エレメンタルロードテナー

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エレメンタルロードテナー

【Ｎコード】
Ｎ６７７３Ｃ

【作者名】
葵夢幻

【あらすじ】
とある事をきっかけに昇は力を得る。そしてその力は精霊との契約、そして自分への力。そして昇は歩み始めた精霊や幼馴染の女の子達に囲まれながら、エレメンタルロードテナーをへの道を。現在ファンタジーハーレムバトルアクション小説、ここに始まります。といいますか、これは初期の作品で最初はつまらないと思いましょうが、後なればなるほど面白くなってくるはずです。なので、最初は頑張って読めば面白くなってくると信じてます。私が（お前がかよ！Σ（゜Д゜υ））そんな訳で末永いお付き合いをお願いいたし

ます。

第一話　契約

えっと、誰でもいいのでここがどこか教えてください。
辺りは真っ白な部屋、というか空間に彼は立っていた。
というか何で僕はこんなところに居るんだ。う～ん、ワケが分からないけど、とりあえず分かる事だけは思い出してみようかな。
えっと、僕の名前は滝下昇(たきしたのぼる)一六歳で式根高校に通う一年生。そしてコンプレックスは顔だけ見られると女の子に間違われる事。ってなんで僕はそんなことまで思い出してるんだ！。
……この虚しさは何だろ。まあいいや、とにかく明日からゴールデンウィークで休みだし、さっさとこんなところを抜け出そう。
昇が歩き出そうとしたその時、突如目の前が光り輝き、目を開けていられないほどの光に昇は手を目にかざし、少しでも光を遮る。
そして光はゆっくりと消えていった。
昇は光が消えた事を感じ取るとゆっくりと目を開ける。そして目にかざしていた手をどけるとそこには少女が立っていた。
歳は昇よりも少し下の一三歳ぐらいだろうか。だがそれ以上に目を引くのは少女の長くて真っ白な髪と同じく真っ白な清楚な服。
そして少女はゆっくりと目を開けると、髪や服とは反して黒い瞳をしており、顔立ちもかなり整っていた。
結構、いや、かなりかわいい。
昇も思わずそう思ってしまうほどの美少女だ。
そしてその少女は昇の目の前まで歩み寄ると、柔らかそうな唇を動かし言葉を口にする。
「……あなたは死にました。デッーデッデデ、デーデデッデデ」
……はい？
どこかで聞いた事のある効果音と衝撃的な真実を告げる少女。キョトンとする昇だが少女はそんな昇に構うことなく続ける。
「復活する場合は復活の呪文を入力してください」

どこに、というか復活の呪文って何？
「さて、冗談はここまでにしましょう」
今までの冗談だったんですか！
「でも、このままでは本当に死んでしまいますよ」
「いや、ちょっと待って。僕が死んだって何？　それに君は誰？」
「私はシエラといいます。それにさっきの事を覚えてますか？」
「さっきのこと？」
「そう、さっきあなたに何が起こったのか、それを思い出してみてください」
いきなりそんなことを言われても。
だがどんなに思い出そうと思っても思い出せず。昇はしかたなく今日の行動を振り返ってみる。
確か、いつもと同じように起きて、朝ごはんを食べた後に学校に行って、いつもと同じように授業を受けて、そして学校が終わると琴未とゴールデンウィークの予定を話しながら帰り始めて、そして僕は商店街に用があったから琴未と別れると商店街に入っていて、それから……それから何だっけ？
「あれっ？」
思い出せずに悩みこむ昇の姿を見てシエラは軽くヒントを出す。
「災難でしたね、あれは」
「災難……そうだ！」
看板だ。確か商店街を歩いてた僕の上に何故だか分からないけど、突然看板が落ちてきたんだ。……って、あれ、ちょっと待って、となると僕はその看板に直撃したの？
「僕はあの看板に当たって死んだの？」
「正確にはまだ死んでません」
「えっ？」
「現在は瀕死の状態です」
「じゃあもしかして、ここは三途の川とか？」
「残念ながら、そんなロマンチックな場所ではありません」

「三途の川はロマンチックなのか」
「ここは私が作り出した特殊な空間です」
「無視ですか！」
「私は昇に看板が当たった直後にこの空間を作り出し、昇をここに強制移動させました。ここなら今すぐに昇は死ぬ事は有りません。ですが、ここを一歩でも出ると即死できますけど、どうしますか？」
「謹んでご遠慮申し上げます」
「まあ、そうですよね。そうでないと私も困ります」
「何で？　っとその前に助けてくれてありがとう」
「いえ、私も昇に話がありましたから」
「ああっ、そうなんだ。というか、何で僕の名前知ってるの？」
「えっと、それは」
顔を赤らめて思わず視線を外してしまうシエラ。その仕草に昇の心臓も鼓動を早くなっていく。
これはもしかして……。
今のシエラの姿を見て期待するなという方が無理だと思うが、いくら女顔の昇も男には違いない。なのでシエラの仕草に期待するのは当然ともいえよう。
「ずっと、見てましたから」
それだけ言って、更に俯くシエラ。昇は思わずグッと手を握り締める。
よし、来たー！　今までこの顔の所為か女の子にまったく縁の無かった僕にもやっとこの時が来た！
それでも昇はあくまでも平静を装いシエラに話しかける。
「えっと、話っていうのは……なんなのかな」
シエラは真っ赤な顔を上げると昇の瞳を真っ直ぐと見据える
「少し込み入った話なるけど、大丈夫ですか？」
「う、うん、全然大丈夫だよ」
「よかった」
今まで不安だったのかシエラは大きく息を吐くと笑顔を昇に向け

る。そして昇もシエラの笑顔に一瞬だけドキッとするが笑顔で返した
「これでやっと、昇の上に看板を落としたかいがあるというものです」
昇の笑顔が急に固まった。
僕の上に……看板を落とした？
「あれやるの結構難しかったんですよ。周りには結構人がいましたけど、なんとか昇だけに直撃する事が出来て本当に良かったです」
僕の上だけに落として……本当に良かった？
「これでやっと、ゆっくり話が出来ますね」
「えっと、ちょっと、待って、くれる」
未だに笑顔のまま固まっている昇はぎこちなく口を開き、頭の中を整理する。
えっと、つまり、僕が生きていられるのは看板が落ちてきてこの子が助けてくれたおかげだけど、その看板を落としたのはこの子ってこと。そうなるとつまり。
「……って、全部君の仕業かー！」
「そんな君だなんて、シエラって呼んで下さい」
また顔を赤らめて可愛げな仕草をするシエラだが、今の昇にはそんなシエラの仕草よりも別なことで興奮していた。
「何で僕に看板なんかを落とすんだよ！」
「それは昇と話がしたかったから」
「話をするためだけに人を殺しかけたのか！」
「そうですよ」
「即答ですか！　というかなんで！」
「だって私、人間ではありませんから」
「……はい？」
シエラの意外な言葉に昇のボルテージは一気に下がり、自分を取り戻すどころか混乱の境地まで達していた。
だがそんな昇に構わずシエラは自分のことを話し始めた。
「私は精霊なんです」

「せい…れい？」
「はい、万物に宿りその力を元にして生まれてくる存在、それが精霊です。けど精霊はあくまでも宿った物の力であり、実際にその存在を確認することは困難です。なにせ精霊は力だけの存在で実体を持ちませんから」
「……えっと、つまり、幽霊みたいなもの？」
「あんな者と一緒にしないでください。精霊はあくまでもこの世界を維持するための存在で、あんなフヨフヨと漂うだけだったり、人間に害をなしたりそんなことはしません。精霊はもっと高貴な存在なんです」
いや、自分で自分達の事を高貴って……。
突っ込むところが思いっきり間違っているのだが、昇が呆れているのは確かなようで、それはシエラにもちゃんと感じ取られていた。
「まあ、簡単には信じてもらいえないと思ってましたけど……」
そういうとシエラは急に真面目な態度に変わり、未だに呆れた昇はシエラの変わりように思わず自分を取り戻した。
そしてシエラは昇に突然の質問をする。
「なぜ、この地球が存在しているか分かりますか？」
「えっ。えっと、確か、偶然の産物？」
「そうですね、一般的にはそう言われていますが、本当にそうだと言い切れますか。偶然にも太陽と地球の距離が生物が生まれるのに適しており、偶然にも地軸は傾いており、偶然にも月があることで地球は安定して公転が出来る。本当に全てが偶然だと思いますか？」
「えっと…」
「他にもいろいろな偶然がありますが、それは全て偶然ですか？本当にこの地球は何億分の一、いや、それ以上ですか、それら全てが偶然ですか？」
「いったい、何が言いたいの？」
「この世界、この地球が存在できるのは全て精霊王の力による物なのです」

「精霊王？」
「はい、ノアの箱舟の話をご存知ですか？」
「確か、ノアが船を作ってその中にオスメス一対の生物をいれて大洪水から難を逃れたって話だよね」
「ええ、そうです。けどそれは後で改ざんされた物。実際の話とは違います」
「じゃあ、実際の話って？」
「船を作ったのは確かです。けどその中に乗り込んだのは全て魔道化学にたけた人達だけだったんです」
「魔道科学？」
「まあ、古代文明だと思ってください。そして箱舟に乗った人達は前人未到の大洪水を予想していた人だけでした。そして大洪水は起き、古代文明は一気に崩壊した。そして生き残った人達が魔道科学に通じた人だけでした。
けど、話はここでは終わりません。聖書では大洪水は三日と書いてありますが、正確には大洪水は地球そのものを全て水浸しにしようとしてたんです。だから三日どころか一年以上も洪水は収まることはありませんでした。
箱舟の中には自給自足が出来るため、船の中にいる人達は何とか生き残ることが出来ますがそれも時間の問題。いずれは箱舟さえ壊れてしまう可能性があるのです。
そこで人間たちが作り出したのが精霊王。この地球を人間が快適に住める環境を作り出す存在、そして私達精霊は精霊王の加護を得て生まれてくる存在。それが精霊なんです」
一気に説明するシエラ。昇はシエラの話を少しでも理解しようと頭をフル回転させていた。
確かにシエラの話はつじつまが合ってるけど。まあ、確かに今でも温暖化で地球の氷が溶け出しているのに、もしそれが一気に溶けたら地球は水浸しだ。そんなところに人間がすめる訳が無い。
じゃあシエラが言ってた精霊王っていうのは、この地球を生命が

生きていけるように環境を整えてる存在って事なのかな。地軸が傾いてるのも、生物が生まれやすい環境を作り出したのも、全ては精霊王がやったのか？

正直、信じられない話だがシエラの真剣な眼差しと話のつじつまに昇はシエラの話を少しだけ信じてみてもいいと思い始めた

というか、未だにこんな変な空間にいるし、つじつまが合ってるだけの話を聞かされると信じたくなってくるよな。

けど、そうなると残る疑問は一つ。

「シエラ」

「なんですか」

「僕の上に看板を落とした理由は？」

「ですから、昇と話をするために」

「何で僕と？」

「それは昇がエレメンタルロードテナー、精霊王の器の候補者に私が選んだからです」

「エレメンタ…なに？」

「エレメンタルロードテナー、精霊の言葉では精霊王の器をそう呼んでいます」

「精霊王の器？」

「はい、万物全てに死があるように、精霊王にも死が訪れる時があるのです。そしてその時が近い時、精霊達はエレメンタルロードテナーを探し始めるのです」

「精霊王が死ぬ？」

「はい、精霊王の死は地球の死でもあります。だから私達は精霊王の力を受け入れられるだけの人間を探し出し、その中に精霊王の力を入れて精霊王の力を維持しているのです」

「じゃあ、精霊王って言うのは力の塊」

「そう言われるのは不愉快ですが、その通りです。例え力の塊でも私達の生みの親でもありますから」

「ごめん」

「いえ、分かってくだされば結構です」
素直に謝罪する昇にシエラは微笑を向けて、そんなに怒っていない事を示す。
「昇、私はあなたにエレメンタルロードテナーになって欲しい。この地球を、この世界を維持して欲しい。協力してくださいますか？」
「けど、僕は何をすれば…」
「まずは契約を、そして戦ってください。エレメンタルロードテナーになる為に」
「って、ちょっと待て！　戦えってどういうことだよ」
「器を探しているのは私だけではないのです。他の精霊たちも器を探し出し、その候補者と契約をして戦うのです。エレメンタルロードテナーを目指して」
「だったら僕じゃなくても……」
「エレメンタルロードテナーになった者は強大な力を得ることが出来ます。ですからエレメンタルロードテナーになった人間が地球の維持を放り出して自分の欲に走る時があるのです。けど、私は昇がそんな事はしないと思ってますし、昇にはそれだけの可能性があると私は信じてます」
「……」
そう言われると言い返す言葉が見つからない昇は黙り込んでしまった。
「私が昇を選んだのは偶然でも適当でもない、昇ならこの争奪戦を勝ち抜き、力を正しく使ってくれると思ったから選んだんです。それに実際に戦うのは私達精霊です」
「えっ、どういうこと？」
「契約した精霊は実体化して他の人間と変わらない存在になりますが、精霊の力は残ります。それに契約者自身にも特殊な力が宿ります。ですから精霊が相手の精霊と戦って、契約者が精霊を援護するのが一般的ですね」
「じゃあ、後ろから援護しろと」

「危険なことには変わりありませんが、昇なら大丈夫だと思います」
「はぁ、どうしてそこまで言い切れるわけ？」
「ずっと見てましたから、昇の事を。だから選んだんです、エレメンタルロードテナーの候補者として」
「僕にはそんな力も勇気も無い」
「大丈夫、昇一人じゃない、私も一緒に戦うから。だから……契約を」
シエラの目は切実に昇へと訴えていた。昇もまたシエラの瞳から目を離せなかった。
けど…僕は。
「僕は、そんなに強くない」
「なら強くなって、自分が目指す物に手が届くように」
「自分が目指す物…」
「今はまだ見えないかもしれないけど、そのうち見えてくると思うから」
そんな事を言われても……。
昇はあまり戦うという事には慣れていない。喧嘩だってやったことないし、争いごとだって嫌いな方だ。そんな昇に戦えと言っているのだから昇がちゅうちょするのも当たり前だろう。
確かにシエラが僕を選んだ事に意味はあるのかもしれないけど、僕にはとてもそんな事は出来ない。
「やっぱり無理だよ。僕には戦う事なんて出来ない」
「……昇には可能性がある。それを今ここで潰すつもりですか」
「けど、可能性は可能性であって本当にそれが出来るわけじゃない。だから無理だよ、僕に戦えだなんて」
それでも真剣な眼差しで見詰めてくるシエラを昇はこれ以上は見詰める事が出来ずに、目を逸らしてしまった。
それが昇の答えだと悟ったシエラは大きく息を吐くと、昇の頬に手を当てて自分に顔を向けさせる。
「分かりました。もうこれ以上は言いません。けど、最後に私の願

いを叶えてくれますか、お願いします」
「最後の願いって？」
「昇は目をつぶってくれればいいだけですから、お願いします」
「う、うん、分かったよ」
言われたとおりに目をつぶる昇。視覚を閉じた所為か嗅覚が敏感になり、甘い香りが漂ってくる。
これはシエラの匂いなのかな、精霊でもちゃんと女の子の匂いがするんだ。
そんな事を考えているうちに昇は自分の唇に何かが触れるのを感じると思わず目を開ける。
するとすぐ目の前にはシエラの顔があり、目をつぶって昇と唇を合わせている。
ええっ！　いや、ちょっと待って、何で、というかどうして？
いきなりの事に混乱する昇。だが昇の体はまるで固まったように動かない。それをいい事にシエラはより深く昇とキスをしていく。
うわっ、初めてだけど、キスってこんなにも凄いんだ。って、そんなことを思ってる場合じゃない
昇は何とか手を動かしてシエラの肩に掛けて離そうとするが、その前に二人の足元に魔法陣が展開された。
って、今度はなんなんだ！
魔法陣は白い光を放ち二人を包むと、すぐに消えてしまい、そしてシエラも昇から唇を離した。
やっと解放された昇は唇に手を当てながらシエラから大きく退いた。
「……えっと、今のキスはいったいなんなの？」
「何といわれても、契約ですけど」
「……はい？」
「ですから契約完了です。これからはエレメンタルロードテナーを目指して頑張って下さい」
「って、キスが契約なの？」

「はい、あとは自分の武器を手渡して契約をするって事も出来ますが、私はキスの契約を選ばせてもらいました」
「でも、僕は戦わないってさっき言っただろ」
「……そうでしたっけ」
「だ、騙された――――！」
「騙しただなんてとんでもない。私最近物忘れが酷くって」
「嘘だ、絶対に嘘だ！」
「まあ、契約してしまったものはしょうがないので、これからよろしくお願いします」
「サギだ――――！」
「あっ、そうそう。昇の怪我は完治しておきましたので心配しないでください」
「いや、違うから。僕が言いたいのはそういうことじゃないから！」
「では、不束者（ふつつかもの）ですがこれからもよろしくお願いします」
「何でそんな挨拶！　というか嫁入りする気！」
「昇が望むならどんな事でも、ポッ」
「いや、ポッって、自分で言う事じゃないし、そこは赤くなる場面でもないから！」
「それでは、この空間を解きますね」
「いや、ちょっとは人の話を聞こうよ！」
「大丈夫です。昇ならきっとやり遂げる事が出来ると、私は信じてますから」
「いやいや、無理矢理いいシーンにもってこうとしないで」
「チッ」
「いやなに、そのチッって！」
「独り言にいちいち突っ込んでると疲れますよ」
「だから、そういう問題じゃなーい！」
「では、この空間を解きまーす。次に昇が目を覚ました時には明日の朝だと思いますが、あまり気にしないでください」
「だから、そうじゃなくて……」

まだ文句を言う昇だが、突然目の前が白い光に包まれると、そのまま意識が遠のいていった。

なんで、こんな、ことに。

遠のく意識の中で昇はこれが夢であって欲しいと願うばかりであった。

第一話　契約（後書き）

始めて来られた方は初めまして、読み直してくださった方はありがとうございます。

え～、始めて来られた方は分かりませんと思いますが、現在エレメは四十四話まで修正作業中で、大きくストーリーは変わってはいませんが、いろいろと書き直している最中です。

まあ、そんな訳でして始めての方はあまり気にせずに読んでください。たぶん、主に誤字脱字や多少の修正なのであまり違和感なく読めると思いますのでよろしくお願いします。

というかですね。やっぱり一話目は大事だよとの声が多く、私のような素人作家には一話目から上手に書けるかーーー！　という感じなのですが、まあ、四十四話まで書いて多少は腕も上がっていると思い書き直しに至ったわけですが、そんな訳でどうか見捨てずにお付き合いください。

それにしてもこの小説、ネット小説ランキングには現代シリアスで登録してあるんですけど、一話目はすごくコメディー調になってしまいましたが、これからシリアスになっていくのでシリアスを期待している人はぜひお付き合いください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、シエラのキャラが大きく変わった？　と思い始めた葵夢幻でした。

第二話　変わり始める日常（前書き）

第二話　変わり始める日常

昇が目を覚ますといつもの見慣れた天井が見えた。
……あれっ、僕はいつの間に寝てたんだろ。
まだまどろんでいる昇の頭が先程の白い空間での出来事を思い出す
シエラだっけか、結構可愛かったけど、最後はなんか思いっきり
騙されたし、やっぱり夢でよかったのかな。でも。
昇はシエラとのキスを思い出すかのように自分の唇を撫でた。
ちょっともったいない気もするけど、やっぱり僕には戦う事なん
て出来ないよな。だから、夢でよかったんだよ。うん、そういうこ
とにしよう。
そう思い直し昇は時計を見ると九時を過ぎていた。さすがに今日
からゴールデンウィークといってもいつまでも寝てるわけにも行か
ない。
起きようとする昇だが、何故か起き上がることが出来なかった。
あれ？　なんで、というか何か乗ってるような…。
だんだんとはっきりしてくる昇の頭が五感を正確に脳へと伝え始
めると、嗅覚がどこかで嗅いだ事のある甘い匂いを頭に伝達する。
もしかして……。
嫌な予感がする中で昇は掛け布団を取り去る。
「なんじゃこりゃぁーーー！」
どこかで聞いたようなセリフを叫ぶ昇。
けどそれもしかたないだろう。なにしろシエラが昇に抱きつく形
で添い寝をしていたのだから。しかもシエラは下着姿だ。
なんだこれ、あれは夢じゃないのか？　というかその前にこの状
況は何なんだー！
「シエラ、シエラ、っていい加減に起きろ」
未だに昇にしがみつきながら寝ているシエラの体を揺らして起こ
そうとするが、せっかくの快眠を邪魔されているのが嫌なのか、シ

エラは昇の首に手を回すと思いっきり抱きつく。
……はっ！
大胆すぎるシエラの行動に昇は一瞬我を忘れていたが、自分を取り戻すと少しずつ体を動かして行き、何とかベットの上に座る形になるが、それでもシエラは一向に起きる気配が無く、昇に思いっきり抱きついて未だに熟睡している。
なんでこんな格好で熟睡できるんだよ。
「シエラ、シエラ、もういい加減におきてよ」
何とかシエラを体から離そうとする昇だが、シエラは離れるどころか起きる事も無かった。
いったいどんだけ朝に弱いんだよ。というか本当に寝てるのか？
その後も昇はシエラを起こそうと奮迅するが、それが逆な結果に結びつくことになるとは思いもよらなかっただろう。というか今の昇にそれだけのことを考える余裕など無かったのかもしれない。
そしてその時はやってくる。
ドアがノックされその奥から声が聞こえてきた。
「昇、起きたの？　それにさっきから何をそんなに騒いでるの？」
「母さん！　いや、なっなんでもないから。本当、ちょっと朝だからハイテンションなだけだから」
混乱からかワケの分からない言い訳をする昇。まあ、それもしかたないだろう。まさか自分の母親にこんな場面を見せるわけには行かない。けど、昇が慌てるのはそれ以上の意味が有ったからだ。
まずい、本当にまずい。もし母さんにこんなところを見られたら……僕の命は無い。言い過ぎかもしれないけど、これだけは断言できる。僕が無事で済む訳が無いと言うことだけは。
「昇、昨日フラフラっと帰ってきたらすぐに寝ちゃったけど、どこか具合が悪いところがあるの？」
「いや、そんなんじゃないから、もう全然平気だし元気だから」
「そお、でも一応熱だけ測っておく？」
「いや、いいからそんなの、大丈夫だから」

「なに言ってるの、ちょっと待ってなさい。今体温計持ってくるから」

それだけを言い残して一旦遠のいていく母親の足音。

まずい、本当にまずい。こんな状況で母さんが入ってきたら、僕は、確実にやられる。

「シエラ、シエラ、頼むから起きてくれ、シエラ、お願いだから」

それでもシエラは昇から離れることなく、それどころか更に力強く昇に抱きつく。

「というかシエラ、起きてるだろ、確実の起きてるだろ。まずいんだって、このままじゃ確実にまずいんだって」

「昇、入るわよ」

そして再び聞こえてくる母親の声だが、今の昇には悪魔の声にしか聞こえなかった。それでも昇は最後まであがく。

「ちょっと待って！　今着替えてる最中だから入ってこないで」

「何を今更言ってるのよ。あなたの裸なんて赤ん坊の頃から見てるわよ」

「思春期なの。だからダメ」

「昇、さっきから何を隠してるの？」

「うっ」

さすが母親といった所だろうか、昇の母親は見事にその心中を見抜いていた。

「じゃあ、入るわよ」

ドアノブが回り開き始める。

「ダメーーー！」

叫ぶ昇の関わらずドアは完全に開き、昇の母親はその光景を目にしてそのまま動かなくなった。

まあ、さすがにこんな光景が待っているとは思っていなかったのだろう。自分の息子が女の子を部屋に招きいれて、しかも女の子は下着姿で昇と一緒にベットで抱き合っているだから。

いったい何があったのか。昇母親の頭にいろいろな想像が巡り巡

る。
「昇」
「いや、これは、ちっ違う。シエラがいつの間にかここに…」
「へぇ〜、その子、シエラちゃんって言うのね」
笑顔を浮かべながら易しく言ってくる母親。だがこの親子の関係は意外と強いようで、昇の目には、はっきりと母親の後ろに漂う黒いオーラが見えていた。
「とりあえず、お母さんの前だし、シエラちゃんと離れてくれる？」
「それがさっきから離れなくて」
再びシエラを引き剥がそうとする昇。だが意外なことにシエラはすんなりと昇から離れてベットへと寝転んだ。
「あれっ」
さっきまではあんなに抱きついてたのに、ということは……こいつやっぱり起きてやがったのか！
ベットに寝転んでいるシエラは寝返りを打つのと同時に自然と手を動かし、ごめんねのポーズを昇に向ける。
やっぱりかぁぁぁーーー！
殺気を出してシエラを睨み付ける昇だが、それ以上の殺気が近づいているのに気付く。
「あっ、あの、母さん、これは…」
「いつから女を連れ込むようになった。この、ドラ息子」
母親のアッパーが昇にクリーンヒット、そのまま宙を舞うと母親の後ろへと落下する。そして母親は床に倒れている息子を足げにする。
「お母さんもさあ、女の子と付き合うなとは言わないけどさ。さすがに自分の部屋に連れ込んで一夜を過ごすのは早過ぎないかい。なあ！」
そのまま母親は昇の背に蹴りを入れ続けながら文句を言い続けた。
昇が意識を失うまで……。

「それでシエラちゃん、昇とどういう関係なの？」
さすがにいつまで狸寝入り出来ないシエラは、昇の母が揺り動かすとすんなりと起きてそのまま指示に従った。
そしてシエラは着替えを済ませるとリビングへと降りて行き、出されたお茶をすすりながら昇の母と対面しているわけだが、シエラは何のちゅうちょも無く、堂々と答える。
「私と昇との関係、それは一生離れられない、と言った感じです」
そんな大胆発言にもかかわらず、昇のは母のんきにお茶をすすると何かを思い出したかのように手を叩く。
「あっ、そういえばまだ私のことを話して無かったわね。昇の母で彩香（あやか）です」
「はい、よろしくお願いします。お義母様」
「あら、いきなりお義母様だなんて、シエラちゃん本気なの？」
「はい、昇は私が選んだ人ですから」
「そう」
彩香は再びお茶をすすると誰に言うでもなく独り言を呟く
「いつかはこういう時が来ると思ってたけど、こんなにも早く来るとはね…」
それは思いっきり誤解なのだが、未だに目をつぶり物思いにふけっている彩香には、してやったりと笑顔を浮かべるシエラの顔は見えなかった。
「そういえば、シエラちゃんのご両親は？」
「今は居ません」
「えっ」
「実は…」
シエラはまるで辛い過去を思い出すかのように表情が暗くなり、声も小さくなる。
「私の両親は突然の事故で死んでしまって、そして両親の遺産を狙ってる親戚たちに根こそぎ遺産を取られて、私は住むとこまで失い

一人、何処にも行くあての無い私はこの町まで流れてきました。そんな時に出会ったのが昇です。昇はこんな私に優しくしてくれて、それで私、恩返しがしたくてせめてと思い。あんなことを……」

「そう、そうだったの」

思わずうんうんと首を縦に振る彩香。

もちろん先程のシエラの話は全て嘘である。そもそも精霊であるシエラに両親など居るはずも無く、シエラはまるで事実のように彩香に話したのだった

それでシエラはうまく彩香を騙した……つもりだったのだが。

「まあいいわ、とりあえず本当の事を話してくれるまでウチにおいてあげるわ」

彩香は完全にシエラの嘘を見破っていた。

そしてそれ以上は何も聞いて来ない彩香に感心すると同時に負けた気持ちも湧き上がってきた。

どちらにしてもシエラの完全な負けである。だが、それでもシエラはあまり悔しくは無かった。

……まあ、いいか。どちらにしろ昇の傍にはいられるみたい。

「そういえばシエラちゃん、荷物は？」

「ありません」

「えっ」

「私は元々荷物なんて必要じゃなかったんです。ですから荷物と呼べる物は今着ている服ぐらいです」

さすがにこの発言には驚いたのか彩香は驚きの表情を隠せなかった。

「他の服も下着も無いの？」

「はい、これだけです」

「ダメよ、女の子がそれじゃあ」

「今まで必要が無かった物で」

「でも、これからは必要でしょ」

「……そうかもしれません」

「じゃあ、昇が起きたらシエラちゃんの服を買いに行きましょう」
「ではお義母様、これを」
そう言ってシエラが差し出したのは一つ分厚い封筒だった。彩香がその封筒の中身を確認すると、かなりの大金が入っていた。
「ちょっ、シエラちゃん、これ！」
「これからお世話になるのですから、それぐらいは当然かと」
「けど、これは多すぎるわよ。こんなにも貰えないわ」
「では預かっといてください。私が必要な時にはいいますので」
彩香は少し考えた後、シエラの言うとおりにお金の管理をする事にした。
そして彩香はとりあえず預かったお金を整理するためにリビングを後にするが、シエラは彩香を見送ると再びお茶をすすり物思いにふける。
あの人、あれ以上は何も聞いてこない。もっといろいろな事を聞かれると思ってたけど、私の嘘を見破った上に置いてくれるなんて、それほど器が大きいのか、それともものんきなのか、どっちらかね。
けど、だから昇の母親なのかな？　まあいいか、争奪戦が激しくなってくれば話す時が来るのかもしれない。その時が来るまで、私は私のやるべきことをやればいいか。
シエラが彩香の器の大きさを計っている中で、彩香が戻ると二人はそのまま世間話に花を咲かせた。
やっぱりこの人、器が大きい。
シエラに関して何も聞いてこない彩香に、シエラは改めて彩香の器の大きさを実感するのだった。

「ねえ、まだ行くの」
両手に荷物を持った昇がいい加減に飽き飽きした声で先行する彩香に声をかける。シエラはというと、昇の両手がふさがってるのをいいことにいつの間にか昇と腕を組んで歩いてる。

「当然でしょ。シエラちゃんの買い物が多いいんだから、まだまだ店を回らないと」
「え～」
不満の声を漏らして昇は辺りにある店を睨み付けた。
今昇達が居るのは多数の店が入っているショッピングモール。中には大きなデパートもありかなりの店舗が軒先を並べている。
「昇、ごめん、私の所為で」
上目遣いでなるべく猫を被るシエラに昇はいい加減に気付いてはいるのだが、そういう仕草をされるともう何も言い返すことが出来なかった。
うっ、今まで僕は女の子に縁が無かったからな、シエラにそういう風にされると断りずらい。けど、……疲れた。いい加減に休みたい。
それでも昇は数件の店を共に回らされて、その度に荷物が多くなってくる。
そして昇はとうとう疲れたと言い出し、しかたなく荷物はシエラが一人で軽々と持った。
「まったく情けない。女の子に荷物を持たせるなんて」
「お義母様、私なら大丈夫ですよ」
「はぁ、どうしてこんなヘタレな子に育ったんだか」
あの～、一応母さんの息子で育てたのは母さんなんだけど。
「まあしょうがない。昇はどこかで休んでなさい。私達はこのまま買い物を続けてるから」
やっぱりまだ買い物が有るんだね……。
結局昇は駐車場近くにある休憩所に非難することが出来た。

それから三〇分後
どうして女の人の買い物ってこんなにも長いんだろう。
昇は未だにここに非難していた。

はぁ、まだ時間がかかるのかな？
たそがれている昇だがいっこうに買い物が終わったという連絡は来ない。どうやら未だに買い物を続けているようだ。
まったく、早くしてくれないかな
そんなことを思いながらも昇は一番大事なことを忘れていた。騙されたとはいえ昇はすでに契約者であり、争奪戦に巻き込まれている。
まあ、昨日契約したばかりで今日は普通の日常を過ごしているのだ。忘れてもしょうがない。だが相手はそんな昇の事情なんて知りえもせずに、ただ昇から感じ取れる精霊の気配に気付いていた。

「おい、あいつが本当に契約者なんだろうな？」
「はい陽悟様、間違いないです。確かにあの人から精霊の気配を感じます」
「そうか、じゃあさっさと狩っちまうか」

争奪戦の幕はすでに上がっており、昇はすっかり争奪戦に巻き込まれていた。

第二話　変わり始める日常（後書き）

そんな訳で第二話ですが、なにこれ、コメディーとか思わないでくださいね。これからシリアスになっていくので、ですから見捨てないください。

というか、シリアス部門で登録しておきながら出だしは思いっきりコメディー調だな。まあ、私が言うのもなんですが、やっぱりシリアスな部分だけを書いてると疲れんですよ。やっぱり時には笑いどころも作っておかなと、はいそこの方、そんな事を自分で言うなよって突っ込まないように、そんな事は百も承知なんじゃーーー！

はい、そんな訳で第二話はこんな形になりました。とりあえず、これから一気に戦闘へと入って行くので見捨てずに付いて来てください、お願いします。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、見捨てないで付いて来てくれる読者が多くなる事を願う葵夢幻でした。

第三話　精界

「あの～、すいません」
突然昇に話しかけてきたのは幼い女の子だった。
年齢は一二ぐらいだろうか、金髪のポニーテールが良く似合う、その少女がおどおどしながら昇に話しかけてきた。
だが少女は手をもじもじさせるだけで、それ以上は何もく喋ることなく、明らかに困りきってるようだ。
しかたなく昇はその少女に離しかける。
「えっと、僕に何か用？」
「えっ、いやっ、あのっ、その、何と言いましょうか」
突然昇が口を開いた事に驚いた少女は取り乱して、あきらに挙動不審でオロオロとして誰かに助けを求めてるようにも見える
えっと、この子はいったい何がしたいんだろう？
ワケの分からない少女の行動に戸惑う昇。
「キャ」
だが突然少女は横から蹴飛ばされて床に倒れこんでしまった。
「なっ…」
突然のことで言葉が出ない昇を放っておいて、そいつは少女の元へいくと髪を掴んで無理矢理顔を向けさせると怒鳴り散らした。
「おい、テメー、いつまで何やってんだよ。さっさとこの契約者をぶっ倒せって言っただろ」
「すいません。けど、陽悟、私」
陽悟と呼ばれた男の拳が少女の頬を当たり、少女は再び床に倒れる。
「陽悟様、だろ。何度言ったら分かるんだテメーわ」
「すいません、陽悟様」
涙を浮かべながらも少女は健気に陽悟に言われたとおりの言葉使いをする。

いったい何なんだこの二人は。
すっかり取り残されている昇だが、目の前でこんなことをされているのを黙ってみているつもりは無い。まあ昇としては正義に味方を気取るつもりは無いが、このまま無視する事も出来なかった。
昇は立ち上がると少女を守るように二人の間に割ってはいると、思いっきり陽悟を睨み付ける。
「いい加減にしろよ。この子も泣いてるだろ」
「あぁ！」
こわっ！
逆に睨み返してくる陽悟に昇は思わず後退りしそうになるが、何とか押しとどまり陽悟と睨み合いを続けているのだが、内心はかなりビビっていた。
ヤンキーってこういう人のことを言うのかな。なんか目を合わせるだけで凄く怖いんだけど。
それでもなけなしの勇気を振り絞って陽悟をにらみ返す昇だが、そんな昇の行動を陽悟は笑い飛ばした。
「バカか、テメーは、敵かばってどうすんだよ」
「えっ、敵？」
「おい、ミリア。さっさとやっちまうぞ」
「はい、陽悟様」
ミリアは涙を拭くと今までと別人のような目つきになり、昇に敵意を向ける。
「なっ、何で？」
「ごめんなさい。でも、契約者であるあなたを倒さないと、陽悟様はエレメンタルロードテナーになれないんです」
「じゃあ、君は…」
「はい、私は陽悟様と契約をした精霊」
ミリアは手を地にかざすと床に魔方陣が現れ、茶色い光を放っている。
「アースシールドハルバード＜地の盾を持つ槍斧＞」

魔方陣から槍の横に斧が付いたハルバードが表れ始めて、ミリアがハルバードを手にとると今度はミリア自身が光り輝きだしてミリアを包み込んでいった。

そして光が消えて姿を見せたミリアの姿はその体に似合わないほど大きなハルバードを持ち、重厚とも思える鎧。いや、甲冑を着ていた。

いったい何なんだ、この子は。

昇が戸惑うのも無理は無い。ミリアが精霊だといわれてもピンとはこないし、いきなり武装されても昇にはどうする事も出来なかった。

それでもミリアの兜が羽飾りのようになっている為、ミリアの表情はよく昇に見えた事が更に昇を惑わす。

たぶんだけどこの子は契約者である僕を倒そうとしてるんだろ。

じゃあ、なんでそんな顔をしてるんだろ。

「ごめんなさい」

涙を浮かべながらその言葉を口にするミリア。

昇は直感的に危険を感じるとその場から離れて振り向くことなく走り出して、二人からかなりの距離をとったところで振り返った。

うそ、だろ。

先程まで昇がいたところにはハルバードが床に刺さっており、あの場所から逃げ出さなければ確実に昇の頭はカチ割られていただろう。

「ちっ、仕留めそこなったか。結構アイツ足が速いな、もうあんなところにいら～」

「すみません、陽悟様」

「まあいい、アイツの精霊が来る前に仕留めるぞ」

「はい」

ミリアは再びハルバードを構え、何故か陽悟も片手で構えを取る。

「行くぞ」

「はい」

走り出そうとする二人だが、突然の違和感にその行動が止まる。
「なんだ～」
陽悟が違和感の元を探そうとする前に、それはもう始まってた。
デパートの中央、そこを突き抜けるように太い光の柱が天井を突き抜けていた。。それはデパートをまったく壊すことなく突き抜けている。
「精界」
呟くようにその言葉を口にしたミリアを陽悟は「あぁ」と言いながら尋ねるが、その顔がよっぽど怖かったのかミリアは一歩下がると説明を始めた。
「これは精界といって、精霊と契約者だけを飲み込む結界のことです。ですから、あの人の精霊にも気付かれたようです」
「せいかいだ～？」
「はい、簡単に申しますと精界の中に入れる者は精霊と契約者だけ、それにどれだけ精界の中で物を壊そうとも人間界には影響が出ません。つまり、精霊達の戦場のことです」
それでもミリアの説明が難しかったのか、陽悟は頭をかきながらどうでもいいような態度をとる
「って、これからどうなってくんだよ」
「あの光の柱はその範囲を広げて一定の空間を人間界から精霊界へと移転させます。その大きさは精界を作り出している精霊が決めることですが、精界が展開されればこの空間は私達とあの人達だけになります。つまり、精霊と契約者だけが精界に居るわけです」
「つまり、あの光の柱が広がれば他の邪魔な奴は全て消えて、俺達だけになるわけだ」
「はい、そうです」
「それにどれだけぶっ壊しても大丈夫、ははっ、まさかこんなに便利な物があるなんて思いもよらなかったぜ」
楽しそうに笑い出す陽悟を見てミリアはまた一歩後ろに下がった。

だが一方、事情が分からない昇は困惑していた。
何だ？　いったいどうなってるんだ。
突然現れた光の柱。それはデパートを突き抜けてはるか頭上まで伸びていた。そして伸びきると今度はその範囲を広げていく。
「うわぁぁぁーーー」
迫ってくる光の柱に思わず悲鳴を上げる昇だが、光の柱は昇を通り抜けてその範囲をさらに広げ続ける。
あれ、なんとも無い、どうなってんの？　……うわ、なんだあれ、空が白い
駐車場の隙間から見える空は真っ白だった。それは雲なんかではなく、空の色が本当に真っ白になったように白い。だが白くなったのは空だけではない。周りの景色も少し白を混ぜたように薄くなっている。
なんだこれ、どうなってるんだ！。
そして精界はデパート全体を包むと拡大を止めて完全に人間界と遮断した。
……なんか、凄い静かだ。
急に訪れた静寂に昇は寒気が走った。
今まであんなに騒がしかったのに今じゃ何も音がしない。何なんだよ、これ！
だがそんな静寂を急に破るように走り来る足音が響く。
昇が振り向くとそこにはすでにミリアが迫っていた。ハルバードを振り上げる風きり音と共に殺気を放ちながら昇へと迫る。
昇は恐怖から目を閉じて、振り下ろされてくるハルバードために全身に力を込める。こんなことをしても仕方ないと思っているけど、とっさの防衛本能が昇を硬直させた。
そして振り下ろされるハルバード。
振り下ろされたハルバードは床をも砕き、土煙が立ち込める。いったいあの小さいミリアにどれだけの力が在るのか疑いたくなる程

の破壊力だ。
そして土煙が晴れて視界が戻ったミリアは下ではなく横を向く。
そう、昇が居る方向へと目を向けた。

なんだ、いったいなにがあったんだ？
昇は立ち上る土煙を見ながら事態を把握できていなかった。だが感じることは出来た、知っている匂いと温もりを。
「ごめん、精界を張ってたら遅くなった」
「シエラ！」
ハルバードが振り下ろされる寸前、ギリギリ間に合ったシエラは昇に体当たりをするようにその場から退避たから、昇は無事にミリアの攻撃をかわすことが出来た。
けどミリアも手応えの無さから昇がかわしたことを知りえていた。だからこそ、下ではなく昇を見ている。
シエラは昇から離れるとミリアと対峙する。
「ずいぶんと私の昇をいじめてくれたみたいね」
「ごめんなさい」
「えっ」
まさかすんなりと謝られると思っていなかったシリアは拍子抜けした。
「まあいいわ、どっちにしろ引く気は無いのでしょう」
「すいませんが、それはできません」
「まあ、分かりきってたことだけど」
シエラは手を前に出すと何かを握るように拳を作り、拳から魔方陣が展開される。
「ウイングクレイモア＜翼のある大剣＞」
魔方陣から噴出したのは羽。
その羽はシエラの拳から広がり大きな剣を作り出していく。そしてシエラの手には大きな、その刃だけでもシエラの身長を超える

ほどの長く、幅の広い大剣が現れた。
それと同時にシエラの体も光だし、今まで着ていた白いドレスから甲冑へと姿を変えていく。
シエラの甲冑はミリアの物とは違い、かなりの軽装で肌も少し露出している。だがその分動きが軽やかになり、早く動けることが出来る。
だがそんな意味があることを知らない昇が思うことは只一つ。
このシエラの姿もちょっと可愛い。って、僕はいったいこんな時になにを考えてるんだ！
二人との殺気を出して今にでもぶつかり合いそうな中でも、昇がそう思うぐらいシエラの戦闘服、精霊用語では精霊武具と呼ばれている姿はかなり似合っていた。
だがそんな昇の妄想に関係なく精霊二人はそれぞれの構えを取り、すでに戦闘体制に入っていた。
先に動いたのはシエラだ。シエラはクレイモアを肩より後ろに構えるとミリアへと疾走する。
迫り来るシエラにミリアは防御の姿勢をとることなく、ハルバードの柄を床へと突き付ける。
「アースウオール！」
突然コンクリの床がせり上がり、ミリアの前に壁を展開する。
「ショット」
そして壁から放たれてくるコンクリの弾丸。シエラはその弾丸の雨をかわしつつ、一気に壁へと迫った。
「無理ですよ、その壁は鋼鉄よりも硬いですから」
「さあ、それはどうかしら」
壁の真横に回りこんだシエラはクレイモアを水平に構えると一気に突っ込む。
「ウイングブースター！」
突然クレイモアから生えた白い一対の翼は、シエラの後ろにその翼を伸ばすと、羽先が揺らぐほどの推進力を生み出して一気にシエ

ラごとクレイモアを加速される。
そして一瞬にして音速近くまで加速されたクレイモアは。軽々とミリアの作り出した壁を切り裂いた。
さすがにあのスピードだと切り裂けない物はほとんど無いだろう。水ですら超高速で発射されると鉄すら切り裂けるぐらいだから、それがクレイモアという大剣となるとその切れ味はドン倍だ。
シエラは切り裂く時に少し角度をつけていたのか、壁は横へずり落ちるようにして倒れ去った。
「これでどう」
「まだまだ、これからですよ」
再び対峙する精霊達。だがそれはあくまでも精霊たちの戦いであっただけだ。

昇はシエラの戦いを固唾を呑むように見守っていたのだが、突然炎の玉が昇に直撃する。
「あっちも始めたことだし、こっちもはじめようとするか、なあ」
「いったい……なにを？」
「はぁ、決まってんだろ。契約者は特殊能力を得ることが出来るんだぜ、こいつを使わない手は無いだろう」
「くっ」
「昇！」
陽悟の攻撃に昇の援護に向かおうとするシエラだが、ミリアのその前に立ちはだかる。
「悪いけど退いてくれる」
「力ずくでどうぞ」
「昇！」
直撃はしたものの、何とか昇は立ち上がると陽悟を睨み付けた。
「ヒュー、女みたいなツラしながら、なかなかタフだね～」
だが実際にはかなりのダメージを負っていた。

正直立っているのがやっとだ。けど、次に喰らったらもう立てる自信は無い。というか契約者に特殊能力が宿るっているなら、僕にも宿ってるはずだよな。……って、僕の特殊能力ってなに？

昇が考えを巡らす中、陽悟は先程の攻撃がかなり効いてると思っているのか余裕を見せるように炎を自分の指に灯すとタバコに火をつけた。

「俺の能力は見ての通りさ、どうやらフレイヤーと言うらしいがな。さあ、次はテメーの番だ。さあ、さっさと能力を見せてみな！」

そう言いながら陽悟は三つの火の玉を作り出し、昇へと放った。

いや、そんな事を言われても実際僕は自分の能力なんて知らないんだけど。というか、どうすればいいんですか、この状況！

迫り来る三つの火の玉を前にして昇はせいぜい腕の顔の前でクロスさせて、全身に力を入れるしか出来なかった。そうすればすこしは耐えられると思ったのだろうが。

そんな事では防ぎきれないような火の玉はすでに昇の目の前に迫っていた。

第三話　精界（後書き）

そんなワケで始まりました戦い、昇にとってはワケの分からないことだけですが、作者の私はいつ頃このバトルが終わるまであとどれぐらいかかるのかが不安です。

もしからしたらこのバトルだけであと数話位書くかもしれない。それでも、やっとシリアスになってきた事にちょっと安心しました。というかあのままコメディー調が続いてもね。

それに、何故か連載になると話が進みません、といいますか私の力量不足なんですかね。話がうまくまとまらないのは、けど、これでも修正済みなので、こんな形になったわけですが。まあ、大幅なストーリー修正は出来ないのでこういう風になりました。

なんか中途半端な気もしますがそれは気のせいです。というか、そういうことにしといてください。もし、そう思わない人には土下座しますんで、この話は決して中途半端ではないです。まあ、そんな訳でして、そこのところは承諾してください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、このバトルが（初戦なのに）いつ頃終わるのか不安な葵夢幻でした。

第四話　踏み出す勇気

迫ってくる三つの火球、昇はせめてもの抵抗として目の前で腕を交差させて衝撃に備えるのが精一杯だ。
そして三つの火球は同時に目標に達すると爆発した。
「うっし、ビンゴ！」
「ダメです、逃げられました」
「あん？」
爆煙が消え去るとそこには昇の姿は無く、シエラもまた姿をくらましていた。
「おい！　あいつら何処に行きやがった？」
「すいません、分かりません。でも、この精界の中にいることは確かです。いくら精界を作り出した精霊でも自由には精界から出入りは出来ません。精界から出るには精界を消し去るしかないのですから。そして未だに精界が展開されているって事は、まだこの近くに居るはずです」
「ちっ、でもまあ、逃げたわけじゃねえみてえだな」
「はい、一時的撤退かと」
「まあいい、どうせ邪魔は入らないんだ。あいつらを探すぞ」
「はい、陽悟様」

その頃、昇とシエラの二人は駐車場の隙間から脱出して屋上へと避難していた。
昇が無事に非難できたのも全てシエラのおかげだ。シエラは初動から音速に近いスピードでミリアを一瞬にして通り越すと、少しスピードを落として昇に接近して抱きかかえると翼を羽ばたかせてそのまま空へと舞い上がったのだ。
ギリギリのタイミングだったため、かなりのスピードで昇と接触

したわけだが、やっぱり接触した時の衝撃はかなり大きかったようで、昇は屋上につくとすぐに座り込んでしまった。
「昇、大丈夫？」
それでも昇は苦笑を浮かべる。
「ははっ、何とかね。でも助かったよ、ありがとう」
「そう、それはよかった」
精界を張って初めての微笑を見せたシエラを見て、昇は何故か安心することが出来た。
「けど昇、能力はどうして使おうとしなかったの？」
「というか、能力ってどうやって使うの？」
「えっ！」
あまりにも驚くシエラを見て昇も困惑する。
「昇、自分の能力の使い方を知らないの？」
「だって、シエラは何も言わないじゃないか」
「昇の能力だって私は知らない。契約者は契約をした時点で、自分の能力とその使い方を自然に知ることが出来る物」
「えっ、けど」
僕はまったくそんなの知りませんけど。
「だから昇はすでに自分の能力と使い方を知っていて当然」
そんなことを言われても。
昇にはそんなことはまったく分からなかった。自然に知ることの出来る能力を自分は知ることが出来なかった。
けどそれだけじゃない。そうなってくると昇は単なる足手まといで、シエラは二人を相手に戦わなくてはならない。
なんで、なんで何も分からないんだよ
自分の力の無さに苛立ち(いらだ)を覚える昇。そんな昇を包み込むようにシエラは昇を抱きしめる。
「シッ、シエラ！」
突然のことに思わず照れてしまう昇とは逆に、シエラは口を昇の耳に近づけると囁くように言葉を紡ぐ。

「大丈夫、昇」
「えっ」
「昇は私が選んだ人だから、大丈夫。焦らないで、心を落ち着けて、ここは私が何とかするから」
そう言ってシエラは昇から離れた。
まさか！　ダメだ、そんなこと
「シエラ！」
だがシエラは言葉ではなく、微笑を返しただけだった。
シエラのウイングクレイモアから生えた翼は、一度羽ばたいただけでシエラを宙へと舞い上がらせ、そのまま下に向かって飛び去ってしまった。
くそっ！
昇は拳を床に思いっきり叩きつける。
何で僕には力が無いんだ。確かに僕は争いごとは好きではないかもしれないけど、ここまで何も出来ないなんて思ってもみなかった。
確かに僕はシエラに巻き込まれてこの戦いに参加する事になったけど、それでも自分には何かの力があると思ってたのに。僕はそこまで役立たずだったのか。シエラ一人に全てを任せるなんて……なんかかっこ悪いじゃないか。
昇は自ら望んで戦いの場にいるのではない、それでもいざ戦いになると何も出来ない自分が不甲斐無く、そして悔しかった。
そんな昇を置き去るように、戦闘は続いていた。

「テメー、何処まで逃げる気だよ！」
「陽悟、あまり熱くならないで」
「陽悟様だっていってんだろ」
「すいません、陽悟様。けど、あの精霊どこかに私達を誘導しているような…」
「うっせーな！　とにかくアイツをぶちのめすんだよ。分かったか、

コラッ」
「キャゥ、すいません」
「フェザーショット」
ウイングクレイモアから生えた翼から羽の弾丸が二人を襲うが、ミリアは前面に壁を作り弾丸を全て弾くが、その度にシエラは二人から適度な距離を取っていた。そう先程ミリアが言ったように誘導するように。
それからもシエラは二人がその弾幕を突破してくると、再び自分を見失わないようにスピードを調整しながら距離を開けて再び弾幕を張る。
本来ならハイスピード接近戦を得意とするシエラだが、わざわざ弾幕戦に持っていくにはそれなりの策があった
ここから少しでも二人を遠ざけて、昇を探せないほどの距離をとったところで精界を解けば、そうすればまた人ごみにもぐりこむ事が出来る。そして昇を迎えに行って相手が精界を張る前にここを脱する事を出来れば、もう二人は上ると接触する事は無くなる。
それがシエラの作戦だった。だからこそ、本来なら接近戦を得意とするシエラだが、あえて遠距離戦を仕掛けている。
「いい加減にしろよな、テメー」
陽悟は迫り来る羽の弾幕を焼き払うと、シエラへと単独で突っ込んでいく。
さすがにこれは予想していなかったのか驚きの表情を見せるシエラ。
陽悟は手にした炎を思いっきりシエラにぶつけるが、シエラは炎をかわすと急旋回陽悟に向かって飛ぶと、ちょうど陽悟の頭上に着地する。
そして天井がへこむほどの初動スピードで陽悟にクレイモアを振り下ろす。
「アースドーム」
ミリアがハルバードを振り下ろすと、床のコンクリが一斉に陽悟

を守るようにドームを形成、シエラの攻撃を完全に防いだ。
「やっぱり、ダメか。でも！」
シエラはコンクリのドームを思いっきり蹴って離れる。
完全にシエラの攻撃を防ぎきったドームは形を崩して再び床へと戻っていく。
「テメー、よくもやり…」
文句をいいたい陽悟だが、そんな余裕をシエラが与えるはずが無い。
シエラのウイングクレイモアの翼はは展示してある商品を押しのけて、思いっきり広げる。
「陽悟様！」
急いで陽悟の前に出るミリア。だがその前にシエラの力が放たれる。
「フルフェザーショット！」
広げきった翼から放たれる数百の羽の弾丸。それは前方にあるものを全てなぎ払い、ミリアたちに迫っていく。
そして着弾と同時に爆発、その階にあるほとんどの物を吹き飛ばしてしまった。
「これで終わってくれれば楽なんだけど、相手は防御系の精霊、これで終わるはずが無い」
爆煙が立ち込める中でシエラは警戒を怠らなかった。いつ反撃が来てもいいように迎撃体勢だけはとっているのだが、一向に反撃の気配が見られない。
いくらあれだけの大技を喰らったからといっても、ここまで反応が無いことに違和感を覚えるシエラだが、土煙が晴れて始めて力を感じ取った時にはもう遅かった。
「上と下！」
「ショット」
天井と床より放たれたコンクリの弾丸がシエラへと襲い掛かる。
どうやら先程まで反撃をしてこなかったのはこの技の力を溜めてい

たらしい。
　シエラは翼を羽ばたかせると天井と床の丁度中間地点で留まり、上下から来る弾丸をかわし続ける。
　しかもやっかいなことに、コンクリの弾丸は反対側に着弾すると吸収されて再発射される。つまりこの攻撃はミリアの力が続く限り弾が切れることなく、上下を行き来する。
「まるで無限弾幕、さすがにキツイ」
　それでもかわしつづけるシエラだが、無数の弾幕を避け続ける事はさすがに困難でシエラの脇腹を一発の弾丸が半分かするように弾が通り過ぎていった。
「ぐっ！」
　だがシエラはバランスを崩すことなく、そのまま飛び続けて少しでもミリアから離れようとするが、ミリアの攻撃はシエラを中心に行っている物で、シエラが移動するたびに攻撃の範囲も移動する。
　つまりミリアの力が及ばないところまで行かなくては行かないのだが、シエラが移動するたびにミリア達も追ってくるため、なかなかミリアの範囲から出れない。
　しかも最悪なことに先程の自分の攻撃で見通しを良くしてしまった。なにしろこの階に有る物をほとんど吹き飛ばしてしまったのだから、ミリアにしてみればシエラは格好の的であった。
「……しかたないか」
　シエラは静かに呟くとミリア達に背を向けるとウイングクレイモアを前に出し、一気に加速した。途中弾丸の直撃を喰らいバランスを崩しながらもスピードを落とすことなく、一気に突き進む。
　そしてその階にある目の前の壁を全てに穴を開けながら一気に進んで表に飛び出すと、すこし離れた所にある地上の大型駐車場に着地した。
「はぁ、はぁ、ぐっ」

さすがにあれだけに無茶をしたからにはシエラも無事ではすまなかった。だがその表情には余裕の笑みが表れていた。

確かさっきまで居た階が三階、屋上とはかなりかけ離れてるはず。だから昇はもう安全。そして今ここで精界を解けば、あいつらはこれ以上は何も出来ないはず。

シエラは荒い息を整えながらよろけるように立ち上がると、精神を集中させる。そして空にはまるでガラスが割れるようにヒビが入って行き、そのまま真っ白な空は割れて精界が解かれる。

「うそ！　いつの間に？」

だが現れた空は青空ではなく、茶色い空だった。そしてシエラの精界が解かれていくのと同時に白いが混ざった風景が、茶色の混ざった風景へと変わっていく。

この色は土の精界、つまりあの精霊が作り出した物。くっ、いったいいつの間に私の精界の外に自分の精界を作ったの？

これではシエラの作戦も台無しだ。精界から出るには作り出した本人が自分で解くか、気絶させるしかない。どちらにしても困難であり、あの二人がシエラ達を見逃すはずも無い。

どうしよう。……昇、ごめんね。私が変なことに巻き込んでしまったから。

こんな状況でもシエラが思い出すのは昇のことであった。確かに昇と接触したのは昨日が初めてだが、シエラはそれ以前から昇の事をずっと見ていた。だから選んだ、器の候補者として。

けど、こんなにも早く負けることになるなんて。

負ける。つまり精霊を倒し、契約を無効化させること、そして一度契約した者同士はもう二度と契約は出来ない。つまり今ここでシエラが倒されれば、もう二度とシエラは昇と会うことが出来なくなる。

昇、昇、昇。

自然と流れ出てくる涙を拭くことなく、シエラは現実に打ちひしがれていた。

僕は本当にこのままでいいのか？
それを何度自分に問うたことか、昇は屋上で未だに自問自答していた。
あんな奴に、あんな女の子を殴りつけるような最低な奴にも僕は何も出来ないのか？　僕にはそんなにも力が無いのか。
ミリアと最初に会ったときの事を思い出す昇。それはミリアがどんなに酷い事をされても、健気に従っている姿だった。
……あれっ、ちょっと待てよ。あの子、何であんな奴を候補者に選んだんだ？　確か精霊がエレメンタルロードテナーの候補者を選んで契約するんだろ。あの子はあんな奴の何処にその素質を見出したんだろ。
それになんだろう、何か無理矢理言うことを聞かせてるみたいだったけど、あれはいったいどうして？
それに…それにあの子は最初謝ってた。ごめんなさいって、それって本当は戦いなんて望んでいないんじゃないのか、それが無理矢理戦わせてるのだとしたら。
ふとした疑問から冷静になって行った昇は自然とそれを見出そうとしていた。
だがそんな時、下の階からもの凄い爆発音と共に屋上が激しく揺れた。それはシエラが丁度三階で大技を使った瞬間だったのだが、屋上に居る昇にそれを知るすべは無い。ただ不安と焦燥（しょうそう）にかられるだけだ。
シエラ！
思わず駆け出そうとする昇だが、数歩走っただけですぐに足が止まる。
僕が行っても何も出来ない。
未だにそのことが頭から離れない昇はそれ以上踏み出すことが出来なかった。

だって、しょうがないだろう。何の力を持たない僕が行っても足手まといになるだけじゃないか、僕は結局何の力にもなれないんだ。

再びその場に座りこむ昇。そして力無くうな垂れるのだった。

どうすればいいんだ。僕はどうするべきなんだ。

その時昇の頭によぎったのはシエラと契約をしたときの言葉だった。

『なら強くなって、自分が目指すものに手が届くように』

僕はそんなにすぐには強くなれない。というか、結局あの後は騙されて契約したものだし、僕とシエラとの関係なんてそんなものかもしれない。

けど、でも……

再び立ち上がる昇。その目には強い意志が表れていた。

このまま放って置けるわけ無いじゃないか、シエラが命がけで戦っている間に僕だけがこんな所で何もしないなんて、そんなこと出切るわけ無いじゃないか。

正義の味方を気取るつもりなんて無い。ただ、昇には放っておく事なんてできないだけだ。シエラの事も、涙を流しながら戦いを挑んできた相手の精霊の事も、昇には放って置く事が出来なかった。

そしてその時、昇は何かを悟るようにある考えに達する。

なんだ、何をしてたんだ僕は。だいたい契約だって昨日したばかりじゃないか、何も出来なくって当然じゃないか。

だから、だからこそやるんじゃないか。たとえ危険で傷つこうとも、このまま放って置く事が出来ないからやるんじゃないか。……損な性格だなと自分でも思うけど、このまま見て見ないふりは僕には出来ない。

昇にはもう迷いは無い。例え足手まといで役に立たなくても、何かしら出来ることがあると信じて突き進むしかないから。

それにどんな経緯があろうとも昇はシエラと契約をしてしまった。もう戻る事は出来ないなら、目の前の道を進むしかない。

昇には最初から分かっていたのかもしれない一番大事なことは、

最初の一歩を踏み出す勇気だという事を、昇は自然と理解したのかもしれない。

そして昇はシエラの元へとその一歩を踏み出した。

第四話　踏み出す勇気（後書き）

激化していくバトル、そして昇決意。そんなワケでずいぶんと戦闘が激しくなってきたなと思って来た今日この頃。

えっと、一応ここまでの話では物語の時間上少ししか立ってないのなんでこんなに長いんだろ、というか、まあ、物語の時間上だからいっかとも開き直ったりもします。

というか昇達にとっては初めての戦いなのにピンチだらけ、苦労してるね二人とも。はいそこの方、いや、書いてる自分で言うなよって突っ込まないように、だって、二人がピンチになってくれないと話が進まないんだもん（ハート）　はいそこの方、気持ちわるって思ってもいいですよ、自分でもそう思ってますから。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、初戦なのに話が長げーなと思った葵夢幻でした。

第五話　エレメンタルアップ

「アースウェーブ！」

ミリアはハルバードを思いっきり振り下ろすと、そこを中心に地面は波打ち生えてる者や乗っているのもを全て吹き飛ばしていく。

そしてデパートの外にある大型駐車場を全て更地にしてしまった。

そうなると当然、駐車場に身を潜めていたシエラはその身を二人に晒さざしかない

「ははっ、やっと見つけたぜコノヤロー。散々手間取らせやがって、もう逃げ場はねえんだからさっさと観念しな」

そう言われてさっさと降伏するシエラではない。それどころか最後まで、昇のために戦わないといけない。なにしろシエラが昇を争奪戦に巻き込んでしまったのだから。

その責任感と別の昇るへの思いがシエラに再びウイングクレイモアを持たせる。

「おい、さっさとやっちまえ」

「は、はい。陽悟…様」

未だに息の荒いミリアに対して陽悟はシエラを倒すように命令し、ミリアも多少ふらつきながも陽悟の前に出る。今までは軽そうに扱っていたハルバードも今ではとても重そうに見える。

どうやら先程の大技がかなり堪えてるようだ。確かに五〇〇〇台もの車を止められるほどの駐車場を更地にしたのだから、それだけ体力を失って当然なのだが、それでもミリアは懸命に戦おうとする。

だが敵に情けを掛けていられるほどシエラにも余裕は無かった。

シエラはクレイモアを後ろに構えると翼を羽ばたかせて、一気にミリアへと突っ込んで行った。

一気に二人の距離が縮まる。

そして宙に舞い上がったシエラはクレイモアを一気に振り下ろすが、ミリアはそれを受け止めたが体に力が入らない。

それでもミリアはなんとかハルバードを横に押し出すと、シエラの攻撃を受け流した。そしてその勢いを使い横に一回転すると、更に遠心力の加わったハルバードがシエラへと迫る。

だがシエラはクレイモアを地面に突き刺すとそのままミリアの攻撃を受け止め、翼を広げて羽ばたき、推進力を利用してミリアを弾き飛ばした。

けどミリアも只吹き飛ばされるわけには行かない。何とか空中でバランスを取ると、一回転して着陸跡（ちゃくりくこん）を残しながら、地に足をつけてシエラの追撃に備えるが、シエラは追撃してこなかった。

「……上！」

シエラはすでにミリアの頭上におり、一気に降下すると共にクレイモアを振り下ろす。

本来防御重視のミリアならそれぐらいの攻撃は受けきれるはずだが、先程の大技で体力が回復しきっていないミリアはシエラの攻撃を受けようとせずに、大きく後ろに跳んでシエラの攻撃をかわそうとした。

だがシエラは地面すれすれで急旋回、ミリアの追撃へと入っていく。

ハイスピードのシエラはミリアが地面に着地する前には、もう攻撃範囲にミリアを入れており、一気にクレイモアを振るう。

ハルバードを斜め下に向けてシエラの攻撃を受け止めるミリアだが、未だに地面に足が付かずに宙に浮いているミリアはこのまま吹き飛ばされるのがオチだが、ミリアはその前にシエラの腕に足をかけると大きく踏み込み、シエラの攻撃を緩めるのと同時に大きく後ろに跳ぶ事が出来た。

追撃を掛けたいシエラだが、先程のミリアの行動が完全にシエラの腕を一時的に封じたため、すぐに追撃には行けなかった。

そして一旦追撃を諦めたシエラは改めてウイングクレイモアを構える。ミリアも多少は体力が回復してきたようで、呼吸を整えながらハルバードを構えた。

だが未だに体力が回復しきっていないミリアは決して攻撃に出ようとはしなかった。それにミリアは本来なら防御重視のカウンター型だ。だからミリアは体力を回復させるのと同時にシエラの攻撃を待っていた。

そしてシエラは翼を大きく羽ばたかせると初動からハイスピードでミリアに突っ込んで行き、ミリアもシエラのその攻撃に備える。

そして二人は再び攻防を繰り返していった。

ったく、いつまでやってんだよ。

その二人の激闘を陽悟はイラつきながら見物をしていた。

まったく、何であの時あんな弱い奴が出てきたんだよ。どうせならもっと強い奴と契約したかったぜ。

溜息をつきながら未だに決着の付かない激闘を見物している陽悟。

それにしても、あそこまで言う事を聞いてくれるなんて思ってなかったぜ。そこだけは健気でいいんだが、ここまで弱いと話にならねえな。

陽悟はタバコに火をつけると、激闘を繰り広げていた二人は再び距離を取り、互いに回復しながら相手の隙を狙っていた。

それにしてもあっちの奴もがんばるな。なんでそこまでするんだか、あんなに必死になってよ。いったいなのためにやってんだか。

……んっ、待てよ。

ふとあることを思いつく陽悟、笑みを浮かべながらタバコを踏み消す。もしこの場に昇が居て陽悟の笑みを見たら確実に嫌悪感を覚えただろう。

そして陽悟は二人の戦闘の合間を見てミリアの後ろへと回り込むと、なにかを静かに言うように顔をミリアの耳に近づけて指示を出す。

驚きと疑念に満ちた顔をするミリアだが、陽悟が一喝すると素直に首を縦に振るのだった。

突然の陽悟の介入によってシエラに不安がよぎる。
こっちはあの精霊だけで手一杯なのに、今あの契約者に介入されると結構やっかい。けど逆に契約者を倒すって手もある。
どちらにしてもシエラにとっては賭けである。やるかやられるかの瀬戸際が迫っていることを実感する。
そろそろ決着をつけないと、じゃないと私も持たない。
改めてクレイモアを構えるシエラを見て、ミリアもハルバードを構え、そして疾走するのだが、今まで先手は全てシエラだった。それはシエラがハイスピードの接近戦を得意としているからだ。
それなのに今度のミリアは自分から攻撃を仕掛けてきた、完全に後手に回ったシエラ。
すぐ傍まで迫ったミリアはハルバードを振り下ろす。シエラは横に軽く飛びそれをかわすが、ハルバードは地面に接する前に急に方向を変えてシエラを追撃する。シエラは翼をはためかせると今度は大きく距離をとった。
だがミリアはすぐに追撃に出てシエラから離れようとはしなかった。
その後もミリアは攻撃を続けてシエラはかわし続けた。
「いったい何を企んでる」
ミリアの攻撃をかわしながらもシエラは口を開く。
「私は陽悟様の指示に従ってるだけだよ」
「指示ね。だいたい察しはつく」
「なら、どうにかしてみれば」
「そうね、そうしたいけど」
それでもどうしようもない。ミリアは間髪をおかずに攻撃をしてくるうえに、シエラが退くとすぐに追撃には行って決してシエラから離れようとしない。そこに相手の策略があるとシエラは見抜いていた。

「私の動きを止めてどうするつもり」
「なっ！」
「どうやら図星みたい」
笑みを浮かべるシエラに対してミリアは顔をゆがませていた。まさか指示を完璧に読まれているとは思いもよらなかったのだろうが、急に先手に出てきたミリアの行動を見ればシエラには相手の策略は簡単に見抜けた。
だが、そうなるとシエラは一箇所に留まるわけには行かなくなった。相手の狙いがシエラの動きを止める事ならシエラは動き続けなければならない。そうしないと相手の思う壺だ。
シエラはミリアの攻撃をかわしつつも反撃もした。だがさすがに相手は防御型、シエラの攻撃は完全に受け止められた。だがシエラはすぐにその場から離れて一回の攻撃ですぐにミリアから距離を取ろうとする。
だがそれをミリアが許すはずも無く、ミリアはすぐにシエラに追いついた。
「さすがに粘ってくる。けど、これならどう！」
シエラは翼を大きく羽ばたかせると一気に上に舞い上がった。さすがに空中までは追って来れないだろうし、例えシエラの高度まで跳んだとしても打ち落とされるのがオチだ。
そんな中でミリアは再び力を溜めて大技に出る。さすがに体力的にはキツイがそこはなんとかミリアは力を搾り出した。
「ブレイクアースシュート！」
ミリアは一気にハルバードを地面に突き立てるとそこから地面にヒビが入って行き、崩壊を始める。
大小様々に砕かれた地面は一気にシエラに向かって飛んでいく。
「さすがにそれは反則っぽい」
ミリアの大技に愚痴を漏らすシエラだが、それでも宙に舞っているシエラは小さな破片は避けて、大きな破片はクレイモアで砕いていった。

そんなことを続けているうちに全ての攻撃をしのぎきったシエラだが、改めて地上に目を向けるとそこにミリアの姿は無かった。
「どこ」
地上をくまなく探すシエラだが、ミリアの姿を見つける事は出来なかった。
「うりゃあーーーっ！」
上からの気合の入った声にシエラは上を向くとやっとミリアの姿を見つけた。
「いつの間に！」
シエラが驚くのも無理は無い。何しろ先程のミリアの大技はあくまでもカモフラージュで、ミリアは大きな破片の上に乗るとそのままシエラに向かって飛んで行き、シエラに気付かれる前に更に破片の上から大きくシエラの頭上を通り越すほど上に跳んでいた。
ミリアはシエラの真上からハルバードを振り下ろす。ただでさえ重量のあるハルバードに落下のスピードに重力が加わったうえに、完全な不意打ち、シエラはハルバードを受け止めるとそのまま勢いに押されて地上へと落下していく。
そして二人はそのままの格好で地上に激突、完全にミリアに乗られているシエラは思いっきり地面へと叩きつけられる事となった。
だがミリアの追撃は終わらない。そのままシエラを押さえ込み動きを封じる。
完全に上の乗られているシエラは動きが制限されるうえに、ミリアのハルバードも防いでおかないといけない。すぐには脱し得ない状況だった。
それでもこのまま硬直状態になるのはまずい。シエラは必死にミリアをどかそうともがくが、ミリアも必死にシエラを押さえつけていた。
「ははっ、よくやった！」
そんな中で横から聞こえてくる陽悟の声。
その声に焦るシエラ。さすがにこのままでは相手の思う壺だ。

だが二人の拮抗は解けることなく、ミリアはシエラに馬乗りになり完全にその動きを封じていた。
「それじゃあ、くたばれー！」
陽悟は今まで溜めていた力を一気に放出すると、炎が津波のように二人に迫っていった。
「えっ？」
自分にも迫ってくる炎の津波にミリアも驚きの表情を隠せなかった。だがそれはシエラも同じで驚いていた。
「まさか、私ごと相手を倒すつもり……」
相手の動きを完全に止めろといわれたけど、まさか自分ごと倒そうとはさすがにミリアも思いもよらなかった。
そして驚きが脱力感に変わり、一気に力が抜けていくミリアをシエラは力の限り押し返し、一気に吹き飛ばした。
「飛べばまだ間に合う」
だが正直少しは焼かれる事を覚悟したシエラはウイングクレイモアの翼を羽ばたかせるのだが。
「シエラ！」
そんな時、突如シエラの耳に思いがけない声が聞こえてきた。
「……昇？　だめ、昇逃げて！」
だが迫り来る炎の津波を恐れることなく、昇はシエラの元へと走り続ける。
シエラは上でなく昇の元に向かって飛び出した。
後ろから迫ってくる炎の津波に遅れることなくシエラは飛び続ける、昇の元へと。そして昇もシエラに向かって炎の津波に恐れることなく走り続けた。
そして昇とシエラの手は互いに結ばれたその時、シエラは異常までの力が沸きあがってくるのを感じた。
「なにこれ、昇、なにをしたの？」
「えっ、僕何かした？」
二人ともワケの分からない状況だが、シエラは沸きあがってくる

力に全身が光りだし、力がみなぎって来るのと同時に左腕の篭手が変化する。
「もしかして、これが昇の能力？」
「えっ、そうなの」
「そうだとすると、かなりラッキー」
「へぇ～、そうなんだ。って、アツッ」
炎の津波はすぐそこまで迫っていた。
「説明は後、昇、私の傍から離れないで」
「分かった」
昇は後ろからシエラの肩を掴むとシエラは左腕を前に出す。そして何かの言葉を発するが、それは全て炎の津波が飲み込んでしまった。
昇とシエラと共に。

「おい、いつまで寝てんだよ。さっさと起きろ」
シエラに吹き飛ばされたことで何とか炎の津波を回避することが出来たミリアは、気絶していたところを陽悟に蹴り飛ばされて無理矢理意識を回復させられた。
「陽悟…様？」
未だにうつろな目をしながら寝ているミリアを見て、陽悟はもう一度ミリアに蹴りを入れる。
「ぐっ！」
呻きながらも完全に意識が回復したミリアが見た物は、未だに燃え続けている炎の海だった。
思わず背筋が寒くなるミリア。
もし私があの時シエラに吹き飛ばされていなかったら。
そう考えるだけでミリアは陽悟を睨み付けた。
「ああっ、何だよその目は」
「私ごと焼き払おうとした？」

「ったりめーだろ、いつまでちんたらやってるテメーがワリーんだよ」
「でも酷い！」
「うっせーんだよ」
腹部に蹴りを入れられてうずくまりむせ返るミリア。その目には先程の力は無く、すでに死んだ魚のような目になっていた。
「けど見ろよ、この炎をな。これが俺の力だ、全部俺がやったんだ。すげーだろ、あいつらだってこれでお終いだよ」
そのまま自分の力を誇示するよう笑い続ける陽悟。けどミリアは何の反応もせず、ただ地面に這いつくばっているだけだった。
「さーて、そろそろいい具合に焼けたんじゃねえかな。けどまあ、死体を残すのも面倒だし、このまま焼き続けるか」
陽悟は幾つかの火球を作り出すとそれを炎の海へと連射していく。
「酷い」
笑いながら炎を繰り出す陽悟を見てミリアはそう思わずにはいられず、そして偶然とはいえ自分が出会った不運を呪わずにはいられなかった。
まるで狂ったように炎を放ち続ける陽悟。だが突然一陣の風が吹き、陽悟は風によって吹き飛ばされそうになるが、何とかその場に留まることが出来た。
「くそっ、何なんだいったい。……なんだありゃ」
「うそ、そんな、あの炎の中でなんで」
二人が見て驚愕した物、それは炎の海から生えた白く巨大な一対の翼だった。
それは間違いなくシエラのウイングクレイモアの翼。それが炎の海より高い位置まで大きく羽を広げている。
そして翼が羽ばたくと強烈な風が巻き起こり、陽悟は思わず地面に伏せて、ミリアも吹き飛ばされまいと必死に地面に喰らい付く。
そして翼の羽ばたきは炎の海を完全に消し去るまで続き、強烈な風を巻き起こしていった。

風が収まり陽悟は立ち上がると信じられないものを目にする。
「何で生きてるんだ、あいつら」
完全に冷え切った地面に立っていたのは、確かにシエラと昇だった。
「おい、どうなってんだよ。これっ！」
目の前の光景が信じられずにミリアに尋ねる陽悟だが、ミリア自身もよつんばになり、信じられないという目で見ていた。

「昇、大丈夫？」
「まだ少し暑いけど大丈夫だよ」
「そう、よかった」
安堵の表情を浮かべるシエラを見て昇も和やかな心持になっていく。
「それにしても、昇もレアな能力を手に入れたものね」
「えっ、これって結構珍しいの？」
「今まで器の争奪戦、その歴史の中でその能力を持った人は確か、昇で三人目」
「へぇ〜、そうなんだ」
自分の手を見つめる昇。
何かしらの役に立ちたいと思ってきてみたら、まさかこんな能力が目覚めるなんて。
昇はあのピンチの中で自分の特殊能力を目覚めさせることが出来た。いや、正確に言うとあのピンチだったからこそ目覚めることが出来たのだろう。それほどやっかいであり、便利でもあるのが昇の能力。
「エレメンタルアップか」
「けど、これでもう負ける気がしない。昇、一緒に戦ってくれる？」
「もちろん」
力良く頷く昇。シエラはそれだけでも力が沸いてくるようだった。

「じゃあ、さっさと終わらせて買い物の続きと行きましょうか」
「ええ～、まだ買い物が有るの？」
「当たり前でしょ。もちろん、昇にも付き合ってもらうからね」
「はいはい、分かりましたよ」
疲れたような表情を浮かべる昇を見てシエラは一笑すると、改めて敵を見据える。
もう負けない。昇が傍に居て力を貸してくれる。だから、私はもう負けない。
シエラは沸きあがる力を抑えることなくウイングクレイモアを構える。

第五話　エレメンタルアップ（後書き）

そんなワケで特殊能力に目覚めた昇。さて、昇の特殊能力とはそしてこれからの戦いの顛末は……とまあ、そんなことはさておき、そろそろこの戦いに決着が付きそうです。

けど、なんか文庫本サイズに起こすと４０ページ以上書いてるみたいですが、……本当、作家さんて大変だね。あれだけの物をひねり出す上に私なんて修正作業までやってますから、まあ、本職の作家さんは校正の人がやってくれると思うんですが、自分でやる辺りがネット小説の運命なんですね。……まあ、しかたないですけどねはいそこの方、なにいきなり愚痴ってんだこいつはとか思わないでください。時にはそういう気分になる時にもあるんだ！　というか愚痴って悪いかーーー！　はい、まあ逆ギレなんで気にしないでください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、次回で決着が付いてくれることを願う葵夢幻でした。

第六話　終わりの始まり

「さーて、そろそろ終わりにしましょうか。昇、私から少しは離れたところに居て」
　沸きあがる力に興奮しながらシエラは今にも相手に向かって突っ込みそうになるが。
「シエラ、ちょっと待って」
「えっ、何？」
　そんなシエラを昇は止める。どうしても気になる事があるからだ。そしてその事をシエラに尋ねる。
「シエラ、確か契約って精霊が契約者を選ぶんだよね？」
「えっ、そうだけど、いったいどうしたの昇」
「その逆は出来ないの？　契約者が精霊を選ぶって事は」
「それは無理。だって精霊なんて普通は見えない存在なの。そんな存在とどうやって接触すればいいの」
「けど、何かしらの方法があるんじゃないかな」
「う～ん、まあ確かに有るにはあるんだけど」
「やっぱり！」
「昇？」
　確信を得て意気込む昇だが、シエラには何の事だかさっぱり分からなかった。
「シエラ、この戦いを終わらせる方法を見つけたよ」
「昇、いったい何を？」
「あの子と、あの精霊と話をしなくちゃ。シエラ手伝って」
「昇……分かった。昇に任せる、それまでちゃんと私が守ってあげるから」
「ありがとう、シエラ」
　微笑んでくる昇を見てシエラは少し顔が赤くなるけど、それと同時に力も沸いてくるようだった。

昇が何を考えているのか分からないけど、とりあえずあの精霊の動きを止めないと、そうしないと昇が近づけない。
「昇、先に行くから付いて来て」
「分かった」
シエラはウイングクレイモアを後ろに構えると、翼を羽ばたかせて宙に舞い上がり、そして二人に向かって一気に加速していった。

「くそっ、いったいどうなってんだよ」
あの炎の海から無事に脱出して、今度は反撃までしてきたシエラ達に、陽悟は火球をいくつも作り出し連射する。
シエラは飛び続けながら陽悟が放った火球を潜り抜けて、ついに陽悟の元へと辿り着いた。
「あなたは邪魔」
シエラは陽悟の腹に蹴りを入れて吹き飛ばした。もちろん手加減をしたから致命傷にはならないけど、これでしばらくは気を失うはずだ。
ミリアは残っている力を振り絞り、ハルバードをシエラに振り下ろすが、シエラはいとも簡単にミリアの攻撃を受け止めた。
「あなたもあんな奴のために、よくここまでがんばるわね」
「精霊にとって契約者は自分の命と同じ、それはあなたも良く分かっているでしょ」
「ならなんで、あんな奴と契約をした！」
二人の近くまで来ていた昇は声が出る限りの力で叫んだ。
「君はあんな奴に器の資格があると思っているのか、君をまるで道具に用に扱うあいつのどこに君は器の資格を見出したんだ」
「そっ、それは……」
ミリアは泣きそうな表情を浮かべて体の力が抜けていくのを感じた。シエラはそのままミリアを押し返すこともできるのだが、いったん昇に任せると決めた以上は今の体勢を維持し続けた。

「もし君が無理矢理契約をさせられて戦ってるんだとしたら、助けるから、必ず助けるから、もう戦うことをやめるんだ！」
「なるほど、だからさっきもあんたがいるのにも構わずにあんな攻撃をしてきた。そういうこと」
「そう、あいつは君の事を道具ぐらいにしか思ってない。そんな奴のどこに君がそこまでやる理由があるって言うんだ」
「……」
シエラは急に憤り（いきどお）の無い怒りを覚え、クレイモアを強く握り締める。
「だからさ、もうやめようよ」
微笑みながら昇はミリアに向かって手を差し出す。
ミリアは一瞬だけ昇が差し出した手を掴もうとするが、すぐに思い直すと手を引っ込めた。
「もうやめて、そんなこと分かってるんだよ」
「なら、僕が何とかするから」
「だからやめて！　うわあああーーーっ！」
ミリアはシエラのクレイモアをカチ上げてシエラの体勢を崩した後、今度は昇に向かってその場からハルバードを振り下ろす。
「アーススピア！」
地面から突き出した土の槍が昇に迫る。
それと同時にシエラも昇に向かって左腕を向ける。
「ポインターシールド＜点で紡ぐ盾＞　六つ」
シエラの左腕から飛び出した光の弾は昇の前に集まると大きな六角形を形成、そのまま半透明な白い盾になり、ミリアの攻撃を完全に防いだ。
「なっ、なんで。あなたさっきそんな精霊武具持ってなかったじゃない」
確かに先程までシエラの精霊武具はウイングクレイモア一つだけだったが、今では左腕の篭手が進化して精霊武具と化している。
「これが僕の特殊能力だよ」

二人に近くまで着た昇はミリアに優しい声で話しかけた。
「あなたの……能力」
「そう、エレメンタルアップ。契約した精霊の力を上げる事が出来る能力。簡単に言うと一時的にレベルを飛躍的に上げる事が出来るってとこかな」
「そんな改造コードみたな能力、ずるい！」
「いや、ずるいって言われても……」
「それで、あなたはまだ戦うつもり？」
シエラはクレイモアの剣先をミリアに突きつける。
「……」
先程までのシエラの力ならまだ戦えたのだろうけど、エレメンタルアップで大幅にレベルアップしているシエラには勝てないと思うほどの力をミリアは感じていた。
ミリアの手からハルバードが滑り落ちると、ミリア自身も崩れ落ちるように座り込んだ。
「私の……負けです」
自ら負けを宣言するミリアを見てシエラは笑みを昇に向けるが、昇は未だに真剣な眼差しでミリアを見ていた。
戦いは終わったが、まだ全てが終わったわけではなかった。

「最初は全て偶然だったんです」
静かに語りだすミリアを昇とシエラは黙って聴いている。
「陽悟は、どうやら自分に存在的な魔力があることに気付いていたらしく、その不思議な力で親からも疎まれた時があるようです。そんなときに陽悟がハマったのが…黒魔術でした。
陽悟の力は強いみたいで幾つかの魔術を成功させることが出来たそうです。そして陽悟が新しく試そうとした魔術が召喚術。そしてその召喚術で呼び出されたのが私です」
「ずいぶんと珍しい方法で精霊と接触したものね」

「そんなに珍しいの？」
「うん、普段精霊って言うのは自然、または人間が作り出した建造物が作り出す力の結晶みたいな者なのよ。だからいろいろな属性を持っている精霊が居るんだけど。たぶんその召喚術って言うのは、正確に言うと具現化術だと思う」
「具現化？」
「そう、私達精霊が契約によって実体化して人間と変わらないように、その魔術の範囲内なら契約と同じように実体化が出来るってこと」
「どちらにしても私は陽悟に呼び出されて、その後は質問攻めでした」
「それで契約のことも、争奪戦のことも全て話した」
黙って頷くミリアを見て、シエラは頭を抱えて呆れてしまった。
「そんなの無視してさっさと魔術の範囲外に出ればよかったのに」
「だって、……怖かったんだもん」
「へっ」
「だって陽悟が怖い顔していろいろ聞いてくるから、私が逃げようとすると髪の毛を掴まれて、それがまた怖くって」
「……シエラ」
「昇なに、って聞かなくても言いたいことは分かる」
「この子って、もしかして気が弱い？」
「そうみたいね。ほんの少し脅されただけで。あそこまで戦うなんてね」
「だって、戦わないともっと怖いことするって言われたから」
『はぁ～』
同時に溜息を付く昇とシエラ。特にシエラはそんな理由で先程まで真剣に戦ってたとなると急にバカらしくなってきた。
さっきまでの戦いはいったいなんだったの。
呆れるのを通り越して急に疲労感を覚えるシエラだが、それすらも通り越して再び呆れきったように溜息を付いた。

「それでシエラ、どうすればいいと思う」
この手の話となるとシエラの方が解決策を持っている、と判断した昇はシエラに尋ねるのだが、シエラは再び溜息を付く。
「そんなの簡単。あいつに契約を放棄させればいい」
「契約の放棄？」
「そう、昇なら分かると思うけど、契約者っていうのは最初は何も分からない。だから途中でやめたいって人も出てくる。そんな人のために契約を放棄できる権利を契約者は持っている」
「どうすればいい？」
「それは簡単、只単に契約者が契約した精霊の名で契約を放棄するって宣言すればいいだけ」
「それだけ？」
「そう、それだけ」
あまりにも簡単な解決方法に昇は気が抜けるが、けどまだ終わったわけじゃないと再び気合を入れる。
「けど、どうやってあいつに宣言させれ……」
「そんなの簡単。こっちは三人、あっちは一人で今じゃほとんどの力を使い切ってる」
「ははっ、そうきたか」
「単純明快で簡単」
「まあ、確かに……」
「あの～、どうするんですか」
事態を把握しきれていないミリアはおどおどしながらも、二人に尋ねて驚き拒否の姿勢を見せるが、シエラが一喝するとおとなしく従った。

陽悟が気が付くとシエラとミリア、そして昇の顔が目に映った。
「とりあえず動かないで、動くとあなたの首が落ちる」
「なんだと～」

「頭をちょっと上げて自分の状態を確かめてみなさい」
シエラを睨み付けながらも陽悟は言われた通りにして恐怖した。
なにしろシエラのクレイモアとミリアのハルバードが陽悟の首の上で交差しているのだから。
確かにこれなら首を少しでも上に上げれば間違いなく切り裂かれる。
「なっ、何する気だ」
「別に、簡単なこと。あなたにはこの精霊との契約を破棄すればいいだけ」
「裏切りやがったな」
「キャゥ」
睨み付けてくる陽悟にミリアは一瞬怯むものの、なんとか気丈を取り繕う。
「わっ、私はこれ以上、あなたに従う気はありません。だから速やかに契約を放棄してください」
まるで立てこもる強盗を説得する警察のような言い回しに、昇は吹き出しそうになるのを抑えながらも、陽悟を睨み付ける。
「もう戦いは終わった。あんたの負けだ。だから素直にこちらの要求を呑んでもらう」
「けっ、そんなことをしてテメーらに何の得があるんだよ」
「損得の問題じゃない。ただこのまま見逃せないだけだ。まるで精霊を道具のように扱うあんたのことをな」
「ちっ、偽善者が」
「偽善でもこの子が助かるならそれでもいい。さっさと契約を破棄してもらおうか」
「ふっ、まあいい。そこまで言うなら放棄させてもらうよ」
やけにあっさりと引き下がる陽悟に昇は嫌な予感がしてシエラに目を向けるが、シエラはまるでこうなることを予想していたかのように、余裕の表情を浮かべていた。
なにかあるのかな?

だがそんな昇の予感に関係なく、陽悟はミリアを睨み付ける。
「こいつの名前を呼んで契約を破棄するって言えばいいんだな」
「そう」
「けっ、まあいいや、こんな弱い奴こっちから願い下げだ」
「今まで散々こき使ってながらそんな言い草をするなんて、あんた最低だな」
「テメーに言われる筋合いはねえよ」
「そんなことはいいから、早くして」
「わーったよ」
陽悟は大きく息を吐くと、再び口を開く。
「今ここにミリアとの契約を放棄する」
宣言するのと同時にミリアと陽悟の体は淡い光包まれて、二人の間に鎖が現れた。その鎖も淡い光を放っているが、突然鎖の一つにひびが入るとそのまま砕け散り、残りの鎖の同じように全て砕け散った。
そして二人を包んでいた光は消えていく。
「あの鎖は？」
「あれが契約の証。精霊と契約者を結ぶ絆の結晶。形は人それぞれだけど精霊と契約者は何かしらの形で結ばれているの。今回の場合は契約者が精霊を奴隷用に縛っていたから鎖にで結ばれていたような物ね」
「へぇ～、そうなんだ」
じゃあ、僕とシエラは何で結ばれているんだろう？
だが、そんな昇の疑念を振り払うように陽悟はわめき散らす。
「おい！　言われたとおり契約を破棄したんだ。さっさとこれをどけろ」
「まだ」
「なんだと」
「まだあなたを解放するわけには行かない」
「何でだよ」

「このままあなたを解放すると、今回と同じようにまた精霊を呼び出して契約をするから。私達としてもライバルは少ないことにこしたことは無い」
「おっ、俺をどうする気だ」
「大丈夫、大丈夫、只単にあなたの力を散らすだけだから」
「どういう意味だ」
「あなたの力を消すって意味」
そう言ってシエラはクレイモアをより深く地面に突き刺し、倒れないようにすると陽悟の頭に近づき、その額に手を当てる。
「やっ、やめろ！」
「大丈夫、痛くないでちゅよ」
「うわぁぁぁーーー」
……あのシエラさん。もしかしてシエラさんってSですか？

全てを終えた三人は陽悟を安全なところに放り出すと、再び屋上へと戻ってきた
「さて、ここなら人は居ないし、精界を解いても大丈夫」
「うん、そうだね」
「……ミリア、あなたずいぶんと喋り方が変わってない？」
「あははっ、だってさっきまで陽悟に無理矢理そう呼べって言われてたんだもん。私の本来の話し方はこんな感じだよ」
「あっそ」
疲れきったように溜息をついたシエラは昇と向かい合う形で口を開いた。
「昇はどうする」
「えっ、どうするって？」
「さっき見たとおりに、契約者には精霊との契約を破棄できる権利がある。昇は私が騙して巻き込んだようなものだから」
というか、思いっきり騙されましたけど。

「昇が契約を破棄したいなら、私はそれに従うしかない」
う〜ん、確かにそう言われれば今ここで全部無かった事にも出来るけど、それだと母さんがうるさそうだな。シエラちゃんは何処にいったんだーって。
それに、なんというか、僕もよく分かっていないんだと思うけど。唯一つ言えることは、もう知ってしまった以上は見逃す事が出来ないという事だ。
自分でも損な性格だと思うけど、このままシエラとの契約を破棄するって事は、もう二度とシエラと会えないって事だし、なんとなくこのままでもいいかなって思ったりもするんだよな。
昇は改めて未だに精霊武具をまとっているシエラを眺める。
それにいいのか、いいのか僕、このままシエラと別れる事になって。もったいなくないか、それは。確かに今日みたいな危険な目にこれからも遭うかもしれないけど、間違いなく美少女のシエラとの縁をここで切ってしまっていいのか。
それにシエラも僕に好意を抱いてる事は確かなようだ。それはあれだけ大胆なシエラの行動を見てれば分かる。いいのか僕、そんなシエラとここで別れて。
いや、いいはずが無い。何せ僕は今まで女の子とはまったく縁が無かったんだから。そんなときに現れたシエラ、例え精霊でもこのままシエラと別れていいはずが無い。
「う〜ん、とりあえず僕もまだよく分からない事だらけだし、それに契約だって昨日したばかりだから、そんなに急いで結論を出す事でもないかな」
「そう、ありがとう昇」
シエラの顔が赤くなると、シエラは昇の腕を取って引き寄せると頬にキスをする。
「もしかしたら昇がもう戦いたくないって言い出すと思ってたけど、そうでなくてよかった」
「ははっ、まあ、確かにそう思わなくも無いけど、今シエラと別れ

るのもなんか嫌だし、このままでもいいかなって」
「うん、今はそれだけでいい」
シエラは最上級の笑みを昇に向けて離れると、精霊武具から普段の白い服へと戻った。
そしてミリアに向かって上機嫌に言うのだった。
「とりあえず私達は買い物の続きをしたいから、さっさと精界を解いて」
「うん、分かった」
そのまま精神を集中させるミリアだが、途中で何かを思い出したかのように溜めた力が散布した。
「どうしたの？」
突然のことに昇は心配そうにミリアに近づくのだが、ミリアはそんな昇を見て会心の笑みを浮かべる。
「えへへっ、一個忘れてた」
「何を？」
「えへへっ」
ミリアは笑いながら昇に抱きつき、そのまま唇を重ねる。そして二人の下に現れる魔方陣。つまり契約の成立。
「なっ、ちょっと何してんの！」
「えへへっ、私も昇がエレメンタルロードテナーに相応しいと思ったから契約をしたの」
「なっ、なっ、誰がそんなことをしていいって言った」
「精霊は契約者を自由に選べる権利があるんだよ。それに重複契約も珍しくないじゃん」
「そんなことを聞いてるんじゃない。何で昇と契約するの」
「そんなの私の勝手だもん。シエラにとやかく言われる筋合いは無いよ」
「とにかく昇から離れなさい」
「嫌、こうしてると気持ちいいから」
そう言ってミリアは昇の胸に頬擦りをする。そして先程までの上

機嫌から一気に不機嫌になっていくシエラ。
「いいから昇から離れなさい！」
「いや！」
二人の間に無理矢理割って入ろうとするシエラだが、ミリアも必死になって抵抗する。そして昇はそんな二人に挟まれて先程までの感情が変化する。
シエラだけならともかく、まさかミリアとまで契約するとは思わなかった。しかも不意打ちで。それに……。
昇は未だにくっ付いてるミリアを見下ろす。
ミリアもシエラと同じ。というか、今まで女の子に縁が無かったのに急にこんな状態になるなんて、僕は一体どうすればいいんだろ。
未だに昇の争奪戦をしている二人を見て、昇は少しだけ自分の未来が少しだけ心配になってきたのだった。

第六話　終わりの始まり（後書き）

終わったーーー！　まさかここまで長くなるとは思っていなかった昇が体験する初めての戦いが。

けどそれもやっと終わり次にいけます。まあ次はその次に繋ぐ話になりますから、ちょっとした閑話ですかね。まあ、それはともかく、昇もやっと男らしいところが出てきましたね。はいそこの方、あれで男らしいのかって突っ込まないように、私もハッキリとお答えできませんので、あしからず。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、次の話もまた長くなりそうな予感がする葵夢幻でした。

第七話　長い一日の終わり

「さーて昇、これはいったいどういうことなのかしら？」
「いたたたっ、ちょ、ちょっとま、いだあっ」
精界を解放して再び昇の母の彩香と落ち合った昇達。そして昇がミリアのことを説明したとたん。昇は彩香に関節技を決められているのだった。
「二股とはいい度胸じゃねえか、このドラ息子。いつからそんな女好きになったんだコノヤロー」
「だから、違うって言ってる、あだぁ」
「誰が口答えしていいと言った」
じゃあ、どうしろって言うんだ。
そんな昇の目に未だに不機嫌なシエラとオロオロとしているミリアが目に映る。昇はそんな二人に助けの眼差しを向けるが、シエラは何故かプイッと横を向き、ミリアは大きく頭を下げた。
……無理ですか、やっぱり。
「まったく、それにしてもシエラちゃんとミリアちゃんを同格に扱ってくれなんて、おのれは女をいったいなんだと思ってるんだ、コラッ」
「あだだだっ！　だから違うって、シエラと同じでミリアも行くところが無いから、ウチで面倒を見てくれって言っただけだろ」
「要するに正妻と愛人を同じ家に囲うってことだろ！」
「違うー！　正妻とか愛人とかそんな関係じゃないから」
「じゃあいったいどういう関係なんだ、コラッ」
「うっ、そ、それは……」
黙りこむ昇を見て彩香は大きく溜息を付いた後、昇を解放した。
「あたたっ、か、母さん？」
そして彩香は昇を通り越してシエラとミリアの前に立つ。先程までの光景を目にしていたミリアはオドオドするものの、彩香は優し

い目つきで二人に問いかけた。
「私にはよく事情が分からないけど、二人はそれでいいの？」
「はっ、はい。問題ありません！」
元気よく答えるミリアに対して、シエラは未だに不機嫌な顔でそっぽを向いていた。
「シエラちゃんは？」
「……釈然としない部分もありますが、認めざる得ません。それが私達に課せられた義務のような物です」
「シエラ！」
大胆すぎるシエラの発言に昇は思わず叫ぶだが、シエラと彩香から睨み返されてしまった。しかも二人とも黒いオーラは発しているように昇には見えて、結局そのまま黙り込む。
「う～ん、よく分からないだけど？」
「つまり私個人としては昇を独占できないということです。ですが私達が目指す物、それを手に入れるためには多くの支持者が居ることもまた事実なのです」
「今後も増えるって事？」
「まあ、そうなるかもしれませんが、これ以上お義母様に迷惑をかけるのも気が引けるので、今後は気をつけたいと思ってます」
「……そう、それであなた達が目指すものっていったい何なの」
三人は一斉に口を閉じてそのまま沈黙。
「そう、未だに私には言えないってことなのね……まあ、それもいいでしょう」
「母さん！」
「それに、もう見捨てる事も出来ないし、ウチで面倒見ましょう。もう必要なお金はミリアちゃんからも預かったからね」
「ありがとう、かあ、げふっ」
何故か昇の顔を思いっきりグーで殴る彩香。昇は鼻血でも出たんじゃないかと思ったけれど大丈夫なようだ。
というか、なんで僕が殴られるの？

「昇、私は別に昇のためにシエラちゃんやミリアちゃんをウチに置いてあげるって言ってるんじゃないの。こんな息子でも一応自分の子、だからその責任を全うさせるためにウチに置いてあげるって言ったの、わかった」

なんか凄く釈然としない部分があるんですけど。

「の～ぼ～る～、分かった！」

「はい！　分かりました！」

「うん、よろしい」

しかたなく敬礼をして昇は元気よく返事をする。

そんな昇の横を通りすぎてミリアが彩香の前に出た。

「あの、これからいろいろとご迷惑をかけると思いますけど、よろしくお願いします」

そして大きく頭を下げるミリア。彩香はそんなミリアを優しい目で見つめると下げた頭を優しく撫でる。

「大丈夫よ。さすがにさっきは驚いたけど、ここまで聞かされたら迷惑だなんて言わないわ。だからミリアちゃんはそんなに気にしなくてもいいわよ」

「あっ、はい、ありがとうございます」

「でも！」

「はっ、はい！」

「全部終わってからでもいいから、いつかは事情を話してね」

「……はい、分かりました」

そのまま軽く笑いあう二人、なんとも微笑ましい光景だがシエラは昇の横に来ると、その脇腹を突付いた。

「シエラ、何？」

「昇のお母さん、よっぽど器が大きくて感がいいみたいね」

「へっ」

「多分だけど、私たちのことを少なからずも感ずいてる。でも詳しい事情も知らずに受けれるなんて、よほど器の大きな人間にしか出来ない。昇のお母さんはそこが凄い」

「う～ん、そうかな」
未だに彩香はミリアと共に笑いながら雑談している。
う～ん、やっぱりそんなに凄いとは思わないだけど。まあ確かに、詳しく聞かれずシエラ達を受けれたことには感謝してるけど、そんなに母さん凄いのかな？
結局、昇には彩香の器が分からないらしい。
そんな昇の心情を見抜いているシエラは思ってる事を口にする。
「やっぱり親子だからかしら、近すぎて今まで過ごして来た時間が長すぎるから、逆に見えなくなってる。私達精霊には分からないけど、親子の絆は最初は強けど長い時間をかけてもろくなり、近すぎるうえに見えなくなる。けど彩香は思ってた以上に凄いのかもしれない。まあ、昇は気付いてないのかもしれないけど」
「う～ん、そういうものなのかな……」
「まあ、あくまでも私の私感だけど」
結局どういう意味なんですか、シエラさん。
シエラは大きく伸びをすると彩香とミリアの元へ向かい、昇には嫌な事を口にする。
「さて、それじゃあ買い物の続きに行きましょうか」
「え～、まだ買う物が有るの？」
彩香の発言に不満を漏らす昇だが「ミリアちゃんの分も買わないとでしょ」と言われると付き合わざる得なかった。
なにしろミリアと契約したのは昇本人なのだから。
結局、その後は買い物に付き合わされて、ウチに帰ったのはすっかり暗くなってからだった。

そして夕食後、シエラたちの部屋が振り分けられた。シエラは昇の部屋の横に、ミリアは前にと自分の部屋をもらい。
自分達の荷物を持ちいれたシエラ達は再びリビングに集まっていた。

「三人ともお風呂が沸いたから入ってきなさい」
洗い物を終えた彩香がそう告げてきた。そして真っ先に反応したのがシエラだ。
「分かりました。では、お先に頂きます」
あのシエラさん、何故私の手を取り引き摺るように歩き始めるのでしょうか？
「ちょっとストップ！」
そんなシエラの前にミリアが立ちはだかる。
「何、ミリアが先に入る？」
「そうだね。シエラが手に持ってる物を渡してくれたら先に入るよ」
僕は物扱いですか、ミリアさん。
「それは無理。だって昇の背中を流すのは妻である私の役目だもの」
「何言ってんの、一緒にお風呂に入るのは恋人の私とのお約束だよ」
あの～、妻とか恋人とかいつそんなことが決まったのでしょうか？
そのまま火花を散らす二人だが、突如昇にその目線が集中する。
「昇はどっちと入るつもり。まあ、当然妻の私だと思うけど」
「押しかけ妻にそんなことを言われても迷惑だよ」
「何ですって！」
「だから恋人の私と入るのが王道だよ。ねえ、昇」
「いや、僕は一人ではいるから。なんだったら二人で入ってきたら」
「そうね。じゃあ、私と昇の二人で入ってきます」
「そういう意味じゃなーい！」
「そうだよ、昇は私と入るって言ったんだよ」
「それも違う！」
そして二人は昇を一別した後、再び火花を散らし始めた。
「ミリア、あんた普段はあんなに気が弱いのに昇のこととなると、ずいぶんと強気ね」
「昇は特別だからね。それはシエラも分かってるでしょ」
「私は目的のためだけで昇を選んだわけじゃない」
「私だってそうだよ。エレメンタルロードテナーを抜きにしても、

私は昇を選んだよ」
「エレメンタルロードテナー？」
初めて聴く言葉に反応したのは彩香だった。
一斉に昇たちの視線は彩香に注ぐのだったが、彩香は何かを思い出すように考えているようだった。
「う～ん、聞いたこと無い単語ね。ねえ、何なのエレ…」
「シエラ、先入ってきなよ」
「そうね、そうするわ」
「じゃあ、僕は自分の部屋に戻るから、二人とも出たら呼んで」
「うん、わかったよ。じゃあ、シエラが出るまで私も部屋に居るから、シエラ出たら私の部屋に来て」
「オッケー、ミリア、昇、じゃあ先に入ってくるね」
『いってらっしゃい。じゃあ、部屋に戻るね』
彩香が何かを尋ねる前に昇達は一気にここまでの会話をすると、脱兎のごとく風呂へ部屋へと戻っていった。
一人残された彩香は独り言を呟く。
「ふ～ん、エレメンタルロードテナーね。それが今の昇達に関係しているってワケね。まあ、あの甲斐性無しの昇がいきなり女の子を連れ込むとは思ってないけど、連れ込んだ理由がエレメンタルロードテナーなのかしらね。
……まあ、どちらにしても今は見守りましょ。昇、あなた達が何をしようとしてるのかは分からないけど、あまり心配かけないでね」
母親らしい表情を浮かべながら彩香もキッチンへと入っていった。

はぁ～、さっきは危なかった。ミリアがいきなりあんなことを言い出すから一瞬心臓が止まりかけたよ。でも……。
昇は椅子に腰掛けたまま隣接する窓から夜空を見上げる。
でも、このままいつまでも隠し通せる物でもないよな～。けど、だからと言って本当のことを話しても信じてもらえるかどうか。

結局、昇の悩みはそこにあった。あまりにも自分が置かれている状況が常識からかけ離れすぎている。だからこそ彩香がそれを信じてくれる自信が無いのだ。

いっそのこと全部母さんに話してみようかな。シエラも母さんの器が大きいとか言ってたから全部受け入れてくれるかもしれない。

……けどな。

昇は改めて今日の戦闘を思い出す。

あんな危険なことをしていると知っても母さんは受け入れてくれるのかな。正直、あの炎の津波が迫った時に僕の能力が目覚めなければ、僕は今ここには居なかっただろう。

それほど危険な目に遭っておきながら、無事で居るということは昇にとっては奇跡と言っていいだろう。

……これからも、あんな危険な事をしなくちゃいけないのかな？

騙されて巻き込まれた事とはいえ今更ながら不安を感じる昇だが、もう後には退けない。シエラ達のことを放っておけない以上、戦うしか道が開けない。それが精霊王の器、エレメンタルロードテナーの試練とも言える。

しかし、それにしても今日は疲れたな。なんかいろいろと有ったし、随分と今日が長く感じたな。これからもこんな日が続くのかな……。

そう思うと急に昇は気落ちした。まあ、まだ契約がして日が浅いというのにあれだけのことを体験したのだから、昇の気持ちも分からなくも無い。

その時、ふいに部屋のドアがノックされた。

「昇入るよ」

そう言って入ってきたのはミリアだった。

「お風呂空いたよ。だから呼びに来た」

まだ濡れている髪を拭きながらミリアはそのことを昇に告げた後、急に昇の顔を覗き込んできた。

「なっ、なに、ミリア？」

「んっ、昇なにか元気ないな～って思って」
「そんなことは無いと思うけど」
「……私と契約したことを後悔してる？」
「えっ」
急に真剣な目で問いかけてくるミリアに昇は驚きながらも、すぐに優しく微笑みかけた。
「そうだね。いきなりで驚いたけど、後悔はしてないよ。だいたいシエラだって契約した時はあまり理解できてなかったんだけどね。というか思いっきり騙されたんだけどね、それでも、もうシエラの事もミリアの事も放っては置けないから、だからミリアとの契約だって後悔なんてしない。むしろ、いや、もしかしたらだけど、こうなるのが運命だったのかもしれない」
「昇」
昇の感想がミリアにとってよっぽど嬉しかったのか、目を潤ませながら昇を見詰めている。
「昇、ありがとう」
そしてミリアは昇に抱きつき、その感情を体で思いっきり表現した。つまり頬へのキスで。
「なにやってるの？」
最悪のタイミングというのはこういうときの事を言うのだろう。いつの間にか部屋の入り口にシエラが立っていた。
「ん～、恋人としての愛情表現」
「へぇ～、そうなんだ」
あれ、なんだろう。シエラの後ろが燃え上がってるように見えるんだけど、目の錯覚だよね。っていうか目の錯覚であってください。
「と・に・か・く、離れなさーい！」
そしてシエラは二人の間に割って入ろうとするが、ミリアも離れようとせず、再び昇の争奪戦が開始された。
はぁ、本当、僕はこれからどうなっていくんだろう。
そんな騒がしい中で昇の長い一日は終わろうとしていた。

第七話　長い一日の終わり（後書き）

今回はいろいろな意味で復習と予習を込めた話になりましたが、次回からはかなり凄いことになりそうな予感がするのは今のところ私だけしょう。というか次は意外と凄い新キャラが出てきます。なんというかキャラが濃いというか、暴走しすぎるというか、まあ、それは次回のお楽しみということで。

それと共に昇もまた長い一日を送りそうです。……合掌。まあ、皆さんも昇の冥福を祈ってやってください。まだ死んでませんけど、って自分で言うなよ。……はい、ノリでやってみた一人ノリ突っ込みも終わりましたので、そろそろ締めたいと思います。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、これ以上書く事がない葵夢幻でした。

第八話　幼馴染の巫女

「それじゃあ、行って来るわね」
「というか母さん。何でいつもその服に着替えてから出かけるの」
「なに言ってるの、これがお母さんのパート先の制服だからよ。それにこれ着るのに結構時間がかかるのよね。だから、お母さんはいつも制服を着てから出かけるのよ」
「いや、そういわれても…」
それでも昇には、なんとなく不に落ちなかった。何しろ彩香が着ている制服というのは巫女装束なのだから。
彩香がそんな服を着ているのは他でもない、パートに出かけるためだ。この家の家計は海外出張中の父の給料で十分補えているのだが、それでも家計が苦しいのか、それとも暇なのか、彩香はいつの頃からか神社にパートに出るようになっていた。
まあ、母さんが良いんなら僕も別に良いんだけど。それより母さん、よくそんな格好で町中を歩けるね。
改めてみても明らかに浮いているだろと思う昇だった。
「そういえば、あなた達も今日は出かけるんでしょ？」
「うん、なんかシエラとミリアが他にも必要な物がある。とか言い出して今日はその買出しに行って来る」
「そう、気をつけてね。ああ、そうそう、お金はちゃんと渡したわよね？」
「うん、あれだけあれば十分だと思う」
「そう、じゃあ、いってきまーす」
「いってらっしゃい」
元気よく彩香に対して、実は昇は少し呆れていた。
只でさえ和服は目立つのに、よく母さんは巫女装束で出かけられるよな。
昇はそんなことを思いながらも、キッチンで後片付けをしている

シエラと、未だに自室で寝ているミリアを起こしに向かっていった。

「はぁ～」

パート中の彩香だが、何故かこの時は仕事に身が入らず。思わず溜息を漏らしていた。

「珍しいですね。おばさんがそんなため息するなんて」

そういって話しかけてきたのは彩香と同じ巫女装束を着ており、歳は昇と同じショートカットの女の子だった。

「あら琴未ちゃん。ごめんね、昨日からドタバタしてたからつい…」

「いえ、それは構わないんですけど。どうしたんですか？」

琴未の問いに彩香は「う～ん」と唸り声を上げる。どうやら話して良いものかどうか迷ってるみたいだ。

「おばさん、私は昇の幼馴染ですよ。だから何か迷っているなら気兼ねなく話しちゃってください」

「う～ん、そうね。昇の事でちょっとドタバタしているから、ここで琴未ちゃんに話を聞いてもらうのもいいかもね」

「昇の事って、昇に何か遭ったんですか？」

急に険しい剣幕になる琴未を見て彩香は戸惑いの表情を見せる。

「別に昇に何か遭ったわけじゃないんだけどね」

その言葉に琴未はほっとしたように息を付いた。どうやら昇に何か危険なことが遭ったのかと心配してたようだ。

「それで、昇がどうかしたんですか？」

「それがね……」

「琴未、こっちは終わったぞ」

そう言って姿を見せたのは、同じく巫女装束に身を包み、長い黒髪を後ろで束ねた少女だった。歳は琴未よりも下だろうか、身長も琴未よりも頭半分ほど低い。だが、容姿は整っており、それなりの美少女とも言える少女だ。

「あら、始めてみる子ね」

「あっ、はい。昨日から来てもらってるんですよ」
その間にも少女は二人の元に来て、彩香を見ていた。
「琴未、このご婦人は」
「ああ、前からパートで来てもらってる人でね。昇のお母さんなの」
それだけ聞くと少女は思い当たる節があるのか、ポンッと手を打った。
「なるほど、この方が琴未のおもいび…」
「わーわー、ちょっと、閃華(せんか)なに言おうとしてんのよ」
よっぽど言ってはいけないことなのか、琴未は慌てて閃華の口に手を当てて塞ぐ。
「ひゃにって、しゃんしつを」
それでも喋り続ける閃華に琴未は思いっきり溜息を付く。
まったくこの子は、少しは私の気持ちも考えなさいよね。おはさんの前でそんなことを言ったら……。

―注意、ここからは琴未の妄想であって本編とはまったく関係ありません―

「まあ！　琴未ちゃんったら、そんなにも昇の事を思っていてくれたの！」
「いえ、そんな、私はただ昇の事を見てきただけで、そんな、大それた事は……」
「なに言ってるの琴未ちゃん、それだけ昇にはもったいないぐらいの果報者だわ。琴未ちゃん、ありがとう」
「いえ、そんな……」
「なら、もうこの話はもう決まりね。琴未ちゃん、昇の所に来てくれる？」
「……私でよかったら、その」
「なに言ってるの、もう昇には琴未ちゃんしかいないわ」
「そんな、それでは、不束者ですが、よろしくお願いします」

「こっちこそ、昇をよろしくね琴未ちゃん」
「はい、お義母様」

「しょとみ、しょとみ」
めくるめく妄想の中で、琴未は不思議な声で現実へと引き戻された。
「琴未ちゃん、そろそろ手を離してあげたら」
「えっ？」
言われてから初めて、琴未は未だに閃華の口を封じていることに気付いて慌てて手を離した。
「まったく、いくら母君の前じゃからといっても、いつもように想像で補うのは良くないのではないか」
「べっ、別にそんなんじゃないわよ！」
「そんなに慌てて言っても説得力が無いぞ、琴未」
「うるさい」
言われているのが的を射ているのか、琴未はそっぽを向き、閃華は不敵な笑みを浮かべる。
「それで琴未ちゃん、そろそろこの子の事紹介してくれないかな」
「あっ、はい、すいません、おか、いえ、おばさん」
「ふっ、想像から溢れ出そうになりおったな」
「うるさい！」
突っ込んだ後、琴未は閃華の手を取り自分の前に立たせた。
「この子は閃華って言って、昨日からウチで住み込みで働いてもらってるんですよ」
「へぇ～、なんでまたこんな子を住み込みで。見た感じまだ若すぎる気もするけど」
「えっと、それはですね。その、なんというか……」
「それは私と琴未がもう二度と離れられない関係に」
「閃華は余計なことを言わないで！」

「なにか特別な事情があるみたいね」
「いや、まあ、その……」
「まあ、契約をしてしまったんだからしかないじゃろ」
「いやーーー、そのことは言わないで」
せっかく昇のために、ううん、昇のためだけに取って置いたのに、まさかこんな形で失うなんて。
いやーーーーーー、私の、私の始めてを返してーーー！
そのまま悶絶する琴未。さすがにここまでくると彩香も呆れた目線になっている。
「えっと、閃華ちゃんだっけ。琴未ちゃんどうしちゃったの」
「うむ、あれはいつものことで病気のような物じゃ。まあ、あまり気にしなくても問題は無いぞ」
「そっ、そう。それにしても閃華ちゃんて、ずいぶん変わった喋り方をするのね」
「そうか、まあナリがこんなんじゃが、歳が結構行ってるからじゃろ。こう見えてもそなたより年上じゃぞ」
「そうなの！　じゃあ失礼な物言いをしちゃいましたね」
「別に先ほどどおりで構わんぞ。ナリこうじゃからの、そういう風に扱われることには慣れておる」
「でも」
「私が構わんと言ってるんじゃから、いいじゃろ」
「そお、じゃあ、これからも閃華ちゃんて呼ばせてもらうわね」
「うむ、そうしてくれ。それで奥方殿、先程からなにやら疲れた様子じゃが、なにか心配事でもあるのでは？」
「あっ、やっぱり顔に出てるのね」
気丈に見える彩香だが、それはウチに居る時に皆の前に見せないだけで、さすがにあんな状況になってくると昇ことが心配でならない。やはり、そこいら辺は母親だからこその心配なのだろう。
そしてそれを話したくなってくるのも、人の心情のなす業である。
「それじゃあ、閃華ちゃん。聞いてくれる？」

「うむ、私は別に構わんぞ。それに心配事は人に話したほうが軽くなる物じゃからな、どんどん話したほうが良いぞ」
「そうね、そういうものなのよね」
彩香は改めて人に話すということが大事なことであることを思うのと同時に、閃華にシエラやミリアとは同じようで違う、そんな変な感覚にも捕らわれていた。
シエラ達と同じようでどこか違う、そう思いながらも彩香は閃華に向かって全てを話す事にした。
「実はね、昇が、昨日女の子をウチに連れ込んできたのよ」
「なんですってーーー！」
だが、その言葉に一番で反応したのが今まで悶絶していた琴未だった。
「昇が女を連れ込んだってどういうことですか、というか誰ですかそんな不届きな奴は、いったいいつの間にそんな事態になってたんですか」
「どうどう、とりあえず落ち着け琴未」
「これが落ち着いていられると思う！」
「思わんな。じゃが、私は琴未との契約をし…」
「いやーーー、だからそのことは言わないで！」
再び悶絶をする琴未、閃華はそんな琴未を押さえつけると、どこからか縄を持ち出して琴未を一瞬で縛り上げてしまった。なんとも早い神業である。そして地面に転がすと再び彩香と向き合った。
「あの、話を続けてもいい？」
「あっ、うむ、琴未はこのまま私が抑えているから奥方は、そのまま話を続けてくれ」
「そう、じゃあ、でね、連れ込んだのが一人じゃなくて、二人も女の子をウチに連れ込んできたのよ。まあ、何かしらの事情があるみたいだけど、それも全然話そうとしなくれそうにないの。はぁ、まあ本人達が話したがらなくて、いきなり押しかけて、それで住み込んでるわけだから何かしらの事情があると思うんだけど、私として

はどうも心配で」
「うむ、奥方の気持ちは良く分かるぞ。そしてその行動も正しいと私は思う」
「そう？」
「うむ、それにまだ一日しか経っておらんじゃないか。ここは長い目で見詰め続けるのが正解じゃと、私は思うのじゃがのう」
「そうよね、私もそう思ったから特に何も言わないで受け入れたんだけど…」
「今は只、見守ってやるが良いぞ」
「そう、そうね、そうするわ」
「うむ」
そこまでは普通に話していた閃華だが急に呟くように、それは独り言のように言葉を口にする。
「奥方の息子が選んだ道はそうとう険しいからのう」
「えっ、閃華ちゃん何か言った？」
「いや、別に気にすることではない。さて、後はこっちをどうするかじゃな」
閃華は縛り上げている琴未の縄を解き、再び縄をどこかへと仕舞い込んだ。
「さて、どうするつもりじゃ？」
琴未は服に付いた土埃を払うと、まるで、いや、本気で敵を見る目になりながら握り拳を力強く握り締めた。
「そんなの決まってるでしょ。これから昇の所に行って、その二人の女ときっちりけりをつけてやるわよ」
「そういえばあの子達、今日は商店街に買い物に行くって言ってたわね」
「ありがとう、おばさん。さあ閃華、いくわよ」
「ふむ、そうじゃのう」
「へぇ～、珍しく素直じゃない」
「何を言う。琴未の一世一代の大ピンチだ、それを助けん出どうす

る」
「ありがとう、閃華。それじゃあ、おばさん、後はお願いします」
「はい、いってらっしゃい」
「いってきます」
神社の仕事を彩香に全て託した二人はそのまま神社を後にする。
「これも青春なのかしらね」
そんな二人を彩香は微笑みながら見送るのであった。

「琴未」
商店街を走っている最中に突然閃華が声を掛けてきた。
「なに、閃華」
「覚悟しておけ」
「どういうこと？」
「あの奥方、ほんの少しだが精霊の気配を感じた。まあ移り香のようなものじゃと思うだが、そうだとすると……」
「なにもったいぶってんのよ、早く言いなさいよ」
「その昇が連れ込んだ二人は精霊かもしれん」
「えっ、それって…」
「うむ、つまり昇もどこぞの精霊に目を付けられて契約をした可能性があるということじゃ」
「なんですってーーー！」
「いきなり大声を出すなバカモノ、驚くではないか」
もし閃華の話が本当だとすると、昇も精霊と契約をしたことになる。つまり…キ、キスしたってこと……。
……許せん。昇の、私の昇のファーストキスを奪うとは。
ふっ、ふっふっふっ、あっはっはっはーーー。どんな奴かは知らないけど覚えてらっしゃい。例え精霊でもこの罪は軽くは無いわよ。この以上ない苦痛を与えて滅ぼしてやる。
「ふふふっ、あっはっはっはーーー！」

「琴未、気持ちは分かるが街中で走りながら不適に大笑いするのはやめたほうがいいぞ」

そんなことはお構い無しに琴未は商店街を目指して走り続ける。

いつの間にか距離を置いて付いてくる閃華に気付きもしないまま。

どうやら今日も昇にとっては長い一日になりそうだ。

第八話　幼馴染の巫女（後書き）

さて、いろいろとあって更新が遅れましたが、やっとアップできました。

さて、今回からまた新展開ですが、前とは違う雰囲気をだしてると私は勝手に思ってます。（というか、琴菜のキャラがたちすぎてる？）そして新しく出てきた二人ですが、これからどうなっていくのか、それよりも昇は大丈夫なのか（出番が）

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、次回から凄いことになりそうだと思う葵夢幻でした。

第九話　昇の争奪戦開始？

「それで、今日は何を買うの？」
昇はうんざりとしながらも、しかたなく準備が整ったシエラ達と出かけ様としていた。
「着替えとか大きな物とかは昨日買ってさっき搬送されてきたから、今日は小物。小さい引き出しとか、レターケースとか」
「そんなのが必要なの？」
「必要」
「え～」
シエラの答えに昇は不満の声を上げる。
まあ、昇の気持ちも分からなくはない。昨日散々買い物に付き合わされたあげく、初めての戦闘までこなしたのだがら。
はぁ、今日ぐらいはゆっくりと休みたかったんだけどな。
だが結局、シエラとミリアに引っ張られて買い物に付き合わされることとなった。
「そういえば、今日彩香さんはどうしたの」
「母さんは仕事だよ」
「ああ、そうなんだ」
「それよりもミリア、なんでお義母様のことを名前で呼ぶの？」
「だって、おばさんなんて呼んだら、すごく怖そうじゃない」
その意見には同意だ。僕ほどじゃないけど、ミリアにとっては凄く怖い目に遭うことは間違いない。
「だから昇、いざという時は私を守ってね」
無理です。
ドサクサ紛れに昇と腕を組んだミリアだが、すぐにシエラが二人の間に割り込み、二人を引き剥がした。
「ドサクサ紛れに昇と腕を組まない。それは妻である私の特権」
「う～、いつそんなことが決まったんだよ」

「天地開闢以来」
そんな昔から決まってたんですか。
「じゃあいいもん、私はこっちにするから」
そう言ってミリアはシエラと逆の昇の腕と組む。
「だから昇と腕を組むのを禁止」
「いやだよ～」
そのまま睨み合う二人に挟まれながら昇は遠い目をしていた。
……あの～、そろそろ行きませんか。
結局その後は二人とも少し騒いだ後、昇は両手に花の状態で出かけることになった。

う～ん、なんだろうな。この変な感じは。……というか、つい最近まで女の子と腕を組んで歩く事なんてまったく無かったからな。なんか、落ち着かない。
現在昇は両腕をシエラとミリアが組んで手まで繋いでいる。
なんだろう、このまま商店街まで行ったら睨まれそうなんですけど。
そう思うと昇は改めてシエラとミリアを見る。
確かに二人とも僕よりも年下に見えるけど、確実に言えることは二人とも可愛いという事だ。そんな二人と手を繋いで歩いてるんだから、僕はいったいどんな目で見られるんだろう。
そんなことを心配しながら歩き続ける昇達だが、突如後ろから昇を呼ぶ声が聞こえてきた
「いた、昇！」
その声に顔だけを振り向ける昇の目に幼馴染の武久琴未（たけひさことみ）の姿と見知らぬ少女が映った。
「琴未？　と誰？」
琴未の隣には琴未と同じ巫女装束を着た少女が同じように走っていた。だが、その少女は息の上がっている琴未とは違い、かなり余

裕がありそうな表情で平然と昇達に向かって走ってくる。
そうこうしているうちに二人は昇たちの元へ辿り着いた。
「よ、かった。のぼ、る、はぁはぁ、げほっげほっ」
「琴未、無理に喋ろうとするな。ほれ、水じゃ」
少女は何処から取り出したのかペットボトルに入っている水を琴未に手渡し、琴未はそれを一気に飲み干した。
「ありがとう閃華。さて昇、説明してもらいましょうか」
「えっ、なにを？」
「その子達の事よ」
琴未は勢い良くシエラ達を指差し、明らかな敵意を示す。
「えっ、えっと、彼女達は…」
「よい、昇とやら、事情は飲み込めた。だからこれ以上は話すことはないぞ」
「へっ」
「琴未、どうやら私の予想どおりのようじゃな」
「じゃあ、この子達」
「うむ、精霊じゃ」
「なっ、何でそのことを！」
「それはあの閃華という彼女も精霊だからよ」
「シエラ」
シエラは昇と並ぶと閃華達を見詰め返す。最初に敵意を示したのはあちらなのだから、こちらも敵意を込めて見詰め返した。
だが昇は何かを思いつくように手を叩くと琴未に尋ねた。
「ちょっと待って、琴未が精霊と一緒にいるって事は、琴未も契約をしたの」
「いやーーーっ！　昇お願いだからその事だけは言わないでーーーっ！　私の、私の始めてがーーーっ！」
「……えっと、琴未？」
悶絶する琴未を目の前にどうする事も出来ずに見詰めてるだけの昇だが、いつの間にか昇の後ろに回りこんだ閃華が昇の肩に手を置

く。
「昇とやら、後生じゃからこれ以上はその事に触れんでくれ」
「えっ、あっ、うん」
それだけを言い残して閃華は未だに悶絶している琴未を介抱しに向かい。シエラは琴未の事を尋ねてきた。
「昇、あの悶絶してる女はなんなの？」
「えっと、琴未といって幼馴染なんだ」
「へぇ～、琴未って言うんだ」
「そうじゃ、将来昇の妻になる者じゃ」
「閃華――っ！　いきなりなに言ってるのよ！」
閃華の言葉に自分を取り戻した。そして閃華の胸倉を掴むと思いっきり引き寄せる。
「閃華ね！　そんなことを昇の前で言ったらどうなると思ってるのよ！」
「さあのう、頭の中で想像してみてはどうじゃ」
「……」

―注意　ここからは琴未の妄想であり本編とまったく関係ありません―

「えっ、琴未はそんなことを思ってたの！」
「ち、違う、それは閃華が勝手に……」
「なに言ってるの琴未、僕の傍にいてくれるのは琴未しかいないんだよ」
「でも、昇はその精霊と契約を……」
「琴未が傍にいてくれるならすぐに契約を破棄するよ」
「昇、本当に？」
「当たり前じゃないか、なんでもっと早く言ってくれなかったんだ。そうすれば精霊となんか契約しなかったのに」
「昇」

「琴未、これからは僕の傍いて欲しい。いや、僕は琴未をもう離さない！」
「ああっ、昇、もっと強く抱きしめて」

自分自身を抱きしめながら悶絶する琴未を見て、シエラはすでに呆れおり、ミリアにいたってはもう興味は無いのか昇の腕を振りながら早く行こうと行動の意思を示していた。
「昇、ずいぶんと変わった幼馴染がいたのね」
「いや、僕もあんな琴未は始めて見るんだけど」
「まあ、それだけ琴未はそなたへの思いを溜め込んでいたという事じゃな」
「……閃華っていったけ、なんであなたまで普通にこっちにいるの」
「そんなの決まっておろう。今の琴未と同類に見られたくないからじゃ」
いや、なんとなくその気持ちは分かるけど、琴未をこのまま放っておいていいのかな？
「閃華さん。まったく話が見えないから、そろそろ琴未を何とかしてくれる」
「私の事は閃華と呼び捨てでよい。それよりも私としてはもう少し悶絶しておる琴未を見てみたいんじゃが」
いやいや、さすがに街中だし、このままというわけにもいかないんじゃ。
「とにかく、琴未を現実に引き戻さないと」
「というか昇、そなたは未だに琴未が悶絶している訳が分からんのか？」
「えっ？」
「はぁ、その様子では分かっておらんようじゃのう。琴未も琴未じゃが昇も相当の朴念仁（ぼくねんじん）じゃな」
えっと、朴念仁ってなんですか。

不思議そうな顔をする昇を無視して閃華は琴未の元へ向かうと、静かに耳打ちをする。その途端に琴未は現実に戻り、改めてシエラ達を指差した。

「忘れてたわ。とりあえず昇にくっ付いてる精霊達、今すぐ昇から離れなさい。そして罪を償っておとなしく消えなさい」

「……えっと、琴未、まったく話が分からないんだけど」

「昇は黙ってて、これは私の戦いなの！」

いや、戦いってなんの？

ワケが分からず呆然とする昇だがシエラ達は違っていた。なにしろ宣戦布告されたのだからそれなりの対応をする。

「罪を償えって、私は犯罪を侵したつもりは無い」

「そうだそうだ。私だって何もやってないもん」

「うるさいうるさいうるさい！　昇の唇を私から奪っておきながらその言い草が許せないのよ」

シエラからしてみれば勝手極まりないことだが、シエラは不敵な笑みを浮かべる。

「……うらやましい」

「うっ」

シエラが呟いた言葉に琴未は怯んでしまった。だがシエラはそこに畳み掛ける。

「そっか、うらやましいんだ。だからそんなに怒ってる。ちなみに最初に昇の唇を奪ったのは私。どう、うらやましい、うらやましい」

不敵な笑みを浮かべながらシエラは琴未に詰め寄る。だがここで琴未がハッキリと自分の気持ちを言えるなら、すでに自分の気持ちを昇に告げているだろう。それが出来ないから、今まで二人は幼馴染でそれ以上でも、それ以下にもならなかった。

「琴未、ここで怯んではいかん。ここで負けてしまえば昇はあの精霊たちに取られてしまうんじゃぞ。なにしろ契約をした精霊は一生、契約者からは離れることは出来ん。そのうえ、生もうとすれば人間の子供すら生める。今ここで決着をつけねば後悔することとなるぞ」

「そうなの？」
昇の問いにシエラは黙って首を縦に振り、今度はシエラが口を開く。
「だから器の争奪戦を利用して思い人に近づいて、そのまま結婚して幸せな一生を望む精霊もいるわ。まあ、悪いことではないから誰も何も言わないけど、そういった精霊は積極的に争奪戦には参加しない。むしろ避けようとする」
「だが、お主らは違うのであろう。その様子じゃと、今のところは昇から一生はなれる気は無いみたいじゃな」
「当たり前」
「そんなの決まってるよ」
はっきりと言い切る二人を見て閃華は軽く笑うと、その顔のまま琴未に顔を向ける。
「琴未の思い人はそうとうモテるらしいのう」
いや、そんなことはないけど。だって僕、今まで誰からも好きだとか言われたことないし、そんな気配もまったくないけど。
「当たり前でしょ。私が今までどれだけ苦労して昇に変な虫が付かないようにしてきたと思ってんのよ。毎朝昇より早く登校して下駄箱をチェック、そして手紙とかが入ってたら全て破り捨てたし、昇に告白しそうな子を見つけたら散々脅したんだから」
「えっ」
「それだけじゃないわ。少しでも昇に好意を持ちそうになった子には、ありもしない昇の変なうわさを流したり、諦めさせたんだから」
えっと、つまり僕が今まで女の子と縁が無かったのは全部琴未の仕業。けど、なんでそんなことを？
琴未の行動の意味が分からないのか昇は考え込み、それを見た閃華は再び笑いながら琴未に告げる。
「琴未も琴未じゃが、この昇もかなりの朴念仁じゃな」
いや、だから朴念仁ってなんですか？
「まあよい、これではっきりしたからのう。琴未、どうやら昇には

争奪戦から外れてもらうしかないようじゃな」
「どうやらそうみたいね」
「琴未？」
「昇は下がってて、ここまで喧嘩を売られたらもう退けない」
「昇は絶対に渡さないんだから」
「えっと、シエラ、ミリア、どういうこと？」
「くっくっく、本当に面白い御仁じゃのう」
いい加減に自体が把握できない昇に、さすがに呆れきった視線を向けるシエラ達と琴未、そして閃華はそうとう面白かったのか、声にならないほど笑っていた。
「まあいいわ。丁度二対二だし、昇を賭けて決着をつけましょう」
「二対二？　なに言ってるの、そっちの精霊は一人、こっちは二人よ。それともあなたも戦闘系の特殊能力を持ってるというの」
「ええそうよ。私の能力を見せてあげる」
琴未は手を前に出すと声高らかに叫ぶ。
「雷閃刀＜雷が走る刀＞」
前に出した琴未の手が一気に放電すると刀の形を形成、次に琴未自身を包んでいく。そして現れた琴未の姿は軽く放電している刀を持ち、巫女装束はそのままだが胸当て具足、軽装ではあるがたすきがけをしており、その姿はシエラ達と同様に精霊武具を思わせる。
「琴未？」
「昇下がって、彼女の能力は戦闘系の最上級」
「えっ」
「そうじゃ、琴未の能力はエレメンタル、精霊と同様の戦闘能力を得ることが出来る能力じゃ」
「それって、そんなに凄いの」
「今の彼女の戦闘能力は私達精霊と同様の力を持っている。普通なら契約者の能力は精霊を補佐をするぐらいの力しかもてない。例え攻撃系でも。昇、昨日の戦いを覚えてる」
「うん」

「確かに最後の攻撃は凄かったけど、戦闘は全てミリアに任せっきりだったの、それは契約者の戦闘能力が精霊に対してはるかに劣るから。でも、彼女の能力はその戦闘能力の差を埋めることが出来る」
「つまり今の琴未は……」
「私達精霊と同等の戦闘能力を持ってるって事、身体能力も含めてかなりの力が上がってるはずよ」
「琴未」
そんな力を持っていたなんて。琴未にもエレメンタルロードテナーの素質を持ってるってことなのか。だとしたら、琴未とも戦わないといけないのか。
昔からの幼馴染だからこそ昇は迷うが、シエラとミリアに迷いはない。売られた戦いは買うだけである、昇のために。
「ウイングクレイモア」
「アースシールドハルバード」
二人とも精霊武具をまとう。そして完全に戦闘態勢に入っていた。
「さて、それじゃあ私もそろそろ行くかのう」
閃華は高々と手を上に挙げる。
「龍水方天戟(りゅうすいほうてんげき)＜水の竜をまとう戟＞」
閃華の手から溢れ出す水は方天戟を形成、水はそのまま閃華を包み消えていく。そして姿を現した閃華は今まで来ていた巫女装束ではなく、チャイナドレスに鎧を付けた姿になっていた。そして方天戟には水の竜がまとい付いている。
そして今度は手を前に出すと、対峙するシエラ達との丁度真ん中に魔法陣が現れ、光の柱が上り建つ。そして光の柱は広がりドーム状にその範囲を広げて、ある程度広がったところでその動きを止めた。
青く染まった世界。どうやら閃華の精界のようだ。
「さて、これでお互いに準備は万端じゃな。それじゃあ、そろそろ……」
「ちょっと待って」

昇は対峙する四人の間に割って入り、双方に向かって両手を広げる。それは明らかに戦闘停止の意思表示であり、悲しげな瞳を琴未に向ける。

「琴未、僕達が戦う理由なんてないよ。だから……やめようよ」

「昇……やっぱりダメ、戦う以外に昇を取り返す手段なんてないからよ」

「僕を取り戻すって、どういうこと？」

「琴未、この朴念仁にはもう本当の気持ちをぶつけるしか手段がないぞ。それともここで諦めて全てを忘れるか。まあ、どちらを選ぶも琴未の自由じゃがな」

「琴未？」

「でも閃華、もしそんなことをしたら、私達今までの関係まで崩れるかもしれないじゃない。そうなっても私は嫌よ」

今にも泣きそうな表情で雷閃刀を持つ手が震えている琴未を見て、閃華は優しい笑みを浮かべながら琴未の肩に手を置いた。

「琴未、大丈夫じゃ。なにしろ昇の奴は朴念仁じゃからな。だから琴未が心配することは何一つとしてないぞ」

「閃華、それってどういう意味？」

「くっくっくっ、それは試してみればすぐに分かる。さあ琴未、自分の思いを昇にぶつけて勝ち取るがいい、何もかも全てを」

「閃華」

「うむ」

琴未は力強く頷くと、改めて昇と向き合う。

「昇」

「なっ、なに」

今まで感じたこのない琴未の気迫に昇は思わずたじろいでしまった。

「私、私ずっと……ずっと昇のことが好きだった」

……えっ。

「だから許せない。私から昇を奪ったその精霊達を、だから今ここ

で決着をつける」
「ちょ、琴未ちょっと待って、それってどういう……」
「だから！　私は昇のことがずっと好きだったの」
「だからこそ、琴未は昇にほかの女が近づくのを阻止していたんじゃぞ。それほど琴未は昇の事を好いておるんじゃよ」
　えっ、えーーーーーーっ！　それって琴未が僕のことをずっと好きでいたってこと。じゃあ、僕が今まで女の子と縁が無かったのは琴未の所為。って！　今はそんなことを気にしてる場合じゃない。
「えっと、琴未、そうなの」
　琴未は答えることなく、只顔を赤くして首を縦に振るだけだった。
　……マジですか。というかこういうときどうすればいいんですか、誰でもいいですから教えてください。
　琴未の思いがけない告白に困惑するばかりの昇だが、突如そんな二人を引き裂くようにシエラが昇の前に立った。
「そこまでにしてくれる。これ以上私の昇を惑わせないで」
「私のって、勝手に昇を自分の者にしないで！」
「昇を思う気持ちなら私もあなたに負けない。私もそれほど昇を愛してる」
　なんですとー！
「それなら私だって同じだよ。私も昇が好きだもん」
　ミリアまでも！　もういったいどうなってるの。
「くっくっくっ、さて昇、ここにそなたが好きだと言う女が三人もおる。さあ、誰を選ぶかは昇の自由じゃ」
　えっ、えっと、急にそんなことを言われても……どうすればいいの？
　戸惑うばかりの昇だが、シエラ、ミリア、琴未と真剣な眼差しで昇を見詰めている。必ず自分を選ぶと信じて。
　そんな中で只一人、この事態を楽しんでる人物がいた。いや、精霊か、とにかく閃華は面白そうにことの成り行きを見守ろうとした

のだが、いい加減に飽きたのか、琴未の肩に再び手を置いた。
「くっくっくっ、なあ琴未、だから大丈夫じゃと言ったじゃろ」
「これの何処が大丈夫なのよ！」
「まだ分からんのか。この朴念仁の初めて告白された相手が精霊も含めて三人。今まで女に慣れていない昇がこの状況で誰かを選ぶのは無理な話じゃ」
「それって、もしかして」
「うむ、昇がこの場で誰かを選ぶことは不可能。というか本当に誰かを選ぶことが出来るのかが心配じゃがのう。とりあえずこの場は昇を取り返すことだけを考えろ」
「どうやって？」
「精霊は一度負けた時点で契約者との契約を破棄されることとなり、二度と同じ契約者と契約は出来ない」
「つまり、私が今ここでこの二人を倒せば昇のと契約も消えて、もう昇の傍にいられないって事」
「うむ、そういうことじゃ」
「それならそうと最初から言いなさいよ。私のさっきの告白はいったいなんだったのよ」
「事の発端である琴未の思いを先に言っておかないと、勝っても負けても収集がつかんじゃろ」
「……そういうもんなの」
「そういうもんじゃよ。さて、一区切り付いたところでそろそろ始めるとするかのう」
閃華が方天戟を構えるのを合図に残りの三人も戦闘体勢に入った。
「まったく、とんだ猿芝居に付き合わされたものね」
「まあそういうな、これも大事なことだったんでな。待たせて悪かったのう」
「結局戦うことになるんだね」
「ミリア、何か文句がある」
「シエラ、顔が怖いよ～」

「はぁ、まあいいわ。とにかく勝ったほうが昇を手に入れる。それでいいわね」
「もちろん」
「っと、その前にそうじゃった」
何かを思い出したかのように閃華は戦闘態勢を解くと、未だに混乱している昇の手を取り、その場から退避させてから強固な結界を張り、昇の安全を確保する。
「さて、これで気兼ねなくやれるじゃろう」
「わざわざの配慮ありがとう」
嫌味たっぷりに言うシエラだが、閃華はまったく気にしてないようだ。
「いやいや、当然の配慮じゃ」
「ぐっ」
何か負けた気がするシエラは、これ以上相手のペースに飲まれないようにクレイモアの翼を大きく羽ばたかせる。
こうして器の争奪戦ならぬ、昇の争奪戦が開始された。

第九話　昇の争奪戦開始？（後書き）

えっと、ネット小説ランキングでは現代ファンタジーシリアスで登録してあるのですが、……なんですか、このラブコメ的な展開は、どうしてこうなったのかは私自身不思議でなりません。というか作者の言う事じゃないんですけどね。

はいそこの方、じゃあ言うなよって突っ込まないように、なんとなく……しんみりとしたい時も有るんですよこれが。つーかもうめんどいので、突っ込みたい人は適当に突っ込んどいてください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、意外とラブコメも書いてると楽しいと思い始めた葵夢幻でした。

第十話　交差する思いと戦い

対峙するシエラ達と琴未達。だがシエラは閃華にペースを持っていかれてるようで気に食わないのだが、それ以上に昇にちょっかいを出してきた琴未が気にかかっていた。

あの閃華って言う精霊、たぶんだけどかなり先まで読んでる。私がまともにぶつかっても勝てるかどうか分からない。……なら、ミリアに任せる。防御重視のミリアならそう簡単に打ち負かす事は出来ないはず。

「私はこっちの巫女をやるから、ミリアはそっちをお願い」

「うん、分かったよ」

「うむ、戦略的には間違っておらんな。シエラとやらもなかなか頭が切れるようじゃのう」

「ぐっ」

これ以上閃華のペースに乗せられてはダメ。なんとか自分を律しないと。

「さて琴未、相手も決まったことじゃし。そろそろ始めようかのう。まあ、私としてはシエラとやらともう少し話がしたかったのじゃがな。それは次の機会ということじゃ」

「次なんてない。今ここで決着をつける」

「くっくっくっ、はたして我らにそれが出来るかのう」

「どういうこと？」

「まあ、そうのうち分かるじゃろ」

この精霊、どこまで先を読んでいるの。

先程からの閃華の物言いは、まるで未来を見通しているかのように発言して事をその通りに運んでいく。シエラはそのことに少し恐怖を感じる。

これ以上話してると私は完全に閃華にペースを持ってかれる。なら、今すぐ戦端を開く。

「はあぁーーー！」
シエラは翼をはためかせると琴未に向かって飛翔する。
「来るぞ琴未、油断するな」
「分かってるわよ」
琴未は雷閃刀を構えると斜め上から飛来するシエラに備える。そしてぶつかり合う両者の武器。衝撃で辺りを少し破壊しながらも両者は一歩も引くことなく、お互いの力をぶつけ合った。
シエラのクレイモアは只でさえその重量を相手に感じさせるのに、それを飛翔することによって生まれる推進力も加えるのだから、威力としてはかなりの物がある。
だが琴未はその攻撃を一歩も退くことなく、その場で受け止めた。琴未の力もなかなかの物である。
「なかなかやるみたい」
「そお、けど、これだけじゃないのよね」
突然シエラは背筋に寒気を感じた。それはシエラが長年培って来た危険を知らせる感だった。
慌ててその場から離れようとするシエラだが、琴未のほうが早かった。
「りゃあぁーーー！」
琴未は雷をまとう雷閃刀が放出している電気の量を一気に上げると、それをクレイモアを通してシエラへと流し込み感電させる。
「ぐぐっ」
全身に激痛が走り、体が麻痺したように動かなくなる。それでもシエラはなんとか足だけを動かすと琴未に蹴りを入れて、無理矢理距離を取った。
「くっ」
精霊ならその程度の蹴りはあまり効かないのだが、琴未はこれが始めての戦闘であり、始めて感じる痛みであった。そのため、そのままシエラを追撃することが出来ず、次の手を考えるだけだった。

「さて、あっちも始まったことじゃし、こっちもそろそ」
閃華が言い終わるよりも早く、ミリアのハルバードは閃華へと振り下ろされていた。閃華はそれをいともあっさりと受け止める。
「ほう、重装備の割には早いのう」
「ぐぐっ」
それはミリアの渾身の一撃だったのだが、閃華は涼しい顔でそれを受け止めた。
「ふむ、その重装備といい、この攻撃力といい本来なら防御を重視するタイプじゃな」
「なっ」
「くっくっくっ、こう見えても結構歳をとっておるもんでな、それぐらいのことは経験で分かる」
「年増」
「まあ、そうかもしれんが、あまり気持ちのいい言葉ではないのう」
閃華は方天戟をミリアごと払い、吹き飛ばした。
ミリアは吹き飛ばされながらもバランスを保つと、着陸跡を残しながら勢いを殺す。
「えっ」
何とか体勢を立て直したミリアだが、閃華の追撃はすぐそこまで迫っていた。いつの間に作ったのか水の槍が渦を巻きながら何本も迫ってくる。
「アースウォール」
ハルバードの柄を地面に突き刺すのと同時に、ミリアの目の前の地面はせり上がり壁となって水の槍を寸前で全て防いだ。
「じゃが、甘いぞ」
「上！」
壁よりも上、そこに閃華の姿があった。
「龍水激」
龍水方天戟に巻き付いていた水の龍が方天戟から離れると、ミリ

アに向かってその牙をむく。
「ブレイク」
ミリアは自ら作った壁にハルバードを突き立てると、壁はミリアを避けて四方八方へと吹き飛び、閃華の龍もその破片と衝撃により消滅してしまった。
「どうだ！」
「うむ、今のをしのぐとはなかなかじゃが、まだまだこれからじゃぞ」
龍水方天戟に巻き付いていた水の龍が再び現れ、本来の姿を取り戻した。
「再生するなんて、ずるい！」
「いや、そこは突っ込むところじゃないと思うんじゃが…。まあよい、それじゃ、そろそろ本気でやろうかのう」
「今まで本気を出してないなんて卑怯だ」
「いや、そこも突っ込むところじゃないぞ」
「はぁ、はぁ」
すっかり息の上がっている琴未をシエラは空から見下ろしていた。
「基礎はしっかり出来てる。でも、経験の差は大きい。……けど、それ以上に気になるのは昇への思い」
それはシエラ自身も負けてはいないのだが、琴未も同じように昇の事を思い好いているのだから、その思いが琴未を動かしているようだ
だが今まで実戦を経験していない差はしっかりと出ていた。琴未は宙を舞いながら攻撃をしてくるシエラにすっかり苦戦していた。
「剣に生えた翼で飛ぶってどんな原理よ。でも、空中にいる以上は格好の的になるのよ」
琴未は雷閃刀を高々と掲げる。
「落雷陣」

雷閃刀から飛び出した一本に雷はシエラに向けらた物ではなく、シエラを通り越してそのはるか上空に魔方陣を展開させた。
「落ちろ！」
魔法陣から放たれたのは三本の雷、それがシエラに向かって一直線に落ちていく。
だがシエラは三本の雷を見事にかわした。
「まだまだ！」
今度は魔法陣からいくつもの雷がシエラに襲い掛かる。その攻撃は途切れることなく、シエラに向かい続ける。
シエラは宙を舞いながら雷をかわし続ける。
「さすがにこれだけ続くとやっかい。なら、本体を潰す」
決断をしてから即行動に出るのは戦場の掟。シエラは雷の合間を見て急降下、琴未を目指して雷をかわしながら、そのスピードを上げていく。
そして琴未まであと少し。
「けど、甘いのよ」
「えっ」
魔法陣から十本の雷が横並びに琴未の前に落ちる。それは雷の壁、さすがにシエラのスピードをもってしても雷が落ちるスピードには敵わない。
攻撃の機会を完全に逃したシエラは琴未から距離をとらざる得なかった。あのまま突っ込んでいったら間違いなく雷の壁に激突してただろう。
「へぇ〜、なかなか精霊の能力を使いこなしてる」
「まあね、こっちのは閃華と契約をしてから、じっちゃんの訓練の後に閃華にも鍛えられてるかね」
「でも、私の能力とは相性が悪い」
「えっ？」
琴未が戸惑うよりも早く、シエラはその場から急上昇を始める。
「このっ！」

上空の魔法陣からまた落雷の雨が降り注ぐが、シエラはそれらをかわしながらスピードが落ちる何処ろか限界まで上げていく。そして琴未が作り出した魔方陣が見え始める。

「いけ！」

超ハイスピードのシエラはそのまま魔法陣を目指して飛び続け、クレイモアと魔方陣が激突して火花を散らします。

「結構硬い」

あのシエラのスピードを持っても魔法陣を突き破ることが出来ない、それほど魔方陣は強固に出来おり、それを地上で操る琴未は必死に魔法陣を維持し続けた。

反撃に出たい琴未だが、さすがにこれほどの至近距離にいられると攻撃は出来ないらしい。

それを察したのかシエラのウイングクレイモアは翼を大きく広げると、その羽先を下へと向けた。

「ブースト」

大きく広げられた翼は羽先が変形するほどの推進力を生み出し、白い粒子を噴出しながらクレイモアを押し上げる。

「それはどこかのメカのブースターか！」

地上からでも魔法陣の状況が分かる琴未はそんなツッコミを入れるが、かなりキツイようだ。

そして次第に魔方陣にはヒビが入り始め、飛び散る火花もその量を増していく。

「あと少し、いい加減に壊れろ」

そしてクレイモアの剣先が魔法陣を突き破り、それをきっかけにウイングクレイモアは上昇を開始、シエラが魔法陣を通過するのと同時にを完全に破壊した。

「キャアッ」

その余波は魔法陣を維持し続けていた琴未まで襲い、琴未は軽く吹き飛ばされるように地面へと倒れた。

「はぁ、はぁ、はぁ」

だが魔法陣を破ったシエラもかなりの力を使ったようで、荒い息をしながらも琴未に向かって急降下を始める。
シエラとしてもこの機を見逃す気は無いようだ。
「相手が完全に起き上がる前に攻撃できれば、こっちのペースに持っていける」
シエラは全身を包み込むフィールド系のバリアを張ると、急降下で生じる空気との摩擦でシエラを包むバリアは赤く熱を発する。
琴未が起き上がるとすぐに上空を見上げる。そこには赤くなりながら急降下をしてくるシエラの姿があった。
「あんたは大気圏を突破してきたんかい！」
思わずシエラの姿にツッコミを入れる琴未だが、急いでその場から離れる。
「冗談じゃないわよ。あんな隕石みたいなのが直撃したらこっちの身が持たないわよ」
そう言いながらも琴未はシエラの着地地点から少しでも回避距離を取る。
そしてシエラはクレイモアを地面に向かって差し出すと、地面に向かって降下スピードを維持したまま地面に迫る。
「メテオインパクト」
地面に激突すると同時にシエラ自身も力を解放、落下の衝撃を倍増させる。
ドーム状に力は広がっていき、飲み込んだものを全て破壊していく。そんな中で琴未は必死に迫り来る力から逃れるために走っているが、熱と破壊力を持った力が琴未を飲み込もうとした時、力は頂点に達して大爆発を起こす。
大爆発に巻き込まれなかったものの、琴未は爆風でかなり吹き飛ばされてしまった。
「ほう、あっちは随分と派手にやっておるのう」

「シエラ～、私まで巻き込むつもり！」
「じゃが実際には私と同様に難を逃れておるではないか」
最初にシエラの攻撃に気付いたのは閃華だ。それで閃華はミリアとの戦闘を一時中断して急いで充分な回避距離を取った。
閃華のその行動にやっとミリアも上空から落下してくるシエラに気付き、閃華の後を追って無事に非難できたわけだ。
「それにしても、シエラとやらも随分と昇に惚れておるようじゃのう。いったい何があそこまで駆り立てるんじゃか」
「昇が好きなのは私も同じだよ！」
「そうであったのう。では、再開するかのう」
そう宣言した直後に閃華は一気にミリアの懐に入る。そしてミリアの腹に手を当てると一気に力を解放すると同時に押し込む。
その衝撃はミリアの鎧を通してミリアの体に衝撃を与えた。そのため一瞬ミリアの動きが鈍る。閃華は方天戟で思いっきりミリアを殴り飛ばした。
「どうじゃ、内気功（ないきこう）と呼ばれる技じゃ。鎧や盾などの防具を通り越して本体に直接攻撃する技じゃが、本来防具に頼ってるそなたには結構効くじゃろ」
「ぐぐっ」
閃華の言葉を証明するかのように、ミリアは慣れないダメージに動きが重くなっていた。
そこへ閃華は一気に追撃をかける。
「ほらほらどうしたんじゃ、動きが遅れ始めておるぞ」
「くっ」
先程の技がかなり効いているようで、ミリアは防戦一方で攻撃に転ずる事が出来ない。だがミリアは何とか閃華の攻撃を弾くとハルバードを地面に突き立てる。
「このっ、アーススピア」
地面から飛び出す何本もの土の槍。それはすべて閃華を目指して突き出してきたのだが、その場所に閃華はおらずに、すでに槍の届

かない場所まで跳んでいた。
　そして方天戟に巻き付いている龍が水を吐き出すと、それが推進力になり閃華を押し出す。そのままミリアに蹴りを入れる閃華、普通ならその程度の蹴りを防ぐほどの重装備なのだが、ミリアは何故か吹き飛びはしないものの、地面を削りながら大きく後退させられた。
　重装備のミリアはそう簡単に蹴り飛ばせるものではないのだが、閃華はいとも簡単にミリアを蹴り飛ばした。その事がミリアは不思議でならなかった。
「くっくっくっ、不思議そうな顔をしておるのう。なんで私がお主を蹴り飛ばせたのがそんなに不思議か」
「一時的にパワーアップしてるんだったら、ずるい！」
「いや、違うから。それにそんな能力を持ってる奴なんておらんじゃろ」
「いるもん」
「ほう、何処のど奴じゃ？」
「昇がそうだよ。昇の能力はエレメンタルアップ、精霊を一時的にパワーアップさせることが出来る能力だよ」
「ほほう、そいつは珍しいのう。その能力を持てる人間は長い器争奪戦の歴史の中でも、ほんの数人しかおらんというのに。ふむ、私も昇に興味が出てきたようじゃな」
「昇は渡さないんだから！」
「くっくっくっ、安心せい。昇は琴未の夫と決まっておるからのう」
「そんなの決まってないよー！」
「では、どうする？」
「……なら、これでどうだ！」
　ミリアはハルバートを地面に突き刺し、一気に力を流し込む。
「アースブレイカー！」
　ハルバードから閃華に向かって地面に何本かの赤い線が蛇行しながら走る。そして赤い線は地面に亀裂を入れると、そのまま引き裂

き崩壊させていく。
「いっけーっ！」
そして崩壊を始めた地面は吹き上がり、巨大な衝撃はとなり、地面の破片と共に閃華に向かっていく。
「ふむ、ずいぶんと大技を使ってきたもんじゃな。これは私も覚悟せんといかんのう」
まだ余裕が有りそうな口調でそう言う閃華は方天戟をミリアに向かって、その矛先を向ける。
「龍水閃」
方天戟に巻き付いていた龍が首だけを上げると大きく口を開き、大量の水を一気に吐き出した。
吐き出された水は衝撃波を突き破りミリアへと直撃するが、まさかの反撃にミリアはどうする事も出来ずにそのまま直撃して、ミリアは吹き飛ばされてしまった。
そして衝撃波は破片と共に閃華を襲って吹き飛ばした。
相打ち、閃華はそれを狙っていたのだ。ミリアの技は見た目は派手だが避けようによってはダメージを最小限に抑えられる。そう判断した閃華は防御よりも攻撃に転ずる事にした。
それなら例え衝撃波をまともに食らってもミリアの追撃は来ない。逆にうまく避ける事が出来ればこっちが先手を取れる。閃華はそこまで計算しての攻撃だった。
吹き飛ばされながらも閃華はダメージを最小限に抑えようとするが、なかなかうまくはいかない。
一方のミリアはまさかの反撃にダウン、軽く気を失っているようだが、すぐに目を覚ますだろう。
両者とも互いにダメージを与えながらも決着は付かずに戦いは続いていく。

第十話　交差する思いと戦い（後書き）

そんなワケで今回は主人公の昇がまったく出てこない話になってしまったわけですが、次回ぐらいにたぶん活躍してくれると信じています。

というかこの話全体で見ても結構主人公をないがしろにしてるな。って、作者の私が言うなよ。はいノリでやった一人ノリツッコミも終わったところで、そろそろこの戦いにも決着がつきそうです。というか、そうなって欲しいです。

いや、なんといいましょうか。私としてはここまで引っ張るつもりは無かったんですけど、ついやってしまいました。許してくだせえ、お代官様……今回はここら辺にしときますか。

ではではここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、昇が本当に主人公なのか疑い始めた葵夢幻でした。

第十一話　譲れぬ想い

あれ、僕は何してたんだっけ。……そうだ！　確か琴未に好きだって告白された後、シエラとミリアまでそんなことを言い出して、そのあと、……あれ、そうか、頭の中がごっちゃになって真っ白になったんだ。

そうだ！　シエラ達は？

昇が辺りを見回すと世界が青く塗られたように、何もかもが全て青みがかっていた。それに昇の周りには結界が張られており、結界の外は何もかも全てが破壊されていた。

精界？　じゃあもしかしてシエラと琴未は戦ってるのか！　というか、なに！　この更地状態。

もしかして戦いの痕跡？　くっ、こんな時になにやってたんだ僕は。

その時、昇の位置から遠く離れた場所の地面が噴出し、その波はある方向へと向かってその歩みを進めていた。そしてその衝撃は地震となり、昇のところまで達していた。

「うわっ」

思わずその場に片膝を付くように座る昇。

地震？　そんなわけないよな。そうするとこれは……ミリアか。

確かミリアは土の精霊だったはずだから。それにしてもこんな技を使うなんて、いったいどうなってるんだ？

地震が鳴り止むのと同時に辺りは静けさを取り戻した。

終わった？　ワケないか。けどまだシエラ達と琴未達が戦ってるなら止めないと。

昇は戦闘が行われている方向へと走り出すのだが、すぐに足が止まった。

というか、僕はそこに行ってどうすればいいんだろう。それよりも琴未やシエラになんて言えばいいんだ。

昇は結界から踏み出す事が出来ずに、そのまま頭を抱えて考え込む。

まさか琴未があそこまで僕に好意を抱いてるなんて思いもしなかった。というか、いつも一緒にいたからそんな気持ちに気付かなかったのかな？　それをいきなり好きだ何て告白されるなんて思っても無かった。

それにシエラやミリアまで便乗してくるなんて。まあ、確かにシエラは可愛い。正直に言うとかなりグッとくる。ミリアもまあ可愛いんだけど、なんかこう妹のような感じがして、どうなのかと思うけど好きだといわれると正直無視できない。

……って！　僕はこんなにも優柔不断だったのか。というか何でいきなりこんな女の子に好きだと告白される状態になってるの。

ううっ、結局僕はどうすればいいんだろう……。

その時、再び大きな爆発が起きてその衝撃が昇にまで伝わってきた。

まだ戦っているんだ。……ああっ、もう、とりあえずこうなったら女好きと言われようが、プレイボーイだろうが、すこけましだろうがなんでもいい。とにかくこの戦いだけは止めないと。

とにかく考えるのは後だ後、今はこの戦いを止めないと。皆僕のために戦ってるんだとしたら、僕にはそれを止めないといけない気がしてならない。というか、僕のために戦っているのが嫌だ。

琴未、シエラ、ミリア、ごめん。けど、そのうち答えは出すから、今は皆に戦って欲しくないんだ。

昇は結界から飛び出すと一番の激戦地を目指して走り始めた。

「やってくれる。溜めた雷を一気に解放する事で爆発を起こして私の動きを止めるとは」

「こうでもしないとあんたは止まらないでしょ」

「けど、それは諸刃の刃」

確かに琴未はハイスピードで攻撃を仕掛けてくるシエラに対抗するために、爆発を引き起こしてシエラの動きを止めて封じる事に成功した。

その結果、今はシエラのクレイモアと琴未の雷閃刀が刃を交えている状態で拮抗している。

だが先程シエラが言ったとおり、近距離での爆発は琴未自身にもダメージを負わせる結果となった。

「けど、これであんたを捕らえたも同然よ」

「さあ、それはどうかな」

クレイモアに生えた翼はその場で大きく羽ばたき、突風を巻き起こして琴未を吹き飛ばそうとするが、琴未は吹き飛ばされるのは防いだものの、多少後退させられてしまった。

シエラにとってはそれだけで充分だったが琴未は致命的になっていく。

「しまった！」

大きく距離を取られてしまった琴未は悔しがるが、そんな暇を与えずにシエラは攻撃を再開する。

シエラはウイングクレイモアを後ろに構えると、その翼を大きく羽ばたかせる。その一回の羽ばたきで、シエラは初動からかなりのスピードで琴未へと突っ込んでいく。

それを待っていたかのように琴未もシエラの攻撃を受け止めようと構えるが、シエラの攻撃は琴未の雷閃刀と一回かち合っただけで、シエラはうまく自分の攻撃を流すと、そのまま琴未の横を通過して行った。

「えっ？」

予想外出来事に一瞬だけ琴未の行動が止まる。だがシエラにとっては、その一瞬だけでよかった。

琴未を通り過ぎたシエラはすぐにウイングクレイモアを反転、再び翼を大きく羽ばたかせる。そして今までのスピードを殺し、新しいスピードを生み出し琴未へと突っ込んでいく。

だが琴未は体を反転させてシエラの攻撃を防ぐが、またしてもシエラは琴未の横を通過してから反転、今度は少し、しゃがんでから角度をつけてから突っ込んでいった。

「こんなのどうしろっていうのよ！」

こうなってくると琴未は防戦一方である。なにしろシエラは上下左右あらゆる角度から攻撃してきて、必ず一回だけ攻撃してそのままスルーしていく。

琴未としては何とかシエラの動きを止めたいのだが、自らの攻撃を流すシエラを捕らえることは困難だった。せめて力同士がぶち当たってくれれば何とかなるのだろうけど、それはシエラが許さなかった。

多角度からのハイスピード一撃必殺攻撃、それがシエラの策だった。さすがにこれには琴未は手も足も出ないようだった。

琴未の反応が鈍ってきたことを感じたシエラは、気付かれないように攻撃のスピードを早めていく。

琴未がシエラのスピードに対応できてると思っている以上、徐々に上がっていくスピードには気付かず、気付いた時にはもう手遅れだろう。

そしてその時が来た。

顔だけ振り向いた琴未の眼前にはすでにシエラが迫っていた。

やられる！

そう思ったとき琴未はまるで時間がゆっくりと進むような感覚にとらわれる。自分もシエラもゆっくりと動き、その中で急に琴未の頭をよぎったのは昇の顔だった。

出会ったときは最初女の子だと思ってた。そして二人は友達になり、仲良くなっていくうちに琴未は昇を親友、それ以上に思うようになった。

何故自分が昇の事をこんなにも思うのか琴未は最初は分からなか

った。それが分かったのは、二人が友達になってから半年後、初めて昇が男の子だと知った時だった。

それは何気ない会話だったけど、琴未にとっては衝撃の事実を知ると同時に自分の気持ちに気付いた瞬間でもあった。

それが初恋だと気付ても琴未は自分の気持ちを打ち明けることが出来なかった。もしそんなことをすれば今までの関係が壊れてしまうのが怖かったから。

だからこそ、今までその思いを胸のうちに秘めながら日々を過ごしてきた。いつか自分の気持ちを打ち明けられる日が来ると信じて。

けど、その日はなかなか訪れなかった。それどころかライバルが増えてる事に焦るばかりだった。

昇は普段は弱げな感じがするけど、一番大事なときには必ず先頭に立って皆を引っ張っていったからだ。だから学級委員にも推薦させる事もあったけど、昇はそこまでの責任感を持てなかったのかそれを断った。

だからこそ、私は今まで昇の事が好きだった。好きで好きでたまらなかった。いつも告白しようとしたけど、昇の顔を目の前にするとどうしても言えなかった。

告白する勇気が無かっただけかもしれないけど、このままの関係でもいいかって妥協していたのかもしれないわね。だから私は今まで昇に好きだって言えなかったのかな。

だから余計に許せない。私から昇を奪っていった目の前の精霊を、だから、私は絶対に負けられないのよ。

本当は壊されたくなかった。今のままでもよかった。それが奪われると思ってもいなかったから。だから、それだけは絶対にダメ！

「うわあぁぁぁーーーっ」

突如琴未は金色の球に包まれ、それはあたり一面を破壊するように雷を放ち、放電をし続ける。

「きゃあぁーーー！」

すでに琴未に迫っていたシエラは金色の球に阻まれ、乱射される

雷を何本も直撃されて吹き飛ばされてしまった。
シエラを吹き飛ばした後でも琴未の放電は止まることなく、辺りを破壊していく。
「渡さない。昇は絶対に渡さない！」
「くっ」
よろけながらも立ち上がろうとするシエラに琴未は容赦なく雷撃を放つ。
「昇の事をほとんど知らないくせに、私と昇の間に入ってくるな！」
「ッ！」
雷撃の直撃を受けて、もはや悲鳴すら上げられないシエラは吹き飛び、再び立ち上がろうとする。
「それは違う」
「何が違うって言うの！」
「私も、昇の事をずっと見てきた。エレメンタルロードテナーを探せといわれて、そして昇を見つけたときからずっと昇を見てきた。そしてあの時から私は昇をエレメンタルロードテナーに、ずっと傍にいたいと思った」
「あの時って何よ！」
「あなたには関係ない。……そう、関係ない。私は、私は昇の傍に居たいだけ。その思いを邪魔するなら、私は目の前の者を全力で排除する！」
何処にそんな力が残っていたのか自分でも不思議なぐらい、シエラは自分の中から沸いてくる力を全てウイングクレイモアに注ぎ込む。
翼を大きく広げ、その白い輝きは強さを増し続ける。
琴未も金色の球を消すと雷閃刀に力を注ぎ込み、雷閃刀が放電する量が増し、もはや一本に雷のようになっている。
『うわあぁぁぁーーーっ』
そして両者は互いに戦いへの一歩を踏み出した。

いったいどうなってるんだよ、これは！
昇がシエラ達の元に向かっていると、あたり一面が全て破壊されて更地となっており、その真ん中ではシエラと琴未が戦っている。
止めないと。
走り出そうとする昇の肩を誰かが掴み、昇をその場に留める。
「今行ったら昇まで巻き添えを食らってしまうぞ」
「閃華さん！」
そこにはボロボロになりながらも余裕の表情を見せている閃華が立っていた。
「でも、止めないと」
「どうやってじゃ、今行っても昇に出来ることはないぞ」
「そうかもしれないけど、けど、……あっ、そういえばミリアは？」
「おお、そうじゃった。受けとれい」
そう言って昇に投げ渡したのは、閃華と同じくボロボロになったミリアだった。
「ミリア！」
「安心せい。止めはさしておらんから契約が消えることはないぞ」
「なんで？」
「今ここでミリアを契約が消えるほど倒したら、そなたは私のことをどう思う？」
「どう思うって、それは……」
「昇は私を恨むだろう。そしてその思いは琴未の障害となってしまうからのう。だから止めは刺さず、気絶させるだけで済ましたまでじゃ」
「……ありがとう」
「別に礼を言われることじゃない。全ては琴未のためじゃ」
「何でそこまで琴未に、というか閃華は何で琴未を契約者に選んだの？」
「んっ、それはのう、良く覚えておくが良い。恋する乙女の力は世

界すら滅ぼすことが出来るからじゃ」
　いや、それは無理でしょう。
「んっ、なんじゃその顔は、私の言った事はそんなに信じられんのか」
「いや、信じる信じないの前に世界を滅ぼすって」
「まあ、確かにそれは例えじゃが、あの二人を見てみい」
　昇は激闘を繰り広げているシエラと琴未に目を向けた。二人とも出来る限りの力を振り絞り、力の限り戦っている。
「なっ、恋する乙女の力はあそこまでの力を発揮するんじゃぞ」
「それなら、なおさら止めないと」
「止めてどうするんじゃ」
「えっ？」
　閃華の言葉に昇は唐突に何かが分からなくなった気がした。
「今は二人とも昇を失いたくないと言う気持ちで戦っておる。そんな二人を止めて昇はどう決着を付けるつもりじゃ」
「……それは」
「未だに誰の気持ちにも答えることが出来んのじゃろ。じゃから今昇が飛び出して行っても何も変わらんぞ」
「……それは、違うと思います」
「ほう、なんでじゃ？」
「確かに僕は誰の気持ちにも答えを出す事は出来ないかもしれない。けど、それは僕が答えなければいけないもので、あの二人が戦う理由は無い」
「理由なら有るぞ。あの二人ともそなたを失いたくないと言う理由がな」
「だから僕が止めるんです。僕が元凶なら、僕が二人を止めないと」
「答えを出さないままか」
「……はい。確かに中途半端で優柔不断かもしれないけど、このまま二人を戦わせるのは嫌だから、僕が止めないと。それが、今の僕にできる唯一の事がと思うから」

「じゃが、今行ってもやれることはないぞ。それにあんな激戦の中に飛び込んでいけるのか？」
「うっ、さすがにちょっと怖いかも」
「じゃろう、だから今はここで見守っておるがよい。それが今の昇にできることじゃ」
「でも」
それでも二人を止めないと。こんな戦いに意味はないはずだから。それに二人がこれ以上戦ってるのを見たくない。
「そうだ！　閃華には二人を止めることは出来ないの？」
「私にも無理じゃよ。何しろ私もここまで激戦になるとは思っておらんかったからのう。それに私が仲介に入っても意味は無い事はよく分かっておるじゃろ」
「そう、ですね」
そうだよ。これは僕が止めないといけないのなんで閃華に頼ってるんだ。僕のバカヤローっ！
「それにしても、琴未が昇の事を思っていることはよく知っておる。じゃがあのシエラのほうは、どこまで昇の事を思っておるのかは分からん。じゃが、確実に言える事は、今の二人は限界を超えて自分の思いを糧に戦ってるということだけじゃ」
「どういう意味？」
「あのシエラという精霊の昇への執着も琴未に負けておらんということじゃ。なかなか罪作りな男じゃのう、昇は」
「えっ、なんでそうなるの？」
「くっくっくっ、やはり相当の朴念仁じゃな、昇は」
軽く笑う閃華を見て昇は首をかしげる。
「じゃが、まさかここまでの激戦になるとは思わんじゃった。私の計算だと昇がもう少し速く来て二人を止めると思っておったんじゃが、この朴念仁は相当の物らしいのう」
それはすいませんでしたね。
「……ふむ、今は止めんほうがいいかもしれん。今ここで止めれば

双方とも遺恨を残すことになるやもしれん。ここは徹底的にやらせてみるかのう」
「って、そんな無責任な」
「責任を問うなら昇が一番責任があるのではないのか」
「うっ、そうだけど」
「なら今は二人を見守ろうじゃないか」
「けどこのままだと二人とも……」
「そこまでやらせてやれということじゃ」
「何で？」
「言葉だけでは伝えらない思いもある。逆に言葉でしか伝えられない思いもある。今の二人にはどっちが必要なのかのう」
「閃華の言ってることはよく分からないんだけど」
「くっくっくっ、まあ、それは若さゆえの経験の足りなさじゃ。別に気に病むことじゃない」
「いや、答えになってないと思うけど」
「くっくっくっ、そのうち理解できよう。さて、私としては二人を倒れるまで戦わせるべきだと思うのじゃが、昇はどうする？」
「どうするって？」
「今の状況を見て、自分が何をやるべきなのか、何を望んでいるのか、そういうことじゃ」
「自分がやるべきこと…」
そんなの決まってる。二人を止めないと、このまま争っていても意味はないはずだから、なんとか二人を止めないと。
「行くのか？」
「はい、このまま二人が戦っても意味はないと思いますから」
「やはり朴念仁じゃのう」
「閃華は、僕の止める？」
「止めるといったらどうするつもりじゃ」
「閃華を倒してでも、僕は二人の元へ行きます」
「人間が精霊に敵うと思っておるのか」

「それでも、行きます」
昇は閃華を、閃華は昇の瞳を真っ直ぐに見据える。
「ふむ、先程とは違いなかなかいい目をしておるな。琴未達が惹かれるのもこの目かも知れんな。まるで別人のような決意と覚悟の瞳じゃからな」
いや、そこまで変わってる自信はないんですけど。
「くっくっくっ、では行くがよい」
「止めないんですか。僕はてっきりとめられるものだと思ってたけど」
「そんな目を見せられては止められるものも止められんのじゃよ」
不思議そうな顔をする昇。どうやら閃華の言っている意味が分からないようだ。
「じゃあ、行って来ます」
「おっと、最後の忠告じゃからよく聞けい。今の二人には戦いに集中しすぎている。じゃから昇の言葉が届くとは限らんぞ」
「……なら、止めてから話せばいいだけです」
「くくっ、あっはっはっ、本当に面白い奴じゃのう。私もそなたに興味が出てきたぞ」
「ええっ！」
「まあ、その話は後じゃ。今は行けい」
「うん、ありがとう閃華」
「別に礼を言われることではないのじゃがな」
閃華は昇の背にこれからのことを見出すように見詰める
「さて、今の昇なら本当に二人を止められるじゃろう。じゃが、それは素質ある故か、それとも別の何かか、どちらにせよ昇は進むことになるのやもしれん。エレメンタルロードテナーへの道を」
それがどれだけ険しい道なのかを閃華はよく知っていた。
「昇、もしやしたら、また私もその道を共に歩むことになるのかもしれんのう。だから見せてくれ、そなたの器を」
閃華ははるか昔のことを思い出しながら、これらの行く末を見据

えるように成り行きを見守るのだった。
「……と言うか昇、結局このミリアという精霊は私が見ておかんといかんのか？」
閃華は未だに地面に寝かされて気絶しているミリアを見て大きく溜息を付いた。

第十一話　譲れぬ想い（後書き）

あれ、おっかしいな。確か前回のあとがきで今回でこの戦いが終わるはずって書いたつもりだったんだけど、終わらなかった。

というかここまで引っ張るつもりはなかったのですが意外とこれが長引いていったいいつまでかかるのやら、というかいい加減に次の話しに行きたいのだがなかなか進まないですね。

というか修正作業中に風邪をひいたらしく、思ったように修正作業も進まない。ヘルプミー、誰でもいいからなんとかしてーーー！

まあ、魂の叫びはここら辺にしときましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、やっと昇が主人公らしくなってきたと思った葵夢幻でした

第十二話　暴走する力

もはや二人には誰の言葉は届かないだろう。それどころか、未だに戦い続けるほどの力が残っているのかどうかも怪しい。それでもシエラと琴未は止まることなく刃を交えていた。

巨大で翼の推進力があるウイングクレイモアをもう琴未は受け止めることが出来ない、シエラももし力同士が拮抗すれば感電は必至、だから二人とも各自の武器をぶつけ合うだけだが、それでも一撃に出せるだけの力を出しているのだから、一度ぶつかりあうだけでも周囲に衝撃波を巻き起こした。

「りゃあぁーーー！」

「はあぁーーー！」

それでも二人は止まることなく、刃を交え続ける。

こうなってくるとシエラも琴未も策などというものはない。むしろ立っているのがやっとの状態で戦っているのだから、後は二人の思いがどれだけ強いかが勝負の決めてとなるのだが、未だに決着が付きそうにない。

それほど昇るへの執着が強いということなのだろう。

だがとうの昇本人はそんなシエラ達の気持ちに気付くことなく、二人の戦いを止めようと、ときどき襲ってくる衝撃波を受けながらも二人に近づいていった。

二人がここまで戦う理由が僕にあるなら、僕が二人を止めないと。

その一心だけで昇は衝撃波に襲われながらも、その歩みを止めることはなかった。

もはやシエラの頭は何も考えていない、そして心も何も感じてはいない。だがやるべきことだけは分かってる。それは目の前の敵を倒すこと、今ここで倒さないと大切な者を失うことになる。

それだけはシエラの全てが拒絶していた。
だからこそ、ウイングクレイモアを振るい続ける。だが力比べのような拮抗状態にはならない。それは体が覚えていることで、琴未の雷閃刀の性質をしっかりと体で覚えていたようだ。
ウイングクレイモアと雷閃刀がぶつかり合う度に、その反動を利用してシエラはクレイモアを後ろに下げていた。
それは一見はじかれているようにも見えるが、シエラはウイングクレイモアの性質をうまく利用して、攻撃する時には加速させて、退く時には逆噴射させてうまく立ち回っている。
だがその分、力を使い消耗するのも確かでシエラはギリギリの状態で戦っている。

それは琴未にもいえることだった。
只でさえ重量があるウイングクレイモアが加速して迫ってくるのだから、こちらもそれだけの力を出さないと押し負けることになる。
だがそこは昇を一途に思う心がなせる業なのか、琴未はうまい方法でシエラと渡り合っていた。
それが雷閃刀の放電を大幅に強化して、もう見た目が一本の雷のようにすることと、その電気をシエラのウイングクレイモアにも帯びさせること。つまり二人の武器に磁気を帯びさせることが琴未の手段だった。
磁力にはプラスとマイナスがあり、雷閃刀はどちらでもいいのだが強い磁力を帯びていることは確かで、その雷閃刀とぶつかり合っているウイングクレイモアも同じ磁力を帯びることは必然だった。
同極同士の反発。琴未はこの現象を利用してシエラの攻撃を軽減させることができた。

だが二人とも再び距離を取るが大技を仕掛けるだけの力は残って

はいない。だから必然的に二人は至近距離での戦闘を持続させなくてはいけなかった。
もし一歩でも退いてしまえば、相手からの追撃が確実に自分に止めを刺すだろという確信しているからだ。
「はぁっ」
「りゃっ」
そして二人は再びぶつかり合う。
だが不思議なことにぶつかり合った武器は離れることなく、その場で拮抗している。
いや、互いに退こうとしているのだが退けないのだ。なにしろ昇が二人の間に割り込んで、互いに武器を持つ腕を掴んでいるからだ。
『昇！』
シエラも琴未も侵入者に驚くが、ぶつかり合う力は未だに止まりはしない。
「昇、すぐに手を離して、そうしないと昇にも…」
「ははっ、もう遅いかも」
笑みを見せる昇だが、その体は今までの衝撃波と二人の間に割り込んだ時の衝撃でボロボロになっていた。
「二人とも、もうやめるんだ。こんなことしても意味はないだろ」
「意味ならある！」
「そうだよ昇、だから離して！」
「絶対にダメだ！」
いつもとは違う昇の気迫に二人は思わず気が引けてしまった。
そして昇は二人の力が弱まっていくのを感じると、琴未に向かって笑みを向ける。
「琴未」
「なに昇」
「僕はまだ、琴未の気持ちになんて答えたら分からないけど。でも、こんな決着のつけ方はして欲しくないんだ」
今度はシエラへと笑みを向ける。

「シエラも分かってくれるだろ。こんな決着のつけ方をしても何も変わらないって」
「昇」
「いつか、いつか必ず僕が答えを出すから、それまで待っててくれないかな。自分勝手なのは分かってる。けど、今の僕にはそれだけしかできないから」
「……そんなのずるいよ」
「琴未」
「だって、私は出来る限りの勇気を搾り出して昇に告白したんだよ。それを、こんな形で決着をつけるなだなんて、じゃあ私はどうすればいいの！」
「ごめん……琴未。でも、今の僕にはどうしても答えは出せないんだ。確かに琴未との付き合いは長いけど、シエラ達とも知り合ったばっかりで。よく知らないのかもしれないけど、僕はシエラ達の気持ちを無下にする事が出来ないんだ」
「やっぱりずるいよ、そんなの……」
「自分でも卑怯だとは思ってる。でも、待って欲しいんだ。僕が答えを出すその時まで」
「……分かった。昇がそうするっていうなら私は従う」
「シエラ、ありがとう」
「私は絶対に嫌だ！」
「琴未……」
「確かに私は今まで昇に告白できなかったかもしれないけど、このまま昇が誰かに取られるのは我慢できない。だから私は戦ってるの、私から昇を奪うこの精霊と！」
「でも琴未」
「分かってる。全部私が悪いって事は。私がもっと早く昇に自分の気持ちを打ち明けていれば、こんな戦いは起こらなかった。でも、私にはそれだけの勇気が無かった。……でも後悔だけはしたくないの、だから昇、手を離して」

「琴未」
「あなたは何も分かってない」
昇の言葉を遮りシエラが口を開く。
「なにがよ！」
「確かにあなたが昇に告白してれば事態は変わってかも知れない。けど、それはもう過去の事、今ではあなたと私は戦っている。それだけは真実であり事実」
「シエラ……」
「つまり、まだ終わってない。私もあなたも自分の気持ちを昇に打ち明けた。その後を決めるのは昇、でも今の昇には決める事は出来ない。だから戦う以外の方法で決着をつけたいって昇は言いたいんだと思う」
……そう、なのかな。なんか二人を止めないとって思って二人の間に入ったけど、僕ってそこまで深く考えてたっけ？
結局、三人の思いは複雑に絡み合い、それぞれ別の結論に達していただけだ。そのことはもちろん三人とも分かってはいないし、これからどうするかも分かってはいなかった。
だがそんな中でシエラだけが明確に答えを出した。
「だから私はあなたとの戦闘以外の方法で決着をつける」
「……どうやってよ？」
「それは簡単、昇に私のことを好きだといわせればいい」
「へっ？」
「なっ！」
「ほら、そうすれば私の勝ち」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。誰がそんなことを許すと思ってるの！」
「ならあなたもそうすればいい。昇に自分の事を好きだと言わせればいい」
「……」
あの～、何故か分からないけど、僕ってもしかして自分を追い込

んでしまいましたか？
「……そうね。確かにそれなら今ここで戦闘をする理由がなくなるわね」
「まあ、昇があなたに好きだと言うことは永遠に来ないけど……」
「なんですって！」
「あの～、話が変な方向へ向かってませんか？」
「向かってない」
「昇は私達がこの戦闘をやめれば満足なんでしょ！」
いや、その通りなんですけど、なんというか、結局決着は付かないんですね。
「まあ、昇を振り向かせる努力はするけどね」
呟くように言ったシエラの言葉に琴未は素早く反応する。
「あんたね、そんなことを許すと思ってるの！」
「只待つだけしょうに合わないの。それともあなたには昇を振り向かせる自身がないのなら、すぐに昇の事を諦めて」
「私はそんなこと言ってないでしょ。だいたいそんなこと私が許さないわ」
「あなたに許可をとる必要なんてない」
「なら私も昇を振り向かせるだけよ。まあ、あんたにような精霊に昇が振り向くことはないでしょうけどね」
「なんですって」
「なによ」
「あの～、二人とも仲良くしてくれると僕的には助かるんだけど」
『出来るわけないでしょ』
その割には声が揃ってるんですけど。
その後もそのまま言い合う二人を見て昇は溜息を付いた。
けどまあ、一件落着かな。はぁ、よかった。何とか二人を止めることが出来て……。
昇がそんなことを思っていると突如、その場にいる三人に衝撃波が襲い掛かった。

「くっ」
「きゃ」
「うわっ」
なんだ、いったいなにが起きたんだ。
それは昇の目の前、ちょうど二人の武器がぶつかり合っているところから生じたものだった。
雷閃刀はもはや一つにまとまってはおらず、何本もその雷を枝のように生やしており、ウイングクレイモアは加速と逆噴射を同時に行い、衝撃を出しながら震えている。
「なっ、なんだこれ」
「しまった！」
「シエラ？」
「くっ、今まで私達が全力で戦っていたのを昇が止めたから、行き場の失った力が暴走を始めた」
「それって、どういうことよ」
「あなた、今の自分の力をコントロールできる？」
ワケが分からないという顔をしながらも琴未は雷閃刀に意識を集中させるが、まったく繋がらない。
「なにこれ、どうなってるの？」
「だから暴走してるのよ。私もウイングクレイモアを制御出来ない」
「えっと、シエラ、このままだとどうなるの？」
「多分だけど、行き場の失った力がこの場で暴発、私達を巻き込んでかなりの爆発が起きる可能性がある」
「ちょ、それってかなりヤバイじゃない」
「だからさっきからそう言ってる」
そう言っている間にもぶつかり合う力は、その属性を失い一つの大きな力へと変わっていく。
「昇」
「なに、シエラ？」
「ごめん、もっと酷いことになるかもしれない。下手したら精界ご

と吹き飛ばす可能性がある」
「ちょ、なんでいきなりそうなるのよ」
「私とあなたの力、つまり精霊の力って言うのは元は一つ、精霊王からたまわった力なのよ。それを各自が自分の属性に変換して使ってるの。けど、今目の前の光は一つになってるでしょ」
「うん」
「それは私達がぶつけ合っていた属性が消滅して、本来の精霊の力となり融合しちゃったからなの」
「つまり私達が使ってた力が合体しちゃったってこと？」
「簡単にいうとそういうこと」
「じゃあどうすんのよ！」
融合した力がこのまま消滅することはまず考えられない。今までぶつかり合ってた力だから完全には融合できずに部分部分で反発しあっている。
シエラの考察どおりに融合しかけている力は時々、小規模な爆発や放電などを起こしながら未だに二人の間に存在している。
そんなとき、ふとシエラの視界に入ったのはミリアを背負いながら事態を見守っている閃華の姿だった。
「昇、私達の手を離して」
「えっ？」
「いいから早く！」
「うっ、うん」
……あれ？　おかしいな、そんなに強く握った覚えがないのに全然離れない。というか僕は力を入れてないのに離れない。なんで！
「昇、どうしたの？」
「それがシエラ、離れないんだ」
「なんで！」
「ああっ！」
「なに琴未、どうしたの」
琴未はばつの悪い顔をかきながら、二人から目線をはずす。

「あー、ごめん。それ、私のせいかもしれない」
「どういうこと？」
「私あんたの攻撃を少しでも防ぐために、あんた自身にも磁気を帯びさせてたのよね」
「それで？」
「つまり磁石って同極同士だと反発しあうでしょ。私はそれを利用してあんたの攻撃をしのいでたの。けど、昇が間に入ったことで真ん中に違う極が入ったのよね」
「えっと、つまり、琴未とシエラがマイナスだとすると、プラスの僕が入った事でくっ付いてしまったってこと」
「まあ、そういうことかな。人間も少しだけど電気持っているから」
「あんたね、何てことしてくれたの。おかげで私が考えた策が台無し」
「そんなこと言ったってしょうがないでしょ。これしかあんたの攻撃を防ぐ手段が見つからなかったんだから」
「二人ともストップ、それまでにして。それでシエラ、作戦って？」
「とりあえずこの場から離れて、あそこにいる精霊とミリアの力を合わせて、ここにある力より強大な攻撃で吹き飛ばそうとした」
つまり全員で力を合わせて、強力な遠距離攻撃でこの力を吹き飛ばして消滅させようとしたのか。けど僕達がこのままだとどうにもならない。
「とりあえずこのままでもいいから、この場所から移動しよう」
「昇、それは私も考えたけど無理みたい」
「なんで」
「とりあえず足を上げようとしてみれば分かるわ」
ワケが分からないまま昇はシエラに言われたとおり、足を上げようとするが、まるで足が地面にくっついているようにまったく上がらなかった。
なんで、どうして。……はっ、もしかして
「地球って磁場の塊みたいな物なのよね」

やっぱりか――っ！。
遠い目をしながら言ってくる琴未を見て、昇は大きな溜息を付いた。
「琴未、これは琴未の能力なんだろ。どうにかならないのか？」
「だから、さっきからやってるけど、雷閃刀がまったく言うことを聞かないのよ」
「私のウイングクレイモアとあなたのその刀はすでに暴走状態だから、今更制御はできない」
ああ、もう、じゃあどうすればいいんだ！
「だいぶ困っているようじゃのう」
「閃華！」
昇が振り向くとそこにはミリアを背負った閃華が、ゆっくりと歩いてきていた。
「ふむ、ずいぶんと凄い力じゃのう」
「閃華、感心してないで何とかしてよ！」
「その様子からすると、二人とも制御できんようじゃな」
「そう言われるのはしゃくだけど、そのとおり」
「やはりここは、あの手しかないようじゃな」
「閃華、何か手があるの」
「うむ、一つだけな」
そう言いながら不敵な笑みを浮かべる閃華に、昇は何故か嫌な予感がした。

第十二話　暴走する力（後書き）

はい、前回もそうでしたが今回も終わりませんでした。何故、と思いながら書いています。そんなワケですがたぶん、次回にはこの戦いは終わり、次の話にいけるはずです。多分だけどね。……というかそうなってくれーーー！　お願いだから、神様、仏様、キリスト様、破壊神様お願いします。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、本当に次回でこの戦いが終わるのか心配な葵夢幻でした。

というか、修正作業もやっと四分の一終わりました。今更ながら長いです。というかよく二ヶ月でこれだけの量を書いたなと自分でも思います。しかもそれを今は修正しているのですから、めんどくせーーー！　というか、新たなシーン増えすぎーーー！　まあ、それだけ一新されたと言う事ですね。……う～ん、新規の読者は書き直したのをどういう風に捕らえてくれてるんだろと今更ながら思います。

まあ、これ以上書くと切がないので、後はブログを始めたのでそっちの方でいろいろと叫びたいと思ってます。結局叫んでるんですね。ではでは、これで失礼します。

第十三話　繋がる想い

緊迫した中で琴未は慌てて閃華にだ他一つの手段について問う
「それで閃華、その一つの手ってなに？」
まあ、琴未がそこまで慌てるのもしょうがないだろう。なにしろ現状が目の前ある爆弾が今にも爆発しそうな感じなのだから。
それでも閃華は落ち着いており、背負っているミリアを下に降ろしてからゆっくりと説明を開始した。
「なに、そんなに難しいことではない」
「じゃあ、早くしてよ」
「ふむ、分かった分かった。では昇と琴未、もう少し近づけるか？」
「えっ、こう」
戸惑いながらも昇と琴未は張り付いて動かない足をそのままに、上半身だけを動かしてお互いの距離を縮めた。
今までシエラと琴未が近距離戦をやっていた所為か、その間に割り込んだ昇はちょっと動くだけで琴未と肩が触れ合うぐらいまで近づくことが出来た。
「そっ、それで閃華、どうすればいいの」
琴未は今まで昇に好意を抱いてはいたが、ここまで触れ合ったことは一度も無い。適度な距離を保ちつつ、いつかは告白しようとしていたのだが、結局はこんな結果になってしまっている。
それが今はすぐ目の前に昇の顔がある。琴未はそれだけで顔が赤くなり、心臓が鼓動を早める。
「後は、そうじゃの、ちょっと二人とも目をつぶってくれ」
「分かったわ」
「うん」
閃華の指示に素直に従う昇と琴未、そんな二人をシエラは複雑な心境で見守っていた。
何か言いたげな表情だが、シエラはそれを心の奥底に押し込める

ように自分の気持ちを制御していた。
まあ、シエラの気持ちは分からなくもない。シエラも昇の事が好きだし、その昇が琴未と近距離に居るのだから嫉妬の一つも湧いてくると言う物だ。
「さて、ではいくぞ」
閃華はそう言うと昇と琴未の後頭部を鷲掴みして、一気に二人の顔をくっ付けた。ちゃんと力の加減をして唇だけが付くように。
「ちょ、あなた何やってんの！」
意外すぎる閃華の行動にシエラは思わず非難の声を上げる。
「なにって、契約じゃ。琴未の特殊能力エレメンタルは精霊と同一の性質を一時的に持つことが出来る能力じゃから、契約も普通に出来るというわけじゃ」
「そんなことを聞いてるんじゃない。なんで昇と契約する必要があるの！」
「それはお主らの戦いの後始末のためじゃ」
「うっ」
さすがにそれを言われると出る言葉のないシエラは言い返すことは出来なかった。
「なら、契約はもう済んだでしょ。早く二人を放しなさい」
「いや、琴未のためにももう少し……」
「絶対にダメ！」
「やれやれ、しょうがないのう。まあ、これ以上怒らせて力を放出させるのは避けねばならんからな」
「えっ、しまった！」
さすがに目の前で昇が他の女とキスをするところ見てしまったのだ。例えそれが契約だとしても、シエラは自然と力が入り暴走し始めている力の塊をより大きくしてしまった。
そして閃華が鷲掴みにしている二人の頭を離すと、自然と唇も離れていく。
だが突然のキスによほど驚いたのか、昇も琴未も未だに呆けてい

る。
「さて、次は私の番じゃな」
「なっ、それってどうい」
シエラが問いただすよりも早く、閃華は昇の顔を自分に向けさせると唇を重ねて、契約を執行させるとすぐに離れた。
「さて、これで後は昇次第じゃな」
「ちょっと、その前にちゃんと説明しなさい」
「何のじゃ？」
「あなたこの子とすでに契約してるんでしょ。なんで昇とも契約できるわけ、普通の精霊なら二人も契約者を持つことは出来ないはずでしょ」
「ふむ、そのことか。それが琴未の能力エレメンタルの効能じゃな。能力発動時の琴未は人間ではなく精霊といってもいい。じゃから私の契約者である琴未が昇を契約者として契約すれば、必然的に私も契約できるというわけじゃ。つまり昇は私の主の主といったところかのう」
「なんてややこしい関係を」
「これも全て、お主らの後始末のためじゃ」
「くっ、またそれを言う」
「効果は抜群じゃからのう。さて……」
そう言って閃華は昇の肩をゆすり、未だに呆けている昇の目を覚まそうとする。だがよほど昇にとっては衝撃的だったのか、なかなか現実へと帰ってこない。
「そういえば、あなた閃華って名前だっけ」
「ふむ、そういえば自己紹介が遅れたのう」
「まあいいけど、って、閃華は昇の意識を取り戻させてどうしようっていうの？」
「それはのう、先程そこに寝ているミリアに聞いたんじゃが。昇の能力はエレメンタルアップらしいのう」
「そうだけど、……あっ、そうか！」

「やっと気付いたらしいのう。そうじゃ、昇の能力を使って二人の力を飛躍的に上げる」
「そうすれば、私達は暴走しかけているこの力を制御できる、というわけね」
「うむ、そうじゃ」
「それなら閃華まで契約する必要ないでしょ」
「ついでじゃ、これから先は何が起こるかわからんからのう」
「……閃華、あなた何処まで先を読んでるの」
「くっくっくっ、別にそんなのではない。只単に歳を取っているだけじゃ」
長年培ってきた経験ってわけ。確かに精霊に年齢はあまり関係ないけど、閃華は今までどれだけの時間を生きてきたのかしら。
シエラがそんなことを思っている間にも閃華は昇を現実に引き戻そうと、肩を揺らし続けるのだった。

「はっ、えっ、あれっ、僕、いったいどうしたんだっけ」
「どうしたではない。やれやれ、やっと戻ってきたようじゃな」
「……閃華？」
「さて、次は琴未じゃな」
そう言って閃華は昇に背を向ける。
あれっ、っていうか僕いったい、何が起こったんだっけ。……あぁっ、そうだ。確か閃華が無理矢理琴未とキスさせて、そして頭が真っ白になったんだ。
けど、昨日と今日でまさかこんなにもキスをするなんて思っていなかった。
「昇、嬉しそう」
「はっ」
突如横から感じた殺気のある言葉に昇は背筋に寒気を感じた。
「いや、違う、これは、その、まさかこんなにもキスすることにな

るなんて思ってなかったから」
　思わず正直に喋ってしまった昇にシエラは大きく溜息を付いた後、閃華へと目を向ける。
「そっちも長引きそうね」
「いや、琴未は簡単じゃぞ」
「そうなの」
「うむ」
　そう言って閃華は琴未に耳打ちするように小さく呟く。
「琴未、昇が大事な話があるそうじゃ」
「大事な話って何！　もしかしてあれ、あれなの閃華」
「なっ、簡単じゃったじゃろ」
「……そうね」
　その後も興奮する琴未を閃華が抑えると、現状とその打開策を二人に告げた。

「つまり、僕のエレメンタルアップでシエラと琴未の制御力を上げて、この暴走をとめようというわけ？」
「うむ、簡単に言うとそういうことじゃな」
「あの、でも、一つだけ問題があるんだけど」
「なんじゃ？」
　昇は本当に申し訳なさそうに真実を告げる。
「僕、未だに自分の能力の使い方が分からないんだけど」
「えっ、だって昨日は発動できたじゃない」
「あの時は無我夢中だったから、いったいどうやって発動させたか分からないんだ」
「ふむ、確かにエレメンタルアップはその能力うえ、発動条件があると聞いたことがあったのう。しかも、その条件は人それぞれ違うともな」
「昇はその発動条件っていうのを分かんないの？」

「そういわれても……」
「昨日のことを思い出してみたら」
昨日の事って言われてもな。あの時は自分の何かしないといけない感じがしたから、それにシエラの事も心配だったし、だからあの場所に走り出したんだけど。
……う～ん、特にこれといった発動条件なんて思いつかないんだけど。
「おおっ、それじゃ！」
「うわっ」
今まで思考の世界に浸っていた昇だが、突然閃華が大声を出したのでびっくりして現実へと引き戻された。
「閃華、なに、どうしたの？」
「昇、お主は今までの話を聞いてなかったのか」
「えっと、ずっと昨日の事を思い出してたんだけど…」
「まあ、朴念仁の昇がいくら昨日の事を思い出しても思いつかんじゃろ」
さすがにこの発言にはむっ、と来る物が有ったのか昇は不機嫌な顔になる。
「まあ、そうむくれるでない。昇の発動条件が分かったかもしれぬのだからな」
「本当？」
「うむ、たぶんじゃが、発動条件は二つ、一つは契約者が精霊に触れている事、もう一つは契約者が精霊の事を思うことじゃ」
「一つ目はともかく、その二つ目の精霊の事を思うってどういう意味？」
「それは昇自身がよくわかっておるじゃろ」
「僕が？」
「うむ、昇。昨日は何故わざわざ危険だと分かっている場所へ飛び込んで行ったんじゃ」
「それはシエラが心配だったから」

「それじゃ！」
　えっ、それって言われても分からないだけど。
「つまり、心配しなくてもよいのじゃが。心に精霊の事を思うことが大事なんじゃ」
「えっと、まだ分からないんだけど」
「まあよい、今は時間がないからのう。後は実際にやってみるしかないみたいじゃ」
　閃華の言うとおり融合と反発を繰り返している二人の力は、その行動が大きくなり始めていた。
「うわっ、いつの間に！」
「とにかく昇、心の中をシエラと琴未の事だけで一杯にして、二人の事を考え続けるんじゃ」
「えっ、えっ」
「時間がない、早く！」
「うっ、うん」
　昇は目をつぶりなるべく精神を集中させる。
　えっと、とにかく二人の事を考えればいいのかな。
　シエラは、なんか一昨日初めて出会って、しかもあんな出会い方をしたから最初はどうなるかと思ったけど、なんかそれも少し昔のように感じる。まあ、昨日あれだけのことをしたんだからしょうがないと思うけど。けど、そう、なにか昔から知っているような、そんな不思議な感じがするんだよな。
　琴未は、今まで只の幼馴染だと思ってたけど、まさかここまで僕の事を好きでいたなんて思ってもいなかった。そういえば琴未って昔からというか、いつからだろう。なんか時々僕と距離を取りたがる時があったな。あれは琴未が照れてたのかな。よく分かんないけどもしかしたらそうかもしれない。
　なんかこうやって改めて二人の事を思い出してみると、今じゃ二人とも僕にとって大事な存在になっているのかな。よく分かんないけど。でも、二人が戦っているときは凄く嫌だった。勝つとか負け

るとかそんなんじゃなくて、二人が争っていること事態が嫌だったから、だから僕は二人を止めようとしたんだ。

ああ、そうか。僕はまだ二人が言った好きだって気持ちは分からないけど、二人のことが大事だって事はわかった。だから失いたくない、二人とも仲良くして欲しい、それが僕の二人への思いなのかな。

いや、それが確かに二人への思いだ。失いたくない、かけがえのない存在、二人ともそうなんだ。

そう思った昇は急に不思議な感覚に襲われる。

なんだ！

それは真っ黒な空間、そこに昇は立っているのではなく、まるで無重力のように漂っていた。

なんだこれ？　……ああ、そうか。

誰かに教わったワケではない、昇の中に眠っている能力が自然に昇に告げている。

そして闇の向こうが赤く淡い光を放つと、二つの紅色の太い糸が一直線に昇に向かって伸びてきて、昇の目の前で止まった。

そして昇はその二つの紅色の糸を強く掴む。そうしなければいけないからだ。

次に瞬間、昇の意識は現実へと引き戻され、今までの光景に戻った。

「二人とも行くよ」

「えっ、昇なに？」

「分かった」

「琴未、落ち着け。今からの昇の能力が発動されるだけじゃ」

「じゃあ……」

「うむ、うまくいったようじゃな」

昇は一回大きく深呼吸をすると精神を集中させる。

よしっ

「エレメンタルアップ！」

途端シエラと琴未の体は淡い光に覆われて、その力を取り戻すと同時に飛躍的に上げていく。
「えっ、なんこれ、力が沸いてくる。というか溢れ出てくるんだけど」
「琴未、驚くのは後じゃ、今は目の前の力を制御せい」
「うっ、うん」
琴未は精神を集中させると今まで断たれていた、雷閃刀との力の結びつきを再び感じることが出来た。
琴未は目の前の力を散布させて消し去ろうとしたが、これだけの力になるとそれも難しいらしい。
「閃華、なんでこの力が消えないよ」
「ここまで来るともう消し去るのは無理、後は力を放つしかない」
「空じゃ、二人とも力を空に向かって放て」
「けど、精界が持つ？」
「そこは私が精界を強化させるから大丈夫じゃ。何とか維持してみせる」
「分かった。それと琴未、力が融合してるから二人同時に撃たないと暴発することになるから気をつけて」
「りょーかい、それにしてもあんたが私のことを名前で呼ぶとは思わなかったわ」
「昇がそれを望んで以上、しょうがない」
「そうだね、シエラ」
その光景を見ていた閃華は満足そうに頷き、昇もホッと胸をなでおろす。
「それじゃあ、二人とも僕がカウントするからゼロになったら一斉に放って」
「分かった」
「うん」
「じゃあ行くよ。五、四、三」
（昇、やっぱり昇は凄いよ。私が昇を契約者に選んだのはこれがあ

ったから。けど、今回はこんな形で決着をつけるけど私は昇の事を諦めてないから、琴未には負けない）

「二」

（昔からそうだった。昔から昇は一番大事なときには私を助けてくれた。だからかな、私が昇を好きになったのは、だから諦めないし負けない、シエラには）

「一」

（ふむ、なかなか見事じゃったぞ昇。シエラが昇を契約者として選んだ理由がよく分かった。じゃが昇、もしエレメンタルロードテナーを目指そうとするなら、これ以上の険しい戦いが待っておるぞ。まあ、それを決めるのは昇自身じゃがな）

「ゼロ！」

『いっけーーー！』

声を揃えながら二人は同時に制御できた力を空に向かって放つ。それは一直線にそれへと向かっていき、上空の精界へとぶつかる。

「う、む、なかなか二人分はキツイのう」

だが精界は壊れるどころかヒビ一つ入ることなく、放たれた力が消費し続けて最後には散っていった。

そして散った力の塊はまるで雪のように、その光を空から地上へと降り始めた。

「うわ～、綺麗だね」

幻想的な光景に感動する琴未。

「そうね」

そんな琴未にシエラは静かに答えるだけだった。

「やれやれ、何とか収まったのう。これで一件落着じゃな」

「だね」

降り続ける力の破片の中で昇は事態の収拾にほっとするが、昇は気付いていなかった。

これが終わりではなく、始まりだということを。

第十三話　繋がる想い（後書き）

そんなワケで十三話をお送りしましたけど、どうでしょか。自画自賛ですが私的には結構うまくかけたと思ってます。はい、そこの方、何言ってんだこの作者はと見捨てないでください。

一応今回の戦闘は終了しましたが、この話自体はまだ続きます。というかまだ引っ張るのかという感じもしますが、私としてもまさかここまで長くなるとは思わなかったので、そこは大目に見てください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、このペースで書いていったら一ヶ月で文庫本一冊分ぐらい書いてしまうのではないかと思い始めた、葵夢幻でした。

第十四話　変わりすぎる日常

「うっ、う～ん」
ミリアが目を覚ますと、青すぎるほどの青空が目に映った。
あれっ、私なんでこんな所で寝てんだろ。
「ふむ、こっちも気付いたみたいじゃぞ、昇」
「そう、よかった」
「なんじゃ、あまり心配していなかったようじゃな」
「いや、なんて言うか、閃華が相手をしていたなら大丈夫かなって、後契約が消えるほど止めは刺してないって言ったから」
「くっくっくっ、私もずいぶんと信頼されたようじゃのう」
「なんていうか、閃華の言葉は妙に説得力があったり、そうなのかなって思うことが多いいんだよな」
「ってゆうか昇、何敵とのんきに喋ってるの！」
「ああ、そういえば、あんたはずっと寝てた」
「シエラ！　シエラからも何か昇に言ってよ」
シエラは大きく溜息を付くとミリアの両肩に手を置いて落ち着かせてから、今までのことをすべて話した。

「シエラって、そんなドジしたの。ぷぷっ、ほんと、情けないね」
「閃華に倒されて今まで寝ていたのは情けなくないの」
「うっ、だって、しょうがないじゃん。閃華かなり強いんだよ。確実にシエラよりもね」
「……まあ、そうかもね」
「あれっ、素直に認めちゃうの」
てっきり不機嫌な顔でも見てやろうと思っていたミリアだが、あっさりと認めてしまったシエラに対して拍子抜けしまった。
シエラは閃華を決して過大や過小評価はしていない。だけど、先

程の二人分の暴走した力を精界にまったく影響を与えずに保ちきった。その事だけでシエラには閃華の力が自分よりも遥か上に感じる。

それだけでなく閃華はシエラよりも数歩先を読んでいるようにも感じていた。まるで全部を見通して閃華の手の上で踊っているような、そんな感覚を覚えるのだった。

それに今でも閃華は琴未に何かを耳打ちしている。それがなんなのか分からないが、シエラは閃華が何を琴未に言っているのかは分からないが、それは確実にシエラよりも数歩先を読んで琴未にアドバイスしているのだろう。

完全に負けた気持ちになるシエラだが、それはシエラが強いから分かったことで、力量が離れすぎているミリアにはシエラの気持ちは分からない。

つまりシエラは閃華に敵わないものの、相手の力を見極めることができるほどの力を有しているからだ。あまりにも格が離れすぎてる相手では、その力量を見極めることも困難である。

だからミリアが完全に閃華に負けた理由はそこに有るのだろう。

「さて、とりあえず一段落した所じゃ。そろそろ精界を解こうかのう」

「そうだね。これ以上戦うこともないし」

「そうじゃな、精界の中では私達が戦う事はもうないじゃろう」

「あの閃華さん、それはいったいどういう意味でしょう」

「くっくっくっ、遠からず分かることじゃ。さて、すっかり更地になってしまったが、今立っている場所は民家の中らしい、とりあえず誰もいない場所へと移るかのう」

言われるがままに昇達は閃華の後に続き、移動を開始する。

精界の外のことを分かるのは精界を作った本人か、精界に介入した精霊だけである。

そしてすっかり更地となった一角に閃華は昇達を誘導した。

「ここならまず人はおらんじゃろ」

「そう、分かった」

そう言って三人の精霊と琴未は精霊武具を解き放ち、普段の格好に戻った。
「では、精界を解くぞ」
閃華は目をつぶり精神を集中させると精界の壁に一気に大量のヒビが入り、そのまま砕け散った。
そして更地ではなくなった普通の住宅街に姿を現した四人。空を見上げると青と赤が混じり始めている。
「うわっ、もうこんな時間なんだ！」
琴未は袂（たもと）から取り出した携帯の時計を見て、突然慌てたように閃華の手を取る。
「じゃあ、私達行くところがあるから。昇、またね」
「えっ、琴未？」
昇が聞くよりも早く、琴未は閃華の手を取り走り出して行った。
……えっと、どうなってんの？
「昇、今日のところは私達も帰ろう」
「えっ、あっ、うん」
「シエラ～、お腹すいた」
「なら自分で作りなさい」
「う～、私料理できないもん」
「はぁ、まったく、敵には負ける、家事は出来ない、食っちゃ寝ばかり、本当役に立たない」
「う～、う～、そういうシエラだって今日は大ミスしたじゃん」
「そうだけど、私達はちゃんと昇の力を使って後始末した」
「う～、そういうのは卑怯だ」
なにが卑怯なんだろ？　まあいいや、それより。
「二人とも、いい加減にウチに帰らない」
「そうね」
「うん、そうしよ」
昇達は頷くと自分のウチに帰るために歩き始めた。
それにしても、琴未はなんであんなに急いでたんだろう。琴未の

家ってそんなに厳しかったけ？　その前に二人とも巫女服を着てたから仕事を放り出してきたのかな。けどまあいいや、どっちにしろ琴未にもなんかの用事があったのかもしれない。だから僕が気にすることも無いか。

だが昇は気付いていなかった。先程閃華が琴未に耳打ちしていた事を、そしてそれがすぐに実行されようとしていることを。

そして気付いた頃には閃華の企みは成功して、琴未の行動力に驚かされる事になるとは、今の昇には思いもよらないことだった。

えっと、とりあえず落ち着け。そうだ、落ち着いてよく数えてみよう。

それはその日の夕食時のことだった。昇は全員が食事をする中で箸を止めて、必至に目の前の現実を拒絶しようとしていた。

とりあえず僕で一、そして元々母さんとの二人暮しだったからこれはいいとして二、そしてシエラ達、三、四、五、六。……六？なんでテーブルを六人で囲んでるんだよ。

「というか、何で琴未達までいるんだ！」

「うわっ、いきなりどうしたの昇？」

「昇、食事中にいきなり大声を出しちゃダメでしょ」

「いや、母さん。そういう問題じゃなくて、なんで琴未と閃華が一緒に夕食を食べてるわけ」

「なんじゃ、その言い方は。それでは私達が邪魔者のように聞こえるではないか」

「そうじゃないけど、まあ、夕食に招いたというならともかく、あの山のように詰まれたダンボールは何？」

「そんなに決まってるじゃない。私と閃華の荷物よ」

「何で二人の荷物がウチにあるわけ」

「あら、言ってなかったけ？」

「言うも何も、母さん達は帰ってきてからすぐに、シエラが用意し

てた食事を食べ始めたじゃないか」
「そうね、いきなりの引越しで随分と体力を使っちゃったから、お腹すいちゃってね」
「そうじゃなくて、なんでいきなり琴未達が引越ししてくるわけ」
「そんなに決まってるでしょ！」
琴未は勢いよく立ち上がると箸でシエラを指差す。
「シエラ達が昇に変なことをしないように見張るためよ」
「琴未ちゃん、箸で人を指差すのはよくないわよ」
「あっ、ごめんなさい、おばさん」
母さん、確かにそこは間違ってないけど、他で大きく間違ってるよ！
状況を整理するとこうである。帰りが遅い昇の母は彩香の帰りを待っていた昇たちだが、彩香はトラックに乗って帰ってきた。琴未と閃華を乗せながら。そして彩香はシエラが夕食を作ってくれてたことを知ると、すぐにテーブルについて食べ始め、業者の人がつい今しがたまでトラックに積まれていた荷物を降ろして帰っていったところだ。
結果、シエラは不機嫌な顔をしながらも二人分の料理を新たに追加して、皆でテーブルを囲み食事をしているわけだ。
「母さん、もしかして琴未達もウチに住むの？」
「そうよ。琴未ちゃんたちが帰ってくるなり、いきなりウチに住まわせてって言ってきたから。私も琴未ちゃんの両親も困惑したんだけどね、まあ、ウチならいいかって、琴未ちゃん達を引き取ることにしたのよ」
「なんでそんな簡単に事が進むわけ！」
「ふっふっふっ、昇、琴未達と母君の関係を軽視してはいかんぞ。母君と琴未の母はかなり親しい関係らしいみたいじゃからのう」
「……閃華はそのことを知っていたの？」
「無論じゃ」
ああだから閃華は琴未に変なことを吹き込んだのか。ああ、もう、

シエラ達だけでも大変なのに、まさか琴未達まで乗り込んでくるなんて思ってもみなかったよ。
頭を抱えたくなる昇だが、先程の戦闘でよほど力を使い果たしたのか、腹が空腹を訴えてきたので、とりあえず箸を取り、料理に手を付ける。
昇が料理を口に運ぶのを見て、シエラは昇に聞いてきた。
「昇、美味しい？」
「えっ、あっ、うん、今朝もそうだけどシエラの料理は美味しいよ」
「そう、よかった」
顔を赤らめながら嬉しそうな表情を浮かべるシエラを見て、琴未は急に彩香に告げる。
「おばさん、明日から料理は私がやりますね」
「えっ、いいわよ。私とシエラちゃんだけも間に合ってるから」
「いいえ、やります。やらせてください！」
「そっ、そう、じゃあ、明日はシエラちゃんと二人でお願いできるかしら」
「はい、分かりました」
「分かった」
渋々承諾するシエラと嬉しそうに承諾する琴未だが、その二人の間に火花が散っているのは昇の目の錯覚だろうか。いや、錯覚だと思い込ませようとしている。
はぁ、これからどうなっていくんだろ。
そう思いながらも昇は食欲を満たしていく。

「お風呂が沸いたわよ」
彩香のその言葉に目を光らせるのが三人。まずは一番昇に近いところに陣取っていたミリアが動く。
「じゃあ、昇と一緒にお風呂は行ってきまーす」
なんか昨日も同じように手を引っ張られた気が。

「ちょーっと待ちなさい。昇は一人ではいるから、ミリアも一人で入ってくれれば」
さすが琴未、いい事を言う。
「じゃあ、私が先に入ってくる」
あのシエラさん、いつの間に僕の首をとって引っ張ってるの。
「だから、昇と一緒に入るな！」
ほっ、琴未が引き剥がしてくれたからたすか、ぐぇ。
「だから昇は私と一緒に入るの」
「それは妻である私の役目だと昨日言ったでしょ」
「勝手に昇の妻を名乗らないでよね」
そのまま昇を引っ張り合う三人。
ぐはっ、こ、このままじゃ死んじゃう。
そんな昇の目に光明のごとく、雑誌を読んでいる閃華の姿が目に映った。
そうか、閃華なら。
そう思い、昇は閃華に手を伸ばす
「せ、閃華、たっ、たすけ…」
「んっ、何じゃ、昇は私がお望みか？」
違うーーー！
「やれやれ、しかたないのう。では琴未と一緒に昇の背中でも流してやるかのう」
「ちょっと閃華、閃華まで何を言い出すのよ」
そうだ琴未、それであってるぞ。
「何を言うか、将来やるべきことが早まっただけじゃ。どうせ二人の将来はそういう関係になるのじゃからのう」
勝手に決めるなーーー！
「……」
琴未、琴未、ああ、なんか琴未が変な妄想モードに入ってる。
「昇、昇って結構凄いんだね。私ちゃんと出来るかな」
何がー！　何が凄いの、ねえ琴未。

「もらった」
うわっ、琴未の力が緩んだ隙にシエラが。
「さあ、このままお風呂に行く」
「させるか！」
どわっ、ミリアがシエラを抱えた僕ごと体当たりをしてきた。
「もらったぁー」
「させない」
「キャ、昇ったらそんなことまで」
ああ、もう、いったいどうすればいいんだ。……そうか！　今のうちに逃げればいいんだ！
昇はミリアの体当たりで自由の身になり、そのまま自分の部屋に向かってダッシュしようとしたが、突然飛んで来た雑誌が昇の頭に直撃、昇はそのままこけた。
「これこれ、女子がこんなにも誘っておるのに逃げるのは釣れないのではないのか」
……閃華さん、もしかしてこの状況を楽しもうとしてません。
「じゃあ、私が」
シエラさん、そこ足ですけど、というか引きずってますけど。
そんな中で閃華は琴未を現実に引き戻すと、琴未はシエラの前に立ち塞がる。
そして再び火花を散らす二人。
「とりあえず、昇は一人で入るって言ってるんだから離しなさいよね」
「それは出来ない。何故なら私が昇の妻で背中を流すのが義務だから」
「勝手にそんなこと決めないでよね」
「勝手じゃない、昇も承諾してる」
いや、そんな承諾した覚えが無いんですけど。
「嘘つくな！　だいたい昇が自らそんなことを承諾するほどの器量を持ってないでしょ」

……えっと、琴未、泣いていいですか？
「そんなことは無い。昇はちゃんと承諾した」
「いつ何処でそんな承諾を得たのよ」
「昨日、私の夢の中で」
……夢かい！
「って、勝手に夢で承諾を取るな！　というか昇の意思は何処に行ったのよ！」
そうだ、いいぞ琴未。
「この際だから昇の意思は私の意志ということで」
なに、その勝手な意見は。
「そんなことが許されるわけ無いでしょ。だいたい昇に女の子とお風呂に入るなんて甲斐性は無いわよ」
……琴未、そうハッキリと言われると泣けてくるんですけど。というか、琴未はさっきから僕の事をいじめてるの？
「じゃあ、シエラと琴未の間と言う事で私が昇と一緒に入ってくるよ」
ぐはっ、ミリア、いきなり上に飛び乗らないで。
『それは絶対にダメ』
なんでこんな時だけシエラと琴未は意見が合うんだろう。
三者の睨み合いが続く中に閃華が突如介入してきた。
「まあ、この際じゃから全員で入るというのはどうじゃ」
閃華さん、なに言ってるの！　そんなことしたら……はっ、ダメだ、それだけは絶対にダメだ。
結局閃華の案も却下されて、昇は三人の睨み合いの中でどうする事も出来なかった。
そんな中で閃華が静かに昇に耳打ちする。
「昇、この際じゃから誰かと一緒に入ってきたらどうじゃ」
「いや、それはまずいって、というか僕には無理」
「やれやれ、朴念仁の上に益体無しではなかろうな」
益体無しってなんですか？

「では仕方ないのう、これ以上やったら近所迷惑じゃからな」
僕よりご近所のほうが心配なんですか。
閃華は精神を集中させるとその場から消えた。いや、正確には電光石火のスピードで移動した。そして素早くシエラ達の後ろに回りこむと一撃を入れて、全員を昏倒させた。
すげー、あんたなにものなんですか。
「さて昇、三人が気を失っている間に風呂に入ってくるがよい」
「う、うん、分かった、そうさせてもらうよ。ありがとう閃華」
「なに、礼などいらぬよ」
そう言って閃華は再びソファーに戻り雑誌を読み始めた。
昇は風呂に向かおうとしたのだが、ふと気になることが。
「そういえば閃華、シエラ達はこのままでいいの？」
「なーに、そんなに強くはやっておらん。少し時間が経てば目を覚ますじゃろう。じゃからあまり長湯をするでないぞ」
「うん、わかったよ」
そうして昇は風呂に入ると体を洗い、湯船へとその身を沈めた。
はぁ、なんかこれまで以上に大変になってきたな。僕の日常はこれからどうなっていくんだろ。
「はぁ～」
風呂場の中、昇の溜息が響き渡るのだった。

第十四話　変わりすぎる日常（後書き）

そんなワケで十四話をお送りしたのですが。なんか一気にラブコメを通り越して独自の世界には行って行ってるような気がします。というか、こういうのも一応ラブコメと言うのでしょうか、その前にこれ一応シリアス物ですよね。確かそうですよね。それが何故ラブコメに……、まあ、そこら辺は永遠の謎にしときましょう。

はいそこ方、それでいいのかって突っ込まないように、……そんなこと言われてもしょうがないんだもん。だってこうなちゃったんだもん。

まあ、駄々っ子はここら辺にしときましょうか。それではいつもの。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、最近駄々をこねる事が多い？　と思い始めた葵夢幻でした。

第十五話　閃華の企み

琴未達がウチに来てから数日、静かに過ごしたかったのだが、そんな昇の願いは叶わず騒がしい日々が続いていた。だがそれもゴールデンウィークが終わるまでだろうと昇は思っていた。

何しろあれから一日中、シエラ達に囲まれながら過ごしているのだがら、静かに過ごせるわけが無い。

そしてこの騒ぎをあそこでやることになるとは今の昇は思ってもいなかった。

「シエラとミリアはおるか？」

ゴールデンウィーク最終日、閃華はそんなことを聞きながら昇たちがいるリビングへと入ってきた。

「んっ、どうしたの閃華」

「おお、二人ともおったか、例の物が届いておるぞ」

「本当！」

勢いよく立ち上がるミリアに静かに立ち上がるシエラ。二人とも閃華に続きリビングから出て行ってしまった。

「琴未」

「んっ、なに昇？」

琴未はテレビを見ながらお菓子をつまんでいた。だから昇のほうへ振り向くことなく答えるだけだった。

「閃華が言ってた、例の物って何？」

「んー、知らない」

「琴未も聞いてないの？」

「うん、だって部屋は別々だし、私も一日中閃華と一緒にいるわけじゃないから、閃華が何か企んでても分からないよ」

「やっぱり、閃華は何か企んでるの？」

「閃華のことだから、そうなんじゃない」
嫌な予感が走る昇だが、琴未はまったく気にしてないようだ。
「琴未は気にならないの、閃華が何を企んでるのか」
「う～ん、気になるって言えば気になるけど、閃華ってそこら辺のガードが固いのよね。だから無理に探ろうとすると痛い目を見ることになるから気をつけてね」
えっと、琴未、それは僕に閃華が何を企んでるか探って来いってことなのかな？
「けど、閃華が企んでることだから、下手な方向へは進まないでしょ」
「僕としてはこれ以上、騒がしくしてもらいたくないんだけど」
「それは無理なんじゃない。なにせ閃華が企んでることだから」
やっぱりそうなのか。
昇は大きく溜息を付くと天井を見上げる。
けどまあ、明日から学校だからシエラ達に振り回されることも無いか。なんかゴールデンウィーク初日が遠い昔ように感じるよ。この数日にいろいろ有ったからな。けど、また普通の学校生活へと戻っていくわけだから大丈夫だろ。
そんな昇の気持ちを知ってか知らずか、閃華の企みは進んでいくのだった。

『いってきまーす』
「はい、いってらっしゃい」
ゴールデンウィークも終わり、五月晴れの中で昇と琴未は学校へ登校するために彩香に見送られながら玄関を出て行った。
そして登校途中、昇にはどうしても気になってしょうがないことがある。
「そういえば琴未」
「んっ、なに？」

「シエラ達はどうしたの？　なんかミリアも閃華もいなかったし」
「そうね、おばさんの話だと、なんか今日は朝早くから用事があるとか言って、私達が起きる前にはもう出かけたらしいわよ」
昇はそのシエラ達の行動に嫌な予感を覚えざる得なかった。
「昨日言ってた、例の物が関係あるのかな？」
「う～ん、多分閃華が企んでることだから、そうなんじゃない」
やっぱり、そうなのか。
嫌な予感がしつつも昇は気分が重いまま歩き続ける。そしてふと、横を歩く琴未に目を向ける。
そういえば、こういう風に琴未と登校したこと無かったな。琴未は僕が教室に入る頃には、もうすでに自分の席に座ってたから。まあ、それが僕が他の女の子の縁を切るためとは思ってみなかったけど、それにしても。
昇は改めて琴未を観察するような目で見回した。
まあ、確かに琴未はシエラ達に比べれば出てるところは出てるんだよな。たぶん平均的だと思うけど、というかなんで精霊の外見ってあんなに幼いんだろ？　それに琴未は結構可愛いからよく告白されるって話も聞いたことあるけど、……それってもしかして全部僕の所為、というか僕のために。う～ん、そう思うと結構感慨深い物があるよな。
確かに琴未は可愛くて、幼馴染の女の子、そかもずっと僕の事を好きでいてくれた。ある意味最強のシチュエーション。けど、僕は今までそんなことは知らなかったし、今まで一緒にいる時間が長すぎたのかな？　好きだと告白されてもどうもピンとこない。
けど、それはシエラ達も言えることかな。確かにシエラは可愛いと思うけど、あの長く白い髪や黒く澄んだ瞳で見つめられるとドキッとする時もある。そして立ち振る舞いも悪くないと言うか、あの姿が清楚に見えるんだよな。その点だけをいえばシエラは完璧だと思うけど。
なんというか、シエラには気が抜けないところがあるんだよな。

特に琴未が来てからは凄い物がある。琴未を出し抜いていつの間にか僕を連れ出そうとするけど、その度に閃華が琴未に吹き込んで邪魔が入るんだよな。それで結局二人の睨み合いが始まると。

う～ん、それさえなければシエラも結構可愛いと思うんだけど、僕は時々シエラについて行けない時がある。それがなかったらどうなんだろ？　最初の印象だけのシエラに好きだと言われると……ヤバイ、結構くる。

そしてミリアか、ミリアはなんか恋人というよりか、なんか妹みたいな感じがするんだよな。あの外見のせいかな、それとも精神年齢の低さ、どっちにしろミリアの明るいところは好きだけど、恋愛対象としてはどうなのかなって思うんだよな。

結局、僕は恋愛が苦手なのかな？

昇は大きく溜息を付くと琴未は心配そうに昇の顔を覗き込んできた。

「そんなに閃華の企みが心配？」

どうやら昇が未だに閃華の事を気にかけていると思っているようだ。

「えっ、いや、そんなことはないよ」

今まで考えてたことが原因なのか、琴未の顔を見た瞬間、昇はドキッとして思わず一歩後ろに下がる。

そんな昇を不思議そうな顔で見詰める琴未だが、すぐにまた歩き始めた。

「けどさ、昇」

「なに？」

「閃華の事だから、もしかしたら学校でも騒がしくなるかもね」

「いや、さすがにそれは無いだろう」

「そうかな、閃華ならそれぐらいやりそうだけど」

「だいたい部外者が学校内に自由に出入りしてたら、先生達が注意するし止めるだろ」

「まあ、そうなんだけどね」

それでもふに落ちない所があるのか、琴未は考え込みながら歩いてるようだ。
そんなに気にすることでもないと思うんだけどな。
だが昇は自分の直感の甘さに気付くのは、その数十分後であった。

それは教室での朝のホームルーム、担任の森尾先生が入ってくるなり、教室は静まり返り、森尾は一通り見渡すと意外な第一声を口にする。
「皆には突然だが転校生を紹介する」
突然騒がしくなる教室内、だが昇は背筋に寒気を感じた。
いや、まさか、閃華もそこまではやらないだろう。
「ゴールデンウィーク中に突然決まった事だから、皆が驚くのも無理は無いと思うけど、これからよろしくやってくれ。それじゃあ、三人とも入ってきて」
三人！　先生、今何て言いました。三人、転校生が三人ですか。
なんかもの凄く思い当たる節がある数字なんですけど。
そうして教室のドアが静かに開くと、最初に入ってきたのは白い髪で黒く澄んだ瞳をした少女、次は金髪のポニーテールでとても同級生とは思えないぐらい幼そうな少女、最後は長い黒髪を首の後ろでまとめた少女が入ってきた。
三人まとめていえることは、教室の男子陣が大きく騒ぎ出したと言う事だ。
ああ、やっぱりか。……閃華～、なにもここまですることないじゃないか。
だが落ち込む昇とは反対に男子陣は美少女の登場に歓声を上げる。
だが森尾先生の一言で歓声は静まり返る。森尾の人望もたいした物のようだ
「それじゃあ、各自、自己紹介して」
「はい」

まず最初に一歩前に出たのはシエラだった。
「滝下シエラといいます。今まで海外で家庭教師に勉強を教えてもらっていたので、学校というところは初めてなので、これからよろしくお願いします」
なんで僕の苗字なの、それにそんな嘘を誰に吹き込まれた！　いや、シエラならこれくらいは言うか。
「滝下ミリアだよ。みんなこれからよろしくねー！」
ミリアまで僕と同じ苗字かよ。といかミリア元気よすぎ。
「武久閃華じゃ、何かと迷惑をかけるかも知れぬが、よろしくお願いするぞ」
閃華は琴未の苗字を使ったんだ。でも、閃華の喋り方は特徴がありすぎるから、なんか変に違和感が有るんだけど。
「以上、三名が滝下の紹介で転校してきた三人だ。皆、仲良くするんだぞ」
「はい！」
「んっ、何で滝下が驚いてるんだ？」
「えっ、いや、だって、僕の紹介って？」
「何言ってるんだ滝下。ゴールデンウィーク中に突然先生のところに電話してきて、転校させて欲しい人がいるって、滝下のお母さんがいったから三人は転校してきたんだぞ」
母さんが絡んでたのかー！　しまった、それは盲点だった。まさか母さんが手引きをするなんて思ってもいなかった！
「それに三人とも滝下とは特別な関係だと聞いたんだが、いったいどういう関係なんだ。こういったことは本人に直接聞いたほうがいいと思って、先生その時は聞かなかったんだが」
「えっと、その、何と言いますか」
昇が答えに詰まっていると、シエラから順に勝手な答えを答えていった。
「昇の妻です」
「昇の恋人だよ」

「私は愛人じゃな」
「いや、ちょっと待って、三人とも何言ってるの！」
必至に弁解する昇だが、すでに琴未を除くクラス全員から痛い視線を向けられていた。
「滝下、その歳にして凄い関係になってるな」
先生、なにのんきなこと言ってるんですか。何か弁解してくださいよ。
「しかし、そうなると、シエラ君が正妻で、ミリア君が恋人で、閃華君が愛人になるわけだ」
せんせー、それ違うから、そこは話を引っ張るところじゃないから、というかそういう発言をすること事態を注意してください。
「いや、それは違うぞ」
「えっ、そうなの？」
「私はシエラを正妻とは認めておらん。正妻は琴未じゃ」
「ちょ、閃華、なにいいだ」
「なに琴未、とうとう告白したの！」
琴未が閃華に文句を言う前に、琴未は周りの女性陣から囲まれて質問攻めに遭ってしまった。どうやら琴未が昇のことを好きだったという事実は女性陣にはすでに知られてたらしい。
「はっはっはっ、四又とは滝下もなかなかやるな」
せんせー！　そこは褒めるところじゃないですよ。
「さて、じゃあ滝下、詳しい話を聞かせてもらおうか」
琴未と同じくいつの間にか昇も男性陣に囲まれて、詳しい説明を求められている。
「いや、説明と言われても……」
「琴未ちゃんだけなら分かる気もするけど、他に三人もあんなに可愛い女の子とからんでいるって言うのはどういうことだ」
「滝下、俺たちは真実を知りたいだけなんだ。ここは腹を割って話しちまおうや」
いや、そんな親友みたいに肩を組まれても困るんだけど。

その時、男性陣の列が二つに割れると、その間をシエラが歩いてきて昇のとなりに立つ。
「私は昇の妻で、全てを昇に捧げた」
いやいやいや、シエラさん、いきなり来て、いきなりなに言ってるんですか！
だがその大胆発言に男性陣は歓声を上げるのと同時に今度はシエラに向かって質問攻めを開始した。
「滝下に全部捧げたって、もしかして……」
「妻だから当然」
「おおっ」
なんですか、その感心する態度は。
「くっ、まさか滝下に先を越されるとは思ってなかったぜ」
いやいや、そこ誤解だから、本気にしないで。
「と言う事は滝下とは一緒に住んでるの？」
「当たり前、一緒の屋根の下に住んでる」
シエラさん。間違ってない、間違ってないですけど、この場合は誤解を生みます。
「妻って事は二人はもう……」
「全てを済ましています」
『おおーっ』
いや、そこは歓声を上げるところじゃないから。
だが突然机を大きく叩く音が聞こえると男性陣を掻き分けて琴未が割り込んできた。
「シエラあんたね。何処まで嘘をつくつもりよ」
「私は嘘なんて言ってない。もしかすると皆が誤解するだけ」
確信犯ですか――！
「とにかく、シエラと昇はそこまでの関係になってないでしょ」
「これからなる予定」
「予定で誤解を招く事を言うな！」
そんな二人のやり取りを見て男性陣は静かに話しが広がっていく。

「やっぱり滝下とは何かあったらしいぞ」
「と言うか二股だろ、二股」
「あの滝下がか、それはありえないだろ」
「けど、皆滝下と妻やら恋人やらって宣言してるよな」
「ってことは……四股か、四股」
「しかも全員可愛いぞ。いいのか皆、こんな暴挙を許して」
「いや、良い訳が無いな」
あの～、皆さん、話がヤバイ方向へ向かっているのは僕の気のせいでしょうか。というか閃華とミリアは。
閃華は閃華でよってくる男性陣を片っ端からふっており、ミリアは何故か女性陣に囲まれていた。どうやらここでもミリアは可愛い妹のような存在らしい。
と言うか先生、このまま放っておいて良いんですか。
だが当の森尾は楽しそうに現状を見ていた。
ああっ、もう、誰か何とかしてくれー！　そうしないとヤバイから、僕がヤバイから。
「はいはい、そこまでよ。皆、今はホームルーム終わるから、あまり騒がないで」
手を叩きながら騒ぎを鎮めようと、このクラスの委員長、森尾与凪（もりおよなぎ）は手際良く集団を散らすと、シエラ達の席まで決めてしまった。
もちろん、左にシエラ、右にミリア、後ろに閃華、そしてついでなのか琴未の席を昇の前に移動させてしまった。
「なんで、私まで席が替わるのよ」
「あなたも滝下君と関わってるから、こうしておいた方がなにかとやりやすいのよ」
「……それは僕達が問題を起こすことを前提にした発言なの」
「そうね、そうかもしれないわね」
与凪は軽く笑いながら昇に答えると今度は森尾先生の所に向かった。
「亮太先生、こういう時は先生が何とかするもんですよ」

「あははっ、すまんすまん、つい面白そうだったから、与凪君今度からは気をつけるよ」
二人は同じ苗字だから自然と名前で呼び合うようになっているようだ。
というか先生、もうちょっとしっかりして下さい。
その時、ホームルームを終えるチャイムが鳴り響く。
「じゃあ皆、あまり滝下をいじめるんじゃないぞ。それと転校生とも仲良くな」
そういって森尾は教室から出て行った。
だがそんな担任の忠告も虚しく、昇達は一時限目が始まるまで質問攻めに遭い、一日中休み時間になるとそんな状態が続いた。

そしてついに昇が待ち望んだ終業のチャイムが鳴り響き、放課後へと突入していく。
はぁ、やっと終わった。
さすがに放課後になると各自、部活やら帰宅やらでいろいろとやることがあるらしく、昇達は解放されている。
だが昇が疲れたようにカバンに教科書を仕舞っていると、与凪が昇の元へと向かってきた。
「滝下君ちょっといい」
「えっ、なに」
「それと琴未と転校生三人、亮太先生がお呼びよ」
「先生が？」
「そう、生徒指導室に来てくれだって」
はぁ、今度は先生からいろいろと聞かれるのかな。
げんなりする昇を見て与凪は軽く笑みを浮かべる。
「そんなに心配しなくて大丈夫よ。それで、あなた達は大丈夫？」
「私は大丈夫だけど」
「私も特に用事は無い」

「うん、大丈夫だよ」
「やれやれ、しかたないのう」
さすがに四人とも疲れたような顔をするが、担任の呼び出しとなると行かないわけには行かない。しかたなく昇達は立ち上がった。
「それじゃあ、行きましょうか」
「えっ、森尾さんも行くの？」
「そうよ、それに私も行かないと話しにならないからね」
「えっと、それってどういう意味？」
「まあ、行けば分かるわよ」
それだけ言って与凪は先導するように昇達の先を歩き始めた。
しかたなく与凪についていく昇達。
だが、昇は気付いていない。なにしろ閃華ですら、気付かないほどなのだから。
これから言われる真実を昇達は知る由も無かった。

第十五話　閃華の企み（後書き）

それでは十五話をお送りしたわけですが、まあ、ここら辺の話は次に繋ぐ話なので、まあ、いろいろ意味で準備期間に当たります。……その割には昇は酷い目に遭ってる気がする。

まあ、新キャラも出て来た事ですし、たぶん、もう数話かいたら新章突入ですので、期待して置いてください。

けど、この新章もまた長くなりそうな予感がして下手したら百以上行くかもしれませんので覚悟しといてくださいね。特に私が…。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、現在新章の設定を思い描いてる葵夢幻でした。

第十六話　生まれる迷い

はぁ、これからなにを言われるんだろ。けど、森尾先生だからそんなに怒られることは無いと思うけど、やっぱりなんか怖いな。
気落ちしながらも昇達は生徒指導室に向かって歩いていた。
だがシエラ達はそんな昇とは反対に気楽にお喋りをしながら歩き、先導する与凪も黙って歩いてるだけだった。
そして昇達は生徒指導室の前に到着する。
「失礼します」
与凪が断りながらも扉を開けると中に入り、昇達を促す。
生徒指導室にはすでに長机と人数分の椅子が用意されており、森尾は仕事をしていたのだろうか、書類から目を離すと昇達を迎えれた。
「おっ、来たね。とりあえず、皆座りなさい」
与凪は森尾の隣に、そして長机を挟んで昇達がそれぞれの椅子に座る。
「さて、どこから話したらいいかな」
「あの、先生、シエラ達とは、その…」
「分かってるよ、滝下」
「えっ」
意外な言葉に昇は驚くが、森尾の眼はまるで全てを見通しているかのように、昇達を見ていた。
なんだこれ、森尾先生がなにを知ってるっていうんだ。
思わず森尾の目に飲み込まれる昇は固唾を呑み、次の言葉を待った。
「先生には滝下の気持ちの少しは分かってると思う。なにしろ……」
そう言って森尾と与凪は立ち上がり、互いに向き合う。そしていきなり……抱き合う。
……って、先生、与凪さん、いったい何やってんですか！

「実は俺達もそういう関係だからな。なっ、よっちゃん」
「ごめんね、滝下君。実はそうだったのよ。けど皆の前では言えないでしょ。それに亮ちゃんとの関係が知られるのもまずかったから」
……はい？　よっちゃん？　亮ちゃん？　というか二人はどういう関係なんですか、というかいつまで抱き合ってるの！　というか先生、生徒に手を出したんですか！
「おおっ、そうか、そういうことじゃったのか」
突然閃華が何か思いついたように手を叩いた。
「閃華、何か分かったの？」
「なに簡単なことじゃ、昇、この二人もまた契約を交わしたということじゃ」
「えっ、それってつまり」
「はい、私は精霊です」
与凪は森尾に抱きつきながらも嬉しそうにそう答えた。
「えっ、そうなの。その割には皆何も言わなかったけど」
昇はシエラ達を見回すが首を横に振るだけだった。
「昇、私達にも彼女が精霊だということには気づけなかった」
「そうなの」
「うん、そうだよ。与凪の気配は人間そのものだったから精霊とは気付かなかったんだよ」
精霊である二人がそういうのだからそうなんだろうと、昇は変に納得した。
「でも、なんで皆分からなかったんだろ？」
「ふむ、それはたぶん、彼女の能力による物じゃな」
「というと？」
「それは私が霧の精霊だからですよ」
「やはりのう」
「いや、僕にはワケが分からないんだけど」
「まあ、簡単に説明するとこうじゃ。精霊というのは何かの力の結晶じゃ。例えるならシエラは翼、ミリアは大地、私は水、といった

具合に精霊には元になる属性ともいえる能力が存在しておる」
「じゃあ、シエラの武器に翼が生えるのも、ミリアが土の壁を作ったりできるのも、全部自分の属性の力なの？」
「そういうことじゃ。そして霧の精霊である彼女の最大の特徴は、全てを覆い隠すこと、まるで深い霧の中に迷い込んだようにじゃな。そして霧は時には幻影も映し出す。彼女はその二つの力を使って、まず自分が精霊であることを隠し、まわりの精霊たちにも普通の人間だと見せていたということじゃ」
「えっと、つまり与凪さんの力は周りの人たちに幻覚を見せること？」
「まあ、そう思っても構わんじゃろう。だから私達も彼女が精霊だとは気付けんかったんじゃ」
「そうなんだ」
凄いな。あの閃華まで誤魔化すなんて、というと与凪さんも強いのかな。……って、もしかして森尾先生と戦うことになるの！
二人の関係が分かった以上、昇達は立ち上がり警戒態勢をとるが、与凪は甘えるように森尾に抱かれながら涙目で訴える。
「違うんです。皆をここに呼んだのは気付かれた時に誤解されると困るからで、私達は皆と戦うつもりは有りません」
「じゃあ、何で契約をしたの？」
シエラの問いに森尾と与凪は見詰めあい、与凪は頬を赤くしながら答えた。
「だって、亮ちゃんの傍に居たかったから」
「えっ、それってどういう」
「はぁ、そういうこと」
「なんか変に警戒したから疲れちゃったよ」
「まったくじゃ」
「というか森尾先生もいつの間にそんな人が出来てたんですか」
一気に和む空気の中で昇は一人で付いていけずに混乱するばかりだ。

って、皆どうしたの、何で急に和やかになるわけ。
そんな昇に見かねたシエラは再び昇を座らせると、事の真相を打ち明かす。
「昇、前に私が言ったこと覚えてる」
「えっ、なんのこと」
「精霊の中には争奪戦の時のみに出来る契約を利用して、自分の思った人に近づいて、その人と一生幸せな人生を歩む精霊がたまにいるってこと」
ああ、そういえば前にそんなことを聞いた気がする。けど、そうするとこの二人の関係ってそういうことなの。
「じゃあ、先生は争奪戦に参戦しないんですか？」
「ああ、俺はよっちゃんと一緒にいられればそれでいい。それよりもだ、先生としては滝下のほうが気がかりなんだ」
「えっ、どういうことですか？」
「滝下は目指すのか、エレメンタルロードテナーを」
「……」
昇はすぐに答えることが出来なかった。なにしろ昇自身もこれからの事をあまり気にしてない。というか周りに振り回されっぱなしだったから、そんなことを考える余裕も無かった。
けど、こう改めて聞かれると、どうなんだろう。僕は……エレメンタルロードテナーになるべきなんだろうか。
いつもとは変わらない日常に、突然の台風のようにやってきた事態。昇はその台風が一段落するまでは、そんなことを気にかける余裕も無かった。そして一段落した今、改めて昇はそのことを考えてみる。
いつもと変わらない日常に突然現れたシエラ、それから大変な事だらけだったけど、僕はもしかしたらそれだけもいいのかもしれない。エレメンタルロードテナーにならなくても、今のように皆で楽しく過ごせるだけでいいのかもしれない。
けど、シエラ達はどう思ってるんだろう。やっぱり僕にエレメン

タルロードテナーになって欲しいのかな。そして僕は……その期待に答えるべきなのだろうか。

いや、そうじゃない。先生が聞いてるのは僕の意思だ。僕がどれだけの意思でエレメンタルロードテナーになろうとしてるのかを聞いてるんだ。……どうなんだろう、僕は今までエレメンタルロードテナーになろうなんて思ってなかったけど、改めて聞かれるとどう答えていいのか分からない。

確かにこのままだといつ戦闘に巻き込まれても不思議は無い。もし僕がエレメンタルロードテナーにならないと言ったら、これからはどうなっていくんだろう。やっぱりシエラ達は僕の事を見捨てるのかな。なにしろシエラ達の目的はエレメンタルロードテナーを探す事だから。そこで見出した僕が拒絶すればシエラ達は僕の傍にいる理由が無くなる。

……いいのかなそれで。

その時、昇の頭には最初にシエラに会った時の光景が過ぎった。

シエラは僕に可能性が有るって言ってくれた。そして目指すものを手に入れることも。……僕の目指すものっていったいなんだろう。僕はどれだけの覚悟でこれからの戦いに挑めばいいのだろう。

昇の中に生まれる不安と迷い。その二つは渦巻いて昇を混乱させていく。そして昇は頭を抱えるように黙り込んだ。

その様子を見ていた森尾は軽く溜息を付くと、与凪と離れて元に位置に座った。

「その様子だと、まだどうするか分からないって感じだな」

「すいません」

「別に謝る事じゃない。俺は滝下の担任としてその事を聞いたまでだ」

「もし昇がエレメンタルロードテナーになる、と言ったらどうするおつもりですか」

「そりゃあ、そうだな、滝下の選択にもよるけどなるべく協力はさせてもらうよ」

「与凪も一緒に戦ってくれるの？」
「残念、私は戦闘には向いてないんです。情報収集と後方支援ぐらいしか私には出来ません。だがら器の争奪戦にも参加しないんですけどね」
「そうなんだ」
「ですから、調べたいことや聞きたいことが有ったら何でも言ってください。調べておきますから」
「ふむ、それは頼もしいことじゃのう」
「えっ、閃華なんで？」
「ミリア、そなたも少しは頭を使わんか。与凪が協力してくれる以上、敵の正体とか情報とかが手に入りやすくなる。その分こちらもいろいろな策や準備ができるというわけじゃ、分かったか」
「う～、そんなバカにするような言い方しなくても」
「なら少しは勉強せい。って、昇はどうするつもりじゃ」
「えっ」
一斉に視線が昇るへと集中するが、昇は戸惑うばかりで何も言葉が出なかった。
そんな昇に見かねたように森尾は大きく息を吐くと、座り直した。
「まあ、今すぐ出る答えじゃないって事か。なにしろ滝下の将来に関することだからな、滝下、ゆっくりでいいからちゃんと答えを出せよ」
「あっ、はい」
「じゃあ、お互いのことが分かったところで、誰か質問はあるか」
静まり返る中でシエラは一人手を上げた。
「はい、シエラ君。なんだい」
「先程できるだけ協力をするといいましたよね」
「ああ、俺としても滝下の担任としても見過ごすことが出来ないからね」
「私達は与凪さんのように自らの正体を隠すことは出来ません。ですから、いつ戦闘に巻き込まれても不思議は無い。それが只の一戦

闘ならともかく、器の争奪戦は必ず組織的な戦闘にまで発展することがあります。そうなった時は協力してくれると約束できますか」
「確かに普通の争奪戦はそうなりますね」
「よっちゃん、そうなの？」
「うん、亮ちゃんが思ってるほど器の争奪戦ていうのは、時々激戦化するときがあるの。そうなった時は前線だけだとおぼつかなくなる。だからシエラさんは私にバックアップを頼みたいんだと思うわ」
「簡単に言うとそういうことになります」
「……そういった事態を避けることは出来ないのかい」
「亮ちゃん、それは無理だよ。だって滝下君達の精霊は契約をした精霊なら相手が精霊だって分かるもの。だから戦いを避けることは結構困難だよ」
「そっか、よっちゃんは自分の正体を隠せるからいいけど、滝下達には無理か、だから望まなくても戦闘に巻き込まれることが有るということか」
「そう、そしてそれが組織的な敵だったら、私に敵の情報を探って欲しいみたい」
「そうか……、よっちゃん頼めるかい？」
「亮ちゃんが望むなら」
「分かった。シエラ君、約束しよう。もし滝下達が回避不可能な戦闘になるようなら、出来るだけの事はやるよ。そのことは約束する」
「ありがとうございます」
「けど、もしかしたら滝下の選択しだいではもっと協力することになるかもな」
「そうじゃのう、その時はよろしくお願い申しますぞ」
「はっはっはっ、閃華君は抜け目が無いね」
「それだけが取り得じゃからのう」
そのまま和やかに笑いがあふれる室内。だが昇だけはとてもそんな気分にはなれなかった。
これで先生まで巻き込むことになっちゃった。いいのかな、僕が

今まで危険な目に遭っているのに。いや、それ以前に僕の選択しだいではもっと迷惑をかけることになるかもしれない。
森尾を心配する昇だが、当の本人は和やかに話している。
いや、すでに先生も契約者なんだ、それくらいのことは分かってるだろう。
なら僕は、僕はいったいどれだけのことを分かっているんだろう。今まで降って沸いた事態に対処してきただけだけど。もしこれから本格的な戦いになるのだとしたら、僕はいったい何処まで戦えるんだろう。そこまでして戦っても僕はエレメンタルロードテナーになりたいんだろうか？
改めて自分が進もうとする道に疑問を投げかける昇。そして疑念は迷いへと変わり、昇を蝕んでいく。
本当にこれが僕の進み道なんだろうか？
そんな昇の迷いをかき消すかのように与凪は突然手を叩いた。
「はいはい、今日はこれまでにしましょうか、もう結構時間がたってるし」
「うわっ、もうこんな時間なんだ」
時計を見たミリアが大げさに驚く。
「あちゃー、しまった。つい話に夢中になっちゃたな」
「亮ちゃん、今日は遅くなりそう？」
「うん、そうだね。どうしても今日中に片付けたい仕事があるから、少し遅くなるかもしれない」
「じゃあ、晩御飯作って待ってるね」
「よっちゃん、ありがとう」
「ううん、亮ちゃんもお仕事がんばってね」
というか先生、その新婚みたいな会話はどうにかならないんですか。
「それでは亮太先生、失礼します」

与凪はそう言いながら森尾が手を振っているので、周りに見えないように小さく手を振ると生徒指導室のドアを閉めた。
「というか与凪、なんでいきなり亮太先生に戻っちゃったの」
「はぁ、ミリアさん。私達の関係が誰かにバレたらまずいでしょ。仮にも生徒と先生なんだから」
「さすがに第三者が聞いておるかもしれん状況に愛称で呼び合うことは出来んじゃろう」
「あははっ、そういえばそうだね」
「それじゃあ昇、私達も帰ろう」
そう言いながらもシエラは昇と腕を組むのだが、昇はあまり反応しない。
「昇？」
「シエラ、なに昇とくっ付いてるのよ。離れなさい」
それでもシエラは離れることなく昇の顔を覗き込んでいる。そんな状況に痺れを切らした琴未は反対側から昇の腕を組むが、琴未もシエラと同じく昇に何の反応が無いことに疑念を感じて、昇の顔を覗き込む。
「昇？　昇、昇、どうしたの？」
「えっ、あっ」
琴未に体をゆすられて昇はやっと現実へと戻ってきた。
「昇、体の調子が悪い」
「いや、そんなことないよシエラ」
「本当に大丈夫、昇」
「琴未まで、大丈夫だよ。ちょっと考え事をしていただけだから」
「昇、早く帰ろう。お腹すいた」
「うわっ」
ミリアが突然昇の後ろから抱き付いてきたので、昇は倒れそうになるがシエラと琴未が両方から引っ張ってくれたおかげで、何とか倒れずに済んだ。
「ミリア！　危ないでしょ」

「う〜、だって、シエラと琴未だけじゃ、ずるいじゃん」
「だからと言って、勢い良く跳び付かない。分かった」
「は〜い、って、シエラ、夕食はなに？」
「はぁ、あなたの頭の中には食べることしかないの？」
「う〜、そんなことないよ」
「というかさ、三人ともそろそろ離れてくれる。一応ここ学校だし」
「けど、今朝の騒ぎで滝下君のことが知れ渡ってるから、別にそのままでもいいんじゃない」
「与凪さんまで」
「クスクス、じゃあ、私も今日は帰るから、また明日ね」
「じゃあね〜、与凪〜」
背中から元気良く手を振るミリアに昇は踏ん張り、両脇を固めているシエラと琴未のおかげで何とか立っていられた。
「ミリア、背中でそんなに暴れないでくれる」
「あっ、ごめん、昇」
「ほれほれ、そこまでにせい。三人とも離れて、そろそろ帰るぞ」
「そうね」
「しかないわね」
「よいしょっと」
やっと解放された昇は大きく伸びをすると、今まで硬直していた筋肉を伸ばす。
「じゃあ、帰ろうか」
こうして、昇達は帰宅のすることになった。
だが、運命という物があるとしたら、その歯車は確実に回り始めていた。

そこは暗い一室、少女は宙に浮かぶ不気味な人影のような物に叫ぶ。
「本当、本当にそんなことが出来るの」

そして、その不気味な人影は怪しげな笑みを浮かべる

第十六話　生まれる迷い（後書き）

そんなワケで、今回で中間となる話が終わってくれたので、次からは新章突入です。

その名もロードナイト編、迷ったまま昇は新たなる戦いへと望むこととなる。その先に待ち受けるのがどんな現実だろうと回避することは出来ない。運命の歯車は回り続けるだけである。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、新章のプロットを未だに書きながら次も長くなるなと覚悟を決めた葵夢幻でした。

第十七話　出会い

そこは暗い一室。一筋の雷光が室内に浮かぶ少年ぐらいの人影を映し出す。

その人影に大きな男が向き合っており、男の足元には怯えたような一〇歳ぐらいの少女が男の足を掴んでいた。

男は少女を守るように手を広げるが、少女はその手をどけて勇気を振り絞りだして尋ねる。

「本当、本当にそんなことが出来るの？」

影は怪しげな笑いを浮かべると快く答える。

「ええ、本当ですよ。私の言うとおりにすれば、あなたの望みは叶います」

「やめろ！　これ以上嘘を言うな」

少女を守っている男が影に叫ぶ。その気迫は今にも影に襲い掛かりそうだ。

「嘘では有りません、真実です。私にはそれが出来る」

「これ以上、この子の心を乱すな！」

男は影に襲いかかろうとしたが、それを止めたのは意外なことに男の後ろに隠れていた少女だった。

「分かった」

「やっと、信じてくれましたか」

「うん、私、エレメンタルロードテナーになる」

再び雷光と雷鳴が鳴り響き、影は笑みを浮かべる。

「はあぁ、つまんない」

ミリアは一人、ウチに帰るために歩いていた。

本当ならシエラや琴未と一緒に昇の近くにいたいのだが、昇が何かの委員会とかやらでやらければならない仕事があり、ミリアも最

初は付き合っていたのだが、そのうち飽きてしまい、結局、一人で帰ることになってしまった。

シエラも琴未も昇も、なんであんなつまんないこと続けられるんだろ。

元々、忍耐とか集中とかが苦手なミリアは単純な作業に耐えられなかった。それが書類の整理やら、なんかの集計の計算とか、その手の作業はミリアには向かないようだ。

結果、ミリアは昇達と分かれ、シエラと琴未は昇の傍で細かい作業をやっている。

むう、あんな仕事が無ければ私も昇の傍にいられるのに。シエラだってあそこまで言う必要ないじゃん。

役に立たないミリアは迷惑以外の何者でもない。そう感じたシエラはミリアを追い出すように帰るように言っただけなのだが、それでもだだをこねるミリアにシエラが怒り始めて、昇が仲裁に入ったおかげでそれ以上は何も起こらなかったが、結局ミリアは一人で帰ることになった。

閃華も閃華で用事があるとか言ってどっかいっちゃたし。はぁ、やっぱり、つまんないな、一人でいるのは。

そんなことを思いながら歩いているミリアの耳に突然、キィと鉄同士が擦れ合うような音が聞こえた。

あれ、なんだろう。

ミリアが音がした方向へ目を向けると、そこにはあまり大きいとは言えないが公園が存在していた。そしてその公園には一人でブランコに乗ってる少女だけがいた。

……あの子も一人なのかな？

ミリアが何故そう思ったのかは良く分からないが、少女の目が寂しそうに見えたことは確かなようだ。

まあ、私も暇だし。

ミリアの足は自然と公園の中に入って行き、そのまま少女の元へと近づいていった。

「君も一人なの？」
「えっ」
少女は突然現れたミリアに驚き、ブランコの動きが止まる。
「私ミリアっていうの、君は？」
「……雪心（きよみ）」
「へぇ～、雪心って言うんだ。って、こんなところでなにしてたの？」
「……ブランコ」
「まあ、そうだね」
ミリアは雪心の隣に開いているブランコに腰を下ろし、軽く揺らす。
「雪心は友達いないの？」
「いない。私、この公園に来たの初めてだから」
「そうなんだ。何処からか引っ越してきたの？」
「ううん、今まで忙しかったから友達も出来なかったし、公園にくることも無かった」
「そっか、じゃあ私と友達になろう」
「えっ！」
何でいきなりそんな展開になるんだ。と昇がこの場にいたらそう突っ込むことは間違いないだろう。
だがミリアは本気で笑みを浮かべながら雪心を見詰めている。
雪心はいきなりの申し出に戸惑うが、嬉しそうな笑みを浮かべながらミリアの顔を見詰め返す。
「私で、いいの？」
「あははっ、だって、お互いに一人で暇なんだし、友達になってもいいんじゃない」
「そう……なの」
「そうだよ」
「……うん」
どういう理屈でそうなったのか、それとも理由なんて要らないの

か、その後は二人ともお互いのことを話し合った。ミリアの外見が幼く見える所為か、それともミリアの精神年齢が低いのか、二人が仲良くなるのにそんなに時間はかかることは無かった。
「じゃあ、雪心のお母さんは死んじゃったんだ」
「うん、でも、今は守ってくれる人がいるから」
「お父さん？」
「ううん、お父さんは私が小さい頃に出て行ったみたい」
「じゃあ、おじさんとかの親戚？」
「う～ん、まあ、そんな感じかな。とても優しくて、とても強いの」
「へぇ～、そうなんだ」
「ミリアは、ミリアのお家はどんな感じなの？」
「私のウチ、あははっ、実は私は他の家に居候させてもらってるんだよね」
「居候って？」
「う～んと、簡単に言うと仲がいい人の家に住まわせてもらってるって事かな」
「ミリアもお父さんとお母さんがいないの」
「そうだよ。私もお父さんとお母さんはいない。生まれたときから一人だったけど、今は居候している家が賑やかだから楽しいかな」
「そうなんだ。ちょっとうらやましいな」
また寂しそうな目をする雪心を見て、ミリアは勢い良くブランコから飛び降りると雪心の前に立つ。
「じゃあ、今度私のウチに遊びにおいでよ」
「いいの？」
「うん、彩香は、お世話になっている人のお母さんなんだけど、いい人だからきっと歓迎してくれるよ」
「うん、じゃあ、そのうちいってみたいな」
「何なら今日でもいいよ？」
勝手なことを言うミリアだが、雪心は首を横に振る。
「今はダメなの、今はやんなきゃいけないことがたくさんあるから」

「そっか……」
「だから、それが全部終わったらミリアのお家に遊びに行くね」
「うん、待ってるよ」
その時、近くの小学校からだろうか、帰宅を促すアナウンスが流れ始めた。
「もうこんな時間なんだ。私帰らないと」
「そうなんだ」
「ミリア、ミリアはまたここに来てくれる？」
「うん、朝からというわけには行かないけど、この時間にはここに来るよ」
「うん！」
嬉しそうに頷く雪心を見てミリアまでも嬉しそうに笑みを浮かべるのだった。
「じゃあ、ミリア、またね」
そう言って雪心は大きく手を振りながら走り出し、ミリアも大きく手を振り返すのだった。

「昇、昇」
その日の夕食後、ミリアはリビングでくつろいでいた昇の背に嬉しそうに抱きついた。
「うわっ、ミリア、頼むから勢い良く飛びつかないでよ」
「あははっ、ごめんね。それよりも昇聞いて、聞いて」
いつも以上にハイテンションのミリアに昇は溜息を付きながらも、とりあえずミリアを落ち着かせてから話を聞こうとしたのだが、その前によっぽど嬉しいことがあったのか、ミリアは一気に喋り始める。
「あのね昇、私友達が出来たんだよ。雪心って言って、たぶん一〇歳ぐらいだと思うけどね。今日その子と友達になったんだよ。嬉しかったよ、何しろ私にとっても初めての友達だから。ねっ、ねっ、

昇はどう思う？」
「どう思うって聞かれてもね。まあ、よかったんじゃない」
「そう、そうだよね、昇もそう思ってくれるよね」
「それじゃあ、昇から離れなさい」
いつの間にか後片付けを終えたシエラがいつものように、ミリアを昇から離そうとするが、昇からミリアを離したのは意外なことに閃華だった。
「ミリア、ちょっとよいか、話があるのじゃが」
「えっ、ちょっと、閃華、なに」
閃華はミリアを猫の首を掴むように持ち上げると、そのままリビングから出て行ってしまった。
「珍しいね、閃華があんな風にミリアを離してくれるなんて」
「そうね。けど、閃華のことだから何かあると思う」
「……というかシエラ、なんで僕と腕を組みながら肩に頭を預けるの」
「これが夫婦としての基本の形だから」
いや、そんなのはないから。
「昇はこうしてるの嫌？」
うっ、今日はそう来たか。確かに僕としてもシエラにそうされるのは嫌ではないけど。というか男なら嬉しくないはずが無い。そう、結局僕も男だからシエラにそうされると確かに嬉しいと思ってしまう。
それに小振りとはいえ、シエラも胸はそれなりにある。ワザとなのかシエラは自分の胸が昇の腕に密着するように腕を組んできてるし。その状態を僕はどうやって拒絶しろと、というか無理です。僕にはこの状況を拒絶する事は無理です。
結局、昇達はお風呂から出てくる琴未に引き剥がされるまで、そのままの引っ付いていたのだった。

ミリアを自分の部屋に連れ込んだ閃華は、座布団を下に置くと、その上にミリアを落とした。
「うわっ、う～、もうちょっと優しくしてよ」
「そいつはすまんかったのう」
「って、私に何か用があるわけ」
「うむ、大有りじゃ」
そう言いながらも閃華は自分の座布団を用意すると、ミリアと対面するように腰を下ろした。
「ミリア、先程友達が出来たと言っておったな」
「うん、そうだよ。雪心って言って、凄くいい子なんだ……」
「スットプ」
勢い良く喋り始めたミリアの目の前に手の平を出して、ミリアの話を強制的に止める。
「う～、なんだよ」
「ミリア、自分がどういう存在か分かっておるのか」
「そんなこと分かってるよ」
「では、なぜ友達などが出来る」
「どういう意味だよ」
閃華の言葉がよほど頭に来たのか、ミリアは閃華を睨み付けながら問いただす。
「ミリア、その友達というのは人間なのだろう。相手が精霊だと、まずそういう関係を簡単に作ることは出来んからのう」
「そうだけど、それがどうかしたっていうの」
「はぁ、ミリア。私達は精霊だぞ、精霊が人間と友達となって、この先も仲良くやっていけると思っておるのか」
「それは、でも……」
「しかもじゃ、昇はいつ戦闘に巻き込まれても不思議は無い。そんな時にその友達とやらが傍にいたらどうするつもりじゃ。その子まで危険な目に遭わせる事になるぞ」
「……」

「まあ、今回の事はもうどうにもならんから、その友達と二度と会うなとは言わんが、これからは気をつけるんじゃぞ。私達は人間ではなく、精霊だということを忘れるな」
「わかったよ。ごめん」
「まあ、分かってくれれば私はこれ以上のことは言わん。後はミリア、そなたがその友達を巻き込まないように気をつけるんじゃぞ」
「うん、分かったよ」
「では、その友達とは仲良くな。さて、私が言いたいことはそれだけじゃ。だからもういいぞミリア」
「うん、ごめんね閃華、心配かけて」
「なにを言うておる。私達が昇と契約をしている以上、私達は運命共同体といっても過言ではない。じゃから忠告をしといたまでじゃ」
「ありがとう閃華、じゃあね」
そう言って静かに出て行くミリアを閃華も静かに見送るだけだった。
まあ、ミリアも頭の中が空っぽというわけじゃないからのう。まあ、あれだけ言っておけば、今後も大丈夫じゃろう
とりあえず閃華は一安心したところで、急にお茶が飲みたくなったのでリビングに下りていくのだった。

それよりも数時間前。雪心は自分の家に入るなり、一人の男の元へ行く。
その男は巨漢で筋肉も引き締まっており、見るからに強そうに見えるが、雪心は男の姿を見つけるなり、嬉しそうに抱きついた。
「どうした雪心、随分と嬉しそうだな」
「うん、うん、シェード聞いて。私ね、友達が出来たの、ミリアちゃんって言って、私と同じぐらい歳で、私と同じ位の背なの」
「そうか、それはよかったな」
シェードはそう言いながら雪心の頭を優しく撫でる。

「うん、それでね。明日もまた遊ぼうって言ってくれたの」
「そうか、だが、あまり遅くまで遊んではいかんぞ」
「うん、分かってるよ。シェードに心配かけるようなことはしないよ」
「私のことは気にしなくていい。今はその友達とたくさん遊ぶといい」
「うん、ありがとうシェード」
そして甘えるように抱きついてくる雪心をシェードは優しく包み込む。
だが雪心が自分の顔を確認できないほど抱きつくのを確認すると、シェードは急に複雑な顔になった。
一抹の不安がシェードを過ぎる。
そしてシェードはゆっくりと雪心を離す。
「雪心、風呂の準備がすでに出来ている。だから先には言って来るといい」
「え～、後でもいいよ」
「外から帰ってきたばかりだろ。それに今日はもう遅いから出かけることも無い。だから先に風呂には行って来い」
「……は～い」
渋々お風呂に向かう雪心。だがシェードとしては一刻も早く風呂に入れたかった。
……あの気配、間違いないだろう。だが、今の雪心にそれを告げていいのだろうか。いや、それでは雪心をまた一人にしてしまう。今は見守るしかあるまい、だが、それが雪心にとって悲しい事にならなければいいが。
シェードは不安を感じながらも、あの楽しげな雪心の笑顔が消え去る方が嫌だった。それならと、今は楽しめるだけ楽しんだ方が良いとシェードは思ったのだろう。
複雑な表情でシェードは雪心の着替えを取りに行った。

第十七話　出会い（後書き）

そんなワケでロードナイト編が始まりました。まあ、結構ありがちな展開になりそうなので、感のいい読者の方は気付いてると思いますが、どうか見捨てずに最後までお付き合いください。

それ以外の読者の方はこれからの展開をお楽しみください。というか見捨てないでください。お願いします。そりゃあもう足まで舐めますのでお願いします。……いや、実際に足を出されても困るんですけど。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、もしかしてこの物語主人公がはっきりしてないと思い始めた葵夢幻でした。

第十八話　再会が告げる予感

昨日とはうって変わって、ミリアは一人でも嬉しそうに学校から公園に向けて歩いていた。

昇達、当分は委員会の仕事で帰りが遅くなるって言ってたから、私は雪心（きよみ）と遊んでればいいや。

そんなことを考えながら、ミリアの足取りも軽く歩いている。

けど昨日閃華が言ってたこともあるし、そこら辺はどうしようかな。う～ん、今は平穏だからいいけど、もし昇が戦うような事になったら私も行かないといけないし。……あっ、そういえば雪心も今はやることが沢山あるって言ってたような気がする。うん、雪心に合ったら、その事を聞いてみよう。

そしてミリアが公園に到着すると、すでにブランコをこいでいる雪心の姿を発見した。

「雪心―！」

大きく手を振りながら公園へと入っていくミリア、それに気付いた雪心もブランコから飛び降りてミリアの元へと走り寄る。

雪心との再開がよほど嬉しかったのか、ミリアも雪心に抱きつこうと走り出し、そしてお互いに抱き付き合おうとしたのだが、両方とも加減という物を知らないようで、全力でお互いに走りより激突した。

まさしく正面衝突をしたミリアと雪心だが、お互いにその場に座る格好になってしまった。だが先程のことがよほど面白かったのか、二人は笑い出して随分と楽しげな再会を遂げた物である。

「そういえば雪心」

「なに、ミリアちゃん」

二人は昨日と同じようにブランコに乗りながら、お喋りをしてい

た。
「昨日、今はたくさんやることがあるって言ってたよね」
「うん、そうだよ」
「それって、何なの？」
笑顔で聞いてくるミリアだが、雪心は逆に考え込むような顔になっている。
「う～ん、今は誰にもいちゃダメって言われてるの」
「誰に」
「うんとね、私の願いをかなえてくれる人」
「願いをかなえて……くれる人？」
「うん、最近までその人の言うとおりにしてたから忙しかったんだけど、なんかある程度揃ったから私は暇になったの」
「えっと、どういうこと？」
「ダーメ、ミリアちゃんにも言えないよ」
「え～、ケチ」
「あははっ、でもね。もしかしたらまた忙しくなるかもしれない。そうその人が言ってたから、ミリアちゃんとも遊べなくなるかも」
「う～ん、私もずっと暇ってワケじゃないから、昇達の仕事が終わればまた昇の傍に居たいし」
「昇って、だれ？」
「んっ、あのね、私の大事な人、そして大好きな人」
「そうなんだ。私にもいるよ、大好きで大事な人が」
「えっ、そうなの？」
「うん、いつも私の傍にいてくれて守ってくれるの」
「あっ、そうか、そういう大事な人か」
さすがにミリアでも自分の好きと言う言葉と、雪心が言う好きという言葉の違いには分かるらしい。
そっか、雪心には守ってくれる大事な人が傍にいるんだ。……あ、私も昇の事を守れるぐらい大事な存在になりたいな。
「ミリア、どうしたの？」

考えていることが顔に出ていたのか、雪心は心配そうにミリアの顔を覗き込んでいた。
「えっ、ごめん、ちょっと考え事してた」
「なにを？」
「えっとね、私の大事な人は私の事をどう思ってくれるのかなって」
「ミリアちゃんの大事な人は、ミリアちゃんのことを大事にしてくれないの？」
「そういうわけじゃないんだけどね。なんていうか、私が言ってる大事と雪心が言ってる大事は違うんだよ」
「そうなの？」
「そうだよ」
「う～ん、よく分かんない」
「大丈夫だよ。雪心も大きくなれば分かるようになるから」
「う～、ミリアちゃんだってまだ小さいじゃん」
「私はこう見えても雪心よりお姉さんだよ」
「そうなの？」
「そうだよ、驚いたか」
「うん、びっくりだよ。同じ歳位だと思ってた」
まあ、実際はかなり年齢が離れてるんだけどね。たぶん百歳ほど。
そう思うと昨日閃華に言われた言葉がミリアの頭を過ぎる。
分かってる、分かってるけど、私にとって雪心は大事な友達になりかけてる。だから今は……
そして二人はそのまま昨日と同じように、近く小学校のアナウンスが流れるまで公園で遊んでいたのだった。

やれやれ、すっかり遅くなってしまったのう。
その日の閃華は今でも続けている琴未の実家である神社の仕事の手伝いをしていた。だが今日に限って立て込んだ仕事があったようで、閃華は一人で夜道を歩いていた。

まあ、連絡は入れておいたから心配されることは無いじゃろう。
じゃが、さすがにこの時間になると腹が減るのう。
さすがの閃華も空腹には勝てないのか、夜道を急ぐように歩いていると、向こうから人影が見えた。その人影は最初は普通に見えたが、互いに近づくたびに人影は大きくなっていく。
おや、随分とでかい人間じゃのう。それに体格も良さそうじゃ、格闘技でもやっておるのかのう。
そんなことを思いながらも二人の距離は近づいていき、そして街灯が照らす明かりの下で二人の足がぴたりと止まる。
「ミラルド！」
「閃華か！」
同時に驚いた二人は互いに名を呼び合う。だが閃華は一呼吸置いて心を落ち着けるといつもの感じを取り戻す。それはミラルドも同じようだ。
「ミラルド、おぬしも器の争奪戦に参加しておるのか」
「ああ、故あって参加している」
「その割には精霊としての気配が薄いのう。とても誰かと契約をしたようには感じんのじゃが」
「その説明は必要か」
「……仮契約じゃな」
「さすがだな、察しがいい」
「じゃが、私としては納得がいかん。争いを拒むそなたが何故、今回の争奪戦に参加している」
「やがて敵になる者にそれを話す理由は無い」
「ふむ、それもそうじゃのう。ということは今ここでは争う気はないということじゃな」
「そうだな」
ミラルドは天を仰ぐように星空を見詰める。
「久しぶりに感じる五感、たまにはそれを感じようと表に出てみたんだが、まさか閃華と再開するとはおもわなんだ」

「私もこんなところでそなたと再開するとは思わんかったぞ」
「閃華、今お前はなにをやっている。いや、その格好を見れば聞くまでも無いか」
「ふっ、なかなか似合っておるじゃろう」
そう言って閃華は自分の制服姿をよく見せるように一回転してみせる。その仕草だけを見れば閃華はかなり絵になっているのだが、閃華の事をよく知っているミラルドにとってはあまり興味を引くものではないらしい。
学校での男性陣とはまったく違う反応を示す。
「随分と気軽な身分だな、こっちはいろいろと奔走しておるというのに」
「ほう、そなたが奔走しておるとは誰かが何かを企んでおるようじゃのう」
「ふん、さすがに閃華だ。鼻は良く効くようだな」
「そうじゃのう。普段から争いごとを嫌うそなたが実体化しておるのじゃ。何かの企みに参加しているとしか思えん。それに仮契約という状態じゃ、何かが起こりそうなのはなんとなく察しが付く」
「そうだな。だが、あまり悪い企みには参加していないつもりだった」
「それはどういう意味じゃ」
「さあな、最近では俺も良くわからんようになってきた」
「……困っておるなら相談に乗ってもよいぞ。何せ昔の顔なじみじゃからのう」
「ふっ、いずれ敵となるかもしれん者に話せると思うか」
「ミラルド、そなたの企みはいずれ私達の敵となる企みなのか？」
「さあな、閃華の契約者が我らの前に立ち塞がるとしたら、そうなるのは必然だろう」
「そうじゃのう、そなた達の企みが私達の契約者が快く思わなければ、いずれは敵となろう」
ミラルドは大きく息を吐くと肩をすくめて見せる。

「それがな閃華、最近ではどうなっているのか分からなくなってきた。どうやら首謀者には別の企みがあるらしい。もしかしたら閃華、お前とも戦うことになるかもしれん」
「そうか」
閃華も同じく肩をすくめて見せる。そしてその顔は悲しむというよりかは呆れている顔をしていた。
「おぬしは相変わらず不器用じゃのう」
「どうやらそうみたいだな」
そう言ってミラルドは笑ってみせる。そして閃華も笑みを向けていた。
「さて、私はそろそろ帰らねばならん。家の者に心配させるのもあれじゃからのう。久しぶりにそなたの顔が見れて複雑な気分じゃのう」
「言ってくれるな。まあいい、ではな」
そして二人は歩き出し、すれ違う。
「ミラルド」
閃華は振り向くことなく、ミラルドを呼び止める。
「なんだ」
ミラルドも振り向くことなく答えた。
「できることなら、そなたとは戦いたくないものじゃな。さすがに昔の顔なじみと戦うのは忍びない」
「そうだな、まあ、出来ることだけのことはやってみるつもりだ」
「あまり無理するでないぞ。そなたには忍び事は似合わんよ」
「だがどうも気になってな」
「そうか、そこまでの覚悟があるならもう何も言わん。まったく、お主は相変わらず不器用じゃのう」
「そういう生き方しか出来ないんでな」
「そうであったな」
そして二人はまた歩き始めた。

「昇、ちょっとよいか」
それは夕食後でシエラと琴未が昇を巡って争っている最中だった。
「閃華、悪いけど後にして」
「今取り込んでる最中」
昇を挟んで睨み合っているシエラと琴未が変わりに答えたが、当の昇は一刻も早くこの状況を脱したいのか、閃華に顔を向ける。
「なに閃華、何か用なの？」
「うむ、とても大事な用じゃな」
「閃華、こっちも大事な用の真っ最中なの！」
「琴未はしつこいから困る」
「あのね、それはこっちのセリフよ」
「はぁ、昇は相変わらず大変じゃのう」
「それなら何とかして閃華」
「この際じゃから琴未と一線を越えてみるというのはどうじゃ」
「いや、ちょ、それはまだ早いよ」
「そうかのう、私には昇もまんざらでもない気がするんじゃが」
「そういうことなら妻の私が先に一線を越える」
「シエラ、お願いだからそこは引っ張らないで」
さすがは昇、それだけの勇気は無いようだ。
「まあよい、どうせ琴未やシエラにも関係あることじゃからのう。そのまま聞けい」
最近になって家族が増えたから、彩香は元からあったソファーのほかにもう一つのソファーを対面式に置いた。そして閃華は昇達とは別のソファーに腰を下ろす。
「私達にも関係があるってどういうことよ」
「実はのう、つい先程のことじゃが、昔の顔なじみと出会ったんじゃ」
「えっと、それが大事な用なの？」
「うむ、そやつは普段から争いごと嫌い。特別な理由でもない限り

器の争奪戦には参加せん奴じゃ。そやつが実体化しておった」
「ということは、その精霊が特別な理由があって誰かと契約をしたということ？」
「いや、あながちそうとも言えんのじゃ」
「えっと、閃華の言いたいことがいまいち分からないんだけど」
「ふむ、そうじゃのう。まあ、これは私の私見でしかないんじゃが。この近く、または周辺で何かが起こり始めているようじゃ」
「なにが始まるの？」
「わからん。じゃから昇にもいつでも襲われてもいいように、覚悟を決めておいて欲しいのじゃ」
「それって、また僕が巻き込まれるって事！」
「いや、そうとも限らんのじゃが」
「ああ、もう、閃華、さっきからいったいなにを言いたいわけ」
「すまんのう琴未、実は私にもよく分かっておらんのじゃ。じゃが、確実に言える事は、これから何かが起きようとしている。それが私達に関係有るか無いのかはわかんのじゃがな」
「つまり、不測の事態に注意しろってこと」
「そうじゃのう。うむ、昇、すまぬがしばらくはそうしといてくれ」
「分かった。なるべく気をつけることにするよ」
「うむ、まあ、私達に関係ないのが一番良いのじゃがのう」
そう言って閃華はまるで祈るように天井を見詰める。
そうじゃな、全てが私の杞憂であって欲しいのもじゃな。そして昇達にも、出来ればあまり関わらせたくは無い物じゃ。
閃華は再び目の前で行われている昇の争奪戦を眺めてる。
久しぶりじゃからのう。このような楽しい日々は、まるで昔を思い出すようじゃ。じゃからか、昇達に危害が及ばないように思うのは。
じゃが、現実は時には残酷な物を突きつけてくる場合がある物じゃからのう。用心に越したことは無いか。ふむ、与凪あたりにも探ってもらおうかのう。

閃華は立ち上がると騒がしいリビングから出て行き、途中で空が見える窓から夜空を見上げる。
出来る事なら、昇達に良き未来を……。

「おや、いつの間に戻られたのですか、ミラルド」
「サファドか」
そこはまるで西洋の城を思わせる長い廊下での出来事だ。
頭に大きな帽子かぶり、白いマントを着ている少年は笑みを浮かべながらミラルドの元へと歩み寄った。
「どうでしたか、久々の人間界は」
「うむ、悪くは無かった。昔の顔なじみとも出会えたしな」
「ほう、昔の顔なじみというと精霊ですね。どんな方なんですか？」
「名を閃華といって、なかなかのキレ者だ」
「閃華？」
その名を聞いた途端、サファドは何かを思い出すように考え込んだ。
「閃華、閃華、そうだ、思い出しましたよ。五〇〇年前でしょうか、契約者が禁を起こし、その責任を問われて、確か三〇〇年位、封印されていた精霊が閃華といいましたね」
「ああ、そいつだ」
「それはそれは、珍しいご友人をお持ちなのですね」
「友人ではない、只単にお互いに顔だけは知っているというだけだ」
「それで、その閃華という精霊は実体化していたのですか？」
「ああ、誰かと契約をしたらしい」
「そうですか」
そう答えるとサファドは笑みを浮かべ、ミラルドはその笑みに何故か嫌な感じがした。何故だか分からないがミラルドはこのサファドの笑みに、時折嫌感じがするのだ。
「では、私はやることがあるので失礼しますよ」

「ああ」
歩き始めたサファドだったが、突然何かを思い出したようにピタリと足を止める。
「そうそう、ミラルド。あなたはロードナイトの一員ですから、あまり勝手な行動はしないように」
「分かっている。だが、ずっとこの城にこもっているのも退屈でな。今回のはその気晴らしだ」
「それならよいのですが、今はあまり騒ぎを起こさないでくださいね」
「分かっている」
「では」
そのまま歩み去るサファドの背をミラルドは只見詰めるだけだった。
ロードナイト、それは元々彼女を救ってやるために作られた集団だと思っていた。だが最近のサファドの動きはおかしい。まるで、そう、何かの儀式でもやるみたいに準備をしたり、軍隊でも作るように戦力を集めている。
儀式はいい、それで彼女が救えるのなら。だが、なぜそこまで戦力を集める必要があるんだ。これではまるで本当に戦争でも起こしそうな感じではないか。
疑念を抱えつつも、ミラルドは今は只黙って従っているだけだった。
もし、サファドに違う企みがあるのだとしたら、早めに潰さねば。
例え裏切り者と思われようとも、自分の正義を貫き通す、それがミラルドの志であった。

第十八話　再会が告げる予感（後書き）

そんなワケでお送りしておりますロードナイト編ですが、まだ序章と言った感じですかね。新キャラもバンバン出てますから、それとこの後の展開が読めるという人も見捨てないでくださいね。それ以外の人は物語を楽しんで行ってください。

というかこれからの展開が読めるという人、お願いだから見捨てないでください。というか最後は結構意外かもしれませんので。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、時折書いててこれでいいのかなと思うことがある葵夢幻でした。

第十九話　襲撃者は突然に

そこは暗い寝室の中、小柄な人影はベットに横たわる少女に近づいて手をかざし、少女の状態を調べる。
「完成率６０パーセントですか、思っていたよりも早いですね。まあ、早ければ早いほど私の望みは早く叶うという物です」
その時ふとそれが近づく気配を感じた。
そういえば、ここには大きな犬がいたんでしたね。見つかると面倒ですから、今日のところはここで退散しますか。
そして寝室は少女一人になり、少女を起こさないためか寝室のドアが静かに少しだけ開いた。そしてその大きな犬とやらは寝室に異常が無いことを確認すると、また静かにドアを閉めるのだった。

そこはまるで王室を思わせるような巨大な部屋。部屋の壁やら柱にはいろいろな彫刻が彫ってあり、高そうな調度品まで置いてある。
そして部屋の奥には数段高くなっており玉座にサファドはそこに腰をかけていた。
「来ましたね」
静かに言ったサファドに答えるかのように、二人の人物がサファドの前に現れる。
一人は女性で背中に大太刀を二本、背負っており。その鋭い眼光はまるで刃のごとく自分の存在を表しているようである。
そしてもう一人は男。小柄だが腰を曲げて立っている所為かよけいに小柄に見える。
そして二人とも嬉しそうな笑みを浮かべてサファドの前に並んで立った。
「私達を呼んだってことは、やっと出番なんだね」
「けけっ、随分と待たされたが、まあ、やれるんなら文句はねえ」

「まあ、一応そういうことですね」
「一応って言うのはなんだい」
まるでサファドの言葉が雑用をさせるように聞こえた女は不満げな声を上げる。
「羽室（はむろ）、私としてはこの計画に邪魔は入って欲しくないのです。ですから、あなた達をロードナイトとして実体化させてあげたのではないですか。ねえ、スクラウド」
サファドは男のほうに向かって同意を求めた。だが、スクラウドはそんなことはどうでもいいという感じで、あまり興味を示さず。ただ、サファドを見るめるだけだった。
さっさと命令を出せと言わんばかりに。
さすがにこれにはサファドも肩をすくめながら溜息を付いた。
「やれやれ、しょうがないですね。本題に入りましょう、とりあえずこれを見てください」
そういって羽室とスクラウド前に現れたのは四角いモニターのようなもの。そしてそこには昇の写真が映し出されていた。
「なんだい、こんな女が相手なのかい？」
「こうみえても男ですよ」
「ずいぶんと可愛い顔した男だね」
「けけっ、切り刻んだらさぞかしいい顔になるんじゃねえか」
「残念ながら、相手はこの人間ではありません。この人間と契約をした精霊です」
「まあ、そうだろうね」
「ですから、お二人にはまずこの人間を探してもらって、襲って欲しいのですよ。そうすれば自然と精霊も姿を現すでしょう」
「探すって、居場所は分かってないのかい？」
「はい、残念ながら」
「はぁ、ずいぶんと面倒なことをさせてくれるね。そこまでしてこいつを消す意味があるのかい？」
「羽室、私は計画を完璧にしたいだけですよ。だから邪魔になりそ

うなものは早めに排除しときたいのですよ。そのためにロードナイトを結成させたのですから」
「まあ、言いたい事は分かるけどさ。こんな奴があんたの邪魔になるのかい？」
「さあ、それはどうでしょう」
「そこもハッキリしないのかい」
「さっきも言ったでしょ。私は計画を完璧にしたいだけなのですよ。ですから邪魔になりそうな者は排除する。それだけです。それに、この付近で確認できた契約者は彼だけですから、彼さえ排除すればもう私の計画に邪魔は入らない、そういうわけですよ」
「まあ、そうだけどさ。わざわざこっちから出向くのかい？」
「ええ、そうしてもらうと助かります」
「まっ、俺は切り刻めればどうでもいいけどな」
スクラウドの本音に羽室も同調する。
「確かにそういえばそうさね。分かったよ、こいつを始末してくればいいんだろ」
「ええ、そうです」
「俺はやれれば誰でも構いやしねえよ」
「そうですか、それではお任せします。……ああ、そうそう、くれぐれもロードナイトとしての行動をとってくださいよ」
「はいはい、分かりましたよ」
「けけっ、気が向いたらな」
そういい残して二人ともサファドの前から姿を消した。
静寂が戻った王室にはサファド一人が残り、玉座に腰を座りながらもう一度、昇の画像を出す。
まあ、こんなのが私の邪魔になるとは思いませんが、万が一ということもありますからね。潰しておいたほうがいいでしょう。
それにもうすぐなのですから、もうすぐ私は王となる。くくっ、あーはっはっはっ。

その日は休日で昇るとしては家でゆっくりと静かな時間を過ごしたかったのだが、それは無理だった。
なにしろシエラがデートしようと言い出して、もちろん琴未がそんなことを許すはずも無く、さんざん議論した結果、シエラと琴未を連れて昇は出かけることになった。
そんな訳で両手に花の状態で昇は時折痛い視線を感じながら商店街を歩いていた。まあ、左右別々の女の子と腕を組んでいるのだから、時折感じる視線もしょうがないというところだろう。
「そういえば、閃華は？」
ミリアは友達と遊ぶと聞いていたけど、閃華の様子が最近変なんだった。与凪とはよく話しているし、自分でもいろいろと調べまわっているらしい。
昇には閃華の行動が何かをが起きる前兆のような気がしてならなかった。
「そういえば最近の閃華は部屋に篭ったり、ときどきいなくなったりしてるわね」
「この前言ってた、昔の顔なじみとの再会がよほど気になってると思う。昇にも警戒だけはするように言ったから」
「そうだね。そういえば、あれから閃華のおかしくなったみたいだけど。放っておいて大丈夫なのかな？」
「まあ、閃華のことだから大丈夫でしょ。そんな無茶をするとは思えないし」
「うん、まあ、そうだと思うけど」
だが昇にはどうして閃華がそこまでする理由がいまいち分からなかった。
というか、何で閃華はあんなに必死になっていろいろと探ってるんだろ。確かに僕が襲われる可能性もあるけど、契約者は僕だけじゃないし、他にも精霊と契約をした人もいるんだろうから、もしかしたらそっちに行く可能性もあるんじゃないのかな。

確かにその可能性もあるが、昇は致命的とも言える事実をすっかりと忘れていた。

それはシエラ達も同じで、シエラは店のショーウィンドに飾られている服の前に昇を無理矢理連れて行く。

「昇、この服なんはどう、私に似合うと思うんだけど」

ショーウィンドウに飾ってあるのは、軽くフリルの付いた白いワンピースだった。

「昇はどう思う」

「いや、どう思うって言われても」

そう言いながらも昇の脳内ではその服を着たシエラの姿を想像していた。

……う〜ん、白い長髪に白いワンピース。確かにシエラの清楚さが前面に押し出してて可愛いような気もするけど。というか、確かにこの服を着たシエラは確実に可愛いと思うんですけど。かなりきそうです。

だが男という物は案外正直なようで、昇は考えていることが顔に出て少しだらしない顔になっていた。

それを見た琴未が放っておくはずも無く、その隣飾ってある服の前に昇を無理矢理引き寄せる。

「昇、私にはこっちが似合うと思うんだけどどうかな。似合うと思う?」

それはミニのプリーツスカートにオレンジ色のシャツの上に袖の無いジャケットを着たマネキンだった。

「う〜ん」

シエラの時と同じように、昇の脳内は勝手にその服を着た琴未の姿を想像させる。

確かに琴未は活発的な部分があるから、こういう服も似合いそうだな。それにしても、あのスカートは短すぎないかな?

どうやら嬉しい反面、少し抵抗があるようだ。

琴未が僕の前だけであの短いスカートに突風でも吹いたら、って、

僕はいったいなにを考えてるんだ。だー！、ダメだ、そんな目で琴未を見ちゃダメだ。
「ちょっと昇、大丈夫？」
「琴未、いきなり電信柱に頭をぶつける人は大丈夫とは言わない」
「そうだけど、ちょっとシエラ、とりあえず昇を止めないと」
「そうね」
再び両腕を取られた昇はそのまま引きずられるように、電信柱から離された。
「昇、いったいどうしたの？」
「いや、なんでもないよ。琴未、大丈夫だから」
「それより昇、こっちの服は私に似合いそう？」
シエラは昇を心配するよりも、先に自分に似合いそうな服を昇に指し示していた。
その服もスカートは短く、シエラの清楚さをまったく損なうことのない服だった。
えっと、これ、……抱きしめたい。ぐあぁ！　僕はまたなに考えてるんだ。ダメだ、そんなことを思っちゃ絶対にダメだ。
「昇……そんなに地面に頭を打ち付けると本当に怪我するよ」
「ふっ、琴未、それは健全な男子なら当然の発想」
「……シエラ、もしかしてワザとやってない？」
「ふふっ、そんなわけ無いでしょ」
嘘だ！　絶対に嘘だ。
昇はそこに抗議したいのだが、とりあえずシエラと琴未に地面に頭を打ち付けている昇を引っ張り上げてもらった。
「はぁ、はぁ」
「大丈夫、昇？」
「うん、まあ、なんとか」
「さすが昇、あんな方法で理性を保とうとするなんて凄い」
「シエラ！　あんたやっぱり」
「軽い冗談、だからそんなに怒らないで」

「はぁ、まあいいけどね」
えっ、いいの？　僕、なんか酷い目に遭わされた気がするんだけど。
「私もいい加減、黒シエラに慣れてきたからね」
琴未、なに、その黒シエラって？
「変な呼び方をしないで」
「でも実際、シエラに黒い部分があることは確かじゃない」
やっぱりそうなんですか、シエラさん。というかかなり思い当たる節があるんですけど。
「ちょっとしたオチャメじゃない」
えっと、確か僕はそのオチャメで死に掛けた事があるんですけど。
「まあ、どっちでもいいけどね」
あの～、僕が死に掛けた事はどっちでもいいのでしょうか。
昇のそんな気持ちをまったく気にかけない二人は再び昇の両腕に片方ずつ腕を組む。
「それじゃあ、次の店に行きましょうか」
「えっ、まだ行くの？」
「当然、昇には今日一日、付き合ってもらうから」
「はぁ、やっぱりそうなるんだ」
「まあ、これも運命だと思って諦めて、昇」
そんな運命変えたいです……。

そして昇達が今までいた店から離れようとした時だった。
突如、昇達より少し離れたところから光の柱が天に昇り、そこを中心点にドーム状に広がり、世界を赤く染めていく。
「精界！」
「シエラ、琴未」
「分かってる。おいで雷閃刀！」
「ウイングクレイモア！」

二人の体が光に包まれるとそれぞれの精霊武具をまとったい、光が消えるのと同時にその姿を現した。
「昇、エレメンタルアップ、いける？」
「うん、前ので発動条件は完全に分かったから、二人ともそれに合わせて」
「発動条件は何？」
「心を重ねること、つまり同じ思いを持つことが発動の条件。簡単に説明するとシエラと琴未が敵を倒したいと思っていて、僕も敵を倒したいと思えば発動できる」
「随分と簡単だね」
「でも、思いが弱いとそんなに能力を上げることは出来ない。今の例だとあんまり能力は上がらないかも」
「つまり、昇のエレメンタルアップは強い思いを繋げることによって、最大の効果を発することが出来る」
「う～ん、そう言われると難しいね。同じことを思うだけならともかく、その思いが強くないといけないなんて」
「けど、最大値で成功させれば私達のレベルアップはとてつもなく上がる。効果が大きい分、その発動条件も難しいのは当たり前」
「世の中、そんな簡単にはいかないという事ですか」
「そう、……来た」
シエラは近づいてくる精霊の気配を確実に捉えていた。
「数は……2、後数秒で私達の前に姿を現す」
シエラの予告通りに、その精霊達はすぐに昇達の前に姿を現した。
一人は昇達の真正面に着地して、もう一人は店の看板の上に着地する。
うわっ、閃華の言ったとおりに本当に巻き込まれたよ。というか、なんで僕だけ。
というか、あの二人精霊だよね。その割にはなんかシエラとは少し違うような気がするんだけど。
違和感を覚える昇だが、看板の上に膝を曲げるように座ってる男

はまったくシエラ達を警戒することなく、もう一人の精霊に尋ねる。
「羽室、こいつで間違いないか」
「ああ、あんな女顔の男なんてそうそういないからね、こいつらで間違いないさ。それに精界の中に入れるんだ。どのみち潰しておいたほうがいいのさ、ねえ、スクラウド」
「けけっ、確かにその通りだ。精界に入れる奴は潰すに限る」
そのまま不気味に笑うスクラウドの笑い声に耐えられないのか、琴未は抗議の声を上げた。
「あんた達ね。さっきから何勝手なこと言ってんのよ。それに私達に何か用なの？」
「ああ、大有りなのさお嬢ちゃん。……おや、あんた精霊じゃなくて人間だね。どうやってそんな力を手に入れたんだい」
「私の特殊能力はエレメンタル。あなた達精霊と同等の力を得ることが出来るのよ」
「おや、そいつは今時珍しいね。昔はその能力を持つ人間が多かったけど、今ではめっきり少なくなってきたからね。けど、これで少しは楽しめそうだよ」
羽室は背負った二本の大太刀を一気に抜くと、まるで重さを感じさせないように構える。
「じゃあ、私の相手はあっちの変な奴かな」
「けけっ、変な奴と入ってくれるな。真っ白」
「あなたは色でしか判断できないの」
「んなことはどうでもいいんだよ。俺は只単にテメーを切り刻めればな。フレイムクロウ＜炎を宿す爪＞」
スクラウドの手が燃え上がると、炎はスクラウドの手を包むのと同時に両手から三本の炎が突き出て、それが精霊武具へと形を変える。
「さあ、焼かれるか、切り裂かれるか選びな！」
「じゃあ、あんたを倒すということで」
「けけけっ、いいねえ、その減らず口。ますます切り刻みたくなっ

てきたよ」
「やれるものならやってみればいい」

「さて、じゃあ、そろそろ始めようかね」
「あなたは精霊武具を使わないわけ」
「あははっ、精霊武具ならすでに使ってるさ。この二陣乃太刀（にじんのたち）が私の精霊武具さ。私は刀の精霊だからね、よく似合ってるだろ」
「そお、私には只の刀にしか見えないけど」
「そいつは仕方ないさ。私は刀の精霊だからね、って二度も言わせるんじゃないよ！」
「あなたが勝手に言ってるんでしょ」
「シエラ、琴未」
後ろから昇が叫ぶ。
「分かってる」
「多分いけるよ」
「うん」
昇は精神を集中させると、黒い世界へと自らの精神を沈めていく。
そして昇が手を伸ばすと、その先が光だし赤く細い二本の糸が上るの目の前まで伸びてきて、昇はその糸を力強く掴む。
それと同時に昇の精神は現実へと回帰する。
「エレメンタルアップ！」
その声を合図に両陣は一斉に戦闘を開始した。

第十九話　襲撃者は突然に（後書き）

そんな訳で一日で二回も投稿してしまいました。……暇だな、私も。

そんなことよりも、少しずつ出てくるロードナイト達そしてサファドの野望とは、ということで少し予告をしてみました。まあ、別に意味は無いんですけど、なんとなく。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、今回は後書きが何も思いつかなかった葵夢幻でした。

第二十話　戦闘狂

あれって、精界！
公園で雪心と遊んでいたミリアだが、突然始まった力の発動にジャングルジムの天辺に飛び乗ると、商店街に赤いドーム状の空間が広がっていた。
もしかして、昇が……。
「ミリアちゃん、どうしたのー」
雪心が下から声をかけてきた。
「えっ、あっ、うん」
とりあえずミリアはジャングルジムから飛び降りると雪心の前に立つ。
「ごめんね、雪心。私行かないといけないから、ごめんね」
「えっ」
「急な用事が出来たんだよ。だから行かないといけないの」
雪心の顔をが悲しみに沈むが、すぐに笑顔を取り戻した。
「明日はまた、同じように遊べるよね」
「うん、それは大丈夫だよ」
「そっか、じゃあ、また明日ね」
「うん、ごめんね雪心」
「ううん、また明日、一緒に遊べばいいだけだよ」
「そうだね、うん、そうしようね」
「それじゃミリアちゃん、バイバイ」
「うん、雪心。バイバイー！」
ミリアは笑顔で大きく手を振りながら雪心と別れて、公園から出ると一気に商店街を目指して走り出す。
なんだろう、あの精界。もしかしたら昇が関わってるのかも。
いつの間にかミリアは笑顔から厳しい顔になっており、精界に向かって走り続けるのだった。

一方、精界の中ではすでに戦闘が始まっていた。
琴未は羽室と刃を合わせ、シエラとスクラウドは精界の中を飛び回っていた。
「はん、人間にしちゃ、ちっとはましな動きが出来るじゃないかい」
「こう見えても結構鍛えられてるのよ」
琴未は羽室の刀を何とか弾き返したが、もう一本の刀が横から琴未に斬りかかって来る。
とっさに雷閃刀で防ぐものの、完全に上ががら空きになってしまった。
「もらった！」
「てやっ！」
琴未の頭上に振り下ろさせる刃。だが琴未は刀を受け止めたまま、羽室の腹に蹴りを入れると、その勢いを使いその場から離れ、羽室の刀は空を斬っただけだった。
そのまま距離を取る琴未、だが羽室は追撃をせずに楽しげな笑みを浮かべていた。
「いいね、いいよ、あんた、それくらいはやってもらわないとね」
その羽室の笑みに琴未は背筋に悪寒が走る。
「さあ、もっと、私を楽しませてくれよ」
羽室は一気に琴未との距離と縮めると二本の大太刀を振るう。だが、琴未は大太刀を受けようとはせず、かわす事に集中していた。
只でさえあの刀だから間合いが広いのに、それが二本も速いスピードで振るってくるなんて、精霊武具は重さを感じにくいけどこの速さは反則でしょ。
もし琴未が一方の刀を受け止めて動きが止まると、もう一方の刀に斬られるのは必然。
琴未は苦戦をするばかりだった。
悔しいけど剣の腕だけはあいつのほうが上みたいね。純粋な剣の

勝負だと確実に負けるわけね。しょうがない、雷閃刀の真の力を見せてあげようじゃないの。

琴未は羽室から距離を取ったところで刀を闇雲に振り回すが、それと同時に雷閃刀の軌道後に雷の塊が幾つも生まれる。

「いくわよ！　雷飛刀」

雷の塊は刀の形になり、その数は二〇ほどの雷の刀が琴未の周りに浮いている。そして琴未が刀を羽室に向けると雷の刀は一気に羽室に向かって飛び出した。

迫ってくる雷の刀を前にして羽室は笑みを浮かべる。

「ふ～ん、今度はそう来るわけね」

羽室は余裕で迫ってきた雷の刀をかわすが、刀は止まることなく急転回して羽室を追撃している。

それでもかわし続ける羽室だが、突如後ろに殺気を感じて振り向き目の前に琴未が迫っている事を確認する。

琴未の一閃が走る。だが羽室は紙一重でかわしたが琴未は笑みを浮かべた。

「てりゃ！」

琴未の雷閃刀は羽室を斬り損ねたが、もう片手に持っている雷の刀が羽室に一撃を入れる。だが完全に捉えきる事が出来ずに羽室の着物と胸の辺りを浅く切り裂いただけだ。

「やってくれるじゃないかいお嬢ちゃん。そこまでやってくれるんじゃ、こっちもそれなりの力を出すのが礼儀って言うもんさね」

羽室は雷の刀をかわし続けながらタイミングを計り、一気に攻勢に転じる。

「刀舞踊（とうぶよう）」

羽室は地に足をつけるとその場で踊るかのように刀を振るい、次々に琴未が作り出した雷の刀を切り裂いていった。その動きにはまったく無駄が無く、そして優雅だった。

「なんてやつなの、あの動きは相当熟練した者じゃないと出来ない芸当よ」

琴未も伊達に巫女や修行をしてきたわけではない。羽室の動きがどれだけ無駄なく軽やかなものかしっかりと見抜いていた。
そして羽室は最後の刀を切り裂いた。
「さーて、お嬢ちゃん。次はなんで楽しませてくれるんだい」
「くっ！」
実力差はあきらかであり、琴未は苦戦を強いられる事のなった。

シエラは宙に飛び、とりあえず相手の様子を見たかったのだが。スクラウドの身軽さはハンパではなく、楽々とシエラのところまで跳ぶ事が出来た。
だがスクラウドは宙を舞うことは出来ない。したがってシエラに一回は攻撃を仕掛けるだけで後は重力に従って降下していくだ。そして着地するとすぐにシエラの元へと跳び上がる。
下から来る攻撃を適当にあしらいながら、シエラは現状を確認する。
「昇は……あそこにいれば問題ない。けど、琴未は苦戦してる。出来るなら加勢しないと」
だが再びスクラウドの攻撃がシエラに迫るが、シエラは体を回転させてスクラウドの攻撃をかわすと、その遠心力を使ってクレイモアを思いっきり叩き付けた。
だがスクラウドも攻撃の気配を察すると体を半回転、シエラのクレイモアを両手の爪で受け止めた。
だが重力にシエラの攻撃が重なったため、スクラウドはその体勢のまま建物を突き抜けて一気に地面へと叩きつけられた。
「ダメ、あんまりエレメンタルアップの効果が出てない。やっぱりこの程度のつながりだと弱い」
確かに先程の攻撃は見た目は派手だが、あまりスクラウドにダメージは与えていない事をシエラは確信していた。それほどエレメンタルアップの効果が出ていないことが分かっていたからだ。

シエラは二度もかなり強いエレメンタルアップの効果を実感している。それに比べれば今のエレメンタルアップはほとんど無いに等しい。

「けど、これで時間は稼げたはず。少しだけ琴未の援護をしないと」

シエラが琴未に向かって飛ぼうとした時、突如後ろに気配を感じる。

シエラは振り向くことなく、翼を羽ばたかせて一気にその場から離れる。そして振り返るが誰もいなかった。

「……上！」

シエラが気付いた時にはすでに上からスクラウドが落下してきていた。それはもうかわせる距離ではなく、シエラはしかたなくクレイモアでスクラウドの爪を受け止めた。

そのままシエラの上に乗るようにスクラウドは爪に足をかけてうまくバランスをとる。そしてシエラさえも気味悪いと思うほどの笑みを浮かべた。

「けけっ、なかなかやるじゃねえか、真っ白」

「いい加減にその呼び方でしか出来ないの」

「けっ、真っ白にはちげーねえだろ」

「だから、その呼び方をやめろ！」

シエラはウイングクレイモアのブーストを片方だけ発動。大きく広げられた翼の片方が推進力を生み出し、二人は半回転して位置が入れ替わる。

結果、スクラウドは足場を失ったように落下を開始して、シエラは両翼を大きく広げてスクラウドに突っ込んでいく。

両方にかかる重力は同じだが、シエラはブーストがある。その分、スクラウドとの距離を一気に縮めていく。

だがスクラウドはフレイムクロウから炎を発してその身を炎が包む。

「そんなの防御にはならない」

シエラはちゅうちょ無く炎に包まれたスクラウドにクレイモアを

振り下ろす。
「ッ！」
だが斬れたのは炎だけでそこにスクラウドの姿は無かった。
「けけっ、こっちだ」
地上から聞こえてくるスクラウドの声に、シエラは慌てて翼を反転、逆噴射で落下スピードを軽減していくが、スクラウドはすでにシエラ目指して跳んでいた。
スクラウドとの接触を避けれないと感じたシエラは、逆噴射を停止して再び地上へ向かってスピードを上げる。
「こっちの虚を取ったつもりだろうけど、それがあなたの命取り」
ぶつかり合うクレイモアとフレイムクロウ。
シエラはすぐに翼を下へ伸ばしいき、スクラウドを両端から包むように展開させる。
「フルフェザーショット！」
両翼から放たれた羽の弾丸は全弾スクラウドに命中、小さな爆発が連鎖して大きな爆発へと発展していく。
そして弾かれる様にシエラは空に、スクラウドは地上に向かっていくのだった。
「全力全開のゼロ距離、これに耐えられるはずが無い」
そうシエラは思っていたが、スクラウドは落下中に一回転して地上に着地した。
「嘘！」
驚くシエラだが、スクラウドは無傷とはいえない。むしろかなりのダメージを負っているのだが、スクラウドは楽しそうに自分の腕から流れる血を舐める。
「けっけっけっ、やってくれるじゃねえか、真っ白」
楽しそうに話すスクラウドを見てシエラはやっと気付いた。自分が相手にしている敵がある意味では最悪とも言える敵だということを。
「戦闘狂（せんとうきょう）、戦いを楽しみにするだけの精霊。これは、少しやっかい

な事になってきた」
そこには戦略も戦術も無い。あるのは純粋な力のぶつかり合いだけである。
「あの手の精霊は退くと言う事を知らないから、自分の存在が消えるまで戦う。相手をする方はかなり迷惑。けど、今はどうにかするしかない」
戦闘を楽しむスクラウドに対してシエラは追い詰められて気分になっていった。

「ほらほら、どうしたんだい。反撃しないのかい」
「あんたが反撃させてくれないんでしょ」
琴未は言い返しながら羽室の攻撃をかわし続ける。だがこのまま行けば追い詰められることは必然、何かしらの手を打たないといけないことは琴未も充分分かっていた。
こんなのどうしろっていうのよ！　だいたい太刀の二刀流なんて分が悪すぎるじゃないのよ。こっちは刀が一本なのに……あっ、そっか、さっきと同じ事をやればいいんだ。
琴未は斜め上からの斬激を受け止める。だが、動きが止まればもう片方の刀が琴未に迫るのは必然。反対側から横に薙いで来る羽室の刀。
だが羽室の刀は琴未まで届く事無かった。
「なにだって！」
羽室の刀を止めた物は先程琴未が作り出した雷の刀、それをもう一度作り出して琴未も二刀流で羽室の攻撃を止めた。
「やあぁー！」
琴未は渾身の力を入れて羽室の攻撃を捌いて吹き飛ばした。
「さっきと同じ刀を使うなんてね」
「私を舐めてみてると痛い目に遭うことになるわよ」
「そうみたいだね。お嬢ちゃんの二刀流もそれなりにいけるみたい

だしさ」
　だが、羽室は楽しそうに笑うだけでそれ以上の感情はなかった。
「何がそんなにおかしいの？」
「おや、分かんないかい。こんな楽しい戦いが久しぶりだからさ」
　再び大太刀を振るう羽室、今度は琴未も雷の刀を利用しながら対等に羽室と渡り合っているのだが、琴未は少し焦っていた。
　なにしろ雷の刀を維持するためには雷撃を放ち続けなければいけない。いくら昇から力をもらっていても、これ以上戦闘を長期化するには耐えられない。
　その思いが琴未を焦らせ、手数を増やしていく。だが、それは攻撃数が増える分、攻撃の合間に出来る隙も多くするだけだった。
「もらった！」
　完全に琴未の隙を突いた死角からの攻撃、羽室の刃は琴未へと迫っていた。
　よけきれないと思った琴未は思わず目をつぶる。だが感じたのは痛みではなく、金属がぶつかり合う音だった。
「閃華！」
　琴未が目を開けると、琴未の体と羽室の刀の間に閃華の方天戟が入り羽室の攻撃を防いでいた。
「くっ、新手かい」
　さすがの羽室もこれにはいったん琴未から退いて距離を取る。
「ありがとう、閃華」
「なに、礼には及ばん。さて、私は閃華という者だが、ずいぶんとウチの琴未を可愛がってくれたみたいじゃのう」
「そうさね、結構楽しませてもらったよ」
「って、お主はいったい何者じゃ、なぜ昇を襲う」
「そういえばまだ名乗ってなかったね。私は羽室、ロードナイトの一員さ。そしてあの女顔の男を襲ったのはそう命令されたからさ」
「ロードナイト？」
「そう、争奪戦に勝つためには複数の精霊をもちいる奴だっている

だろ。あんたのご主人様みたいに」
「昇は私達の主人じゃないわよ」
「そんなことはどうでもいいさ」
「つまりおぬし達の集団がロードナイトと言うわけじゃな。そしてロードナイトの頭が昇を襲うように命じた、そういう訳じゃな」
「まあ、そんなところだね」
「なるほどのう」
「ちょっと閃華、なに感心してんのよ」
「それで、昇を襲った理由はなんじゃ」
「そう命令されたからさ。まあ、私は楽しめれば充分だけどね」
「ふむ、やはりそうか」
「えっ、閃華？」
「さーて、そこのお嬢ちゃんにも楽しませてもらったことだし、あんたも私を楽しませておくれよ」
「琴未もずいぶんとやっかいな奴の相手をしていたんじゃな」
「うん、あいつ結構強いよ」
「それだけではない。あ奴は戦闘狂じゃ」
「なにそれ？」
「戦うことだけに楽しみを感じる精霊のことじゃ。じゃからどんな状況になっても退くということをしない。本当にやっかいな奴らじゃ」
「つまり、確実に倒さないと終わらないって事」
「そういうことじゃ。この二対一の状況でも、あ奴は楽しんでおるからのう」
「……確かに、ああ、もう、なんであんなのを相手にしないといけないのよ」
琴未は嫌な気分になりながらも、攻撃の構えを見せている羽室から眼を離すことは無くて、いつでも対応できるように構えるのだった。

この手の奴らは全力で叩き潰さないと終わらない。
地上に舞い降りたシエラはブースターの力を利用して、身軽なスクラウドとハイスピード戦をしていた。
建物の壁を使いトリッキーな動きをするスクラウドに対して、シエラはウイングクレイモアのスピードを利用してスクラウドに張り付きながらの攻防戦を展開していたのだ。
「早いうえに動きが読みずらい、か」
本来ならハイスピード戦を得意としているシエラでも、スクラウドの動きにはあまり対応できずにいた。それでも何とか攻防を繰り返しているだけで決め手が無い。
一つ、後一つぐらい何か手があれば。
そんな時だった。
「アーススピア」
スクラウドが地上に着地した瞬間。地面から数本の土の槍がスクラウドに襲い掛かる。だが、スクラウドの対応は意外と早く、槍が伸びきる前にはすでに上空に居た。
「ショット」
だが土の槍は突如、地面から解き放たれスクラウドに襲い掛かる。スクラウドも槍を蹴る事により、襲いかかってくる槍達をかわすが、完全には交わしきれなかったようで、体に数箇所の傷を負うことになった。
「ごめんシエラ、遅くなった」
「ミリア！」
「いきなり精界が現れたからびっくりしたよ。もしかしたらと思って駆けつけてみたら、やっぱり昇が関わってたよ」
「昇と会ったの？」
「うん、とりあえず簡単に話だけはしたよ」
「なら状況は分かってる？」
「簡単にだけどね」

「まあ、今はそれだけでいい。とにかく、あいつを倒すよ。あいつ戦闘狂みたいだから完全に倒すまで終わらない」
「うわっ、シエラすごいの相手にしてたんだね」
「好きで相手にしてたわけじゃない」
「あと閃華にも途中で出会ったから、琴未の増援は閃華が行ってるはずだよ」
「そう、それはよかった」
「それと、もちろん私達もエレメンタルアップ済みだよ」
「けど、この程度の思いだとあまり効果が無い」
「まあ、そうなんだけどね。でも、少しは違うよ」
「確かに、じゃあ、そろそろあいつを倒す」
「うん、分かってるよ」
ミリアと閃華の増援も入り、一気に士気が上がる昇側だが、それはロードナイト達も同じだった。例え不利な状況でも戦えればいい、それが戦闘狂の本能だからだ。しかも相手が増えたことにより、戦いは一層激しさをまし、楽しく感じる。
そんな奴らを相手に戦いは再開されるのだった。

第二十話　戦闘狂（後書き）

そんな訳で新章での初バトルの開幕です。
それにしてもバトルシーンは書いてると楽しいんだけど、時々表現が難しい時がある。私の頭の中にある戦闘をどう書いたらいいのか、迷う事がよくありますが、今回はこんな形になりました。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。
以上、バトルシーンって書き始めると長くなるなーって思った葵夢幻でした。

第二十一話　予期せぬ乱入者

「りゃあぁー！」

閃華の加勢により士気の上がった琴未は雷閃刀に溜めた雷を一気に解き放ち、枝分かれした雷撃が羽室へと襲いかかる。だが羽室はそれらを全てかわしながら琴未との距離を一気に縮めていく。

「させん」

閃華が羽室の前に立ちはだかり方天戟を一閃、当たりはしなかったが羽室は大きく後退せずにはいられなかった。

それでも羽室は笑みを浮かべている。

「いいね、いいね、この感じがさ」

羽室は再び走り出すと今度は閃華に向かっていく。当然閃華は攻撃を入れるが、羽室は閃華の攻撃をかわすと、今度は琴未に向かって走り出して止まった。

まるで攻めて来いと言わんばかりに、二人に挟まれる位置を選んだ羽室。

やれやれ、これじゃから戦闘狂はやっかいなんじゃのう。

閃華は目線を琴未に送ると、琴未は閃華の視線に答えるように頷いた。そして二人同時に羽室に向かって走り出す。

「さあ、きな！」

待ってましたと嬉しそうにする羽室。

琴未と閃華は同時に攻撃を繰り出しすが羽室の二刀に防せぐ。閃華と琴未は攻撃を続けるが羽室はその状況を楽しむかのように、二人の攻撃を防ぎつつも時々反撃も入れていた。

羽室の技量に琴未は改めて感心するが攻撃の手は緩めなかった。

それは閃華も同じである。だが所詮は二対一、羽室が不利なことに変わりは無い。その証拠に攻防の中で羽室は少しずつではあるが傷を負っていく。

それでも羽室は満足そうに笑みを浮かべながら二刀の大太刀を振

るうのであった。
さすが戦闘狂じゃのう、この状況でも楽しむか。
異常とも言える闘争心、それが羽室をかきたてる。
じゃがこのままでも追い込めるが、決め手がないとまずいのう。
それにこやつがこのままで済むとは思えん。
その通りだった。
羽室は二人の攻撃を同時に受け止めると今まで溜めていた力を一気に解放、刃が重なっている部分が一気に爆発を起こす。
「キャッ」
「ぐっ」
思いがけない羽室の反撃に琴未と閃華は吹き飛ばされてしまうが、爆発がそんなに大きくなかったのか二人とも立ったまま着地することが出来た。
まるで自爆じゃな、じゃが威力が弱い。すぐに反撃に来るじゃろうな。……ほれ来た！
粉塵舞う中で羽室は閃華に向かって姿を現した。
羽室は分かっているのだ。琴未よりも閃華のほうが強いということを。普通なら弱いほうから倒すのがセオリーだが、戦闘狂にそんなセオリーは無い。ただ少しでも強い敵に向かっていくだけである。
さすがにここまでやられると、私でも嫌になってくるのう。
羽室は先程の爆発の中心点にいたのだから無事であるはずが無い。それどころか額から血まで流れている。それでも羽室の笑みは消えることは無かった。
今度は閃華と刃を交える羽室。
閃華は琴未の方へと目を向けるが、まだ粉塵が消えておらず姿を確認することが出来なかった。
琴未の事じゃ、この剣戟音（けんげきおん）を聞けば私と戦っていることが分かるはずじゃから、短慮的には動かないはずじゃ。とりあえず、今はこやつの相手をしておるか。
そのまま閃華は羽室との攻防を続ける。

だが今度は一対一、閃華は羽室に傷を負わせるどころか対等に立ち回るだけだった。

「いいね、さすがだよ。さっきの人間の小娘よりかは出来るじゃないかい」

「私としては、さっさと終わらせたいのじゃがのう」

「こんな楽しいことが、そう簡単に終わってたまるかい」

その時だった。粉塵が晴れて閃華はやっと琴未の姿を確認することが出来た。

琴未は雷閃刀を水平に構えており、その剣先には魔方陣が展開されている。そして魔方陣の先には巨大な雷球がすでに準備されていた。

閃華は上から振り下ろされた羽室の太刀を受け止めると、そのまま腰を沈めて羽室のバランスを崩し、前屈みにさせてから腹に蹴りを入れて宙に浮かせる。そして閃華は低い姿勢のまま横へと飛びのいた。

「雷神閃！」

それと同時に琴未の雷球が巨大な雷となり羽室に迫る。

「いかん、高さが足らんかったか！」

閃華は羽室が着地する前に琴未の攻撃が当たるように宙に浮かせたつもりだったが、思っていたよりも羽室は高くは上がらず、琴未が攻撃を放ってからすぐに地に足をつけることになってしまった。

確かに今のタイミングなら琴未の攻撃を避けることができただろう。だが羽室は避けるどころか、迫り来る巨大な雷に二刀を交差させるように構えた。

これも戦闘狂ゆえの行動かのう。避けるよりも受け止めるほうを選ぶか。

そして巨大な雷撃は羽室の刃とぶつかり合う。

「何この手応え、まさかあいつ受け止めてるの！」

「琴未！　攻撃を緩めるな、そのまま押し切るんじゃ」

閃華の言葉に琴未は頷くとありったけの力を羽室にぶつける。

だが羽室は少しずつ後退はしているが琴未の攻撃を完全に防いでいた。
「あははっ、やるじゃないか人間のお嬢ちゃん。なかなかのもんだよ」
それでも戦闘を楽しむ羽室は笑いながら攻撃を防ぎ続けるが、閃華も軽い笑みを浮かべた。
「ふっ、これも戦闘狂のサガじゃのう」
「なに！」
「もう遅いぞ。龍神激」
龍水方天戟に巻き付いていた水の龍はいつの間にか方天戟より離れており、水の量を大幅に増した巨大な龍となっていた。そして琴未の雷と大きさが負けないぐらいの水の龍は羽室に向かって突っ込んでいく。
「ぐっ」
羽室はとっさに片方の刀を放して水の龍を防ぐが、琴未と閃華の最大級クラスの攻撃である。羽室でもその両方をいっぺんに喰らっては持つはずが無い。
結果、羽室は琴未と閃華の攻撃に飲まれて、雷を帯びた水の龍となった二人の攻撃は建物を突き破っていき、数百メートル先が見通せるぐらい破壊してしまった。
「さすがに、これには、耐えられない、でしょ」
「そいつはどうかのう」
未だに息の荒い琴未と合流した閃華は不吉なことを言い出す。
「相手は戦闘狂じゃ。あやつらは自分の存在が完全に消えるまで戦いをやめようとせん。じゃからあやつが立てる限り、終わりとはならん」
「あまり、嫌なこと言わないでくれる」
「じゃが事実じゃ」
「ああ、もう、いい加減にして欲しいわ！」
「それは相手次第じゃのう」

「あのまま倒れて欲しいわ」
「残念じゃったのう、琴未」
「えっ」
そう言って閃華が指差す先には、よろけながらも立ち上がろうとする羽室の姿があり、その姿はすでにボロボロになっているが、顔の笑みだけは消えることだけは無かった。
その羽室の姿に琴未はヒステリーでも起こしたかのように髪を掻き続ける。
「ああ、もう、本当にいい加減にして欲しいわ！」

さすがに今のは効いたね。だがあたしをここまでするなんて何百年ぶりだろうね。あの二人、組めば本当に楽しいね。
ボロボロになり、各所から少しずつ流れ出る血をまったく気にすることなく。羽室は再び二刀の大太刀を構えようとした時、突如羽室の横から爆発が起こり、何かが羽室の前を横切っていき、強靭な建物にその身をぶつけることとなった。
羽室は横切った者の姿を確認すると肩をすくめながら笑いかける。
「おやおや、スクラウド。あんたも随分とやられたみたいだね」
「けけっ、そういうテメーだってヒデー姿じゃねえか」
「そうさね。こんなに楽しいのは久しぶりだよ」
「けけっ、そいつはちげーねえ」
これも戦闘狂のサガなのだろうか、完全な負け戦に見える状況でも二人は絶対に退こうとはしない。むしろ喜んで死地に向かっていくだろう。
そんな二人を前にしてシエラ達も琴未達と合流したようだ。
「おや、あっちも揃ったみたいだね」
「そうみたいだな」
「って、どうするんだい」
「けけっ、これから楽しくなってくるんじゃねえか。ここで退席し

ちまったら勿体無いだろ」
「そうさね、そのとおりさ」
こうして戦闘狂の二人は再び戦闘体勢へと入っていく。

シエラとミリアの二人はスクラウドを吹き飛ばした後、琴未達の姿を確認するとそこに合流した。
「とりあえず、状況は四対二、こっちが有利なのは変わりない」
「じゃがあいつらは引くことを知らん戦闘狂じゃ。さて、どうしようかのう」
「皆、大丈夫」
「昇！」
振り返る四人は走り寄ってくる昇の姿に驚いた。
「急に静かになったから来てみたんだけど、皆大丈夫」
「うん、今のところは皆元気だよ」
「ミリア、私は少しうんざりしてるけどね」
「琴未～、ファイト！」
「いや、そう言われても困るだけなのよね」
「あの二人、そんなに強いの？」
「いや、強いというよりやっかいという感じじゃな」
「やっかいって？」
「あの二人は退くことを知らない、ただ戦いを楽しむだけの戦闘狂。だからまだ、戦いは終わってない」
「えっ、あの二人かなりやられているように見えるんだけど」
「それでも戦うことをやめないのが戦闘狂じゃ」
「うわっ、すごっ」
「昇、感心してないでなんとかしてよ」
「いや、僕に言われても困るんだけど」
「とりあえず、私達にしてもこれ以上の戦闘はキツイ、というか嫌になってきた。だから今のうちに何か手を打たないと」

「じゃが、あまり相談している時間は無さそうじゃのう」
「えっ」
昇が閃華と同じ方向を見る頃には、羽室とスクラウドは今にも動きそうなほどの殺気を放っていた。
「とりあえず、キツイがじわじわと追い込んでいくしかないみたいじゃ。昇もなるべくエレメンタルアップを強く出来るようにしといてくれ」
「うん、分かった」
昇が離れたのを確認すると四人は再び戦闘体勢へと入っていく。
そして両陣とも一斉に動き始めた。

それは突然の砲撃のようなものだった。
それがぶつかり合おうとしている。シエラ達と羽室達の丁度真ん中に着弾して、小規模な爆発を起こす。
「なんだい、いったい」
「新手か、それともあやつらの手じゃろうか」
混乱する両陣営、だが砲撃をした人物は羽室達の後ろに浮いていた。
「羽室、スクラウド、戻るぞ」
「シェード！　何であんたがここにいるのさ」
「サファドからの命が届いた。二人を連れ帰るようにとな」
「ざけんな、これから楽しくなるの言うのに引き下がれるか」
「これもサファドからの伝言だ。これ以上ロードナイトとして醜態をさらすようなら、それなりの処分をするそうだ」
「ぐっ、」
「くそっ！」
納得がいかないのか、楽しみを奪われて悔しいのかは分からないが、羽室とスクラウドの二人はシエラ達に向かって高々と叫ぶ。
「今回はこれで終わりにしてやる。だが、次ぎあったときにはテメ

ーらをぶっ倒す」
「そこら辺をよく覚えておきな」
言いたい事だけを言った二人は少しだけ満足したのか、先に姿を消した。どうやら完全に撤退したらしい。
そしてシェードも姿を消そうとした瞬間、昇が叫ぶ。
「ちょっと待って！」
その声にシェードの転送術は止まってしまった。
「物のついでじゃ、名乗っていったらどうじゃ」
だが先に口を開いたのは閃華だった。
「……ロードナイトが一人、シェード」
「なんで、あの二人は僕を襲ってきたの？」
「そう命令されたからだろう」
「やはりそうじゃのう」
「閃華？」
閃華には何か心当たりがあるようで、その顔は確信を表していた。
「ならお主らの主に伝えてもうらおうかのう。私達はお主らの邪魔をする気は無い。だから昇には手を出すなとな」
閃華の言葉にシェードは少し考え込むとゆっくりと口を開く。
「それはどうだろうな。もし真実を知ればお前達が動かないという保証は無い」
「その真実とやらはなんじゃ」
「それは俺も知らん。知りたければ自分で調べるがいい」
「ちょっと待って」
だが今度は昇の制止を聞かずに姿を消すのだった。
誰もいない虚空を見詰めながら昇は何かが引っかかっていた。
さっきの人、あの二人とはまったく違う何かを感じたんだけど、あの感じはなんだったんだろう。
昇がそんなことを考えていると、突如赤く染まった世界ヒビが入り始めた。
「しまった、この精界は敵の作った物」

「シエラ、大丈夫じゃ。私がこの精界の上にもう一つの精界を作っておいたからのう」
閃華の言ったとおり、赤く染まった世界が一瞬にして崩れ去ると、今度は青く染まった世界になった。
「よかった。……そういえば閃華、なんでこの精界が敵が作った物だって分かったの？」
「それは簡単なことじゃよ昇。我々精霊が作り出す精界は属性によって染まる精界の色が決まっておるからじゃ。私は水の属性だから青、ミリアは土の精霊だから茶色、シエラの場合は翼の精霊でも異なる物なんじゃが、シエラの場合は白みたいじゃからのう。そして赤い精界は炎の属性を示しておる。私達の中に炎の精霊はおらんから敵が作った精界だということはすぐに分かるのじゃよ」
「へぇ～、そんな風に見分けるんだ」
「それより閃華」
「シエラ、なんじゃ」
「さっきの閃華の反応だと昇が襲われた理由について何か知ってるんじゃない」
「ふむ、この騒ぎが起きるまではあくまでも推測で動いていたんじゃが、今回のことで確信に変わったからのう」
「じゃあ、聞かせて」
「まあ、そう焦るでない。とりあえず、私達も戦闘の後じゃ。話は家に帰ってからゆっくりとしよう」
「……そうね」
「はぁ、やっと終わった」
琴未は崩れるようにその場に座り込む。
「琴未、大丈夫？」
「うん、ちょっと疲れただけだから。でも、せっかくの昇とのデートがこんな形になちゃったのは残念かな」
「昇は私とデートをしてたの、琴未はおまけ」
「人をオマケ扱いするな！」

「まあまあ、二人とも……」
「じゃあ今度は私が昇とデートをする番だよね」
「ミリア！　なんでそういうことになるのよ」
「え～、だって、二人だけが昇とデートして私はしてないんだよ。不公平じゃん」
「ミリアは友達と約束があるから、そっちで遊んでなさい」
「う～、雪心と昇は別だよ。だよね、昇」
ミリアはそう言いながらちゃっかりと昇に抱きつく。
『離れなさい！』
シエラと琴未は声を揃えてミリアを無理矢理昇から剥がす。
「う～、これくらいのスキンシップぐらいいいじゃん」
「ダメ！　それが許されるのは妻の私だけ」
「どさくさに紛れてなに言ってるのよシエラ！」
「……えっと、そろそろ家に帰るんじゃ」
『昇は少し黙ってて！』
「はい……」
そのまま続く昇を巡る言い争いを閃華は呆れながらも楽しそうにみていた。
やれやれ、いつもの事ながら騒がしいのう。けどまあ、それが一番よいのかもしれんのう。
じゃが、これから先、もし私の推測が当たってるとしたら。それに与凪が掘り出す真実しだいによっては当分この戦いは終わりそうにないのう。
いや、その前に昇がどう決断するかじゃな。このままロードナイトに関わるのか、それとも見過ごすのか。……まあどちらにしても出てくる真実次第では昇は動くじゃろうな、あまり大きなことが出てきてそれを見過ごせるほど昇は弱くは無いからのう。
それに……
閃華はミリアへと目と感覚を向ける。
もしやすると、ミリアは知らないうちにこの件に関わってるでは

ないじゃろうな。この気配、どうも先程の奴と一緒のような気がしてならん。

……まあ、今ここで私が考えをめぐらしてもしょうがないのかもしれんのう。今はただ流れに身を任せるしかないのかもしれん。今の昇には未だに迷いがあるからのう。その迷いが消えん限り、昇は運命に立ち向かう事は出来んじゃろ。じゃから今は運命に身を任せるとするかのう

そんな閃華をよそに昇を巡る騒ぎは続き、なんとかそれを収拾すると皆揃って家路に付くのだった。

第二十一話　予期せぬ乱入者（後書き）

ロードナイト編、その初戦が終わりました。いやー、本当は一話にまとめたかったんだけど、どうしても二話になっちゃいました。バトルシーンって書き出すとどうしても長くなるよね。というか私がリアルに書きすぎ？

まあ、そんなことはこれから考えるので、とりあえずそこら辺に置いときましょう。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、この物語の主人公は本当に誰なんだろうと思い始めた葵夢幻でした。

第二十二話　新たなる力

「さて、何処から話そうかのう」
ロードナイトと名乗る襲撃者を退けた、その日の夕食後。全員揃って昇の部屋に集まっていた。
それは閃華が何かを掴んでいて、それを皆に報告するためだ。
でも、何で僕の部屋に集まるんだろう？
そんなことを思いながらも昇は黙って、机の備え付けてある椅子に腰掛けた閃華が口を開くのを待っていた。
だが、先に口を開いたのはシエラ、その日一番の疑問を閃華にぶつける。
「とりあえず、なんで昇が襲われた事から」
「うむ、そのことか、それは簡単じゃ。この付近、正確に言うとこの町全体を見回しても契約者が昇一人しか確認できなかったからじゃろ」
「えっ、でも私も閃華との契約者だよ」
「琴未はエレメンタルで精霊の状態で昇と契約してしまったから、契約者とは認識しずらいんじゃよ」
「ああ、確かにあの時、閃華はいろいろとややこしい関係にしたから」
シエラは遠い目をしながらそのことを口にする。どうやら琴未と戦った時の事を思い出しているようだ。
「まあ、その関係の所為で琴未は契約者と認識されなかったようじゃ」
「じゃあ森尾と与凪は、あの二人も一応契約者と精霊だよ」
「ミリア、森尾先生は教員なんだから、ちゃんと先生と呼ばないとダメだよ」
「う～、べつにいいじゃん、そんなこと」
そこで閃華は咳払いをすると、話を元に戻す。

「とりあえず、あの二人は与凪の能力により契約者であることを隠している。それもよほど強度の高い術を使っているらしく、あの二人を見つけることはまず、不可能じゃろう」
「それで、唯一見つかった契約者の昇を襲ってきたってワケ」
「まあ、器の争奪戦の最中だからそれも普通だと思うけど」
「そうじゃな、じゃが、これからはあくまでも私の推測に過ぎないんじゃが。今回の襲撃者には黒幕がおり、その黒幕が何かを企んでおるみたいじゃ」
「それが昇とどう繋がるの？」
「うむ、たぶんじゃが、その黒幕は自分の企みを邪魔されたくは無いのだろう。じゃからこの町で唯一見つけることが出来た契約者を潰しておけば、例え企みが他の精霊にばれてもすぐには手を出せないと、こういうことじゃろう」
「つまり、その黒幕はとてつもない事を企んでると」
「うむ、そう考えるのが妥当じゃろう。そして、その障害となる者を今のうちに排除しておけば、計画はスムーズに行われるじゃろうな」
「その計画ってなんだろう？」
「それは分からん。じゃが与凪に頼んでいろいろと調べておる最中じゃから、そのうち分かるじゃろう」
「でも……」
視線が一斉に昇に集まる。
「その計画がとんでもない物なら、止めないと」
「ふむ、昇はやはりそうでるか。じゃが私達で止められるとは限らんぞ」
「でも閃華、その計画がとんでない物で、それを止められるのが僕達だけなら何とかしないと」
「やれやら、やはり昇はそう動こうとするんじゃな。まあよい、じゃがこの件に首を突っ込むとなるとこれからの戦いは激化するばかりじゃぞ」

「うん、覚悟はしとくよ」
「では、修行でもするか」
「ちょっと閃華、何でそうなるのよ」
「昇のエレメンタルアップはここぞという時には最大の効果を発揮するが、普段はあまり役にはたたん。正直、足手まといでしかない」
「閃華！　そこまで言うことないでしょ」
「いいんだ琴未、僕もそれは前々から思ってたことだから」
「昇」
　そう、僕はあまり役に立ってない。戦うといっても皆が戦うだけで僕は何もしていないから、しょうがないと今まで納得してたけど、戦えるなら僕も戦いたい。
「閃華、どうすればいいの」
「ふむ、覚悟は出来ておるようじゃのう。修行といっても簡単じゃ、なにせエレメンタルアップを自分にかければいいじゃからのう」
「えっ、それってどういう」
「エレメンタルアップは契約した精霊の能力を上げる特殊能力じゃ。その力を精霊ではなく自分に寄与できれば、昇の力は飛躍的に上げる事ができるはずじゃ」
「そうなの？」
　思わず昇はシエラに振るが、シエラは首を横に振るだけだった。
「まあ、これは私が与凪と調べたことじゃから、理論上は可能なはずじゃ」
「でも、どうやって？」
「とりあえず昇、エレメンタルアップの状態を詳しく話してみい。アドバイスができるとしたらそれからじゃ。何しろ特殊能力が分かるのは契約者のみじゃからのう」
　とりあえず昇はエレメンタルアップ時の黒い空間の事、そして思いが繋がった時に現れる赤い糸の事を皆に話した。
「ふむ、なるほどのう。つまりエレメンタルアップはその赤い糸を通して私達に力を送ってるわけじゃな。そして糸の容量以上の力

は送れない。糸の容量を上げるには互いの思いを強くしないといけないわけじゃ」
「まあ、そんな感じかな」
「では昇、まずはその黒い空間とやらに入って自分に力を送れるか試してみい」
「えっ？」
「つまり、契約した精霊に力を送るのではなく、自分自身に力を送って能力を上げる。もしやしたら、昇も精霊に負けないぐらいの力を得るかも知れんぞ」
「けど、そうすると私達の能力アップはどうするの？」
「それは昇の力しだいじゃな。昇の力が強ければ自分自身を強化しながら、私達四人も強化できる」
「う～ん、そこまで出来るのかな？」
「じゃから、昇には修行をしてもらうわけじゃ」
そういわれても、どうすればいいんろう。
「とりあえず昇、まずは黒い空間に入って自分に力を送れるか試してみい」
「今ここで？」
「そうじゃ」
「うん、分かった、やってみる」
「あと、私達はあまり昇と思いを重ねないようにそれぞれ昇のこと以外考えておれ」
「分かった」
「昇のこと以外を考えればいいんだね」
「りょ～か～い」
「うむ、では昇、やってみい」
「うん」
昇は精神を集中させると意識を沈めていく。そして黒い空間へと意識を漂わせていた。
う～ん、今まで急いでやってからそんなに感じなかったけど、こ

の空間に一人でいるのはちょっと怖いな。
えっと、とりあえずどうしよう。いつもは糸が出てきて、それを掴んで力を送ってるから、自分に手をつけて力を送ればいいのかな？
昇は自分の胸に手を当てると、いつもは糸に送っている力を自分に送る。
あれ、すんなり入ってく。もしかして、成功した？　ぐへぇ。
昇の意識は突然、現実へと引き戻されて、気が付くと壁に寄りかかるように座っているようだ。
あれ、何があったんだろう？
混乱する昇はとりあえず辺りを見回すと、みんな驚いたような顔をしながら、なぜか閃華の手には龍水方天戟が握られていた。
「あれ、えっと、どうしたの」
「どうしたのじゃないわよ。昇、あんなことしたら家が壊れちゃうじゃない」
「えっ、えっ？」
「昇を中心点に力が放出されて、それが余波へと変わり地震を巻き起こした」
「そうなの？」
シエラは黙って首を縦に振る。
「びっくりしたよ。昇からあんな力がいきなり出て来るんだもん」
「えっ、えっ、そんなに力を出した覚えは無いんだけど」
「ふむ、昇の力は私が思っていたより、遥かに強力なようじゃのう」
「えっと、僕の力ってそんなに凄かったの？」
昇を除く全員が首を縦に降る。
「じゃから私がこれを昇に叩きつけて無理矢理意識を現実に引き戻したわけじゃ」
そういって閃華は龍水方天戟を指し示すと、もう用はなくなったので消した。
もしかして僕、閃華の方天戟で思いっきり打たれた。ああ、だから背中が痛いんだ。

「もう少し、優しく止められなかったの？」
「うむ、突然じゃったからのう。これが精一杯じゃ」
その割には未だに体中が痛いんですけど。
「じゃが、これではっきりしたことがあるわけじゃ」
「なにが？」
不思議そうな顔をする昇に対して閃華は笑みを浮かべるが、何故か昇にはその笑みが嫌な感じがした。
「とりあえず、昇の力は強すぎてコントロール出来んようじゃ。じゃから、これから毎日放課後は力のコントロールの修行じゃな」
はぁ、やっぱりか。……でもしかたないか、危険がすぐ傍まで来ているのだとしたら、しっかりとそれに備えておかないと。……でも、ちょっと不安。
「でも、力のコントロールの前に武器だけは精製できるようにしとかないと」
「ふむ、それもそうじゃのう。では、出掛けるか」
「えっ、今から？」
「もちろんじゃ。とりあえず、そうじゃの、確か近くの川原なら誰もおらんから昇の力を発動させても大丈夫じゃろう」
「でも、さっきみたいになるんじゃ」
「あれは昇が自分に力を送ったから起こった現象じゃ。これからやるのは自分の武器と防具、まあ精霊武具のような物をイメージして実体化させるというわけじゃ」
「だから昇、今のうちに自分に合った武器と防具をイメージしといて」
「それに失敗しても、あそこなら被害は出んじゃろう。精界を張ると大事になりかねんしな」
「はぁ、分かったよ」
「じゃあ、準備してくるね」
「って、ミリアもいくの？」
「当たり前だよ」

その時、閃華は昇の肩に軽く手を乗せるのだった。
「このメンバーがお主から離れると思っておったのか」
そういえばそうでしたね、閃華さん。
結局、全員出かける準備を済ました後、昇の母である彩香に一応出かけることを告げてから、一同は川原へ向けて歩き出した。

それにしても自分に合った武器と防具といわれてもな。
歩きながらも昇は自分に似合う武器と防具を必至に考えているのだが、なかなかイメージが浮かばない。
結局、何が僕に似合ってるんだろ。
そう思いながら昇を囲む全員を見渡す。
そういえば、皆は剣とか槍とか近接戦闘の武器だけだよね。それに琴未は違うけど、精霊は皆かなり歳を取ってるはずだから、武器も古い形だよね。まあ、琴未は剣術をやっているから分かるけど。
そうすると、僕に似合うのは、いや、この中で必要な武器と言ったら、……あっ、もしかしたらあれかもしれない。
昇がイメージを描き始めた頃にはすでに川原へと付いていた。
川原は雑草が生い茂っている部分と小石などの砂利が混じったところがあり、まさに昇の修行場としては持って来いの場所だった。
「昇、イメージは出来た」
「うん、たぶんだけどこれでいけると思う」
「ほう、そいつは頼もしいのう」
「けど昇、あまり無理しないでよね」
「分かってるよ、琴未」
「昇、がんばって」
「ありがとう、ミリア。じゃあ、ちょっと行って来るよ」
「ふむ、力は送らんでいい。ただ思い描いたイメージを実体化させることだけを考えるんじゃぞ」
「えっと、あの黒い空間でイメージすれば大丈夫なんだよね」

「うむ、察するにその黒い空間は昇の力の溜まり場、または深層意識とも言える場所じゃからな。そこでうまくイメージできて、後は外に出すだけじゃ」
「うん、分かったよ。やってみる」
そして昇は砂利道を進み、大きく開けた場所の真ん中辺りへと立つ。
えっと、ここら辺でいいかな。
昇は精神を集中させると意識を沈めて行き、黒い空間へと漂う。
とりあえず、武器のイメージから、そして防具、というか服だなこれは、けどいいや、とりあえずこれで。
イメージを終えた昇に黒い空間から光の粒が現れて昇るへと集まっていく、そして両手には武器を、体には服を光の粒が作っていく。
そして全てを作り終えた昇は意識浮上させていく。もちろん、光に全身を包まれたまま上っていく。
そして現実ある昇の体が突如光を発すると、その光はすぐに消え、昇の姿が変わっていた。
ゆっくりと目を開ける昇。そして両手に握られている物を改めてみてみる。
うん、だいたいこんな感じかな。
「ふむ、どうやらうまくいったみたいじゃのう」
「うわっ、閃華、いつの間に」
「そこまで驚くことは無かろう。それにしても二丁拳銃とは考えたものじゃな。それにその服も似合ってるといえば似合っておるぞ」
今の昇は両手にリボルバー式の拳銃を持っており、服は体型が判るほどの密着した黒いシャツ着てコートを羽織っている。
だが、女顔の昇に真っ黒な服はどうかと思うが、これが意外にも似合ってたりもしていた。
「うん、似合ってるよ、昇」
「シエラ、なにドサクサ紛れに昇と腕を組むのよ」
「妻としては常識」

「そんな常識はないし、私はシエラを昇の妻とは認めてない！」
「別に琴未の承認なんて要らない」
そしていつものように二人は騒がしくなり、昇は溜息を付くのだが、今度はミリアが背中に思いっきり抱きついてきた。
「昇、昇、なんかその姿もかっこいいよ」
「そ、そう、ありがとうミリア」
『ミリア』
抜け目の無いミリアにそれを見破るシエラと琴未の声が重なり、昇は再び溜息を付く。
「さて、一段落したところで……」
ああ、やっと今日も終わりか。
「次に行こうかのう」
「まだやるの！」
「昇、なにを言っておる。当たり前じゃ」
「え～、これ以上なにやるの」
「ふむ、昇がその状態で戦いながらどれだけの力を私達を送れるかじゃが」
「つまり、この状態でエレメンタルアップを使えと」
「まあ、今の昇もエレメンタルアップの改良版のようなもんじゃが、昇だけが強くなって本来のエレメンタルアップが損なわれるようじゃ、あまり意味がないからのう」
「まあ、そうだけど」
「では、皆も準備してくれ」
そしてシエラ達は各々を精霊武具を出して、昇を囲むように展開する。
「とりあえず、皆は昇の事を思ってくれ、そして昇は皆のことを思うんじゃ。そうすれば思いは繋がるはずじゃからな」
「分かったよ」
そして昇は再び黒い空間へと意識を沈めていく。
そして少し待つと四方から四本の糸が昇の前まで伸びて来て、昇

はその四本の糸を一気に掴むのと同時に意識は現実へと回帰する。
「エレメンタルアップ」
昇を囲む四人は湧き上がる力を感じる。
「あれ、なんか、昼間よりも力が沸いてくるんだけど」
「それだけ琴未を含めて、私達の絆が深まったということじゃ」
「へぇ～、そういうもんなんだね」
感心する琴未とミリアをよそに閃華は昇のほうへ顔を向ける。
「昇、その二丁拳銃は実弾か？」
「いや、さすがにそこまでは作れないよ。だから僕の力を弾丸として撃ち出すようにしてあるけど」
「ふむ、それでよい。そのほうが効率はいいからのう。では昇、空に向かって撃てるだけ撃ってくれ。シエラ、済まんが防音の結界を張ってくれ」
「分かった」
シエラは意識を集中させると手の平に透明な四角い箱が現れ、それが一気に広がり、昇達を箱の中に入れてしまった。
「さて、これでどんな音がしても外には漏れん。じゃから昇、思いっきりやってみい」
「はいはい、分かったよ」
いい加減に疲れてきたのか昇は適当に返事をしながらも、真剣に両手の拳銃を空に向けると引き金を一回だけ引き続ける。
それと同時に拳銃のリボルバーは高速回転を始めてシリンダーが銃身に合わさるたびに弾丸が発射された。
「ほう、まるでガドリングガンじゃのう」
「けど閃華、この状態であれだけの力の弾丸を乱射できるということは」
「うむ、昇の力は私達が思っていた以上に潜在する力が大きいようじゃのう」
「そうみたいね」
エレメンタルアップを利用しての武具の精製、そしてシエラ達へ

のエレメンタルアップ、そのうえ力の弾丸をあれだけ乱射できるんだから、昇の力はシエラ達が思っていた以上に大きいようだ。
そして昇はいい加減に疲れたのか、銃の乱射を止めると閃華に顔を向ける。
「閃華、もういい？」
「そうじゃのう、今日はいろいろとあったからのう。それでもそこまでの力を出せることを証明できただけでも凄いことじゃからな。今日はここら辺で引き上げるとするか」
やっと終わった。
さすがに今日はいろいろと有り過ぎたので、疲労の色を隠せない昇を伴ないながら、皆揃って家へと帰っていった。

第二十二話　新たなる力（後書き）

そんな訳で、只でさえ一話の話が他の人より長いのに、今回は更に長くなってしまいました。携帯読者の皆さん、がんばって付いてきてくださいね。

ちなみに、今回の話を文庫本サイズに直すと１６ページぐらい、いくみたいです。普段でも１０ページ以上書いてるのに今回は更に長くなってしまった。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、これからの昇の活躍に期待する葵夢幻でした。

追伸

やっと修正作業も半分終わりました。いや～、長かった、本当に長かった。けど、まだ半分残ってるんだよね。ああっ、もう、風邪はひくは、出かけることになるは、いろいろと忙しいです。

まあ、詳しい事は私のホームページ、冬馬大社にブログに書いてあるので興味がある人は読んで見てください。

ではでは、そろそろ新章のプロットを考えないとなと思った葵夢幻でした。

第二十三話　修行、そして思わぬ再会

「へぇ～、滝下君ってそんな力を秘めてたんだ」
「うむ、私達もびっくりしたぞ、昇の力にはな」
突然の襲撃者が来た翌日、閃華は放課後に与凪と生徒指導室で昨日の事を話していた。
この学校には生徒指導室が三つもあるのだが、この生徒指導室はすっかり閃華達に占領されていた。これも担任の森尾の力だろう。
閃華の話を聞いた後で与凪は周辺を捜索したのだが、肩をすくめるだけだった
「その昨日の襲撃者、ロードナイトだっけ、私の捜索範囲にはなにか拠点らしき物も無いし、それらしい精霊の反応も無いわね」
「ふむ、となると拠点は与凪の捜索にも引っかからないように隠してあるか、または別次元に作っているのか、そのどちらかのう」
「う～ん、やっかいな相手よね。相手の拠点も戦力も分からないんだから」
「そうじゃのう」
そしてお互いに考え事をするように生徒指導室は静寂に包まれた。
それから数分後、与凪は何かを思い出したように手を叩いた。
「あっ、そうだそうだ。とりあえず、関係ないかもしれないけど、最近変な事が起こってるのよ」
「ほう、どこでじゃ」
「うん、どこってわけじゃないんだけど、精霊王の力がここいら辺に流れ出してる感じがするのよね」
「んっ、エレメンタルロードテナーが決まってもいないのに、精霊王の力が移動することがあるのか？」
「普通は無いんだけど、もしかしたらその黒幕が精霊王にちょっかいを出してるのかも」
「ふむ、それは無理じゃろう。精霊が精霊王に関わることは無理じ

ゃからのう」
「そうなんだよね。でも、少しずつだけど精霊王の力が移動していることは確かみたいなの」
「ふむ、その移動先はわかるか？」
「詳しくは分からないんだけど、この近く、私の捜索範囲内なのは確かみたい」
「う～む、確かにそれは少し引っかかるのう。昨日の襲撃者とよい、相手はこの周囲を中心に動いてるみたいじゃのう」
「そうだね。私も昨日は足を伸ばしてみたんだけど、この近郊で簡単に見つけられる契約者は滝下君だけみたい」
「ふむ、そうじゃろうな。なんせ精霊は世界中に散らばっておるのじゃからのう。じゃがな、これは推測じゃが、もし精霊王の力が少しでもこの周辺に移動しておるのじゃとしたなら」
「これからの器争奪戦は、この周辺で行われる可能性が高いって事？」
「ふむ、そういうことじゃ。なんせ精霊王の力が少しでも表に出ていれば精霊は力を増すことが出来るからのう」
「少しでも有利な場所を選ぶのは戦場の鉄則だからね」
「まあ、そうじゃが。それに乗じて良からぬ事を企むやからも出てこよう」
「はぁ、そういう話を聞かされるとさすがに気落ちするわね」
そのまま机に突っ伏す与凪。そして閃華は窓から見える風景を見ながら考え事をしていた。
我らを生み出した精霊王。その力は全て人間が快適に過ごせるように地球環境を整えることじゃ。だから精霊は精霊王には近づけないし、受け入れることが出来るのは人間だけじゃ。
そう、古代文明の人間達は精霊王を作り出したのじゃが。もしそやつがその仕組みをいじる事が出来るなら、そやつはいったいどうするつもりじゃ？
絶対無理、実現不可能、机上の空論、今はそういう概念を捨てね

ばならんのかもしれんな。常識にとらわれていては見落としがあるやもしれんからのう。

さて、それを踏まえたうえでどうするかじゃのう。

「そういえば閃華さん」

閃華が物思いにふける直前、与凪が声をかけてきた。

「んっ、なんじゃ」

「滝下君達はなにしてるの？」

「ああ、昇達か、それなら今屋上で修行中じゃ」

「屋上って、そんなところで修行なんかして大丈夫なの？」

「じゃから前もって頼んどいたんじゃろ」

「ああ、あれのこと」

「そう、そうれじゃ」

それとは学校内を全て包み込む結界である。その結界内は外に力を漏れ出すのを防ぐことが出来る。つまり、学校内なら精界を使って思いっきり暴れられるということだ。

「じゃあ、精界内での学校は凄いことになってるかもね」

「ふむ、そうじゃのう。あの二人にはあまり手加減するなといっておいたからのう」

「二人って？」

「シエラと琴未じゃ。ミリアは最近出来た友達といつも遊んでおる」

「友達って、ミリアさん大丈夫なの」

「そこいら辺はよく言って聞かせておいたから、もうこれ以上は友達などできんじゃろう」

「そう、それならいいんだけど」

まあ、ミリアは今のうちは遊ばせておいてもよいじゃろう。これからの事を考えれば辛くなるばかりじゃからのう。せいぜい、今のうちは楽しんでおけミリア。

遠い目をしながら閃華はこれからのことを思いふけるのだった。

その頃、屋上に張られた精界に中では昇の修行が行われていた。
その修行というのも昇には死ぬほどきつかった。というか、ときどき死に掛けていた。
それもそのはず、なにせシエラと琴未にエレメンタルアップをかけて、その二人を相手に模擬戦をやっているのだから。
もう少し手加減してくれよ。
そう思いながらも昇は二丁拳銃の片方で宙を舞うシエラを追って発砲し、もう片方は琴未に向けて牽制（けんせい）していた。
拳銃の連射速度は決して遅くは無いのだが、それでも宙を飛び回っているシエラに当てることは困難である。なにせウイングクレイモアの飛行性能は格段によく、ハイスピードでも直角に曲がれるほどだ。だから、昇はシエラに一撃も入れることが出来なかった。
「じゃあ昇、そろそろこっちも行くよ」
だから手加減してくれよ。
琴未の宣言に昇はげんなりとするが、宙を舞うシエラを諦めて、今度は琴未に二丁拳銃を向けて乱射する。
「それじゃダメだよ。昇」
琴未は雷閃刀に電撃を放出させると振るい。昇が放った全ての弾丸を叩き落してしまった。
「攻撃が直線すぎる。もう少し動かないと」
上から来るシエラの助言に昇は横に走りながら、琴未に向かって弾丸を放つ。
「けど甘いよ、昇」
琴未は昇攻撃を叩き落しながら、昇の移動スピードと自分の雷撃のスピードを簡単に計算して、雷撃が直撃する地点を割り出すとそこに向かって雷撃を放つ。
車は急には止まれない。そして走っている昇も急には止まれなかった。そのため、昇は雷撃を直撃、そのまま吹き飛ばされてフェンスにその身をぶつけた。
「いっつ」

「ダメだよ昇。もう少し敵の動きを読まないと、自分だけ動いてもしょうがないんだからね」
「相手の動きを完全に見切り、その間に自分の攻撃を入れるのが一番のベスト」
「そうは言うけどさ。そんなすぐには出来ないよ」
「まあ、そりゃそうね」
「だろ」
「じゃあ、次いくよ」
シエラの情け容赦ない言葉に昇は大きく溜息を付いた。
「少し休憩させてよ」
「ダメよ。こういうのは体に覚えさせなくっちゃいけなんだから。はい、昇、立った立った」
「はぁ、分かったよ」
そんな感じで、再び模擬戦が再開させることとなった。

そんな日々が一週間ほど続いたある日の深夜。
昇の家がある町の一角、その家、その部屋にそいつはいた。
「完成度……９６パーセント。くくっ、そろそろですか」
ベットに寝ている少女に手をかざしながら、静かに笑うそいつは不気味なほどの笑みを浮かべていた。
受け皿はそろそろ完成しますね。まあ、穴の開いた受け皿ですから完全には完成させませんけど。んっ。
その時そいつは、その部屋に近づく気配を感じていた。
やれやれ、この家の犬はずいぶんと過保護なんですかね。いつも定期的に見守ってるんでしょうか。見つかるとやっかいですから、そろそろ引き上げますか。
そして、そいつはその部屋から姿を消し、部屋の扉が静かに開く、そしていつもと同じように異常がないのを確認すると静かに扉を閉めるのだった。

それから数日後の土曜日。夕食後の滝下家。
一人で風呂から出てきた昇はシエラと琴未の間に座った。最近では何処に座ろうと最終的にはこういう形になるので、もう諦めたようだ。
だが、今日に限ってミリアが昇の正面から抱きついてきた。
「ちょっとミリア、何やってんのよ！」
「とにかく離れて」
横から来る文句をミリアは適当に聞き流して、昇に楽しげな表情を向ける。
「昇、昇、明日は暇？」
「昇は明日も修行」
やっぱり、そうなんですか。
「そうそう、だからミリアに付き合ってる暇は無いの」
えっと、そういうのは琴未が決めることなの？
「う～、最近、シエラと琴未が昇を独占してるじゃん。だから、たまには貸してよ」
ミリア、やっぱり僕は物扱いなの？
「ダメよ。今の昇には少しでも強くなってもらわないと困るんだから」
「今のままだと足手まといでしかない」
やっぱりそうですか。というかシエラさん、そこまでハッキリ言われると傷つくんですけど。
「私だってダメだよ。だって雪心（きよみ）と約束したんだから」
雪心って誰だっけ？
「ほう、その雪心というのがミリアの友達じゃな」
「うん、そうだよ」
ああ、そういえば、前にそんなことを言ってたな。
「それで、約束とはなんじゃ？」

「うん、お互いに大事な人がいて、その大事な人を見せ合おうって約束したの」
「絶対にダメ！」
「同じく！」
……あの、シエラさん、琴未さん、なにもそこまでむきにならなくても。
「え～、なんで。いいじゃない、昇は私の大事な人なんだから」
「昇は私だけの大事な人だから」
シエラ、いつからそんなことが決まったの。
「それは聞き捨てならんのう。昇の正妻は琴未と決まっておる」
だから、いつそんなことが決まったの。というか閃華まで参戦しないでよ。
「正妻、私が昇の妻……」
あの～琴未さん、変なモードに入らないでください。
「別に私は昇の妻じゃなくてもいいもん。恋人でいいんだから」
ミリアさん、それは一般的に言う不倫ということになるのではないでしょうか。って、誰かが僕の妻になってる設定に入ってるし。
「ミリアよ。残念な事じゃが昇は私を愛人として認めているらしい、じゃから恋人も諦めるんじゃ」
認めてない、認めてない、というか閃華さん、いきなり何を言い出すんですか！
「とにかく、妻の権限でミリアの案は却下」
シエラさん、あなたにいつそんな権限が与えられたんでしょうか。
「……やだ、昇ったら、そんなことまで」
どんなことまで！　というか琴未、そろそろ帰ってきて。
「とにかく、昇は明日一日私に付き合ってもらうんだよ」
無理矢理ですねミリアさん。でも、そうすれば明日は修行をやることはなくゆっくり過ごせるかな。
「……まあよかろう昇、明日はミリアに付き合ってやるがよい」
「ちょっと閃華、いきなり何を言い出すのよ」

うん、僕もちょっとびっくりしたよ。それと琴未も現実に戻ってきたね。でも、閃華の後ろに後光が見えるよ。ありがとう閃華。これで次の休みは修行から解放される。

「昇も最近は修行ばかりで疲れておるじゃろう。じゃからたまには羽を伸ばすのもよいじゃろうとな」

そうです、そのとおりです閃華さん。

「でも、今の昇の状態だと戦力的に不安」

「じゃが昇には切り札ともいえるエレメンタルアップがある。あまり前線に出して、肝心な時に使えん状態になるのもまずいじゃろう」

「それは……そうだけど」

そうだ。かんばれ、閃華さん。

「それに、あまり根を詰めすぎるのもよくないじゃろ」

「うっ、まあ、確かにそうかもしれないわね」

よっしゃーっ、あと一押しですよ閃華さん。がんばれ閃華、ファイト閃華。

「そんなわけじゃ、昇、明日はミリアに付き合ってやるがよい」

黙りこむシエラと琴未を見て昇は嬉しそうに頷いた。

「うん、じゃあ明日はミリアと一緒に出かけてくるよ」

「そうね、たまにはミリアと一緒に出かけるのも悪くないもね」

「息抜きも必要」

二人とも付いてくる気ですか！

「え～、シエラと琴未はいらない」

いらないってミリアさん、二人も物扱いなの。

「いらないって何よ。人を物扱いしないでよね！」

「その言葉は非常に不愉快」

その意見には同意です。というかミリア、人を物扱いする言動は直したほうが良いな。

「だって、私の大事な人は昇だけだもん。だからシエラと琴未が付いてくること無いよ」

「だから勝手に昇を大事な人にしないでよね」

「昇は私だけの大事な人」
「シエラも勝手な事を言わないでよ」
「それは琴未にとやかく言われる筋合いは無い」
「なんですってー！」
あの～、この騒ぎはいつまで続くんでしょうか？
その後も騒ぎは続き、閃華が仲裁に入るがなかなか騒ぎが収まらず。そこに昇の母、彩香が仲裁に入ったことにより、一応騒ぎは決着を見せる。
昇とミリアの二人だけで出かけることを承認することによって。

そして翌日。昇は楽しそうに手を繋ぎながら横を歩くミリアを優しげな眼差しで見守りながら、ミリアと雪心がいつも会っている公園に向けて歩いていた。
「随分と楽しそうだね」
「うん、昇が一緒だし。雪心の大事な人も来るんだよ。だから今からとても楽しみなんだよ」
「そう、それは楽しみだね」
ミリアの友達の大事な人か、いったいどんな人なんだろう。
「ミリア、その雪心ちゃんの大事な人ってどんな人か知ってる？」
「う～ん、私も詳しく聞いても分からなかったからお互いに会わせようって話になったんだけど、なんでも雪心を守ってくれる、強くて優しい人みたい」
「そうなんだ。ところで雪心ちゃんって何歳なの？」
「んっ、一〇歳だけど」
一〇歳！　一〇歳と友達になるなんてミリアっていったいどれだけ幼いんだろう。というか精霊だから年齢は関係ないか、ということは精神年齢が一〇歳ぐらいってこと、ミリアは。
昇がそんなことを思っている間に二人は公園に辿り着いた。
そして、公園にはブランコに一人で乗っている少女が一人だけだ

った。
「雪心〜」
昇の手を離して大きく手を振りながらミリアは駆け出し、そんなミリアを見つけた少女の顔も明るくなる。
「ミリアちゃん」
あの子が雪心ちゃんか。うん、なんかおとなしそうだけど、その正反対なところがミリアと気があったのかな。
ミリアと雪心の二人は互いに手を取って笑いあった後、ミリアは昇に向かって大きくて招きした。
そして昇はミリアの横に並び、腰を下げて目線を雪心に合わせる。
「この人が私の大事な人の昇だよ」
「始めまして、雪心ちゃん」
「……えっと、こ、こんにちは」
「雪心、そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。昇は優しいから」
「ミリア、それは言い過ぎたと思うけど、雪心ちゃん、ミリアの言ったとおり緊張しなくても大丈夫だよ」
そう言って昇は雪心の頭を優しく撫でる。
それで安心できたのか、雪心に笑顔が戻った。
「そういえば、雪心の大事な人は？」
「うん、なんかお仕事があって少し遅れるって。でも、すぐに来ると思うよ」
「そっか」
「うん」
「じゃあ、それまで待ってようか。昇は大丈夫？」
「僕の事は気にしなくて良いよ」
「ありがとう、昇」
そして二人はいつもと同じようにブランコに乗りながらおしゃべりを始めて、昇はブランコの周りに設置されてある鉄柵のような物に腰をかける。
それにしても、ミリアは本当に楽しそうだな。よっぽど、雪心ち

ゃんと遊んでいる時が楽しいんだろうな。
　というか精霊が人間と友達になっていいんだろうか。……そういえば閃華がそこいら辺の事は注意してたって聞いたな。なら問題ないか、なにしろ二人とも楽しそうだし。
　そのまま昇は楽しげな二人を見守り続けて、二人の関係がこのままずっと続けばいいと思ったほど二人は楽しそうだった。
　やっぱり仲のいい友達がいると楽しそうだな。う～ん、僕も友達と呼べると思う人は居たけど、最近ではずっとシエラ達に囲まれてるからな、すっかり嫌煙されちゃったよ。
　というかあの二人の関係はやっぱり友達というより親友に近いような気がするな、二人ともあんなに楽しげだし、話してるだけでそこまで楽しくなれるのは親友の証拠かな。
　昇は楽しげな二人を見続けること数十分後、一人の男が公園へと入ってきて、雪心はその男を見つけるとミリアとの会話を切り上げて、その男の下へ駆け寄り抱きついた。
　どうやらその男が雪心の大事な人らしいのだが、その男を見た瞬間から昇とミリアは凍りついたように、その場に固まってしまう。
　その男は前に会ったことがあるからだ……。

第二十三話　修行、そして思わぬ再会（後書き）

ぐはぁ、風邪ひいた。なんかからだが熱くて、のどが凄いことになってました。

まあ、そんな訳で執筆が遅れました。というか頭が真っ白になって何も浮かんでこなくて、何も書けなかった。どうやら風邪をひいている時はさすがに神様も降りては来ないらしい。

そんなワケでお送りしました第二十三話、いかがでしたでしょうか。まあ、この話は次への布石で、次の話から一気に運命の輪は加速することとなる。……たぶん。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、未だに風邪が治りきっていない葵夢幻でした。

第二十四話　突然の別れ

昇達は突然走り出した雪心の背を見送ると、雪心がある男に抱きつくのを目撃した。

嘘……だろ。あの人、この前の、なんでここに、というかあいつが雪心ちゃんの大事な人だって言うのか。

その男が雪心を抱き上げると顔がはっきりと見えて、昇とミリアとその男は固まったように身動き一つせず、相手を見詰めるだけである。

なんで、なんであいつがここにいるんだ。なんで雪心ちゃんを……。

そんな中で昇は目をミリアに向けるが、ミリアも驚いたように固まっている。

ということは、ミリアもしらなかったのか、あいつが、雪心ちゃんの大事な人が精霊だということを。

お互いに見詰めあう中で、一人事情を知らない雪心だけが、男の事をミリアに向かって紹介するのだった。

「あのねあのね、ミリア。この人が私の大事な人のシェードだよ」

シェード、あの時、僕達があの戦闘狂達に襲われたときに仲裁に入った精霊に間違いない。

シェードはまだ楽しげな雪心を降ろすと、今度は雪心を守るかのように前に立つ。そして目線をミリアへと向けた。

「お前がミリアか？」

「えっ、何で私の名前を知ってるの？」

「お前の事はよく雪心から聞いている。だから分かった、それだけだ」

そしてシェードは一度雪心を見ると、再び目線を昇達に戻す。

「そうか、雪心から精霊の気配が残っているとは知っていたが、よくよく考えてみればこの近くで精霊と契約をしているのはお前だけ

だったな。だから、雪心がお前達と繋がっていても不思議は無いということか」
「じゃあ、まさか雪心ちゃんは……」
「そうだ。雪心も契約者だ、そして俺が契約をした精霊シェードだ」
なんで、僕の他にもまだ契約者がいたなんて、閃華や与凪さんはそんなことは一言も言ってなかった。
「不思議そうな顔をしているな。まあ、それも当然だろう。雪心は確かに契約者だが、器の資格を持っていない」
「えっ、それってどういう意味？」
「昇、精霊が契約する相手は器の資格を持つものなんだよ、つまりはエレメンタルロードテナーになれる人だけだよ。それに、器の資格は生まれ付いて決まっている物だから変えようが無い。それに与凪も探索は器の資格を持つ者に絞って探索してたと思うから、だから雪心が与凪に見つかる事は無かったのかもしれないんだよ」
「そうか、それで与凪さんの探索には引っ掛からなかったんだ。でも、なんであの精霊は資格の無い雪心ちゃんと契約を？」
「それは、お前達には関係ないことだ」
一方的に付きはねたシェードをミリアは睨み付ける。
「なんで」
「ミリア」
昇はミリアが尋常ではないことに気付いた。
俯いて顔はよく見ないが、手が震えていて、まるで怒りを抑えられないという感じだ。
「なんで雪心と契約なんてしたんだよ！　契約者がどれだけ危険な目に遭うか精霊のあんたならよく分かってるだろ！」
ミリアの言葉にシェードは大きく目を見開きミリアに負けないぐらいの迫力をかもし出す。
「そんなことは分かりきっている！　それに雪心には器の資格は無い。だから雪心に危険が及ぶことは無い！」
「じゃあ、なんであの時出てきたんだよ！」

「……」
「あんたもロードナイトの一人なんだろ！　そんな奴が雪心に危険が無いと言い切れるとはとても思えない！」
そして二人は黙り込んだまま睨み合いを続けていたのだが、突然シェードの後ろから雪心が顔を出した。
「シェード、ミリアちゃん、さっきから何で二人とも怒ってるの？」
二人の気迫がよほど怖いのか、雪心は恐る恐る二人に尋ねて、二人とも同時に怒りの形相から一転、困ったような顔になった。
「雪心、違う、だってそいつこの前……」
「黙れ！」
突然叫んだシェードの一言にミリアは言いかけた事を飲み込み、雪心もシェードの足にしがみ付いた。
「シェード？」
泣きそうな顔をしながら雪心はシェードを見上げるが、シェードはミリアを睨み付けているだけだった。
「この子はもう決めたんだ。だから、これ以上はこの子を惑わすことを言うな！」
その言葉が再びミリアの怒りに火をつける。
「なんだよ、それ、なにを決めたか分からないけど、雪心をあんた達と関わらせるわけにはいかない。雪心！　そいつはこの前、私達に襲い掛かって来た、悪い奴らの仲間なんだよ。だから、そいつから離れて、そいつも悪い奴だから」
「何も知らない奴が勝手なこと言うな！」
「何も知らなくない、少なくとも雪心の事だけは知ってる！」
「それでもほんの一部だろう、この子の願いを叶える為にロードナイトは存在している」
「えっ」
それって、もしかして雪心ちゃんが今回の黒幕って事？
「嘘だ！　雪心がロードナイトとかかわりがあるはずが無い。そうだよね、雪心」

「雪心、こいつらは雪心の願いを邪魔する敵だ。心を許すな」
「ミリアちゃんが……敵？」
「違う、私は雪心の友達だよ。そうだよね、雪心」
「ミリアちゃんは、私のお願いを邪魔するの？」
「そんなことしないよ」
悲しそうな顔で聞いてくる雪心に悲しそうな顔で答えるミリア。
どちらを見ても昇は悲しいとしか思えなかった。
「では、これ以上我らの邪魔をしないでもらおう。もう少しでこの子の願いが叶うのだからな」
「ちょっと待って」
「まだ何か有るのか」
「雪心ちゃん、君の願いって何？」
「……お母さん」
「えっ」
「お母さんがいなくなちゃったから、戻ってきてもらうの。エレメンタルロードテナーになればお母さんが帰ってくるの。天のお星様から」
それってどういうい……。
「嘘だ！」
昇が考える前にミリアが叫んだ。
「エレメンタルロードテナーになっても死んだ人を蘇らせるのは無理だ。シェード、あんただってそれくらい知ってるよね。なんで雪心に嘘を教えたの！」
「黙れ」
「雪心、雪心のお母さんはもうし……」
「黙れといってる！」
「黙るもんか！　あんたが雪心に何を吹き込んだか知らないけど、これ以上雪心を……」
「分かったような口をきくな！」
シェードは大きく拳をミリアに向かって振る抜くと、その風圧だ

けでミリアを吹き飛ばして、ミリアはジャングルジムに激突した。
「ぐっ、げほっ」
「ミリア！　いきなり何するんだ！」
「言ったはずだ。これ以上、この子の心を惑わすなと」
昇はミリアに駆け寄り、手を差し伸べるが、ミリアはその手を振り払うとシェードを睨み付ける。
「そっちがそのつもりなら、こっちも容赦しない」
「ミリア！」
よろけながら立ち上がるミリア。そして、その手にアースハルバードを出現させる。
「シェード、お前が何を企んでるかは知らないけど、これ以上雪心を巻き込ませるわけにはいかない。だから、今ここでお前を倒して雪心を助ける！」
「先程も言っただろ、何も知らない奴が勝手なことを言うな！」
昇の静止も聞かず飛び出していくミリア、それと同時にシェードも走り出し、二人が激突する寸前。
「やめて！」
雪心の悲痛の叫びが二人の動きを止めた。
「雪心……」
「ミリアちゃん、シェードは私にとって大事な人だよ。そしてミリアちゃんも……私の大事な友達だよ」
『雪心』
同時に呼びかける二人の声に雪心は顔を上げるとミリアを真っ直ぐと見詰める。その瞳に決意と悲しみを含みながら。
「でも……ミリアちゃんが私達の邪魔をするなら、私は……ミリアちゃんと戦う！」
「雪心！」
信じられない言葉にミリアは悲しみを込めた声で雪心を呼ぶが、雪心にはミリアの悲しみは届かなかった。
「シェード、行こう」

「ああ」
ミリアに背を向けて公園から出て行こうとする雪心。だが、それは今の顔をミリアに見せたくないからだった。
「ミリアちゃん、もう二度と私達の前に現れないでね」
「雪心！」
雪心の元へ走り出そうとするミリア。
「来ないで！」
だが、完全な拒絶がミリアの足を止める。
「雪心、雪心が言われた事は全部嘘なんだよ。だからそんな奴らのいう事を信じちゃダメだよ！」
「嘘じゃないもん。エレメンタルロードテナーになれば、お母さんが帰ってくるって言ったもん」
「だから、それが嘘なんだよ！」
「……ミリアちゃんは、そんなに私のお母さんが帰ってくる事が嫌なの？」
「えっ？」
「ミリアちゃんはそんなに私の邪魔をしたいの。お父さんもお母さんもいなくなって、私を守ってくれるのはシェードだけなんだよ。でも、シェードもお母さんが帰ってくるって言ったから。ミリアちゃんは……そんなに私の邪魔をしたいの？」
「違う！　違うんだよ雪心！　シェード、なんで雪心にそんな嘘を吹き込んだんだよ！」
「……お前には関係ない。それに、雪心は俺の主でもある。主が決めた事に俺は従事しているだけだ」
「そんなの言い訳だ！　シェード、お前はいったい……」
シェードに怒鳴りつけてるミリアを昇はさえぎりって前に出る。
「シェードさんでしたね」
「まだなにか用があるのか？」
「さっきから聞いてたけど、あなたは全部分かっていて雪心ちゃんを守ろうとしてるんじゃないんですか」

「昇！　そんな訳ないよ。だってこいつは……」
「ミリア、分かってる。でもここは僕に任せて」
そう、最初に見たときからどうもおかしいと思ってたんだ。あの戦闘狂とは違う雰囲気を持っているというか、なにか別の決意を持っている感じがしたんだよな。
「シェードさん、あなた達はいったい何をやろうとしてるんですか。もしミリアの言っている事が本当なら目的は別にあるはずだ。あなた達の本当の目的はなんですか？」
「……」
黙りこむシェード。それはまるで何かに耐えているように拳が震えている。
やっぱり何かあるんだ。僕達の知らない何かが。……そして、僕達はそれを知らないといけないんだ。
「どのみちお前達には関係ないことだ。これ以上首を突っ込むと、この場でお前達を倒すことになるぞ」
「やれるものやならやってみればいい」
意気込むミリアだが昇はそれを押さえつける。
「ミリア、今ここで戦うのは良くない。それに雪心ちゃんがいる。雪心ちゃんだまで巻き込むつもり」
「うっ、……それは」
「とにかく今の僕達にはどうする事もできない。だから今は抑えるんだ」
「……昇」
泣きそうな顔で上るに抱きつくミリアの姿を見て、雪心は少しだけ前に出た。
「ミリアちゃん。ミリアちゃんが私の邪魔をしないって約束してくれれば許してあげてもいいよ」
「……無理だよ。だって、雪心は騙されてるんだよ。だから、私は、雪心を止めないといけないんだよ」
「ミリアちゃんのバカ！　なんで分かってくれないの！」

「分かってるんだよ。雪心以上に分かってるんだよ。だから、雪心を止めないといけないんだよ」
「……じゃあもういい、ミリアちゃんとはもう絶交だよ」
「雪心、違う、違うんだよ」
「もういいよ。じゃあね、ミリアちゃん、バイバイ」
それはいつもと同じ、二人が別れる時の言葉だが、今の言葉には永遠の別れが含まれているようにミリアは聞こえた。
「きよ……」
「ミリア！」
雪心を追おうとするミリアを昇は抱きとめた。
「離して昇！　雪心が、雪心が」
「……もう、無理だよ。今の僕達にはどうする事もできない」
「なんで、何でそんなことを言うの……」
昇は公園の出口に目を向けたが、そこにはもう二人の姿は無かった。そしてミリアも、同じように二人がいないことをその目ではっきりと見た。
「……いや、なんで、なんでいきなり……」
「ミリア」
昇は更にミリアを抱き寄せて、小さなミリアの体を包み込むように抱きしめる。
「昇、雪心が、雪心が。私は雪心を止められなかった。どうすればいいの」
「分かってる。ちゃんと分かってるから、無理しなくていいよ」
「昇、昇、昇、うわあああーーっ」
泣きじゃくるミリアを胸に、昇は何かを無しくしてしまった、そんな感じにとらわれていた。

「昇、ミリアはどうじゃ？」
「うん。泣き疲れたみたいで、今は寝てるよ」

「そうか、では何があったのか話してもらおう」
リビングではなく昇の部屋に集まった皆に、昇は公園での出来事を全て話した。
「……その、なんて言っていいか分からないけど、えっと」
「琴未、今は無理に言葉にせんでいい」
「えっ、うん、そうだね」
「それで、昇はどうするつもり？」
「相変わらず直球だね、シエラ」
だが、何故かシエラは沈んだ表情を浮かべた。
「シエラ」
「昇、昇もかなり無理してるみたいだから気をつけて」
「えっ、そうかな、そんなつもりは」
「まあ、確かにいつもの昇なら、そんな反論はしないで諦めるか、溜息を付くかのどっちかよね」
「うむ、そうじゃのう」
「……」
「どうする閃華、今日のところはこの辺で切り上げる？」
「ふむ、そうじゃのう」
「ちょっと待って」
「昇？」
確かにシエラの言うとおり、今の僕は無理をしてるのかもしれない。けど、あんな場面を見ちゃったんだから仕方ない。……どうせ、いつかは決めないことなら、先送りにせずに今決めるべきなんじゃないだろうか。
「閃華」
「んっ、なんじゃ？」
「明日、学校が終わってからでいいから、与凪さんと一緒に雪心ちゃんのことを調べておいて」
「ちょっと！　昇、どうするつもりなの？」
「琴未、実は……まだ自分でもどうすればいいのか分かってないん

だ。でも、一つだけいえることは雪心ちゃんをこのままに出来ないって事だ」
「じゃあ、何で？」
「何かがあってから知るんじゃ遅いんだ。今のうちに知らなきゃいけないことを知っておかないとダメな気がするんだ」
「ふむ、そうじゃのう。まず、相手の情報が無いと動きようがないからのう」
「閃華まで、ちょっと昇、まさか雪心ちゃんと戦うつもりなの？」
「まだ分かんない、けど、もしかしたらそうなるかも」
「昇！」
「落ち着け琴未、あくまでも可能性の一つじゃ。まだそうと決まったわけでは有るまい」
「……そうなの？」
琴未の問いかけに昇は首を縦に振る。
「そうなんだ、一瞬あせっちゃったよ」
「じゃが、そうなる可能性もある」
「結局どっちなのよ」
「今の段階で結論を出すのは無理」
「そう、シエラの言うとおりだ。今はとにかく雪心ちゃんとロードナイトの情報が欲しいんだ。それが分からないと、雪心ちゃんも、そしてミリアもかわいそうだ。今のままだと……悲しすぎる」
「そう、だね。はぁ、さすがに私もあんなヘビーな話を聞いたら落ち込んできたわ」
「でも乗り越えないと、ミリアも雪心も、そして昇も」
「うん、そうだね」
これはミリアと雪心ちゃんだけの問題じゃない。僕もそして皆も関わっていることなのかもしれない。いや、雪心ちゃんははっきりとエレメンタルロードテナーと言った。だからこれは、僕達全員の問題なんだ。
「とにかく今は皆が出来る事をしよう」

「うん、そうだね」
「分かってる」
「そうじゃな」
「そして出来るなら、僕は雪心ちゃんを助けたい。そのことだけは、はっきりと言える」
「そうだね。今のままだとミリアも雪心ちゃんもかわいそうだもんね」
「悲しい結末は迎えたくない」
「そうじゃのう」
そうだ、僕は取り戻さないといけないんだ。やっと分かった、あの時に失った物は二人の笑顔だったんだ。
僕は二人に笑顔を取り戻さないといけないんだ。
新たな決意を胸に昇は新たな道を進み始めていた。そして、その道を進むたびに運命の歯車は加速する。

第二十四話　突然の別れ（後書き）

いままで風邪をひいていた所為なのか、一日に二話も書いてしまいました。

まだ完全に治りきってないのに、何故か降りてきてくれたおかげですね。もちろん、執筆の神様がですよ。はい、そこの人、私を変な目で見ないように。というか、執筆をするようになってから気付いたんですが、やはりそういうときがあるんですよ。これがまた。

さて、では余談も終わったところで本編の話に参りますか。とりあえず、事態は急展開を迎えました。私的にはもう少しうまく書けたかなと思うところもありますが、今の限界でこの話はこんな形になりました。

そして次から、真実が少しずつ明らかになっていく……といいな。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、絶好調な分、絶不調な葵夢幻でした。

第二十五話　加速し始めた運命

「はぁ～、昨日そんなことがあったのね」
いつも使っている生徒指導室で閃華と落ち合った与凪は閃華から昨日のことを聞くとまず、そんな第一声を口にした。
「うむ、それで昇からの依頼じゃ。その雪心（きよみ）とか言う少女の事とロードナイト達について調べておいて欲しいそうじゃ」
「それは構わないんだけど。閃華さんは、本当にその雪心って女の子が今回の黒幕だと思います。だって、まだ一〇歳でしょ」
「ふむ、私もそれは気になっておったんじゃが。まず、一〇歳の少女がそんな大それた事を考えたとしても、実行することはまず不可能じゃろう」
「そうですよね」
「じゃから、こう考えるのが自然じゃろ。何者かがその雪心という少女を使って何かをしようとしている、とな」
「そうですね。じゃあ、まずその雪心ちゃんから調べてみますね」
「分かるのか？」
「その雪心ちゃんって器の資格を持ってないんでしょ」
「うむ、そなたが契約した森尾先生と同じようにな」
「あっ、やっぱり分かってました」
「当然じゃ」
「まあ、亮ちゃんは私が一目惚れして、そのままラブラブの生活をしてますけど。その雪心ちゃんって子はそうじゃないみたいね」
「うむ、昇の話だとエレメンタルロードテナーになれば、本気で母親が生き返ると信じておるそうじゃからのう」
「けど、エレメンタルロードテナーは精霊王の器でしかない。確かにエレメンタルロードテナーになれば少しは精霊王の力が使えるけど、逆に言えば精霊王の力意外は使えないって事なのにね」
「そうじゃのう。精霊王は地球の自然その物と言ってもいい。じゃ

から自然の摂理に反する蘇りなどということは出来んはずじゃ」
「それくらい、契約者なら少し考えれば分かることなのに、何で騙されたんだろ？」
「それは逆じゃろ」
「というと」
「一〇歳の少女じゃから騙しやすかった。そう考えた方が自然じゃろ」
「そっか、そうだね。まあとにかく、器の資格が無くて契約をしている人間を探せばすぐに見つかると思いますよ」
「どれぐらいかかる？」
「う～ん、大まかな位置ならすぐに分かるんだけど、詳しく調べるにはかなりの時間がかかるかもしれませんね」
「ふむ、それはまずいのう」
「なんで？」
「ミリアと雪心が完全に決別したことにより、雪心に関する奴らが本格的に動き出しても不思議は無い。どうやら雪心とやらは本気になったらしいからのう」
「だから、相手がいつ動いても不思議は無いということですね。そういえば、ミリアさんはどうしたの、今日は欠席したみたいだけど」
閃華は立ち上がると、窓により外を遠い目で見詰める。
「ミリアはウチで寝ておる。今はそっとしてやるのが一番じゃと思ってな」
「そっか、そうですよね」
じゃがミリア、いつまでも落ち込んではおられんぞ。相手がいつ動くか分からんからのう。それに、今ぶつかっている壁はミリア自身で突破せねばならぬ壁じゃ。じゃからミリア、がんばるんじゃぞ。
閃華はそんなことを思いふけっていると、ふと校庭に目を向ける。普通に見れば各部活が、それぞれの部活をやっているのだが、閃華は目を精霊化させると精界内で行われていることを見た。
ふむ、どうやら火が付いたのは相手だけではないみたいじゃのう。

昇、そなたも覚悟を決めたか。
　精界内ではいつもと同じように昇の修行が行われていたが、今までの修行とはうって変わって、昨日の事件で今日の昇は気合が入っている昇の修行は屋上だけでは収まらず、校舎を破壊し続けながら、とうとう校庭まで降りてきたようだ。
「うわっ、今日の滝下君、なんだか気合が違うね」
　閃華の横で同じく精界の中を見ている与凪はそんな感想を言った。
「ふむ、昇は昨日の事を目の前で見ておるからのう。じゃから、ミリアの悲しみと雪心の悲しみがよく分かるんじゃろう」
「でも、それを差し引いても、この短期間であそこまで成長するなんて凄いですよ」
「それが器の資格を持つ者の所以(ゆえん)じゃ。器の資格というものは凡人と言っては聞こえが悪いが、普通の人には与えられん物じゃ。何らかの才ある者、その者じゃけが器の資格を得ることが出来るからのう」
「そうなのよね。だけど、滝下君って普通の人にしか見えないんだけど」
「まあ才能があっても、その才能を発揮できずに人生を終える人もおるからのう。もし、昇もシエラと契約せなんだら、その才能を発揮出来んかったじゃろ」
「ふ～ん、ところで滝下君の才能ってなんなのかしら」
「そうじゃのう。生まれる時代と場所違えば、もしや名君になっていたじゃろうな」
「そうかしら」
「まあ、昇の性格からその才能は見えずらいからのう、分からんのも無理は無い」
「そうね、まあ、そういうことは近くにいる人にしか分からない物なのよね」
「そうじゃな、特に昇の場合はな。……おおっ、そうじゃった。今の話で思い出したことがあった」

「んっ、何かしら」
「たぶんじゃが、雪心の能力じゃ。この前に話したと思うが顔馴染みの精霊が実体化しておったから、もしやしたら、それが雪心の能力かもしれん」
「って、その能力ってのはなんなの？」
「仮契約じゃ」
「仮契約。あの、契約をせずに精霊を実体化させることが出来る力が雪心ちゃんの能力なの？」
「うむ、そうなってくると、少しじゃが相手の戦力が見えてくるのう」
「そうだね。器の資格を持たない雪心ちゃんの力はそんなに強くない。だから、仮契約で実体化できる精霊の数もそんなには多くない」
「うむ、これは器の資格を持っておる者なら数百、下手すれば数千の精霊を実体化できる。いわば昇とは正反対の能力じゃからのう」
「エレメンタルアップは少数精鋭を作り出し、仮契約は数で相手を勝ることが出来る」
「じゃが、器の資格を持たない雪心の力を普通の平均で考えると、実体化できる精霊はせいぜい十以下、それ以上は無理じゃろう」
「だね。そういえば、そのシェードって精霊、なんで器の資格が無い雪心ちゃんと契約をしたんだろ」
「それは本人に聞かんと分からんのう」
「でも、これで敵の正体が少し見えてきたましたね」
「じゃな。じゃが肝心の黒幕が分からん」
「そうですね。雪心ちゃんに嘘を吹き込んで何かを企んでる、たぶん精霊。あっ、もしかしたら、この間話した精霊王に関係しているんじゃないかしら」
「ふむ、与凪、その後の精霊王の力は移動を続けておるのか？」
「うん、本当に少しずつだけど、何者かが精霊王の力をどこかに流しているのは確かみたいよ」
「場所は？」

「ごめん、まだ」
「そうか」
閃華は短く答えると再び校庭で模擬戦をやっている昇達に目を向けた。
そこではひけは取っているものの、何とかシエラと琴未を相手に奮闘している昇の姿がよく見えた。
……ふむ、少し整理してみるかのう。
この事件の黒幕は雪心という少女を騙して何かを企んでいる。そして器の資格を持っていないシェードが雪心と契約を交わしていた。いや、順番が逆か、契約して仮契約の力に目をつけた黒幕が何かの企みを思いついた、ということじゃろうか。
そして黒幕は、まずは戦力の増強のために雪心の仮契約でロードナイトと呼ばれている集団を作り出した。ふむ、となるとミラルドもロードナイトの一人と思っておいた方がよいのう。
そして戦力は揃い、雪心の役割は終えたというところじゃろうか。じゃからミリアと知り合って、友達になったんじゃろう。
そして黒幕はまだ何かを企んでおる。それはとてつもない計画なんじゃろうな。じゃからその障害となりうる、雪心の近くいる契約者、昇を始末するためにロードナイトを送り込んできた。そのときは黒幕もコチラの戦力を知らんかったろうから、その場は引いたんじゃと思うが、あれから襲撃が無いということは、私達がそれほどの脅威にならないと判断したんじゃろう。
確かに、そのままじゃったら私達もそやつの計画を見逃してたかもしれん。じゃが、昨日ミリアと雪心はお互いの立場を知って決別した。これから先、それがどう出るかでいろいろと決まりそうじゃのう。
じゃが、昇も皆も、ミリアと雪心をこのままにしとくつもりは無いらしいからのう。じゃからロードナイトとの戦いは避けられんか。
雪心の目を覚ますということは、今回の黒幕が企んだ計画を潰すのと同じかもしれんからのう。

まあ、どちらにしても勝負はこれからじゃのう。我らが先に黒幕の動きをつかめるか、それとも黒幕が先に動き出すか、出来ることなら先手を打ちたいものじゃが。そう簡単にはいかんかもしれんのう。

「与凪」

「んっ、なに閃華さん？」

どうやら与凪は今まで昇達の模擬戦を見物していたようだ。

「どうやら与凪の出番が多くなりそうじゃから。これからも協力をお願いしたい」

「はいはい、分かってますよ。どうやら今回は相手も組織的なものを作り出したみたいだからね」

「ふむ、ロードナイトがそうじゃろう」

「オッケー、まずはそこら辺から調べてみますね」

「うむ、では、よろしく頼む」

「あれ、もう帰るんですか？」

「うむ、私も少し足で調べてみるつもりじゃ」

「そう、じゃあ気を付けてくださいね、閃華さん」

「うむ、ではまた明日」

「はいはい、じゃあね閃華さん」

閃華は手早く自分の荷物を手に取ると、そのまま生徒指導室を出て行った。

「さて、じゃあ私も少しやってみますか」

与凪はそう言うと元の椅子に座り、精神を集中させる。そして自分の意識を霧状にすると広範囲に散布させるのだった。

「とりあえず、雪心ちゃんって子を探してみようかな」

そうして与凪は雪心探索を開始するのだった。

それから数日後の雪心の家。

「よいしょっと」

雪心は先程の買い物で買った物を玄関にそのまま置いた。
「これは先に持って行っとくぞ」
雪心の横にいたシェードは、もう靴を脱ぎさり玄関に上がって雪心が置いた荷物を手に持っていた。
「うん、シェード、お願い」
「ああ」
そのまま歩き出すシェードだが、その足は数歩歩いただけで止まった。
「シェード、どうしたの？」
「……」
だがシェードは答えず、荷物を手早くキッチンに持っていくと、そのままリビングへと向かった。
「何か用か、サファド」
少し怒気を込めた声にもかかわらず、サファドは雪心の家のリビングでコーヒーを片手にくつろいでいた。
そして、睨み付けているシェードにサファドは笑顔を向ける。
「ええ、とりあえずお留守だったので勝手に上がらせてもらいました」
「人間はそういう行動を不法侵入といって、罰せられるそうだ」
「そうみたいですね。でも、私達精霊ですから、そんな法は関係ないですよ」
「それでサファド、何の用だ」
「いえいえ、雪心に用があるだけで、あなたに用はありません」
「ッ！」
「おやおや、あなたがそこまで驚かなくてもいいでしょう。なにせこれで雪心の願いが叶うのだから」
「いつまで、そんな嘘で雪心を躍らせる気だ」
「くすくす、そう思うなら止めてみてください。私をね」
「くっ」
サファドはよく知っているのだ。シェードは決して自分に逆らえ

ないということを。
　もし、ここでサファドを消してしまえば、雪心は更に希望を失い、生きる気力さえもなくしてしまうかもしれない。シェードはそんな雪心の姿を心に思い描くだけで胸が張り裂けそうなぐらいの痛みを覚えるほど、雪心のことを大事にしているからだ。
「シェード、さっきから誰と話してるの？」
　とその時、雪心がリビングのドアを開けて、シェードはいつもの無表情に戻り、サファドは雪心に笑みを向けると、敬意を払うように大きく頭を下げるのだった。
「サファド！」
　嬉しそうに声に出す雪心。
「お久しぶりですね。我が主、雪心」
「なんで、なんでサファドがここにいるの？」
「はい、我が主、それは報告のためです」
「なんの？」
「全ての準備は終わりました。後は我が主がいらっしゃるだけで、全てが整います」
「それって……」
「はい、もうすぐ我が主の望みが叶う時が来ます」
「本当、サファド！」
「はい、我が主、雪心」
　嬉しそうな雪心にシェードは複雑な思いになる。
　くっ、とうとうこの時が来てしまったか。俺は雪心の目を覚ますことは出来なかった。なら、覚悟を決めるしかない。雪心に害が及ばない限り、ロードナイトの一員として雪心を守ると。
「聞いた、シェード、もうすぐお母さんが帰って来るんだよ」
「そうだな。よかったな、雪心」
　シェードは一応笑みを浮かべるが、その笑みはとても悲しい笑みだが、今の雪心は気付かないだろう。なにせ、自分の願いが叶う問うことだけで頭が一杯なのだから。

「では、参りましょうか、我が主」
「うん。あっ、でもちょっと待って、これだけ仕舞って来ないといけないから」
そういって雪心はサファドの答えを待たないで、買って来た物を片付けに行ってしまった。
「くすくす、本当、我が主は純粋でかわいいですね」
「サファド」
「なんですかシェード、おやおや、そんなに怖い顔をしないでくださいよ」
「とりあえず今はお前に協力してやる。だが、もし雪心に何かしてみろ。その時は俺がお前を消す」
「くすくす、本当にあなたは心配性ですね。何度も言うように雪心に危険なことなんてありませんよ。只、我が主の願いを叶えるためには、我が主の協力が必要なだけですよ」
「俺も何度も言うようだが、俺はお前を信じてはいない。ただ雪心がお前を信じたから協力しているだけだ。だからもし、雪心を傷つけた時には」
「その時はどうぞ。あなたの手で私を消すといいですよ」
サファドは本音を笑みで隠しながら、睨み付けて来るシェードを微笑みで受け流していた。
「お待たせ！」
その時、元気よく雪心がリビングに戻ってきた。どうやらよほど嬉しいらしい。
「もう大丈夫ですか？」
「うん、いつでもいいよ」
「では参りましょうか、我が主、雪心」
そして三人の丁度真ん中を中心点にして魔方陣が展開され、三人は姿を消して魔方陣もその光が消えた。

「バカな！　こんなことをして、あいつはなにを考えてるつもりだ」
そこは西洋風の城の一角、その奥の奥にあるロードナイトでさえ入ることが許されない禁断の部屋だった。
「ここはあの子の願いを叶える場所だと聞いていたが、この力は、まちがいなく」
「おやおや、困りますね。ここには入るなとサファド様が言いませんでしたか。ねえ、ミラルド」
「くっ、冷峰(れいほう)か」
ミラルドが振り向くと、そこには同じロードナイトの一人冷峰が壁に寄りかかりながら立っていた。
冷峰は中華風の服を身にまとい、元々目が細い為かいつも笑っているように見えるが、今は更に笑みを深めて、返って不気味に思えるほどの笑みを浮かべていた。
「ここはロードナイトさえ入るなと、サファド様の言葉を聞いていなかったのですか」
「冷峰、お前もロードナイトの一人だろ。それともサファドの懐刀(ふところかたな)のお前は特別なのか」
「そうですね～、その通りかもしれませんね。では、サファド様の命により、ここへの侵入者を排除するとしましょう」
くっ、どうする。本当ならあれを破壊したいが、冷峰が相手では分が悪い。
その時ミラルドの頭を過ぎったのはこの前会った精霊の姿だった。
もう選んでいる時は無い。性には合わんがあいつを頼るか、あいつは正式に契約をしていたから本来の力を出せるはずだ。
だが、その前に今はここを切り抜けねば。だが、ただでは逃げる気はせん。
ミラルドは精霊武具のマジョリティーサイファー＜多くの刃を持つ鎌＞を出すと目の前の装置に思いっきり一撃を入れる。
「なっ！」
思いきったミラルドの行動に冷峰は驚くが、その一瞬を狙ったか

のようにミラルドに一撃を入れる精霊がいた。
「ぐはっ、くっ、マルドか」
マルドは血の付いたバトルアクスを再び構える。
「マルド、お前まで……」
「俺はサファド様の代わりである冷峰に命じられてここに来た。そして裏切ったお前を攻撃しただけだ」
くそっ、冷峰だけなら何とかできたがマルドまで加わると一苦労だな。もうなりふり構ってる暇は無いな。
一気にここを抜け出してあいつに、閃華にこの事を伝えればどうにかしてくれるかもしれない。今はそれに賭けるしかない。
ミラルドは鎌を構えると一気に出口に向かって走り出すのだった。

運命という物は時に思わぬ場所で加速する場合がある。そして昇は未だに、加速し始めた運命の歯車に気付いてはいなかった。

第二十五話　加速し始めた運命（後書き）

そんな訳で第二十五話をお送りしました。

え～、修正以前はこの後書きの欄に人気投票の説明を書いていたのですが、まったく反応が無いので削除しました。……というか少しぐらい反応があってもいいとおもうんだけどな。

まあ、そんなことはさておき、そんな訳で二十五話の後書きは全て書き直す事になりました。

……っと言っても書く事なんてそうそう無いんですけどね。はいそこの方、なら書かなくていいんじゃないかと思わないように。後書きにはそう不思議な力があるのです。なんかこう、何かを書かなくてはと思ってしまうほどのパワーを秘めているのです。その破壊力は銀河さえも破壊するほどだーーー！

まあそんなことはどうでもいいんですけどね。けど、後書きは何か書かないとって思うのは私だけでしょうか。まあ、後書きでここまで書いてるのも珍しいですよね。ちなみにブログでもこんな感じでいろいろと書いてますよ。……なんだろうね、いったいこれは。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、何も書く事が無くても本能とノリでいろいろと書く葵夢幻でした。

第二十六話　始まりの夜

その日、昇は夕食後にミリアの部屋をノックした。
あの別れから数日、ミリアは部屋にこもったきりでほとんど出ていないうえに、食事すら満足に食べていないようだ。
いくらミリアが精霊だと言っても実体化している以上は、多少の食事を取らないと体がもたないはずだが、ミリアは一向に何も食べずに外出することなく部屋にこもっていた。
さすがにいつまでもミリアをこの状態を放っておけなかった昇は一人でミリアの部屋を訪ねることにしたのだが、ノックしても返事は返ってこなかった。
でもここで引き返すわけにはいかないか。
「ミリア、入るよ」
一応、断ってから昇はドアを開けた。
うわっ、真っ暗だ。
どうやらミリアは部屋の電気もつけずに、布団の中で丸まっているようだ。先程、昇の母である彩香が届けた食事もほとんど手につけていない。
「電気つけるよ」
昇が部屋の電気をつけると、ミリアは布団を被るように丸まっていて布団から出ているのは頭の上だけだ。
昇はベットに寝ているミリアの枕元に腰をかけると、出ているミリアの頭を軽く撫でながら口を開いた。
「ミリア、少しは食べないと体が持たないよ」
「……うん、分かってる。でも食べたくない」
返事が返ってきたことに昇はひとまず安心した。どうやら受け答えをする気は有るらしい。
「でも、無理してでも食べないと、いざという時に動けないよ」
「いざという時ってなに？」

「ミリア、ミリアはこのままでいいの。このまま雪心ちゃんと別れたままで」

ミリアは勢いよく布団を剥いで起き上がると思いっきり昇の頬を平手打ちする。

「分かったような口を聞かないでよ！　昇に私の気持ちが分かるの、私は雪心にはっきりと絶交されたんだよ。私、嬉しかったんだよ。雪心と友達になれて、雪心と過ごす時間が楽しくて。けど、もうそんな時間は送れなくなったんだよ！　私の気持ちなんて昇には分からないよ」

泣きながら訴えるミリア。昇はそんなミリアの頭をまた優しく撫でた。

「まだはっきりしてないからミリアには言ってなかったけど、もしかしたら雪心ちゃんは誰かに騙されてるのかもしれない」

「……なんでそういえるの？」

昇の言った事をすぐには信じられないミリアは疑いの眼差しを向ける。それほど雪心との別れがミリアにショックを与えて昇の言葉すら簡単に信用できないようだ。

「閃華や与凪さんが今調べてる最中だけど、どうも雪心ちゃんは誰かに踊らされて能力と雪心ちゃん自身を利用しているみたいなんだ」

「じゃあやっぱり、雪心は騙されてるんだね」

「うん、まだ確定したわけじゃないけど、その可能性が高いって閃華も与凪さんも言ってる」

「じゃあ、シェードが！」

「いや、これは僕の感なんだけど、あの人はそんな事をする人じゃないと思うんだ」

「じゃあ誰が雪心を騙してるの！」

「だからそれを調べているんだ。皆必死で……。皆、ミリアの事も雪心ちゃんの事も放ってはおけないんだよ。それなのにミリアはこのままでいいの？」

「……」

「まだ終わってない。ミリアと雪心ちゃんは今でも友達だと、僕は思ってるけど」
「……本当、昇？」
「うん、本当だよ。それに、もしかしたら雪心ちゃんもミリアと仲直りしたいと思ってるんじゃないかな」
「でも、雪心ははっきりと……」
「友達だもの、喧嘩ぐらいする時もあるよ。けど、ここで終わらせちゃったらミリアは本当に雪心ちゃんと絶交する事になるよ。それでもいいの？」
「よくないよ」
まるで希望を見出したかのような目を向けてくるミリアの頭を撫でる昇。
「だから今は元気を出して、雪心ちゃんは誰が助けるんだ」
「……うん」
「それに友達って言うのは困っているなら一緒に考えてあげる。泣いてる時には一緒に泣いて、笑ってるときには一緒に笑う。そして友達が道を踏み外そうとしている時には、たとえ嫌われようとも友達の目を覚まさせてあげなくちゃ。それが友達という物だと僕は思うよ」
「昇……」
「だからミリアは雪心ちゃんに何をしてあげないといけないのか、もう分かってるはずだろ」
「……うん」
「ミリアは雪心ちゃんがエレメンタルロードテナーになっても、雪心ちゃんのお母さんが蘇らないことを知ってる。だからミリアにはそれを伝えなくちゃいけない。たとえ何度嫌われようとも、何回も絶交されても、ミリアは雪心ちゃんに言い続けなくちゃいけない。それが本当の友達だから」
「……そうだね。私、そうしないといけないんだよね」
「決めるのはミリア自身だ。ミリアがこのまま本当に雪心ちゃんと

関わりたくないなら忘れればいい。けど、もし雪心ちゃんの目を覚まさせたいなら、今は何をすべきか、分かるだろ」
「うん、そうだね。ありがとう、昇」
ミリアは流れ出した涙を拭くことなく、昇の手を取ると自分の頬に当てる。
「ごめんね昇、そしてありがとう。私、こんな事してる場合じゃないよね」
「もう大丈夫？」
「うん」
ミリアはいつもと同じ笑みを返して昇はその笑みを見て安心した。
「昇」
まだ涙が止まらないミリアが上目使いで昇を見上げる。
「ミリア、何」
「私、少し元気は出たけど、まだ少し不安だよ」
「そ、そう……」
少し不安そうな目をしながらミリアは昇の手を伝って、少しずつ距離を縮める。
あっ、あれ、なんかこの展開、少し変になってきてるんですけど。僕の気のせいかな、そうだよね、誰かそうだと言ってくれ。
「だから昇、もう少し私を安心させてほしいな……」
にじり寄るミリアだが、さすがに先程までいろいろと言った手前で昇も今のミリアから離れるには抵抗があった。
そしていつの間にかミリアの手が昇の腰に回っており、昇の動きを完全に封じた。
「えっと、僕にどうしろと？」
……って、うわっ、なんだ、今まで気付かなかったけど、ドアの方から凄い殺気と黒いオーラが見えるんですけど。
「うん、簡単だよ」
そう言ってミリアはシャツのボタンを一つ外す。
おーい、ちょっと待ってくださいミリアさん。ドア、なんかドア

の方からさっきより殺気とオーラが強くなっていくみたいなんですけど。

「……今日一晩でいいから、私をだ」

っと、その時、突然ドアが勢いよく開くと何かがミリアに向かって飛んできた。

とっさに避けるミリア。だが今までミリアは昇が逃げないようにしっかりと押さえていたために昇までミリアと移動してしまい、丁度昇の頭がミリアがいた位置に昇が来てしまった。

結果、その何かは辞書らしく、それが昇の頭に直撃してそのまま気を失った。

それから数分後、昇は意識を取り戻した。

あれっ、僕どうしたんだっけ、というか、何で寝てるんだろう。

「ほれ見てみい琴未、昇が目を覚ましたぞ」

「昇、大丈夫！」

「じゃから言ったじゃろ。そんなに心配ないとな」

琴未？　……あれ～、なんで僕は気絶なんてしたんだろ？

昇はゆっくりと体を起こすと、まだ少し痛む頭を撫でる。

「えっと、僕、どうしたんだっけ」

「全部シエラの仕業よ」

琴未はシエラにジトッとした目線を向けるが、シエラは明後日の方向へ向いて琴未の視線を受け流していた。

「けど、ドアを開けたのは琴未」

そして責任を押し付けるかのように、その言葉を呟くのだった。

「確かにそうだけど、私は昇をミリアから離そうとしただけで、まさか後ろから辞書が飛んでくるとは思って無かったわよ」

辞書が飛んできた？

「ふむ、どうやら状況が分かっておらんみたいじゃから簡単に説明しよう。まず、昇に迫ろうとしてたミリアを見て琴未は勢い良くド

アを開けたんじゃが、それと同時に瞬時に照準を合わせたんじゃろう、琴未の後ろに控えていたシエラが何故か手に持っていた辞書をミリアに投げつけた。ミリアも殺気は感じておったんじゃろうが、昇を放すことを忘れてそのまま避けてしまい。結果として、昇に辞書が直撃したわけじゃ」

簡単な説明ありがとう、閃華さん。

「というと、皆して僕達の会話を盗み聞きしてたと……」

「いや、そういうわけじゃないんだけどね。なんていうか……」

「琴未が昇がミリアの部屋に入っていくのを見かけたから、たぶん琴未もミリアのことが心配だったんだと思う」

「シエラ！　なに余計なことをいってんのよ。私はただ、昇の様子がおかしかったから覗いてただけよ」

覗いてたことは認めるんだね、琴未。

「まあ、そんなわけじゃ。結果として皆してお主らを見てたわけじゃ」

「というかシエラ、なんで辞書なんて持ってたの？」

「……念には念を入れないと」

えっと、シエラさん、それは答えになってるんですか？

「けどまあ、よかったではないか」

「なにが？」

「昇のおかげでミリアも元気が出たわけじゃし。まあ、多少のトラブルもあったが、些細なことはこの際忘れようではないか。のう、皆」

えっと、それは僕の災難を全て水に流せということですか。

「そうね、ミリアも元気を取り戻して結果的には良かったのかと」

シエラさん、なんでさっきから僕の目を見ようとしないんですか。

「良くないよ。私的にはせっかくのチャンスを潰されたんだから、その責任は取ってもらわないと」

……ははっ、よかったねミリア、元気が出て……はぁ。

「責任って何？」

先程の辞書の事もあるのか、シエラは仕方なくミリアに目を向ける。そして、そんなシエラにミリアが言ったこととは。
「シエラ、お腹すいた。そこは冷めちゃったから作り直して」
だった。
「分かった」
すんなりと承諾するシエラは不機嫌な声で返事はしたものの、昇はシエラが軽く笑みを浮かべたのを見逃さなかった。
やれやれ、これで一安心かな。
琴未も冷めた料理を持って行き、ミリアも元気良くリビングへと降りて行った。
「さて、これで問題の一つは解決したわけじゃな」
二人だけになったミリアの部屋で閃華はそんなことを言い出した。
「やっぱり問題は山積みなの？」
「そうじゃのう、やはり一番の問題は雪心の事じゃろうな」
「そういえば、雪心ちゃんの居場所は分かった？」
「ふむ、徐々にではあるが位置は特定できるみたいじゃ」
「そっか、後は説得しないといけないんだ」
「雪心にはつらい現実じゃが、現実で生きている以上、現実を見てもらわねばな。それに必ず妨害も入るからのう、ロードナイトというやっかいなやつらのう」
「はぁ、そうだね。まずはロードナイトをなんとかしないと。それから雪心ちゃんに……真実を告げないとか、それがどんなに辛くても、見ないといけない現実もあるよね」
「そうじゃな、ミリアにはまた辛い目に遭わせてしまうかもしれんがのう」
「そうだね……」
「じゃが、問題はそれだけではないぞ」
はぁ、やっぱりまだあるんだね。
「今回の黒幕じゃ。そやつの目的がいまいち見てこんのじゃ。そこら辺を見極めねば対処の仕様がないかもしれんのじゃ」

「それにしても、今回の黒幕って、いったいどんな奴なんだろ？」
「場合によっては、そやつと戦うことになるかしれんのう」
「けど、負けられない」
「そうじゃのう。ミリアのためにも、そして雪心のためにも、何とかせねばなるまい」
「そうだね」
昇はミリアのベットに腰を下ろしたまま、考え込む。
突発的に始まった今回の事態だけど、まさかこんなにも複雑な関係を生み出すなんて思ってもいなかった。
でも、知ってしまった以上は引き返すことは出来ない。ミリアのためにも、雪心ちゃんのためにも、なんとかしないといけないだ。
「くっくっくっ」
突然笑い出した閃華に昇の思考は途切れて疑念の眼差しを送る。
「閃華、突然笑い出してなに？」
「いや、大したことではない。昇もいろいろと成長したもんじゃなと思っただけじゃ」
「それってどういう意味？」
「そういう意味じゃ。さて、いつまでもミリアの部屋にいても仕方なかろう。そろそろ我らも下りるか」
「……そうだね」
そして昇は腰を上げると、ミリアの部屋の電気を消して出て行く。
そして階段を下りる途中にある窓から夜空を見上げる。
そういえば、雪心ちゃんはどうしてるんだろう。
「昇、どうかしたか」
「えっ、いや、なんでもないよ」
雪心ちゃんはああ言ったけど、やっぱり今でもミリアの事を友達と思ってくれてるんだろうか。それとも、本当に戦わないといけないのかな。
昇はそんなことを思っていたが、他の場所では確実に事態は動いていた。

「ミラルドが気付いたと？」
「はい、今はマルドが追っております」
「逃がしたのですか」
「申し訳ありません、サファド様」
そこは玉座の間。サファドは玉座に腰をすえて下に控えている冷峰から報告を聞いていた。
あの方は強いから味方にしようとしたのですけど、まさかここまで鼻が利くとは思いませんでしたよ。
「まあ、いいでしょう」
「では、私はマルドの応援に」
「いえ、私が出ます」
「おや、サファド様がご自身で出るのですか？　そこまでしなくても良いのでは」
「私だけではありません。我が主にも来てもらいましょう」
普段でも目が細い冷峰だが、更に目を細めて首をかしげる。
「とにかく、留守は任せますよ。これ以上あの部屋に誰も近づけないでくださいね」
「御意」
それだけ言い残してサファドはマントを翻し、玉座の間から出て行く。

ミリアちゃん、やっぱり怒ってるかな。
そんなことを考えながら雪心は城の一角にある一室から夜空を眺めていた。
この城に戻ると何かがあったらしく、すぐに冷峰がやって来てサファドをどこかに連れて行ってしまった。
そこで仕方なく。雪心はこの城に設けてある自室で夜空を見上げ

ていたのだ。
　でも、仕方ないよね。ミリアちゃんが私の邪魔をしようと、シェードと戦おうとしたんだから、悪いのはミリアちゃんだよ。……でも、私の願いが叶ったら、もう一度、もう一度だけでいいから会いたいな。そのときミリアちゃんが謝ってくれたらまた友達になれるかな。
　雪心がそんな思いにふけっていると、突然ドアがノックされた。
「あっ、はーい、どうぞ」
「失礼します。我が主」
「サファド！」
　サファドの登場でとうとう自分の願いが叶うと思った雪心だが、サファドは別のことを雪心に告げた。
「申し訳ありません、我が主。準備が整っていましたのですが、突然ミラルドが裏切りました」
「えっ、なんで？」
「分かりません。我が主の恩を忘れて今は逃亡中です」
「そう」
「そこで、我が主にも協力して欲しいのです」
「先にお母さんを取り戻してからじゃダメ」
「このままミラルドが逃亡を続ければ、我が主の母君は二度と蘇られなくなる可能性があるのです」
「そっか、分かった。どうすればいいの？」
「では、目を閉じて、心を落ち着けてください」
　雪心はサファドの言うとおりにする。
　そしてサファドは雪心の額に手を当てると小さな光と共に手の平サイズの魔法陣が出現して、次の瞬間には雪心は気を失い、深い眠りについた。
　倒れてくる雪心を抱きかかえるサファド。そして雪心を抱き上げるとそのまま部屋を出て行こうとした。
　だがその前にシェードが立ちはだかる。

「雪心をどうするつもりだ？」
「シェード、そんなに怖い顔をしないでください。ミラルドのことはすでに聞き及んでいるでしょ」
「俺にはそれが信じられん。あのミラルドが何の根拠もなく裏切るとはな……」
「ではあなたも探ってみますか、ミラルドと同じ物を。そしてそれを発見した時、あなたはどうするのでしょうね。我が主を悲しませることをしますか？」
「……」
「では私達はミラルドを消し去りに行きます。留守は任せましたよ」
シェードは道を開けると、そのまま雪心を抱えているサファドの背を見送った。そして完全に見えなくなると思いっきり壁に拳をぶつける。
「くそっ、結局俺には何も出来ないのか！」
一人取り残されたシェードを静寂の夜が包み込む。

第二十六話　始まりの夜（後書き）

今更ですが、この作品は一話自体が長すぎますね。そのためか最近では携帯読者よりＰＣ読者が増えているようです。……がんばれ、携帯読者。というか携帯向きに空行を入れてもいいんですけど、そうするとページ数が凄いことになりそうなんで、というかこの話でも文庫本サイズに直すと１４．５ページ行くみたいなんで、空行を入れるとその倍、つまり２９ページぐらい行きそうなんで、さすがにそれはどうかと思ったりもします。

だからがんばって付いてきてくれ携帯読者、私は君達のことを応援してるぞ。はい、そこの方、だったらもっと読みやすくしろよ、とか思わないように、私にも限界がありますから。はい次の方、そこを何とかするのが作者の役目だと思わないように、そんな事を思ってしまった日には私が土下座するしかないじゃないですか。というか無理な物は無理だーーー！

はい、そんな訳です。とりあえず携帯読者の方にはがんばってもらいましょう。今の私にはそれしか言えん。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、頑張って携帯読者を応援している葵夢幻でした。

第二十七話　見え始めた真実

「おかわりー！」
ミリアは空になったお茶碗を勢い良くシエラに突き出した。
「ミリア、なんでそんなに良く食べるの」
さすがのシエラも呆れたようにご飯を山盛りにしてミリアに返してやった。
「いや～、だって、ここ最近ずっと落ち込んでたから、たぶんそのリバウンド」
ミリア、たぶんそのリバウンドの意味は違うと思うよ。
「でもよかったわ。ミリアちゃんが元気になって」
「あははっ、ご心配をおかけしました」
和やかなミリアと昇の母ある彩香との会話。昇はそれを何故か複雑そうな表情で見ていた。
「んっ、どうしたの昇。変な顔して、末期症状？」
「何の末期症状なんだよ。というか、母さんもこの状況に慣れてきたな～って思っただけだよ」
「そうね。今まで昇と二人っきりだったから寂しかったけど、今では賑やかになって、お母さんは毎日が楽しいわ」
「はいはい、そうですか」
「何昇、何か不満でもあるの？」
「いえ、何もありません、お母様」
彩香に黒いオーラが見えた昇は、とっさに敬礼、反抗の意思がないことを示した。
というか母さん、シエラ達だけじゃなくて、僕にも少しは優しくしてよ～。さすがに毎回死に掛けるのは辛いんですけど。
昇は別にマザコンというわけではないのだが、彩香の教育方法がムチどころか金棒を使っているように昇には感じている。それほど、彩香は昇に容赦が無い時がある。

だが器の大きいところもあるようで、いきなり押しかけてきたシエラ達には文句を何一つ言わずに受け入れたのだ。だからなのか、昇は前よりも彩香に頭が上がらなくなってしまった。

昇はシエラ達だけには優しい母親を見ながら溜息を付く。

「おかわりー！」

昇がそんなことを思っている、再びミリアが勢い良く茶碗を差し出していた。

「まだ食べるの？」

さすがのシエラも呆れたようだ。

「琴未～、オカズまだ？」

「今やってるわよ」

現在滝下家の台所はシエラと琴未が仕切ってることが多い。さすがに二人ともタダでお世話になる気はなく、家事の手伝いは積極的にやっていた。

「ミリアちゃん、育ち盛りだから沢山食べないとね」

精霊にそんなものがあるんだろうか？　というか母さん、ミリアは母さんより年上なんだよ。……まあ、一応。

「まあ、ここ数日ほとんど食べておらんかったからのう。シエラも琴未も文句を言わずに作ってやるんじゃな」

「じゃあ、閃華も手伝いなさいよ」

「残念ながら、私は料理は不得手なんじゃよ」

「平然と嘘を言うな！　ウチにいたときにはちゃんと料理してたじゃない」

「へぇ～、閃華も料理できるんだ」

「まあ、長年生きておるからのう、それぐらいは出来るぞ」

「じゃあ、手伝って」

「いやいや、残念ながら、今は手が離せんのじゃ」

「なんでよ」

「うむ、丁度崖のシーンじゃからのう、そろそろ犯人が自白をする頃じゃろ」

「って、なに二時間ドラマ見てんのよ！」
「じゃから琴未、がんばれるんじゃぞ～」
「はいはい、わかったわよ」
「ははっ」
そんな和やかに過ぎて行く滝下家の時間。
だが突然近くに力の発生を感じると、それはすぐに広がり始めた。
「むっ！」
「皆！」
「分かっておる、全員落ち着け」
状況を理解していない彩香だけを残して、シエラと琴未は料理を中断してミリアも口の中の物を飲み込んで閃華も警戒態勢に入っていた。
そして力の広がりは滝下家を通り抜けて、世界を灰色に塗りつぶしていく。
「精界！　いったい誰が？」
そして滝下家には昇達だけが存在して彩香は現実に取り残されてしまった。
「ふむ、この色の精界は刃系の精霊じゃな。それにこの力、どこぞで覚えがあるんじゃがのう」
「本当？」
「うむ、それにもしやしたらロードナイトが関わっておるかもしれん」
閃華の言葉に全員に緊張が走る。
「じゃあ、また襲ってくるって事」
「居場所がバレた？」
「いや、そう感じでもないみたいじゃ。とにかく、力が発生したところに行ってみたほうが早いじゃろ」
「うん、なら行こう」
昇の言葉を合図に全員が一斉に動き出して滝下家を後にした。

そこは昇の家から近い運動公園。ここを中心に精界を作り出したみたいだ。
「ここなの？」
精霊でない昇にはいまいち精界の中心点は良く分からないが、精霊達とエレメンタル発動時の琴未には、しっかりとここが精界の中心点だということが感じ取れた。
「うむ、ここで間違いないんじゃが」
「誰もいないね」
「うむ、もうどこかに移動したのやもしれんな」
「じゃあ、この精界を作り出した精霊はもうここにはいないのかな？」
「うむ、その可能性も、ッ！　誰じゃ、そこにいるのは」
閃華が右にある茂みに向かって叫ぶのと同時に、すでに精霊武具をまとっているほかのメンバーが茂みにそれぞれの刃を向ける。
「さすがだな、気配は殺したつもり、だったんだが」
「その声、ミラルドか？」
「ああ、それとあまり騒がないでくれ、奴らに見つかる」
「奴らって？」
「無論、ロードナイト達だ」
その言葉に閃華以外の者には衝撃が走った。だが閃華にはふに落ちない事があり、どうしてもミラルドの言葉をそのまま受け止めることが出来いようだ。
「ミラルド、そなたもロードナイトの一人ではないのか」
「ふっ、さすがに気付いてたようだが、今では裏切り者だ」
「それではいまいち信頼に足りんな」
「やれやれ、まあ、そうだろうが、しかたない、この姿を見てもらえば分かるだろう」
その言葉を最後に茂みが揺れてミラルドが昇達に前にその姿を現した。

「うわっ、ひどっ」
「うぬ、お主ほどの者がここまで手ひどくやられるとは、相手は一人ではないな」
茂みから出てきたミラルドは全身ボロボロになっており、精霊武具の甲冑も多少破壊されている。そのうえ左腕には大きな傷を負っているようだ。
「これで分かったか、閃華」
「うむ、では、この精界を作り出したのもミラルドお主か」
「そうだ。とりあえず閃華、お前に話がある。ここでは見つかると危険だ。こっちに」
そう言ってミラルドは足にも怪我負っているのか引きずるようにして、昇達を茂みの奥へと先導して行った。
茂みを少し進むと開けた場所があり、さすがに五人も増えると一気に狭くなるが、それでも話を聞くだけでも充分だった。
そこへ、円陣の様に座るとミラルドは昇を見詰める。
「閃華、そいつがお前らの契約者か」
「うむ、滝下昇。なかなか面白い奴じゃ」
「そうか、それでお前達はどれだけの情報を掴んでいる」
「その前に、怪我の手当てをしないと」
「構わん、どうせ俺はすぐに実体化が解かれるはずだ。そうすれば、こんな怪我なんぞ一瞬で治る」
そうなのと昇は閃華に目線を送り、閃華も黙って頷いた。
「それで、わざわざ精界を作り出したのは私に用があったからじゃのか」
「ああ、羽室とスクラウドがお前達にちょっかいを出したことは知っていた。だから、お前達に告げるのが一番いいと思っただけだ」
「それでこの間出合った場所の近くに精界を作り出したんじゃな」
「ああそうだ。私ではこれ以上は無理だったからな。だからお前達に託すのが一番いいと思った」
「いったい何を？」

「……お前達、古泉雪心（こいずみきよみ）という少女を知ってるか」
思いがけない名前が出てきたことに昇達は大いに驚き、ミリアはミラルドに詰め寄る。
「雪心が、雪心にいったい何が起こってるの？」
「ミリア」
昇はミリアの肩を掴むと、そっと元の位置に座らせる。
「その様子だと、ずいぶんと知ってそうだな」
「当たり前だよ。私と雪心は友達だもん」
「そうか、あの子にもいつの間にか友達が出来ていたのか」
「それでミラルド、その雪心がどう関わってくるんじゃ」
「全ては雪心を中心に動いていた。俺がロードナイトの一員になったのも、最初は雪心の願いを叶えるために協力して欲しいといわれたからだ。だが、それは大きな間違いだったんだ。すべてはあいつの、サファドの野望のためだったんだ」
「サファド？」
「その様子だと知らないようだな。サファドはロードナイトを作り出した、いわばロードナイトの頂点に立つ者だ」
「ふむ、どうやらそのサファドとやらが今回の黒幕らしいのう」
「ああ、その通りだ」
「それでお主の事じゃ。サファドの動きに不審な点を見つけて嗅ぎ回ってたんじゃろ。そしてなにかをつかんだ、だから逃げ出して追っ手をかけられている。そんな所じゃろ」
「さすがだな閃華、話が早い」
「それでミラルド、お主が掴んだ物とはいったいなんじゃ」
「最近、精霊王の力が移動していることは知ってるか」
「うむ、エレメンタルロードテナーが決まっていないのに精霊王の力が、少しずつじゃが移動していることは掴んでおる」
「その移動先がサファドの拠点であるロードキャッスルで、ロードナイト達の住処でもある」
「むぅ、そのサファドとやらは精霊王の力をどうするつもりなんじ

や。そこいら辺がいまいち視えてこんのじゃが」
「そこで一番大事な存在が、雪心という少女だ。サファドは雪心に精霊王の力を移そうとしている」
「じゃが、雪心は器の資格を持ってない契約者じゃ。そんなことをしても精霊王の力は溜まることなく、雪心を通り抜けていくだけじゃろ」
「だから、サファドは雪心に器を作ったんだ。精霊王の力を受け入れる器を」
「う～む、ますます分からん。それだったら、最初から器のある者を騙せばいいのではないのか」
「いや、あえて器の資格を持たない者をサファドは探していたんだ」
「何故？」
「器は完成しては困るんだ。多少の穴を開けないと意味がない。そうしないと精霊には精霊王の力に触れることも出来ないからな」
「そうか、そういうことじゃったか」
納得したのか閃華は大きく頷くと、ミラルドは疲れたように木により深く寄りかかる。
……えっと、僕にはさっぱり意味は分かんないんだけど。
昇はシエラ達を見るが、どうやらシエラ達もいまいち事態を飲み込めていないようだ。
「これでようやく、全てが見えてきたのう」
「あの、閃華、悪いんだけど僕達にはさっぱりワケが分からないんだけど」
「ふむ、そうじゃのう。事態はかなり複雑に絡み合っておる。じゃから細かい説明は後にしよう」
「そ、そうなんだ」
そう言われては昇達も引き下がるしかなかった。
ただ一つだけ分かっていることだけは、目の前にいる精霊が元ロードナイトで今では裏切り者として追われており、昇達はミラルドをかくまっているという事だけだ。

だがミラルドと閃華はそんな昇達を放っておいて会話を続けていた。
「だいたい理解できたみたいだな、閃華」
「うむ、後はサファドの拠点、ロードキャッスルの場所が分かれば良いんじゃが」
「さすがに今の俺には案内することは無理だな」
「それは分かっておる。それで場所は？」
「この町の中心点に大きな公園があるだろう」
「うむ、中央公園と呼ばれる税金を無駄使いして作った公園じゃな」
「そこにあるのだが、普通の方法では入れない。サファドが張り巡らせている特殊な結界はロードナイト以外を入ることを拒む。そのうえ侵入しようとすれば、結界が察知して侵入者を焼き殺す」
「随分と強固な結界みたいじゃな」
「それだけじゃない。ロードキャッスル内は無数の機動ガーディアンが配置されている」
「機動ガーディアン？」
「古代魔道技術が作り出した動く魔道兵器の事じゃ。じゃが、それだけではなくロードナイトもおるのだろう」
「当然侵入者を排除しようとするだろうな」
「ということは、またあの戦闘狂と戦わないといけないわけ」
「まあ、そうなるじゃろうな。じゃが琴未、もしそうなった場合は決して負けることは許させんぞ。負けは自分の死を意味するものじゃし、雪心も救えなくなる」
「って、閃華、雪心って今はそんなに酷い状況なの？」
「落ち着けミリア、今のところは大丈夫じゃろう」
「でもでも……」
「ミリア」
昇はミリアを肩を掴んで下がらせると、優しく頭を撫でる。
そんな時、霧でも出てきたかのように辺りを白く染めていった。
「まずい！　お前らここから逃げろ」

「いや、もう遅いみたいじゃ。ミリア、頼む」
「えっ？」
「とにかく全員を守るんじゃ！」
「う、うん、分かったよ。アースドーム」
ミリアがアースハルバードを地面に刺すと、土が盛り上がり昇達を囲むようにドーム状になり、完全に外界と遮断した。
そしてすぐにドーム内でも分かるほどの衝撃と爆発、そして熱が伝わってきた。
「くっ、何この暑さ」
「たぶん水蒸気爆発だ。俺を追ってるロードナイトの一人、マルドの仕業だろう。奴は雲の精霊だからな」
「なるほど、雲は水蒸気の塊のような物だから」
「これくらいはお手もの、ということじゃな」
衝撃が収まり熱も引いていくとミリアは自分達を囲っていたドームを解除する。
「うわっ、すごっ」
昇が驚くのも無理はない。なにしろ先程まで木々が生い茂っていた林が完全に消滅したのだから。林だけではない、公園内にある物全てが吹き飛んでいた。
「そこにいたか」
上から聞こえてくる静かな声に全員の視線が上空に浮かんでいるマルドに集中する。
マルドは薄手の甲冑に長身で、その身長よりもでかい斧を持っていた。
そしてマルドの隣に突然姿を現す陰が一つ。
「サファド！」
ミラルドの叫びに全員が新たに現れた精霊に注目する。
この、少年みたいな精霊がサファド。今回の黒幕。
「ご苦労様でしたマルド、あなたはもう下がりなさい」
「御意」

マルドは一礼だけすると、その場から姿を消した。
「さてミラルド。まさかあなたにあれを見られるとは思いませんでしたよ」
「こう見えても感はいいほうなんでね」
「そうなんですか、そうと知っていればロードナイトに加えることはしませんでしたのにね。あなたのおかげで手を焼く羽目になってしまいました」
「なんなら本当に火傷を負わせてやろうか」
「ふふっ、それは無理ですよ。もうすぐあなたは消えるのですから」
サファドは右手を横に突き出すと魔法陣が現れて、その魔法陣からゆっくりと現れてくる人影。
その人影を見てミリアは声高に叫ぶ
「雪心――――！」
だが、その悲痛にも似たミリアの叫びは決して雪心に届くことはなかった。

第二十七話　見え始めた真実（後書き）

……そんな訳で二十七話をお送りしました……。

テンション低っ！　といますかね、今回はこんな話になったんですけど、なんといいますか、はっきりいいますと、納得できるほど書けなかった、という感じがします。

いや～、やっぱり書いてるとどうしても行き詰るというか、表現しきれないというか、特に今回は真実を明にしながらストーリーを少し進めないといけないので、そこいら辺に苦労しました。

まあ、もしかしたら読者の皆さんも真実を理解できてないと思いますが、次回簡単に真実を明にする予定なので、皆さん諦めずに付いてきてくださいね。特に携帯読者の皆さん、がんばって付いてきてくれ。俺は応援してるぞ～。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、最近後書きが長くなってきたなと思い始めた葵夢幻でした。

第二十八話　やるべき事、進むべき道

「雪心――――！」

ミリアの悲痛な叫びは雪心には届かない。雪心は眠っているかのようにサファドが抱えてるからだ。

「雪心に何をした！」

雪心を抱きかかえるサファドに吼えるミリア。だが、そんなミリアの姿をサファドは笑い飛ばすだけだった。

「あははっ、何をそんなに必死になっているんですか。そんなにこの受け皿が大切なんですか」

「受け皿じゃと、お主はやはり……」

「おや、随分と察しのいい方がおりますね。そうですか、ミラルドが頼るということはあなたが閃華ですか」

「ほほう、私の事を知っているとは随分と有名になったもんじゃのう」

「ええ、あなたの事は一度聞き及んだことがありますから。契約者が禁を犯し、歴史を変える自体を巻き起こしたことを」

「えっ、閃華！」

「うろたえるでない。全ては昔のことじゃ」

「そうですね。昔より今を大切にすることにしましょう」

サファドはそれだけ言うと、雪心の体が徐々にサファドから離れて宙に浮くようにして立った。

そして雪心の前に魔法陣が現れると、急にミラルドが苦しみ始める。

「ミラルドさん！」

駆け寄る昇だが、そんな昇にミラルドは静止をかける。

「構う……な、全ては、わかっていたことだから……な」

「いったい、ミラルドさんに何をしている！」

叫ぶ昇の姿をサファドは笑みを浮かべながら見下ろす。

「何をしてる？　決まってるではありませんか、ミラルドは我らを裏切ったのですよ。裏切り者には制裁をするに決まってるじゃないですか」
「制裁って！」
「昇、落ち着いて」
今にも駆け出そうとする昇の腕を掴むシエラ。その瞳は昇を心配げに見詰めており、そのおかげで昇は冷静さを取り戻していく。
そして閃華は落ち着いた昇の肩に手を置いた。
「心配するでない。ミラルドの症状からして仮契約を強制的に消し去っておるだけじゃ」
「仮契約？」
「うむ、雪心の能力は仮契約じゃ。仮契約は正式な契約をせずとも精霊を実体化させることが出来る能力じゃ。サファドは雪心の能力に干渉してミラルドの仮契約を強制的に破棄させているだけじゃ」
「サファドが雪心ちゃんの能力に干渉してって、そんなことが出来るの」
「うむ、普通は出来ん。じゃがサファドは長い時間をかけて雪心にいろいろと術式を施しておる筈じゃ。じゃからそんなことが出来るんじゃろ」
「じゃあ、ミラルドさんは」
「ただ実体化が解けているだけじゃ」
「それだけではありませんがね」
宙に立っているサファドが急に会話に割り込んでくる。昇は笑みを浮かべながら話しかけてくるサファドを思いっきり睨み付ける。
なんだ、なんかこいつの笑顔だけは気に食わない。
そんな昇の気持ちをあざ笑うかのように、サファドは口を開く。
「ミラルドには少し眠ってもらうことしました。まあ、すぐに誰かと契約をされても困るのでね」
「なるほどのう、仮契約を解除するのと同時に封印もしようというわけじゃな」

「ええ、あなた達と契約されても困りますから」
「だそうだ昇、ミラルドは消えるわけではない、精霊である本来の姿に戻るだけじゃ。まあ、復活するのには時間が必要じゃがな」
「そう、なんだ」
そう言われてもいまいち納得できなかった昇だが、ミラルドに心配はないことだけを確認すると一安心する。
そんな昇の状態を確認した閃華は昇の元から離れて、体が半透明になっているミラルドの元へと行った。
「すまないな閃華、やっかいな事を押し付けてしまって」
「なに、構わんぞ。そなたがこんでも私達は動いていたじゃろう。まあ、そなたが情報を持ってきてくれただけで動くのが早くなっただけじゃ」
「そう、か」
「それにしても、わざわざ裏切るとは、相変わらずそなたは不器用じゃのう」
「別に好きで裏切ったわけではない。探っていたら、見つかっただけだ」
「それでも充分な裏切りじゃ。そなたには間者は無理じゃのう」
「ははっ、相変わらず、容赦が無いな」
「そなたが不器用なだけじゃ」
「そうかもしれんが、俺にはこういうやり方しか、出来ん」
「じゃろうな、そこがそなたのいいところでもある。後のことは心配するな、今はゆっくりと眠るがよい」
「そうだな、そうさせて、もらおう」
その言葉を最後にミラルドの体は光の粒へと変わっていき、光の粒は宙を舞いながら消えていく。
「さて、後はあっちじゃな」
その言葉を合図に、昇達は一斉にサファドを睨み付ける。
だが、サファドはそんなことをまったく気にすることなく。再び下りてきた雪心を抱きかかえるのだった。

「雪心を返せー！」
叫ぶミリアにサファドは不思議そうな顔して首をかしげる行為をする。
「返せ。我が主雪心はロードナイトの長であり、あなたの所有物ではありませんよ」
「し、所有物とか言うなー！　雪心は友達だ、だからこれ以上お前の野望の為に雪心を犠牲にするな！」
「ふふっ、ふっははははっ、あーはっはっはっー」
「何がおかしい！」
「精霊と人間が友達？　そんな関係を作ってどうするんですか、そのような関係は互いに傷つけあうだけですよ。まあ、私には関係ないことでしたね」
それだけを言ってから、サファドは自分の足元に魔法陣を出現させる。
「待て！」
「そこの友達と吼える精霊とその契約者の人間、もし我が主を取り戻したいのなら、我が城までくるといい。せいぜい歓迎してあげますよ。まあ、これたらの話ですがね」
そして魔方陣は強い光を放つとサファドと共に消え去った。
「雪心――――！」
虚空に叫ぶミリアの悲痛な叫び。その場の誰もが聞きに耐えなかったが昇はミリアの肩を後ろから両手を置く。
「……昇～」
今にも泣き出しそうな声で目に涙を溜めながらミリアは振り返る。
「大丈夫、必ず、絶対に雪心ちゃんを助け出すから」
それは昇の決意の表れ。強い意志がこもった昇の眼差しにミリアは涙を流しながら何度も頷いた。
「さて、じゃあ閃華、説明してくれ」

あれから滝下家に戻った昇達は、いきなり消えたことに驚いている昇の母、彩香に適当に言い訳をした後にいつものように昇の部屋に全員集合していた。
「うむ、そうじゃのう、まずは何処から話そうか」
「雪心は、雪心は大丈夫なの！」
真っ先に雪心の事を聞くミリア。やはり心配はぬぐいきれないようだ。
「ではまず、雪心の事からから話すとするかのう。とりあえず、雪心は今のところは大丈夫じゃろう。じゃが、それも時間の問題じゃろ」
「というと？」
「うむ、雪心に器の資格が無いことは知っておるな」
全員が無言で頷いた。
「サファドは器を持っていない雪心に器を作ったんじゃ。つまり、今の雪心は未完成の器の資格を持っていることになる」
「未完成って事は、これから完成させるって事？」
「いや、そうではないじゃろ。サファドはあえて未完成にしている。つまり器の底に小さな穴が開いた状態じゃな」
「いったい何のために？」
「うむ、こんなことは考えたく無いのじゃが、結論としてはそれしか考えられんのじゃ」
「閃華、もったいぶらないで早く言ってよ」
「せくでない、琴未。うむ、では簡単に結論を言うと、サファドは未完成の雪心に精霊王の力を移して流れ出てくる精霊王の力を自分の物にしようとしておる訳じゃ」
その言葉にシエラとミリアは衝撃を受けるが、昇と琴未にはいまいちピンと来ないようだ。
「えっと、それってどういうこと」
「つまり、雪心に溜まった精霊王の力は一度人間に触れたことになるからその力は雪心のものになる。じゃが雪心の器は未完成じゃか

ら精霊王の力が流れ落ちるのは必然じゃな。サファドはその流れ出た力を取り入れようとしておるのじゃ。」

「精霊は直接は精霊王の力に触れることが出来ない。でも、人間は違う。エレメンタルロードテナーが存在すると決まっている以上は人間にしか精霊王を受け入れるすべは無いはずだった」

「じゃから、サファドは精霊王の力ではなく。雪心の力に変換された精霊王の力を手に入れようとしておるわけじゃ」

つまり結論にすると、サファドが精霊王になるってこと。……あっ。

「ちょっと待って、それじゃあこの地球を維持してる精霊王の力はどうなるの？」

「もしそうならば、全てはサファドの意思で決まることじゃ」

「精霊王が意思を持たないのは、精霊王が自らの意思で人間達を裏切ることを懸念した古代の魔道技術者達が決めた事。だからサファドが精霊王になれば」

「この世界はあやつの物と言ってもいいじゃろう」

「ちょっと、それって凄く話が大きくなってるじゃないのよ」

「うむ、じゃから琴未、未だに私達精霊も受け入れがたいんじゃ。現実離れしすぎてる話じゃからのう」

「……っていうか、閃華。もしかして、世界の命運が私達の手にかかってるの？」

恐る恐る聞いてくる琴未に閃華は無言で頷いた。

「ちょ、どうすんのよ。そんな事を私達だけでやれって事なの！」

「落ち着いて、琴未」

「って、昇、昇はどうも思わないの！」

「琴未、例え世界の命運が僕たちの手にかかって様とも、僕達は僕達のやるべきことをしなきゃならないんだ。雪心ちゃんを助けるっていう事を」

「昇」

昇の力強い瞳に琴未を始め、シエラとミリアも引き込まれそうに

なるが、ミリアは昇が雪心の事を第一に考えてくれていることが嬉しかった。
「とにかく閃華、サファドの城、ロードキャッスルだっけか、まずそこに行かないと」
「うむ、場所はミラルドが教えてくれたから分かるんじゃが。後はどうやってそこまで行くかじゃな」
「話を聞いただけでも、相当強固な結界が張られてる」
「まずはそれを突破しないとか……」
さすがにその解決方法が見つからないのか、その場の全員が黙り込む。
そしてそんな静寂が続くこと数分、閃華は何かを思い出したように手を叩いた。
「おお、そうじゃった。ついうっかり忘れておった」
「閃華、どうしたの」
「うむ、ちょっと電話をしてくる」
「えっ、閃華、ちょっと」
琴未の制止を聞き流して閃華は部屋を出て行った。そしてその場の全員がお互いに目線を合わせて首をかしげるのだった。

「どうですか、直り具合は？」
ロードキャッスルの奥の奥にあるその部屋に、サファドが入ると今まで何らかの作業をしていた冷峰が振り向く。
「サファド様。とりあえず破損は少ないのですが、それでも複雑な術式を組上げて作り出した物ですから完全に修復するには少し時間がかかるかと」
「そうですか。でも困りますよ、いくらミラルドが裏切った現場を押さえたとしても装置を壊されるなんて」
「すいません。まさかミラルドがいきなり装置を破壊するとは思っていなかったので」

「まあ、それがあだとなりミラルドは深手を負ったんでしたね。まあ、よしとしましょう」
「今後はこのようなことがないように気をつけます」
「そうして下さい。そうでないと、私が王となった時はあなたに補佐は任せられませんから」
「はっ、ロードナイトの名にかけて」
「では、作業に戻ってください」
「御意」
それだけを言い残してサファドは部屋から出ていくと広く長い廊下を歩き始めた。
やれやれ、本当ならすぐに出来るはずだったのですが、まさかこんな足止めを喰らうとは思いませんでしたよ。
それと先程の契約者、かなり強い力を感じましたね。もしかすると本当に乗り込んでくる可能性もあるかもしれませんね。機動ガーディアンを入れれば数では勝っているのですが、念のために警備を強化しておきましょう。
まあ、私が王になればそんな物は無用なんですがね。今は私にとっても正念場というところでしょうか。警戒を怠ることはさけましょう。それに、もしかしたら面白い見世物になるかもしれませんからね。羽室もスクラウドもそろそろうずきだす頃ですから、丁度いいかもしれません。
「ふふっ、あーっはっはっはっ」
廊下にサファドの笑い声だけが響きこだまするだけだった。

「昇」
突然話しかけてきたシエラに、昇は物思いにふけっているところを現実へと引き戻された。
「んっ、なにシエラ」
「あまり、無理しないように」

「大丈夫だよ」
そういって昇はいつの間にか隣に座っていたシエラの頭を撫でる。
それを見た琴未が行動を起こそうとしたとき、昇は口を開いた。
「この先どんなことが起きようとも僕は、シエラ達の、皆の傍にいるから、例え離れていても繋がっているから、だから大丈夫だよ。僕が皆と繋がっている限り決して負けないから、絶対にここに帰ってくるから」
『昇』
シエラも琴未もミリアも、その言葉に助けられた気がした。そしてその言葉は昇が自分自身にも言った言葉だった。
そうだ。ここには皆がいる、そして騒がしいけど楽しい毎日を送ってる、だから僕はここに帰ってこないといけないんだ。
雪心ちゃんを助けて、サファドを倒して、ここに帰ってこないといけないんだ。それが僕のやるべきことなんだ。
世界なんて関係ない。僕達に一番大事なことは雪心ちゃんを助けて二人の笑顔を取り戻す事なんだ。そのために、僕達は戦わないといけない。どんなに相手が強くても絶対に負けない。
そして、そして皆でここに帰ってくるんだ。
昇が決意を決めた時に部屋のドアが開いて閃華が元の位置に座る。
「ふむ、待たせてしまったかのう」
「大丈夫だよ、閃華」
「ふ～む」
「どうしたの閃華？」
「いや、なんでもない」
「んっ？」
昇にはワケが分からなかったが、それは只単に閃華が昇の事を見抜いただけだ。昇が自分の進むべき道を決めてもう迷いが無いことに。
「それで、閃華は今まで何やってきたの？　というか何処に電話かけてきたわけ」

「うむ、与凪のところじゃ」
「そうか、与凪なら場所さえ分かれば詳しく調べられる」
「そのとおりじゃ。とりあえず詳しく話してたら時間が長くなってしまったわけじゃが、明日には報告できるように今日中に調べてくれるそうじゃ」
「そっか、与凪さんにも迷惑をかけたね」
「なに、協力をすると言って来たのはあっちじゃ。じゃからそんなに気にすることではないぞ、昇」
「まあ、そうだけど」
「今回のような場合には、必ず与凪のようなバックアップが必要になってくる。だから昇は頼れるだけ頼ればいい。そう森尾先生も約束してくれたから」
「そっか、そうだね」
「では、話もまとまったことじゃし。いつ何が起こっても不思議は無い、じゃから今日の所は解散としよう」
「そうね」
「はぁ、なんか疲れてきちゃった」
「じゃあね、昇」
「ではな」
それぞれ言いたい事だけを言い残して、各自自分の部屋へと戻って行った。
一人っきりになった昇は思いっきりベットに倒れこんで天井を見詰める。
そんな昇の頭にふとこの前に見た、楽しそうに笑うミリアと雪心の笑顔が横切った。
さっき見た時の雪心ちゃんは眠っていたけど、その寝顔はとても悲しそうだった。なんだろう、やっぱり今の雪心ちゃんは悲しんでるのかな。ミリアと決別した事を嘆いているのかな。
もしそうだとしたら、助けないと。必ず、雪心ちゃんにも笑顔を取り戻してあげないといけないんだ。

誰かに言われたわけではない。誰かに決められたわけでもない。
それは昇が決めた事だからこそ、昇はしっかりと見据えなければいけなかった。これから進む道を。

第二十八話　やるべき事、進むべき道（後書き）

そんな訳でお送りした二十八話ですが、なんか書いている途中に『ここで強制的に最終話にしていいんじゃねえか』とか思っちゃいました。いや、でも、書きますけどねこれからも。

まあ、本編の下にある作者紹介の所をクリックすると私のホームページに飛ぶようにしたんですけどね。一応そっちでも長編は書いてたんですけど、今はエレメが忙しくなって一ヶ月以上続きを書いてない。だからかな、そんなことを思ったのは？

まあ、そんなことはさておき。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、妹に普通はホームページを重視するからそのやり方は変だよと言われた葵夢幻でした。

第二十九話　決意の朝

「全員起床じゃーーー！」
という叫び声と共に、カンカンカンという金属音が鳴り響いて昇は目を覚ました。
ん～、いったい何の騒ぎだよ
それでも昇は体を起こすと時計を確認する。
って、まだ五時じゃないか。いったいこんな時間に何の騒ぎだよ。
すると突然昇の部屋のドアが開いて閃華が入ってきた。
「おおっ、起きとったか昇」
「閃華、いったい何の騒ぎなの？」
「緊急事態じゃ、とにかく全員いつでも出かけられる準備をしておる」
「今日は学校じゃ……」
「じゃから、制服を着て下の降りてきて朝飯を食うのじゃ」
「……緊急事態じゃないの」
「腹が減っては戦は出来んじゃろ。とにかく、私はまだ起きてない者を起こしに行くからのう、早く準備をするんじゃぞ」
そういい残して閃華はとっとと昇の部屋を後にした。
う～ん、いったいなんなんだよ。
だがそれでも昇は言われたとおりに学校へ行く準備をして、下に降りていった。
「おはよ～、昇」
「おはよう琴未、なんか髪が凄い事になってるけど」
「ああ、うん、閃華が急いで朝食を作れって騒ぎ立てるからセットしてる暇が無かったのよ。だから朝食を作り終えてからやろうと思ってたの」
「う～ん、なんで閃華は朝からこんな騒ぎを？」
「そんなの私が聞きたいわよ」

そういい残して琴未はキッチンに入っていく。たぶんシエラもそこにいるのだろう。
「おはよ～、昇」
「おはよう、ミリア。なんか凄い眠そうだね」
「うん、眠い。スー、スー」
って、立ったまま寝てる！
「ミリア、ミリア」
昇がミリアの肩を揺さぶると、まるで鼻提灯が弾けた様にミリアはゆっくりと目を開けた。
「あっ、おはよう昇」
「いや、挨拶はもうしたから」
「……そう」
って、反応が薄！
「とりあえずシエラと琴未が朝食を作ってくれてるから、座って待ってようよ」
「うん」
……あの、ミリアさん。とりあえず、床じゃなくて椅子に座ろうよ。
「皆集まっておるか」
とその時、閃華が入って来たら床に座り込んでいるミリアを勢いで蹴飛ばしてしまい、ミリアはゴンッといういい音を鳴らして床に突っ伏すこととなった。
「う～、痛い」
額を擦りながら立ち上がるミリア。今度こそ完全に目を覚ましたみたいだ。
「おお、すまんかったのう。まさか、そんなところで寝てるとは思わなんだ」
もしかして閃華さん、確信犯ですか。
「それより、皆急いでくれ。六時には迎えに来るはずじゃから」
「迎えに来るって誰が？」

「もちろん森尾じゃ」
「って、先生がなんで？」
「うむ、今朝方早く電話があってな、誰も出んじゃろうと思って私が出たんじゃが、与凪からの電話じゃった」
その言葉が一同に緊張を走せる。
「何か分かったの？」
「うむ、状況が複雑らしいので詳しくは会って話すということじゃ。じゃから、私が皆を叩き起こしに回ったわけじゃ」
「そうなんだ。あれ、そういえば母さんは？」
「んっ、奥方か、奥方になら私達の問題だから心配ないと伝えておる」
「じゃあ、今は」
「ぐっすり寝ておるじゃろう」
母さん、前にシエラが母さんの事を器の大きい人って言ってたけど、その態度は大きすぎるんじゃないのか。もう少し息子達の事に関心を持とうよ。
というか、あれだけ閃華が騒ぎまわったのに未だに寝てるなんて、もしかして母さんは器が大きんじゃなくて神経が図太いだけなんじゃ。
「とにかく事態は急を要するようじゃ。琴未とシエラは早く準備してくれ」
「今やってるわよ。というか閃華も手伝いなさい！」
「うむ、残念ながら私はやる事がある。では朝食が出来たら呼びに来てくれ」
……もしかして閃華さん、逃げました。
その後は慌しい朝食を終えてから琴未やらシエラは準備に忙しく。結局、六時に迎えに来てくれた森尾を少し待たせてしまってから家を出て、六時半には学校に付くことが出来た。

そしていつも使っている生徒指導室へと昇達は入っていった。
「すまんのう、待たせてしまったか」
「大丈夫よ。けど、ちょっとやきもきしたかな」
「それで与凪さん、話ってなんですか」
「うん、それがね。どうやら今夜みたいなの」
「何がですか？」
「サファドの城、ロードキャッスルで儀式が行われるのが」
またしても昇達に衝撃が走る。
「それにしてもサファドっていう精霊、うまい方法を考えたわね」
「与凪さん。それってどういう意味？」
「サファドの目的は知ってるでしょ」
「精霊王になること？」
「そう」
「まあ、ここら辺は昨日説明したから分かるじゃろ、エレメンタルロードテナーが精霊王の力を少し使えるように、雪心にも精霊王の力を自分の力にすることが出来るわけじゃ。そして雪心の未完成の器は精霊王の力を流れ出すわけじゃ」
「というか、本当にそんなことが出来るの。確かシエラが前に精霊は精霊王の力に干渉できないじゃなかったけ」
「そう、そこが盲点だったの。滝下君、君がエレメンタルアップを行うときには自分の力を精霊に送ってるでしょ」
「そうだけど」
「サファドも同じことをやろうとしてるの。雪心の力と化した精霊王の力を自分に吸収させようとしてるわけ」
「でもそれは雪心ちゃんの力であって、精霊王の力じゃないんじゃ」
「甘いのう、昇。なぜサファドが器の資格を持たない雪心を選んだと思う」
「何でって言われても」
「答えは簡単じゃ。器の資格を持たないということは、ほとんど力を持っていないということじゃ。じゃが、これが私達には有利にな

っておる」
「というと」
「雪心は元々力を持っていないのじゃ。普通なら日数が経てば回復はするが、今の雪心の力は器を形作るために使われておるじゃろう。つまり、もう雪心の特殊能力である仮契約は使えない。つまり、これ以上ロードナイトは増えないということじゃ。その証拠にサファドは昨日わざわざ雪心を連れて我らの前に現れたんじゃ。雪心の力に干渉してミラルドの仮契約を解除するためにな」
「つまり、今の雪心ちゃんから流れ出てくる力は……」
「そう、全て精霊王の力じゃ」
そうか、つまり今の雪心ちゃん自身の力はゼロで持っている力の全部は精霊王の力なんだ。そして流れ出てくる精霊王の力をサファドが受け入れる。
それは僕がエレメンタルアップを使うときと同じで、僕は自分の力を精霊に送るんだけど、サファドは雪心ちゃんから送られてきた精霊王の力をそのまま取り込もうとしてるんだ。
そして精霊王の力が全てサファドに取り込まれた時、サファドが精霊王になる。
ダメだ。そんなことをさせちゃ絶対にダメだ。雪心ちゃん自身もそうだし、このままサファドの野望を成就させるわけには行かない。
「それじゃあ今夜の儀式はなんとしても阻止しないと」
「その手もあるけど、別の手もあるのよ」
「えっ、どんな？」
「精霊王の力は強大だからそんな一気に器に注ぎ込むことが出来ない。もし、そんなことをすれべ不完全な器は壊れてしまうから」
「って、ちょっとまって、それって雪心が」
「ミリアさん落ち着いて、まだそうなると決まったわけじゃないから」
「う、うん」
「それでね、器から漏れ出す力もほんの少しずつ、だから今は他に

戦力になる契約者と精霊を探して、こっちの戦力を上げるって手もあるわ」

「じゃが、そう簡単に見つかるかのう。この辺りでも昇以外の契約者はおらんし、協力者を求めるとしたなら、かなり遠出をしなくてはいかん。はたして私達にそんな時間は残っておるのかのう」

「それは、そうだけど」

そうか。

その時、昇はやっと自分が置かれている立場を理解したと感じた。

もう、僕達に残されてる時間はほとんど無いんだ。今ここでサファドに時間を与えてしまったら、サファドは精霊王の力を吸収してどんどん強大になっていく。だから、サファドの野望を打ち砕くには今しかないんだ。

そして、それが出来るのは僕達だけなんだ。他の精霊や契約者が気付いてるとは思えない。そもそもこの近くにいるのかさえ分からないんだ。そんなのは当てに出来ない。だからやるしかないんだ、僕たちが。

「与凪さん」

「んっ、滝下君、なに？」

「どうやったらロードキャッスルに行けます？」

昇のその言葉を合図に静寂がその場を支配する。まさか、誰も昇がそんな事を聞くとは思いもよらなかったらしい。いや、察してはいたのだけど、いざ言われて見ると唖然とするようだ。

「滝下君、本気？」

「もちろん。僕達しかサファドを止める事が出来ないなら、僕達がやるしかないんです」

「それは、そうかもしれないけど……。サファド達の力は強大よ。下手をすれば怪我どころか命の危険さえあるかもしれないのよ」

「覚悟の上です」

そのまま昇と与凪はお互いに見詰めあう。与凪は昇の覚悟を確かめるように、そして昇は与凪に覚悟を伝えるために。

「よし、じゃあ、いってこい」
だが、意外にも許可を出したのは森尾だった。
「ちょっと亮ちゃん、勝手に決めないでよ」
「大丈夫だって、今の滝下の目を見れば分かる。滝下がどれだけの覚悟で戦いに望むのかがな」
「はぁ、なんで亮ちゃんにはそんなことが分かるのよ」
「覚悟を決めた男の目は違うんだよ。それが男というものだ」
「……私には永遠に分からない世界だと思うわ」
さすがにこの発言には呆れたのか、与凪は眉間にしわを寄せて、そこを人差し指で撫で回す。
「まあ、そんなわけだ。滝下、自分が思ったとおりの未来を作るために戦わないといけないなら行って来い」
「先生、ありがとうございます」
頭を下げる昇だが、それとは関係なくシエラは呟いた。
「でもどうやってあの強固な結界を破ってロードキャッスルまで行くの？」
「……」
何故か静寂がその場を支配する。そんな中で与凪は静かに笑い出した。
「ふっ、ふふっ、ふふふっ」
「って、与凪さん、どうしたの？」
「もうこうなると笑うしかないのよ」
「えっ」
「はぁ、まさか本当に滝下君達が行くとは思ってなかったけど、準備しておいてよかったわ」
「んっ、ということは、ロードキャッスルに行く方法があるんじゃな」
「ええ、一応ね」
「何か引っ掛かる言い方ね」
「私が用意した方法は行くだけの片道切符、つまり行ったら戻って

くることは出来ない。サファドを倒すまではね。それでも行くつもり？」
「もちろん」
「即答しないでよ。はぁ、さすがにここまでくると呆れてくるわ」
「よっちゃん、男というものはそういう生き物なのさ」
「ごめん亮ちゃん、私には分からないわ。相手はロードナイトという強敵と無数の機動ガーディアン、どう見ても負け戦で無謀としか思えないわ」
「それでも行かないと、取り戻さないといけない物があるんだ」
『昇』
昇の決意がこもった言葉に視線が昇るへと集中する。
そんな中でミリアは昇の手を取ると、少し泣きながらその感触を確かめるように自分の頬に当てる。
「ありがとう、昇。雪心を、雪心を助けてくれるんだね」
「当たり前だよ。雪心ちゃんのためにも、絶対にサファドを倒さないといけないんだ」
「昇、ありがとう」
そんな二人のやり取りを皆は穏やかな目で見詰めているが、シエラは何かを思い出すように昇を見ていた。
（やっぱり、昇を選んだのは間違いじゃない。あの時もそうだった。昇は関係ない私を助けるために、体をはって守ってくれた。だから私は精霊に戻ってからは、昇の事を見続けた。いつか昇の傍に行ける日が来ることを信じて。だから、私は昇の傍にいる。昇を信じて、昇が決めた未来を作り出すために、私は絶対に負けない）
昇はミリアの涙を拭くと、与凪へと振り返る。
「それで与凪さん、どうすれば行けるの？」
「まったくもう、分かったわ、もう止めないわよ。とりあえず準備は出来てるから全員屋上集合」
「なんで？」
「詳しくは屋上で説明するわ」

それだけを言い残して与凪はさっさと出て行ってしまい。昇達も慌ててその後を追う。

そして屋上へと辿り着いた昇達が見たものは、半透明な三角錐の柱が六本、まるで何かを囲むように立っているのだった。

「与凪さんこれは」

「これが私の用意した片道切符」

「ふむ、転送魔術じゃな」

「そう、いくら強固な結界だからといっても破壊する必要は無いのよ。ほんの少し小さな穴を開けて、そこから入れば問題ないわ」

「でも、屋上にこんな物が建ってると目立つんじゃ」

「大丈夫よ。その柱は精霊と契約者しか見えないようにしてあるから、普通の人間には屋上にこんな物が建っていることに気付きはしないわ」

「そうなんだ」

「けど、転送魔術自体は結構派手になっちゃうから、こんなに朝早くに来てもらったんだけどね。それに本当に行くんだとしたら時間が無いのも確かだったからね」

「そうじゃな」

「それじゃあ滝下君、最後に確認するけど、この転送魔術で一度ロードキャッスルに行ったら、サファドを倒すか、ロードキャッスルの結界を張っている装置を破壊するしか戻ってくることは出来ない、それでも滝下君は行く？」

「もちろん、大切な物を取り戻すために。そして自分が決めた未来を実現させるために行くよ」

「……分かったわ。亮ちゃん、そういうわけだから後の事はお願いね」

「ああ、分かってる。今日は滝下達とよっちゃんは休みということで手続きしておくよ」

「うん、お願い」
「えっ、与凪さんも来てくれるの？」
「残念。前にも言ったけど、私は戦闘向きじゃないの。だから滝下君達を送ったらバックアップに回るわ」
「そうね、とりあえずロードキャッスルの地図は欲しい」
「それなら、ある程度用意してあるわ。さすがに奥の方は調べられなかったけど、手前の部分ならすぐに表示できるわ。後は滝下君たちの反応を追ってマッピングしてくから」
「分かった、お願い」
「まあ、そこら辺は得意分野だから任しといて」
「後は、目標の位置じゃな」
「それは実際に行って見ないと分からないわ。さすがに強固な結界を抜いての調査だったから、あまり奥の方は調べられなかったの」
「ふむ、じゃが雪心が手前の方にいなかったのは確かじゃろ」
「うん、それにこんな重要な儀式を警備の薄い手前の方でやるとは思えないから、たぶん奥の奥まで行かないと雪心ちゃんと会えないかも」
「とにかく、ロードキャッスルに入ったら奥を目指そう」
昇の言葉にシエラ達は同時に頷く。
「正直、行き当たりばったりでいかないといけないから何が起こるかわからないわ。だから皆気をつけてね」
「うん、与凪さんもバックアップよろしく」
「分かってるわ。じゃあ皆、始めるわよ」
与凪は柱の方へ手をかざして精神を集中させると、六本の柱は光だし、その中心点から魔方陣が現れた。
「じゃあ皆、魔方陣の中心へ」
与凪に言われたとおり、昇達は柱が囲む魔法陣の中心へと集合した。
「それじゃあ、行くわよ。皆、本当に気をつけてね」
「大丈夫だよ。僕達はまたここに帰ってくるから」

「はぁ、なんか滝下君にそう言われると、本当にそんな気がするから不思議だわ」
「それが決意を決めた男の言葉だからだ」
「はいはい亮ちゃん、もう分かったから、お願いだから気をそらさせないで」
与凪の冷たい言葉にショックを受けた森尾は、壁に向かって何かを呟くが、そんな森尾を無視して与凪は組上げた魔術を完成させる。
「行くわよ！」
「うん」
「転送―！」
六本の柱が同時に光だし、光が昇達を包んでいく。そして昇は変な感触を感じながら、その場から消えていった。
光が消えた後には、半透明の柱だけが残っており、昇達の姿はもうそこにはない。
そして与凪は天を仰ぐように見詰める。
皆、気をつけてね。そして、無事に戻ってきて。
そして与凪はまだ落ち込んでいる森尾を引きずりながら、いつもの部屋へと戻っていくのだった。

第二十九話　決意の朝（後書き）

……疲れた。

はい、そこの方、いきなり何言ってんだ、この作者はとか思わないように、別に書くことが思いつかなかったから本音が出たわけではないですよ。

そんな訳でお送りしました二十九話、次からはとうとう決戦の地、ロードキャッスルでの戦いが始まるわけですが、本当、どうなるんでしょうね。それを一番知りたいのは私だったりして、お願い神様降りてきてーーー！

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、何故か首が痛い葵夢幻でした。

第三十話　ロードキャッスル突入

光に包まれた昇は、あまりの眩しさに目をつぶっていたが、眩しくなくなると確認するようにゆっくりと目を開いた。
……着いたのかな？　うわっ、なんだあれっ！
昇が驚いた物、それは朝日とはそぐわないほど黒い城。作りからして西洋風の城はまるで入って来る者を威嚇するかのようにそびえ建っている。
あれが、ロードキャッスル。
「どうやら、全員無事に着いたみたいじゃな」
「閃華、じゃあ、あれはやっぱり」
「うむ、サファドの根城で間違いないじゃろ」
「はいはい、当たり前のことを言わない。というか、私がミスをすると思った」
「うわっ、与凪さん！」
突然昇達の目の前に現れたモニターに与凪が映し出されていた。
「うん、どうやら無事に全員転送できたようね」
「はい、それで雪心ちゃんは何処に？」
「はいはい、焦らない焦らない。とりあえずさっきも言ったけど、奥の事は行ってみないと分からないわ。だから皆はそのまま奥に入って行って」
「はい、分かりました」
そうして昇が歩き出そうとした時。
「後、その城の警備は厳重だから、そこから一歩でも動くとすぐに機動ガーディアンが召喚されるから気をつけて」
「えっ」
いや、あの、そういうことは一歩を踏み出す前に言ってもらいたいんですけど。
時すでに遅し。ロードキャッスルの巨大な扉の前に数十の魔方陣

が現れて、機動ガーディアンが召喚され始めていた。
「うわっ、もう出て来た」
「昇が一歩を踏み出すから」
すみませんでしたシエラさん。
「とにかくじゃ、こっちもいつでも戦えるように準備を怠るでないぞ」
その言葉を合図にシエラ達は精霊武具をまとい、昇も二丁拳銃とコートの武装姿になった。
そして昇達の準備が終わる頃には既に門前には三〇体程の機動ガーディアンが現れていた。
「さてそれじゃあ、あいつらぶっとばして先に進みましょ」
先行しようとする琴未だが、昇がそれを遮る。
「昇？」
「ここは僕がやる。皆はロードナイトを相手にしてもらうから、今は力を温存しといて」
「でも……」
それでも琴未は何かを言おうとしたが、シエラが琴未の肩を掴んでその言葉を飲み込ませる。
「今の昇なら大丈夫」
「そっか、そうだね」
今まで昇の相手をしてきた二人だからこそ、現在の昇の力を一番分かっている。だからこそ、この場を任せることが出来る。
「それじゃあ、いくよ」
昇は二丁拳銃を構えずにそのまま引き金を引くとシリンダーが回り、銃身と重なるたびに昇の周りには赤い球体が次々と出現していった。
昇は必要な分だけの球体を作り出すと、次は機動ガーディアン達に向かって銃口を向けて引き金を引き絞る。
「バルスシュート！」
赤い球体は力の弾丸となり一気に機動ガーディアン達を殲滅して

いく。
「ほう、ずいぶんと器用なことをするもんじゃのう」
「まあ、ただ撃つだけじゃ戦術が限られるからね。そう言ったら、昇るなりに考えていろいろな方法を思いついたみたい」
「その一つがあれ、それに力の使い方も覚えたみたい」
「ほう」
昇は全てのガーディアンを消滅させたことを確認すると、昇は二つの銃口をロードキャッスルの巨大な扉に向けて力を溜める。
その力は銃口には収まらず、すでに銃身から離れて銃口の前に大きく力を溜めていた。そして昇は引き金を引いて一気に力を解放する。
「ツインバスター！」
放たれた物は最早銃弾とは呼べずに砲撃のような物で、それはロードキャッスルの扉をぶち破り建物の内部で爆発を起こした。
……あれ？
『……』
何故か痛い視線が昇に集中する。
「……昇、とりあえず扉を破るだけでよかったんじゃが」
「ほらほら、中は凄く破壊されてるみたいだよ」
「昇、次は力のコントロールを覚えよう」
「というかさ、中まで破壊しちゃって大丈夫なの。ねえ、与凪」
「ちょっと待って琴未、今調べてるから。というか滝下君やりすぎ、おかげでジャミングが酷くて中の状況が確認できないわ」
……えっと、とりあえず、すいませんでした！
ロードキャッスルの入り口には粉塵が巻き起こっているが、それも徐々に晴れて中の様子が遠くからでも少しずつ確認できるようになった。
「皆、さっきの滝下君の攻撃はロードキャッスルのちょっとを破壊しただけで内部に影響は無いわ。それにラッキーな事に、中にいた機動ガーディアンの数がかなり減ったみたいね」

「まっ、結果オーライじゃな」
「でもよかったわ。いきなり入り口を潰されたら何処から入れば言いのよ、って言うところだったわよ」
「まあ、それだけロードキャッスルが頑丈に出来てたという事に」
「とりあえずよったね、昇」
……いや、というか、なんで僕だけそんなに責められるの？　……まあ、確かに入り口がつぶれたら元もこうもないし、内部でそんな事をやったら建物が崩れて生き埋め、なんてことにもなりかねないからな。……やっぱり、ちょっと反省しとこうかな。
だがそんな暇も無く、ロードキャッスルの内部から残りの機動ガーディアンが昇達を目指して飛び出してきた。
「いきなり何すんじゃボケ、ケツから手突っ込んで奥歯をガタガタいわしたる」
「……あの～、シエラさん、そのセリフはいったいなんなんでしょう？」
「あの機動ガーディアン達の心情を言ってみただけ」
いや、機動ガーディアンって確か機械のような物だよね。そんなのに心情なんてものがあるの。というかシエラさん、それは僕に責任を取れということでしょうか。
昇は二丁拳銃を迫ってくる機動ガーディアン達に向けると、両方の引き金を二回ずつ引いて四発の弾丸が発射される。
発射された四発の弾丸はそれぞれ一体ずつの機動ガーディアンを貫くと急旋回、別の機動ガーディアンを撃破して行った。
「ほう、誘導弾じゃな」
「今の昇は四発をコントロールするのが限界だけど、それでも戦術の幅は広がる」
「これも私達が昇の修行を手伝った成果よね」
……というか、最初の頃は地獄でしたけど。
そして昇は全ての機動ガーディアンを撃破すると後ろを振り向き皆に言う。

「行こう」
昇の言葉に全員が頷き、昇達はロードキャッスルの中に突入して行った。

その頃、玉座の間ではサファドが冷峰から侵入者の報告を聞いていた。
「まさか、本当に来るとは思いませんでしたが、来てしまったものはしょうがありませんね。冷峰、今から儀式を始めます。本当なら月夜の晩に始めたかったのですが、失敗しては元もこうもありませんからね」
「御意」
「それからロードナイト達も配置につかせなさい」
「それならば各自すでに向かっております」
「よろしい。では冷峰、あなたに全指揮権を与えます。決して儀式の邪魔をされないようにしてください」
「はっ、心得ております」
そしてサファドは儀式を始めるために、玉座を後にしようとしたが。
「あっ、そうそう、冷峰、あなたはこの玉座の間に待機していなさい。儀式場の門前にはシェードを配備させます。まあ、ここまで来るとは思いませんが念には念をいれるように」
「御意、では、そのように配備します」
「それでは後は頼みますよ」
「はっ」
そして今度こそサファドは玉座の間を後にして雪心の部屋へと向かう。
やれやれ、こんな朝早くからの奇襲とは、これだから無粋なやからは困りますね。もう少し演出という物を考えて欲しい物です。月夜の晩に私が王になる、それこそが最高の演出であり芸術だという

のに。
　まあ、結局は私の元へと来れないのですけど、もしかしたらすぐにやられてしまうかもしれませんね。まあ、少しはがんばってもらわないと面白味が無いですからね。少しは奮戦を期待しようとしますか。
　サファドは笑み浮かべながら長い廊下を歩いていった。

　ロードキャッスルに足を踏み入れた昇達がまず最初に入った場所はエントランスホール。そこには機動ガーディアンは居ない。どうやら先程飛び出してきたのがエントランスホールに残った最後の機動ガーディアンのようだ。
　機動ガーディアンが一掃されているエントランスホールを見渡すと中央には大きな階段があり左右に通路が延びており、それに一階にもそれぞれ通路と呼べる物がいくつか有った。
「与凪さん」
「はいはい」
　空中にモニターが現れて与凪を映し出す。
「これからどっちに行けばいい？」
「とりあえず、中央階段を上って右に進んでください。そのほかの通路は全てトラップみたいですから」
「分かった。じゃあ行こう」
　昇は与凪の案内に従いロードキャッスル内を進んでいく。途中で機動ガーディアンが現れるが、それらは全て昇が撃破して昇達は奥へと進んでいった。
　そして昇達が到達したのは上下別々に伸びた階段だった。
「与凪さん、どっち」
　再び現れる与凪。だが、先程までとは違って何故か申し訳なさそうにしている。
「ああ、ごめん。私が案内できるのはここまでなの」

「じゃあ、これから先は……」
「行って確かめてもらうしかないわ。けど、一つだけふに落ちないのよね」
「それはどういう意味じゃ」
「それがね。両方の階段とも、その先に強固な調査妨害の結界が張ってあるのよ」
「両方とも？」
「そう、両方とも。って、これは私の予想なんだけど、もしかしたら両方に儀式に必要なものがあるのかもしれない」
「なるほどのう。じゃから両方とも調査妨害の結界を張っておるわけか」
「じゃあ、両方に行かないといけないの？」
「う～ん、それがよく分からないのよね。もしかしたらどちらか一方を潰せばいいのかもしれないし、両方を潰さないといけないかもしれない」
「結局、分かんないんだ」
「琴未、そんな言い方しなくてもいいでしょ。私の能力にも限界があるんだから」
「じゃが困ったのう。せめてどっちに何があるか分かればよいのじゃが」
「たぶんだけど、それくらいなら分かるかもしれない」
「分かってるなら早く言いなさいよ」
「だから、たぶんって言ってるじゃない、確証は無いのよ。とりあえず、下の方からは精霊王の力を感じるし、上の方には人間の気配を感じる。だから上に雪心ちゃんがいるみたい」
「じゃあ、上に行こうよ！」
「ちょっと待ってミリア」
「う～、昇なにかあるの？」
「与凪さん、精霊王の力は上から感じられないの？」
「そうね、今のところは下の方しか感じられないわね」

「そうか、昇、そういうことじゃったか」
「閃華、何か分かったの？」
「よう思い出してみい。サファドは無理矢理精霊王の力を移動させておるんじゃぞ、つまり下にあるのは精霊王の力を吸い上げるポンプ」
「それに貯水槽みたいに力を溜めているかもしれない」
「確かにその可能性はあるわね」
「それでは昇、どうする」
閃華の問いに昇は目をつぶって考える。一番最善な方法を。
確かに、どっちかを潰せば止まるかもしれないけど、もしそうじゃなかったら……。しかたない。
「二手に分かれよう」
「うむ、それしかあるまいな」
「琴未と閃華は下に、僕とシエラとミリアは上に行くから。もし、下で予想通りにポンプを見つけたら破壊してそれから上で合流しよう」
「もし何も無かったらどうするの？」
「その時も上に上がってきて、上に雪心ちゃんがいるのは確かみたいだから、雪心ちゃんを助け出す手伝いをして」
「分かったわ」
「うむ、了解した」
「じゃあ、気をつけて。また上で合流しよう」
「うん、昇達も気をつけてね」
「はいはい、その前にちょっといいですか、。注意事項があります」
「いきなり何よ」
「皆さん、調査妨害の結界を突破したら注意深く進んでください。あまり早く進まれると私の調査が間に合いませんので」
「つまり慎重に進めって事ですか」
「けど、だからと言って慎重になりすぎる必要も無いけど、私の調査範囲を追い越さないようにしてください。まあ、トラップに引っ

掛かりたいなら別ですけど」
「そんなこと思うわけ無いでしょ」
「とりあえず、これからは皆さんの横には常にモニターを出しておきますので、そこに少し先の通路が表示されますから、表示されていない場所には行かないでください。そこはまだ調査をしていないところですから」
昇と閃華の横にモニターが現れて今まで辿ってきた道が表示されている。
「これからは皆さんを媒体にして調査しますから。たぶんですけど、結果以内の私の調査範囲はせいぜい十メートル程度ですから、あまり早く進まないでくださいね」
「分かった」
「では気をつけて進んでください」
与凪の顔が表示されていたモニターが消えて、地図が表示されているモニターだけが残った。
「じゃあ行こう」
全員が頷くと昇達は二手に分かれて進み始めた。そして調査妨害の結界を通り越すと、自分達を中心に十メートルぐらいの通路が表示される。
昇は横に有るモニターと視界で確認できる通路の先を見合わせる。
「どうやら上は一本道みたいだね」
「じゃあ、一気に雪心のところまで行こう」
「ミリア、あまり焦らない。変に焦ると全てが終わる」
「う〜、分かってるよ。というかシエラの言い方はいつも残酷だよ」
「私は真実を言ってるだけ、そして現実はいつも残酷な物」
あの〜、シエラさん、確かにそうかもしれませんけど、もう少し言い方というものが有るんじゃないでしょうか。
「と、とにかく、まだ時間は有るはずだからあまり焦らずに進もう」
「……うん」
それでもミリアは焦る気持ちを抑えきれないのが顔に少し出てい

る。
そして昇達が進み続けること十数分、目の前に扉らしき物が見え始めた。
「ミリア、分かってると思うけど、いきなりあの扉を開けないで」
「う～、それぐらい分かってるよ」
いや、たぶんやりそうだったからシエラが言ったと思うだけど。
そして扉の前に辿り着くと、与凪が映し出されたモニターが現れる。
「滝下君、その先は気をつけてね」
「この先に何があるの？」
「どうやら広いホールみたいだけど、中に精霊の反応が一つあるのよ。確実にロードナイトが待ち伏せしてるわ」
「分かった。そういえば琴未達は大丈夫？」
「ああ、あっちはいろいろと苦労してるみたいだけど、今のところは大丈夫よ」
「そう……なんだ」
いろいろな苦労って、いったいどんな苦労なんだろう。
「じゃあ私は少しあっちのサポートに回ってるから、滝下君たちも気をつけてね」
「うん、ありがとう与凪さん」
そして与凪を映し出していたモニターは消え、昇は扉に手を掛ける。
ゆっくり、慎重に昇は扉を開いていった。

一方、琴未達はというと。
「ああ、もう、いったいここはどうなってるのよ！」
琴未が叫んでいた。
「まあ、落ち着け琴未」
「だって閃華、さっきからあっち行ったり、こっち行ったり、ここ

は迷路かって言いたくなってくるのよ」
「気持ちは分からんでもないが、ここは敵の根城じゃぞ。当然侵入者を妨害するように作ってあるはずじゃ」
「そんなの分かってるわよ。けど、いい加減に頭にくるのよー！」
「だからと言って叫んでも何も変わらないでしょ」
「おお、与凪、戻ったか。って、昇達はどうじゃった」
「うん、もうすぐロードナイトの一人と接触するみたい」
「って、それって大変じゃない！」
「だから落ち着けといっておるじゃろ。ここは敵の根城じゃぞ、当然ロードナイトとの戦闘は避けられん」
「ぐっ、それはそうだけど」
「そして、いつ私達の前に現れても不思議は無いんじゃぞ」
「うっ！」
「じゃがその前にここを突破せんとな。与凪、次はどっちじゃ」
「そうね、じゃあこっちに行ってみて」
与凪がそういうと地図の一つの道に矢印が表示される。
「うむ、では行くぞ琴未」
「はいはい、分かったわよ」
先程の閃華の説教が効いたのか、琴未は冷静さを取り戻すのを通り越して落ち込みながら閃華の後を追って行った。
じゃが、さすがに手探りで進むのは時間がかかるのう。それにロードナイトいつ現れることやら。まあ、心配してもしょうがないじゃろうから今は進むかのう。
そして琴未達は迷路を手探りで進み続けることになった。
だが、昇達が進んでいる時にも、サファドの行動も進んでいるのは確かで、もう少しすれば儀式が始まってしまうところまで来ていた。

第三十話　ロードキャッスル突入（後書き）

そんな訳でとうとう三十話まで来ました！。
いや、だからどうしたってワケでもないんですけどね、ちょうど切がいい数字なんではしゃいだだけです。
まあ、それはともかく、とうとうロードキャッスルに突入した昇達、これから待っているのはロードナイトとサファド、はたして昇達はサファドの野望を阻止できるのか、そして雪心の運命は……。
そんな訳でノリでやった予告も終了したことで。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。
以上、俺この三十話で何ページぐらい書いたんだろうと思った葵夢幻でした。

第三十一話　戦闘狂再び

昇が扉を開けると、そこは広いホールでその真ん中にその精霊は立っていた。
あいつ……、確かミラルドさんを追って来た。
「来たか」
静かに呟くその精霊マルドは床に突き立てていたバトルアクスを肩に乗せると、腰を落として戦闘体勢に入いる。
「さあ、来るがいい」
なんか、静かな割には短気な精霊だな。でもこいつを倒さないと先には進めないか。
「昇、さっさとこいつを倒して先に進もうよ！」
やる気満々のミリアを通り越してシエラは一人で前に出る。
「シエラ？」
「昇、私達には時間があまり無い。だからこいつの相手は私がやる、昇達は先に行って」
「でも……」
「目標を見失わないで、私達の目的はサファドの野望を阻止すること、そして雪心を助け出すこと、それが一番大事だから、そのためには私一人でこいつの相手をするのが一番効率がいい」
「……分かった。ミリア、隙を見て一気にあの扉を目指すよ」
「う、うん」
目標はマルドの後ろにある扉。シエラが道を作ってくれれば僕達は一直線に扉を抜けられる。後はシエラに任せるしかない。
「シエラ、気をつけて」
「大丈夫、私はこんな奴に負けない」
シエラはウイングクレイモアを構えると大きく翼を広げる。それを見たマルドもすでに迎撃体勢に入っている。
翼が大きく羽ばたくとシエラは一気に加速してマルドとの距離が

一気に詰まる。
だがマルドはハイスピードで突っ込んでくるシエラに動じることなく、冷静にタイミングを計るとバトルアクスを振り下ろした。
激突するクレイモアとバトルアクス。だがシエラはこの時を待っていた。
「ブースト」
羽先から光があふれ出すと共にウイングクレイモアをマルドごと押し上げる。そのまま天井にマルドをぶつけたシエラは急旋回、今度は壁に向かってマルドを吹き飛ばした。
「昇！」
「ミリア、行くよ」
「う、うん」
一気に駆け出す昇、ミリアはシエラの方を気にしながらも昇の後を追いかけていく。
「させん」
壁にめり込むほど吹き飛ばされたマルドだが、すぐに這い出すとバトルアクスから白い霧状の物が昇立ち向かって一気に伸びていく。
だが白い霧は突如発生した突風によってすべて吹き飛ばされてしまった。マルドは風を巻き起こした方を見ると、そこには翼を大きく羽ばたかせているシエラの姿があった。
「翼で風を巻き起こしたか」
冷静に現状を確認するマルド。だからこそ、もう昇達を追う事はしなかった。今から追っても間に合わないことはわかっている。それにシエラの妨害があるはずだから。
マルドは地面に降り立つと、宙に浮かんでいるシエラに向かってバトルアクスを構えて徹底抗戦の意思を示す。
二人とも分かっているからだ。相手を倒さない限り昇達を追うことが出来ないということを。

その頃、琴未達の目の前には重々しい扉があった。
「ふむ、どうやらここが迷路のゴールみたいじゃのう」
「はぁ、やっと抜けたのね」
「はいはい琴未、油断しないでね。その扉の向こうに精霊反応が二つあるから確実にロードナイトが待ち伏せしてるよ」
「そうか、では琴未、慎重に……どうしたんじゃ」
与凪の報告を聞いてから琴未は顔を下に向けていた。閃華が覗き込むと琴未は笑っているみたいだ。
「ふっ、ふふっ、ふふふっ」
「って、琴未どうしたの！」
モニター越しに与凪が聞いて来るのだが琴未は軽く笑い続けて、閃華は呆れるのを通り越してもう諦めているようだ。
「心配するでない与凪。琴未は例の病気じゃ」
「例の病気って何？」
「まあ、琴未の本性が表に出るだけじゃ。じゃからあまり心配することではないぞ」
「というか、そんな状態でロードナイトと戦えるの？」
「ふむ、意外と奮戦するかもしれんのう」
「……そういうものなの？」
「この際じゃ、琴未の本性を見ておくがよいぞ」
「なんか、あまり見たくない気もするけど」
「さて、では行くか琴未」
「ふふふっ、あーっはっはっはっ。オッケー閃華、今までさんざんイライラしてきたから全部奴らにぶつけてやるわよ」
「……まあ、気をつけてな」
「じゃあ、閃華、行くわよ」
そう言って琴未は重々しい扉を一蹴して、一気に開けてしまった。ずいぶんとまあ、派手にやってしまったのう。まあ、この際じゃから仕方なかろう。
そうして琴未達が踏み入れた場所は、真ん中に大きな柱が立って

おり、そこに寄りかかるように見覚えがある精霊が二人いた。
「やれやれ、またあいつらの相手をせんといかんみたいじゃのう」
「おや、ずいぶんな言い草だね。そんなにあたい達とやるのが不満かい」
羽室はそう答え、その隣でスクラウドが軽く笑っている。二人とも、この前襲ってきた戦闘狂達だ。
「別に～、不満なんて無いわよ。今の私はあんた達をぶっ飛ばせばいいだけだからね」
「おや、この前の人間のお嬢ちゃん。ずいぶんな口を聞くようになったじゃないかい」
「けけっ、それでこそやりがいがあるっているもんじゃねえか」
「そうね、この前の決着を今ここでつけてあげるわよ」
……なんじゃろうな、なんか、戦闘狂が三人になったような気がするのは私の気のせいであって欲しいものじゃな。
「どうやら、私達には言葉は要らないみたいだね」
いや、言葉は大事じゃぞ。言葉でしか伝わらぬこともあるからのう。
「そうね。今の私達に必要なのは、この刃だけよ」
いやいや、ちょっと待て琴未、お前はいつからそんな性格になったんじゃ。
「けけっ、よく分かってんじゃねえかよ。人間」
「当たり前よ！　今までさんざん迷路にイライラさせられたんだから、その恨みをここで全て晴らしてやるわよ」
琴未、その返し文句はどうかと私は思うんじゃが。
「おや、そいつは難儀だったね。まあいいさ、楽しませてくれるんなら楽しませてもらうだけさ」
「ふふっ、いいわよ。充分楽しませてあげようじゃない」
……おーい、琴未。出来る事ならそろそろ戻ってきて欲しいんじゃが。
「よし、じゃあ人間のお嬢ちゃん、この前の決着をつけてあげるさ。

そういうわけでスクラウドはあっちを頼むさ」
「けけっ、了解」
「閃華、私はあの羽室って奴を切り刻んでやるから、閃華はあっちの爪の奴をお願い」
いや、それはいいんじゃが、琴未、頼むからその戦闘狂ぶりは今回だけにしてくれ。
閃華が溜息を付く頃にはすでに琴未と羽室はお互いの距離を縮めて刃を交えていた。それと同じくスクラウドも閃華に向かって突っ込んできたが閃華は静かに呟くだけだった。
「水流激」
龍水方天戟から離れた水の龍は一気にスクラウドに向かうと、その胴に噛み付いてそのまま壁を突き抜けて隣の部屋に行った。
それを見ていた与凪が急に閃華の横にモニターを出現させる。
「あの、閃華さん、あまり戦力を分散するのはよくないかと……」
「なに、今の琴未なら大丈夫じゃろう。それに琴未にも見せ場を作ってやらねば。可哀相であろう」
「いや、閃華さん、そういう問題じゃないと思うんですけど」
「まあ、良いではないか。琴未もそれなりにやる気を出しておるようじゃし。それより与凪、あっちの部屋の広さはわかるか？」
「はいはい、ちょっと待ってください。……今いる部屋よりも少し小さいみたいです」
「そうか、では私はあっちで戦ってくるとしよう」
「琴未とあの精霊の一騎打ちで大丈夫なんですか？」
「与凪、琴未は昇の修行を手伝っておったのじゃぞ」
「だからなんです」
「昇が強くなったように琴未もまた、強くなったということじゃ。まあ、そんなに心配せんともよかろう」
「はぁ……、そういうもんなんですか」
「そういうもんじゃよ。では行って来るぞ」
「あっ、はい、お気をつけて」

こうして琴未対羽室、閃華対スクラウドの戦いの幕が切って落とされた。

あれ、遅い？

琴未がそのことに気付いたのは羽室と刃を交えてから、少し経ってからだった。

以前は鋭く感じられた羽室の剣さばきだが、今の琴未には以前ほどの鋭さが感じられなくなっていた。つまり羽室の剣が琴未には少しずつ見えてきたわけだ。

……そっか、昇の弾丸はこれよりも早かったから、私もいつの間にか見切る力をつけてたんだ。そうと分かれば反撃開始。

羽室の剣線を完全に見切った琴未は紙一重でそれをよけると、一気に自分の間合いにもっていく。そして右袈裟から切り下げるが羽室は大きく後退してそれをかわした。

そしてその行動が意味する物を琴未はちゃんと理解していた。

動揺してる。前とは違ってここで反撃が来るとは思っていなかったのね。なら、攻めるなら今。

「雷撃閃」

雷閃刀から放たれた数本の雷が羽室に迫る。だが羽室はその雷さえも切り裂いてしまった。

やっぱりこいつには雷は通用しない。純粋な剣の勝負でしか決着をつけることが出来ないみたいね。上等、こっちだって伊達にじっちゃんの稽古を受けてきたわけじゃないんだから。

雷を放ち、そのすぐ後を追っていた琴未は雷閃刀を下段に構えたまま疾走していた。そして琴未の間合いに羽室が入る。

私の剣術を見せてあげるわよ。

―新螺幻刀流（しんらげんとうりゅう）　三段斬り返し―

額、喉、胸、その三箇所に突きを入れてすぐに左右逆袈裟を入れる琴未。だが、羽室も負けじと刀を振るい、両者は交差してお互いに距離を取る。

そして膝を付く羽室。

最初の突きはかわされたけど右の逆袈裟は手応えがあった。けど致命傷にはならないはず、だからまだ終わってない。

琴未はすぐに振り向くと再び刀を構えるが、羽室は逆にゆっくりと立ち上がる。そして静かに笑い出した。

「くっくっくっ、いいね、いいよ、この感じ、この痛み、最高だね。それでこそ、やりがいがあるってもんだよ。ねえ、人間のお嬢ちゃん」

あいつ手傷を負わされても笑ってるの、うわ～、私にはそこまでは理解できないわ。

思ったことを口にして、もし傍に閃華がいれば、少しは理解できるのかと思われるようなことを考えながら、琴未は改めて自分が相手にしている異常さを感じざる得なかった。

「さて、ここまでやってくれたんじゃ、こっちも答えてあげないと悪いさね」

何こいつ！　今まで本気を出してなかったの？

そう思うほど羽室は一気に殺気と力を放出、琴未は羽室の力が高まっていくにつれて、少しずつ恐怖という物を感じる。

「さあ、本番はこれからさ！」

そう言うなり、一気に距離を詰めてくる羽室。琴未も迎撃のために刀を下段に構えるのだが、一瞬で羽室の姿が消えるとすぐに左肩に痛みを感じる琴未。

くっ、何今の、全然見えなかった。いったいどうして？

「さーて、これでさっきの借りは返したよ。さあ、楽しもうじゃないか、人間のお嬢ちゃんさ」

「くっ！」

この時、琴未は初めて戦闘狂というものを理解した。戦闘狂は戦

いを楽しめればいい、そのために一番言い方法は相手のレベルに合わせること、つまり弱い相手には自分も力を抑える。そして例えどんなに傷つこうとも、決してそれ以上の力を出そうとはしない。それが戦闘狂のサガ。そして先程の攻撃こそ羽室の本気なのだ。

せっかく優位に立ったと思った琴未だが、その自信が一気に崩れ落ちていく。

何て事なの、あいつは今まで本気で戦っていなかったってこと。くっ、随分と舐めた真似をしてくれたじゃない。こうなったら絶対にあいつを倒してやる。

「ふふっ、ふふふっ、あっーはっはっはー」

突然笑い出した琴未に、さすがの羽室も驚きを隠せないようだ。

「どうしたんだい、人間のお嬢ちゃん。もしかして、さっきの頭がいかれたのかい」

「あはは っ。……あんたは、絶対に倒す」

急に静かになった琴未の言葉に羽室も笑みを浮かべる。

「そうこなくっちゃね。さあ、かかってきな」

羽室がそういった直後に琴未は一気に走り出して羽室の間合いに入る。羽室の二本の大太刀は琴未の刀よりも長い。つまり、この距離なら羽室の攻撃は届くが琴未の攻撃は届かない。それは充分分かっているはずなのに琴未は進んで羽室の間合いに入って行った。

もちろん、羽室が攻撃をしないわけがない。羽室の太刀が琴未に迫るが琴未は一本の太刀を紙一重でかわしてもう一本を弾き飛ばした。その動きは先程とはまるで比べ物にならに程に俊敏な動きだ。

これにはさすがの羽室も下がるのだが、琴未も羽室に合わせて自分の間合いを保ち続けてるために羽室に追いすがる。

「くっ、なんなんだい、人間のくせにこの動きは、いくらエレメントでもここまでの力が出せるかい」

「言ったでしょ。あなたは絶対に倒すって」

「それにしては随分とやってくるじゃないさ。あんたも本気で戦ってなかったのかい」

「そうね。あえて言うなら私が使ってる新螺幻刀流は活人剣じゃなくて殺人剣なのよ。だからじっちゃんも私に教えたけどよっぽどの無い事が無い限り使うなって言われてるのよね」
「なるほどね。今時そんな剣術を会得してるなんて思ってもいなかったさ」
「そう、私の剣術は人を殺める剣。けど今の私には人だろうが精霊だろうが関係ない。私はあなたを全力で倒すだけよ」
「あははっ、いいね、その気迫、その覇気、久しぶりに昔を思い出すよ。あの人斬りが横行してた楽しい時代をさ。くくっ、あーはっはっはっーーー」
「面白いじゃない。それ以上の楽しみをあんたに与えてあげるわよ。ふふっ、ふっはっはっはっはーーー」
羽室が琴未の力に驚く中で、隣の部屋ではその理由を知っている閃華が悠々と構えて、呆れていた。

やれやれ、琴未はまた例の病気が出たようじゃのう。まあ、これで心配はあるまい。例の病気の原因は琴未の心にあるのじゃからのう。それは決意の表れであり、また本来の性格が噴出することでもあるからのう。
……というか琴未、いい加減にその本性を直さないと昇に嫌われるのではないか。じゃがまあ、そんなこともないか。昇のことじゃから、琴未の本性には尻に敷かれるのが関の山じゃな。
閃華がそんな事を考えている間にもスクラウドは閃華に攻撃を仕掛けてきているのだが、閃華は楽々とその攻撃を弾いていた。
「くっ、テメー、いい加減に本気で戦えよな」
「おおっ、そいつはすまんかったのう。隣があまりにも楽しそうなんでな」
「けけっ、じゃあこっちも楽しく行こうじゃねえか」
「悪いが、私はそなたのような戦闘狂に付き合う気は無いのでな。

さっさと終わらせてもらうぞ」
「つれねーこと言ってんじゃねー！」
再び閃華に向かって爪を振るいだすスクラウド。
こうして、戦闘狂達との戦いは続いていくのだった。

第三十一話　戦闘狂再び（後書き）

……疲れた。……なんか前にも後書きでいきなりこんなことを書いたような気もしますけど、まあ、この際そのことは放って置きましょう。

といいますか、最近いろいろとありまして、ＨＰがかなり減っております、このままでは確実に死んでしまうので、とりあえず執筆のペースを落とすかもしれません。

というか、ポーションをくれ、もう薬草でもケアルでもホイミでもいい。とにかく回復してくれ。……まあ、そんな感です。

はい、それではワケの分からないことはここまでにして、いつものを行きます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に感想評価もお待ちしております。

以上、ＨＰが残り３ぐらいの葵夢幻でした。

第三十二話　琴未の意地

琴未と羽室の刃が交わって二人はそのまま拮抗状態になる。
「はん、人間のお嬢ちゃんにしてはやるようになったじゃないかい」
「そう思うんだったら、さっさと本気を出しなさい！」
琴未は刀に力を溜めるとそのまま雷閃刀が雷の塊となり放電する。
さすがの羽室のじかに電撃を喰らうのには耐えられないのか刀を弾き大きく後退する。
ただ雷を放つだけじゃ効かないけど刀を通りしての電撃なら効くみたいね。そうと決まればやってみたいことがあるのよね。
琴未は刀を脇に構えると羽室に向かって疾走して行き、羽室の間合いに入る前に大きく前方へと跳ぶ。

―新螺幻刀流　改　飛翔乱舞―

空中で羽室と刃を交えた琴未は雷撃だけを羽室に与えて、自分は跳んだ勢いを殺さないように羽室の後ろに着地する。そしてすぐにまた羽室に向かって大きく跳ぶ。
この飛翔乱舞は本来なら相手を斬り付けながら飛び回る技なんだけど、今の私にはあいつを斬り付ける事は無理だから雷撃だけでも与えられれば、それが蓄積されていくはず。
たしかに琴未の攻撃は羽室には通っていないが、確実に電撃のダメージだけは与えていた。
「このっ、ちょろちょろとうっとおしい！」
羽室は琴未の攻撃に合わせて電撃を喰らいながらもそのまま力ずくで振り抜き、琴未を吹き飛ばした。
だが琴未は先程まで空中にいた時間が長かった所為か、吹き飛んだまま体をひねりって見事に着地する。
ここで攻撃を緩めちゃ意味が無い。攻めて行かないと。

琴未はすぐに走り出して羽室の間合いに入っていく。それでは格好の的なのだが琴未は振り下ろされる刀を待っていたのだ。

―新螺幻刀流　乗り刀返し斬り―

琴未は振り下ろされた太刀を紙一重で交わすと、振り下ろされた太刀の峰に足を乗せてさらに体重をかけると、羽室の太刀を地面へと食い込ませる。そして琴未自身も太刀にかけた足を曲げると、一気に真上へと跳んで刀を振り下ろす。

だが羽室はもう一方の太刀で琴未の攻撃を防ぐが、琴未はそのまま刀を滑らせて一度地面に着地した後にすぐ刀を返して切り上げる。

羽室もすぐに太刀を横に構えて琴未の攻撃を防ごうとするが、一方の刀は地面に刺さり封印され、もう一方は先程の攻撃を防いだばかりか利き腕ではない。

そのため、一度地面に着地したことで力を溜めることが出来た琴未の攻撃を防ぎきれずに、飛び上がった琴未の刀は羽室の太刀を弾いて羽室の右肩に切り傷をつける。

よし、じゃないか、この程度じゃあいつは本気を出さないかもね。だからもう少し、攻め続ける。

琴未はいったん距離を取っている間に、羽室は地面に突き刺さっている太刀を引き抜くと再び構える。

そして羽室が構える直前には琴未はもう走り出していた。そして、羽室が構えるのと同時に琴未の間合いにも入った。

―新螺幻刀流　嵐崩し―

琴未は羽室が間合いに入ると一回転して勢いをつけて、片方の太刀を上に弾いてまた一回転して残ってる太刀をカチ上げる。そうなると羽室の前面はがら空きだ。そこにすかさず琴未は攻撃を仕掛ける。

―新螺幻刀流　二乃太刀無用―

踏み出した右足を軸に琴未は刀を大きく振り上げて全ての力を初太刀に込める。そしてその攻撃は羽室の胸を切り裂いて鮮血が噴出した。

そして琴未は大きく退いて相手の様子を見る。

さっきの技は一撃必殺の剣。これで仕留められたとは思わないけど、これであいつも本気になるはずだわ。そしてもらわないとこっちにもプライドってものがあるのよ。

じっちゃんから授かった新螺幻刀流、その名にかけて手加減している相手に勝っても名が汚れるだけなのよ。だから本気のあいつをぶちのめしてやるわ。

それは武士の意地とまでは言わないが、武道をしている者として手加減してもらっている相手に勝っても嬉しくは無い、逆に悔しいだけだ。琴未にもそれだけの意地があり、本気の羽室を相手にしても勝てる手も持っていた。

実際に出来るかどうか分からないけど、それに昇にも負担をかけたくないけど、ここはしょうがないのよ。昇、ごめん、ちょっとだけ力を貸して。

「くっくっくっ、随分とやってくれたね、人間のお嬢ちゃんさ～。これだけやられたんじゃ、こっちもそれ相応に返してやらないといけないようさね」

「どうやら、やっと本気になったみたいね。あんたに手加減されてると無性にムカツクのよ」

「そうかい、お嬢ちゃんは本気のあたいを見たかったのかい。じゃあ見せてあげるよ、あたいの本気の力って言う物をさ」

一瞬にして羽室は琴未の後ろに回る。なんとか殺気で羽室の気配を感じることが出来た琴未は、前に転がるようにして羽室の攻撃を避けようとしたが、背中には痛みが走ってたすきが切れると共に血

が白衣を染めていく、
くっ、やっぱり今の私じゃ無理か。ごめん昇、力を貸して。

その頃、昇は広い通路の中でミリアと共に機動ガーディアン達を相手にしていた。
そして突然琴未を感じる。まるで傍にいるかのように琴未がそこにいるように感じる昇は、そのまま琴未の思いを受け止めようとする。

「ミリア、ごめん、ほんの少し時間を稼いで」
「えっ、何かあったの？」
「うん、琴未がピンチみたい」
「分かったよ。その間は昇には敵を近づけさせないから」
「頼んだよ、ミリア」
昇は一瞬にして黒い空間へと沈んでいく。これも修行の成果なのだろう。そして琴未から伸ばされてきた糸を掴むと同時に意識が現実へと戻る。
「エレメンタルアップ！」
昇の叫びが廊下に響き渡る。まるでその声が琴未に届くかのように。

そして琴未は沸きだしてくる力を抑えることなく羽室の動きを見切っていた。
「なっ、なんでいきなりあたいの動きについてこれるんだ！」
琴未がエレメンタルアップで見切りの力も上がっていることには気付いていない羽室は驚くばかりであるが、琴未は本気で攻めてくる羽室の攻撃をかわし、隙を付いて吹き飛ばした後で一気に勝負に出る。
昇に長時間エレメンタルアップを使わせるわけには行かないわね。

時間が長くなるほど昇の負担は大きいから。だから、この一撃で勝負を決める。

琴未は大きく腰を落とすと脇よりも後ろに構えて、刀の剣先を地面に少し突き刺す。

今の私に出来るかどうか分からないけど、これしかあいつを倒す方法が見つからないのよね。だから、全てをこれにかける。じっちゃんもお願い、私に力を貸して。

その様子を見た羽室も覚悟を決める。お互い刃を交えた者同士、決着の時が分かるものなのだ。

そして羽室は二陣乃太刀を構えると、そのまま二人は硬直状態に入る。

これが先に動いた方が負けるってやつかい。面白い、なら、先に行ってやろうじゃないか。

これが戦闘狂のサガなのだろう。例え負ける可能性があるとしても戦いをやめることは出来ない。むしろそれでも勝ちに行く物だ。なにしろ負け戦を勝ち戦にひっくり返すのが最高に楽しいからである。

先程の琴未の動きを見て羽室はもう容赦などはしない。全ての力を使って目の前の敵を倒すだけだ。

そして羽室は第一歩を踏み出す。

先程までの琴未なら羽室の動きには付いて来れなかっただろうが、今の琴未は羽室の動きをしっかりと捉えていた。

真正面から勝負する気ね。これが閃華の言ってた戦闘狂のサガなのかしら。でも、私にとっては好都合。なにしろ今まで成功したこともないし、横から来られて確実に当てられる自信も無い。けど、真正面なら……行ける！

そして琴未は羽室の間合いに入って羽室は両方の刀を大きく振り上げる。それと同時に琴未も右足を力強く一歩踏み出す。

―新螺幻刀流　奥義　地・脈・抜・刀―

そして二人は刃を交えて羽室は突っ込んでいった勢いのまま、琴未を通り越してから止まった。
琴未は刀を振りぬいたまま止まり、羽室は方膝を付いた状態で両手を地面につけながら止まっている。
そしてその二人の間に、切り裂かれた刃が二本、今まで宙に舞っていたのが地面へと突き刺さる。
「ふっ、ふふっ、あっーはっはっはっはっはっ――――！」
突然笑い出す羽室。そしてゆっくり立ち上がると琴未の方へと向く。
羽室の胸には横一線に切られており、そこから出ているのは血ではなく、白い粒子のような物が天に向かっていく。
「まさか人間のお嬢ちゃんがここまでやるとは思ってなかったさ。けど、まあ、楽しかったよ。出来ることなら、また今度やりたいくらいだね」
今まで固まっていた琴未だが少しずつ動くと羽室と対等に向き合う。
「私はごめんだわ。もう二度とあんたに合いたくないのよね」
「なあなあ、そいつはちょっとつれないないかい」
「今の私は昇の力を借りてやっとあなたを倒すことが出来たのよね。だから、もし、またあんたとやる時には私の力だけで倒してあげるわよ」
「口の減らないお嬢ちゃんだね。まあ、だから楽しかったんだけどさ」
「……あんた、これからどうなるの？」
「おや、一応心配してくれるのかい。大丈夫さ、私達精霊は特に私は仮契約って言う能力で実体化してるからね。だから、このまま元に戻るだけさ。元の刀の精霊の姿にね」
「そう……」
「……そういやお嬢ちゃん、まだ名前聞いてなかったね」

「琴未、武久琴未」
「琴未か、いい名だね。じゃあ、もう時間みたいだから、あたいはいくよ」
「そう、元気でねって言うのも変ね」
「そうさね。まあ、あんたはやるべき事があるんだろ。今はそいつに集中すればいいだけさ」
「そうね、ありがとう、羽室」
「別に礼を言われることじゃないさ。じゃあもし、今度会ったら最初から本気でやらせてもらうさ」
「だから私はあなたに二度と会いたくないわ」
「ふふっ、最後までつれないね」
その言葉を最後に羽室はすべて白い粒子に変わり、天へと登っていった。
というか、わざわざ天に昇っていくのは演出なのかしら。けどまあ、何とか勝った――！
琴未はそのまま床へと座り込む。
はぁ、さすがに昇の力を借りないとやばかったわ。でも、そのおかげで今まで一度も成功したことが無い奥義を完璧に放つことが出来たのよね。まあ、結果オーライかな。
琴未は改めて先程まで刀の剣先が刺さっていた地面に手を触れる。
アツッ、うわっ、地面がこんなにも摩擦で熱くなるなんて、さすがに奥義ね。さすが抜刀術の最終形態。
新螺幻刀流の奥義は抜刀術の進化系で本来の抜刀術は刀を抜くときの摩擦で力を溜めて一気に振りぬくものだが、奥義の地脈抜刀は剣先を地面に食い込ませることで、より強く力を溜てその振りぬく速度と切れ味が抜群に上がるのだ。
したがって先程の勝負は羽室が両方の刀を振り下ろした瞬間に、溜め込んでいた力を一気に解放して地面から飛び出した刀のスピードは並みの物ではなく、そのスピードと雷閃刀の切れ味、そして奥義を使いこなした琴未の技量により、羽室を太刀ごと切り裂いた。

結果、完全に太刀を切り裂かれた羽室は攻撃を出来るはずは無く。
琴未に斬られて突っ込んでいった勢いをでそのまま琴未の横を通り過ぎていった。
そして両者は一瞬だが完全に出せるだけの力を出したのだから、その場を動くことが出来ずに固まっていたというわけだ。
あっ、そうだ、エレメンタルアップも解除しとかないと。
琴未は今まで昇と繋がっていた物を離して沸きだしてくる力が消え去った。そしてエレメンタルアップの副作用なのか、疲労感が一気に襲ってきて琴未は仰向けに大の字なって倒れこむ。
はぁ、疲れた。でもよかったわ、これでロードナイトが一人減ったわけだし。後ちょっと休憩したら閃華の応援に行かないとね。
「閃華は大丈夫かな？」
「閃華さんなら大丈夫ですよ」
「うわっ、与凪、いきなり現れないでよ、びっくりするじゃない」
「そういう言い方は酷いと思うよ、琴未。私はせっかく閃華さんの言付けを聞かせてあげようと思ったのに」
「えっ、閃華、何か行ってたの？」
「なんか琴未に傷つけられたから、このまま回線切っちゃっていい」
「与凪！　私はさっきの戦いで疲れてるの、あまり怒らせないで」
「はいはい、分かりましたよ。閃華さんが言うには、琴未の増援はいらないそうです。だから琴未はしっかりと休憩をしていろって言ってました」
「要するに、私は閃華の増援に行かなくてもいいってこと」
「というか、足手まといなんじゃない」
「与凪、相手が閃華だとシャレにならないからそういうこと言わないで」
「まあ、確かに閃華さん強そうだし、琴未の増援が無くてもロードナイトを倒せそうよ」
「でしょうね」
「でしょうねって、琴未分かってたの？」

「そりゃあもう、私も毎日の様に閃華に鍛えられてた時があったからね。その時に閃華の強さは嫌って程、見せ付けられたわよ」
「じゃあ、閃華さんは琴未のお師匠様でもあるんだ」
「まあ、一応、そうなるのかな」
「でも、本当に大丈夫なのかな、閃華さん一人で」
「閃華が一人でいいって言ってるなら、一人で大丈夫でしょ」
「そうなの？」
「そうよ」
「ふ～ん、ずいぶんと閃華さんの事を信用してるのね」
「まあ、閃華の最初の契約者は私だからね。だから閃華との付き合いも、私が一番長いわけよ」
「って、琴未も契約者だったの」
「そうじゃないと特殊能力が使えないでしょ」
「あっ、そっか。でも、なんで滝下君とも契約をしたの」
「それは閃華が……」
琴未の顔が赤くなり、思わず与凪が移っているモニターから顔をそらした。そして与凪はそんなあからさまな態度を取られると、ついやりたくなるものなのだろう。
「琴未、あんた今、何思い出してるの？」
「べっ、別に何も思い出してないわよ！」
「おうおう、ムキになるところが、また怪しいですな」
「うるさい、うるさい、うるさい、もうなんだっていいでしょ」
「はいはい、分かりましたよ。あっ、ところで、何で琴未は閃華さんと契約をしたの？」
「いや――――っ！　そのことだけは聞かないで、私の、私の初めてが――っ！　いやーっ、いやっ、いや――――――――っ！」
「ちょ、琴未、どうしたの琴未？」
のた打ち回る琴未に、さすがの与凪も混乱を隠せないようで必死に琴未を静めようとしている。

そして、その叫び声はとなりの部屋にいる閃華に耳にもきっちりと届いていた。

やれやれ、またなにか出たようじゃな。じゃが、あの様子だと相手のロードナイトを倒したみたいじゃのう。まあ、これで一安心じゃな。

それじゃ、コチラもさっさと片付けて琴未の元へと戻るとするかのう。

閃華はスクラウドの攻撃をかわし続けながら、そんな事を思っていた。

その閃華の姿はまるで、華麗に舞う蝶のように見事な身のこなしであった。

第三十二話　琴未の意地（後書き）

十一月の一発目の話が上がりました。
そんな訳で今回は今まで少し影が薄かったと作者が勝手に思ってた琴未が中心となった話です。というか、琴未はエレメンタルがなくても人間相手だったら、充分強いみたいです。
ちなみに新螺幻刀流、これは私があるゲームで使っていた流儀の名前です。まあ、他に出すところも無いのでここで使ってみました。
というか、そのゲームの次の新作でないかな、私的には結構気に入ってたんですけど、やっぱりマニアックすぎたのかな。まあ、そんなことはさておき。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に感想評価もお待ちしております。
以上、なんか急に神社に行きたくなった葵夢幻でした。

第三十三話　貫く意志

閃華を相手にしていたスクラウドは焦っていた。
だがそれもしかたないだろう、なにしろ今まで一度も閃華に攻撃が届いてはいないうえに、閃華はスクラウドの攻撃を楽々と捌いているからだ。
「テメー、さっきから涼しい顔しやがって、少しはちゃんとやれ！」
「何を言っておる。ちゃんとお主の相手をしておるではないか」
「だったらさっきからよけてばかりじゃなくて、反撃したらどうだコラ！」
「ふむ、そうじゃのう。先程まで少し気になる事があってのう。それも終わった事じゃし反撃に出るとしようかのう」
どうやら閃華は琴未の事まで気にかけていたようだ。
ふむ、琴未は何とかあのロードナイトを倒したようじゃのう。途中ドキドキじゃったが、まあ、結果としてはこんなもんじゃろ。エレメンタルアップもそんなに長時間使っておらんかったから昇の負担も少ないはずじゃ。なにしろ昇は力の容量だけは巨大じゃからのう。
そんな事を考えながら、閃華はスクラウドの攻撃を捌いているのだから凄いとしか言いようが無い。
さて、こっちもあまり時間をかけてはいかんからのう、そろそろ決めるか。
今まで防戦一方だった閃華が一気に攻勢へと出る。
スクラウドの爪を両方弾くと、方天戟の柄でスクラウドを吹き飛ばして壁に激突させてその衝撃を示すように壁がへこみヒビ割れる。
では一気に決めさせてもらうぞ。
閃華は龍水方天戟を構えると一気に力を放出する。
「龍神激」
龍水方天戟に巻き付いていた水の龍が離れると、そのまま大きく

なっていきかなりの巨体となる。
そして閃華が方天戟を横に差し出すと、水の龍は一気にスクラウドに迫る。
先程の奇襲で思っていたよりダメージを負っていたスクラウドは迫り来る水の龍から逃れようと跳ぶのだが、龍は正確にスクラウドの後追ってそして大きく口を開けると噛み付いた。
完全にスクラウドを捕らえた龍はそのまま部屋の壁に向かって進み激突した。後はスクラウドを壁に擦りつけながら部屋の壁に沿って進んでいく。
そして部屋を一周した龍は壁から離れると今度は閃華の元へと飛んでいく。閃華が横に構えていく方天戟の矛先を目指して。
そしてスクラウドを方天戟に突き刺して水の龍は閃華を通り抜けて再び方天戟に巻き付いた。
「ぐはっ」
完全に串刺しになったスクラウドが血を吐くがそれでも笑みを絶やさずにいる。
「テメー、本気で戦ってなかったのかよ」
「そんなことはないぞ、ある程度は本気で戦っていたんじゃがな」
「けっ、本気で戦ってる奴が他の事を気にするかよ」
「なんじゃ、気付いておったのか」
「こっちとら、戦いの申し子だからな、舐められた戦いは興がうせるんだよ」
「ならば、やられた方がましというわけか？」
「違わ、勝てるんなら勝ってたんだよ」
「ならお主の目は節穴ということじゃな。相手の戦力も計れん用では役に立たん」
「けっ、うまく自分の力を隠してた奴が言う言葉かよ」
「まあ、どちらにしてもお主はこれで終わりじゃ」
「そうみたいだな。けっ、最後につまんねえ戦いをやっちまったもんだぜ。どうせなら、もっと楽しみたかったんだがな」

「今のお主では私の足元にも及ばんよ」
「そうみたいだな。まあいい、今回はこれで消えてやる。次ぎ会った時は覚えてろよ」
そしてスクラウドは光の粒子になり、天へと登って行き、その姿が完全に消えた。
「まあ、次があるとは思わんがのう」
閃華は龍水方天戟を肩に掛けるとそのまま琴未の元へ向かっていった。

「それにしても、随分とやられたものじゃのう」
「悪かったわね。どうせ私は修行不足ですよ」
「くっくっくっ、そうひねくれるでない琴未。とりあえず、与凪はおるか」
閃華の問いかけに与凪を映し出したモニターが出現する。
「はいはい、なんですか？」
「与凪、そこからでも琴未の治療は出来るか？」
「ああ、そのことですか。それなら今やってますよ。とりあえず、傷はあまり深くないので応急処置と精霊武具の修復を今やってます」
「そうか、では琴未の怪我が治り次第、奥に向かおうとするかのう」
「そうですね。とりあえず、お二人が戦闘中に辺りを探索してみたんですけど、そこの奥の扉から精霊王の力が強く反応してるんですよ」
「ということは、この奥に目的の物があるわけじゃな」
「たぶんですけど……」
「じゃあ、行くわよ」
「琴未、大丈夫なの！」
「これくらい平気よ。こう見えても結構鍛えられてるんだから」
「ふむ、とりあえず与凪辺りに精霊反応はあるか？」
「えっ、ちょっと待って下さい。……ありませんね」

「では行くとするかのう」
「大丈夫なんですか、閃華さん」
「なに、琴未が大丈夫と言っておるんじゃから大丈夫じゃろ」
「いや、そういう問題じゃないと思うのですけど」
結局、琴未と閃華の二人は奥の道へと進んでいった。

「うわっ、なにこれ」
琴未と閃華は進んだ道の奥の奥にある部屋に辿り着いた。
そこにはあまり照明は無くて少し暗いが、それ以上に光り輝く筒状の物が上に向かって伸びており、その下にはワケの分からない装置みたいな物がある。
「ふむ、どうやらこれがそうみたいじゃな」
「っていうか閃華、結局これはなんなの？」
「これが精霊王の力を強制的に移動させて、溜め込んでいる装置じゃ」
「じゃあ、これをぶっ壊せばいいんだね」
「ちょっと琴未、そんなことをしたら大惨事になるわよ！」
刀を構えた琴未に与凪は慌てて止めに入った。
「大惨事って、なんでよ」
「あのね、その中にあるのは、仮にも精霊王の力なのよ。そんなものをこんな場所で爆発させたら、そのロードキャッスルどころか、この町全体が吹き飛んじゃうわよ」
「えっ、そうなの！」
その言葉に驚く琴未だが閃華は与凪に向けて呆れた視線を送っていた。
与凪、精霊王は精霊の生みの親、つまり私達の親でもあるんじゃぞ。それをそんなもの呼ばわりするのはどうかと思うんじゃが。
だが与凪はそんな閃華の眼差しに気付くことなく、装置の解析に移っていた。

「……うわ～、凄いわこれ、かなり強引な術式を組み立ててるわ」
「って、与凪、私達はどうすればいいの」
「とりあえず、私の指示通りに回線を切ったり、基板を壊したりして。まあ、爆弾を解体するような物だから慎重にね」
「うっ、痛い、さっきやられた傷が痛い」
琴未、あまり見え見えな芝居はやらんでくれ、見ているこっちが虚しくなってくるからのう。
「そうじゃのう、とりあえずこれの解体は私がやるから琴未は休んでおれ」
「ありがとう閃華」
「それと与凪、あれを琴未に渡してくれ」
「はいはい」
「あれって何？」
琴未が問いかけている間に、座り込んでいる琴未の膝に魔法陣が現れると光り輝き弁当箱が突如現れる。
「……お弁当？」
「うむ、腹が減っては戦は出来んじゃろ。それにそろそろ昼時じゃ」
「うわっ、もうそんな時間なんだ。というか閃華の分は？」
「私達精霊は人間とは違うからのう。二三日何も食わんでも全力で戦えるんじゃよ」
「へぇ～、そうなんだ。じゃあ、お言葉に甘えていただきます」
弁当にがっつく琴未を無視して閃華は装置と向き合う。
やれやれ、これまた随分な物を作ってくれた物じゃのう。完全に解体するには時間がかかりそうじゃのう。ふむ、じゃが私達には時間が無いのは確かじゃ。解体は諦めて機能だけを停止させるかのう。
「与凪」
「なんですか、閃華さん」
「とりあえず、こいつを完全に解体するには時間がかかりすぎるじゃろ」
「そうですね。確かにそんなことをすれば二、三日かかりますね」

「じゃから、こいつが完全に機能できないようにするのが一番じゃからのう。与凪、こいつの完全停止を調べてくれ、出来れば二度と使えないようにな」
「分かりました。やってみますね」
「うむ、頼んだぞ」
じゃが、こいつを停止させてもポットには精霊王の力がある程度溜まっておる。それが後で裏目に出なければいいんじゃがのう。
そんな閃華の心配をよそに装置の解析は進んでいく。

その頃、別の場所ではシエラとマルドの戦闘が行われていた。
この感じ、さっき琴未がエレメンタルアップを使ったみたいね。けど私は使う訳には行かない。昇も戦っている以上は負担を掛け過ぎると大事なときにエレメンタルアップが使えなくなる。だから、こいつだけは私の力だけで倒す。
マルドのバトルアクスをシエラはクレイモアで受け止める。精霊同士が武器の重さはあまり関係ないかのように、シエラの細い腕がマルドの豪腕から繰り出されるバトルアクスを受け止める。
だが精霊にも体格差というものがあるのだろう。マルドは力任せにバトルアクスを振り抜き、シエラを吹き飛ばすのだがシエラのウイングクレイモアが空中でシエラの体勢を立て直させる。
やっぱり力勝負だと勝ち目は無い、なんとかスピードでかく乱したい所だけど、あの精霊武具がやっかい。
そう、マルドはシエラがスピードタイプだと判断すると、スモークバトルアクスから見えないほどの薄い雲を出してその雲の粒子一つ一つを感じていた。つまりこの部屋全体に見えないほどの薄い雲がかかっており、それがマルドのレーダーになっている。
換気でも出来ればいいんだけど、さすがにこんな城の一角じゃ無理。やっぱり相手が反応出来ないほどのスピードを出さないと。
考えがまとまったシエラは一気に行動に出る。

「フルブースト」
ウイングクレイモアの翼が光の粒子を放つほどの力を出すと、シエラは初動からハイスピードでマルドの後ろに回りこむ。
普通ならシエラが消えたように見えて、反応できないだろう。
だが、シエラが攻撃に移る瞬間にマルドのバトルアクスが横から迫ってきた。
正確には見切ったのではなくマルドは感じたのだ。この部屋全てがマルドの感覚といっていいほど、マルドの放った雲のレーダーは俊敏で正確なのだ。
シエラは攻撃を中断して防御体勢を取るが、明らかに力負けしているマルドの一撃を受けきれずに後ろに吹き飛んでいった。だが、半分は自ら後ろに飛んだのだからダメージは受けていない。
だが、吹き飛ばされては隙が出来るのも事実でマルドもその隙を見逃すはずが無かった。
シエラが吹き飛んでいった方向へ走り出すマルド。シエラもすでにマルドの追撃を確認している。
シエラはウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて宙へと舞い上がろうとするが、途中で止まってしまった。
「なっ！」
マルドはバトルアクスを振り回すのではなく、腕を伸ばして宙に舞い上がろうとするシエラの足を掴んだのだ。
そしてマルドはシエラの足を掴んだまま一回転、シエラもなすすべも無く遠心力に身を裂かれそうな気になるが、マルドが掴んだ足を離してシエラはまったく体勢を立て直すことが出来ずに壁に激突する。
「ぐっ」
さすがにマルドの力に遠心力が加わってはシエラもかなりのダメージを受けたようだ。その証拠にシエラは壁にめり込み、壁は衝撃でクレーターのようにへこんでひび割れている。もう少し強ければ突き抜けていただろう。

シエラは壁からずり落ちいきそのまま倒れこんでしまった。
誤算だった。まさかここまで強いとは思ってなかった。けど、エレメンタルアップを使えば倒せない相手じゃない。でも、それは出来ない。昇にこれ以上負担をかけるわけには行かない。じゃあ、どうすればいい。
シエラは顔を上げ、ゆっくりよろけながら立ち上がろうとする。だが、マルドは追撃をかけることなく、シエラが立ち上がるのを待っているようだ。
ロードナイトにも紳士的な精霊がいるみたい、それとも騎士的かな、どちらにしても今の私ではあいつに勝つことが出来ない。けど、エレメンタルアップも使えない。……もう、あれしかないか。
シエラは立ち上がるとウイングクレイモアを構える。
昇の修行で強くなったのは昇だけじゃない。私もちゃんと成長したはず、だから、今ならこれが使えるかもしれない。
シエラはよろけるが、何とか足を踏ん張り、力を集中させていく。
そんなシエラの姿にマルドは口を開いた。
「降伏すれば、これ以上の攻撃はしない」
どうやら降伏勧告のようだが、シエラは笑ってそれを拒絶する。
「冗談、そんなことできるわけない。今ここであなたを倒さないと昇達を追えない。そして雪心も救えない。だから、絶対に負けるわけには行かない」
「そうか……」
そのシエラの言葉にマルドは顔が少し俯き、シエラはその行動が何を意味しているのかはっきりと分かった。
「あなた、サファドがやろうとしてることを知ってる。それでも戦うの」
「俺は一度は主に忠誠を誓った。例えサファドがどんなことをしてようとも、騎士の名にかけて忠誠を裏切ることは出来ない」
「そう。でも、それは本当の忠誠ではない。本当の忠誠は例え自分の身がどうなろうとも、主の間違いを正す者。それが真の忠義」

「それも忠誠の一つかもしれん。だが、私は私の忠誠を貫くだけだ」
「不器用な生き方」
「そういう生き方しかできん」
「なら、私も私が信じた物を貫くだけ」
昇、エレメンタルアップはやらなくてもいい。だけど力だけは貸して、あいつを倒せるだけの力を私に貸して。私が信じた昇の意思を貫くために。
昇、私は昇の傍に居られるなら、本当はそれだけでよかった。本当はエレメンタルロードテナーにならなくても、私は昇の傍に居られるだけで充分だった。けど、昇が戦うと決めた以上は私も全力で戦う。
それは忠義なんかじゃない。私が信じるたった一つのもの。だから私はその信じたものを貫くだけ。
だから全力であいつを倒して昇の元へ行く！
シエラはありったけの力をウイングクレイモアに注ぎこむと空気が震えだし、その余波はその部屋全体に広がり自身のように空気と部屋が震えだしている。それほどウイングクレイモアが発している力が強いようだ。
そしてシエラがそれだけの力を発する意味をマルドはしっかりと分かっていた。この戦いに決着をつけようとしている事を。

第三十三話　貫く意志（後書き）

そんな訳でお送りした三十三話なんですが、……閃華強すぎ！
というか作者の私が言うなよ。まあ、そんな感じの話になってます。
はい、そこの方、どんな感じの話なんだよって突っ込んでもいいです
すよ。まあ、実際に突っ込まれても困るんですけど。
といいますか、物語を重箱の隅を叩くように読むもんじゃない。
物語の雰囲気を楽しみ、想像力で補うもんなんだ。はい、そこの方、
じゃあ、それだけの物を書けよって突っ込んでもいいですよ。まあ、
私は土下座するだけですけど。
ではいつものいきますね。
ではではここまで読んでくださりありがとうございました。そし
てこれからもよろしくお願いします。更に感想評価もお待ちしてお
ります。
以上、本当に私の後書きは自由でフリーダムだなと思った葵夢幻
でした。

第三十四話　セラフィスモード

空気が震えて部屋自体も地震に襲われているかのように震えている。それほどの力がシエラから放出されている。

シエラの何処にそんな力が残っていたのか不思議に思うマルドだが、冷静に精神を集中させてシエラの攻撃に備える。さすがに今飛び出すのは自殺行為のようなものと判断したらしい。

さすがのマルドも今のシエラの力に少しは怯んだようだ。

だが、それこそがシエラにとっては好機であり一気にウイングクレイモアのもう一つの姿に持っていくチャンスであった。

そしてウイングクレイモアは白く輝いて新たなる力が形となっていく。

「ウイングクレイモア　セラフィスモード！」

白い輝きはそのままウイングクレイモアの新たな翼となってその姿を現す。

新たに生えた四枚の翼。それは今までの翼の上下に生えてその形をしっかりと保ってはいるが、シエラにはそうとうの負担がかかっているようだ。

くっ、やっぱりキツイ。

だが六枚の翼は完全な形になれないようで羽先が炎のように揺らいでいる。それでも六枚の翼は大きく羽を伸ばしてシエラは一気に攻勢に出る。

刹那の瞬間、それほどのスピードでシエラはマルドの横に回りこむ。

そこでマルドはやっと横にいるシエラに気付くのだが、シエラはすでにクレイモアを振り始めており、マルドも慌ててバトルアクスを構えようとしたのだが、その前にクレイモアがマルドのヒットしてマルドを吹き飛ばした。

だがその攻撃こそシエラの限界を示していた。

先程の攻撃が刃の部分でなら一撃で決められたものを、シエラは刃の無い部分でマルドを吹き飛ばしてしまったのだ。それはシエラが今の状態であるセラフィスモードを使いこなしていない証拠だった。

だがそれでも再びウイングクレイモアを構えるシエラ。マルドは先程の攻撃が効いたようで未だに壁にめり込んでいる。

ここで一気に攻勢に出ないと今のシエラではいつまでセラフィスモードをを維持できるか分からない。

シエラは一気に勝負をつけるために、まずはウイングクレイモアを横一線に振るうと四枚の羽が飛び出して壁にめり込んでいるマルドの両手両足をそれぞれ拘束する。

「フェザーバインド」

あがくマルド。それでも拘束された両手と両足が自由になることは無く、壁に括り付けられている。

これでマルドの動きは封じる事が出来た。後は一気に決めるだけである。

シエラは改めてウイングクレイモアを構えると三対の翼の内、一対は真上にその翼を広げ、もう一対は真横、そして斜め下と六枚の翼は大きく展開される。

そして各翼の前に魔法陣が現れて始めて光の球を作り出だす。そしてそれらは次第に大きくなっていく。

「これが私の全力全開」

シエラは魔法陣に溜めた力を一気に打ち出す。

「セラフィスブレイカ――――！」

各魔法陣から打ち出された力は一つになってレーザーのように放たれた力はマルドを飲み込むだけではなく、その威力は壁どころかロードキャッスルを突き抜けて行き外に張ってある結界にぶち当たった。

そして放たれた力は収束を始めて一気に細くなり消えていく。

「こらなら、決められたはず」

今まで強く輝いていた翼はその光が点滅するほど弱まりおり、翼が消えるのと同時にシエラは糸が切れたようにその場に座り込む。
未だに土煙が立ちこめる場所に目を向けるシエラ。
あれでダメだったら今度こそ本当にエレメンタルアップを使うしかない。
だが、段々と薄れていく土煙の中からうっすらと人影が見え始めて土煙が完全に晴れるとそれがマルドだと確認できる。
嘘！　あれでも大丈夫なの。
無理にでも立ち上がろうとするシエラだが、一方のマルドはまるで動かない。
くっ、次に備えないと。
焦るシエラだが、マルドは動くどころか少しずつ体から白い粒子が立ち上っていく。そしてそれを見たシエラは再び座り込み大きく息を吐いて安堵する。
まったく驚かせないで。あんたは弁慶かって言いたくなってきた。
それは勝った瞬間。マルドは立ったままだが確実に倒したのだから。
その証拠にマルドの体は半透明になっており上っていく粒子の量は増えていき、マルドの姿は完全に人間界から消えていくのだった。
確かに消え行くマルドの姿は立ち弁慶そのものだった。
「はぁ」
シエラはクレイモアを地面に降ろすと大きく息を吐く。
昇に負担をかけないためにエレメンタルアップは使わなかったけど、私はかなりの力を使ったみたいね。まあ、少し休めば回復するけど、今すぐ昇達を追いかけるのは無理。
シエラはそのまま後ろに倒れて、大きく足を伸ばす。
疲れた。さすがに今の私じゃセラフィスモードは長時間維持できない。なにしろあれは通常の三倍の力を使うから、私の負担は大きい。
……そういえば、昇達は大丈夫なのかな。

「与凪、いる？」
虚空に問いかけるシエラの目の前に与凪を映し出したモニターが現れた。
「はいはい、なんですかって！　シエラさん、大丈夫ですか」
さすがに床に寝転んでいるシエラの姿に与凪も驚いたようだ。
「大丈夫、ロードナイトは倒したから」
「いや、そうじゃなくて、あっ、でも、まあ、いいのかな」
「与凪、混乱しすぎ」
「だって、いきなり呼び出されてシエラさんが倒れてるところ見たんですよ。誰だって驚きますよ」
「そう、それは悪かったわ。それで、他の皆はどうしてる？」
「はいはい、そのことですか。とりあえず琴未と閃華さんはロードキャッスルの最深部で装置の解体をやってるところです。そして滝下君達は、機動ガーディアンを全て撃破して、今はロードナイトが控えてる扉の前です」
「なら、すぐに行かないと」
無理に立ち上がろうとするシエラに対して、与凪は笑いながら現在の時刻を告げる。
「あははっ、シエラさん、今何時だか分かりますか？」
「……与凪、いきなりなに？」
「実はもうお昼なんですよ」
「だから」
「だから、滝下君達はロードナイトが控えてる扉の前でお昼ご飯を食べてます」
「……はぁ？」
「ですから、ロードナイトが控えてる部屋の前で現在滝下君達は昼食中です」
シエラは少し固まった後で再び倒れた。
昇、ミリア、それでいいの？
肝が据わってるのか、それとも頭があれなのか、どちらにしても

敵のすぐ近くでのんきに昼食を取っている昇達にシエラは呆れた顔をする。

そして与凪ものんきな事を言い出す。

「シエラさんも何か食べますか。とりあえずお弁当はありますけど」

「なんでお弁当なんてあるの？」

「それは、私が情報整理しながら調理教室を借りて皆さんのお弁当を作ってたからですよ」

「……私達精霊は二三日食べなくても全力で戦えるのは知ってる？」

「もちろん知ってますよ。精霊は本来元となった元素からのエネルギーで活動するんですよ、それに実体化しても供給されるエネルギーがなくなるわけじゃありませんから」

「そこまで分かっていて、何でお弁当なんて作るの？」

「それは実体化している精霊は食事を取ることで回復を早めることが出来るからです。ですから、あまり戦闘で力を使ってない閃華さん以外の人は皆食事中なんですよ」

それでも昇、せめて場所は選ぼう。

「それでシエラさんの分もありますけど食べますか？」

「……そうね、いただくわ」

まあ、回復が早い事に越した事はないから。

「はい、では今からそっちに転送しますね」

シエラの倒れている横に魔法陣が現れると重箱に包まれた弁当が現れた。

なんで重箱？

「それじゃあ、シエラさん。しっかりと食べて栄養を付けてくださいね」

「それにしては量が多くない」

「それはシエラさんが最後だからですよ」

与凪、あなたまさか量を考えずに作った。そして余った物を全部こっちによこした。

ジトッとしたシエラの目線に与凪も重箱の真意を気付かれたと思

い。そこから一気に早口になる。
「それじゃあシエラさん、私は閃華さんの補佐をしないといけないのでこれで失礼しますね。ではシエラさんの奮戦を期待してますので」
それは何に対する奮戦。
シエラがそう思っている間に与凪はさっさと回線を切ってしまった。
「はぁ」
さすがにこれにはシエラも溜息をつき、ゆっくりと起き上がって重箱の包みを開けた。
「……」
重箱にはぎっしりとつまった色とりどりの食事と、一番下にはどう見ても無理矢理詰め込んだ痕跡が見える。
与凪、せめて人数分の食材を計算してから調理して。それとも閃華が食べない分を私に回したの？
それでもしかたなくシエラは箸を取ると重箱に箸を付けていった。

そして同じく食事中だった昇達は昼食を食べ終わり、先程与凪に弁当箱を回収してもらったところだ。
そして改めてロードナイトが控えている扉の前に立つ。
この先にロードナイトがいる。
昇はそう思うと緊張はずだったのだが、そのことを知らせてくれた与凪がついでに昼食も用意していたのでミリアもお腹がすいたと駄々をこねてしまい、結局この場所で昼食をとることになってしまった。
そのせいで昇は先程までの緊張感は消えてはいないがかなり薄らいでいた。逆に言えば、余計な力が抜けたということだろう。
与凪がそこまで計算していたかは分からないが、昇はこれで戦いに望むことが出来るのだから。

僕達には時間が無い。だから、僕も戦わないといけないんだ。
昇の決意がどういうものかミリアは分かっていないだろうが、それでも昇は覚悟を決めていた。
そして大きく重厚な扉を昇はゆっくりと開いていく。
そして昇達が足を踏み入れたのは、奥に玉座が置いてある玉座の間だった。
「おや、ここまで来たんですか、私はてっきり引き返すと思ってたんですがまあいいでしょう。この玉座の間に来たということはロードナイトの一人、この冷峰が相手をしてあげましょう」
……いや、まあ、それはいいんですけど。
「けど、なかなか入って来ないんで私は怖気付いたと思ってたんですけど、ここに来たという事はそれなりの覚悟がおありなのでしょうね」
「まあ、一応、それなりの覚悟があるつもりですけど」
「おや、随分と曖昧な覚悟ですね。そんなことで私を倒すつもりですか」
「いや、曖昧というか、呆れてるというか、突っ込んだら負けかなと思ったりもして、もうどうしていいやら」
「昇、昇、こんな奴の相手をしちゃダメだよ。変なのが確実に移るよ」
もし移るんだとしたらそれはやだな～。
「随分な言い草ですね。言いたいことがあるならハッキリと言ったらどうですか」
「いや、そこに触れていいのかが、分からないんですけど」
「言葉にしないと伝わらないことが多いですよ」
まあ、そうかもしれないけど……。
「じゃあ」
昇は咳払いをすると勢いよく冷峰を指差す。
「なんで寝転がってせんべい食いながら雑誌読んでんねん！」
エセ関西弁でツッコミを入れる昇。そして突っ込まれた冷峰はゆ

っくりと立ち上がると雑誌とせんべいを虚空へと片付ける。
「愚問ですね。そんなの決まってるじゃないですか」
そして冷峰も勢いよく昇達を指差す。
「あなた達がなかなか入ってこないから暇だったんですよ！」
……。
「昇、昇、やっぱりあいつ変な奴だよ」
いや、いわれなくても分かるけどね。まあ、確かにあんなところでのんきに昼食を取ってた僕達も僕達だけど、それに合わせてのんきに寝転んで雑誌を読んでるなんてこの精霊もそうとうのんきなの？
「ふっ、お分かりになりましたか」
何を分かれと。
「あなた達がのんびりとしているものですから、ついこっちも羽を伸ばしてしまいましたよ」
えっと、それは責任転換ですか。
「ですが、ここに足を踏み入れということはそれなりの覚悟が出来ているのでしょうね」
先程のあなたの姿を見るまでは出来てました。
「まあ、あなた達はここに足を踏み入れたことに後悔することになるでしょう」
というかすでに後悔してます。
「それに私にも責任というものがありますからね。あなた達をここから先には行かせはしません」
よかったですね、責任感という物がまだ残ってて。
「では、始めましょうか。氷塊金砕棒（ひょうかいこんさいぼう）＜氷を持つ砕棒＞」
伊達にロードナイトは名乗っていないというところだろう。精霊武具をまとい始めた冷峰から発せられる力は昇達もしっかりと感じさせるほど強いものだった。
そして精霊武具をまとった冷峰は、昔の中国武将を思わせるような出で立ちとその細い体にはにつかわない程に大きな棍棒を持っていた。その棍棒は青くバットのように先に行くほど太くなっている

がその大きさと長さは冷峰の身長以上あった。
そんな中で、昇はミリアに近づくと小声で話し始めた。
「ミリア、ミリア」
「んっ、昇何？」
「しっ、声が大きい」
「あっ、ごめん」
「ミリア、こいつの相手は僕一人でやるから、ミリアは先に行って」
「昇！　だって相手は精霊だよ。人間の昇が敵う相手じゃないよ」
「大丈夫、僕だってシエラ達に鍛えられてきたんだから、精霊を相手にしても引けは取らないよ」
「でもでも、シエラ達なら手加減してくれるけど、あいつは容赦なく昇を倒しに来るよ。それに契約者の昇が死んじゃうと、私達契約した精霊も実体化が解かれちゃうんだよ。だから昇の敵は取れないよ」
昇は静かにミリアの頭を撫でる。
「大丈夫、僕は絶対に負けないから、それに後からシエラや琴未達が来てくれるかもしれない。だからここは僕に任せて先に行って」
「でも……」
「大事な友達なんでしょ、雪心ちゃんは、だからミリアは雪心ちゃんのところに行って」
「昇……分かった。ごめんね、昇」
「ミリアが謝ることじゃないよ」
それでも昇の心遣いが嬉しかったミリアは少しだけ溢れ出た涙をぬぐう。そして自分が進むべき道をしっかりと見据えるのだった。
「じゃあ、行くよ！」
「うん！」
昇は二丁拳銃を片方を冷峰に、片方を冷峰がいる少し前の地面に向けて乱射する。
「その程度が効くとお思いですか」
冷峰は自分に迫ってくる弾丸に向かって手を差し出して結界を張

る。だが昇の真の狙いには気付いてはいないようだ。
「むっ」
気付いた時には冷峰の目の前は昇の弾丸で作り出された土煙により、目の前が見えなくなっている。
「小賢しいですよ」
冷峰は金砕棒を横に振るうとその風圧だけで全ての土煙を吹き飛ばしてしまった。
「なに！」
そして再び昇達を目にしたはずの冷峰は驚きを隠せなかった。
それもそうだろう、そこには昇一人しかいないのだから。
冷峰がすぐに横を向くとそこには奥に向かって疾走するミリアの姿があった。
「させません」
「それはこっちのセリフ」
昇は再び冷峰の前に土煙を上げると共に今度は力を圧縮した弾丸を打ち出す。
「しつこい」
再び土煙を払い、昇の攻撃に結界を張る冷峰だが、弾丸は易々と結界を貫いて冷峰の頬を掠める。
冷峰は驚いた表情をしながらも頬から流れ出た血をぬぐい、今度は昇だけを見詰める。
「まあいいでしょう。この先にはシェードがいますから、一人ぐらい通しても構わないでしょ。まあ、サファド様には後でなにか言い訳を考えておかないといけませんけどね」
そんな冷静な冷峰とは反対に昇には微かな緊張感が走っていた。
今まで戦闘では全てシエラ達が戦ってくれていたが、昇自身が戦うのはこれが始めてである。ある意味では初陣とも言える戦でそれがロードナイトという強敵だから、緊張するなというほうが無理だろう。
さーて、どうしようかな。

そんな事を考えながら、昇の戦いは始まっていく。

第三十四話　セラフィスモード（後書き）

そんな訳でお送りした三十四話でしたが、その前に一言。

皆さん、ネットランキングへの投票ありがとうございました。おかげさまで初登場で三十四位とかなりの好スタートを切れたと思ってます。これも全て投票してくださった人たちのおかげです。本当にありがとうございました。

そしてまだ投票してない人は、ぜひとも投票をお願いします。とりあえず、そこら辺にある投票するというところをクリックしてもらいえれば、投票画面に行くので皆さんよろしくお願いしますね。

そんな訳でこれからも投票よろしくお願いします。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、かなりの人が投票してくれたので本当に嬉しい葵夢幻でした。

第三十五話　昇の初陣

契約者の能力は幾つかに分類できる。

まずは放出型。これは力を自分が持っている属性に変化させて放出する、つまり属性攻撃が出来るタイプ。この放出型は性格の個性が強いと現れやすい、怒りっぽい奴は炎、クールな人は氷という感じだ。戦闘では主に前線を精霊に任せて後衛からの援助攻撃で使われることが多い。

次に強化型。これは自分自身の身体能力を上げることが出来る。だが何処まで強化できるかは本人が今まで努力してきたかによって決まることが多い。ちなみに琴未のエレメントは強化型の最強形態にあたる。その他にも足だけを強化するスピードタイプ、力だけを上げるパワータイプなどがある。

そして最後に特殊型。昇のエレメンタルアップや雪心の仮契約などが当てはまり特別な資質を持っている者に出ることが多い。例えば仮契約などは人望を多く人の上に立つ資質を持っている。つまり、多くの人を仕切ることが出来る人がこの能力を発揮しやすい。昔は名将と呼ばれる人がこの能力を持つことが多かった。

そして昇のエレメンタルアップ。これは義に対して強い心の持ち主が発揮することが多い。つまり、人を思いやり人の為に自分が努力できる資質を持っている者に現れるのだが、人間そこまでお人よしな資質を持っているものはかなり少なので凄くレアな能力になっている。

そして特殊型がレアで強いワケが、型にはまりすぎないことだ。放出型、強化型、共に使い道が限られているが、特殊型だけは使い方によってはかなりの応用が利く。

昇が今着用している武器や防具はすべてエレメンタルアップの応用、精霊が契約時に発揮する能力である実体化を自分の武器や防具を作り出すために使っている。

本来なら精霊の能力を上げるわけだが、逆に言えば精霊の能力を自由にコントロールできるとも言える。つまりエレメンタルアップは精霊の能力や属性をを全て持っているとも言える。

そして昇は精霊が契約時に発揮する能力と実体化を使えるようになったわけだ。そしてその実体化を自分自身の武器や防具にかければ武器や防具は実体化する。後は本人の努力しだいで何処まで使いこなせるかだ。

そして昇はそれら全てを理解した上でミリアを先に行かせて自分の戦いに望もうとしていた。

今までは機動ガーディアンだけだったから射撃重視のこの装備でいたけど、さすがにロードナイトになると近接戦闘も考慮しないとかな。

昇は精神を集中させると、その身を光が包み近接戦闘用の武器と防具をイメージして実体化させていく。

武器の二丁拳銃は変わらないが、コートの下にはあきらに武装した装備が見えていて袖口からは篭手のような物が見えている。

「ダガーモード」

昇がそう呟くと左手に持っていた拳銃が変化を始めて、銃口から伸びた力はグリップの下まで届いて銃をガードするように囲んでいる。

そして銃口からは赤く光る刃が生えた。

「おや？」

銃を構える昇の姿を見た冷峰は肩をすくめて見せる。

「まさか、人間風情が精霊に戦いを挑もうというのですか、精霊の援助もなしに」

「そのつもりだけど」

「なにか私と対等に戦える能力でもお持ちでも？」

「さあ、それはどうかな」

今手の内をさらすわけには行かない。僕の能力が知られれば相手は容赦なくかかってくるだろうな。今は警戒させながら隙を付かないと。

だが冷峰は不気味なほどの笑みを浮かべる。普段から目が細い所為か冷峰の笑みは、より不気味に見える。

「どちらにしても、あなたが甘いことは確かですよ」

「なにっ！」

昇が冷峰の言葉に驚いている間に一気に昇との距離を詰めていた。慌てて横に飛ぶ昇。だが、精霊から見れば今の昇の動きはかなり遅い。そのため冷峰は一気に昇を間合いに入れることが出来た。そして振られる金砕棒。

昇はガードの付いている銃身で防ごうとするが、その衝撃は銃身を通り越して篭手まで貫くほどの衝撃を感じさせるもので昇は大きく吹き飛ばされてる。

だが昇は吹き飛ばされる寸前に後ろに跳おり半分は自分で吹き飛んだのだ。

そして昇の着地点を予想していた冷峰は容赦なく追撃をかける。

「氷列」

冷峰は床に金砕棒を突き立てると、そこから氷の針が突き出して地面を伝わり列をなして昇へと伸びていく。

地面を伝わってくる氷の針の列に銃を向ける昇。そして銃身に力を溜めると一気に引き金を引く。

「フレイムシュート！」

昇の銃から発射された炎の弾丸はバスケットボールぐらいの大きさになり、地面の氷を溶かしながら冷峰へと向かっていく。

だが冷峰は動じることなく、向かってくる炎の球のタイミングを計り、片手で金砕棒を振る。そして金砕棒が炎の球の芯を捉えて横へと弾き飛ばした。

「おや残念、これではファールですね」

いや、それはそうだけど……。

こんなときに、そんなのんきな事を言って来る冷峰が昇には妙に恐ろしかった。

なんなんだこの精霊。

「そういえば、エレメンタルアップには属性が関係ないのでしたね。すっかり忘れてましたよ。何しろ珍しい能力ですからね」

「なっ、何で僕の能力を！」

「おやおや、何を驚いているのですか。我々を侮ってもらっては困りますよ。あなた方も私達のことを調べたように、私達もあなた方の事を調べさせてもらいました。ただそれだけです」

しまった。確かに学校内なら結界が有るけど、それ以外は情報に関する防御は一切やっていない。だから調べようとすれば簡単に調べられたんだ。

自分の手の内を知られてしまったことに昇は萎縮してしまう。だがそれも無理は無い、何しろ相手は精霊で昇は人間なのだから。その戦闘能力の違いは嫌というほど昇は分かっている。

それでも昇はしっかりと顔を上げると冷峰をしっかりと見据える。

確かに情報戦では負けたかもしれない。けど、この戦いに負けたわけじゃない。僕がここに立っている以上はまだ僕は負けてない。

昇は冷峰に向かって走り始めた。

「愚かですね」

いや、違う。昇は自然と分かっているのだ。戦闘で一番大事なのは、例えどんな相手でも踏み出す最初の一歩の大事さが、その小さな勇気の尊さが昇には分かっていた。

「サンダーショット」

拳銃から飛び出したのは弾丸ではなく雷撃。

さすがに先程の一撃で接近戦がどれほど不利かを理解した昇は遠距離戦へと切り替えたのだ。しかも実体の無い雷撃を使って、確かにそれなら先程のように防ぐ事は出来ない。

だが冷峰は表情をまったく変えないで、ただ金砕棒を振り下ろして地面を叩くとそこから氷の柱が立ち上った。

そして雷撃が氷の柱に当たると双方とも消えてなくなってしまった。
「むっ」
そこを冷峰としては一気に昇との距離を詰めたかったのだが、昇の姿が見当たらない。
「上！」
冷峰が昇に気付いた時にはもう昇はエネルギーチャージが終わっていた。後は放つだけだ。
「どうして上に！」
冷峰は昇の移動方法に困惑しながらも上からの攻撃に備える。
「フォースバスター！」
いつの間にか二丁拳銃に戻っていた銃口から放たれたエネルギーは一つになり、一直線に冷峰に向かっていく。
これは力の塊だから放ち続ければ跳ね返すことは不可能なはずだ。確かに冷峰は昇の放った攻撃を跳ね返すことが出来ない。それどころか、金砕棒を両手で支えないと防ぎきれないほどだ。
昇の放ち続けている力が少しずつ冷峰を押していく。
「いっけー！」
昇は一気に出力を上げて決めにかかる。
一気に出力が上がったことによって冷峰はこらえきれなくなったのか、金砕棒を弾かれて昇の攻撃が直撃する。
しっかりとした手ごたえを感じた昇は攻撃を止める。そして今まで攻撃の反動で宙に浮いていた昇は一気に地上へと着地する。
「あれだけの攻撃だったから無傷なわけないよな」
だが、それは完全な昇の油断だった。
昇がそのことに気付いた時には左の脇腹に冷峰の金砕棒が当たり、痛みを感じながら吹き飛ばされた時だった。
昇は地面を二回、三回とバウンドしてやっと止まった。
「ど、どうして？」
全身に痛みを感じながらも、昇はやっと顔を上げて冷峰の姿を確

認した。
「嘘だろ、あれを耐えたのか」
確かにあれだけの攻撃だから冷峰も無傷ではすまなかった。その証拠に冷峰はかなりの傷を負っている。だが冷峰は昇の攻撃を耐え切ってすぐに反撃に出たのだ。
「まったく、驚きましたよ。まさか人間にこれだけの傷を負わされることになるとは」
「くっ」
「でも、詰めが甘かったようですね」
ゆっくりと歩いてくる冷峰、昇は全身の痛みに耐えながら、何とか立ち上がろうとする。
「おやおや、まだ戦う気ですか。そのまま寝ていれば楽に止めをさしてあげたのに」
「僕は、こんな所で負けるわけには行かない」
「そうですか。なら、充分苦痛を味わってから死になさい」
冷峰が一瞬にして昇の前に来て金砕棒を振り上げる。
昇は軽く横に飛ぶと二丁拳銃を発射してその反動で一気に移動する。先程冷峰の上に回ったのと同じように銃撃の反動を利用した。
だが冷峰はすぐに昇に追撃をかけてくる。
すでに金砕棒を振り出そうとしている冷峰に、昇は後ろに軽く飛ぶと冷峰に向かって、ありったけの力を打ち出した。
そいて冷峰の金砕棒は空を切り、昇は冷峰に攻撃をするのと同時に反動を使って冷峰と大きく距離を取った。
「その程度の攻撃が効くと思いますか」
だが昇の狙いは冷峰の攻撃をかわすことでダメージは期待していなかった。
このまま距離を取りたい昇だがそれを冷峰が許すはずも無く。すぐに冷峰は昇に向かって走り始めた。
「くっ、ダガーモード」
今度は両方とも近距離戦の武器に変えると昇は自ら冷峰に向かっ

て突っ込んでいった。
「愚かですね」
タイミングを計って金砕棒を振るう冷峰。だが昇は銃口から生えている刃の先に力を溜めると一気に放ちその反動で金砕棒を避けるとこんどはこっちから斬りかかって行った。
確かに冷峰の金砕棒は長くて破壊力もあるが、昇の武器とは真逆であり一旦懐に入られるとすぐには対応できない。そう昇は判断した。
だからこそ、冷峰の攻撃をかわした後にすぐに懐に入る昇。
そして刃をクロスさせるように振るうが冷峰は後ろに飛びよける。これは昇の武器であるダガーの弱点だ。確かに懐にもぐりこめば相手よりも有利に立てるが、刃が短い分当てるのも困難である。
そのまま冷峰の懐に入り続けて攻撃を続ける昇。さすがにここまで接近されると金砕棒を自由に振るえない冷峰はしかたなく一旦昇から距離を取るために、金砕棒を足元に打ち付けると床が壊れて粉塵が巻き起こる。
そして一気に昇との距離を開ける冷峰だが、昇はその時を待っていた。
通常の二丁拳銃に戻すとすぐに昇は粉塵から脱出して銃口を冷峰に向ける。
「ツインフォースバスタ――――！」
そして二丁拳銃から放たれた力は一直線に冷峰に向かっていく。
さすがにここまで早い反撃が来るとは思っていなかった冷峰は慌てて結界を張ると昇の攻撃をそのまま受け止める。
「ぐっ、直撃ですか。ですかこの程度……」
「このまま押し切らないと僕に勝ち目は無い」
そのまま力の拮抗が続くが冷峰は一気に反撃に出る
「私を、あまり舐めないでください！」
冷峰は結界を解くとすぐに金砕棒で昇の攻撃を受け止めてそのまま下に打ち下ろした。

重低音をあげて床に大穴が開く。
そして粉塵が巻き起こるが冷峰も昇も相手の様子を伺うだけで自ら動こうとはしなかった。
二人ともそれほど先程の攻防で体力を使ったようで、今は様子を見ながら息を整えている。
そんな中で昇は次の手を考える。
このままじゃ追い詰められる。なんとかこっちも手を打たないと。
……ッ！　まだ全身が痛いけど、動けなくは無い。けど僕にはこれ以上攻撃されると耐えられる自信は無い。なら、一気に決める。
「ダガーモード」
再び近距離戦の武器に変える昇。
そして粉塵が晴れると昇は冷峰に向かって走り出した。
「愚かですね」
冷峰は走ってくる昇に氷の槍を飛ばすが、昇はその攻撃をかすりはしたが直撃だけは避けながら走り続けて一気に冷峰の懐に飛び込む。
「無駄ですよ」
銃口を冷峰に向ける昇だが冷峰は手を差し出すと結界を張る。
だが、それこそが昇の狙い。銃口から生えた刃と結界が衝突する。
「まさか！」
昇の狙いに気付いた冷峰が一気に結界を強める。
「りゃあああーーーっ！」
だが昇はその結界を貫こうと、渾身の力を込めて銃を推し進める。
貫け、貫け、貫け、貫け、つらぬけーーーーーっ！
そして刃は結界を貫いて半分ほどが結界の中に入った。
昇は刃の先に一気に力を溜めると、刃の先に力の光球生まれてそれが一つにまとまり一気に膨れ上がる。
「フォースブレイカー！」
光球は一気に収束されて砲撃となって冷峰を飲み込んでいく。
そして昇の攻撃は壁にまで至り爆発を起こす。

その反動で昇も大きく後ろに吹き飛ばされてしまった。けど、昇は確信の笑みを浮かべる。
ほとんどゼロ距離、これなら倒せたはずだ。
確かに冷峰の防御を抜いての全力攻撃、冷峰が昇の攻撃を受けたのは間違いない。昇は両手を床につけて何とか座って未だに土煙が立ち上っている方を見詰める。
これで倒せなかったらどうしよう。ははっ、さすがにそれだと、もう笑うしかないか。
土煙は未だに晴れない。それが先程の攻撃の威力を物語っていた。でも、油断はまだ出来ないかな。シエラ達にも確実に敵を倒したのを確認するまで気を抜くな、って言われてるし。
立ち上がろうとした昇だが立ち上がることが出来ずに異変にこの時初めて気付いた。
あれ、なんで。……うわっ、手と足が凍ってる。
後ろを振りむく昇。そこには土煙から大きく迂回して地面を伝わってきた、氷の道が出来ていてそれが昇の下まで繋がっていた。そして昇の両手両足の自由を奪っている。
まさか！
昇がそう思った瞬間、一気に土煙が晴れて冷峰が姿を現す。
「人間風情が、よくもここまでやってくれましたね」
冷峰はかなりボロボロになっており、体の何箇所からは血が流れ出ている。
「だから、これ以上いたずらが出来ないように手足を縛らせてもらいましたよ」
「くっ」
この氷、破れなくは無いけどかなり時間がかかる。
「さあ、終わりにしましょうか」
一瞬にして冷峰は昇の前まで移動して金砕棒を振り上げる。
「契約者であるあなたが死ねば他の精霊も実体化は解かれる。つまり邪魔者はいなくなるわけです。さあ、あなたに死んでもらって全

てを終わりにしましょう」
なにか、なにか手は無いか、この状況を逆転できる手は。
だが手足の自由を奪われている昇にはこの状況をどうする事も出来なかった。
そして振り下ろされる金砕棒。
昇の目には振り下ろされてくる金砕棒がゆっくりと動いているように見える。
ああ、覚悟を決めろって事かな。ごめん、みんな。
昇は目をつぶりって謝りながらその時を待っていた。金砕棒が振り下ろされる、その時を。

第三十五話　昇の初陣（後書き）

難しいわボケ！　おかげでかなりシーンの修正になってしまったじゃねえか、責任者出て来い責任者。……というか私なんですけどね。

……はい、いきなり愚痴から入った三十五話の後書きですが、この話を書くのにかなり苦労しました。

なにしろ昇自身が戦うのは初めてだし、しかも武器が二兆拳銃と重火器を使った戦いですから、どう近距離の武器と戦えばいいのか、かなり困りました。というか、自分で設定しておいて何言ってるんだ、とか思わないでくださいね。まさか、私もここまで難しいとは思いませんでした。

でもでも、初めての昇の戦いです。それなりに相手の手を読み取る頭脳戦を中心に書いたつもりでしたが、こんな形になりました。

まあ、今の私の力量がこんなもんだと思って、見捨てないでください。

あっ、後、ネット小説ランキングへの投票ありがとうございました。おかげさまで、かなりランキングが上がりました。ですので、まだ投票していない人はバンバンそこら辺にある、ランキングに投票するをクリックしちゃってください。本当に多数の投票ありがとうございました。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、もうちょっと昇のかっこいい所を書きたかったなと思った葵夢幻でした。

第三十六話　合流

両手両足を凍らされて、昇は振り下ろされてくる金砕棒を目の前にして少しでも抵抗するために目をつぶり全身に力を入れる。
そして振り下ろされる金砕棒。
だが昇が感じたのは死ぬほどの痛みではなくぶつかり合う金属音だった。
ゆっくりと目を開ける昇。そこには見慣れた白い後姿があった。
「シエラ！」
「ごめん、遅くなった。そこから脱出できる？」
「うん、シエラはそいつの相手をしてて」
「分かった」
昇は凍っている両手両足に力を溜めるとその力を炎に転換させて放出させて完全に氷を溶かした。
つめた～、これは完全に凍傷かな。でもこのままシエラだけに任せるわけには行かない。僕も戦わないと。
昇はゆっくりと立ち上がると再び二丁拳銃を手にする。
さ～て、どうしようかな。……やっぱりここは、修行の成果を見せてやるか。
「シエラ、いくよ！」
冷峰と刃を交えながらも頷くシエラ。
シエラは一旦冷峰の武器を弾くと翼をはためかせて宙に舞い上がる
「フレイムシュート」
そこへすかさず昇が冷峰の横から炎の球を発射する。
「小賢しいですよ」
昇の炎の球を弾く冷峰、だがその時にはすぐそこまでシエラが迫っていた。
慌ててシエラの攻撃を受け止める冷峰。そしてシエラと冷峰は攻防を繰り返していたのだが、突然シエラが再び宙に舞い戻る。

「フォースバスター」
冷峰の後ろから昇の攻撃が来るのを見越しての撤退だったらしい。
だから冷峰はすでに眼前に迫っている昇の攻撃を避けるのは不可能だった。もう受け止めることしか出来ない。
そして冷峰は完全に昇の攻撃を受け止めた。
目で宙に舞うシエラに合図を送る昇。シエラは無言で頷くとウイングクレイモアの翼を大きく広げる。
「フルフェザーショット」
無数の羽の弾丸が一塊になって冷峰に放たれた。
「くっ」
さすがに前後からの攻撃に苦戦する冷峰だが、片方の腕をシエラの方へ向けるとシエラの攻撃に合わせて結界を張って攻撃を受け止めた。
「シエラ！」
昇は宙に舞うシエラに向かって叫び、シエラも頷く。
「せーの、いっけーーーっ！」
昇の合図に合わせて、シエラも全力を出す。
昇もシエラも今までの攻撃は冷峰の動きを止めるための物で、倒すために力を温存しておいたのだ。
それが昇の合図で両方からの攻撃が一気に出力を増す。
「ぐっ、ぐあああっ」
さすがにこれには冷峰も防ぎきれないのか段々と押されていって。ついには両方の攻撃がぶつかり合い爆発を起こした。
やった……のかな。うわっ。
だが、まだ油断が出来ないと判断したシエラは爆発の直後に昇に向かって飛び、抱きつくように抱えると爆発した地点から距離を取って地面へと舞い降りる。
「倒したのかな？」
「まだ分からない。だから昇、油断しないで」
「うん、分かってるよ」

「でも、さっきの連携はかなりうまく行ってたから、相当のダメージを与えたはず」
「ははっ、あれだけ練習したからね」
昇の修行はシエラの提案により、昇はシエラと琴未との連携の修行もしていた。実戦で使うのは初めてだったのだが、シエラと昇は見事に連携を決めて見せた。
「それに、私が来る前に昇がかなりのダメージを与えていたから、相手も限界が近いはず」
「こっちも、結構喰らっちゃったけどね」
「初めての実戦にしては上出来」
「ははっ、そうかな。つつっ」
今までは戦闘の高揚感で忘れていた痛みが急に思い出したかのように、昇の全身に痛みを走らせる。
だー、忘れてた。そういえば僕もまともに攻撃を受けてたんだっけ。
「昇、大丈夫」
警戒を解かないままシエラは昇を心配する。
「大丈夫、まだ戦えるよ」
本当はあばらの一、二本折れているのかもしれないけど昇は気丈に振舞う。というか、シエラが精霊とはいえ女の子の前で弱音を吐くのは、さすがの昇も抵抗が有るらしい。
そんなさなか、土煙の中からゆっくりと冷峰が歩いてきた。
嘘！　なんで。
「まさか私と昇の攻撃を喰らってあの程度なんて……そうか。昇、失敗したみたい」
「えっ？」
「あいつ、私達の攻撃を喰らう寸前に攻撃をずらした。だから、私と昇の攻撃は互いにぶつかり合い、あいつを巻き込むことなく爆発した」
「じゃあ……」

「そう、あいつは私達の攻撃をななめに受け流すことによって、ダメージを最小限に抑えた。思ってた以上にやるみたい。昇、よくあんな相手にあれだけのダメージを与えられたね」

いや、それは違う。

「あいつは僕と戦ってるときは本気を出してなかったんだ。僕が人間だから」

「なるほど、まさか昇があれほどやるとは思ってなかったんだ」

そうかもしれない。僕が人間だからあいつは油断していたんだ。だから僕はあれだけたたかうことが出来た。……今更ながら、改めて精霊の実力を実感すると自信をなくすかな～。

それでも昇の戦う意思は消えはしなかった。いや、シエラがいる以上はこれ以上の醜態をさらすのが嫌だったのかもしれない。どちらにしても昇は自分が足手まといになることが嫌なのだ。

けど、あれでダメならどうしよう。……やっぱり、ここは前衛をシエラに任せて、僕は後衛に回るしかないか。

「シエラ、前は任せるから、僕は後ろから援護する」

「分かった」

フォーメーションを組む昇達を見て、冷峰は薄ら笑いを浮かべる。

「おや、まだ抵抗する気ですか」

「そっちのほうが酷い状況」

「ふふっ、そうかもしれませんね。ですが、あなた方に私を倒す手段はありませんよ。さっきの攻撃で分かったでしょ。私の本気がどの程度か。それともそれすら分からないほど頭が悪いのですか」

「確かにあなたの本気がどの程度か分かった。けど、私達が倒せない相手じゃない」

「言ってくれますね。あなた達二人にこれ以上の攻撃は出来ないんじゃないんですか」

確かに、さっきのシエラとの連携は僕たちが出来る中では最強の攻撃に値するけど、でも僕達もそれだけじゃない。

「さて、では見せてもらいましょう。あなた達の力が本気の私に通

用するかどうかを」
「それじゃあ遠慮なく行かせてもらうわよ。雷光閃」
突然昇達の後ろから放たれた雷が冷峰を襲う。予想外の攻撃に冷峰の動きが一瞬遅れるが冷峰はギリギリ雷をかわした。
「ごめん昇、遅くなった」
「琴未！」
「くっ、新手ですか」
昇が振り返るとそこには琴未の姿があり。琴未はすぐに昇に駆け寄る。
「昇、大丈夫？」
「なんとかね。けど、まだ戦えるよ」
「そう、あんまり無理しないでね」
それで言うと琴未はシエラの横に並び、共に前衛に出る。
「琴未、閃華は？」
「下でワケの分からない装置をいじってる。って、私には分からない物だから、私だけ先に来たってわけ」
「そう、とりあえず助かった。今は少しでも戦力が欲しかったから」
「なに、あいつそんなに強いの？」
「たぶんかなりやる。今まで昇が相手だったから見くびって手加減してたみたいだけど、私達が合流したから本気でくると思う」
そう、あいつは今度こそ本気で来る。でも、この戦いは僕が挑んだ物だから、出来れば僕の手で決着をつけたい。けど、実際にはシエラと琴未の力を借りないと僕にはあいつを倒すことは不可能だから、せめて止めだけは僕が刺す。
「シエラ、琴未、少しの間時間稼ぎして」
「昇、何か手でもあるの？」
「この戦い、僕が終止符を打ちたいから」
「分かった」
「任せて、充分時間を稼いで上げるからね」
「それとシエラ、僕が合図をしたらあいつの動きを止めて」

「分かった、やってみる。琴未、協力して」
「了解、シエラもミスんないでよ」
「琴未じゃないからそれは無い」
「……シエラ、あいつの相手をする前に一回殴っていい？」
「いや」
「というか私は今あなたをグーで殴りたいんだけど」
「他の人を殴っといて」
「それだと意味が無いじゃない」
「じゃあ諦めて」
「嫌よ」
「あの～、出来れば目の前の戦いに集中して欲しいんですけど」
『分かってる！』
ううっ、なにも声を揃えてどならくてもいいじゃないか。
「しかたないわね。とりあえず行くわよ」
「分かってる」
「ＧＯ！」
琴未の合図にシエラは一気に宙に舞い上がり、琴未は冷峰へと突っ込んでいく。
冷峰はまず突っ込んできた琴未に向かって金砕棒を振り出し、琴未はそれを受け止めたのだが。
最初は何とか受け止めていた琴未だが、冷峰の力に敵わず吹き飛ばされてしまう。だがそこへすかさず飛び込むシエラ。
上から振り下ろされるウイングクレイモアを冷峰は両手で金砕棒を持ち、完全にシエラの攻撃を受け止めた。
そのままシエラはブーストを強めて押しにかかるが、冷峰にはびくともしなかった。
これ以上はやっても無駄と思ったシエラは一旦離れて宙へと舞い戻る。
そしてすかさず飛び込む琴未、冷峰は琴未に金砕棒を振るが琴未は反撃をせずに交わすことに専念した。

そして冷峰は大きく上に金砕棒を振り上げる。
そして振り下ろされた金砕棒は床をも砕くほどの威力だが、琴未には当たらなかった。何しろ琴未はこの時を待っていたからだ。琴未は金砕棒を紙一重でかわした後で金砕棒の上に乗っていた。

―新螺幻刀流　改　乗り刀―

そのまま金砕棒の上を走っていく琴未。だが冷峰は琴未ごと金砕棒を再び振り上げた。
冷峰は金砕棒を振り上げた勢いを使い、そのまま後ろへと飛び。琴未とシエラは冷峰よりも更に後ろで合流した。
「シエラ、そっちはどう？」
「ダメ、浅い」
「そう、こっちも浅かったわ」
シエラと琴未が話しているのは、お互いに冷峰に攻撃した結果だ。
琴未は金砕棒を振り上げられたときに、琴未は自ら跳んで一回転しながら冷峰の肩に斬り付けていた。そしてシエラは冷峰が金砕棒を振り上げるタイミングを見計らって、一気に高度を落として横から冷峰に斬りかかったのだが、それに気付いた冷峰は金砕棒を振り上げた勢いを使ってそのまま後ろに跳んでいた。
結果、シエラも冷峰の胸に浅い切り傷しか付けられなかった。
だが、これでシエラと琴未は確信した。
二人同時ならいける。

その頃、昇は黒い空間へと意識を沈めていた。
そこはいつもならエレメンタルアップを行うために、契約した精霊と思いを繋げる場所なのだが、昇は目の前に伸びてきている二本の糸を無視して自分の精神を落ち着かせていた。
この二本の糸、たぶんシエラと琴未だろうけど、あいつを倒した

いといういい思いが繋がっただけだから、エレメンタルアップをしても弱いはず。それに、この戦いは僕の手で決着をつけたい。だから、やってみるしかない。どれだけの力がでるのか分からないけど、今の僕はこれに賭けるしかないんだ。

昇は自分の胸に手を当てると精神を集中させて一気に力を送り込む。そして昇の意識は段々と現実へと浮上を始めた。

地震でも起きてるかのように床は振るえ、突風が吹きつけているかのように空気が震える。それほどの力が昇から溢れ出ていた。

「えっ、昇？」

「琴未、動きを止めない！　昇を信じて」

「あっ、う、うん」

シエラと琴未は攻撃を再開するが驚いているのはシエラと琴未だけではない。異常ともいえる力の放出に冷峰も充分驚いていた。

「なんですかこの力は、あの人間にこれだけの力があるとでも言うのですか」

冷峰ほどの精霊が目の前の真実を受けきれないほど、昇は異常は程の力が溢れ出ているのだ。

そして昇の意識は現実へと回帰する。

すごい、これがエレメンタルアップなんだ。注ぎ込んだ力を数十倍にしてくれる。僕の能力ってこんなにも凄かったんだ。

改めてエレメンタルアップの力に感心する昇。

そうか、だから発動条件もあんなにも難しいんだ。たぶん今の僕はエレメンタルアップの力を最大限した場合なんだ。

昇は自分の力を確認すると片方の銃を冷峰に向ける。

「シエラ、琴未、どいて！」

昇の言葉を合図にシエラと琴未は冷峰から距離を取るのを確認すると昇は引き金を引く。

な、なんだこれ。

発射された弾丸は、もはや弾丸ともいえないほどの砲撃というかレーザー光線のように力は発射されて、その威力には昇自身も驚くほどの力が込められている。

先程までシエラと琴未を相手にしていた所為か冷峰は昇の攻撃を避けるだけの余裕は無かった。たぶん傷つくのを覚悟すれば避けられたのかもしれないが冷峰はそれでも受け止めることを選んだ。

そして金砕棒を構えた冷峰に昇の攻撃が激突する。

「なっ！」

そして冷峰は昇の攻撃を防ぐことも、その場に踏みとどまることも出来ずに、玉座まで吹き飛ばされてしまった。

「シエラ！」

そこへすかさず昇は合図を出す。

「フェザーバインド！」

ウイングクレイモアを振ると十枚の羽が冷峰に向かって跳んでいく。

だが、冷峰はそれを避けようと飛び出そうとするが。

「じっとしてなさい！」

琴未の跳び蹴りが再び冷峰を玉座に座らせる。そして両手両足、そして首と各箇所、二枚ずつの羽が冷峰を縛る。

「シエラ、琴未、思いっきりやるからこっちまで戻って！」

二丁拳銃を冷峰に向けながら昇は叫ぶのと同時に力も溜めていく。

そして二丁拳銃の銃口の前に光球が生まれて昇は力任せに膨らませるのではなく、そのまま力を圧縮させていく。

こうすれば威力は倍以上になるはずだ。これで一気にあいつを倒す。

シエラと琴未が横に戻ってきたことを確認すると昇は一気に引き金を引く。

「ヘブンズブレイカーーー！」

発射されたのは極太レーザー、それが一気に冷峰向かっていき冷峰を飲み込むとそのまま壁まで突き抜けてロードキャッスルの外に

まで飛び出した。
これで、どうだ！
自分へのエレメンタルアップを解いて一気に疲労感が襲う中で、昇は未だに土煙が立ち上る向こうを見詰める。

第三十六話　合流（後書き）

そんな訳でお送りした三十六話でしたが、それとは関係なくこんなメッセージを受け取りました。後書きにツッコミを入れいいのか迷った、とのことです。

つーか、構いませんよ。もう私の後書きに突っ込みいれたい場合は感想欄でも、メッセージでも、心の中でも好きなところに突っ込んでください。ただ、私に届けたい場合は突っ込むところの場所を書いてくださいね。例えば何話の後書きのここにこう突っ込むとか、そう書いてくれないと何の事か分からないので。

まあ、私の後書きに突っ込みたい時にはご自由に突っ込んどいてください。……というか、私の後書きってそんなに突っ込むところあるのかな？　まあ、それはともかく。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、なんか最近調子が悪いなと思ったら、やっと自分が風邪をひいたことに気付いた葵夢幻でした。

第三十七話　変わらぬ定めと変える意思

「はぁ～、それにしても随分と綺麗に穴が開いたわね」
琴未が言っているのは昇が冷峰を攻撃した時に出来た穴のことだ。
あの後は土煙が完全に晴れると冷峰の姿は無く。与凪を呼び出して辺りに精霊の反応があるかも探ってもらったが、冷峰の精霊反応は出なかった。
つまり昇の最後の攻撃が冷峰を倒した。
それで安心したのか琴未はまるで観光気分で昇の攻撃の後を見ていたのだ。
「なんか、破壊したってより切り取った感じがするわね」
「それだけ昇の攻撃が鋭かったって事」
「そうなんだ。って、昇は大丈夫なの与凪」
昇は大丈夫だといったのだけど、シエラと琴未がどうしても無理矢理昇を床に寝かせると与凪に治療を受けている。
「はぁ、琴未、よく滝下君生きてたね。普通ならとっくに死んでるわよ」
「そんなに酷いの！」
「怪我事態はそんなにたいしたこと無いけどコートの方は完全にボロボロね」
「どういうこと」
「つまり、滝下君が防御力の高いコートを身にまとってからこの程度で済んだけど。もう少し弱い防具だと完全に死んでたわよ」
あの、与凪さん、そんな恐ろしいことを簡単に言わないでください。
「とりあえず、コートは基礎構造だけを残してほかはボロボロ。だから後一撃でも喰らえば骨折どころか内臓が破裂してた可能性があるのよ」
あの～……僕って、もしかして凄い状態で戦ってた？

「まあ、とりあえず防御力の高いコートに助けられたことは確かね」
「近接戦闘だと人間の昇は確実に不利、だから私達が攻撃よりも防御力強い装備を使うように進言した」
「って、シエラさんの予想通りに防御力が高いコートに助けられたってワケですね」
「そう、完全な状態の昇の装備なら一〇トントラックにはねられても大丈夫」
そんな災難に見舞われたくないです。
「まあ、どっちにしろ、私達が昇を鍛えてきたことは無駄じゃなかったて証明出来たみたいね」
あの酷い修行で何も身に付かない方が嫌だな～。
「それだけじゃなくて、あの精霊は最初から昇の事を見下していた。それが私達の勝因」
確かに、僕だけが相手をすると知ったあの精霊はどうみても最初っから僕を相手に本気を出してないようだった。
「昇がそんなにも強いとは思わなかったんでしょ」
「そう」
う～ん、そう言われても未だに強くなった実感が無いんだけど。
「だから昇を相手にあんなにもダメージを食らっていた。最初から本気で昇を倒すつもりなら昇に勝ち目は無かった」
……シエラさん、確かにその通りかもしれませんがハッキリと言わないでください。怖くなるから。
「まっ、どちらにしても外見だけで判断したあの精霊の敗因ってことね」
「そう。能力が特殊型の昇は使い方によっては幅が利く。そこまで見抜けなかった」
「それってつまり、僕がエレメンタルアップをここまで応用するとは思って無かったって事」
「そう、エレメンタルアップはレアな能力だから使い方も応用の仕方もあまり知られていない。だから昇の能力が分かっていても手加

滅した。エレメンタルアップは本来精霊の能力を上げる能力だから」
「まあ、確かにそれだけの情報だと昇があそこまで戦えるなんて思わないわよね」
というか、僕もよくこれだけ戦えたと思ってるよ。
「それで与凪、昇は大丈夫なの？」
「とりあえずね。体の怪我はもう大丈夫だけど、さすがにコートの再建は難しいわね。一旦装備を解除して新しく実体化したほうが早いかもしれないわね」
「そうか、じゃあそうして早くミリアの後を追おう」
「昇、そんなに無理しなくてもいいんじゃない」
「琴未、僕達には余り時間は無いんだ。出来るだけ早く上に行かないと」
そう、そこに雪心ちゃんがいて、あのサファドってやつもいる。
一刻も早く雪心ちゃんを助け出さないと。
昇は立ち上がると一旦制服姿に戻って再びコートの武装を実体化させた。
「行こう」
シエラと琴未は頷くと、昇達は上へと続く階段に向かって走り出した。

一方、ロードキャッスル最上階では、サファドが地面に魔法陣を出現させてその中心に雪心が眠っているかのように横になって宙に浮いていた。
ふむ、この感じ、メインの装置がいじられたみたいですね。さっきから精霊王の力が移動してこない。やれやれ、まあいいでしょう。今まで溜め込んだ分でもそれなりに私は力を得ることが出来ますし、後は別な媒体を探しましょう。
サファドは宙に浮いている雪心を改めて見詰める。
この媒体も便利だったんですけどね。しょせん仮契約は仮契約で

しかないと事ですか、仮契約では精霊本来の力がでませんからね。
まあ、ロードナイトなんて所詮は飾りでしかなかったんですからここまで働いただけましという物でしょう。
そしてサファドは手を振ると目の前に昇が走っている姿が映し出された。
それにしてもこの人間、まさかあれほどの力を持っているとは思いませんでしたよ。仮契約とはいえあの冷峰を倒すほどの出力を出せるなんて、一体どれだけの力を秘めてるんですかね。いや、ただ単に力の容量がバカデカイだけかもしれませんね。
そして今度はモニターにグラフが表示された。
ふむ、やはり装置をいじられたのは痛いですね。おかげで儀式を始めるのに時間がかかってしまいます。ですかこの扉の前に控えているのはシェードです。飾りのロードナイトとは違い、彼は本当に契約をしていますから本来の力を出せるはずですからね。強いですよシェードは、今の私以上にね。けど……。
サファドはもう一度雪心に目を向ける。
もうすぐ、もうすぐ私はシェードを超える、いや、それ以上の力を手にすることが出来る。例え今は精霊王になれなくても一歩近づいただけでも良しとしましょう。あまり欲張るのもよくないですからね。まあ、今回は今ある分だけの力を吸収して撤退することにしましょう。やはり引き際をわきまえるのも王としての資質ですからね。
サファドの笑みがこれから起こることを示してるかのように、不気味に最上階の明かりが照らし出す。

そしてミリアはというと、大きな扉の前に居た。
「与凪」
そして与凪を呼び出す。
「はいはい、なんですか」

「この先はどうなってるの？」
「はい、ちょっと待ってくださいね。……精霊反応が一つあります。確実にロードナイトが待ち構えていますね」
「分かった。じゃあいってくる」
「ちょっと、ミリアさん！」
いきなり扉を開けようとするミリアを与凪は慌てて止める。
「なに」
まるで人が変わったかのように見詰めてくるミリアに、与凪は思わず怯んでしまった。
「えっと、あの、滝下君達も今そっちに向かっているから合流してから入って入った方がいいんじゃないかって、思ったんですけど」
「それはダメだよ。私が今までほとんど力を使わないでここまで来れたのは昇やシエラが他のロードナイトを相手にして時間を短縮させてくれたから。だから、私がここで時間を無駄にするわけに行かないよ」
「それは、そうですけど……」
「大丈夫、私は絶対に負けない」
「はぁ、分かりました。では、滝下君達にはミリアさんの状況を伝えておきますね」
「うん、分かった」
それだけを言い残して与凪を映したモニターは消えてミリアは扉を勢いよく開けた。
そこは丸く広い部屋。そして、その中央に立っているのが……。
「シェード」
「……お前か」
ミリアもシェードもお互いに相手の姿を静かに確認する。そしてミリアはその部屋に足を踏み入れてシェードと対峙する。
「まさかお前がここまで来るとは思わなかった」
「皆が、私をここまで来させてくれた」
「良き仲間を持っているようだな」

「雪心も私達の仲間だよ」
「……そうだな。もし、雪心がお前達ともう少し早く会っていればそうなっていたかもしれない」
「今でも変わってない。私は雪心の友達だし私達の仲間だよ」
「そうだな、そうなればよかったのかもしれない。だが変わらぬのだよ。雪心が決めてしまった以上は変わることは出来ない」
「決め付けるな！」
「決めたのは私ではない。雪心が自ら決めたんだ。だから、俺は……雪心が決めたことに従うだけだ」
「それが嘘だと分かっていても」
「ふっ、俺も何度も雪心に言ったさ。だが雪心は聞き入れなかった。だから俺も覚悟を決めた。ロードナイトとして雪心を守ると」
「なんだか、悲しいよ。それ」
「俺にはそれしか出来なかった。ただそれだけだ」
「今からでも変えればいいじゃないか！」
「そうはいかぬのだよ。俺には変えることは出来なかった。だから自分のやるべきことをやるだけだ」
「なら、私が変える！　こんなこと、私が変えてやる！」
「出来るものならやってみるがいい。だがその前に」
シェードは両腕を胸の辺りでクロスさせる。
「ファングガンドレット＜牙のある篭手＞」
シェードの両腕が力のオーラを発すると、それは実体化を始めてシェードの篭手となった。
「俺を倒していくがいい」
「……この、バカ――――！」
ミリアはアースハルバードを振りかざしてシェードに向かって走り出す。シェードも構えて攻撃態勢に入ると、ミリアとシェードはお互いに攻防を繰り返す。
「なんで、なんで、なんでこんな悲しいことするんだよ！」
ミリアの言葉がハルバードと共にシェードに向かっていく。

「俺とて好きでやっているわけじゃない！」
シェードはミリアのハルバードを弾くと拳を繰り出すが、ミリアのハルバードに流されるようにかわされてしまった。
「じゃあ、なんで、こんなことをやってるんだよ！」
ミリアはハルバードを大きく上に振り上げると一気に振り下ろすが、頭の前で腕をクロスさせたシェードに完全に止められてしまった。
「こうする以外、俺に出来ることが無いからだ！」
ハルバードを弾くように両腕を大きく広げるシェード、そうなると完全に無防備な状態になるミリアの腹に拳をヒットさせて吹き飛ばした。
ミリアはそのまま壁に激突。だが重装備のミリアにはあまりダメージは無いのか、床に足が付くとすぐにシェードに向かって走り出した。
「そんなのは言い訳だー！」
ミリアはシェードに向かって大きく跳んでその勢いを使って一気にハルバードを振り下ろす。
「ならお前には何が出来るんだ」
シェードは振り下ろされたハルバードの柄を両手で掴み、完全にミリアの攻撃を受け止めた。
そして、ミリアごとハルバードを持ち上げるとミリアを床に叩きつける。
「結局、お前には、何も出来ない。俺と、同じだ。何も変えることが出来ず、ただ見守ることだけしか出来ない。それが、俺とお前の、定めだ」
言葉を区切るたびにシェードはミリアを床に叩きつけて、最後には再び壁に向かってミリアを投げつける。
そして再び床に足が付くとミリアはよろけながらもシェードに向かって走り出した。
「なら変えてやる。そんな定め、変えてやる！」

「無駄だ」
「無駄じゃない！」
ミリアは横からハルバードを振るってシェードの脇腹を狙うが、シェードは素早く体勢を横に向けると真正面からハルバードを受け止める。
「雪心は私の友達だ！　楽しい時には笑ったし悲しい時にはなぐさめ合った。そして私が雪心と過ごした時間は楽しかったから。だから雪心が困っているときには助けてあげたい。その先にどんな定めあろうと、運命だろうと、全部打ち砕いてやる！」
ミリアはハルバードの柄がしなるほど力を込めると、さすがのシェードも耐え切れないようで後方へ吹き飛ばされたが足だけは地面から離れることは無かった。
「定めを変えることなどできん。もう、何もかも遅いんだ！」
再びミリアに迫るシェードは拳を振るうが、その拳は空を切るのと同時に重装備のミリアの腕、鎧に二本の牙がまるで鎧を削ったような後が残る。
「だから、そうやって全部決め付けるな！」
ミリアはハルバードの柄でシェードの脇腹にヒットさせる。シェードは一瞬呻くものの怯みはせず拳を繰り出す。
その攻撃はミリアの顔をかすめるのと同時に頬に切り傷を与えて、ミリアの頬から少しだけ血がなれる。
だがミリアもシェードの攻撃にあわせてハルバードを突き出していた。その攻撃は顔を攻撃された所為か少しずれて、シェードの脇腹をかすめて服を切り裂き少しだけ血に染めた。
その後も二人は一歩も下がることなく、その場での攻防を繰り返して次第に二人とも傷が増えていく。
負けない、こいつだけには絶対に負けない。確かにこいつは雪心の大事な人かもしれないけど、今まで何も変える事が出来ずにただ従っていただけじゃないか。もし、昇が同じ事になるとしたら私は昇をぶっ叩いてでも目を覚まさせてあげるのに。

それはミリアが昇から一番最初に教わったこと。最初の頃のミリアはただ怖くて、震えてて、従うことしか出来なかったけど。それを変えてくれたのが昇だ。例えどんなに怖くても、どんなに決意してても、最初の一歩を踏み出さない限り変わらない。

その小さな勇気を教えてくれたから今のミリアがあるのかもしれない。どんな強敵だろうと怯むことなく踏み出す勇気。

そしてその勇気の大事さを知っているからこそ、ミリアはシェードを許せないのかもしれない。シェードは例え雪心に嫌われようとも踏み出さなければいけなかったのかもしれない。雪心の決意を変える、最初の一歩を。

そしてその勇気を持っている者と持っていない者のその差は確実に現れる。

少しずつではあるがシェードは確実に押されていた。

そして横から振り出すハルバードにシェードは堪えきれずに、ついにミリアに吹き飛ばされてしまった。そして壁に激突してヒビが入れて床に座り込む。

どうだ！　って言いたいけど、この程度であいつはねを上げないよね。なら、分からせるまでぶっ叩いてやる。

「うりゃあーーー！」

追撃をかけるミリア。だが、シェードは立ち上がると振り下ろされてくるハルバードに拳をぶつける。

力と力がぶつかり合ってそれは爆発を巻き起こした。ミリアも反対の壁まで吹き飛ばされてしまい。シェードも再び壁に激突することになる。

いった～い。まったく何て迎撃の仕方をするのよ。……けどなんでだろう、今のあいつには負ける気がしない。

ミリアはすぐに立ち上がると、まだ爆煙渦巻く中のシェードに備えて構える。

だがシェードは爆煙が渦巻く中で決意が揺るいでいた。
俺は負けるわけには行かない。そう決めたはずなのに何故だろうな。こいつなら、ミリアなら負けてもいいような気がする。もしかたら雪心を助けてくれる気がする。……ふふっ、お笑い種だな、俺がこんなことを思うなんてな。
だが、俺にもなさねばならぬことがある。可能性は限りなく無いかも知れないけど、雪心が信じた物を俺も信じねばならぬ。だから、雪心の願いが叶うまで負けるわけには行かない。
あの時の雪心が心から願った想いを叶えるために、それが嘘だと分かっていても俺はもう二度とあの時の雪心を見たくは無いんだ。あの一人で泣いている雪心を、もう見たくは無い。俺はもう雪心を泣かせる訳には行かないんだ。
そのためなら俺は命さえも賭けていい。
シェードは全身に力を入れる。それはまるで縛り付けられている鎖を自力で解き放つように。そんな中でもシェードは雪心の事を思う。
……ふふっ、そういえばいつから雪心の事をこんなにも思う事になったんだろうな。やはり俺の存在と雪心の存在が似ていたからか、だから俺は雪心と契約したんだったな。
俺も雪心も最初は似たようなものだった。だから、俺は雪心が信じた事を叶えてやりたい。その先に絶望が待っているのだとしても、俺は少しの望みを雪心に与えてやりたかった。だから俺はロードナイトになった。
だが……なんだろうな。今のミリアを見てると何故か俺とは違うやり方で雪心を助けてくれそうな気がする。だから証明してくれ、俺の命を賭けた戦いに勝ったなら雪心を助けてやってくれ。
「ウルフモード」
シェードの呟いたその言葉にシェードの篭手が消えるのと同時に全身が変化を始めだした。全身が毛に覆われて口が伸びて鋭い牙をむいて耳も頭の上に移動して大きくなっていく。人狼、そう呼ばれ

る姿がシェードの本当の姿だった。
それは生物系の精霊にとっては最終形態で極限までの力を出すことが出来る。
それほどまでにシェードが雪心を思う気持ちが強い。そしてその強さはミリアも変わることなく持っていた。
そして爆煙が晴れると再び両者はぶつかり合うことになっていくだろう。

第三十七話　変わらぬ定めと変える意思（後書き）

そんな訳で、ロードナイト編も始まってから、もう二十話になりました。わー、パチパチ、……はぁ、疲れた。

いや、書いていることにではないですよ。いい加減に治らない風邪に対して言っているわけですよ。

といいますかね。正直、この三十七話はもう少しうまく書けたかなと、思ってるわけですよ。それが、風邪が治らない所為か、いいところまでは行くんですけど、肝心な所でつまずく感じですかね。

……つーか、誰か何とかしてーー！

それじゃあ、そんな訳で。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、そろそろ健康な体が欲しいので、いっそのこと機械の体をくれるところに列車で行ってみようかと思い始めた葵夢幻でした。

第三十八話　ぶつかり合う同じ思い

「与凪さん、あの先？」
「ええ、あの扉の向こうでミリアさんがロードナイトと交戦中です」
「なら急ごう」
シエラと琴未が無言で頷く。
そして昇達はその部屋へと足を踏み入れると、すでに人狼と化したシェードとミリアの戦闘が激化していた。
「ミリア！」
昇の声にミリアは昇達がここに到着したことを知るとシェードを相手にしながら叫ぶ。
「来ないで！」
「えっ？」
「こいつだけは、私が絶対に倒すから手を出さないで！」
「けど……」
昇はミリアが相手にしている人狼に目を向ける。
なんだあれ、あれも精霊なのか？
始めて見る精霊の別形態に昇は戸惑いを隠せなかった。それを見越したシエラが口を開く。
「あれは生物系の精霊、その最終形態」
「生物系の精霊って？」
「簡単に言うと動物や植物を元素にした精霊。あの形状からすると、たぶんあいつは狼の精霊」
「動物にも精霊って宿るんだ」
「精霊は森羅万象全ての物に宿ってる。動植物も例外じゃない」
「それは分かったけど、ねえシエラ、何でミリアはあそこまで必死になってんのよ」
「……」
「分からないんのね。そうなんの、そうなのね」

「あの琴未、それはシエラにも分からないことがあるんじゃ」
「昇、琴未がいじめる」
「って、シエラ、ドサクサ紛れに昇に抱きつくな！」
「……うらやましい？」
「ぐっ、そんなの、うらやましいに決まってるでしょ」
……あの～琴未さん、素直すぎなのでは。
「でも琴未にはやらせない」
「なんでよ。次は私の番なんだからさっさと代わりなさいよ」
いつのそんなことが決まったんですか？
「嫌」
「あんたね！」
「あの～、皆さん。一応、ミリアさんが必死に戦っている最中にそんな漫才なんてやっていていいんですか」
与凪の指摘に一同が沈黙した後、シエラは昇から離れて琴未は顔を赤くしながら咳払いで誤魔化した。
「でも、確かに何でミリアはあそこまで自分一人でやろうとしてるんだろう？」
「ふむ、それはたぶん、あの狼の精霊がシェードじゃからじゃろう」
「えっ！　あの精霊がシェード」
「それしか考えられんじゃろ。ミリアがあそこまで必死になる理由は。じゃからシェードとの因縁は自分だけの力で決着をつけたいんじゃろうな」
「そっか、だからミリアは僕達に頼りたくないんだ」
「うむ、そうゆうことじゃろうな」
「そっか、確かにあの二人は雪心ちゃんの事で因縁があると言ってもいいから、だからミリアは自分の手でその因縁に決着をつけるつもりなんだね」
「まあ、簡単に言うとそういうことじゃな」
「僕達に出来る事は無いのかな？」
「やめておけ昇、今は見守る事だけしかできん」

「ミリア……」
「……ところで昇」
「なに閃華？」
「いや、いきなり私が現れたことに驚きはしないんじゃな」
「うわ、閃華いつの間に」
「棒読みの驚きをありがとう昇」
……あっ、いじけた。というか閃華ならいきなり現れても驚かないというか、もうそういうものだと思ってるからな。今更そこに驚けと言っても無理なんじゃ。
そしてそんな昇達を与凪はモニター越しに見ていた。
「というか滝下君たち何やってるんですか？」
「いや、今更それをきかれても困るんだけど」
「はぁ、今の滝下君たちを見てるとよく今までの激戦を潜り抜けてきたのか不思議だわ」
……僕もそう思います。
呆れる与凪と昇。そしてそんな昇達を無視してというか構う気も無く。ミリアとシェードの激闘は続いていた。

シエラほどのスピードは無いけど攻撃が鋭いよ。
ミリアは人狼と化したシェードの攻撃に押されていた。確かにシェードのスピードはシエラよりも劣るが攻撃の切り替えしが鋭く、防御重視のミリアにとってはやっかいな攻撃だった。
上下左右あらゆる角度から来る攻撃にミリアは防御するだけで攻撃に転ずることが出来ない。
そして次第にミリアの鎧には傷が増えていくばかりで、ミリアは直撃を免れるだけで手一杯だった。
まずいよ。このままだと押し切られちゃう。けど、昇のエレメンタルアップには頼りたくないし、どうしよう。
その時、背後から迫るシェードの動きを完全に見切ったミリアは

ハルバードでシェードの爪を完全に防いだ。
あれ？
だが、すぐにシェードは距離を取って再びかく乱してから攻撃に転じてきた。だがミリアはシェードの攻撃を防ぎながらも、先程見たものに確信を得ていた。
さっき、攻撃を完全に防いだときのシェードは完全に息が上がってた。もしかして、あの状態だと結構キツイんじゃないかな。……そうか、そうだよね。この戦いはシェードも私も思いは同じなんだ。雪心のために私とシェードは戦ってるんだ。だから、私もシェードも負けられないんだ。
それなら、私もやるしかない。
ミリアは迫ってくるシェードに向かって走り出して、シェードの爪がミリアの肩に食い込むのと同時にミリアはハルバードで思いっきりシェードを吹き飛ばした。その衝撃でミリアの肩から血が一瞬噴水のように噴出すがすぐに止まってミリアの鎧を赤く染めていく。
それでもミリアは怯むことなくシェードへ再び突っ込んでいく。
シェードはスピードで撹乱しようとするがミリアはそれを許さなかった。すぐにシェードの懐に飛び込むとそのままハルバードで押さえつける。そして一気に壁にまでシェードを押し切り壁にめり込ませる。
「ショット！」
壁から土の弾丸が飛び出す。それはシェードだけではなくミリアにも直撃するがダメージ量からすれば壁にめり込んでいるシェードが多い。
ミリアは自分にも攻撃が当たる事を覚悟したうえでの攻撃だ。そこまでしないと今のシェードに攻撃を加える事は不可能だと判断してようだ。
だがシェードは弾丸が収まるとすぐにミリアの腕に噛み付いて、顎の力だけでミリアを振り上げるとそのまま振り回してミリアを吹き飛ばした。

壁に激突したミリアに腕にも痛みが走る。どうやらシェードの牙はミリアの装甲すら貫くらしい。

こうなってくるとミリアの重装備も役には立たないようだ。それぐらいシェードは命を賭けて戦っていることが今のミリアには理解できた

そうだよね。この戦いには私とシェードの雪心への思いが掛かってるんだ。だから私も全力で戦わないといけない。例え、この命を賭けてもシェードと全力で戦わないといけないんだ。

それがシェードの望んだ事だし、この戦いに決着をつける方法だから。

ミリアはハルバードを天に向かって差し出すと、一気に力を放出する。

その力に反応するかのように地震が起きて部屋中が揺れるが、シェードは怯みもせずにミリアを見守っていたシェードも待っていたからだミリアの本気を。

そしてミリアの足元に魔法陣が現れる。

「ティターンモード！」

ミリアが叫ぶとハルバードがその形を変えていく。槍の部分が引っ込んで変わりにもう一つの斧が出現した。そして斧の先端が伸びると槍の様に鋭くなっていく。その姿は槍の様な斧を二つ対等に柄の先端にくっ付けたようになっている。まるで双斧（そうふ）のようだ。

それと同時にミリアの装甲も変わっていく。今まで重装備だった鎧がかなりの軽装になり、まるで防御を考えてないほどの薄い装甲になった。

これがミリアの、いや、地の精霊のもう一つの姿。

ミリアの変化を見ていた昇はその変わった姿に驚きを隠せなかった。

「だいぶ驚いておるようじゃのう、昇」

まるで昇の心を読んだかのように閃華が口を開く。
「だって、地の精霊って防御重視じゃなかったけ？」
「それは地の精霊の姿の一つ」
「シエラ？」
「昇、大地は確かに全てを支える物だから普段は防御重視のなの」
「じゃが、大地は時には凄まじき破壊力をもたらす時があるんじゃよ」
「時にはって？」
「例えるなら地殻変動による地震、または地底を流れる溶岩を噴出させる噴火、どちらにしてもその破壊力は凄まじいものじゃ」
「確かに、そういった自然災害は凄い破壊力を持ってると思うけど」
「それにじゃ、津波だって元は地震から発生する場合が多いじゃろ」
「つまり、地の精霊のもう一つの姿ってのは」
「そう、全てを破壊する防御無視の殲滅攻撃型、それが地の精霊のもう一つの姿」
「というか、防御無視って、かなり危なくない」
「じゃから本来は使わないんじゃ。じゃが、この戦いはお互いに負けることが許されない戦いじゃ。じゃからこそミリアもあのシェードとかいう精霊も己の全てを賭けて戦っておるんじゃよ」
そうか、ミリアもシェードもそこまで雪心ちゃんのことを思ってるんだ。
改めて二人の思いを感じる昇。だが、それと同時に別な感情も昇の中に湧き出してくるのだった。
けど、そこまでして戦うなんて、なんか悲しいよ。

ミリアは双斧を振り下ろしシェードの肩に傷をつけて、それと同時にシェードの爪はミリアの腕にその爪痕を残す。
もう二人に防御なんて概念は無い。どちらかが倒れるまで傷つけあるだけだ。

こうなると勝敗を決めるは戦術でも戦略でもない。思い、どちらが強い思いを抱いているかで勝敗が決まることになる。

そうして二人の思いは攻撃という形で二人ともぶつけ合い、傷つけ合う。二人とも、もしかしたら戦う力なんて残ってないのかもしれないが、雪心を思う気持ちが二人を戦いへと駆り立てる。

そうすることでしか表すことが出来ないからだ。雪心に対する自分の気持ちを。

雪心を思う気持ちはミリアもシェードも同じかもしれない。だがすれ違い、ぶつかり合うことになった事は二人とも後悔はしていない。なぜなら、それが自分の選んだ道だから。

だから後悔なんてしない。ただひたすらに自分が信じたことをやり通すだけだ。

必死で。

雪心、ごめんね。私、もしかしたら雪心の大事な人を倒すかもしれない。でも、例え雪心に恨まれても怒られてもいい。私は雪心を助けたいから、だから、シェードを倒して雪心の元に行くよ。

そして謝らないといけないから。私、雪心の気持ちも分かろうとしないでシェードの事を酷い奴だと決め付けちゃったから、その事だけは謝らないといけないから。だから、雪心の所まで行くよ。絶対に。

それにしても、私もバカだよね。こうやって全力で戦って初めて分かったよ。シェードがどれだけ雪心のことを思ってるかを今頃気付くなんてね。本当、私バカだよ。

そして全部終わったら一緒に泣いてあげるよ。お母さんの事が嘘だったことも、シェードがいなくなちゃう事も、雪心が泣くなら私も泣くよ。一緒に、それが友達だから。

だから、ごめんね雪心、今は全力でシェードを倒すよ。

雪心は、もしかしたら本当に良き友人を得たのかもしれんな。ここまで必死になって俺を倒して雪心の元へ行こうとしているのだから。

二人とも別な出会い方をしていれば、もしかしたら雪心は幸せになれたのかもしれないな。だが俺が不甲斐無いばっかりに、雪心に別の道を歩ませることになってしまった。もし俺がもっと必死で雪心を止めていたなら、あの時にサファドを倒していたなら別の未来が待っていたのかもしれない。それは雪心とって幸せな、別の未来が。

だが、今はそんなことを思っても詮無き事。俺は信じるしかないんだ。今歩いている道が、雪心を幸せにするということを。あの時誓った事を貫くために。

だから今は、試させてもらうぞミリア、お前の雪心に対する思いを。

二人が交差するたびにお互いに傷を増やし、武器を振るたびに血が飛び散る。そんな激闘を前にして昇は思わず目を逸らしてしまった。

「昇、目を逸らしてはいかんぞ。私達にはあの二人の戦いを最後まで見守る義務があるんじゃからな」

「でも、もう見ていられないよ。出来ることならミリアに手助けしてあげたい」

「それはならん！　昇、こういう思いがぶつかり合う激闘は見ている方も痛いんじゃよ。じゃから見届けねばならん。たとえ、ミリアが倒れようともな」

「そんな事を言わないでよ閃華！」

「じゃが、今のところ勝負は五分五分じゃからのう。ミリアが負ける可能性もある」

「それでも、見届けろって言うの」
「そうじゃ、この戦いには手出しは許されん。もし横槍を入れればお互いに後悔することになるぞ」
「後悔って……」
「例えどちらが勝っても横槍が入れば、横槍を入れた者を恨むじゃろう。お互いに真剣な勝負しておるのじゃらのう。それを邪魔されれば例え勝っても嬉しくはないじゃろう」
「でも、この戦いは悲しすぎるよ」
「なら昇、昇はあの二人を上回るほどの思いを持つことが出来るか」
「えっ？」
「もし昇があの二人の思いを上回るほどの思いを持っておれば、二人の戦いをやめさせることが出来るじゃろう。どうじゃ昇、昇の思いはあの二人を上回れる物か」
……そんなの、無理に決まってる。だって二人とも、あそこまで雪心ちゃんの為に戦ってるんだ。僕に、あの二人を止められるだけの思いはない。
僕も雪心ちゃんは助けたい。でも、自分の全てを、いや、それ以上を賭けても今の僕にはそこまで戦う理由がない。でも、あの二人は違う。ミリアもシェードって精霊も雪心ちゃんの為に全てを賭けて戦ってる。僕に、それを止める権利はない。
昇はしっかりと顔を上げて二人の戦いを見守る。
「うむ、それでよい。こういった戦いは見ているほうが辛い時もある物じゃよ」
「そうだね。僕は……しっかりと見届けないといけないんだ」
「うむ」

ミリアはシェードの肩に、シェードはミリアの腕にそれぞれ傷をつけるとお互いに距離を取って呼吸を整える。
そして二人の荒い息が収まり、普段の呼吸に戻ると一瞬だけその

場は静寂に包まれるが、すぐ二人は走り出した。
そして戦闘は再開されるが、今までの戦闘は違ってミリアもシェードも防御と避けることを取り入れて攻防を続ける。
どうやらお互いに分かっているらしい。二人とも限界が近いということと、その限界を超えた時が決着が付くときだと言う事を。
そして限界は確実にミリアに現れ始めた。
まずいかな、少し目がかすんできたよ。
それでもミリアはシェードの攻撃をかわして防いでいた。
攻撃のキレは相変わらずだけど、スピードがかなり落ちてるみたいだよ。そうか、シェードも結構きてるんだ。なら……。
ミリアはシェードの攻撃を真正面で受け止めるとそのまま力任せにシェードを吹き飛ばした。
もう決めるしかない。
ミリアはシェードに追撃はかけずに、出来るだけ精神を集中させて残っている力をありったけ無理矢理引き出す。
そのミリアの力を感じ取ったシェードもその場に留まり、出来る限りの力を引き出す。
「次で決まるぞ。昇、しっかりと見届けるんじゃぞ」
「うん」
「琴未とシエラも分かっておるな」
「分かってる」
「……ミリア」
琴未はまるで祈るように手を組み、昇とシエラ、そして閃華はしっかりと二人の戦いを見詰めていた。
そしてシェードの目が大きく見開く。
「うおおおぉぉぉーーーっ！」
シェードの咆哮が空気を震わせ、力が放出されて牙と爪に集中される。
「ファングスラッシャー！」
そして一気にミリアに向かって走り出す。そのスピードは速くて

空気が押されて風を巻き起こすほどだ。
シェードが迫っているのにミリアは動こうともせずにただその場に立っているだけだ。
そしてシェードの牙と爪がミリアに迫る。
だが突如ミリアは光の柱に包まれて、シェードの牙と爪を完全に光の柱で止めた。
「なっ！」
ありったけの力を込めた牙と爪を簡単に止められたことで驚くシェード。だが反対にミリアは笑みを浮かべた。
「忘れた。地の精霊は防御重視なんだよ。そして防御こそ、最大の攻撃できる」
そして光の柱はシェードの牙と爪を飲み込み、完全にシェードの動きを封じる。
ごめんね、雪心。雪心の大事な人、倒すね。
そしてミリアが立っている床が崩壊を始め、ミリアは宙に浮く。
「タルタロスブレイカーーー！」
そして光の柱は完全にシェードを飲み込む。
それに伴ない、まるで大地震のような揺れが部屋を襲い。昇達もたっていることが出来ずに床に伏せてシエラだけが宙に浮く。
そして光の柱は、その内部にあるロードキャッスルの天と地まで崩壊させていき大きな光の柱はロードキャッスルを貫いた。

第三十八話　ぶつかり合う同じ思い（後書き）

よっしゃあーーー！　きたーーー！　途中までだけど降りてきてくれたーーー！　執筆の神様が降りてきてくれたーーー！

……はい、現在深夜二時、無駄にハイテンションです。けどまあ、途中までは調子良く書けてたんだよ。ほんとに。まあ、最後ほうで少し詰まっちゃったけど、久々に調子が良かったよ。

いや～、今まで風邪をひいてたせいか、あまり書けなくてね。お昼頃までは調子よく書けてたんだけど、疲れてきたから溜まってるＤＶＤを整理したら、また少し不調になちゃった。そんな訳で三十八話はこんな形になりました。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、ゴ○ラのＤＶＤを二本レンタルしたら、二作ともＤＶＤの傷が凄くてまともに見ることが出来なかった葵夢幻でした。

第三十九話　悲しみを越えた決意

あれはある夜のことだった。俺はあてども無くさまよっていた俺は、ふと泣き声らしき物をが耳に届いた。

普段の俺なら捨て置いただろう。だがその時は何の気まぐれか泣き声のする方へと足を向けた。

そして俺が辿り着いた場所。そこには明かりもつけずに泣いている少女がいた。

だからどうしたと、本来ならそのまま捨て置けばよかったのだが何故か俺はその少女に近づいた。その時は契約を会話していない俺は実体化はしていなかったから少女は俺に気付くことなく泣き続けた。お母さんとなんども呼びながら。

今思えば俺はその場を立ち去るべきだったのだろうが、俺は何故かその少女を見続けていた。

ただ、悲しかったのかもしれない。少女ではなく俺が。

精霊は普段から元素となった物の傍から離れない物だが、俺のように今の日本では絶滅してしまった狼だが海外では確実に存在している。だから俺もその場所へ行けば同じ精霊に会えただろう。

精霊王が何故俺をこの地に生み出したのかは分からない。だから俺は宿る元素も無くてたださまよう事だけしか出来なかった。

だからだろうか、俺がこの少女を選んだのは。器の資格が無いと知っていながらも選んだのは俺が寂しかっただけなのかもしれない。目の前で泣いている少女のように。

そしてその時に俺はやっと自分が何をするために生まれてきたのかを理解した。俺は単なる探してにすぎない。器の資格を持ったものを探し出してその者をエレメンタルロードテナーにするためだけに俺は生み出された。

これは後で知ったことだが、精霊王は自分の死期が近くなると新たな器を探すために多くの精霊を生み出すらしい。俺もその中の一

人に過ぎない。
だから俺は決めてやった。あえて器の資格を持たないものと契約して俺は自分の生まれた意義を消し去ってやろうと。
そして俺は少女の、雪心の前に姿を現した。
最初は怖がっていた雪心だが、これからは俺が傍に居てやると言った途端にその表情が変わった。そして俺は雪心の前にひざまついて自分の精霊武具を差し出す。
これも契約の仕方の一つだ。精霊武具はその精霊の属性を示して自分の分身に等しい物だ。それを差し出すということは契約者に忠誠を誓うのと同じ、俺はその時から雪心の傍に居ることを約束して己の精霊武具にかけて忠誠を誓った。
最初の頃は大変だった。雪心を引き取るという役人を追い返して初めての人間の生活という物に慣れるのにかなり苦労した。だがそんな中でも雪心が俺に笑い掛けてくれれば楽しかった。
例えどんな失敗をしようとも雪心の笑顔が俺を励ましてくれた。それに、契約した精霊は契約時に人間界での生活に困らないように多額の現金が支給される。その額は雪心が成人するまでには充分な額だったから何も心配は要らないと思ってた。あいつが現れるまでは。

シェードが目を覚ますとそこには石造りの天井が見えた。
俺は……どうなったんだ。
それは確認するまでもなかった。シェードの感覚がすでにその答えを示していたからだ。だがシェードは念の為に自分の手を目の前に持っていく。シェードの手は半透明なほど薄くなっており、それは全身がそうなっていることを示していた。
そうか、俺は負けたのか。
シェードは目をつぶって必死に流れ出てくる物を手で押さえていた。

すまない雪心、約束を破ってしまった。だが俺は安心出来たぞ。
「おっ、ミリア、目を覚ましたみたいじゃぞ」
その時、閃華の声が聞こえてその後に自分に駆け寄る足音がシェードにはしっかりと聞こえていた。
シェードは目を擦るとゆっくりと目を開く。そしてそこには今にも泣きそうなミリアの顔があった。
「シェード……」
「俺は、お前に負けたみたいだな」
「……うん」
「そうか」
「……ごめん」
「お前が謝る必要はない。全ては俺の不甲斐無さが招いた結果だ」
「そんなことない！」
ミリアの涙がシェードの頬に落ちてるほどミリアは思いっきり首を横に振る。
「そんなことないよ！　全部シェードが悪いんじゃない。全部あいつが、サファドが悪いんだからシェードが悪いわけじゃないよ」
「だが、俺は雪心を止められなかった」
「なら私が止める。友達の頼みなら私が止める！」
「とも……だち？」
「そうだよ。雪心は私の友達、だから雪心の大事な人も私の友達だよ」
「……ふふっ、ははっ、そうか、俺とお前は友達か」
「そうだよ。皆、友達だよ」
「そうか、雪心は……本当に良い友人を得たようだな。今まで敵だった俺を友達と言うとはな」
「もうそんなの関係ないよ。私もシェードも同じ思いを持ってる。同じように雪心を助けようとした。ただ、道が違ってただけだよ」
「そうだな、そうかもしれないな。ミリア、といったな雪心を頼んでいいか」

「うん、うん、絶対に助けるよ」
「そうか、これで、安心して消えることが、出来る」
「なんで！　実体化が解けても雪心の傍に居てあげてよ。何で消えちゃうんだよ」
「ミリア」
閃華がミリアを呼ぶが、ミリアには届いていないようだ。
「雪心の傍に居てあげてよ。私がシェードの言葉を雪心に伝えるから、だから雪心の傍に居てよ！」
「ミリア」
「だから消える必要もどっかに行く必要も無いよ。雪心の傍に居てあげてよ！」
「ミリア！」
閃華はミリアの肩を掴むと無理矢理こっちに向かせて、ミリアの頬を思いっきり平手打ちする。
「……何するんだよ、閃華！」
「ミリア、そなたにはもう分かっておるはずじゃ。なにしろ、シェードと戦ったのはミリアなのじゃからな」
「……」
「二人ともあの状態で戦っておったんじゃぞ。お互いに自分の存在である元素の力を使ってな。じゃから負けたシェードは実体化を解かれる時にはもう元素の力を使いきっておるから、実体化が解けたら消え行くだけじゃ。それぐらい分かっておるじゃろう」
「シェードが、自分の存在する力まで使って戦ってたから、だからもう消えるしかないって言いたいの」
「そうじゃ。ミリアもシェードも己の限界を超えて人間で言えば命ともいえる精霊の存在する力までも使って戦ってたんじゃ。じゃから負けた者は消えるしかない。人間で言えば死を迎えたというところじゃろうな」
「……なんで、なんでこんなことになるんだよ！　私もシェードも雪心を助けようとしただけじゃないか、それがなんで消えなきゃい

けないんだよ！　なんでこんなことになっちゃうんだよ！」
　閃華の平手打ちがもう一度ミリアの頬に当たる。
「ミリア、今ここでそなたが喚き散らしても何も変わらん。じゃからやるべき事をやるんじゃ」
「やるべきこと……」
　ミリアは再びシェードの横に座り、流れ落ちる涙を拭かないままシェードを見詰めていた。
「出来ることなら……泣くのをやめて欲しいんだがな」
「無理だよ、そんなの」
「お前は、雪心と、背格好が似ているからな。お前が泣いてると、雪心が泣いてるようだ」
　そう、あの夜の時のように、雪心が泣いているのをただ見詰めていた、俺を思い出してしまう。
　その姿は今思い出しても、情けなくて、嫌になる。
「だから、泣くな、ミリア」
「シェード……」
「これからは、ミリアが、雪心の傍に、居てやってくれ」
「ダメだよ！　そんなのはダメだよ！」
「受け、入れろ。そして、助けて、やってくれ、雪心を」
「……うん」
「そして、これからも、雪心の、よき友で、いてやって、くれ」
「うん、うん」
「なら、これでいい。俺は分かっていたのかも知れない。ミリアが、俺を倒してくれる事を、そして、俺もそれを望んでいたという事を」
「何でだよ！　なんでそんなこと思ったんだよ」
「さあな、俺もよく分からん。だが、ミリアなら雪心を、本当の雪心に戻してくれると、思ったのかもな」
「なんだよそれ、それならシェードがやればいいじゃないか」
「俺では無理だった。だから言っただろ、全部俺の不甲斐無さが招いた、結果だと」

「だからそんなの変えれば良かったんだ。シェードにはそれが出来たはずでしょ」
「いいや、俺には無理だった。だからこそ、ミリアに、託す事が出来る。雪心の事を」
「シェード！　そこにはシェードも居なくちゃ意味が無いんだよ」
「そうだな。だが、俺は満足だ。俺が無し得なかった事を、代わりにやってくれる者が居て」
「シェード……」
「ミリア、最後に俺の手を握ってくれ」
「うん」
ミリアは半透明になっているシェードの手を取る。そこにはもう体温すらなく冷たい手だがミリアにはとても優しく暖かい温もりを感じる事が出来た。
この手が今まで雪心を支えていたんだと言う事を。
「すまないが、雪心の事を任せて良いか？」
「うん、絶対に雪心を助けるよ」
「そうか、これで、安心だ」
「……シェード」
もう俺には後悔などはない。全力で自分が選んだ道を進み、それを正してくれた友に全てを任せることが出来る。もしかしたら、俺は最後に幸せを取り戻したのかもしれない。雪心と過ごしてきた楽しい日々を、取り戻したのかもしれない。
「ありが……とう」
「シェード。シェード……シェード、シェード！」
シェードの体はもうほとんど透けている。あと少しすれば完全に消えるだろう。だが、それが分かっていても、ミリアは叫ばずにはいられない。
「ダメだよ！　こんなことはダメだよ！　シェードは雪心の傍にいなくちゃいけないんだ。だから、消えるなんて絶対にダメだよ！　シェー――ド――――！」

そしてシェードの体は完全に消え去りミリアの涙は床に落ちていく。
「こんなの……ダメだよ」

昇は思いっきり壁を叩いて歯を噛み締める。
なんで、なんでこんなことになるんだ。ミリアもシェードも雪心ちゃんを助けようとしただけじゃないか、それがなんでこんな結末になるんだよ。
昇はもう一度壁を思いっきり叩き、やりきれない気持ちをぶつけるが壁を叩いた手が暖かく包まれる。
「シエラ」
昇が横に向くといつもの無表情とは違って悲しい顔をしたシエラが昇の手を包んでいた。
「昇、昇の気持ちは分かる。それは皆一緒だから。だから、これ以上はやめて」
「……うん」
昇は壁に叩きつけた手をゆっくりと下ろすとシエラも手を離した。
「なんで、こんなことになったのかな」
「……しかたないこと」
「しかたない！　この結末をしかたないでシエラは済ませるの！」
「なら昇！　昇にはこの結末を変えられた。ミリアもシェードも救えた」
「うっ、それは……」
「……だから、しかたないで済ませるしかない」
「それは、悲しすぎるよ」
「そうだね。でも一番悲しいのはミリアだと思う。だから昇……」
昇は力無く頷くとゆっくりとミリアの元へ歩いていった。
そして後ろからミリアを思いっきり抱きしめる。
「昇、昇、シェードが、シェードが」

「分かってる。みんな分かってるから」
「うん、うん」
ミリアは昇の腕を思いっきり掴んでまるで何かに耐えてるように震えてる。
「私、こんなことをしたくて戦ったんじゃないよ。雪心を助けたかったから、だからシェードとも戦ったんだよ。でも、シェードが消えるなんて思ってなかったよ。私がシェードを」
「それは違う。ミリアは悪くない、いや、シェードも悪いわけじゃない。ミリアもシェードもああするしかなかったんだ。それしか、無かったんだ」
「でも、でも、私達がそこまでして戦わなければよかったよ。そうすればシェードは消えることは無かったのに」
「それも違う。二人があそこまで戦ったから二人とも後悔せずにすんだ。シェードも全部ミリアに託して消えることが出来た。もし二人ともあそこまで戦っていなかったら、未だに決着が付かずに二人とも後悔したかもしれない」
「でも、消えちゃったんだよ。シェードは、消えちゃったよ」
「それはミリアがちゃんとシェードの思いを受け止めたから、だからシェードも後悔しないで安心して消えていけたんだと思うよ」
「……私は、ちゃんとシェードの思いを、受け止められたのかな」
「ちゃんと受け止めたからミリアはあそこまで全力で戦ったんだろ。だから後悔なんてしちゃいけない。ミリアはちゃんとシェードの思いを受け止めたんだからその思いを引き継がなきゃいけないと思うよ」
「シェードの思い……」
「そう、それはミリアも同じ思いのはずだ。だからミリアの思いにシェードの思いも足してその思いを遂げないといけないんだ」
「……うん」
ミリアは昇の腕を放すと昇と向き合う。
「でも、少しだけ、少しだけでいいから、時間をもらっていい」

「うん、いいよ」
ミリアは昇の胸に飛び込むと思いっきり泣いた。昇もそんなミリアを優しく包むように抱きしめる。
だが、昇の胸中も複雑な物がいろいろとごちゃ混ぜになってうごめいている。
僕は、何も出来なかった。何も変えられなかった。僕の力はこの程度の物なのか、こんな悲しいことを止める事が出来ない程、僕は弱いのか。
自分の力の無さを嘆き。
僕はミリアと雪心ちゃんの笑顔を取り戻すために来たのに、なんでこんなことになってしまうんだ。こんなこと誰も望んでいないのに。こんなの、酷すぎる。
悲しみに押し潰されそうになりながら。
だから僕は絶対に許さない。ミリアと雪心ちゃんの笑顔を奪っただけじゃなく、シェードの犠牲してミリアを泣かせた。僕はあいつを、サファドを絶対に許さない。
そして、決意する。

それからしばらくして、ミリアも落ち着きを取り戻して昇達は与凪を呼び出した。
「はいはい、なんですか！」
いつも以上に明るく振舞う与凪の目に昇は涙の後を見つけるが、何も言わないことにした。それは今更言うことでもないし、与凪も昇達をずっと見ていたからあえて明るく振舞ってくれているのだから。
「この先について分かる？」
「はい、皆さんお分かりだと思いますが」
与凪の態度が急に真面目な物になる。
「その先に儀式用の魔方陣と人間と精霊の反応が出ています。です

から、その扉の向こうは……」
「サファドと雪心ちゃんがいる」
「……はい。おそらく」
「分かった。ありがとう与凪さん」
「いえいえ、私は皆さんに協力すると約束しましたから、その約束を守っただけですよ」
「でも、ありがとう与凪さん」
「……気をつけてくださいね皆。皆さんには帰る場所があって、待ってる人がいるはずですから」
「そうだね」
僕達は帰らないといけないんだ、あの楽しい日々に。そして、そこには雪心ちゃんもいなきゃいけないんだ。僕達はその日々を取り戻すためにここまで来たんだから。
「行こう」
昇の言葉に全員が頷きいて昇達は最後の扉に向かって歩き始めた。
だが、その扉の向こうに待っている物が最悪の運命であることを昇達はまだ知ることは無かった。
運命の歯車は確実に狂い始めて、そして加速していく。

ミリア……ちゃん？

第三十九話　悲しみを越えた決意（後書き）

……眠い。何故だか分からないが、最近やたらと眠い。はいそこの方、なら寝ろよと突っ込まないように、私は充分寝てますから。それでも眠いから、こういうことを書いているわけで、特に意味は無いです。

はいそこの方、意味が無いなら書くなよ、とか突っ込まないように。というか、意味が無いことを書いて悪いかーーー！　ここは俺の後書きだ、俺の自由だ、俺の楽園だ。だから何を書いてもフリーダムなんだーーー！

つーわけで、寝ます。でもその前に。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、寝ようと思って布団に入った途端、眠気が一気に吹っ飛ぶ葵夢幻でした。……なんで眠気が吹っ飛ぶんだよー！　寝れないじゃないか！

第四十話　精霊王の力の一端

この先にあいつが、サファドがいる。
昇は生唾を飲み込むと扉に手を掛ける。そして昇が力を入れて扉を押すと、鈍い音をたてながら扉はゆっくりと開き、暗い部屋に少しずつ光が入り始めた。
そして扉が完全に開くとそこには扉から入る光と、床に描いてある魔法陣が放つ光しか明かりは無いが魔法陣の前に立つサファドの姿だけはハッキリと見えた。
「おや、まさか本当のここまで来るとは思いませんでしたよ」
「サファド！」
「人間風情が、気安く私の名を呼ばないで欲しいものですね」
サファドは昇に向かって手を差し出しただけで、昇は後ろに吹き飛ばされてシエラと琴未がなんとか昇を受け止めた。
「ぐっ」
「ちょっと昇、大丈夫？」
「う、うん、大丈夫」
けどなんなんだあの力。シエラと琴未が受け止めてくれなかったら、僕は確実に隣の部屋すら飛び越えてたかもしれない。たったあれだけでなんであそこまでの力を出せるんだ。
「サファドー！」
昇達の横を通り過ぎてミリアが一気にサファドに向かって走り出して大きく跳ぶとハルバードを力の限り振り下ろすのだが、サファドはハルバードの斧を片手で軽々と掴んで、ミリアの攻撃を止めた。
ミリアの渾身の一撃をあんなに軽々と止めるなんて。
「サファド。よくも雪心とシェードを」
それでもミリアは出せるだけの力を出して押し切ろうとするのだが、サファドが動くことは無かった。
「お前が、お前が雪心に嘘を吹き込んだから、シェードは消えるこ

とになったんだ！　だからシェードの敵をここで討ってやる」
「おや、何を言っているのですか、あなたは。シェードを倒してここまで来たのはあなた達ではありませんか、シェードの敵というべきはあなた達では」
「ふざけるな！　お前が雪心に嘘を吹き込まなければシェードはロードナイトなんかにはならなかった。自分の命が燃え尽きるまで戦う必要なんて無かったんだ！」
「それは立派な最後でしたね。さすが、というべきですか」
「この、バカ――――！」
　更に出力を増すミリア。だがその力はサファドの髪すら小揺るぎもしないほど完璧に防がれていた。
「あなたは先程から騒々しいですね」
　サファドは掴んだ斧を軽く弾くとミリアは吹き飛ばされて、扉の上の壁に思いっきり激突して落ちてきた。
「ミリア！」
　昇は落ちてきたミリアを何とか受け止める。
「ミリア、大丈夫？」
「ぐっ、うん、平気」
　それにしてもさっきからなんなんだ。あのサファドの異様な力は、どう見ても力の差が有りすぎる。それにサファドはさっきから攻撃らしい攻撃はしてないのに僕達を軽くあしらってる。あの力はいったいなんだんだ。
「まずいのう」
「閃華？」
「どうしたのよ、閃華？」
「琴未、城の地下で見たものを覚えておるか」
「ああ、あの変な装置？」
「うむ、その装置の上に筒のような物が有ったじゃろ」
「あの青く光ってたやつ？」
「そうじゃ、あれが何か覚えておるじゃろ」

「……なんだっけ？」
「琴未、お主の頭はそんなに記憶力が無かったのか」
「あははっ」
「あれは精霊王の力を溜め込んでいた物じゃ。それに異様とも言える今のサファドの力、これはどうみても精霊王の力じゃな」
「じゃあ、儀式は？」
「終わってはおらんがその最中じゃろう。精霊王の力は強大な物じゃから一気に取り込むことは出来ん。器から零れ落ちる一滴を受け止め続けながら、サファドは精霊王の力を取り込んでいるんじゃ」
「それって、かなり気の長い作業じゃないなのよ。あいつはそんなを続けてるわけ」
「じゃろうな」
「けど、それって逆に言えばまだ少ししか精霊王の力を取り込んでないって事じゃ」
「うむ、その通りじゃ昇。たった少しの精霊王の力でこれじゃ。これ以上取り込まれては打つ手がない」
「じゃあ、今のうちの倒すしかない！」
「焦るな昇。手はもう一つあるんじゃ」
「えっ！」
「この戦いの鍵を持っているのは雪心じゃ。雪心さえ奪取すればサファドはこれ以上の力を得ることは出来ん」
「じゃあ、まずは雪心ちゃんを取り戻そう。サファドはそれからだ」
「うむ、うまく行けばサファドの力が逆流する可能性もあるからのう、今は雪心を取り戻すことに集中するんじゃ。よいな」
「うん、ミリア、シエラ、琴未、閃華、行くよ！」
「分かった。さすがに私もあいつは許せない」
「ギッタギタにぶちのめしてやるわよ」
「うむ、さすがに私もここまでの怒りを覚えるのも久しぶりじゃからのう」
……あの、皆さん。最初の目標は雪心ちゃんを取り戻すことで、

サファドを倒すことじゃないですよ。
「雪心――――！　絶対に助けるから、だから待ってて、私、雪心に謝らないといけないから！　だから待ってて！」
昇は意識を黒い空間に沈めると、そこにはすでに赤い糸が伸びてきていた。そして糸は今までに無いほどの力を発していてとても力強かった。
そっか、皆同じなんだ。あいつを許せない、そして雪心ちゃんを助け出したい。みんなの思いは一つなんだ。
昇は四つの糸を掴むと一気に意識を現実に引き上げる。
「エレメンタルアップ！」

……ミリア、ちゃん。……今、ミリアちゃんの声が聞こえた。……そっか、来てくれたんだね。……ミリアちゃんも分かってくれたんだね。……シェードが、どれだけ大事な人かを。

「りゃあ――――！」
ミリアは真っ先に突っ込んでいくとハルバードをサファドに向かって振り下ろすのだが今度はハルバードは空を切った。さすがのサファドも今のミリアの攻撃を受け止める自信が無いのだろう。それほど昇のエレメンタルアップが今のサファドをとの力の差を一気に埋めた事になる
そこへすかさず琴未と閃華のコンビネーション攻撃を加えるが、これもサファドを捉えることが出来ない。
そしてサファドの最終着地点を見極めていたシエラは空中から一気に攻撃を加える。
「フルフェザーショット！」
無数に迫る羽の弾丸。さすがに動きを止めた直後のサファドには回避不可能だ。サファドは手を迫ってくる攻撃に手をかざすと結界

を張って攻撃を受け止めた。
そしてサファドの裏手に回りこむ昇。そして二丁拳銃を動けないサファドに向かって、銃口をそろえて向けた。
「ツインバスターシュート！」
並んだ銃口から飛び出す力は一つの極太レーザーになり、サファドに向かって突き進むのだが。
「あまり、頭に乗らないでください！」
サファドは黒い光に包まれると、それを一気に開放してサファドを中心に黒い光は広がると同時に破壊もしていく。
それは昇とシエラまで伸びて行って二人の攻撃は掻き消されしまい、撤退を余儀なくされたのだが、その場から離れると昇はミリアに向かって叫ぶ。
「ミリア！　今だ、行って！」
ミリアは一気に雪心に向かって走り出す。
「雪心――――！」
だがサファドは一瞬にして元に居た位置、つまり雪心の前に移動した。
「だから、調子に乗るな――――！」
サファドミリアを吹き飛ばして雪心の前からどけると今度は手を前にかざして巨大な魔法陣が出現した。そこから放たれた力は昇達を吹き飛ばすどころか隣の部屋とも区切る壁まで破壊してしまった。
おかげで昇達は隣の部屋にまで吹き飛ばされてしまい、その力はサファド自身さえも驚くほどの破壊力だった。
「ふふっ、あっーはっはっはっ。そうです、これですよ、これが私の求めていた力、精霊王の力。ははははっ、これで私は王になる。精霊を、いや、この世界をすべる王になるのですよ」
「そんなことさせるか――――！」
まだ爆煙が渦巻く中からミリアが飛び出してサファドに攻撃を入れるが、その攻撃はサファドに届く事無く途中で止まってしまった。
サファドは何もしてないかのようだが、まるで壁に攻撃したよう

な手応えがミリアに伝わる。
「くっ、結界」
「ふふっ、ええ、そうですよ。今の私にはあなた程度の攻撃はわざわざ動く必要も無いのですよ。いい加減に諦めたらどうですか」
「うるさい、うるさい、うるさーい！　私は諦めるわけには行かないんだ。雪心にちゃんと謝るまで諦めるわけには行かないんだよ！」
「はぁ、あなたは何を言っているのですか？」
「うるさい、お前なんかに分かるわけが無い！　私と雪心は友達だから、そして私は雪心に酷いことを言っちゃったから、だから謝らないといけないんだ。だからそれまで、諦めるわけには行かない。雪心を助け出して、シェードの思いまで遂げてやるんだ」
「シェードは自らの意思でロードナイトになったのですよ」
「違う！　シェードは雪心をお前から助け出すためにロードナイトになったんだ。そしてシェードは、その思いを私に託して消えていった。だから、私はここでお前を倒して、雪心を助け出す」
「ふふっ、まあいいでしょう。やれるものならやってみるといい」
サファドは大きく目を見開くとミリアは吹き飛ばされてしまい、再び爆煙の中に姿を消していった。

……ミリアちゃん、謝りに来てくれたんだ。……よかった、シェードの事分かってくれて、……でも、シェードが消えたってどういうことなのかな、……シェード、シェード、シェード、返事して、……約束したよね、私の傍に居てくれるって、もう二度と私を一人にしないって、……シェード。

爆煙の中で合流した昇達はそのまま作戦会議に入っていた。
「ふむ、なかなかどうして、うまくはいかんもんじゃのう」
「昇のエレメンタルアップは今までに無いぐらいにその性能を発揮

しているのに、それでも困難」
「じゃあ、どうすんのよ。閃華、何か手は無いの？」
「そう言われてものう。私もサファドがあそこまで強大な力を手に入れておるとは思っておらんかったし、正直エレメンタルアップで対等に戦えると思っておったんじゃが」
「僕がエレメンタルアップに集中してみようか？」
「う～む、それでもエレメンタルアップの力が上がっても、正直あやつに対抗できるとは思えんしな。どうしたものかのう」
「はぁ、打つ手無しなの、閃華？」
「琴未、その通りじゃ」
「……お願いだから、こんな時に言い切らないで」
「じゃが事実じゃ。こうなってはしかたないのう、最後の切り札を使うとするか」
「なによ閃華、やっぱり手があるんじゃない」
「じゃがこれは最後の最後に使う手じゃ。これがうまく行かんときにはもう後は無いぞ」
「分かったわ、それで、どうするの？」
「特攻あるのみじゃ」
「……」
「なんじゃ琴未、その目は」
「いや、閃華、まともな作戦は無いの？」
「力の差が有りすぎる。こうなっては各々が出来る限りの力を出し切るしか手は無いんじゃよ。もう、戦略などは役にたたん」
「はぁ、結局、全力でぶっ叩くしかないわけね」
「そうじゃのう」
その時、突如昇達のところに何かが飛んできて、昇は飛んできたものに直撃する。
「つつっ、って、ミリア！」
だがミリアは昇達に気付いていないように、再びサファドの元へ駆け出そうとするが、昇がミリアに抱きつく格好になって、それを

止める。
「昇！　離して、雪心を助けないと」
「分かってる、分かってるから落ち着いてミリア」
「おお！　そうじゃ！」
突然大きな声を上げた閃華にミリアも驚き、昇を振りほどこうとするのが止まった。
「なに閃華、いい手でも思いついての？」
「ちょっと待っておれ琴未、与凪、出れるか」
「はいはい、なんですか」
昇達の目の前に与凪を映し出したモニターが現れる。
「与凪、雪心の意識レベルは分かるか？」
「えっ、それって雪心ちゃんがどれだけ意識がハッキリしてる、ってことですか？」
「うむ、そうじゃ」
「ちょっと待ってください。……そうですね、完全な睡眠状態ですけど、レム睡眠みたいですね」
「うむ、後どれぐらいレム睡眠は続くか分かるか？」
「そうですね、脳波から見て、あと三〇分ぐらいかと」
「それだけあれば充分じゃ。これでいけそうじゃな」
「あの～、ちょっと質問していい？」
「なんじゃ、琴未」
「レム睡眠って何？」
「……時間が無いので簡単に説明するよ琴未。レム睡眠っていうのは、体は寝てるんだけど脳が起きてる状態。つまり、眠りが浅い状態で、レム睡眠の時に脳は記憶や深層意識を整理して夢を見るってこと、分かった？」
「……なんとなく」
「詳しく知りたければ後にするんじゃ、今は目の前のことに集中せい」
「分かったわよ」

「って、閃華、作戦って？」
「うむ、まずはミリアを除く四人でサファドに攻撃を仕掛ける。その間にミリアは雪心に向かって叫び続けろ」
「それで閃華、ミリアが雪心ちゃんに叫び続けるとどうなるわけ」
「雪心が起きる」
「……えっと、閃華、それにどんな意味があるのよ」
「もし雪心が起きれば、今サファドに送られている精霊王の力をこっちでコントロール出来るやもしれん。そうなれば」
「そうか、サファドは精霊王の力を使えなくなる」
「うむ、そういうことじゃ昇」
「じゃあ、私は雪心に言いたい事を言えばいいの？」
「うむ、ミリアの思い、そしてミリアに託したシェードの思い、それを全て雪心にぶつけてくるんじゃ。そうすれば雪心は起きるやもしれん」
「うん、わかったよ」
「じゃあ、その作戦で行こう。琴未と閃華は先行してシエラは中間をお願い、僕は援護に回るから。そしてなるべくサファドを雪心ちゃんから離させる。そしてミリアは遠くからでもいいから雪心ちゃんに聞こえるように叫び続けて。皆、それでいいね」
全員が頷き、立ち上がる。
「じゃあ、行こう」
昇の合図と共に全員が行動を開始して、昇も爆煙が薄れていく中でサファドに向かって走り出した。
この作戦がうまく行くかは分からないけど、今は信じるしかない。ミリアやシェードの思いが雪心ちゃんに届くことを。
だが、その作戦が思いもよらない結果を生み出すことになるとは、今は誰にも分からなかった。

第四十話　精霊王の力の一端（後書き）

う～ん、調子に乗りすぎた～、というか勢いに任せて書いていたら、かなり長くなってしまった。

本当なら、サファド戦は一話で終わるはずだったんですけど、終わりませんでした。はいそこの方、ネタバレするようなことを書くなと突っ込まないでください。そうなったらもう私が額を地面に突きつけるまで土下座するしかないので、まあ、勘弁してください。

はい、そこの方、自分で言うなよって突っ込んでいいですよ。私は開き直りますから。それがどうした、ごめんなさい。……って、結局謝ってんじゃん俺。

さて、勢いで書いた後書きもこの辺でして、それでは行きます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、そろそろ次のシリーズのプロットを書かないとなと思い始めた葵夢幻でした。つーか、まだこのエレメは終わりませんよ。終わらせてもいいけど、終わりませんよ。目指せ百話。……あれ、もしかして今、俺自分の首を絞めた？

第四十一話　届けたい思い

「閃華、行くわよ」
「うむ、しっかりと合わせてやるから思いっきりやるんじゃぞ」
「うん」
爆煙が薄れていく中で琴未と閃華はサファドに向かって走り始めた。
「シエラは上から行って」
「分かった」
昇の指示に従ってシエラは一気に爆煙が渦巻く中で一気に上昇を始める。
「じゃあ、ミリア、後は頼んだよ」
「うん、昇も気をつけてね」
「大丈夫」
昇はそれだけ言うとミリアの頭を優しく撫でる。
「絶対にうまく行くから」
そうだ。絶対に失敗するわけには行かないんだ。僕はミリアと雪心ちゃん、二人の笑顔を取り戻さないといけないんだ。
「じゃあ、行ってくるよ」
「うん」
昇はミリアから手を離すとサファドに向かって爆煙の中を走り始めた。まだ心配そうな顔をしているミリアを残して。

爆煙の中から飛び出した琴未と閃華は一気にサファドへと迫る。
そんな二人を見たサファドは軽く肩をすくめて見せた。
「おや、まだ分からないみたいですね。力の差という物が」
「そんなに物分りがよかったら、何年も片思いなんてやってらんないのよ」

「……琴未、それは自慢なのか」
閃華のツッコミを思いっきり無視した琴未は一気に距離を詰めて、サファドが間合いに入ると床がヒビ割れるほど右足を踏み出す。

―新螺幻刀流　二乃太刀無用―

渾身の力を込めた琴未の初太刀だがサファドに届く前に結界がそれを防ぐ。
そのまま力を込める琴未だがサファドの結界を破るには至らず、しかたなく一旦距離を取るがそこにすかさず閃華が飛び込む。
そして方天戟を一気に突き出して結界の突破を図るが、やはり結界を突破出来ずに琴未と同じところまで退いた。
「どうしました。もう、終わりですか」
「くっ、閃華、あの結界がもの凄く硬いんだけど」
「そうじゃのう。私も琴未と同じところを攻撃してみたんじゃが、突破できんかった」
「というか、あいつが何もしてないのに退くのがもの凄く悔しいわ」
「ならこちらからも行きましょ……」
「シエラ！」
サファドの言葉を遮って昇が叫ぶと、上空にいたシエラが一気にサファドに向かって降下していく。
「ウイングクレイモア、フルブースト」
羽先が変形するほどのスピードでサファドに突っ込んでいくシエラ。だがサファドの結界が完全にシエラの攻撃を防ぐのと共に、ウイングクレイモアと結界がぶつかり合った衝撃で突風が巻き起こる。
それでも昇は爆煙から飛び出して左斜めに向かって走り続ける。
そして未だにぶつかり合う結界とウイングクレイモア。
ここで一気に決めないとサファドに攻撃を加えるどころか移動させるのも困難になる。皆で一気に叩くしかない。
「琴未、閃華、合わせて！」

昇の叫び声に琴未と閃華は頷いてすぐに攻撃態勢に入る。
シエラは上空から攻撃しているからそのすぐ下は開いてる。シエラの攻撃にあわせるにはあそこしかない。
「ツインフォースバスター」
「雷神閃」
「龍神激」
昇達の攻撃はシエラのウイングクレイモアが攻撃しているすぐ下、つまりシエラが攻撃している場所とは若干ずれてはいるがその一点に攻撃は集中された。
「ぐおっ」
さすがにこれだけ一点に集中攻撃をされては、さすがのサファドも両腕を前に出して結界を維持するのが精一杯だったのだがそこに昇は新たに叫ぶ。
「追加の、エレメンタルアップ！」
それと同時に四人の攻撃力は一気に上がってとうとうサファドの結界は砕け散った。
そして今まで結界を押し切ろうとしていたシエラが障害となっていた結界が無くなった事により、一気にサファドに迫る。
だがシエラのウイングクレイモアはサファドではなく、サファドが居た位置の床を砕いた。
よし！　これで雪心ちゃんへの道が開けた。後はサファドを遠ざけるだけだ。
「琴未、閃華、追って！」
「誰をですか」
すぐ後ろで聞こえた声に昇は振り向くことなくすぐに床を転がるようにしてその場から離れて、そこに閃華が突っ込んできた。
そして琴未も加わりサファドと攻防を繰り広げる。
昇はというと未だに座ったままで先行した琴未達に戦闘を任せていた。というか立ち上がれないようだ。
うわ～、びっくりした。いきなり後ろに現れるからとっさに避け

たけど、あれでよかったのかな。
　ようやく昇が立ち上がるとそこへシエラが舞い降りてきた。
「昇、大丈夫？」
「うん、何とかね」
「そう、でもいい判断だった。昇があのまま立ち尽くしてると、今頃昇の頭は胴体と繋がってなかった」
　……マジですか、シエラさん。って、こんなことしてる場合じゃないか、二人を援護しないと。
「シエラ、なるべくサファドから離れないように出来る？」
「攻撃に専念しなければいける」
「分かった。じゃあ、シエラは二人を援護しつつ、サファドに引っ付いてて、そうじゃないとまたさっきみたいに僕の後ろに回られそうだから」
「そうだね。昇さえ死ねば私達の実体化も解かれちゃうから、そうなれば私達の負け、もうどうしようもなくなる」
　いや、そうなんですけど。そうハッキリと言われると凄く怖くなるんですけど、というかシエラさん、ワザとやってます。
「まあいいや、じゃあシエラ頼んだよ」
「任せて」
　シエラはウイングクレイモアの翼を羽ばたかせると、一気にサファドに向かって突っ込んで行いくと二人に合流してなるべく防御に専念しながら、サファドに張り付いている。
　さて僕も行かないと、ミリア、後は任せたよ。
　昇は完全に爆煙が消えて姿が見えるミリアに頷いて見せるとミリアも頷き、昇は再びサファドの元に向かって走り始めた。

　昇はああ言ってたけどそんなに時間は無いはずだよね。雪心、今起こしてあげるからね。
　ミリアはなるべく気配を消しながら、雪心が浮いている魔法陣へ

と近づき辿り着くのだが魔法陣の中には入れないようになっていた。
う～ん、やっぱり中には入れないよね。じゃあ、この魔法陣の壁を叩きながら叫ぶしかないか。
ミリアは大きく息を吸い込んで思いっきり叫ぶ。
「雪心――――――っ！」
その声が部屋中に響き渡る。
まあ、それだけの大声を出せば当然サファドも気付いてミリアの元へ移動しようとしたが、その前にシエラが立ちはだかった。
だがシエラは攻撃をするわけでもなく、ただサファドの前に立っているだけで何もしようとしない。
シエラの意図に気付いたサファドは一瞬悩むてそこに追い付いて来た琴未と閃華が攻撃に移る。
そう、シエラはサファドをミリアの元に行かせなければいいのだから、無理に攻撃する必要が無い。ただ足止め出来れば良かっただけだ。
結局、足止めを喰らったサファドは昇達の相手に専念するしかない。だが、サファドは余裕の笑みを浮かべるとミリアにも聞こえるような大声で叫んだ。
「無理ですよ。その器には充分に寝てもらってるので、何を叫んでも聞こえはしませんよ」
それでもミリアは魔法陣の壁を叩く。
そんなことは無いはずだよ。例え聞こえていなくても、私とシェードの思いは届くはずだから。
「雪心！　……ごめん、ごめんね。私、何も知らないでシェードの事を悪く言って。そうだよね、シェードは雪心にとって大事な人だったんだよね。それなのに、あんな事言って勝手に喧嘩して、本当にごめん。
私、雪心にそのことを謝りたくてここまで来たんだよ。だから雪心、起きて、そして私の声を聞いて」

……ミリアちゃん。……そっか、シェードの事、分かってくれたんだ。……よかった、本当によかった。……これで、ミリアちゃんとも仲直りできて、お母さんも帰ってくるから。……本当によかった。

「それとね雪心、私、どうしても雪心に告げないといけないことがあるの。本当ならシェードもこの事を告げたかったんだけど、もう無理だから、私が言うね。

雪心、雪心がエレメンタルロードテナーになってもお母さんは帰ってこないんだよ。それは全部、あいつの、サファドの嘘だったんだよ。シェードも最初はそう言ってたんでしょ。シェードの言ってたことは嘘じゃないんだよ。だって……シェードが雪心に嘘をつくはず無いもん」

……それは、嘘だよ。……お母さんは帰ってくるって、シェードもそう言ったもん。……だから、それは嘘だよ、ミリアちゃん。

「けどね雪心、私、今ならシェードの気持ち分かるよ。雪心はお母さんが帰ってくるって信じちゃったから、もうシェードの声も届かないから、だからシェードは雪心が少しでも笑顔でいられるなら、だからシェードはロードナイトになって、私達と戦ったんだよ。

本当に命を賭けてシェードは雪心を守ろうとしたんだよ。だからお願い、信じて、私が言ったこと、シェードが本当に思ってたことを信じてあげて。シェードはもう、消えちゃったから……」

……そっか、だからシェードは最初の時には、あんなに必死に私に信じるなって、言ったんだ。……でも、私が聞かなかったから、私がシェードの言葉よりサファドの言葉を信じちゃったから。……ごめんね、シェード。……ずっと傍にいてくれてたのに、ずっと守ってくれてたのに、私が気付けなくて。……本当にごめんね、シェード。

「だから雪心！　お願いだから起きて、そして強くなって、もうお母さんも帰ってこないし、シェードも雪心のために死んじゃったから。だからお願い、雪心は起きて、そして強くなって、一人でも生きていけるように。そのためにシェードは消えて行ったんだよ。私にはこんなことしか出来ないけど、雪心は強くなって戻ってきて欲しいんだよ。それが私とシェードが本当に願ったことだと思うから雪心、戻ってきて、私達のところに」

ミリアはもう立っていることが出来ずに壁に手を押し付けたまま下がっていき、座り込んだまま涙を流した。

もうミリアは言いたいことを全て言った。だから、今のミリアには泣いて待つしか出来ない。それだけがミリアが今できる事だった。

……ミリアちゃん。……分かったよ。……ミリアちゃんの思いも、シェードの思いも、全部分かったよ。……全部、私が悪かったんだね。……私のわがままが、シェードを苦しめた。そして、ミリアちゃんも同じなんだね。……そしてもう、お母さんも、シェードも私傍にはいてくれない。……私また、一人になちゃったんだね。

……また、私の傍には誰も居なくなっちゃた。また一人になちゃったんだね。……嫌だよ、寂しいよ、こんなの嫌だよ。また、一人になるのは嫌だよ。

なんで、なんで私だけが一人になるの、……一人っきりの世界、

それが私の世界。……そんな世界なら……。

もう、こんな世界なんて要らない。

突然雪心の体が光りだすと魔法陣の壁は消え去って、それと同時に雪心から力が流れ出して突風を巻き起こした。

ミリアは魔法陣のすぐ傍にいたために突風の直撃を喰らい、大きく後ろに吹き飛ばされてしまった。

「ミリア！」

昇は吹き飛ばされたミリアに向かって駆け出し、突然の出来事にサファドをはじめシエラ達との攻防が一旦中止された。それほどの力が雪心から放出されておりそれは突風となってシエラ達をも襲ったからだ。

「ちょっと閃華、いったいどうなってんのよ」

「分からん。じゃが、この力はまさしく精霊王の力じゃ」

「さすが、精霊王の力」

「シエラ！　感心する前に何とかしてよ」

「無理、これだけの力を出されると飛ぶ事さえ困難」

「ああ、もう、いったいどうなってんのよ」

突然の出来事に混乱するシエラ達。だが事態を把握できていないのはシエラ達だけではなく、サファドも同じくこの突然の事態を理解できていなかった。

「バカな、儀式の最中に器が覚醒するなんて、いったい何が起きたというんですか」

だがサファドはすぐにやるべき事に気付くと、シエラ達の攻撃が中断している隙に一気に雪心の元へと移動した。

「しまった！　シエラ、追ってよ」

「だからこんなに力が流れ出てる状態だと飛べない。だから追う事も出来ない」

「じゃあいったいどうすんのよ！」
「とりあえず落ち着け琴未。まずは昇達と合流しよう、話はそれからじゃ」
「う、うん、分かった」
シエラ達が移動をしている最中でもサファドは流れ出る力に逆らいながら、雪心を再び眠りに付かせようとしていた。
「まさか本当に覚醒するとは思いませんでしたよ。ですが、今は起きてもらっては困るんですよ」
サファドは雪心に向かって手を差し出してその先に魔法陣が展開される。
だが、その直後に一本の青く光る槍がサファドを貫いた。
「ぐはっ、な、なぜ……」
そして雪心は静かに口を開く。
「サファド、ずっと私のことをだましてたんだね」
「ぐっ、器の分際で」
「だから、サファドも、もう要らない」
「ぐはぁっ」
更に二本、三本と青く光る槍がサファドを貫いていく。そして合計で五本の槍がサファドを貫いた。
「なぜ、こんなことに、私は、王になるはず、なのに」
サファドは体から光の粒子を発するとそれは天に昇っていく。それと同時にサファドの中にあった精霊王の力も器である雪心の元へと戻っていく。
そしてサファドは実体化を解かれて元素の元へと戻っていった。

「ミリア、大丈夫？」
昇はミリアの元に辿り着くとすでに座り込んでいるミリアの肩に手を掛けて、これ以上突風に吹き飛ばされないように支えた。
「昇、うん、大丈夫。それより雪心は？」

昇は雪心に目を向けて衝撃的な光景を目にした。
「サファドの実体化が解かれてる」
もうほとんど見えなくなっている程透明になっているサファド、そしてそのサファドの前には宙に立っている雪心の姿があった。
「とりあえず、雪心ちゃんは無事みたいだけど、この力はいったい」
そしてサファドの姿が完全に消え去ると、今まで吹きすさんでいた突風も止まってシエラ達が昇達と合流する。
「昇、ミリア、無事？」
「うん、なんとかね。それより、さっきの力はいったい」
「精霊王の力じゃ」
「なんで精霊王の力が雪心ちゃんから？」
「うむ、何故だか分からんのじゃが、雪心は自らの意思で器を完成させて精霊王の力を自らに注ぎこんでいるらしいのう」
なんで、なんで雪心、そんなことするの？
「つまりじゃ、今の雪心はエレメンタルロードテナーとは違うのじゃが、その力を使うことが出来る。まあ、ほんの一部じゃろうが、それでもこの威力じゃからのう」
「それじゃあ、今の雪心ちゃんは？」
「仮のエレメンタルロードテナーと言ってもいいじゃろ。しかも、自らの意思で何かをしようとしてるみたいじゃな」
嘘だよそんなの、雪心がエレメンタルロードテナーになるわけ無いよ。もうそんな必要が無いんだから、だから嘘だよ、そうだよね、雪心。
サファドが消えて突風が止まり静寂を取り戻した室内で、雪心はミリアに向かって静かに口を開く。
「ミリアちゃん、私、分かったよ」
「雪心！　じゃあ、もうその力は使わないでよ」
だが雪心は静かに首を横に振る。
「ミリアちゃん、私、また一人になっちゃった。だからね、もう要らないの」

「……なにが」
「この世界、私を一人にしたこの世界はもう要らないの。だからね、私はこの力で強くなって、この世界を壊すの、だって、もう要らないから」
「きよ、み……」
「もう私は一人だから……」
「雪心――――！」
違う。それは違うよ雪心。私とシェードの思いは、雪心にそんな事をさせたいんじゃないよ。
「だから、まずはここから壊してくね」
「違う、違うんだよ、それは違うんだよ、雪心」
「違わないよ。だって……私はもう一人になっちゃったんだもん」
「雪心」
ミリアは涙を流し続けている。そして雪心も同じく涙を流していた。
雪心、なんで、どうしてそうなちゃったの。違うんだよ、私とシェードが雪心に望んだことは違うんだよ。
なんで、私があんなに伝えたかったのになんで雪心には伝わらないの、どうして、こんなことになっちゃうの。
「雪心、違う。それは違うんだよ。私とシェードが伝えたかった事は違うんだよ！」
それでも雪心は首を横に振る。
「ミリアちゃん、これでいいの。だって、この世界は私一人だから、だから私が壊しても大丈夫なの」
「いかんのう。完全に精霊王の力を勘違いしておる」
「どういう意味なの閃華」
「うむ、精霊王の力は地球の意思と言ってもいいほど同調して調整しておるわけじゃ。じゃからエレメンタルロードテナーはその代弁者と言ってもよい。じゃから少しでも精霊王の力を取り入れた雪心はこの世界を自分一人の物と勘違いしておるようじゃ」

「なんで、なんで！　雪心はそんなことを思ちゃったの。ねえ、閃華！」

「落ち着くんじゃミリア。残念じゃがミリアとシェードの思いは別の形となって雪心に届いてしまったようじゃのう」

「そんな……」

じゃあ私が雪心に届けたい思いは何処に行ったの。シェードが私に託した思いは届かなかったの。私がやってきたことはまったく意味が無かったの。

こんなの、こんなの酷すぎるよ。私はいつもの雪心に戻ってもらいたいだけなのに、なんでこんなことになっちゃったんだよ。

涙を流し続けるミリアと雪心。それは昇が望んだ結果とはまるで違っていた物だった。

どこかで狂いだした運命の歯車、それはもしかしたら最初っから狂っていたのかもしれないけど、昇は狂い出した運命に必死に抗おうとしていた。

第四十一話　届けたい思い（後書き）

さて、そんな訳でお送りした四十一話ですが、その前に一言。

前回の後書きでもちょっとは触れたんですが、ロードナイト編が終わり次第、次のシリーズに行こうとしたんですが、その前に一話から見直して書き直そうと思ってます。

といいますか、いろいろな人から意見を頂き、その結果としてやはり書き直したほうがいいと判断しました。

まあ、私的には成長の記録でもあるのでこのままでもいいかなとも思いましたが、それではもったいないというご意見が多く、書き直すことにしました。

なので、新章は一話から見直して、もしかしたら全部書き直し、または修正したからになると思います。

そんな訳なので、ロードナイト編が終わり次第書き直しの作業に移るので、新章はその後になります。つまり、しばらくは新たな話をアップできません。なので、しばらくはエレメの更新が止まるので、そこのところをご容赦願いたいと思います。

それと新章にも軽く触れておきますね。次は閃華の過去にまつわる話を書こうと思ってます。一応ロードナイト編でも閃華のフラグを立てたので、新章でその話を囲うかと思います。

けどまあ、ロードナイト編だけは終わらせるので、新章は来月辺りになりそうです。それまでは修正作業に没頭します。というか、今に思えば書き直すとシエラのキャラがかなり変わりそう、まあ、ストーリー自体は変わらないので読み直さなくても大丈夫ですが、新たに追加するシーンや、大幅に変更するシーンなどがある予定です。なので、読み直したい人は読み直してください。

さて、長くなりましたがこの辺で終わりにして。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちして

おります。

以上、久しぶりにまともな後書きを書いた葵夢幻でした。

第四十二話　辛い決断

ダメだ。こんな終わらせ方しちゃ、絶対にダメだ。
昇は未だに涙を流しているミリアの頭を軽く撫でるとその場に立ち上がる。
「閃華、雪心ちゃんの状態がわかる？」
「う、うむ」
突然の質問、というより昇が別人のような目つきに変わったので閃華は戸惑ったが、出来うる限りの情報を昇に告げる。
「雪心の器は本来なら未完成のはずじゃったんだが、今では何故か完全に完成している。たぶんじゃがこれは自力で完成させたんじゃろうな。何かしらの強い思いが器を完成させる最後のピースとなった訳じゃ」
「じゃあ、今の雪心ちゃんは……」
「うむ、完全に器の資格を持つものなんじゃが、所詮は作り物の器じゃから何処まで持つかは保障できん」
「それはどういう意味？」
「本来器の資格を持つ者は、生まれもって自然と精霊王の力を受け止めることが出来る者の事を言うんじゃが、雪心の場合はあくまでも作り物でそれが何処まで精霊王の力を受け入れきれるかは分からんのじゃ。そして下手をすれば……器が壊れる」
……ということは、下手したら雪心ちゃんの命は無いって事か。けど、その前に止めなくちゃいけないんだ。ミリアと雪心ちゃんの涙を止める為に。
「閃華、雪心ちゃんを止める手段はある？」
「無い」
「そう、分かった」
「昇？」
本来の昇なら確実に何らかのリアクションをするところだが、今

の昇は完全に閃華の冗談を無視した。
　ならどうすればいい。どうすれば雪心ちゃんから精霊王の力を消し去ることが出来る。……そうか、なんだ、簡単じゃないか、なんでもっと早く気付かなかったんだろう。
「閃華、雪心ちゃんの下にある魔方陣は何？」
「あれは地下に溜めてある精霊王の力を注ぎこむための魔法陣じゃ」
「つまり、あれが有る限り精霊王の力は雪心ちゃんに注ぎこまれるの？」
「うむ、そうじゃが、あの魔法陣を破壊するのは困難じゃぞ。かなり複雑な術式で組み立てられておるし、力ずくで消し去れるほど軟な魔法陣でもなさそうじゃ」
「そう、分かった。琴未、閃華、先行して雪心ちゃんを魔法陣から追い出して」
「って、昇！　まさか、戦うつもり」
「違う。あの魔法陣をこっちで操って雪心ちゃんへ注がれてる精霊王の力を逆流させるんだ。そのためにはいったん雪心ちゃんをあそこからどかさないと」
「ふむ、なかなか良い手じゃが。今の雪心は完全に暴走状態じゃぞ、じゃから素直にどくは思えんがのう」
「だから力づくでどかすんだ。仮にも今の雪心ちゃんは精霊王の力を宿している、だからこっちも手加減無く全力で戦うしかない」
「……本気、昇」
「うん」
「……分かった、そうする」
「ちょっと、シエラまで、昇は本当にこれで良いの？」
　昇に詰め寄ろうとした琴未だが、閃華が琴未の肩に手を置いて止める。
「閃華？」
「今は昇を信じるしかあるまい。それにのう」
　そこから閃華は琴未に耳打ちする。

「今の昇の顔をよお見てみい」
「はあっ、なんで」
「まあ、よいからよいから」
「分かったわよ」
昇は先程から雪心に目を向けているが、琴未は明に違っている昇の顔つきに自分の顔が赤くなっていくのを感じた。
そして更に耳打ちする閃華。
「なっ、なっ、分かったじゃろ。というか惚れ直したじゃろ」
「う、うるさいわね」
「くっくっくっ、どうやらとうとう昇に火がついたようじゃのう」
「昇は今までだって一生懸命だったじゃない」
「じゃが、今までの昇にはまだ迷いが有った。自分が戦う意味を見出せんかったんじゃが今は違う、雪心を救いたいという昇の戦う意思に火を付けたんじゃ」
「だから今の昇は一味も二味も違う」
「シエラは最初から昇のそういうところを見抜いておったんじゃろ。じゃから昇と契約した。そうじゃろ」
「そう、昇は自分の為じゃない。誰かを助けたいと思ったときに最大の力を発揮するタイプ。私は昇のそういうところが気に入った」
「そうね、そういえば昇は昔からそうだったわね」
「後は琴未さえ妨害できてれば完全に昇は私のものだったのに、それが残念」
「シエラ、あなたさりげなく私に喧嘩売ってるわけ」
「まあ、その戦いは後にせい。今は目の前の戦いに集中するんじゃ。何しろ相手は仮にもエレメンタルロードテナーの一部でもあるんじゃからな」
「分かったわよ。閃華、行くわよ」
「まあ、妾（めかけ）の琴未には正妻である私には敵わないと思うけど」
「シエラ、この戦いが終わったらグーで殴る」
「その時は加勢してやるから、ほれ、さっさと行くぞ」

「分かったわよ。シエラ、ちゃんと援護よろしくね」
「それは任せて、琴未にはちゃんと私が昇の正妻だということを見せ付けないといけないから、だからちゃんと援護してあげる」
「そうね。私も昇が私に惚れるところを見せ付けたいから、今は全力で戦うから後ろは任せたわよ」
「そんなことは絶対にありえないけど、この戦いだけは任せてもらって構わない」
「おーい、そろそろいいか、昇もそろそろ痺れを切らしそうじゃし」
「分かったわよ。閃華、シエラ、行くわよ！」
琴未のこの言葉を合図に琴未と閃華は雪心に向かって走り出し、シエラは宙へと舞い上がった。
頼んだよ、皆。
昇は傍に座り込んでいるミリアの頭を再び撫でる。
「じゃあ僕も行って来るから」
「昇、本当に雪心と戦うの」
昇は静かに頭を横に振る。
「それは違う。僕は雪心ちゃんを助けるために精霊王の力と戦うんだ。だから本当の敵は雪心ちゃんじゃない、精霊王の力なんだ」
「じゃあ雪心は、雪心は助かるよね」
「うん、絶対に助けるよ。だからミリア、今のミリアは戦える状態じゃないから今はここで休んでて」
「……うん」
「じゃあ行って来るね」
「昇、気をつけてね」
「大丈夫だよ。雪心ちゃんとミリアをもう一度笑えるようにしてあげるから」
「うん！」
昇はミリアの頭から手を離すと雪心に向かって一気に走り出した。
そしてミリアは昇の背中を見送ることしか出来ずに未だに涙を流し続けていた。

先行する琴未と閃華が雪心に迫る。
「とりあえず雪心ちゃんをあそこからどかせばいいのよね」
「うむ、後は昇が精霊王の力を逆流させるだけじゃ」
「本当に、それでうまく行くの？」
「分からん。じゃが今は昇を信じるしかあるまい。それに琴未は将来昇の妻になる女子じゃぞ。こんな時に昇を信じてやらずにどうする」
「……そうね」
「おや、随分と素直じゃな」
「私だってシエラに負ける気は無いし、それに今は雪心ちゃんを助けないと」
「ふむ、昇だけではなく琴未も随分と成長したもんじゃのう」
「うるさいわよ閃華！」
「くっくっくっ、そう照れんでも」
「いいから、さっさと終わらせるわよ」
琴未は走るスピードを一気に上げると、そのまま雪心の下まで回りこんで思いっきり地を蹴ってその勢いを使い刀も同時に振り上げる。

―新螺幻刀流　滝返し―

宙に立っている雪心に琴未の刃が迫るが、雪心が手を横に振るとそれだけで琴未は吹き飛ばされてしまった。慌てて閃華が琴未を受け止めるが、それでもかなり後退するほど、雪心の力は強かった。
「大丈夫か、琴未」
「うん、なんとかね」
昇は後退した琴未達の横を通り過ぎると、上空にいるシエラに向かって叫ぶ。

「シエラ、一番強いやつで合わせて」
シエラは雪心に向かって飛びながら頷いて適度な距離を取ってその場に止まると、下にいる昇も同じ位の距離を取っていた。
「フルフェザーバスター！」
「ヘブンズブレイカー！」
二人の攻撃が同時に放たれて雪心に向かっていくが、雪心は軽く手を前に差し出して結界を張ると二人の攻撃を軽く受け止めた。
そのまま押し切ろうとする昇とシエラだが、雪心は小さく呟く。
「もう邪魔しないで」
雪心の手のすぐ前に展開される巨大な魔法陣。その大きさは部屋の天井から床ぐらいまであるほどの巨大さだ。それを見た閃華はすぐさま叫ぶ。
「まずいぞ、皆集まるんじゃ」
その声に昇とシエラは攻撃を中断、一気に琴未達と合流するが雪心は呟くように口を開くのと同時に一気に力を解き放つ。
「エレメンタルブレイカー」
巨大な力が魔法陣から一直線に放出される。
そして閃華は後ろにミリアがいる位置に全員を集める。
「とにかく攻撃を防ぐんじゃ！」
それだけ言って、昇達は巨大な力に飲み込まれていった。そして全員で前方にありったけの力で結界を張った昇達は雪心の攻撃に耐え続ける。
だが雪心の放った攻撃は昇達が張った結界の所だけ流されて、他の力は一気にロードキャッスルを突き抜けていった。
そして雪心の放った攻撃は収束して行き細くなって消えた。
……どうやら耐え切ったみたいだけど。
昇が後ろを振り向くと、昇がいる位置からでもよく外が見えるほどの巨大な穴が開いていた。
すごい。これでも精霊王の力の一部であれだけの破壊力があるんだ。

「昇！　油断するでない次が来るぞ」
「えっ」
昇が再び雪心に目を向けると雪心は手を上に大きく上げて、その上には黒く渦巻いている球体の力が徐々に大きくなっていった。
「なにあれ？」
「詳細は分からんのじゃが、範囲空間攻撃じゃ。あれは飲み込んだものを全て破壊していく攻撃じゃ」
「あの～、閃華、それってやっきのよりヤバイ？」
「……かなりのう」
「……皆！　ミリアの元に集まって、それで出来るだけ耐え抜こう」
「うむ、それしかあるまい」
急いでミリアの元に集まる昇達、本来なら防御中心のミリアを先頭に防御陣形を取りたいところだが、今のミリアにそれを期待するのは無理と判断した昇は自ら先頭に立って防御陣形を取る。
さすがに二丁拳銃じゃダメか、とりあえずミリアの真似をしてみるか。
昇は二丁の拳銃を消し去ると盾を実体化させて大きく広がり昇達を包みドーム状になっていく。
「皆、この盾に出来るだけ力を加えて防御力を維持させて」
ミリアを除く全員が頷き、昇達を包んでいる盾が光を帯びていく。
そして完全に術式を完成させた雪心が呟く。
「デアボリックブレイク」
雪心の上にある力が渦巻く巨大な球体は一気に広がり、昇達が居るところを飲み込んで行きロードキャッスルの最上部全てを飲み込んでいった。
まるでロードキャッスルの最上部に球体がついたようになっているのが、中にある物を全て破壊して収縮して消えた。
そして破壊の衝撃で生じた爆煙により、ロードキャッスルの最上部には煙が立ち込めるがその中から雪心が姿を現す。
その表情は変わらず涙を流してまだ煙の向こうを見ているが、未

だに煙がはれる気配が無い。それほど先程の雪心が使った術式が強かったということだ。

だが雪心は軽く手を横に払うと突然突風が吹いて煙を全て払いさろうとするが、その途中で雪心の眉が軽く動く。

そこには昇が作り出した盾が未だに顕在しているからだ。

「まだ、邪魔するの」

誰かに言ったわけではい様に雪心は呟く。

そして煙も晴れて雪心は吹かせていた突風を止めるのだが、ロードキャッスルの最上部にはもう壁も天井も無く床しか残っていない所為か、軽く風が雪心の髪を揺らす。

そんな中で衝撃も突風も感じなくなった昇は盾を消して元の二丁拳銃に戻した。

「嘘！　なによこれ」

あまりの変わりように驚きを隠せない昇達。まあそれもしかたないだろう。なにしろあれだけ豪勢に作られていたロードキャッスルの最上部が床だけを残して全て破壊されているのだから。残っているのは床と雪心の下にある魔法陣だけだ。

まさか、こんなにも凄い力があるなんて、精霊王の力ってどれだけ凄いんだ。

改めて精霊王の力の偉大さに気づかさせる昇。だがこの雪心の攻撃は昇だけでなくシエラ達にも衝撃を与えていた。

「これほどの力、もうしかたないのう、昇、もう雪心から精霊王の力を取り除くのは無理じゃろう」

「それに、これ以上後手に回ると次はどうなるか分からない。本気でかからないと私達がやられる」

「本気って、ちょっと、閃華、シエラ、あなた達本気で言ってるの！」

「無論じゃ、琴未」

「……でも」

琴未がちゅうちょするのも昇にはよく分かっていた。なにしろ相

手は一〇歳の女の子だし、いくら強大な力を持っているとはいえ、そんな子を相手に本気で戦えるわけが無い。
それに僕は決めたんだ。雪心ちゃんを助けるって。それなのに僕達は本気で戦わないといけないのか。それじゃあ、僕達はいったい何のために今まで戦ってきたんだ。
昇は突然コートを引っ張られる感じがして、振り返るとミリアがコートの端を持っていた。
「ミリア」
「昇、戦って」
「えっ！」
予想外の言葉に驚く昇。だがミリアは悲しい瞳で涙を流しながら昇に訴える。
「雪心には、もう私の言葉もシェードの思いも届かない。だから、今は、雪心と戦って倒すしかないんだよ」
「でも……」
そんな事をすれば未完成の器を持つ雪心の命さえも危ない。正直、昇はそんな危険すぎる賭けには出ることが出来なかった。
だが、それでもミリアは昇に訴える。
「昇、私達は出来るだけの事はやってきたはずだよね。でも、それでも雪心は目を覚まさなかった。だからもう、戦うしかないんだよ」
「けど……」
「このままでも、雪心は壊れちゃうんだよ。だからその前に、昇……」
「ミリア」
昇にはミリアの言いたいことをちゃんと分かっていた。分かっていたからこそ、ミリアがどれだけのことを覚悟しているのかも昇にはちゃんと分かっていた。
僕は、僕はどれだけ弱いんだ！　あれほど決めたことなのに、それすら達成できないなんて、僕はそこまで弱かったのか！
昇は崩れるように座り込むと思いっきり床に拳をたたきつけた。

もう、それしかないのか。本当にもう、そうするしかないのか。
僕が望んだことは、そんなに難しいことだったのか。
雪心ちゃんを救う事はもう出来ないのか。もう……倒すしかないのか。じゃあ！　一体何のために僕達はここまで来たんだ！
そんな昇の肩に閃華は手を掛ける。
「……閃華？」
「昇、ミリアの目をよお見てみい」
昇は閃華に言われたとおりに、真っ直ぐとミリアの瞳を見つめる。そこには、やはり悲しみしかなく、それを表すかのように涙が流れている。けど、昇の目にはミリアの悲しい瞳が前よりも悲しくなった気がした。
そして昇は再び立ち上がる。
「シエラ、閃華、琴未、エレメンタルアップを最大限にするから、みんなも全力を出して」
「昇！　本当にきよ」
「分かってる！」
琴未の言葉を遮り昇は叫ぶ。
「のぼ、る」
「私も、戦う」
「ミリアまで、本当にいい」
「分かった」
「昇！」
即答する昇の胸倉を琴未は思いっきり掴み、引き寄せる。
「昇！　本当にそれでいいの！」
「じゃあ他にどうしろっていうんだ！」
「けど、昇は雪心ちゃんを助けに来たんでしょ。それがなんでそんなことになるのよ！」
「僕にはもう、それしかできないんだよ！」
「諦めるの、ここで全部諦めちゃうの！」
「しょうがないだろ！　精霊王の力は強大だし今の僕達に抗う術は

一つしかないんだから！」
「だからって雪心ちゃんを」
「なら琴未には雪心ちゃんを助ける事が出来るの！」
「昇」
琴未はゆっくりと昇を離してまるで失意に溺れて行くようによろける。
閃華は琴未の肩に手を掛けた。
「閃華？」
「琴未、昇もミリアも、もう決めた事じゃ。今更私達が何を言う権利も無い」
「けど！」
「琴未の気持ちも分からんでもないが、一番辛いのは誰じゃ、誰がこの決断をしなくてはいけなかったんじゃ」
「でも……」
「もう何も言うな。私達は私達の出来ることをやるだけじゃ」
「……分かったわよ」
力なく頷く琴未を閃華は軽く抱きしめる。
「すまぬな」
「なんで閃華が謝るのよ」
「元はといえば私が琴未を戦いに巻き込んだようなものじゃからな」
「違うわよ。私は私の選んだ道を進んできただけよ」
「そうか、なら最後まで、その道を信じて進んで行け」
「……分かってるわよ、そんなの」
閃華は琴未を離すと、再び昇と向き合う。
「よいな」
昇は目を擦ると顔を上げてしっかりと閃華を見詰め返した。
「うむ、まだ意思は死んでおらんようじゃな」
昇は閃華に背を向けると雪心に目を向ける。
「僕は、こんなにも弱かったんだね」
「……思ったことが全て叶う人間はさぞかし幸せじゃろうな」

「それに、本当に強い人なんて居ないかもしれない。皆、どこかで弱いところがある」
「そうだね、でも僕は……」
「昇、それ以上言っても詮無き事じゃ」
「……うん」
昇は自分の手を見詰めると思いっきり握り締める。耐えられない辛さを少しでも和らげるように。
そして昇は顔をしっかりと上げると雪心を見詰めてそのまま振り向くことなく全員に向かって口を開く
「皆、いくから思いを一つにして」
「大丈夫じゃ、もう皆の思いは一つになっておる」
「分かった」
それだけ言うと昇は意識をいつもの黒い空間に沈める。
そしてそこには既に四本の赤い糸が今までに無いほどの強い力を放ちながら、昇の目の前まで伸びて来ていた。
なんか、皆悲しいよ。
四本の糸はどれも強い力を放っているが昇にはどれも悲しく見えた。
昇は四本の糸を一気に掴むと意識を浮上させていく。
僕は、僕は……。
途中で流れ出た涙を拭くことなく、昇は現実へと意識を戻した。
そして全ての思いを乗せて超え高らかに叫ぶ。
「エレメンタルアップ！」

第四十二話　辛い決断（後書き）

はい、そんな訳でかなり長くなった今回ですが、とうとうロードナイト編も佳境に入りました。終わりまでもう少しです。

まあ、少しだけ本編に触れておくと、もう言うことは無いというところでしょうか。はいそこの方、まったく本編に触れてないじゃんとか思わないように。あれが今の昇の決断であり、限界でもあるわけですよこれがまた。まあ、そういうわけなんで本編に関することはこれで終わり。

というか、今の私の後書きで本編に触れたことがどれだけあったんだろ。というか、いつも勢いや思ったことを書いただけだったからな。

まあ、今回は本編があまあだったので後書きも短めで終わりにします。はいそこ方、充分長いじゃんとか思わないように、私の中では短めだからいいんです。というか後書きに境界はない、ボーダレスだーーー！

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、結局いつもと同じ後書きになったなと思った葵夢幻でした。

第四十三話　最後の笑顔

沸きあがってくる力は確かに今までに無いほど強かったが、どこか悲しい感じがするのをシエラ達は感じていた。

だが昇とミリアが決断した以上は決して引くことは出来ない。それがどんな結果になろうとも。

シエラは覚悟を決めたかのように力強い瞳でウイングクレイモアを見つめると水平に構えて力を集中させる。

「セラフィスモード」

そして新たに生える四枚の翼。その白き輝きは力強く、白い羽を撒き散らしていてた。

「さて、私も久しぶりに本気を出すとしようかのう」

閃華も方天戟を構えると力を集中させていく。

「六韜三略開封（りくとうさんりゃく）」

方天戟の前に二つの巻物が出現した。

二つの巻物は厳重に紐で巻きつけて封じられているが、閃華が方天戟を振るうと二つの巻物はその封印を解かれて、一気に巻き解かれいき閃華と方天戟に巻き付いて行く。

閃華と方天戟に巻きつた巻物はそのまま吸収されるように、それぞれに溶け込むと変化を始める。

方天戟は両端に付いている三日月形の刃が龍の爪のごとく形を変えて三本になり、槍の両端にまるで龍の爪のような刃となる。そして閃華自身も今までの軽装な武装から古代の中国武将を思わせるような鎧をまとった。

「ふむ、その姿になるのも久しぶりじゃのう」

「というか、閃華変わりすぎよ」

「そうはいうが、これが私が全力で戦うときの姿じゃからな。まあ、それなりに変わるわけじゃよ」

「どんなわけよ。まあ、いいわ。私も伊達に巫女をやっていないと

ころを見せますか」
　琴未は雷閃刀を目の前に集中すると、天に向かってその切っ先を突き立てる。
「建御雷之男神（たけみかづちのおのかみ）ご降臨願いたてまする」
　一本の雷が雷閃刀に落ちると琴未をも飲み込む巨大な雷となった。
　それと同時に雷閃刀もその姿を変えて打刀（うちがたな）から太刀へと長くなり、刃には雷を表した文様が刻まれた。
　そして琴未が太刀を振るうと雷は消えて、新たな姿を現した。
「ふむ、あまり変わりばえせんのう」
「そんなに姿かたちが変わってもしょうが無いでしょ」
「まあ、そうじゃな」
「それよりも、本当に戦うの……」
「もう後には引けぬ。琴未はそれを充分分かっておるじゃろう」
「そうだけど……」
「ためらうでないぞ。ためらえばやられるのこっちじゃ、それほど雪心の力は凄まじいんじゃぞ」
「……うん」
　琴未は力なく頷くと、改めて自分の手にある刃に目を向ける。
「……もう、これしかないんだよね」
「他の手があるなら、昇は間違いなくそれを選んでおるじゃろう」
「そうだね」
「さて、昇。こっちの準備は整ったわけだが、どうするんじゃ」
「ミリアがまだだよ」
「……そうか」
　閃華はそれ以上は何も言わなかった。
　そして昇はミリアの涙を拭いてやるとそのまま両手でミリアの顔を包んだ。
「ミリア、いける？」
「……うん」
「じゃあ、これで終わりにしよう。僕も出来るだけの事はやってみ

るから」
「……ありがとう、昇」
「礼を言われることじゃない。僕には……これだけしか出来なかったから」
「うん……」
ミリアは昇から離れるとハルバードを床に付けて精神を集中させる。
ごめんね、シェード。私には雪心を救うことは出来なかったよ。……だから、私の手で全部を終わらせるよ。もう、これしか私には出来ないから。だから、雪心の心を助けるためにシェードも力を貸して。
ミリアは大きく目を開けると力を一気に放出した。
「ティターンモード！」
ミリアのハルバードが双斧へと変わり、その装甲も一気に薄くなっていった。
そして光の中からミリアが現れる。
だが未だに悲しげな瞳をしているミリアに昇は心が少し乱れるが、一度目をつぶって心を落ち着ける。
「行こう。そして、これで全部終わりにするんだ！」
昇の言葉に全員が頷いて閃華が先陣を切り雪心に向かって走り出した。

「やっぱり、邪魔するんだ」
雪心は呟くと手を前に差し出して向かってくる閃華に狙いをつけると砲撃する。その砲撃の大きさは軽く閃華を上回るほどの大きさだ。
閃華は後ろを振り向くことなく叫ぶ。
「避けながら突き進むんじゃ！」
無理な注文だと琴未は言い返したくなったが、それよりも早く砲

撃は閃華を飲み込んで琴未達にも迫ってくるが他の全員は何とか砲撃を避けることが出来た。
「閃華！」
砲撃に飲み込まれた閃華を心配する昇だが閃華の姿すでに雪心の隣にあった。
「はやっ！」
昇が感心している間にも閃華は新たな方天戟を振るう。
雪心は閃華の攻撃をバリアで防ぎきる自信があったのだが、閃華は雪心のバリアを易々と切り裂いて三本の切り裂いた跡を残して雪心のバリアは消え去った。
そのまま追撃を掛ける閃華だが雪心はゼロ距離で閃華に砲撃を放つが、一瞬にして閃華の姿は消えて砲撃は誰にも当たることなくロードキャッスルを貫いた。
「いい子だから」
そして後ろから聞こえてくる声に雪心が振り向くと、すでに太刀を振るい始めてる琴未の姿があった。
「そこをどきなさーい！」
そして琴未は峰の方で雪心に一撃を入れるが、雪心は寸前で結界を張って琴未の攻撃を受け止めるがそれこそが琴未の狙いだった。

―新螺幻刀流　嵐崩し―

下から切り上げるように太刀を振るった琴未は雪心が太刀を受け止めるとそのまま力を流し結界を上に押し上げた。そして前面がガラ空きとなった雪心を思いっきり蹴飛ばす。
その程度の攻撃なら今の雪心にダメージは与えられないのだが、吹き飛ばすには充分だ。
「そのまま雪心ちゃんを魔法陣から遠ざけて！」
下から聞こえてきた昇の声にシエラが追撃を掛けて閃華と琴未もそれに乗じて一気に攻勢に出る。

その間にも昇は雪心が立っていた魔法陣に辿り着くと、魔法陣に手を当てて何かを探るように力を伸ばしていく。
「昇」
そこへミリアが到着した。ミリアの表情は未だに心配と悲しみが入り混じったように昇には見えたが、とりあえず知りえたことだけをミリアに告げる。
「ダメだ。もう精霊王の力は残ってない。今までサファドが溜め込んでいた精霊王の力は全部雪心ちゃんの中にある」
「じゃあ、どうすればいいの？」
「やれるだけの事はやっておこう。与凪さん」
昇の目の前に与凪を写したモニターが現れる。
「はい、なんですか」
いつもとは違い元気のない声で与凪が応答する。
「与凪さん、雪心ちゃんから精霊王の力を出す方法は無い？」
「……ごめんなさい」
「……そうですか」
昇も与凪も短く答えるだけで全て終わった。
分かってた。分かってたけど最後の最後まで足掻きたかった。僕にはそれだしかできないから。
結局僕はなにも出来なかった。あれだけ約束したのに何も出来なかった。所詮僕の力なんてその程度なんだ。
自分の無力さに打ちひしがれる昇は裾を引っ張られる感じがして、振り向くとミリアが昇の裾を掴んでいた。
「ミリア……ごめん。助けるって約束したのに」
「ううん、昇は精一杯の事をやってくれたよ。だから……もう終わりにしようよ」
「……ミリア」
ふふっ、ははっ、あははっ。
昇はその時ほど自分を笑いたくなってきた。
何も出来なくて、情けなくて、結局取り戻す事が出来なかった二

つの笑顔。それがもう永遠に消える物だと悟ると昇は自分を笑うしかない。

情けない。僕は、本当に情けない。結局何も出来ないのに、勝手な約束をして、それすらも遂げる事が出来ないなんて、僕ほど惨めな人は他に居ないんじゃないか。

自分の無力さを痛感する昇だが、それでも立ち上がって未だに攻防を続けているシエラ達と雪心に目を向ける。

けど、最後の事だけはやらないと。

「ミリア、行くよ」

「……うん」

ミリアが頷くと昇達は雪心に向かって走り出した。最後にできることをやるために。

「う～む、さすがに精霊王の力じゃな。これだけやっても傷一つ付けられんとは」

「閃華、感心してないで手伝ってよ！」

「分かっておる。んっ？」

閃華の視界の片隅にこちらに向かってくる昇達が写った。

「……」

「閃華！」

「琴未、シエラ、私が合図したら一斉に下がるんじゃ」

「えっ、なんで」

「分かった」

「今は答えとる時間は無い。目の前の事に集中せい」

「分かったわよ！」

本当なら閃華に文句の一つも言いたい琴未だが、変わりに目の前の雪心に一撃を入れるが雪心が張った結界に触れると軽く爆発して攻撃を弾かれてしまうが、それでも琴未は二撃、三撃と攻撃を入れるたびに小爆発されて攻撃が届かない。

しかたなく一旦下がる琴未の代わりにシエラが上空から神速を超えるハイスピードで攻撃を入れるが、これは完全に雪心の結界に防がれた。

シエラはそのまま雪心を通り越して距離を取り間を置かずに閃華が攻撃に入る。

さすがにこれだけのコンビネーションだと雪心も攻撃に転ずる事が出来ない。いや、シエラ達が雪心に攻撃をさせないためにお互いに間髪を置かずに攻撃に入っている。

そして閃華の攻撃が雪心にとっては予想外の大爆発を引き起こした。だが、その程度では雪心にはまったく効かないのだが爆煙が巻き起こると閃華が叫んだ。

「今じゃ、皆一旦退けい！」

閃華の言うとおりに一旦雪心から距離を取るシエラと琴未、そして別方向から感じる強大な力にシエラが振り向く。

「昇！」

そこには銃口を雪心に向けている昇の姿があった。

風を操って爆煙を全て吹き飛ばす雪心も昇の力に気付くが、その時にはもう遅い。

「ディファインブレイカー！」

高圧縮された昇の力が一気に打ち出されて雪心にと迫る。

慌てて結界を張る雪心だが、高圧縮されて一点に集中している昇の攻撃は雪心のバリアに穴を開けると同時にバリアは砕け散った。

その一瞬の隙に雪心に追撃が入る。追撃に入ったのがシエラや琴未なら雪心ももしかしたら防いでいたのかもしれないが、雪心の目の前にはよく知った顔が現れた。

「ミリア……ちゃん」

「雪心、ごめんね」

その一瞬だけ、雪心には迷いが生じて固まるがミリアはすでに覚悟を決めている。だからこそミリアは動く事が出来た。

そしてミリアの双斧が雪心に突き刺さる。

時間が止まったかのように二人は動かなくなり、昇には何も聞こえなくなった。
ミリアが双斧を抜くと、今まで宙に立っていた雪心がゆっくりとよろけてそのまま地上に向かって落下を始める。
ミリアは双斧を投げさると雪心を追って降下していき途中で雪心を抱きしめるように捕まえると、そのままゆっくりと地上へと下りてきた。

取り戻したかったのは二人の笑顔。だが現実は二人に涙を流させていた。
「雪心……」
ミリアは雪心を抱き起こすように抱えているが、ミリアの手から足、そして床へと雪心から流れ出た血が赤く染めていく。
「ミリア……ちゃん」
「ごめんね、ごめんね雪心」
「……ミリアちゃんが、謝る事じゃないよ。全部、私のわがままがこうしたんだから」
「でも、でも！」
「謝るのは、私の方だよ。ごめんね、ミリアちゃん」
「違う！　雪心が悪いわけじゃない」
「ううん、いいの、全部、私が望まなければ、よかったんだから」
「そうじゃない。雪心が思った事は間違いじゃない。ただ、やり方が違ってただけだよ」
「そうかな、どこで、間違えたんだろ。けど、よかった」
「雪心？」
「最後に、ミリアちゃんと、仲直りできて、よかった」
「雪心、私は、今でもちゃんと雪心の友達でいるよ」
「うん、私も、そうだよ」
「これからも、ずっとずっと友達だよ。雪心を一人になんかさせな

いから！」
「……そっか、そうだね、私、一人じゃないよ、ね」
「そうだよ。当たり前だよ。私は雪心の傍には居られないけど、雪心が呼んでくれれば行く事が出来た。だから寂しくなったら私を呼んで欲しかった！」
「そうだね」
「それにシェードも雪心のお母さんも姿は見えないけどずっと雪心の傍に居たはずだよ」
「……そうだね」
「だから、雪心は一人なんかじゃない。絶対に、絶対に一人なんかじゃなかったんだよ」
「……うん」
「そしてこれからも、雪心は一人じゃないよ」
「……うん」
雪心はミリアの頬に手を当てると、そのまま温もりを確かめるように撫でてミリアに笑顔を向ける。涙を流し続けながら。
「こうすれば、よかったんだね。そうすれば、ミリアちゃんが、傍に居てくる事が、わかったのに」
「雪心……」
「私、もう一人じゃないって、分かったから。泣かないで、ミリアちゃん。ミリアちゃんには、笑って欲しいな」
「雪心」
「笑ってくれれば、私は、ずっと、ミリアちゃんの傍に、居られると思うから。だから」
「うんうん、分かったよ雪心」
ミリアは一度涙を拭くが、それ以上流れ出る涙は拭かないで雪心に笑いかける。ほんの数日前までそうしていたように。二人は同じ笑みを向け合う。
それだけでミリアは雪心を、雪心はミリアを感じる事が出来た。傍に居る事が分かった。本当にそれだけでよかったのに。

「ごめんねミリアちゃん、いろいろと、迷惑をかけて」
「ううん、いいよ雪心、だって友達だもん」
「……うん」
「一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に困るのが友達だよ。私は雪心とそんな友達で居るから」
「そう……だね。なんで、そんなことに気付かなかった、んだろう。私には、ミリアちゃんっていう、大切な友達がいることに」
「それは雪心がうっかり者だからだよ」
「ははっ、ミリアちゃん、酷い」
「雪心がしっかりしていれば、私が傍に居ることが分かったのにね」
「ミリアちゃん、存在感が薄いんじゃないの」
「う～、なんだよそれ」
「ふふっ」
それはあの楽しかった時のように話をする二人。だが二人とも流れ落ちる涙を拭く事も無く楽しい話を続ける。
そして最後に雪心はゆっくりとあの楽しかった時のように同じ言葉を口にする。
「じゃあね、ミリアちゃん、バイバイ」
「うん、雪心、またね」
そして雪心の手が力を無くして崩れ落ちた。
「……雪心」
「……」
分かっている。分かっているけどミリアは雪心に答えて欲しかった。
「雪心、雪心」
それでも何度も呼びかけるミリア。
そんなミリアに閃華は軽く肩に手を掛けると、振り向いたミリアに顔を横に振って見せる。
そしてミリアは全てを受け止めた。
「うっ、うわあああーーーっ！　雪心、雪心！」

雪心を強く抱きしめて思いっきり泣き叫ぶミリア。誰もそれを止めようとしない、止められなかった。ただ一人、昇だけは雪心の最後を看取るとその場からゆっくりと離れていった。

そして昇は天井も壁も無くなった部屋の端に立つ。すぐ目の前には何も無く、遠くに空が見える。

昇は遠くの空に銃口を向けると力の限り空に向かって力を放ち続けた。何も言わずにただ力を放っていく。力尽きるまで。

そして力の限り銃弾を撃ち尽くした昇は、そのまま崩れ去るようにその場に座り込む。

結局僕は何も出来なかった。あれだけ偉そうな事を言っておいて、何も出来なかった。僕は弱くて無力だ。ほんとに情けないぐらい弱い。

なんで、なんで僕はもっと強くなろうとしなかったんだ！　そうすれば、こんな事にはならなかったのに、絶対にさせなかったのに。なんで僕は、強くないんだ。

僕は何度ミリアに雪心ちゃんを助けるって言った。何度も言ってそれを実行できないなんて、僕はなんて不甲斐無いんだ。口だけで何にも出来なかった。誰も助ける事も出来なかった。

「昇」

後ろから聞こえたシエラの声、だが昇は振り向こうとはしなかった。

「今は、一人にしといて」

「分かった。でも忘れないで欲しい。私が昇を契約者に選んだのは可能性があったから、強くなって、エレメンタルロードテナーになれる可能性があったから、私は昇を選んだ。そのことだけは、忘れないで」

それだけを言い残してシエラは昇から離れようとするが。

「シエラ」

昇が突然シエラを呼び止める。
「なに？」
「僕は、僕の力は誰かを助ける事が出来たのかな？」
「……」
「僕はもう、あんな悲しい笑顔を見たくないんだ」
「……昇がそう願うなら、昇はその願いを叶える努力をすればいい」
「……そうだね」
そして昇が口を閉ざすとシエラは静かにその場から立ち去っていき、昇は手にした二丁拳銃を強く握り締める。
取り戻せなかった。あれだけ約束して、あれだけ修行もしたのに僕は取り戻す事が出来なかった。
そして昇の胸の中にぽっかりと穴が開いたような、そんな虚無感を覚えるのだった。

第四十三話　最後の笑顔（後書き）

まあ、今回はあまり書かない事にしましょう。
以上、葵夢幻でした、

第四十四話　決意

あれから僕達はロードキャッスルから学校の屋上へと戻ってきた。
あたりはすっかり暗くなっており、時計の針はかなり遅い時間を指し示している。
ロードキャッスルを囲んでいた結界はどうやら閃華と与凪さんで手を加えたらしく、僕らは何の障害も無く結界から出る事が出来た。
それからロードキャッスルは後で閃華と与凪さんが空間ごと消し去るらしい。だからもうロードキャッスルについては何も心配要らないそうだ。
そして雪心ちゃんの遺体を抱えて戻ってきた僕達を待っていたのは、与凪さんと森尾先生だった。
「ただいま、与凪さん、森尾先生」
「滝下君」
「……ああ、よく帰ってきた。滝下……」
「……先生」
「今は何も言うな滝下、後の事は全部先生に任せておけ」
「えっ？」
森尾先生が僕達に告げた事、それはもちろん雪心ちゃんの葬儀の事だ。
ミリア達が雪心ちゃんの体を綺麗にしてあげると、僕達は森尾先生の車でそのまま雪心ちゃんの家まで行った。場所はすでに与凪さんが調べておいてくれたらしい。
雪心ちゃんの家に着くとそこにはすでに業者の人が葬儀の準備を始めていた。
僕達は雪心ちゃんの遺体を寝かすと、ミリアはあくまでも最後まで雪心ちゃんの傍に居たいと言い張ったので、結局ミリアには閃華が付いてくれて僕とシエラと琴未はウチに帰ることになった。
ここに居てもやる事はないし、母さんに心配をかけるのも嫌だっ

たから。
後の事は全部与凪さんがやってくれると言ってくれたので安心して後を任せられた。
ウチまで送ってくれた森尾先生は、明日準備が全て終わったら連絡するからと言い残して戻っていった。
ウチに帰った僕達を母さんが出迎えると、最初は何かを言おうとしていたけど僕達の表情を見るなり、何も言わずに食事とお風呂の準備ができてる事を告げたが、僕はそのまま自分の部屋に戻ってベットに横なった。
僕の意識は泥に沈んでいくように眠りに付いた。

翌日はシエラに起こされるまで眠っていた。
シエラは朝食の準備ができてる事を告げたが、正直食欲なんて物はその時の僕にはまったく湧いてこずに断ったのだが、シエラは無理矢理僕を起こすとそのままリビングまで連れて行った。
用意されていた朝食はいつもと違い、凄く軽く手軽の物だった。
シエラは朝食は母さんが用意してくれたと告げると自分の席について朝食を取る。僕も何とか自分の席に着くとその日初めて時計に目を向けた。
学校に行くなら確実に一時限目が始まってる時間だったが、誰も何も言わずに朝食を取っている。僕もそれに習って出来るだけの物は食べたけど、それでもあまり喉を通らなかった。
僕は再び自分の部屋に戻るとまたベットに横なり天井を見詰める。
それから何をするわけではなく、ただ天井を見詰めていた。森尾先生からの電話が来るまでは。
その事を知らせに来たのは母さんだ。母さんはそれだけを告て部屋から出て行った。今更言う事もないらしい。正直僕にとってはありがたかった。
僕は準備を済ませるとリビングへと降りていった。そこにはすで

にシエラと琴未の準備が終わっていた。二人とも制服を着ている。まあ、当然といえば当然だろう僕もそうだし。

それから少しして森尾先生が迎えにやってきた。

僕たちが玄関に向かうと、そこでは森尾先生と母さんが何か話をしていたが僕達は簡単な挨拶だけをして森尾先生もそうしてくれた。そして母さんもいつもと同じように「いってらっしゃい」とだけ言って僕達を見送ってくれた。

雪心ちゃんの家に向かっている車の中は、誰も何も言わずに僕は自分の手だけを見ていた。

僕は……あれが本当に僕の全力だったんだろうか。もしかしたらもっと力を出せたのかもしれないし、雪心ちゃんも救えたのかもしれない。僕は……どれだけの覚悟でこの戦いに望んだんだろう。

エレメンタルロードテナーについてもそうだ。僕はどれだけの事を理解していて、どれだけ望んでいるんだろう。結局僕はその事も雪心ちゃんの事も中途半端な覚悟で望んでたのかもしれない。

だとしたら、こんな事になるのは当たり前だよな。だって僕はその程度の覚悟しかもてなかったんだから。

だったら僕は……

そして雪心ちゃんの家に着くと閃華が出迎えてくれた。

「おおっ、やっと着いたようじゃのう」

「閃華、ミリアは大丈夫なの？」

琴未が真っ先にその事を聞くと閃華は首を欲に振る。

「大丈夫なわけなかろう。あれから雪心の傍を一時も離れんで一晩中傍におった。私が何を言っても、そう約束したから、としか答えん」

「そう……なんだ」

「やれやれ、そっちもあまり変わってないようじゃのう。まあ、昨日の今日じゃからのう、しかたないといえばしかないかもしれんのう」

「閃華はよくそんなに元気でいられるわね」

「くっくっくっ、こう見えても結構歳を取っておるもんでのう。こういうことには慣れておる。シエラもそうじゃろう」
「私は、閃華ほど受けれいれられていない」
「……そうか。まあ、こういうことは時間が解決してくれるもんじゃ。今は八つ当たりなり泣いたりしておれ」
「……閃華ごめん」
「な～に、構わんよ」
閃華は琴未の肩を軽く数回叩く。
「さて、これからのことじゃが……」
閃華はこれからの手順を簡単に説明してくれた。
それからは何の滞りも無く葬儀は進み、僕達は現在雪心ちゃんをお墓に納骨しているところだ。
このお墓も雪心ちゃんの両親が眠っていてそこに雪心ちゃんも入る事となった。それにシェードがもたらしてくれたお金によってこのお墓の管理などは全て業者がやってくれるらしい、僕達が生きている間はお墓はこのまま維持される事は確かだ。
だがそんなことよりも、僕は未だに過去を悔やんでいた。
こんな結末しか迎えられなかった自分の不甲斐無さを悔やみ、どこかで迷っていた自分の決意の無さを悔やんでいた。

「さて、これで終わりじゃのう。ミリア、線香を上げてやれ」
「うん」
まず最初にミリアが線香をあげて雪心の冥福を祈る。
そんな中で昇は静かに閃華に近づいて小さな声で話し始めた。
「ねえ、閃華」
「んっ、なんじゃ昇？」
「今までの争奪戦でも、こういう悲しい事ってあったの？」
「……そうじゃのう。お互いに命を削っての戦いじゃからのう、いつこういうことがあっても不思議ではないのは確かじゃ」

「そう、なんだ」
「まあ、エレメンタルロードテナーを目指すものは何かしらの決意を持っておるからのう、じゃから譲れない戦いも出てくるわけじゃよ」
「決意か……」
「じゃから、契約者同士が互いに強い決意を持っておると、決着はどちらかの死でしか終わらんときもあるんじゃよ」
「死ぬまで戦うの！」
「まあ、そうじゃな。例え命に代えても叶えたい望みがある者だけじゃがな」
「争奪戦って、そんなに壮烈なんだ」
「それほど精霊王には力がある。昇も今回の戦いで精霊王の力がどれだけ凄い物じゃが分かったじゃろ。あれで精霊王の力の一部にすぎん」
「あれほどの力、いったい何に使うんだろ」
「それは人それぞれじゃな。まあ、今はおらんと思うが昔は天下統一を目指すために精霊王の力を欲する者も多かったもんじゃ」
「戦国時代とか？」
「まあ、そうじゃのう。じゃが、中には自分のためではなく人のために使おうとして目指した者もおったのう」
「なんで人のために？」
「それは決意した本人にしか分からんもんじゃよ。ほれ昇、ミリアが終わったから次は昇が線香を上げて来い」
「僕は最後でいい」
「……そうか、なら先に行かせてもらうぞ」
それだけを言い残して閃華は雪心の墓に向かうと、代わりにシエラが昇の横に立ち並ぶ。
「昇、私のこと恨んでる」
「なんで？」
「私が昇と契約しなければ、今回の事に関わらずに済んだ。何も知

らないままでいられた。それなのに私との契約がきっかけで昇は今回悲しい思いをしたから」
「それは別にシエラの所為じゃないよ」
「でも、きっかけを作ったのは私」
「そう、だね」
確かにシエラとの契約はきっかけにすぎないけど、それから僕はいったいなにをしてきたんだろ。
「だから、私のことを恨みたければ恨んでもいい」
「そんなことしたってしょうがないよ。それにシエラはきっかけでそれからの行動は僕自身の責任だから」
「そう、昇がそう言うのなら……」
「シエラ」
「なに？」
「昨日シエラは言ってたよね。僕には可能性があった。だから僕と契約したって」
「そう、私は今でも昇の可能性を信じてる」
「今の僕はシエラが見出した可能性の何パーセントを引き出してる？」
「……」
「はっきりと言ってくれていいよ」
「分かった。甘く見てもせいぜい四、五パーセント」
「そっか、僕はその程度の力しか出せていなかったんだ」
「でもそんなにすぐには自分の全ての可能性を引き出せる人間なんて居ない」
「けど、シエラと出会ってからもう二ヶ月ぐらい経ってるよね」
「そう、たったの二ヶ月」
「言い方を変えたって同じだ。僕は、その二ヶ月でどれだけのことをやってきたんだろ」
「昇……」
「例え二ヶ月でも、もっと必死になっていればこんな事にはならな

かったかもしれないのに」
「昇、未来が分かる人なんて居ない。人はその時に最良と思った選択肢を選んでる。だから今更そんな事を言っても何も変わらない」
「分かってるけど、どうしてもそう思っちゃうんだよね」
「昇」
「シエラ、順番が来たから雪心ちゃんにお線香を上げてきたら」
「……分かった」
シエラは昇の傍を離れて雪心のお墓に線香を上げている。
確かにこんな未来が来ると分かっていたなら、僕はもっと必死で自分自身を鍛えていただろう。でも、そんな事は出来ないから僕はこんな結末を迎えてしまった。
けど、どんなに悔やんでも過去は変えられないし、雪心ちゃんも戻ってこない。なら、今の僕にできることはたった一つしかない。
今回のような事をまた起こさないために僕は足りない物を今ここで埋めないといけないんだ。決意と覚悟を……。
もう嫌だから、目の前であんなことになるのはもう嫌だから。そして自分が望んだ未来を手に入れたいから、僕は僕の選んだ道を進まないといけないんだ。
それは命を賭けての決意と覚悟を持って……。
昇が考え事をしているうちに、順番は最後の昇の番になった。
昇は与凪から受け取った線香をお墓に供えると、雪心の冥福を祈るのと同時に新たな決意を告げていた。
そして昇が立ち上がると振り向くことなく口を開いた。
「シエラ、ミリア、琴未、閃華、そして与凪さんと森尾先生、僕は決めたよ」
「何をよ」
不思議そうな顔で琴未は昇に聞いてくる。
「僕は……エレメンタルロードテナーになる」
『……』
「もう、こんな事は嫌だから、もしこれからに未来に同じことが起

きるかもしれないなら、僕は今度こそ自分の全てを賭けて戦いたい。もう二度とこんな悲しい事を繰り返さないために僕はこの争奪戦を勝ち抜いて、そして相手も死ぬ事の無いように僕はもっと強くなりたい」

そして昇は皆の方へと振り向く。

「だから、僕に力を貸して」

大きく頭を下げる昇に、まずは閃華が口を開いた。

「どうやら覚悟を決めたようじゃのう。まあ、琴未はどんな事があっても昇についていくじゃろ。じゃから私も昇についてくぞ」

「閃華！　勝手な事を言わないで」

「ほう、では違うのか」

「違うなんて言ってないでしょ。私だって昇がそう決めたのなら付き合うけど、それは私が言うセリフで閃華に言われたくないのよ」

「くっくっくっ、そいつは悪かったのう」

「琴未、閃華」

「昇を最初に契約者に選んだのは私。だからどんな事があろうとも、これからも私は昇と一緒の道を進んでいく」

「シエラ」

「昇が雪心の前で決めてくれたなら雪心も喜ぶと思うよ。だから、私も一緒に強くなる。私も嫌だから、雪心みたいに悲しい思いをするのもさせるのも嫌だから。だから私も昇と一緒に強くなるよ」

「ミリア」

「まあ、担任として教え子の将来が決まる事はいい事だからな。これからも出来るだけのことはやってやるよ。滝下の担任としてな。よっちゃんも頼めるかい？」

「亮ちゃんがそう言わなくても、私も滝下君のクラスメートとして、そして友達としてできるだけ助けてあげるわ。まあ、私の力なんてそんなに役には立たないけど助力は惜しまないつもりよ」

「よっちゃんが役に立たないって言うと、俺なんて役に立たないどころか何も出来ない奴に聞こえるな」

「亮ちゃんは滝下君の担任としての立場で滝下君を助けてあげればいい。それが亮ちゃんの仕事だし滝下君を助ける事になるわよ」
「そうだな。そういうわけだ滝下。困った事があったらいつでも先生に相談しに来るんだぞ」
「森尾先生、与凪さん、ありがとうございます」
昇はもう一度大きく頭を下げると再び雪心のお墓に目を向ける。
「僕は今ここに誓う。もう二度と悲劇は繰り返さない。戦うべきときには全力で戦う。もう誰も悲しまないように、もう誰も泣かないように、そしてもう誰も傷つけないように僕は戦い続ける」
それで許してくれるかな。雪心ちゃん、シェードさん。
雲一つ無い晴天の下で昇は決意する。
今までのように流されて戦うのではなく今度からは自分の意思で戦う事を。それが例え自分の命を賭けようとも戦い続ける事を。そして今度こそ自分が望んだ未来を勝ち取る事が出来るように昇は決意する。
もう二度と自分の目の前では悲劇を繰り返さない事を、昇は雪心の墓前で誓うのだった。

第四十四話　決意（後書き）

そんな訳で、ロードナイト編終わりました。

え～、ここで以前から感想欄に多く書かれていた事をハッキリさせたいと思います。

まずは昇が戦う理由がハッキリしない。とよく書かれていたのですが、ハッキリ言うと争奪戦は命を賭けて戦う事になります。なので、そう簡単に決められるかーーー！　というのが私の意見です。まあ、今回の話でやっと昇は戦う理由をハッキリとさせたわけですが、人間命を賭けて戦うにはそれなりの理由が必要であって、昇はやっとその理由を元に決意したわけですよ。だから今まで昇は戦う理由をハッキリとしてなかったんですよ。まあいいかえれば、あえてそこはハッキリとさせずに書いてきたわけです。

きっかけはシエラとの契約、今までの戦闘は経験、そして今回の悲しい出来事で昇はやっと戦う理由を得るのですが、私の技術レベルが低い所為かそこら辺をハッキリ伝えられたかどうかが不安ですが、まあ、そういう意図があったワケでして、ですから今までそこには触れずに来ました。

あと、よく言われるのが誤字脱字が多い。……まあ、これはしょうがないんですよ。というか、俺はそこまでうまくはねーーー！今までは小説を読むのが好きで妄想好きの普通の人間だったんだーーー！　そんな奴が書いてんだから誤字脱字が多くて当たり前だーーー！　はい逆ギレです、すいません。

まあ、そんな訳でこれより全話の修正作業に入ります。というかいい加減に誤字脱字が多いという評価ばかりに頭にきました。まあ、逆ギレなんですけどね。けど、言われ続けるのも癪なので修正作業を決意したわけですが、ご存知の通りこのエレメ、かなり長いです。

そんな訳で新話は来年辺りになりそうです。まあ、大きなストーリー改変は行わないので読み直さなくても大丈夫ですが、幾つかシ

ーンの変更や追加、削除をします。まあ、読み直したい人は読み直してください。あえて薦めませんが、そんな訳で今まで最新話まで読んでくださった方、申し訳ありませんがエレメの更新をしばらく止める事をここにお詫び申し上げます。

そして再開したときにはまたよろしくお願いします。次の話に軽く触れておくと前にも書いたかもしれませんが、今度は閃華にまつわる話です。できることなら閃華の過去にも大きく触れたいと思います。……結局今度も長くなりそうだな。

まあ、そんな訳でしてこれからも見捨てないでくださいね（ハート）

では、当分の間は更新できないのでかなり長くなりましたが。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。そしてしばらく止まりますがこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、校正能力ゼロの俺がまた書き直すのはめんどだなと少しだけ思った葵夢幻でした。

そんな訳で修正作業が終わりました～。そしてこの後書きもさらに長くなります。

……というか修正作業を始めてから丁度一ヶ月、やっと終わりましたよ。ちなみにその間の事はブログに書いてあるので気になる人は私のホームページ、冬馬大社にブログを設置してあるのでそちらを見てください。まあ、書いてる事はここの後書きとほとんど変わらないけど。

それと検索する時は冬馬大社でお願いします。この前葵夢幻で検索をかけたらいろいろな物が出てきて、もうどれがなにやらって感じだったので冬馬大社で検索をかければ一発で私のホームページが出ると思うのでよろしくお願いします。

ではでは、長らくお待たせしてすいませんでした。これから新章の執筆に入りたいと思います。

以上、修正作業がやっと終わり一息つく葵夢幻でした。

第四十五話　夏の始まり

真夏の海で日差しをパラソルで遮りながら昇は待ちぼうけを喰らっていた。
皆遅いな～。というかいきなり海に来るとは思わなかったよ。

事の発端は夏休みに入ってから二週間ほどすぎてからだった。いい加減にやる事が無い事に飽きたミリアが夕食後にいきなり言い出したからだ。
「昇、海に行こう、海」
「はぁ、いきなり何を」
「いいわね。どうせなら海と温泉が楽しめるところに行きましょ」
「……母さん、なんでいきなりそんな乗り気なの」
「昇、主婦というは結構きつい仕事なのよ」
いやいや、洗濯はともかく料理とか掃除とかはシエラと琴未がやってるでしょ。
「だから、お母さんもたまには羽を伸ばしたいのよ」
いやいやいや、母さんはいつも羽伸ばしてるから。
「昇、いいでしょ。彩香もそう言ってる訳だし」
「はいはい、そう言いながら昇に抱きつかない」
「う～、琴未。琴未だって海に行きたいでしょ？」
「う～ん、そうね」
そうなんですか琴未さん！
「けど、後になって宿題見せてって言わなければいいわよ」
「ぐっ、それは、お願い」
「嫌よ」
「シエラ～」
今度はシエラに泣きつきますか。

「宿題は自分でやらないと意味が無い。それに海に行こうなんて宿題を終わらせた人が言う言葉。だから私と昇だけで行って来る」
「って、シエラ、なんでそんなことになるのよ！」
「私は宿題を終わらせたし、昇も少しぐらいならやらなくても充分間に合う」
いや、そうですけど。シエラさん、あなたは毎日僕の宿題をチェックしてるんですか。
「それなら私だって終わってるから一緒に行くわよ」
「琴未は邪魔だから来なくていい」
「シエラ、グーで殴っていい」
「嫌」
「というか殴る」
「ほれほれ、そこまでにしとくんじゃな」
「閃華、閃華も加勢して」
いや、閃華まで騒がれたら家が壊れますから。
「じゃが、たまには皆で旅行に行くのもいいんじゃないか」
そこは賛成なんですね閃華さん。
「閃華までそういう」
「何を行っておる琴未、それに琴未にとっても良い事じゃぞ」
その後は琴未に耳打ちする閃華。そして一気に琴未の顔は赤くなっていった。
あ～、なんかまた嫌な予感が。
「昇、私そこまで出来るかな」
なにが！　一体何をやる気なんですか！
「でもそうだよね。昇のためならやらないと」
だから一体何をやるんですか？
「くっくっくっ、それで昇どうするつもりじゃ」
「えっ、なんで僕に聞くの？」
「それは昇の決定次第で全てが決まるからじゃ」
いや、そう言われても。というか僕はいつからそんな決定権を持

ってたんですか。
「それにのう」
そこからは閃華は昇に耳打ちをする。
「ミリアの事もある。少しじゃが未だに雪心の事を引きずってるようじゃ。それに皆は口に出さんがそれぞれ雪心の事を引きずっておるようじゃ」
確かにあのロードナイトとの戦いから一ヶ月以上経ってはいるが、皆表面上は元気を装ってるけど、どこかで暗い影を落としてるように時々思うんだよな。
「じゃから今の皆には気晴らしが必要じゃ。ミリアも無意識の内にその事を悟っておるんじゃろ」
そっか、だからいきなり海に行こうなんて言い出したんだ。
「そうだね。じゃあ海に行こうか」
「やった――――！」
「さて、いろいろと準備をしておかないと」
素直に喜ぶミリアと何かを画策するシエラ。それで琴未はというと。
「いやぁん、昇ったらそんなことまで」
未だに妄想モードに入っているようだ。
ミリアはともかくシエラと琴未の行動に溜息を付く昇。
えっと、これでよかったのかな？
というか琴未、お願いだからそろそろ戻ってきてくれないかな。
「くっくっくっ、よかったのう昇、これだけの女子を連れて海にいけるのだからのう」
閃華さん、僕はそれが逆に心配なんですけど。
「さて、じゃあ明日は皆の水着を買いに行きましょう」
やれやれ、また荷物持ちかな？
「あっ、昇はこなくていいから」
「えっ」
予想外の言葉に驚く昇に彩香は楽しげな表情を向ける。

「お楽しみは後に取っておいた方がいいでしょ」
母さん、確かに楽しみもあるけど心配もかなりあるんだよ。
「それじゃあ明日は皆で買い物よー」
『おおーっ』
……なんだろ。この心配でならない予感は。
そんな中でシエラはいつの間にか昇と腕を組んで上目使いで見詰めていた。
「シエラ、何」
「昇、私昇るために頑張るから期待してて」
いや、そういわれても。
昇は改めてシエラを見回す。
……水着か、シエラごめん、できればもう少し……。
そんな二人の間に現実に戻ってきた琴未が割り込む。
「はいはいそこまで、昇は私の水着姿に期待してるんだから」
いや、そんなこと一言も行ってませんけど。だけど……。
シエラ同様琴未の事も昇は一度見回してみた。
……オッケーです。琴未、確かにそれぐらいあった方が。って、僕の思考がいつの間にか変な方向に行ってる。
そんな昇の心情を見抜いたかのように閃華が昇に寄りかかってくる。
「よかったのう昇。琴未はスタイルは抜群じゃぞ。決してシエラには劣らんほどの大きさじゃ。しっかり堪能せい」
ぐっ、閃華さん、それはいじめですか。
「なんだったら私も混ざっても良いぞ」
いや、それは、……お願いします。って、完全に閃華に思考を乗っ取られてる！　ダメだ。こんな事じゃダメだ。
それでもなんとか理性を保とうとする昇に閃華は後ろから抱きつき胸を押し当てる。
「ぐはっ」
「どうじゃ、琴未には劣るが私もなかなかじゃろ」

「って、閃華なにやってんのよ」
「いやいや、琴未をより引き立たせるための当て馬じゃ」
「そういう風には見えないんだけど」
「もう少し待っておれ」
閃華は口元を昇の耳に近づけると呟く。
「琴未の胸は私以上じゃぞ。昇はそれを感じたくは無いのか、このまま無に帰していいのか」
ぐっ、そう言われると確かに琴未の水着姿に凄い期待が……。
更に何かを言おうとする閃華をシエラは無理矢理引き剥がした。
「おやおや、邪魔が入ったようじゃのう」
「当たり前、これ以上は閃華の思い通りにさせない」
「じゃがシエラのスタイルでは私達に対抗できるのかな？」
「ふっ、水着が全てスタイルで決定する事じゃないって事を証明する」
「ほう、それは楽しみじゃのう」
あの～、なんかシエラと閃華の目線が火花を散らしてるのは僕の気のせいですよね。そうですよね、誰かそうだと言って。
「昇、昇、私の水着姿も期待しててね」
……無理ですミリアさん。というかミリアは水着によってはマニア受けするんじゃ。……なんだろう、この不思議な感覚は。違うぞ、僕は絶対に違うからな。
「さ～て、それじゃあ何処に行く？」
彩香はいつの間にか多数のパンフレットをテーブルにばら撒いた。
「……母さん、なにこれ」
「決まってるでしょ。温泉と海が楽しめる旅館のパンフレット」
いや、それは分かるんだけど、なんでこんなに持ってるの。
「おばさん、これなんてどうですか？」
いつの間にかパンフレットを漁っていた琴未がとある旅館のパンフレットを差し出す。
「あら、いいわね」

「そうでしょ。海も近いし、それに露天風呂まであるんですよ」
「いいわね、海を眺めながら露天風呂に入るのも」
「お義母様、こちらはどうです」
負けずとシエラもパンフレットを彩香に差し出す。
「あらあら、これは……」
「海水浴場が近くにあるのは当然、そのうえ夜景を眺めながらの露天風呂は最高と書いてます」
「……夜景を眺めながらの露天風呂か、いいわね」
その後も旅館選びに女性陣は騒ぎ出して昇は一人でテレビを見ながらジュースを飲んでいた。
もう何処でもいいから早く決めてくれないかな。それにしても海か……なんか、また一波乱があるの様な気がするのは僕の気のせいだよね。……というか。
昇は未だに旅館選びで騒いでいる女性陣に目を向ける。
この時点で一波乱起きてるような気がするのは僕だけでしょうか。

そんな経緯があって昇達は一週間の旅行に出かけることになったわけだが、いつもの騒がしい面々が出かけるのである。静かな旅行なんて出来るわけが無かった。
電車は二席ずつ向かい合って座るタイプの電車でシエラ達と昇と彩香の両隣の席に座っている。
海が見え始めるとミリアが騒ぎ出して、それを注意する琴未だがそれで収まるミリアではなく。その後も騒ぎはシエラと閃華まで参戦して電車の中では昇はなるべく無関係を装うとするのだが結局は巻き込まれてしまった。
結局僕には静かな旅行なんて出来ないんだね。
ついに昇は諦めの境地に入ってしまったようだ。
そんな息子の姿に彩香は肩をかけて話しかけてきた。
「どうしたの昇、そんなに小さくなって」

「はぁ、どうしたって言われても、って母さん酒臭い」
「あん、昼間っから酒飲んじゃ悪いのか」
というかすでにからみ酒になってるんですけど。
「というかさ昇、あれだけ女の子に囲まれてるんだから一人ぐらい手を出しなさいよ」
母さん、それはとても母親が言う言葉じゃないと思うんだけど。
「まったく不甲斐無い。そういうところはお父さんに似ちゃって」
変なところが母さんに似なくて良かったです。
「お父さんもさ、お母さんが一生懸命アプローチしたのに一向に手を出してこなくてさ。正直もうお母さん焦っちゃったよ」
いや、今更そんな昔の出会い話を聞かされても。
「そんな訳で昇。今回はチャンスなんだから誰か一人ぐらい手を出しなさいよ」
いやいやいや、母親が息子に夜這いを進めてどうするの！　それに一人ぐらいってそういうのは一人に決めないといけないんじゃないの。
「ふ～ん、あんたの事だから誰か一人に決めないとって迷ってるでしょ」
心を読まれた！　さすが母親。
「いいのよこの際、だれかれ構わず手を出しちゃいなさい」
……母さん、もしそんなことしたら僕の命がないよ。だって……皆僕より強いし絶対に殺されるから。
「だから昇、頑張るのよ」
いや、なんか頑張ってもオチが見えてるんですけど。
「すいませーん、ビール二缶下さい」
あなたはまだ飲む気ですか！　というかこれ以上からまれても困るんですけど。えっと、こういう時は……閃華しかいない！
昇はそっと自分の席を離れると閃華に話しかける。
「んっ、どうしたんじゃ昇？」
「ごめん閃華、席替わってというか母さんの相手をしてあげて」

「ふむ、どうやらその様子だと奥方のからみ酒から逃れてきたようじゃのう」
「そうなんだよ。僕にはもうあれは止める事が出来ない」
「やれやれしかたないのう、じゃがこっちにいても騒がしいのは変わらんぞ」
「今の母さんよりまし」
「そこまで言い切るならしかない。では席を替わるとするか」
昇は閃華と席を替わったことで一安心するが、それもつかの間で隣に座っているミリアが甘えるように昇の腕に抱きついてきた。
「昇～、こっちに来たんだ」
「はいはい、おばさんの酒癖から逃げてきただけでしょ。だから引っ付かない！」
「う～」
ミリアは抗議するがシエラも加わり結局昇から離れる事になった。
「というかこの席順が気に入らない、替わろう」
「そうね」
あの～シエラさん、琴未さん、いきなり何を言い出すんですか。
「私はこのままでいいもん」
再び昇に甘えるミリア。昇もそんなミリアの頭を撫でる物だから二人の闘争心に相当火をつけた。
「いいわけないでしょ」
「断固替わるべき」
「嫌だよ～」
「ミリア、とにかくここは公平に席を決めるが決まりでしょ」
「そんな決まり知らないもん」
「閃華がいなくなったからもう一回席を決めるのは当たり前」
「別にいいじゃんこのままで」
『よくない！』
こういうときは声が揃うんですね。
「そうだ。ここは昇に決めてもらうのが一番いい」

「そうね、そうしましょう」
「昇はこのままでいいよね～」
えっと、なんで僕に振るんですか。というか皆……目が怖い。
それは自分が選ばれるという絶対の自信に満ちた目なのだが、今の昇にとってはその目ほど怖い物は無かった。
どうする、どうするんだ僕。……というかかなり前にこんなCMがあったような。って現実逃避しても何にも解決しないじゃん、僕もっとしっかりしろ。
「って、昇は誰の隣に座りたいのよ。今ここではっきりさせてもらいましょう」
「まあ妻である私に決まってるけど」
「昇はこのままでもいいよね！」
「……あっ、僕トイレに」
『ちょっと待った』
一斉に掴まれる昇の腕。
皆さんこんな時だけは息が合うんですね。
「はぁ、わかった。ならじゃんけんで決めよう」
そんな妥協案に普通なら抗議の声が上がりそうなものなのだが、何故か三人は闘志を燃やしていた。
うわ～、精霊って闘争本能が強いんだね～。
それはまったく関係ないのだが、三人はまるでこれから戦いに望むかのように活きこんでいる。
「それじゃあいくわよ。言っとくけど一度決まったらもう替えないからね」
「分かった。それでいい」
「ふふん、私がどれだけじゃんけんが強いか見せてあげるよ」
「じゃあ行くわよ」
なんだろう、三人から異様なオーラが出てるように見えるんですけど。
『じゃんけん、ぽん』

……って、結局僕の隣にはミリアが座りって前にはシエラ、僕から一番遠いところに琴未が座る事になった。

そして先程一度決まったら替えないと言ってしまった為かこれ以上は席について誰も異論を言う事も無く、昇に甘えてくるミリアは恨めしく見詰めるシエラと琴未の姿が異様に怖い。

そんな空気の中で昇はもう諦めたかのように、というかいい加減に悟ったらしい。普通に振舞うのだった。

そんな中で電車はやっと目的の駅に付いて昇達は駅から出るとそこには一面に海が広がっていた。

「って、閃華。旅館はどっち」

「ふむ、ちょっと待っておれ……こっちじゃな」

地図を見ながら閃華は旅館の方向を指差し一同は旅館に向かって歩き出して、数分歩いただけで旅館に着いた。

旅館に付いた昇達は早速と海に出かけることになった。そんな訳で着替えが一番早い男の昇が荷物とパラソルを用意する羽目になり、シートに座りながら女性陣の到着を待っているのだった。

なんで女の人ってこんなにも着替えに時間がかかるのだろう。

そんな事を思いながら昇は海を見詰めているとそこに変わった人の姿を見つけた。

あれ、なんだろあの女の人、海水浴場なのに水着じゃなくて普通のワンピースで海岸を何かを探すように歩いてる。何か落としたのかな、でもそんな感じでもないな。

けどその女性は髪が長く大人びており周りの男の視線を集めているのだが、昇にはなんだかその女性が悲しげに見えた。

なんだろうな。あの目はどっかで見たことがあるんだよな。

昇がそんな事を考えていると後ろから忍び寄る一団が迫っているのだが、昇はその一団に気付くことなく考え事にふけっているのだった。

第四十五話　夏の始まり（後書き）

一ヶ月もかかった。なにって、もちろん今までの修正作業がですよ。……疲れた。けどやっと終わってホッとしました。よかった、本当に終わってくれて。

そんな訳で新たに始まった新章、純情不倶戴天編ですが読めますか。ちなみにいきなり私に聞かないでください。私もいきなりだと読めない場合がありますから。

ですから意味も無く引っ張りたいと思います。この純情不倶戴天編は次回に読み方を発表しますね。ちなみになんでこんな事をするかは意味が無いからですよ。無理に意味をつけるなら、なんとなくやってみたかったです。

ああ、後私の後書きが好きだーーー！　という人に朗報？　です。最近私のホームページにブログを追加しました。書いてる事はこの後書きとほとんど変わりません。なので興味がある人は私のホームページ、冬馬大社まで来て下さい。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、純情不倶戴天編のプロットを書いててなんか凄く長くなる予感がする葵夢幻でした。

第四十六話　母心

昇の後ろから近づいてきた一団の一人が昇の頭に蹴りを入れた。
「いつっ！」
昇が頭部に軽い痛みを感じながら振り向くとそこには彩香の姿があった。
「お待たせ、ドラ息子」
「なんだ、母さんか」
「ああっ、なんだいその言い方わ」
「酒臭っ、母さんまだ飲んでるの」
「だから昼間っから飲んじゃ悪いかってーの」
「まあまあ、おばさんその辺で」
そこへ救済の手を差し伸べてきたのは琴未だった。
「……」
思わず生唾を飲み込む昇。そんな昇に琴未は自分をアピールする。
「どう昇、似合ってるでしょ」
確かに。
琴未が着ている水着は黄色のビキニ。琴未にはぴったりと合っていた。なにしろ琴未は普段から鍛えられている所為か出るところはしっかりと出て、引っ込むところはしっかりと引っ込んでいる。
まさに文句のつけようが無いスタイルを損なう事の無いビキニ姿なのだから、昇が琴未に見とれるのも無理は無い。
というか琴未ってこんなにスタイル良かったんだ。いつもはあまり気にしてないというか、よく見る姿は制服か巫女服だけだったからな。琴未がこんなにもスタイルが良いなんて気付かなかったよ。
すっかり琴未の水着姿に見とれてる昇の視界が急に塞がれた。
「だ～れだ？」
「っていうかシエラ、なにやってるの？」
「うん、昇が琴未に見とれてるから今度は首を絞めようかと」

いやいやシエラさん、いきなり何を言い出すんですか！
昇はシエラの手をどかすと振り向いて硬直する。
そこにはちょこんと座ったシエラの姿があったのだが、シエラの水着は白のワンピースでそれがいつものように白く輝く髪と一致してシエラの清楚な雰囲気を更にかもし出していた。
確かにスタイルでは琴未に大きく劣るが、シエラは自分の雰囲気を更に押し出す水着で昇にアピールしてくる。
「昇、私の水着はどう、似合ってる」
……抱きしめたいです。……というかもうシエラのそういう雰囲気に慣れたつもりだけど水着だとまた別な雰囲気があるな。
それに座って上目使いで見られるとなんかこう、抱きしめたくなるようなとかもう胸に飛び込んできてと言いたくなってくる。
そんなにシエラに見とれてる昇に突然後ろから抱きついてきたのがミリアだ。
「昇、昇、どう、私に水着は似合ってる？」
「いや、後ろから聞かれても分からないよ」
「ああ、そうか」
ミリアは昇の背中から降りると今度は目の前に立つ。
……ミリアさん、それ本気ですか。
「というか、なんでそんな水着を選んだの？」
「んっ、彩香が選んでくれたの。どう、似合ってる」
別の意味で凄く似合ってます。
昇が呆然とするのも無理は無い。なにせミリアが着ている水着は何故かスクール水着なのだから、しかも胸のところにはしっかりと『ミリア』と書いてある。
いや、母さん。なんとなく分かるけどさすがにこれはどうかと思うんですけど。
昇は呆気に取られてもう言葉も出ないようだ。
「どうどう昇、似合ってる？」
「うん……別の意味でよく似合ってるよ」

その言葉を素直に受け取り喜ぶミリアを昇は温かい目で見守っていると、そこに荷物を持たされた閃華が来た。どうやら荷物持ちに選ばれたらしい。

「はぁ～」

そんな閃華の姿に昇は感嘆の声を上げる。

「んっ、どうしたんじゃ昇」

「いや、なんというか、新鮮というか意外というか」

「くっくっくっ、残念ながら琴未を泣かす事は出来んぞ」

「いや、そんな意味じゃ」

慌てて弁解をする昇だが閃華の水着姿はそれほど似合っていた。青いビキニだが腰に巻かれているパレオと普段は束ねている髪を下ろしているものだから、普段の閃華とは違った魅力が引き立っていた。

こういう所って普通は髪を上げるか束ねるんじゃ。だけど髪を下ろした閃華も綺麗だよな。う～ん、普段はそんな事を感じないのにやっぱり海で水着姿となると別の魅力が出てくるな。

一応四人の美少女に囲まれながら昇は改めて思う。

う～ん、いつの間にか僕の周りってこんなに女の子がいたんだな。それもさっきから浜辺にいる男達がシエラ達をちらちらと見てるしなあ、四人とも一応美少女なんだな。というかそんな女の子に囲まれてる僕っていったいどんな目で見られてるんだろ。

というかさっきから時々痛い視線が僕に向かってくるのは気のせいだよね。そうですよね、誰かそうだと言って下さい。

だが現実は確実に美少女に囲まれている昇に男達は恨みやら嫉妬やらの念を込めて昇に視線を向けていた。

だがそんなことをまったく気にしない美少女四人は閃華と彩香を残して昇の手を引っ張って海に入っていくのだった。

パラソルの下で片手にビール缶をもってる彩香は同じく日陰で休

んでる閃華に問いかける。
「閃華ちゃんは行かないの？」
「な～に、こう見えても結構歳なんでな、あそこまでの元気は無いんじゃよ」
「ふ～ん」
とてもそういう風には見えないが彩香は適当に返事をしてからビールをあおる。
「そういえば閃華ちゃん」
「んっ、なんじゃ」
「最近なんだか昇が急に成長した気がするのよね。何かあったの？」
「そうじゃのう。まあいろいろとな、それに昇もいろいろと経験して覚悟を決めたからのう、じゃからそういう風に見えるんじゃろ」
「ふ～ん。覚悟ってどんな覚悟なのかしら？」
「くっくっくっ、奥方はお分かりにならぬか」
まるで彩香をからかうように閃華はいうのだが、彩香はまったく気にせずに昇が成長した理由を考えたがまったく思い当たらない。
「う～ん、やっぱり分からないわね」
「昇は父君に似たと聞いておるが」
「そうね。そういえばあの人に似てる部分が多いわね」
「なら奥方は父君の何処に惚れたんじゃ」
「……なるほど、そっか、昇もあの人のようになったのね」
彩香は海外出張中の旦那を思い出しながら昇が父親に近づいた事に気付いたようだ。
「父君もやはり自分より他人のために力を発揮するタイプかのう？」
「そうよ。あの人は頼まれもしないのに自分から首を突っ込んで、なんでもかんでもやっちゃう人よ」
「やはりそうであったか」
「昇もあの人みたいになってきたのかしら」
「そうじゃな。まだまだ未熟じゃが徐々にそうなりつつあるようじゃのう」

「……そっか」
彩香は海で遊んでいる昇を改めて見てみると、そこに旦那の影を少しだけ見ることが出来た。それは昇が成長した証拠でもあるのだが母親としての感覚からか昇が少し遠くにいったような気がするのも確かだった。
「ねえ、閃華ちゃん」
「なんじゃ」
「今昇達がやってる事が昇を成長させたのかしら？」
「そうじゃろうな」
「それってどういうことなの？」
「ふむ、それを説明すると長くなるのでな。それに奥方を巻き込むのは昇としても気が引けるじゃろ」
「それって、昇が危険な事をやってるって事？」
「確かに危険はある。じゃが昇はその危機を何度か乗り越えて、この前大きな壁を乗り越えたというところじゃろ」
「……そっか」
「奥方は止めないんじゃな」
「そうね。確かに危険な事なら止めさせたいけど、昇の姿を見てる限り悪い事はしてなさそうだし。それに昇が決めた事なら私が言うことは何も無いわ」
「……そうか」
「でも少しぐらい相談はして欲しいわね。そこら辺は寂しいわ」
「くっくっくっ、そいつは悪かったのう。じゃが最近では落ち着いたがあの時は忙しかったんでのう。じゃから相談する暇も無かったんじゃよ」
「そっか。……けど、そこまで昇が真剣に打ち込めることならいい事なのかしらね」
「……そいつは分からんが結果は昇次第じゃな」
「そうね。昇がどんな道を進んでるのかは分からないけど、その道が昇を成長させてくれるなら結果なんてどうてもいいのかもね」

「奥方がそう思っておるなら私から言うことは無いな」
「けどそろそろ何をしてるのか教えてくれても良いじゃない」
「そうしてもいいんじゃが、やはり昇の口から聞くのが一番良いのではないのか」
「そうかもしれないけど、あの子はなかなか話そうとしてくれないのよね」
「くっくっくっ、まあそこには深い事情があるわけじゃからのう」
「それは話してくれないの？」
「無理じゃな。これは私達の間でも極秘事項じゃからのう、そう簡単には話せんのじゃよ」
「そう、じゃあ無理には聞けないわね」
「そうしてもらうと助かる」
「じゃあ閃華ちゃん、シエラちゃん達と一緒に昇の事をお願いできる」
「無論じゃ、昇が絶対に死ぬような事にはさせん。その事だけは約束しよう」
「死ぬ事って、そんなに危険なの！」
「時と場合によってじゃが、その可能性もあるということじゃ」
「……」
「やはりここまで聞かされると心配のようじゃのう。だから昇も黙っておったんじゃろう」
彩香はビールを一気にあおると缶を空にする。
「はぁ～、あのドラ息子はどうしようもないわね」
「それで奥方はどうするつもりじゃ」
「別にどうもしないわ。どうやら私が出来る事はあのドラ息子を見守る事だけみたいだからね」
「さすが賢明じゃのう」
「ふふっ、そうでもないわよ。こんな事は飲まないと決心なんて付かないわ」
「酒の付き合いをしても良いんじゃがこのナリじゃからのう。今は

うるそうてかなわん」
「別にいいわよ。例えどんな道でもいつかは昇も私から離れていくんだから」
「まあ、男というものはそういうもんじゃろうな」
「本当に男って勝手よね」
彩香は新たにビールの缶を開ける。
「あの人もあの人で勝手に世界を飛び回ってるし」
「それに昇まで離れるとなると寂しいもんじゃろうな」
「分かってたんだけどね、いつかはこんな時が来るって。なにしろ私とあの人の息子だもの」
「……そうか」
「昇が目指している物は……そうとう厳しい物らしいわね」
「うむ、かなりのう」
「昇はどこまで進めるのかしら？」
「やはり心配かのう」
「それは母親だからね。心配するのが当然でしょ」
「確かに昇の進む道は険しくて厳しいじゃろう。じゃがそういう道ほど見ているほうが辛い時もあるもんじゃよ」
「はぁ～、黙って見守るのがこんなに辛いとは思わなかったわ。今までは私が厳しくしてたから楽だったけど、もうその必要も無いのね」
「進むべき道を見出した者にはもう見守るしかないからのう」
再びビールをあおる彩香。閃華には酒をあおる彩香の姿が立派に見えた。
やはり昇の母親じゃのう。やり方は違うがやるべき事が見えたらしっかりと見据えておる。まあ奥方の事じゃからこのまま酒におぼれる事は無いじゃろう。
私達できることは奥方になるべく心配をかけないことだけじゃな。まあそれも昇が成長すれば大丈夫じゃろうが。
再びビール缶を空にした彩香に閃華は尋ねる。

「それで奥方はこれからどうするつもりじゃ？」
「別に、いつもと変わらないわよ。私は昇の母親として昇を見守るだけよ」
「そうか」
やはり母親というのは強いものじゃのう。……そういえばあやつもそういう意味では強かったのかも知れんな。じゃが子供がおらんかったから夫への思いが強すぎたんじゃろうな。じゃからあんな事を……。
くっくっくっ、やれやれ奥方の姿を見ていたら久しぶりにあやつの事を思い出してしまったのう。もう忘れたつもりじゃったが、やはり忘れられんのかのう。
もう五〇〇年ぐらい経とうというのに未だに私は引きずっておるのかも知れんな。あの時あやつを止めておればあんなことにはならんかったじゃろう。それが出来なかったのはこの身の未熟じゃな。
今更で分かっておるんじゃが、やはりあれは悔やんでも悔やみきれんみたいじゃな。まあ、あれだけの出来事じゃからのう。今更全てを忘れるのは無理というものか。
なにしろ今でも思い出そうとすればはっきりと思い出せんじゃからのう。あの炎に包まれたあの場所を。
「閃華ちゃん」
閃華が昔の事を思い出していると急に彩香が話しかけてきた。
「んっ、どうしたんじゃ？」
「今度から昇に根性を叩き込んであげて」
「いきなりどうしたんじゃ」
「あのドラ息子がもう根を上げたみたいね」
「んっ」
閃華が海の方へ視線を向けるとそこにはぐったりとしながらこっちに歩いてくる昇の姿があった。
なるほど、そういうことか。
「まったく、シエラちゃん達はまだ元気に遊んでるのにあのドラ息

子はもうへばったみたいね」
「くっくっくっ、まあそんなに攻めたもんでもないじゃろ。なにしろ琴未達が元気すぎるんじゃからのう」
「それでももう少し女の子をエスコートできないものかしらね」
「一人ならともかく三人もエスコートしてきたんじゃ。昇が根を上げるのも無理は無いじゃろ。それに女性のエスコートは昇がもっとも苦手な分野じゃからのう」
「はぁ～、情けない」
「くっくっくっ」
まあこうなる事は最初から分かっておったがのう。さて、琴未のために一肌脱いでやるかのう。
すっかり疲れきった昇は閃華が何かを企んでいる事を未だに知る由も無かった。

第四十六話　母心（後書き）

え～、私のホームページにあるプロフィールを見てくださった方には分かると思うのですけど、私は現在は病人と書いてあります。というかうつ病を酷くして自律神経失調症にまでなってしまったんですけどね。

そんな訳でときどき病気が酷くなる時があります。つまり眠れません。この後書きを書いてるときもまったく眠れなかった後です。つーか、ほとんど徹夜明けに近いです。でも眠れない、……キツイ。

まあ私のことはこれくらいにして少し本編に触れておきましょうか。そんな訳で水着姿になったシエラ達、もしうまい絵描きさんがいてくれればいいサービスシーンになったんですが、さすがに私にはそんな知り合いもいないし、私自身も絵はうまくありません。

そんな訳でそこのところは脳内補完しといてください。まあ、そこまでうまく書けた自信は無いんですけど皆さん頑張ってください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想投票もお待ちしております。

以上、病院にいきたいけど今日祝日じゃねえかと思った葵夢幻でした。

第四十七話　閃華の企み・真夏の誘惑

ぐったりとしながら歩いてきた昇は崩れ落ちるように閃華の隣に座った。
「はぁ～」
そして溜息。さすがこんな昇の態度に彩香も呆れて新しいビール缶を開けて一気にあおり、閃華は笑っている。
「くっくっくっ、そうとうお疲れのようじゃのう」
「というかシエラ達に引っ張りまわされた」
「開放的な場所じゃからのう、琴未達が騒ぎたくなるのも無理は無いじゃろ」
「というか、最初は一応皆で遊んでたんだけど、そのうちシエラがいつものようにいろいろと画策して、それに琴未が反応したり、ミリアが便乗したりと大変だった」
「くっくっくっ、今の琴未達はいつもよりも元気じゃからのう、それに付き合うのも大変じゃったろ」
「うん、かなり」
「はぁ～、情けない。男だったらそれくらいで根を上げるな」
「いや、さすがにあれは無理」
というか母さん、そこに転がってるビール缶の数々はなんですか。どうやら全部が空のようですけど、まさかこれ全部を飲みました。
「さて、それじゃあ今度は私に付き合ってもらうとしようかのう」
いやいや閃華さん、いきなり何を言い出すんですか。というか休ませてください。
閃華は昇の心情を見抜いてるかのように笑うと、手の平サイズの何かを投げ渡して昇は慌ててそれをキャッチする。
「うわっっと、なにこれ？」
「見て分からぬか」
「……日焼け止めクリーム？」

「うむ、そのとおりじゃ」
「って、これをどうしろと」
「私の背中に塗ってくれ」
「……はい！」
「さすがに背中は自分では塗れんからのう。じゃから昇に塗ってもらおうという訳じゃ」
……なんですとーーー！
閃華の突然な申し出に昇は大いに驚き戸惑うが、その間にも閃華は横になるとビキニの紐を解いて背中を昇にさらすのだった。
「では頼んだぞ」
いや、そう言われても困るんですけど。
「ほらほら、閃華ちゃんが待ってるんだから早くしてあげなさいよ」
いやいや母さん、なにいきなり急かしてるの。
というか、やっぱりこういう時は塗らなきゃいけないのかな。
昇は決心を固めるとクリームのふたを開けて中身を手の平に出した。そして改めて閃華の背中に目を向ける。
……うわっ、今まで閃華の背中って見たこと無いからな、というか閃華の肌自体ほとんど見てないから今まで分かんなかったけど閃華って肌が白いんだな。というか、なんか凄く緊張してきたんだけど。
昇は高鳴る胸の鼓動と震える手を抑えながら少しずつ閃華の背中にクリームがついたてを近づけていく。
というかいいのかな、いいんだよね。だって閃華が言い出したことだし、というか閃華の背中って凄く綺麗なんですけど、それに左右に分けた髪がなんというか、……ハッキリ言って邪魔。って僕は一体何を思ってるんだ！
まあ確かに左右に分けた閃華の長い髪が体を横から隠しているのが残念だ。
そして昇の手がゆっくりと閃華に近づいていく。
「って閃華、何やってんのよ！」

そこに閃華の行動を見つけた琴未が駆けつけた。その声に思いっきりびっくりする昇と何故か笑みを浮かべる閃華が琴未の到着を待っていた。

「というか昇も何やってるのよ」

「いや、だって、閃華が……」

まるで言い訳を言う気分で琴未に事情を説明する昇。そして事態を理解した琴未は閃華に問いただす。

「というか閃華、なんで昇にそんなことをやらすのよ」

「それは自分では出来んからのう」

「だったらおばさんでもいいじゃない」

「いやいや、昇にもたまにはサービスしてやらんと」

「そんなサービスやらなくていいわよ！」

「そうか、じゃが昇もたまにはそういう事をしたいと思っておると思うんじゃが」

「そんな訳ないでしょ！」

「そうかのう。じゃが昇も男じゃぞ、そういう事を言われて嬉しいはずがなかろう」

いや、結構困ってましたけど。

「だとしても閃華がやらなくてもいいでしょ」

「なら琴未がやればよいか」

「へっ」

閃華の発言に驚く琴未だが、閃華は素早く水着を着直すと琴未を横に寝かせてビキニのひもを解いて素早く位置を入れ替えるのだった。

「って、ちょっと閃華」

「動くと見えるぞ」

「うっ」

しかたなくその場に横になり続ける琴未。そして昇はというと展開について行けずに呆然とするばかりだった。

というか、どうなってるの？

「さて昇、琴未の閃華に日焼け止めを塗ってやるがよい」
「へっ」
「何を呆けておる。琴未がお待ちかねじゃぞ」
……そうかーーー！　そういうことだったのか！
やっと閃華の企みを理解する昇。
そう閃華は最初から琴未にこの状況を作ってやるために、最初は自分に日焼け止めを塗ってくれと言い出したのだ。そしてそんな状況を琴未が黙ってみているわけがなく必ず止めに入る。そしてそこにすかさず自分と琴未の位置を入れ替えて琴未にチャンスを与えるのが閃華の企みだったのだ。
そして全ては閃華の思い通りに事は進んだ。
といか、僕の状況はあまり変わってないんだけど。
昇は今度は琴未の背中を目の前にする。
……というか、なんかさっきよりもドキドキするんだけど。というか琴未は髪が短いから横から少し……いやダメだ。そこは見ちゃダメだ。
そう思いながらも昇の目はスタイル抜群の琴未から目が離せなかった。特に胸の辺りとかは。
ぐっ、というか閃華は長い髪でよく見えなかったけど、琴未は邪魔な髪が無いからそこら辺はよく見えって僕は何を思ってるんだ。
昇はクリームが付いてない方の手で自分の頭を殴ってなんとか理性を保とうとする。
「ほう、やはり理性が勝ったか」
「まったく、そのまま襲っても良かったんじゃないの」
閃華も母さんもなにをいいだすの、特に母さん！
「ほれほれ、琴未がお待ちかねじゃぞ。早く塗ってやらぬか」
「ついでだからいろんなところも触りまくってあげなさいよ」
勝手な事を言い出してくる閃華と彩香を無視して昇は目の前の事に集中する事にした。
というかこれ以上に勝手な事を言われるのを聞いてると洗脳され

そうになる気がしてならない。
そして昇の手がゆっくりと琴未の背中に近づいていく。それに連れて昇の鼓動は高鳴るのだが、それは琴未も同じようで高鳴る鼓動を抑えながら今か今かと昇が日焼け止めクリームを塗ってくれるのを待っていた。どうやら琴未もこのチャンスをそのまま見逃す気は無いらしい。
うわ～、今まで気付かなかったけど琴未も結構肌が白いんだ。というか琴未は背中から見てもしっかりと腰の辺りがくびれてるな。……というか、どこから塗っていけばいいんだろう。
昇は少し戸惑うがそれでも覚悟を決めると琴未の背中に手が近づく。もう昇の手に乗っているクリームは気温と昇の体温ですっかりドロドロに溶けている。
そして指の間からクリームの一滴が琴未の背中に落ちる。
「んっ」
敏感に反応する琴未の声に昇の緊張は更に増して行く。
そして昇の手が琴未の背中に触れようとしたその時、突然津波が昇達だけを直撃して昇と琴未は思いっきり津波に飲み込まれてしまった。

そして津波が収まると琴未は一体何事が起きたのか確かめるために立ち上がりあたりを確認する。
「って、一体なに？」
「残念じゃのう、もう少し昇の決断が早ければうまく行ってたんじゃが」
いつの間にか閃華は琴未にビキニを着せてひもを結んでいるところだった。
そのことに琴未の顔は一気に赤くなる。
「安心せい、誰にも見られておらんからのう。その前にちゃんと隠しておいてやったぞ」

「……ありがと、閃華」
「なに、元は私の策が失敗したせいじゃからのう。当たり前じゃ」
「それにしてもあの津波ってなんなの？」
「先程の状況を黙って見てるワケには行かないのが、あそこに二人いるじゃろ」
「……シエラね」
「まあ、力自体はミリアがやったんじゃろ。たぶんシエラに脅されてのう」
「はぁ、まったくいいところだったのに」
というか、僕の事は放っておくんですね。
昇は自力で立ち上がると改めてシエラ達に目を向けるとこっちに向かって歩いてくる。
「はぁ～」
昇はもう溜息しか出ないようだ。
そしてシエラは琴未と対峙する。
「シエラ、あんたね。よくもやってくれたわね」
「琴未達と一緒に遊ぼうと水をかけただけ」
「ほほう、あの津波はただの水遊びだと」
「そう」
「それにしては随分と威力があったわね」
「迫力があったほうが楽しい」
「へぇ～、迫力ね」
「そう」
「なら今から迫力がある水遊びでもする」
「じゃあ勝った方が昇に塗ってもらうという事で」
「分かったわ、それでいいわよ」
「それなら本気でやった方が楽しい」
「そうね。どうせなら本気で楽しみたいものね」
あの～、話が変な方向に行っているのは僕の気のせいでしょうか。
「昇」

呆けてる昇を閃華は手招きしてパラソルの下に呼び寄せる。そこにはいつの間にかミリアも座っていた。
「というか閃華、どう収拾するつもり」
「……海は開放的でよいのう」
考えてなかったんですね。それともシエラ達がここまで本気になると思って無かったのかな！
「閃華」
昇はジトッとした目で閃華を見詰めるが閃華は決して昇と目を合わせようとしなかった。
「ふむ、策士策に溺れるとはよくいったもんじゃのう」
「それで言い逃れたつもり」
「まあ、良いではないか。たまにはこんな事があっても」
「閃華」
「んっ、どうしたんじゃミリア」
「シエラが精界を張った」
「……」
昇達の目には波打ち際に張られた精界がしっかりと見えている。範囲はそんなに広くは無いが白く張られた精界はその中を遮断するように真っ白で中の様子は見えなかった。
「たしかにあの色はシエラだね」
「やれやれ、どうやら開放的すぎたようじゃのう」
「全部閃華のせいだけどね」
「まあ、たまにはそういう事もあるもんじゃ」
開き直りましたか。
「けど中の様子が見えないな」
「ああ、それはのう昇、目に力を集中させるんじゃ。そうすれば精界の中を見ることが出来るぞ」
「そうなんだ」
昇は言われたとおりに目に力を集中させると精界が薄くなり、中の様子がよく見えるようになった。

精界の中では二人とも精霊武具を着用しており、すでに本格的な戦闘に入っていた。
「……なんか、二人とも本気でやりあってるように見えるんだけど」
「まっ、こうなってはしかたないからのう」
そう言って閃華は昇とミリアの肩に手を掛ける。
「我らはここで温かく見守っておこうではないか」
つまり放っておくんですね。
「あ～、まだ口の中が塩辛いわ」
そこに先程の津波に巻き込まれた彩香が戻ってきた。
「母さん大丈夫」
「あ～あ、なんか頭がクラクラするわね」
それは飲みすぎただけなんじゃ。
「彩香、大丈夫」
彩香を心配するミリア。そんなミリアの頭を撫でながら彩香は素直に答える。
「あまり大丈夫じゃないかも。私先に旅館に戻ってるわ、後のことは任せていい？」
「うむ、任せておけ」
「それじゃあ、お願いね」
「母さん、あまり飲みすぎちゃダメだよ」
「嫌よ。だって旅館に戻ったら温泉に入りながら飲む予定なんだから」
というか、母さんが大丈夫じゃないのは津波の所為じゃなくて飲みすぎてるだけなんじゃないの。
昇はそんなことを思いながら母親の背を見送るのだった。
「ふむ、思っていたより奥方は酒豪のようじゃな」
「母さん飲む時はとことん飲むからね。それより閃華」
昇は改めて精界に目を向ける。
「本当にあのまま放っておいていいの？」
「じゃあ、昇が二人を止めるために精界に飛び込んでいくというの

はどうじゃ」
「心の底から遠慮します」
「では見守るとしようか」
「それより昇、私そろそろお腹すいた」
「おや、もうそんな時間みたいじゃな」
「といっても、二人をあのままには出来ないし」
「まあ、二人とも本気でやりあってるわけではないんじゃから。飽きたら戻ってくるじゃろう。それまで我らはここで待っておるとしよう」
「それじゃあ、二人が終わったらお昼にしようか」
「はぁ～、シエラも琴未も早く終わらせてくれないかな」
結局、二人の喧嘩が終わるまで見守る事になった。
だが昇達は気付いてはいない。精界が見える者が他に居た事を。

その者は海岸よりはなれた道路で何かを探していたようだが、見つけたのはシエラが張った精界だった、
「ねえねえ竜胆（りんどう）、あれって精界じゃない」
「えっ、あっ、本当だ。規模は小さいけど確かに精界ね」
「どうする？」
「常磐（ときわ）、ちょっかいを出したいって顔に書いてあるわよ」
「そういう竜胆も同じでしょ」
「まあ、確かにね」
「だから風鏡（ふみね）の事は後にして先にあっちを見学してみようよ」
「そうね、それも面白そうかもね」
竜胆と常磐の二人は自分の存在を隠しながら静かに海岸へと下りていくのだった。

第四十七話　閃華の企み・真夏の誘惑（後書き）

……忘れてました。前々回の後書きでこの純情不倶戴天編の読み方を前回の後書きで発表するつもりだったんですけど、私もいろいろな人から風邪を移されてすっかり忘れておりました。

そんな訳で今回の章は純情不倶戴天編（じゅんじょうふぐたいてんへん）と読みます。まあ、それなりの意味があってこんな難しいタイトルをつけたんですけどね。ちなみに意味を調べてもいいですけど、もしかしたらネタバレになるかもしれませんね。だからそこら辺は読者の方々に判断を委ねますので調べたい人は調べてください。

ちなみに、調べてネタバレになっても私は一切責任を持ちませんから、そこは自己責任でお願いします。その手の苦情が来たら無視しますんで、そこら辺はよろしくお願いしまーす。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想投票もお待ちしております。

以上、平熱が低い所為で調子が悪くても風邪だと気付くのに二、三日かかる葵夢幻でした。

第四十八話　綺麗な花はトゲだらけ

「ああっー、もう！　海に来てなんで本格的な戦闘をしなきゃならないのよ！」
「それはこっちのセリフ」
いい加減に喧嘩に飽きたシエラと琴未は荒い息と文句を言いながら昇達の元に戻ってきた。
「ようやく戻ってきたようじゃのう」
『ただいま』
「じゃあお昼だし、そろそろお昼ご飯にしようか」
「そうね」
「ご飯～」
「でも荷物はどうするのよ」
「それなら任せておけ」
閃華はそう言った後で突然精界を張った。そして精界は昇達がいる場所だけを飲み込んだ。
「って、閃華！　いきなり何やってんのよ！」
「じゃから荷物を片付けるんじゃよ」
「精界を張るワケを聞いてるのよ！」
「こんな事は人に見せるわけにはいかんからのう」
それだけ言うと閃華は昇とミリアが片付けた荷物を虚空へと移転させた。
「荷物はこれで大丈夫じゃろ」
「……精霊って便利ね」
同感です。
「まあ、これは初歩的な術じゃからのう。少し学べばエレメンタルを持つ琴未にも出来るようになるぞ」
「……あとで習ってみようかな。便利そうだし」
別に止めませんけどね。けど、こんな所で精界を張って大丈夫な

のかな？
「閃華、それで精界から出る時はどうするの？」
「んっ、それなら安心せい。精界にちょっと工夫をして表からは私達が消えたようには見えておらん。術だけを見えないようにしただけじゃ」
……本当に便利ですね精霊って。
「さて、精界を解くぞ」
閃華が手を上にあげると精界にヒビが入って一気に崩れ去った。
「では昼飯に行くとしようかのう」
「そうだね」
「やっとご飯だよ～」
「というかシエラの所為で余計な体力を使ったから余計にお腹がすいたわ」
「そうね。最初の津波の時に琴未をもっと流してたら私にもチャンスがあったのに初手をしくじった」
いやいやシエラさん、あれ以上派手な事されると僕が困るんですけど。というかそれだと琴未の傍にいた僕も流されるんじゃ。
「シエラ、お昼の前にグーで殴っていい」
「嫌」
「というか殴るわ」
「じゃあ千倍返しで」
「ほう、じゃあ一万回殴ってあげるわよ」
「ほれほれ、そこまでにしとくんじゃ」
「ご飯～、ご飯～」
閃華が仲介に入ってミリアがとうとうダダをこねだしたものだから、シエラと琴未はひとまず休戦しておとなしく昼食を取りに海の家に向かうのだった。
「ごちそうさま～」

元気の良いミリアの声が響いて昇達の昼食が終わった。
「というかミリア、あんたよくそんなに食べたわね」
「だってシエラと琴未の所為で散々お預けをくらってたんだもん。これぐらい当然だよ」
「……ミリア、あんたさりげなく喧嘩売ってるの」
「じゃあ百倍返しで」
「う～、シエラも琴未も顔が怖いよ」
そう言いながらもミリアは素早く昇の影に隠れる。
その事に逸早く反応するシエラと琴未だが、それを遮り二人の女性が昇達に声をかけてきた。
「はいはい、ちょっといいかな」
「へぇ～、二人もいるなんて思わなかったわ」
「ちょっと、なんですかあなた達は！」
琴未は立ち上がるといきなり声をかけてきた二人に噛み付くような言動をする。どうやら相当機嫌が悪いらしい。
だが昇は声をかけてきた二人の女性にに見とれていた。
まあそれもしかたないだろう。
声を掛けてきた女性の一人は十九歳ぐらいだろうか、ビキニ姿のその女性は長い髪を後ろで編んでいるため体の線がよく分かる。それは琴未以上のスタイルだから昇の目には更に新鮮に見えた。
もう一人も同じ位の年齢みたいで、長い黒髪をそのまま下ろしていてその姿はまるで大人びた日本人形にワンピースの水着を着せたみたいで、シエラとはまったく違う雰囲気を出していた。
どちらにしても共通に言える事はシエラ達には無い大人の魅力を持っているという事だ。昇は始めて感じる大人の魅力にすっかり飲み込まれていた。
はぁ～、綺麗な人達だな。というか美人って言うのはこういう人たちの事を言うんだろうな。う～ん、シエラ達も確かに綺麗なんだけど、なんというか、やっぱり年下や同年代に見えるからこういう雰囲気は出てないよな。

すっかり二人の魅力に魅入られる昇だが、それは周りにいる男性陣も同で視線は昇も含めてその二人に集中していた。

だが昇は気付いていない。昇の後ろにはもの凄い殺気を出している女性が三人いる事をすっかり忘れていた。

同時に昇の頭を三人の拳が殴りつけたその後で、琴未は昇と二人の女性の間に立って昇と女性達をさえぎる。

「それで、何のようですか？」

琴未の問いに二人は少しだけ相談した後で髪をまとめた女性が口を開く。

「悪いね。どうやらお嬢ちゃんじゃないみたいだから、その後ろに居る男の子と話をさせてくれる」

……って、僕ですか！

「昇に何か用があるんですか」

「そうね、用があるのはそこにいる皆なんだけどね。だけどその男の子があなた達のリーダーみたいだからね」。

「じゃあ私達になんのようがあるんですか」

「ふふっ、だから、その前にそこの男の子と話がしたいの。それにその子もまんざらでもないみたいだし」

その言葉に琴未の頭には怒りのマークが三つぐらい浮かんだのは昇の気のせいではないだろう。

「常磐、いい加減に遊びすぎ」

今まで黙っていた女性がついに口を開く。

「だって竜胆、このお嬢ちゃん結構からかいがいがあるんだもん」

更に琴未の頭に怒りのマークが浮かぶ。

というか、この人達っていったい。

「まあ、常磐の言うとおりだけど、それはそのお嬢ちゃんが人間だからでしょ」

「そうね。後ろの精霊の三人は気付いてるみたいだけど」

えっ、それって、まさか！

昇が気付くのと同時に琴未も気づいたみたいで警戒態勢に入る。

「どうやら気付いたみたいね」
「う～ん、私としてはこのお嬢ちゃんともう少し遊びたかったんだけど」
「常磐、どうせ後で遊ぶ事になるんだから後にしなさい」
「それで、一体何用で私達に近づいてきたんじゃ」
閃華の言葉を合図にシエラとミリアが立ち上がる。
「いやね～、そんなの決まってるじゃない」
「この辺で契約者は私達のほかにはいないの、だからあなた達を見つけたらからとりあえず挨拶をしに来たってワケ。あなた達は観光客でしょ」
「そうじゃが、その挨拶も言葉だけじゃないんじゃろ」
「当たり前じゃない」
まさかこの人達が精霊でこのまま戦うことになるなんて。はぁ～、せっかく海に着たのになんでこんなことになるんだろう。
うんざりする昇だがこれも契約者の義務であり、決して避けられない事だと気合を入れなおす。
「じゃあ、私達の用件が分かったところで場所を変えましょう。ここで精界を張ったら目立ちすぎるわ」
竜胆は昇達を促して、昇は皆の顔を見回して頷くと竜胆達の誘導に従って海の家を後にした。

「さて、ここならいいでしょ」
竜胆が案内した場所は海岸から離れた岩場で段差が激しく歩きにくいところだった。
「なんでこんな場所まで来なきゃいけないのよ！　歩きにくくてしょうがないわ」
「だって～、ここなら人は居ないでしょ。だから精界を張っても大丈夫なの」
確かに昇達の周りには他に人は居ない。どうやらここは観光名所

でも釣り場でもなくただの岩場のようだ。
確かにそんなところに好き好んで来る人なんていないだろう。
そして海を背に竜胆と常磐が昇達と対峙するが、琴未は一歩前に出ると思いっきり竜胆達を指差す。
「ところで、このままやっちゃっていいの。そっちは二人だしこっちは五人よ。それでもやるつもり」
「ふふっ、でもそっちの精霊は三人でしょ。だからあまり関係ないわよ～」
「残念だったわね。私の能力はエレメンタル、だから精霊と同じ戦闘能力を持ってるのよ」
「あら珍しい」
それでも常盤はあまり驚きはしなかった。
どうやら最初から人数差は考慮していたようだ。それでも琴未は勝ち誇ったように胸を張る。
「なんだったら手加減でもしてあげましょうか」
「ダメよ～、それだとつまらないでしょ」
「……」
さすがにこの発言には琴未も固まる。というか以前にも同じような事を言われたような気がするのは間違いではないだろう。
「閃華」
「なんじゃ琴未」
「デジャブかしら、前にもこんなことがあったような……」
「安心せい琴未。あやつらは好戦的じゃが戦闘狂ではないようじゃ。私達に近づいてきたのも好奇心からじゃろう」
「そうなのよ～、この辺じゃ契約者なんて見てないから珍しくてね」
常磐の言葉にまるで動物園の珍しい動物のような気持ちになってくる琴未。そこまで珍しがられるのも困るだろう。
というか僕達ってなんでこんな精霊にばっかり絡まれるんだろう。
「そういえば、あなた達の契約者は？」
シエラの問いに竜胆は困った顔になって常盤は笑いながら答える。

「ふふっ、私達の契約者は迷子になってるのよ」
いや、そんな楽しそうに言われても困るんですけど。
「常磐、迷子になってるのは私達でしょ。あんたが勝手な行動をするから」
そうなんですか、というかあなた達は契約者を探さなくていいんですか。
「だってつい、それで私達の契約者を探してる最中にあなた達を見つけたの。それで挨拶に来たってワケ」
いやいや、それよりもあなた達の契約者を探してあげましょうよ。
「まあ、あなた達と遊ぶ方が楽しそうだったからね」
いやいやいや、そんな楽しそうだったからという理由であなた達の契約者は放っておくんですか。
「ふむ、相当好奇心が強いやつらじゃのう」
「そうね。好奇心だけで契約者をほったらかしにするぐらいだから」
「私そんな精霊なんて聞いたこと無いよ～」
「はぁ～、また変なのに絡まれたものよね」
「というか、本当にあなた達の契約者は放っておいていいんですか？」
「う～ん、まあ、そのうち帰ってくるんじゃない」
いや、犬じゃないんだから。
「だから私達の契約者は気にしなくていいわよ」
いやいや、そういう問題じゃないと思うんですけど。
「それであなた達の契約者はどうするの。なんだったらはずしましょうか？」
「いや、僕も戦うよ」
「へぇ～、やっぱり男の子はそれくらいの勇気がないとね」
「ふっ、昇を甘く見てるとあなた達が痛い目を見るわよ！」
「ふふっ、それは楽しみね～」
「……閃華」
「なんじゃ？」

「この精霊達って頭がおかしいの？」
「私に聞くでない」
「失礼ね。私達の頭は正常よ」
いや、そんなことを胸張って言われても困るんですけど。
「戦闘が数の差だけじゃないことをお嬢ちゃんに教えてあげるわよ」
「上等じゃない。出来るものならやってみなさいよ」
「やれやれ、琴未は完全に頭に血が上っているようじゃな。どうする昇？」
「……僕と閃華で琴未をフォローしよう。シエラとミリアは組んでもう一人をお願い」
「うむ、間違ってはおらんが昇も無理してはいかんぞ。私達は完全にあやつらのペースに乗せられておるからのう」
「うん、分かったよ」
「さて、じゃあ話がまとまったところで始めましょうか」
竜胆とシエラは同時に対峙する中心点に精界の柱を生み出すと一気に広げて、かなりの広範囲を精界で包み込んだ。
精界が完成すると昇達はそれぞれの精霊武具を身にまとい、常磐達も精霊武具に身を固める。
「風陣十文字槍＜風巻く槍＞」
常磐が手を前に出して叫ぶと槍が出現して刃が左右にも突き出して漢字の十に似た形になる。そして常磐は十文字槍を掴むと今度はその身を渦巻く風で隠して防具を身にまとい姿を現した。
十文字槍を手にした常磐の精霊武具は女性用の大鎧姿で平安末期の女性武将を思わせるものだ。
「灼熱斬馬刀＜熱する斬馬刀＞」
竜胆が地面に手をかざすと、地面から竜胆の身の丈ほどある柄が一気に飛び出して竜胆は柄を掴み一気に引き抜く。
現れた刃は柄と同じ位の長さで横幅は完全に竜胆の体を隠すほどに大剣以上に大きな刃だ。それもそのはず、そもそも斬馬刀とは馬に乗った武士を馬ごと斬る為に作られたものだが、その大きさと重

さゆえに誰も扱えなかった武器なのだが、竜胆は軽々と斬馬刀を振るって刃で身を隠すと防具をまとう。
そして精霊武具を身にまとった竜胆は、シエラのウイングクレイモアを軽く上回るほど大きい斬馬刀と軽装な防具の上に火消し羽織をまとった忠臣蔵にでも出て来そうな姿だ。
「うわっ、デカイよ！」
竜胆の斬馬刀を見てミリアは思いっきり驚く。だがそれは昇達も同じで始めて見る斬馬刀に驚きを隠せなかった。
そんな昇達に竜胆は斬馬刀を見せ付ける。
「珍しい武器でしょ。この斬馬刀は作ったのはいいけど誰も使えないから忘れ去られた武器なんだけど、私にとっては丁度いいのよね」
その言葉を証明するように竜胆は斬馬刀を軽々と振るい、岩場を大きく切り裂いてみせる。
「そんなに大きいのは卑怯だ！」
いや、だからミリア、別に卑怯では無いと思うんだけど。
「くすくすっ、なんだったらあなたもこの斬馬刀を扱ってみる。まあ、これくらい大きな物を扱える精霊なんてそうそういないけど」
確かにそうかもしれない。シエラのクレイモアも大きいと思うけど、あの斬馬刀の大きさは軽くクレイモアを上回ってる。
そうなると琴未の刀だとあの斬馬刀に対抗するのは無理か。
「琴未、閃華、僕達はあの常磐っていう精霊の相手をするから、シエラ達はそっちの竜胆の相手を」
「分かった」
昇の指示に従いそれぞれ組む昇達。そんな中で常磐は昇に注目する。
「あら、あなた達の契約者って何か特別な力があるのかしら。精霊武具並みの武装が出来るなんて、それに能力もエレメンタルって感じがしないわね。一体何の能力なの？」
「そんなこと教えるわけないでしょ！」
「ケチ！」

いや、ケチって言われても困るんですけど。
「それに武器が銃火器っていうのも珍しいわね。精霊武具は接近戦の武器が基本だから飛び道具自体珍しいけど、それにしても近代兵器を武器に出来るなんて相当特別な力ね」
昇の二丁拳銃には竜胆も興味を示したようだ。確かにエレメンタルアップ自体が珍しい能力で、しかも昇の武装はそのエレメンタルアップの応用だから二人に推測が付くはずも無かった。
「まあいいわ、常磐、油断しないようにね」
「分かってるわよ。それに面白そうな事になりそうだしね」
そんな昇の未知な能力にも常盤と竜胆の二人は怯む事もせず、逆に好奇心に更なる火を灯したようだ。
いい加減にそんな二人の態度にも慣れてきた昇達はそれぞれ戦闘体勢に入り、売られた戦いの火蓋は切って落とされた。

第四十八話　綺麗な花はトゲだらけ（後書き）

さて、ちょっと更新に間が開きましたが、実はそれにはちょっとした訳がありまして。

先の後書きに書いたと思いますが私はうつ病持ちです。それで眠れない日々が続いてたのですが、そこで私はあることに気付いた。

そうだ、酒を飲もう。

まあ、そんな訳でアルコール度数４３度の泡盛を購入してその日にビンの三分の一ほどロックで飲みました。翌日、二日酔い。……というか、私自身が一番驚きました。二日酔いなんて何年ぶりかです。それどころか翌朝の朝食中に吐き気をもよおし、全部吐きました。うわ～、何年ぶりだろ、そこまでなるなんて。さすが泡盛、抜群の破壊力でした。

それでその日は一日中寝てました。いや～、あそこまで寝たのも久しぶりです。

まあ、そんなこともありまして更新が遅れました。皆さん、この時期はお酒を飲む機会が多いと思いますけど、決して私の真似をして泡盛をロックで飲み過ぎないように、……すごいは、あれ。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、こりずに泡盛を適度に飲み続けようと思ってる葵夢幻でした。

第四十九話　地の利無し

「いくわよ！」

最初に飛び出したのは琴未。勢いよく先陣を切って走り出した琴未は常磐に向かって疾走する。そして……コケた。

それはもう豪快に転ぶ琴未。勢いよく走り出したのはいいが、おうとつがある岩場に足を捉えられ、それに走り出した勢いも加わり二転、三転と豪快にコケる琴未。

そしてやっと止まって起き上がろうとする琴未に常盤の十文字槍が迫る。

今の体勢だと十文字槍を避ける事ができないと判断した昇は、一瞬で十文字槍の穂先に狙いを定めると力の銃弾を発射して弾丸はピンポイントで十文字槍を捉えた。

そして十文字槍が琴未の横に突き刺さる。なんとか十文字槍を逸らす事が出来たようだ。

そこにすかさず閃華が飛び込み常盤に方天戟を振るうが避けられてしまう。

だがそれでよかった。閃華は琴未から常磐を離せればよかったのだから。

「大丈夫か、琴未」

常磐を警戒しながら琴未を心配する閃華。

琴未は思いっきり顔面を打ちつけたらしく、鼻を摩りながら起き上がる。まあコケただけだからそんなに心配するほどでもないのだろう。

「大丈夫よ。それにしても、ここって思いっきり走りずらいじゃない」

「それがやつらの狙いじゃからのう」

「えっ？」

「慣れておるんじゃよ。あやつらはこういう場所に」

簡単に説明する閃華だが琴未は分からないって顔をしていたらしく、常磐は笑いながら琴未に説明してくる。
「昔から言うでしょ。戦に勝つには天の時、地の利、人の輪って」
「なにそれ？」
それを知らない琴未に閃華は溜息を付くと一つ一つ説明していく。
「人の輪とは自軍の人間関係と数じゃ。つまりどれだけの人数がいて、どれだけの信頼しておるという絆じゃ。
そして天の時はタイミング、どんな策もタイミングというものがある。その時を逃すと策は失敗して逆に漬け込まれる事になる。
そして最後に今のあやつらが持ってる地の利じゃ。これはその地形をどれだけ知っており、またどれだけ慣れておるかじゃ。簡単に言うと今の琴未がこの足場に慣れておらぬが、あやつらはここをよく知っておるし、こういう足場にも慣れておる。じゃからあやつらはこういう場所でも普通に動けて、私達は動きを制限されるわけじゃ」
そうか、だからこんな場所にまで僕達を誘い出したんだ。
自分達の状況をやっと理解する昇。確かに人数では昇達は大いに勝っているが、この場所での戦いは完全に常磐達に有利。それは人数差を埋めるには充分な理由だった。
人の輪は僕達にあるけど地の利は完全にあっちがもってる。状況は僕達が有利なんじゃない。五分五分なんだ。
昇は琴未に近づくとそのことを伝える。
「琴未、油断しないで僕達は完全にあの二人にはめられたんだから」
「それはどういう意味よ？」
「ここに僕達を誘い出したのは精界を張るためだけじゃない。自分達が有利に戦える場所を選んで僕達と対等に戦えるようにしたんだ。その証拠にここだと僕達は動きずらいだろ」
「確かにそうね」
「ふふっ、だから言ったでしょ。人数だけが戦闘を決めるんじゃないって」

「くっ」
常磐の言葉と完全に罠にはまった事に悔しがる琴未だが、今更悔しがっていてもどうにもならない事は充分承知だった。だからこそこれからの事を考える。
「それで昇。どうすればいいの？」
「……なるべく閃華と一緒にいるように戦って」
「昇は大丈夫なの？」
「うん、ちょっとやってみた事もあるしね」
「分かったわ」
「では行くか」
「そうね」
「分かっておると思うが、さっきのように闇雲に突っ込んで行ってはならんぞ」
「分かってるわよ。閃華、フォローをお願い」
「うむ、任せておけ」
琴未は足場を見渡してから常盤への進行ルートを見極めると、そのルートに従って走り始めた。
動きは遅いが琴未は確実に常磐との距離を詰めて行き、常磐もまるで琴未が辿り着くのを待っているようだ。
琴未は最後の一歩で大きく跳ぶと一気に常磐の懐に潜り込んで琴未の刀を振るうが、刀は空を斬り常磐を捉える事が出来なかった。
だが琴未の目はしっかりと常磐の動きを見ていた。
すぐに追撃に移る琴未だが、慣れない足場が琴未の動きを一瞬だけ鈍らせる。
その一瞬に反撃に出る常磐。琴未はその一撃をなんとか防ぐが、どうしても慣れない足場では下半身の踏ん張りが利かずに押し切られそうになる。
徐々に押されていく琴未。だがそこに閃華が飛び込んできてくれたおかげで常盤は一旦琴未から離れる。
「ヘリオスシュート」

常磐の着地点をを見極めてそこに攻撃を放つ昇。
それでも常盤は昇の攻撃を簡単にかわしたが、昇の弾丸は急に止まると再び常磐に向かって飛んで行く。
「なによ、それ！」
さすがに一度かわした弾丸が再び戻ってくるとは思ってなかった常磐は慌てて弾丸を回避するが、それでも弾丸は消滅することなく再び常磐に向かっていく。
昇は一度発射した弾丸をコントロールしてしつこいほど常磐に攻撃を仕掛けるが、常磐は弾丸の軌道を見切ると十文字槍でなんとか打ち落とす。
しつこい攻撃から開放されてやっと一安心する常盤だが、昇が笑みを浮かべるのと同時に力を感じる。
「えっ、上！」
常磐が上を見上げると、そこにはすでに急速落下してくる弾丸が迫っていた。
そして着弾すると同時に爆発する。
……残念、逃がしたか。
そう、昇が放った弾丸は二発。一発はしつこく常磐を追って気付かせないようにして、もう一発はかなり上空で待機させていた。そして常盤が一発の弾丸を打ち落とすのと同時にもう一発は常磐に向かって急速落下させた。
昇としては一発の弾丸を打ち落とした隙をついたつもりだったのだが、常磐の反応が思っていたより早かったのか、それとも気付かれないように上にやりすぎたのか、どちらにしても常磐が攻撃を回避したのは確かだ。
そして爆煙の中から常磐が姿を現す。
そこに素早く切り込む閃華。それでも常盤は閃華の攻撃をさばいてその場をしのぐが、琴未も加わり完全にはさまれてしまう。
「ふふっ、思っていた以上にやるわね」
「当たり前よ」

「そうじゃぞ、琴未と昇の愛を前にして敵う物などおらん」
……あの～、閃華さん、いきなりなにを言ってるんですか？
だが常盤は閃華の言葉に意外なほど興味を示した。
「へぇ～、あなた達はそういう関係だったのね」
いや、その、なんといいましょうか。
「ふふっ、やっぱり人間は面白いわね。あなた達の将来も見てみたくなっちゃった」
「んっ、それはどういう意味じゃ」
「ふふっ、あなたには関係ないことよ」
笑いながらそう言って来る常盤。だが昇はその常磐の笑みが誰かに似てると思う。
……なんだろう。この人の笑い方、誰かに似てるんだよな。……そうだ！　ミリアだ。ミリアが興味本位で僕に笑いかけてくる時に似てるんだ。
思いついたことで目の前の戦闘に集中する昇。だが常磐の笑みが示す本当の意味を昇は分かっていなかった。

一方、シエラ達は完全に苦戦していた。
なにしろ竜胆の武器はシエラのウイングクレイモアを上回るほどの大きさを持つ斬馬刀、それに慣れない足場がミリアの動きを制限する。
シエラはというと足場の不利を真っ先に感じ取り、すでに宙に浮いている。そして足場が気にならないように常に空中から攻撃を仕掛ける。
そしてぶつかり合うクレイモアと斬馬刀。
「なるほどね。確かに空中からの攻撃なら足場は関係ないわね。それに私の斬馬刀を受け止めるために、その羽根の力を最大にしてるってワケね」
「こうでもしないとさすがに無理」

シエラは斬馬刀とぶつかり合う時は必ずブーストを全開にしていた。そうして少しでもウイングクレイモアに推進力をつけないと大きさと重量で上回る斬馬刀には対等にやり合えない。

だがその戦い方は本来スピードを重視するシエラの戦い方とは大きく違っていた。

シエラは斬馬刀とぶつかり合う中でちらちらとミリアを見ていた。そのミリアはというと先程から戦闘をシエラにまかせっきりで精神を集中している。どうやらシエラ達には何らかの策があるみたいだ。

そのためシエラは戦闘開始から一人で竜胆の相手をしている。精界を広げすぎた。もう少し小範囲に絞っておけばミリアも時間が掛からなかったはず。そこは失敗だった。

だが今更そんな事を思ってもしょうがないとシエラは竜胆と刃を交えている。すべてはミリアが術を発動するまでの時間稼ぎのために。

だが竜胆はそんなことをまったく気にすることなく、斬馬刀と対等に渡り合ってくるシエラとの戦闘に集中していた。まさか竜胆もシエラが一人でここまでやるとは思ってはいなかったのだろう。

それに斬馬刀と対等に渡り合う相手も始めてのようで、竜胆はそんなシエラとの戦闘を楽しんでいるようだ。

だがシエラにそんな余裕はない。斬馬刀と対等に戦うためには常にフルブースト状態を維持しなければならない。シエラは力の消耗を顕著に感じながら竜胆と戦っているのである。

こんなことなら、さっき琴未と喧嘩しなければよかった。

シエラは先程の琴未との喧嘩を入れれば二連戦で、そのうえ今は力の消耗が激しいフルブースト状態を維持しないといけない。さすがのシエラもこの状況は厳しかった。

そしてとうとうシエラは斬馬刀の威力に負けて吹き飛ばされてしまうが、なんとか空中で体勢を立て直す。

そこに追撃を入れる竜胆。リーチの長い斬馬刀だから例え距離を

置かれても移動距離が少なくてすむ。だからシエラが体勢を立て直した時はすでに竜胆の間合いに居る事になってしまった。

迫ってくる斬馬刀。シエラは翼を羽ばたかせて急上昇するが、竜胆も斬馬刀が空を斬るとすぐに構え直してその場からシエラを追うために上空に跳ぶ。

少しでも回避距離を取りたいシエラだが力の消耗が激しくスピードにキレがない。そのため跳び上がった竜胆の間合いに入ってしまう。

すかさず斬馬刀を振るう竜胆。

シエラは斬馬刀を受け止めたが支えきる事が出来ずに押し切られてしまい、今度は地面に向けて弾き飛ばされてしまった。

高威力の斬馬刀が放つ一撃はシエラに体勢を立て直す事を許さず、シエラは背中から地面に激突してしまう。

重低音と共にシエラの周りにある岩場も吹き飛んで斬馬刀の威力を物語る。

そこへ追撃を入れるために竜胆は斬馬刀をシエラに向けて落下していくが、落下先には大きく翼を広げたウイングクレイモアがあった。

「フェザーショット」

羽の弾丸が発射されて空中にいる竜胆に迫る。

空中では自由に動けない竜胆は格好の的になるはずだったのだが、竜胆は刃を横に向けて斬馬刀の上に乗った。

そのため竜胆の体は完全に斬馬刀の影に隠れてしまい、シエラの攻撃は斬馬刀に当たっただけで竜胆に届く事はなかった。

そして斬馬刀の上に乗ったままシエラを目指して落下してくる竜胆。そして轟音と共に斬馬刀は地面に激突して衝撃を辺りに撒き散らす。

危なかった。

再び空中に戻ったシエラは斬馬刀の衝撃に改めてその威力を垣間見る。

シエラが無事に斬馬刀から逃れられたのも、竜胆が斬馬刀の刃を返してその影に隠れたおかげだ。
刃を返した事により巨大な盾と化した斬馬刀は落下の空気抵抗もまして落下スピードが大幅に低下して、そのうえ竜胆が斬馬刀に隠れたおかげでシエラの姿を捉える事が出来ずにそのまま落下してきたからだ。
もし竜胆が怪我を覚悟でそのまま落下してきたらシエラは避ける事すら困難だった。
けど、うまく行ってくれてよかった。
なんとか難を逃れたシエラは再びミリアに目を向けると、そこにはすでに術式を完成させたミリアの姿があった。
やっと、これで私達の不利は無くなる。
ミリアはハルバードを思いっきり地面に突き刺す。
「アースウェーブ！」
ミリアが術式を発動させると精界内部は巨大な地震が起こり、ミリアのハルバードを中心に地面を吹き飛ばしていく。
その様子を逸早く察した閃華が叫ぶ。
「いかん！　昇、琴未、合流するんじゃ！」
閃華は琴未の手を取ると昇の元へ戻り結界を張る。
「閃華、この地震はミリアがやってるの？」
「ああ、そうじゃ。まったくミリアのやつめ、こっちに声をかけてからやればいいものを」
「というか、シエラ達はなに考えてんのよ！」
「ミリアは地の精霊じゃ、じゃからこの不利な状況を何とかできるんじゃよ。だがその前にこっちに声をかけん事は後でしからんとな」
「えっと、それってどうい」
昇が閃華に問いかける前にミリアの放った衝撃が昇達にも直撃して、結界の内部にも伝わるほど振動を巻き起こす。
その衝撃は竜胆達にも直撃するが、竜胆と常磐はそれぞれ結界を張ってなんとか持ちこたえる。

そしてミリアは精界内部にある地面を全て吹き飛ばすのだった。

攻撃をやり終えたミリアの元にシエラが舞い降りる。

「お疲れ様」

「シエラ、これ、結構、疲れるんだけど」

「だけどこれで私達の不利は無くなった」

まだ息の荒いミリアをよそにシエラは先程の成果を見渡す。

そこには足場の悪い岩場が全て吹き飛んでしまい、まっ平らな更地が広がっている。

「うん、上出来」

足場の不利が無くした事に満足そうに頷くシエラ。だがミリアは先程の攻撃がよほど疲れたのかハルバードにもたれかかるように立っていると、そんなミリアの頭を石が直撃する。

涙目になりながら石が直撃した箇所を摩りつつミリアは石が飛んできた方向に目を向けると、そこには怒りながら迫ってくる琴未の姿があった。

「ミリア！　あんたいきなりなにやってんのよ！」

「う～、だって、シエラがやれって」

「シエラ！」

「私は足場の不利を無くす為にそうしただけ」

「だったら、あんな攻撃をする前に私達にも声をかけてよね！　私達が巻き込まれたらどうするのよ！」

その言葉にシエラは少し考えるとポンッと手を叩く。

というかシエラさん、僕達の事を忘れてました。

「まあ結果オーライってことで」

「それだけで済ませるな！」

「琴未、過去にこだわってはダメ」

「なにいきなり人を諭そうとしてるのよ！」

「ほれほれ、そこまでにしておけ琴未」

「閃華まで」
「まだ終わっておらんのだぞ。先程の攻撃でどうにかなる相手ではあるまい」
「そうね、先にあっちを叩かないと」
「シエラ、私はちゃんとこのことを根に持ってあげるからね」
「あまり根に持ちすぎると早く老けるよ琴未」
「やっぱり今殴るわ」
「琴未、その時は加勢してやるから落ち着けい」
「そうだよ琴未、今はあの精霊達をなんとかしないと」
「昇がそうやってシエラを甘やかすからつけあがるのよ！」
いや、甘やかすとかそういう問題じゃないかと……。
「まあ、とにかく今は目の前の戦闘に集中せい琴未」
「……分かったわよ」
「やれやれ、今日はいろいろと反省すべき点が多いのう」
そうですね。もちろん閃華を含めてだけど。

昇達がそんな漫才をやっている頃。竜胆と常磐の二人ものんきにこの様子を楽しむような会話をしていた。
「あ～あ、すっかりまっ平らにされちゃったね」
「あの精霊が地の精霊とはね。白い精霊に気をとられてまったく気付かなかったわ」
「って、どうする竜胆？」
「う～ん、本気でやってもいいんだけど。けど風鏡がいないとさすがにキツイかな」
「そうだね。さすがに私もこのままじゃキツイかな」
「まあ、今回は挨拶代わりだし、この辺で退いても問題ないかな」
「う～ん、私としてはあの人間二人の関係が気になるんだけどな～」
「なに、また何か面白い物でも見つけたの？」
「ふふっ、そうね。私が見たところかなり面白そうなのよね。もし

かしたら精霊を含めた三角関係かもしれなね」
「くすくすっ、あなたも本当にそういうのが好きね」
「そういう竜胆だって気になるでしょ」
「まあね」
「けど、今日はこれまでかな？」
「そうね。けど楽しみが増えただけでもいいじゃない」
「そうだね～」
楽しげに会話をする竜胆と常磐。
だが二人は気付いていない。精界の隙間から二人に伸びてくる影を……。

第四十九話　地の利無し（後書き）

そんな訳で２００８年、一発目の投稿です。
それと気付いている人は気付いていると思いますが、私はこりずに再び連載物を始めました。しかも内容が恋愛物風、去年の年末からチャレンジし始めました。
これで再び連載を二本抱える事になり、エレメの更新が遅れる事が確実です。しかも、実は他にも考えてたりして。なんか自分で自分の首を絞めてる気分です。
まあ、そんな訳なのでエレメを楽しんでいる人には悪いのですが、これから更新期間が長くなると思いますがどうか見捨てずに付いて来て下さい。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。
以上、おみくじを引いたら中吉だった葵夢幻でした。

第五十話　重なる笑顔

いつの間にか常磐と竜胆の後ろに現れた真っ黒な精界の切れ目から、突然雪崩が起きたかのように雪が怒涛の勢いで二人を襲い。すぐ傍で起こった雪崩に二人はどうする事も出来ずに雪崩に飲み込まれた。

「えっ、なに、どうしたの？」

突然の事に驚いてるのは昇達も同じだった。そして琴未が目にした物は自分達に迫ってくる雪崩。

「雪――――！」

「落ち着け琴未、ミリア！」

「うん」

「……ちょっと待って」

ミリアがハルバードを振り上げた瞬間から雪崩の勢いは一気に弱まり、昇達の元にまで来ることは無かった。

シエラは近くまで迫ってきた雪崩の一部を掴み取ると冷たい感覚がしっかりと感じ取れた。

「これ、本物の雪」

昇もシエラと同じく雪を手にとった。

本当だ、冷たい。でもこれだけの雪が一体何処から来たんだろう。それにあの二人の精霊はどうしたんだ？

「今は真夏だよね。何でこんなにも雪が？」

「昇、こんなことを出来るのは限られておるじゃろう」

「……精霊？」

「もしくは契約者のどちらかじゃろ」

「……どちらにしても相手の増援には間違いないかもしれない」

「そうじゃな」

「でも昇、相手の精霊が雪に埋もれてるよ」

「えっ！」

ミリアの言葉に昇は積もった雪の上を見てみると、そこには雪からはい出して来る常磐と竜胆の姿があった。
えっと、どうしてあの二人が雪崩の被害に？
昇達にはまったく心当たりが無いのだが、竜胆と常磐の二人はそうは思わないようで雪から這い出すと昇達に敵意を剥き出しにする。
「あんた達ね～、よくもやってくれたわね！」
「精界の外から奇襲なんて予想外だったわ」
「えっ、えっ、いや、僕達の仕業じゃないんだけど」
「この期に及んで言い訳するなんて男の子らしくないわよ！」
いや、そう言われても困るんですけど。実際に心当たりないし。
戸惑うばかりの昇に噛み付いてくる竜胆と常磐。閃華は昇の前に立って口を開く。
「とりあえず、私達の中に雪を扱える者はおらん。お主達に心当たりがあるのではないか？」
「あんた達ね！　この奇襲は見事だったけど言い訳するのは見苦しいわよ！」
「ちょっと待って常磐。……これ、雪だわ」
「だからなんなのよ！　竜胆」
「もしあの精霊が言ってることが正しかったら、私は思い当たる節があるんだけど」
「私には無いわよ、ゆき、を……」
常磐の声が段々と小さくなっていく。どうやら竜胆と同じように思い当たる節があるらしい。
そして常磐が静かになった事によりその場は静寂に包まれて、今まで聞こえなかった音が聞こえてきた。
それは雪の上を歩く時に鳴る独特の音。
竜胆と常磐は顔を見合わせると二人の顔は青ざめていき、そして後ろから近づいてくる足音に恐る恐る振り返る。
「……風鏡！」
後ろから来た足音の主に常磐は驚きの声を上げて、竜胆は頭を抱

える。
あれ？　あの人はさっき浜辺で見かけた人じゃ。
昇達の前に現れた風鏡は確かに昇がシエラ達と合流する前に見かけた女性だった。
それにあの格好、もしかしてあの人も……。
前に昇が見えかけた時には風鏡は普通のワンピースを着ていたが、今では白い長襦袢（ながじゅばん）と黒い袴の上に武装しており、たすき掛けで邪魔な袂をまとめて戦闘向きな姿になっている。
それに手にしてるのは日本刀の刃と長い柄を持つ長刀（なぎなた）。その出で立ちはどう見ても精霊武具に他ならなかった。
そして風鏡は常磐と竜胆の前に辿り着くと二人に笑みを向けて話しかける。
「常磐も竜胆も、こんな所で何をしているの？」
「えっ、えっと、あれだよ風鏡……」
「ほら、私達って精霊じゃない。だからあれよ」
笑みを浮かべる風鏡に対して常盤と竜胆の二人は明らかに動揺している。
そして竜胆は思いっきり昇達を指差した。
「あの契約者に私達が精霊だって事がバレたから、それでこんな風に巻き込まれたのよ。私達は断ったんだけどしつこくってね」
いやいや、あなた達が僕達を誘い出したんでしょ。
「そうだよ。だから私達は被害者なのよ」
いや、被害者は僕達ですけど。
「へぇ～、そうなんだ」
笑顔で返す風鏡だが常磐と竜胆は逆にそれが怖かった。
「それ……嘘よね」
「うっ！」
「ぐっ！」
一発で見抜かれたことにより言葉を失う常磐と竜胆。風鏡は笑顔を崩すことなく更に二人に歩み寄る。

「あなた達がそんなに謙虚なわけないわよね」
『……』
最早出る言葉も無いらしい。
風鏡は始めて笑顔を崩して溜息を付くと大きく長刀を振り上げる。
「とりあえず二人とも」
「ちょ、ちょっとまって風鏡！」
「許して――っ！」
「反省してなさい！」
「いや――っ！」
「ごめんなさい、ごめんなさ――っい！」
そして風鏡が長刀を振り下ろすと二人の足元にある雪が吹き上がり二人を飲み込んでいった。

「私の精霊が迷惑をお掛けした様で、本当にすいませんでした」
昇達の前にやってきた風鏡は頭を下げて丁寧に謝罪する。ちなみに常磐と竜胆は首から下を完全に雪で固められて、雪だるまのようになって風鏡の後ろで涙を流していた。
「本当になんとお詫びしていいやら」
「いや、あの、別に気にしてませんから」
丁寧すぎる風鏡に昇は思わずそう言ってしまう。
「甘いわよ昇！　私達はあの精霊達に散々酷い目に遭わされたのよ。それを簡単に許すなんて！」
「本当にすいませんでした。今後はこのような事をしないようにちゃんと二人には言って聞かせますから許してください」
「えっ、いや、その……」
それでも下手に謝る風鏡に琴未はすっかり毒気を抜かれてしまった。それどころかここで怒っている自分が大人気ないように思えてすっかりおとなしくなる。
「えっと、風鏡さん……でしたっけ」

「あっ、自己紹介が遅れましたね。私は秋月風鏡（あきづきふみね）と申しまして、常磐と竜胆の主です」
「あるじ？」
聞き慣れない言葉に昇は首をかしげるが、そんな昇を見てシエラは風鏡達が交わした契約について説明を始める。
「契約には幾つか種類がある。一つは私達が昇とした契約でキスをもって契約が完了する方法。これは精霊が己の全てを契約者に捧げる事を意味してる。つまり昇が私達に何をしようと私達は文句をいえない。だから昇は私達を自由に出来る権利を持ってる」
「……その割にはシエラ達って結構自由にやってるよね」
「それがこの契約の良い所。精霊が己の全てを捧げてる事によって精霊にも契約者の命令以外は自由に出来る。その代わり精霊には拒否権は無い。だから昇は私達にどんな命令でも出来る」
「なんか、それも気が引けるんだけど」
「昇は権利を持っても精霊に酷い事をしないって確信してたから、だから私は昇に全てを捧げる契約方法をとった」
さすがにそこまで言われると気恥ずかしいのか、昇は少し照れながら風鏡達の契約について聞いてくる。
「それで、主って言うのは？」
「それは自分の武器を差し出す事によって契約をする方法。これは完全な上下関係を示してる。つまり精霊が契約者に絶対の忠誠を誓う意味を持ってる。だから精霊の行動は契約者に忠実であり、完全に自由が許されない。その代わりに精霊には主となった契約者の命令に拒否権を持ってる」
「んっ、それって逆なんじゃないの？　普通は上の人に逆らったらダメなんじゃ」
「主は人間、だから間違った事もする。精霊が拒否権を持つのは主が間違った方向に進んだ時にそれを正すため。あえて逆らう事で主である契約者をより良く導く事が出来るのがこの契約方法の良い所。本物の忠臣というのは主に逆らう事も必要」

「ふ～ん、そういうものなんだ」
「まあ、昇には分からんと思うが、生来上に立つ事を決められた人間には逆らう家臣が必要な時もあるんじゃよ」
「……閃華、それっていつの話し」
「くっくっくっ、それは今の世も変わらん。人間は生まれによってそういう定めを負う者もおるんじゃよ」
「そうなの？」
「うむ、それにな、自分の手で勝ち取った立場でも時によっては自らの立場を忘れるときがある。そういう時にも自分に逆らってくれる忠臣は頼りになるもんじゃよ」
「……なんか、僕にはよく分からないんだけど」
「くっくっくっ、だから言ったであろう。それに昇は今のままで良い、それが私達が昇と契約を交わした理由じゃからのう」
そう言われてもピンと来ないのか昇は考え込んでしまった。
そんな昇を見て閃華が昇の代わりに風鏡との会話を始める。
「まあ、私達は戦闘に巻き込まれることは覚悟の上じゃ。それに昇もあまり気にしておらんようじゃし、お主が気に病むことは無い」
「はい、そう言って頂けるとありがたい限りです」
「それにしても、お主も契約者なら私達との戦闘を望むのではないか？」
「いえ、私はエレメンタルロードテナーに興味はありません。私は自分の目的を遂げるために契約したのですから」
「んっ、お主の目的とは？」
「それはあなた達に関係無い事なのでは」
笑顔でそう言って来る風鏡の顔を見ながら閃華は風鏡の意思を読み取っていた。
つまり、余計な首を突っ込むな、という事じゃな。やれやれ、また面倒な事になりそうじゃのう。なにしろ事と次第によっては首を突っ込みたがるのがおるからのう。
閃華は昇に目を向けると未だに何かを考えているようだ。

まあ、昇のことじゃから真相を知った時に首を突っ込むじゃろ。
なら今のうちから情報を集めておこうかのう。
「ところで風鏡殿」
「なんですか？」
「この近くに風鏡殿の他に契約者はおらんのか？　その精霊達の話ではそういう風に聞こえたんじゃが」
「……」
風鏡はすぐに答えずに思い出すような仕草をしてから口を開いた。
「そうですね。私の知る限りではいませんね」
……嘘じゃな。
風鏡の返答に閃華はそう思う。だがそれにはそれなりの根拠があった。
あの精霊達の異常に強い好奇心、風鏡殿にはその好奇心をそそるだけの理由があるはずじゃ。それには必ず契約者が絡んでおるはず。例えどんな理由があろうとも契約者が絡んでおらん限り契約なんてせんじゃろ。
つまり風鏡が契約をしたという事実が風鏡以外に契約者が絡んでいる事を示している。
「そうか。まあ、私達としても余計な戦闘を避けたいのは事実じゃ。それにここにはバカンスで来ておるじゃからのう。やっかい事に巻き込まれるのはごめんじゃ」
まあ、それも昇次第じゃがのう。
「そうなんですか、何も無い所ですけどゆっくりとして下さい」
んっ？
笑顔でそう言って来る風鏡。だが閃華にはその風鏡の笑顔をどこかで見たような気がした。
「ふむ、ぜひそうしたいものじゃな」
だが閃華は決してそれを表には出さずにそう答える。
「こちらにはどれくらいご滞在する予定なのですか？」
「一週間ほどじゃ」

「お詫びに観光地があったら案内したいのですが、生憎と何も無い土地なので」
「なに、そこまで気を使ってもらえなくても構わん。私達は好き勝手にやらせてもらうだけじゃ」
「では代わりにお土産を用意させてください。幸いに漁港が近いもので海の幸は豊富ですから」
「ほう、それはありがたいのう。ならぜひとも連絡先を教えてはくれぬか、あまり煩わせるのも気が引けるのでな」
「いえ、お気になさらずに。旅館を教えてくだされればそこに届けますから」
ふむ、相当私達に関わりを持たせたくないようじゃのう。
閃華は今まで会話で風鏡の心理をそう読み取った。
滞在予定を聞いてきたのは私達に介入させないためじゃな。おそらく私達がいる間には事を起こす気は無いのじゃろ。
それに連絡先を教えずに私達の滞在先を聞いてきたのは監視をしやすいためじゃな。私達には不慣れな土地ゆえに風鏡殿の住所を調べるには時間が足らん、それにコチラの滞在先を教えれば私達の行動を自由に観察できる。
さて、どうしたものかのう。とりあえずあまり警戒されてもやっかいじゃからな。
「私達はこの先にある旅館に滞在しておる」
閃華は旅館があるところを指差して曖昧に答えるが、それでも風鏡には昇達の滞在先が分かったらしい。
「分かりました。では、お発ちになる時には届けますので」
「そうか、ではお言葉に甘えるとしようかのう」
「はい、ぜひそうして下さい。それと常磐と竜胆にもあなた達に手を出さないようによく言って聞かせますので、どうかご滞在中は安心して羽を伸ばしてください」
「変に気を使わせて悪いのう」
「いえいえ、元はあの二人が悪いのですから、これくらいは当然で

す」
「そうか……」
「はい」
……小松。
風鏡の笑顔に閃華は記憶の底から蘇る笑顔を重ねていた。
そうか、風鏡殿の笑顔はあの時の小松と似ておるのか。……やれやれ、変な事を思い出してしまったのう。じゃが風鏡殿の笑顔があの時の小松と一緒なら……風鏡殿の目的も推測が出来というものじゃ。
それにしても……。
閃華は改めて風鏡の笑顔を見る。
やれやれ、これは困った人物と縁を持ってしまったのう。まだ推測に過ぎぬがこの事を昇に話したら確実に昇は動くじゃろうな。それに……私もあの時と同じ物を見るのはごめんじゃからのう。
さて、どうしたものかのう。
閃華は確実に迷っていた。推測とはいえ思っている事を全て昇に話せば、昇が動き出す事は確実だったからだ。つまり閃華の推測は昇を動かすだけの理由を持っている。
だがその先は閃華にとってあまり見たくない光景であり、繰り返したくない過ちでもあった。
つまり閃華の推測が正しいとすると、昇は動き出して閃華は過ちを繰り返すことは無いが見たくない光景を見ることになり、昇に話さなければ何も見ずに済む。閃華はどちらが正しいのか迷うばかりだった。
私は……未だに引きずっておるようじゃのう。いや、それは琴未と契約をした時点で分かっていたはずじゃ。じゃが、あの時の小松と同じ笑顔をする者と巡り会う事になろうとはのう。巡り合わせというのは残酷じゃのう。
それは閃華にとっては二度と繰り返したくない過ちであり、目の前にはあの時と同じ笑顔をしている人がいる。

閃華は過去の過ちを清算するような選択を迫られているのだった。

第五十話　重なる笑顔（後書き）

とうとうエレメンタルロードテナーも五十話を迎えました。だからと言う訳ではありませんが、ちょっと過去を振り返ってみました。

そして思ったことが一つ、私は……どれくらい真剣にこの作品と向き合ってきたんだろうという事です。

私としては自分で読んでつまらない物を書いてるつもりはありません。けど、今までに書いてきた物が面白いかというと正直自信を持って面白いという事が出来ません。

けどそれは決して手を抜いてるわけではありませんが、自分の技量によって限界を感じで妥協してきたところは数多くあると思います。

そういった事を含めて過去を振り返ってみると、私はどれだけこの作品と真剣に向き合ってきたかと思うわけです。

それに私はこの作品をダラダラと妥協して続けていくつもりも無いです。それにはっきりいうと、この作品は今年中には終わらないでしょう。なので、そんなことを思ったんですよね。

う～ん、途中から何を言ってるのか自分でも分からなくなってきました。まあ、要するに自分はどれだけ過去の反省を取り入れられてるかという事ですかね。

それは後悔ではなく反省。だから私は時々過去を振り返り、今の自分と見比べている訳です。そしてこのエレメという作品にちゃんとそれが出ているのかな、と思ったわけです。

さて、随分と長くなりましたから、これで。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、久しぶりにまともな後書きを書いた葵夢幻でした。

第五十一話　戸惑い

「では、私達はここで失礼させて頂きます」
風鏡は丁寧に頭を下げると常磐と竜胆の二人を連れて昇達に背を向けた。
はぁ～、よかった。せっかく海にまで来たのにやっかいな事に巻き込まれなくて。
昇はそんな事を思いながら風鏡の背を見送る。
風鏡さんもああ言ってくれた事だし、これでゆっくり羽が伸ばせるかな。
などと油断していると災難は別な方向から来るようだ。
「昇、昇！」
「うわっっと！」
昇の背中に勢い良く跳び付いたミリアがそのままダダをこね始める。
「昇、おなか空いた」
「えっ、だってさっき食べたんじゃ」
「もう夕方だよ」
「えっ！」
昇がミリアを背負ったまま海の方へ振り向くと、そこには水平線近くで赤く染まっている太陽があった。
「……もう、そんな時間なんだ」
「久しぶりの戦闘で集中してた？」
「というか、精界の中って時間が分かりずらくない。シエラの精界は真っ白だし、あの竜胆さんの精界は赤いし。そういえば二つ精界を張ったのに真っ白だったんだろ？」
「それは私の精界が内側に来てたから。精界は二つ重ねる事は出来ない」
「つまりシエラの精界が内側に来てたから中は真っ白で、竜胆さん

の精界は外側にあったってこと？」
「そう。だから外から見れば精界は赤く見える」
「だから風鏡さんは竜胆さんが精界を張ったって分かったんだ。けど、どうやって中に入ってきたんだろ？」
「精霊が精界を張るときには通常外から入れるようにしてる。その代わりに中から外にはでれない」
「なんで外から入れるようにしてるの？」
「時と場合によるけど味方の増援を受け入れる為。でも一騎打ちを望む場合は誰も入れないようにする」
「けど僕達には増援が無いはずだよね？」
「だからあの風鏡って人は私の精界を切り裂いて中に入ってきた」
「えっ、シエラは外から入れないようにしてたの？」
「もちろん。ただでさえ足場の不利があったから念には念を入れて」
「その割には随分とあっさり侵入を許したわね」
琴未、そんなシエラを怒らせるような事をわざわざ。
そんな昇の心配を余所にシエラはまったく気にせず淡々と答えた。
「それは精界が外からの攻撃に弱いから。破壊は出来ないけど切れ目ぐらいは琴未でも簡単に入れることが出来る」
「……シエラ、喧嘩売ってる？」
「私は事実をそのまま言ってるだけ」
「とりあえず殴っていい？」
「嫌」
「……」
……あれ？　いつもならここで……。
「どうしたの昇、変な顔して」
「えっ、いや、なんでもないよ琴未」
急に話を振られて慌てる昇はなんとか平静を装う。
おかしいな、なんか会話に違和感があるような。
違和感を覚える昇だが、背中にいるミリアが騒ぎ出した事により思考が中断される。

「昇、昇、そんなことよりおなか空いたよ」
「はいはい、分かったから昇から降りなさい」
「このままオンブ～」
「ダメ」
「う～、シエラの言ったとおりにやったらおなか空いたんだよ。だからこれくらい大目に見るのが普通だよ～」
「あんたね、どれくらい燃費が悪いのよ」
「精霊がそれくらいで根を上げない」
「昇～、シエラと琴未がいじめる～」
「ははっ、とりあえずここまでにして旅館に帰ろうか」
「はぁ、そうね」
「じゃあ、ミリアを降ろしてから」
「う～、う～」
唸り声を上げながら抵抗するミリアだが、空腹には勝てないのかあっさりと昇から引き剥がされる。
「それじゃあ、帰ろうか」
「そうね。閃華、行くわよ」
だが閃華はまったく反応せずに別は方向を見詰めていた。
「閃華？」
「……」
「閃華、閃華ったら！」
「……んっ、なんじゃ琴未」
「はぁ、ほら、帰るわよ」
「そうじゃな」
……あれ？
琴未を先頭に歩き出す昇達だが、昇は先程の違和感がなんなのかようやく分かった。
閃華が変だ。
思いっきり失礼な事を思う昇だが、昇がそう思うには幾つか理由がある。

さっきだって、いつもなら琴未の味方をしながら仲裁に入るのに。それにシエラと一緒に分からない事は説明してくれるのに、さっきはまったくそれが無かった。……調子が悪いってワケじゃないみたいだし、いったいどうしたんだろう。

そのことを閃華に聞いてみたい昇だが、この場で聞いても答えてくれないだろうと思い。後で二人っきりで話したほうがいいと判断したので、何も聞かずに旅館に帰る事にした。

「はぁ、海に来てどうしてこんなに疲れなきゃいけないのよ」

琴未は湯船に浸かりながらそんな愚痴をもらす。

昇と別れた女性陣は戦闘の疲れと海の塩分を落とすために浴場へと入っていた。

「琴未の所為で余計に疲れた」

「あ～、疲れてるから突っ込まなくていい」

さすがにそこまで反応が薄いと寂しいのか、シエラは複雑な顔をする。

「それより、あんた達精霊なんでしょ。なんでそこまで丁寧に髪を洗ってるわけ」

髪の短い琴未はすでに湯船に浸かっているが、髪が長い他の三人は未だに髪を洗っている。

「実体化してる精霊は人間と変わらない。だからこのままだと髪が痛む」

「なんか……変な所は人間臭いわね」

「琴未～、それは人間のセリフじゃないよ～」

「いいのよ、そんなこと。それより私には、長い髪をそのまんまにして戦闘してるシエラが信じられないわ。邪魔じゃないの？」

「慣れてるから邪魔じゃない」

「そう、それより髪を切ろうとか思わないの？」

「精霊の容姿は生まれたときから決まってる。だから髪を切っても

戻そうと思えば一瞬で戻せる」
「それに髪は女の命だよ」
「ミリア、それは古くない」
「けど昔は女性が髪を長くするのが常識だったから、精霊は未だにそれを受け継いでる」
「つまり、髪が長いのは精霊王の意思ってこと」
「そう、それに今だと気にしないけど、昔はそういうことにうるさかった。だから普通に人間社会に溶け込めるようにそういう配慮があった」
「確かに時代劇なんかでも髪が短い人って出て来ないわよね」
「その時は日本にいなかったから知らない」
「そうなんだ。というかシエラって何処で生まれたの？」
「……西洋のどっか」
「覚えてないなら覚えてないと言いなさい。閃華、そういう事は閃華が詳しいでしょ」
「……」
「閃華、閃華ったら」
「んっ、どうしたんじゃ琴未」
「閃華……私達の話し聞いてた？」
「すまん、ちょっと考え事をしててな」
「ふ～ん」
「悪いが先に上がらせてもらうぞ」
「あっ、それなら閃華、温泉の方を見てきてくれる」
「何故？」
「おばさんがいるかもしれないから呼んで来て」
「うむ、分かった」
それだけ言うと閃華は浴場を後にして残された三人は閃華の背を見送った。
「ねえ、閃華少し変じゃない」
「……何かを企んでるに一票」

「同じく二票～」
「あんたらね、いつも閃華をどんな目で見てるのよ。……ついでに三票」
……カポーンという音が聞こえそうな空気の中で、髪を洗い終えたシエラとミリアは黙って湯船に浸かるのだった。

風呂から上がったシエラ達を待っていたものは、女性陣の部屋に用意された豪華な食事だ。
部屋にはすでに昇の姿があり、テレビを見ながらくつろいでいた。
「昇、昇、凄いよ。海老とかカニとかあるよ」
「なんか知らないけど、僕が来た時にはすでに用意されてた」
「旅館をここに決めた理由に海の幸が安いこともある」
「つまり、この豪華な食事は母さんの意思？」
「おばさん、結構楽しみにしてたみたいよ」
「へぇ～……」
まあ、いいけど。
昇は戻ってきたシエラ達の中に閃華がいないことに気付いた。
「あれ、そういえば閃華は？」
「閃華ならおばさんを呼びに温泉の方に行ってもらってるわ」
「やっぱり母さん温泉に行ってるんだ」
「私達が使ったお風呂にはいなかったからそうだと思う」
「へぇ～」
母さん、温泉でも飲んでないだろうな。
昇がそんな疑念を抱いていると、部屋の戸が開き閃華と彩香が入ってきた。
「ただいま。おっ、もう用意されてるのね」
「おかえりなさい。閃華もご苦労様」
「うむ」
彩香は用意されている食事を一通り眺めると昇の首を掴んでその

まま立たせる。
「そういえば昇、あれ持ってきた、あれ？」
「いや、その前に何処を掴んでるの」
「首」
いや、それはそうだけど。
「まあいいや、とりあえず来なさい」
「えっ、えっ？」
彩香は昇の首を絞め直すとそのまま引きずって部屋を後にする。
取り残されたシエラ達は呆然とそれを見送るだけだった。
そして彩香は昇の部屋に入ると、そこでやっと昇を解放した。
「ててっ、というか母さん、あれって何？」
だが彩香はすぐに答えずに柱に寄り掛かって腕組をする。そして昇の目を真っ直ぐ見据えながら口を開いた。
「気付いてるんでしょ、閃華ちゃんのこと」
「……母さん」
昇は首を縦に振る。
「やっぱりね、あんな閃華ちゃんも珍しいからね。それで、何があったの？」
「う～ん、僕にもよく分からないけど、だから後で聞こうとしてたんだ」
「そう、ならいいわ」
「母さんは、いつ閃華の事に気付いたの？」
「迎えに来てもらった時。なんか、いつもの閃華ちゃんと違ってたのよね。普段の雰囲気が無いというか。あれは明に変だったわ」
「そこまで言うんだ」
「あそこまで思い悩んでる事を表に出してる閃華ちゃんが珍しいだけよ。それで昇、何があったかは話してくれないんでしょ」
「……うん」
「はっきりと言いやがったな、ドラ息子」
彩香は大きく溜息を付くと、昇の肩に手を掛ける。

「まあいいわ。昇、昇は皆を引っ張って行かないといけないんでしょ。なら、閃華ちゃんが今目の前にしている事も一緒に見ていかないとね」
「うん、分かってる」
「ならいいわ。戻ってご飯にしましょう」
昇に背を向けて出て行こうとしてる彩香に、昇は呟く。
「ありがとう、母さん」
そして彩香の足がぴたりと止まると、急に反転して左足を思いっきり踏み込み彩香の拳が昇の頭にヒットする。
昇は後ろに倒れると殴られた所を抑えながら悶絶する。
「わざわざ母親に礼なんて言わない！」
それだけ言い残して彩香はさっさと部屋を後にする。
というか、なんで僕は殴られたの？
頭をさすりながらワケが分からないという顔をして立ち上がる昇は、しかたなく彩香の後を追って部屋を出る。
まあ、昇には一生分からないだろう。それが彩香の照れ隠しだという事に。

それからいつもの様に、いや、いつも以上に騒がしい夕食となった。
なにしろ目の前には普段では目に出来ない新鮮は海の幸が、これでもかというほど並んでいるのだからミリアを始めとして騒がしくなるのもしょうがない。
そして夕食が終わると彩香が急に。
「温泉に入って、卓球でもやりましょう」
と言い出したので一気に盛り上がるシエラ達。ちなみに卓球の勝敗に昇が賭けられたのは今更言う事でもないだろう。
そして部屋を後にするシエラ達と一緒に昇も自分の部屋に戻る。
さーて、どうしようかな？

部屋に戻った昇はどう閃華に切り出そうか悩んでいた。
なにしろ閃華だからな、直接的に聞いて素直に答えてくれないだろうな。
その後もいろいろと思考錯誤していると、急に部屋の戸が開いて誰かが入ってきた。
「昇、おるか？」
「閃華……」
「……やはり、おったか」
閃華は複雑そうな顔をしてからテーブルを挟んで昇の向かいに座る。
「どうしたの閃華？」
突然閃華が来た事に昇は内心動揺していたが、なるべく平静を装った。
だが閃華には昇の動揺が手に取るように分かるらしく、軽く笑いながら返すだけだった。
「なに、これ以上心配をかけてもあれかと思ってのう」
「えっ、心配って？」
「別に隠さんでも良い。奥方も気付いてるようじゃからな、昇も気付いておるのじゃろ」
「……」
まさか閃華の方から来るなんて……。
昇と彩香が閃華の異変に気付いていたように、閃華も自分が昇や彩香に心配をかけている事を気付いていた。
ははっ、やっぱり閃華には敵わないな。
それを察して昇の所に来たのだから、昇は改めて閃華の行動が自分より先に行っていることに感心した。
「それで閃華、全部話してくれる」
「ふむ、正直未だに悩んでおるじゃがのう。奥方にも分かってしまうぐらいじゃから、しかたないのう」
「それじゃあ風鏡さんについてどれくらい知ってるのか話してくれ

るよね」
　閃華は一瞬だけ驚いた顔になるが、すぐに昇に笑いかける。
「そこまで気付いておったか」
「うん、だって風鏡さんと別れてからだから、閃華が何かに悩んでいるのは」
「くっくっくっ、敵わんのう」
　閃華は自分の顔を隠すように髪を掻き揚げると立ち上がり、昇の隣に移動すると押し倒して昇の上に馬乗りになる。
「って、えっ、えっ、閃華？」
　そして閃華はゆっくりと昇の首に手を掛ける。
「閃華？」
「……のう、昇。昇は……誰かを殺したいほど人を怨んだ事はあるか？」
「えっ？」
　閃華、泣いてる？
　閃華の顔はよく見えないが昇には閃華が泣いてるように見えた。
　それは閃華が昇に始めて見せる素顔。過去の傷が痛み出し、必死に堪えてるかのように手が微かに震える。
　そして閃華の手が昇の首を滑る。

第五十一話　戸惑い（後書き）

イーン、フーールー、エーーーンーザーーー！！！　にかかってしまいました。

というか未だに頭がボーッっとしてます。そんな訳でかなり更新期間が開いてしまいました。というか五十話の最後と後書きなんか何を書いてるのか分からないくらいです。

という事は五十話をアップした時からインフルエンザにかかっていたということになります。……そんな訳で後書きがクデクデ、これを書いてるときも結構来てたりもします。

まあ、後は本文に影響が出てなければいいのですが、なにしろ頭が真っ白になって、一度書き直したぐらいですから。

ああっ、これを書いてると頭が真っ白になって行きます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして最近では誰もしてくれない投票もお待ちしております。

以上、もう後書きに何を書いてるのか分からなくなった葵夢幻でした。

第五十二話　民主主義は絶対です

昇の上にまたがった閃華の髪が垂れて昇の頬を撫でる。
だが昇はそんな事を気にすることなく閃華の瞳を見つめる。
なんだろう、閃華の目、すごく悲しいよ。
悲しみ、悔しさ、後悔、そんな事を感じさせる瞳を閃華はしていた。
「のう昇、昇は人を殺したと思うほど人を憎んだ事があるか？」
「閃華？」
「私は止められなかった。いや、それどころか気付いてもやれなかった」
「……その事を後悔してる？」
「ふふっ、そうじゃのう、その通りかもしれんのう」
「そして風鏡さんからも同じ物を感じた」
「そうじゃ、あれは、あの笑みは、復讐を隠しておる笑みじゃ」
「復讐！」
まさか、そんな、あの風鏡さんがそんな事を企んでたなんて。
にわかに信じがたいが、閃華が迷いに迷って告げてきた真実だから昇は閃華の言葉を否定できなかった。
「それで閃華、僕に一体どうしろと？」
「分からぬ、私にも、どうして良いのか分からぬのじゃ」
閃華は昇の首に手を回して体を昇に預ける。
甘い匂いと暖かい温もりを感じながらも、昇はどうしていいのか分からなかった。
「だから昇、決めてくれ。私は……一体どうすればよい」
閃華、泣いてる？
昇の耳に微かに届く閃華の嗚咽。それと同時に閃華は思いっきり昇に抱きついてきた。
昇は閃華の髪を優しく撫でるとそのまま頭を優しく抱き寄せる。

「分かったよ閃華。僕に何が出来るか分からないけど、閃華をこれ以上泣かせる事はさせないから」

今の僕にはそう言う事だけが精一杯かな。

ほとんど何も出来ない自分に昇は悔しさを感じるが、耳元では閃華が軽く笑っている声が聞こえてきた。

「どうしたの閃華？」

「いや、なに、昇は充分女たらしの素質を秘めておるなと思っただけじゃ」

「そんなことは無いと思うけど、というかいきなり何を言い出すの閃華」

「くっくっくっ、前から聞きたかったんじゃが、それは演技で聞いておるのか、それとも素か？」

「いや、閃華、意味が分からないんだけど」

「どうやら素のようじゃな。なら」

閃華は昇に顔を見られないように、昇の胸まで移動するとそのまま顔を昇の胸に擦り付ける。

「今はそれに甘えさせてもらうとしようかのう」

「閃華……」

胸の辺りから聞こえてくる閃華の咽び声、昇は閃華を包み込むように抱きしめる。

今の僕にはこうする事しかできないけど、ここで終わるつもりは無い。

それからしばらく昇は閃華を優しく包み込んでいた。

横になっている所為か、昇が少しウトウトとし始めた時だった。

急に閃華が昇から離れると外の気配を窺うように一点を見詰めていた。

「閃華？」

「……さて、私はそろそろ休ませてもらうかのう」

「どうしたの？」
「昇、修羅場が見たいならもう少しここに居るが」
「……シエラ達が帰ってきたんだね」
「くっくっくっ、さすがにそれくらいは察しが付くようになってきたようじゃのう」
「ははっ、もういい加減にそれくらい覚えるよ」
「それでどうする昇、修羅場に突入するか？」
「謹んでご遠慮申し上げます」
「そうじゃな、では私は休ませてもらうぞ」
そう言って閃華が部屋を出て行こうとしたが、急に足が止まる。
「閃華？」
「昇、風鏡殿には気を許すな」
「えっ？」
「復讐を誓った者は、周りが見えなくなるどころか利用までする。じゃから昇、風鏡殿には常に警戒をしておけ」
「……分かったよ、閃華」
「……ではな」
今度こそ部屋を後にする閃華。一人部屋に残された昇は閃華の言葉が意味する物を考えてみる。
風鏡さんは、復讐の為に僕達を利用するって事なのかな。あの風鏡さんがそんな事を企んでるとは信じられないけど、閃華があそこまで自分を傷つけて伝えたことなんだから、そうなのかもしれない。
それに閃華が、あの閃華が僕に頼ってきたぐらいだから、たぶん閃華もどうしていいか分からないんだ。……なら、どうすればいいんだ。僕は、どうすればいい。
風鏡さんの復讐を止めればいいのかな。いや、それは風鏡さんの問題だし、僕が出て行っても変わらないか。けど、閃華はたぶん、風鏡さんが復讐するところを見たくないんじゃないかな。閃華の過去に何があったかは分からないけど、たぶん、風鏡さんの今は閃華の過去に繋がってる。

そうか、僕は風鏡さんと閃華の繋がりを断ち切らないといけないんだ。

でも、どうやって？

そもそも閃華の問題は閃華自身が納得しないと終わらないし、風鏡さんの問題も風鏡さん自身の手で終わらせないといけない。……困ったな、この二つの問題は繋がっているようで繋がってない。

僕に出来る事は閃華と風鏡さん、二人の問題を解決する手助けしかないか。

昇は一応結論を出したが、新たな問題に直面する。

……というか、風鏡さんの復讐したい相手って誰？　まさか一般の人じゃないよね。いや、それは無いか。もしそうだとしたら精霊と契約する意味が無い。ということは、僕以外の契約者、または精霊と考えるのが妥当か。

はぁ、どっちにしても情報が少ないか。

昇は考えに行き詰っていると、外から騒がしい聞き覚えのある声が聞こえてきた。

シエラ達帰ってきたのかな。そうだ、皆にも伝えておかないと。

昇はシエラ達を呼びに部屋の外へと向かった。

「それで昇、話って何？」

昇の部屋に集まったシエラとミリアと琴未に昇は先程閃華が話した事を伝える。もちろん、閃華が昇に抱きついてきた事は省いて。

「というワケなんだけど」

「ちょっと待って昇、それって閃華が勝手に思ってることで、何一つ確証が無いんじゃない」

「うっ、でも、あの閃華が僕に話してきてくれたことだし」

「どちらにしても閃華が迷ってる事は確か」

「まあ、そうかもね」

「じゃあ、風鏡の復讐相手を私達で倒しちゃうのは？」

「ミリア、これはそういう簡単な問題じゃないよ」
「それに相手が誰だか分からないじゃない」
「単純」
「昇、シエラと琴未がいじめる～」
『だからそれをやめなさい』
昇に飛び付こうとしたミリアだが、シエラと琴未の連携攻撃を前にしてあっけなく撃沈される。
というかミリア、少しは真剣に考えてよ。……無理かな？
結局、結論が出ずに行き詰って行く中でシエラが口を開く。
「昇、今のままだといくら考えても結論は出ない」
「そうだけど、このままにも出来ないし」
「私達には決定的に欠けている物がある」
「なにもったいぶってるのよ、シエラ」
「……情報」
「そう、今の私達には情報が欠けてる。つまり、何も知らないのと一緒」
「なら、やる事は決まったわね」
「えっ、えっ、何かやるの？」
一人取り残されているミリアが昇達の顔を順に見回す。確実に何をやるのか分かっていないようだ。
琴未は溜息を付くとミリアをこっちに向かせる。
「あのね、私達には情報が無いのよ。だから、無い情報を集めるのよ。つまり、情報収集よ、分かった？」
「琴未、情報収集なんて出来たんだ」
「うっ、それは……」
何にも考えてなかったんだね、琴未。でも、どうしようか……。
結局行き詰るのだが、またシエラが口を開く。
「大丈夫、私には情報収集のエキスパートに心当たりがある」
「えっ、本当？」
「うん、それに琴未も心当たりがあるはず」

「えっ、誰よ、それ」
「与凪」
……いや、与凪さん、ここに居ないんだけど。
「あのねシエラ、与凪は今ここに居ないんだけど」
「居なければ呼べばいい」
「連絡先は分かるの？」
「もちろん、先生も困った事があったらいつでも連絡をくれと言ってくれた」
「手回しがいいわね」
そうですね。
「でも、先生にも都合があるんだし、来てくれるとは限らないんじゃない」
「大丈夫、与凪達は絶対に来る」
「……その心は？」
「森尾先生も男だから」
「いや、シエラ、意味分かんないわよ」
「そういう訳だからいつでも与凪と連絡が取れるけど、どうする昇？」
昇は少し考えてから結論を伝えた。
「確かに与凪さんが居てくれれば心強いからね。でも今日は遅いから明日朝一で連絡しよう」
「でも昇、与凪がこれなかった時は」
「その時は僕達で何とか情報を集めよう」
「え～、めんどくさそう」
「ミリア、お願いだからやる前に気を挫かないで」
「だって～」
その後も駄々をこねるミリアだが、それを無視してシエラが昇に告げる。
「何シエラ？」
「私達でも独自策を打ってみるのもいいかもしれない」

「なによ、独自策って？」
「もし閃華の仮説と昇の考えが正しければ、私達の他に契約者か精霊がいる。それを釣り上げるのもいいかもしれない」
「どうやってよ？」
琴未の問いかけにシエラは昇を指差して一言。
「エサ」
昇は自分を指差して固まる。
……ええええぇ――――っ！
「し、シエラ、僕がエサってなに！」
「そうよ、昇に何をやらせる気よ！」
「誰も昇一人にやれとは言ってない。昇を使って相手を誘い出すだけ」
どっちにしろ僕は使われるんですね。
「それに誘い出すなんて、どうすればいいのよ？」
「それは簡単、目立つところで精界を張ってその中で待ってれば相手の目に止まる。後は相手が乗ってくるかどうか」
「もし相手が乗ってこなければどうするの？」
「それはそれで構わない。そもそも情報が無い、だから釣れればラッキー」
「要するに運任せってこと？」
「うまく相手が乗ってくれれば情報収集の手間が省ける。それに新しい情報が出てくるかもしれない」
「まあ、確かにそうかもね」
「そしてここからが重要」
急に真剣な眼差しになるシエラにつられて、昇達も真剣にシエラの言葉に耳を傾ける。
「あまり大人数が昇に付いてると警戒される可能性がある。だから昇と一緒にいるのは一人がいい」
……あの、シエラさん、それのなにが重要なんでしょうか？
シエラの言葉に重要性が見つからなかった昇だが、ミリアと琴未

はそうではないみたいだ。
「確かに、それは重要だね～」
「そうね、あまり大人数が付いてると警戒されるよね」
「それに情報収集にも人数を裂いたほうがいい。だから昇の護衛以外は情報収集」
「そうね」
「いいよ～」
あの～、なんか三人の間に火花が散っているように見えるのは、僕の気のせいでしょうか。気のせいですよね。気のせいだと言ってください。
誰に言っているのか分からないが、昇が目に見えない人に問いかけている間にシエラ達は勝手に話を進める。
「って、どうやって昇の護衛を決めるわけ」
「じゃんけん！」
『却下』
声を揃えてミリアの提案を却下するシエラと琴未。そして今度は琴未がある提案を持ち掛ける。
「ここは公平にくじを作って昇に引いて貰うのはどう？」
「それでいいよ～」
「構わない」
「じゃあくじを作るわよ」
琴未はテーブルの上にあった菓子包みの紙を手に取ると、部屋に備え付けてある電話のところに行き、そこにあったボールペンでくじを作る。
そして中が見えないように折られた三つの紙を適当な器に移すと昇の元へ持っていく。
「じゃあ、昇」
「ちょっと待って」
「なによ？」
シエラが待ったをかけると、すぐさま琴未が作った三つのくじを

手に取る。
　ミリアがシエラの肩口から覗いてくる中で、シエラは三つのくじを全て開いてみると、そこには全て琴未と書いてあった。
「やっぱり」
「琴未ずるい～」
「ちっ！　まさか見抜かれるとは思わなかったわ」
　というか、三人ともなにをやってるの？
　現実に戻って来た昇もさすがに呆れてるようだ。
　そんな中でシエラが紙を持って立ち上がる。
「琴未じゃ信用できないから私が作る」
「私はシエラの方が信頼できないんだけど」
「同じく～」
「じゃあ、皆が見ている前で作れば問題ない？」
「そうね、ぜひともそうして」
「分かった。ミリア、ボールペン取って」
「はい」
「ありがとう」
　こうしてシエラは琴未とミリアの監視を受けながらくじを作った。
　そうして出来上がったくじにはちゃんと三人の名前が書かれており、それを琴未とミリアに確認させてからシエラはくじを折りたたむ。
「これで問題ない」
「……そうね」
「うん」
　琴未はまだ何かを疑っているようだが、何も不審な点が無いために文句のつけようが無かった。
「じゃあ昇、くじを引いて」
「昇、昇、ちゃんと私を引いてね」
　いや、ミリア、これくじだから誰を引くかなんて分からないよ。
「なに行ってるのよ、昇はちゃんと私を引くわよ」
　琴未、前から聞きたかったんだけど、その根拠の無い自信は何処

から来るの？
「ふっ」
シエラさん、その笑みが一番怖いです。
昇は溜息を付いた後、しかたなく、くじの入った容器に手を伸ばす。
……あれ？　くじが勝手に飛び込んできた？。
そしてシエラは素早くくじが二つ入った容器をテーブルの上に戻した。
「じゃあ昇、くじを開いて」
シエラに言われて昇は手の中にあるくじを開いて中に書いてある字を読む。
「シエラ」
思いっきり落胆する琴未とミリア。だが琴未は何か納得がいかないのか、すぐにシエラに突っ掛かる。
「シエラ！　また何かやったでしょ！」
「じゃあ琴未、私が何をやったか説明してみて」
「ぐっ、それは……」
「ふっ、説明できなければ私が何をやったかは立証不可能。逆にバレなければイカサマはイカサマにあらず」
「ってシエラ！　やっぱり何かやったのね！」
「だから琴未、証明してみて」
「うっ、……昇！　昇ならシエラのイカサマを説明できるでしょ」
「無理」
「はっきりと言わないでよ！」
「いや、だって、シエラだし」
その言葉は予想以上に説得力があった様で、琴未は思いっきり落ち込む。
「はぁ～、こんな時に閃華がいてくれたら」
琴未、それを言っちゃうんだ。
それは昇達があえて口にしなかった事。三人でもいつもの様に騒

がしくはあったのだが、どこか味気無さを感じていたのは琴未だけではない。その場にいる全員がそれを感じていたのだが、口に出そうとはしなかった。

急に静寂が訪れる部屋に琴未は耐えられなかったのか、大声を上げる。

「ああっ、もう！　分かったわよ、こうなったら情報収集でも何でもやってやろうじゃない！」

「琴未、がんばって」

「……シエラに言われると、殴りたい衝動が湧き上がってくるのは何でだろ？」

「それは琴未がひねくれてるから」

「やっぱり殴るわ」

「琴未やっちゃえ」

『あおるな！』

ミリアの発言にシエラと琴未は声を揃えて突っ込む。

「あっ！」

その時、急に昇が声を上げた。

「どうしたのよ、昇？」

「そういえば、与凪さんが来てくれても情報収集はするの？」

『……』

……あっ、あれ、この静寂はなに？

そして琴未がその静寂を破る。

「じゃあ与凪が来た時は、昇の護衛を交代でやるってことで」

「異議なし」

「意義あり！」

『却下！』

珍しく琴未とミリアが声を揃えてシエラの意見を却下した。

「賛成二、反対一、という結果が出たので民主主義に乗っ取りこの案は受理されました」

「誰が受理するの？」

「そんなことはどうでもいいの！　とにかく、与凪が来た時には昇の護衛は交代でやる事！　それともシエラ、民主主義に反論する」
「うっ！」
さすがに民主主義を持ち出されてはどうする事も出来ないのか、しかたなく頷くシエラに琴未とミリアはハイタッチで勝利を喜ぶ。
……なんか、また騒がしくなってきたな。
だがそれでも、昇は何か足りない感覚を覚える。そしてそれは昇だけではないだろう。

第五十二話　民主主義は絶対です（後書き）

今回の本文頭で閃華フラグがたった事を確証して、閃華を中心に話を進めようとすると、実は罠が待っており、閃華フラグが消滅する。……ということが、あったり無かったり。

皆、ちゃんと両方見られるように、選択肢ではこまめにセーブしよう、ちゃんと石を投げてるかい。と、某高校生には見えないロリキャラが言ってました。なので皆さん、閃華エンドが見たかったらこまめにセーブしよう。

……さて、戯言はここまでにして、そろそろ後書きをちゃんと書こうと思います。

まあ、書くことなんてほとんど無いんだけどね。というか、冒頭の戯言でネタが尽きた。

いや、ほら、なんか五十二話はそんな感じがするじゃない、本文の頭だけ読むと。……私の気のせい？　違うよね、間違ってないよね。私は道を踏み外してないよね！！！

はいそこの方、すでに踏み外してると突っ込まないように。そんな事を言われたら、もう生きて行けないじゃないですか！

……さて、それじゃあ、今回はこの辺で終わっときますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票をお待ちしております。

以上、インフルエンザが治り始めて久しぶりに絶好調な葵夢幻でした。

第五十三話　目覚ましは爆発で

海に着てから慌しい初日を過ごした昇はぐっすりと休んでいたのだが、まさか翌朝からこんな目に遭うとは思って無かっただろう。

それは午前七時ちょっと前だった。突然昇が寝ていた部屋が爆発起こすのと同時に爆発の勢いが部屋の窓を吹き飛ばして、爆煙が部屋中に立ち込める。

「げほっ、げほっ、なんだ一体！」

ワケも分からず部屋の片隅に飛ばされた昇は辺りを見回すと、まるで爆弾が室内で爆発したように部屋の中はボロボロになっており。世界は白く染まっていた。

あれ？　もしかして、いつの間にか精界の中にいる？

どうやら昇が寝ている間に精界が張られたらしい。昇は精界を張るような事態になったのかと思って警戒するが、騒がしい声が昇の警戒心を和らげる。

「げほっ、シエラ！　あんたね、いきなりなにするのよ！」

「琴未が抜け駆けしようとしたから攻撃しただけ」

「それにしてもこれはやりすぎでしょ！」

「大丈夫、ちゃんと精界を張った」

「そういう問題じゃない！」

「シエラ？　琴未？」

昇の呼びかけにシエラと琴未が部屋に入ってきた。

「おはよう昇」

「おはよう」

「うん、おはよう。それで、これは一体どうなってるの？」

「どうもこうも無いわよ！　シエラがいきなり攻撃してきたのよ！」

「琴未が抜け駆けするから」

「私が悪いみたいに言うな！」

「じゃあなんで琴未はこっそりと昇の部屋に入ろうとしたの？」

「そんなの決まってるじゃない。昇が朝一で与凪に連絡する言ったから起こしに来たのよ」
「えっと、それがなんでこんな事に？」
「シエラに聞いてよ！」
昇はシエラに目線を移すと、シエラは悪びれた様子も無く、当たり前のように答える。
「琴未がこっそり部屋を抜け出したから、気付かれないように後を付けて様子を見てたら昇の部屋に入ろうとした。だから精界を張って一気に攻撃！」
親指をグッと立てて満足げな顔をしているシエラを見て、昇と琴未は溜息を付いた。
いや、シエラさん、さすがにこれはやりすぎだと思うけど。
「はぁ、とりあえず精界を解こうか。シエラ」
「分かった」
シエラが意識を集中させると世界にヒビが入り、一気に崩れ去る。
そして爆発が起きる前と寸分変わらない部屋に戻った。
昇は部屋が元通りになったことに一安心すると、気になった事を尋ねる。
「そういえばミリアは？」
「ああっ、ミリアならまだ寝てるわよ」
ミリアは相変わらずだね。というか、こんなに朝早くからは行動できないか。
妙に納得する昇を余所にシエラは自らの携帯電話を取り出した。
「それじゃあ昇、与凪に連絡する？」
「そうだね、この騒ぎで目が覚めちゃったからね。でも、こんなに朝早くに連絡して大丈夫かな？」
「こんな朝早くだから簡単に攻め落とせる」
「シエラ、なに物騒な事を言ってるのよ」
同感です。
だがシエラは呆れた目線を琴未に送る。

「私が言ってるのは心理戦、だから物騒じゃない」
いや、シエラさん、そう言われても意味が分からないです。
「それで昇、どうする？」
昇はちょっと考えると、すぐに結論を出した。
「そうだね。とりあえず連絡してみようか。出なかったらまた後で電話すればいいし」
「分かった」
シエラは携帯の発信ボタンを押して顔の横に当てる。
少しの間無言で待っていたシエラが電話に向かって喋り始める。
どうやら与凪が出たようだ。そうしてシエラが状況を説明すると突然電話が切れたようで、顔の横から電話を離した。
「与凪なんだって？」
電話の内容を確認する琴未。シエラは簡単に伝えるだけだった。
「専用回線で改めて連絡するだって」
「専用回線って何？」
昇がその事を聞くとシエラは呆れた目線を昇に向けた。
えっ、なに、なんでそんな目で見られるの？
ワケが分からないまま昇は琴未に目線を向けるが、琴未も分からないと首を横に振った。どうやら琴未も分からないようだ。そんな中でシエラは口を開く。
「昇、この前のロードキャッスルの一件、覚えてる？」
「うん、覚えてるけど」
「あの時使った通信手段。あれは与凪が用意した私達と連絡を取るための専用回線」
「じゃあ、あのモニターを使った連絡方法の事？」
「そう。与凪はバックアップが本領だから、いつでもその回線を開けるようにしていたらしい」
「そうなんだ」
そうこうしているうちに昇達の目の前に突然モニターが現れて、そこに与凪の姿を映し出した。

思わずモニターに食い付く昇。それもしかたないだろう。なにしろ映し出された与凪の姿はワイシャツ一枚で、しっかりと胸の谷間が見えているのだから。

一点に集中される昇の視線。それは普通の男の子なら仕方の無い事なのだが、昇の隣にはそれを許さぬ者が二人。

シエラと琴未の一撃が同時に昇の後頭部を捉えて、昇は畳に突っ伏す事になった。

頭を擦りながら起き上がってくる昇を無視してシエラは与凪と話を始める。

「ごめん、こんな朝早くなら」

「はぁ～、私なら構いませんけど、なんかそっちも変な事に巻き込まれたみたいですね」

まだ眠い目を擦りながら与凪は答える。

「それで与凪、事態はさっき話したとおり、こっちに来られる？」

「う～ん、私は構わないんだけど亮ちゃんがなんて言うかな？」

「それと来る時はちゃんと水着を持ってきて、全部終わったら海で遊んで帰るから」

「いや、シエラさん、いきなりそんなこと言われても行けるかどうか」

「大丈夫、行こう！」

突然モニターに現れた森尾がそんなことを言った。

というか先生、何でそんなに意気込んでるんですか？

昇がそんな疑問を抱いても不思議は無いほど、森尾はモニターに身を乗り出さんとばかりにそう言ったからだ。

そんな森尾にシエラは確認する。

「じゃあ先生、来てくれるんですね」

「もちろんだともシエラ君。大事な教え子の頼みだ、ここで行かないでどうする。なあ、よっちゃん！」

「いや、いきなり言われても……」

「それに海だ、海はいいな～」

そのままうきうきとしながらモニターの外へ移動する森尾。そこまであからさまな態度を取れば森尾の狙いも察しが付く
（水着目当てか！）
昇と琴未と与凪は同時に心の中で森尾に突っ込む。
というか先生、与凪さんの水着姿を目当てに来るんですか。……もしかしてシエラ、こうなる事を計算してた。
疑念の眼差しをシエラに送ると、シエラは満足そうに頷いた。
やっぱりか！
そして与凪も呆れたように溜息を付くと昇達に目線を戻した。
「亮ちゃんがもの凄く乗り気みたいだし、そっちに行くことが出来るみたいよ」
「分かった。待ってる」
「……ところでシエラさん」
「なに？」
「今朝早く亮ちゃんに電話があったみたいなんだけど、もしかしてシエラさんが？」
「さあ、私には何の事だか」
……シエラ、すでにそこまで手回ししてたんだ。なるほど、確かに森尾先生を落とせば与凪さんも従うざる得ないよね。
与凪は呆れたように溜息を付く。
「ここまで手回しされたのなら行きますけど、わざわざそこまでしなくても」
どうやら与凪にもシエラが手回しした事に気付いているようだ。
「念には念を入れただけ」
「まあ亮ちゃんがいいなら、私は構いませんけど。事態はそんなに悪いんですか？」
う～ん、どうなんだろ。僕もよく分かってないんだよね。
それは琴未も同じようで二人が言葉に詰まっていると、代わりにシエラが口を開く。
「とりあえず閃華がまったく使えなくなった。だから閃華の代わり

に補佐をしてくれるのが欲しい」
「シエラ！　それは言い過ぎなんじゃない！」
「けど事実、琴未も今の閃華を見て突然の事態に対処できると思う」
「そ、それは……」
言葉に詰まる琴未を見て与凪は確信を得る。
「それにしても珍しいですね。あの閃華さんがそこまで思い悩むなんて、一体何があったのかしら？」
「出来れば与凪、それも調べといて」
「簡単に言ってくれますね。相手はあの閃華さんですよ、そう簡単に分かるとは思いませんが」
「大丈夫、いざという時には琴未がいる」
シエラは琴未の肩に手を置いて強調するが、琴未はワケが分からないとばかりにシエラの手を払いのけた。
「ってシエラ、なんで私なのよ？」
「琴未は閃華と契約を交わした人間。だから閃華の事は一番分かってると思う」
「そう言われても分からないものは分からないわよ」
「なら琴未は閃華をこのままにしておくの？」
「うっ、それは……」
「閃華が琴未を契約者に選んだのには必ず理由があるはず。だから一番大事なところで閃華の力になれるのは琴未しかいない」
「……そう、なのかな？」
「大丈夫、自信を持って。その間に私は昇との一時を大事にするから」
「って、それが目的かい！」
「当たり前」
「はぁ、シエラの言葉に懐柔されそうになった自分が悔しいわ」
「けど琴未、シエラの言った事は間違いじゃないと思う」
「どういう意味よ、昇？」
「たぶん、今一番閃華の力になれるのは琴未だと思う。それは閃華

が風鏡さんの中に何かを見つけたように、琴未の中にも何かを見つけたからだと思う」

「そう言われても私には心当たりなんて無いわよ」

「別に特別な事はしなくていいと思うよ。琴未は琴未らしくしていればそれが一番いいんじゃないかな」

「昇……はぁ、やっぱり敵わないな」

「えっ、何が？」

「別に、なんでもないわよ」

そのままハテナを浮かべる昇。まあ昇には琴未の心情は分からないだろう。

なんだかんだ言っても琴未は閃華と居る時間が一番多かった。だからこんな事になって閃華を一番心配してるのは琴未だ。だから琴未は自分と閃華の関係をよく分かっている昇の言葉が嬉しかった。

ちなみに、シエラの言葉は琴未には届かなかったらしい。まあ、例え届いたとしてもシエラは喜ばないだろう。ある意味ではひねくれてるシエラだった。

そして再びモニターに森尾が現れる。

「じゃあ滝下、準備できたからこれからそっちに向かうぞ」

「って亮ちゃん！　私はまだ準備できてないわよ！」

「なら早く準備しないと、滝下達を待たせるのもあれだろ」

というか先生、そこまで意気込まなくても。

与凪はモニターから森尾をどかす。

「はぁ、そういう事みたいだから、今日中にそっちに着くと思うわ」

「そうしてくれるとありがたい」

「じゃあ準備するから切るわね」

「分かった」

「与凪、ありがとうね」

「まあ別に構わないわよ」

そう言って与凪は笑顔を浮かべると回線を切ってモニターも消えた。

再び三人になって静かになる室内。昇はシエラに視線を向ける。
「というかシエラ、なんか凄く手回しが良かったね」
シエラは昇と目線を合わさずに明後日の方向を向きながら答える。
「昨日昇の話を聞いて私なりに考えて結論を出した。現状では閃華を参加させると逆効果になる。だから今は閃華の悩みを解決するのが最優先。そのために最善な手段を取っただけ」
「へぇ～」
「なに？」
妙にニヤ付きながらシエラの言葉に感心する昇に、シエラは疑念の眼差しを送る。
「別に、なんでもない」
「なんでもないという感じがしない」
変に突っ掛かってくるシエラ。昇にはそのシエラの行為が照れ隠しだとちゃんと分かっていた。
なんだかんだ言ってもシエラはちゃんと皆の事を考えてくれてるんだな。まあシエラは否定するかもしれないけど、それでも嬉しいかな。
昇にも察しが付くぐらいだ、当然琴未もそれぐらい分かっていた。だから琴未はシエラに貸しを作ったみたいで、素直にシエラの気持ちを喜ぶ気にはなれなかった。
というかいつも喧嘩してる二人だから素直になれないのだろう。
琴未が複雑な表情でシエラを見ていると、部屋の戸が開いて思いっきり眠そうなミリアを彩香が引っ張って来た。
「って母さん、どうしたの？」
「んっ、朝起きたらシエラちゃんと琴未ちゃんがいないでしょ。だから昇の部屋かなと思ってミリアちゃんを連れてきたの」
「閃華は？」
「閃華ちゃんはなんだかうなされてるみたいだったわね」
「えっ！」
閃華がうなされてる！

全員予想もしなかった事だけに驚きは大きかったようだ。
というか母さん、うなされてる閃華を放っておいて来たの？
昇がそんな事を思いながら彩香を見ていると、急に彩香の足が昇の顔面にヒットする。
「失礼ね、閃華ちゃんを起こすのも良くないと思ったから、こっそりと部屋を出てきたんじゃない」
心読まれた！　というか母さん、いきなり蹴るのはやめようよ。
鼻を擦りながらそんな事を思っていると、更に彩香が告げる。
「それから、朝食はこっちの部屋に運んでもらうから」
「えっ、なんで？」
「閃華ちゃんを起こすのもあれでしょ」
いや、まあ、そうかもしれないけど、いいのかな閃華を放っておいたままで。
だがそんなことに関係なく。彩香は部屋の外に待っている仲居さんに声を掛けて、朝食を部屋の中へ運んでもらう。
そうしていつもの朝が始まるのだが、そのころ閃華は夢の中で炎に包まれていた。

第五十三話　目覚ましは爆発で（後書き）

今更ながら、長かった。はいそこの方、いきなりなに言ってるんだと思わないように。もうこれ私の中ではパターンの一つに入ってますから、今更文句を言われても困ります。

そんな訳で次回からやっと閃華の過去に触れたいと思います。やっとだよ、やっと。なんかここまで来るのに長かったな。

それではちょっと予告でも入れたいと思います。炎に包まれたある場所、それは歴史が変わった瞬間。閃華はその場所に着いた時には、もう何もかも終わっていた。

はい察しがいい人はもう何処を舞台にしてるか分かりますね。分からない人はこれからの展開を楽しんでください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、最近サブタイがまったく思いつかず、適当になってきてると思い始めた葵夢幻でした。

第五十四話　炎の記憶

炎の中を閃華が走る。どうしても行かないといけない、その場所に向かって。

「小松！」

閃華の叫び声も炎が渦巻く音に消えて建物が崩れ落ちてくる。

落ちてくる炎をまとった瓦礫を避けながら閃華は走り続ける。

「小松！」

そして開かれる最後の障子。奥には炎の中に座り込む人影。

閃華は炎を掻き分けて奥へと向かい、その人影を目の当たりにする。

「こ……まつ」

炎の奥に座り込む女こそ、閃華の契約者だった小松。だが小松は血まみれになりながら、すでに息絶えていた。

止められなかった。いや、私は気付きもせんかった。……無様じゃな。

閃華に襲い来る激しい後悔。だが世の中はもっと無常に出来ているらしい。

閃華の足元に魔法陣が現れると、黒い闇が広がっていく。そして閃華を飲み込み始めた。

そうか、私も同罪と言う訳じゃな。それもしかたないじゃろ。なにしろ小松は……エレメンタルロードテナーを殺したんじゃからな。

閃華の意識は完全に闇に沈む。

目を覚ますとそこには見慣れぬ天井があった。

……夢じゃな。

閃華がその結論に達するまで時間は掛からなかった。

だが夢の割には酷い疲労感が閃華を襲い。しばらく起きる事はし

ないで、天井を見上げるだけだった。
まいったのう。まさか夢にまで見るとはのう、結構重症じゃな。
自分を笑いたくなるが、それほどの元気は出なかった。
そして天井を見上げるのも飽きた閃華は、まだ疲れが残ってる体をゆっくりと起こす。
「あっ、閃華ちゃん起きたのね」
「……奥方」
部屋には彩香だけが居て、他には誰も見当たらなかった。
「……琴未達は、もう出かけたようじゃのう」
「ええ、何かやることがある、って言って出て行ったわよ」
「……そうか」
琴未達が何をやっているかなど気にならなかった。それ以上の喪失感が閃華の中にあり、今はそれを埋める事だけで精一杯だ。
生気の無い閃華の顔。彩香は気付かないふりをする。
「閃華ちゃん、ご飯食べるでしょ。時間はちょっと遅いけどちゃんと閃華ちゃんの分もとってあるから」
閃華が時計に目を向けるとすでに十時を過ぎていた。だが閃華は首を横に振る。
「いや、今は……」
「ダメよ、ちゃんと食べないと」
精霊である閃華は二三日食べなくとも全力で活動できるが、彩香はそんな事情は知らない。だから閃華にしつこいほど勧める。
「そうじゃな、では頂こう」
根負けする閃華。彩香が閃華の朝食を取りに部屋を出ると、閃華は窓から空を見上げる。
今日も暑くなりそうじゃのう。……んっ？
閃華は自分が大量の汗を掻いてたことにやっと気付いた。
やれやれ、まいったのう。そんなに気にしてないつもりじゃったが、体と心は素直に反応するもんじゃのう。
肌に張り付く浴衣が気持ち悪くて閃華は少しだけ浴衣を肌蹴る。

……どうしたもんかのう。昨日昇に話して振り切ったつもりじゃったが、そう簡単には振り切れないという事じゃな。……こういうのはトラウマというんじゃったかな。なかなか厄介じゃな。

思い通りにならない自分の心。閃華が対処法を考えていると彩香が朝食を持って戻ってきた。

「お待たせ」

朝食は彩香自身が持ってきてそのままテーブルに並べる。さすがにここまでやられてはいつまでも布団の中にはいられない、閃華はゆっくりと布団から出るとテーブルに付く。

そしてゆっくりと食事を口に運んで行くのだった。

「それじゃあ温泉に行きましょう」

「いや、奥方……」

朝食を終えた閃華に笑顔で誘う彩香。そして閃華の返事を待たないで手を取ると、そのまま引っ張って行く。

結局、閃華は彩香と一緒に温泉に浸かっている。まあ先程大量の汗を掻いたから丁度良かったのだろう。

隣に居る上機嫌な彩香の顔を見詰める閃華はおもむろに口を開く。

「奥方」

「んっ、どうしたの閃華ちゃん？」

「いや、……私は、かなり気を使わせてるようじゃのう」

彩香は上機嫌な顔を崩すと真面目な顔になる。だがその顔をもすぐに崩れて笑顔に戻った。

「自覚はあるのね」

「なんとなくじゃがな」

「そう、……昇達も、表には出さないけど結構心配してるみたいよ」

「……そうか」

「……」

水音がはっきりと聞こえるほど二人の周りからは音が無くなり、

沈黙の空気が流れる。
それでも彩香は何かを聞こうとはしない。待っているのだろう、閃華が話してくれるまで。それは閃華も充分分かっていた。
だからと言って素直に話せる話ではないからのう。そもそも全ては終わっておる。今更何か言っても詮無き事、過去が変わるわけでは無いからのう。……じゃが、私は未だに過去に囚われておるようじゃ。
それを証明するかのように、閃華の脳裏にはあの風鏡の笑顔が重なってならない。
風鏡殿は、たぶん昇達を利用してくるじゃろう。じゃが深くは関わらせないつもりじゃな。その辺りは風鏡殿の優しさか、それともそこまで踏み込めないのか、そのどちらかじゃろ。……あやつも、私を深くは関わらせんかったからのう。……くっくっくっ、本当、風鏡殿は小松と似ておるのう。
閃華は湯船の淵に首を当てると頭を後ろに倒す。
私は……また傍観者に過ぎぬのじゃろうか。また、何もできぬのじゃろうか。……私は、一体何がしたんじゃろ。
だがいくら考えても閃華は答えを導き出す事は出来なかった。
「閃華ちゃん」
彩香の呼びかけに閃華の思考は中断されて彩香に目を向ける。
「なんじゃ、奥方」
「……忘れないでくれる」
「んっ、何をじゃ？」
「昇達が……誰の為にいろいろとやってるか、をね」
「……そうじゃな」
分かっておるんじゃがな。どうも自分の気持ちに決着が付かん。
んっ？　昇達がいろいろとやってるじゃと？　……そうか、昇が動いたか。何も進んで首を突っ込まなくてもいいもんじゃが。いや、昇をけしかけたのは私じゃからな、何も文句を言う権利は私には無いじゃろ。

話せばこうなる事は分かっていた筈だが、いざ昇が動いたと知ると閃華は複雑な気持ちを感じざる得なかった。

本当なら昇はこの事に首を突っ込むべきではないと思ってたんじゃが、風鏡殿はそれを許してはくれんじゃろ。昇が首を突っ込まなくても何かしらの手を講じてくるはずじゃ。

んっ、ということは、どっちにしろ昇はこの件に関わる事になるのう。なんじゃ、ということはどの道昇が巻き込まれる事は確定しておるようじゃのう。

そう思うと閃華は急に可笑しくなり、声を殺しながら笑う。そんな閃華を彩香は不思議そうに見詰める。

……そうか、どっちにしろ私がこの事を避けるのは無理みたいじゃのう。ならこれからの事を考えてみるかのう。

閃華はあまり波を立てないように立ち上がる。

「閃華ちゃん、もう出るの？」

「うむ、先に上がらせてもらうぞ奥方」

「そう、頑張ってね」

「……うむ」

閃華を見送る彩香。一人残された彩香はゆっくりと温泉を満喫するのだった。

そして部屋に戻った閃華の目に飛び込んで来た物は、何故か不機嫌で部屋に寝転がっているミリアだった。

ミリアはこれでもかというほど不機嫌な顔をしており、不貞腐れている様に大の字になって寝転がっていた。

「……どうしたんじゃ、ミリア？」

閃華が声をかけるとミリアは顔を向けることなく答える。

「別に」

明らかに不機嫌な声。閃華は呆れたように息を吐くと、ミリアの傍に座る。

「何かあったのか？」
少し黙っているミリアだが、閃華に顔を向けると口を開いた。
「琴未が意地悪なんだよ」
その言葉に閃華の頬が緩む。
「また何かやったんじゃないのか？」
「う～、閃華まで。何もやってないよ～。ただ琴未が邪魔だから帰って閃華を監視しとけって」
ミリア、それは私に言ってはならぬのではないか。
だがミリアはそんな事には一向に気付かないで、言いたい事だけを閃華に告げる。
「だいたい琴未は昇と一緒に居られないからって私に当たりすぎだよ。だいたいこうなったのもシエラの策略を見抜けなかった琴未が悪いんじゃないか」
「やれやれ、またやっておるのか」
「今回はシエラの一人勝ちだった」
「しょうがないのう」
それはいつもと同じ光景のはずだった。だがミリアは久しぶりに閃華が微笑んでるのを見たような気がした。
だからか、ミリアは頭を閃華の膝の上に移動させる。
「んっ、どうしたんじゃ？」
「……別に、なんとなく～」
自分でやっておいて急に恥ずかしくなったミリアは閃華と目線を逸らせる。
「そうか」
そんなミリアの頭を優しく撫でる閃華。その心の中には別な想いが生まれた。
もし、小松に子さえおれば、あんな事はしなかったじゃろうな。
……というか、ミリアを膝枕してこんな気持ちになるのもどうかと思うが、まあ本人に言うわけではないからよいか。
何気に母親の気持ちを少しだけ体験する閃華。

その時、閃華を見上げながらミリアは話しかけてきた。
「閃華」
「んっ、なんじゃ？」
「閃華は争奪戦初めてじゃないんでしょ？」
「うむ、そうじゃが。ミリアは初めてか？」
「うん、これが初めてだよ。閃華は前の争奪戦にも参加したの？」
「いや、最後に参加したのはぐらい五〇〇年前の争奪戦じゃ」
「じゃあ五〇〇年も争奪戦は無かったの？」
「いや、その間に二度の争奪戦が行われたが、私は参加する気になれんかった」
「じゃあなんで今回は参加したの？」
「……琴未に、琴未を見つけてしまったからのう。じゃから琴未と契約をしたわけじゃ」
「なんで琴未？」
「何処となく似ておったからじゃよ」
「誰と？」
「……」
閃華は急に口を閉ざして明後日の方向へ目を向ける。どの瞳は何処となく寂しくて懐かしい物だった。
そんな閃華をミリアは不思議そうな顔で見続けると、閃華は決心したようにミリアに顔を向ける。
「……小松。私が五〇〇年前に契約した女子（おなご）じゃ」
「どんな人？」
そう聞かれると閃華は急に考え込んでしまった。
「どうしたの？」
「いや、どんな人と聞かれてものう。どう答えてよいやら」
「答えにくい人？」
「いや、そういう訳でもないんじゃが」
「けど琴未に似てるんでしょ」
ミリア、それは琴未が答えにくい人と言ってるのか？

そんな疑問を感じながらも閃華はなんとか言葉を繋げる。
「そうじゃのう。外見は、まったく琴未に似ておらんのう。それに性格も……重なる点がないのう」
「それって、何処が琴未に似てたの？」
「ふむ、あえて言うなら……志かのう」
「こころざし？」
「うむ、琴未は昇の為ならどんな事でもやるじゃろう。小松もそうじゃった。夫の為にどんな事もでもやった。そこが二人の似ている点じゃのう」
それを聞いてミリアは急に不機嫌な顔になる。
「どうしたんじゃ？」
「別になんでもないよ」
「くっくっくっ」
閃華にはミリアが不機嫌になった理由がはっきりと分かった。
「大丈夫じゃよ。昇の為にどんな事でもやるのはミリアもシエラも一緒じゃ」
「えへへっ、そう」
「うむ」
要するにミリアは自分も昇の為にどんな事も出来ると認めて欲しかっただけだ。その気持ちをしっかりと理解した閃華はミリアに微笑みかける。
同じくミリアも微笑を返す。
「ねえ、閃華」
「なんじゃ」
「その小松って人の事話して」
「随分と唐突じゃのう」
「だって閃華だけにそんな過去がるなんでずるいよ」
随分と子供染みた言い分だが、閃華は何かを思い出したような懐かしいがる顔になる。
「あまり面白い話ではないんじゃが、それに時代背景も複雑じゃぞ。

それでも聞くか？」
「うん！」
元気良く返事をするミリア。閃華はミリアの顔を見詰めると大きく息を吐く。
やれやれ、しかたないのう。
ミリアの期待する視線を下から感じながら、閃華はゆっくりと語り始めた。昔出会った女性の事を、そしてその女性が犯した契約者にとってもっとも重い罪の事を。

第五十四話　炎の記憶（後書き）

さて、いよいよ次から閃華の過去についての話になります。……というか、未だに過去の話のプロットが上がってない。いいのだろうか？

サイン！　コサイン！　タンジェント！！！　……いや、意味はないです。偶然テレビでそんな事を言ってたので叫びたくなりました。本当に意味はないです。

さて、話が脱線しましたね。まあ、いつもの事ですけど。そんな訳で本編にちょっと触れたいと思います。

閃華がミリアを膝枕する絵。……なんか、凄く似合ってると思うのは私だけでしょうか。というか、閃華は大人びてる。いや、かなり昔の人っぽい。そしてミリアは子供っぽい。というかガキなので、二人が一緒だとどうしてもそんな展開になっても不思議はないと思ったりもします。

……そう思うのは私だけでしょうか。違うと思う人はぜひ意見をください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、しばらく昇達の出番はなくなりますが、忘れずにいてくれる事を切に願う葵夢幻でした。

第五十五話　閃華回想録

一四六七年二月二十二日、この国の暦では応仁元年一月十八日。御霊合戦という戦いが京の町で起こった。世に言う応仁の乱の始まりである。

それを皮切りに始まった戦いは各地に広がるが、十年後に一応の決着が付いた。

だが、それで終わりになるはずも無かった。

十一年に渡った戦いは何も生み出さず。ただ、時の権力者である足利幕府の権威を失墜させるだけであった。

そうして応仁の乱が終わった翌年。一四七八年、文明十年未明、もう一つの戦いが始まった。それは歴史に残らない戦い。精霊王の器争奪戦である。

こうして奇しくもこの国では二つの戦いが巻き起こっていた。足利幕府の権威失墜による戦国乱世の到来、そして器の争奪戦。精霊達はこぞって力のある武将の元へ走り、人間も精霊達を受け入れた。

先の見えぬ戦国乱世が幕を開ける。

一五六〇年、永禄三年。一人の男が奇跡を起こした。

二五〇〇〇の兵を連れて今川義元が上洛を開始。それに立ち塞がるのが、尾張の織田家、二〇〇〇であった。

誰もが今川の勝利を疑わなかった。だが尾張の当主、織田信長は今川本陣を奇襲、義元の首を討ち取った。

奇跡とも思えるこの勝利。だが信長は全てを計算しつくした上でこの大胆な行動を取った。しかしこの時点では、未だに信長の力を正等に評価した者は居なかった。

一五六七年、永禄一〇年。信長は美濃を攻略。以後は岐阜と改めて天下布武の志を印にしたためて使うようになった。そして始まる

信長の疾走劇。

その翌年、信長は権力争いに敗れた足利義昭を奉じて上洛。義昭を征夷大将軍に据え、副将軍という地位を断り、自分は草津、大津、堺という要所を得た。信長は名より実を取った。

その後も信長の力は増長する。だがその増長を快く思わないものが一人。上洛直後は信長を兄とも父とも慕った足利義昭、その人である。

義昭は北の浅井、朝倉、西に石山本願寺、畿内に三好、六角などを動かして信長包囲網を作り上げようとしていた。

信長に危機が迫っている一五七二年、元亀三年二月。閃華は岐阜城下に居た。

閃華は争奪戦開始直後はこの国には居なかった。だが、東の小国で面白い事が起こっていると聞き付けてから、この国に来る事にした。

そしてこの国では予想以上に争奪戦が激化しており、それと同時に戦国乱世も激化していた。

精霊達は主に影で、そして時には表舞台に立って国の歴史を動かしていた。精霊が歴史の表舞台に立つ事など今までありえなかった。だがこの国の武将達は精霊達を受け入れて隠そうとはしなかった。いや、表向きには隠していたのかもしれないが、今や精霊の存在は当たり前のように認識されていた。

面白い、本当に面白いのう。

閃華はこの国の現状が稀で珍しい事に気付いていた。だが他の精霊達を一緒になって武将に仕える気にはなれなかった。だからだろ、今まで閃華が誰とも契約せずにこの国を彷徨い続けてきた。

それ故に、閃華はこの国の事情に詳しくなった。

信長は完全に囲まれておるのう。じゃが、もしこれを何とかすることが出来れば信長は……天下を取るじゃろう。なにしろ信長は、

面白い才能を持っておるからのう。
楽市楽座、関所の廃止、この二つを見るだけでも信長は知性の王としての才覚は充分じゃろ。それに軍備の完全化、それだけでも信長はこの乱世を静める事をうかがわせるというものじゃ。
この時代は半農半武（はんのうはんぶ）が当たり前だった。半農半武とは農民をやりながら武士をやるような物で、戦は農業が暇な時期にやる物だと決まっていた。だが信長はこの制度を無視。武士は武士として戦だけに専念させて農民と区別させた。結果、信長はいつでも戦が出来る様な軍隊を作った。
知性の王と乱世の雄、この二つを持っておるのは信長だけじゃろうな。……なら、織田家に仕えてみるのも悪くは無いのう。これから先、時代がどう動いて行くのかが楽しみじゃ。
じゃが、問題は誰と接触するかじゃのう。織田家は信長を始め、羽柴秀吉、柴田勝家がすでに契約者じゃ。あと考えられる候補は丹羽長秀、滝川一益、明智光秀ぐらいじゃのう。……いや、今更織田家の重臣に接触しても重くは見られんじゃろう。となると、残るは……文官じゃな。
そんな事を思いながら閃華は岐阜城下を彷徨っているのだった。

そしてそんな閃華の目に止まったのは武官どころか文官でもなかった。そもそも男ではなかった。武将の妻、閃華はそこに目をつけた。
けなげじゃのう。毎晩の様に夫の愚痴を聞いておるのか。ふむ、年は結構行っておるが悪くない。熟年者の余裕じゃろうか、落ち着いた雰囲気のする女子じゃのう。
そこを観察する事三日目、閃華はその女性を見出していた。
それに武家の出なんじゃろうか、女子の割には隙が無いのう。ふむ、弱くは無いようじゃのう。いや、この女子は充分に戦えるじゃろうな。

閃華が見出した女性こそ林道勝が妻、小松であった。
林道勝は宿老ではあるが、その役割は行政官として色合いが強い。そのため、出世して行く羽柴秀吉や明智光秀など、新しく織田家に仕えた物達に引け目を感じていた。
そのことを毎晩の様に道勝は妻の小松に愚痴るのだったが、小松は嫌な顔一つせずに道勝の愚痴を聞いていた。それどころかなかなか良い提案もするのだが、道勝にはその実行力が伴わなかった。
面白い才覚を持った女子じゃのう。観察力、判断力などはなかなかの物じゃ。じゃが夫は三流じゃのう。妻の言を実行しようとはせんからのう。いや、実行出来るほどの力がないようじゃな。……ふむ、頃合を見て接触してみようかのう。
随分と珍しい選択ではあったが、閃華は自分に合っていると思っていた。そもそも閃華はあまり表舞台に立つ性格ではない。裏でいろいろとやっていた方が性にあっていた。だからだろう、武将の妻と契約しようと思い立ったのは。
小松が部屋で一人になった時を狙って、閃華は小松に近寄ると精神を集中させて光の柱を生み出して部屋全体を包み込む。それは契約時専用の精界、金色の空間だ。
突然部屋が変わって驚いている小松の後ろから閃華は声を掛ける。
「こっちじゃ」
小松は振り向くと敵意をあらわにする。
「無礼者、ここを何処だと思ってますか？」
「織田家宿老、林道勝邸じゃ」
あっさりと答える閃華。小松は更にキツク閃華をにらみつけるのだった。
「そこまで分かっていながらの所業なら、どうなるか分かっていますか？」
「くっくっくっ、無礼なのは謝るとしよう。じゃが、私のような存在はこのような接触しか出来んのでな。その辺は許して欲しい物じゃ」

「……あなたは一体？」
小松は敵意を消して閃華を見る。
ふむ、この突然の状態にもかかわらず、ここまで冷静な態度を取れるとはのう。これは予想以上に期待が持てそうじゃのう。
「精霊の存在は存しておろう」
「せい、れい……」
小松は記憶を辿ると、その言葉が意味する物を掘り出した。そして今度は打って変わって閃華に頭を下げる。
「お願いがございます。あなた様が精霊だとおっしゃるなら、我が夫道勝にどうかお力をお貸し下さい」
さすがの閃華もこれにはビックリした。まさかここまで切り替えが早いとは思っていなかったからだ。そして閃華の口から笑いがこぼれる。
「くっくっくっ、なにもそこまでせずとも良い」
「ですが」
「しかたないのう。とりあえず頭を上げられよ、このままでは話しずろうてかなわん」
閃華が小松の前に座ると小松はやっと頭を少し上げた。
溜息を付く閃華はしかたなくそのまま話す事にした。
「とりあえず頭を上げてくれんかのう。それに話すときは人の目を見て話すもんじゃ」
「ですが、精霊様」
「閃華じゃ」
「えっ？」
「私の名前じゃ」
「では閃華様、夫道勝にお力をお貸ししてくれますでしょうか？」
閃華は目を細めると思っているままを口にする。
「悪いが道勝殿と契約する気は無い」
「そこをなんとか！」
「じゃが、お主となら契約をしても良いと思っておる」

「私……でございますか？」
「うむ、そうじゃ」
今度は小松がビックリする番だった。精霊は武将とばかり契約する者だと思っていたが、まさか自分が選ばれるとは思っていなかった。
「あの……私でよろしいのですか？」
「うむ、お主は充分な才を持っておる。じゃからお主の前に姿を現した」
「ですが……」
「夫の力になりたくはないのか？」
そう言われると小松は戸惑った。本当なら道勝と契約をして欲しいのだが、自分が歯痒い思いをしていたのも確かだ。
ただ愚痴を聞くだけの日々、それ以外のことは何一つ出来なかった。だがもし、目の前の精霊と契約をしたのなら夫の力になれるのは確かだ。そして夫の地位も向上するだろう。
そうすれば織田家で肩身の狭い思いをしている道勝をどんなに楽に出来るか。
その思いが小松に決断させる。
「……一つだけ約束してください」
「なんじゃ？」
「私と契約した際には、この家に、道勝に仕えると」
「うむ、それは構わん。契約をすれば私はこの家の家臣じゃ。じゃから好きに使ってもらって構わんぞ」
「ありがとうございます」
深々と頭を下げる小松。閃華は己の武器である龍水方天戟を取り出す。
「では契約じゃ」
閃華は小松を立たせて、その前に膝ま付き方天戟を差し出す。
「精霊が己の武器を差し出すのは忠誠の証。これよりこの閃華、林家に仕え、忠節を誓う事を約束いたします」

「頼みます」
小松が方天戟を握り締めると突然光が生まれて、一気に辺りを強い光で包み込んだ。
そして光が消えると金色の空間は消えていて、元の部屋に戻った。
閃華は未だに小松の前に平伏している。
だが小松はしっかりと感じていた。自分の中に生まれた力を。
「……エレメンタル、とは？」
「なるほど、やはり小松は武将並みの力を持っていたようじゃのう」
閃華は契約者の事を小松に話した。精霊と契約した者は必ず特殊な力が宿る事。そしてエレメンタルの能力の事。
「要するに私は精霊と同等の力を得たと言う事ですか？」
「うむ、そういうことじゃ。それから、私に対してそんなに丁寧な言葉で無くて構わんぞ。なにしろ私は林家の家臣じゃからのう」
「ですが、そんな……」
「くっくっくっ、まあじきに慣れるじゃろう」
こうして閃華は林道勝に仕えることになった。

そしてその夜、閃華は道勝と対面する。
閃華は与えられた部屋に一人で居ると、足早な足音が聞こえてきて部屋の障子が開いた。
部屋に入ってきたのは男と小松。男は威厳がありそうな風体をしているが、どこか弱弱しい雰囲気を出していた。せいぜい外見だけでも体裁を整えたかったのだろう。
閃華は男に平伏して、男は閃華を見下ろしていた。
「そなたが閃華か？」
「はっ」
素直に答える閃華。まあ閃華はこの家を何日も見張っていたのだから、当然この家の当主が誰か知っていた。そしてこうなる事も予想していたようだ。つまり、道勝が自分の部屋に不機嫌な顔で飛び

込んでくる事を。
　道勝は閃華の前に座ると頭を上げるように言ったので、閃華は黙って頭を上げて道勝を見詰める。
「精霊というのは本当か？」
「はっ」
「疑う訳ではないが儂は契約の場に立ち会っておらん。だからそなたが精霊だといわれても正直信じ難い。儂も精霊は何度か目にしておるが、あまり人間と変わらんからな。だからそなたが精霊だという事を証明してくれんか」
　器が小さいのう。
　閃華は道勝の言動に少し嫌な気分になった。そもそも試し方が気に入らなかったようだ。
　もしこれが信長や秀吉だったら、こんな直接的には聞かずに仕事を与えるだろう、それも精霊にか出来ない仕事を。そしてその仕事の出来具合で判断するだろう。成功すれば精霊だろうが人間だろうが使えることは確かだ。そして失敗すれば切り捨てればいいだけ。
　それにそうした方が試される側も充分に自覚が出るし、アピールする機会も与えられる。試される方もやる気が出るというものだ。
　だが道勝のように直接聞かれると返って困るものだ。
　閃華は龍水方天戟を道勝に差し出す。
「これは精霊の武器である為、人間には作る事が出来ません。どうかお改め下さい」
　まあ確かに閃華の龍水方天戟は水の龍が巻き付いてる為、人間には作る事は不可能だろう。
　それを見た道勝は納得したようだが、未だに不機嫌な顔をしている。
「あい分かった。確かにこれは人間には作れんな。だが今一つ画点が行かん。そなたは何故小松を選んだ？」
　やれやれ、とことん卑屈じゃのう。
　要するに道勝は自分が選ばれなかった事が不満なのだ。この時代

は精霊と武将が契約するのが常識だった。だから道勝も精霊が現れる時は自分の前だろうと思っていたのだが、実際には妻の小松が契約者になった。そのことが悔しいのだろう。

閃華が小松に目を向けると口を出そうか困っていた。閃華は道勝に平伏すると口早に理由を説明するのだった。

「人に分があるように精霊にも分があります。私は己の分をわきまえているつもりです。ですから、表には立たずにひたすら影で働きたく、奥方様と契約をした次第であります」

つまり表に立っている道勝と自分とは合わないという事だ。まあ確かに閃華の性格からいえば道勝に同伴して表でいろいろとやるのは性に合わないだろう。というか、ただ単に道勝と合わないだけなのかもしれないが、閃華は多少真意を濁しながら道勝に言うのだった。

道勝は閃華の言葉を曲解して、その真意を得た気になる。

「つまり乱波の方が自分に合っていると申すか？」

「はっ」

まあよいか。

閃華は道勝は実力が無いと思っているが嫌っているわけではない。だから事を穏便に済ませればよかった。

「うーむ、そうか……」

苦い物でも食べたかのように顔をしかめる道勝。道勝としては小松との契約を解消して自分と契約をさせたかったのだが、表に立つ性格ではないと言われてはどう返して良いのか思いつかなかった。

そこに閃華は一気に懐柔させようと口を開く。

「戦、謀略、政略、全ては表に立つ者だけでは事は成り立ちません。裏で働く者が居るからこそ正しい判断が出来るのです。旦那様にそういった者は必要でございましょう。それに御館様を始め、あの羽柴秀吉も精霊を数多く裏で使っております。旦那様にも裏で働く精霊が居れば、決して秀吉ごときに引けは取りますまい」

「そ、そうか！」

初めて不機嫌な顔を崩す道勝。どうやら閃華のおだてにまんまと乗せられたらしい。だが当の本人はその事に気付かず、かなり上機嫌になっていた。秀吉に負けないというのがかなり効いたらしい。

「うむ、それでは閃華、これから先この道勝を支えてくれるか」

「はっ、旦那様の命あればこの閃華、どんなことでもやってみせます」

「うむ、では任せたぞ」

上機嫌で部屋を後にする道勝。後に残った小松は閃華に呆れた視線を送る。

「随分とうまく旦那様を乗せましたね」

「くっくっくっ、そう言ってくれるな。ああでも言わねば自分と契約しろとうるさいじゃろ」

「そうですね」

「小松は、今からでも旦那様と契約をした方が良いと思っておるか？」

だが小松は大きく溜息を付く。

「いいえ。先程の旦那様を見てれば私が契約をして良かったと思ってます」

「くっくっくっ、そうじゃろうな」

道勝は精霊という強力な手札が手に入っただけであれだけ上機嫌になったのだ。これが完全に自分の手に入れば、どれだけ増長するか分かったのもではない。小松は閃華が自分を選んだ気持ちが分かった気がした。

「ところで閃華」

「なんじゃ」

「今更なんですが、閃華は何故この林の家に来たのですか？」

「それはちょっと違うぞ」

「そうなのですか？」

「うむ、私はこの家に来たのではない。小松に興味を持ったから契約をしたまでじゃ」

「それはどういう意味です？」
「くっくっくっ、じきに分かるじゃろう」
不思議な顔をする小松に閃華は笑って誤魔化した。
そしてその日を境に林道勝が精霊を手に入れたという噂は一気に広まり、岐阜城下には誰もその事を知らない者は居なかった。まあ半分は道勝が自分で言い触らしたのだろう。
そうなれば当然、信長の耳にも入るというものである。
同年十二月。ついに小松と閃華は信長が居る岐阜城に呼び出される事になった。

第五十五話　閃華回想録（後書き）

さて、冒頭ではかなり説明を省きましたね。というか、応仁の乱から説明していくと軽く一話以上使ってしまいます。なので、戦国時代の時代背景を知りたい人は勝手に調べてください。それにこれは時代小説ではなく、一応現代ファンタジーですから。

それではちょっと補足。エレメの第一話でシエラと契約する昇ですが。この時シエラは昇を瀕死の状況に追い込んでます。これは契約時に絶対にやらないといけない事ではなく。シエラが昇を脅す材料としてやった事です。なので、本文で閃華は普通に小松と契約しましたが、あれが本来の姿です。決してシエラがやったやり方が一般的ではありません。

さて、言い訳も済んだ事ですし、命を惜しむな名を惜しめ！！！これは義経ですね。例の如く意味は無いです。そろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、サブタイに閃華回想録1とやりたかったけど、それだとかなりの数いきそうだからやっぱりやめた葵夢幻でした。

第五十六話　信長謁見

岐阜城に登城した閃華を始め小松と道勝。三人は謁見に用いられる部屋に通されると大人しく信長を待っていたのだが、どうも道勝は落ち着かないらしい。

先程から明にソワソワしており、膝がどうにも落ち着かない。まあ道勝にしてみれば、妻が信長に会う事など予想も出来なかったみたいで、何かあっては大変だと気を揉んでいるのだろう。

逆に小松はすっかり落ち着いたものだ。

「旦那様」

「なんだ！」

小松が道勝に話しかけると道勝は声を大きくして答えるが、小松は逆に笑顔を道勝に向ける。

「そんなに心配しなくとも大丈夫です。御館様の前で決して粗相などいたしません。どうかご安心ください」

ほう。

閃華は小松の言葉に改めて感心する。

普通は逆に夫が妻を気遣う物だが、小松は自分が余裕を見せる事で逆に道勝を落ち着かせた。

それに小松も御館様が気性の荒い一面を持っていることは知っているはずじゃ。それなのにこれほど落ち着いているとはのう。かなり肝が据わっているようじゃ。

すっかり落ち着いた道勝。小松はそんな道勝に向かって微笑むのだった。

それからしばらくして、戸が開き一人の小姓が姿を現した。

「御館様のおなりです」

それだけ告げると小姓は身をどけて、閃華達三人は平伏する。

そして入ってくる信長。信長が座に着くと扉を閉めた小姓も隣に控える。

「面を上げい」
顔を上げる三人。閃華は久しぶりに信長の顔を見た。
閃華が信長を見るのはこれが初めてではない。小松と契約をする前、未だにこの国を彷徨っていた時に信長の戦を見たことがある。それから信長の噂を聞きつけて岐阜城下を彷徨っている時にも何度か見かけた。だから閃華は少なからずも信長を知っていたわけだ。
だが閃華は小姓の方に注目する。
あの小姓、精霊じゃな。
信長の隣に控えている小姓はかなりの美少年である。そして閃華はその少年から精霊の気配がするのをしっかりと捉えていた。
そして信長は小姓に言葉を掛ける。
「蘭、そなたは下がっておれ」
「はっ」
信長の言葉どおりにその場を後にする小姓。
なるほどのう、あれが森蘭丸か。森可成（もりよしなり）殿のご子息と聞いておったが、精霊じゃったか。となるとあの噂も本当のようじゃな。
その噂というのも重要な物ではない。ただ単に大名は精霊を人間の養子にしているというものだ。これによって精霊と人間の区別は余計に付きにくく、精霊は自由に動けるという事だ。
どうやら精霊の力を最大限に発揮するために、このような手を使うのが常識らしいのう。確かに相手が精霊じゃという事は人間には分からんからのう。うかつに斬り込めば痛い目を見るのは確かじゃ。くっくっくっ、本当にこの国は面白いのう。
今までの争奪戦では人間と精霊の区別ははっきりとしていたが、信長を始め強国の武将はそういった物を取り払っているらしい。
確かに精霊の戦闘能力は凄まじく、人間ではまったく敵わないだろう。その戦闘能力を持っている精霊が人間に混じって戦場にいるのだから、その事を知らずに戦場に居る物は精霊の餌食となるだけだ。
しかも人間の養子にする事で素性をしっかりとしておる。これは

ちょっと調べただけでは精霊かどうかは分からんな。なるほどのう、どうりで各国の大名が精霊を求めるはずじゃ。精霊に対抗できるのは精霊だけじゃからのう。

閃華がそんな考察をしている間に信長は道勝に問いかけるのだった。

「道勝」

「はっ」

「武田の事、聞き及んでいよう」

「はっ、二万の兵を率いて上洛を開始したと」

「うむ、これで北に浅井、朝倉、西に本願寺、そして東から武田が来る。さて、どうしたものか」

随分と言葉を濁しておるのう。

それは本来の信長とはまったく違う印象を受ける物だった。信長はまるで道勝から何かを言うのを待っているような。そんな感じを閃華は受けていた。

もっと直接的に来ると思っておったが、一体どういうつもりじゃろうな。

信長が武田をの話を持ち出した時点で閃華には信長の言いたい事が分かっていたが、あまり出しゃばるのも道勝の心証を悪くすると思い、あえて黙っていた。

だが信長は少し声を張り上げながら道勝に問いただす。まるで道勝の態度に業を煮やしながら。

「道勝、この状況を打破するにはどうしたらよいと思う！」

「はっ、その……」

言葉に詰まる道勝。そんな道勝を見かねて小松がとうとう口を開く。

「御館様」

小松が口を開いた事に道勝は自重するように言うが、信長はこの時を待っていたかのように小松に発言を許した。

「御館様、武田が事、この私にお任せくださいませ」

その言葉に道勝は目を丸くするが、信長は大いに頷いて見せた。
そして閃華も見えないように笑みを浮かべる。
とうとう言い出したようじゃな小松。さて、御館様はどうするかのう。
「バカな！　小松、お前は何を」
「よい」
信長が許した事によりしかたなく引き下がる道勝。そして小松を見詰める信長はゆっくりと口を開く。
「小松、武田の事を任せよと申したが、どうするつもりだ？」
「はっ、信玄が首、御館様の元へ持参いたします」
その言葉に道勝は大いに驚くが信長は笑ってみせる。そして信長が小松に命を下そうとした時。
「では小松、信玄」
「御館様」
閃華が信長の言葉を遮る。
道勝は閃華に自重するように仕草で伝えるが、閃華は信長を信長は閃華を真っ直ぐ見詰める。
「そなたが、小松と契約した精霊か？」
「はっ、閃華と申します」
「では閃華、申してみよ」
「はっ、信玄が首は我ら二人では取れはしないでしょう」
「出来ぬと申すか？」
「いいえ、決して出来ぬわけではありません。ただ、信玄が首を取るために御館様のお力をお貸しください」
あまりの申し出に道勝はもう驚く事にも疲れたらしい。じっと事の成り行きを見詰めるようにした。
そして信長はじっと閃華を見詰める。普通の者ならその重圧に耐え切れずに意味無く喋り続けるだろうが、閃華は黙って信長の答えを待っていた。
「……儂にどうしろと？」

重く冷たい声。閃華は笑みを浮かべる。
「たいしたことではございません。ただ徳川様に我らの御助勢をお頼みくださいますか」
「だが家康は武田に当たるだけで精一杯だ。とても助勢など出せんだろう」
「兵は要りません。裏で動く精霊を動かしていただければよいのです」
「……家康の元にそのような精霊がおったか？」
「おります。服部半蔵、徳川家きっての乱波と聞き及んでおりますが、その正体は間違いなく精霊。彼の者に武田の詳細を探っていただきたいのです」
「……ずいぶんと家康の事を知っておるな」
「徳川様だけではございません。私は契約をする前に諸国を渡り歩きました。ですから各国の事情には詳しいつもりです」
その言葉に信長の顔に笑みが戻る。
「なら武田の事も詳しいのだな」
「はっ、信玄は人間精霊分け隔てなく登用し、それぞれに適した場所へ付かせます。ですから信玄の護衛には精霊が多くなります。そこが信玄に付け入る最大の好機でございます」
信長は遂に笑い出し、再び閃華に目を向ける。
「面白い、実に面白い精霊だ。よかろう、家康には半蔵を貸してもらえるように言って置こう。閃華！　小松と一緒に信玄の首、信長の前に持って来い」
「はっ」
こうして道勝の心臓に悪い信長の謁見が終わった。

その夜、小松と閃華が準備に追われている中に道勝が姿を現した。
作業を中断する閃華達、道勝は座り小松がお茶を出すと今日の事を話し始めた。

「それにしても、今日ほどこの身が冷えた事はなかったぞ」
その言葉に小松は笑みを返す。
「ですが此度の命、見事果たせば旦那様の名は大いに高まりましょう」
やれやれ、しかたないのう。
閃華は大きく溜息を付く。別に呆れてるわけではない。小松の度胸と胆に呆れるのを通り越して大きく息をついただけだ。
まさかこれほどの大任を二つ返事どころか自ら引き受けるとはのう。それにしても……。
「何故御館様はあのような回りくどい言い方をしたんじゃろ？」
突然ぶつけられた質問に道勝は目を丸くするが、小松は笑って閃華の質問に答えた。
「御館様は私に命を出しづらかったのでしょ」
「そうか、そんなお方とは思えんが？」
「そういうお方なのですよ、御館様は」
「ふむ、ずいぶんと確信を持っておるようじゃのう」
「閃華、私は織田家家臣の妻を何年もやっているのですよ。ですから自然と御館様の話は耳に入ります。昔から織田家に居る妻の間では御館様は女の気持ちがよく分かると評判です」
「ほう、そのような一面があったんじゃな」
「それは本当か、小松？」
どうやら道勝もその話を聞くのは初めてのようで、小松に問いかける。
「はい、ですから御館様は私にそのような過酷な命を出すのに戸惑ったのでしょう。だからあのような回りくどい言い方をして私自身から言い出すように仕向けたのです」
「なるほどのう」
「だが本当にいいのか小松？」
今更心配になってきたのか道勝は小松に心配そうな顔を向ける。
小松は道勝の手を取ると改めて笑みを向ける。

「大丈夫です旦那様、此度のお役目を見事果たして旦那様のお役に立ちます」
「……小松」
閃華は溜息を付く。
「やれやれ、私は邪魔なようじゃから出て行くとするかのう」
「いや、閃華！」
「待て待て閃華！」
まるで新婚生活をちゃかされたかのような反応する小松と道勝。
閃華が笑うと二人とも顔を赤くしながら離れてしまった。
「くっくっくっ、まあ、夫婦仲が良いのはいい事じゃな」
「閃華！」
更にちゃかす閃華に小松は怒った様な声を出すと、そっぽを向いてしまった。
くっくっくっ、やはり女は誰かを好いておるといつまでも若いのう。じゃが……。
閃華はこの家に来てからずっと気に掛かっている事があった。
夫婦の仲は悪くないんじゃが、それでも子がおらんという事は、小松は石女（うまずめ）ようじゃな。
石女とは妊娠できない女性、つまり子供が出来ない女性の事を言う。この時代は石女と分かれば側室を持つか、下手すれば離縁もありえたのだが、道勝はそのどちらもしなかった。
それほどこの夫婦の中は良いようで、閃華は二人を見ていると時々微笑ましくなる。
まあ、本人達があまり気にしておらんなら私が口を出す事でもないからのう。それにさしあたっての問題は武田じゃな。
閃華は東に待っている強大な敵に思いを馳せる。
精強な武田軍団、じゃが私達の敵は信玄一人じゃ。なんとか信玄の首を討ち取れればよいのじゃが。徳川がどう動いてくれるかじゃな。

それから二日後、閃華達は信玄暗殺の為、岐阜を後にする。
道中で年を越して閃華達が家康が居る浜松城に入ったのは一月末の事だった。そして途中で聞いた三方ヶ原の真偽を確かめる。
三方ヶ原詳細はこうであった。信玄は家康が籠もる浜松城を無視してその先にある堀江城を目指して進軍を開始、三方ヶ原を通過していった。この報を聞いた家康は籠城から一気に打って出るが、武田は途中で反転して家康を待ち構えていた。
結果、徳川と織田の援軍はほぼ壊滅、家康はたった一騎で命辛々浜松城に逃げ帰ったようだ。
そして現在、三河の野田城は武田に包囲されたいた。
このままでは徳川が敗れるのは時間の問題。だが閃華はあえて時節を待ち続けた。信玄の首を確実に取れる時を閃華は待ち続ける事にした。
そして二月十五日、遂に野田城は落ちた。

第五十六話　信長謁見（後書き）

何をとち狂ったのでしょうか、小説家になろうの秘密基地、そこの新イラストコーナーにイラスト投稿。シエラのキャラデザをアップしてみました。

だが、自分の携帯で見てみると、やっぱり見れなかった。……やっぱり画像が大きすぎたな。ちょっと反省。まあＰＣの方は暇な時に見てやってください。そんなにうまくはないですが。

さて、戯言はここまでにして、少し本編にでも触れますか。そんな訳で森蘭丸と服部半蔵は精霊だということが発覚しました。……まあ、この二人は精霊でも問題ないでしょ。ちなみに本多忠勝は契約者という設定です。……ここでこんな事を書くということは、本多忠勝の出番がないということです。まあ、気が向いたら登場させます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、永〇亭にいる兎の目を見たらしく、かなり狂ってる葵夢幻でした。……このネタは分かる人にだけ分かればいいです。

第五十七話　野田城潜入

野田城が落ちた翌日、閃華はある人物と会っていた。だが相手は人ではなく精霊だ。徳川家康と契約した精霊、服部半蔵である。

半蔵は他の徳川家臣と変わりない格好ではいるが、独特の威厳ある雰囲気と気をつけないと見失ってしまいそうな気配の薄さが只者ではない事を示している。

閃華と半蔵は人があまり来ない奥の一室で密やかに会っていた。

「それで頼んでおいた物は手に入ったのかのう？」

近くに人も精霊も居ない事を確認した閃華は半蔵に尋ねる。半蔵は頷き、懐より紙を取り出して広げた。

「野田城は元より我らの城、その絵図面なら手中に収めるのは容易い」

「そうじゃったな」

閃華は半蔵の前に広げられた絵図面に目を通しながら半蔵に尋ねた。

「それで信玄の寝所はどこじゃ？」

半蔵は城の奥にある一角を指し示す。

「だがまだ確実ではない、今でも探索を進めている」

「そうか、広範囲でも良いから確実に居る場所を知りたいんじゃ」

「承知」

半蔵は閃華に頭を下げた。

これも御館様のお蔭じゃのう。

閃華達が浜松城に入ってからというもの、家康は表向きには何もしないが閃華達を厚遇していた。

それにしても半蔵殿だけではなく、まさか乱波衆を丸ごと貸してくれるとはのう。三方ヶ原での敗戦か応えたようじゃな。それに徳川様もこれ以上武田の好きにはさせたくないんじゃろ。

確かにこれ以上武田が西進すれば確実に信長と当たる事になる。

そうなると武田を止められなかった家康の面子は丸潰れ。織田との盟友的立場を守るためにも、家康はこれ以上失態を見せるわけには行かなかった。

そんな時に現れたのが閃華達だ。閃華達は信長がよこした織田方の兵、つまり閃華達が失敗しても家康の責任ではない。それどころか、充分に協力をしたという事実があれば万が一の時にも明文が立つという物だ。

だから家康は閃華達に協力を惜しまなかった。

私達の来訪は徳川様にとって天の助けじゃったろうな。信玄暗殺という命を帯びている以上、成功しようと失敗しようと三方ヶ原は薄れるからのう。徳川殿にとっては敗戦を消す良い機会という事じゃな。

「閃華殿」

半蔵が口を開いたので閃華は目を向ける。

「んっ、なんじゃ？」

「閃華殿が着てから半月、今まで動かなかったのは三河の城が落ちるのを待ってからか？」

「まあ、そんなところじゃ」

その言葉に何も反応しない半蔵。だが閃華は半蔵から不機嫌な気配が出ているのをはっきりと捉えていた。

「半蔵殿、今の徳川に武田は止められたか？」

「無謀」

「確かにのう」

半蔵が機嫌を悪くしたのを察したから閃華はその質問をぶつけてみたのだが、半蔵は今の徳川が武田に敵わないのをちゃんと理解していた。だから閃華は安心して次の言葉を口に出来る。

「じゃから武田を引き込む必要があったんじゃ。野営している武田本陣に侵入するのは不可能じゃからのう。じゃが野田城なら話は別じゃ。城に居れば油断もある、全ての兵に緊張感を持たせるのは無理じゃからのう。そこに付け入るわけじゃ」

「……」
半蔵は無言のまま頷く。
「後は精霊達じゃ、精霊は眠らずとも二三日は活動できるからのう。特に信玄に付いてる者はなおさらじゃろ。じゃが城という鎧に守られておるとどうしても油断が生まれる物じゃ。そしてそこを一気に攻め落とす。そこで半蔵殿に頼みたい事があるんじゃが」
閃華は袂から扇子を取り出すと半蔵を呼び寄せて自らも身を乗り出す。口元を扇子で隠しながら小声で話し、伝え終えたら二人とも離れた。
「出来るかのう？」
「承知」
「では頼むとしようかのう。これで精霊は最小限に抑えられるはずじゃ」
「後は？」
「そうじゃのう、兵はよいから出来るだけ精霊の情報が欲しいかのう」
「承知」
「では絵図面は貰っていくぞ」
閃華は絵図面を懐に仕舞うと部屋を後にする。そして閃華が障子を閉めると半蔵の気配も部屋から消えた。
小松も元へ戻る閃華にまだ冷たい二月の風が吹き付ける。
まだ風が冷たいのう、じゃが暖かくなってからでは遅い、時はそう無いようじゃな。じゃが事ここに至ったからこそ慎重にならんとな、焦って攻めるは匹夫の勇じゃからのう。
じゃが時が無いのも事実じゃからな、信玄の寝所が分かり次第決行することになるじゃろ。
半蔵殿は優秀じゃ、おそらく数日中には調べ上げるじゃ。となると、数日後には決行。この事、小松にも伝えておかんとな。
閃華は浜松城の一角、人気がまったく無い方へと消えて行った。

そこは浜松城の隅にある一角、閃華達は人が来ないその一角に家康から部屋を借りていた。
閃華がその部屋に入ると小松は自ら閃華の為に茶を出した。
「寒い中ご苦労様でした。それで首尾は？」
「上々じゃ、数日後には野田城の信玄を討てるじゃろ」
「そうですか」
安堵の表情を浮かべる小松。閃華はお茶をすすると小松に厳しい顔を向ける。
「安心するのはまだ早いぞ小松。我らが相手にするのは武田じゃ、例えうまく忍び込めたとしても返り討ちに遭う可能性が高いんじゃからのう」
「そこは頼りにしてますよ、閃華」
「やれやれ、まいったのう」
たいして困った顔をしてない閃華は懐から絵図面を取り出して広げる。
「これが、私達の戦場（いくさば）ですか」
食い入るように野田城の絵図面を見る小松は、先程閃華が半蔵に尋ねた事を閃華に尋ねる。
「信玄の寝所は？」
「今は詳しく調べてもらっている最中じゃ」
「そう、ですか」
「じゃが数日中には調べがつくじゃろ、そうしたら時を移さずに決行じゃ」
小松は絵図面から顔を上げて閃華を見る。その顔はすでに戦場に出向いているような、凛々しい顔をしている。
「分かりました」
「後は敵の戦力じゃな。相手にするのは精霊だけじゃが、詳しい数は分かっておらん」
「私達より少ない、という事は無いでしょう」

「じゃな、少なくとも二〇、もしくはそれ以上じゃな」
「十倍以上ですか」
「こっちは二人じゃからのう。信玄は確実にそれ以上の精霊を用意してるじゃろう」
「それにしても、信玄はよくそれだけの精霊と契約が出来ましたね」
「それは信玄の能力じゃな」
「というと？」
「確証は無いが信玄の能力はおそらく仮契約じゃろ。仮契約は契約した精霊よりかは劣るが精霊を実体化できる能力じゃ。おそらく信玄は仮契約で多数の精霊を実体化させたんじゃろ」
閃華の説明に小松は情報を整理して尋ねる。
「つまり信玄は契約ではなく能力で精霊を実体化させているのですね。閃華、精霊が劣ると言いましたが、どれぐらい劣るのですか？」
「それは個人差じゃな、本契約と近い力を出せる者もいれば、激しく制限を受ける者も居る。まあ、それを決めるのは信玄じゃがな」
「そうですか」
「この仮契約は数で責める能力じゃ。じゃから数をそろえてこそ意味がある。信玄は能力の本質を理解しておるようじゃのう」
「対抗策は？」
「考えてある。じゃが短時間で決めねばならん。下手に時が過ぎれば増援が来るじゃろう、そうなれば失敗じゃ」
「時間はどれぐらいです？」
「半刻もないじゃろう」
「そんな短時間で……」
半刻といえば三〇分も無い、閃華達はその短時間で信玄を倒さなければいけない。時間と信玄、この二つの敵に閃華達がやろうとしている事は明らかに無謀ではある。
だが閃華にははっきりとした勝算があった。いや、この時間制限こそ勝算の一つだった。それほどの計画を閃華は立てていた。
この戦、時と信玄が敵じゃ。信玄を討ち取れないのはもちろん、

時が過ぎても私達の負けじゃ。奇襲は奇襲に過ぎないという事じゃな。じゃが奇襲なればこそ得る物も多い。短時間でどれだけの物が得られるか、そこが勝負じゃな。

だが厳しい事に変わりは無い。仮にも戦国最強といわれてる武田軍団に奇襲をかけようというのだ。楽に事が進むわけが無かった。

それが分かっていても小松は決意を固める。

「ですが、やらねばならぬのですね」

「そうじゃな」

「御館様はもちろん、旦那様の為にも討ち取らないとですね」

「……後悔しておるか」

「えっ？」

閃華の質問に小松は驚きの声を上げる。

「私と契約をしなければこんな大任を受ける事も無かった。普通の女子としていられたんじゃ」

だが小松は首を横に振って閃華に笑顔を向ける。

「そんなことはありません。いいえ、それどころか感謝しているぐらいです。閃華のおかげで私は旦那様の役に立つ事が出来る。それだけで私は満足です」

「そうか」

やれやれ、どこまでも健気じゃのう。まあ、その健気さがあったから契約したんじゃがな。

一途過ぎるほど夫を思うその思い、閃華が小松を契約者として選んだ最大の理由がそれだ。そしてその思いは曲がらず折れずに小松を支えている。まあ、すぐに折れる思いなら閃華は小松を契約者として選ばなかっただろう。

そしてその思いを持っているから、閃華は小松に全てを委ねる事が出来る。

「さて、では策を披露するとしようかのう」

「お願いします」

閃華は練りこんだ策を小松に説明する。最初は静かに聞いていた

小松だが、その顔は徐々にこわばっていく。
そして閃華が全て話し終えた後でやっと口を開いた。
「本当に、それでうまくいくのですか？」
「分からん。じゃが分の悪い賭けではない、こちらにも充分勝機はある」
「……綱渡りですか」
「敵はあの信玄に武田じゃ。こっちの戦力からすればどうしてもそうなってしまうからのう」
「それにしても、精霊を一人も倒さずに措くというのは敵の手中に飛び込むのと同じではありませんか」
「手中に入らねば信玄の首は取れん。それに自ら敵の手中に入る事で刹那の勝機が生まれるんじゃ。私達はその刹那の瞬間に賭けねばならんのじゃ」
小松は目を閉じて黙り込んでしまった。閃華も目線を外して小松の出方を見る。
さて、小松はどう決断するかのう。このまま引き去るという事は無いじゃろうが、別の策を考えねばならんかのう。
そんな憂いを持った閃華に小松は静かに話しかけた。
「閃華」
「なんじゃ？」
「信玄を討った後はどうするのです？」
「それなら心配ない。信玄さえ討てば精霊は全て消えるじゃろ、じゃから後の脱出は楽なもんじゃ」
「そうですか……」
再び目を閉じる小松を閃華は笑みを浮かべながら待ち続けた。
「閃華」
「どうした」
「探索を急がせてください。いつ信玄が動くか分かりませんから」
「そんなにすぐには動かんと思うが、まあ少し催促してみよう」
「頼みます」

その場から立ち上がる閃華。小松に目を向けるとまた目を閉じて何かを考えているようだった。
決めたか小松。なら私も少しは動いてくるかのう。
閃華は静かに部屋を後にした。

そして三日後、牛の下刻。閃華達は浜松城の北西にある野田城の裏手前に潜んでいた。
辺りは闇の帳が覆い隠し、城の篝火でなんとか警備の様子が分かるぐらいだ。
そんな中で閃華と小松は息を殺しながら待っていた。
「ふむ、遅いのう」
「何かあったのでしょか？」
小松の問いかけに閃華は首を横に振る。
「仮にも徳川の乱波衆じゃ、下手な事はすまい」
「ならいいのですけど」
冬の冷たい空気が噛み付いてくる中で二人はじっと待っていた。
そして突然気配が現れると音もなく二人の前に一人の乱波が現れた。
「遅かったのう」
乱波は閃華達に頭を下げる。
「申し訳ございません」
「それで、見つかったか」
「はっ、すでに御頭（おかしら）がお待ちです」
「そうか、小松」
「ええ」
閃華と小松は顔を見合わせると乱波の案内に従って城を迂回するように歩き始める。
警備の者に見つからぬように茂みに身を隠しながら進む閃華達。
だが警備は門の所だけで後は音に気をつけて進めばいいだけだった。

そして乱波が足を止めて城の塀を示す。
「ここです」
「そうか、それで半蔵殿は？」
「すでに中におります」
「分かった。では小松、行くぞ」
「ええ」
閃華と小松は一気に茂みから飛び出すと、閃華は塀を背にして両手を腰の前で組む。そこに足を掛けて一気に塀を跳び越す小松。閃華もそのまま塀を背にして跳び、一気に塀を乗り越えて城の内側に着地する。
そこには大量の植木があり身を隠すには充分だった。
さすが半蔵殿じゃな、しっかりと侵入場所を心得ておる。
そして二人の元に人影が音も無く飛び降りてきた。
「閃華殿」
「首尾は？」
最小限の会話をする二人。半蔵は目の前の建物を指し示す。
「あの家屋の一つ向こう、そこに信玄が居る」
「分かった。では後を頼むぞ」
「承知」
半蔵は姿を消し、閃華達だけが残る。
閃華はすぐに精神を集中させると、信玄が居るであろう場所に光の柱を生み出して一気に広げる。
そして世界は青く染まる。

第五十七話　野田城潜入（後書き）

そんな訳で狂乱のフィーバータイムが続いてる私の頭。ホームページでこんな事をやってみました。それは……エレメンタルロードテナー人気投票――――！！！　ワ――――、パチパチ。……え～、何やってんだこいつは、とか思わないでください。私の頭は常に狂乱の宴なのですから。

まあ私の頭はさておき、ホームページ冬馬大社はエレメのトップにある作者紹介から行けるようにしておきました。ＰＣサイトですが一応携帯でも見られるようです。そしてホームページのアンケートに人気投票がありますので、気が向いた方は投票しておいてください。

ちなみに、人気投票に意味はありません。強いて理由を挙げるなら『やってみたかった』ということですね。それから人気投票には昇達六人と自由欄があります。お好きなキャラを書いて投票してください。もし、意外なキャラに投票されるようなら、次に出そうと手抜きな事を考えております。……まあ、そんなもんですよ。

さて、余談はここまでにして少し本編に触れますか。とりあえず読み直してて『あれ、これって忠臣蔵を思いださね？』とか思いました。……終わり！

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票、最近では投票してくれる人が増えて嬉しいです。などなどをお待ちしております。

以上、最近ではニコニコ○画のスキマツアーを聞きながら書いている葵夢幻でした。

第五十八話　信玄暗殺

「龍水方天戟」
「影潜薙刀（えいせんなぎなた）＜影に潜む薙刀＞」
精界で人間が消えた世界で閃華と小松は己の精霊武具を身につける。
小松の武器は薙刀、その出で立ちは袴にたすき掛けと防具を一切身に着けていなかった。
小松と閃華はお互いに顔を見合わせると頷き駆け出す。
青く染まった世界を閃華と小松が駆け抜ける。
「小松、分かっておるな」
「ええ、全て頭の中に入ってます」
「精界で邪魔な雑兵はすべて消えたからのう、後は半蔵殿が二重精界をどれだけ張り続ける事が出来るかじゃ」
二重精界、通常の精界は二重に張ることは出来ないのだが、特定の条件が揃えば精界を二重に張って強化する事が出来る。
その条件に必須な事は内と外に精霊が居る事。内に居る精霊は普通に精界を張り、外に居る精霊は張られた精界に力を贈り強化する。これにより外部からの攻撃に弱い精界を完全を強化して誰も入れないようにする事が出来る。
だが精界は精霊の属性が大きく影響する。だから異なる精霊が二重精界を行うときには、外で精界を強化する者に高い技術が要求される上に大きな負担が掛かる。そのため、外に居る精霊は精界維持に集中しないといけないので他の事など一切出来なくなる。
だからこの二重精界を使う者はほとんど居なくなった。そもそも精霊を二人そろえること事態が難しく、更に戦力を分散させる事になる。だったら精霊を全て投入した方が戦いは有利に進むというものだ。それに援軍が無い時にやっても遊兵を作るだけ、だから大して意味が無い。

だが今の閃華達にはもの凄く有効だった。閃華が張った精界は必要最小限の物で、精界の外には信玄の精霊たちが何人も控えているのはすでに調べがついている。

その精霊達が精界に気付けば駆けつけてくることは間違いない。そこで二重精界を張っていれば精霊達の介入を防げる。それに半蔵は仮にも徳川の乱波衆を束ねる者、見つかるような下手はしないだろう。

だがいかに半蔵でも二重精界を長時間保つ事は不可能。だから閃華達は半蔵が二重精界を維持できる短時間で信玄を仕留めければ行かなかった。

すでに信玄の寝所と周りの精霊達の情報を得ている閃華達は迷わずに野田城を駆け抜ける。

閃華は自分達に近づいてくる気配を察する。

「思っていたより早いのう、さすがは信玄じゃな抜かりない」

「数は？」

「最初に三、後に五」

「半分ですか」

「後は信玄の元に居ると思ってよいな」

現在精界内に居る信玄の精霊は十六名。これは半蔵達が調べた精霊の配置図と閃華が張ろうとした精界の範囲から割り出された数字だ。確証は無いがこの人数が精界内に居ると思っていいだろう。

更に気配が近づいてくる。

「来るぞ！」

閃華の言葉に小松にも緊張が走るが、それでも二人は駆けるスピードを緩める事はしない。

障子を突き破り左から二本、右から一本の刃が二人に襲い掛かる。だが閃華と小松はそれをうまくかわすと更に駆け続ける。

「それ以上行かせるな！」

後ろから怒鳴り声が聞こえてきた。先程襲ってきた精霊の一人だろう。そしてその言葉を合図にふすまを蹴破り閃華達の前に四人精

霊が立ち塞がる。
狭い廊下は閃華達二人が並んで走るだけのスペースしかない。そこに四人もの精霊が立ち塞がれば先程のようにかわすだけは不可能。だが閃華達は駆けるスピードを落とさない。
前に居る精霊二人がタイミングを合わせて閃華達に斬りかかる。上に跳ぶ事で攻撃をかわす閃華達。だがそれでは後ろに居る二人には良い的なのだが、この二人がそこまで甘いわけが無かった。
閃華と小松は天井を蹴ると後ろの居る二人の精霊に襲い掛かる。小松は体当たりで弾き飛ばし、閃華は体を回転させた勢いを使い蹴り飛ばした。そして二人とも着地すると後ろを振り向くことなく駆け出す。
「なにをやってる馬鹿者ども！」
更に後ろから響く叱責する怒鳴り声。だがその直後に天井が崩れ去ると巨漢の精霊が二人の前に降り立ち。手にした大剣を二人に振り下ろす。
「閃華！」
「うむ」
小松の掛け声に閃華は短く応えると再び上に跳ぶ。小松は逆に大剣を避けると、体勢を一気に低くして廊下を滑り、そのまま相手の股を滑り抜けるのと同時に足に薙刀を絡ませる。そこに巨漢の精霊を飛び越した閃華が、まだ残っている天井を足場にすると巨漢の精霊に向かって跳ぶ。そして首の後ろにある頚椎に蹴りを入れると、巨漢の精霊はバランスを崩してそのまま前に倒れた。
閃華が着地すると再び二人は走り出す。後ろに居る精霊達は巨漢の精霊が倒れた事により一時的に足止めを食らっている。
小松がちょっと後ろを振り向くと、何人かの精霊が倒れた巨漢の精霊を乗り越えて閃華達を追走し始めたところだ。
だが一時的でも足止めに成功した閃華達とはかなり距離が離れていた。
「ずいぶんとうまく行きましたね」

予想以上の成果に小松は感心するが、閃華は前を気にしながら簡単に説明する。
「実体化している精霊は人間と変わらん、じゃから人間の急所は精霊の急所でもあるんじゃ。私が蹴りを入れたのは頚椎という運動機能が集まる場所じゃ。それに足も取られておったからのう。立っているのは不可能じゃ」
「よくそんな事を知ってましたね」
「くっくっくっ、私は海の向こうにある国も周っておるからのう。そのついでに覚えただけじゃ」
海の向こうにある国はこの国よりもはるかに人体の研究が進んでいる。閃華が得た知識はそういった国を巡って得た知識だ。
使えそうな物は何でも覚えておく。それが長い時間を生きる精霊である閃華が選んだ手段だった。
閃華達は外の飛び出すと別の建物を目指して更に走り続ける。
「あそこじゃ、小松」
「ええ」
「手筈は分かっておるな」
「任せてください。閃華も後ろは頼みます」
「うむ、誰一人として通さんから信玄に集中せい」
小松が頷くと二人は戸板を蹴破り、その建物に飛び込む。
そして閃華は気配を探ると、すぐに信玄の場所が判明した。
「そっちじゃ」
閃華は指差すとすぐに駆け出す二人。だが閃華は珍しく舌打ちをした。
「どうしたのですか？」
小松が聞くと閃華は苦い顔で答える。
「数が多いようじゃ。思ってた以上に精界内に精霊が居たようじゃな」
「数は？」
「全部で十三、一つは信玄じゃろうから精霊は十二じゃ」

「四人も多いのですか」
想定外の事態だがここまで来た以上は中止には出来ない。どれだけ数が多くとも信玄の首を取らない限り二人はこの場から帰る事が出来ないのだから。
それでも閃華はあえて問う。
「やれるか？」
「やれます」
「うむ、頼もしい返事じゃな」
この場に来て動じる小松ではなかった。それどころか緊張が逆に小松の神経を鋭くする。
二人は幾つもの障子やふすまを開けて突き進む。後ろから閃華達を追っている精霊達も段々とその距離を縮めてきた時、閃華は信玄が近い事を感じ取る。
「小松、あの向こうじゃ」
閃華が目の前にあるふすまを指差すと、小松はふすまに向かって突き進み、閃華はその場で反転して追ってきた精霊達と対峙する。
そして小松はふすまを蹴破り中へと入った。

その部屋は暗く、奥にある障子から月明かりが差し込むだけだった。
部屋には幾つもの人影があるが暗いために誰が誰だか分からない。
なるほど、そういうことですか。
信玄の意図を理解する小松。そう、この暗さこそ信玄が仕組んだ罠だった。
この暗闇なら普通は身動きが出来ない。だが信玄の方は部屋の配置は頭の中に入っている。後は相手さえ捉えればいつでも斬りかかれる。
逆に小松がやぶれかぶれで突っ込んで行っても誰が信玄だか分からない以上、信玄に刃が届く事は無いだろう。その前に切り伏せら

れるのが関の山だ。
さすがは信玄公と言ったところですか。まずは信玄公を見つけないといけませんね。
小松は刃を下に薙刀を構えてから口を開く。
「お初に御意を得ます、信玄公」
「ほう、女子がよくここまで来れたな」
人影の一人が上からの物言いで返してくる。だがそれが信玄とは限らない、逆に怪しいと思うが当たりかも知れない。迷う小松は態度に出さずになんとか信玄を見つけ出そうと策を廻らす。
さて、どうしたものでしょうか。こちらから切り込めば間違いなく返り討ち、だがこのまま待っていても時間切れ、八方塞ですね。
月に雲が掛かってきたのだろう、部屋の闇が更に濃くなって行く。
……刹那の勝機が訪れるまで、待つしかありませんか。
膠着状態になる小松と信玄達。小松は微動だせずに、そして隙も見せずに信玄たちを牽制している。そんな小松に信玄を囲む精霊達は業を煮やしてきた。
「どうした、儂の首が欲しくないのか？」
人影の一人がそんな事を言って来るが小松は動こうとはしない。小松は信玄が何を待っているのかが分かっている。だからだろう、ここまで冷静さを保てるのは。
どうやら信玄公も私達と同じく時を相手にしているようですね。さて、どっちが先に時を打ち負かせるか、そこが勝負の決め所ですね。
闇の中に身を潜めるのと攻勢に打って出ないことが、その事を示している。つまり時間稼ぎ、信玄は援軍を待って確実に閃華達を屈しようとしている。
ずいぶんと手の込んだ事をしますね。ですが、それこそが油断であり、私達の勝機です。
月が更に隠れて、部屋に浮かぶ人影さえ消えて行く。こうなってくると信玄達も動けなくなってくる。

そんな時、部屋の外で追撃を掛けてきた精霊達を相手にしている閃華が小松に向かって叫ぶ。
「まずいぞ小松、外壁が崩れる！」
「二重精界か、どうりで」
対峙している精霊の一人だろう、いつまでも来ない援軍に納得をする。だがさすがに信玄の精霊、それ以上は口を開かなかった。下手に口を開いて相手に情報を漏らす愚を行わなかった。
そして閃華の言葉を聞いた小松も動じることなく膠着状態を保ち続ける。
遂に月は完全に隠れて、部屋が常闇に沈む。
その瞬間に小松は一気に動く。
「影鎖縛符（えいさばくふ）！」
小松は一気に力を解放すると闇から黒い鎖が飛び出して信玄達を全員縛り付ける。そして間髪を置かずに小松は薙刀を足元の闇に投げ込む。
白刃が部屋を舞い、閃光を残す。
それは刹那の瞬間と言っていいだろう。その一瞬で小松は信玄を倒した。
崩れ去る全ての人影。薙刀を手に戻すと小松は部屋の奥に進もうとするが、すぐに足を掴まれた。
「な、なぜ儂の居場所が、分かった」
そこは人影達から離れた光が届かない場所。信玄はそこに隠れていた。
「なるほど、確かにあの状況なら人影の誰かが信玄公だと思いますね。まさかそんな所に隠れているとは思いませんでした」
「ならば、どうやって」
「信玄公、闇はあなたの味方ではありません、私の味方です。私の能力はエレメンタルですから属性も使用できます。そして私の属性は影、故に影が勝る常闇こそ最大の味方なのです。後は闇に投げ込んだ薙刀が闇を繋ぎ、この部屋を縦横無尽に走り回ったというわけ

です」
「なるほど、な。狙わなかった、故に、儂に当たった、というわけか」
「そうですね、もし人影に狙いを定めていたら危なかったです。ですが信玄公、策を労せずに数で押したなら討ち取られていたのは私達かもしれません」
「ふっ、儂も老いた、ようだな」
「……では信玄公、その首貰います」
「させるかぁぁぁっ！」
信玄の精霊二人が小松に斬りかかる。小松の攻撃は狙って放ったものではないから、傷が浅い者が居ても不思議は無い。
だが小松は動かずに目線をそっちに送るだけだった。
「なにっ！」
斬りかかって来た精霊の一人が驚愕の声を上げる。
それも無理は無い。なにしろ刃は小松に届くことなく、手前の闇に止められているからだ。
闇はそのまま刃に絡み付き完全に動きを封じる。
「言った筈です、闇は私の味方だと。闇に包まれている私を斬るのは不可能です。故に、私は防具を身に着けていないですよ」
つまり闇と影が小松の防具だ。そして動きを制限する防具を身につけてない故に、小松は刹那の勝機を掴む事が出来た。
薙刀を振るい、精霊二人を切り伏せると今度は振るい上げる。
「信玄公、お覚悟を」
信玄は座りなおすと自らの首を叩く。
「この首、持って行きたくば持って行くがいい。だが一つ、信長に伝えてもらっていいか？」
「……受け賜ります」
「魔王の天下などこん、いずれその事をわが身で知るだろう」
「魔王なればこそ、この乱世を治める事が出来るのです」
「女子にはこの理は分からんと見える。さあ、この首を持っていく

がいい」
じっと座る信玄。長い、いや、実際には少しの間だけだったかもしれないが静寂が訪れ、小松は薙刀を振り下ろした。

明かりが灯されたその部屋は首の無い亡骸が一つと、小松しか居なかった。
「終わったようじゃな」
「ええ」
小松は信玄の首を包むと振り返って驚く。
「せ、閃華、大丈夫ですか！」
部屋に入ってきた閃華はあちこちに傷を負っており、身形もかなりボロボロになっていた。
「心配ない。あれほどの数を一人で相手にしてたんじゃ、こうなって当然じゃよ」
「……今更言うのもなんですが、よくあれほどの数を一人で捌けましたね」
「なに、攻勢に出ずに防御に徹しておれば何とかなるもんじゃよ。私の役目は足止めじゃからのう、倒そうとしなければ捌けるんじゃよ」
「それでも凄いですよ」
改めて閃華の強さに感心する小松。小松はエレメンタルの能力を使いこなす為に閃華と模擬戦をよくやっているのだが、未だに閃華に勝った事は無い。それどころか本気の閃華がどれぐらい強いかもよく分かっていなかった。
「さて、精霊達が消えたとはいえ、あまり長居したくない場所じゃからな。さっさと引き上げるとするかのう」
閃華が急かせて来たので小松は信玄の首を持つと立ち上がる。
「では、行きましょう」
「うむ」

「……あっ」
部屋を出ようとした閃華だが、小松が声を上げたので足を止める。
「どうしたんじゃ？」
尋ねると小松は閃華を指差した。
「閃華、その格好のまま行くのですか？」
「んっ、何か問題があるのか？」
改めて自分の格好を確認する閃華。八人もの精霊を相手にしていたのだから当然無傷では済まなかったが、それほど深い傷は貰わなかった。だから今では傷は綺麗に消えているのだが、精霊武具は切り裂かれたままだ。
ただでさえ足の露出が多いチャイナドレス、更にお腹の部分を切り裂かれて露出が多くなっている。
閃華はあえて切り裂かれて部分を強調するようなポーズを取る。
「なかなか色っぽいじゃろ」
「なにをバカな事を」
「くっくっくっ」
笑う閃華に小松は溜息を付いた。
この国の女性は硬いのう。いや、小松は結構いい年じゃからのう、それで説教臭くなっておるんじゃろうか。
そんな失礼な事を考えている閃華に気付く事無く、小松と閃華はこの場を後にするのだった。

閃華と小松は青く染まった世界を再び駆け抜けて、最初に潜入した場所に戻ってきた。そしてまた身を潜めると閃華は精界を壊して現実へと回帰する。
現実の野田城はかなりの騒ぎになっていた。どうやら精霊達がいきなり消えた事が騒ぎの原因らしい。
そして閃華達の元へ、音も無く人影が舞い降りる。
「半蔵殿」

「首尾は？」
「うむ、取ってきたぞ、信玄の首を」
閃華は小松から信玄の首を受け取ると、包んである布を開いて半蔵に確認させる。
「確かに」
再び信玄の首を包んだ閃華は半蔵に渡す。
「では半蔵殿、この首を家康様に、それから岐阜の御館様に届けてもらえるかのう」
「承知」
首を受け取った半蔵は音も無く姿を消す。そして残された閃華と小松。閃華はここに来てから始めて安堵の笑みを小松に向けた。
「終わったのう」
「ええ、何とか無事に」
「そうじゃな、では戻るかのう」
「ええ」
再び塀を乗り越える閃華と小松。茂みに身を隠してあたりを窺うが、城内の騒ぎでここまでは手が周る事は無かった。
そして二人は茂みの奥へと姿を消した。

第五十八話　信玄暗殺（後書き）

何処まで強いんだ閃華――――！！！　っと、思ってしまうのは私だけでしょうか。正直に告白しますと初期設定では閃華はここまで強くは無かったのですが、いつの間にか達人的な強さを手に入れていた。……実に不思議だ。

さて、今回は早めに戯言を切り上げます。

その理由として一つご報告。私のホームページである冬馬大社にエレメンタルロードテナー外伝を掲載しました。ワーパチパチ。……えっと、感想欄でもホームページの掲示板でもいいので少しだけ反応をください。さすがにちょっと寂しくなってきました。

さて、エレメの外伝ですが、昇達の日常を一話完結で書いてあります。簡単に言うとネタですね。そんな訳で久しぶりに昇達の話を書きました。なんか凄く書きやすかったです。それに比べてこの五十八話は意外と苦労しました。なにが、というわけではないのですが、なんか言葉が出てこなかった。

それから、ホームページの方は更新が不定期です。というか、これ以上定期的な更新は出来ません。そんな訳で外伝の方は気長にお待ちください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、奇跡って人が起こすから奇跡なんだよね、っと古いセリフをほざいてみる葵夢幻でした。

第五十九話　家康の器

閃華達が浜松城に帰り付いた時にはすでに夜も明けており、朝飯時も過ぎていた。
「う～ん、疲れたのう」
大きく伸びをする閃華。二人の姿は精霊武具ではなく、いつもの着物姿に戻っていた。
「さすがに眠いですね」
「そうじゃのう、じゃがその前に朝飯じゃな」
「よく食べられますね。私は今すぐに寝たいです」
「くっくっくっ、私は精霊じゃから二三日は寝ずとも活動できるんじゃ」
「……そうでしたね」
信玄暗殺という大任を果たした今、二人に掛かる重圧は無い。そのため二人はすっかりのんきになっていた。
「浜松城は海に近いからのう、大任を果たした褒美として海の幸を振舞ってくれんかのう」
「何を言ってるのですか。私達は影の任を果たしたのですよ、褒美なんて出るわけがありません。それに期待してもいけません」
どこまでも真面目な小松に閃華は笑みを浮かべながらある提案を持ちかける。
「なら帰りは、うまい海の幸を食べてから帰ろうではないか。どうじゃ、なかなかの名案じゃろ」
小松は呆れた視線を閃華に向けると大きく溜息を付いた。
「岐阜では旦那様と御館様が苦労しているのですよ。それなのに私達だけ遊ぶわけにはいきません」
「それなら大丈夫じゃ。信玄亡き今、義昭公に御館様は討てんのじゃ」
「どうしてです？」

「信玄を欠いた以上、包囲網は決定的な手を失ったんじゃ。後やっかいなのは本願寺じゃが。私達が使われたんじゃ、そっちにも誰かを回すじゃろ」

それに御館様は誰にも知らせておらん手を持っておるはずじゃ。たぶん軍師の力を持った精霊じゃろうが、よほどうまく隠しておるようでよう分からん。

閃華がそう思うのには一つの理由がある。それは桶狭間や金ヶ崎に見えるように信長は時折、神懸(かみが)かった判断を下す。それは信長の力もあるだろうが、近くに優秀な精霊がいると考えた方が腑に落ちる。

たぶんじゃが、その精霊は私達を試したんじゃろ。今回の任は、断れば己に力量を理解して使える者、無謀に突っ込んで行けば切り捨ててもよい者、そして成功させれば切り札になる者、そういう基準が引かれていたはずじゃ。

それに信玄暗殺という大任をわざわざ私達を試すために使うぐらいじゃ。私達が失敗しても良いように次の手を幾つも用意しておるじゃろ。

御館様の近くにはそのような精霊が近くに居るんじゃから、本願寺の方に手を回さないはずは無いんじゃ。

閃華がそんな考察をしていると、小松は静かに口を開いた。

「……本願寺顕如ですか」

「いや、本願寺には顕如よりもやっかいな輩がおる」

「誰ですか？」

「雑賀衆じゃ」

「……あの鉄砲大名ですか」

「うむ、織田家の鉄砲量はこの国で随一じゃろうが、その織田家に匹敵する鉄砲を持っておると言われる雑賀衆。そしてその雑賀衆を束ねる雑賀孫一、かなりやっかいな相手じゃ」

「ですが、雑賀衆は地方の土豪に過ぎません。そんな人達が御館様の脅威になるとは思えないのですが」

「じゃが雑賀衆は謎が多い。私にはそのことが気になってしかたないんじゃが」

「そう、なのですか」

雑賀衆の頭領は皆「孫一」と名乗るの、それはこの国では珍しくない事じゃが、孫一というのはどうも見えてこんのじゃ。どうも頭領の名……では済ませられぬ物があっても不思議ではないのう。

「ということは、次に行くのは雑賀ですか？」

「いや、それはないじゃろ」

「どうしてですか？」

「私達が武田に向けられたぐらいじゃ。雑賀にも誰かが行っておるじゃろ」

「そうでしょうか」

「うむ、今御館様を囲っている包囲網じゃが、武田と本願寺さえ止められれば突破が出来るんじゃ。朝倉はすでに兵を引き上げたんじゃ、残された浅井だけでは御館様は止められんじゃろ。後は畿内の三好六角を討って終わりじゃ。そして武田が止まったこの好機、みすみす見逃すはずが無いじゃろ」

「確かに、この浜松城から紀州の雑賀までは距離があります。私達を呼び返すよりは他の者を行かせた方が早いですね」

「そういう事じゃ。じゃから私達の出番は終わりじゃ、じゃからゆっくり帰ろうではないか」

「……しかたないですね」

「くっくっくっ、この辺は何がうまいんじゃろうな」

話題は浜松城がある遠江（とうとうみ）の幸に切り替わり、閃華達は部屋へと戻って行った。

「お待ちしておりました」

部屋に戻っていた閃華達を待っていた者は、徳川家の女中であった。

女中は二人が入ってくるなり、平伏して二人を迎え入れた。
「そなたは？」
小松が聞くと女中は自分の姓名を名乗った後で、家康が閃華達を呼んでいる事を伝えてきた。
「家康様が、私達に会われたいと？」
「はい、御館様直々にお二人の功を称えたいと申しております」
「めんどうじゃのう」
「閃華！」
閃華にしてみれば正直後にして欲しかった。それは家康の狙いが閃華に分かっていたからだが、小松にしてみれば家康からの呼び出しを断れるはずも無かった。
「分かりました、行きましょう。閃華もそれで良いですね」
「しかたないのう。まあ、悪い呼び出しではないからいいじゃろ」
女中は再び平伏すると礼を言ってから二人の案内に立った。
浜松城内を進む閃華達。実は閃華達が堂々と浜松城内を歩く事はこれが始めてである。閃華達はあくまでも隠密扱い、浜松城に着いてからもすぐにその存在を隠されて普通に接触できたのは半蔵だけであった。
そんな二人に家康が直々に会うのだから、これはかなり異例な事であった。
そして家康が待つ部屋に着いたのだろう、女中は跪くと中に声を掛けて、返事が返ってきて後に障子を開けた。
小松と閃華が中に入ると障子は静かに閉まった。部屋の中には狸のようなオヤジが一人、閃華達が入ってくると呼び寄せた。
これが徳川殿じゃな。
家康の前に座ると閃華達は平伏する。家康はすぐに優しい声で頭を上げるように言ったので、閃華達は頭を上げて家康と向き合う。
「小松殿、此度の大任を良くぞ果たされた。本来ならこの家康が決着を付けねばならぬのだが、三方ヶ原で多くの忠臣を失ってしまった。亡き忠臣の敵を討ってくれた事、この家康心からお礼申し上げ

ます」
頭を下げる家康。小松は慌てて平伏したので、閃華も小松に合わせて頭を下げる。
「勿体無いお言葉です。家康様にそのようなお言葉を頂けるとは身に余る光栄、どうか、頭をお上げください」
小松としては、まさか家康から直々に礼を言われるなんて思ってもみなかったことだが、閃華は家康の出方に感心していた。
ほう、まさかここまで謙虚に出てくるとはのう、これで小松の心は懐柔されたも同じじゃな。
その後も家康は下手に出ながら小松の功を称え、そして労った。自分達の協力を一切出さずに全てを小松の功として称えたのだ。
そんな展開になれば小松も家康の協力があったからと言わざる得ない。いや、本人が意識しなくても勝手に口にするだろう。そして自分が口にした事と言うのは、意外と心に残る物だ。
これで小松の口からは家康の悪口は出んじゃろう。もちろん御館様に報告する時も、家康の協力があったからこそと付け加えるじゃろう。うまいのう、小松の功を半分攫いおった。
小松の口から言わせることで、小松に自分の功を認めさせる。そして家康は何度も続ける事で小松に印象付けて決定的なものにさせる。なかなか見事な懐柔策であった。
だが後ろで小松と家康の会話を聞いている閃華はさすがに飽きてきた。まあ閃華としては、ここで小松が家康の良い様に懐柔されても別に構わなかった。それで小松に害が及ぶわけではないし、小松にもちゃんと功績が残る。
確かにこれで一番得をするのは家康だが、それでも三方ヶ原を帳消しにするだけでそれ以上の手は打ってこなかった。
欲張らないからこそ、家康は確実に自分を高めていけたのかもしれない。
それにしても、そろそろ終わりにしてくれんかのう。
家康が何がしたいかを分かっているからこそ、閃華は飽きてきた。

家康の株を上げる為だけにある場、そんなのに付き合いたくない閃華は適当に視線を泳がせて遊ぶ。

……んっ、なんじゃあの掛け軸は？

そして閃華の目に映ったもの、それは家康の後ろにある掛け軸。そこに描かれているのは、しかめっ面で座る変なオヤジ。どうみても芸術性を感じられない物だ。

なんでそんな物があるかは分からないが、見てると少し笑える絵だ。だからだろう、閃華の頬も自然と少し緩む。

そんな閃華に気付いたのだろう、家康が閃華に目を向けたので小松も振り返る。

「閃華と申したな、この絵が気になるか？」

「えっ、いや」

絵に見入ってた閃華は慌てて言い繕って顔を伏せる。そんな閃華に小松は不思議そうな顔をするが、閃華が見ていた物を見つけるとやはり頬が少し緩んだ。

「ずいぶんと面白い絵でございますね」

「これか」

家康は立ち上がると絵の横に立つ。

「笑える絵であろう」

「ええ」

素直に答える小松に家康も笑顔で返す。

「これはな……儂を描いたものだ」

「えっ！」

思ってもみなかった事に小松は驚き、慌てて頭を下げて謝った。

「申し訳ございません、無礼な事を申しました」

「いや、構わんよ。これは人に笑われる為に描いたものだからな」

小松が顔を上げると家康は笑顔を返す。どうやら先程の事は家康のいたずらだったらしい。そして小松が不思議そうな顔になると、家康は絵の方へ向いて説明を始めた。

「これは三方ヶ原かたった一人で帰ってきた後、すぐに描かせた物

だ。数多の忠臣を失い、命辛々たった一人で浜松城に帰り付いた時のなんと無様な事か。その屈辱、そして忠臣達が儂に託した思い、それを忘れぬために儂はこの絵を描かせて生涯傍に置いておくつもりだ」

真剣な顔で語る家康。その話は小松の心を強く打ったのだろう、両手を付いて口を開く。

「ご立派なお心がけです。それだけでも亡き忠臣達は浮かばれるというものです」

「そうだと良いのだがな」

再び笑顔となった家康は元の位置に座った。

なるほどのう、あの御館様が徳川殿との関係を重視するわけじゃ。閃華はこの時初めて、家康が持つ器の全貌を見た気がする。

まだまだ未成熟じゃが、大きさで言えば御館様と変わりないようじゃ。もし御館様がおらんかったら家康殿が天下を取るじゃろうな。なんとも、人の世というのは分からんものじゃのう。

信長と家康、同じく天下を治める器量を持ちながら二人の気質は大きく違っている。信長は早くからその気質を表し始めた。始めはうつけと認められなかったが、今では天下に向けて疾走している。逆に家康の気質は未だに定まっていないと言えるだろう。だからこそ、今でも進化し続けることが出来る。

後の世では、信長は乱世の雄と治世の王を併せ持ち、家康は治世の王のみを持っていると言われているが、それはちょっと違うのではないかと思う。

信長、秀吉を経て時勢は納まりつつあった。だから家康は乱世の雄を捨てたのではないだろうか。確かに関が原では家康の雄が目立つが、その後の大阪の陣では随分とお粗末ではないだろうか。

まず大阪の陣で皮切りとなった方広寺（ほうこうじ）の鐘。この鐘に刻まれた言葉が家康を呪い殺すものだと因縁をつけている。これでは大義名分があったものではない、どう見ても無理矢理因縁をつけたとしか思えない。

そして大阪夏の陣、これには三日分の兵糧しか持って行かなかったという。

とてもではないが関が原で勝った人物とは思えない。だがこう考えれば納得が行くのではないか。関が原以降、家康は戦を戦とは思っていなかった。そして家康は晩年でも進化をし続けた。

天下分け目と言われた関が原、それ以降の豊臣は家康の敵にすら成り得なかった。だから家康は乱世の雄を捨てて治世に専念したのではないだろうか。と、勝手な事を思ったりもします。

閑話休題（かんわきゅうだい）。

絵の話しになって話題が途切れたのだろう、家康は座り直すと閃華にとっては嬉しい事を言って来た。

「信玄暗殺という大任を負ってた以上、そなた達の存在を隠してきたが、大願成就の今は隠す理由など無い。これからは織田家の客人として持て成そう。実はな、新たに部屋を用意しておいた。そこに遠江の幸が並んでいるはずだ。じっくりと疲れを癒すが良い」

ほう、これはこれは。

思わぬ言葉に閃華は感心するのと同時に小松と一緒に頭を下げた。

「過分な待遇、恐悦至極に存じます」

「じっくりと疲れを癒してから岐阜に戻ると良いだろ」

「……ではお言葉に甘えさせてもらいます」

家康が外に声を掛けると静かに障子が開き、一人の女中が姿を現して閃華達を案内するように申し付けた。

閃華達は家康に丁重に礼を言った後、その場を後にする。

そして新たに案内された部屋、そこにはこれでもかというぐらい海の幸をふんだんに使った料理が並べられていた。

「ほう、これは凄いのう」

料理に感心する閃華、女中は更に閃華が喜ぶ事を言って来た。
「お酒もあちらにご用意しておりますので、ご存分にお飲みくださ
い」
「ほう、それはありがたいのう」
「閃華」
「今日ぐらいよいではないか。折角徳川様がご用意してくださった
ものだ、手付かずでは罰が当たるというものじゃ」
「はぁ、しかたないですね」
「今日ぐらい小松もどうじゃ」
「結構です」
「くっくっくっ」
閃華達は海の幸を存分に味わった後で眠りに付いた。さすがに疲
れが残っていたのだろう。小松は翌朝まで目を覚まさなかった。
それから三日、閃華達は存分に家康の好意に甘えた後、浜松城を
後にして岐阜へと戻って行った。

第五十九話　家康の器（後書き）

……なんか、途中真面目に語ってしまった。さすがに時代物となるとそんな気持ちになってしまいます。恐るべき時代物。

さて、そんな訳で途中変な事を語ってしまいましたが、エレメにはこんなのいらねえよ、と思う方いらっしゃったらご一報ください。以後エレメでは控えようと思います。そして何もご意見が無い場合は、いつものように好き勝手やろうと思います。

さてさて、気が付けば五十九話……長いですね。しかも！　閃華の話はまだ続きます。……なんか、まだまだ話数を使いそうです。まあ、純情不倶戴天編は閃華の過去にまつわる話がメインだから良いのかな、とも思ったりなんかりしちゃったりしちゃってます。

ニコチ――――――ン！！！　はっ！　しまった、手元にタバコが無いからつい叫んでしまった。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれかもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票もお待ちしております。

以上、とあるオークションサイトで虎徹の脇差を見て欲しいと思ったが、すでに百万以上の値が付いていたことに凄く驚いた葵夢幻でした。

第六十話　長篠へ

岐阜への帰り道、閃華達はわざわざ海沿いの道を選んで三河、尾張へと抜けてから岐阜へと入った。

この道は遠回りなのだが、わざわざこの道を選んだ理由はただ一つ。海の幸を満喫するためだ。

大任を果たした閃華達にもう緊張感は無いが、大任を果たした開放感は大いにあった。

それに岐阜への連絡は半蔵達、徳川の乱波衆が走ってくれている事になっていたので急ぐ必要は無い。更に家康から褒美としてかなりの路銀が送られてきたものだから、小松が閃華のわがままに付き合うことになった。

結局、二人が岐阜に帰りついたのは空気が暖かくなり始めた頃だった。

「懐かしいか？」

「そうですね、少し」

数ヶ月ぶりに見る我が家の前に立って、小松はやっとここに帰ってきた事を実感する。

まあ普段は家の留守を預かる側じゃからな、懐かしく思うのも無理は無いじゃろ。

感慨にふける小松を閃華が隣で見守っていると家から誰か出てきた。

「奥方様！」

それは林家に仕える下女。下女は閃華達の姿を見つけると駆け寄ってきた。

「奥方様……よくぞご無事で」

「ただいま戻りました。何か変わったことはありましたか？」

小松が聞くと下女は涙目になりながら嬉しそうに答える。

「それが聞いてください奥方様、奥方様のご活躍には御館様も大い

にお喜びで、旦那様に奥方様が帰ったら大いに尽くしてやれと、直々のお言葉を貰ったそうですよ。それに旦那様も奥方様のおかげで再び以前のような威厳を取り戻されたようです」

よっぽど嬉しいのか一気に捲くし立てる下女。その言葉を小松も嬉しそうに聞いていた。

さて、これで旦那様のお株が上がったわけじゃが。……なんじゃろうな、何か引っ掛かっているような気がするんじゃが。

心を過ぎる一抹の不安、閃華はその正体を探ろうと考え始めるが、急に下女が閃華の腕を引っ張った。

「さあさあ、閃華様もそんな所に突っ立っていないでお上がりくださいい」

玄関に目を向けると小松はすでに家の中にいた。閃華はしかたなく思考を中断させると懐かしい家へと入って行く。

「う～ん、やはりここが一番落ち着くのう」

「閃華、はしたないですよ」

「帰って来た時ぐらい大目に見て欲しいもんじゃな」

閃華は部屋に寝転がると両手両足を思いっきり伸ばした。その様子を小松は呆れ半分、笑い半分で見ている。

そこへお茶を持って入ってくる下女。閃華は勢い良く起き上がると下女に尋ねた。

「そういえば、私達の事は話題になっておるのか？」

「いえ、硬く口止めされていますので。ですが織田家のご重臣で知らない者はいないと思います」

「そうか」

つまり口には出さぬが皆知っていると思って良いじゃろうな。

閃華達の功績は決して表に出してはいけない物。だけど、その功績は誰もが知りうる事が出来た物だ。

私達の功績は誰もが認めるものじゃろう。じゃからだろう、どう

も心配でならん。
　下女が下がると閃華は小松に目を向ける。小松は上機嫌でお茶をすすっていた。そんな小松に閃華は真剣な面持ちで話しかける。
「小松、今回の事をどう思う？」
「どう、とは？」
「今回の功績をどう思っておるかじゃ」
「良かったのではありませんか。旦那様も自信を取り戻したようで、また織田家の筆頭家老としてやっていけるでしょう」
「じゃが、今回の功績はあまりにも大きすぎるのではないのか。これほどの功績を旦那様は手に入れたんじゃ。疎む者も出てこよう」
「道勝は織田家の中でも筆頭に立つ家老です。そのような者が居ようと旦那様ならどうとでも出来ます」
「そうじゃろうか？」
「そうですよ、閃華がウチに来る前は旦那様も立派に責務を全うされておりました。ですが御館様、柴田殿、ひいてはあの秀吉まで精霊を手に入れたので焦っておいでだったのでしょう。だから空回りもしておりましたが、今回の事で全てが元に戻るのですよ」
「……そうだと良いんじゃがな」
　なんじゃろうな、何かが引っ掛かっておるような、そんな気がするんじゃが。
　考え込む閃華に小松は笑いかける。
「大丈夫ですよ、閃華が思っているほど旦那様は弱くはありません。だから下手な杞憂は疲れるだけですよ」
「……そうじゃな」
　いくら考えても答えなど出てこない。そのことが閃華に杞憂だと思わせたのだろう。
　そして先程とは別の下女が部屋に顔を出した。
「奥方様、閃華様、お食事の用意が出来ましたのでお出で下さりませ」
「食事？」

「はい、旦那様の言い付けで奥方様がお帰りの際には、予てより用意しておいた物を出せといわれております」
顔を見合わせる小松と閃華。とりあえず二人は食事が用意されているという部屋に行く事にした。

「ほう、随分と凄いのう」
部屋に入るなり閃華はそんな言葉を口にする。
「これは？」
「はい、奥方様に召し上がってもらおうと各地より取り寄せた物でございます」
そこには小松と閃華の二人分、各地から取り寄せて贅を尽くした食事が並べられていた。
「誰がこのような事を？」
「旦那様の命にございます」
「くっくっくっ、しかたないのう。どうするんじゃ小松、まさか捨てるわけにも行くまい」
「本当にしかたない旦那様ですね」
もう笑うしかない小松は笑顔を閃華に向ける。
これだけの食材を揃えたのだから安いはずが無い。一体どれだけのお金を掛けたのか、普段ならそのことを考えただけで目眩がしそうなのだが、この時ばかりは呆れるのを通り越して小松は自然と笑った。
「では頂くとするかのう」
「そうですね、今は旦那様の行為に甘えましょう」
食事の席に着く小松と閃華。しかも酒まで用意してあるようで、二人はそのまま宴会気分に突入して行った。

道勝が帰ってきたのは日が暮れてすぐにだった。

二人が帰ってきた事を知った道勝は、すぐさま二人が居る部屋へと駆け出した。大きな足音を立てながら、二人が居る部屋の障子を勢いよく開ける道勝。

「あっ、旦那様、おかえりなさいませ」

多少ろれつが回らず、フラつきながら小松は道勝を迎え入れた。そして閃華に至ってはもう何を言っているのか聞き取れなかった。どうやら二人ともかなり酒が入っているようだ。

そんな事をまったく気にせずに、道勝は刀を置くと二人の間に座り小松の手を取る。

「小松、ようやってくれた。御館様も大喜びで儂にお褒めの言葉を下さるぐらいだ。おかげで儂の一文も立った。小松、ありがとう」

小松の膝に尽く位、頭を下げた道勝。小松はそんな道勝を優しく起き上がらせる。

「旦那様、私が林家に嫁いできてから長い事になりますが、初めて旦那様のお役に立てて私は嬉しく思います」

「小松」

道勝はもう一度小松に頭を下げると、今度は閃華の方に向く。

「閃華、そなたが来てくれたおかげで儂はようやっと、柴田やサル如きに負けない功を治めることが出来た。全ては閃華が来てくれたおかげだ。礼を言う」

閃華にも頭を下げる道勝。そんな道勝に閃華は笑って答える。

「くっくっくっ、私も小松と契約したおかげで面白い経験が出来た。礼を言うのはこっちの方じゃ」

閃華としても満足しすぎるほどの事をしたのだから文句は無かった。

武田という最強の敵を下して、織田が天下へと向かう道を切り開いた。それは正しく歴史が動いた事を意味していた。

そして歴史を動かしたという実感が、閃華をこれ以上無く満足させていた。

それでも裏の仕事、決して評価されるわけではない。そして道勝

にはそんな閃華の心はよく分かっていないのだろう。
道勝は大声で人を呼ぶと下女の一人が部屋に入ってきた。
「お呼びでしょうか」
「うむ、確か最近手に入れた銘酒が有っただろう。それを持ってきてくれ」
「かしこまりました」
下女はすぐに酒を持ってきて、道勝は自らそれを受け取ると閃華の元に行く。
「儂にはこんな物しか出せんが閃華、飲んでくれ」
自ら酌をする道勝、閃華も杯を差し出す。
やれやれ、ここまで気を使わなくても良いんじゃがのう。じゃがせっかくじゃからのう、ありがたく飲ませてもらうかのう。
「今夜は無礼講で行こうではないか、閃華、思う存分飲んで食ってくれ」
再び宴会モードに突入する。道勝も大いに飲んで、そのうえ舞まで舞うというはしゃぎよう。おかげで閃華と小松は大いに楽しむことが出来た。

「まっ、こうなる事は分かっていたがのう」
「よほど御館様に褒められたのが嬉しかったのでしょう」
小松の膝上で静かに寝息を立てる道勝。そんな道勝を小松は優しい眼差しで見ている。
閃華は持ってきた布団を道勝に掛けてやると、再び徳利を手にする。
「まだ飲む気ですか？」
「今夜ぐらい良いじゃろう。せっかく旦那様がいろいろと出してきてくれたんじゃからのう」
だが閃華の周りには空になった徳利が数え切れないほど転がっている。空の徳利に囲まれながら、更に空の徳利を作り出す閃華に小

松は溜息をついた。
　静かに酒を飲む閃華、小松はしばらくそんな閃華を見ていたが急にこれからの事を話し始めた。
「これから御館様は、どうするおつもりでしょう？」
「まずは北の浅井朝倉じゃな。姉川では叩けんかったからのう、今度こそ本気で叩き潰しに行くじゃろう。それから一向宗じゃな」
「ですが一向宗の多くは民百姓、そのような者を相手に御館様はどういう手段を取るおつもりでしょうか？」
「そんなの決まっておるじゃろう」
　閃華は手にした杯を置くと真面目な顔を小松に向ける。
「御館様は天下布武を唱えておるんじゃ、相手が民百姓でも同じじゃろう」
「やはり閃華もそう思いますか」
　天下布武、天下に武を布き収めるという信長の思想、要するに武力で全てを従わそうという考えである。それは戦国乱世を収めるには最も適しているのかもしれないが、人々の心に恐怖を植えつけるのも確かだった。
　御館様の考えは完璧すぎるんじゃな。じゃからそれを理解できぬ者をおれば、受け入れられない者もおる。御館様はそこを理解しておられるのじゃろうか。もし、理解せずに強行していけば命取りになるかもしれんというのに。
　それは閃華が前から感じている事だった。信長のやり方は確かに社会全体を上から見れば正しいやり方かもしれない。けど、下に居る者がそれを理解してるかどうかは怪しい。だからもし、織田家が崩れる事になるなら下からの反乱だろうと閃華は思っている。
　下をどう押さえるかじゃな。そこをしくじらねば織田家は天下を取れるじゃろうが、下手に恐怖心を抱かれては反乱を招くだけじゃな。
　この閃華の懸念は最悪の形で当たる事になってしまった。

天正元年、ここから信長は再び疾走を始めるが、人によってはこれが暴走にも見えただろう。

まずは閃華の予想と反して信長が行った事は、北へ攻め込むのではなく、扇動する者を叩く事だった。各国の大名を扇動して信長包囲網を作り上げた人物、足利義昭その人であった。

信長は兵を率いて二条城に取り囲み、遂に義昭を追放してしまった。これにより足利幕府はその幕を閉じた。

そして次は浅井朝倉。信長は一乗谷の朝倉に攻め込み、朝倉当主である朝倉義景は遂に自刃して果ててしまった。信長はそのまま兵を翻して次は小谷城を包囲する。ここでは羽柴秀吉の活躍により、信長の妹であるお市の方は助け出された。その後、浅井長政は自刃、浅井家は滅びその領地は秀吉の物となった。

更に時は過ぎて翌年、天正二年。これは閃華も予想していたとおり、本願寺勢が再び兵を上げた。一時は勢いを弱めていた一向宗であったが、再び勢いを取り戻したのだった。もちろん、一向宗を弱めたのは信長の影に居る精霊であっただろう。

そしてその年の七月、信長は一向一揆鎮圧のために兵を挙げる。そして九月、家臣一同が驚愕する命が下されるのだった。

それは伊勢長島焼き討ち。伊勢長島には女子供も居る、そのような場所を焼き討ちにするにだから誰もがその耳を疑った。こうして伊勢長島に火は放たれて、合計二万人近くの者が焼け死んだ。

この報を聞いた閃華もさすがに驚いたが、信長がやりたい事も分かった。

これは見せしめじゃな。一向宗などという物を信じて戦ってもこうなるだけだと、御館様はそれを示されたんじゃろう。じゃが御館様、人の信仰という物は根が深いものじゃ。そう簡単に拭い去れぬじゃろう、時代が荒れれば荒れるほどにじゃな。

閃華が思ったとおりだった。一向宗はその勢いを弱めるどころか、その気運を高めていくのだった。

更に翌年、天正三年。再び武田が動いた。
信玄亡き後を継いだ勝頼が長篠城を攻め取った。この報告を聞いた信長はすぐに出陣の準備を開始する。だがその準備の段階からこの戦いが特別な物だと物語っていた。
まずは数多く集められた鉄砲、至る所から引っかき集めた鉄砲三〇〇〇丁。それから、精霊と契約者、更に布にくるまれた大岩のような物。合計一六〇〇〇兵が長篠に向けて出陣した。
そして五月、織田軍は徳川軍と合流して長篠の西方、設楽原に陣を張り武田軍を待ち構える。
その陣中には閃華と小松の姿があった。
目の前で組まれる巨大な馬防柵、その光景を見ながら閃華はのんきにお茶をすすっていた。
「あなたも少しは働いたらどうですか」
握り飯を閃華に持ってきた小松がそんな事を言って来た。だが閃華は胸を張って反論する。
「私は何も命令を受けておらんからのう。じゃからこうやってのんきにしておるんじゃ」
「胸を張って言わないでください」
閃華の隣に座った小松が大きく溜息をつく。
ただでさえ女性が居ない織田陣中で女性が二人、特に閃華などはよく目立っていた。それに小松などは進んで飯炊きなどをやるものだから、兵士達からは随分とありがたられている。
だが閃華は何一つとして働こうとはしなかった。
「皆一生懸命にやっているのですから、閃華も少しは動きなさい」
「お断りじゃ。ここに居るだけで被害を受けておるというのに、そのうえ働けなど酷な話ではないか」
小松は返す言葉も無く、しかたなく溜息をつく。
精霊というのは男女に関係なく、その容姿は整っており美しい。

もちろん閃華も例外ではない。多少幼いとはいえ美しい女性がこんなむさい連中の中にいるのだから言い寄ってくる者も出てくる。
　もちろん閃華はそういう連中を重症にならない程度に叩きのめしている。だがそういう連中はなかなか後を絶たないもんだから、閃華はいい加減にうんざりしてきた。
「まったく、いい加減にして欲しいものじゃな」
「若い方もおらっしゃいますから、しかたないのでしょう」
「言葉だけで来るならまだしも、中には力づくで来る者もおるからのう。困ったものじゃ」
「なんとまあ」
「まあ、そういう連中は首だけ出して埋めてやったがのう」
「何をしてるんですか」
「女に力づくで迫るとは万死に当たる行為じゃ。じゃからそれぐらい当然じゃろう」
「その方々はどうしたのですか？」
「知らん」
「知らないって」
「埋めた時は思いっきり笑えたんじゃがな、最近では飽きてきたのう」
「……もう好きにしてください」
　呆れた顔のまま握り飯を手に取って口に運ぶ小松、その隣で閃華も昼食に入った。
　それからしばらくして、小松がじっと何かを見ているのに気付いた閃華は声を掛ける。
「どうしたんじゃ？」
「いえ、前々から気になっていたのですが。あの布が掛けられ物はなんなのでしょう？」
　小松が指差したのは、作業の邪魔にならないように馬防柵から少し遠のいたところにある、布で隠されている大岩のような物。閃華もそれを見て首をかしげる。

「さあのう、どうやら御館様が用意した物みたいじゃが。誰も詳しい事は聞いておらんそうじゃ」
「そうなの、ですか」
誰も知らないというもの妙であるが、信長がわざわざ長篠に持ってきた物だから、それなりの意味があるのだろう。
小松は昼食を終えると戻って行き、閃華はまたそこで暖かい日差しを浴びながら日向ごっこを始めた。

そして遂に武田軍は長篠城を出て設楽原に向かった。そして五月二十一日、晴天の中で両軍は激突する事になる。

第六十話　長篠へ（後書き）

さて、いつ間にやら六十話です。……もっと早く閃華の過去が終わるはずだったのに、いつの間にやらかなり長くなっています。というか、いつになったら現代に帰れるのだろう。そんな事を思ったりもします。

いや、書いている分には楽しいのですけどね。現代ファンタジーでここまで時代小説のような事を書いていいのだろうか、とそんな事を思ったりなんかしたりしたんです。

背中痛い――――！！！　いや、ちょっと痛みを感じたので短く叫んでみました。最近姿勢が悪いのか変な所が痛み出しました。そこでやったのがたすきがけ、これで姿勢改善と思ったのですが、よほど姿勢が悪かったようで背中が痛いです。皆さんも姿勢には気をつけてください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、ようやく社会復帰し始めた葵夢幻でした。

第六十一話　長篠兵器戦

長篠での戦いは小競り合いから始まった。
両軍とも様子見で一軍を当てたのだろう。だから早朝から始まった戦いも、この時点では目立った被害は出ていない。
更に小競り合いは続き、とうとう昼になってしまった。
閃華と小松も昼食を取っていたが、終えた直後に信長からの呼び出しが掛かった。
呼び出される理由は何一つ思い当たらないが、とりあえず二人は信長が居る本陣へと向う。

そして本陣、足軽が二人の到着を告げると閃華と小松は織田家の重臣が揃っている中に進み出て膝を付いた。
「来たか」
信長はそれだけ言うと二人の元に自ら進み出て、追い越していった。そして後ろを振り向かずに二人に向かって言葉を掛ける。
「閃華、小松、着いて来い」
思わず顔を見合わせる閃華と小松。そして織田家の重臣達も驚くばかり、だが信長はそんな周りに構わずにさっさと本陣を出てしまった。
やれやれ、相変わらず困ったお方じゃな。
閃華は小松と目を合わせると頷き、二人は重臣の方々に一礼だけして信長の後を追った。
さて、御館様は何処に行ったんじゃろうな？
閃華達が本陣を出た頃には信長は遥か前、馬防策がよく見える位置に居た。急いで信長の元へ向かう閃華と小松。信長の傍で影のように居る森蘭丸に挨拶だけしてから信長に話しかける閃華。そんな閃華に信長は例の布がかかった物を指し示した。

「閃華、あれがなんだか分かるか？」
「いえ、私には……」
まあ、隠してある物を当てろと言われても難しいじゃろう。
確かにそのとおりなのだが、一応織田家の家臣としてそれなりの態度で応じる閃華。そんな閃華に信長は更に聞いてきた。
「閃華、そなたはこの国に来る前、海の向こうにある国に居たそうだな」
「はっ、大陸はもちろんポルトガルに居た事もあります」
「では、あちらの事にも詳しいのだろう？」
「多少の見聞は得ています」
「そうか。ときに閃華、武田はこれからどう動くと思う？」
「武田は騎馬を得意としております。恐れながらこの程度の馬防柵なら突破できるでしょう。そうなれば」
「そうはならん」
閃華の言葉を遮り信長は断言する。そして初めて閃華に振り返ると笑みを見せた。
んっ、なんじゃ、この御館様の笑みは、まるで子供のようじゃな。
信長の笑みにそんな事を思う閃華。それは今まで閃華が信長に抱いていたイメージとはまるで違うものを連想させるものだった。
そして閃華はその笑みが物語るものをすぐに察した。
そうか、御館様は新たな事をしようとしてるんじゃな。まるで新しい玩具を与えられた子供のようじゃ。くっくっくっ、男というものはいつまでも子供というそうじゃが、こういう所から来てるんじゃろうな。
だが閃華は気付いていなかった。その笑みが印すもう一つの意味を。
まるで子供のような笑みを浮かべている信長だが、一人の足軽が慌しく信長の元に来るといつもの威厳のある顔つきに戻った。
「どうした？」
信長が聞くと足軽は一気に喋る。

「武田の本隊が動き始めました！　騎馬を前面に出して突撃態勢に入っております。その数およそ五〇〇〇、我が方に向けて進軍中。指示を仰ぎたいとのことです」
「道勝めは慌てふためいておるようだな。サルに鉄砲隊の指揮を取るように言え、すぐに馬防柵に前に鉄砲を並べよ」
「はっ」
本陣に走っていく足軽を見送った閃華はすぐに進言した。
「御館様、今はこのように快晴ですが今は雨季、いつ雨が降るかは分かりません。あまり鉄砲に頼らぬよう」
「閃華、そのためにそなたを呼んのが分からぬか」
「……なるほど、私の事はすでにお調べになっているのですね」
「ふっ、近くに精霊の事は把握しておけとうるさく言うものが居るのでな、そなたの事も充分に知って居るというわけだ」
「恐れ入りました。では」
立ち上がりその場を後にしようとする閃華、小松も慌てて後を追って、そんな二人に信長は声を掛けた。
「終えたらまた戻って来い。面白い物をみせてやろうぞ」
「はっ」
その場で返答する閃華、小松も慌てて信長に一礼すると閃華の後を追った。

閃華は人気が無い広場へと向かい、その途中で小松が話しかけてきた。
「一体何をするつもりなのですか？　御館様は閃華に何かの命を下したようですけど、私には何がなにやら？」
ワケが分からないという顔をしている小松に閃華は一から説明する。
「小松、属性については覚えておるな？」
「ええ、充分に分かっています」

「では、私の属性はなんじゃ」
「水です。それが何か？」
「では鉄砲の弱点はなんじゃ？」
「そうですね……先程閃華が進言したとおり雨ですか？」
「そうじゃ、鉄砲は雨で火縄が消えてしまっては撃てんからのう。火縄に火がともっておるから撃てるんじゃ」
「それで？」
「うむ、それに今は雨季じゃ。いつ雨になってもおかしくは無い。そこで問題じゃ、雨とはなんじゃ」
「それは……水ですよね」
「そうじゃ、空気中の水が集まって振ってくるんじゃ。そこで、私の役目はなんじゃろうな？」
「……雨を防げと」
「正解じゃ。長篠から水を遠ざけて雨を降らせないようにする。御館様も精霊の使い方がうまいのう」
属性を持っている以上、属性に順ずるものを操る事が出来る。それは精霊が属性の結晶体であり、属性そのものと言っていいからだ。
水の属性を持つ水の精霊である閃華は水を操る事が出来る。操る範囲や量は精霊の能力で変わってくるが、閃華の力なら空気中の水分を長篠からほとんど無くす事が出来る。
つまり、閃華がやるべき事は空気中の水分を長篠から遠ざけて乾燥状態にすることだ。そうれば……。
「なるほど、雨が降らなければ鉄砲の力を充分発揮する事が出来る。それが御館様の狙いですか」
「まあ、それだけではないみたいじゃがのう」
「というと？」
「先程、御館様が私に聞いてきたものじゃ」
未だにそれがなんなのか分からないが、それが信長の切り札である事は推測できた。あれがあれば武田の突撃も食い止められるものだろう。だがそれがなんなのかは、いまいち見えてこない。

う～ん、そう言えば御館様は海の向こうについて話したのう。という事は、あれはこの国で生まれたものではないんじゃな。確かに海の向こうからも精霊が多く入ってきとるからのう、そういう技術が持ち込まれても不思議は無いんじゃが。あの武田を防げるものじゃからのう、相当力がある物のはずなんじゃが……ダメじゃな、まったく思いつかん。

それでも後になれば分かるだろうと閃華は思考を中断させる。

そうこうしているうちに閃華達は目的の場所に到着。そこはかなり開けており、周りには誰も居ない、閃華達だけだ。

「さて、では始めるとしようかのう」

閃華は小松を遠ざけると精神を集中させる。

まずは長篠になる水を支配下におかんとな。

閃華が力を放出させると大きく広がり、織田陣営はともかく武田の所までその力の範囲を広げていった。

気付かれるじゃろうが良いじゃろう。さて、後は水を支配下においてじゃな。

閃華の力に呼応するように、人の目には見えない水が震えて閃華の支配下に入る。そして力の範囲にある水が全て閃華の支配下に入り、長篠にある全ての水分が閃華の思いのままになった。

ではいくか。

今度は力を一気に弾く。力に呼応した水分も力と共に弾かれて行き、それは連鎖して次々と弾かれて一陣の風となった。

強風が長篠に巻き起こった後、風はぴたりと止んで小松はなんだかすっきりした気分になった。

「なんだか、心地よいですね」

先程との空気とはまるで違い、気持ちよいと感じるほどすっきりした。

「湿気が無くなったからのう、心地よい天気になったもんじゃな」

「そうですね。これでしばらくは雨が降らないのですね」

「それは風次第じゃな、風が早く水を運んでくれれば雨が降るじゃろ

うが、今日一日ぐらいは大丈夫じゃろう」
「そうですか」
「では戻るとしようかのう」
「そうですね。御館様をお待たせするのもいけません」
一仕事を終えて信長の元に戻る閃華と小松。
自分でやったとはいえ、湿気が無くなった事で大分過ごしやすくなった。それだけも、閃華の足取りはかなり軽くなったようだ。

「ただいま戻りました」
信長の元へ戻った閃華と小松。
信長は相変わらず振り向く事をせずに、二人に言葉を掛けると隣に来るように申し付けた。
信長の隣に立つ閃華と小松。そこは織田の馬防柵から設楽原がよく見えた。そして今まさに、織田へ突撃している武田も。
「武田があんな所まで！」
すでに突撃を開始している武田に小松は思わず声を上げるが、そんな小松を信長は静かな声で諭す。
「安心せい小松、武田があの馬防柵を越える事は無い」
「ですが……」
閃華が声を上げたので信長は閃華に振り返った。まるで閃華が何を言うのか楽しみにしているように。
「例え鉄砲三〇〇〇丁でも、武田の勢いは止められないでしょう」
「だろうな」
あっさりと認めた信長に閃華は驚きの眼差しを向ける。そして信長も閃華と目線を合わせた後、急に笑い出した。
「御館様？」
いぶかしむ目線を送る閃華に、信長はまず鉄砲を指し示した。
「閃華、海の向こうから来た物は、あの鉄砲だけではないぞ」
そして次は閃華を指し示す。

「精霊、これもほとんどが海の向こうから来た者だと聞いている。そなたもそうだったな」

無言で頷く閃華。信長は笑みを浮かべると最後に例の物、布が掛けられた何かを指し示した。

「そしてあれも、海の向こうから来た物だ。布を取れい！」

その場から号令を下す信長。足軽達が布を縛っている紐を取った後に、布が一気に取り去られた。

そして現れたもの。それは人の形をしているが、どう見ても人の倍以上は大きく。何より全てが鎧で出来ているようだ。その鎧もこの国の物ではなく、海の向こうにある国の物だ。

「ゴーレムじゃと！」

思わず驚きの声を上げる閃華。閃華の驚きに信長は満足そうに笑う。その笑顔もまた子供のようであり、どうやら閃華が驚くのを楽しんでいるようだ。

どうやらこれが閃華を呼んだもう一つの理由らしい。この反応はこれを知っているから出来る物で、何も知らない者は同じ反応しかしないだろう。つまり閃華の反応はゴーレムを知っているから出来る物で、信長はそんな閃華の反応を楽しむために傍に呼んだようだ。

「どうだ閃華！　これが海の向こうから来た物だ。儂は鉄兵（てっぺい）と呼んでいるがな」

「鉄兵……」

言葉を失う閃華。まさかこんな物までこの国に来ているとは思ってもいなかった。

ゴーレム、古くはユダヤ教に登場する泥人形の事で、作り出した主人の言う事をなんでも聞いて、忠実に働く人形の事を言う。だが、もともとはノアの箱舟や精霊王と同じで古代の魔道科学が生んだものだ。

魔道科学が表舞台から消えるとゴーレムもまた、その存在を忘れ去れて行ったのだが、精霊達はゴーレム技術をちゃんと受け継いでいた。

だから海の向こうでも閃華は時々ゴーレムを見かけたことがある。だがそのとき見た物は昔から伝えられている泥人形。今目の前にある鉄製に物とは大きく違った。

ゴーレム技術を研究しておる精霊が居ると聞いておったが、まさか鉄製のゴーレムを作るとは思いもよらんかったのう。

今まで鉄製のゴーレムが作られたという話しは聞いた事がない。おそらく精霊の歴史でも、鉄製ゴーレムが登場した初めての時だろう。ちなみに、ゴーレム技術は更に進化を続けて、昇達の時代には機動ガーディアンという名前になっている。

その鉄製ゴーレム、鉄兵総数百体近くが一斉に動き出した。手には鉄砲のようなものを持っているがその大きさは遥かに違う。そして馬防柵の後ろまで進み出ると鉄砲を構える。

「……凄い」

思わず言葉を漏らす小松。確かにこんな光景が目の前に展開すれば誰もがそう思うだろう。実際に鉄砲隊の兵士達も驚きの表情で鉄兵を見ており、秀吉が必死になって隊列を乱さないように指示を飛ばしている。

「んっ」

とその時、閃華はある物に注目する。そんな閃華に気付いたのだろう、信長はまたしても意地の悪い笑いを浮かべる。

「気付いたようだな」

「えっ？」

信長の言葉に小松は思わず声を上げてしまう。鉄兵だけでも凄いというのに、まだ何か有るらしい。

そして閃華はその何かを信長に指し問う。

「あの鉄兵が持っているもの、あれは一体？」

閃華の問いに信長は嬉しそうに笑う。

「あれも海の向こうから来た物、いや、正確には精霊がもたらした物だ」

「精霊が？」

「小松、属性については分かるな？」
「えっ、あっ、はい」
いきなり振られて驚きながら答える小松。小松が落ち着くのを見て信長は更に説明を続ける。
「属性は精霊にとって自分の存在を表し使いこなす物だが、それと同時に力その物を示している。火も水も木も精霊にとっては力だ」
確かに精霊にとって属性とは力の変換先であり、持っている属性に順ずるものしか力として表に出す事は出来ない。閃華が水を生み出し操るように、小松が影を繋げて闇を操るように、それは全て属性を持っていくら出来る技だ。
「では、属性とは何だ？」
「えっと……」
そう聞かれると分からないのか小松は黙ってしまった。代わりに閃華が口を開く。
「力の基礎構造、精霊も属性を持つ契約者も属性を持つから力を変換できる。つまり属性は力の設計図のようなもの」
「そうだ、そしてその設計図さえ持っていれば属性を発動できる。後は力を集めればいいだけだ」
「まさか、あれは！」
鉄兵が持っている物の正体に気付いたのだろう、閃華は声を上げて鉄兵に目を向ける。そんな閃華を見て信長は高らかにあれの正体を打ち明ける。
「そうだ閃華！　あれは精霊砲だ」
「……やはり」
百年ぐらい前じゃろうか、人間達が作り出した大砲。それを見た精霊が作り出したのが精霊砲じゃが。まさかそんな物までこの国に来ておるとは、御館様はどれだけの技術を手に入れたんじゃ。いや、そういう技術を持っている精霊が傍におるんじゃろう。
「閃華、精霊砲とは？」
隣に居る小松が聞いてくるが、小松は簡単に返すだけだ。

「口で説明するより、見た方が早いじゃろう」

はてなを浮かべる小松。だが小松はそれ以上は聞こうとしなかった。たぶん、閃華の頬を流れる汗を見たからだろう。

それにしても……まさか精霊砲を持ち出すとはのう。御館様は本気で武田を潰すおつもりじゃな。なにしろあれは精霊達の間でも好んで使うやつはおらんからのう。威力は確かに高すぎるほど高いんじゃが。精霊には効かんし、そんな物を使うよりかは自分の技を放った方が早いからのう。じゃが、人間を相手にしては別じゃ。精霊砲、しかもこれだけの数を前にしては武田は何もできんじゃろう。

武田の滅亡を予感する閃華。だが武田はそんな事を知る由も無く、今はただ織田を倒すために突き進むだけ。

武田は最初鉄兵に驚いていたようだが、今では士気を取り戻して破竹の勢いとなっている。

武田の兵が津波のように織田の陣へ押し寄せる。織田の鉄砲隊はすでに狙いを定めており、鉄兵も精霊砲を構えた。いつでも撃てる準備は出来ている、後は信長の命を待つだけだ。

信長は武田勢を充分に引き付けてから右手を上げた。それを見た秀吉が鉄砲隊に号令を掛ける。そして信長が手を勢いよく下げると、秀吉の口から発射命令が出た。

一斉に火を噴く三〇〇〇丁の鉄砲と百近くの精霊砲。

鉄砲の弾は最前列に居た敵兵を倒し、精霊砲は武田の中段で爆発を引き起こした。だが両方とも再度発射するには時間が必要だった。それがあったからだろう、武田は鉄砲や精霊砲に怯むことなく突撃を止めはしない。

前が崩れたとはいえ、その勢いを止めたわけではない。再び武田の先頭が織田の陣へ迫る。再び発射命令が出る織田の陣、だが撃ったのは鉄兵の精霊砲だけだった。何故か鉄砲隊は撃たずに待機している。そして秀吉が鉄砲隊に狙うように号令を掛けると、今度は鉄砲隊だけが一斉に発射した。

なるほどのう、そういう手を使ってきたか。

後方で見ている閃華には織田の戦術がよく分かった。
鉄砲も精霊砲も発射までには時間が掛かるからのう、御館様はその時間をエサに使ったんじゃな。
鉄砲も精霊砲も一定時間飛んでこない。武田からみればその時間は織田の陣へ突っ込む最大の機会、だが信長はそこに罠を仕込んだ。
鉄砲だけなら突破されていたかもしれないが、精霊砲はかなりの高威力で武田の先陣に大打撃を与えられるほどだ。
つまり精霊砲で武田の先陣を大多数削り、鉄砲で精霊砲を潜り抜けてきた者を狙い撃つ。その二段攻撃に武田の先陣は全滅するだろう。更に、時間を空ける事で武田に突撃できると思わせる。そう思った武田は突撃スピードを緩めることなく、織田の陣へ突っ込んで来るという訳だ。
敵の前衛を着実に削り、しかも相手に何度も突っ込ませる。これが信長の仕込んだ罠だった。
だが何度もやっていれば、いくら勝頼でも気付くだろう。ついに武田は精霊を投入してきた。
武田の先頭を騎馬と変わらないスピードで突っ込んでくる精霊。そこに精霊砲と鉄砲が集中するが武田の兵は倒せても精霊までもは倒せなかった。
精霊砲は精霊にとって防ぎやすいものだし、たとえ三〇〇〇丁の鉄砲でも全てが精霊に向く訳ではない。だから精霊にとって鉄砲は避けやすいものだ。
武田の精霊達は遂に馬防柵を乗り越える。だが雑兵には目もくれずに更に奥を目指す。どうやら信長を直接狙うつもりらしい。
「蘭、小松、閃華、武田の精霊達を……撫で斬りにせよ！」
信長は自ら刀を抜くと閃華達に号令を飛ばす。
信長に迫ってくる精霊はおよそ三〇、かなり分が悪いが信長はあえて笑みを浮かべてみせる。
「御館様！」
信長の前に出る蘭丸、閃華と小松も信長の横に着く。

近くに来た閃華と小松を確認すると、信長は刀を地面に突き刺し二人の両肩を軽く掴む。
「よいか二人とも、これより儂の力を与える」
「えっ？」
「あの？」
信長の言っている事が分からなかったのだろう、思わずはてな顔になる閃華と小松。だがそんな二人に構うことなく、信長は意識を沈めて一気に力を解放する。
「エレメンタルアップ！」

第六十一話　長篠兵器戦（後書き）

さて、更新に大分間が開きましたが、詳しくは私のブログを読んでください、遅れた理由がいろいろと言い訳の形で書いてありますので。

さてさて、遂に始まりましたね長篠の戦い。そんな訳で出てきた鉄兵こと機動ガーディアン、皆さん、覚えてますか？　覚えていない方は第一話から読み返してみよう。かなり時間が掛かりますが、たぶん思い出すかもしれません。もちろん、保障はしませんよ。

さてさて、実はこの前、エレメの読了時間を見てみました。そしてたら……７００分だそうです。……長っ！　今更ながらよくそれだけ書いたな。というか、まだまだ続けるつもりですけど……最終的には一体どれだけの時間になるんだろう。まあ、最終がいつ頃に、そしてどんな形になるのかまったく考えてませんけどね。目指せ一万時間……というところですか。

はいそこ方、げんなりとしないように。頑張れ、頑張ってついて来るんだジョー――！！！　……ジョーって誰？

そんな訳で今回はここいら辺で終わりです。詳しくはブログをお読みください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれかもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票、人気投票もお待ちしております。

以上、久しぶりに熱い展開になってきたので少しワクワクな、というか久しぶりに次回はバトルシーンを書ける事にちょっと喜んでる（長くなった！！！）葵夢幻でした。

第六十二話　長篠精霊戦

どこにそれだけの力があったのかは分からないが、小松と閃華の中から自分の力以上の力が沸きあがって来る。

「こ、これは？」

突然の事で戸惑う小松、敵が迫っている中で閃華は口早に説明する。

「御館様の能力じゃ、この能力は精霊と契約者の戦闘能力を限界以上に高める事が出来るんじゃ。小松、思っている以上に自分の能力が上がっておるから注意せい」

「は、はい！」

とはいえ、さすがは御館様じゃな。エレメンタルアップの発動条件はかなり難しいんじゃが、触れただけで発動できるとはのう。どうやら完全に能力を使いこなしておるようじゃのう。

特殊型の能力は人それぞれ発動条件が違う。昇の場合は契約した者を大事に想う事が発動条件だが、信長は触れただけで発動できるようだ。

それは一見簡単そうに見えるが、実はかなり難しかったりする。エレメンタルアップ程のレアスキルとなれば発動条件にかなりの規制が付く。それを触れるという簡単な行為だけで発動させるのだから、エレメンタルアップを完全に使いこなして規制を緩めないと出来ない技だ。

三人にエレメンタルアップを掛け終えた信長は、地面に突き刺した刀を抜くと敵に備える。

「お下がりください、御館様」

長尺刀と呼ばれる太刀より遥かに長い刀を手にしている蘭丸が後ろに居る信長にそう言って来るが、信長は笑みを浮かべて答えた。

「あの程度の精霊に信長は倒せぬ、第六天魔王の力、とくと見せてやろうぞ」

信長は刀を振るうと一陣の風が吹き、戦闘開始の合図となる。

まずは六人、信長の元に辿り着いた精霊達が襲い掛かってくる。

真っ先に飛び出したのは閃華と小松。エレメンタルアップの効果でスピードもかなり上がっているため、敵に対応する暇を与えずに一気に攻めかかる。

敵の懐に飛び込んだ閃華は方天戟を振るい二人を後方に吹き飛ばし、近くに居る敵へと切り込んで行った。

小松も一人だけ弾き飛ばし、もう一人の精霊と交戦している。

くっ、一人捕り逃したようじゃ。

さすがにこれだけの人数を閃華達だけで倒すのは無理。だから閃華達は最初に何人かを弾き飛ばして最前線の戦力を削ったのだが、一人だけ捕り逃してしまった。

閃華達を突破した精霊が信長に迫り、一気に信長を狙うが蘭丸の姿が一瞬にして消えると敵の精霊は切り伏せられた。

なるほどのう、縮地(しゅくち)じゃな。確かにこれだけの数じゃ、出し惜しみしておっては防げまいのう。

武田の精霊達は続々とこの場に到着しており、その数は最初の三倍になっている。すでにまともに戦っていては防げない数になっている。そのうえ敵にはまだ到着していない戦力があるのだから、ここで削らないと手詰まりなってくるは必至だ。

四の五の言ってはおられんようじゃな、こっちも戦用の技を出して行かんといけないようじゃ。

「龍水閃」

龍水方天戟に巻き付いている水の龍が大量の水を勢い良く吐き出すと、数人の精霊が押し流されて閃華に一瞬だけ隙を与える。

「龍水舞闘陣(りゅうすいぶとうじん)」

水の龍が方天戟から離れると、今度は閃華の周りを巻き付くように漂い、体の大きさも数倍になっている。

そして一気に斬り込んで行く閃華。閃華の攻撃にあわせて水の龍も別の敵へ攻撃をしていく。

だが武田の精霊は閃華を囲んでいるのだから、いつまでも閃華の好き勝手にはさせない。閃華の死角より一人飛び込んでくる。

槍を突き出してくる精霊を閃華は視界の片隅で確認するが、それだけで別の精霊を一気に突き刺した。

閃華に迫る槍。取った、とその精霊も思ったが槍の切っ先は閃華に届くことなく水の龍に阻まれる。龍の胴体に突き刺さった槍はそれ以上は押す事も引く事も出来ず、完全に捕らえられていた。

閃華は体を反転させると槍を封じられて身動きが取れない精霊を突き刺す。

だがそれで終わりではない、矢継ぎ早に別の精霊が閃華に迫る。方天戟を振るう閃華、おしい事に紙一重でかわされてしまった。だが閃華は微かに笑みを浮かべる。

閃華の攻撃をかわした精霊はここぞとばかりに一気に迫ってくる。だがそれこそ閃華の狙い、自分が優位に立ったと思った隙を付き、水の龍がその精霊に爪を振るう。

完全に死角から入ったので精霊に爪痕を残すほどの攻撃が出来た。そしてその攻撃は精霊の心を一瞬怯ませる。

その隙に閃華は一気に攻める。水の龍も攻撃の合間に爪と牙を振るい相手に立て直す隙を与えない。閃華と水の龍は更に数回攻撃を入れると、遂に相手は手詰まりになり一瞬の硬直状態に陥ってしまう。龍水方天戟が突き刺さると光の粒子となって精霊は消えて行った。

小松も閃華と同様にすっかり囲まれていた。

足元から数本延びる影。これで今まで防いでいたが、そろそろキツクなってきたようだ。

さすがにこの人数は辛いですね。大半は私と閃華で押さえていま

すが、とうとう御館様の所にも数人辿り着いてしまったようです。
小松は少し目線を外して信長を見る。数は少なく、蘭丸が奮闘しているため、まだ大丈夫そうだが油断は出来ない。
そして小松の意識が逸れた事を感じだろう、小松を囲んでいた精霊は一気に攻勢に出る。
前から一、後ろから二とタイミングを合わせて精霊達が一気に小松に迫る。
「くっ！」
小松は影を後ろに集中させると一気にせり上げて闇の壁を作り出し、後ろの攻撃を防ぎ。前から来た敵には影潜薙刀で応戦する。
剣戟音を立てて薙刀と青龍刀がぶつかり合う。最初は拮抗していたのだが、次第に小松の薙刀は押され始めていた。
「ぐっ……うっ！」
押し返したいが小松の力では無理なようだ。しかたなく自ら引いて相手を崩す小松。すぐさま攻撃に転じるが、別な精霊が割り込んできたため、しかたなくその場から大きく後ろに跳ぶ。
なんとか攻撃をかわした小松。だが着地の瞬間を狙い別な精霊が小松の後ろから斬りかかって来た。
小松はその場から動こうとはせず、薙刀の刃だけを後ろに向けると精神を集中させる。
ここ！
刃とは反対側の石突を持ち、勢い良く後ろに突き出す。
確かな手ごたえと短い呻き声が聞こえ、小松はそのまま上に斬り抜く。そして精霊は消えて行った。
何とか切り抜けた小松はだが、現状はあまり変わっていない。倒した精霊は一人だけ、周りにはかなりの数が残っている。
もう出し惜しみしている状況ではありませんね。これが有効なのは一回だけ、次からは警戒されますから……機会は一度だけです！
小松を囲んでいる精霊は確実に倒すチャンスを狙っているようだ。
様子を窺いながら小松の隙を狙っている。

そんな精霊達の動きを読み、小松は一気に力を解放する。
「影鎖縛符！」
精霊達の足元に存在する影から闇の鎖が一気に伸びて精霊達を拘束する。それと同時に小松は一気に走り出し、次々と精霊達を切り抜いていく。
武田の精霊達が闇の鎖から逃れた時には、すでに三分の二が小松によって切り伏せられていた。
攻撃の手を緩めない小松は更に数人の精霊を切り伏せる。だがその時だった。突然背後に気配を感じた小松は影で壁を作り出すのと同時に振り向き、背後からの攻撃に備える。
だが背後からの襲撃者は壁を簡単に切り裂くと、その刃は影潜薙刀に当たり小松もろとも吹き飛ばした。
二回ほどバウンドして地面を転がり、ようやく止まる小松。かなりの人数を切り伏せたため、追撃は無かった。
痛む体にムチを撃ってすぐに起き上がる小松。そして襲撃者に目を向けると、その精霊は偃月刀（えんげつとう）を持っている、どうやらこれで壁を切り裂いたようだ。偃月刀の形状は薙刀に似ているが刃の長さと厚さは明らかに違う。
「こいつは俺がやるから、お前達は信長を狙え」
偃月刀を持った精霊の言葉に従い、今まで小松を囲んでいた精霊達はその場から離れて信長の元へ向かう。
いけない！
少しでも多く斬り捨てようと小松は精霊達の後を追おうとするが、走り出す前に偃月刀が小松の首を捉える。
「くっ！」
なんとか薙刀を首まで上げて偃月刀を防ぐ。だがこれで完全に足を止められてしまった。
頭二つ分ぐらい上にある相手の顔を睨み付ける小松。だが相手は笑みを浮かべると、小松もろとも偃月刀を振り抜いてしまった。
とっさに踏み止まれないと感じた小松は自ら跳んだ事で、吹き飛

ばされるのは防いで無事に着地するが、完全に道は塞がれてしまった。
「慌てるなよ、ちゃんと魔王の首は取ってやるよ」
「ぐっ！」
挑発とも取れる相手の言葉、小松はその挑発に乗った訳ではないが焦りがあるのは確かなようだ。
目線を一瞬だけ信長に向ける小松。そこにはかなりの精霊が集まっており、蘭丸一人では防ぎきれずに信長自身も刀を振るっている。
なんとか御館様の元へ行かなくては、けど、この精霊はそう簡単に通してくれそうにありませんね。……しかたありません、ここは一気に決めます！
出来る限りの力、それは小松が持っている以上の力を最大限に引き出す。エレメンタルアップで集められるだけの力を影潜薙刀に集中させた小松は、目の前の精霊に向かって一気に駆け出す。

小松！
閃華が戦闘の合間に一瞬だけ小松に目を向けると、小松は大柄な精霊と対峙していた。
エレメンタルアップで強化された小松の力を知りながら、あの精霊に任せるとはのう。どうやら相当の手練れのようじゃな。なんとか小松の援護に向かいたいんじゃが、こちらも手を抜けん。ここで緩めてしまっては御館様が危ない！
ここへ辿り着いた精霊達は当初の倍以上の数になっている。どうやら信玄亡き後の武田はかなりの精霊を新たに加えたらしい。
まさかここまでの精霊を確保しておようとは思わんかったのう。じゃがここを下がる訳にはいかん。小松、ここが正念場じゃぞ。
閃華はエレメンタルアップで強化された力を一気に解放する。
「龍水刃舞（りゅうすいじんぶ）」
閃華を取り巻いている水の龍は大きく口を開けると、勢い良く水

を撃ち出す。撃ち出された水は先程物とは違い、円形に高速回転している水の刃だ。それが細かく、幾つも撃ち出される。

更に龍は首を動かし、閃華の周りにいる精霊達に攻撃を浴びせていく。武田の精霊達は防ぐだけで精一杯のようだ。

その隙を付き、閃華は水の龍から離脱。一気に斬り込んで行く。

武田の精霊達は龍水刃舞を防ぐために作った防壁を切り裂かれて無防備の状態になっている。そこに閃華は突っ込み、突き刺し切り伏せて次々と精霊達を倒していく。中には特攻してくる精霊もいるが、全て龍水刃舞の餌食となってしまった。

そして精霊達が体勢を立て直した時には、かなりの数が閃華によってやれられていた。

再び水の龍を巻く閃華。水の龍を警戒してるのか、武田の精霊達は水の龍を攻略出来ずに手詰まりになってしまった。

これで大分楽になったのう。後はこやつらを切り伏せて小松と代わるだけじゃ。

だが閃華の元にも襲撃者が襲来する。

鋭い殺気を感じた閃華はとっさに体をずらす。それは水の龍を貫き、閃華が居た所を通り過ぎて地面に突き刺さった。

矢じゃと！　一体どこから？

矢が飛んできた方向に目を向けると、そこは前方上空。しかも相手は更に三本の矢を引き絞っている。

放たれる矢、閃華はとっさに再生した龍を前面に出すが、またしても貫通されてしまった。

方天戟を振るい矢を叩き落す閃華。

二本じゃと！

だが叩き落した矢は二本だけ、もう一本は見当たらない。閃華がもう一本の矢を見つけた時には、すでに回避不可能な距離まで迫っていた時だ。

影矢か！

最初に放った矢と同じコースを辿り相手から隠す二本目の矢、そ

れが影矢。
なんとか体を動かす閃華。だが矢は閃華の肩に矢じりを食い込ませる。
ぐっ！　じゃがこの程度。
肩に刺さった矢を抜こうとする閃華だが、手が途中で止まり体を移動させる。そして閃華が居た場所には新たに矢が突き刺さった。
まずいのう、こっちも手練れのようじゃな。水龍で止められんとは、一本一本にかなりの力を込めておるようじゃのう。
地上に着地して弓を引き絞り閃華を狙っている精霊は、あごだけを動かして周りの精霊達に指示を出す。そして閃華を囲んでいた精霊は一気に信長の元へ向かう。
やはりそう来たか。追いたいところじゃが、一瞬でも気を逸らせば射貫かれるからのう。……切り伏せるしかないじょうじゃな。
水の龍を方天戟に戻す。本来の姿に戻った龍水方天戟を構え直すと、閃華は弓の精霊へと一直線に駆け出した。

この精霊……相当できるようですね。
荒い呼吸をしながら小松は影潜薙刀を構え直して次に備える。切り傷は無いものの、小松の服はかなり砂にまみれていた。
防げば確実に吹き飛ばされますし、避けるだけで精一杯なので手詰まりになってしまいます。なんとか決め手がほしいところですが。
横目で閃華を見るが、こちらも相手にしている精霊は一人だけ。どうやら弓という飛び道具に苦戦しているようだ。
援軍は期待できそうに無いですね。やはり、私一人でどうにかしなくては。
影潜薙刀を八双（はっそう）に構え直して相手を睨みつける小松。だが相手は小松が格下だと思っているのだろう、笑みを浮かべながら小松の攻撃を待っている。
その余裕が命取りです！

一気に飛び出す小松。あっと言う間に相手を間合いに捉えて薙刀を振るうが、これは避けられてしまった。

避ける動作から攻撃の動作へとそのまま移行して、小松が態勢を立て直さないうちに偃月刀が襲い掛かってくる。

受ければ吹き飛ばされる事は必至。倒れるように肩を地面に打ち付けて避ける小松。これでなんとか避ける事ができた。そしてそのまま足払いを掛ける。

だが小松の足は虚しく空を切る。すでに相手は中に跳び、偃月刀を小松に向けている。

落下してくる偃月刀、小松は転がりなんとかそれを避けて、勢いを使って一気に立ち上がる。

だが立ち上がった小松の眼前には相手の精霊が迫っていた。

くっ！

薙刀を構えて攻撃に備えるが、小松の体に当たったのは重い偃月刀ではなく相手の拳だった。

重さがある武器では小松を捉える事が出来ないと判断したのだろう、素早く攻撃が出来る拳に切り替えて小松を吹き飛ばした。

自分の意思とは関係なく地面を転がる事になった小松。もちろん先程のように立ち上がることは不可能、止まるまで地面を転がるしかなかった。

やっと止まり、地に伏せた小松は顔だけ上げると相手の精霊は余裕の笑みを浮かべながらゆっくりと小松に迫っていた。

小松は薙刀の刃を地面に向けて、もたれながらなんとか立ち上がる。

これで終わりです！

だが崩れ落ちる小松。

膝が地面に近づくたびに、影潜薙刀も小松の影に潜る。

小松は力尽きるフリをしながら影潜薙刀を影に押し込んだ。そして影と影を繋ぎ、影潜薙刀が相手の影からその姿を現す。

それは丁度相手の真後ろ、その下に写っている影から飛び出して

くる影潜薙刀。この距離、しかも完全な不意打ち。確実に相手を捉えられるのは間違いなかった。

取った！

完全に相手を仕留めたと確信する小松。だが相手の素早い反応が小松を驚愕させる。

……まさか、そのような事が。

目の前の出来事が信じられない小松。

影潜薙刀は確実に相手を仕留めるはずだった。だが現実には少ししか傷つけることが出来なかった。

影潜薙刀が飛び出したその時、相手の精霊は瞬時のそれを察知して後ろに手を回して影潜薙刀を掴んだ。見事としか言いようの無い一瞬の早技、だが少しだけ遅かったようで影潜薙刀は相手の精霊に切っ先を少しだけ食い込んでいる。

背中から影潜薙刀を抜き取ると小松から離れたところに捨てる相手の精霊。

「残念だったな、今のが最後の手段だったろ」

「くっ！」

悔しさを隠し切れない小松。確かにそのとおりだった。影潜薙刀を手放す技は危険が大きすぎる。だから小松は最後の決め手でしかこの手段は選ばない。だからそれが失敗した以上、小松に打てる手はもう無かった。

「さて、魔王が残っているんでな、そろそろ観念してもらおうか」

すいません、旦那様。

ここに来ても思うことは道勝の事。いつ死んでも構わない、だが道勝に迷惑を掛ける死に方だけはしたくなかった。

今ここで死んで、御館様が傷つくような事になれば道勝にまで累を及ぼす。それだけは避けたい小松だが、影潜薙刀を失った今ではどうする事も出来ない。

どうする事も出来ない現実が悔しくて涙が出てくるが、涙目になりながらも小松は相手を睨みつける。

せめて一矢報いなければ！

武器ならある、それはいつも懐に入れている懐刀。だがそれを使うには精霊武具を解かなくてはならない。そうなれば当然、エレメンタルも信長のエレメンタルアップも消えて普通の人間になる。そうなれば確実に殺される。

だが小松は死ぬと分かっていても怯みはしない。

どこまで出来るか分かりませんが、せめて旦那様のために功績を立てなくては。

全ては道勝の為。それで相手は倒せないと分かっているが、手傷を負わせれば誰かが倒すきっかけとなる。それだけでも手柄としては十分だ。

道勝は褒められはするが、責める者は誰も居ないだろう。そしてそれは信長も同じだと、小松は確信していた。

確実に傷を負わせられる距離まで近づけて、一気に攻めます。

ゆっくりと近づいてくる相手を睨みつけながら、小松はエレメンタルを解く機会を狙っている。

出来るだけ多くの傷を負わせられれば。

それだけを考えながら、小松は地に伏せながら懐刀がある場所に手を当てて、いつでも走り出せるようにしている。

来なさい！

小松が意を決しようとした時だった。

突然小松と精霊の間にある地面に亀裂が走り、勢い良く炎が立ち上る。

思わず後ろに飛んだ精霊は亀裂が走ってきた方向へと振り向く。

「誰だ！」

炎が治まり姿を現す一人の武将。

あの方は！

しっかりとした体、相手を射抜く強い眼差し、存在だけで相手を怯ませる事が出来るその雰囲気。そして地に突き刺さっている蜻蛉（とんぼ）切（きり）と呼ばれる名槍。

「何者だ！」
この精霊は知らないのだろう。この武将こそ、戦国最強だと。
蜻蛉切を地面から抜き、構えると名乗りを上げる。
「本多平八郎忠勝、ここに推参！」
名乗りだけで空気を震わせ、圧倒的な威圧感が迫ってきた。
忠勝の存在感に押され、偃月刀の精霊は完全に小松から意識が反れた。そして小松の元に一人の精霊が舞い降りる。
「大丈夫ですか？」
「あ、あなたは？」
「忠勝の精霊で朱蘭（しゅらん）と申します」
小松に回復術を掛けている女性がそう名乗ってきた。どうやら朱蘭も生まれは閃華と同じところらしく、閃華と似たような精霊武具を身に着けている。
おかげで体の痛みが消えた小松が立ち上がると、朱蘭はいつの間にか手に入れていた影潜薙刀を差し出してきた。
「ここは私と忠勝様が、信長公の元へお急ぎください」
「ですが……」
小松は影潜薙刀を受け取ると閃華へと目を向ける。慣れない飛び道具を相手に苦戦をしているみたいで、閃華の体には三本ほどの矢が刺さっている。
「私一人で御館様を守りきれるかどうか、せめて閃華がいてくれれば」
「それなら大丈夫です」
笑みを浮かべる朱蘭に小松は不思議そうな顔を向ける。
「あちらにもすぐに援軍が来ます、信長公の危機を放って置く我等の主ではございません。ですから今は信長公の元へ、ここを乗り切れば武田を下せます」
「……はい」
多少戸惑いながらも朱蘭の言葉を信じる事にした小松。仮にも家康がよこした援軍でだから、そう悪いようになるとも思えなかった。

「では、お願いします」
それだけ言って走り出す小松。影潜薙刀を手に信長を囲んでいる精霊達に突っ込んでいく。

やれやれ、随分とやっかいな相手じゃのう。
押し出すと引き、引くと押し出してくる相手の精霊。閃華と一定の距離を取り、それを縮めも伸ばしもしない相手のやり方に閃華は苦戦していた。
一定の距離を確実に確保しつつ、命中精度の高い矢を放つとはのう。さて、どうしたものかのう。
今までいろいろな攻め方をしてみたが全て失敗。逆に新たな矢を二本食らってしまった。
閃華の腕と腹に突き刺さった新たな矢。一本一本は大したダメージにはならないが、何本も食らうとキツクなってくる。そのうえ矢を抜こうとすると、その瞬間を狙い打ってくる始末だ。
せめて動きを制限している矢を抜ければのう、一気に攻められると思うんじゃが。それはさせてくれんじゃろ。それにさっきの戦いで大分力を使ってしまったからのう、ここでまた大幅に消費すると御館様の援軍にはいけんじゃろ。……まいったのう、手詰まりじゃな。
目の前の精霊を倒せば良いだけじゃない。閃華にはその後、信長の救援と言う仕事が残っている。そのためにはここで力を温存しておかねばならないのだが、目の前の精霊は全力で戦わないと倒せない相手だろう。
そうなってくると頼みの綱は家康だけであった。
先程小松の救援に入ったのは本多忠勝殿じゃな。徳川殿が本多殿一人だけをよこすとは思えん。なにしろ武田の精霊は全てここに向かってきておるんじゃからのう。となると、今出来る事は時間稼ぎじゃな。

たぶん来るであろう、家康の援軍を待つことにした閃華。だがそんなに時を置くことなく、家康の援軍は来てくれた。
突如弓の精霊を蹴り飛ばす一人の人影。その人影は蹴りの反動で再び大きく跳び、閃華の目の前に着地する。
「遅くなった」
「半蔵殿か！」
家康と契約を交わした精霊であり、影でもある服部半蔵。どうやら家康は最大限の援軍を出してくれたらしい。
体に刺さった矢を一気に抜き去る閃華。そんな閃華に半蔵は振り向くこと無く言葉をかける。
「ここに来る途中でだいぶ精霊を叩いてきた。残りの数少ないだろう。そっちは動けるか？」
「大丈夫じゃ、それよりここを任せて良いか？」
「そのために来た」
「ありがたい、では頼む」
背を向けて信長の元に走り出す閃華。その顔は勝利を確信した事をはっきりと表していた。
半蔵殿に本多殿、徳川家中でこれ以上の精霊はおらんからのう。これで武田の精強な精霊は倒せるはずじゃ。後は御館様に群がっておる三下のみじゃな。それに、織田の精霊は私達だけでないぞ。
絶対にここに来るであろう新たな戦力を計算に入れながら、閃華は信長と蘭丸、そして小松が戦っている戦場へと切り込んでいった。

第六十二話　長篠精霊戦（後書き）

ぐはっ！！！　本来なら一話にまとめるはずだった今回の長篠精霊戦。やっぱりまとめる事が出来ずに次に引っ張る事になりました。……いやね、閃華の過去もいい加減に長くなってきたものだから、そろそろ一気に話を進めたいんだけど、そのためには長篠を終わらせないといけないんだよね。

……よし！！！　後四話で閃華の過去を終わらせよう！　うん、たぶん無理だと思うけど頑張ります。というか、いい加減に昇達に戻らないと純情不倶戴天編が終わらない。今更だけど、現代の方は話があまり進んでないんだよね。風鏡とか竜胆とか常磐とか覚えてますか？　忘れてませんよね？　覚えていて――――――――！！！

というか、俺が覚えているか怪しんだけど！！！

そこでツモるか！！！

さてさて、花粉症やら花粉症やらで話を上げるペースが落ちていますが、なんとか来月辺りからまたペースを上げて行きたいですね。う～ん、花粉症もそうだけど時間の関係上で書くペースが落ちてるのも確かなんですけどね。そんな訳で、見捨てないで！！！

さてさて、懇願も終わった事ですし、もういいでしょう。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票、人気投票をお待ちしております。それからいつも投票をしてくれている方、ありがとうございます。

以上、うわっ、今回の話エレメの中だと一番長いんじゃね、とか思った葵夢幻でした。

第六十三話　忠勝と半蔵

偃月刀の精霊と対峙する忠勝。蜻蛉切の切っ先を顔ぐらいに落として上段の構えを取っている。

「お前も織田家の人間か！」

偃月刀の精霊が隙を見せることなく、威圧するかのように聞いてくるが忠勝は平然としている。

「いや、某（それがし）は徳川家の者だ」

「ちっ、狸の援軍かよ」

忠勝の眉が少し反応する。どうやら家康を狸呼ばわりされた事に怒りを感じたらしい。だが忠勝は冷静に現状を判断する。

「朱蘭、そなたは信長公の元へ」

「はっ」

忠勝の傍に控えていた朱蘭だが、家康を狸呼ばわりされた忠勝は一騎打ちが望みらく。主の望みを感じ取った朱蘭はその場を後にして、武田の精霊が取り巻いている信長公の元へ向かった。

そして朱蘭を見送る事無く忠勝は一気に飛び出す。そして間合いの少し外から軽く跳び、相手に向かって蜻蛉切を振り下ろした。

突然の奇襲に精霊は驚くが、それでも攻撃をかわして見せた。

だが忠勝の攻撃はこれで終わりではない。地面に突き刺さった蜻蛉切は幾つもの地割れを引き起こし、そこから炎を噴出させる。

「こんな物効くかよ！」

偃月刀を振るうと精霊の周りには風の壁が出来て炎を完全に遮断してしまった。

「だが、これならどうだ！」

切っ先が地面に突き刺さったまま蜻蛉切を振り抜くのと同時に、幾つもの炎で焼け爛れた岩が飛んでいった。

「くっ！」

これは風の壁でも防ぎきれない。しかたなく避ける事に専念する

精霊だが、ふと後ろにさっきを感じた。
咄嗟に偃月刀を後ろに出す精霊。そして偃月刀と蜻蛉切は剣戟音を鳴り響かせる。
「お前、どうやって後ろに回った」
鍔迫り合いをしながら精霊は忠勝に尋ねた。よほど後ろに知ることが不思議らしい。
「某の属性は火山。故に燃えた岩に乗るなど動作も無い」
つまり忠勝は自分が隠れられるほどの岩を幾つも飛ばして、完全に陰になる岩のうえに乗っかってここまで移動したに過ぎない。
「よく燃えなかったものだな」
「言ったであろう、某の属性は火山。地と火を自在に操る事が出来る。炎の上に立つことなど地に立つのと同じ」
「なるほど、そういうことか」
火山の属性は火と地の力を持つ。もちろん専門の属性には及ばないが、組み合わせる事でそれ以上の力を持つ事が出来る。
「だから焼けた岩の上でも平気という事か」
「それだけではないぞ」
忠勝は笑みを浮かべると一気に力を解放する。
突然地面から噴火のような炎が幾つも噴出し、それは忠勝もろとも飲み込んでいった。だが偃月刀の精霊は咄嗟に察知したのだろう、灼熱の炎に体の半分を焼かれながらも何とか逃れた。
天を突くように吹き上げる炎の柱は未だに止まることなく、精霊は炎が無い場所から辺りを窺う。
忠勝が火山の属性を持っていることはとうに知れている。だからこれしきの炎は何とも無い。だが、やっかいなのは炎が忠勝自身を覆い隠して姿が見えないことだ。
もちろん忠勝もそれを狙っている。
吹き上がった炎の勢いに身を任せ、遥か上空まで跳んだ忠勝は精霊の位置を確認すると後ろにある炎の柱に飛び込む。
火柱を一気に舞い降りる忠勝。そして着地するのと同時に蜻蛉切

を突き出して横に薙いだ。
むっ、しくじったか。
手応えが無かった。どうやらよけられたようだ。
そしてすぐに忠勝に向かって偃月刀が振るわれる。
攻撃が行われたので忠勝の位置が把握できたのだろう。咄嗟に炎の柱から出て偃月刀をかわす、だが相手はそれを狙っていた。炎から出れば忠勝を確実に捉える事が出来る。
一気に攻勢に出てくる精霊。忠勝は退きながらも打ち合うが、まったく引けを取っていない。後退しながらも互角に渡り合っている。
忠勝は相手の攻撃を避けるとなるべく距離を取るために後ろに飛ぶ、だがそれでも相手がすぐに追いつける距離だ。けど、それだけでよかった。
蜻蛉切を地面に突き刺して一気に炎を噴出する。地面は焼け爛れて真っ赤になったところで迫ってきた精霊に向かって投げつける。
何かをやってくることは察していたのだろう、精霊はなんとか焼かれた岩を避けきる事が出来た。だが、その次までは読めなかったようだ。
避けきった岩は地面に幾つも転がっているが、その一つ一つが炎を精霊に向かって噴出させた。
突然の攻撃に精霊は避けるしかなかった。そして炎をは縦横無尽に噴出している。
「くっ、一体なんなんだよ。……そうか！」
ここまで炎が走ると動きが制限させれてくる。つまり忠勝の狙いは動きを止めた所を仕留めると精霊は読んだ。
「思い通りにさせるかよ！」
精霊は風を一気に集中させる。
風の集まる力は最速を有している。精霊の手に集まった圧縮された風を一気に開放させる。そして突風が巻き起こり炎を吹き消していった。
だが、これも忠勝が予想していた事だ。

炎が消されたか。だが、まだ足りないようだ。
再び蜻蛉切を地面に突き刺すと炎が巻き起こる。だが今度は柱状の炎ではなく、忠勝と精霊を囲むかのように炎の壁が展開した。
「くっ」
完全に炎に囲まれた精霊は動きを制限させるが、炎の属性を持つ忠勝には何も影響が無い。
更に忠勝は中央にも巨大な火柱を生み出す。辺りは熱気で包まれて景色が歪んで見えるほどだ。
そんな中で忠勝は火柱を通り越して、一気に精霊へと迫る。
なんとか忠勝の攻撃に反応する精霊。忠勝は猛攻を繰り出して精霊を一気に追い詰めていく。
だが相手も負けてはいない。出来るだけ攻撃の一点に力を集中させて忠勝の猛攻と渡り合っている。こうでもしないと押し負けてしまうのだろう。
けれども忠勝が優勢なのは確かだ。偃月刀の精霊には決め手が無いため、更に風を巻き起こし炎で自分の周りを囲み隠れ蓑に利用する。
だが炎は縦横無尽かつ多種多様に入り乱れる。辺りの熱気は更にまして灼熱地獄のようだ。
そろそろだな。
機が熟した。忠勝は一気に勝負に出るために大地を一気に吹き飛ばし、大量の炎も一瞬にしえ消え去った。
そこにすかさず忠勝は一撃を入れる。だが炎の障害物は無い、忠勝の動きは丸見えで備える事は簡単だった。
突き出される蜻蛉切。偃月刀の精霊はカウンターを狙うべく蜻蛉切を弾こうとする。
タイミングを合わせて蜻蛉切を偃月刀で打ち付ける。
（なんだと！）
精霊が驚くのも無理は無い。なにしろ偃月刀を蜻蛉切に打ち付けたはずだったのだが、まるで手応えが無い。

そして精霊が全てを知ったのは蜻蛉切が胸を貫いた時だった。
「ぐはっ、ぐっ、なぜ？」
「分からぬか、先程の炎で辺りは揺らいでいる」
「そういう……ことか」
つまり簡単に説明すると蜃気楼の応用である。
忠勝は蜃気楼の中でも下位蜃気楼を利用した。これは空気が熱せられ密度が低くなると実際の物より下に見える現象だ。
つまり精霊が見た蜻蛉切は実際の位置より上にあり、よって空を切り本物の蜻蛉切には当たらなかった。
もちろん、忠勝はこれを狙って大量の炎を出して辺りの温度を上げた。かなり派手な攻撃方法だが本当の狙いを悟らせない為には有効だ。火山の属性を持つ忠勝だから出来た攻撃だろう
蜻蛉切で貫かれたまま精霊は忠勝に目を向ける。
「本多……忠勝だったな？」
「うむ」
「その名、後世忘れずにいよう」
そう言い残して偃月刀の精霊は光の粒子となり消えて言った。

一方の半蔵はというと、未だに矢を一本も食らうことなく。だが間合いを近づけられないでいた。
放たれてくる矢は全て飛苦無（とびくない）という、現代で言う投げナイフのようなもので打ち落としているが、それだけで後はどうする事も出来ない。つまり防ぐだけで精一杯のようだ。
せめて間合いを詰められれば。
それは閃華も思ったことだが、半蔵もその点で苦労しているようだ。相手は適正距離を決して崩そうとはしない。こちらが特攻を試みれば逃げの一点にされてしまう。そのため、半蔵も距離を詰めることが出来ずに、放たれた矢を打ち落とすのが精一杯だった。
このままでは無理、なら忍びの技を使うか。

両手に合計八本の飛苦無を持つと同時に放つ。さすがにこれには相手の精霊も避けるのが精一杯だろう。その間に半蔵は次の準備をする。

半蔵の周りに浮かぶ幾つもの虚数空間、その数は二〇を超えている。そして両手には一二本の飛苦無。

そして先程放った飛苦無を弓の精霊がかわしたところで半蔵は一気に攻撃に出る。

まずは両手に持った飛苦無を一斉に放ち、虚数空間からも連弩のように飛苦無が発射される。

数多く迫ってくる飛苦無。さすがの精霊もこれには如何する事も出来ず、避けきろうとするがどうしても何本か食らってしまった。

だが相手もやられっぱなしではない。攻撃が止まるのと同時に弓を構え、出来る限りの矢を作り出した。その数は先程の半蔵が行った攻撃数と引けは取らない。

そして矢を放つと無数の矢が半蔵に向かって放たれた。

半蔵はというと先程の攻撃ですぐに動ける状態ではない。つまり、交わしきることは不可能……なはずだった。

無数の矢は半蔵に向かって一直線に向かっていくが、半蔵に当たる直前にその姿が消えた。無数の矢は半蔵がいた場所を通り過ぎていく。

突然の事態に戸惑う暇も無く、本能的に回避運動を取る精霊。

突然消えたとなれば何かをやってくると思ったのだろう。それに矢が一点に集中していてくれため、反撃に出やすいのだろう。そして反撃に使うものとすれば一つだけである。

それは属性。たぶん半蔵は物理移動、又はそれに属する属性を持っているのだろう。そうなると弓に精霊は戦術を変えざる得ない。

下手に矢を放てば、また先程のよう姿を消されてしまう。そうなると取るべき手段は一つ。

弓の精霊は精霊武具である弓その物の形を変える。形は弓その物だが、上下の刃となっている。これにより遠距離攻撃も出来るが接

近戦も出来る。
つまり遠距離攻撃だけを諦めて接近戦も考慮に入れるようだ。
たしかに半蔵の能力は遠距離の戦い方だけだと不利だろう、だから接近戦も交えるしか得ない。
幾つもの矢を放ち、その後を追って精霊が半蔵に迫る。
半蔵はというと精霊武具である忍装束をまとい小太刀を二本手にしている。そうやらこれが本来の戦闘スタイルらしい。
小太刀で矢を薙ぎ払うと小太刀を交差させて相手の弓を受け止める。このまま鍔迫り合いになると思いきや、弓の精霊は弦を引き絞る。
咄嗟に体を回転させて相手の後ろに回る半蔵。半蔵が立っていた場所には数本の矢が突き刺さっていた。どうやらゼロ距離射撃もできるらしい。
本来なら距離を取るべきなのだろうが、それでは的になってしまう。半蔵は間合いを開けることなく一気に攻めかかる。
弓に刃が付いているとはいえ補助に過ぎないのだろう。精霊は半蔵の攻撃を防ぐだけで精一杯だ。
だが防戦だけで終わる相手ではない。
半蔵の攻撃をしのぎきった時だった。精霊は回避運動と同時に弦を引き絞って一気に矢を幾つも放つ。ゼロ距離射撃が出来るのだから、こんな事は簡単に出来るのだろう。
思っても見なかった攻撃に半蔵の動きが一瞬だけ遅れる。だがそこは忍、なんとか避けるが完全に避けきる事が出来ず、何本かかすってしまった。
だがそれだけで半蔵の動きが鈍るわけではない。何事も無かったように攻勢を続ける半蔵。
相手の精霊は多少の隙が出来ると思っていたのだろう。だが早すぎる半蔵の攻撃にまた手詰まりになってきた。
こうなってはしかたないのだろう、相手の精霊は一気に勝負に出る。

攻撃の継ぎ目で一気に後ろに下がる精霊。だが半蔵もすぐに距離を詰めてくる、それが狙いだと気付かずに。

弓を引き絞り半蔵を狙い矢を放つ。

半蔵は同じように矢を叩き落すが、小太刀が矢に当たった瞬間に爆発。辺りは爆風と熱気が充満した。

……見失ったか。

爆発の衝撃で噴煙が上がり、半蔵の周りは何も見えなくなっている。だがそこは忍、辺りに注意を払う。

……上！

気付いた時には頭上から大量の矢が降り注いできた。噴煙で相手が見えないのは精霊も同じ。だからこそ、あえて狙いをつけずに大量の矢を上から注ぐように放ったのだろう。

やるか。

上から注いでくる矢をまったく避けようともせず。半蔵は力を一気に溜めて属性を発動させる。そして噴煙の中には大量の矢が降り注いだ。

一方、噴煙の外では精霊はまったく油断をしていなかった。この程度で倒せる相手ではないし、狙い打つ事も出来ない。先程の降り注いだ矢は全て半蔵を噴煙の中から出すためだ。

「んっ？」

とうに矢は降り注いだはず、だが一向に半蔵は噴煙の中から出てこなかった。もしやと思い、噴煙の向こうにも矢を連発するが当たった気配が無い。

これはおかしい。そう思って接近戦に備えようと弓を長刀のように構えたときだった。

突如精霊の背中に突き刺さる半蔵の小太刀。

「ぐはっ、な、なんだと」

突然の事態に痛みだけは伝わるが状況は理解できない。はっきり

と状況を理解した時は半蔵が口を開いた時だ。
「終わりだ」
後ろを振り向くとそこには半蔵が小太刀を二本、背中に突き刺している。
何故こうなったかなど分からない。先程まで半蔵は噴煙の中にいたのだから。
「な、どうして、そこにいることができる？」
半蔵は表情を崩すことなく、消えていく精霊に向かって説明した。
「我が属性は空、空間を知り移動できる属性だ」
「なるほどな……そなたにとって空間移動など簡単に出来るということか。では、なぜ今までやらなかった」
「あまり属性を見せびらかせると警戒される。だから必殺の時以外は使わん」
「そうか……それも、そうだな」
半蔵は更に小太刀を突き刺すと精霊は軽くうめき声を上げて、光の粒子となって消えていった。

その頃閃華達はというと、辺りを囲む精霊はすでに八〇を超えているようだ。それでも一気に攻めかかれるわけではなく、閃華達が疲れるのを待っているかのように押しては退いている。
くっ、まずいのう。このままではいつまで持つか分からんぞ。
最初から戦っていた蘭丸と人間の小松にはすでに疲労の色が出ていた。
大技を使いたいところじゃが、それでは皆も巻き込んでしまうからのう。大きすぎる力というのも使い勝手が悪いのう。
だが形勢は悪くない。忠勝の精霊である朱蘭が来てくれたおかげでなんとか戦線を維持できているからだ。
だがこのまま時間が経てば形勢は悪くなるばかりだ。
くっ、一体いつまで待たせるつもりじゃ。いい加減に来て欲しい

んじゃがのう。
来るはずの援軍。それは未だに来ていない、そのため閃華達だけで戦うはめになっている。
閃華は隙を見て辺りを見回す。もちろん援軍の確認のためだが、逆に嫌な物が来てしまった。
くっ、武田め。信玄亡き後でもこれだけの精霊を有しておったとは。
閃華が見たのは武田の援軍。たぶん今いる精霊と合わせれば百になるだろう。それほどの精霊を有しているのだから武田が最強といわれる所以も分かる。
信長の元へ向かってくる二〇ほどの精霊。だが突然その精霊達の足元に地割れが走ると一気に炎が走る。
なんじゃ！
斬りかかって来た精霊をさばいた閃華はそちらに目を向けると、忠勝が武田の援軍を叩いてくれたようだ。
全てを倒したわけではないが、半分ぐらいは減らせたらしい。
そして閃華の元へも援軍が駆けつける。
はっきり言って閃華を囲んでいる精霊だけでは、閃華は倒せないだろう。だから隙を窺おうと様子を見ていたのだが、その三分の一が一気に切り伏せられた。
これには驚く閃華。
倒れた精霊の後ろには半蔵が立っていた。そして閃華と合流する。
「遅くなった。まだ戦えるか」
「私は大丈夫じゃ。じゃが小松がまずいかもしれん、そっち行ってくれるか」
「承知。それから先程確認したが、織田の軍勢が近くまで来ている」
それだけ言うと半蔵はその場から消えると小松の傍に移動する。
半蔵の属性である空は空間を意味している。つまり力が及ぶ範囲なら空間内で行われている会話や動作が知る事が出来る上、空間移動も出来る。つまりテレポートと考えていいだろう。

それは小松の属性とは違ってくる。小松は影や闇を使って移動するが半蔵は空間を移動する。
だがこれにも短所はある、間に遮るもの、つまり壁などがあると空間を繋いで移動することが出来ない。便利そうな力ほどある程度の制限が付くのが属性の規則らしい。
ちなみに小松の属性は繋げる事が出来れば間に何があろうと移動することが出来る。だがそのためには影や闇が必要となってくる。要するに一定の場所にしか瞬間移動できないということだ。
やはり属性というのも万能では無いという事だろう。
そして半蔵の言葉を聞いた閃華はやっと笑みを浮かべた。
やっと来たか。
それは今まで閃華が待っていたもの、つまりこの戦いに終止符を打つ最後の一手。
そして織田の援軍は閃華が思っている以上よりも早く来た。
信長の周りにいる精霊達が吹き飛ばされ、切り伏せられる。
「大丈夫ですか、御館様！」
泣きそうな顔をしながら秀吉が信長に向かって叫ぶ。だが信長は軽く笑みを返すだけだ。
「ふっ、サルめ、やっと来たか」
信長の無事を確認した秀吉は契約した精霊達に命令を出す。
「ヨッタ、ゼッタお前達は御館様を守れ。エキサ、フェムトお前達は儂に続け！」
それぞれ美女の精霊達に命令を下した秀吉は一気に戦場へと突っ込んで行く。
どうやら秀吉と契約を交わした精霊達はこの国で生まれた精霊ではなく、海の向こうで生まれた精霊達らしい。それに例外に無く、それぞれの精霊達は美しかった。秀吉が精霊と契約した事がよく分かるという物だ。
これで織田方の精霊と契約者は十一人。だが信長はもちろん、閃華、忠勝、半蔵と一騎当千の精霊達がそろっている。

そして武田方はというと、精強な精霊は先程忠勝と半蔵に倒されてしまった。つまり、現在信長を囲んでいるのは三下に過ぎないが、これだけの数が揃うとやっかいだ。

だがそんな中でも閃華と忠勝は猛威を振るう。さすがに戦闘に疲れてきた小松と蘭丸は信長の元まで下がり警護に当たっている。そして秀吉達はそれぞれ組んで先頭に臨んでいる。

その中でもやはり重要な役割を果たしているのは半蔵だろう。半蔵は遊撃兵となり相手の連携を防いでいる。そして相手が崩れたところに忠勝か閃華が一気に突っ込み切り伏せて行く。

その戦術で武田に大打撃を与えた。

そして武田も精霊がもういないのだろう。これ以上の援軍は無い、つまりここにいる精霊を倒せばこの戦は勝ったも同じだ。

だいぶ精霊の数も減り、秀吉も一度信長の元へ戻った。

「そういえばサル」

「はっ、なんでしょう？」

「鉄砲隊の指揮は誰が執っている」

「それは家康様に任せてきました。林様では鉄砲はともかく鉄兵までは使えないと思いまして」

「ふっ、サル知恵とはよく言った物だ」

それは信長の褒め言葉なのだろう、そして秀吉もそれは良く分かっていたからこそ満面の笑みを浮かべる。

そして信長は改めて回りを確認する。

武田の精霊は大部減り、その数は総数の半分以下になっていた。

「小松、蘭丸、まだ戦えるか？」

「はっ、この命尽きるまで」

「御館様のためならどこまでも」

小松と蘭丸はそれぞれ戦える事を主張する。それを聞いた信長は会心の笑みを浮かべる。

「もう守りは不用。いくぞ、一気に武田を撫で斬りにする！」

それは総攻撃の合図。

周りの者達は頷くと一気に駆け出した。
閃華と忠勝と半蔵、それから秀吉の精霊二人が前線に出ていた為。信長を含めて七人は一気に敵陣へと切り込んで行った。
信長を中心に切り込んでいく一団。それは信長を司令塔に完璧な連携が取れた戦い方だった。
閃華達との遊撃兵的な戦い方とは違い、戦としての戦い方だ。それ故に崩しにくく、相手をする方も完璧な連携を要求されるのだが、先程の戦いで武田方の司令塔は忠勝と半蔵に倒されてしまった。
つまり、今の武田は総崩れに近い。
そんな中での突撃である、武田の士気は下がる一方だ。
例え精霊とはいえ逃げ出す者もいた。そして織田方は怒涛の勢いとなり一気に武田の精霊達を突き崩す。
閃華、忠勝、半蔵の遊撃兵が武田の連携を突き崩し、信長を始めとする一団が一気に相手を殲滅する。こうなってくると勢いは完全に織田方にある。最早数などは関係ない。今の戦場に必要なのは連携と勢いだけだ。
そして、それを完璧に手にしたのは信長だった。

それからあまり時を置かず、武田の精霊達は壊滅した。さすがに何人かは逃げたようだが、数の油断があったのだろう。まさか織田方がここまでやるとは思っていなかったらしい。
そのうえ閃華だけでなく、忠勝と半蔵という一騎当千の精霊まで参戦してきたのだから三下の精霊たちにはどうにもできなかったようだ。
これで精霊戦は終わりを告げた。後は長篠で行われている戦だけだ。
武田騎馬隊は未だに馬防柵を超える事が出来ずに鉄砲と精霊砲の餌食となっている。それに精霊砲にも工夫が施されていたらしい。
属性を組み込む時にさまざまな属性を入れたらしい。だから着弾

するのと同時に炎上する物や雷を撒き散らす弾丸も発射するようだ。
そして精霊達を撃破した信長が再び戦に目を向けたときにはすでに変化が起こっていた。
鉄砲に鉄兵、更には精霊による襲撃も失敗したからだろう、武田はすでに退陣に移っていた。
精霊だけでなく、鉄砲と鉄兵でも多大な被害を出している。これから再起するにも大分時間が掛かるかもしれないし、もしやしたらこのまま潰れる可能性があるぐらいに叩き潰されていた。
たった一度、たった一度の突撃だけでこれだけの被害をこうむるとは勝頼は思いもしなかっただろう。まさか鉄砲だけでなく鉄兵のような兵器まで用意してあるとは思うことすら出来ない。
だからもう退くしかないのだろう。
兵を引いていく武田、だが信長は追撃をしようとはしなかった。
逆に満足したような顔をしている。
そう、これは信長にとって戦ではない。新兵器を試すための実験でしかなかったのだ。それに織田と徳川が有している精霊の力を確かめるための物、ただそれだけだった。
つまり、信長に目には最初から武田は写っていなかったのだろう。
信玄亡き後の武田など恐るべき相手ではないのだ。
こうして武田の敗北によって長篠の戦は終わった。
だが全てが終わったわけではない。まだ武田の他に信玄と並び立つ上杉謙信が顕在している。これもまた織田家の脅威となるだろうが、信長には何かしらの手があるのだろう。
だが問題は閃華達だ。閃華達にとっての脅威は思わぬところから忍び寄っているのだった。

第六十三話　忠勝と半蔵（後書き）

え～、そんな訳で今回は確認作業を手抜きにさせてもらいました。だって、しかたないじゃん！！！　仕事で疲れて頭が真っ白なんだもん！！！

そんな訳で、誇示脱字、その他慣用句の誤りがあったら教えてください。明日ぐらいには直します。

さてさて、寝ます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。それからこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、それから投票、人気投票とお待ちしております。

以上、最近ブログでエレメのキャラと座談会をやってる葵夢幻でした。

第六十四話　たった一つの出来る事

鉄砲と鉄兵、それから精霊達の活躍により長篠の戦は織田家の勝利に終わった。

もちろん、この時代でも精霊や鉄兵は黙認されて当然の存在だから歴史の表舞台に立つことは無い。だが、それでも鉄兵と精霊達の活躍は凄まじかった。

その凄さを語るかのように武田の被害は甚大だ。重臣たちを始め多くの物が戦死、たった一回の突撃で八〇〇〇人以上の兵が戦死した。

それほど鉄砲と鉄兵の力が証明されたと言えよう。

それから信長は岐阜へと帰還する。

それから再び始まる信長の疾走。歴史が信長を求めているかのように天下を目指して突き進み始めた。

そして長篠の戦から三年後。ついに上杉謙信がこの世を去る。

信長と謙信は一度激突して負けているが、これで武田と上杉、この二強が去って信長を止める者は誰もいなくなった。

そしてそれを示すかのように信長はある物を作り始めた。それが城、後の世に言う安土城である。

足掛け七年の歳月を掛けてやっと完成した安土城の天主閣、それは今までに無いほど壮麗でなもので、その天主閣完成が道勝に思わぬ幸運をもたらす事になった。

「小松、小松はいるか」

道勝は帰ってくるなり廊下を走りながら小松を探していた。

なんじゃ、帰ってくるなり騒がしいのう。なにかしらあったんじゃ

ろうか？
その時閃華はちょうど庭にいたので、通りかかった道勝に小松の居場所を教えると一緒に来るように言われたので同行することにした。
そして勝手に言葉を掛けて部屋に入る道勝。
小松は驚く事もせずに道勝を迎え入れる。まあ、あれだけ騒いでいたのだから聞こえて当然だろう。
道勝は小松の前に座ると嬉しそうな顔で話し始めた。
「小松、安土城の天主が完成したのは聞いておろう」
「ええ、皆その話題で持ちきりです」
それを聞いた道勝は更に胸を張る。
「そこで今日、御館様から直々にお許しが出たのだ」
「と、言いますと」
「聞いて驚け、なんと、織田家重臣の中で儂が一番最初に天主に入ってよいようじゃ」
「ッ！」
さすがにこれには小松も言葉は出ないようだ。
安土城の天主閣、これは信長の部屋であり、そこに一番最初に入る権利を与えられたのだから、これは織田家中では他にありえないほど栄誉な事だ。
なんと、これは、まさか御館様はそこまで旦那様を重視しておったとはのう。
この栄誉な事は重臣だからと言って得られる物ではない。信長が自分で一番最初に見せてやろうと思ったのが道勝だ。そしてそのことは、織田家で道勝が重臣の中で一番重要視していることを示していた。
まあ、確かに旦那様は目立った功績はないが、裏ではしっかりと仕事をこなしておるからのう。じゃからこそ、戦で思いっきり戦えるというものじゃ。
どうやら御館様も裏方の役割をちゃんと分かっておるようじゃの

う。裏方を重視せずに負ける者は多いが、御館様は違うか。
つまり戦は兵達の戦いだけで決まるわけではない。食料や武器などの物資の補給、情報の獲得。いろいろな事を得るからこそ戦に勝てるんだ。そこをちゃんと分かっていたからこそ、信長は今まで戦に勝てたのだろう。
だが、話はそれだけではなかった。
「どうだ小松、これほどの朗報もないだろう！」
楽しそうに話す道勝に閃華は頭を下げた。
「旦那様」
「んっ、どうした閃華、改まって」
顔を上げる閃華。その顔は笑みに満ちていた。
「実はもう一つ、朗報らしき物があるのです」
「らしき物？」
「はい、まだ確定はしていませんが間違いないかと」
そう言われると興味があるのだろう。道勝は閃華と向き合った。
「実は昨今、精霊達の間で囁かれている話しがあるのです。それは精霊王の器がもうすぐ消えるとの事」
それがどうしたとばかりの顔をする道勝。
「精霊王の器が消える。つまり、新しいエレメンタルロードテナーが決まるのです。そしてその最大の候補者こそ、御館様なのです」
再び驚く小松と少し考えて事態を把握する道勝。
道勝などは思わず閃華の肩を掴むほどだ。
「それは本当か閃華」
「まだ確定はしていません。ですが、御館様以外にエレメンタルロードテナーに最も適している人間がいないのも事実。海の向こうにも御館様を超える契約者はいないそうです」
「……そうか、そうか！」
閃華から離れて更に嬉しそうに腕を振る道勝。その気持ちも分らない訳ではない。
道勝は織田家の中で最高の栄誉を得て、信長はとうとう精霊王の

器となり天下統一に近づくのだから織田家にとってこれほど喜ばしい事は無いのだろう。

「これで御館様がエレメンタルロードテナーになれば織田家は安泰。それに儂もその織田家で立派に役目を果たせる。これほど嬉しい事はない、なあ小松に閃華！」

「はい、それはもう！」

信長がエレメンタルロードテナーになれば、その力だけで一軍を倒す事が出来る力を得る事が出来る。それほどの力を信長は手にいようとしている。そうなれば、もう信長に逆らえる者はいなくなるのだろう。つまり、織田家の天下である。

そして道勝はその傍で信長を支える。道勝にとっても信長にとってもこれほど喜ばしい事は無かった。

そして閃華もこの幸運が続く物だと思っていたが、不安があるのも確かだった。

強大な力は時に人を変えるからのう。御館様がそうなるとは思わんが、なんじゃろうな、どこかで不安を感じておるんじゃ。

胸の奥で蠢く不安。閃華はそれを無視する事は出来ないが、これほど喜ばしい事が続いたのだから、とりあえず胸の奥に閉まって置いて明るい未来を想像する。

さて、これで織田家の天下になれば私は暇になるのう。今のうちに小松を懐柔させていろいろと画策しておこうかのう。それに旦那様も織田家にとっては無くてはならない人になるのだから、それなりの恩賞があって当然じゃろう。さて、どこの領地がもらえるじゃろうな。

どちらにしても、林家にとっては朗報続きだった。

そして、閃華達が思っていたとおりにことは進んだ。

見事、安土城の天主閣は完成して最初の見物は道勝だった。もちろん信長も同行して直々に案内して驚く道勝を楽しんでいるようだ

った。

しかもそればかりではない。道勝と小松の間には子は無い。だから養子を取ってはどうかと言い出し、その世話をしてやろうとまで言ってくれた。

思わずその場に平伏する道勝。道勝にとってこれほど嬉しい事は無かった。正にこの時が林家にとって最高の瞬間。道勝など何度も信長に礼を言ったほどだ。

更に時は進み、安土城が完成してから六ヶ月。遂に前のエレメンタルロードテナーが完全に消滅した。そして精霊王が選んだ次の器はもちろん信長だった。

精霊王の力を得た信長。これで信長の天下はなったと誰もが思ったが、綻びは意外なところから出るものである。

絶対的な力で天下統一を計る信長。だが強大な力ほど近くに脅威を生む物のようだ。

一五七八年、天正六年一一月。荒木村重が元の将軍足利義昭と組んで謀反を起こした。そして、その鎮圧に奔走したのが羽柴秀吉。特に秀吉の家臣である黒田官兵衛などは自ら荒木村重の居城に乗り込んで説得をしようとしたが捕らえられてしまった。

もちろん、信長の怒りは尋常ではない。すぐに荒木村重の城に焼き討ちを掛けろと言い出したが、秀吉が官兵衛を心配してなんとかこれを抑えた。

それから足掛け二年。やっと村重の反乱を鎮圧して官兵衛を救い出すことに成功したのだが、これで終わりではなかった。いや、今思えばこれがすべての始まりだったのかもしれない。

絶対的な力を手に入れたとしても、人の心までも支配できるわけではない。それに信長は浅井長政、荒木村重と意外なところから謀反が出ている。

そのことがあっただろうか、閃華が予想していたとおりに信長が変

わってしまったのは。いや、最初からそういう気質を持っていたのかもしれない。

だからこそ、エレメンタルロードテナーとなって神に近い力を得た信長にとっては絶対に許せないことだし、もう二度と繰り返したくは無い事だ。

だからだろう、道勝にまで累が及んだのは。

ある日突然、織田家の重臣である佐久間信盛と道勝は一緒に信長の元へ呼び出された。両名とも織田家では最も地位かある家老職である。

その二人が呼ばれるとは尋常ではないと、二人は信長がいる部屋へと向かった。

そして両名が部屋に入るとすでに信長はおり、不機嫌そうに扇子を軽く叩いていた。

「林道勝、佐久間信盛、両名をお呼び付けと聞き参上しました」

「ああ、呼んだぞ」

まだ不機嫌な雰囲気を崩さない信長は座り直すと両名に敵意ではなく、別の意を含んだ目を向けた。

「信盛」

「はっ」

「そなたには石山攻略を命じたのに未だに落とせないのか。四年の歳月も掛けて何もしなかったのか」

「いえ、そのようなことは決して。本願寺勢の鉄砲の数は多く、海上からの補給路閉鎖を狙いましたが、これが」

「言い訳などよいわ！」

突然、扇子を放り出し立ち上がると信盛の元へ行き、膝を折って目線を合わせる。

「サルも勝家も毛利、上杉と奮迅しておるのにそなたは何も出来ぬのか！」

「いえ、そのようなことは！」
つまり信盛が成果を上げていない事に信長は怒っているのだろう。
そのまま元の席に戻ろうとする信長の裾を信盛は掴んで懇願し始めた。
「お待ちください！　確かに」
「離せ痴れ者が！」
信盛を蹴り飛ばし、更に手にしていた扇子を投げつけた。それから席に戻り再び信盛に命じる。
「そなたように痴れ者に用は無い。織田家から去れ！」
つまり織田家からの追放ということである。
「お待ちください御館様！」
さすがにこれには今まで黙っていた道勝が口を開く。
「佐久間殿も決して手を抜いておった訳ではございません。それだけ本願寺勢が精強なのでしょう。どうか、もうしばしのご猶予を」
頭を下げて懇願する道勝。そんな道勝にも信盛は気体の眼差しを送り同じように頭を下げるが、信長は信盛と同じような目で道勝を見る。
「道勝」
「はっ」
「そなたは信長が織田家の家督を継いだ後に弟の信行に付いておったな」
「はっ？」
「つまり機会があれば儂の首を狙っておるのだろう！」
「なっ！」
さすがにこれには驚く道勝。信長の弟である信行が謀反を起こしたのはもう二〇年以上前になる。それからずっと織田家のために仕えてきたのに、その事を今更言い出すのは酷すぎる。
「そのようなことがあるはずがございません！　確かに信行様に加担しましたが、それは二〇年以上前のこと、その後はただ織田家のために尽くして参りました」

「では、そなたは何をやって尽くして来たのだ」
「はっ？」
「そなたはこの二〇年以上何をやったと聞いておるのだ！」
怒鳴りつけてくる信長に道勝は思わず身をすくめる。確かに道勝の仕事は裏方が多いから目立った功績は無い。それをどう説明すればよいといわれても困るだけだ。それは道勝もそれを信長が分かっていると思っていた。だからこそ、目立った功績を作ろうとしなかったのだ。
だが今はそんな事を言ってられない。どんな事でも良いから目立った功績を上げなければ。そして道勝が思い悩んだ時だった。誰にも負けない功績を思いついた。
「し、信玄の首を取ったのはこの林家でございます。それをお忘れでしょうか。それに長篠では御館様を直々にお守りしました」
武田との戦いで得た功績を語る道勝。だが信長は再び席を下りて今度は道勝と目線を合わせる。
「道勝、まだ分らぬのか？」
「はっ？」
「信玄の首を取ったのも、長篠で精霊達を撃退したのもそなたではなかろう。小松と閃華、この両名であろう！」
「ですが、二人とも林家の」
「だが、そなたは何もやっておらぬではないか。それでは信盛と一緒に痴れ者だ。そなたにも用は無い。織田家から去れ」
「お、お待ちを。それでは小松と閃華が救われません」
信長は道勝のまげを取るとそのまま掴んで投げ飛ばす。
「まだ分らぬか道勝！」
「……」
「そなたは小松と閃華という精強な兵を得ていたのだぞ。それを遊ばせておいて何もせずとは、それでよく一軍の将が務まるのかと申しておるのだ！」
そういわれれば言い返す言葉が無い。確かに小松と閃華の力は戦

に出せばかなりの戦力となっただろう。だが道勝は小松可愛さに戦に出さず、閃華も小松と契約したから利用しという考えが思い浮かばなかった。

「これで分っただろう、そなたらの罪が。今まで織田家に仕えてきたのだ、命だけは助けてやるからさっさと去れ！」

『お待ちください！』

道勝と信盛は更に懇願しようと呼び止めようとするが、信長はさっさと部屋を後にしてしまった。

取り残される二人。もう交わす言葉も無い、ただうな垂れるだけである。

なんでこんな事になったのかも分らない。もちろん、裏切りを考えたり手を抜いた事は無い。織田家のために必至に働いてきた。それなのにこの仕打ちは酷すぎる。

ただただ、いろいろな考えが頭を巡り、うな垂れながら時が過ぎていく。もちろん交わす言葉も無く、これからの境遇を考える余裕すらない。

道勝が帰ってきたのは、かなり夜が更けてだった。そして出迎えた小松も侍女達も魂が抜けた道勝に言葉を掛けても返事は無く、ただ自室に入っていくのを見送るだけだった。

それからすぐに小松は閃華を自室に呼ぶ。やはりこういう時に頼れるのは閃華なのだろう。

「先程の旦那様、まるで魂が抜けたようでした。なにかあったのか知りませんか？」

小松の問に閃華は少し考える。確かに思い当たる事が少しあるが確定しているわけではないし、閃華自身も信じられなかった。

だがエレメンタルロードテナーとなった信長にはその可能性があるのも確かだ。

う～ん、まさかあの噂が本当じゃったんじゃろうか。あくまでも

噂じゃと思っておったし、旦那様は織田家の家老職じゃ。そんなことがあるはずがないんじゃが。……あの御館様の事じゃ、もしやしたら。

「確証は無いんじゃが」

「それでも知っている事は教えてください」

「最近巷ではとある噂が流れておる。なんでも御館様の周りに謀反が続くから怪しいのを斬り捨てていこうという噂じゃ」

「それなら私も聞いた事があります」

強すぎる権力には必ず謀反が出る。エレメンタルロードテナーなどという最強の力を有しているのだから信長の周りに謀反が出て当然といえよう。

「ですが、御館様は神に最も近い存在。謀反人も出ましょう」

「うむ、そこが一番問題なんじゃ」

「と、言いますと？」

もし、これは御館様の性格にまつわる問題なんじゃが。もし、御館様が裏切りというのを嫌うお人なら、これを最も排除しようとするじゃろう。たとえ、その可能性が薄くても信頼が置ける人物だけで周りを固めようとするんではないじゃろうか。

そんな完璧主義的なやり方で世が治まると思わんが、エレメンタルロードテナーの力がある以上はそれが可能じゃ。

……そうか！　今まで御館様に時々感じていた不安。それは御館様が完璧主義ではないじゃろうかということか。つまり、エレメンタルロードテナーの力を手に入れれば信頼できるかどうか分らない人間は不要。逆に斬り捨てた方が安心じゃ。……となると。

「もしやしたら、御館様は旦那様の事を謀反の疑いがあると思ったんじゃ」

「決してそのようなことはありません！」

「そこで怒鳴らなくても分っておる。じゃが、御館様の事じゃ。もしや何かしらの事で疑いを掛けられたのじゃろう」

それを聞いて黙っていられなくなったのだろう。小松は立ち上が

ると部屋を出ようとするが、閃華は慌ててそれを止める。
「離しなさい閃華！」
「今はそっとしておいてやれ。時が来れば話すはずじゃ。無理に聞けば心を乱すことになるぞ」
それを聞いて小松は困った顔になると一応納得したのだろう。再び座り溜息を付いた。
「ただ待つというのもつらいですね」
「一番つらいのは旦那様じゃ、それぐらいは察してやれ」
「ええ、そうですね」
それから更に時が過ぎ、夜が明けて朝食が終わったときだった。

道勝は登城せずに小松と閃華を部屋に呼び全てを話した。
「何故ですか！　旦那様はあれだけ織田家に尽くして来たのというのに！」
感情を抑えきれないのか叫ぶ小松を閃華は押さえ込む。だが道勝はもう全てを受け入れたのだろう。静かに座りながらこれからの事を話し始めた。
「まあ、儂も年だ。隠居してもおかしくは無い。だから追放ではなく隠居と考えよう」
そう考えた方が気が楽なんじゃろうな。
道勝の心中を察した閃華はなるべく明るく振舞う事にした。これ以上、怒ったり沈んだりしたら道勝が傷ついてしまう。
「なら、住まいを変えたらどうじゃ。ここでの暮らしは飽きたからのう。どうせなら他の土地に住みたいものじゃな」
つまり織田の傍にいたいほうが良いという閃華の判断だ。織田が傍にいればどうしても道勝が気にしてしまう。そうなるくらいなら織田から遠のいた方が良い。
「だな……どうせなら京にでもいくか」
「京か、なるほどのう。あそこならいくらでもうまい物がありそう

じゃ」
「あなた達はそれでよいのですか！」
思わず声を荒げる小松に道勝は顔を伏せて、閃華は目をそむける。
「今回の仕打ち、あまりにも理不尽極まりないものではありませんか。それを黙って受け入れるなんて、どうみてもおかしいでしょう！」
しかたなく小松と向き合う道勝。
「それは儂も良く分かっている。だが御館様の命だ。逆らえば儂の命が飛ぶじゃろ」
「ですが！」
「とりあえず落ち着け小松。そしてよく周りをよく見ろ。一番辛いのは誰じゃ？」
閃華にそう言われてやっと冷静さを取り戻す小松。確かに辛いのは道勝だ。そんな中で自分がこんなに騒いでは道勝を困らせるだけではないか。
やっと口を紡ぐ小松。
（ですがこれはあんまりです。確かに旦那様は信行様に加担しました。ですがその後は二心など抱かずに織田家に奉公されたではありませんか。それを今更信行様に加担したという理由で追放など酷すぎます）
確かに納得できるものではない。だがエレメンタルロードテナーになった信長には道勝は邪魔な存在だけだったかもしれない。どちらにしても理不尽な処置なのは確かだ。
（なぜ、なぜ私には何も出来ないのでしょう。もう少し力があれば、旦那様のお役に立てたのに）
だがこればかりはしかたない。信長直々の命だし、誰にも覆す事は出来ないだろう。だからもう、小松は黙り込むしかなかった。
小松が静かになったので安心したのだろう、閃華と道勝は再び今日の話し戻り、その横で小松は不機嫌な顔をしている。まあ、道勝と違い先程この話を聞いたのだから不機嫌なのも分からなくはない。

逆に道勝はもう隠居してもよい年だし、諦めがつけようとしているのだろう。

そして閃華はというと落ち着いたものだ。昨日の時点からこの事態は予測できたし、信長の性格からなんとなくこういう事になるのではないかと感じ取っていたのだろう。

まあ、こうなってしまったものはしかたないからのう。旦那様の驚きは私達以上じゃし、先程の事もあるからのう。後で小松に言っておくか。

そらから閃華の計らいでとりあえず小松と閃華は部屋から出ることにした。これ以上小松が騒げば道勝に心労が溜まるかもしれないからだ。

そして部屋に戻った閃華と小松はこれからの事について話し合いを始めた。

なにしろ道勝は織田家を追放されて無職になったのと同じである。そんな者が何人もの使用人や家来を雇い続ける事は出来ない。それだけではなく、もう安土からは出て行くのだから新たな新居もどこかに構えないといけない。つまり、家の後始末に追われる事になる。これで林家は断絶なのだから。

まず小松達が取り掛かったのは大量にある荷物の整理だ。いらない物を捨てて最低限のものにまで物を減らしていく。織田家を追放された以上、これまでのような裕福な生活は出来ない。そんな中でも何人もの家来が去って行き、作業ははかどらなくなるがやっと全てをまとめる事が出来た。

それから使用人達の解雇。これはしかたない。この時代、上位にいる武士には必ず何人もの使用人、つまり主家でなくその家に仕えているものがいた。中には兵となるものもいるがほとんどが私生活周りの仕事をこなしている。そういう使用人たちを全て解雇した。

そして使用人達もこうなることは分っていたのだろう。泣きなが

ら小松に別れを告げると次々と林家を去って行った。こういった裏の事を取り仕切るのも妻である小松の役目だ。

そして最後に残ったのは、道勝と小松、そして閃華だけだった。閃華は契約も破棄できたが、ここで見捨てるのも忍びない。せめてその生涯だけでも看取ってやろうと最期まで付き合う気のようだ。

こうして林家は断絶、同じく追放された佐久間信盛にも同情の目を向けられたが、それ以上に信長に恐れの目を向けるものが多かった。

そして遂にこの家を出るときが来た。

（今思えば、織田家のために何度も住まいを変えてきましたね。ですが、これも全て織田家のためと喜び勇んで準備をしたものですが、今回ほど気が重いときはありませんでした）

まあ、そうだろう。今回は織田家の転居ではなく追放である。そんなのを気乗りでやる奴などいない。

だがそんなことよりも小松には心配事があった。

（織田家を追放されてからというもの、旦那様の食事が細くなりました。此度の転居でお心が変わればよいのですが。このままでは病にかかってしまいそうです）

小松がそんな事を思いながら閃華達は安土を離れて京へ上がった。

今までの暮らしに比べればかなり貧相な生活になっただろう。だが小松は文句の一つも言わずに畑仕事まで始めた。まあ、このまま隠居生活も悪くは無いだろう。

だが心配事はあった。

（旦那様はやはり未だ織田家のことが忘れられないのでしょう。食欲が無いようです）

こちらに来れば気持ちの切り替えで元気が出ると思ったが、よほど織田家の事が忘れられないのだろう。特に何かをするわけではなく、京の町に出た時に織田家の話を聞けばすぐに喰らいつく。そん

な生活をしていたのだから、よほど今でも織田家に執着があるようだ。

（ここでの生活も悪くないというのに、旦那様もお早く織田家の事を忘れてくれればよいのですが。別に暮らしに困ってるわけではない。楽隠居といっても良いくらいの生活なのですが）

今まで織田家の家老でいたのだから、これからの生活に困る事は無い。余生をゆっくり過ごす人生も良いと小松は思っていた。

だが道勝は未だに織田家の家老であったことに執着があるらしい。だがそれもしかたない、道勝にとって織田家の家老という立場は誇りであり全てだったのだろう。

それを失ったのだから精神に掛かる負担は大きいものだ。

京に移ってから数ヶ月、とうとう道勝は病に倒れた。病状は不明、どうやら織田家から追放された心労から来ているものだろうが、今更どうする事も出来なかった。

（やはり織田家から追放されたのが堪えているのでしょう。なんとか、気を取り戻してもらわないと）

必至に道勝の看病を続ける小松。その傍らで閃華も小松を手伝っていた。

……あまり、思いたくない事じゃが。旦那様はあまり長くは無いじゃろう。もう年だし、織田家を追放された事が相当堪えたようじゃ。まあ、今まで織田家の家老が一気にこんな生活に落ちたんじゃからのう。心労は絶えんじゃろう。

そして閃華が思っていた悪い想像は現実となる。

京に移ってから一年。遂に道勝はこの世を去った。

（なぜ、なぜ旦那様が逝ってしまうのです！　どうしてこんなことに！）

道勝に寄り添い泣き叫ぶ小松に掛ける言葉が無い閃華は、いたたまれずにその場から去ってしまう。

その後も小松は未だに道勝に寄り添う。

（旦那様、旦那様！　……くっ！　やはり織田家ですか。織田家追

放がそこまで旦那様を苦しめたのですか！）

二人の仲が良かっただけに耐え切れないのだろう。いや、小松はどこかにぶつけないと耐えられないのだろう。それが織田家だったに過ぎない。

だからこそ、小松の恨みは織田家へと、いや、信長へ向いたのかもしれない。

（旦那様、確かに織田家ではいろいろとありました。だが、信長様に叛こうとした事は一度も無いはずです。なのに、何故このような仕打ちを受けねばならぬのです！　そこまでの事を旦那様はしたのですか？）

そう聞かれれば誰もがしていないと言うだろう。だが信長にとっては何もしていない事が罪なのだろう。

小松は一旦涙を拭く去ると道勝の手を取る。未だに少しだけ暖かい感触が伝わってくる。

（もう、この手は私を撫でてはくれないのですね。触れる事すらできないのですね。二度と……旦那様の温もりを感じられないのですね）

だからだろう、小松は道勝を感じるかのように頬を撫でて、少しずつ冷たくなっていく道勝を何度も撫で続けた。

（違う、こんなのは違う！　旦那様が、旦那様は……）

小松は道勝の手を戻すと今度は覆いかぶさるようにして、失われていく道勝を少しでも感じ取ろうとする。

（旦那様、私がこの林家に嫁いでからというもの。毎日が幸せでした。確かに子の産めない私でも可愛がってくださり、生涯愛してくださいました。だから私は……旦那様のお役に立ちたかった。閃華と契約して力を得ればそれが出来ると思っていた。……けど、私は無力だったのですね。旦那様が一番苦しんでいる時に支える事が出来なくて）

悔しかった。寂しいのでも悲しいのでもない、ただ悔しかった。何かが出来ると思っていた自分、役に立っていると思っていた自分。

それは全て小松の幻想に過ぎないのだったから。
そして道勝の体からは生気が消えて行き、唇も紫色になっていくと小松は自分の紅を持ってきて唇に塗る。
（武士は死んでも桜色、せめて旦那様は最後まで武士でいてくださらなければ）
顔の色は完全に生気を失っているが、唇の赤が今までの道勝を思い出させて小松は再び道勝の腕に抱かれる。
（お許しください旦那様。私は何も出来ませんでした。何もやり遂げる事が出来ませんでした。だからこそ、この思いは墓まで持っていこうと思います。だから向こうでも、再び夫婦になってください。お願い申し上げます）
悲しいほどに夫を思う妻の心。それこそがこの夫婦だったのだろう。

その頃の閃華はというと、外に出ると未だに少し冷たい夜風が頬を撫でる。
とうとう来たか。まあ、こうなると分っておったが……やはり寂しいものじゃのう。今まで仕えていただけに、私まで泣きなくなってくるではないか。
じゃが、これはしかたないことじゃ。人間はいつか死ぬ。そんな事は分りきっている。なのに何故受けきれないんじゃ。
小松と道勝、この二人は本当に仲の良い夫婦だった。閃華が小松に目をつけた本心も実は二人の関係にある。あれほど互いに思い思われる、これほどの物があるのかと、だからこそ閃華はこの二人の関係をもっと見続けたいと思った。人が互いに思う姿がこんなにも美しいと思わなかったから。
そしてそのために小松と契約した。
だが……道勝はもういない。もう、あの夫婦の姿は見ることが出来ない。それだけ、ただそれだけなのに。閃華の頬に涙が流れ落ち

て、口からは嗚咽が勝手に出てくる。止める事なんてしない。そんな事をしても意味は無いから。

そして閃華の悲しみは静かな夜に溶けて行った。

それから一年、最初は魂が抜けたような小松であったが、今ではすっかり以前の明るさを取り戻していた。そして閃華も同じように振舞っている。

もう、あれから一年以上も経つのである。いつまで沈んでいても意味は無い。

まだ夏が遠い気候の中で小松も閃華も畑仕事を良くやっているし、小松などは時々京の町に出ては芝居見物などもしている。決して道勝の事を忘れたわけではないが、やっと振り切れてきたのだろう。

そしてその日も小松一人で芝居見物のために京の町に繰り出していた。閃華はあまり芝居は好きではないようだ。それよりか家で書物を読んでいる方が多い。

芝居小屋に入る小松。そしてその日の芝居はちょっと変わった物だった。

内容は信長が前の将軍足利義昭を追放する場面を描いた芝居だったが、その後が変わっていた。なんと、その義昭が信長に復讐をするのだった。

どうみても現実的には無理だろうという身のこなしで信長の寝所に潜入する義昭。そしてそのまま信長と刃を交えるが返り討ちに遭ってしまい、芝居は終わった。

まあ、信長の天下である。信長が殺されるような芝居は出来ないのだろう。だが小松の胸にはある思いが生まれ始めていた。

（……）

芝居が終わっても小松は席を立とうとはしなかった。まあ、次の芝居を見るために席に座り続ける人も多いのも確かだが、小松の心には何か別なものがあったようだ。

そんな時小松の横から小声で妙な話が聞こえてくる。
「よお、この芝居実は実際に義昭様が信長を討とうとしてる企みから出来てるみたいだぜ」
「本当かよ！　でも義昭様は追放されたんだろ」
「そう、そこが肝よ！　つまり義昭様は死んでない。いくらでも復讐できるってワケさ」
「なるほどね～、だからこんな芝居を書いたんか」
（死んでない？　そうか、義昭様は死んでおられないんでしたね）
だが話はそれで終わりではない。二人してその話をしていた一人がもう一人に耳打ちする。だが声が大きいのだろう。小松にもしっかりと聞こえてきた。
「しかもよ、義昭様は実際に信長への挙兵を考えてるらしいぜ」
「嘘だろ！」
（ッ！）
思わず大声で反論してしまう相手に慌てて指を口に当てて静かにさせる。それを聞いていた小松も驚きを隠せないようだ。
「それがよ、俺も聞いた話なんだけど。どうやら義昭様は坂本に居て兵を挙げようとしてるんだってよ」
「なんでそんな場所に」
「馬鹿だな、お前。坂本といえば明智様の領地だろ。つまり、明智様と義昭様が信長の天下を覆そうとしてるんだよ」
「その話は本当ですか！」
思わず話しに入り込む小松。話していた二人は驚くばかりだが、義昭の事を話していた者は頷くばかりだ。
それから小松は懐から財布を出すと小判を差し出す。こういった話は普通他人には話さないのが普通だろうが、金銭が絡んでくると急に口が軽くなる物だ。
「これでその話、良く聞かせてください」
最初は戸惑う二人だが、目の前に小判を受け取り知っている事を全て話した。

それからここでの話は誰にも漏らさない事を約束に小松は更に金銭を渡して芝居小屋を後にした。

（旦那様、一年以上の歳月を掛けてしまいましたが、やっとお役に立てる時が来ました。ですから見ていて下さい。必ずやお役に立ちます、旦那様のために）

「閃華、私はしばらく旅に出ますから留守番お願いします」

芝居見物から帰ってくるなり、突然荷物をまとめ始めた小松がそんな事を言い出したので、閃華は驚き立ちすくんでしまった。

「小松、いったいどうしたんだ？」

だが小松は作業の手を休めることなく簡単に答えるだけだった。

「湯治と明智様に用がありまして坂本へ行ってきます。それで準備をしているだけです」

「なら私も行こうか？」

「いえ、閃華は留守番をお願いします」

（これは……誰にも知られてはいけない事ですから。それに閃華が知ったら止めるでしょう。だからこそ、私一人でやらねばならないのです）

荷物をまとめながら小松は更に思いを募らせる。

（確かに閃華がいれば心強いでしょう。けど、旦那様の無念は私自身が晴らさないといけないのです。そのためには一人で行くのが一番良い。そして誰にも漏れないように閃華にも話しません。）

だが、そう思うと閃華自信のことがふびんと言うか心配させるのではないかと思ってくる。

（許してください閃華。これは、これだけは私自身の手でやり遂げたいのです。だから後のことは任せます。身勝手な私を許してください）

それから数日後、閃華を残して小松は坂本へ向けて旅立っていった。

更に時は過ぎ、五月の半ば。坂本にある名も無い廃寺ある。だが一応雨風は防げるようで中ではお経を上げる声が聞こえている。

その廃寺の前に小松は立っていた。

辺りは雨が降り、随分と湿気が高くなっている。そんな中で小松は中に入り笠を取ると平伏する。

だが和尚は小松に気付いているのかいないのか、読経を続けている。

そんな中で小松は読経を遮り言葉を掛ける。

「初めて御意を得ます。足利義昭様とお見受けしましたがお間違えないでしょうか？」

和尚はやっと読経をやめると小松に振り向いた。平伏している小松を見下ろすように見定めるとやっと口を開いた。

「どうしてそう思いなさる？」

どうやらあくまでもシラをきるつもりのようだ。そんな義昭の心中を察したのだろう。小松は真っ直ぐと義昭を見つめる。

「義昭様のご健在を聞き及び、ぜひともお話がしたくて探しておりました」

その言葉に和尚は笑ってみせる。

「なら正直に言おう。確かに元の名は足利義昭と申すが、今は一介の和尚だ」

「ご冗談を言わないでください！」

いきなり声を荒げた小松にさすがの義昭も驚いたようだ。

「義昭様が信長様に兵を上げるのは聞き及んでおります。恐れながら私も契約者、現在は精霊を連れてはおりませんが、ぜひとも明智軍に加えて欲しいのです」

義昭は少し考えると、やはり軽く笑みを向ける。

「何を言い出すかと思えば、そのような噂は聞いたことがあるが、この義昭はそのようなことを考えた事は無いぞ」

（やはりそう簡単にはお心を話してはくれないか。なら、一気に畳み掛けるしかありませんね）

「ここに来る途中、坂本城下の事を調べました。なんでも中国の毛利へ援軍に向かう手はずでしょうがそうは思えません。兵糧があまりにも少ないし、兵達にもちゃんと指示が届いていない。これはどういうことでしょう」

「それは光秀の指示でやっておることだろ、儂は知らんぞ」

「ですが、このまま明智様が羽柴様の援軍に行くとは思えません。狙っているのは信長ただ一人ではないでしょうか？」

「そうはいわれてものう。確かに儂も信長に追放された身、恨んで当然だろうが力が無い。だから信長を討つだのとてもとても」

（くっ、だめか。ここまで話してシラをきられると攻めてがない。……なら最後の手段です）

「申し送れました。私は元織田家家老、林道勝の妻で小松と申します」

「林道勝……？」

どうやらすぐには思い出せないようだが、義昭は思い出したようで手を叩いた。

「そうか、一昨年織田家を追放された林か」

「はい、その妻でございます」

「うむ、ならそなたの事は聞いておる。契約者でありながらかなりの働きをしたと」

「恐縮です」

頭を下げる小松に義昭はやっと傍まで寄って来てくれた。

「なるほど、同じ追放された身。儂を頼ってきたということか」

「いえ、違います」

戸惑う義昭に小松は本心をぶつける。

「先程も申したように明智様が謀反を起こす事は必至。そして義昭様が明智様と朝廷を結んでいる事も推測が着いております。ですから、その明智軍に私をお加えください。必ず信長の首を取って見せ

ます」
「……敵討ちか」
「はい！」
（そう、それがたった一つ旦那様のために出来る事。旦那様が亡くなったのは全て信長の所為。何故二〇年以上前のことで責を負れて追放され。旦那様は……さぞや無念だったでしょう）
「ですから、私を明智軍に加えてください。お願いします」
頭を下げる小松。
（そう、信長を、信長さえ倒せば旦那様の魂は救われる。無念が晴らせる。そうすれば旦那様も喜んでくれる。これで心置きなく安らかに眠れるのだから。もう、亡くなった時のように苦しむ必要は無いのです）
義昭は手を顎に当てると考え込み、考えがまとまったら立ち上がった。
「よかろう、儂から光秀に推挙してやろう」
「あっ、ありがとうございます！」
平伏して忠誠を示す小松。
（これで、これで旦那様の敵が討てる！　待っていろ信長、必ずその首を貰い受けて上げます！）
だが小松は気付いていない。それが契約者にとって最大の罪である事を……。

第六十四話　たった一つの出来る事（後書き）

そんな訳で今まで最長になってしまった今回の話はどうでしたでしょうか。つ～か、疲れました。風邪はひくし、小松の心情は表せきれないし、言葉は出てこないし、かなり苦戦しましたがやっと上がりました。

さてさて、今回は一気に話を進めましたが、一応それなりの説明は入れたつもりです。なので、分からないことがあったら勝手に調べてくださいね・～ゞ（。ｰ＾＊）

さあ、次はよいよあそこだ！！！　もう想像はつきますね。想像が出来ない人は歴史を勉強してください。

さてさて、そんな訳で次はあれと閃華の戦闘になると思います。えっ、閃華が誰と戦うかですって。ふっふっふっ、それはかなり意外な人物ですよ。まあ、誰も想像できないと思いますが次回をお楽しみください。

それから、最近ではこの後書きの内容が薄くなってると思っている方、間違っていませんよ。というか、ほとんどノリはブログに持って行ってますからね。まあ、以前ほどはっちゃけてはいないことは確かですね。……というか、真面目になってる？

さてさて、閃華の過去編は残すところ後二回になると思います……たぶん。……やっと終わる――――――――！！！　いや～、長かったね。というか一〇話は使ってるよ。けど、これで現代に帰れます。というか、やっと話が進みます。まあ……これからの詳しい話はまだ考えてないんだけどね。

そんな訳で、現代に帰ったエレメもご期待ください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、投票と人気投票もお待ちしております。

以上、今回の話は最長になったなと思った葵夢幻でした。

第六十五話　本能寺精霊戦

小松が旅立ってからというもの、閃華は一人で留守番をしていたが寂しさも感じていた。今までずっと小松に傍にいたのだから、こんなに長い時間を離れる事になると寂しさを感じても不思議は無い。

だが閃華が感じていたのはそれだけだった。そう、それだけ、それが以外の物はまったく感じ取る事が出来なかった。

なんじゃろう、小松が旅立つと言い出したときからのあの笑顔。普通の笑顔に見えたんじゃが何かが違っておったんじゃよな。

だからだろう、後で後悔する事になるのは。この時に感じた小松の小さな変化気付いていたなら未来は変わっていたかもしれない。

だが、今更言っても詮無きことである。

そして運命の日。一五八五年、六月二日未明。京へ向かってくる兵馬の音、それで閃華の目が覚めた。

なんじゃこの音は、一体何が起こっておるんじゃ。……もしや！

信長公か。

さすがの閃華も京に住んでいるだけに、現在信長が本能寺に泊まっている事は知っている。だが、この兵馬の音だけは意味が分からなかった。

……確かめてくるか。何事もなければひっそりと引き返せばよい。

よほど気に掛かる事があるのだろう。閃華は一応精霊武具に身を固めながら表に出ると、屋根の上に飛び移り、そのまま屋根の上を跳びまわりながら移動する。

なんじゃ、この胸騒ぎは？　これは兵馬の音が掻き立てるのではない。何か別な物がそうさせているようじゃ。

そこは契約者と精霊。多少の繋がりがあるのだろう。そしてその繋がりが小松の行動を閃華の脳裏に過ぎらせる。

もしや、これに小松が関わっておるのか！
とてもそうは思えない。今更軍に属して何の得があるのというんじゃ。それとも、何か別の目的が有るんじゃろうか。
更に進む閃華。だが突然閃華を中心に光の柱が展開されるが、世界の色は変わらずに人々は消え去って行った。
精界！　じゃがなぜ！
「やはり動きましたか」
「誰じゃ！」
閃華の前に現れた精霊。それは長い髪をまとめて優美な着物姿おり普通の女性と変わりないのだろうが、精霊武具には変わりない。外見がそうであってもかなりの防御力を持っているだろう。そして手には扇、それも体がすっかりと隠れるぐらい大きな鉄扇だ。
その扇で閃華を指し示す。
「出来れば動いて欲しくなかったのですが、やはり動いてしまうんですね。まあ、契約者が明智軍に加わっているのですから、その精霊も動きますか」
「なんじゃと！」
思わず驚きの声を上げる閃華。そしてそこまで驚くと思っていなかったのだろう、相手の精霊までも驚いた。
「おや、どうやら知らなかったみたいですね」
「小松が明智に加わっているとはどういうことじゃ？」
「……」
相手に精霊は扇を口に当てながら少し考えると状況を理解した。
「なるほど、どうやら小松さんはあなたに何も告げずに行ったようですね。なら教えてあげますよ。全てを」
くっ、随分と余裕じゃな。この精霊は只者ではないようじゃ。
「申し送れました。私は織田家の軍師をしております吉乃（よしの）と申します。信長様と契約を交わしており軍師として傍に仕えております」
「なるほどのう、時々信長公が神がかった戦略を疲労するのもそなたの入れ知恵か」

「まあ、軍師ですから、その役目を果たしているだけです。それで本題に入りますが、あなたの契約者である小松様が明智軍に加わりましたので、それで私自身があなたを止めに来たのです」

さすがに驚く閃華、まさか小松が明智に組するとは思わなかったのだろう。

「何故小松が明智に？」

「お分かりになりませんか。小松様の旦那である林道勝様。追放されたショックで亡くなったそうですね。御館様を恨んでも不思議は無いんじゃないんですか」

なん……じゃと、まさか、小松は信長公を恨んでいたのか。私にはそんな素振りは一切見せなかったというのに。

なんと不甲斐無い。一年近くも一緒にいたというのに小松の心が分らんかったと言うのか。くっ、なんと間抜けな。

今更ながら悔やむ閃華。だが吉乃とってはそんなことよりも重要なことがあるようだ。

「さて、契約者の事はお分かりになりましたね。では、次はあなたの番です」

「私……じゃと」

「はい、あなたに介入されると邪魔なのです。せっかく明智を潰す好機を逃すかもしれませんから」

「なんじゃと！」

思わず声を上げる閃華。

そう、この事態を見れば誰もが明智が織田に反旗を翻したと思うだろう。だが吉乃が言っていることは、まるで逆の事だ。

「これは明智の反逆ではないのか？」

「そうですよ。ですが……誰が明智殿にそうさせたんでしょうね」

もったいぶるような口ぶりで話す吉乃。だがそれだけでも閃華には全てが見えたような気がした。

「つまり、この反乱は仕組まれたという事じゃな」

「さすが、話が早いですね」

思わず笑い出す吉乃に閃華は睨みつける。
「ならここから出せ！　小松を説得させて明智から手を退かせる。その猶予をくれんじゃろうか？」
だが吉乃は意地悪な笑みを浮かべるだけだった。
「説得ですって、誰が聞いているかもしれないところでそんな事をさせるわけにはいけません。まあ、どちらにしろ小松さんが今更明智軍から抜けるとは思えません。林様が追放された時、一応私もお留めになったのですがどうしても聞き入れてもらえなかったのですよ」
「止めようとしたじゃと？」
「はい、契約者と精霊を手放すのは後で痛手にるからやめるように進言したのですが、御館様は聞き入れずにあのような処置を。小松殿にして見れば恨んでも当然、それで明智に付いたのでしょう。どこから聞き入れたかは知りませんが」
「くっ」
確かに、今まで信長公を恨んできたならこれは最大の好機。じゃがこれが仕組まれた物とは知らんはずじゃ。ここはなんとしても小松と会わねば。……んっ、じゃがちょっと待てよ。これは変ではないか？
「吉乃と申したな」
「なんでしょうか」
「確か、本能寺に泊まっておる織田勢は一〇〇〇にも満たないはずじゃ。そのような数で二〇〇〇〇もの明智軍を止められると思っておるのか？」
だが吉乃は思いっきり笑い出す。どうやらそれなりの手を打っているようだ。
「確かにこのままぶつかり合えば織田家は負けるでしょう。ですが、兵が一〇〇〇とは限りませんよ」
「なんじゃと」
「ついでです、表の様子を見せてあげましょう」

吉乃は扇を高く上げると元々無色の精界が表の様子を写し始める。
鉄兵じゃと！
驚く閃華。そう、明智軍と戦っているのは人間の兵ではない。刀や槍をもった鉄兵が戦っているのだ。そのうえ、屋根の上には何人もの人影が見えて明智軍を鉄砲で狙っている。
「なんじゃ、あの鉄砲を持っておる者は？」
「雑賀衆、聞いたことはおありでしょう」
「雑賀衆じゃと！」
「ええ、味方にするのに苦労しました。なにしろ雑賀衆の頭領は人間ではなかったのですから」
「なん……じゃと」
信じられない言葉に閃華は途切れ途切れに答える。
「妖魔、というのをご存知でしょうか？」
「精霊と人間の間に生まれた、ごく稀に精霊に近い存在じゃな」
「はい、ですから人間には見えず、精霊からも嫌われるそんな存在です。ですが人間と接触は出来るのですよ」
「なるほどのう」
つまり、雑賀衆の頭領は代々妖魔が勤めてきたようだ。確かにこれなら不気味なほどの強さと海の向こうに通じてるのも分る。精霊に近い存在が何人かいれば海の向こうなど簡単に行けるからのう。
「つまり雑賀衆とは」
「そう、妖魔の集まりなんですよ」
それが多数の鉄砲を持って織田に付いた。それに人では倒す事が困難な鉄兵が多数本能寺を囲んでいる。これでは明智が負ける事は充分にありえる。
「まあ、正直妙覚寺の信忠が討たれたのは計算外でしたが、後はあなたを止めれば計画通りです」
扇を構える吉乃。だが閃華には戦う理由が今ひとつはっきりとしなかった。
「なぜ私の邪魔をする！」

「それは決まってるでしょう。ただでさえ明智軍には契約者がいるのにこれ以上精霊に介入されてはやっかいなのですよ。ですので、明智を潰すまでここで私の相手をしてもらいます」

くっ、つまり時間稼ぎか。じゃが一つだけ忘れておるようじゃ。

「じゃが契約者にエレメンタルロードテナーは殺せんぞ。そんなことをすれば契約者自身も責を負うからのう」

「確かにそうですが、逆に言えば契約者以外なら殺しても何の問題は無いというわけなんですよ」

そういうことじゃったか！

つまり吉乃がしたいことは契約者と精霊を介入させたくないという事だ。確かに明知軍には契約者も精霊もいない。まあ、光秀自身に運が無かったのか、嫌ったのかは定かではないがどちらにしても精霊や契約者がいないのは事実だ。

そうなってくるとこの戦は人間同士の戦いとなる。だが織田方には鉄砲と鉄兵がいる。人間ではとても倒しにくい相手が多数揃っているのだから、どうみても負け戦に見える。

だが織田方は全て合わせて二〇〇〇足らず、片や明智方は二〇〇〇〇、数の優位は変わりなく戦略的にはどう見ても明智が有利だ。

だが信長はこれを戦術でひっくり返そうとしているのだろう。人では倒しにくい鉄兵を投入する事で少ない兵で大勢の兵を倒せる事が出来る。それにこの戦、お互いの首を取ったものが勝つ。

つまり信長も光秀もお互いの首を狙っているのだ。……桶狭間、信長はそれと同じ事をやろうとしているのではないのだろうか。

状況は分かった、後はこの状態をどうにかいて小松を迎えに行くだけだ。だがそのためには……目の前の吉乃を倒さないといけないらしい。

だがそれもしかたない。両者の目的を達するためには戦う以外の道は無いのだから。

方天戟を構える閃華に吉乃は、扇を右手から右肩まで折りたたんだ状態で乗せている。

さすがにあの武器とはやりあった事は無いからのう。まずは様子見しか入れんか。急ぎたいところじゃが負けては意味が無いからのう。

じゃが！　ここは一気に突破させてもらうぞ。

精界は外からの攻撃には弱いが中からの攻撃には強い。つまり、吉乃を倒さない限りここはからは出られないということだ。

方天戟を中段に構えると一気に突っ込んで行く閃華。だが吉乃はまるで反応しない。

そして閃華自身も吉乃を貫いたと思ったときだった。開かれた扇が方天戟の攻撃を逸らしていた。

くっ。

しかたなく一度距離を置こうとする閃華は横に大きく跳ぶが、それと合わせる様に吉乃も閃華にぴったりとくっ付き、鉄扇での一撃を加えてくる。

まずい、やるしかないようじゃな。

その場から上に跳ぶ閃華。なんとか鉄扇を避けられたのだが、閃華の行動を読んでいるかのように吉乃も上に跳んできて閉じられた鉄扇を閃華に突きつける。

なんじゃと！

これにはさすがに驚く閃華、確かに戦いでは相手の行動を予測して動くも者も居るが、ここまで正確に読める者などいるはずが無い。

違和感を感じながらも吉乃の攻撃は続く。

重力で落下しながらも吉乃は正確に閃華に攻撃をしてくる。その動きは腰の動きだけを使い、回転を上手く利用しながらの攻撃だ。

さすがの閃華もこれでは防戦一方だ。

攻撃をするときには普通、足を踏ん張り威力を出すものだが、吉乃は舞をやっているのだろう。舞うように足の踏ん張りを使わずに腰の回転だけで攻撃を繰り出してくる。

そして閃華の防御が間に合わなくなった時、吉乃は一気に力を溜めると攻撃と同時に解放、閃華を一気に吹き飛ばした。

これにはどうする事も出来ない閃華。吹き飛ばされるままに民家を二、三軒突き抜ける。

くっ、これほどとはのう。空中戦はダメじゃな、なんとか地上で戦わねば。じゃが、あの動きはなんじゃ、まるでこちらの動きを読まれているようじゃ。

「時間は与えませんよ」

声と共に吉乃が民家の屋根を突き破り閃華の頭上から一気に鉄扇を振り下ろす。重力と落下の威力が重なり鉄扇と方天戟がぶつかり合いかなりの衝撃が巻き上がり、閃華の周りにあったものは全て弾け飛んでしまう。

だがこのまま終わる閃華ではない。攻撃の衝撃が終わる前に、力が集中する一点をずらすとそのまま吉乃を地面に激突させて、すかさず方天戟を突き刺すがこれは避けられてしまった。

さすがは精霊武具じゃな、動きずらそうでもそれなりの動きが出来るようじゃ。

確かに吉乃の精霊武具は女官のような着物姿で動きずらそうだが、その分防御力もあるし、動きの邪魔にもならないようだ。

じゃが、これではっきりした。あの精霊は防御型じゃな、つまり攻撃には向いておらん。じゃが、それ故に時間稼ぎが出来るんじゃろう。

確かに吉乃から攻撃してきた事は無い。全てカウンターか隙を狙ったものだ。それにあの扇、攻撃には適してないが防御には適しているようだ。

さて、どう攻めようかのう。あまり時間が無いからのう。それに一番やっかいなのは、あの舞じゃな。

舞の動きというのは全て優雅であって、戦闘では攻撃に適してはいないが、その動きは防御には大いに適している、

それにしても、あそこまでの速さで舞われるともの凄い防御力を発揮するんじゃな。……じゃが、それが弱点にもなるはずじゃ。

再び方天戟を構える閃華。吉乃も扇を構えでどんな攻撃でも対処

できるようにしている。
「龍水舞闘陣」
龍水方天戟に巻き付いている水の龍が大きくなると閃華との適切な距離を開けて巻き付く。
そして一気に突撃する閃華。
この龍水舞闘陣は本来多数を相手にする時に使う技なのだが、ここで使うという事は何かしらの意図があるのだろう。
一気に差を詰める閃華。水龍が閃華から離れると一気に牙をむくがこれは避けられてしまった。そこへすかさず方天戟を打ち込む閃華。
だが開かれた扇が方天戟を防ぐが、閃華は笑みを浮かべる。
方天戟を持ったまま手を滑れせて、そのまま吉乃と距離を更に詰めていく閃華。そして二人の距離がほとんどなくなると閃華は龍水方天戟を話してそのまま拳を打ち込む。
そう、武器での攻撃ではほとんど鉄扇で防がれてしまう。だからこそ打撃戦をいれたのだが、吉乃は今までどこに隠しえていたのかもう一つの鉄扇で閃華の拳を防いだ。
なんじゃと、これまでもか！
さすがにここまで読まれると疑問を感じ得ない閃華。
そのまま龍に守らせながら龍水方天戟を手に取ると再び距離を取る。
「なるほどのう、そういうことか」
そうやら何か分かったようで、閃華は悔しさを表に出す。だが逆に吉乃は笑みを浮かべている。
「どうやらお気づきになられたようですね」
「ああ、あんたの属性にじゃな」
「そう、私の属性は考相手の思考を読む事が出来ます。つまり、あなたがどのような攻撃をしようと私には事前に分かるのですよ」
そんなの反則だ――――！！！　もし、ミリアがここにいたら、そう叫んでいただろう。

それほど吉乃の属性はやっかいなのだ。
じゃが、これで信長が吉乃を軍師にしている理由が分るというものじゃ。
相手の行動が分るのだから、事前に情報が漏れているのと同じだ。戦場ではこれほど有利な事は無い。桶狭間、金ヶ崎、これらの信長の行動は吉乃の属性を利用したものだろう。両方とも吉乃の力を使えば勝てない戦ではない。まあ、金ヶ崎では退くしかなかったようじゃが、神掛かった読みは吉乃の力が存分に発揮されたからだろう。
まさか相手の思考を読む属性とはのう。これはやっかいじゃな。じゃがどうにかして突破口を見つけんとな。
ここを抜けない限り小松の元へは迎えない。そのことが閃華に焦りを与えていたのだが、本人はそのことに気付いていないようだ。
再び方天戟を構える閃華、吉乃も二つの鉄扇を構える。そしてそのまま効力状態に入って行った。
吉乃の目的は時間稼ぎだから無理して閃華を倒す必要は無い。つまり、表の明智軍が負けるまで閃華を引き付けていればいいだけだ。だが閃華は違う。なんとかここを突破して伝えないといけない事実がある。そのためにはなんとしても吉乃を倒さないといけない。
しかたない……やるか！
閃華は覚悟を決めると一気に力を集める。その速さは吉乃も驚くほどだ。
そして一気に開放する。
「六韜三略開放！」
龍水舞闘陣の効果が消えると光に包まれる閃華は精霊武具がその形を変えていく。それと同時に力も今までに無いほど上がっている。どうやらこれが閃華の本領らしい。
そして昔の中国武将がまとっていた鎧姿になると、再び吉乃の前に姿を現した。
確かにこれなら速さで吉乃の思考よりも早く動けるじゃろうが、あまり使える時間が無いのも確かじゃ。

ロードナイトとの戦いにもこの六韜三略を使ったが、それは短時間だけ。つまり長時間この力は使えない。まさに奥の手といったところだろう。

そして龍水方天戟を構えると閃華の姿が消える。いや、消えたのではない。一瞬にして吉乃の後ろに回りこんだ。

これにはさすがに驚く吉乃。慌てて防御に入るが、今の閃華は力も大幅に上がっている。例え防いだとしても吉乃は吹き飛ばされて、何軒もの民家を突き抜けていった。

「この力は一体？　そうか！」

属性で閃華の思考を読む吉乃。どうやら六韜三略の意味を理解したようだ。つまり、強大な力を一気に出して吉乃を潰そうとしている。

「さすがにこれではこっちが持たない！」

相手の思考を読むということは、相手の力を正確に理解する事だ。つまり、相手の力が完全に自分を上回っていれば勝てるはずが無い。だが、手が無いわけではなかった。

「鉄刺舞踊！」

今まで鉄扇の梁が一気にくいなのようなひし形のナイフに変わると、一斉に吉乃の周りを旋回し始めて合図と共に半分が閃華の元に飛んでいく。

じゃが、速さはたいしたことは無い。

今の閃華にとっては避けられない速さで無い。閃華は飛んできたくいなを全て避けると一気に吉乃に向かう。だが避けたくいなも閃華を追ってくる。

なるほどのう、自動追尾か……なら。

吉乃との距離を一気に縮める閃華。そして吉乃の間合いに入ろうとした瞬間、一気に上に跳ぶ。確かにこうすれば追って来たくいなも吉乃に当たるかもしれない。

だがそんなに甘いものではなかった。くいなは急旋回、それでも閃華を追い続ける。

そこまで甘くは無いか、なら！
「龍水舞闘陣！」
再び龍水舞闘陣を展開する閃華。そして龍を追ってくるくいなに向ける。
「龍水刃舞！」
龍の口から放たれる無数の回転する刃。それが追って来たくいなを全て迎撃するのと同時に閃華は一気に吉乃との距離を詰める。
どうやらこの機に一気に攻めるようだ。
だが吉乃は笑みを浮かべる。
「忘れましたか、私の属性？」
気付いたときにはもう遅かった。閃華はすっかりくいなに囲まれ、刃の生えた鉄扇が一つ、回転しながら回避不可能な距離まで迫っていた。
ぐっ。ここまで読まれて手を打たれていたのか！
なんとか体を動かそうとする閃華。だが今一歩間に合わなかった。
回転しながら突っ込んできた鉄扇は閃華の体に突き刺さり切り裂いていく。さすがの精霊武具でもこれには耐えられずに破れて行き、閃華を切り裂いていく。
だが閃華は痛みを堪えると龍水方天戟の反対側で鉄扇を突き、なんとか機動を逸らして攻撃を止めさせる事が出来るがダメージは甚大なようだ。
まさかここまで読まれておようとは。くっ、くいなは時間稼ぎじゃったか！
今頃吉乃の意図に気付く閃華。だが傷は深く片膝を付いて血が流れ出ている。それもしかたない。なにしろ巨大な円状のカッターで体を切り裂かれたようなものなのだから。
どうする、ここからどう逆転すればいいんじゃ！
もう、今までのように援軍は期待できない。自分で何とかするしかない。だが吉乃の属性は凶悪の言って良い代物だ。苦戦は必至だった。

そのうえ奥の手とも言える六韜三略も使っている。これ以上の手は閃華には残されていなかった。

くっ、私はここで終わるのか、小松を救えず。いや、気づけもせずに救えもせず終わるのか。

更に傷から流れ出る血が閃華の体力を奪っていく。

何も出来ない、ここまま何も出来ずに終わってしまうのか！

悔しい、ただそれだけが閃華の中にあった。せめて小松の心に気付いていればどうにか出来たかもしれないのに。荷物をまとめていたあの数日に見せたあの笑顔、その笑顔の意味にさえ気付いていれば。その悔しさと後悔が閃華の中を渦巻く。

くそっ！　私は小松の一体なにを見ていたんじゃ。

悔しさで地面を叩く閃華。それと同時に先程受けた傷口から血が流れ落ちる。

……。

痛いんじゃない、もしくは悔しいのでもない。この時閃華は希望を見出した。

これでいけるはずじゃ、先程の攻撃が仇になったようじゃのう。

ふらつきながらも立ち上がるとうする閃華に吉乃は笑い飛ばす。

「まだ戦う気なのですか。私に勝てないのは充分に分かったでしょうに」

更に笑う吉乃に閃華も笑みを返す。

「それはどうかのう、まだ終わったわけではないぞ」

「なにを？」

さすがにこれには吉乃も不思議そうな顔に変わる。

そして閃華は方天戟を構えるのと同時に吉乃は気持ちを切り替えると迎撃態勢に入る。

「私は……小松の元へ行かねばならんのじゃ！」

血を撒き散らしながらも閃華は吉乃に向かって疾走する。そう、真っ直ぐに。

当然吉乃も二つの鉄扇を全面に構えるが、ここで閃華が一気に攻

勢に出る。
まず龍水舞闘陣の龍で一つの鉄扇を食わえこみ封じると、そのまま更に距離を詰める。だが吉乃にはもう一つの鉄扇がある。それで閃華に攻撃を試みるが、閃華は方天戟を下から思いっきり鉄扇に向かって振り上げる。
そうなると当然、吉乃の前はがら空きになる。そこに閃華は真正面から吉乃の顔に向かって体当たりした。
慌てて閃華から距離を取る吉乃、どうやら顔を直撃されたようで閃華の血がべっとりとついて目が開けられないようだ。だが体当たり、そんなにダメージがあるわけではない。だが吉乃は完全に悔しそうな顔をする。
「まさかこのような手を打つとは」
「さすがに避けられんじゃろう。あそこまで防御を封じられてしまってはのう。じゃが、これでそなたの目は役に立たん」
そう、どんなに思考を読み取ろうと相手が見えなければ対処の使用が無い。そのうえ先程の吉乃は完全に油断していた。まさかあれほどの傷を負った閃華がこんな手を打ってくるとは読めていたが、完全に力を解放している閃華の早さで攻めてくるとは思っていなかった。
どんな情報でも使う人次第で変わってくる良い例である。
完全に目をやられた吉乃はぬぐうが完全に開く事が出来ない。それに血である。空気に触れれば固まってどんどん取れずらくなってくる。
これで完全に吉乃は思考が読めても対処が出来なくなったわけだ。そして閃華もそんな状態の吉乃を見逃すはずが無かった。
水龍を先行させて避けたところに方天戟を打ち込む閃華。だが吉乃も完全に目をやられたわけではない。多少は見えるようで、微かに傷を負いながら防戦に専念した。
いける。ここで一気に決めてしまえば。
そうして閃華が一気に攻め立てていたときだった。突如本能寺が

大爆発した。
さすがに驚く閃華と吉乃。そして吉乃の驚きはそれだけではなかった。
吉乃の体が光の粒子となって消え始めたのだ。
「まさか、そんな、御館様！」
まさか！
そう、二人とも気付いたのだろう。信長が死んだことに。
「なぜ！　計画は完璧だったのに！　なぜ御館様が！」
「……まさか小松か！」
「あの契約者ですか！」
そう、ただの人間が信長を殺しただけならこんな現象は起きない。だが、契約者がエレメンタルロードテナーを殺した場合には必ず加害者も殺すために自爆のような現象が起きるのだ。
「まさか、たった一人の契約者だけで！」
「くっ！　小松！」
もう吉乃か体は半透明になっている。精界が消えるのも遅くは無いだろう。だからこそ、閃華は本能寺に向かって走った。せめて小松に会う為だけに。
止められんかった！　いや、気付いてもやれんかった！　私はなんと無能なんじゃろう！
悔しい。ただそれだけが閃華の中にあり、本能寺に向かって走っていく。
そして精界が消えた。
どうやら吉乃は完全に消えたようだ。こうなれば邪魔するものはいない。あとは小松の元へ行くだけだ。
せめて、せめて。
そう、先程も言ったように契約者がエレメンタルロードテナーを殺した場合加害者もただでは済まない。
だからこそ、閃華は急ぐのだ。
せめて……小松の臨終に立ち会うために。

第六十五話　本能寺精霊戦（後書き）

そんな訳で次で終わりだ――――！！！　という訳で胴でしたでしょうか、私なりの本能寺の変。

本来なら明智の反乱ということになっておりますが、実は信長が明智に謀反を起こさせたという設定になっております。

まあ、本編では長くなりすぎるので説明を控えましたが、ここで簡単に説明すると。光秀は義昭や朝廷とのつながりが強すぎた。だが信長はエレメンタルロードテナーになった以上。朝廷は邪魔でしかなかった。そこで朝廷を潰す第一歩として光秀に謀反を起こさせたという設定になっております。

まあ、こんなことはどうでもよいし、あまり長くして本編にあまり関係ない事を入れてもと思いカットしました。

さてさて、話は変わりますが、実は最近画力を上げようと頑張っております。いや、いつもどおり意味は無いんだけどね、やってみたかったから。そんな訳で現在デッサンを中心にやっております。

できたらそのうち、シエラや閃華も画きたいなと思ってます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからによろしくお願いします。更に評価感想、そして投票に人気投票をお待ちしております。

以上、上手く画けたならホームページに上げよかなと思ってる葵夢幻でした。

第六十六話　語り終わり

「敵は本能寺にあり！」

かの有名なセリフを明智光秀は軍を止めて、馬上から高らかに叫ぶ。

本来なら明智軍は羽柴軍の援軍に向かうはずだったが、途中で光秀は軍を止めると兵を集めて高らかに叫んだ。

だからだろう、兵たちはかなり動揺しているが、中には光秀の本心を知っている重臣が何人もいる。その者達が自分達の主が天下人になると説き伏せて兵たちを高揚させて士気を上げる。

光秀も本心を信頼できる重臣達に打ち明けたのはこのためだろう。そしてその中に変装した小松も紛れ込んでいた。

顔を泥にまみれ分厚い服を着て男のように見せている。どうやら兵の中に女性がいると間者に勘ぐられると思ったのだろう。

そして安全域まで達すると光秀は本心を打ち明けて謀反を起こしたのだ。これが本能寺の変、その始まりである。

兵を返し京へと向かう明智軍。なるべく音を出さないようにわざと鎧甲冑を脱いで行軍している。このほうが早いし、意外と鎧甲冑はうるさい。しかも奇襲するのだから相手に気付かれては意味が無い。

だからこそ、今は鎧を脱いで身軽な格好で行軍し始めた。もちろん、この時に小松が女性であることに気付き、光秀の食客ということで特別な地位を得る事が出来た。

それなりの待遇で進軍していく小松。どうやら京に着くまでは問題は無いようだ。

鎧甲冑は攻め込むときに着ればよい。そうすれば信長に気付かれる事は無いだろう。

どうやら謀反はかなり前から計画されていたようですね。
対応の早さ、それから準備の良さと充分に整っているようだ。どうやら光秀はかなり前から謀反を企んでいたらしい。
まあ、それもしかたないのでしょう。最初はあれだけ高待遇だったのに、今では嫌われ者扱い。そのうえせっかく徳川殿の接待役を任されたのに降ろされて戦に借り出される始末、これでは謀反も起こしたくなるというものです。
光秀の心中を察しながらも小松は自分の目的も忘れていない。
ですが、これで明智軍が本能寺に攻め込めば契約者である私が一番最初に信長の元へ行ける。そうなればやっと、やっと旦那様のご無念が晴らせるというものです。見ててください旦那様、必ずや信長を討ち取って見せます。
小松の目的はただ一つ、信長の首だけだ。それに契約者でもある。契約者も精霊もいない明智軍に義昭が上手く取り入ったようだ。
だがそのおかげでここにいられるのだから。
そして明智軍は京が見下ろせるところまで進軍していた。

再び身に付ける鎧甲冑、小松はというと精霊武具を着ていた。まあ、契約者なら精霊武具の方が存分に力を発揮できるというものだ。
それから物見が戻ってきたのだろう。京の様子を聞いた光秀はそのまま指示を出す。
「相手は一〇〇〇足らずの織田軍だ！　そのうえ兵を分けているらしい。本軍は妙覚寺の信忠、兵のほとんどが妙覚寺にいるらしい。だから先にそちらを叩いてから信長を討つ」
「ですが、それでは信長に気付かれるのでは」
家臣の進言も一理ある。だが光秀はちゃんと考えているようだ。
「だからこそ兵を二手に分ける。まず一五〇〇〇を妙覚寺へ。そして残りを本能寺の信長へ向かわせる。これで信忠と信長を討てば我等の天下だ！」

高らかに声を上げる光秀に兵も鯨波（とき）を上げて一気に京に向かって進軍を開始する。

その中で小松はもちろん本能寺へと向かう事になった。そうでなければ意味はないし、義昭からの進言もあったおかげだろう、光秀自身がそれを許した。

それになにしろ、信長の傍には森蘭丸という精霊が常にいる。これには何人もの人間が掛かってもそう簡単に倒せる相手ではない。だからこそ、小松という契約者が必要なのだから、この戦には不可欠な存在になっている。

そこまで考慮したからこそ光秀は小松を受けれたのだろう。

そして明智軍は京へと進軍していく。

静かなものだった。なにしろ夜更けだし、誰一人横道に出ている者などいるはずがない。そんな中で明智軍は進軍を開始する。

だが甲冑の音が鳴り響き、どうしても足音までは消せない。気付いている者は気付いているだろう。もちろん、閃華もこの音を聞いて動き出した。

そして明智軍は予定通り二手に分かれる。そして小松は光秀達と一緒に本能寺へ向かう。

もちろんこんな真夜中だ。何者かが現れるはずが無いはずだった。明智軍が本能寺に到着すると同時に鉄砲の音が鳴り響き、兵士の一人が倒れる。

なんですか！

こちらが奇襲をかけるはずなのに奇襲をかけられるとは思っていなかった明知軍は混乱するが、すぐに光秀の支持で再び陣形を元に戻した。

……上！

再び名に響く発砲音。それは屋根の上から聞こえてきた。

もちろん光秀もこのまま的になるはずも無く、ありったけの鉄砲

を屋根の上にいる敵に撃ちながら城門を破壊した。
このまま本能寺に入ってしまえば鉄砲では狙いにくいはずだ。そう思ったのだろう。
だが光秀の思惑通りには行かなかった。
突如本能寺の境内に多数の魔法陣が現れると鉄兵がせり上がってきた。この前の長篠とは違い槍や刀を持っている。どうやら近接戦闘を想定したいたようだ。
くっ、まさか読まれていたとは。
そう、ここまでの備えをされていれば、こちらの行動が読まれていたと考えるのがどおりだ。
小松は一気に走り出すと未だに戦闘体勢に入れない鉄兵を一気に何体かを撃墜していく。そして光秀に向かって叫ぶ。
「これは近接戦闘用の武器ですから、倒さなくても動きを封じれば充分です。ですから押し倒して縛り上げれば無力化できます！」
小松の叫びに光秀は頷くと多数の鉤縄。熊手のような先が曲がった爪がついた縄を用意させて鉄兵へと立ち向かう。
鉤縄を鉄兵の首に引っ掛けるとそのまま押し倒して、動けない鉄兵の腕を叩き落しえてしまった。さすがに鉄兵の腕を切り落とすのは無理だったのだろう。
だがこれで鉄兵は何とかできる。
後は信長の元へ行くだけです！
小松は明智軍が鉄兵に抵抗できると分ると奥を目指して走り始めた。
この本能寺は手前に広い境内があり幾つかの施設がある。そして更に奥には門があり、信長はいつもその奥にある部屋に寝ていた。
それは織田家の者なら誰でも知っている事で、もちろん織田家と縁のあった小松も充分に分っていた。
そして奥にある城門が見えてきた。
たった一人で城門を目指す小松。どうやら明智軍は鉄兵の相手だけでここまでは来れないようだ。

そして小松は一気に城門を壊さずに跳び越すと奥へと入る。
だがそれと同時に本能寺の奥から光の柱が生まれて世界を紫に染める。
精界！　森蘭丸ですか！
信長の元にいる精霊といえば蘭丸しかいない。だとしたら小松が侵入した事に気付いた証拠で、すぐに迎撃に来るかもしれない。
しかたなく辺りを見回し広い場所を探すとそこに移動する。そして微動だにせず気配を探る。
来た！
人では出せない速さで迫ってくる気配。小松は一瞬にしてそちらを向くと影潜薙刀を構えてあての攻撃に備える。
そして鳴り響く剣戟音。蘭丸の長尺刀と薙刀がぶつかり合い鳴り響かせる。
そこまで接近すれば互いに確認できる。どうやら相手は思っていたとおりに蘭丸のようだが、蘭丸の方は驚いているようだ。
「何故、あなたが？」
だが小松は答えずに一旦距離を取って互いに離れる。
「決まっています。信長を討つためです」
だが蘭丸は困ったような顔をする。
「何故です！　追放されたとはいえあなたは織田家に仕えていた方の奥方様でしょう。それに幾つもの功績を重ねている。そのような方が何故御館様を？」
蘭丸の質問に小松は顔を伏せると、歯を思いっきり噛みしてから答えた。
「旦那様は……亡くなりました」
「……そうでしたか」
「織田家を追放された所為で、その所為で旦那様は病に掛かり亡くなったのです！　これでは旦那様は報われません。ですからせめて私が信長の首を取り、墓前にそなえて差し上げるのです」
怒りの感情を思いっきり込めて答える小松に蘭丸は驚いた顔をす

る。
「あなたが御館様を討つつもりですか？」
「もちろんです！」
「そんなことをすればどうなるのか分っているのですか、契約者がエレメンタルロードテナーを殺すという事は」
「私はどうなろうと構わないのですよ！」
それだけ叫ぶと小松は一気に蘭丸へと向かっていく。どうやらこれ以上は問答無用のようだ。それを悟ったのだろう、蘭丸も小松との距離を詰めてそのまま互いの武器を打ち合う。
だがそれは様子見に過ぎない。小松も蘭丸もどうやら技量に差はあまり無いようだ。そうなると勝負の決め手は策となる。
そして最初に仕掛けたのは蘭丸の方だ。一度距離を取ると力を集中させる。どうやら属性を発動させる気のようだ。しかも一旦離れるとなるとかなり強力な技を使ってくるだろう。
それを想定して小松も決め手を用意する。目的は蘭丸を倒す事ではない、あくまでも信長を倒す事だ。そして信長はエレメンタルロードテナー、どれほどの力を持っているかなど分りはしない。
だからこそ小松はここで時間をかけるわけには行かなかった。
そして蘭丸の準備が出来たのだろう長尺刀を構える。
「接差刀傷（せっさとうしょう）！」
力を込めた長尺刀を上段に構えながら蘭丸は一気に小松に迫ってくる。だが小松はその場から動かずに蘭丸が接近してくるのを待っている。
そして振り下ろされる長尺刀。だが当然、小松の薙刀に防がれるのだがそれで終わりではなかった。
「ぐっ！」
なんですか、これは！
ただ刀を防いだだけ、それだけで小松は斬り付けられたように一筋の傷を負った。それはまるで蘭丸がそのまま小松を斬った様な傷だ。

「驚きましたか、この技は例え防ごうとも自分の攻撃をそのまま通す事が出来るのですよ。それこそが私の属性、斬の力です」

そのまま次の攻撃に入ろうとする蘭丸、だが気付いていない。小松が笑みを浮かべている事に。

再び振り下ろされる長尺刀、小松は今度はそれを避けると一気に薙刀を突き出す。

ここ！

「影刀連刃！」

そして蘭丸は小松の薙刀を避けた……はずだった。いや、確かに小松が突き出した薙刀は避けた。だが蘭丸の周りには多数の闇で出来た薙刀が蘭丸に突き刺さっている。

「ぐはっ」

血を吐く蘭丸。まさかこんな手段があるとは思っていなかったのだろう。そして小松の薙刀も蘭丸に突き刺さる。

「これで終わりです」

蘭丸に決着が付いたことを告げる小松。確かにこの状態の蘭丸ではどうする事も出来ない。

「では最後に聞かせてもらいましょう。信長はどこにいますか？」

以前の野田城と違って本能寺は調べたわけではないから信長がどこにいるなどは分かりはしない。

だが蘭丸は笑みを浮かべると素直に答えた。

「右側の建物、その二番目が御館様のご寝所です。ですかあなたは、ぐはっ」

せめてもの武士の情けなのだろう。小松は一気に蘭丸に止めを刺した。信長がいる場所を聞けばもう用は無いのだろう。

せめてもの情けです、楽に消してあげましょう。後は信長だけ！

場所は分かった後はそこへ行くだけだ。何もためらいも迷いもいらない、ただあるのは復讐という信念だけ。

旦那様を追放して死なせた無念、これで晴らさせてもらいます。

そして小松は信長の元へ向かい走り始める。信長がエレメンタル

ロードテナーあろうとなかろうと。

「何処だ信長！」

信長がいるだろう建物の部屋を片っ端から明け放ち、中を確認していく小松。

そして幾つもの部屋を空けただろう。小松は遂に信長を見つけることが出来た。

信長は武装する事も無く、白い着物を一枚だけ来ており、まるで誰かが来るのを待っていたかのように刀を手にして入り口に向かって立っていた。

「女か、てっきり光秀本人が乗り込んでくるとは。だが蘭丸をどうにか出来たということはそなたも精霊か契約者だ」

「私をお忘れですか」

部屋に明かりは無く月明かりだけが微かの明かりとなっているだけだ。そんな中で小松は更に信長に近づき顔を確認できる位置まで移動した。

「……そなたは、確か道勝の」

「はい、元織田家家老林道勝の妻、小松でございます。覚えておいでしょうか？」

「なるほどな、確かにそなたなら蘭丸も撃退できよう」

長篠の戦で信長は小松の力を充分に知っている。だからだろう、蘭丸が小松に倒されたと察しても驚かないのは。

「それで、何用があってわざわざ信長の元へ来た？」

「復讐を、夫道勝の無念、ここで晴らさせてもらいます」

小松の言葉が理解できなかったのだろう。信長は初めて不思議そうな顔をする。

「儂が道勝を殺したと？」

「そうです！　旦那様はあなた様に、織田家に奉公してきました。それも、二心も抱かずに必死にです。それなのに追放とはあまりに

も酷過ぎる処置ではございませんか！」

必至に訴える小松だが信長は当然のように答えるだけだ。

「奉公？　確かに道勝は織田家に仕えて出来た。だがそれだけだ。ただ仕えるだけなら誰でも出来る。この信長が求めるのは仕事が出来る人間だ、ただ仕えるだけの人間など使えぬ。だからこそ追放したのだ。それが何か間違っているのか？」

「確かに旦那様は優秀ではなかったかもしれません。ですが、本人なりに織田家に仕えてきました。その努力すら認めずに無能な人間は切り捨てるのですか！」

「そなたには分かっていないようだな。今や織田家は天下を取ったと同じ、そこに無能な人間はいらんのだ。優秀な人間が仕切るからこそ国が保てるのだ、だからこそ切り捨てた。まあ、無常ではあるとは思うがな。道勝も織田家ではなく、下の家に仕えていればそのような事にならなかっただろうな」

つまり、天下人として国の頂点に立ち運営していく者に無能者は要らない。だから道勝を切り捨てた。信長はそう言いたいのだろう。

けど、けど！　なにもそこまでしなくてもよいのではなかったのですか！

確かに小松が思ったとおり、切り捨てなくとも降格という手段もあったかもしれない。だが信長にとって、エレメンタルロードテナーの力を手に入れて天下人となった以上は道勝のような人間は邪魔なだけだったのかもしれない。

いや、信長の性格から考えれば織田家にいること事態のが許せなかったのだろう。なにしろ今回の光秀排除もわざわざ武力行使を取るぐらいだから、今の信長が必要としているのは自分を絶対的に信仰している人間だけかもしれない。

だからこそ、一度は謀反を抱いた道勝を切り捨てた。そして信長の本誌を理解した小松は更に復讐の念を燃え上がらせるのだった。

確かに生まれは変えられないかもしれない。それに過去も取り戻せないかもしれない。けど、人間はやり直すことが出来る、失敗を取り戻す事が出来る。そして過去を悔やみ変わる事も出来る。それすらも認めないというのですか。

最早問答無用、こんな人を天下人とさせるわけにはいかない。ここで倒します。旦那様のためにも。

行きますよ、影潜薙刀！

まずは一気に距離を取り、横からの一閃を……行きます。

一気に距離を詰めて行く小松、だが当然信長は手にした刀を構える。

くっ、防がれた。まあ当然ですか。この程度はまだ小手調べ、本番はこれからです。……えっ、なんですかその笑みは？

「燃えよ」

刀が燃えた。くっ、こっちにまで急いで離れないと。

突如燃え上がった信長の刀が小松の影潜薙刀まで通し小松にまで広がりそうになったので急いで小松は信長から距離を取る。

急いで反撃備えないと、このまま追撃が来るかもしれない。……えっ、嘘！

気付いた時にはもう遅かった。畳に刺した信長の刀から氷の道が出来ており、そのまま小松の足を氷付けにして動けないようにしていた。

くっ、この氷、更に上がってくる。

小松は一気に力を解放させると氷を一気に砕く。だがその瞬間に信長は一気に小松との距離を詰めて、すでに眼前に迫っていた。

とりあえず防がないと！

なんとか薙刀を前に出し、刀と薙刀がぶつかり合い剣戟音を発する。だがそれで終わりではなかった。

完全に防いだはずなのに小松には信長に斬られた傷を負った。

そのまま力任せに信長を突き飛ばすと小松は流れ出る血を気にすることなく、そのまま信長を睨みつける。

これは蘭丸と同じ属性。それにさっきのといい、これがエレメンタルロードテナーの力。なるほど、つまりエレメンタルロードテナーとは全ての属性を仕えるという事ですか。

エレメンタルロードテナーの力がある以上は不利なのは確か、それでも小松は退くという事をせずに薙刀を構える。

たとえどんな力があようと、この方を認めるわけにはいかない。強者弱者、有能に無能、確かに人間にはそれぞれ長所も短所もあるかもしれない。けど！　長所しか使わない人を認めるわけにはいかない。そしてこれ以上、旦那様のような犠牲者も出させない！

たとえ傷を負おうとも小松は攻勢に出続ける。常に先手の攻撃を繰り返し、信長を追い詰めているようだが、信長は様々な属性を使い小松を翻弄している。

だがそれでも小松は下がろうとはしなかった。

ここでこの方を、いえ、旦那様の無念を晴らす事が出来るのは私だけです。だからこそ、どのようなことになろうと退くわけには行かない。

先程の蘭丸の属性である斬があるからだろう、確かに小松は信長の刀を直接的に防ぎはしないが属性の攻撃でかなりの傷を負っていた。中には半蔵の属性である空を使い、一気に迫ってきた。

まさか、それまで！

エレメンタルロードテナーである信長にとって、このような力はほんの一部でしかない。だが確かにこの属性はかなり凶悪である事は確かだ。だが小松はそこに何かを見つける。

……見つけた。やっと、この方を、旦那様の無念を晴らす方法が。これで全てを終わりにします。けど旦那様、私は旦那様の元へ行けないかもしれません。ですが、来世でも再び夫婦になってください。そしてどうかあの幸福だった日々をまた……私にください。

……懐かしい。閃華が来る前もそうだったけど、以前には小松にも子供がいた。戦で死んでしまったが、それまではこれ以上無いほど幸福だった。

そして再び寂しくなったけど、それを閃華が埋めてくれた。閃華が来てからドタバタしたけれど、幸せだった、楽しかった。困ることもあったけど、確かに幸福だった。

その日々はもう戻っては来ないかもしれない。だからこそ、来世は、来世だけは、そんな日々を暮らせますように。

一気に信長に迫られた小松だったが、傷を負うのを覚悟で信長から一気に離れる。もちろん、影は小松の属性である。それで信長を縛り上げると一気に距離を取る。

だが信長にそんな物が通用するはずが無かった。再び空の属性を使い小松に迫る。

待ってましたよ、信長！

刀を降り下げてくる信長だが、小松は影潜薙刀を捨てるとすぐ傍にいる信長に力の限り抱きいて締め上げる。

そんなことをすればもちろん小松は信長の攻撃を直接受けるのだが、小松は痛みを信念で封じ込めると一気に力を解放する。

「影刀連刃！」

夜襲を掛けたのだからもちろん辺りは闇に包まれている。だからこそ、小松の属性が最大限に発揮されるという物だ。

闇から飛び出した何本もの薙刀が信長と小松をそのまま突き貫いていく。小松は信長を力の限り抱きつき拘束していたのだから避ける事は不可能。それはもちろん小松も同じだ。

つまり、小松は信長の動きを完全に封じて自分ごと信長に止めをさした。

「ぐはっ」

信長が吐いた血が小松に掛かる。だが小松は笑みを信長に向ける。

「これで終わりですね」

「馬鹿な！　まさか自分ごと貫くとは、お前も死ぬ気か」

「私はすでに死んでいます。旦那様が亡くなったその時から、それ

からあなたの事を聞いて一時の生を取り戻しただけです」
そう、旦那様が亡くなった時に私の命は無くなった。けど、この事が、この戦いだけが私に命をくれた。だからこそ、この命など一時の物に過ぎない。だからどうなろうといい。
「なるほどな、まさか道勝の追放がこのような結果になるとは、吉乃が必至で止めるわけだ」
小松にとっては吉乃とは初めて聞く言葉だが、これから死に行く者、そのようなことはどうでもいい。
「最後に、何か言い残すことは有りますか」
「全てはこの信長が招いた結果、是非も無し」
そして信長は全身の力が抜けたようにうな垂れると、小松はやっと技をといて信長を部屋の奥へと座らせて。
切り捨てられたとは言え元は織田家の家臣である道勝の妻、それなりの敬意を払ったのだろう。
だが自滅に近い攻撃をしたのだから、小松も無事でいるはずが無い。信長を座られて数歩歩くと小松は遂に立っている事ができずに倒れてしまう。
そして見えるのは自分から流れ出る大量の血。だが小松は動じもしない、こうなる事は分かっていた。だからこそ、最後の攻撃に選んだのだ。
更に流れ出る血を見ながら、小松は笑みを浮かべた。
旦那様、旦那様、これで旦那様の無念は晴らしましたよ。ですから、これからはゆっくりと眠ってください。織田家はこれで終わるでしょう。だからもう、織田家の事など気にしなくて良いのです。
そして出来る事なら、最後のわがままを聞いてください。これが、私の願いです。本当に最後のわがままです。ですからどうか、聞き届けてください。
『どうか来世も夫婦になってください』
これだけで、これだけで良いのです。これだけが私の願いです。
そのためだけに私は信長公を討ちました。そうすれば旦那様も私を

認めてくれると思ったから、無念が晴れて再び私を受け入れてくれると思ったから。ですからどうか、これだけでよいのです。私の願いを……叶えてください。

誰でもいい、神様でも仏様でもキリシタンの神様でもいい。どうか、この願いを旦那様に告げてください。そして旦那様と生活を再びください。特に面白い事はなかったかもしれないけど、幸福を感じられたあの日々を。

どうか……再び。

それに……そうですね、今度も閃華と契約をしたいものです。閃華がいた間も私は楽しかった。混まされる事が多かったけど、それでも幸せだった。それから子供も。現世では子に恵まれなかったけど、来世では子供が沢山欲しいですね。

沢山の子供に囲まれて、そして閃華がわがままをいいながらも面倒を見てくれて。そして私は子供達と閃華の面倒を見ながら旦那様を待ち、旦那様が帰ってきたら再びゆっくりと話し合う。

ふふっ、楽しそうですね。そんな生活をしたかった。いえ、来世ではどうか、そのような生活をさせてください。

たったそれだけ、それだけで良いのですから。

確かに小松の願いはささやかな幸福を願ったものかもしれない。だが世の中はかなり無常に出来ているものらしい。

まだ意識のある小松の体の下から黒い淀みが発生する。

なんですか……これは！

薄れいく意識の中で小松は変化を感じ取り、辺りは昼間のように明るくなる。

小松が明かりの方向に手をかざしながら目を向けると、どうやら信長の体が強烈な光を放っているようだ。

そして次の瞬間。信長の体は大爆発を起こして本能寺は半分以上が吹き飛び炎上する。

だがその中でも小松は何かに守られているように、下に発生した黒い淀みに少しずつだが吸い込まれていく。

そういえば、先程蘭丸さんが何かいいかけてましたね。なるほど、私が信長を殺すとこうなるのですか。なんなんでしょうね、これは？　まあ、どちらにしても良い者でない事は確かなようです。私が罪を犯したのは確かなのでしょうから。

どうやらこれがなんなのかは微かだが分るらしい。これも契約者ならではなのだろうか。

そう、これは罰。契約者は本来器の候補者であり守護者でもある。エレメンタルロードテナーが決まった以上は契約者はエレメンタルロードテナーを守れてという義務は無いが、殺してはいけないという絶対の掟がある。

これは同じ力同士が再びぶつかり合うのを防ぐためだ。そうすればエレメンタルロードテナーは長い間存在できる。つなり、地球を長い時間維持できるために作られた掟だ。

だが小松はそんな事は知りもしなかった。ただ道勝の無念を晴らすためだけに、再び幸福の日々を手に入れるために戦っただけに過ぎない。

そして小松の下に出来た黒い淀みが突如消えた。それと同時に小松も事切れる。

どうやらこの罰はエレメンタルロードテナーを殺した契約者を殺すためのものらしい。だが小松が死んだ以上、その効果も消えたのだろう。

そして小松は燃え上がる部屋に静かに横たわっているのだった。

「小松！」

燃え上がる本能寺、その中を閃華は必至に小松を探して走り回っていたのだが、やっと小松を見つけたときにはもう何もかも終わっていた。

なん……じゃと、これは一体、どういうことじゃ？

隣で燃え上がる部屋には小松の体だけが眠っているように寝てい

るだけだ。
だがこの爆発炎上の状態を考えられるとしたら答えは一つしかない。そして横たわっている小松の体。
……どうやら罰を受ける前に死んだようじゃな。くっ、刺し違えたか！
それは無常というべき物なのかもしれない。閃華は四つん馬になると思いっきり畳を叩いた。
なぜじゃ！　なぜ私に相談してくれんかったんじゃ。……いや、分かっておる。もし相談しておったら私は小松を止めてたじゃろう。じゃからこそ……小松は一人で。
それでも更に閃華を攻め立てるように、何も気付けなかった悔しさが襲い始める。
どこじゃ、どこで小松はこんなことを決めたんじゃ！　そして何故私はその変化に気付けんかった！　私は……なんと気が回らんのじゃろう。
自然と流れ落ちる閃華の涙。だがその涙すら消せる物は無い。部屋はすでに爆発の影響でほとんど吹っ飛んでおり、近隣の部屋が炎上してこの部屋を明るく照らしているだけだ。
そんな中で閃華は力なく立ち上がると小松の元へと歩み寄る。
「小松」
だが答えは返ってこない。返って来るはずは無いがそれでも閃華は叫ばずにはいられなかった。
「小松！　小松！」
なんじゃ、この失態は！　私は小松の事を知っていると思っておったんじゃが、それは思い上がりじゃたんか！　私は何一つ……小松を理解しておらんかったんか！
何も出来なかった。いや、気付く事すら出来なかった！それは何も出来なかったよりも辛いのかもしれない。なにしろ相手の事を何一つ察する事が出来なかったのだから！
「ふっ、ふふっ」

自然と笑い出す閃華。ここまでの失態をするともう笑うしかない。いや、自分を笑い飛ばして、けなして、壊れるぐらい卑しめてやりたいほどに自分が嫌になるのだろう。

こんなもんだったんじゃな、私と小松の絆は。もっと深い物じゃと思っておったが、小松の変化に気付けぬほど絆は浅かったんじゃ。なんともろい、なんと弱い、なんと脆弱な物じゃったんじゃろうな。私と小松の絆は。

閃華と小松が契約をしてからかなりの時間が経っている。閃華はその間に小松との信頼関係を強いものにしたと思っていた。だがそれは閃華の勘違いだったのかもしれない。

何故何も話してくれんかった。何故何も相談してくれんかった！なぜ何も……頼ってくれんかった。確かに私は小松を止めたかもしれん。じゃが、小松の思い次第では協力も惜しまなかったのかもしれんのじゃぞ。なのに何故……私を信じてくれんかったんじゃ。

どこまでも続く後悔と悲しみ。それは終わりを迎える事が出来るのだろうか。

だが、無常な世の中はそんな閃華にも終止符を打つ。

突如閃華の下に現れる黒い淀み、それは先程小松の下に現れたものと同じものだった。

だが人間と精霊では違いがある。精霊は世界のバランスを保つための存在。無闇に消すわけには行かない。だがエレメンタルロードテナーを殺した契約者の精霊であることは確かだ。

「くっくっくっ」

なるほどのう、つまり私も罰を受けろという事か。

黒い淀みに沈み始める閃華、だがその顔には笑みが浮かんでいる。

丁度いいかもしれん。これは信長を殺した罰ではない、私が小松を理解できんかった罰じゃ。それなら甘んじて受けよう。

なにしろこの罰は私には絶対に受けねばならぬものじゃからな。小松を理解できんかった。絆を深められんかった。私は小松と一緒にいる間には何もしてやれんかった。これはその罰じゃ。なら拒否

する理由は無い。小松に信頼されぬ私など罰を受けてちょう良いぐらいじゃから。

なら受けてやろう。どんな罰じゃろうが私は構わん。それがどんな地獄が待ってようとも私にはそれを受ける義務がある。さあ、やるがいい、何も気付けんかった、何も変える事が出来んかった、何も気付く事が出来んかった私を罰するがいい。

「じゃが罰は思ってより軽いものじゃったんじゃよ。それが封印、三〇〇年じゃったかな、それぐらい封印されただけじゃったんじゃよ」

そして閃華は大きくため息を付く、長い話をしただけに疲れたのだろう。そしてそれを聞いていたミリアとは言うと、すっかり閃華の膝枕で寝てしまった。

「くっくっくっ」

思わず笑ってしまう閃華。だがミリアの眠りは深いようでそのような事では起きる気配は無かった。

そして外を見るとすっかり暗くなっていた。

もう夜か、まあ、長い話をしたからのう。ミリアが眠くなるのも当然じゃな。

「それに、そんなに面白い話でもなかったしのう」

「そんな事は無いですよ」

突然聞こえた声に閃華は思わず膝の上にいるミリアを落として振り向くと、そこには入り口が開いておりある人物が立っていた。

「お主、なんで？」

「ちょっと呼ばれましてね。それよりミリアさんをちゃんと寝させてあげましょう。このままは精霊でも体調を崩しかねませんから」

それから布団をひくとミリアをちゃんと寝かせてから閃華はその人物と向き合う。

「それで、なんでお主がここにおるんじゃ。与凪」

第六十六話　語り終わり（後書き）

そんな訳でやっと終わった――――！！！、（、Д´）ノ

これでやっと現在に帰ってこれたよ。皆さん、昇達の事を忘れてないですよね。もちろん覚えてますよね。

そんな訳で以前もやりましたが、忘れている方は最初から読んでみよう。そうすれば全てを思い出すことが出来ますから。

さてさて、そんな訳でやっと終わった本能寺。というか大爆発してましたね。ですが、一説によると実際に本能寺は爆発したという記述があるみたいですよ。そんな訳で、それを参考にエレメンタルロードテナーを契約者や精霊を一緒に殺すために自爆という設定が生まれました。

それにこれなら信長の遺体が見つからなかった理由も付きますからね。まあ、こじつけですよ、こじつけ。

さてさて、そんなことはさておき、これからやっと本編ともいえる現在の話に戻ってきました。さて、これでやっとあれが出せるよ。かなり前から考えてたんだけどね。まさか閃華の過去がここまで長くなるとは思ってなかったから、すっかり出番がなくなってしまいましたが、次回、には出る……はずですΣ（゜Д゜；エーッ！

まあ、期待しないで待っていてくださいね。そして閃華の決着も結構以外というか、普通というか、そういう方法を取ろうと思ってます。まあ、どうなるかはお楽しみください。まあ……大して面白くないかもしれませんが（それはダメだろ！！！）まあ、そんな形になるかもしれませんのでよろしくお願いします。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれかもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、最近うつ病か風邪なのか分らなくなってくる症状が出てきた葵夢幻でした。（結局、風邪だったみたいですね）

第六十七話　一時の休息から……

閃華が長い昔語をしている最中だった。琴未は情報収集に駆け回り、そして昇とシエラはというと浜辺に巨大な精界を張り巡らして……その中で遊んでいた。

昇が目を覚ますとシエラの笑顔と影となっているパラソルが見えた。

あれっ、いつの間に寝ちゃったんだろう？

たった今起きたばかりの昇は記憶を手繰り寄せて何があったのかを思い出した。

そっか、散々シエラに引っ張りまわされて、それで休憩ついでに寝ちゃったんだ。というか、なんで膝枕？　いや、嫌じゃないんだけど。

「えっと、シエラ？」

「どうしたの」

相変わらず嬉しそうに返事を返すシエラに、昇は変に照れくさくなってしまう。

「ずっとこうしてたの」

「昇が寝てからすぐに」

「じゃあ疲れたでしょ、今すぐ、ぐぎゃ！」

昇が頭を起こそうとしたその時、シエラは自分から離れていく昇の頭を思いっきり押し戻した。

「大丈夫、だからもう少しこうしていい」

「そ、そう」

いやに威圧感があるシエラのセリフに甘えて昇はシエラに膝枕をしてもらいながら、澄み切ったとはいえないが空を見上げる。

とはいえ、なんかこうしてるとまた眠くなってくるな。

再び睡魔に襲われそうになった昇だが、シエラがそんな昇に質問をぶつける。
「ねえ、昇？」
「んっ、どうしたの？」
「昇は……私の事が嫌い？」
突然の質問に驚きの表情を一瞬だけ浮かべる昇だが、すぐにいつもの優しい笑みに戻る。
「そんなことはないよ」
「じゃあ……好き？」
「……」
好きにもいろいろとある。シエラが聞いている好きの意味を理解している昇はすぐに答えることが出来なかった。
う～ん、どうなんだろう？　嫌いではないことは確かだし、恋愛感情も無い事も無い。けど、僕の周りにはシエラの他にもミリアや琴未や閃華がいる。彼女達と比べるとシエラだけが特別に好きとは言い切れない。
沈黙をしている昇にシエラは優しい笑みを向けてきた。
「昇も外見は女顔だけど男の子、今のハーレム状態が嫌な分けない」
「いや、ちがっ、そうじゃなくて」
慌てて起き上がり思いっきり仕草でも否定するが、そんな昇にもシエラは優しい笑みを向けたままだ。
「大丈夫、浮気は男の甲斐性とも言う。だから私は気にしない」
「えっ？」
思いがけない言葉に呆然となる昇。だがシエラは微笑を空に向けるとそのまま言葉を紡ぐ。
「私が一番怖いのは昇の傍に居られない事。昇の傍に居るのに一番適してるから妻って主張してるの。でも、本当は昇の傍に居られるだけで充分」
「シエラ……」
たぶんこれがシエラの本心なんだろう。このような静かな精界内

で二人っきりの時間を満喫したのだから少しだけ、そう、ほんの少しだけ本心を語りたくなったようだ。

それからシエラは視線を昇に戻して真っ直ぐに見すえる。

「だから昇、絶対に私の傍から離れないで」

その直後、シエラは顔を赤くして俯いてしまった。たぶんこれがシエラの精一杯なのだろう。だからこそ、急に恥ずかしくなって俯いてしまった。

だがそれとは逆に昇は戸惑っている。

……えっと、それはつまり、ずっとシエラの傍に居ればいいってことなのかな？

さすがは朴念仁、シエラの言葉の意味をよく理解していないようだ。だがシエラの言葉に答えないといけないと思ったのだろう。昇は未だに俯いているシエラに向かって口を開く。

「大丈夫だよ。僕はずっとシエラの傍に居るし、たぶんミリア達もずっと傍に居るよ。今の生活が壊れる事なんてないよ」

これにはさすがにシエラも呆れた目線を送る。

何故そんな目で見られるの！

まったく意味が分かっていない昇にシエラはため息を付いた後、急に笑い出した。

えっと、なんでそこまで笑われるの？

「まあ、昇にちゃんとした答えを求めた私が急ぎすぎたのかな？」

いつもの優しい笑みに戻るとシエラはそんなことを言い出した。

「そうだよね、昇は……たぶん皆が好きなんだよ。だからこそ、一人だけに決められない。そんなことずっと前から分かってたのに」

独り言のように呟くしシエラに昇は首を傾げるが、急にシエラが昇と目線を合わせてきた。

「でもね昇、昇はそれでいいかもしれないけど、私達はときどき不安になるんだよ」

えっと、なんで急に真面目な顔になるの？

真剣な顔つきで昇に語りかけてくるシエラに戸惑うが、それでも

シエラは続ける。
「だからね、証拠が欲しいときがある。ちゃんと私を好きでいる証拠が」
いや、そんな事を言われても。
「証拠と言っても、どうすればいいのか？」
頭を掻いて悩む昇にシエラは近づいて微笑を向ける。
「そんなの簡単」
別にそんなに力をいえれているわけではない。ただ昇はシエラが押されるままに押し倒されて、そのまま馬乗りにされ目の前にシエラの顔がある。
「ほんの少しの温もり、ほんの少しの繋がり、それを示してもらえばいいんだよ」
えっ、えっ、それってつまり……
そう昇が考えているとおりだった。シエラは昇にキスを求めていた。
まるで体が固まったように動かすことが出来ない昇。喉も急に渇いてきてつばを飲み込む。さすがの昇もシエラのような美少女にキスを求められて嫌なわけがない。いや、むしろ大歓迎だろう。
だがいつもは必ず回りにミリアや琴未達が居たからそんな事は出来なかったが、今は二人っきりだ。何もはばかる事はない。
そしてシエラの髪が昇の頬を撫でるほどシエラの顔が近づいてきた。
いや、いいのかこれで、このままシエラの思い通りになって……でも、それもいいような。……でもなんだろう、このままだと何かが壊れてしまいそうな、そんな感じがする。
嫌ではない、むしろ大歓迎だ。だが昇は何かしらの不安に捕らわれているのも確かなようだ。
それが何か分からないうちに口は塞がれて、甘い匂いが昇の嗅覚を刺激する。そう、二人は完全に口付けを交わしていた。
そして男のサガというやつだろう。昇は思わずシエラの細い体を

抱きしめてしまう。
シエラってこんなに細かったんだ。いつも強いシエラしか知らなかったから分からなかったよ。それに……なんか心地良い。
昇とシエラがキスをするのはこれで二度目だ。一度目は契約時で、その時にはそんな事は感じられなかったのだろう。
そしてシエラはただのキスだけでは満足できずに舌で昇の唇をノックする。
さすがに驚いて口を開く昇。その隙にシエラの舌が昇の口へと侵入する。そして昇の舌との絡み合いを求める。
うわっ、えっと、どうすればいいの？
さすがは朴念仁、こういう時はどうすればいいか分からないらしい。そんな昇をリードするかのようにシエラは上手く舌を絡みつかせていく。そして昇も不器用ながらにシエラに合わせて舌を動かしていく。
えっと、これでいいのかな？　というかいつまでやってればいいの？
やめるタイミングが分からない昇は戸惑うが、そんな昇を察したのか、それとも満足したのかシエラはやっと昇から唇を離した。
離れる時にできたお互いの架け橋を手で払いのける。だがそれと同時にシエラは昇の上から急に跳び上がり、何かが昇の上を通過していった。
えっと、あれ、なにがあったの。
事態が把握できていない昇は呆然とするばかりだが、地面に降り立ったシエラは侵入者と対峙する。
「シエラ～！　あんたね、一体何をやってたのよ！」
どうやら琴未が侵入者だったらしい、しかもしっかりと精霊武具で身を固めている。そして昇とシエラのキスシーンをバッチリと見たようだ。それを察したのだろう、シエラは意地悪な笑みを向ける。
「……うらやましい？」
「当たり前でしょ！」

琴未……相変わらずそこは正直なんだね。
そのままシエラと激突すると思われた琴未だが、昇が未だに固まっているのを察すると真っ先に昇を目指して駆け出す。
「させない、ウイングクレイモア！」
シエラも精霊武具を身にまとうと琴未の行動を邪魔する。
横一線に振られるクレイモアを避けた琴未はそのまま一回転して着地するが、ここは足場が悪い砂場だと言う事を忘れているのだろう。体重の掛け方を間違えて思わず後ろに倒れていく。
「やった」
琴未の行動を阻止したシエラは笑みを浮かべるが、何の悪運か妙運か、琴未は体を半回転させてすぐに反撃の態勢をとろうとするが、倒れる先には未だに固まっている昇が居た。
えっ？
思っても居ない事態に昇も琴未も戸惑ってしまうが落下運動が止まるはずもなく、琴未はそのまま昇の上に倒れてしまった。
「しまった！　昇」
昇を巻き込んでしまったシエラは心配するが、琴未が倒れた衝撃で砂埃が上がりどうなっているのかまったく見えない。
シエラはウイングクレイモアの翼で弱い風を起こして砂埃を吹き飛ばすと、衝撃的な光景を目撃する事になった。
すぐに反撃しようとうつ伏せに倒れようとした琴未だが、その先に昇るが居るのは計算外だった。だからだろう、二人はお互いに向かい合いながら横になっている。
そして幸か不幸か、その時の倒れ方が良かったのか昇と琴未に唇が重なる事になってしまった。
……えっと、なんでまたこんな状態に？
再び固まる昇。先程とは違う甘い匂いを感じながらどうすることもできなかった。それは琴未の方も同じだった。
まさかこんな事になるとは思っていなかっただろう。昇とキスをしたまま固まっている。

「なっ、なっ」
まさかの事態にシエラも思わず行動を忘れて見入ってしまっているが、内から吹き出してくる物は止められないようだ。
だが昇達はそんなシエラに構わずに固まっていた。
……あの～、こういう時はどう対応すればいいのでしょう？
まさにハプニングとも言うべき出来事に昇も琴未も固まっていたのだが、そんないつまでもキスをしてる二人にシエラは叫ぶ。
「いい加減に離れなさい！」
その叫びが二人を現実に引き戻したようだが、琴未だけは笑みを浮かべていた。
確かに二人の唇は離れた。だが琴未に昇と密着しているのをいいことにそのまま昇に抱きついてほお擦りまでした。
「なにやってるの！」
さすがにこれにはシエラも自制心を抑えきれないようだ。だが、そんな自分を見失っているシエラに琴未は意地悪な笑みを向ける。
「……うらやましい？」
「ぐっ！」
いつもとは逆な展開にシエラは思わず怯んでしまうが、このままにしておくわけにもいかない。
しかたなく力技に出るシエラ。昇と琴未の間に割り込んでそのまま二人を引き剥がそうとするが、琴未も琴未で精一杯に抵抗するように昇に抱きつく。
い、いたたたっ、痛いって、ちょ、二人とも落ち着いてよ～
最早言葉すら出ないほど締め付けられる昇に気付くことなく、二人の争いは昇が完全に泡を吹くまで続いた。

やっと事態が収まって三人でパラソルの日陰で円状に座り、琴未が集めてきた情報を聞くのだった。
「けど、たいしたことは分からなかったのよね。風鏡さんの恋人が

何でも自殺したらしいって事になってるみたいだけど」
「自殺？」
「うん、確か……赤沼拓也さんだったかな。それが飛び降り自殺して内臓が飛び出すほどの衝撃だったんだって」
「でもそれだと」
そう、風鏡さんが復讐をする理由がなくなってくる。
「その赤沼さんって人に何か問題があったとか？」
「ううん、誰に聞いても良い人だったって。自殺なんて考えられないぐらいの温厚な人だよ」
じゃあなんで風鏡さんが……あっ、そっか！　忘れてた。
「もしかしてその赤沼さんって人は自殺じゃなくて殺されたんだよ」
「でも犯人らしい人は出てこなかったって」
「それは当たり前だよ。犯人は人間じゃなくて精霊だとしたら」
「なるほど、それならすべての説明がつく」
そう、赤沼さんを殺したのが精霊なら警察の手なんて届くはずが無い。そうなると手段はただ一つしかない。自分が契約者となって相手の精霊を倒すしかこの事件を終演させるさせる方法は無いんだ。
「でも、その精霊はなんで赤沼さんを殺したんだろう？」
「それは本人に聞いたほうが早いかもしれない」
言い終わるなりシエラは立ち上がると別な方向へと目を向ける。昇達もそちらに目を向けるがどうやら誰かがこちらに向かって歩いてくるようだ。
何だあの人？　医者？
昇がそう思うのも無理は無い。なにしろこの暑い中で白衣を着ており、その出で立ちは医者そのものだから。
「なんなのよ、あの人？」
「分からない。でも私の精界内に居る事は確か」
その言葉に昇と琴未は警戒態勢に入る。
そう、精界に入れるのは契約者か精霊だけである。普通の人間が間違っても入ってこれるはずは無い。

「でもまさか、本当に釣れるとは思って無かったわ」
「それは私も」
二人ともやっぱりそう思ってたんだ。
大体この大規模な精界は全て風鏡の復讐相手を誘い出すためのエサにすぎない。もし周辺に赤沼を殺した精霊が居ればこれほどの精界に興味を持つだろうと、何も根拠の無いシエラの思い付きでやった作戦だ。それが成功するなんて誰も思っていなかったのだろう。
そして白衣の男はとうとう昇達の前までやって来た。
「おやおや、まさかこんな場所で契約者と精霊に出会えるとは思っていませんでしたよ」
「私もこんな場所に精霊が居るなんて思ってなかった」
それは明らかに嘘なのだが、それが通じているのか通じていないのか分からないよな笑みを白衣の男は浮かべるのだった。
「まあ、いいでしょう。では先に名乗るとしましょうか。私はエルク・シグナル、アッシュタリアで開発技術者をやってます」
「アッシュタリア？」
聞き覚えの無い単語に昇達は顔を見合わせるが、それがよほど不思議なのかエルクまでもが不思議そうな顔をした後に笑いだした。
「おや、まさかアッシュタリアを知らないとは、やはり辺ぴなところに居る契約者は違いますね」
「なんですって！」
相手の挑発に乗りそうになった琴未を押し留めると、昇はエルクと向き合う。
「とりあえずあなたに一つだけ聞きたい事があります？」
「おや、いきなりぶしつけですね。まあいいでしょう、答えられることなら答えてあげますよ」
「赤沼さんという方をご存知ですか？」
「……赤沼？」
エルクは不思議そうな顔をしながら首を傾げる。
……えっ、まさかこいつじゃないの？

エルクの反応に戸惑う昇だが、それはすぐに逆転する事になる。
「赤沼ねえ、まあ、人間なんて実験体の名前なんて覚えている物じゃないですからね、もしかしたら心当たりがあるのかもしれませんね」
実験体！
さすがにこの単語には昇達は動揺を隠せなかった。だがそんな昇達を無視してエルクは続ける。
「まあ、中には実験体に名前を付けて可愛がる精霊も居ますが、私にはそんな趣味は無いんですよ。実験が失敗して死んだら捨てる、それが科学者のやり方だと持ってますから」
……なんだって
今までに見た事が無いほど昇の顔は怒りをあらわにしていた。
人間が実験体で、そかも用事がすんだらゴミ扱い。こんなのに、こんなやつに風鏡さんの恋人は殺されたのか。
たぶんそれが真実であろう。だからこそ、昇はこれ以上は抑えることが出来なかった。
「あなたは人間を、命を何だと思ってるんだ！」
昇が叫んだ言葉にエルクは軽く笑いながら答えるのだった。
「命、そんなのはその辺に適当に転がっている物ではないですか。そんな物を実験体に使って何がいけないんですか。いや、適当にある物だから有効活用してるのですよ」
「貴様！」
一瞬にして武装する昇。その力は今まで以上に凄まじく、火の粉のように黒い力が飛び散っていた。
そして昇が攻撃態勢に入ろうとした時だった。突然昇達の後ろから竜胆が姿を現し、炎を灯した巨大な斬馬刀をエルクに振り下ろそうとしていた。
「エルク――――！」
叫び声と共に斬馬刀は大地に叩きつけられて巨大な砂煙を巻き起こすのと同時に、斬馬刀が直撃した砂はマグマとなりエルクの方に

襲い掛かった。
それから竜胆は昇達の前に着地する。
だがこれぐらいでエルクを倒せたと思っていないのだろう、斬馬刀を構えたまま昇達の声を掛けてきた。
「悪いとは思ってたけど、あんた達のこと監視させてもらってたのよね」
「大丈夫、そうだと思ってた」
「そう、なら話は早い。あいつが風鏡の敵だよ。けど、まさかこんなでかい精界を張ってあいつをおびき寄せるなんて思って無かったよ」
「私達も引っ掛かると思ってなかった」
斬馬刀を構えながら笑う竜胆、だが微塵も隙は見せない。そんな事をすればやられるのがこっちだというのが分かっているから。
そんな竜胆に昇は近寄り話しかける。もちろん、エルクを警戒したまま。
「じゃあ、あいつがやっぱり赤沼さんを殺したんですね」
さすがに驚きの表情を浮かべる竜胆。だがそれと同時に昇達に向かって投げつけられてくるナイフ。咄嗟に避ける竜胆、だが昇は違った。
この程度なら。
ナイフの本数とスピードを的確に捉えた昇は銃口を向けると全てのナイフを撃ち落してしまった。
竜胆もこれには感嘆する。まさかあれを全て撃ち落すとはかなりの命中精度を示しているからだ。
そんな昇に今度は竜胆から近づいていった。
「その腕も凄いけど、よく拓也の事まで調べたね」
「普通の殺人事件だと精霊と契約する意味がないから、だからこいつが絡んでいるかと思って罠を張ってたんです」
「なるほどね、そこまでしってるんじゃあちょっと付き合ってもらおうかな。さっき常磐が風鏡に連絡を付けに行った。だからもうす

ぐ風鏡たちも来るはずだよ」
そっか風鏡さん達も……あっ、そういえば。
「ちょっと聞いていいですか」
「なに？」
「竜胆さんと常磐さんはなんで風鏡さんと契約をしたんですか？」
昇がそれを聞くと竜胆は都合が悪いように頬をかいた。
「最初はね、私達は風鏡の終焉が見たかったの。復讐出来ても、出来なくても人間は地獄に落ちていくって聞いたから。だから見てみたかったのよ。風鏡がどんな地獄に落ちていくのか」
確かにそうかもしれない。復讐なんてしても救われる者なんて居るのだろうか。いや、どちらにしても苦しむ事になるのだろう。人の命を奪う事に変わりはないのだから、違いはただ一つ、大義名分があるということだけに過ぎない。
だからだろう、竜胆達が聞いた話で復讐は人間を地獄に落ちるというのは。人殺しという罪を背負うのだ。まともに生きていけるはずがない。それどころか今度は復讐される立場に立ってしまう。まさに殺しの輪。どこまでも続く怨念の輪は断ち切ることが出来ないのだから、それはまさに地獄といっていいだろう。
どうやら竜胆達は風鏡が復讐を遂げようと遂げまいと、どんな地獄に行くのか見たかったのだろう。
だが竜胆は照れるようにまた頬をかいた。
「けどね、長い間を風鏡と過ごしてきたからね。今では風鏡に幸せになって欲しいとか思っちゃってるんだよね」
すこし茶化すように語る竜胆。たぶんこれが本音なのだろう。昇はそう理解した。だからこそ選ばなければいけなかった、これから進むべき道を。
一つは風鏡に復讐を遂げさせてやり、閃華の無念を払う道。
二つ目は風鏡に復讐をやめさせて、閃華を説得する道。
たぶん、普通ならこの二択を選ぶだろう。だが昇には他に考慮しなければいけない者が居た。それがエルクだ。

人間を実験体として命を弄ぶ狂乱者。こいつをこのままには出来ない。だからどちらにしろエルクだけはこの場で倒して行きたいのだが、このまま風鏡に復讐させるわけには行かない。昇も風鏡の復讐を遂げても救われないと思ってるからだ。

だからこそ、第三の道を取る。

それは風鏡に復讐させる事なく、自分達の手でエルクを倒す事。こうすれば風鏡に罪を負わせることなく、エルクという狂乱者を始末する事が出来る。それにまあ、閃華の事は後で考える事になるけどしかたない。

風鏡さんの手を汚させるわけには行かない。だから僕がやる、僕ならもうすでに汚れているから問題ない。だからこそ、これ以上は誰かの手を汚させちゃダメなんだ。

それが昇が決めた道だ。後は突き進むだけ。

「ごめん、竜胆さん」

「えっ、どうしたの？」

昇がいきなり謝ったので竜胆は少しだけ動揺を見せる。

「このまま風鏡さんに復讐を遂げさせるわけには行かない。どっちにしても風鏡さんは救われないから。けど、このままあいつを見逃す事は出来ない。これ以上は犠牲者を出すわけには行かないから。だから！　あいつは僕達が倒す」

はっきりと宣言する昇。

シエラは頷き琴未も笑みを浮かべている。これこそが、今の昇こそが二人の大好きな昇なのだから。

だが当然のように竜胆は反論してくる。

「ちょっと、勝手に決めないでよね。こっちにだって事情って物があ」

竜胆の言葉を遮り再び襲い来るナイフ、今度は砂煙もすっかりとなくなっており狙いやすかったのだろう。全員に数本ずつ投げつけてきた。

当然、避ける竜胆とシエラ達。昇はもう一度銃口をナイフに向け

るとトリガーを引く。だが発射された弾丸はナイフに当たる事はなかった。いや、ナイフの方が弾丸を避けた。

なっ！

さすがにこれには驚く昇。慌てて体を動かしてナイフを避けるが、ナイフは旋回すると再び昇に向かってきた。どうやらシエラ達に襲い掛かっているナイフも同様のようだ。

「琴未！」

そんな中で昇は琴未を呼び寄せる。なんとかナイフを交わしながら昇と背を合わせることが出来た琴未。昇はそのまま琴未に指示を出す。

「ごめん、ちょっとの間だけ僕を守ってて、あのナイフを全部落とすから」

「分かった、気をつけてね」

「うん、大丈夫だよ」

それから琴未は自分達に襲い掛かってくるナイフを雷閃刀で打ち落とそうとするが、寸前のところで避けられてしまい。旋回して再び迫ってくる。

その間にも昇は全ての意識を銃身に集中させる。それと共に力を辺りに放出してナイフの位置とスピード、それから軌道などを確認すると一気に行動に出る。

「これでどうだ！」

大の字に両手を開いた昇は銃身から幾つもの弾丸を同時に発射する。それはナイフに向かって飛ぶのだが、やはり寸前で避けられてしまった。だがそれで終わりではない。

昇が放った弾丸は旋回すると今度はナイフを追いかけ始めた。そしてスピードは弾丸の方がはるかに早い。ナイフと弾丸は一気に距離を縮めていく。もちろん、ナイフは弾丸を逸らそうと急旋回を繰り返すが、弾丸は正確にナイフの後を追っていく。

そして遂に弾丸はナイフに激突、飛び交っていた全てのナイフを撃ち落した。

「昇すごい、いつの間にこんな事が出来るようになったの」
「あははっ、いつもシエラと琴未に鍛えられてるからね」
「日頃の成果ってやつだね。じゃあ、そのお礼でもしてもらおうかな」
昇に抱きつこうとする琴未、だがその直前に二人の間にウイングクレイモア振り下ろされた。
「どさくさ紛れに何やってるの？」
「いや、昇が私に感謝してくれてるからそのお礼を貰おうとしただけよ」
「普段の修練は私もやってる」
「……ちっ、聞こえてたか」
あの、琴未さん、本音が怖いですよ。
そんな昇達に竜胆も合流する。
「凄いね君、まさかあれを撃ち落すなんて」
「そんなことないですよ」
一応謙遜する昇。そしてその場にいるもう一人の人物も近づいてきた。
「いやいや、謙遜する事はないよ。なにしろ私が操るナイフを撃ち落したのだから」
「エルク！」
全員がエルクに向かって戦闘体勢を取る中でエルクは笑みを浮かべている。
「思い出しましたよ。そういえば私を狙っている復讐者が居ましたっけね。あなた達がそうだったんですか」
「残念だけどそれは違う。お前が言っている復讐者の仲間はこの竜胆さんだけ、僕達は僕達の意思でお前と戦う事を決めた」
「ほう、なぜそんな事を思ったのか興味深いですね」
余裕の笑みを浮かべるエルクに昇は銃口を向けるとはっきりと宣言する。
「命を弄ぶお前の行為をこれ以上は見逃せないからだ！　だから

こそ、僕達がお前を倒す」
まるで大将のような雰囲気と鋭い意気込みを言葉にして叩きつける昇だが、エルクはそんな昇を笑うと狂気の笑みを向ける。
「面白い、あなたは本当に面白い。見てみたくなりましたよ。あなたというものを。それにあなたの本当の力を」
「本当の力？」
言っている意味が分からない竜胆は昇を見るが、昇はエルクから目線を外すことなく睨みつけている。
「そのエレメンタルジャケットとエレメンタルウェポン以外にあるのでしょう。あなたの本当の能力が」
「なにを……」
聞きなれない言葉に昇は聞き返そうとするが、その前にエルクが手を横に大きく振るとエルクの目の前に多数の魔法陣が現れた。
「さあ、見せてください。あなたの本当に持っている能力を」
魔法陣からは機動ガーディアンがせり上がってきた。どうやら数の不利を悟ったのか、それとも昇を本気にさせたいのか、どちらにせよ数多くの機動ガーディアンが昇達の目の前に現れたのは確かだ。
くっ！　まさかこんな戦力を持っていたなんて。
この機動ガーディアンが居なければ昇達は直接エルクと戦えただろう。だが目の前に現れた機動ガーディアンは確実に五〇以上はいる。この状態でエルクと直接戦うのは無理だし、こっちの戦力だけでは機動ガーディアンだけで精一杯だろう。
だが昇には逆転の手がある、それがエレメンタルアップ。能力が限界値を超えたシエラと琴未なら機動ガーディアンを何とかできるし、竜胆と共同戦線を組めばエルクと直接戦える。だがそれでは風鏡が来た時に介入の口実を与えてしまう。
つまり今の昇達は自分達だけで機動ガーディアンとエルクを相手にしなくてはいけなかった。
足りない、足らないものが多すぎる。
ミリアもそうだが、閃華すらもこの場には居ない。その状況で昇

が進む道はかなり困難になっていた。だが立ち止まるわけには行かない。

「とりあえず、あの機動ガーディアンだけでもなんとかしよう！」

昇の言葉に頷くシエラと琴未。足りないものが多すぎる中で昇達は不利な戦闘に突入していくしかなかった。

第六十七話　一時の休息から……（後書き）

そんな訳でお送りしました六十七話ですが、いかがでしたでしょうか。まあ、最初の方にちょっとだけラブコメを入れてみたつもりでしたが……失敗したかな？　とか思っております。

まあ、そんな事は一切気にせずに行きましょう。

そんな訳で新たに現れた敵エルクとアッシュタリア。これについては次回……には無理っぽいので、その次あたりに与凪が説明してくれるでしょう。……たぶん。

そしてやっと話も現代に戻ってきました。う～ん、なんかちょっとだけ違和感があるのは私だけでしょうか。まあ、今までが時代小説っぽい書き方をしていたからでしょうかね。でもまあ、これでいつものエレメが戻ってきましたよ。

さて、話も一段落しましたし、この辺で終わりにしておきましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。更に投票してくださっている方々、おかげさまで一時だけですが一位を取る事ができました。ここに心から感謝させていただきます。

以上、このままエレメの一位をキープしたいなと思った葵夢幻でした。

第六十八話　進化する機動ガーディアン

昇達と竜胆の前に現れた機動ガーディアン達はそれぞれに剣や槍などを手に持ち、昇達の前に立ちはだかっている。
そして肝心のエルクとはいうと機動ガーディアン達の後方で、まるで昇を観察するかのような目で見ている。
その視線には昇も気がついたからシエラと琴未の傍による。
「今回はエレメンタルアップは使わないで行こう。あいつの目線、まるで僕の能力を探ってるみたいだから」
「わざわざ奥の手を見せる必要は無い」
「そういうことなら分かったわ。それにこいつらは前にも相手をしたことがあるだから必要ないわよ」
そう、ロードナイトとの戦いで昇達は機動ガーディアン達を相手に奮闘したことがあった。
「だからこんな雑魚に必要ないわよ！」
そう言って真っ先に突っ込む琴未。それを察知した機動ガーディアン達も琴未を迎撃するべく動き出す。
そして一体の機動ガーディアンが巨大な斧を琴未に向かって振り下ろす。もちろん、この程度の攻撃なら琴未は簡単に避けられる。
紙一重でかわした琴未はそのまま斧を持っている機動ガーディアンに突っ込もうとするが、すぐさまシエラの手によって後ろに引き戻されてしまった。
「何するのよ」
「串刺しになりたかったの？」
「えっ」
シエラの言葉に目線を逸らすと斧の下を琴未を串刺しにするかのように槍のが突き出していた。
「嘘っ！　まったく気付かなかった」
「あいつら、この前戦った奴とは性能が違いすぎる。油断してると

こっちがやられる事になる」
そう、この機動ガーディアン達はロードキャッスルで戦った奴よりもはるかに高性能の戦闘能力を持っている。
なんで同じ機動ガーディアンなのにこんなにも差が出るんだろう？
そんな疑問を感じながらも昇はシエラ達に指示を出していく。
「シエラ、琴未、無理して大勢を叩く必要は無いから、一体一体確実に倒していこう」
「分かった」
「そうするしかないみたいね」
先程の戦闘でこの機動ガーディアン達が依然戦った奴との違いを肌で感じ取った琴未は、嫌というほどこの機動ガーディアンの性能を感じ取ったようだ。
「じゃあ行くよ」
昇の合図にシエラと琴未は昇の前方に進み出て構える。
「ＧＯ！」
そして昇の合図と共にシエラと琴未は別方向へと一気に飛び出した。
そして昇はというと、その場から動かずに銃口だけをシエラ達に向ける。
こうしていればいつでも援護は出来る。それにシエラと琴未になら一体に集中すればどうになかるはずだ。
つまり昇は後衛からの完全援護、シエラと琴未は最前線での撃破。これが昇達の布陣だ。
そしてシエラは問題無く次々と撃破していった。持ち前のスピードを生かして相手を撹乱させるのと同時に攻撃も加える。そのうえ空中からの攻撃にはスピードもはるかに上がるので一撃で仕留められるらしい。
そしてシエラほどではないが琴未も奮闘していた。
―新螺幻刀流　三段突き切り返し―
瞬時に繰り出された三段突きの後に追撃を入れるこの攻撃に機動

ガーディアンの一体は確実に倒れた。だがそれで油断できるわけではない。攻撃直後のを狙い別の機動ガーディアンが琴未に向かって剣を振るう。

もちろん、先程の事で琴未は油断なんかしていない。それどころか神経を鋭く、精神を集中させているようだ。

振るわれる剣、だが琴未はあえて避けずに懐に踏み込んで身をかがめる。そうすることで相手との距離をなくして、攻撃をかわすことが出来るからだ。

琴未の思惑通りに剣は琴未の上を通過していった後に、そのまま右足を大きく踏み出して引く姿勢のまま一気に切り上げる。

さすがにこのゼロ距離攻撃はどうする事も出来ずに機動ガーディアンはその機能を停止させた。

そんな最戦前で奮闘するシエラと琴未。もちろん、昇も後ろで遊んでいるわけではない。シエラと琴未が目の前の戦いに集中できるように昇は二人に接近する敵を確実に撃ち貫いていく。

だがそれでも二人に迫る機動ガーディアンを防ぐだけで精一杯だ。なんなんだこの機動ガーディアン達、ロードキャッスルで戦ったのとは大違いだ。

反応速度に攻撃の鋭さといい、以前戦った機動ガーディアンとはまったくの別物と一定ほどの性能を発揮している。

それは竜胆も同じようで一体を相手にするのが精一杯で、昇も時々援護をしてくれるので、それでなんとかしのいでいる状態だ。

「くっ！　一体なんなんだ、この機動ガーディアンは！」

高い戦闘能力を持つ機動ガーディアンに昇は思わず大声で愚痴をこぼす。それがエルクにも聞こえたのだろ。エルクは笑い出すと不気味なほどの笑みを浮かべながら口を開いた。

「あっはっはっ、随分と苦戦しているようだね。だがそれも当然だろう。なにしろその機動ガーディアン達は私が作り出した最新型だからね」

まるで機動ガーディアンを誇るような口調で説明するエルク。

その言葉に昇は驚きながらも援護射撃を続ける。
最新型だって、この機動ガーディアンはロードキャッスルで戦ったのとは別物だという事か。
つまり機動ガーディアンにもいろいろと種類があるのだろう。それを説明するかのように竜胆は戦闘を続けながら口を開く。
「さっき名乗ったでしょ、あいつはアッシュタリアの技術開発者。そんなやつの手に掛かればこの程度の機動ガーディアンなんて簡単に作り出せるのよ」
昇に説明し終えた竜胆は斬馬刀を大きく振るい一体の機動ガーディアンを撃破する共に、その隙を突くように攻撃してきた剣を避けた。
つまり機動ガーディアンはロボットみたいに進化を続けているって言うのか。くそっ、だからこんなにも違いがでるのか。
しかもエルクは技術開発者だ。この手の技術に関しては最高級の技術を持っているのだろう。そんなやつが作り出した機動ガーディアン相手に昇達は苦戦を続けていた。
―新螺幻刀流　改　飛翔乱舞―
琴未は雷閃刀に雷を放出させながら一体の機動ガーディアンの周りを跳び回りながら、切り刻んでいく。
この技はかなりのスピードを有しているため、機動ガーディアンでも防ぐのは無理のようだ。だが一体やられようとも別の機動ガーディアンが琴未に襲い掛かる。
最後の着地から攻撃に備える琴未。だが機動ガーディアンの巨大な斧を横に薙いではすでに琴未を捕らえていた。
だが雷閃刀を斧にぶつける事で直撃は避けたが、衝撃まではどうする事も出来ずに吹き飛ばされてしまった。
そこへすかさず上空に跳び上がった機動ガーディアンが琴未に向かって槍を向けて落下してくる。
さすがにこの状態ではどうすることもできない琴未。だが落下してくる機動ガーディアンは昇の攻撃を四発ほど受けると、その衝撃

で体がへこみその場で爆発した。
危なかった。でも間に合ってよかった。
荒い息をしながら一安心する昇。一方琴未はというと、すぐに立ち上がり別の機動ガーディアンと戦闘を開始していた。
このままじゃダメだ。いつまでたってもエルクに到達する事が出来ない。
確かに現状では機動ガーディアン達を相手にするのが精一杯で、それ以上のことは何も出来ない。
せめてミリアと閃華がいてくれたら。
だが二人ともこの戦場にはいない。どうやら閃華の相手はミリアがやっているようだが、今頃どうなっているのかは想像なんて出来ないし、している暇は無い。戦闘は未だに続いているのだから。
先程の援護攻撃でかなりの力を使った昇はやっと通常の呼吸に戻り、再び援護に回ろうとしたときだった。
突如、別方向から現れた機動ガーディアンが昇に向かって剣を振るった。
思いもがけない攻撃に昇は拳銃をダガーモードにすると、そのまま剣を受け止める。
だが相手は最新型の機動ガーディアンである。昇がそのまま相手の攻撃を受け止められるはずも無く、剣は振り切られて昇は吹き飛ばされてしまった。
くっ、こっちにまで来たのか！
今まで最後衛で援護をしていた昇だが、その昇の所にまで来たという事は最前線で奮闘しているシエラと琴未が抜かれたという事になる。
そうなると昇達は囲まれてどうしようもなくなる。
昇は急いで立ち上がるとシエラと琴未、それに竜胆も自分の元に呼び寄せた。もちろん、囲まれる事を前提にしてだ。
昇の呼びかけに応じて後退するシエラ達。だが相手もすんなりと逃してはくれない。しかたなくゆっくりと後退して、集結した頃に

はすっかり囲まれていた。
「どうするの昇、囲まれた」
「分かってる。でも、あのまま攻めていても分断されて囲まれるだけだから、それなら全員集まって囲まれた方が勝機はある」
「へぇ～、結構頭が回るんだね」
竜胆の言葉に昇は謙遜の言葉で返すとこれからの事を話し始めた。
「竜胆さん、風鏡さん達の到着するに後どれぐらい掛かりそう？」
「もうそろそろだと思うけど、この状況で風鏡達が救援に来ても突破できるか怪しいわね」
「そう、風鏡さん達がいても突破は無理か、なら残る手は一つしかない」
自身を持って言い切る昇にシエラ達には驚嘆の声を上げる。
「それで、どうするの？」
シエラの問いかけに昇はシエラに振り向く。
「シエラ、精界を解いて」
「なっ！」
思いがけない言葉に琴未はともかくシエラまでも驚愕の声を上げる。
精界は精霊と契約者にとっては専用の戦闘空間である。したがって精界内での出来事は現実に影響を及ぼさない。
だが精界の外はまったくの現実だ。物を壊せばそのまま壊れて、人が死ねばそのまま死ぬ。それを防ぐ為の精界なのだが、昇はそれを解けとシエラに言ってきた。
「昇！　分かってる、そんな事をすれば外の人達も巻き込むんだよ」
「だから精界を解くんだ。これほどの機動ガーディアン、それを表の人達に見せるわけには行かないだろう」
「なるほどね、こっちが精界を解く事で相手に機動ガーディアンを封じ込めるというわけね」
竜胆の言葉に昇は頷く。
つまり昇がやろとしている事は精界を解いて、相手に機動ガーデ

ィアンを仕舞わせる事だ。
たしかにそうすれば機動ガーディアンを無効化できるだろうが、エルクとの戦闘を開始するわけには行かない。つまりそれは、昇達の負けを示していた。
「このまま戦っても勝ち目はない、それどころかこっちが負けるだけだから。シエラ、精界を解いて」
しばらく黙って昇を見詰めていたシエラは静かに頷いた。
そして手を天にかざすと世界にヒビが入り始めた。
「なんだと！　精界を解く気か！」
さすがにこの行動にはエルクも驚くが、その行動の意味を悟ると高らかに笑う。
「あははっ、そうか、そうやって逃げるつもりか。まあ、いいだろう。今回は挨拶代わりだ。近いうちに決着を付けさせてあげるよ。あの復讐者さんにもね」
それだけいい終えると機動ガーディアン達の下に魔法陣が現れると、次々と魔法陣の中に入って姿を消していく。そしてエルク自身も精界が壊れるのと同時に姿を消した。

精界が壊れる寸前に昇達は人がいない場所に移動していたため、精霊武具で身を固めた姿を見られてはいない。
そして普段の姿に戻った昇達が表に出ると、そこには風鏡と常磐の姿があった。
竜胆に向かって歩き出す風鏡、昇はその前に立ち塞がった。
「どいてくれませんか」
静かな口調だが、その中には明らかに怒りが混じっていた。
「今回のことは僕の独断でやりました。文句があるなら僕に言ってください」
「それで竜胆を庇うつもり」
「そっちだって竜胆さんを使って僕達を監視していたんでしょう」

にらみ合う昇と風鏡。だが風鏡はすぐに笑みを浮かべる。
「ご存知だったのですね。まあ、それぐらい察すると思ってました。それから昨日も言いましたが、これ以上は首を突っ込まないで下さい。あなたたちには関係ないのですから」
「あんただって私達を囮にしようとしたでしょ！」
後ろから怒鳴り付ける琴未を制すると昇は再び風鏡と向かい合う。
「残念ですが僕達の事も相手に知られてしまいました。これで関係ないと言えますか？」
「それはあなた達が余計な事をしたからでしょう」
「ええ、その事についてはお詫びいたします。けど、僕にはあなたにこのまま赤沼さんの敵討ちをさせるわけには行かない」
「どうして……拓也の事を？」
初めて動揺を見せる風鏡。思わずよろけて常磐が慌てて支えるほど動揺したようだ。
だが風鏡はすぐに立ち直ると昇を思いっきり睨みつける。
「どうやって拓也の事を知ったかは知らないけど、あなた達に私の邪魔をして欲しくないの」
「そうは行きません。僕は……このまま風鏡さんが敵討ちをしても救われないと思うから！」
はっきりと言い切った昇は更に続ける。
「風鏡さん、このままエルクを倒せばあなたは救われるんですか。元の幸せを取り戻せるんですか。違うでしょう！　そんなやり方は間違ってる！」
「じゃあどうしろっていうのよ！　あいつは私の目の前で拓也を実験動物のように殺したのよ！　私に見せ付けるように、その時の私の気持ちが分かる！　愛してた、私は本当に心の底から拓也の事を愛してたのよ。それをあんな殺されかたをさらたら拓也だって浮かばれない！」
それ以上は耐え切れなかったのだろう。風鏡はその場に泣き崩れると嗚咽を上げ始めた。

とても見ていられない状況にシエラと琴未は思わず目線を逸らすが、昇だけはしっかりと風鏡を見詰めていた。

「確かに風鏡さんの言うとおりかもしれません。このままでは赤沼さんは浮かばれないでしょう。だから……僕達がエルクを倒します！」

思ってもみなかった言葉に風鏡は涙目のまま昇に目線を上げる。

「けど、僕達が戦うのは赤沼さんの敵討ちじゃない。これ以上エルクの被害者を出さないためだ。それが僕達が戦う理由です。それには風鏡さんも口出しは出来ないでしょう」

だが風鏡は涙を流しながら笑みを浮かべて、まるで昇の行動を笑うかのように言葉を放つ。

「なによそれ、そんなの言っている事が違うだけでやることは同じじゃない。そんなので私を納得させるつもりなの。それともなに、自分達が敵討ちをやってやるから拓也の事を忘れろというの」

「どれも違います。これは僕が決めた、僕達の戦う理由です。それはあなたには関係無い。だから、あなた達が僕達の邪魔をするなら僕はあなた達とも戦います」

「そんなの……ずるいじゃない」

再び涙に崩れる風鏡。

それはそうだろう。風鏡にとっては現実を突きつけられているのだから、もっとも逃げ出したい現実から。

風鏡は敵討ちという手段で自分を救おうとしている。それは違うかもしれないけど、昇にはそう思えてならなかった。だからこそ昇は風鏡を止めた。

そんな事をしても意味は無いから。現実から逃げて敵討ちに走っても風鏡が救われる事は絶対にないと分かっているから。

結局昇には分かっているのだろう。目の前の辛い現実を乗り越えられるのは自分自身だけだと。昇がそうしてきたように、雪心の死を乗り越えたように、風鏡にも赤沼の事を乗り越えて欲しかったのだろう。

ごめん、風鏡さん。でも、風鏡さんが幸せを手に入れるにはそれしかないと思うから、だから風鏡さんにも頑張って欲しい。
心の中で風鏡に謝罪する昇。だが昇に後悔などは無い。そう、全ては自分で選んだ道だから。

結局、その場は解散となった。風鏡は涙を止める事が出来ないようなので常磐に支えながら歩いている。
そして昇達も自分達の宿の帰る事にした。
その帰りの道中、昇はもう一つの問題を考えていた。
「ねえ、琴未」
「んっ、どうしたの昇？」
「閃華は、風鏡さんが復讐する事を察したんだよね」
「だから私達にその事を話したんでしょ」
「じゃあ、閃華自身はどうしたいのかな？」
その質問にはシエラも琴未も答えることが出来なかった。今回の事は閃華の過去と綿密に繋がっている。だからこそ、閃華は風鏡が復讐する事を察して迷っているのだろう。
多分それは二択。一つは風鏡の復讐に協力する事、そしてもう一つは風鏡の復讐を止める事。
たぶん閃華は過去の問題からその二択を迫られているんだと思う。けど、答えは本当にその二つしかないのかな。もしかしたら別の道もあるかもしれない。
だが閃華の過去を知らない昇はその道を見つけることは出来ない。なにしろ閃華が背負っている物を知らないからだ。
やっぱり聞くしかないか、閃華の過去を。う～ん、あまり人の過去を掘り返すのは嫌なんだけどな、ここまできたらそうは言ってられないか。
閃華の過去を知る事を決めた昇は旅館への道筋でどう聞きだそうか迷いながら歩いていたが、それが杞憂に終わるのは旅館に戻った

時だった。

旅館に戻った昇達を待っていたのは……宴会場だった。昇の母である彩香と担任である森尾はすでに酒に酔っており、ミリアと与凪も海の幸に舌鼓を打っていた。そして閃華一人だけが、部屋の隅で夜空を見ているようだった。

そんな中で戻ってきた息子に気付いたのだろう。すでに酔っている彩香が昇に声をかけてきた。

「おっ、おかえりドラ息子」

「母さんまた」

「いいじゃないかい、今回は先生もいるんだからあんたの今後についていろいろと話してるんだよ」

酒を飲みながら人の将来を語らないで下さい。

「そうだぞ滝下。今日ばかりは無礼講といこうじゃないか、という訳でお前もどうだ？」

「謹んで遠慮します」

というか生徒に酒を勧めないで下さい。

そしてこのままでは二人のペースに乗せられると思ったのだろう、与凪に目線で助けを送ると、それを察したかのように与凪は立ち上がった。

「さて、じゃあ滝下君達も戻ってきた事だし、私達は私達だけで宴会をしましょうか」

「え～、一緒でいいじゃない」

文句を言って来る彩香に与凪はウインクをして返した。

「大人は大人の、私達思春期はそれなりの楽しみかたがあるんですよ」

それだけ言うと与凪は未だに食事にありついているミリアを引っ張って昇の部屋に移動していった。

一応、ミリアの要望で昇の部屋にもそれなりの食事を移動させながら与凪から話を切り出し始めた。
「じゃあ、まず私が聞いた閃華さんの過去についてから話すね」
「閃華の過去を聞いたの！」
与凪はいたずらでもしたかのような笑みを向けると一言付け加える。
「ほとんど盗み聞きですけどね。どうやらミリアさんに話したみたいですよ」
「そうなの」
昇はミリアに尋ねるが笑って誤魔化されるだけだった。どうやら最後まで聞いていないらしい。
「まあ、ミリアさんが途中で寝ちゃったんで私が最後まで盗み聞きしてたわけですよ」
ああっ、そういうことですか。
全てを理解した昇は深いため息を付くと与凪へと目を向ける。そして視線が与凪に全ての視線が集まると静かに閃華の過去を語り始めた。

全てを語り終えた与凪はジュースを手に取ると一気に流し込んだ。そして誰一人として言葉を発する物はいなかった。
それはそうだろう。閃華の無念を思えばそう簡単に言葉に出来る物じゃない。
気付けなかった事、何も出来なかった事、力を持ちながらそれがどんなに悔しい事か僕には良く分からないけど、閃華が何について悩んでいるのかは判ったような気がする。
つまり昇の答えはこうだ。
閃華は迷っている。過去の出来事と類似した出来事が目の前で起こっている。その時に自分はどうすべきなのだろうかと。

少なくとも昔のように何も出来ないのは嫌なんだろうな。けど、閃華の過去を振り切らせるという事は、風鏡さんの復讐を遂げさせる事になる。

つい先程、それだけはさせないと自分の口で言ったばかりなのに、昇はまたしてもそのしがらみに捕らわれる事になった。

もし、この二つの問題を同時の解決させるのだったら答えは一つしかない。それは閃華も協力して風鏡の復讐を成功させる事だ。

そうすれば風鏡は満足するし、閃華も過去のしがらみから開放されるだろう。

けど、でも、それは何か違うような気がする。

だが昇はその道を選ぶ気にはなれなかった。

この復讐を成功させて本当に二人とも問題を解決できるの？　本当に二人は手に入れたいものを手に入れることが出来るの？

どちらにしても違うような気がする。そもそも復讐を成功させるべきではないのではないのだろうか。そんな事をしても意味が無い事は昇だって良く分かっているはずだ。

閃華だって今更他人の復讐を遂げるのを手助けしたって救われるはずは無い。……ならどうすればいいんだ！

思わず畳を叩く昇。その音に驚きの視線が昇に集中する。そして昇もその視線に気付いたらしい。

「あっ、ごめん、つい」

「ううん、いいよ、昇の気持ちも分かるから」

琴未の言葉に昇は少しだけ気が楽になったような気がした。そしてそれをきっかけに与凪は話題を変えてきた。

「じゃあ次は滝下君達の番だよ」

「えっ、なにが！」

「なにがって、今日一日遊んでたワケじゃないんでしょ。分かった事を報告してよ」

「あっ、そっか」

事態を把握した昇達はまず琴未が調べてくれた事を話し始めた。

内容は先程昇達に話したのと同じだ。風鏡の恋人である赤沼拓也がエルクの実験体として殺されて、風鏡はその復讐のために動いている事。

そして昇達の番になるとエルクとアッシュタリアの事を話すと与凪は驚いたように同じ言葉を繰り返す。

「アッシュタリアですって！」

突然驚いたように声を上げる与凪に呆然とする一同。それを無視して与凪は空中にキーボードとモニターを出現させると何かの情報を引き出しているようだ。

そしてモニターを昇達に向ける。

「これを見て、これ」

「いや、これって言われても」

モニターにはワケの分からない組織図のような物が映し出されていた。

「これがアッシュタリアの組織図よ。大まかな物だけどこれだけも見てのとおり大組織だということが分かるでしょ」

えっと、つまりアッシュタリアというのは……これ全部！

やっと状況を理解した昇は驚きの表情を浮かべる。

そんな中で与凪は更にアッシュタリアについての説明を始めた。

「アッシュタリアって言うのはね。見たとおり契約者が組織した精霊と契約者の軍隊のような物。その頂点に立っているのは未だに謎だけど、今現在では一番エレメンタルロードテナーに近い人物といわれてるわ」

「なんでそんなのが存在しているのよ」

思わず声を上げる琴未だが、シエラは当然のように答えを返した。

「争奪戦は規模が大きくなると必ず組織戦になってくる。だから、こういう組織があっても不思議は無い」

「そう、シエラさんの言う通りなの。ほかにも小規模な組織が幾つか出来始めてるけど、全部アッシュタリアに潰されてるわ。この手の情報は私達のような精霊達の情報網には行きかってたんだけど、

まさかこんなにも早く接触する事になるなんて」
苦々しい顔をする与凪。まさか昇達がこんなにも早くアッシュタリアと接触するとは思っていなかったのだろう。だからこそ、今まで話していなかったのだから。
そして与凪はさらにモニターに新たな画面を出現させる。
「そしてエルク・シグナル。アッシュタリアの技術開発者。けど実体はマッドサイエンティストのようなものよ。人を実験体にしていろいろな事をやっているわ。それから滝下君達が戦った機動ガーディアンもエルクが開発した物だと思う。最近、機動ガーディアンの開発戦争は頻繁に行われているから」
「なぜまた、機動ガーディアンの開発が？」
シエラの質問に与凪は頭を抱えるように答える。
「それがね、確かに機動ガーディアンは精霊に比べれば質はかなり落ちるわ。そしてどれだけ進化させても精霊ほどにはならないと言われてるの。けど、人海戦術とか、数で攻める時にこれほど優秀な駒は無いわ」
「そういうことか」
小規模な争奪戦は精霊の質が物を言うが、組織戦だとどうしても精霊だけでは追いつかなくなってくるのだろう。だからこそ、高性能な機動ガーディアンが必要となってくる。これほど便利な兵は他には無いからだ。
そんな事になってたんだ。だからあんな高性能な機動ガーディアン達があんなにも出てきたんだ。
先程の戦闘を思い出して、改めて新たな機動ガーディアンに感心する昇。その中でも一番やっかいなのは戦闘能力ではなく、戦闘思考の方だ。
戦況を確実に把握して的確な攻撃をしてくる。あれほどやっかいな物はない。
その事を与凪に話すと、またしても頭を抱える。
「そっか、そこまで進化してたんだ。滝下君、そんなやつらを相手

に閃華さんを抜きに何か手はあるの？」
今度は昇が頭を抱える番だ。そんな高性能の機動ガーディアンを相手に閃華までも抜きにしてどれほどの事が出来るだろう。
それに、そもそも閃華の悩みすら自分は解決する事が出来るのだろうか。
結局八方塞の状態には変わりなく、誰しもが答えを出せないときだった。突如部屋の扉が開くと誰かが入ってきた。
「よう、盛り上がってるか？」
「亮ちゃん……」
入ってきたのはすっかり出来上がっている森尾だった。どうやら昇達の様子を見に来ただけのようだが、かなり酔っている事に違いない。だがそんな状態でも昇の担任という立場は忘れていないようだった。
ふらつきながら昇の元に行くと酒臭い口で言葉を掛けてきた。
「どうした滝下、なんか葬式みたいになってるぞ」
これにはさすがの昇もため息を付く。
「もう八方塞でどうしていいのか分からないんですよ」
「閃華君の事もそうかい？」
思いがけない質問に昇は驚いた顔で森尾に顔を向けるが、森尾は相変わらず上機嫌のように酔っているようだ。
「閃華の過去……聞いたんですか」
「よっちゃんと一緒だったからね。ついでに立ち聞きしちゃったよ」
何がおかしいのか笑い出す森尾に思わずため息を付く一同。だがそんな周りに関係なく森尾は喋り続ける。
「いや～、閃華君も大変な過去を持っているみたいだね～。けど滝下、人も精霊も変わらんぞ。皆それぞれ問題を抱えながら生きているもんだ。それをどう解決するのはその人自身だからな。まあ、無理して答えを出さなくてもいいんじゃないのか？」
随分とおき楽に言ってくれるな。
昇は思いっきりため息を付くと森尾がこれ以上いると邪魔なので、

与凪に目線で合図を送ると森尾は与凪と一緒に部屋を後にした。
だが昇には何か引っ掛かる物があった。それは酔っているとはいえ、先程森尾が残していった言葉だ。
人も精霊も変わりなく問題を抱えながら生きているのは確かだよな。けど、それをどうやって乗り越えるのかが問題なんだよな。
どうやったら閃華自身が抱えてる問題を乗り越えさせるか、昇はその事を考えていた。だがしょせんは閃華の問題。昇に答えが出せるわけが無い。
結局答えが見つからずに迷走する昇達、そんな時だった。突如昇の部屋に来訪者が訪れたのは。

第六十八話　進化する機動ガーディアン（後書き）

そんな訳で気付けばもう六十八話なんですよね。う～ん、我ながらよくもまあここまで書いたものだと感心してしまいます。しかもこれ以上書くのだから、かなり長くなりそうですね。

というか、この作品に最終話など来るのだろうかと、そんな事を思ってます。

さてさて、今回の話で沢山出て来た機動ガーディアン。大元は信長が作り出した鉄兵なんですよね。それがそこまで進化するとは、精霊達の技術力も大した物ですね。

まあ、それはともかく、ついに全貌が少しだけ見えたアッシュタリア、こんな強大な敵に昇達はどう戦っていくんでしょうね。まあ、現状ではアッシュタリアとぶつかり合うのは無理でしょう。

さてさて、そんな事より、私事になりますが、最近ライターの仕事を始めました。仔細は私のホームページを見てください。まあ、簡単に言うとお客様が作り出したキャラクターが、こちらの用意したオープニングを見てどうプレイするか提示して、それを小説化するわけですね。まあ、ご興味がある方はぜひとも私のホームページから飛べますので是非ご覧下さい。それから「マギラギ」で検索しても私のオープニングが出ているときがありますので興味をもたれた方はぜひともどうぞ。

ではでは、長くなりましたが、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、最近いろいろと悩んでる葵夢幻でした。

第六十九話　迷い続ける事

「こんばんは」
突如昇達に部屋に乱入した者。
「常磐さん！」
そう、風鏡の精霊である常磐が昇達の部屋にある窓から乱入してきた。
「一体何かあったんですか」
突然の乱入者だというのに一同は落ち着いたものだ。まあ、この手のものにはもう慣れっこなのだろう。
そして常盤は勧められたわけでもなく勝手に座ると一通の封筒を差し出した。
「なんですか、これ？」
「読んでみて」
常磐に進められるままに昇は封筒の中身を確認する。
なっ、これって！
「これ決闘状じゃないですか」
そう封筒の中身にはエルクから風鏡へに当てた決闘状のような内容が書かれていた。それも場所を指定手の決闘。つまりエルクとしては風鏡に復讐のチャンスをやろうという内容だ。
「こんなものはもう決闘状じゃなくて、挑発状と言ってもいいないようよ」
誰が差し出したわけでもなく、常磐は勝手にお茶を入れるとそれをすする。
「それで風鏡さんは」
「もちろん、受ける気よ」
それはそうだろう、風鏡としてはエルクからの挑戦状。しかも復讐のチャンスを自ら飛び込んで来たのだから、それが罠であろうとも飛び込まないわけが無い。

こんなのを送りつけてくるなんって、エルクは一体何を考えてるんだ。
挑戦状の内容はこうなっている。場所は今日シエラが精界を張った場所。時間は明日の深夜。しかもそっちはいくらでも援軍を出してもいいと書いてある。
つまり昇達も巻き込めという事だろう。
僕達が参戦すると見込んでの挑発か。
内容からエルクの意図を察する昇。そんな昇を無視しながらもお茶をすすり、常磐は口を開いた。
「本当はね、君達を巻き込まないつもりだったんだけど。私と竜胆が相談して、風鏡に知られないようにそれを君達に見せに来たってワケ」
「じゃあ、風鏡さんは僕達を巻き込まないつもりなんですか」
「そう、風鏡は元々君達をエルクを釣るエサにするつもりだったけど、それ以上は介入させたくないみたい。やっぱり自分の手でエルクをやっつけたいんだと思うよ」
確かに風鏡さんからしてみればそうだろう。僕達の力を借りてエルクを倒すより、やはり自分の力でどうにかしたいんだろうな。
それが分かっているから昇も黙って見逃すわけには行かないのだろう。封筒を常磐に返すと皆の方を見る。
「私は昇が決めた事なら何でもする」
「もちろん、私も付き合うわよ」
「今度も留守番なんてつまらないから私も行くよ」
それぞれに返答を返してくるシエラ達。その答えに昇は頷くと再び常磐と向き合う。
「分かりました、その決闘に参戦します。けど、先程も言いましたけど風鏡さんに復讐させるためじゃない、エルクの被害者をこれ以上出さないために戦います」
その答えに常磐は複雑な顔になるが、それでも昇達が参戦するとなると有利になるのは確かだ。だからだろう、これで良しとしたの

は。
「分かった。それでいいよ」
それ以上は何も言わなかった。常磐にも分かっているのだろう、風鏡には風鏡の、昇には昇の戦う理由有ると言う事を。そしてそれは互いに反発し合うだけで、決して一つにはならないという事を。
「それじゃあ、明日はお願いね」
「はい、協力すると約束できませんが精一杯の事はやるつもりです」
その言葉に満足したかは分からないが常盤は席を立つと、再び窓に向かっていった。
「どっちにしても明日には決着をつけないとだよ。風鏡もそうだけど、君たちもね」
「ええ、分かってます」
「そう、じゃあ明日またね」
それだけを言い残しして常磐は窓の外へとその身を飛び出していった。

それにしても、まさかエルクの方からこんな挑戦状を持ってくるなんて、一体何を考えてるんだ。
常磐が帰った後、昇はそのことだけを考えていた。それはシエラ達も同じだろう。どうしてエルク自らがこんなものをよこしたのが予想がつかなかった。
そんな時だ。森尾を寝かしつけた与凪が戻ってきたのは。昇は先程の出来事を全て与凪に話した。与凪の情報網なら何かしらつかめるかもしれないからだ。
だが与凪も困ったような顔になった。
「そう言われてもね、私達の間でもアッシュタリアは結構謎に満ちた組織で、内部の事情なんてものは分からないのよね。だからエルクが何を考えてそんな物を送りつけてきたかなんて分かりはしないわ」

「そうですか」
「けど確信はないけど予想だけはつくわね」
与凪の言葉に一斉に視線が集中する。
「さっきも話したけどエルク・シグナルはマッドサイエンティストなのよ。だから狙いは滝下君だと思う」
「僕！」
自分を指差しながら驚く昇、まさか自分が狙われているとは思っていなかったようだ。
「いい、エルクは実験体として風鏡さんの恋人を殺した。それと同じ事を滝下君でやろうとしてるんじゃないかな。それに滝下君は契約者だし、しかもエレメンタルアップというレアスキルをもっている。これはバレてないけど知られたらこれ以上無い実験体に間違いないわ」
「つまり昇を釣り出すために風鏡に挑戦状を出した」
「そう、シエラさんの言う通りかもしれない」
つまりエルクの狙いは昇であるが、その昇自身の情報が無いため、唯一のつながりを持っている風鏡を利用しようとしているのだろう。
それが分かって急に不安になる昇。まさか自分自身にそんな災難が襲い掛かるとは思えないのだろう。それはシエラ達も同じだ。昇が狙われているとは誰も考えていなかったようで静寂がその場を支配する。
まさか僕を狙ってたなんて、でもなんで僕なんだろう。……そうか！　さっきの戦闘で僕が契約者だという事は分かってる。後はどんな能力を持っているか、その情報だけがエルクには無いんだ。だから僕を狙っているのかもしれない。
確かにそう考えれば筋は通る。それにエルクの性格から考えても契約者を実験体にしたい衝動に駆られても不思議は無い。
そう考えると昇の背筋に寒い物が走ったようで、急に身震いをした。それを見て誤解したのか、それとも考えがあるのかシエラが口を開いた。

「昇、さっきの戦闘で疲れでしょ。だからお風呂にでも入ってゆっくりしてきたら」
確かにさっきの戦闘から今まで話し込んだり常盤が来たりとゆっくりした時間が無かったことは確かだ。だからだろう、昇もその気になったのは。
そうだね、なんかいろいろと忙しくなってきたし、ちょっとゆっくりもしたからお風呂にでも入ってこようかな。
「そうだね、なんかいろいろとあったからお風呂でゆっくりしてくるよ」
そう言って昇は準備をすると風呂場へと向かった。後ろで光る怪しい視線に気付くことなく。

頭から思いっきりお湯をかぶると昇は大きく溜息を付いた。
「それにしても、まさか僕が狙われてるなんてな」
そんな事は想像もしていなかった。だからだろう、急に不安になってきたのは。けど、こうなってしまったものはしょうがない。ここは一つ体でも洗ってすっきりしようと昇が石鹸に手を伸ばそうとした時だった。
「あれ？　石鹸はどこだっけ？」
「ここ、とりあえず背中を流すから」
「あっ、ありがとうシエラ……って！」
思わず立ち上がり振り返る昇。そこにはバスタオルを巻いたシエラが泡の付いたタオルを手に座っていた。
「どうしたの、早く洗わないと湯冷めするよ」
「それよりどうしてここにいるの！」
「そんなの決まってる」
何故か頬赤めるシエラ。
「これが新妻の務めだから」
「違う――――！」

思わず大声で突っ込む昇、だからだろう、他の気配に気付かなかったのは。
「じゃあ私が腕から洗ってくね」
「あっ、うん、頼むよミリア……って、そうじゃなくて」
思わずその場から飛び退く昇。そしてお約束どおりに着地点には石鹸があり、そのまま滑って倒れてしまった。
「じゃあ私は胸を洗ってあげるね、ちゃんと私の胸で」
「なんで琴未まで――――！」
「大丈夫、ちゃんと出来るようにするから」
「というか妄想モードに入ってる！」
思わぬ事態に昇は琴未を押しのけると出口に向かおうとするが、そこにはすでにシエラが待っていた。
「ダメだよ昇、ちゃんと暖まってから出ないと、湯冷めして風邪をひいちゃう」
「そういう問題じゃなくて、なんで皆ここにいるの」
「昇がお風呂にいるからだよ」
「答えになってな――――い！」
ミリアの一言に思わず思いっきり突っ込む昇。だが昇に迫る魔の手は緩みはしなかった。
「だから、ちゃんと私の胸で洗ってあげるから」
いや、琴未、頼むから正常に戻ってください！
「そうそう、だからちゃんと座らないと洗えないよ」
ミリアさん、問題点が違います。
「だから昇、観念する時」
勝手に決めないで下さい！
三方から攻められて昇の逃げ道は無いといっていい。けど、さすがは朴念仁、この状況でも諦めはしなかった。
出口とは反対方向へ走り出す昇。
「逃がさない」
それと同時に三人も一斉に昇を追いかける。だがそれが昇の狙い

だった。
昇はその場で急停止して反転、すぐさま三人の間で一番隙間が開いているところに狙いを定める。
シエラと琴未の間が一番広い！
狙いを定めた昇はそこを狙って一気に突破を狙う。そして一気に疾走するが一つだけ忘れている事があった。
それはここがお風呂場で石鹸があり、そのうえ濡れているため思いっきり滑りやすいということだ。
そして案の定、昇は包囲網を突破する前に石鹸を思いっきり踏んで足を滑らせて、更に水に濡れた足場が昇を前に思いっきりこけるが、せめてもの抵抗で何か掴める物を掴んだ。
だがそれは昇の落下運動を止める事が出来ないものだった。
その結果、昇は思いっきりずっこける事になった。
あたたっ、思いっきり顔を打っちゃったよ。
だがこうなってしまったものはしかたない。昇は顔を擦りながら座ると改めてシエラ達に目を向けて……固まった。
……えっと、先程私が掴んだのはなんだったんでしょ。
思わず手元を見る昇、そこには三人分のバスタオルが握られていた。
「やっぱり無かった方が良かった？」
「裸の付き合いが一番だよね」
「やだ、昇ったら言ってくれればすぐに取ったのに」
……そういうことじゃな――――――――――――――――――――――――――――――――――――――いっ！
頭の血管が切れそうなほどの突っ込み、それから目の前に広がる三人の裸体。昇は意識が薄れていくのを感じながら後ろに広がる大きな湯船へと倒れこんだ。
昇が目を覚ますと、そこには旅館の天井が見えた。

そして辺りを見回すとどうやら部屋に運び込まれたらしい。そして部屋には主犯格の三人がゆっくりとくつろいでいた。
「あの～」
とりあえず声をかける昇、それに真っ先に反応したのはミリアだ。
「あっ、昇、起きた？」
「というか、なんで僕はここに？」
「昇がお風呂場で湯当たりしたから三人で運び込んだの」
つまり今昇が来ている浴衣もシエラ達が着せたものだろう。そう思うと急に恥ずかしくなったのか昇は穴が有ったら入りたい気持ちになっていく。
そんな昇の気持ちを知ってか知らずか、シエラは状況を説明する。
「とりあえずちゃんと三人で体を拭いて浴衣を着せてから寝かせたから風邪はひかないと思う。けど今日は暖かくして寝た方がいい」
「……そうだね」
何かを言いたそうな目線でシエラに目を向けるが、シエラはあくまでもシラを切るつもりらしい。それが分かったのだろう、昇は思いっきり溜息を付いた。
まったく、なんでこんな目に遭うんだか。
だが今更言ってもしかたない。全ての根源は昇自身にあるのだから。誰かに文句を言うわけには行かない。誰か一人に決められない自分が悪いと分かっているから尚更だ。
とは言ってもな、今更誰か一人に決めろといわれても……決められないよな。
それほど絆を持ってしまったのだからしょうがない。強い絆があるからこそ、縛られる事もあるのだから。
……あれっ？
そう思った途端、昇は何か引っ掛かるものを感じた。
そうか、僕達も小松さんと同じなのかもしれない。強い絆だからこそ、小松さんは閃華に何も告げなかったんじゃないかな。自分一人でやるために、そう、今の風鏡さんのように。

そう思うと急にいろいろとこんがらがってきた。
なにしろ自分達の絆と小松と閃華の絆、そしてその絆がもたらした結果と風鏡が行おうとしている復讐。一見繋がってないようで繋がっているようだ。
けど、そうなると閃華がどうすべきなのかちょっとだけ判ったような気がする。
結果はまだ出てないけど糸口だけは掴んだようだ。
もしかしたら閃華の問題って……。
「昇、昇」
せっかく解決方法が見えかけてきた時だった。ミリアが急に昇に抱きついてきた。昇は思いっきり溜息を付くとミリアの頭を撫でながら答える。
「今度は何？」
「もう一度お風呂にいく？」
「絶対に行きません！」
はっきりと言い切った昇に部屋には笑い声が溢れた。
そして昇はミリアの頭を撫でながら溜息を付くとシエラ達を見回した。
「まったく、明日にはエルクとの決戦が待っているのに一体何をやってるんだか」
「いいんじゃない、これが私達だもん」
それは琴未らしい答えだね。
「だってだって、今から心配してもしょうがないでしょ」
けどミリアさん、少しは心配しましょうよ。
「昇、私達は私達、それは世界がどうなろうと変わらない」
……そうだね。特別なものなんて必要ないし、いらない。僕達は僕達でいればいいだけだから。そしてそれは閃華も同じだと思う。
そっか、それでいいんだ。
昇はミリアをどかして立ち上がると部屋を出て行こうとする。
「どこ行くの？」

ミリアの質問に昇は笑顔で答えた。
「ちょっと閃華と話してくるよ」
「そう、行ってらっしゃい」
「閃華の事をお願いね」
「うん、分かってるよ」
そして昇は部屋出て閃華がいる部屋へと入っていった。

そして昇が部屋に入ると、森尾と彩香は未だに宴会を続けていた。
その隅で夜空を見上げる閃華、昇はそんな閃華に近づく途中で彩香に掴まってしまった。
「おおっ、ドラ息子、どうした？　ついに飲みに来たか？」
「だから母さん、未成年に酒を勧めないでよ」
「ならそんなしけたツラをしてるんじゃないよ」
「いや、しけたツラって」
どうやら綾香には昇が何かを悩んでいる事を見抜いてるらしい。
それを隠しながらも昇にちょっかいを出しているのだろう。
「今も昔も同じ、皆壁に向かいながら生きてるのよ。そこから逃げたり、見ないふりをするのはずるい奴なのよ。だからここは飲んで壁にぶつかって玉砕しなさい」
「いや、それじゃあ元も功もないよ」
それから絡んでくる彩香を振り切ると昇はやっと閃華の元に辿り着いた。
「閃華」
「なんじゃ」
生気の無い声が帰ってきたことで、閃華の悩みがどれだけの物かが想像できそうなものだ。
それでも昇は閃華に向かって口を開く。
「ちょっと、散歩に付き合ってよ」
「そんな気分ではないんじゃがな」

「閃華じゃないとダメなんだよ」
やっと昇に顔を向ける閃華、そして二人はしばらく視線を交わすと閃華はやっと立ち上がり、二人は旅館の外へと散歩に出かけた。

そして二人は誰もいない海岸線へを歩いている。
ここなら適度に照明もあるし丁度いいのだろう。
「答えならまで出ておらんぞ」
「えっ？」
突然発せられた閃華の言葉に昇は驚きの声で返す。そして閃華はその場で昇に振り返る。その姿は浴衣姿と月明かりの所為かとても不思議な綺麗さを出していた。
そして二人はお互いに見詰めあうと閃華は顔を伏せてしまった。
「私の過去は聞いておるんじゃろ。なら私が悩んでいる事も分かるはずじゃな」
それだけ言うと、閃華は体を半回転させて海の方に振り向く。
「私は小松を止められんかった。じゃが、それは過去の話じゃ、今は関係ない。じゃがのう、昇。あの風鏡殿は小松に似すぎておる。ただ一人の人間を愛して、無念の死を遂げた復讐をしようとしている。この似すぎた状況で私はどうすればいいじゃろうな」
「……」
そんな事を聞かれても昇には答えることが出来なかった。それもそのはずだ。これは閃華の問題であり、閃華でしかその答えを出すことが出来ないのだから。
けど、このままにはしておけないよ。
それでも昇は閃華の問題にぶつかろうとしていた。
「閃華は……風鏡さんにどうしてもらいたいの？」
目線を向けることなく閃華は答える。
「そうじゃのう、どうしたいんじゃろうな。もし、風鏡殿の近くに居たなら止めたじゃろう。じゃが風鏡殿との関係はあまりにも他人

すぎる、そんな無関係な私が口をだしてもしょうがないじゃろ。じゃが、このまま風鏡殿の復讐に手を貸す気にもならん。それは間違ってると思っておるからのう」

そこでどうすればいいのかと閃華はずっと思い悩んでいるのだろう。昔のように閃華と小松の関係なら閃華は積極的に動けただろう。だが今現在では状況が違いすぎる。だから口も手も出せないと分かっていても閃華は何かしてやりたいのだろう。出来る事なら、あの時出来なかった、小松を止めるということを風鏡さんでやるのが一番良いのかもしれない。

だがしょせん閃華と風鏡は他人でしかない。小松のように長い時間をかけて築いた絆も無い。そんな閃華が口をだしてもしょうがないと分かっているから、だから閃華は悩み続けているのだろう。

そんな閃華に昇は初めて自分の考えを言葉にしてみた。

「確かに閃華の過去にまつわる話は聞いたよ。でも、それは小松さんが閃華を信頼してたから何も言わなかったんだと思う。ううん、閃華を巻き込む事も嫌だったんじゃないかな」

「所詮は私が役に立たないということじゃったんじゃろ」

「そうじゃない。多分だけど、小松さんは閃華には閃華の道を進んで欲しかったんだと思うよ」

「どういう事じゃ」

そこで初めて閃華は昇に振り返った。

「小松さんが復讐を決意した時から、閃華と小松さんは別の道を進んでたんだよ。だから小松さんは閃華に何も告げなかった。閃華には自分の復讐につき合わせたくなかったんだよ。それが小松さんが出した答えだと思う」

その言葉はまぎれも無く昇が推測した小松の心情だ。だが、筋は通っており、そのとおりだったかもしれない。だとしても、閃華にしてみればそれも酷すぎる。

再び俯く閃華は小さく笑いを漏らす。

「くっくっくっ、所詮私はその事にも気付けん愚か者じゃったんじ

ゃな」
「違う、そうじゃない！」
珍しく声を荒げる昇。さすがにこれには閃華も顔を昇に向ける。
どうやら泣いてたみたいで涙目でしっかりと昇に目を向ける。
そんな閃華に昇はしっかりと答える。
「小松さんは閃華に幸せになって欲しかったんだよ。復讐となれば不幸になることは目に見えていたから、だから閃華には何も知らずに、幸せになって欲しかったんだよ。だからだよ、自分だけが復讐という道を選んだのは」
「……」
突然の静寂がその場を支配する。風も止まり、物音一つしない静寂の中で閃華は少しずつ昇に近づいていく。
「のう、昇。私の幸せってなんなんじゃろうな。小松は私に何を願っていたんじゃろうな？」
「……分らない、けど、閃華には自分と同じ道を進ませたくなかったんだよ」
「くっくっくっ、なんじゃ、そうか、旦那様が死んだ時から私達は道を違えてたんじゃな。そんなことにも気付けんかったとはな」
「小松さんも閃華に気付かせないようにしようと必至だったと思うよ」
「……そうかもしれんのう」
そこで初めて閃華と昇の距離はなくなり、閃華は昇の胸に顔を沈めた。
そして閃華は昇のシャツを強く握りながら嗚咽を漏らし始めた。
そんな閃華を昇は優しく抱きしめる。
僕は、閃華がこんなにくるしんでるのに僕はこれぐらいしか出来ないんだ。
閃華を抱きしめながら、昇は自分が何もでしてやれないことに苛立ちを感じるが、それを見せるわけにはいかない。今、一番辛いのは閃華なのだから。

くそっ、閃華がこんなに苦しんでるのにどうすればいいんだよ。
苛立つ昇、そんな昇の頭にとある二人の言葉が過ぎるのだった。
『今も昔も同じ、皆壁に向かいながら生きてるのよ。そこから逃げたり、見ないふりをするのはずるい奴なのよ』
『まあ、無理して答えを出さなくてもいいんじゃないのか』
先程酔って口走った彩香と森尾の言葉だ。
その言葉に昇の頭にはある解決方法が思い浮かぶ、だが。
これじゃあ、閃華には酷すぎるよ。僕は……それを閃華にやれって言うのか！
思わず怒鳴りたくなる衝動を抑えながら、昇は更に強く閃華を抱きしめてやる。
……閃華って、こんなに細かったんだ。
改めて感じる閃華。それは今までとは想像がつかないほど弱弱しく、まるでこのまま強く抱きしめると折れてしまいそうな。そんな閃華を昇は始めて感じた。
だからこそ、いや、絶対に閃華を助けてあげないといけないんだ。
それがどんなに酷な手段でも使わないといけないんだ。
昇は決意すると密着している閃華を離して、しっかりと目線を交わらせる。
そのして昇は乾いてもいない喉に生唾を飲み込む。これから閃華に言う事はそれほど残酷なのだからしょうがない。
そして昇はしっかりと閃華の瞳を見つめる。
「閃華」
「……なんじゃ」
まだ涙声の閃華が少し言葉を濁しながら答える。
「確かに閃華の過去から今に繋がっている問題は凄く難しいと思う」
「……じゃからじゃろ、こんなに悩んでるのは」
「僕はそのままでいいと思うよ」
「……はっ？」
突然の思いがけない言葉に閃華は今まで泣いていた事を忘れたか

のように、驚いた顔を昇に向ける。
「どういう……意味じゃ？」
言葉を途切れながら聞いてくる閃華に昇はあえて笑みを向けながら答えた。
「確かに閃華が抱えている問題は難しくて、とても解けるものじゃないかもしれない。けど、閃華はその問題から逃げても、目を逸らしてもいない。真っ直ぐに向き合ってどうにか解決しようとしている。だからこそ、今すぐ答えを出さなくていいんじゃないかな」
その言葉に閃華は俯くと口を開いた。
「昇、自分の言っている意味が分かっているのか？」
「分っているから……だから閃華に告げたんだ」
そして二人は言葉を紡がなくなった。急に静かになった事で海の音が昇の耳にも聞こえてくるほどだ。
そんな中で、昇は閃華の答えを待つ。
やっぱり辛いんだ。そうだろうな、僕だってそんな事を言われた辛くて逃げたくなるよ。
だが閃華は逃げる事せず、その場にじっと立って強く胸の浴衣を強く掴む。
そうだよな、やっぱり辛すぎるよ。何とかしてあげないと。
昇がそう思い、閃華に近づいた時だった。急に閃華は大きな声で笑い始めた。
えっ、えっ、どうしたの？
突然の事で戸惑う昇。だが閃華は一通り笑い続けたら、急にまた静かになった。その急激な変化についていけない昇は戸惑うばかりだ。
だが閃華は違うようで、涙目になりながらもしっかりと顔を上げて昇を見る。
「くっくっくっ、まったく、このような答えを出すとは思っておらんかったぞ」
「えっ？」

ワケが分からないという顔になっている昇に閃華は更に言葉を続ける。
「何を呆けておる。大体昇が言った事ではないか。そうじゃな、忘れておったよ。いろいろなことをな」
「えっと、どういうこと」
その言葉に閃華は溜息を付くと笑みを向ける。
「これだから朴念仁はいかんのう。大体昇が言い出したのではないか、このまま悩み続ければよいと」
そう、それが昇が閃華に告げた答えのひとつであり、閃華が見つけた答えの一つでもあった。
「そうじゃな、所詮は過去のことじゃ。どれだけ悩んでも解決するわけではない。じゃからといって問題から逃げるわけには行かない。なら答えは一つじゃ。悩み続ければいい、答えが出なくても、問題に向き合ってればいい。そう教えてくれたばかりではないか」
いや、まあ、そう言いたかったんですけど。
つまり悩み続けろ。それが二人の出した答えだ。閃華の場合はどれだけ悩んでも解決するワケではない。なにしろ全て終わった事だから。だが、それを全て無かった事にすることもできない。なら悩み続けるしかない。どんなに答えが出ない難問でも悩み続けながら生きていけばいい。それが昇の出した答えで、閃華が受け入れた答えだ。
そして閃華は遠くの星空に目を向ける。辺りに明かりが少ないためか良く星が見える。その中で閃華は昇に向かって口を開いた。
「のう、昇」
「んっ、なに？」
「私と小松が作り上げてきた絆は本物じゃろうな。じゃから私達は別の道を進む事になった。いや、小松が私を思ってそうしてくれた。それは本当じゃろうかのう？」
そう言われてもな。
所詮は過去の事で他人事だ。昇に分かるわけがない。だが昇に言

えることは一つだけあった。
「それは分らないけど、僕達の絆は本物だと思う。だからもう閃華一人を置いて行ったりはしない。これからも皆で一緒にいられればいいよ」
その答えに最初は真面目に聞いていた閃華だが急に笑い出した。
えっ、なに、なんで笑われるの？
ワケが分からない顔になっている昇に閃華は笑いが収まると説明した。
「なるほどのう、つまり昇はこのハーレム状態が気に入っているワケじゃ。それは離したくないじゃろうな」
「いや、ちが、そんなんじゃなくて」
「分っておる」
急に静かな口調で答える閃華。そしてその雰囲気は急に天女のように不思議な雰囲気に変わった。
そしてゆっくりと昇に近づくと、再び昇に抱きついて胸に顔をうずめる。
「せ、閃華」
突然の事で戸惑う昇だが閃華は静かに手を動かして、より深く昇に抱きつく。
「少しだけでよい」
「えっ」
海風に消されそうな声で閃華は昇に告げる。
「少しだけでよいから、じゃからこのまま泣かせてくれ」
「……分ったよ」
そして静かに閃華の泣き声は海風に消されていく。

第六十九話　迷い続ける事（後書き）

そんな訳でお送りしました六十九話。いや～、今回はいろいろな要素が詰まっておりましたね。まあ、その結果、かなり長くなりましたが、まあ、満足していただける話なっていればよいと思っております。

はい、そんな訳でそこのあなた、もしかしたらこれで閃華フラグが立ったと思っていませんか。ですがそんなに甘くありませんよ。これからの選択肢次第では閃華フラグが消滅する罠が待ってますからね。皆、こまめに石は投げようね。

さてさて、戯言は終わったので本編に少し触れようかと思います。そんな訳でやっと閃華の答えがでたのですが、それは悩み続けるという過酷な答えです。まあ、人間にしろ、精霊にしろ、何かしらの悩みを抱えながら生きているのです。閃華がその問題を抱えながら生きていく事を選んでも不思議は無いでしょう。そんな訳で、こんな結末になりました。

そんな訳で次はエルクとの戦闘ですね。まあ、もしかしたら、その前に一話挟むかもしれませんが、いよいよこの純情不倶戴天編も終わりに近づいております。つ～か思っていた以上に長くなったな。それでもまだ終わらないんだよね。もしかしたら後十話ぐらい使う可能性が、……まいっか。どうせ長い作品だし、そんな事を気にしてもしょうがないですよね。……でも、早く次の章に行きたいのも確かなんですよね。

そんな訳で次はいろいろと用意しております。そしてバトルメインでやっていこうと思ってます。更に新たに出て来る新キャラと思わぬキャラが待っている事でしょう。そんな訳で今後のエレメもご期待下さい。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票

と人気投票もお待ちしております。

以上、そろそろ病院に行かないとなとか思った葵夢幻でした。

第七十話　戦場へ

「う、う～ん」

昇はゆっくりと目を開けるとけだるさと疲労感を覚えながら、目の前にある天井を見詰める。

……そうか、あれから旅館に帰ってからすぐに寝たんだっけ。

昇は寝ぼけた頭で昨日の事を思い出すように記憶を手繰り寄せる。

なんでも与凪が言うには明日に備えて今日は早めに眠るように、とシエラ達もさっさと寝るように部屋の中に押し込めてしまった。

その結果だろう、昇がじっくりと熟睡が出来たのは。だが、その反動なのか体がだるさを訴えてくる。

なんだろうな。ちゃんと寝たのになんか疲れが取れないんだよな。

……まあ、しかたないか。昨日はいろいろあったし、閃華もこれでやっと立ち直ってくれるだろうし、これでよかったのかな？

誰かに問うわけではないが、昇はまだ呆けている頭で昨日の事を振り返っていた。

あれから閃華は笑みを見せてくれて、元の閃華に戻ったような気がするけど。今はどうなのかな。また悩んでないかな。

そう思うとこのまま横になっているのも、まだるっこしくなってくるのだろう。昇は起き上がると一応身だしなみを直してから部屋を出た。それからシエラ達の部屋に向かうが、シエラ達も昨日の事で疲れていたのだろうか、その時は未だに眠っていた。だが閃華の姿だけはどこにもなかった。

あれ？　どこにいったんだろう。

そう思いながら昇はシエラ達の部屋を後にする。そして次に向かったのは与凪達の部屋だ。一応断りの言葉を掛けると返事が帰ってきたので、昇が部屋に入ると閃華はそこに居た。

「ここにいたんだ」

「うむ、いろいろと情報を整理しているところじゃ」

昇はそのまま部屋に入り、閃華の隣に座るとその横顔を見詰めた。
その視線に気付いたのだろう。急に閃華が昇の方へ顔を向けた。
「んっ、どうしたんじゃ」
「えっ、あっ、いや、なんていうか」
閃華の事が心配でここに来たのだが、いざとなると言葉が出ないのだろう。そんな昇の気持ちを察した閃華は笑みを向ける。
「大丈夫じゃ。昨日答えをくれではないか、私はこの罪から目はそむけん、常に向かい続けるだけじゃ」
「それってどういう意味なんですか？」
横槍を入れてきた与凪と昇に閃華は笑みを浮かべると、今度は急に閃華は目の前のモニターを遠い目で見詰めながら答える。
「悩み続ける事。それが私の出した答えじゃ」
やはり分らないという仕草で今度は昇に顔を向けてくる与凪。そんな与凪に昇は出来るだけ分りやすく説明しようとする。
「閃華の問題は過去の物で今からだと、どう足掻いてもどうしようもないよ。だからこそ、その問題を見詰め続けないといけないんじゃないかな。……という事かな？」
一応閃華に同意を求める昇。だが閃華は笑うだけで答えを返してくれなかった。
だがそれでいいのかもしれない、閃華自身が閃華の問題なのだから。
それをみていた与凪も自分なりに答えを出してみた。
「えっと、つまり、閃華さんは昔の問題を抱え続けながら生きていく……ってことですか」
「まあ、そういうことじゃな」
簡単に答える閃華だが、そこまで行き着くのにどれだけ辛いか。そしてその苦しみは未来永劫続くものだと知っておきながら、あえて微笑みながら答えるのだった。
それを見た昇はやっと一安心する。
よかった。どうやら昨日の事で閃華は立ち直ってくれたようだ。

あの時は凄く酷い事を言ったような気がしたけど。たぶん、閃華にはそうやって生き続けるしかないんだ。そしてそれは、たぶん僕も同じだと思う。

それは契約者としての覚悟を言っているのだろう。昇はすでに雪心の死を背負っている。それは昇が死ぬまで背負い続けるものだ。そして閃華も同じ、小松の事を背負いながらこれから生き続ける。

どちらも似たようなものだ。だが背負う物があるから人は強くなれる。いや、それは人も精霊も関係ないのだろう。心が何かに立ち向かっている以上、それを乗り越えるために強くならないといけない。人も精霊も関係なく、それは心を持ちながら生き続ける者なら誰しもそうしないといけないのかもしれない。

それはまさに棘の道。昇も閃華も自分の意思でその道を進む事に決めた。だからこそ、強く生きられるのだろう。

改めて自分自身の覚悟を身に染みた昇は閃華達が見ているモニターに目を移す。

「そういえば、さっきから何をやってるの？」

「ああ、これ」

与凪は昇の前にも同じモニターを出すと説明を開始する。

「昨日の戦闘でね、シエラさんが出来る限りのデータを取っててくれたから、それを検証してるの」

「これ、昨日の機動ガーディアン」

「そうだよ」

そう言われて昇もモニターに目線を移すが、何が表示されているのかまったく分らないようだ。ただ昨日出てきた機動ガーディアンにワケの分からない言葉のような物が書かれているだけだ。

「えっと、どういう意味なの？」

「えっ、あっ、ごめんね。つい精霊用語でやっちゃってるから。日本語に変換は出来ないのよ」

「まあ、簡単に言うとこの機動ガーディアンの性能についてじゃな」

更にモニターが現れるとそこには以前に見た機動ガーディアンが

表示されて、二つを並べるようにグラフが表示された。
昇は新たに現れたモニターを指差しながら与凪に訪ねる。
「これって、あのロードキャッスルにいた奴だよね」
「そう、そしてこっちが昨日滝下君達が戦った機動ガーディアン」
「これが結構やっかいなんじゃよ」
そう言いながら閃華は空中に浮いているキーボードを叩くと、新たに数値が加えられる。
「えっと、これってどういう意味なの？」
やはりワケが分からない昇が尋ねるので与凪は位置から説明していくとになった。
「まず、簡単に説明するとこの二体に関する戦闘能力の違い。これはあんまり変わらないんだけどね。スピードとか、パワーとか、そういった力の出力関係はあまり変わらないの」
「はぁ」
それでも良く分かっていないようで、昇は生返事を返す。その返事に昇の理解度を理解したのだろう。与凪は更に砕けた言い方に切り替えてきた。
「つまり、この二体の戦闘能力はほとんど変わらないの」
「えっと、つまり強さは同じような物、ってこと？」
「ええ、そういうことよ」
でもそうなると、さっき閃華が言ってた事は一体何になるんだろう。
「それでこれのどこがやっかいなの？　ロードキャッスルにいた機動ガーディアンと大して変わらないなら、数が多くてもなんとかなると思うんだけど」
そのセリフを聞いた与凪と閃華は同時に溜息を付く。
えっ、えっ！　僕何か変な事を言った。
ワケが分からないという風に二人を見回す昇。そんな昇に見かねて閃華はある問いを出してきた。
「では昇、昨日戦った機動ガーディアンはどうじゃった。ロードキ

ャッスルで戦ったのと同じ位の強さじゃったか？」
その問に昇は記憶を掘り返すと正直な感想を述べる。
「……ううん、なんていうか、ロードキャッスルで戦ったのとはまったく別な物のように思えた」
そうだ、ロードキャッスルで戦った時は目の前の敵を倒すだけで終わったけど、昨日のはそんな感じじゃなくて……そう、まるで自分の意思を持って動いてるような、そんな感じがした。
「じゃから、やっかいじゃと言ったんじゃ」
閃華が再びモニターに視線を戻したので、昇も釣られてモニターに視線を向ける。
「こやつらの戦闘能力は確かに以前相手にした機動ガーディアンと大差ない。じゃが、それは戦闘能力だけの話じゃ」
「というと？」
昇が聞くと今度は与凪が話しかけてきた。
「滝下君、戦うっていうのはただ武器を振り回したり、力づくで押し出したりすれば勝てるものじゃないでしょう」
「うん、確かにそうだと思うけど」
ただ敵に向かって行って武器を振りますだけなら、殺してくれと言っているようなものだ。そんななんの戦術も戦略も無い戦いなんて、ただの暴力に過ぎない。
その事を理解した昇は与凪に向かって頷いてみせ、説明の続きを促す。
「それが集団戦になればなるほど、求められる物があるは」
「それって一体？」
「つまり、それがこいつらが最も改善された点……戦闘思考よ」
「戦闘思考？」
と言われても良く分からないと思っていたのだろう。閃華は新たな資料を昇のモニターに写してやる。そこには精霊用語ではなく、日本語で書かれていた。
「つまり周りの状況を判断して、その場に最適な攻撃を繰り出すシ

ステム。それが戦闘思考じゃよ」
「つまりこの二体で最も違うのは、その戦闘思考なの」
「詳しい資料を出してやったじゃろ、それを良く見てみい」
そう言われて昇はモニターに視線を戻した。

戦闘思考システム

周りの状況から適切な情報を取得して、それに最も合理的な攻撃をする戦闘思考を有する事が出来る可能性がある。
これによって以前の個体単体だけでの攻撃だけでなく、その他の機体とあわせて攻撃をすることが可能になる。つまり、個体の攻撃だけでなく連携の攻撃が可能になったと思われる。
これは有史に残っている限り、まったく無かったシステムではないが、ここまでの完成度は以前までの記録には残っていない。
これからは推測になるが、この戦闘思考システムはエルクが進化させたものであり、その完成度は完璧とは言えないが、かなり高い物だと推測される。
以上が、これまでで推測される戦闘思考システムである。

モニターに書かれた戦闘思考システムについて読み終わった昇は少し考え込む。
えっと、つまり、ロードキャッスルで戦った機動ガーディアンは個別の攻撃だけだったけど、今度の機動ガーディアンは連携攻撃をしてくるってことなのかな。
「もしかしてこれって、例えば琴未や閃華が連携して攻撃するのと同じような事が出来るようなった……ってことなの」
その問に与凪は少しだけ考えると、少しだけ違う点だけを示した。
「そこの報告書にもあるでしょ。この戦闘思考システムは完璧とはいえないのよ。だからあそこまでの連携は出来ないけど、それなりに同時攻撃とか、こっちの隙を付いた攻撃をしてくる事はあるわね」

「まあ、機動ガーディアン自体、精霊や契約者を越える能力を持つ事が出来ないって言われてるんじゃがな」
「それってどういうこと？」
今度は与凪に変わって閃華が答えだした。
「つまりじゃ、精霊や契約者は個々の能力がかなり高く、その戦闘能力は普通の人間から見れば驚異的じゃろ。じゃが、機動ガーディアンは所詮機械、そこまでの判断能力や戦闘能力を所有する事は不可能なんじゃ」
「それじゃあ、なんでエルクは機動ガーディアンを進化させ続けているわけ？」
「それは簡単じゃ、つまり少数精鋭の争奪戦ではやくにはたたんが、組織戦での物量戦ではこれ以上無い力を発揮するんじゃよ。つまり、一兵卒としてはこれ以上無い兵器なんじゃ」
えっと、それってつまり、兵士の代わりって事なのかな？
確かに昇が思ったとおりである。エルクが作り出した機動ガーディアンは兵士として戦場で戦うには最強といって良い兵器であるが、やはり精霊や契約者を前にするとその質ははるかに劣る。
だがそれでも、エルクがアッシュタリアという組織に属している以上は、そのような兵器を作り出していても不思議は無い。
これでやっと機動ガーディアンを理解した昇だが、そうなると当然次の疑問が出てくるようだ。
「でも、なんで二人とも機動ガーディアンの情報を整理してるの？」
その問にやはり閃華と与凪は疲れたような顔になる。
えっと、とりあえずごめんなさい。
まあ、それでも説明していた方が良いと思ったのだろう。与凪はモニターを別な物に切り替えた。
それはエルクとその戦力である機動ガーディアンと昇達と風鏡の戦力数であった。
「見てのとおり、相手は精霊が一人、それにこっちは風鏡さんとやらも入れれば七人。こんな状態で機動ガーディアンを使わないとま

ともな戦いにすらならないでしょ。だからエルクが多数の機動ガーディアンを出してくることは必然なの」

確かに与凪の言うとおりである。機動ガーディアン抜きで言えば相手はエルク一人である。そんな状態でエルクがまともに昇達と戦うとは思えない。だからこそ、エルクが機動ガーディアンを使ってくるのは当たり前といっていいだろう。

「確かに、エルク一人で向かってくるとは思えないし、そうなると僕達と風鏡さん達、そしてエルクの三つ巴になってくるかもしれない」

その昇の言葉に閃華は溜息を付く。

「やはり風鏡殿と協力する気は無いんじゃな」

「うん、風鏡さんの気持ちが分らないわけじゃないけど、それでも復讐という目的で戦うのは間違ってると思うから。だから僕は僕の理由で戦いたい」

そうだ、そうしないとエルクの被害者が出るだけだし、たぶん…風鏡さんも救われない。

そう思う昇の瞳には確かに心強い意思が宿っている。そして閃華も与凪もそんな昇がどんな行動を取るかも予想で来ていた。

だがそれでも与凪は昇に問いただしてみる。

「滝下君、本当にその理由でエルク達と戦うつもりなの？」

「うん、風鏡さんが正しいとは思えないし、このまま風鏡さんが復讐を遂げても救われないと思うから。それにエルクもこれ以上は放っておく事は出来ない。出来る事なら、この戦いで倒しておきたい」

それが昇の戦う理由なのだろう。今回の事は無視しても全然構わないのだが、それが出来る昇ではない。目の前で何かしらの事が起こっていて、自分にやれることがあるなら真っ先に首を突っ込む。これが昇だからしょうがない。

そんな昇の意思をしっかりと確認した与凪は軽く息を吐くと次の作業に入った。

「分ったわ。それじゃあ、戦場がどんな状態になってもサポート出

来る様にしておくわね」
「うむ、では頼むとしようかのう」
勝手に意思疎通をする閃華と与凪、だが昇には何の事か分かっていなかった。
「えっと、戦場がどんな状態になってもって、一体どういう意味」
だがすぐに答えは帰ってこず、変わりに閃華は軽く笑うと昇の方へ真剣な眼差しを向ける。
「昇、今回の戦いは戦と同じじゃ。今までの戦いとはまったく違う物なんじゃよ。今までは少数戦力戦が多かったが、今回はこっちは少数、あちらは多数の戦と同じようなものじゃ。今までどおりの戦い方では勝てんのじゃよ」
そう言われても意味が分からないのだろう。昇は首をかしげると閃華は真剣な眼差しのまま、説明に入る。
「つまりじゃ、今回の戦いは昇が風鏡殿よりも早くエルクを倒す事が絶対条件じゃ。これをクリアするにはそれなりの戦略が必要という事じゃよ。なにしろ、こっちの戦力は限られておるんじゃからな」
「つまりただ戦えばいいと言うワケじゃないってこと？」
「そういうことじゃ、戦況を把握して風鏡殿よりも早くこちらの戦力をエルクに届ける事が出来れば有利に事が進められるんじゃ」
だが相手には多数の機動ガーディアンがある。だからこそ、戦況を把握して戦略を使う必要があるのだろう。
だが今回の目的はあくまでも風鏡よりも早くエルクを倒す事。そんな大掛かりな戦略は必要が無いが戦況を把握する必要がある。そのために与凪がサポートに周る必要がある。
確かに僕達は多くの機動ガーディアンを突破して逸早くエルクに辿り着かないといけない。いや、それだけじゃない。エルクとの戦闘にも余力を残しておかないと倒す事なんて不可能だ。
やっと状況を理化した昇は与凪に顔を向ける。
「えっと、それじゃあ与凪さん、戦場のサポートをお願いできるかな？」

「サポートは私の得意分野、だから任せておいて」
そう言ってウインクしてくる与凪に昇は軽く笑うと、そのまま閃華に顔を向ける。
「与凪さんのサポートもそうだけど、閃華にもいろいろと助けてもらわないと。僕は戦なんてやったことないから」
その言葉に閃華は笑いながら返す。
「くっくっくっ、それは任せておけ、戦のやり方をしっかりと教えてやるぞ」
「なんかそういわれると怖いな」
率直な感想を言う昇に部屋には笑い声が溢れた。

昨日のことがあったからか、全員が起き出したのはもう昼近い時間になってからだ。
シエラと琴未など自ら家事をする必要が無いものだから、随分とゆっくりする事にしたようだ。まあ、シエラと琴未は普段家事で忙しいから文句が出なくて当然だが、それに便乗するようにミリアもまったりとしていた。
そんな有様を見た昇は何かを言おうとはしない。逆に優しい瞳で皆を見回すだけだ。
今夜にはエルクとの決闘がまっている。それは皆分っている。だから……今のうちだけはゆっくりと休息を取ってもらわないと。
そんな感じで今日はまったりと過ごしていく面々だった。

そして夕刻、少し早めの夕食が始まると急にシエラが何かを思い出したようで、昇の隣へと席を移動させる。
「どうしたの？」
だがシエラは昇の問に答えることなく料理の一つを箸で掴むと、そのまま昇の口へ持っていく。

「はい、あ～ん」
「いや、いきなり言われても」
戸惑う昇を前にシエラは料理を差し出してくるが、突然その料理が消えてしまった。それと同時に振り向くシエラ。そこには片手に持った箸を腰に当てながら口を動かしている琴未の姿があった。
「琴未、行儀が悪い」
「え～、何の事かしら」
どうやらとぼける気らしい。
だが昇の目も琴未の行動はしっかいと見えていた。
それはほんの一瞬、シエラが料理を昇の口に運ぼうとしてきたが、横からハイスピードで箸が伸びてくると料理をかっさらい、そのまま琴未の口へと放り込んでしまった。
つまり、一瞬でも目を逸らしていれば琴未が何をやったのかは分らないことを利用しての作戦みたいだ。
だが琴未の行動をはっきりと見ていたのは昇だけではなく、シエラもしっかりと捉えていた。
もちろん、そんな事をされて黙っているシエラではない。立ち上がると琴未との間に視線の火花を散らす。
「えっと、とりあえず二人ともおち、んぐっ」
二人の間に割り込もうと口を開いた昇だが、突如昇の口に料理が放り込まれる。
まさかの事態に三人の視線は犯人であるミリアへと視線が集中する。
「えへへっ、どう、昇、美味しい？」
えっと、とりあえず何でミリアさんがここで出てくるんでしょうか？
そんな事を思いながら口を動かし、料理を味わう昇。もう、こうなってはその場の状況に流された方が楽だと経験から理解しているのか、昇はそれ以上は行動を起こさないようにしようとしたが、シエラと琴未は違う。

「ミリア、何をやってるの」
「それは私がやるはずだったのよ！　それを何横取りしてんのよ！」
いきり立つシエラと琴未、だがミリアはそれでもとぼけてみせる。
「だってシエラと琴未がやりそうに無かったから、私が代わりにやっただけだよ」
その答えにシエラと琴未の怒りゲージが限界値を破壊して突破した。
「ミリア、覚悟して」
「こうなったら二人まとめて片付けて上げるわよ」
「へぇ～んだ、二人とも隙があるから悪いんだよ」
そのまま口喧嘩に突入する三人。一方の昇はというと、もう慣れているのか、こっそりと被害の少ない閃華と与凪の元へ移動していた。
「それにしても相変わらず賑やかね」
シエラ達を見て率直な感想を言って来る与凪。
まあ、確かにそうなんですけどね。やっぱり見てるだけで止める気は無いんですよね。
もちろん、閃華も与凪もそのまま食事を続けており、シエラ達の行動を面白そうに見ているだけだ。
そんな与凪に昇も溜息を付いてから答える。
「相変わらず他人事ですね」
「だって他人事だもん」
それもいつもと同じ答えだった。
それでも昇はシエラ達に目を向ける。
「今日はこれからエルクとの決闘がまっているのにですか？」
それでも与凪は楽しそうに答えるだけだった。
「これでいいんじゃないの、考え込んでいる方が滝下君達らしくないわよ」
いや、まあ、そうかもしれませんけど。
そう思うと昇はシエラ達に目線を向ける。どうやらかなりヒート

アップしてきているようだ。
そんな状態に溜息を付きつつも、少しだけ安心感を覚えるのも確かだ。
「それに今更じたばたしてもしょうがないでしょ」
「そうじゃぞ、なにしろ大将は昇じゃからのう。ここはしっかりと構えてもらわんとな」
その閃華の言葉が昇の思考を一旦中断させる。
……えっと、閃華さん、今なんて言いました？
「えっと、閃華さん？」
急にぎこちない口調に変わる昇。そんな昇に閃華はしれっとして答える。
「僕が大将ってどういう意味でしょう」
「そのままの意味じゃ。今回の戦いは昇が負けた時点でこちら側の負けじゃ。つまりエルクを倒した時点でこちらの勝ちと言うことじゃがな」
「つまりどっちが先に敵の大将首を取れるかが勝敗を分けるのよ」
えっと、与凪さん、それは分りますが、そんな楽しそうに言われても困るんですが。
思いっきり現状を楽しんでるかのように言って来る与凪に昇は溜息を付くと、今度は急に首を捕まれるとそのまま引きずり出される。
えっ、なに、なんなの！
そして昇が解放された場所はシエラ達の中心地だった。
……えっと、僕はいったいどうすればいいのでしょう？
だがその問の答えるものは無く。再びシエラ達のいさかいに巻き込まれていく昇だった。

そして宴も終焉を迎えようとしていた頃。
彩香と森尾は昨日飲みすぎたのか、今日は早めに切り上げて寝てしまった。まあ、与凪がそう仕組んだようだが、昇達にとっては好

都合だった。これで誰の視線も気にすることなく。準備に専念できる。

だが準備が整う前に与凪が口を開いた。

「どうやら始まったみたい。指定された場所に大規模な精界が張られたわ」

モニター越しにそう報告してくる与凪。それは風鏡達がエルクとの戦闘を開始した事を意味していた。

こうなっては昇達もゆっくりは出来ない。とりあえず昇は皆を集めると作戦内容を確認する。

「敵の布陣は分らないけど、僕達は風鏡さん達よりも早く、敵の布陣を突破してエルクを倒さないといけない。もちろん、エルクに辿り着いたとしても機動ガーディアンがそのまま大人しくしているとは思えない」

まあ、それはそうだろう。たとえ布陣を突破されただけで行動を止める機動ガーディアンじゃない。

「だからエルクに辿り着いたら二手に分かれる。一方はエルクを、そしてもう一方は迫ってくる機動ガーディアンを足止めして欲しい。そうすればエルク組みが戦いに専念できるから」

「それで昇じゃが、当然エルク組へ参加してもらうぞ」

「分ってる。僕も元々そのつもりだったし、僕の手でエルクと決着を付けたいし」

「そうか……」

それだけ確認すると閃華はもう何も言わなかった。その代わりに与凪が口を開く。

「それじゃあ私はいつものようにサポートに回るから、必要な情報はリアルタイムで送れるわよ」

「うん、お願いします。それで皆から質問はある」

だが誰も口を開くことなく、ただ昇を見詰めるだけだ。それを確認した昇は頷いてみせると口を開く。

「じゃあ、行こう」

一斉に立ち上がるシエラ達。そして部屋の出口からではなく窓から外に出ようとする。これからの一戦前に誰か余計な人に見られるのもまずいし、そっちの方が早いからだろう。
そして窓から出て行く昇達に与凪は静かに言葉をかける。
「気をつけてね」

旅館から出た昇達は今居る位置から見えるほど大規模な精界を目にしながら、そこに向かって走り始める。
それにしても大きいな、あの中ではもう風鏡さん達が戦ってるんだ。
そして精界に向かって走っている最中だった。閃華が微かに笑う。そのことを見逃さなかった琴未は不思議そうな顔をで閃華に尋ねる。
「どうしたの？」
琴未の問い掛けに閃華は軽く頭を横に振った。
「いや、なんでもないんじゃよ。ただ、こういう雰囲気が懐かしいだけじゃ。そう、まるで長篠の戦い向かうときのような、そんな緊迫感が懐かしくてのう。それでただ笑っただけじゃ」
「ふ～ん」
戦という物を知らない琴未には良く分からないのだろう。戦前の緊迫感という物が、だがそれは閃華にとって懐かしい感覚だった。
だが今回の戦いは長篠とはまったく違う。時代はもちろん、仲間も全て違う。その中で琴未は琴未なりに閃華を心配してたのだろう。その琴未が出した答えを閃華に告げる。
「閃華！」
「んっ、どうしたんじゃ琴未？」
急に真剣な眼差しで言葉を掛けてきた琴未を閃華は不思議そうな顔で見るが、琴未にとっては真剣そのものだ。
「私は閃華と小松さんの絆とか、昔の出来事とか、閃華が悩んでいた事とか分らないけど。閃華は私と約束してくれたのは覚えてるで

しょ」
「契約した時の事か？」
「そうよ、それを果たすまで絶対に私の傍から離れちゃダメだからね。閃華にはこれからも手伝ってもらわないといけないんだから」
それだけ言うと急に恥ずかしくなったのだろう、琴未は閃華とは反対方向へ顔を向ける。だがそんな琴未を閃華は優しい顔で見る。
「そうじゃな、ありがとう」
琴未に聞こえるかどうかぐらいの声で呟く閃華。それが琴未に聞こえたかは分らないが、それでも閃華は満足だった。
それは琴未が琴未なりに自分を心配してくれてた事。それだけで閃華は少しだけ救われたような気がした。
（まったく、どうやら琴未にまでも気を使わせてしまったようじゃな。じゃが、なんじゃろうな。不思議と悪い気はせんもんじゃな）
たぶん、それが今の閃華と琴未が築いた絆なのだろう。互いに隠すことなく真正面から向かい合える相手。それが閃華と琴未の絆なのかもしれない。

そんな事をしているうちに昇達は精界の前に到着した。
うわ～、こんな間近で見るとこんなに大きいんだ。
改めて精界の大きさに驚く昇。昨日もシエラはこれぐらいの精界を張っていたのだが、中と外から見るのでは、その大きさを実感するのも違うようだ。
そして突如、昇達の前にモニターが出現すると与凪が映し出された。
「はいはい、そんな訳でその精界は二層構造になってるみたい」
「それってどういう」
「エルクと風鏡殿、それぞれが精界を張っておるというわけじゃ」
昇の言葉を遮り、閃華が先に答えを言ってしまった。だがそれで昇も状況が理解できたようだ。

「まあ、そういうこと。だから中の状況は実際に入ってみないと分らないわ。解析準備は出来てるからいつでも突入していいわよ」
「うん、分ったよ」
昇が相づちを打つと皆それぞれに顔を向けるのと同時に、シエラ達も精神を集中させて一気に力を解放する。
「ウイングクレイモア」
「アースシールドハルバード」
「雷閃刀」
「龍水方天戟」
それぞれ精霊武具を身にまとい、武器を手に取る。そして昇も力を集中させると、放出された力を固めて実体化させる。そうして黒いコートを身にまとい、両手に拳銃を持った姿になる。
「シエラ」
シエラに顔を向けて頷いて見せる昇、そしてシエラも頷き返すとウイングクレイモアの翼が羽ばたくのと同時にシエラ自身を上昇させる。
そしてある高度まで達するとシエラはクレイモアを上に振り上げると、今度は重力に従い一気に落下してくるのと同時にクレイモアを振り下げて精界を切り裂いていく。
そしてシエラが地面に舞い降りた頃には、大きく切り裂かれた精界が口を開いている。中の様子は真っ暗で何も見えないが、戦闘音だけは聞こえてきた。
確かに風鏡達が戦っているのは確かなようだ。
昇は一度だけ皆を見回すと切り裂かれた精界に視線を移す。
「行こう」
そう言って昇達は精界内に突入して行く。

第七十話　戦場へ（後書き）

そんな訳で、気付けばエレメも七十話になりました。早いものですね。半年ほどとはいえ、これほどの量を書くとは思っていませんでしたよ。というか、今までがニートだったからこれくらい書けたのかな。

けど、そろそろ仕事につかないとな。まあ、そんな訳で就職活動の合間に書いている状態です。出来る事なら、これを本業にしたいのですが、世の中はそんなに甘くは無く、未だに金が無い生活を送っております。というか、いい加減にプリンターを買い換えて、投稿やら、同人とかやってみたいんですけどね。これがなかなか上手く行かないようで、未だにニート。そろそろ何とかしたいですね。

さてさて、近況報告はこのあたりにしてそろそろ本編に触れますか。と言っても今回は触れる点があまり無いんですよね。まあ、今回の話は次回のバトルに繋げる話なのでそんなにピックアップする場面がありません。そんな訳で次回からは大いにバトリますよ。

ではではそういうことで、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、いい加減に環境を変えないと次に進めない葵夢幻でした。

第七十一話　敵陣突破

よほど大規模な精界の中で中規模な戦闘が行われているのだろう。昇達が精界に突入した時には少し遠くの方で戦闘音が聞こえてきた。

やっぱりもう始まってたんだ。

たぶん風鏡達が戦闘しているのだろう、戦闘区域の一角から爆発音や衝撃音が聞こえてきた。

遠巻きに風鏡達が戦闘している事を確認した昇達の前に突如モニターが現れて与凪が映し出された。

「はいはい、皆さんそろってますか？」

「ええ、それで与凪さん、現状はどうなってるの？」

昇が聞き返すともう一つ別のモニターが現れる。そこにはVを逆にした形の右側に凸型のマークが示されていた。

「これは？」

「これが現状。どうやら相手は五〇〇近くの機動ガーディアンで鶴羽の陣で布陣してるわ。そして、その風鏡さんとやらは敵の左翼と交戦中。そしてエルクは中央の布陣よりも更に奥に居るわ。分った？」

……えっと。

どうやら良く分かってないようだ。そんな昇を察したのだろう。閃華が布陣が映されているモニターで説明を開始した。

「つまりじゃ、鶴羽の陣とは見てのとおり鶴が羽を大きく広げたような布陣。まあ、今風で言うとV字を逆にした布陣じゃ。この布陣は下手に中央に突っ込んで行けば一気に包囲殲滅させる事が出来る布陣じゃ。そこまでは分るか？」

頷く昇、どうやら鶴羽の陣をようやく理解したらしい。

「そしてじゃ、風鏡殿は相手の左翼、こちらから見ると右側じゃな、その先頭集団と戦闘中と言う訳じゃ」

「でもでも、なんで風鏡はそんな端から戦ってるの？　真っ直ぐ進

めばすぐにエルクのところにいけるよ」
　そのミリアの質問に呆れた顔をする閃華と与凪、どうやらミリアには鶴羽の陣が良く分かっていなかったようだ。
　そんな呆れている二人に代わり、シエラがキーボードを出現させると中央から攻め込んだらどうなるかを説明し始めた。
「確かに現在、中央はがら空き、だからといってそこに突っ込んで行くと」
　シエラはキーボードを操り、自分達を締める凸型の印しを中央から進める。そして凸型が一番奥まで進むと、両翼が閉じて始めて、最後には完全に包囲されてしまった。
「こうなる」
「じゃから言ったじゃろ、これは中央の敵を包囲殲滅する布陣じゃと」
「あははっ、そうだっけ」
　笑って誤魔化すミリア、どうやらやっとミリアも理解できたようだ。そして全員が現状を理解すると、当然これからの行動を求められる。
「それで滝下君、どうするの？」
　確かに僕達が下手に中央を進むと包囲されるかもしれない。それが分っているから風鏡さん達も端から攻め始めたんだ。なら僕達も反対から攻めれば両端から削っていける。……いや、それじゃダメだ。僕達は風鏡さん達よりも早くエルクに到達しないといけないんだ。それにはどうすれば……そうだ！
「与凪さん、中央にどれぐらいの機動ガーディアンがいるか分かる？」
「ちょっと待ってね」
　そう言って分析を始める与凪、だが相手の数が少ないためかすぐに答えが帰ってきた。
「さすがに中央は厚いみたいね。一〇〇の機動ガーディアンが編隊を組んでるわ」

「つまり中央に一〇〇、両翼に二〇〇ずつの布陣じゃろうな」
一〇〇か……でも、それを全部倒す必要は無いだからいけるかも。
方針を決めた昇は顔を皆に向けると、とんでもない事を言い出す。
「中央を一気に突破しよう」
さすがにこの発言には驚く一同。中央突破の危険性は先程説明したばかりで、昇も充分に分かっているはずだ。
「ちょっと昇、さっき中央を行くのは危険だってシエラが説明したじゃない」
琴未の発言に頷く一同、それでも昇には策があるようで笑みを浮かべる。
「大丈夫、確かに危険な賭けだけど、スピードと突破力があれば上手く行く」
その言葉に何かしらの策がある事を察した閃華と与凪は、その策を聞いてくる。
「それで、どうするつもりなの」
与凪が聞くと昇は布陣が映されているモニターのある部分を指差す。そこはエルクがいる前に布かれている中央の部分だ。
「ここに攻撃を集中させて一気に道を作って突破する。たぶん全員で一斉に攻撃をかければ道は出来るはずだから、そしたらそこを一気に突破して二組に分かれる。一組はエルクを、もう一組は後続の機動ガーディアンをそれぞれ対処する。これで行こうと思う」
「確かに危険な賭けじゃな」
もし一撃で突破できなければ包囲されることは確実だ。だが、突破できれば相手にするのは中央の機動ガーディアンだけですむ。つまり敵の右翼が幽兵、つまり戦闘に参加できない戦力にすることが出来る。
もちろん、右翼が昇達を包囲するために動き出すだろうけど、二〇〇もの集団だ。包囲するにしても時間が掛かりすぎる。そのうえ左翼は風鏡達が相手にしているから布陣を崩す事はできない。もしそんな事をすれば風鏡達もエルクの元へ着き易くしてしまう。

後は敵の右翼が昇達を包囲する前にエルクを倒してしまえばいい。
「けど、成功すれば一気に優位に持っていける」
「それに敵の左翼は風鏡さん達を相手にしているから崩せないはず。だから右翼が中央を包囲する前に突破できれば」
「エルクとの一騎打ちに持っていけるというわけじゃな」
頷く昇、そしてモニターの向こうで与凪は呆れたようにため息を付く。
「相変わらず無茶な事をしようとするわね」
「でも悪い案じゃないわよ。それに私達には昇が居るしね」
そう言って昇にウインクする琴未。そしてせめてもの嫌がらせにシエラが二人の間にウイングクレイモアを差し入れる。
まあ、そんな事は置いておいて、確かにいざとなったら昇のエレメンタルアップで一気に突破できるだろう。それに昨日の戦闘で相手の機動ガーディアンが驚異的なのも分っている。だからどうしてもエレメンタルアップを使わざる得ないだろう。
だが昇も戦闘に参加するのだからエレメンタルアップは最小限に抑えたい。使わないのが一番だろうだが、この状況では無理だろう。
それでも、エレメンタルアップを入れれば、そんなに無茶な賭けではなかった。
「まあ、確かにいざとなったら昇のエレメンタルアップが有るしのう。そんなに分の悪い賭けではないじゃろ」
「そうね、確かに滝下君のエレメンタルアップは驚異的だもんね。それに滝下君も力をつけてきてるし、行けるかもしれないわね」
「じゃあ皆、それでいい？」
昇が聞くと全員が頷いてみせる。そして昇もそんな皆に笑顔を見せると、すぐに真剣な眼差しになり振り向く。
「行くよ」
その言葉を合図に昇達は敵の中央をエルクに向かって一直線に駆け出した。

鶴羽の陣、その中央を一直線に突き進む昇達。当然、敵の右翼は昇達を包囲すべく動き出すが陣形を崩すわけには行かない。そのため、どうしても行動が遅くなる。

だが昇達は少数、その機動力は敵の右翼よりもはるかに勝っている。そこがこの策で一番重要な点の一つだ。

やっぱり敵の動きは遅い。これならこっちが先に中央につける。

敵の動きを確認しながら、昇は自分達の状況を冷静に分析する。確かにこのまま行けば先行できる。後はどれだけ早く中央を突破できるかだ。

そして敵の最右翼がやっと昇達の後ろに回りこんだのと同時に昇達も中央戦力とぶつかる事になった。

「琴未と閃華が先行して、その後にシエラと僕が一気に道を作る。ミリアは突破中に迫ってきた敵を一掃して」

一気に指示を出す昇。どうやら昇の指示能力もかなり上がってきたようだ。

そして昇の指示通りに琴未と閃華が一気に前に出る。

「もう大丈夫なんでしょうね」

「くっくっくっ、誰に向かって言っておるんじゃ。それに先程も約束したばかりではないか。琴未を昇の正妻にするまで手伝うと。じゃから、もう心配はいらん」

琴未に笑みを向ける閃華、琴未もそれを笑みで返すと二人は敵陣に向かってそれぞれの武器を突き出す。

「一気に行くわよ！」

「任せておけい」

琴未の雷閃刀は急激に帯びている電撃が一気に強まり、閃華の龍水方天戟に巻き付いている水龍が離れると、今までの倍以上に巨大化する。

「龍神激」

そして敵陣に向かって水龍が一気に突入する。

「雷撃閃」
そこに雷閃刀から幾つもの雷が水龍に直撃する。だが雷は水龍に吸収されて、水龍はその巨体に雷までもまとい敵陣の先頭へ、その巨体を当てるのと同時にまとっていた雷も連鎖的に爆発を引き起こす。
やっぱり二人の連携は凄いな。
琴未と閃華の攻撃で敵陣の先頭はほとんど全滅、かなりの数を倒したようだ。
そんな二人の攻撃に感心しながらも、昇は次に取り掛かる。
「シエラ！」
「分ってる」
ウイングクレイモアの翼が羽ばたき、空へ舞い上がるシエラ。昇も二丁拳銃を目の前の敵に向かって銃口を向ける。
シエラは先程、琴未達が撃破した敵陣の上にまで進むとウイングクレイモアの翼を大きく広げる。
「フルフェザーショット」
翼から放たれる無数の羽。それは一気に敵へと突き刺さり爆発する。そこへすかさず昇は銃口の先に大きな光の球を作り出す。
「フォースブレイカー」
昇がトリガーを引くのと光球からレーザーが発射される。その太さは昇の体よりも大きく、そのレーザーが一気に敵陣を切り裂くいていく。
「敵陣中央に居た機体は全滅、滝下君、道が出来たわよ」
モニター越しに与凪がそう報告してきたので昇は頷くと皆に向かって叫ぶ。
「一気に駆け抜けるよ！」
その言葉を合図に一気に駆け出す昇達。機動ガーディアンの残骸が転がる中を一気に突き進んでいく。
「滝下君、早く、もう敵は穴が開いた中央に向かって進軍を開始してるわ。このままだと間に合わない」

なにしろ敵陣の中央に真っ直ぐと全滅させられたのだ。敵もこのままじっとしているわけが無い。なにしろ敵の機動ガーディアンは戦闘思考システムを改良した新型。当然、開いた陣形を埋めに密集を始める。

そんな事は最初から昇も分かっている。だがそれでも昇達は駆け続ける。

「とにかくギリギリまで駆け続けて、それからミリア、僕が合図を出したら一気にやっちゃって」

「うん、わかったよ」

駆け続ける昇達、それを包囲しようとする機動ガーディアン達。双方、その距離を縮めながら昇達は駆け続ける。

だが機動ガーディアン達の方が一歩早く、もうすぐで突破できそうな時に機動ガーディアン達が昇達の前に立ちはだかり、そのまま包囲しようと動き出す。

「ミリア！」

ミリアに向かって叫ぶ昇。その言葉にミリアは頷くとアースシールドハルバードを地面に突き立てる。

「アースドーム」

砂浜の砂が一斉に吹き上がると昇達を包み込み、砂は更に密集して岩盤へとその姿を変える。

「ブレイク！」

更にアースシールドハルバードに力を注ぎこんだ途端、昇達を包んでいた岩盤は四方八方へと一気に破裂する。

辺りに飛び散った岩盤は昇達を包囲しようとしていた機動ガーディアン達にぶつかり、時には突き刺さり、昇達の周辺に居た機動ガーディアン達を全滅させる。

よし！　これでいけるはずだ。

確信を得た昇は高らかに叫ぶ。

「皆、一気に駆け抜けて！」

再び駆け出す昇達。当然、機動ガーディアン達も昇達を追うが、

先程の攻撃で昇達の近くに居た機動ガーディアン達が全滅したため、他の機動ガーディアン達とはかなり距離がある。
それでも迫ってくる機動ガーディアン達を尻目に駆け続けた時だ。
「敵陣突破、やったよ滝下君！」
喜びの声と共に与凪が報告してくる。
よし、ならここで。
残るはエルクだけだが、後ろにいる機動ガーディアン達も止めなければいけない。
「ミリア、琴未、閃華、皆はここで機動ガーディアン達を足止めして。僕とシエラがエルクを倒すから」
「うん、わかったよ」
「気をつけてね」
「油断するでないぞ、相手もかなりの使い手みたいじゃからな」
それぞれ掛けてくれた言葉に頷く昇。それからかなり後方に居るエルクを見た後、シエラに視線を向ける。
「シエラ、行くよ」
「分った」
昇はシエラの手を取るとウイングクレイモアが羽ばたき、二人を中に浮かせて翔け出した。
結局僕は閃華や風鏡さんの答えを出すことは出来なかったけど。それでも！　もうこんな事が起きないようにエルクを倒さないといけないんだ。僕は、僕にはそれだけしか出来ないから。
それが昇の出した答えだ。それが正しいのか間違っているかは誰にも分かりはしない。人はそれぞれ自分の壁にぶつかりながら生きているのだから。
昇、閃華、風鏡、それぞれ同じ問題を抱えているように見えるがそれは違う。そもそも同じ悩みや、問題などは存在しない。人はそれぞれ自分の心があり、自分の問題を抱えているのだから。たとえ似てようとそれはまったくの別物である。
だからこそ、昇は自分が出した答えを信じて突き進む。それがた

とえ……どんな道であっても。

昇達を見送ったミリア達は迫ってくる機動ガーディアンに備える。

「与凪、敵陣はどうなっておるんじゃ」

「はいはい、ちょっと待って下さいね」

すぐに解析に移る与凪、だが敵の数が少ないためか、すぐに答えは返って来た。

「敵中央、残り六四体。左翼は風鏡さん達に備えるためだろうけど、陣形は崩してないわ。けど右翼は二つに分かれた」

新たに現れたモニター、そこには敵陣と昇達を指し示しており、確かに敵の右翼は二つに分かれていた。

「各隊一〇〇ずつに分かれて一方は中央、もう一方は迂回して皆さんを囲むつもりみたい」

「中央の戦力を強化しつつ、横からも仕掛けようというわけじゃな」

「それで閃華どうするの？」

昇が居ない以上は、ここは閃華が指示を出すのが一番だろう。ミリアも琴未もそう思い、閃華に意見を求めるが、閃華は笑みを返してきた。

「くっくっくっ、良い機会じゃ。二人に戦のやり方を教えてやろうとしようかのう」

その言葉に困惑するミリアと琴未を無視して閃華は与凪の方へ視線を移す。

「敵の右翼が私達の横を突くまでにどれくらいかかりそうじゃ」

「最初は包囲しようと中央に寄ってたから、このスピードだと……一時間半ぐらい掛かるんじゃないかしら」

その言葉に頷く閃華は再び二人の方へと向き直る。

「集団での移動は時間が掛かるものじゃ。そして一時間半もあれば昇達も決着を付けられるじゃろう。つまりは」

「横からの戦力は気にしなくていいって事？」

「うむ、そのとおりじゃ」
琴未の答えに満足そうに返事を返す閃華。それから迫ってくる機動ガーディアン達に向く。
「つまり私達の役目は一つじゃ。一兵たりとも昇達の元へ行かせてはならん。全ての機動ガーディアンをここで食い止める事じゃ」
「思いっきり暴れればいいんだね」
「昇達の元へは行かせないわよ」
自分達の役目を理解したミリアと琴未はそれぞれ意気込む。それから閃華は何かを思い出したかのように与凪を呼び出す。
「はいはい、なんですか？」
「昇達に伝えておいてくれ、私達へのエレメンタルアップはいらんとな。これぐらいならなんとかなるじゃろ。それにエレメンタルアップをシエラ一人に絞ればかなり有利に出来るはずじゃ」
「はいはい、わかりました。では、伝えておきますね」
与凪との通信を切った閃華は二人よりも前に出る。
「私が先頭で当たるから、二人とも思いっきりやってよいぞ。それに、戦のやり方もみせてやるぞ」
それから閃華は少しだけ笑みを浮かべると龍水方天戟に力を注ぎこむ。
「龍水舞闘陣」
龍水方天戟から離れた水龍はその体を大きくすると、閃華を取り巻くように宙を漂う。
「よいか二人とも！　相手は多数じゃ、どこから攻撃が来るか分らん。じゃから常に周りは確認してるんじゃぞ。それから大技を使うときは、その後に出来る隙も考慮するんじゃぞ、特にミリアはな」
確かにミリアの性格なら後先考えずに大技を使いそうだが、それでも指摘されて少しだけ膨れる。そして琴未はというと、先程から軽い笑みを浮かべている閃華の横に並ぶ。
「なんだか嬉しそうだね」
「いや、懐かしいだけじゃ」

そう、昔……小松との戦場もこんな臨場感じゃったな。じゃが、今は琴未が隣におる。

それは昔の絆と今の絆。同じようでもまったく違う物。だけど今の閃華にはそれがまったく同じ物に感じてならない。

そう、閃華が紡いだ絆は人は違えど同じ物なのかもしれない。そしてそれは閃華だからこそ感じる事が出来る絆だ。

隣にいる琴未に視線を移す閃華。その姿形は小松とまったく違ったもだが、しっかりと繋がっている絆を感じる。

昇が言ったとおりじゃな。確かに今の私達もしっかりとした絆で結ばれておるんじゃ。じゃからこそ、この絆も大切にして行かんとな。

新たに出来た絆を感じながら閃華は迫ってくる機動ガーディアン達に視線を移した。

「では行くぞ、二人とも油断するでないぞ」

「大丈夫よ」

「分ってるよ」

返って来た言葉に閃華は笑みで答えると、敵の先頭集団に向かって駆け出した。

今は昔に帰らん、じゃからこそ、同じ失敗をしないよう、今は全力で戦うだけじゃ。

迫ってきた閃華に先頭集団から三体の機動ガーディアンが同時に槍を突き出す。だがその槍は閃華を取り巻いている水龍によって阻まれ、抜けなくなってしまった。

それでも槍を引き抜こうとする機動ガーディアン。閃華は水龍を飛び越えると動きを封じられている機動ガーディアンを一気に撃破する。

だが閃華の背後から別の機動ガーディアンが剣を振り下ろすが、それは閃華に届く前に水龍によってその機動ガーディアンは噛み砕かれてしまった。

噛み砕いた機動ガーディアンの残骸を吐き捨てた水龍は再び閃華

を取り巻き、閃華と共に敵陣へと突っ込んでいった。

「私達も負けてられないわね、行くわよミリア！」
「は～い！」
閃華に続けとばかりにミリアと琴未も敵陣に向かって駆ける。
琴未は駆け続けながらも雷閃刀に力を溜めると、その力を一気に上空に向かって解き放つ。
上空へ放たれた力はある程度の高度で止まり魔法陣を展開させる。
「さあ、久しぶりにやるわよ」
琴未だけが駆けるのを止めて、その場に踏み止まると迫り来る機動ガーディアン達に狙いを定める。
「落雷陣！」
上空の魔法陣から放たれた幾つもの雷が琴未に迫ってきた機動ガーディアン達に直撃して破壊する。
「よし！」
一気に目の前の機動ガーディアン達を撃退した事に喜ぶ琴未だが、相手は新型の機動ガーディアン。たとえ他の機動ガーディアンがやられようとも最善の攻撃方法で攻撃を仕掛けてくる。
突如、琴未の前に飛び出してくる機動ガーディアン。どうやら先程の落雷陣を己を武器を投げつける事で防いだようだ。そのため、素手で琴未に殴りかかってきた。
「私をなめないでよ」

―新螺幻刀流　改　飛翔乱舞―

雷閃刀に雷をまとわせながら一気に機動ガーディアン達に飛び込んでいく琴未。だがその動きは初動からかなりのスピードがついており、機動ガーディアン達が琴未に殴りかかる前に一閃を入れる。
だがそれで終わりではない。琴未はすぐに反転、そして一閃と一

瞬のうちに機動ガーディアン達を切り刻む。
そのため、機動ガーディアン達が地面に着いた頃には完全に切り刻まれ、溜まった雷により爆発した。
これで最初の敵は撃破出来た。琴未は次に向かってきた機動ガーディアン達にも雷を落としていく。

一方、ミリアはというとアースシールドハルバードを地面に突き立てると一気に力を注ぎこむ。
「連続アースウォール、いっけ～！」
ミリアの前方にある砂場が一斉に吹き上がり、幾つもの壁を作り凝固して完全にミリアに迫っていた機動ガーディアン達を阻んでしまった。
だがその程度で進軍を止める機動ガーディアン達ではない。壁の高さがあまり無い事を察した機動ガーディアン達は一斉に壁の上を飛び越えようとするが、それを狙い済ましたようにミリアも一気に仕掛ける。
「ブレイク！」
一斉に砕け散る壁。その破片が上空にいる機動ガーディアン達に激突、または突き刺さり次々と地面へ落ちていく。
さすがに上空にいては新型の機動ガーディアンでもどうする事も出来ないようだ。
だが後続の部隊は壁を飛び越えようとする寸前だったので、その被害は最小限ですんだみたいだ。そのため、障害物が無くなったことをいい事に一気にミリアに向かって突き進む。
だが機動ガーディアン達は気付いていないようだ。ミリアのアースシールドハルバードが未だに地面に突き刺さっている事を。
笑みを浮かべるミリアは一気に力を注ぎこむ。
「一気にいっちゃうよ～。アースブレイカー！」
アースシールドハルバードから幾つもの赤い光の線が地面を走る。

それが後続部隊の最後方に達すると地震が起こり、赤く光る線が地面を二つに切り裂いていく。
一気に切り裂かれた地面は、その破片を辺りに吹き飛ばすのと同時に衝撃波すらも巻き起こす。
地震で動きが封じられた上に地割れと衝撃波が襲い掛かって来たものだから、機動ガーディアンの何体かは地割れに巻き込まれて落ちて行き、残った機体も衝撃波と地面の破片が突き刺さり撃破されていく。
「見たか！」
迫ってきた機動ガーディアンを全滅させたミリアは、嬉しそうにアースシールドハルバードを地面から引き抜き満面の笑みを見せる。

「龍水閃」
水龍から放たれた水は高圧縮されており、そのうえ砂も巻き込んでいるため、それだけで機動ガーディアンを貫けるほど威力を持っていた。
手近に居た最後の一体を撃破した閃華は辺りを見渡す。ミリアと琴未は未だに戦闘を続けているようだが、閃華の付近に居た機動ガーディアン達は全滅したようだ。
よし、なんとか行けそうじゃな。
そして敵が来ない事を確認した閃華は与凪を呼び出した。
「はいはい、どうしました」
「中央の戦力は後どれくらいじゃ？」
「ちょっと待って下さいね」
すぐに分析に掛かる与凪。だがそれほど時間が掛からずに終わった。
「中央戦力、残り三二」
「増援が来るまで後どれぐらいじゃ」
「元々中央に向かってましたからね、そんなに時間は掛からないみ

たいですよ。後、一〇分後には合流しちゃいます」
　一〇分か、出来る事なら合流する前に中央は全滅させておきたい所じゃな。
「与凪、琴未とミリアに通信をつなげてくれ」
「はいはい」
　そして新たに現れるモニター、そこには戦闘中の琴未とミリアが映し出されている。だが、そんな二人に構わず閃華は指示を出す。
「二人とも一時撤退じゃ。合流するぞ」
「ちょ、いきなり言わないでよ」
「こいつらどうするの～」
「こっちが合流すれば敵も合流を計ってくるはずじゃ、そして集まった敵を一気に全滅させるんじゃ。このままじゃと敵右翼と合流して不利になるばかりじゃからな、その前に中央を全滅させる」
「分ったわよ！」
「付いて来るな～」
　閃華の指示通りに後退する琴未とミリア。そしてある程度引き離したところで機動ガーディアン達も追撃を止めて合流するため中央に集まる。
　やっぱりのう、さすが戦闘思考システムじゃな。もっとも効率が良い戦法を選んでくるのう。じゃがそれ故に、その行動も読みやすいというものじゃ。
　段々と中央に合流してくる機動ガーディアン達。そしてミリアと琴未も閃華と合流する。やはり数が少ない閃華達の方が合流が早い。まあ、そこまで計算して上で閃華は指示を出したのだから当然といえば当然である。
「よし、あやつらが完全に合流する前に叩くぞ。琴未、まだ落雷陣は消しておらんな」
「もちろん、まだガンガン撃ち放題よ」
「ならミリア、私が合図を出したら地震を起こしてあやつらの動きを封じるんじゃ。そしたら琴未はあの集団に向かって雷を落としま

くれ」
　一気に指示を出す閃華。だが琴未には引っ掛かる事があるようだ。
「閃華はどうするの？　普通に地面の上に居たら閃華だって動けないでしょ」
「くっくっくっ、大丈夫じゃ、心配いらん」
　まあ、閃華がそこまで言うなら何かしらの手があるのだろうと琴未は妙に納得する。
「では行くぞ」
　再び機動ガーディアン達に向かって駆け出す閃華達。その事に機動ガーディアン達も気付いているのだが、戦闘思考システムが合流を優先させる。
　それはそうだろう。なにしろ数では勝っているのだから集まった方が有利なのは決まっている。
　だがそれは相手の戦闘能力が同じぐらいならの話である。機動ガーディアンはどれだけ集まってもその戦闘能力は一兵卒。逆に精霊や契約者は一騎当千。その差までは新型の戦闘思考システムでも計算できないのだろう。
　その事を示すかのように閃華達は動き出す。
「ミリア！」
　閃華がミリアの名を叫ぶのと同時にアースシールドハルバードは地面へ突き刺さり、琴未はその場に停止する。そして閃華はというと機動ガーディアンに向かって突き進む水龍の上に乗る。
「やあっ！」
　ミリアが気合と共に一気に力を注ぎこむと、アースシールドハルバードを中心点として周囲に大規模な地震を巻き起こす。
　崩れてしまいそう程揺れる地面に機動ガーディアン達は立っている事すら不可能で、それは琴未も一緒に膝を付いて地震に耐える。
　そんな中でも琴未は雷閃刀を通して上空に展開されている落雷陣を一気に発動させる。
「いっけー！」

掛け声と共に落雷陣から轟音を発しながら幾つもの落雷が機動ガーディアン達に降り注ぐ。

さすがに地震の中で発動させているのだから命中度は低い。それに琴未自身も狙い定めるわけでなく、集団の中にありったけの雷を落としているだけだ。

そんな中で宙を翔ける閃華を乗せた水龍は、多少上昇すると雷が降り注ぐ機動ガーディアン達がよく見える位置に移動する。

「一気に決めるぞ！」

閃華の言葉に反応した水龍はその口を大きく開く。

「龍水閃」

水龍の口から放たれた大量の水は機動ガーディアン達に襲い掛かり、その機体を吹き飛ばすのと同時に辺りに大量の水が降り注ぐ事になった。

そのため、琴未が放っている雷は水を伝わり周囲の機動ガーディアン達にも一気に通電させる。そのうえ、落雷陣は未だに雷を落とし続けている。そのため、周囲に溜まった電力は凄まじく、それが限界に達した瞬間、大爆発を引き起こした。

よし！　狙い通りじゃな。

「与凪！」

未だに水龍に乗りながら爆煙が収まらない場所を見ながら閃華は状況確認を求めた。

「残りの中央戦力は？」

「はいはい、ちょっと待って下さいね……敵中央全滅、やりましたよ！」

よし、これで残りは増援の右翼部隊だけじゃな。

水龍を反転させて琴未達の元に戻る閃華。そして合流すると水龍も龍水方天戟に戻った。

「やったよ～、これで相手は全滅だね」

「それは中央戦力だけじゃミリア、直に敵の右翼増援が到着するじゃろ」

「まあ、それでもちょっと休憩ね」
「そうじゃな」
あれだけの数を相手に一気に暴れたのだから、閃華達にも多少疲労の色を見せているが、まだまだ余裕はあった。
「とにかく、こっちはこの場で待機して回復じゃな。後は敵の増援が付き次第、迎撃する。よいな」
閃華の言葉に頷くミリアと琴未。そして閃華は昇達が向かったエルクの方へ視線を移す。
後ろは任せておけい。じゃから昇、頑張るんじゃぞ。

シエラの手を取り、ウイングクレイモアで宙を翔ける昇達は一直線にエルク向かって突き進む。
見えた！
完全にエルクの姿を捉えた昇はシエラの手を離すと地面に向けて落下、その勢いのまま砂浜をすべり、エルクの前で止まった。
「エルク！」
すぐに銃口をエルクに向ける昇、その隣にシエラも舞い降りる。
だがエルクは意外な事に笑い出した。
「何がおかしい！」
昇が叫ぶとエルクは視線を昇に戻す。
「あははっ、まさか鶴羽の陣を逆手にとって少数精鋭による中央突破を図るとは。あははははっ、本当に君は面白い事をする」
エルクとしては昇の戦略を褒め称えてるつもりらしいが、昇はその賞賛を甘んじて受ける気にな絶対になれなかった。
「そんな事はどうでもいい。それよりエルク、これ以上お前の被害者を出さないために、ここで僕が倒させてもらう」
そう言って睨み付ける昇だが、エルクは逆に笑みを浮かべる。
「そうだ、そう来なくてはいけない。君が来なければわざわざ決闘状を出した意味が無いのだからね」

「やっぱり狙いは僕か？」
「ああ、そうだよ。契約者は実験体としてはとても貴重なんだ。だからここで確保させてもらうよ！」
エルクの手が何かを掴むように握られた瞬間。シエラは一瞬にして昇の周りをウイングクレイモアで振るう。
えっ、何があったの？
突然の事態に困惑する昇だが、シエラはエルクを睨みつけ、エルクは更に笑みを浮かべる。
「ほう、それに気が付くとは、なかなかだね」
「どういうこと？」
昇が目線を移さずシエラに聞くと、シエラは手を差し出した。
えっと、それはどういう意味なんでしょう？
それでも昇には分からないのだろう。だからシエラはエルクを警戒しながら口を開く。
「見えづらいけど力を収束させた糸。これで昇を絡め捕らえようとした」
そうだったの！
改めて己の事態を理解した昇はエルクに更なる警戒心を抱く。だが逆にエルクは楽しそうに笑うだけだ。
「あははははははっ、そういえば、そちらの精霊もなかなかの者だったね。すっかり契約者に捉われてて忘れてたよ。でも、その程度だと私には勝てませんよ」
つまり、自分の実力はこの程度ではないと言いたいのだろう。要するにエルクも未だに昇達に見せていない力があるということだ。
……なら、こっちから一気に攻め立てる。
「シエラ！」
昇の目線だけで意図を察したシエラは頷く。
「私達の力もこの程度じゃない」
「あははっ、そういえばそうでしたね。君の能力、そろそろ見せてもらいましょうか」

「僕の力、全力で見せてあげるよ」
昇はありったけの力で能力を発動させると、シエラから昇にしか見えない赤い紐が一気に伸びてきて、それをしっかりと握り締めると思いっきり力を注ぐ。
「エレメンタルアップ！」
その途端、シエラの力は限界を超えて急激に上がり、エルクが驚く暇を与えずに突っ込んでいった。
こうして、エルクとの最終決戦の幕は開かれた。

第七十一話　敵陣突破（後書き）

……長っΣ（゜Д゜。υ）　そんな訳で今回はかなり長い話になりました。というか、最後は収集できなくて無理矢理切ったように感じるかもしれませんが、それ皆さんの気のせいだと思い込ませてください。私はとっくにそう自分に信じ込ませました。

さてさて、今回は未だに戦国時代を引きずっているのか、それっぽい話になりましたね。というか、好きなんですよね。少数精鋭による戦局逆転って。だからあえて鶴羽の陣を中央突破してみました。いや～、いいですね。そういうの。……まあ、分かる人だけに分かればいいですこれは。

さてさて、次回はいよいよエルクとの決戦ですね。どうしようか（「□」；）！！　実は細かい事は全然考えて無かったりして（＾▽＾）　まあ、そんな事は気にせずに次回、一気に決着をつける……と思います。まあ、どうなるか私にも分かりませんがねΣ（゜Д゜。υ）

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、更に投票と人気投票もお待ちしております。

以上、人気投票でミリアと琴未を差し置いて与凪に入っていたことに正直驚いた葵夢幻でした。

第七十二話　エルク戦開始

ウイングクレイモアが羽ばたき、エレメンタルアップで一気に加速を得たシエラは一気にエルクに向かって突っ込んで行く。

もともとシエラはスピード重視の戦闘を得意としている。そこにエレメンタルアップで加速しているのだから、そのスピードはかなりのもので不意を付かれたエルクが気付いた時にはウイングクレイモアが振られた時だった。

とっさに回避行動に移るエルク、だがシエラの方が早くエルクを捉えていたため、エルクの脇腹をウイングクレイモアの切っ先が切り裂く。

ダメだ、浅かったみたい。

昇が見ている中ですぐに追撃に入るシエラだが、突如目の前の砂浜が吹き上がると、まるで砂の柱が立ったように一気にエルクを柱の上へと持ち上げて行った。

だが翼の属性を持つシエラを相手では制空権はシエラにある。一気にエルクの元へ舞い上がるシエラ、だが突如砂の柱から巨大な手が飛び出してきた。それも砂で出来ているようだが、シエラの進行を阻むのと同時に掴みかかってきたが、シエラのスピードに追いつくことが出来ずにそのまま空を掴む。

その砂の手に昇は銃弾を撃ち込み撃破するが、砂の手はすぐに再生して元の形になる。

……やっぱり、そうなのかもしれない。この前戦った時に使っていたナイフといい、今エルクが使っていると思われる砂といい。まるでエルクが自分の意思で操っているみたいだ。

そんな疑念が顔に出てたのだろう、高みからエルクが昇に向かって話しかけてきた。

「どうやらあなたは気付いたようですね。私の属性に」

その言葉にシエラは一旦エルクへの攻撃を中断すると昇の元へ舞

い降りる。
「昇、どういうこと」
「たぶんだけど、エルクは自分の意思でいろいろな物を操れるんだ。だから飛んでるナイフを自由に軌道を変えたり、今みたいに砂を操ったりできるんだ」
「操の属性！」
「見事、大当たりだよ」
柱の上からエルクは楽しそうに語りかけてくる。
「私は操り人形の精霊、故に操り人形の動力源である操の属性を得ているのだよ」
楽しそうに語りかけてくるエルクを睨みつけながらシエラは口を開いた。
「随分と気前がいい、自分の属性を教えてくれるなんて」
更にエルクは楽しそうに、昇にはその楽しそうな笑みに嫌悪感を感じるほど楽しそうなエルクは更に語り続ける。
「な～に、レアスキルを見せてくれたお礼だよ。エレメンタルアップ、契約者の力を精霊に送り、果てには精霊の限界値を超える力を引き出す能力。くくくっ、あっーはっはっはっ」
「何がおかしい！」
笑い始めたエルクを睨み付ける昇。だがエルクも笑うのを止めて昇に目線を向けると、昇は急に背筋が寒くなるほどの悪寒を感じた。
それほど昇に興味と狂気を交えた視線を送ってきている。
「おかしいのではなく嬉しいのですよ。契約者、しかもエレメンタルアップのレアスキル。それを有している実験体が手に入るのですよ。科学者としてこれほど嬉しい事は無いのですよ」
やっぱり……こいつをこのままにしておいちゃいけない！
改めてエルクの危険性を肌で感じた昇は銃口をエルクに向けると、思いっきり力を込めた弾丸を撃ち出す。
途中でそれを阻もうとしてきた砂の手を突破しながら、放った弾丸は一直線にエルクを目指す。

さすがにこれは防げないと思ったのだろう。砂の柱から飛び降りるエルク。そこにシエラが追撃にはいるが、エルクが軽く手を上げただけで砂浜の砂が一気に舞い上がり、シエラの前方に立ち塞がる。

「邪魔！」

砂の壁に阻まれて急停止したシエラはウイングクレイモアを構えると、翼を大きく広げてその場で羽ばたかせて突風を巻き起こす。

一点に集中された風は砂の壁を打ち破るのと同時にエルクに襲い掛かるが、エルクが軽く手を前に出しただけで風向きは変わり、突風はシエラに向かって襲い掛かってきた。

思いがけない事態にシエラの行動が一瞬遅れてしまい。突風を完全に避ける事が出来なかったシエラは空中での制御が出来ずに、地面に向けて落下して来る。

それでも翼を羽ばたかせて体勢を立て直そうとするシエラだが、突風が巻き起こした気流の乱れにより上手く飛べないまま地面に激突したかのように砂埃が一気に舞い上がる。

その砂埃の中で昇はシエラに語りかける。

「シエラ、大丈夫？」

「ごめん、助かった。ありがとう、昇」

よかった、どうにか間に合って。

シエラが地面に直撃する寸前、昇はシエラの落下地点に一気に駆け出して、なんとかシエラを受け止める事に成功したようだ。その代わりにシエラを受け止めた衝撃で辺りの砂が一気に舞い上がり、砂埃となって今は二人の身を隠している。

「失敗した。あいつ私が起こした風を操って反撃してきた」

「でもシエラは風を使うことが多いから制御できるんじゃないの？」

「私は風の精霊じゃなくて翼の精霊。翼を使って風を巻き起こす事は出来るけど、その後の制御は風の精霊じゃないと無理。後は風の属性を持ってない限り、私が巻き起こした風は全部あいつに制御される」

つまりエルクはシエラが作り出した風を操ったというワケか。で

も、僕達の中に風の属性を持ってるのは……あっ！
何かを思い付いたのだろう、昇は未だにお姫様抱っこをしているシエラに顔を向ける。
「確か風を使った攻撃で切り裂けるやつもあったよね？」
「無い」
「……あれっ？」
呆れた視線を送ってくるシエラから目線を外しながら、昇は大事な事を思い出した。
そうか、シエラは翼で風を巻き起こす事が出来るけど、それを自在に操る事が出来ないんだ。……というか、それをやってたのって閃華だっけ？
確かに閃華は水の精霊、それぐらいの事は出来るだろうがシエラは翼の精霊。本質は翼を使った空中戦とハイスピードの戦いであり、風を使った攻撃はあくまでも補助に過ぎない。
そのことに気付いた昇は顔を背けながらシエラを地面に降ろした。それから辺りの砂煙が薄くなってきたことに気付き、あまり時間が無い事を悟る。
まあ、いいや。たぶんこれでエルクの意表を付けるはずだ。それに僕の思っているとおりなら
何か確信を得たのだろう。真剣な顔付きに戻ると再びシエラに振り返る。
「シエラ、さっきのやつもう一回やって」
「でも、また操られる」
「試したいことがあるんだ」
「分った」
昇の言葉にすんなりと承諾するシエラ、それだけ昇を信頼しているという事だろう。
砂煙が更に薄くなり、昇達からもエルクの姿を捉えられるようになると、シエラは再びウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて風を一点に集中させる。

それを見たエルクは軽くあざ笑う。
「おやおや、先程の行動から何も学習してないようですね。これだから人間という実験体は」
「それはどうかな」
エルクの言葉を遮り、昇は自信に満ちた目を向ける。
その目がよほど気に入らなかったのだろう。エルクは初めて笑みを崩して静かな眼差しを向けると右手を一気に上げて昇達の前に砂の防壁を形成する。更に砂の防壁から一塊になった砂が昇達に向かって撃ち出される。
後方に飛び退く昇とシエラ、さすがに防壁で自分の視界を塞いでるためか、エルクがそれ以上の追撃を掛けてくることは無かった。
「シエラ！」
全ての攻撃を避けきった昇はシエラに合図を出し、先程集めた風を砂の防壁に向かって一気に解き放つのと同時に昇も銃口を向ける。
一陣の風が一塊の突風となり防壁に大穴を空けて突き進む。先程のように上空からの攻撃ではないためエルクを捉えることが出来ず、シエラが放った突風の先にはエルクがいなかった。
「ごめん、捉えられなかった」
「いや、それでいいんだ」
昇も防壁を前にして正確にエルクを捉えられるとは思っていなかったようだ。だが、突風で貫かれた砂の防壁は衝撃により、すでに元の地面へと崩れ落ちている。そのため、今なら昇の位置からでもエルクを捉える事が出来る。
引き金を引き絞り、銃口から発射される力。それはエルクに向かっていくとシエラも思っていたが、昇が放った力はエルクへは向かず、シエラが放った突風の中へと消えていった。
よし、後は集中して。
突風はすでにエルクを通り過ぎていたが、昇が精神を集中させると突風は急旋回してエルクへと突き進む。
「ッ！」

さすがにこれには驚きを隠せないエルク、手を突き出して向かってくる突風を制御しようとするがまったく受け付けない。
「これは！」
制御できない突風の意味に気が付いたのだろう、エルクは驚きの表情を浮かべる。だがその間にも昇は精神を集中させると、突風は風の刃へと姿を変えてエルクに向かって襲い掛かる。
後ろに飛び退いて風刃を避けきるエルク。だが全ての風刃がエルクが居た場所に固まると渦を巻き、再びエルクに向かって風刃を放ってきた。
「くっ」
エルクも下に手を向けると再び砂の柱を作り上空へと退避する。そして砂の柱を切りつける風刃。だが元は砂だ。そのためすぐに復元してしまった。
だが昇の意識は未だに風刃と繋がっている。風刃は急角度に方向を変えるとエルクに向かって再び飛び放たれる。
それに対してエルクも再び砂の防壁を築くが、所詮は砂のため易々と風刃に突破されてしまう。だがエルクは更に海の水を操っていた。どうやら砂の防壁はこれを隠すための物だったらしい。
水を迫ってくる風刃同様に高速回転させて水刃に変えると、昇が操っている風刃にぶつけて全て相殺した。
今だ！
風刃を全て潰して一息つくエルクだが、その意識は全て昇に向いていたため、もう一人の存在に気付いた時には遅かった。
突如エルクの背後に現れるシエラ。すでにウイングクレイモアを大きく振りかぶっている。
「フルブースト」
更に翼が歪むほどの加速をつけるとウイングクレイモアを一気に振り放つ。完全に隙を付いたうえにハイスピードで破壊力を上げた攻撃だ。そう簡単に防げるものではない。
だがエルクは風を操作して右腕に一気に集めると、エルクの右腕

は竜巻よりも早い回転をしている風の篭手を作り出してウイングクレイモアを防いだ。
　渦巻く風の回転により、フルブースト状態で振り出したウイングクレイモアはその方向を激しく乱される。よってシエラが振り出したウイングクレイモアはその刃先を激しく揺さぶれれて、勢いを完全に殺されてしまった。
　更に風の回転を早めるエルク、そうされてしまうとシエラは弾き飛ばされないようにウイングクレイモアを力づくで押さえつけるしかない。そうしないと風の回転に負けて、いつ吹き飛ばされるか分ったものではないからだ。
「……ダメ」
　それでもシエラの力だけで踏み止まる事は不可能だと感じ取ったのだろう。シエラはウイングクレイモアの翼を大きく広げると、一回だけ大きく羽ばたかせる。
　そうする事で更に風を巻き起こし、エルクが腕に巻いている風の回転を抑える。回転が弱まった事により、ウイングクレイモアを弾き飛ばそうとしていた威力も弱まり、シエラは多少吹き飛ばされながらもエルクから離れる事が出来た。
　空中で体勢を立て直すシエラ、そんなシエラに向かってエルクはナイフを取り出すが、その前に昇が放った弾丸がエルクの右腕を目指して飛んできた。
　先程のように風の回転を利用した篭手を使えば昇の攻撃も簡単に弾き飛ばせそうだが、エルクはそうせずに今まで操っていた風を一気に解放してナイフで昇の弾丸を全て撃ち落した。
　気付かれた。まあ、こんな手がいつまでも続く相手じゃないとは思っていたけど。
　次の手を考える昇に一旦距離を取ったシエラ、そして再びナイフを取り出すエルクと事態は一旦膠着状態に入った。
　そしてエルクは柱の頂上から昇を見下ろすと、その顔は再び好奇心を異様に帯びた笑みに代わる。

「なるほど、エレメンタルアップのような特殊型は属性が無い物が多いと聞いてましたが、やはりそうみたいですね」
更に不気味なほどの笑みを昇に向けてくるエルク。昇はエルクの笑みに飲まれないように無言で睨み付ける。
「属性が無いという事を逆に言えば全ての属性に適する事が出来る。先程のようにただの風に風の属性を加えて、私の操の属性を無効化したというわけですか。確かに、操の属性は操る物によっては本来の属性を持つ力には効きませんからね」
「やっぱりね、そうじゃないかと思ったよ」
無理に余裕の笑みを浮かべてみせる昇。
そうする事で操の属性を完全に理解して反撃の手段があるとプレッシャーを掛けたいのだろうが、その程度で崩れる相手でもないことは昇にも分かっているが、やならいよりはやったほうが昇にも余裕が生まれる。
それに昇が操の属性を理解したことは確かだ。だからこそ、先程のように優位に事を進められた。全てはエルクの言ったとおり、昇のエレメンタルアップが属性を持っていないことが昇達を一時的に優位に立たせた。
放出型や強化型の能力と違って特殊型は属性に規制に縛られる事は無い。それは特殊型の力が属性を必要としていないからだ。
昇のエレメンタルアップを見ても、その能力は自らの力を精霊に送って無理矢理レベルアップさせているだけ、地球上にある全ての属性とはまったく関係ない力だ。故に属性を持たない。
そしてこれもエルクが言ったとおり、属性を持たない故に後付で属性を自由に得る事が出来る。つまり特殊型は本人の努力次第で幾つもの属性を身に付けることが出来る。まあ、今の昇はせいぜい数個の属性しか持っていないが、それでも使い方によっては優位に立てる。
先程の攻撃がその証拠だ。シエラが放った突風に昇の弾丸が風の属性を付けて、突風を完全に昇の制御下に置いてしまう。そうする

事で操の属性を受け付けないようにした。だからエルクが向かって来る突風を操る事が出来なかった。

操の属性が精霊や契約者の属性を帯びてない物しか操れないと理解したからこそ出来た事だ。だがそれは昇の力も同じで、操の属性も後付で身に付けた属性も本来の属性には敵わない。

操の属性は元々属性の及んでいない物を操るだけで、後付で身に付けた属性も本人の努力次第で昇華できるが、やはり本来の属性を持っている者には及ばない。

それでも、幾つもの属性を持てるということは状況に応じて優位に立てる。

それに今回の場合はエルクよりも属性を撃ち込むか、エルクが操っている操の属性に打ち勝てば完全に操の属性を無効化できる。

つまり、操の属性を無効化できる手段を持っている以上、昇達は有利なのだが、それでもエルクは不気味なほどの笑みを向けると、ナイフを持っている腕を振るい、エルクの手から離れたナイフは飛ぶ事無くその場に浮いて漂っている。

「あなたが操の属性を理解した以上、おおっぴらに操の属性は使えませんからね。ですが、私の精霊武具であるこのニュウマスナイフ＜多数のナイフ＞は乗っ取る事は出来ませんよ」

エルクは更に手を大きく横に振ると、更に多くのナイフが現れ、先程のナイフと同じように宙を漂い。エルクが手を振るたびにその数はどんどん増していく。

「では、行きますよ」

エルクが大きく手を縦に切ると、今まで宙を漂っていたナイフが一斉に昇とシエラに向かって飛び出して行った。

って！　あんな数のナイフを一辺に操れるの！

昇に向かってくるナイフは数本ではなく、数え切れないぐらいの数十本だ。それだけの数のナイフが昇とシエラに向かって一斉に飛んでくる。

「くっ」

試しにありったけの弾丸をナイフの群れに撃ち込む昇だが、撃ち落せたナイフは一個も無い。全て昇の弾丸をナイフの群れは避けきってしまった。

嘘！　あれだけの数を全て制御してる！

しかたなく、後方へ大きく跳ぶ昇。だがナイフの群れも地面に激突する寸前にその動きを止めると昇のいる方向へ刃先を向けて再び飛び出した。

こうなったら一か八かやるしかない！

銃口を地面に向ける昇。一気に引き金を引き絞り、砂浜に向かって思いっきり力を込めた弾丸を発射すると、砂浜の砂は一気に舞い上がり、昇の姿を隠した。

だがナイフの群れはそんな事を気にする事無く砂煙の中に一気に飛び込んでいった。

一方のシエラもナイフの群れに追われていた。

ウイングクレイモアのスピードで何度も急旋回しているが、それでもしつこくナイフの群れは飛んでいるシエラに向かってくる。

さっき、昇の攻撃を全て避けて見せた。そうすると、飛んでるナイフを撃ち落すのは無理。下手にこちらからの攻撃で撃ち落そうとすれば、こっちがやられる。……なら、全て叩き落すしかないか。

再び急旋回するシエラ。ナイフの群れもシエラがいたところを通過すると、その動きを止めて刃先をシエラに向けて再び飛び出す。

だがシエラのスピードは並みじゃない。ナイフの群れが一瞬だけ動きを止めた隙にかなりの距離を稼いだ。

その間にシエラは急停止すると、ナイフの群れに振り返り、ウイングクレイモアを右下後方へと構える。

「フルブースト！」

翼は羽ばたく事無く、その姿を歪めながらシエラに最大限の加速を加えるが、それでもシエラは加速を押さえ込み、その場に留まっ

ている。
そして自分に向かってくるナイフの群れを確認すると、溜め込んだ加速を一気に解き放ち、ナイフの群れに向かって急発進する。
さすがに今まで加速を押さえ込んでいたためか、そのスピードは初動から最速となり、ナイフの群れを一気に通り過ぎる。
さすがにここまでのスピードには追いつけないようだ。よってシエラがナイフの群れを通り越して止まるまで、ナイフの群れは先程までシエラが居た場所に向かって突き進んだままで、シエラが動きを止めるとやっとナイフの群れも動きを止めて再びシエラに刃先を向ける。
だがどうしたことか、今度はシエラに向かって飛んでこない。その代わりにエルクが口を開いた。
「なるほど、確かにそのスピードなら私の目でも追いきれない。だから一直線に向かってくるナイフを叩き落す事が可能ですね」
……こいつ、たった一回でこっちの意図に気が付いた。
さすがに苦い顔になるシエラ。もう少しこの方法でナイフの数を減らす事が出来ると思っていたが、そうも行かないようだ。
先程シエラはハイスピードでナイフの群れを通過する時、完全に群れの横に出て当たらない位置を取り、更にナイフの群れの先頭からウイングクレイモアを差し入れる。そうすれば、ナイフの群れを通過する時に勝手にウイングクレイモアに叩き落されるという手段を取っていた。
更にナイフを操っているのエルクでも捉えきれないスピードならウイングクレイモアを避ける事は不可能。よって、先程の攻撃でかなりの数を落としたのだが、それでもナイフの群れには、まだ数え切れないぐらいのナイフが存在していた。
せめてもう少し落とせれば楽になったのに。
だがそれはさせてもらえそうに無い。先程まで群れで固まっていたナイフは一気に散らばり、シエラを半包囲する。前方の上下左右に展開されるナイフ達、こうなってしまってはどこから攻撃がくる

か予想が出来ない。
「あなたのスピードは確かにやっかいですね。ですが、これでそのスピードは役に立たない。さあ、どうしますか」
まるで今の状況を楽しむかのように語りかけてくるエルク。シエラもウイングクレイモアを構えて一応備えるが、この状況を打破する手が思いつかない。
一旦退く……ダメ、それでもあいつはもうナイフをひとまとめにすることは無い。それにこちらのスピード対策として、まったく動かさないナイフを取っておくつもりだ。だから私の後ろを空けている。私が退いた途端に予備を残して一気にナイフが迫ってくる。
だが無理に突っ込んだとしても、シエラにはナイフを避けきる自信は無い。なにしろ前方には全方位にナイフが展開されているのだから、避ける隙間が無い。
よって、シエラが動けないまま膠着状態に入ろうとしていた時だった。突如、先程昇が巻き起こした砂煙の中から巨大な力が海の方向へ向かって撃ち出された。

ナイフの動きが止まってる。やっぱり思ったとおりだ。このナイフはエルクが見える範囲でしか制御できない。だからこうやって隠れていればナイフは僕に向かってこないんだ。
砂煙の中で微かに見えるナイフの群れはその動きを完全に停止していた。どうやら昇は賭けに勝ったようだ。
砂煙の中でナイフが縦横無尽に暴れまわる可能性はあったけど、現在ではナイフの群れが完全に停止している。どうやら砂煙が晴れてから昇に攻撃を加えても間に合うと思っているのだろう。
だが昇の目的はナイフの動きを完全に停止させる事だ。
後は……一気に吹き飛ばせばいいだけ！
群れの刃先に立った昇は二つの銃口を並べてナイフの群れに向けて一気に力を溜める。銃口の先に光の球が生まれると、二つの銃口

から力を注ぎこまれて光球は更に力強く光、辺りの砂煙に反射して砂煙の内部は更に輝きを増していく。

そして二丁拳銃が作り出した光球が力を溜めきった時、昇は引き金を一気に引き絞る。

「ツインフォースブレイカー」

光球から解き放たれる力は、光球の数倍以上大きく。その力がレーザーとなりナイフの群れに向かって一直線に突き進む。

一度解き放たれたツインフォースブレイカーは全ての物を飲み込み、その光の中に消していった。その衝撃で砂煙も一気に弾き飛ばされて視界が一気に良くなる。

昇が放った力はナイフの群れを飲み込んだ後、海に出て精界の端にぶつかり大きな爆発を引き起こした。

よし、これで迫ってきたナイフは全部消滅させた。後は！

未だに光球が残っている銃口を今度はシエラに向ける。

「シエラ！」

その場から叫ぶ昇、シエラも頷くだけだ。そして新たに光球に力を注ぎこむと、再び光球は強い光を放ち、力強さを増していく。

「ツインフォースブレイカー！」

引き金を引き絞り、第二射を行う昇。先程より密度は薄いが、その分だけ大きくなっているツインフォースブレイカーがシエラに向かって一直線に突き進む。だがシエラはその場から動こうとはしない。いや、もし動いてしまえば囲んでいるナイフが一斉にシエラに襲い掛かってくるだろう。

そんな中で攻撃を終えた昇はもう一度シエラから伸びてくる赤い紐を掴む。

いっけーっ！

掴んだ紐に一気に力を注ぎこむ昇。その間にも昇が放ったツインフォースブレイカーがシエラに迫り、そしてシエラを囲むナイフを全て巻き込み更に突き進む。

全てを光の中に消しながら精界の端まで到達したツインフォース

ブレイカーが大爆発を起こすと、エルクは柱の上から狂気に満ちた目で笑い、そして語りかける。
「まさか仲間ごと吹き飛ばすとはね。だから人間という実験体は面白い。こうでなくては人間としての本性を研究できないですからね」
だが昇もそんなエルクに向かって笑みを向けながら話しかける。
「僕がそういう事をすると思ってるの？」
「ええ、人間というのはそういう生き物でしょ」
「へぇ～、じゃあ、今すぐその考えを変えたほうがいいよ」
「なにをいっ、ッ！」
エルクが感じて振り向いた時にはすでにシエラのウイングクレイモアが迫っていた。とっさに砂の柱から飛び降りるエルク。
だがシエラが切落（きりおとし）、頭上から一直線に振り下ろしたウイングクレイモアはエルクを捉える事は出来なかったが、その衝撃は凄まじく、砂の柱を一刀両断してしまった。
地面に降り立つエルクに銃口を向ける昇。さすがのエルクも再び苦い顔になる。
「……そうか、エレメンタルアップか」
「当たり、ツインフォースブレイカーを撃った後にシエラに思いっきりエレメンタルアップを掛けた。シエラのスピードなら眼前に迫ったツインフォースブレイカーを避ける事が出来るからね」
「なるほど、そういうことですか。ですが、それだけの力を一気に使ったのですから、あなたも相当疲れてるのでは」
「……」
くっ、読まれてたか。
確かに昇は疲労の色を表には出していないが、大量に吹き出した汗が昇の力が一気に消費された事を物語っている。
ははっ、さすがにこんな状態だとバレて当然か。でも、僕だっていつも鍛えてる訳じゃない。これぐらいなら少し休めば回復するけど、なんとかそれまで時間稼ぎしないと。
シエラのエレメンタルアップをかなり抑えると、昇はなんとか回

復する時間を稼ぐためにエルクに語りかける。
「上にはシエラがいるし、この距離なら僕は絶対に外さない。もう終わりだね、観念してもらうよ。それとも、何か隠してる手でもあるの？」
「おやっ、よく分りましたね」
えっ、嘘、当たっちゃった！。
時間稼ぎの当てずっぽで言ったのに、それが見事に的を射てるとは昇は思いもしなかったが、エルクはそんな昇の心情を分かるわけではない。隠している手が知られた以上はもったい付ける理由が無い。
そのため、エルクは余裕の笑みを浮かべると手を前に出す。とっさに引き金を引こうとする昇だが、何かが昇の両手を切り裂いた。
えっ？　なにが……。
痛みよりも疑問が先に頭を過ぎる昇。そして両手をやられたことにより、昇は二丁拳銃を落としてしまう。
更に追い討ちとばかりに何かを操るように手を動かすエルク。とっさにシエラも上空から一気に舞い降りてエルクの背後から斬りかかるが、突如シエラの下から砂が噴火のように吹き出してシエラを空中へ無理矢理戻す。
そしてエルクが更に手を振ると、今度は昇の太ももが切り裂かれて、血を吹き出しながら昇は立っている事が出来ずに膝を付く。
つつぅ、一体何が起こってるんだ。
砂浜に手を付き、なんとか倒れるのを防ぎながら昇は顔を上げる事無く、先程起こった事を考えるが、一向に何が起こったのかは分らない。
何だ。僕は一体……なにで攻撃されたんだ！
必至に考える昇を目の前にエルクは笑みを向けながら、上機嫌で語りかけてきた。
「あはは、どうやら操の属性を相当甘く見ていたようですね。これこそが、操の属性が持つ本質であり、恐ろしさなんですよ」

操の属性が持つ……本質？
エルク言い放った言葉の意味が分らないまま、エルクの手が動くのを見た昇は、とっさに二丁拳銃を拾うと砂浜に向かって乱射する。
一気に砂煙が巻き起こり、その中に昇の姿を隠すが、エルクが手を下に振ると砂煙は元の砂浜へと一気に舞い降りて、昇の姿は丸見えとなる。
くっ、なら！
痛む手で銃口をエルクに向けると狙いを定める事もせずに乱射するが、放った弾丸は全て何かに叩き落されてしまった。
「無駄ですよ、そんな事をしても」
「くっ、どうしていきなり」
昇の言葉にエルクは意地の悪い笑みを向けると嬉々として答える。
「おや、まさか今まで私が本気で戦っていたと思っているのですか」
「なっ！」
さすがにこの言葉には驚く昇。
それじゃあ、今までエルクは本気で戦っていなかったの。僕達は全力を出してたのに。
驚愕の表情を浮かべる昇をエルクは待っていたかのようにあざ笑う。
「いいですね、その表情。やはり実験体が絶望を感じている表情が一番心地よい」
……絶望だって、違う！　こんな所で終わってたまるか！
よろけながらも立ち上がる昇は銃口をエルクに向けると思いっきり睨み付ける。そんな昇にエルクは不思議そうに語りかけてきた。
「おや、もう諦めたのかと思いましたけど。どうやら、まだ力の差という物が分ってないみたいですね」
「そうだね、僕だけの力だと勝てないかもしれない。けど！」
僕は一人じゃない。それにこの程度の威力なら行ける！　シエラ！
上空にいるシエラに目線を送ると、再び手にした赤い紐に一気に力を送る。

更に引き金を引き絞り銃弾を乱射する昇。だが、先程とは違い、全てエルクを狙って発射している。だが、その発射した弾丸の全てをエルクに届く事無く、全て何かに叩き落されてしまった。
「これだけやっても分からないのですか、全てが無駄だと」
「……どうかな」
その昇の言葉が言い終わるのと同時にエルクの背後にシエラが姿を現す。
「バカな、あの距離を一瞬で！」
「今の私なら簡単」
そして振られるウイングクレイモア。だがウイングクレイモアがエルクに届く直前に、またしても何かがシエラを切り裂き、軽装のシエラは武装が無い部分から血が吹き出す。
だがそれでもシエラはウイングクレイモアを一気に振りぬいた。だがダメージを負った分、キレがなくエルクは簡単に避けられてしまった。
「そんな簡単な連携がいつまでも通用すると思ってるのですか」
「じゃあ、こういうのはどう」
とっさにエルクの後ろから響く昇の声。すぐに振り向くエルク、だが昇の姿はどこにも無い。
「下だよ」
その声に目線を下げるエルク、だがその時には全て遅かった。
二丁拳銃からダガーモードへと変えた昇の武器が、エルクの体を左右の切り上げから一閃の元に切り裂く。
エルクの返り血を浴びながら昇は再び二丁拳銃に戻すと、銃口をエルクの体に押し当てる。
「この距離なら絶対に外さないよね」
「なめるな！」
エルクも何かをしようと手を動かすが、その前に昇が一気に引き金を引き絞り、解き放たれた力はエルクに当たるのと同時に爆発を引き起こして昇とエルクを吹き飛ばす。

吹き飛ばされた昇を受け止めるシエラ。一方のエルクは爆煙によりまだ姿は確認できないけが、先程の攻撃でかなりダメージを与えたはずなのは確かだ。

だが昇は吹き飛ばされただけだから、たいしたダメージは負っていない。そんな昇をシエラは静かに地面へと下ろす。

「倒したかな？」

「たぶんダメ、この程度で倒せる相手じゃない」

「あははっ、やっぱり」

それはエルクと一番戦った昇がよく分かっている。だけど、これほどの傷を負った以上はこれで倒れて欲しいのもよく分かる。

「それにしても、あの見えない攻撃はなんだったのかな？」

「たぶん、暗器」

「あんき？」

聞きなれない言葉に昇はそのままの言葉を返して、シエラは頷いてみせる。

「簡単に言うと隠してる武器の事。それを操の属性を使って死角から攻撃してきたんだと思う。けど、隠している分、武器は小さくて威力もそんなに大きくは無い」

「だからダメージ的にはそんなに大きくなかったんだ」

それを感じ取ったからこそ、昇は賭けとも言える先程の攻撃に出た。威力が小さければエレメンタルアップを掛けているシエラなら、攻撃を受けてもそのまま止まる事無く攻撃を続けられる。更にダメ押しが、何度も繰り返した連携と昇の近距離攻撃。今までシエラは必ず背後を取り、昇も二丁拳銃しか使わなかった。

だから、シエラが背後をとっても昇の弾丸なら防げると思ったエルクの不意を付く事が出来た。

「やっぱり、奥の手は最後まで取っておく物だね」

「……」

「シエラ？」

急に黙り込んだシエラの意図を察すると、昇もシエラが向いてい

る方向へと振り返る。そこには爆煙がすっかり消えており、未だに血を垂らしながらこちらにゆっくりと歩いてくるエルクの姿があった。

「どうやら奥の手はあっちにもあったみたい」

「そうみたいだね。それで、どうしようか？」

「練習中のアレ、使ってみる？」

「……いまいち自信が無いけど、もうここまで来たらしょうがないか」

ゆっくりこちらに歩いてくるエルクを見ても、時間を稼ぎたいのだろうと判断した昇は二丁拳銃のイメージを変える

「ツインブレイド」

昇がその言葉を発した途端、二丁拳銃のグリップに布が巻かれてそのまま刀の柄へと姿を変えて、銃口も柄のかなに消えると柄の端から細いて短い刀が飛び出すと、それが中心となり、光の刀へと姿を変える。

長さはそんなに無いが、小柄な昇が扱うには丁度良い長さなのだろう。

そのツインブレイドとウイングクレイモアを構える昇とシエラ。

だがエルクは声が届くぐらいの距離達するとそこで止まって語りかけてきた。

「まさか、私にここまでの傷を負わせるとは、少し遊びすぎたようだね。それにその武器、どうやら接近戦も出来るなんて、すっかり騙されてたよ」

「こっちも、まさかあんな攻撃をしてくるとは思ってなかったよ」

昇の言葉にエルクは軽く驚きの表情を浮かべた後、すぐに理解して笑い出す。そのことにさすがの昇も攻撃態勢に入った。どうやらさすがの昇もここまで笑われると頭に来るらしい。

そんな昇をシエラが制するとエルクは軽く手を差し出した。そのことに身構える昇とシエラ。だがエルクはそんな二人をあざ笑う。

「あはは、大丈夫だよ。なにも攻撃をしようというわけじゃない。

先程の攻撃が理解できないみたいだから教えてあげてるんだよ」
「何を訳の分ら」
「そうか！」
昇の言葉を遮り、シエラはその正体を掴んだようだ。
「そう、これは一番最初に見せたものだよ」
その言葉にシエラは悔しそうに歯を噛み締める。そして昇もエルクの言葉に先程の正体が分ったようだ。
「糸！」
「そう、これがあなたの攻撃を防ぎ、その体に傷を負わせた正体だよ」
「うかつだった。最初に大きな物を操ってたから、小さな物まで気が向かなかった」
「それが私の狙いだったからね。元々、操の属性は小さいものを操って死角からの攻撃を得意としている。まあ、やり方によっては暗殺にも使われるけどね」
つまり最初に砂浜の砂を大規模に使った攻撃は全てこの糸を使った攻撃に気付かせないための罠だった。
その事を理解した昇もシエラと同じように悔しそうな顔になる。
その二人の表情を見て、エルクはこのうえなく楽しそうに次の言葉を投げかける。
「だが、最後の攻撃は良かったよ。こちらの攻撃力が小さい事を理解しての特攻と近距離の武器を隠してた事。私的には及第点だけどね」
及第点？　一体何を？
昇が問いかける前にシエラが先に口を開いた。
「武器の正体を教えるのといい、こちらの戦力分析結果を伝えるのといい、さっきからあなたは何が言いたいの」
そのシエラの言葉にエルクは顔半分を手で押さえながら笑いをこらえる。
「あははっ、最初に言っただろう。契約者の実験体は貴重なんだ。

そのうえエレメンタルアップというレアスキルまで持っている実験体はこれまでに遭遇した事が無い。だからこそ、今の時点で壊してしまうのは勿体無いんだよ」

こいつ、最後まで僕を実験体扱いか！

エルクの言葉に内なる感情を抑えながら、昇は攻撃に入ろうとする。先程の攻撃がなんなのか分れば手の打ちようがある。

だが昇が攻撃に入る前にエルクは背を向けた。そしてそのまま歩き出す。

「どこに行く！」

昇の叫び声にエルクは立ち止まると顔だけを振り向かせる。

「言っただろ。君は貴重で今の時点で壊してしまうのは勿体無いんだ。だから今回はこれでお終い。貴重なデータも取れたしね、充分すぎる成果だ。それに、もうこの土地には面白そうな実験体はいないからね。別のところに行く事にするよ」

「僕たちがみすみす見逃すと思うのか」

「出来るのかい。君たちが私を捕らえることが」

「これ以上、お前の被害者を出すわけには行かない。だから今ここで倒す」

一気に飛び出す昇。そしてこのまま一直線にエルクへと向かっていく……はずだった。突如、地面に倒れる昇。その背中には小さな矢が何本も刺さっていた。

「くっ、なにが？」

背中に痛みを感じながらも昇は顔だけを上げる。そんな昇をエルクはあざ笑う。

「まさか、私の武器がこの糸だけだと思っていたのかい。操の属性は暗器を得意としている。これだけでなく、幾つもの武器を私は隠し持っているのだよ」

「昇！」

駆け寄ったシエラが昇の背に刺さっている矢を全て引き抜く。攻撃力が小さいとはいえ、これだけの数を喰らってしまっては今の昇

に立ち上がるだけの力は無い。
「では、私は失礼するよ。これからも健やかに成長してくれエレメンタルアップの少年。再開の時にはじっくりと解体してあげるから」
狂気の目を昇に向けるとエルクは再び背を向けて歩き出し、そして突如にしてその姿を消した。
「与凪！」
エルクが姿を消した事で、すぐに与凪を呼び出すシエラ。
すぐに与凪が映し出されたモニターが昇達の前に現れるが、与凪はキーボードを一心不乱に操作している。
「追跡できる」
「今やってます！　でも……なんとか」
「そう、じゃあ皆を呼び戻してなんとか再戦」
「ああっ！」
シエラの言葉を遮り、与凪が驚きの声を上げる。
「どうしたの？」
シエラが問いかけるが、与凪は未だに信じられないという顔をしている。
「……エルクの反応が……精界の外に」
「えっ」
「嘘！」
「間違いないです！　ああっ、ダメ、完全に……逃げられた」
うな垂れる与凪。その行動が信じられないのだろう。本来精界は内部からの破壊は限りなく困難であり、たった一人の精霊がどうにかできる物ではない。
だがシエラにはどうやってエルクが外に出たのか分っているようだ。
「操の属性、思っていたよりやっかいみたい」
「えっ、シエラさん、それってどういう意味ですか？」
「たぶん、エルクは精界の外にある物も操れるんだ。だからそれを使って外から精界を破った。そう考えればエルクを逃がした原因が

分る」
なるほど、確かに。エルクがどんな物でも操れるなら海の水を操って水刃として精界を切り裂く事も可能だ。それにしても……くっ、まさかこんなにも強いなんて。
未だに背中が痛むのだが、それ以上に昇は胸の内が痛かった。
あれほどエルクを止めないと決めてやってきたのに、結果としては見逃してもらったのと同じじゃないか。僕は……完全に負けた。
あれほど心に決めた事を失敗したのだから、昇の悔しさは半端ではないだろう。それを現すかのように、未だに地面に伏せっている昇は砂を強く握り絞める。
「昇……」
そんな昇を心配するシエラだが、昇には先程の戦闘がよほど応えているようだ。
「……シエラ」
「どうしたの」
「あいつ……戦闘中はいつも笑ってたよね」
「そう……みたいだったけど」
「それって、僕達が完全に遊ばれてた……ってことなのかな」
「……」
答えることが出来ないシエラ。それはシエラも感じていた事だから。
先程の戦闘でエルクはほとんど笑っていた。どれだけ昇達の攻撃を受けようとも笑い続けていた。それは昇達が敵としてなりえないと感じ取っていたからだろう。
つまり、エルクにとって昇達は最初から敵として見るに値しない相手だったということだ。
そのことが理解できたからこそ、昇の悔しさは一層増して行く。
あれだけエルクを倒そうと思ってここまできたのに、僕は……エルクの敵にすらなれなかった。それじゃあエルクの言うとおり実験体じゃないか。……僕は、そこまで弱かったんだ。

最後に決定的な差を見せ付けられたものだから昇が落ち込むのも分からなくは無い。だが、今の昇にはこれが限界と言うのも確かな事だった。

それから数分後、昇は与凪の治療を受けていると閃華達が合流する。閃華達の話では突然機動ガーディアンが全て戻されたようだ。どうやらエルクの撤退と共に機動ガーディアンも戻したらしい。それからシエラがエルクとの戦闘を閃華達に話している間に、昇は与凪の力で傷を癒していく。

モニター越しとはいえこれぐらいの事は出来るようだ。そして全て話し終えたシエラは一息つくと、閃華が昇の元へやって来た。その頃には昇の傷も回復して、砂浜に座っていた。

「昇」

「……なに？」

「悔しいか」

「当たり前だろ！」

珍しく声を荒げる昇。それほど悔しかったのだろう。初めて徹底的に負けた上に、その悔しさの根源は全て閃華と風鏡に繋がっているのだから。

風鏡さんの前で、あれだけ大見得を切ったというのに。いざとなったらエルクを倒せないなんて、これじゃあ一体何のために風鏡さんに立ちはだかったのか分らないじゃあないか！

それに閃華も、この戦いで決着を付けたかったのに。これだと僕は、ただ二人の邪魔をしただけじゃないか。それだけしかないと思ってたのに、こんな事しか出来なかったなんて！

そんな自責の念が昇を襲っている中で、閃華は静かに昇の隣に座る。

「昇、皆同じなんじゃよ。私も風鏡殿も昇もな」

さすがに首をかしげる昇。そんな昇に閃華は微笑みかける。

「皆、己の中にある物と戦い続けているという事じゃよ」
「自分の中？」
立ち上がる閃華はエルクの精界が消えて、竜胆の精界が広がっているのだろう、赤く染まった世界の天を仰ぐ。
「昇、自分が望んだ未来を掴むというのは大変な事なんじゃよ。努力すれば、必死になれば必ず掴める物ではないからのう」
「……」
確かに閃華の言うとおりかもしれない。望んで必死になって努力して、それでも掴めない物が多くある。……でも、それでも僕は。
己の手を見て強く握り締める昇。それは誰もが望む事だろうけど、手にするのは極僅か、それが分っていても昇は掴む事を止めようとしないだろう。
その先に自分で決めた未来と閃華と風鏡の想いがあるのなら、それを掴むために手を伸ばし続けなければいけない。
それを感じ取った昇の中からは先程の悔しさは消えていた。
これで終わりじゃない。まだ、終わりに出来ない。僕は……エルクの被害者をこれ以上出さないと決めた。それにエルクが存在している以上、風鏡さんの思いも止まらない。だからこそ、こんな所で立ち止まっちゃいけないんだ。
立ち上がる昇は閃華と同様に天を仰ぎ、閃華は優しい眼差しを昇に送っている。
（さすがに立ち直りが早いのう。じゃが、それぐらいの覚悟が無ければ、これからはやっていけんからのう）
それは昇の未来を見通しての閃華が送る眼差しなのだろう。だが、それをぶち壊す者がいる事を忘れてはいけない。
「昇、昇」
「ととっ、……ミリア、いい加減に後ろからいきなり抱きつくのをやめない」
「そんな事より、終わったならさっさと帰ろうよ。お腹空いた」
「ミリア、あれだけ夕食を食べてまだ食べるつもり」

呆れた顔をしてミリアを昇から引っぺがす琴未がそんな事を言ってきたが、ミリアは不服そうに言い返す。
「だって、これだけ暴れたんだもん。お腹だって空くよ」
「精霊なら全力で戦っても数日は持つ」
「空いたものは空いたの！」
シエラの言葉に思いっきり反論するミリア。だが最早反論にすらなってないミリアのワガママにさすがのシエラも頭を抱える。
あははっ、なんか、いつもどおりになってきたな。
先程までの戦闘で重くなっていた空気も一気にぶち壊され、いつもの雰囲気に戻って行く中で閃華は突如、何かを感じ取ると全員に向かって叫ぶ。
「いかん、皆、散るんじゃ！」
突如叫ぶ閃華、その言葉に真っ先に反応したシエラは手近にいるミリアの手を取り空中へ。閃華も昇と琴未の手を取ると、その場から思いっきり飛び退く。
そして昇が目にしたのは、今まで居た場所に炎が走っていく光景だった。

第七十二話　エルク戦開始（後書き）

……えっと、とりあえずごめんなさい。いやね、よく見たら七月はほとんどエレメを上げてないんだよね。……エレメを楽しみにしていた方には本当にごめんなさい。

さて、一応謝ったところで許しも出たと勝手に思い込みます。もちろん、意義は受け付けません。……だって、しょうがないじゃん。七月はいろいろとあったんだもん。さらに言うと八月もいろいろとありそうなんだもん。だから皆さん、覚悟して置いてくださいね。ちなみに、私はもう開き直りました。

。・゜・（Д、（（⊂（゜Д゜。つ(

ぐふっ、ふっ、なかなかのものをもってるな。……まあ、そんな戯言は置いておいて今回は長くなったな。

やっと本題に入ったところで、いやね、このエルク戦は一話で終わらせる予定だったから、まあ予定通りなんだけど。……気が付いたらもの凄いページ数に。まあ、紆余曲折でもあったと思ってください。

そんな訳で、次回から純情不倶戴天編のラストバトルに入ります。……ようやく終わりが見えてきた。まあ、そんな訳で純情不倶戴天編も後数話で終わりそうです。……ということは、そろそろ次回のプロットも上げとかないとなんだよな。まあ、なんとかなるでしょ。

。・゜・（Д、（⊂（゜Д゜。つ(

ぐはっ、ごめんなさい。なるべく全力をつくしますのでご容赦下さい。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、つーか今回はマジで長くなりすぎたなと思ってる葵夢幻でした。

第七十三話　責任

閃華に引っ張られるようにして強制移動させられる昇。だが昇はその中で炎の発生源を発見した。

あれは、竜胆さん！

竜胆は灼熱斬馬刀を地面に叩きつけて、そこから昇達が居た場所に炎が走っていた。明らかに昇達に対しての攻撃だ。

……そうか、まだ終わりじゃないんだ。僕は、エルクを倒せなかった責任を取らないといけないんだ。……風鏡さんに対して。

強制的に跳んだとはいえ、なんとか無事に着地する昇と普通に着地する琴未と閃華。そこにミリアを連れたシエラが舞い降りてくる。

「あっちは完全にこっちを敵視してる。昇、どうする？」

「それにしてもいきなり攻撃してくる事は無いでしょ！　もう少し礼節って物を！」

「琴未、奇襲をするのにわざわざ挨拶してくるバカはおらんぞ」

「それよりご飯は、ご飯～！」

皆が、それぞれの意見を行っている間に昇は風鏡に対して、どうしたらいいものかを考えていた。

正直……考えが甘かった。エルクがあそこまで強いなんて思わなかった。完全に僕達の油断だ。もう少し情報があれば戦況は違ってたのに。

……いや、今更そんな事を言ってもしょうがない。僕は僕が出来る事をするしかない。それが……僕の出来ることだから。それが風鏡さんの意に反しても、僕はそれを貫かなくちゃいけないんだ。それが唯一……僕が風鏡さんに出来ることだから。

鋭い眼差しをシエラ達に向ける昇。そのことが昇の意を示していたのだろう。

「皆、ごめん、もうちょっと付き合って」

真剣な表情で話しかけてきたので、シエラ達も口を閉ざして昇に

視線を集める。
「今回の事は……完全に僕の失敗だ。だからこそ、風鏡さんに対して責任と取らないといけないと思うんだ」
「けど、謝って許してもらえる雰囲気じゃないわよ」
琴未の言うとおり、風鏡達は完全に昇達を敵視している雰囲気を出しながら、ゆっくりとこちらに向かってきてる。
「もちろん、僕も謝るつもりは無い。これは僕の意思でやったことで風鏡さんは関係ないから」
「昇、そういう発言は控えた方がいい。人によっては自分勝手に思われる」
「分ってるよ、シエラ。けど、風鏡さんだけには……どんな風に思われようと自分の意思を貫きたい」
「それは風鏡殿のためか、それとも自分のため、どっちじゃ？」
妙な笑みを浮かべて意地悪な質問をしてくる閃華に琴未は文句を言うが、昇ははっきりと答える。
「両方！」
その答えに閃華は軽く笑い、シエラは微笑を向けて、琴未は溜息を付き、ミリアはワケが分らないという顔をしている。
「このまま風鏡さんが復讐を遂げるようなことは、絶対にやっちゃいけないような気がする。もしそんなことをしたら、風鏡さんまで死んでしまいそうだから。それに、僕は自分の意思でエルクを倒すと決めた。これ以上、エルクの被害者を出さないために。だから、皆には悪いけど、もう少し付き合って」
はっきりと断言する昇にシエラは微笑みながら答える。
「私達は昇と契約を交わした精霊。だから昇の意思は私達の意志。だから私はどこまでも、昇に付いて行く。絶対に離れる事無く」
「シエラ」
シエラの言葉に昇は少しだけ安心した顔を見せる。だが、シエラにいい所をもって行かれて不満な琴未はそれを表に出さずに、二人の間に割って入る。

「まっ、私は人間だけど、このままシエラ達にいい所を持っていかれるのもしゃくだし、それに昇の事は昔から私が一番分ってるから。だから昇、自分の信じた道を進んで。もし、邪魔な物があるなら私が蹴散らすから」

「琴未、ありがとう」

琴未も琴未でなかなか良い雰囲気を作り出す。その事にシエラは少しだけ不満そうな顔になるが、ここはぐっと堪える事にした。今の状況で雰囲気を壊すと士気に関わると思ったからだろう。

だが二人とも忘れている。この中には全ての雰囲気をぶち壊す者がいる事を。

「昇～」

昇の後ろから袖を引っ張ってくるミリア。昇はそんなミリアに振り向くと微笑を向ける。

「どうしたの、ミリア」

今までの雰囲気が良かった所為だろう。昇はミリアの頭を撫でながら優しい笑みを向ける。だが、ミリアはまるで捨てられた猫のように昇を見上げて一言。

「ご飯はおあずけ？」

「……」

さすがに笑顔のままで固まる昇、シエラは呆れたように溜息を付いて頭を抱え、琴未に至っては豪快にずっこけている。

「さすがは地の精霊じゃな。まさか大地だけではなく、せっかくの雰囲気まで破壊するとはのう。まさにフラグクラッシャーじゃな」

「突っ込むところはそこじゃないでしょ！　というか何、フラグクラッシャーってなにっ！」

勢いよく立ち上がり閃華に突っ込む琴未。閃華はそんな琴未を制しながらミリアに近づく。優しく頭を撫でる。

「ミリア、これからの一戦は昇と風鏡殿が己の決意を貫くための戦いじゃ。じゃからもう少し我慢してくれ」

静かに語りかける閃華にミリアもそれなりに感じる物があったの

だろう。すんなりとご飯の事は諦めたようだ。
そして閃華はミリアをどかして昇の隣に並ぶ。
「それでどうするんじゃ昇。相手は邪魔されて話し合いが通じる相手ではないんじゃぞ。ここは力付くでねじ伏せるしかあるまい」
だが昇は頭を横に振る。
「いや、それ以外に何かしら手があるはずだよ。それに……復讐なんてしたら自分自身まで殺してしまう。僕はそんな事を……風鏡さんにさせたくない」
その言葉を聞いた閃華は目を細める。
（どうやら昇は分かっておるようじゃな、復讐が成す意味を。……じゃが昇、風鏡殿の思いは純真じゃ。じゃから昇が風鏡殿の心を理解できるかが、この戦いの鍵じゃな）
たぶん、この時点で昇の意思と風鏡の心を理解しているのは閃華だけだろう。それは閃華が昔に経験した事が風鏡の心を教え、昇やシエラ達と築いてきた絆が昇の意思をしっかりと閃華に伝えていたからかもしれない。
その後、妙に静かになる昇達。そんな昇達の前に風鏡達が言葉の届く距離に到着した。

「よくも人の決闘に横槍を入れてくれましたね」
最初に会った時とは別人のような雰囲気を出しながら昇に語りかけてくる風鏡。その雰囲気はまるで研ぎ澄まされた刃のようだが、昇はそんな風鏡に動じる事無くしっかりと返事を返す。
「確かに結果的にはそうなったかもしれません。ですか、あなたがあなたの意思で戦っているように、僕も僕の意思で戦いました」
「その結果がエルクに逃げられるというものですがね」
挑発というべき風鏡の言葉にも昇は表情一つ変えずに返答する。
「確かに僕の不甲斐無さでエルクを倒す事が出来ませんでした。ですが、それは僕とエルクの戦い。風鏡さんには関係ないと思います

が」
「なに勝手な事を言ってるのよ！　大体あの挑戦状だって元々はふ……」
　激昂する竜胆を制して風鏡は冷静に昇と向き合う。
「ですが、あなた達の勝手な行動でエルクを逃した事は事実。その責任はどう取ってくれるのですか？」
　鋭い睨みを利かせてくる風鏡。そんな風鏡に昇は武器をツインブレイドから二丁拳銃に戻すと片方の銃口を風鏡に向ける。
　その事に戦闘体勢に入ろうとする両陣営だが、昇と風鏡がそれぞれを制す。
「何の真似ですか？」
　冷静に、そして冷たく言い放つ風鏡。そんな風鏡に昇はしっかりとした意思を視線と言葉に込める。
「これが答えです。そして……僕がここに来たもう一つの目的です」
「もう一つの目的？」
「ええ、ここで……あなたを止める事です」
　さすがに驚きの表情を隠せない風鏡。それはそうだろう、昇の発言は……宣戦布告なのだから。
「なにを、いや、そんな事をしてあなたに何の意味があるのです」
　先程の宣戦布告が示している意味が分からないのだろう。風鏡は少し動揺しながら、昇に問いただす。
　だが昇はすぐには答えずに、少しの間目をつぶる。それはほんの数秒だったかもしれないし、もっと長かったかもしれない。だが再び目を開けたときの昇の瞳には何の迷いも無く、強い意志だけが宿っていた。
「正直、僕がいくら考えても風鏡さんの気持ちは分らない。けど、このままだと風鏡さんは自分までも殺してしまう。僕は、そんな風鏡さんを黙ってみているわけには行かない」
「例えそうであっても、私がどうなろうとあなたには関係ないでしょ！」

昇の行動が分らない風鏡は明らかに動揺しているように声を荒げる。まあ、それはそうだろう。出会って数日も経たない人のために昇は命がけの戦いを申し込もうとしようとしている。そこまでして自分を止めようとしている理由が風鏡には見つからない。

だが、昇にはしっかりとした理由がある。

さっきのエルクでも、そしてロードキャッスルでも、僕は誰一人助ける事は出来なかった。確かに僕は凡人で無敵のエースにはなれないかもしれない。けど……自分の目の前でもう悲しい出来事は見たくないんだ！

「僕は目の前で風鏡さんが復讐の代価を払うのは見たくない。それは凄く……悲しい事だと思うから。だから、僕が戦う理由はそれだけで充分です」

その言葉に今度は風鏡が目をつぶると、すぐに鋭い瞳を昇に向けた。

「どうやら、これ以上の言葉は必要ないみたいですね」

「そうかもしれません。それでも、僕はあなたを説き伏せてみせる。たとえ、力づくでも」

「言ってる事が支離滅裂よ」

「同じです。倒して見せます。あなたも、そしてあなたの心も！」

「……なら、やってみなさい！」

一旦距離を置くために大きく後ろに跳ぶ風鏡、竜胆と常磐もそれに従い、昇達と距離を置く。

相手が一旦退いた事で昇達はそのままで距離を保つ。どちらとも戦闘準備が出来ていない以上は多少の作戦会議をする時間が必要だ。だが、あまり時間も取れない。もちろん、先に先手を打った方が有利になるからだ。

その事を理解している昇はシエラ達の方へと振り向く。

「琴未、ミリア。エレメンタルアップ無しで常磐さんの相手を出来る？」

率直に意見を聞いてくる昇。時間が無い以上は無駄な説明をして

いる暇は無い。それを察している琴未も正直な意見を返してきた。
「正直、自信が無い。あの常磐って精霊は技を駆使してくるタイプだから。私はともかく、ミリアがどこまで付いて行けるか分らないわよ」
「分った。なら琴未が先行して常磐さんとぶつかって。ミリア、琴未の援護は出来そう？」
「シエラよりスピードが遅いから大丈夫だと思うよ」
さすがにこの発言にはミリアを睨み付ける琴未。どうやらシエラと比較された事をねたんでいるんだろう。
だがそれもしょうがない。なにしろ、この二人が組むのは初めてなのだから。普段はスピード重視のシエラに援護として重装甲のミリアが付いてバランスを保ち。まだ未熟な琴未には閃華が付いてフォローしている。
それが普段の連携なのだが昇はあえて、その連携を崩してきた。だが、昇がそうするにはちゃんと理由がある。
「二人とも、常磐さんを倒す事は考えないで」
「どういうこと？」
「後で全部説明する。シエラ」
「なに？」
今度はシエラに振り向く昇。
「エレメンタルアップを少し絞った状態で、あの竜胆さんと一人で渡り合える？」
少し考え込むシエラ。だが、すぐに答えを出してきた。
「あまりエレメンタルアップを少なくされるとキツイ。あの斬馬刀を相手にしてだと、どうしてもかなりのスピードアップを要求すると思うから」
「分った。エルクと戦ってたときぐらいの力なら、なんとかなる？」
「それだけあれば充分」
よし、これで竜胆さんと常磐さんは抑えられる。後は、一気に攻め込むだけ。

「じゃあ、琴未とミリアは常磐さんを、シエラは竜胆さんを押さえ込んで。倒す必要は無い。ただ風鏡さんの援護に回れないようにして。その間に僕と閃華が風鏡さんを倒す。それで終わりにしよう」
一気に説明する昇。ミリアは追いついていないようだが、琴未が代わりに補足してやり、シエラはすでに宙に羽ばたいている。
「皆、準備はいい？」
最後に全員に振り向く昇。シエラ達もそれぞれの答えを返してきた。
「大丈夫、任せて」
「まあ、何とかしてみせるわ」
「頑張るよ～」
「では、行くとしようかのう」
頷く昇。そして風鏡達に振り向くと合図を出して昇達は駆け出して行った。

風鏡達に向かいながらも昇は指示を出していく。
「シエラと琴未は先行して二人を引き離して。ミリア、琴未を運んであげて」
「分った」
シエラは返事を返して一気に急上昇するが、一方の琴未はあまり乗り気ではないようだ。それでもミリアはアースシールドハルバードを地面に付き立てる。
「琴未、行くよ！」
「ちゃんと狙いなさいよね」
「大丈夫」
そう返事を返してくるミリアだが、やはり琴未は心配そうだ。そんな琴未の心境をミリアが察するわけも無く、手加減無しで一気に力を地面へと流し込み、琴未の足元から常盤までの砂浜を一気に硬化させて一直線の道を作る。

「いっけー！」
ミリアは地面に突き刺したハルバードを抜き取ると、今度は先程作り出した道に向かって振るう。
「自動なんとかアースウォーカー！」
その途端、一気に加速する琴未。いや、正確に言えば琴未が加速したのではなく。琴未が乗っている硬化した地面が動き出した。しかもかなりのスピードで琴未を運んでいる。自動歩道の精霊バーションとでも言うべきなのだろうか。どちらにしても、琴未が乗っている道が高スピードで動いていることは確かだ。
だが、乗っている琴未はいきなり急加速したことにバランスを崩しそうになるが、なんとか体勢を取り直して方膝を付く。
「ミリア、手加減って物があるでしょ！」
いきなり急加速した歩道に乗せられたのだから、琴未が文句を言いたい気持ちも分らなくないが、かなり加速が付いているため文句がミリアに届く事は無かった。
だがそのおかげでもうすぐ常磐に迫れる。けれども琴未の頭にはふとした疑問が過ぎる。
（これって……止まってくれるわよね？）
心配になり後ろを振り向く琴未は絶望する。なにしろ、かなり距離は離れてた位置でミリアも加速している道の上に乗っている。ということはつまり、この加速する歩道は現在誰も制御していないと言う事だ。
「ミリア――っ！」
文句を叫びに変えるがどうしようもない。
しかたなく、加速する歩道上で常磐に狙いを付ける琴未。そして歩道の終わりが迫り、道が途切れる寸前に常磐に向かって雷閃刀を振り上げたまま跳んで突っ込む。
歩道の勢いがあったからか、かなりのスピードで常磐に突っ込んでいくが所詮は一直線に加速しただけ、常磐が少し体をずらしただけで琴未は常磐の横を猛スピードで通り過ぎて行き。砂浜に足が付

くと、砂浜を削りながらなんとか止まる事が出来た。
「あなた達はなにがやりたいの？」
さすがに敵とはいえ常磐も呆れた表情を隠しきれない。だが、そんな常磐に向かって琴未は笑みを向ける。
「もうすぐ分るわよ」
その琴未の笑みに常盤も真剣な表情に戻り、風陣十文字槍を琴未に向かって構える。だが琴未の狙いはまだ先にある。というか、先程の仕返しだろう。
（狙いは一瞬だけ、しくじれば後は力押ししかないわね。なんとか決めないと！）
琴未も雷閃刀を構えて二人は戦闘体勢に入るが、常磐はちゃんともう一人の存在を忘れていない。もちろん、未だに加速する歩道で移動してくるミリアである。だが、常磐が背を向けているため、ミリアも攻撃のチャンスだと思ったのだろうアースシールドハルバードの矛先を向けて突っ込む。
歩道の終わりと共に一気に跳んで常磐に突っ込むミリア。そして、誰もが予想したとおりに常磐はちょっと移動すると、猛スピードを制御できないミリアは常磐の横を通り過ぎていく。
「だから」
「甘いのよ！」
ミリアに気を取られた間に常磐に突っ込む琴未。当然、常磐もミリアだけに気を取られて琴未の事を忘れていたワケではない。
常盤も風陣十文字槍を縦に構えて防御の姿勢に入る。普通なら刀より槍を持つ常盤の方が有利なのだが、常磐はあえて防御の姿勢に入った。それはミリアに気を取られて初動が一瞬だけ遅れたからだ。
その隙に琴未は一気に常磐の懐に入ってくると読んだから、常磐はあえて防御に出た。
だが琴未が本当に狙っていた真の目的は常磐に防御させる事だった。
（思ったとおり、これで槍を突き出してくることは無わね。後は一

気に決める！）

常磐に迫る琴未。その途中でミリアが琴未の横を通り過ぎる。と、常磐も思っただろう。

だが琴未はミリアが横に入る寸前に雷閃刀を消して素手でミリアを掴むと、片足を軸にして勢いを殺さずに一回転する。そして常磐に狙いを定めるとミリアを掴んでいた手を離す。

「必殺、ミリアアタック！」

常磐に向かって飛んでいくミリア。先程までのスピードをほとんど殺していない事と、かなりの近距離まで詰めていた事で、もはや常磐には避ける事は不可能。そのため、猛スピードで突っ込んできたミリアを直撃する。だがそれだけでは収まらず、ミリアと一緒に風鏡から離れた方向へと飛んで行ってしまった。

さすがの常磐もこんな馬鹿げた攻撃をしてくるとは思って無かっただろう。十文字槍でなんとかミリアを受け止めたものの、その勢いだけは殺しきれなかった。そのため、ミリアと一緒に明後日の方向へと飛んでいく羽目になったようだ。

「よし、狙い通り！」

一人、満足な琴未は再び雷閃刀を手にすると、そのままミリアと常磐を追って駆け出していった。

「常磐！」

さすがにあんな馬鹿げた攻撃をしてくるとは風鏡達はおろか昇達すら予想できなかった。

そのことで常盤のフォローに回ろうと竜胆が動くが、すぐにその場で止まり風鏡を遠ざける。

そして次の瞬間、頭上から猛スピードで突っ込んできたシエラのウイングクレイモアを灼熱斬馬刀で受け止める。

重力とエレメンタルアップでかなりのスピードを得ていたシエラのウイングクレイモアと直撃したのだから、その衝撃は一気に竜胆

へと圧し掛かり、周りへも衝撃波となり砂浜を陥没させる。
「ぐっ、前より……重い」
「当たり前、前は見せなかったけど、これが昇の能力、エレメンタルアップの力」
「エレメンタルアップ！　あの子、そんな力を隠してたの！」
さすがに驚きの表情でシエラの攻撃を受け止める竜胆。それでもシエラの攻撃を受け止めきると、すかさず反撃に出る。
一気に燃え上がる灼熱斬馬刀。さすがに距離を取るシエラ。斬馬刀だけならともかく、あの炎まで相手にするには長時間も近距離に居るのは危ない。
あの斬馬刀が炎の属性を帯びているのは先程確認済みだ。だからこそ、シエラはスピードを生かした攻撃に切り替える。それでもスピードだけではあの斬馬刀をどうにかできないのは以前の戦闘で経験済みだ。
なにしろ竜胆の斬馬刀はああ見えても切り替えしが早い。だからこそ、うかつに飛び込めば斬馬刀に叩き斬られる事は目に見えている。
だがエレメンタルアップ状態のシエラなら充分に竜胆の斬馬刀と打ち合うことが出来る。
一旦距離を置くシエラ。だがエレメンタルアップでかなり加速しているシエラは、竜胆との距離はかなり開いた。
ここまで開けば詰めて来る間に時間が出来るのは必至。だからこそ、竜胆も斬馬刀を構え直してシエラを睨み付けるが、そのシエラが一瞬にして姿を消す。
いや、正確には低空で竜胆に迫ってきてる。シエラが低空で飛んでいるため、その風切りの影響で砂浜の砂が舞い上がってる。そのため、竜胆もシエラの姿は捉えられないものの、こちらに向かってきてる事は察した。
だがそれだけで、それ以上の時間は無かった。竜胆が気が付いた時には自分の斬馬刀とシエラのウイングクレイモアがぶつかり合っ

ていた。そこでシエラは更に追い討ちを掛ける。
「フルブースト！」
低空で真横からではなく、少し相手を打ち上げるように切り上げていたものだから。竜胆はどうしても上に押し上げられて、踏ん張りが効かなくなって来る。そこにブーストを掛けて更に竜胆を押し上げようとしているのだから、とても踏み止まれるものではない。
その場に留まり続けられない竜胆はシエラに押されるままに風鏡から離されて行った。

「これであらかたの大勢は決したのう。常磐は琴未とミリアが、竜胆はシエラが風鏡殿から遠ざけた。こうなってしまってはもう目の前の相手をするしかないからのう。上手く先手は打てたようじゃな。それで昇、これからどう進める？」
ここまで体勢を作ってしまえば昇達はそんなに急ぐことも無いのだろう。すでに駆けているのではなく、歩きながら風鏡に向かっていた。
そんな中で閃華は一人、昇に問い続ける。
「それにじゃ、先程のエルク戦でシエラが疲れてるのだとしたら、ここは私ではなく琴未を連れて行くところでないのか？　琴未とも一緒に鍛錬をしておったんじゃろ。なぜ、わざわざ私を選んだんじゃ？」
確かに昇との連携を考えたのだとしたら、ここは琴未と組んだ方が連携が取りやすい。なにしろ、昇は無理矢理、まあ、最近では自主的になってきたが二人に鍛えてもらっている。だからこそ、シエラと琴未の思考を読むことが出来て、連携も取りやすくなる。
それなのに今回は閃華を選んだ。そのことの意味を聞いてくる閃華に昇は笑みを向ける。
「たぶん、閃華が考えてる事と一緒だよ」
「……」

一瞬の沈黙。閃華は驚いた表情をするがすぐに笑い出す。
「くっくっくっ、随分と一人前な口をきくようになって来たのう」
茶化すような物言いで答えてくる閃華。だがそんな閃華に昇は真剣に答える。
「たぶん、これが閃華に出来る、たった一つの事だと思ったから。閃華は今でも小松さんを止められなかった事を悔やんでる。それはそれでいいと思う。もうどうしようもない事だから。けど、風鏡さんは違う。今からでも間に合うから」
つまり、それこそが閃華の悩み続けた根源。閃華がずっと気にしてたのは小松のことではなく、あくまでも風鏡の事だった。それは小松と言う前例があるからこそ、風鏡を止めたい気持ちに駆られた。だが他人の自分が出て行く幕ではない。だからこそ、閃華は全ての思いを胸の内に秘めようとしていた。
だが出来なかった。胸の内に封じ込めたいと思ってはいたが、どうしても抑えきれない衝動に駆られる。その度に、閃華は小松の最後を思い出していた。
だからこそ、風鏡を止めたいと思っていただろう。もう二度と、小松の悲劇を繰り返さないために。
だが、それはあくまでも閃華のワガママだ。それを他人である風鏡に押し付けるわけには行かない。それでも小松のような悲劇を見たくないことも確か。そんな葛藤をしている内に事態は閃華の知らぬ間に事は進んで行ってしまった。
「たぶん、こうすれば閃華の迷いも晴れると思ったから」
「つまり、エルクを倒せば風鏡殿の復讐は目的を失って意味を成さず。失敗しても力づくで、風鏡殿を説き伏せれば私の迷いは消えると思ったんじゃな」
「うん……余計な事だったかな？」
少し心配そうで閃華を覗き込む昇。だが、閃華はそんな昇に笑みを返した。
「いや、ありがとう。そして、すまなかったのう」

「えっと、どうして閃華が謝るの？」
ワケが分らず少し驚いた表情をする昇に閃華は微笑みかける。
「私は……もっと信頼すべきじゃった。昇達の事も、そして小松の事も。どこかで信頼して、いや、信用しきれていない部分があったんじゃろ。だからこのようなことに、私がもっと昇達を信頼していれば」
「それは違うと思うよ」
閃華の言葉を遮り、今度は昇が微笑みかける。
「閃華は僕達を信頼してないからいつでもフォローに回れるようにしてくれている。それが僕の知ってる閃華だよ。だから閃華は、今の閃華でいいと思うよ」
「……くっくっくっ、あははっ」
えっ、どうして笑われるの！
突然笑い出した閃華に驚く昇だが、うっすらと閃華の目に涙が溜まっている事には気付いていないようだ。
（そうじゃな、それが私じゃ、私のやり方で生き方じゃ。今まで当然のようにしてきた事なのに、今更そのような事に気付くとはのう。……そうじゃ、あれはあれでよかったのかもしれない。あれが、私の精一杯じゃったのだから）
現在も、そして昔も閃華の戦い方は何一つとして変わっていない。いつでも周辺を見ており、誰かのフォローに回れるようにしている。それが閃華の戦い方だ。そして生き方でもあったのだろう。
周りに絶対の信頼を置かずにいつでも自分がフォローできるように動く。それが閃華のやり方だ。だからこそ、昇も、そして小松も閃華を信頼できた。いつでも閃華が見ていてくれると言う安心感があるからだろう。
絶対の信頼を置かない事で、絶対の信頼を得る。それが閃華という精霊なのだろう。
笑いを止めた閃華は昇に気付かれないように目を軽く拭うと、風鏡に向かって鋭い視線を向ける。

「では、行こうとするかのう。風鏡殿への責任、それを果たしに」
「うん、エルクを倒す事が出来なかった以上、風鏡さんを止めるのが僕達の責任だから」
それからは無言で歩き続ける昇と閃華。その中でも閃華は少しだけ遥か昔に思いをはせていた。
（小松、私は未だに小松がそのような行為に及んだのかはよく分かっておらんのかもしれん。じゃがな、はっきりと分ったぞ。小松は……自分の業を私にまで背負わせる気は無かったと言う事がな。じゃからこそ、私達は道を違えたんじゃな）
確かに閃華と小松は道をそれぞれに分けた。道勝が死んで以来、小松は道勝の敵を取るための道。閃華は小松を幸せにする道。どちらも互いを思いやり、強い絆で結ばれていた。
だからこそ、二人の道は違うものとなった。
小松には子が居なかった。そうなれば林家も断絶、そのうえ放逐されたからには閃華が小松に仕える意味が無い。だからこそ、小松は閃華に自分の道に戻ってもらいたかったのだろう。本来の精霊としての道へ。
だが閃華の意思はそれとは間逆なものだった。残された小松の人生を精一杯、閃華は小松に生きて欲しかった。
どちらとも相手を思いやる純真な思いから出てきたことだ。だからこそ、二人は道を違えるしかなかったのかもしれない。
（違えた道、もう戻す事は出来ない過去。じゃが、目の前に小松と同じ道を進もうとしている者が居る。それを踏み止ませることが私の願いじゃったのかもしれん。そして昇達は私のためにその道を作ってくれたんじゃ。もう迷う必要は無い、後は突き進むだけじゃ）
無言で歩き続ける昇達、そしてお互いの言葉が聞こえる範囲で昇達は歩みを止めた。
「ここまでです、風鏡さん。あなたに復讐をさせるわけには行かない」
「どうあっても邪魔をしたいみたいですね。竜胆と常磐が私から離

れた以上、後は私を倒すだけですか。そこまで私の邪魔をしてあなたに何の得があるのです」

「別に損得でやってるわけじゃないです。僕はただ、あなたが復讐をする姿を見たくない。それだけです」

二丁拳銃を構える昇。それでも風鏡は長刀を構えようとせずに、長刀を強く握り締めて涙を見せる。

「それだけ、たったそれだけで私の邪魔をするの。あなたに……あなたになにが分るって言うの！」

長刀を構える風鏡。閃華も昇の前に出ると龍水方天戟を構える。

「……確かに昇がやってる事は風鏡殿にとって邪魔でしかないじゃろ。じゃがな、昇はそこまでしてまで風鏡殿に復讐をして欲しくは無いんじゃ。分ってくれとは言わん。じゃが、知っておいて欲しいのじゃ」

「だからなんだって言うの！　あいつは、エルクは私の目の前で拓也を殺したのよ！　実験動物のように無残に！　そんな奴を許せるわけが無い、だから……私の手で消してやる。永遠に！」

恨み、憎しみ、殺意、それらを瞳に強く宿らせながら風鏡は昇達に向かって睨みつけてくる。それを見ても、昇の瞳から強さが消えることは無かった。

「確かにあなたの行動にどうこう言うのは僕の勝手かもしれません。けれど、あなたの幸せを望んでいる人がいる。それだけでも、あなたは幸せな未来を掴まないといけないんです」

真剣な面持ちで言い放つ昇。だが風鏡は笑い飛ばすだけだ。

「どうやら私の身辺については調べていないようですね。今の私には両親も兄弟も居ない。孤立無援だった。そんな中で拓也だけが私の傍に居てくれた。だから、今の私にはそんな人は居ないのよ！」

「居ます！　それは風鏡さんが気付いていないだけです」

「なら誰なの！　それを教えて」

「ええ、教えてあげます。けど、それは言葉ではなくこれで」

銃口を風鏡に向ける昇。その事に風鏡も笑い出す。もうその瞳に

は狂気しか宿っていない。
「結局、あなたはそうやって自分のワガママを貫くだけでしょ。なら私も、邪魔する者は全て倒す！」
長刀に一気に力を流し込む風鏡。その力はかなりのもので力がオーラとなり長刀を包み込むほどだ。
「さあ、行くわよ。氷雪長刀（ひょうせつなぎなた）」
「閃華」
それを見て昇も閃華の名を叫び、自分の能力を発動させる。
閃華から一気に昇の元へ伸びてくる赤い紐を掴む
あれっ？　なんかいつもより太いような。
そんな事を一瞬だけ気にしたが、風鏡はすでに攻撃態勢に入っている。悠長に考えてる暇は無い。だからこそ、昇は高らかに叫ぶ
「エレメンタルアップ！」

第七十三話　責任（後書き）

そんな訳でお送りしました、エレメの七十三話はいかがでしたでしょうか。正直に申しますと、私的にはちょっと自分の腕の無さを実感しました。伝えたい事を上手く伝えられていないんじゃないかと。そんな感じですが、たぶん、これが現在の私にとって精一杯なのでしょう。だからこそ、今回の教訓を活かして次につなげたいと思ってます。

さてさて、話は変わりますが……琴未とミリアを組ませたら意外と面白い？　とか思っちゃってます。……いや、自分で書いておきながら「必殺、ミリアアタック！」が結構気に入ってしまいました。書いている時にはニヤニヤしながら書いてたぐらいですから。

さて、純情不倶戴天編もラストバトルに入ったことですし、そろそろ終わりが見えてきましたね。そんな訳で、そろそろ次のを作り始めないとなとか思ってるんですがね、ついつい後回しに……そろそろ始めないとヤバイかな。でもまあ、いつもの事なのでなんとかなるでしょ。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、九月ぐらいからいろいろと忙しくなりそうな葵夢幻でした。

第七十四話　雷と風と大地

「ふにゅ～～～」
常磐を風鏡から引き離すためにミリアが身を挺しての体当たり？
そのおかげでなんとか風鏡から常磐を引き剥がす事に成功したが、肝心のミリアは目を回していた。
まあ、しかたないだろう。琴未が後先考えずに放った攻撃だし、ミリアも後先考えずに突っ込んで行って琴未に投げ飛ばされたのだから、ある意味では自業自得と言えるかもしれない。
けれでも一番の被害者はミリアの下にいる。
「いい加減に、どきなさい！　あんた重装の精霊武具だから重いのよ！」
ミリアを蹴飛ばしてどかすと、やっと立ち上がる常磐。そして風鏡の方に目を向ける。
「あ～ぁ、だいぶ離されたわね。急いで戻りたいんだけど……そうはさせてくれないんでしょう」
「もちろん」
雷閃刀を手に二人の後を追って来た琴未が答える。常磐も琴未に目を向けると風陣十文字槍を強く握り締めた。
「それにしても油断したわ。まさか、あんな馬鹿げた攻撃をしかけてくるなんて思っても無かったわ」
「奇襲は馬鹿げてるほど通用する物よ！」
「……いや、それは違うんじゃない」
はっきりと言い切る琴未に対して常磐は少し呆れたような返事を返した。それから常磐は気を取り直すと、鋭い眼光を琴未に向ける。
「それで、私の相手はお嬢ちゃんがするわけ？」
「私一人じゃなくて、もう一人いるでしょ」
「未だに目を回して地面に突っ伏してるその子の事？」
笑みを浮かべながら地面のミリアを指差す常磐。常磐が言ったと

おりの状態であるミリア。このままでは確実に戦力にならない事は確かだ。
　情けないミリアの姿に琴未は溜息を付くと、しかたなくミリアを起こしに掛かる。
「……しかたないわね、目を覚まして上げるわよ」
　そう言って琴未は雷閃刀の切っ先をミリアに向けると、細い一本の雷が放たれてミリアに直撃する。琴未としては軽い雷撃を入れてミリアに気付けをしたつもりだが、ミリアはピクリとも動かない。
……あれ？　もしかして強すぎた？
　確実に強すぎたみたいでミリアは気を失っている。
「……」
「……」
　静寂がその場を支配して、海風が琴未と常磐を撫でていく。
……よし！
　琴未は雷閃刀を構えると常磐に向かって叫ぶ。
「さあ、行くわよ！」
「って、この子は！」
　未だに地面に突っ伏して気を失っているミリアを指差して突っ込む常磐。だが琴未は胸を張って答える。
「精霊だから大丈夫！」
「そういう問題じゃないでしょ！　精霊でも痛いものは痛いのよ！」
「じゃあ、ミリアだから大丈夫！」
「えっ、いやっ、そうなの？」
「そうなの！」
「そうなのね」
　まったく説得力が無い琴未の言葉に何故か納得する常磐。
　常磐が納得した事で、二人とも地面に転がっているミリアを無視して精霊武具を構える。今度こそ本気で戦闘に入るつもりなのだろう。二人とも鋭い眼差しを相手に向ける。
「風の精霊、常磐。主のためにそこを通してもらうわ」

「雷の契約者、武久琴未。昇のために絶対に通させはしないわよ」
互いに名乗りを上げて相手の隙を窺う。だが琴未はまったく打ち込める気がしなかった。それほど常磐には隙が無い。
まっずいな、相手は槍だから下手に打ち込めば簡単に返されちゃうかな。まあ、あの斬馬刀よりかはやり易いと思うけど、それでも一人でやるのはキツイかな。
自分でトドメを刺しておきながら、そんな事を思う琴未。だが相手の隙が見つからずに先手を打てないのは琴未だけじゃなかった。
常磐も琴未の動向を窺っている。
（前は足場の悪い岩場に誘い込んだから、それなりに余裕があったけど。さすがにこの状況だと余裕は無いわ。それに……風の属性より雷の属性の方が早い。下手にこちらから撃てば必ず隙を付いてくる事は確かね）
もし、常磐が風の属性を使った攻撃を放って琴未に避けられたら、琴未は必ず攻撃直後で動きが取れない常磐に向かって雷を放ってくるのは確かだろう。まあ、それだけでは大したダメージは受けないが、その後に懐に飛び込んでくるのは確実だ。
琴未としては飛び込んでしまえば常磐の十文字槍を封じ込める事が出来る。だが逆に言えば、琴未の雷閃刀が届かない距離で戦えば常磐が有利に持っていける。もし、無理に懐に入り込もうとしても常磐の精霊武具は十文字槍だ。横にも突けるし、斬り裂くことが出来る。
だがそんな無茶は琴未はしないだろう。
こうなってくると遠距離での撃ち合いになりそうだが、それは常磐が許さない。風の属性よりも雷の属性の方が放った後のスピードがはるかに違う。たとえ琴未が撃ち遅れても、それを挽回するだけのスピードを雷の属性は持っている。
常磐としては互いの属性を撃ち合うぐらいなら接近戦に持っていくだろう。
（う～ん、そうなってくると突っ込んできてもらった方が早いんだ

けどな。……少し挑発してみるのもいいかもしれないわ。あの子って結構、単純みたいだし。引っ掛かる可能性が大きいわ）

そう思って常磐が口を開こうとした時、琴未が一気に飛び出して距離を詰めて来る。

（あらっ、まさか自分から突っ込んでくるなんてね。けどこれで、一気に決められるわね！）

常磐も十文字槍を水平に構えると、いつでも突ける体勢に持っていく。それでも琴未はスピードを落とす事無く突っ込んで来て、常磐の間合いへと入る。

その瞬間に一気に突き出す常磐。胸と腹を狙った二段突き、だが琴未は体を横にずらして常磐の槍を避ける。

（無駄よ！）

すぐに体を退いて槍を引き戻す常磐。琴未が避ける時にスピードをあまり落とさなかった為、結果的に琴未は斜め前に移動した形になり雷閃刀が届く距離にまで一気に持って行ったからだ。

雷閃刀を振り上げる琴未に常磐はそのまま十文字槍を引き戻す。このまま行けば琴未が雷閃刀を振り下ろす前に、背後から十文字槍の横刃が琴未を斬り裂くことは確実だ。

その事を確信する常磐。だが琴未の狙いは別なところにあった。

ここっ！

一気に振り下ろされる雷閃刀。だが雷閃刀は常磐にではなく十文字槍、その穂先近くに振り下ろされた。

（嘘っ！）

目の前の常磐ではなく横にある十文字槍に振り下ろされた雷閃刀。もちろん、無理矢理横に斬り下ろしたものだから力はそんなにこもってない。それでも、十文字槍を叩き落すには充分だ。

しかも振り下ろされた場所は穂先近く、手元から離れているために常磐に掛かる負担は大きい。そのため、十文字槍の横刃が琴未に届く直前に下に叩き落されてしまった。

（けど、まだっ！）

それでも十文字槍を引き込む常盤。叩き落されたとはいえ、横刃が琴未の足を捉えれられる位置にある。このまま引けば琴未の足に傷を負わせることは可能だ。だがそれは、琴未も充分に分っていた。

―新螺幻刀流　乗り刀斬り返し―

叩き落された十文字槍は穂先に行くほど地面に近い。そのため、琴未が少し足を浮かせれば簡単に踏み付けられる。

踏み付けられた十文字槍は封じられて動かす事もままならない。更に琴未はもう片方の足を浮かせると槍の上に大きく踏み込む。これで琴未は完全に十文字槍の上に乗ってしまった。

更に踏み込んだ事で琴未は雷閃刀を振るう事が出来る。雷閃刀が常磐に向かって振り下ろされる。

（くっ、重い、ならっ！）

引く事も押す事も出来ない十文字槍。だが槍ならではのやり方があった。

常磐は身を沈めて槍を脇に抱え込むと、そのまま倒れるように槍を横に倒して行く。穂先は地面に刺さっており、そこを中心に円を画くように倒れれば琴未が上に乗っていても簡単に倒す事が出来る。

当然、十文字槍の上に乗っている琴未は急に足場が崩された事と攻撃途中で勢いを止める事が出来ない事により、琴未は前に倒れ込む。

思いっきり砂浜に突っ込んでいく琴未。一方の常磐は自分の意思で倒れたため、起き上がるのも早い。当然、琴未に向かって追撃を掛ける。

まだうつ伏せに倒れている琴未に向かって一気に距離を詰めて来る常磐。琴未が顔を上げて常磐を確認した時には、すでに十文字槍の間合いに入っていた。

駆けた勢いを殺さぬまま十文字槍を突き出してくる常磐。
無理よね。なら、ここっ！
避ける事を諦めた琴未が狙う点は一つ。仰向けになると上半身を一気に起こして雷閃刀をその点に向けて一気に振るう。
そこは槍の直刃と横刃がクロスしている場所。つまり、十の字で言えば丁度真ん中を狙って雷閃刀を振るった。
だが勢いを殺さぬまま突き出してきた常磐と立ち上がる事の出来なかった琴未では力の掛かり方が違う。当然、雷閃刀は十文字槍を弾く事は出来なかったが、直刃と横刃の間に雷閃刀を滑り込ませることが出来た。
よって、十文字槍の穂先が琴未にまで届く事は無かったが、勢いを殺す事が出来ない琴未は雷閃刀を両手で押さえながら砂浜を常磐に押されるがままに滑っていく。
大きな砂煙が二人の駆けた跡に立ち上り、琴未は背中で砂浜を削りながらも堪える。
そして二人がやっと止まった時には、拮抗が未だに続いていた。上から十文字槍を押し出してくる常磐、下で雷閃刀を両手で押さえながら十文字槍を受け止めている琴未。明らかに形成は琴未に不利だ。
あっつ～いっ！　思いっきり砂に押し付けてくれたわね！　おかげで背中が火傷するぐらい熱いじゃない！
どうやら背中で砂を削った時に生じた摩擦により、琴未の背中に大分熱が生じたようだが、そこは精霊武具。それぐらいの熱や摩擦で琴未が着ている巫女服が破れたり、焦げたりすることは無いが、さすがに摩擦熱までは遮断してくれないらしい。
まあ、大したダメージを受けなかったので、琴未は思考を切り替えて先程の反省点を思い出していた。
……なるほど、だから乗り刀なのね。あの技は槍には通用しない、相手が刀の時に使える技。……とか、じっちゃんが言ってたわね。
今更ながら自分で使っている技の真髄（しんずい）を理解する琴未。

そもそも乗り刀という技は相手が日本刀のように片刃の刀剣にしか通用しない技だ。相手の攻撃を叩き落して、更に切っ先近くの峰を踏み込むことによって相手の刀を封じ込める技。

刀の長さという物は人によって違うが、せいぜい長さがあっても一メートルちょっと。そのうえ、長さのほとんどが刃。だからこそ、切っ先を踏み込まれるとどうする事も出来なくなる。

だが槍となると話は別だ。槍の平均的な長さは二メートル半。しかも長さの大部分が柄だから、先程の常磐みたいに上に乗られても倒す事が出来る。それに完全に上に乗られても先程の琴未みたいに大きく踏み込まなければ、後ろに退がるだけで刀の間合いから出る事が出来る。

そのうえ常磐が使っているのは普通の十文字槍ではなく精霊武具だ。長さも太さも尋常ではない。だからこそ、琴未が簡単に上に乗って踏み込むことが出来た。

だが結局は失敗して現状のような状態になっている訳だ。

「さあ、降参するならやめて上げてもいいわよ。どうする？」

槍を押し付ける力をまったく緩める事無く、降伏勧告をしてくる常磐。だが琴未もこの程度の不利で降参するほどヤワでは無い。

「冗談でしょ。こんな所で降参すると後でシエラに何を言われるか分ったもんじゃないわ。それに……」

「それに？」

圧倒的に不利な体勢である琴未だが笑みを浮かべてみせる。

「あまり甘く見ない方がいいわよ」

「へぇ～、こんな状態でよく言えるものね」

更に力を込めてくる常磐。徐々に十文字槍の穂先が琴未の喉へと近づいていく。

琴未もなんとか抵抗するが、ほぼ下に倒されている体勢で常盤の十文字槍を両手の力だけで支えなくてはいけない。それに引き換え常磐は槍に体重をかけることが出来る。

確実に琴未に不利な体勢なのだが、それでも琴未の笑みが耐える

事は無かった。
「その笑みがどこまで持つか、見ものね」
「もちろん、あなたを倒すまで。それに甘く見ない方がいいって、さっき言ったばかりよ」
「こんな状態でお嬢ちゃんに何が出来るの？」
「……私じゃないわよ」
「えっ？」
琴未の言葉に一瞬だけ迷いが生じる常磐。だが、その程度の事で、琴未がこの状況をひっくり返すのは不可能だ。だが琴未は更に不敵な笑みを浮かべてみせる。
「分かっていないようだから教えてあげるわよ」
「そんな事を聞かなくても、お嬢ちゃんにはこの状況を覆す事は出来ないわ」
「だから分ってない。私がさっきから言っているのは私のことじゃないのよ」
「じゃあ、何が言いたいわけ？」
「もちろん、大地の精霊が有する防御力よ！」
「えっ？」
思いがけない言葉に常磐の集中力は一瞬だけ乱れるが、すぐに琴未に向けて全神経を集中させる。それが琴未の狙いと気付かぬまま。
琴未はそちらに視線を向けると目で合図を送り、それが通じたようでそちらも頷くとすぐに行動を起こした。
「ワケの分らない事を言って私の集中力を乱そうとしても無駄よ」
「どうやら完璧に忘れてるみたいだから教えてあげるわよ。……ミリア！」
常磐の背後を取っているミリアに向けて叫ぶ琴未。その言葉に常磐もやっと自分が置かれている状況を理解するが、もう遅い。
「アースウォール、鉄拳制裁バージョン！」
常磐の横から砂が舞い上がり、硬化と形を作りながら常磐に向かって行く。

「なっ！」
琴未を押さえ込んでいる以上、常磐はとっさに動きは取れない。
その隙に硬化した砂は巨大な拳となり、常磐を殴りつける。
なす術も無く殴り飛ばされる常磐。ミリアの登場でやっと一息つ
いた琴未が立ち上がるとミリアが合流する。
「まったく、遅いわよ」
「う～、だって、なんか目が覚めたら体が痺れてたんだもん」
……やっぱり強すぎたみたいね。
どうやら琴未の雷撃が強すぎてミリアの体を麻痺させていたよう
だ。そんな事実に気付きもしないミリアは更に言い訳の口調で琴未
に説明する。
「それにそれに、なんか今でもピリピリしてバチバチなんだよ」
「擬音で説明しない」
それだけ言うと琴未はミリアの両肩に手を置く。
「いい、ミリア。あんたにそこまでのダメージを負わせたのはあい
つよ、だから絶対に油断しちゃダメよ！」
「って、なに私に罪を着せようとしてるのよ！」
いつの間にか戻ってきた常磐が突っ込みを入れてくる。それから
常磐はミリアを指差してきた。
「あなたが負ってるダメージは明らかに雷の属性による物でしょ！
この中で雷の属性を使えるのは、そこのお嬢ちゃんだけよ！　だ
からあなたにトドメを刺したのはそこのお嬢ちゃんなの！」
ちっ、余計な事を。
「そう言えば……この感じ、琴未の雷撃に似てる？」
「ミリア！」
更に手に力を込めてミリアの両肩を思いっきり掴む琴未。
「いい、敵の言っている事を鵜呑みにしちゃダメよ！　あれは私達
の信頼を崩すための作戦なのよ、だから絶対に信じちゃダメよ！
私達の信頼がその程度じゃ崩れない事を見せ付けるのよ！　とい
うか、信じたらミリアのご飯を減らすわよ」

「うん！　ご飯を減らされたくないから琴未を信じるよ！」
よし！　洗脳完了。
さすがに二人に呆れた視線を送る常磐。
「あなた達の信頼関係って」
「ご飯だ！」
「……」
「……」
バカだ。
（バカね）
はっきりと言い切るミリアに対して、琴未と常磐は同じ事を思っていた。まあ、他のメンバーがこの場にいても、きっと同じ事を思ったのは言うまでも無いだろう。
「そっれじゃ～、一気に行っちゃうよ～」
琴未と常磐にどんな風に思われているか、まったく気付かないミリアはアースシールドハルバードを構えると思いっきり意気込む。
それに対して常磐は思いっきり溜息を付いた。
「確かに、甘く見ていたみたいね。特に……大地の精霊である、その子の頭を」
「えへへっ～」
ミリア……分ってないとは思うけどね。それは誉められてないから。
常磐の言葉を曲解して捉えてるミリアに並んで雷閃刀を構える琴未。そして小声でこれからの戦略を話していく。
「いい、ミリア。とにかく私が先鋒で当たるから援護をお願い」
「でも琴未」
どうやらミリアには気になることがあるらしく、それを琴未に尋ねてきた。
「さっき琴未は思いっきりやられてたけど大丈夫なの」
ミリアのくせに思いっきり気にしてる事を言って来るわね。
多少、不機嫌になりながら琴未はミリアに先鋒を任せられない理

由を説明する。
「ミリアはあいつの攻撃を捌き切れないでしょ。それに地の属性は発動に時間が掛かるんだから、属性の勝負になると明らかに不利でしょ」
「う～ん、確かに。属性の撃ち合いになると私のスピードじゃ琴未や風の属性にかなわないよ」
「そうでしょ。それに、ちょっとした作戦があるのよ」
琴未は自信満々に言い張るが、ミリアは思いっきり不安げな表情を浮かべていた。そしてミリアの顔を見た琴未は、思いっきりミリアの頭に雷閃刀の柄先を押し当ててグリグリと回す。
「その顔はなに、そんなに私の立てた作戦が不満？」
「いたっ、痛いよ琴未～」
いい加減にミリアが泣きそうな。というか、泣いたので雷閃刀を引っ込める琴未。ミリアは涙目のまま、琴未を見上げる。
「それで、作戦って？」
頭を擦りながら琴未の作戦を聞いてくるミリア。
「いい、良く聞いておくのよ」
作戦をミリアに説明する琴未。もちろん、その間も常磐から神経を外す事無く、様子を窺っている。

（あの子達、一体なにをやってるのかしら？）
琴未達の行動を見ていた常磐はそんな事を思うが、それと同時に琴未が自分から意識を外していない事を察する。
（それにしても、私が一番甘く見ていたのが雷のお嬢ちゃんね。まさか、あそこまでやるとは思って無かったわ。それに頭も回るようだし。まあ……あっちの大地の精霊は頭が悪いわね）
改めて琴未の認識を書き換える常磐。まあ、常磐が琴未を甘く見ていてもしょうがないだろう。なにしろ、今まで重要な決断は昇が行っていたし、戦闘での判断は閃華が行っていた。そして何よりも、

琴未はいつもシエラとの悪知恵で競っている。
つまり、学ぶべき環境は充分に整っていた。琴未の傍には閃華がいる時が多いため、閃華からいろいろと教え込まれてるうえ、シエラを相手にそれを試す事が出来る。教育と実践、この二つを琴未は持っているのだから、ある意味では昇よりも成長しているだろう。
……ちなみに、琴未の成長が正しい方向で進んでいるかは別問題である。
なんにしても、琴未にミリアという戦力が増えた以上は、これを充分に活用してくるだろう。
（そうなるとやっかいね、それに風鏡の援軍にも行かないといけないし。……でも、この子達は手加減して勝てる相手じゃないわね。いや、もしかしたら本気を出しても勝てないかもしれないわね。……けどね）
常磐は琴未達から視線を外すと風鏡がいる方向に目を向ける。ここからでは詳しい様子は分らないが、どうやら今のところ派手な戦闘にはなっていないようだ。
それだけを確かめて再び琴未達に視線を戻す常磐。
（私も負けるわけには行かないのよ。全ては……風鏡のために）
風陣十文字槍を強く握り締めて自分の決意を確認する常磐。だが、何かしらを思い出したかのように、常磐の顔に微かに笑みが浮かぶ。
（……ふふっ、まったく、いつの間にこんな事を思うようになったのかしら。最初の頃はそんな事を微塵も思ってなかったのに。……そう、全ては風鏡と契約をしてから。それから、私も竜胆も変わって行った。もう……あんな風鏡の顔を見たくないから。だから、今は全力で戦うわ！）
風陣十文字槍を構える常磐。更に常磐を中心に空気が揺らぎ、それは風となって風陣十文字槍に集まっていく。
（さあ、もう遊びの時間は終わりよ。これからは、全力で行くわ！）

空気の揺らぎは琴未達も感じており、風が常磐に集まっていくのをはっきりと確認できた。
「どうやら次は本気で来るみたいね。ミリア、準備は出来てる」
「うん、大丈夫だよ。もう琴未とあいつを繋いでるよ」
「オッケー、後は気付かれないようにね」
「分ってるよ～！」
元気の良いミリアの返事を聞くと、琴未も雷閃刀に雷をまとわせる。黄色い光の覆われた雷閃刀が電撃の独特な音を立てながら雷を溜めていく。
そして琴未と常磐の鋭い視線が絡み合い。前触れも無く二人は飛び出して、互いに距離を詰めていく。
先手はもちろん、間合いが広い槍を持つ常磐だ。
突きが来る！
琴未はもちろん、相手が槍なら誰しもそう思うだろう。だが常磐はあえて十文字槍を振り上げる。馬鹿げた行為だと普通なら思うだろう。槍の刃は切っ先にしか付いていない。だからそれを過ぎてしまえば、後は柄で打ち付けるしかない。
致命傷にはならないそんな行為を普通の人間ならやらないだろう。だが常磐は風の精霊、風陣十文字槍に巻き付いている風が油断できない事を琴未に知らせる。
だからこそ、槍が振り上げられた時から琴未はスピードを落とし、振り下ろされる瞬間に大きく後ろに跳ぶ。
琴未はそれで避けたつもりだろうけど、常磐は口元に笑みを浮かべる。
「天風潰裂（てんぷうかいれつ）！」
「アースウォール！」
振り下ろされる風陣十文字槍。それと同時にまとっていた風を一気に地面へと叩きつける。斜め上から打ち下ろされた風は巨大な圧力となり、風陣十文字槍を起点に砂浜を一気に押し潰す。
巨大な圧力が掛かった砂浜は一気に押し潰されて、大量の砂が圧

力の掛かっていない両脇へと逃げ出して一気に吹き上がる。だが常盤の攻撃はこれで終わりではない。

一つにまとまっていた風が今度は四散する。地面を押し潰すほどに集められていた風が解放されて縦横無尽に吹き荒れる。それもタダの風ではなく、風刃と化して吹き出しているのだから風に触れた物は全て切り裂かれて行く。

その風刃が地面を切り裂きながらミリアの元にまで迫ってくる。慌てて自分の目の前にアースウォールを作り出すミリア。

だが風刃がいとも簡単にアースウォールを切り裂いてしまったので、更に慌ててアースウォールを強化するミリア。念のために強化した大地の壁を前に身を屈める。

「うわ～、びっくりした～。琴未……大丈夫かな」

ミリアと違って琴未は常磐との距離をかなり詰めていた。そこへ広範囲の攻撃を仕掛けてきたのだから無事ではないはずだろう。

それは攻撃をした常磐が良く分かっていた。

（最初の一撃で確実に潰した手応えを感じたわ。まあ、それで逃れてもニ撃目で仕留めたはず。……けど、油断できないわね）

確かな手応えを感じつつも常磐は油断しなかった。この程度で琴未がくたばるとも思えないし、なにより先程の攻撃で自分が巻き起こした砂埃が未だに常磐の視界を悪くしている。琴未が攻めるには絶好の機会だろう。

だからこそ、辺りに気配を配らせる常磐。そして砂埃が少しずつ晴れて行き、常磐の前にそれは現れる。

（……大地の、壁。そうか、あれで天風潰裂を防いだのね。だけどニ撃目までは無理だったようね）

確かにミリアの作り出したアースウォールは一撃目の攻撃は防いだみたいだが、風刃までは防ぎきれなかったみたいで、ところどころ切り裂けている。

（壁があの状態なら手傷は確実に負わせた。なら、後は壁の向こうにいるお嬢ちゃんを仕留めるだけ）

風陣十文字槍に新たな風をまとわせると常磐は壁に向かって駆け出す。

「雷神閃！」

「えっ？」

突如、アースウォールを破壊して突き進む巨大な雷。まるで常磐が突き進んでくるタイミングを見切ったように放たれた雷は完全に常磐の虚を付いていた。

だが多少の隙を付いたぐらいで常磐はやられるような精霊ではない。この事態にもすぐに対処に入る。

十文字槍の穂先を下から後ろに振り上げる。

（もう避けるのは無理。でも、これなら！）

後ろに振り上げた穂先を一気に地面に向かって振り下ろす常磐。そして穂先が地面を完全に斬り裂く前に溜め込んでいた風を一気に解放する。

「昇華風龍（しょうかふうりゅう）！」

地面を斬り裂いた十文字槍と共に風が一気に天に向かって駆け上る。そうして常磐の前に出来た巨大な風の壁と巨大な雷がぶつかり合う。

だが常磐の攻撃はこれで終わりではない。正確には風の属性より早い雷の属性である琴未の攻撃を防ぐために不完全のまま技を発動させた。だから風の壁が昇華風龍の正体ではない。

更に風陣十文字槍を風の壁に向かって横一線に振るう常磐。そこを起点に上に向かって吹いている風はねじれ始める。そして風の壁は巨大な竜巻へと変化した。

（タダの竜巻とは思わないことね。私の昇華風龍は……全てを飲み込むわ）

常磐が思ったとおりに、巨大な竜巻は辺りの砂を引き寄せて吸い込み始めた。更には今まで竜巻とぶつかり合っていた巨大な雷すらも竜巻の中に少しずつ吸い込まれていく。その証拠に竜巻は次第に雷を帯びて放電している。

そして竜巻は飲み込んだ雷を栄養源としているかのように威力を強め始め、砂浜の砂を全て吸い上げてしまいそうな勢いで回転を強める。

（この昇華風龍は相手の属性を飲み込んで自らの威力を高める、吸収強化の技なんだけど。ここまで成長するのは始めてね。あの子、一体どれだけの威力を雷に込めてたわけ）

始めて見る竜巻に琴未の放った雷がどれだけの威力を持っていたかを物語っている。だが、それは全て竜巻に吸収されてしまい。雷を全て飲み込んだ竜巻は自然と消えて行き、飲み込んだ砂がゆっくりと辺りに降り注ぎ、辺りを砂埃が飲み込んでいく。

どうやら属性攻撃は飲み込んで吸収しても、普通の物体などは巻き込むだけのようだ。

……やっぱり、雷神閃は防がれたわね。まあ、こっちも最初から防がれる事を計算して放った攻撃だからいいけど。それにしてもあっちも最初からやってくれたわね。おかげでかなりの手傷を負ったけど、動けない程じゃないわね。……でも、ここから一気に決めるわよ！。

竜巻が消えて、最初は巻き込んだ砂が一気に落ちてきたのか、辺りを砂埃で何も見えない状態にしてしまった。だが重い砂はほとんど落ちてしまったのか、次第と視界が開けてきた。

それと共に砂が落ちる音が消えて行き、次第に静かになって行くが、それが常磐の耳にある音を届ける。

「なに？」

音がしたであろう方角、それは常磐の真正面だ。そこに目を凝らす常磐。少しずつ砂埃が消えて行き、それが姿を現す。

「嘘っ！」

そこは丁度ミリアが作り出したアースウォールの真後ろ。そこに強大な光球が雷を帯びて放電音を出していた。

「雷神閃！」

そして放たれる第ニ射。だが先程よりかは威力がかなり落ちてい

るようで、雷もそんなに太くない。
（これぐらいなら）
とっさに横に跳び、地面を転がるように雷を避ける常磐。威力無い雷神閃を間一髪で避けきる。
更にニ、三回ほど地面を転がった常磐はすぐに顔を上げる。未だに地面に寝ている状態だが、今は現状把握が先だと判断したのだろう。
そんな常磐の瞳に先程の光球が写り込む。大きさは変わっていないものの、その輝きは弱弱しく、雷もまとっていない。どうやら消える寸前のようだ。
（どうやら、お嬢ちゃんの攻撃はかわしきったみたいね。さすがにさっきのは危なかったわ。……えっ！）
消えかけていた光球が完全に消えた時だった。その後ろにあるであろう、琴未の姿はそこには無かった。
「嘘っ！　あのお嬢ちゃん、どこに行ったの？」
「ここ」
突然、横から聞こえてくる琴未の声。常磐がそちらに振り向くと砂埃の中から琴未が飛び出してきた。

―新螺幻刀流　二ノ太刀無用―

雷を帯びた雷閃刀、それに全ての力を込めて琴未は初太刀を未だ地面に付している常磐に向かって放つ。
「ッ！」
とっさに地面を蹴る常磐。だが両手は砂を掴んで下半身を前に持って行き、そのまま半回転する前に両手の力だけで体を押し出す。
雷閃刀が常磐の居た地点に振り下ろされて、技の威力で砂浜は削られて雷閃刀が半分ほど砂の中へとその身を沈めた。

片手を砂浜に付けて何とか着地する常磐。
「おしかったわね」
「いいえ、これで決まりよ」
「えっ？」
「雷撃閃！」
雷閃刀が放電するのと同時に常磐の足元から天に向かって十数本の雷が一気に駆け上がる。
「きゃあああああああああっ！」
足元からの不意打ちに常磐は悲鳴を上げ、攻撃を終えた琴未はすぐにその場から離れると大きく叫ぶ。
「ミリア、場所は分るわね！」
「うん！　思いっきりやっちゃっていいんだよね！」
「構わないわよ、私がそっちに戻ったら全力でやるのよ！」
「うん！」
未だに砂埃が酷くて視界が悪い中を琴未はミリアの声がした方へと駆け出す。一度振り返って常磐を確認するが、常磐は先程の攻撃がかなり効いたようで両膝を付いて荒い息をしていた。
これで私が一気に駆け抜ければ、それで決まりよ！
後は一気にミリアの元へ駆け抜けるだけ。琴未は視界が悪い中を一気に駆け抜けて、ミリアの姿を確認すると一気に滑り込む。
そこは砂埃の外だ。あの視界の悪い中に居たのでは二人の位置が確認できないのだろう。だからこそ、ミリアは砂埃の外に居た。
そこに一気に滑り込んでくる琴未を確認すると、ミリアは砂浜に刺してあるアースシールドハルバードに溜め込んだ力を解放させる。
「アースブレイカー！」
アースシールドハルバードから先程天に向かって放たれて雷が発生した場所へと赤い光が線となり、一気に地面を駆ける。
そこはつまり常磐がダメージを受けた場所。琴未の攻撃を直撃したのだから、すぐには動けないだろうと琴未は判断したからミリアへの目印としても使った。

更にアースブレイカーは広範囲に攻撃する事が出来る。だからこそ、多少常磐が動きをとっても避けきる事は不可能。そこまで計算しての攻撃だ。

そして地面に描かれた赤い光の線が砂浜を切り裂き、大量の砂が一気に舞い上がって崩壊を始める。

更に地震を巻き起こして崩壊は加速する。地面は裂けてクレパスとなり、飲み込まれた者は出る事は出来ないだろう。そのうえ無理矢理クレパスを作り出した事により、その衝撃は衝撃波となり砂を巻き込んで縦横無尽に駆け回る。

衝撃波同士がぶつかり合い、更なる衝撃を生み出すこの中では常磐も無事では済まないだろう。

そしてミリアの溜め込んだ力を解放し終えると、再び大きな地鳴りと地震が起きて地面は元の形へと戻って行く。

地震が納まり地面は元の形へと戻ったが、大気に舞い上がった砂埃は未だに取れないままだ。琴未達の前には大量の砂埃が舞っている。

「どうだーっ！」

目の前の成果に自信満々に胸を張ってみせるミリア。そんなミリアに琴未は溜息を付く。

「どうだーって言われても、こんな状態だと相手の意見が聞けないでしょ」

「う～っ、言ってみただけだもん。それに……って！　琴未どうしたの！」

琴未の方へ振り返り、やっと琴未の状態を知るミリア。

まあ、ミリアが驚くのも無理は無いだろう。両腕と太もも、更には左頬（ひだりほほ）と頭から血を流しているのだから。まあ、顔と頭の傷は軽いみたいだが、両腕の傷はかなりの物だろう。そんな状態であれだけの事をしたのだから大したものだ。

だが琴未は傷を見て軽く言ってのける。

「あぁ、これ。最初の一撃でかなり貰っちゃったのよ。まあ、足を

死守したからなんとか動けたけど。まあ、大した傷じゃないわよ。もう血は止まってるし」
「本当に大丈夫なの？」
だがミリアは琴未の傷を見て明らかに動揺を見せる。そんなミリアの頭に琴未は手を置いた。
「大丈夫よ、皆戦ってるんだからこの程度で根を上げてられないわよ。それにこれで終わってくれるとは限らないでしょ」
「うん、でもでも、あれだけの攻撃だから、もしかしたら」
「それほど甘い相手じゃないわよ」
「うえ～、それはや」
ミリアの言葉が終わる前に二人に突風が突きつける。いや、正確には地面に叩きつけられた風が逃げ道を求めて周りに向かって吹いている。
この風……やっぱりまだ終わりじゃないみたいね。
風は大気中に舞っていた砂埃を地面に戻すと止まり、すっかり普通の砂浜に戻って常磐が姿を現す。
「はぁっ！　はぁっ！」
呼吸がかなり荒い。どうやら先程の攻撃は通ったみたいで、常磐の大鎧は半分ほど砕け散り、服にも多少焦げた跡が残っている。
琴未の攻撃も通っていたみたいで焦げた後は雷撃による物だろう。そして大鎧はミリアの攻撃によって砕かれたようだ。
それでも、あの中をそれだけの傷で済ませた事には違いない。
（……危なかった。とっさに上昇気流を作って体を浮かせたから良かったけど、下手したら地面に落ちてたわ。それにしても……）
「まさか、地面から、雷撃が来るとは、思って無かったわ」
まだ息が続かないのか途切れ途切れで言葉を口にする常磐。それでも言葉は琴未達にしっかりと届いていた。
「まあ、私一人じゃできないことよね。けど、ミリアは大地の精霊。だから最初から繋げてもらってたの、あなたの足元と私の足元をね」
「……そうか！　しくじったわ、まさかそこまで用意しているとは

思わなかったわ」
「察しがいいわね。そう、普通に雷撃を地面に撃ち込むと四散するけど、地の属性が作り出したトンネル内なら四散せずにコントロールできる」
普通に雷撃を地面に撃ち込めば、それは地面に吸収されて四散してしまう。だが琴未はミリアの地の属性を利用する事でそれを回避した。
つまり、なにも属性を有していない地面は普通の地面だが、属性を宿している場所は属性のコントロール内にある。琴未はその地の属性が付加している場所に雷撃を通した。後はミリアが地面を流れる雷撃を四散しないようにコントロールするば、通常の威力のまま雷撃を撃つ出す事が出来る。
「二人とも動き回るから追い掛けるのが大変だったよ～」
「えっ？　二人って？」
ミリアの言葉に驚きの表情を見せる常磐。そんな常磐に向かって琴未は笑みを向ける。
「やっぱり気付いてないみたいだから教えてあげるわよ。あなたが放った最初の一撃、それの余波が収まると私はすぐに砂埃の中に身を隠したの」
「じゃあ、あの壁は？」
琴未が隠れていると思った大地の壁を言っているのだろう。あれが見えたからこそ、常磐はあそこに琴未が居ると思い込んでしまった。
「あなたと私がぶつかれば、あなたが先手を取る事は確実。だから私は最初の一撃を避けるためにミリアに作らせたのよ。それと、あなたの注意を引くためでもあったけどね。後は壁の後ろに雷撃を溜めて次の攻撃に備えるというわけ。まあ、ニ撃目があったのは予想外だけどね」
「それに、お前が砂埃をあんなに上げなくても私が作り出す予定だったんだよ」

「けど、あなたの一撃が強すぎたために、その必要が無くなった」
どうやら最初から多くの砂埃を上げる事は計算にあったらしい。
だが常磐が代わりに作り出してくれたために、ミリアは二人の足元を結ぶのと同時に大きな力を溜める事が出来た。
「後は溜めた雷撃を遠隔操作で撃ち出した後、私はあなたに斬り掛かった。まあ、あなたなら避けると思ってたけどね。けど、それも足元にある地の属性に気付かせないため」
「……そう、全ては最後の攻撃に持っていく布石だったのね。まさかそこまで考えてるとは思って無かったわ」
「この前教えてもらった事を生かしただけよ」
「えっ？」
琴未の言葉に常磐は驚きの顔で示す。
「地の利、その地形を生かす形での戦い方よ」
つまり琴未は砂浜という地形を最大限利用しての戦い方を組み立てたのだが、常磐は明らかに呆れている。
（……えっと、それは間違ってるけど……間違ってないわね）
常磐としては普通の使われ方を言ったまでなのだが、琴未はそれを独自に解釈して精霊戦に適した形にしてしまった。
それから常磐は視線を琴未からミリアに移した。
「大地のお嬢ちゃんも、良く私を追えたわね。たしか砂埃の外に居たはずだけど」
「あははっ、だって私は大地の精霊だもん」
「……」
「……」
ミリア、答えになってないわよ。
（こんな子にやられたのがちょっと悔しいわね）
しかたないという感じで琴未は溜息を付くとミリアの代わりに答える。
「ミリアは大地の精霊だから、地の属性以外にも出来る事がある。あなたが地に足をつけてる限りだけどね」

「なるほどね、大地を通して私の気配を追ってたわけね」
それは精霊だから出来る技だ。精霊は属性以外にも生み出した物を感じ取ったり、多少のコントロールが出来る。それは属性の力でも可能だが、生粋の精霊ならより素早く行う事が出来る。
つまり、大地の精霊であるミリアが大地を通して常磐の気配を探って追いかけるのはそんなに難しい事ではないという事だ。もちろん、それは相手が大地に立っている場合で、シエラのように飛ばれると気配がつかめなくなる。
「さて、他に質問はある？」
全ての事を説明し終えた琴未はまるで勝ち誇ったように常磐に言葉を掛ける。それは挑発のようにも感じ取れるが、常磐が怒りを覚える事は無かった。
（確かに、この状況じゃあ私の負けね。……けど、まだ終わりにするわけにはいかないわ。竜胆も、風鏡も戦ってる。だから、まだ終われない。終わる時は……私の契約が解かれる時よ！）
風陣十文字槍を前面に押し出して、再び風を集める常磐。
「琴未、あいつまだやる気だよ！」
「見れば分るわよ、ミリア！」
「んっ、なに？」
再びミリアの両肩に手を置いた琴未は、真剣な眼差しをミリアに向けて一言。
「今度はミリアが行って」
「……え――――――――っ！」
大げさに驚きの声を上げるミリアだが、琴未はそんなミリアを揺らしながら説得を開始する。
「というか、ミリアがこの中で一番元気なんだからミリアが行きなさい！　それにここで頑張れば、今度からご飯を大盛りにしておかずも一品多くしてくれるわよ……シエラが」
「うん！　頑張るよ！」
またしても同じ手段でミリアを洗脳する琴未。いや、シエラに責

任を押し付けている事があれだが、ミリアはまったく気付いていないようで意気込んでいる。

まあ、琴未の気持ちも分からなくも無い。なにしろ琴未はかなりの傷を負っている。それは常磐も同じだが、だからこそ元気なミリアを出してきたのだろう。

傷を負わせた常磐ならミリアでも対抗できると踏んだからこそ、琴未はミリアに前線を任せる。……とは言っても、やっぱり不安なのかミリアからあまり離れない距離を取る琴未。

そんな二人を見て常磐も風陣十文字槍を構える。

（あの子達、思っていた以上に相性が悪くないわね。それどころか、あのいかずち、いや、琴未って子は大地の精霊を使いこなしてる。契約者としてはあの昇って男の子が全権を握ってるみたいだけど。この子も普通の契約者なら、昇って子とまったく引けは取ってないわね）

閃華が昇達の複雑な関係を生み出して以来、成長してきたのは昇だけではない。琴未もしっかりと成長して来た。だからこそ、ここまで戦える。昇の信頼を一身に受ける事が出来る。昇のために戦える。

だが、戦う理由と負けられない想いは常磐も負けてはいない。

（あの時、竜胆と一緒に誓った二度目の契約。そして風鏡がくれたあの時間、それを大切にしたいから私達は風鏡から暗い表情を取ろうと決意した。だからもう一度交わした契約、その契約がある限り、私達は絶対に負けるわけには行かない）

風陣十文字槍を構える常磐。それを見たミリアが一気に突っ込んできた。常磐もミリアを迎え撃つために更に風を集める。

こうして再び戦いの幕が上がった。

第七十四話　雷と風と大地（後書き）

そんな訳でお送りしました、エレメの七十四話はいかがでしたでしょうか。……まあ、いつの間にやら、話が思いっきり長くなっていたことは大目に見てください。

さてさて、そんなことよりも、更新に一ヶ月も掛かってしまいましたが、これでエレメも一周年です。……なんか、長かったような、短いような不思議な感覚です。

というか、この一年でどれぐらいの文字数を書いたのか気になりますね。後で調べる事にしますね。

さてさて、エレメも無事に？　一周年を迎えた事ですし。来年への抱負と言いましょうか、意気込みを。……一体いつまで続くんだ――――！！！

まあ、自分で作っておきながらなんですが、正直一年以上も掛かる作品になるとは思っていませんでした。まあ、長くはやるつもりだったんですが、一周年を迎えると、……本当に長いな、と実感させられますね。

さてさて、そういうことですので、エレメはこれから二周年はおろか、五周年に向けて突き進みたいと思います。……まあ、それぐらいには終わるか……な？

そんな訳で純情不倶戴天編も残り後数話。頑張って生きたいと思います。と、抱負を抱き捨てたところでそろそろ。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして評価感想もお待ちしております。更に投票と人気投票もお待ちしております。

以上、人気投票の途中集計で、この小説の人気はシエラと閃華で持っているのか？　とか思ってしまった葵夢幻でした。

第七十五話　翼と焦熱

「はあああぁぁぁっ！」

竜胆が灼熱斬馬刀に炎を灯しながら縦横無尽に灼熱斬馬刀を乱れ振るう。斬馬刀の軌跡から炎が炎刃となってシエラに向かっていくが、昇のエレメンタルアップによりスピードが増しているシエラはわざわざ炎刃を掻い潜って距離を詰めてきた。

（やっぱりあのスピードだと飛ばして当てるのは無理みたいね）

竜胆がそんな事を思っている間にシエラが迫ってくる。灼熱斬馬刀を後ろに思いっきり力を溜めて、タイミングを合わせて一気に振り出す竜胆。だが、それと同じくシエラもウイングクレイモアを振り出してくる。

激しく鳴り渡る剣戟音。ウイングクレイモアと灼熱斬馬刀がぶつかり合い、互いにせめぎ合っている。

（ぐっ、接近戦でもこれだと、さすがに辛いのよね。さすがエレメンタルアップ、一筋縄ではいかないみたいね）

シエラのウイングクレイモアは超重武器なのだが、竜胆の灼熱斬馬刀はウイングクレイモアを上回るほどの超重武器だ。だから単純な武器の打ち合いでは重量が勝っている灼熱斬馬刀が有利なのだが、シエラはハイスピードで突っ込む事により、威力を増しているために灼熱斬馬刀とも対等に渡り合っている。

有利を欠いて攻めきれずにいる竜胆。だがシエラにも同じ事が言えた。

エレメンタルアップでやっとあの武器と対等に戦える。でも……それだけ、エレメンタルアップでも、あの斬馬刀を無効化するのが精一杯。それ以上の決め手は無い。……どうしよう。

昇がエレメンタルアップに集中できる状態ならシエラも楽に事を進められただろう。だが昇が風鏡と戦っている以上は更なるエレメンタルアップは使う事が出来ない。つまりは現在の状況で竜胆を倒

さねばならなかった。
でも勝てないワケじゃない。ううん、負けるワケには行かない、昇のために。……あぁ、しまった、情けない事に琴未のようなミスをした。昇は無理に倒さなくても良いと言った。つまり、私の役目は時間稼ぎ。考えるのは倒す事じゃなくて、ここに釘付けにする事。
戦闘が膠着状態に入り、やっと自分の役目を思い出すシエラ。……まあ、心の中とはいえ自分のミスを琴未に例えるところはシエラらしく、冷静さを取り戻してきた証拠だろう。
なら狙うところは一つ。
シエラは体を一気に押し出すのと同時に翼を羽ばたかせる。そうして反動を付けて一気に竜胆から離れた。竜胆もシエラのスピードをきちんと理解しているから無理に追う事はしない。
（離れた。まあ、その方が私にとっても都合がいいけどね）
接近戦で決められない以上は竜胆が狙うタイミングは一つだけだ。
（あのスピードだから私がどう足掻いても追いつけはしない。けど、あの大剣の間合いに入った瞬間にこっちが攻撃できれば、なんとか出来るはずよ）
竜胆が狙っているのはシエラが接近してきて、ウイングクレイモアを振るう刹那の瞬間。つまりは互いの間合いに入り、シエラが攻撃するよりも早く攻撃を加えようと言うワケだ。
シエラのスピードに先の先を狙うのは賭けだが、竜胆にはその瞬間しか確実に当てられる時は無い。
だからこそ竜胆は自分から攻める事無く、シエラの動向を窺っている。
そのシエラは竜胆が攻めてこない事を確認するとウイングクレイモアの翼を大きく広げる。
「フルフェザーショット」
翼から放たれる羽の弾丸が竜胆に向かって突き進んでいく。
「天馬炎熱衝（てんばえんねつしょう）！」
灼熱斬馬刀より一塊の炎が放たれると天馬、翼の生えた馬の形と

なって向かってくる羽の弾丸に向かって突き進んでいく。
そのままぶつかり合うと思えた両者の攻撃だが、炎の天馬は向かってきた羽だけではなく近くを通り過ぎようとした羽まで燃やし尽くしてしまった。よって竜胆まで攻撃が届く事は無かった。
炎の天馬は更に突き進み、とうとうシエラにまで達してそのまま直撃、炎の天馬は一気に燃え上がり炎の柱となって天を焦がす。
（次は）
この程度でシエラが終わるはずも無く、竜胆も次の攻撃に備えるためにシエラの気配を探るが、それよりも早くシエラが動いた。
「フルフェザーショット」
再び放たれる羽の弾丸。今度は先程よりも距離を詰めて、更に上空から攻撃を放った。
（距離を詰められた。でも、このぐらいなら）
前方の上空から放たれた羽の弾丸は一直線に向かってくる、と竜胆は思い避けようとしたが、実際は違っており竜胆はその場に踏み止まった。
（狙いがずれてる。何かの罠？　それともミスしただけ？　どちらにしても見定めて叩き潰すだけよ）
あくまでも慎重な姿勢を崩さない竜胆。そんな竜胆の前に羽の弾丸が降り注ぎ、砂浜の砂を一気に巻き上げていく。
（砂を煙幕代わりに、なら！）
次に来るであろうシエラの攻撃に合わせて、竜胆は先手を取るべく行動を開始する。
そのシエラはというと、先程の攻撃で巻き上げた砂の煙幕に低空からハイスピードで突っ込んでいく。そして煙幕を抜ける直前にウイングクレイモアを振るう。そこに今まで慎重な姿勢を崩さなかった竜胆が居るであろうと読んでの攻撃だ。
だが煙幕を抜けて振るわれたウイングクレイモアだが、竜胆ではなく空を切った。
読まれた！

その場に急停止して辺りを確認するシエラだが竜胆の姿が見当たらない。

どこ？　……上！

上から感じる熱気にシエラが確認すると、灼熱斬馬刀が真っ赤になるほどに高熱を宿して竜胆が降って来る。

「くっ」

ウイングクレイモアの翼を羽ばたかせるのではなく、ブースト状にして初動からハイスピードでその場を離れるシエラ。そしてシエラが離れた直後に竜胆の灼熱斬馬刀が砂浜に叩きつけられる。

灼熱斬馬刀を叩きつけられた砂は舞い上がる事無く、その場で液状にまで溶けてしまった。竜胆の周りにある砂は、かなりの広範囲でマグマになってしまう。だが、そんな所でも竜胆は平気な顔で立つと再び真っ赤になっている灼熱斬馬刀を構えた。

（あっぶなかった～。てっきり上から来るものだと思ってたけど下から来るなんてね。まあ、おかげで罠にかからずに済んだけどね）

どうやら竜胆はシエラの攻撃を完全に読んだワケではなく読み違えたようだ。今まで上空からの攻撃が多かったシエラだけに、煙幕の上から攻撃が来ると思ったから上に跳んでシエラを迎え撃とうとしたようだ。

だが実際には下から仕掛けてきたシエラの上を取る結果となった。完全にシエラの虚を突いたが、竜胆もシエラが下から来るとは思っていなかったため、動きが少し遅れてシエラに避けられてしまった。だが竜胆にしてみればシエラの罠をかわし切ったのだから、よしとしたようだ。

そんな竜胆のラッキーまでシエラが読めるはずもなく精神的に追い詰められる。

まずい、あそこまで完璧に読まれて最高の手を打ってきた。……というと、下手な策は使わない方がいい。そうなると消耗戦になるけど……しかたない。昇が決めるまでなんとか堪える事が出来れば、なんとかなる。

そう決断するシエラ。それは明らかに失策に近いが、シエラが竜胆を過大評価してしまったからしかたない。シエラも無理に策を使えば勝機が生まれるが、あくまでも時間稼ぎを優先したから安全策としてそう判断してもおかしくは無かった。

それからシエラは真っ赤になった灼熱斬馬刀に目を向ける。

あの精霊武具、かなりの高温になってる。斬馬刀だけでもやっかいなのに、そのうえ高温まで宿したとなると……接近戦は控えた方がいい。

接近戦になればどうしても高温の斬馬刀がシエラの身を焦がす。たとえ触れなくても近くを通り過ぎただけで火傷を負わすことは出来るだろう。つまり、今の竜胆は接近戦に絶大な力を持っている。

そうなると……遠距離から仕掛けるか、一気に通り過ぎるしか手は無い。……熱で折れないかな？

そんな事を勝手な妄想をしてみるシエラ。

まあ、普通の武器ならあそこまでの高温を宿した時点で溶けるか、もしくは脆くなるが、精霊武具に限ってはそんな事は無い。

そもそも精霊武具は属性の象徴たる精霊が手にする武器や防具であり、当然自らの属性に適応している。だからウイングクレイモアが空を翔るために見た目よりもかなり軽かったり、灼熱斬馬刀がどんな高温でも強度を失わないのは全て自らの属性に適応しているためである。

だから灼熱斬馬刀が熱で折れることは決して無く、そんな事を可能にする属性は。

「焦熱（しょうねつ）の属性」

シエラが呟いた言葉に竜胆は笑みを浮かべる。

「へぇ～、気が付いたのね」

「それしか考えられない」

シエラは真っ赤になった灼熱斬馬刀に注目する。

「最初は炎の属性かと思ったけど、その真っ赤な斬馬刀は炎の属性じゃ無理。そうなると考えられるのは一つしかない」

「ご名答、私は高温の精霊で属性は焦熱。そして焦熱の属性は全ての物を焼き焦がすのよ」

そうなると、かなりやっかい。なにしろ高温は低温と違って上限が無いだけに、どこまでも温度を上げる事が出来る。そのうえ高温の象徴たる炎も操る事が出来るから……けど、炎の総量は炎の属性よりはるかに劣る。ここは遠距離戦を仕掛けた方がいいか。

炎の属性は炎を無尽蔵に操る事が出来るが、焦熱の属性は炎を操る総量が決まっている。したがって炎に関しては炎の属性を上回る事は無い。

だが何かを高温にまで持って行くには焦熱の属性が一番適している。実際に灼熱斬馬刀はかなりの高温になっており、触れただけで全ての物を灼き焦がすだろう。

だからシエラは宙に舞い上がると竜胆と距離を取る。明らかに遠距離戦に持っていこうとしているのだが、竜胆は笑みを浮かべると灼熱斬馬刀を振るう。

だが振るっただけで何かが飛び出したわけではない。少なくともシエラには何も見えないまま、それはシエラへと迫って来てからやっと気が付いた。

……空気が、揺らいでる。

とっさに危険を感じてそれを避けるシエラ。だがあまり回避距離を取らなかったため、それの影響がシエラにまで達する。

あつっ！　なにこれ？　……そうか！　熱伝導。

熱伝導にもいろいろな意味があるが、竜胆が使ったのは熱エネルギーを空気中の高温部から低温部に移動させた技だ。つまり、灼熱斬馬刀から放たれた高温は空気を伝わりシエラにまで達した。温度だけに見ることが出来ない分、避ける事が難しくなる。

まさかこんな事まで出来るなんて。……けど、それが反撃の糸口になる。

先程とは打って変わって竜胆に突っ込んでいくシエラ。ハイスピードで一直線に突っ込んでくるシエラに再び灼熱斬馬刀を振るって

高熱を放つ。
それが空気の揺らぎとなってシエラに向かっていくが、シエラは避けようとはせずにウイングクレイモアを前に突き出して翼を羽ばたかせる。そこから生まれた風が空気の揺らぎに当たったことを確認したシエラは再び竜胆に向かって直進していく。
（なに？　あれで避けたの？）
シエラは特に避けたような動作は行っていない。だが竜胆の放った高熱が反れた事は確かだ。
再び灼熱斬馬刀を振るって高熱を放つが、シエラは同じ方法で高熱を回避してしまった。そして竜胆の前まで一気に迫る。もう竜胆に高熱を放つだけの時間は残されていない。
（考えるのは後、今はこの好機を最大限に生かすのよ）
高熱を宿した灼熱斬馬刀は接近戦で最大の効果は発揮する。だからシエラが近づいてきた今が竜胆にとって最大の好機だ。
跳び上がりシエラへの攻撃態勢をとる竜胆だが、シエラは急停止すると翼を羽ばたかせて風を竜胆が居た場所へと送り込む。
シエラの行動がよく分からないままに、竜胆はシエラに向かって斬り掛かろうとするが、突然下から吹きつけてくる突風が竜胆の自由を奪う。
「なっ！　なにこれ？」
突然の出来事に竜胆は驚きの声を上げる。更には下からの突風で竜胆の体は宙に浮いて動かすのもままならない状態だ。
そんな竜胆にシエラは一気に迫った。
「くっ！」
とっさに灼熱斬馬刀を前面に出して防御するが、シエラの狙いは最も手薄なところだ。
（ぐっ、足！）
竜胆の足を斬り付けて一気に突風を突破していくシエラ。片や竜胆は下からの突風に飲まれたままだが、すぐに突風は収まり再び地上へと戻っていった。

未だに熱で真っ赤になった砂浜に舞い降りた竜胆は、斬馬刀に寄りかかりながらもなんとか立ち上がり、上空にいるシエラを睨み付ける。

「いったい、何をやったの？」

そんな竜胆の問い掛けにシエラはゆっくりと口を開く。

「あなたは、熱が及ぼす効果を分かっていない」

「何ですって！」

高温の精霊が熱について分かっていないと言われるのは最大の屈辱だ。悔しそうな顔で睨みつけてくる竜胆に、シエラは変わらぬ口調で言葉を続ける。

「あなたが放った高熱、私はそれに水平の気流をぶつける事で完全に回避した」

そう言われて何かに気付いたように、驚きの表情を隠せない竜胆。

「水平対流による熱拡散」

「そう」

竜胆の放った高熱に対してシエラは常温の風を真正面から叩き付けた。そうする事で二つがぶつかり合った場所には温度差が出来て対流を生み出す。これが水平対流。まあ、対流と言っても一方は流れの無い大気そのものだが、温度差があるからこそただの大気でも風とぶつかり合い、風同士がぶつかり合う対流を生み出す。

そして竜胆が放ったのはかなりの高温、そしてシエラは常温だが竜胆の高温から見れば低温と言ってもいい。そうして高温と低温がぶつかり合った場合、高温は上に逃げて、低音は下に逃げる。その現象を熱拡散という。

だからシエラの放った常温の風は動きの無い竜胆の高温を全て上に跳ね除けて、シエラの前に道を作り出した。竜胆がシエラに回避されても多少のダメージを負わせるように高温にし過ぎた事がアダになったようだ。

「それじゃあ」

竜胆は足元の真っ赤に溶けた砂に目を向けて、それを見たシエラ

も言葉を続ける。

「そう、あなたが足元に送った熱が砂浜を溶かし、常に熱を放出している。その熱が空気に伝わり、あなたの周りでは常に空気が上に流れてた」

「……」

「後はそこに風を送ってあげれば、熱上昇気流の完成」

一般的な熱上昇気流は太陽光によって暖められた空気の密度が軽くなり起こる現象だが、焦熱の属性は太陽光以上に砂浜に影響を与えていた。

砂浜が溶けるほどの高温のため、溶けた砂浜の上にある空気は常に暖められる事になり、密度を薄くして上昇している。だが、所詮は流れが少ないためにあまり感じることはない。

簡単な例を上げると湯気や水蒸気などが分りやすいだろう。水は温められると気体へと変化して上に昇り続ける。そして冷えると液体に戻り、下へと落ちる。

つまり、暖められた水は密度の薄い水蒸気に変わり上昇する。それが上空で冷やされて密度の濃い雲へと変わり、更に密度が重くなると雨となって地面へと落ちる。

シエラはこの原理を使って上昇気流を生み出して竜胆の自由を奪った。竜胆の足元は先程の攻撃で焦熱の属性を叩きつけられて高温になっており、その高温がガスコンロのように上にある空気を一気に暖めた。暖められた空気は上に昇り続けるが、空気の流れが遅いためにあまり気付く事は無い。だが、その流れを一気に加速させるような風を送れば、流れは一気に加速して上昇気流へと発展する。

普通なら上昇気流に発展する前に冷やされる物だが、焦熱の属性はそんなにヤワではない。少しぐらいの常温を叩きつけられようとも、一度熱した砂浜が簡単に冷える事は無い。そうして起こした上昇気流により竜胆の自由を奪う事に成功して手傷を負わせることが出来た。

完全にシエラにしてやられた竜胆は悔しそうに歯を噛み締める。

（やられた。まさか、ここまで熱の影響を理解しているとは思わなかった。……それより、高温の精霊である私の特性を理解している。そんな子に……勝てる気がしない）

斬馬刀に寄り掛かりながら竜胆は遠くで戦っている風鏡と常磐をちらっと見てみる。ここからでは良く分からないが、どちらとも激しい闘いになっているようだ。

（ごめん、風鏡、常磐。この足だと、もう風鏡の援護には行けないみたいよ。ごめん、私は風鏡に……本当の笑顔を取り戻す事が出来ないよ）

そんな竜胆にあの時の記憶が一瞬にして蘇る。

私と常磐が出会ったのは、お互いに精霊王から生を受けた直後。それは前回の争奪戦が終わって数年後だったのよね。

何故か分らないけど私達は気が合ったから、いつの間にか一緒に行動をするようになってた。

そして今回の争奪戦で、私達は風鏡と拓也がエルクと遭遇した場面に出くわした。

契約前の精霊は人間世界に干渉は出来ないのよ。だから見てるだけ、拓也が実験動物のように殺されて、風鏡が絶望に沈んでいくのをね。

最初は興味を引かれたから、泣いて暮らす風鏡がこれからどうなっていくのか、それを見るためにね。そして風鏡の瞳に狂気が宿った時、私達は風鏡の前に姿を現した。

最初は驚いていた風鏡だけど、私達の存在やエルクの事を話すと目が変わったのよね。だから私達は風鏡と契約を交わした。風鏡が落ちていく地獄を見るために。

けど、私達を待っていた生活はまったく逆な物だったのよ。確かに風鏡は拓也の敵を討つために、私達にまだ近くに居るはずのエルクを探させた。それと同時に風鏡は普段の生活でよく私達を叱り付

けたのよね。
箸の持ち方が違うとか、生活習慣を正しく身に付けろとか、少しは恥じらいを持てとか、今に思ってもくだらない事だったのよ。
最初は私も常磐もうんざりしてたけど、それらが少しは身に付いた時よね。風鏡が私達に始めて微笑んでくれたのは。
それはまったく曇りの無い微笑み。始めて見た風鏡が隠してきた本当の笑顔。
そんな顔も出来るのね。そう思ったときから、私と常磐、そして風鏡は変わって行った。
風鏡はよく笑うようになったし、私達も風鏡に協力的なって行った。たぶん、その時が本当に契約を交わした瞬間だと思うのよ。
それからの生活は楽しかったのよね。風鏡はよく笑ってくれたし、私達もそんな風鏡に好意を抱き始めてた。……けど、風鏡の心にはいつでも復讐という言葉が刻みつけられていたのよ。それを私達に見せなかっただけ。
私達がそれに気が付いたのは、ある夜の事だったわね。なんとなく、夜中に目が覚めた私達は真っ先に風鏡の事が気になった。私達は何かが告げるままに、静かに風鏡の様子を見に行ったのよ。
そしたら風鏡の部屋にはまだ明かりが付いていて、私達はそっと中を覗いてみた。そこには、位牌を前にしてむせび泣く風鏡の姿があったのよ。そして、私達は再び目にしたわ……狂気に宿った風鏡の瞳を。
正直に言うとショックだったのよね。あの瞳は私達の前では決して見せなかったから、だから……風鏡はもう大丈夫だと、私達は勝手に決め付けていたのよ。
けど、風鏡の本心は違ったのよね。いつでも、心に復讐という想いが刻み付けられている。
だから私達は誓いを立てた。もう風鏡が一人で泣かないように、本当にいつでも笑っていられるように、私達が……風鏡に敵を討たせてあげるって。……だから。

「だから……こんな所で負けられないのよ！」

竜胆の周りにある溶けた砂は一気に冷やされて黒く固まって行き、代わりに竜胆自身に熱が移っていく。どうやら砂浜を溶かしていた熱を全て自分自身に移したようだ。

更に灼熱斬馬刀を引き抜くと構える事無くシエラに向かって走り出したが、先程やられた足が一瞬だけ竜胆の動きを鈍らせる。

（こんなの……痛くない！）

想いで痛みを凌駕する竜胆はスピードを落とす事無く、いや、更に加速してシエラに向かって疾走して行く。

それを迎え撃つシエラは意外そうな顔をしている。

てっきり戦意を喪失したと思ったけど、逆に戦意を高ぶらせた。

何があったのか分らないけど、確実に精神が痛みを押さえつけた。

こうなると倒さない限り止らない。

竜胆の気迫はシエラにまで伝わるほど凄まじく、その気迫を全て熱に変えてシエラに向かって一撃を繰り出す。

あえて熱の影響が出ないところギリギリまで引き付けて、振り下ろされた灼熱斬馬刀をかわすシエラ。そして灼熱斬馬刀を叩きつけられた砂浜の砂が一斉に舞い上がる。

熱で溶けない！　焦熱の属性を攻撃だけに集中させて他に影響を与えないようにした。……まずい、あれだと一撃でも当たれば致命傷になる。

先程までの竜胆はシエラのスピードに対処するために、あえて熱を分散させていたのだが、逆にシエラに利用された為に手傷を負う事になった。だが、現在の竜胆は攻撃にのみ熱を集中させている。そうする事で灼熱斬馬刀に宿っている高温を更に高め、自身がまとっている高熱であらゆる攻撃を焼き尽くす。

一撃で相手を倒せるほどの超高温の攻撃に、相手の攻撃を無効化、または歪める事が出来る高熱の鎧。この二つを使った接近戦こそが、

焦熱の属性が誇る最大の攻撃方法だ。
だから焦熱の属性は接近戦だと、どの属性よりも最強に近い強さを発揮する。だが短所が無いわけではない。
自らの精霊武具を超高温に持っていくことで、焦熱の属性は遠距離攻撃が出来なくなる。そのため、自ら突っ込んで行って距離を縮めるしかない。だから遠距離を得意としている属性にはどうしても後手に回ってしまう。
だがシエラの属性は翼。スピードを生かした撹乱と接近戦を得意とする属性だから、焦熱の属性とは明らかに翼の属性が不利だ。だが勝敗は属性で決まるわけじゃない。その事はシエラも良く分かっている。
……さすがにあんな戦い方をされたら不利、でも手が無いわけじゃない。
舞い上がった砂が全て落ちる前に、翼を羽ばたかせて宙へと舞い上がろうとするシエラ。
上空からの一撃離脱、これなら撹乱出来る。
そのうえ竜胆は足に怪我をしている。だから状況を確認しながら上昇していけば確実に竜胆を捉える事が出来る。そう判断したシエラだが、それが大きな間違いであった。
突如、舞い上がった砂の向こうから姿を現す竜胆。だが、竜胆が姿を現したのはシエラよりも上だった。
「なっ！」
予想の範囲をはるかに超えた竜胆の行動。竜胆は怪我した足にもかかわらず、跳んでシエラよりも少し上を取った。
「りゃあああああっ！」
完全にシエラを捉えた竜胆は右薙から灼熱斬馬刀を振るう。とっさに最高速で避けようとするシエラだが、灼熱斬馬刀の間合いが広すぎた。どの方向に逃げても竜胆なら修正してくるだろう。
そして剣戟音が鳴り響き、ウイングクレイモアと灼熱斬馬刀がぶつかり合っていた。

笑みを浮かべる竜胆に苦い顔をするシエラだが、もう遅い。
ウインククレイモアに生えた翼は一瞬にして燃え出して一気に焼き尽くされた。だが超高温を宿した灼熱斬馬刀に威力はそれだけに留まらず、シエラの腕まで一瞬にして燃え出してしまった。
「あああぁぁぁっ！」
自らの肉が焼かれる痛みに声を上げるシエラ。更に竜胆は灼熱斬馬刀を振り抜くと、シエラを砂浜に叩きつける。
砂浜に叩きつけられたシエラは大きくバウンドして再び地面に叩きつけられる。それから砂浜を転がるシエラだが、意識は飛んでおらずにはっきりしている。そのため、転がっていた体が止まるとすぐにウイングクレイモアを手放し、未だに燃えている両腕をなんとか砂浜に突っ込んで燃えてた火を消す事が出来た。
完全に火が消えた事を確認するとシエラは両腕を砂浜から取り出す。
……精霊武具が、燃え尽きた。
軽装なシエラの精霊武具でも腕と肩、胸と足にはしっかりとした防具が付いていたのだが、腕の防具はすでに跡形もなく消え去っており、両腕の表面は炭化していた。
……まだ動く、少しの間は痛いけどしょうがない。
両腕に力を一気に込めて炭化した皮膚を弾き飛ばす。もちろん、精霊とは言えそんな事をすれば皮膚の下にある神経が風にさらされて激痛を伴うのだが、こんな状況ではそんな事は気にしていられない。どうにかして腕を動かせるようにしなくてはやられるだけだ。
それに炭化したままの皮膚だと、どうしても腕の動きを損なう。今の竜胆を相手にするのだから少しでも戦いやすいようにしなくてはいけなかった。
……よし。
なんとか腕を動かせる事を確認したシエラはすぐにウイングクレイモアを拾うと、その場から飛び退く。
そしてシエラが居た場所には灼熱斬馬刀が振り下ろされた。

竜胆としてもシエラに時間を与える気は無い。だからこそ、間髪を置かずに追撃を掛けてきたのだが、かなり吹き飛ばしてしまった為にシエラに両腕だけは使えるようにしてしまった。

だがそれだけでシエラにしてみれば、まだ大事な物の再生を出来ていなかった。

その事に竜胆も気が付いているのだろう、シエラに立て直す隙を与える事無く、ここぞとばかりに一気に攻め立てる。

竜胆の攻撃をなんとか避け続けるシエラだが、その動きは先程に比べてかなり遅い。今のシエラはエレメンタルアップの力でなんとか灼熱斬馬刀を避けてるに過ぎなかった。

ここまで矢継ぎ早に攻められると……翼を再生している時間が無い。……それにしても、砂浜ってこんなにも動きずらいとは思わなかった。

シエラが全力で戦うときは必ず飛んでいた。そのため、今まで自分の足だけで戦った事がほとんど無いシエラにとっては、この砂浜はかなりの悪条件だった。

それでも竜胆の攻撃を避け続けられるのは、昇のエレメンタルアップがシエラの反射速度と足での移動を加速しているため。エレメンタルアップが無かったら、とっくにシエラはやられていただろう。

なんとか翼を再生させたいけど……。

そう考えているシエラだが、現状がそれを許してくれない。なにしろ、避けるだけでは限界があり、シエラはしかたなくウイングクレイモアで灼熱斬馬刀を弾いて避ける事もあるからだ。

竜胆の攻撃に対して自分に当たらないように軌道をずらしてやれば、ウイングクレイモアと灼熱斬馬刀が重なるのは一瞬だけ。その一瞬だけならシエラにまで熱が伝わる事無く、後は互いの反作用によりウイングクレイモアと灼熱斬馬刀は離れる事が出来る。

そうやってなんとか攻撃を回避しているシエラだが、ウイングクレイモアと灼熱斬馬刀が重なり合う瞬間があるために翼を再生する事が出来ない。

もし再生途中で避けられない攻撃が来たらウイングクレイモアで弾かないといけない。そして灼熱斬馬刀と重なり合えば、確実に再生途中の翼は再び燃え尽きてしまうだろう。

つまり、ウイングクレイモアから翼が生えている限り、翼の再生は出来ないという事だ。

その事でシエラは思い悩む。

……手が無いわけじゃない。でも……この姿にはあまりなりたくない。……なんとか、他の手を打ちたいんだけど……無理……っぽい。……しかたない、少しの間なら。それに……昇や皆に見られなければいいか。

胸当ての精霊武具を解除するシエラ。元々軽装のシエラだから防具の一つを解除したところでスピードが変わる訳ではない。シエラが胸の精霊武具を消したのは別の目的があったからだ。

竜胆の攻撃を避けながらも意識を少しだけ背中に持っていく。そしてシエラの背中、長い髪を通り抜けてそれは姿を現し始めた。

それは紛れ無い……翼。シエラの背中から生えた翼は徐々に全貌を現していく。

そしてシエラの背中から生えた翼が完全に広がりきった瞬間、竜胆の眼前にいたシエラが一瞬にして姿を消した。

「なっ！」

突然消えたシエラに驚きの声を上げる竜胆。急いで辺りを見回してみるがシエラは居ない。そうなると残された場所は。

「上！」

上を見上げる竜胆。そこには確かに背中に翼を生やして宙に浮いているシエラの姿があった。

「くっ！」

シエラの姿を捉えて悔しそうな顔をする竜胆。シエラが居る位置は跳び上がればなんとか届きそうだが、シエラに翼がある限り、捉える事は出来ないだろう。

だから竜胆には見上げる事しか出来なかった。

（翼の属性、その特徴はスピードにあるけど。翼の生える場所は精霊武具ならどこにでも生やす事が出来るのよね。くっ！　なんとか翼の再生を止めたかったけど、さすがに背中だと無理よね）

シエラは常に竜胆と向かい合っていた。だから竜胆の攻撃が最も届かない場所は背中になる。さすがに背中に翼を生やされると竜胆にはどうする事も出来なかった。

（それにあのスピード、私じゃあ捉えきれない。たぶん、剣に翼を生やすより、背中に翼を生やした方が早い。まずいな、さすがにあれ以上スピードアップされると追えるかどうかも分らないわよ）

つまり、背中に翼を宿したシエラのスピードは竜胆が捉えられない程でもある。先程の動きを見れは竜胆にもそれははっきりと分ったのだろう。

（こうなったら、一か八かやるしかない。あの子の攻撃が私に入った瞬間、その時だけは必ず動きは止まる。その瞬間に決めることが出来れば、私の一撃なら確実に仕留められる）

肉を切らせて骨を絶つ、というやつだろう。そんな決意をする竜胆だが、シエラは意外な行動をとる。

ウイングクレイモアを前に突き出したシエラは静かに呟く。

「六枚は……キツイから、四枚でなんとか」

一気にウイングクレイモアに力を流し込む。流し込んだ力がかなり大きいのか、シエラのウイングクレイモアは大気を揺るがす。

「って、何する気！」

下から竜胆がそんな事を叫んでくるが、シエラは構わずに続ける。そして必要な分の力を注ぎ終えたら一気に力を解放する。

「ウイングクレイモア、ケルビムモード」

そしてウイングクレイモアから新たな翼が姿を現す。新たなる翼を一気に広げると羽が舞い踊り、大きく広げられた四枚の翼が完全なる姿を現した。

それからシエラは再び背中に意識を映すと、背中から生えた翼が再びシエラの髪を通して内側に戻っていく。

完全に背中の翼を引っ込めたシエラは新たなる翼を宿したウイングクレイモアを構える。
「……その背中のやつ、戻してよかったの？　そっちの方が早いんでしょ」
竜胆が灼熱斬馬刀を構えながら、そんな皮肉染みた事を言って来るが、シエラは少しだけ顔を伏せて答える。
「あの姿は……好きじゃない」
その答えに竜胆は笑みを浮かべてみせる。
「そお？　天使みたいで綺麗だったわよ」
「そんな事は関係ない。嫌いな物は嫌いなだけ」
「へぇ～、まあいいけど。それで、もう一回剣に翼を生やしてよかったの。私の灼熱斬馬刀とぶつかり合えば、その翼も一瞬にして燃え尽きるのよ」
その言葉にシエラは竜胆に鋭い視線を送りつける。もちろん、竜胆も負けずに闘志を視線に込めてシエラに送る。
「もう、あなたの剣は私に触れる事は出来ない」
「へぇ～、なら、試してみなさいよ！」
「言われなくても」
二人の視線が交差して互いに負けられない意思を送りあう。
そして次の瞬間、シエラは一気に下降して、竜胆はそれを迎え撃つ。
こうして、お互いに全力を尽くす戦いが再開された。

第七十五話　翼と焦熱（後書き）

え～、そんな訳で、エレメの七十五話はいかがでしたでしょうか。

……なんか、いろいろな用語が出てきましたね。まあ、本文中で説明しているので分ると思いますが、より一層の理解を求める方はご自分でお調べ下さい。

……だってしょうがないじゃん！！！　あまり詳しく書いてるとどこかの専門書みたいになっちゃうし、詳しい説明がどこにも載ってなかったんだもん！！！　だから説明が間違ってたらごめんなさい。

でもでも！！！　理論は間違ってないよ！！！　だから間違った事は書いてないはずです……たぶん。

まあ、そんな訳ですので、もし詳しい方が間違いを見つけたらご一報下さい。出来る限り何とかしてみます。

さてさて、言い訳はこの辺で終えといて。そんな訳で、純情不倶戴天編は残すところ数話となりました。……長かったな。振り返ってみても、やっぱり閃華の過去に長く取りすぎたかな？　とか思っております。けど、まあ、あれはあれで面白かったからいいっか。と自己完結しておきましょう。

さてさて、そろそろ次の設定を完成させないとですね。あらすじは頭の中で出来てるんですが、……その他もろもろがまだ。

ちなみに、次は純情不倶戴天編の少し後、つまり昇達はまだ夏休みですね。少しだけ予告しておくと、夏祭りがあります。そこでやるであろう私の野望（お前のかい！！！）　まあ、そんな感じの出だしで行こうかと思っております。

という事で、そろそろ締めましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票をお待ちしております。

以上、琴未とミリアというヒロインを抜いて昇に票が入った事に少し驚いている葵夢幻でした。

第七十六話　降り積もる雪のように

昇達と相対しながら、風鏡は静かにゆっくりと瞳を閉じる。それは一瞬だけど、その一瞬で今までも事が一気に思い出される。

カサカサと、静かに舞い降りる雪のように、私の心には密かな想いが積もっていく。

私は昔から一人で居る時が多かった。両親などは顔すら知らないし、物心が付いた時から施設で同じような境遇の子達と一緒に暮らしてた。

中には親の事について知りたいと思う子が多かった。だけど私はそんな風に思ったことはほとんど無かった。

一度も無いわけじゃない、私もそういう風に思ったことはある。……けど、どうせ最後は一人になるのだから、それなら最初から一人でも同じだと思っていた。

だから施設の子達とも一緒に居る事も私は無かった。そんな孤独の中で、私は私なりに生きていた。

中学と高校は寮のある所を選んだ。施設に居てもいつかは出て行くんだし、それなら早めに出た方が楽だと思ったから。それに、施設の子達にも美味く馴染めなかった私が早く出て行った方が残った子達にもありがたかっただろう。

そして寮に移っても……私は一人だった。別に友達が居なかったわけじゃない。その頃になれば、それなりの処世術も身に付けていたから、今までのような孤独感からは少しだけ解放された。けど……私を理解してくれる人は居なかった。

そんな感じで学生時代を終えた私は、適当に就職してそれなりに

仕事をしていた。何も問題も起こさなかったし、人付き合いもそれなりにしていたから普通の生活を送っていたと言える。

……けど、私は常に一人だった。心の奥底では理解者を求めてた。誰でもいい、誰かに私の気持ちを分って欲しかった。でも、自分からそういう考えをひけらかすのはためらった。なにか……同情を買うみたいで嫌だったから。

そんな時にあの人が……拓也が私の前に現れた。最初は私も普通に接していた。世間一般で言う大人の付き合い方というやつで。

……けど、拓也はある日、私の心を見透かした。

それは仕事で拓也と話しているときだった。丁度会話が切れて適当に笑顔を作って話題を繋げようとした時だった。

「何か悲しいことでもあったんですか？」

「えっ？」

「いや、凄く悲しい目をしていたから」

笑顔を崩した事も、悲しい表情をした覚えも無かった。ただ、唐突に理解した。私は……いつでも目に悲しみを漂わせていた事を。

その時は適当にはぐらかしたけど、それからの私は拓也の言葉が頭から離れなくなり、いつでもその事を考えていた。

その後も何度か拓也と会う機会があった。拓也はその度に私を元気付けようとしてくれた。何度も誤解だと言ったけど、拓也は聞こうとしなかった。たぶん、私の瞳から悲しみが消えなかったから。

けど、私もそんな拓也の行為を拒絶しなかった。どこかで望んでたのかもしれない、拓也が……もっと私の中に入ってくるのを。

それからしばらくして拓也から個人的な呼び出しを受けた。そして言われた事。

「よかったら僕と……付き合ってくれませんか」

「……」

びっくりした。いや、最初は何を言われたのか理解できずに黙っている事しか出来なかった。黙り続ける私に拓也は狼狽して勝手に話し続けて、最後には勝手にフラれたと勘違いして話を終わらせよ

うとした。
　そんな拓也に私は慌てて声を上げて、出来る限り自分の気持ちを伝えた。その時に話した事は良く覚えてないけど。拓也が私の手を取って嬉しそうにしていた事は良く覚えてる。その時から、私達は恋人になった。
　それから私の世界が変わった。今まで常にあった孤独感は消えうせて、いつでも拓也が傍に居るようだった。そんな温もりを、私はいつでも感じるようになっていた。
　それだけじゃなく、拓也は私をいろいろな所に連れて行ってくれて、その度に私の世界は広がって行った。
　そして時が経つにつれて、拓也の傍に居る一分一秒が降り続ける雪のように私の中に積もっていく。それは大切で、掛け替えの無いもの。大事な、大事な時間。
　その時間の中では私は一人ではなく、すぐ傍に幸せを感じることが出来た。たとえ離れていても傍に感じることが出来た。喧嘩をしても、それでお互いを深く知る事が出来た。大事な存在。
　だから疑う事が無かった。これからもそんな時間が続いていく物だと思ってた。
　けど……そんな日々は、突然音を立てて崩れ去った。
　大した理由があったわけじゃない。ただ、拓也が海を見に行こうと言い出したので、私達は海の見える岬へと向かった。
　小波と海鳥の音を音を聞きながら、私は拓也に寄り添っていた。いつまでも続くと思っていた時間がそこにあった。
　だけど……突然世界が色を変えて、海鳥の泣き声が聞こえなくなった。
　静か過ぎる世界、聞こえてくるのは小波の音だけ。そんな世界に突然迷い込んだ私達は狼狽するばかりだった。そして……あいつが現れた。
「なかなか面白い能力をお持ちですね」
　突然私達の後ろに現れた白衣の男。隔離された世界であいつは笑

いながら悠然と私達に近寄ってきた。
「初めまして、私はエルク・シグナル。アッシュタリアの開発技術者です」
どう見ても怪しい状況に妖しいエルクが現れたのだから、拓也は私を守るように立ちはだかった。私は拓也の腕を掴みながら震えているのが分った、私も……そうだったから。
エルクは笑みを浮かべていたけど、その奥から感じる恐怖が私達を動けなくしていた。
そしてエルクは私を庇う拓也に笑顔で言った。
「大丈夫ですよ。そちらのお嬢さんには危害を加えません。用があるのは……あなたなんですから」
突然私は弾き飛ばされて拓也から離された。そして私が顔を上げると、拓也は何かに縛られてるみたいに身動きが取れずに、宙に浮かされてエルクの前にまで移動させられた。
楽しげな笑みを浮かべながらエルクは拓也の胸に手を宛てると、エルクの手はそのまま拓也の中に入って行った。
「ぐあぁっ、あ、あ」
苦しそうな声を上げる拓也。私は目の前で何が起こっているのか分らず、その場を動けないで居た。
「おや、やはり珍しい能力ですね。心の能力、属性は考ですね」
更に拓也の中を引っ掻き回すエルク。その度に拓也は苦しそうな声を上げた。
「ほう、これは、なるほど。心の能力は相手を思いやる者、また相手の心を読む術に長けた者が使える能力なんですね」
それだけを言って拓也の中から手を引き抜くエルク。私はこれで突然の悪夢が終わるものだと思ってた。だがエルクは不気味な笑みを浮かべた。
「心の能力を目にしたのは初めてですよ。これはぜひとも研究したい物ですね。けどこれは……データさえあれば充分ですから」
見えない何かを手にするエルク。

「器は要らないんですよ」
それを一気に引っ張り、次の瞬間……拓也は中から弾け飛んだ。
暖かい物が私に降り注ぎ、それを確認する暇も無く、拓也の頭が私の方にだらりと落ちてきて、無機質な瞳が私を見つめる。
胸の鼓動が高く早くなり、頭が無理矢理現実を伝えてくる。
「いやあああああああああああああああああっ！」
やっと悲鳴を上げた私に構う事無く、エルクは平常と変わらない声で言葉を発した。
「さて、後は器を始末するだけですね。まったく、今の人間社会はめんどうですからね。まあ、事を荒立てなければ自由に出来るワケですから、やる事はちゃんとやりましょう」
未だに宙に浮いている拓也と一緒にエルクが岬の先に向かって歩き出した。私は震える体を動かして拓也を掴もうとしたけど、エルクによって再び弾かれてしまった。
そのままエルクは拓也を岬の外にまで持って行き、私の視界から拓也が消えた。
「あっ、あっ」
震える体をはわせながら、私は岬から乗り出して下を見た。はるか下、岩場のところに拓也が居た。ただ見詰めるだけの私にエルクは無常な言葉を投げつけてきた。
「後を追いたいならどうぞ。止めはしませんからご自由になさってください」
ワケが分らなかった。ほんの数分前までいつものように笑っていた拓也が、今は冷たい岩場にいる。
信じられない光景に私は涙を溜めた目をエルクに向けた。
「な、なんで、こんな事を」
それが出せる精一杯の言葉だった。そんな私にエルクは笑顔を向けて当たり前のように答えた。
「決まってるじゃないですか。いらなくなった道具は捨てる。当たり前の事ですよね」

「どう、ぐ」
「ええ、普通の事ですよ。缶コーヒーも飲み終わったら器は捨てますよね、それと同じですよ。まあ、最近はリサイクルの時代ですから再利用してもいいんですけどね。それもめんどくさいじゃないですか。それに、あなたには器だけでもあった方が良いでしょう」
それだけを言い残して、エルクは私の前から消えた。そして世界は元に戻り、私に待っていたのは……警察の尋問だった。
あの場所に居たのは私だけ。当然私はエルクの事を話したが、そんな男は見かけていないという事で処理された。そして拓也の死は事故死となり、真相は全て覆い隠された。
悔しかった。悔しさで押し潰されそうだった。何も出来なかった事、何も分らない事、何も……拓也にしてあがられ無かった事。そう、拓也は私に大切だと思える時間をくれた、孤独だと思っていた私を引っ張り出してくれた。拓也は……本当に私に大事な物をくれた。
……けど、私は何も拓也にしてあげた事は無い。
だから、だからせめて、敵だけは討つ。それが……唯一、私に出来る事だから。
そう決意した時、常磐と竜胆が私の前に現れて力をくれた。敵を討つ力を……。
だから、こんな所で止まれはしない。邪魔する者を全て倒してでも、あいつを……エルクの存在を消してみせる。
そのためには……どんな事でもしてみせる！

風鏡はゆっくりと目を開くと鋭い眼光を昇と閃華に向ける。それから視線を少しずらして常磐と竜胆が戦っているのを目にする。
二人とも戦闘を開始したようで戦っているのだが分った。それから風鏡は昇達に視線を戻すと自らの精霊武具、氷雪長刀を構える。
「では、行きますよ」

静かだけど鋭い声に閃華は昇より前に出ると龍水方天戟を構えてから、ゆっくりと口を開いた。
「じゃが、その前に言っておこうかのう」
「なんですか？」
「昇の能力じゃ。風鏡殿の能力はこの前見せてもらったからのう」
昇達が常磐と竜胆に絡まれた時は昇の能力は使っていない。だから風鏡にも昇の能力は分かっていない。
だが風鏡の反応は冷たいものだ。
「わざわざそのような事を言わなくても結構です。どちらにしても倒す事には変わりありませんから」
「くっくっくっ、では勝手に言わせて貰おうかのう。昇の能力はエレメンタルアップじゃ」
「エレメンタルアップ？」
聞き覚えが無いのか風鏡は少しだけ考えるような顔になるが、気持ちを切らさない事を優先したのか、すぐに考えるのをやめた。これから倒す相手だから、どうでもよい事なのだろう。
そんなに風鏡に閃華は言葉を続ける。
「エレメンタルアップは契約した精霊の力を限界以上に上げる事が出来る能力じゃ。まあ、ドーピングの強力版と思ってもらってよいぞ」
なんか……そう言われると嫌な感じだな。
閃華の後ろで黙っていた昇はそんな事を思う。まあ、間違いではないのだから、そう言われてもしょうがないのだろう。
だが風鏡はそれがどうしたという感じで、今にも動き出しそうだが、閃華はそんな風鏡の殺気を軽く流すように笑う。
「くっくっくっ、昇の能力を聞いても闘気は薄れんのう。全て分っているのか、それともまったく分ろうとしないのか、どちらにしても心は折れんか。じゃがな」
閃華は姿勢を低くするといつでも動けるようにする。
「それ故に、何も見えておらん、何も聞こえておらん。そんな事で

は……潰されるだけじゃ」
「なら、やってみてはどうですか」
風鏡も姿勢を下げると、いつでも突っ込めるように構える。
睨み合う閃華と風鏡。そして動き出す前に、閃華は昇に向かって言葉を放つ。
「昇、分かっておるな。風鏡殿を止めるには潰すしかない。手加減するでないぞ」
「分ってるよ。けど、風鏡さんを潰す気は無いよ。あくまでも力づくで説得するだけだよ」
「同じじゃと思うんじゃがな」
「全然違うよ」
そう、僕達がやる事は風鏡さんを潰す事じゃない、気付かせる事だ。
そんな昇の思惑が通じたワケではないが、閃華は笑みを浮かべると一呼吸置く。
「まあ、そこは任せるとしようかのう」
それだけ言って閃華から笑みが消える。
それを合図に閃華と風鏡は前に出している足に力を入れると一気に飛び出す。互いに距離を詰めて行き、剣戟音が鳴り響く。
ぶつかり合い、そのまませめぎ合う龍水方天戟と氷雪長刀。だが突然の変化が龍水方天戟に現れる。
「ッ！」
龍水方天戟に巻き付いている水龍が凍りだした。最初はぶつかり合っている場所に近い頭から凍りだし、凍結する場所は段々と広がっている。
その様子を見た閃華は目の前の風鏡に向かって口を開く。
「さすがは冷(れい)の属性じゃのう。水龍を凍らせるか」
「このまま行けば、その程度では済みませんよ」
「そうみたいじゃのう」
氷雪長刀が放っている冷気は龍水方天戟を通して閃華の手にまで

伝わるほどだ。確かに、このまま二つがぶつかり合っていれば龍水方天戟まで凍る事になるだろう。

だが閃華が笑みを浮かべるのと同時に水龍の氷は弾け飛び、元の姿になると龍水方天戟から離れて風鏡に牙をむく。

「くっ」

閃華から離れる風鏡。すぐに閃華の追撃が来ると思い、いつでも迎撃出来るように隙は見せないが、閃華が追撃する事は無かった。

そのため、風鏡はゆっくりと再び龍水方天戟に戻る水龍を見ることが出来た。

「龍の水が、流れてる」

「正解じゃ。止まっている水はすぐに凍るからのう。じゃが、動いている水はそう簡単には凍らんぞ。まあ、気休め程度じゃがな」

わざわざそんな事を口にする閃華。風鏡はそんな閃華を睨み付けるのではなく、冷やかな視線を送る。

（甘く見られてる。精霊はともかく後ろの契約者がまったく動こうとはしない。……なら、その余裕を今すぐに消してあげます！）

風鏡が氷雪長刀をかかげると風鏡の周りから一気に雪が吹き上がる。それを見た昇は初めて二丁拳銃を構え、閃華は笑みを浮かべる。

「それでよい、本気の風鏡殿を叩かないと意味が無いからのう」

吹き上げた大量の雪は風鏡の前に落ちると氷雪長刀が振るわれる。

「雪流怒涛（せつりゅうどとう）！」

昇達に向かって一気に流れ出す大量の雪。雪崩のように迫ってくる雪に閃華は振り向く事無く叫ぶ。

「昇！」

昇の軸線上から飛び退く閃華。目の前が開けた昇は迫ってくる雪に銃口を向ける。

「フレイムレーザー！」

銃口から飛び出す赤い閃光、それは昇に迫ってくる雪を一直線に溶かす。だが、そんな事をすれば雪が水に変わり、スピードを増して昇に迫るだけだが、閃華は流れてくる水に龍水方天戟を突っ込ん

で一気に持ち上げる。
迫ってくる雪を溶かした事で昇と風鏡を隔てるのは大量の水だけ、その水を閃華は持ち上げて、龍水方天戟の後を追っている。
大量の水を従えて風鏡へと迫る閃華。大きく跳んで上空から大量の水を風鏡に叩きつけようと龍水方天戟を振るうが、風鏡も合わせて氷雪長刀を振るう。
龍水方天戟がぶつかる前に水が氷雪長刀とぶつかり合う。普通ならそのまま風鏡に大量の水が叩きつけられるはずだが、氷雪長刀とぶつかった水はその場で凍りつき、その範囲を急激に増していく。
とっさに水を切り離して雪の上に避難する閃華。風鏡のぶつけようと持ち上げた水は全て凍らされてしまった。
その光景に昇も驚いた。
あれだけの水を瞬時に凍らした。う～ん、さっき閃華が言ってた策は大丈夫なのかな？……今は閃華を信じよう。それが……閃華に応える事になるから。
そんな事を思う昇。昇自身も風鏡が戦うのを始めて見る。だから風鏡がここまでの力を持っているとは思ってなかったのだろう。
それでも昇は閃華を信じる事にした。かつて、小松が閃華を信じたように、昇も閃華を信じたかったから。だからこそ、今は閃華を信じて行動を起こす。
その閃華は風鏡の動きが止まった事を確認すると雪の上から飛び出して一気に攻めに出る。
「龍水刃舞」
水龍が大きく口を開けて、高速回転する水刃を大量に放つ。
さすがにこれは風鏡も凍らせよとはせずに、その場から飛び退いて避ける。例え凍らせても回転までは止められず、氷の刃になるだけだ。
だが、ただ避けるだけの風鏡ではなかった。避けた先は閃華の着地地点からはそんなに離れていない。だからこそ、避けきった後はすぐに閃華に向かって氷雪長刀を振るう事が出来た。

閃華も龍水方天戟を振るって応戦するが、決して拮抗状態には持ち込ませない。さすがに少しの時間でも氷雪長刀に触れたくは無いのだろう。

その事は風鏡も分っているみたいで、無理に拮抗状態に入ろうとしない。閃華の実力からして無理に持っていけば、こちらに隙が出来る事が分っているからだ。

だからこそ、閃華と風鏡は打ち合いを続ける。

剣戟音が鳴り続ける中で、閃華は一瞬だけ視線を外して昇を見る。どうやらかなりの力を集めてるようで、そろそろだと判断できる。

閃華が風鏡から視線を外したのは一瞬だけだが、その一瞬を風鏡は捉えていた。

(何かを企んでいるようですね。……契約者の子がかなり力を集めてる。先にそっちを何とかした方がいいみたいですね)

風鏡も昇が何かをしている事に気が付いた。だからこそ、風鏡は勝負に出る。

閃華の龍水方天戟が打ち下ろされるのと同時に風鏡は一気に距離を詰める。お互い長い物同士、懐に入り過ぎれば武器は使えなくなる。

だから風鏡は氷雪長刀を持った手を後ろにして、閃華の懐に飛び込む。

龍水方天戟が風鏡の肩を打って激痛が走るが、風鏡は痛みを堪えると空いている手と片足を伸ばす。

「なんじゃと!」

驚きの声を上げる閃華。だが次の瞬間には風鏡は閃華の手と片足を踏み付けていた。そして一気に力を発動させると、閃華の手足を凍らせて行く。

「くっ」

閃華の手は龍水方天戟を持ったまま凍らされて、足は片足と地面を貫くように凍っていく。

このまま全身を凍らされると思った閃華だが、風鏡は閃華の動き

を封じるだけ凍らせると閃華から離れる。
「いかん、昇！」
風鏡の意図に気付いた閃華は叫ぶが、風鏡は昇に向かって駆け出していた。
昇も迫って来る風鏡に目を向けるが、あえてそこから動こうとはしなかった。
僕を相手に風鏡さんが近距離戦を仕掛けてくるとは思えない。だから、あれが来る。
風鏡の思考を読んだからこそ、昇は動かなかった。
昇の武器は明らかに遠距離。下手に近距離戦を仕掛ければ昇が先手を取り続けて反撃すらままならないだろう。だからこそ、風鏡はこの距離から一気に仕掛ける。
「雪流怒涛！」
風鏡の足元から一気に舞い上がる大量の雪。今度は風鏡自身も押し上げて、風鏡を昇に向かって運ぶ。
風鏡は昇を完全に捉えると雪を蹴って後方へと飛び退き、大量の雪は昇に向かって崩れ始める。
怒号を響かせながら大量の雪が昇へと流れて行き。遂には昇を巻き込んで大量の雪は崩れ流れた。
風鏡は雪が昇を巻き込んだ事を確認すると閃華へと振り向く。閃華はすでに腕と足の氷を砕いている。だが凍らされた後遺症が出ているのだろう、まだ上手くは動かせないようだ。
閃華は凍傷を引き起こしている手足を軽く動かしてみる。どうやら完全に動かせないようでは無いようだ。
まだ動く手は龍水方天戟を強く握り締めて、閃華は風鏡に目線を向ける。
そして風鏡と視線が合った途端、風鏡は一気に飛び出して氷雪長刀を振るう。
ここぞとばかりに一気に攻め立てる風鏡に閃華は避けに徹する。
風鏡は攻撃の合間に閃華の表情を捉えるが、その顔に悲観や絶望は

無い。むしろ何かを待っているようだ。
　閃華が距離を置くために大きく後ろに退がる。風鏡はあえて追撃は掛けずに氷雪長刀を構えなおす。
「ずいぶんと余裕ですね。何を待っているか分りませんが、契約者は雪の下ですよ」
　閃華の意図を探ろうとしたのだろう。風鏡は閃華に話しかけるが、閃華は笑って流す。
「くっくっくっ、確かにそうじゃな」
　あっさりと答える閃華に風鏡は心の底で歯を噛み締める。
「契約者の助けが無い以上、あなたに勝ち目はありません」
「くっくっくっ、それはどうかのう。それに……まだ昇が退場したと決まったわけではないぞ」
「……」
　閃華の言葉に風鏡は少しだけ意識を昇が居た場所に向ける。
「……ッ！」
　そこには微かだが、雪の下から力を感じることが出来た。
「くっくっくっ、気付いたようじゃな。じゃが、昇の元へは行かせんぞ」
　今度は閃華から仕掛けてきた。閃華に気付いた風鏡も先手を取るために氷雪長刀を振るおうとするが、一旦休んだ事により緊張が解かれて動かした肩に痛みが走る。
（くっ、こんな時に）
　どうやら戦闘の緊張が解かれた事により、痛みを認識できるようにしてしまったようだ。
　しかたなく防戦に回る風鏡。そんな風鏡の状態を察した閃華は一気に攻め立てる。だが風鏡はすぐに痛みを気合で押しのけて攻めに回る事が出来た。
　攻防を続ける閃華と風鏡。そんな二人にくぐもった声が聞こえた。
「フレイムシュート　ガドリング」
　昇を飲み込んだ雪から聞こえる声と何かがぶつかり合う衝撃音。

その音の正体はすぐに分った。昇を飲み込んでいる雪がすべて溶けて、それがまだ残っている雪にぶつかり始めたからだ。
それは昇が放った火球。銃口から乱射される火球は残っている雪に当たって溶かし始めている。
その様子に風鏡は一瞬だけ気が逸れた。その隙を見逃さない閃華は風鏡を弾き飛ばす。
「キャ！」
海とは反対方向に飛ばされた風鏡はすぐに体勢を立て直すと、追撃してくる閃華に備える。だが閃華は風鏡に追撃しようとはしなかった。それどころか、風鏡に背を向けて海に向かって走っている。
（なっ、何をする気ですか？）
ワケの分らない行動をする昇と閃華。呆気にとられる風鏡だが、このまま終わるはずも無く、これが次に繋げる布石だと判断する。
（そうすると、どちらかを潰さないとですね）
閃華は昇と海の間で止まり、昇は未だに大量の雪を溶かしており、その足元には大量の水が広がっている。
（……攻撃の要は精霊。なら、先に精霊さえ潰せば、後はこちらの思ったとおりに持っていける）
閃華に狙いを定めた風鏡は一気に駆け出す。
迫ってくる風鏡に閃華は面白そうに笑みを浮かべると辺りを見回す。それから迫ってくる風鏡に龍水方天戟を向けると水龍が大きく口を開く。
「龍水閃」
水龍の口から放たれる圧縮された水。一直線に風鏡に向かって行くが、風鏡はスピードを落とす事無く避けてみせる。
距離を詰められた閃華だが、風鏡の足元に龍水閃の一撃を放つと、風鏡の前に大量の砂が舞い上がり、風鏡は思わず足を止めてしまう。
閃華との距離は詰めたことには変わりない。だから何をすればすぐに対応できると判断したのだろう。
閃華も追撃を掛ける事無く。静かに舞い上げた砂が落ち着くのを

待っている。
そして砂が落ち着くと、風鏡は閃華に鋭い視線を向ける。
「もう逃げ場はありませんよ」
「別に逃げたワケではないんじゃがのう」
「でしょうね。なら、ここで終わりにしましょう」
相変わらず風鏡の挑発に乗る事無く、軽く流してしまう閃華。そんな閃華に風鏡は苛立つ事も無くなり、冷静に物事を運ぼうとする。
そんな風鏡を見て閃華は軽く笑う。
「くっくっくっ、さすがじゃのう。その態度、少しは琴未に見習わせたいものじゃな」
笑う閃華に風鏡は警戒を解きはしない。そんな風鏡に閃華は笑うのをやめると大きく手を広げて自分の左右を指差す。
「さて風鏡殿、私の右側と左側に共通するものはなんじゃろうな？」
馬鹿げてるとも言える質問。そんな質問は無視しても構わないのだが、それでは閃華にやられた気分になり士気が下がる。
だからこそ風鏡は閃華を警戒しながら交互に左右を見る。
右側、距離は開いているが昇が未だに雪を溶かしている。どうやら大半は溶かしたみたいで、今は残り少ない雪を溶かしている。その所為だろう、辺りはかなり水浸しだ。
左側、これも距離は離れているが海がある。一応、観察してみるが、これと言って目立ったものは無い。
風鏡は視線を閃華に戻す。閃華は未だに両腕を広げて風鏡の答えを待っているようだ。
警戒を怠る事無く、風鏡は思考を巡らす。
（二つに共通する点？　海と浜辺に共通する物？　いったい何を言いたいのでしょうか？）
閃華の質問に戸惑う風鏡。もう一度、昇の方向に目を向ける。どうやら昇は雪を溶かし終わったみたいで、荒い息をしていた。
そんな昇の足元にはしみ込め切れない大量の水があった。
「……そうか！」

質問の意味を理解した風鏡は声を上げると共に先手をしくじった事を思い知る。

（くっ！　やはり契約者から叩いておけばよかったんですね！）

悔しそうな顔をする風鏡に閃華は口を開く。

「そうじゃ、答えは水じゃな。海には大量の水があり、昇が居る場所には大量の雪を溶かした大量の水がある。そして雪は全て溶かしたからのう、こうなっては風鏡殿の属性よりもこちらの属性が働くんじゃ」

どちらにも言えること、それは水があるということ。そして雪を全て水に変えたことにより、風鏡の属性では操れないようにしてした。

雪は水が固体化した物で、その支配属性は雪や冷などが優先されて水の属性では届かない。だが溶かしてしまえば水の属性が優先的に働きかける事が出来る。つまり、この場には風鏡が影響できる物は無いということだ。

「さて、では私の最高技を持って戦いを終わりにするとしようかのう」

閃華が力を発動させると、昇の周りにある水は砂浜と完全に分離して水だけが舞い上がり、海からの大量の水が閃華の元へと集まってくる。

「龍水舞闘陣　八俣ノ大蛇舞（やまたのおろちまい）！」

龍水方天戟から離れた水龍は大量の水と共に閃華の足元へと消えて行き、大量の水がそこに注ぎ込まれると閃華が何かに乗って舞い上がる。

それは水龍の頭。頭だけでも閃華ぐらいの大きさがあり、首は更に長く続いている。しかも水龍の頭は一つだけではなく、ドンドンと地面から這い出して合計八つになる。

八つの頭は一つの胴体に繋がっており、更に進むと一つの尻尾が海と繋がっている。

まさしく、その姿は神話に出てくる八俣ノ大蛇そのものだった。

八つの首を垂らしながら、水龍の上に乗った閃華は風鏡を見下ろす。

「どうじゃな、水場の強い場所だからこそ使える八俣ノ大蛇舞じゃ」

閃華の策は全てこの技を発動させるために用意していた物だ。風鏡が大量の雪を使う事は分っていた。だからこそ閃華は昇に風鏡が雪を出したら、それを全て溶かすように頼んだ。

おかげで風鏡の攻撃を封じつつ、自らの最高技を出す事が出来た。

閃華が作り出した水龍の八俣ノ大蛇はかなりの大きさがあり、その威力は見なくても充分に分るだろう。

だが風鏡は水龍の八俣ノ大蛇を目にしても一向に慌てる様子は無く、いつものように平静な態度で口を開いた。

「では、その八俣ノ大蛇を倒したら私はスサノオですね」

「くっくっくっ、そうじゃな」

「私には八塩折(やしおり)の酒も十握剣(とつかのつるぎ)もありませんが、私なりに大蛇(おろち)退治と行きましょう」

風鏡の言葉に笑みを浮かべる閃華。

「くっくっくっ、なかなかサビを分っておるようじゃのう。そういう所を琴未も見習って欲しい物じゃな。さて、風鏡殿はどうやって大蛇退治をするつもりじゃ？」

閃華の問に風鏡は氷雪長刀を前に出すと刃を下に向ける。

「こうやってです」

風鏡は氷雪長刀を地面へと突き刺す。地面と接している刃から氷が生まれて伸びていく。それは風鏡の少し前で止まり、円形に広がっていく。そして人の一人分まで広がると風鏡は叫ぶ。

「雪姫　哀愁白夢(あいしゅうはくむ)！」

円形に広がった氷が一気に割れて、その中から人が一人、飛び出してきた。

砂浜に着地するその人物。その姿は風鏡に似ているが、白装束を身にまとい、長く黒い髪を風になびかせて悲しい瞳をしている。その姿は雪女を想像させる者だった。

「雪姫」
風鏡がそう呼びかけると雪姫は風鏡の前に移動して、守るように立ちはだかった。
これにはさすがの閃華も驚いているようだ。
「凄いのう、まさか自分の分身を作り出すとはのう。どうやったか教えて欲しいものじゃな」
「別に特別な事はしてません。自分の力を時分に使った、それだけです」
「なるほどのう」
理論で言えば昇がやった事と同じだろう。契約者や精霊達が使う力というものは属性を通さないと単なる力に過ぎない。そんな物を放出しても意味は無いし、上手く形にならずに散布するだけだ。
だからこそ、昇は自分自身に力を送り、武具をイメージして具現化させて使用している。
風鏡の場合だと、武具はエレメンタルがあるから必要ない。そこでもう一人の自分をイメージし、更に能力をイメージして具現化させている。
やり方は昇と一緒だ。後は何をイメージしたかだけの違い。そしてこの違いこそ、精霊と契約者を分ける物だ。
精霊にはこんな真似は出来ない。そもそも精霊は属性の象徴であり、生まれながらにして属性に縛られている。だが契約者は違う。その力は契約者本人の物であり、自由に使う事が出来る。
だからこそ、イメージ次第で具現化などという芸当が出来るわけだ。
風鏡は砂浜から氷雪長刀を引き抜くと大蛇に向かって構え、大蛇も声は出ていないものの威嚇するように口を開く。
「では、大蛇退治の開始ですね」
「くっくっくっ、そう簡単にはやられんがのう」
雪姫が飛び出すのと同時に八俣ノ大蛇の首が一つ雪姫に向かって突っ込んでくる。再び死闘が開始された。

えっと、これはいったいどういう事なんだろう。
閃華達から離れた所に居る昇は常識外れの戦いに参戦できずに居た。まあ、この状況で昇が突っ込んでいったところで足手まとい以外の何物でもないだろう。
う～ん、ここは閃華に任せるしかないかな。まあ、閃華の事だからうまくやってくれると思うけど……僕は何をしよう？
なんとなく仲間外れになった気分になる昇。少し考えて自分がやるべき事を思い付いた昇は虚空に向かって口を開く。
「与凪さん」
「はいはい、なんですか？」
昇の呼びかけにすぐにモニターが現れて与凪の姿を映し出す。
「状況を教えて下さい」
「はいはい、ちょっと待ってくださいね」
そう言ってキーボードを操作する与凪。それからすぐに昇の前に新たなモニターが三つ現れる。
三つのモニターにはミリアと琴未、シエラ、そして閃華が戦っている様子が映し出されていた。
「皆さん有利に戦闘を進めているみたいですね。けど、相手の精霊もかなり粘っているみたいです。ここまでやれるって事は……かなりの執念ですね」
「うん、常盤さんも竜胆さんもこの戦いには負けられないからね」
この戦いで負けたら風鏡さんの契約が解かれて、風鏡さんは力を失う事になる。けど……それ以上に二人には戦わないといけない理由があるはず。
何かを確信している昇。それは確かな絆だと思うからこそ、昇はそこに賭ける事が出来る。
昇はどちらかというとシエラ達より竜胆達の闘いを見ていた。
そんな昇に与凪は何気なく口を開く。

「ところで滝下君」
「なんですか？」
「……暇なの？」
「……」
……言い難い事をはっきりと言わないで下さいな！
暗い眼差しを与凪に送る昇。その事が与凪に図星だった事を伝える事になった。
「えっと、大丈夫だよ。滝下君の能力は戦闘向きじゃないから、それに大将は後ろで威張って構えておくものだよ」
とっさの慌しいフォローをありがとう、与凪さん。
だがこのまま大人しく待っているのも性に合わない。だからこそ、自分が思っている結末へ行くために昇は手を講じる。
閃華が勝つのはいいけど……勝ちすぎちゃいけないんだ。どうにかして、丁度良い所で行ければいいんだけど。
そう考えた昇は閃華の戦いに注目する。
そのモニターには水龍八俣ノ大蛇を操る閃華と雪姫と一緒に大蛇と戦っている風鏡の姿が映し出されている。
形勢は……やっぱり閃華が有利か。あの八俣ノ大蛇を相手だと風鏡さんも苦戦せざる得ないか。う～ん、決めるにしても、あの雪姫をどうにかしないと難しいな。かと言って閃華が勝ち過ぎると機を逃すし……あっ、そうだ。
何かを思いついた昇は与凪に向かって口を開く。
「与凪さん！」
「はいはい、どうしました」
「閃華と話せる？　出来れば風鏡さんに気付かれないようにしたいんだけど」
昇に言われて風鏡はキーボードを叩く。
「音声だけの通話ですか？　う～ん、さすがにバレる可能性が大きいですね」
「そこを何とかできない？」

「……分りました、少し待ってくださいね」
そう言って与凪はキーボードから手を離し、意識を集中させる。
少し待っていた昇だが、自分の近くに小さな霧が出来ている事に気付いた。その霧は薄くだが閃華に続いているようだ。
「滝下君、準備できたわよ。その霧に向かって話しかけて」
昇は頷くと与凪に言われたとおりに霧に向かって話しかける。
「閃華、聞こえる？」
『なんじゃ？』
返事はすぐに帰ってきた。一応、昇はモニターに目を移してみるが閃華は視線を風鏡から外してはいない。どうやら閃華も霧には気付いていたようだ。
昇は一安心すると続きを話す。
「閃華、どうにかして風鏡さんの近くに居る、あの人を倒す事が出来る？」
『雪姫か？』
閃華に聞かれて昇は返答できずに困ってしまったが、与凪があれが人ではなく風鏡が作り出した分身だと説明してくれた。
あれは与凪さんの能力が作り出した分身なんだ。なんか……皆いろいろな事を考えてるんだな。って、今はそんな場合じゃないか。
昇は気を取り直すと話を続ける。
「その雪姫だけを倒せそう？」
要するに風鏡は倒すなという事だ。無茶な注文ではあるが閃華なら出来ると昇は信じていた。
そして閃華もそんな昇に応えようとする。
『随分と無茶な注文じゃのう。じゃが、やってみよう』
「うん、ありがとう。そして雪姫を倒した後なんだけど……」
昇は更にその先の事を説明する。
……。

説明を終えて昇は閃華の反応を待つが、与凪が先に口を開いた。
「相変わらず凄いと言うか、そんな事をする必要があるの？」
与凪の質問ももっともだろう。なにしろ昇は水龍八俣ノ大蛇すら使おうというのだから。
だが昇はそんな風に水龍八俣ノ大蛇を使う事に閃華が怒るのではないかと心配だった。だが閃華は軽く笑い出した。
『くっくっくっ、何を企んでおるかは知らんが、その後はどうするつもりじゃ？』
「それで終わりだよ」
閃華としてはそれで終わるとは思っていなかったのだろう。だが、昇はそれでこの戦いを終わりにするつもりだ。
『……まあよい、全ては昇に任せておる。じゃから昇の言うとおりにしようではないか』
「うん、ありがとう閃華」
『わざわざ、礼などいらんがな』
そういう閃華だが、その声から少し嬉しそうな気持ちが昇には伝わってきた。
昇は与凪に通信を終えた事を告げると、周りに浮いているモニターも全て消してもらってから走り出した。
正直……自分のやっている事が正しい事だとは言い切れない。でも、風鏡さんの幸せを願っている人が居るなら、風鏡さんは復讐に捕らわれるべきじゃないと思う。
押し付けかもしれない、自己満足かもしれない。でも、時間が戻らない以上はそれからは逃げられない。だから、向き合わないといけないんだ。例えどんなに……苦しくて答えが出ないものでも。それが……生きて行くという事だと思うから。
その時になって昇はようやく風鏡に伝えるべき言葉を思いついた。それは昇が無意識に手を伸ばしていた事。閃華と風鏡がずっと見て

いた物とはまったく逆の物。
過去は過去、どんなに探しても問題しかない。答えは今日の続きにある。例え無くても作り出す事が出来る。それが未来だと昇は思う。
過去をヒントに未来に答えを見出す。それが昇のやり方だ。
だからこそ、今は目指して駆け続ける。自分が出した答えを風鏡に聞かせるために……。

第七十六話　降り積もる雪のように（後書き）

さてさて、そんな訳で七十六話でしたが、いかがでしたでしょうか。

……やりすぎ？　まあぶっちゃけると怪獣と妖怪ですからね。八俣ノ大蛇と雪姫ですよ。

これに関しては私もどうしようかと思ったんですが、八俣ノ大蛇舞はかなりの条件がありますし、雪姫ぐらいならありかなと思い、思い切ってやっちゃいました。……大丈夫！！！　後悔はしてないから……たぶん。

さてさて、次回は風鏡との戦いに決着を付ける……予定です。まあ、相変わらずどうなるか分りませんが、予定では後二話で純情不倶戴天編を終わらせる予定です。

いや～、長かった純情不倶戴天編も終わりが見えて来ましたね。……閃華の過去が思ったより長かったのはご愛敬ということで。次章も長くなりそうだ！！！　という事で末永いお付き合いをお願いします。……見捨てちゃヤダ、お・ね・が・い（ハート）

ではでは、懇願が終わったところで締めましょう。

ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。

以上、戦国武将が女性の間では大人気ですね。ちなみに、私もその辺には広くて浅い知識を持っていますと、小声で主張してみる葵夢幻でした。

第七十七話　雪と水は相乱れる

水龍八俣ノ大蛇の首が一つ、風鏡と雪姫に向かって突っ込んでいく。

風鏡は横へ、雪姫は上空に跳んで大蛇の首を回避したので大蛇の首はそのまま風鏡達が居た場所の砂浜へと突っ込み、砂煙を上げて鎌首を上げると上空にいる雪姫を睨み付ける。

雪姫はゆっくりと落下してくる中で左手を口元に添えると、静かに息を吹きかける。

雪姫が吹きつけた息はすぐに吹雪へと変わり下に居る大蛇の首へと襲い掛かる。大蛇の首はすぐに凍りだすが、大蛇の首は凍っている事などまるで気にしないかのように、開かない口をそのままにして雪姫へと襲い掛かる。

迫ってくる大蛇に雪姫は吹雪を止めると一蹴、大蛇の首を粉々に砕いてしまった。

着地する雪姫。だが水龍八俣ノ大蛇の首は他に七つある。雪姫の着地に合わせるかのように首の一つが雪姫へと迫る。

その首は雪姫へ辿り着く前に、一瞬にして首のほとんどが凍りつくと砕け散ってしまった。

砕け散った大蛇の後ろから風鏡が姿を現す。風鏡は氷雪長刀を突き出すような格好をしていた。どうやら大蛇の首に氷雪長刀を突き刺して一気に凍らせたようだ。

だが水龍八俣ノ大蛇は風鏡に休む暇を与える事無く攻め続ける。

先程、雪姫に砕かれた首がまたしも雪姫へと迫る。頭が無く首だけで迫ってくる大蛇は気味が悪いが、雪姫との距離を詰めた大蛇の首が一気に再生した。

雪姫に牙を向く大蛇の首。

閃華は雪姫が回避すると思い、予想地点にいつでも次の首が迎えるように準備をするが、雪姫は自ら大蛇の口へと飛び込む。

ほう。
当然それだけでは終わらなかった。
雪姫を飲み込んだ大蛇が一気に凍って行き、全ての首が繋がっている胴体にまで達しようとしていた。
凍った首を切り離す閃華。凍りついた大蛇の首が砕け散り、その中から雪姫が姿を現す。
うむ、雪姫は風鏡殿が作り出した分身じゃったのう。じゃからあれぐらいの事はやってのけるというワケじゃな。
水龍八俣ノ大蛇は生き物ではなく水の結晶体だ。だから消化器官はおろか、口の奥は首を形成する水で出来ている。
雪姫は自ら口の中に飛び込むことで奥にある首を形成する水の塊、その中心部に手を当てて一気に凍らせた。端から凍らせるより、中心部に冷気を通すからかなり早く凍らせる事ができる。
だからこそ閃華も首を切り離すしかなかったようだ。
ふむ、どうやらあの雪姫はうかつに手が出せんようじゃな。一番手っ取り早いのが風鏡殿を倒す事なんじゃが、それは昇から止められておるからのう。どうにかして雪姫を倒すとするかのう。
昇の策を実行するには閃華がやるべきことが二つある。一つは雪姫の完全撃破、もう一つが風鏡を撃破せずに大ダメージを与えること。
まったく、昇もやっかいな事を言ってくれるのう。……じゃが、昇は私にそれが出来ると信じてくれたんじゃからのう、ここは一つ、その期待に答えるとしようかのう。
落とされた大蛇の首を再生する閃華。風鏡の目線は再生した大蛇の首ではなく、水龍八俣ノ大蛇の尻尾に向かっていた。
（あの尻尾、あれが海に繋がっている限り、海水を無尽蔵に汲み上げて八俣ノ大蛇を再生できるワケですか。だからといって……これだけの物量を私の力だけで凍らせるのは無理みたいですね。……竜胆が居てくれたら楽なのだけど）
少しだけ視線を外す風鏡。竜胆も常磐も交戦中でかなり派手な戦

いを繰り広げているようだ。
（援軍が期待できない以上は私の力だけで何とかしないといけませんね）
風鏡の周りにある大気が一気に温度を下げる。一気に気温が下がった事により、大気中の湿気が一気に凍り付き、風鏡は無数の輝きで覆われてその美しさを増す。
風鏡が氷雪長刀を前に出すと無数の輝きは数箇所に集まり、氷の楔（くさび）となる。
「氷刺点結（ひょうさてんけつ）」
氷の楔達は水龍八俣ノ大蛇に向かって撃ち出され一直線に向かっていく。
水龍八俣ノ大蛇の大きな体では避ける事は不可能。閃華は首を五つ前に出して氷の楔を全て大蛇の首で受け止めるが、楔が刺さったところから大蛇の首が凍りだす。
それで風鏡の攻撃は終わらず、次は雪姫が甲高い声を上げると両手を広げると雪姫の足元から砂浜が凍りだし、一気に大蛇の胴体へと氷の範囲を伸ばしていく。
やはり狙いは胴体のようじゃのう。
首をいくら潰してもすぐに再生される。なら再生し難い胴体なら水龍八俣ノ大蛇を倒す事が出来ると判断したのだろう。
確かに首はいくら潰されようとも他の首がフォローしている間に再生できる。だが胴体は一つしかない。かなりの質量はあるが砕かれれば再生は出来ない。
そして風鏡は胴体に向かって雪姫が作り出した氷の上を走り出す。
閃華もすぐさま残りの首で風鏡の迎撃に向かわせるが、風鏡の足元にある氷が彼女を守り大蛇の首を妨げる。
ならば、こっちはどうじゃ。
風鏡の迎撃を諦めた閃華は攻撃対象を雪姫に変更。二つの首が雪姫に向かって大きく口を開き、水の塊を幾つも発射する。これなら先程のように首を凍らせるのは不可能。

これは避けるしかない雪姫。これにより砂浜を走っていた氷は進行を停止。だが風鏡は氷雪長刀を縦にすると刃とは反対側の石突を凍りに付ける。そうすると再び砂浜の氷が胴体に向かって進行を始めた。

雪姫は風鏡殿の分身、じゃから同じ事ぐらい出来るという事じゃな。じゃがそう簡単に行くかのう。

迫ってくる風鏡をそのままに動ける大蛇の首は雪姫に集中する。二つの首が雪姫に向かって水を吐き牙を向く。大蛇の猛攻を避け続ける雪姫、どうやらそれで精一杯のようで反撃には移れないようだ。

その間に風鏡が水龍八俣ノ大蛇との距離を一気に詰める。

首の根元まで一気に走りぬけた風鏡が氷雪長刀を振るうと足元に広がった氷から幾つもの氷が伸びて行き大蛇の胴体に突き刺さる。一気に凍りだす大蛇の胴体。

それと同時に風鏡の真下から氷の柱が飛び出し風鏡を上に持ち上げる。

一気に上昇した風鏡が柱を蹴って飛び出すと、下に閃華の姿が見えた。どうやらこちらが本命らしい。

上空から一気に襲い掛かる風鏡。閃華は風鏡を見上げると大きく叫ぶ。

「読めておるぞ風鏡殿！」

閃華は完全に風鏡の手を読んでいたようだ。だからこそ、胴体への攻撃をそのままにして風鏡に備えた。現に胴体への攻撃は少しだけ凍らせるだけで今は止まっている。

風鏡に向かって龍水方天戟を振るう閃華。それと同時に凍ってしまった首は崩れ落ち、胴体からは五つの水柱が上がると新たなる首へと変わった。

新たな大蛇の首が牙を向くとしている中で風鏡は閃華に向かって笑みを向ける。

「でしょうね」

風鏡が腕を大きく振るうと眼前に雪の塊が出現して、その中から

雪姫が現れる。
　突如として現れた雪姫に閃華は二つの首がある方向に目を向けるが、そこに居るはずの雪姫は消えており代わりに砂浜が濡れていた。
　どこぞの幽霊みたじゃのう。
　閃華がそんな感想を思っていると雪姫が大蛇の胴体に着地。甲高い声を響かせると雪姫の足元から一気に水龍八俣ノ大蛇が凍りだす。
　そのスピードは早く、閃華が手を打つ前に胴体の表面と八つの首を一気に凍らせてしまった。
「随分と器用な事ができるんじゃな」
　雪姫の瞬間移動にそんな感想を口にする閃華。雪姫の横に並んだ風鏡はそんな閃華に語りかける。
「雪姫は私の分身、いわば私の一部です。ですから、私の元へ召喚する事は簡単に出来ますよ」
　氷雪長刀を構えて殺気と共に言葉を閃華に届ける風鏡。対する閃華も龍水方天戟を構える。
「それにしても水龍八俣ノ大蛇に乗り込んでくるとはのう、大胆な手を打つ物じゃな」
「大きな像は自分の体に取り付いた虫を払う事は出来ませんから、乗り込んでしまえばどうする事も出来ないでしょう」
　確かにこの状況では水龍八俣ノ大蛇は役に立たないだろう。風鏡は閃華を追い詰めたと確信するが閃華は笑い出した。
「くっくっくっ、確かにのう。じゃがそれは像の話であって水龍八俣ノ大蛇には効かんぞ！」
　凍りついた首から胴体へと飛び移る閃華。そして凍った八つの首が一気に崩れ落ちると新たなる首が再生される。新たなる首は今までのように一方に向いているのではなく、風鏡達を囲むように現れる。
「さて、雪姫の事は充分理解したからのう、そろそろ決めさせてもらおうかのう」
　風鏡達に向かって八つの首が一斉に襲い掛かる。

雪姫は声を上げると猛吹雪を発生させて大蛇の首を凍らせていくが、そんな事に構う事無く大蛇に首は突っ込んでくる。

「雪姫！」

風鏡は雪姫に合図を出して手を取る。雪姫に引っ張られるように大蛇の背中から脱出する風鏡。風鏡達の後に八つの首が一斉に自らの背中へと突っ込む。

大きな衝撃と共に氷が砕け散る。

舞い散る氷と共に砂浜に降り立つ風鏡。すぐに水龍八俣ノ大蛇を目にして悔しそうに奥歯を噛み締める。水龍八俣ノ大蛇はすでに元の形へと戻っており、再び一つの頭に乗った閃華が風鏡に向かって叫んできた。

「水龍八俣ノ大蛇の特徴は驚異的な再生力じゃ。どれだけ大蛇を凍らせようとも私の力が尽きん限りは倒せんぞ。それに今の私は昇の能力で限界を知らんからのう、いくらでも大蛇を再生できるというものじゃ」

その言葉に風鏡は昇の能力がやっかいな事に気付いた。

なにしろエレメンタルアップは精霊に限界以上の力を与える。当然のように力の容量も爆発的に増える。つまり力の消費が激しい技でも使いたい放題ということだ。

更に閃華は雪姫について話し出した。

「それに雪姫と水龍八俣ノ大蛇の相性は悪いからのう。雪姫の性質は相手が生き物なら生命活動を停止できるほど驚異的じゃ。じゃが無機質な物には大して効果が無いようじゃな」

そのとおりだった。雪姫の攻撃は相手が生物、または精霊でも生命活動を停止まで行かなくても著しく制限させる事が出来る。いくら精霊でも適した属性を持たない限りは極寒の中で生きる事が出来ない。

だが水龍八俣ノ大蛇は水の固まり、閃華の意志で動く大蛇に生命は宿っていない。極寒の地でも閃華の意思がある限り、制限を受ける事無く動き続ける事が出来る。

つまり雪姫では水龍八俣ノ大蛇は倒せないという事だ。
それを悟らせるために閃華は最終勧告とも言える発言をしたのだろう。それでも風鏡は氷雪長刀を手に閃華に鋭い視線で睨み付ける。
「……まだ、負けたわけではありません」
未だに闘志の折れない風鏡に閃華は軽く笑うと龍水方天戟で天を刺す。
「そうじゃな、じゃから、これからは全力で風鏡殿を潰そう！」
閃華が矛先を風鏡に向けると七つの首が一斉に風鏡に向かっていく。
向かってくる大蛇の首に雪姫が飛び出すと甲高い叫びと共に吹雪を巻き起こす。七つの首はすぐに凍りだすが、凍ったまま風鏡に向かって突っ込んで来る。
雪姫を弾き飛ばして風鏡に向かって突き進む七つの首は砂浜に突っ込み、衝撃で巨大な砂柱が天に伸びる。
閃華はすぐに凍った首を切り離して新たなる首を再生。七つの首を砂埃が舞い上がる中へと突入させる。
もちろん閃華が風鏡を捉えていたわけではない。ただ闇雲に大蛇の首を暴れさせているだけだ。
水龍八俣ノ大蛇ほどの質量になれば比例して破壊力が増す。だから策を労した小技より、勢いに任せた大技が有効だ。
砂埃の中を縦横無尽に暴れまわる七つの首。かなり派手に暴れまわっているので、新たな砂埃が舞い上がり、治まる気配は一向に無い。
それでも、首の一つが風鏡に直撃すれば大ダメージを与えられる。だからこそ閃華は大蛇を暴れさせているのだが、未だに手応えが無い。
ふむ、さすがに目標が小さいとなかなか当たらないものじゃな。
そんな事を思いながら大蛇を暴れさせている閃華。
だが唐突に七つの首が動きを止めた。
なんじゃ？　凍らされた……ワケではないみたいじゃのう。捕ま

ったという感じじゃな。
大蛇に首が動かせなくなったワケではなく、頭の先が何かに捕まったように動けない。どうにかして脱出を試みるがうまく行かない。
何度か試しているうちに砂埃も治まり、大蛇の首を捕らえている物が閃華の目に映る。
「なるほどのう」
それは雪姫の両手から大きく伸びた氷の網。それが大蛇の頭に取り付いて動きを封じている。
更に氷の網は大蛇の首に絡みつき、数本の糸を伸ばしている。糸は全体ではなく間隔を開けて数箇所に氷の足場を作っている。全体を凍らせれば切り離されて新たな首を再生させるだけだ。だからこそ、凍らせる箇所を絞って足場を作った。
風鏡が足場を渡り閃華へと迫ってくる。
狙いはあくまでも私というわけじゃな。
閃華も龍水方天戟を構える。
「じゃがな、それはこちらとて同じじゃ！」
閃華は自らが乗っている首を突進させる。その先には当然風鏡が居る。
風鏡も迫ってくる閃華に気付いたのか、それ以上は進もうとせず、今居る足場で閃華を迎え撃とうとする。
タイミングを合わせて足場から飛び出す風鏡。閃華も龍水方天戟で風鏡を捕らえられる位置に首を合わせる。
交差する両者。
宙を舞う風鏡の右腕から鮮血が吹き出すが、閃華は無傷だ。
風鏡が着地する前に追撃を掛ける閃華は首を急反転、背を見せている風鏡に迫るが急に首の動きが止まってしまった。
足元を確認する閃華。大蛇の首はすでに全体が凍っており、先程までの動きが伴った衝撃で崩壊を始めていた。
どうやら風鏡の攻撃は閃華ではなく、足元の大蛇に当たったようだ。

急に足場がなくなった事で重力に従い落下する閃華。地面に居る雪姫が声を上げると両手の網を切り離して跳び上がる。
閃華も矛先を下に向けると迫ってくる雪姫に備える。
二人の距離は一気に縮まり、閃華は龍水方天戟を突き出す。すぐに水龍を離して次の攻撃を準備するが、意外な事に龍水方天戟は雪姫を貫いた。
「……しまった！」
雪姫の意図に気付いた閃華は雪姫から方天戟を抜こうとするが、その前に雪姫の両手が閃華の肩を掴む。
掴まれた両肩から凍り付き、厚い氷が形成される。更に雪姫は突き刺さっている龍水方天戟を自ら突き進めて深く突き刺し閃華に抱きつく。
極寒の地に裸でいるような寒さを感じながら、閃華の体は雪姫との接触箇所から氷で包まれていく。
雪姫の腕の中でもがく閃華だが、まとわり付く氷で上手く動けない。閃華と雪姫は抱き合ったまま地面へと落下。
落下の衝撃で閃華の動きは一時的に止まるが、雪姫の冷気は止まる事無く閃華の体を氷で包んでいく。
「りゃあああぁっ！」
動きを封じられた閃華に風鏡がトドメを刺すべく氷雪長刀を突き出してくるが、再生した大蛇の首が牙を向いて風鏡を弾き飛ばす。
なんとか風鏡の攻撃を免れた閃華だが、このまま行けば雪姫に凍死させられるのは確かだ。
まずいのう、このままでは氷に閉じ込められた美しい少女の完成ではないか。……しかたないのう、やるしかないようじゃな。
閃華は覚悟を決めるとすでに八つの首を自由に動かせる水龍八俣ノ大蛇を操り、首の一つを自分達に向かって体当たりさせる。
衝撃で再び宙に舞い上がる閃華と雪姫。大蛇の首は次々と二人に体当たり、どんどんと二人を空中に舞い上げて風鏡が手出しできない場所で体当たりを続けた。

そのうち閃華の体を包み込もうとしていた氷は砕け散り、雪姫も閃華から離れだした。

更に加速して体当たりを続ける八つの首。衝撃に耐えられなくなった雪姫はとうとう閃華から離れ、閃華は雪姫を一蹴して龍水方天戟を抜き去った。

二人が離れた事で大蛇の攻撃は止まり、二人は落下を開始するが閃華は首の一つが受け止めた。

「やれやれじゃのう」

大蛇の攻撃で閃華も大分ダメージを負ってしまった。傷ついた身体がまだ動ける事を確認すると閃華は立ち上がり、頭の先に立つと下に居る風鏡達を見る。

風鏡の隣には無傷の雪姫が立っていた。あれだけの攻撃で無傷という事はありえないので風鏡が雪姫を回復させたのだと閃華は考えた。

分身というのも便利じゃのう。あれだけの傷を負っても能力者の力次第では回復できるんじゃからのう。

それでも風鏡を消耗させた事は確かだ。

傷ついた体を撫でながら、戦果はそんなに悪くないと感じた閃華は攻撃を再開する。

閃華を乗せた首を残して七つの首が風鏡に向かって再び牙を向く。迫ってくる七つの首に対して風鏡達も真正面から飛び出していく。自殺行為ともいる突撃に大蛇の首は容赦無く襲い掛かる。

大蛇の首を避ける風鏡達だが、あれだけの巨体を進みながら避けきれるわけが無く。どうしても体は傷つく。それでも風鏡達は耐え切ると大蛇の胴体を目指して疾走する。

一時的に止んだ大蛇の猛攻はすぐに再開され、今度は時間差を置いて首が一つ一つ襲ってきた。

それで断続的に攻めて風鏡達を近づけないようにしたかったのだろうが、攻撃が緩くなった事には変わりない。

風鏡は避けきれない大蛇の攻撃に耐えつつ、その距離を確実に詰

めてきた。
　かなり迫ってきた時点で閃華も攻撃を切り替えて猛攻を加えるが、風鏡はそれに耐えつつ距離を詰める。
　すっかりボロボロの体になったところで風鏡達は大蛇の胴体を捉えることが出来る距離まで辿り着いた。
「雪姫！」
　飛び出す雪姫。水龍八俣ノ大蛇もそこまで接近されると攻撃がし難いのか、雪姫を食い止める事が出来なかった。
　雪姫が吹き出した吹雪が首の一つ、その根元を一気に凍らせる。
「りゃあああぁっ！」
　大蛇の猛攻を掻い潜り、風鏡が雪姫の後を追って飛び出すと凍った首元を一閃。首の一つを切り落とす。
　だが水龍八俣ノ大蛇には無限とも言える再生能力がある。だから首の一つを切り落とされてもすぐに再生するのだが、今回に限り再生は出来なかった。
　どうなっておるんじゃ？
　さすがに驚く閃華。一瞬の同様が大蛇にまで伝わり、動きが一瞬だけ鈍ったところを再び雪姫の網で残りの首を捕らわれてしまった。
「さすがに驚いているようですね」
　すでに勝利を確信した風鏡は余裕の笑みを浮かべながら上にいる閃華に話しかける。閃華も平静を装うと風鏡の語り掛けに応じた。
「そうじゃな、出来たらタネ明しをしてくれたらありがたいんじゃが」
　風鏡は軽く笑うと水龍八俣ノ大蛇を指差す。
「現在、その八俣ノ大蛇は全てと言って良いほど海水で構成されてますね。それは再生に海水を用いていたからです。なら、海水を取り込めなくすればいいだけです」
　閃華は振り返ると水龍八俣ノ大蛇の尻尾に目を向ける。そこは海と水龍八俣ノ大蛇の尻尾が繋がっているのだが、尻尾の一部が凍らされて海との繋がりを断っている。

再び風鏡に目を向ける閃華。
「いつ気付いたんじゃ？」
「最初からです。あなたは攻撃を首だけでして来た。尻尾も使えば私達の虚を付けたでしょうけど、それをしなかった。無尽蔵に水を生み出せるなら尻尾も使えるはずです、それをしなかったのは何かしらの理由が在ると思いました」
「それで尻尾から海水を汲み上げて再生に使っていることに気付いたんじゃな」
「はい」
なんとも見事な観察力じゃな。
閃華は尻尾の事を上手く隠してきたつもりだったが、風鏡はあっさりとそれを見破ってしまった。
風鏡の観察力に驚きつつも閃華は話を進める。
「では、いつ尻尾を凍らせたんじゃ？」
「あなたが雪姫と戯れている時ですよ。さすがにあのような上空までは手が出せませんし、あなたの注意が雪姫に向いているときがチャンスだと思いました。ここから地面を通して尻尾の一部を凍らせましたのです」
地面は保温性が高い。だから風鏡が冷気を地面に送って操っても、そんなに温まる事無く冷気を尻尾まで届かせる事が出来た。
見事とも言える風鏡の手に閃華は感心したが、まだ終わったわけではない。
「じゃが八俣ノ大蛇にはまだ七つの首があるぞ、そのようなボロボロの体では最早相手は出来まい」
確かに風鏡の体は傷つき、力も限界に近いものがあった。それでも風鏡は笑って宣言する。
「いいえ、すでに王手です。そしてこれが詰みです」
切り落とした首の根元、未だに凍っている部分を指差して風鏡は叫ぶ。
「雪姫！」

飛び出す雪姫。閃華も残りの首を操り、雪姫の行動を防ごうとするが、その前に雪姫は凍っている首の根元に辿り着き、そのまま大蛇の内部に入ってしまった。

「なっ！」

「これで雪姫には手が出せない」

「じゃが風鏡殿を倒せば意味は成さんぞ！」

攻撃対象を風鏡に切り替えて、大蛇の首を向かわせる閃華。

首が風鏡に辿り着く前に、内部の雪姫を指差して風鏡は静かに言葉を出す。

「雪姫　白夢凍世（はくむとうよ）」

水龍八俣ノ大蛇の内部にいる雪姫が一気に力を解放。強烈な冷気が水龍八俣ノ大蛇を内部から凍らせていく。

そして首の一つが風鏡の眼前に迫った時、水龍八俣ノ大蛇は全身を凍りつかせて動きを止めた。

「さあ、大蛇退治の完了です」

宣言をする風鏡。

確かにこうなっては水の属性である閃華には八俣ノ大蛇をどうする事も出来ない。完全に制御権を失った事は閃華の敗北を意味している。

それでも閃華は凍った大蛇の上で軽く笑い出す。

「くっくっくっ、確かに水龍八俣ノ大蛇は負けたのう。じゃが私が負けたわけではないぞ」

「ええ、ですから最後の勝負と行きましょう」

氷雪長刀を構える風鏡。そんな風鏡に対して閃華は笑い続ける。

「くっくっくっ、いやいや、風鏡殿の言葉を借りればすでに王手じゃよ」

「なん、ですって？」

風鏡は確かに水龍八俣ノ大蛇を打ち破った。だから有利なのは風鏡はずなのに閃華はすで風鏡が追い詰められている事を宣言する。

「ときに風鏡殿、誰かを忘れておるんじゃないか？」

閃華はそんなことを口にするが風鏡は首を傾げるばかりだ。
「くっくっくっ、まあ影が薄いからのう、覚えて無くてもしかたないじゃろ。では詰みと行こうかのう」
終わりを宣言する閃華に風鏡は構えるが、閃華は攻める事無くその場で大喝する。
「さあ昇、条件は果たしたんじゃ！　じゃから後は任せる！」
途端に凍りついた水龍八俣ノ大蛇の後ろから巨大な力が発生して、光の柱が天へと登る。
「なっ！」
突然発生した力に驚きを隠せない風鏡。冷静さを取り戻したのは斬りかかって来た閃華の攻撃を受け止めた時だ。
「くっくっくっ、どうやら八俣ノ大蛇に集中しすぎていたようじゃのう。じゃから後ろで力を溜め込んでいた昇に気付かんのじゃ」
「まさか！　あの八俣ノ大蛇が囮」
「そうじゃよ、全てはここに至るまでの布石に過ぎんのじゃ」
焦る風鏡。昇と閃華にまんまとしてやられた事もそうだが、あれだけの力を防ぎきる自信は無い。そのうえ閃華との戦闘でかなり疲労している。このままここに居てはやられるだけだ。
閃華とのせめぎあう中で風鏡はより一層追い詰められる。
「あれほどの力です、あなたもここに居ては巻き込まれるのではないのですか」
閃華も戦闘でかなり負傷しているうえ、水龍八俣ノ大蛇という大技を使ったのだから疲労は大きいはず。
だが閃華は風鏡と刃を交えながら笑ってみせる。
「くっくっくっ、心配無用じゃ。私にはエレメンタルアップが掛かっておるからのう。風鏡殿には避けられなくても、私には避けられるんじゃよ」
「くっ！」
つまり閃華はギリギリまで風鏡をここに足止めしておくつもりだ。
絶対的に追い詰められた状況で風鏡は打開策を講じるが、どうし

ても答えは出てこない。
　それでも諦めるわけにはいかなかった。風鏡にはやるべき事があり、そのために生きている。
（こんな、こんな所でやられる訳にはいかないのに。あいつを、エルクを消滅させるまで負けない。そう誓ったはずなのに）
　そんな理想とは裏腹に現実は風鏡の目標を、生きる意味すら奪おうとしている。
（終わりたくない、こんな所で終わるのは絶対に嫌！　ここで私が負けたら拓也の心はどうなるの、何も知らずに逝った拓也に、私は……何をして上げられるの）
　甘える事しか出来なかった、頼る事しか出来なかった。幸せな時間の中で何も出来なかった後悔。
（一緒に居てくれる事、傍に居てくれる事。私が望んだのはそれだけの事なのに、それすら返す事が出来ない）
　貰ったのは少しの優しさ、風鏡はそれを返したかっただけ。けど……今はそれすら出来ない。
（ここで終わったら、私は本当に何も出来なくなる。たった一つだけ、私が拓也にしてあげられる事なのに）
　痛いほどに純粋すぎる想い。その想いが、更に風鏡を突き動かす。
（終われないの、拓也の敵を討つまで終わるわけには行かない。だから……だから！）
「邪魔しないで！」
　ありったけの力を冷気に変えて閃華の龍水方天戟を凍らせようとするが、閃華は逸早く離脱。風鏡もその隙に昇の攻撃範囲から逃れようとするが、閃華の追撃がそれを許さない。
　ならばと風鏡は閃華に攻めかかる。
　このような緊迫した事態でも風鏡は戦う事を選んだ。
　発動した昇の力は二つの戦いにも影響を与える。

「なに、この力！」
突然発生した力に常磐は弾き飛ばしたミリアの事を忘れて強大な力が発生している方へと目を向けると、そこには天を突き抜けた光の柱があった。
「なに、あれ？」
あの方向では風鏡が戦っていたはずだ。その事が不安となり常磐の心へ圧し掛かる。
「どうやら決着が近いみたいね」
ミリアを庇いながら雷閃刀を向けてくる琴未に、常磐は今まで見せた事無い真剣な顔を向けた。
「どういう事？」
「この力、あなた達には誰の物かわからないでしょ。だけど私達にははっきりと誰の物か分るのよ」
つまりこの力を発している持ち主は琴未達の仲間という事になる。
「さあ、どうするのよ？」
昇の力をはっきりと感じ取った琴未は勝利を確信し、余裕の笑みを浮かべならが復活したミリアと共に精霊武具を構える。
そんな琴未達に対して常磐も軽く笑うと元の表情を琴未達に向ける。
「そうね、これだけの力を発生させているという事はたぶん……私達の負けね」
風鏡が有利に戦っていれば今頃は力の発生源を叩いているだろう。だが未だにそれが無いと言うことは追い詰められている事になる。
敗北を確信した常磐に琴未はある提案を持ち出す。
「これで勝敗は決まったのよ。だから、私としてもこれ以上は無駄な戦いをしたくないのよね。素直に降参してくれれば悪いようにしないわよ」
「確かにそれも悪くないわね」
風陣十文字槍を下ろして戦う意思を見せない常磐。そんな常磐に琴未達も少しだけ警戒を緩める。

「私達の負けみたいだわ」
静かに呟く常磐にミリアは完全に警戒を解いて見守る。
「けどね」
「ミリア！」
再び風陣十文字槍を持つ手に力を入れる常磐に琴未はミリアに注意を促すが、すでに遅かった。
「それでも私は風鏡の傍に行かないといけないのよ！」
風陣十文字槍を振り上げるのと同時に大量の砂が上昇する風に乗って巻き上げられる。
上昇する風は琴未達をも巻き込む。
「くっ、ミリア！　何処から来る」
視界が完全に塞がれた以上はミリアの属性に頼るしかない琴未は常磐の位置を訪ねるが、ミリアからは意外な答えが返ってきた。
「琴未～、あいつ逃げたよ」
「へっ？」
意外すぎる返答に琴未は間抜けな声を上げる。そんなやり取りをしているうちに風は治まり、舞い上がった砂が二人に降り注ぐ。
やっと視界が開けた時には。常磐はすでに二人から遠く離れた位置を走っていた。
「……はっ、ミリア！」
突然の事態に呆然としていた琴未はやっと常磐の行動を理解する。
「急いで追うわよ！」
「えっ、なんで？　逃げるならいいじゃん」
「昇が攻撃されたらどうするのよ！」
「あっ」
やっと事の重要性に気付いたミリアを引き連れて琴未は常磐の後を追うべく駆け出す。
「なんとか出し抜けたわ、あの子達がバカでよかった」

そんな感想を言いつつ、常磐は風鏡を目指して駆け続ける。
途中で良く知った力が迫ってきたので常磐はそちらに顔を向ける。
「竜胆、あなたも無事……じゃないみたいね」
なんとか常磐に追い付いた竜胆だが、左肩から右腹まで大きな傷があり、未だに血が流れ出している。
「大丈夫？　というか何したの？」
いつもの調子で竜胆に語りかける常磐。だが竜胆にはそれほどの余裕は無いようだ。
「あの、白い子、かなり強くて、なかなか抜け出せなかったから。あの子の武器に抱きついて、追ってこれないようにした」
つまり竜胆はシエラのウイングクレイモアを全身で受け止めてシエラと翼を燃やし、そのまま戦闘から離脱してきたようだ。
そんな竜胆を心配する常磐だが走る速度は緩めないし、竜胆もしっかりと付いてきた。
「それで竜胆どうするの？　あの契約者の子に直接攻撃をしかける？」
それが一番手っ取り早いし、風鏡が戦えない状況なら退き易い。だが竜胆は首を横に振る。
「それはダメ、あの契約者、私達に気付いてる。気付いてて、私達を待ってる」
「なんで？　そんな事をして何の意味があるの？」
先程から質問攻めをしてくる常磐を竜胆は軽く睨み付けた後で自分の考えを口にする。
「分らない。とにかく風鏡の元へ行くのが最優先。そして逃げられるようなら逃げる。風鏡が無事ならまだやれる」
「……それしかないわね」
幸いな事は昇達が精界を張っていないという事。
エルクが最初に作り出した精界は巨大な物で、常磐もエルクの精界を包み込む精界を作り出すのには苦労した。
そんな巨大な精界だからこそ、突入を最優先した昇達は精界を張

らなかった。だから昇達はこの中から逃げる事は出来ないが、風鏡達は精界を解けば簡単に逃げる事が出来る。
そんな状況だからこそ、竜胆は逃げる事を最優先にした。
後は自分達が到着する前に昇が攻撃を仕掛けない事を祈るばかりだ。

力の発生源である昇は二つの銃口を風鏡に向けながら溜めた力を解放している。
「滝下君、もうすぐ二人が到着するわよ」
「了解です」
昇の隣には与凪を映し出したモニターがあり、常に状況を昇に伝えている。
そんな与凪がモニターの向こうでキーボードを叩く。そのスピードはかなり早く、さまざまなデータを一気に叩き込んで答えを求めた。
「出た！　残り三十八秒、なんとか間に合った」
「僕の前に出してください！」
与凪が一安心する暇も無く、昇は目の前に残り時間を刻む時計を表示してもらう。
残り三十秒。それでこの戦いが終わる、僕の手でしっかりと終わらせる。それが唯一、僕が風鏡さんに出来る事がだから。
残りの時間は十秒を切り、昇はこの一撃に神経を集中させると銃口の先に光り輝く光球が生まれる。
そしてカウントダウンの時計が零を示した。
「ヘブンズブレイカ――――ッ！」
昇が引き金を引くと光球より発射される高圧縮された膨大な力。
砂浜を削り、空気を押し出して突き進む光を風鏡はしっかりと目にしていた。

第七十七話　雪と水は相乱れる（後書き）

エレメ七十七話、如何でしたでしょうか。
そんな訳で……引っ張っちゃいました。……いやね、もう一気に風鏡との決着を付けようかなと思ったんですがね。それだと次回のボリュームが足らないような気がして、引っ張っちゃった。
という事で、次回は風鏡との決着とエピローグで純情不倶戴天編が終わります。
いやはや、長かったですね。いよいよ終わりですよ。……なんか、一年ぐらい掛かってしまいましたが、ようやく純情不倶戴天編が終わり、次に行けます。
さてさて、私のホームページ冬馬大社で行っている人気投票ですが、少し修正しました。
メインキャラに森尾と彩香を追加。更にロードナイト編と純情不倶戴天編を追加しました。これでロードナイトの面々と風鏡達が追加されたので、投票の幅が広がったと思います。
ちなみに、メインキャラ、ロードナイト、純情不倶戴天と分かれてますが、三つ全てに入れなくても構いませんよ。どれか一つでも行けますので投票をよろしくお願いします。
さてさて、一通りの事は言ったと思うのでそろそろ締めますね。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、そして投票と人気投票もお待ちしております。
以上、更新速度を上げたいと思ってるけど、なかなかうまく行かない葵夢幻でした。

第七十八話　明日へ

その美しい輝きとは裏腹に風鏡にとっては絶望とも言える光が迫ってくる。

昇が放った強大な一撃は砂浜を削り、空気を押しのけて風鏡と閃華を目指して突き進んでくる。

「さあ、風鏡殿、これで詰みじゃな！」

風鏡に背を向けて閃華は離脱を計る。昇の攻撃が放たれたからにはここに留まるのも限界だ。

そして閃華が戦闘を放棄した事で風鏡も自由に動けるが時間が無いもの確かだ。だから風鏡は閃華とは逆の方向へと走り出し、昇の攻撃を回避しようとするが、そんな風鏡の前にそれは現れた。

「ッ！」

本来なら龍水方天戟に巻き付いている水龍。閃華が氷付けにされそうになった時に切り離され、それから龍水方天戟には戻っていない。どうやら閃華がどこかに隠していたようだ。

水龍は口を大きく開けて風鏡に向かってくる。

風鏡は向かって来た水龍の口に氷雪長刀を突っ込んで一気に凍らせようとするが、身体が凍りつく前に水龍の胴体が風鏡の体に巻き付く。

「しまっ！」

そして水龍の身体が全て凍った時には風鏡の動きを完全に封じ込めてしまった。

確かにこの程度ならすぐに脱する事が出来る。だが昇の攻撃がすぐそこまで迫っている。

凍りついた水龍八俣ノ大蛇を一気に破壊してヘブンズブレイカーが迫り、風鏡は光の中へと消えていった。

昇の前には巨大な砂煙が立ち込めている。これもヘブンズブレイカーが砂浜を大きく削った影響だ。
そんな砂煙を前にしながら昇は呼吸を整えていた。
「さて、後は昇次第じゃな」
隣にいる閃華がそんな事を言ってくる。
閃華はヘブンズブレイカーを回避した数秒後には昇の元へと戻っていた。さすがはエレメンタルアップというところだろう、本来ならスピード型ではない閃華にそれだけの速さを与えるのだから。
「けど本当に上手く行きますかね？」
与凪がモニター越しにそのような事を言ってくる。どうやら未だに心配しているようだ。
そんな与凪に閃華は微笑みかける。
「ここまでやったんじゃ、今更四の五の言ってもしかたないじゃろ」
「まあ、そうなんですけどね」
与凪も閃華に釣られて笑みを浮かべる。
すでに風鏡との戦いには決着を付けた。ここからどう進めるかは昇に掛かっている。下手をすれば風鏡がこの先も昇達の前に立ちはだかる事になってしまうが、そんな事にはなら無いと昇は思っているようだ。
なんとか上手く行った……と思うけど。与凪さんの計算なら間に合っているはずだから、後は風鏡さんを説得できれば……全部終わって始める事が出来る。
確信は無い、ただ信じるだけだ。昇達のように……風鏡達も築いている事を……。
「昇」
舞い降りてきたシエラはすぐに昇の元へ駆け付ける。
「ごめん、逃がした」
シエラはすぐに竜胆を逃がした事を謝ってきた。シエラの役目は竜胆を足止めして風鏡に近づけさせない事だと……勝手に思っていた。

昇は少し申し訳無さそうに軽く笑うとシエラの髪を撫でながら、驚きの言葉を届ける。
「あ～、ごめんシエラ……実はそれで良いんだ」
「えっ？」
その言葉に呆然としてしまうシエラ。昇はどう説明したらいいか迷っていると閃華が軽く笑いながら昇の代わりに口を開く。
「くっくっくっ、よく言うじゃろ。敵を騙すにはまず味方から、とのう」
いや、あの、閃華さん。別に騙したワケでは無いのですけど。
確かに昇はシエラを騙したつもりは無い。時間が無いから説明を省いただけだ。まあ、それを騙したとも言えなくも無いが、昇に言わせれば早めに手を打ちたかっただけだ。
それにシエラ達に不自然なところが有っても疑われる可能性があった。本気で戦うからこそ意味がある。だから昇は何も言わなかっただけだ。
そんな昇の気持ちを知ってか知らずか、シエラは顔を伏せると静かに呟く。
「騙した？」
妙に殺気のこもった言葉だと昇は感じた。閃華に言わせればそのような事は無いのだが、先程の言葉が昇に妙な罪悪感を持たせてしまったようだ。
「いやいやいや、違うから、騙してないませんから。ただ説明を省いただけですって！」
慌てて言い作ろう昇。シエラはそんな昇の腕に抱き付くと潤んだ瞳で見上げる。
「本当？」
「本当です！」
はっきりと断言する昇だがシエラがその程度で終わるはずが無かった。
「でも結果的にはそうなった」

「うっ、いや、まあ、そうなった……のかもしれないですけど」
バツの悪い顔でシエラから視線を逸らす昇。そんな昇にシエラは軽く笑うと、更に体を密着させて一気に攻め立てる。
「別に怒ってない。昇になら……何度騙されても良いから」
いや、さすがにそんな事はしませんけど。
昇はそんな突っ込みを心の中で入れるがシエラとは視線を合わせられないでいた。
とてもそんな状況では無いのだが、先程の言葉に昇はかなり来る物があったらしく、ついそれなりの雰囲気になってしまう。
顔を真っ赤にして視線を逸らす昇に、シエラはそっと昇の頬に手を当てるとこちらを向かせる。
「でも、昇が少しでも悪いと思ってるなら……一晩だけで良いから、一緒に居て欲しい」
「いや、それはさすがに……」
まずいだろう、という言葉を言えずにいた昇。どうやらすっかりシエラの雰囲気に飲まれているようだ。
念のために言っておくが、風鏡との決着は付いておらず、現状はとてもではないがそんな状況ではない。
シエラもその事は分っているのだが、このチャンスを逃す事無く一気に攻める。
「別に何かをして欲しいわけじゃない。ただ、傍にいて欲しいだけ。……けど、昇が望むなら……どんなことでも。だから……良い？」
「良いわけないでしょ！」
琴未の右足がうねりを上げてシエラの脇腹を捉える。珍しく琴未の突っ込みが直撃してシエラは弾き飛ばされてしまった。
琴未は着地するとそんなシエラに指差して一気にまくし立てる。
「シエラ！　あんたね、こんな時まで何やってんのよ！　今はそんな事をしている場合じゃないでしょ！　それよりも私と代わりなさいよ！」
言葉の最後はすっかり目的が変わっているのはいつもの事で、琴

未は一通りシエラに文句を言うと閃華と与凪に矛先を変えた。
「二人ともなんで黙ってみてるのよ！　こういう時にシエラを止めるのが役目でしょ！」
それは確実に違うのだが、今の琴未に何を言っても無駄だという事は与凪も閃華も良く分かっている。
だから与凪は笑いながら琴未に告げる。
「だって琴未、こういう時に琴未が突っ込みを入れるのがお約束じゃない。結構楽しみにしてるのよ」
「知らないわよそんなの！　というか勝手に楽しみにしないでよ！」
何処まで行っても他人事の与凪に琴未は溜息を付くと今度は閃華に視線を向けた。
「というか閃華、今回に限ってなんで黙って見てるのよ！　こういう時に何とかしてくれるから頼りにしてるんでしょ」
確かに普段の閃華ならそれぐらいやっただろう。だが今回に限っては見学を決め込んでいた。だから琴未の矛先が向いたのだが、閃華は顔の前で手を横に振ると言い訳を始める。
「いやいや、琴未よ。私は後学（こうがく）の為に見学していただけじゃ」
「後学って何する気よ！」
「後々の為に役に立てようという意味じゃ」
「意味を聞いてるワケじゃないわよ！」
珍しく琴未の矛先をはぐらかそうとする閃華。その態度はいかにも怪しげであり、琴未だけではなくシエラまで加わり閃華を追求しようとしたが、その隙に後から来たミリアが昇を独占しようとする。
そんなミリアの行動はもちろん上手くは行かずにシエラと琴未によって阻まれた。そして繰り広げられたのはいつもの光景。
シエラとミリアと琴未の三つ巴。果てる事の無い言い争いが繰り広げられ、それを昇と閃華が呆れたのを通り越して諦めの視線を向けている。
そんな昇達に与凪が一言。
「皆さんそんな事をしていた良いんですか？」

『あっ』
一斉に声を上げる昇達。やっと現状に帰ってきたようだ。
ヘブンズブレイカーは確かに風鏡達にトドメを刺しただろう。だからと言ってこれで終わりと言うワケではない。昇にはまだやるべき事が残っている。もちろん、周りにいる精霊と幼馴染も……。
昇は照れながら咳払いすると前方の砂煙に目を向ける。だいぶ薄くなってきたようで見通しが良くなっている。
と、とにかく、風鏡さんのところに行こう。そして始めさせないと……これからの時間を。
「……行こう」
全員が頷き、昇達は砂煙の中へ歩き出した。

（……思っていた以上に……痛くない？）
閃華の水龍によって完全に動きを封じられてヘブンズブレイカーのダメージを覚悟していたのだが、実際にはそれ程の痛みやダメージは感じなかった。
水龍を砕いてから歯を食いしばり目を閉じ、前方には出来るだけの力を押し出したから軽減できた事は確かだろう。
それでももあれ程の力だから、この程度で済んだのは奇跡なのだろうかと風鏡は思った。
（それとも大きいだけで威力は少なかったのでしょうか？）
そんな疑問を感じながら風鏡は静かに瞳を開く。砂煙が辺りを覆っているようだが、風鏡の目にはしっかりと見えていた。風鏡を守ったモノの姿が。
「常磐！　竜胆！」
風鏡の目の前には両膝を付きながらも手にはしっかりと武器を握り締めている常磐と竜胆の姿があった。二人とも傷つき荒い息をしている、どうやら立つことすらままならないようだ。
ヘブンズブレイカーが風鏡に直撃する寸前に二人とも割って間に

入った。そのおかげで風鏡のダメージは軽減されて動ける状態を維持する事が出来が、常磐と竜胆はかなりのダメージを負ってしまった。

だから二人とも戦える状態ではないのだが、それでも後ろに居る風鏡に向かって二人は希望の言葉を投げ掛けてくる。

「風鏡……逃げて」

「ここは……なんとか、するから」

確かにそれは希望。争奪戦では契約者が負けない限りは負けではない。だからここで風鏡が逃げ切る事が出来れば次に希望が残せる。まだエルクを追うことができる。

そのために常磐と竜胆を見捨てる事になっても風鏡はまだ目的を追うことが出来る。まだ生きる目的を失わずに済む。

痛みを伴う希望。今の風鏡はそれにすがるしか道は無い。ここまで追い詰められては確実に負けるだけだから。

けれどもそれは道理であり理屈。正しい論理かもしれないが人の全てがそれで出来ているわけは無い。

「そんな状態では……どうする事も出来ませんよ」

歩き出そうとする風鏡。戦う意思は未だに折れてはいない。

これ以上戦えば負ける事は確実。そんな事は風鏡にも分っている。分っているけど今は戦う以外の選択肢は風鏡の中には無い。

だからこそ戦う事を選ぶ風鏡。そんな風鏡に常磐と竜胆は思いっきり叫んだ。

「ここで逃げないと負けるだけだわ！」

「全部終わっちゃうのよ！」

風鏡を負けさせるわけには行かない。少なくとも目的を達するまでは。

その想いだけが二人に力を与え、血を流しながらも立たせようとする。戦う意思が折れてないのは風鏡だけではない。人も精霊も想いだけで限界以上の力が出せる。

けれども現実はいつも容赦が無い。常磐と竜胆もなんとか立つ事

が出来た。けど動くどころか己の武器を握ることすら出来なかった。
地面へと落ちる風陣十文字槍と灼熱斬馬刀。すぐに拾わなくては戦う事すら出来ない。何度も体に動けと命じるが一向に動かす事は出来ない。もう……二人とも限界なのだ。
動かない体に遂げられない想い。その事が二人の目に涙を浮かばせる。
たった一つのささやかな願い。二人はそれすらも叶える事が出来ない。その事が悔しくて、情けなくて、どうしようもなく惨めに思えた。
そんな二人に今度は風鏡から言葉を投げ掛ける。
「もう……いいのですよ」
諦めに似た敗北宣言、少なくとも二人にはそう思えた。
「よくないわ！」
叫ぶ常磐に竜胆も頷く。そんな二人に風鏡は後ろから笑みを向ける。
「いいのですよ」
ゆっくりと歩き出す風鏡。常磐と竜胆を通り越して二人を守るように砂煙に向かって立つ。
「幸いにもあの子にはエルクを討つ理由が在ります。都合の良い事を言ってるかもしれませんが、敵はあの子に取ってもらいましょう」
『……』
「私よりもあの子が強かった。それだけです。……けど、私も素直に負けを認める気はありません。だから……最後の最後まで足掻く事にします」
どこまでも諦めず、戦う意思が折れない風鏡の姿はカッコイイかもしれない。けれどもその時点で敗者であり、すでに諦めた者の姿だ。
それだけでなく今の風鏡は生きる事すら投げ出そうとしている。殺して欲しいとまで風鏡が願っているのを二人は良く分かった。
だから言わずにはいられない。

「……なら、全部捨ててよ」
「竜胆？」
止められない涙に抑えきれない感情。竜胆も無理に止める事はせずに全部風鏡にぶつける。
「明日に生きようとしないなら！　……全部、捨ててよ。戦う事も生きる事も、そして敵を討つ事も全部！　捨ててよ。そうじゃないと……私達が戦ってきた意味が無い。諦めるなら……全部諦めてよ」
敵を討つという事、戦うという事、そして生きるという事。それぞれ意味は違うかもしれない。けど竜胆にとっては全部同じ意味だ。
風鏡が敵を討つという意思がある限り戦い続けて生き続ける。目的の先に安息があると信じて生きる事が出来る。だから竜胆は風鏡の為に戦う事が出来た。
けれど今の風鏡は違う。中途半端に諦めて昇に希望を託そうとしている。それは悪い事ではないのかもしれない。けど竜胆にとっては耐えられない事だ。
崩れ落ちる竜胆に代わって今度は常磐が静かに風鏡に告げる。
「私達は風鏡の為に戦ってきたわ。契約をしたからじゃないわよ、私達がそれを望んだからよ。風鏡の願いの先に……私達の願いがあったから……。だからと言って責任を押し付ける気は無いわよ。終わりにしたければ終わりにすればいいわ」
常磐達の願いは常磐達が勝手に願った事。だからその責任を風鏡に押し付けるようなことはしない。そのために積み重ねてきた努力が全て無駄になったとしても、攻めるような事はしない。
主従という関係がそうさせているのではなく、常磐達の願いはそんな事では叶わないと分っているから。
言いたい事を言い切ったので常磐の気力も尽きたのだろう。竜胆と同じように崩れ落ちる。そんな二人に風鏡は静かに見詰める。
「……私に、どうしろと言うのですか？」
初めてぶつけられた本音に風鏡は戸惑っているようだ。
風鏡の本心を言えばここで諦めるようなことはしたくないだろう。

けど現状はどうにもならない、諦めるしか出来ない。
けど、それが悔しくて、受け入れられなくて、だから昇達の手で終わらせて欲しいと願っても風鏡を攻める事は出来ない。
それでも常磐達は不条理を感じずにはいられなかった。自分達は風鏡に残酷な事を言ってるのかもしれない、それでも風鏡には凛としていて欲しい。それが二人が尽くす風鏡なのだから。
二人に向かってどう答えていいのか風鏡が言葉を出せずにいると、砂煙の向こうから現実と残酷な言葉が投げつけられる。
「明日に生きればいいと思いますよ」
振り向く風鏡、その先には昇達が姿を現した。
氷雪長刀を構える風鏡にシエラ達も応戦体勢を取るが、昇がシエラ達を抑えて武器を下ろさせる。
それから昇は少し歩くと風鏡と向き合った。
「戦う前に言いましたよね。あなたの幸せを願っている人がいる、だからあなたは幸せな未来を掴まなくてはいけないと」
優しい笑みを浮かべながら風鏡に語り掛ける昇。そんな昇に警戒を解く事無く、敵意を込めて風鏡は答える。
「そうでしたか？　覚えてませんけど」
思いっきり敵意を込めた嫌味なのだが、昇はそんな事を気にする事無く笑顔を向ける。
「まあ、厳密に言えば人ではないですからね」
昇にしてみれば場を和ます為に言った冗談のつもりなのだが、もちろん笑う者など誰一人としていない。
けど少しだけ風鏡の警戒は解けたみたいで昇の話しに耳を傾け始めた。
「それで、あなたは何が言いたいのですか？」
敵意は薄れる事は無いが昇の言葉に興味を示しただけも充分に効果はあったようだ。
昇はゆっくりと瞬きをする。開かれた瞳には先程までの優しさは無くなり、真剣な物へと代わった。

「あなたは過去しか見ていない。だから僕に負けたんだ。ほんの少しだけ、少しだけ良かったんです。今を見てくれれば……こんな事にはならなかったと思います」

さすがに風鏡も訝しげな顔をした。昇が何をしようとしてるのでは、何かを企んでるのではないかと思っているようだ。

もちろん昇にそのような気は無い。風鏡とはまったく違うが昇も同じだ。……バカ過ぎるほどに純情な想いで動いている。

そうでなくてはこのような事はしない。何処まで行っても昇は昇という所だろう。

そんな昇の瞳が真っ直ぐに風鏡を貫く。

「僕は精霊と人間はそんなに違わないと思ってます。だから契約した精霊を道具のように扱う事はしないし、僕は僕なりに精霊を理解しようとしてます」

突然変わった話に風鏡は戸惑いを見せたが、すぐに口を開いた。

「それは私も同じです」

風鏡も常磐と竜胆を道具のようには扱っていない。多少二人に常識が無くても風鏡は風鏡なりに接してきたつもりだ。だが昇はそんな風鏡を否定する。

「いいえ、あなたにとって精霊は道具です。復讐するための刃に過ぎない」

「違うわ！」

風鏡の代わりに抗議の声を上げる常磐。

そんな常磐に昇は優しい笑みを向ける。それは敵意の無い、真っ直ぐで優しい眼差し。だから常磐はそれ以上何も言えずに黙り込むしかなかった。

それから昇は鋭い顔付きになると視線を風鏡に戻した。

「あなたにとって必要なのは力であって、力をくれるなら誰でも良かった。常磐さんと竜胆さんでなくてもあなたは困りはしない。あなたにとって精霊とはそれだけの存在だ。そしてあなた自身も……それだけの存在に過ぎない」

「そっ……」
何かを言い掛ける風鏡だが言葉が思ったとおりに出てこない。
「それはあなたが過去にしか生きていないからだ。今に生きてないから周りに居る存在に気付かない、明日に生きようとしないから簡単に捨てられる。それがあなたの本性だ」
いきなり飛び出した風鏡は氷雪長刀を昇に向かって振るう。
とっさに二丁拳銃で氷雪長刀を受け止めたが、勢いまでは受け止める事が出来ずに昇は弾き飛ばされシエラと琴未に受け止めてもらった。
突然の攻撃にミリアが反撃に出ようとするが昇はそれすらも止めると風鏡に向かって勝ち誇った笑みを向ける。
昇は分かっている。風鏡が言葉では反論できないから力で訴えた事を。
昇が言った事は風鏡自身でさえ気付いていない本音の一つ。かと言って風鏡が常々そう思っていたワケではない。心の奥底でそういう気持ちも少しはあった、その程度の事だ。
たったそれだけの事で風鏡の心を大きく揺さぶった。風鏡のように心を硬く覆ってしまうと露呈された時には凄く脆くなる。
それを証明するかのように風鏡は追撃を掛けるワケでもなく、昇を弾き飛ばした格好で固まっている。
「だから……なんだと言うのですか。あなたの言うとおり私は負けました。なら！　早く私にトドメを刺せば良いでしょう！」
氷雪長刀を捨てる風鏡。最早戦う意思さえも折れてしまった。
昇を攻撃した時点で風鏡も悟った。自分は……全てにおいて昇に負けたのだと。
戦いはもちろん、自分では気付かなかった本音の一つを露呈されてしまった。頭でどれだけ否定しても昇の言った事は風鏡の中に存在し、完全に否定できる物は無かった。否定できないからこそ風鏡に完全な敗北感が生まれてしまった。
昇はそんな風鏡を地獄にへ突き落とすような言葉を投げかかる。

「僕はあなたにトドメは刺しません。たとえエルクにどんな策略があったとしても、僕があなたの邪魔をしたのは確かだ。だからトドメは刺しません」
「じゃあ何で戦ったのよ！」
相手にトドメを刺さないなら戦う理由が無い。それでも昇達は風鏡の邪魔した。その事が風鏡は腹立たしく、納得が行かなかった。
涙を堪えきれない風鏡に昇は微笑を向ける。
「僕の攻撃を、常磐さんと竜胆さんは身を挺してあなたを守った。それは何故ですか？」
「えっ？」
突然投げ掛けられた質問に風鏡は初めて真っ直ぐと昇の瞳を見た。
「それに二人とも最後まであなたに逃げろと言った。今のあなたに二人の気持ちが分りますか？　あなたの為にここまでしてくれる二人をちゃんと見ていますか？」
言葉が出ずに昇を見詰める風鏡。答えられるはずがなかった。風鏡は一度も二人と向き合った事は無いのだから。
だけど昇には二人の気持ちが痛いほどに分る。二人が風鏡に向ける純粋な想いは、シエラ達が昇に向けるものと似ているから。
そこにあるのは純粋な絆、絶対の信頼、自分を捨てても尽くすという事。精霊が契約者に向ける純粋な想いを昇はしっかりと理解しているつもりだ。強い絆を作れると判断したから精霊は契約者を選ぶのだと。
昇はその事を風鏡に伝えたかっただけだ。
「常磐さんも竜胆さんも……あなたに幸せな未来を掴んで欲しかったんです。本当の笑顔を見せて欲しいんです。そして僕も、あなたの幸せな笑顔を見たいから戦いました。あなたに気付いて欲しかったから、今でも……あなたの傍にあなたの幸せを願っている存在が居る事を」
気付きもしなかった。いや、気付こうとしなかった。風鏡にとって優しくしてくれる存在は拓也だけであり、そこまでの好意が自分

に向けられているとは思いもよらない事だ。
体中の力が一気に抜けたかのように座り込む風鏡。顔を伏せて静かに涙を流している。
「……風鏡」
「……」
そんな風鏡に静かに寄り添う常磐と竜胆。
風鏡は一度も二人と向き合ったことは無いかもしれない。それでも風鏡が二人を変えた事も事実。
ただ……気付いていなかっただけ。自分達が築き上げた絆に。
けど今の風鏡にはしっかりと分かった。自分を支えてくれる存在がこんなに近くに居る事を。
やっと分った、今を生きるという事を。だから生きていける、明日へ。
それでも人間はすぐに変わることが出来ない。だから風鏡はその言葉を昇に投げつける。
「……あなたは……ずるいです」
それは感謝と謝罪の言葉。だから昇もしっかりと答える。
「はい、そうかもしれません」
それは謝罪と祝福の言葉。新たな道を進む風鏡の行き先に幸(さち)あらんことを願って。

「う〜〜〜〜〜んっ」
旅館への帰り道で琴未は大きく体を伸ばす。
あれから昇達はすぐに風鏡達と別れる事にした。それ以上は風鏡達がどうにかする事で昇達が首を突っ込む事ではない。
だから常磐に精界を解いて貰い、風鏡に声を掛ける事無く旅館への帰路に付いている。
「それにしてもよ、昇」
歩きながら琴未が昇に問いかけてきた。

「よくあの二人は間に合ったわよね。少しでも遅ければ風鏡さんの救援が出来なくて、昇も説得が出来なかったんでしょ」
常磐と竜胆が身を挺して風鏡を守った。その事実があったからこそ昇の言葉にも信憑性が付いてきたというものだ。
だから二人が風鏡を救援できなければ意味は無い。琴未にしてみれば偶然とも言えるほどのシチュエーションだ。
けど実はそれも計算だったりする。
頬を掻きながら琴未の質問に答える昇。
「う～ん、実は二人を待ってたんだよね。こっちに向かってくる事は分ってたから、後は与凪さんに二人がギリギリで救援に入れる時間を計算してもらってたんだ」
ヘブンズブレイカーを撃つ直前に昇の前に提示されたカウントダウンの時計。あれがそうだった。
「つまり二人が風鏡殿を助けられたのは偶然ではなく必然という事じゃな」
「それに最後の攻撃も実は少しだけ手加減してたんだよね。二人が風鏡さんを守れないと意味が無いから」
つまり風鏡との戦いは風鏡を説き伏せる布石に過ぎなかったという事だ。
「ほへぇ～、凄いね～」
素直に感心の声を上げるミリア。そんなミリアとは違ってシエラが不機嫌な声で呟く。
「だからあの二人が私達を振り切る事も計算済みだった」
うっ、もう一回それを引っ張り出しますか。
バツの悪い顔をする昇。そんな昇とは打って変わって琴未とミリアは始めて聞く事実に驚きを示す。
「え～っ！　私達必死に戦ったんだよ～」
「どういう事よ、昇！」
不満の声を上げるミリアに問い詰めてくる琴未。さすがにこれには昇も少しだけ距離を開けようとする。

「いや、あの、なんて言うか。風鏡さんがピンチになればどんな事をしてでも助けに来ると思ったから。それに実際に二人とも助けに来たから」
「つまり私達が負ける事も計算済みだった」
いやいやいや、そんな事は計算してませんから！
シエラの一言に刺激された琴未とミリアは追及してくる。昇は何とか二人を説得すると今度はシエラに向かって話しかける。
「えっと……シエラさん？」
「なに？」
うっ、目すら合わせてくれない。
こちらを振り向かずに歩き続けるシエラに不機嫌なオーラが見えた。これは何とかしなくてはいけないと昇はシエラに不機嫌な理由を尋ねる。
「なにをそんなに怒っていらっしゃるのでしょうか？」
限りなく下手に出て尋ねる昇。そんな昇にジトッとした視線を向けてシエラはゆっくりと口を開く。
「昇は……私達より風鏡の笑顔が見たいんだ」
「それはなんですか！」
昇にしてみれば、まったく身に覚えが無い濡れ衣のように感じたかもしれない。だが周りの女性陣はシエラに同意し始めた。
「あ～、うん、私もあれはどうかと思ったわよ」
「酷いよね～、私達だって昇の為に戦ったのに～」
「これじゃから女たらしは手に負えんのう」
えっと、僕はどうして非難されているのでしょうか？　誰か教えてください。
やはり理解できない昇。
もちろん女性陣が怒っている理由はただ一つ。それは風鏡を説得する際に「僕もあなたの幸せな笑顔を見たい」との一言。
あの部分だけを見れば口説いているようにしか思えない。そして昇には永久に分からない事かもしれない。

「さて、この女たらしは捨てて、さっさと旅館に帰ろうとするかのう」

えっと、なぜ？

閃華の一言に昇は呆然としてしまうが、女性陣はドンドンと閃華に乗ってくる。

「そうよね、さすがに疲れたわ」

「ご飯～、ご飯は～」

「途中で買っていけばいい。私達だけの分を」

「そうね、たまには女だけってもの悪くないわよね」

……なに、この疎外感？

すっかり置いてけぼりなった昇。更に女性陣は歩くスピードも上げて昇を引き離す。

「……えっと、なんでこうなるの！」

慌てて前の女性陣を追う昇。

この自業自得とも言える意地悪は旅館まで続いたそうだ。

「はぁ～～～」

頭からお湯を被った昇は大きく息を吐いた。

結局、昇は夜食には招待してもらえなかったのと、少し気分を落ち着かせたかったのでゆっくりと湯に浸かる事にした。

……今更だけど、これでよかったのかな。

風鏡に対する責任としてやれる事はやったつもりだ。だがそれで風鏡が救われたとは限らない。その事が少しだけ心配だった。

風鏡さん、大丈夫かな？　ちゃんと……二人と向き合えたかな？

考え込めば心配は尽きる事は無い。けどこれ以上は昇に出来る事はないも無い。後は信じるしかなかった。

頭から離れない心配を振り切るために、もう一度お湯を被って頭を振る。

「……はぁ～～～」

どうやらあまり変わらなかったようだ。
「やはり心配のようじゃな」
「そうだね、出来る限りの事はやったけど。それが正しいかは分らないよ」
「世の中に正しいと言い切れるものは無いもんじゃよ。じゃから人は皆自分の信念で行動するんじゃ」
「うん、そうだね。……って！　なんで閃華がここに居るの！」
やっと閃華の存在に気付いた昇は後ろを振り向くが、それ以上のスピードで再び前を向く。
「なんで裸なんですか！」
「風呂は裸で入るもんじゃろ」
いや、まあ、そうですけど。
思いっきり落ち着いている閃華とは違い、昇は先程見た光景を忘れるために別な事を考えて思いついた。
「えっと、一応ここは男風呂なんですけど」
「安心せい、琴未達がやったように入り口に清掃中の看板を出してから入ってきたんじゃ」
あ～、昨日はそうやって入ってきたんですね。というか気配を殺して入ってこないでください。それに今日も乱入されるとは思ってませんでしたよ。昨日は昨日で……。
昨日の事を思い出して真っ赤になった昇は頭を勢いよく振って思い出しかけていた事を振り払う。
そんな昇とは裏腹に閃華はマイペースで行動する。
「さて、ここは定番らしく背中から流してやるとしようかのう」
「やらなくていいです！」
振り向かずに思いっきり突っ込む昇だが、後ろからは石鹸を泡立てているような音が聞こえる。どうやら聞く気は無いようだ。
それでも昨日みたいに逃げ出そうとすれば良いのだが、昇は一向に動こうとはしなかった。
「では行くぞ」

「はぁ～、もう好きにしてください」
「なら私の胸で洗うとしようかのう」
「余計な事はしないでください！」
昇の声が浴場に響いた後に背中に感じる優しい温もり。泡だったタオルの向こうから閃華の手をはっきりと感じることが出来た。
「意外と広い背中をしておるのう、もう少し華奢だと思ってたんじゃが」
閃華はそんな事を口にするが昇は答えない。閃華もそれ以上は口を開かずに、優しく静かに昇の背を流す。
背中を洗う音だけが浴場に響き渡り、静かな時間が流れる。ゆっくりと丁寧に背中を洗ってくれているのが良く分かった。
そんな事を感じながら昇は静かに口を開いく。
「閃華は……」
「なんじゃ？」
「……閃華は、これで……戻ってこられる？」
風鏡との出会いから始まった今回の戦い。閃華は昇達の傍に居たけど、どこか遠いような気がしていた。一人で、旅に出ているかのように。
実際に閃華の心は離れていただろう。迷い続け、探し続け、それでも出ない答えを求めて。
だから昇は風鏡と戦う事を選んだ。それはエルクの事、風鏡の事もあったが、それ以上に閃華の事があったからだ。
それで解決したわけではないが、手は差し伸べられたと昇は思っている。後は閃華が手を取ってくれるだけだ。
そんな昇の気持ちを察したかどうかは分らないが、閃華は手を止めると静かにはっきりと答えた。
「うむ、明日からはいつもどおりじゃよ」
「……そっか」
それで満足だった。昇は閃華に見えないように軽く笑う。
ゆっくりと昇の背から閃華の手が離れる。閃華が乱入してきたの

も、昇が逃げなかったのも全てはこの話をするため。二人っきりでゆっくりと話せる場所など風呂場しか無かったのだろう。

これで全部終わった。昇がそう思った時、突然閃華が後ろから抱き付いてきた。

「って、えっ、あの」

背中から伝わってくるやわらかい感触とすぐ横にある閃華の顔に、昇は顔を真っ赤にしながら固まってしまった。

そんな昇の耳に口を近づけて閃華は静かに言葉を届ける。

「じゃからその前に、これは礼じゃ。今回は散々心配を掛けてしまったからのう。それに昇には……助けてもらったんじゃ。これぐらいの礼をしなくてはならんじゃろ」

別にしなくていいです。

そう突っ込みたい昇だが、この状況では上手く言葉が出ないようで口をパクパクとさせている。

そんな昇に閃華は軽く笑い出す。

「くっくっくっ、初心(うぶ)なのも大概にしておかんと琴未に泣かれてしまうぞ」

いや、そう言われても困るんですけど。

「まったく……じゃが、琴未が惚れた理由が良く分かったというものじゃな」

えっと、それはどういう意味でしょう。

もちろん閃華は答えない。たとえ昇が口に出して聞いても笑い飛ばすだけだろう。それが閃華なのだから。

まったく離れようとしない閃華に昇が困りきっていると閃華が話しかけてきた。

「のう、昇」

答えたい昇だが神経が勝手に伝えてくる感覚に捕らわれて言葉が出ない。その事を察しているのか、いないのかは分からないが閃華は勝手に喋り続ける。

「確かに風鏡殿との決着が付き、進むべき道を見出したワケじゃが

……どうにもすっきりしないんじゃ。たぶん……小松の事じゃろうけど」

「……閃華」

これからどう進めばいいのか、どう生きればいいのか、その答えは出したつもりだ。だけど頭では分っていても気持ちだけが追いついてこないだろう。

これだけは理屈では割り切れない心の問題だ。それは難しく答えが出にくい物なのかもしれないが、昇はあっさりと答えを出す。

「恨んじゃえば」

「……はっ？」

はっきりとあっさり答えた昇に閃華にしては珍しくすっとんきょうな声を出した。そんな閃華を軽く笑うと笑みを向ける。

「だって小松さんは卑怯だよ。ずっと仕えてた閃華を無視して勝手な行動を取って裏切ったんだよ。だから閃華だけは、恨んでもいいと思うよ」

笑顔ではっきりと言う昇の顔を呆然と見詰める閃華。

昇の言わせれば小松の行動は閃華を裏切っている。小松には小松の理由があったかもしれないが、閃華から見れば裏切り以外の何物でもない。

それでも閃華が今まで小松を恨んだ事はないのは、自分の不甲斐無さだけを見て小松の行動がもたらした物を見なかったからだ。

だからよくよく考えれば昇の言うとおりかもしれないと閃華は思い始めた。

「……くっくっくっ、あははは、うむ、そうじゃな、その通りじゃ」

笑いながら何度も頷く閃華。その目には少しだけ涙が見えるが、昇は見なかったことにして閃華の顔から視線を逸らした。

納得するまで笑い続けた閃華は涙を拭くと再び体を密着させてくる。

「……昇」

「……うん」
なんかこう、気まずいというか、妙というか、良い雰囲気とも言える空気になったので昇に緊張が蘇ってしまった。
再び固まった昇に閃華は静かに呟く。
「ありがとう」
「……閃華」
深い深い感謝の言葉。たった一言だけど、その中にはいろいろな想いが詰まっており、今回の事を終結させるには最適の言葉だった。
これで全部終わりかな。
やっと今回の終わりを身に染みる昇。エルクの問題はまだ残っているが、これで風鏡は新たな道を進みだし、閃華も過去と決着を付けることが出来ただろう。
そして昇は差し伸べた手を閃華が掴んだ事を感じる。
遠くに感じていた閃華が再び近くに感じることが出来た。やっと戻ってきてくれたのだと思えた。
明日からはいつもと同じようになるだろう。だけど今は、少しだけ閃華を感じたくて昇は閃華の温もりを感じる。
お湯が揺れる音だけがする浴場で、閃華は昇に寄り掛かりながら静かな時間が流れる……ワケが無かった。
「閃華！　あんたは何やってんのよ！」
突然勢い良く開かれた扉の向こうから琴未を先頭にシエラとミリアがバスタオル一枚で姿を現す。そして最初に見たのは昇に抱きつく閃華の姿。
そんな場面を目撃したのだから当然三人のボルテージは急上昇する。
「なななななななななっ、なにやってんのよ！」
予想できなかった事態に琴未は大いに取り乱したようだ。そんな琴未に代わってシエラが前に出てきた。
「じゃあ言い訳を聞かせて」
言い分ではなく言い訳だ。だからどのような主張をしても却下さ

れるのは決定事項だ。
　それが分っているだけに閃華はシエラを挑発するような行動に出る。更に体を密着させる閃華はあっさりと喋りだす。
「いやのう、今回は昇にかなり助けられたからのう。これはその礼じゃ」
「だからって、そこまでやる事無いでしょ！」
　限界の琴未が閃華に詰め寄る。珍しく二人が喧嘩になるのではないかと昇は心配したが、すぐに閃華はいつもの閃華だと実感した。
　……えっと、閃華さん、何で僕を羽交い絞めにするんですか？
　後ろからしっかりと押さえつけられて動きを封じ込められた昇。そして閃華は三人に向かって平然と口を開いた。
「じゃからほら、前は残しておるぞ。早い者勝ちじゃから琴未、早ようせい」
　なにを！
　あっさりと三人の目的を摩り替えてしまった閃華。まあ、これがいつもの閃華だからしょうがないだろう。
　そして三人はというと昇ににじり寄る。
「うん、練習した事無いけど頑張るね」
　練習ってなんの練習ですか！　ねえ、琴未！
「大丈夫、私はちゃんと練習した」
　あなたは何の練習をしたんですか！　シエラさん！
「いじって、いじって、いじくりま～わす」
　それが一番怖いです！　ミリアさん！
「くっくっくっ、まあ、これも礼の一つじゃよ」
　すっかりいつもどおりですね！　閃華さん！
　……そして数分後には昇の意識は真っ白になり天に召したそうだ。
　まあ、四人の攻撃はくすぐりに近く、笑いながら逝っただけですけどね。

翌日からは初日同様に遊びまくる昇一行。そこに与凪が加わった事で一段と賑やかになった。

然したる問題も起きなかったので充分過ぎるほどに海を満喫する事が出来たようだ。

すっかりはしゃぐ女性陣とは違って昇の心には引っ掛かる物が一つだけあった。

あの戦いからは風鏡と会ってはいない。だから今の風鏡がどうしているかは分らない。その事だけが気がかりだった。

そして風鏡の事が分ったのは最終日で海から帰って着てからだ。

旅館に戻った昇達に彩香は来客を告げる。どうやら昇の部屋に待たせているようだ。

首を傾げた昇は女性陣と一緒に部屋へと向かう。そして部屋で待っていたのは常磐と竜胆だった。

「やっほ〜、元気」

「お邪魔してるわよ」

思いっきりくつろぎながら昇達を迎え入れる二人。そんな二人に琴未が真っ先に反応する。

「って、あんた達はなんでここいるのよ！」

「うん、これを届けに来たわ」

琴未の突っ込みを思いっきりスルーして、常磐は立ち上がると部屋の奥においてあった大きな紙袋を差し出してきた。

「なにこれ？」

「お土産に決まってるでしょ」

琴未の問い掛けにはっきりと答える竜胆。

「……なんで、お土産？」

二人のペースにすっかり毒気を抜かれてしまった琴未に代わって閃華がお土産を受け取る。

「これはこれは、わざわざ済まんのう」

「まあ、約束だし」

「私達が迷惑を掛けたのも確かだしね」

昇達は初日に二人に絡まれて戦闘になっている。まあ、結局は風鏡によって止められたのだが、その時に閃華が風鏡と約束したお土産だろう。

それをわざわざそれを届けに来たようだ。けど用件はそれだけは無いみたいで、昇達は座ると二人は照れ臭そうに話し始めた。

「えっと、この前はごめんなさい」

「それにありがとうね。風鏡に代わってお礼を言っておくわ」

謝罪と感謝を述べる竜胆と常磐。二人の話によると、あれだけの事になったものだから風鏡は昇達にどんな顔で会えば分らないようだ。

そんな事を気にしなくて良いと昇は思うのだが、風鏡にしてみれば未だに気持ちの整理が付かないのだろう。

風鏡の話が出たことで昇は二人に切り出した。

「あれから……風鏡さんはどうしています？」

あの後から昇は無理に首を突っ込む事はしなかった。それは風鏡の問題であり、風鏡自身が答えを見出さなくてはいけないと思ったからだ。

それでも心配する心だけは隠せないようだ。

「うん、あの後随分と落ち込んでたわ」

「もう死にそうなぐらい」

あっさりと凄い事を言う二人。

そう言われると急に罪悪感が昇に生まれるのだが、二人は微笑むと言葉を続ける。

「けど大丈夫よ」

「まだ思い悩んでるみたいだけど、君の言葉はちゃんと風鏡に届いたわ」

すっかりからかわれた事を気にする事無く、昇は優しげな笑みを浮かべる。

「そうですか」

風鏡に対してどれだけの事が出来たかは分らないが、それでも自

分の想いが風鏡に届いた事が嬉しかった。
「これからどうするんですか？」
やはり気になるのか昇は尋ねてみる。そして竜胆から意外な言葉が返ってきた。
「うん、旅に出るって」
「……えっと、なんでまた？」
「エルクはもうここには居ないわ。だから探すための旅よ」
……まだ、エルクを追うつもりなんだ。
少し複雑な心境になる昇。
昇としては復讐を諦めて普通の生活に戻って欲しかったのだが、どうやら風鏡にはその気は無いようだ。
地の果てでも追いかけて復讐を果たす、昇はそう感じたのだが違っているようだ。
「けど復讐を果たすだけじゃないわ」
「えっ？」
「半分は君と同じ理由だって。エルクの被害者を出さないために追って、絶対に倒すって言ってたよ」
「そう、ですか」
やはり捨て切れない物があるのだろう。それでも復讐のためだけに行動するよりかは随分とマシになったと昇は感じていた。
風鏡にとってエルクを追うという事は生きる目的であり、そこで全てが終わっていた。けどこれからは違うだろう。常磐と竜胆が傍に居る限り、その先を見て考える事が出来る。エルクを倒してもしっかりと生きていける。
そして常磐と竜胆も変わって行けるだろう。風鏡の傍にあり続けて、しっかりと支える事が出来るようになる。
それが分っただけでも昇は安心する事が出来た。
風鏡達は元々しっかりとした絆を築いていた。ただ、少しだけ遠慮していただけ。その遠慮が互いに本当の気持ちを気付かせなかっただけだ。

それは閃華と小松にも言えることかもしれない。閃華と小松ももう少し本音を明かせば、あのような事にはならなかったのかもしれない。だが今更そのような事を言っても詮無き事。

だから閃華は改めて思う。これからはそのようにしようと。

それから……何故か常磐と竜胆も混ぜて宴会へと突入して行った。

二人に言わせれば昇達の送別会らしい。

まあ、二人らしいと言えばらしいだろう。

……風鏡さんは？

そんな事を思う昇だが、二人の頭からはすっかり消え去っているようだ。しかも酒まで飲んで、すっかりハイテンションになっている。

だから明日は風鏡に思いっきり怒られる事になるだろう。けど、それで良いのだと思う。それすら楽しいと常磐と竜胆は思えるようになったのだから。

翌日、旅館を出て電車に乗り、発車をするのを待っている昇一行。相変わらず賑やかで周りのお客に迷惑にならないかと昇は心配していた。

そんな時にミリアが窓の外、プラットホームを見て声を上げる。

「昇昇、あれ」

ミリアに促されてプラットホームに目を向ける昇。そこには電車から少し離れた所に常磐と竜胆に挟まれて静かに立っている風鏡の姿があった。……常磐と竜胆の頭に出来ている大きなタンコブはあえて見なかった事にする。

窓を開けようとする琴未を昇は止める

不思議そうな顔で「いいの？」と尋ねて来る琴未に昇は頷く。窓を開けたところで交わせる言葉も無いし、それは風鏡も望んではいないだろう。

その証拠に風鏡は昇と目を合わせても電車に近づこうとはしなか

った。
そして風鏡はゆっくりと頭を下げる。常磐と竜胆も風鏡に倣って頭を下げた。それが今の風鏡にできる精一杯の事なのだろう。
だから風鏡が頭を上げたら昇は微笑を向ける。それは言葉を交わすよりも風鏡に届くと思ったから。
風鏡も微笑を返してきた。それは最初に見た風鏡の笑顔とは違い、優しくて綺麗な笑顔だった。
発車のベルが鳴り響いてドアが閉まると電車はゆっくりと走り出す。
もう一度頭を下げる風鏡。動き出した電車はすぐに風鏡の姿を見えなくしてしまったが、昇は心から安心する事が出来た。最後に見せたあの笑顔こそ、風鏡の笑顔だと思ったから。
「……また、会う事になりそうじゃのう」
「うん、そうだね」
閃華の言うとおりだろう。昇としても機会があればエルクを追うつもりだ。だから風鏡がエルクを追い続ける限り、またどこかで出会うだろう。
その時は敵ではなく、友人として。
昇は心の底からそう思った。……だが人の心というのは完全に伝える事は出来ない。それは人も精霊も同じだ。
「そんなに風鏡がよければ次で降りれば」
えっ？
そんな事を呟くシエラ。昇が振り返ると不機嫌な黒いオーラがハッキリと見えた。シエラのみならず琴未とミリアからも黒いオーラは発せられている。
「はいはい、どうせ私達は子供ですよ、大人の色気はありませんよ」
えっと、琴未、何を言っているんでしょうか？　あれ～、もしかして、いつの間にか僕は追い詰められてる？
「まあ、滝下君の傍には居ないタイプですからね。だからコロッと行っても不思議は無いでしょう」

あの～、今回は与凪さんも参加するのでしょうか？
「う～、私だって昇の為に頑張ったのに～」
いや、あの、分かってますよ、ミリアさん。
「所詮男というのはそういう生き物なんじゃよ」
閃華さん、優しい笑顔でなにを諭そうとしているんでしょうか？
「この浮気者～」
何で母さんまで参戦するの！
「そうか、滝下はこんな所で愛人を作ったのか」
いや、先生……絶対に面白がってますよね。
全員から攻められて居場所を無くしてしまう昇。昇にしてみれば理不尽極まりないのだが、なんとなく自分が悪いというのも分るのだろう。だから怒るに怒れずに泣き寝入りするしかなかった。
それでも家に着くまでには何とかするべく昇は行動を開始する。
「えっと、シエラさん、何か飲みます？　琴未は何かお菓子でも取り出しましょうか？」
「じゃあ白い恋人が食べたい」
「私はさんぴん茶」
えっと、それは日本を縦断しろと？
北海道の名産菓子と沖縄の定番茶である。
「なら私は中国の銘菓にしてもらおうかのう」
「フランスの甘～いスイーツ～」
「ついでにブラジル産のコーヒーもお願いしようかしら」
「ウオッカ！」
「じゃあ先生はアフリカの民族料理にしてもらおうか」
……世界を回れと？
好き勝手に言ってくる周りに呆然としてしまう昇。しかも困った事に期待の眼差しを向けられている。
「ど……」
震えだす昇の体。次の瞬間には両手を思いっきり挙げて叫ぶ。
「どうすれば良いんですか――――――――――――っ！」

昇の叫びは電車中に響き渡り、周りからは楽しげな笑い声が溢れた。

第七十八話　明日へ（後書き）

そんな訳で純情不倶戴天編はいかがでしたでしょうか。楽しんでいただいたなら幸いです。

そして、最終話の文字数が凄い事になっていたとしても見ないフリをしましょう。……いや、前回引っ張っちゃたから。

さてさて、やっと終わった純情不倶戴天編ですが……一年ぐらい掛かっちゃった。……いやね、本当ならもう少し早く終わらせる予定だったんですけどね。ほら、今年は私にとっては迷走する年みたいだったんですよ。だからいろいろと迷走して見ました。

……ごめんなさい！！！　来年は頑張るよ！！！

さてさて、かなり早いですが今年の反省が終わったところで次の話をしましょうか。

そんな訳で次は他倒自立編です。はい、そこの方、辞書を取り出しても意味は無いですよ。なにしろこの言葉は私が作り出した……はずですから！！！

たぶんそうだろうという感じです。

さてさて他倒自立の意味ですが、言葉のままです。詳しい意味は劇中で閃華が語る予定なので、それまで楽しみにしておいてください。

さてさて、もう少し語る事にしましょう。

他倒自立編は昇をメイン……にする予定です。でもでも、ミリアととても深い関係にある人や意外な人物の再登場や琴未と思いっきり対立関係になりそうな人なんかも出てくる予定ですので……やっぱり昇の影は薄くなる運命なのだろうか？

そんな感じの他倒自立編です。……一応メインは昇ともう一人の方ですよ。そちらの方は結構存在感がありそうなので、なんとか昇が引き立ってくると思いますが……無理っぽいかな？

まあ……絶対運命という事で昇には諦めてもらいましょう。

さてさて、予告も終わったところでそろそろ締めようかと思います。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想、投票と人気投票もお待ちしております。

以上、今頃になって他倒自立編の設定を少し変えたくなってきた葵夢幻でした。

第七十九話　登校日

昇達が海に行っていた頃。数名の人物が空港から日本の地へと降り立った。

「ここが日本か」

ブロンドの髪をした少年がつまらなそうに辺りを見回しながら言った。

年齢は昇と同じぐらいだろう。かなりの美少年であり、辺りの視線を集めている。けど視線を集めているのは少年だけが原因ではない。少年の後ろに居る四人も劣る事無く美形であり、視線を集める原因となっていた。

女性が二人と男性が二人。男の方は二人ともに三十代ぐらいに見えるが、それでも現代人には見られない威厳のような物があり、遠巻きに女性の視線を集めている。

女性は二十代前半の女性と昇達と同じ位の少女がいる。大人の女性は優しげで包容力がありそうだ。少女の方は清楚の一言に尽きるだろう。

そんな人物が一箇所に集まっているのだから注目を浴びて当然。だが騒ぎの中心となあっている本人達はまったく気にしていないようだ。

「そういえば、ここが故郷だったな。どうだ、久しぶりに帰った感想は？」

少年が後ろを振り向き、男の一人に話しかけた。

「我がこの国を出たのは四百年近くも前、故に面影など残しておりません」

「そうだったな」

普通の人間ならありえない会話だ。男の言っている事が確かなら四百年以上も生きている事になる。そうなると考えられる事は一つだけ、この五人も契約者と精霊達なのだろう。それが来日したから

には何かしらの目的があるのは間違いない。
「マスター」
取り巻きの女性が少年に話しかけてきた。どうやらこの少年が契約者のようだ。
「理由は分りませんが、確かに力の一部が日本のどこかに流れ出てます。なにがあったかは分りませんが、数日もあれば場所が特定できるでしょう」
そうか、とだけ返事をして少年は改めて辺りを見回す。いや、日本を見ているといったほうが少年の心理を付いているだろう。
「絶対に手に入れるぞ。セリスの為にも」
同意するように精霊たちが返事をする。その返事に満足したように少年は歩き始めながら宣言する。
「精霊王の力はこのフレト＝グラシアスがな！」

八月十三日、午前六時。シエラは起床して学校の制服に着替えるとリビングに下りてそのままキッチンへと向かった。
わざわざ学校の制服を着たのは今日が登校日という存在理由が良く分からない日で、学校に行かなくては行けない日だからだ。
学校側としては生徒達の確認とかの意味も有るのだろうが、生徒たちにとっては迷惑極まりない日なのだ。
だからこそ朝食を作るためにキッチンへと入ったが、そこには誰も居なかった。
……そっか、今日は琴未は実家に帰ってるんだった。
琴未は周に一日か二日は実家に帰っており、最低一日は実家に泊まってくる。さすがにずっと昇の家に居ると言う事は出来ないのだろう。
昨日はその実家に泊まる日だったようだ。なにしろ数日前まで海に遊びに行っていたのだから家族が寂しがっていたようだ。
昇や彩香なら良く知っているが、琴未の祖父は琴未に対してもの

凄く甘い。厳しい時はしっかりと厳しく接するが、それ以外はもの凄く甘いようだ。

だから琴未が昇の家に居候すると言った時に、ちゃんとお爺ちゃんに会いに行く事を約束したら琴未の祖父である玄十郎（げんじゅうろう）はすぐに快諾したようだ。

どうやら玄十郎は琴未に甘えられるともの凄く弱いらしい。昇や彩香はそういう場面を何度か目撃している。だからこそ、今のような状況が出来上がってしまったのだろう。

シエラは話に聞いただけだが、今日は一人で全員分の朝食を作るとなると少しだけ憂鬱になってしまう。なにしろ琴未がいれば手間は半分になるのは確かなのだから。それがたとえいがみ合っていたとしてもだ。

まあ、この二人にとってはそれすらもコミュニケーションの一つで楽しい物なのかもしれない。本人達は全力で否定する事は想像する前に明らかな事だが。

どちらにしてもこのまま立ち尽くしていてもしかたない。シエラは朝食を作り始めた。

その琴未はというと実家である高戸神社の奥にある道場で木刀を振るっていた。

琴未は新螺幻刀流という剣術を祖父である玄十郎から習っていた。最初は見ていただけだが、やってみたくなり、いつの間にか真剣に取り組んで今では免許皆伝までは行かないか目録ぐらいは貰えるぐらいの腕になっていた。

その琴未の相手をしているのが祖父である武下玄十郎だ。ちなみに朝稽古は琴未が実家に居た時には毎日やっていたし、今でも周に一回は泊まっているのでその度に朝稽古は行っている。

つまりこの朝稽古は二人にとっては日課だ。

もちろん相手は祖父で普通の人間である。精霊ではないため精霊

武具などは使用せずに普通の木刀を使っている。別に精霊武具が無くても属性は使えるのだが、まさか使うわけにも行かず。契約する前と同様に稽古をしていた。

琴未は正眼、玄十郎は八双に構えている。

琴未は未だに玄十郎に一撃を入れた事が無い。それほど玄十郎は強い、だから下手に攻撃に出れば逆に撃たれる可能性がある。だから慎重に正眼の構えを取っているのだろう。正眼は攻撃にも守りにも出やすい構えだ。

玄十郎が構えている八双の構えは完全に攻撃に出やすい。木刀を顔の右に真っ直ぐ上に向ける構えは振り下ろす攻撃は強力だ。下手に受ければ防御など出来ずに打たれてしまうだろう。

二人は動く事無くお互いに隙を窺っている。いや、正確には琴未が隙を窺っている。玄十郎の方は琴未がどう攻めてくるか楽しみにしている感じが有る。それが二人の実力差だ。

動かずに居る二人。玄十郎から攻めても良いのだが、それだと稽古にならないから琴未が攻めて来るまで待っているのだろう。

その琴未はどう攻めようか迷っていた。左右に動いて揺さぶっても良いのだが、下手をすればこちらに隙が出来てしまう。動いている間は良い、だが動きを左でも右でも切り替える瞬間には一瞬だけ止まってしまう。その時に玄十郎は一気に攻めてくるだろう。そうなると琴未は対処しきれずに崩されてしまう。

つまりペースが乱れてしまうわけだ。だからこそ動かずにいるのだが、いつまでもこうしていると集中を乱した時点で打ち込まれてしまう。お互いに相手の動きに集中しているからこそ拮抗しているのであって、その集中力が切れた時点で相手は一気に攻めてくるだろう。そうなっても琴未のペースは乱されてしまう。

琴未は今までこれらのパターンでやられている。幾つかの趣向を凝らしてはみたのだが、だいたいこの二つのパターンに分類できるだろう。

そうなると二つのパターン以外で攻めないと玄十郎に一撃を入れ

えることなど出来はしない。けれども二つのパターン以外にどう攻撃を繰り出せば良いのか琴未は迷っていた。

困ったな～、はっきり行ってお爺ちゃんの集中力が途切れるとは思えないのよね。でも下手に動き回るとこちらがやられるし……まさか真っ向から突っ込むわけにもいかない……あっ！

どうやら何かを思いついたようだ。

琴未は右足を少し下げて腰も少し落とすと木刀を少し下げる。どうやら攻めるようだ。そんな琴未の姿に玄十郎は笑みを浮かべる。どう出るか楽しみしているようだ。

そして琴未は一気に踏み出すと真正面から向かって行く。一瞬だけ眉を動かす玄十郎。まさか琴未が真正面から突っ込んでくるとは思っていなかったようだ。それにスピードも乗っている。このスピードでの方向転換は無理だ。そうなると真正面から受け止めるつもりか。

それならそれと玄十郎は両手に力を入れると瞬時に木刀を少しだけ後ろに下げる。そして琴未が間合いに入った瞬間に一気に振り下ろす。

このまま琴未が玄十郎の攻撃を防ごうとすれば、力を溜めて繰り出した玄十郎が押し勝つだろう。

けれどもそうはならなかった。なにしろ玄十郎の木刀は振り下ろされる前、玄十郎の肩位で琴未の木刀とぶつかり合っているのだから。

玄十郎の攻撃は振り下ろされた瞬間に最大の効果を発揮する。けれども振る下ろされる前なら威力は半分以下だ。だからこそ琴未の力でも充分に止める事が出来る。

琴未はそのまま玄十郎の木刀を横に弾くと一気に攻勢に出る。玄十郎は木刀を弾かれてしまったので、防御を封じられて避ける事に専念しなければならなかった。けれども琴未の木刀が玄十郎を捕らえる事は一度も無かった。

玄十郎は琴未の攻撃を完全に読んでいる。だからこそ簡単に避け

る事が出来た。
もちろんそれは玄十郎だからこそ出来る事だ。普段から琴未の相手をしているのだから細かな癖まで知っている。だからこそ避け続ける事が出来る。
琴未としてはこのまま一撃を入れたかったのだが、この攻勢がいつまでも続ける事が出来ない事は分っている。攻勢し続けられる限界点に達する前に一度引かないと打たれることは確かだ。
けれども攻勢から守勢に転ずる瞬間に出来る隙が一番危ない。だからこそ上手く引かなくてはいけないのだが、琴未はなかなか引くタイミングが掴めなかった。
どうにかして一回距離を取らないと。
そう思うのが行動に出たのか玄十郎は一気に距離を詰めてきた。木刀は下段、下からの攻撃は間違いない。
琴未は木刀を横にして下げると力一杯後ろに飛び退く。少しでも距離を開けたいのだろう。そうすれば下から来た玄十郎の攻撃を上手く受け流し、更に距離を開ける事が出来る。
けれども琴未の思い通りにはならなかった。
琴未が着地すると玄十郎が持っている木刀の切っ先は顔の横にあった。木刀を下に構えたのはフェイントで、そのまま下から刺突を出してきた。
だからこそ琴未は防ぐ事も避ける事も出来ず。ただ呆然と立ち尽くすしかなかった。
玄十郎は微笑を浮かべると木刀を引いた。勝負が付いたのは明らかだ。これ以上の訓練は必要ない。だからこそ背を向けて琴未から一定の距離を取って向き合った。
「今朝の稽古はこれまでにする」
それだけ言うと琴未も姿勢を正してお互いに礼をする。こうした礼儀も武芸には必要不可欠な事だ。
「それにしても、ここ最近で一気に腕を上げたな」
玄十郎は木刀を壁掛けに戻しながらそんな事を言い出した。琴未

の成長が教えている者として嬉しいのだろう。
けれども当の琴未はそこまで気楽にはなれなかった。
「まあ、いろいろと修羅場があったからね」
ロードナイトの事といい、海での出来事といい。なかなか体験できない戦いを体験してきたのだから腕もかなり上がらざる得ないのだ。
「それも閃華くんと契約をしてからだな。どうやら貴重な経験をしているようだ」
玄十郎も含め、琴未の家族は精霊や契約者の事を知っている。それは最初に閃華が全て話したからだ。シエラはどういう理由でかは話はしなかったが、そこが滝下家と武久家の違いだろう。
だから玄十郎は琴未が貴重な経験で腕を上げている事を半分喜び、半分不安なのだが、当の琴未は悲鳴を上げた。
「いや――っ！　だからその事を思い出させないで！　私の！　私の初めてが！」
「……」
そういえばそうだったなと玄十郎は少し反省した。
精霊との契約方法は幾つかある。琴未と閃華が取った契約方法は服従契約と呼ばれ、契約方法はキスである。これは精霊が契約者に絶対に忠誠を誓うために選ばれたのだが、琴未としてはファーストキスであり、それが閃華に奪われたのが未だにトラウマになっている。
ちなみに余談だが、風鏡達が行った契約は主従契約であり、これは完全な上下関係を閉めている。契約方法は精霊が武器を差し出すことで忠誠を誓う方法だ。
どの方法にしても精霊が下の立場になる事になる。それは精霊という存在自体が特殊であり、現世つまり人間世界では存在する事が出来ないからだ。そのうえ人間世界に対しては覗く事は出来るが干渉する事は滅多に出来ない。
己の属性に従って地球という存在を顕使するためだけに力を行使

する、それが精霊の存在意義なのだから。
だから契約が下の立場であっても人間と契約したがる精霊は多い。何も無い精霊精界にいるよりはいろいろとある人間世界に興味が沸くし、そちらで過ごしてみたいというのも当然の欲求なのだろう。
そんな精霊の存在意義はともかくとして琴未は未だに床板の上を転がり回っていた。どうやら未だに悶え苦しんでいるようだ。
そんな琴未に玄十郎はしかたないという顔をすると話しかけてきた。
「そういえば、あっちの家での生活はどうだ？　うまくやってるか？」
滝下家での生活は良く家族にも報告しているのだが、玄十郎はよほど気になるのか。話を切り替えるたびに、その事を聞いてくる。
話しが切り替わったのでトラウマから脱した琴未は立ち上がると木刀を壁掛けに戻した。
「別に、いつも言っている通りよ。シエラったらいっつも昇との間を邪魔して」
不満そうに報告する琴未。シエラとの抗争は琴未にとって不愉快な事この上ないのだろう。けれども玄十郎はそんな話でも微笑を浮かべながら聞いている。
「まあ、お前が滝下の小僧に惚れて長い時間が立っているからな～。それでも進展しただけでもいいんじゃないのか」
「……そうとも言えるけど、邪魔な者は邪魔なの、特にシエラが！」
完全にシエラを敵対視している琴未。確かに昇に告白できたのは大きな進展だろう。けれどもそれと同時にあんなにも多くの邪魔が出てくるとは思ってはいなかった。告白する以前はそういうのを全て潰していただけに、実際にそういうのが出てくると上手く対処できないようだ。
「けれども滝下の小僧とは進展してるのだろう？」
琴未が告白して以来、邪魔はあっても二人の仲は発展していると思っているようだが実際はそうではない。琴未は溜息を付くと実際

の状況を説明した。
「なるほどのう。なかなかそう上手くはいかんか」
「まったく、いっつもいつも邪魔が入って」
実際には結託する事もあるのだが、邪魔される数の方が多いのも確かだ。そんな状況をしった玄十郎は笑みを浮かべるとある提案をしてきた。
「なら二人の仲を一気に進展させてやろう」
「えっ！」
まさか玄十郎からそのような言葉が出てくるとは思って無かった琴未は大いに驚いたが、それ以上に期待の眼差しを送った。
玄十郎が琴未に甘い事は琴未自信も良く知っている。だから昇との仲を反対する事は絶対にしないし、いつでも味方になってくれる事も承知している。だからこそ玄十郎の言葉に期待せざる得ない。
「そろそろウチの神社も夏祭りの時期だろ」
「そういえばそうね。それで、それが何か関係が有るの」
玄十郎はワザと含みを持たせてから琴未に耳打ちした。
「なななななななっ！」
「そこまで驚く事は無いと思うぞ」
玄十郎の提案に琴未は思いっきり驚き動揺した。それは琴未の予想以上の展開が行われようとしていたからだ。
「で、でも、昇はともかくシエラ達までどうやって」
「くっくっくっ、心配する出ないそこは大丈夫じゃ」
「って閃華、いつの間に」
相変わらず神出鬼没の閃華に半分驚きながらも琴未は事態を把握した。どうやらこの提案は閃華も絡んでいるようだ。だからこそあのような大胆な事を実行しようとしているのだろう。
ちなみに閃華も時々琴未の実家に泊まる事がある。昇の事があるから琴未と一緒にここに泊まる事は無いが、それでも海に行っていて一週間近くも帰っていないのだから今回は二人して泊まりに来ていた。

閃華は道場内に入ってくると琴未に向かって親指を立てて見せた。どうやら今回の企みには相当の自信があるようだ。

それに自信があるのでは閃華だけではない、玄十郎も満足そうに何度か頷いて見せた。

「そうだぞ、お前達のために儂もいろいろと苦心したからな。絶対に上手く行かせてやる」

「そうじゃぞ、今回の作戦こそ二人の仲を決定的に出来るじゃろ」

声を合わせて笑い出す閃華と玄十郎。どうやら今回は二人で協力していろいろと企んでいるようだ。

玄十郎が琴未に甘いかと言ってここまでするとは当の琴未自身も思ってはいなかった。それに玄十郎は昇の事をそれなりに認めてはいる。まだまだ未熟なところは多いが、素質だけは見抜いているのだろう。だからこそ二人の仲を認めて発展させようとしているのだ……閃華と一緒に。

そして更に盛り上がる閃華と玄十郎は笑いながらも企みの絶対さを自慢し始めるが、さすがの琴未もここまではついていけないのか。呆れながら道場から静かに出て行く。

もちろん盛り上がっている閃華と玄十郎は気付きもしないで笑いながら話している。出て行く琴未に気付かないままに。

登校日のうっとうしい行事が全て終わり、やっと解放された生徒達は散り散りに自分の目的地へと向かっていく。

そんな光景を閃華と与凪は冷房のが効いた生徒指導室で見ていた。もうこの部屋はすっかり私室となっているようだ。

この学校には生徒指導室が三つも有るのだが、その一つが与凪達の私室となっているのだが、その事に誰も気付かない。

それは与凪の属性が関係している。与凪は霧の精霊、霧は全てを覆い隠し、その存在を気付かせないようにする。だからこの生徒指導室を使用しようとすると、すでに使用中だと思い込ませ別の部屋

を利用させるようにしている。
つまりいつでも使用中だが、その生徒指導室自体の存在も隠しているため、誰もその存在に気付いてはいない。
そんな与凪の属性があるからこそシエラ達も与凪が精霊だとは気付かなかった過去があった。
そしてその生徒指導室にはいつも閃華と与凪が占領しているのだが、今日は昇達までもが入ってきた。
「あ～、やっぱりここは涼しいよ～」
部屋に入るなり真っ先にくつろぐミリア。他の三人は声だけ掛けてから定位置へと座る。こうなってくると与凪だけでなく、昇達が部屋を私室と化しているようなものだろう。
シエラと琴未が昇達のお茶を入れてから与凪から話を切り出してきた。
「そういえば今日はどうしたんですか？」
閃華と与凪はよくこの部屋を占領しているが昇達は何かしらの理由が無い限りここに来る事はあまり無い。つまりここに来たのはそれなりの理由があるからだ。
その理由を琴未の口から話し始めた。
「先週、海に行ったばかりだけどさ。せっかく夏休みだし、皆でまた遊びに行かないって事になって。だから与凪も誘いに来たのよ。それにここなら閃華も居るしね」
「なるほど、それはいいですね～」
学生にとって夏休みは思いっきり遊べる限られた時間だ。それなりに宿題も出ているのだが、ミリアはともかく他の全員はそれなりに片付けているようだ。
だからこそ、そのような提案が出たのだろう。
「海には行ったばかりじゃからな、せっかくじゃから水に関係ないところが良いのう」
水の精霊としてもあまり水場ばかりでは詰まらないのだろう。水場なら力は発揮できるが、それと遊ぶのとは別問題だ。

「そうね、今日これから行けるところだから近場に限られるわよね」
琴未の言うとおり何日も遊ぶわけではない。これから少し遊ぶのだからどうしても近場に限られてくる。だがそうなると何処に行こうかいろいろと意見が出てくる。
ショッピング、映画、遊園地などなど。ちなみに遊園地はミリアの発言だが、すぐに却下された。さすがにそこまでの金銭的な余裕は無い。
その後もいろいろな意見が出たが、あまり暑い中を歩き回るのもあれだという結論に達したのか、ここでお菓子でも買ってきておしゃべりでもしてようという結果になったようだ。
そういう結果になったのには一つの理由がある。それは閃華が三日後に夏祭りが有る事を告げたからだ。どうせ遊ぶならそういうイベントがあった方が楽しいだろうと言い出した、だから今日はここで座談会という事になった。
昇としては少しだけほっとした。もしショッピングにでもなれば昇は確実に荷物持ちである。炎天下の中でそんな役割だけはごめんこうむりたいのだが、座談会での買出しのクジで昇は見事に当たりを引いてしまった。
その事で当然でしゃばるシエラと琴未。だがそれを仲裁するように与凪から自分が付き合うと言い出した。
与凪からそんな事を言い出すのは珍しい事だが、与凪には森尾という契約者兼恋人がいるのだから安心だろうと全員が納得した。
そんな経緯があり、昇と与凪は涼しい生徒指導室を後にし、学校の外へと出て行く羽目になってしまった。

「それにしても珍しいですね。与凪さんから付き合ってくれるって言うなんて」
与凪は傍観者や裏方の仕事で自ら動く事はあまりしない。これは性格なのか役割なのかは分らないが、普段からも傍観者で居る事が

多い。そんな自ら昇に付き合うのが珍しかった。
　前を歩く与凪にそんな言葉を掛けると少しだけ考えるような仕草すると、与凪は昇の隣を歩き始めた。
「これはまだ確定した事じゃないから伝えようかどうか迷ってたんだけどね、ちょっと厄介な事になり始めてるの。だから二人だけで話をしたかった、そんな理由があったからね」
　つまり昇にだけは伝えておいた方が良い事が有るのかもしれないということだろう。これども昇としては少し引っ掛かりを覚えたのも確かだ。
　そういう事はいつも閃華に伝えるものだと思ってたけど、今回は何で僕なのかな？　というかやっかいな事が起こり始めてるかな？
　あ～、せっかく海から帰ってきたばかりなのに。
　与凪の言葉に昇は少しうんざりしたような顔になる。海では散々な目に遭ったばかりだと言うのに、これ以上は何も起きて欲しくないのだろう。
　そんな昇の顔を見て与凪は軽く笑った。
「大丈夫大丈夫、まだそうなるって決まった訳じゃないから。でも……事が事だから滝下君にだけは伝えておこうと思って。もちろん確定したら皆にも伝えるつもりよ」
　未確認の情報だけに下手に伝えると誤解を招く事になる。けれども事が大きければ後手に回りかねない。つまりはそういう状況なのだろう。
　昇は与凪の言葉にそう判断を下した。さすがに幾つかの修羅場を潜り抜けてきただけにこの手の話は飲み込みが早くなってきているようだ。
「それで、その情報ってのは何なんですか？」
　まずはそれを聞いておかないとどうしようもない。昇は与凪に話すように促したが、与凪は少し複雑な顔をした。
「さっきも言ったとおり未確認の事なんだけどね。どうやら誰かが精霊王の力にちょっかいを出そうとしているらしいの。正確には私

と閃華さんが封じた封印を解こうとしているようなの」
「って！　それって」
精霊王の力についての危険性は充分過ぎるほどに分っている。なにしろ昇は以前に精霊王の力、その一端だが、その力と戦った事が有るのだから。
その時はどうにかなったが、もしまたそのような事態になれば今度はどうなるか分らない。だからこそ与凪と閃華は精霊王の力が流出しないように封じていた。
そんな精霊王の力を再び利用しようとしている者が出た。いや、未確認の情報だから出ているのかもしれない。どちらにしても良い情報ではない事は確かだ。
「でも、誰がそんな事を？」
「精霊王の力よ。利用したい契約者や精霊なんて数え切れないぐらい居るわよ。だからうまく隠してきたんだけど、どうやら誰かが気付いたみたいね」
サファドの例もある。精霊王の力が利用できると知れば狙う契約者や精霊は何人でも来るだろう。それほど精霊王の力は絶対であり利用価値が充分過ぎるほどある。
閃華達はそれを少なくするために封印と隠ぺいをしていたのだが気付く者は気付いたようだ。
その気付いた者が近づいているのかもしれない。与凪はそう警告してきた。
「つまりまた……ここで戦いがあると」
「争奪戦が終わるまでどこでも戦いがあるわよ。でも……話しが通じない相手なら戦うしかないでしょうね。まあ、ロードナイトの事からいつかはこういう事になるとは思ってたけど、意外と早く着たみたいね」
……また、あんな戦いが。
昇の脳裏にロードキャッスルでの悲しい戦いが思い出させる。あんな想いをしたくないから、もうあんな戦いをしたくないから強く

なる事を選んだ。そんな想いを抱いたからこそ、昇はすぐに決める事が出来た。

「もしそうならなるべく早く接触した方が良いかもしれませんね。話し合いで解決できるならそれに越した事は無いですけど、戦う必要が有るなら準備は早い方が良い」

確定している情報ならもっと具体的に動けるだろうが、未確認の情報ならそれだけが精一杯だろう。

だから昇なりに出来る限りの事を言ったつもりなのだが与凪に笑われてしまった。

「ごめんね、でも滝下君……大分成長したなと思って。不安がると思ってたけど、まさかそんな反応が返ってくるとは思って無かったのよ」

与凪なりに昇に時間を与えるつもりだったのだろう。もし昇が悩むようなら悩む時間は多い方がいい。だからこそここで話す事を選んだようだ。

けれどもそれは与凪の杞憂に過ぎなかった。与凪が思っていた以上に昇は成長していた。さまざまな経験を経て、そしてこれからも成長していくだろう。

「じゃあ、とっとと買出しを済ませて戻りましょう」

伝えるべき事を伝え終わった与凪は再び歩みを速めて近くのコンビニへと歩いていった。

『ただいま～』

買出しを終えて戻った昇と与凪。私室の生徒指導室ではすっかり座談会となっていた。

「おかえり～」

一番先に気付いた琴未が声を掛けるとミリアは真っ先に二人の元に来て荷物を奪い去っていく。そしてテーブルに上に並べると早速お菓子に手を出し始めた。

シエラや閃華は全員のジュースを手渡し、琴未はミリアが散らかしたテーブルの上を整理する。そして昇と与凪はいつもの席へつくとそこにはすでに頼んでおいたジュースが置かれていた。

「それじゃあ、改めてカンパーイ」

なんで乾杯なのかは分らないがミリアがそんな事を言い出しても盛り上げる。もう楽しければ何でも良いのだろう。

「そういえば皆さんは浴衣は持ってるんですか？」

話しが丁度切り替わり、与凪がそんな事を尋ねてきた。せっかく夏祭りに行くのだから浴衣の方が良いに決まっている。だからそんな事を尋ねたのだが閃華から意外な答えが返ってきた。

「それなら心配ないぞ、こちらでしっかり用意しておくからのう」

「へぇ～、気前が良いですね～」

笑顔で答える与凪だが閃華だけが与凪の笑顔に隠されている何かに気付いたようだ。どうやら与凪だけは閃華達の企みに気付いたようだ。

「あ～、でも、もしかしたら私は行けないかもしれませんね」

「え～、なんで」

閃華達の企みに気付いた与凪がそんな事を言い出しミリアが抗議の声を上げる。ミリアとしては皆一緒に遊びたいのだろう。

けれども与凪はみすみすと閃華の企みにハメられるつもりはない。だからこそ今回も逃げるつもりなのだが閃華は意外な事に軽く笑う。

「くっくっくっ、それはどうかのう。もしかしたら絶対に来るかもしれんじゃろ」

「……何をしたんですか」

「さあ、何のことじゃ？」

二人の会話には様々な意味と思惑が交錯しているのだが、二人以外は首を傾げるだけだった。やはり会話の内容が分らないようだ。

「それよりも私はカラオケに行ってみたいんじゃがな、最近の歌も

やっと覚えたからのう」
　これ以上この会話を続けると他の者に気付かれる可能性が出てきた閃華はとっとと会話の内容を切り替えた。
　その会話の内容にシエラとミリアも飛び付く。昇と契約してから遊ぶ機会はあまり多くは無かった。それに二人とも争奪戦に参加するのは今回が初めてだ。だから人間世界の物に興味を持つもの不思議ではない。
　だから二人ともカラオケには一度は行ってみたいと思っていた。そんな事もあり、日取りは決めてはいないがカラオケに行く事になり、その後は他愛の無い話へとなって行った。

　占領した生徒指導室での座談会もかなりの時間が過ぎ、空が赤く染まり始めた時間になり始めたのに気付いたのはシエラだった。
「もうこんな時間、買い物に行かないといけないんだった」
「シエラなんか買う物でもあったの？」
　昇の問い掛けにシエラは頷く。
「食材、夕食の分はあるけど明日の朝食分が足りないから」
　学校帰りに食料の買出しに行くつもりだったのだろう。人数が多いだけに買い物の数も多くなったわけだ。
「冷蔵庫の中身ってそんなに少なくなってたっけ？　明日の分ぐらいはあると思ってたけど」
　どうやら琴未の計算ではまだ充分に間に合う予定だったようだが、足りなくなった理由をシエラは説明する。
「昨日は琴未と閃華が居ない事を計算して買い物をしたから、だから明日の分は足りない」
　つまり琴未達が居ない事を良い事に買い物の手間を省いたのだろう。ただ単にめんどくさかっただけなのかもしれないが、どちらにしろ買出しには行かないと行けないようだ。
「それじゃあ今日は解散にしましょうか」

時間が時間だけに与凪がそんな事を言い出した。確かにすでに夕暮れだ。これ以上は夕食の支度をしなくてはいけないシエラと琴未とっては負担になるだろう。

与凪の言葉に全員が頷くと与凪と閃華は部屋の片付けを始め、シエラと琴未は昇の腕を片方ずつ組んで連行しようとしていく。

えっと、なんで僕は誘拐されそうになってるんでしょう？

そんな疑問を抱きながら逆らえない事と連れて行かれる理由が分っているだけに抵抗はしない。しかも昇の荷物はすでにミリアが持っているからだ。

要約すると荷物持ちである。普段の買出しはシエラと琴未が行くのだが、たまに昇や彩香が付き添う事もあり、そういう時は必ず昇が全ての荷物を持つ。それは男手が昇だけしか居ないので避けられない運命となっている。

昇もすでに諦めの境地に達しているようだ。二人の腕から解放されるととミリアから荷物を受け取り素直に買出しに付き合うのだった。

「とりあえず何にする？」

近所に有るスーパーで昇にカートを押させながら琴未がそんな事をシエラに尋ねてきた。

「野菜はまだ充分にあったと思ったから、魚も飽きたし、肉にしようかな？」

「却下」

「なら揚げ物」

「それも却下」

シエラの提案に即答で却下する琴未。そこには人間と精霊の違いが存在した。その理由が分っているだけに琴未は時々シエラがうらやましくなる。

「まったく、どうして精霊はカロリーを気にしなくて良いのかしら。

食べたい物を素直に食べられるって幸せよね」

そんな事を呟く琴未。

厳密に言えば精霊には身体という物は無い。精霊とはエネルギーの結晶体であり、契約によって結晶体を人間の姿に出来る。だからシエラ達の身体は人間と同じであってそうではない。

あくまでも仮の身体に過ぎないのだから。だから太ったり痩せたりなどの身体的な変化はまったく無い。だからカロリーも塩分も血糖値も気にしなくて良いのだ。

その点だけは琴未は精霊が凄く羨ましいと思っている。なにしろケーキだろうがお菓子だろうがいくら食べても体重など気にしなくて良いのだから。

だからシエラは食べたいと思った事を口にするのだが、琴未の意見は重要視している。さすがに昇達まで精霊の食生活に合わせる訳には行かないだろう。そんな事をして病気にでもなったら大変だ……琴未だけならともかく。

だからシエラは一人だけで買出しには行かない。かならず琴未か彩香が同行する。やはり人間の食生活や栄養バランスを学ぶためにもそういう事をしているようだ。

そのため買う物は琴未や彩香が要望する物が多くなる。今回も魚と肉は少なめに、他に足りない調味料やキノコ類などを買って買い物は終了した。

それを全て昇に持たせて帰路につく。昇も最早溜息しか出ないようだ。そんな昇達の前を三人の女の子が談笑しながら歩いている。もうすっかり慣れた光景だ。

このまま聞いているだけでも暇なので昇もその会話に参加しながら歩く。そうして昇達は家へと帰っていくのだった。

その後に待っている閃華達の企みからすでに抜け出せない事を知らないままに。それを知るのは昇達が家に帰った後だった。

第七十九話　登校日（後書き）

え～、そんな訳でやっと再開できましたエレメです。
まあ、一番最初ですからね～。こんな感じでしょうとか納得してます。それに昇達の日常を少し取り入れてくださいという意見も有りましたので、すこしやってみました～……上手く出来たかは別問題ですけどね。
さてさて、そんな訳で始まりました他倒自立編。数話ほど大人しい話しが続きますが、後半はいつもどおりに派手なバトルが繰り広げられるでしょうね～。
それにブログかな？　そこでも予告したどおりに与凪の精霊武具も解禁となります。武器はまだ詳しく決めては居ませんが、姿としてはミニスカにする予定です。さあ、どんな姿になるんでしょうね。少し自分でも楽しみだったりします。
さてさて、それでは、長い事お待たせして申し訳ありませんでした。以前のようにまだまだ更新スピードを上げて行く事は出来ないかもしれませんが、少しずつやって行こうと思っております。
それでは今までお待ちして頂いた方々に感謝しつつ、そろそろ締めようかと思います。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。
以上、最近いろいろと悩みなら考えが巡りまわってる葵夢幻でした。

第八十話　花火を人に向けてはいけません

『なんで～っ！』

夕食後、シエラとミリアは彩香の言葉に驚きの声を上げた。その言葉を聞いたのは昇を始め琴未と閃華も含まれているのだが、昇は閃華達が何かを企んでいるのではないかという勘が働いたのか動じない。

琴未と閃華はすでにその事を知っていたからだ。

抗議の声を上げたシエラとミリアに彩香は改めて先程頼んだ内容をもう一度説明する。

「だから人手が足りないのよ。それでシエラちゃんとミリアちゃん、ついでに昇にも夏祭りの手伝いをして欲しいのよ」

つまり夕暮れに占領した生徒指導室で夏祭りに遊びに行こうと決まったのだが、今度は彩香から夏祭りの手伝いを頼まれてしまった。そうなってしまうと夏祭りで遊ぶ何処ろではなくなってしまう。

その事で困り顔になるシエラとミリア。昇はというと平然としている琴未と閃華の顔を見てなんとなく察していた。

この事に驚かないのは彩香がこういう事を言い出す事を知っていたからだ。そして夏祭りの会場は琴未の実家。つまり高戸神社だ。つまり彩香がそういう頼み事を言い出す事を知らないわけが無い。逆に閃華達からその事をシエラ達に頼むように言ったのかもしれない。

どうやら先程の生徒指導室で夏祭りの話を出したのは与凪までも巻き込むつもりなのかもしれない。シエラとミリアは彩香から頼まれれば嫌とは言いづらい。言えない訳ではないが、彩香は家主でありシエラ達はやっかいになっている身だ。たとえいろいろと家事をやっているとしても、この家での権力を握っているのは彩香なのだ。

だからシエラ達は絶対にこの申し出を断れない。その事に不審を抱いたシエラが気付いたようで食事を終えた琴未に詰め寄ってきた。

「何を企んでるの？」
直球に聞いてくる琴未は当然素知らぬ顔をする。
「何の事？」
「さっき夏祭りに遊びに行こうって決まった時にはこうなる事を知ってたんでしょ。それなのにさっきはその事を言わなかった。それはお義母様からこういう事を言い出す事を知っていて私達にそれを絶対にやらせないといけない。そうでしょう」
自分の推理を琴未だけに聞こえるように話すシエラ。確かにその通りなのだが、それだけでは説明不足なのは気付いていないようだ。
「まあ、そうかもしれないわね。なにしろ閃華がやったことだからね。それにそんな事をして私達に何の得があるっているの？」
琴未の言うとおりである。ただ単にシエラ達に夏祭りの手伝いをさせたいだけなら彩香から言い出すだけで良い。それなのにここまで手を込んだ事をしたって事はそれなりの理由が有るのだろう。
それを説明してみろと琴未は主張するがシエラは答えることは出来ない。それは琴未の言うとおりだからだ。手伝いをさせるだけなら彩香だけで良い。何も生徒指導室で話を持ち出して与凪まで巻き込む必要は無い。それなのに、ここまで手の込んだ事をするにはそれなりの事があるのかもしれないが、それが分らないからには反論の仕様が無い。
「……分った、お義母様の頼みだから断れないし手伝ってあげる。でもあなた達の企みが上手く行くと思ったら大間違い」
この場ではどうする事も出来ないと判断したシエラは現場でどうにかしようと判断を下したようだ。
確かに現状ではそうするしかないだろう。けれども今回の企みは閃華と玄十郎が結託して行う事である。そう簡単に阻止する事は難しいだろ。
それにシエラは玄十郎の事は知らない。話には聞いた事はあるだろうが面識は無い。だからどういう人物かも分りはしない。だからそこまで計算に入れる事は出来ない。それよりも重要になってくる

のが与凪だ。
閃華はわざわざ与凪を巻き込むように生徒指導室で夏祭りの話を出してきた。そこには何かしらの企みがあるのだろう。その事に気付いているのは当の与凪だけなのかもしれない。
何にしても行く重にも巡らされている企みをシエラだけで突破するのは難しいだろう。それに一番やっかいな点はシエラが玄十郎の存在や与凪が巻き込まれている事を知らない事である。
だからこそ閃華と玄十郎は今回の企みが絶対に上手く良くと確信している。その事に閃華は心の内で悪辣な笑みを浮かべ、玄十郎は笑っているだろう。その事に昇は一瞬だけ悪寒を感じた。
どうも夏祭りが無事平穏に済まない事だけは察したようだ。

夕食後、全員がリビングへと集っていた。各自の部屋は用意されているのだが、さすがにテレビやコンポなどの個人的な電化製品までは用意しきれないので自然とリビングに全員集るようになった。
そんな中で起こるのがテレビのチャンネル争いだ。時たまそういう事が起きるのだが、彩香が出てくると治まってしまう。やはりこの家の権力者には誰も逆らえないのだ。だからと言って彩香が傍若無人な訳ではない。
彩香の自室にはちゃんとテレビが設置してある。だから自分だけが見たい番組が有るときは自室に戻るのだが、皆で見る番組はリビングで見るようにしている。
そんなテレビで放送されているのは動物番組だ。ミリアは動物系、琴未は音楽系の番組に拘るのだが、やはり動物やスイーツなどの番組だとそちらに行ってしまう様だ。
そんな動物番組でシエラだけが時折詰まらなそうな顔をしている。それは必ず鳥に関する事が放送されている時だ。
シエラの属性は翼。やはり鳥に関する事は興味が薄いのだろう。他には動物系の属性を有している者が居ないだけに、そういう事が

起きるのかもしれない。
だけどシエラとて動物番組が嫌いなわけではない。鳥系の動物に興味がもてないだけだ。
現に今現在テレビに映っている猫には興味津々だ。もちろんシエラだけでなく琴未とミリアも。閃華と彩香は可愛いとだけしか思っていないだろう。だから二人ほど興味がないワケでは無い。
「この猫、足が短くて可愛〜い」
テレビに映った猫にミリアが率直な感想を口にする。マンチカンという種類の猫だ。最近ではかなり人気がある。
短い足に垂れた耳、それにつぶらな瞳が人気を博しているようだ。
「マンチカンも可愛いけど、私はスコチィッシュフォールドかな。あのつぶれた顔が可愛いのよね」
スコチィッシュフォールドも少し前までは一番人気を取っていた猫だ。こちらはなんと言っても顔に特徴が有る。琴未の良いようではないが、すこしつぶれたような顔をしており、それがなんとも愛らしい。
「シエラはどんな猫が好きなの」
ミリアと琴未が猫のトークで盛り上がったので昇はシエラの意見も聞いてみたのだが、予想外の答えが返ってきた。
「私は犬派」
「へぇ〜、シエラは犬の方が好きなんだ」
頷くシエラ。まあ、確かにシエラが猫と笑顔で戯れている光景はあまり想像できないが、犬に芸を教えたり、外で遊んだりするのはなんとなく昇にも想像が出来た。
けれどもシエラはそういうのとは少し、いや、かなり違うようだ。
「うん、お預けを覚えさせて放置して、涙目で訴えてくる目とか。お手をさせてそれを数十分我慢させた時とかの顔がなんとも可愛い」
シエラさ〜ん、論点がずれてますよ〜。というかドSですか！
すでに芽生えて花が開いちゃってますか！
シエラの言葉に昇は言葉を失う。確かにそんな事を聞かされたら、

どう返事をすれば良いのか分からないだろう。
　そんな会話をしていたらテレビの画像は鳥の求愛行動についての放送を始めた。真っ先に視線をテレビから離すシエラ。やはり興味が無いようだ。ミリアと琴未も先程まで熱心では無いが求愛行動の不思議としか言えない動作に笑ったりしている。
　そんな時だった。興味を失ったシエラが夏祭りに関する事を閃華に聞いてきた。
「そういえば浴衣の話になった時にそっちで用意するって言ってたけど、まさか私達が着るのは浴衣ではないんでしょ」
「ほう、察しがよいのう」
　まさか浴衣を着て神社関係の手伝いをする訳にはいかないだろう。そうなると用意されている物は一つしかない。
「もうすでに全員分の巫女装束を用意してあるぞ。なんじゃったら一度寸法合わせしても良いのじゃが、どうする」
「遠慮する」
　閃華の申し出に即答するシエラ。そこまでするつもりは無いのだろう。なにしろすでに閃華達の術中にはまっている事には気付いているのだから。
　けれども意外な事を閃華は言い出した。
「じゃが浴衣も用意してあるぞ。なにしろ手伝ってもらうのは午後じゃからな。午前中は自由行動じゃ。それなら浴衣の方がよいじゃろうと一応用意はしておるぞ」
　つまり閃華達の企みは夜に行われるという事だろう。それだけでも分っただけでシエラには充分収穫があったし、ミリアも午前中は遊べると聞いて満足したようだ。シエラとしても行動する時間が把握できただけでも充分に動ける。だからシエラの興味はすぐに移り、またテレビへと視線を移した。
　そんな光景を目にした昇は少しだけ溜息を付きたくなって来た。
　与凪さんの話も気になってるんだけど、夏祭りの方が気になるな～。絶対に僕がらみなんだろうな～。今度はなにされるんだろう？

というか僕の理性はどこまで耐えられるんだ！

つまり閃華達の企みが成功するしないは全て昇の理性に掛かっている。昇としてはその理性が閃華の企みに打ち勝つ自信など無かった。

海での出来事と良い。ドンドンと手が込んできたり大胆になってきている。今度はどんな策略が待っているのかと思うとさすがに溜息を我慢できなかった。

「どうかした？」

昇の溜息に琴未が気付いたが昇は何でも無いと誤魔化した。琴未もそんなに気にしなかったのだろう「ふ～ん」とけ言って視線をテレビに戻した。

琴未の視線が完全に昇から外れると今度はシエラが耳打ちしてくる。

「大丈夫、私が必ず昇の貞操は守るから」

それだけ言うとシエラは昇から離れて定位置へと戻っていった。

けれどもシエラの言葉も気になる昇だった。

貞操を守るって、シエラも琴未もどんな想像をしてるんだ。というか……僕は一体なにをされるんだろう？　ううっ、どうにかして回避できないかな？　でも閃華が企んでいる事だしな～。どうしよう……よしっ！　ここは一度当たってみるか！

定位置から閃華の隣に座る昇。そこで閃華だけに聞こえるように話し始めた。

「夏祭りの件だけど、生憎と僕は用事があって手伝えないんだけど……大丈夫かな？」

「安心せい、昇の用事は全て片付けて有るはずじゃ、宿題も私が手を加えておいたからのう。すぐに終わるじゃろ。それ以外に用事があるというなら総出手伝ってやるぞ。それに……昇が奥方に逆らえると思っておるのか？　そう思っておるなら今すぐ考えを改めるんじゃな」

反論の余地どころか選択の自由すらなさそうだ。すでに閃華が引

いたレールの上に乗せられている事を昇は理解せざる得なかった。
見事に当たって砕け散った訳である。
すでにそこまでしてあったなんて。というか、僕の宿題にも手を加えたの！
どうやら今回はすでに逃げ場は無いようだ。そうなると頼るのは一人しかいない。
昇は定位置に戻ると今度は隣に居るシエラに耳打ちした。
「ねえ、本当に閃華の企みをどうにか出来る？」
シエラは視線を動かす事無く昇にだけに聞こえるように短く答えるだけだった。
「出来る限りの事はするけど、最後は昇の理性がどこまで耐えられるか」
結局はそこですか。
全ては昇の理性に掛かっている。まあ、閃華がどんな誘惑をしようと昇の理性がどれだけ耐えれるかが最後の鍵なのは違いない。
はぁ～、耐えられるかな～。
海での出来事を思い出すと昇には自信が無かった。そんな時にテレビはＣＭに突入した。その事で席を立つシエラと琴未。琴未は用をたしに、シエラはキッチンへ。だがシエラがキッチンへ行ったのは用があるわけじゃない。昇に言葉をかける為だ。
昇の後ろを通り過ぎる時にシエラはこう呟く。
「何かあったら私が力技に出るから」
えっと……シエラさん……それは脅しですか？
確かにシエラは以前に。というか最初の出会いで昇のベットに侵入している。それから琴未達が乱入してからというもの、そういう事は無くなったが、その気になればそれぐらいの事は簡単にやってのけるのかもしれない。なにしろシエラなのだから。
それだけ思うと昇は凄く納得してしまう自分に気付いた。一体自分の中で想像してるシエラってどんなだろうととか？　そんな事を思ったらしい。

いろいろな意味で不思議な面を持っているシエラだった。
そういえばシエラとは契約してから一番長い時間居るけど、一番知らない事が多いのかな？
琴未とは幼馴染で誰よりも長い時間を過ごしているからお互いに知っている事が多いろう。ミリアは性格上分りやすいし行動にもでる。だからいろいろと知る事が出来る。閃華に関しては海に行った時にいろいろと知った。
だから現状で一番知らない事が多いのはシエラなのかもしれない。それにシエラも何かしらを隠しているような気もする。
う～ん、結局シエラってどんな精霊なんだろう？
昇はそんな事を思ったりするのだった。

昇は決して同性愛主義者であったり、女嫌いな訳では無い。そういう事に面識がなさすぎるのと性格的な物があるのだろう。つまり奥手で経験が無いだけである。まあ、ヘタレとも言えなくは無いが昇に言わせればそこまで言われる筋合いは無いだろう。
だから強く誘惑されたり押されたりすると戸惑ってしまう。昇としてはどうして良いのか分らなくなってしまうのだろう。誘惑に乗ってしまおうとも思うときも有るだろう。けれども理性と正確がそれを阻害しているようだ。
さて、突然こんな事を言い出したのは現在の昇はベットに腰掛けて硬直しているからだ。
そんな昇の前にはあられないの無い姿を晒しているシエラと琴未とミリア。どうやら昇が寝ている間に何かあったらしい。
昨日シエラは力技に出るとか言っていたから先手を打とうとしたのかもしれない。それが琴未だかミリアに知らる事になった。そうなると二人は妨害に出るのは当然といえる展開だ。
この分だと精界すら張ってその中で大暴れをした可能性がある。どちらにしろ全員がノックアウトして昇の部屋でのびている訳だ。

あられの無い姿で。
……えっと、この状況で僕はどうすれば良いのだろう？
そんな事を自分に問い掛ける昇。確かにこんな状況ならやりたい放題だろう。けれども昇の正確からいってそんな事など絶対に出来はしない。つまりどうにかして三人を部屋へ連れ戻したいのだが、この姿を見てしまうと抱き上げるどころか触れる事すらためらってしまうようだ。
そんな状況だからこそ昇はベットに座りながら硬直して困り果てている。
全員部屋に戻さないとダメだよね～。
そんな事を思っている時だった。部屋の扉が開くと閃華が姿を見せて辺りを見回す。
「昨晩の精界はこれが原因のようじゃな。まあ、そんな事じゃと思っておったから放っておいたんじゃが。後は私がやっておくから心配はいらんぞ」
閃華は見ただけで状況を察すると琴未から一人ずつ昇の部屋から連れ出していった。おかげで昇はようやく一安心できた。後始末は全部閃華がやってくれる。それなら自分は何もしなくて良いのだと。というか、こんな姿の女の子達をどう扱って良いのかすら分からないのに、後始末なんて出来るわけが無い。それが無くなっただけでもよかったのだが、昇の頭にはこれからの事で嫌な考えが浮かんできた。
というか、これは昨日の事が原因だよね。そうなると……夏祭りが終わるまでずっとこんな状況が続くのかな。それだけは勘弁して欲しいな～。
そう思うと溜息しか出なかった昇であった。

どうやら昇の心配は杞憂で終わったようだ。あの後、意識を取り戻したシエラ達に停戦協定が結ばれたらしく。決戦は夏祭りだけと

なったようだ。
その事を聞いて半分安心する昇だが、残りの半分以上は不安になった。それは夏祭りが絶対に平穏無事に終わらない事を示していたからだ。
夏祭りまで残り数日。それまでは何事も無いようだが、その日だけは爆弾が爆発しそうな気配を昇は感じざる得なかった。
そうなるとやはり溜息しか出ない昇。そんな昇にいきなり体当たりしてくる物体があった。正確にはミリアという人物、いや、精霊である。
ミリアは昇の上に乗っかると手に持っている物を昇の眼前に差し出してきた。
「ねえねえ昇、花火だよ花火～」
「いや、それは見れば分るから」
確かにミリアが差し出してきたのは手持ち花火の袋詰めでよくデパートなどにも売られている物だ。いつの間に入手したかは知らないが手に入れたらしい。
「今から花火やろうよ～、花火～」
「花火たって……」
ちなみに現在の時間は午前だ。表も太陽がこれでもかってほど照り付けている。そんな中で花火なんてしても面白くないだろう。それにこんな明るい中でやっても楽しさは半減以下になってしまう。
せめて暗くなってからにしようと昇はミリアに悟らざる得なかった。ミリアも最初は渋ってみせたが、昇の説得にシエラ達も加わりミリアをどうにかして納得させる事が出来た。
だから夜まではいつも通りに過ごす事になった。
昇の事があるとはいえシエラ達も年がら年中、昇の争奪戦をやっている訳ではない。誰かが何かを仕掛けない限りは平穏な日常を送っている。その時ばかりは昇も心が休まるのだった。
現に今現在は何事も無く皆して普通の日常を送っている。
琴未と閃華は何かの雑誌を読みながら何か話してるし、ミリアも

それに時々加わり、飽きたらシエラや彩香に構ってもらっている。
シエラはというとずっと何かの本を読んでいる。
読書好きという訳ではないのだが、今まで争奪戦に参加した事が無いシエラにとって人間界は知らない事ばかりだ。そういう事を勉強したり、興味本位で読みたいと思った本をよく買って来ては読んでいるようだ。
何にしてもシエラは知識を良く求めているようだ。見た目的には大人目の子に見えるだろう。そんなシエラと違ってミリアは活発そのものだ。落ち着きが無いとも言えるが、それだけの明るさを持っている。
そんな二人とは対照的に琴未と閃華は普通の女の子と言えるだろう。話の内容や趣味やその他など他の女の子とも合わせる事が出来る。悪く言えば普通、良く言えば一般的。そういう感じの女の子だ。
だが全員に言える事はそれは表面上だけで内面はもの凄くいろいろと言えない事が凄かったりする。まあ、精霊だったり琴未だったりするのだからそれはしかたないだろう。そんな女の子に囲まれているのだから昇もたくましくなると言うものだ。
そんな普通の日常を過ごし、夜になるとミリアが再び花火と騒ぎ出した。どうやら相当やりたいらしい。
まあ、この中に火の属性を持っている者は誰も居ない。だから火の属性に関係する事には興味が沸くのは当然と言えるのかもしれない。
彩香を除く全員が庭に出ると閃華が水を入れたバケツを用意して、琴未がロウソクに火をつけて準備が整った。
真っ先に手持ち花火を手に持つミリア。先端をロウソクの火に接すると中の火薬に引火して火花が飛び出してきた。
「わ〜っ、きれ〜っ」
率直な感想を言うミリアはそのままロウソクから少し離れた所で花火を楽しむ。その間に琴未達も花火を手に取り点火する。そして様々な色の火花が庭を彩るのだが、そこまでは良かった。

「基本は先制攻撃」
シエラが火花を放っている花火を琴未達に向けて振り回し始めた。
「シエラ、あんたね！　ならこっちも」
琴未も負けじと花火をシエラに向かって振り回し始める。そんな事が始まれば当然ミリアも参戦する。そしてそんな様子をとっくに非難した昇と閃華が眺めていた。
「それで閃華、どうするの？」
こうなっては閃華に頼るしかない昇。けれども閃華はあまり状況を重くは見てないどころか楽しんでいるようだ。
「まあ大丈夫じゃろ、何かあっても火傷程度じゃし。どこかに引火するようならすぐに消してやるから安心せい」
まあ、確かに閃華は水の精霊ですからね～。
閃華にとって水を操る事など動作も無いことだ。だから火事になりそうになったらすぐに閃華が何とかしてくれるだろう。その事が分っているだけに昇も特に何も仕様とはしなかった。
だからだろう、隣に居る閃華が大量に隠し持っていた物を取り出したのに気付かなかったのは。
「昇、ライターはあるか？」
「ウチは誰もタバコなんて吸わないから無いかな。マッチなら琴未が……」
言葉を言い掛けて固まる昇。それは閃華の手に大量に持たれている物にやっと気付いたからだ。
「あの～、閃華さん。その手に持っている大量の物はなんでしょ？」
「んっ、決まっておろう。ロケット花火じゃ」
いや、それは分かっているんですけどね。なんでそんな物を大量に持っているんですか？　というか何をするつもりなんですか？
昇がそんな事を思っているうちに閃華は一度ロケット花火を仕舞うと琴未の元へ向かいマッチ箱を貰ってきた。
再び昇の隣に戻ると再びロケット花火を取り出し標準をあわせる。そして擦られて点火するマッチ。それが次々とロケット花火の導火

線に引火していく。
そして展開される阿鼻叫喚の光景。
あ～、ロケット花火もこう見ると綺麗だね～。
すでに現実逃避している昇。そんな昇を放っておいて閃華はロケット花火をシエラとミリアに向けて発射し、半分ほどを琴未に渡して加勢させる。
もちろん、そんな事をされて黙っているシエラではない。シエラが取り出したのは……なんと打ち上げ花火。
もちろん小さい奴で店で売られているやつだが、絶対に手に持ってやってはいけないものだ。
シエラはその打ち上げ花火や放射式の花火をミリアにも渡すと琴未と閃華のロケット花火に対抗していく。
うわ～、なんか……ウチの庭がいろいろな色に輝いてるんだけど。
すでに安全圏に非難している昇がそんな事を思った。まあ、閃華がいるから火事になるような事は無いだろうが近所迷惑になるのは確かだろう。だが近所の人は誰も気付いては居ないようだ。
昇はやっとその事に気付いて少し精神を集中させてみる。そうすると家の周りだけシエラと琴未の力が包み込んでいた。
シエラの属性は翼。だから風も少しは操れる。それで音などを遮断しているのだろう。光の方はというと琴未の属性で何とかしているようだ。こちらは雷。つまり電気で少しだけ光も混じっている。だから花火の光程度なら遮断出来るようだ。
すっかり琴未も力の使い方を覚えたようだ。今までにいろいろと修羅場を体験していただけに力の応用も身に付けているようだ。だからこれだけ大騒ぎをしても近所迷惑にはならないのだろう。
これは良い事なのだろうか悪い事のなっているのか昇にはよく分からなくなってきた。

そんな日常を過ごして数日後。ついに夏祭りの日がやってきた。

とは言っても手伝うのは夜だけであって、昼の間は自由行動だ。
だからこそシエラ達は各々で用意した浴衣を着て露店を見て周っていた。さすがに準備中の物もあるが半分以上はすでに開店しているようだ。
そんな中をミリアを先頭に歩いて周る。さすがに琴未と閃華、それに彩香は神社の関係者という事でこの場には居ない。だからシエラとミリアと昇の三人だけで露店を見て周っている。
人でもそんなに多いわけではないが、それなりに賑わっているのも確かだ。そんな中を三人はいろいろな物に目移りしてた。
「昇昇、たこ焼きが食べたい」
「自分のお小遣いでどうぞ」
昇にせがむミリアだがシエラが即答で切り返す。さすがにそう言われるとミリアも返す事が見付からないようだ。
そうなってはしかたないとミリアは自分の財布と相談すると食べ物の露店を一気に周って行って手には大量の袋が持たれる事になった。
そんな状況に満足な顔のミリア。どうやら満足するだけの食べ物を買えたらしい。
なんかミリアらしいな。
いろいろな物を頬張るミリアに昇は微笑ましい笑みを浮かべるが、他の事に気付いてシエラに視線を移した。
「シエラは何も買わないの？」
「……そうね」
シエラも興味が無いわけではない。さすがにこれだけの露店が揃っていると目移りしてしまうのだろう。そんなシエラが目を付けたのが射的だ。コルク球を飛ばして景品を落とすゲームである。
露店の前にシエラが行くと代金を払い。五発のコルク球とおもちゃのライフルが渡された。そしてシエラが狙うのは、こういう店には絶対に置いてある。コルク球では絶対に落とせない景品だ。
昇もシエラが何を狙っているかに気付いたようで耳打ちをする。

「さすがにあれは無理じゃない？」
軽いコルク球で絶対に落とせない重いゲーム機を狙おうとしているのだ。成功するはずが無い。けれどもシエラは視線を動かす事無く答えるだけだ。
「大丈夫、問題ない」
それだけ言うとシエラは完全に狙い済まして引き金を引く。飛び出したコルク球は信じられないほどの勢いで飛び出し、狙ったゲーム機の片隅を弾き、落とすまでは行かないが傾かせる事には成功した。
信じられないという顔をしている店主。そんな店主を無視してシエラは第二段の弾を込める。
「やっぱり少し癖が有る。今度はそれを計算して修正しないと」
どうやら次で完全に落とすつもりだ。そんなシエラの後ろで昇は呆れ顔になっている。ライフルから発射されたコルク球にはシエラの力が宿っていた。たぶん翼の属性を付加させてスピードと威力を上げたのだろう。
もちろん店主はそんな事に気付きはせず、未だに呆然としている。そして発射されるシエラの第二射目、今度は確実にゲーム機を落としてしまった。
半分ほど泣いているのか困り果てているのか分らないような顔で店主はシエラが落とした景品を渡してきた。
満足げにゲーム機を受け取るシエラ。けれども昇にはとある疑問があったので射的屋から離れるとシエラに尋ねた。
「シエラってゲームなんてやったっけ？」
シエラがテレビテームに夢中になっている姿なんて一度も見たことは無い。それとも今まで興味があったのだろうか。どちらにしても昇には不思議だった。
そんな昇の疑問をシエラは一言で解決する。
「転売するの。新品だから高く売れる」
……そういうことですか。

すっかり呆れた顔になる昇。どうやら中古の買取店で売り払うらしい。確かに数百円が数千円。下手すれば一万ぐらいいくかもしれない転売だ。シエラらしいと昇は思うものの、これはいいのかとも思ったりもしていた。

そんなシエラが次に興味を示したのは意外な事にお面を売っている店だった。立ち止まって熱心そうに見詰めるシエラ。昇とミリアは数歩あるいてからそんなシエラに気付いた。

「よかったら買ってあげようか？」

立ち止まったシエラにそんな事を言う昇。シエラには契約時からお世話になっていると感じている。まあ、それ以上の迷惑もあったがそこは気にしない事にしよう。それに先程もミリアにせがまれて少し出している。だからシエラにもそんな言葉を掛けた。

当のシエラはビックリしたような顔をするとすぐにいつもの顔を昇達に向けて首を横に振った。

「別に欲しくて見てたわけじゃないから」

「えっ、それじゃあ何で？」

シエラはすぐに答えず並んでいるお面を見詰める。そうして静かに呟いた。

「どれが私を隠せるんだろと思って」

えっと、それはどういう意味でしょう？

そう問い掛けようとする前にシエラは歩き出して二人を追い越して進み始めてしまった。慌てて追う昇とミリア。二人とも首を傾げるが祭りの楽しさがすぐに忘れさせてしまったようだ。

そのまま祭りを楽しみたい三人なのだが、夏祭りの本番は夜に行われる神事や神楽であり、関係者の接待までも含まれている。

さすがに接待までやれとは言われないが裏方はこなさないと行けない。だから三人が祭りを楽しむ事が出来るのはお昼までだけだ。

正午を過ぎると三人とも指定された社務所に有る部屋にまで呼び出された。もちろん呼び出したのは彩香だ。どうやらそろそろ手伝わされるらしい。

何をさせられるやらと思って昇は溜息を付いたが、そこにもう一人意外とも言える人物が入ってきた。

部屋に入ってきたのは与凪であり、うんざりとした顔をして閃華の方へと歩いていった。

「まさかこんな手で来るとは思ってませんでしたよ」

どうやら与凪も強制的に手伝いをさせられるらしい。どうやって巻き込んだかは分らないが閃華は得意げに笑みを浮かべる。

「良く言うじゃろ、城を落とすにはまず掘りからとな」

つまり与凪を参加させるには与凪に何かをしたのではなく別の人物に何かしたのだろう。まあ、なんとなく想像は付くが。

閃華、森尾先生に何をしたんだろう？

閃華が森尾に何かを吹き込んだ事を察する昇。与凪を強制的に何かさせるには森尾をどうにかするのがうってつけなのは以前シエラがやった事でも有る。なにしろ森尾は与凪の水着姿の為に昇達がいる海にまでやって着たぐらいだから。その手の事に関しては森尾ならなんでもやってのけるだろう。

それぐらい森尾は与凪に惚れ込んでいるし、与凪も森尾を愛している。シエラも閃華もそこを利用したようだ。まあ二人にとって害になる事ではない事だから、こんな事になるのだろうけど、巻き込まれる与凪にとっては災難しかいいようが無いだろう。

そんな中に当の森尾が入ってきた。

「やあ、皆揃ってるようだね」

一応担任としてそれなりの態度で接する事にしているようだ。けれども瞳の奥底には何かしらの期待があるのを昇はしっかりと見抜いていた。

先生は与凪さんに一体何を期待してるんだろう？

そこまでは昇でも察する事が出来るようだ。つまり与凪に何かする、または海と同様に何かしらの姿を期待させているのではないかと昇は推理してみた。まあ、森尾が与凪に期待する事と言えばそれぐらいだろう。

そして森尾は期待の確認をすべく閃華に耳打ちし始めた。少しだけ何かを話した二人。それから森尾は閃華に「なら終わったら電話をくれ、期待してるよ」それだけ言うと部屋を出て行った。そんな森尾を見て与凪は溜息をせざる得ないかった。

与凪としては嫌な訳ではない。森尾が喜んでくれるなら与凪としても良い事なのだろうが、あまりにも期待しすぎると重荷にもなる。森尾もそれが分っているからあまり過剰な要求はしないが閃華達の企みに自分の欲求が重なるなら実行するのだろう。

それに与凪が昇達に協力するのは森尾も承諾してるし与凪も約束している。だから昇達が不条理な要求をしない限り拒否などするはずも無いし、そんな事を昇達がするはず無いと思っている。

だからこそ与凪も森尾も閃華の企みにも乗ったりするのだろう。これもコミニュケーションの一つであり、森尾も与凪もそれなりに楽しんでいる節も有る。巻き込まれる与凪は迷惑だろうが、これはこれでしかたないということだろう。

それこそが昇と与凪達の絆とも言えるべき所だ。

「さて、それではそろそろ昇には退室してもらおうかのう」

閃華がいきなりそんな事を言いだしてきた。昇も何かしらの手伝いがあるから呼ばれたのにいきなり出て行けと言われるとは思ってなかったのか驚きの表情を隠せなかった。それと同時に淡い期待も抱いたりもする。

「それって僕は何もしなくていいって事?」

それならそれでラッキーだと期待するが閃華はすぐに否定した。

「残念じゃったな昇にもしっかりと手伝ってもらうぞ。出て行って貰うのは私達が着替える為じゃ。それとも昇は私達の着替えを眼に焼き付けたいのか? それはそれで構わんがのう」

「それでは失礼します」

しっかりと敬礼して一気に部屋を退室する昇。確かにあそこに居

たい気持ちも有るが、そんな事をすれば後で地獄が待っている事は目に見えている。ここはさっさと退散するべきだ。

だからこそ部屋を出た昇。そうすると丁度そこには玄十郎が居た。

「おっ、久しいのう滝下の小僧」

「お久しぶりです。というか未だに小僧扱いですか」

玄十郎は昔から昇の事を滝下の小僧と呼んでいる。確かにその通りだが昇もそれなりに成長しているし、そろそろ小僧を取ってもらいたいものだが玄十郎にも言い分はある。

「何を言う、酒の味が分らんうちは小僧だよ」

どうやら玄十郎の基準はそこにあるようだ。まあ確かに現在の基準でもそこで線は引かれているが、玄十郎としては年齢ではなく。酒の良さが分かれば大人という基準を持っている。

だから真面目で未だに酒を一口も飲んだ事が無い昇は小僧に過ぎないのだ。

「さて、小僧がここにおるって事は琴未達は準備を始めたようだな。ではこっちに来てもらおうか」

あの～、来てもらおうかと言われましても。いきなり後ろの襟首を掴まれて引きずられていかなくても良いのではいいのでしょうか。

強制的に昇を連行する玄十郎。近くの別室に昇を放り込むとそこには白い長襦袢と浅葱色の袴が置かれていた。

「一応神社の手伝いだからのう。それに着替えてもらえばならん。な～に、あまり人に接する事も無いから説明を求められる事は無いだろう。閃華君が指示を出すからその通りにやってくれ」

簡単にこれからの説明をする玄十郎。その説明を聞き終えた昇は簡単に頷くと長襦袢を手に取ってみる。

……これって……どうやって着るの？

さすがに和服など来た事が無い昇には着付けなど出来るわけが無い。だからこそ玄十郎が指示を出しながら手馴れない動作で昇は着替えていく。

というか、本当にこれからなにが起きるんだろう。特に閃華の指

示に従うだけだからな～。そこが一番心配なんだよね。……なんせ閃華だし。

閃華の事だからいろいろと手の込んだ事をやってるんだろうと思いながら昇は着替えを進めていく。

これから起こる予想外、いや、予想の範疇（はんちゅう）をはるかに超えた誘惑、いや、どうにも出来ない状況を知る良しが無いままに。

第八十話　花火を人に向けてはいけません（後書き）

そんな訳で今回のエレメは如何でしたでしょうか。なるべく昇達の日常を重視してみたつもりですけど、如何な物でしょう。

まあ、次回からは閃華達の企みが始まりますからね～。たぶん丸々一話使うと思います。その後に起こる出来事。本来のエレメが戻ってきますね～。

というか、後三話ぐらいで戦闘シーンになるのではないのかととか思っちゃってます。

そんな感じのエレメですが、これからもよろしくお願いします。

さてさて、それではそろそろ。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、ロケット花火を人に向けて発射するのが大好物な葵夢幻でした。

第八十一話　閃華の企み玄十郎と一緒　密室密着大作戦

見慣れた服装をした人物と新鮮味を感じる人物が昇の前に並んでいた。

なんか新鮮味が有るよね～、特にシエラと与凪さん。

昇が着替え終わり元の部屋に戻るとシエラ達の着替えも終わっていた。全員巫女装束を着ており、普段巫女装束を着ている琴未や閃華はともかく、シエラや与凪、そしてミリアには新鮮な感じがあった。

まあ、ミリアは巫女さんというより子供巫女のような感じで幼く見えるが、これは致し方ないことだろう。

そんな光景に認めれている昇を頭を玄十郎は軽く小突いた。

「いつまで見とれておるんじゃ。まあ、琴未に関してはそれもしかたないとして、そろそろ動いてもはないといけないぞ」

つまり琴未の巫女装束だけはいつでも似合っているっと玄十郎は言いたいのだろう。そこが玄十郎が琴未に甘いところだ。

それに夏祭りで琴未達が関係者という事もあり、琴未と閃華、それに彩香は巫女装束だけでなく千早という上着のような物まで来ていた。一応手伝いのバイト巫女との見分けを付ける為だろう。

千早は長襦袢と同じく白で半透明の物だ。それえを赤い紐で締めている。千早は琴未達も滅多な事では着ることは無い。なにしろそこまで着る必要も無いし、防寒能力があるわけではない。それに一番の理由が面倒という事に限るだろう。

千早も巫女装束の一つなのだが、上位の巫女や特別な神事でも無い限り着る事は滅多に無い。だからこそ普段は着ないのだが、それを着ている琴未や閃華にも新鮮味を感じるのは昇だけでは無いだろう。

なにしろ千早だけで普段の姿とは違った印象を与えるのだから。

そんな巫女姿のお披露目を終わると玄十郎はそれぞれに指示を出

してきた。
シエラとミリアは彩香の手伝い。これは売店の売り子のようだ。
昇は琴未と一緒に荷物運び。ご進物やお供え物や蔵出しなどいろいろと物運びをやらされるようだ。そして与凪は閃華の指示に従えばよいとだけ伝えられた。
総指揮は玄十郎。売店の指揮は彩香が取り、その他の指揮は閃華が取るようだ。そこは琴未が指揮を取るんじゃないのかなと昇は思ったが、閃華が何かを企んでいた事を思い出し、これはその一環ではないのかと察してしまった。だからと言ってここまで来ては逃れる術は無い。
しかたなく昇は閃華の指示に従い動き始めた。
ちなみに神社の関係者。琴未の両親だが、こちらは神事と氏子の接待などで全員借り出されているようだ。だからこそ玄十郎が裏方の指揮を取っている。
それに玄十郎は閃華の力も充分に理解している。それは戦闘力ではなく頭の方だ。しっかりと指示を出して仕切ってくれるだけの器量を持っていると把握しているから、そちらは全て任せる事にしたのだろう。
「さて、それでは各々持ち場に行って説明を受けてもおうか。動いてもらうのはそれからだな。なにしろこれから忙しくなるか覚悟はしておいてくれ。それでは解散」
玄十郎はそれだけ告げるとやるべき事があるのかさっさと部屋を出て行ってしまった。
取り残された面々はそれぞれに指示を受ける。シエラとミリアは彩香が連れて行き、残された昇達も移動を開始した。
はぁ～、これから一体何がおこるんだろう。
移動しながらも昇はこれからの事に不安を覚えざる得なかったのだった。

昇達が移動してきた場所は神社の裏。社務所や拝殿の裏にあたる。そこには明かりらしい物はほとんどなく、遠くからの祭りの明かりだけで充分に辺りを見渡せる拓けている場所だ。

「さて、やってもらう作業じゃが。昇と琴未には蔵から必要な物を出してきてもらおうかのう。それを私と与凪で運ぶんじゃ。何か質問はあるかのう?」

口をつぐむ三人に閃華は頷いて見せた。

昇が視線を暗がりの方へと向けると確かにそこには蔵が存在した。小さい時にはあそこで遊んだ経験も有るから勝手が分っていると思われているのだろう。

そういえばあの蔵で琴未とよく遊んだっけ。一応あそこで遊んじゃいけないって玄十郎の爺さんに怒られたけど、結構楽しかったよな。

そんな事を思い出していると琴未が声を掛けてきて作業を始めると言いだしたので、一緒に蔵の扉へと向かった。扉には鍵が掛かっているのだが、その鍵はすでに琴未の手にある。

琴未は少し戸惑いながら扉の鍵。南京錠のようだが、それを開けるのに少し手間取りながらも開錠に成功した。

重い音を立てながら開く蔵の扉。中は真っ暗だ。琴未は扉の傍にある電気のスイッチを探り当てて押すと、あまり明るいとは言えない豆電球のような照明が蔵の中を照らした。

「じゃあ行きましょか」

「そうだね」

中に入っていく昇と琴未。その光景を閃華は笑みを浮かべて見守っているのだった。

「一体何を企んでるんですか?」

そろそろ聞いても構わないだろうと与凪は閃華に尋ねた。聞かれた閃華は与凪に顔を向けると、これまた意地の悪そうな笑みを浮かべて与凪に詰め寄る。

「な〜に、大した事では無いぞ。じゃが、与凪にも協力してもらう

がのう」
「もしかして私を共犯者にするために呼んだんですか？」
「そうじゃな、確かに与凪の力が必要じゃからのう」
つまり閃華の計画には与凪の力が必要不可欠であり、そのために森尾を餌に与凪を巻き込んだ訳だ。
そんな事になっているとは気付かないままに昇は琴未の後を歩いて蔵の奥へと進む。
へぇ～、さすがに昔と変わってないね～。やっぱりあまりいじくらないからかな。
昔遊んだ光景と同じような光景が昇の前に広がっていた。それは随分と懐かしい光景で楽しい思い出だった。だからだかろう、閃華が何かを企んでいる事を忘れているのは。
「さてと、ここだったかな」
蔵の一番奥の棚。そこに辿り着いた琴未は物ではなく、まるで場所をチェックするように辺りを見回した。
「何を運べば良いの」
「えっと、確か……」
曖昧に答えただけで明確に答えない琴未。そんな琴未が何かを発見すると昇を傍へと呼んだ。
「そうそう確かこの箱だよ」
確かにそこには箱があるが。それ以上に箱の周りには様々な荷物が乱積みになっていて、今にも崩れそうになっている。
周りに気を付けながらも昇は箱を持ち上げようとしたが重すぎてとても持ち上がらなかった。
「これってどうやって運ぶの？」
さすがにこれだけの重量を持っている物をそう簡単には運び出す事は出来ない。けれども琴未は胸を張って言い切った。
「私の属性って雷でしょ。だから多少磁力にも干渉できるのよ。昇も知っていると思うけど地球にも磁力があるでしょ、それと反対の極をこの箱に流すのよ」

「なるほど、そうすると反発して軽くなるって事か」
そういうこと、と琴未は頷くと早速箱に向かって手をかざし静電気のような物を放出する。磁力といえども電気に干渉するには違いない。だからこそ箱にそのような事をしたのだろう。
作業が終わったのだろう。琴未は箱に手を掛けると昇に反対側を持つように行ってきた。昇もその通りに二人で箱を持ち上げた瞬間だった。
床に電気が一気に走ると崩れ去り昇達は突如として出現した穴へと落下する事になってしまった。

「んっ」
……あれっ、何か暗いけど、ここは何処だっけ？
「あっ、昇気が付いた」
「えっ、えっ！　琴未！」
いきなり琴未の顔が目の間に有る事に昇は大いに驚いた。事態の状況すらよく分かっていないというのに琴未とこんなに急接近するとは思ってはいないどころか予想すら難しいだろう。
「あっ、ごめん、今」
「昇ダメ！」
いきなり動き出そうとする昇に琴未は待ったを掛けるが遅かった。とりあえず上に動こうとした昇は思いっきり頭をぶつけて激痛で唸る破目になったからだ。
「いつつ～、一体どうなってるの？」
ワケの分らない昇は琴未に状況説明を求めた。その琴未の説明によると、昇と琴未はもろくなっていたから床が崩れて落下したようだ。その時に乱積みにされていた周りの荷物も一緒に落下し、昇達は生き埋め状態になってしまった。
幸いな事に琴未の属性で自分達を守るバリアは張れたが行動範囲は無いに等しい。このバリアは電磁波のような物で出来ており、感

電する事は無いが完全に壁と化している。
そのためか琴未と昇の体は密着している。あの瞬間でも昇は琴未を守ろうと下に身体を持って行ったようだ。そのため昇の上に琴未が寝そべっている感じになっている。
更に最悪なのが、バリアを張る時間が無かったのかほとんど身体が動かせない状態だ。なにしろ時間が無かったのだから自分達に沿うようにしかバリアを張ることが出来なかった。
つまり張られているバリアは昇と琴未に沿って張られており、手足を動かすスペースなどほとんど無いという事だ。
完全な密室密着状態になってしまった。
その事をやっと理解した昇は携帯で閃華か与凪に連絡を取る事を提案してきた。確かに二人なら傍に居る。だから連絡すればすぐに来てくれるだろう。
けれどもそれは無理だと琴未はすぐに否定した。
昇達が張られているバリアは雷の属性、電波なども遮断してしまう。要するにここは電波の圏外になるというわけだ。
試しに昇は何とか手を動かして自分の携帯を見てみるが圏外と表示されていた。
あ～、やっぱりダメか。じゃあ、どうしよう？
完全に連絡手段が無くなった昇だが、琴未が言うにはまだ連絡手段があるようだ。
「そういえばさっき閃華から何かあったら連絡用に無線機のような物を預かったのよ。携帯サイズのね。それを使えば閃華達に連絡が取れるんだけど……」
言葉を詰まらせる琴未。その理由を問いただしてみると仕舞っていた場所に無いそうだ。つまりは落とした事になる。そうなるとその無線機を探し出さないといけないのだが、昇には一つの疑問が浮かんだ。
「そういえば、このバリアって電波も遮断しちゃうんでしょ。それなのに無線機なんて使えるの？」

確かに先程の説明ならそうなるが、そうでは無い事を琴未は説明した。
「渡されたのは与凪さんの属性を使った無線機なのよ。ほら、私達もよく与凪に連絡する時に使ってるでしょ。あれを応用したものみたいなものなの。だからバリアの影響を受けないのよ」
「なるほど」
与凪の属性は霧。霧は何かを隠したり見えづらくしたりするが、幻覚等も発生させる事が有る。与凪はその幻覚作用を連絡手段に用いている。だからこそ今までも昇達の前に自分の姿をモニターのような物で姿を写していたわけだ。
これは霧の幻覚作用と投影作用があるからこそ出来る事だ。
まあ、与凪の属性に関してはさておき。現状にとって一番大事なのはその無線機を探し出す事だ。
琴未の話しでは袴に入れていたらしい。つまりは足の方だ。けれども琴未の手は昇の胸辺りを掴んでおり、バリアは腰辺りで一気に狭くなっている。つまり琴未に無線機を探し出せるのは無理だ。そうなると……。
……僕が探し出すしかないんですか。
そんな事を思う昇はこれが閃華達が張っていた企みではないかとようやく気付いた。だが気付いたところで状況が好転するわけではない。ここは何としても無線機を探し出さなくてはならない。
幸いな事に昇の手は琴未の背中に回っている。そこから手を伸ばせば何とか探し出せるかもしれない。
昇は一応琴未に探し始める事を告げると手を動かし、なんとか腰辺りの狭い空間に手を突っ込もうとした。
「きゃっ！」
そんな時にいきなり声を上げた琴未に昇は思わず手を戻す。
「あっ、ごめん、変なところを触った？」
「あっ、うん、別に嫌じゃいないんだけど、いきなりだったから」
二人とも赤面する。なんとも気まずい雰囲気が流れる。

どうやら昇の手は琴未のお尻に触れたようだが、行動空間が狭いため触れずに手を伸ばすのは不可能だ。
えっと、どうしよう。というか、どないせいというんですか！
心の中で突っ込みに近い叫びを上げる昇は少しだけ冷静になった。
このままだと、また琴未のお尻に……というか、すでに胸がもう……。あ～っ！　そうじゃない。どっちにしてもこのままじゃダメだ。どうにかして手を動かせるスペースを作らないと。でもこのままだと……あっ、そっか、その手があったけど……しかたない！
昇は覚悟を決めると琴未を見詰めた。その顔は赤面しており、見詰められた琴未までもが赤面してしまう。
そんな琴未に昇は告げる。
「ごめん、琴未。少し辛いかもしれないけど、思いっきり抱きしめて良い？」
えっ、それって、どういうこと。昇の言葉に混乱する琴未だが、同時に別の考え、いや、妄想が暴走する。
「ごめん、琴未。もう我慢できないんだ。琴未を……思いっきり、いや、永遠に抱きしめていたい！」
「そんな昇、いきなりそんな事を言われても。心の準備が」
「大丈夫、僕が琴未の全てを包み込んであげるよ。だから安心して」
「……昇」
「……み、琴未」
昇の呼び掛けにようやく現実に戻って来た琴未。そんな琴未に昇は先程言った言葉の意味を説明する。
「このままだと無線機を探し出せないから、だから手を動かすスペースを広げるためにもっと密着しないといけないんだ。嫌だっていうならしょうがないけど、ここは我慢して欲しいんだ」

なんとも昇らしい言い方だ。そんな昇の言葉に琴未は超高速で首を横に振る。

「ううん、別に嫌じゃないし、全然構わないわよ」

うんうんと何度も頷きながら昇の提案を受け入れる琴未。それを見た昇は先程の言葉どおりに実行する。

琴未の腰に手を回すと思いっきりでは無いが、琴未が痛がらない程度に力を込める。出来るだけ密着させないと意味は無い。琴未の方でも昇の首に手を回して身体を押し付ける。こうして密着させる事でようやく動けるスペースが広がった。

うっ、さすがにドキドキするな～。それに琴未の……胸が。琴未って結構大きいからね～。って、そうじゃないだろう！

自分自身の心に突っ込みながら昇は行動を開始する。

昇は手をバリアに沿うように動かすとようやく伸ばしきる事が出来た。どうやら琴未に触れる事無く通過できたようだ。

そんな時だ。琴未がいきなり軽く笑った。

「えっ、どうしたの？　なにかやっちゃった？」

昇としては自分に非があると思っただろうが、琴未は笑みを絶やす事無く否定した。

「そうじゃないの……やっと、夢の一つが叶ったかなって」

首を傾げる昇。何のことか分らないのだろう。まあ、その言葉だけで理解しろというのも無理だし、朴念仁の昇に察しろというのは更に無理な話だろう。

そんな昇と見詰めあいながら琴未は夢の続きを語る。

「私ね、一度だけでもよかったから昇に抱きしめてもらいたかったんだ。もちろん二人っきりでね。……そう、それだけでよかったんだ。こうやって昇の温もりを感じて、しっかりと昇に抱きしめてもらって。まるで守ってもらっているような感じで、そんな感じを味わいたかったんだ。だから……もう少しだけ……こうしていたいな……って」

そんな言葉を聞いた昇の手が止まる。さすがにそんな事を言われ

ては無線機を探すどころでは無いし、このまま何もせずにはいられないのだろう。
まあ、少しだけなら。
昇はそう思うと手を琴未の腰に戻し、琴未を優しく包み込むように抱きしめるのだった。

蔵の中での出来事を想像している閃華は笑みを浮かべながら楽しそうに身体を揺らしていた。どうやら蔵の中を見よとしているのだろうが、決して入ろうとはしない。それはそうだ、ここで入ってしまっては今までの計画が台無しになってしまう。
そんな閃華の隣で与凪は溜息を付いた。
「私を呼んだのはこのためですか」
「うむ、その通りじゃ。おかげで上手く行きそうじゃのう。これも与凪のおかげじゃ、感謝しておるぞ」
「はぁ、それはどうも」
うんざりとした返事を返す与凪。閃華の計画に巻き込まれる予感はしていたものの、実際にこのような事をさせられると不満では無いが少しはうんざりとはするようだ。
それに森尾の事があるから絶対に断れない。たぶん森尾もどこかで何かを手伝わせれて居るのだろう。
そう思うとすっかり閃華に乗せえられた事に半分うんざりしながら、半分は少しワクワクしながら事の成り行きを見守っていた。
与凪とて二人の仲がどうなるのか知りたい。なにしろ琴未にはライバルが多すぎるから、それを出し抜いての企みだ。どうなるのか興味が沸くのは当然だろう。
だからこそ、こうして協力をしているわけだ。
与凪がやっているのは蔵の存在を隠すこと。つまりそこに蔵があり、昇と琴未が居る事をシエラやミリアに気付かせないようにしている。つまり与凪が力を発している限り誰にもこの事には気付かな

い。そのために閃華は与凪までも巻き込んだのだから。
「それにしても、今回はどんな狙いがあってこんな事をしでかしたんですか？」
今回の作戦理由を尋ねる与凪。今までの企みでは誘惑系が多かったのだが、今回はまったく違った物だ。そこには何かしらの理由があるのだろと気付いたのだろう。
現に閃華も「良いとこに気付いたのう」と返事をしてから説明を開始した。
「今までの事で分かったんじゃが、昇は理性が強すぎるというか耐性が無いというか、とにかく押しが強すぎると戸惑ってしまうようじゃからのう。じゃから今回は搦め手から攻めてみたんじゃ」
「というと？」
「つまり、密室で密着状態の二人じゃ。その場では何事も無くとも、その事が切っ掛けになり今後は意識し始めるかもしれん。意識し始めれば多少の邪魔があっても物ともせんじゃろ」
「そういう事ですか」
要するに閃華が企んだのは二人の仲を進展させる事には違いないが、今までのように一気に進展させるのではなく、少しずつ進展させようという事だ。
つまり、密室密着状態の二人。そこでは必ず二人はドキドキするだろう。それが琴未には恋だと分っているが昇には分ってない。その事が昇を動揺させる。
そうなると琴未と二人っきりになるたびに、その事を思い出させて動揺してしまうだろう。そしてそれが恋だと誤認させる。まあ、この場合は本当に誤認かどうかは分らないが。どちらにしても昇に琴未が好きだと思わせる隙を作る。
今回はその切っ掛けを作る企みにすぎなかった。その事を思い出させ手く誘導して琴未を意識させれば良いだけだ。もちろんシエラ達の妨害もあるだろうが、今回の事はそれ以上に効果があるだろうと踏んだ。

だからこそ与凪まで巻き込んで今回の企みを絶対に成功させようとしているのだ。
そんな閃華の企みを察した与凪は今後の展開を聞いてきた。
「そう上手く行きますかね」
「上手く行かせたいものじゃな」
率直な答えだけ返す閃華。まあ閃華としてはそうとしか言えないだろう。けれども与凪は意外な事を言い出した。
「でも上手く行かせるにはシエラさんだけは注意しとかないといけませんよ」
「じゃから与凪を呼んでここまでやってもらってるんじゃろ」
「そうではないですよ。昇とシエラさん、たぶん何かありますよ。滝下君は気付いてないと思いますけど、シエラさんには何か奥の手が有るようにも思えますけどね」
与凪の言葉が終わると閃華は少しだけ鋭い視線を与凪に向ける。一方の与凪は閃華の視線を微笑みながら受け流すだけだった。
与凪が昇とシエラの事で何かを察している可能性は有る。けれども具体的な事は閃華に教える気は無いようだ。
与凪としても今回は巻き込まれたわけだし、閃華に多大な恩義が有るわけでもない。それどころか、このままシエラまで巻き込んで三角関係を高みの見物すらしてみたいとも思っているだろう。
まあ、あまりドロドロの修羅場を期待している訳ではないが、少しはこじれた場面を高見の見物をしたいのだろう。
与凪の性格からして傍観者として楽しい物を見ていたいのだろう。だからこそ今回も閃華に協力したし、閃華に情報を渡さなかった。それは後々の展開を考えると面白くなると踏んだからだ。
そうなると与凪は絶対に閃華に情報を漏らさないだろう。
閃華は諦めに似た溜息のように息を吐き、与凪も微笑からいつもの顔へと戻る。そして二人の視線は再び蔵へと向かった。
「さて、そろそろ助けに入ったほうが良い頃じゃな」
「一体どうなってるんでしょうね」

「もしかしたら濡れ場まで行ってるかもしれんのう」
そんな閃華の冗談に笑いながら二人は蔵に向かって歩き出すと、与凪の周りに幾つかのモニターが現れると赤い画面で『ＡＬＥＲＴ』と白い文字が表示されて警戒音が鳴り響く。
ＡＬＥＲＴとはアラートと読み警戒を意味する。
「どうしたんじゃ！」
突然の事で驚く閃華。その間に与凪はアラートの情報を収集しつつ整理する。情報整理が一区切り付くと与凪は警戒音を切り、モニターも全て消し去った。それから閃華に真剣な顔を向けるととんでもない事を呟く。
「誰かが……精霊王の力に干渉しようとしたようです」
「なんじゃと！」
再び驚く閃華。それも無理は無い。閃華達が封印して管理している精霊王の力が有する危険性は良く知っている。それに与凪の力で精霊王の力を発見する事すら困難なのに干渉までしてくるとは、相手もかなりの情報を持っていると思ってよいだろう。
何にしても、このまま呑気に閃華達の企みを続ける訳には行かない。閃華は与凪の顔を見て頷くと全速力で昇達の元へ駆け出した。

はぁ～、なんかドキドキしたり混乱したり困ったり大変だったよ。
やっと蔵から救出された昇はそんな感想を抱いた。なにしろ閃華達が来るまで琴未を抱きしめ続けていたのだから。その場を見られただけでも恥かしいのに、いきなり緊急事態とか言われてなんかここに引っ張り出されたり、一体何がなにやらワケが分からない状態だ。
その場所とは蔵の近くにある先程まで閃華達が居た場所だ。
そこには与凪が幾つものモニターを出しキーボードを叩いている。
そして閃華はシエラ達を呼びに行ったようだ。状況からしてかなり切羽詰っているらしい。

そんな時だった。昇の頭に先日与凪から言われた事が頭を過ぎる。
『誰かが閃華達が封印した精霊王の力を解き放とうとしている』その時は不確定な情報で誤報というのも否めなかったが、与凪の表情からしてもしかしたら現実にそのような事態が起こっているのかもしれない。
そしてもし閃華達の封印が解かれたりしたら……昇達は再び精霊王の力と対峙する事になるだろう。それだけはどうしても避けねばならなかった。
精霊王の力が強大な事もあるが、それ以上に以前のような悲しい出来事を繰り返したくは無かった。
だから精霊王の力は昇達にとって悲しい力と認識されている。だからこそ封印を解かれる訳にはかない。あのような悲しく不毛な戦いを昇達は望んではいないのだから。
昇がそんな事を考えているとシエラ達を連れた閃華が戻って来た。連れてきたのはシエラとミリアだけだ。二人とも未だに巫女服を着ており、その姿に見とれそうになるが、今はそれどころでは無いと昇は煩悩を振り払う。
閃華が二人だけを連れてきたという事は昇の推測がほぼ当たっているという事を意味している。他に緊急のようなら彩香や森尾、それに玄十郎も連れてきても構わないだろう。
その三人を連れてこないって事は事態が精霊に関する事を意味しており、昇はそれが精霊王の事に関する事だと察していた。
全員が集ると与凪はキーボードを叩いてた手を一旦止めると集った面々を見渡す。それから全員に驚かないように忠告を交えながら、先日昇に話したのと同じ事を話した。
今度は未確定ではなく確定した情報としてだ。
「ちょ、ちょっと待ってよ。じゃあ、また誰かが雪心と同じような事をしようとしてるの？」
真っ先に反応を示したミリア。あの事件で一番の悲しみを負ったのはミリアだ。だから精霊王の力に一番関わりたくないのはミリア

だ。
　そんなミリアに与凪は複雑な表情で頷く。
「ロードナイト達のような事をしようとしてるかは分らないけど、誰かが精霊王の力を流出させようとしてるのは確かみたい。私と閃華さんが厳重に封印してあるから簡単には解けないだろうけど、このまま手を打たなかったらいつかは破られるのは確かよ」
　放っておく事は出来はしない。精霊王の力に関しては昇達が一番良く知っているのだから。だからここは何かしらの手を打たなくてはいけないくなってきた。
「今のところはどんな状況なんじゃ」
　とにかく相手の出方が分らない限り手の打ちようが無いと判断したのだろう。閃華が与凪に現状を尋ねたが与凪は首を振るだけだった。
「もう反応が無くなったわ。どうやらあっちも様子見がてらちょっかいを出してきたみたいね。たぶんこっちの反応を見たいんだと思うのよ。あの封印は結構強力だから私達を引っ張り出したいんでしょ」
「引っ張り出してどうするのよ」
　そんな疑問を琴未がぶつけてきた。まあ、相手にしてみればこちらが出てくればいくらでも手の打ちようは有るだろう。倒して封印を解除させるとか和解するとか。どちらにしても昇達を引っ張り出そうとしている事は確かなようだ。今回の事はその手始めと言ったところだろう。
「つまり相手は僕達を引っ張り出して封印をどうにかしようとしてるんだ」
　昇の言葉に閃華と与凪とシエラは頷く。三人とは少し送れて琴未とミリアも事態を把握した。
　つまり封印の鍵は昇達が持っている。その鍵を奪うなり壊すなり話し合うなりするには昇達を見つけ出さないといけない。そのためには封印を解こうとしている自分達の存在を昇達に知らせないとい

けない。今回のアラートは自分達の存在を知らせるためだったのだろう。

だから与凪が調べ始めた頃にはもう退散していたという事だ。

「それでどうするの？」

これで事態は把握できた。相手は自分達が精霊王の力を狙っていると知らせてきた。それは宣戦布告かもしれないし、和解や講話の材料にするのかもしれない。どちらにしろこのまま放っておく事は出来ない。

時間さえ掛ければいつかは封印は解かれてしまうのだから。

だから昇は俯いて少しだけ考えると顔を上げて与凪に尋ねる。

「与凪さん、その人達は明日も来ると思う？」

「う～ん、たぶん来るでしょうね。あちらとしてもこちらに会いたがってるんだから」

「そっか……なら決まった。明日……会ってみよう」

とんでもない事を言い出した昇にシエラと閃華は頷き、ミリアと琴未は驚きを見せた。「昇！　本気で言ってるの？」

相手の正体が分らない以上は接触するのは危険ではないかと琴未は主張するし、ミリアとしては精霊王の力にちょっかいを出すような相手など問答無用で倒してしまえば良いと思っているのだろう。

けれども昇には違う考えがあった。

「確かに相手が何を企んでいるのかは分からないけど、もし……話し合いで決着が付くならそうしたい。無駄に戦う必要なんて無いんだから。なにしろ精霊王の力が掛かってるんだから。そのためには相手に会わなくちゃいけないだろ。大丈夫、まだ敵だって決まったわけじゃないんだから」

確かに相手はまだ敵だと決まった訳ではないが敵である可能性がかなり高い。分の悪い賭けなのだが、昇にしてみればその賭けに乗るだけの価値は有る。なにしろ精霊王の力だ。

無駄な戦闘で影響を与えたくないし、悪巧みをしているなら早めに潰しておきたい。そのためにも一度は接触しないといけない。相

手が分からないからにはどうする事も出来ないのだから。
昇はその事をロードナイト達の事で充分に学んでいた。まずは相手が何をしようとしてるのか、それを見極めるのが重要だという事をしっかりと刻み込んでいるのだ。
だからこそ今回のような決断をする事が出来た。
そんな昇の判断に閃華と琴未と与凪は頷き、ミリアは納得が行かないような顔をしている。そんな中でシエラだけが手を上げて意見を言い始めた。
「昇の意見に反対はしないけど準備だけは怠らない方が良い。相手が敵と決まったわけじゃないし、準備不足での戦闘は不利になる。それに和解するのであれば準備が無駄になるだけ、やっておいて得は有っても損は無い」
「うん、そうだね」
もし相手が敵意を剥き出しにして襲い掛かってきた時に何も準備も無しに相手をするのは不利になるから、そういう場合を想定しての準備をすべきだという事だ。
確かにシエラの言うとおりだと昇も思った。相手が味方だと決まったわけじゃない。話しが通じるとも限らない。ただ戦うしかないのかもしれない。なんにしても、どんな事態になっても不利にならないようにはしとかないといけない。
昇は与凪には更に詳しい状況を集めてもらい、閃華はそのサポート。シエラには偵察を頼み。琴未とミリアには現状に合わせて動いてもらう事にした。まあ、はっきり言ってしまえば琴未とミリアは雑用係である。けど、それもしかたない。
能力的に琴未とミリアの能力は戦闘向きでこうした情報収集やサポートには向いてない。それとは反対に与凪の能力はサポート向きで閃華は与凪との親交が深いために与凪の手伝いが出来るだろう。
シエラはその飛行能力から偵察などの単独任務に向いている。なにしろスピードタイプでシエラの全速力に追いつける者など早々居ないだろう。同じ翼の属性か速の属性を持ってないとシエラには追

いつけないだろう。
　ちなみに速の属性は簡単に言うと足が速くなるだけである。翼の属性とは違い空を飛ぶ事は出来ないが、地上での走りは敵うものは居ない。翼は空、速は地上、どちらもスピードタイプではトップクラスの属性だ。
　だからこそシエラには偵察という役割をまわした。
　それぞれの役割にシエラと閃華は感心せずにはいられなかった。なにしろ適材適所としか言いようの無い配置だ。与凪と閃華はともかく、シエラ達まで上手く使えるようになってきたのだから大将としての器が育ってきているのだろうと実感せざる得なかった。
　そんな感じで話しがまとまると閃華はそろそろ解散しないといけないといいだした。
「なんじゃ、皆忘れておるのか？　今の私達は神社の手伝いをしてるんじゃぞ。このままサボるわけにはいけなんじゃろ」
　確かに閃華の言うとおりだ。昇達が高戸神社に居るのは夏祭りの手伝いと閃華の企みがあったからこそだ。
　閃華の企みが終わったからとしても手伝いは残っている。もちろん昇と琴未にも。だからこそ今は夏祭りの手伝いをしなくてはいけない。
　それを思い出しただけでミリア達はうんざりし始め、渋々元の配置へと戻っていった。今やるべき事は精霊王の力に対する対策ではなく。夏祭りの手伝いなのだから。
　まあ、これもしかたなか～。
　昇もそんな風に納得して閃華の指示通りに動き始めるのだった。

「今晩は賑やかだな」
　とある高級ホテルの一室で窓の外を見ながらフレトはそんな事を呟いた。
「どうやら夏祭りがあるようで、それで賑わっているみたいですよ。

行って見ますか、主様（あるじさま）」
清楚な少女が何故か巫女装束を見にまといフレトに紅茶を差し出しながら言葉を口にする。
「いや、やめておこう。先程封印に手出ししたばかりだからな、相手の動きが早ければ鉢合わせになりかねない。こちらとしてもしっかりと準備だけはしておかねばな」
それだけ言うとフレトは差し出された紅茶を口へと運び感想を漏らした。
「腕を上げたではないか咲耶（さくや）。最初の頃に比べればなかなかの味わいだ」
「お褒めにいただき光栄でございます」
咲耶と呼ばれた巫女服をまとった少女は深々と頭を下げた。それからフレトに気遣わせないように紅茶のセットを片付けると静かに退室して行った。まるでメイドのような振る舞いだ。それで巫女服を着ているのだから、なんともある人種には受けが良い事だろう。
そんな事を考える事無くフレトは窓の外、ある一点を見詰め続けた。
「待っていろセリス。もうすぐだ、もうすぐ精霊王の力でお前を。それだけが俺の望みなのだからな」
強大すぎる精霊王の力。それは地球の力その物と言ってもいいだろう。だからフレトにはそれが希望に見える。強大な力だからこそ絶望にも争いになる事にも気付かないままに。その事にフレトは気付きはしない。なにしろフレトの望みは一つだけなのだから。

第八十一話　閃華の企み玄十郎と一緒　密室密着大作戦（後書き）

え～、そんな訳でこんな展開になってきたエレメですが……あかん、頭が白くなってきて後書きのネタが浮かんでこない。まあ、そんな訳で適当に書いてみましょう。

さてさて、今回急接近した昇と琴未ですが、まあ、身体的にですが、かなり美味しい展開ですよね。……あ～、一度でも良いからあんな体験をしてみて――っ！！！

おっと、つい欲望が暴走してしまった。まあ、確かにあの状況は憧れる人もいるのでは人は居るのではないのではしょうかと勝手に思い込んでます。

さてさて、それからもう一つ。今回は私の野望をとうとう実現させました。それは……全員巫女化計画！！！

いや～、全員に一度巫女服を着せてみたかったんですよね～。……絵師さんがいれば是非とも描いてもらいたい状況です。まあ、その前に自分で絵の勉強でもしようかと企んでますけどね。

なんにしても、まだまだ時間が掛かる事が多いです。なので、少しずつ一つずつ消化していきましょう。

さてさて、そんな訳で話しが尽きた所で締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、なんとか今年中に萌酒を手に入れたい葵夢幻でした。

第八十二話　協定争命

中央公園にある人には見えない精霊世界で隔離された封印。その存在に気付く者は人も精霊もほとんど居ない。

まず与凪の属性で封印自体を精霊達から隠している。だから契約の有る無しに関わらず見つけるのは難しいだろう。たとえ同じ霧の精霊だとしてもだ。

それほど霧の属性で隠された物を見つけるのはやっかいな事だ。

人間に関してみれば精霊世界に干渉するどころか存在すら知らない。だから精霊王の封印なんて気付くわけが無い。たとえ契約者だとしてもだ。

契約者の能力で何かを察知する力を得たとしても、霧の属性で隠された封印を見つけ出すのは不可能に近い。そうなると封印を見つけ出した相手はそれとは別の手段を使って見つけ出したのだろう。

例え霧の属性で隠されているとしても、見つけ出すのは不可能に近いが不可能ではない。それとも霧の属性とはまったく関係ない別の手段を使ったのかもしれない。

何にしても精霊王の力を狙っている相手がおり、その対処を昇達がしなければいけないのは避けられない事実となっている。

いずれは精霊王の力を狙ってくる者が出てくる。ロードナイトとの戦いが終わった後にそのような事を聞かされはしたが、数ヶ月もしないうちにやってくるとは言った閃華達ですら予想できなかっただろう。

だからこそ今は準備に追われていた。

昇は自分の部屋で目の前に浮かんでいるモニターとキーボードを相手に悪戦苦闘していた。別に機械が苦手なわけではないが、これは元々は与凪が情報整理の為に精霊界の知識で作ったもので、昇の

目の前にあるやつはそれを人間にも使えるように与凪が手を加えたものだ。
昇も少しは情報整理出来るようになった方が良いという閃華と与凪の判断でこのような事をしているのだが、人間製の機械とは使い勝手が違うのか悪戦苦闘している。
う～ん、基本は同じなんだと思うんだけど、専門用語というか精霊の言葉が使われている場所が多いんだよな～。さすがに全部は翻訳は出来ないのか～？
そんなボヤキのような事を思いながら昇は目の前に展開されている情報整理の道具。まあ、パソコンみたいな物を相手に勉強していた。
そこには閃華達から定期的に情報が送られてきており、昇はその全てに眼を通している。
閃華と与凪はいつもの生徒指導室で情報処理をし、シエラは偵察に出て映像やら何かしらの情報やらを閃華達に送っているようだ。そんな情報を閃華達が整理して昇に送ってきてるが、半分ぐらいしか理解できていないようだ。
そんな時だった。ノックの音が聞こえると戸が開いて琴未がコーヒーを持ってきてくれた。
「進み具合はどお？」
入ってくるなり昇の状況を確認する琴未。そんな琴未に昇はわざわざ両手を軽く上げて見せた。
「お手上げ……ってワケじゃないけど、かなり手間取りそう」
「そうなんだ」
琴未も手伝おうかと言ったのだが、閃華達はそれを許さなかった。正確に言うと向いていないし使いどころがないからだ。
琴未の能力は戦闘向きであり、下手に後衛の手段を覚えるとどっち付かずになり全体の能力を下げてしまう。だから琴未には戦闘訓練だけをするようにした方が良いと閃華が提案して昇もそれに同意した。

琴未って能力もそうだけど性格も攻撃性が強いからな～。それにあまりこういう事には詳しく無さそう。

昇の予想通りに琴未はコーヒーを机の上に置くと今まで昇が見ていたモニターを見て難しい顔になった。やっぱりワケが分からないどころか古代の碑文のように思えたのだろう。

琴未はモニターから離れると溜息を付いた。どうやら向いていない事を自覚したようだ。それから昇に視線を移してきた。

「やっぱり私向きじゃないわね、どうもこういうのはまどろっこしくて」

自分は肉体派でこういう事務的な事は向いていないと自覚したようだ。それから琴未は「頑張ってね～」とだけ声を掛けてから昇の部屋を後にした。

ちなみにミリアは独自に動いているだが、実際には暇を持て余したり惰眠を貪ったりとあまり役に立っては居ない。まあ、しょうがないといえばしょうがないだろう。

けれども閃華などはミリアの能力に少し疑問を感じていた。性格などの事もあるから実際に口には出さないが、大地の精霊というのは風の精霊と同様に情報などが集めやすい。

与凪の属性である霧は風の影響を多く受ける事が出来るので情報収集にも向いている。だからこうしたサポートが出来る。

そして大地の属性も風の属性と同じように情報収集が出来やすい属性だ。それは大地も風も多くの範囲を移動、または属しているからだ。

風の属性は様々な場所を吹き渡り、多くの場所に存在し移動する。だから情報が集りやすい。一方の大地は地球の基盤である。全ての物の大地の上に立っており、その上で行われている事などを知る事が出来る。もちろん個人の位置や能力によってだが、情報収集に向いているのは確かだ。

けれどもミリアはそういう事を一度たりともした事が無い。ああいう性格だから向いてないのだろうと閃華は思っているが、それ以

上に教育者が居なかったのではないかと思っている。
精霊は人間と同様に人間から生まれる事は無い。全ては存在のエネルギー。つまり火なら発見されて使われ続ければ存在が認められ、存在をエネルギーとすることが出来る。そのエネルギーを集めて作られた結晶体が精霊だ。
そうした精霊は自分の属性に関する知識だけは最初から持っているが、常識など人間社会などに関しては自分で勉強するか、先輩の精霊に教わるしかない。そうした生まれた精霊に教える精霊を教育者と呼ぶのだが、ミリアには教育者が居なかったのだろう。
けれどもこれは珍しい事ではない。精霊がどこで生まれるなんて誰にも分りはしない。ただ属性を多く使われ、また生まれて多く論じられる場所に精霊は生まれるのだから。だから自分と同じ属性を有している教育者に巡り合う事は結構、稀(まれ)だが決して遭遇率が低いわけではない。
特に大地などの多くの精霊がいる精霊にとっては教育者が多いだろう。その逆の例も存在する。
先日海で出会った精霊。竜胆の事を覚えているだろうか。あれは人間の理論から生まれた珍しい精霊だ。なにしろ高温の精霊で焦熱の属性をもっていたのだから。これは科学が発展したからこそ生まれた精霊と言って良い。
そうした精霊は数が少なく、教育者が居る事も少ないだろう。だからこそ、シエラにその隙を付かれたりもした。
つまり精霊は自分の属性に関する事は最初からある程度理解しているが、深い部分は教育者に教わるか、自分で学ぶしかない。そうした教育システムだ。
だからだろう、昇にも直接何かを教えるわけではなく、必要な道具だけを与えて自分で学ばせるのは。まあ、確かにこの方法ならスピードは遅いが深く理解できる。時間が無限に近いほど有るからこそ出来る精霊の教育方法ともいえる。
けれども昇は人間である。だからそのような事をされても悪戦苦

闘するだけだ。
　というかさ～、こんなの渡されて後は自分で勉強しろと言われても困るんだけどね。操思うと昇は涙目になりながら机に突っ伏して、そのまま諦めに似た休憩へと入って行った。

　その日の昼食は情報収集の成果も込めて占拠した生徒指導室で会食となった。各自の意見や伝えきれない報告などを一度に集めるには、やはり一度は集合した方が良いだろうという判断だ。
　雑談をしながら昼食を終えると与凪が状況を説明する事から話が始まった。
「どうやら少し前から封印には手出ししてたみたい。ただ相手も慎重だったようで、こちらに悟られないように探ってたらしいのよ。けど封印が強力すぎて自分達ではどうする事も出来なくなった。それなら封印した者を誘き出そう、たぶんそういう事だと思う」
　最後だけ推測だけでその他の報告は全て裏付けある確定情報だ。現に封印を解こうとした痕跡が見付かったらしいが、それでも封印には何の影響すら与えてはいなかった。それだけ封印が強力なのだろう。
　与凪からの報告を聞いた昇は頷いて見せた。昇の中ではすでに方針は決まっている。後はそれを告げて決行するだけだ。
　それからは特に報告する事も無いのか全員が黙り込んだ中で昇はわざわざ咳払いすると自分の方針を話し始めた。
「なんにしても、相手との接触は避けられないと思う。このまま放っておく事が出来ないんだからいつかは接触はする。それなら早い方が良いと思う。だから……今夜、中央公園に張り込もうと思うんだ」
　驚きを隠せない面々。確かに昇が言ったとおりにいつかは接触する事にはなるだと誰もが想像していた。それが今夜になるとは誰も思っていなかった。

そんな昇の意見にシエラはわざわざ手を上げてから反論を始めた。
「接触するのは構わないと思う。でも、わざわざ急ぐ必要も無いと思う」
シエラには戦闘準備を万端にしておきたい理由が在るのだろう。それはそうだ、なにしろ準備不足で不利になってはたまったものではない。
そんなシエラの意見に昇は真っ向から反論した。
「確かにシエラの言うとおりだと僕も思う。でも……準備不足は相手も同じ、それに今夜なら相手の隙を突けるかもしれない。それに準備不足は相手も同じだよ、大事なのは状況を僕達が作る事だと思ったから今夜にしようと言ったんだよ」
つまりは奇襲である。戦うにしても話し合うにしても相手が今夜こちらが来る事を予想できなかったのだったら戸惑うはずだ。相手にそういう隙が出来れていれば昇達としても状況を進めやすい。そこまで考えたからこそ昇は今夜を選んだ。
その事を理解したシエラは黙り込み閃華や与凪は考え込んでいるようだ。
「なんにしてもじゃ」
閃華が何かを思いついたのか何かを言い始めた。
「どんな状況になるか分らんからのう。退路だけは確保しておいた方が良いと思うんじゃが」
「というと？」
昇には閃華の言っている意味が分からなかったのか首を傾げる。そんな昇に閃華は微笑むとその微笑をそのまま与凪に向けるのだった。

日付が変わる数時間前、昇達は封印近くにある林に身を隠していた。そこで相手が来るのを待ち伏せるつもりだ。
確かにここなら封印にちょっかいを出そうとするればすぐに分る

し、この時間なら人通りがほとんどない。つまり封印にちょっかいを出すには絶好の時間帯だ。

それだけうってつけの場所なのだが、さすがに数時間も居ると飽きてくるのだろう。ミリアなどは封印の監視などはやっておらず、半分ほど舟を漕いでいる。

「精霊でもお子様は寝るのが早いのかしらね」

そんな冗談を口にしながらミリアを頭を小突く琴未。ミリアも重要な戦闘要員だ。戦闘になる事にでもなれば眠ってもらっていられては困る。けれども今は少しだけ休ませて上げようと昇が口にしたので琴未はミリアを小突いたり、頬を引っ張ったりと遊ぶだけに留まった。

そんな中で待っているとようやく待ち人達がやってきたようだ。相手は五人、辺りを気にするかのように見回っている。それから、その中の一人が何かを呟くと今まで少しだけあった人通りが完全に無くなった。

これでこの場所にいるのは相手の五人と昇達だけとなった。それから五人は精霊王の力が封印されている場所へと移動し何かをし始めた。

それと同時に閃華の前にモニターが現れた。先日と同じように赤い画面でアラートの文字が出ている。もちろんこういう事態を想定していたから警告音などは一切発していない。「どうやら間違いないようじゃな」

警告が出たという事はあの五人が精霊王の力を手にしようとしている者達に違いないだろう。

「もう少し近づいてみようか」

さすがに人通りが無いだけに明かりも少ない。ここからでは相手の姿形は良く分からない。

大人が三人、高校生ぐらいが二人といった感じとしか分らない。相手の姿を良く見るためにも近づかなければいけない。

もちろんこのまま林を出るわけは行かない。なるべく遠回りして

昇達も精霊王の封印に近づいていく。
相手の五人も精霊王の封印近くにずっといるわけではない。役割が決まっているのだろう。少女のような人物が精霊王の封印に干渉し続け、残りの人物は辺りを少し移動したり、じっとしたりしている。
やる事が無くうろうろしてるのか、辺りを見回っているのか、それとも暇を持て余しているのか分らないが、うかつに近づけない事は確かだ。
そんな中でも昇達はこの場所を良く知っている。だから相手に気付かれる事なく近づく事が出来た。
かなりの距離を近づいたのだが暗がりの所為で姿は良く見えないが、大体の姿形は分ってきた。昇より少し背の高い少年が一人。琴未と同じような少女が一人。大人の男性が二人に女性が一人。そういう編成のようだ。
そして少女はずっと精霊王の封印に干渉を続けている。どうやら今日は長めにやってこちらに興味を持たせようとしているのだろう。昨日の短時間だけでは間違いと思われても困るからだ。
なにしろ相手も昇達に出てきてもらいたいのだから。
そんな様子を見ている時だった。大人の女性が暗がりから丁度街灯の下に移動してきて姿をはっきりと見る事が出来た。
「あ――――――――――――――――――――――――――――――っ」
女性の姿を見るのと同時に大声を上げるミリア。その声に全員が驚き視線がミリアに集まる。
「お師匠様がどうしてここにっ！」
ワケの分らない事を言い続けるミリア。その場は未だに混乱しているようだが閃華はすぐに昇に話しかける。
「もう奇襲は無理じゃ、ここは正面から堂々と行くしかあるまい」
閃華の言葉にすぐに頷く昇。ミリアがいきなり大声を上げてしまったからにはそうするしかないだろう。昇達しては様子を探って奇襲なり、突然現れたフリをして相手の虚を付きたかったのだが、こ

うなってはどうすることも出来ない。
昇はその場から立ち上がると素直に林から出て行き、シエラ達もそれに従って静かに歩き出し、明かりの下に自分達の姿を晒した。
その行為に少年は女性と男性の一人から助言を受けたようで、同じように明かりの下に全員を集合させた。
「さて、まずは自己紹介から始めるか？　それとも素直にあの封印を解除するか？　どちらがいい？」
挑発的な態度で出るフレト。そんなフレトに男性の一人は頭を抱えているようだが、昇としてはそこまで気にしている余裕は無かった。
「そうだね、出来れば自己紹介から行きたいかな。それから精霊王の力を求める理由を教えて欲しい。場合によっては協力するよ」
昇としては友好的に言ったつもりだが、それが必ず相手に伝わるとは限らない。それどころか疑念を抱かせる事もある。
「協力か、確かにそれはありがたいが、それを保障するものは有るのか？　まさか協力するフリをして後ろから刺されては敵わないからな」
「……それは……でも、僕達としても精霊王の力はこのままにしておきたいんだ」
それは昇達が争奪戦が終わるまで精霊王の力を誰にも使わせない為だが、封印のおかげで精霊王の力が何に使われているのかは分らない。だからフレトが誤解しても不思議は無い。
「それはそうだろうな。こうしている限り精霊王の力は使いたい放題だからな」
「なっ、僕達は精霊王の力を使ってない！」
確かに昇達は自分達の為に精霊王の力は使ってない。それはロードキャッスルでの悲劇が有ったからこそだ。その悲劇を繰り返さないために誰にも手を出せないようにしたのだが、この場でそこまで説明するのは不可能だ。なにより時間がないし、それを証明するだけの物も無い。つまりフレトを信用させる事が出来ないという事だ。

「どうやらこれ以上の言葉は必要ないようだな。元々は争奪戦で戦いは避けられないのだから、ここで戦いを避けてもしかたない」
「待って、せめてもう少し話だけでも」
「そんな必要があると思うのか」
フレトとしては精霊王の力さえ手に入れば手段はどうでも良い。それに昇が下手に出た事であまり信用できなくなってしまったのだろう。
昇としても下手に出て話をしたかったのだが、それは逆効果でフレトを刺激してしまったようだ。
フレトの性格からしても腹の探り合いのような話は苦手なのだろう。それなら力づくで行ってしまった方が良いといったタイプのようだ。
もう戦う事は避ける事は出来ない。昇はそう確信した時だった。
フレトは笑みを浮かべると言葉を発した。
「そうそう、一つだけ希望を叶えてやろう。俺が名はフレト＝グラシアス、契約者でここにいる者達の主だ。能力は自分で調べるんだな。他の者はそれぞれ自分達でやってもらおうか」
その言葉に一人の男が前に出ると閃華も同時に前に出た。
「久しぶりじゃのう、何百年ぶりかのう」
「だいたい四百年だな」
「くっくっくっ、相変わらず口数の少ない奴じゃのう」
そんな会話を交わした閃華は後ろを振り向かずに昇達に告げる。
「こやつは服部半蔵。名前ぐらいは知っておるじゃろ。なにしろ有名じゃからのう。空間の精霊で空の属性を持っておる。こやつとの距離は一切気にするでないぞ」
「……的確だな」
半蔵はそれだけしか言わなかった。閃華の説明が的確で状況に合っている事を認めたようだが、半蔵の性格からしてその事が分るのは閃華だけだった。
半蔵はそれだけ言うと後ろに下がった。そうやらこれ以上は語る

事は無いのだろう。閃華との久しぶりの対面だというのに、こういう態度に出るのは半蔵の性格なのだろう。
半蔵の次に前に出てきたのは大人の女性の方だ。その女性が前に出るのと同時にミリアは昇の影に隠れてシャツのを掴んできた。
そんなミリアに女性は優しい笑顔を見せて話し始めた。
「初めまして、私はラクトリーと申します。そこにいるミリアの師匠をしていたのですが、いつの間にかミリアが行方不明になって今はマスターと契約したわけなのですよ……さて」
笑顔を絶やさないままラクトリーは立つ位置を変えるとミリアが見える場所へと移動する。
「久しぶりですねミリア……さて、ここで会ったのも何かの縁、何があって私の元を去って行ったのか話してもらいましょう」
笑顔は変わらないのだが、体から黒いオーラのようなものを昇達ははっきりと見た。正確にはそれほど雰囲気が変わった。
そんなオーラをミリアも見てしまったのだろう。ますます昇の影に隠れてしまった。そんなミリアにラクトリーは溜息を付くと素直に背を向けた。
「まあ、すぐに戦いが始まるでしょうから、その時にでもゆっくり聞きましょう」
「昇～」
すっかり涙目、というか泣いているミリアは昇を見上げるが、昇は半分諦めた顔でミリアの頭を撫でるしか出来なかった。
ラクトリーが下がると次に出てきたのは巫女服を着た少女だ。先程まで封印にちょっかいを出していた相手だ。この場で何かをするとは思えないが油断することはできない。
それに同じ巫女だという事に刺激されたのだろう。昇側からは琴未が前に出た
「お初に御目に掛かります、咲耶ともうします。これから仲良くとはいけませんが、よろしくお願いします」
「こちらこそ始めまして、武久琴未よ。あなたと同じ巫女をしてい

るわ。そこだけは奇遇ね」
　琴未としては少し嫌味を込めたつもりなのだろうが、あまり効果が無いどころか逆に返される結果となってしまった。
「そうでしたか。ですが、あなたのような粗暴な人が巫女とは、この国の格も落ちたものですね」
「なんですって！」
　倍以上の嫌味で返された琴未に一瞬だけ声を荒げると、琴未はすぐに深呼吸をして平常心にもどした。
「なんにしてもよ、同じ巫女としてあなたにだけは負けないわ」
「そのお言葉、そっくりお返しします。言葉だけでなく力でもですね」
　その言葉に琴未は少しだけ首を傾げた。言葉で返されえるのは分るのだが、最後の力というのはどういう意味だろと。けど一つだけ理解していた。もしこのまま戦う事になるのだとしたら琴未の相手が咲耶になるということだ。
　咲耶としてもその意思があるからこそ最後にそのような言葉を付けたのだろう。
　なんにしても負けられない。琴未は改めてそう決意した。それ咲耶が巫女というだけではなく、品格としても負けているような気がしたからだ。
　別に琴未が劣っているのではない。ただ咲耶から発せられている雰囲気がなんとなく巫女の神格を現しているかのように感じたからだ。
　琴未達の話が終わったのだろう。あちらからはもう一人の男性が、こちらからはシエラが前に出た。
「レット・ローネだ。こんな事もいうのもあれだがよろしくな」
「シエラ」
　シエラは自分の名前だけを伝えただけで他には何も言わなかった。レットはもう少シエラが喋ると思って黙っていたのだが、どうやらシエラがそれ以上は喋るつもりが無い事を理解すると肩をすくめて

見せた。
「おいおい、それだけかよ。もう少し何か言う事はないのかい？」
「別に」
そっけない態度で返すシエラにレットも諦めたのか素直にその場から下がる。そしてシエラも下がり、代わりに昇を前に押し出した。
どうやら昇の番だと言いたいのだろう。昇は一度ゆっくりと息を吐くとフレトの目を真っ直ぐに見据えた。
「滝下昇。君と同じ契約者だ。もちろん僕も自分の能力を教える気はないけど、もう少しだけ話は出来ないの？　せめて精霊王の力を求める理由だけでも教えて欲しいんだけど？」
昇としては精霊王のような危険な力を何に使うのかだけでも確かめなければいけないと思っただろう。そうしなければ話し合いどころではない。
フレトが自分自身の野望の為なら問答無用で戦うしかないのだが、昇の言葉を聞いたフレトは悲しそうな瞳を見せた。
「もう……これしかないからだ。精霊王の力を手に入れる以外……手の打ち様がないからだ。だから……渡してもらうぞ！　精霊王の力をな！」
「だから何のために」
「それを聞いてどうする。どうせお前なんかに何も出来やしない。俺は大切な存在を留めさせる為には戦う事はいとわない！」
どうやらフレトはすでに戦う気なのだろう。フレトとしても話し合いを考えてなかった訳ではない。けれども昇が下手に出たとしても主導権は昇が握っている。そんな昇に頭を下げて頼む気にはなれないし、そんな事はフレトのプライドが許さなかった。たとえ大事な存在を失いかけようとしていても。
それなら戦って勝ち取ればよい。そうフレトが考えてもまったく不思議はなかった。なにしろ本来なら争奪戦で戦いは避けられない物で、出会ったからには戦うのしかないのだから。もしかしたら、そのように戦いを強制させるような力が働いているのかもしれない

が、そんな事は誰にも分りはしない。
「さあ、これ以上の言葉は不要だ。ここからはこれで語るとしよう」
フレトは片手を前に出すと大きく手を開く。
「アルマセット」
フレトが差し出した手が光り輝くと杖なる。杖の先端には翠がかった翠昌石（すいしょうせき）が付いている。それと同時に身体も輝くと黒いローブをまとい、同じく黒いマントを付けていた。
その姿は童話に出てくる魔法使いそのものだ。
「って、あれって昇の！」
フレトの姿に驚く昇。けれどもそんな昇達に構う事無く、フレトの精霊達も精霊武具を出してくる。
「アースブレイククレセントアクス＜大地を壊す三日月斧＞」
ラクトリーの精霊武具もミリアと同じく斧系統のようだ。ミリアと同じくその大きさはラクトリーの身長とほぼ同じで先端の斧部分は全体の三分の一を占めている。斧そのものは長く反りが強く太い。まるで大きな三日月のようだ。
身体を覆う防具はこれもミリアとは違って軽装で余計な部分を排除している。つまり下着ではないが身体に密着する服と最低限の甲冑しか付けていない。鎖帷子や各鎧部分を繋ぐ箇所を排除した容姿をしている。
付けている防具といえば胸当てと肩当、それと両手足の具足だけ。あとは防御能力が低い服のような物を少し付けいるが、大地の精霊からして服だけでも充分な防御効果があると思ってよいだろう。
「空斬小太刀＜空間を斬り裂く小太刀＞
半蔵も同じく精霊武具を見にまとう。容姿は誰もが想像する忍者をそのまま再現したような格好だ。主だった防具を見にまとう事無く、覆面と黒い和装で動きやすい格好をしている。
武器の方は珍しく大きくは無い。琴未が使っている雷閃刀の半分ぐらいの大きさの小太刀を腰の後ろに二本さしている。まさしく忍者そのものと言って良いだろう。

さすがは歴史に名を残した服部半蔵。その名に恥じる事ない容姿と雰囲気を漂わせている。

「桜華小刀＜桜の華みたいに小さな刀＞」

次の精霊武具を出してきたのは咲耶だ。こちらの容姿はあまり代わり映えはしない。元々巫女装束を見にまとっていたから、それに琴未とは違った防具を付けているだけだ。

琴未はたすき掛けをして方を振り回しやすい格好をしているが、咲耶は防具らしいものはつけておらず、千早をまとっただけだ。

手にしている武器は半蔵の小太刀よりも更に短い小刀だ。それを手に持っている。

そして精霊武具を発動させた効果か、桜の花弁が咲耶も周りに舞い落ちた。

「テルノアルテトライデント＜三つの爪を持つ槍＞」

次に精霊武具を出してきたのはレットだ。槍だが先が三つに分かれている。いわゆる三叉槍だ。けれどもその三つとも湾曲しており、まるで爪用になっている。そのまま斬り裂く事も可能だが、突き刺す事も出来るようだ。

大きさも大柄のレットを隠すほどの大型の槍だ。その槍に似つかわしい防具をも身にまとっている。

ミリアほどの重装備ではないが、全身を甲冑で覆われている。重装備である事には違いないのだが、あまり動きずらいという訳ではなさそうだ。

フレト達が各々精霊武具を見に待とうとシエラ達もそれぞれ精霊武具を見にまとう。ここまでされてはもう戦うしかないのだろう。

そうして睨み合いが始まると誰もが思ったのだが、ミリアの一言がそんな雰囲気を一気に壊してしまった。

フレトを指差して真っ先に言葉を口にする。

「なんで昇と同じ事が出来るんだよ。さてはお前の能力もエレメンタルアップだな。だから昇と同じように武器や防具を作り出せるんだな。そうでしょう！」

よっぽど自分の推測に自信があるのかミリアは胸を張って見せるが、そんなミリアにラクトリーは思いっきり溜息を付いてからミリアに言葉を返した。

「能力者が自らの力で武器や防具を作るのは現代において常識となってますよ。そして能力者が精霊武具同様に武器や防具を呼び出す事を『アルマセット』と呼ばれてます。大地の精霊ならそれぐらいの情報ぐらい集められるはずだと教えたのですが、忘れましたか」

最後だけ独特の黒いオーラを発してミリアに説明するラクトリー。さすがに今度は昇の後ろに隠れるわけにはいかないのか、一歩下がり思いっきり戸惑いを示した。

そんなラクトリーの言葉に昇は別の感想を持った。

そうか、皆考える事は同じなんだ。そう言われればそうだよね。昔ならともかく今は武器なんて手に入れることなんて出来ないし、それなら自分で作り出そうと思うのも不思議じゃないか。

自分が考えた事は他人も似たような事を考える。そんな事を思った昇はフレトの真似をして見る事にした。

「アルマセット」

昇は力を集中させてそう呟くと両手にはいつもの二丁拳銃が現れ、黒いシャツとコートを見にまとった。

なるほど、確かにこうした方が便利だな。

精霊たちが精霊武具を召喚するのに各々の武器名を叫ぶには召喚する手順を省くという意味がある。

昇が今までのように精神を集中させてイメージを実体化させるよりかはかなり簡単に武器と防具を具現化できる。

どうやら能力者の間ではこの事を『アルマセット』と呼んでいるようだ。情報収集を得意としているラクトリーだからこそ、この事を知っていたのだろう。……ちなみに、ミリアも同じ大地の精霊だがその手の作業は一切出来ないようだ。

そんな事はともかく、これでお互いに臨戦態勢へと入った。昇としてはもう少し話をして精霊王の力を求める理由を知りたかったの

だが、出会ってしまったからには戦うしかない争奪戦の理由。それにフレトとしても急ぎたい理由が合った。長々と話をするぐらいなら一気に叩き潰してしまった方が手っ取り早いのだろう。

だからこそ戦う事を選んだ。もしかしたら選ばされたのかもしれないが、この場合はどうしようもないだろう。なんにしても戦うのだとしたら先手を打たなければ行けない。昇達としてもここで勝たないと話をするどころではないのだから。

とにかく勝ってここは話を進めよう。そう昇は決めると小声で戦う事を皆に伝え、それぞれに頷いてきた。

そして真っ先に動いたのはシエラだ。一気に上空に飛び上がり、上から攻めるつもりなのだろう。確かに地上にいる者にとって上空からの攻撃はやっかいな物は無い。けれどもそれは誰も空中戦が出来ない場合だけだ。

ウイングクレイモアを構えて翼を広げるシエラ。そこから一気に攻めようとするのだが、視界に何かが写るとそれに合わせて防御に入った。

シエラのウイングクレイモアを捕らえたのはレットのテルノアルテトライデントだった。

二本目と三本目の爪の間にウイングクレイモアを突き刺し、串刺しだけは免れたシエラ。

そんなシエラの瞳にレットの姿しっかりと写った。レットの背中には茶色みかかった翼が生えており、どうやら鳥系の精霊のようだ。

「残念だったな。上空戦が出来るのはお前だけじゃなんだぜ」

「別に私だけが特別だとは思ってない。ただ以外だっただけ、あなたが飛べた事に」

どちらにしても両者ともこのまま退く事は出来ない。こうしてシエラ達の上空戦から戦いの火蓋は切って落とされた。

第八十二話　協定争命（後書き）

そんな訳でお送りしました八十二話ですが、なんか自己紹介だけで終わったような気がしますね～。まあ、次の戦いまで書いていたら、軽くもう一話分ぐらいのページ数を使ってしまいますからね。今回はここで切らせてもらいました。

そんな訳で、次からはバトルに入ります。いや～、久しぶりのエレメバトルです。……本当に久しぶりだ。なんかワクワクするような不安のようなそんな感じですね。

まあ、なんにしても楽しんでいただければ幸いです。

さてさて、そんな訳でそろそろ締めましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に票感想もお待ちしております。

以上、未だに風邪が治ってないと思われる葵夢幻でした。

第八十三話　絶対不利

世界はすでに茶色を交えた世界となっている。真っ先にラクトリーが精界を張り巡らしたからだ。その上に閃華が精界を張り二重に精界が張られている。これで両者とも逃げる事は出来ない。

そんな中で刃を交えるシエラとレット。戦いの中でもシエラの思考は相手を的確に観察していた。

飛べるという事は翼の属性を持っている精霊。翼の色から察すると鳥系統の精霊。それなら属性が翼だけという事は無い。かならず他の属性も混じっているはず、なにしろ翼だけの属性なんて滅多にないから。

自分の属性がレアな事を知っているからシエラはそんな推測を立てる。それにはもちろん理由が在る。

その一つにレットの背中に生えている翼の色だ。鳥系の精霊は必ず翼に色を持っている。これは元となった鳥が持っている翼の色で、精霊もそれと同じ翼を持つからだ。

それにもう一つ、シエラのように純粋に翼だけの属性を持つ者などほとんど居ない。そもそも翼の属性は人が翼に対する憧れから生まれた属性で、人間はそれをいろいろな形で再現してきた。

だからこそ翼の精霊が生まれたのだが、元々鳥系統のように翼を持っている者の精霊と数を比べれば極端に少ない。つまりシエラの属性はかなり珍しい。その証拠にウイングクレイモアに生えている翼の色は常に白だ。

これは人間が天使などのように人間に翼を付けるとしたら必ず色が白になるからこそ、翼の属性を持つ者は必ず白い翼を持つ。

そこまで推測した上でシエラは次の手を決めた。

他の属性を出される前にスピードで撹乱する。スピードだけなら私の方が勝ってる。それで撹乱して一撃を入れる。そうシエラは決断した。

翼の属性は空中では最速を誇る。他の属性が混じっている物に追いつけはしない。その事が分っているからこそ、シエラは数度レットと打ち合うと一気にスピードを上げて相手の後ろに周った。

まずはその翼を切り落とす。

背後からウイングクレイモアを振り下ろす。それは確実にレットの翼を斬り裂く予定だったのだが、ウイングクレイモアが切り裂いたのは空気だけだった。

「なっ！」

さすがに驚きを隠せないシエラ。急いでレットの気配を探り、後ろに見つけたときにはレットのテルノアルテトライデントがシエラの背に向かって振り下ろされていた。

急加速でその場から離れるが背中に痛みが走った。どうやら完全には回避は出来なかったようだ。けれども致命傷にはなっていないし戦いにも支障は無い。なにしろシエラの翼はウイングクレイモアに生えているのだから。

その事をすっかり忘れていたのか、それとも余裕の表れなのかレットは一旦テルノアルテトライデントを肩に担ぐと余裕の笑みを浮かべながら言葉を発した。

「そっかそっか、お前の翼は武器に付いてるんだったな。なら背中を攻撃しても落ちはしないか」

レットのシエラと同じ事を考えていたようで翼を切り落として地上に落としたかったようだ。けれどもレットは肝心な事を忘れていた。

「私の属性は翼。いくら翼を切り落としてもいくらでも再生できる。なにしろ翼の精霊だから」

「なるほどな、だから武器なんかに翼を生やしてる訳か」

「これは趣味」

「趣味かよ！」

シエラとしては半分冗談で言ったつもりだがレットの突っ込みがよっぽど面白かったのか、少しからかいたい気持ちも生まれるが今

は戦闘中。ここは相手を倒す事に集中しなくてはいけない。
戦闘の集中力を高めるシエラ。その時にある事に気付いた。背中の出血がもう止まっている事だ。浅手だったとはいえ、こんなに早く血が止まるとなると考えられるのは一つだけだ。
相手の武器が鋭い。並外れに鋭い刃を持っているということだ。それは一気に深手を与える事が出来るが、浅手なら大したダメージは与えられない。一撃必殺の武器と言えるだろう。
そしてそんな武器を作り出せる属性といえば。
「爪翼の属性」
爪翼の属性とは爪と翼の属性の二つを掛け合わせた属性だ。けれども両者ともそれぞれの属性には敵わないが、重ね合わさる事で新たな攻撃が出来る。
「おっ、さすがにわかったようだな。大当たりだ」
自分の属性が言い当てられたのにレットからは余裕が消えなかった。確かに相手に属性がバレたぐらいで同様などはしないが、相手もこちらの属性に対して対処の方法を取ってくるだろう。その対処法を考えなければいけないのだが、レットにそのような事を考えている気配は無い。
それだけではない。シエラにはもう一つだけ気になる事があった。それはシエラが最初にレットの背後を取った時だ。爪翼の属性ならあそこからの完全回避は絶対に無理だ。それなのにレットはやってのけた。もう一つぐらい隠している何かがある。
シエラはそう感じながら慎重に戦闘を再開させた。

その事地上も戦いが始まっていた。真っ先に動いたのは閃華だ。正確には半蔵の攻撃に対処しただけだが、動いたのは閃華が先だ。
「皆、私から離れるんじゃ。半蔵を相手にしては距離など意味は無い、各自私から離れて戦うんじゃぞ！」
半蔵の事を知っている閃華はそう告げる。それは閃華が半蔵の属

性を知っているからこその言葉だ。
半蔵の属性は空。この空は『そら』ではなく『空間』の事を指している。
空の属性は空間を縮めたり、伸ばしたりする事が出来る。つまりは相手との間合いを自由自在に出来るという事だ。だからその場から動かずとも手にしている小太刀を空の属性で作り出した場所に差し込めば相手に突き刺す事が出来る。つまり空間に入口と出口を作り出す事が出来る。
その入口から攻撃して出口から相手に届くというやっかいな属性だ。閃華はそんな半蔵の属性を知っているからこそ自分から離れるように言った。
いくら空間を縮める事が出来ると言っても半蔵の力にも限界がある。それはそんなに広くは無い。だから閃華から全員が離れれば空の属性は閃華にしか使えなくなる。それを見越しての閃華からの忠告だ。
そんな閃華の忠告に昇は頷くと閃華から離れる場所を指定してそこに全員で向かおうとするが、走り出している途中で一瞬だけ軽い地震が起きると昇達とミリアを隔離するかのように大地の壁がそびえ立った。
「さて、これでゆっくりと話せますね。まあ、戦闘はその後にしましょう」
「お、お師匠様～」
情けない声を出すミリアは辺りを見回すが逃げ場はない。昇達の方へは壁が邪魔をしているし、閃華の方へは逃げられない。もし逃げてしまえば半蔵の餌食となってしまう。
こうなるとラクトリーと戦うのしかないのだが、ミリアはすっかり腰が引けていた。
「では、突然私の元から去った理由から聞きましょうか？」
「えっ、えっと、その、あの、あれは、しかたなく」
「言葉ははっきりと言いましょうね」

優しい言葉に黒いオーラと恐怖の雰囲気を混ぜながらミリアに届けるラクトリー。そんなラクトリーにすっかり逃げ腰のミリアは今までの事を説明する。それは自己弁護と言葉の覇気が無く、たどたどしい物だったのだが、ミリアには慣れているのかラクトリーにはそれだけで全て分ったようだ。

「つまりこういう事ですか、興味本位で飛び込んだ召喚陣だったけど召喚者が怖くて全て話しまい、そのまま契約。その後は昇君達に助けてもらった後、今度は昇君に興味を持ってそのまま居座ってると。そういう事ですか？」

笑顔で確認するラクトリーだがミリアはその笑顔に怯えるばかりだ。傍から見たら何が怖いのだろうと思うのだが、ミリアにとってはとても怖い事なのだろう。だからこそ、なんとしてもここでラクトリーを説得しないといけないと思ったのは。

「だ、だからしかたなかったんですよ～、お師匠様。本当はお師匠様の元に戻ろうとも思ったんですよ。けど戻り方なんて知らなかったし～、それだったら昇と契約して争奪戦に参戦した方が自分の為になると判断したんですよ～」

「それでも師匠である私への連絡は出来たでしょ。それすらしなかったのは何故なのかしら？　大地の精霊なら何処にいようと相手の精霊反応さえ知っていればいつでも連絡できるはずですよ。今までそれがなかったのは何故なのかしらね～」

「うっ、そ、それは……」

とうとう言葉に詰まるミリア。

二人の会話から察するとラクトリーはミリアの教育者だったらしい。それなのにミリアが突然いなくなった事に心配だけはしていてようだが、そこは精霊。それなりの教育は済んでいたし、一人立ちしてもおかしくは無いのだが、ラクトリーとしてはまだまだ教えたい事が多いほどあったようだ。

だからこそ突然居なくなったミリアに怒りに似た感情を抱かずにいられないのだろう。完全に怒っている訳では無いが、それなりに

は頭に来ているようだ。
　それに何の連絡も入れなかったミリアにも非はある。連絡を取ろうと思えば取れたのだろうけど、その場の成り行きかミリアの思い込みかは分らないが、そのまま昇と契約をしてしまった。
　このような事実がラクトリーに知られれば確実に怒られるどころか折檻だけではすまないだろう。確実に真っ黒なオーラを見にまとったラクトリーが思い浮かばれたのだろう。だからこそミリアとしてはこのまま行方を眩ますつもりだった。
　それがまさかこんな所で出会おうとは二人とも予想外だったろう。けれども出会ったからにはラクトリーとしても確かめずにはいられない。
　ミリアが自分の元を去った理由は先程聞いた。後はミリアがどれだけ成長したかだ。それを確かめるためにラクトリーはあえてアースブレイククレセントアクスを向けるのだった。
「まあ、いいでしょう。あなたの事だからあなた自身が決めても問題は無いでしょう……けれども、私も師匠としての義務があります。あなたがどれぐらい成長したかは、これで確かめて見ましょう」
「えっ、あの、ちょっとま」
　ミリアが言い終わる前にラクトリーは一気に距離を詰めてクレセントアクスを振り上げる。そして一気に振り下ろすと爆風が起きた。まるで何か巨大な物が落ちてきたようにクレセントアクスのある場所を中心に破壊している。
「どうしました。このまま何もせずに終わらせる気ですか？」
　笑顔を絶やす事無く残酷な事を言ってくるラクトリー。そんなラクトリーにミリアも覚悟を決めたのだろうアースシールドハルバードを構えるとラクトリーと向き合う。
「さあ、それでは見せてもらいましょう。今のあなた自身を」
　ラクトリーの身体にはまったくにつかわないクレセントアクスを楽々と持ち上げると、再び大地を蹴りラクトリーはミリアへと迫った。

「アースウォール」
それに対してミリアはハルバードを大地に突き刺すと土の壁を作り出してラクトリーの進行を阻害しようとする。そんなミリアにラクトリーの笑顔は未だに耐える事が無い。
クレセントアクスを一振りしただけでミリアが作り出したアースウォールを軽々と破壊してしまった。
アースウォールはかなりの防御力があり、破壊する事すらかなり困難な防御力を持った大地の壁だ。それを軽々と破壊するとなると、ラクトリーのクレセントアクスはかなりの破壊力を持っている事になる。
そんな事を考える暇をミリアに与える事無くラクトリーは一気にミリアに詰め寄ると刃ではなく、柄先でミリアの腹に一撃を与えて吹き飛ばしてしまった。
地面を数回転がって止まったミリアは腹を抱えながら咳をする。どうやら手加減されたらしいが、それでもかなりの激痛が走った。
そんなミリアにラクトリーは初めて笑顔を消して話しかけた。
「教えたはずですよ、大地の属性には二つの顔がある事を。一つは防御。大地という地球の基盤を構成してるからこそ得られる防御力。二つ目はその逆、大地を揺るがし火山すら噴火させる事が出来る破壊力。天変地異では無いですが、大地には防御と破壊の二面性が有る事を」
大地の属性で注目される特徴は防御力と破壊力だ。ミリアの場合は防御の方へ片寄っているが、その破壊力を現す技も持っている。例えるならアースブレイカー。この技は大地にひび割れを起こし崩壊させる技だ。つまり破壊力を示している。
けれどもミリアはアースウォールやアースドームなどの防御技を好んで使う傾向がある。これはミリアの力が防御側に向いているからでは無い。そこまでしか学んでいなかったからだ。
ラクトリーとしてはそこまで教えてから自分と一緒に争奪戦に参加させようとしていたのだろうけど、こんな結果になってしまって

はしかたない。
しかも今は敵である。あまり手加減など出来ない。師弟の情も程々にしなければならなかった。

完全に劣勢であるミリアが倒れている頃。琴未も同じ巫女服に身を包んだ咲耶と対峙していた。
相手の武器は小刀だから、あまり懐に入るのは良くないわね。少し距離を取ってこちらの間合いで攻め続けてみる。琴未はそう考えていた。
確かに咲耶が手にしている小刀はかなり短い。三〇センチほどの長さしかない。そんな武器を持っているのだから相手はこちらの懐に入らなければ攻撃が出来ない。琴未がそう思っても不思議は無い。
雷閃刀を脇に構えて一気に踏み出す琴未。あまり間合いを詰める事無く、雷閃刀が届く精一杯の距離で振り上げるが咲耶は軽やかな動きで琴未の攻撃をかわした。
さすがに避ける事にはなれているのかしら。琴未よりも接近しなければいけないのだから受ける事より避ける事を重要視していると琴未は思った。
だからこそ、咲耶が近づこうとすると距離を取り、少し離れては攻撃を続けるが咲耶は琴未の攻撃をかわし続けた。
「ふわふわと避けられてまったく当たらないなんてね。まったく、どういう瞬発力をしてるのよ」
「ふふっ、それはちょっと違いますけど。その事は後で主様がお話になるでしょう。それよりもそろそろ満足していただきました」
「何がよ」
咲耶の言葉に怒気を込めて返す琴未。咲耶の言葉どおりなら今まで遊ばれていた事になる。そんな事があってたまるもんですか、琴未はそう怒りたい気持ちを抑えながら冷静に雷閃刀を構える。
そんな琴未に咲耶は短い間だけ微笑むと一気に真剣な顔へと変わ

る。
「それではそろそろお見せしましょう。桜華小刀の力を」
一気に距離を開ける咲耶。ただでさえ武器の長さが短いというのに、ここまでの距離を開けてしまっては攻撃のしようが無い。少なくとも琴未にはそう思えた。
けれども実際には違った。咲耶が桜華小刀を琴未に向けると短く言葉を発する。
「桜」
桜華小刀から無数の桜が、正確には桜の花弁が琴未に向かって飛び出してきた。
「こんなもの」
琴未は雷閃刀に雷をまとわせると向かってきた桜の塊に振り下ろして二つに切り裂いて見せた。
「ッ！」
けれどもそれと同時に身体に痛みが走った。桜の塊が完全に通り過ぎて身体を確認すると幾つかの箇所が切り裂かれている。全て浅手だが数箇所から少しだけ血が出ているは確かだ。
どうやらさっきの桜の花弁が切り裂いたらしい。どうやら桜華小刀はその刃で斬り裂くのではなく、遠距離からの攻撃の為に存在しているようだ。
「けれども、驚くのはまだお早いですよ」
再び笑顔でそう告げる咲耶。今度は先程とは違った言葉を口にする。
「炎」
桜華小刀から炎が一直線に琴未に向かって放射されて。さすがにこれは避けるしかない琴未。横に飛び退き一回転して今まで居た場所を見ると、そこの地面には確かに焦げ後が残っていた。
どうやら先程の炎は幻影などの幻ではなく本物のようだ。
「一体どうなってんのよ」
さすがに困惑する琴未。属性から言って複数の属性を含む物なん

て限られている。昇のように最初から特殊な属性を有しているか、レットのように複数の属性を持っているかのどちらかだ。

複数の属性を持つのも可能だが、それは元となる精霊によって限られる。レットは鷹の精霊だからこそ爪翼という爪の属性と翼の属性を持つ事が出来た。もちろん本来の属性、爪なら爪、翼なら翼の属性に比べれば威力は落ちるが、組み合わせる事が出来るだけで強力になる。

けど咲耶は巫女装束を着ている。言わば巫女だ。そんな巫女が複数の属性を有するとは考えられない。

「あんた、一体何の精霊なのよ？」

これ以上は考えも埒が明かないと考えた琴未は無茶を承知で直接尋ねた。琴未はシエラや閃華のように精霊ではない。だから精霊としての知識に関しては掛ける部分がある。それはエレメンタルの属性を持つ者が避けられない物なのだろう。

だから直接聞いてみるしか琴未には手の打ちようが無かった。さすがに正直に答えてもらえないだろうと思っていたのだが、咲耶は微笑むとすんなりと答え始めた。

「私はあなたと同じといったじゃないですか。私は巫女の精霊。属性は巫（かんなぎ）ですよ。ちなみに巫の属性は自然界の物を自由に放射できますから注意してくださいね」

つまり火や水、更には大地や木々などの自然界にある物を自由に操れる事が出来るという事だ。

「そんなの卑怯じゃない！」

さすがにミリアと似たようなセリフを吐く琴未だが、この場合はしかたないだろう。そんな琴未に咲耶は更に説明を加えてくれた。

「巫女とは本来神に仕えるものですよ。そしてこの国は八百万の神が居る。つまり自然にある物全てに神が宿っている。そうした信仰心が巫女の精霊である私を生まれさせた。つまり私の属性は自然界にあるもの全てを自由に操れるわけですね」

確かに咲耶の言うとおり巫女とは神に仕え、その伝道師となるべ

き者と言っても言い。時と場合には巫女自信が神になる事もある。つまり巫女とは神に最も近い存在だ。そしてこの国の巫女は八百万と言う自然界全てに存在する神に仕えている。

そんな巫女の精霊だからこそ巫のような属性が生まれた。

「つまり巫女とは神に仕える者。あなたのように刀を振るうだけの存在では無いのですよ。だから最初に言ったではありませんか、巫女としてこの国の格が落ちたと。あなたに巫女を名乗る資格等は最初からないのですよ」

「言ってくれるわね」

さすがにそこまで言われると琴未も頭に来るのか、顔にも怒りが表れてくる。雷閃刀を一気に振り払うと地を蹴り咲耶へと突進する。

まるで猪突猛進のような琴未に咲耶は軽く笑みを浮かべると桜華小刀を琴未に向ける。

「樹」

桜華小刀から木の根みたいな物が無数に琴未に向かって伸びてくる。琴未はそれを避け、時には切り裂きながらも咲耶に向かって進み続ける。

けれども雷閃刀に間合いに入る前に咲耶が距離を取るのは目に見えている。現に今にも咲耶は後ろに下がろうと地面を蹴った。

その瞬間に琴未は笑みを浮かべた。

「雷撃閃」

雷閃刀を振り抜くと数本の雷が咲耶の着地地点に向かって放たれた。どうやら琴未はこの瞬間を狙っていたようだ。

迫ってくる雷に咲耶は桜華小刀を地面へと向ける。

「金柱」

桜華小刀から光が地面に走ると咲耶を中心に幾つもの鉄の柱がそびえ立った。琴未の放った一撃はその柱に吸い込まれるように消えていった。

「そんな」

さすがにこれには衝撃を隠せない琴未。避けられる事は想定して

いたとしても、こんな手段で出てくるとは想定外だ。
「さしずめ避雷針といったところですかね。どうやらあなたの属性は雷のようなので、このような物を作らせて貰いました。さあ、これであなたの属性は封じたも同じですね」
どうやら咲耶の作り出した鉄の柱には雷を吸収しやすくしてあるようだ。そのため、琴未がどのような技を出そうとも全て鉄の柱に吸収されてしまう。つまりは雷の属性が使えないということだ。
けれども手段が無いわけではない。琴未には新螺幻刀流という剣技が残っている。けれども接近できないとなるとそれすら出来ない。完全に手を封じられてしまった。
さすがにこの状況には焦る琴未。今までに無いほどに不利な状況に追い込まれている。それが分っているだけに心は焦るのだった。

そんな琴未が苦戦している頃。半蔵を相手にしていた閃華も苦戦していた。身体には数箇所の切り傷があり、血まで流れているがいずれも紙一重でかわしているのか深手は負っていない。
けれども追い込まれているのは確かだ。
まったくやっかいじゃのう。味方だった時はそう脅威には思わんかったが、こうして敵対するとまったくもってやりずらいもんじゃな。そんな事を思う閃華。
確かに半蔵とは過去に味方として一緒に戦った事もある。それで半蔵の能力については知っているつもりだったが、こうして敵対してみると思っていた以上にやっかいな事に気付かされた。
とにかく今は防御に専念せねばッ！
閃華の考えが終わらないうちに真横から突然現れた手裏剣を交わす閃華。空の属性を使っての飛び道具。これほどやっかいな物は無い。
なにしろ飛び道具なだけに反撃のしようがない。本体その者が来るならともかく、こうも不規則に遠距離攻撃を飛ばされてきては対

処するだけで精一杯だ。
しかも空の属性で上下左右、どの方向からでも飛んでくる。だからこそ手の内ようが無い。
閃華が手裏剣を全て避けきると再び殺気を感じる。龍水方天戟を腕に向けて突き出す。その矛先には龍水方天戟を両刀で受け止めた半蔵が居た。
半蔵が空の属性で空間移動させてるのは飛び道具だけではない。自分自身さえも移動できる。つまりは瞬間移動みたいな物だ。だからこそやっかいだと閃華も感じている。
半蔵はそのまま龍水方天戟を横に弾こうと力を込めるが、閃華としてもそんな事をされればやられるだけだ。お互いに力を込めあい拮抗状態となる。
このままでは埒が明かない思ったのだろう。半蔵は一旦距離を取った。その間に閃華は一気に反撃に出る。
「龍神檄」
龍水方天戟に巻き付いている水龍が離れると巨大化して閃華の周りを旋回する。そして半蔵が現れると一気に向かって行き牙を突きたてた。
反撃を予想していただけに龍神檄を受け止める半蔵。けれども質量からして違いがありすぎる。半蔵は巨大化した水龍と共に飛びまわる事になってしまった。
その間に周りを確認する閃華。この攻撃は半蔵への反撃は無く、現状を確かめるための物だ。
まずはミリア、こちらは完全に遊ばれている状態ではないが完全に手玉に取られている。さすがにミリアの師匠だけの事はあるのだろう。完全にミリアは反撃にすら転ずる事が出来ない。
次の琴未。こちらも雷の属性が封じられていて接近戦に持ち込もうとしているのだが、咲耶がそれを許さず。遠距離からの攻撃で翻弄されている。
そしてシエラ。こちらは互角といえるだろう。けれども翼の属性

は空中でのスピードはトップクラスである。それに相手の属性が翼とはとても思えない。それなのに互角とは言えないだろう。
シエラとしてもなんとかスピードで誤魔化しているだけで押されている事は確か。
確かに今は昇のエレメンタルアップが掛かっていない状態だ。それでもここまで不利になるとは想定外だ。これは閃華達ですら予想してなかった、何かがあるのではないか。閃華はそう考えると最悪の事態に備えるために連絡を取らざる得なくなってしまった。

その頃、昇とフレトはお互いに睨み合いを続けていた。
「どうやら精霊達の戦いはこちらが有利のようだな。そろそろ諦めて精霊王の力を渡したらどうだ？」
有利を感じているフレトは昇に降伏を勧告するが、そんな勧告に素直に従う昇ではない。なにしろ昇にはまだ手が残っている。
「残念だけどそれはできない。それが……僕の答えだ」
言葉の終わりと同時に射撃を開始する昇。当然フレトは避けるが今はそれで、精霊達の戦いが不利であるからには使わざる得ない。なんとしてもエレメンタルアップを。
フレトが体勢を立て直す前に意識を集中させる昇。けれども昇はすぐに吹き飛ばされてしまい、集中させていた力も四散してしまった。
「悪いがエレメンタルアップを使わせる訳にはいかないんでな。今は大人しく俺の相手でもしてもらおうか」
「なんで……僕の能力を」
昇はフレトがエレメンタルアップの能力者で有る事を知っているのが不思議なのだろうが、フレト側としてはそうは思ってはいなかった。なにしろ昇の能力をバラした者が昇の陣営にいるのだから。
昇としてはその事を完全に忘れているのかフレトはミリアを親指で指しながら思い出させる。

「あのちびっ子が先程言ったじゃないか、お前の能力がエレメンタルアップだと。精霊の力を限界以上に引き出す能力。噂には聞いていたが実在しているとは驚きだったぞ」

それはフレトがアルマセットで自分の武器と防具を作り出した時だ。その時にミリアは誤って、いや、自覚すらないままに昇の能力を教えてしまっていた。

その事をやっと思い出した昇は奥歯を噛み締める。自分の能力だけがバレているだけでは完全に不利だ。なんとか相手の能力だけでも掴まないと。そう考えた時だった。フレトは笑みを浮かべた。

「まあ、こちらだけ情報を貰うのもあれだからな、お前にも俺の能力を教えておいてやろう。ただし……その身体でな」

未だに地面に伏せっている昇に杖を向けるフレト。そのまま力を集中させると風が一塊になり昇に向かって放たれた。

なす術も無く風の塊を身体に受けた昇は再び吹き飛ばされて地面を転がる事になってしまった。

「俺の能力は風の放出型。風のシューターというらしいがな。だがそれだけでは無いぞ。俺のエレメンタルウェポンたるマスターロッドとエレメンタルジャケットのウィンドウマントにはまだそれぞれの能力があるがな。それは自分で確かめるんだな」

エレメンタルウェポンにエレメンタルジャケット？　聞き慣れない言葉に昇はその言葉が何を指しているのかに数秒を要した。つまりは昇達のような能力者が使っている武器と防具の総称をそういうのだ。

エレメンタルという言葉が付くのはやはり精霊との契約が元になっているからのだろう。何にしても、フレトの杖とマントには何かしらの仕掛けがまだあるようだ。

その仕掛けすらも突破して昇はなんてしてもエレメンタルアップを実行しなくてはいけない。

しかも辺りを見回すと全員が不利な状況だ。中途半端なエレメンタルアップではどうしようもない。完全に近いエレメンタルアップ

を掛けないとどうしようもないだろう。
どうやってそのような状況を作ろうか、昇はそう考えようとするがフレトはそんな暇を与える事無く攻撃を仕掛けてくる。
「さあ、いつまでそうしているつもりだ」
もう一度、風の塊を放射するフレト。昇は横に転がりながら回避すると何とか立ち上がる。そんな昇にフレトはもう杖を向けていた。
「紅蓮の炎、その身を矢と化し、眼前の敵を撃て」
フレトの言葉が終わると周りには六本の炎で出来た矢が出現した。それが一斉に昇に向かって放たれる。
昇は二丁拳銃を構えると照準を合わせる。
数は六本、それだけなら的確に落とせる。そう確信すると昇はトリガーを引く。
「アイスシュート」
銃口から小さな氷柱が発射されると昇に向かってきた炎の矢を全て射落とした。
「なら次はこれだな」
今度は昇にではなく地面に杖を向けるフレト。そして昇を中心に円を描く。
「吹き上がれ、大地の咆哮」
昇の周囲にある大地が光ると一気に噴水のように吹き上がる。コンクリートと土砂を巻き上げながら昇もろとも上に押し上げて、それが治まると再び昇を大地へと叩き付けた。
「くっ、どうなってるんだ。なんで……幾つもの属性を」
確かに複数の属性を共有する能力もある。けれどもフレトの能力はそのどれにも属していない。そうなるとこれがフレトの言っていたマスターロッドの力なのか。昇はそう推測する。
相手は風のシューター。風以外の属性は使えないはずなのに、それなのに炎や大地を操って見せた。そうなるとあの杖がやっていることなのか。昇の視線が自然とフレトの杖に向けられる。その事にフレトも気付いたのだろう。わざわざマスターロッドを前に突き出

してきた。
「その通りだ。全てはこのマスターロッドの力だ。まあ、それなりに条件もいるがな。今の俺に属性は関係無く幾つでも操れるぞ」
それは昇も同じだ。昇のようにレアな属性には他の属性に縛られる事無く使えるものが有る。けれどもフレトのはそれとはまったく違った物だ。
なにかしらの条件を満たす事で他属性を使用する事が出来る。これがマスターロッドの正体だろう。
けどその条件は分らない。分らなければ封じようも無い。封じなければエレメンタルアップを使う機会が得られない。
そのうえ数は丁度五対五、援軍など期待するどころか自分達が有利に戦う事すら困難な状況だ。それは昇にも言えることで、この戦いに集中しなければやられるだけだ。
なんとしてもそれだけは避けないといけない。なにしろ昇が負けてしまっては全てが終わってしまうのだから。
なんとか……どうにかしないと……。そう昇は思うが打つ手が未だに見付からない。シエラ達も苦戦している今ではどうする事も出来ない。そのフレトは絶対にエレメンタルアップを使わせる隙は作りはしないだろう。
そんな絶対的な不利な状況中で昇達の戦いは続いていた。

第八十三話　絶対不利（後書き）

そんな訳でお送りしました八十三話ですが……皆さんおいつめられてますね。まあ、なんにしても昇のエレメンタルアップが無い状況かつフレト側にも何かがありそうな感じがしますからね～。皆さん追い詰められてましたね～。

さてさて、バトルはたぶんもう二話ぐらい続くと思いますよ～。いや～、今回でもう少し話を進めたかったんですけど、ページ数を考えると、どうも分けないといけなくなってしまいました。

そんな訳で次回はフレト側の秘密が暴露される……かもしれません。まあ、予定ですけどね。……予定は未定（ボツ）

そんなエレメですが、どうかこれからもよろしくお願いしま～す。という事でそろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、どうやら風邪を酷くしたらしい葵夢幻でした。

第八十四話　完全契約

何か変じゃ。閃華は半蔵の攻撃を受け流しながらも、そんな風に感じていた。

確かに精霊も成長するし、私との間には四百年ほどの差があるんじゃが。どうしてこんなにも強さに差が出るんじゃ。スピードだけではない、力どころか反応速度まで押されておるとはのう。これは絶対に何か変じゃ。

左右から飛び出してきた鎖鎌を薙ぎ払うと閃華は後ろから斬り付けて来た半蔵の二刀を受け止める。

閃華としてはそのまま弾き飛ばしたいのだが、半蔵の力が勝っているのか徐々に押され始めてしまった。

しかたなく閃華から横に受け流して一回転しながら龍水方天戟を振るうが、半蔵はすでにそこには居なかった。

この反応スピードと良い。これはまるで……そうかっ！

上空から放たれた手裏剣を後ろに跳んで避けると半蔵が居ると思われる地点からかなり距離を取る。

「今回の契約者、そなたにそれほどの事を思わせる器を持っておるのか？」

この距離だと半蔵の属性も届かないのだろう。攻撃が来る事無く半蔵が姿を現した。

「無論」

完結に答える半蔵。そんな半蔵に閃華は平静を装いながらも返事を返す。

「くっくっくっ、相変わらずじゃのう。それにしても四百年じゃ、もうこの世界に飽きたのか、それとも別の理由があるのかのう？」

「……」

閃華の問い掛けに半蔵はすぐには答えなかった。ただ閃華からの攻撃が無い事を察したのか空を軽く見上げた。

「家康様に仕えてから四百年。この世界の人物も随分と衰退した。最後の主としては今の若殿が最適だ」

「なるほどのう、じゃから完全契約をした訳じゃな」

言葉ではなく頷く半蔵。どうやら閃華の言ったとおりのようだ。

契約にも幾つかの種類がある事は以前にも話した事を覚えているだろうか。閃華の言った完全契約もその契約の一つだ。

「なるほどのう、それでは完全にこっちが不利じゃな。なにしろ完全契約じゃからのう」

言葉にしながらも閃華は別の事を考えていた。

今回の戦いはまったくと言って良いほど勝機は無いようじゃ。ここは一つ撤退するしかないじゃろ。

すでに勝つ事を諦めた閃華。閃華がそう思わざる得ないほど完全契約はやっかいなのである。

完全契約とは服従契約や主従契約とは大きな違いがある。それは精霊の本体であるエネルギーの結晶体を差し出すことだ。

これは契約者が死ねば精霊自身も死ぬ事になる。他の契約なら負けても契約が取り消されて実体化が解けるだが、完全契約は負けた時点で死を意味している。

それだけのリスクを負っているのだから、それなりの見返りもある。それが精霊界と同じだけの強さを持てるということだ。

完全契約は他の契約とは別とされている。それは完全契約だけが持つ特色にもよるが、他にも特質を持っているからだ。

他の契約だと実体化した時点で精霊界での強さを失ってしまう。正確には動きが制限される事になるからだ。これは他世界に実体化した時の影響で本体たるエネルギーの結晶体は精霊世界にあるため、どうしても本体との連携が取れずに動きに制限を設ける事になってしまう。

だから精霊世界ほどの強さを持てなくなる。とは言っても少し弱くなるだけで、そんなに戦闘を及ぼさないのだが、弱くなる事は確かだ。

力、スピード、反応速度、その他の能力がそれぞれ少しずつ落ちる事になる。それでも精霊も成長するから契約後の修行次第で元の強さを取り戻せるのだが、相手も同じような事をしていたら意味は無い。

つまり完全契約とは精霊界と同じ強さを持つ事が出来、他の契約は多少能力が落ちる事になるが死ぬ事は無い。これだけの違いだが、実際に戦ってみるとかなりの違いが出てくる。

それに閃華には四百年も封印されていたブランクがある。その間に半蔵もそれなりに修練を積んで強くなっているだろう。そのうえ完全契約である。個人の力としては完全に勝ち目は無い。

「他の精霊達も完全契約なのかのう？」

もし相手が完全契約をしていれば確実に昇達は不利だ。それに相手は服部半蔵という知っている人物だ。ここは変にカマをかけるより直接聞いた方が効果的だと閃華は判断したようだ。

そして閃華の思い通りに半蔵は言葉ではなく首を縦に振った。

まずいのう、全ての精霊が完全契約となると昇のエレメンタルアップを最大限に使わないと勝ち目は無いんじゃがな。数では互角じゃからのう、肝心の昇までも本気で戦わねばならぬ相手となると、こちらにエレメンタルアップをかける余裕など持てんじゃろうな。

閃華の判断は正しいといえるだろう。ただでさえ戦力は拮抗しているのに相手には完全契約という強みがある。なのにこちらは昇のエレメンタルアップを封じられている状態となると打つ手が無い。

どうやら最悪の事態を想定しておいてよかったようじゃのう。閃華はそう感じずにはいられなかった。

シエラの提案で最悪の事態を想定して準備だけはしておいたのが正解だったのを痛感する閃華。こうなってしまっては戦い続けるだけで追い込まれるだけだろう。ここは一つ逃げの一手を打たなければいけない。

けれどもそれには目の前の半蔵をどうにかしないと手の内用が無い。もう余裕を残している事が出来ないと判断した閃華は一気に勝

負に出る。
　龍水方天戟を地面に付きたてるように縦に構えると地面から水のようなオーラが一気に噴出し、閃華が力を解放した事を示していた。
　その事に半蔵の眉が少しだけ動いた。半蔵も閃華の事を知っている。ここでこのような無謀とも言えるような行動を取る事は閃華は絶対にしない事も知っている。だから何かある。そう思うのだが今は先手を打つより様子を見たほうが良い。何かしらの罠の可能性があるからだ。
　そう半蔵に思わせるのも閃華の手だった。お互いに知っている仲でだからこそ下手な探りあいをしてしまう時がある。閃華はそれを利用したのだ。
　そして閃華は集めた力を一気に解放する
「龍水舞闘陣！」
　龍水方天戟から離れた水龍はその身体を巨体化させると閃華の周りを守るようにとぐろを巻く。
　半蔵はすぐさま移動できるように空間を斬り裂くが、それと同時に閃華は龍水方天戟を振り下ろした。半蔵に一気に向かっていく水龍。斬り裂いた空間に半蔵が飛び込み、水龍もそれに続くが、水龍の頭が入っただけで空間の入口は閉じられてしまった。
　水龍の頭は半蔵が作り出した空間の中に取り残されて消滅してしまったのだが、残っている本体は頭を再生させると再び姿を現した半蔵を目指して突き進み、その牙を突きたてようとするが、半蔵に受け止められてしまった。
　さすがの半蔵も連続で空間移動は出来ないようだ。少しだけ時間がいるのだろう。その間に水龍に迫られてしまったのだから対応するしかない。
　これで半蔵は水龍の相手をしなくてはならなくなった。そのうえ龍水舞闘陣は自動攻撃を兼ねている。だから閃華は個別に行動が出来るわけだ。閃華の攻撃に注意しつつも半蔵は水龍の相手をしなくてはならないのだが、肝心の閃華からの攻撃は無かった。

その閃華は最善の手を実行するために別行動へと掛かっていたのだった。

「桜炎（おうえん）」

炎の花弁で形成された桜が琴未を目掛けて迫ってくる。さすがにこれは避けるしかない琴未だがすぐに反撃に移る。

「雷撃閃」

雷閃刀を振るうと幾つもの雷が咲耶に向かって行くが、その全てが先程作り出された鉄の柱に吸収されてしまった。

咲耶はすでに鉄柱から離れているのだが、雷の属性を吸い込むように出来ているのか、琴未が放つ攻撃は全て鉄柱へと吸い込まれてしまった。

「そんな攻撃は無駄ですよ」

余裕の咲耶は鉄柱の付近を移動しながら攻撃を繰り出していた。さすがにこれには琴未も打つ手はない。どうにかして接近戦に持ち込まないと。そう考えた琴未の頭にある考えが浮かんだ。

「お返しです、雷炎」

鉄柱から琴未の雷で溜まったのだろう、一筋の雷となって琴未に向かって放たれる。これも避けるだろうと咲耶は思ったのだが、琴未は避けようとしなかった。

―新螺幻刀流　二ノ太刀無用―

雷閃刀に出来るだけの雷を溜めると真正面から咲耶の放った雷に雷閃刀をぶつける。咲耶はこれを予想していたのか、ぶつかり合った雷と雷閃刀は一気に燃え上がり、琴未を炎が包み込む。

「終わりですね」

さすがにこれでは琴未が持たないと思ったのだろう。それはそうだ、雷だけでもそれなりのダメージを与えたのに、その後にこれだ

け燃え上がれば無傷ではいられないだろう。
だからこそ咲耶に余計な余裕が生まれた。
「雷神閃」
突如、炎の中から雷光を生まれ周囲を照らすと、それは一気に放たれた。咲耶にではなく、鉄柱付近の地面に向かってである。
放たれた雷神閃は鉄柱に向かおうとするが、その前に地面に激突して一気に土砂を巻き上げた。
「くっ！」
さすがにここまでの力が残っているとは思っていなかった咲耶は油断を付かれた。吹き荒れる爆風と土砂で動きが完全に止まってしまった。
けれどもそれで終わる咲耶では無い。すぐに桜華小刀を構えると横に振るう。
「風薙（かぜなぎ）」
桜華小刀を振るった方向と同じ方向へと突風が突如として吹き付ける。どうやら咲耶が風を操ったようだ。これで視界を良くしようとしたのだろうが、それは琴未に自分の位置を知らせるのと同じようなものだった。
土砂と突風が過ぎ去ると琴未はすでに咲耶の目の前に迫っていた。先程の攻撃でかなりのダメージを負っているものの雷閃刀だけは決して手放してはいない。
「ッ！」
咲耶に声を上げる隙すらも与えずに琴未は一気に攻勢に出る。

―新螺幻刀流　三段斬り返し―

三段刺突からの左右への斬り上げ、咲耶は最初の刺突は全てかわしたが、左右の斬り上げは桜華小刀で受け流すしかなかった。これで咲耶は完全に動きを封じられたも同じだ。これだけの攻撃の後にすぐに動けるはずは無い。

けれども攻撃を仕掛けた琴未は逆である。ここぞとばかりに一気に仕掛ける。

―新螺幻刀流　二ノ太刀無用―

左足を力一杯に踏み込むと振り上げた雷閃刀を一気に振り下ろした。この技は初太刀に最大限の威力を持たせる事が出来る技だ。だから咲耶の桜華小刀では受ける事も受け流す事も出来ない。

これで決まりよ。琴未もそう思っただろう。けれども忘れてはいけない。先程の閃華と半蔵の会話を。フレトと契約した精霊は全て完全契約である。いくらエレメントの能力だとしても、その力は通常の精霊契約と同じ位の強さしか得る事が出来ない。

つまりここでも完全契約の差は出るという事だ。

雷閃刀が咲耶をとらえる寸前だった。咲耶は素早く呟く。

「樹幕」

咲耶の足元から木の根が一気に延びてくると咲耶の前に壁を形成する。その動きは早く、咲耶は一歩もそこから動く事無く、雷閃刀の一撃を受け止めてしまったのである。

「なっ！」

さすがに驚きを隠せない琴未。これも完全契約による差というものだ。技の発動時間短縮。咲耶の場合は通常の契約より攻撃の発動が極端に短くなる。だからこそ、この短時間で琴未の攻撃を完全に防ぐ事が出来た。

それだけではない。壁となった木の根はそのまま雷閃刀に絡み付き、そのまま琴未の動きすらも止めてしまった。

「さあ、今度こそ本当に終わりですね」

桜華小刀を壁の向こうにいる琴未に向ける咲耶。そして静かに呟いた。

「樹刺（じゅし）」

木の根から枝分かれしたかのように根が増えると針のようになり、

琴未に向かって一気に伸びて行った。
やられる！
思わず目を瞑り体中に力を入れて痛みに対処する体勢を取る琴未だが、針と化した木の根が琴未に届く事は無かった。
「琴未、大丈夫じゃったか」
閃華の声が聞こえると琴未はやっと瞑っていた瞳を開いた。そこには咲耶が作り出した樹の針と壁を全て斬り崩した閃華の姿があった。ただ一つだけ変わっている事と言ったら閃華の龍水方天戟に水龍が巻き付いていない事だけだ。
樹の壁が切り崩されて雷閃刀も解放されたので、その場から数歩下がる琴未に閃華は呟く。
「ここは撤退じゃ、どうやっても勝ち目は無いからのう。じゃから退くぞ」
さすがに驚きを隠せない琴未。精界は内からの攻撃ではまったく破壊する事が出来ないのは閃華も良く知っているはずだ。それなのに逃げるなどという事が出来るわけが無い。
「一体どうやって逃げるつもりなのよ」
そんな琴未の問い掛けに閃華は周りの状況を確認しながら答える。
「逃げる準備はしておいた。後はそこに行くだけじゃが、その前にあの敵をどうにかせんといかんようじゃのう」
咲耶の事を言っているのだろう。確かに逃げるにしても咲耶をどうにかしないと逃げようが無い。背を向けた途端に攻撃されてはどうしようもないからだ。
だからこそ咲耶をどうにかしなければいけないのだが、琴未にはその他にも気がかりがあるようだ。
「シエラ達はどうするのよ。まさか私達だけ逃げる訳にも行かないでしょ」
「シエラは自分で何とかできるじゃろうからミリアの救援に行ってもらってる。昇も自分で何とかしてみるそうじゃ」
「……そう」

短く答える琴未。状況を把握しただけに呑気にしてられないのは分っている。すぐに咲耶の反撃が来るだろと思っていると、思っていた通りに咲耶はすぐに反撃に転じてきた。

一塊になり琴未達に向かってくる炎。それを避ける寸前に全てを把握している閃華は一気に琴未に指示を出す。

「あの鉄柱は私がなんとかする、じゃから琴未は逃げる隙を作るんじゃ」

それぞれ反対方向に炎を避ける閃華と琴未。閃華は着地すると一直線に咲耶が立てた鉄柱へと向かっていく。その間にも琴未は雷閃刀の剣先に雷の球体を作り出していた。

どっちを先に叩くか。咲耶は一瞬だけ迷ったが、すぐに判断を下した。鉄柱が存在する限り琴未の属性は意味を成さない。そうなるとこちらに向かってくる閃華に対して対処すべきだ。

桜華小刀を閃華に向ける咲耶

「桜」

桜の花弁が一直線になって閃華に向かって突き進む。けれども閃華は咲耶へと突き進むスピードを緩めたりしない。そのままの勢いで突っ込んでいくだけだ。

このままでは両者がぶつかり合った衝撃でダメージが大きくなるのは閃華には分っているはずだ。それなのに突っ込んで行くという事は何かしらの手段があるのかもしれない。

そしてそのまま両者はぶつかり合うと思われたのだが、閃華に向かっていた桜の花弁は閃華に当たる寸前に四方八方へと散らされている。

「なんでっ！」

さすがにこれは驚かされる咲耶、まさかこんな事態になるとは思っていなかっただろう。せいぜい閃華が避けた先に次の攻撃を仕掛けようとしていたのだが、こうなってくると対処法を変えなければいけない。閃華が辿り着く前に。

その閃華はというと龍水方天戟を前に出し、自らの属性で水を作

り出すと矛先で高速回転をさせた。まるでドリルで桜の花弁を掘るかのように突き進んでいた。

さすがにこの方法だと閃華自身も無傷では済まないが、今は戦う事よりも次の手を打つために短時間で事を進めなければいけない。だから閃華はそうやって咲耶の攻撃を突破すると、咲耶の眼前へとその姿を現した。

さすがにこの短時間でここまで距離を詰められては咲耶はどうする事も出来ない。精々、閃華の攻撃を受け止めるために桜華小刀を構えるだけだ。

そんな咲耶に閃華は龍水方天戟がしなるほどの一撃を加えて咲耶を吹き飛ばし、すぐに次の行動へと入った。それは咲耶が作り出した鉄柱。これがある限り琴未の属性は無効かされてしまう。

閃華は鉄柱の群れに走り込むと次々と鉄柱を切り倒していった。そして全ての鉄柱を切り倒すと琴未に向かって大きな声を上げる。

「今じゃ、琴未！」

その頃の咲耶は閃華の一撃からようやく立ち上がったところだったが、目にした光景に驚愕せざる得なかった。

なにしろ作り出した鉄柱は全て切り倒されてなくなっており、琴未の雷閃刀は咲耶に向けられているからだ。

「雷神閃！」

咲耶に何も考える隙を与える事無く攻撃を放つ琴未。鉄柱がなくなった今では琴未の属性を邪魔する物は無い。だからこそ最大限の攻撃を放った。

けれども相手は咲耶である。それに閃華の攻撃も上手く受け流していたのか、あまりダメージは残っていない。

すぐに桜華小刀を地面に突き刺す咲耶。すぐに力を集中させると琴未の攻撃が届く前にこちらの防御を完成させる。

「鉄壁」

咲耶の前に鉄で出来た壁が地面から盛り上がり、完全に咲耶の姿を覆い隠す。そのうえ先程作り出した鉄柱のように雷の属性を地面

に流し込む効果があるのだろう。
琴未の雷撃閃がまともにぶつかると幾つもの細い雷が四方八方に飛び散ると、その後は何事も無かったかのように雷は消え去ってしまった。やはり雷吸収の効果があったようだ。
このまま相手の出方を窺っても良いのだが、あえてこちらから仕掛けて流れを変えるのも悪くない。咲耶はそう判断すると先程作り出した鉄壁の上に跳び乗ると琴未が居た方向へと桜華小刀を向けるが、そこには琴未はいなかった。
すぐに周りを警戒する咲耶。けれどもどこからの殺気も気配もしない。その事に戸惑いつつ、少し考えるとようやく答えが出たようだ。
「……逃げの一手に出ましたか」
してやられたとは思っているが、ここは精界の中。しかも内側にはラクトリーが精界を展開している。ラクトリーを倒さない限り、この精界内から出る事は不可能だ。だから焦る事は無い。
この状況では狩るのは咲耶で逃げるのは琴未なのだか、そう考えれば焦る状況では無いと判断したのだろう。
咲耶は鉄柱の上から静かに下りると琴未達を探索するためにゆっくりと歩き始めた。

琴未と閃華が逃げるために奮闘していた頃。昇もフレトから逃れるために戦っていた。
お互いに遠距離攻撃の武器を手にしてるな～。それに、あのマント、あれは物理的な物を受け流す効果があるみたいだね。だから下手な攻撃はあのマントの所為で出来ないか。さて、どうやって逃げる隙を作り出そうかな。
昇は迷っていた。お互いに似たような戦い方をしているものだから逃げ方に迷いが生じていた。フェイントを掛けても良いのだが、下手なフェイントで相手の射程距離内にいると撃たれる事は確かだ。

そうなると打つべき手は限られてくるだろう。
やっぱり強力な一撃を入れてその隙に逃げるしかないかな。シエラ達も手が一杯だろうし、ここは何とか自分の力でどうにかしないといけないか。
そうは思うのだが良い案が浮かばない。いっその事エレメンタルアップを使って救援を待つとも考えたのだが、フレトはそんな隙を与えてはくれないだろう。
シエラ達にはエレメンタルアップは使えないか……あっ！　じゃあ、自分にエレメンタルアップを掛けてみようかな。
昇は前にそのような事を試した事がある。それは昇が自らの武器を作り出そうとした時の事だ。その時は強大な力が溢れ出て閃華達に強制的に止められたが、今なら出来るかもしれない。それに力のコントロールも出来るようになってきている。そんなに大きな力でなく、相手の目を晦ます程度の力ならいけるはずだ。
昇はそう考えるとフレトの攻撃をかわしながら銃口を向けて連射する。
……でも、さすがにこの土壇場では危険すぎるか。ここは無難に……属性は……光。今まで使った事は無いけどいけるはずだ。これでなんとかするしかない。
昇はそう決断するとすぐに行動へと移る。
「激しき咆哮、その閃光の如く敵を貫け」
フレトのマスターロッドから数本の雷が発射されるのと同時に昇は銃口を少し前の地面へと向けた。
「フォースバスター！」
銃撃ではなく砲撃とも言える威力のある力が昇の銃口から発射されて地面をえぐる。昇はそうする事で地面を押し出し、壁を作り出してフレトの雷を防いだ。
確かに地の属性に属している地面なら雷も吸収できるだろう。
そんな昇の作り出した土の壁にフレトはマスターロッドを向けた。
そして杖先に風の塊のを作り出すと発射。昇が作り出した土の壁を

完全に破壊してしまった。
もちろん昇もいつまでも壁の影に隠れてなんていない。フレトの攻撃を防ぐとすぐに壁の外に移動していた。幸いな事に土の壁を作り出した時に舞い上がった土砂が昇の姿を隠してくれたようだ。
土の壁を壊した先に昇が居ないとわかったフレトは杖を振るうと突風が吹き、またしても舞い上がった土砂を全て吹き流してしまった。
そしてその事が昇に一つの事を確信させるのだった。
そうか、相手は風のシューター。風の属性は自由に操れるけど、他の属性を使う場合には呪文が必要なんだ。だから必ずどんな攻撃をするかを言葉にしてから攻撃してるんだ。　それがマスターロッドの能力なんだ。
確かにその通りかもしれない。昇のようにレア能力者の属性無視でも無い限り、幾つもの属性を使う事など出来はしない。それを可能にするには武器にその能力を付加させるしかない。けれども無条件でそんな能力を付加させるのは不可能だ。だからこそフレトのマスターロッドは他の属性を使う時には前置き、つまり呪文が必要になる。
昇は今までの戦いでそう確信していた。そうなると昇は軽い笑みを浮かべた。どうやらここから脱出する手段を思いついたようだ。
そうとなるといつまでも時間を持て余す事は出来ない。なにしろ一刻も早く昇はここから逃げないと行けないのだから。
すぐにフレトに向かって銃口を向ける昇。そんな昇にフレトは風の塊を発射してくるが、昇はそれを避けながらも引き金を引く。
「アイスシュート、連射！」
銃口から幾つもの氷の弾丸が発射されてフレトの足元を狙う。確かにこれならフレトをその場で文字通りに足止めが出来るだろうが、そうやすやすと昇の手に乗るフレトではない。
「燃え上がれ炎の龍、我が身を包み込むように守護せよ」
マスターロッドが一気に燃え上がると周囲を明るく照らしながら

炎の龍へと変化する。
今だっ！
昇はそう確信すると銃口をフレトへと向けた
「サンライトシュート」
銃口から発射された光球は真っ直ぐにフレトへと向かっていくのだが、フレトの周囲にはすでに炎の龍が煌々（こうこう）と辺りを照らすほどの炎をまといながらまとっていた。
そんな炎の龍と昇の弾丸がぶつかり合った時だ。昇の放った弾丸は一瞬にして周囲に眩しすぎるほどの閃光を生み出した。
「くっ！」
さすがのフレトも自ら作り出した炎の光と昇が放った閃光の弾によりその視界を塞がれざる得なくなった。
よし、この間に。昇はすでにフレトに背を向けていた。昇は自分が放った弾丸が閃光弾と同じ威力を持っている事を知っている。まともにフレトを見ていたらその場から動けなっただろう。
だからこそ、弾丸を発射した直後にはすでにフレトに背を向けて閃光に備えていた。そして周囲が一気に明るさをますと一気に駆け出してその場を後にした。

閃華が短い文章で指定してきたポイント。詳しい事は書かれていなかったが、どうやら逃げるしかない事だけは分った。だから昇もこうしてフレトを振り切って逃げ出してきたわけだ。
そこはかなり分りずらい林の奥だった。昇も誰か居ないか探している途中に後ろから口を塞がれて薮へと引きずり込まれた。敵の襲撃かと驚いたが、どうやら閃華がやったらしい。口に人差し指で喋るなという仕草をするとすぐに昇を解放した。
そこにはすでに全員が揃っていた。一番酷き傷を負っているのは閃華だ、次に琴未にミリア。シエラだけが大した怪我は無いようだ。
全員の無事を確認して一安心する昇。そして一息付く暇もなく閃

華は一気に喋りだした。
「とにかく詳しい事は後じゃ、ここでは説明している時間はないからのう。じゃが、このまま戦っていても勝てない事は確かじゃ。じゃからここは撤退する」
「けど、ここは相手の精界が邪魔になるんじゃ？」
当然の質問をぶつける昇。精界は外からの攻撃には弱いが、内部からの攻撃はかなり強固に出来ている。つまりラクトリーの精界から脱出するのは不可能に近い。
そんな昇の疑問を閃華の代わりにシエラが答えた。
「念のために準備だけはしておいた。後は時間を合わせて一気に突破するだけ……だけど」
何か気がかりでもあるのだろうか、シエラは言葉を最後だけ濁した。その意味を閃華だけは気付いていたのだろう。あえて話し出した。
「あれはしかたないじゃろ。あんな事をする精霊などほとんどおらんからのう。じゃから分らなくてもしょうがないじゃろ。じゃから気にすることは無い。それよりもじゃ、まさか本当にこんな手を使う事になるとはのう」
軽く溜息を付いてみせる閃華。閃華なりにシエラを気遣ったつもりらしいが、他の三人は首を傾げるばかりだ。どうやら何の事か分らないのだろう。
そんな三人に閃華は軽い笑みを浮かべると、すぐに真剣な顔に戻り空中にキーボードが出現した。
それをそうさする閃華、そうするとすぐにモニターが現れると与凪の姿も一緒に映し出した。
「まさか本当に私が出る事になるとは思いませんでしたよ。いったい何があったんですか？」
画面の中に居る与凪は説明を求めるが閃華は説明をしている時間が無い事を告げる。
「とにかく今は一刻も早くここを離れる事じゃ。他の事は全て後回

しじゃ」
　閃華の面持ちから只事では無い事を察したのだろう。与凪も真剣な面持ちになりキーボードを操作し始めた。
「そこから一番近い位置だと……ここですね。皆さんここに移動してください」
　用件だけ言うとモニターは特定の箇所を示した画面へと切り替わった。現在位置から大して離れては居ないが、精界の一番端には違いない。そこで何をするのか昇は聞きたい気持ちになったが、閃華やシエラ、それに与凪の様子からすると只事ではない事は分っている。
　今は脱出する事に集中した方が良さそうだと判断した。幸いな事にミリアもかなり傷ついており騒ぐ元気が無いのだろう。まあ、それ以上に師匠であるラクトリーと再会した事がよりショックだったのかもしれない。
　なるべく物音を立てる事無く移動する昇達。こうしている間にもフレト達は昇達を探しているのだから少しでも早くここを抜け出さないといけない。
　そうして何事も無く。指定されたポイントに付くと閃華は再び与凪に連絡を入れた。そして与凪からの返事はそこで少し待っていて欲しいとの事だった。
　ここに隠れている間にもフレト達に見付かるのではないか、そんな不安の中で昇は与凪の行動を待つ。何をするつもりかは分らないが、ここは与凪に任せるしかない。
　そう考えながら周囲を窺っている時だった。突如、精界の一部が爆発すると大きな穴を空けた。
「今じゃ、全員脱出するんじゃ！」
　大声で叫ぶ閃華。動けそうにないミリアをシエラが担いで、琴未は閃華に肩を貸しながらなるべく早く精界から脱出した。そして最後に昇が出ると、精界は修復されて再び元の形へと戻っていった。
「どうにか全員脱出できたようじゃな。じゃがまだ油断は出来んぞ、

もう少しだけここを離れるんじゃ」
　閃華の言葉に頷くシエラと琴未。この事で昇達がここから精界を脱出した可能性が高い事はフレト達も感じ取っているだろう。だからいつ精界を解いて追って来ても不思議は無い。今はともかく、この場所を離れて静かに話せる場所に辿り着くだけだ。
　その事を考えながら昇達は急いでその場所を離れていった。

「……精界の修復は終わりましたけど、そこから逃げた可能性が大きいですね。いかがいたしますか？」
　その頃フレト達も精界の爆発に気付いて昇達が逃げたのではないのかという考察を深めていた。
「こうなると逃げたと考えるのが一番だろう。まあ、無理に追う事も無いと思うがな」
　レットの言葉に頷くフレト。確かにそのとおりだろう。なにしろ精霊王の力はここにあり、フレト達が精霊王の力を解こうとしている限り昇達はそれを阻止するために、ここに来なければ行けないのだから。だから今は無理して追う事も無いとフレトは判断する。
　それと同時に昇達の事も聞いてみる事にした。
「お前達が相手にした敵はどうだった？」
　敵の情報が知りたいのだろう。確かにフレトとしてはそこが一番気になるところだ。その事に真っ先に答えたのがレットだ。
「とにかく頭の切れるやつだ。こちらの属性を理解するのと同時に戦闘場所を林の中に持っていきやがった。あれ程の障害物があると爪翼の属性だと動きがどうしても鈍るからな。だからこっちは頭の回転が速い奴だと思っていいだろう」
　レットの言葉にフレトは頷いて見せた。その次には珍しく半蔵が口を開いた。
「こちらは儂が知っている相手とは少し違っていました。四百年の間に何かあったのだろうと思われます。手ごわい事には変わりあり

ませんが、とにかく油断だけはしない方が良ろしいでしょう」
　半蔵の言葉にフレトは再び頷いて見せる。その次に咲耶が珍しく軽い口調で報告するのだった。
「私が相手にしたのは大した事がなかったですね。私の属性に翻弄されっぱなしで、救援がなかったら確実に仕留められてたと思いますよ」
　まるで半蔵が閃華を逃がした事を咎めているようにも聞こえるが咲耶にはその気は無いし、半蔵もそんな事は思ってはいない。
　半蔵が知っている閃華はあそこまでして逃げる隙を作るような精霊ではなかった。だから先程は四百年の間に何かが変わったと言ったのだろう。
　そして最後にラクトリーだが、ラクトリーはフレトですら驚くような事を言い出した。
「マスター、ここは一つ私を使者として送っては頂けないでしょうか？」
「……何を言ってる？」
　ラクトリーの言っている事が分らないのだろう。フレトは首を傾げるばかりだ。そんなフレトにラクトリーは笑顔で告げるのだった。
「私が相手にした精霊。あの子は私の弟子だった子でして、この近くに居るなら居場所は簡単に分るのですよ。なにしろあの子の精霊反応を追えば良いだけですからね～」
　そんな言葉を口にするラクトリーにフレトは驚きを隠せなかった。相手の居場所が分かるなら今度はこちらから仕掛ければ良いのではないのかと考えるが、そんなフレトの考えを見抜いているかのようにラクトリーの話しが続く。
「ダメですよ、下手に契約者同士が同じ場所に居ると戦闘になりかねません。ですから、私が使者となって全てを話してきますよ。まあ、それで成立するか分りませんが、このまま相手を待ち続けるよりかはマシになると思いますよ。それに話を聞かせれば相手も混乱するでようし」

まるで自信がありげでに話すラクトリー。確かにラクトリーの言うとおりに事が進むかもしれないし、こちらの立場を優位にできる可能性がある。

それなら下手に自分が出て行くよりラクトリーに任せた方が良いのではないのかと思うが……やはり少し不安なのだろう、フレトはワザとらしく溜息をついた。

「なんですか、その溜息は！」

わざわざ怒った反応するラクトリー。そんなラクトリーにフレトはジーっとした視線を送り、咲耶がフレトの言葉を代弁する。

「このままラクトリーに任せるのは危なっかしい、それだったら別の手を考えた方が良いのでは、それともレットに行ってもらった方が良いかもしれない。と主様は思っているようです」

「あなたはいつから超能力者になったんですか！」

方向性が思いっきり間違っている突っ込みをするラクトリー。そんなラクトリーに咲耶は笑うだけだ。その後も二人の漫才は続き、レットが仲裁に入るハメになる。

そんな漫談を横目にフレトは天を仰いだ。

セリス……お前の為に俺はわざわざこんな国にまで来た。これも全てお前の……ああ、そうだな、無駄に争う必要も無いな。……お前らしいな。

フレトはマントを翻すと四人に向き合う。

「ラクトリーの意見を採用する。これから使者となって全てを話して来い。和解できるようなら全権を委ねる。だが一切妥協する必要は無い、分かったな」

膝を付いて頭を下げるラクトリーは形式に乗っ取った返事をする。

「はっ、その命、確かに承知しました。全てはマスターのために全力を尽くします。では」

ラクトリーは精界を解くとモニターを出現させて、その場所が示している地点へと移動を開始する。

そんなラクトリーを見送るとそれぞれ普段着に戻ったフレト達も

自分達の寝床へと帰宅するのだった。
「帰るぞ、後の事はラクトリーの報告後に決める」
『はっ』
三人とも同じ返事を返してフレトの後ろを歩き始めた。そんな時だった。フレトは一度立ち止まると、もう一度天を仰ぐ。
……もう少しだ、もう少しでお前を……待っていろ、セリス。
再び歩き出した四人。こうして昇とフレトの初戦闘は終わりを告げるのだったが、昇の一日はまだ続くのだった。

第八十四話　完全契約（後書き）

さてさて、こんな形となった八十四話ですけど如何でしたでしょうか。完全に昇達は逃げの一手を打ちましたね～。まあ、それもしかたないでしょう。なにしろ通常の契約と完全契約ではかなりの違いがでますからね～。詳細は本文に書いたとおりですので、分からない人はもう一度読んでご確認くださいね。

さてさて、そんな訳で新キャラ達も出揃ったところで、いろいろと分ってきましたね～。半蔵は以前に閃華の回想で出しましたし。ラクトリーとミリアの関係はあんな関係があったんですね～。というか、二人は一体どういう生活をしていたのかちょっと興味が沸くところですね。まあ、暇があったらそのうち書いてみましょう。番外編として。

まあ、何にしても次回はいろいろな事が明らかになる……予定です。いや、ちゃんとラクトリーが動いてくれればね。与凪はちゃんと動くけど……ラクトリーが……不安だ！！！

そんな訳で次回で全てが明らかになるとは思えませんが、その事が切っ掛けで昇にもいろいろな変化が現れるでしょうね。そこいら辺を楽しんで頂けたら幸いです。

シエラ達も完全契約に立ち向かうべく何かするでしょうね。しかも琴未はもの凄く負けっぱなしだし。このまま引き下がる琴未ではないでしょう。だから琴未なりに何かを考えるはずです……たぶんね。

さてさて、そんな訳でそろそろお開きの時間となりましたので締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、なんかゆっくりと休みたいとか思い始めた葵夢幻でした。

第八十五話　お師匠様は神出鬼没

中央公園から南側に行くと閑静な住宅街が広がっている。昇達はその路地裏の更に分り難い場所までやって来て、やっと一息付いた。

精界を脱出してからというもの、人通りが少ない道を選んで進んできたが、さすがに精霊武具のまま走るわけにも行かないので精霊武具は精界を脱出した直後に解除していた。

だから今の昇達は普段着である。そんな昇達は物陰に隠れるかのように荒い息を整えていた。ダメージが大きかったミリアや琴未は立つ事すら出来ないようだ。そんな中で閃華は辺りを警戒し、シエラはモニターを出現させて何かをやっているようだった。

「それでいったい、何があったの？」

まだ少しだけ呼吸が整っていない昇が閃華に尋ねる。昇はフレトの相手をしていたから精霊達が完全契約を行っていた事をまだ知らなかった。

そんな昇に閃華は口に人差し指を指してみせる。どうやらまだ喋るなということらしい。確かに呼吸はまだ正常に戻っていないが、それ以上に閃華がそこまで警戒する事態に陥っていた事を昇はこの時にようやく気付いた。

それからしばらく昇達はそこで休憩していると昇はやっと平常の状態に戻った。先程の戦闘で疲れは残っているものの、大したダメージを負っていなかった昇だけに回復は早いようだ。

そんな昇に今度は閃華から話しかけてきた。

「どうやら追っては来ないようじゃな。さて、いろいろと面倒な事になってきておってのう」

「その話しには私も混ぜてくださいね」

突然上から声がすると、それは昇達の前に舞い降りてきた。

「与凪、やっと来た」

シエラが降りてきた者の正体を明かす。どうやら先程から与凪と

連絡を取っていたようだ。
　これで全員が揃ったと言えるのだが、昇はそれ以上に与凪の格好に気に取られていた。
　与凪は普段着ではなく、グレーの上着に胸当てをしており、タイトのミニスカートをはいている。靴は革靴のようで手には手袋の上に手甲をはめており、その手には白い弓が握られていた。
　セミロングの髪をなびかせながら始めて見る与凪の姿に昇は思わず見とれてしまった。そんな昇の視線に気付いたのだろう。与凪は自らの胸に手を当てるともう一方の手で弓を昇の前に差し出して見せてきた。
「そういえば私の精霊武具を見せるのは始めてだったわよね。これは私の精霊武具ファインレインボウ＜霧雨の弓＞よ。まあ、武器も防具も見たとおり攻撃的じゃないからね。だから私はサポート専門なのよ」
　わざわざそのような事を付け加える与凪。けど昇はまったく違う事を思っていた。
　確かに与凪さんも美少女と言えるほどだ。それがこんな精霊武具姿になると……なんか森尾先生が惚れるのも分るような気がする。
　そんな事を考える昇。確かに与凪も精霊であるからには容姿は整っている。優しい目元にセミロングの髪などは良く似合っていると言えるだろう。そんな与凪が突然目の前に現れて契約を申し込んできたんだ。これは昇でなくても即答してしまいそうだ。
　そんな与凪の姿を目の前に閃華はわざわざ咳払いすると話し始めた。
「さて、どうやら気付いておるのはシエラだけみたいじゃからな。最初は完全契約から説明するとするかのう」
　それから閃華の説明が始まった。まずは完全契約がどういうものかという事、それからフレトと契約している精霊が全員、完全契約をしている事。だからこそその場での戦いを避けて逃げに出た事。そしてこれから完全契約に対して自分達が立ち向かわないといけな

い事を話した。
「なにしろ相手は完全契約じゃからのう。個人の力では完全にあちらが上じゃ。こちらがどう足掻いても勝てんじゃろ。じゃからこそ、あやつらは最初から個人戦に持って行ったようじゃな」
そんな感想を述べる閃華。閃華がそう思うにしてもちゃんとした理由があった。
「翼の属性をもっておるシエラ達は自ずと空中戦になるじゃろ。半蔵の能力を知っている私も自分の傍から皆を離れさせた事じゃし。あのラクトリーという精霊が完全にミリアと琴未を分断しおった。そうなると契約者同士の戦いは必然となるようじゃな」
偶然に必然を重ね合わせえた状況になったと言えるだろう。その事は否めなくとも、相手はこちらを合流させる事はさせる気は無かったし、出来なかっただろう。なにしろ完全契約だから、相手を振り切って合流するのは至難の業だ。
「つまり相手は最初から個人戦に持って行く予定だったと、そういう事ですか？」
与凪が確認すると閃華は頷いてみせる。
こちらの情報が漏れていたとは思えない。だから当初の計画なら半蔵の能力で戦力の分散から個人戦に持って行こうとフレト達もしていた。けれども両者とも予定外な事が続きながらもフレト達の思惑通りになってしまった事は確かだろう。
「なるほど、確かにそうなると逃げるしか手は無いですね」
そう言ってわざわざ溜息を付いてみせる与凪だが、その顔には軽く微笑が出ていた。
「私まで引っ張り出される時は何事も無いと思ってんですけどね。まさかこんな形で役に立つとは思いませんでしたよ」
「私も与凪を使う事になるとは思っていなかった。けど、思い付きが大当たりを引いた事は確実」
「思い付きだったんですか！」
シエラの言葉に過剰に反応する与凪。普段傍観者だけにいじられ

る事に慣れていないのかもしれない。
　そんな与凪に昇は気付かれないように笑うと今後の事を話し始めた。
「それでこれからどうしよう。相手が完全契約なら個人戦だと完全に勝ち目が無いって事でしょ。そんな人達を相手にどうやって」
　昇としてはどうやってそんな人達を相手に戦えば良いのか分からなくなってきているのだろう。だからこそ迷いが生じるのだが、そんな昇に閃華は勢い良く昇を指差した。
「それは昇、お前が考えるじゃ！」
「結局僕ですか！」
　そんな漫才のような会話に先程までの重い雰囲気が一気に吹き飛んだ。けれども閃華としては冗談を半分、残りの半分を本気で言っている。
　こういう状況を打破すべき能力を昇は持っている。絶対的な不利な状況、そんな状況でも希望を探し出せる能力を昇は持っている。だからこそ閃華も昇を契約者として選んだ。決して面白半分で契約したワケではない。そこまでの資質を見抜いたからこその契約だった。
　まあ、そう見えなかったのは閃華の性格に寄る所が大きいだろうが、今はそんな事よりも今後の方策である。
　まずはそれを考えるべきだと昇が考えていると誰かのお腹が大きな音を立って鳴った。
「ミリアが空腹を訴えてる」
「すでに夕飯は済ましてきておるんじゃがのう」
　シエラと閃華がそのような感想を次々に口にする。その肝心のミリアはダメージがまだ抜けきっていないのか、地面に伏せっているままだ。シエラが確認すると気を失っているらしい。どうやらかなり手痛くやられたようだ。
　そんなミリアに昇は笑いを込めた溜息を付くと、今度は琴未の方へと目を向けた。琴未は地面に座っているものの先程から一言も喋

ってない。どうやらかなり沈んでいる。昇にはそう見えた。
だからこそ昇はわざわざ琴未の横に腰を下ろした。
「琴未、大丈夫？」
「……うん……平気」
どう見ても平気では無いだろう。今回の事は琴未にとっては完全に負けと言えるべき勝敗だ。悔しいのも分るような気がする。けれどもそれはしかたない事だと昇は思っていた。
「琴未、今回のはしょうがないよ。なにしろ完全契約なんて、そんな強さで個人戦に持ってかれたらに逃げるしか手が無いよ。だって完全契約なんだし、いくら琴未のエレメンタルでも完全契約と同じ強さなんて手にれられる」
「違うわよ！」
昇の言葉を遮り琴未が大声を上げる。その事で全員の視線が琴未に集まり、当の琴未は膝を深く抱えて顔を伏せる。
「今回の戦い……完全に遊ばれてたし、負けてた。それは強さだけじゃない、巫女としても、その役割としても完全に叩きのめされた。今の私は……もう巫女でも何でもない、普通の女の子でしかない」
確かに今回の戦いでは琴未は完全に翻弄（ほんろう）されていた。それだけではない、咲耶の言ったとおり巫女とは本来神に仕えるものであり、その神の言葉を伝えたり力を借りたりするのが本業とも言えるべき職業だ。
そんな巫女を完璧に再現したのが咲耶と言えるだろう。そんな咲耶と自分を比べてみるとどうしても劣って見えてしまう。琴未は剣術では確かに強さを持っている。エレメントでの属性も強力な部類だろう。
けれども今回の戦いでは強さでも完璧に負けていた。なにしろ雷の属性は完璧に封じ込められていたし、遠距離戦を仕掛けてくる咲耶に近づく事もほとんど出来なかった。閃華の助けが入らなかったら完膚なきまで叩きのめされていただろう。
それが分っているだけに琴未の負けたという自覚は強かった。

「巫女としても、戦力としても昇の力にはもうなれない。完全に負けた私はもう、昇の役には立てない、そう思うと……」

それからは言葉に出来ないのだろう。ただ琴未の嗚咽だけが小さく聞こえてくるだけだ。

そんな琴未の隣に今度は閃華が座り、肩に手を掛けて琴未を抱き寄せる。

「ただ一回負けただけじゃ。よいか琴未、本当に負けたと言う事は次に勝つ事を諦めた時に負けたということじゃよ。じゃから今は次に勝つために何をすべきか考えるんじゃ。大丈夫じゃ、なにしろ琴未は私が選んだ契約者じゃからのう」

「……閃華」

閃華の胸に顔を埋めて完全に泣き出してしまった琴未。そんな光景に誰も言葉を発する者はいなかった。

負けたという考えは琴未だけのものでは無い。シエラですらそう考えているほどだ。直接戦闘には参加していない与凪でさえ、今回は昇達の負けだと思っている。

それほど全員の敗北感は強かった。それはもちろん昇でさえも。けれどもここで立ち止まる昇達では無い。特に琴未などは立ち直りが早かった。

泣いていたのは少しだけですぐに琴未は顔を上げた。そして涙を拭かないままにこう告げる。

「強く……強くなりたい！　巫女としての役割だけじゃない、昇の力になるために強くなりたい！」

そう宣言する琴未に閃華は微笑むと優しく琴未の頭を撫で始めた。

「なら考えるんじゃ。どうすれば良いか、どうすべきなのか。それでも分らなければ分りそうな者に聞けばよい。琴未の周りに居るのは私達だけではないじゃろ。案外と意外なところからヒントが出てくる可能性があるもんじゃよ」

そう言われても琴未としてはどうすれば良いのか分らないのだろう。ただ閃華の顔を見詰めるだけだ。

「じゃから強くなれ琴未。自分が思った強さを得るためにのう」
「……うん！」
力強く頷く琴未に昇達は短い間だけだけど微笑を向けた。それから昇は天を仰ぐ。
……僕達は……完全に負けた。でも、ここで歩みを止めちゃダメなんだ。ここから逆転できる手を見つけ出さないといけないんだ。今はまだ分からないけど、時間はあまりないけど考えないと、あの人達の……完全契約に打ち勝つ道を。
そう決意する昇。そんな昇の姿をシエラは優しい瞳で見ていた。何かを思い出すかのように、だからこそ大丈夫だと感じる。昇なら何とかしてくれるとシエラは信じているから。

「ただいま～」
一応家に帰ってきた昇達だが、時間はすでに日付が変わるまで数時間しかない。彩香などはもう寝ているかもしれない。だから返事が無くてもあまり気にすることは無かった。
閃華が確認するとすでに寝ているようだ。それを聞くとミリアもそれなりに気を使っているのだろう。声の大きさを抑えながも騒ぎ出した。
「お腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いたお腹空いた」
「何度も言わなくても分ってる。だからこうして夜食を作ろうとしてる」
ミリアが訴える前にシエラはすでにキッチンへと入っていた。先程ミリアが気を失いながらも空腹を訴えてからこうなる展開は分っていたのだろう。だからこそ、その準備にはいる。
シエラがやるならと琴未までも手伝いに入る。その事にシエラは何かを言い掛けたがやめた。これは自分の役目では無いと思ったの

だろう。だからこそ琴未の好きにさせる事にした。
　騒ぐミリアを横目に二人は夜食作りへと励んだ。さすがにこの時間だ手の込んだ物は作れないから簡単に済ませられる料理をテーブルに並べるとようやく全員が夜食へとありついた。
「夜食の時だけは元気になるんだね」
　夜食をかき込むミリアに昇はそんな感想を口にした。確かにミリアが受けたダメージは大きかったものの、今はではそんな事をすっかり忘れたかのように元気に夜食にありついていた。
「あの子は昔から食事の時だけは元気になりますからね～」
「へぇ～、そうだったんですか」
　というか、ミリアがこの時だけは元気になるのは昔からだったんだ。
「どんなに厳しい訓練をしていても、食事となると何事も無かったように思いっきり食べてましたよ」
「そうだったんですか……って！」
　ようやく異変に気付いた昇が立ち上がると隣で普通に夜食を頂いているラクトリーを指差す。
「いったい、どこからいつの間に入ってきたんですか」
「つい先程、入口から入ってきましたよ」
　つまり玄関からちゃんと入ってきたという事だろうと昇は解釈すると全員を一通り見回す。けれども全員首を横に振るだけだ。つまり誰一人としてラクトリーを招き入れていない事になる。
「入口って一体何処ですか？」
「ほら、そこにあるじゃないですか」
　普通に窓を指差すラクトリー。確かにここの窓は庭に出られる程の大きな窓だ。普通に洗濯物を持って行ったりと通用口になってるのも確かだが、普通はこれを入口とは言わない。もちろん昇もそう思っている。
　そこは玄関じゃなくて窓ですよ。だから出入り口でも入口とはいいませんよ。

「一応中に向かって声を掛けたんですけど返事がなくて、なので勝手に上がらせてもらいました」

というか、そこから誰か来るなんて誰も思ってませんよ。しかもカーテンで外の様子なんて分らないし。

「そうしたら丁度夜食の最中だったので、食材を一人分たして私のも作ってもらっちゃいました」

いつの間にそんな事をしてたんですか！　というかシエラ達は気付いてなかったの？

シエラに確認するが首を横に振るだけだ、どうやら完全に気付いていなかったらしい。一体どんな手口を使った事やら。神出鬼没とはこういう事を言うのでは無いのかと昇は思った。

「それでラクトリーさんはなんでここに居るんですか？」

当然の質問をぶつける昇。そしてラクトリーも当然のように返事を返してきた。

「その話は夜食が終わった後でいいでしょ～」

いや、そんな甘えたような声で言われても困るんですけど。

「だって喋りながら食事をするのはお行儀が悪いでしょ。だから話は夜食が終わった後でね」

まあ、その通りなんですけど……あなた敵ですよね。さっきまでミリアと戦闘してましたよね。それがなんで今は和やかな雰囲気になっているんですか！　それにミリアだって突然ラクトリーさんが現れればビックリ……。

昇はミリアがラクトリーの存在を知ってまた怯えていると思っていたのだが、ミリアは食事に集中しているようで、それどこではないようだ。

……もう好きにしてください。

とうとう諦めた昇。もうこうなっては諦めるしかないとすでに悟っている。これも経験から学んだ物の一つだろう……本人の意思とは関係なく。

ようやく夜食が済んだミリア以外だが、ミリアは食べたりのかお

かわりをせがむが、今の状況でこれ以上夜食を続ける気分には誰しもなれなかった。それはラクトリーも同じなのだろう。

ラクトリーはおもむろに立ち上がるとミリアの後ろに立って、どこからか取り出した『おしおき用』と書かれたスリッパでミリアの頭を思いっきり引っ叩いた。

その事で一度はテーブルに突っ伏すミリアだが、すぐに後ろを振り向くとそのまま固まってしまう。

「お、おっ、お師匠様――――――――――――――――――――っ」

やっぱり今までラクトリーの存在に気付いていなかったのだろう。ラクトリーの存在を確認すると大声を上げてすぐ傍に居るシエラの後ろに隠れてしまった。

そんなミリアにラクトリーは溜息を付く。

「まったく、食事をしている時は相変わらずの集中力ですね。その集中力を他に持って行ければどれだけ役に立つ事やら」

そんな評価を下すラクトリーにその場に居る全員は思わず頷いてしまった。

「裏切り者――――っ」

いきなりそんな事を叫ぶミリア。どうやらラクトリーの評価に全員が同意した事がよほど不満だったらしい。

「さて、それではそろそろ本題に入りましょうか」

ミリアの叫びを無視してラクトリーはそんな事を言いだした。こうして見るとミリアの性格は少なからずもラクトリーの影響を受けているのでは、と昇は思わずにはいられなかった。

そんなラクトリーが昇ではなくシエラに視線を送った。

「けどその前に、お茶をいれてくださいね」

……もうどう突っ込んで良いのか僕にはわかりませんよ。

完全に諦めた昇は大きな溜息を付き、このままでは話しが進まないと判断したシエラはミリアを振りほどくと、しかたなく全員分のお茶を用意して本題に入る準備に取り掛かるのだった。

「さて、それではまず私達の目的から聞いてもらいましょう」
軽くお茶をすすったラクトリーは急に真剣な顔付きになるとそんな事を言い出した。どうやらやっとここに来た目的を話す気らしい。
その前に閃華が手を上げて質問をぶつけるのだった。
「その前にどうしてお主がここにおるのか説明して欲しいのじゃがのう」
確かにその通りだ。ラクトリーがここに来た理由をまだ昇達は聞いていない。ラクトリーもうっかりしていたのだろう。というか、夜食だったのですっかり忘れていたのだろう。ようやくその事から話し始めた。
「今回私は使者としてここに来させてもらいました。契約者同士が同じ場所にいると先程ような事になりかねませんから、だから私が使者として話し合いに出向いてきたというわけです」
「つまり和平を結ぶ気は少なからずともある問う事じゃな」
閃華が問いただすとラクトリーは頷いた。
「ええ、けれども契約者同士が同じ場所に居ると先程のように争奪戦の影響で好戦的になります。それを避けるために私一人出来たのです」
一度でも精霊と契約して争奪戦を受け入れれば、精霊王の力によって好戦的に思考が傾く傾向にある。これは紛れも無い事実だ。けれども、これが適用されるのは争奪戦に参加を決意した者だけで、与凪達のように争奪戦に興味を示さない者には適用されない。
そうした争奪戦の適用者が同じ場所に居ると、お互いに戦う意思が無くとも思考が戦闘的になってしまう。これは争奪戦をスムーズに進めるためのシステムであり、閃華達でさえこれに何かしらの影響を与えることは出来ない。
つまりは争奪戦に参加表明した者同士が同じ場所に居るだけで戦闘が開始されてしまうように思考が移行してしまう。争奪戦戦闘システム。これがある限りは契約者同士が同じ場所に居て和平を結ぶ

のは難しいだろう。
もちろん例外もある。このシステムは思考を戦闘的に向ける物であって、かならず戦闘させる訳ではない。だから契約者同士が出会っても必ず戦闘になるとは限らないのだ。
好戦的にはなるが必ず戦闘にはならない。これが争奪戦戦闘システムの特徴と言えるだろう。
だからこそラクトリーはそれを避けるために一人出来たのだが、それは大変危険な事である事もよく分かっているはずだ。なにしろラクトリーが敵だったのだから。
「でもよく一人でこれましたね。僕達が今ここであなたを倒そうとしたらどうするつもりだったんですか？」
確かにその可能性はある。なにしろ先程まで敵だったのだからラクトリーが今でも敵である事には変わりない。
そんな昇の質問にラクトリーは微笑むとお茶をすすり優しい口調で答えた。
「私はミリアの師匠ですよ。そのミリアが好んで契約したあなたです。とてもそんな事をするとは思えません。私はミリアがそんな契約者と好んで契約しないと信じてますから」
昇とミリアの契約はミリアからの申し出、というよりかはミリアが勝手に行ったものだ。先程の説明でその事を聞いていたラクトリーは昇の人柄をそのように判断したのだろう。少なくとも、自分の弟子であるミリアがそんな卑怯者と好んで契約する弟子には育てた覚えは無いし、そんな弟子でも無い事はラクトリーが一番良く分かっているのだろう。
ラクトリーは優しい視線を昇に向けると次の事を告げた。
「だから、ミリアが好んで契約したあなただからこそ私もあなたを信じてみようと思った。その答えでは不満ですか」
最後に微笑みで切り返してくるラクトリーに昇は言葉を失ってしまった。さすがにミリアの師匠だけはあるのかもしれない。
昇がそんな事を思っているとソファーの後ろに隠れていたミリア

が恐る恐る顔を出してラクトリーに質問をぶつけてきた。
「け、けど、お師匠様。どうしてここが分ったんですか？　だって誰も追ってこないって皆言ってたし」
あぁ、そう言われればそうだよね。なんでラクトリーさんはこの場所が分ったんだろう。
昇も同じ事を思っているとラクトリーは静かに立ち上がり、ミリアの傍に行く。思わずソファーに隠れるミリアだが、ラクトリーはミリアの後ろに立つと首根っこを引っ掴み、片手で軽々と持ち上げて自分の顔を付き合わせる。
ラクトリーの顔は笑顔には間違いないのだが、周囲には黒いオーラが出ているのを昇は見たような気がした。それだけの雰囲気をラクトリーは出しているのだろう。そんなラクトリーと面を付き合わせているミリアは泣きそうな、というか、もう泣いている。
そんなミリアにラクトリーは静かに告げるのだった。
「地の属性は相手の精霊反応せえ登録しておけば、自分の力が及ぶ範囲内なら相手を探し出す事が出来ると教えた事がありましたよね。覚えてますか～」
「ももも、もちろんです」
完全に泣きながら答えるミリア。それどころか全身がかなり震えている。どうやらそうとう怖いらしい。
「なら、なんで先程のような質問をするんですかね。答えならすでに分っているのでしょう。それなのに何故質問したのですか？」
「え、えっと、それは、その、ほら、あれですよ、なんというか」
完全に返答に困るミリアにラクトリーの頭に怒りのマークが浮かぶ。その途端、急に庭の地面が盛り上がると鍵の合いている窓を勢い良く開けた。
「忘れたなら、忘れたと言いなさい！」
言葉と一緒にミリアを開いた窓から庭に思いっきり全力投球するラクトリー。投げられたミリアは庭に思いっきり突っ込むと、追い討ちを掛けるように地面が盛り上がり、ミリアを土で埋めてしまっ

た。
　どうやら全てラクトリーが地の属性でやったようだ。まあ、確かにこれだけの事をされれば恐怖も覚えると言うものだろう。

　完全に意気消沈してシュンとなっているミリアがソファーに戻るとラクトリーは話を元に戻そうとした。
　ミリアの身体は一度土に埋められたにも関わらず、土埃一つ付いていない。さすがにミリアの師匠なだけはあるのだろう。地の属性を使ってミリアについている土を全て払ってしまった。
　これほどまでに属性を操作できるのだから相当の使い手には間違いないのは確かだ。
　そんなラクトリーが話し始めた。
「ではまず、私達の目的ですが、これは皆様のご想像通り精霊王の力です。けれどもマスターはこれを悪用する気はありません。全ては妹のセリス様のためなのです」
　そこまで話すとラクトリーは一度お茶をすすって話を中断させる。それからフレトとセリスの関係について話し始めた。
　その内容は次の通りである。

　グラシアス家はそれなりに名門の家で幾つもの会社を持っています。まあ、名門の金持ちの血筋だと思ってもらって結構です。
　マスターはそこの跡継ぎなのですが、妹様のセリス様は幼い頃からの病弱で未だに病名すら分っていない病気を患っていました。
　マスターはそんなセリス様を昔から溺愛してました。だからどうにかしてセリス様を助けようと何人もの医者を呼び付けては何とかしようとしたのですが、誰にもどうすることもできなかったのです。
　完全なる不治の病。分った事と言えば、少しずつ衰弱して後数年で命数が尽きるとの事でした。

そんな時です。私達がマスターと出会ったは。まあ、私達の事は置いておきましょう。簡単に言いますと気が合ったからその時は四人一緒に行動していた。それだけでございます。

そして私達はセリス様にご執心なマスターの姿だけではなく、グラシアス家の跡取りとしての資質が充分すぎる事に気付かされました。人望、知略、眼力、どれをとっても優秀と言えましょう。まあ、欠点もあるは確かですが、誰しも完璧にはなれないも確かです。

だから私達はマスターに契約を申し出るのと同時に精霊王の力について話しました。精霊王の力は地球の活動を維持するものであり、その力を使えばセリス様の病を治す事も簡単に出来るのではないのかと。

なにしろ精霊王の力は地球を治し、維持し続けているのですから、その力を使えば不治の病といえども治す事が出来るでしょうと。

その話を聞いたマスターはすぐに私達との契約を決断しました。セリス様を治す為ならどのような戦いにも身を投じる覚悟はすでに出来上がっていたのでしょう。それで我ら四人と完全契約をしました。

まあ、私達も長く生き過ぎました。そろそろ最後の主を探していたので、マスターはその器に敵う人物と言えるでしょう。

こうしてマスターは争奪戦に身を投じる事になったのですが、初夏頃でしょうか、私は精霊王の力が動いている事を感じ取ったのです。

何が起こっているのかは分りませんでしたが予想は出来ました。争奪戦中は精霊王の力は無防備です。それを悪用する輩が現れたのだろうと。そう考えるのと同時に別の事を思いつきました。

精霊王の力が動いているなら、これを利用する手は無いと。このまま争奪戦を続けていてはセリス様の命数が先に無くなってしまう可能性があります。けれども、移動された精霊王の力をほんの少しでの使えることが出来るならセリス様を治す事が出来るかもしれないと。

その事をマスターに告げるとすぐに精霊王の力が何処に向かっているか調べるように言われました。そうして調べた結果、精霊王の力は日本にある事を突き止めました。それ以上の事は日本で調べたのですが、その結果として私達はここに辿り着いたわけです。

そこまで一気に喋ったラクトリーは一息つくためにお茶をすする。

「マスターはエレメンタルロードテナーになりたい訳ではないのです。ただセリス様を救いたいだけなのです。そのために精霊王の力を使わせてはもらえないでしょうか？　その話をするために私はここに来たのですから」

これでラクトリーの話は終わったのだろう。お茶をすするとまるで昇達の返事を待つかのように黙り込んだ。

そんなラクトリーの話に動揺する昇。

そんな事情があったなんて、だからあんなに必至だったのかな？

確かにフレトや精霊達の攻撃には手加減も油断も微塵も無かった。それはそんな背景があったからこそ、あそこまで必至に戦ったのかもしれない。

そう考えると昇の心は揺らぎ始める。

それなら精霊王の力を使わせてもいいんじゃないかな。それで人の命が救えるなら……それは良い事だと思うから。

昇がそう考え始めた時に閃華から口を開いた。

「大体の事情は察したんじゃが、どうやってそれを証明するんじゃ？」

「……」

証明？

閃華の言葉にラクトリーは黙ったままだ。そんな二人に昇は首を傾げる。そんな昇を見かねたのだろう、シエラが二人の間にある確執を説明し始めた。

「確かにラクトリーの話は筋が通ってる。でも、それを証明できな

い限り嘘という可能性がある。話の内容が内容だけに相手の同情を誘う罠という可能性も否めない。だからラクトリーは今の話が本当であると証明しないといけない」

あっ、そういう事か。

やっと状況を理解する昇。

つまりラクトリーの話しが本当か嘘かの判断は昇達には出来ないという事だ。確かにどちらにしても筋は通ってるし話も良く出来ている。それだけに嘘という可能性を捨てきれない。

けれども昇の心はラクトリーに偏り始めているのも確かだった。

確かにラクトリーさんの話が嘘かもしれないけど、もし本当で時間が無い事だったたら取り返しが付かないことになる。それに……わざわざ日本に来るぐらいだし、もしかしたら時間が無いのかもしれない。

閃華が嘘だと言い出さなければ僕はそのまま信じてたかもしれない。それほどの説得力もあったし……でも本当だとも言い切ってはくれなかった。……そうか、ラクトリーさんもそれを証明する手段を持ってないんだ。それなら筋は通る……そう、筋は通るけど。

ラクトリーの話は信じてやりたい。けれどもそれを証明できないからには信じるわけにはいかない。そしてラクトリーからも何も言ってこない。昇の心は揺れるばかりだった。

いったい何を信じて何を疑えば良いのか分らなくなってきた。けど、心の片隅ではラクトリーの言うとおりであって欲しいとも願っている。

そんな葛藤を昇が続けているとラクトリーは溜息を付いた。

「確かにその通りです。今の私には先程の話を証明する事は出来ません。実際にセリス様に会って貰えれば良いのですけど。なにしろ不治の病で直る見込みが無いからには無理に日本に連れてくるわけにも行きませんから。今は信じてください……としか言いようがありません」

顔に悲しみが出てくるラクトリー。先程までミリアに対しての笑

顔など今は見る影も無い。それでもラクトリーは大きく息を吐くとテーブルの上に一枚の紙を置くと静かに立ち上がった。

「私達が泊まっているホテルの場所と部屋の番号です。何かあったらいつでも来てください。私達だけが相手の本拠地だけを知っているのは卑怯ですからね」

それだけ告げると再び窓に向かって静かに空けた。微かに夜風が部屋の中に入ってラクトリーの長い髪をなびかせる。

「今は信じてくださいとしかいえません。どうかそれだけは分ってください。それからミリア」

呼びかけられて思いっきりビックリするミリアは昇の影に隠れる。どうやら昇が一番近くにいたからのようだ。

そんなミリアにラクトリーは微笑む。今度は黒いオーラが出る事無く、本当に優しい微笑をミリアに向ける。

「良き契約者と出会いましたね。もう私が心配する事は無いのかもしれません。こんな事を私が言う資格はありませんが、どうかミリアをよろしくお願いします。それがミリアの師匠としての最後の仕事だと思ってください。それでは……」

ラクトリーはそのまま外へ出ると姿が消えた。どうやら独特の移動術を持っているようだ。

ラクトリーが居なくなり、静まり返った部屋の中で昇は誰かが口を開くのを待っていた。いや、期待していたのかもしれない。ラクトリーの話を信じようと。

けれども、まったく逆の事がシエラの口から飛び出した。

「昇は……ラクトリーの話を信じたい？」

「えっ……」

まさかそんな質問が来るとは思っていなかった昇は返答に困った。確かに信じたいのかもしれない。けれども精霊王の力だ。その危険性は昇も充分に分っている。ここでうかつに信じて雪心のような悲劇を繰り返す事になったら目も当てられない。

そうと分っていても信じてやりたいと心の片隅では思っているの

を感じていた。
　昇が黙り込んだ事で再び静まり返る室内。そんな空気を斬り裂くように閃華はわざと咳払いをしてから話し始めた。
「何にしてもじゃ、このままあやつの話を信じる事は出来んじゃろ。なにしろ確証も無く精霊王の力を渡す事は出来んからのう。何かしらの代価か証明が必要じゃ。それか、それに変わる何かをじゃがな」
　つまりは素直にラクトリーの話を信じるのは危険だと言いたいのだろう。昇だって言われなくてもそんな事は分ってる。けれども揺れる心を留める事は出来ない。ただ嵐のように大きく揺れ惑うだけだ。
　そんな時だった。左手に温もりを感じるとシエラが昇の手を取って見詰めていた。
「昇だけじゃない。たぶん……皆が苦しい。でも、昇なら皆を救えると私は信じてる。だから私は昇の剣になって動くから。だから今は充分に考えて、皆が心安らげる状況を。昇なら……昇だからそれが出来るから」
「……シエラ」
　今度は右手に温もりを感じる。視線を向けるとミリアが昇の手をシエラと同じく手に取っていた。
「お師匠様は普段は厳しいけど、大事な事だけは優しく教えてくれた。成功した時には一杯誉めてくれた。そんなお師匠様が昇に全てを任せたんだよ。だから昇なら皆を救う事が出来るよ。お師匠様は、ううん、少なくとも私はそう思ってるから」
「……ありがとう、ミリア」
　二人の言葉に昇は何かを貰ったような気がした。それが何なのかは分らないけど、自分がやるべき事は分ったような気がする。
　まだ何をやるべきかは分らないけど、何かをしなくてはいけないのだと。
　そんな事を思いながら昇は窓から天を仰ぐのだった。

両手をシエラとミリアにとられ、静かに天を仰ぐ昇の後姿を見て琴未は消沈していた。今回の戦闘では役に立つどころか何も出来なかった。昇の役に立つ事は何一つ出来なかった。

それだけではない。あの咲耶という精霊を相手に巫女としても完全に負けを宣告されて返す言葉すらなかった。なら自分は何のためにここに居るのか、何のための力なのか、この力は何なのか考えざる得なかった。

心身ともにここまで叩きのめさせられた事は初めてだ。今までにも挫折しそうになった事もある。けどそれは自分の信じている心が有ったからこそ、ここまでこれたんだ。

それはいつか昇の力になるからと剣術はもちろん家事まで充分に習得していた。それなのに今回に限っては昇の力になるどころか、自分が信じていた巫女としての心構えさえも折られてしまった。

そうなると何を支えにして良いのか分らなくなった。それは先程のラクトリーが話した内容とはまったく逆の物だと言えるだろう。

フレト達は信じる物があるからこそ、あそこまで必至に戦える。けれども今の琴未は何を支えにして良いのか分らない。だからラクトリーの話に羨ましいとまで思ってしまったほどだ。

自分もそれだけの強さが欲しいと昇を支える事が出来る人になりたいと。そう思わざる得なかった。

そんな時だった。琴未の頭に先程言われた閃華の言葉が思い出される。琴未の周りに居るのは昇達だけではない。それに意外なところからヒントが出てくると。

その言葉を思い出すと琴未の脳裏に一人の人物が思い浮かんだ。

あっ、お爺ちゃんなら何かヒントをくれるかもしれない。そうだよね、私にいろいろと教えてくれたのはお爺ちゃんなんだから、今回も私の力になってくれるよね。

確かに玄十郎なら琴未達の事に精通しているし、琴未の力にもなってくれるだろう。けれども玄十郎はただの人間である。それが精

霊を相手にどこまでヒントをくれるかとなると不安にもなるけど、琴未はたびたび玄十郎から助けてもらった事は何度もある。だから今度も、そんな思いがあるのだろう。

だからこそ、明日は朝一で玄十郎に会いに行こうと決めて、その事を全員に伝えるだった。

「うむ、行って来るが良いじゃろう。それでどこまで出来るか分らんがのう、琴未なら大丈夫じゃよ。それは私が一番良く分かっておるつもりじゃよ」

「うん、ありがとう閃華」

少しだけ涙が出てきた目を拭うと昇が琴未の目の前まで来ていた。

「僕もまだ自分がなにをすべきが分ってないけど、たぶん……僕も琴未も考えないといけないんだと思う。自分がやるべき事と進むべき道を。まあ、僕なんて何回も同じ事を考えさせられたけど、それでも考えるのは無駄じゃないと思うよ。それに琴未なら答えは見つけられるよ、琴未なりのね」

「うん、ありがとう。昇～」

涙を拭く事無く、そのまま昇に飛び付いて抱き付こうとする琴未。昇もそんな琴未の行動にビックリしながらも両手を広げるが、琴未が昇に抱きつく事は無かった。

途中で割り込んだシエラの蹴りが思いっきり琴未にヒットして弾き飛ばしたからである。

「今度からそういう雰囲気を作るの禁止」

「って、いきなり攻撃してきて何言ってるのよ！」

上半身だけを起こして文句を言う琴未。シエラは腕組したまま視線を合わせる事はしなかった。

「ワザとそういう雰囲気を作って昇に接近しようなんて作戦は通じない」

「作戦じゃないわよ！　自然な成り行きよ自然な！」

「……嘘吐き」

「なんですって！」

……えっと、両手を広げた僕はいったいどうすれば良いのでしょうか？

そんな事を思っている昇の肩に閃華は手を置いてきた。

「まあ、こんなもんじゃろ。これでよかったのではないのか。それからその両手はもう普通にして良いと思うんじゃがな」

「あぁ、うん、そうだね」

またいつものように騒ぎ出したシエラと琴未にミリアまで参戦して再び賑やかになる室内。そこに彩香が起きて来て煽るものだから、昇は近所迷惑にならないか心配になってきた。

それと同時に少しだけ安心する事が出来た。

そうだよね。問題は山積みだけど、少しはこういう事も必要だよね。だから今だけはいっか。

そんな事を感じる昇だった。

第八十五話　お師匠様は神出鬼没（後書き）

そんな訳でお送りしました八十五話でしたが、如何でしたでしょうか。そういえば始めてなんですよね、与凪が精霊武具を見につけてる姿って。

まあ、与凪が精霊武具を着けて登場する事は決めてたんですけど、いったいどういう格好の精霊武具にしようかは結構迷いましたね～。その結果……私の趣味が出てしまいました。

良いじゃないですか、あの与凪の精霊武具～。なにしろミニスカですよミニスカ。今までに無い精霊武具ですよ。さすがは与凪やってくれますね～。

さてさて、話を本文に戻しますか。

そんな訳でいきなり出てきていろいろと話して行ったラクトリーですが、昇達がどういう決断をするのかは次回以降のお楽しみって事ですね。

更にミリアと琴未。二人とも今回は完全に負けてましたからね～。琴未に関して言えば何も出来なかったの一言でしょう。確かに反撃はしましたけど、逆に閃華の救援がなかったらやられてましたしね～。それに巫女についても琴未は反論出来ませんでしたよね……確か。

それとミリア。こちらは完全に師匠であるラクトリーに翻弄されてましたね。これから先、この二人はどうやってこの壁を打ち砕いていくのか、それも楽しみの一つだと思います。

更に昇の前に立ち塞がっているのが完全契約です。昇はいかなる手段でこの完全契約に立ち向かっていくのかも見物かもしれません。

……まあ、時間があったからいろいろと考えたんですよ～。

そんな訳で次回はたぶん他倒自立についての説明があると思われます。……たぶんね。うん、閃華ならたぶんやってくれるよ。そう信じてます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、エレメが復活した事がそろそろ知れ渡ってきたのかな、とか思ってみた葵夢幻でした。

第八十六話　さまざまな教え

翌朝、琴未は日が昇るのと同じ時間に起きるとすぐに準備に取り掛かった。もちろん、ここを数日の間だけここを出るための準備だ。

このままでは何も変わらないと感じた琴未は修行しなおすべく数日の間は実家に帰って玄十郎に鍛え直してもらおうと考えていた。そのための準備を終えた琴未は事の次第を全て告げた手紙をリビングにあるテーブルの上に置いた。彩香宛てにしての手紙である。

昇達は事の次第を全て知っているからこそ、琴未がそのような事をしても不思議には思わないだろうが、何も知らない彩香にはそれなりに言葉を濁して告げておく必要があった。

全ての準備を終えた琴未は静かに滝下家を後にするのだった。

高戸神社の奥にある剣術道場。一応剣道などで貸し出しなどをしているが、こんな朝早い時間に使うのは琴未の家族だけだろう。

琴未は道場のど真ん中に正座すると静かに玄十郎が入ってくるのを待っていた。玄十郎はここ数十年朝稽古を欠かしたことは無い。だからここに居れば必ず玄十郎に会えるのは確かだ。

琴未が静かに座っている事、数十分後に玄十郎は道場に足を踏み入れて驚いた。まさか琴未が居るとは思わなかったからだ。

それで玄十郎はすぐに平常心に戻ると琴未に向かって歩き始めた。そして琴未の前に立つと琴未は額を床につけるぐらいに頭を下げた。

「お爺、お師匠様。私にもう一度稽古を付けてください！　誰にも負けないぐらい、もう一度だけ鍛え直してください」

最大限の礼儀と必死を込めた琴未の言葉にさすがの玄十郎も驚いた。琴未の事は充分に知っているが、ここまで必死に頼み込んできた琴未の姿を見たのは始めた。

玄十郎は静かに琴未の前に座ると頭を上げるように言った。

「まずは何があったのかを話しなさい。全てはそれからだ」
普段の玄十郎とは違い、一切の甘さを捨てた玄十郎の言葉に琴未は少しだけ驚き、生唾を飲み込んだが、すぐに全てを話した。
自分が負けた事、巫女としての役目すらも出来なかった事、そして昇の力になれなかった事。その全てを話した。もちろん負けた悔しい感情を抑えきれない場面もあり、時々泣きそうになったが、それでも全てを話した。
玄十郎は琴未の話を黙って聞いていただけだ。頷きすらしなかった。それは琴未の話を真剣に聞いていた証拠なのかもしれない。
だからころ全てを聞き終わった玄十郎は意外な言葉を琴未に掛けるのだった。
「琴未は充分に強い、それでも儂に勝てないのは経験の差によるものだ。だが今回の負けはまったく違う要因だ。だから儂から言えることなど何一つ無い」
「そんな！」
玄十郎なら何かしらのヒントをくれると思っていただけに琴未の衝撃は大きかった。玄十郎から何も得られないとなると、どうすれば良いのか分らなくなってきた。
それでも悔しい気持ちと強くなりたいという思いが入り混じっているのだろう。琴未は自分の袴を手が震えるほど強く握り締めた。
そんな琴未を見て玄十郎は視線を逸らしてから言葉を発してきた。
「儂が教えられる事は全て教えてた。けどそれは逆に言えば儂から教わった事しか知らないと言う事だ。琴未……琴未の中にある力は儂が教えた物だけでは無いだろう。契約によって手に入れた力もあるだろう。琴未はその全ての力を完全に使いこなしていると言えるか？」
「えっ、いきなりそんな事を言われても」
確かに今までの琴未は玄十郎から教わった剣術とエレメンタルによって備わった雷の属性を組み合わせて使ってつもりだが、それを完全に使いこなしていると言われると即答は出来なかった。

一つ一つの物を順番に使って組み合わせて使ってきたのだから、一つの事に関しては完全に使いこなしている言えるだろう。けれども全ての力を使いこなしているかと聞かれると、そうでは無いような気がしてきた。

確かに私には新螺幻刀流と雷の属性がある。けど……今まではそれを別々に使ってきたのも確かよね。全ての力を完全に使いこなすか……そっか！　新螺幻刀流に雷に属性を加えればいいんだ。

「つまり新螺幻刀流に雷を加えれば良いのね」

そんな答えを出す琴未。けれども玄十郎は首を横に振った。

「それでは今までの新螺幻刀流とは変わりないだろう。負けた時の事を思い出してみろ。それで勝てたか？」

「……ううん」

首を横に振る琴未。確かに新螺幻刀流に雷の属性を加えても剣術の威力が増すだけだ。それで遠距離を得意としている咲耶に勝てたとは思えない。

再び頭を垂らして落ち込む琴未に玄十郎は静かに立ち上がると格子窓から外を見ながら話し始めたのだった。

「そもそも新螺幻刀流とは巫女や神主などが物の怪から人々を守るために作り上げた剣術だ。それだけではない、どんな剣術にも始まりというのもある。それはやはり何かの目的があっての事だろう。誰かを守る、誰かを斬る、どちらにしても強くなるために新たに作り出して伝えてきた。剣術も今は剣道として残っている。そして巫女のもう一つの役目である物の怪から人々を守る新螺幻刀流も今に残っている。それがどういう意味か分かるか？」

「……」

あまり良く分からなかったのだろう。琴未は黙り込むだけだ。そんな琴未に玄十郎は振り向く事無く話を続けるのだった。

「つまり何事にも始まりはあるということだ。さまざまな艱難辛苦を乗り越えて新螺幻刀流は今も存在している。それは新螺幻刀流を作り出し、時には改良し、今に伝えてきたからだ」

「……あっ」
ここまで来てようやく玄十郎が何を言いたいのかを理解したのだろう。琴未は短く声を上げると玄十郎に向かって嬉々し話しかけた。
「つまり新螺幻刀流と雷の属性を使って新しい剣術を作ればいいんだね。そうだよね、お爺ちゃん！」
答えが分かった事に興奮しているのか、または道を見出した事が嬉しいのかすっかりお師匠様から普段のお爺ちゃんに戻ってしまっている琴未の言葉に玄十郎は振り返ると優しい笑みを向けた。
つまりは正解だということだろう。
確かに琴未は今まで新螺幻刀流と雷の属性を分けて使ってきた。その二つを混ぜ合わせて新しい物を作ろうという発想すら出来なかったのだ。その事を悟らせるために玄十郎はわざわざ遠回りの話をしたのだ。
率直に言っても琴未は完全に理解出来ない事を玄十郎は充分過ぎるほど理解している。伊達に琴未のお爺ちゃんはやっていない訳だ。
「まあ、そういう事だな。だが口にするのは簡単な事だが実際にやるとかなり難しいぞ。なにしろ手本などという物は無いのだからな。全ては自分で考え出さないといけないのだから、それだけの覚悟はあるのだな」
「もちろんよ！」
即答した琴未に玄十郎は近寄ると琴未の頭を撫でた。
「いつでも恋愛に関することばかり話していたから子供だと思っていたが、思っていたよりも成長していたんだな」
「た、確かにそうだけど、私だってちゃんと成長してるわよ」
「はっはっはっ、そうだな」
「それよりもいつまでも撫でてないでよ」
琴未は玄十郎の手から逃れると拗ねたよう顔を背けるが、すぐに玄十郎に向き直って一度頭を下げた。
「ご教授、ありがとうございました。これからは様々な艱難辛苦が待ってようとも、今の教えを胸にがんばって行きます」

しっかりと礼儀を返す琴未に玄十郎は何度か頷いてみせた。それから琴未が頭を上げるとまるで次の言葉を期待しているかのような顔で待っていた。

そんな玄十郎に琴未は溜息を付くと、しっかりと言葉にしてみせた。

「だからお爺ちゃんは大好きだよ」

「儂も琴未が大好きだぞ」

調子に乗って抱き付こうとする玄十郎を体をそらしてかわす琴未。もうすっかり慣れたという感じの顔で溜息を付いた。

一方の玄十郎は床に頭を思いっきりぶつけたのだが、その顔は思いっきり幸せだった。ここが琴未に甘い玄十郎一番の短所なのだろう。

昼過ぎの滝下家はすっかり静まりかえっていた。シエラとミリアはどこかに出かけたようで。今現在この家に居るのは昇と閃華と彩香だけだ。

昇は自らのベットに体を横たえながら天井を見上げていた。どうやら何かしらの迷いや考えをする時の昇の癖らしい。

ラクトリーの話を聞いてからというもの、昇はどうするべきか迷っていた。このままラクトリーを信じて精霊王の封印を渡すか、それともこのまま精霊王の力をこちらで封印し続けるかのどちらに決めないといけないと考えているようだ。

でも……そんな事に答えなんて出せないよな。

ラクトリーの話に証拠が無い限り精霊王の力を任せる事なんて出来るわけが無い。ラクトリーとしてもその証拠を提示する事が出来なかっただからしょうがないと言えるだろう。

問題はそれだけでは無い。もし交渉が決裂した時には再びフレト達と戦う事になるのは必至だろう。そうなると昇達は完全契約したフレト達を打ち倒さないといけないのである。

けれども個人の力では完全にあちらが上である。こちらがどう足掻いても勝ち目なんてものはない。

それをどうにかいて勝利をもたらさないといけないのだから問題は山積みである。

精霊が自分の命を差し出しての完全契約か～。だからあれだけ強い……そんな人達を相手にいどうやって戦えばいいんだ？

結局は堂々巡りで答えなんて出てくる気配なんてしなかった。

そんな時だった。ノックする音が聞こえると昇の返事を待たないで閃華が部屋の中に入ってきた。

「相変わらず悩んでいるようじゃのう」

「いつもの事ながら、何で僕だけこんなに悩んでるんだろうって思うよ」

「くっくっくっ、いろいろと背負い込んだり、首を突っ込んだり、しておるからのう。それはしかたないじゃろ」

閃華は軽く笑うと昇はベットに腰を掛けた。そんな昇の前まで閃華は進むと立ったまま昇と視線を交わすのであった。

「今回も迷っているようじゃのう」

「もうどうすればいいよ。特にラクトリーさんの話を聞くと……どうすれば良いかなんて答えなんて出ないよ」

「じゃろうな」

「……」

さすがにこんな雰囲気の時に漫才のような事をする気にはなれないのだろう。二人とも閃華の冗談染みた言葉を軽く流すだけだ。

「僕としてはラクトリーさんの話を信じて見たいと思ってる。でも閃華達は反対なんでしょ」

突然そんな質問をしてくる昇。昇一人だけの問題ならラクトリーの話を信じていたかもしれない。それに閃華とシエラが異論を唱えたからこそ昇は迷う事になってしまった。

その事を再確認する昇。そんな昇に閃華は静かに目を瞑るとゆっくりと語りだした。

「私とてラクトリー殿の話を信じてやりたいんじゃが、なにより精霊王の力じゃ、そう簡単に決断を出して良い物では無いからのう。ここは誰かが慎重論を唱えないといけないと思っただけじゃ」

「そう……だよね」

精霊王の力が暴走すればどれだけ危険な事になるのかは昇達が一番よく知っている。だからこそ、ここは慎重に決断しなくてはいけないのだ。閃華はその事を昇に伝えているし、昇もその事は分ってる。

けれどもラクトリーの話しが本当だという証拠が無いからには信用するわけには行かない。何処まで行っても堂々巡りだ。

昇は再びベットに横になると片腕で両目を塞ぐ、もうどうして良いのか分からないのだろう。

そんな昇に閃華はこんな言葉を掛けてきた。

「昇はいったいどんな未来が一番良いとおもっておるんじゃ？」

「へっ？」

いきなりの質問に昇は再び上半身を起こすと閃華の顔を見詰める。

「昇が迎えたい未来の事じゃ。昇が望んでいる未来とはいったいどんなものじゃ？」

「いきなりそんな事を言われても」

閃華の問い掛けに考え込む昇。けれども答えはすぐに出てきた。

それはもちろんフレトの妹を救いながらも精霊王の力を今までどおりに管理する事だ。それなら誰も文句は出ないだろうし、誰かが傷つく事は無い。

けどそれが実際に出来るかどうかとなると難しいだろう。昇が無条件でラクトリーを信じられないように、フレトも無条件で昇を信じる気にはなれないだろう。妹の病気を治してあげるから日本に連れてきてなんて言えるわけが無い。

たとえ言ったとしてもフレトがそんな事を承知するわけが無い。それが分っているだけに自分の理想が理想であって現実にはならないのでは無いのかと思っている。

「自分が思っている未来が必ず実現できるなら誰も苦労しないよ」

確かにその通りである。誰しも自分が思っている未来を手に出来る訳ではない。むしろ挫折する者の方が多いだろう。

そんな昇の答えを聞いた閃華は昇の隣に座るとこんな話をし始めた。

「昇、他倒自立の理というのを知っておるか？」

「たとうじりゅう？」

頷く閃華に昇は首を傾げるだけだった。そんな昇に閃華は説明を始めた。

「他倒自立とは相手を倒して、その上に自分が立てという勝負の理じゃ。つまり自分の理想を現実の物にするために誰かを倒さなければならないのなら、相手を倒してその上に自分の理想を築けという事じゃな」

というか、なんでいきなりそんな話を？

閃華がいきなりそんな話をし始めた事を考え始めた昇。閃華の話だけにそれなりの意味があるのだと思ったのだろう。確かに閃華ならその可能性は大きいだろう。

閃華は直接的ではなく、間接的に物事を伝える事が多いのだから。だからこそ昇は閃華が話した意味を考えてみる。

それってつまり勝った方が負けた方を自由に出来るって事だよね？　まあ、スポーツでもなんでも勝った方が栄光や名誉なんかの理想を手に入れられるんだから。けど、それと今回の状況がどんな風に繋がるんだろう？

確かに今回の状況はフレトを倒せば良いというだけで終わるものではない。物事がそれだけで決着が付くならどれだけ楽なのだろう。そんな風にも昇は思ったりもした。

だからこそ閃華に尋ねてみる。

「今回は相手を倒したとしても、そこにどんな意味があるの？」
昇のそんな質問に閃華は別の質問で返すだけだった。
「昇は相手を倒した後にどんな理想を立てるつもりじゃ？」
「えっ？」
どんな理想って……あっ！　そうか、閃華はそういう事を言いたかったんだ！
閃華が言いたい事の意味を理解した昇は思わず立ち上がる。
「そうか、僕は難しく考えすぎてたんだ。何の事も無い、今回も相手を倒せば良いだけなんだ。それも正面から堂々と、完璧に勝てば良いだけなんだ」
そんな言葉を口にする昇。どうやら何かを掴んだ事は確かなようだが、未だに昇のベットに腰を掛けている閃華は溜息を付いた。
「言葉にするのは簡単じゃが、どうやって完全契約した相手を倒すんじゃ？」
「……あっ」
さすがにそこまではすぐに考え付かなかったのだろう。というか完全に忘れていたようだ。そう、他倒自立の理を実現させるためにはフレト達の完全契約を破らないといけない。
それが出来ない限り他倒自立の理を成立させる事が出来ないのだから。
昇は再びベットに倒れ込むとそのまま頭を抱えるのだった。そんな昇の姿に閃華は少しだけ微笑を向けると立ち上がった。
「何にしてもじゃ、私に出来るのはここまでじゃからのう。後は期待しておるぞ、昇」
それだけを言い残して閃華は昇の部屋を後にした。
……他倒自立の理か……確かにそれならラクトリーさんの件はどうにかなるかもしれない。でも……相手は完全契約をした精霊だ。そんな人達を相手にどうやって戦えばいいんだろう？
結局はベットに横になりながら迷う事になった昇。けれどもいくら考えても答えなんて出て来はしなかった。

天井を見上げながらどれだけの時間を考えたのだろう。突然昇の腹が空腹を訴えてきたので時計を見ると正午を過ぎていた。

もうこんな時間になってたんだ。

時間を確認するとリビングに降りていく昇。そしてリビングに着くと珍しい光景が広がっていた。いつもは昼食の用意もシエラと琴未がしていたのだが、今は彩香がしている。

シエラ達と契約する前は珍しくもなんでもない光景だったのだが、久しぶりに見た光景に昇は懐かしい気持ちになった。

「ああ、やっと起きてきたのね。昼食は出来てるからさっさと食べちゃいなさい」

これも久しぶりに見る彩香の母親としての一面。今は珍しい光景を連続で見て驚きはしたものの、少しだけ安心した。

テーブルに付いた昇は並べられた昼食に注目した。なにしろ二人分しか用意されていなかったのだから。

様子から見て彩香が昼食を済ませた気配は無い。そうなるとこれは彩香の分なのだろう。

「閃華はどうしたの？」

そう推測した昇は閃華の朝食について尋ねると、用事があるから外で済ましてくると返事が返って来た。

「そう……なんだ」

なんだか急に静かになったような感じで寂しいような感じもするが、こうして彩香と一緒に二人っきりで食事をするのも久しぶりなので懐かしさも少しだけ沸いてきた。

そうこうしているうちに昼食は出来上がり、二人は揃って昼食を口に運ぶのだった。

食事が終わり、食器をそのままに昇と彩香はお茶をすすっていると彩香から話し始めてきた。

「それで、今度は何の事で悩んでるの」

すすっていたお茶を吹き出して咳き込む昇。まさか彩香がそこまで推測しているとはまったく思っていなかったようだ。

「まったく、なにしてんのよ、汚いわね。とりあえず口でも拭きなさい」
タオルを渡されて口を拭く昇。彩香は適当に辺りを拭いて細かいところは後でやるつもりらしく、再びお茶を口に運ぶのだった。
「……いつから気付いてたの？」
「昇が悩み始めた時からよ。もう何年も母親をやってるのよ。それぐらい分るわよ」
「……」
返す言葉が見付からずに黙り込んでしまった昇。彩香には精霊や争奪戦の事を一切話していない。それは彩香を巻き込みたくないという昇の意思から出てきているものだが、彩香にしてみれば息子が何かに付いて悩んでいるのか分るのだろう。
それに彩香がそう思ったのには他にも理由があるみたいだ。
「琴未ちゃんは今朝から実家に帰ってるし、シエラちゃんとミリアちゃんも朝食を済ませるとどっかに行っちゃったし。閃華ちゃんもどっかいっちゃったし、これで何も無いとは思えないわよ」
確かに彩香の言うとおりである。昨日の負けが堪えているのか、皆今朝から行動を起こしている。それに反して昇は自分の部屋で悩み続けるだけだ。
そんな自分に何かをしなければいけないとは思うものの、何をして良いのかはまったく思いつかなかった。
黙り込んだ昇に彩香は微笑みながら言葉を掛けてきた。
「とりあえず皆の様子でも見てきたら。皆が何をして、何を望んでいるのか。それが分るだけでも昇が答えを出すのにヒントになるんじゃない」
「……母さん」
「それに……皆は自分の進む道を見つけて頑張っているんでしょ。昇だっていつまでも悩んでられないでしょ。だったらとりあえず動いてみて、それから考えてみてもいいんじゃない」
そう……なのかな？

彩香の言葉に迷う昇。確かにこのまま部屋で悩んでいても答えが出るとは思えない。かと言って皆のところに行って迷惑になるかもしれない。なにしろ皆は自分達が選んだ道に向かって頑張っているんだから。

そう思うと昇は皆の所に行くのをためらい始めた。

「でも……頑張っているなら迷惑になるんじゃ？」

「ならないわよ、絶対に」

はっきりと即答する彩香は昇に向かって微笑んでいた。

「皆昇のために頑張っているんでしょ。だから迷惑になんてならないわよ。それに例え離れていてもいろいろな物が繋がっているものよ。それに気付かないなんてまだまだね」

「なんだよ、それ～」

不満げな声を漏らす息子に彩香は更に微笑んで見せた。彩香はそのままお茶をすすると微笑んだまま話を続けてきた。

「正直に言うとね……少し不安なのよ。皆は私に何も話してくれないし、昇だって何をしているのかまったく教えてくれない」

「それは……」

「分ってるわよ。皆も昇も私に気を使ってる事ぐらいわね。けどね……どんな事があっても私が昇の母親である事には変わりないのよ。だからこそ言える事がある、だからこそ助ける事が出来る。別に全部話せとは言わないけど……頼れる時は頼っていいのよ」

「……うん」

顔を上げる事無く頷く昇。どんな顔をして良いのか昇にはまったく分らなかった。確かに彩香の言う通りなのかもしれない。けど、争奪戦の事を隠したままの相談事なんて出来るわけが無い。

だからどんな言葉を出せばよいのかまったく分らなかった。それでも今の彩香には何を話さないといけないような気がした。そんな気にさせるような力が彩香から出ているようだ。

実際は彩香が昇を心配しているだけなのだが、普段が普段だけにここまで真剣に出られると昇にはまったく敵わないのだろう。

だからこそ、昇は言葉を選びながら話し始めた。
「始めて……完璧に負けて皆も悔しいんだと思おう。でも、個人の力では完全に相手の方が上でこちらがどう足掻いても勝ちようが無いんだ。それでも、僕達はその戦いに勝って守り通さないといけない物がある。僕が選んだ……未来の為に」
「……」
昇の話を聞いた彩香はすぐに返答は返さなかった。昇が真剣に迷っているからこそ、ここは慎重に出た方が良いと思ったのだろう。
だからこそ彩香は言葉を選びながら昇に話しかけるのだった。
「そっか……でも、皆は諦めてみたいね。何でだと思う？」
「えっ、いきなりそんな事を言われても」
いつもの冗談のように聞こえるが彩香の顔は優しい顔になっている。どうやら真剣に話した方が良さそうだ。昇はそう判断すると真剣に考える。
「……やっぱり、分らないよ。負けて悔しいのは分るけど、けどがむしゃらに特訓して勝てる相手じゃないのは皆分ってるのに」
「皆分っているのに頑張っているのよね」
「それは……」
確かにその通りだ。相手は完全契約で精霊の力を完全に出す事が出来る。そんな相手に今の昇達が敵うわけが無い。それでもシエラ達は諦める事無く、それぞれの相手に勝つべく特訓している。
それは何の為か？　負けたからではない、それが以外にも理由があるのだと昇は思いつくが、それが何なのかまったく分らなかった。
考え込む昇の姿に彩香は軽く笑った後にわざわざ大げさに溜息を付いて見せた。
「閃華ちゃんの言う通りね。本当に昇は朴念仁なんだから」
だから朴念仁ってなに？
そんな疑問を昇が口にする隙を与えずに彩香は話を続ける。
「皆……信じてるのよ。昇ならこの状況を撃破できる手段を手にする事が出来るって、だから今は自分が出来るだけの事をやっている

だけよ」
　そんな彩香の言葉に昇は思いっきり溜息を付いた。
「いつもの事ながら何で僕なんだろう？」
「それが朴念仁っていわれる理由よ」
　またそれですか。
　昇は諦めたかのように溜息を付いてみせると彩香は昇に向かって再び微笑んで見せた。
「それだけ繋がってるのよ。皆と昇はね。皆は昇を信じて頑張ってる。昇だって皆を信じて今の状況をどうにかしようと頑張ってるんでしょ？」
「それは……そうだけど」
「だから繋がってるのよ。それがまったく見えないものでも、皆と昇はしっかりと繋がっている物なのよ。もしかしたら皆と運命の赤い糸で繋がってるのかもね」
　いきなりそんな冗談を言いだした彩香に昇は呆れたような顔を見せた。そんな昇の顔を見た彩香は軽く笑うと話を続けた。
「それは見なくとも感じる事は出来るでしょ。自分が皆と繋がってるんだって。離れていても近くに居るような、そんな感覚を感じた事があるでしょ？」
「そんなの簡単に……」
　言葉の途中で話を止める昇。彩香の言葉に何かしら引っ掛かる部分があったからだ。
　離れていても繋がってる、遠くても近くに居るように感じる……それって……エレメンタルアップを使用した時に感じる物じゃないか。
　そうか、エレメンタルアップは使用すれば繋がる事が出来るんだ。皆と一緒に居る事を感じる事が出来るんだ。……あっ、でも、それが分ったからっていったいどうやって完全契約に勝てと？
　肝心なところで再び考え込む昇。どうやらまた行き詰った事を感じた彩香は優しい顔のままお茶をすすると再び話し始めた。

「知ってる、協力するのは足し算だけど繋がるのは掛け算なのよ」
「はぁ？」
いきなり突飛押しの無い事を言い出した彩香に昇はすっとうきょうな声を上げた。
「どんなに心の通じた相手と協力するのは、どんなに頑張っても足し算でしかないの。けど、本当に心の底から信じている相手と繋がって協力するのは掛け算なのよ。だから繋がっている昇達は強いのよ、本当にね。後はそれをどうやって活用するかね」
それはつまり……エレメンタルアップの使用方法が一つじゃないって事なのかな？
彩香の言葉にそう感じる昇。どうしてそう感じたのは分らない。ただ本能がそうだと訴えてきているような気がした。それだけではない。昨日戦ったフレトも自分の能力を武器に付加することで応用している。だからこそ他の属性を支配する事が出来たんだ。
つまりエレメンタルアップも普通に使っているだけじゃダメなんだ。何かもっと、別の使い方があるんじゃないのかな。もしかしたらそうなのかもしれない。
何かしらを掴んだような気がした昇。それが何なのかはまだ分らないが、確かにこの手に掴んだような感覚を得ていた。
「ちょっと出かけてくるよ」
「そう、行ってらっしゃい」
そうだ、まずは母さんが行ったとおり、皆の様子を見に行って見よう。掴んだこれが何なのか分るかもしれない。
昇はすぐに出かける仕度をするとすぐに家を飛び出して行った。
そんな滝下家に一人残された彩香は未だにお茶をのんびりとすすっていた。
「まったく、人がいつまでも何も知らないと思ったら大間違いよ」
彩香はしっかりと知っていた。昇が争奪戦に参加している事や今回の事情の事を。
「それにしても……まさか閃華ちゃんの口から全てが語られるとは

思って無かったわね。……でも、いろいろな事でこれは良かった事なのかもしれないわね。昇はしっかりと成長してるし、あの人も巻き込まれてるし」

彩香は空になった湯飲みをキッチンの流し台に置くと自室に引き返し、誰にも見せた事の無い引き出しから一通のエアメールを取り出した。

「まったく親子揃って同じ事に巻き込まれて、いったいなにやってるんだか。……でも、それもしょうがないわね。なにしろ昇はあの人の子なんだから」

彩香はそう呟くと一度は開いたエアメールを再び開けて中に目を通すのだった。

まずは琴未のところに行ってみよう。今回の事で一番のダメージを負っていたのは琴未だ。それは身体もそうだけど心もそのはず、でも琴未ならもう立ち直ってるかもしれない。

そんな琴未を見れば何かしら掴めるかもしれない。

そう考えると昇は琴未の実家である高戸神社に向かって足を進めるのだった。

第八十六話　さまざまな教え（後書き）

そんな訳で今回はいろいろな人から教えてもらう事が多かった話になりましたね～。……いや～、こういう時の閃華は本当に頼りになりますね。もちろん作者的にですよ～。

まあ、そんな訳で今回は悩みっぱなしの昇でしたが、まだまだ悩む事になるでしょうね。なにしろ相手は完全契約をしたフレト達なんですから。これを打ち破るのはそう簡単では、昇は何かを掴んだようですね。それらについては、他倒自立編の最後の方で明らかになるでしょう。

ふっふっふっ、実はまだ隠し球があったりもします。それが明らかになるまで、もう少し時間が掛かりますが、まあ楽しみに待っていてくださいね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想をお待ちしております。

以上、眠りが不安定な葵夢幻でした。

第八十七話　繋がるという事

なんだかここに来るのも久しぶりで、なんだか懐かしいな～。
高戸神社の奥にある道場へと向かう道すがらで昇はそんな事を思っていた。
そういえば昔は琴未と一緒にこの辺でよく遊んだっけ。かくれんぼとか鬼ごっことかやってたけど、結構楽しかったな～。
昔の思い出に浸りながらも歩みを進めて道場へ向かい、目的の建物が見えてくると途端に違和感を感じた。
精界……じゃない、なにかの結界かな。
道場内部を全て覆うように結界が張り巡らせているようだ。
ちなみに精界と結界の違いだが、精界は内部空間を精霊界に移行させる事で人間世界にまったく影響を与える事が無い。なにしろ内部は人間世界というより精霊世界といった方が良いのだから。
もう一方の結界は完全に壁である。これは何かを封鎖する時に使われる物だ。もちろん人間世界で行われているものだから、結界の中で何かが破壊されると当然のように人間世界でも同じように破壊される。
何かを遮断するために使われるのが結界であり、人間世界から精霊世界に移動して戦闘空間を確保するのが精界と理解した方が早いだろう。
つまり精界は人間世界に影響を与えないが、結界は人間世界にその通りの影響を与えるということだ。
そんな結界がまるで道場を守るように張り巡らされているのだから昇は不審に思わずにはいられなかった。
いったい何をやっているんだろう。
それと同時に興味も沸いてくる昇はそのまま道場に近づくと玄関の扉に手を掛けて、少しだけ力を入れると簡単に開いた。
どうやらこの結界は何かを封じ込めるものではなく、内部の影響

を外に出さないために張られているような結界だ。
だからこそ昇は普通に玄関の扉を開けると、そこには丁度琴未が訓練していた。
「はぁっ！」
琴未が雷閃刀を一気に振り下ろして床にぶつけると幾つもの雷が四方八方へと走った。どうやら雷の属性を使っているから結界を張って訓練をしているようだ。
けれども上手くは行っていないのだろう。琴未は荒い息のまま雷閃刀を振り下ろした部分を見て悔しそうな顔をしている。どうやら何かをしようとして失敗したようだ。
「やっぱり同時にやると精密さに欠けてコントロールが出来ないわね」
そんな事を呟いている琴未に昇は話しかける事を躊躇したが、さすがにこのままにはいかないので開いたドアをノックすると自分の存在を琴未に知らせた。
「昇！　いつからそこに？」
いきなり現れた昇に琴未は驚きを示す。さすがに昇が来る事は予想出来ていなかったようだ。まあ、それはそうだ。なにしろ琴未はここに修行をしに来ているのであって、帰省している訳では無い。
「ついさっきだよ。なんとなく琴未達の様子を見に行こうと思ってさ」
「私の……」
『達』の部分をすっかり削除してしまった琴未の脳内には勝手に次の展開が繰り広げられ始めていた。

「琴未、僕はやっと分ったんだ。やっぱり琴未は僕の傍に居ないとダメなんだよ」
手を取りすっかり美形と化した昇を見詰める琴未。そんな昇にうっとりとしながら昇の話しに聞き入る。

「琴未が居なくなってからすぐに分ったんだ。僕の中にすっぽりと大きな穴が開いた事に。最初は戸惑ったよ。けどすぐに分ったんだ。琴未が僕の傍に居ない事が僕にとってどれだけ大きなものを失ったかを教えてくれたんだ」
「で、でも、今の私じゃ昇の役には立てない」
「そんな事ないよ」
琴未を思いっきり抱きしめる昇。あまりにも唐突な事で琴未は抵抗どころか逆に昇の両肩を強く握り締めてしまった。
「琴未は僕の傍に居るだけで充分なんだ。ただそれだけいいんだ。それに修行ならならこれから僕がつけてあげるよ」
「えっ、つけてあげるって、何を……きゃ」
いきなりの感触に琴未は悲鳴を上げるが昇から離れるどころか更に抱き付く。
「ほら、体の力を抜いて、そんなに力を入れてると何も出来ないから。だから……全部僕に任せて」
「昇……うん」

「琴未、琴未～」
昇の姿を見た琴未はすっかりあっちの世界に旅立ってしまったようで、雷閃刀を片手にうっとりと昇の姿を見ていた。
「そんな昇、いきなりそんな所を」
って、そんな所ってどこですか！
「だって、今の私は沢山汗を掻いたし……うん、昇がそういうならいいよ」
なにが！　いったいなにがいいの！
「けど、ここだとやっぱり恥かしいよ……分った。昇がそう言うなら」
僕はいったい何を言ったんだ！
さすがにこれ以上は琴未の妄想モードに突っ込みきれないのか、

昇は道場に上がると琴未に近づいていった。
やっぱり結界の中だね。琴未があれだけの事をやったのに傷一つ付いてないや。
そんな感想を持ちながら琴未の目の前に立つと両肩を掴んで前後に揺さぶる。今回の妄想モードはかなり強いのかうっとりとした顔で前後に何度か揺らされると、やっと驚いた顔をして現実の世界に戻って来た。
そんな琴未は笑って誤魔化すが昇はすっかり慣れたようで同じく笑い流した。
「それで、どうしたの？」
昇の来訪理由を尋ねてきた琴未。その返答に昇は少しだけ考えてから答えた。
「うん、えっと、少しだけ……琴未の特訓風景を見てて良いかな？」
「昇、それって」
「いや、それはもういいから」
もう一度妄想モードに入りそうな琴未を止める昇。さすがにこれ以上はキツイのだろう。なにしろ放っておいたらいつまでも続くのだから、突っ込む身にもなれば突っ込みきれないのだろう。
まあ、そんな漫才みたいな理由はともかく、昇には確かめたい事があった。それが琴未とどう繋がっているかだ。
絆とか縁とか言い方はいろいろとあるけど、昇と琴未の繋がりはそんな言葉では表す事が出来ない信頼のようなものだ。琴未がどこまで昇を信頼して、どれだけ繋がっているのかを確かめてみたかった。
昇がここに来た理由がそれだ。
「それで、見てても大丈夫かな？」
「それは構わないけど、あんまり面白くないわよ」
「大丈夫だよ、確かめたい事があるだけだから」
昇の答えに琴未は首を傾げた。昇が何を求めているのか良く分らないのだろう。実際に昇もどう言葉にして良いのだから琴未に分る

わけも無かった。
それでも支障は無いのか琴未は昇の見学を許可すると、昇を結界の端に誘導してから琴未は道場の真ん中に移動した。
そして雷閃刀を下段に構えた。
さすがに構えると違うな。
そんな感想を抱く昇。雷閃刀を構えた琴未の表情は真剣であり、その眼差しは敵を射抜くかのように鋭くなっている。
そんな琴未が構えて静寂が訪れる。それがどれだけの時間かは分からないが、琴未は精神を集中させると右足を大きく踏み出す。
それと同時に雷閃刀も突き出し雷が迸る。放たれた雷は太い物だが、まとまってはおらずに今にもバラけてしまいそうだ。
そんな技を繰り出した後、琴未はもう一度元の位置に戻ると今度は下段よりも切っ先を右側の床に突ける。
今度は上半身から前に出すと左足を一気に踏み出す。そして一気に斬り上げるのと同時に幾つもの雷が天に向かって放たれた。
その雷は天井の結界に当たって四散するが琴未はやはり満足していない顔になっている。やはり思った通りには出来ていなかったのだろう。
それから琴未は雷閃刀を鞘に収めると一度昇の所にやってきた。
「今のところはこれぐらいなんだけどね。出来ればもう少し技数を増やしたいんだけど、思いついたのはこれだけだからしょうがないといえばしょうがないのよね」
「うん、凄かったよ。なんか、琴未らしい技だと思ったよ」
昇の感想に琴未は満足したのか顔に少しだけ笑みが溢れ出す。どうやら少し嬉しかったようだ。
そんな琴未とは逆に昇は少しだけ言い辛そうな顔をすると話を切り出した。
「……琴未は……なんで強くなろうと思ったの？」
「えっ？」
突然の質問に驚きを隠せない琴未。どうしてそんな事を聞くのか

分らないと示すばかりに首を傾げるだけだ。
そんな琴未に昇は話を続ける。
「負けて悔しいのは分るけどさ、琴未がわざわざここまでして特訓をする理由は何なの？」
昇がここに来た本当の目的はこれを尋ねるためだ。この質問こそが二人の繋がりを示す事になると思ったから昇はあえて口にした。
そんな昇に琴未は思いっきり溜息を付いてみせる背中を向けた。
「分らないの？」
「……うん」
「まったく、閃華の言ったとおりに本当に朴念仁なんだから」
またそれですか。
いつも言われている言葉に同じ事を思う昇。そんな昇に琴未は再び振り返ると昇の顔を下から覗き込むように近づける。
「好きだからだよ」
「えっ？」
突然の言葉に昇は思わず上半身を後ろにそらすと驚き、琴未はそんな昇を笑うのだった。
「私は昇の事が大好きだよ。だからどんな状況でも、どんなに負けても昇の傍に居る事だけは諦めない。そのために強さが必要なら……完全契約をした精霊に勝つ事が必要なら私は強くなる。だから一生懸命に特訓してるんだよ」
琴未は短い髪を揺らして再び昇に背中を向ける。本気の言葉でもここまではっきりと口にすると恥ずかしくなったようだ。
大きく深呼吸をする琴未。それで平常心を取り戻すと再び昇の傍に行って、お互いの顔を近づけた。
「昇はまだ迷ってるかもしれないけど、あいつらともう一度戦う事になるのは確かなんでしょ。精霊王の力が持っている危険性は私も充分に分ってるから。だから！　今度は負けないように、今度こそ勝てるように特訓してるのよ。昇が勝たせてくれるって信じてるからね」

最後にウィンクして一番最後の言葉を強調させる琴未。そんな琴未に昇はどう返事をして良いのか迷っていた。

ただ……嬉しいのは分った。琴未がここまで自分の事を思っていてくれた事が分っただけでも充分に繋がったような気がした。

「ありがとう、琴未」

他にも言い様があるだろうが、今の昇にはこれが精一杯なのだろう。そんな昇に琴未は微笑むと顔を少し赤らめた後で顔を一気に近づけてキスをしてきた。

いきなりの事で驚いて一瞬で琴未から離れる昇。そんな昇を琴未は笑っていた。

「これは罰だよ。女の子にこんな事を言わせるなんて男失格だよ。だからこれはその罰ね」

「……これからはなるべく精進します」

「うん、まったく期待しないで待ってるよ」

厳しいですね。

お互いに笑いながらその場の雰囲気を楽しむ昇と琴未。何にしても琴未との繋がりをはっきりと感じる事が出来ただけでも昇としては充分だった。

琴未の道場を後にした昇が向かったのは学校だった。さすがに夏休みなので静まり返っているが、昇が学校に一歩を踏み入れた途端に辺りの風景は一変した。

校庭ではシエラとミリアが特訓しているし、校舎には被害を出さないためか結界が張られている。そして学校全体には精界が張られており、その上から与凪の属性である霧を使って精界の存在を完全に隠している。

ここまでされてはかなり近くで強力な探知能力を使われないと発見される事は出来ないだろう。なにしろ精界は近くなら契約者でも精霊でも感知出来るが、大抵は目視で確認しないと発見できない物

だ。
　それでも分るのは精界は広範囲で張る事が多いため、遠くからでもよく目立つためである。
　だがこのように霧の属性で隠されてしまうと発見する事は不可能に近い。なにしろ精界の存在を隠しているし、契約者や精霊も常に精界を探している訳ではないのだから。
　そのため今ではこの場所がミリアやシエラの特訓場になっている。
　確信は無かったがミリアが特訓するとなるとここしかないと思っていた昇は校庭に入る事無く、その一歩手前で二人の様子を見守った。
　上空から攻めて来るシエラに対してミリアは大地を破壊して迎撃している。本来なら防御からのカウンターを狙うミリアにしてみれば積極的な行動と言える。
　そんなミリアの攻撃をかわしながら上空から一気に距離を詰めてくるシエラ。そんなシエラにミリアはアーススピアで対抗する。
「ショット！」
　アースシールドハルバードを一気に上に振り上げると、地面の槍であるアーススピアはシエラに向かって一気に飛び出していった。
　迫ってくるアーススピアにシエラはウィングクレイモアを右肩に担ぐと一気に翼を羽ばたかせる。もともと重量がある武器だけに一振りだけに大きな威力を持っている。
　だがそれだけではない、タイミングを合わせての一振りでほとんどのアーススピアを撃破すると、余波で生じた風で残りのアーススピアも吹き飛ばしてしまった。
　これでミリアの攻撃は潰した。再びミリアに突っ込んでいこうとするが、ミリアはすでに場所を移動してシエラの後ろを取っていた。
「アースボール」
　アースシールドハルバードを地面に突き刺したミリアの周囲から地面が吹き上がると、それは丸いボール状態になった。大きさは人一人が入れるぐらいの大きさだ。それが一つだけではない、幾つも

のアースボールがミリアの周囲に浮いている。
「ショット！」
再びアースシールドハルバードを振るうとアースボールはシエラに向かって突っ込んでいった。さすがにこれだけの質量だと全部破壊する事は不可能なのだおう。シエラは自分に直撃する最低限のアースボールだけを破壊しながら下降を続けたが、いつの間にかミリアの姿は地面には居なかった。
「……上」
シエラが上を見上げるとシエラが見逃したアースボールの中から一つが破裂すると、その中からミリアが一気に飛び出してきた。
「やあっ！」
気合と共に一気にアースシールドハルバードを振り下ろしてくるミリア。距離的にも重力が加わったスピード的にも普通に避けるのは無理だろう。
けれども相手はシエラである。スピード戦に関してはエキスパートだ。ただ上を取っただけで攻撃を入れられるほど甘くは無かった。
ウイングクレイモアの翼を羽ばたかせると一気にその場から離れる。これで完全にミリアの攻撃は空振りに終わるのだが、ミリアの攻撃はこれで終わりではなかった。
「ブレイク！」
未だに残っていたアースボールが一度に全て破裂する。周辺に大地の破片を撒き散らせながらシエラにも破片が飛んで来る。さすがにここまで予想は出来なかったのか、シエラは両手で顔を庇いながら攻撃をまともに受けるだけしかできなかったが、シエラもそこで終わる事は無かった。
アースボールの破片が全て通過するとシエラはすぐにミリアの姿を探した。アースボールを破裂させるタイミングが早すぎたのだろう。その短時間がシエラにミリアの姿を捉える隙を与える事になってしまった。
ミリアは未だに落下の最中で油断しているようだ。どうやら先程

の攻撃が上手く行ったのに満足しているようだ。確かに攻撃は上手く行ったが反撃までは考えていなかったのだろう。

なにより未だに地面に着地してなく上空である。こうなってはシエラにとっては絶好の的だ。

ウイングクレイモアの翼が羽ばたくとシエラは一気に下降途中のミリアに向かって飛んで行く。

完全に油断してたミリアがシエラに気付いた時には、ウイングクレイモアがすでに振られそうになっている時だ。

慌ててアースシールドハルバードを構えるミリアだが、その時にはすでにウイングクレイモアがアースシールドハルバードを捉えており、ミリアと一緒になって振り抜いてしまった。

吹き飛ばされたミリアは地面に叩きつけられるだけでなく、そのまま地面に後を残しながら滑り、かなりの距離を地面に擦りつけながら行くとやっと止まった。

そんなミリアの元にシエラはゆっくりと降りてきた。

「途中で気を抜き過ぎ、こちらの攻撃が完全に効果を出してるか確かめるまで油断しない」

「……っ～、う～、分ったよ～。でも、ここまでやることは無いんじゃないの」

文句を言うミリアを無視するように視線を逸らすシエラ。

「それは自業自得、これにこりたら……」

言葉を止めてミリアから視線を逸らすシエラ。その視線の先には昇が居た。どうやら今まで集中していたようで昇の存在には気付いていなかったようだ。

そんなシエラの視線に気付いた昇は二人の元に歩いて行った。

「二人とも頑張ってるね」

正直な感想を口にする昇。けれどもその発言がミリアに火を付けてしまったようだ。

「当たり前だよ！　なにしろ相手はお師匠様だよ。だから今のままじゃダメなんだよ。もっともっと強くなって、お師匠様を倒さない

といけないんだから～」
相手がラクトリーだという事で久しぶりにミリアの修行する心に気合でも入ったようで、かなりの特訓をしていたのが二人の姿を見ればよく分かる。
二人ともかなり汚れており、打撲のような後まで残っている。さすがに訓練なだけに斬り合いまではしないが、打撃は加えているようだ。そこまでやっているのだから、かなりキツイ訓練になっているようだ。
そんなミリアに昇は感心したような顔をしてるとシエラが袖を引っ張ってきた。
「シエラ？」
「私達は大丈夫、いつでも昇の剣と盾になれる。だから心配は要らない」
どうやら昇を心配しての発言のようだが、昇の目的とは少しずれていた。
「うん、それは分ってるよ。二人とも僕の為にがんばってくれてるって事は……でも……なんていうか……」
それ以上はどう言えば良いのか分からなくなったのだろう。急に黙り込んだ昇にシエラは視線を動かさないままに見詰めるが、ミリアがいきなり昇に抱き付く。
「大丈夫だよ昇、私が絶対にお師匠様を倒してみせるから」
そんな事を言いながら昇に頬擦りするミリアをシエラは引き剥がすと、ウイングクレイモアでぶっ叩いて吹き飛ばすのだった。
わ～、ホームランだ。
思わずそんな事を思ってしまった昇は咳払いをして気分を入れ替えるとシエラと向き合った。
「シエラは……どうして僕を選んだの？」
考えて浮かんできた言葉ではなく、自然と浮かんできた言葉を口にする昇。自分で言った後に自分でもどうしてシエラが自分を選んだのかを考えてみたが見当が付かなかった。

その一方で質問されたシエラはゆっくりと昇の手を取ると視線を交じ合わせる。
「昇は知らないけど……私に一番大事な言葉をくれた。それから昇の事が気になってずっと見てた。それで契約したいと思ったから契約した」
「えっと、一番大事な言葉って？」
昇にはそんな言葉はまったく思い当たらなかった。それはそうだ、シエラとは知り合う前だし、シエラから勝手に人間界を覗いていただけなのだから、その言葉が何なのか昇に分かる訳が無かった。
その言葉が何なのかを聞いてみるとシエラは静かに人差し指を唇に当てた。
「それは秘密。私の……一番大事な言葉だから」
それからシエラは今まで自分の唇に当ててた人差し指を今度は昇の唇に当てる。
「だから昇も聞かないで、それだけ大事な物だから」
「う、うん」
シエラの仕草に思わずドキッとしてしまった昇。先程までシエラの唇に触れていた指が今は自分の唇に触れてると感じているだけでドキドキしてしまうようだ。
そんな昇の心情を見抜いたかのようにシエラは微笑を浮かべると、突如地面から突き出した壁に斜めから突き飛ばされてしまった。
……今日はいろいろと良く飛ぶ日なの？
そんな感想を抱いてると戻って来たミリアが昇の後ろから抱き付いて来た。
「昇、ただいま～」
「おかえりってのも変だけど、シエラは良いの？」
先程の仕業はミリアがやったものだろう。だからこそそんな事を聞いたのだが、ミリアは怒ったような表情になると昇から離れた。
「だってさっきはシエラが私を吹き飛ばしたんだよ。これでお相子だよ」

「そ、そう」
もうこうなってはどうすれば良いのか分らなくなってきた昇だった。
けれどもミリアにも尋ねるべき事があるのも確かだから、そのままミリアと話し込む。
「そういえば、ミリアはいきなり僕と契約したけど……いったい何で僕だったの？」
その質問にミリアは考え込む、というより思い出しているのだろう。ミリアの事だから契約した時の事などすっかり忘れていたようだ。
それで何かを思い出したかのように手を叩くと少しだけ悲しい顔になる。
「私が前に契約していた人を昇達が倒したでしょ」
「うん」
ミリアは昇達と知り合う前は他の契約者と契約していた。けれども、その契約者が酷い奴で精霊を道具としか思っていないような奴だった。そんな奴を相手に昇達は初めての争奪戦に参加したわけだが、その結果としてミリアは以前の契約が解かれるとすぐに昇と契約をしてしまった訳だ。
そんな経緯があってミリアは昇と契約をしたわけだが、ミリアにとっては悲しかった出来事の一つなのかもしれない。
「その時に思ったの、この人ならちゃんと私を見てくれる。私と一緒に楽しい事や嬉しい事をやってくれる。そう思ったから契約したの。……それにそれだけじゃない……雪心の事でも昇は一生懸命に何とかしてくれようとしてくれた。私、凄く嬉しかったよ」
「……そっか」
ミリアにしてみれば昇は最も優しくしてくれる契約者なのだろう。今までラクトリーの元で修行に励んでいたため、少しだけ常識に欠ける部分があったのだろう。だからあのような契約者と契約を結んでしまったのかもしれない。

その後に現れた昇。その時の昇はミリアにとってはとても眩しく見えたのだろう。だからこそ、その場での契約を決意したようだ。まあ、これも常識が欠けていると言える要因の一つと言えるのかもしれない。

「要するに優しければ誰でも良いと？」

やっと戻って来たシエラがそんな言葉を掛けてきて、ミリアは怒ったように反論する。

「そんな事無いよ。昇は昇だから昇なんだよ。そんな昇だからこそ昇を選んだんだよ」

あの～、ミリアさん、何が言いたいのかさっぱり分りません。

確かにその通りなのだが、そんな事をミリアに言ってもしょうがないだろうと昇とシエラは同時に半分諦めたような、半分微笑むような顔をした。

そんな二人の反応に不満なのかミリアは文句を言いだした。

「昇だからこそ私はお師匠様に勝てると思ってるんだよ！　昇がしっかりと私を支えてくれてるから、だから私はお師匠様を倒す事が出来ると思ってるんだから」

そんな文句を言ってくるミリアにシエラは頷くと昇の手を取った。

「それは私も同じかな。昇がいるから私達は私達で居られる。昇が居るからこそ、私達は協力し合えるし、一緒に進む事が出来る。だから私達と昇はいつまでも繋がってる」

「そう……なのかな」

「そうだよ！」

元気良く返事をするミリアに昇は驚いた後にゆっくりと目を瞑った。

「少しだけ……試してみてもいいかな？」

「何を？」

「繋がっている事を」

顔を見合わせるシエラとミリア。どうやら昇が言っている事の意味が分からないようだ。そんな二人を放っておいて昇は精神を集中

させると精神だけを鎮めていく。
　足元から広がった黒い空間は昇の精神だけを降ろして行き、そして昇の精神が全て飲み込まれると昇はしっかりとした地面に足を付ける。
　なんか……ここに来るのも久しぶりだな。
　そこは最初の頃にエレメンタルアップを使用していた時に使っていた場所だ。今ではそこまでしなくてもエレメンタルアップは使えるが、最初の頃はこの空間に入ってから繋がりを確かめないとエレメンタルアップを使用することが出来なかった。
　……そっか、今までは普通の事でいつもの事だと思ってたけど。繋がっている事はこんなに近くにあったんだ。
　昇は更に精神を集中させるとどこかから四本の赤い紐が伸びてきた。
　これが……僕達の繋がり。そうだよね、エレメンタルアップの使用条件は心が繋がってる事だもんね。僕達の心はいつでも繋がってたんだよね。
　四本の紐を見詰めた昇は精神を浮上させていく。これだけ確かめれば充分なのだろう。昇としては満足な成果を得たような気がした。
　現実に戻って来た昇を覗き込んでいるシエラとミリア。どうやら昇が急に静かになった事を気に掛けていたようだ。
「……忘れてたよ……僕達はいつでも繋がってるんだって事を」
　いきなりそんな事を呟いた昇にますます訳が分らないという顔をするシエラとミリア。そんな二人に昇はこんな言葉を掛けた。
「こんな事を言うのは自分勝手かもしれないけど、二人には僕に全てを預けて欲しい。信頼するだけじゃない、心の底から繋がってて欲しい。……そんなのはダメかな？」
　最後だけ誤魔化すように笑いながら尋ねる昇にシエラから返答をしてきた。
「私の……私達の繋がりは切れもしないし、無くなったりもしない。いつでもそこにある。だからこそ私は昇に全てを預ける事が出来る。

昇の剣になれるのは昇に全てを預けてるから。だからダメじゃない」
「うん、ありがとうシエラ」
シエラの言葉からしっかりとした繋がりを感じた昇。それだけシエラが昇と繋がっていると言う事だろう。それは信頼や信用を通り越しての繋がりだ。そう簡単に切れたり消えたりする物ではないのはシエラの言うとおりなのかもしれない。
そんなシエラに続いてミリアも元気一杯に答え始めた。
「大丈夫だよ、私は皆を守る盾だよ。だからお師匠様が相手でも絶対に攻撃を防いでみせるよ。だから昇、お師匠様達に勝ってね。昇なら絶対に私達を勝たせるって信じてるからね～」
「分ったよ、ミリア」
ミリアの言葉からは覚悟が感じられた。それは自分は精一杯の事をするから昇の力で勝たせて欲しい。そんな想いが込められているのかもしれない。
そんな二人の言葉を胸に刻みつけるように目を瞑る昇。
そうだ、それは当たり前のことで、すぐ近くにあって、こんなにも普通だから。だからすっかり忘れてたけど、少しだけ立ち止まって辺りを見回せばすぐに見つかる物なんだ。後はこれを……。
「そう、後はこれで完全契約をした精霊達に勝たないといけないんだ」
覚悟を口にする昇。その昇の言葉に頷いて見せるシエラとミリア。シエラは微笑み、ミリアは満面の笑みを浮かべている。二人とも今の昇を見て何かしらの確証を得たのかもしれない。
けれどもシエラは冷静さを取り戻したように真剣な顔付きに戻るとキツイ一言を放つ。
「それでどうやって完全契約した精霊に勝つの？」
「うっ、それは……」
言葉に詰まる昇。彩香のヒントで皆との繋がりを確かめに着たものの、それをどうやって活用するかまでは考えていなかった。
その答えを求めて見詰めてくるシエラに昇は頭を掻きながら溜息

を付いた。
「実はまだ思いつかないんだ。何かヒントでも無いかなとか思って皆の所を周ってただけなんだ」
「そっか、それで何かしらのヒントを得た。後はそれをどう活用するか、そういう事？」
さすがに驚いた顔をする昇。まさかシエラがここまで昇の心を読んでいるとは思っていなかったのだろう。
「う、うん、まあ、そうなんだけど」
「ならいつもの生徒指導室に行けば良い。そこには閃華と与凪がいるから昇が得た物を形にしてくれるかもしれない」
「あっ、閃華と与凪さんは学校に来てるんだ」
始めてその事を知ったが、あまり驚きはしなかった。閃華が居なくなる時は大体琴未の実家である神社か学校の生徒指導室のどちらかである。
神社には先程行って居なかったのだから、昇もこっちに閃華が居るとは考えていたが、与凪まで居るとは思っていなかったようだ。
「というか、なんで与凪さんまで来てるの？」
「それは知らない。別に与凪の事を監視している訳じゃないから」
まあ、それはそうなんですけどね。
確かに与凪が生徒指導室に居る事は多いが、まさか夏休みまで居るとは思っていなかったようだ。
もしかしたら森尾先生に仕事があるから一緒に学校に来ているのかもしれないし、まったくの別な理由があるのかもしれない。
どちらにしろ、これからの事を二人に相談するために昇はシエラのミリアの二人に別れを告げるといつもの生徒指導室に向かうのだった。

第八十七話　繋がるという事（後書き）

なんか書いていて一つだけ思った。琴未フラグだけは簡単に立つのではないのかと。

いや、なんか、今回の話を読むとそんな感じがしない。これで完全に琴未にフラグが立って攻略ルートに突入しそうな勢いじゃないですか。

まあ、そんな事を感じたわけですよ。というか、もしエレメをゲーム化するとしたらどうなるんだろう？　なんか普通に恋愛アドベンチャーもいけるし格ゲーも行けそうな気がしない。

いや、だって、エレメってバトルだって多いじゃない。それに技数も多いから普通にそんなゲームが作れてしまいそうな気がしてしますのは私だけでしょうか？

まあ、そんな戯言はさて置き、もう一個戯言。

いや、なんかさすがにここまでの長い作品になると普通にアニメ化してみたいとか思ったりとかもしました。いや、だって、普通にワンクール出来るし、それだけの量は持ってると思うんだよね。……まあ、内容はともかくとして、なんとなくだけど、そんな事を思ってみました。

でもファンタジーを書いてる人は皆思っているのかもしれないですね。自分の作品がアニメ化されたりするのを。やっぱりほかのメディアでも自分の作品がどうなるのかって気になりますよね～。

そんな訳で戯言は終了。そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、今月はいろいろとやり過ぎてしまった葵夢幻でした。小説以外の意味ですけどね。

第八十八話　宣戦布告

「おっ、やっと来たようじゃな」
昇が生徒指導室に入るなり閃華がそんな事を行って来た。
「僕がここに来ることが分ってたの？」
「なに、昇の事じゃから必ず答えを求めてここに来るだろうと予想していただけじゃ」
「そっか」
閃華なりに昇が必ず答えを出すためにここに来ると確信していたのだろう。それだけ昇と閃華の繋がりはしっかりとしているものなのかもしれない。
一緒に居た与凪に促されていつもの席に腰を下ろした昇に与凪はわざわざお茶まで出してくれた。
ここまで至れり尽くせりだと少し気が引けてしまうが、与凪が好きでやってくれている事だから、ここは甘える事にしようと昇は素直に与凪の好意を受けいれた。
「それで、ここまでの手応えはどうなの？」
昇が一息付くと与凪は直球に聞いてきた。さすがにそこまで率直に聞かれると昇もどう答えて良いのか迷ったようで、正直に話す事にした。
「まだ……どうすれば良いのか分らない。けど、あの完全契約をした精霊達を倒す事は決めてるよ。そうしないと僕が望んでいる未来は掴めないから。だからそれだけは絶対にやる。……けど」
「けど完全契約に勝つ手段が見付からないんじゃな」
閃華が昇の言葉を続けると昇は素直に頷くしかなかった。
閃華の言うとおりなのは間違いない。戦う事が確実でもどうやって勝てば良いのか、その糸口さえも見つけることが出来ていない状態だ。
そんな中で何かしらのヒントを得るために昇はこうやって皆の様

子を見て周っているのだから。
「まあ、確かに相手は完全契約で完全な強さを手にしてますからね。こちらが対抗するにはそれなりの手段が必要ですよね」
そんな感想を漏らす与凪に昇は溜息を付いた。与凪の言葉が的を射ているだけに返す言葉が見付からない。更に言うなら昇はその完全契約に勝つ為の手段を見つけ出さないといけないのだから。
こんな状況をしっかりと把握するような言葉を聞かされると溜息の一つでも出てしまうのだろう。
「そうなんだよね。問題はそこなんだよ。個人の力では完全にあっちの方が上だし、そんな人達にどうやって対抗すれば良いんだろう？」
そんな言葉を漏らした昇に珍しく閃華は鋭い視線を投げ掛けてきた。
「昇はいったい何を見て、確かめてきたんじゃ」
「えっ」
閃華の鋭い言葉が昇の胸に突き刺さる。
何を……見てきたか？
そう言われてると今日の事を思い出さざる得ない昇。それは映写機に移した画像のように昇の頭に流れて行く。
僕が今日見てきたもの、確かめてきたもの。それは……皆との繋がりだ。僕と皆は常に繋がってる。心と心を通わせてるはずだ。でも……それをどうやって活用すれば良いっていうんだ。確かにお互いの事が分っているとしてもそれは完璧に分っている訳じゃない。誰だってお互いの事が完璧に分かるはずが無い、そんな事が出来れば……ッ！
思考の途中で何かを思い付いたのだろう。昇は思考を止めると何かを感じたかのように驚きの表情を示した。
「協力する事は足し算、繋がる事は掛け算か」
そんな言葉を口にする昇。それは昼に彩香から言われた言葉だ。
その時は意味は分からなかったが今は分かったような気がしてきた。

「閃華」
何かの糸口を掴んだような目で閃華に尋ねる昇。
「契約者の能力は能力を逸脱してなければ応用が効くんだよね？」
突然そんな事を尋ねた昇に閃華は座りなおすと、少しだけ微笑みながら多少の意地悪なスパイスを混ぜながら答える。
「確かにその通りじゃな。能力の範囲外の事が出来んが、範囲内ならいくらでも応用は効くぞ」
「なら……エレメンタルアップが精霊の能力を上げない事も出来る？」
そんな質問に驚きを示したのは与凪だった。
それもしかたない。本来エレメンタルアップは精霊の能力を限界以上に引き出す能力だ。それを無視して精霊の能力を上げないなんてエレメンタルアップの意味が無い。
「って、そんな事をしてどうすつもりなんですか」
当然の質問をぶつける与凪。そんな事を言いだした昇に聞かずにはいられなかったようだ。そんな与凪に昇は少しだけ自信ありげな笑みを浮かべながら口を開く。
「エレメンタルアップは精霊の能力を上げるもの。そうやって決め付けちゃうと能力の応用が効かないと思うんだ。だからこそ精霊の能力を上げなくても戦える方法があるんじゃないかなと思って」
「なるほどのう。確かに昇のいうとおりじゃ。エレメンタルアップを使ったからとって必ずしも精霊の能力を上げる必要は無い事は確かじゃのう」
そんな言葉で返してきた閃華に頷いて見せる昇。どうやら何かしらの確信を得たようだ。
それから昇は自分の胸に手を当てると少しだけ瞳を閉じる。何かを感じているような、そんな雰囲気を出していた。そして静かに瞳を開けるとゆっくりと話し出した。
「能力の使用条件が……どうしてこういう条件が付いたのか分ったような気がする。それが必要だったから、そうしなければいけなか

ったから、だからエレメンタルアップの使用条件が精霊の事で心を一杯にする事。それは精霊と心を繋げる事だから」

エレメンタルアップの使用条件は二つ。一つは精霊に触れていることだったが、昇の能力が上がっていて触れて無くても使用可能となっていた。

二つ目には精霊の事で心を一杯にする事。そこが一番重要だと昇は気付いたようだ。

それは精霊でも人でも関係ない。その人の事で心の中を一杯にして、相手からも自分の事を一杯にされる。そうする事で自然と出来た繋がり、それが作れるからこそ昇はエレメンタルアップの能力を得たのかもしれない。

相手の事を思い、思いすぎる事があって誤解するかもしれないけど、それでも信頼し続ける心が持てる。それだけの心を昇が持つ事が出来ると判断したからこそ、精霊王は昇にエレメンタルアップを与えたのかは誰にも分らないだろう。

けれども今はそのエレメンタルアップを使って完全契約の精霊を打ち破らないといけない。だが実はそれだけじゃない、昇自信もフレトに完全勝利しなければいけなかった。その糸口はすでに昇は掴んでいた。

「閃華、前から思ってたんだけど」

「なんじゃ？」

「僕が最初に自分の武器を作り出そうとした時、あの時って閃華達が僕を止めたよね」

質問の内容を思い出すのに少しだけ時間を要した閃華。それは昇が始めて自分の武器である二丁拳銃と黒いシャツとコートを作り出した時の事だ。

今にして思えば最初のやり方が間違っていたのかもしれない。なにしろエレメンタルアップの応用で武器を作り出そうとしていたのだから、今のようにアルマセットを使って作り出すというアイデアは出てこなかったのだろう。

その後に何とか武器のイメージ化に成功したのは偶然だろう。けれども昇がアルマセットを出来るようになったのもその時からである。

それがなんの関係があるのか尋ねる閃華に昇はその時の状況を踏まえながら答えた。

「あの時は力の影響で地震が起きるほどの力を発動させたよね。もし……それが自分でコントロールできるとしたら？」

「ッ！」

さすがに驚きを隠せない閃華。どうやら昇が言いたい事が一発で分ったらしい。

「じゃがあれは未知の能力じゃ。何が起こるか分らんぞ」

「分ってる。でも、その力も必要だと思うんだ」

「本気で言ってるんじゃな？」

「もちろん」

溜息を付いて見せる閃華。こうなっては何を言っても無駄だと悟ったようだ。でもそれだけじゃない。昇ならやるかもしれないという期待に似た確信があったのかもしれない。

そんな昇から視線を外すと閃華は背もたれにもたれかかった。真剣な話をしただけに少し疲れたのだろう。そんな閃華にお茶を入れなおしながら与凪が突然変な事を言い出した。

「そういえば滝下君の武器ってまだ名前をつけて無かったわよね。丁度良い機会だから武器の名前も考えてみたら」

……えっと、それが勝つ事にどんな関連性があるのでしょうか？

「そうじゃな、いつまでも二丁拳銃とか黒いコートとかでは言い辛いからのう」

いや、閃華さんまでそこは賛同するんですか。

「どうせならカッコイイ名前にしましょうよ」

いやいや、与凪さん、何をいきなり盛り上がってるんですか。

「うむ、それは名案じゃな。なにしろ決めゼリフじゃからのう。ここはビシッと決めるような名前ではいかんのう」

あの～、いつからアルマセットは決めゼリフになったのでしょうか。

「ならいっその事、横文字じゃなくて日本的な名前にしてみましょうか。下手に横文字にするよりかはカッコイイと思いますよ」

もうカッコ良ければどうでもいいんですか。

「そうじゃな、どうせならそうしてみるとするかのう」

……もう好きにしてください。

「それで、滝下君はどんな名前が良い？」

「いや、いきなりこっちに振られても困るんですけど」

「まあ、昇にはセンスが無いからのう。ここは私が決めてやるとするかのう」

わぁ～、閃華さん、それは遠回しのイジメですか。まあ、確かにセンスが無い事は認めますけど、そうはっきりと言われると傷つきますよ……僕が。

「武器は紫の黒と書いて紫黒防具は八咫烏というのはどうじゃ？」

「いいですね、それ、カッコイイですよ」

まあ、確かにそうですけど、それでいいんですか……本当に。

先程までの雰囲気は何処に行ったのやら。今では閃華と与凪は昇の武器についての名前で盛り上がっていた。

もちろんそれは与凪なりに休憩を入れたつもりだ。いつまでも真剣な話をしていたのでは疲れるだろという、与凪ならではの休憩の入れ方だろう。

おかげで昇は気付かないままに少しだけ気が楽になっていた。

そんな二人の会話は少しだけ盛り上がると閃華は大きく伸びをすると話を元に戻してきた。

「さて、余談はここまででいいじゃろう。そろそろ本題に入ろうかのう」

「本題って？」

「もちろん、昇がどうやって完全契約をした精霊を倒すかじゃ」

急に真剣な顔付きになった閃華に昇の顔をも引き締まる。それか

ら昇の口から今日のことで導き出した答えと作戦が告げられるのだった。

「確かに実現可能だけど、滝下君にはかなりの付加が掛かるわよ」
「別にエレメンタルアップと一緒にやるわけじゃないから大丈夫ですよ」
「あっ、そっか」
昇の答えを聞いた与凪がそんな事を言ってきた事に対して昇は大丈夫な事を告げた。
「それにしても、相変わらず予想外な考えを出してくるわね。それに今回は私も手伝わないといけないわね」
「はぁ～、こればっかりは与凪さんの力を借りないとどうしようもなくて」
申し訳無さそうに頭を掻く昇に与凪は笑ってみせる。
「別にそんな事を気にしなくても良いわよ。私はバックアップが専門だもの、これぐらいはやってのけて見せるわよ」
「ありがとうございます」
「礼なんて別にいいわよ」
軽く手を振って律儀な昇を軽く流す与凪。そんな与凪に昇は感謝するのと同時に別の思いも浮かんできた。
けど今はそれを胸に仕舞い込んで閃華へと目を向けた。
「これの完成には一度皆が集らないといけないと思うんだ。閃華には悪いけど琴未を呼んで来てくれる」
「うむ、では行ってくるとしようかのう」
席を立って部屋を出て行く閃華を見送る昇と与凪。二人っきりになり、すっかり静かになった生徒指導室で昇は先程思った事を尋ねて見る事にした。
「与凪さん」
「んっ、どうしたの？」

急に呼び掛けられてモニターから昇へと視線を移す与凪は何事かという顔をしている。そんな与凪と視線を交じ合わせる事無く昇は尋ねた。

「与凪さんにはいつもお世話になってるし、今回もこんな事まで頼んじゃったんですけど。与凪さんは本当にこれで良いんですか？僕達と一緒に戦ってくれて」

そんな昇の言葉に与凪は驚いた顔をするとわざわざがっかりしたような表情になり肩を落として見せた。

「それは……私が滝下君達の仲間じゃないって事？」

「い、いや！　そうじゃなくて！」

突然そんな事を言われたので慌てる昇に与凪は思いっきり笑い出した。どうやら相当面白かったようだ。

そんな与凪の笑いが収まると与凪は視線を外に移す。外では未だにシエラとミリアが特訓しているのがチラチラと視界に入ってくる。

そんな二人を見て与凪は微笑むと両手を組んで軽く頬を乗せる。その姿は可憐で優雅で与凪が精霊である事を昇は再確認させられた。それほどまでに与凪の姿は綺麗だった。

「確かに最初はこんな無茶な事をする人達を放っておけなかっただけなんだけどね……でもね、それは切っ掛けにすぎないの。私は……友達を放っておいて自分だけ逃げる事なんて出来ないわよ。だからこうして滝下君達と一緒に戦ってる」

「……与凪さん」

「私は友達を見捨てる事なんて出来はしないのよ」

いつも以上に真剣に語る与凪の雰囲気に昇は完全に飲み込まれたように与凪を見詰める。そんな与凪は今度は昇に視線を移してきた。

「それに……滝下君達は傍目から見てると面白いのよね。こんなに楽しませてもらってるんだから、少しぐらいは恩返ししないと」

僕達はいつから与凪さん専門の漫才師になったんですか。

そんな事を思いながら昇は軽く溜息を付いた。先程までの雰囲気は何処に行ったのやら、与凪は何処まで行っても与凪なのだと昇は

分ったような気がした。

「って、本当にそんな言が出来るの！」

全員が集って昇の説明を聞いた琴未はそんな事を言い出した。確かに昇のアイデアなら完全契約にも勝てるかもしれない。けれどもそれが実際に出来るかとどうかと言われると不安になるのだろう。

「それは大丈夫、エレメンタルアップの応用で何とかしてみせるから」

「そ、そう」

自信満々で言われたので琴未はそれ以上の事は何も言えなかったのと同時に安心する事が出来た。いつもの昇が戻ってきたのだと実感できたのだろう。

「これで完全契約に対抗する下地が出来た訳じゃが、いつしかけるつもりじゃ？」

フレト達がこれからも精霊王の封印にちょっかいを出してくるのは確かだろう。だからあまり時間がない。悠長に修行をしている暇は昇達には無いのだが、昇は何かを確信したような笑みを閃華に向けると次は真剣な顔付きを皆に向けた。

「これから十日後に精霊王の封印を賭けて勝負を挑む」

「なんじゃと！」

「なっ！」

「それは！」

それぞれに驚きを示すシエラ達。それはそうだろう、なにしろ精霊王の封印を賭けて正面から勝負を挑もうというのだから。

「そんなの無謀すぎるよ～」

さすがのミリアもそんな短期間でラクトリーに勝てる自信が持てないのだろう。けれども時間が無いのも確かだし、昇なりにも考えがあった。その事を見透かしたかのように閃華は昇に尋ねる。

「なぜわざわざそのような真似をするのか、その説明が必要じゃな。

私達にもじゃがな」
　頷く昇は自分の考えを信じて言葉を口にする。
「僕はこれからこの事をあの人達に伝えてくるよ。なにしろ精霊王の封印を賭けた勝負だ。相手としても拒否する必要は無い。なにしろ勝てば余計な手間を省いて精霊王の力を手にする事が出来るんだから。だから相手は絶対にこの提案を拒否しない」
　確かに昇の言うとおりだ。相手はこの勝負に勝つだけで精霊王の力を手にする事が出来るのだから拒否する理由がないだろう。
　罠とも考えるだろうが、なにしろ精霊王の力だ。たとえ罠だと分っていても飛び込んでくるだろう。フレト達にも時間が無いのだから。
　お互いに時間が無いのは一緒だ。だからこそ昇は正面からの勝負を挑もうとしている。だが昇としても負ける気は無い。
「でも……僕達は絶対に負けられない！　絶対にあの人達に勝たないといけないんだ。その勝負で勝つことが出来れば皆が喜んでもらえるような未来を僕が作ってみせる！　だからこそ、そこで全てに決着をつける」
　昇の言葉に聞き入るシエラ達。皆が昇を見詰めている中で昇だけが自分自身を完全に信じていた。いや、自分自身では無い。自分と繋がっている皆を信じている。だからこそ何も言わずに今は黙っていた。
「十日後……分ったわ。それまでに何とかしてみせる」
「琴未……」
　真っ先に答えた琴未に昇は琴未に強い覚悟がある事を感じた。今度こそは昇の役に立とうと必死になっているのが朴念仁の昇にさえ分るぐらいだ。相当の覚悟を琴未は持っているようだ。
「私はいつでも昇の剣なる。だからいつでも構わない。私を振るいたい時はいつでも振るって」
「ありがとうシエラ」
　シエラも昇を真っ直ぐに見据えながら覚悟を口にした。シエラは

最初から決めていたのかもしれない。そう、契約した時から昇の剣となって敵を斬り裂く事を。それがどんな状況でも、どんな事態でも関係ない。自分は昇を信じて一緒に歩くと決めていたのだから。

「……十日後には……お師匠様と。うん、分ったよ、シエラが剣になるなら私は盾になる。皆を守る盾になる。だから私も昇を信じるよ」

「僕も信じてるよミリア」

お互いに繋がっている事を確認しあう昇とミリア。直感だけで昇を契約者として選んだミリアの勘はある意味では当たっていたのかもしれない。なにしろこんなに強い繋がりを作れたのだから。

「やれやれ、美味しいところを取られっぱなしじゃな。まあ、たまには良いかもしれんのう。昇、私がやれる事はここまでじゃ、後は自分が信じた道を進むんじゃな。なに心配はいらん。なにしろ昇には私達が付いておるからのう」

「そうだね閃華」

いつも導いてくれている閃華に改めて昇は感謝する。ここまで来れたのは閃華のアドバイスがあったからこそだ。閃華はいつだってそうだ。昇が困っている時は影ながらサポートしてくれる。

時々度が過ぎて遊びすぎる事もあるけど、それは昇や琴未を思ってやっている事だ。だからこそ昇も閃華を信じる事が出来るのかもしれない。それを時々感じているからこそ、閃華とは改めて繋がりを確認しなかったのかもしれない。

閃華は影でいつも昇と琴未を見守っているのだから。

「さてと、それじゃあ私もそろそろ自分の作業に戻るとしますか」

「お願いします、与凪さん」

「任せて、最高の物を作ってみせるから」

背中を向けて歩き出した与凪は片手を上げて親指を立てて見せた。

少しだけ距離は開いているけど、そんな距離を無くして繋がる事が出来るのが与凪なのかもしれない。

確かに与凪は昇とは契約はしてないが、昇達を助けてくれる。そ

れは与凪の意思であり覚悟の表れかもしれない。それに出来ないのだろう、昇達を見捨てることなどは。

そんな事をするぐらいなら徹底的に首を突っ込んで行くだろう。それが与凪なのかもしれないと昇は思わざる得なかった。

今までは無意識でやっていたけど、エレメンタルアップってもの凄く凄い事なのかもしれない。なにしろこんなにも強い繋がりを持つ事が出来るんだから。皆と……だから、これからも一緒に戦っていける。

昇はそう確信したのだった。

はぁ～、すっごい高級ホテルだな～。

ラクトリーに渡された連絡先を辿って辿り付いた場所は、この付近でもかなり珍しい高級ホテルだった。こんなのがここにあるだけでも不思議なのだが、まあ宿泊施設などはどこにでもあるものだと昇はホテルの中に足を踏み入れていった。

現在ここに居るのは昇一人だけだ。下手にシエラ達を連れて行けば昨日のような戦闘になりかねない。それを防ぐためにも昇一人でここにやってきた。

当然、琴未達に止められたが、これは絶対に必要な事だし、下手に刺激しないためにも自重した方が良いという閃華の進言により琴未達は身を引く事になった。

ホテル内は入口から特別に豪勢というわけではなく、通常のホテルに比べれば高級感が出ているだけだ。

そんなホテルの受付に向かうとラクトリーが示してくれた部屋の住人に自分が来た事を知らせてくれと頼んだ。いきなり乗り込んで行っても警戒されるだけだから、自分が来た事だけでも先に知らせておいて損は無いと判断したようだ。

受付の人が電話を代わるか聞いてくるが、直接話がしたいから部屋に行きたいと自分の意向を伝える。

その事をフレト達に伝えているのだろう。受付の人は電話を切ると昇にフレト達の部屋が何処にあるのか、行き方を丁寧に教えてくれた。

教えられた通りにエレベータへと乗り込んだ昇は最上階にある部屋へのボタンを押しすとドアが閉まり動き出した。エレベーターの半分はガラス張りになっており外がよく見える。

時間はすっかり夕刻になってしまい。夕焼けがよく見えた。そんな光景を見ながら自分の手が震えている事に気付いた昇。不安なのか武者震いなのかは分らない。けれども敵陣に一人で乗り込むようなものだから震えてもまったく不思議は無い。

けれどもそんな身体とは反対に心は静かだった。鏡のような水面のように静まり返った昇の心に夕焼けが写る。

その綺麗な光景は昇の覚悟を後押ししているかのように綺麗に輝いている。

そうだ、ここまで来たらもう引き返せないんだ。いや、引き返す気なんて無い。もう決めた事だから。後は自分を信じて進むだけなんだ。

綺麗な夕焼けに自分の覚悟を写すかのように鋭い視線で見つめる昇。そんな光景を見ていると到着が近いようでエレベータの動きがゆっくりとなった。

そして動きが完全に止まるとエレベータのドアが開く。

「お待ちしておりました」

そこには咲耶とレットが居た。咲耶は深々と頭を下げて昇を出迎え、レットは辺りを警戒しながら軽く頭を下げた。昇が着たから警戒のためか、それとも何かしら企んでいるのかは分らないが、昇は堂々とエレベータから出て二人に告げる。

「フレトさんに話しがあってやってきました。重要な話なので取り付いて貰えますか？」

「先程から部屋でお待ちです。どうぞこちらへ」

レットがそう告げると咲耶が案内に立つ。咲耶とレットに挟まれ

て歩く昇。一応警戒されているのだろう。昇はそれを肌で感じながらも表に出さずに堂々と歩いていく。

そしてフレトが待っている部屋に着くと咲耶がノックして昇の来訪を告げた。中から返事が返って来ると両開きの扉を咲耶とレットが開いて昇を室内へと促した。

そこには机を前に椅子に腰掛けているフレトの両脇にラクトリーと半蔵が控えていた。これで完全に昇は囲まれた形になるが、昇に怯えも警戒も無い。ただ堂々とフレトの前へと歩むだけだ。

「今日は勝負を申し込みに来ました」

フレトの前に立つなり昇はそう宣言した。そんな昇にフレトは意地悪な笑みを浮かべながら両手を組む。

「ほう、勝負なら昨日の段階で付いたと思っているのだが」

確かにフレトの言うとおりだ。昨日は昇達は逃げ出した。その時点で勝敗は付いている。けどそれだけだ。

「確かに昨日は負けました。だから今度は……精霊王の力を賭けて勝負を挑みます」

「なっ！」

昇の宣言にさすがに驚きを隠せないフレト。まさか精霊王の力を賭けて来るとは思っても見なかったことだろう。

そんな驚きの表情のままのフレトに昇は更に話を続ける。

「今度の戦いでは僕達が負けたら精霊王の力をあなた達に託します」

「それは……本気で言っているのか？」

さすがにフレトも動揺しながらも昇の言葉を疑う。動揺しながらもその言葉が出るのだからフレトの器も大した物なのだろう。

そんなフレトに昇ははっきりと宣言する。

「本気です」

さすがにこの言葉にはフレトの精霊達も動揺を隠しきれて居ないようだ。あのラクトリーでさえ驚きを隠しきれず、半蔵は何かあるのでは無いのかと警戒心を強めたように感じられる。

そんな昇の宣言に驚いていたフレトだが、すぐに平常心を取り戻

すと笑い出した。
「どうやら本気のようだな。それで、俺達が負けたらどうしろというのだ？」
「その時は僕の言った言葉に従ってもらいます」
「まあ、確かに戦いなんてものはそういうものだからな。良いだろう、負けたら精霊王の力から手を引こう」
そう宣言するフレトに昇は首を横に振った。
「僕は勝ったら僕の言葉に従ってもらうと言ったんです。誰も精霊王の力から手を引けとは言ってません」
その言葉にさすがのフレトも表情を少し崩した。昇が精霊王の力を賭けての勝負を持ち込んできたのだから、てっきり負けたら手を引くものだと思っていたが、どうやら昇達の条件は違うようだ。
「それではどうしろと」
「まだ勝ってもいないのに言ってもしかたないでしょう」
つまりこの場では言う気は無いということだ。その事がフレトの気に障ったのか二人は少しの間だけ黙って鋭い視線を交じ合わせる。
それからフレトは背もたれにもたれ掛かると昇にはっきりと告げた。
「良いだろう、その勝負……受けようじゃないか」
「なら十日後、昨日と同じ場所で」
「分った、それで良い」
フレトが片手を上げると後ろに控えていた咲耶とレットが扉を開けた。もう話すことは無いというフレトの宣告だ。昇としてもそれは同じ事だ。
昇はそのままフレトに背中を見せて堂々と歩いていく。そして扉の仕切りを跨いだ時だった。フレトが昇に話しかけてきた。
「後悔する事になるぞ、そんな勝負を持ちかけてきた事にな」
フレトとしては、その勝負に勝つだけで全てが手に入る。もし約束を反故にされてもすでに勝敗が付いているのだから、後はフレトの自由に出来るのも確かだ。

けれどもフレトはそんな口約束だけで昇を信用はしないだろう。昇が振り返るとフレトの横に居た半蔵はすでにおらず、どこかに姿を消したようだ。

そんな様子を見て昇は自信に満ちた口調で宣言した。

「あなたが何をしようと僕達は正面から正々堂々と戦わせてもらう。そうしないとあなたを説得させる事はできませんからね。だから僕を偵察しても無駄ですよ。十日後の勝負は真正面から……あなたに勝つ！」

いつもの昇とは思えないほどの気迫で宣言する。そんな昇の気迫に押されたのかフレトの頬を一筋の汗が流れ落ちた。

何かを言い返したいとは思っているのだろうけど、今の昇に言い返せるほどの覚悟をフレトは持ち合わせて居なかった。

昇が来ることでさえ思いもよらなかったのに、まさかそのような宣言もされれば動揺せずにはいられなかったのだろう。

黙り込むフレトに昇は再び背を向けると部屋を後にした。

「半蔵」

昇が去ったすぐ後にフレトはすぐに半蔵を呼び寄せた。

「やはり監視はしなくて良い。真っ向から向かってくると宣言したのだから、その通りになるか面白いじゃないか」

フレトの言葉にレットは思いっきり溜息を付いた。

「フレト様、そういう火遊びは程々にしておかないと火傷をしますよ。なにしろ口約束だけなのですから、相手がどのような罠を」

フレトはレットに向かって手の平を差し出すと、それ以上の言葉を遮った。レットの言いたい事ぐらいフレトにも分っている。それが分っていて昇の提案に乗ったのだからレットとしては口に出したい事がいくらでもあるのだろう。

フレトは立ち上がると外がよく見える大窓から視線を表へと移した。さすがにこの位置からでは帰っていく昇の姿は見えないが、夕

焼けがそろそろ終わるのは分った。
「確かに勝負に勝ってば精霊王の力が手に入るという確証は無い。だが……あいつは一人でここに……敵陣に乗り込んできたんだぞ。そんな事をする奴の言葉を信じてみてもいいんじゃないのか。それにラクトリーのお隅付きだしな」
「ラクトリーいつのまに」
どうやらレットはラクトリーが昇の事をどう報告したかは知らないようだ。そんなレットに向かってラクトリーは微笑みながら昇について話をし始めた。
「レットの心配も分るけど、あの子なら大丈夫よ。決して卑劣な罠は使わない子よ。少し話しただけだけど、それぐらいは分るわ」
「たったそれだけの根拠で」
確かにそれだけで納得しろというには無理があるのだろう。なにしろラクトリーの偏見が入ってないとも言い切れないのだから。レットは更に頭を抱える事になった。
そんなレットにフレトは自信を持って告げる。
「そんなに心配は無い。なにしろ俺達が負けるはずが無い。たとえ勝って約束を守らなかったとしても、追い詰められているのはあいつらの方だ。こちらの優位に代わりは無い。だったら見てみようじゃないか。やつらの最後の足掻きをな」
「それが足元をすくわれないとも限りませんよ」
フレトの言葉に一応忠告だけはするレット。もうどうにでもなれという感じで諦めるしかないのだろうと大きく溜息を付いた。
そんなレットを安心させるためなのか、それとも大して意味は無いのかフレトは咲耶にも意見を求めた。
「全ては主様のお心のままに」
その言葉にフレトは自信に満ちた笑みで答えるのだった。
はぁ～、かなり緊張した～。なにしろ口約束だけだったからな～。

上手く乗ってくれて助かったよ。
昇は自分の家に帰るなり、部屋に戻るとベットへと倒れこんだ。
先程までの堂々とした昇の姿はそこにはまったく感じられなかった。
なんとか虚勢だけで口車には乗せられたけど、状況はあまり変わりないんだよね。僕達は十日後にあの人達に勝たないといけないんだから。
つまりは昇があそこまで堂々としてフレトと対面したのは自分を信用させる為と威圧するためだ。
なぜそんな事をする必要があったかというと、それは十日後の勝負を約束させるためだ。
フレトが本当に精霊王の力を渡すという確約を寄こせとでも言われたら昇にはどうする事も出来ない。だからこそ虚勢を張って自分の言葉が真実であり、またフレトの自尊心を揺さぶる事になった。
昇があそこまで堂々と宣言したからこそ、フレトどころか周りの精霊達も動揺した。もし昇に少しでも自信が無い言葉だったらフレト達は動揺しなかっただろう。そして動揺させる事で、確約も無しに昇の言っている事が真実だと認めさせなければいけなかったのだ。
そのために昇は普段からは想像出来ないほどの緊張と戦いながらも、あそこまで堂々と宣言するという芝居をする必要があったのだ。
そこまでしないと精霊王の力を渡すという確約を求められる事になりかねないからだ。全ては自分を信用させるため。それにあの場にはラクトリーもいたし、昇の事も聞いているだろうから、こんな嘘や安っぽい罠などは張らないはずだと進言していてもおかしくないと昇は思っている。
昨日見たラクトリーからはそんな印象を受けたからこそ、そこにも賭けてみる事にした。
そんな事もあり、どうにか約束だけは取り次いだ昇だが、未だに問題は山積みだ。なにしろ相手は完全契約をしたフレト達。そのフレト達を倒して昇が描く未来を実現させる為には昇だけじゃない。皆の努力と力が必要なのだから。

そのためにはまず完成させないといけない。完全契約を打ち破る、昇のとある考えを。

第八十八話　宣戦布告（後書き）

はい、そんな訳でお送りしました八十八話でしたですけど、如何でしたでしょうか？　楽しんで頂けたなら幸いです。

ん～、実を申しますともう少しフレト達で遊びたかったんですよね～。だから少し話数を増やしてフレト達の話を入れようかどうか迷っております。ぜひ見てみたいという方はご一報ください。フレト達も実は結構面白い一面を持っているみたいなので。

さてさて、前々回に続き与凪の出番が増えてきましたね～。今回は脇役にも関わらずフラグでも立つんじゃね？　とか思いませんでした？　まあ、与凪にはもう森尾が居ますからね～。さすがにフラグは立たないかな。

まあ、そんな事はさて置き、今回の与凪は何気なくカッコイイシーンがあったような気がします。いつもの与凪とは違う一面を見せてますよね。私的にはかなり気に入ってるんですけど、皆さんは如何でしたでしょうか？　まあ、いつもの与凪とは違いますからね～。でも、あれも与凪の一面なのでは無いのではしょうか。そう思っております。

さてさて、余談はここまでにしてそろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、最近では全体的に書き方が変わったのが良いのか悪いのか分らなくなってきた葵夢幻でした。

第八十九話　それぞれの特訓

「ここをもっと改良できませんか？」
そんな言葉を口にする昇はいつもの生徒指導室で与凪を相手にそんな要求を突き付けた。
フレト達に宣戦布告してから二日後、琴未と閃華はそれぞれに特訓しており、シエラとミリアは今でも学校の校庭で特訓していた。
そんな中で昇はある物を完成させるために与凪との会話をしていた。
「これでもかなり早い方よ、まだ早くしないといけないの？」
「ええ、出来るだけ早い方がいいです。少しでもタイミングがずれると致命傷になりかねませんから」
「まあ、確かにそうかもしれないわね」
そんな事を呟きながら与凪は指摘された部分を直すべくモニターへと向かうのだが、ここ二日ほど、ほとんど休む事無くこんな事をしているのだから疲れが溜まっているのだろう。
与凪はモニターから目を離すと大きく身体を伸ばした。
「それにしてもこんな事を考えるなんてね。本当にいつも予想外の事を言い出すのよね。滝下君は」
作業に戻った与凪がそんな事を言ってきた。与凪にしてみれば昇が考え出した事は発想すら出来なかった事であり、そこが昇の凄い所だと与凪自信も認めているからでた発言だろう。
「そうでもないですよ。個人の力では完全に勝ち目が無い相手にどう戦えば良いのか考えたら自然と出てきた答えでした。それに閃華や母さんからヒントを貰ってるし、僕だけで考え付いた訳じゃないですよ」
「まあ、それでもその考えが実現可能って所がまた怖いけどね」
そんな冗談を言いながら微笑を向けてくる与凪に対して昇の笑顔は引きつっていた。確かに考えたが、それが実現できるかまでは考

えていなかった。与凪と相談してやっと実現可能だという答えが出たのが昨日の事だ。

「それで、このシステムを使って本当に勝てるのかしら」

作業を続けながら意地悪な質問をしてくる与凪に対して昇は微笑みながら答えた。

「勝てますよ、絶対に」

「そう……なら完璧に仕上げてあげないとね」

与凪としては昇が少し困る様子を見たかったのだが、そこまで自信満々に答えられるとそう返すしかなかった。

滝下君もしっかりと成長してるのね。契約してからたった数ヶ月しか経ってないのに。とそんな事を与凪は思っていた。

確かに以前の昇ならそこまではっきりと答えられなかっただろう。けれども今回はあそこまで言ってのけた。それだけの自信が昇の中にあるのだろう。

いや、正確には昇達の中にあると言うべきだ。それは昇とシエラ達との繋がりなのだから。心がしっかりと繋がっていると感じることが出来たからこそ、昇もここまではっきりとした自信を持つ事が出来たのだから。

「それで、もう一つの宿題はどうなのかしら？」

話題を切り替えてきた与凪に昇はうんざりしたような溜息を付くと頭を掻きながら答えた。

「そっちはまだまだですね。どうも精密なコントロールが必要みたいで、何度も暴走しかけました」

そんな昇の答えに笑ってみせる与凪。やはり昇には困っている姿の方が似合っているのかもしれないと与凪は思った。

けど、その後にいつも思う。昇なら必ずやり遂げるのではないかと。

「でも完成させるんですよね」

「ええ、なにしろこれがこっちの奥の手ですからね」

どうやら昇がやろうとしている事は昇が手にしてる最後のカード

のようだ。それがあるからこそどんな事態になっても逆転出来ると昇は考えているのだろう。

「なんにしても、今回のキーワードはエレメンタルアップよね。今までは普通の使い方ばかりしてたから気に掛けなかったけど。こうやって改めて調べてみると信じられないほどの能力なのよね」

与凪の役割はエレメンタルアップを使った新たなるシステムの開発だ。だからこそ、もっと詳しくエレメンタルアップの事を知る必要が有った。そして調べてみた感想をそのまま口にしたようだ。

「本当、滝下君っていったい何者なの？」

「いや、そんな事を真顔で言われても困るんですけど」

昇の答えに与凪は微笑むと再び体を大きく伸ばした。やはり与凪にも無理をさせているのでは無いのかと実感する昇だが、決して止めようとはしなかった。

今回の協力は与凪の意志であり、昇達が強制したものではない。だからこそ止めてはいけないのだ。それが与凪に対する最大に侮辱になってしまうから。

なにしろ一度協力を申し入れといて、やっぱり無理しなくて良いなんて言われたら与凪は自分が役立たずだと思うだろう。

それに無理する事は与凪は引き受けた時点で承知している。だからこそ昇は与凪に無理をしないでとは決して言わなかった。

そんな与凪の姿を見た昇は席を立つ。

「それじゃあ、僕もそろそろ自分の特訓に行って来ますね」

「頑張ってね～」

呑気にそんな事を言う与凪。そんな与凪に昇は頬を引きつらせるのだった。どうせ突っ込んだところで返ってくる答えは「どうせ他人事だもの」に決まっているからだ。

そこが与凪らしいといえば与凪らしいのだろう。

「後はお願いします」

「はいはい、任せといて～」

気軽に返事を返す与凪に昇はそれ以上は何も言わなかったし思わ

なかった。それは与凪の気持ちを充分に汲み取っているからこそだ。
与凪は与凪らしいのが一番良いと思っているのは昇だけでなくシエラ達も森尾もそう思っているはずだ。
だから昇は自分の特訓をするために生徒指導室を後にした。

そんな昇が向かったのは高戸神社だ。もちろん神社に用があるわけじゃない。神社の奥にある道場に用があるからこそ、ここに着たのだから。
道場にはいつものように結界が張られており、中では相当の特訓がされている事を昇は想像する。
そんな道場の扉を開くと爆音と共に強い閃光が走った。それは強風と共に昇を通り過ぎて行き、やがて静かになった。
「ダメじゃな、まだまとまりきっておらん。それでは威力が半分以下じゃぞ」
そんな言葉を掛ける閃華の向こうに琴未は膝を付いたまま荒い息を整えていた。
「閃華」
琴未がやすんでいる間に声を掛ける昇。あまり琴未の邪魔にならないように閃華にだけ聞こえるように声をあまり出す事無く呼び出した。
「もう時間か、まあ琴未の特訓は一人でも出来るから大丈夫じゃろう。問題は昇の方じゃな」
「うん、分ってるよ」
昇が答えると閃華は傍を離れて琴未の元に向かった。それから昇の事を話すと全てを承知したように頷くのだった。
それから閃華は昇と一緒に道場を後にしようとするが、道場を出る寸前に琴未から言葉が掛かってきた。
「頑張ってね」
「琴未もね」

お互いに少しだけ見詰め合った後に微笑み、お互いに励ましあいながら昇は道場を後にした。

そんな昇が閃華と一緒に向かったのは道場の近くにある林の中だ。そこは昼間でも薄暗いところで、普段なら誰も近寄らない場所だ。更に言うなら一昨日、この辺の草むしりを昇はやっていた。

どうしてそんな事をしていたかというと、場所が必要だったからだ。誰にも邪魔される事無く精神を集中させられる場所が。それに閃華の助言も欲しかったからこそ、この場所を昇はわざわざ切り開いた。

「さて、では始めるとするかのう」

「うん、お願いします」

昇は精神を集中させると足元に黒くて丸い淀みが出現した。最初の頃はエレメンタルアップを使用する時にその中に入って、繋がりを手にとってエレメンタルアップを使用していたのだが、今はその淀みの中に入る事は無かった。

「分っておるじゃろうが、エレメンタルアップは精霊の限界を超えて力を発揮させる能力じゃ。じゃから力が強ければ強いほうが良いじゃが今回の場合は下手に出力を出しすぎると昇の身体が持たん。じゃから精密なコントロールが必要じゃ。最初は少しずつ、徐々に大きくしていくんじゃ」

「うん、分ってるよ」

そう答えながらも昇は今更ながらエレメンタルアップが凄い能力だと思わずにはいられなかった。

なにしろ限界を超えた力を出す事が出来るのだから、普通なら身体に掛かる負担も大きいのだが、エレメンタルアップはそれすらも無視して限界を超える事が出来る。

つまりリスク無しで限界を超えられるのだから、使い方によってはかなりの力を発揮できるのは当たり前だ。

けれども今回、昇が挑もうとしているのは通常のエレメンタルアップではなく、エレメンタルアップを使った応用だ。だからそこまで器用には出来ていない。今回ばかりは下手に限界を超えすぎれば昇の身体がダメになってしまうだろう。

つまり今回に限ってはリスクを承知の上でのエレメンタルアップだ。それを後数日でものにしなくてはいけない。

昇は精神を集中させて少しずつ力を放出していくが、集中が少しでも切れると一気に出力が上がってしまい。その度に龍水方天戟で弾き飛ばされるハメになっている。

どうやら昇も未だに深い闇から脱するのはまだ出来ていないようだ。けれどもここで諦める訳にはいかない。なにしろ精霊王の力が、いや、それ以上に皆の信頼と繋がりがあるのだから。

その頃、学校で特訓をしているシエラとミリアだが、ミリアは迷っていた。

それは大地が持つ性質であり、ミリアとラクトリーの違いでもあった。

大地は地球を支える鉄壁の防壁、それと同時に自然をも破壊する天変地異すら巻き起こす破壊の怒涛。この二つを兼ね備えているからだ。

ミリアは防御に特化しており、ラクトリーは破壊に特化している。そのうえ完全契約でラクトリーの破壊力が落ちる事は無い。

つまりミリアの防御ではラクトリーの攻撃を防御できないという事だ。それが分っているだけにミリアの迷いは大きかった。

ラクトリーと同じく破壊力を上げて対抗するか、それとも元々得意だった防御を更に完璧に仕上げるか。時間が無い今ではそのどちらかを選ぶ必要が出てきてしまった。

だからミリアの攻撃にも精彩を欠き、つい先程もシエラに弾き飛ばされてしまったところだ。

荒い息をしながら立ち上がろうとするミリアにシエラは近づいて声を掛けてきた。
「全てにおいてダメ、いったいこれじゃあ何のために特訓してるのか全然意味が無い」
シエラの言葉にミリアは奥歯を強く噛み締める。何か言い返してやりたいが、シエラの指摘どおりで言い返すことが出来ない。
「昇の作戦でもミリアは重要な役目を背負ってる。そんなあなたがこんな状態じゃ、勝てるわけ無い」
「分ってるよ！」
さすがにそこまで言われると黙っていられないのか、ミリアはハルバードに寄りかかりながら立ち上がるとシエラを睨み付けた。
「でも相手はお師匠様なんだよ！　全てにおいて私より上なのに、それに完全契約だよ。そんな本気のお師匠様を相手に私はどうすれば良いかなんて分んないよ」
「ならやめる？　今回は見てるだけにする」
「そんな事が出来るわけないよ！」
相手が誰であろうと皆が必死に戦っている中で自分だけが、ただ見ているだけなんてミリアでも耐えられるものではなかった。
けれどもラクトリーに勝てる方法などはミリアには考えも付かなかった。だからこそ迷いが消えないままに無意味な特訓を続けていた。
シエラもその事にやっと気付いたようで、特訓に戻る気配をまったく見せずにミリアを見詰めてくる。
そんなシエラの視線に耐えられないのか、それとも特訓の疲れが出たのか、ミリアは再び膝を付いて荒い息を整え始めた。
「もし……立場が逆ならどうする？」
「んっ、どういう事？」
突然シエラの口から出た質問にミリアは呆然とした顔で答えるだけだった。
「もし完全契約をしたのがミリアで服従契約をしたのがラクトリー

だったら、勝つのはどっちかということ」
「そ、そんなの……お師匠様かな？」
ミリアはラクトリーの修行を全て終えてからラクトリーの元を去ったわけではない。何気ない事故により、強制的にラクトリーの元を去ることになってしまったのだ。
だからミリアはまだラクトリーの修行を終えて対等に戦えるだけの力を持っていない事を自分でも充分過ぎるほど分かっていた。
それが分っているだけにミリアの迷いは更に深くなる。
「その理由は？」
「だって、お師匠様の所に居た時でもお師匠様に勝った事なんて一度も無いんだよ。特訓で何度も戦った事があるけど、本気のお師匠様なんて相手にした事なんてないし。それでも勝てなかったんだから今の私が勝てるはずが無いよ」
ラクトリーの元でも模擬戦をやっていたようだが、ミリアは本気を出したラクトリーに勝った事は一度も無いようだ。それは模擬戦であり、ミリアを鍛えるための訓練だ。それなりに条件を付けた模擬戦だろう。
だから成功した事があっても決して勝った事は一度すらない。その事が更にミリアを追い詰めているのだろう。
「ところで、なんでラクトリーの事を今でもお師匠様って呼ぶの、敵なのに」
いきなり話を変えてきたシエラにミリアは再び呆然とした顔で呆けてると慌てて答えた。
「そ、それは今までずっとそう呼んできたし、だから今でもというか……あっ、うん、今でもお師匠様だと思ってるから」
昔の事を思い出したかのように懐かしい顔をするミリア。どうやらラクトリーとの思い出を巡らしているのだろう。それは厳しい時も沢山会ったが、楽しい時も沢山あったのも確かだ。
だから今でもミリアはラクトリーの事を自分の師匠だと思っているのかもしれない。たとえ敵同士になったとしても。

「じゃあラクトリーはミリアの事を今ではどう思ってると思う？」
今度の質問にもミリアは呆然としてしまう。そんな事など本人に聞かないと分りはしないとミリアは言うが、シエラはそれを否定する。それを否定できるだけの理由をシエラが持っているからだ。
「ラクトリーが着た時、最後にミリアの事をよろしくと言ってた。それは今でもミリアが自分の弟子だと思っているからだと思う。本人に自覚が無くとも、そういう言葉が出るならそういう気持ちを今でも持っているに違いない」
「そ、そうなのか……」
シエラの言葉にミリアは少しだけ嬉しくなった。ラクトリーが今でも自分の事を弟子だと思ってくれているなら、これほど嬉しい事は無い。ラクトリーが師匠である事はミリアにとっては誇りなのかもしれない。
「もしそうだとしたら、今のあなたを見てラクトリーはどう思う？」
「……」
さすがに今度ばかりは返す言葉が見付からないミリア。それはあまりにも情けなさ過ぎるからだ。
ラクトリーに勝とうと訓練してくれて、昇が勝つための手段を与えてくれえた。それなのにミリアは自分の役目すら満足に出来ない。決してラクトリーには見られたくない姿だ。
「私……情けないよね」
「ええ」
「大地の属性は鉄壁の防御と怒涛の破壊を主にしている。お師匠様はその二つを身に付けてこそ完璧に大地の属性を扱えると言ってた。それなのに私はどっちも出来なくて、どっちを選んだ良いのか分らなくて。本当に……情けないよね」
抑えきれない涙を拭く事も無くミリアは泣き出すが、そんなミリアにシエラは容赦の無い言葉を掛ける。
「泣いて強くなれるなら泣けばいい。でも、そんな事は無い。泣いてるだけ時間の無駄」

容赦の無いシエラの言葉にミリアは更に涙が溢れ出してくる。迷ってばかりで情けなくて、どうしようもない自分が悔しくて、ただ泣く事しか出来ない自分が怖くて。

そんないろいろな思いがミリアの中を駆け巡る。ここまで追い詰められるともう泣くだけしか出来ないのかもしれない。

そんなミリアにシエラは背を向けるとウイングクレイモアの翼を広げる。

「私は訓練に戻る。あなたは好きにすればいい。ただ……あなたの周りには私達が居る。お互いに足りない物を補い合ってる。だから決して一人じゃない。私は……そう思ってる。だから自分の役目をこなすだけ。だから……じゃあ、私は戻るから」

ウイングクレイモアの翼が羽ばたくとシエラは宙に舞い上がり、再び空へと飛び去っていった。

一人残されたミリアは不思議な事に泣き止んでいた。ミリア自身にもなんでそうなったのかは分らない。けれどもシエラの言葉が確かにミリアの中に残ってる。

その言葉に今の自分を重ね合わせてみた。

私は……一人じゃない。皆が周りに居てくれる。だから足りない物は他の皆が補ってくれる。じゃあ、私の役割って……あっ！

ミリアは何かを思いついたかのように顔を上げると少しずつ顔に笑みが戻ってく。

そうか、私の役割は防御。皆を……昇を守る盾なんだ。そうか、そうなんだ。

ミリアの顔に完全に笑みが戻るとアースシールドハルバードを握り締めて見詰める。それが何のためにあるのか、何をすべき物なのかをミリアはやっと分ったような気がした。

それと同じく別の思いもミリアの中に浮かんできた。

今はまだお師匠様のようにはなれないけど、いつか必ずお師匠様のようになってみせる。だから今は自分の役割を……皆の盾になる事に専念すればいいんだ。たとえ相手が……お師匠様だとしても。

ミリアは涙を拭うと立ち上がってアースシールドハルバードを大地へとしっかりと立てた。
もうミリアに迷いは無い。なにしろ自分の役割を見つけたのだから。後は信じるだけだ。昇が勝たせてくれる事を信じて、自分の役割をしっかりとこなす。それだけを考えて特訓を開始するためにミリアはシエラの元へと駆け出していった。
今更ながら、どうもミリアは昇の作戦を完璧に理解していなかったようだ。だからこそ、このような迷いが生じたのだろう。まあ、そこがミリアらしいといえばミリアらしいところだろう。
何にしてもいつものミリアに戻ったのだからもう心配は無いだろう。だからいきなり奇襲してきたミリアを見てシエラは微笑むのだった。

まさかこんなのがここまでキツイとは思っていなかったわね。
高戸神社の道場では琴未が未だに特訓を続けていた。琴未がここまで疲れているのは常にい雷閃刀に雷をまとわせているからである。
今までの戦闘での一時的に雷閃刀に雷をまとわせていた時はあったが、それは一時的なもので、今回の特訓では常に雷閃刀に雷をまとわせている。たったそれだけの事だが長時間にも及ぶとかなり負担が掛かるみたいで琴未の疲労はかなりのものだった。
琴未が完成させようとしている新たな剣術は新螺幻刀流と雷の属性を使った新しい剣術だ。だからこそ常に雷の属性を発動させ続けなければいけない。
今までは砲撃や遠距離攻撃での発動が多かった琴未にとっては、長時間の属性維持はかなり辛い特訓になっていた。
更にそれだけではない。琴未はそこから新たな技を剣術を作り出さないといけないのだから心身ともに負担はかなり大きいだろう。
それでもここまで琴未が頑張れるのは先の戦いで完敗が堪えているからだ。

戦闘も巫女としても琴未は完膚なきまでに叩きのめさせれた。それがあるだけに新たなる技に必死になって取り掛かっている。そこまでしないと勝てない相手だと分かっているからだ。

けれどもまだ技は一つも形になってはいなかった。そんな現状が琴未にこんな事を思わせたのだろう。

ただ放つだけなら簡単なのに、剣の上に乗せるとここまでコントロールが効かないなんて思わなかったわね。さすがに無理があるのかな。

そう思いながらも琴未は雷閃刀を八双に構えると精神を集中させる。心を静かに水面に波が立たないように心を静かにさせると、一気に水が吹き上がるように動き始める。

雷閃刀を振り下ろすとの同時に雷の属性を一気に増幅させる。その状態を維持したまま雷閃刀を床に振り下ろそうとするのだが、途中で雷が上手くまとまらずに少しバラけてしまった。

一つにまとまりきらなかった雷の属性と雷閃刀は床に叩きつけるが、雷のが一つにまとまりきっていないのでそんなに威力は出ていない。これでは普通に雷の属性を放ったのと同じだ。

琴未が目指しているのはそんなレベルの技ではない。それ以上の剣術と属性を融合させた技なのだから、この程度の威力で満足が行くはずが無い。

「もう一度」

再び雷閃刀を構える琴未だが、急に足の力抜けて膝を床につけて両手を付いたまま荒い息を整える。

それだけ琴未の訓練はかなり厳しいものなのだ。

「少しは休んだらどうだ」

急に入口の方からそんな声が聞こえてきた。琴未が両手を付いたままの体勢で顔だけそちらに向けると玄十郎が立っていた。

「休憩も無しで何時間もやっていたら身体の方が先にまいってしまうぞ。休む事も重要だぞ」

「うん、分ってる……でも」

それでも琴未は立とうとして足に力を入れて立ち上がる。さすがに呼吸まではまだ整っていないが、立てるだけの気力はあるようだ。

「今は休む時間も勿体無いの。だから今だけは全力でやらないと」

そんな事を言う琴未に玄十郎はわざわざ琴未に聞こえるように咳払いをした。

「確かにその気持ちも分からなくは無い。完膚なきまで負けたなら誰しもそう思うだろう。だがな琴未、それで自分自身を壊してしまっては何も意味は無いぞ。本当に勝ちたいと思うのなら、無理をせずに限界までやるものだ」

「お爺ちゃん、それって矛盾してる」

「それは琴未が儂の言葉をしっかりと理解していないからだ」

そんな風に言われて琴未は玄十郎が言いたい事を考え始めてみた。けれどもどう考えても矛盾している事は確かだ。どういう意味で玄十郎がそんな言葉を掛けてきたのか琴未にはまったく分らなかった。

黙り込んだ琴未を見て玄十郎は静かに首を横に振った。どうやら琴未がかなり疲れているのを察したようだ。けれども玄十郎は決して特訓を止めろとは言わないと決めていた。

今回の特訓は琴未の意志でやっているものであり、やり通すと琴未が決めたからには玄十郎に口を挟む余地は無い。

出来る事といえば少しばかりの助言だけだ。

今回も琴未に考えさせながら答えを導いてやろうとしたのだが、今の琴未は疲労で頭の回転がそこまで回らないのだろう。ただただ玄十郎の言葉に戸惑っているだけだ。

そんな琴未に玄十郎は近づくと琴未が雷閃刀を持っている手に玄十郎の手を重ねてみせた。

「なあ琴未、この手に触れていれば琴未が限界まで頑張っている事は分る。だがな琴未、こんな手で本気の勝負する気か、こんな手で本当に勝つことが出来るのか？」

「そ、それは……」

玄十郎にそう言われると琴未は返す言葉を失ってしまった。

琴未は今だけを見たいたからだ。その先に待っている本番の勝負の事を無視して今を限界まで頑張っている。そんな状態で本番の勝負になってどれだけの事が出来るのか。そう考えると玄十郎の言葉が何なのか琴未には分ったような気がした。

「そう……だよね。こんな状態じゃあ勝てるものも勝てないよね。でもねお爺ちゃん！」

何かを言おうとした琴未の口に手を当てて玄十郎は琴未の言葉を途中で止めた。

「琴未が言いたい事はよく分かっている。だからこそ無理をしてはいけないんだ。適度に休んで限界まで特訓する。それが一番だと儂は思うがな。今の琴未は限界までやりすぎてるようにしか見えんぞ」

「お爺ちゃん」

琴未としてはまだまだ特訓したいが身体が悲鳴を上げている事も琴未は充分に分っていた。それでも無理して特訓してたのは、どうしても負けたくないという気持ちがあったからこそだ。

それは時にはその人を押し上げる強さになるが、その思いが強すぎると逆にその人を無理させすぎて潰しかねない思いだ。

負けて悔しいのは分る。だからこそ負けたくないという気持ちに負けてはいけない。もし負けてしまえば逆に自分を潰す事になりかねないのだから。

その事を玄十郎は琴未に伝えた。そして琴未もその事が分ったようで雷閃刀を消すと玄十郎にもたれ掛かってきた。

「ごめん、お爺ちゃん。少しだけ……休ませて」

「うむ、しっかり休んで、今度も限界までやってまた休めばいい」

「……うん、そう……だね」

琴未は玄十郎にもたれ掛かるとそのまま眠ってしまった。今まで溜まっていた疲労が一気に出たのだろう。または玄十郎の言葉がそこまで琴未に安心感を持たせたのかもしれない。

そのどちらでも構わない。今の琴未にはしっかりとした休養が必要なのは確かなのだから。

「おやすみ、琴未」
玄十郎はそう言葉を掛けると琴未を抱き上げる。琴未の重さが両手に圧し掛かってくる。それは昔感じた重さとは随分と重くなっていたが、それが逆に心地良かった。
それは琴未が成長した証でもあり、今でも自分を頼ってくれているという安心感と師匠としての責任感を感じる事が出来たからだ。
そんな琴未を抱えたまま玄十郎は道場を後にする。もちろん琴未を充分に休ませるために琴未の部屋に向かうのだった。

ミリアは立ち直れた。私も負けてられない。
シエラはそんな事を考えながらミリアとの特訓を続けていた。ミリアは完全に立ち直ったどころか前よりもやる気を出したようで、先程とはまるで違って手ごわくなっていた。
ミリアも気付いた、自分の役割を。だから防御を中心に攻めて来る。さすがにあそこまで固められると攻撃が届かない場合が多い。
シエラはミリアの行動からそんな風に感じ取っていた。どうやらミリアが自分の役割を何なのか完璧に理解したのだと実感したようだ。
そんなミリアに負けないようにとシエラも自分の役割を改めて考えてみる。
私が一番を発揮できるのはスピード。それを活かすためにはどんな状況でも、どんな場所でも対応しないといけない。昇ならそんな私を活かしてくれる。だから私は自分の利点を最も上げないといけない。どんな状況でも対応できるスピードを身に付けないといけない。
シエラにとってスピードは自分の利点だと思っている。確かにその通りだ。翼の属性を有しているシエラのスピードに敵う属性はそうそう無い。それだけスピードに特化した属性と言えるのだが、何かが足りないと思っているのも確かだ。

その足りない物も何なのかはシエラはしっかりと分っている。
私に特別な技なんていらない。ウイングクレイモアとこのスピードがあれば大抵の事は出来る。それだけの重量をウイングクレイモアは持っている。
つまりシエラが目指しているものはウイングクレイモアの重量を活かしたスピード攻撃。確かにかなりの重量を持つウイングクレイモアに高スピードが加わればかなりの破壊力が生まれるだろう。
けどそのためにはウイングクレイモアに充分なスピードを与えないといけない。それだけではない。自分自身にも更に速いスピードが必要なのはこの前の戦いで分っている。
なにしろ相手は完全契約をしたレットだ。爪翼の属性で翼の属性と同じスピードを有していた。だからこそシエラには更なるスピードが必要なのだ。
それだけじゃない。相手にはミリアの師匠であるラクトリーがいる。そのラクトリーの防御を打ち破るにしてもミリアの防御は簡単に打ち崩せないと意味は無い。
だからこそシエラは自分が最も得意としているスピードを重点的に上げている。
シエラの戦闘スタイルはスピードに重量のある武器で攻撃する事でスピードをパワーに変える事が出来る。だからこそ特別な技を習得したりはしない。ただスピードを上げるだけだ。
それだけでシエラの戦闘力は全体的に上がるのだから。そういう戦闘スタイルだと自分で分っているからこそシエラは特別な何かをやろうとはしない。それがシエラなのだろう。

残り八日。それだけでどれだけの事が出来るか分らないが、皆が全力を尽くして自分達のレベルアップを図っている。
それでフレト達に勝てるか分らないが、誰も自分達が負けるとは思っていなかった。最初から負けると分っていても、それでも全力

を尽くさない勝負に意味は無い。
それだけではない。必ず昇が勝たせてくれると思っているからこそ、各々が独自の特訓に挑んでいる訳だ。
それがどんな結果になるかはまだ分らない。けど昇以外の皆が思っている事が一つだけある。
昇なら必ず皆が幸せになれるような未来を勝ち取る事が出来るという事を。

第八十九話　それぞれの特訓（後書き）

そんな訳で今回も前回に引き続き、次に行くための話しとなりました～。皆さんそれぞれ頑張っているみたいですね。まあ、何はともあれ、楽しんで頂けたなら幸いです。

という事で、今回に限っては珍しく話す事も無いのでそろそろ締めます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、何となく、いろいろと中途半端な気分が多い葵夢幻でした。

第九十話　フレト達のある一日

この辺りでは珍しい高級ホテルの一室でフレトは国際電話を掛けていた。
「ああ、分ってるさ。お前こそ身体には気をつけろよ……分ってる。俺は大丈夫だ……うん……ああ。じゃあな、充分に身体には気をつけるんだぞ。……ああ、またなセリス」
電話を切ると丁度良く咲耶が紅茶を持って来た。
「妹様は如何でしたか？」
「今のところは大丈夫だ。病の進行が遅い事だけが不幸中の幸いだったな」
そう言いながらフレトは電話の隣に置いた写真立てに目を向けた。クリーム色でウェーブの掛かった髪の長い少女が車椅子に乗りながら微笑を浮かべている写真だ。
この写真の人物こそがセリスだ。
写真の微笑みにフレトの顔も自然と微笑みに変わってる。たとえ傍に居なくとも、こうして写真だけでも姿を確認できればそれだけで不安を消し飛ばして安心することが出来るのだろう。
「主様」
咲耶が呼びかけるとフレトは写真立てから離れるとテーブルに付いて咲耶の入れた紅茶を堪能する。
「残り六日か、さすがにそれだけの時間があると暇だな」
昇がフレトを尋ねてから、すでに四日が経過している。昇達はフレト達に勝つために特訓をしているが、完全契約をしているフレト達には絶対の自信があるのか、まったく特訓しようとはしなかった。
理由はそれだけでは無い。なにしろ精霊王の力だ。何が待っているかは分らない。だからフレト達は必要と思われる特訓は既に本国で済ましてから来日した。だからこそ、今はこうして暇を持て余しているのだ。

確かに昇達のように特訓や準備をしても構わないのだが、なにしろ土地勘が無い。こんな状態で下手に動いて余計な騒動を巻き起こしても面倒な事になるだけだ。それなら大人しくしてようとしていたのだが、やはり十日もの時間はフレト達を暇にさせるだけだった。

なんとか三日だけは外出は控えたものの、さすがに四日目になると相当暇になって来るようだ。

「それなら観光に行きましょうよ～」

いきなりそんな言葉が聞こえるとフレトは視線を上げて反対側に座っている人物に目を向ける。そこには既に紅茶を口にしているラクトリーの姿があった。

「いつも思うんだが、お前はノックというものを知らないのか」

「あらあら、ちゃんとしましたよ、ノック。しかも内側から」

「そうか、それならいいが」

「いや、よくは無いでしょう」

部屋の入口からそんな言葉が聞こえてくるとレットと半蔵がそこに立っていた。レットはそのままラクトリーの隣に座ると咲耶はレットにも紅茶を差し出した。そして半蔵はというとフレトの後ろに立つだけで、咲耶の紅茶も断った。どうやら紅茶は口には合わないようだ。

そんな位置取りがいつものフレト達のなのだろう。咲耶も紅茶を入れ終わると席に着き、落ち着いたティータイムが始まると思われたのだが、ラクトリーは先程の話をまだ続けてきた。

「この際ですから皆で観光に行きましょうよ。この辺もいろいろとあるみたいですし、見て周るだけでも面白いですよ～」

「まあ、そうかもしれんな」

そんな事を言い出したフレトにレットは反論しようとするが、フレトは片手を差し出してレットの言葉を止めたのだった。

「レットの言いたい事も分る。だが約束は十日後だ。たとえ遭遇したとしてもその約束がある限りあちらも手が出せんだろうし、もし約束を囮にしての奇襲だとしてもこの前の戦いで、こちらの戦力が

上だと言う事も分っているはずだ。それなのに、そんな手で攻めて来るとなるとそれだけの相手だったという事だけだ」

「いや、まあ、その通りかもしれませんけど」

レットとしては昇達との遭遇を危惧したのだがフレトはそれを完全に否定してしまった。しかもしっかりと理論付けて。

つまり、決戦は十日後と約束したからには例え出くわしても戦いに発展する事は無いだろう。その理由として昇から十日後と指定してきてるからだ。つまりフレト達に勝とうとするにはそれだけの時間が必要だという事だ。

それなのに偶然の出会いから戦闘を挑もうとは思わないだろう。むしろ昇こそ約束を重視して戦闘を避けるはずだ。

だから例え街中で出会っても戦いに発展する可能性は無いということだ。

それから約束を理由にして暇を持て余したフレト達が出てくるのを待っての奇襲だとしたら、これもあまり意味は無い。

なにしろフレト達は完全契約だ。ただ奇襲だけでどうにかできる相手ではない。確かに昇にはエレメンタルアップがあるが、それでも数が同じなだけに昇も戦線に参加させればエレメンタルアップの威力が落ちるのは当然の理だろう。

それに昇の性格からしてもそのような姑息な手段を取るとは思えない。二度ほど会っただけだがフレトは昇の性格をそう判断している。それにラクトリーも同じような意見を言っているのだから、フレトの判断は間違ってないと確信出来るものとなっていた。

そんなフレトに説得されたレットは何も言えなくなってしまった。そうなったらすぐにラクトリーは大量の紙をテーブルの上に広げ始めた。

「なんだ、これは？」

フレトが尋ねるとラクトリーは笑顔で答える。

「この辺りの観光マップと広告類ですよ。やはり行くには下準備をしとかないと」

「いつの間にこんなにも集めたんだ？」
かなりの量にレットが尋ねるとラクトリーは笑顔で答えた。
「もちろん、このホテルに泊まり始めたときから下準備をしてたのよ～」
「なんで最初っから下準備してるんだ！　むしろなんでこんな準備なんてしなくていいわ！」
さすがにラクトリーの奇行に突っ込むレット。まさかラクトリーが最初から観光をしようとしてたなんて思いもよらなかった事なのだろう。
「まあ、いいじゃないか。何事にも準備は大切だぞ」
「いや、フレト様。言っている事は正しいのですけど、この場合は前提が違うと思います」
まさかフレトまでそんな事を言い出すとは思ってなかったレットは軽く突っ込むがそれで終わりはしなかった。
「そんな事は無いぞレット、この下準備があったからこそ……充分に観光が楽しめるんじゃないか」
「あなた様も観光する気が満々ですね！」
どうやらフレトも相当暇を持て余していたようで、ラクトリーの提案に乗ろうとしているようだ。
ここ三日ほどならず、相手が分からないからにはあまり動かない方が良いとの判断で今まで外出を控えていただけでにうっぷんが溜まっているのだろう。
けれどもレットは昇を直接的に知らないからには、あまり信用も置けないし、フレトの身を考えれば今はあまり動かない方が良いと思っているのだろう。
そんなレットは助けを求めるために半蔵に視線を送ると半蔵は頷いて見せた。
これで安心だろうと思い。レットは紅茶を飲みながら半蔵の動向を見守った。
そんな半蔵は懐から何かを取り出すとフレトに差し出した。それ

は風呂敷に包まれており何かは分からないが、半蔵はフレトの前でその包みを解くと中からは拳銃が姿を現した。
「若様、表に出るときは常にお持ちください。自分の身を守る道具はいつでも必要です」
「そうじゃねえだろ！」
レットは紅茶を噴出すと思わず立ち上がる。
「俺が言いたかったのはフレト様を止めてくれって事で、そんな物を渡せって事じゃねえ！　そもそもどっからそんな物を持ってきてるんだ！　ここは日本だぞ！」
「我が属性は空、税関など簡単にすり抜けられる」
「そんな問題じゃねえ！　というかすり抜けるなよ！」
確かにそんな事をすれば大問題だろう。けれどもフレトは意外な行動に出る。
「ああ、確かにそれもそうだな」
そう言いながら半蔵が差し出した拳銃を手に取ろうとする。
「取ってはダメ――っ！」
すかさずレットが突っ込むがフレトの手は拳銃を通り越して紅茶のカップを手に取る事になった。
「さすがに冗談だ。ここがどんな国なぐらい知っている。だからそんなに心配するな」
その言葉に半蔵も拳銃を仕舞い。レットもやっと落ち着いて再び紅茶を口に入れるのだった。
フレトも紅茶のカップを再び置くととんでもない事を言い出した。
「この国で持ち歩くのは銃ではなく刀なのだろう」
再び紅茶を噴出すレット。さすがに今度はむせて咳き込んでいる。
「御意」
半蔵もフレトに言われてどこかの空間から刀を取り出した。そんな二人にやっと咳が止まったレットはすかさず突っ込む。
「それはいつの時代だ！　今では刀もダメですから！　というか半蔵もそんな物を取り出すな！」

「大丈夫だ、それぐらい知ってる」
そんなフレトの言葉にレットを除いた精霊達が笑い始める。どうやら全て分っていてやっていたようだ。つまりレットはからかわられていたに過ぎなかった。
それが分ったレットは疲れたように背もたれにもたれ掛かると天井を見上げる。さすがに連続で突っ込んで疲れたようだ。もちろん気分的に。
そんなレットを面白げに見ていたフレトは咲耶に紅茶のお代わりを要求するのと同時にラクトリーが広げた観光マップなどに目を落とした。その後ろで半蔵は先程冗談で取り出した刀を仕舞い込んでいた。
「ふむ、だが気分転換に出かけるのも悪くは無いな」
そんな事を言い出したフレトにレットはもう何も言わなくなっていた。先程の理由から出かけても害が無い事は立証されたし、レットとしても閉じこもってばかりでは気がめいって来てるのも確かだった。
「それじゃあ皆で出かけましょう～」
そんなラクトリーの言葉で観光へと向かう事に決まったフレト達は各々準備するために一旦解散となった。

「なんというか……普通だな」
歩きながらそんな感想を漏らすフレト。その隣に居るラクトリーは観光マップを見ながら答える。
「まあ、観光地では無いですからね。それなりに大きな町ですけど、都市と呼ぶには少し小さいという感じですかね」
「ふ～ん、まあいい、さて、どこから見て周るか」
まだ見る所を決めていなかったフレトは観光マップを受け取ると目を落とした。その間にラクトリーが行きたい場所を口に出そうとしていた。

「それはもちろん」
「却下だ」
すかさず否定するレット。どうやらラクトリーが何を言おうとしているのか分っているようだ。
「う～、最後まで言わせてよ～」
「言わなくても分る。どうせ洋服とかアクセサリーとかだろ」
「失礼ね～、スイート類が抜けてるわよ」
「そういう問題じゃねえ！」
レットの突っ込みに首を傾げて見せるラクトリー、なぜ突っ込まれたのか理解できていないようだ。そんなラクトリーにレットは溜息を付くと説明を開始した。
「女のそういうのに付き合ってると時間が掛かりすぎるんだよ。フレト様にも行きたい場所があるなら、そっちを優先させるべきだろう」
確かに正論ではある。だがそれゆえにラクトリーは何も言い返せずに頬を膨らませるだけだった。
「それで主様、どこか行きたい場所は見付かりましたでしょうか？」
このまま二人に話をさせているといつまでも決まらないと判断した咲耶はさっさとフレトの要望を聞く事にした。
そんなフレトが目を付けた場所が一つだけ合ったようで。そこの項目を真剣に見ていた。それから行くところを決めたのか、観光マップをラクトリーに返すとこう告げる。
「土産物屋だ。セリスに何かを買ってやりたいからな。どうせなら日本的な何かを買ってやることにしよう」
そんなフレトの言葉に取り巻きの精霊達は全員頷くのだった。
それから一番近い土産物屋に入って中を見て回るが、フレトが気に入った物は何一つとして見付からなかった。
それから三軒ほど土産物屋を周り、四件目はいかにも日本調を重んじているような土産物屋だった。
さっそく中に入るフレト達。中は少し薄暗いが、狭いぐらい物が

置かれている。どうやらここならフレトが気に入る物があるのではないかと思う精霊達。そんな精霊たちと一緒中を見て回っているフレト。

そんなフレトの元に咲耶が筒のような物を持ってきた。

「主様、これなどは如何でしょうか」

「……万華鏡か」

半蔵が答えると咲耶は笑顔で万華鏡をフレトに手渡した。それから使い方を教えるとフレトは気に入ったかのように万華鏡を覗き込む。

「なるほど、これはいいな」

万華鏡を堪能しながら回し続けるフレト。どうやら相当気に入ったようだ。そんなフレトの元にラクトリーとレットもやってきた。狭い店内だ、フレトの言葉が聞こえたのだろう。

だから気に入った逸品があったのかもしれないとやってきたようだ。

「私にも見せてください」

どうやら万華鏡に興味が出たラクトリーはそんな事を言い出したので、咲耶はすぐ傍にある万華鏡が置いてある場所を教えてた。

そしてフレトと同じように覗き込むラクトリー。中では色とりどりの光る紙が、筒を回すたびに不思議な動きで動いている。

「綺麗ですね～」

「ああ、そうだな」

ラクトリーの感想に素直に答えるフレト。そんなフレトの心には妹のセリスの事が思い出されていた。

そうか……外にはもっと沢山の綺麗な物がある。俺はそれをセリスに見せてやりたい。もっと……沢山の事をしてやりたい。

そんな想いが込み上げてくるフレト。それだけセリスの事を大事にしているのだろう。だからこそ精霊王の力を求めてここまで来たのだから。

けれども今は出来る事はほとんどない。だからこそセリスの為に

この万華鏡でも買ってやろうという気持ちになったのだろう。
今はこれぐらいしか出来ない事はフレトが一番良く分かっているから。
お土産を万華鏡にすると告げたフレトは万華鏡を咲耶に渡すとレジへと向かわせた。その間にもレットは他の物を物色したり、ラクトリーは未だに万華鏡を見ている。そして半蔵はというと相変わらずフレトの傍から離れようとはしなかった。
フレトを守る事が自分にとって一番の使命だと感じている半蔵らしいといえばらしい行動だろう。
会計を済ませるとフレト達は次に行く店を吟味し始めた。お土産は決まったからもう土産物屋はいいのだろう。だから次は自分達が楽しめる店を探そうとしたのだが、観光マップを持っているラクトリーは真っ先に提案してきた。
「じゃあ次はスイーツ類に行きましょう～」
すでに決まっているかのように宣言するラクトリーにレットは溜息を付いて、それを止めようとするが、意外な事にフレトがそれに賛同した。
「なるほど、それも良いかもしれんな。どうせなら和菓子とやらを堪能してみたいものだな」
「なら甘味所が良いかと」
フレトの言葉にすぐさま行き先を厳選する半蔵。確かに甘味所を掲げている店なら和菓子を多く扱っているだろう。
その意見にラクトリーも異論はなく、観光マップから甘味所を探し出して、その場所へと向かった。

「意外としつこい味をしている物なのだな。だが、それがいい」
フレト達が入った甘味所はその場で食事が出来るスペースを確保している店だった。だからこそ、ついそこで買った物をテーブルの上に広げて味わっている。

フレトが口にしたのは饅頭だ。どうやら餡子がかなり気に入ったようだ。

そんなフレトとは反対にレットは頭を抱えていた。

「いったいどうするつもりなんだ、ラクトリー」

そう言ってラクトリーを睨み付けるレット。それはそうだろう。なにしろテーブルの上に広がっている和菓子の数はかなりの量があり。よくこれだけ買ったなと思わざる得ないほどの量をラクトリーは買い込んだのだ。

「いいじゃない。余ったら後で食べればいいんだし。それに和菓子なんて日本じゃないと手に入らないのよ」

「そんな事を言ってるんじゃない！　買いすぎだと言ってるんだ」

確かにテーブル一杯に積まれている和菓子の山を見るとさすがにフレトも困ったような顔をした。

「まあ、確かに買い過ぎだが……一週間もすれば無くなるんじゃないか」

「そういう問題じゃないですフレト様！」

「じゃあ、二週間？」

「それも違う、というかラクトリーは黙ってろ！」

そんな突っ込みを入れられてワザとらしく泣くような仕草をするラクトリー。

「しくしく、そうよ、全部私が悪いのよ。なら……私が責任をもって全部食べるわよ！」

「だからそうじゃねえ！　ここまで買う必要があったのかと言ってるんだ！」

そんな突っ込みにラクトリーは平然と答えた。

「無いわね」

「うむ、確かに無いな」

「否」

「もちろん無いですよ」

ラクトリーからフレト、半蔵から咲耶までレットの突っ込みを肯

定してしまった。こうなってはどう突っ込めば良いのかレットには分らなくなってしまったのだろう。頭を抱えると、もういやだと呟くのだった。

「まあ、菓子の事は置いておいてだ」

話題を変えてきたフレトに全員の視線が集中する。

「俺はセリスにやれる事は出来るだけやってやりたいと思ってる。そのためにはお前達の協力が必要だ。それを踏まえての話だが」

急に真顔で語り始めたフレトにレットは生唾を飲み込む。その後に続く言葉がどれだけ重いものかを想像しているのだろう。

そしてフレトは話を続けた。

「そんな訳でこの菓子の半分をセリスに送ろうと思う。さっそく手配してくれ」

「さっきの重い雰囲気は何なんですか！」

再び突っ込む事になったレットの裾を咲耶は軽く引っ張ると自分にレットの耳を近づけさせる。

「主様は本当に妹様の事を思ってらっしゃるのですよ。あのような性格ですから、そのような事を言いたい気持ちは分りますけど、おっしゃっている言葉は本心だと思いますよ」

「……はぁ、まあそうだな」

それから咲耶は立ち上がるとフレトの指示通りに買い込んだ和菓子の半分を本国のセリスに速達で届くように手配した。なにしろ生ものに近い物だ。速達でなければ腐ってしまうだろう。

まあ、和菓子なら多少の日持ちはするが、あまり時間を掛けるとさすがに腐ってしまう。そんな物をセリスに食べさせる訳にはいかないだろう。

そんなフレトの気遣いをちゃんと思いやりながら咲耶は手続きを終えると店員と一緒にフレト達の元に戻って来た。

「それでは送る物をこちらに移してください」

店員の言葉で買い込んだ和菓子を仕分けするフレト達。先程自分で食べて美味しいと思ったものは全てセリスに送るつもりのようだ。

そんな作業をしているフレトの顔はいつの間にか微笑んでいた。
それは自然かつ当然の事で、フレトにとってセリスは特別な存在だ。だからこそセリスの事を考えて行動するだけで自然と笑みが出てくるのだろう。それが喜ばれる事なら当然だ。
まあ、これだけの和菓子を一気に送られても困るだけだろうとレットは思っていたが、あえて口には出さない事にした。
そんな幸せそうなフレトの笑顔をわざわざ壊す必要がないからだ。
そして手続きを終えると大量の荷物をレットに持たせてフレト達は甘味所を後にするのだった。

「さて、次は何処に行きましょうか～」
そんな事を言い出したラクトリーにレットは当然のように告げる。
「もう夕暮れだぞ、まだ周るつもりか？」
確かに時間はすでに午後六時過ぎになっている。日も既に暮れ始めて辺りも暗くなり、街灯が付き始めていた。
フレト達が居る場所はそれなりの商店街だ。街灯が付き始めれば暗さも軽減される。けれども暗い場所は暗いのも確かだ。
そんな商店街を歩きながら、このまま帰るか、それともう一軒ぐらい周ってくか議論するレットとラクトリー。そんな二人の仲裁するわけでは無いが、フレトが突然こんな事を言い出した。
「どうせだから夕食は外で済ますとしよう。咲耶、ホテルに連絡だけは入れといてくれ」
「はい、主様」
どこからか携帯電話を取り出した咲耶がホテルに夕食のキャンセルを頼む電話をしていた時だった。
前から明らかにガラの悪い学生服を着崩した学生が五人ほどやってきた。そしてフレト達を見て何かを話しているようだ。
確かにフレトは本国、イギリスからきた外国人だ。それだけではない。容姿だけでも美少年といえる容姿をしているうえに、精霊を

四人も連れている。精霊も容姿は良いだけに普通に立っているだけでも目立つ存在になる時もある。

そんな五人が揃っているのだから、時々注目を浴びて当然なのだが、今回ばかりはどうも様子が違うようだ。

相手の五人組は話がまとまったようでフレト達に近づいてくる。そんな五人組に半蔵とレットはフレトを守るように前に立つが、フレトはそれを制止した。フレトなりにも考えがあるのだろう。

そして五人組の一人がフレトに声を掛けてきた。

「よう、日本語は分るかよ」

「日本語だけではなく、十ヶ国語はしゃべれるぞ」

「あぁ、そうかよ」

フレトの言葉を受けて明らかに不機嫌になった五人組の一人はフレトに視線を合わせて下から睨み上げるように話を続けるのだった。

「見た感じどこぞのお坊ちゃんだよな。だからさあ、金貸してくんない。お坊ちゃんなら俺達に恵んでくれても構わねえよな」

要するにカツアゲだ。だが今回の場合に限って言える事はフレト達がまったくビビっていない事だ。さすがにこの程度の相手に怯えるようなフレト達ではないだろう。それどころか呆れているようだ。

「やれやれ、何処の国にもこんな馬鹿は居る者だな」

「なんだとテメーッ！」

さすがにそこまで言われると他の連中も黙ってられないのかフレトに近づいてくるがそれ以上フレトに近づけさせまいと半蔵とレットがフレトを守るように立ちはだかる。

「な、なんだテメーはよ！」

さすがに半蔵とレットの雰囲気には飲まれてしまっているようだ。そんな五人組にフレトは面白半分で情けをかけてやる。

「半蔵、レット、あまりいじめるてやるな。まあ、金を恵んでやっても構わないが、それはでは面白くないだろう」

そう言うとフレトは自ら「付いて来い」と言い、人気が無い場所へと移動していった。

そこは店の裏手にある空き地で、今は更地になっている場所で周りは高いビルに囲まれていた。あまり広くは無いが、多少の喧嘩ぐらいなら出来る場所だ。

まさか自分達からこんな場所に来るとは思ってなかった五人組は動揺している。確かにこういう場所で金を受け取ろうとしていたが、差し出す本人からこんな場所に来るとは予想外にも程があるだろう。

そしてフレト達と五人組が退治するように並ぶとフレトはこう宣言した。

「さて、お前達の望んだ通り金を恵んでやろう。ただし……この咲耶に勝ったらな」

フレトは巫女装束を着ている咲耶を指差すと、そう高らかに宣言した。呆然とする五人組。けれどもすぐに笑い出した。

「勝ったらってなんだよ。じゃんけんでもしようってのか」

「いや、普通に叩きのめしたら勝ちだが」

「なんだよ、その女と喧嘩でもしろっていうのかよ」

「そう聞こえなかったのは俺の勉強が足りなかった所為だな。そこは謝っておこう」

フレトは更に挑発する。さすがにここまで挑発されると五人組も黙っていられないだろう。いいだろうとやる気を出している。

そして指名された咲耶は静かに前に出ると丁寧に頭を下げたのだった。

「それではよろしくお願いします」

丁寧に挨拶する咲耶だが、相手はすでにフレトの挑発で頭に血が上っている状態だ。まともな返事が返って来る訳が無く。言葉の代わりに拳を繰り出したて来た。

相手の一人が殴りかかって来たが、咲耶は身軽な動きでその動きをかわすと、次に殴りかかってきた相手の腕を掴むと、そのまま相手の力を利用して投げ飛ばしてしまった。

そんな感じで咲耶は相手の攻撃を避けながら投げ飛ばす事を数十回。五人組はとうとう地面に倒れて荒い息をしていた。

「なんだ、もう終わりなのか。大して面白くなかったな」
「まあ、今回は相手の力不足ですからね。私達の相手にはなりませんよ」
レットの言葉にフレトはつまらなそうに溜息を付くのだった。
「じゃあ、そろそろ夕食へでも行くか」
フレトの言葉にそれぞれ返事を返して五人組を放置して、そのままフレト達は観光マップを頼りながら夕食の店を探すのだった。

ホテルに帰ってきたフレトは風呂から上がると夜景がよく見える大きな窓へと向かい。そのまま夜空を見上げる。
そんなフレトの元に咲耶がアイスハーブティーを入れて退出していった。フレトは夜になると一人でいる場合が多い。
それは日本に着てからの習慣になっていた。本国に居た時にはいつでもセリスが傍に居たからだ。夜だけは二人の時間だった。
それが今では離れ離れになっているが、こうして夜空を見上げて遥か彼方にある空の下にセリスが居ると思うと、そんなに遠くにいるようには感じられなかった。
まるで傍に居るような。そんな風に感じる事が出来るからフレトは日本に着てからというもの空を見上げる事が多くなっていた。
そうしているだけでもセリスと一緒に過ごした思い出が蘇る事も多いからだ。
一緒に遊んだ事はもちろん。セリスの為に降雪機で無理矢理ホワイトクリスマスにしたり、セリスの為に親に頼み込んで無理矢理プライベートビーチを手に入れたりとそんな楽しい思い出が幾つも出てくる。
グラシアス家は相当の名家であり、いくつもの会社を持っている。フレトはその後継者であり、幼少の頃から厳しい教育と訓練を受けていた。それもすべてグラシアス家を繁栄させるための後継者育成だ。

そんな家だからこそ両親は忙しくてフレト達と一緒に過ごした事などほとんど無い。だからこそフレトにとってセリスは特別な存在となったのだろう。

まるでたった一人の家族のように。

だからこそ失うわけには行かない、失ってはいけないのだ。だからセリスの為ならフレトはどんな事でもする。それが危険な争奪戦の参加でもためらう事無くセリスの為に契約をした。

そう、フレトは全てセリスの為に動いている。それだけ大事な存在であり、失ってはいけない者だ。

そんなセリスが今、まさに失いかけている。そのために精霊王の力が必要ならどんな事をしてでも昇達に勝たないといけない。そのための訓練は幼い頃から充分にやってきた。

その自信があるからこそ、今の余裕があるのだろう。今のフレトに負ける気はしない。なにしろセリスの命が掛かっているのだから。

もしセリスの命が失われるようなら自らも迷わず命を絶つだろう。それぐらいの意気込みでフレトは来日を決意した。それほどまでに必要なのだ……精霊王の力が。セリスを救ってくれる力が。

だから今のフレトは誰にも負けないと決意している。それがどんな相手だとしてもだ。昇達にも絶対に勝つつもりだ。いや、絶対に勝つと決めている。決めているからには後は実行するのみ。

「待っていろセリス、もうすぐお前を……」

フレトは遠くても近くにいるセリスに勝利を約束するのだった。

第九十話　フレト達のある一日（後書き）

そんな訳で今回はフレト達のお話にしてみました～。まあ、元々フレト達の出番が少なかったですからね～。少しは出番を増やさないと思い。今回の話しが出来上がりました～。

……それにしても……ボケが多すぎだなフレト達。フレトにラクトリー、更に時々半蔵まで乗ってくるのだから、レットの苦労も分るというものですかね。

まあ、今までシリアスな展開が続いてたので、たまにはこういう話もいいだろうと軽くしてみました。けれども少しはシリアスな展開も入れてましたね。まあ、それも必要な話しですからね～。

さてさて、次回からは……どうしようか？　まあ、たぶん、昇達の話しに戻るかもしれません。このままだらだらやってもしょうがないですからね～。そろそろ話を進めて行こうかと思っております。

ではでは、この辺で。ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、季節の変わり目に普通に風邪をひいた葵夢幻でした。

第九十一話　決戦前日

九日目、昇達は学校の校庭にて模擬戦を行っていた。それが今しがた終わったところだ。

模擬戦は二度行われた。まずは昇とシエラとミリアが組み。二度目では昇と琴未と閃華が組んで行われる事になった。これも全て与凪に開発を任せた新システムのテストを兼ねての模擬戦でもあったからこのような組み合わせで行われる事になった。

それが終わると皆がいつもの生徒指導室に集って、現在では休憩を兼ねてお茶会となっている。

「それにしても凄いわね、そのシステム」

琴未が言っているのは先程の模擬戦で試した新システムの事だろう。そのシステムを肌で感じて正直な感想を口にした。どうやらあんな事が可能とは琴未とっては予想も出来なかった事だ。

「それはそうですよ、私の全てを出し切って作り出しましたからね」

少しだけ自慢げに言う与凪はどこか嬉しそうだった。やはり自分が作り出した物で満足させられたのが嬉しいのだろう。

「うむ、確かにこれなら完全契約にも対抗できるじゃろう……じゃがのう」

そう言って閃華は昇に視線を向けると皆の視線も自然と昇に集まった。

「大丈夫だよ、絶対にちゃんと使いこなしてみせるから」

「……そうじゃな」

閃華はそれ以上の事は言わなかった。それは昇を絶対的に信頼しているのと同じで、それはシエラ達も同じだった。だからこそ、ここは昇を信用してこれ以上は不安になりそうな事を口にするのを控えた。

「そういえば、これは何て名前なの？」

いきなりそんな事を言い出したミリア。確かにいつまでも新シス

テムとかでは言い辛いのだろう。だからこそ、システムの名前などという話題を持ち出してきた。

その話しが出てきた事で与凪は立ち上がると胸を張って答える。

「それはもう決まってますよ。このシステムの名前は……ストケシアシステムです」

はっきりとシステム名を口にする与凪。けれどもミリアからは予想外の反応が返ってきた。

「ストケ……何？」

どうやら一回では覚えることが出来なかったようだ。だからもう一度尋ねてきたミリアに与凪はがっかりと肩を落とした。与凪としてはもう少し驚きのリアクションを期待してたのだろう。

そんな与凪の代わりにシエラが口を開いた。

「ストケシアシステム。私は良く知らないけど、ストケシアは花の名前だと思った」

「さすがシエラさん、良くご存知ですね」

どうやらシエラの言った事は正解だったらしい。それから与凪はストケシアについての説明に入った。

「ストケシアはキク科の多年草でして、花言葉は『清らかな乙女』『清楚な娘』です。つまり清らかで滝下君に対しては清楚な皆さんにはお似合いの花言葉だと思って、そんな名前にしてみました」

自分達で言ったら自画自賛な言葉を平然と口にする与凪。

確かにシエラ達は昇に対してだけは清楚で清らかかもしれない。そんな昇の元で戦うシエラ達を花に例えるなら、ということで与凪はそんな名前を付けたらしい。

けれども確かに昇から見たらシエラ達はその言葉にぴったりかもしれない。昇の元で不純な心無く昇の為に戦う乙女。その心意気は清楚で猛々しくもある。もしかしたら与凪はそんなシエラ達の姿を見て、そんな名前にしたのかもしれない。

与凪はそこまでは語らなかったが、システムの名前に込めた与凪の想いはそうなのではないかと昇は思った。

「さて、これからじゃが」
丁度話の節目で閃華が話題を切り替えてきた。
「決戦は明日じゃが、皆はそれまでどうするつもりじゃ？」
「私達は今までどおりにゆっくりと休ませてもらいますよ～」
「……そうか」
「もう少し驚いてください～」
いきなり現れたラクトリーに閃華は何事も無かったようにリアクションする。それがよほど不満だったのだろう。ラクトリーは拗ねるように頬を膨らませる。そんな仕草を見てると確かにミリアの師匠だと昇は改めて思う。
「えっと、ラクトリーさんがどうしてここに？　というかどうやってこの場所を発見したんですか？」
確かにこの学校は与凪の属性と結界で発見できないようにしてある。それなのにラクトリーはいとも簡単にこの場所に侵入してきた。つまりは以前からこの場所を突き止めていたのかもしれない。
昇の疑問にラクトリーはいつの間にか自分のティーカップに紅茶を入れて喉を潤すと、昇の疑問に答える。
「それは前からこの辺には目を付けてたんですよ。以前も言ったと思いますが、地の属性は登録した精霊反応を追う事が出来るんです。先日もそうやってお宅にお邪魔させていただきましたよね」
「ええ、まあ、確かに」
ラクトリーに言われてやっと昇は思い出した。ラクトリーはいつでもミリアが何処にいるのか監視できると言う事を。
それを使って何かしらの手段を講じてくるとも昇は考えたが、それをさせない為の宣戦布告だ。だから次に会うのは戦場だと思っていたが、まさかこんな場所にまで現れるとは思ってもいなかった。
けれども、この学校は与凪の属性で地の属性を使ってもミリアを追いきれないはずだ。だからラクトリーですらもそう簡単には発見できなかった。
だがここ数日ミリアの反応が同じ場所で消えているので、今日は

その周辺を探っていたらしい。それでこの学校を見つけ出したのだろう。

「本当に苦労しました。まさか霧の属性で隠されてるなんて思いもよらなくて。それでつい先程学校に足を踏み入れたら運良く結界がありまして、それで結界内からミリアの反応が出たので着たんですよ」

つまりつい先程、結界内に足を踏み入れたラクトリーは霧の属性で隠されている学校の範囲内に入ったため、霧の属性の効果が消えてミリアを発見する事が出来たらしい。

確かに霧の属性は外からの発見はかなり難しいが、一度突破してしまえばもう効果をもたらさない。もちろん、もう一度出れば同じ効果を発揮するが相手が場所を覚えてしまえば意味は無い。

それでここにミリアが居る事を確認したラクトリーはいつもの生徒指導室に来たと言う訳だ。

「それでラクトリーさんはどうしてここに？」

昇が尋ねるとラクトリーは微笑を返してきた。どうやら昇に何かを答えさせたいらしいが、昇には何のことかまったく分らなかった。

そんな昇にラクトリーは溜息を付くと説明を開始した。

「時間ですよ、時間～。戦闘開始時間をまだ決めてなかったじゃないですか。それが分らないと何時頃に行けば良いのか分りませんよ～」

「あっ、そうだった」

ラクトリーの答えに昇は間の抜けた声で返事を返した。さすがにあの時は緊張していた所為か、そこまで決めていなかった。

そんな昇に与凪は辛うじて聞こえるように呟いた。

「滝下君……カッコ悪い」

へっ？

そんな与凪の言葉に続くかのように閃華も呟く。

「まったく、もう少ししっかりしてもらいたいものじゃな」

ぐっ、閃華まで……というか、すいませんでした！

「慣れない事をしたから緊張しすぎたのでは」
あの～、シエラさんまで言いますか。でも反論出来ない言葉は投げ掛けないでくださいな！
「まあ、昇だからね～」
呆れたように溜息を付かないでください琴未さん！
「や～い、昇のうっかり者～」
ミリアさんあなたまで言いますか。というかミリアは言わない方が良かったと思うよ。
昇がそんな事を思ったのはミリアの後ろに立っているラクトリーを見たからだ。もちろん片手にはお仕置き用のスリッパを持っている。そして思いっきりミリアの頭を引っ叩くのだった。
かなり思いっきり叩いたのだろう。ミリアの頭はテーブルにまで達して思いっきりぶつける事になってしまった。
それからラクトリーはすぐさまミリアの首根っこを引っ掴むと引っ張り上げて顔を自分の方へと向かせた。
「ミリア～、あなたがそんな事を言えると思っているのですか」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、お師匠様～、顔が近いです、顔が～」
ラクトリーの顔は微笑んでいるが明らかに黒いオーラは誰の目にも見えているだろう。それぐらいの雰囲気でラクトリーはミリアに迫る。
「うっかりしているのはあなたも同じですよね～、なにしろ誰が呼んだか分らない召喚陣に飛び込むぐらいですから」
「だからあれはしかたないというか～、もう許してくださ～い」
とうとう泣き出したミリアをラクトリーはやっと解放した。けれどもその場で手を離しただけだから、ミリアは思いっきり尻餅を付く事になってしまった。
お尻を撫でながらラクトリーとは遠い位置に移動するミリアにラクトリーは平然と先程まで居た位置に座ると、もう一口紅茶を頂くのだった。

「それでは明日の夜、午後八時で構いませんね」
ラクトリーはそう確認すると昇は頷いて見せた。昇達もその時間に異論は無かった。
なぜ夜になったかというと、やはりそこには精霊王の力が関係してくるからだ。もし昇達が負けた場合はその場で精霊王の封印を解除しなくてはいけない。
そして昇達が勝った場合には、その場でフレト達に昇の未来を実現させるための手続きをさせなければ行けない。
精霊王の封印場所が中央公園の為、どうしても人が少なくなる夜に決戦をした方が良いという結論に達する事になったようだ。
精界を張るにしても目立ってしまっては意味が無い。それどころか騒ぎになってしまうだろう。なにしろ現実から見れば昇達が消えたように見えてしまうのだから。
だからこそ人通りが無くなる夜に決戦をする事に決まった。
ラクトリーは紅茶で喉を潤すと少し優しげに微笑みながら昇に向かって次の提案を出してきた。
「もし、他にルールのような物が必要なら今のうちに言ってください」
つまり他になにか規制を設けるなら先に言ってくれということだろう。そう解釈した昇は堂々と答えた。
「これはスポーツではなく戦いです。戦いにルールも卑怯も無い。ただ勝った者が全てを手に入れる事が出来る。僕はこの他倒自立の理を持ってあなた達と戦います」
そんな昇の答えにラクトリーはティーカップを置くと軽く笑い出した。
「ごめんなさいね、あなたを試すような事をして」
どうやら昇はラクトリーに試されていたようだ。本当にフレトと戦う資格を持っているのかを。昇もその事を理解していたからこそ、

あそこまで堂々と答えた。そうしないとラクトリーに認めてはもらえなかっただろう。

今回の戦いはスポーツではなく戦争と言ってもいい。そんな勝負に卑怯も策略も正当化される。そんな場所にスポーツのようにルールを持ち出すなど腑抜けや腰抜けなどの負け犬と同じだ。

そんなルールを好んで持ち込むような輩ならフレト達の相手にもならないだろう。ラクトリーはちゃんと昇達が自分達と戦えるのかを試したのだ。

今更そのような事をする必要も無かったのだが、やはり確認しておきたかったのだろ。ミリアの師匠として昇が仕えるに価する契約者かどうかを。

「さて、それじゃあそろそろ私は失礼させて頂きますね」

「そうじゃな、どうやら本当にその事を尋ねてきただけのようじゃからな」

「あらあら、まあ疑われてもしかたないですね。けど分ってもらえたなら充分です」

この場所を探り当てたという事は偵察も兼ねているのではないのかと疑ったのだが、閃華とて学校に張り巡らせている結界に何の仕掛けもしていない訳じゃない。昇達以外の者が結界内に侵入すれば分るようにしてある。

だから閃華と与凪はラクトリーが侵入してきた事に気付いていた。それから真っ直ぐにこの生徒指導室に来た事も監視していたのだ。

何にしてもラクトリーに先程の模擬戦を見られなくて一安心と言ったところだろう。ラクトリーとしても下手な嫌疑を掛けられなくて安心した事だろう。下手に偵察に来たと言われてはラクトリーとしても心外だ。

けれどもそうでない事が証明されたので両方で安心と納得が行く結果が出てくれた。それで何事にも発展しなかった事に昇は胸を撫で下ろすのだった。

「それじゃあ、こういうのも変ですけど。フレトさんによろしくお

伝えください」
「そのお心遣いには感謝いたします。それでは」
それを最後にラクトリーは生徒指導室を後にした。その後も与凪はラクトリーの監視をしていたのだが、ラクトリーは真っ直ぐと学校を出て行ってしまった。
どうやら本当にその事だけを尋ねに着ただけなのだが、どうもラクトリーは掴み所が無いというういか、素直に信じられない所を持っているのだろう。
それはもちろんラクトリーを敵にした場合だ。もし味方なら全てが笑って過ごせるだろう、それがラクトリーの長所であり短所なのかもしれない。
なんにしても突然の来訪者は去っていった。後は昇達がどう過ごすかだが、明日の決戦に備えて今日はもう休む事を閃華は提案してきた。
確かにここで無理をして体力を消耗するより、今は万全の状態を作り上げる方が優先されるべきだろう。
そんな閃華の意見に反論する者は居なかった。
与凪が新たに作り上げたストケシアシステム。それだけでは無い。各自に特訓してきたのだから準備はすでに出来ている。それはもちろん昇だってそうだ……と言いたいところだが。昇の特訓だけは最後まで上手くは行かなかった。
どうやら相当難しい特訓をしていたようで、さすがに十日で物にするには至らなかったようだ。
けれども今はそんな事を嘆いていてもしかたない。ストケシアシステムだけでもかなりの戦力アップが図れるのだから、それ以外の手段が無くても乗り越えて見せなければいけない。
昇が作ろうとしている未来の為に。
それから昇達は与凪を残して帰路に着いた。こうして皆が揃って

帰るのも久しぶりだと感じながら昇は歩いていた。
そんな帰り道で琴未は身体を大きく伸ばすとこんな事を言い始めた。
「長かったのか、短かったのか良く分からない日々だったわね」
「琴未、まだ全てが終わったわけでは無いぞ。これからが本番じゃ」
そう言われても琴未は微笑を絶やす事無く話を続ける。
「それは分ってるわよ。けどね、こうやって特訓してきた日々も結構楽しかったんじゃないかなとか思ってね」
確かに辛い事しかなかった特訓の日々だったかもしれないが、琴未は琴未なりに特訓を楽しんでいたのではないか、それは他の皆も同じなのかなと昇は皆の顔を見回してみると琴未と同じように少し微笑んでいる。どうやら心境は琴未と一緒のようだ。
「まあ、祭りの準備が一番楽しいというしのう。それはそれでよい事なんじゃろう」
そんな閃華の言葉をシエラは否定と肯定をする。
「祭りじゃないけど、戦いに向けて特訓した日々は……確かに楽しかったのかもしれない」
「そうだね……うん、そうかもしれない。けど、明日の戦いには絶対に勝たないと今までの特訓して来た意味が無いから。だから明日は頑張ろう」
そんな励ましの言葉を掛ける昇にシエラは昇の手を取って、しっかりと握り締める。
「私は昇の剣になる、だから明日は思う存分私を振るって。そうすれば必ず勝てる」
「ありがとうシエラ」
そんな言葉を昇に掛けるシエラに続かんとばかりにミリアも片手を大きく上に上げて宣言する。
「なら私は皆を守る盾になるよ。お師匠様にも負けない盾になるから、私が皆を守ってあげるよ」
元気良くそんな言葉を口にしたミリア。そんなミリアとは正反対

に琴未は真剣な眼差しで昇に告げる。
「一度は負けた。けど……今度は絶対に負けないから、だから私と昇とでしっかりと勝利を手にしよ」
そんな言葉を掛けてきた琴未に昇は頷いて見せるが、すぐにシエラが琴未の背中に蹴りを入れて蹴り飛ばしてしまった。
だが琴未はそれを予想していたのか、上手く空中で一回転すると見事に着地してみせた。
「痛っいわね～。いきなり何するのよ」
「さりげなく私達の事を無視するから、その仕返し」
「シエラだってさりげなく昇の手を取ってたじゃない。私の言葉はその仕返しよ」
えっと、これはいつものパターンですか？
そんな事を思う昇。確かにシエラと琴未の争いが始まれば当分は収まる事は無いだろう。下手をしたらミリアまで参戦して発展してしまう。
だからとりあえずミリアだけでも確保しておこうと思った昇はミリアの手を取ろうとしたが、一足遅くミリアはシエラと琴未に向かって走り出してしまった。
「なら私は二人に奇襲だ～」
そんな言葉を掛けながら二人に拳を繰り出すミリアだが、二人ともそんなミリアの攻撃をまんまと喰らうわけが無い。見事にかわして見せた。
「突然邪魔するんじゃないわよ」
「その程度で昇が手に入ると思ったら大間違い」
「ならこれならどうだ～」
すでにいつもの喧嘩同様の戯れになってきている。傍目に見たら喧嘩に見えるだろうが、三人とも戦闘能力は人間より遥かに上である。だからこの程度の事は喧嘩とは言わないだろう。
そんな様子をいつものように安全地帯から見守る昇。当然閃華も昇の隣に避難している。

「この程度で私を倒せると思ったら大間違いよ」
「そんなフェイントに引っ掛かるわけが無い」
「まだまだこれからだ～」
あ～、こうなると収まるまで時間が掛かるな～。そんな事を思った昇は隣に居る閃華に語り掛ける。だが閃華は既に昇が何を言おうとしているのか分っているようで、心配以来無い事を告げた。
「大丈夫じゃ、すでに簡易的な結界は張ってある。だから近所迷惑にはならんじゃろ」
「そっか、それならいいけど」
いつもの騒ぎに慣れているのだろう。閃華はすでにそのような手段で三人の戯れを近所迷惑にならないようにしていた。
そんな事をしていた閃華は三人を見守りながら、少し真剣な口調で昇に尋ねてきた。
「のう、昇」
「んっ、何？」
昇は閃華の方に視線を向けるが閃華は視線を交じ合わせようとしない。そのまま顔を動かさずに聞いてきた。
「今回はあまり悩まなかったようじゃな。海に行っていた時は随分と悩んだようじゃが。まさか今回はこんなにも早く結論を出すとは思っていなかったんじゃが」
どうやら閃華は昇があまり悩まずに結論を出した事に不思議さを感じていたようだ。確かに昇の描いている未来なら誰かが不幸になる事は無いのかもしれない。けれども、それは充分に悩んで出した結論だからこそありえることで、こんなに簡単に結論を出されると逆に不安になったのかもしれない。
だからこそ、そんな質問をしてきたのだろう。
そんな閃華の質問に昇は軽く微笑むと再び三人に視線を向けて答え始めた。
「風鏡さんの時は本当にどうすれば良いのか分らなかったけど、その時に分った事が一つだけある。皆が何かと戦ってるんだなって。

それは敵と戦う事じゃない、自分の心だったり、過去の因縁だったり、皆がいろいろな物と戦ってるんだなって思ったんだ」

「なるほどのう、確かにそうかもしれんのう」

戦うという事は武力を用いて敵を倒すことじゃない。自分の心や過去と向き合って乗り越えるのも戦うといえるだろう。それだけではなく、目の前に何かしらの障害があるなら、それを乗り越えようとするのも戦いだ。

戦うというのは現在でも続いてる人が成長するための儀式なのかもしれない。

そんな中で昇は何かを掴んだのだろう。

「だから閃華が他倒自立の理を教えてもらった時に分ったんだ。今回のやるべき事を、しなければいけない事を……僕が作りたい未来を」

「……」

「本心を言えば戦いは避けたい。でも……戦う事が必要ならためらう必要なんて無い。だから迷う事なんて無かったんだよ。戦う事が唯一の方法なら、僕はためらわずに戦う事が出来る」

「……そうか」

閃華はそれだけしか答えなかった。いや、答える必要が無かった。閃華も昇と共に戦う事を心に誓った。それは琴未の為であり、その先に昇が居る。だから昇のためになる事は琴未のためになる。そう判断したからこそ、閃華は昇にヒントを与え続けていたが、それももう必要ないのかもしれない。そんな事を閃華は思っていた。

「それはそうと、そろそろ止めた方が良いんじゃないかな？」

昇はシエラ達を指差しながら、そんな事を言い出した。

確かに戯れ始めてからかなりの時間が経っている。だから昇としてはそろそろ止めて家に帰りたいのだろう。

そんな昇に閃華はとんでも無い事を言い出した。

「なら精界を張って一撃をお見舞いするか？」

「お願いですから穏便な方法でお願いします」

「そうか、それならしかたないのう」
閃華はそういうと昇の後ろに周ると背中に両手を押し当てた。
「なら昇自身が仲裁に入るのが一番じゃろ」
あの～、閃華さん、それは僕に生贄になれと？
そう閃華に確かめる暇も無く、昇は押し出されると三人が戯れている中心に向かって一気に押し飛ばされた。
そんな事に気付く事無く戯れている三人は更にヒートアップするのだった。
「乾坤一擲！」
「一撃必倒！」
「全滅必至！」
琴未、シエラ、ミリアの順で最大限の攻撃を繰り出す。その一撃はそれぞれの属性が込められており、かなりの威力を持っているのは確かだ。
そんな中に飛び込まされた昇は三人の攻撃をまともに受けると、そのまま上に跳ね飛ばされて地面に叩きつけられるのだった。
あ～、やっぱりこうなるんですね。
そんな事を思ったのを最後に昇の意識は沈んで行くのだった。

昇が気付くのを待ってから再び帰路に着く昇達。家に着くと珍しく彩香が夕飯を作ってくれていた。どうやら昇達の帰りが遅いから自分でやったようだ。
彩香もシエラ達が来る前までは普通に主婦をしていたのだから、これぐらいは出来て当然だが、今夜の料理はやけに豪華に感じたのは昇だけじゃなかった。
その理由を彩香に尋ねようとした昇だが止めた。それは聞かなくても分る事かもしれないと思ったからだ。
確かに昇は何も彩香に告げてはいない。けれども彩香が何も知らないとは限らない。もしかしたら誰かが全部話したのかもしれない。

だから明日の事も知っており、このような豪華な夕飯を用意したのかもしれない。
　全ては推測だが、昇はその推測が当たっていると思っている。伊達に親子を長い間やっている訳ではない。彩香が昇の事を分っているように、昇も彩香の事を分っているつもりだ。
　だからこそ何も言わないでおこうと思った。いつか自分の口から全てを話すときが来る。もしかしたら彩香から話を聞かされる時がくるかも知れない。どちらにしても今はその時では無いと思ったのは確かだ。
　だからこそ昇は何も聞かずに夕食の席に付くのだった。

　その頃のフレト達はすでに夕食を済ませていた。
　フレトはその後で本国にいるセリスへと電話を掛けた。これも毎日行っている事で一回も欠かしたことは無い。
　この時間帯が両者にとって最も話しが出来る時間帯なのだろう。
　そして話が終わるとフレトは電話を切ってラクトリーを呼んだ。
「お呼びですか～？」
　呑気な声でフレトの部屋に入ってくるラクトリー。そんなラクトリーにフレトは窓の外を見ながら話し始めた。
「明日で精霊王の力が手に入る。セリスがこちらに来る準備だけはしておいてくれ」
「マスター、こういうのもなんですが」
「分っている。まだ俺達が勝った訳じゃない。だが……絶対に負けない。だから勝った時の為に準備だけはしておいてくれ」
　そんなフレトの言葉を聞くとラクトリーは静かに頭を下げた。そんな時だった。咲耶が丁度紅茶を用意して来訪してきたのは。
　フレトは丁度良いと半蔵とレットも呼び寄せて全員を部屋に集めさせた。それぞれにテーブルに付かせて咲耶はしっかりと全員分の紅茶を出してから席に着くとフレトは全員を見回して宣言する。

「明日は絶対に勝つぞ。セリスの為に、そう、全てはセリスの病を治すために必ず勝たないといけない。だから……力を貸して欲しい」
そんなフレトの言葉に真っ先に反応を返してきたのは半蔵だった。
「御意、全ては若様の為に」
「明日は絶対に勝ちますよ～」
ラクトリーも呑気な口調の中に少しだけ真剣なスパイスを入れてそう宣言した。そんな半蔵とラクトリーに続かんとばかりにレットも宣言する。
「お任せくださいフレト様」
「全てはお二方様の為に全力を尽くします。我ら一同、主様の為に」
最後に咲耶が締めるとフレトは満足したように頷いた。それほどまでにフレト達の絆も強いものなのだろう。
そんなフレト達に昇はどう対抗するのか、全ては明日の夜に答えが出る。そう、全ての決着は明日の……夜。

第九十一話　決戦前日（後書き）

そんな訳で他倒自立編も佳境に入ってきましたね。これか昇とフレトは精霊王の力を賭けて戦う事になります。いよいよ他倒自立編のラストバトルですね。

今回はいろいろとシリアスな場面が多かったですが……というか、実は次に考えてるのはもっと重い話だったりして。まあ……その辺は他倒自立編が終わってからの話しですね。

さてさて、今回出てきたストケシアシステムですが……言い辛い。けど、実は凄いシステムだったりして……うん、たぶんね。まあ、その真価を発揮するのは後数話先かもしれませんね。

なんにしても、次からは一気に盛り上げて行きたい所です。なにしろ一番盛り上がるところですからね～。

ではでは、この辺で締めさせてもらいますね。ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、今月は更新ペースを上げすぎたなとか思った葵夢幻でした。

第九十二話　ストケシアシステム

午後八時の中央公園。さすがに広い公園であってもこの時間帯に人が通る事はまったく無かった。それもこれも公園の周りには人が集るような施設が無く、休日には賑わうものだが、さすがにこの時間帯には誰も居ないのだ。昇達とフレト達以外は。

十人の人影が二つのグループに分かれて、それぞれから一人ずつ前に出た。シエラとラクトリーだ。

二人は精神を集中させると一気に解き放つ。

『精界展開』

二人から光の柱が天に向かって伸びると、ある一定の高度の達する。そこから中央公園を包み込むように光の幕は展開される。

これで精界は出来上がり、世界は白くなる。どうやらシエラの精界が内側に展開されたようだ。

それからそれぞれの精霊武具とアルマセットを行い。フレトから語りかけてきた。

「さあ、これで準備は整ったようだな」

勝つ自信があるのかフレトは昇にそう告げてくる。確かにこれで戦闘準備は整った。後は戦闘の火蓋を切るだけだ。

「そうだね、今日こそは負ける訳には行かない。絶対に勝たせてもらう」

昇もフレトに負ける事無く言い返すが、それがフレトに火を付けてしまったのだろう。フレトは奥歯を強く噛み締めると鋭い視線を投げ掛けてきた。

「それはこっちのセリフだ。俺達は絶対に勝たないといけないんだ。セリスのためにもな！」

それだけ宣言するとフレト達は大きく後ろに跳んで昇達から距離を取る。それを見た昇達も後ろに跳んで二組の間には大分距離が開いた。

「行くよ」
昇は静かに宣言すると精神を集中させて意識だけを黒い空間へと沈める。それを見ていたフレト達は先手を打つためにすでに動き始めていた。
「行け！　半蔵にレット」
「はっ」
「御意」
真っ先に動いたのはレットだ。一気に飛び上がると上空から昇達に接近する。
それは昇達も見ていたのだが、昇の陣営は誰も動こうとはしなかった。半蔵とレットが動き出したのだから、真っ先にシエラが動きそうなものだが誰も動かない。
その頃、昇は黒い空間に意識を沈めて四本の赤い紐を手にしていた。その紐を持ったまま意識を浮上させるとシエラ達に向かって告げる。
「ストケシアシステム起動。行くよ！」
それぞれに返事をするシエラ達。そんな昇達の陣営に真横から手裏剣が多数も投げ掛けられていた。レットに目を向けておきながら半蔵から攻撃を仕掛けたのだろう。
昇はそれを見て素早くストケシアシステムを作動させる。
「アースウォール」
手裏剣に対してミリアが壁を作って防ぐ。幾つもの手裏剣が土の壁に阻まれて止まるが、その隙にレットが空中から一気に降下してくる。どうやら半蔵の攻撃こそ囮だったのだろう。
そんなレットに対して閃華が一気に跳び上がると、龍水方天戟とテルノアルテトライデントがぶつかり合う。そして琴未が上空に向かって雷閃刀を突き上げた。
「落雷陣」
閃華の後ろを一筋の雷光が過ぎ去ると上空に魔法陣が展開される。それと同時に閃華はレットのトライデントを弾く。その反動を利用

して一気に降下していく。当然、レットとしては空中で動きの取れない閃華に追撃を掛けるが、その前に琴未が動いた。

「行っけ～」

落雷陣から一気に幾つもの雷を落とす琴未。それはレットに向かって落とされており、閃華への追撃を諦めるしかなかった。

その間に昇の後ろから空間の裂け目が出来る。そして半蔵がそこから一気に飛び出してくるが、半蔵の空斬小太刀は昇に届く事無く、ミリアのアースシールドハルバードによって阻まれる事になった。

このまま力比べになると思われそうだが、なにしろ小太刀と重量のあるハルバードだから力比べの勝敗は明らかにミリアの方である。それが分っているだけに半蔵はすぐさまミリアから遠のくが、それを予想していたかのようにシエラが一気に半蔵に向かって飛び込んできた。

シエラのスピードだ。さすがの半蔵もこればかりは、なんとか受け止めたが弾き飛ばされてしまった。シエラはそのまま半蔵の追撃に移ろうとするが上空からレットが迫ってきていたので、そちらの対応に周った。

さすがの半蔵もあそこまで連続で攻められてはやられていただろう。けれども半蔵も百戦錬磨の達人であるすぐに起き上がると、再び攻撃に移る。対象はミリアだ。先程やられただけに一番近くにいる標的に狙いを定めたのだが、半蔵の横を突く形で琴未が雷閃刀を振るってきた。

どうやら半蔵が吹き飛ばされている間に琴未が追撃を掛けていたようだ。

けれども半蔵の強さは閃華から良く聞かされている。普通に相手をしていてはまともに戦えない事を琴未は分っていた。だからこそ、今ここで特訓の成果を出そうとしていた。

「行くわよ」

これが私の考えた新しい剣術。その名を昇琴流（しょうきんりゅう）。私が昇のために作り上げた剣術を今こそ使うときよね。琴未はそう決意すると雷閃

刀を下段に構えて軽く跳び上がると右足を思いっきり踏み出す。
そして雷閃刀を一気に突き出した。
―昇琴流　雷華一輪刺突（らいかいちりんつき）―
突き出された雷閃刀から一筋の雷撃が出ると、それが幾つにも枝分かれして、まるで雷の花でも咲いたかのように枝分かれした雷撃が広範囲に展開される。さすがにこれを避けきるのは今の半蔵には無理だ。
そんな半蔵の足元から土砂が一気に舞い上がる。
「アースドーム」
既に迫っていたラクトリーが半蔵を守るためにアースドームを発動させた。半蔵を包み込むようにして守る土砂に琴未の攻撃は完全に防がれてしまった。
そんな攻防が行われている隙にミリアは反撃に移るために強大な力を発動させていた。
「ブレイクアースシュート」
アースシールドハルバードを地面に突き刺したミリアの矛先から一筋の地割れが起こると、それはラクトリーと共に迫っていた咲耶に向かって伸びて行った。
そして咲耶の元に達すると一気に土砂が吹き上がり、咲耶はその土砂の破片をまともに喰らう事になってしまった。
そんな咲耶を援護するために上空から一気に舞い降りてくるレット。そんなレットの前に立ち塞がったのはシエラだった。
「フルフェーザーショット」
ウイングクレイモアの翼を思いっきり広げて、そこから飛び出してくる羽の弾丸にレットの足は完全に止められてしまった。
レットが動けないとなると今動けるのはラクトリーだけだと思われたが、もう一人だけいる事を昇は忘れてはいなかった。
ミリアの攻撃が終わるとそこには咲耶の姿は無かった。どうやら

途中で攻撃を受けるの覚悟しながらも半蔵が咲耶の救援に入ったようだ。
その半蔵は空の属性でいつの間にかアースドームの中から出ていたようだ。その事が分っていたからこそ、昇はあえてアースドームを破壊する事はしなかった。
ここまでは昇達が優位に戦闘を進めていた。

やっぱりこのシステムは凄いな。後で与凪さんにお礼を言っておかないと。
昇がそんな事を思えたのはフレト達が一旦引いたからだ。あのまま続けていても不利になるばかりだと思ったのだろう。一旦体勢を立て直すために引いたようだ。
もちろん昇達もフレト達にそんな時間を与えるつもりは無い。だからこそ一気に攻めに転じる。
真っ先に突っ込んでいくシエラと閃華。その後にミリアが続いて琴未が最後方だ。そんな陣形で一気に突っ込んで行く昇達の陣営にラクトリーが立ち塞がる。
「アースブレイカー！」
どうやら昇達の反撃を予想していたようで、すでに力を溜め込んでいたラクトリーが大技を発動させる。
アースブレイククレセントアクスから伸びた幾つもの赤い光が地面を崩壊させる。その威力はミリアとは比較にはならないだろう。
そんなラクトリーの攻撃にシエラは閃華の手を取ると上空に大きく舞い上がり、ミリアはアースドームを波動させて琴未と一緒に立てこもる。
アースブレイカーはかなり上昇すれば攻撃が届く事は無い。けれども地上にいるミリアと琴未はどこまで耐えられるかわかったものでは無い。その事はミリアもよく分かっていた。
「さすがお師匠様、破壊系の発動が早いな～」

「って、関心してる場合じゃないでしょ！　ちゃんと守れるんでしょうね？」

さすがに心配なのだろう。なにしろ相手は完全契約をしたフレト達だ。今まで見てきたミリアのアースブレイカーとは格が違う。

そんな会話をしているうちに地面の崩壊が始まる。幾つもの箇所から地面が崩壊して行き、土砂が舞い上がる。

そんな中でミリアはしっかりと琴未に言って見せた。

「大丈夫だよ。私は皆を守る盾なんだから」

そして見せた笑顔に琴未はミリアを信頼する事に決めた。

ラクトリーが発動させたアースブレイカーの破壊力はかなりのもので、広範囲に土砂を巻き上げ、地割れを起こし、完全に地面を崩壊させたのだが、空中に逃げたシエラと閃華は無傷だった。

さすがにそこまでは攻撃は届かなかったのだろう。そんなシエラ達はすぐさま急降下を始めた。それはもちろん、相手の反撃を読んでいたからだ。予想通りにレットがすぐさま現れてシエラ達がいた場所に攻撃を加えるが、ただ空を切るだけだった。

そんなレットに対して完全に無視を決め込んだシエラは一気に敵陣へと切り込んで行った。閃華の手を離して、閃華から突撃させるのだが、当然フレト達からも反撃がある。

「桜炎」

上空から落ちてくる閃華に炎の桜をぶつけてくる咲耶。そんな咲耶の攻撃に閃華は真正面から立ち向かう。

「龍水閃」

龍水方天戟の水龍が大きな口をあけると高圧縮された大量の水を一気に噴出した。そしてぶつかり合う桜炎と龍水閃。威力としては完全契約をしている咲耶の方が上だ。けれども閃華としては地面に着地するだけの時間を稼げればよかった。

さすがの咲耶といえども一度放ったものを曲げるという芸当は出来ないだろう。だから一時的にでも桜炎を止める事が出来れば、閃華が着地する時間は充分に稼ぐ事が出来た。

けれども油断は出来ない。着地した直後は動けないのだから、そこを狙ったかのように半蔵が空間を切り裂いて姿を現すが、半蔵の後ろにはシエラの姿が既にあった。

まさか自分が後ろを取られるとは思っていなかった半蔵は閃華への攻撃を諦めて、シエラの攻撃に備える。シエラの武器も重量型。そのうえハイスピードで振られては、さすがの半蔵も踏ん張る事が出来ずに弾き飛ばされてしまった。

そんな攻撃直後のシエラに上空からレットが一気に舞い降りてくる。シエラの攻撃直後を狙った攻撃だ。さすがのシエラも対応せずには要られないだろうとレットは思っていたのだが、それはまったくの間違いだった。

シエラはレットを無視するが如く、その場を退く。当然後を追うレットの目の前に現れたのはラクトリーの攻撃を耐え切った琴未の姿だった。

―昇琴流　夜天昇雷覇（やてんしょうらいは）―

雷閃刀の切っ先を地面に付けて雷撃を溜めていた琴未は一気に雷閃刀を振り上げると、強大な雷が夜空の精界に向かって放たれた。

レットはシエラを追っていた直後の攻撃だ。これを避けるのは至難の業だが、レットは完全契約でシエラと同等のスピードを得ている。だから奇襲とも言える琴未の攻撃を避けたのだが、完璧に避けきる事が出来ずに左腕に攻撃を喰らってしまった。

レットの装甲もシエラと同じで軽装だが、それなりの防御力と耐久度を持っている。けれども琴未の攻撃はそんなレットの装甲をも破壊するほどの威力を持っていた。

まともに喰らっていたら完全にやられていただろう。

傷を負って一旦退がるしかなくなったレットに対して、代わりに咲耶が出てきた。どうやら先程の攻撃ではそんなにダメージは受けていなかったようだ。

だからレットの援護に出てきたのだろう。そんな咲耶は琴未に桜華小刀を向ける。

「樹刺」

地面から飛び出してきた気の根っこのような物は琴未を串刺しにすべく伸びだす。そんな琴未の前に土の壁が現れると咲耶の攻撃を完全に防いだのだが、その直後に土の壁は完全に破壊された。

どうやら土の壁はミリアのアースウォールのようで、それを破壊したのはラクトリーのようだ。

確かにラクトリーの破壊力ならミリアのアースウォールを破壊するのは簡単だ。問題はその次に出る行動だ。

ラクトリーはそのままミリアを目指して駆け出す。どうやらこのままミリアとの一騎打ちをするつもりなのだろう。けど、それを許さないが如く、閃華がラクトリーの前に立ちはだかると、そのまま閃華とラクトリーは打ち合いを始めた。

ラクトリーの破壊力なら閃華の龍水方天戟ですらも破壊できると思われるのだが、精霊武具はそこまでヤワではない。それに閃華を弾き飛ばす事も可能に思われるが、閃華は攻撃はせずにラクトリーの攻撃を全て受け流している。

確かにまともに正面から立ち向かえば閃華は一瞬にして弾き飛ばされてしまうだろう。けれども、どれだけ破壊力を持っていても、その力を逸らしてしまえば意味は無い。だからこそラクトリーの相手に閃華を選んだのだろう。

その間にミリアと琴未は咲耶へと迫るが、そんなミリアの前に半蔵が突然現れた。突然の事なのだがミリアは半蔵の攻撃を簡単に受け止めると、そのまま押さえ込みに入った。どうやらこのまま半蔵の動きを封じるつもりらしい。

その間に琴未は一気に咲耶に向かって突き進む。そんな琴未に咲耶は桜華小刀を向けようとするが、咲耶の後ろにはすでにシエラが居た。

「フェザーバインド」

シエラがウイングクレイモアを振るうと三枚の羽が飛び出し、大きくなるとそのまま咲耶を縛り上げる。これで咲耶の動きも完全に封じてしまった。

ラクトリーの相手は閃華がしており、半蔵はミリアによって押さえ込まれている。そしてレットは負傷中で未だに動ける状態ではない。そしてつい先程、咲耶の動きすらも封じられてしまった。これ程の絶好な好機は無いだろう。

「この間の借りを返させてもらうわよ！」

琴未はそう叫ぶと走ったまま雷閃刀を八双に構えると雷を溜める。

「あんたの為に取っておいた技よ。光栄に思いなさいよね」

そして咲耶が間合いに入ると一気に雷閃刀を振り下ろす。

―昇琴流　天雷斬（てんらいざん）―

八双から振り下ろされた雷閃刀は強大な雷と共に咲耶を一気に斬り下げると共に強大な雷を天から打ち下ろす。

「――――ッ！」

声に出せない程の悲鳴を上げる咲耶。これで前回の借りは完全に返したと琴未に少しだけ油断が生まれる。それは昇も一緒だった。だからこそ、次の行動が少しだけ遅れた。

突然吹き飛ばされるシエラと琴未。その向こうにはフレトの姿があった。完全に押されている状況をただ見ている訳には行かなくなったのだろう。

今までは昇が動かなかったからフレトも動かなかっただけであり、咲耶がやられる寸前となれば動かずにはいられない。そのまま咲耶を見殺しには出来ないのだから。

完全契約での負けは即、死亡に繋がっている。つまり契約解除ではなく消滅である。そんな契約を交わしている相手をフレトでなくても見殺しには出来ないだろう。

だからこそフレトが動かざる得ない状況になった。こうなると昇

も動くとフレト達は思ったのだが、昇はまったく動こうとはしなかった。

最初の地点、つまり現在の戦闘地点を全て見渡せる場所からまったく動く事無く。それで何かをしているようにも見えなかった。そんな昇にフレトは奥歯を強く噛み締める。精霊達が危なくなれば嫌でも出てくるだろうと、昇を戦闘に引き出そうと強気になって攻め始める。

だがその前にやらなければいけないことがある。まずは動けない咲耶を後ろに下がらせると一旦後退を命じるフレト。このままそれぞれ戦っていては押される一方だ。だからここで仕切りなおさないといけないと考えたのだろう。

昇達も深追いはせずに少しだけ下がった。それでも昇の元までは引くことは無かった。先程の戦闘地点から少しだけ退いただけだ。

そんな昇達を見てラクトリーはフレトに語りかける。

「どうやら何かをやっているみたいですね。それが何かは分かりませんが、相手の契約者が参戦してこないのが不気味ですし、この強さはエレメンタルアップで強化されたものでは無いみたいです」

「そうか、どちらにしてもこちらが不利な事は確かだな。ここからは俺の指示で動け」

それぞれに返事を返すフレト陣営。これで完全にフレトも前線に参加する事になった。

フレトはまずラクトリーとレットに前線に突っ込ませた。確かに戦闘能力的に見ても、この二人が最前衛にするのが一番効果を発揮できるだろう。

そんなフレト達に対して昇達は琴未と閃華、それにミリアまでもが一気に駆け出して行った。

こうして再び戦いの幕が上がった。

まずはラクトリーがアースブレイククレセントアクスを大きく振

り上げると一気に振り下ろした。
「アースウェーブ」
クレセントアクスが振り下ろされた地点から、まるで水面に水滴が落ちたかのように地面が波打ち始める。これで琴未達は動くどころか立っている事も困難だ。
そんなラクトリーの攻撃を少しでも防ぐためにミリアも対抗する。
「アースウォール」
土砂が一気に舞い上がると琴未達の前に土の壁が出来上がり、完全にラクトリーの攻撃を遮断する事に成功した。
けれども空中にはすでにレットが舞い上がって上空から狙っているが、そんな事は昇達も充分に承知している。だからこそシエラがレットの迎撃に向かっていた。
打ち合うクレイモアとトライデント。二人の空中戦には誰も手出しが出来ないだろう。これでシエラを封じたとフレトは考えているようだ。
だからこそここで半蔵を動かし一気に攻める。
半蔵は空間に切れ目を作り出すと移動を開始する。もちろん、先程ミリアが作り出した壁の向こうへとだ。どうやら琴未達の後ろを取ろうというのだろう。
そして半蔵が姿を現すと驚愕する。なにしろ既にそこにはミリア達は居なかったのだから。更に間を置くことなく後ろから感じる殺気。半蔵が後ろを振り向くとそこには閃華の龍水方天戟が迫っていた。
半蔵はそのまま後ろに下がって閃華の一撃をかわす。だが下がった先には琴未が回り込もうとしている。どうやら完全に前後を取られてしまっているようだ。
そんな半蔵の援護に入るためにラクトリーはわざわざミリアが作り出したアースウォールを破壊してその破片を琴未達にぶつける。さすがにこれには琴未の足が止まり、半蔵はその間に再び閃華へと向かって行くことが出来た。

これで半蔵の援護を出来たラクトリーなのだが、突然後ろから殺気を感じると振り返るとすぐに弾き飛ばされてしまった。そこにはミリアの姿があった。どうやらラクトリーが攻撃した直後を狙っての攻撃だ。これはさすがのラクトリーも避けられなかった。

そんなラクトリーにミリアは追撃を掛けるが、そこにフレトと咲耶が連携で救援に入ってきた。

「我が炎よ、剣となり敵を突き刺せ」

「桜炎」

炎の剣と桜の花弁が無数にミリアに迫る。さすがにこの状態ではラクトリーの追撃を諦めるしかなった。

「アースウォール」

ミリアは土砂を巻き上げて再びアースウォールでフレト達の攻撃を遮断した。

その頃、半蔵は閃華と打ち合っていたのだが、なかなか押す事も退く事も出来なかった。こちらが退こうとすれば閃華が押し出し、半蔵が押し出すと閃華が退く。どう見ても時間稼ぎだ。それが分っているからこそ半蔵は焦る事無く、その時を待った。

それでその時になったのだろう。半蔵が退くのと同時に閃華が退いた。これで両者の間にかなりの距離が出来たわけだが、それで終わりという訳ではない。

「雷撃閃」

半蔵の着地地点を狙ったかのように幾つもの雷が半蔵に向かって伸びていく。だが半蔵の着地地点前にはすでに空間が切り裂かれており、半蔵はその中に姿を消して雷撃閃はどこにも当たる事無く通り過ぎてしまった。

さすがは半蔵じゃな。そんな感想を思う閃華だが、その間にも戦闘は続いている。

「炎の大蛇よ、その牙を持って敵を焼き尽くせ」

フレトが琴未に向かって攻撃を繰り出してきた。フレトのマスターロッドから放出された炎は巨大な蛇の形となり、琴未に向かって

行く。
琴未も攻撃した直後だ。すぐにこんな大掛かりな技を避ける事は出来ない。
「龍神激」
だが閃華の龍水方天戟から水龍が離れると炎の大蛇に向かって行く。そしてぶつかり合い巨大な爆発を引き起こす。なにしろ水と炎だ。そんな二つが強大な力で一気にぶつかり合えば水蒸気爆発を引き起こすのは当然だ。
そんな爆発に巻き込まれる琴未。動けないところに爆発だ。さすがにこれはまともに巻き込まれてしまった。
「樹縛」
そんな琴未に追撃を掛けるべく咲耶が動く。地面から幾つもの木の根が飛び出してくると琴未を絡めとろうとする。
「アースドーム」
だが寸前で救援に入ったミリアがこれを完全に阻止してしまった。二人を守るように吹き上げられて形成された土の壁は二人を包み込み。木の根は土の壁に阻まれてしまった。
「なら、樹刺」
それならばと木の根をトゲのように鋭くして一気にアースドームを突き破って中に居る二人を貫こうとしたのだろう。
「ブレイク！」
けれどもその前にミリアは自らアースドームを破壊すると辺りの木の根に向かって、アースドームの破片をぶつける。かなりの強度を持つ土の塊だ。そんな物が勢い良くぶつかればさすがに咲耶の攻撃は完全に潰されてしまった。
これでフレトと咲耶の攻撃を完全に防ぎきったミリアと琴未だ。少しだけ油断して隙が出来る。そんな隙を半蔵が見逃すはずが無かった。
二人の後ろから現れた半蔵はミリアに向かって空斬小太刀を振るうが、その攻撃は閃華によって阻まれてしまった。

「相変わらずじゃのう。じゃからお主の行動は読みやすいんじゃ」
半蔵を弾き飛ばして距離を保つ閃華。これでお互いに距離を取ったので戦闘は一時的に膠着状態へとなった。
だが空中では未だにシエラとレットの空中戦が行われていた。お互いにハイスピードでの戦いは徐々に高度を下げていた。どうやらシエラが少しずつ高度を下げながら戦っているようだ。
けれどもレットはその事に気付いてはいなかった。なにしろ完全契約とはいえ翼の属性を相手に戦っているのだから、シエラのスピードに追いつくのが精一杯だ。これで完全契約でなければ完全にシエラにほんろうされていただろう。それが分っているだけにレットには余裕が無かった。
シエラとしても上手く高度を落とさないといけないので、二人の戦いは互いに打ち合いつつ移動するヒットアンドランになっている。
そんな状態でシエラは一気に高度を落として降下していく。さすがに急降下したシエラに何かしらの罠を感じるレットだが、地上では戦線が膠着状態になっているので戻ろうとしているのだと考えたようだ。
それならば自分から戦闘を再会させるべく、シエラをそのまま追うレットに向かって琴未に雷閃刀が伸びていた。
そこから放たれる一筋の雷光。これでレットの足止めでもしようとしたのだろうが、レットもスピードに自信がある。その程度の雷などは軽く避けてしまった。
そして、そのままシエラを追おうとしたのだが、シエラは九十度も角度を変えると一気に後退を始めた。
「落雷陣！」
その時に下から聞こえる琴未の声。その声にレットは下を見下げるが、見なくてはいけないのは上だった。
先程の雷光は落雷陣を作るための物で、レットを攻撃したわけではなかったのだ。攻撃はこれから行われる。
落雷陣から幾つもの雷がレットに向かって落ちる。怒涛と共に迫

ってくる雷にレットが気付いた時にはもう遅かった。
幾つもの雷がレットを通り越して地面へと走る。
「ガッ！」
さすがに悲鳴は上げなかったのはレットならではだろう。けれども完全に攻撃を受けてしまったのは確かで激痛が体中を走る。
そんな琴未の攻撃が終わるとシエラが追撃に入るべく、再びレットに向かって飛ぶが。さすがに高度を落としすぎたのだろう。半蔵が突然現れるとレットを引きずって、そのまま空間の裂け目に消えてしまった。
「マスター」
この機を逃すまいとラクトリーはフレトに一時撤退を進言した。ラクトリーには何が起こっているのか分っているのだろう。
だから半蔵がレットを連れて戻るとフレト達は大きく後ろに跳び、再び大きく距離を取った。さすがにこの距離から一気に迫る事は昇達にも無理だ。
そうなるとフレト達から戦闘を再開させるか、こちらの陣形を立て直して再び攻め込むかのどちらかである。
一時休戦と言ったところか双方とも一度、大きく距離取り、シエラ達も昇の元へ戻って来た。
「さすがに凄いわね」
そんな事を真っ先に口にする琴未。そんな琴未に対して閃華が問を投げ掛けてきた。
「どっちが凄いんじゃ」
「どっちもよ。私達のストケシアシステム。それにあいつらは対応できなくても、あそこまで足掻いてきてる」
「まあ、どちらかと言えば完全契約にこれだけ対抗できるストケシアシステムが凄いんじゃがな」
そんな事を言って軽く笑う閃華。そんな閃華に昇も少しだけ安心する事が出来た。
確かにストケシアシステムは与凪のお墨付きが付いてるとは言っ

ても、本当に完全契約に対抗できるか不安だったのだろう。
けれども現状はこうやって優位に戦闘を維持できている。これからの本番を考えれば戦闘は激化し、ストケシアシステムもどんどん使っていかないといけないだろう。そのうえ、まだ昇達にはエレメンタルアップという切り札がある。ここまで来たら次は使う事になるだろうと昇は考えていた。
なんにしても昇への負担は大きくなるばかりだろう。
そんな昇を気遣うかのようにシエラは昇の手を取った。
「昇は大丈夫？」
「うん、今のところはね」
正直に答える昇。確かに今回はストケシアシステムに集中してたから負担は少なかったが、これから戦線に参加するとなると昇への負担は大きくなるばかりだろう。
けれども弱音を吐く事は出来ない。なにしろ精霊王の力が掛かっているだけでなく、昇が描く未来も掛かっているのだから絶対に負けられない。
昇がそう決意している頃にはフレト達の陣営にも動きがあった。どうやらラクトリーが何かに気付いたようだ。その事をフレトに告げようとしていた。

第九十二話　ストケシアシステム（後書き）

そんな訳でいよいよ始まった昇とフレト達のラストバトルですが、さすがにこのような急展開な戦闘シーンは楽しいのですが、今回はストケシアシステムの影響で少しややこしくなっているかもしれませんね。

けどまあ、そのストケシアシステムの真髄こそ、そのややこしさでありますからね。まあ、ストケシアシステムについては次回、ラクトリーがしっかりと語ってくれるでしょう。どうやら何が起こっているのか感づいたようですからね～。

そんな訳で次回予告終わり。

ではでは、そろそろ締めますね。ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、昨日一日で今回の話を上げた葵夢幻でした。

第九十三話　完全連携

「それでラクトリー、何か分かったのか」
昇とフレトの両陣営が退いてからというもの小休憩に入ったかのように、どちらかも攻撃を仕掛けようとはしなかった。
やはり先程の戦闘で昇達が優位に戦えたのがフレト達に考える時間を必要とさせ、昇達には昇が休む時間が必要だった。
なにしろ戦闘はこれからは更に激化して行くのは必至だ。
そうなるとフレト達にとって気がかりなのは、どうして昇達が完全契約をしている自分達と対等に渡りあったかだろう。
いや、それどころか昇達に押されていた時も有った。完全契約で完全にフレト達が優位なのに、それでも昇達が優勢に戦った。そこには何かしらの秘密があるようで、ラクトリーはそれが何なのか察しが付いたようだ。
「はい、マスター。これはかなりやっかいな事になってそうです。しかもこのシステムを破るのは困難かと」
「遠い言い回しはしなくてはいい、簡潔に説明しろ」
「はい。相手がやっているのは、そうですね、言葉にすると……完全連携です」
「完全、連携だと？」
頷くラクトリーにフレトは困惑の色を示した。どうやら完全連携の意味が良く分かっていないようだ。そんなフレトにラクトリーは説明を開始する。
「戦闘が始まれば私達は私達の意志で動きます。もちろんマスターの指示通りに動きますが、それでも自由自在とは行かないですよね。なにしろ意思の伝達には時間が掛かりますから」
「まあ、そうだな」
「その意思伝達時間をゼロに出来たらどうなります」
「……ッ！」

驚きの色を示すフレト。どうやらやっと昇達が開発したストケシアシステムについて理解できたようだ。
「つまりこういうことか、俺はチェス盤の駒を自由に動かせないが、あいつは自由自在に動かせるという事か」
「はい、そういう事です」
分りやすく説明するとこうである。
戦闘では前線に出てしまうと個人の判断で動く事が主に成ってくる。指揮では大まかな動きだけで、細かな動きは個人の判断でなくてはどうする事も出来ない。
つまりそこか戦略と戦術の違いだ。先程の戦いでフレトが出した指示は戦略に当たり、昇達は戦術レベルで自由にシエラ達を操る事が出来る。
大した違いには思えないかもしれないけど、実際に戦闘している側にとっては、かなりの違いが出てくる。
なにしろ昇はチェス盤の駒を自由自在に動かせるのに大して、フレトは大まかな動きしか動かせる事が出来ない。もっと簡単に説明すると昇はチェスのルールを無視して駒を動かせるが、フレトはルールに沿ってしか駒を動かすことができないという事だ。
それが前線の戦闘員を自由に動かせるのと自由に動かせないとの違いだ。
なにしろ今回のような小さな戦場では戦略よりも戦術の方が大いに効果を発揮する。だからこそ完全連携が出来る昇達の方が優位に戦いを進める事が出来たのだ。
「なるほど、確かにこれはやっかいだな」
「はい、マスター」
フレト達がそんな会話をしていた頃、同じような内容を昇達も話していた。
「なんとかストケシアシステムでやってこれたけど、今度は相手も

対抗してくるよね？」
　そんな事を閃華に尋ねる昇。確かに完全連携を可能にしていたストケシアシステムだが対抗策がまったくない訳じゃない。全てにおいて完璧などというシステムなど存在しないのだから。
　だからこそ閃華もはっきりと答える。
「そうじゃろうな。じゃがストケシアシステムはまだ使えるはずじゃ、それとエレメンタルアップもじゃがな」
「そうだね」
　そんな会話をする昇と閃華にミリアは首を傾げた。どうやら話している内容がいまいち理解できていないようだ。
　そんなミリアに説明するかのようにシエラが語り始めた。
「ストケシアシステムは私達が見たもの聞いたものを瞬時に昇の思考に伝達する。それを受け取った昇の思考は私達がどう動けばいいのか瞬時に伝達してくれる。つまり私達の意志が一つになって動けるようになるのがストケシアシステム」
「それは分ってるよ～」
「そのストケシアシステムはエレメンタルアップの応用で生まれたシステム。だからそこからエレメンタルアップに切り替える事はそう難しいことじゃない」
　お互いの繋がり。それがエレメンタルアップを使用する絶対条件だ。ストケシアシステムはその繋がりを利用して瞬時に思考のやり取りをするシステムと言えるだろう。
　つまりはストケシアシステムを発動させている間もエレメンタルアップを使用可能にする繋がりを持つ事が出来ているという訳だ。だからこそ、ストケシアシステムを発動させている間はエレメンタルアップに切り替える事も出来るというわけだ。
「つまりストケシアシステムが使える状態にだからこそ、エレメンタルアップに切り替えてるって事」
　ミリアがそう答えるとシエラは珍しく驚いた表情を見せた。
「そう、まさかこんなに理解が早いとは思わなかったけど正解」

「う～、なんか遠回しに馬鹿にされてる気がするんだけど」
「はいはい、そこまでにしときなさいよ」
そんな事を言いながら琴未が仲裁に入ってきた。それでミリアも退き下がるしか得なかった。
二人を止めた琴未は何度か頷くと今度は閃華に問い掛けてきた。
「それで、相手はどんな手でくると思う」
そう、一番肝心なのはそこだ。ここまでは昇達が優位に攻めていたが、ストケシアシステムの全貌を悟っているなら対抗策を必ず出してくるはずだ。昇達はその対抗策を打ち破らなければいけなかった。
「それは簡単じゃ、今回の戦いは互いに人数は同じじゃからのう」
「つまり……個人戦に持って行こうって事？」
「そう出てくるじゃろうな。ストケシアシステムを封じるにはそれしかない。それに相手には完全契約という強みがある。個人の戦いなら完全に相手の方が上じゃ」
「そうよね……」
完全契約の強さは前回の戦いで嫌というほど見せ付けられた。それを今度もやられると厳しいものがあるのは確かだった。
それが分っているだけに、次に戦いの幕が上がったら先程のように行かない事は明白だ。けれども昇は堂々と宣言する。
「確かに相手はそう出てくるかもしれない。けど、それを打ち破ることが出来るのもストケシアシステムだ。それとエレメンタルアップの同時使用。これが出来れば何とかなる」
「じゃが昇、分っておろうが、昇への負担は大きなものになるぞ。その覚悟はあるんじゃな」
「もちろんだよ」
ちゅうちょなく答えた昇に閃華はそれ以上の事を問わなかった。そこまでの覚悟を認めたからだろう。それに昇がそれだけの覚悟を持ってこの戦いに挑んでいるのも確かだ。全ては自分自身が描き出した未来の為に。

その頃、フレト達の陣でも方針が決定していた。
「答えは簡単だ。相手に連携させる隙を与えなければいい。全員で突っ込んで行き、一人の相手に集中しろ。数は同じだ、それで完全連携を防ぐ事が出来る」
そんなフレトの指示にそれぞれに返事をするフレトの精霊達。こちらもこちらで昇達の読みどおりの作戦を展開させようとしていたが、それはフレトにも分っている事だった。
要はそんなに難しい事ではない。個人の強さではフレト達が完全に強いのだから、フレトが自分達に優位な戦線にしようとしているのは昇でなくても分かる事だろう。なにしろそれだけ完全契約という強みを持っているのだから。
けれどもフレトの不安が消えた訳ではない。本当にこれで良いのかと迷いも生じていた。
それは昇達のストケシアシステムを簡単に読み取る事が出来たからだ。これだけ簡単に読むことが出来たシステムだ。まだ何かあってもおかしくは無い。もしかしたら、まだストケシアシステムには秘密があるのでは無いのかと思いも生まれてきた。
そんなフレトを見て咲耶ははっきりと思っている事を言葉にした。
「主様、主様の不安も分ります。ですが、ここは私達を信じてください。必ず勝ってみせます。主様のためにも、妹様のためにも、必ず」
「そうですよフレト様。今度はさっきのように無様な戦いはしません。どうか我らを信じてください」
咲耶に続いてレットもそんな言葉を掛けてきた。そんな二人の言葉を聞いてフレトは静かに目を閉じた。そして思い描く、自分が望む未来の姿を。セリスが元気になって自分の傍にいる姿を。
「……分った。俺はもう迷わない。ここは自分を信じて突き進むのみだ。お前たちも……付いてきてくれるか」

そう宣言するフレトに対して精霊達は頭を下げた。
「御意」
「もちろんです」
「私達はマスターを選び、マスターと戦える事を光栄に思っております」
「我ら一同、一丸となって主様の為に戦う事をここに誓います」
そんな精霊達の言葉を聞いて頷くフレト。そしてマントを翻すと昇達の陣営に目を向けた。
「では行くぞ」
『はっ』

「どうやら相手が動いてきたようじゃな」
閃華がそう言うと昇はフレト達の陣営に目を向けると、ゆっくりではあるがこちらに向かってきてる事は確かだ。
そんなフレト達からシエラ達に視線を戻した昇は真剣な眼差しで皆の顔を一通りに見回した。
「次こそは総力戦になる。僕もさっきのようにはストケシアシステムに集中できないから、かなり性能が落ちるけど……これからエレメンタルアップをやって迎え撃つ」
そんな昇の言葉に頷くシエラ達。どうやらこちらも戦闘を再開させる気が熟したのを察したようだ。
昇は精神を集中させると既に手の中にある赤い紐に目を向けると一気に力を流し込む。
「エレメンタルアップ！」
赤い紐から昇の力がシエラ達に流れ込んでいく。これで完全契約した精霊とも対等に戦えるはずだ。それにストケシアシステムまだ生きている。
これだけの準備をしていれば、もう後は戦うだけだ。
昇達もフレト達に向かって歩き出した。

両陣営がある程度まで距離が縮まると一気に飛び出したのがシエラとレットだ。二人とも一気に空中に舞い上がり、レットはかなり高度を上げている。どうやら一対一の戦いにするために高度を上げて邪魔が入らないようにしたいようだ。

そんなレットの思惑を読みながらもシエラはレットの誘いに乗るかのように高度を上げていった。

上空での戦いが始まろうかとしている頃には地上でも既に動きが出ていた。

『ブレイクアースシュート！』

ミリアとラクトリーが同時に同じ技を発動させた。ハルバードとクレセントアクスの先端が地面へと突き刺さり、そこから地割れが起きて破片をお互いの陣営に向かってぶつけ始めている。

まるで弾幕のように見えるが、一つ一つをコントロールしているわけでは無いので、破片の行き先などは二人とも予想が付かない。

それに先程のエレメンタルアップによりミリアの技は完全にラクトリーと拮抗しており、互いの陣営にそれぞれの被害を出すはずだったが、両陣営ともそれぐらいの攻撃は分散して避けきってしまった。

けれどもこれで良い。なにしろ昇もフレトもこの展開を望んでいたのだから。これで完全に個々に分かれて戦闘になってくる。前回の戦いと同様な展開が再現されているように見える。

それが二人の狙いなのだから。

上空ではシエラとレットが、地上では半蔵と閃華、琴未と咲耶、ミリアとラクトリー。そして昇とフレトがそれぞれ対峙しており、互いに援護できない距離に開いてしまった。

これでさっきのようにスケトシアシステムは使えない。でも、もう一つの使い方がまだ残ってる。今度はそれを駆使して戦わないと。

そんな事を考えている昇にフレトは既に攻撃態勢に入っていた。

「冷たき鷹、その凍土を持って敵を滅せよ」
フレトのマスターロッドの先に氷が形成されるとそれは鷹の形となり、鈍い音を立てながら羽ばたくと昇に向かって突っ込んでくる。
そんなフレトの攻撃に対して昇は二丁拳銃たる紫黒を氷の鷹に向けると正確かつ早急に照準を合わせる。
「フレイムシュート」
紫黒から炎の弾丸が発射されるとそれは的確に氷の鷹を射抜いて見せた。けれどもフレトの攻撃はそれだけではなかった。氷の鷹が消えるのと同時に風が一塊となり昇に向かって来ていた。どうやら昇に休む暇を与える気は無いようだ。
それが昇がストケシアシステムの司令塔だと理解していたからこそ、昇を戦場に引っ張り出して他に気を向けさせないようにしている。
それは的確な判断だといえるだろう。けれども昇はそんなフレトの攻撃を避けて見せた。攻撃直後にフレトの攻撃を避けるなどとは至難の業だ。昇はそれを軽々とやって見せた。
どうやら一筋縄ではいかないようだな。昇の動きを見てフレトもそう感じ取っていた。けれどもフレトはまだ気付いていなかった。ストケシアシステムの真髄を。

「この前は完璧にやられたけど、今度はそうは行かないわよ」
咲耶を前にして琴未は雷閃刀を向けながらそう宣言した。そんな琴未に咲耶は軽く笑ってみせた。
「確かにそうですね。先程は大きな一撃を貰ってしまいました……ですが、今度は先程のように救援はありませんよ」
「そうね、だからこそ……今度は完璧に勝たせてもらうわ」
そんな琴未の言葉にさすがの咲耶も笑みが消えて真面目な顔になる。
前回の戦いであれだけやられて自信が喪失してもおかしくない状

況なのに、琴未にはまるで何かがあるように咲耶は思ったからだ。
それは何かしらが不気味なように感じたが、それで腰が引ける咲耶ではなかった。それどころか逆に咲耶に火を付けてしまったかのように咲耶の目は今までに見たことが無いぐらい鋭い物に成っていた。
何かしらの罠があるのは分かっております……けど！　主様の為に、ここで負ける訳には行かないのですよ。咲耶はそう決意すると桜華小刀を琴未に向かって差し向けた。
さあ、ここからが勝負ね。琴未としてもやる気は充分だ。だからこそ咲耶が動く前に琴未から一気に駆け出して間合いを詰めようとした。
桜華小刀は遠距離用の刀だ。そんなのを相手に距離を取っていては勝負にならない。だからこそ、琴未は自ら駆け出した。
そんな琴未を迎え撃つべく咲耶も攻撃を仕掛ける。
「土突（どとつ）！」
咲耶は桜華小刀を一旦真下に向けると一気に振り上げた。その直後に琴未の前面から土砂が一気に舞い上がった。どうやらこれで足止めをするつもりだろう。
けれどもそうは成らなかった。

―昇琴流　雷華一輪刺突―

琴未は土砂が噴出している数歩手前で右足を一気に踏み出すと雷閃刀を一気に土砂の中に突き刺した。
一気に噴出している土砂である。そのまま雷閃刀が吹き飛ばされても不思議は無いのだが、すでに琴未の技は発動している。
噴出す土砂を払いのけて雷閃刀から一筋の雷光が伸びて行き、それは幾つもの枝分かれを一気に繰り返して雷の花となり咲耶へと襲い掛かった。
これは咲耶に対抗するために琴未が考えた遠距離用の技だ。しか

も効果範囲がかなり広いために避けるのはかなり難しい。
　完全契約をした咲耶でも完全に避けるだけで精一杯だった。だからこそ、すでに傍に迫っている琴未に気付くのに一瞬の遅れが出てしまった。
「はぁっ！」
　気合と共に雷閃刀を振るう琴未。咲耶はそんな琴未の初撃を何とか避けて見せた。けれども琴未は攻撃の手を緩める事無く雷閃刀を振るう。咲耶もそれを全て避けている。
　咲耶としては桜華小刀で受け止めても良いのだが、その瞬間に何が起こるか分らない。なにしろ琴未がエレメンタルアップで格が上がっている事には既に気付いているのだから、今の琴未が前回の琴未だと思ったら大間違いだと咲耶は自分に言い聞かせていた。
　そうして気を引き締めておかないと琴未の思うがままになってしまうような気がしていた咲耶だった。
　けれども気を引き締めているのは琴未も同じだった。
　これだけ攻撃しても当たるどころか、かすりもしないなんて、さすがは完全契約ね。咲耶の動きに少しでも気を抜けば反撃が来る事を琴未は察していた。
　そんな拮抗したような状態をしばらく続けていた琴未と咲耶だが、さすがに琴未もこのまま攻め続ければ、いつかは隙が出来ると余裕があるうちに退かなければいけなかった。このまま攻撃し続けるとどうしても動きが大雑把になる事は琴未が良く知っている。
　だからこそ反撃が来ると分っていても琴未は一旦攻撃を中断すると間合いを取った。その瞬間に咲耶が攻めに出た。
「樹縛」
　地面に突き刺した桜華小刀。そこから放たれた樹の属性は木の根を一気に伸ばすとそのまま地面に突き出て琴未の雷閃刀に絡み付こうとする。
　そんな咲耶の攻撃に琴未は後ろに跳んで更に距離を開けるが、木の根は更に伸びてくる。

―昇琴流　天雷斬―

そんな木の根に対して琴未は雷閃刀を八双に構えると天雷斬で一気に木の根を消滅させた。

けれどもこの機を咲耶が逃すはずがなかった。琴未が距離を取ったのを良い事に一気に責めに出てくる。

「桜炎」

炎の桜が琴未に向かって怒涛の勢いで攻めて来る。けれども琴未もこういう反撃を予想しての撤退だ。だからこそ咲耶の攻撃をかわす事が出来た。

だが今度は咲耶の方が一気に攻め続けに出てきた。

「風刃」

桜華小刀を振るう度にその軌跡から風の刃が形成されて琴未へと襲い掛かってきた。空気を切り裂きながら見えない刃が琴未に向かって迫ってくる。

そんな咲耶の攻撃に対して琴未も応戦する。

「雷撃閃」

琴未は雷閃刀を突き出すとそこから幾つかの雷が咲耶に向かって放たれる。琴未としてはこれで咲耶の攻撃を防ぎたかったのだが、雷は幾つかの風刃を消滅させたものの、全てを消し去る事が出来ずに、琴未に一陣の風が吹くと幾つかの切り傷を琴未に残した。

さすがにあれだけの数を一瞬の間に全て消し去るのは不可能だったようだ。そんな琴未に追い討ちを掛ける咲耶は、攻撃を受けて一瞬だけ怯んだ琴未に向かって大技を放った。

「雷龍（らいりゅう）」

桜華小刀を真上に上げるとそこに雷が落ちる。けれども咲耶にダメージは無い、それどころか桜華小刀に雷が溜まっているようだ。そして桜華小刀を振るうと溜まっていた雷は龍の姿になって咲耶の上にその姿を現した。

随分と派手な事をするわね。それにこっちの属性に合わせてきたって事は、私の昇琴流を封じる事にもなってるわね。そう考える琴未は的確に咲耶の思惑を読み取っていた。

確かに昇琴流は剣術に雷の属性を付加させて威力を上げた物だ。咲耶はそんな昇琴流の特性を読み取って雷の属性だけでも相殺するために、わざわざ雷の属性で龍を作り出したのだろう。

けれども咲耶の属性は巫。威力だけはどうやっても雷の属性に及ばないのだが、そこは完全契約でカバーしている。つまりは通常の琴未と一緒で雷の属性が発する威力は同じという事だ。

でも、私の技は昇琴流だけじゃないのよ！

そんな覚悟を心の中で叫んだ琴未は自ら咲耶が作り出した雷の龍に向かって走り出した。それを見た咲耶も桜華小刀を振るい。雷龍を琴未に向かって放ち、雷龍は琴未にその牙を尽きたてんと一気に飛び出していった。

そのまま一気に琴未と雷龍の距離が一気に縮まると、琴未は急停止を掛けて雷閃刀の切っ先を地面に付ける。

―新螺幻刀流　奥義　地脈抜刀―

雷龍がその牙を琴未に付きたてようとしたその時、地面から抜き取られた雷閃刀は今までに溜めてた力と共に一気に振り上げられた。

その衝撃と破壊力は凄まじい物で振り抜かれた雷閃刀によって雷龍は真っ二つに切り裂かれてしまった。

新螺幻刀流はまったく属性を使っていない剣術だ。だからこそ属性を無視して雷龍を斬り裂いた。それは剣だけで稲妻を切るようなものだが、エレメンタルアップが掛かっているからこそ出来る琴未の奥義だ。

まさか、こんなにもあっさりと雷龍が消し去られると思っていなかった咲耶は一瞬だけ呆然としてしまった。あれだけの力を込めた雷龍だけにその衝撃は大きかったのだろう。だからこそ、その間に

一気に間合いを詰めてきた琴未に遅れを取る事になってしまった。
咲耶に向かって雷閃刀を振るう琴未。咲耶もその攻撃を避けるが、先程の一瞬が未だに尾を引いており、その動きは少しだけ遅かった。だからこのまま避け続けるのは難しかった。
だから琴未の雷閃刀を桜華小刀で受け止めても何も不思議は無いのだが、それが大きな過ちだった。
琴未は咲耶が避けたのを良い事に身体を一回転させると、先程の攻撃よりも高スピードで雷閃刀を振るう。そうなると咲耶は桜華小刀で受け止めるしかない。

―新螺幻刀流　嵐崩し―

だがそれを狙っていた琴未は雷閃刀を桜華小刀の下から当てると上に弾き飛ばしてしまった。さすがに咲耶の手から桜華小刀が離れる事は無いが、体勢が崩されたのは確実であり、咲耶の前面はがら空きだ。
もちろんそれを狙っていたのだから琴未も更なる追撃に移る。振り上がっている雷閃刀に雷を一気に溜めると今度は振り下ろした。

―昇琴流　天雷斬―

雷の属性をまとった雷閃刀はそのまま咲耶に向かって振り下ろされるが、咲耶は身体が後ろのめりなっている事を利用して、そのまま後ろに飛び退く。
けれども今度の攻撃は雷の属性をまとっている。体勢を崩したまま退いた咲耶が完全に避けきるのは不可能だ。
そこに天雷斬が振り下ろされて、地面への衝撃と破壊を発生させる。
そんな琴未の攻撃に咲耶は完全に吹き飛ばされた。いや、半分は自分で衝撃に身を任せたのだ。威力がでかいだけに、その衝撃波も

大きかった。それだけに咲耶の身体は琴未から大きく距離を取って弾き飛ばされた。

完全に避けきれない悟った咲耶はダメージを覚悟して、琴未から距離を取るためにした行動だ。つまりは多大なダメージを負ってでも、これ以上の追撃を避けたかった。そうしないと次こそは本当にトドメを刺されてしまう。それが分っているだけに咲耶は自ら吹き飛ばされたのだ。

琴未としてもこれを機に追撃を掛ける予定だったのだが、咲耶が思っていた以上に吹き飛ばされたために、追撃を諦めざる得なかった。そうなると再び間合いを詰めるために駆け出す。

このまま遠距離で居れば咲耶の思うがままになってしまう。それが分っているだけに琴未は一気に駆け出したのだが、そんな琴未は豪快に転んでしまった。

なんで、こんな感じな時に。どうやら自分でも何で転んだか分らないようだ。とりあえず足元を見ると木の根が琴未の足に絡み付いている。

そう、咲耶は吹き飛ばされて地面に叩きつけられるとすぐに桜華小刀を地面に突き刺して、樹の属性で琴未の追撃を防ぐために『樹縛』を発動させていたのだ。

だから木の根は琴未の足だけでなくそのまま上に登ってこようとしていた。それを察した琴未は逸早く立ち上がるが、足は完全に縛られてしまっていた。

……こうなったらしかたないか。

琴未は覚悟を決めると雷閃刀を地面へと突き刺した。

―昇琴流　夜天昇雷覇―

琴未は雷閃刀を一気に振り上げると、雷の属性だけを自分に向けて発動させる。激痛が走る中で琴未は耐える。

どうやら夜天昇雷覇の威力で樹縛を切り裂こうとしているようだ。

確かに刃が自らの体に触れることは無いが、雷だけは琴未の身体を駆け抜ける。

確かにこれなら樹縛から抜け出せるが、琴未自信も只では済まない。なにしろ自らの技を自分で喰らっているのだから、多少加減しているとは言ってもダメージが無いわけじゃない。

けれどもこれで完全に樹縛から解き放つ事に成功した。

その頃には咲耶も立ち上がっており、桜華小刀を琴未に向けていた。どうやらこれ完全に仕切り直すしかないようだ。

「そんな身体で、なかなかやるじゃない」

まだ呼吸が整っていないまま琴未はそんな言葉を咲耶に掛けた。正直、琴未も咲耶も少しだけ休憩したい気分だったようだ。だからこそ琴未の語り掛けに咲耶も答える。

「それはこちらのセリフです。前に戦った時とはまるで別人のようです」

「だから言ったでしょ、今度はそうは行かないって。今日こそは完全に勝たせてもらうわよ。前回の負けが消え去るぐらいにね」

そんな言葉を口にする琴未は笑みを浮かべていた。それは咲耶も同様だ。

互いに負けられないのは確かだ。だがそれ以上にこの戦いは二人とって特別な物なのかもしれない。

けれども、そんな事に関係なく勝敗だけは付けなければいけなかった。このままいつまでも戦っていたいと二人とも思っていたかもしれないが、互いに負けられない理由があるからこそ、ここで全力を尽くすしかない。

「行くわよっ！」

「望むところです！」

再び戦いの幕を開ける琴未と咲耶。そこからかなり離れた距離では、もう一つの因縁がある戦いが繰り広げられているのだった。

第九十三話　完全連携（後書き）

そんな訳でいよいよ秘密が明かされたストケシアシステムですが。まだ何かがありそうですね～。それに両者の戦力は拮抗してますからね～。これから先の戦いは何が鍵になってくるのか、それもお楽しみの一つだと思いますよ……たぶんね。

さてさて、今回は大活躍した琴未ですけど、如何でしたでしょうか。なんか琴未らしくないとお思いでしょうけど、それでもあれが本来の琴未であり、エレメンタルアップの力なんですよ。

いや～、なんか今まで普通にエレメンタルアップを使っていたから、その凄さを改めて実感してもらおうと思って、このような展開になりました。やっぱり凄いんですね、エレメンタルアップって。

……はいはい、分ってますよ。自画自賛はやめておけって言うんでしょ。あなたがそんな事を言う人とは思ってなかったわ。……終ね、もう……私達。でも、せめて……エレメが完結するまで見捨てないで！！！

……なに？　この一人芝居は？

いやね、なんかつい調子に乗ってやってしまった。

ではでは、戯言が終わったのでこの辺で。ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、感想をくれて本当にありがたいのですが、評価もくださると更に喜んでしまう葵夢幻でした。……いやね、ここ最近は評価がまったくなくって、ちょっとねだちゃった、てへっ……ごめんなさい。

第九十四話　弟子と師匠

「アースウェーブ」
「アースウォール」
ラクトリーのクレセントアクスが地面へと突き刺さり、そこから地面が波打つと、波に揺られるように大地とその上に立っている建造物や木々を破壊していく。
そんなラクトリーの攻撃に壁を作ったミリア。それはまるで防波堤と言っても良いぐらいの壁だ。問題はそのアースウォールでラクトリーの攻撃を防ぎきれるかだ。
そんな心配を抱きながらもミリアはラクトリーの攻撃に備える。そしてアースウェーブがミリアのところにまで到達するとアースウォールと正面からぶつかり合う。
それでもミリアの作り出したアースウォールはヒビ一つ入る事無く、完璧にラクトリーの攻撃を防いでみせた。
これで少しだけ安心するミリアだが、すぐにラクトリーが反撃に来る事は分っていた。いや、正確には知らせてきた。
そんなラクトリーに備えてミリアも行動を開始する。
「ブレイク」
先程作り出した壁を自ら破壊して壁の破片をラクトリーの居る正面に向かって打ち放つ。けれども正面にはラクトリーは居なかった。ラクトリーもミリアの反撃が来る事は分っていた。だからこそ、大きく右へ迂回しながらミリアに迫っていた。
ミリアも先程の攻撃で時間が掛かってしまった。ここからは大技で応戦するのは無理だ。ラクトリーとしてはこのまま接近戦にもって行きたいのだろう。
確かに属性の技が使えなければ完全契約をしているラクトリーが大いに有利だ。けれどもミリアはあえてそんなラクトリーの行動に合わせるかのように駆け出した。

互いに距離を詰めていくミリアとラクトリー。そして両者は互いの間合いに入る寸前に己の武器を振り上げると、一気に振り下ろした。ぶつかり合うアースシールドハルバードとアースブレイククレセントアクス。

お互いに武器をぶつけ合えば完全契約をしているラクトリーがミリアを弾き飛ばしてもおかしくは無いのだが、どちらも弾き飛ぶ事無く力比べの拮抗状態に入っていた。

「なるほど、これがエレメンタルアップの力ですか」

完全契約したラクトリーと同じ力を持つには確かにエレメンタルアップの力が必要だ。だからこうして拮抗状態に入っているのだとラクトリーは考えたのだろう。けれどもミリアは笑みを浮かべて見せた。

「お師匠様、それだけじゃありませんよ」

そんなミリアの笑みに何かがある事を感じたラクトリーは、そのまま一気に勝負に出るために押し出すが、一向に押し出す事が出来ずに拮抗状態が続いている。

これはいったい……そういう事ですかミリア。やっとミリアのやっている事に気付いたラクトリーは微笑を一瞬だけ浮かべるとすぐに行動に出た。

ラクトリーは正面に押し出している力を一気に横に方向転換させた。急にそんな事をすればミリアもラクトリーも体勢を崩してしまうのは当たり前だ。

そのため横に倒れこもうとしているミリアに対してラクトリーは素早くクレセントアクスを手放すと、倒れている身体を片手で支えてミリアに蹴りを入れた。

重装備のミリアにその程度の蹴りでダメージを与える事は出来ない。だがミリアは体勢を崩した直後の蹴りだから弾き飛ばす事には成功した。

あのまま拮抗状態を続けていても意味は無い。それにミリアの力を考えるとあれ以上続けるのもラクトリーには不利になる可能性が

高かった。だからこそ拮抗状態を崩すための行動だ。
「アースシールドハルバード、その名の通り大地の盾を持つ槍斧。ミリア、あなたはやっと自分の武器をちゃんと使いこなせるようになったのですね」
追撃をしないでそんな言葉を口にするラクトリー。その顔は真剣なのだが瞳の奥には少しだけ優しさが見える。けれどもミリアはそんな事に気付きもしないで立ち上がると早々にハルバードを構えるのだった。
ラクトリーもすでにクレセントアクスを手にしている。けれども構える事無く、まるでミリアの言葉を待っているかのように沈黙を保っていた。
けれどもミリアはラクトリーに言葉ではなく行動でそんなラクトリーに応えた。一気に駆け出したミリアはハルバードで地面を削るように、切っ先を地面に付けながら走り。ラクトリーが技の間合いに入ると一気にハルバードを振り上げた。
「アースボール」
ミリアの周囲から一気に土砂が吹き上がると、その中から大地が球状に削り取られたような形の物が幾つも出現した。
「シュート」
アースボールをラクトリーに向かって放つミリア。その時にラクトリーには迷いが生じていた。前回のミリアならこの攻撃もクレセントアクスで楽に破壊できただろう。けれども今のミリアは前回とはかなり違い、そのうえエレメンタルアップまで掛かっている。だからラクトリーはアースボールを破壊できるかどうか迷い、そして決断した。
迫ってくるアースボールを避けながら駆け出すラクトリー。
先程の防御力といい、力の拮抗といい、あの子は自分の利点を最大限に伸ばしてきたようですね。そんな考えを抱いたからこそラクトリーはあえてミリアの放った弾幕とも言える攻撃、アースボールを避ける事にしながら接近を試みた。

それはミリアが防御力を中心に力を上げていた事を証明するものであり、そのうえエレメンタルアップを警戒した上での決断だ。さすがにこれだけの条件下でアースボールを破壊しながら進むのは次に備える事は出来ないし、多少の危険は覚悟の上でアースボールを避けた方が懸命だ。

だからラクトリーの判断としては間違ってはいないが、やはり全てのアースボールを避ける事は出来ず。多少のかすり傷や軽い打撲を負ってしまった。少々ダメージを与えたというところだろう。

そしてラクトリーはミリアに向かって突進する。それはミリアの行動を読んでの行動だ。

アースボールは囮。この後に大きな攻撃が来る。ミリアならそうするはずだとラクトリーは読んだ。だからこそ突進して先制攻撃を仕掛けようとしたのだが、弾幕を潜り抜けたラクトリーの眼前にはミリアの姿は無かった。

いったいどうして？　自分の読みが外れて困惑しながらもミリアを探すラクトリー。そんな時だった。ラクトリーは突如として後ろに殺気を感じるとそこにミリアの姿があった。

どうやらミリアは弾幕を放つのと同時に弾幕を迂回してラクトリーの後ろに回り込んだようだ。

確かにアースボールは囮だった。けれどもこんな手で来るとはラクトリーには読みきれていなかった。

接近戦ではミリアの方が圧倒的に不利だ。なにしろ二人ともお互いの事をよく理解しており、ミリアは一度もラクトリーに勝てた事が無いのだから。

確かにエレメンタルアップで能力が上がっているが、経験と技術ではラクトリーの方が大いに上回っている。

それなのに接近戦を仕掛けてきたという事は何かしらの手があるのだろう。少なくともラクトリーもそう考えたし、ミリアも考え無しに突っ込んで行った訳ではない。

確かにシエラと比べればスピードはかなり遅いけど、やっぱりお

師匠様だよ。こんなにも早くこちらを向いてきた。でも、私だって毎日シエラと特訓していた訳じゃないよ～。

ミリアがシエラを相手に特訓していた理由がそこにあった。

ミリアは一気にラクトリーに迫るとハルバードを横一線に振り切る。けれども膝を一気に落としてラクトリーはミリアの攻撃をかわしてきた。ラクトリーはそのまま足払いを掛けてくる。

そしてそこからは鈍い音が響き渡った。

ラクトリーの足払いは的確にミリアの足に命中した。けどそれだけだ。ミリアは逸早くラクトリーの足払いを察すると思いっきり踏み込み、その場で耐えしのいだ。

そう、これがミリアがシエラを特訓相手に選んだ理由の一つだ。それがこの反射神経である。

なにしろシエラの攻撃はラクトリーとは比べようが無いほど速い。そんなシエラを相手にしているのだから反射神経を思いっきり駆使して戦わないと行けなくなる。その結果としてミリアはラクトリーの足払いを耐える事が出来た。

これでラクトリーの頭上はがら空きだ。ミリアはハルバードを振り上げると一気に振り下ろした。そんなミリアの攻撃を横に転がりながら避けるラクトリー。さすがに体勢が悪いため、その場で受け止めるような事はしなかった。

もし受け止めていたら確実にミリアのハルバードに押されていただろう。それが分っているからこそ、ラクトリーは反撃が来るかもしれないが転がりながら避けたのだ。

けれどもミリアは反撃をしなかった。ラクトリーは半分安心するのと同時に半分は迷いが生じた。

先程はミリアにとって最大の攻撃をするチャンスだったはずなのに、ミリアはあえてそれを見逃した。見落としたわけではなく、見逃したのだ。それが何を意味しているのかラクトリーには未だに分っていなかった。

けれどもおかげで体勢を立て直す時間を稼ぐ事が出来た。立ち上

がったラクトリーはすぐにクレセントアクスを構える。
もちろん、ミリアもただ黙って見ていた訳ではない。先程の時間で思いっきり力を溜める事が出来た。だからこそ一気に大技を仕掛ける事が出来る。
「アースブレイカー！」
ミリアはハルバードの切っ先を地面に突き刺すとそこから赤い光が幾つも地面を走り、ラクトリーを目掛けて、その軌跡を延ばしていく。
赤い光から地割れが起きて、まるで重力が無くなったかのように大地が上下する。そして始まる崩壊。土砂は一気に舞い上がり、地面は波打ち地上に有る物を全て破壊していく。大地が擦れ合い、幾つもの衝撃を生み出して破壊は傍に有る物の存在を許さないかのように破壊を続けていく。
そして破壊は少しずつ収まり、全てが収まると舞い上がった土砂と大地が一気に落ちて大量の砂埃を宙に舞い上がらせる。
地面からハルバードを抜いたミリアは全神経を砂埃の向こうへと集中させる。未だに砂埃でなにも見えないが、これぐらいでラクトリーが倒せるとミリアは思っていないのだろう。
そんなミリアの予想が的中したかのように土砂の向こうから土壁の破片が幾つも飛んできた。けれどもそれはミリアを的確に狙ったものではないようで、ミリアはハルバードを振り回すだけで土壁の破片を全て打ち落とす事が出来た。
この攻撃……お師匠様はアースドームを使ったのかな？　そんな推測を立てるミリア。そう考えたのにはちゃんとした理由がある。なにしろ土壁の破片はある一点を中心に三百六十度、全方位に向かって放たれた物だからだ。
確かにアースドームを作り出した後にブレイクをすればそのような結果になる。ミリアはそう考えたのだ。
なにしろラクトリーはミリアの師匠だ。だからラクトリーがミリアの事を知っているように、ミリアもラクトリーの事を知っている。

だからこそお互いの手を知り尽くしての戦いとなっているから相手の手が読みやすくなっている。これはそういう戦いだ。

そうなると次は……。次にどんな手でラクトリーが打って出てくるか考えるミリア。けれどもこの砂埃だ、この中にいるラクトリーの動きが分らない。さすがにこればかりはストケシアシステムも使いようが無い。なにしろ誰も中の状況が見れないのだから。

そのような状況の中でもミリアはアースシールドハルバードを構える。ラクトリーがどこから攻めて来てもいいように備えなければいけない。なにしろこの砂埃だ。中で何をしているか分ったものではない。

そんな警戒をしつつラクトリーの攻撃に備えていると、突如として砂埃の中心から光の柱が天に向かって伸びると衝撃が走り、砂埃を一掃してしまった。

予想していた事とはいえ衝撃に吹き飛ばされないように踏ん張るミリア。そして砂埃が消え去った後に残る光の柱。その中にはラクトリーの姿があった。

この技は！

これからラクトリーが仕掛ける技が分っているのだろう。ミリアはアースシールドハルバードを前面へ押し出すと、ハルバードに力を集中させる。

「タイタロスブレイク」

ラクトリーは呟くようにしてそのような言葉を発すると光の柱はアースブレイククレセントアクスの切っ先にその力を溜め込み、矛先をミリアに向けた。

やっぱり、これは……お師匠様が持つ最大限の技だ！

つまりはラクトリーが持つ奥の手と言ってもいい技だ。そんな技をあの短時間で発動させるとはさすがはラクトリーと言ったところだろう。

クレセントアクスの切っ先に溜まっている力が一気に大きくなり、それは地震となって辺りの大地を揺すぶる。それ程の力を秘めた攻

撃をしてくるつもりなのだろう。
「アースドームにアースウォール！」
そんなラクトリーに対してミリアも最大限の防壁を一気に築き上げる。これでラクトリーの攻撃を防ぎきる自信は無いが、直撃を喰らえば確実にやられてしまうだろう。避けるという手も無いわけじゃない。
けれども戦場は他でも展開されている。ここでミリアが防壁を築かないと、どの戦場に影響が出るか分ったものではない。
それにラクトリーもミリアが避けたとしても別の敵に、つまり昇達の誰かに当たる角度で撃って来るだろう。それが分っているだけにミリアはここで立ち止まるしかなった。けれどもそれはミリア自信も望んでいる事だ。
私は皆を守る盾なんだから、お師匠様の攻撃を完璧に防いで見せる。
防壁の内に身を隠しながら、更に防壁を強化しているミリアはそんな事を考えながらラクトリーの攻撃に備えていた。
そんなミリアの防壁にクレセントアクスを向けるラクトリーは、ミリアをこれで落とせると確信していた。そして溜めていた力を一気に解き放つ。
「シュート！」
クレセントアクスから淡い光を煌々と光らせながらタイタロスブレイクシュートは放たれた。それは一直線にミリアの築いた障壁へと向かい。そして直撃するとその場で大爆発を引き起こした。
さすがに貫通は出来ませんでしたか、成長しましたねミリア。攻撃の手応えでそう感じ取るラクトリー。
ミリアの築いた防壁はよほど堅かったのだろう。ラクトリーの攻撃を貫通させる事はしなかった。けれども中にいるミリアは爆発の影響でどうなっているのか未だに分らない。
だからラクトリーは完全にこれでミリアを倒した、または戦闘不能状態に持ち込んだと思っていた。ラクトリーがそう思ってもなん

ら不思議は無い。なにしろラクトリーが持つ技の中では最大の破壊力を持つ攻撃だ。

その技だけはミリアも習得前で何度か見ただけの技だ。そんな技の直撃を受けてミリアの防壁が耐えられるはずが無い。それは二人を知っているものなら誰でも思った事だろう。

けれども昇達は違った。これでミリアが落ちたとは思ってはいない。それどころかストケシアシステムを最大限に利用していた。

『ミリア、大丈夫』

ストケシアシステムを利用して昇の言葉が直接ミリアの頭に届く。けれどもミリアからの返事が無い。そんな時に上空にいるシエラからストケシアシステムを使って通信が届く。

『爆発の影響で上空からの確認は無理。けれども相手は油断している、叩くなら今しかない』

『ミリア、返事をして』

昇は自分の闘いをしながらも、頭の中ではそんな会話をしていた。これがストケシアシステムの真髄。つまりは思念通話と言っても良いだろう。頭の中で話したい相手に話す事が出来るシステム。それがストケシアシステムの真髄だ。

先程の完全連携もこの思念通話でお互いに連絡を取り合って、昇が司令塔になって命令できたから出来た物であって、完全連携を実現するだけがストケシアシステムではない。

お互いに見たもの、聞いたものを瞬時にやり取りするシステムがストケシアシステムなのだ。けれども未だにミリアからの返事は誰の元にも届いていなかった。

「なかなか成長しましたけど、今一歩及ばなかったようですね」

爆煙が上がる場所を見てラクトリーはそんな言葉を呟いた。そこは先程までミリアが居た場所だ。いくら敵同士に成ったからとは言っても、自ら望んで敵に成ったわけでは無いし、師弟関係も切った

覚えは二人には無かった。
だから今でも二人は師弟関係なのだろうけど、この状況がその関係を認めるわけにはいかなかった。だからこそラクトリーは最大の力を持ってミリアを倒しに掛かった。
その結果が目の前にある爆煙だ。未だに煙は晴れていないが、先程の攻撃でミリアが落ちたのは間違いないとラクトリーは思っていた。それほどまでに技の破壊力には自信があったからだ。
けれどもその心境は複雑だろう。なにしろ師匠が本気で弟子を倒さなければいけないのだから。これが逆なら喜ばしい事なのかもしれない。けれどもラクトリーにもフレトの為に負けられない理由があるからには手加減などは出来ない。
だからこそ全力で技を放った。ラクトリーが知っているミリアでは確実に防ぐ事も避ける事も不可能だ。
けれども突如して地震が起こり始めた。突然の事で多少足を取られたラクトリーだが、バランスを一瞬だけ崩しただけで、後は普通に立っている。さすがは地の精霊といったところだろう。地震が起きてもバランスを崩す事無く立てるようだ。
……これは！
起きている地震に違和感を感じたラクトリーは辺りを調べてみると地震が起きているのはこの周囲だけで、昇達のところでは何の異変も起こってはいない。
まさか、そんな事が！
何かを察したのだろう。ラクトリーは地震の震源地と思われる場所を凝視する。そこは未だに煙が晴れていない爆煙の中。けれども次の瞬間、何かの力が一気に解き放たれると爆煙が一気に吹き飛ばされて、その中からミリアが現れた。
矛先は既にラクトリーに向けており、力を思いっきり溜め込んでいる。
「耐え切ったというのですか、そんな身体で！」
確かにラクトリーが言ったとおり、ミリアの身体はボロボロだっ

た。重武装だったミリアだが、今ではほとんどの武装が破壊されており、身体には少ししか武装が残っていないほどだ。その他にも傷を数えたらキリが無い。

それほどまでになりながらもミリアは先程の攻撃を耐え切ったのだ。他に被害を出す事も無く、見事に盾としての役割を果たしたのだ。

そんなミリアがラクトリーの顔を見るとはっきりと言葉を口にした。

「お師匠様！　最後の技、確かにご伝授していただきました」

「まさか、覚えたというのですか、たった数回見ただけの技を、先程受けた技を。そんな事が出来るわけがありません」

そうはっきり言い切るラクトリーに対してミリアは否定も肯定もせずに沈黙で答えた。そう、ミリアにもはっきりとは言えなかったのだ。

お師匠様の言うとおり、さっきの技を完璧に撃てるとは限らない。けれども何度も見たし、体で覚えた。だから出来るはず、ううん、絶対にここで撃たないと私達に勝ちはないよ。

そう自分に言い聞かせるミリア。そうしなければ、ここでこんな反撃などは出来ないどころか思いも付かなかっただろう。ミリアがラクトリーに抱いている師匠としての尊敬は未だに消えてはいない。

だからこそ、今回の戦いでミリアはラクトリーに勝たなければいけなかった。それこそが弟子として師匠にして上げられるたった一つの事だと考えたからだ。

だからこそ、ミリアは覚悟を決めると技を放つ。

「タイタロスブレイクシュート！」

ラクトリーと同じように淡い光を放ちながら煌々と輝く力はラクトリーに向かって一直線に突き進む。そして巻き起こる大爆発。

ミリアのタイタロスブレイクシュートが何かに直撃したのは確かなようだが、それがラクトリーなのかは確かめようが無い。なにしろ先程と同等の力が放たれて、先程と同じように爆煙を巻き上げて

いるのだから。中の様子などは分りはしない。
そんな光景を目にしたミリアはハルバードに寄りかかるように膝を地面に付ける。
さすがお師匠様の最大技だよ。こんなにも消費するなんて思っていなかった。けど……すごい破壊力。完璧に撃てたとは思えないけど、かなり完成度は高いと思うよ。だからきっと……お師匠様を……。
そんな事を考えるミリアはボロボロの身体を少し休ませる。なにしろラクトリーの最大技を受けてからの、真似をした最大技だ。いくらエレメンタルアップの影響下であってもその消費は凄まじく、昇に負担を掛けないためにミリアは全ての力を出し尽くしたつもりで撃ったのだ。
だからミリアの負担は大きく、今ではハルバードに寄りかかりながら荒い息を整えていた。今ラクトリーの反撃が来れば確実に対処は出来ないだろう。けれどもあの爆煙だ。ラクトリーも無事では済まないだろう。
なにしろ威力はミリア自身で証明されているのだから、たとえ威力が及ばなくてもかなりのダメージを与えたはずだ。少なくともミリアはそう考えていた。
さ～て、これでお師匠様が無傷だったら……どうしようかな～。
けれども不安が残っているのだろう。そんな考えも頭を過ぎるミリアだった。

爆発で舞い上がった砂埃が少しずつ落ちて行き、今まで見えなかった砂埃の中も徐々に見え始めた時だった。ミリアはこちらに向かってくる足音を確かに聞いた。
やっぱりダメだったのかな～。
そう考えるミリアの前に現れたのは予想通りのラクトリーだった。
「成長しましたねミリア。まさかここまでやるとは思いませんでし

たよ」
「でも、お師匠様には通じませんでしたね」
「そんな事はありませんよ、先程の技はかなりの破壊力を持っていましたから私もこの通りですよ」
そう言われてミリアはラクトリーの身体を見てみるとかなりの傷が目に付いた。どうやら完璧に防がれたわけではないようだ。それだけじゃない、どうやらダメージも結構大きいようだ。
そんなラクトリーの身体を見てミリアは少しだけ微笑む。ラクトリーにダメージを与えられたのが嬉しいのではない。ラクトリーに褒められた事が嬉しいのだ。
「子が親元をいつかは離れるように、弟子もいつの間にか師匠から離れていくものなのですね。ミリア、今のあなたを見てそう思いました」
「お師匠様……」
「先程の技、完璧とは言えませんが確かに完成していました。たった数回見せただけなのにものにするとは、私が教える事はもう無いのかもしれません」
「……」
ミリアの頬を涙が流れる。それだけラクトリーの言葉がミリアの胸に刺さったのだろう。
ラクトリーに褒められ、認められた。これでミリアはやっと一人前となったのだ。その事を実感すると同時にもうラクトリーから離れないといけないと思うとやはり寂しいのも確かだった。
そんなミリアにラクトリーは師匠として最後の言葉を掛けた。
「立ちなさいミリア。まだ戦いは終わっていないのですよ。ここで終わるあなたではないでしょう」
「……はいっ！」
ミリアはハルバードに寄り掛かりながらも立ち上がると、ラクトリーに向かってハルバードを構えた。
そんなミリアにラクトリーは微笑を一瞬だけ向けると真剣な顔付

きになり、手にしているクレセントアクスをミリアに向けた。
「これからは敵として、本気で行きますよ。私達は絶対に負けられないのですから」
「負けられないのはこっちも同じだよ～。昇のため、皆のために私は盾にならないといけないんだから～」
そんな言葉を掛け合い。お互いに一度だけ微笑み合うと戦いは再開されて、今度は師弟ではなく敵としての戦いが始まるのだった。

おかしい？
上空で戦っているレットはそんな事を感じていた。確かにシエラのスピードはエレメンタルアップの効果で飛躍的に上がっているが、それでも対等に戦える。いや、スピードでは負けていない。
そんな事はありえないとレットは考えている。いくら完全契約と行っても爪翼の属性が有するスピードには限界がある。だからエレメンタルアップが掛かっているシエラにはスピードでは完全に負けると思っていたのだが、そんな事は無くて戦闘は拮抗状態を続けている。まるでシエラが手加減しているかのように。
いや、違う。攻撃に転ずる事無く、防御に徹しているのだ。でも……何故だ？
そう推測するレット。確かにエレメンタルアップの掛かっているシエラを前にした時は、負けるとは思わなかったが押されるとは思っていた。それほどの激戦になると予想していたのだが、実際にはシエラは攻撃を抑えており、そんなに激戦とまではならなかった。
だからレットにもそんな事を考える余裕が生まれた。
それはシエラにも言える事だ。けれども正確に言うとその余裕を作り出すためにシエラはワザとこんな戦い方をしているのだ。
なぜそのような戦い方をしているかというと、それはやはりストケシアシステムが関わっているのだった。

「極寒の塊、その力を持って敵を悠久の凍土へと誘え」
マスターロッドの先端から冷気の塊が放出されると、それは昇に向かって突き進む。
昇もフレトの攻撃に対して二丁拳銃の紫黒、その銃口を向かってくる冷気に照準を合わせると引き金を一気に引き絞る。
「フレイムシュート　レーザー！」
紫黒の銃口から飛び出した炎は、その形をレーザー状にしてフレトの出した冷気に向かって一気に突き進む。
その両方がぶつかり合い水蒸気爆発を引き起こした。けれどもこんな爆発如きで二人の動きが止まる事は無い。
なにしろ先程からこのような戦いを繰り広げているのだから。
二人とも遠距離の攻撃型だ。だからお互いに接近する事無く。動き回っては相手の隙を狙って遠距離の攻撃を行っている。
フレトは呪文を使っての攻撃と風の属性を上手く使いこなして攻撃を仕掛けてくる。昇もそんなフレトの攻撃をさばきながらも、時には拮抗状態を作り出してストケシアシステムを使用したりもしていた。
けれどもフレトの攻撃は苛烈（かれつ）を極めるほどだった。それほどまでにフレトをかき立てる物が存在していた。それがセリスなのだろう。彼女の存在があるからこそ、フレトはここまで戦える。
一方の昇も負けられない理由がある。それが精霊王の力。でも、それは建前で本当は今の生活が気にいっているのかもしれない。
シエラとの契約から始まったこの生活を今では楽しんでいる自分をどこかで自覚していた。だから精霊王の力も重要だが、今の生活を守る事も昇には凄く重要な事なのだろう。
だから双方にも負けられない理由があるからこそ、お互いに全力を出して戦っている。フレトとしてはここまで追い詰められる事は計算外だったが、それでも今は全力で戦うしか手が無い事はフレトが一番良く分かっている。

只でさえ完全契約という有利な条件を最初っから持っているにも関わらず、そのうえ充分な準備までしてここまで来たフレト達だ。
その攻撃は決して油断できるものでは無い。そこまでの攻撃をフレトはしているのだ。それなのに粘ってくる昇達。
まさかここ数日でこんな状況になるまで成長するとはフレトも思っていなかった。だから押されている事に驚かされていても、決して弱気になる事は無く。未だに昇達の戦いも拮抗状態が続いていた。
昇達としてもストケシアシステムとエレメンタルアップが無かったら、とっくにフレト達に敗れていただろう。けれどもここまで戦えたのはこの二つを駆使してるからだ。
だが決着は付きそうになかった。二つの勢力が有している力は同等であり、このままではいつまで戦っても決着が付きそうに無い。戦っている誰もがそう思っている中で昇だけが違う考えを持っていた。
そう昇は最初っから知っていたのだ。完全契約の弱点とこの戦いを終わらせる為の方法を。

第九十四話　弟子と師匠（後書き）

さてさて、そんな訳で今回は師弟対決をメインにしていた訳ですが、如何でしたでしょうか。ミリアがどんな成長をして、そんなミリアを見てラクトリーもどんな思いを抱いたのか、そこいら辺を楽しんで頂けたなら幸いです。

さてさてさて、そんな訳で他倒自立編も終盤に向かって突き進んでいるワケですが……次のプロットが上がってない。というか、話し自体があまり出来上がってない。

というかですね、頭の中ではある程度はまとまってるのですが、今一歩足りなくてこんな状況になっております。そんな訳で次の更新も遅れると思いますが、今年中には後一話か二話ぐらいは上げたいと思っております。

そんな訳で次の話は……いや、これはまだ言わないでおきましょう。なにしろ他倒自立編が終わった訳ではないですからね～。

ではでは、話しが終わった所でそろそろ締めますね。

ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、最近はいろいろな方面で多忙な葵夢幻でした。

第九十五話　発動　エーライカー

やっぱり、あれを使うしかないかな。

戦局が膠着している中で昇はそんな事を考えていた。地上で戦っている琴未達は押されてはいないものの、決着が付きそうになかった。

なにしろ相手は完全契約だ。いくらエレメンタルアップとストケシアシステムで完全契約の差を埋めたとしても、それが勝因となるわけではない。やっと対等に戦えるというだけだ。

そうなってくるとこの戦いで一番の鍵を握っているのは、やはり昇とフレトの戦闘だった。

「大地の槍、その切っ先を突き出し敵を穿て」

フレトはマスターロッドの先端を昇の足元に向けると呪文と共に地の属性を発動させる。すると昇の足元から大地で作られたトゲのような物が一気にせり上がってきた。

そんなフレトの攻撃に昇は後ろに跳ぶのと同時に紫黒の照準を合わせると一気に引き金を引き絞る。シリンダーが高速回転を始めると銃口から無属性の弾丸が一気に飛び出していく。

フレトは横に駆け出すと昇の攻撃を避けながらも風の属性を発動させて、上昇気流を作るとそれを壁にして昇の攻撃を完全に防いでしまった。

さすがにこのまま攻撃をしていてもしかたないと考えた昇は攻撃を一旦中止すると、次に備えるために紫黒を構えなおす。

けれどもフレトは昇にそんな時間を与えないために、今まで壁に使っていた上昇気流の流れを曲げて昇にぶつけてに来た。高度に圧縮されて威力のある風の流れが昇に迫る。それは濁流のように一気に流れ出した。

さすがにこの攻撃には避けるしかないと昇は横に向かって一気に駆け出すが、フレトは風の属性を有している。だから風の流れを変

える事など簡単だ。
濁流のような風の流れは、その行き先を再び昇に曲げると勢いを増して昇に迫る。
ダメかっ！
これは避けきれないと思った昇はすぐに反転すると紫黒を構えるが、風の濁流が有している勢いは昇の予想を超えており。そのスピードもかなり出ていた。
そのため昇が紫黒を構えた頃にはすぐ目の前に迫っていた。
そんな状況に昇は咄嗟に両腕をクロスさせて防御体勢を取る。さすがに避ける事も防ぐ事も不可能だと感じ取ったのだろう。だからここは耐えるしかないと全身に力を入れた。
そして風の濁流は一気に昇を飲み込んでいく。全身が強大な流れで押し流されそうになるのを必死に堪える昇。全身が引きちぎられそうな勢いの中で必死に身体を堅くしてなんとか耐え忍ぶ。
そんな昇に追撃を掛けようとフレトは風の濁流を一瞬して消し去ると呪文の詠唱に入る。
「灼熱の火球、幾つもの弾丸で敵を撃て」
フレトの周りに幾つもの火球が出来ると、フレトはマスターロッドを昇に向けて一気に撃ち出した。
昇は先程まで風の濁流に耐えていたのだから、すぐに動ける状況では無い。かと言って、紫黒を構えている隙も無い。だからフレトの攻撃は昇に直撃する。
フレトの攻撃が昇に当たるのと同時に爆発を引き起こし、昇の周囲に爆煙が立ち上るが、それはすぐに消え去った。
フレトは攻撃を確実に当てるために威力よりも的中率を優先させたため、そんなに大きなダメージにはならなかったのだろう。けれども昇がダメージを負った事は確かであり、そのダメージにより昇の動きを更に止めてしまった。
そんな昇にフレトは大技をもって追撃を仕掛ける。
「氷のドラゴン、その牙と爪をもってかの敵を打ち破れっ！」

フレトはマスターロッドを頭上に上げるとそこに氷が生まれて、その氷は一気に大きくなり、ドラゴンの形となって咆哮を上げるかのように氷のドラゴンは頭を上に向けると大きく口を開いた。
それからフレトはマスターロッドを昇に向かって振り下ろすと、氷のドラゴンは羽根を羽ばたかせると昇に向かって一気に飛び出した。
昇はフレトの連続攻撃で動けない状態だ。それは攻撃をしたフレトが一番良く分かっている。だからこそ、ここで一気に大技に出てきたのだ。
けれども昇は一気に顔を上げると氷のドラゴンに向かって紫黒を構えた。そして一気に引き金を引き絞る。
「ツインフォースバスター！」
二丁拳銃である紫黒。その二つの銃口から放たれた無属性の力は高圧縮されており、レーザーと化している。そんな二つのレーザーが一つにまとまると巨大な力となって氷のドラゴンを一気に打ち砕いてしまった。
「バカなっ！　あの状況で動けるはずが無いっ！」
さすがにこれには驚きを隠せないフレト。そんなフレトに向かって昇は語りかける。
「僕が黙って君の攻撃を耐えいたと思う」
「……まさかっ」
昇が何をしていたのか理解したのだろう。フレトは奥歯を強く噛み締めた。
「そう、君の攻撃を耐えている間に僕は力を蓄えていたんだ。君が大技に出る瞬間を狙ってね」
「そんなバカな事があってたまるか。俺の行動を読むのなら分るが、こちらが攻撃に出る瞬間を狙うなど不可能だ」
確かにフレトの言うとおりである。昇がフレトの行動を読んで次に大技に出ると分っていたとしても、それにすぐさま対応できるはずが無い。なにしろ昇はフレトの攻撃で動けない状況だったからだ。

けれども、そんな状況でも動けるようにするシステムを昇達は持っていた。
「僕は君の行動を完全に読んだわけじゃない。君が大技を出してくる瞬間を教えて貰ったんだ」
「なんだ、それは？」
昇の言っている意味が分からないのだろう。フレトは率直に聞いてくる。
「それが……ストケシアシステム。またの名を瞬間思考交換システム。つまり僕達は仲間の誰かが君の行動を見て、それを瞬時的に僕に教えてくれたんだ」
「何を言っている。お前らの仲間は全員とも戦闘中だぞ。そんな余裕がある仲間なんて」
「居るよ、一人だけ」
そう言って昇は紫黒で上空を指し示した。そんな昇の行動にフレトは警戒しながら顔を上げると、そこにはシエラとレットの戦闘が繰り広げられていた。
……いや、なんだかおかしい。フレトは二人の戦闘を見て違和感を感じていた。二人とも精界の上空ギリギリで戦っており、いや、正確にはシエラは防戦一方でまったく攻撃していない。それどころか、スピードでレットを翻弄しながら下を気にしているようだ。
「……そうかっ！　あいつが」
「そう、シエラがわざわざあんな上空で戦っているのは僕達に介入する隙を与えないためじゃない。僕達の行動を見るためにあそこにいるんだ」
つまり、今までの行動で昇達が度々フレト達の行動を読んだかのような行動を取ったのは、相手の行動を読んだわけではなく。相手の行動を見て、それを瞬時に昇に伝えて、昇から各自にそれを知らせていたにすぎない。
だから先程の事も昇がダメージを覚悟した瞬間にフレトがいつかは大技に出てくるだろうと予想して力を溜めており、フレトが大技

に出た瞬間をシエラに教えてもらったのだ。
その瞬間思考交換こそがストケシアシステムの真髄である。
それは昇だけではない。琴未を始め昇陣営の全てに言えることだ。
だからこそ、ここまで対等の戦いが出来ている。
エレメンタルアップだけだと完全契約を相手にするには昇に負担が掛かりすぎて、昇は戦闘に参加できなかっただろう。けれどもこのストケシアシステムの恩恵で昇の負担を軽減するのと同時に昇が参戦できるようにしていた。
それが昇達の戦略だ。
「くっ！」
マスターロッドを強く握り締めるフレト。まさか昇達がここまでやるとは思っていなかっただろう。けれどもそれ以上にフレトを傷つけたのが、完全契約という自分自身への怠慢である。
完全契約があればこそ、精霊達は完全な力を発揮する事ができる。その利点が知らない間にフレトに努力するという事を忘れさせて依存させていた。それは怠慢以外の何ものでもなく、フレト自身の過失だ。
その事に気付いたフレトは昇にではなく自分自身への怒りが沸いて来たが、今は戦闘中である。フレトは大きく息を吐くと全てを吐き出すしたかのように平常心を取り戻した。さすがにフレトの覚悟もこの程度で自我を失わないほど強い物なのだろう。
再び冷静に戻ったフレトはマスターロッドを昇に向けて構える。けれども昇は紫黒を構えようとはしなかった。それどこか顔には笑みを浮かべている。
「君はまだ気付いていないみたいだね」
「何がだ」
「もちろん……完全契約の弱点にさ」
「ッ！」
平常心を取り戻したばかりのフレトの心が再び揺れ動くが、すぐにその揺れは収まり再びフレトの心は戦闘体勢となる。

そんなフレトに向かって昇は堂々と宣言する。
「完全契約は確かに強い、精霊達の力を完全に引き出してるんだから僕達が勝てるわけが無い」
「けれどもお前はここまでやってこれた」
「そう、けどそれは完全契約の弱点を付いたからじゃない。僕達が独自に完全契約に対抗する術を作り出したからだ」
つまりはここまで戦ってこれたのは完全契約の弱点を付いたわけではなく。昇のエレメンタルアップとストケシアシステムを駆使したからこそ、ここまでの戦いが出来たという事だ。
その二つがあってこそ、昇達は完全契約と対等に戦える。そういう事なのだろう。
けれども昇は更に完全契約に弱点がある事まで示した。それはつまり、その弱点がフレト達の敗因となりかねないという事だ。
そう宣言されて、さすがのフレトにも心に少しの動揺が生まれる。けれどもフレトの覚悟が揺れ動いた訳ではない。だが昇が自信があると雰囲気で語りかけているのも確かだ。
つまりその弱点を突かれればフレト達は完全に敗北する。それは昇の勝利宣言とも言えるべき言動だからだ。
けれどもそんな事を言われて素直に降伏するフレトではない。なにしろフレトにも守るべき人がいる。なさねばならない事がある。だからこそ、ここで絶対に負ける訳には行かないのだ。
「ならその弱点、教えてもらおうではないかっ！」
フレトはそう叫ぶとマスターロッドを振るう。瞬時に風の刃が生まれると昇に向かって放たれた。
仮に昇が言っている事が本当だとしても、その弱点を付かせる隙を与えなければ良い。だからこそ、フレトはここで一気に攻勢に出るつもりだ。
昇は向かってくる風刃を避けるとすぐに紫黒を構える。けれどもフレトはすでに風を操って幾つもの気流を生み出していた。
その気流を昇に向かって一気に流し込んでくるフレト。昇も素早

く気流に照準を合わせると一つずつ確実に気流に弾丸を撃ち込み、拡散させて行った。

けれどもフレトの攻勢はまだ続く。どうやらこのまま攻勢を続けて一気に決着を付けるつもりなのだろう。だが、そのような攻勢がいつまでも続く訳が無い。

フレトは呪文の詠唱と風の属性を上手く操りながら昇に攻撃を仕掛けてくる。

油断したらやられる。昇にそう思わせるほどの大攻勢だ。だから昇は防戦一方になってしまっているが、今はそれでいい。次に攻勢に出る時は完全契約の弱点を付く時だ。だからこそ、今は防戦で耐え忍ぶ。

「火の鳥よ、その翼で敵を煉獄へと誘え！」

フレトは炎の塊を鳥の形へと変えると、炎の鳥は翼を羽ばたかせて炎を噴出する。それはまるで火炎放射のように昇へと迫っていくが、昇はアイスシュートを地面に向かって連射すると氷の壁を一気に築き上げた。

ぶつかり合う炎と氷。けれども炎の威力が強いのか、氷は徐々に溶かされていき、そして一気に打ち破られる。そして辺りは炎で包まれるが、その中に昇の姿は無かった。

上空から炎の威力を見ていたシエラからの連絡で氷の壁では防ぎきれない事を知った昇は大きく後退して、完全に炎が広がりきる圏外へと退避していた。

炎が昇に効いていないと分ったフレトはすぐに炎を消し去って次の攻撃に移ろうとするが、先程までの大攻勢で体力をかなり消耗したのか、すぐに行動に移る事は出来ずに荒い息を整えていた。

そんなフレトに昇は話が出来るまで近づくとはっきりと宣言する。

「これが完全契約の弱点だ」

そう宣言する昇だが、フレトには何の事だかさっぱり分らなかった。そんなフレトに昇は攻撃する事無く話し始めた。

「完全契約で完全な強さを得るのは精霊だけ、僕達のような契約者

には何の恩恵も無い」
「それが、どうした。それは、お前も、同じ事だろ」
「そう、それは僕も同じ。だけどエレメンタルアップは精霊の限界を超えて力を出させる能力だ……それが自分自身に使えるとしたらどうなる」
「なっ！」
さすがにそれは予想外の言葉だったのだろう。フレトは驚きを隠す事が出来ず、荒い息すらも一瞬にして止まってしまった。
昇が言った事、それはつまり、完全契約で力を発揮できるのは精霊だけでフレト自身には何の恩恵も無い。けれどもそれはエレメンタルアップも同じだ。精霊の限界を超えた力を引き出すことが出来るが、昇自身には何の恩恵ももたらさなかった。そう、今までは。
けれども今は違う。今こそ、その力を発揮する時かもしれない。まだ上手く行く保証は無いけど戦況が膠着状態なってしまってはしかたない。昇はそう決断すると顔を上げてフレトに視線を向けた。
「見せてあげるよ。これがこの戦いに終止符を付ける最後の手。エレメンタルアップの応用技。僕の……最後の切り札だ」
先程の大攻勢でフレトがすぐに動けない事を確認すると昇は精神を集中させる。そして昇の足元には昇にしか見えない黒い淀みが出現する。
その中に吸い込まれるように精神だけを沈めて行く昇。そこはとても暗いが、どこか暖かく、幾つもの温もりが感じられる場所であり、自分が決して一人で無い事を感じさせてくれる場所だった。
そんな場所に降り立った昇は目の前にある紐を掴みながら自分の胸に手を当てる。そして今まで紐を通していた力を自分自身にも流し込む。
そして一気にその力を解放させると意識は自然と身体へと戻っていた。
「エーライカー！」
昇がそう叫んだ瞬間に昇から一気に力が溢れ出す。それは先程ま

でとはまったく違う、別人と思うほどの力が昇から湧き出していた。
「なっ！　なんだ、それは」
昇の変化に動揺を隠せないフレト。それはそうだろう、なにしろ昇から感じる力は先程とは比べるほどが無いぐらい、格段に上がっているのだから。
「これが僕の奥の手、その名を『エーライカー』　僕自身の限界を突破して力を発揮させる事が出来る。つまりはエレメンタルアップを自分自身に掛けた状態だよ」
以前に昇はこれと同じような事をした事がある。それは昇が自分の武器を作り出そうとした時だ。その時は誤って力を暴発しかけて閃華が止めたが、今回はしっかりとその力を制御下においている。
今思えば、あの時が始めてエーライカーを発動させた瞬間なのかもしれない。それから昇はすぐにアルマセットが出来るようになったが、あの時にもっとこの力についていろいろと調べていればもっと早くに習得できたかもしれない。
けれども今はこの戦いに終止符が打てるなら充分だと昇は思っていた。
「このエーライカーが僕の奥の手であり、そして完全契約の弱点を的確に付いた方法なんだ」
「弱点を……的確にだと？」
昇が言っている弱点が良く分かっていないのか、フレトは言葉をそのまま返して質問にした。そんなフレトの質問に答えるかのように昇は口を開く。
「そう……完全契約の弱点は契約者の能力がそのままの事。だから契約者同士の戦いでは決着が付き難い。完全契約をした精霊と違ってね。でも、このエーライカーを使えばまったく戦況が変わってくる。それは僕も精霊達と同様に自分の限界以上の力を出せるからだ」
つまりは契約者は精霊と違ってエレメンタルアップや完全契約での戦闘能力を向上させる事が今までは出来なかった。だから昇もフレトもそういった能力を無しに、自分自身の戦闘能力だけで戦って

きた。
だがエーライカー状態の昇は違う。シエラ達と同様にエレメンタルアップが掛かっている状態だ。一方のフレトはそんな能力は持っていない。
そうフレト達の弱点とはフレト自身がエレメンタルアップや完全契約のような自身の戦闘能力を上げる術を持っていない事だ。
「これで僕も完全契約をした精霊と対等に戦うことが出来る。けど君は違う、そのままの状態で完全契約した精霊やエレメンタルアップが掛かっている精霊を相手にする事が出来ない。なにしろ君には何の能力も掛かってないからだ」
そんな昇の言葉にフレトは奥歯を強く噛み締めた。
確かにあいつの言うとおりだ。戦闘能力が上がったあいつと俺とでは差が出すぎている。このままでは勝負にならない。そんな事を考えるフレトだが、その思考は決して負けを認める気にはならなかった。
だからと言って俺は負ける訳にはいかない。そう、セリスの為に！　そんな決意を堅くするフレトの頭にセリスの顔が過ぎる。笑顔……そう、笑顔であって欲しい人の、大切な人の存在がフレトに戦う力を与えた。
「確かにお前の言うとおりだ。だがな……まだ決着が付いたわけでは無いぞ！」
フレトは叫ぶなり、すぐに風を操って昇にぶつけようとするが、昇はまったくその場から動く事はしなかった。それどころか紫黒すら構えようとはしなく、ただ呟くように口にすると力を発動させる。
「エレメントインバリス」
昇は瞬時に紫黒の銃口を向かってくる風の塊に向けると光り輝く閃光を打ち出した。そして次の瞬間にはフレトの放った風は全て消されていた。
「なっ！」
さすがに驚きを隠せないフレト。まさかこんな事になるとは思っ

ていなかったのだろう。だからと言ってこのまま引き下がる気の無いフレトは次なる大技に取り掛かる。

「雷の蛇、その大牙を持って敵を噛み砕け！」

マスターロッドの先端から雷が飛び出すと、それはすぐに蛇の形となり、昇に向かって大きく口を開ける。

そんな蛇に向かって紫黒を構えると昇は再び引き金を引き絞る。銃口から飛び出した閃光は雷の蛇と接触した瞬間に、またしても雷の蛇を消し去ってしまった。

「ぐっ」

さすがに言葉の出ないフレト。そう、昇はフレトの攻撃を相殺したのではない、消し去ってしまったのだ。それが示している事はフレトの攻撃は全て昇に効かないということだ。

相殺するのなら幾らでも手が打てるだろう。けれども相手の攻撃を消し去ってしまうなんていう技を使われると、どう対処してよいのかフレトにも迷いが生じていた。

さすがに次の攻撃に出れないフレト。このまま攻撃を続けても全て消し去られてしまうのは明らかだ。そんなフレトに昇は話しかけてきた。

「今の僕にはどんな属性も効かない。だから……もう終わりにしよう。ここで降伏してくれれば悪いようにはしないよ」

そんな言葉を掛けてくる昇に対してフレトはマスターロッドを強く握り締めた。まるで敵の情けを受けているようで、ここで降伏するなどフレトのプライドが許さないのだろう。

そんな事が出来るか。俺が……ここで負けを認めろだと。そんな事をしたらセリスは、セリスが救えなくなってしまうじゃないか。それだけは、それだけは絶対に出来ない。いや、してはいけないんだ。

それどころかフレトに火をつけてしまったみたいで、逆にフレトは冷静さを取り戻し、昇の言葉について考えると一つの結論に達した。

「ならば……これならどうだ！」
再びマスターロッドを昇に向けるフレト。そして呪文の詠唱に入る。
「力の塊よ、その弾丸を持って敵を射抜け！」
マスターロッドの先端から弾丸というより大砲の弾に似ている力が打ち出された。昇はすぐに先程の閃光を打ち出すが、今度は消し去る事が出来ず。大砲の弾丸はそのまま昇に直撃した。
そして大きな爆発を引き起こすと爆煙が上がる。フレトはその爆煙に叫ぶかのように口を開いた。
「俺もお前の弱点を教えてやろう。それは、喋りすぎる事だ。自分自身の事をそこまで喋れば自分の弱点をさらけ出しているのと同じだろ」
「それは違うよ」
すぐ横から聞こえてきた昇の声にフレトは驚愕の表情でそちらを向くと、昇はすぐ傍まで迫っており、片足を軸に蹴りの体勢に入っていた。
予想の範囲を思いっきり超えている、この状況にフレトはまったく動く事が出来ずに昇の蹴りをそのまま喰らってしまった。
蹴り飛ばされて地面を転がるようにして止まったフレトは顔だけを上げて、なんとか昇の姿を捉える。けれども昇の姿を見て更に驚く事になる。
あれだけの爆発だというのに昇はまったくの無傷だ。そんな昇がフレトに語りかけてきた。
「これは弱点じゃない、余裕だよ。その証拠に僕は君の攻撃に対して無傷だ。君がエレメントインバリスの効果に気付いていた事は分っていたからね」
そう、全ては昇が仕組んだ事だ。
順を追って説明していくとエレメントインバリスとは敵の属性攻撃を無効化する。属性防御の弾丸だ。だから風の属性を有しているフレトの攻撃や呪文の詠唱で作り出した雷の属性も全てエレメント

インバリスの効果によって消し去られてしまう。それがエレメントインバリスだ。

そんなエレメントインバリスの効果を悟ったフレトは昇がやったのと同様に無属性の力をぶつけたのだが、昇のエレメントジャケットである八咫烏により防がれてしまった。

そして爆発の中を一瞬にして脱出した昇はそのままフレトの横に回りこんだということだ。

更にフレトのエレメンタルジャケットであるウィンドウマントには物理攻撃を逸らす効果があるのだが、エーライカー状態の昇が放った攻撃はそんなウィンドウマントの効果を突き破ってフレトに攻撃を加えることが出来た。

それだけエーライカー状態の昇が有している戦闘能力が向上したという事だ。

「これで分っただろ、君は僕には敵わない。もう勝負は付いているんだ、僕がエーライカーを発動させた瞬間に」

そんな昇の言葉にフレトは奥歯を強く噛み締めるとマスターロッドに寄りかかりながらも立ち上がった。そして再びマスターロッドを昇に向ける。

「確かにお前の言う通りかもしれないな。だがな、ただそれだけで負けを認めるわけにはいかないんだよ！　こっちにも守らなければいけない者が、大切な存在が掛かっているんだからな！」

「けど僕の力は分かっているはずだ、君には」

「黙れ！　そんな事は関係ない！　俺はこの戦いに勝ってセリスを救ってみせる、いや、救わなければいけないんだ！　だから俺は……この戦いに勝って精霊王の力を手に入れる」

……それが他倒自立の理か。昇はそんな事を思った。

閃華が昇に教えた他倒自立の理。それはまさにフレトが言葉にした、そのものではないかと昇は感じたようだ。

他者を倒して自分がその上に立って理想を敵える。フレトがやろうとしている事はまさにそれなのだ。

ならば昇はどうなのか、昇は自分自身に問い掛けてみるが出てくる答えは一つだった。
「なら……君を倒してこの戦いに決着を付ける！」
「望むところだ！」
フレトは大きく後ろに跳ぶと昇と大きく距離を開ける。どうやらかなりの大技を出そうとしているのだろう。昇もそんなフレトに対抗するかのように紫黒に力を溜めていく。
それからフレトは詠唱に入った。
「かの地にある全ての大気よ、その流れを我が元へ、その流れを渦と成して我が元へ集らん。大気の渦と化しき全ての風よ。その力を持って我が敵を葬れ」
詠唱が終わるとフレトを中心に巨大な竜巻が生まれつつあった。どうやらあれをぶつけてくる気になのだろうと昇は考えてた。
それにしても大きすぎるな。巨大な竜巻を見て昇はそんな事を考えながら紫黒をフレトに向けるのだった。
ここで撃ってもあの竜巻を打ち破れるか分らないな……だったら、相手が撃ってきた瞬間にそれ以上の力をぶつけて打ち破るしかないか。昇はそう考えると力を溜めながら照準しっかりと合わせる。
フレトは詠唱が終わると更に風を操って竜巻を圧縮させて行った。風の属性に更に呪文で風の属性を上乗せしたのだ。その威力は倍どころか数十倍に膨れ上がっている。
風の属性を倍加させる、これこそがフレトの奥の手なのだろう。
そしてフレトはマスターロッドを頭上に上げると巨大な竜巻は一気に圧縮されてフレトの周りだけに絞られるが長さは天を突くほどに長い。そんな竜巻が一気に上昇するとフレトはマスターロッドを昇に向けた。
「ハリケーンバスターッ！」
上空から一気に落ちてきた竜巻は地面すれすれで急転回すると昇に向かってきた。
そんなフレトの攻撃に昇も二丁拳銃である紫黒を並べて引き金を

一気に引き絞る。
「ヘブンズブレイカーッ！」
銃口の先に光り輝く光球が生まれるとそこから圧縮された力が一気に撃ち放たれる。

第九十五話　発動　エーライカー（後書き）

そんな訳でお送りしましたエレメの九十五話ですが、如何でしたでしょうか。

いや～、とうとう昇も奥の手を出してきましたね。その名をエーライカー。というか……かなり卑怯って言えば卑怯だよね。このエーライカーって。

けどまあ……エレメンタルアップだって完全契約だって似たような物だからいいか。というのが私の結論ですね。

さてさて、これで他倒自立編も残り数話ほどとなってきました。そろそろ次の話を考えないといけないのですが……これがまったく出来てない……てへっ。

いやね、粗方の設定は出来てるんだけどプロットが上がらなくって、それでまったく話しが出来ていない状態です。

ん～、だから更新も結構遅れ気味になると思いますので、その辺はご容赦ください。

ではでは、言い訳が終わったところでそろそろ締めますね。

ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、最近の不調が風邪の所為だとやっと気付いた葵夢幻でした。

第九十六話　他倒自立の先に

並べられた紫黒の銃口から放たれたヘブンズブレイカーは一直線にフレトに向かって行く。だが、その眼前にはフレトの放ったハリケーンバスターが昇に向かっていた。

そして両者の放った技がぶつかり合う。重苦しい重低音が辺りに鳴り響き、両者の攻撃が激しくぶつかり合い、その衝撃を辺りに撒き散らす。

木々は激しく揺れ動かし、今にも引っこ抜かれそうだ。そんな衝撃の中で昇とフレトの二人は更に力を込めていく。

拮抗状態に入った為、二人とも身体を持っていかれそうな衝撃に耐えながらも、お互いに一歩も引く事無く技に力を込め続ける。そんな状態に昇は驚いていた。

決めきれないっ！　エーライカー状態のヘブンズブレイカーなのに、ここまで耐えるなんて、凄い覚悟と力を持ってるんだ。だけど……僕だって負ける訳には行かない。そのためのエーライカーなんだから。だから、そろそろ決めさせてもらう！　昇がそう決意していた頃にはフレトはかなり消耗していた。

くっ、まさかこんな隠し球を持っていたなんてな。……ちっ！このままでは押し負けてしまう。それだけは、それだけはなんとか防がないと。負けられない……負けられないんだ！　この戦いにだけは絶対に。

「そう、セリスのためにな！」

フレトはそう叫ぶと更に力を込め始める。けれども拮抗状態は崩れる事無く。フレトの体力を奪い続けるだけだった。

そんな状態に昇は一つの事を察する。

そろそろ相手の体力も限界かな。だったら、そろそろ決めるかな。

そんな事を考える昇。

そう、今回の状態で決定的に違っていた事、それは昇はエーライ

カー状態でまだ余裕があるが、フレトは限界に近いということだ。
そうなると拮抗状態の勝敗も目に見えてくるというものだ。
「いっけーっ！」
昇は叫ぶと共にヘブンズブレイカーの出力を一気に上げた。今度こそ手加減無しの本気でヘブンズブレイカーを放ったのだ。
先程のヘブンズブレイカーよりも二周りほど大きな力がハリケーンバスターに迫る。そして昇が放ったヘブンズブレイカーはハリケーンバスターを突き破ると、そのままハリケーンバスターを四散させながらフレトへと迫った。
まさか、そんな。目の前の状態が信じられないフレトは迫ってくるヘブンズブレイカーにどうする事も出来なかった。ただただ呆然と見ているだけで、心の中では敗北するのではないのかという真実とそれを認められない思いが葛藤していた。
俺はここまでなのか、ここで終わってしまうのか。このままセリスを助けられないままに……認められるか、そんな事！　このまま終わってたまるか！
フレトは最後の足掻きとも思われる行動に出る。迫ってくるヘブンズブレイカーに四散されているハリケーンバスターを再び集中させようとしていたのだ。けれども昇のエーライカーを使ったヘブンズブレイカーにはまったく、そんな事は通用せず。ただただ風を操るが、上手く操る事が出来なかった。
そんなフレトの眼前にヘブンズブレイカーが迫る。セリスっ！
心の中でそう叫ぶフレトはそのままヘブンズブレイカーの光に飲み込まれていった。

俺は……生きているのか。
フレトが目を開けると白く染まった夜空が瞳に映った。それから立ち上がろうと身体を動かそうとするが、フレトの身体はそんなフレトの意思を拒絶するかのようにまったく身体を動かす事が出来な

かった。
……負けたのか、俺は。さすがにこんな状態ではもう戦う事が出来ないのだと、フレトは自覚せずにはいられなかった。心の中ではまだ戦えると思ってはいるものの、身体がそれを拒絶している。だからこそ心を納得させるために負けを認めると言い聞かせるしかなかった。
そんなフレトの視界に昇が写りこんだ。未だに仰向けに寝ているフレトを見下ろす昇は紫黒をフレトに向けるのだった。
「俺は……負けたのか」
どうする事も出来ないこの状態にフレトはそんな言葉を呟く。そんな呟きに昇は紫黒の銃口を向けながらも答えた。
「そうだね。このまま負けを認めてくれるなら、そうなるのかもしれないね」
「嫌な物言いだな」
「けど、これが真実だ」
「なら、トドメを刺せば良いだろう。そうすればお前の勝ちだ」
けれども昇は首を横に振ってフレトの提案を拒否した。
「僕は僕の未来を作る為に、君にはここで降参して欲しい。そうしないと僕が望んでいる未来はやってこないから。それにもう勝負は付いている。僕の勝ちは揺ぎ無い。だからこそ、君にはここで降参して欲しい」
「トドメを刺せば自然とお前の望みは叶うのだろう？　俺は力を失って精霊王の力に手を出す事は出来ない。契約した精霊達も自然へと帰っていく。それで終わりだ」
「それは僕の望みとは違う。だから降参して欲しい、もう……この戦いは終わりにしよう」
昇はそう言うと紫黒の銃口をフレトから逸らして、膝を折ってフレトの瞳を真っ直ぐに見据える。
「それに勝負に賭けていたのは精霊王の力だけじゃない、お互いの未来も賭けていたはずだ。僕が賭けていた未来を得るためには、こ

こで君に降参してもらわないといけない。だから……負けを認めて欲しい」
「お互いの未来か……ふっ、そうだな」
「じゃあ」
「分った。あまり納得が行かないが負けた者はしょうがない。お前の言うとおりにしよう」
「ありがとう」
「礼を言うのは変だろう」
そう言うとフレトは軽く笑みを浮かべ、昇は満面の笑みを浮かべた。それから昇は立ち上がると未だに戦っている精霊達に大声で勝負が付いた事を告げた。

戦いが終わり、ラクトリーと閃華がフレトの両側に座って治療の術をフレトに掛けていた。
戦いが終わった直後は、まだ戦えると言い張ったレットや咲耶はフレトの言葉で負けを認めざる得なくなってしまった。そして戦いは終わり、今は両者の陣営がフレトのところに集り、フレトの治療を見守っていた。
レットや咲耶は未だに悔しそうにしているが、フレトがこんな状態になってしまってはしかたない。むしろ昇がフレトにトドメを刺さなかった事に不審を抱いているようだった。
まだ何かを企んでいるのではないか。そう思うのだが、戦いの勝敗が付いた今ではどんな策略を用意したところで昇に何の利益も無い事は確かだろう。それが分っているだけにレットも咲耶も不安だった。
それとは反対に昇側は満面の笑みを浮かべていた。なにしろ絶対的に不利と言われている完全契約をした精霊達に勝ったのだ。先の戦いで負けた屈辱をここで晴らしたのだ。これほど嬉事はないのだろう。特にミリアと琴未は今回の戦いでは満足の行く勝利を得られ

た事が嬉しかったようだ。
そんな感じで黙り込み、フレトの治療を見守っていると、フレトは身体が動くようになると治療をしてくれていた二人に「もういい」と告げて立ち上がった。
そして昇はフレトの前に進み出る。そんな昇にフレトは片膝を付いて、負けた証として頭を下げたのだが、昇は慌ててフレトに頭を上げるように言うのだった。
「負けた者が勝者に屈するのは当然だろう？」
昇が示した行動にフレトはそんな疑問を投げかけるが、昇はそうでは無いと首を横に振るのだった。
「確かに負けた者は勝った者に屈するのは当然だけど、僕が描いた未来では君に屈してもらうつもりは無いよ。ただ一つの事を許してもらいたいだけなんだ」
昇がそう言うとフレトは首を傾げる。昇が何を望んでいるのか未だに分らないのだろう。それはシエラ達も同じだ。
シエラ達はただ勝つ事だけを考えて戦ってきた。だから昇がその先に描いている未来までは未だに知らされていなかった。
「そのたった一つの事とはなんだ？」
フレトがその事を尋ねると昇は困った顔をした。それからシエラに時間を尋ねるともう少し待つように全員に言うのだった。
それから数分後、精界を突き破って一人の人物が昇達の集団に合流した。
「どうもお待たせしました」
それは与凪だった。与凪は真っ先に昇のところに行く。
「よかったですね。無事に勝つ事が出来て」
「与凪さんが作ってくれたストケシアシステムのおかげですよ」
「そお？　それなら後で私のお願いもしやすくなるかな～」
与凪さん、もしかして何か企んでます。そんな突っ込みを心の中でする昇は一度咳払いすると話を元に戻すためにフレトと向き合った。

「他倒自立の理。他者を倒してその上に自分が立つという真理だ」
「それは分っている。それでお前は俺の上に立って何をする気だ？」
負けたという真実が未だにフレトには納得しきれないでいるのだろう。けれども既に結果は出ている。だからフレトは昇に従うしかない。そうと分っていながらも、やはりフレトには納得しきれないのを隠す事は出来ずに、昇を睨み付けるように訪ねるのだった。
そんなフレトに昇は笑みを浮かべるとはっきりと宣言した。
「僕に……いや、僕達に君の妹を治療させて欲しい」
「なっ！」
「えっ！」
さすがに昇と与凪以外の全員が驚きを隠せなかった。まさか昇がそんな事を言い出すとは誰しも予想が出来ない事なのだろう。
けれども昇は他倒自立の理を閃華に教えてもらった時から、この事を決めていた。そう、自分達が勝ったらフレトの妹であるセリスの治療をする事を。それこそが昇が描いた未来である。
それぐらいなら話し合いでも決着が付きそうだと思いそうだが、そういう訳には行かない事を昇は分っていた。
なにしろセリスの治療には精霊王の力を使う。昇もラクトリーの話を聞いてセリスを治してやりたいと思ってはいるが、精霊王の力をフレト達に委ねる事は出来ない。
だからと言ってセリスの治療をさせてくれと言ってもフレトが素直にセリスを引き渡すとは絶対に無いだろう。
だからこそ、昇はこの戦いに勝ってセリスを治療する権利を得たかったのだ。そうすれば誰も傷つかないで済む。それが昇の描いた未来像だ。
けれどもいきなりそんな事を言われて、すぐに納得が出来るフレトではなかった。なにしろセリスはフレトにとってたった一人の掛け替えの無い存在だ。そのセリスを昇達に委ねるなど、到底許せる物ではなかった。
「そ、そんな事が出来るわけが無いだろう」

なんとか拒絶を口にするフレト。確かに精霊王の力を使ってセリスを治してやりたいと言う気持ちは今も変わってないが、それは自分の手でやる事で昇に委ねる事が出来ないのだろう。

だからこそ拒絶したのだが、そんなフレトに昇ははっきりと言いのける。

「今回の戦いで勝ったのは僕だ。そして君は僕の願いを叶える必要がある。それは僕にとっては権利であり、君にとっては義務だ。それこそが他倒自立の理なんだから」

負けた者は勝った者の言う事を聞かないといけない。非情なる戦いの真実である他倒自立の理。その理からはどんな言葉を連ねたとしても逃れる事が出来ないとフレトは事の時にやっと他倒自立の理を理解した。

「それが……お前の望みか？」

「そうだよ。僕達としても精霊王の力を君に委ねる事は出来ない。それは君だって同じだ。たった一人の妹を僕達に委ねる事は出来ない。だからこそ戦う必要があった。それぞれに譲れない物があるからこそ戦って、そして僕達は勝った。だから」

「だから俺にはその義務を果たさなければいけないという事か」

「それが他倒自立の理だ」

非情といえば非情だろう。けれどもこれこそが戦いにおける真実である。昇はそれが分っていながらも戦いに応じた。だからこそ絶対に負けられなかった。それはフレトも同じだろう。

その両者の違いはたった一つ。戦いの理をどこまで理解しているかだ。負けたら大切な物を失う事になる。それが分っているからこそ、昇は誰も悲しまない未来を描いた。誰も傷つかない、誰も悲しまない。そんな未来を昇は勝ち取ったのだ。

そうなるとフレトは……もう昇にすがるしかなかった。プライドも何もかも捨て去って昇にセリスを委ねるしかないと自分で自分に言い聞かせる。必死にそう納得しようとしていた。

「ほ、本当にセリスを治してくれるんだな」

「僕達に出来る事は全部やるよ。もちろん精霊王の力を使ってね。だから君がやろうとしていた事を僕に任せて欲しい」
「それは……負けた者へ対する命令か」
「半分はお願いだけどね」
そう言って昇は照れながら笑みを浮かべて見せた。
「ラクトリーさんから君達の事情を聞いた時は困ったけど、僕達もそう簡単に精霊王の力を委ねる訳には行かなかった。だから考えたんだ、どうすれば誰も傷つかない、悲しまない未来を作れるかって。そうして出た答えは君に折れてもらうしかなかった。たとえ戦う事になっても、戦って、勝って君に折れてもらうしか僕には思いつかなかったんだ。だから信頼して欲しい。僕達を、君達に勝った僕達を」
「他のやつらもそれで良いのか？」
フレトはシエラ達にも意見を求めた。確かに勝ったのは昇達だが、シエラ達も戦って勝ち取った勝利だ。それを昇の一存で決めて良いのか不安に思ったのだろう。だからこそシエラ達にも意見を求めたのだが、シエラ達はあっさりと答えてきた。
「私は昇の剣だから、昇の意思に応えるだけ。それだけで充分」
あっさりと答えるシエラに続き琴未も口を開いた。
「私達の役目は昇の意思に従って戦う事なのよね。それに、そういう事を考えるのは昇にまかっせっぱなしだから、今更私が言うとは何もないわね」
「そうじゃな、ここにおる者は皆昇の意思と共に戦っておるんじゃ。今更昇の決めた事に何も言う事も無いのも確かじゃな」
閃華もそんな事を言うとミリアが元気良く手を上げて、閃華に続いて口を開いた。
「私はそういう事を考えるのがめんどうだから昇に任せてるよ～。だから昇の決めた事に何も言う気は無いよ～。だってめんどうだもん」
えっと、ミリアさん。そこまで僕を信頼してくれるのは嬉しいん

だけど、少しは自分の考えを持とうよ。あぁ～、ミリア、後ろ後ろ。
昇が呆れた視線をしているとミリアの後ろに黒いオーラを出したラクトリーがいつの間にか立っていた。
「ミ～リ～ア～」
「お、お師匠様っ！」
ラクトリーの気配を察したミリアは逸早くその場から脱出しようとするが、その前に後ろの襟首を引っ掴まれて脱出に失敗してしまった。
「ミリア、めんどくさいとはなんですか、めんどくさいとは！　少しは自分の考えという物を持ちなさいと前に言いましたよね」
「痛い痛い痛い、お師匠様～、痛いですよ～」
ミリアの頭をグーでグリグリと押し付けてお仕置きをするラクトリーに必死に抗議するミリア。そんな光景にいつの間にか先程までの緊迫した空気が消え去っており、フレトも自然と昇を信頼しても良いのではないのかと思い始めていた。
「滝下昇……だったな」
いきなりフレトに名前を呼ばれてミリアからフレトへと視線を移す昇。フレトは真剣な眼差しで昇を見詰めていた。
「約束してくれるか、セリスを……治してくれると」
「うん、精霊王の力を使ってどこまで出来るか分らないけど約束するよ。僕達に出来る事はなんでもすると」
「そうか……では負けを認めて信頼するとしよう。それが敗者となった俺の務めだ」
「主様」
咲耶が心配そうにフレトを見詰めてきたが、フレトは心配ないとばかりに咲耶に向かって笑みを向けるのだった。
それからフレトは肝心な事を聞くために再び昇に視線を戻した。
「それで、どうやってセリスを治すつもりだ」
そう聞かれて昇は困ったように頬を掻きながら、誤魔化すように笑みを向けると視線を与凪へと移した。

「えっと、与凪さん、そこら辺の説明をお願いしますね」
そう言われて与凪は昇をからかうような笑いをした後に昇とフレトに向かって説明を開始した。
「正直に言うと聞いただけだとよく分からないんですよね～。だから実際にここに来てもらわないと手の打ちようが無いんですよ」
「精霊王の力が手に入ればセリスをこっちに呼ぶつもりだった。だから近いうちにセリスをこっちに呼ぶ事も可能だ」
「なら、そこは問題ないですね。後は事前に詳しい情報が欲しいのですけど」
「ラクトリー」
与凪にそう言われてフレトは未だにミリアにお仕置きをしているラクトリーを呼び寄せて与凪に引き合わせた。
「なんですかマスター」
「セリスに関する詳しい情報を送ってやれ、出来るだけ詳細にな」
「はい、かしこまりました」
フレトに軽く頭を下げたラクトリーはそれから空中にモニターを出現させると、同じく空中にあるキーボードを叩いてセリスに関する情報を与凪の方へと送って行く。
「うわっ、こんなにあるんですか」
どうやらかなりの情報が送られてきたみたいで与凪は驚きを隠せなかった。そしてうんざりしたように昇に目を向けてきた。
「滝下君、さすがにこれだけの情報を私一人じゃ処理が出来ないわよ」
「じゃあ、閃華に手伝ってもらえば」
確かに閃華も与凪と一緒に情報を処理した事もしょっちゅうあるのだが、今回はセリスの事だけで大量の情報を処理しなくてはいけないのだ。二人でやっても追いつかないと与凪は昇に向かって愚痴をもらした。
そんな愚痴を聞いた昇はとんでもない事を言い出す。
「じゃあラクトリーさんに手伝ってもらえば良いよ」

「なっ！」
「えっ？」
えっと、なんで皆さん、そんなに驚いているんですか？
一人だけ事情が分らない昇は首を傾げるだけだった。そんな昇にラクトリーは申し訳なさおうに尋ねるのだった。
「あの～、私達は先程まで敵同士として戦っていたのですよ。それなのに今更手伝ってもらえっていうのは……その」
そう昇とフレトは敵同士。けれども昇は今になってはそう思ってはいなかった。だからこそ、昇はラクトリーにも手伝ってもらおうと思ったのだ。
「それはさっきまでの話ですよ。これからはセリスさんを助けるために協力して行った方が早いじゃないですか」
「……えっと、あなたはそれで良いのですか？」
「はい、それが僕の出した答えですから」
昇がはっきりと答えるとラクトリーは嬉しそうに目を閉じる。それから少し考えたような仕草をすると目を開けてフレトに向かって口を開いた。
「マスターのお考えは？」
ラクトリーとしては昇の考えに賛同したいのだろうが、そこはラクトリーの一存で決める事は出来ないとフレトに意見を求めたのだ。
そう聞かれてフレトは昇の顔を真っ直ぐに見据えてみる。それからはっきりと思った。
負けたな。この瞬間がフレトに完璧な敗北をもたらした瞬間かもしれない。それは戦いだけではなく、その次まで考えていた昇への敗北なのだから。
「協力が必要だと言ってるんだから協力してやれ」
「はい、マスター」
少し照れながら、それでも少しだけ偉そうにそういうフレト。たとえ敗北を認めたといえどもプライドまでもが消え去ったわけでもないようだ。

それが分っているラクトリーなだけに、ラクトリーも少し笑みを浮かべながらもそう答えるのだった。

それからラクトリーと与凪はセリスに関する情報処理をするために互いに話し合いを始めた。その事でやっと解放されたミリアがよろけながらも昇の元へやってきた。

「昇～、もう……ダメ」

えっと、まあ、あれだけお仕置きされればね。

そう言って昇に寄り掛かってくるミリアを抱き止める昇だが、ミリアはすぐに琴未によって蹴り飛ばされてしまった。

「はいはい、もともとはミリアが悪いんだから昇に甘えない」

「う～、せっかくのチャンスだったのに」

「そういう事を企んでるんじゃない。……そこも！」

そう言って琴未は思いっきりシエラを指差した。どうやら琴未とミリアが揉めている隙に何かを企んでいたようだが、琴未によって見抜かれてしまったため、シエラは残念そうに顔を背けた。

「まったく、油断も隙もないんだから」

えっと、琴未。そう言いながら腕を絡めてくるのは何でしょう？　……うっ、琴未、む、胸が……当たって。

どうやら琴未は二人を注意した隙を付いて昇と腕を組んで思いっきり胸を昇の腕に押し当てているようだが、そんな事をしていれば黙っている者がいるはずが無い。

あっ、やっぱり琴未が蹴り飛ばされた。いつの間にか琴未の後ろに回り込んだシエラとミリアが琴未を背中から思いっきり蹴り飛ばした。そのため琴未は昇から押し剥がされて、昇の両側にはシエラとミリアが陣取る事になってしまった。

だがそんな事は許さないとばかりに、いきなり現れた濁流によってシエラとミリアは琴未の元へ押し流されて行ってしまった。どうやら閃華の仕業らしい。

そうして三人揃うと、いつものように言葉の交わしあいから、いつの間にか本格的な戦闘へとなだれ込んで行った。

「やれやれ、まったく、しょうがない奴らじゃのう」
というか閃華さん、ワザととやってますよね。ワザと三人が揃うようにやりましたよね。どうやら閃華は面白がってワザと三人が揃うように押し流したようだ。
もちろん、そんな事をすればいつものように大騒ぎになる事を楽しんでの行動だ。
「止めなくていいのかよ」
さすがに心配になったのだろう。レットがそんな事を言ってきたが、閃華は大丈夫だとばかりに手を振りながら答える。
「なに、心配はいらんぞ。いつものことじゃからのう」
「そ、そうなのか」
いつもの事と言われてさすがに驚きを隠せないレット。確かにいつもこんな感じなら驚きもするだろう。けれども、そんな騒ぎにまったく驚かない人物が居る事も確かだった。
「まったく、巫女なら巫女らしく、おしとやかでないといけないというのに」
レットと並び出て咲耶がそんな事を言い出した。どうやら今回の事で琴未をライバル視するどころか、巫女として少しだけ先輩面をしたくなってきたのだろう。
そんなフレト達の精霊に言われて昇は引きつった笑みを浮かべるしかなかった。そんな昇の肩にフレトは手を置いた。
「滝下昇、お前もなかなか苦労しているんだな」
大きなお世話ですよ。というか、なんで僕の事をフルネームで呼ぶんですか？
すっかりいつもどおりの空気に戻った事が昇に安心感を与えていた。やっぱりこうして皆で大騒ぎしていた方が昇達らしいのだろう。
今回に限ってはフレト達もすっかり傍観者として楽しんでいるようだ。
まあ、なんにしても今回の事が丸く収まって一安心する昇だった。

シエラ達の大騒ぎも一段落して収まり、与凪とラクトリーの情報処理も目処がたったのだろう。全員は一度、昇とフレトの居る場所へと集った。

「一応、再確認しておこう」

フレトがそう言うと昇は頷いた。

「そちらの与凪といったか、与凪とラクトリーの二人でセリスの治療を行う。その他に協力できる者はそれぞれ協力する事でいいな」

「そうだね、セリスさんの命が掛かってるんだもの。こっちも協力は惜しまないよ」

「……ありがとう」

思いっきり照れながら礼をいうフレトに昇は軽く笑みを浮かべた。それからフレトは照れ隠しの為に咳払いをすると更に話を続けた。

「そういう事だから、俺達もここに残る事にした」

「えっ、帰らなくて大丈夫なの？」

「それは心配ない。精霊の事や争奪戦の事はすでに知らせるべき者には知らせてある。それにセリス一人をここに残す訳にはいかないだろう」

「まあ、そうだね」

確かに昇にセリスの治療を任せるからと言ってフレト達だけが帰国する訳にはいかないのだろう。だからこそフレトもここに残ると言い出して当然なのだろう。

「だから当分の間は一緒にいる事になるな、滝下昇」

「まあ、それは構わないけど、暮らす場所なんてあるの」

「それはこれから手配する。自分達の事は自分達で出来るから、そこまで心配してもらう必要などは無い。分ったか」

「うん、分ったよ」

やはり偉そうなフレトに対して昇はまったくいつもと変わらずに返事を返す。まあ、それがこの二人らしいのだろう。

そんな二人の会話に与凪は口を挟んできた。

「だから残っている問題はセリスさんの事だけですね。詳しい事はセリスさんがこっちに来てからでないと分りませんが、精霊王の力を使えば病気も完治できる可能性が高いですよ」
「そうか、それならよかった」
与凪の言葉を聞いて一安心するフレト。
「よかったですね、主様」
フレトに続いて精霊達も喜びの言葉をフレトに掛ける。フレトにしてみればセリスの病気を治すために、こんな遠い地まで来たのだ。その念願が叶い始めているのだから喜びも一層増す物なのだろう。
フレトは精霊達と喜びを分かち合った後で昇の元へとやってきた。
「今回の事では礼を言う。そしてこの借りはいつかは返そう。困った時はいつでも協力する。グラシアス家の家名に掛けて誓おう」
そう言ってフレトは握手を求めてきた。そんなフレトの言葉に昇は少し照れながら答えるのだった。
「別にそこまで礼を言われる事じゃないよ」
「いいや、今回の事ではセリスの恩人だ。だからそれぐらいは当然だ。だからそれぐらいはやらせてくれ」
「ありがとう、じゃあ困った時はいつでも相談するよ」
そう言って昇はフレトの握手に応じようと手を差し出すが、昇の手はフレトの手と握手する事無く。昇はそのまま地面へと倒れてしまった。

第九十六話　他倒自立の先に（後書き）

そんな訳で後書きのコーナーがやってきました――っ！！！

……いやね、今回はちょっとハイテンションで入ってみようかなと思っただけですので、特にここが盛り上がる事は無いと思われます。

さてさて、そんな訳で他倒自立編のラストバトルも終わりましたね～。そんな訳で他倒自立編も残り数話となりました。

そんでもって次の話なんですが、なんと……未だにプロットが上がってませ～ん！！！

……いや、その……ごめんなさい。

そんな訳でそっちもやらないといけないので残り数話の更新が遅くなるかもしれませんが、ご容赦ください。

……えっ、ダメ！？　そんな、そんな事をいわんといて～。そんな事を言われるとラクトリーさんに折檻されるから、それだけは、それだけは～～～っ！！！　……はい、そろそろ遊ぶのも終わりにしましょうか。　ではでは、締めますね。　ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、Ａ列車に乗って旅立ちたいなと思った葵夢幻でした。

第九十七話　セリスの来日

昇が目を覚ますと、そこには見慣れた天井とシエラ達の顔が写った。

あれっ、僕はいったいどうしたんだっけ？

そんな事を呆然とした頭の中で考える事を数秒。昇は勢い良く上半身を起こすと、辺りを見回した。間違いなく、そこは昇の部屋だった。

「えっと、僕はどうして自分の部屋に？」

そんな事をシエラ達に尋ねる昇。その質問に対して真っ先に答えたのがシエラだ。

「戦闘が終わった後に昇は倒れた。覚えてない？」

「いや、そこまでは覚えてるんだけど、なんで僕は自分の部屋に居るの？」

「決まっておるじゃろ」

机の前にある椅子に腰を掛けた閃華がシエラに代わって答える。

「ここまで運んでくれたからじゃよ」

「誰が？」

「レットというシエラと戦ってた精霊がおるじゃろ。その者が昇を背負って、ここまで運んでくれたんじゃ。もう帰ってしまったけどのう」

「そうなんだ……というとフレトさん達は？」

そんな昇の質問に皆は笑みを浮かべた。それだけで昇は安心する事が出来た。

よかった。どうやら上手くまとまったみたいだね。そんな風に安心感が一気に広がると、今までの疲労が一気に来たのか再びベットに倒れ込む昇。

「大丈夫、昇～？」

昇の顔の近くにいるミリアが心配そうにそう尋ねてきた。そんな

ミリアを昇は頭を撫でてやりながら「心配ない」と口にするが、閃華とシエラがその言葉を否定し来た。
「心配が無いわけじゃない。昇のあれは相当力の消費が激しい」
「あれって？」
「無論、エーライカーのことじゃよ」
あ～、やっぱりそうだったんだ。どうやら昇も薄々は感じていたようだ。あのエーライカーという技がどれだけ昇の体力を奪っていく技かという事を。
「それじゃあ何、昇がエーライカーを使ったから昇は倒れたわけ？」
琴未がそんな質問を閃華にぶつける。同感とばかりに昇も閃華に向かって頷き、その質問の回答を求めた。
そんな状況に閃華は首を横に振るとそうでは無いと答える。
「別にエーライカーという技に問題があるわけではない。ただ消費が激しいだけに、それだけ身体に掛かる負担も大きいというわけじゃ」
「つまりエーライカーは長時間使える技じゃないって事」
シエラがそう付け加えると昇は思いっきり溜息をついた。
もう少し力のコントロールが出来ればいいんだけどな～。やっぱりそういう訳にはいかないか。そんな事を考えるとやはり気が重くなったのか、昇は再び溜息を付いた。そんな昇に追い討ちを掛けるかのように閃華の言葉が届く。
「じゃが問題はそれだけでは無いようじゃのう」
「えっ、まだ何か問題があるの？」
エーライカーのコントロールだけだと昇は思っていたのだが、エーライカーには他にもまだ問題があるようだ。
それは何かと少し不安になりながら閃華を見詰める昇。問題と言われてはやっぱり気になってしかたないのだろう。そんな昇に閃華は笑みを浮かべると口を開いた。
「今のところは大丈夫じゃが、問題は明日になってからじゃな」
「えっと、それは明日には何かがあるという事？」

「まあ、昇は若いからのう。明日には来るじゃろ」
あの～、閃華さん。その物言いは凄く不安になるのですけど。そんな不安を言葉ではなく目で閃華に訴える昇だが、昇の予想通り閃華は軽く笑っただけで答えてくれなかった。
こういう場合はいつも昇が酷い目に遭う事はすでに昇自身が良く分かっている。だからこそ不安になってくるのだが、そんな深刻な問題でも無いという事でもあり、安心感もあるのも確かだった。
「えっと、じゃあ、そんなに深刻な問題では無いということなのかな？」
一応閃華に確認してみる昇。そんな昇の言葉に閃華は一度頷いてから答えた。
「まあ、深刻といえば深刻じゃろうが。安心せい、酷い目に遭うのは昇だけじゃからのう」
ぜんぜん安心できませんよ！
「なに、そんなに昇の身に何かが起こるの」
「そうじゃぞ、じゃから琴未、これはチャンスじゃ」
「えっ、チャンス」
あの～、琴未さん、そこで目を輝かせないで欲しいのですけど。
「なるほど、そういう事。なら今からでも準備をしとかないと」
シエラさ～ん、それは何の準備なのですか！
「えっ、えっ、明日何が起こるの？」
ミリアさん、どうかそれ以上は追求しないでください。お願いしますから。
「大丈夫じゃよ。明日になれば分かる事だからのう」
だから明日はいったい何が起こるんですか！
昇はさまざまな不安を抱えつつも、その日は昇が倒れたという事もあって、あまり大騒ぎせずにゆっくり休ませてあげようという事になり、それぞれは自分の部屋へと帰って行った。
一人不安な昇を残して。
ううっ、明日はいったい何がおこるんだろう。未だに気になって

いる昇はなかなか寝付けないと思っていたのだが、意外と疲れがたまっていたのだろう。部屋を暗くして少し時間が経つと深い眠りへと落ちて行った。

翌朝。

「ぐぎゃあああぁぁぁ――――――――――――――――――――――――っ！」

昇の悲鳴が家中に響き渡り、シエラ達は急いで昇の部屋へと入って行く。そこでシエラ達が見たものは……ベットの上で痙攣（けいれん）を起こしてピクピクしている昇の姿だった。

「ちょ、昇、大丈夫！」

すぐに琴未が昇に駆け寄ろうとするが閃華がそれを止めた。どうやら無理に動かしたり触ったりしない方が良いとの事だ。

それでも昇をその体勢にだけはしていられないと昇を少しずつ動かし始める。身体を動かすたびに悲鳴を上げる昇をベットに寝かしつけると、朝食を昇の部屋へと運び込んだ。どうやら今日の朝食は昇の部屋での朝食会となったようだ。

「それで閃華、なんで昇はこんな状態なわけ？」

シエラと閃華が妙に落ち着いているので、そんなに大騒ぎする事でもないと察した琴未とミリアも慌てる事無く、落ち着いて朝食の席についている。昇を横目に見ながら。

そんな状態で質問してきた琴未に閃華は口の中を空にしてから答えた。

「これがエーライカーの副作用じゃよ」

「副作用？」

「そうじゃ、つまりは全身筋肉痛というわけじゃな」

あっさりと答える閃華に琴未は首を傾げた。なんでそんな副作用が起きるのかが分らないといったところだろう。そんな琴未に閃華は一旦箸を置くと説明を始めた。

「そもそもエーライカーというはエレメンタルアップの応用技じゃ。つまりは自分自身が持っている限界以上の力を引き出す技じゃ」
「それは分ってるわよ。それがどうして全身筋肉痛に繋がるわけ？」
「琴未よ、自分自身の限界を超えて力をだすんじゃぞ。そんな事をして人間の身体が持つわけがないじゃろ。つまりエーライカーは使えば使うほど身体に負担が掛かる技なんじゃよ」
「つまりは諸刃の剣」
最後にそんな言葉を付け加えるシエラ。
要するにエーライカーとは限界以上の力を引き出せる分、身体への負担を無視して無理をさせる技だという事だ。だが、その説明だと疑問が浮かんできたのか、琴未はその疑問を閃華にぶつける事にした。
「でも私達だってエレメンタルアップで限界以上の力を出してるじゃない。どうして昇だけそんな副作用がでるの」
「それは人間と精霊の違いじゃな。それに琴未はエレメンタルの能力を持っておる。じゃから副作用が出ないというわけじゃ」
詳しく説明するとこういう事だ。
精霊とは本来、肉体というべき物を持っていない。精霊は人間が生み出した論理や思考、信仰等の心で願った力が集結して生まれてくる者なのだ。だから人間のように身体を持っていない。だからエネルギーの結晶体と言っても良いだろう。
けれども精霊世界。つまりは人間世界と隣接している精霊が住んでいる世界では身体と似た物を持っている。それはこの世界で一番繁栄している種族。つまりは人間に近い姿として精霊世界ではエネルギーの結晶体を人間の姿に変えている。
だが結局はエネルギーの結晶体である精霊だ。だから病気に掛かることも無いし、怪我だってすぐに治すことが出来る。つまりは人間の身体をしていても、その機能は人間とはまったく違うものだということだ。
それは契約を交わしても変わる事は無い。ただ精霊世界で活動し

ていた身体で人間世界に干渉できるようになる。それだけの事だが、ある程度は力が落ちてしまうのが欠点といえるだろう。

そんな精霊だからこそエレメンタルアップのように限界以上の力を発揮しても負担を掛ける身体を持たないから副作用が出るはずが無い。どこまでも力を上げることが出来るわけだ。

それから琴未のようにエレメンタルの能力を持つ者は、エレメンタルの能力を発動させた時点で身体能力を精霊に近づけている。そのための身体を守る加護を受ける事が出来ている。

つまりはエレメンタルの能力は戦闘能力を精霊と同等に上げるだけではない。戦闘能力を上げて身体に掛かる負担を保護する力を自然と使っているのだ。だからこそ、その身体は精霊に近づき、精霊と同様の戦いが出来るわけだ。

要するにエレメンタルの能力とは身体への負担を保護して、精霊と同様の能力を得る能力と言える。だから琴未にエレメンタルアップを掛けても副作用が出ないはそのためである。

そんな精霊やエレメンタルとは違ってエーライカーはそうした物を持ってはいない。つまりエーライカーを使えば使うほど昇の体には負担が大きく圧し掛かり、今のように全身筋肉痛などの副作用を起こしている訳だ。昨日も昇が倒れたのはエーライカーの副作用が一気に来たからだ。

つまりエーライカーは無制限に使える技では無いという事だ。どうしても身体への負担という制限があるからには使いどころが難しい技だと言えるだろう。

そんな説明を琴未は朝食を食べながら聞き、閃華も朝食を食べながらゆっくりと説明した。

「つまりエーライカーには制限があって、今の昇はエーライカーを使ったツケを喰らってるって事？」

「まあ、簡単に言うとそうじゃな」

「なるほど、そういう事か……」

あの～、琴未、その考えている仕草はいったい何を意味している

んでしょう？
　そんな事を思う昇はベットの上で指一本動かしただけでも激痛が走るほどの状態だ。だから喋る事すらままならない。だから今までも喋らずに黙って横になっていただけなのだが、そんな昇の枕元にシエラが座ると手の中にあるものを見せた。
　それは……お粥？
　シエラが手にしていた物は暖かい湯気を出しながら、美味しいよと主張しているお粥だった。
「さあ昇、口をあけて。私が食べさせてあげるから」
「って、シエラ！　いつの間にそんな準備してたのよ」
「……ふっ、こういう場合は早い者勝ち」
「って、このっ！」
　シエラさん、ご好意は嬉しいのですが……琴未が怖いです。どうか神様、このまま何事も無いようにしてください。そんな事を心で祈る昇だが、どうやら神様は留守にしているようで昇の願いを聞き届けないまま、閃華が琴未にシエラと同じくお粥を手渡した。
　どうやら閃華も琴未にそういう事をさせるべく、すでに準備をしていたようだ。
　更に閃華はお粥をミリアにまで手渡した。けれども閃華はそれを食べて良いと言ったので、ミリアはそのままお粥を食べ始める。これでミリアが参戦する事は無くなった。これも閃華の計算したうちなのだろう。
　そうなるとシエラと琴未の一騎打ちである。二人とも睨み合いながら暖かいお粥を昇の口元へ持って行くが、昇はどちらから口を付ければ良いのかすっかり困り果ててしまった。
　あの～、こういう場合はどうすれば良いのですか？
　どこの誰かに質問したのか分らないが、そんな事を誰かに尋ねてみた昇。当然、どこからも返事が返ってくることなく。その場は膠着状態になってしまう。
　そこへ閃華が琴未に向けて要らない進言をする。

「琴未、良いからそのまま昇の口に入れてしまうんじゃ」
琴未は頷くとお粥の乗った蓮華(れんげ)をそのまま昇の口へと入れようとするが、当然シエラが持っている蓮華がそれを阻む。
睨み合いながら蓮華をぶつけ合うシエラと琴未。当然そんな事をしていれば暖かいと通り越して熱々のお粥を乗せた蓮華が二つとも震える事になる。
あの～、オチがもう見えたのでそろそろやめて欲しいのですけど。というか、このままだと僕がヤバいよね！　酷い目に遭うよね！　絶対にそうなるよね！
そんな予想を展開する昇。そして事態は昇の予想通りへと発展していく。
つまりはぶつかり合った蓮華が両方ともその場で弾けて、熱々のお粥は昇の口に入る事無く、顔へと落下する。
「……」
「……」
そんな光景に言葉を失うシエラと琴未。そして……
「ぎゃぁ――――――――――――――――――――――――っ！」
昇の悲鳴が再び家中に響き渡った。

エーライカーの副作用とも言える筋肉痛は翌日には全快しており、昇はいつもの日常を過ごしていた。
そして全てが終わってから数日後。昇達は空港へと着いていた。
空港にいるのは昇達だけではなく、フレト達一同と与凪までもがその場所に居た。
「もうそろそろのはずだがな」
フレトが落ち着きのない面持ちでそんな言葉を口にする。フレトが落ち着かないのもしかたないだろう。なにしろ今日、この日にフレトの妹であるセリスが治療の為に来日するからだ。
戦いが終わった後に交わされた約束。それがセリスの治療を昇達

に任せるという事である。けれども昇達に任せっきりとはいかないので、フレト達も当然セリスの治療に加わる事になった。
なんにしても昇が描いた未来像になったわけだから。昇は一安心していた。後はセリスを治療するだけだ。
与凪の予測では時間は掛かるが、決して治らない病気ではないらしい。詳しい検査と治療はセリス本人が来ないとやりようがない。
そこで顔合わせも兼ねてセリスを出迎えようと全員して空港で待っているわけだ。
「ところでフレトさん、セリスさんは何時の便で来るの？」
そんな昇の質問にフレトは訝しげな顔をすると次の事を言い出した。
「俺の事はフレトでいい。セリスもそう呼んでやってくれ」
「そお、じゃあ、そう呼ばせてもらうよ」
「ああ」
「それでフレト、セリスは何時の便で来るわけ？」
フレトに言われて言い直した昇の問い掛けにフレトは大げさに鼻で笑ってみせると、少しだけ自慢げに口を開いた。
「何時の便だと、セリスは病人だぞ。そんなセリスを一般の飛行機で来させる訳が無いだろう」
「えっ、それじゃあ、どうやって？」
「当然、自家用の専用飛行機だ」
「へっ」
あまりにも唐突な言葉に昇は呆然としてしまうが、今までのフレトがしてきた生活を見てみれば、そんなに違和感が無い事だと思った。
わ～、今更だけどフレトの家ってお金持ちなんだ。あぁ、そういえば今も高級ホテルに泊まってるぐらいだからね。グラシアス家って相当な資産家なんだ。
今更ながらそんな事を思う昇。そんな事を考えているとある疑問が昇の頭に浮かんできた。

「そういえばフレトもずっとこっちに居るんでしょ。ずっとホテルに泊まるわけ？」

セリスはフレトにとって掛け替えのない存在だ。そんなセリスを一人だけ残して祖国に帰る訳には行かないと、戦いが終わった後にフレトはセリスの病気が治るまでこちらに住む事になったわけだが、フレト達は未だにホテルを利用している。

けれどもずっとホテル暮らしとは行かないだろうと思い。昇はそんな質問をしてみたのだが、フレトは心配ないとばかりに親指を立ててみせる。

「それならば心配ない。すでに住む場所は決まっている。今は改装工事中だ。それが終わり次第、俺もセリスもそちらに移り住む予定だからな」

「そうなんだ。それなら当分は近くに住む事になるんだね」

「ああ、その方がセリスの治療にも良いからな」

昇達がそんな会話をしていると、どこからか現れた半蔵が二人の前に現れた。

「若様、妹様がご到着したようです」

「そうか、では行くとするか」

フレトがそう全員に告げると揃って空港から滑走路へと出て行く。さすがに専用機を使っただけにあって、一般の搭乗ゲートは通らないで滑走路まで行けるようだ。

昇達がある一機の飛行機前に着くと、そこには既にセリスの姿があった。

あの子がセリスか。昇はセリスを見るのは初めてだが、フレトから話しには聞いていた。

セリスはクリーム色にウェーブの掛かった髪をしており、容姿から昇より二、三歳年下という感じだ。そんなセリスは車椅子に乗っており、病気の深刻さを物語っているが、その顔からはまったく辛いという印象は受けなかった。それはセリスの笑顔がそんな印象を昇に与えなかったのだろう。

「セリスっ！」
フレトはセリスの姿を見るとすぐさまセリスの元へと向かい。そのまま抱きしめようと両腕を広げてセリスに飛びつく……のだが、セリスは器用に車椅子で真横に瞬時に避けると兄の包容を回避した。
……えっと、ここは再会の感動するシーンだよね。そんな事を思う昇だが、セリスは笑顔で真横に突っ伏しているフレトに向かって言葉を掛けた。
「お久しぶりですね、お兄様。お会いできて嬉しいですわ」
あの～、その割にはそっけないと感じるのは僕だけでしょうか？
「俺もだぞ、セリス」
フレト！　いつの間に復活してたの！
「さあ、セリス。共に再会を喜び合おう」
あっ、またフレトが抱き付きにいった……えっと、その包容をまたしてもセリスが避けたのは僕の見間違えでしょうか？
どうやら再び包容しようとしたフレトだが、再びセリスに避けられしまったようだ。そんなフレトをセリスは「相変わらず可笑しなお兄様」とだけ笑うと昇達のところにやってきた。
そしてラクトリーを始め、フレトの精霊達は一斉に片膝を付いて頭を下げた。
「ラクトリー、咲耶、半蔵、レット。皆、お兄様の力となって戦ってくれた事に感謝します。これからもどうかお兄様の力となってくださいね」
『はっ』
ラクトリー達は一斉に返事を返した。そんな光景に昇は呆然としてしまった。
えっと、ラクトリーさん達と契約を交わしたのってフレトだよね。なんかセリスの方が偉そうに見えるんだけど。そんな感想を抱く昇の元へセリスがやってきた。
「あなたが昇様ですね。初めまして、セリス＝グラシアスです。これからの事、よろしくお願いしますね」

「えっ、あっ、はい、初めまして、こちらこそよろしくです」
あまりにもしっかりとした挨拶をしてきたので昇は慌ててしまった。どうやらセリスは事前に昇達の事も聞いていたようで、それぞれにしっかりとした挨拶をして周った。
そんなセリスの姿を見ていると突然フレトが肩を組んできた。
「どうだ、セリスは？」
「うん、可愛い子だね」
正直な感想を口にする昇。確かにセリスはその容姿もフレトに似てかなりの美少女であり、あのしっかりとした性格が更にセリスの人格を上げている。だから昇がそんな感想を抱いても不思議ではない。昇だけでなく、誰が見てもそんな感想を抱くだろう。
昇の言葉にフレトは満足げに頷くと更に強く肩を組んできた。
「絶対に惚れるなよ」
えっと、それは脅迫ですか。というかフレト、顔が近いよ。
「大丈夫だよ、そんな心配しなくても」
とりあえずそんな言葉を口にする昇。確かにセリスは可愛いと思うが、昇の周りには既にシエラ達が陣取っている。今更セリスに思いを寄せる事は無いと昇自身がそう思うほど、昇の周りには美少女で溢れている。
だからこそフレトは心配なのだろうか、昇に念を押してくる。
「絶対だぞ。手を出したらお前がこの世から消えると思え」
えっと、そこまでされるんですか。というかフレトはそこまでするんですか？
「だから大丈夫だよ。僕ってそんなに信用が無い」
「それはそうだろう。お前の周りを見えれば心配にもなる」
あぁ、言われればそうですね。
フレトの言葉に納得してしまった昇。確かに他人に言われると自覚せざる得ないのだろう。自分の周りに美少女が揃っている事を。
だからこそフレトも心配するのだろうが、この反応はいかにも過敏すぎるのではないかと昇は思ったので、その事を直接聞いてみる

事にした。
「とりあえずフレトが心配している状態にはならないよ。うん、それは約束する。でも……」
「なんだ」
昇が言葉を濁してきたのでフレトは昇から離れると向かい合った。
「フレトにはそういう人は居ないの？　恋人とか」
「何を言う！」
昇がそんな質問をぶつけるとフレトは思いっきり握り拳をつくり、はっきりと宣言する。
「セリス以外の女に興味などはない！」
言い切っちゃったよ、この人！　というかフレト、それはそれで問題じゃないの？
そんな疑問を抱いたが、先程のセリスの態度やフレトの言葉を聞いて昇は確信を抱いていた。そう、フレトがシスコンであると。
ラクトリーさんから二人の事は聞いていたけど、まさかフレトがここまでシスコンだとは思ってなかったよ。昇がそんな事を思っていると一通り挨拶を終えたセリスが二人の元へ戻って来た。
「昇様、今回の事はなんとお礼を言っていいのか。いくらお礼を重ねても言い様が無いぐらい感謝しておりますわ」
「えっと、そこまでお礼を言われる事じゃないよ。それから僕の事をそんなに仰々しく呼ばなくても大丈夫だから。もっと気楽に呼んでもらって構わないよ」
「分りましたわ、では昇さんと呼ばせてもらいますね」
昇としては呼び捨てでも一向に構わないのだが、セリスとしては呼びづらいのだろう。だからあえて昇はそこまで訂正はしなかった。
それからセリスは笑顔で昇に告げるのだった。
「それで昇さん、今回の事で是非ともお礼をしたいのですけど」
「いいよ、そこまで気を使ってもらわなくても」
「いいえ、今回の事はすべて昇さんのおかげです。ですので是非ともお願いします」

う～ん。
さすがにそこまで言われると断り切るのも悪い気がしたのか、昇は素直に首を縦に振る事にした。
「じゃあ、そのお礼を貰っておくよ」
「良かったですわ」
昇がそう言ったのがよほど嬉しかったのか。セリスの笑顔は一層輝きを増し、光り輝いて見える。確かにこんな可愛い妹がいればフレトの気持ちも分るかもしれないと昇が思うほどだ。よほど昇には可愛く見えたのだろう。
「では、こちらに」
そんなセリスが手招きしたので近づく昇だが、セリスとしてはもっと近寄って欲しいらしく。昇は前屈みになる形でセリスに近づいた。
そんな昇の頬にセリスは口付けをした。
「なっ！」
突然の事で昇は慌ててセリスから身を退く。
「今の私に出来る事はこれぐらいですから、これでお礼にさせてくださいね」
いや、ねって言われても。困るのは……はっ！
セリスのキスに驚いている昇だが後ろから放たれている殺気に気が付くと、慌てて後ろを振り向いて弁明を開始する。
「いや、これは、違うから。フレト、落ち着いて……って！　すでにアルマセットしてる！」
「た～き～し～た～の～ぼ～る～」
振り向いた先にはすでに怒り心頭のフレトがおり、その手にはマスターロッドが握られていた。
そんなフレトの姿を見て、うろたえながらセリスから遠ざかっていく昇だが、またしても後ろから殺気を感じる事になった。
だいたい殺気を放っている人物は分ってはいるが、このまま振り向かない訳には行かないとばかりに、昇は恐る恐る後ろを振り向い

た。
「えっと、これはあくまでもお礼であって、特別な意味はないかと」
そんな言葉を口にするが彼女達には効果が無い。
「その割には嬉しそう」
いえいえシエラさん、そんな事は無いですよ。
「私のキスは拒んでも、あの子のキスは受けるんだ」
いえいえいえ、琴未さん、そんな事は無いですよ。というか、琴未のキスを拒んだ事は一度も無いと思われます。
「ずるい～、ずるい～」
いやいや、ミリアさん、そんな駄々をこねられても困るんですけど。
「まったく、これだから女たらしの昇は困ったものじゃな」
あの～、閃華さん、それはワザとですよね、ワザと僕を追い込んでますよね。
「まあ、お相手はセリス様だからしかたないですよね」
なんでラクトリーさんまで僕を追い詰めるんですか！　しかもかなり楽しげなんですけど！
「やはりここは一つ、お仕置きが必要なのでは」
お仕置きってなんですか与凪さん！　というか、その期待に満ち満ちた目はいったいなんなんですか！
「そうですね、殿方を仕付けるのも女子の務めと思われます」
咲耶さんまで参加してる！　というかそんな務めは捨ててください！
「半蔵、レット、取り押さえろ」
「御意」
「はっ」
二人とも楽しげに僕に近づいてくる！　というか、フレトの目が本気なんですけど。どうする、どうしよう、どうすれば良いんですか！
そんな事を心の中で叫ぶ昇の瞳にある人物が映る。そう、今回の

事態を招いた張本人であるセリスだ。
セリスなら、なんとかしてくれるだろうと思った昇は半蔵とレットに追い詰められる形でセリスの元へと逃げ込む。そんなセリスが昇に笑顔を向けながら口を開いた。
「くすっ、話に聞いていた通りに楽しい方々ですね」
「……」
えっと、あの～。
「それだけですか――――――――――――――――――――っ！」
そんな昇の叫び声が飛行機の滑走音に掻き消され、昇の命は風前の灯火になったという。
結局はいつもの通りの結末を送る事になった昇だが、そんな昇も心の片隅ではこんな状況を少しは楽しいと感じつつあった。
そしてそれがあそこまで続くとは、今の昇にはとても想像出来なかった事のようだ。

第九十七話　セリスの来日（後書き）

さてさて、そんな訳でお送りしましたエレメは如何でしたでしょうか。まあ、いつも通りの展開になってしまいましたが、これもお約束という事でやらない訳にはいかないと最後のシーンを入れさせてもらいました。

さてさて、これで他倒自立編も終わりかと思われますが、それは間違っています。実は後一話、他倒自立編が残っておりますので、それが終わったら次の編にいきますね。

……ふっふっふっ、実は私にしては珍しく次のプロットがすでに出来上がっているのですよ。いや～、いつもは中途半端にしかプロットは書かないんですけどね。まさかプロットが完成するとは思いも寄りませんでしたよ。

そんな訳で次編は『白キ翼編』となります。

……まあ、サブタイだけで誰がメインの話かが大体予想出来ますよね。まあ、そんな訳で、その片がメインとなる話になっております。

さてさて、そんな訳で次編の紹介も済んだ所でそろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いしますね。更に評価感想もお待ちしております。

以上、正月早々から慌しかった葵夢幻でした。

第九十八話　築き上げた物

「うん、これなら問題は無いですね」
いつもの生徒指導室で与凪がそんな言葉を口にした。
セリスが来日した次の日。フレトがなるべく早くセリスの状態を調べて欲しいとの要望で昇達は全員でいつもの生徒指導室に集っていた。そこにはセリスの姿もあり、セリスの周りにはいろいろなモニターのような物が浮いており、いろいろな情報を表しているようだった。
それらの情報は与凪とラクトリーの前にあるモニターに整理されて表示されており、その結果として与凪はそのような言葉を口にしたのだった。
「じゃあ、セリスは治るんだな」
真っ先に尋ねるフレト。そんなフレトにラクトリーは笑顔を向けて答える。
「はい、マスター。確かに時間が掛かりそうですけどセリス様は完治しますよ」
ラクトリーの言葉に一安心したかのように大きく息を吐くフレト。そんな光景を昇も一安心したかのように軽く息を吐いて事態が上手く行った事を喜んだ。
そんな時だった。琴未が手を上げて質問をぶつけてきた。
「セリスさんが治るのは分ったんだけどさ。いったいどうやって治療するの？　投薬？　それとも別の何か？」
琴未も琴未なりにセリスの事を心配していたのだろう。だからそんな質問をぶつけてきたようだ。そんな琴未の疑問に与凪は首を横に振る。
「いいえ、特別な事は何もしませんよ」
「えっ、じゃあ治療っていうのは？」
首を傾げる琴未。それは昇達を始めフレトも良く分からないとい

う顔をしていた。そんな光景を見て閃華が一歩前に出ると説明を開始する。

「そもそもじゃな、今回の治療は精霊王の力を使って自己の自然治癒能力を飛躍的に上げて治そうというものなんじゃ。じゃから精霊王の力が及ぶ範囲内で精霊王の力をほんの少しだけ流し続ければ自然と完治するもんなんじゃよ」

「それって何もしないのと同じじゃないの？」

閃華の説明を聞いてそんな疑問を再びぶつけてきた琴未。まあ、あの説明では琴未がそう感じても無理は無いだろう。

そんな琴未に与凪は細くするかのように話を続けてきた。

「まあ、私達が特別に何かするってワケではないのは確かですよ。でも何にもしないわけじゃないですよ」

「じゃあ、何をやってるわけ？」

「そもそも琴未よ、今現在は精霊王の力がどうなっているのか知っておるのか？」

そう言われると琴未は精霊王の力に関しては知ってはいなかった。閃華達が封印しているとしか知らず、細かい事までは知らない。

そんな琴未が昇達の方へ顔を向ける。けれども昇も首を横に振る。どうやら昇も詳しい事は知らないようだ。当然、ミリアも同じように首を横に振るだけだった。

そんな中でシエラが口を開いてきた。

「精霊王の力は厳重に封印されている。だからまったくその力が流れ出る事は無い。でも今回の治療に精霊王の力が必要なら、精霊王の力を流すバイパスが必要になってくる」

「そういう事じゃな。そのバイパスを作るのが今回の治療という事じゃ」

それでも良く分からないのか琴未は次の説明を求めて、閃華に視線だけを送って黙り込む。そんな琴未に閃華は溜息を付くと閃華は話を続けた。

「簡単に説明するとじゃな。大きな風船を精霊王の力じゃと仮定し

よう。そこに小さな穴を開けて少しずつ流れ出てくる風をセリス殿に当てるわけじゃよ。そうする事でセリス殿は自然と病気が完治するという訳じゃな」

『おぉ～、分りやすい』

琴未のみならず昇やフレトまで同じ言葉を口にする。どうやら皆して分っていなかったようだ。そんな感心した言葉を発した者達に呆れた視線を送るのはシエラに閃華に与凪にラクトリーだった。

まあ今回のケースは情報収集や精霊王の力に関わっていないと分りずらい部分が多い事も確かなのだが、それでも昇はその件に関しては与凪や閃華に任せっきりだったなと感じずにはいられなかった。

「けどまあ、今回も無事に丸く収まってよかったわよ」

全てが終わってようやく一安心した琴未が大きく身体を伸ばしながら、そんな言葉を口にするが、そんな琴未の言葉に閃華の目は輝くと意地悪な笑みを浮かべながら琴未に話しかけてきた。

「まあこの件に関してのみは丸く収まったようじゃがのう。琴未よ、何か忘れておるのではないのか？」

そんな事を尋ねてくる閃華に琴未は首を傾げる。どうやら何の事かまったく分らないようだ。そんな琴未に閃華は意地悪な笑みを浮かべたまま話を続ける。

「そろそろ夏休みも終わりじゃぞ。琴未はこのまま夏休みが終わっても大丈夫なんじゃな」

『……あっ！』

同時に声を上げる昇と琴未とミリア。どうやら三人とも今回の騒動ですっかり忘れていたようだ。そう、夏休み前に出された宿題の事を。

「ど、どうしよう昇」

すっかり宿題の事を忘れていた琴未は昇にすがり付くが、その昇も宿題の事はすっかりと忘れており、琴未にすがり付かれても困るだけだった。

「こ、こうなったら最後の手段を使うしかないよね」

ミリアが突然そんな事を言い出したので昇と琴未の視線はミリアに集中する。
「ミリア、いい作戦でもあるの」
そんな琴未の質問にミリアは頷くとそのまま歩き出し、ラクトリーの近くで立ち止まった。
「……」
そんなミリアの行動を見守る一同は自然と静かになり、誰も言葉を発する者は居なかった。
そしてミリアは……いきなりラクトリーに抱きついた。
「どうにかしてお師匠様！」
「いきなり他力本願！」
ミリアの行動に思わず突っ込みを入れる昇。けれどもミリアは本気らしく、瞳をウルウルと涙目にしながらラクトリーに懇願する。
そんなミリアに対してラクトリーは優しく頭を撫でてやると口を開いた。
「自分の事は自分でなんとかしなさい」
そんなラクトリーの言葉がミリアに刺さり、今度は昇に抱き付くミリア。
「断られた！」
いや、うん、見てたからそれは良く分かってるよ。そんな事を思う昇はミリアの頭を撫でながら宿題の事をどうすれば良いのか策を巡らすが、どうしても良い案が出てこない。
そんな昇がカレンダーに目を向ける。日付はすでに夏休みが終了するまで数日を切っている。今からではあの量を処理できるとは到底出来る事では無いと昇は思っていた。どうして良いのか分からずに昇は視線を泳がせるとある人物達が目に映った。
それはシエラに閃華に与凪である。三人とも昇達と同じく宿題が出ているはずなのに余裕をかもし出している。そうなると昇の思考はある推測を立てる。
三人ともこの状況で落ち着いているよね。という事は……。昇が

そんな思考を巡らしているとシエラの方から昇に近づいてきた。
そして未だに昇に引っ付いているミリアを引き剥がすとシエラは昇の手を取った。
「じゃあ行こう」
あの～、シエラさん、どこに？
「って、シエラ、いったい何をやってるのよ」
当然のように琴未がそんな事を言い出してくる。そんな琴未にシエラは勝ち誇ったかのような笑みを浮かべながら口を開いてきた。
「私は宿題を終わらせてる。だからこのままデートをしてくれれば昇に写させてあげる。それと琴未にも、そこをどくなら写させてあげてもいい」
「ぐっ」
そんな言葉を口にするシエラに昇はやっぱりそういう事かと納得した。先程の問での余裕は三人が宿題を終わらせている証拠だった。だからこそ三人とも昇達のように慌てる事がなかったのだ。
その事にやっと気付いた琴未はその場で怯むしかなかった。確かに今から自力でやったのでは間に合わない量がある。だから誰かに手伝って欲しいのは確かだった。それは昇もミリアも同じであり、その場は膠着状態となるが、そんな光景をいつまでも傍観している閃華ではなかった。
「大丈夫じゃ琴未よ。琴未の宿題は私が何とかしてやるからのう。じゃからそこ場で昇を連れ去って勉強会へと雪崩れ込むんじゃ」
「うん、わかったわ」
閃華らしい妙案といえるだろう。確かに勉強会という名目で昇を合法的に連れ去る事が出来る。そのうえシエラの策略を阻止できて、昇を始め、琴未とミリアの宿題まで終わらせる事が出来る。つまりは全てが丸く収まるわけだ。
けれどもそんな作戦をシエラが容易に受け入れる訳が無かった。
「なら強行策に出るだけ」
シエラはそういうと昇の腕を絡めながら両手を胸の前で組むと一

気に精神を集中させて、それを解き放った。
「精界展開」
シエラを中心に生まれた光り輝く光の柱は一気に広がり学校を包み込む。
「って、こんな場所で精界を展開させて大丈夫なのか」
世界が真っ白になるなりフレトがそんな疑問をぶつけてくるが与凪は笑顔で答える。
「大丈夫ですよ。学校の周辺には精界を認識できないように結界が張ってありますから。だからこれもいつもの光景ですね」
「そ、そうなのか」
いつもの光景と言われて驚きを隠せないフレト。また、毎回こんな事をやっていれば驚きもするだろう。
そしてフレトが驚いている間にもシエラは一気に行動を開始する。
「ウイングクレイモア」
「雷閃刀」
「アルマセット」
逸早く精霊武具を身にまとったシエラはウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて、生徒指導室の窓を突き破って一気に外に飛び出すが、その後を追うかのように琴未が右足を大きく踏み出すと雷閃刀を窓の外に向かって突き出す。

―昇琴流　雷華一輪刺突―

雷閃刀から放たれた雷華一輪刺突は一気に雷の花を広げて、宙を舞うシエラを捕らえようとしていた。いつものシエラなら簡単に避けられただろう。けれども今は片腕に昇という重しを抱えている状態だ。動きにいつものキレがなく、どうしても精細が欠けて来る。
そして琴未の放った雷華一輪刺突は見事に直撃するのだった。そう……昇に。
昇に雷華一輪刺突が当たった事でシエラにも電撃が伝わり、その

衝撃で昇を掴んでいた腕を放してしまい。昇は重力に従ってその場から落下を開始する。そんな昇を再び捕獲しようと一気に降下するシエラだが、そんなシエラの前に琴未が立ちはだかった。

どうやら琴未は雷華一輪刺突を放った直後には、もう生徒指導室を飛び出していたらしい。ちなみに、生徒指導室は三階にあるが、エレメンタルで能力がアップしている琴未にとっては飛び降りても何とも無い高さといえるだろう。

だから琴未は校舎から飛び降りると、真っ先に昇の落下地点に走るが、シエラが追ってくるのを見て、それを阻止すべくシエラに向かって跳び上がったのだ。

その二人はそのまま戦闘の準備があったから問題は無いだろう。けれども昇はそうでは無い。いきなり連れ出されて、攻撃を喰らって、そのまま救助されずに落下しているのである。ああ、やっぱりこうなりますか。そんな事を思う昇。どうやらこういう事態を予想していたようだ。

だからこそ、昇は自力で着地する。

そう、昇もシエラ達が精霊武具を着用した時にアルマセットで自分の武器と防具を装備しており、このような状況になっても対処できるようにしていたのだ。

昇の防具である黒いコート。通称『八咫烏』は衝撃を和らげる効果がある。だから精霊との戦いでも、致命傷を受ける事無く戦う事が出来、今回のように高所からの落下にも対処できるようになっている。

そんな昇は着地すると逸早く、その場から退避する。なにしろ琴未は昇の着地地点を予想して跳び上がったのである。つまりは昇が居た場所がそのままシエラと琴未の戦闘地点になる事は明白である。

だからこそ昇は逸早くその場から去ったのであった。

「ただいま～」

「おかえりなさい、というか滝下君は戻って着ちゃったんだ」
与凪さん。第一声がそれですか？
昇は再び生徒指導室に入るとそのような会話が行われた。どうやら与凪としては何かしらの期待をしていたようだが、そうはならなかったようだ。
そして外では未だにシエラと琴未の戦闘が行われおり、フレト達は完全に傍観していた。けれどもフレトは戻って来た昇に気付くと昇の元へとやってきて、昇の肩にポンッと片手を置いた。「お前も大変なんだな」
大きなお世話ですよ！　そんな突っ込みを入れたい昇だが、シエラ達の戦闘を目の当たりにするとそんな同情でも少しはありがたいと思う自分が居るのではないのかと疑問にも思うようになっていた。
結局は涙を流しながら頷くしかない昇にフレトは同情の眼差しを送る。そんな二人の間に閃華が割り込んでくるとこれからの事を尋ねてきた。
「……結局、勉強会をやるしかないかな」
「そうじゃな、それしかないじゃろうな」
結局は閃華の思惑通りになった事に疑問を抱く昇だが、宿題を片付けるのに他に方法が無いからには閃華の提案に従うしかないかなと泣く泣く納得せざる得なかった。
そんな昇の元へセリスがやって来る。そして表を指差した。
「あの昇さん、表のお二人はこのまま放っておいて良いのですか？」
そんな事を尋ねてくるセリスに閃華が代わりに軽く手を振って答える。
「大丈夫じゃよ、飽きたら帰ってくるじゃろ」
「はぁ」
閃華の答えに言葉にならない答えを返すセリス。まさかこんな事態に陥るとは思ってもいなかったのだろう。それはフレト達も同じだ。
「というか、あいつら本気でやりあってないか？」

「そうですね、私と戦った時以上の気合を感じますけど」
そんな言葉を口にするレットと咲耶。確かに二人が言ったとおりシエラと琴未の二人は昇を掛けて本気で戦っている。けれども昇達に言わせれば、そんな事はいつもの事であり、特別に気に掛けることでもないのだと説明する閃華。
そんな説明を聞いて言葉を無くすフレト達。さすがにこれがいつもの光景と言われれば誰しも言葉を失うだろう。けれどもこうして目の当たりにすると驚きを通り越して呆れるしかないとばかりの目になっているを昇はしっかりと見ていた。
あ～、やっぱり皆さんそんな目になりますよね～。昇がそんな感想を抱いている中で未だにラクトリーにしがみ付いているミリアを発見した。どうやら未だに宿題の事でラクトリーに泣き付いているようだ。
「なんというか、結局はいつもの光景になってきてるね」
「なんですか、その言い草は、何かご不満でも？」
「そうじゃぞ昇。何か不満でもあるのか」
昇の言葉にそんな言葉を返してくる与凪と閃華。そんな二人に向かって昇は首を横に振る。
「まあ、こんなもんじゃないかな」
昇はそんな言葉を口にすると辺りを見回す。いつもの光景に新たに加わった新たな仲間。そんな人達を見て昇は満足げに頷き。そんな昇を見ていた閃華と与凪も笑顔を交わす。
そう、こんな光景こそが昇が他倒自立の先に築き上げた光景なのだから。

翌日、昇達は昇の部屋へと集っていた。もちろん宿題を片付ける勉強会を開く為である。
「さて、それじゃあ始めますか」
そんな事を言い出して自分の宿題を広げる昇。

うっ、まだ半分ぐらい残っている。自分の宿題を見てそんな感想を抱く昇。そして隣にいるミリアの宿題を見ると真っ白だ。どうやらミリアはまったく手を付けていなかったらしい。そしてもう一方の隣にいる琴未の宿題に目を向けると昇と同じく半分ぐらいまでは進んでいるようだ。どうやら琴未はそれなりに宿題を進めていたらしい。

そんな状況を昇が確かめているとシエラが昇と琴未の間に座り、すでに終わっている自分の宿題を広げてきた。ご丁寧に琴未に見えないようにノートを直角にして昇にだけ見せている。

「って、シエラ。素直にノートを開きなさいよね！」

「嫌」

当然文句を言ってくる琴未にシエラは一言で返す。そんなシエラの対応に琴未は思わず握り拳に力を込めるが、ここは珍しく閃華が仲裁に入った。

「ほれほれ琴未、今日からはそのような時間はないんじゃぞ」

「けど閃華」

「ほれ、こっちのノートを写していけばよいじゃろ」

そういうと閃華は自分の宿題を琴未の前に広げて見せた。確かにそこに位置なら全員に見える場所であり、昇も琴未も宿題を写すには打ってつけの場所だった。

けれどもそんな中でミリアが文句を言ってくる。

「う～、私はまだそこまで進んでないよ～。最初から見せて～」

そんな文句を言ってくるミリアだが、昇も琴未もそんなミリアに構っていられるほどの状況ではなかった。けれども突如としてミリアの頭を誰かが撫で始めた。

「大丈夫ですよミリア、あなたの宿題は私が見てあげますからね」

「お、お師匠様！」

いつものように突如として現れたラクトリーにミリアは驚きと感動の声を上げる。どうやらミリアの惨状を察していた閃華が呼んでいたようだ。

そしてミリアは真っ白な宿題をラクトリーに押し付けるように見せる。
「なら最初っから埋めていってください」
どうやらミリアは全てラクトリーに答えを教えてもらうつもりらしい。そんなミリアにラクトリーは笑顔で一言。
「ダメですよ」
「……へっ？」
ラクトリーの言葉に呆然とするミリア。そんなミリアにラクトリーは話を続ける。
「そもそも宿題というのは自力でやらないと意味が無いものなのです。ですからミリア、分らない所は教えてあげますから、自分で出来る場所は自分でやりなさい」
そんな言葉がミリアだけでなく昇や琴未にまで刺さる。確かにラクトリーの言うとおりなのだが、今はそんな事を気にしてはいられない状態だ。だからこそ昇と琴未は宿題を丸写しをしているのだが、ラクトリーはこんな状況でも非情な言葉をミリアに掛けるのだった。
「そんな～、お師匠様～」
「ほらほら、早く始めないと終わりませんよ」
泣き付くミリアをなだめながら宿題に向かわせるラクトリー。どうやらこんな状況でもラクトリーが持つ師匠としてのやり方は変わらないようだ。
そんなこんなで時間が過ぎ、三十分もしないうちにまたしてもミリアがラクトリーに泣き付くが、ラクトリーはミリアが泣き付くたびに宿題に向かわせるのだった。
そうして時間が正午になった頃、昇の母である彩香が昼食を持ってきてくれた。ラクトリーはそのまま綾香と挨拶を交わし簡単に紹介や世間話をした後に再び戻ってきて、昇達は宿題を一時撤去して昼食となった。
その昼食の席で昇はある事が気になったので、その質問をラクトリーにぶつけてみた。

「そういえばラクトリーさんは、ここに居て大丈夫なんですか？セリスの事もあるし」

確かにセリスの事が関わっているからにはラクトリーも暇では無いはずだと昇は思っていたのだが、ラクトリーからは呑気な声で答えが返ってきた。

「ええ、大丈夫ですよ。ほとんどの事は与凪さんがやってくれてますし、私に出来る事などはほとんどありません。それに今はマスターがセリス様の傍に居ますからね。ですから私がここに居ても大丈夫なんですよ」

ああ～、なるほど。フレトがセリスの傍に居ると聞いて納得する昇。なにしろ昇はフレトがセリスを溺愛している現場を見ているのだ。だからこそラクトリーぐらい抜けていても何の支障も出ないのだろう。

それだけではない。フレトの傍には完全契約をした半蔵達もいる。そのうえ事態が丸く収まった今では特別な問題でも起きない限り、フレトやセリスの身に何かが起きるような事は無いだろう。だからこそラクトリーはミリアを心配してこうして、ここに居るという訳だ。

そんな事を話していると話の内容は自然にフレト経ちの事へと移り変わっていった。

「フレトって昔からああなのかな？」

「昔からって？」

昇がふとした疑問を口にして、その疑問を繰り返す琴未。そんな疑問にラクトリーは少し困りながら答えてきた。

「う～ん、私達が契約したのも数ヶ月前ですからね～。そんなに昔から知っているわけでは無いですが、私達が契約をした頃にはマスターはすでにあんな感じでしたよ」

「という事は……少なくともかなり前からシスコンって訳ね」

琴未、それは容赦ないね～。琴未の言葉にそんな感想を抱く昇。けれども昇も琴未の感想に同感していた。なにしろフレトのシスコ

ンぶりを目の当たりにすれば嫌でも納得せざる得ないだろう。それはシエラを始め閃華達もそうのようだ。

「戦っている時からかなりの信念を感じておったんじゃが、その根底がそのような理由じゃとはのう。正に真のシスコンじゃのう」

確かにその通りですけど、閃華さんもバッサリいきましたね～。

「けど愛の形は人それぞれ、あれはあれでありかも」

いやいや、シエラさん。兄妹でそれは絶対に無しですよ。

「確かにマスターのセリス様に対する溺愛ぶりは異常ですからね。そこまで言われて当然かもしれませんね」

いやいやいや、ラクトリーさん。せめてラクトリーさんだけはフォローしてあげましょうよ。

そんな会話が楽しく繰り広げられ、ミリアが昼食をかき込む事に夢中になっている間にほのぼのとした空気が広がっていた。

それから昼食が終わると勉強会が再開され、それは数日に渡って繰り広げられて昇達はなんとか宿題を無事に片付けられたという。

まあ、昇と琴未は宿題を丸写しだし。ミリアは終始泣きながらラクトリーから勉強を教わっていたそうだ。けれども終わった事には変わりなく。次の日からまた学校の日々が始まると思うと昇は一安心する暇も無く、また騒がしい日々が始まるのかと半分は心配に半分は少し楽しみに寝床へと入って行くのだった。

そして新学期初日。恒例行事の無駄に長い話を聞かされる新学期の集会も終わり、昇は自分の机に久々に座りまったりとしていた時だった。

突如として教室のドアが勢い良く開くと琴未が姿を現して真っ先に昇の元へ駆け寄ってきた。

「昇、大変よ、大変！」

「いやいや、琴未、ちょっと落ち着いて。いったい何が大変なの？」

琴未の慌てっぷりに昇はそんな言葉を掛けるが、琴未は相当取り

乱しているようで昇を引っ張り上げるとそのまま教室を出ようとする。そんな出来事に何事かとシエラ達も昇と同行して琴未に引っ張られる形で教室を後にする。

そうして琴未に連れてこられたのは隣の教室である。ドアは空いており、教室の片隅には人だかりが出来ている。そんな光景に昇は首を傾げる。いったい何が起きてるのか分っていないようだ。だからこそ琴未の顔を見る。見られた琴未は説明を開始する。

「フレトよ、フレト。フレトがここに転校してきたのよ」

「……へっ？」

あまりにも予想が出来なかった言葉に昇はすっとんきょうな声を上げる。そして人だかりを指差しながら琴未に尋ねた。

「じゃあ、あの人だかりの中心にフレトが？」

「そうなのよ！」

「その通りですよ」

「って、咲耶さん！」

「はい、おはようございます、昇様」

琴未との会話に割り込んできた咲耶が丁寧に頭を下げて挨拶をしてきた。そんな咲耶に釣られる形で昇も丁寧に挨拶をする。

「って、そんな場合じゃない！」

咲耶のゆっくりとした行動に釣られてしまった昇だが、自分を取り戻すと咲耶に尋ねる。

「本当にフレトが転校してきたの？　というか咲耶さんまで？」

フレトの転校も驚きだが、咲耶が学校の制服を着ていた事にも昇は驚きを示した。

「はい、主様も昇様とご一緒のご年齢。ですから、この学校への転校の手続きをしました。それに昇様がここで活動されているからには、セリス様の治療のためにも昇様のそばに主様がおられた方がよろしいとの判断で私とラクトリーも同行した次第でございます」

事情を一気に説明する咲耶。そんな咲耶の説明を一通り聞いた昇はフレトの周りにいる人だかりを指差した。それには咲耶も苦笑い

するしかないようだ。
　まあ、確かにフレトは外見だけでも目立つのに、転校してきたって事ならああなるよね。咲耶の反応に昇は納得したかのように頷く。けれども、そんな昇にミリアが震えながら腕に抱きついてきた。そしてミリアは咲耶に質問した。
「お、お師匠様もここに来るの？」
「ええ、さすがに外見上の理由で学生としては無理ですから、教師として赴任してますよ」
　いったいいつの間にそんな手続きをしたんだろう？　咲耶の答えにそんな疑問を抱く昇だが、ここには与凪が居る。それに森尾も昇達の味方だ。だからそのような事が簡単に出来ても不思議では無いのではないのかと考えを改める昇だった。
「そうなるとレットさんと半蔵さんは？」
「二人はセリス様についております。さすがにセリス様をお一人にする訳には行きませんし、あのお体ですから学校に行く事も叶いません。ですので、自宅療養扱いで日本に留まる事になっております」
「そうなんだ」
「そ、それでお師匠様は？」
　やはりラクトリーの事が気になってしかたないのか、ミリアは未だに昇の腕にしがみ付いたまま、少し振るえながらもラクトリーの事を聞いてきた。
　そんなミリアに咲耶は笑顔を向ける。
「ラクトリーの事ならすぐに分ると思いますよ」
「なんで、お師匠様はどうしたの？」
「私がどうかしましたか？」
「って、お師匠様！」
　やはりいつも通りにいきなり現れたラクトリーに思いっきり驚くミリア。そのラクトリーの後ろには森尾も居た。
「先生、なんでラクトリーさんが？」
　丁度森尾もそこに居たので、ラクトリーの事を森尾に尋ねる昇。

確かに森尾なら昇達の事情も良く知っているし、与凪からいろいろな事を聞いているから全て知っているはずだ。だからラクトリーがここに居る理由も知っているはずと、昇は森尾に尋ねた。

そんな昇の質問に森尾はいつものように平然と答えた。

「ああ、今日から副担任として勤めていただく事になったよ。詳しい事は俺よりお前達の方が知っているだろう」

「副担任！」

副担任と聞いて思いっきり驚くミリア。まさかこんな事態になるとは思っていなかったのだろう。そしてラクトリーは未だに驚いているミリアに近づく。

「いいですかミリア、ここでは先生と呼びなさい」

「はい、お、先生」

「よろしい。それからミリア、あなたには放課後に特別授業を行います。まだ修行が全て終わったわけでは無いですからね。これからみっちりと扱いてあげます、いいですね」

そんな事を言い出したラクトリーにミリアは目眩を起こしたように昇に倒れ掛かって涙目を向けてきた。

いや、そんな目で見られても僕が困るんですけど。これはミリアとラクトリーの師弟としての問題であり、昇が口を挟む事ではない事は昇自身が良く分かっていたし、口を出したくない事も確かだった。

それでも昇にしがみ付いてくるミリアをシエラと琴未が引っぺがすと、ラクトリーの前に捨て去る。

「さあ、そろそろホームルームが始まる時間ですよ。皆さんも教室に戻ってください」

そう言いながらミリアを引きずっていくラクトリー。どうやらミリアにとって地獄の修行が再会される事は確実のようで、ミリアは泣きながら昇達に手を振って助けを求めるが、誰一人としてそんなミリアに手を差し伸べる者は居なかった。まあ、当然といえば当然だろう。なにしろミリアはラクトリーの弟子なのだから。

「ほら、お前達も教室に戻れ」
森尾に促されて昇達も教室に戻り、各自の席に付いてホームルームが始まった。まずはラクトリーの紹介から森尾の話が始まるが、昇は森尾の話を聞き流しながら、この席からでは遠い窓の外に目を向けていた。
まさかフレトが転校までしてくるとは思ってもみなかったよ。でも……これでよかったのかな。そんな事を思う昇。
昇としては全てが丸く収まり、昇が描いた未来像とはちょっと違ってはいたが、誰も傷つかず、誰も失う事の無い未来を作る事が出来たのは確かだろう。
そして今ある時間こそ、昇が他倒自立の上に築き上げた未来であり、これから楽しく過ごしていけるのではないのかという希望でもあった。
閃華が言ってた他倒自立の理を僕はこんな結果で終わらせる事が出来たけど、これが僕のやり方だからいいんだよね。倒した他者に手を差し伸べても構わないんだよね。それも他者の上に立った勝者の器量なんだから。
他倒自立の理にそんな感想を抱く昇。確かに昇が思ったとおり、勝者が敗者に手を差し伸べる事も今までの歴史上では幾たびか有った事だ。それは勝者の器量を示し、昇の器量を示す物でもあった。
そんな昇の器量があったからこそ、今はこうして楽しい時間を迎えられるのかもしれない。けれども昇はそこまでの器量が自分にあるとは思ってはいなかった。全ては皆の助けがあったからこそであり、その助けのおかげだと思っている。
けれども皆にそう思わせたのは昇の器量に寄るだろうが、昇はその事にまったく気付きはしなかった。けれどもそれで良いのかもしれない。それが昇なのだから。
なんにしても、これからはもっと騒がしくなるのかなと思う昇。けれども昇はその事を疎ましくは思ったりしなかった。なにしろこれこそが昇の築いた他倒自立なのだから。

第九十八話　築き上げた物（後書き）

さてさて、これで他倒自立編も無事に終わりを迎えました。いやはや、読んでくださった皆様のおかげでございます。

そんな訳で次からは白キ翼編をお届けする予定になっております。まあ、今月中には一話ぐらい上げたいですね。

さてさて、そんな訳で本編に少し触れておきましょうか。まずはフレト達ですね。こちらはすっかり昇の仲間になってしまいましたね。まあ、セリスを治療しなければいけませんし、先の戦いではフレトは負けてますからね。だからこれからは昇達と戦って行くかもしれません。……たぶんね。

本当ならフレトが転校してきてから、ちょっと昇と会話をさせたかったのですが、転校初日でフレトは目立つ外見をしているからそんな暇は無いと思い。取り巻きのラクトリーと咲耶との会話で終わらせる事にしました。

まあ、なんにしても、これからフレト達が昇達と一緒に学園生活を送る事になるのは決まりきった事ですね。

まあ、詳細は本文で書いたとおりです。というか咲耶は是非とも絵にしてみたかったなと思っております。だって制服ですよ、制服といったらスカートが短いんですよ！　そんな制服を着た咲耶を見てみたい！！！

ああっ！　そこ、ちょっとまって、警察に通報しないで！！！私はそこまで変態的では無いですから！　通報されるほどではないですから！！！　せめて軽蔑の眼差しだけで勘弁してやってください！

……

さてさて、久々の戯言も終わったところでそろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちして

おります。

以上、白キ翼編ではねちっこい事を考えている葵夢幻でした。

第九十九話　夢からの始まり

ここは……どこ？

微かに見覚えがある風景がシエラの前に広がっている。その光景はいつもの日常とは違い。色が薄くなっており、近くの喧騒も遠くに聞こえる。

精霊世界……という事は……。

そう、シエラが見ているのは昇と契約する前のシエラ達、精霊が住んでいる世界だ。そこは人間世界にある物がそのまま存在しているが、明らかに異なっている部分がある。それは色が薄くなっており、近くにある物がまるで遠くに在るように感じる。精霊世界では独特の感覚がシエラの中に蘇ってくる。

これは……夢。

独特の世界にシエラは今見ている光景が夢である事を察する。それはそうだろう。なにしろシエラは昇と契約をしている今では精霊世界に戻る事などは出来ないのだから。もし戻る事が出来るとしたら、それは昇が負けて契約が解除される時だけだ。だから今現在シエラの前に広がっている光景が夢であると判断した。

そんなシエラの前に一匹の野良犬が姿を現す。いや、正確にはそこに存在してたものだ。今ではまったく動く事無く、呼吸すらしていない。それが何を意味しているのかはシエラにはすぐに分かった。

すでに死んでいる野良犬は決して可愛いと言えない。それどころか軽蔑さえ覚えるほどの不細工だ。そんな野良犬の屍がシエラの前に存在している。

……知っている。この光景……ここで私は……。

「琴未、あそこ」

突然に昇の声が聞こえるとシエラはそちらを振り向く。そこには昇と琴未がいつもとは違った制服を着て、そこに立っていた。

そして昇は野良犬の屍を見つけるとすぐさま駆け寄ってきた。こ

れが夢だと分っていても昇を避けるシエラ。今の昇にシエラの姿が見えていない事はシエラが一番良く分っている。それでも昇を避けるのには理由があるかもしれない。

私は……だから、そして……あの犬も。

あの時と同じ事を思うシエラ。そして昇もあの時と同じように野良犬の屍に寄り添うように座ると琴未も昇の後ろから顔を出してきた。

「随分と不細工な犬ね」

バッサリと切り捨てる言葉を吐く琴未。確かに琴未が言ったとおり昇の前に横たわっている犬の屍はお世辞にも可愛いとは決して言えない。愛敬が無いどころでは無い。それどころか嫌悪感すら覚えるほどの不細工な犬だ。

そんな犬の屍を前に昇は呟く。

「なんで……死んじゃったんだろう」

そんな昇の言葉に琴未ははっきりと言う。

「やっぱり誰も飼おうとか、餌を与えようとかしなかったからじゃない。なにしろそんなに不細工だし、というか本当に犬なのって疑いたくなるような顔をしてるじゃない」

やっぱりバッサリと切り捨てる琴未。けれどもこの犬を前にしては琴未だけではなく、誰でも同じ事を思うほどの犬だ。確かに本当に犬なのかと疑いたくなるような容姿はしているけど、その姿形でようやく犬だと判別出来るほどだ。よっぽどの愛犬家か動物愛護の会に所属している人意外は関わりたいとは思いたくは無いだろう。

そんな犬を前にして昇は呟く。

「けど……そんなの変だよね。だって犬は犬なのに変わりないのに。それなのに……」

それから先は聞かなくても分っている。そんな事を思うシエラ。

その言葉があったからこそシエラは昇に興味を抱いた。その言葉が切っ掛けでシエラは昇と契約をした。その言葉があったからこそ、今でもシエラは昇の傍に居られる、居る事が出来る。そう、全ては

その言葉から始まった。

シエラはゆっくりと目を開けると、今ではすっかりと見慣れた天井がシエラの瞳に写った。それからシエラは自分の頬に手を当てると濡れているのを感じた。

私は……泣いてた？　……そうなのかもしれない。そんな自問自答をするシエラは涙を拭うと上半身を起こして時計を確認する。いつも起きる時間よりも三十分も早く目が覚めてしまった事にようやく気付いた。

けれども、このまま二度寝をする気分でもないシエラはベットから抜け出ると自分の部屋を見渡す。

シエラの部屋にはあまり物が置いてない。どちらかといえば殺風景なイメージを与える部屋だが、壁紙もカーテンも白で統一されている。その他にも机や多少の収納ができる物。それと姿見と呼ばれる大きな鏡しか置いていなかった。シエラらしい部屋といえばそうなのかもしれない。

決して広い部屋とは言えないが、シエラとしてはこの部屋で満足している事は確かだった。

そしてシエラは歩き出して姿見の前に立つと自分の姿を鏡に写す。そして上半身の服を全て脱ぎ捨てたシエラの真っ白で長い髪と同じく白い肌をしたシエラが鏡に映し出される。そしてシエラは精神を集中させると自分の背中にある翼を広げて、その姿を鏡に映し出した。

背中から生えた真っ白な翼はシエラに天使のようなイメージを与える。そもそも翼の属性という物は人間が翼を持ちたい、神の使いである天使が白い翼を宿している。そんな想いから生まれた属性だ。だからこそシエラの背から生えている翼も真っ白である。

けれどもその姿はシエラが最も嫌い、最も嫌な姿だった。

シエラはそんな自分の姿に耐え切れないようにその場に座り込む

と翼を抱き込むように自分自身を抱きしめる。そして自分の翼に触れて思う。

いっその事、こんな翼は無い方がいいのに……と。

シエラはいつもの制服姿に着替えてから自分の部屋を後にしてキッチンへと向かった。現在の滝下家でキッチンを専門的に使っているのはシエラと琴未だ。二人とも昇への食事を提供するために自ら買って出た役目だから文句などが出るはずも無いが、今日のシエラはそんないつもの作業さえ休んでしまいたい気分だった。

けれども、そうなると琴未の食事だけが昇の口に入るのは更に気分を悪くさせると、シエラは気が重いままキッチンへと入ると、そこには既に琴未の姿があった。

「おはよう」

一応、一つ屋根の下に住む者同士だ。シエラは琴未にもちゃんと朝の挨拶だけは欠かすことは無かった。それは琴未も同じだ。

「おはよう。今日は随分と遅かったじゃない、てっきり昇の事を諦めたものだと思ってたわよ」

琴未は今日も朝から元気一杯でシエラに挑発的な言葉を飛ばしてくるが、シエラはそんな言葉を無視して朝食の準備に取り掛かる。そんなシエラに琴未は少しだけ首を傾げた。それはいつものシエラなら何かしらの反応が返ってきてたからだ。

けれども今日に限っては何の反応も無くシエラは琴未の言葉を無視した。それが新たなるシエラの手だと勘違いした琴未はそのまま何事も無かったかのように、いつもの朝食作りへと精を出す。

そんな琴未の姿をシエラは少しの間だけ見詰めていた。

「んっ、なに？」

「別に、なんでもない」

シエラの視線に気付いた琴未が質問してきたが、シエラは何事も無かったかのように朝食作りに入って行った。そんなシエラにもう

一度、首を傾げる琴未。
　いつもとは違うシエラの態度に琴未はまたしてもシエラが何かを企んでいるのではないかと勘繰るが、どうもそうでは無いとすぐに気付いた。それはいつものシエラなら何かを企んでいるならもっと狡猾的に動くはずだ。こんなあからさまにおかしな態度を取ったりはしない。
　だからこそ琴未はいつもとは違っているシエラが気になった。だからだろう、ちょっとした気まぐれでシエラに話しかけたのは。
「シエラ」
「なに？」
「今日はどうしたの？　妙に落ち着いちゃって、何か悪い夢でも見た。あ～、そうか、昇が私に取られる夢を見たんだ」
　琴未はいつもと同じようにを心がけながらシエラに話しかけた。まさかシエラの態度に心配しているとは決して悟られたくは無かったのだろう。
　けれどもシエラから返って来た答えはいつもと同じような感じで展開された。
「確かに夢を見た。琴未が……ごめん、これ以上は私の口からは」
「って！　いったいどんな夢を見たのよ！」
　シエラの言葉に思わず突っ込みを入れてしまう琴未。それでもシエラの言葉が気になったのだろう。シエラとの会話を続ける。
「なに、いったい私がどうしたって？」
「……大丈夫、琴未の事……絶対に忘れないから」
「って！　すでに星になってるの！　青空に私の笑顔が浮かんでるわけ！」
　シエラの言葉に勝手に誇張を加えてくる琴未にシエラは笑みを向けてきた。
「琴未はいつものままでいい」
「はぁ？」
　いきなり笑顔で意味不明な事を言って来たシエラに琴未は表し抜

かれた顔をして、すっとんきょうな声を上げる。
　それからシエラは作業に没頭し始めたので琴未もシエラの事が気になりながらも作業に集中して行った。そんな作業をしながらでも琴未はシエラに話し掛ける。
「いったいどうしたのよ、いつものシエラらしくない」
　そんな言葉を口にする琴未。ここは琴未なりにシエラに気を使っているのだろう。まあ、珍しい事でもあるが、昇が居ない場所ではそんな二人の会話もごくごく稀に起きてもおかしくは無いのだろう。自分にそう言い聞かせつつ琴未はシエラの返答をまった。
「……別に、私はいつもと変わらない」
　いつもとはちょっと違い、少しだけ間を置いていつもと同じような返事を返してくるシエラに琴未は更に話を続ける。
「そお？　私にはいつものシエラと変わってると思うから、こんな事を言ってるんだけど」
　シエラを相手にいつものように会話をしていてはまたはぐらかされるだろうと琴未は率直に自分が思った事を口にする。そしてシエラも琴未がそこまで素直に出てくるとは思っていなかったのだろう。すぐに返事を返さずに作業をしながら、少し間を置いてから返事を返してきた。
「……昔の……夢を見た」
「ああ、やっぱり変な夢を見たんだ。それに精霊って寿命が無いんでしょ。昔って言うと数百年前とか？」
　確かに精霊に寿命というのは存在しない。その精霊が生き続けようと思っている限り存在する事が出来る。だからシエラがかなりの年月を過ごしてきても不思議は無かった。こう見えてもシエラは翼の精霊なのだから。
　そんな琴未の質問に今度はサラッと答えてきたシエラ。
「半年ほど前」
「って、それってつい最近じゃない！」
　シエラの答えに思わず突っ込みを入れる琴未。まあ琴未としては

突っ込む気は無かったのだが、シエラの返答が琴未に突っ込みを入れさせる結果となってしまったようだ。
そんな突っ込みをした琴未は溜息を付くと話しを再開させた。
「それでどんな夢を見たのよ」
「……」
今度は沈黙で答えるシエラ。どうやら夢の内容までは話したくはないようだ。そんなシエラに琴未はもう一度溜息を付くと「まあ、いいけどね」とだけ返答して作業に没頭する事にした。
確かにシエラの態度は気になるが、そこまでシエラのプライベートに琴未は首を突っ込む気は無かった。第一そこまでやってやる必要が無い。なにしろ琴未にとってシエラは恋敵なのだから。
そんな感じで朝食の準備が終わる頃には閃華と綾香が起きてきて、続いて昇がやってきた。結局は最後まで寝ているミリアを綾香が起こしに行き、いつもと同じく賑やかな朝食が始まったのだが、その中でシエラ一人が黙々と朝食を口にしていた。

う～ん、どうしたのかな？
昇達は教室に付くといつものように賑やかな会話をしていたが、その中からシエラ一人だけが席を離れて窓から外を見ている。そんなシエラはいつものシエラらしくないと思った昇はそんな事を思ってシエラを見ていた。
窓からは未だに熱いと感じる風が入ってきており、夏の名残を残している。シエラはそんな夏の風に髪を揺らしながら空を見ているようだ。
「やっぱり昇も気になる？」
シエラを見詰めていた昇だが、急に琴未からそんな質問をぶつけられて琴未の方へと顔を向ける。
「シエラはいったいどうしたの？」
「さあ？　今朝からあんな感じなのよ」

確かにシエラは普段から口数は少ない方と言って良いだろうが、今日のシエラは口数が少ないどころか昇とすらも話そうとはせずに、窓の外を見て黄昏ていた。

そんなシエラの姿はいつもとはまったく違っており、その背中には哀愁どころか寂しさすら感じるほどだった。

そんなシエラの姿を見て黙っていられる昇ではなかった。昇は席を後にするとシエラのところへと向かった。

「シエラ、どうかしたの？」

シエラの横に立った昇は率直に質問をぶつける事にした。なにしろシエラだ。何かを企んでるにしろ、そうでないにしろ遠回しの質問はシエラにはぐらかされる可能性がある。それに昇はそんな器用な事が出来る性分ではない。だからこそ率直にシエラに尋ねる昇だった。

「……」

昇の質問にシエラはすぐに答えようとはしなかった。いつものシエラなら何からの返事がすぐにあってもおかしくは無い。それどころか自分のペースに昇を巻き込もうとするはずだが、今日に限ってはそんな気配は無く、ただ黙って空を見上げていた。

「……昇は……空を飛びたいと思った事はある？」

「へっ？」

突然に来たシエラの質問に昇は少し驚いた声を上げた。まさかいきなりそんな質問が来るとは思ってもみなかったのだろう。けれども昇はそんなシエラの質問を真剣に考えるとその答えを口にする。

「子供の頃はそう思った時があったよ。鳥のような翼を持って空を飛びたいって」

それは誰しも思う事かもしれない。人は昔から空に思いを馳せていた。だからこそ飛行機は開発されたし、今だって鳥のように飛びたいとさまざまなスポーツがあるほどだ。人が空を飛びたいと思う気持ちは誰しも持つ物かもしれない。

だからこそ昇は翼の精霊であるシエラが少しだけうらやましと思

った事もある。けれどもシエラに翼があるなら一緒に飛ぶ事が出来る。そう思えるからこそ昇はシエラと一緒に居るのかもしれない。

昇の答えを聞いたシエラは始めて昇の方へと顔を向けて口を開いた。

「その翼が偽物であっても、昇は空を飛びたいと思う？」

「にせもの？」

今度の質問には昇も首を傾げた。翼は翼であって本物も偽物も無いと思っているからだ。だからシエラが何でそんな質問をしてきたのか昇は不思議でならなかった。

けれども昇は昇なりにシエラの質問を真剣に考えると答えを口にするのだった。

「空を飛べるならそれは翼だよ、だから本物も偽物も無いと思う。それに本物の翼なんて存在しないよ。翼なんて皆姿形や色が違って当たり前なんだから、本物の翼なんてない。だから偽物の翼も無い思うよ」

そんな昇の答えにシエラは少しだけ驚いた顔をするとすぐに微笑を見せてきた。それは今日始めて見るシエラの微笑だった。

「……そっか、昇ならそう言うと思ってた」

「えっと……そうなのかな」

「そう」

シエラは微笑を浮かべたまま短く答えると満足したかのように自分の席へと戻って行ってしまった。そんなシエラの態度にやはり首を傾げる昇。

「やっぱり気になるようじゃのう」

「そうだね、いつものシエラとは感じがまったく違うし」

「……」

「どうしたの閃華？」

いつものように突如として現れた閃華に驚きもせずに普通の会話をする昇。そんな昇に対して閃華は珍しくいじけたような顔をしていた。

「最近は驚いてくれんようでつまらなくなったものじゃな」
ええ、閃華さんのおかげですっかり耐性が付いてしまいまいたね。
そんな皮肉な事を思う昇は閃華に向かって勝ったような笑顔を向けた。それが閃華の気に障ったのだろう。閃華は更にいじけたように昇を睨み付けると昇の横に立って話し始めた。
「まあシエラの事じゃから心配はいらんじゃろ。じゃが気を付けておいた方が良いかもしれんのう」
「気を付けるって、何に対して」
「さあ、それは分らん」
というか、そこが一番肝心なところじゃ。そんな事を思う昇だが、その事を閃華に尋ねてもしかたないと口には出さなかった。なにしろシエラの事について話しているのだから閃華がそこまでシエラの事を知っているとは思っていなかった。まあ、琴未の事ならすぐに閃華は答えられるだろうが、シエラの事は閃華どころか他の皆に聞いてもあまり分らないだろうと昇は思っていた。
そんな昇の突っ込みに気付いている閃華はそれを無視しながら話を続けてきた。
「昔から言うじゃろう。虫の知らせというやつをじゃな」
「それって、シエラの身に何かが起きるって事？」
「さあのう」
閃華としても確信があってこのような話をしている訳ではない。ただ何となくシエラの事で昇が気に掛けているからこそ、このような話をしているという訳だ。
「ただ一つだけ言える事はじゃな。時々じゃが、何かしらが起きる時は何かの前兆が起きる場合があるという事じゃな」
「つまり、シエラの態度は何かしらの前兆かもしれないって事？」
「そうかもしれんし、そうじゃないかもしれん」
つまりは分らないって事ですね。昇としてもそこまで明確な答えを閃華に期待していた訳ではなかった。ただいつものように何かしらのヒントでも与えてくれれば良いなと思ってはいたが今回は空振

りのように昇には思えた。
「このまま何事も無ければ良いんだけどね」
素直に思った事を口にする昇。そんな昇の言葉に閃華も同意するが、それと同時に否定も思えるような質問をしてきた。
「そう願いたいものじゃが。昇よ、何かしら忘れておらんか？」
「へっ、何を？」
すっとんきょうな声を上げて首を傾げる昇。まあ昇としては何も忘れていないつもりだが、閃華はそうは思っていないようで思いっきり溜息を付いて見せた。
「そもそも昇よ。私達と契約をしたという事はじゃな。そのこと事態が精霊王の器争奪戦に参加したのと同じようなものなんじゃぞ」
「それは分っているけど」
精霊との契約。それは精霊王の器を持った者が精霊王の力を賭けて行われる契約者同士の戦争と言っても過言では無い戦いだ。その事は昇としては充分に分っているつもりだったが、そうでは無いと言いたげに閃華は再び溜息を付いて見せた。
「どうやら完全に忘れておるようじゃから言わせてもらうがのう。契約は争奪戦に参加表明をしたのと同じようなものなんじゃ」
「うん、それは分ってるよ」
「ならいつ、どこで、何が起こっても不思議は無いということじゃよ」
「つまり今度はシエラが原因で何かが起こるって事」
そんな昇の答えに閃華は首を横に振った。
「そうではない。戦いが起きる原因はすでに持っておるという事じゃよ。契約をして争奪戦に参加するという事はそういう事じゃ」
閃華にそう言われて自分の立場を改めて考えてみる昇。確かに閃華が言ったとおり昇がエレメンタルロードテナーを目指している限り、いつどこで戦いが起こっても不思議は無い。
そのうえ今の昇達はその一旦とはいえ精霊王の力を封印している。今現在はその力をセリスの治療に使ってはいるが、まだサファドの

ように精霊王の力を利用しようとした者が現れてもおかしくは無い。
つまりはいつ戦いが起こってもまったく不思議は無いということだ。
「うん、確かに閃華の言うとおりだけど、今戦いが起きるとまずくない？　シエラがあんな状態だし」
「確かにそうじゃのう。じゃからこそ昇の出番という訳じゃよ」
あ～、やっぱり僕に来るんですね。今更ながらそのような役割が自分に回ってくる事を再確認した昇。なにしろ昇達の中では一応昇が契約者となっており、シエラを始め琴未までもが昇と契約をした精霊扱いとなっている。それに昇達が交わした契約は服従契約。精霊が契約者にはむかう事が出来ない契約だ。
けれどもそれは逆に言えば精霊達の不信感を買えば契約者自身にそのツケが来るという契約だ。だからこそ契約者が精霊をメンタル的にも支えてあげないといけない訳だ。まあ、昇としてはシエラの事が気なっており、その原因を探ってなんとかしてあげたいと心の底から思っているだけで、決してそこまで考えての行動を取っている訳ではない。
だからこそ閃華はそのような役目をいつも昇に振っているし、それはシエラ達も同じだ。だから昇達でリーダーは自然と昇になってきているという訳だ。
そんな事にまったく気付きもしない昇は、いつの間にかシエラの事に付いて考え込んでいた。
う～ん、あのシエラが何かを悩んでいるのかな？　というかシエラが何かを悩んでいる姿なんて今まで見た事もなかったし、そんなシエラを想像する事も出来なかったよ。そんな事を考えた昇はやはりシエラの事について自分があまり良く知っては居ない事を再確認するのだった。
なんというか、シエラって琴未の次に僕とは付き合いが長いんだよね。まあ、ミリアや閃華とは数日しか違いは無いけど。それでも一番最初に僕と契約を交わしたのはシエラなんだよね。……けどシ

エラって僕達に対してある所で線を引いている気がするんだよね。
それはあくまでも昇がシエラに抱いた感想の一つであり、勘違いという事もありえるが、昇としてはシエラが何かについて決して踏み込まれたくない領域を持っているのではないのかと考えた。
けれどもそれは誰しも同じではないのかとも昇は思っている。人間であれ精霊であれ、心を持っているからには誰にも踏み込まれたくないテリトリーを持っていても不思議ではない。それは非常にデリケートであり、そう簡単に他人が足を踏み入れて良い場所ではない。
だから今日のシエラから感じるいつもとは違う感じはそのテリトリーに関する事ではないのかと昇は結論を出した。
「なんにしても、難しい事だよね」
そんな事を考えた昇は隣に居る閃華を身ながら、そんな言葉を口にする。それを聞いた閃華は頷くと微笑を浮かべながら言葉を返してきた。
「じゃが昇ならなんとか出来るじゃろう」
はっきりとそう言いのける閃華。昇にはどうしてそこまで言い切れるのかが不思議でならなかった。だからだろう直接その事を閃華に尋ねたのは。
「なんで閃華はそこまで僕の事をはっきりと言えるの？」
昇としては閃華がそこまで自分の事を評価しているとは思っていなかったのだろう。だからこその質問だ。その質問に対して閃華は微笑を絶やさないまま瞳を閉じる。
「海での出来事を覚えておるじゃろ」
「うん、つい最近の出来事だからね」
それは夏休みの中盤に皆で海に遊びに行った時の事だ。昇達はそこで風鏡と出会い、そして閃華の過去に触れることになった。
昇はその時の出来事を思い出しながらも閃華の言葉に耳を傾ける。
「昇よ、私にとって小松の事は決して触れられたくない事じゃった。それは私にとって後悔と贖罪しか残しておらんかったからじゃよ。

じゃが昇はそこに足を踏み入れる事で私の後悔と贖罪を振り切って前に歩きだせるようにしてくれたんじゃ。それは風鏡殿も同じじゃろう。そんな昇じゃからこそ、今度はシエラの中にある何かを吹っ切ってくれると私は思っておるんじゃがのう」

そんな話を終えると閃華は瞳を開けて昇を見詰めてきた。そんな閃華とは目を合わさずに視線を逸らした昇は照れたように頬を掻く。

ただでさえ閃華の言葉を聞くだけで恥かしいのに、そのうえ閃華に見詰められては余計に恥かしいのだろう。

けれどもあの出来事があったからこそ、今の閃華があり、そして風鏡も新たに歩き出す事が出来たのは確かな事だ。

昇はそういう実績を持っている。だからこそ閃華も昇のそういう所に期待して、そのような言葉を掛けたのだろう。

けれども昇には閃華が言うような自身が無いのか、少し顔を下に向けると呟くように話しを続ける。

「でも、前は上手く行ったかもしれないけど、今回も上手く行くとは言えないよ。それにシエラにしてみたら本当に触れられたくない事なのかもしれないし、もしかしたら数日したら忘れてしまう簡単な悩みなのかもしれない。どっちにしても僕が口を出す事なのかな？」

確かに昇の言う通りなのかもしれないと閃華は感じ始めていた。それは今日のシエラがいつもとは違う感じがするだけで、今の時点で何かしらの問題が起きている訳ではない。ただ閃華がこんな話をしたのは、何かが起きた時の為に昇が対処しやすいようにしておこうと思ったからだ。

だから閃華としても本当はこのまま何も起こらずに、いつもの日常に戻っていく事を願っているのは確かだった。けれども閃華の性格からかそうそう気楽な気持ちで居られないのも確かだった。だからこそこうして昇に発破を掛けている訳だ。何かがあったときの為に。

「言われてみれば確かにそうじゃな。もしかしたら今日だけシエラ

の気分が変なだけなのかもしれんしのう。じゃからここは一つ様子を見るのが一番何じゃろうな」

閃華としてはそんな結論を出したようだ。確かに今日のシエラは変だ。だからと言ってそれが何かの問題を引き起こしている訳ではない。一番怖いのはそれを引き金に何かが起きてしまうことだ。だからこそ閃華は昇に警告をしようとしたのだが、逆に昇の言う事に一理あると感じてしまったようだ。

「うん、そうだね。確かに今日のシエラは少し変だけど、だからと言って僕達が焦って何かをやるべきじゃないよね」

「そうじゃな」

「そうなんですね～」

昇と閃華とは別な声が二人の前から急に聞こえてきた。その事で二人とも顔を上げるとそこにはラクトリーの姿があった。

「えっと、なんでラクトリーさん、じゃない、ラクトリー先生がここに」

そんな昇の問い掛けにラクトリーは笑顔で答える。

「それは簡単ですよ」

そう言ってラクトリーはある所を指差す。ラクトリーが指差した場所に目を向ける昇と閃華。そんな二人の目に映ったのは時計であり、時刻は既に授業開始の時間を過ぎていた。

「あっ」

「おやおや」

二人とも授業開始のチャイムが聞えないほど集中して話していたのか、昇が辺りを見回すとクラスの視線は二人に集中しており、皆が席に付いていた。

「分りましたか？」

笑顔で問い掛けてくるラクトリーに昇は謝ると閃華と共に自分の席へと戻って行った。そして開始されるラクトリーの授業。

ラクトリーの担当教科は世界史だ。特にミリアに対しては厳しく、ミリアがラクトリーの授業中に寝そうになるとラクトリーの投げた

チョークがミリアの額に見事にヒットする事が頻繁に起こっている。
そんな光景がラクトリーの授業ではもう恒例行事となっていた。
その度にミリアは涙目になってラクトリーに謝り、クラスには笑いが溢れていた。
そんな授業中にも昇は左の席に座っているシエラを頻繁に見ていた。そのシエラは昇の視線に気付く事無く、そしてクラスの皆と一緒に笑みを浮かべる事無く、ただ遠くの窓から空を見上げていた。
そんなシエラに昇は何かしらの言葉を掛けたくなるが今は授業中である。それに話なら家に帰れば何時でも出来るとその時は、何もせずに割り切る事にした。
その時はまだ昇達も知らなかった事だから、昇がそんな態度を取ったのもしかたないだろう。まさか帰る前に与凪からの召集があるとは、その時の誰もが思ってもいなかった事なのだから。

第九十九話　夢からの始まり（後書き）

さてさて、そんな訳でいよいよ白キ翼編もスタートしました。いやはや、いったいどこまで続くんだエレメって感じですよね～。まあ、かなり続ける予定ですからね～。

さてさて、そんな訳で今回はシエラの夢からスタートしましたね。その夢が告げているのは何か。そして与凪が召集を掛けてきた理由とは、まあ、その辺はおいおい書いていくつもりですのでお楽しみに～。

そんな感じで進んで行く白キ翼編ですが……今回は今までにやった事のなかったバトルをやろうとしております。それが誰と誰との対決かはまだ言えませんがね。かなり意外な対決になるのかもしれませんね。まあ、勘の良い人は既に分っているかもしれませんね。

さてさて、そんな訳でここいら辺で締めるとしましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、エレメを書くスピードが最近では早くなったのかな？　とか思い始めた葵夢幻でした。

第百話　対策会議

昇達が与凪に呼ばれていつもの生徒指導室に入るとそこにはフレト達。とは言っても半蔵とレットはセリスに付いているので、フレトの他にはラクトリーと咲耶しか居ない。他には昇達を待っていた与凪が落ち着いた感じでいつものようにモニターに向かって何かをしているようだ。

そんな生徒指導室に足を踏み入れた昇達はいつものように席に着く。

「えっと、与凪さん」

「……あぁ、滝下君、いらっしゃい」

何かをしている与凪に少し、ためらいながら声を掛けた昇だが、与凪からはいつものようにまったく気にするなと言った感じの返事が返って来た。

そして与凪は全員が揃った事を確認するとシエラと閃華にお茶を入れてくれるように頼むが、シエラは動こうとせずに虚空を見詰めている感じだった。そんなシエラに代わって琴未が閃華と共に全員分のお茶を入れた。

これで話す準備は整った。後は与凪の話を待つだけだ。その与凪は自分の前にお茶が出された事を確認すると今まで見ていたモニターを消し去って、お茶で喉を潤してから話し出した。

「実は皆さんに集ってもらったのには理由があるんですよ」

与凪の言葉に頷く一同。なにしろ与凪からの召集だ。なにか新しい情報が入った可能性が高い。その情報が昇達にとって凶と出るか吉と出るか、それはこれからの話し次第だ。

そこの事を全員が理解していると感じた与凪は詳しい説明に取り掛かった。

「昨日の未明なんですけど、どうやら契約者がこの付近に入ったようなんです。現在の居場所は不明ですが、この町にいる事は確実で

すね」

「それが何か問題でもあるの？　今は争奪戦の最中だし、契約者が現れても不思議は無いでしょ？」

そんな質問をする琴未。確かに琴未の言うとおりである。

なにしろ器の争奪戦が始まってからというもの精霊達は積極的に人間との契約を交わして器を持っている人間をエレメンタルロードテナーにしようと戦っている。その中には特定に地域に留まる事無く、旅をしながら対戦相手となる契約者を探す者が居てもおかしくは無い。

だから琴未の言っている事は正しいのだが、与凪は溜息を付いた。どうやら琴未は何かを忘れているようだ。その事を思い出させるために与凪は説明をそこから始める事にした。

「いい琴未、私達は一旦とは言え精霊王の力を管理しているのよ。もしかしたらそれを狙っている可能性もあるし、またはただ偶然にここに契約者を探しに来たのかもしれない」

「どちらにしろセリスの治療があるからには早急に排除した方が良いという事だな」

そんな結論を出すフレトに与凪は頷く。フレトとしては相手が精霊王の力に気付かれてセリスの治療がダメになるという最悪の事態を防ぎたい。だからこそ、見つけ次第倒すという提案を出して来たに過ぎない。それは精霊王の力を管理している与凪も同じだ。

今現在では精霊王の力をセリスの治療を行うために使っている。その行為自体を与凪の属性である霧で隠してあるとはいえ、相手に探査能力がある精霊が付いているとしたら精霊王の力が見付かってもおかしくは無い。それだけではなく、精霊王の力を使っているからには、それだけで完全封印の時とは違って発見される可能性が高くなってくる。

その懸念があるからこそ与凪はフレトの言った事に同意を示したのだ。その懸念は与凪だけではなく閃華も同じような事を思っていた。

「確かに今の時期に契約者との戦闘は避けたいものじゃが、相手が来てしまってはしかないという事じゃな。このまま無視して相手が去るのを待っても良いのじゃが、今は争奪戦の最中じゃ。じゃからここでぶつかって倒した方が安全確実なのは確かじゃな」

そんな意見を言ってくる閃華達に対して昇は正反対の意見を口にする。

「でも、相手が確実に精霊王の力を狙ってくるとは限らないんでしょ。だったら、ここは様子を見て、場合によっては相手にしない方が安全で確実じゃないの？」

そんな昇の意見に閃華は黙り込み、与凪は頭を抱えた。確かに昇の言っている事にも一理ある。だからこそ否定する事が出来なかったのだ。けれどもフレトはすぐに昇の意見を否定してきた。

「だが相手は契約者だ。そのうえ目的も分っていないからには、まずは一戦して相手の意思を探った方が確実だろ？」

「けど無理して戦う事は無いでしょ。与凪さんの情報網で相手の目的は分らないの？」

話を振られて与凪は頭を上げると首を横に振る。

「争奪戦が始まってから契約者なんてかなりの数が居ますからね。私達だって正確な人数を把握している訳では無いですし、相手が分からないからには理由を探るのは無理ですね」

そんな与凪の言葉に昇はしかめっ面になり、フレトは勝ち誇ったような顔になった。この二人が和解したのはつい先日の事で、それまでは敵対していたのだ。だから今でも多少の敵対心では無いが、相手には勝ちたいという欲が出るときがあるのだろう。

まあ、それはそれで二人が良いコンビになる可能性を示唆しているものだが、今は侵入してきた契約者についての話なので、昇は少し負けたような感じを押さえ込み話を続ける。

「なら侵入してきた相手についてはまったく分からないって事？」

そんな昇の質問に与凪は胸を刺されたような仕草をすると机に突っ伏した。

……えっと、僕の言った事はそこまで与凪さんにダメージを与えました？　そんな事を思う昇。確かに昇は思った事を口にしただけなのだが、それは与凪の情報網が頼りないと言っているようにも聞こえるのも確かだった。まあ、実際には与凪にそう思わせてしまったのだろう。

けれどもこういう事に関しては鈍感な昇には何を言っても無駄だろうと琴未を始め、昇側は誰一人として口を開かず、フレト達は首を傾げるだけだった。

「と、とにかくですね」

ようやく復活した与凪が言葉を濁しながらも話を続けてきた。

「今日、皆さんに集って頂いたのは、この事態にどう対処すべきかを検討するためなんですよ。下手に動けば精霊王の力がバレてしまう可能性がありますし、相手が精霊王の力を狙っているなら先手を打たないと不利になります」

与凪の言葉に頷く一同。確かに与凪の言うとおりだ。相手の目的次第では下手に動くと精霊王の力を察知される事になる。だからと言って何もせずに後手に回って精霊王の力を奪われる訳にはいかない。

なんにしても判断が難しいのは確かである。なにしろ昇達には精霊王の力というバレてはいけない秘密を抱えているのだから。下手に争奪戦に参加できないのも確かだった。

「それで滝下昇、お前の考えはどうなんだ。俺としては即刻倒す事を主張するが」

そんな主張するフレトに対して昇は少し考え込むと自分の考えを口にした。

「僕はもうちょっと慎重に動く事を提案するよ。なにしろ相手の事がまったく分からずに行動するのは危険だと思うから、もう少し与凪さんに調べて欲しいってところかな？」

そんな昇の言葉にフレトは首を傾げた。どうやら昇の言葉に納得が行かない部分があるようだ。フレトはそんな思い付きを隠す事無

く口にする。
「調べていったいどうしようと言うんだ。相手がいると分っているからにはすぐに倒した方が良いだろう」
フレトとしてはセリスの治療に関することだから不穏分子になりかねない者はすぐに排除したいという気持ちがあるのだろう。けれども昇はセリスの事は気になっているが、フレトよりは冷静なのは確かだった。
「少なくとも相手の居場所と人数は確認しておかないと、出来れば能力とかも分かれば良いんだけど」
「なるほどのう、孫子曰く敵を知り己を知れば百戦危うからずというしのう」
つまり昇としては戦うにしても相手の情報を得てから戦った方が良いという事を提案してきたのだ。確かに相手の事が分かるだけでも、自分達が動くにしても戦略が立てやすい。だからこそ昇はそんな提案をして、フレトはそんな昇の提案について考え込む事になった。
そんな中でラクトリーが口を開いた。
「相手の人数はともかく、さすがに能力まで判断するのは無理ですね～。それは戦ってみないと判断できない事ですから。でも相手の事を調べれば有利に立てる事も確かですよ、マスター」
そんな進言をするラクトリー。どうやらラクトリーとしても早急に動く事には危険性を感じたようだ。そんなラクトリーの進言を受けてフレトは更に考え込む。その間に与凪が話を続ける。
「その相手の人数なのですが、こちらで確認できたのは精霊が二人だという事だけです」
「つまり相手は三人？」
与凪の言葉にそんな質問をぶつけてきた琴未に向かって与凪は首を横に振った。
「私が確認したのは精霊の数だけ、契約者の数までは把握できてないのよ」

「でも、精霊が二人って事は」
「琴未よ」
琴未の言葉を遮って閃華が口を挟んできた。そのため琴未は言葉を発するのを中断すると閃華に目を向けた。
「契約者が必ずしも複数の精霊と契約をしているわけではないんじゃぞ。じゃからこの場合は契約者が二人居てもおかしくは無いと言うことじゃ。二人の契約者が一人ずつの精霊と契約をした可能性もあるからのう」
「そっか～、そういう事ね」
つまりは精霊の数だけ分っても契約者の数が分らないからには、相手が何人居るかは分らないという事だ。けれども、それだけ分れば動きようがあるのではないのかと昇は考えていた。それにはちゃんとした理由が在ってのことだ。
「つまりは相手の最大人数は四人って事ですよね？」
そんな事を与凪に確認する昇。そんな昇の問い掛けに与凪は頷く事無く、ただ頭を抱え込んだ。
「それがそうとも言えないのよね。なにしろこちらで確認したのは、この町に入り込んだ精霊の数だけ、もしかしたら別行動を取っている精霊が居るかもしれないですからね」
「そんな事があるんですか？」
昇達もフレト達も常に精霊が自分達の周りに居る事から、どうやらそんな考えが思い浮かばなかったようだ。けれども与凪に言わせれば、そんな行動を取ってもおかしくは無いということだ。
「今回のように動き回っている契約者は対戦相手となる契約者を探しながら移動している訳でしょ。だから契約した精霊の数によっては一緒に行動するし、精霊の数が多ければ分散させて契約者を探す可能性があるのよ」
要するに今回侵入してきた契約者が契約してる精霊の数を安易に特定する訳には行かないという事だ。現にフレトも傍に置いている精霊はラクトリーと咲耶だけで、半蔵とレットはセリスの護衛と別

行動を取っている。それと同じように分かれて契約者を探している可能性があるという事だ。

「結局はもう少し調べてみないといけないって事なのかな？」

与凪の言葉にそんな結論を出す昇。確かに現状では昇がそう考えてもしかたないのだろう。なにしろ今現在の状況では情報が少なすぎる。けれどもフレトはそんな昇の考えとはまったく違った意見を口にする。

「いや、もし相手が別行動を取っているとしたら、これは好機だろう。相手が合流しないうちに契約者を討ち取ってしまえば、それで終わりだ」

「……なるほど、そういう手もありか」

フレトの言葉に昇は感心すると共にフレトの意見を考えてみる。確かにフレトの考えも一理ある。一番重要なのは先手を打つことじゃない、いかに自分達が有利に戦える状況を作るかだ。そのためなら自分達の準備が万端でなくても動いた方が効率が良い場合があるのも確かだ。

けれどの昇には一つだけ気になる事があるのだろう。その事をフレトにぶつけてみた。

「でも、もし契約者が別行動を取っていて、相手が精霊だけだった場合はどうするの？」

確かにその可能性もある。相手が別行動で契約者を探しているのだとしたら、こちらに来た側に必ず契約者が居るとは限らないのだから。

そんな昇の言葉にフレトは笑みを浮かべながら答えてきた。

「その場合は相手の戦力を削れるだけだ、そうすれば後の戦いで有利に立てるだろう。もしかしたら戦力が削られた事で撤退する可能性だってあるしな」

「なるほど、そうか」

そんなやり取りをする昇とフレトを見て、閃華と与凪、そしてラクトリーは二人の性格について考えていた。

それはフレトはこういう場合は攻撃的に出る。そして昇はその反対に防御的に出るということだ。どちらも一長一短で、必ずしもどちらかが正しいとは言えないだろうが、こうした議論をする場合では、そうした正反対の性格は確実な理論を出すのには大いに役立つ事を三人は知っているからだ。

だからこそ昇とフレトは良き友になると思うし、ライバルとして成長していくのではないのかと三人は思っていた。そしてそう思ったからこそ、ここはあまり口を出さずに二人に議論を任せた方が良いのではないのかと口を出すのを差し控えていた。

けれどもフレトの考えに昇が考え込むとそうは言ってられないのだろう。なにかしらの結論を出すために閃華が口を開いた。

「なんにしてもじゃ、このまま手を拱いて後手後手に回る愚だけは避けねばならんのう」

「そうですね、私ももう少し調査を続けてみますね」

「私の方でも調査をしてみましょう」

閃華の言葉に与凪とラクトリーがそんな言葉を返した時だった。突如として昇が口を開いた。

「いや、ここは皆で動こう。フレト、半蔵さんとレットさんは動かせる？」

そんな昇の言葉にフレトは訳が分らないという顔をしながらも質問に答える。

「それは相手が居る場所によるな。俺達が移り住んだ場所に近ければセリスの安全を考えると二人を動かすわけにはいけないからな」

「そっか～」

「なんじゃ昇、何か良い考えでも浮かんだのか？」

閃華の質問に頷く事無く、頭を掻きながら答える昇。どうやら昇としてもこの考えが最善とは言えないが、どの案よりも優れているだろうと判断したようだ。そして昇は自分の考えを言葉にする。

「確かにフレトが言ったとおり、相手の戦力を削れるなら削っておきたいし、契約者が居るならその場で終わらせるのが一番だと思う。

けど、その為にはこちらも戦力を整えておく必要があると思うんだ」
「つまりはいつでも戦えるようにこちらも準備だけはしておくべきという事だな」
フレトの言葉に頷く昇。それから話を続ける。
「だからこっちは動ける人数を総動員して相手の精霊か契約者を探すべきだと思う。いつ遭遇しても戦えるように」
「なるほどな、だが一塊になって探すのは効率が悪いだろう」
確かに昇達が全員で一塊となって探すとなると、この町は広すぎて遭遇する可能性が低くなる。それは相手が動きやすさでは一歩劣ると共に精霊王の力を見つける好機にもなりかねない。けれども昇はちゃんとそこまで考えていた。
「だから僕達とフレト達の二手に別れて探そう」
「そう思った根拠はなんじゃ？」
そんな事を尋ねる閃華。昇が何の理由も無しに戦力を二手に分けるとは思えなかったからだ。もちろん昇はその事までもしっかりと考えていた。
「僕達はエレメンタルアップがあるから相手に増援があっても対処できる。フレト達は完全契約だから最初っから有利な状況で戦える。それにお互いに連絡を取り合う事が出来ればすぐにどちらかの援護に迎える事ができる。つまりどんな状況でも、すぐに有利に立てるはずだよ」
「なるほどな、言われてみれば確かにそうだな」
昇の考えに感心するフレト。確かにその手段ならどんな状況に陥ったとしても、すぐに援護が来るし、昇もフレトもそれぞれに切り札を持っているからには、そう簡単には負けるとは思えない。
けれどもフレトが感心したのはそれだけではない。この町に入った精霊は二人。そして相手の人数は最大でも四人。つまりは相手に増援の精霊が居たとしても町の外であり、どこで相手に遭遇したとしても昇達の方が素早く確実に数を揃える事が出来る。
つまりは昇が立てた戦略では相手の増援が有った場合でも、昇達

の方が確実に先手を取って相手よりも多い数で押す事が出来るということだ。

けれどもそれだけではない。昇にはエレメンタルアップ、フレートには完全契約を交わした精霊達。それぞれに卑怯とも言える切り札を持っている。そのうえ人数でも勝るなら負ける要素が限りなく無くなるというわけだ。

昇はそこまで考えてその戦略を立てた。フレトはその点に関心すると共に、その戦略があったからこそ自分達が負けたのだと今更ながら自分達の敗因を感じる事となった。

フレトがそんな事を感じている間にも昇はラクトリーに確認を取っていった。

「ラクトリーさん、どんな状況でも僕達と連絡が取れるように出来ます？」

昇の戦略ではそこが一番肝心なところだった。どちらが相手と遭遇しようと、その事をお互いに連絡する事が出来ればすぐに増援を期待できるからだ。

そんな昇の質問にラクトリーは笑顔で答えてきた。

「その点に付いては大丈夫ですよ。与凪さんの協力もあって、私達の連絡はいつでも出来るようにしてあります」

「じゃから安心せい。そうした連絡網はすでに完成しておるからのう」

「そっか、なら大丈夫だよね」

ラクトリーと閃華の答えに一安心する昇。けれども昇はすぐに机に突っ伏しているミリアを発見する事になった。

「……えっと、ミリア、どうしたの？」

「昇……嫌な事を思い出させないで～」

そんな返事を返してきたミリアに昇は首を傾げる。さっきのやり取りでなんでミリアが机に突っ伏す結果となったのかが分らないと言ったところだろう。

そんな二人を見てラクトリーはいつもの笑顔で昇に話しかけてき

た。

「丁度良い機会だったので、ミリアに情報操作や今回の連絡網作りに徹底的な抗議を交えながら連絡網を作り上げましたからね。その所為でしょ」

あ～、そういえばラクトリーさんが着てからはミリアは放課後にいつも引っ張って行かれてたからね～。その後遺症か。ラクトリーの説明にそう納得する昇。なにしろ昇はここのところ毎日、放課後になるのと同時にラクトリーが教室に入ってきて、泣いているミリアを引っ張っていくところを見ているのだから。

今に考えればミリアが机に突っ伏しているのは、その事を思い出してしまったからなのだろう。なにしろラクトリーはミリアにとって唯一頭が上がらない師匠だ。そのうえ厳しい時にはかなり厳しいらしく。ときたま本気で泣き出すミリアを最近では見ているだけに、昇はミリアに同情するのと同じく自業自得という言葉が頭を過ぎるのだった。

まあ、ミリアの性格から言ってとても真面目に修行をしていたとは思えない。たぶんラクトリーが頭を抱える事が何度も有った事だろう。だからこそラクトリーの修行も厳しくなっていった事を昇はつい最近知ったのだ。だからこそ同情はしても、それはミリア自身が招いた事だと決して止めるような事はしなかった。

だからミリアが机に突っ伏していても掛ける言葉が思い浮かばない昇は心の中で合掌をするのだった。まあ、昇にしてみればそれぐらいしか出来ないのも確かな事だ。なにしろこの件に関してはミリア自身が頑張らないといけない事なのだから。

そんな事を思いながら少し遠い視線でミリアを見ていた昇の瞳に今度は隣に座っているシエラの姿が写った。

そういえば、今日のシエラは……。そんな事を思う昇。シエラは今日に限ってだが一言も発していない。普段のシエラならこういう会議の場では多少の補佐説明や自分の意見を言ったりするのだが、今日に限っては一言も口を開いてはいなかった。

確かにシエラは口数が多い方ではないが、主張すべき時はしっかりと主張するし、言いたい事があるときもはっきりという性格だ。そんなシエラが今日に限っては沈黙を守っているという事は未だに今朝から感じている違和感に変化が見られないのだろうと昇は結論付けた。

う～ん、どうしようかな。

そんなシエラを見て昇には迷いが生じた。このままシエラの様子を見ているべきか、それとも自分達がシエラを巻き込んで無理矢理自分達のペースに乗せるべきか。どちらにしても契約者が現れて、これから戦闘になる可能性があるからにはシエラをこのままにすべきでは無いと昇は結論付けた。

けれどもこの場では一旦議論をまとめた方が良いと判断した昇は皆に向かって口を開く。

「じゃあ、皆で契約者の探索に当たるという事で良いかな？」

「そうじゃな、そうした方が良いじゃろう」

昇の質問に閃華がそう答えると全員が頷いた。どうやら誰も異論は無いようだ。そんな中で閃華は気に掛かっていた事を与凪に尋ねる。

「それで与凪よ、その精霊の居場所は追えておるのか？」

与凪の話しでは今現在の居場所は分らないと先程言ったばかりだが、精霊の反応を追うことが出来れば相手の居場所を特定する事が出来る。そうなれば二手に分かれて探すより、一気に攻め込んだ方が良いと閃華は思ったようだ。

けれどもそんな閃華の期待を裏切るかのように与凪は首を横に振った。

「ここからだと、どうしても追える範囲とか限られてますからね。ただ私がこの町に張り巡らせたセンサーによって精霊が入り込んだ事を察知しただけですから、そこから精霊の居場所まで追う事は不可能ですね」

「そうなると……足で探すしかないかのう」

「ですね」
そんな会話をする閃華と与凪。そんな二人の会話を聞いていて全員が少しうんざりとした顔をした。なにしろこれから町に入り込んだ精霊を探すために町中を歩き回らなければいけないという事を二人の会話から察したからだ。
確かに昇達が住んでいる町は大都市とは言えない。けれどもそれなりの広さを有しており、その中から精霊を見つけ出すためには地道に町中を歩き回らないといけないらしい。
二人の会話からそんな事を考えていた琴未の頭にある疑問が浮かんだのか、琴未は手を上げると口を開いた。
「それで具体的にどうやって精霊を探すわけ？」
確かに今まで話してきたのは入り込んできた精霊に対する対処法であり、これから実際に動くには相手を確実に見つけなければいけない。その方法を琴未は尋ねたのだ。
そんな琴未の質問に与凪は心配は無いとばかりに胸を張って答える。
「それは大丈夫よ琴未。なにしろ昔から精霊を見つける方法は多数存在するからね」
「精霊の探索法は昔からの必須技術でしたからね。今ではかなりその精度は進歩しています。それに与凪さんはその手の技術に関してはエキスパートですから。その与凪さんが作ったレーダーのような物を使えば後は簡単に探し出せますよ」
与凪が答えた後に少し抗議を交えたラクトリーが説明の補足をしてくれた。つまりは与凪が作り出したレーダーで精霊を探せる事は確かなようだ。確かに与凪は戦闘向きではなく、こうしたバックアップを得意としている。だからこそ、そのような開発技術を持っていてもまったく不思議ではなかった。
そんな二人の答えを聞いた琴未は納得するのと同時に溜息を付いた。
「でも、そのレーダーを使って町中を歩き回らないといけないのは

変わらないのよね」
「そうね、さすがにここから広範囲に精霊を的確に索敵できるレーダーの開発なんて無理なのよね。けど小範囲なら確実に精霊を見つける事が出来るレーダーなら既にあるのよ」
「つまり、それを持って町中を歩き回って相手を探せって事ね」
「そういう事よ」
はっきりと言い切った与凪の言葉に琴未は再び溜息を付いた。確かに入り込んだ精霊に対して早急に手を打たないといけないは分るが、そのために町中を歩き回る事になるとは思ってもいなかったことであり、これほどかったるい事になるとは琴未は思ってもいなかったからだ。
「まあ、しかたないじゃろ。このまま放置しておく訳にも行かんからのう」
「そうだよ琴未、ここは頑張らないと」
昇と閃華からそんな言葉を掛けられて琴未はうんざりしながらも元気良く顔を上げて見せた。どうやら琴未も覚悟を決めたらしい。それから琴未は隣で未だに突っ伏しているミリアにも渇を入れると、そのまま話し込んでいった。
そんな光景を見ながらも昇は未だに黙り込んでいるシエラに話し掛けた。丁度話しがまとまったところだし、閃華達はこれからの準備で多少の時間を要する。だからシエラと話すには丁度良い機会だからこそ昇はシエラに話しかけたのだ。
「シエラ」
「なに？」
昇が話しかけるとシエラは顔を向ける事無く言葉だけを返してきた。そんなシエラに昇は軽く息を吐くと話を続けてきた。
「えっと、とりあえず僕の顔を見てくれないかな」
そんな言葉を口にする昇。そんな昇の言葉を受けてシエラは顔を動かすと昇は今日に入って初めてシエラの顔をまともに見た。
シエラ……なんか、人形みたいだ。シエラの顔を見てそんな事を

感じる昇。
　シエラの顔立ちは普段から無表情に近いものがある。それでもシエラには感情があり、普段からそれを出しているからこそ、シエラからは人形のように無表情な印象を受ける事はまったく無かった。けれども今日のシエラはそんな普段のシエラとはまったく違い、昇はシエラから魂が抜けて人形にでもなったかのような印象を受けていた。
　それは今までに経験した事の無いシエラに対する印象であり、昇は正直どう接しようか戸惑ったが、それでもシエラはいつものシエラでいて欲しいと思った昇は笑みを浮かべるとシエラとの話を続ける。
「今日のシエラは何か変だよ。何か悩みがあるなら僕に言って欲しい……って思ったんだけど」
　最後だけ少し言葉を濁してそんな発言をする昇。そんな昇の言葉を聞いてシエラは驚きの表情を浮かべた。
　確かに今日のシエラが少し落ち込んでいるというか、変だと言う事はミリア以外は気付いていた事ではあるが、シエラの事だからと皆が遠慮して聞かなかった事だ。それは昇も同じであり、先程はシエラに遠慮して率直に聞かなかったのだが、事態がここまで急変するとシエラをこのまま放っておく事が出来なくなった昇は率直に尋ねる事にした。
　まあ、昇に遠回しに気を使うという事が出来なかったという事もあるが、この場合は功をそうしたようであり、シエラはいつもよりも少し無表情な顔になると昇との話を続けた。
「ごめん、心配を掛けた？」
「うん、いつもと違うから少しだけ心配だったかな」
「そう……ありがとう」
　そう言ってシエラは昇に笑みを向けるが、昇はそんなシエラの笑みに違和感を覚えた。それはいつもシエラが昇に見せている笑みとはまったく違ったものだからだ。

それは昇ですら分るぐらい無理をして笑っていると感じさせる笑みだった。そんなシエラの笑みはどこか儚げで痛々しかった。

そんなシエラの笑みを見たからこそ昇は更に心配になった。だからこそ昇はシエラとの会話を続ける、無理に言葉を出そうと苦労しながら。

「……えっと、なんて言ったら良いのか分らないけど。いつものシエラに戻る事は出来ないのかな？　なんか、無理して僕達に合わせようとせずに、いつものようにシエラはシエラらしくというか……だから、その……」

結局は言葉がまとまらずに支離滅裂な話をする昇。そんな昇にシエラは本当の微笑を向けると昇の手を取った。

「シエラ？」

突然の行動に昇はキョトンとした顔でシエラの顔を見詰める。そしてシエラはいつも以上の微笑を昇に向けてきた。そして昇に尋ねるのだった。

「昇は……私が必要？」

「えっ？」

突然の質問に昇は更に呆然としてしまう。そんな昇に向かってシエラは更に質問を重ねてきた。

「昇は私が昇の剣になれるから傍に居る事を許してくれているの？　私が必要だから傍に居ていいの？　私が必要じゃなくなったらどうするの？」

「えっ？　えっと、ちょっと待って」

立て続けに質問されて昇の戸惑いは大きくなる。

えっと、必要ってどういう事？　そもそもシエラは何でそんな質問をしてくるの？　……え～っと、とりあえずどうしよう。何とかシエラの質問に答えないとか。戸惑いながらもそんな考えを巡らす昇。

そんな時だった。突如としてどこからか木片が飛んでくるとシエラのおでこに直撃する。その衝撃で昇から離れるシエラは平然とし

た顔でおでこを撫でながら一言。
「痛い」
それだけしか言わなかった。それから木片が飛んできた方から琴未がシエラに歩み寄って思いっきりシエラを指差した。
「って、シエラ、人が他に気を取られている時に何をやっているのよ」
まあ、琴未からしてみればシエラと昇がお互いに手を取って見詰め合っているのだから、決して見逃せる状況では無いと判断してもおかしくは無かった。
だからこそいつものようにシエラに向かって攻撃したのだが、やはり返って来る反応はいつもと違って薄いものだった。
「……琴未が思っていた通りの事を」
「こんな事態の時にそんな事をしないでよね！」
シエラの一言にそんな突っ込みを入れる琴未。それからいつもならシエラと琴未はそのまま戦闘に成りかねない会話になるはずだが、今日に限ってはそうはならずにシエラは琴未に質問で返してきた。
「琴未は……私が居ない方が良い？」
「はぁ？」
いきなりの質問に琴未は素っ頓狂な声を上げた。それはそうだろう、いつものシエラからは考えられない質問が飛び出してきたのだから。けれどもそれもシエラの罠かもしれないと判断した琴未はいつものように答える。
「そうね、確かにシエラが居ない方が昇を独占できて良いわね」
「そう」
いつものように挑発的な言葉を発する琴未とは反してシエラの反応はあまりにも薄く、その答えは儚ささえ感じる答えだった。
そんな答えを聞いた琴未は思わずうろたえる。いつものシエラならそんな発言に対して決して肯定的な言葉は口にしないのだが、今日のシエラに限ってはまるで琴未が言っている事が正しいかのような反応を示したのだ。だからこそ琴未は慌てて言葉を付け加える。

「けど実際に居なくなると困るのよ！　それは……私が一番見たいのは昇を私に取られて悔しがっているシエラを見るのを楽しみにしてるんだからね！」

顔を真っ赤にしながら、そんな言葉を付け加える琴未。まあ琴未としても素直にシエラを心配しているという態度を表に出せないでいるのだろう。それが琴未の良いところだし、欠点でもあると閃華は感じていた。

閃華も閃華なりに二人の事を気に掛けているが、ここは琴未に任せた方が良いと判断したようだ。そしてその判断を下したのは閃華だけでなく昇もそうだった。

女の子同士の方が言える事が多いのかな？　昇としてはそんな風に考えての判断だ。確かに昇には言い辛い事なのかも知れないけど、琴未になら素直に言える事も多いのではないのかと昇は考えたようだ。

昇がそんな事を考えている間にも二人の会話は続いていた。

「だから楽しみにしてなさいよ。いつかシエラが泣き崩れる日をね」

やはり挑発的な言葉を発する琴未。そんな琴未の言葉に対してシエラは今までとは違った反応を示した。

「確かに楽しみ、私じゃなくて琴未が泣き寝入りする日が来るのを」

「って、どういう意味よ！」

「言葉通りの意味。昇が私に惚れて琴未が泣き寝入りするように家出する。そして路頭に迷った琴未は見知らぬ猫とであって、二人で共に生きて行く事を誓うのだった」

「何勝手な想像を巡らしているのよ！」

「未来予想図……じゃない予言、というかこれが琴未の運命」

「勝手に人の運命を決めるんじゃないわよ！　というか何で猫と一緒に生きて行かないといけないのよ！」

「……運命の出会いだから？」

「私に尋ねないでよね！」

結局はシエラのペースに乗せられる形で興奮していく琴未。そん

な二人の光景を見て昇はやっと一安心した。そんな昇の隣に閃華が移動してきた。

「どうやらもう大丈夫なようじゃのう」

「そうだね」

未だにいつものようにシエラに翻弄されながらも言い返す琴未。そんな二人の姿を見て昇はやっとシエラには心配が要らないと思った。

けどそれと同時にまた同じような事が起きるのではないのかとも思っていた。確かに今のシエラはいつものように戻ったけれど、昇はシエラの質問に答えていないし、シエラも何かしらの答えを出したわけではない。ただ何かを確認しただけで安心しただけ、昇はそんな印象を受けていた。

だからこれからシエラに関してまだ何かが起こるのではないのかと心配があった。けれどもその心配が的中するのは数日後の事であった。

第百話　対策会議（後書き）

そんな訳で……祝！　第百話ですよ！！！
いやはや、エレメの連載を始めてから二年以上、ようやくエレメも百話を突破しました！！！
こうして百話を振り返ってみるといろいろな事がありましたね～。ロードナイト編が終わってから、全てを修正するために一ヶ月ぐらい更新しなかったり。うつ病のために休筆したりと様々なことがあってようやく辿り着いた百話です。
これも読んでくださっている方々、休筆する時に頂いた沢山の方々からのメッセージのおかげでございます。
そんないろいろな事も有り、ようやく辿り着いた百話ですが、エレメはまだまだ続きますよ～。まあ、白キ翼編は始まったばかりですからね～。これからも二百話、三百話を目指して頑張って行きたいと思っております。
……というか、そこまでこのエレメは続くのか？　とか思っちゃってますけどね。けど、まあ、そこまで目指すという気概を持って頑張っていこうと思っております。
まあ、とりあえずは百話を祝ってかんぱ～い。というところですかね。さ～て、百話を過ぎた事ですし、これからも皆さんに読んでもらえるようなエレメを書き続けて行きたいと思っております。
さてさて、長くなったのでそろそろ締めますね。
ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。
以上、本当にこのエレメはどこまで続くんだろうとか思った葵夢幻でした。

第百一話　妥協点は慣れて探せ

「さすがに嫌になってくるわね」

琴未は歩きながらも溜息混じりにそんな言葉を呟いた。琴未がそんな言葉を呟く状態になったとしてもしかたないだろう。なにしろ与凪から契約者が侵入したという情報を貰ってからというもの、ここ数日は契約者を探して町中を歩き回っているが一向に契約者が見付かる気配が無い。

そんな状況で琴未のみならず昇までも少しだけ嫌気が刺してきたのは確かだ。そんな中で最も早く根を上げたのはミリアだという事は言わなくても分かる事だろう。

なにしろミリアは初日はともかく二日目からはぶつぶつと文句を言いながら町中を歩き回るが、ラクトリーが傍に居るからには逃げる事も敵わず。こうして昇達と一緒に町中を歩き回っている。

まあ、事態の重要性はラクトリーから徹底的に聞かされているのでミリア自身、大っぴらに文句を言う事は無いが、時々途方も無い行動に出る事もしばしばある。その度にシエラと琴未に叱られながらも昇達は契約者を探すためにこうして町中を歩き回っている。

丁度今は川岸を捜索中でこれから繁華街へと向かう予定になっている。

すぐ傍から聞こえてくる川のせせらぎでさえ、うっとうしいと思うほどの気温の中を昇達は汗水を垂らしながら歩き回っているのだ。だから昇のみならず琴未までもが嫌気をさしてそんな事を言い出しても不思議ではなかった。

その途中で琴未はある事に気付いて後ろを振り向くと精霊である三人を見詰める。そんな琴未に気付いた昇も同じように三人を見詰めるが、琴未が何を気にしているか分らずに首を傾げると直接尋ねる事にした。

「琴未、どうかしたの？」

昇に尋ねられて琴未は明らかに暑くて嫌気が刺している事を思いっきり表情に出した顔を昇に向けてきた。
「昇、今日も暑くない？」
「暑いよ」
そんな質問をしてくる琴未に昇はすぐに同意した。なにしろ夏休みが終わってもカレンダーは未だに九月の上旬である。だから未だに夏の余韻どころか真夏のような気温の中を昇達は歩き回っているのだ。昇としても暑くてしかたないのは確かだった。
琴未はそんな昇の答えに満足したかのように頷くと後ろに居る精霊である三人を指差した。
「この炎天下を私達と同様に歩き回っているのに、なんであんた達は汗一つ掻いてないのよ！」
いきなりそんな事を叫ぶ琴未。そんな琴未の言葉に昇はシエラ達に視線を戻すと、確かに琴未が指摘したとおりにシエラ達は汗一つ掻かずに平然とした顔で歩いていた。
そんな琴未の突っ込みに閃華は何かを思いついたかのように手を叩くと、琴未の突っ込みに答えてきた。
「琴未よ、前にも行ったと思うんじゃが精霊は人間とはまったく違った存在なんじゃぞ。それに属性を使った戦闘を兼ねておるからのう。これぐらいの気温差はまったく気にならんのじゃよ」
つまり精霊にはこの程度の寒暖差はまったく気にならないということだ。けれども制限無しに気にならないわけではない。
海での戦いを思い出してもらえれば分ると思うが、竜胆のように高温の精霊が操る焦熱の属性や風鏡のように冷の属性など。気温や温度に関する属性は多数存在する。だからこそ精霊自身もそうした属性に対応するために、多少の寒暖差はまったく気にするどころか、感じなくなっているのだ。
これも属性に対する精霊が進化した証明とも言えるべきものだろう。
琴未はそんな閃華の説明を理解すると更に不快感を顔に出した。

そして静かに呟く。
「……私も雷閃刀を出してみようかな」
えっと、琴未、ここでエレメンタルの力を使うのは止めておいた方が良いと思いますよ～。
琴未の独り言にそんな事を思って琴未に行為を止める昇。確かにエレメタルの能力を使えば琴未の身体は精霊へと近づき、シエラ達のように多少の寒暖差を感じる事がなくなるだろう。
けれども雷閃刀を出すという事は自然に精霊武具である琴未の巫女服も自動的に着用する事になる。さすがに雷閃刀を持って、そのうえ巫女服で街中を歩く琴未の隣を昇も歩きたいとは思わなかったようだ。
昇に止められて暑さに耐え切れない琴未はスカートをパタパタとさせると少しでも風を起こして涼を得ようとするが、この炎天下では無駄な抵抗でもあるし、それよりも女の子にとってはとても行儀が悪いと言えるだろう。
そんな琴未の姿に見かねた閃華が溜息を付いた。
「やれやれしかたいのう」
閃華はそう言うと立ち止まり、瞳を閉じて精神を集中させると大気中にある水分を操る。そして湿気とも呼ばれる水分で渦を作ると、その渦が昇と琴未を巻き込み、渦の中へと二人を入れた。
「どうじゃ、これで少しは涼しくなったじゃろ」
「あ～、確かにこれは涼しいわね～」
一気に涼しくなった事で琴未の顔からやっと不機嫌さが消えて清涼感を体中で感じる。けれどもその隣で昇は一人で身体を抱えていた。
「えっと、閃華、僕のところだけやけに寒くない？」
そんな質問をしてきた昇に閃華は首を傾げる。閃華としては昇と琴未の二人に涼を取らせるために水を操って目では見えない水の渦で二人に涼を取らせたのだが、昇にはそれ以上の力が加わっているようだ。

そんな昇の言葉にシエラが口を開いてきた。
「ごめん昇、強すぎたから弱くする」
シエラがそう言うと閃華と同じように精神を集中させると昇に加わっていた力を弱める。
「あ～、なんかかなり涼しいんだけど」
そんな昇の言葉に琴未は見えない水の渦から出るとシエラに詰め寄る。
「シエラ、あんた何をやってるのよ」
シエラの言葉から察して閃華が水の渦を作るのと同時にシエラが何かをやった事は明白である。だからこそ琴未はシエラに詰め寄るのだが、シエラはそんな琴未の視線を交わしながらしれっとした態度で答える。
「私は少しだけ風を操っただけ」
「それがどうして昇だけが更に涼しくなる展開になるのよ」
「……知りたい？」
「当たり前でしょ」
琴未としては事の次第を究明してシエラをとっちめたいと考えているのだろうが、シエラの思考はそんな琴未の考えを更に凌駕する物だった。
「じゃあ今日一日、昇とデートさせてくれたら教えてあげる。もちろん最後はキスで終わり」
「って、何を勝手な事を言ってるのよ！　いいから早く教えなさいよ！」
琴未は再び炎天下に戻った事で更に頭に血が上ってヒートアップする。そんな琴未の隣で閃華は何かに気が付いたかのように手を叩いた。
「なるほど、そういうことじゃったか」
「どうしたの閃華、何か分かったの？」
琴未の問い掛けに頷く閃華、その隣でシエラは琴未に気付かれないように舌打ちをするのだった。そんなシエラに気付かないまま閃

華は説明へと入っていく。
「つまりはこういう事じゃ。私がやった水の操作で大気中の水分に流れを与えて熱を吸収しやすくしたんじゃ。それを昇と琴未にぶつけて二人に涼を取らせたんじゃが、シエラはそこに風を操って冷風を作ったというわけじゃ」
　要するにシエラは閃華が都合良く水を操ってくれたのを利用して、自らの属性を使って冷風を作り出して昇にぶつけて更に昇だけに涼を取らせていたというわけだ。翼の属性はただ単に空を飛ぶだけでなく、少しだけだが風を操る事が出来るのだ。
　そして水というのは流れているだけで周囲の熱を吸収して冷やす事が出来る。流れている川の近くに行くと涼しく感じるのはそこに水があるからではなく、水が流れているからこそ熱を吸収して冷やす事が出来るのだ。
　閃華はそれを利用して湿気に流れを加える事で川の流れと近い効果を昇と琴未にぶつけたのだ。けれどもシエラはそれを利用した。閃華の作った水の渦で冷やされた大気に更に流れを作って、それを昇にぶつけて冷却効果を倍増させたのだ。
　シエラとしては、その事を後で報告して自分に都合の良い展開に繋げようとしたのだが、風の流れが強すぎた所為で、こんなにも早く事が露見してしまった。
　けれどもそこはシエラである。その事を利用して昇とのデートを公認させようとしたのだが、それが分って引き下がる琴未ではなかった。
　未だにヒートアップしている琴未に向かってシエラが口を開く。
「デートを認めるなら琴未にもやってあげる」
「結構よ！」
　シエラの申し出をきっぱりと断ると琴未は再び閃華が作り出した水の渦へと入って行き、再び涼を取る。そこには何故かミリアの姿もあり昇と一緒に涼んでいた。
　琴未はそんなミリアを外へと放り出すと、このまま契約者を探す

と言い出し、閃華はやれやれとばかりに溜息を付き、シエラは再び舌打ちをすると昇達は再び歩き出した。

川沿いから住宅街へと入ると琴未が再び口を開き始めた。

「それにしても、その契約者は未だに見付からないの？」

そんな言葉を閃華に向かってぶつけてきた。その言葉を受けて閃華は制服のポケットからおもむろに携帯電話を取り出すと開いて何かを確認するかのように画面を見詰める。

もちろん精霊が携帯電話を持てるはずも無く、これは与凪が作った物だ。精霊を探し出す手段は幾つもあるにしろ。それが変わった風貌をしていれば周りからの注目を集めてしまうだろう。だからこそ与凪はこの時代に合った。何処にでもあるようなものを精霊を探すレーダーの形にしたのだ。

確かに携帯電話を見詰めている閃華の姿はまったく違和感が無く。とても精霊を探しているとは誰一人とは思えないだろう。まあ、その前に閃華が精霊だと気付く者は居ないだろうが。

それはともかく、閃華が確認するからにはこの辺りには精霊が居ないと琴未に告げると、琴未は疲れたように肩を落とした。そんな琴未の姿を見て昇も疲れたように息を吐く。二人とも疲れてきている事は確かなようだ。

そんな二人の姿を見てシエラは自然と昇の手を取って歩き出す。

「じゃあ行こう昇」

えっと、何処にですかシエラさん？

いきなりの行動に戸惑う昇。当然そんな事をすれば黙っていない琴未が二人の前に立ち塞がる。

「シエラ、いったい何をしてるのよ」

「昇が疲れたみたいだから、この先にある繁華街で休憩する。もちろん二人っきりで」

「そんな事が許されるワケが無いでしょ！」

シエラを思いっきり指差しながら断言する琴未。まあ、琴未としてはそんな事は絶対に許されない事だ。だからこそ、ここは断固として二人の前に立ち塞がる。そんな琴未に向かってシエラは口を開いた。

「なら、このまま休憩無しで契約者を探し続ける？」

「……まあ、それは……ちょっとね」

琴未としても疲れてきているのは同じだ。だからここは休憩を兼ねてどこかでお茶をしたい気分でもある。もちろん昇と二人っきりでだ。だからこそ琴未はシエラの質問に言葉を濁すしかなかった。そんな琴未にここぞとばかりに追撃を掛けてくるシエラ。

「確かに事態から考えて急いだ方が良いのは確か、けれども肝心な時に動けないようでは本末転倒。だからこそ、ここは一旦休憩を兼ねて昇とデートする」

「休憩は良くてもデートは却下よ！」

シエラの言葉に即座に突っ込みを入れてくる琴未。さすがは琴未といったところだろう、もうシエラの口車には早々簡単に乗らなくなっている。まあ、最初っからそうだったかもしれないが、今ではすっかり翻弄される事無く、しっかりと言い返せるようになっているのは確かだろう。

そんなシエラと琴未の言い争いに収集が付かないと感じた閃華が仲裁に入ってきた。

「ほれほれ、二人ともそこまでにしておくんじゃな」

「だって閃華」

琴未としてはまだまだ不満が残っているのだろう。それはシエラも同じなようで未だに二人とも頃合を見ては睨み合いを続けている。もちろん、すっかり疲れきっている昇を放って置いてだ。

閃華はそんな昇を指差して言葉を口にする。

「確かにここいらで休憩を入れた方が良いかもしれんのう。ほれ、昇もすっかり疲れきっているじゃろ」

閃華に指摘されてやっと昇に目を向けるシエラと琴未。昇は二人

に挟まれてすっかり疲れきった顔をしていた事にやっと気付いたようだ。

そんな昇を見て二人の間に暗黙の停戦協定が結ばれたのだろう。ここはしたないと二人とも昇から少し距離を取る。やっと解放された昇はこの時に一息ついた。

あ～、やっと終わってくれたよ。それよりも……疲れた。

いつものように二人のいさかいにすっかり巻き込まれた昇は疲れたように思いっきり息を吐き出した。毎度の事とはいえ何度経験してもこれに関しては慣れるという事が出来ない昇だった。

そこで昇達は休憩を兼ねて繁華街へと足を向けた。そこは時間時というのもあり、沢山の人で賑わっていたが、昇はシエラ達に手を引かれる形でオシャレな洋菓子店へと足を踏み入れた。

そこは昇一人では決して入る事が出来ないような店だ。店の雰囲気もさることながら、お客も全て女子高生や主婦などが多い。つまりは女性に人気があるお店である事は確かだ。

そんな店だからこそ昇が足を踏み入れることに戸惑っていたのは昔の事であり、最近ではシエラ達に連れられてこういう店にも抵抗無く入れるようにもなっていた。

その店はカフェも兼ねており、ショーケースの向こうには、その場で食事が出来るスペースが設けられていた。

空いている席に腰を掛ける昇達。女性陣が甘い物を注文する中で昇一人がアイスコーヒーだけを注文した。これも経験からして今後の展開を読んでいるからだろう。

それから数分後には注文したケーキなどが到着した。ミリアの前には特大のパフェが置かれている。まあ、ミリアの事だからそれぐらいは一人で簡単に片付けてしまうのもいつもの光景となっている。

そして昇はアイスコーヒーにガムシロップとミルクを入れて掻き回すと、少しだけコーヒーを喉に流し込んで潤した。

そんな昇の目の前に突如としてケーキの切れ端がホークに刺さって二つ差し出されてきた。

あ～、やっぱりこうなりますよね～。
そんな光景を遠い目で見詰める昇。もちろんケーキを差し出してきたのはシエラと琴未だ。二人ともお約束のアーンをやりたいのだろう。そんな事は昇には分っているからこそ、ここは再びアイスコーヒーで喉を潤して準備をする。その間にもシエラと琴未は睨み合いながらも言葉を交わす。
「これはいったい何の真似なのかしらね、シエラ」
「琴未こそ……邪魔」
「はっきりと言ったわね！」
シエラの言葉にいきり立つ琴未。そんな瞬間を見逃さない昇はここぞとばかりに行動に出る。
今だ！　はっきりとそう感じると昇は口を大きく開けて二人が差し出してきたケーキを一気に両方ともほうばる。さすがに二人とも昇にケーキを食べさせないとばかりにせめぎ合っていたばかりに、二人が差し出したケーキはお互いに邪魔をする形で接近しており、昇が大きく口を開けば両方とも口の中に入れられる距離にまで縮まっていた。
『あっ』
昇の行動にシエラと琴未は二人同時に声を上げる。まさか昇がこんな行動に出るとは二人とも予想が出来ていなかったのだろう。そんな光景を見ていた閃華が隣で笑い声を上げる。
「くっくっくっ、昇も二人の扱い方を憶えてきたようじゃのう」
「まあ、何度もこんな光景を目の当たりにしてるからね」
「なるほどのう、慣れで妥協点を探り当てた訳じゃな」
そんな会話をする昇と閃華。当然二人の会話はシエラと琴未の耳にも入り、二人ともしかたないという感じで自分の前にあるケーキを口に入れながら呟く。
「これは、新たな作戦を考えないと」
「今度こそは、今度こそは絶対になんとかしないとよね」
あの～、シエラさん、琴未さん、そこまで真剣に考えられるとこ

っちが困るんですけど。そんな昇の気持ちも知らないでシエラと琴未は新たな作戦を考えると閃華が再び笑いかけてきた。

「どうやら悩みの種は尽きないようじゃな」

閃華さん……楽しそうですね。そんな事を言って来た閃華を昇は睨みつけていると閃華は意外な行動を取ってきた。なんと自らのケーキを丁度良い大きさに切るとホークに尽くさして昇の前に差し出してきたのだ。そして一言。

「もう一つぐらい悩みの種を増やしてみるのはどうじゃ？」

「心の底から遠慮させてください」

昇が呟いた素直な言葉に閃華は笑うと差し出してきたケーキを自分の口へと運んだ。それからやっぱり呟くのだった。

「やはり琴未のためにも新たな策が必要じゃな」

……閃華さん、また何かを企むんですか？　そんな疑問を口に出すのを恐れた昇は何も聞かなかった事にしてケーキで甘くなった口をアイスコーヒーで丁度良く配分するのだった。

そんなやり取りが行われている中でミリア一人だけが特大のパフェを食べ尽くし、追加注文をしていた。

昇達が店を後にすると丁度、閃華のポケットから携帯電話の着信音が鳴り響いた。もちろん閃華が携帯電話などを持っているはずも無く、与凪から貰った精霊の反応を示すレーダーだ。その携帯電話式のレーダーが鳴り響いて、閃華は素早く携帯電話を開いた。

「見つけたぞ、どうやらこちらに向かってくるようじゃ」

「って、そんな事を言われても」

昇は辺りを見回すが、ここは繁華街であり、この時間帯は人で大いに賑わっている。そんな中で精霊だけを見た目だけで判断するのは不可能だ。けれどもレーダーが反応していると言う事は、この人込みの中に精霊が居る事は間違いない。

後はどうやってその精霊を特定するかだが……。

「どうする昇、さすがにこの人込みだと私達でも精霊を見つけ出すのは不可能」

そんな事を言ってくるシエラ。人通りが少なければレーダーに頼らずとも相手が精霊かどうかシエラ達のように精霊なら相手の事が分かる。それは精霊が発する特有の力を精霊なら感じる事が出来るからだ。つまり精霊同士なら相手が精霊である事を見分けることが出来る。

けれどもこれほどの人込みだ。相手に直接接触でもしない限りシエラ達でも、誰が精霊かなんて分かりはしない。

それにレーダーもそこまで細かく表示されている訳ではない。さすがにこんな人込みの中で的確に精霊を探し当てるレーダーなどは与凪でも作る事は出来ないのだ。

それはレーダーが精霊の反応だけを示す事しか出来ないからだ。さすがに人間の反応までレーダーに組み込むだけの物は作る事が出来ないうえ、たとえ作れたとしてもこんな人込みの中では人間の反応と入り混じって精霊を特定する事が出来ない。

「どうするんじゃ昇、こんな状況では相手を特定するのは不可能じゃぞ」

閃華もシエラと同じ意見を述べる。どうやら閃華もこの状況に少しは焦りを感じているようだ。確かに精霊がこの人込みに紛れ込んでいるのは確かであり、昇達はすぐにその精霊達を見つけ出さないといけない。

けれどもレーダーもシエラ達の感覚も当てにならないとなると打つ手が無い。そんな状況だからこそ閃華も少し焦り、判断を昇に委ねてきた。

状況が状況なだけにこのまま精霊の反応を追って人込みが少ない場所まで跡を付けるという手段が昇の頭を過ぎるが、それだと少し間違えれば再びレーダーの範囲外に出られてしまう可能性がある。昇はそう判断すると、その手を使うわけには行かなかった。

そうなると……どうしてもここで見つけ出さないと、また歩き回

って探さないといけないし、僕達としてもそれだけは避けたし、それに精霊王の力があるから早く見つけ出さないとやっかいな事になりかねない。

通り過ぎていく人々を見ながら昇は思考を巡らす。そんな時だった、昇の頭に昔の事が思い出される。それはあまり思い出したくないことだが、閃いてしまった物はしかたなく、現状ではその手段に出るのが一番良いと昇は判断した。

「皆、とりあえず人気が無い裏路地に行こう」

昇はそう言うと適してる場所が無いか探しながら歩き始めた。そんな昇の言葉に反論する暇も無くシエラ達は顔を見合わせながらも昇の跡を追って歩き始める。

そしてすぐに店の裏側に通じていそうな路地を見つけると昇達はそこに入り込んだ。さすがにこんな場所には人などはおらず。誰も昇達を見る者は居なかった。

「うん、ここなら大丈夫そうだね」

「それで昇よ、どうするんじゃ？」

尋ねてきた閃華に昇は早口で先程思いつた事を交えて閃華とシエラに指示を出す。

「閃華はすぐにフレト達と連絡を取って」

「うむ」

頷いた閃華はすぐに空中にモニターを出現させると画面に映し出されたラクトリーと話を始める。そして昇はすぐにシエラの方へと顔を向けた。

「シエラはすぐに精界を張って」

「ここで？」

「そう、そうすれば精界内に取り残されるのは僕達と相手の精霊だけになるから」

「分った」

シエラは頷くとすぐに精神を集中させて精界を展開させる準備へと入った。

これで準備は出来た。後は相手を見つけ出して倒すだけだ。昇がそんな事を考えていると横から琴未の質問が飛んできた。

「昇、いったいどうするつもりなの？」

どうやら琴未には昇が出した指示の意味が分かっていないようだ。それは琴未の隣に居るミリアも同じみたいで首を傾げている。昇はそんな二人に向かって説明を開始する。

「精界に入れるのは精霊と契約者だけなんだよ」

「それは分ってるわよ」

「そして精界が展開されると精霊と契約者は強制的に精界内へと入る事になる」

「なるほど、そういう事なのね」

昇の短い説明で全てを理解した琴未が頷き、ミリアは未だに首を傾げている。どうやらあの説明ではミリアは理解出来ていないようだ。いや、正確には理解するには時間が掛かるだけで、時間が無いこの状況下では素早い理解がミリアには出来ないという事だ。

そんなミリアに向かって琴未が事細かく昇の作戦を説明する。

昇の作戦を要約するとこういう事になる。

そもそも精界とは契約者と精霊が戦う戦場であり、その中に入れるのは精霊と契約者に限られる。そして一旦入った精界は中から精界を破壊するのは不可能に近い。その分だけ外からの攻撃には弱いという弱点があるが、今の状況ではその事は無視しても良いだろう。そして精界が展開されれば範囲内にいる精霊と契約者は強制的に精界へと送り込まれる。

昇はその精界の特性を利用して相手の精霊を見つけようとしたのだ。

つまりシエラが精界を張れば、その範囲内には昇達と探している精霊だけが取り残される事になる。要するに邪魔な人込みが消えて的確に相手の精霊を見つけ出す事が出来るわけだ。

昇は以前のこの手で精界に取り込まれた事があったが、今回はこの手段を用いて相手の精霊を強制的に精界内に取り込んで特定しよ

うというのだ。
けれどもそんな事をすれば相手との接触は確実であり、そのまま戦闘になるのは当然と言えるだろう。だからこそ昇はすぐにフレト達に増援を頼むために閃華に連絡を取らせて、シエラに精界を張らせるという策に出たのだ。
確かにこの作戦なら確実に相手を見つける事が出来るが、すぐに戦闘になるというリスクも負う事になる。その覚悟があっての作戦だ。だからこそ昇は琴未達にもすぐに戦いになる事を告げるのだった。
なにしろ相手から見れば昇達から戦いを仕掛けているようなものだ。そのうえ精界内に取り込んでしまうのだから相手も逃げる事が出来ない。だから相手としても戦うしかないのだ。
昇としては最初から戦う事を前提にした作戦を遂行するのは避けたかったが、こんな状況下になってしまってはしかたないと諦めて戦う覚悟を決めるしかなかったのだ。
「どうやらフレト達はここからかなり離れた所に居るようじゃから、到着するまでには時間が掛かるそうじゃ」
「うん、分った。僕達だけで倒せるならそれに越した事は無いけど、無理だと感じたら時間を稼いでフレト達の増援を待つ方向で戦おう」
昇の言葉に皆が頷くと昇はシエラに顔を向けた。
「シエラ」
昇の言葉にシエラは頷くと一気に力を解放させる。
「精界展開」
シエラから光り輝く柱が一気に天に向かって登っていくと、光の柱はシエラが指定した高度に達すると上昇するのを止めて、今度は包み込むように広がり始め、そして世界は白く染まって行く。
完全に白く染まった世界で昇は皆に向かって頷くとシエラ達も頷いてきたので、それを合図に昇達は元居た繁華街へと飛び出していった。
そこには先程までの人込みはすっかり無くなっており、少し遠く

に数人の人影が見える。
「相手は三人のようじゃな」
相手の人数を確認した閃華がそんな事を言って来た。確かに精界内に見える人影は三人で、三人とも辺りを見回している。どうやら状況を確認しているようだ。
昇達は駆け出すとその三人へと一気に近づき、相手も昇達に気が付いたようで、両者は適度な距離を開けて対峙する。
「まさかこんな所に契約者が居るとは思いもしませんでしたわ」
派手なドレスを着た女性が明らかに威張った態度でそんな言葉を口にした。年齢からすれば昇よりも年上だろうが、そんなに大人びてないところからあまり年齢が離れていない事が分った。
状況から察するにどうやら彼女がこの中ではリーダーであり契約者なのだろう。なにしろ相手は三人。その中の二人は精霊である事はすでに分っている。そうなると後の一人は契約者となるのは必然だ。
そんな相手の契約者がこれまた派手な毛皮のような物が付いた扇子を昇達に向かって突き出してきた。
「この状況、これは宣戦布告と受け取っても構いませんわよね？」
昇達は五人に対して自分達は三人だというのに、相手の契約者はそんな人数差をまったく気にするどころか、高飛車な態度を崩す事無く言葉を放つ。どうやらこんな状況でも不利だとは感じていないようだ。どうやら何かしらの手があるのだと昇は感じたが、そう言われて黙っているのもあれなので昇は相手の契約者に向かって言葉を返した。
「ええ、申し訳ないですけど、あなた方をここで倒させてもらいます」
「そう、それは結構な事ですわね。後で……後悔しても知りませんわよ」
こんな状況でもやはり高飛車な態度を崩さない相手の契約者。そんな相手の契約者に琴未は業を煮やしたのだろう。一歩前に進み出

ると相手の契約者に負けないぐらいの態度で言葉を放つ。
「あなたね、まさかこの人数差で私達に勝てると思ってるの？」
確かに人数だけを見れば相手の方が不利なのは確実だ。けれども相手の契約者はそんな琴未の言葉を笑い飛ばした。
「私の能力の前ではその程度の人数差など、何の問題にもなりませんわ」
「何ですって！」
相手の態度に思いっきり腹を立てる琴未を閃華が抑え付けに掛かる。
「琴未、あまり興奮するでない。相手の能力も分かっておらんのじゃからな。ここは慎重に事を進めんといかんぞ」
そんな閃華の言葉に琴未が言葉を失って頷くと同時に相手の精霊と思われる一人が前に出てきた。
「残念だけど私には少しだけ相手の能力が分かっているのよね。まあ、一人だけだけどね」
その言葉を発した人物の見た目は昇達より年上だと感じさせる容貌をしていた。けれども昇達が更に注目したのはそんな事ではなかった。
その人物は短く真っ白な髪をしており、肌も同じぐらいに白い。顔だけを見れば男性のようにも見えるが、胸の膨らみが女性である事を示していた。男装の麗人とはまさしく彼女の事を言うかのよう思えるほどだ。
けれどもそんな彼女からは男性らしい雰囲気はまったく出ておらず、返ってその顔立ちが彼女を美しくしており、まるで女神のように思えた。
そう、その髪や肌の白さ。そしてその雰囲気はシエラに似ていたからこそ昇達は驚きながらも注目したのだ。
「翼の精霊じゃな」
そんな彼女を見て閃華はそんな言葉を発した。そしてその人物は閃華が言った事が正解かのように自分の胸に手を当てて口を開く。

「その通りよ。私は翼の精霊。そう、そこに居る……シエラと同じくね」

その精霊は的確にシエラを指差した。その事で昇達の視線も自然とシエラに集中する。

そして指差されたシエラは明らかに驚愕の色を顔に出していた。

シエラが……またあの時みたいに。昇はシエラの顔を見て真っ先にそんな事を思った。それは数日前までのシエラであり、そんなシエラの瞳はどこか悲しげで、その存在はどこか儚げな雰囲気を出していた。

そんなシエラが相手の精霊を見て呟く。

「……アレッタ」

第百一話　妥協点は慣れて探せ（後書き）

はい、そんな訳でお送りしました百一話はどうでしたでしょうか～。

まあ、今回は白キ翼編の初回バトルに繋げる話のようなものでしたからね～。昇達の私生活を交えながらお送りしてみました。

そして次回からはいよいよ白キ翼編の初バトルと入っていきます。けれども、その初バトルで思い掛けない事が……。そしてシエラを知っているアレッタという精霊との関係とは……。

まあ、なんにしても、それらはこれから明らかになっていく事なのでお楽しみに～。それに白キ翼編はちょっとバトルを多く取り入れようかと思っております。まあ、他倒自立編は少しバトルが少なかったようにも思えましたからね～。まあ、あれはあれで良いのかもしれませんが、白キ翼編では思い掛けないバトルを用意してありますのでお楽しみに～。

さてさて、長くなってきたので、ここいらで……締めません！！！　まだ話を続けます！！！　と思わせといてやっぱり締めます！！！

……ごめんなさい、ちょっと遊んで見たくなったので、ついやってしまいました。そんな訳で素直に締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、昇もシエラ達に対する日常に慣れてきたな～、とか思ってしまった葵夢幻でした。

第百二話　鳥のサモナー

シエラにアレッタと呼ばれた精霊は笑みを浮かべると途端に鋭い眼差しへと変わってシエラを刺すように視線を向けてきた。
「本当に久しぶりね、シエラ」
話しかけられたシエラはまるで何かを恐れているかのように一歩だけ後ずさりをするとアレッタとの会話を続ける。
「どうして……アレッタがここに？」
そんな質問にアレッタは急に笑い出すと今度は更に鋭い眼差しをシエラに向けてくる。
「どうしてここに？　それはこっちのセリフでしょシエラ。まさかあなた風情が人間と契約をして争奪戦に参加してくるなんて思ってもみなかったからね。そしてよくもまあ、もう一度私の前にその顔を出す事が出来た物ね」
「なんだと！」
アレッタの言葉は明らかにシエラを見下した言い方をしており、その言葉はシエラではなく昇に火をつけてしまったらしい。だからシエラの代わりに昇が怒りをあらわにする。
「シエラと君の間に何があったかは知らないけど……シエラがそんな風に言われる筋合いは無い！」
はっきりとそう宣言する昇に対して、昇の言葉を聞いたアレッタは再び笑い出した。そしてアレッタは笑いを止めると昇に向かって微笑んでくる。
「やっぱり何も知らないんだシエラの事。それはそうでしょうね、私もその事を知らないでシエラと行動を一緒にしていた時があるんだから。そうね、私は君と同じ被害者なのよ」
「どういう意味？」
アレッタの言葉が理解できなかった昇はアレッタを威嚇したまま聞き返す。そんな昇に対してアレッタは態度を崩すどころか逆に微

笑を強くして話を続ける。
「シエラはあなた達に隠している事があるのよ。だから誰とも親密な関係になろうとはしない。そう、それはシエラが」
「アレッタ！」
アレッタの言葉を遮りシエラが一気に駆け出すとウイングクレイモアを取り出して精霊武具を身にまとう。
そんな素早い行動をまるで予期していたかのようにアレッタもすぐに精霊武具を召喚する。
「スカイダンスツヴァイハンダー＜空を舞い踊る両手剣＞」
アレッタが取り出した武器は両手剣だが、その刃の長さと大きさはウイングクレイモアにも引けを取らない。ただウイングクレイモアに比べると刃の幅が少なくなっており、空中で振るうにしても振るいやすい形状となっている。
更にアレッタの防具もシエラと同様に軽装備であり、動きやすさを重視している。そして防具の色までもが真っ白であり、更には背中から翼を生やしている。その姿はまさしく天使そのものと言っても良いほどだ。
そんなアレッタも向かってくるシエラに合わせて一気に駆け出すと、シエラとアレッタはお互いに刃をまじあわせる。それから二人とも上昇しながらお互いに武器を振るい、何度もの剣戟音を響かせながら一気に上空へと舞い上がっていった。
「何があったかは知りませんが、アレッタにも困ったものですわね」
そんな光景に相手の契約者がそんな言葉を発してきた。どうやらこの事態は相手にも予測不可能な事態であり、まさかあの二人が先陣を切って戦い始めるとは、その場に居る誰もが思ってもいなかった事だ。
それは昇達も同じであり、最初は突然飛び出していったシエラに気を取られていたが、相手の言葉でまだ対戦相手が地上にもいる事を思い出し、昇はシエラの事を心配しながらも相手の契約者と話し始める。

「いきなりこんな事態になってあれですけど、僕の名前は滝下昇。あなた方に恨みは無いですけど、ここに居られると迷惑なので倒させてもらいます」

律儀に名乗りを上げる昇に対して相手の契約者は少しだけ昇に微笑を向けてきた。

「どうやら礼儀だけは知っておられるようですわね。ならば私も名乗るといたしましょう。私はローシェンナ＝ハーベスト。そしてこっちがもう一人の精霊」

「エリンだよ～」

ローシェンナの言葉を遮って今まで黙っていたもう一人の精霊が元気に良く昇達に名乗ってきた。

エリンと名乗った精霊は真っ赤で長い髪を腰まで伸ばしており、外見年齢は昇よりも少し下のように見えるが、ミリアと同じような陽気を通り越した雰囲気をかもし出しており、更に幼い印象を昇達に与えていた。

そんなエリンがローシェンナに向かって話し始めた。

「ねえねえ、とりあえずこいつらをぶっとばせば良いんだよね？」

そんな事を尋ねてきたエリンにローシェンナは笑みを向けてはっきりと言葉を口にする。

「ええ、そうですわよ。手加減無用、全力全開で叩きのめしてあげなさい。それが争奪戦で戦いを仕掛けられた者の義務ですわ」

ローシェンナの言葉に昇は少しだけ苦い顔をする。それは昇としては戦う事は不本意に思っていたからだ。

確かにセリスの治療をするために今の状況で精霊王の力に気付かれてしまうのはまずい。だからと言って話し合いだけで解決する問題では無い事は昇にも充分に分っている。つまりは戦いは避けられない事は頭では理解していたものの、実際に戦いが始まるとどうしてもそんな気持ちが少しだけ出てしまうのだろう。

それに戦端を切ったシエラの事も気に掛かっているのは確かだ。シエラに何があったかは知らないが、この状況でシエラ一人だけを

上空で戦わせるのは危険だと昇は感じていた。だからこそ昇も戦いを火蓋をなるべく早く落とそうとしていた。

だから昇はローシェンナの言葉を否定はせず、それどころか肯定に挑発を交えて言葉を放つのだった。

「そうだね、この状況では僕達が圧倒的に有利な事が確かだから、さっそく倒させてもらいますね」

そんな昇の言葉がエリンに火を付けたのか、エリンは前に踏み出すと思いっきり楽しげに自分の精霊武具を呼び出した。

「エルターレフレイル＜噴火する打撃鉄球＞」

エリンの右手が赤く輝くとそれは長い棒へと変化する。けれどもただの棒ではなく、棒の先端には鎖が付いており、その鎖は鉄球に繋がっているという独特の形状をしている。

そして身にまとった精霊武具はミリアと同じような西洋式の甲冑のようだが、ミリアのように全身を甲冑に覆われているのではなく、ミリアの半分ほどしか甲冑を身にまとっていない。しかもその甲冑の色は真っ赤であり、まるで相手を威嚇するどころかそのまま飲み込んでしまいそうな雰囲気をかもし出していた。

そんなエリンが精霊武具を身にまとった事で昇陣営からも琴未達が前に出る。

「武久琴未、押して行くわよ！」

「閃華、そなたに恨みはないんじゃが、これも定めじゃ」

「ミリア、さあ、一気に行っちゃうよ～」

琴未達も短く名乗りを上げると自分達の精霊武具を取り出して身にまとう。そんな琴未達の準備が終わった頃には、戦闘準備が出来ていないのは昇とローシェンナだけになる。そんな状態に昇も自分の武器を取り出そうとするが、ローシェンナはまったくそんな素振りを見せるどころか余裕すら出して昇達の動きを窺っているようだ。

そんなローシェンナが昇に向かって話しかけてきた。

「あら、あなたは武器を持たなくて良いのですか？」

意外なほどの質問だ。その質問をしたローシェンナは武器を出す

どころか戦う素振りすら見せない。そんなローシェンナに戸惑いながらも、昇は自分の武器を具現化させる。

「アルマセット」

エレメンタルウェポンである昇の二丁拳銃である紫黒が昇の手に握られ、その身体にはエレメンタルジャケットの黒いコートの八咫烏が身にまとわれた。

そんな昇の姿を見てもローシェンナは戦闘準備をするどころか、余裕を見せるように手にしている派手な扇子で自分を扇いでいる。

「そちらこそ、そのままでいいんですか？」

いつまで経っても戦う意思を見せないローシェンナに昇は思わず、そんな問い掛けをしてしまう。そして問われたローシェンナは扇子を閉じると昇を指し示してきた。

「ええ、こちらはすでに戦闘準備は整っていてよ」

そんなローシェンナの言葉に首を傾げる昇。どうみてもこのままローシェンナが戦えるとは昇には思えなかったのだが、そんな昇に閃華は警告を発してきた。

「昇よ、あのローシェンナという契約者の能力は未だに分かっておらん。仕掛けるのなら今のうちじゃぞ」

ローシェンナのあの余裕は何かしらの能力を未だに温存しているためと閃華は推測して、昇に先手を打たせようとそのような警告を発してきたのだ。昇もそんな閃華の警告をすぐに理解すると行動に出る。

「ストケシアシステム起動。相互リンク発動」

昇がそんな言葉を口にするとストケシアシステムが発動されてお互いに言葉を口にする事無く、意思伝達が出来るよう何なる。つまりはわざわざ指示を口に出さなくても昇の指示は全員へと繋がるという事だ。

ストケシアシステムの起動を確認した昇はすぐに全員に向かって指示をだす。

（ミリアはあのエリンという精霊の相手をして、なにも無理して倒

す必要は無いから、フレト達が来るか、僕達が相手の契約者を倒すまでの時間稼ぎでいいから。そして僕と琴未と閃華で一気に相手の契約者に畳み掛ける。そしてシエラはそのまま上空で戦闘を続けてて、こっちに敵を降ろさないで）

そんな指示をストケシアシステムで一気に全員に伝える昇。けれども昇はすぐに違和感を感じる事になる。

それはフレト達との戦いで使った時とはまったく違った違和感。昇の指示にすぐに返事を返してきたミリアに琴未に閃華だが、シエラだけが返事を返す事無く沈黙を守っている。

確かに戦闘が激化していれば返事は返せないということがあってもおかしくは無いが、このストケシアシステムは心に思った事をそのまま伝えるシステムである。だから戦闘が激化していたとしても返事ぐらいは返す事が出来るのは簡単なはずだ。

けれどもシエラが沈黙を守っているという事は他に気に掛けていることがあるのか、それとも昇の指示を無視しているのか、どちらにしてもシエラからの返答が無い事に昇はシエラが心配になったが、シエラとアレッタはかなりの高度で戦闘を続行している。このままではとても昇が手出して出来る状況では無い事は確かだ。

そんな状況が昇に更る心配を抱かせるのだが、それでも目の前に居るローシェンナさえ倒せば全てが終わるとここは割り切って、真っ直ぐにローシェンナを見据えた。

ローシェンナはそんな昇の視線を戦闘開始の合図と受け取ったのだろう。エリンに攻撃をさせるように言って来た。

「じゃあ、一気にいっちゃうよ！」

「それはこっちのセリフだよ～」

元気の良いエリンの掛け声に、これまた元気の良いミリアの掛け声が重なり、ミリアとエリンは同時に駆け出した。

それを合図に琴未と閃華も一気にローシェンナに迫ろうとするが、自分に迫ってくる琴未と閃華の姿を見てローシェンナは軽く笑みを浮かべると指を鳴らして叫ぶ。

「アークイラ、アストーレ、ロンディネ。さあ、出ていらっしゃい」
そんな言葉が響き渡るとローシェンナの前には三つの魔法陣が展開される。その魔法陣から鷲、鷹、燕の姿があわられたのだが、どの鳥も通常のサイズとは異なっており。その大きさは軽くローシェンナの三倍ぐらいはあった。
つまりはこの三匹の鳥は巨鳥といえる部類の鳥と言えるだろう。本来はそんな鳥は存在しないのだが、これがローシェンナの能力だとしたらまったく不思議は無いと閃華は驚きもせずに昇と琴未にその場に立ち止まるように言葉に出した。
「閃華、なんなのよ、あれ！」
琴未はいきなり現れた三匹の巨鳥に驚いているようだ。そんな琴未に向かって閃華は自分の考えを伝える。
「これがあのローシェンナという契約者の能力じゃろう」
「その能力っていったい何？」
琴未が聞き返すと閃華は振り向きもせずに真っ直ぐに三匹の鳥を見詰めながら答えてきた。
「これがサモナーの能力じゃよ」
「サモナー？」
聞きなれない言葉に首を傾げる琴未。そんな事になっているだろうと思っている閃華は説明を続けてきた。
「サモナーの能力とは特定の種類に値するものを、その場に召還する事が出来るんじゃ。その大きさや能力は契約者の力によるんじゃがのう。あれほどの巨鳥を三匹も召喚するとは、思っていたよりも能力が高い契約者のようじゃのう」
そんな閃華の言葉がローシェンナにも届いたのか、ローシェンナは更に胸を張って自分の能力を自慢するかのように言葉を放ってきた。
「その通りですわ。私の能力は鳥のサモナー。数多いサモナーの中でもこれほどの力を持っているのは私ぐらいのものですわよ」
よほど自分の能力に自信があるのか、ローシェンナが先程から出

していた余裕はこの能力によほどの自身があるからだろうと昇は判断して、改めて召喚された巨鳥に目を向けるが、その大きさを実感するだけでも驚きだというのに、その能力が契約者の力によって上げられてるとなるとやっかいな相手には違いなかった。

なにしろローシェンナを倒すには、まず召喚された三匹の巨鳥を倒さないといけない。たとえ倒したとしてもローシェンナに力の余裕があるのだとしたら、また召喚されて数が元に戻る事になる。

けれどもそれは逆に言えばローシェンナの力がどれだけのものかを示しているのも同じだった。

召喚した巨鳥は三匹。それは昇達の数に合わせたと言えばそうなのかもしれない。けれどもローシェンナにまだまだ余裕があれももう数匹呼び出して、数的に有利に持って行く事も可能だ。

つまりはローシェンナが同時に召喚できる数は三匹まで。もちろん、能力を落とせばもっと召喚できる可能性を持ってはいるが、今現在目の前に居る三匹の巨鳥がローシェンナが出せる力だの最大限である可能性が高いという事になる。

要するに目の前にいる三匹さえ倒す事が出来ればローシェンナの力を大きく削ぐ事が出来るのは確実だった。そしてローシェンナの力を推測する限り、これぐらいの力を有した鳥はそうそう何匹も召喚できないと判断した昇は目の前に居る巨鳥を倒す事に全力で挑む事に決めた。

その理由としては、たとえ昇達の一撃がローシェンナに届かなくても、昇達にはフレトという後詰がある。だから今ここでローシェンナの力を大きく削ってしまえば後から来るフレト達に敵うはずが無い。つまりは目の前の巨鳥を倒す事で勝利に大きく突き進めるというわけだ。

そんな判断を下した昇はストケシアシステムを使って琴未と閃華に指示をだす。

（琴未は鷲を、閃華は鷹を狙って、僕が燕を落とすから。とにかくあの三匹さえ倒してしまえば相手の契約者には戦う力は残らないと

思う。だからあの三匹を倒した後に一気に叩く）

そんな昇の指示に琴未と閃華はすぐに返事を返してきて、すぐに自分の目的となる敵に向かって駆け出していった。

そんな昇達の動きに合わせたかのように鷲と鷹はそれぞれ特有の鳴き声を大きく上げると、一気に羽ばたいて昇達の方へと飛び立ってきた。どうやらローシェンナは攻撃はこの二匹だけにして、残っている燕を自分の護衛に付けるつもりのようだ。

それならそれで構わないと昇は先程指示した目標を倒すように琴未と閃華に指示を送り、自分はローシェンナに向かって突き進み。そんな昇の前に巨大な燕が行く手を阻むように昇に向かって飛んできた。

そんな燕の突撃をかわす昇。けれども燕はすぐに旋回するとまたしても昇に向かって突撃をかけてくる。そのスピードはかなり早く、昇が体勢を立て直すとすぐに次の攻撃が来るという感じだ。

さすがに燕だけに旋回能力には長けているようだ。昇がそんな燕を相手にどう戦おうか考えている間にも、離れたところでは鷹を相手に閃華が奮闘していた。

閃華は鷹の爪を避けると立ち並ぶ商店街の一店舗を一気に駆け上がり、その屋上へと舞い降りる。けれども閃華がそこの辿り着いたすぐ後には鷹も一気に商店街の店舗の隙間を飛び回り、一気に上昇して閃華を追ってきた。

さすがに鷹だけの事はあるようじゃのう。これだけの障害物が有っても、それだけのスピードで飛べるんじゃからのう。そんな事を思う閃華。これも鷹が有している能力が強化されている証拠だろうと判断したようだ。

確かに鷹は森の中でも木々の間をスピードを落とす事無く飛ぶ事が出来る。それは鷹の飛翔能力のみならず鷹の障害物を避けながら、そして時にはその障害物を利用して上手く飛ぶ事が出来る。

そんな能力をこんな商店街の店舗で見せ付けられたのだ。閃華がそんな事を思ってもしかたがない。だからこそ、閃華は障害物が少

ない屋上へと出たのだ。
　確かにここなら鷹が持っている飛翔能力は関係無い。けれども障害物が無いだけに鷹にとっても閃華が狙い易い獲物になった事には変わりない。
　だからこそ鷹は躊躇する事無く閃華に向かって飛び立ち、その鋭い爪を閃華に向かって突き立てる。
　そんな鷹の攻撃に閃華はなるべく体勢を低くするとタイミングを計る。確かに鷹の攻撃力やその狙いの精度から言って確実に鷹の爪は閃華を捕らえるだろう。けれどもそれは逆に言えば閃華からすれば確実に自分を狙ってくる事が分っているということだ。
　だから後は狙いを定めて反撃を入れるだけである。そう判断した閃華は龍水方天戟を背負う形で構えると鷹の攻撃に合わせて龍水方天戟を振るう。
　けれども龍水方天戟が鷹に当たる事は無かった。なにしろ鷹は閃華の間合いに入る寸前に急ブレーキを掛けるかのように翼を広げると、そのまま身体を横に倒して急旋回してしまったからだ。
　それから鷹は屋上の床を蹴ると再び急旋回して再び閃華に向かって突き進んでくる。今度も足の爪を前面に出して確実に閃華に爪を突き立てるつもりだ。
　閃華としても鷹の能力が強化されている事は予測していたが、まさかここまでの動きをしてくるとは思ってもいなかった。
「やるものじゃな」
　それでも閃華は冷静に事態に対処する。まず龍水方天戟を床に突き立てると、その上に飛び乗り、そのまま龍水方天戟を掴んだまま跳び上がる。もちろんそんな事をすれば高くは跳べるはずが無く、閃華は大した高さに跳び上がりはしなかったものの、鷹の攻撃を避けるにはギリギリの高度まで跳ぶ事が出来た。
　けれども閃華の行動はこれで終わりではない。鷹の攻撃を避けるのと同時に閃華は身体を一回転させると、そのまま勢いに任せて龍水方天戟を振るう。

そして龍水方天戟の切っ先は見事に鷹の背中にその傷跡を残す事に成功した。

傷を負ったことで鷹は大きな鳴き声をその場で上げると共に翼を羽ばたかせて、その場から動く事が出来ない。別に飛べなくなったわけではない。傷を受けた事により、鷹の動きが一瞬だけ止まっただけだ。

そんな瞬間を閃華が見逃すはずも無く。閃華は着地するとすぐに鷹に向かって駆け出す。先程の攻撃が浅手だっただけに、今度は確実にダメージを与えておきたいと閃華は考えていた。だからこそ閃華は一気に鷹との距離を詰めるが、予想外な事に閃華は鷹に届く前にその場から身を退かなくてはならなくなってしまった。

なにしろ鷹がその場で急反転するのと同時に大きな翼を広げで閃華を弾き飛ばそうとしたからだ。閃華はそんな鷹の反撃に逸早く察すると、すぐにその場に踏み止まり、一気に後ろに跳んだという訳だ。

けれども予想外に引き起こした鷹の反撃に閃華にある推測を立てる結果となってしまった。

なるほどのう、どうやら召喚した鳥達は自分達の意思だけで動いているようでは無いようじゃな。そんな推測を立てる閃華。

閃華がそんな推測を立てたのには先程の鷹が行った反撃が元となっている。もし鷹が自分の意思だけで動いているのだとした。あの場合は確実に閃華の攻撃が入っているか、もしくはその場から退いて閃華から距離を取っていただろう。

けれども鷹はあえて反撃という手段に出てきた。それは閃華は鷹の真後ろと確実に鷹から見て死角からの攻撃だ。だからそんな閃華の攻撃に合わせて反撃などは鷹に出来るはずが無い。そうなると鷹とは別の視点で見ている者が居ると推測してもおかしくは無い。

もちろん、その視点の持ち主こそ召喚者でもあり契約者でもあるローシェンナだろう。ここからは閃華の推測になるが、ローシェンナは全ての鳥を別の視点から自由に見る事が出来る。つまりは別の

視点から見ながら鳥を操っている可能性があるという事だ。
それはつまり鳥の死角からの攻撃でも下手をすれば反撃にあうという事だ。閃華はストケシアシステムを使って自分の推測を昇と琴未へと伝える。けれども琴未に関してはすでに遅かったようで、通信では「もうちょっと早く行って欲しかったわ」という返事が返ってきた。
その琴未はというと相手にしている鷲の一撃に先程吹き飛ばされてしまったところだ。

琴未は閃華と違って屋上へは登らずに障害物が多い路地を選んで戦っていた。そんな琴未に向かって鷲は鷹と同じく爪で攻撃してくるが琴未はあえてその攻撃を避けようとはしなかった。
迫ってくる鷲の爪。琴未はその爪の間合いとタイミングを合わせると、一気に駆け出て鷲との距離を一気に縮める。
そんな琴未に確実に標準を合わせている鷲も琴未を確実に捉えているらしく、多少の軌道修正しながら一気に迫る。
そして鷲の爪が琴未を捉える瞬間。琴未は一気に身を屈めて、そのままスライディングするかのように地面を滑っていく。これで鷲の爪を避けるのと同時に反撃に出る事が出来る。なにしろ琴未は鳥の死角である足元を完全に確保したのだから。
そして琴未は雷閃刀を鷲に向かって突き立てようとした時だった。突如として鷲の片足が地面を掴むと、もう片方の足が下にもぐりこんだ琴未を思いっきり蹴飛ばしてきた。
まさかの反撃に琴未はなす術もなく蹴り飛ばされてしまった。琴未としては完全に鳥の死角をついたつもりだったが、まさかこんな反撃が来るとは思ってもみなかった事であり、琴未は蹴り飛ばされながらも空中で体勢を立て直すと何とか無事に着地する事が出来た。
そこにストケシアシステムを使って閃華の推測した言葉が入ってきたという訳だ。琴未としてはもう少し早く、その事に気付いてい

ればそんな攻撃はしなかっただろうし、先程の攻撃も防ぐ事が出来ただろう。

けれども今更そんな事を言ってもしかたないと琴未は閃華の推測を聞いてどう戦おうか考えを巡らす。どうやら鳥だからと言って甘く見ない事は確かなようだ。それを踏まえて琴未は新たに戦術を組み立てていく。

雷華一輪刺突は攻撃範囲は広けど射程は短いのよね。かと言って雷撃閃や雷神閃を撃ってもあのスピードなら当てるのは難しいわよね。そうなるとやっぱり……私の間合いに引きずり込んでの一撃必殺、これしかないわよね。そんな戦術を組み立てていく琴未。

確かに琴未は遠距離の攻撃をほとんど持っておらず、その攻撃は近距離に高威力という攻撃方法が多い。そのため、こういった空を飛ぶ相手や遠距離攻撃をしてくる相手には少し梃子摺る傾向がある。

それでも苦手意識を持っていないのは何度もシエラとの喧嘩で空を飛ぶ相手に慣れてしまっているからだろう。だから目の前の鷲を前にしても決して負けるとは思っていなかった。

だからこそ琴未は自ら進んで駆け出して一気に間合いを詰める。けれども相手も鷲とは言え完全に独立して動いている訳ではない。ローシェンナが多少なりとも遠隔操作しているのは閃華の推測で分りきっている。だからこそ琴未は自分から動いたのだ。

そうなると当然のように鷲は空に羽ばたき琴未の雷閃刀が届かない場所にまで舞い上がる。それを待っていたかのように琴未は一気に雷閃刀を突き出す。

―昇琴流　雷華一輪刺突―

鷲にしてみれば思い掛けない遠距離攻撃だ。琴未の放った雷華一輪刺突は雷の花となって広範囲に雷をばら撒くが、それを悟った鷲は雷の花を避けるように空を翔ける。

そんな鷲の目の前に突如として琴未が姿を現した。そう、先程の

攻撃は鷲の行動を制限するだけでなく、飛んで行く方向を見定めてその先回りをするために放った遠距離攻撃だ。

この場合でもしも鷲が高度を上げて雷華一輪刺突を避けてきたとしても、その時は雷撃閃の餌食となるだけだ。つまり鷲は完全に琴未の術中にはまってしまったという訳だ。

琴未も地面からどこかの店舗をなしている壁を蹴って跳び上がると一気に鷲の前に突き進む。そして完全に不意を付かれた鷲にうろたえる隙を与える事無く、琴未は一気に畳み掛ける。

―昇琴流　天雷斬―

跳び上がったときにすでに雷閃刀を肩に乗せて八双の構えを取っていた琴未は鷲が間合いに入ると雷閃刀を一気に振り下ろすのと同時に怒涛の雷を一緒に鷲にぶつけてくる。

さすがにこの攻撃には鷲も剣撃と雷撃のダメージを負ったためか、鷲は大きな声で鳴き声を上げると雷を振り払うかのように大きく翼を広げた。

そのため天雷斬の威力の雷も拡散されて鷲はようやく天雷斬の攻撃から脱出する事が出来たが、琴未の攻撃で確実にダメージを負った事は確かだ。けれども鷲はその程度のダメージなどはまったく気にしていないかのように再び鳴き声を上げると、翼を羽ばたかせて琴未に向けてその嘴（くちばし）を突き出してきた。

どうやら天雷斬だけでは完全に倒す事が出来なかったようだ。

それだけ鷲を召喚したローシェンナの能力が高い事を示しているが、こうもしぶといとは琴未は思ってもいなかった。確かに先程の攻撃はかなりの高ダメージを与えたのは確かだが、鷲はそんなダメージを気にする事無く、嘴を突き出して突っ込んでくる。

琴未はそんな鷲の突撃を避けながらも思う。まさかここまでしぶといとは思ってもいなかったわね。確かに時間が経てば私達に増援があるのは確かだけど、私としてはこの鷲ぐらいは倒しておきたい

のよね。
　琴未はそんな事を考えながらも次の戦術を練るのだった。

　その頃、ローシェンナの目の前では燕を目の前に昇は完全に苦戦していた。それは燕の動きが速くて昇の弾丸が当たらないという事と隙を付いてローシェンナを攻撃しても必ず燕が昇の攻撃を防ぐという事で、まったくダメージが与えられていない事に昇は少しだけ焦りを感じていた。
　あの燕……相当防御力を強化してあるんだ。だから並みの弾丸じゃあ通じないし、かと言ってローシェンナさんを攻撃しようとしても防がれるんだよね。そんな事を考えながら次の手も同時に考える昇は燕への攻撃を続行しながら思考を巡らす。
　紫黒のシリンダーを高速回転させながら、まるでマシンガンのような連射を繰り出してはいるものの一発も燕には当たりはしなかった。それだけ燕の旋回能力に昇が翻弄されている事になる。かと言って隙を見てローシェンナに銃口を向けたとしても、すぐに燕がフォローに入って昇の攻撃を完全に防いでしまった。
　どうやら防御力だけではなく、そのスピードや旋回能力もかなり上がっているようだ。だからこそローシェンナは自分を守る盾として燕を自分の元へ残して置いたのだろう。
　そう昇は考えるとあの燕は相当やっかいな相手である事を自覚せざる得なかった。なにしろ攻撃が当たらないどころか、当たったとしても大してダメージを与えられる訳ではない。そうなると新たな攻撃方法が必要となってくる。
　それでも燕がローシェンナの防御を優先しているためか、あまり攻撃に転じてくる事が無かったために昇には対抗策を考えるだけの余裕が生まれていた。
　さて、どうしようかな。普通に攻撃していただけじゃ通じないからダメだよね。そうなってくると……一発勝負の砲撃に賭けてみる

しかないかな。そんな考えを巡らす昇。
　昇がそんな考えを持ったのには一つの理由がある。それは燕がローシェンナの防御を重視しており、あまり攻撃に積極性が無いということだ。つまりは多少のリスクを負った高威力の攻撃の方がこの場合は相手にダメージを与える事が出来る。昇はそう判断したのだ。
　そして昇はそんな自分の考えが正しいのか確かめるために一気に勝負に出る。
　ローシェンナを守るかのように旋回を続けていた燕が昇の気が緩んだ隙を感じ取って、昇に向かって一気に滑降してくる。そんな燕の攻撃を昇は余裕でかわすとすぐに振り返り燕に照準を合わせて通常弾をマシンガンのような連射で繰り出すが、いくら燕の行き先を予想して打ち出しても燕の方がスピードが早いために一発も当たりはしなかった。
　けれどもそれでよかったのだ。昇の狙いは燕をローシェンナから少しでも遠ざける事にある。そして燕は完全に昇の弾丸が届かないところまで移動すると旋回して戻ろうとするが、昇はその瞬間を見逃す事無く、一気に振り返ってローシェンナに銃口を向ける。
　それから一気に力を紫黒に溜めていくと、背中に燕が迫ってくる気配を感じながらも昇は振り返らずにローシェンナに銃口を向け続ける。
　そして一気に引き金を引き絞る。
「フォースブレイカーッ！」
　銃口の先に光球が生み出されると、そこから高圧縮された力が砲撃となって打ち出される。そんな昇の砲撃は一直線にローシェンナに向かっていき、フォースブレイカーが通り過ぎるたびに周辺の物が破壊されていく。それだけフォースブレイカーの威力が高い事を証明していた。
　そしてフォースブレイカーはローシェンナの眼前で何かに激突して爆発を巻き起こした。
　さて、これで直撃したのは確かだよね。後は……これで倒せるか

どうかだよね。そんな事を考える昇。確かに昇は攻撃が当たった手応えを感じていたが、それがローシェンナを倒した事に直結しない事は分りきっていた。

それでもローシェンナに向かってフォースブレイカーを放ったのは昇の策略がそこに隠されていたからだ。いや、正確には昇の観察力がそのような結果をもたらすだろうと予測させて、その策略を生み出す結果となったのだ。

そんな策略の成否がフォースブレイカーの爆発によって発生してた煙が晴れていく事ではっきりとしてくる。

薄くなっていく煙の向こうで昇ははっきりと目にする事が出来た。それはローシェンナの前に巨大な影が存在している事だ。

どうやら上手く行ったみたいだけど、どれだけのダメージを与える事が出来たのかな？　薄くなっていく煙の向こうに巨大な燕の姿を確認する昇。そんな燕の身体にはフォースブレイカーの後がくっきりと残っており、その痛みを和らげるためか燕は甲高い鳴き声を上げた。

そんな燕の鳴き声を聞きながらも昇は自分の予想が当たった事に残念がっていた。

う～ん、やっぱり燕には当たったけど……さすがに倒すまでには至らなかったか。どうやらこの結果は昇が充分に予想できた出来事のようだ。

なにしろ燕がローシェンナを守る盾だという事は分りきっている。だから燕は昇を攻撃するよりもローシェンナを守る事を優先する。だからこそ燕の隙を付いて高威力のフォースブレイカーをローシェンナに叩き込もうとすれば自然と燕がローシェンナの前に立ちはだかり、フォースブレイカーからローシェンナを守ろうとするのは当然の結果だ。

昇としてはこれで燕を倒す事が出来ればよかったのだが、さすがにそこまでは上手く行かずに昇が予想したどおりに燕にはダメージは与えたものの、倒すまでには至らなかった。

けれどもローシェンナとしては、ここまで昇達が強いとは思っては居なかったのだろう。それに昇がこんな手段に出てくる事も予想できなかったようで驚きの表情をすぐに怒りの表情に変えるとローシェンナは昇に向かって言葉を放ってきた。

「よくもやってくださいましたね。ここまでの侮辱は初めてですわっ！」

「いや、侮辱って」

これは戦いだから侮辱も何も無いと昇は言葉を続けようとしたのだが、ローシェンナにしてみればここまでの苦戦を強いられている事がローシェンナのプライドを傷つけた事なり、侮辱と感じているのだろう。

だからこそ昇の言葉を遮ってローシェンナは話を強行する。

「ですが、あなた達の力が今のところは勝っているのは事実のようですから、それは認めましょう……けどっ！　これこそが私の本当の力でしてよっ！」

どうやら昇達の奮闘がローシェンナに本気の火を付けてしまったのだろう。ローシェンナは力を解放するかのように両手を広げると召喚された鳥達が光に包まれる。

その光に包まれた鳥達はまるで卵からかえる雛のように光を突き崩すと新たなる姿を現した。それは鳥としての形状は変わってはいないが、体のいたるところに鎧のような物を身に付けている。どうやらこれで鳥達の能力が上がったことには変わりないようだ。

その変化に驚きの通信を送ってくる琴未。

（ちょっと、これってどうなってるのよ）

そんな琴未の通信は昇を通じて全員に伝わっていく。だからそんな琴未の驚きに閃華は琴未に冷静になるように忠告を発する。

（落ち着くんじゃ琴未。どうやら鳥達の能力が上がった事は確かなようじゃな。攻撃力もスピードも上がっておるじゃろうな。じゃから琴未に昇よ、充分に気を付けて戦うんじゃぞ）

そんな思考会話が一瞬にして行われると琴未も昇も目の前の鳥が

大いにパワーアップした事を感じ取る。どうやらこれが鳥のサモナーとしてのローシェンナが有している最大の力なのだろう。だからこそ昇と琴未は一層気を引き締める。

そんな時だった。昇達が戦っている場所からかなり離れた地点で、まるで噴火が起きているかのように二つの炎が天に向かって吹き上がり、地面を大きく揺らしていた。

第百二話　鳥のサモナー（後書き）

さてさて、そんな訳で白キ翼編での初回バトルが開始された訳ですが……本当ならミリアの戦いも今回の話に組み込む予定だったのですが、ついつい昇達の方に集中してしまい。そんな訳で本来なら一話にまとめる予定だった話を二つに分ける事にしました～。

……いや、まあ、なんというか……こういうところは成長していませんね～。まあ、これもエレメの醍醐味だと勝手に思い込んでください！！！　というか、そういうことにしといて！！！

さてさて、そんな訳で次回予告も少し入れたところでそろそろ締めますね。まあ、今回はあまり語る事が思いつかなかったので……。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、ケチってはいけないところでケチってしまった事を悔いている葵夢幻でした。

第百三話　破壊と破壊とやっぱり破壊

いったい何処まで行くんだよ～。

昇達の戦闘が始まるとすぐに移動を開始したエリンを追ってミリアも駆けずり回っていた。ミリアとしてはすぐに戦闘が始まると思っていただけに、エリンの行動は予想外でもあり、いつまで経っても立ち止まろうとしないエリンに飽き始めていた。

それでもミリアがエリンを追う事が出来たのはエリンの移動方法が関係していた。なにしろ昇達が出会った場所は込み入った商店街だ。そんな店やビルが立ち並ぶ場所での移動でならミリアがエリンを見失っても不思議では無いだろう。

けれどもエリンは手にしているエルターレフレイルの一撃で移動の邪魔となる店舗などを破壊しながら一直線に突き進んでいるのだ。

そんな移動をしているのだからエリンの後を追うミリアはエリンの破壊力に少しだけ驚きながらもエリンの後を追って駆けているのだが、そろそろ飽きてきたようだ。なにしろ、すでに昇達が戦っている地点からはかなり離れている。そんな場所にまで移動してきたのだからエリンには何かしらの思惑があると閃華辺りなら気付くだろうが、ミリアはエリンを追う事に飽き始めていた。

だからこそ障害物を壊しながら突き進むエリンに向かってミリアは思いっきり叫ぶのだった。

「いったい何処まで行く気だよ～っ！」

そんなミリアの叫び声がエリンに届いたのか、エリンは前進をやめると辺りを見回した。そしてミリアに振り返ると思いっきり笑みを浮かべた。

「あははっ、ごめんごめん、思わず夢中になっちゃってこんな場所にまで来ちゃったよ」

そんなエリンの言葉にミリアは突っ込みを入れると思いきや、思いっきり頬を膨らませて文句を言い出した。

まあミリアがそんな状態になったとしてもしかたないだろう。なにしろシエラが張った精界の端近くまでミリア達は移動したのだから。そんな場所まで引っ張ってこられたミリアにしてみれば不貞腐れて当然なのかもしれない。

「だからって、わざわざこんな場所にまで来なくてもいいでしょ～。なんでこんな端っこまで移動しなきゃいけないんだよ～」

そんなミリアの文句にエリンは笑って誤魔化すかのように笑うと、手にしていたエルターレフレイルを肩に担いだ。

「だからごめんって誤ったじゃん。それにローシェンナの近くで戦うとローシェンナが怒るんだよね。なにしろ……僕って破壊を得意としている火山の精霊だからね」

「へぇ～、火山の精霊なんだ……というか火山の精霊ってどんなの？」

そんなミリアの質問にエリンはずっこけると思いきや、逆にミリアの質問がそんなに面白かったのか、楽しげに笑い出した。

「あははっ、火山の精霊は火山の精霊だよ」

「う～、だからその火山の精霊が何なのかって聞いてるんだよ～」

そんなミリアの質問に近い文句にエリンは更に楽しげな顔をすると、今度はミリアに向かって質問をぶつけてきた。

「そっちこそ何の精霊なの？」

「私は大地の精霊だよ～」

素直に答えたミリアにエリンは何度か頷くとエルターレフレイルをミリアに向けて突き出してきた。

「じゃあ大地の精霊って何？」

突然の質問にミリアは首を傾げながらも、また素直に答える。

「大地の精霊は大地の精霊だよ～」

「僕も火山の精霊だから火山の精霊だよ」

「そっか～、そういう事なんだ～」

何故かそんな会話で納得をするミリア。そもそもミリアの質問自体に意味が無いのだ。相手の精霊が何なのかを聞くのは、そこから

相手の属性を推測して、これからの戦いを有利に運ぶためにそんな会話が普通に行われている。

だから相手の精霊が何なのかさえ分かれば、それ以上の質問は意味を成さない。けれどもミリアは異常なほどに、いや、聞きなれない……ではないな。すっかり忘れている火山の精霊という言葉によっぽど引っ掛かりを覚えたのだろう。だから火山の精霊が何なのかとしつこく質問をしたのだ。

けれどもそれは先程の会話で分るとおり、火山の精霊とは通常の精霊と同じく、人間の火山に対する恐怖心や恐れ、そして信仰などから生まれた精霊であり、それ以上でも以下でもなかった。つまりは先程の会話に深い意味は無く。二人とも遠回しの自己紹介をしたに過ぎないという事だ。

そんな状況をやっと理解したミリアはようやくアースシールドハルバードを構えた。それはすでにエリンの突き出したエルターレフレイルに対して、ようやくミリアが見せた交戦する意思の表れと言えるだろう。

そんなミリアを見たエリンはエルターレフレイルを構えながらも辺りを見回した。辺りは閑散としており、遠くからは昇達が戦っている音がようやく聞き取れるほど静かだった。そんな状況にエリンは笑みを浮かべるとミリアに向かって笑顔ではなく、鋭い眼差しを送ってきた。

その事にミリアは攻撃が来ると構えるが、エリンから放たれたのは攻撃ではなく言葉だった。

「僕ってさ……何かを壊すのが好きなんだよね」

突然の言葉にミリアは気を許しはしないが、少しだけ首を傾げながら言葉を返した。

「それが何だって言うんだよ～」

確かにミリアが言ったとおりにエリンの言葉に何の意味が含まれているのかは、ミリアにはまったく分っていなかっただろう。そんなミリアに対してエリンは顔付きを変える事無く、言葉を返してき

た。
「そのまんまの意味だよ」
そんな言葉を放ったエリンは口元だけに笑みを浮かべて見せた。
その事にミリアはいつでも動ける体勢に持って行くと、少しずつ足を動かし始める。そうすればどんな事態になってもすぐに動けるからだ。
そんな行動を取りながらもミリアは言葉を返した。
「さっきから何を言ってるのかまったく分らないよ～」
確かにエリンの言葉は断片的でミリアには分りずらいのかもしれない。けれどもエリンとしては直接的に言ったつもりだったのだろう。エリンは軽く溜息を付くと、一気に鋭い視線をミリアに向けて、その場から大きく跳び上がった。
「要するに……君とこの辺りに有る物を全部壊すのが僕の趣味ってことなんだよ！」
そんな言葉を発しながら一気にエルターレフレイルを振り下ろすエリン。ミリアは一瞬だけそんなエリンの攻撃を受け止めようとしたが、すぐに回避行動に入ってその場から離れる。
ミリアがそんな行動を取った最大の理由はエリンの武器にある。エリンのエルターレフレイルは棒の先端に鎖が付いており、その鎖は大きな鉄球と繋がっている。つまりはエルターレフレイルの棒の所だけを防いだとしても、後には大きな鉄球がミリアに向かって迫ってくる。
要するにエルターレフレイルとは最初から二段攻撃が出来る武器だという訳だ。だからこそミリアは防御ではなく回避という手段を取ったのだ。
けれどもミリアは更に驚かされる事になる。
それはエリンの攻撃で最大の特徴である鉄球が地面に激突したときだ。その瞬間にアスファルトは一気に砕け散り、その下にある地面までをも吹き飛ばした。
うわ～、破壊力だけならお師匠様ぐらいあるよ。そんなエリンの

攻撃を見たミリアはそんな印象を受けると共にやっと火山の精霊に付いて思い出した。つまりはミリアは以前にラクトリーからちゃんと火山の精霊について教わっていたという事だ。

えっと、確か……火山の精霊って大地と火の属性を持ってるんだよね～。そっか～、だからあれだけの破壊力が出せるんだ。そんな事をやっと思い出したミリア。けれども思い出しただけで、その対抗策や交戦方法を思いついた訳ではない。だからこそ、ミリアはエリンの一撃に少しだけ驚くと共に隙は見せていないものの足は完全に止めてしまっていた。

そんなミリアに遠慮する事無く再びエリンはエルターレフレイルを振るってくる。今度は横一線に振るってきており、ミリアはすぐに身を屈めてその攻撃を避けるが、エルターレフレイルの鉄球は周囲にある店舗の内、その何軒かを一撃で破壊した。

その破壊力を示すかのように鉄球の当たった店舗は弾き飛ばされる形で破壊されており、その攻撃を喰らったら、いくらミリアでも無事では済まない事を示していた。

けれどもミリアはそんなエリンの破壊力を見ても怯むどころか平然としていた。

「はぁ～、凄い破壊力だね～」

「当たり前だよ、それが僕が持っている溶解の属性が有している特徴の一つだからね」

あっさりと自分の事を話すエリン。どうやらこの子もミリアと同じくバ、いや、素直な精霊なのだろう。

そんなエリンの言葉を聞いてミリアは溶解の属性についてラクトリーから教わった事を何とか思い出していた。

えっと……確か溶解の属性って、破壊するだけじゃなくて。物体を溶かして破壊するんだよね。確かそうだったはずだよね～。誰に向かって確認したのかは不明だが、ミリアが思い出した事は当たっていた。

確かに溶解の属性が最大限にその破壊力を発揮する時は大地の属

性を生かした破壊力に火の属性を加える事で破壊するだけでなく、触れたものを溶かしてしまう性質を持っている。つまりはエリンが本気で戦う時は鉄球の破壊力に火力も付加されて更に強力な一撃になる事をミリアはようやく理解した。

その事を理解したミリアはようやくエリンに対する対抗策を考え始めた。

う～ん、そうなると下手に防御すると突き破られる可能性が有るってお師匠様が言ってたっけかな～。確か……相手が同じ大地の属性で破壊力に対してこちらが対処する手段は……。

そんな事を考え始めたミリアは思わず体勢を崩してしまい、考え込むような仕草をしてしまった。どうやらミリアに考えながら戦うという事は未だに高度な技のようだ。

当然エリンがそんなミリアの隙を見逃すはずも無く、再びエルターレフレイルを振り上げると一気に振り下ろしてきた。そんなエリンの動きと殺気にミリアもいつまでも考え込んでいるわけにもいかず。ラクトリーに仕込まれた条件反射によりエリンの攻撃をなんとか避けたが、エリンはここぞとばかりに連続でエルターレフレイルを振るってきた。

そんなエリンの連続攻撃にミリアは体勢を崩さないように避けるのが精一杯だ。なんとかバランスを保ちながらエリンの攻撃を避け続けるミリアだが、その動きは傍から見ればかなり危ないと感じる物があった。

なにしろ本来ならミリアは防御を得意としており、相手の攻撃を避けるという行為にはあまり慣れていないからだ。だからミリアにとって相手の攻撃を避け続けるという事はかなりの重労働だった。

だからだろうミリアは自分の得意な戦略に持って行くために思いもよらない行動を取ったのは。

ミリアは横に振られたエルターレフレイルの鉄球を顔面すれすれで避けるとその場に大きく踏み込んで、ふんばる体勢に持って行く。そのままアースシールドハルバードを前面に押し出すと再び攻撃し

てきたエルターレフレイルの棒を見事に避けてみせる。
けれども棒を避けても次には鎖で繋がっている鉄球がミリアへと迫る。だが、そこにこそミリアの狙いがあったのだ。
棒の軌道に沿ってミリアへと迫る鉄球。ミリアは素早くアースシールドハルバードを鉄球に向けるとそのまま鉄球をハルバードで受け止めてしまった。さすがにかなりの衝撃がミリアに伝わってきた。その証拠としてふんばっていた足が数センチほど衝撃で地面を擦るように移動している。それだけでもエリンが放つ破壊力が凄まじい事を物語っていた。けれどもミリアはその攻撃を見事に受け止めたのである。ここぞとばかりにミリアは鉄球を弾いて反撃に転じようとするが、そんなミリアの動きを読んでいたかのようにエリンがエルターレフレイルの棒を突き出してきた。
なにしろミリアが攻撃に出ようとした瞬間を狙っての攻撃だ。ミリアはいきなり突き出された棒を避ける事が出来ずに、そのまま胸を突かれる事になってしまった。けれども所詮は棒だろうとミリアは思っていた。
なにしろミリアの精霊武具は大地の精霊でも防御に特化した精霊武具である。だから棒に突かれたぐらいでは逆に弾き返してしまうと思うほどの重装備だ。だからこそミリアは逆に突っ込んで行って棒を弾こうとしたのだが、弾かれてしまったのはミリアの方だった。
棒に突かれた衝撃で一気に後ろに吹き飛ばされるミリア。それと同時にミリアはやっとエルターレフレイルの破壊力が鉄球だけでなく棒にまで含まれている事を理解したのだった。なにしろ棒で突いただけで重装備のミリアを吹き飛ばすほどである。これが少しでも軽装備だったら確実にミリアはやられていただろう。
そんな事を感じながらミリアの体は建物の一つに突っ込んで行き、そのまま建造物を破壊してミリアはその下敷きになってしまった。けれどもミリアも精霊である。この程度の攻撃でやられるとはエリンも思ってはいなかった。
現にエリンが思ったとおりにミリアにはそんなにダメージは無か

ったものの、破壊された建造物の下敷きにされて脱出するのには時間が掛かりそうだ。だからこそエリンも手出しできないとミリアは思ってはいたがエリンからは思いもがけない言葉が飛び出してきた。

「これで身動きが取れなくなったよね。だからそろそろ僕の全力で君を破壊してあげるよ」

エリンの位置からでは破壊された建造物が邪魔となってミリアの姿を捉える事が出来ない。それがミリアに分っているだけにエリンの言葉は返って不気味に感じられた。なにしろエリンはこれからミリアにトドメを刺そうと宣告したのと同じなのだから。

そんな言葉を受けてミリアは必死になって脱出を試みるが、破壊された建造物は次から次へと落ちてきてミリアの脱出を邪魔している。

そんな中の状況も分からないままにエリンはエルターレフレイルを思いっきり振り上げると一気に力を流し込む。するとエルターレフレイルは一気に燃え上がり、鉄球も炎で包まれた。

「じゃあ、一気に行くよっ！」

楽しそうにそんな言葉を発したエリンが大きく跳び上がると、ミリアが未だに苦戦している破壊された建造物に狙いを定める。

「インニーヴォカッツァッ！」

そして一気に振り下ろされたエルターレフレイルは破壊された建造物を更に破壊するだけでなく、破壊するのと同時に溶かして更に細かく破壊していく。これこそがエリンが有している溶解の属性が発揮する本来の力なのだろう。

そんな破壊に破壊を上乗せしたような攻撃にさすがのミリアも倒す事が出ただろうと確信するエリンだが、破壊を重ねて土煙さえ上がらない現状に見たものはミリアが作り出したアースドームだった。

どうやらミリアはエリンの攻撃を感じ取るとすぐに防御に徹するためにアースドームを作って完全防御に徹したようだ。そしてエリンが巻き起こした破壊の衝撃が収まると一気にアースドームを破壊する。

「ブレイクッ！」
　鋼鉄のように硬いアースドームの破片が当たり一帯に飛び散り、周囲の建物を破壊しながらエリンにも攻撃を加える。エリンとしては先程の攻撃でミリアを倒したと思っていただけに、この反撃は予想外であり、なんとかエルターレフレイルでアースドームの破片を叩き落すが、さすがに全ての破片を叩き落す事が出来ずに、エリンの身体には幾つかの傷跡を残す結果となった。
「残念だけど、そう簡単にはやられてあげないよ～」
　姿を現したミリアにさすがのエリンも悔しそうな顔をする。先程の攻撃はかなり強烈なものだっただけにミリアが無傷な事が悔しいのだろう。まあ、ミリアとしてもトドメを刺すと宣告されれば完全防御に徹するだけの知恵だけは持っていたようだ。
　そんな状況の中でミリアはエリンに向けて笑みを向けてきた。
「さっきの攻撃のおかげでやっとお師匠様から教わった対抗策を思い出したよ～」
　わざわざそんな事を言わなくても良いと思われるのだが、そんな事をわざわざ言うのがミリアらしいところなのかもしれない。だからミリアとしては特別な意味は無いのだが、その言葉を受けたエリンはそうは思えなかったようだ。
「へぇ～、僕の破壊力に対抗できるって言うのなら、その力……見せてもらうよ」
　少しだけ苦い顔になりながらも強がりのような言葉を発するエリン。それだけエリンには自分自身が持っている破壊力に自信があった。けれどもミリアはその破壊力に対抗する手段があると宣言したのである。
　つまりは真正面からエリンの破壊力に対抗する手段があると宣戦布告をした事になるのだ……そう、そうなるのだが、ミリア自身はエリンがそんな風に自分の言葉を捉えているとは微塵も思っていなかった。まあ、それがミリアなのだからしかたない。
　そんなミリアがアースシールドハルバードを自分の前に突き出し

てきた。
「お師匠様が言うには、相手が破壊力を武器にしてきた場合はそれ以上の破壊力を示せば良い。それだけの破壊力を大地の属性は持っているのだから、破壊力には破壊力で対抗しなさい。確かお師匠様はそんな風に言ってたよ～」
そんなミリアの言葉を聞いてエリンは更に苦い顔をする。エリンも火山の精霊として破壊力には自信はあるが、一番破壊力を有しているのは大地の属性だという事を知っている。だからこそ自分自身に宿っている大地の属性を使って巨大な破壊力を生み出しているのだ。
そして複数の属性を有する精霊の場合。どうしても一つだけの属性を有する精霊よりかは属性の性能が劣ってしまう。つまりは一つの性能を落として幾つもの属性を有しているという訳だ。
だからこそ火山の精霊であるエリンとしては大地の属性が持つ破壊力だけを使った勝負をする事だけは避けたかった。そのためにエリンはトドメの一撃として大地の属性に火の属性を加えた攻撃をしたのだが、それもミリアに通じなかったためエリンはミリアにダメージを与えるには更に破壊力を上げるために次からは火の属性を強めないと、そう考えていたのだが目の前のミリアは意外な行動を取ってきた。
「だから、破壊力には破壊力で対抗するよ～」
ミリアはそう宣言するとアースシールドハルバードは光り輝き、その輝きはミリアが身を包んでいる精霊武具にも及ぶ。そしてミリアは高らかに叫んだ。
「発動、ティターンモード！」
その言葉を発した後にミリアに劇的な変化が訪れた。アースシールドハルバードはその形状を変えて行く。ハルバードの槍と成している部分が一気に引っ込むと斧が付いている反対側にも斧が出現した。そこから更にハルバードは双斧となり斧は更に形を変えていく。ハルバードの先端となっている斧の部分が一気に延びて、まるで槍

のような形状へと変化する。その姿は二つの斧の先端を槍のように尖らせた形へとアースシールドハルバードは形状を変えた。

ミリアの変化はそれだけでは無い。今まで重装備だった装甲が一気になくなって行き。最低限の装甲しか残していなかった。そして重装備の下に着込んでいた服までもが、その形状を変えて行き、動きの邪魔になりそうな部分は全て排除されて、かなりの部分が露出される事になる。

残っている部分と言えば手甲と具足。それから身体を覆う袖の無い密着した服と腰には短いスカートにスパッツのような服を着ている。そんな状態になったミリア。今までの重装備のミリアからはとても想像が出来ない姿となっていた。

けれどもこれこそがミリアにとってもエリンに対抗する最大の手段であるティターンモードだ。その能力は防御を無視した破壊殲滅。つまりは破壊力だけで言えばエリンの破壊力を上回る姿になったとも言える。

けれども防御を無視しているだけにエリンの攻撃が当たった時点でミリアはやられるだろう。けれどもミリアもここ数日は伊達にラクトリーに引っ張られて行っている訳ではなかった。

強制的に行われたミリアの修行には大地の精霊が持つもう一つの姿。つまり破壊殲滅の象徴たるティターンモードに関する修行もやらされていたという訳だ。だからこそミリアは自信を持ってエリンの破壊力に対抗するためにティターンモードを選んだのだ。

まあ、ミリアとしてはそこまで深く考えたわけではなく。ラクトリーが教えてくれた事を実行していただけに過ぎない。つまりエリンの破壊力に対抗するために自分の破壊力を上げるティターンモードを発動させるしかないと思っただけだ。

けれどもそこまで劇的に変化をもたらしたミリアの姿にさすがにエリンも少しだけ怯むような仕草を見せた。

なにしろ破壊力だけで言えば大地の精霊が一番である。その大地の精霊であるミリアが破壊重視の姿になったからにはエリンも本気

でミリアに対抗しなくてはいけない事は確実だ。
火山の精霊もその破壊力では有名だが、複数の属性を有しているからには大地の属性だけを有した破壊力勝負ならミリアに敵いはしない。その事が分っているだけにエリンは気を引き締めるしかなかった。
それと同時にエリンは心の片隅で楽しいとも感じていた。なにしろ相手は破壊力ではトップに立つ大地の精霊である。そのミリアが本気でやりあうとなるとどれだけの物が破壊されるか分った物ではない。その事を想像するだけでエリンの心は躍った。さすがに自分で破壊する事が大好きと言っただけの事はあるのだろう。
そんなエリンにティターンモードに換装したミリアがアースシールドハルバードを突きつける。
「さあ、ここからが本気の勝負だよ～」
その言葉を受けてエリンもエルターレフレイルを腰の部分から押し出すような形で構える。
「そうだね、楽しい勝負になりそうだよ」
その言葉を最後に二人とも戦闘体勢に入って一言も発する事が無くなり、辺りには静寂が立ち込める。お互いに仕掛けるタイミングを計っているのだろう。そんな時に先程破壊した瓦礫の破片が地面へと落ちる。
その音を合図にミリアとエリンは一斉に駆け出した。両者の距離が一気に縮まると先手を打って武器を振るってきたのはエリンの方だ。
なにしろエリンのエルターレフレイルには棒だけではなく鎖で繋がれた鉄球が付いている。その分だけミリアのアースシールドハルバードよりかは射程が長いのだ。
そんなエリンのエルターレフレイルが振るわれるが棒の部分はミリアに届く事無く、空を斬り裂いた。どうやら最初っから攻撃は破壊力がある鉄球に集中させてミリアを叩くつもりなのだろう。そのうえ今のエルターレフレイルには火の属性も宿しており、その破壊

力は今までよりも遥かに上がっている。
そんな攻撃を今のミリアが受けたら一撃で落とされる事は間違いないだろう。それが分っているミリアなだけに素直に鉄球に対して対抗するという手段は取らなかった。
ミリアの目の前をエルターレフレイルの棒が振りぬかれるとミリアもすぐにアースシールドハルバードを振るった。それはエリンにではなく、エルターレフレイルにだった。それも迫ってくる鉄球ではない。その鉄球を繋いでいる鎖を狙ってミリアはハルバードを振るったのだ。
棒と鉄球の中心点となっている鎖の更に中心を狙ってハルバードをぶつけるミリア。もちろんそんな事をすれば鉄球はミリアに届かないものの、鉄球の軌道が変わってどこに飛んで行くか分ったものではない。
けれども、そんなミリアの攻撃を受けたエリンは違和感を感じるとすぐに吹き飛ばされてしまった。まさかの事態にエリンはどうする事も出来ずに建造物の一つに思いっきりぶつかるどころか、建造物を破壊するまでの衝撃でぶつかる事になってしまった。
先程のミリアと同じような状況に陥るエリン。なにしろ建造物が破壊されるほどの衝撃で吹き飛ばされたのだ。そのうえエリンの上からは瓦礫が降ってきて、エリンは下敷きになっている。けれどもエリンはそんな状況でもエルターレフレイルを振ると、自分の動きを制限していた瓦礫を再び邪魔にならないぐらいにまで破壊してしまった。
さっきの衝撃はいったい何なんだよ。再び自由に動けるようになったエリンはそんな事を考えていた。なにしろ先程の攻撃はエリンが絶対的に有利だったからだ。
たとえミリアが鎖の破壊や鉄球の軌道変更でその場をしのごうとしても、エリンは燃え上がっている棒でミリアを吹き飛ばそうという算段があった。けれども実際に吹き飛ばされてしまったのはエリンの方である。

しかもミリアのハルバードがエルターレフレイルの鎖に触れた瞬間に、鎖を通じてエリンは何度も寄せ押してくる衝撃波のようなものを感じていた。それが先程感じた違和感の正体だとエリンはやっと気が付いた。

そっか、これが破壊力ではトップに立つという大地の属性が有している力なんだ。そんな結論を出すエリンには先程ミリアが行った攻撃の正体を確実に掴んでいた。

そう、それは衝撃の連続発生。ミリアの一撃はただの一撃ではなく、細かな衝撃を一秒の間に数十回も発生させて、その衝撃波でエリンを吹き飛ばしたのだ。

簡単に例えるなら地震を想像してもらうと分りやすいだろう。大きく一回だけ地面が揺れるよりも、細かく何度も揺れる方が地震の被害が遥かに大きくなる。つまり地面が揺れて、その衝撃が多ければ多いほど地震の被害も大きくなるのだ。

つまりミリアのティターンモードは全ての攻撃に細かな衝撃波を発生させる効果があり、その一撃の破壊力を一気に上げているのである。だから直撃ではないにしろ、エリンのエルターレフレイルにハルバードが当たっただけでエリンが吹き飛ばされるほどの衝撃波を発生させる事が出来たのである。

それは確かに直撃すれば確実に一撃で落とされてしまうだろう。けれども、その条件はミリアも同じである。なにしろミリアはその衝撃攻撃をするために今まで重装備だった装備を今ではほとんど外さなければいけないのだ。

つまり両者の攻撃は当たれば落ちるという一撃必倒な状況になっているというわけだ。だからこそミリアも攻撃には慎重にならずにはいけなかった。なにしろエリンのエルターレフレイルにも大地の破壊に火の溶解が加わって、その破壊力を上げている事は確かである。下手に攻撃を仕掛けて反撃を喰らえばミリアも一撃で落とされる事は間違いない。

だからこそ両者とも攻撃を仕掛ける事をせずに動向を見守ってい

る。
　けれども二人の性格から言っていつまでも大人しく相手が仕掛けてくるのを待っていられるワケが無かった。
　う～ん、どうしようかな～……ここはやっぱり大技で行くしかないよね。すぐにそんな結論を出すミリア。
　まさかこんな手を隠していたなんてね。さすがに大地の精霊に破壊力だけで勝負を挑むのは無謀かな。だったら……破壊力に火力を乗せて一気にやっつけよう。エリンもこう着状態の中ですぐにそんな答えを出していた。
　そんな状況で真っ先に動き出したのはミリアだ。ミリアはアースシールドハルバードの切っ先を地面に付き立てると一気に力を流し込む。
「アースウェーブッ！」
　ハルバードから地面が大時化のような海のように波を打つ。それは今までのアースウェーブとは違って扇状に広がるのではなく、一直線にエリンに向かってアースウェーブは向かっていった。破壊系の技がちゃんと制御できるようになっているのもラクトリーが行っている強制抗議のおかげなのだろう。
　そんなミリアが放ったアースウェーブは波打つ地面の上に有る物を全て破壊しながらエリンへと迫る。
　そんなミリアの攻撃に対してエリンは一歩も動こうとはしなかった。それどころかエルターレフレイルに更に火の属性を流し込んで火力を上げている。
　そしてエルターレフレイルを思いっきり振り上げると鉄球を地面に向かって思いっきり叩き付けた。
「メテオイラクション！」
　その瞬間に鉄球が叩きつけられた場所から炎が噴出して地面を揺るがす。まるでその場で噴火が起きたかのように周囲の建物を破壊しながら炎はまるで天を焦がすように吹き上がる。
　そんなエリンの攻撃にミリアのアースウェーブは完全に相殺され

てしまった。なにしろエリンの攻撃は衝撃を全て上に持って行ったのだ。そのためミリアのアースウェーブの衝撃も全て吹き上げられてエリンまで届く事は無かった。

けれどもエリンの攻撃はこれで終わりではなかった。

まさかこんな攻撃でアースウェーブが相殺されてしまう事が予想外だったミリアは動きを止めてしまっていた。そんなミリアの足元から急激に蒸気が吹き上がると、巨大な熱と共に一気に炎が吹き上がる。

そう、エリンのメテオイラクションはミリアの攻撃を防御しただけではなく、地中を通してミリアにも攻撃をするための技なのだ。

なにしろ火山活動というのは、ほとんど地中で行われている物だ。噴火はそれが吹き上がった現象に過ぎない。だからこそ地中を通してミリアに攻撃するという技が出来るのだ。

もちろんミリアは大地の精霊であるから地中を移動してくるエリンの攻撃を察知してもおかしくは無いのだが、ミリアはそういう大地を通した情報処理を苦手としている。だからエリンの攻撃を察知する事が出来なかった。

それだけなく、エリンは自らの攻撃に大地の属性を負荷させている事を良い事にミリアに察知し難くしていた事もあり、ミリアはエリンの攻撃を直撃する事になってしまったのだ。

二箇所から天を焦がすように吹き上がる炎は周囲に巨大な衝撃波を与えると共に、破壊しきれなかった大地や建造物は溶岩となって辺りに降り注ぎ、更に周囲の建物を破壊している。これぞ正しく火山の精霊を象徴しているかのような技といえるだろう。

そして一方の炎が消えるとエリンが姿を現した。

「これならどうだっ！」

未だに天に向かって炎が噴出している部分に向かって叫ぶエリン。確かにこれだけの大技だからミリアを確実に倒したものだと思ってもしかたないだろう。だからこそエリンは自信満々にそんな言葉を叫んだのだが、その直後に信じられない事が起こった。

なんと噴き出している炎に変わって土砂が一気に噴き出して炎を消し去ってしまったのだ。
「なっ、なんでっ！」
そんな現象にさすがに驚きを隠せないエリン。まさかこんな状態になるとは思いもよらなかった事であり、目の前で起こっている現状が瞳に写っても信じられないという顔をしてる。
そして吹き上がった土砂で全ての炎を消し去ると、今度は周辺に向かって一気に落下してきた。それは先程の溶岩ほどの威力は無いものの、大量の土砂が上から降って来たのである。その被害は先程のエリンが行った攻撃に比べると周囲の被害は遥かに酷い物になっていた。
なにしろ土砂が重力の力を借りて一気に落ちてきたのだ。その影響で破壊された建造物は更に多くなった。そして先程まで炎が噴き出した場所には一粒の砂も落ちる事無くミリアが姿を現した。
「う～、よくもやったな～、凄く暑かったんだよ～っ！」
姿を見せるなり、そんな文句を言うミリア。確かにミリアは姿を現したものの、まったく無事という訳ではなかった。ミリアのポニーテールには明らかに焦げた後が残っており、体中には軽い火傷の跡が残っている。そのうえ薄手の服にも焼け焦げた箇所や完全に焼けて消滅している部分もある。どうやらかなりのダメージを負ったようだが致命傷には至らなかったようだ。
「なんであの技を喰らってその程度ですんでるのよっ！」
ミリアの文句に対して文句で返すエリン。当のエリンとしてはミリアを完全に倒したと思っていただけにミリアがこうして顕在している事が不思議であり、納得の行かないところであった。
そんなエリンに向かってミリアは勝ち誇ったかのような笑みを浮かべながら話し出した。
「だって～、さっきの攻撃に半分は大地の属性を使ってたでしょ。だから私から見ればたとえ炎に包まれていようと大地を操って、さっきの技を半減させる事ぐらいできるんだよ～」

そんな説明をしたミリアにエリンは首を傾げた。やっぱりミリアの説明では良く分からなかったようだ。そんなエリンを見てミリアは更に補足説明を開始する。その内容を分りやすくすると次のようになる。

つまりエリンが放った技の半分は大地の属性を有した技だ。だからこそ地中を伝ってミリアに直撃させたり、溶岩などを噴出させて更にダメージを与えることが出来る大技だ。

けれども大地の属性に関して言えばエリンよりも大地の精霊であるミリアの方が大地の属性を支配することが出来る。つまりエリンが使った大地の属性をミリアは自分が支配する事で、大地の属性をコントロールする力を完全にエリンから奪ってしまったのである。

それを利用してミリアは炎と一緒になって飛んできた大地の破片を自分の周りに形成して、あの大量の炎から身を守ったというわけだ。

つまりエリンが大地の属性を使った技を使用するたびに、属性の支配権はミリアに強制移譲する事が出来るのである。そこが大地の精霊と火山の精霊の違いとも言えるだろう。

けれども、いくらミリアが大地の属性を支配して自分の防御に使ったからと言っても火の属性までは支配する事が出来ない。だからこそミリアは体中に炎が直撃した痕跡を残す結果となってしまったのだ。

そんな事を時間を掛けて説明するミリアにやっと理解したエリンは素直に「やっと分ったよ」と言って頷くとようやく二人とも戦闘再開の態度を取った。

けれども現状ではミリアの方が圧倒的に不利である。なにしろ先程の攻撃が直撃したのもあるが、エリンが持っているエルターレフレイルに対する対抗策も持ってはいない。その事はエリンも分っており、このまま押していければ確実にミリアに勝てると確信していた。

そんな現状だからこそミリアはここぞとばかりにストケシアシステムを使う。

（昇、昇、ちょっとこっちがやばいよ～。だからエレメンタルアップを使って～）

そんな思考を瞬時に昇に送るミリア。その思考は昇を介して閃華達にまで届いていた。

（確かにここで使っておいた方が良いかもしれんのう。なにしろ相手のサモナーが本気を出してきたんじゃ。こっちも出し惜しみは出来ん状態だ）

ミリアの思考を聞いて閃華もすぐにそんな意見を出してきた。確かに昇達が相手にしている鳥達もローシェンナの力によってかなりの能力アップがされた事が見た目だで分る。それだけに昇達としても、そろそろエレメンタルアップで対抗していかないとキツイ状況に追い込まれているのは確かだった。

こっちだけじゃなくてミリアの方も押されてるんだ。フレト達が来るまでまだ時間が掛かるし、ここは少し無理してでも倒しておく必要があるかな。そんな決断をする昇。

確かにこのまま戦い続けていても昇達は負ける気はしないが、勝つためにはかなりの力と時間が掛かるのは確かだった。それにフレト達が到着する頃には確実にローシェンナを倒すために出来るだけ戦闘を有利に持って行きたいのも確かだった。

だからこそ昇はここで目の前の鳥とミリアが相手をしているエリンを確実に倒すためにエレメンタルアップを使う事を決意する。その事をストケシアシステムを使って瞬時に全員に伝える昇。

けれども昇がエレメンタルアップを使おうとした瞬間には思いも掛けない事が起こり、昇は思わず上を見上げるのだった。

第百三話　破壊と破壊とやっぱり破壊（後書き）

そんな訳でお送りしました、おバカな子対決……じゃない。エレメの百三話はいかがでしたでしょうか。

まあ、ミリアとエリンも知能指数は同じぐらいだと思いますので、たぶん二人が対決したら時々ほのぼのとした空気が流れてもおかしくは無いと勝手に思っている次第であります。

……というか、この二人が真面目かつ知能的に戦う姿がまったく想像できない。まあ、ミリアよりもエリンの方がほんのちょこっとだけ知能指数は高いんでしょうね。とか思っておりますけどね。

というか、そうしないと、この二人の戦いは成り立たないのでは無いのか？　そんな風にも思っております。

さてさて、話は次回の事に移り変わりますが、いよいよ……次回はシエラ対アレッタの空中戦へと話しが移り変わりますが。本文の最後に昇が見上げたのは何故か？　そしてシエラとアレッタとの因縁とは……それはいよいよ次回に……明らかになるのかな？

まあ、シエラとアレッタの因縁はそのうち本文で出て来るでしょうが、それが次回になるかは不明です。……いや、引っ張るところは少しは引っ張らないとって思って。まあ、何にも考えてないわけではないですよ。

……いや、本当ですよ、ちゃんと考えてますよ。だからそんな目で見ないで！！！　もっと私を信頼して！！！　えっ？　無理？……やっぱりですか！！！

……さてさて、お遊びもここら辺にしてそろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、花粉という最大の敵を前にして更新が遅くなるのではないのかと心配している葵夢幻でした。……まあ、ここ数日倒れる事と

なってて更新が遅くなった事は心よりお詫び申し上げます。まあ、大した事は無いんですけどね。

第百四話　シエラ暴走

戦闘開始直後から一気に上空に舞い上がって行ったシエラとアレッタ。二人ともお互いの武器を交じ合わせながら精界のギリギリまで上昇すると、そこからスピードを生かした一撃離脱の攻撃を互いに行っている。

二人がこんな戦術を行っているのは、それが翼の精霊にとって最も適した戦闘方法だからである。上空からのハイスピードでの一撃離脱。その攻撃は相手に反撃を許す事無く、確実にダメージを与える事が出来るからだ。

けれども今回は二人とも翼の精霊である。だから同じ戦術を取れば戦術の効果は無いのと等しいのだが、シエラはそれでも不利な事を感じていた。

さすがはアレッタ……あの時からまったく変わってない。やっぱり翼の属性を最大限に使いこなしている。そんな事を思うシエラ。

確かにアレッタは背中に生えた翼だけでなく、武器にまで宿した翼の属性によってシエラよりも鋭い攻撃を仕掛けてきている。それは背中の翼で全体的なスピードを上げて、武器の属性によって攻撃のスピードを上げているからだ。

それに対してシエラは全体的なスピードも攻撃のスピードも全てウイングクレイモアに委ねている。だからこそ攻撃に関してだけはどうしてもアレッタに一歩だけ遅れる点が出てくる。

けれどもシエラも翼の精霊である。だからアレッタと同じようなやり方をすれば対等に戦えるものの、それだけはシエラにとって耐え難い苦痛であり、決してやりたくない事であった。

そんな状況での戦闘である。シエラはアレッタのスピードに何とか付いていくが、アレッタにはまだ余裕があるようでシエラほど真剣な眼差しはしていなかった。それどころか未だにシエラを蔑む視線を送っている。この二人の間に何があったのかは未だに分っては

いないが、アレッタが確実にシエラを軽蔑しているのは確かなようだ。

そんな一撃離脱の攻撃を繰り返した来たシエラとアレッタだが、アレッタから戦術を変えてきた。全体的なスピードで言えばアレッタの方が確実に上だ。だからこそ戦局を変えやすいのもアレッタなのは確かだ。

そんなアレッタは今までと同じ通りシエラの真正面から一気に突っ込んでくる。お互いにハイスピードを得意としている精霊だけに、相手の横や後ろを取るとなると攻撃どころではなくなり、お互いに手詰まりになってしまう。だからこそ、シエラもアレッタもお互いに真正面から一撃を入れて一瞬で離脱するという戦術を取っていたわけだ。

けれども今回行ったアレッタの攻撃はそのままシエラに離脱の機会を与えずに、その場でシエラを足止めした。もちろん、そんな事をすればアレッタの動きも止まってしまい。二人は空中で武器を交じ合わせながら膠着状態に入っていく。

そんな力比べのような状態の中でアレッタはシエラに向かって言葉を投げ掛けてきた。

「さっきの様子から見ると、やっぱり隠しているようね」

「……」

そんなアレッタの言葉にシエラは沈黙で返すと、シエラは膠着状態を脱しようと試みるが、アレッタの巧みな操作により、その場から抜け出す事が出来なかった。

これこそがアレッタの精霊武具、スカイダンスツヴァイハンダーの効果なのだ。空中でも舞い踊るかのように武器の威力を自由自在に操作できる。つまりシエラがどんな行動を取ってもそれに対応できる能力がすでに武器に備わっているのだ。

そんなアレッタの精霊武具とは反対にシエラのウイングクレイモアはスピードで威力を増して力押しで押し切るタイプである。つまりアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーのように武器を巧みに

操る事が出来ないのだ。
　そんな二つの武器がぶつかり合っているのである。ここはシエラが一気に力を入れて押し切るか、退く事をしない限り、シエラからこの膠着状態を脱出する手段は無いと言うわけだ。けれどもそんな無理な手段を使えばシエラは確実にアレッタの攻撃を受けてしまう。だからこそシエラは黙ってアレッタの言葉を聞くのだった。
「まあ、その姿を見れば察しが付くけどね。やっぱり言えないよね」
　そんな言葉と共にアレッタは明らかに悪意に満ちた笑みを浮かべる。その笑みはやっぱりシエラを見下している視線をしており、笑っている口元からはアレッタにはまだ余裕がある事をシエラに告げていた。
　そんなアレッタの言葉にシエラは言葉で返してきた。
「もうアレッタとは関係ない。だからそんな事を言われる筋合いは無い」
「関係ないだって、よくもまあ、そんな言が言えたものよね。この嘘吐き」
「嘘は……吐いてない」
　言葉を少しだけ濁して口にするシエラに対してアレッタは笑みを消すと真剣な眼差しへと変わったが、その視線からは軽蔑が消える事は無かった。
「そうだね、確かに嘘は吐いてなかったわよね。でも……騙してたのは事実でしょ」
「違う、騙してたわけじゃ」
　はっきりと最後まで否定できないシエラに対してアレッタの表情は更にキツクなっていく。
「あれを騙してたと言わないで何を騙してたっていうのよっ！」
　アレッタはそう叫ぶとスカイダンスツヴァイハンダーを巧みに操り、シエラの体勢を一気に崩して一撃を入れようとするが、その前にシエラはアレッタが動いた事を好機として一気にその場から後退した。

やっぱり……分っていても。そんな事を思ったシエラは自分の胸が締め付けられるように感じていた。最初からシエラには分っていたのだ。アレッタの心情も、アレッタの言葉がどれだけ自分に影響を与えるかを。だからこそシエラは戦闘が始まってからアレッタと言葉を交わすのをためらっていた。けれども先程のように強行策で言葉を掛けられるとシエラは苦痛の念を感じざるにはいられなかった。

……昇。シエラはこんな時に、いや、こんな時だからこそ昇の事を強く思う。それは昇の言葉がシエラの世界を変えてくれたから、昇と契約を交わしたからこそ今の生活があるのだから。昇の事を思うだけで、それだけの事を思い出すシエラは再びウイングクレイモアを構える事が出来た。

シエラにとっても、ここでアレッタに負ける訳には行かないのだ。それは昇だけではない、琴未達も昇の為に戦っている。戦っている仲間がいる。だからこそシエラも戦うためにウイングクレイモアを構えてアレッタの攻撃に備えるのだった。

そんなシエラとは正反対にアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーを構える事無く顔を伏せている。その身体は小刻みに震えているように見えるが、アレッタはすぐに大声で笑い出した。

そんなアレッタに対してシエラは一気に突っ込んで行く。身体を前に出してウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて推進力を一気に増していく。そんなシエラの攻撃にアレッタは笑いを止めるとスカイダンスツヴァイハンダーを構える事無く、両手を垂らしたままシエラに視線を向ける。

そしてウイングクレイモアの間合いにアレッタが入るとシエラは横一線に一気に振るう。けれども振られたウイングクレイモアは途中でアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーにより、下からの攻撃より軌道を逸らされてしまった。

このような展開は戦闘が始まってから何度も行われており、両者はその度に一気にスピードを上げてお互いに距離を一気に開けたの

だが、今回からはシエラが一気に攻勢に出た。
上に弾かれたウイングクレイモアの翼を大きく羽ばたかせると、そのまま上がる勢いを止めると振り下ろすだけの推進力を得て、一気に振り下ろす。
そんなシエラの攻撃をアレッタは舞うかのように一回転して避けるとそのまま反撃に出る。今度はシエラに向かって横に振られてくるスカイダンスツヴァイハンダー。そんなアレッタの攻撃をシエラはギリギリの距離まで後退すると、シエラの眼前をツヴァイハンダーが通過していく。
アレッタの攻撃を紙一重でかわしたシエラはすぐに反撃に出る。シエラはウイングクレイモアを振り下ろした衝撃を使って、そのまま自分の体ごと降下させるとすぐにクレイモアを振り上げる。もちろん直上はアレッタが攻撃をした後だ。
けれどもアレッタは背中の翼を羽ばたかせるとこちらも紙一重でシエラのウイングクレイモアを避けると真下にいるシエラに向かってスカイダンスツヴァイハンダーを突き出してきた。
だがスカイダンスツヴァイハンダーはシエラの真横を通過する。アレッタの反撃を予測していたシエラは事前にアレッタの真下から少しだけ身体をずらしていたのだ。そうなると今度は自分の番とばかりにシエラはウイングクレイモアごと急上昇する。確かにこの攻撃ならアレッタに攻撃を入れるのと同時に、そのまま上昇すれば反撃を避ける事も出来る。
なのだがアレッタは予想外の動きを見せた。シエラが急上昇してくる事に対してアレッタも急上昇してウイングクレイモアの間合いに入らなかったのである。そして機を見るとアレッタは急降下に切り替えてスカイダンスツヴァイハンダーを一気に振り下ろす。
これにはシエラも方向転換を余儀されなくなった。
そんな近距離でのハイスピード戦を繰り返していくシエラとアレッタ。そんな中でシエラはやはり不利を感じざるには得られなかった。

なにしろ急激な方向転換、鋭利な武器の切り替えし。この二つにとってシエラは圧倒的に不利なのだから。それでもシエラは距離を開けようとはしなかった。それはシエラとしてもアレッタをウイングクレイモアの間合いから出さないようにしていたからだ。

確かに武器を操るテクニックスピードではシエラは圧倒的に不利だ。けれどもウイングクレイモアは重量があるだけに当てるだけでアレッタを落とす事が出来る。つまり一撃でアレッタを落とす事が出来るのだ。だからこそシエラは近距離でのハイスピード戦を繰り広げているのだが、普段見慣れている者が見れば、それはシエラらしくない戦い方と思うだろう。

いつもなら沈静零着に自分に有利な戦術を取るシエラだが、今回に限っては明きからに無理をしているのが分る。それは本来のシエラならアレッタを相手にアレッタが有利としか見えない近距離でのハイスピード戦を繰り広げているからだ。

シエラの利点を最大限に生かすなら距離を開けて一撃離脱の戦術が一番アレッタを苦しめる事が出来ただろう。なにしろ距離を一気に進むだけに一撃の威力も増すからだ。それなのに一撃の威力を殺してでも近距離戦に出たのは明らかにシエラらしくない。

それはシエラ自身も分っていた。分っているが、こうせざる得ない事も充分に理解していた。

早くアレッタを倒さないと。そんな事を心のどこかで思っているシエラ。つまりシエラは焦っているのだ。だからこそこんな無茶な戦い方をしている。

そこには二人の因果関係が関係あるのだろうが、今は戦闘中であり、シエラも明らかにいつもとは違う。それに昇達もそれぞれの戦いを繰り広げている上に、ここは精界ギリギリの上空で誰の言葉も届かないし、援軍すらも無い。そんな状況でシエラの焦りは増すばかりだ。

一方のアレッタはそんなシエラの心境を完全に見抜いていた。そこにはやはりアレッタだけが知っているシエラがあり、そんなシエ

ラを知っているからこそシエラが焦っている事を見抜く事には充分だった。

だからこそアレッタに更なる余裕が生まれる結果となってしまった。

「やっぱりあの時からまったく変わってないようね。騙して騙しとおそうとして、今だってそうしてるんでしょ。それはそうでしょうね。あんな事を自分の口から言える訳がないものね」

そんな言葉を投げ掛けるアレッタ。どうやらシエラが焦った影響でアレッタに会話をするだけの余裕を与えてしまったようだ。一方のシエラはそんなアレッタの言葉に苦い顔をして胸の奥を傷めていた。それでも言葉を返すだけの余裕が無いシエラはハイスピードで振るわれてきたスカイダンスツヴァイハンダーをかわしてウイングクレイモアを振るうので精一杯だ。

とてもじゃないが言葉を返せるだけの余裕が無い。だからこそシエラは戦闘に集中しながらもアレッタの言葉を聞くしかなかった。

「今の気分はどうシエラ？　人の事を騙して仲間のフリをしながら生活をしていくのは楽しい？　人を騙して契約を交わしたのがそんなに楽しい？」

更に言葉を投げ掛けてくるアレッタ。そんなアレッタの言葉に対してシエラは違うと叫びたかったのだが、今の状況がそれを許さない。少しでも気を抜けば確実にアレッタの攻撃がシエラを捉えるのだから。だからこそシエラは何も言えないままに戦闘を続ける。

そんなシエラとは逆にアレッタは更に余裕が生まれてくる事を感じていた。なにしろアレッタの言葉にシエラの心は揺り動かされ、その動きは少しずつではあるがキレが無くなってきている。つまりは少しずつシエラの動きが鈍くなっているのだ。そんなシエラの心情を察したアレッタだからこそ更に言葉を投げ掛けてくる。

「でもシエラ、本当は分ってるんでしょ。本当の事がバレれば今の場所には居られない、全てを失う事になる。それが怖いから騙してるんでしょ」

そんな言葉を投げ掛けてきたアレッタにシエラは大きくウイングクレイモアを振るうが、近距離でそんな大降りの攻撃が当たるわけが無い。なおかつアレッタもシエラと同様に翼の精霊である。だから空中でのスピードにはかなりの自信がある。そんなアレッタだと分っていながらもシエラはそんな攻撃を繰り出したという事はかなりアレッタの言葉がシエラの心を揺り動かすどころか抉り突いているのだろう。

ますます攻撃が荒くなっていくシエラを見てアレッタは笑みを浮かべると、トドメとばかりに大きな声で言葉を発する。

「そうだよねシエラ！　だから騙し続けてるんでしょ！　どんなに思っても、どんなに信頼しても、最後には拒絶される事が分ってるんだからね！　私がそうだったように、今の仲間にも本当の事がバレれば……私のようになる事が分りきってるんだからね！」

「アレッタッ！」

アレッタの言葉に我慢が出来なくなったシエラは更に距離を詰めて、ウイングクレイモアが確実に当たる間合いまで一気に迫る。そんなシエラの行動にアレッタは笑みを浮かべると背中を翼を羽ばたかせる。

近接戦闘でのゼロ距離攻撃。それがシエラが仕掛けてきた攻撃だが、その動きはアレッタの目から見ればかなり荒く。次にどのような動きに出てくるか簡単に予想が出来るものだった。

だからこそアレッタはあえて動く事無く、シエラの接近を許す。そして二人の距離がほぼ無くなるとシエラはウイングクレイモアの翼を大きく広げた。

「フルフェザーショットッ！」

大きく広げられた翼から数え切れないぐらいの羽が弾丸となってアレッタを撃ち抜こうと一気に放たれる。けれどもシエラがフルフェザーショットを放つ一瞬前にはアレッタはすでにシエラの眼前から姿を消していた。

さすがは翼の精霊と言ったところだろう。シエラがフルフェザー

ショットを放つ頃にはアレッタはスピードをフルに生かしてシエラの横を取っていた。
　一方のシエラは技を放ったばかりでまったく身動きが取れない。そんなシエラに向かってアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーをシエラの脇腹を目指して一気に振るう。
　さすがに不意を衝かれたとしてもシエラも翼の精霊でスピードには自信がある。だからこそ無理矢理体勢を横に倒してアレッタの攻撃を回避しようとするが、さすがに技を放っている最中だけあって、そんなに鋭い動きが出来るわけが無く。スカイダンスツヴァイハンダーはシエラの脇腹を斬り裂く。その証拠としてアレッタが斬り裂いた場所からは血が一気に吹き出るのと同時にシエラに激痛を与えていた。
　そんな状態でもシエラはすぐにフルフェザーショットを中断させると、ウイングクレイモアの翼を羽ばたかせてアレッタから退く。
　そんな攻防を一瞬の内に繰り広げた辺りが翼の精霊たる象徴といえる戦いなのだろう。
　シエラはアレッタから距離を置くことに成功したが、そのままアレッタが追撃に出てくると思っていた。けれどもアレッタは攻撃した場所から動く事無く。シエラに向けて笑みと言葉を向けてきた。
「分ってると思うけど、さっきの攻撃はワザと浅く攻撃したのよ。このままシエラを倒して契約の強制解除なんて事になったら面白くなくなるからね。だからシエラ、本当にシエラを倒す時はシエラの正体を皆に教えた時よ」
　そんなアレッタの言葉にシエラは苦い顔をする。それと同時に自分が焦って攻撃していた事にやっと気付かされた。なにしろアレッタの言葉から察すると手加減して戦ってると言っているようなものだ。そんな言葉を聞いてシエラはやっと冷静さを取り戻す機会を得たのだ。
　そしてアレッタもシエラが冷静さを取り戻した事に気付いていた。なにしろ普段は表情をあまり表に出さないシエラだが、アレッタと

戦っていた時には明きからに焦りの色が少しだけ出ていたからだ。シエラを知らない人物ならそんな事には気付きはしないだろうが、アレッタにはそんなシエラの微妙な表情の変化さえも分っていた。

だからこそ圧倒的に有利だと感じたアレッタは最大限の屈辱をシエラに与えた後にトドメを刺そうと決めて、その事をシエラに告げてきたのだ。それはシエラにとっては死刑宣告にも似た言葉に聞こえただろう。だからこそ今までの興奮が冷めるのと同時に冷静さを取り戻す事が出来たのだ。

そんな時だった。ストケシアシステムを伝わってミリアからエレメンタルアップの救援要請がシエラの元へも届いた。

確かに今の状況から言ってシエラは圧倒的に不利だ。だからここは昇のエレメンタルアップで一気に状況を逆転させたいのだが、先程の言葉がシエラの胸を締め付けていた。アレッタが放った言葉の数々、それは全て本当であり、全て事実だと分っているからこそシエラの心は大きく揺れ動き、昇と築いてきた絆にも影響を与える事になってしまっていた。

昇はエレメンタルアップを発動させるために精神を集中させた途端、昇にだけしか見えない三本の赤い紐が一気に昇の元へ伸びてきた。

えっ、なんで？　普段のエレメンタルアップを発動させた時とは違う事に昇は驚きを隠す事が出来なかった。なにしろ普段は四本の赤い紐が昇の元へ伸びてくるのだが、今回に限っては三本だけしかない。

エレメンタルアップを発動させる条件は今の時点では一つだけとなっている。それは昇と精霊達の絆。信頼と置き換えても良いだろう。つまりお互いに信頼し合い、強い絆を築く事でエレメンタルアップを発動させる事が出来るのだ。

だから昇としては普段の生活からもシエラ達との生活を大事にし

ている。だからこそ強力なエレメンタルアップを発動させる事が出来るのだ。

けれども今回ばかりはそうでは無いようだ。伸びてきた三本の紐、その先には琴未、閃華、ミリアの居場所から伸びてきている。それは三人との絆がしっかりと築かれている証拠だ。けれども今回に限っては上空にいるシエラからは、いつものように赤い紐は伸びてこない。その事に昇は驚くのと同時に嫌な予感を憶えた。

それでも現状が拮抗しているからには、ここで三人だけでもエレメンタルアップで状況を有利に持って行った方が良いだろうと、昇はシエラの事を気に掛けながらも紐に力を流し込む。

「エレメンタルアップ」

昇の能力であるエレメンタルアップにより一気に力の限界点を超える琴未達。けれども今回のエレメンタルアップは琴未と閃華を重点的に力を送った昇だった。

そして昇はすぐにストケシアシステムで琴未と閃華に向けてメッセージを送る。

（琴未、閃華、何とか目の前にいる敵を素早く倒して。どうもシエラの様子がおかしい。僕はシエラのフォローに回りたいからお願い）

そんな昇のメッセージに閃華はすぐに了解の合図を送ってきて、琴未も文句を交えながら返事を返してきた。これでローシェンナが呼び出した鳥達は片付ける事が出来るだろう。それにミリアの方も決着は付かなくても有利に戦えるのは確かだ。

そのうえエリンがローシェンナからかなり離れたために、すぐに救援に向かうという行動は取れない。そのうえミリアがいるのだからエリンはミリアに任せておいても問題は無いだろう。

だから一番の問題は上空にいるシエラであり、目の前で驚いているローシェンナに昇の意識が向けられる事は無かった。

ローシェンナが驚くのも無理は無い。なにしろ相手にしている琴未と閃華の力が目で見てもはっきりと分かるほど力が増しているのだ。だから本気になったローシェンナが召喚した鳥達もエレメンタ

ルアップで力を増した琴未達の敵にはなりはしなかった。
琴未も閃華も昇の指示通りに、目の前の鳥を一気に倒すと昇に合流する。そんな状況に焦ったローシェンナはもう一体だけ鷹の巨鳥を召喚する。どうやらローシェンナもこれ以上、召喚を続けるだけの力は残ってはいないようだ。
そんな状況に昇はローシェンナとの戦いを琴未達に任せると昇は少しでもシエラのフォローが出来るようにと戦場から離脱するだけの距離を開けて上を見上げた。

そんな地上での出来事は上空にいるアレッタにも伝わっていた。
「なに、あの能力……まさか、あれって……エレメンタルアップッ！」
さすがのアレッタも昇の能力には驚いているようだ。そんなアレッタとは間逆にシエラは冷静を通り越して冷たいような表情をしていた。
昇……ごめん。今の私は昇を受け入れる事が出来ない。昇を……心の底から信頼する事が出来ない。でも！　本当は信じたい、ずっと信じていたい……でも、それが無理なのは私が一番良く分っている。あの時の言葉が本当であると信じたいと思うのと同時に昇も私の傍から居なくなると思っている私がいる。ねえ、昇……私は……どうしたらいいの？
そんな事を考えるシエラは地上の状況を把握しながらも両手を力無く下げて、顔も伏せている。どうやらアレッタの言葉がよっぽどシエラの心を掻き乱したようだ。
だからこそシエラにはエレメンタルアップが掛からなかったのだ。いや、正確にはシエラから昇との絆を拒絶した。だからこそシエラにだけエレメンタルアップの効果が現れる事が無かった。
地上の状況を見ていたアレッタだが、すぐにシエラに目を向けてきた。昇の能力がエレメンタルアップなら、その効果がシエラに現

れても不思議ではない。そうなるとアレッタは圧倒的に不利になるどころか倒されても不思議では無いと危機を感じたからだ。

けれどもアレッタが見たシエラは地上の琴未達のように力が増した気配は一向に無く。それどころか逆に弱った感じを受けた。

そんなシエラを見てアレッタは笑い出す。

「シエラ、やっぱりそうなんだ。見捨てられたんだ、私がシエラを見捨てたように、今の仲間にも見捨てられたんだ」

楽しげにそんな言葉を発するアレッタ。そんなアレッタに対してシエラは力のない声で言葉を返してきた。

「それは違う。今は……私が拒絶した。だから、昇が私を見捨てた訳じゃない」

「でもエレメンタルアップの効果はシエラには現れてない。やっぱり分ってるんでしょ、本当の事が知られたら見捨てられるって、だから拒絶したんでしょ」

そんなアレッタの言葉は今までどおりシエラの心を掻き乱そうとした言葉だったが、今回に限ってはシエラの心が揺り動かされる事は無かった。それどころかシエラは更に冷静になったかのように静かにウイングクレイモアをアレッタに向けた。

「その通り」

そしてシエラは初めてアレッタの言葉を肯定した。それはアレッタにとっても驚きであり、シエラにとっては覚悟だったのかもしれない。

そんなシエラは顔を上げる事無く言葉を続ける。

「私は昇の剣になるために傍に居る。けど……私が必要ないなら昇の傍に居る資格は無い。アレッタの言ったとおり、本当の事が分れば昇は私を必要としない。昇に必要とされない私は……何の意味も無い」

「良く分かってるじゃない」

シエラの言葉にアレッタは満足げな笑みを浮かべてシエラの言葉を肯定する。だがその直後に顔を上げたシエラの表情は今までと違

って鋭いものとなっていた。そしてシエラはしっかりとアレッタを見詰めて宣言する。

「だからっ！　私の本当を知っているアレッタをここで倒す！　もう……それしか私が昇の傍に居る理由が無いから」

最後の言葉だけ小さく発するとシエラはウイングクレイモアに力を一気に流し込んだ。

「発動　セラフィスモード」

ウイングクレイモアは白い光を発するとシエラが流し込んだ力が翼の形となり、ウイングクレイモアに新たなる翼を生み出させる。けれども新たに生えた翼はしっかりと形作る事が無く、しっかりとした翼の形を保つ事が出来なかった。それは今まで使っていた翼も同じで、合計で六枚になった翼はどれもしっかりとした翼の形を保てなかった。

そんなシエラの姿を見てアレッタは悪意に満ちた笑みを浮かべると言葉を放つ。

「シエラ、随分と無様な姿だね」

そんな感想を口にするアレッタだが、そんな事はシエラが一番良く分かっていた。

シエラの切り札といえるセラフィスモードはエレメンタルアップが掛かっている事が最低条件だ。そのエレメンタルアップを拒絶したシエラが発動させたセラフィスモードがしっかりとした形で発動してない事は当のシエラが一番良く分っている。だからアレッタに無様だと言われても何の感情も沸いては来なかった。

自分の言葉にまったく反応を示さないシエラにアレッタは急に気を引き締めた。確かにシエラのセラフィスモードはしっかりとした形で発動はしていないが、これがシエラの本気だという事はしっかりとアレッタにも分った。

つまりはアレッタも気を抜いたらやられる。そうシエラの雰囲気から悟ったようだ。けれどもアレッタが有利な事には変わりない。なにしろシエラは先程、脇腹に浅いとはいえダメージを負っている。

だからこそシエラの動きはそんなに鋭くはならないと予想するアレッタは心の片隅でシエラを見下していた。

そんなシエラに向かってスカイダンスツヴァイハンダーを構えるアレッタ。本気になったシエラだけにアレッタも言葉を発する余裕は無いと感じたのだろう。そんなアレッタの視界からシエラが一瞬にして姿を消す。

そしてすぐに後ろから大きな音がしたのを聞いたアレッタは、すぐさま後ろに振り向くのと同時にツヴァイハンダーを反射的に振り抜く。

その瞬間に鳴り響く剣戟音。どうやらシエラのウイングクレイモアとアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーがぶつかりあったようだ。けれどもアレッタがシエラの姿を捉えようと視線を合わせようとした時には、シエラの姿はすでに無く。今度も後ろから何かにぶつかるような音がしたので、そちらを振り向くとそこにはシエラの姿があった。

そんなシエラは何事も無かったかのように再びアレッタに向かってウイングクレイモアを向けるが、その身体にはアレッタには覚えが無いダメージが確実に存在していた。

それはシエラがセラフィスモードを完全に制御できない事による。シエラは自分に最も有利な一撃離脱の戦術を取ったのだが、制御できないセラフィスモードではうまく止まったり、切り返す事が出来ない。そのため音速まで速度を上げてしまったシエラは音の壁にぶつかってしまったのだ。

音の壁とは空気が圧縮されて生じる抵抗力であり、一定の圧力にまで圧縮された空気が爆発した衝撃波ともいえるものだ。つまりシエラのスピードは音速まで達した事により、シエラの身体に掛かっていた空気の圧力が一気に爆発してシエラの身体にダメージを与えたのだ。それこそが音の壁である。

けれどもシエラはその音の壁をも利用した。制御できなほどのスピードまで達する事が出来るセラフィスモード。そうなると止まる

だけでも困難になる。だがシエラは自ら音の壁にぶつかる事により急停止と急発進を同時に行えるようにしたのだ。

正にその戦術は諸刃の剣とも言える戦術だった。けれども昇のエレメンタルアップを拒絶したシエラにとっては最早これしかアレッタを倒せる手段が残されていないのも事実だった。

そしてそんな戦術を取られたアレッタもシエラの動きに翻弄されるしかなかった。さすがにスピードが自慢である翼の精霊であっても、音速に近いスピードで動かれてはシエラの姿を追うのがやっとで、とてもではないが反撃なんて出来るものではなかった。

だから防戦一方のアレッタに対してシエラは猛攻撃を繰り返す。自らの身体にダメージを蓄積させながらアレッタをドンドンと追い詰めていく。

そしてそんな攻防はシエラを優勢に運ばれていくと誰もが思っていただろう。けれどもアレッタの眼差しから闘志が消える事は無く。まるで何かの機会を窺っているようにも思えた。

そんなアレッタの眼差しはシエラも気が付いていた。気が付いてもなおシエラは攻撃の手を緩めようとはしなかった。それは今の時点で攻撃を緩めてしまえばアレッタに反撃のチャンスを与えるのと同じだからだ。だからこそシエラは攻め続けなければいけなかった。

けれども今のシエラが取っている戦術から言って攻め続けるという事は自分にもダメージを与え続けるのと同じであり、こうなってくるとどちらが先に根負けするかで勝負が決まってくるようにシエラは思っていた。

そう思っていたからこそシエラはこんな戦術を取ったのかもしれない。それはシエラには絶対にアレッタを倒さないといけない理由がある。絶対に負けられない理由があるからこそ、絶対の自信を持って持久策に打って出たのだろう。シエラとしては絶対に根負けしないだけの覚悟を自覚していたからこその手段だった。

けれどもそんな戦術を続けていればシエラの動きが少しずつではあるが鈍ってくるのは明らかである。そしてアレッタはその瞬間を

待っていたかのように一気に動き出してきた。
それはシエラが一瞬だけ音の壁から反転する時だった。その衝撃でほんの少しだけ動きが止まってしまったのだ。かと言って何秒も止まっていた訳ではない。それはほんの刹那の瞬間だけだった。
けれどもアレッタもハイスピードを得意としている翼の精霊である。その刹那の瞬間さえあれば反撃に転じる事が出来る。
そんなアレッタの行動に気付かないままにシエラは再び突撃を掛けて驚愕する。なにしろ今までアレッタはシエラの姿を捉えるのに完全に遅れを取っていたのだが、今回に限ってはすでにシエラの方を向いており、スカイダンスツヴァイハンダーを突き出す形で構えている。
そしてシエラの突撃に合わせてアレッタもシエラに向かって突撃する。両者の距離は一瞬で縮まり、シエラのウイングクレイモアはアレッタの肩を切り裂いていた。
だがアレッタがウイングクレイモアの間合い以上に接近して密接していたため、シエラのウイングクレイモアはアレッタの肩を傷つけただけで、その刃はほんの少ししかアレッタの肩を斬り付けるだけに過ぎなかった。
なにしろシエラとアレッタの身体は密着しており、ほとんど二人の間に距離は無い。だからウイングクレイモアはその大きさゆえにその程度のダメージしかアレッタに与える事が出来なかったのだ。
そんな状態で密着しているシエラとアレッタ。そしてアレッタは自らの口をシエラの耳に近づけるとささやく。
「これで終わりね、シエラ」
そう言われたシエラの瞳は大きく見開いており、身体が動くどころか瞬きすらしなかった。シエラがそんな状態になったとしても不思議は無い。なにしろアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーはシエラの腹を突き抜けて、シエラの真っ白で長い髪から真っ赤に染まった刀身を突き出しているのだから。
シエラに刃を突き刺す事に成功したアレッタ。そこにはアレッタ

が待っていた機会を充分に生かした戦略が練られていたからだ。
シエラの攻撃は自らもダメージが負う諸刃の剣とも言える攻撃だ。そんな攻撃を続けていればいずれはシエラに隙が出来るはずだとアレッタは考えていた。そんな考えを持っていたからこそ、下手な反撃に出ないで防御に専念していたのだ。
そしてシエラが一瞬だけ動きを止めた刹那の瞬間をアレッタは反撃の好機だと瞬時に悟った。なにしろ今まで後手後手に回り、シエラの動きを追いきれなかったアレッタだが、その瞬間だけはしっかりとシエラの姿を捉えることが出来たからだ。
後はシエラに向かって突っ込んでいくだけ。それだけでよかったのだ。なにしろシエラは方向転換を音の壁に自らの身体をぶつける事で行っていた。つまりは音の壁にぶつからない限りはシエラは真っ直ぐにしか進めないという事だ。
アレッタはそこに勝機を見出したのだ。真っ直ぐに進めないと分っているからにはシエラの攻撃は限られてくる。更に自分から突き進む事でシエラがウイングクレイモアを振るっても、刃が身体に切り込む前にシエラに密着する事が出来る。そうすればウイングクレイモアを振るう事が出来ずに、シエラは動きを止めるしかない。
それと同時に突き出したスカイダンスツヴァイハンダーでシエラの腹を突き刺したというわけだ。つまりアレッタは自ら距離を縮める事によってシエラの攻撃を途中で止める事に成功し、なおかつシエラに決定的なダメージを与える事が出来たのだ。
そんな予想外の事態にシエラは自分の身体に冷たい物が貫いているのを感じならも、驚愕よりも絶望が先にシエラの心を過ぎった。
……そんな、こんな事が……昇、どうしよう……助けて。シエラの視界は少しずつぼやけていき、思考も少しずつ周らなくなってくる。それだけアレッタから喰らったダメージが致命的なのを示していた。それでもシエラは沈みそうな意識だけは何とか保っていた。
そんなシエラに向かってアレッタは更にささやく。
「シエラ、まだ気を失っちゃダメよ。なにしろこれから……本当の

事をシエラの仲間達に教えてあげないとなんだから」

……ダメ……それだけは。抵抗しようにもすでに身体は動きはしない。今までの攻撃で蓄積されたダメージにアレッタから致命的なダメージを負わされたのだ。シエラの身体はすでに限界を超えて痛覚すらも薄れさせる程だった。

そして意識と共に体中から力が抜けていくのを感じたシエラは、最早ウイングクレイモアを持っている事すら出来なくなり、ゆっくりとシエラの手からウイングクレイモアが地上へと落ちていく。

そんな光景を見たアレッタはシエラの身体からスカイダンスツヴァイハンダーを一気に引き抜く。

すでに飛ぶ事が出来ないシエラはそのまま仰け反るかのように地面に向かって落下していく。そんなシエラの瞳に地上にいる昇の姿が写った。

昇の姿を見てシエラは昇に尋ねたくなった。

昇は、私が必要……と。

第百四話　シエラ暴走（後書き）

さてさて、そんな訳でお送りしたエレメですが、今回の話は予想外の結末だったのではないのでしょうか？　なにしろシエラがやられちゃってましたからね～。

だが！！！　これで終わりではない。シエラにとって本当の試練はこれからなのかもしれませんね。つまり今回の事は序章に過ぎないという事です。う～ん、これからのエレメはどうなってしまうんでしょうね～。

……いや、大丈夫だから、ちゃんと続きは考えてあるから、というか今回だけはしっかりとプロットも全部上げたから。だから……疑惑の視線を向けないでーーーっ！！！

さてさて、今回はかなり更新期間が空いてしまいましたが、少しだけ言い訳をさせてもらうと……どうしてもやっておかない事があったんです！　……それだけ！！！

まあ、私なりに忙しかったという事で納得してください。お願いします。

だが、私とて無駄に時間を費やしていた訳ではない！　今まで抱えていた用事は全て済ませた。まだ結果は出てないけど、当分はやる事がない！　つまり！！！　当分はエレメの更新に集中できるという事です。……まあ、花粉の影響が出なければですけどね。

それから同時進行している断罪の日、その解答編についても書いている状況なのでさすがに頻繁に更新するという事は出来ませんが、これからはエレメの更新ペースを上げて行きたいと思っております。

さてさて、なんか無駄に長くなったような気がするのでここいらで締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、少しずつではあるが調子を取り戻してきたと思い込んでいる葵夢幻でした。

第百五話　シエラの正体

重力に従って地面へと落下して行くシエラ。そんなシエラの身体が途中で止まると共にシエラは苦痛の声を上げた。なにしろシエラの落下が止まった原因はアレッタがシエラの髪を鷲掴みにしてそのまま宙吊り状態にしているからだ。

シエラの身体は先程の攻撃で未だに指一本を動かせる状態ではない。それほどまでに深い傷をシエラは負っているのだから、髪を鷲掴みにされて抵抗するなど今のシエラに出来るわけがなかった。

一方でシエラの髪を掴んでいるアレッタはシエラの姿に笑みを向けると通信回線を開いた。

「ローシェンナ、エリン。もうすぐ精界が崩壊するから、その時に逃げるわよ。さすがにエレメンタルアップを相手にしてたらこちらがやられるわ」

そんな通信を送るアレッタ。その通信にエリンはすぐに分ったと返事を返してくるが、ローシェンナにはいまいち意味が伝わっていなかったようだ。

そんなローシェンナにアレッタはエレメンタルアップが何であるかを説明した。つまり昇達が急激に強くなった原因が昇の能力であるエレメンタルアップの影響である事を説明したわけだ。その説明を聞いてようやく納得の行った顔をしたローシェンナ。どうやら彼女としてみてもいきなり昇達が急激にパワーアップした事に疑問を抱いていたようだ。

その疑問が解けて、しかもその能力がとてつもなくやっかいな能力である事を分かったローシェンナはアレッタの意見に同意してきた。その答えを聞いてアレッタは更にエリンに向かって話しかけてきた。

「その前にエリン、こっちに戻って来なよ。面白いものを見せてあげるから」

「急にそんな事を言われても、こっちも手一杯だよ」
アレッタの言葉にそんな言葉を返すエリン。なにしろエリンもエレメンタルアップで能力を限界以上に上げているミリアを相手に戦っているのだ。
そんな二人が戦っている場所は瓦礫すらも破壊され、すでに周囲には建造物と呼ばれる物は全てなくなってしまっている。今ではその破片どころか地面すらもへこむように破壊されながら二人の戦闘は続いているのだ。
こんな状況でエリンが脱出するのは困難かと思われるが、そんなエリンの心配を振り払うような言葉をアレッタは口にする。
「それでもなんとかこっちに合流できるでしょ。こっちに来ればもう戦闘なんて出来なくなるんだから。そう、もう戦う事なんて出来ないのよ」
そんな言葉を口にしたアレッタは真下に居るシエラを見て笑みを浮かべるのだった。

少しずつ降りてくる？
シエラのフォローに周ろうとしていた昇は周囲で一番高い建物の上に居たが、そこからではかなり上空で戦っているシエラの様子がほんの少しだけ見えるだけで詳しいところまでは分らなかった。
けれどもシエラが動かなくなり、アレッタに髪を掴まれて少しずつ降りてくるのははっきいと分った。それと同時に自分の心配が的中した事に昇は後悔した。
なにしろシエラの様子がおかしい事は気付いていたのだ。それなのに何も出来なかった。そんな思いが昇の胸に去来する。自分がもう少しシエラの事を気に掛けていたら、そんな事を思う昇だが、こんな状況になってはもう遅い。今はなんとかシエラを助ける事が最優先とさせるが、まだ昇の紫黒では撃っても届く距離ではない。それにシエラが人質のように囚われているからには下手に手出しは出

来ない。
　今までに無いほどに絶体絶命な事態に昇はどう動いてよいか判断に迷っていた。そんな時だった。ミリアからストケシアシステムを使って通信が入ってきたのは。
（なんか分んないけど、私が相手にしていた精霊がそっちに戻っていくよ）
　その通信を聞いて昇はすぐに理解した。そう今回の戦いではシエラが落とされて敵の手にあるからには昇達からは手を出す事は出来ない。つまりは完全に追い込まれたどころか負けを宣告されたようなものだ。
　そんな状況を閃華もすぐに察する事が出来た。だからこそ閃華はすぐに琴未に呼びかけるとローシェンナから共に距離を取らせた。シエラがアレッタに囚われているからには、いつ人質として使ってくるか分らない。そんな状況でローシェンナを相手に戦っていてもしかたないと閃華は判断したのだ。そしてその判断は昇と同じ物だった。
　昇もミリアに戻ってくるように指示を出すと自分も琴未達と合流するために一気に建物から飛び降りて琴未達の元へ走る。少しずつ降りてくるシエラに目を向けながら。

「あまりにも不本意ですが、今回は傷み分けですわね」
　昇が琴未達に合流して、そこにミリアとエリンもそれぞれの陣営へと引き返してきたところでローシェンナは相変わらずな高飛車な態度でそんな事を言い出した。どうやら今回の事はローシェンナも勝ったとは思っていないようだ。それはそうだろう。なにしろ昇達が戦闘を停止したのはシエラが落とされた所為だ。そのために昇達は剣を退くしかなかった。だからローシェンナとしても勝った気はしなかったのだろう。だからこそ傷み分けと言ったのだ。
　そんなローシェンナの言葉に琴未は何かを言いかけようとするが

閃華がすぐに止めた。なにしろシエラはローシェンナ達の手に落ちている。ここで下手に刺激を与えるような事を言えばシエラの身に何があってもおかしくは無い。だからこそ、ここは大人しく状況を見てシエラを奪還するのが一番だという事を閃華は小声で琴未を説得した。

それでも琴未には納得がいかないのだろうが、シエラが落とされたからにはしょうがないと苦虫を噛み潰すように苦い顔で奥歯を噛み締めた。

そのシエラだが未だに動く気配を見せずにアレッタに髪を掴まれたまま、ゆっくりとローシェンナ達の元へ降り立ってきた。

そして昇達は驚愕するのと同時に息を呑んだ。なにしろシエラの背中は真っ赤に染まっており、未だに傷跡がはっきりと分るほど深いものだ。そんな傷を負わされて今のシエラが動けない理由がようやく分ったと琴未は理解するのと同時にぶつけようの無い怒りが沸いてきた。

そんな琴未を察した閃華は小声で琴未をなだめるが、琴未の雰囲気からいつローシェンナ達に斬りかかっても良いような殺気は消える事が無かった。そんな琴未に目を向ける昇。琴未はローシェンナ達を睨みつけながら、強く拳を握っている。それだけ琴未は自分自身の感情を抑えているのだろう。

そんな琴未を察して昇は逸早く前に出るとローシェンナ達に呼び掛けた。

「シエラを離して貰おうか。そうしなければ僕達は戦いを続行する。シエラの身に変えてもあなた達を倒させてもらう」

あえてそんな言葉を口にする昇。もちろんそれは昇の本心では無い。昇としてもシエラの身を一番に案じている。だが下手に出れば付け込まれるだけだ。だからこそ余裕を見せて安全無事にシエラを解放させようとしているのだ。

けれどもそんな昇の予想とは反してアレッタは楽しげに笑い出した。

「良いねえ、そのセリフ。シエラにはピッタリだよ」
そんなアレッタの言葉に昇は少しだけ訝しげな顔をする。まさかアレッタからそのような言葉が出てくるとは思っていなかったようだ。昇としてはハッタリをかまして、シエラを取り戻そうとしただけなのに、アレッタは昇の言葉を鵜呑みにしたかのようにシエラを犠牲にする昇の言葉に共感を覚えたかのような返事をしたのだから。
そんなアレッタがシエラの髪を引っ張り上げて、強制的にシエラに顔を上げさせると悪意に満ちた笑みを向けてシエラに話しかけた。
「聞いたかい、シエラ？　あんたの契約者はあんたを犠牲にしても私達を倒すってよ。そりゃあそうだよね。あんたなんかに危険を冒して助ける理由なんて無いものね」
「シエラを離せっ！」
シエラに向かって暴言を吐き捨てたアレッタに向けて紫黒を構える昇。けれどもアレッタはそんな昇にシエラを見せ付けるように更に引っ張り上げると、昇を挑発するかのように撃てるものなら撃ってみろといわんばかりの態度を示した。
そんな状況に昇の手は震え、最終的には紫黒を降ろさざる得なかった。昇が紫黒を降ろした事でアレッタもシエラを地面に寝かせるまでに降ろした。それだけでもシエラの苦痛が和らいだのは確かなようでシエラの顔はあまり見えないが少しだけ和らいだのが昇には分った。
そんな昇に向かってアレッタは楽しげに話しかけてきた。
「まあ、そんなに慌てないでよ。一番の楽しみはこれからなんだからさ」
「一番の、楽しみ？」
昇はアレッタを睨みつけながらも言葉を繰り返した。どうやらアレッタはこれから何かをしようとしているらしい。けれどもシエラがアレッタの元に落ちているからには昇達には手を出す事が出来ない。そんな状況に昇達は焦りを感じながらも閃華もなんとか奪還策を講じようとするがエリンと未だに召喚してあるローシェンナの巨

鳥がどうしても邪魔になってくる。
　確かに未だにエレメンタルアップを解除してないからローシェンナ達を倒すのには時間が掛からないだろう。けれども瞬殺という訳には行かない。どうしても多少の時間が掛かるのは必至だ。そんな状況でシエラにトドメを刺されてしまっては元も功も無い。
　そうなると頼みの綱はこちらに向かっているフレト達となってくる。閃華はローシェンナ達に気付かれないように与凪との回線を開くと小声で事情を説明して、そのまま映像と音声をフレト達に送り続ける事にした。そうする事でフレト達が奇襲をしてくれればシエラを取り返す隙が確実に出来るからだ。
　だからこそ閃華は今の状況をフレト達に送り続けながら状況を見守った。
　そんな閃華の行動に気付かないままに昇とアレッタは会話を続けていた。けれどもシエラが囚われている状況でまともな交渉が出来るはずも無く、昇はまるでアレッタに遊ばれているように感じていた。
　それでも昇は焦る色を出す事無く冷静に言葉を返す。いつまで経っても慌てる様子を見せない昇にアレッタの方もそろそろ飽きてきたのだろう。アレッタとしてはもう少し昇に取り乱して欲しかったようだ。その方がアレッタとしては、その後に待っている楽しみとやらが倍増するからだ。
　けれどもこれ以上は話を続けても無駄だろうと、アレッタはスカイダンスツヴァイハンダーを前に出した。これには昇も紫黒を構えるが、そんな昇に対してアレッタは落ち着くように言い始めた。
「おっと、待つんだね。こっちだって、この状況でわざわざシエラにトドメを刺して、そっちに有利な状況に追い込む気はないのよ」
「じゃあ何をしようって言うんだっ！」
　さすがに武器を出されてきては焦りを隠しきれない昇。そんな昇をあざ笑うかのようにアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーをシエラの背中に持って行く。

「あんた達だって知りたいだろう。シエラの秘密を、今までシエラが隠してきた真実を」
「シエラの……秘密」
「そうさ、あんた達だって気付いてるんだろう。シエラとの間にどんな絆が出来ようとも、シエラはどこかで線を引いてる事を。決して誰にも見せようとしない部分がある事を。その事を知りたいと思うだろ」
　そんな言葉を昇に投げ掛けるアレッタ。確かに振り返ってみればシエラにそんな部分があった事に昇達は心当たりがあった。だからこそアレッタの言葉にすぐに言葉を返す事が出来なかった。昇だけを除いては。
「そうまでしてシエラの秘密を知りたいと思わない。シエラにも心があるからには誰にも言えない事があっても不思議じゃない。でも、だからこそ！　シエラを信じる事が出来るんだ。シエラが隠している事が有ったとしても僕達との絆を大事にしてくれるなら、それだけで僕はシエラを充分に受け入れる事が出来る。だから無理にシエラの秘密を知ろうとは思わない」
　はっきりと断言する昇。そんな昇の言葉を聞いて琴未達も頷いた。
　確かに昇が言ったように誰にも言えない秘密は誰しも持っているのかもしれない。けれども一番大事なのは、その秘密を抱えたままでも昇達との絆を大事にしていたシエラの心が重要だと昇は断言したのだ。
　その昇が放った言葉がシエラに届いたのだろう。未だに閉じられているシエラの瞳から涙が流れ出るのを昇ははっきりと見る事が出来た。
　そんなシエラとは正反対にアレッタは楽しげな笑みを浮かべると断言するかのように言葉を発する。
「なるほどねえ、シエラは良い仲間にめぐり合えたものだね。まあ、だからこそ……壊しがいがあるってものだけどね！」
　アレッタの放った言葉を聞いた昇達は沸きあがる感情と共に動き

出そうとするが、すぐにアレッタがシエラの首筋にツヴァイハンダーを当てたので昇達はすぐに動きを止めて固まるしかなかった。
そんな昇達に向けてアレッタは楽しげな笑みを向けると更に話を続ける。
「だからそう慌てないでよ。これからしっかりと見せてあげるからさ……シエラの正体をね」
アレッタはそんな言葉を発した後にスカイダンスツヴァイハンダーを振るってシエラの背中にある装甲と服を一気に斬り裂いた。そのうえいつもはシエラの背中を隠すように伸ばしている髪もアレッタに掴まれているため、シエラの背中は向き出しとなっている。
そんなシエラの白い肌を持つ背中に染み渡る赤い血の跡がシエラの傷を更に物々しくさせていく。
「さあ、ここからがショータイムだよ」
アレッタは楽しそうに宣言するとシエラの首横にツヴァイハンダーを突き刺すと手の平をシエラの背中に向けて差し出した。アレッタがシエラに何かをしようとしているのは昇達にもはっきりと分るが、この状態では昇達は動く事が出来ない。なにしろアレッタの行動一つでシエラの首を切り落とす事が出来るのだから。
そんな状態だからこそ昇は奥歯を噛み締めながら状況を見守るしかなかった。けれども隙さえ見せればいつでも紫黒を発砲できるように準備だけはしている。今の昇にはそれだけしかできないのだから。
そんな苦い思いをしながらも昇は状況を見守っていると、アレッタの手が白く輝き、それに共鳴するかのようにシエラの背中も白く輝く。
「あっ、ああっ！」
そんなアレッタの行動に抵抗するかのようにシエラは声を上げる。そんなシエラの声はあまりも悲痛であり、苦しげであったために昇は更に胸が締め付けられる思いがした。
そんな昇とは逆にアレッタは楽しげにシエラに向かって話しかけ

る。
「無駄な抵抗はよすんだね。もうシエラにそれだけの力は残ってないでしょ。だから素直に……さっさと翼を出しなっ！」
アレッタがそう叫ぶと手の光は更に輝きを増し、シエラの背中も強く輝く。そしてシエラの背中からは少しずつではあるが、まるで何かに引き出されるかのように翼の先端が現れてきた。それはいつもシエラがウイングクレイモアに生やしている翼と同じで真っ白な翼が少しずつシエラの背中から生えてくる。
なんで、こんな事を？　昇は目の前の光景を見ながらもそう感じていた。シエラは翼の精霊であり、だからこそウイングクレイモアに生えている翼は純白で、本当に天使の翼を感じさせる物だ。それが背中に生える事とアレッタがいうシエラの秘密とはまったく結び付く物が無いと昇は考えたからこそ、そんな疑問を感じたのだろう。
昇がそんな事を考えている内にシエラの翼はドンドンとその姿を現して行き、そして最後まで一気に引き出されると誰もが思ったところでシエラは沈みそうな意識の中で思いっきり抵抗するかのように声を上げた。
「うっ、あぁっ、あ――――――――――――――っ！」
最後の抵抗を思わせるようなシエラの行動にアレッタは今までの表情を崩して鋭い目付きに変わると放っている力を一気に上げる。
「しつこいんだよ、シエラッ！」
アレッタはそう言い放つと最後には自らの手でシエラの翼を掴むと、そのまま引きずり出すかのように一気に引っ張り出した。
そしてシエラの翼がその全貌を現す。
「なんじゃとっ！」
「そんなっ！」
シエラの翼を見て驚きの声を上げるミリアと閃華。そんな二人とは正反対に昇と琴未にはミリア達が何でそんなに驚いているのかが分らないようだ。
そんな二人の反応を確かめるように昇はシエラの背中に生えた翼

をじっくりと見る。確かにシエラの背中に生えた翼は真っ白で天使の様相を思い描ける物だった……翼の付け根だけを残しては。

シエラの翼は確かに白い。けれども翼の付け根だけは純白な翼の精霊を思う事が出来ないような黒い色をしている。つまりシエラの翼は完全に純白では無いということだ。

翼の付け根、背中との境界は真っ黒で、その黒い色は翼の先端に向かうほど一気に真っ白になっている。つまり今まで髪の毛に隠れていた部分だけは完全に真っ白な翼ではなかったという事だ。

けれども昇にとってはシエラが背中から翼を生やしてる姿を見るのはこれが初めてだ。だからこそミリア達が何で驚いているのかが、まったく分らなかった。それは琴未も同じなようで良く分からないといった顔をしている。

そんな人間二人とは正反対に精霊であるミリアと閃華は驚きを隠せないといった感じで固まっている。昇はそんな二人を見てシエラの背中に生えている翼。それも黒い部分には重要な秘密があるのだろうと推測した。

それはアレッタの翼を見ても良く分かる。アレッタの翼は完璧に純白であり、黒い部分なんて存在しない。だからこそ昇もアレッタに天使のような印象を受けたのだ。けれども今のシエラは違う。まったく純白でない翼を見て今まで抱いていたイメージが一気に壊れて行くのを感じていた。

だがそれだけである。確かにシエラの翼は真っ白では無い。だからと言ってシエラがシエラである事にはなんら変わりは無い。そんな翼を見たからと言って昇がシエラに対して築いてきた絆が壊れるとはまったく思ってもいなかった。

だからこそ昇は冷静に紫黒を一瞬で構えると、アレッタのスカイダンスツヴァイハンダーを目掛けて一気に放った。

アレッタとしてはこれで昇達が冷静さを失って驚愕すると思っていたのだろう。だからこそ昇の攻撃に気付いた時にはスカイダンスツヴァイハンダーを弾かれてしまった時だった。

これは正しく両者の計算外が生み出した結果とも言えるだろう。アレッタとしてはシエラの秘密を明かす事で昇達の動きが完全に止まると思っていたからこそ、シエラの正体を明かして、その隙に逃げようとしていた。

けれども昇にとってシエラの秘密と言うのは未だに訳が分らないものだった。だからこそ完全に油断していたアレッタの隙を付いて一気に行動に出ることが出来た。昇としてもシエラの秘密が凄い物で完全に驚愕させられると予想しただけに、拍子抜けした感じになり、冷静に状況を判断して動く事が出来たのだ。

昇はこのままシエラを奪還しようと一気に走り出すが、それに気付いたアレッタはシエラを昇に向かって思いっきり蹴り飛ばした。昇がシエラを取り戻そうと動いた事はアレッタにも分っている。だからこそシエラを解放すれば昇が危険を冒して、それ以上の戦いを仕掛けはしないだろうと判断したからだ。それにアレッタとしてはすでに目的は果たしている。だからこそ、もうシエラには用は無かった。だからこそ蹴り飛ばすという結果でシエラを開放する事になった。

自分に向かって飛んでくるシエラを何とか受け止める昇。これを機会にローシェンナやエリンも動こうとするが、その前に琴未が昇をフォローする形で立ち塞がったために完全に機会を逃してしまった。

こうして再び生まれたこう着状態を利用して昇はシエラに向かって話しかける。

「シエラ、大丈夫？」

けれどもシエラからは返事が無い。それどころか完全に体から力が抜けているかのように腕を垂らしている。どうやら完全に気を失ってしまったようだ。

そうなれば当然、シエラが作り上げた精界も自然と崩壊を始める。

「さて、そろそろ私達は失礼させてもらうわよ」

精界にヒビが入り始め、崩壊の前兆なった状況にアレッタは冷静

にそんな事を言って来た。確かに世界は真っ白くなっており、これはシエラが張った精界である事はアレッタにはすぐに分った。なにしろ昇達の中に翼の精霊はシエラしかおらず、白い精界はシエラにしか張る事が出来ないからだ。

そのうえ昇のエレメンタルアップで完全に追い込まれていた状況。これらを察するにここは逃げの一手で次に備えた方が良いとアレッタは判断したようで、その事をローシェンナにも告げる。

そのローシェンナも何が起こったのか分らない言った表情をしている。どうやらシエラの正体で驚いているのは精霊だけのようだ。

そんなアレッタが去り際に昇達に向かって大きく叫んだ。

「そうそう、そのシエラこそが妖魔と呼ばれる生き物なのよ。これを機会に良く憶えておくといいわよ」

そんな捨てセリフを吐いて、その場から一気に立ち去っていくローシェンナ達。精界の崩壊が始まっている今では、とてもではないがローシェンナ達を追撃するだけの余裕は当然残されていない。だからこそ昇達もすぐに場所を移動しなければいけなかった。

なにしろ精界が完全に崩れれば精霊と契約者は強制的に現実世界へと戻される。そのうえここは繁華街だ。そんな場所に精霊武具を身にまとって、そのうえ血まみれのシエラを抱えたまま戻っては大騒ぎになる事は確実だ。

「とにかく今はこの場所を離れるんじゃ」

精界の崩壊にそんな進言をする閃華。どうやら閃華も精界の崩壊が始まってようやく冷静さを取り戻したようだ。そんな閃華の言葉に頷いた昇はシエラを抱えなおすとそのまま移動を開始する。琴未は未だに驚愕しているミリアを引っ張っていきながらも昇達は戦いの傷跡が残っている繁華街を一気に駆け抜けて、元の人気がまったく無い場所へと戻ってくると精界は完全に崩壊して、昇達は現実世界へと戻って来た。

「昇、早くシエラをここに寝かせるんじゃ」

現実世界に戻って来た事を確認した閃華はすぐに昇に向かってそ

う言った。そんな閃華の言葉に戸惑いながらも昇は頷くと閃華の指示通りにシエラを横にさせる。そして閃華はシエラの下に魔法陣を展開させるとシエラの治療を開始した。さすがに怪我をしたシエラをそのまま運ぶのは危険だと判断したようだ。だからこそ出来る限りの治療をしてから、しっかりとした場所に運ぶべきだろう。

そんなシエラの治療にあたっている閃華を見て昇は口を開く。

「閃華」

「分っておる。じゃが今はシエラの治療が先じゃろ。じゃから妖魔については後じゃ」

「う、うん、分った」

閃華が早口にそう答えたので今は邪魔をしない方が良いと判断した昇は静かにシエラの手を取った。

……シエラ……あの翼がシエラの隠していた秘密なの？　それに妖魔っていったいどういう意味なの？　そんな疑問をシエラにぶつけたい昇だが、それ以上に気になる事があり、今度はその事をシエラに向かって思う。

けどシエラ。シエラの秘密がどんなに重いものでも僕にはそんな事は関係ないから。その重荷に耐え切れないなら一緒に耐えてあげるから。だからシエラ……僕達は……。それ以上の言葉が思いつかない昇。それはシエラがエレメンタルアップを拒否した事が原因となっているのだろう。シエラが昇を拒絶するほどの秘密を有している。だからこそシエラはエレメンタルアップを拒絶するという行為に出たのだ。

それがどんな意味を秘めているのか、どんな意味がこもっているのか今の昇にはしる術はなかった。

それからしばらくするとフレト達も到着してシエラの容態に驚いていた。今まで映像で見ていたとはいえ実際にシエラの傷を目の当たりにすると驚きを隠せないのだろう。

それからラクトリーは閃華に向かって何かを話しかけようとしるが、その前に閃華が口を開いてきたのでラクトリーは話を切り出す機会を失ってしまった。

「とにかく今はシエラの傷を癒す事が最優先じゃ。昇達への説明は後でも良い。それに……ここでシエラを見捨ててしまっては昇達とて納得が行かんじゃろ。じゃから全てを話すのは後回しじゃ、今はシエラの治療に専念してくれ。後の事は……それからじゃ」

閃華が一気にそう言い放ったのでラクトリーは意を決したかのように頷くと閃華と共にシエラの治療にあたる。そこにフレトと行動を共にしていた咲耶も加わり三人がかりでシエラの治療へと取り掛かっていった。

けれども昇にはしっかりと分っていた。閃華だけではない、ミリアやラクトリーといった精霊達が動揺しているのを。今は閃華の好意で協力しているがラクトリーも咲耶も動揺を隠しきれてはいないようだ。それほどまでにシエラの秘密が精霊達に動揺を与えているのだろう。

そんな光景を目の当たりにしながら昇は強くシエラの手を握り締めると後ろから琴未の声が聞こえてきた。どうやらミリアと話しているらしい。それから琴未とミリアの二人は昇の元へ来た。

「昇」

「どうしたの……ミリア」

なるべく平静を装う昇だが、どうしても心配が顔に出ているのだろう。昇の顔を見て琴未とミリアは少しだけ昇を心配そうな顔で見詰めてきた。それでもミリアは話さないわけには行かないと琴未に突付かれて話を切り出してきた。

「昇、詳しい事は閃華が言ったとおりに後でお師匠様達と一緒に説明するから、今は簡単に説明するね。お師匠様、それでいいでしょ」

一応ラクトリーに確認を取るミリア。やっぱり重要な事らしくミリアだけの判断で全てを話して良いかどうか迷ったようだ。そんなミリアにラクトリーは頷いて見せるとミリアは改めて昇に向かって

話し始めた。そこにフレトも加わりミリアは人間達に向かって説明を開始するのだが、どうしても言い難い事なのだろう。なかなか切り出せないままに、何とか言葉を口にする。

「……シエラは……純粋な翼の精霊じゃないんだよ」

「精霊に純粋も不純もあるっていうの？」

そんな琴未の質問にミリアは首を縦に振った。それからミリアは話を続ける。

「琴未も人間と精霊の間に子供が出来る事は知ってるでしょ？」

「まあ、与凪という例があるからね」

確かに人間と精霊の間には子供を作る事は出来る。けれどもそれは契約をしたもの同士でなければならない。だからこそ争奪戦では戦いに参加しない精霊がそうした人間との関係を求めて契約をしてくるのも珍しくは無い。

それに真実を知った人間から精霊に告白してそうした展開に発展しくのも珍しくは無かった。

その例として昇達に一番近いのが与凪と森尾だろう。与凪は争奪戦に参加するために森尾と契約を交わしたわけではない。与凪が一方的に森尾に惚れて、それで森尾を契約者とすることで二人の交際が始まった。

そうして結ばれた人間と精霊はしっかりと子供を宿す事が出来る。しかも人間の子供をだ。だからこそ、そうした人間と精霊というカップルが未だに争奪戦の度に誕生している訳だ。

その事を再確認するかのように話すミリアの言葉に琴未を始め人間達は全員相槌を打つだけだった。

そして話は一番大事な部分へと差し掛かる。

「でも……何事にも例外は存在するんだよ。本来ならシエラは……そうして人間に生まれてくるはずだった。でも……シエラは精霊に近い存在として生まれちゃったんだよ」

「つまりシエラは人間として生まれてくるはずが精霊として生まれてきたという事か？」

そんな疑問を投げ掛けてきたフレトにミリアは黙って頷いた。けれどもすぐに琴未が疑問を思いついたので、その言葉を口にする琴未だった。

「でも、それが今回の問題とどう関係してくるわけ。精霊として生まれてきたからシエラは精霊として生きてるんじゃない」

確かに琴未の言う通りにも聞こえるが、ミリアはそうでは無いとばかりに首を横に振ってきた。

「人間と精霊の間に出来た精霊の子供は純粋な精霊にはなれないんだよ。確かに存在としては完全に精霊だけど、純粋な精霊じゃない証が身体のどこかに出て来るんだよ。私達はそんな存在を妖魔って呼んでるんだよ」

「つまり妖魔とは人間と精霊のハーフであり、精霊でもあるという事だな」

そんなフレトの答えに頷くミリア。つまり妖魔とはフレトが言った通り、人間と精霊のハーフであり、その存在は限りなく精霊に近い存在と言えるという事になる。

「でも……」

そんなミリアの説明を聞いて今まで黙っていた昇が口を開いてきた。

「それがシエラの秘密とどう関わってくっていうの。ただ生まれ方が違っただけじゃない。それなのにシエラはどうしてその事を秘密にしていた訳？」

そんな昇の疑問に口を閉ざすミリア。どうやらどう話して良いのか分からないといった感じだ。そこにシエラの治療が一段落したのかラクトリーが会話に混ざってきた。

「その理由としては精霊と妖魔の間に取り去る事が出来ない壁があるのですよ」

「壁？」

ラクトリーの言葉に首を傾げる昇はフレトを見上げるが、フレトもそれが何を意味しているのか分からないといった感じだ。そんな

人間達を見渡したラクトリーは話を切り替えてくる。
「とにかく、これでシエラさんの容態は大丈夫です。後は安静にしていれば二、三日で完治するでしょう。ですから、ここは一旦学校に戻りましょう。一応与凪さんにもシエラさんの様子を観てもらいたいですから」
ラクトリーがそう言い放つと全員が頷き、昇は動けないシエラを背負うとシエラの温もりを感じながら学校に向かって歩き始めた。
……妖魔か、まだ良く分からないけど、シエラは自分が妖魔である事を必死になって僕らにも隠してきたんだ。なんでそこまでして自分が妖魔である事を隠しておかないと行けなかったんだろう？そんな事をしなくてもシエラはシエラなのに。……だからシエラ、僕はこれからどんな事実を知ろうともいつものシエラを取り戻してみせるよ。そう心に誓う昇であった。

その頃、繁華街を離れて人気なの無い場所まで移動していたローシェンナ達はやっと一息ついていた。
「それにしてもアレッタ、いったい妖魔って何なんですの？」
どうやらローシェンナも妖魔についてはまったく知らないようだ。そんなローシェンナに向かってアレッタは楽しげに話しかけようとした時だった。
「妖魔とは精霊にとって決して受け入れてはならない存在。精霊にとっては忌むべき存在なのですよ。だからこそ精霊は妖魔を嫌うのです」
突如として男の声が聞こえるとローシェンナ達は声の方に振り向くのと同時に再び精霊武具をいつでも取り出せるように構える。
そんなローシェンナ達の前に現れたのは長身の男性と少し幼さが残る女性が二人。二人の女性を見る限り精霊である事はすぐに察しが付いた。二人とも誰もが見惚れる容姿をしており、黙っていれば誰もが振り向くような姿をしているからだ。

それだけではなく、精霊独特の感触をアレッタとエリンはしっかりと捉えていた。だからこそ突如として現れた三人組に気を許す事は無く、未だに疲労が残る身体でも戦えるように身構える。

そんな二人の気配を感じたのだろう。長身の男性は丁寧に頭を下げると自ら名乗ってきた。

「驚かせて失礼しました。私はアンブル＝リックネットという者でアッシュタリアの使者でございます」

あまりにも丁寧な挨拶にローシェンナは少しだけ気を許すのと共にある事を口にした。

「なるほど、そういう事ですのね。ここ最近になって感じていた視線はあなた達ですか」

どうやらローシェンナはアンブルの存在に気付いていたようだ。けれども接触してこないからこそワザと歩き回って様子を見ている内に、この町に辿り着いてしまったのだろう。

そんなローシェンナの言葉にアンブルは驚く事もせずに微笑んだまま言葉を返してきた。

「やはりお気づきでしたか」

「当然ですわ。それで、そのアッシュタリアの使者とやらが私に何の用がありますの？」

ここまで来ても高飛車な態度を崩さないローシェンナは相変わらず上からアンブルに対して言葉を放つが、アンブルはそんなローシェンナの態度に嫌気を見せる事も無く。微笑んだまま話を続けてきた。

「まずは黙って付け回していた事をお詫びしましょう。どうしてもあなた様の実力を見極めねばなりませんでしたので、他の契約者との戦いを拝見したかったのですよ」

「それで、私達が弱ったところを叩こうという目論みですの？」

「いえいえ滅相もありません。決してそんな事は考えていませんのでご安心ください」

あくまでも冷静かつ丁寧に話をするアンブルに対してローシェン

ナの警戒心は少しずつではあるが緩んできているのは確かだった。どうやらローシェンナはアンブルを完全に敵だとは思えなくなってきたようだ。

そんなアンブルに対してローシェンナは改めて尋ねる。

「それで、私の実力を見た感想は如何でしたか？」

確かにさっきの戦いでは勝敗は決してはいないが、ローシェンナ達の実力ははっきりとアンブルに見せる事にはなってしまったのには違いない。だからこそローシェンナはあえて強気に出たのだ。

それは昇のエレメンタルアップが完全であり、なおかつあそこまで一気に逆転されてしまっていては、あのまま負けても不思議は無かった。けれどもこうしてローシェンナ達が無事でいられるのもアレッタがシエラを落としてくれたおかげだ。だからこそ今回の戦いは引き分けとなったわけだ。

その事はアンブルも良く分かっているが、ローシェンナの性格から考えて、あれを苦戦していたと見られるのはプライドに触ると分っているのだろう。それにアンブルの目的を遂行するためにもここでローシェンナを怒らせる訳にはいかなかった。

だからこそアンブルは微笑んだまま先程の戦闘を褒めるかのような言動を放った。

「お見事としか言いようの無い戦いでした。あそこまでのサモナーはそうそう居る者ではございません。そんなあなただからこそ、私はあなたをアッシュタリアに招こうと参上した次第であります」

「つまり私にあなた方の仲間になれと言うわけですの？」

「はい、あなたのような方が居れば我々も心強いですから。それに、あなたは本気でエレメンタルロードテナーになろうとはしていないのでしょ」

「ッ！」

さすがにこの言葉にはローシェンナも驚きを隠せなかった。ローシェンナの本心を言えばアンブルが言ったとおり、ローシェンナはエレメンタルロードテナーを目指して戦っている訳ではない。

なら何のために戦っているかといえば、ただの暇潰しである。ローシェンナの態度を見てれば分ると思うが、どこからどう見ても生活に一切不自由が無いお嬢様なのは確かだ。そんなローシェンナが世界を周って戦いを繰り広げている理由はただ一つである。それは普段では体験できない戦いに身を投じる事で飽き飽きしていた日常にメリハリを付けたかっただけである。

ただそれだけのためにローシェンナはアレッタ達と契約を交わしたのだ。そのアレッタ達も本気で争奪戦に参加する気にはなれなかった。ただ普段は干渉できない人間世界に興味を抱いていたアレッタとエリンは何不自由無く世界を回れるローシェンナと契約する事で人間世界に干渉して満喫するのが目的だった。つまりは観光と一緒である。

だからローシェンナ達にとって争奪戦は余興にすぎなかった。けれどもそんな本心を明かしてしまっては興が失せるというもの、だからこそ今まで誰にも悟られる事無く行動していたのだが、ローシェンナを観察していたアンブルにはすっかり見通されていたようだ。

だからと言って動揺するローシェンナ達ではなかった。その程度の目的が見抜かれたところでローシェンナ達にはまったく不利益は無い。だからこそアンブルの言葉に耳を傾けるのだった。

「ですから、我々の仲間となって我らの総帥をエレメンタルロードテナーに導いて欲しいのです。あなたのようなサモナーが居てくれれば、これからの争奪戦も有利に運べますから。それに……これほど楽しい事は他に無いですよ」

すっかりローシェンナの心を見透かしたような言葉を放つアンブル。どうやらアンブルも伊達にローシェンナ達を観察して勧誘に来たというわけではないようだ。

そんなアンブルの言葉を聞いてローシェンナは口元に笑みを浮かべる。

「確かにそれは楽しそうですわね。あなた方の命令に従う気にはなれませんが、どうしても協力して欲しいというのであれば、協力し

てもよろしくてよ」
あくまでも上からの態度を崩さないローシェンナ。やはりローシェンナは誰かの下に付いて命令どおりに動けという行為は出来ないのだろう。
だがアンブルに言わせれば、そんなローシェンナだからこそ操りやすかった。ちょっと持ち上げただけで簡単にアンブルの言葉に同意を示してきたのである。これからも言葉次第ではローシェンナを確実に操る事が出来るだろうとアンブルは確信していた。
だからこそローシェンナの言葉に感激したかのように大げさな態度を取った。
「おおっ、それでは我らに協力してくれるのですね。それはなんとも頼もしい。ならば早速、我らの総帥にお会いして頂きたく、アッシュタリアの本部まで来てもらえませんか」
そんなアンブルの言葉にローシェンナが同意しようとした時だった。突如として横から出てきたアレッタが言葉を放つ。
「悪いけどまだここを離れるわけにはいかないのよ。まだシエラを倒した訳じゃないからね。私はシエラを徹底的に追い詰めて倒さない限り気が収まらないの。だから今すぐにこの場から離れる気は無いわよ」
そんな言葉を放つアレッタ。どうやらアレッタとしては完全にシエラを叩き潰したいようだ。そんなアレッタにローシェンナは困ったような溜息を付く。
確かにこのままアンブルに付いていけばアッシュタリアで存分に暴れる事が出来るだろう。けれどもローシェンナとしても妖魔の事は気になってしたし、このまま昇達との戦いも引き分けにしたままアッシュタリアに行くのもプライドに触るのも確かだった。そう考えたローシェンナだからこそアンブルに向かって言葉を放った。
「どうやらこのままという訳にも行きませんわね。いいわ、アレッタ。あなたの望みどおりにしてあげてもいいわよ」
そんなローシェンナの言葉を聞いてアンブルは慌てるかと思いき

や、意外な言葉を返してきた。
「そういう事ならば、是非とも私達も協力いたしましょう。あのエレメンタルアップを相手にしては戦力が多い方が徹底的に叩けるというものでしょう」
決してローシェンナのプライドに触るような言い方を避けるアンブル。そんなアンブルは微笑を絶やす事無く、ローシェンナに向けて視線を送ってくる。そんなアンブルに対してローシェンナも首を縦に振るのだった。

第百五話　シエラの正体（後書き）

さてさて、新キャラも登場したところでこんな感じとなったエレメですが如何でしたでしょうか。

まあ、今回はさすがにページ数が行き過ぎたと思いますので、妖魔についての詳しい説明は次回という事で～。今回はこんな形で切らせてもらいました。

……それにしても久しぶりに出てきましたね。アッシュタリアという言葉。しかも今回の奴もエルクと負けないぐらいねちっこく感じますね。

さてさて、まあ、そんな事はさて置き、重症となったシエラさんですが、なんとか一命は取り留めましたのでご安心を～。けれども心の傷はかなり深いようですね～。そんなシエラさんが心配な方～、たぶんこれからの展開ではもっと心配になると思いますよ。

……我ながらねちっこい事を考えたものだと今更ながら思ってますけどね。

まあ、そんな感じでこれからのエレメは展開していくと思われますので……たぶんね。ですので、これからもエレメをお楽しみください。

さてさて、やっと終わった白キ翼編の初回バトルですが、まあ、予定では数話後にはバトルが再開されている予定です。まあ、あれをバトルと言えるかどうかは皆様の判断に任せます。そしてその後に待っているのが、今までのエレメでは到底考えられないバトルが繰り広げられるでしょう。

なにしろあの二人が戦うのですから。まあ、その辺は後のお楽しみという事で。

そんな訳で適当に繰り広げてきた次回予告ですが、まあ、こんな感じの展開になるかと思われます。

さてさて、長くなってきたのでそろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、リアルでは花粉という敵とバトルを繰り広げている葵夢幻でした。

第百六話　妖魔

「死産のようだね」

違う、私はここに居る！

シエラの目の前には自分を生んでくれた両親と産婆らしき人物が暗い顔で、その部屋に集まっていた。母親は汗だくで泣いているかのようだったが、父親は暗い顔で時折シエラの方を向いてはすぐに視線を逸らせた。

……私は……いったい……何？　そんな疑問が突然シエラの頭に生まれるのと同時に精霊として必要な知識が一気に流れ込んできた。怒涛のように頭の中に流れ込んでくる知識の数々、それは人間として生きるためではなく、精霊として生きるのに必要な知識だった。そしてその中には妖魔の事も当然含まれていた。

そんな知識の流れが止まるとシエラは自分の身体を見る。身体はしっかりと触れる事が出来るし、そこに存在している事も分っている。だがシエラが母親に触れようとすると触れる事が出来ずにシエラの手は母親の身体を突き抜けて、その下にある床に触れた。

これが……精霊……ううん、私は……妖魔なんだ。先程の知識と目の前の現実がシエラにそんな事を実感させられる。そして父親が時折シエラに目を向ける理由もはっきりと分った。それはシエラが妖魔であるからに過ぎない。だからこそ父親はシエラの存在を認めようとはしなかった。だからシエラの事を見て見ぬフリを続けているのだ。

そんな状況に耐えかねたシエラは背中の翼を広げるとそのまま一気に舞い上がり、その場所を後にした。そう、自分が人間として人間として生きていくはずだった場所を。

まるで逃げるかのように上昇を続けるシエラ。その先には真っ暗な暗闇が広がっており、その暗闇を進めば進むほどシエラの意識は自然と暗黒へと沈んでいくのだった。

昇達は一旦学校へ戻るとシエラをいつもの生徒指導室へ連れて行き、与凪はシエラの容態を見て適切な治療を施した。そういう施設も兼ね備えているという事は、ここは完全に与凪の私室と言えるような場所になっているのかもしれない。けれどもこんな状況では与凪がそうしてくれてた事が大いに助かった。なにしろこうしてシエラの治療を適切に行えたのだから。

そんな与凪の治療が終わると与凪は昇に向かって「後は安静にしてれば三日ぐらいで完治しますよ」そんな言葉を掛けてきたので昇達はほっと胸を撫で下ろした。

それから昇は再びシエラを背負うと帰宅の途へと付いた。まさかシエラをこのまま生徒指導室に寝かせ続けるわけにも行かず。ひとまずシエラの部屋に寝かせてから、未だに意識を取り戻していないシエラを残して昇は学校の生徒指導室に戻って来た。

生徒指導室には未だに暗い雰囲気が残っていた。特に閃華とラクトリーは深刻そうな顔をしており、そんな二人を琴未とフレトは問い詰める事はしなかった。全ては全員が揃ってから話した方が手っ取り早いと判断したからこそ、昇が戻ってくるまで聞きたい事を聞かずにいたのだ。

そして昇がいつもの席に付くと昇達を始め、フレトの方には咲耶が居なくなり、代わりに半蔵の姿があった。どうやら妖魔に関しては半蔵の方が良く分かっているのだろう。だからこそフレトは咲耶と半蔵の役割を入れ替えたようだ。

そんな状況で真っ先に口を開いたのは与凪だった。最初は溜息から入った与凪の言葉は次の言葉から会話が始まった。

「まさかシエラさんが妖魔だったとは、それなら自分の口から何かを言えるわけがありませんよね」

「そうじゃな、自分から妖魔じゃと名乗るような酔狂な奴はおらんじゃろう」

「そうですね、自分が妖魔だと知られたらどのような目に遭うか、それはシエラさん自身が一番良く分かっているはずですから」
与凪の言葉を皮切りにそんな会話をする閃華とラクトリー。そんな精霊達とは違って昇達のような人間は首を傾げるばかりだ。そんな状況にフレトは痺れを切らしたのか、ラクトリーに向かって言葉を放った。
「ラクトリー、そろそろ妖魔について説明したらどうだ」
「あっ、すいませんマスター、これは気付かずに」
どうやらシエラが妖魔であった事はラクトリーにもよっぽど予想外だった事であり、すっかり昇達への説明を忘れてしまっていたようだ。
そしてラクトリーは改めて昇達の方へ顔を向けると真剣な眼差しで話し始めた。
「妖魔についての簡単な説明は先程ミリアが仰ったとおりです。それはお分かりいただけましたよね」
「妖魔は人間と精霊のハーフで、本来なら人間として生まれてくるはずだが精霊として生まれてしまった存在だという事だろ」
ラクトリーの言葉にそんな答えを返すフレト。そんなフレトに同意するかのように昇と琴未も首を縦に振った。それを確認したラクトリーは首を縦に振ると話を続ける。
「ええ、その通りです。ですが……そうですね……」
それからどうやって説明したものかと言葉を詰まらせるラクトリー。そんなラクトリーに変わって与凪が口を開いてきた。
「皆さん、コウモリの話って知ってますか？」
「コウモリ？」
いきなりそんな話題を振られて首を傾げる昇。そんな昇を見て与凪は話を続けてきた。
「コウモリは動物ですけど、翼を持っているために自由に空を飛ぶ事が出来ます。けどコウモリは空を飛べるという理由で地上に生きる動物からは阻害されてました。だから空を飛ぶ事から鳥類の仲間

になる事にしましたが、コウモリは鳥類とも生態が違う事から鳥達からも阻害される事になってしまいました。そんなお話しです」

「あぁ、そういえば昔にそんな話を聞いた事があるわね」

与凪の話を聞いて記憶を呼び起こす琴未。それは昇も同じだった。あぁ、確かに昔に……幼稚園の頃だったかな？　そんなような話を聞いたような覚えがある。どうやら昇もこの話を知っているようだ。

この話はコウモリが自分が動物であるからと言って動物の仲間に入れてもらうとするが、空を自由に飛べるという理由からコウモリは動物じゃないと仲間に入れてもらうことが出来なかった。それなら空を飛んでいる鳥の仲間に入れてもらおうと鳥達のところに行くが、鳥にも習性の違いからコウモリは鳥じゃないと言われてしまい。結局は鳥の仲間にも入れてもらえなかったという話だ。

そんな話を思い出して昇はなんで与凪がそんな話を切り出したのか分らないようだが、フレトには何となく察しが付いたようだ。だからフレトは少し机に乗り出すと与凪の方に向いて話し出した。

「つまり妖魔とはコウモリのようなものか。人間でもなければ精霊でも無い。どちらからも仲間に入れてもらえずに孤立している存在という事か」

「さすがフレトさんですね、飲み込みが早くて助かります」

「フレト、どういう事？」

フレトの答えにそんな感想を述べる与凪に対して昇はフレトに説明を求めてきた。どうやら昇にはいまいち飲み込め無かったようだ。そんな昇に対してフレトは言葉を整理してから話しだしてきた。

「要するに妖魔という存在を人間とか精霊という括りでまとめようとするから分らなくなるんだ。妖魔は人間でも精霊でも無い、妖魔という第三の種族なんだ。そう考えれば妖魔の立場が分りやすくなるだろ」

えっと……つまり、妖魔は人間としても精霊としても認知されず。妖魔とした独立した存在だという事なのかな？　そんな結論を出す昇。

確かに昇が出した結論どおりなのだ。与凪の説明から導き出される答えは、妖魔は人間でも精霊でも無い。妖魔という種族なのだ。

だがそれがどんな問題を引き起こすのかまでは分らなかった昇はその事を言葉にして質問に変えた。

「でも、妖魔だからと言ってそれが何で問題になってくる訳？　シエラとしてもなんで妖魔である事を隠しておかないといけないの？」

そんな質問を精霊達に向かってぶつける昇。そんな昇の質問に対してラクトリーは口を開かなかった。それはシエラは昇と契約を交わした昇達の仲間であり、真実を伝えるなら昇達の方からが良いと判断したからだ。

だからこそラクトリーは閃華を見詰めると、閃華は諦めたかのように溜息を付くと昇に向かって顔を向けてきた。

「昇よ、普通の人間は精霊王の器を持った者が精霊と契約を交わさない限り、精霊という存在を知る術は無いんじゃ。そこは分かっておるじゃろ。じゃから通常の人間が妖魔の存在を知る術は無いんじゃ」

「うん、それは分ってるけど……となると精霊の方に問題があるの？」

「そういう事じゃな」

閃華はそれだけを言うと、どう説明したものか迷っている素振りを見せた。そんな閃華の姿を見て驚きを隠せない昇。まさか閃華がそのような姿を見せるとは、今まで一緒に暮らしてきた中では一度も無かった事だ。だからこそ昇は驚き、琴未も動揺を隠せなかったようだ。

そんな閃華の姿を見てお互いに視線を交わす昇と琴未は同時に首を傾げた。それから昇は何か話しかけようとしたが止めた。ここで余計な話をして閃華を混乱させるよりかは、今は閃華が自分の心を整理するのを待った方が良いと思ったからだ。

そして閃華は意を決したかのように話し始めた。

「つまりじゃな、精霊は妖魔を自分達と同じ存在ではないと、自分

達の仲間では無いと判断したんじゃ」
「それって……」
「そうじゃ、妖魔は精霊達から自分達の存在を拒否されたんじゃ。それからじゃよ、人間と精霊の間に生まれた精霊に近い存在を妖魔と呼ぶようになったのはじゃな」
「なんでっ！」
昇は思わず自分の中に生まれた怒りの感情と共に立ち上がると思いっきり机を叩いた。
「それって、ただ単に生まれ方が違うってだけじゃないかっ！　それなのに区別されるのっ！」
感情のままに叫ぶ昇。そんな昇の叫びに閃華は苦い顔をしてミリアは普段は見せない昇の怒った姿にラクトリーの影に隠れるかのように半分だけ顔を出して昇の方を見ている。
そんな昇に向かって閃華は未だに言い辛そうに言葉を続けた。
「じゃが妖魔という存在が確立されてからは精霊と妖魔は区別せざる得なかったんじゃ。そうしなければ精霊という存在自体があやふやになってしまうからのう。精霊は精霊王から生み出された存在であり、精霊王から生み出された事にプライドをもっておるからのう」
「でもっ！　その存在は精霊に近いんでしょ。なら精霊と同一視しても問題は無いじゃないかっ！」
「精霊にも享持という物があるんじゃっ！　自分達が精霊王から生み出された存在に権利とプライドを持っておるんじゃっ！　そこに人間から生まれた精霊を受け入れる事は自分達の存在を貶(おとし)めるとの同じだと感じても不思議は無いんじゃよっ！」
昇に同調するからのように閃華の声も自然と荒くなっていく。閃華としては自分が落ち着いているつもりなのだが、妖魔に関する問題は精霊にとってそう簡単に受け入れる事が出来ない問題らしく。どうしてもいつもは冷静な閃華も熱くなってしまうようだ。
そんな昇と閃華のやり取りが更に続く。
「でも精霊に近い存在なんでしょ！」

「近いだけで同じ存在では無いんじゃっ！　そんな存在がいきなり現れてきて、それを仲間だとすぐに受け入れる事が出来ると思っておるのかっ！　確かに例外として受け入れようとした精霊もおった事は確かじゃ、じゃが大多数の精霊が妖魔という存在として区別したんじゃっ！　今となってはその波を止める事は到底不可能なんじゃよっ！」

「ならシエラは……これからも精霊と区別されながら生きていかないといけないって事っ！」

「そういうことじゃな」

「そんなの変だよっ！　絶対に間違ってるよっ！」

「ならどうすれば良いというのじゃっ！　今更この壁を壊すことなんて到底不可能なんじゃぞっ！　なにしろ精霊と妖魔が長い時間を経て建てられた壁なんじゃ、今更精霊と妖魔を同一視しろと言われても無理なんじゃっ！」

「でもシエラはっ！」

「いい加減にしろっ！」

机を思いっきり叩いて叫んだフレトに昇と閃華の怒鳴り合いに近い会話が一時的に中断される。そしてフレトは思いっきり溜息を付いて昇に話しかけてきた。

「滝下昇、先程自分が言った言葉を思い出してみろ。その言葉を振り返って自分が冷静に話していると思えるか」

「……それは」

フレトに言われてやっと昇は気付いたようだ。自分が何の考えも無しに感情のままに閃華に向かって怒鳴りつけていた事に。その事に気付いた昇は崩れるように再び椅子に座ると頭を抱え込んだ。

そんな昇を見てラクトリーは閃華に話しかける。

「閃華さん」

だが閃華はすぐに片手をラクトリーの前に差し出すと、それから先の言葉を止めた。

「言いたい事は分っておる。じゃから何も言わんでくれ」

そんな閃華の言葉に頷くラクトリー。そうして部屋の中には暗い雰囲気が立ち込めて、誰しもが言葉を発する事がなくなってしまった。そんな静寂がしばらく続くとフレトはラクトリーにお茶のお代わりを入れさせると溜息交じりで言葉を発した。

「しかしなんだな、精霊の世界にも人間の世界と同様に差別という物があったんだな」

「差別？」

フレトの言葉に昇はちょっとだけ顔を上げて同じ言葉を返してきた。そんな昇に向かってフレトはなるべく真剣な顔付きにならないように注意しながら話を続けた。

「考えてみればそうだろう。今だって人種差別は問題になっているぐらいだ。精霊世界にもそのような問題を抱えていても不思議では無いだろう」

「……」

そんなフレトの言葉に沈黙で返す昇。どうやら昇は先程のやり取りで一気に気力を消費してしまったようで、今はとても喋るような気分では無いようだ。そんな昇の代わりにラクトリーが口を開いてきた。

「確かにマスターの言う通りかもしれませんね。精霊が妖魔を差別するのは長い年月を経てすっかり精霊世界に根付いてしまったものですから、今更ここでどんな言い合いをしても解消されるものではありませんね」

つまり精霊が妖魔を格下として見るのは今に始まった事ではなく。昔から根付いている問題というわけだ。

精霊としては自分達が精霊王から直接命を承った（うけたまわ）という誇りがある。だからこそ人間と間に生まれた妖魔を格下に見る傾向が高いのだ。なにしろ精霊と妖魔では精霊の方が明らかに精霊王に近い存在だからだ。つまり精霊は妖魔よりも優れた存在である。精霊にはそんな考えが根付いているのだ。だからこそ、そういった差別が生まれるのだろう。

ラクトリーの言葉からそんな事を感じた昇はやり場の無い感情をどうすれば良いのか迷っていると今まで口を開かなかった半蔵が喋り始めた。
「だが妖魔もただ虐げられている訳ではなかった」
「そういえば、そうじゃったのう」
「そうでしたね」
半蔵の言葉に心当たりがある閃華とラクトリーは半蔵の言葉に同意するかのように言葉を発した。そしてやっぱり言葉の意味が分らない人間達は昇を除いて首を傾げるのだった。それからフレトは半蔵の方へと顔を向けた。
「どういう意味だ半蔵、詳しく話してみろ」
「御意。確かに妖魔は精霊から軽く見られて受け入れらる事がございませんでした。ならばと妖魔達は自分達で徒党を組んで争奪戦で精霊達に戦いを挑む事がこれまでも数え切れないぐらいございました」
「妖魔達も黙って虐げられている事に我慢がならなかったのでしょう。だからこそ妖魔は争奪戦で相手の精霊を倒すたびに自分が妖魔である事を告げるようになってきたのです。さしずめ妖魔達の反撃といったところでしょうか。争奪戦なら精霊に近い妖魔も戦いに参加できますから、そこで日頃から溜まっていた精霊達の屈辱を晴らすようになってきたのです」
半蔵の説明にそんな補足を加えるラクトリー。つまり妖魔にとっては争奪戦は日頃の屈辱を晴らす絶好の機会であり、その度に徒党を組んで契約者と共に精霊達に戦いを挑む事も普通に行われていた時があったそうだ。
そんなラクトリーの補足に続いて半蔵は更に話を続けてきた。
「けれども、その反撃が更に精霊と妖魔の間に壁を作る結果となってしまったのです」
「んっ、どういう事だ？」
半蔵の言葉に何かしらの意味があると察したフレトは半蔵に、そ

の事を詳しく話すように促し、半蔵も頷いていつもと変わらない口調で話を続けてきた。そこら辺が半蔵らしいところと言えるだろう。こんな状況でも冷静でいられるのだから、伊達に戦国時代を生き抜いた精霊では無いということだ。

そんな半蔵がゆっくりと口を開く。

「精霊と妖魔の戦いで分った事が二つあるのです」

「その二つとは？」

ゆっくりと話す半蔵に早く話すように促すような言動をするフレト。半蔵としては一気に説明してフレトを混乱させまいとした気遣いなのだが、今のフレトにはそれ以上に妖魔に対する知識を求める意識が強いのだろう。

そんなフレトを確認しながらも半蔵は話すペースを変える事無く話を続けた。

「まず一つは妖魔は身体のどこかに精霊と違った部分があるのです。昔の争奪戦では倒した精霊にその違いを見せて、お前を倒したのは妖魔だと悟らせたようです。そうする事で精霊に最大限の屈辱を与えて契約の強制解除を行っていたのです」

「つまりシエラの翼にあった黒い部分が妖魔である証拠だって事？」

半蔵の説明にそんな質問をしてきた琴未。やはり半蔵の話で閃華達がシエラの翼を見て驚いたのが未だに気になっていたようだ。そんな琴未に半蔵は黙って首を縦に振る。そんな半蔵をフォローするかのように今度は閃華が口を開いてきた。

「そもそも翼の精霊というのはじゃな、背中に生やした翼でハイスピードを生み出すのが一般的じゃったんじゃ。そして、背中の翼が真っ白なのも翼の精霊じゃという証拠みたいなものなんじゃ。じゃがどんな事にも例外という物がある、シエラのウイングクレイモアを見て私はそれがシエラの戦闘スタイルとして一番適しているから背中の翼を使わないと思っておったんじゃが、まさか妖魔である事を隠す為に背中の翼を使わなかったとは思いもよらんかった事じゃ」

そんな説明をした閃華の言葉を昇は頭の中で整理し始めた。

つまり、本来なら翼の精霊はアレッタのように背中の翼を使って空中戦を繰り広げるのを得意としている。そして武器に翼の属性を宿す事で更に攻撃の鋭さを上げている。だからこそ翼の精霊に空中戦で敵う属性はほとんど無いと言われているのだ。そして翼の精霊はその特徴をアピールするかのように背中から生えている翼は真っ白なのだ。

けれどもシエラはウイングクレイモアの翼で背中の翼も兼ね備えた戦い方をしていた。それはシエラが自分が妖魔である事を隠す為に生み出した戦い方であり、シエラの体格から見てもまったく違和感を感じさせない戦い方だったからこそ、今まで誰もシエラの闘いを見て違和感を覚えるものはいなかったのだ。

それはシエラの小さな体格と巨大なウイングクレイモアに関係がある。一見にすると不釣合いのように思えるが、シエラは自分の体格が小さい事を生かしてウイングクレイモアの性能を最大限に引き出していたのだ。それは巨大なウイングクレイモアを振るう事で、その反動とも言える衝撃がシエラの身体に負担を掛ける。シエラはその負担をあえて受け止めて、そのまま逃がすように身体を動かしていたからこそ、ウイングクレイモアを振るう事が出来ていたのだ。

つまりシエラは舵取りの役目をしていたとも言える。振るったウイングクレイモアは勝手に突き進み、普通なら反動で身体の自由が奪われてウイングクレイモアに振り回されるだけだろう。けれどもシエラはウイングクレイモアの翼と体重移動を使って、自由自在にウイングクレイモアを振り回していたのだ。それは体格が小さく、なおかつ体重が少ないシエラだからこそ出来た戦い方だ。

その戦い方があまりにも理に適っていたために誰もシエラの戦い方に疑問を抱かなかったのだ。閃華ですら気付かなかったほどだ。シエラはこの戦い方を身に付けるためによっぽどの努力をしたんだろうなと昇はそんな事を思っているとフレトが話を続けてきた。

「それで半蔵、そのもう一つとは」

「はっ、それは……妖魔には精霊には無い力を持っていたのです」

「んっ、それはどういう事だ？」
半蔵の言葉に思わず首を傾げるフレト。それは琴未も同じでどういう意味だか、すぐには理解できないようだ。まあ、半蔵も必要最低限の言葉しか発していないので理解できなくても不思議では無いだろう。
そんな半蔵の言葉を付け足すように今度はラクトリーが補足をしてきた。
「そのもう一つの力というのが……契約者が有するはずの能力なのです」
「それはつまり……」
「はい、マスターのご想像通りです。妖魔とは人間と精霊のハーフ。だからこそ精霊の戦闘能力と属性、それと契約者の能力。この二つを兼ね備える事が出来るのです。もっとも、契約者の能力は人間と契約をしないと発揮されませんけどね」
その言葉にフレトは息を呑み、琴未は首を傾げた。どうやら琴未にはいまいちラクトリーの言葉が理解できなかったようだ。
そんな琴未に向かって閃華が言葉を発する。
「つまりはこういうことじゃ琴未。妖魔は契約者と同様に契約をした時点でそれまで隠れていた能力を引き出して使う事が出来るんじゃ。琴未が私と契約するまで隠れていたエレメンタルが引き出されたようにじゃな。妖魔は契約を行った時点で自分の属性以外に契約者の能力というもう一つの力が使えるようになるんじゃよ」
「……って、それってかなり卑怯じゃないっ！」
閃華の言葉を聞いてやっと事態を理解できた琴未。つまりはこういう事だ。
妖魔は契約をする前なら通常の精霊とは変わりない。だが争奪戦で人間と交わした瞬間から能力者の能力を引き出して使用する事が出来る。その能力がエレメンタルなら通常の戦闘力が重ね掛けになって二倍になる。それに琴未も知っている仮契約、シューター、サモナー、それらの能力も使えるようになるわけだ。

その時点で妖魔は精霊の戦闘能力を遥かに凌ぐ存在となってしまった。だからこそ精霊はそんな力を持っている妖魔を忌み嫌うようになり、精霊と妖魔の間には復旧できない壁が存在してしまったのだ。

それはそうだろう。通常の精霊世界では格下として見ていた存在が契約を交わした途端に自分達を凌ぐ存在となってしまったのだから、精霊としてはそんな妖魔の力を恐れると共に排除するようになってきた。

そして精霊達はそんな妖魔の存在を区別するために、妖しい魔物の意味を持つ妖魔という名前で差別を付ける事になったのだ。確かに精霊から見れば契約を交わした途端にパワーアップする妖魔は畏怖の対象でしかなかったのだろう。

そんな事実を聞かされて驚きを隠せない人間達。まさか妖魔にそのような力があるとは思いもよらなかった事だ。だが、そんな話を聞かされて琴未は同時に疑問が浮かんできたようだ。

「でも、それだけの力があるなら妖魔の方が主導権を握っても不思議は無いんじゃない？」

確かに琴未の言うとおりである。争奪戦では卑怯とも言える力を得る事が出来る妖魔だ。そんな妖魔が精霊と取って代わって主導権を手にしてもおかしくは無い。

けれども琴未の言葉を聞いた閃華は首を横に振ってきた。

「琴未よ、そもそも妖魔という存在はごく稀にしか生まれないんじゃ。人間と精霊のハーフのほとんどが人間の子供として生まれてくるんじゃ。そのうえ人間と精霊のハーフですら珍しいと言うのに、その中の一握りが妖魔として生まれてくるんじゃ。現在に存在している妖魔の数がどれほどのものか簡単に想像が付くというものじゃろ」

「つまり妖魔という存在がいること事態が奇跡に近い確立で存在しているって事？」

「まあ、そういう事じゃな」

琴未の言葉を肯定する閃華。確かに琴未が言った通りに妖魔が生まれてくる存在はかなり奇跡に近い確立といえるだろう。

なにしろ人間と精霊のハーフですら、かなりの低確率でしか生まれてこない。それは精霊が人間に出会う事が出来るのは争奪戦が行われている時だけだからだ。そんな短期間で生まれるカップルなどたかが知れている。そこから与凪達のように上手く行って、更に子供まで授かるにはかなり数が下がるだろう。その下がった数字の中からかなりの低確率の割合で妖魔が生まれてくるのだ。

だから妖魔が多数存在するという事がありえないのだ。つまりシエラの存在自体が奇跡であり、その奇跡ゆえにシエラは妖魔である事を隠さなくてはいけなかったのだ。

その事を琴未が理解したと感じた閃華は話を続けてきた。

「それほどまでに妖魔は数が少ない。たとえ単独では強い力を持っていたとしても、圧倒的に多数を占める精霊から権力を奪う事なんて出来るわけがないんじゃ。それどころか争奪戦で妖魔は完全に精霊に喧嘩を売ってしまったからのう。その勝敗は非を見るより明らかじゃ」

つまり一度は徒党を組んで精霊達に戦いを挑んだ妖魔達も圧倒的に数で勝っている精霊達に打ち勝つ事は出来なかったというわけだ。まあ、精霊としては地方反乱ぐらいにしか思えなかっただろうが、この事で妖魔が精霊から嫌われる要因が高まってしまったという事だ。

そんな話を聞かされて琴未は言葉を失ってしまった。もう何て言ったら良いのか分らなくなったようだ。それはそうだろう、こんな話を聞かされて琴未の気持ちも複雑な物になってしまったのだから。

精霊が妖魔を嫌う理由も良く分かる。なにしろ精霊世界では精霊は妖魔を格下存在としかみていなかったのだ。それなのに争奪戦では卑怯とも思われる契約者の能力が使えるのだから。だからと言って妖魔を軽蔑する気にもならず、逆に同情の念すら覚えるほどだ。

いったいどちらが正しいのかが分ったものではない。

それはフレトも同じ気持ちのようだ。だからこそラクトリー達が動揺したのも良く分かった。だからと言ってこんな問題をフレトは自分達の力で解決できるとは思ってなかった。

なにしろ精霊と妖魔の問題は長い年月を掛けて築き上げられた高い壁だ。そんな壁をフレトは自分の力だけで取り払えるような事が出来るとは思ってはいなかった。

そんな琴未やフレトとは違って昇だけは違う事を考えていた。それどころか怒りすら覚えるほどだ。けれどもその怒りは決して精霊と妖魔との壁に対する物ではなかった。

……なんで……なんで話してくれなかったんだよ、シエラ。……いいや、違う。なんで僕はそんなシエラの気持ちに気付いてやれなかったんだっ！　気付く機会はつい最近にあったじゃないかっ！

それは夏休みが終わってすぐにシエラがいつもとは違った反応を示した時だろう。昇としてはその時にしっかりとシエラに言葉を伝えられていなかった事に凄く後悔していた。もし、自分があの時にしっかりとシエラを見て、言葉を伝えていたのなら、こんな事にはならなかっただろうと昇は自分自身を責めるかのように締め付けられている胸を抑えようともせずに頭を抱えていた。

そんな昇の頭にはやっぱりシエラの事が横切る。その度に昇は湧き上がる感情に胸を締め付けられるのだった。

確かにシエラは僕の事を好きだと言ってくれた。でも……絶対に僕の意思に反するような行動はしなかった。それどころか、シエラは僕の傍にいるだけで良いと言ってた。その時に気付いてあげなきゃいけなかったんだっ！　シエラが抱えている秘密に、言ってあげなきゃいけない言葉があったんだっ！

そんな事を考える度に昇は胸を締め付けられるような苦痛を感じていた。そんな時だった。突如として昇の袖が引っ張られたので、昇はひとまず思考を停止させて、そちらに目を向けるとそこには心配そうな顔をしているミリアが居た。

そんなミリアが意を決したような顔をで言葉を昇に投げ掛けてき

た。
「昇、妖魔に関する問題は私達にはどうする事も出来ないけど……けどっ！　シエラに関することなら昇にも、ううん、昇にしか出来ない事があるはずだよっ！　だから……助けてあげて、シエラを……シエラは……私がこっちに来て一番最初に出来た友達だからっ！」
「ミリア……」
思い掛けないミリアの言葉に昇は少しだけ救われたような気持ちになった。昇はミリアの頭を優しく撫でてやるとラクトリーがミリアの後ろから肩に手を置いてきた。
「成長しましたね、ミリア」
そんな言葉を優しく掛けるラクトリー。それからラクトリーは昇に顔を向けると先程までとは違って真剣で、どこか心配げな顔で話しかけてきた。
「昇さん、妖魔に関して言える事は全て話しました。これからどう動くか、どう判断するかは昇さん次第です。ですから、どうか……良き未来を」
そんな言葉で締めくくったラクトリー。それはラクトリーなりにも昇とシエラの関係を心配しての言動なのだろう。そんなラクトリーに同調するかのようにフレトも勢い良く立ち上がると思いっきり昇を指差した。
「そうだぞ滝下昇。確かに妖魔に関する問題はどうする事もできないかもしれない。だがお前だけにしか出来ない事が必ずあるはずだ。お前にはそれを果たす責任がある。俺達に勝った責任を果たすためにもなっ！」
「……フレト」
そんなフレトの言葉に昇は少しだけ勇気を貰ったような気がした。最後の一言は余計な気がするが、そこがフレトらしくて昇にはとても頼もしく感じていた。
そんなフレト達の言葉を聞いて昇はやっと顔を上げて、皆の顔を見回した。そして足りない物があるのを確実に感じると昇はゆっく

りと立ち上がる。そしてゆっくりと話し始めた。
「……まだ……何をするべきか分っていないけど。だけどっ！　これだけは誓うよ、これ以上の後悔は絶対に重ねない。だから……皆の力も貸して欲しい」
　改めてそんな言葉を発した昇に真っ先に返事を返してきたのはフレトだった。
「まあ、セリスの事もあるからな。こちらも協力を惜しむつもりは無い」
「マスター、今更照れなくても良いと思いますよ」
「うるさいぞラクトリー。半蔵、お前は見失った契約者達を追え、相手の居所だけも分っていればいくらでも手が打てるからな」
「御意」
　ラクトリーの言葉に照れるかのように顔を背けたフレトは半蔵にそんな命令を与えると、半蔵はすぐにその任務に取り掛かるためにその場から姿を消した。それでもフレトは先程言った言葉が今になって恥かしくなってきたのだろう。昇に向かって背中を向けるのだった。
　そんな光景に今まで黙っていた与凪が軽く笑うと口を開いてきた。
「結局はいつものように滝下君に重要な選択を迫る結果になっちゃったわね」
「ええ、そうですね」
　はっきりとそんな言葉を発した昇に与凪は更に笑みを浮かべて話を続けてきた。
「いつもならこんな役目を嫌う滝下君にしては随分とやる気みたいね」
「当然ですよ。なにしろ……シエラの事が関わっているんですから」
　そんな昇の言葉を聞いて与凪は思いっきり背もたれに寄り掛かり、大きく身体を伸ばしてから言葉を発してきた。
「なら、私も頑張らないとね」
「与凪さん？」

いつもとは違った反応を見せた与凪に昇は少し調子を狂わされたように呼びかける。そうすると与凪は満面の笑みを浮かべて昇の顔を見詰めてきた。

「助けてあげるんでしょ、シエラさんの事を」

「……はいっ！」

「だから私もいつも以上にサポートをしてあげますよ。それが私に出来る事ですからね。私に出来る事は何でも言ってくださいね」

「あっ、えっと、ありがとうございます……でいいのかな？」

「別にお礼なんていいのよ。言ったでしょ、それが私の役目だって」

そんな言葉と共に笑みを向けて来る与凪に昇は少しだけ優しさを貰ったような気がした。

なんにしても、これからはシエラを、いや、シエラの心を癒すために戦わないといけない。その事だけを考えて事を進めていかないと事態は深刻になっていく。それだけは防がないといけないと昇は意を決したかのように強く拳を握り締める。

だが、その時は誰も知らなかった。事態は既に深刻になり始めている事を……。

第百六話　妖魔（後書き）

え～、そんな訳で今回は妖魔の説明だけで終わってしまったエレメは如何でしたでしょうか。まあ、今回の話だけではまとめきれていない部分もあったので、その他の事は次回という事で～。

さてさて、そんな訳で明らかになり始めたシエラの秘密ですが、結構複雑な設定にしたために理解しずらいですかね。まあ、私としてはなるべく分りやすく説明したつもりですが、ちょっと分り辛い部分があったと思いますが、そこは昇も混乱していたという事で理解してもらえるとありがたいです。

まあ、なんにしてもやっと妖魔に関しての説明が終わって本筋に戻る事が出来ますね～。まあ、後一話ほどちょっと挟みますけどね。その後に待っている展開が……いったいどうなるんでしょうね。

まあ、思いもがけないバトルはもう少し先だという事だけは確かなようです。そんな訳で今後の展開をお楽しみに～。という事でそろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、そういえば今月は友達が結婚するんだよね。まあ、私には未だに縁遠いはなしですが、すでに諦めの境地に達している葵夢幻でした。

第百七話　さよなら

「それにしてもあれよね」
生徒指導室で行われた妖魔についての会議も終わり、昇達は帰宅の途へついていたのだが、その道すがらに琴未が口を開いてきた。
「シエラにあんな秘密があったのも驚きだけど、精霊にもそんな問題があったという事も驚きよね」
「妖魔の事じゃな」
閃華が返してきた言葉に琴未は頷いて見せた。数ヶ月前までは普通の人間だった琴未にとっては精霊と妖魔の問題は縁遠いものであり、シエラが妖魔である事実を知った今でもこれと言った実感は持つ事が出来なかった。
確かに精霊世界では長い問題となっているだろうが、今まで普通の人間として暮らしてきた琴未にとっては縁もゆかりの無い話に思えて当然だ。けれども現実はそうではない。シエラが妖魔という事実は現実な物であり、琴未を含めて昇達はその問題に立ち向かわなければいけなかった。
けれども実感が沸かないのは琴未だけではなかった。昇としてもシエラが妖魔だとしても決して他の精霊みたいに軽蔑する気持ちになれないし、閃華達のように動揺する事も無かった。それだけ二人にはシエラが妖魔という事実を知っても心が揺らぐ事はなかった。いや、正確には昇の心だけは揺れていた。それはシエラが妖魔である事にではなく、シエラが妖魔という事実を隠してきた事についてた。
シエラがどこかで自分達とは一線を引いているのは薄々ではあるが昇も気が付いていた。けれども何も出来なかった。その事に昇の心は揺れているのである。それはシエラとしても自分が妖魔であるという引け目から昇に全てを伝えられなかった事も要因としてはあるだろう。けれども昇としてはそんなシエラの心に気付けなかった

自分を責めるしか、向かい場所の無い憤りをぶつけるしかなかった。
　そんな昇の心が沈んでいるのに気付かないまま、いや、もしかしたら気付いていたかもしれないが琴未は会話を続けてきた。
「そうだけどね。私にはいまいち良く分からないのよね。シエラが妖魔という存在だからとって差別する気にはなれないのよね」
「まあ、琴未は今まで普通の人間として暮らしてきたんじゃ。そこいら辺の意味がわからずともしかたないじゃろ。じゃが精霊にとっては大問題なんじゃよ。間近に妖魔が居たという事はのう」
「そういう物なのかしらね」
　閃華の言葉に大きく身体を伸ばしながら答える琴未。どうやら琴未にとってはシエラが妖魔であろうがなかろうが大した問題では無いようだ。けれども閃華達のように精霊にとっては大問題のようだ。そんな閃華に同調するかのようにミリアも話しに加わってきた。
「そもそも妖魔という存在自体が卑怯なんだよ～。どっち付かずだし、それに契約者の能力も使えるし。しかも中には妖魔独自の能力が発生する事だってあるんだよ～」
「どっち付かずは精霊が妖魔を受け入れなかったからじゃない。それに妖魔独自の能力ってなによ？」
　ミリアの言葉にそんな反論をしながら閃華に向かって質問をする琴未。どうやらこの場合では閃華が明確な答えをくれる事はすでに琴未も充分に学習しているようだ。そんな質問をされて閃華はなるべく軽い口調で答えてきた。
「つまり人間の契約者では決して発動しない能力の事じゃよ。それは妖魔じゃからこそ発動する能力でもあり、妖魔じゃからこそ使える能力というわけじゃ」
「つまり妖魔独自の力って事？」
「そういう事だよ～」
　琴未の出した答えに笑顔で答えるミリア。そんな三人の会話を聞き流しながら昇は黙って歩き続けている。どうやら昇は別の事で頭が一杯になっているようだ。そんな昇に気付いているのだろう。だ

からミリアも琴未も無理に昇を会話に引っ張ってくるようなマネはしなかった。

けれども女の子が揃えば自然とお喋りは続くものであり、琴未達も例外無くそのまま話を続けるのだった。

「それで精霊である閃華とミリアは、シエラが妖魔と知ったからにはどうするわけ？」

つまりこれからどういう風に接するかを尋ねたいのだろう。琴未としてはそれが一番気に掛かるようだ。そんな琴未の質問にミリアは笑顔で答える。

「別に何もしないよ。だってシエラはシエラだし、お師匠様から逃げる時にはまた庇ってもらうんだ～」

そんな事を言ってくるミリアに琴未は笑い出した。どうやらミリアはラクトリーから逃げる時に時折シエラに庇ってもらっていたようだ。だからこそミリアはミリアなりにシエラを友達と理解しているのだろう。まあ、ミリアのことだからただ単にシエラが居ないとずっとラクトリーの強制授業から逃げる事が出来ないからそんな事を言ったのだろうが、そんなミリアの頭を撫でながら閃華が続いて答えてきた。

「そうじゃな、それが一番良いかもしれんな。確かに精霊的な立場で言えば妖魔であるシエラは排除すべき対象なのかもしれん。じゃが私的な立場から言えばシエラはもう仲間じゃ。私としても今更シエラが妖魔じゃからと言って阻害する気にはなれん事は確かじゃな」

「そっか」

二人の言葉を聞いて琴未は短く返事を返すだけだった。そんな琴未の顔から少しだけ安堵した表情を見せたのを閃華は見逃さなかった。どうやら琴未も琴未なりにシエラの事を心配していたのだろう。けれども今更そんな事を言うのは、琴未にとってはとても恥かしい事であり、素直になりきれていない部分だと閃華は感じていた。

だからこそ閃華も同じ質問を琴未にぶつけてみる。

「それで琴未はどうするんじゃ？　シエラが妖魔じゃと知った今で

はのう」
「そうね……」
質問された琴未はすぐに答えずに考える仕草をする。そして答えが出たのか、空いている手で強く拳を作りそれを二人に見せた。
「とりあえずシエラが元気になったら思いっきり殴る」
「なんでそんな結論が出るんじゃ？」
琴未の答えに呆れながらも質問を返す閃華。そしてミリアも何で殴るのという疑問を顔に出しながら琴未を見ていると、琴未は拳を思いっきり前に突き出した。
「だって前の戦いはシエラが暴走しなければ確実に勝ててたのよ。それに今までそんな事を秘密にしていたのも頭に来るし、今では寝込むような傷を負ったような事になったのも頭に来る。だからシエラが動けるようになったら思いっきり殴るのよ」
そんな事を言った琴未は真剣な眼差しで二人を見詰めた。どうやら琴未は本気でシエラを殴る気らしい。そんな琴未に閃華は素直になれんものじゃのう、と感じならが笑い。ミリアはやっぱり意味が分かっていないのか首を傾げるのだった。
「まあ、それが琴未らしいのかもしれんのう」
琴未の答えにそんな感想を漏らす閃華。閃華の言葉がよっぽど不満だったのか、琴未は閃華に向かって突っかかってきた。
「ちょっと閃華、それってどういう意味よ」
「言葉どおりの意味じゃが。でも困った事に琴未のそういった部分ではシエラに退けを取る事になりかねんぞ」
「それってどういう意味よ」
「琴未が争奪戦が始まるまで昇に告白できなかったのと同じ意味じゃよ」
「ちょ、それとこれとは関係無いでしょ！」
閃華の言葉に怒り出す琴未。そんな二人に巻き込まれないようにミリアはさっさと昇のところに避難していた。そして閃華は琴未をからかうかのように昇の周りを逃げ回り、そんな閃華を琴未は叫び

ながら追いかけるのだった。
閃華としては琴未を心配しての言葉だったのだが、今の琴未にとっては余計な一言だった事は確実だ。
もし琴未が恋愛が上手であればシエラの心配などはせずに、今の昇を励ましていただろう。そうする事で昇の心を少しでも自分に近づけさせようとしていたはずだ。けれども琴未はそこまで恋愛は上手くは無い。それどころか昇と同じで下手な部類に入るだろう。だからこそ琴未はシエラの心配をしてしまい。シエラを出し抜いて悩んでいる昇に優しく接するという事が出来ないのだろう。
そんな抜け駆けのような事が出来ないからこそ閃華は琴未を心配して、あのような言葉を発したのだが、それは琴未にとっては余計なお世話であり、気を紛らわせるには最適の言葉だったのかもしれない。閃華がそこまで気にしてその言葉を放ったどうかまでは分らないが、琴未の心にあった精霊と妖魔に対する確執に対する不安は一時的であれ晴れた事は確かな事だ。
そんな琴未達を見ていて昇も少しだけ微笑を見せた。昇も会話には参加しなかったものの、しっかりと話の内容は聞いていた。だからこそ昇は安心する事が出来たし、今の状況が嬉しいと感じることが出来た。
もし琴未達までシエラを妖魔として差別するような事になれば、誰がシエラを受け入れてくれるのだろう。そうなれば自分だけしかシエラを受け入れる事が出来ないのではないのかと心配していたのだが、それは昇の杞憂で終わった。
確かにミリアと閃華は精霊であり、妖魔との確執を知っている。それでもシエラを仲間として友達として受け入れてくれると言ってくれた。それは他の精霊にしてみれば異端と呼べる行為かもしれない。
けれども昇達が今までの戦いと時間の中で築き上げてきた絆は本物であり、今更精霊と妖魔との確執という壁で砕けるほど昇達の絆は弱くは無いという事を実証した事になる。だからこそ昇は未だに

追いかけっこをしている琴未と閃華に微笑み、避難してきたミリアの頭を優しく撫でる事が出来た。
　そんな昇に気付いたのだろう。閃華は急停止すると後ろから突っ込んできた琴未を受け止めると昇の方へと顔を向ける。そんな閃華を見て琴未も昇の方へと顔を向けると、そこには先程まで沈んだ表情を見せていた昇とは違った表情をした昇がいた。
「それで昇よ、これからどうするつもりじゃ？」
　柔らいた表情になった昇に問い掛ける閃華。そんな閃華に向かって昇ははっきりと告げた。
「僕はシエラに言ってあげないといけない言葉がある。今まではその事を言えなかったけど、今度こそはちゃんとその事を告げるよ」
「そうか、そうじゃな」
　昇の言葉に短く答える閃華。どうやらそれ以上の言葉は必要無いと感じたようだ。そんな光景を見ていた琴未は急に今までの物事がバカらしくなり、再び身体を大きく伸ばすと歩き出した。そんな琴未に釣られるように昇達は再び家に向かって歩き出した。
「あっ」
　そしてすぐに琴未は声を上げると振り返って、そのまま後ろ向きに歩きながら話し掛けてきた。
「そういえばシエラの事ですっかり忘れてたけど、さっきの契約者。今度こそは探し出して叩き潰してやらないと。特にあのアレッタとかいう精霊には絶対に一発殴るわ」
　そんな事を言い出した琴未。どうやらシエラの事が心配無いと分かったからには、今度はローシェンナ達にその矛先が向かったらしい。そんな琴未に同意するかのようにミリアも騒ぎ出す。
「それなら私も手伝うよ～。今度こそあの精霊を倒したいし、私もその翼の精霊にも思いっきりぶん殴ってやりたいよ～」
　どうやらミリアも琴未と同意見のようだ。二人ともシエラを落として屈辱を与えたアレッタの事が許せないようだ。だからこそ二人とも今度こそはと屈辱戦に燃えるのだった。そんな二人を見て閃華は

静かに昇に話し掛けてきた。
「どうやら二人にとって精霊と妖魔の壁は関係無いようじゃのう」
そんな閃華の言葉に昇は微笑みながら訂正を加えてきた。
「それを言うなら僕達にとってだと思うよ」
「……そうじゃのう」
昇の言葉に閃華は言葉と微笑で返すと、後ろ向きで歩いていた所為か、転びそうになった琴未の元へ急いで向かって受け止める閃華。そんな光景をミリアは琴未を笑い、笑われた琴未は怒ってミリアの頭を叩くのだった。
そんないつものような光景に昇は安心するのと同じく、もう一つの事を心に思う。
精霊と妖魔の確執。それは二つの種族にとっては重要な問題なのかもしれないけど、僕達にとってはまったく関係ない問題だ。なにしろシエラは……すでに僕達の仲間なんだから。……う～ん、なんだろう。シエラを仲間と思うとちょっと違うような気がするな？じゃあ仲間じゃなかったらなんだろう？　友達……じゃないよね。う～ん、なんかもっと適切な言葉があると思うんだけどな～。
そんな事を考える昇。けれどもいくら考えても、その適切な言葉が浮かんでくる事は無かった。そのうちに思いつくだろうと昇は考える事を止めるといつものような光景を静かに楽しんでいた。

その頃、フレト達はすでに完成した豪邸とも言える自分の家へと帰っていた。その一室でフレトは精霊達とお茶会を開いていたのだが、その空気はとても陽気と呼べるものではなく、その逆のような雰囲気が漂っていた。
そんな中でフレトは精霊達に向かって口を開く。
「妖魔については分ったが、大事なのは今後の事だ。滝下昇はこれからもあの契約者と戦うと宣言したが、お前達は妖魔についてどう思っている」

どうやらフレトも昇達の事を心配してそのような発言をしたのだろう。なにしろセリスが精霊王の力を使って治療を受けられるのは昇達の戦いがあったおかげであり、昇が切り開いてくれた道があったからこそ、フレトは昇を友として接する事が出来るのだから。だからフレトとしても妖魔の問題は捨て置けない問題となっていた。

だからこそフレトは率直に精霊達に意見を求めたのだ。そんなフレトの言葉に真っ先に言葉を返してきたのがラクトリーだ。

「マスター、今回の件に関しましてはマスターが出来る事はあまりにも少ないでしょう。なにしろ今回の件で問われているのは昇さん達の絆なのですから。私達に出来る事はあまり無いと思われます」

つまりは妖魔に関する問題を解決するのは昇の役目であって、フレトにはフレトがやらなければいけない問題があるという事をラクトリーは言いたかったのだろう。けれどもその答えはフレトが望んだ物とはまったく違った物だ。フレトとしてはラクトリー達が妖魔に対してどんな感情を抱いているのかを問いただしたかったのだ。それによってこれからはシエラとの接し方を考えないとフレトは感じていたからだ。だからこそフレトはもう一度同じ事を問い掛ける。

「そうではない、お前達が妖魔に対してどう思っているかを聞いているんだ」

『……』

そんなフレトの問い掛けにすぐに答える事が出来ない精霊達。それは精霊という立場とフレトの従者としての立場との葛藤にさいなまれているからにすぎない。

そんな時だった。突如として扉が開くとセリスが部屋へと入ってきた。そしてすぐにフレトの傍に行くと咲耶が入れた紅茶に手をつける事無くフレトに向かって話しかける。

「お兄様、あまり精霊達をいじめては可哀想ですよ」

「いや、いじめているわけでは無いぞ」

まさかセリスからそんな反撃が来るとは思っていなかったフレトは思わず動揺してしまう。そんなフレトをセリスは軽く笑うと紅茶

を一口飲んで話を続けてきた。
「お兄様、今回の事は私も全て聞かせてもらいました。だからこそ、誰もお兄様の問に答える事が出来ないんですよ」
「んっ、それはどういう意味だ？」
セリスはまるで精霊達の言葉を代弁するかのように話を続けてきた。
「精霊達はお兄様と完全契約を交わしています。それはつまりお兄様に全てを賭けて忠誠を誓うのと同じ事です。つまりお兄様が白い物でも黒と言えば精霊達も黒だというようなものです。そんな精霊達に向かって今回の意見を求めるのはいじめているのと同じですよ」
そんなセリスの言葉にフレトは背もたれにもたれ掛かると言葉の意味を考えてみる。
……なるほどな、確かにセリスの言うとおりだな。こんな意見を求めた俺が悪かったのだな。そんな事を思うフレトは気分直し紅茶を口にする。そんなフレトの姿を見て精霊達は安堵したかのような表情を浮かべていた。そしてラクトリーはセリスに向かって頭を下げるとセリスは最上級の微笑で返してきた。セリスとしてもフレトが自分の問い掛けが、いかに理不尽な事に気付いてもらえた事に安心していた。
つまりはこういう事だ。ラクトリー達はフレトに対して完全契約という忠誠を誓っている。だからこそフレトの命令は絶対であり、フレトが自分の立場を危うくしない限りは忠言など逆らった行動に出る事は出来ないのだ。
それはラクトリー達の中にも妖魔に対する差別は存在している。それは長い年月を生きてきたラクトリー達だからこそ妖魔との確執は良く分かっているのだろう。けれどもそれを素直に口に出してしまえばシエラの立場を無くし、フレトの怒りを買うのも当然といえるだろう。なにしろフレトが妖魔を差別するのは良くないことだと認識しているのは精霊達も知っているからだ。
そこに素直に妖魔に対する差別を口にするのはフレトの反感を買

うのと同時に忠誠を裏切る事にも繋がる。だからこそ誰しもが口を開かなかったのだ。その事にやっと気付いたフレトはそれ以上は精霊達に問い掛けるようにはしなかった。それはラクトリー達が妖魔との確執を実感していると認識したからだ。そしてその認識は間違った物ではないのも確かだった。

だからと言ってフレトとしてもこの問題を放置する気にはなれなかったのだろう。別の質問を精霊達にぶつける事にした。

「精霊と妖魔の確執を無くす事は出来ないのか？」

そんな質問をするフレトにラクトリーはすぐに首を横に振ってきた。

「マスター、先程も申し上げましたが妖魔という存在は数が少ないのです。そのうえ妖魔は徒党を組んでも、妖魔をまとめる事が出来た妖魔は存在しなかったのです。私達精霊は精霊王の意思で物事を決定しますが、妖魔にはそのような存在はいないのです」

「つまり話し合おうにもそれぞれの代表者がいないという事か」

「はい、そういう事です。妖魔の存在自体が希少であり、今の時勢ではシエラさんのように自分が妖魔である事を隠して振舞っている妖魔が多くいます。そんな妖魔達をまとめるのは不可能でしょう。それに争奪戦の最中では精霊王の意思も弱まって精霊達は各自の判断で物事を判断するのです。そのような状態で精霊と妖魔の確執を無くすのは不可能という物です」

つまりは精霊側も精霊王の力が弱まる争奪戦では精霊を取りまとめる存在がいなくなり、精霊達の意見をまとめる者が居ない状態となる。妖魔の方でも妖魔を束ねる存在が居ない限りは妖魔を取りまとめて精霊に意見をぶつけるなんて事は不可能だ。

要するに現状では話し合いも何も出来たものではない。そんな状況下で精霊と妖魔の確執を無くすのは不可能というべきだろう。だからこそラクトリーも諦めた表情でそのように言葉をまとめたのだった。

その言葉を聞いたフレトは再び背もたれに寄り掛かり大きく溜息

を付いた。
「……滝下昇、やつには大きな借りがある。今回の事でその借りが返せると思ったのだがな」
そんな事を呟くフレトにラクトリーは半分微笑みながら言葉を返してきた。
「今回ばかりは昇さん達に任せるしかないでしょう。ですからマスターはマスターが出来るだけの助けをするべきです。昇さん達への借りは分割して少しずつ返すようにしましょう。その頃にはセリス様も完治しておりますよ」
「……そうだな」
短く答えるフレト。まあフレトとしては少し複雑な心境なのは確かなのだろう。昇への借りを返したいのが半分。精霊と妖魔の問題を解決したい気持ちが半分。どうやらフレトもフレトなりにこの問題を直視していた事だけは確かなようだ。
けれども長い時間を掛けて築かれた精霊と妖魔の壁はフレトの力だけはとても崩せない事を実感させられるばかりだった。それが分っているだけにフレトは心配と焦りが交錯する中で自分が出来る事を考えるのだった。
そんな時だった。フレトは自分の手が暖かいものに包まれている事を感じるとそちらに目を向ける。そこにはフレトの手を握ったセリスの姿があった。
「お兄様、もしお兄様に全ての問題を解決する力があったらお兄様は世界を征服しているしている事でしょう。けれどもお兄様にはそこまでの力が無いから、今のこの時があるのです」
「それはそうだな」
「だからお兄様はしっかりと自分の力を見極めて自分のやるべき事をすべきなのがお兄様のやるべき事です。ですから自分の力量とやるべき事を量り掛けて、自分が出来る事をなさってください」
「あぁ」
そんな言葉を掛けてくれたセリスの手をしっかりと握り返すフレ

ト。そして自分がまだ力不足なのをしっかりとフレトは実感した。
もしセリスの言葉がなかったらフレトは今頃精霊達との押し問答のすえに間違った道を進んでいたのかもしれない。だがセリスの言葉がしっかりとフレトの胸に刻み込まれたからこそ、フレトはその言葉をしっかりと理解する事が出来た。
それはフレトの事をしっかりと理解しているセリスだからこそ言える言葉であって、そんなセリスを理解しようとしたからこそフレトも理解できた事だ。だからこそフレトはそんなセリスに感謝すべく思いっきり包容しようとするが、セリスはいつものように車椅子では出来ないような器用な動きでフレトの包容を回避した。
そんな光景にいつしか精霊達の顔付きも自然と緩んでいた。そして精霊達は改めて実感した。やはりフレトにはセリスが必要なのだと、そしてフレトはいつまで経ってもセリスから離れる事が出来ないシスコンだという事に。

「さ～て、今晩の夕食は何にしようかな」
昇達は家のすぐ近くまで帰ってくると琴未がそんな言葉を発した。なにしろ今の滝下家はシエラと琴未が厨房を握っているのだ。けれどもシエラは怪我の為にとてもじゃないが動ける状態ではない。そうなると琴未だけで夕食を作らなければいけなくなる。まあ、昇の母である彩香が手伝っても良いのだが、最近ではすっかりシエラ達に任せるようになってしまってからはすっかり炊事には手を抜くようになってしまった。
そのうえ滝下家は精霊達の同居により大人数だ。それだけの食事を琴未だけで作るとなると出来るだけ手の掛からない料理にしたいと考えたようで、琴未はそんな言葉と共に昇達に夕食のリクエストを聞いたのだろう。
そんな琴未の呟きにミリアが真っ先にリクエストを出してくる。
「ゴージャスデラックスピザ豪華八枚重ね南極海風！」

それってどんなピザっ！　というか南極海風ってなにっ！
昇がそんな突っ込みを入れる前に琴未は素早くミリアの頭を引っ叩く。
「そんな意味の分からない料理は自分で作りなさいよね」
「う～、ケチ～」
自分のリクエストが即興で却下された事に膨れるミリア。まあ、その前にどんなピザなのかも想像できないようなリクエストだ。そんな物を琴未が作れるはずも無く、作りたくも無かった。だから再び夕食の事で悩みだす琴未に閃華からリクエストが出た。
「カレーで良いのではないか。なにしろ琴未一人で作るんじゃから、それが一番楽じゃろう」
「そうね、そうしようかしら」
閃華のリクエストにすんなりと同意を示した琴未。確かにカレーならそんなに手間も掛からない上に大人数をまかなえる。それにシエラが食べられる物をついでに作るのだから、なおさら手間の掛からないカレーなら琴未も楽に作れるだろう。
こうして今晩の夕食が決まると琴未はカレーの具材を何にしようかな、と呟いている間に昇達は家に到着して玄関を潜る。
『ただいま～』
帰宅を告げる昇達に対して綾香はリビングから「おかえり」といつものように返事を返してきた。綾香にはシエラが負傷した事は詳しくは伝えていない昇だった。まさか剣で突き刺されたなんて言えるわけが無かった。だから昇は綾香にシエラは風邪で寝込んでるから看病をよろしくと伝えただけで今日は学校に行ったのだ。
だからこそ昇は真っ先にリビングへと向かうと綾香にシエラの様子を尋ねる。そんな昇に対して綾香は笑顔で心配要らないわよと気楽な様子で返してきた。
けれども綾香はシエラの看病で部屋に入ってシエラの様子を見ている。服を着ているから怪我をしている事が悟られないとしても、あのシエラが落ち込んでいる様子はただ事では無いと綾香は感じ取

っていた。だからこそ昇にはいつもの調子で心配無いと告げたのだ。
もし、これから何かが起こってもそれは昇自身の力で解決しないといけない問題だと綾香は肌で感じたからだ。綾香は昇から争奪戦や精霊の事などは一切聞いていない。だから昇としては綾香が何も知らないと思っているのだろう。けれども綾香も伊達に昇の母親をやってはいなかった。昇が話してくれないのならと綾香は話してくれそうな精霊にカマを掛けて真実を知る事になった。そう、全てを知ったうえで綾香は知らないフリを続けている。
それは綾香がそうした方が一番良いと判断したからだ。昇は争奪戦を通して自分の力で道を切り開いて行くと決めた。だからこそ綾香には何も話さずに自分達の力だけで争奪戦を勝ち抜こうとしていた。そう昇が決めたからこそ、綾香は見守っていこうと決めたのだ。
そんな綾香だ。当然のようにシエラの不調が怪我だけではなく心に傷を負っている事もしっかりと見抜いていた。けれども綾香はシエラに対してもいつものように振舞った。見守ると決めたからには綾香は決して自分から手を出す事はしない。それがどんな結果を生もうとも昇達を見守るという綾香の覚悟なのかもしれない。
そんな綾香の心に気付かないままに昇は綾香にシエラの様子を尋ねた。そんな昇に対して綾香はいつものようにお気楽な態度で答えるのだった。
「ん～、まだ具合が悪いみたいね。今は部屋で寝てるから起こさないようにね」
そんな事を昇に告げる綾香。けれども昇としてはシエラの様子が気になってしかたないのだろう。昇はシエラの部屋に向かおうとし、琴未達もそんな昇に続いてシエラの部屋へと向かった。どうやらシエラの様子が気になるのは昇だけではないようだ。
そんな琴未達に何も言わないままに昇はシエラの部屋に付くとノックを数回するが中からは返事が無い。その事で昇は琴未達の方へ顔を向けるが、琴未も首を傾げるばかりで返事は返さなかった。そんな二人を見かねて閃華が「未だに寝ておるんじゃろう」とそんな

言葉を告げてくる。
だがそうなるとこのままそっとしておくか、様子だけでも見るかで迷いだす昇。シエラが未だに寝ているのだとしたら起こすのは身体に悪いだろうと昇は迷っているのだがシエラは精霊である。
確かに深手を負ってはいるが、それが原因で傷が悪化したり、死んだりすることは無い。なにしろ精霊は人間とは違うのだから。だからだろうミリアが勝手に部屋に向かって「シエラ入るよ～」と告げて勝手にドアを開けたのは。
そんなミリアを慌てて止める琴未だが、開けてしまったものはしかたないと昇は入る事だけを伝えてからシエラの部屋に入ると風を感じた。
……シエラ？
シエラの部屋に設置してある窓は全開になっており、入ってくる風でカーテンが大きく揺れている。まさか綾香が暑いからと言って部屋の窓を全開にするとは思えない。そんな事をするぐらいならエアコンのスイッチを押すだけで充分なはずだ。けれども部屋の窓は全開になっており、窓からは夕焼けの赤い色が差し込んでいる。
そんな部屋に虚しさを憶えた昇はシエラが寝ているはずのベットに目を向けるが、そこにシエラの姿は無かった。昇はすぐに閃華の方へと顔を向けると閃華はすぐに頷いてくれた。どうやら昇が言いたい事が分ったようだ。そんな昇の意思を受けてシエラを探すために部屋を後にして他の部屋へと向かう閃華。
一方昇達はシエラの部屋に足を踏み入れると勝手に部屋の中を見て回る。ミリアはベットを確認するかのように覗き込むし、琴未はシエラが机として利用していた場所へと向かった。
……シエラは……居るよね？　そんな事を考える昇。確かにシエラの部屋はあまり物が無く、殺風景な印象を受けるが、今は更に何かが足りていないような、殺風景どころかまるで白紙のような印象を昇に与えていた。
そんな時だった。琴未が突如として叫ぶと昇を呼び寄せた。

「昇っ！　ちょっとこれっ！」
琴未は机に設置してあるスタンドに明かりを灯すと一枚の紙を昇に見せるかのように指差した。慌てた様子の琴未に釣られるかのように昇も素早くそこに行くと紙に向かって視線を落とす。そしてその紙には一言、シエラの文字でこう書かれていた。

さよなら

バンッと思いっきり机を叩く音が部屋に響いた。その音を発した主は昇だ。どうやら昇は何かを考える前に感情だけで何かを察して思いっきり机を叩いたらしい。そんな昇は混乱しそうな頭で必死にシエラが残した言葉の意味を考える。
シエラ……さよならってどういう事っ！　僕達はシエラの事を拒絶してはいないんだよ。それなのに僕達から遠ざかるって、さよならってどういう事だよっ！　これからシエラに……伝えなきゃ、言わないといけない事があるっているのにっ！
昇が顔を伏せながらそんな事を考えていると慌てた様子で閃華が戻って来た。
「ダメじゃ、何処にもおらん」
閃華はこの家にある全ての部屋を探したがシエラを見つけることが出来なかった。そんな閃華に琴未は呼び寄せると閃華にも手にしたシエラの言葉が書かれた紙を見せた。その紙を見てさすがの閃華も驚きを隠せずに驚愕している。そんな閃華の隣で意味が分からないといった感じで首を傾げているミリア。どうやらミリアには状況がつかめていないようだ。
そんなミリア達を放っておいて昇は早足で部屋を出ようとするが、すぐに閃華に腕を掴まれて足を止める事になった。
「何処に行くつもりじゃ昇。今の状況ではシエラが何処にいるのか、まったく分らんのじゃぞ」
そんな言葉を発してくる閃華に向かって昇は鋭い表情を向けると

掴まれている腕を無理矢理振り解いた。
「何処だっていいっ！　シエラが居そうなところを片っ端から探してくる」
「冷静になるんじゃ昇、こんな状況で動き回ったところで」
そこで閃華の言葉は途切れた。それは琴未が閃華の腕を取ってそれ以上は言わないようにと視線で訴えてきたからだ。そんな琴未に困惑の表情を見せる閃華。その間に昇はさっさと部屋を後にしてしまい、あっという間に家を飛び出していった。
そんな状況に呆然とする閃華達。それでも閃華は優しく琴未の手をどかせると顔を琴未に向けた。
「どうして昇を行かせたんじゃ？」
率直に尋ねてくる閃華に琴未は申し訳なさそうな顔で答えた。
「今の昇が冷静じゃない事は私も分ってる。でも……今の昇を止める事は絶対に出来ないわよ。昇はシエラの事で自分を責めてたから、そんな負い目があるからこそ昇は私が止めたって必ずシエラを探しに行くわよ」
そんな琴未の目からは涙が流れていた。それはシエラに対する嫉妬から来ていた物だが、シエラに対する心配する心が無くなった訳ではない。ただ、この状況で昇が自分よりもシエラの事を優先した事に琴未は悲しくもなり、少し安心したりと複雑な感情を抱いていた。
そんな琴未を見てすぐに閃華も琴未の心を見抜いたのだろう。閃華は静かに琴未を抱き寄せて、そのままゆっくりと琴未の頭を抱きしめた。
「すまなかったのう」
「閃華が、悪いんじゃ、無いわよ。全部、シエラが、悪いんだから。だから、だから、帰ってきたら絶対に」
それ以上は言葉に出来ないのだろう。琴未は閃華に抱かれながら思いっきり泣き始めた。昇への想いとシエラに対する心配。この二つの感情で一番苦しかったのは琴未かもしれないと閃華はこの時に

やっと気付く事が出来た。琴未はそんな葛藤の中でも昇に心配をかけまいと必死になっていつもの自分で居たのだ。

「まったく、優しすぎるのも難点じゃな」

閃華はそんな琴未を優しく抱きしめながら、そんな言葉を呟いた。そんな閃華の袖をミリアはこっそりと引っ張ってきたので閃華は琴未を抱きしめる形でその場に座り込み、ミリアが話しやすい姿勢を取った。

そんなミリアが琴未に聞こえないように話を切り出してきた。

「私はちょっとお師匠様のところに行ってくるよ。何か分かるかもしれないし」

「うむ、そうしてくれるか」

「うん、じゃあ行ってくるね」

ミリアはそれだけ告げると静かに部屋を後にした。そして琴未は堰を切ったかのように泣き出した。今まで溜めていた複雑な思いを全て吐き出すように琴未は閃華に抱かれて泣き続ける。

そんな琴未を優しく包み込む閃華は琴未の事を思いながらもこれからの事を考えていた。それと同時にいつもがこれからは崩壊していくのではないのかという不安にも駆られていた。

そのいつもこそ昇達がある本来の姿であって、昇が望んでいる本当の姿かもしれない。けれども今となってはそれが崩壊しかけている。そんな状況の中で閃華はこれからどうしたら良いものかと思い悩むのと同時にいつものが変化するのが当たり前の事だとも思っていた。

人も精霊もずっといつもではいられないのだから……。

第百七話　さよなら（後書き）

さてさて、今回は最後の最後で急転回を告げたエレメは如何でしたでしょうか。これにより楽しんで頂けたなら幸いです。

まあ、今回の白キ翼編は最初っからシリアスな展開で行こうと思ってましたけど……まさか琴未がここまでやってくれるとは思っていませんでした。もしかしたらシエラが妖魔だということが分って、昇とシエラの間で一番苦しんでいたのは琴未なのかもしれませんね。そんな事を思う今日この頃です。

さてさて、そんな訳で白キ翼編もそろそろ中盤に差し掛かってきたところなので、そろそろ次を考えないとな～、とは思っているんですけどね。どうも次の話しが上手くまとまらない今日この頃です。う～ん、時期的にそろそろ頭の中では次の話を組み立てないといけないんですけどね～。どうも上手くまとまりません。

まあ、次回は次回でとある事を企んでいるのでその所為かもしれませんね。なんにしても、これから頑張って次の話も作っていこうかと思ってます。

……まあ、その前にしっかりと白キ翼編を終わらせないとですけどね～。そんな訳でこれからのエレメにも是非とも期待を～、という事で締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、本気でゴージャスデラックスピザ豪華八枚重ね南極海風を想像してみたけど、やっぱりどんなピザなのか想像できなかった葵夢幻でした。

第百八話　シエラとアレッタ（前編）

窓の外は鈍色の雲が広がり、その雲からうっとおしと思うほどに雲は雨を降らせていた。そんな光景を昇は教室ある自分の席から授業を聞き流しながら見ていた。

シエラが居なくなってから数日が経った。昇はシエラが居なくなった翌日は学校を休んでまでシエラを探したが見つけ出す事が出来なかった。けれどもシエラの事だけで、そう何日も学校を休む訳には行かないと綾香に諭された昇はシエラを探したい気持ちを無理矢理抑え付けながら学校へと来ていた。

もちろんシエラを探しているのは昇だけではない。琴未達も学校が終われば即行で学校を飛び出してシエラを探し、フレト達や与凪も手伝ってくれてはいるが未だにシエラを見つけ出す事は出来なかった。

以前にラクトリーがミリアを発見したように精霊反応を追えば簡単に見付かるというフレトのアイデアも出たのだが、そのアイデアも効果を発揮する事無くシエラを見つけ出す事が出来なかった。

その事でラクトリーが言うにはシエラが純粋の精霊でなく妖魔である事が関係しているのではないのかと推測を話した事があった。それはシエラが妖魔の力で自分の精霊反応を消しているのではないのかという事だ。

確かに純粋な精霊にはそんな事は出来はなしない。けれども妖魔であるシエラならそういった事が可能ではないのかとラクトリーが言い出し、与凪もそうかもしれないとラクトリーの推理に同意を示した。

つまりシエラが妖魔であるからこそ未だに昇達はシエラを発見する事が出来ないという訳だ。そんな状況に昇は苛立ちを覚えながらも、なるべくそれを表に出さないようにしていた。それはフレト達も与凪も全力でシエラを探してくれているからだ。そんな時にシエ

ラの契約者である昇が取り乱すわけには行かないと閃華の進言により昇は自重せざる得なかったのだ。

それでも昇の心はシエラへと向かっていた。

シエラ……いったい何処に行ったの？　この雨の下でも無事で居るよね。……なんでだろう、一緒に居た時はそれが当たり前だと思っていたのに、こうやって離れると無性にシエラの事が心配になってくるよ。だから……シエラの姿が見たい、シエラの声が聞きたい、そしてもう一度……シエラの温もりを感じたい。昇はそんな事を考えながら視線を窓の外へと向けていた。

そんな昇を気遣うように琴未もちょくちょく昇の方へと視線を向けているのだった。琴未の席は昇の前である。だから教師に気付かれないように時折、顔だけを傾けて昇を心配そうな眼差しで見詰めるが、そんな琴未と昇の視線が交じ合うことは一度も無かった。それだけ昇は前を見ていないということであり、だからこそ琴未はそんな昇がより一層心配になり、複雑な思いが胸の内に生まれるのだった。

そして閃華もそんな琴未を気遣うように時折、琴未に向けて視線を送っているが、琴未がそんな閃華の視線に気付く事は無かった。それだけ昇の事を気に掛けていたのだろう。

そんな状況に閃華は溜息を付きたくなってきた。思いのすれ違いはこういう事を言うんじゃろうかのう。そんな事を考えながら閃華は小さく溜息を付くのだった。

確かに閃華が考えたとおりに今の昇達はすれ違いを繰り返している。シエラの事を皮切りに、昇の心は完全にシエラの心配に移っており、そんな昇を心配しながらもシエラの事も気に掛ける琴未。更にはそんな三人を気に掛ける閃華。お互いにお互いの事を気にしながらも、誰しもがお互いの事に気付いていない。そんなすれ違いの連鎖に終止符を打つためにはどうしたものかと閃華も授業を聞き流しながら考えるが一向に答えなどは出てこない。

そんな閃華が右前に視線を送ると、そこには自分の席に突っ伏し

てすっかり居眠りしているミリアの姿があった。そんなミリアを見て閃華は思う。どうやら私もミリアのように行動した方が良いみたいじゃな。それにしてもじゃ……まさかミリアからそんな事を感じるとはのう、どうやら私も深刻になり過ぎていたようじゃな。

ミリアもシエラが居なくなってからというもの、いつものように常にお気楽な態度は取ってはいなかった。それは放課後になってミリアの行動を見ればすぐに分る。

今まではラクトリーによって強制的に連れて行かれていたミリアだが、今はシエラを探すために自主的にラクトリーの元へ行ってシエラを探す手伝いをしている。けれども昇達の前ではいつものようにお気楽で決して深刻な態度は見せなかった。

それはミリアも昇達が深刻な空気になっている事を肌で感じているからこそ、自分はいつものようにと自分で考えて自分で決めて、そういう風に行動しているようだ。今回の事では珍しく真面目に事態を考えたミリアだが、やっている事のほとんどはいつもと同じだ。

けれども深刻な雰囲気を出している昇達の中でそのような態度を取るのが一番難しいかもしれない。けどミリアはいつもお気楽である。だからこそ、そのような態度を取るのが一番簡単であり、今の状態では一番良いと判断したのだろう。もちろん、その判断を下すのにラクトリーからの助言があったからこそミリアはいつものような態度を取っている事が出来たのだ。

そんなミリアにも気付かないままに昇は窓の外を見たままだ。

いつもは固い絆で結ばれていた昇達も、こうも簡単にすれ違いを続ける事になるとは思ってもいなかった事で昇達はお互いに戸惑いながらも、お互いにこの五里霧中から抜け出す方法を探っていたのだった。崩れかけ始めたいつもを取り戻すために。

その頃、シエラは雨を防ぐために橋の下にある架橋の上で雨をしのいでいた。膝を抱え込み顔を隠すかのように座り込んでいるシエ

ラは、ここ数日まともに食事もしていないのがシエラの顔色は悪くは無い。けどかなり沈んで暗い表情をしているのははっきりと分る。いつもはあまり表情を表に出さないシエラがそんな表情でいる事は昇達には想像も付かないことだろう。どうやらシエラの心も昇達と同じように深刻なのは変わりないようだ。

そんなシエラはここ数日、まるで昇から逃げるように移動しているが、決して町から出ようとはしなかった。それは何かを期待してるのと同時に何かを恐れている結果と言えるだろう。そんなシエラだが健康状態には何も問題を起こしてはいなかった。

なにしろシエラは純粋とは言えないが精霊である事には変わりない。だからこそ数日はまともに食事を取らなくても全力で戦う事が出来る。だからここ数日でシエラが口にした物と言えば綺麗とは言えない川の水だけで喉を潤しただけだ。それでもシエラの健康状態に異常を来たさないのは精霊が身体という物を持っていないから、汚い水を飲んだかと言って体調を崩す身体を持っていないからだ。さすがに汚れきった水を飲む気にはなれないが、少しぐらいなら汚れていても今のシエラには喉の渇きを癒すために口にしても何にも問題は無かった。

むしろ問題なのはシエラの心だ。そんなシエラの心が勝手にシエラの思いを代弁するかのように訴えかけてくる。……また、逃げ出した……と。

そんな事を思うとシエラの頭も自然とその事を考え出す。私は……また逃げ出してきた。アレッタの時と同じように……昇の元からも……逃げ出してきた。そんな事を頭が勝手に考えてしまうシエラは自分自身を弁護するかのように先程の考えを否定するような事を考える。

だってしかたない。私は純粋な精霊じゃなくて妖魔なんだから……だから……。私は……嫌われて当然なんだから……だから……逃げたっていい。そう、私には逃げ出して良い権利がある。

自分でも無理があり勝手な理論だとシエラは自分を笑うかのよう

に軽く短く笑った。シエラにもちゃんと分っているのだ。今の自分が……凄く惨めだという事を。

そんなシエラが顔を横に向けると未だに降り続いている雨と幾つもの波紋を消し去るように流れる川が瞳に写った。その光景はまるでシエラの心を映し出しているかのように思え、そして降りしきる雨はあの時の事を思い出させた。

そう、シエラがアレッタと過ごした時間とアレッタの前から姿を消した時の事を……。

人間世界に隣接する精霊世界。その精霊世界は人間世界を見ることが出来るが、決して干渉する事が出来ない世界だ。そんな精霊世界でシエラは一人、高層ビルの上で足だけをビルの外へ出すような姿勢で座りながら知識書と呼ばれる本を開いて目を通していた。

知識書とは精霊に関する知識を記した書物だが、精霊に関する知識は無尽蔵にあり、とても一冊の本にまとめられる物ではない。けれどもこの知識書は自分が知りたいと思った精霊に関する知識を本を手にした者の意思を読み取ってそれを表記してくれる便利な本だ。

つまり普段は白紙の本だが、知りたいと思った事を思い浮かべながら本を手に取ると知識書には自動的に本を手にした者が知りたい知識を記してくれる便利な本なのだ。

そんな知識書を見ながらシエラは一人で心地良い風を感じながら読んでいると、自分に近づいてくる気配をシエラは感じ取った。けれどもシエラはその気配を無視して本に集中しているとシエラに近寄ってきた。正確には空から舞い降りてきた精霊がシエラに向かって話し掛けてきた。

「やっと見つけた。シエラはこんな場所で知識書を読むのが好きだからね。だから高い所を中心に探してたんだ」

そんな言葉を掛けてきた精霊をさすがに無視する事が出来ないのか、シエラは知識書を開きながらも顔だけを精霊に向けると口を開

いた。
「それで何の用、アレッタ」
どうやらアレッタはシエラを探して文字通りに翼を広げて飛び回っていたらしい。そんなアレッタはシエラの横に座ると同じように足だけをビルの外へ投げ出して満面の笑みをシエラに向けてきた。
「暇だから何かして遊ぼうよ、シエラ」
「嫌」
アレッタの提案を即答かつ拒否するシエラはすぐに知識書に向かって顔を戻した。そんなシエラにアレッタは頬を膨らませて明らかに不機嫌になった事をアピールしながら、シエラにちょっかいを出すようにシエラの頬を突付きながら無理矢理話を続ける。
「そんな事を言わないで遊ぼうよ、シエラ」
さすがにアレッタに頬を突付かれたままでは知識書に集中できなくなったシエラは呆れたような顔付きでアレッタの指を軽く払いのけると、しかたなくアレッタに向けて再び顔を向けるのだった。
「遊ぶなら他の精霊を誘えばいい」
そんなシエラの提案にアレッタはそれは無理とばかりに顔を横に振るのだった。
「だって、この辺で空を飛べる精霊と言ったら私とシエラだけよ。せっかく空を飛べるのに地上を駆け回る遊びなんてつまらないじゃない。だからシエラの元に来たの。それにこの辺には他に友達は居ないんだから」
アレッタに友達が居ないのはアレッタに問題がある訳ではない。そもそも精霊の数が全体的に少ないうえに、精霊世界でも精霊同士が出会う確立が低いのだ。例えるなら過疎化しきった村のようなものだ。
そのうえ精霊世界も人間世界に隣接している所為か、地上の面積は人間世界と同じだ。そんな世界で精霊同士が出会うだけでも稀だというのに、同じ精霊同士が出会う確立はかなり低くなる。確かに精霊同士が集合して独自の町のような物も存在するが、シエラは自

分がそこで体験した経験により、その体験をしてからはそんな町には一切近づかず。あまり他の精霊と接する事が無い場所を選んで居つく事が多くなった。

そんな時に同じ翼の精霊とであったのだ、だからこそ同じ翼の精霊同士であるアレッタとシエラが打ち解けあうのにはそんなに時間は掛からなかった。

けれどもシエラの性格から言って遊ぶ事よりも今は知識書に目を通している方が、シエラにとってはとっても有意義な事であり、楽しい事でもあった。だからこそ、こんな場所で一人で居たのだ。

だがアレッタはそんなシエラとは正反対であり、誰かと一緒に居た方が楽しいと感じるタイプのようだ。それに好奇心も強いからいろいろな事に興味を示す事が多い。その度にシエラはアレッタに引っ張られていたのだ。

だからこそアレッタの誘いを即行で断ったシエラだが、その程度でアレッタが諦める事が無い事も充分に分っていた。だからこそシエラはしかたないという感じで知識書を虚空へと仕舞ってアレッタの話し相手になる。

シエラが知識書を仕舞うのを見て、やっと自分の相手をしてくれると感じ取ったアレッタはそのままお喋りに入っていった。

「あぁ～、早く争奪戦が始まらないかな。そうすれば人間世界に干渉できるのに」

精霊王の力が弱まってきている事は全ての精霊が知っている事であり、それは争奪戦が間近に迫っている事を示していた。だからこそシエラとしては知識書を使って少しでも争奪戦に役立てようとしていたのだが、アレッタとしては別の目的があるようだ。

「アレッタは人間世界で遊べれば満足なんでしょ」

「まあね」

シエラの言葉を否定しないという事はシエラが言った通りなのだろう。そんなアレッタがシエラに顔を近づけて熱弁する。

「だって人間世界には面白そうな所がいっぱいあるじゃない。精霊

世界だとそれを見ることしか出来ないけど、人間と契約すればそうしたところで遊べるのよ。それを考えると今からでも楽しみなのよね」

どうやらアレッタは完全に争奪戦の目的を忘れているようだ。それよりも人間世界で遊ぶ事を優先させたいらしい。まあ、シエラとしてもそんなアレッタの気持ちが分らない訳でも無かった。

なにしろ精霊世界では人間世界を見ることだけしか出来ない。だからと言って全ての物に干渉出来ない訳ではない。現にシエラはビルの上に座っている。これはビルの素材が複数の精霊の力を借りて作られたものであるから、人間世界にあるものでも精霊世界に共通して存在する物があるのだ。

けれどもそれらも限られている。あまりにも複数の精霊が密接に関わっている物や、未だに精霊の力が宿っていない物。つまり人間が独自の力だけで生み出してきた物には精霊は干渉する事が出来ないのだ。

文明開化前ならいざ知らず、機械という独自の技術を生み出し続けた人間の物にはなかなか精霊が宿る事が出来ずに、未だに精霊が干渉できない物が数多くある。だからこそ精霊世界は人間世界に干渉できないと言われる要因の一つとなってきているのだ。

まあ、それ以前に精霊世界から人間世界に向かって属性を力を使っても発動できない事から干渉できないと言われているのだが、今では人間が独自に生み出して来た物で溢れているから余計に精霊にとっては干渉できないと感じる機会が多くなっているのは確かだった。

だからこそアレッタがそんな事を思っても不思議は無いのだが、シエラにとっては争奪戦は遊びではなく、本気で挑む物と捉えているようだ。

「争奪戦は遊びじゃない。エレメンタルロードテナーを決める重要な儀式。だからあまり軽視するのはどうかと思う」

「そうだけどさ……やっぱり人間世界に行ったらやってみたい事が

いろいろとあるじゃない。シエラだってそうでしょ」
「別に」
「え～」
シエラの答えに不満を漏らすアレッタ。それはそうだろう、ここでシエラに同意して貰わないと自分だけが人間世界に遊びに行くのが目的とアレッタは思わなくてはいけなくなるのだから。まあ、実際はその通りなのだが、アレッタとしてはシエラにも同意して欲しいのだ。そうすれば二人して同じ人間と契約して一緒に遊べる事が出来るのだから。
けれどもシエラが人間世界にまったく興味を示していないのも確かだった。それはシエラだけが知っている自分が妖魔だという秘密。その秘密を精霊世界では隠しとおさないといけないのに人間世界が受け入れてくれるとは限らない。むしろ精霊達と同じように妖魔として差別を受ける可能性だってあるからだ。
シエラは以前に妖魔として差別を受けた事が一度だけある。それはまだ生まれたての頃。自分が妖魔だという事実を軽視していた頃の事だ。その頃は精霊が集う町のような場所に住んでいたが、シエラが妖魔だという事実が分った途端に精霊達はシエラに向ける視線が一気に冷たくなり。更には罵倒や非難、石などを投げられるのが当たり前になってきた。
そんな差別を受けたシエラだからこそ、今は他の精霊と出会う確立が少ない場所に移り住んでおり、アレッタにも自分が妖魔だという事実を入念に隠している。もしアレッタにも自分が妖魔だという事が分れば、アレッタも以前の精霊達のように急変するに違いないとシエラは思っていたからだ。
けれどもアレッタとの友好を深めていく内に心のどこかではアレッタがシエラの秘密を知ったとしても、いつものように接してくれるのではないのかと微かな期待もしていた。だからこそシエラはアレッタと行動する事が日に日に多くなって行ったのだ。
二人が出会った切っ掛けは本当に些細な事。シエラが精霊と出会

いそうに無い場所、つまり空を飛ぶ属性を持っていないと行けない場所。例えるなら今現在二人が居るビルの上。その時は大きな木の上だったが、その場所でアレッタがシエラを発見して、アレッタから積極的に話しかけてきた。そしてシエラが自分と同じ翼の精霊だと知るとアレッタはそれからシエラに更なる興味を持つようになり今日に至ったのだ。

そんな経緯もあり、シエラとアレッタは共に過ごす時間が多くなっていき、今でもお喋りを続けているのだった。

「ところでシエラはどんな人間と契約したい？」

「どんな人間って？」

「ほら、人間にもいろいろなタイプがあるじゃない。性別とか性格とか趣向とか、それぞれ皆が違うわけじゃない。様々な人間の中でどんな人と契約したいかってことよ」

アレッタにそんな質問をされて考え込むシエラ。確かに契約をしない限り人間世界に行く事も出来ないし、争奪戦にも参加する事が出来ない。それでは今まで知識書を読んできた意味が無くなってしまう。けれどもシエラはアレッタにそんな質問をされるまでどんな人間と契約したいかなんて考えた事が無かった。だからこそ考え込み、自然と出てきた言葉を口にした。

「……優しい人、かな」

「優しいって、どんな風に？」

「全ての物事に対して優しさで接する事が出来る……そんな人間かな？」

「ふ～ん」

シエラの答えに曖昧な返事を返すアレッタ。やっぱりシエラの言い方ではどんな人間なのかは想像出来なかったようだ。そんなアレッタに向かってシエラは同じ質問を返した。

「アレッタは？」

「私、私は……そうね。やっぱりお金持ちな人間かな、そういう人間と契約すればいろいろ体験が出来そうだし、いろいろなところに

遊びに行けるじゃない」
　そんなアレッタの答えにさすがのシエラも呆れた顔をした。そんな顔をしたシエラによっぽどアレッタは不満を憶えたのだろう。いきなりシエラを抱き寄せるとシエラの頬を軽く突付きながら文句を言い出した。
「何よ、その顔は。確かにお金が全てじゃないけど、多くのお金があった方がいろいろな体験が出来るじゃない。その方が面白いでしょ」
「分ったから離して」
「本当に？」
「本当に分ったから離して」
「しかたないわね……えいっ」
　何故だかアレッタはシエラを離すどころか、シエラを抱える形で一緒になってビルから飛び降りた。もちろん、そんな事をすれば二人とも重力に従って落下して地面に叩きつけられるのだが、二人とも翼の精霊である。シエラは逸早くウイングクレイモアを取り出して羽ばたかせ、アレッタは背中の翼を広げて羽ばたくとようやくアレッタはシエラを解放した。
　そんなアレッタにシエラはウイングクレイモアを向ける。
「なんであんな場所から飛び降りないといけないの？」
「スカイダイビング～、人間世界では遊びの一種よ」
　笑顔でそんな事を言ってくるアレッタにシエラは顔を伏せると静かに言葉を放つのだった。どうやらいきなりスカイダイビングをさせられた事にシエラは不満を感じたらしい。そんなシエラだからこそウイングクレイモアをアレッタに向けながら呟く。
「……このまま摸擬戦をして、ウイングクレイモアの一撃を喰らってみる」
「嫌よ、そんなの。シエラの攻撃はちょっとだけスピードが遅いけど一撃が思いっきり痛いんだもの」
「なら私を巻き込んで遊ばないで」

「だって、こうでもしないとシエラは一緒に遊んでくれないじゃない」

あまりにも無邪気なアレッタの言葉にシエラは諦めたかのように溜息を付くとウイングクレイモアを下に降ろした。そんなシエラを見てアレッタは楽しげに次なる遊びを言い出してきた。

「このまま空中鬼ごっこをしようよ。もちろんシエラが鬼でね、私は全速力で逃げるから」

「……行ってらっしゃい」

「少しは付き合ってよ」

シエラの一言に少し泣きそうな声で返してくるアレッタ。いつまで経っても釣れない態度を取っているシエラにアレッタも泣きそうな気分になってきたのだろう。そんなアレッタを見てシエラは思いっきり溜息を付くと、ウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて先程まで居た場所にまで飛び上がると再び同じように座る。

シエラが戻ってしまったのでアレッタも不満を顔に出しながらシエラの後を追って元の場所に座るアレッタ。そんなアレッタの姿を確認するとシエラは風を感じるかのように顔を上げてゆっくりと歌いだした。

「果てなく続く空の中で、君は今、何処にいるの～」

風がそのまま音楽となりシエラの歌声を一層美しい物にしている。そんなシエラに続くかのようにすっかり機嫌を直したアレッタが笑顔で続きを歌い始めた。

「彩る空で私は祈る、再び出会う永久の時を～」

それからはシエラとアレッタの歌声が重なり合い、風は更なる音楽を奏でるように流れると二人の歌はより一層彩られる。

二人とも翼の精霊であるからには、その姿は天使に近い物がある。だから二人の歌声もまるで天使が歌っているかのように美しく響き渡る。翼の精霊はその歌声も美しく天使を思わせるようだ。そのうえアレッタは未だに翼を出していて、シエラも翼の生えたウイングクレイモアを横に置いている。

そんな二人の姿は誰が見ても天使が美しい歌声で歌っているのだと思う事だろう。それほどまでに二人の姿と歌声は天使を思わせる物があった。そして二人の歌は風に乗せて流れて行き、美しい歌は何処までも響くのであった。

一度歌い始めたらなかなか止まらないのがアレッタである。二人はあれから十曲ほど歌ったところでアレッタも満足したかのように思いっきり身体を伸ばし、そんなアレッタをシエラは優しげな瞳で見ていた。

そんなアレッタが身体を伸ばし終えると最高の笑みをシエラに向けてきた。

「やっぱりこういう場所で思いっきり歌うと気持ちいいね」

「それに天気も風も心地良かった」

アレッタの感想に同意するかのように言葉を返すシエラ。どうやら歌を歌って満足したのはアレッタだけでは無いようだ。けれどもシエラの表情はいつものように無表情に近いがアレッタはシエラが思いっきり気持ちが良い気分である事を、シエラの微かな表情の変化からしっかりと読み取る事が出来ていた。

だからこそアレッタはシエラに向かって更に話を続けるのだった。

「それで、次は何をしようか？」

どうやらアレッタはまだ遊び足りないようだ。そんなアレッタにシエラは呆れたような顔を向けてアレッタに提案を出すかのように呟くのだった。

「滝落ちならぬ風落ち」

「なにそれ？」

聞きなれないシエラの言葉にアレッタは興味津々といった感じで尋ねてきた。そんなアレッタから顔を逸らしたシエラは絶対に視線をアレッタに向けないように呟く。

「風と一緒にここから落ちる。そして地面に叩きつけられる遊び。

もちろんアレッタ一人で実行」
「……それってただの自殺行為だよね」
「パラシュートの無いスカイダイビングのようなもの、もちろん翼の属性を発動させてはダメ」
「だからそれは自殺行為だよねっ！」
「精霊は自らの意思で消えようとしない限り死なないから自殺行為じゃない。じゃあ行ってらっしゃい」
「実行する事が決定してる！　というかシエラ、思いっきり押し出さないでよ」
最早、厄介払いとしか思えないシエラの行動に非難の声を上げるアレッタ。それはそうだ。こんな場所から落ちて、地面に叩き付ければ死なないものの痛い事は確実だ。そんな行為をアレッタは好んでするほどマゾでは無い。
けれどもシエラはアレッタの翼を封印するように、何処からか取り出したロープでアレッタの翼を縛り上げるとアレッタを突き落とそうと思いっきり押してくる。そんなシエラの行為に必死になって抵抗するアレッタだが、徐々に押されているのは確実だ。
こうなってはしかたないとアレッタは素早くシエラのウイングクレイモアを蹴り飛ばすと、シエラを抱きかかえて、一緒に高層ビルから落下する。それから……二人は仲良く地面に叩きつけられるのだった。
地面に思いっきり叩きつけられてピクピクと痙攣しているシエラとアレッタ。そんなアレッタが顔を上げる事無くシエラに尋ねる。
「ねえ、私達……いったい何をやってるの？」
そんなアレッタの質問にシエラも顔を上げる事無く答える。
「私に……聞かないで」
そんな二人が意識を失うのには、そんなに時間が掛からなかった。
そして二人の意識は一気に闇の奥底へと沈んでいくのだった。

「ああ～っ、もうすっかり夜じゃない」
二人が復活した頃にはすっかり日も落ちて、空には見え辛い星が輝き、地上には星の輝きを消し去るほどの光で満ちていた。
そんな光景を再びビルの屋上に腰を掛けて見渡すアレッタはシエラに向かってそんな文句を言って来た。そんなアレッタの文句にシエラは平然と言葉を返す。
「……だからアレッタだけを突き落とそうとしたのに」
「シエラって……時々酷い事を平然とするわよね」
「そお？」
シエラの言葉に呆れるしかないアレッタ。一方、そんな言葉を向けられたシエラは再び知識書を取り出して、そちらに目を向けていた。だからだろうアレッタがそれ以上はシエラに文句を言わないのは。
そんなシエラの横に座りながらアレッタは見え辛い夜空の星を見上げていた。そしてアレッタは静かにシエラに顔を向ける事無く話し出すのだった。
「ねえ、シエラ」
「なに」
シエラも顔をアレッタに向ける事無く言葉を返す。アレッタがこうして話しかけて来る時は真面目な話をする時だという事はシエラにも分っていたからだ。だからシエラは知識書から目を離す事無く、言葉だけを返したのだ。
アレッタもシエラが知識書に目を向けていても自分の話をちゃんと聞いていてくれる事を知っているから、二人ともお互いに顔を合わせる事無く話を続ける。
「争奪戦が始まっても一緒に居ようよ。同じ人間と契約して同じ時間を過ごそう。それに翼の精霊が二人だよ。戦いが始まっても私とシエラのコンビネーションならかなり有利に戦えるし、負けることは無いよ」
そんな事を言い出してきたアレッタにシエラはすぐに同意を示す

事は無かった。確かに翼の精霊が二人も居て、その二人の息がぴったりと合っていれば相手にとっては限りなく厄介な相手になる事は間違いないだろう。

なにしろ二人の精霊が空中から揃って攻撃してくるのだから、対応するのは相当難しくなるだろう。だからこそアレッタはそんな提案を出したのだが、本心を言えばシエラから離れたくないという気持ちが強いのだ。

そっけない態度を取るシエラだが、アレッタはそんなシエラを気にいっていた。それはいつもはそっけなく無表情なシエラだからこそ、時折見せるシエラの一面にアレッタは新鮮さと面白さを感じていたからだ。だからこそアレッタはシエラの傍に居て、シエラの相棒になろうとしているのだ。

けれどもシエラはいつもアレッタがそんな話を出してくるとはぐらかすか、沈黙を守る。それは別にアレッタを嫌っている訳ではない。昼間の行動を見ても二人の仲はかなり良好な事は見ているだけで分るだろう。

けれどもシエラには漏らしてはいけない秘密がある。自分が妖魔である事はアレッタには絶対に知られてはいけない。シエラはアレッタとの仲が親密に成れば成る程、そんな風に考えるようになっていた。

だからこそシエラはアレッタがそんな事を言い出した時には必ず一線を引いて、それ以上はその話を続けないようにしている。シエラも忘れれないのだ、自分が妖魔だと知られた時に精霊達が取った行動を。だからこそシエラはアレッタとの関係について考えてしまう。

……私は……どこかで恐れてる。私が妖魔だと分れば……アレッタとの関係が壊れる事に恐怖してる。だから……私は……。そこまではいつも考えるが、いつも結論を出す事が出来なかった。シエラとしてもアレッタにどういった返事を返して良いのか分らないのだろう。

だからこそシエラはアレッタの話を無視するかのように知識書に目を向ける。そんなシエラにアレッタはいつもの事だと思って軽く溜息を付くと話題を切り替えてきた。

「そういえばさ、この前ね。鷹の精霊を真似して木々を蹴りながら森の中を全力で飛び回ったのよ。その時に温泉を見つけたのよね、だから今度二人でそこに入りに行こうよ。シエラは温泉に入った事は無いでしょ」

「確かに温泉には入った事は無い」

いつものようにそっけない返事を返してきた事でシエラがアレッタの話に興味を抱いた事を感じ取ったアレッタは更に話を続ける。

「それで温泉に入ってみたんだけど、結構気持ち良かったよ～。その時にこういうお風呂も結構良いな～って思ったのよ。だから今度二人で行こうよ」

「……別に構わないけど」

そっけない返事だが、その返事がシエラが同意した事だとアレッタには分りきった事だから。アレッタはシエラの返事を聞いてすっかり上機嫌になり、その顔には笑みを浮かべていた。こうやって少しずつシエラとの親交を深めていくのがアレッタにとっては楽しくてしかたないのだろう。

そんなアレッタの行動にシエラも嫌な態度を示す事は無かった。シエラも心のどこかでアレッタとの交友を楽しんでいたのかもしれない。だからと言ってシエラの態度が急変してアレッタと仲良く出来ないはシエラの特徴とも言えるだろう。

だからシエラがいきなり知識書を仕舞って、屋上の真ん中に移動していきなり結界を張って、その中に布団を敷いて眠りに付こうとしてもアレッタは驚く事無く、まるでそれが当たり前かのようにシエラが寝ているう布団へと潜り込んできた。

そんなアレッタにシエラはいつもの質問をぶつける。

「なんでいつも私のところに潜り込んでくるわけ」

シエラとしては自分の隣に同じように布団を敷けば良いと思って

いるのだが、アレッタは決してそうする事無く。いつもシエラの布団に潜り込んでくるのだった。そしていつもの決まり文句を口にする。

「シエラの温もりが恋しいの」

「おやすみ」

アレッタの言葉に即答したシエラはすぐにアレッタに背中を向けて眠りに付こうとする。シエラとしてもアレッタを無理矢理、布団から追い出す気は無いようだ。そんなシエラでもアレッタを布団から蹴り飛ばす時は、シエラが背中を向けた事を良い事にアレッタがシエラの胸を揉んできた時だけだ。それ以外の時は普通に仲良く一緒の布団で寝るのが二人の日常になってきた。

そんな状況を楽しむかのようにアレッタはシエラの背中にくっ付きながら話しかけてきた。

「温泉、一緒に行こうね」

「そのうち」

短く返事を返してきたシエラの言葉に満足したアレッタはそのままシエラの温もりを感じながらゆっくりと眠りついていく。シエラもアレッタの温もりを背中に感じなら心地良い眠気に身を任せていた。

けれども先程交わした約束が二人の仲に修復が難しい亀裂を入れる事になるとは、今の二人には想像も付かない事だった。

第百八話　シエラとアレッタ（前編）（後書き）

そんな訳で今回はシエラの回想となりました～。……当初の予定なら一話で終わらせるつもりだったのですが、いつの間にか長くなり、これまたいつものようにしかたなく二話に分ける事にしました。う～ん、けどまあ、今回は二話に分けた方が面白いかなと思ったからいいけどね～。

さてさて、そんな訳で回想の中ですが再登場したアレッタですが……すっかりキャラが変わってますね。

まあ、正確に言うと今回のアレッタが本来のアレッタの姿であり、この後に起こった出来事がアレッタがシエラに対する態度を急変させた要因となっているのですよ。つまり本来のアレッタはこんな感じだという事ですね。

……なんか、このアレッタって琴未を昇でなくシエラに惚れさせたようなキャラを思わせますね。まあ、それだけアレッタと琴未は根幹が少し似ているという事なのかもしれませんね～。

そんな訳ですっかり重くなっていた話も今回はちょっと軽くして、次回の最後辺りには、また一気に重くなってくるでしょうね～。まあ、あまり重い話を続けてもと思っている間に今回はこのような話と成りました～。まあ、時にはこんなのもありかなとか思ってますけどね～。

さてさて、長くなってきたのでそろそろ締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、風邪でリンパ腺が炎症を起こして二日ほど寝込んでいたのですが、そこに登場した救世主、その名を葛根湯に助けられて、今ではすっかり回復した葵夢幻でした。

第百九話　シエラとアレッタ（後編）

人間も立ち入る事が出来ないような森林の奥深く。シエラはその森林にある木が生やしている太い枝に腰を掛けて知識書を開いている。さすがのシエラも木の天辺には座る事が出来ないので、天辺よりも少し下にある枝の上に座っていた。

そんなシエラは日の光と葉っぱの影が映りこむ知識書を開きながら暗い顔をしている。シエラが見ているページは妖魔に関するページだ。だからだろう、シエラが暗い顔をしているのは。

シエラは時々妖魔のページを開いては暗い顔をする時がたまにある。それは知識書に妖魔に関して新たな知識。つまり妖魔が差別されないような知識が書かれる事を祈りつつ、妖魔に関するページを開いているからだ。だが妖魔に関する項目はいつもと変わりなく次の通りであった。

妖魔……人間と精霊の間に生まれた子供であり、存在自体が人間にではなく精霊に生まれた存在。そのため妖魔は人間と精霊の特徴を両方有しており、人間と契約すると妖魔独自の能力を発揮する事が出来る。

それだけである。知識書の妖魔に関する項目はそれだけの事しか書かれてはいなかった。それは知識書は知識だけを記した物であって、精霊が妖魔に対して抱いている感情や差別までもが知識として認知されていないから、それだけしか書かれていないのである。

けれどもシエラは妖魔が精霊達からどんな差別を受けているのかを、その身を持って体験している。だからこそ妖魔が差別されないような世界したいと願いながらも、その打開策を探すために知識書を開く事があるのだが、その度にシエラは溜息を付くのだった。

やっぱり、いつも通り……精霊が妖魔を差別している事は確かな事実なのに知識書には決してその事実は記されない。それは私がいつ差別を受けてもおかしくないって事を意味してる……のかもしれ

ない。そんな事を考えたシエラはもう一度溜息を付く。
　シエラも自分一人の力だけで妖魔の差別を無くす事が出来るとは思ってはいない。だが何かしらの抵抗手段でも持っていない限りは差別を受ける一方である。だからこそ精霊達の前でも妖魔として堂々といられるような手段をシエラは探しているのだが、その手掛かりは一向に見付かる事はなかった。そして、そんな現実についてシエラは再び考え込む。
　でも……どうにかして精霊達に私が妖魔であっても手出しが出来ないような手段を見つけないと。受け入れてもらおうとまでは思わない。せめて対等な立場で争う事が出来れば幾らでも手段がある。
　つまりシエラとしては精霊と対等の立場に立って、そこで精霊達に抗おうと考えているのだが、それを考えるとやっぱり正反対な事も考えてしまうようだ。
　でもそんな事をすれば……私とアレッタは敵対してしまう。戦えるの……あのアレッタと本気で……ためらう事無く抗う事が出来るの？　そんなの無理に決まってる。だって、アレッタは……。
　そこまで考えるとシエラは考える事を拒否するかのように頭を振った。シエラはいつもそこまでは考えても、それ以上は考える事はしなかった。なにしろシエラにしてみればアレッタと本気で戦う事なんて想像できないし、アレッタに自分が妖魔だと知られた時の事を考えると、とてもではないが、それ以上の事を考えたくも無かったし、想像するのも嫌だった。だからこそシエラはいつもそれ以上の事は考えずにいたのだ。
　そんなシエラが気分直しに知識書を仕舞いこむとゆっくりと瞳を閉じる。さすがに人間すら入れ込めない森林の奥深くである。そこに流れる風はとても清らかであり、澄み渡った空気はシエラの心を洗い流してくれているように感じた。
　そんなゆっくりと流れる風にシエラは軽く髪をなびかせながら、ゆっくりと口を開いた。
「優しい月明かり　私を照らし出す。見上げれば　漆黒の闇に月一

つ。そんな月が自分だと気付かせた　あまりにも漆黒の中に一つだけの光が孤独で寂しいから。でも月明かりは優しかった　どこまでも　どこまでも」

　ゆっくりと歌いだしたシエラの歌声が風に流されて森林に響き渡っていく。その歌声は少しだけ悲しげであり、けれどもしっかりとした優しさを秘めていた。まるで今のシエラをそのまま歌にしたような歌が森林に響き渡る。

　そんなシエラの歌声が届いたのだろう。何かが森林の中をシエラに向かって急接近してくる。それに気付いたシエラは歌いながらも静かに立ち上がると歌い続ける。どうやらちゃんとシエラも気付いているようだ。真後ろから急接近してくるものを。

　だからこそ、歌いながら急接近してくるものに注意を払う。そして森林の木々を掻き分けてシエラに接近してきたそれはスピードを落とす事無く、シエラにそのままぶつかると思われたが、すでにその存在を察知していたシエラはそれが触れる瞬間に一歩横に移動する。

　翼の精霊であるシエラはそのスピードが自慢である。だから急接近してきたそれを紙一重でかわす事などはシエラにとってはとても容易な事である。

　そしてシエラに避けられたそれは、まさかシエラに避けられると思っていなかったのか。猛スピードでシエラの横を通り過ぎると木々が立ち並ぶ森林の枝にその身をぶつけながら、シエラから見て遥か先まで行くとやっと止まったようだ。それから体中に擦り傷と枝を刺しながらシエラの元へやってきた。

「避けるなんて酷すぎると思わない、シエラ」

「アレッタが猛スピードで体当たりしてくる方が悪い」

　そうシエラに急接近してきたそれこそが、シエラの歌声を聴いてシエラを発見したアレッタだった。まあ、アレッタとしては普通にシエラの前に現れるのもつまらないと思ったのだろう。だからこそ、こんな悪戯染みた事をしたのだが、まさかこんな結果になるとはア

レッタは思ってもいなかった事だ。
　そんなアレッタとは正反対にシエラはそんなアレッタの行動を全て見抜いていた。そもそもシエラの歌声を聴いたかのように猛スピードで接近してくる精霊などはアレッタしかシエラには思い当たる節が無いからだ。そしてアレッタならそういう事をしてくるだろうとシエラにはしっかりとアレッタの悪戯を先読みして避ける事に成功したのだ。
　まあ、状況から言ってアレッタが一方的に悪いのだが、当のアレッタはそうは思っていないようだ。
「シエラの歌声が聞こえたから、せっかくシエラに会いに来た親友の包容を普通は避けないでしょ。そこはやっぱり私を抱き止めてくれないと親友らしくないでしょ」
　随分と勝手な事を言ってくるアレッタにシエラは無表情で言い返す。そもそもあのスピードで接近して来たのである。最早その行動を包容とは言わないだろう。本当ならそんな事を言いたいシエラだが、アレッタにそんな反論は無駄な事はすでに承知している。だからこそ別の言葉を返してきた。
「じゃあ、次からは親友らしくウイングクレイモアで打ち返してあげる。数キロ以上は飛ばす自信があるから何も問題無い。だからとっても親友らしいと思わない？」
「思わないわよっ！」
　シエラの言葉に即答で反論を返してくるアレッタ。けどシエラの言葉がよっぽどアレッタに火を付けてしまったのだろう。アレッタの反論はそれだけに留まらずに早口でシエラに言い返してくるのだった。
「そもそも打ち返すことのどこが親友らしいのよ。親友だったら素直に私の包容を受け止めなさいよね。それが親友として取るべき行動であって親友という証でもあり親友なのよ」
　最早最後では何が言いたいのか分らなくって来たアレッタの言葉を聞いてシエラは溜息混じりに聞き流すのだった。どうやらシエラ

も自分がアレッタに油を注いだ事には気付いているようだ。気付きながらもアレッタをからかうような言葉を発したのだ。そんなシエラに気付かないままにアレッタは更に抗議を続ける。

「そもそもどうしていつも見つけ難い場所に居るのよ。もう少し分りやすい所に居れば私だって普通に登場するわよ。それなのにいつもいつも分り辛い場所に居て、探すこっちの身にもなってよね。そもそもシエラは……」

どうやらアレッタの抗議魂に炎が灯ったらしく。アレッタは更にシエラに向かって文句を言ってくる。当のシエラはいつものように平然と聞き流しているだが、そんなシエラに気付かないままにアレッタは更にまくし立てる。

そもそもシエラからしてみればアレッタが勝手にシエラを探している訳で、シエラもかくれんぼのように隠れている訳ではないのだ。ただシエラの性格から言って、そういう場所を好むだけで、あまり騒々しい場所や派手やかな場所には居る事は無いのだ。

それはシエラから見れば自分がそういう場所に相応しくないと自然と思ってしまうからだろう。やっぱりシエラは自分が妖魔というコンプレックスを自然と抱えているみたいで、自然と他の精霊と出会わない場所を好むようになってきただけだ。

そうとうは知らないアレッタとしては、もっとシエラを他の精霊達と交流を持ってもらいたいと思いながらも、自分との交流をもっと深めたいのだろう。だからこそ、こんな場所にまでシエラを探しに来るのだ。

まあ、当のシエラは半分ほど迷惑していたのだが、半分だけ嬉しいとも思っていた。それはアレッタがそれだけシエラの事を気に掛けていることの証明だからだ。たとえその行動がシエラにとって迷惑になるものであっても、その根源はシエラを思っての行動だという事をシエラは知っている。だからアレッタを拒絶する事はシエラはしなかった。それどころか少しずつではあるが二人の距離は縮まっているのをシエラもアレッタも感じていた。

だからだろう、今になってアレッタがシエラに向かって散々文句を言っているのは。それはそれだけ二人の距離が縮まって、言いたい事を少しだけ言えるようになってきた証拠なのだから。

だがシエラにとっては迷惑な事は変わりない。だからと言ってアレッタを拒絶する事が出来ないシエラはしかたなく、アレッタの文句を聞き流しながら適当に相槌を打っているのだった。

「だからシエラも自分の態度を考え直すべきだと思うのよっ！」

「はいはい」

「はいは一回で良いのっ！」

ここまで文句を言い続けたアレッタだがシエラの態度からやっと自分の話が聞き流される事に気付いたみたいで、アレッタは腰に両手を当てると思いっきり溜息を付いた。どうやらアレッタも察したようだ。これ以上はシエラに何を言っても無駄だと。

それはアレッタもシエラと接していて何度か感じた事がある壁だった。アレッタはシエラにもっと社交的とか他の精霊に会わせてあげるとか、そんな話をし始めると必ずシエラは拒絶した。そしてそこからはどんなにアレッタが説得してもシエラは決して受け入れる事が無かった。まるで二人の関係に一線が引かれたようにシエラはそれ以上はアレッタを受け入れる事は無いのだ。そんな経験をアレッタは今までに何度もしている。

だからシエラにこれ以上は何を言っても受け入れる事が無いという事を知っていたのだ。だからこそアレッタは諦めたようにシエラの隣に座ると、シエラも再び腰を下ろした。

そうなると自然と二人とも黙り込み沈黙が立ち込めるだが、その沈黙を破るのはいつもアレッタだ。アレッタはシエラが一線を引いたと感じるといつも溜息を付いては話を切り替えてくるからだ。そんなアレッタの心遣いがあったからこそシエラもここまでアレッタに気を許す事が出来たのだろう。

今回もそんないつものようにアレッタから沈黙を破ってきた。

「そういえばさ、この辺りなのよね」

「何が？」
「温泉よ温泉、この前話したでしょ」
「この前？　……あぁ、そういえばそんな話を聞いたような気がする」
どうやらシエラはすっかり忘れていたようだが、アレッタは少し前にビルの屋上で話した事をしっかりと憶えていたようだ。それにアレッタとしてもシエラと一緒に温泉に入りたいという気持ちがあったのだろう。そんな気持ちがあったからこそ温泉の事を憶えていたのだ。
だからとアレッタは丁度良く、その話を思い出したのと共にあの時の約束も思い出した。
「丁度良い機会だから、これから一緒に温泉に入りに行こうよ。この前も一緒に入りに行くって約束したでしょ」
そんな事を言い出したアレッタに対してシエラは即答する。
「嫌」
「なんでっ！」
予想外の答えにアレッタは驚きながらも不貞腐れた。なにしろ約束したのは事実であり、その約束を反故にされるのはアレッタとしても気に食わないのだ。だからこそアレッタはシエラの肩に手を回して抱き寄せると、シエラの柔らかい頬を突っ突きながら再び文句を言い始めるのだった。
「この前は一緒に行くって約束したでしょ」
そんな事を言って来たアレッタの指を頬から払いのけるシエラだが、今回のアレッタはかなりしつこく一度だけ払い除けられたとはいえ、シエラの頬を突付くのを止めなかった。そんなアレッタにシエラは諦めたかのように溜息を付くと呆れた顔をアレッタに向けた。
「確かにそんな約束はしたけど、しっかりと行くと返事をした憶えは無い」
確かにシエラははっきりとアレッタと約束を交わした訳ではない。ただ一緒に行ってもいいぐらいの返事をしただけだ。だからシエラ

としては相当気が乗らない限りは、アレッタと一緒に温泉に行く気にはなれなかった。

そんなシエラの返答にアレッタは不満げな声でシエラが反論できないような事を言ってくる。

「それはつまり曖昧な返事しかしなかったって事でしょ。それって逆に言えばいつでも一緒に行くって意味に受け取っても構わないわよね」

「どうしたらそんな結論が出てくるの？」

「だってシエラが曖昧な返事しかしなかったって事は、絶対に行かないという意味じゃないし、機会があれば何時でも行くという意味を含むと思わない」

「まあ……それは」

どうやら今回に限ってはアレッタの方が完全に正論のようだ。

確かにシエラはアレッタとの約束に曖昧な返事しかしていない。それは少し見方を変えれば機会があればいつ行っても構わないと受け取られても、シエラには文句が言えないという事だ。

まさかアレッタからそんな正論が飛び出してくると思っていなかったシエラは断る理由を何とか探し出そうとするが、どう考えてもアレッタとの約束がある限りはアレッタに理があり、シエラにアレッタの申し出を拒絶する権利は無いのと同然だ。

そんな状況にシエラは諦めたかのように溜息を付くと、未だに抱き付いているアレッタを突き飛ばして無理矢理引き剥がした。それからシエラはアレッタに向けて笑みを向けた。こうなってしまえばシエラも諦めるしかなかったのだろう。

確かにシエラの心境から言っても懸念が消え去ったわけでは無い。ただ相手がアレッタだけに心のどこかで油断していた事もあり、ただ温泉に入りに行くだけだから問題は起きないだろうとシエラは思っていた。

だがシエラもアレッタの申し出を理由も無しに断っていた訳ではない。ただ温泉だとどうしても肌を晒す事になる。それだけなら問

題無いのだが、何かの拍子にシエラが妖魔だという事実が知られる可能性が高くなるというだけだ。

そもそも妖魔という印しは体のどこかに現れるものだが、シエラは過去の経験からどんな状況になってもそう簡単に自分が妖魔だと悟られないように工夫している。つまり過去の経験からそんな工夫をしており、更には妖魔だという事実を悟らせる機会を減らすために、シエラは他の精霊に肌を晒す機会を少なくしていたのだ。

だからアレッタが温泉に行こうと言い出しても曖昧な返事しかしなかったし、先程も即答で拒絶したのだが、アレッタにそこまで言われるともう嫌とは言えない状況に追い込まれてしまった。

だからこそシエラはアレッタに向けて笑みを向けると溜息混じりに返事を返した。

「アレッタがそこまで言うならしかたない……か」

「やった」

シエラが承諾した事で思わず喜びの声を上げるアレッタ。まあ、アレッタとしてもこうやってシエラとの親交を深めていくのが今では一番楽しい事なのだからしょうがないのだろう。

だから二人は一斉に飛び立つとアレッタの先導で温泉に向かう事になった。

「……変な臭いがする」

温泉に着くなりシエラがそんな事を言い出した。まあ、シエラの前に広がっている温泉地帯は完全に天然温泉であり、硫黄の臭いがそこら中に広まっていても不思議は無かった。けれどもアレッタから、これが温泉特有の臭いだと聞かされるとシエラもそんなものなのかと納得した。シエラも温泉自体は知識として知ってはいたが、こうして実際に目の当たりにするのは初めてだ。

だからアレッタが調子に乗って嘘の事を言い出したりもしたが、温泉の知識を知識書からしっかりと学んでいてシエラの一撃を喰ら

って反省する場面もあったが、そんなお茶目な行動を取りながら温度が丁度良い温泉へと二人は到着した。

精霊なら溶岩風呂でも入れると思われがちだが、それは間違いである。確かに精霊は身体と言う物を持っていないエネルギーの結晶体に過ぎない。だからどんな事をしても死なないし、病気にもならない。自ら死を願わない限りは精霊は死なないのだ。

けれどもそんな精霊にも痛覚などの神経は存在してた。だから精霊も痛みを感じるし、熱湯に触れれば熱いと感じる。

まあ、属性によってはそういう物を中和して何も感じなく出来るが、二人とも翼の精霊である。だから熱に関する属性は持っておらず、人間と同じような温度の温泉でなければ入れないのだ。

そういう痛覚があるからこそ戦闘でも自分がダメージを負ったという事が認識できるのだ。もし痛覚がなければダメージを負った事に気付かずに、いつの間にか致命傷を喰らってしまうだろう。そんな事を避ける為に精霊にも神経という物が宿っているのだ。

そして二人とも蒸し暑い中を入れる温泉を求めてここまでやってきたという訳だ。温泉に到着するとアレッタは早速とばかりに着ていた服をいつの間にか全て脱いでいた。そんなアレッタをシエラは呆れた視線を向ける。

「アレッタ……いつから露出狂になったの？」

「いきなり失礼な質問をしないでよねっ！」

さすがにシエラの一言に怒るアレッタ。当然アレッタにはアレッタなりの理由があるからいきない裸になったのだ。

「こんな場所に他の精霊がほいほいと来るわけないでしょ。それに温泉は服を脱いで入るものなのよ。だからシエラも早く服を脱ぎなさいよ」

そう言いながらシエラの服を脱がそうと迫ってきたアレッタをシエラは思いっきり蹴飛ばすと、辺りを確認する。さすがに精霊といえども羞恥心といった一般的な常識を持っている。まあ、アレッタはここで精霊に出会った事が無いから大胆な行動に出たのだろうが、

初めてのシエラはやっぱり野外で肌を晒す事に少し抵抗を感じているようだ。

けれどもいつまでもじっとしていたら再びアレッタが来るのは分りきっている。だからシエラは湯気の濃い場所を選んで、そこで服を脱ぎ始めた。まあ、そんなところに入った時点で湯気で服が濡れるのは当たり前なのだが、今から全部脱ぐのだから関係無い事だし。後で翼を使って風を起こせばすぐに乾くのは確実だった。だからこそシエラはそんな場所で服を脱ぎ始めて、脱いだ服を虚空へとしまったのだった。

その頃には蹴飛ばされて、どこかの温泉に落ちていたアレッタも戻って来ており、服を脱いでいるシエラを素直に大人しく待っているのだった。

そして服を脱ぎ終えて、温泉に入る準備が出来たシエラが湯気の中から出てきた。そんなシエラをアレッタはまじまじと見詰める。

「何？」

アレッタに見詰められて一瞬だけ鼓動が大きくなるシエラ。なにしろシエラは妖魔である。その証拠は何かをしない限りはアレッタにバレる事は無いが、こうやってまじまじと見られると恥ずかしいと共に妖魔だとバレないかと心配になってくる。

けれどもアレッタからは別な事が口から言葉として飛び出してきた。

「シエラ……髪が長くて良いな～。私も長くしてもらうように頼んでみようかな」

そんな事を言い出してきたアレッタ。確かにシエラの白い肌を隠すかのように流れる白い髪はシエラの美しさを更に引き出していた。それだけにアレッタもそんな事を言って来たのだろう。

ちなみに精霊の外見は生まれた時に大体決まる。けれども中には気分転換や戦闘的な理由から外見を変えたいという精霊も出て来ても不思議ではない。そういう場合は精霊王に頼み、その願いが受理されると外見を変える事が出来るのだ。

つまり精霊王の力が一時的に無くなる争奪戦が始まると外見は変えられなくなる。だから今のうちにアレッタは自分の外見を変えようと思ったのだろう。まあ、確かにシエラの長い髪を見ればアレッタも憧れる気持ちも分る。

けれども当のシエラはそんな風には思ってなかった。アレッタは髪を長くしようか自分の髪をいじりながら考えているのを見ながら、自分の髪を長くした理由を思い出してしまった。それは妖魔だとばれないように工夫した時の事だ。シエラはその時に今の髪型に変えてもらったのだ。

そんなシエラの心境に気付かないままにアレッタは自分の髪から手を離すと、シエラの手を取って引っ張り出した。どうやらこのまま温泉に連行しようというのだろう。シエラとしても温泉に入りに来たのだから素直にアレッタに連行されるのだった。

そして目的の温泉に付いたのだろう。アレッタはその温泉を紹介するかのように両手を思いっきり広げてシエラに温泉を見せた。

「じゃーんっ！　ここが私が見つけた温泉だよ。広さも深さも丁度良いでしょ。それに水温も少し高めだけど、そこがまた良いのよ」

一気に温泉の説明をするアレッタ。そんな説明を受けてシエラも温泉を見渡してみるが、確かに広さも申し分が無いほど広いし、深さは入ってみないと分らないが、水面から見える限りでは水底は起伏があり、シエラが座っても肩まで付かれる場所があるのは確かなようだ。

そんな温泉を見てシエラもアレッタに向けて笑みを向けると頷いた。どうやらシエラもこの温泉に満足したようだ。

普通の人間なら更に温泉の効能を気にするところだろうが、精霊のシエラ達にしてみれば効能などは関係ない。なにしろ効能が作用する身体が無いのだから、温泉を充分に満喫できる状況さえ整っていれば良いのだ。

そんなシエラの笑みを見てアレッタは再びシエラの手を取ると温泉に向かって走り出した。そんな状況にシエラはつまづきそうにな

るが、なんとかアレッタの歩調に合わせることが出来た。そして次の瞬間にはアレッタは思いっきりジャンプして、シエラごと温泉に飛び込むのだった。

まさかいきなり飛び込まされるとは思っていなかったシエラはアレッタと同じ軌道を描いて温泉に突っ込んで行ってしまった。そして大きな湯柱が立つと、それはすぐに無数の水滴となって二人に降り注いだ。

そんな中でシエラは呆れたを通り越して少し怒り気味でアレッタに文句を言い始めた。

「アレッタ、マナーが悪い」

「誰も居ないからいいじゃない」

確かに温泉にはアレッタとシエラの二人っきりである。だからアレッタとしては、はしゃぐにしては充分な理由があるのだろう。そんなアレッタに向かってシエラは呆れたような溜息を付いた。

「そういう問題じゃない……けど」

シエラはすっかり落ち着いた水面を見渡しながら、肩まで湯に浸かり、お湯の中で両手を思いっきり伸ばした。

「気持ちいい」

「そうでしょう」

シエラの一言に満足げに答えるアレッタ。どうやらシエラの一言でシエラもこの温泉が気に入った事を察したようだ。現にシエラは幸せそうな笑みを浮かべながら温泉を堪能するかのようにお湯の中で手の平を使って身体を撫でる。

精霊だからそうする事で温泉の効能が効くという訳ではないのだが、そうするだけで温泉が身体に染み込むような感じがしたからこそシエラはそんな行為をしたのだ。そんなシエラを見習ってアレッタも同じような事をするが、すぐに目の前に流れてきた物に目を向けるとシエラに向かって文句を言い始めた。

「シエラ、温泉に入る時は髪をまとめておきなさいよね。ほら、こんなにも広がってる」

確かにアレッタが指摘した通りに、シエラの長い髪は水中に沈む事無く、水面を漂うかのようにシエラを中心に広がっている。だからこそアレッタは文句を言ったのだが、そんなアレッタに顔を背けたシエラは一言でアレッタの言葉を蹴飛ばす。

「嫌」

そんな一言に当然アレッタも文句を言い続ける。

「嫌じゃないでしょ。温泉に入る時は髪をまとめるのがマナーでしょ」

「アレッタにマナーを指摘されるとは思ってなかった」

「私は他の精霊に迷惑を掛けた訳じゃないからいいのよ。シエラの場合は私に迷惑を掛けてるでしょ」

「アレッタだからセーフ」

どうやらシエラとしてはアレッタに少しぐらい迷惑を掛けようとも罪悪感はまったく無いらしい。まあ、いつもはシエラの方がアレッタに迷惑を喰らっているのだから、これぐらいは大目に見ても構わないとシエラは勝手に解釈しているようだが、当のアレッタはそうそう大目には見てくれることは無かった。

シエラの言葉にアレッタから反論が来ると思っていたシエラだが、いつまでも来ないアレッタの言葉にシエラは疑念を抱くとアレッタに目を向ける。するとそこにはアレッタの姿は無かった。

アレッタ……一体何処に？　アレッタが姿を消した事で警戒するシエラ。あの程度の事でアレッタが怒って温泉から出たとは考え辛い。そうなると……またアレッタがシエラに対して悪戯を仕掛けようとしているのは明白である。

だからこそシエラはアレッタの姿を探すのだが湯気が邪魔をしてアレッタの姿を見つける事が出来なかった。そんな時だった。突如としてシエラの後ろから湯柱と共にアレッタが姿を現した。シエラが振り向く頃には、もうすでに遅く。アレッタはシエラに思いっきり抱き付き、そのまま思いっきり抱きしめた。

「さあ、これで逃げられないわよ。シエラ、観念しなさい」

「私は何に対して観念すれば良いの？」
「どうやら諦めたようね。じゃあ、早速行くわよ」
シエラの疑問に答える事無くアレッタは行動を始める。そんなアレッタに対してシエラは溜息を付くしかなかった。そして突如として胸に変な感触を憶えるシエラは確認する事無く、頭を思いっきり後ろに振り上げてアレッタの顔面にぶつけた。どうやらシエラの胸を揉んできたアレッタにシエラの反撃が入ったようだ。
そんなアレッタは片手でシエラが逃げないように抱きしめながら、片手で先程頭突きを喰らった箇所を擦りながら話しかけて来た。
「いきなりこれは無いでしょ」
「アレッタがいきなり変な事をするから」
「別に変な事じゃなくてコミニュケーションの一つよ。それにしてもシエラ、シエラも胸を大きくしてもらえば良いのに」
「そうすればアレッタも揉み易くなるから」
「そうそう」
再びアレッタに頭突きを喰らわせるシエラ。まあ、シエラとしても冗談だという事は分ってはいるのだが、相手がアレッタだとなると突っ込みがどうしても痛い物が多くなるようだ。そんな突っ込みを喰らったアレッタは涙目でシエラに訴えかける。
「シエラ、せめてもう少し手加減して」
「気が向いたら。それで、なんでそんな場所に居る訳？」
今更というかやっとその事に触れてきたシエラに対してアレッタはすっかり痛みが引いた顔から手を離すと、水面に広がったシエラの髪を集めてまとめ始めた。どうやらアレッタとしてはあのままシエラの髪が水面に漂っているのが我慢できなかったようだ。だからこそシエラの髪をまとめるためにシエラの後ろを取ったのだ。
シエラもそんなアレッタの行動に文句を言う事無くアレッタの好きにさせた。シエラとしてはあのまま髪をまとめるような事はしたくなかったのだが、それはシエラの長い髪はシエラが妖魔である事を隠す一つの要因となっているからだ。けど、アレッタがこういっ

た行動を取った時には何を言っても無駄だと悟っているシエラは何も言わずにアレッタの好きにさせた。シエラとしても自分が妖魔だとバレる工夫は長い髪だけでは無いからだ。

だからこそシエラはアレッタの好きにさせて、アレッタはシエラの髪をまとめて上げると満足げに頷いた。

「やっぱり温泉にきたらこうじゃなくちゃね」

「何がこうなの？」

「それにしてもシエラが髪型を変えた姿を見た事が無いから新鮮よね」

シエラの疑問をすっかり無視したアレッタは満足したようにシエラから離れるとそんな言葉を口にした。確かにシエラは常に長い髪を真っ直ぐになびかせている髪型にしている。だから髪を上げたシエラはアレッタの目には新鮮に映ったのだろう。

シエラとしても髪型を変えた事に抵抗を感じていたが、それが今更何かに繋がるとは思っていなかったのだろう。それは油断とも言える行動だと悟るのはもう少し先の事だ。

シエラが髪型を変えた事を良い事に、すっかりシエラをおもちゃにしようとしたアレッタはいつも見る事が無かったシエラの背中に注目した。

湯気と水面の揺れでしっかりと分らないが、シエラの背中は細く。シエラの身体が華奢な事を改めてアレッタは実感した。そんなシエラがあんなでかいウイングクレイモアを振るってくるのだから、どうやって操っているのかアレッタには想像も付かなかったし、シエラに問い掛けても教えてくれない事は分ってる。幾ら二人の仲が良くなったと言ってもシエラが手の内を晒すような言動はしないとアレッタも分っていたからだ。

それと同時にアレッタにはとても興味深い疑問が湧き出してきた。翼の精霊を例に上げても翼の属性を持っている精霊は背中に翼を生やしている。鳥系統の精霊を思い出してもらえばすぐに分る事だろうが、翼の属性を持っている者は背中に翼を生やす事が常識となっ

ている。
　けれどもシエラが背中に翼を生やしたところアレッタは一度も見た事が無かった。それだけシエラのウイングクレイモアを使った戦術は完璧であり、背中の翼を使うよりそうした方がシエラにはあっているとアレッタも感じていたからだ。
　だからだろう、アレッタがシエラの背中に翼を生やした姿を見てみたいと思ったのは。それはアレッタにとってはただの悪戯だったろう。それがシエラにとっては深刻な事だとはアレッタは知りもしないのだから。
　温泉に浸かったシエラの肌はすっかり熱を帯びて赤くなってきた。どうやら精霊でものぼせるという事があるみたいだ。まあ、精霊でも神経があるからにはのぼせるのも不思議ではない。そんなシエラに向かってアレッタは話しかける。もちろん、先程思い付いた悪戯を実行するために。
「シエラ、少し上がったら。あまり温泉に浸かりすぎてるとのぼせるわよ」
「……そうね、少し冷まそうかな」
　そんな事を言って立ち上がったシエラは座るのに丁度良い岩場に向かって歩き出す。そこは温泉の中にあり、火照った身体を冷ますには丁度良い場所と言えるだろう。そしてシエラはお湯を掻き分けながら歩いていると、後ろからポチャンと小さな湯柱が上がるのを目にした。そしてアレッタの姿が消えている事を確認した。
　……また？　そんな事を考えるシエラ。どうやらアレッタがまた悪戯を思いつた事はシエラにも察しが付いているようだ。だからこそシエラはアレッタを無視しながら岩場へと向かった。今度はどんな反撃をしようかと考えながら。それがまさかあのような事態になるとは当のシエラも思っていなかっただろう。
　だからこそ今は火照った身体を冷ますために岩場に腰を下ろして、温泉で暖まった風を感じながら体を冷ましていたのだった。
　そんなシエラの背後からアレッタの手だけが水面から手を出して

きた。あまりにも静かなアレッタの行動にシエラも気付きはしなかった。そしてアレッタの手はシエラの背中に近づくと一気に翼の属性を発動させてシエラの背中に向けて流し込んだ。

「なにっ！」

あまりにも思い掛けない事でシエラは思わず立ち上がろうとするが、それよりも早くアレッタが姿を現すと、立ち掛けたシエラの腰にしがみつくとそのままシエラが逃げられないように抱き付く。

「アレッタっ！　何をしてるのっ！」

思わず叫ぶシエラ。けどアレッタはそれだけシエラが悪戯に驚いているものだと思ったようで、シエラが本当に拒絶していた事には気付く事は無かった。だからこそアレッタは笑顔でシエラに言葉を掛ける。

「いいじゃない、これぐらい。一度は見てみたいのよ、普通に翼を生やしたシエラの姿を」

そんな事を楽しげに言ってくるアレッタ。確かに翼の精霊にとっては背中に翼を生やすのは普通と言うのが常識となっている。けれどもシエラにはそうしてはいけない理由がある。だからこそシエラは本気でアレッタを引き剥がそうとするが、シエラが抵抗すればするほどアレッタの悪戯心に油を掛けたようでアレッタはシエラを離す事が無く、翼の属性をシエラの背中に向かって発動し続ける。

そうする事でアレッタの力を借りてシエラの背中からシエラが持っている翼が強制的に生えてくる。そしてその翼は一気にその全容をあらわにした。そして目的を果たしたアレッタはようやくシエラから離れるとシエラを見ながら口を開く。

「やっぱり翼の精霊なんだから、この姿じゃないと。シエラだってそう……」

アレッタの言葉は最後まで出る事が無かった。なにしろシエラの翼は真っ白ではなく、翼の根元だけは黒くなっており、先端に向かって一気に白へとグラデーションの色をした翼がアレッタの瞳に写ったからだ。

「……シエラ……その翼……」

まさかシエラからこのような翼が生えてくるとは思っていなかったアレッタは言葉を失ってしまった。そしてシエラの姿を驚きの眼差しで見ていた。

一方のシエラは迷っていた。これで自分が妖魔だという事がアレッタに知られたわけだ。けどアレッタなら自分を受け入れてくれるのでは無いのかという希望と以前に体験した精霊達と同じような視線を向けているのでは無いのかとシエラは振り向く事が出来なかった。

静寂がその場を支配した。まさかこのような事態になるとは二人とも思っていなかったのだ。シエラもまさかアレッタがあんな行動を取るとは思っていなかった。それだけアレッタに心を許していた証拠でもあり、自分が妖魔だと悟らせないようにしていた警戒心が油断していた証拠でもあった。

アレッタもまさかシエラからそんな翼が生えるとは思っていなかった。そして、その翼が意味する事がすぐに理解できなかったアレッタだったが、少しの静寂がアレッタを冷静にさせてその翼が示している意味をアレッタに理解させた。

「シエラ……妖魔……だったの？」

言葉を途切れさせながらもシエラに尋ねるアレッタ。けれどもシエラからの返答は無かった。

シエラもどう答えて良いものかと迷っていた。このまま正直に全て話すべきだろうか、それとも今すぐこの場から離れるべきなのか。どちらを選べば今までのようにアレッタと接する事が出来るだろうか、それともそんな時間は来ないのだろうか。様々な思いと考えがシエラの胸と頭に去来する。

いつまでも黙っているシエラにアレッタも焦りが生じたのだろう。再びシエラに呼び掛ける、というよりかは叫ぶのと同じだった。

「シエラっ！」

そんなアレッタの叫び声にシエラは驚いたかのように身体が跳ね

ると、次の瞬間にはシエラは背中に生えた翼を使って空に舞い上がっていた。いきなり飛び上がったシエラに対してアレッタの叫び声が聞こえたが、シエラはそんなアレッタの叫びを無視して飛び続けた。

どれぐらい飛び続けたかは分らない。けれども先程の温泉地帯が見えなくなった事を確認したシエラはやっと自分が未だに裸である事に気付いた。そこで丁度真下にあった森に着地すると、飛び続けた事ですっかり乾いた髪を解くと、身体も冷めるほど乾いており、その場で背中の翼をたたんで翼の属性を抜くとシエラの背中に生えた翼は体の中へと戻っていった。それからやっと服を着始めるシエラ。

……逃げ出してきた……アレッタの……本心を確かめないままに……。そんな事を考えながら服を着るシエラ。そんなシエラの胸には二つの思いが葛藤していた。先程の温泉に戻ってアレッタの本心を確認したい気持ちとこのままどこかに行ってしまいたい気持ち。

けれどもアレッタが他の精霊と同様にシエラを差別するようになったら、ここに居られないのは確実である。そう考えるとシエラの考えは逃げるかのように決まった。

服を着終えたシエラはウイングクレイモアを取り出すと再び空中に舞い上がる。そしてそのまま温泉とは反対方向に向けて一気に飛び出したのだ。

それからシエラは昼夜を問わずに飛び続けた。少しでも早く今まで居た地区から離れたかったのだ。だからシエラは飛び続けた、幾つもの山を越え、町を通り過ぎて、最後には海まで渡った所まで飛び続けた。そして最後には大陸を抜けて極東の島国まで、つまり日本まで来てしまったのだ。

やっぱり……私は何も変わってない。先程までアレッタの事について思い出していたシエラは再び顔を上げると目の前には少し濁った川が流れており、雨が作り出した波紋をすぐに消し去っている。

再びそんな光景を目にしたシエラはもう一度同じ事を思う。

……アレッタの前からも……昇の前からも……私は逃げ出してきた。アレッタも昇も……私を受け入れてくれたかもしれないのに……私は……それを確かめる事無く逃げ出してきた。……惨め……だよね？

誰に問い掛けたのか分らないシエラの心。それは誰にでもない、シエラは自分自身に問い掛けたのかもしれない。そんなシエラの心境を表すかのように雨は更に降り続け、シエラは架橋の下で更に身体を丸める。これからどうすれば良いなんて、今のシエラには分かりはしなかった。

けれどもアレッタの時と同じように一気にこの町から離れようとはしなかった。なにしろシエラは昇と契約を交わした状態であり、このままどこに逃げても昇との契約がある限りは人間世界に留まり続けなければならないのだ。

シエラが完全に逃げるためには誰かに負けて昇との契約を強制解除しなくてはいけないのだから。けれども昇なら自分を受け入れてくれると希望を抱いているシエラは自分を倒してくれそうな精霊や契約者を探そうとは思わなかった。それだけシエラの心には昇の言葉が残っているのだ。

それはシエラがこの国を放浪しながら争奪戦の開始を知らされて、そして自分を受け入れてくれそうな契約者を探している時だった。偶然にも昇と琴未に出会ったシエラは、二人に精霊王の器がある事に気付いて二人の後を付いていくと、そこで昇からまるでシエラに向けられたような言葉をシエラは聞いた。

だからこそシエラは昇を契約者として選んだのだ。その言葉をシエラは思い出してみる。

それは昇と琴未が犬の死骸を見つけた時の事だ。その犬はとても

犬とは思えないような顔をしていたためか、誰かに飼われる事も餌を与えられる事も無く餓死していた。そんな犬を見て昇はその言葉を口にした。『犬は犬なのに変わりないのに、それなのに少し違うからと言って』シエラがそこまで思い出すと誰かの声がシエラに向かって放たれた。

「シエラ……やっと見つけた」

第百九話　シエラとアレッタ（後編）（後書き）

そんな訳でやっと終わりました～、シエラの回想です。……予定していたのよりもかなり長くなってしまいました。ちなみに今回の話だけで約一万六千字ほど使っております。

……久しぶりに長くなったな～（「ω」；；）

当初の予定ならこんなにも長くするつもりは無かったんですけどね～。それが書いている間にいつの間にかこんな長さに……まあ、いつもの事だよね～。以前にもかなり長くなった事もあるし、まあ、恒例行事という事で大目に見てもらいましょう。

さてさて、そんな訳で更新にちょっと間が空いてしまいましたが……今の時期は辛い物が多すぎです。花粉症に風邪が上乗せされるともうどうして良いものか分かった物じゃありません。そんな訳で一週間ほど、その二つに苦しめられて悶絶してました。……やっぱりこの時期は辛すぎます。そんな訳でちょっと更新が遅れました～、というか一週間ほど小説が書けない状況だったので……まあ、しかたないよね。

さてさて、今回の後書きは更に続きますよ～。前回に引き続き、シエラが歌うシーンを入れたのですが……作詞って難しいっ！！！曲が無くて詞だけを作るのって難しいですね～。今回はかなり長く作詞をしてみたんですが……かなり苦労しました。一応簡単なメロディーを思い浮かべながら書いたつもりですが、しっかりと作詞になっているのかは不明です。

さてさて、ついでに今回の話で思った事がもう一つ。それは……やっぱり挿絵が欲しいよね～。という事ですかね。だってっ！！！

シエラとアレッタの温泉シーンですよ。そこは挿絵が欲しいとは思いませんかっ！！！　特にシエラが服を脱いで登場したシーンなんて挿絵が必須ですよねっ！！！　とまあ、そのシーンを書いている時にそんな事を思ってました。

私自身、絵は得意な方では無いので挿絵を入れるのは確実に無理なのですが、挿絵を描いてくださる方もおらずに、未だに挿絵が入れられない状況です。まあ、そんな訳で皆さん……何とか脳内保管でお願いします。

さてさて、白キ翼編も中盤へと差し掛かりました。そろそろ次を形にしていかないとな～と思いながらも、未だにやっていない状況です。いやね、つい断罪の方に手が回って、今の時期はそこまで時間が取れないのですよ。

まあ、なんにしても、白キ翼編はこれから一気に激化して行く予定です。それはもうかなり派手に。そんな白キ翼編をこれからもよろしくお願いしますという事で締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、ＧＷを過ぎる頃まではこんな状態が続くな～、と今までの経験から悟っている葵夢幻でした。

第百十話　心の暴走

声を掛けられたシエラは驚愕の眼差しで声を掛けてきた人物を見詰めていた。まるで信じられないかのようなシエラの眼差しにその人物は笑みを浮かべてみせる。そしてシエラは静かに現れた人物の名を口にするのだった。

「……アレッタ……どうして？」

シエラとしてはアレッタが自分を見つけるとは思いもよらない事だったが、アレッタにしてみればシエラを見つける事などは時間さえあれば可能な事なのだ。その事を説明するかのようにアレッタは話し出した。

「精霊世界での暮らしを忘れたの？　私はいつもシエラを探して飛びまわってたじゃない。翼の精霊には相手の精霊反応を追う技術は無いから、勘だけで探すしかないわけよ。でも私はシエラが行きそうな場所を勘と経験で何となく分かるから、それだけを頼りにシエラを探してたわけよ」

つまりアレッタは精霊世界での経験を生かしてシエラが行きそうな場所をしらみつぶしに探し回っていた訳だ。けれどもシエラにはアレッタがシエラを探す理由が思い当たらない。だからこそシエラは人目が無い事を良い事にウイングクレイモアを取り出して構えた。

「なんで……アレッタが私を探してたの？　アレッタには私が昇達が離れた事を察する事が出来ていないはずだし、私を探す理由が無い」

そんな疑問をアレッタにぶつけるシエラ。そんなシエラに向かってアレッタは軽く笑いながら答えるのだった。

「シエラ……あの時の事を憶えてる？　シエラが妖魔である事を私に知られた時の事を憶えてる？」

「……」

そんな事を尋ねてくるアレッタ。けれどもシエラはアレッタの質

問に答える事は無かった。それは憶えていないわけじゃない。むしろ忘れられないぐらいにシエラの記憶にあの時の事はしっかりと刻まれていた。だからこそ思い出したくないし、口に出すのも嫌なんだろう。

そんなシエラとは不対称的にアレッタは微笑みながら話を続けてきた。

「あの時もシエラは私の前から逃げ出した。そして二度と私の前に姿を現さなかった。今度もそうなんでしょ。シエラはあの契約者に妖魔である事を隠してたから、妖魔である事を知られたら今度も逃げ出すと思ったのよ。まあ、あくまでも推測だったんだけど、どうやら当たりみたいね」

そんな事を言われて苦い顔をするシエラ。まさかアレッタがここまでシエラの思考を読んで来るとは当のシエラも予想外の事だ。そこまでアレッタがシエラにこだわる理由をシエラは思い当たらないし、アレッタがここまでしてシエラを探す理由も分からないようだ。

そんなシエラを追い込むかのようにアレッタは話を続ける。

「それに今回はすでに契約を交わしているからね。私の時みたいに遠くに逃げる事が出来ないと思ったのよ。だからこの町を中心にシエラが行きそうな場所を探していたというわけよ。シエラは雨が降ると橋の下を良く好んでいたからね」

その言葉にシエラは更に苦い顔をした。確かにアレッタとの付き合いは長いとは言えないが、その短い時間で二人の間に出来た絆はかなり強い物で、アレッタとしてはシエラの行動パターンがそれなりの読めるのだろう。

けどシエラはまさかアレッタがここまで自分の事を理解しているとは思ってもみなかった事であり、ここに現れた理由すらも検討が付かなかった。それだけシエラはアレッタの事を理解していないが、アレッタはシエラの事をかなり理解しているのは確かだった。

だからこそアレッタはシエラを探し出す事に成功したのだから。

そんなアレッタにシエラはウイングクレイモアを構えながら話しか

ける。
「それで、私を見つけてどうするつもり？」
シエラとしてはそれが一番気になる事だった。数日前の戦いでは完全にシエラはアレッタに負けた。そんなアレッタが今になってシエラを探し出す理由がシエラには分からなかった。そんなシエラを笑うかのようにアレッタは微笑を絶やす事無く、シエラの質問に答える。
「まあ、シエラだからね。遠回しに腹の探り合いをしても無駄でしょ。だから単刀直入に言うとね。……シエラ……あなたを潰しに来たのよ。完全にトドメを刺して契約を強制解除させる。それが私の目的」
そんな話を聞いてシエラは瞳に悲しみを映し出すが表情には出さなかった。それはアレッタがそこまでする理由などシエラには一つしか思い浮かばなかったからだ。妖魔に対する差別。アレッタも他の精霊と同様にシエラを徹底的に甚振りたいのだろう。少なくともシエラにはそんな風に思えた。
だからと言ってシエラは素直にアレッタに負ける気にはなれなかった。確かに昇の前から逃げ出してきた事は事実だ。けれども昇はシエラが選んだ契約者である。昇なら妖魔である自分を受け入れてくれると思ったからこそ契約をした人間だ。だからこそシエラは昇の前から逃げ出しても、遠くにも離れる事が出来なかった。
それはアレッタの時に犯した失敗を二度としたくないという気持ちが強かったのだろう。たとえ昇がシエラを拒絶するような事になったとしても、シエラには昇の気持ちを確かめずにはいられなかった。
けど今のシエラには昇にその事を尋ねるだけの勇気が無かった。だからこそ昇の前から逃げ出してきたのだ。その結果としてシエラはこんな所で一人になっていた訳だが、まさかアレッタが自分を潰しに来ると思っていなかったシエラは確実に戦闘は避けられない事を悟った。

だからこそシエラはアレッタを一気に叩こうと精界を張る前にウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて一気にアレッタに迫るが、そんなシエラの横から猛スピードで接近してくる精霊が居た。まさかもう一人居るとは思っていなかったシエラは完全に不意を付かれてしまった。

それだけではない。相手のスピードがかなり速かったためにシエラは対応が完全に遅れて、なんとか身体を捻って相手の攻撃をかわすだけで精一杯だ。そのおかげでシエラは脇腹に何かで切り裂かれた傷跡を残す事になったが、傷は浅く大したダメージは負ってはいない。

けれどもこれでアレッタに奇襲を掛ける事に完全に失敗したわけだ。それだけでなく、これでシエラの動きも完全に止まってしまい。シエラは二人に挟まれる形で脇腹を押さえるように屈むと後ろを振り返って、いきなり出てきた精霊に目を向けた。

その精霊は他の精霊と同様に美しい容姿をしているが、それ以上に目立つのは長い足である。顔だけを見ると幼さが残る顔立ちをしているが、全体を見えると長い足がそんな幼さを消し去っており、大人と子供の中間的な美少女と言った感じの精霊が短剣を手に立っていた。

シエラが後ろの精霊に気を取られている間にアレッタは完全に精界を作り出す準備を終えていた。だからシエラが気付いた時にはアレッタは片手を大きく上げて叫ぶ。

「精界展開っ！」

アレッタから放たれた光の柱は一定の高度に達すると指定した範囲を包み込むように広がって行き、そして世界は白く染まって行った。

完全に先手を取られてしまったシエラは傷を癒しながらもどうやって戦おうか思考を巡らす。幸いな事に精界のおかげで今まで降り続いていた雨も遮断されて空中戦に持っていける。そうなれば後ろの精霊も手出しが出来ないだろうとシエラは結論を出す。

その間にもシエラは完全な精霊武具を身にまとい、アレッタ達も精霊武具を身に付ける。

「スカイダンスツヴァイハンダー」

アレッタは精界が完成するとすぐに精霊武具を見にまとい、後ろに居る精霊も精霊武具を身に付ける。

「ガーレジャンビーヤ＜疾風の如き短剣＞」

後ろに居る精霊は今まで持っていた短剣が少しだけ形を変える。短剣は大きく湾曲して、いかにも斬りやすい形状になる。それ以上に目立ったのが防具の方である。

その精霊は防具と言える物は一切身にまとっておらず。アラビア風の服を着ているだけだ。それだけ無く、短いスカートから伸びる美しい足は誰しもが注目するほど美しく、それが彼女の特徴と言えるだろう。

そんな精霊武具を身にまとった後ろに居る精霊がシエラに向かって話しかけてきた。

「どうも、初めまして。まあ、妖魔如きに挨拶をするのも嫌なんだけど、自分を倒した者の名前ぐらいは知っておきたいでしょ。私はシェル、知らないかもしれないけどアッシュタリアに属する精霊よ」

シェルの言葉に驚きを示すシエラ。まさかこんな所でアッシュタリアなどという言葉を聞くとは思って無かったからだ。そんなシエラの反応にシェルは意外そうな顔をしてきた。

「どうやらアッシュタリアについては知ってるみたいだね。まあ、今では一番大きな組織だもんね。だから妖魔の耳に入っていても不思議は無いか」

そんな言葉を吐き出すシェル。その言葉は明らかにシエラを見下した言葉であり、その視線もシエラを確実に見下している。その視線はアレッタよりも明らかに見下している視線であり、シエラが過去に経験した他の精霊達と同じ視線をシェルはシエラに向かって送っていた。

そんなシェルの視線にシエラは睨み付けるような視線を送る。確

かにアレッタにも同じような視線を感じた憶えもあるが、それはシエラが過去にアレッタの前から逃げ出した事も要因の一つとなっているとシエラは思っている。けどシェルの視線は明らかに妖魔を差別する視線であり、そんな目でシェルから見られる理由が無いからこそ、シエラはシェルに対してアレッタには抱かなかった敵対心が芽生えてきた。

それだけシエラはアレッタに負い目があると感じているのだろう。けどシェルの視線は明らかに違う。なにしろシエラとシェルは初対面である。そんな相手に見下されるような行為はシエラはした憶えは無い。ただ妖魔だというだけでシエラはそんな目で見られる事を過去に経験しているからこそシェルに対してだけは敵対心が大きくなっていった。

けれども現実は非常で、アレッタとシェルに挟まれるように追い詰められているシエラである。空に舞い上がろうとしても、今まで雨除けに使っていた橋が邪魔して一旦橋の外に出ない限りは空中戦に持っていけない。つまりシエラはアレッタかシェル。どちらかを突破して橋の外に出なくてはいけないのだ。

そんな状況でシエラが取った行動は……シェルにウイングクレイモアを向ける事だった。その事にシェルは何かを言い掛けるが、その隙を与えずにシエラは一気に戦闘へと持って行く。

ウイングクレイモアの翼が一気に大きく開くと翼が白い光を発する。

「フルフェザーショットッ！」

翼から放たれた無数の羽は弾丸となりシェルに向かって集中砲火を開始する。それを合図に後ろに居るアレッタが背中の翼を羽ばたかせて一気にシエラに向かってくるが、シエラはそれを待っていたかのようにフルフェザーショットを中断させると真上へと飛び上がる。

真上にはすぐに橋の裏側がある。だから飛び上がればすぐに橋にぶつかる事は確実だ。けれども相手はシエラである。そこには何か

しらの考えがあると察したアレッタはシエラを追う事をせずに成り行きを見守った。

アレッタが追ってこない事を確認したシエラは縦に百八十度回転すると上下を入れ替えた。そして橋に飛び乗る感じで足を付けると、体を縮めて一気に伸ばした。こうする事で一気に加速する事が出来るからだ。

つまりシエラは橋を足場として地面から飛び立つような感じで飛び出して行ったのだ。もちろんアレッタの後ろを目指して。こうする事で二人に挟まれる事が無くなり、少しでも有利に持っていける事は確実だ。

けれども飛び出したシエラに向かって猛スピードで接近してくる者が居た。シエラが確認した時にはシェルがすぐ目の前まで迫っていた。

そんなシェルが一気にシエラの懐に入るとガーレジャンビーヤを振るってくる。形状からしてかなり振るい易い形状となっているため、シェルの攻撃スピードはかなり早いものだった。それでもシエラは何とかウイングクレイモアを盾にしてシェルの一撃を防ぐが、完全に懐に入られてしまったためにウイングクレイモアを自由に振るうことが出来ない。

一方のシェルはこうした密接戦に慣れているのだろう。自分の一撃が防がれたと感じたシェルはすぐにウイングクレイモアの翼を掴むと、そこを軸に自分の身体を回転させて一気にウイングクレイモアを乗り越えてシエラに迫る。

まさかシエラもそんな方法でシェルが迫ってくるとは思ってもいなかったようだ。だからこそ驚愕の顔でシェルを見詰める事しか出来なかった。

その間にもシェルは長い足を大きく振りかざして、シエラに強烈な蹴りを入れる。

空中という事もあり、そのうえウイングクレイモアの翼さえも掴まれて封じられた状態だ。そこに更に密接しての蹴りである。そん

な攻撃をシエラが避けられるはずも無かった。だからシエラはまともにシェルの蹴りを喰らってしまう。

直撃を受けたシエラはそのまま蹴り飛ばされて橋の外にある地面に叩きつけられた。地面は先程の雨でぬかるんでいる為か、そんなにダメージは無いものの、確実に直撃を受けた事には変わりない。それだけシェルもスピード戦を得意としている精霊である事は確実であり、その精霊が何なのかはシエラにはすぐに察しが付いた。

そんな事を考えながらシエラはすぐに立ち上がると状況を確認するために辺りを見回す。そして事態はシエラが予想していた最悪な物へなっていたのを知る事になった。なにしろ前方にはすでにアレッタがスカイダンスツヴァイハンダーを構えており、後ろにはいつの間にかシェルがガーレジャンビーヤを構えているのだから。

つまり挟まれている状況には変わりなかった。けれども変わった状況が一つだけある。それは橋の外に出たおかげで空中に舞い上がれる事だ。けれどもシェルの属性を考えるとそれは難しい事だとシエラは実感せざる得なかった。

そんなシエラがアレッタに向けて話しかけてきた。

「いつの間に俊足の精霊を仲間にしたの？」

「へぇ～、妖魔の割には博学ね。すぐに私の属性に気が付くなんて」

アレッタの代わりに後ろからシェルがそんな言葉を投げ掛けてきた。そんなシェルに対してシエラは振り向く事は無いが、シェルがシエラを蔑む目線で見ている事を感じながらアレッタを見詰める。そんなシエラの視線を受けてアレッタは軽く息を吐くと話し始めた。

「実はこの前の戦いが終わった後にね。私達はアッシュタリアからスカウトされたのよ。一緒に戦わないかってね。それで私達はアッシュタリアに加わる事にしたわ。でも……その前にシエラ、あなただけはどうしても倒しておかないといけない理由が私にはある。だからこうして協力してもらってるわけよ」

そんな事を言って来たアレッタをシエラは睨み付ける。それはそうだろう、なにしろアレッタはシエラの正体を昇達にバラした。そ

れで充分だと思うのだが、アレッタとしては完全にシエラを潰さない限りは気が済まないのだろう。いや、正確にはシエラをここで叩かないといけない理由がアレッタにはあるようだ。

アレッタはそれだけシエラの事を恨んでいるのだろうとシエラは勝手に理解する事にした。なにしろシエラにはアレッタがここまでする理由が分からなかった。確かにアレッタの前から逃げ出したのは本当の事で、妖魔である事を隠してきた事に負い目を感じている。

だがここまでされる理由はシエラには検討が付かなかった。一つだけ思いつく事と言ったら、以前に受けた妖魔への差別。それだけしかシエラにはアレッタがここまでやる理由が思い浮かばなかった。

やっぱり……アレッタも他の精霊と同じ。私を……妖魔を差別する事に何の抵抗も感じてない。でも……だからと言ってここ負ける訳には行かない。たとえ昇に拒絶される可能性があるかもしれないけど、今度は逃げないで確かめると決めたから……だからっ！

「アレッタが今更アッシュタリアに加わろうが私には関係ない。でも……私はここで負ける訳には行かない。今度は逃げないと決めたから」

そんなシエラの言葉を受けてアレッタは初めてシエラに向かって鋭い視線を送ってきて、奥歯を強く噛み締めた。どうやらシエラの言葉が相当アレッタに響いたらしい。

そんなアレッタがまるで怒っているかのような口調で話を続けてきた。

「関係ないか、よくもまあ二度もそんな事を言えたものね。でもねシエラ、冷静になって状況を見てみなさいよ。翼の属性と縮地の属性を前にして私達に勝てると思うの？」

「……」

そんなアレッタの言葉にシエラは苦い顔になった。

アレッタが言った縮地の属性とはシェルの俊足の精霊が持っている属性である。その特徴は翼の属性と似ており、スピード戦を得意としている。それだけのスピードを発揮する事が出来るのが縮地の

属性だ。
　けれどもこの二つの属性には大きく違う点が二つある。一つは空と地上との違い。翼の属性は知っての通り空中でのスピード戦を得意としている。そして縮地の属性は地上でのスピード戦を得意としていた。つまり空では翼の属性に勝るスピードを出せる属性は無いし、地上では縮地の属性に勝る属性は無かった。
　そしてもう一つはスピードの違いである。翼の属性は翼を羽ばたかせる事で徐々にスピードを上げて行き、トップスピードに達するまで時間が掛かるが、翼の属性が出すトップスピードは縮地の属性よりも上である。
　一方の縮地の属性はトップスピードでは翼の属性に引けを取るものの、スタートスピードではどの属性よりも勝っていた。つまり縮地の属性はトップスピードでは翼の属性に劣るものの、トップスピードを出すまでの時間は翼の属性よりも勝っていた。つまり縮地の属性は翼の属性よりも初動スピードが早いのである。
　だからシエラが翼を羽ばたかせて加速する頃には、シェルはトップスピードでシエラに迫る事が出来るのだ。それはつまり、シエラが空中に舞い上がる前にシエラに接近する事が出来る事を示していた。
　そうなると下手に空中戦に持っていこうとすると、その前にシェルに落とされるのが目に見えている。先程の攻撃もシェルがダメージを負った気配は無い。どうやらシェルはフルフェザーショットが当たる寸前に移動して、完璧に避けたようだ。それだけ縮地の初動スピードは早いのである。短距離ならば半蔵の空の属性に匹敵するほどの瞬間移動ほどのスピードを出す事が出来るだろう。
　そんなシェルとアレッタに挟まれてシエラはどうしたら良いものかと思案を巡らす。けれども幾ら思案を巡らせても良い案が浮かんでこない。なにしろスピード自慢の二人に挟まれているのである。いくらシエラもスピードに自信があるとあると言っても、さすがに二人を相手にするのは辛い物がある。

そんな二人を相手にシエラは一人で戦わないといけないのだ。だからだろうか、シエラはふと寂しさを感じた。昇と契約をしてからは常に昇が、そして琴未達が一緒に居た。皆と一緒になって戦ってきた。例え離れていても通信でいつも繋がっていた。昇のエレメンタルアップで何時でも繋がっている事を確認できた。でも……今はそんな繋がりは一切無い。だからだろうシエラが寂しいと感じたのは。

そんなシエラにアレッタとシェルは何時でも攻撃を仕掛けられるように少しずつ的確な位置取りをするために、少しずつ移動している。けれどもシエラはそんな二人を見ていなかった。それどころか顔を伏せて、まるで笑っているかのようだった。

情けない……今頃こんな事を感じるなんて。私……こんなにも弱かったの？　シエラの心が誰かに尋ねる。それは自分自身への質問だったかもしれない。それほどまでにシエラは今の自分を笑いたくなるほど、情けなくて、凄く惨めで、どうしようもなく無残だった。

自分から昇の前から逃げ出してきたくせに、今頃になって昇達が恋しくなる。随分と自分勝手な言い分だとシエラは軽く笑う。そんなシエラの笑いを聞いたアレッタとシェルは動きを止める。どうやらシエラが何かしらの策でも思い浮かんだ物だと勘違いしたようで、アレッタとシェルはより一層シエラを警戒するようにシエラの出方を窺っている。

そんな二人に気付かないままにシエラは、いや、シエラの考えはとんでもない方向へと向かっていった。

私は昇の剣として昇の傍にいた。でも……私は自分自身の手でその役目すらも放棄した。そんな私に……もう……帰る場所なんて無い。それだったらっ！

シエラは何かを決意したかのように顔を上げるとウイングクレイモアに翼の属性を一気に流し込む。

「発動　セラフィスモード」

白い光を放つウイングクレイモアから新たに四枚の翼が生えた。

その事に驚きを隠せないアレッタ。なにしろシエラのセラフィスモードは前の戦闘で見ていたが、今のセラフィスモードの翼はしっかりと形作られており、以前に見た無残なセラフィスモードの翼とはまるで違っていたからだ。

その事に未だに驚いているアレッタに向かってシエラは静かに話し掛けた。

「アレッタ、確かにこの状況で私が勝てる訳が無い。だから、私の……役目を果たすために全力で戦う。私の……全てを掛けて」

そう……私には……もうそれだけしか残ってない。そんな事を考えるシエラ。けれどもアレッタはシエラがまるで別人のような変化を遂げた事に戸惑いを示していた。なにしろセラフィスモードもしっかりと発動しているだけではない。シエラの瞳からは……完全に生気が消えていたからだ。

そんなシエラはアレッタでも見た事が無かった。だからアレッタの戸惑いは大きいが、シェルにしてみればシエラの発言は宣戦布告と同じだ。だからアレッタが戸惑っている間にもシェルは一気に飛び出して、一瞬でシエラとの間合いを詰める。

完璧に取った。シェルはそう感じただろう。なにしろシエラは未だに棒立ちの状態であり、ウイングクレイモアが自由に振るえないほど一気に懐に入ったのである。そこはシェルの領域であり、完全にシェルは自分の攻撃がシエラに入ると思っただろう。

けれどもシェルがガーレジャンビーヤを振るい出した瞬間にシェルの目の前からシエラが消えた。その事に驚きを隠せないまま、シェルは振り出したガーレジャンビーヤの動きを止める事が出来ずに、そのまま空を切る。そしてすぐにシエラの姿を探すが、その時にはすでに遅く、シエラはシェルの横に位置しており、大きくウイングクレイモアを振るい上げていた。

そんな光景を目にしたシェルはすぐに危機を感じて、その場からの離脱を計るが。シエラがウイングクレイモアを振るうのと同時にシェルも一瞬でその場から離脱する。

そしてシエラは静かに先程のまで居た場所に着地すると生気を失った瞳でシェルの方を見詰める。シェルもシエラから距離を置いており、ここまで来ればいくらシエラでもそう簡単には攻撃できないはずだとシェルは思っていた。

だが、そんなシェルの左腕から突如として血が噴き出す。噴き出した血は一瞬で止まったが、攻撃を受けたのは確かだ。シェルは驚きながらも傷口を左手で押さえるとシエラを睨み付ける。シェルとしてはシエラの攻撃を完璧に避けたつもりだが、まさか微かに当たっていたとは思いもよらない事だ。

だが現にシェルの左腕にはしっかりと傷跡が残っている。どうやら傷は浅いようだが、シェルとしてはあの瞬間に攻撃を入れられた事が驚きであり、屈辱であった。なにしろ短距離での移動スピードは完全に縮地の属性が上回っているのだ。それなのにあの瞬間だけで攻撃を入れられたのが縮地の属性を持っている者としては屈辱なのだろう。

だからこそシェルはシエラをにらみ付けるものの、なんでシエラがこのような事が出来たのが不思議でならず、その事を考えているとアレッタがシエラに向かって叫ぶように話し出した。

「シエラッ！　あなた何をやっているのか自分でも分ってるのっ！　そんな事をすればシエラ自身の存在すら消えかねないのよっ！」

そんなアレッタの言葉にシエラは生気の無い瞳を向けると静かに答える。

「それがどうかしたの？」

「なっ！」

さすがに驚きを隠せないアレッタ。そんなアレッタに遠くからシェルが何が起こっているのか説明してと叫んで来たのでアレッタは声を大きくしてシエラの状態を説明する。

「シエラは……存在するための力をそのまま戦闘力に上乗せしてるのよ」

「ッ！」

アレッタの短い説明で全てを理解したシェルは驚きを示したが、すぐに笑い出した。

「あんた何をやってるわけ、そんな事をすればあんた自身も消えるんだよ。つまり死ぬんだよ。まあ、こんな状況だからね、妖魔のあんたがそんな行動にでも出ない限りは私達には勝てないでしょうね」

そんな事を言って来たシェルにシエラは顔を向ける。その事でシェルは一瞬だけ怯んでしまった。なにしろシエラの瞳には生気が宿っていない。そのうえ表情すらもまるで死人のように無表情だった。そんなシエラの顔を見たからこそシェルは一瞬だけ怯んだのだ。

そんなシェルに向かってアレッタが叫ぶ。

「気をつけて。今のシエラは何をしてくるか分からないっ！」

「そんな事は言われなくても分ってるよっ！」

二人とも今のシエラに驚く以上に警戒しているようだ。それもしかたない。なにしろシエラが行っている手段は精霊の最終手段とも言える手段なのだから。

精霊がエネルギーの結晶体だという事は今までも説明した事だろう。精霊はいつもそのエネルギーを二つに分割しているのである。一つは自分自身の存在を維持するために、そしてもう一つは戦闘力として使っているのである。

つまり精霊がエネルギーとして使用している力の半分は戦闘力であり、後の半分は自分の存在を維持するための生命力と言えるだろう。

けれども今のシエラは全てのエネルギーを戦闘力に回している。そうする事で戦闘力を飛躍的に上げているのだ。だが精霊がエネルギーの結晶体とは言え、そのエネルギーは無尽蔵に溢れ出る訳では無い。エネルギーの総量は精霊によって違う。それは精霊自身が修行する事で増やす事も可能だ。つまり人の体力や精神力が個人個人で違うように、精霊が有しているエネルギー総量も個人個人で違うのだ。

つまり今のシエラは戦闘力として回しているエネルギーを全て使

い切ってしまえば、自分の存在を維持する事が出来ずに消えてしまうのだ。それは人間で言う死という物だ。そんな事をシエラはしているのだ。

だからこそアレッタとシェルはそんなシエラを警戒している。なにしろ今のシエラは自分の命すらも戦闘力に加えているほどだ。その力はどれだけの物かアレッタにも想像が出来ない。それだけに今のシエラは驚異的だった。

そんなシエラの心はすでに何も感じてはいなかった。それはそうだろう、すでにシエラには戦う理由が見付からない。それだけでは無い、自分の居場所、そして帰る場所すらもシエラは失ってしまったのである。だからこそシエラは自分が行う最後の役目として昇の敵を少しでも排除しようとこのような手段に出たのだ。

それはシエラの心が暴走していると言えるかもしれない。シエラの本心を言えば、昇に確かめてみたいというのが本心だろう。自分が妖魔であっても受け入れてくれるか、それとも拒絶されるのか。それをシエラは確かめたかった。

だがアレッタ達の来襲によってそれすらも確かめる手段を失って負けると、昇との契約は強制的に解除される。そんな状態でシエラは何にすがって生きて行けば良いのか分からなくなる。シエラにそう思わせるほどシエラにとっては昇の傍は居心地が良かったのだ。それは今までに感じたほどが無いぐらいに。

だからこそシエラにとって昇との契約が解除されるなんて考えられる事じゃなかった。そんな事になるぐらいならと……シエラは消える事を選んだのである。それほどまでにシエラの心は暴走していたのだ。

そんなシエラの心に気付かないままにアレッタは動揺していた。まさかシエラがここまでするとはアレッタには想像も出来なかった事だ。けれどもそれ以上に悔しさが込み上げて来るのをアレッタは感じていた。

だからこそ今のシエラを許せないとアレッタはスカイダンスツヴ

ァイハンダーをシエラに向けて構えるのだった。そして心が暴走したシエラへと戦いを仕掛けるのだった。

シエラ達の戦闘が始まる少し前。昇達はいつもの生徒指導室に集まっていた。なにしろ外は雨が降っている。そんな中を闇雲に探すより、ここは一旦情報を整理すべきだと閃華が言い出したので、昇はシエラを探したい気持ちを抑えながらも、窓の外に降り続いている雨を見ていた。

そんな昇に閃華が話し掛けてきた。

「だいぶまいっているようじゃな」

「そんな事は無いと思うけど」

「そう思ってるのは昇だけじゃ、私達から見れば今の昇は見るに耐えん」

閃華にそう言われて考え込む昇。そしてここ数日の事を思い返してみた。

確かに、ここ数日はずっとシエラの事だけを考えて、シエラの事を探し続けてたからなあ。皆から見ると僕は疲れているように見えるのかな……あぁ、そうか、閃華はその事を告げたかったんだ。

昇は閃華が本当に言いたい事を理解すると振り返って皆を見回してみる。琴未は心配そうな顔で昇の方を見ており、ミリアはラクトリーと与凪と同じく情報整理に四苦八苦しているようだ。そしてフレトは相変わらず仏頂面をしている。そんな皆を見て昇は改めて思う。

そっか……シエラを探してるのも心配してるのも僕だけじゃないんだ。皆でシエラの事を心配して探してるんだ。それなのに僕は……一人で突っ走っただけなのかな。昇はそんな結論を出すと軽く笑い出した。

そんな昇に自然と視線が集まるので、昇は慌てて何でも無いと言い繕う。

昇としては一人で突っ走っていた事を思い出してみれば滑稽であり、もう少し皆と協力して探していればシエラを見つけられていたかもしれないと思っただけだ。つまり一人で突っ走っていた自分を思い出して自分を笑っただけに過ぎない。

そしてそんな自分を笑った事で昇はやっと気分転換が出来たのだろう。改めて閃華の方へと顔を向けた。

「ありがとう」

「何の事じゃ」

昇のお礼にワザととぼけて見せる閃華。それが閃華らしいと昇は改めて思った。なにしろ閃華だ。昇のお礼に照れるような仕草を見せたりするのは似合わない。それどころか何事も無かったかのように振舞っているのが、いつもの閃華であり、そんな閃華の姿に昇は安心する事が出来た。

それから昇は心配そうに見ている琴未に微笑みかけると、琴未も安心したかのように微笑を返してきた。そしてフレトにも顔を向ける。そして真剣な眼差しでフレトを見ると、フレトはそんな昇を笑うように頷いてきた。

そんな光景を見て昇はやっと気付いた。自分がシエラの事でどれだけ暴走をしていたのかを、そしてどれだけ心配を掛けていたのかを。だからこそ昇はいつもの昇を見せる事で皆を安心させるのと同時に気持ちを切り替えてシエラを探す事にした。

そんな昇が真っ先に取った行動は与凪達の所に向かう事だ。与凪達は相変わらずモニターに向かって何かをしているようだが、そんな与凪達に向かって昇は尋ねる。

「与凪さん、何か分かりました」

突如としてそんな事を聞いてきた昇に与凪は振り向くと驚いた表情を浮かべるが、昇の顔を見た途端にいつものように軽く息を吐いて肩をすくめて見せるのだった。

「全然ダメ、それらしい場所はしらみつぶしに探したんだけど、シエラさんの反応どころか精霊反応すら出ないですよ」

「そうですか……シエラがこの付近に居ないという事は考えられないんですか？」

突如としてそんな質問をしてきた昇に対して与凪は溜息を付くとラクトリーが代わりに答えてきた。

「シエラさんは昇さんと契約をしている状態ですから、そんなに離れて行動する事は出来ないんですよ。まあ、契約者が許可を出せば別ですけどね。それに昇さん達は服従契約を交わしているわけですから、契約の規制により契約者から長距離離れる事が出来ないんですよ。契約者の命令が無い限りはですね」

「じゃあ、シエラは僕がここに居る限りは遠くに行く事が出来ないというわけですか」

そんな昇の答えに今度は与凪が返事を返してきた。

「そういう事ですね。まあ、シエラさんの心境を察して滝下君の傍から離れたいとは思えないですよね。というか滝下君、この説明が三回目だって事が分ってる？」

「えっ、そうなんですか？」

昇の答えに思いっきり溜息を付く与凪。どうやら与凪達はこの説明を以前にもしたようだが、昇の心は完全にシエラに行っており、与凪達の話を聞いてなかったようだ。そんな昇を見てフレトが容赦の無い言葉を言ってくる。

「まったく無様だな」

そんなフレトの言葉に昇は怒るどころか笑みを顔に浮かべた。

「そうだね」

そしてそんな言葉をフレトに微笑みと一緒に返すと、フレトも昇に向かって笑みを向けてきた。どうやらフレトもフレトなりに昇の状態を確認したらしい。だからこそフレトも昇に笑みを向ける事が出来たのだろう。

そんな時だった。すっかり疲れ果てたように机に突っ伏したミリアが昇達に向かって話を戻してきた。

「でも、そうなるとどうやってシエラを探せばいいの～」

そんな事をミリアが言い出してきたので、誰も答える事が出来ずに沈黙が立ち込めてしまった。けれども誰かが、この事を言わない限りは問題は解決しないは確かだ。ミリアとしては一刻も早くシエラを探し出して今の状況を脱したいのだろう。というよりかは、すぐにラクトリーから解放されたいのだろうが、シエラが見付からないのではしかたないと今でも作業を手伝っているわけだ。

そんな状況に与凪は大きく身体を伸ばした後に溜息を付いて打開策を話し始めた。

「こうなったらシエラさんに何かしらのアクションを起こしてもらうしかないですね」

「というと？」

与凪の言葉に説明を求める昇。やっぱり与凪の言葉には説明が無いと理解が出来ないようだ。それは昇だけではなく、他の皆も同じようで視線が与凪へと集まる。そして与凪は軽い口調で説明を開始した。

「シエラさんが精界を張るとか、無意味に翼の属性を使って物を壊しまくるとか。そういう行動を取って貰えればすぐに発見できるんですけどね」

「それって……シエラの気が狂ったか、シエラがピンチじゃないと意味ないじゃないですか」

「つまりそういう事ね」

うわ～、思いっきり他人事だ。そんな突っ込みを心の中で入れる昇。どうやら与凪も昇がいつもの冷静さを取り戻したと判断したのだろう。だからそんな冗談を言って来たのだが、昇の呆れた視線を受けるのは当然の事で、与凪はそんな昇の視線を無視するかのようにテーブルの上に置かれているお菓子に手を伸ばした。

そして与凪が手にしたお菓子を口に放り込んだ時だった。突如として警報のような音が鳴り響いた。あまりにも突然だったのでお菓子を詰まらせてむせる与凪はすぐに警報を止めると状況を確認するためにモニターに向かう。そして昇達に告げるのだった。

「何でも言ってみるものね。まさか本当に起こるとは思って無かったですよ」
「いったい何があったんですか？」
警報に胸騒ぎを覚えた昇はモニターに顔を近づけるために与凪の顔に自分の顔を並べてモニターを見るが、そこには相変わらず精霊文字が記されており、何の警報かまでは分からなかったが、地図が特定に場所を指し示しているのは分かった。そこは昇も知っている場所であり、学校からでも走ればそんなに時間が掛からない場所だった。
昇はその場所を指しながら与凪に尋ねる。
「ここで何かあったんですか？」
「ええ、どうやらここを中心に精界が張られたようですね。ちょっと待ってくださいね……精界の属性は……翼の属性っ！」
与凪の言葉でその場所に翼の属性で精界が張られたのは確かなようだ。その事を確認した昇はすぐに与凪の傍から立ち退くと部屋を後にしようとするが琴未に腕を取られて止められた。
「ちょっと待って昇。いくら翼の属性だからと言ってシエラが張った物だとは限らないでしょ」
確かに琴未の言うとおりである。なにしろ翼の精霊なんてかなりの数がいてもおかしくは無い。だからこの精界をシエラが張った物だという確証はなかった。
それでも昇は冷静な事を示すかのように琴未に反論するのだった。
「今、この町に居る翼の精霊はシエラとあのアレッタとかいう精霊だけだよ。確かに他の精霊が紛れ込んだ可能性もあるけど、あのアレッタという精霊。異常なほどにシエラに対して何かを抱いてた。だからシエラを探しているのは僕たちだけじゃなく、たぶんあのアレッタも同じだと思う。そこで僕達よりもアレッタの方が先にシエラを見つけた。その結果として精界が張られたと思うんだけど、僕の考えが間違ってると思う？」
「……それは」

さすがにそこまでの理由を聞かされると琴未には反論のしようが無かった。それは他の皆も同じであり、誰一人として昇の意見に反論できる者は居なかった。だからこそ昇は話を続ける。

「だからどちらが張った精界だとしても、そこにシエラが居る可能性が高い。それにシエラがピンチならいつまで持ちこたえられるか分からない。だから救援に行くなら早くしないと」

「……でも」

「琴未、離してやるんじゃな」

「閃華まで」

閃華までそんな事を言い出してきたので琴未は困ったような顔をするが、そんな琴未を閃華はあえて無視して昇に話しかける。

「昇よ、任せて良いんじゃな？」

閃華がそんな風に尋ねると昇は少しだけ笑みを見せながら、少し照れ臭そうに答えてきた。

「出来れば後で援軍に来てもらえば助かるんだけど。さすがに状況が分からない中に僕一人で突っ込んで行くんだから無茶なのは承知しているよ。だからそっちは準備を万端にしてから援軍に来てもらえるかな」

そんな事を言った昇に閃華は笑みを浮かべながら答えた。

「分かった。ならそうしよう。さあ、そろそろ行かないと間に合わないかもしれんじゃろ、琴未、離してやるんじゃ」

閃華にそう言われて琴未は迷ったような顔をしてちゅうちょするが、昇の腕を放すと昇は琴未にありがとうと告げて部屋から飛び出していった。そんな昇を琴未は心配そうな顔で見送る事しか出来なかった。そしてそんな琴未の頭を閃華は優しく撫でてやると琴未に向かって優しく話しかける。

「まあ、今回はシエラに華を持たせてやるんじゃな。今回の問題は深刻すぎるからのう。じゃが、今回の問題が終われば、次からは本気で行っても大丈夫じゃよ」

「……うん」

そんな閃華の言葉に琴未は少しだけ流れ出た涙を拭くと立ち上がる。もちろんこれから昇達の救援に行くための準備をするためにだ。そのために与凪達はすでに動き出している。それでも昇一人では心配だと感じたのだろう。フレトは半蔵を呼び出した。

「御用ですか、若殿」

「さすがに滝下昇だけで行かせるのは不安だからな、半蔵は滝下昇の後を追いかけて行け。だが手出しは無用だ。状況だけを俺達に分かるように映像を送ってくれ。そしてもし滝下昇がやられそうな時だけは助けてやれ」

「御意」

フレトの命が下ると半蔵は早速、フレトの命令を実行するためにその場から姿を消した。そんな行動を見ていた琴未が少しだけ不安になる。確かに昇一人で行かせるのも不安だし、その護衛では無いが、監視として半蔵だけを行かせる事にも不安を感じていた。

そんな琴未に閃華は大丈夫とばかりに話しかける。

「半蔵は戦国時代には伊賀忍軍の頭を勤めた精霊じゃ。あやつなら任せても大丈夫じゃろう。その場に適した行動を取ってくれるはずじゃ」

さすがに半蔵とは過去に面識がある閃華の言葉だけに琴未は安心する事が出来た。まあ、閃華がそこまで言うならという気持ちもあったのだろうが、どうやら昇は半蔵に任せておいても大丈夫なようだ。

だからこそ琴未達は自分達の準備を万端にするために行動を起こす。

そして昇は雨の中を傘を差さずに一心不乱に走っていた。全てはシエラのために、シエラに伝えるべき言葉があるから。そのために昇は走り続ける。

第百十話　心の暴走（後書き）

さてさて、そんな訳でやっと更新する事が出来ました。今回は少し更新が遅れた理由としては……体調不良で一週間ほど死んでました。

いやね、なんか、ワケの分からない風邪やら花粉症の症状やらが一気に出てＰＣの前に居るだけでも辛い状況になり、まったく小説が書けない状況が続きました。そんな訳で更新が遅れた事をお詫び申し上げます。

……まあ、更新が遅い事はいつもの事ですけどね（｀ω´）

とか開き直っている部分もありますけど、まあ、いつもの事だと思って大目に見てやってくださいな。……えっ、ダメ？　そんな殺生なっ！！！　そこを大目に見るのが人としての器が試されるところやないかいっ！　せやから大目に見て～っ！！！

……はい、エセ関西弁での言い訳が承認された事で話を次に持って行きましょう。

さてさて、今回も密度と長さが随分と凄い事になってますね。というか……実のところ当初の予定ではここまでシエラさんを暴走させる予定は無かったのですよ。それがいつの間にかあんなにも暴走して……成長しましたね、シエラさん……ってっ！！！　それは成長じゃないやろっ！！！

……そろそろエセ関西弁も飽きてきました？　もちろん私は飽きて来ました。そんな訳でそろそろ普通にやって行こうかと思います。まあ、そろそろ話す事も無いんですけどね。

あっ、そうそう、ちょっと密度が濃い話が続いたので、次回は少し短めにまとめようかと思ってます。……まあ、思ってるだけで実際に短くなるかは不明ですけどね。

さてさて、そんな訳で白キ翼編も中盤になってきたので、そろそろ次を考えないといけない時期になってきましたね。う～ん、頭の

中ではまとまってきたんですけど未だにプロットにはしてないです。そんな訳でエレメはまだまだ続きそうなので、これからもよろしく～。

……というか、本当にどこまで続くんだろう？　すでに二年以上が過ぎてるんですよね～。というか、あと数ヶ月で三周年を迎える事になります。う～ん、このままだと本当に五年以上はやっていそうで不安になってきますね。

けどまあ、それはそれでいいっかとか思ってますけどね。まあ、そんな訳で、話も尽きたところでそろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、ヤバイっ、そろそろサブタイが思いつかなくなってきたと感じている葵夢幻でした。

第百十一話　曖昧倒立

心が暴走して自分の命すらも戦闘力に代えたシエラの猛攻がアレッタとシェルに襲い掛かる。さすがにそんなシエラの攻撃に一対一の状況では太刀打ちできないとアレッタはシェルと何とか合流するとシェルはアレッタに向かって文句を言い始めた。

「ちょっと、あんなの相手にどうしろって言うのよ」

さすがにシエラが自分の命を削ってまでの攻撃である。さすがのシェルも避けるだけが精一杯で、とても反撃なんて出来る余裕は無かった。それはアレッタも同じであり、この二人を相手にそこまでやってるのだから、今のシエラは相当スピードに特化した戦闘を見せているのは確かなようだ。

そしてアレッタは文句を言って来たシェルに向かって今の状況を打破する打開策があると話し始める。

「こうなったら心理戦に持って行くしかないわね」

「心理戦って、あいつどう見てもこっちの言葉なんて聞きそうが無いわよ」

シェルはシエラを指差しながらそんな事を言ってきたが、アレッタにはしっかりと分っていた。シエラの心は暴走していてもその頭は冷静に状況を分析して戦闘に反映させていると。だからアレッタが何かしらの言葉でシエラの冷静さすらも失わせるほど心を乱す事が出来れば反撃の機会も生まれる。アレッタはそうシェルに説明するが、シェルは本当にそんな事が出来るのかと半信半疑のようだ。

けれどもアレッタとシェルがシエラを前にして、ここまで追い詰められているのは確かな事であり、こうなったらアレッタの作戦を信じるしかないとシェルも覚悟を決めるしかなかった。そんなシェルに向かってアレッタはとんでもない役目を与える。

「それじゃあ、あなたはなるべくシエラと戦闘して。反撃をする必要は無いわ。要はシエラの攻撃に耐え続ければ良いだけよ」

「それって凄く大変な事なんじゃ」
「妖魔如きに遅れを取りたい訳？」
そんなアレッタの問い掛けがシェルの心に火を付けたのだろう。シェルはガーレジャンビーヤを構えるとやってやろうじゃないという気構えでシエラに立ち向かおうとする。そんなシェルを見てアレッタは密かに笑みを浮かべるのだった。
これで私の目的が果たせる？　まあ、こんな奴はどうなっても良いんだけどね。それにしても……シエラ。ここまで暴走するなんて、そんなに今の生活が気に行っているわけ。そんなにも今の契約者が大事なわけ。そんな事を心の中で思ったアレッタは自然と怒りが沸きあがってくるのを感じていた。
それはやはりアレッタはシエラに対する特別な感情であり、シエラが今の生活に執着しているのがアレッタには許せない事だった。だからこそアレッタはシエラを尚更許す事が出来ずに、自分の目的を果たすために動き始める。
「それじゃあ、行くわよ」
「もう、どうにでもなれっていうのよ」
アレッタの掛け声に自暴自棄のような答えを返してきたシェルはシエラに向かって一気に飛び出す。出来る限り自分の足に縮地の属性を流し込んでのスタートである。シェルの動きは常人から見れば、その場から消えたと思わせるほど早いものだった。けれども今のシエラは戦闘能力だけでなく、反射能力も飛躍的に上がっている。だから突っ込んでくるシェルの姿をしっかりと捉えていた。
間合いはシエラのウイングクレイモアの方がはるかに上である。だから最初に攻撃を仕掛けたのはシエラの方だ。セラフィスモードでシエラの攻撃スピードもはるかに上がっている。だからシェルが懐に入る前にシエラは三回ほどウイングクレイモアを振り回した。
そんなシエラの連激にシェルはもう慣れたのだろう。反撃する事を諦めて避ける事に専念する。さすがに俊足の精霊である。地上での動きはかなり早いもので、シエラのセラフィスモードでもなかな

かシェルに攻撃を入れる事が出来なかった。それほどまでにシエラの攻撃とシェルの避けるスピードが早いのだ。

そんな二人の攻防も秒数にすれば一秒も経っていないだろう。それほどまでのハイスピード戦を行い続けるシェルとシエラ。相変わらずシエラはここぞとばかりに攻勢に出ると、シェルは先程アレッタに言われたとおりに避け続けて、今はシエラの攻撃に耐えるのだった。

そんな二人のハイスピード戦が行われているのを後ろから眺めるアレッタ。それはアレッタは翼の精霊であるから、地上ではシェルのフォローや今のシエラに対抗するどころか言葉を掛ける事も不可能だからだ。だからこそアレッタも非常識な行動に出る。

「発動　ジェンスモード」

アレッタの背中にある翼が白く輝くとの同時にアレッタの身体からも異常なほどの力が湧き出る。このままでは何も出来ないと踏んだアレッタはシエラと同じ手段を取ったのだ。それはつまり……命を削っての戦闘力アップ。

そんな事をすればアレッタも同様に全てのエネルギーを使い切ってしまえば消えるだけである。それを覚悟しながらもアレッタはこの手段を選んだのだ。そう、全てはアレッタが自分の願いを叶えるため。例え叶わなくてもこの手段なら目的を果たす事が出来る。アレッタはそう考えたからこそ、こんな非常識な手段に出たのだ。

けれども効果は抜群である。一気に翼を羽ばたかせて、先程までは比べ物にならないスピードで一気に飛び出したアレッタは一瞬でシエラとシェルの攻防戦に参加する。シェルをフォローするように攻撃を加えるアレッタ。そんなアレッタの攻撃にシエラは驚きを隠せなかった。なにしろアレッタの攻撃は先程までとは打って違い、そのスピードもパワーもはるかに増していたからだ。

そんなアレッタの攻撃を捌きながら、シェルに反撃の隙を与えないシエラ。けどシエラもそれだけで精一杯になり、とてもではないがアレッタやシェルに反撃をする事が出来なかった。そんなシエラ

に休む事無く攻撃を続けるアレッタは、スカイダンスツヴァイハンダーを振るいながらもシエラに話しかける。
「シエラがそこまでするなんてね。どうやら今までの生活が相当気に入ってたみたいね」
「……」
そんなアレッタの言葉にシエラは返事を返さない。なにしろアレッタが戦闘能力を上げて参戦した事だけでも厄介だというのに、シエラはそんなアレッタとシェルを同時に相手にしているのだから返事などが出来るはずが無かった。もし下手に返事をしてしまえば隙を与えるだけだという事はシエラが一番良く分かっている。だからシエラはアレッタの言葉を聞き流しながら、ハイスピードでの攻防を繰り返す。
そしてアレッタもシエラに返事をする余裕が無いと察すると笑みを浮かべて、更にシエラを追い込むような発言をする。
「シエラ、いい加減に気付きなさいよね。今のシエラは一人で戦ってる。それはつまり今の契約者に捨てられたのと同じじゃない。いや、その前にシエラが逃げ出したんだから、シエラが今の契約者を捨てたのと同じでしょ。それなのに今更私達と戦って何の意味があるって言うの」
「……」
アレッタの言葉にやっぱり返事を返さないシエラ。けれども先程の言葉はシエラの心を揺さぶったのは確かなようだ。それは刹那の瞬間だがシェルはシエラの動きが急に鈍くなった事を感じると、ガーレジャンビーヤを一気に突き出す。
そんなシェルの攻撃に一瞬だけ反応が遅れたシエラだが、持ち前のスピードで何とか避けるがさすがに避けきる事は出来なかったのだろう。シエラの頬に赤い筋を現れると、そこから細くて赤い雫が流れる。
どうやらシェルのガーレジャンビーヤはシエラの頬をかすめただけらしい。けれどもシエラに一瞬だけ動揺が生まれたのは確かであ

る。だからアレッタは自分の作戦が有効だという事を再確認した。
　それは先程のシエラが一瞬だけ動きが鈍った事を見ればすぐに分かった。だからこそアレッタは更にシエラの心を掻き乱すような言葉をスカイダンスツヴァイハンダーと共にシエラに向けて繰り出すのだった。
「つまり今のシエラは用無しって事よ。自分から逃げ出した道具はすでに使い道が無い。正に無用の長物ね。それが今のシエラなのよ。それなのに今更契約者の為に戦って何になるって言うの。いや……違うわね。シエラ、気付いているでしょ。今、私達と戦っているのは契約者のためじゃない。自分の為だってね」
「……違う」
　ようやく短い返事を返してきたシエラ。どうやら先程の言葉は相当シエラは否定したかったのだろう。
　だがその短い否定がシエラに隙を与える事になる。例え一瞬でも他の事に気を取られて、その事を否定してきたシエラに隙が生まれないはずがない。それどころかハイスピードで戦いを繰り広げている三人だ。シエラの隙が一瞬だとしてもアレッタとシェルにしてみれば反撃をするには充分な時間が出来る。それが刹那の瞬間だったとしても、今のアレッタとシェルにはそれだけの時間があれば充分に反撃が出来た。
　同時にアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーとシェルのガーレジャンビーヤがシエラを目掛けて突き出してきた。どうやら二人と確実に攻撃が入れられる刺突を選んで攻撃をしてきたようだ。
　そんな二人の攻撃にシエラは身体を無理な方向に無理矢理、捻るように身体を回転させると何とか二人の同時攻撃を避けて見せた。けれどもそんなシエラの避け方にはかなり無理があるのはアレッタの目にはすぐに分かった。
　だからこそアレッタはすぐにスカイダンスツヴァイハンダーを持ち直すと二激目を入れに掛かる。さすがのシエラも自分が無理な避け方をした事は理解している。だからこそ一旦二人から距離を置こ

うとすぐにその場から前方に向かって飛び出すが、そんなシエラの背中にアレッタの一撃が入る事になってしまった。

シエラの髪に沿って縦一線に降られたスカイダンスツヴァイハンダーは確実にシエラの背中を切り裂き、その証拠としてシエラの真っ白な髪に赤い染みが広がる。けれどもシエラもやられっぱなしでは無かった。

このまま逃げては一気に防戦にもって行かれるだろうと一瞬で判断したシエラは、またしても身体を無理矢理捻って、すぐに振り向くと眼前に迫っていたアレッタに向かってウイングクレイモアを振るう。

さすがにシエラがそこまでして反撃に出てくるとは思っていなかったアレッタは、そんなシエラの反撃に驚きながらも身体を逸らせてシエラの攻撃を避けたと思ったが、その直後にアレッタの胸から腹に掛けて精霊武具が切り裂かれると、鮮血が舞い散る。さすがにリーチの長いウイングクレイモアだけあって、これだけの距離なら確実にアレッタに攻撃を入れる事が出来たようだ。

けれどもシエラはそれだけで安心はしていなかった。なにしろシエラの相手は二人である。そう、もう一人のシェルが攻撃直後のシエラを狙って一気に間合いを詰めてきたのである。さすがに攻撃をした直後でシエラの動きもかなり鈍る。だからシェルは一気に懐に入って決めようとするのだが、ここでもシエラは予想外な行動に出てきた。

なにしろシエラはその場で六枚もあるウイングクレイモアの翼をフル機動させて、シェルを目掛けて飛び出していったのである。そんな事をすればシェルのガーレジャンビーヤに突き刺されるのは目に見えている。

だがシェルとしてはシエラがそんな行動を取ってくる事が予想外であり、迫ってくるシエラになんとかガーレジャンビーヤを振るおうとするが、その前にシエラの体当たりを喰らって、シェルはそのまま吹き飛ばされてしまった。

そんな攻防を数秒の間に繰り広げたシエラとアレッタ達。その行動はとてもじゃないが目で追える物ではない。スローモーションにでもしない限りは何が起こったのかは、常人の目では分からないほどハイスピードでそれだけの攻防が行われたのだ。

そして二人に一撃を入れた事で少しだけ安心するシエラ。これで体勢を立て直すだけの時間を稼いだのは確かである。だがシエラが完全に体勢を立て直す前にシエラは後ろからの殺気を感じるのと同時にすぐに横に身体を移動させてウイングクレイモアを盾にして攻撃に備える。

そして鳴り響く剣戟音。どうやら何かがウイングクレイモアに当たった事は確かなようだが、シエラがそれを確認するためにウイングクレイモアを動かした時にはスカイダンスツヴァイハンダーを振り上げたアレッタの姿が瞳に写った。

そのため、再びアレッタとの攻防に移るシエラ。さすがに体勢を立て直すだけの時間を少しだけ稼いだおかげでアレッタと打ち合うことが出来た。そんな打ち合いが行われている中で、未だにシェルが先程の体当たりでやっと立ち直り始めた事を確認したシエラ。今度はシエラの方からアレッタに向けて話しかけてきたのだ。もちろんお互いに武器を振るいながら。

「アレッタ……昔と凄い変わった。まるで別人みたい」

「その原因を作ったのはシエラ、あなたでしょ」

「確かにその通り、私が……アレッタを騙していたから。でも……ここまでされる」

「理由ならあるわよっ！」

シエラの言葉を遮ってアレッタが叫ぶ。どうやらアレッタには相当シエラが許せない理由があるらしい。だからこそアレッタはここまでやっているのだろう。それが何なのかシエラにはまったく検討が付かない。

だからこそ生気の無い瞳に少しだけ悲しさを写しながらアレッタを見ながら己の武器を振るう。そんなシエラの瞳にアレッタも気付

いたようだ。いや、アレッタだからこそ気付けたのだ。そんな二人が武器をお互いに振るいながら、今度はアレッタから口を開いてきた。

「でもねシエラ、実は私は昔から何も変わっていないのよ。私はただ怒っているだけ、今のシエラを見て許せないだけ。その意味が分かる。分かるわけ無いわよね。だってシエラは昔っから私の事は見ていないんだからっ！」

そんな言葉と共に渾身の一撃を振るってくるアレッタ。そんなアレッタの攻撃をシエラはウイングクレイモアで受け流しながら反撃するが、そんなシエラの攻撃もアレッタに受け流されてしまった。

そんな目にも見えない攻防を繰り返しながらも、二人の会話は続く。

「だからシエラには私の心は分からないでしょ。でもねシエラ、私にはシエラの心が分るのよね。だって、私はずっとシエラの事を見てきたもの。だからシエラが今は何の為に戦っているのかも分かってるのよ」

「……なら、なんで私との戦いを続けるの？」

「決まってるでしょ。私は私の目的を果たすためにシエラと戦ってるのよ。その目的が何なのかはシエラには分からないでしょ。自ら消えようと願っているシエラならより一層分からないでしょねっ！」

「ッ！」

さすがのシエラもアレッタの攻防戦が続いている中で驚きを隠せないという表情を露にした。まさかアレッタがそこまでシエラの心を見抜いているとはシエラ自身も思っていなかった事だし、シエラも自分が消える為に戦っているのだと、アレッタの言葉でやっと気が付いたのだから。

確かに今の状況では自分の生命力を戦闘力に変えない限りは、この二人とまともに戦う事は出来ないだろう。だが、それは勝つ事を前提とした戦い方であり、シエラは決して逃げようとか時間稼ぎの戦い方を選ばなかった。

もしシエラが今でも昇の事を心の底から信じていたなら、この精界を感じ取って助けに来てくれるだろう。そう考えてシエラは時間稼ぎの戦い方や、あえて逃げ回る戦い方を選んだだろう。けどシエラは心のどこかでそんな事は無いと思い込んでいた。だからこそ自分の命を削る戦い方を選んだのだ。

もし、この戦いでシエラが消える事になっても、昇が悲しんでくれる確証は無い。それどころか妖魔である自分が消えた事で清々するかもしれない。そんな考えがシエラの頭にあるからこそ自分が消えるような戦い方を選んだのだ。

そんな酷い現実を見せ付けられるぐらいなら、この戦いで消えてしまった方が何倍もマシで楽な死に方が出来るとシエラは知らず知らずの内に心の中でそんな風に決めたのかもしれない。だからこそ、こんな戦い方をしていたのだ。

アレッタはそんなシエラすら気付かなかった心情を悟ったのだ。シエラにしてみれば、アレッタがここまで自分の事を理解しているとは思ってもみなかった事で、だからこそ驚きを隠せなかったのだ。

そしてその驚きは一瞬の隙となってシエラの動きを止める事になる。もちろんアレッタがそんな隙を見逃すはずも無く、反撃とばかりにスカイダンスツヴァイハンダーを縦に振るって、シエラの右肩から胸に掛けて一撃を入れる。

その事に未だに驚きの表情をしているシエラ。アレッタに自分ですら気付かなかった心情すらも言い当てた事ですらも驚きだというのに、更にアレッタから追撃でシエラは完全に動揺してしまった。

そのため、スローモーションのように飛び散る自分の血飛沫ですら、シエラは驚きの眼差しで見ていた。そんなシエラに追い討ちを掛けるかのように、すっかり復活したシェルがシエラの後ろから一気に迫ってシエラの背中にガーレジャンビーヤを突き立てる。

心が動揺しているのか、それとも最早痛みすら感じないのか。シエラは驚きの眼差しで虚空を見詰めながら、防衛本能だけでウイングクレイモアを持ち直すと、後ろにいるシェルに突き立てるように

ウイングクレイモアを突き出す。
　けれどもそんなシエラの反撃にはすでに敏捷さは無かった。だからシェルも余裕でシエラの反撃を簡単に避けて、念の為とシェルはシエラから距離を取って様子を見守る事にした。確かにアレッタに続いてシエラに致命傷となりうる攻撃を入れたのは確かだ。これでシエラを倒したとシェルは完全に思っただろう。そしてそれはアレッタも同じだった。
　そんな攻撃を受けたシエラは立っている事が出来ないのか、その場で両膝を付く。さすがに生命力を戦闘力に変えているためか、この程度では致命傷にはならないのだろう。それどころか、更に戦闘を続かせようと、戦闘力に流し込んだ力が勝手にシエラの身体を治療する。
　それでも致命傷的な傷を受けたのだ。そんなシエラがもう戦えるはずが無く、両膝を付いているシエラにアレッタは静かに向かって行き、片膝を付いてシエラに向かって話しかけてきた。
「これで分かったでしょシエラ。あなたは本当は私達に倒される事を願っていたのよ。だって、そうすれば辛い現実を確かめる事無く契約が解消されるからね。だからこんな無茶な戦い方をして私達に倒されるのを待ってた。良かったねシエラ、自分の願いが叶って」
「……違う」
　アレッタにそう言われてシエラは否定するが、その言葉には力が入ってなく。まるで辛い現実を突き付けられて、それでも信じようとしない者が発する言葉のようにシエラの言葉には力も説得力も持っていなかった。
　そんなシエラにシェルが楽しそうに笑いながら話しかける。
「所詮妖魔なんてこの程度なのよね。微かな可能性にすがって、それが勘違いだと気付かないままに無茶な戦いをして、そして負けてるんだから惨め以外の何ものでも無いわね」
　そんな事を言って笑い出すシェルをアレッタは思いっきり睨み付けた。そんなアレッタの視線を感じてシェルは驚いた表情で黙る。

なにしろシェルとしてはアレッタも妖魔を嫌ってるからこそシエラをここまで叩き潰したのだ。それなのに追い討ちを掛けるかのようなシェルの言葉にアレッタがこんな反応を示すのが意外であり、そんなアレッタをシェルには理解できなかった。

そしてシェルが黙り込んだ事を確認したアレッタは更にシエラに向かって話を続ける。

「シエラ、私が言った事は違ってはいないわよ。シエラは妖魔である事が契約者に知られて、そしてまた妖魔として差別される事を恐れて逃げ出してきた。そんなシエラが行くところなんて何処にも無いじゃない。だから私達が現れたのを幸いに無謀な戦いをして自ら消えようとした。その方が楽だもんね」

「……違う……私は」

アレッタの言葉を聞いて更に言い返そうとするシエラだが、何を言い返して良いのか分からなくなってきた。なにしろアレッタの言った事は確かにシエラが自分でも分からない内に心のどこかで願っていた事は確実であり、シエラは昇に真意を確かめる前に消えてしまいたいと認識させられた時点でアレッタの術中にはまってしまったのだ。

だから言い返すことが出来ない。けれどもシエラは心の中で自らの本心。それはもう一つの心と言えるべきものだろう。そんなか弱い心の中で必死にアレッタの言葉に反論しようと心の中で叫んでいた。

違うっ！　確かに私は昇の前から逃げ出してきたけど……それは……私に勇気が無かっただけ。昇に私が妖魔であっても受け入れてもらえるか確かめるだけの勇気が無かっただけ、だから……自分から消えようなんて思ってないっ！　そう、思ってない。思ってない、思ってない……はずなのに。

いつの間にかシエラは自分が涙を流している事に気が付いた。それはアレッタの言った事を完全に否定できないと認識してしまったためだ。そんなシエラが更に心に思う。

そんな事を……思ってないはずなのに。なのに、私は……アレッタの言った事に反論ができない。じゃあ……やっぱりアレッタが言った通りなの、私は……昇に確かめる勇気が無いから楽な道を取ろうとしただけなの。……ふふふっ、ふふふっ、なんか笑えてくる。自分が凄く惨めで、凄くずるくて、凄く……卑怯で。

シエラの本心は昇の心を確かめる事にあったのは間違いが無い。以前に昇が言った言葉。その言葉があったからこそシエラは昇を契約者として選んだのだ。その言葉が無ければシエラは昇と契約をする事は無かっただろう。

けどシエラはそんな昇の前から逃げ出してしまった。更にはアレッタ達に見つかった事で全てを諦めて自らの死を願った。だからこそ自分の命を顧みない戦い方をしたのだ。シエラとしてはそんな気はまったく無かったのだが、アレッタに指摘されると反論が出来なかった。その事実が更にシエラを追い詰めたのだ。

「これで分かったでしょシエラ。今のあなたは誰からも必要とされてない。すでに捨てられた存在なのよ。誰にとってもあなたの存在は邪魔でしかないんだから。……でもね、シエラ。そんなシエラを一つだけ救う方法があるのよ」

思いもがけないアレッタの言葉にシエラはゆっくりと顔を上げてアレッタを見詰めた。そのアレッタの表情は先程までは打って変わって、昔にシエラに向けていた笑みそのものだった。そんなアレッタを見てシエラはアレッタに救いを求めるように手を伸ばした。

そんなシエラの手を取らずにアレッタは立ち上がるとスカイダンスツヴァイハンダーをシエラに向けてくる。その事に驚きを隠せないシエラはアレッタの顔を見るが、アレッタは先程と同様に昔のアレッタと同じ表情をしていた。

そんなアレッタが昔に戻ったみたいに笑みを浮かべながらシエラに話しかけてきた。

「シエラ、もう疲れたでしょ。だから今……楽にしてあげるわよ。まずは一旦契約を強制解除させてもらうわ。後は私に任せれば良い

だけよ。そうすればシエラはもう二度と妖魔でる事に悩まされる事は無いわ」

そう……なの？　アレッタの言葉に疑問を感じならもシエラはアレッタを信じたいとも思い始めた。それはアレッタが昔に、シエラがアレッタの前から逃げ出す前と同様の笑みを浮かべてシエラに話しかけてきたからだ。

そんなアレッタを見てシエラも昔に戻ったような気になる。なにしろ今のアレッタには先程までの怒りはどこにも存在していなかった。むしろ逆にシエラの事を気に掛けているような。おせっかい過ぎるほどの笑みを浮かべていたからだ。

そんなアレッタが昔の笑みを浮かべたままスカイダンスツヴァイハンダーを振り上げる。その事にシエラは不安げな表情を見せるが、アレッタはそんなシエラの心を読み取ったのだろう。今までに無いぐらい優しい声でシエラに話し掛けてきた。

「大丈夫よシエラ。痛いのも辛いのも一瞬だけ、すぐに楽になるから。だから今は私にやられて契約を強制的に解除させるのよ。そうすれば私の願いも叶う。シエラも安息を手に入れられる。もう妖魔だからと、皆と違うからと言って差別される事は無いわ」

……皆と差別される事が無い？　アレッタの言葉にシエラは疑問を感じた。それはどこかで聞いた言葉だったからだ。その言葉が誰が発した物で、誰が言った物かはすぐにシエラには分かった。その言葉こそが昇が言った言葉だったからこそ、シエラは昇を契約者に選んだのだから。

そんなシエラの脳裏にその時の事が一気に頭を過ぎる。

それはまだシエラが昇達を見つけた時の事だった。昇と琴未は一匹の餓死した野良犬を発見した。その犬はとても不細工で犬とは思えないような、まるで人面犬に近いような顔をしていた。だからだろう、誰もその犬を救おうとはしなかったし、餌を与えようともしなかった。だからこそ、その野良犬は餓死したのだ。

そんな野良犬を発見した昇は琴未に向けてこんな言葉を放った。

『犬は犬なのに変わりないのに、それなのに少し違うからと言って差別されるのはおかしいよ。同じ犬なのに少し皆と違うからと言って差別されるのはおかしいと思わない、ねえ琴未』昇は餓死した犬を見て、そんな言葉を琴未に投げ掛けたのだ。

その時の事を思い出したシエラは思わず軽く笑ってしまった。なにしろシエラはその現場を見ている。だから昇にそんな問い掛けを投げ掛けられて困っている琴未の顔を思い出してしまったからだ。

それからシエラは昇に興味を持ち、昇の事を詳しく知るために四六時中も昇の傍を離れる事は無かった。それは昇なら妖魔である自分を受け入れてくれるからとシエラは思ったからだ。だからシエラは昇を契約者として選んだのだ。

けど結局は自分が妖魔だという特殊な存在だという事を昇に言う事が出来なかった。言うだけの勇気が無かった。その勇気が無かったからこそずるずるとここまで来てしまい。最後には昇からも逃げ出してしまったのだ。

そんな自分が今更アレッタに救いを求めてよいのか、今更救われて良いのかとシエラは疑問を持ち始めた。それだけ今のシエラは自分が惨めでしかたなかったのだろう。だからこそ、そんな自分が救われる権利を持っているかに疑問を憶えたのだ。

けれどもアレッタはそんなシエラに更なる救済の言葉を掛けてきた。

「だからシエラ、もう何も心配する事は無いわよ。もう戦う必要なんて無い、全てを私に任せてくれればシエラが欲しがってた安息を上げる。だからシエラ、目を閉じて、そして全てを私に任せて体の力を抜いて」

そんなアレッタの言葉を聞いてシエラは言われたとおりにゆっくりと目を閉じる。そんなシエラは思う。このまま……アレッタに全てを任せれば……私は救われる？　いいっか、私を助けてくれるなら誰だって、そう誰だって……誰だって。そんな事を思っているうちにまぶたの裏には一人の人物が浮かび上がってくる。それが昇だ。

昇っ！

アレッタのスカイダンスツヴァイハンダーが今まさにシエラの身体を切り裂き、トドメを刺さそうと契約を強制解除させようと振るわれたのだ。けれどもスカイダンスツヴァイハンダーはシエラの身体を切り裂くどころかウイングクレイモアに弾かれて、アレッタは体勢を崩して後ろに倒れこむ。

一方のシエラは先程までの戦闘をしていた目付きに戻っており、ウイングクレイモアを片手に荒い息をしていた。どうやらダメージは完全に癒えてはいないようだが、シエラに再び戦う意思が戻った事は確かなようだ。

そんなシエラにアレッタは叫ぶように話しかけた。

「何をやってるのシエラっ！　このまま契約を解除すれば楽になれるのよ。それなのに、ここまで来て抵抗するってどういう事なのよ。なんで私に全てを任せてくれないのっ！」

そんなアレッタの言葉にシエラは顔を伏せると呟くような声で答えるのだった。

「それは……私も分からない。けど、一つだけ分かった。ここでアレッタから安息を貰っても何も解決しないって。それはまた逃げるのと同じだって。私は……もう……逃げるのは嫌っ！」

はっきりとそう宣言したシエラの瞳には涙が流れていた。そんなシエラを見てアレッタも困惑していた。そう、二人ともお互いにお互いの意思が分からないのだ。シエラに限ってはシエラ自身も自分の心が分っていない状態だ。それでもアレッタに歯向かったという事はここで契約を解除される事をシエラは本能的に拒絶した事は確かだ。

そんなシエラの言葉を聞いて、そんなシエラを見て、アレッタは再び怒ったような表情に戻るとシエラを睨み付ける。そして立ち上がるとシエラにスカイダンスツヴァイハンダーを向けるのだった。

「どうやら完全に決着を付けないと無駄みたいね。残念だけど、シエラには苦しみながら契約を解除させてもらうわよ」

はっきりとそう宣言するアレッタ。そんなアレッタの瞳をシエラはしっかりと見つめて言い返してきた。

「アレッタには悪いけど、そういう訳には行かない。確かにアレッタの言葉を聞いてアレッタの言うとおりにしても良いと思った。でも……出来なかった。今の私にはそれだけの物を持ってる。知らない間にそれだけの物を貰ってた。だからっ！　ここで契約を解除されるわけにはいかない。私には……まだやりたい事があるかもしれないから」

「そんな曖昧な事で余計に苦しむという訳。シエラ、もう一度考え直してみなさいよね。ここで私に全てを任せた方が楽になれるんだよ。もうシエラが苦しむ事は無いんだよ。それを捨ててまで、まだ抵抗するって言うの？」

そんなアレッタの問い掛けにシエラは申し訳無さそうに顔を伏せるとはっきりと宣言した。

「そう、私はそんな曖昧な心のままにアレッタに抵抗する。私の心がはっきりとここで契約解除を受け入れる事が出来ない限りは、消えるまでアレッタに抵抗する」

「シエラっ！」

シエラの言葉にもう黙っている事が出来なかったアレッタが抗議の声を上げるが、そんなアレッタの声を聞いてシエラはゆっくりと顔を上げるとアレッタの瞳をしっかりと見つめる。今度は生気の宿った、まるで固い意志を写しているような瞳でアレッタを見詰める。

そんな瞳で見詰められたアレッタは思いっきり奥歯を噛み締めた。まさかあそこからシエラが復活して、まだ抵抗してくるとはアレッタにとっては思ってもいなかった事だ。戦いの決着はすでに付いているというにシエラは抵抗するのを止めないのを見てアレッタは歯痒くもあり、心の底から怒りを感じていた。

そんなアレッタの横からシェルが出てくるとアレッタに向けて話し掛けてきた。

「何が目的でこんな妖魔如きに情けを掛けたのかは知らないけどさ。

私としてはさっさとケリを付けて欲しいんですけど。いつまでもあなた達に構ってはいられないのよね。だからさっさとケリを付けちゃいましょうよ」

そんな事を言って来たシェルを睨み付けるシェル。でもシェルもすでにアレッタがシエラに対して特別な思いを持っている事を見抜いている。だからそんなアレッタに睨みつけられてもシェルは動じる事無く、鋭い視線を返すだけだった。

そんなシェルがアレッタに向けて更に話を続ける。

「まあ、約束だからそこの妖魔を倒すまでは手伝ってあげるわよ。その後は好きにすればいいわ。どっちにしても、そろそろケリを付けてさっさと帰りたいのよね。だから、ここは一気に行かせて貰うわよ」

そう言って臨戦態勢に入るシェル。そんなシェルにアレッタは何かを言いたげだが、所詮はシェルは契約者の命令でアレッタに協力しているに過ぎない。そんなシェルだからこそ、今は何を言っても無駄だろうとアレッタはシェルに何も言わずにスカイダンスツヴァイハンダーを構えるのだった。

そんな二人を見てシエラはどうしようかと冷静に頭を動かしていた。確かに今のシエラは生命力を戦闘力に変える事で戦闘能力を上げている。だがそれと同じ方法でアレッタも戦闘能力を上げている。そのうえシェルもいるのだから、シエラが不利な事には違いない。

それにシエラは命を削りながら戦っているのだ。だから後は、どれぐらい戦えるのかはシエラの生命力次第だ。その生命力が弱っているのを感じながらもシエラはウイングクレイモアを構える。どうやらシエラは本当に自分が消えるのを覚悟して戦いに挑もうというのだろう。

そんなシエラ達の戦いが始まろうとした時だった。突如として光り輝く力がアレッタ達に向けて放たれた。

「ツインフォースブレイカーッ！」

第百十一話　曖昧倒立（後書き）

さてさて、そんな訳で最後についに出てきましたね。けど、それがこれからの始まりだったりして、まあ、詳しい事は次回に～、という事で予告終わり。

そんな訳で本編に少し触れてみましょうか。いやはや、今回はかなり苦労しました。なにしろシエラさんが暴走しまくってくれましたからね～。それの帳尻合わせで苦労しました。

それでも自分なりには上手く書けた方だと思っております。まあ、点数を付けるなら及第点ぐらいな感じの出来栄えになっていると勝手に思っております。皆さんは如何でしたでしょうか。今回のエレメも楽しんで頂けましたでしょうか。楽しんで頂けたなら幸いです。

……

……燃え上がれ我が手、バーニングファイア――――――――――っ！！！

……

……はい、いつも通りに意味は無いです。いやね、なんかシリアスに語りすぎたかなと思って。というか本編もシリアスだったし、後書きまでもずっとシリアスなのに耐え切れんかったですよ。せやから、また無駄な事をして、この作者はいったい何を考えていらはるんでやしょうかね。

とまあ、意味不明な戯言はここまでにしましょう。という事で締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、今回は自分の限界を見る事になった葵夢幻でした。

第百十二話　すれ違いからの戦い

突然の不意打ちとはいえ、アレッタとシェルはスピード自慢の精霊である。だから多少反応が遅れようとも攻撃を簡単に避ける事が出来た。そしてアレッタとシェルが攻撃を避けて土手の上を見上げると、そこには昇の姿があった。

昇の紫黒はすでに二人を捉えており。昇はシエラから二人を引き離そうと更に攻撃を加える事にした。昇も今の状況を完全には分って無いが、やるべき事は分っているようだ。シエラを助けるんだ。そんな事を思った昇は状況を考えるよりも攻撃を優先している。

「ツインフォースバスターッ！」

土手を滑り降りながらも昇の紫黒はすでにアレッタとシェルを捉えているようで、そんな二人に向かって攻撃を放つ。紫黒から放たれた攻撃はすでに銃弾というレベルを超えており、砲撃と言ってもいいほどの威力を持っていた。

その威力を証明するかのように昇の攻撃を避けてた。アレッタとシェルが居た場所には、着弾直後に爆発して辺りに衝撃波を撒き散らす。その間にも昇はシエラに駆け寄るのだった。

「大丈夫、シエラ」

昇はすぐにシエラに向かって声を掛けると倒れてきたシエラの身体を慌てて抱き止めた。けれどもシエラは昇がここに居る事が信じられないといった表情で呆然としていた。それはそうだろう、なにしろシエラは昇の元から逃げ出した卑怯者であり、妖魔でもあるのだから。だからこそシエラは自分が昇に嫌われても不思議は無いと思っていた。昇が自分を心配してくれないと思っていた。

けど……実際にはこうして昇が来てくれた。その事実だけでシエラの心は混乱するばかりで、ただ嬉しくて、ただどうして良いのか分からなくて、それでも嬉しくて、それでも昇に向かって何て言えば良いのか分からなかった。

嬉しさと先程までの心境がシエラの中で複雑に混ざり合い。シエラを混乱させるばかりだ。そんなシエラに向かって昇は更に言葉を掛けるが、シェルは昇が出てきたのを黙って見ている訳にはいかなかった。

すぐに攻撃を仕掛けようとするシェルをアレッタは止めた。止められた事に抗議するシェル。

「何で止めるのよ」

そんなシェルの文句にアレッタは嫌な汗を掻きながらも、昇を指差して自分の考えをシェルに向かって話し始めた。

「あれはシエラの契約者よ。そして能力は……エレメンタルアップ」

「エレメンタルアップッ！　あの契約者ってレア能力を持ってるわけ」

さすがに昇の能力を聞かされてはシェルも驚きを隠す事が出来なかった。そんなシェルに向かってアレッタは更に話を続ける。

「それに契約者が現れたって事は、他の増援が来てもおかしくない。シエラ一人ならともかく、エレメンタルアップと他の精霊を相手に私達二人だけで勝つ自身がある」

「……じゃあ、どうするのよ？」

シェルの問い掛けにアレッタは迷う事無く、はっきりとシェルに告げた。

「一旦精界を崩してこちらも形勢を立て直しましょう。シエラがかなりの傷を負った事には変わりないから、このチャンスを活かさない手は無い。だから私達も一旦合流して、それから再戦するわよ」

「はいはい、分かったわよ」

アレッタの言葉に疲れたように返事を返すシェル。確かにシェルは命を掛けたシエラを相手にあれだけの戦闘をしていたのだ。だから今日のところはここで完全に退いて、後日に再戦をしたかったのだが、アレッタは完全にシエラを潰すために一旦退却を告げてきたのだ。

数時間後には再び戦う事になると思うと、さすがのシェルもいい

加減にして欲しいと思ってしまうのだろう。なにしろシェルはアレッタの仲間では無い。ただローシェンナがアッシュタリアに加入する前に、ローシェンナの手伝いをする言わばアルバイトと同じである。そんな状況だからこそシェルはそこまで付き合わされることに不満を抱いたのだろう。

「それじゃあ、私は先に退かせてもらうわよ」

シェルはアレッタにそう告げると自慢の俊足を使って、一瞬でその場から姿を消してしまった。どうやら一気にこの場から離れたらしい。そんなシェルを見送ったアレッタは精界を崩し始める。

世界にヒビが入り、白く染まった世界が徐々に崩れ始める。そんな光景を見た昇は相手が退くのだとアレッタ達の思考を読んだのだろう。アレッタに紫黒を向ける事無く、視線だけをアレッタに向けた。

そのアレッタがシエラに向かって叫ぶ。

「しょうがないから一旦退いてあげるわよシエラ。でもシエラ、忘れない事ね。シエラがさっきまでやっていた事を。それこそがシエラが願っている本心だって事をねっ！」

そんなアレッタの言葉に昇は首を傾げるばかりだが、昇の腕に抱かれているシエラは大きく目を見開いて、アレッタの言葉に先程の心境が蘇ってきた。そんなシエラに気付かないままに昇はアレッタを見詰めると、アレッタは一度だけ溜息を付いて背中の翼を広げて昇達の前から飛び立って行った。

そして精界が完全に崩れた。

元の世界に戻った事により、町の騒音が聞こえてくる中で昇は自分が未だにアルマセットを解除しないまま、というか解除するのをすっかり忘れていたようで、紫黒を地面に置くとシエラに向かって話し掛けた。

「よかった、随分と探したんだよシエラ。怪我は大丈夫？」

そんな質問をする昇の顔はすっかり安心しきっていた。それはそうだろう、なにしろアレッタ達は完全に退いた事により、戦闘は終わりを告げたのだ。後は閃華達が到着するのをこの場で待ってシエラの治療をしてもらえば良いだけだと昇は思っていた。

そんな昇とは正反対にシエラは顔を伏せて呟くように昇の質問に答える事無く、質問を質問で返してきた。

「なんで、ここに来たの？」

「えっ、なんでって……」

まさかシエラからそのような言葉が飛び出すとは思っていなかった昇はシエラの質問に戸惑うばかりだ。そんな昇に構う事無く、シエラは更に質問を重ねてくる。

「私の事はすでに知ってるんでしょ？　私は妖魔で皆から嫌われてる存在、私はその事をずっと皆に隠してきた。それなのになんで昇はここに来たの？」

そんな質問をするシエラは決して昇の顔を見ようとはしなかった。もし今の時点で昇の顔を見てしまえば泣いてしまう事が分っているからだ。だからシエラは昇と視線を合わせる事無く、そんな言葉を放つのだった。

そしてそんな言葉を受け取った昇は優しげな笑みを浮かべながらはっきりとシエラに告げた。

「僕がここに来た事に理由が必要」

はっきりとそう告げられたシエラは思わず泣きそうになってしまった。それは昇が今までシエラの事を心配しており、必死になってシエラを探していた事を、その一言で悟ったからだ。つまり、昇は妖魔であるシエラをはっきりと受け入れた証拠だと言えるだろう。

それが分っているだけにシエラは思わずにはいられなかった。先程アレッタが残していった言葉を。だからシエラは思う……。

私は……卑怯だ。アレッタの前から逃げて、昇の前から逃げて、今度はその昇に受け入れてもらおうとしてる。全部私が悪いのに、だから私は自分の存在を消すような戦いをしたのに、それなのに今

度は昇に受け入れてもらって幸せだった生活に戻ろうとしてる。私には……そんな資格は無いのに。

そんな事を思ったシエラは思わず昇の胸を強く押すと、昇の腕から逃れるように昇から離れる。そんなシエラに昇も驚きを隠せなかった。そしてシエラも何でそんな事をしたのかが分からなかった。ただ一つだけ分っている事は……今の自分が昇の傍に居る資格が無いという事だけどシエラは思い込んでいた。

だからだろう、再びシエラに近づこうとした昇に向かって叫んだのは。

「来ないでっ！」

「シエラ？」

シエラの行動に戸惑いを隠せない昇。それでも昇はシエラに近づいてシエラの手を強引に掴み取る。そしてシエラに告げるのだった。

「シエラ……帰ろう。僕たちは」

「出来ないっ！」

昇の言葉を遮ってシエラが叫ぶ。そんなシエラに昇は驚きを隠せなかった。確かにこんなシエラを見るのは昇も始めてだが、昇はまるで自分が拒絶されている事に驚いていたのだ。

今まで苦労してシエラを探していたのに、今になってシエラに拒絶されると思っていなかった昇は呆然とするばかりだ。そしてそれはシエラも同じだ。シエラも今まで何回も昇の元へ帰ろうとした。昇の気持ちを確かめようとした。けれども出来なかった。それだけの勇気を持ち合わせていなかったからだ。

それが今頃になって、さっきまで消えようと戦っていた時に限って昇は現れてしまった。アレッタによって乱された心は未だに修復される事無く、それどころか昇が現れた事によりシエラに一層その事が事実である事を確信させるのだった。

もう……昇の元へは戻れない。だって……私……自分から消えようとしてた。昇に確かめる勇気が無かったから……更に逃げようとしてた。ずるい……。私は……こんなにも卑怯。それなのに、それ

なのにっ！　今頃になって昇の元へ戻るなんて……出来るわけが無い。

そんな事を思うシエラ。やっぱりさっきまでの戦いが未だに尾を引いているようだ。それだけアレッタの言葉がシエラの言葉を掻き乱したのだろう。それだけが原因ではない。元々の原因はシエラが昇の前から逃げ出した事にある。そんなシエラだからこそ、アレッタの言葉に心を揺さぶられて、今では昇を目の前にして確かめる事が出来ないのだ。

それでも、シエラは思ってしまう。

確かに……私は昇の前から逃げ出した。でも……こうして迎えに来てくれた事は……やっぱり昇は受け入れてくれた。もう一度……元の暮らしに戻れるの……戻りたい、戻りたいよ。あの生活に戻れるものなら戻りたいよ。

そんな事を思ってしまったシエラの瞳から自然と涙が流れ出た。このまま昇と一緒に行けば皆が待っているかもしれない。琴未はいつもようにご飯をねだるかもしれない。閃華はいつもように私と琴未のやり取りを笑って見ているかも知れない。そんな事を思ったからこそシエラは涙を止める事が出来なかった。

やっぱりシエラの本心は昇と共にあるのだ。だからこそ、このまま昇と戻れば全てが丸く収まって今までの生活に戻れるかもしれない。昇ならそうしてくれるかもしれない。シエラはそんな確信を抱けば抱くほどに、それとは反対の事を思ってしまう。

けど……私はまた逃げようとした。またアレッタと昇の前から逃げようとした。今度は消えて永遠に逃げようとした。そんな私が……何事も無かったように戻って許されるの？　許されるわけが無い。こんな卑怯者を……誰が許してくれるというの。そんな事を思ってしまうシエラ。

結局はシエラの中で二つの気持ちが葛藤しているのである。そんな二つの気持ちに揺り動かされながら、シエラは手から微かに感じ

る昇の温もりを確かめると自然と昇に向かって言葉が出た。
「昇、昇は私が必要？　私が昇の剣だから、私が昇の為に戦うから、だから昇は私を受け入れたの？　私が未だに必要だから……私を探してたの？」
　そんな事を自然と尋ねてしまったシエラは思わず自分でも驚いていた。なんでこんな質問をしたのかすら自分では分からない。けどその質問はシエラが一番昇に尋ねたい質問だった。昇が必要としてくれるなら、シエラにはまだ昇の傍に居られる理由があるからとシエラは無理矢理自分自身を納得させる事にした。
　そして昇は優しい笑みを浮かべたままシエラの質問に答えてきた。
「その質問は今までも何度かしてきたよね。僕はその質問になんて答えれば良いのか、ずっと分からなかったけど、シエラが居なかったここ数日でやっと分かったよ。だからはっきりと告げるよ。その質問の答えを」
　昇がそんな言葉を掛けるとシエラは顔を伏せながら頷いた。シエラも覚悟を決めたようだ。昇がどんな答えを返して来ても、決して今度は逃げないと、今度こそは受け止めると。だからシエラは空いている手を思いっきり握り締めて昇の言葉を待つ。そんなシエラにはっきりと昇は告げた。
「僕はシエラが必要だった訳じゃない。確かに騒がしい毎日で僕もいろいろと迷惑を掛けられた事もあるけど。それを含めて僕は思うんだ」
　昇がそこまでの言葉を掛けるとシエラは昇の掴んだ手を強引に振り払うように大きく振り上げた。その事によって強制的にシエラと昇の手が離れる。シエラと昇の目にはその光景がスローモーションのように映った。
　それはそうだ。昇に必要じゃないと言われた時点でシエラには昇の傍に居る理由が無くなったのだから。だから昇の言葉を最後まで聞く事に耐えられずに、昇の手を振り払ったのだ。
　そんなシエラに昇は驚きの眼差しを送りながらも、自分から離れ

るシエラを見詰める。シエラの心はすでに何かを決意したかのように固まっていた。確かに昇はシエラを妖魔だと知っても受け入れてくれたのは確かだ。

けど昇はシエラの存在自体を必要無いと言ったのだ。それはシエラが妖魔で無くても、シエラが傍に居る理由が無いと言ったのと同じだとシエラは思い込んだ。だからこそシエラは昇の手を振り払ってウイングクレイモアを手に持つのだった。

「シエラッ！」

シエラの行動に思いっきりシエラの名前を叫ぶ昇。けれども全ては、もう遅かった。シエラがアレッタの前から逃げ出さなければ、シエラが昇の前から逃げ出さなければ、そして永遠に逃げ出さなかったら、こんな事にはならなかっただろう。そう……全ては……もう遅かったのだ。

いきなり昇から離れてウイングクレイモアを手にするシエラを見詰めるだけの昇。そしてシエラは呟くように力を解放させるのだった。

「精界展開」

シエラを中心に光の柱が天に向かって伸びていく。その柱はそんなに高くない高度で留まると今度は昇達を包み込むように広がって行き、世界は白く染まった。

「シエラッ！」

シエラの行動にもう一度シエラの名前を思いっきり叫ぶ昇。そんな昇が最後の抵抗とばかりに叫び続ける。

「シエラッ！　お願いだから僕の話を最後まで来て。僕はこんな事を望んでた訳じゃない。こんな事をしに来た訳じゃない。だからシエラ、最後まで僕に言わせてくれっ！」

そんな昇の叫びもシエラに届かないようだった。なにしろ精界が展開されて顔を始めて昇に見せたシエラの瞳には生気が宿っていなかったからだ。それは先程までアレッタと戦っていたよりも深い悲しみを秘めた瞳だった。

そんな瞳で見詰められて昇はやっと自分の間違いに気付いた。
そうか、僕の言い方が悪かったのか。だからシエラは……けどっ！　だからと言ってここで諦める訳には行かない。僕はシエラに伝えないと行けないんだ。本当に僕が思っている事をっ！　そんな決意をした昇はしっかりとシエラを見詰める。
シエラの瞳は生気が無くなったように真っ黒であり、涙を流し続けている。そして手にしたウイングクレイモアは未だにセラフィスモードが発動されたままであり、六枚の翼を生やしていた。つまりシエラは決意したのだ。昇の傍に居る理由を無くした瞬間から……永遠に逃げる事を。
そんなシエラを見て悔しそうに奥歯を噛み締める昇。どうしてこう上手く行かないんだっ！　思わずそんな事を思ってしまった。確かに昇にも落ち度はあったかもしれない。そのたった一度の落ち度がこんな事態を招き、もう戻れないかもしれない状態にまでシエラを追い込んでしまった。
そのシエラは心が凍りついたように何も思う事は無かった。すでに何かを考える事すらおっくうだった。だからせめて、最後の望みを叶える為にウイングクレイモアを振り上げるのだった。
そんなシエラを見て昇も紫黒を手に取って構えずにはいられなかった。けど昇は諦めたわけではなかった。今のシエラを見て戦闘が避けられないのだと感じ取ったのだ。だからこそ昇も決意する……シエラと戦う事を。
そんな昇が紫黒を強く握り締めながら思う。
ごめん、シエラ。僕の所為でシエラを追い込むような事をしちゃったみたいで。だからっ！　絶対に助けるよ。今度こそ……本当に迎えに行くよ。もう一度繋いだ手を離さない為にっ！　そんな事を思う昇。
昇は先程の戦闘を見ていた訳ではない。だからシエラがアレッタの言葉で追い詰められた事は知らない。だけど今のシエラを見て、今のシエラが何を願っているのかがしっかりと分かった。それは昇

がしっかりとシエラを見たからだろう。今までのように誤魔化したり、はぐらかしたりする事無く。ここ数日でシエラの事をしっかりと思い出して、今のシエラを見たからこそ分かった事だ。

だからこそ昇はシエラに紫黒を向け、シエラも昇に向かってウイングクレイモアを向けるのだった。

「行くよ、シエラ」

今度こそ……全部受け止めてあげるから。

昇が紫黒の引き金を引いて銃弾が豪雨のようにシエラに向かって行く。そんな昇の攻撃に対してシエラは六枚の翼で一気に上昇すると、そのまま空を翔けながら昇に向かって急降下してくる。それと同時にウイングクレイモアが振られる。

そんなシエラの攻撃に昇は横に跳ぶ……とは言えないまでに無様な格好で横に避ける事に成功した。そんな昇がすぐに立ち上がって空を見上げると、そこにはすでに空中に戻っているシエラの姿があった。

前にシエラに特訓してもらった事があるけど……今のシエラはその倍、ううん、比べようが無いほどに早い。シエラのスピードにそんな事を思ってしまう昇。確かに昇はシエラのスピードがどれぐらいかは知っていたが、今のシエラが出しているスピードは今までに昇が見たことが無いほど早かった。

つまり今のシエラは先程の戦闘と同様に自分の生命力を戦闘力に上乗せしてスピードを上げている状態にある。そんなシエラに昇は驚きながらも決断する。こうなったら使うしかないかな。エーライカーの応用版を。そんな決断を下す昇はシエラが次に攻撃をしてくる前に、シエラが攻撃できないように手だけは打っておく。

「サンライトシュート、ブレイクッ！」

紫黒の銃口から発射された銃弾は飛び出すとすぐに爆発、いや、発光した。昇を包み込むように強い光がシエラの視界を遮る。通常の閃光弾よりもかなり強い輝きを放ち続けるサンライトシュートの前にさすがのシエラも攻撃する事が出来ずに、なんとか腕で光を目

に入れないようにするのが精一杯だ。
その光続ける輝きの中で昇は精神を集中させると、昇にだけしか見えない足元の暗闇に精神を沈める。そして暗闇の底に足を付けた昇は自分の胸に手を当てた。そして……それ以上は何もしなかった。
確かにここから自分に力を流し込めばエーライカーを発動出来て、今のシエラにも充分に対抗できるだろう。けれども昇の目的はシエラを倒す事じゃない。目的が別にあるからこそ、昇はエーライカーを発動させる事無く。自分の胸に手を当てたまま意識を浮上させる。
その頃には先程放ったサンライトシュートの光も弱まっており、シエラも昇の姿を捉えているようだ。そんなシエラが昇に攻撃するためにウイングクレイモアを振り上げる。それを見た昇はすぐに力を発動させるのだった。
「紫黒、バーションソニックッ！」
二丁拳銃である紫黒が光に包まれると、紫黒を包んでいた光は一瞬で砕け散った。けれども紫黒の形は変わっており、まるで拳銃に翼をあしらったような造形が追加されていた。そんな紫黒をすぐに構えてシエラに照準を合わせる。そしてシエラが動く前に昇が引き金を引いた。
どうやらシエラは自分のスピードなら一瞬で昇の前に行く事が可能なだけに多少油断していたようだ。まあ、今のシエラが出せるスピードなら昇の弾丸を避ける事なんて簡単だろう。バージョンソニックを出す前なら。
「ヘリオスシュートッ！」
紫黒からそれぞれ一発ずつ、二発の弾丸が発射される。そして発射された弾丸は一瞬にしてシエラの元へ到達しようとしていた。
これこそがバージョンソニックの力である。つまりバーションソニックとは弾丸のスピードを飛躍的に上げる事が出来るのだ。
通常のエーライカーでもこれぐらいは出来るのだが、なにしろエーライカーはその副作用が強すぎて今の昇では到底操りきれる物ではない。それにエーライカーの威力は強すぎる。それだと昇の目的

が達成できないために、昇はこんな手段に打って出たのだ。
ちなみにエーライカーとバージョンソニックの違いは力の使い方だけだ。エーライカーは昇自身に力を流し込む事で限界を超えて全体の力を飛躍的にアップする技だが、バージョンソニックは力を流し込む場所を特定する事で、昇に掛かる負担を無くす事が出来る。
例えるならエーライカーは身体全体に力を入れ続けるようなもので、バージョンソニックは力瘤を作り続けるのと同じだ。つまり力を使う場所を一箇所に集中させる事で昇は体に掛かる負担を無くす事に成功したのだ。
けれどもバージョンソニックも万能ではない。スピードを上げた分だけに威力は落ちている。つまりスピードは上がったが破壊力は落ちているのである。けれども今のシエラに対抗するならバーションソニックを使うしかなかったのも確かな事だ。バージョンソニックのスピードでなければシエラを捉える事なんて出来ないからだ。
それを証明するかのように昇の放った弾丸は一瞬でシエラに到達するが、シエラもスピードだけでなく反射速度も上がっている状態である。だから一瞬でシエラの元に到達したヘリオスシュートを避ける事は簡単なのだが、昇が放ったヘリオスシュートはシエラの横を通り過ぎると、小さく円を描いて再びシエラに向かっていくのだった。
そう、昇の放ったヘリオスシュートは追尾弾である。だから一度放てば相手に当たるまでか、弾丸の力が消費し尽くされるまで相手を追い続けるのである。
そんなヘリオスシュートをシエラは数回避けると、準備が整ったかのようにウイングクレイモアを振るうとヘリオスシュートを二つとも一気に叩き落したのである。シエラがヘリオスシュートを落とすまでは数秒だが、その数秒の間だけはシエラは昇を見てなかったのは確かだ。だから昇の姿を確認するためにシエラは地上に目を向けると、そこには昇の姿は無かった。
「フォースバスターッ！」

突如として後ろから聞こえてきた声にシエラは振り向くと、そこには昇が放った弾丸が目の前まで迫ってきているのを確認した。どうやら昇はあの数秒の間にシエラの後ろに回り込んだようだ。そして砲撃とも言えるフォースバスターを放ったのだ。

けれどもフォースバスターはシエラに当たった訳ではない。今のシエラは当たる前に確認できれば避ける事は可能だ。それがバージョンソニックで加速された砲撃であっても同じ事だ。

シエラは急降下してフォースバスターを避けるとそのまま地上付近まで降下して、地上すれすれで九十度回転して昇に向かって一気に突き進む。そんなシエラに昇はもう一方の紫黒を向ける。

紫黒は二丁拳銃である。だから先程の攻撃で一つがすぐに使えなくても、もう一つはすぐに使えるという訳だ。そしてシエラの反撃を予想していた昇は照準を正確に合わせる事無く、適当にシエラに向けて再びフォースバスターを放つ。

どうやら昇は力を溜め込んでいたようで、先程よりも大きなフォースバスターが一瞬にしてシエラの目の前に迫る。さすがにこれだけの大きさならシエラも方向転換をしなくてはいけないと昇は読んだのだろう。

けれどもシエラのスピードと反射速度は昇が思っているよりも上であり、シエラは身体を捻るとフォースバスターに背中を向ける形でギリギリの間だけを空けて避けながら一気に昇へと迫っていった。

さすがにそんな避け方をしてくるとは思ってなかった昇はすぐにフォースバスターをキャンセルすると迫ってくるシエラに備えた。けれども昇がシエラを確認した時には、シエラは昇の目の前で空中に浮いており、ウイングクレイモアを振り上げていた。

昇は咄嗟に紫黒を交差させて防御の姿勢を取る。これでウイングクレイモアが振り下ろされても何とか耐える事が出来るだろう。けれども今のシエラは昇の行動を見てから動きを変えても充分なほどのスピードを持っていた。

弾き飛ばされる昇は何が起こったのかはすぐには分からなかった。

ただ飛ばされていく中でシエラがウイングクレイモアを横に振り終わった姿を目にして、やっと状況が分かった。つまりシエラはウイングクレイモアを振り下ろすのではなく、咄嗟にその場で一回転しながらウイングクレイモアを振り下ろして行き、羽が生えている横の部分で昇を叩き飛ばしたのだ。

けれどもシエラの攻撃はそれで終わらなかった。シエラは六枚を翼を一気に羽ばたかせると、その場から急発進する。そして未だに弾き飛ばされている昇に追い付くと、そのまま昇の前にウイングクレイモアを突き出して、六枚の翼を大きく広げた。

「フルフェザーショット」

六枚の翼から羽が弾丸となって一気に昇に降り注ぐ。まさかこんな追撃までやってくると思ってなかった昇は咄嗟に体を丸める事しか出来ずに、シエラの攻撃をそのまま直撃してしまった。さすがにセラフィスモードのフルフェザーショットである。その破壊力は凄まじく、昇は土煙が上がる中に叩き込まれ。シエラは逸早く、その場から脱出すると昇から距離を置いたところで地面から軽く浮いた状態で止まる。

さすがはシエラといったところだろう。これだけの攻撃を数秒の間にやってのけたのだから、シエラが出しているスピードはかなりの物だ。昇はその事を実感しながも今のシエラにどう対抗したら良いのか、傷ついた身体を無理矢理起こしながら、土煙の中で考えていた。

さすがにシエラだな。やっぱりスピード勝負だと敵わないか。でも……あのシエラのスピードは今までに無いほどまでに早い。シエラはいったい……何をやってるんだろう。精霊の知識が乏しい昇がまさかシエラが自分の生命力を戦闘能力に上乗せしている事になんて気付きもしなかった。

まあ昇は人間だからしかたないだろう。それにこの手の説明は必ずシエラか閃華がやってくれていたので、昇は自分から精霊に付いて調べるという事はしなかったのが仇になったようだ。けれども今

のシエラが異常なのは昇にも分かっていた。それは戦闘能力が飛躍的に上がっていることだけじゃない。シエラの瞳を見れば昇にはすぐに分かる事だ。

だからこそ昇はシエラと戦う事を選んだのだ。選んだのは良いが、まさかシエラがここまで本気で更にスピードを上げてくるとは思っていなかった昇は、それでも何とかしようと頭をフル回転させるしかなかった。

とにかくシエラに攻撃を当てないと意味が無い……やるしかないかな。なにしろあのスピードだから……しかたないか。というか、僕にはもうちゅうちょしている時間は無いんだ。なにしろシエラに届けないといけない言葉があるんだから、それを伝えるためなら……どんな事でもやらないといけないんだっ！

覚悟を決めた昇は土煙が晴れると真っ直ぐにシエラを見詰める。シエラは相変わらず無表情で、その瞳には生気が無く深い悲しみを秘めており、涙を流し続けている。そんなシエラは大地に足を付ける事無く、翼を軽く羽ばたかせて空中に浮いている。だから昇がどんな攻撃をしかけてもすぐに反撃できる事は昇にもすぐに分かった。

だからこそ昇は別の手段に打って出るのだった。

「紫黒、バージョンブレイク」

呟くように昇がその言葉を口にすると再び紫黒は光に包まれて形状を変える。今度は明らかに銃口が広くなっており、重さを感じさせるような形状へと変化していた。どうやらこれがスピードでは敵わないと思った昇が考え出した手段なのだろう。

そんな紫黒を握り締めながら昇はシエラに向かって話しかける。けれども昇の声が小さいのか、それともすでにシエラには言葉は届かないのか。どちらにしても、それは昇の独り言に終わるのだが、昇はその言葉を言わずにはいられなかった。

「シエラ……シエラはずっと僕に必要とされる事に意味を求めてたけど。そんな必要は無いんだよ。シエラは僕達の仲間で、僕にとっては……」

昇はあえてそれ以上の言葉は言わなかった。それから先の言葉はシエラにしっかりと伝えないといけない言葉だからだ。だからこそ昇は今のシエラをしっかりと見詰める。そしてしっかりと心に刻んだ。

もう二度と……シエラに一線を引かせるような事はしない。ううん、それは僕にだけじゃない。琴未にもミリアにも閃華にも、誰にもシエラが一線を引くような真似はさせない。シエラが妖魔なんて関係無い。僕にとってシエラはシエラだから。今度こそシエラの心に決着を付けて全部終わらせてやるっ！　絶対にっ！

そんな気持ちをしっかりと心に刻んだ昇は先程とはまるで別人のような真剣な眼差しでシエラをしっかりと見詰めると紫黒をシエラに向ける。それと同時にシエラは一気に上昇する。どうやら昇が攻撃してくると思ったのだろう。けれども昇は攻撃する事無く、威嚇だけに留めた。

それはこの形状をしている紫黒ではシエラのスピードに対抗しきれないからだ。だからこそ昇は確実に攻撃を決めるためのタイミングを計る。それこそがシエラを取り戻す、ただ唯一の方法だと信じて。

だから今度こそは自分の気持ちをはっきりと告げて、シエラの手を離さない為に……今はシエラをしっかりと見据えて戦う昇であった。

第百十二話　すれ違いからの戦い（後書き）

さぁ～て、いよいよ始まりましたね。これが私が今まで隠してきた白キ翼編のメインバトル。そう、昇対シエラの戦いですっ！！！

……まあ、この二人を戦わせようとは考えていたんですけど、戦いの内容は相変わらずその場任せですね～。そのため、今回は文章の密度が少しだけ少なくなりました。

……いや、本当だよ。だって、文字数を計ってみたらいつもより千字以上少なかったもん。だから文章の密度が少なくなって、ページ数も減った……と思うよ。まあ、それだけお楽しみは次のお話で～、という事になりますかね。

……まあ、次の戦闘内容なんて未だに考えてないんだけどね……てへっ。

……誰か巫女服を着た美少女をここに連れて来て下さいっ！！！　はい、そこの方、いきなり何を言い出すんだって引かないように。……いやね、巫女属性を有している者として、最近は巫女成分が足りないと感じてるんですよ。だからっ！！！　是非とも私の元に美少女巫女をっ！！！

はい、ごめんなさい。つい耐え切れずにやってしまいました。でも、反省なんてしないもん、だって巫女さんが近くに居て欲しいの本心だもん、それが巫女属性を有している者の宿命なんだもん。……まあ、三回ほど拗ねてみたので少しは気が晴れましたが……やっぱり美少女の巫女さんが見たい（もう末期症状ですね）

まあ、そんな事は置いておいて、本編に……触れませんっ！！！

いや、だって、今回は次回のバトルに繋げる話だもん。だから特に触れるところは無いかな～とか思っただけですけどね。

さてさて、そろそろ戯言のネタが尽きてきたので締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちして

おります。
以上、ご職業はと聞かれたら、はっきりと『世捨て人』と答える葵夢幻でした。

第百十三話　昇対シエラ　そして最後の……

昇の弾丸を警戒するかのように空を翔けるシエラ。先程のバージョンソニックで放った弾丸のスピードを垣間見ればシエラが警戒するのも分かる。だが今現在、昇の手に握られている二丁拳銃の紫黒はバーションを変えて、バーションブレイクという形態に変化してる。そんな変化に気付いていないからこそ、シエラは昇の弾丸が先程のようにスピードを持っているものだと思って警戒するように飛んでいるのだ。

昇はバージョンブレイクで重さが増したような紫黒をシエラに向けるが、実際に重さが増しているわけではない。そういう形状になっただけで重さは代わらない。そこが精霊武具同様にアルマセットで作り出した武器の利点と言えるべきだろう。

しかも今の昇はエーライカーの応用技で紫黒をいろいろな形で様々な攻撃方法が取れる。昇が手にしているバージョンブレイクもその一つだ。バージョンブレイクは銃口が遠めで見ても分かるほどに銃口が広がっている。最早、銃口というよりも大砲の発射口のような広さを持っている。

そしてそんな銃口に合わせるかのように紫黒も重厚な形状に変わっており、昇の腕に絡みつくような形をしていた。そんな紫黒を昇はシエラに照準を合わせると一気に引き金を引く。そして銃口からは無属性の銃弾が飛び出すのだが、最早銃弾とは言えないエネルギーレーザーのような物が紫黒からシエラに向かって飛び出していった。

これがバーションブレイクの力なのだろう。銃弾では無く砲撃のようなレーザーを打ち出すことが出来るのがバージョンブレイクの特徴だ。その分だけ破壊力は増すが、バージョンソニックのようにスピードは無かった。

だからシエラが紫黒から放たれた砲撃を避けるのは簡単だったが、

昇はそんな砲撃をマシンガンのようなスピードで連射していたのだ。確かに一つ一つのスピードはシエラのスピードには敵わないが、一つの砲弾といえるレーザーが大きく、そんな物が連射されているのだから。シエラは基本的には避けながらも昇との距離を詰めていく。

さすがのシエラのそんな巨大な物が連射されれば一気に距離を詰めるという事が出来ないのだろう。昇もそう考えたからこそ、連射してシエラが一気に距離を詰めてくるのを封じたのだが、昇が考えた作戦の意図は更に先を読んでの事だ。

昇の砲撃を避けながら距離を縮めてくるシエラ。そんなシエラとの距離を測りながら昇は決断する。今だっ！　昇はそんな決断を下すと砲撃を止めた。さすがの昇もこんな力を連射し続けるのには限界があるし、何時までも当たらない攻撃を続けていても意味は無い。昇はシエラが一気に距離を詰めてくるのを防げさえすればよかったのだ。

昇の攻撃が止まった事でシエラが一気に昇に接近する。シエラも昇の攻撃から見て、そんなに長続きはしないだろうと読んだからこそ、一気に距離を詰める事無く。昇に攻撃をさせて昇の体力を消費させようとしていたのだ。つまり昇の攻撃が限界に来るのを待ちながら、少しずつ距離を詰めていたのだ。

そしてシエラは予想通りに昇の攻撃が止まったのを確認するのと同時に一気に昇との距離を詰めた。そして昇もそんなシエラに対してすぐに行動を開始する。

昇の目ではシエラのスピードを捉えきれないのは先程の戦闘ですでに分っている。けれども昇はすぐに紫黒の片方を頭の上に上げて、思いっきり力を入れると、その先にはすでにウイングクレイモアを振り上げたシエラの姿を捉えた。どうやらシエラはあの一瞬で昇に接近してすぐにウイングクレイモアを振り上げたようだ。

そして鳴り響く金属音。それと同時に昇の腕にはもの凄い重圧と痛みが伝わってきた。どうやらシエラのウイングクレイモアを受け止める事には成功したものの、その衝撃までは和らげる事は出来な

かったようだ。
　けれども昇には痛がっている余裕も許されなかった。なにしろこの瞬間こそがシエラに攻撃を入れる唯一の機会なのだから。シエラの攻撃を受け止めて、再びシエラが離れる刹那の瞬間。その瞬間だけはシエラが無防備になる。
　昇はシエラとの特訓でその事を知っていたからこそ、その刹那の瞬間に全てを賭けて反撃に出るのだ。
　既にシエラに向かって紫黒を突き出している時間は無い。だから銃口だけをシエラに向けるとシエラの攻撃を防いだ自分の腕に当たらない角度で昇は紫黒の引き金を引く。その頃にはシエラも昇に攻撃が防がれて、反撃前に離脱しようとしている時だった。
　すでに紫黒から発射された砲撃はシエラに向かって短い距離を一気に突き進む。さすがのシエラも昇がこんな反撃をしてくるとは思ってもみなかっただろう。しかも反撃をした方の紫黒は下から上に撃ち出していたので、完全にシエラの死角を突いている。だからシエラが昇の反撃に気付いた時にはすでに遅かった。
　それでもシエラは無理矢理身体を捻ると、どうにかして身体を無理矢理移動させる。けれども、死角からのほぼ零距離攻撃である。いくらシエラのスピードが早いからと言っても、この距離で完全に避ける事は不可能だった。
　シエラの身体を半分ほど昇が放った砲撃に飲み込まれるのと同時にシエラの身体も砲撃に沿って吹き飛ばされる。この反撃こそが昇がシエラのスピードに対抗して考え付いた作戦であり、今回は見事に昇の作戦が成功したみたいでシエラは吹き飛ばされていく。
　吹き飛ばされたシエラは未だに体勢を立て直す事が出来ずに空中に舞い上がっている。そんな好機を昇が見逃すはずも無く、素早く紫黒を並べてシエラに照準を合わせると一気に両方の引き金を引く。
「ダブルフォースバスターッ！」
　バージョンブレイクで広くなった銃口から、更に二つ重ねたフォースバスターが打ち出されたのである。その大きさも威力も通常の

フォースバスターをはるかに上回っていた。通常のダブルフォースバスターでも威力は充分にある。そのうえ、今はバージョンブレイクで更に威力を上げている状態だ。そんな物がシエラに直撃すればシエラが落ちるのは確実だろう。

けれどもシエラも自分の生命力を戦闘能力に変えている状態にある。だからその回復速度も増しており、更には姿勢制御などの補助機能も上がっている。だから昇の攻撃がシエラに届く前にシエラは離脱する事が出来た。

そんなシエラが居た地点をダブルフォースバスターが通過して行く。何かに当たった気配も無く、昇も手応えを感じていないからこそ、シエラはダブルフォースバスターを避けた事をすぐに悟ってシエラの姿を探す。だがその行為こそ昇が油断していた証拠だと言えるだろう。

確かにシエラに軽くではあるが一撃を入れる事に成功した。つまりはダメージを負ったシエラがすぐに反撃に転じるとは昇は思いもしなかった事だ。要するにシエラからの反撃は無いと昇は勝手に判断していたのだが、突如として横から感じた殺気と鋭い気配に昇は反射的に紫黒をそちらに向ける。

それと同時に昇は紫黒もろとも吹き飛ばされていた。昇は吹き飛ばされる中でシエラがウイングクレイモアを振るっていた事に気付いた。その事で自分の考えが甘かった事を実感せずにはいられなかった。

なにしろシエラはダメージを喰らった直後の攻撃を避けたのだから。今までのシエラならそのまま空中でしっかりと体勢を立て直して、すぐに反撃に転じる事はなかっただろう。けれども今のシエラは違う。例えダメージを負おうとも戦闘を続行する。それがシエラの望みであり、最終目標なのだから。

そんなシエラの決意を改めて実感する昇。シエラ……そこまでして……けど、シエラの思い通りにはさせない。これは僕のわがままかも知れないけど、僕はっ！

シエラの決意に昇も決意を強くすると、このままバージョンブレイクでも通用しない事を実感していた。確かにバージョンブレイクでの零距離攻撃なら、今度こそはシエラを確実に捉えて、ダメージを負わせる事が出来るかもしれない。けれどもシエラも先程の反撃を教訓にそう簡単には何度も通用しないと昇は実感せざる得なかった。

この戦術も通じないとなると……やるしかないか。今の僕にはそれが通じないと、次はエーライカーしかない。だから次の手段で絶対に決めるしかないんだっ！　そんな決意をするのと共に昇は吹き飛ばされている中で体勢を立て直し、何とか足から着地するが、その頃には既にシエラが目の前に迫っていた。どうやらこのまま昇に反撃をさせる事無く、攻撃を続けてくるようだ。

そうなると昇も今のバージョンブレイクで対応し続けなければいけない。だから昇も先程のように片方の紫黒で何とかシエラのウイングクレイモアを受け止めると、片方の紫黒でシエラに向かって砲撃を撃ち出すが、そんな手に何度も引っ掛かるほどシエラが甘くない事は先程の事で承知している。

シエラはウイングクレイモアを軸にするとそのまま身体を回転させて、見事に昇の撃ち出した砲撃を避けて見せたのだ。しかも、それだけではない。シエラは身体を回転させた事を良い事に、そのままウイングクレイモアも動かして行き、勢いをつけて昇に連撃を入れてきたのだ。

さすがの昇としても何度も今のウイングクレイモアを受け止めるのは困難だった。だからシエラが離れた一瞬の隙を付いて、シエラから離れるのだが、なにしろウイングクレイモアの間合いはかなり広い。だから昇はシエラの反撃を避けきる事が出来ずに、エレメンタルジャケットである黒いコートの八咫烏を切り裂かれてしまった。とは言っても切り裂かれたのは裾の部分であり、昇の身体にはダメージを受ける事が無かった。

それでも八咫烏を切り裂いた事には変わりない。昇の防具とも言

える八咫烏は黒いコートのような形状で防具らしい物はまったく付けてないが、それだけに八咫烏は相手の攻撃を弾く機能を持っているのだが、シエラのウイングクレイモアはそんな八咫烏の機能を押し殺して八咫烏を斬り裂いたのである。もしこれが昇の身体を少しでもかすめていれば昇自身もかすり傷程度では済まなかっただろう。

切り裂かれた八咫烏を見て、昇はそんな事を実感するがためらっている暇は無かった。なにしろ既に体勢を入れ替えたシエラが再び攻撃に入ろうとしているのだから。そんなシエラを前にして昇も決断を余儀なくされた。くっ、こうなったらしかたないかっ！　昇はそんな決断を下すとすぐに実行する。

再びシエラのウイングクレイモアを受け止めに入る昇。今度は両方の紫黒を突き出して、シエラがどんな方向から斬りかかっても受け止められるような姿勢を作る。そんな昇を見てシエラはウイングクレイモアを真上に構えなおすと、そのまま一気に振り下ろした。昇が防御に徹すると判断したシエラは、その防御ごと潰すために一番威力が出る振り下ろしに攻撃を切り替えてきたようだ。

それはそうだろう。なにしろウイングクレイモアはその重量からしても振り下ろしただけで、相当の威力が出る。そこにシエラの力も加わり、更に翼の属性でスピードを上げて振り下ろすのである。その破壊力はシエラが繰り出すどんな攻撃よりも一番破壊力が出る攻撃方法だろう。

それでも昇はシエラの攻撃に対して紫黒を十字に組む事により、何とか攻撃に耐えようとする。そう、昇はこの一撃さえしのげば次に出る手はあると確信しているからこそ、ここはあえて防御に徹する事でシエラの攻撃を受け止めに入ったのだ。

そしてウイングクレイモアが最高速で振り下ろされると、もの凄い衝撃が紫黒を通して昇にも伝わり、それだけは無く昇ごと地面をへこませるほど威力を出して見せた。そんな中でも昇は何とかウイングクレイモアを止める事には成功した。後はシエラが離脱前に反撃に出るだけだ。

昇はすぐに片方の紫黒をウイングクレイモアに密着させる。つまり紫黒の銃口とウイングクレイモアの距離がまったく無くなった状態になった訳だ。そんな状態で昇は引き金を引いて、一気に無属性の砲撃を撃ち出す。

「フォースバスターッ！」

もちろんそんな事をすればシエラに直撃する事は確実だろうが、昇もただでは済まない事は承知の上だ。けれども今のシエラに対して次なる手段に出るためには、どうしても時間がいる。だからこそ、昇はその時間を作る為にあえて自爆に近い攻撃をせざる得なかったのだ。

そしてウイングクレイモアと密着状態にある紫黒から撃ち出されたフォースバスターは、ウイングクレイモアに切り裂かれる形でシエラに直撃して、更に密着した部分に放たれたフォースバスターは臨界点を超えると一気に爆発を引き起こす。

そのため、昇もシエラも爆発によって吹き飛ばされる。シエラとしてもまさか昇がこのような反撃に出るとは思っていなかったために直撃を避ける事が出来なかった。一方の昇はこの手段しか無いと思ったからこそ、フォースバスターを放った瞬間に八咫烏に向かって一気に力を流し込むと八咫烏の防御力を上げていた。だから昇はダメージを軽減できた。

それでも零距離での爆発である。昇自身も吹き飛ばされて当たり前だ。けれども少しだけダメージを緩和できたのはシエラとの違いと言えるだろう。けれどもシエラは生命力を戦闘力に変えている状態である。だから回復能力もはるかに上がっており、その程度の傷なら少しだけ時間が稼げれば問題なく回復が出来るからこそ、あえてシエラはそれ以上の攻撃に出る事無く。昇の動向を見守る事にした。

だが未だに爆発により煙が立ち込めていて、その反対側に居る昇の姿を捉える事が出来ない。だからこそシエラはあえて動かない事を選択した。ここで動き回ってもあまり意味は無いし、回復を優先

させたいシエラとしては、この状況は返ってありがたいと言える状況だろう。

そしてそれは、この状況を作り出した昇も同じだった。零距離での爆発によるダメージ、そして爆発のダメージ回復と爆煙による視界封鎖でのシエラの行動停止。どれもが昇の計算して作り上げた状況だ。昇はその間に次の手に入るために準備に取り掛かる。

よしっ、これでシエラは少しだけ動けないはずだ。その間にこっちはエーライカーの応用で一気にレベル2に持って行く。そんな事を考えた昇はすぐに行動を開始する。とは言っても何かを動かすわけではない。エーライカーの応用で自分自身に繋がっている状態に、少しだけ力を流し込むだけだ。

どうやら昇は少しだけエーライカーをコントロール出来るようにはなっていたようだ。だからエーライカーのように無尽蔵に力を流し込むのではなく、ほんの少しだけ力を自分自身に流し込んだ。……んっ、ここら辺が限界かな。自分自身に力を流し込んで、流れる力がギリギリコントロールできる部分で昇は自分自身に力を流し込むのと止めた。

その力はエーライカーに比べれば、ほとんど通常とは変わりない状態であり、エーライカーの状態に比べれば足元にも及ばないだろう。けれども今の昇にとってはそれだけの力をコントロールするのが限界であり、それだけ出来れば充分だった。

そして昇は未だに爆煙が上がっている事を確認する。爆煙は大分薄くなっており、もう少し時間が経てば完全に晴れる事は確実だろうと感じた昇は、すぐにでも行動に移さないとシエラに先手を取られてそれどころでは無いと肌で感じていた。だからこそ昇はすぐに行動を開始する。

「紫黒、レベル2、バージョンソニックウイングッ！」

先程と同じように紫黒が一瞬の光に包まれると紫黒は再び形状を変えた。その形状は先程のバージョンソニックと似ているが、大きく違う点が一つだけある。それは紫黒にあしらったようについてい

る翼が大きくなり、シエラのウイングクレイモアに生えている翼のように動いているという事だ。

そう、これはシエラのウイングクレイモアをヒントに昇が作り出した新たなる紫黒の形状だ。その証拠として紫黒から生えている翼は小さくて真っ黒な翼は明らかに羽ばたくように動いているのだから。

そして昇のバージョンソニックウイングが完成する頃には爆煙もすっかり晴れてお互いの姿をしっかり捉える事が出来るほどに、昇もシエラも視線を交ぜ合わせていた。昇は鋭い眼差しでしっかりとシエラを捉えているが、シエラは相変わらず生気の無い瞳から涙を流し続けている。それでもシエラが戦闘を停止する気は無い事はすぐに分かった。

なにしろシエラは昇の姿を確認するとすぐにウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて軽く宙に浮くからだ。それは先程までの戦闘体勢と同じであり、これで昇がどんな攻撃をしてきても、すぐに対応できるようにしているのは確かな事だと昇にもしっかりと分かった。

そんなシエラに向かって昇は紫黒を一瞬で向けると発砲する。昇が紫黒をシエラに向けて発砲するまでコンマ数秒しかなかっただろう。つまり昇が紫黒を上げて照準を合わせて発砲するまで常人では見えないほどのスピードでやってのけたのだ。

けれども翼の属性を最大限に活かしているシエラにとっては昇のスピードに驚きはしたものの脅威に感じるほどではなかった。だからシエラは昇の攻撃を避けるのと同時に一気に上昇する。そうして距離を取れば昇の攻撃が届かないとシエラは今までの経験で知っているからだ。

そんなシエラが始めて表情を変えたのは、その時が始めてだ。それは驚愕の表情と言っていいだろう。なにしろシエラが上昇して昇と距離を空けたというのに、その昇も一気に上昇しており、空中でシエラに向かって紫黒を向けていたからだ。

まさか昇が空中戦を挑んでくるとは思ってなかった。いや、その

前でそんな事が出来るとは思ってなかったシエラは驚きを隠せなかった。その間にも昇はシエラに向かって攻撃を行う。

「フォースバスターッ！」

銃弾ではなく砲撃に近い攻撃を行った昇。そんな昇の攻撃にシエラは驚きを隠せなかった。なにしろ昇が放ったフォースバスターは先程のバージョンソニックよりもスピードが増していたからだ。それでも翼の属性を有しているシエラにとっては避けられないスピードではないが、すぐに反撃に持っていける事は出来なかった。

それは昇の攻撃がそれだけ早かった訳ではない。シエラが驚いて少しだけ動きを鈍くさせていたからだ。けれどもシエラは昇の紫黒を見るとすぐに昇がやっている事が分かった。どうやらシエラも昇のバージョンソニックウイングが自分のウイングクレイモアをヒントに作り出した事を察したらしい。

そんなシエラに昇は再びフォースバスターを放つが、今度はシエラも冷静に対処する事が出来たので、フォースバスターを避けながら一気に昇に向かって距離を詰めるが、昇はフォースバスターをキャンセルするとすぐに紫黒の黒い翼を一気に羽ばたかせる。

そして一気にシエラに向かって距離を詰めると、シエラがウイングクレイモアを振るう前に昇は一気にシエラの横を翔け抜けた。その事にさすがのシエラも驚きを隠せないと言った表情をあらわにしている。そして昇はシエラから距離を取った事を確認すると再び紫黒をシエラに向けるのだった。

そう、これこそがバージョンソニックウイングにおける最大の特徴である。バージョンソニックウイングは昇に空中戦をさせるために飛ぶ能力を与えるだけではない。翼の属性には及ばないが、昇自身の移動スピードも飛躍的に上げる事が出来るのである。もちろん、空中に浮いているのだから空中に限られているのだが、今のシエラにとっては有効である事には間違いない。

昇もシエラとの戦いを予想してこのような技を作り出したのではない。昇の特徴から言って遠距離攻撃が主流であるから、どうして

も相手との距離を取らないといけない。そこで昇はシエラの攻撃方法を参考にして、このバージョンソニックウイングを生み出したのだ。

確かにこの方法なら相手から距離を詰められても、またすぐに相手との距離を開けて遠距離に持って行くことが出来る。つまり昇が主流としている遠距離攻撃を最大限に活かす方法としてはバージョンソニックウイングは適しているのである。

そのうえ、相手が翼の属性を有していない時には上空から銃撃が出来る。やる気になれば絨毯爆撃のような攻撃も出来るだろう。昇はそう考えたからこそ、このようなバージョンソニックウイングを作り出したのだ。

それをまさかシエラに対して使う事になるとは昇も思ってもいなかっただろう。だが今のシエラを止めて、再び迎えに行くにはこれを使うしかないと決めた昇はこのバージョンソニックウイングに頼るしかなかったのだ。

シエラとしても、まさか昇がそんな隠し球を持っているとは思っても見なかったので驚きを隠せないようだ。けれども先程の昇を見て気付いた事があった。それはスピードでは、やはり翼の属性には及ばないという事だ。

確かに昇のバージョンソニックウイングもそれなりのスピードで昇を移動させる事が出来るが、やっぱり翼の属性や縮地の属性と言ったスピードを得意としている属性を前にしては、スピードに関しては及ばないようだ。

だからこそシエラはあえて戦術を変える事無く、再び昇に向かって突っ込んでいく。昇もそんなシエラに対して後退しながら銃弾を豪雨のように浴びせるが、今のシエラにとっては昇の攻撃を避けながら進む事は何とか出来る。昇が放っている銃弾のスピードも増しているのも確かだが、今のシエラにとっては決して避けられないスピードでは無いようだ。

そして何とか昇をウイングクレイモアの間合いに入れようとする

のだが、昇はシエラがある程度近づいてくると、一気に反転してシエラに向かって突っ込んで行き、再びシエラの横を通過して再びシエラとの距離を開けるのだった。

シエラとしてもウイングクレイモアを振るうのだが、自分自身がハイスピードで進んでいる状態で昇がハイスピードで突っ込んで来るのだから、そんな昇にウイングクレイモアを当てる事は凄く困難だった。

けれどもそれ以外の戦術が思いつかないシエラはそんな攻防を何度か繰り返し、昇もウイングクレイモアに当たらないように、時々軌道を変えながらシエラの横を通過している。そのためシエラのウイングクレイモアが昇に当たる事は無く。シエラは昇に翻弄されているように見えるが昇の弾丸もシエラに当たる事は無かった。

つまり両方とも決め手となる手段が無いままに、そんな攻防を続けているわけである。けれども昇としてはある考えがあってこそ、そのような攻防を続けているのだ。そしてそれこそがシエラを連れ戻す最後の機会になる事を信じて今はそんな攻防を続ける。

そんな攻防を続けている内に昇はある事に気付いた。そう、シエラが焦り始めたように攻撃をし始めたのだ。昇はその意味にまったく気付いてはいないが、シエラの身に何かが起こっているのは感じ取っていた。

シエラも自分にはもうあまり時間が無い事を感じ始めていた。なにしろシエラは自分の生命力を戦闘力に上乗せしているのである。先程のアレッタからその状態を続けて戦っているのである。だからシエラも自分の生命力が限界に達するまで、つまり消えるまで時間が無い事をしっかりと感じ取っていたのである。だからこそ、最後は……そんな思いで昇との戦いに焦りが生じていたのだ。

そんなシエラに気付かないままに、昇としてはこの好機を付かない手は無かった。だからこそあえてシエラから距離を取り続けて弾幕を張る。そうする事でより一層シエラを心理的に追い詰める事が出来ると昇は判断したからだ。

そしてそんな昇の作戦に乗るかのようにシエラは弾幕をギリギリで回避し、時には当たりながらも昇への突撃を繰り返していたのだが、どうしても昇を捉える事が出来なかった。ウイングクレイモアを振るうたびに昇には避けられてしまうどころか、更に距離を空けられてしまう始末だ。

そんな状況に焦りを感じたシエラはもう時間が無いと悟るとここで一気に勝負に出た。

再び昇に突っ込んで行くシエラ。昇もそんなシエラに向かって弾幕を張る。そこでシエラは急停止するとウイングクレイモアを突き出して、六枚ある翼を大きく広げる。

「フルフェザーショット」

そして六枚の翼から羽が弾丸となって昇が放った弾幕を相殺する。そして昇の弾幕が一時的に消滅するとシエラは再び昇に向かって突撃する。もちろん昇も新たなる弾幕を張るが、シエラはその弾幕に当たりつつも、ダメージを感じていないかのように突撃スピードを緩める事はしなかった。

確かにバージョンソニックウイングも威力を殺してスピードを上げているから、一発のダメージはそんなに高くは無いが、それを補うために昇は数多くの弾で弾幕を張っているのだが、シエラはそんな中にあえて飛び込んでいくのである。

一発一発の威力は無いに等しいとしても、これだけの数が当たれば大ダメージになる事は確実だ。それはシエラも身体で感じている。それだけシエラの身体にダメージが残っている証拠なのだが、回復能力を最大限にまで上げる事でシエラは昇の作り出した弾幕に突っ込んで行くことが出来たのだ。

そんなシエラの行動に昇もシエラの攻撃が限界に来ていると感じ取ったのだろう。だからこそ昇もここで一気に勝負に出た。一気に突っ込んでくるシエラに対して、ここで急反転しないとウイングクレイモアを避ける事は出来ないだろう。

けれども昇は急反転する事無く、そのまま後退を続ける。そんな

事をすればシエラに追い付かれてウイングクレイモアを喰らうのは確実だが、昇は今のシエラにはそれだけの力が無いと判断したようだ。だからこそ勝負に出るためにあえて後退し続ける。

そしてシエラが昇の前まで迫ると、シエラは一気にはね上がってウイングクレイモアを振るい上げる。そんなシエラに対して昇は紫黒をシエラに向ける事無く、あえて自分の後ろに向ける。そんな無防備に近い状態の昇に向かってシエラのウイングクレイモアは振り下ろされた。

……だがシエラのウイングクレイモアは昇を斬る事は出来ずに空を斬るだけだった。そして昇はすでにシエラの背後を取っていた。

そう、昇はあえて紫黒を背後に回す事によって移動スピードを瞬間的に上げたのだ。ただそれだけではない。シエラがその攻撃に全てを賭けて勝負に出たと感じたからこそ、昇はあえてシエラに攻撃をさせたのだ。

全てを賭けての一撃だ。当然次の手などは考えていないはずだ。昇はそう判断したからこそ、あえてシエラに攻撃させて、シエラの背後を取ったのだ。

そして昇はシエラの背中に向けて紫黒を並べて一気に力を解き放つ。

「ダブルフォースバスター」

呟くように言った言葉と一気に引かれるトリガー。そしてダブルフォースバスターはシエラの背中を直撃するのと同時にシエラと共に地面に向かって一直線に進んで行く。ダブルフォースバスターはシエラと共に地面に着弾するとそのまま爆発を引き起こし、シエラを飲み込んで爆発と爆煙を一気に上げた。

その光景を上空で見ていた昇はシエラに直撃した手応えをしっかり感じ取っていた。だからだろう、少しだけ心配そうな顔をしているのは。けれどもこれで終わったわけではないと昇は分っている。

そう、まだ戦いは終わっていないのだ。確かに昇の攻撃はシエラに直撃した。ダメージも大きいだろう。シエラとしても次の攻撃が

最後だと分っているだろう。それは昇も同じだ。けれどもここでは終わらない事は昇もしっかりと分っていた。

だからこそ、昇は一気に下降すると、爆発地点から距離を取ったところに着地する。そして呟くように言葉を発するのだった。

「紫黒、バージョン解除」

紫黒が再び光に一瞬だけ包まれると、今度はいつもの形をした紫黒になって再び姿を現した。そして昇は紫黒を未だに爆煙が上がっている地点に向けると紫黒に力を一気に流し込む。

シエラ……これで最後だよ。もう……自分が妖魔だという事実で苦しむ事は無いから。僕の手で……今こそシエラを縛っていた束縛を解き放つっ！　だからシエラ、もう苦しむ事は無いんだ。全部……僕の手で壊してあげるから。だからシエラ、安心していいんだよ。シエラが思ったとおりの行動をしていいんだよ。今度こそ……全部受け止めて上げるからっ！

そんな事を心に思う昇は紫黒に向かって力を溜め始める。そんな紫黒の銃口は光り輝き、二つ揃った銃口の先には光り輝く光球が作り出されては圧縮されるのを繰り返していた。これはどう見ても昇がヘブンズブレイカーを撃つ前兆である。

確かにシエラに直撃を入れれ、シエラが動けるようになるまでの時間は充分にあるからヘブンズブレイカーを撃つ事は可能だろう。だが、そんな事をすればシエラは完全に生命力を使い果たし、消える事は確実だ。

昇はシエラが自分の生命力を戦闘力に上乗せしている事を知らない。昇には、その事を知る術が無いからだ。だから今のシエラにヘブンズブレイカーを入れれば確実にシエラは消えるだろう。そんな事実を知らないままに昇はヘブンズブレイカーを放つ準備をしている。

その頃シエラはやっと起き上がり、視界が悪い事から自分が未だに爆煙の中に居る事を察するのと同時にある方向から昇の巨大な力を感じた。そんな昇の力を感じてシエラは凍りついた心を溶かして、

心に思う。

……よかった……これで私は消える事が出来る。私が望んだ……昇の手で消える事が出来る。

そう、それこそがシエラが戦いを始めた理由だ。シエラは最初から昇に反抗する気も、勝つ気も無かったのだ。ただ昇の手で自分に終止符を打って欲しかったのだ。それこそが、シエラが望んだ最後のわがままと言えるだろう。だからこそシエラの瞳から流れていた涙は止まっており、今はすっきりとした笑顔をしている。

爆煙で昇にはその笑顔を見る事は出来ないだろう。けれどもシエラとしてはこれで満足なのだ。自分の最後を昇の手で決めてもらう。それこそがシエラ自身が望んだ最後の望みなのだから。その望みが叶おうとしている今では、シエラとしてはもう心残りは無い。後は昇に終止符を打ってもらうだけだ。

けれども最後まで油断しないところがシエラらしいと言えるだろう。シエラは最後の生命力でウイングクレイモアを手にする。

「セラフィスモード解除」

セラフィスモードを解除して、ウイングクレイモアは二枚の翼に戻り、通常の状態へと戻った。シエラにも分っているのだ。これ以上セラフィスモードを維持していると昇に終止符を打ってもらう前に自分自身の手で消えてしまう事を。だからこそウイングクレイモアを通常の状態に戻してしっかりと握って構える。

シエラも分っているのだ。ここで自分の本心を悟られるような行動を取れば昇はきっと攻撃を止めて、シエラに生き続ける事を望むだろうと。だからこそシエラは最後まで戦う事で昇に終止符を打ってもらうのだ。そのためにシエラはウイングクレイモアを昇の力が感じられる方に向けると爆煙が晴れるのを待つ。

その間にもシエラの心には今までの事が自然と思い浮かんでくる。

それは昇達と一緒に戦った記憶。確かに困難な闘いばかりだったが、昇がいつでもシエラの心を支えており、昇が居たからこそシエラは今まで戦ってこれたのだ。それはシエラだけではない、たぶん

琴未やミリアや閃華も同じだろう。
そしてそんな皆と過ごした時間こそが今のシエラはとても大切で、とても楽しかった時間だと改めて感じた。いつもなら感じる事の無い感情だ。自分がこれで消えると思うと、いつもは迷惑だと思っていた時間も楽しい時間だったと思えてしかたない。
そんなシエラが皆について改めて思う。
ミリア……ごめん。もう庇う事もご飯を作ってあげる事も出来ない。けど……今のミリアにはラクトリーが居るから大丈夫。これからはラクトリーの言う事をしっかりと聞いて、私が居なくても昇や皆の盾になって……。
閃華……閃華の事だから私が居なくなっても、皆をフォローして上げられる。それに私が居なくなった事も上手く埋めてあげられると思う。だからお願い、これからは……私の分まで皆の力になって……。
琴未……琴未とはいつも張り合ってばかりだったけど……だけど……そんな時間も凄く楽しかった。私はもう昇の傍にはいられない。だから琴未……昇の事をお願い。私の分まで……昇の事を愛してあげて。それが……私が琴未に言う最後のわがままだから……。
昇……昇……昇、昇、昇。私はもう……昇に何て言って良いのか分からない。でも……これだけははっきりと言える。昇……好きだよ、今でも大好きだよ。そして、出来ることなら……これからもずっと好きでいたかった。昇を愛していたかった。でも……もう……無理。だからこれが私からいう最後のわがまま……昇の手で私を消して。それだけが……私が最後に望む事だから。
そんな事を思ったシエラはやっと自分が再び涙を流している事に気が付いた。シエラもしっかりと分っているのだ。出来る事なら、昇の元へ戻りたいと。また以前のような生活に戻りたいと……けど、全ては遅かったのだ。
昇がシエラを見つけるのも、シエラが昇の元へ帰るのも、今では出来ないほど全ての出来事が遅かったのだ。だからこそシエラは自

分の消滅を願い、アレッタとの無謀な戦いを挑んだ。その時点でもう取り返しが付かないのだと気付くべきだったのだ。

だからこそシエラはアレッタと戦い、今は昇と戦っている。もっと早く自分が消える事を望んでいる事に気付いていれば……永遠に逃げる事を選んでいれば誰にも迷惑を掛ける事が無かったのに……それなのにここまでアレッタや昇に迷惑を掛けたのは自分の所為だとシエラは改めて実感した。

だからだろう、シエラが後悔に似た思いを抱き始めたのは。

……こんな事なら……昇と契約をしなければ良かった。そうすれば昇に迷惑を掛ける事は無かったのに……アレッタにも再開してアレッタを苦しめる事は無かったのに。こんな事になるなら……もっと早く自分で消えておくんだった。

……でも、昇と契約をしてしまった。アレッタと再び出会ってしまった。その事が私に決断させた。再び逃げ出すという最低な決断を……そんな決断をするぐらいならアレッタに消されればよかった。でも……でもっ！　よかったよ。最後は昇の手で私を消してくれるんだから、それだけは……よかったかな。

そんな事を思ったシエラは自然と涙を流しながら笑っていた。自分があまりにも卑怯で、自分があまりにも惨めで、けど最後は自分のわがままを通す事になった。その事がシエラに慟哭をさせる事になったのだろう。

そんなシエラの慟哭が止まるとシエラは再び心に思う。

……もう、いいっか。次で……全部終わるんだから。もう……何も考える必要はないか。昇の手で終わらせてくれるんだから、今の私はこれ以上無いぐらい幸せ……そうだよね。だから、もういい、終わりにしよう……全部。昇が消してくれるから、私はもう……何も考えなくていい。もう、考える事にも疲れた。

そしてシエラはウイングクレイモアを構えなおすと爆煙が薄くなり、昇の姿が徐々にはっきりと見えてくるのをはっきりと目に焼き付けた。

行くよ、昇。昇の手で……私を消して全てを……終わらせて。
まるで気を計ったようにその場所に風が吹き抜けると、二人の間を塞いでいた爆煙は様々な思いと共に消えて行った。そしてシエラはウイングクレイモアの翼を羽ばたかせると軽く舞い上がり、昇に向かって一気に突っ込んで行く。
昇もそんなシエラの姿をしっかりと捉えており、紫黒をしっかりとシエラに捉えたまま、いつでもヘブンズブレイカーを撃てるように準備する。
そしてシエラは一気にウイングクレイモアの間合いに昇を入れると、ウイングクレイモアを一気に振り上げる。まるで昇の攻撃をまったく気にしていないかのように、昇に向かってウイングクレイモアを振り下ろす。
それと同時に昇は叫んだ。
「ヘブンズブレイカーッ！」

第百十三話　昇対シエラ　そして最後の……（後書き）

さてさて、そんな訳で今回のエレメは如何でしたでしょうか。楽しんで頂けたなら幸いです。

まあ、そんな事はさて置き。本編での事ですが、最後の方……シエラの死亡フラグが立ったような気がするのは私だけでしょうか。というか、立ってますよねっ！　シエラの死亡フラグッ！！！　シエラの死亡フラグが立ったなんて縁起でもない事を言うなっ！！！

……いや、なんというか、つい自分で突っ込んでしまいました。

でもでも、なんか最後の方だけを読むとシエラの死亡フラグが思いっきり立ってますよね。さあ、このフラグがどう処理されるのか、それは次回のお楽しみですね。このままシエラは消えてしまうのか、それとも別の何かが待っているのか。……ふっふっふっ、ちょっとは気になる所ですね。だが、そんな皆さんに残念なお知らせをしないといけない。それは……

……それは……五月中に次の話を上げるのは無理ですっ！！！

まあ、そんな訳で次の話は何とか六月の始め頃には上げる予定ですので、それまでお待ちください。

さあ、無駄な溜めで遊んだところでそろそろ本編にちょっとだけ触れてみましょうか。

さてさて、そんな訳で昇なんですが……すっかり強くなりましたね。初期の頃にはエレメンタルアップを掛けて、後ろで観戦しかしてなかった昇が……今ではシエラと対等に戦えるまでになるとは。昇……成長したな～。

そんな訳で昇の成長に感慨しつつ、次の話についてちょっとだけ予告でもしようかと思います。

次回の注目点は……琴未ですっ！　いや～、ここになってようやく琴未が出てくる予定です。そしてその次からはいよいよ白キ翼編のラストバトルに入る予定ですので、心待ちにしてください。とい

うか、次回は琴未が一番美味しい所を持って行く予定です。……まあ、予定通りに進めばですけどね。……頑張れ琴未っ！！！

そんな訳で、いろいろとやったところでそろそろ締めましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、気候の変化に付いていけずに五日ほど死んでましたっ！

と大きな声で主張して更新が遅れた事を言い訳にしたい葵夢幻でした。

第百十四話　繋がり、再び

……えっ、なんで……どうして？　そんな事を思うシエラ。自然と握っているウイングクレイモアが震える。そのウイングクレイモアはというと、昇の肩に届く前、つまり顔の真横にあるのだ。

思い掛けない事態にシエラは戸惑いを隠せなかった。シエラは昇の攻撃を受けて消えるはずだった。それなのに……シエラは昇の前で宙に浮きながら震える手でウイングクレイモアを握り締めている。シエラは何でこんな事になったのかが、まったく分からなかった。

一方の昇はシエラに銃口は向けているものの、先程まで発動していたヘブンズブレイカーの輝きはすっかり消えていた。だが昇はヘブンズブレイカーを撃ってはいない。もし、撃っていたら確実にシエラは消えているからだ。それでもシエラは消えずに、今もなお昇の目の前に居るという事は……そう、昇はヘブンズブレイカーを撃つ事無く、掛け声だけでヘブンズブレイカーをキャンセルしたのだ。

だからヘブンズブレイカーは放たれる事無く、シエラも自分が消えると思ったから昇への攻撃を途中で止めたのだ。そんな状態に戸惑うシエラ、それはそうだろう、何しろシエラは先程まで消えるつもりで戦っていたのだから。だから昇に最後のトドメを刺してもらうために、最後まで戦い抜いたのだ。

それなのに最後の最後で昇が攻撃をキャンセルする行動はシエラにとっては、とてもではないが想像が出来ない事だった。

けれども昇は違う。昇はシエラを連れ戻すために、そして繋いだ手を二度と離さない為にシエラと戦っていたのだ。だから昇の目的はシエラを倒す事ではない、シエラを連れ戻す事だ。そのために戦う事が必要だったから昇は戦っていたに過ぎない。そして昇はその戦いの中にこそシエラを連れ戻すチャンスを見出そうとして、見事にそのチャンスをしっかりと掴んだのだ。

昇は紫黒を降ろすと、そのまま仕舞いこみ。空いた片手でシエラ

の手をしっかりと掴んで、もう片方の腕でしっかりとシエラを抱きしめた。
「な、なんで？」
思い掛けない事態に混乱するばかりのシエラ。それはそうだろう、シエラとしては消えて終わりにするつもりだったのが、今ではしっかりと昇の腕に抱かれているのだから。今までの思考と今の状況がまったく相反する物なのでシエラは混乱するばかりだ。
けれども昇は、もう二度と離さないぐらい強くシエラを抱きしめると、シエラの耳元に口を持って行くとはっきりとシエラに告げた。
「ごめん、シエラ。僕の所為で余計に苦しめる事になっちゃって。でも、大丈夫だよ。だから安心して聞いて欲しい。僕がこれから言う……本当の気持ちとシエラに聞かれた答えを」
その言葉を聞いたシエラは咄嗟に昇から離れようともがくが、昇はシエラが暴れれば暴れるほどを強く抱きしめて、決してシエラを離そうとしなかった。
どうやらシエラは今でも昇の気持ちを聞くのが怖いのだろう。だからこそ、こんな状況になっても咄嗟に逃げ出そうとしてしまう。それほどまでに、以前に自分が妖魔だと知られた時に受けた仕打ちがシエラにとってはトラウマになっていたのだ。だからこそ、自分が妖魔だと知られるのをシエラは一番怖がっていたし、知られたら思わず逃げ出したくなってしまうのだろう。
けれども昇はシエラがどんなに暴れようと決して離す事無く、強く抱きしめ続けた。昇も分っているのだ。今のシエラにとってはどんな事よりも、まずは安心させる温もりが大事だという事を、そうする事でシエラを落ち着けようと昇はシエラを強く抱きしめ続ける。
そうしているうちにシエラ自身もどうして良いのか分からなくなってきたのだろう。暴れる事を突然止めると自然と手からウイングクレイモアが落ちて地面に突き刺さった。シエラも昇に抱きしめられているうちに自然と悟ったのかもしれない。このまま全て昇に任せてしまった方が楽になれると。だからこそシエラは涙を流しなが

ら、昇にもたれ掛かるように寄り添うと、しっかりと昇の腕に抱かれた。

そんなシエラに昇はやっと笑顔になると優しい口調で話し始める。

「さっきは僕の言い方が悪かったね。ごめん、けど、これから言う事は僕が思っている本当の気持ちだし、皆もきっと同じだから安心して聞いて欲しいんだ」

そんな事を言われてシエラもやっと顔を上げると、未だに涙を流している瞳で昇を見詰めると一度だけ頷いた。そんなシエラに昇は優しい笑みを向けると本当に伝えたい事を伝え始める。

「シエラは自分が必要とされる事に理由を見出そうとしていたみたいだけど、僕から言わせてもらえば……そんな事に意味は無いんだ。必要だから傍にいて欲しいとか、必要無くなったから居なくなっても構わないとか、僕達はそんな関係じゃないと思う。僕達は……そう、家族だと思うから」

「家族？」

昇の言葉に思わずオウム返しで言葉を返すシエラ。まさか昇からそのような言葉が出てくるとは思っても見なかった事だし、シエラには家族という言葉が何を意味しているのかが、まったく理解できていなかった。

そんなシエラに昇は笑みを絶やす事無く伝え続ける。

「そう、家族。一緒に居るのが当たり前だから一緒に居る。僕はそれが家族だと思う。だからシエラが傍に居るのに理由なんて要らないんだ。だって……一緒に居るのが当たり前だから。だから理由なんて関係無い、これからも家族として、ずっと一緒に居て欲しい。これが僕がシエラに伝えたかった本当の気持ちだよ」

昇が伝えたかった事を全て伝え終わるとシエラは未だに呆然とした顔をしていた。シエラにしてみれば自分が妖魔だからこそ、昇の傍に居る理由を求め続けたのだ。だが、こうして昇の本心を聞いた今では……とても心地良く、何処までも昇の優しさが広がっているようだった。

一方の昇はシエラが黙り続けている事で戸惑いを感じていた。もしかしたら自分の言いたい事が伝わっていないという不安が急に込み上げてきた。

確かに昇の気持ちはシエラに伝わっているのだが、シエラが昇の言葉を受け入れるには、あまりにも急すぎてシエラはすぐに全てを理解する事が出来ずに呆然としているのだ。

「えっと、シエラ？」

そんなシエラに言葉を掛けてもシエラは言葉を返す事は無かった。いや、正確に言えば未だに呆然としているシエラは昇の言葉に何て返事をすれば良いのかが未だに分っていないのだ。

そんなシエラを見て昇はふと以前の事を思い出す。そういえば、海に行ったときにシエラが温もりと繋がりを証明して欲しいって、言ったことがあったっけ。……って事は……あれしかないのか。まあ、僕としても嫌なわけじゃないけど、さすがに恥かしいというか……ええいっ！　今のシエラにはこうやって伝えるしかないか。うん、この方法で行こうっ！

そんな決意を勝手にした昇は意を決するとシエラを更に抱き寄せて顔を近づけた。

「えっ？」

突然の事でシエラも声を上げる。シエラも呆然としていても昇の顔がいきなり急接近すれば驚きもするし、戸惑いもするものだ。それにいつもは攻めているシエラだけに、今回のような急転回には驚きを隠せないようだ。

そして昇はゆっくりとシエラに顔を近づけると、優しく唇を重ねる。突然のキスにシエラは驚きを隠せない表情になるが、すぐに瞳を閉じて安らかな顔になる。そうしてシエラは身体も心も昇に預けて、今はしっかりと唇から感じる昇からの繋がりを優しく握り締めていた。

そんな繋がりを確かめるようなキスを続ける二人。そして充分に繋がりを確かめたのだろう、自然と二人は唇を離し、シエラは昇を

見上げる。そんなシエラの瞳からは涙は流れ続けていたが、その表情は先程までの悲哀ではなく、すっかり安心した優しい微笑みに変わっていた。

シエラの表情を見てやっと昇は一安心して心に思う。よかった、これでシエラを連れ戻す事が出来たかな。……もう、離しちゃいけないよね。この繋がりを、掴んでいるこの手を……。そんな事を思った昇も自然と微笑を浮かべていた。

そんな昇の微笑を見続けながらシエラが始めて口を開いた。

「昇……ごめん。私が早とちりしたから、戦う事になって。昇の言葉を最後まできちんと聞いてたら戦う事なんて無かったのに」

そんなシエラの言葉を受けて昇は首を横に振った。

「あれは僕の言い方が悪かったんだ。もっとしっかりとシエラに伝える事をしっかりと伝えていれば、あんな事にはならなかったんだ。それに……これでシエラは僕達の元に戻ってきてくれるんでしょ、なら問題ないよ」

「昇……」

昇の言葉にしっかりとした安心感を感じるシエラ。けれどもシエラはどうしても確かめなければいけない事がある。それを確かめるまではシエラは昇達の元へは戻れないのだ。だからこそ、今度こそはとシエラはその事を昇に尋ねる。

「昇……私は妖魔という精霊とは違った存在。それでも……それでも受け入れてくれるの？　今まで同じように接してくれるの？　また……あの生活に戻れるの？」

そんな質問を連続でしてくるシエラに昇は微笑みながら頷いた。そんな昇の返答を受け取りながらもシエラは昇から顔を逸らした。やはり自分が妖魔であるという事実を受け入れてくれるという昇が信頼できない部分があるのだろう。

それは昇との繋がりに問題がある訳ではない。シエラが昔に受けた精霊達からの差別が未だにシエラの心に残っており、シエラも未だにそのトラウマを拭い去る事が出来ていないからだ。だから自然

とシエラは昇から顔を逸らせてしまった。
そんなシエラを見て、昇はシエラの手を取っている手を離すと、その手でシエラを強制的にこちらに向かせた。そして昇はもう一度シエラとキスをする。
今度はシエラも最初から昇を受け入れる事が出来ており、素直に昇からのキスを受け入れた。そして昇もシエラとのキスを続ける。シエラのトラウマが消え去るまでは行かなくとも、昇達との繋がりが実感できるまで、二人はキスを続けた。

「少しは落ち着いた？」
昇がそうシエラに尋ねるとさすがのシエラも少し恥かしいと思うところがあったのだろう。顔を赤らめながら昇から顔を逸らして返事をする。
「うん……昇……ありがとう」
「別にお礼を言われる事はしてないよ。それに僕の言い方が悪くてシエラと戦う事になったんだし、それに戦わないと僕達は本当の意味で分かり合えなかったのかもしれないし」
「そうじゃなくて……」
未だに顔を逸らして真っ赤になっているシエラに対して昇は首を傾げた。
シエラは昇が繋がりを証明する為にキスしてくれた事にお礼を言ったつもりだったのだが、昇にはそれがちゃんと伝わっていないのだろう。まあ、朴念仁の昇がそんなシエラの気持ちに気付く事も無く。別の意味を示す言葉を返してしまったのだからシエラは困るばかりだ。
そんな状況にシエラはどうしたら良いものかと考えると、急に全身の力が抜けてその場に座り込む。そんなシエラを慌てて支える昇。シエラは昇の腕の中で微笑みながら口を開いた。
「さすがに無理をしすぎたみたい。それにこんな風に昇が受け止め

るとは思ってなかったから、だから思いっきり無茶をした」

「思いっきり無茶って、そういえば……さっきのシエラってエレメンタルアップを使ってないのにセラフィスモードを維持できてたよね？」

そんな疑問をぶつける昇にシエラは全て説明した。自分の生命力を削って戦闘能力に変えて戦っていた事。それから最後には昇の攻撃で世界から消えようとしていた事を全て昇に話した。一方でそんな話を聞いた昇は驚きを隠せなかった。

そんな戦い方をしてたんだっ！　というか、精霊ってそんな事も出来るんだね～。って！　今はそんな事に感心している場合じゃないか。う～ん、確かにさっきの戦いでシエラの調子が変だとは感じてたけど、まさか僕にトドメを刺して欲しいとまで思っていたなんて……僕達はそこまでシエラを追い込んでたんだ。そんな事を思った昇。

正確には違うのだが、シエラをここまで追い込んだのはアレッタの言葉であり、昇との戦いはアレッタの言葉を受けたシエラが最後の決断として取った行動に過ぎない。けれどもまさか、こんな形で二人の戦いが終わりを迎えようなんて誰にも想像がつかなっただろう。そう、昇以外の人物は。

そもそも昇はシエラを連れ戻すために、しかたなく戦っていたのだ。だからこそ、自分がシエラにトドメを刺すか、シエラが自分にトドメを刺すか、どちらにしても最終局面でこそ昇はシエラを連れ戻す機会は無いと思ったからこそ、あそこまで戦ったのだ。

まあ、シエラが予想外に強すぎたという事もあるが、昇もまさかシエラがそこまでやっていた事などは想像も付かなかった事だからしかたない。それにシエラは暴走状態にあったと言ってもいいだろう。そんな状況だからこそ昇は最終局面に全てを賭けたのだ。

そして見事に昇が賭けに勝ったのだが、シエラからの話を聞いては昇は驚くばかりだ。そしてシエラの話からシエラの生命力がかなり弱っている事を昇は察する事が出来た。だからこそ、昇は今の自

分に出来る事を考える。
　要するにシエラの生命力を回復させれば良いんだよね……あっ、そうだ。自分の生命力を戦闘能力に加える事が出来るなら、その逆も出来るんじゃないかな？　そんな事を思いついた昇はシエラに尋ねてみる。
「ねえシエラ。シエラは自分の生命力を戦闘能力に上乗せして戦ってたんだよね？」
「うん」
　確認するかのような昇の言葉にシエラは首を傾げながらも頷いて見せた。そんなシエラに昇は更に質問をする。
「なら、戦闘能力を生命力に上乗せする事も出来るの？」
「それも出来る。けど……なんでそんな……あっ」
　やっと昇が何を言いたいのかが分かったのだろう。シエラは声を上げると頷いて見せた。そんなシエラを見て昇も頷きを返す。
「じゃあ、行くよ」
「分かった」
　昇がそんな事を言うとシエラはすぐに返事を返した。そして昇は精神を集中させるとシエラから赤い紐が伸びてきて昇はその紐をしっかりと握り締める。それは昇にしか見えない紐であり、それがあるという事はシエラが再び昇達との繋がりを復旧させた証拠でもある。
　そして昇は赤い紐に力を流し込む準備をすると一気に発動させる。
「エレメンタルアップッ！」
　赤い紐を通して昇の力が一気にシエラに流れ込む。
「んっ」
　一気に流れ込んだ力にシエラは思わず声を上げてしまう。けれども今はやらなければいけない事があるから、まずはそちらを優先させるシエラ。それは……エレメンタルアップで上がった戦闘能力を生命力に変換する事だ。
　そう、シエラの生命力は限界を迎えていた。けれどもエレメンタ

ルアップなら昇の力が続く限りシエラに限界を超えた力を与える事が出来る。つまり本来なら戦闘能力として使う力を今は生命力を回復させるために使っているのだ。これもエレメンタルアップならではの使い方と言えるだろう。

まあ、その前にシエラのように自分の生命力を戦闘能力に上乗せして戦う精霊なんて酔狂な精霊は居ないだろう。今回はシエラが追い詰められた事によって、そんな戦い方をしたに過ぎない。シエラも本来ならそんな戦い方はしない。なにしろ生命力が尽きれば消える。つまり死ぬのと同じだ。そんな戦い方を好んでやる者は居ないのだ。

けれども今回の戦いではシエラがそんな戦い方をしたからこそ、昇はエレメンタルアップを使ってシエラの生命力を回復させる方法を思い付いたのだ。そんなエレメンタルアップが功をそうしてきたのか、シエラの生命力は徐々に回復して行き、昇はかなりの力をシエラに流し込むと、やっと回復してきたのか、シエラはもう大丈夫とばかりに立ち上がると、身体の状態を確かめてみる。

確かにエレメンタルアップのおかげで大分生命力を回復する事が出来た。だが、それだけではなかった。昇がかなりの力を送ってくれたおかげか、今では戦闘すらも行えるほどダメージも回復しており、シエラはウイングクレイモアを手に持つと軽く振るってみた。

どうやら今すぐ戦闘を行っても支障が無いぐらいにシエラは回復したらしい。だからこそ、シエラは再びウイングクレイモアを地面に突き刺すと昇の元へやってきた。

「ありがとう、昇」

「うん、もう大丈夫だね」

そんな昇の言葉にシエラは首を横に振ってきた。そんなシエラに昇は勝手に、シエラは万全な状態まで回復してないと思い込んだ。だからこそ昇はシエラに尋ねる。

「まだ力が足りなかった？」

そんな事を尋ねた昇に対してシエラは首を横に振ってきた。なら、

何の支障があるんだろう？　勝手にそんな事を考える昇。そんな昇にシエラは話を続ける。
「足りないのは力じゃない」
「えっ？　じゃあ何が足りないの」
「そんなの決まってる……」
　言葉を途中で切って、なおかつ顔を赤らめ逸らせてモジモジとした仕草をするシエラ。普通ならここまですればシエラが何を求めているかが分かるものだろう。だが相手は昇である。シエラがそんな態度を取っても首を傾げるだけで、検討ハズレな事を言い出す。
「あっ、まだ傷が痛むとか？」
　そんな昇の言葉に思わずこけるシエラ。確かにシエラも昇が鈍い事は承知の上だが、まさかここまでとは思っていなかったようだ。そんなシエラが疲れたように昇に向かって倒れ込むと、昇は慌ててシエラを受け止めて、シエラは昇の胸に顔を埋めるのだった。
「えっと、シエラ？」
　シエラの態度に戸惑う昇。そんな昇に構う事無く、シエラは潤んだ瞳で昇を見上げて見詰める。
「足りないのは繋がり、繋がっているという証拠が欲しい。だ・か・ら」
　そんな事を言って瞳を閉じて顔を突き出してくるシエラ。そんなシエラに昇は思う。
　……シエラさん、すっかりいつも通りですね～。けど、まあ、これでよかったのかな。
　そんな事を思った昇はシエラとキスをする。そのキスは軽く短い物だった。そのためか、キスが終わるとシエラは不満げな顔で昇に不満をぶつける。
「それだけ？」
「いや、実は何かあった場合に備えて琴未達に増援を頼んであるんだ。だからそろそろ琴未達が到着するから。だからそろそろ終わりにしたいかなと、そんな事を思っただけで」

「それなら琴未達に見せ付けるようにキスして」
いや、あの～、シエラさん。そんな事をしたら地獄を見ますよ…
…僕がっ！　そんな言い訳染みた事を思う昇。確かに昇もシエラとキスをするのが嫌な訳ではない。さすがに今日は何度もキスをしているし、昇にとっては何度しても未だにキスする事に抵抗があるのだろう。まあ、ただたんに恥かしいだけかもしれないが、琴未達に増援を頼んでいるのも本当だし、そろそろ到着してもおかしくない頃合だ。だから昇の言い訳も丸々嘘という訳ではない。
けれどもシエラとしては納得が行かないのだろう。いや、シエラとしては、このチャンスを充分に活かしたいのだろう。だからこそ、ここぞとばかりに攻めようとするが、昇もこの手の攻めにすっかり慣れてきたのだろう。シエラが言葉を発する前に自分から話しを切り出してきた。
「そういえば、さっきの精霊達。一旦退くって言ってたじゃない。もしかしたら、今度は全員揃って来るかもしれないから。ここは僕達も琴未達と早く合流して体勢を立て直した方が良いと思うんだ」
「……分かった」
シエラの返事でようやく一安心する昇。だが昇の言った事もあながち間違いでは無い。アレッタは確かに『一旦退く』とシエラに向かって叫んでいたのだ。どうやらアレッタとの戦いもまだ終わってはいないようだ。シエラもそう感じたからこそ、ここは素直に昇の言葉に従うのだった。
「じゃあ、精界を崩す」
「うん、お願いするよ」
しかたないという顔でシエラは諦めて片手を天に向かって挙げると世界にヒビか入り、徐々に崩れ始めていった。
「……これはっ！」
「……先手を取られてた」
それは精界が半分ほど崩壊した時だった。通常なら人間世界が現れてくるのだが、崩れた精界から現れたのは肌色のような柑子色(こうじ)に

染まった世界だった。どうやらシエラが張った精界の外に新たなる精界が張られていたようだ。そして柑子色の精界を張る精霊は昇達の中には居ない。となれば、考えられる事はただ一つ、アレッタ達が合流して再び戻ってきたのだろう。

そう認識した昇とシエラはすぐに戦闘体勢に入る。そして辺りを警戒する二人だが、そんな二人に奇襲を掛ける事無く、高飛車な笑い声と共にローシェンナ達が川の向こう側から一気にこっちに飛び移って来た。

「ようやく見つけ出してよ妖魔。アレッタがあなたに執着するものだから、私達も随分と苦労する破目になってしまいましたわ。ですが、これで終わりですわね。丁度良く契約者も居る事ですし、そっちは人数も揃ってないようですし、更にはこっちには増援もありましてよっ！」

「増援？」

ローシェンナの言葉に昇は首を傾げる。そんな昇に向かってシエラが尋ねる。

「そういえば昇」

「どうしたのシエラ？」

「というか……あれって誰だっけ？」

シエラの一言で昇のみならずローシェンナ達までも一斉にこけた。そして逸早くローシェンナは立ち直るとシエラに向かって叫ぶ。

「私の事を憶えてないってどういう事ですのっ！　そっちが紳士的に挨拶してきたからこっちもしっかりと挨拶を返したじゃありませんかっ！　それを憶えてないってどういう事ですのっ！」

そんな文句を言うローシェンナ。そんな文句を聞いている間に昇は何かを思いだしたのだろう。手を叩いてシエラに説明を開始した。

「そういえば前の時はシエラはすぐに、あのアレッタと戦闘を始めたからローシェンナさんの事は知らないんだっけ」

「うん、アレッタが余計な事を言おうとしたから」

「余計な事とは随分な言い方ね、シエラ。私はシエラの仲間達にシ

エラの本当はどんな存在かを教えてあげたんじゃない」
ローシェンナを押しのけて、そんな事を言ってくるアレッタ。そんなアレッタをシエラは先程とはまったく違った。昇達が知っているシエラの表情で話を続ける。
「それが余計な事。でも……今では感謝してる。おかげで私が妖魔だという事を打ち明ける機会が出来た」
「なっ！　シエラ……」
シエラの変化に気付いたのだろう。アレッタは戸惑いの表情を見せた。
アレッタとしてはシエラを追い詰めるだけ追い詰めたつもりだったのだ。それも昇達との関係が修復できないぐらいまで。だがアレッタには一つだけ誤算があった。それが昇という存在だ。
確かに普段の昇は影が薄くてシエラ達に振り回されてばっかりで、戦闘でも目立って活躍する事も無い。だからアレッタとしてはレア能力持ちとしか認識していなかった。
けれども昇の真髄はその中身にある。どんな状況でも決して諦める事無く、自分が信じた未来に突き進む力と決意。そんな中身があるからこそ、昇は今までの戦いも勝ち抜いてこれたし、今回もシエラを連れ戻す事が出来たのだ。そしてそんな昇だからこそ、シエラは傍に居たいと思ったのは確かな事だろう。
昇がそこまで影響力がある契約者だと思ってなかったアレッタにとっては、今の事態はもの凄い誤算だ。そしていつもの状態に戻ったシエラは、そんな好機を逃すはずが無かった。
「残念だったね、アレッタ、思い通りにならなくて。でも、私は感謝してる、おかげで自分が妖魔であっても昇が受け入れてくれる事が分かったから、その切っ掛けを作ってくれてありがとう」
随分と凄い皮肉を言うシエラ。まあ、アレッタにあれだけやられたのだからシエラもそれぐらいやり返さないと気が済まないのだろう。
一方の言われたアレッタは悔しそうに瞳を閉じながら、拳を強く

握り締めて震えている。それほどまでにアレッタにとっては許せない誤算だったのだろう。けれども、それも一時の事でアレッタはすぐに冷静さを取り戻したように見えた。

いや、それだけでは無い。アレッタは何故か哀愁のような雰囲気を出しており、開いた瞳には少しだけ悲しみと、少しだけの優しさが写っていた。けれどもそんなアレッタの瞳に気付いたのは昇だけで、シエラはそこまでは気付いてはいないようだ。精々アレッタが平常心を取り戻したと感じ取っただけだ。

そんなアレッタを押しのけてローシェンナが前に出る。

「そこの妖魔っ！　しかたないですから、もう一度だけ自己紹介してあげますわよ。私の名はローシェンナ、最高級のサモナーですわ」

自信満々に言ってくるローシェンナに対してシエラの反応は冷たいものだった。

「そう、それなら何とかなりそう」

「何ですってっ！」

いきなりとんでもない発言をするシエラ。どうやらシエラにはこれだけの人数を前にしても充分に相手に出来る自身があるようだ。そんなシエラとは対称的に昇は少し心配げにシエラに話し掛けた。なにしろシエラはアレッタとシェル、そして昇と戦いが続いているのだから昇が心配するのも当然だ。

「シエラ、大丈夫なの？」

そんな事を尋ねてきた昇にシエラは笑顔を見せて来た。

「大丈夫、昇が私を受け入れてくれたから。家族だって言ってくれたから。だから……私も本当の姿で戦える」

「本当の姿？」

昇が聞き返すとシエラは微笑んで見せた。

「そう、本当の姿。だから……今の私にはあの程度は相手じゃない」

随分と大言壮語な事を言うシエラに昇は微笑んで見せた。シエラがそこまで言うのなら、何かしらの手があるのだろうと昇はシエラを信じる事にした。だが事態というのは急変する物である。

「随分と言ってくださいますね。なら、更に数が増えても充分に応戦できるという事ですかね」
いきなり昇達の後ろからそんな声を聞こえると、昇が振り返るとそこには見たことも無い男と少女が二人立っていた。そして男は帽子を取ると丁寧に昇に向かって挨拶をしてくる。
「お初にお目に掛かります、エレメンタルアップの少年。私はアンブル＝リックネットと申します。そしてこちらが私と契約をした精霊。そちらの妖魔には一度お目に掛かってますね。こちらがシェル。そしてもう一人がコーラルと申します」
そんなアンブルの自己紹介に昇は警戒を緩める事無く。二人の精霊に目を向ける。その間にシエラはシェルについて話して来た。なにしろシェルとは先程戦っているのだ。だからシエラはシェルに関しては情報を持っていた。
「あのシェルとかいう精霊は俊足の精霊で縮地の属性を持ってる。だから地上でのスピード戦では確実に不利。だから気をつけて」
「分かった」
短く返事を返した昇はシェルに目を向けてみる。確かに足が速そうな綺麗な足をしている。だから誰もが目を引く足を持っているのは確かなようだ。それに少し幼い容姿をしているとしても精霊には違いない。それにシエラが地上でのスピード戦では確実に不利だと断言したぐらいだ。だからシェルもシエラと同じように地上ではスピードに自信があるのだろうと昇は判断した。
それから昇はコーラルという精霊に目を向ける。こちらは一見すると普通の少年のように見えるが微かな胸の膨らみから少女であることが分るが、先程のアンブルが言った言葉どおりならコーラルも精霊である事には違いない。そのうえコーラルに関してはシエラも見るのが始めてだ。だからどんな精霊で、どんな属性かも想像が付かなかった。
そのうえコーラルは人形のように無表情であり、まるで何事にも興味を示していないようだった。それほどまでに表情は人形に近か

った。確かにシエラも普段は無表情だが、コーラルはそれ以上に無表情で感情という物が一切無いと思わせるぐらいの表情をしていた。
そして最後に昇はアンブルに目を向ける。アンブルは長身の青年で印象としてはさわやかな印象を受けるだろう、契約者で無ければ。それほどまでにアンブルは紳士的な笑みを崩す事無く、昇達の動向を見守っているようだった。そしてアンブルは昇の視線に気付いたのだろう、更に言葉を付け加えてきた。
「そうそう、言い忘れてました。私はアッシュタリアに属する契約者であって、そこのローシェンナさんを勧誘に来たんですよ。ですが、ローシェンナさんはあなた達を倒さないと気が済まないというので、こうやってお手伝いをしに来たわけです」
「アッシュタリアだってっ！」
さすがに昇もアッシュタリアという言葉に驚きを示した。アッシュタリアといえば以前にも昇達はアッシュタリアのエルクという精霊と激戦を行っているのだ。それだけに昇はいつかアッシュタリアのエルクと決着を付けるつもりだったが、ここでもアッシュタリアと関わるとは思いもよらなかった事だ。
そして昇の反応からアンブルは何かを悟ったように言葉を放った。
「おやおや、どうやらアッシュタリアの説明は不要なようですね。まあ、今では一番大きな組織となってますから、このような辺ぴな所に住んでいる契約者が知っていても不思議では無いのですが、説明する手間が省けただけでも楽になるというものです」
挑発に似たアンブルの言葉にも昇は冷静さを欠く事無く、状況を確認すると静かにシエラに尋ねる。
「数が増えちゃったけど、行けそう？」
「アレッタ達だけなら、何とかなったけど。あっちまで来られるとキツイ。だから昇」
「分かった、何とかしてあのアンブルとか言った人達は抑えるよ。その間にシエラはローシェンナさん達を叩いて」
「分かった」

そんな密談をしている昇とシエラ。けれどもアンブルにとってはそんな密談をしても無駄だと思っているのだろう。今までと表情を変える事無く、冷静に昇に向かって話しかける。

「相談しても無駄ですよ。いくら妖魔と言っても、これだけの数に対してまともに戦える訳が無い。契約者のエレメンタルアップを使ったとしてもですね。さあ、時間が勿体無いですから、そろそろ始めましょうか」

アンブルのその言葉に一斉に戦闘体勢に入るローシェンナ達とアンブルの精霊達。そんな両陣に挟まれながら昇とシエラはお互いに背中を預けあいながらも、どうにかして打開策を見出そうとしている。

そして戦いが始まろうとした時だった。

「ちょーっとまったーっ！」

突如として土手の上から声が響くと全員の視線が一斉にそちらに向かう。

「昇、お待たせ、加勢に来たわよ」

どうやら先程の声は琴未が発したもののようだ。だがそこに現れたのは琴未だけではない。

「ふんっ、滝下昇、随分と不利な状況のようだな。だが安心しろ、なにしろ俺が来たんだからな」

「琴未っ！　フレトっ！」

突如として姿を現した琴未とフレト。そして二人の周りにはしっかりとミリアと閃華。そしてレットと半蔵とラクトリーまでもが加勢に駆けつけてくれた。そんな状況に昇達もやっと明るい笑みをあらわにするのと同時にローシェンナ達は敵の加勢に苦虫を噛み砕いたような顔をしている。

そんな中で琴未が一歩前に出ると全員に向かって叫ぶ。

「さあ、これで数の上でも私達が有利よ。どうやら観念するのはそっちの方ねっ！　……でも、その前に」

琴未は突如として声のトーンを落とすとシエラを睨みつけて叫び

ながら土手を一気に駆け下りる。
「シエラ――ッ！」
琴未は土手から一気に跳び上がるとシエラに向かって行き、着地と同時に思いっきりビンタを喰らわすのだった。いきなりの行動にシエラもワケが分からずに叩かれた頬を片手で押さえながら琴未を呆然と見ている。
一方の琴未はそれだけは済まないのか、シエラを思いっきり指差すと更に叫び続ける。
「あんたねっ！　なにいきなり居なくなってるのよっ！　残されたこっちの身にもなってみなさいよねっ！　シエラが居なくなった所為で私が一人であれだけの人数分をまかなえる食事を作らなくちゃいけなくなったのよっ！　だからシエラ、帰って来たら当分は一人で食事を作りなさいよね、そうして私の苦労を少しは分かるといいわっ！」
いきなりそんな文句を言ってくる琴未にシエラは未だに呆然としている。そんなシエラに琴未は未だに怒りが収まらないのだろう。シエラに向かって更に叫び続ける。
「シエラッ！　歯を噛み締めなさいっ！」
「えっ？」
突然そんな事を言い出した琴未に対してシエラは戸惑うばかりだが、そんなシエラに構う事無く、琴未は拳を思いっきり握り締めるとシエラに向かって思いっきり叩き付けた。どうやらビンタだけでは物足りなかったようだ。
一方のシエラは歯を噛み締める前に殴られたものだから、倒れはしなかったものの、さすがに仰け反って慌てた昇に支えてもらった。そして殴った琴未とはいうと、やっとスッキリしたのか晴れやかな表情を見せた。
「やっぱり思いっきり叩かないとダメね。どうもビンタだけだとスッキリしなかったわ」
そんな感想を漏らす琴未に対して、やっと自分で立つ事が出来た

シエラは抗議する。
「というか、なんで私が殴られないといけないの？」
そんな事を言うシエラに対して、琴未は再び怒りの目になるとシエラに向かって思いっきり人差し指を突き出してきた。
「いきなり私達の前から居なくなったシエラが百パーセント悪いからに決まってるでしょっ！　私達がどんな思いでシエラを探してたと思うのよっ！　それだけシエラの行動は私達に迷惑を掛けたのよっ！　だから殴られて当然でしょっ！　というか、もう一回殴るわ」
「それは嫌」
シエラがそんな返事を返すと琴未はやっといつもの表情に戻り、突き出していた指を引っ込ませたが、今度は変わりに両手を腰に当てて偉そうな姿勢になる。
「なら、その代償として昇とのデート権は私の物ね。もちろん異論なんて認めないわよ。今回に限ってはシエラが全面的に悪いんだから。さあ、反論できるものなら反論してみなさいよ」
「……ふっ、デートで済むならどうぞ。さっきの私達に比べればそれぐらいは大目に見てあげる」
「って！　シエラッ！　いったい昇に何をしたのよっ！　素直に言いなさいよねっ！」
「素直に言っても良いけど、言うと琴未が半狂乱になる」
「どういう意味よっ！　詳しく説明しなさいよね、詳しくっ！」
「ほれほれ、琴未よ。それぐらいにしておくんじゃな。最早、誰も二人のテンションに付いて来れては無いぞ。それに詳しい説明なら後でも充分に出来るじゃろ」
しかたなく仲介に入った閃華がそんな事を言ってくると琴未は改めて辺りを見回す。閃華の後ろにはミリア達を始め、フレト達もすでに降りて来ており、すっかり呆れた顔をしていた。そしてローシェンナ達は事態が飲み込めていないのか、それともどうやって介入すれば良いのか、すっかり置いてけぼりを喰らっていた。
そんな状況に琴未は思いっきり溜息を付くとシエラに向かって手

を差し伸べて来た。そんな琴未の行動にシエラも握手するものだと思って手を差し伸べるが、琴未はシエラの手を思いっきり叩いて一言だけ口にする。

「おかえり」

そんな言葉を聞いたシエラは仕返しとばかりに琴未の手を思いっきり叩くと同じく一言だけ口にした。

「ただいま」

そしてシエラと琴未はお互いに鋭い笑みを交わす。そんな光景を見て閃華は思わず溜息を付いた。それは琴未もそうだが今回に限ってはシエラも随分と不器用だと感じたからだ。

つまり先程までの琴未が言った文句も思いっきり殴ったのもシエラが妖魔である事は関係ない。ただ突然居なくなった事への怒りであって、琴未もシエラが妖魔であっても今までどおりに受け入れるという感情表現に過ぎないのだ。

けれども二人の場合だとどうしても不器用になってしまうのだろう。だから琴未もこんな形でしかシエラに安心感を与える事が出来ないし、シエラも琴未がそう接してきてくれた事で琴未も自分を受け入れてくれたのだと安心する事が出来た。

つまりこれこそが、琴未がシエラが妖魔であっても関係無い。自分達の仲間だという事を表現したのと同じである。だからこそシエラもいつものように琴未と接する事が出来たのだ。そしてシエラが妖魔であっても関係無いのは琴未だけではなかった。

「シエラ～」

琴未とのやり取りが終わるとミリアがシエラに向かって抱き付いてきた。いや、ミリアだからほとんど体当たりに近いものだがあるだろう。けれどもミリアはそれは体当たりだとは思っていない。ただ純粋にシエラに抱きついただけである。そんなミリアをシエラは何とか、よろける事無く支える事が出来た。

そしてミリアは半分泣きそうな顔でシエラを見上げてきた。

「ごめんね、シエラ～。私がちゃんと妖魔について説明できてなか

ったから、だから誤解させるような事をしちゃったみたいで、だからごめんね～」

どうやらミリアはシエラが失踪した原因の半分は自分にあると思っていたようだ。そんなミリアにシエラは優しげな微笑を向けるとミリアを引き剥がして、その頭を優しく撫でた。

「大丈夫、ミリアの所為じゃないから。全ての原因は……私にあるから。だからミリアが気にすることは無い」

「じゃあ、またご飯を作ってくれる？」

「うん」

「じゃあ、またお師匠様からかくまってくれる？」

「こっちの条件を飲むのなら」

「じゃあ、ついでに宿題もやってくれる？」

「それは自分でやりなさい」

「そうですよミリア～」

「お師匠様っ！」

つい調子に乗ったミリアはラクトリーに連行されて、そのまま簡易式のお仕置きを受けている。その間に入れ替わりで閃華がシエラの元へやってきた。

「すまんかったのう。私達の配慮が足りない所為で、こんな事になってしまったようじゃ」

そんな閃華の言葉にシエラは首を横に振る。

「全ては私のわがまま。だから閃華達が気にする必要は無い」

「そう言ってもらうと助かるというものじゃな。それでシエラよ、全ては丸く収まったのか？」

そんな閃華の質問にシエラは嬉しそうに首を縦に振って短く答えた。

「うん、もう大丈夫」

「そうか、ならもう心配する必要は無いようじゃな。これからも普段どおりで構わないんじゃな」

「うん、お願い」

「うむ、分かった」
　短い会話だが、それだけでもシエラにはしっかりと分かった。ミリアも閃華も琴未と同様にシエラの事を心配し、そしてまた受け入れてくれた事を。その証拠に琴未はいつものようにシエラに睨みを効かせているし、ミリアはいつものようにラクトリーからお仕置きを受けているし、閃華はいつものように軽く笑みを浮かべている。それだけでもシエラには戻ってきたという実感が沸いてきたというものだ。
　それだけ最初の琴未が放った言葉が効いていたのだろう。いや、この場合は琴未の行動こそがシエラにとっては一番ありがたかった。
　なにしろシエラは勝手に出て行った事に罪悪感を憶えていた。それなのにこうやって戻ってこれたのは一番最初に琴未が殴ってくれたからだろう。琴未が皆の代わりに殴ってくれる事でシエラは今までの罪悪感を一気に払拭する事ができた。だからこそ、シエラはいつものようにミリアとも閃華とも接する事が出来たのだ。
　そしてその琴未はというとシエラに思いっきり文句を言って少しはスッキリしたのだろうが、完全にスッキリした訳では無い。なにしろ今回の原因を作ったのはアレッタなのだから、琴未としてはローシェンナ達をここで叩きのめさない限り、琴未の怒りが収まる事は無かった。
　そんな琴未がローシェンナ達に向かって叫ぶ。
「さあ、こっちの用は済んだわよっ！　今度はあんた達をぶっとばしてあげるわっ！」
　思いっきり宣戦布告をする琴未に置いてけぼりを喰らっていたローシェンナ達はやっと我に返って琴未に向かって言い返してきた。
「随分と待たせてくれまわしたわね。おかげで寝てしまうところでしたわ。それで妖魔との三文芝居は終わりかしら？」
　ローシェンナとしても自分達を無視して勝手に盛り上がった昇達に呆然としながらも、無視されていた事に今頃になって腹が立ってきたのだろう。挑発的な言葉を返してくるが、今の琴未にはそんな

挑発などは取るに足らない事だった。
「それは悪かったわね。それに寝てくれても構わなかったのよ。その間に叩きのめしてあげたんだから。あ～、寝てくれなくて残念ね」
「なんですってっ！」
琴未の挑発にまんまと乗るローシェンナ。まあ、ローシェンナの性格から言えば、そのような挑発に乗りやすい事は確かだろう。けど琴未はそこまで計算してローシェンナを挑発したワケではない。未だにシエラに対する怒りが収まっていないから、その捌け口としてローシェンナに皮肉を交えて挑発したに過ぎない。
そしてその挑発はもう一人のアンブルにまで届いていた。
「随分と言ってくれますね。確かにそちらにも増援が来たようですけど、それで私達に勝てると思ったら大間違いですよ」
そんなアンブルの言葉に琴未が言い返そうとするが、その前にフレト達がアンブルと向き合うとフレトがアンブルに向かって言葉を返した。
「もちろん勝てると思ってるぞ。それと……あっちには因縁がありそうだからな。お前の相手は俺が直々にやってやろう」
「ほう、それはそれは」
そんな事を言って来たフレトにアンブルはそこそこな返事を返す。さすがにアンブルの方が冷静なようで、フレトの挑発にも乗る事無く冷静に言葉を返してきた。
そのような状況に昇はフレトに向かって話しかける。
「フレト」
「大丈夫だ、こっちは任せておけ。あのアンブルという契約者と精霊二人は確実に抑えておく。まあ、倒してしまうかもしれないがな」
「けどあの契約者、アッシュタリアからの使者だから」
「それぐらいはさっきの会話で察しが付いてるから心配するな。それからアッシュタリアに付いても情報ぐらいは持っているから安心しろ」
そんな事を言うフレトに昇は頷いて見せた。フレトは実際にアッ

シュタリアの契約者と戦った事は無いのだが、アッシュタリアは今では一番大きな組織だ。だからラクトリーの情報網でフレト達もそれなりの情報を持っていてもおかしくはなかった。そのうえ半蔵を昇に付かせていたのだから、その半蔵からアンブルがアッシュタリアだという事を聞いていたのだろう。だからこそ、昇は安心して後ろをフレト達に任せる事にした。

「じゃあ、フレト。そっちは任せたよ」

「あぁ、そっちもしっかりとやれよ。この戦いで今回の件を全て終わらすぞ」

「うん、ありがとう」

フレトの頼もしい言葉に昇は嬉しそうに頷いてみせると、昇とフレトはお互いの敵へと目を向けて、そして陣形を整える。それはローシェンナ達も同じでいつでも戦えるようにそれぞれの武器を構えるのだった。

そんな中でシエラはしっかりと感じていた。また……再びこの場所に戻ってきたという実感を。一度は逃げ出した場所だけど、またこうやって自分の周りに仲間が居てくれる。その事だけでシエラは充分過ぎるほどの充実感を感じていた。そんなシエラが思う。

……また……こうして、いつもの仲間に囲まれて戦う事になる。今回の事は……私が悪いのに、私が逃げ出したから、確かめる勇気が無かったから、皆に心配を掛けたのに、また……こうして受け入れてくれた。だから……今度こそは決着を付ける。アレッタ……あなたとの責任にも……。

シエラはアレッタをしっかりと見詰めていた。そしてアレッタもしっかりとシエラを見詰め返していた。どうやらアレッタも感じ取ったようだ。シエラが再び安息の場所を手に入れた事を、だからこそアレッタは許せずに怒りが沸きあがってきた。

そんなアレッタの怒りにシエラは気付かないままに、戦いの幕は上がるのだった。

第百十四話　繋がり、再び（後書き）

はい、そんな訳で……すまん琴未。確かに美味しい所を持って行ったんだが、思っていた以上に盛り上がらなかったな。琴未よ……不憫でなりませんっ！

さてさて、そんな戯言はさておき、今回のエレメは少し密度が多くなってしまいました。……いや、だって、思っていた以上にシエラさんが粘ってきた物だから。ついつい琴未達が登場するのが遅くなってしまって、そんな訳でこんな密度と文字数とページ数になってしまいました……てへっ。

はい、いつものように適当に誤魔化したところで次に行ってみましょうか。さてさて、ついに白キ翼編もラストバトルに突入です。今回の戦いで全てを終わらせるつもりですので、ご承知を。更には……実はシエラにはまだ何かが、まあ、ヒントは本文にあるので、その時を楽しみにしていてくださいね。

さてさて、話は変わりますが。このエレメ……遂に百万字を突破しましたっ！！！　正確には前話で百万字を突破したんですけどね。投稿するまで文字数が確認できなかったので、今回ご報告する事になりました～。

そんな訳で、ついでにこんなにも長い話を書き続けているバカ、げほっ、げほっ、いや、書き続けている人がどれぐらい居るのかをちょっとだけ調べてみました。まあ、そんな奴は居ないだろうな、と最初は思ってたんですけど……以外に居たな……百万字を突破して書いてる作者って。

中には私より早く、更に話数を少なくして百万字を突破している方も……どれだけ一話の密度が濃いんだよ。それにどれだけ早く書いてるんだよ。とか思ってしまいましたけどね。

まあ、何にしても……祝・百万字突破！！！

という事で一応お祝いしておきましょうか。そんな訳で、これか

らも二百万字、はたまた一千万字を目指して書いていきたいと思っております。……というか、そこまで続くのか、このエレメは……。

まあ、何にしても次の話はすでにプロットを書いている段階に入っているので、何とか六月中に仕上げて、七月には新編突入と行きたいですね。……まあ、その前に六月中に白キ翼編が終わるかどうかが疑問ですけどね。

さてさて、そんな訳でいろいろと書き終ったところで、そろそろ締めましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、近距離用の眼鏡を購入してから、すっかり調子が良くなった葵夢幻でした。……まあ、いつまで調子が良い時期が続くか分かりませんけどね。

第百十五話　アンブルの思惑と氷のシールダー

昇達の陣営を背後に回して、フレト達はアンブルとの睨み合いに入っていた。どうやらフレトもアンブルもお互いに出方を窺っているようだ。そんな中でフレトが逸早く半蔵に状況を確認するような言葉を投げ掛ける。

「半蔵、お前の調べでは、あのシェルとかいう精霊が俊足の精霊だったな」

「御意」

フレトの言葉を肯定するかのように半蔵は軽く頭を下げてフレトの言葉に答えた。そしてフレトはそんな半蔵の報告を元に、すでに戦略を練り上げていたように頷いた。

「なら決まりだな。レットはあの俊足の精霊を相手に戦え。無理してを倒す必要は無い。一対一でやりながら時間を稼げ。もちろん倒せるなら倒しても構わないぞ」

「分かりました、フレト様」

「ラクトリーと半蔵はもう一人の精霊を叩け。こっちの精霊に関しては情報が無いからな、一気に叩き潰して相手の戦力を一気に削ぐ。その間に俺はあっちの契約者を相手に時間を稼ぐ、ラクトリーと半蔵がなるべく早く相手の精霊を倒せるようなら。形勢は一気にこっちが更に有利になる。今回はこの作戦で行くぞ」

そんなフレトの言葉に精霊達はそれぞれに返事を返して武器を構える。ちなみに、咲耶は留守番をしており、今回は戦場となるこの場には居ない。フレトもシスコンなだけあって、セリスを一人きりには出来ないのだろう。だからこそ、いつでも精霊の一人をセリスの世話役として付かせる事が多い。よほどの事が無い限り、全ての精霊を一つの戦場に集める事をしないのがフレトのやり方だ。

それはフレト達が完全契約という、常に一歩有利な条件を手にしているからだ。つまりフレト達は戦う前から有利な条件を手にして

いるのである。そのうえ今回は数においてもフレト達が勝っている。だから咲耶無しでも充分に戦えるだろう。

それにセリスに護衛を付けているからこそ、フレトは何の心配もなく戦う事が出来るのだ。更に今回は昇達との共同戦線である。だからこそ、余計にフレトは余裕があった。

それでもフレトは相手を警戒する事を忘れてはいない。なにしろ、コーラルと紹介された精霊の能力は未だに分かってないし、それは相手の契約者に関しても能力が分かっていない。だからこそ、フレトはコーラルに攻撃を集中させて、そこから切り崩そうとしたのだろう。

確かにコーラルの能力については未だに不明だ。だが戦えばすぐに分かるだろう。それにコーラルと戦うのは経験豊富なラクトリーと半蔵だ。だからどんな精霊でも、この二人を相手にすれば梃子摺るのは確実だ。フレトもそれが分っているからこそ、コーラルに対してラクトリーと半蔵の二人を当てたのだ。

それだけではない。半蔵の報告からシェルの能力については分っている。この中でシェルのスピードに対抗できるのはレットだけだろう。確かにレットの属性は爪翼でスピードに関しては翼の属性に劣る。だが、レットは完全契約をしているのである。だから爪翼の属性でも翼の属性にも劣らないスピードが出せる事は分っている。

なにしろレットは以前にシエラと戦っているのだから。だからスピード戦に関しても、レットは経験がある分だけに劣る事は無いとフレトは判断したのだ。だからこそ、レットをシェルにぶつける事にした。

そんな考えもあり、フレトはそんな陣形を取ると、先手を取るためにレットから攻撃を仕掛けるように命を下す。それを皮切りにレットはシェルに向かって駆け出す。自分に向かっていると感じたシェルは一瞬で駆け出すとレットとの距離を一気に詰めるとガーレジャンビーヤを突き出す。

これでっ！　シェルは地上戦に関して自分のスピードで勝る者は

限られている事を知っている。だからこそ一撃でレットに致命傷を与えられると思ったのだろう。

だが、現実はシェルの思い通りにはならなかった。それどころかレットの思惑通りに事は運んでいた。

レットはシェルの突き出してきたガーレジャンビーヤが届く前に背中の翼を広げると、そのまま回転するように飛び立ち、シェルとの距離を保ちながらシェルの上を一回転してガーレジャンビーヤを避けるのと同時にテルノアルテトライデントを一気に振るう。

シェルとしてはまさかレットが翼の属性を有しているとは思っていなかった為に一瞬だけ行動が遅れた。それでもシェルは地上戦では最速である。だからガーレジャンビーヤで防御しながらもレットから一気に距離を取った。

何とか避けた、なら、今度はこっちからっ！　レットの攻撃を避けてそんな事を考えるシェルはすぐにレットに向かって反撃に移ろうとしたが、いきなり腕から血が噴き出したのでシェルの動きが止まってしまった。

……そういう事か。噴き出した血は一瞬で止まり、今では出血もしてない。それだけレットの攻撃が鋭い事を示していた。その事でやっとシェルも気付いたようだ。そう、レットの属性に。これほどの切れ味を出せる属性は限られている。それに背中に生えた翼を見ればレットの属性はすぐに察しが付いた。この受けた切り傷こそ、爪の属性を持っている証拠であり、背中に生えた翼から翼の属性を持っているの確かである。だからシェルにもレットの属性が爪翼だとわかったのだ。だからこそレットに向かって言葉を掛ける。

「随分とセコい手を使ってくれるじゃない」

シェルとしてはレットは始め、自らの足で駆け出した事から翼の属性を有している爪翼の属性の持ち主だとは思わなかった。だがレットはシェルの攻撃を避ける時に始めて爪翼の属性を発動させて空中に飛び上がって一回転しながら切り掛かってきたのだ。シェルにとってはレットが空中を飛べる事が予想外の出来事だ。それに受け

たきり傷といい、その事を踏まえてシェルはレットが爪翼の属性だと見抜いたのだ。だから、その事を隠して攻撃してきたレットに向かって、そんな言葉を放ったのだ。

一方のレットはそんなシェルの言葉を受けて不適に笑いを見せながら言葉を返すのだった。

「セコいとは心外だな、これが戦術という物だろう。もっとも、この手をセコいというなら、そんなセコい手に引っ掛かる方もどうかと思うが」

「くっ、言ってくれるじゃない」

レットが返した言葉にシェルは苦い顔をする。確かにレットが言ったとおりに、こんな戦術に引っ掛かるのは相手への警戒を怠っていた証拠とも言えるだろう。レットはその事を的確に指摘しており、その言葉を聞いたシェルは黙り込むしかなかった。

けれども、これでシェルもレットの属性に気が付いた訳になる。だからシェルも不用意に突っ込んできたりしないだろう。一方のレットはシェルの俊足に合わせて背中の翼を羽ばたかせている。翼の属性を持っている限りは地面に足を付けているよりかは、少しでも空中に浮いていた方がスピードを活かせるのだ。

だからこそレットもシエラやアレッタと同じように地面に足を付けたりはしない。翼の属性に頼って移動した方がスピードが出るからだ。

それでも初動スピードはシェルの方が上である。だからこそシェルはあえて先手を取る事にした。なにしろレットは鷹の精霊で爪翼の属性を持っている。だから翼の属性ほどのスピードは出せないとシェルは判断したのだろう。だからこそシェルは再びレットに向かって一気に距離を詰めるのだ。

一方のレットはそんなシェルに対して上昇する事はせずに、あえて地面から少し浮いた距離を保ちつつ、シェルの攻撃に対応する。なにしろシェルが持っている縮地の属性から言ってもレットの懐に入るのは簡単だ。だから一気にレットの懐に飛び込んだシェルはガ

ーレジャンビーヤを振るい続ける。
相手が普通の爪翼の属性なら縮地の属性を持っているシェルの方がスピードでは圧倒的に有利だから、シェルは一気に攻勢に持って行けると思っていただろう。だがレットのスピードはシェルに匹敵する物であり、初動スピードでは負けていても、戦いを始めるとレットはすぐにシェルにスピードに対応できるスピードを発揮したのだ。
その事に戸惑いながらもシェルは攻勢に出ようとするが、レットは決してそれをさせない。レットは上手くシェルの攻撃を捌きながらもテルノアルテトライデントで反撃を入れているのだ。つまりは一進一退。そんな攻防をレットとシェルは繰り返している。
おかしい、なんで？　攻防を繰り返しているうちにシェルはそんな事を思い始めた。それはそうだ。なにしろレットは爪翼の属性でスピードでは翼の属性に及ばないはず。それなのにレットのスピードは翼の属性に匹敵するほどのスピードを出してシェルとの攻防を繰り返しているのだからシェルがそんな疑問を抱いても不思議ではなかった。
そんな攻防をしている間にも、アンブルの陣営に居る、もう一人の精霊も違和感を感じながらも戦っていた。

ラクトリーのアースブレイククレセントアクスを大きな篭手で受け流しながら、コーラルもう一方の腕に付いている、これも大きな篭手で空間を切り裂いて現れた半蔵の攻撃を受け止めていた。そんな状態の中でコーラルはラクトリー達の強さに違和感を覚えていた。
攻撃の鋭さ、反応速度、そして攻撃力。どれを取っても私の上を行ってる。そんな事を考えながらもコーラルはラクトリーと半蔵の攻撃を受け流しつつ、防御に専念するしか出来なかった。それでも思考だけは働かせて一つの決断を出した。
それと同時にラクトリーのアースブレイククレセントアクスと半

蔵の空斬小太刀をそれぞれの篭手で受け止めてから、二人に向かってコーラルは口を開いた。
「もしかして……完全契約？」
そんな疑問を投げ掛けてきたコーラルにラクトリーは軽く笑みを浮かべながら返答する。
「だったら、どうします」
「少し……やっかい」
ラクトリーの言葉に短い返答をするコーラル。どうやらコーラルは見た目どおりにあまり心境を表に出したり、感情を表すという事をしないのだろう。無愛想、少し良く言えば無表情。そんな感じの精霊だ。
そんなコーラルに向かってラクトリーは更に言葉を投げ掛ける。
「やっかいですか……それなら、本気を出したらどうですか」
ラクトリーは言葉を言い終えるのと同時に一気にクレセントアクスに力を入れる。どうやらそのまま押し切ろうとしてるのだろう。さすがに大地の精霊だけあって、破壊力はトップクラスに入る。そのうえラクトリーは破壊力に特化した大地の精霊だ。だからこそ、そんな力押しの手に出ても不思議ではない。
けれどもラクトリーがそんな手段に出たのは、それだけの理由だけではない。それはコーラルの身に付けている精霊武具を見たからだ。
コーラルは防具と言える物をほとんど付けていない。防具と言える物は両手に付いている大きな篭手だけだ。その他は服と言っても良いほどに防具という物を付けていなかった。その分だけ動きやすいだろうが、ラクトリーの一撃を喰らえば落ちるのは確実だ。だからこそ、ラクトリーは得意の力技に出たのだ。これなら相手に上手く捌かれても、その余波でダメージを与える事が出来るからだ。
だが、コーラルはラクトリーの思惑とは正反対の方向に出る。コーラルはまず、半蔵の空斬小太刀に掛かっている力を逸らすと半蔵の姿勢を崩す。そこにすかさずコーラルは蹴りを入れるが相手は半

蔵である。そんな反撃などを喰らうはずはなく、逸早く退いてコーラルと距離を取った。

そしてコーラルは器用にも片足で立ちながらも身体を半回転させるとラクトリーに向かって拳を突き出してきた。だがラクトリーのクレセントアクスはコーラルの篭手に密着しているだけで決して動かせないわけではない。だからこそラクトリーはクレセントアクスを引き戻す事無く、その場で立てるように構えるとコーラルが放った拳に備える。

そんなラクトリーのクレセントアクスとコーラルの拳がぶつかり合う。さすがにクレセントアクスの柄で防御しただけにコーラルにダメージは与えられないものの、防ぐ事には成功した。少なくともラクトリーはそう思った。

だがコーラルはクレセントアクスの柄に拳が当たった瞬間に、更に拳を強く握り締めると指の間から爪が飛び出してきてラクトリーに迫る。

まさかこんな隠し球を持っているとは思わなかったラクトリーは上半身だけを横に倒すように体を折ると、何とかコーラルの爪を回避する。そこからコーラルは今までクレセントアクスの刃を防いでいた手を一瞬だけ離すと器用にクレセントアクスの柄に絡ませる。そしてそのままクレセントアクスを押さえ込む。これでラクトリーはクレセントアクスを自由に振るう事が出来なくなったわけだ。

その隙を狙ってコーラルはクレセントアクスを強く握り締めながらもラクトリーとの距離を詰めると、一旦退いた拳を再び突き出す。今度は爪が既に出ている状態だ。今のラクトリーが取っている体勢では防ぐ事は難しいだろう。

だがコーラルは攻撃を中断すると今まで掴んでいたクレセントアクスを離すとラクトリーから距離を取った。

「さすがですね、助かりました」

すぐ横に着地した半蔵に礼を言うラクトリー。そう、コーラルがラクトリーから離れたのは半蔵がフォローしてきたからだ。半蔵は

空間を切り裂いて、二人の上空に姿を現すと、コーラルに向かって苦無と呼ばれる手裏剣を打ったのだ。その気配に気付いたからこそ、コーラルはしかたなくラクトリーから離れざるえなかったのだ。

そんな半蔵が珍しくラクトリーに向かって言葉を返した。

「相手の情報を探るためとはいえ無茶をしすぎだ」

そんな言葉を放ってきた半蔵に対してラクトリーは笑みを交えながら返答するのだった。

「あなたがフォローしてくれると思ったから少しだけ無茶をしただけです。ですが、これではっきりしましたね」

「そうだな」

ラクトリーの言葉に短い返答をする半蔵。どうやら二人にはコーラルがどういう精霊かが分かったようだ。そんなラクトリーがアースブレイククレセントアクスを構えなおすと、コーラルに向かって言葉を放つ。

「格闘の精霊、拳の属性ですね。間合いは狭いですけど、その分だけに何をしてくるのかが分かりませんね」

「そうだな。下手に攻撃すれば思わぬ反撃を喰らうぞ」

「分っています。攻撃をするからにはどうしても相手の間合いに武器を入れないといけませんからね」

そんな会話をするラクトリーと半蔵。その話はしっかりとコーラルの耳にも届いていたのだが、コーラルは表情一つ変えずに、それがどうした、という感じでラクトリー達の出方を窺っていた。

そもそも攻撃というものは己の武器を相手にぶつけたり、斬り付けたりしなければいけない。つまり、どんな長い武器でも最終的には相手の間合いに武器を入れる事には変わりない。だからこそラクトリーと半蔵はあんな事を言ったのだ。

なにしろコーラルは格闘の精霊。つまり武器は持たずに己の拳と精霊武具だけで相手を倒す精霊だ。だからこそ、攻撃の間合いは拳が届く範囲、つまり腕の長さに限られている。まあ、精霊武具のおかげで多少攻撃範囲は広くなったといえるだろうけど、それでも他

の精霊に比べればかなり狭い事は確実だ。
　それだけに後手に回りがちだが、そこに格闘の精霊たる特徴がある。コーラルの精霊武具から攻撃の要は拳につけている篭手から出ている爪に限られると思いがちだが、実際には蹴りや当身などの近接戦闘で確実にダメージを与えてくる。
　それだけではない。なにしろ格闘の精霊において最大の特徴と言えるのが密接戦闘での戦いである。武器を持っていないだけに、相手と密着していてもコーラルは攻撃手段を持っている。一方で武器を手にしているラクトリーや半蔵でさえも密着されると武器を振る事が出来ずに、どうしても攻撃が出来なくなってしまう。
　格闘の精霊は間合いが狭い分だけに密着しての戦闘が出来るのだ。
　それともう一つ。先程ラクトリーが言ったとおりに攻撃を当てるためにはコーラルの間合いに武器を入れないといけない。それがすんなりと当たればいいが、逆にコーラルによって武器を封じられる事もある。
　なにしろコーラルの精霊武具と言える物はどうやらあの大きな篭手だけに、下手に攻撃すれば捌かれるどころか逆に武器や腕を掴まれて、動きを封じられたうえにコーラルが得意としている近接戦闘へと強制的に入ってしまう。それを警戒したからこそラクトリーと半蔵はそのような言葉を交わしたのだ。
　これでコーラルの特徴は分かった。それでも厄介だと言える物が一つだけある。
「あの精霊武具、思ってた以上に厄介ですね」
「そうだな」
　そんな会話をするラクトリーと半蔵。その会話はしっかりとコーラルにも届いており、コーラルは篭手を強調するかのように前に出すと口を開いてきた。
「これが僕の精霊武具コンセアルバグナク＜隠し持つ虎の爪＞だよ。防御と攻撃を一体化した武器だから、完全契約の精霊でも退けは取らない」

そう、はっきりと断言するコーラル。なにしろ完全契約の精霊にも退けは取らないとまで断言したのだ。これはラクトリー達に対する完全な挑戦状と言ってもいいだろう。なにしろ完全契約だけでラクトリー達は一歩だけ優位に立っているのだ。そんなラクトリー達に自ら引けを取らないと断言したぐらいだ。コーラルは相当な使い手だと判断しても良いだろう。

だがラクトリー達も伊達に何百年も生きてきたわけではない。二人とも相当の修羅場を掻い潜っており、相当の経験を積んでいる。だからこそ自分達が少しぐらい目下に見られても怒りを感じるどころか二人とも冷静に状況を判断するのだった。

そんな中でラクトリーが口を開く。

「確かにあの戦い方なら、こちらも梃子摺りそうですね。どうします？」

そんな風に半蔵に尋ねるラクトリー。そんなラクトリーに半蔵は答えが決まっていると言いたげな視線を送りながらも返答する。

「我は主の命を果たすのみ」

そんな返答をする半蔵にラクトリーは相変わらずと言いたげな顔をすると少しだけ笑みを浮かべた。どうやらラクトリーと半蔵は同じ考えを持っているようだ。確かにコーラルの属性や戦い方は厄介だろう。けれども、決して二人を相手に勝てない相手では無いと二人とも判断したのだ。だからこそラクトリーは笑みを浮かべるだけの余裕を持っていた。

一方でそんなラクトリー達を相手にする羽目になったコーラルは相変わらず表情を一つ変えない。それどころか内心では何を考えているのかも分からない程だ。もしかしたら何も考えてないのかもしれないと思うほど、人形に近い表情でラクトリー達の動向を窺っている。

コーラルの戦い方から見ても、相手から攻めて来てもらった方が戦いやすいのだ。間合いが狭いだけに自分から先手を取ると、どうしても避けられた時に相手の反撃を捌ききる事が出来ない場合が多

い。それだけコーラルはカウンターを得意としているのだ。だからこそ今はラクトリー達の動向を探っていて、自ら動こうとはしなかった。

そんなコーラルと対峙しながらラクトリーは半蔵に向かって視線を送ると半蔵は頷いたので、ラクトリーは一気に力を発動させる。地の属性を込めたクレセントアクスを一気に振り上げるラクトリーは、そのままの勢いでクレセントアクスを地面へと叩きつけた。

「アースウェーブッ！」

叩き付けたクレセントアクスの衝撃がそのまま地面へと伝わり、地面は一定の幅で波打つとコーラルに向かって波紋を広げていく。さすがはミリアの師匠なだけはある。ラクトリーは攻撃範囲を的確に絞る事で破壊力を増しているのだ。

だからアースウェーブが通過した場所は雑草どころか地面そのものを破壊しながら、一気にコーラルに向かって突き進んでいく。

さすがにそんな攻撃を直撃しては堪らないとばかりにコーラルはアースウェーブを引き付けてから、その攻撃範囲から一気に飛び出る。だがコーラルはその場に留まる事は許されなかった。なにしろ、既にコーラルが避けた場所を狙って半蔵がコーラルの後方上空から何本もの苦無を連続で打ち付けてきたからだ。

半蔵の攻撃を避け続けるコーラル。そんなコーラルに追い討ちを掛けるようにラクトリーが更に動く。

「アーススピアッ！」

半蔵が苦無を打つ事を止めて、コーラルがやっと一安心したところに槍と化した地面が何本もコーラルに向かって伸びて来る。その事でコーラルはすぐにその場から飛び退き、後退するしかなかった。

そんなコーラルに併走するかのように、今度は半蔵が横から苦無を打って来る。だからコーラルは反撃もままならずに走り続けるしかなかった。そして半蔵の攻撃が止まると、再びラクトリーが地の属性を発動させる。

そんな攻撃をラクトリーと半蔵は続けた。それだけ二人はコーラ

ルの特徴を掴んで、すぐに対抗策を練り出したと言えるだろう。なにしろコーラルは近接から密着の戦闘を主流としている。だからこんな風に遠距離での攻撃には反撃する事が出来ずに、ただ避け続けるしかないのだ。その事を見抜いたからこそ、ラクトリーと半蔵はすぐに遠距離戦術を選んだのだ。

だがコーラルも遠距離攻撃に対して何の打開策を持っていない訳ではない。大きな篭手を活かして距離を詰めるだけの技量は持っている。だが今回は相手が悪かった。なにしろ相手は百戦錬磨のラクトリーと半蔵である。相手が一人だけなら、何とか対等に戦う事が出来ただろう。だがこの二人を相手にするとなると、どうしてもコーラルは防戦どころか避けるだけが精一杯になってしまう。

それほどコーラルにとっては厄介な相手なのだが、それでもコーラルの表情が崩れないのはコーラルらしいとも言えるだろう。

そんなコーラルを目にしながらもラクトリーと半蔵は確実に攻撃が入れられる瞬間を作り出すために今は遠距離攻撃に専念するのだった。

そんな精霊達の戦いを尻目にフレトとアンブルはお互いに精霊達の戦いを観戦していた。フレトとしては完全契約した精霊達の力を示し、自分達が有利である事をアンブルにしっかりとアピールして自分達が有利な事を告げることでアンブルの戦意を下げようとしていた。

一方のアンブルは精霊達の戦いから、初めて見るフレト達の戦力を測っていたのだ。

だが戦況はフレト達が完全に有利。それほどまでに完全契約をした精霊と通常契約をした精霊では差が出るのだ。それだけではなく、フレトの元にはラクトリーや半蔵と言った経験豊富な精霊も揃っている。だからこそ、ここまでフレト達は優位に戦闘を持って行くことが出来ているのだ。

そんな戦況を見てアンブルは片手で顎を擦りながら言葉を発する。
「ふむ、どうやらこちらが圧倒的に不利なようですね」
「だったら素直に降参して退散したらどうだ」
アンブルの言葉にフレトはマスターロッドを突き付けながら言葉を返す。それでもアンブルは表情を変える事無く。まるで今の戦況でも不利を感じていないかのような雰囲気を出しながらフレトに向かって言葉を返す。
「そうしても良いのですが、そうすると私が怒られてしまいます。ですから、ここは粘らせてもらう事にしましょう」
「粘っても何も変わらないと思うが、それどころか時間が経てば不利になっていくのはそっちだぞ」
あくまでも自分達の優位が揺ぎ無い事を強調するフレト。実際にフレトの言ったとおりである。なにしろ戦況は圧倒的にフレト達が有利。そのうえ時間が経てば追い込まれていくのはアンブル達の方なのは目に見えている。それでもアンブルは表情を曇らせる事無く、言葉を返すのだった。
「まあ、私の役目はあくまでも勧誘ですからね。ここで勝敗にこだわる必要はありません。つまりローシェンナさん達が勝って、こちらの増援に駆けつけてくるまで粘れば充分なのですよ」
つまりアンブルは最初から勝つ気は無いという事だ。確かに最初から数の上でもフレト達が有利なのは分っている。そのうえ完全契約という事実さえも明らかになったのだ。このまま行けばアンブルは確実に負けることだろう。
だが、そんな状況でも逆転する手が一つだけある。それはローシェンナ達が昇達を打ち破って加勢に駆けつける事だ。そうすれば数の上だけも勝る事が出来る。
けれどもアンブルの狙いはそれではなかった。先程アンブルが自ら言ったように、アンブルは勧誘に来たのだ。つまりローシェンナ達が昇達を打ち破れば、ローシェンナ達も気が済み、素直にアッシュタリアに加入する事だろう。

つまりアンブルはここで無理をしてフレト達に勝つ必要は無いのだ。あくまでもフレト達を昇達の加勢に行かせないための足止めに過ぎない。そんな考えを持っているからこそ、アンブルは最初から勝つ気は無く、あくまでも足止めに徹しようとしているのだ。

けれどもフレトとしては昇達の騒動に巻き込まれた分だけに、その間に受けたストレスを発散するためにも、ここはアンブルを叩きのめしたいという気持ちがあったのだろう。だからこそフレトはあえてアンブルに向かって言葉を放つ。

「なるほどな、そっちの思惑は分かった。……だがなっ！　こっちはいろいろとあって暴れないと気が済まないんだよっ！　だからここは相手をしてもらうぞ」

はっきりと戦う意思を示すフレト。どうやら今回の事でフレトも相当昇達に対して気を使っていたらしい。だからこそ思いっきり戦って、アンブルを叩きのめす事で今までの鬱憤を晴らそうというのだろう。そんなフレトの言葉を聞いてアンブルはやれやれ、といった感じて顔を横に振った。

「これはまいりましたね。私の能力は戦闘向きでは無いのですよ。だから戦いは精霊に任せているのですが、やはり私も戦わないといけないみたいですね」

「当然だっ！」

アンブルの言葉にフレトは短く強く言葉を返すと、マスターロッドの先に風を集中させると圧縮された空気が砲弾のようになり、アンブルに向かって放たれた。

そんなフレトの攻撃にもアンブルは慌てる事無く、不気味なほどに冷静だ。そのうえ動く気配すら見せずに両手をズボンのポケットに入れたまま能力を発動させる。そして次の瞬間にはアンブルの前に氷の塊が出現すると一気に広がって、アンブルの前面を全て覆うほどに広く展開された。

そんな氷の盾にフレトの攻撃がぶつかると風の砲弾は氷の盾を砕こうとするが、先に壊れたのはフレトが放った風の砲弾だった。ど

うやら完全に氷の盾に防がれて、風の砲弾は四方八方に流れ出して、その威力を失った。
そしてフレトの攻撃を完全に防いだ氷の盾はそのままアンブルの横に移動して、再びフレトの前にアンブルが姿を現して言葉を発する。
「見ての通り私の能力は氷のシールダー。だから攻撃には向いてないんですよ。お分かりになりましたか」
「なるほどな、それなら……思いっきりやっても大丈夫そうだなっ！」
アンブルの能力が分かったからにはフレトはもう相手の能力を探るために手加減する必要は無いと判断したようだ。
そもそもシールダーの能力は防御に特化した能力であり、それぞれの属性で盾を作る事が出来る。しかも作り出した盾の強度はかなり硬く、力のある契約者ならかなりの強度を持った盾を作り出すことが可能だ。
その代わりに攻撃手段をあまり持ってはいない。そもそもシールダーの能力は完全に戦闘を精霊に任せて、自分は相手の攻撃にやられないように守るための能力であり、自己保身に長けている者に現れやすい能力だ。
だからこそアンブルは直接戦いに参加する事はほとんど無い。あくまでも攻撃されたら防御するだけで、全ての攻撃は精霊に任せている。それほどまでにアンブルが作り出す氷の盾は硬く、その強度は大地の精霊が作り出す防御力にも匹敵するだろう。それほどまでの防御力を持っているのだ。だからアンブルは直接戦闘に参加する事は少ない。
だが、今回は数の上でもフレト達が上回っているからには、どうしてもフレトの相手をしないといけないだろう。それにフレトは戦う意思を示しているからには、このまま観戦しているわけには行かない事はアンブルにも察しが付いている。
だからこそアンブルはしかたないと溜息を付きながらもフレトに

向けて視線を向けるのだった。
「やれやれ、しかたないですね。ここは相手をするしかないですね。ですが、私の盾を貫く事は不可能ですよ」
そうはっきりと断言するアンブルの言葉がフレトに火を付けただろう。ならば絶対にその盾を砕いてやろうとフレトは一気に攻撃の構えを見せる。
「業火よ、その姿を槍と変え、敵を貫けっ！」
フレトが突き出したマスターロッドの周りに六つの巨大な炎が発生すると、炎はすぐに巨大な槍に姿を変えるとアンブルに向かって放たれた。フレトとしては、これほどまでの炎なら氷の盾を砕くとまでは行かなくても傷つける事は出来るだろうとは思っていた。
そしてフレトの放った業火の槍はアンブルに向かって行き、アンブルはそれを防ぐために再び氷の盾を前面に押し出す。そのため、ぶつかり合う業火の槍と氷の盾。業火の槍が衝突したためか、その場で巨大な爆発が起きると炎が一気に吹き上がる。どうやらフレトは先程の攻撃に火の属性を思いっきり込めたらしい。だからここまでの爆発と炎が巻き上がっているのだろう。
さて、これでも冷静でいられるかな。自分の攻撃によほど自信があるのか、フレトは爆発の炎を見ながら余裕を出しているが、すぐに攻撃の気配を察すると本能だけで後ろに飛び退く。そしてフレトの本能が正しいかのように、フレトが居た場所には氷が突き刺さっていた。
氷の先は尖っており、直撃を喰らえばフレトも無傷では済まなかっただろう。そんな事をしている間に、先程まで舞い上がっていた炎は一気に沈静化して、すっかり収まるとうっすらと爆煙が残る中からアンブルが姿を現した。
「おやおや、外してしまいましたか。なかなか勘の鋭い方ですね。どうやら私も本気でやらないとダメみたいですね」
「なら、その本気とやらを見せてもらうかっ！」
どうやら先程の攻撃はアンブルの盾によって完全に防がれたらし

い。それどころか姿を見せたアンブルは傷を一つも負っていない。それほどまでにアンブルが作り出す盾は硬く、よっぽどの威力を出さない限りアンブルに攻撃が当たる事は無いだろう。

それでもフレトはすぐに攻撃態勢に入る。先程の攻撃でアンブルの防御力がかなり優れている事は分かった。だからこそ、フレトは狙いを変えて攻撃を続ける。

「吹き上がれ、土流よ、その勢いを天を突けっ！」

今度はアンブルの足元にマスターロッドを向けて地の属性を発動させるフレト。そして地の属性が発動するとアンブルの足元から一気に土砂が噴き出し、天に向かって伸びていく。

これなら……ダメか。自分の攻撃を見てそんな事を思うフレト。確かにフレトはアンブルが盾を作れないと思った足元を狙って攻撃を仕掛けたまでは良かった。けれどもアンブルの実力はフレトの予想よりも上だった。

なにしろアンブルは一瞬で足元に氷の盾を作り出すと、盾の上に乗る状態で噴き出した土砂の上に乗っているだ。つまりこの攻撃も通ってはいない。完全にアンブルによって防がれてしまった。

確かに攻撃の狙いは良かったかもしれないが、アンブルの能力がここまで素早く発動し、なおかつ場所を選ばない事からアンブルは相当な力を持つシールダーだとフレトは感じざる得なかった。

そんな事を感じている内に噴き上がった土砂の勢いは徐々に弱まって行き、アンブルは土砂の上に乗りながらゆっくりと地上に降りてきた。けれどもフレトはその間にも次なる攻撃をしかける。二回の攻撃でアンブルの能力がどの程度の物なのかは既に分かった。後は打開策を講じるだけだ。だからこそフレトはあえて攻撃する事を選んだ。

「土なる蛇、その強度と長さを持って、敵を絡め捕れ」

アンブルが次の攻撃に出る前に先手を打つフレト。再び地の属性を発動させて大地を使って巨大な蛇を作り出すと、未だに着地したばかりのアンブルに向かって土の蛇を一気に放つ。その直後にすぐ

に次なる攻撃をするために詠唱に入る。
「水の円刃、早き回転を持って、敵を切り裂け」
マスターロッドの先に幾つもの水で出来た円盤のような物を作り出すと、それはすぐに高速回転を始めて、どんな物でも切り裂けるほどの切れ味を生み出す。その間にも先程作り出した土の蛇はアンブルを絡め捕ろうと、とぐろを巻くようにアンブルに絡み付くが、アンブルは四方に氷の盾を出現させると土の蛇を完全に防御した。
「炎の鳥、その回転を持って、竜巻と化せ」
土の蛇でアンブルを縛る事は出来なかったが、これでアンブルの動きを封じたのも同じだ。そこに先程作り出した水の円刃が一気にアンブルを縛っている蛇の間を掻い潜ってアンブルに迫る。だが、アンブルは小さな氷の盾を幾つも作り出すと完全にフレトの円刃を防いでしまった。
けれどもフレトの攻撃はそれで終わりでは無い。先程の詠唱で作り出した炎の鳥が土の蛇を巻き込む形でアンブルを巻き込むように炎の竜巻を作り出そうとしていた。
そんな状況でもフレトは思う。たぶん……この攻撃も防がれるだろう。だが、相手に攻撃の隙を与えずに連続で攻撃を加えていけば、必ず攻撃が通るはずだ。今はそれを狙うしかない。
どうやらアンブルの能力を見てフレトはそんな決断を下したようだ。確かにアンブルの防御力はかなりの物だ。だが、ここまで連続した攻撃に何時まで耐えられるかは別問題である。つまりフレトは一つの盾を砕くのではなく。連続した攻撃で盾が作れない状況を作り出して攻撃を通そうとしているのだ。
これこそがフレトの考え出したアンブルへの打開策だ。それに、ここまで思いっきり攻撃を続けると疲れるどころか、返って気持ち良く。フレトは今まで昇達に気を使っていたストレスと全て吐き出すかのように攻撃を続けているのだった。
そんなフレト陣営が有利に展開されている後方で昇達の戦闘も始まっていた。

第百十五話　アンブルの思惑と氷のシールダー（後書き）

はい、そんな訳で今回はラストバトルの前哨戦とも言えるフレト達の戦いをお送りしました～。

まあ、本文を読んでの通りにアンブルの思惑はフレト達を足止めする事にありますからね～。たぶんアンブルも本気で戦う事は無いでしょうね。……まあ、本気で戦っても、どこまでフレト達と戦えるかが疑問ですけどね。

けどっ！！！　まだアンブルには別の思惑があったりして。まあ、そこら辺はそのうち出てくるでしょう。たぶん昇達の戦いが終わった後に。

さてさて、そんな訳で白キ翼編も終盤を迎えた中で……私は死んでます。……いやね、毎年思うんだけど、私はこの時期が花粉の時期の次に弱いんですよ。寒くなるのなら、あまり影響が無いんですけど。ここまで気温の差が大きいと体調を崩す事もしばしば。

更にこれから暑くなってくる。完全に暑くなれば大丈夫なんですけどね、今の時期は気温も安定せずに、徐々に暑くなってくるじゃないですか。だから……その変化に身体が付いていかない。そんな訳でこの時期は花粉の時期と同様に更新が遅れるかもしれませんが、そこはご容赦くださいな。

さてさて、言い訳も終わったところで……本編に触れてみる？というか、今回のメインは昇達だからな～。まあ、昇が主人公だし、昇達の戦いが中心となっても不思議では無いんですが……フレト陣営はあまり目立たないな。

まあ、次編ではフレト達にも活躍をしてもらう予定です。……あくまでも予定ですけどね。そんな感じでプロットも書いていこうかと思ってます……はい、その通りです。まだ次のプロットが上がってません。そこは許してっ！　私も頑張ってるんですっ！！！　だから堪忍してっ！！！

さあっ！　言い訳は終わったっ！　だから開き直ろうじゃないかっ！　……えっ、ダメ。介錯はしてやると……切腹をしろというわけですかっ！！！　それぱかりはご堪忍をっ！

……さて、遊びはこの辺にして、ちょっとだけ先の話をしますか。次編が終わったらいよいよ、あの人を再登場させる話を作ろうかと思っています。……そうっ！　意外にも人気があった風鏡です。……まあ、まだ予定ですけどね。というか、そろそろ風鏡が出てくる話を作らないと風鏡が忘れられてしまいそうですからね～。だから、そろそろ風鏡が再登場する話にしようかなと思ってます。

……まあ、次編が終わってからですけどね。

さてさて、いろいろと書いていたら長くなってきたので、今回はここいら辺で締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、そろそろ次のアニメ番組の放送予定をチェックしないとかな、とか思っている葵夢幻でした。

第百十六話　全力全開のミリア

「さあ、こっちも始めましょうか。今度こそはボコボコに叩きのめしてあげるわよっ！」

そんな琴未が指を指して宣戦布告にローシェンナは更に高飛車な態度で返してきた。

「それはこちらのセリフですわ。今ではそこの妖魔は使い物にならない。そんな妖魔を抱えながら私達と対等に戦えると思っているのかしら」

そんな事を言って高笑いするローシェンナ。どうやらローシェンナは今の状況でも昇達に勝てると思っているようだ。まあ、それもしかたない。なにしろさっきまでシエラを徹底的に叩きのめしてきたという報告をアレッタから聞いているからだ。だから数では劣っていても、サモナーの能力でなら補えると考えても不思議ではない。

そんなローシェンナの言葉を聞いて琴未は怒ったように反論する。

「さっきから聞いてれば妖魔妖魔ってうるさいのよっ！　確かにシエラは無愛想だし、可愛くないし、目障りだし、邪魔以外の何者でも無いけど。それでも私達の仲間なのは間違いないのよ。それが何かの間違いで仲間になったのだとしてもね」

そう、はっきりと断言する琴未の肩に閃華は優しく手を置くと、琴未に後ろを見るように促す。そんな閃華に言われてしかたく琴未が振り向くとシエラが暗い表情で琴未を睨みつけていた。

「琴未……まず一回殴る」

「断るっ！」

シエラの一言をバッサリと切り捨てる琴未。そんな琴未はシエラを無視するかのように再びシエラに背中を向けたので、シエラはウイングクレイモアの鞘で琴未の頭を軽く殴った。まあ、あそこまで言われたらシエラも黙っている訳にはいかないのだろう。

けれども琴未は何事も無かったかのように昇に向かって話しかけ

てきた。
「さあ、昇。とりあえずはどうするのよ」
まずは昇の作戦を聞いてから動こうとする琴未。だが未だに腹の虫が収まらないシエラが会話に割って入る。
「私の事は無視するの？」
「当たり前でしょ。シエラはいつでも叩きのめせるけど、あいつらは今しか叩きのめせないのよ。だったら先にあっちを叩きのめす方が先でしょ」
はっきりと断言する琴未。そんな琴未の頭をシエラはもう一度ウイングクレイモアの鞘で軽く叩くのだった。
「さっきからうるさいわね」
さすがの琴未もここまで叩かれると痛くは無いものの、少しだけうっとうしいと感じるようだ。そんな琴未の横にシエラが並ぶように立つと、今度はローシェンナ達に向けてウイングクレイモアを構えた。
「琴未が無視するから悪い。でも、琴未の言うとおり。琴未はいつでも叩きのめせるから、今はあっちを叩きのめす事を優先させる」
そんなシエラの言葉を聞いて琴未は軽く笑みを浮かべるとシエラと同じく雷閃刀をローシェンナ達に向ける。
「なら、さっさとあいつらを叩きのめすわよ。それから、シエラが居なくなっていた間のお礼はきっちりさせるから覚悟しておきなさいよね」
「分ってる。迷惑を掛けたのは承知してる、だから……琴未の出る幕が無いぐらい活躍する」
「それは楽しみね。その間に私は昇を独り占めさせてもらうわよ」
「やれるものならやってみればいい」
そんな会話をするシエラと琴未。それからお互いに視線を交わすと、今度は笑みを交わしてお互いの武器を軽くぶつけ合った。心地良い金属音が鳴り響くと、シエラと琴未の後ろから溜息をした閃華がやっと二人と並ぶように前に出てきた。

「どうやら二人とも不器用なのは何とかした方が良いようじゃな。まあ、お互いに不器用じゃからこそ、今回の事は収まったのかもしれんのう。のう、昇」

そんな事を言った閃華は昇に同意を求めた。なにしろシエラと琴未は犬猿の仲と言っても良いほどだ。そんな二人が器用に仲直りではないが、シエラが妖魔である事を気にしないという事実を受け入れたと伝える事は出来なかっただろう。

シエラと琴未は不器用なりにお互いの意思を確かめ合い。お互いにいつもの関係でいられる事を確かめ合ったのだ。それは言葉で素直に伝えられない二人のやり方なのだろうけど、ここまで不器用だと、さすがの閃華も溜息を付いてしまうようだ。

一方で同意を求められた昇は会話に参加しようとせずに何かを考えているように顔を伏せていた。そんな昇を心配してミリアが昇に向かって話しかけると、昇はいつものようにミリアの頭を優しく撫でると、ローシェンナ達に鋭い視線で睨み付けるのだった。

それは一瞬だけ昇かと疑うほどの鋭い眼差しだった。そんな昇が誰に向かって話しているのかが分からないが言葉を発してくる。

「今まで……僕にこんな感情が……ここまで怒るという事を感じた事は無かったよ。僕は今始めて……自分がここまで怒ってると感じてる。それほどまでに僕はあなた達を、あなたを許す事が出来ない。だから、全ての決着をここで付けるっ！」

はっきりと断言する昇。それは昇からの宣戦布告と言えるだろう。そんな宣戦布告を受けてローシェンナ達も黙ってはいられない。

「手負いの妖魔が居ながら、よくそんな口が叩けますわね。いくらエレメンタルアップがあるからと言っても、私の前では役に立ちませんわよっ！」

「そうだ、そうだーっ！」

ローシェンナの言葉に同意するかのように騒がしく叫ぶエリン。どうやらエリンもローシェンナと同じ考えのようで、今の状況でも充分に勝てると思っているのだろう。だが、その中でアレッタだけ

が昇の異変に気付いていた。
　確かにアレッタは昇を数度しか見てはいない。けれども今の昇は前に戦った時とはまるで違った、そんな感じを受けていた。それが何なのか分からないが、どうやらアレッタ達の行動が昇の闘争心に最大級の火を付けてしまった事には間違いないようだ。だからこそ、昇も自分自身では今まで感じた事が無いぐらいの怒りを感じていると言葉に発したのだろう。
　そんな昇の変化に気付いたのはアレッタだけではない。閃華もしっかりと見抜いていた。だからこそ閃華は安心して昇を見ている事が出来た。
　確かに昇はシエラの事で今までに感じた事が無いぐらい怒っているのかもしれない。けれども、それをしっかりと自覚して、口に出せるぐらいコントロールしているなら暴走する危険は無いからだ。それどころか今までの昇には欠けていた闘争心が高ぶっているのだ。どうやら今回の昇は今まで以上に本気で戦う気らしい。だからこそ閃華は安心しながらも、少しだけ楽しげな声で昇に向かって尋ねる。
「それで昇、何か策でもあるのかのう？」
　そんな閃華の問い掛けに昇ははっきりと答えてきた。
「何も無いっ！」
　その言葉を聞いてシエラと琴未は思わずこけそうになる。そしてミリアは昇の隣で呆然とするばかりだ。そんな中で閃華だけが冷静に話を続けてきた。
「では、どうするんじゃ？」
「皆は前と同じ相手と戦って。最初から全力全開で、エレメンタルアップを最大限にして一気に倒すっ！」
　はっきりと断言する昇。そんな昇の言葉を聞いてローシェンナが皮肉めいた言葉を発してくる。
「よくもまあ、妖魔如きにそこまで戦えますわね。妖魔と分って用済みになったのなら必要ないでしょう。さっさと契約を解除して捨てればいいですのに」

疲れたような口調でそんな言葉を放つローシェンナ。まあ、ローシェンナとしては自分自身の本音を言っただけに過ぎないが、その言葉が更に昇の闘争心を高ぶらせる事になるとはローシェンナも思いもしなかっただろう。だからこそ昇はローシェンナに向かって叫ぶ。

「妖魔だとか、必要だからとか、そんな事は関係無いっ！　僕達は家族だっ！　一緒に居る事が当たり前だから一緒に居る。そこに妖魔だとか、必要だとか、そんな理由こそが必要無いっ！　一緒に居る事が当然なんだからっ！」

はっきりと叫んだ昇にローシェンナは思わず一歩だけ退いてしまう。まさか昇がここまで本気になって反論してくるとは思ってもみなかったのだろう。それだけローシェンナにとっては妖魔の問題は軽い物であって、重要視する必要は無いのだ。

だが昇達は違う。今まで暮らしてきた時間、一緒に戦ってきた修羅場。幾つもの困難を一緒に乗り越えてきた掛け替えの無い存在を否定されて、昇に黙っている事なんて出来はしない。だからこそ昇は叫ばずにはいられなかったのだ。

そんな昇の言葉を聞いて、思わず退いてしまったローシェンナだが、すぐに気を入れ直すと昇に向かって言葉を投げ掛けてきた。

「なら、その妖魔を精々大事にしとけば良いですわ。ですが、私達との決着はつけてもらわせますわよ。アークイラ、アストーレ、出ていらっしゃい」

ローシェンナの言葉と同時に魔法陣が展開されると、そこから巨大な鷲と鷹が姿を現した。どうやらローシェンナ達も臨戦体勢に入ったようで、アレッタもエリンもそれぞれに武器を構えている。

そんなローシェンナ達を見て、昇は前に居る皆に話しかける。

「この戦いで全部終わらせる。準備は良い？」

そんな事を問い掛ける昇に対してそれぞれに返事を返してくる。

「いつでも良いわよ昇、思いっきり暴れられるようにしてよね」

「私も私も～、思いっきり暴れたいから思いっきりやっちゃって～」

「では、行くとするかのう」
琴未、ミリア、閃華の順番で返事を返してくる。そして昇は最後にシエラに目を向けるとシエラも少しだけ振り返って昇と視線を交わすと少しだけ微笑んで見せてから答えてきた。
「問題ない、この戦いで……私の過去にも決着を付ける」
そんなシエラの言葉を聞いて昇はシエラに頷いて見せると、シエラは再び前を向いて自らの敵を見据える。その間に後ろに陣取っている昇は精神を集中させると、昇にだけしか見えない赤い紐が四本。今度はしっかりと全員から伸びてきた。
昇はその四本の紐を鷲掴みにすると、四本の紐を確かめるように掴んだ手を胸に当てる。そうする事で昇は再び繋がりを感じようとしたのだろう。そして今度こそ、しっかりと皆と繋がっている事が確認できた。これで迷う事は無いと皆と繋がっている赤い紐を伝って一気に力を流し込む。
「エレメンタルアップッ！」
昇が叫ぶのと同時にシエラ達の四人から一気に力が沸き出す。その力を量で言ったら前回の戦いで見せた量とは比べ物にならないほど増していると言っても良いほどの力が一気に溢れ出たのである。
そんな光景を目の当たりにしたのだ、ローシェンナ達は驚きを隠せなかった。なにしろ前回の戦いで見たエレメンタルアップとは比べ物にならないほどシエラ達は力が上がっているのだ。そんな光景を見れば驚かずにはいられないだろう。
そして一気に限界を超えた昇達からシエラが一気に上昇すると、そんなシエラに合わせるかのようにアレッタがすぐにシエラを追って急上昇して行った。どうやらアレッタとしてもシエラとの決着を付けてしまいたいのだろう。それだけではなく、昇にはシエラとアレッタとの間には特別な何かがあるのではないのかと感じ取っていた。だからこそ昇は上空での戦いを全てシエラに委ねると判断して自分達は地上での戦いに専念するのだった。
そんなシエラ達を見送ると昇はすぐにミリアに向かって叫ぶ。

「ミリア、お願い」
「うん、分ってるよ～」
片手を上げながら元気の良い返事を返してきた。そこがミリアらしいところだろう。そんなミリアがエレメンタルアップで一気に力を得た事で、すぐに全力が出せる体勢へと持って行く。
「発動、ティターンモードッ！」
ミリアの精霊武具が防御型から破壊型へと変わるとミリアは一気にエリンに向かって突っ込んで行った。
さすがに全力全開のエレメンタルアップだけあって、ミリアが突っ込んでいくスピードもはるかに上がっており、そんなスピードで突っ込んでくるとは思っていなかったエリンはミリアのアースシールドハルバードを受け止めながらも、勢いを止める事が出来ずにミリアと共にローシェンナの横を突っ切って行き、そのままはるか後方まで行くとやっとミリアが突っ込んだ勢いが弱まったところで、やっとミリアを弾き飛ばして何とか止まる事が出来た。
「さあ、これからじゃのう」
閃華がそんな事を言ってくると昇と琴未は頷いた。これで前回と同様に戦局が展開された。後は昇達がローシェンナと戦うだけだ。だがローシェンナは前回とは違って巨鳥を二匹しか出していない。これは昇のエレメンタルアップに対抗しようと一体の能力を上げたからこその影響だろう。もちろん、そんな事は昇も閃華も見抜いている。それでも閃華は昇に尋ねるのだった。
「どうやらあちらもエレメンタルアップを警戒して対抗策を打ってきたようじゃな。たぶんじゃが、今回の鳥は前回と違って強くなっているはずじゃ。そんな状況でどうするんじゃ、昇？」
そんな閃華の問い掛けに昇はすぐに閃華の方に顔を向けてきて尋ねてきた。
「閃華、悪いけど一人で一匹を相手にできる？」
そんな昇の問い掛けに閃華は軽く笑みを浮かべると、少しだけ楽しげに答えてきた。

「ふむ、キツイんじゃが。なにしろ今回は私も思いっきり暴れたい気分じゃからのう。あの程度の相手が丁度良いじゃろう」

どうやら閃華の気持ちも琴未やミリアとあまり変わりないようだ。なにしろシエラが居なくなってからというもの、閃華もいろいろと厄介事を回されてきたのだ。だからこそ、閃華としてもここは思いっきり暴れてストレスを発散させたいのだろう。

それに今は昇が思いっきりエレメンタルアップを掛けている。そんな気分と今の状況で閃華はまったく負ける気がしなかった。だからこそ閃華はそんな風に答えたのだろう。

そんな閃華の言葉を聞いて昇は頷くと今度は琴未に目を向ける。

「なら決まった。閃華は鷹の方をお願い。琴未は鷲を相手にして、琴未のフォローは僕がするから。それで一気に叩くっ！」

「分かったわ」

「うむ、了解じゃ」

昇の言葉に返事を返す琴未と閃華。そんな二人の答えに昇も満足げに頷くと一度だけ上空に目を向ける。そこにはシエラとアレッタの戦いが始まっていたのだが、今ではエレメンタルアップでしっかりとシエラと繋がっている事が実感できる。

だからこそ、昇はそんなシエラとの繋がりを確かめるように胸に手を当てて、シエラから伸びている赤い紐を優しく撫でる。それだけでシエラが傍に居るのが分かるのだから。だからこそ昇も思いっきり戦う事が出来る。

昇は気分を入れ替えて目の前の敵に目を向けると琴未と閃華の二人に向かって戦いの合図を出す。

「それじゃあ、一気に倒すよっ！」

「さあ、行くわよっ！」

「おうっ！」

昇の言葉にすぐに返事を返す琴未と閃華。そして琴未と閃華はそれぞれの敵へと駆け出して行き、昇も今回の戦いに幕を引くために全力を出すのだった。

「いった～いっ！」
　ミリアの砲撃みたいな突撃にさすがのエリンも受け止める事が出来ずに、ミリアと一緒になって吹き飛ばされていた。
　けれども突っ込んで行ったのがミリアである。当然のように止まる事なんて考えておらず、ただ突っ込んで行っただけでに、エリンがミリアの突撃から弾かれるように地面に叩きつけられると、その衝撃で爆撃にも似た衝撃が巻き起こり、噴き上がった土埃でミリアもエリンを見失ったのだろう。幸いな事にミリアからの追撃は無かった。
　けれども、これでローシェンナ達から離された事になる。確かにエリンの能力から言ってもローシェンナ達から離れて戦った方が良いのだが、まさかこんな奇襲をされるとはエリンも思ってもいなかった。それだけに今のミリアがどんな攻撃をしてくるのかが分かったものではない。
　だからこそエリンはすぐに体勢を立て直すとエルターレフレイルを構える。これでいつでもミリアが攻撃して来ても充分に戦えるはずだ。だが今のミリアは先程の攻撃で分かるように前回の戦いとは比べようが無いほどレベルアップしている。だからこそエリンも今度こそは最初から全力で行かなければならないと覚悟を決めていた。
　そして徐々に土埃が収まっていくとエリンの視界が開けてくる。どうやらかなりの距離をミリアと共に移動したらしく。かなり遠くにローシェンナの姿が見えた。まあ、これ程の距離を取っておけばエリンとしても戦い易いだろう。けれどもそれはミリアも同じだ。なにしろこれでミリアも周りを気にしないで破壊系の攻撃を充分に使えるのだから。
　そんなミリアを警戒しながらエリンは開けてきた視界の中にミリアを探す。そしてやっとミリアを見つけたエリンだが、思わず呆然としてしまった。そんなエリンがミリアに声をかける。

「……えっと、何をやってるの？」
　思わずそんな事を聞いてしまうエリン。まあ、それもしかたないだろう。なにしろミリアはエリンから少し離れた場所で上半身を地中に埋めている形で突っ伏しているのだから。そんなミリアがエリンの声を聞いてやっと土の中から顔を出すと、顔に付いた泥を落とすように顔を横に何度も振る。そしてやっと立ち上がってエリンにアースシールドハルバードを突き付けてきた。
「いきなり弾かないでよ～。おかげで思いっきり顔から地面に突っ込んじゃったじゃないか～っ！」
　いきなりワケの分からない文句を言い出すミリア。どうやらエリンに突撃して行ったまでは良いのだが、その後の事はまったく考えていなかったようでエリンに弾かれると姿勢を崩して、どうやら頭から地面に突っ込んで行って止まったようだ。
　そんな状況も分からないままに文句を言われたのだからエリンが黙っているわけが無かった。
「そんな事知るかっ！　そもそもそっちから突っ込んで来たんでしょ」
「なら、ちゃんと受け止めてよ～」
「何で受け止めないといけないのよ」
「ケチ～」
　そんな会話をした後で二人と『ウ～ッ』と唸り声を上げてお互いに威嚇を始める。傍から見ているとすでに戦いではなく、小動物同士の喧嘩みたいに見えるのが二人の何とも言えないところなのだろう。
　けれども二人とも間違いなく破壊力を持った精霊同士である。一度戦いの火蓋が気って落ちれば一気に燃え上がる事は確かだ。それが分っているだけに二人ともお互いに相手の出方を窺う……ワケが無かった。
　最初に動いたのはエリンの方だ。なにしろ先程の攻撃でミリアはその破壊力だけは無く、スピードもはるかに上がっているのは身に

染みて分っている。だからこそエリンはあえて先手を打つ事にしたのだ。それだけ今のミリアが出すスピードに追い付ける自信が無いのだろう。

だからこそ戦局を少しでも引き寄せるためにエリンは先手を打つために飛び出していった。

そんなエリンを見てミリアも一気に飛び出す。なにしろミリアはエレメンタルアップでその反応速度もスピードも上がっている状態だ。そしてなにより思いっきり暴れたいのだ。だからこそエリンの攻撃に合わせてミリアも飛び出していった。

そんなミリアにエリンはエルターレフレイルを振るう。先の戦いで分っているようにエリンのエルターレフレイルは鉄棒の先に鎖を伝って鉄球が付いている。だから一回の攻撃で二回の攻撃が出来るのだ。ミリアもそれが分っているからこそ、あえてエルターレフレイルの棒を避けると鉄球をアースシールドハルバードで弾いた。

だがエリンの真骨頂はここから始まる。たとえ鉄球が弾かれたとしても次は棒での攻撃がミリアへと襲い掛かる。そう、鉄球と棒術。この二つを連続で繰り出す攻撃こそエリンの真骨頂と言えるだろう。そんなエリンが更にミリアへと猛攻を掛ける。

「メテオデストラクションッ！」

ミリアのアースシールドハルバードを棒で弾くのと同時にエリンは一気に溶解の属性を鉄球に一気に流し込む。そして振り上げたエルターレフレイルを一気に振り下ろすと、溶解の属性がこもった鉄球が地面に叩きつけられるのと同時に大爆発を引き起こして、鉄球を中心に大地を破壊するのと同時に飛び散った破片すらも熱を持って溶岩と化して辺りに散らばる。

さすが破壊力を得意としている火山の精霊なだけはある。攻撃した部分のみならず、周囲までをも破壊するところはまさしく火山の噴火を思わせる攻撃と言えるだろう。

けれども、そんな破壊力を持った攻撃もミリアに届く事は無かった。エリンの攻撃を逸早く察知したミリアはすぐにエリンから距離

を取って、何とか直撃だけは避けたものの、降り注ぐ溶岩まではさすがに防ぎきれないと思ったのだろう。ミリアも一気に大技に出る。

ミリアはアースシールドハルバードを地面に突き刺すと一気に地の属性を注ぎ込む。

「ブレイクアースシュートッ！」

突き刺さったハルバードを中心にミリアを少しだけ巻き込んで、一気に地面が割れるのと同時に地割れの衝撃波と破片が一気に上空へと吹き上がっていく。そして地割れは一気にエリンへと迫っていくのだった。

どうやらミリアはこの攻撃で降り注ぐ溶岩を相殺するのと同時にエリンを攻撃しようとしたようだ。だがエリンも何時までもじっとしているわけが無い。ここは一気に攻めようとしたエリンだが、さすがにブレイクアースシュートの破壊力が凄まじかったのか。ここは一旦、距離を取って安全圏に退がろうとするエリン。

だがミリアのブレイクアースシュートはそんなエリンを追いかけるように、地面を引き裂きながら崩壊と破壊を繰り返して行き。エリンを追い詰めようとした。

そんなミリアの猛攻にエリンも避けきれないと感じ取ったのだろう。だからこそ、ここはあえて強気に出る事にした。

「メテオイラクションッ！」

鉄球に溶解の属性を一気に流し込んだエリンのエルターレフレイルに付いている鉄球が燃え上がると、エリンは迫ってくるブレイクアースシュートが届く前に地面へと鉄球を叩き付けた。そのため、ミリアの攻撃で破壊されるはずだった大地は先にエリンの攻撃で、そこに噴火が起きたように炎が噴き出すのと同時にミリアのブレイクアースシュートを相殺したのだ。

確かにエリンのメテオイラクションは火と地の属性を同時に使っている溶解の属性だ。だからこそ地の属性が混ざっている技なら相殺する事が出来たのだ。けれども、やはり溶解の属性は地の属性に関して言えば大地の精霊には劣る。

だからエリンが全力でミリアのブレイクアースシュートを相殺する頃にはミリアはすでに次の攻撃をするための準備が終わっていた。

「アースブレイカーッ！」

先程のブレイクアースシュートで砕けた地面に向かって、更にアースシールドハルバードから赤い光が何本もエリンに向かって伸びていくと、赤い光に沿って地面は更なる崩壊を始めた。砕けた地面は更に砕け散り、赤い光はかなり広範囲に展開されたようでエリンが居る周辺も含めて地面を崩壊させていく。

これだけの広範囲な攻撃だ。これならエリンにダメージを与える事は確実だろう。少なくともミリアはそう思っていた。だがエリンも先の戦闘で昇の能力がエレメンタルアップである事を知っている。だからミリアが限界を超えた攻撃をしてくるのも予想が付いていた。だからこそ、そんなミリアに抵抗するためにエリンも全力を出してミリアに対抗してくる。

再び溶解の属性を一気に棒に流し込んだエリンはエルターレフレイルを立てるようにして地面へと突き刺した。

「ウルトラボルカノッ！」

突如としてエリンを中心に大規模な爆発が起きる。それは火山の噴火みたいに一気に地面を粉砕して火山灰のような爆煙を上げる。そんな大規模な爆発を引き起こしたのにも関わらず、今回の攻撃では溶岩は一切噴出せずに、大規模な爆発で周囲の地面を破壊するだけに止めていた。

だが爆発の威力は凄まじい物でミリアが放ったアースブレイカーをあっさりと相殺してしまったのだ。その事に驚きを隠せないミリア。けれどもすぐにその原因が分かった。

……そっか～、地面にある水を使ったんだ～。だからアースブレイカーよりも深い地点で爆発を引き起こしてアースブレイカーを相殺したんだ～。そんな情報分析をするミリア。どうやらラクトリーの強制授業のおかげで少しは戦闘中に考えるという行動が出来るようになったらしい。

けれども、それを人に説明しろと言われればミリアには説明できないだろう。だからミリアが考えた事をまとめると次のようになる。

ミリア達が戦っている場所は河原である。だから地面の奥深くには地下水、つまり帯水層と言われる物が存在している可能性がかなり大きい。帯水層はその名のとおりに地層の変わりに水が溜まってたり、流れていたりする層の事であり、簡単に言うと地面の中にある川や湖みたいな物である。

エリンはその帯水層に向かって一気に溶解の属性を流し込むと帯水層を挟むようにある、地層に溶解の属性を展開させたのだ。もちろん、そんな事をすれば帯水層を挟んでいる地層はかなりの熱を持ち、それはマグマへと変化する。ここで重要なのは帯水層を挟んでいるという事である。

なにしろマグマの温度はかなりの高温。そんな物が水に触れれば当然のように一気に気化、膨張して水蒸気へと変化する。だが場所は高圧縮された地中の中である。膨れ上がる水蒸気は膨張を繰り返し、熱の特性でドンドンと上へと行こうとするが、そこには高圧縮された地層が展開されているわけだ。

そこに追い討ちを掛けるように、更に水蒸気を発生させると限界を超えた水蒸気は一気に大爆発して地層を砕きながら地上へと噴き出すのである。これこそがエリンの使った技の正体である。ミリアもその事に気付いたからこそ、あんな感想を思ったのだが、やっぱり分かり辛いところはミリアらしいと言えるだろう。

けれどもこの現象も噴火現象の一つである。これは溶岩やマグマは発生しないものの、大規模な爆発を引き起こす。その威力はかなりの物で爆発の威力だけなら、これ以上の無い影響を出すだろう。なにしろ、このような噴火で山が削り取られるという例があるぐらいだ。それほどまでに一撃の威力は大きいのである。

そんな攻撃だからこそエレメンタルアップで限界を超えたミリアの攻撃を相殺する事が出来たのだ。だがさすがに帯水層まで影響を及ぼすだけの技だけあってエリンへの負担は大きかった。エリンは

突き立てたエルターレフレイルに寄り掛かるように荒い息をしながら、これからの展開を考えていた。

さすがに疲れたっ！　けど……未だに火山灰が降り注いでいる状態ならあっちだって攻撃は出来ないはず。なら、ここは少し休憩して体勢を立てないした方が良いかな。あっちだってかなりの大技を使って動けないはずだから。そんな予測を立てるエリン。だが休んでいるエリンに思いもがけない事が起こった。

なんと火山灰が降り注いで視界があまり効かない中をミリアが突っ込んできてアースシールドハルバードを突き出してきたのである。まさか、こんな中で正確に攻撃してくるとは思っていなかったエリンは荒い息をしながらも、なんとかアースシールドハルバードを棒で受け止めるが、今のミリアはティターンモード全開である。だからアースシールドハルバードの一撃はかなりの威力を持っており、エリンは一気に吹き飛ばされる。

火山灰が降り注ぐ場所から一気に川にまで吹き飛ばされたエリンは驚きながらも、なんとか体勢を立て直す。未だに息は整っていないが、あの中で正確な攻撃をしてきたミリアである。だから今度も追撃があってもおかしくないとエリンは判断したようだ。

そしてエリンが予測したとおりに火山灰が降り注ぐ中からミリアが一気に飛び出してくると、再びエリンに向かってアースシールドハルバードを振るってくる。そんなミリアの攻撃にさすがに今の状態では避け続ける事も受ける事も出来ないと判断したエリンは最終的な手段に打って出た。

一気に振り下ろされるミリアのアースシールドハルバード。エリンはそんなミリアのハルバードを避けるのと同士にエルターレフレイルを振るう。それはミリアにではなくハルバードに向かってだ。しかもエルターレフレイルの棒はハルバードに届く事は無かった。

それなら何が狙いかというと、エリンの狙いは次の行動にあった。アースシールドハルバードの横をエルターレフレイルの棒が通り過ぎていくと、当然のように鎖も棒の軌道にそって振られる事になる。

だが鎖は棒の先にくっ付いているために棒よりも間合いが広い。そのうえ鎖の先には鉄球という重しがあるのである。

振られたエルターレフレイルの鎖はそのままアースシールドハルバードの柄に巻きつくと、ミリアの動きを封じるかのように鉄球が川に落ちる。つまりエリンは鎖をハルバードに巻きつかせる事でミリアの攻撃を封じたのである。

もちろん、そんな事をすれば自分自身も攻撃が出来ない。それでも、今は回復に専念するためには、どうしてもミリアの攻撃を止めなくてはいけなかった。それに回復の時間を稼ぐためにもエリンはあえて目の前に居るミリアへと話し掛けた。

「よく、私の居場所が、わかったね？」

未だに呼吸が整っていないのだろう。エリンは言葉を途切れさせながらも、そんな問い掛けをミリアにする。一方のミリアにはまだまだ余裕があるのだろう。なんとか鎖からハルバードを抜こうとするがエリンがかなり強く押さえつけているために、上手く鎖を解く事が出来ない。だからミリアは鎖に目をやりながらもエリンの質問に答える。

「大地の精霊は情報収集においても優秀なんだよ～。なにしろ相手が大地に足を付けていれば、そこから相手の反応を追って、相手の居場所を正確に把握出来るんだから～」

そんな返答をするミリアにエリンは納得が行った顔をした。なにしろエリンも火山の精霊、少しは地の属性についても情報を持っていても不思議ではない。だからこそ難解困難なミリアの言葉をあっさりと解釈できたのだろう。

つまりミリアが言った事とは、地の属性を使って相手の精霊反応を追跡して正確に居場所を突き止めたという事だ。これは以前にもラクトリーが似たような手段で昇達の家や学校を突き止めた例がある。どうやらミリアはこの短時間でエリンの精霊反応を登録して追えるようにしておいたようだ。それで先程も正確にエリンに向かって攻撃が出来たのだ。

さすがのミリアもラクトリーの強制授業を受けたおかげで少しは成長しているようだ。まあ、以前にも似たような状況があったが、その時はそこまで考える事が出来なかったのだろう。けれどもシエラが居なくなってからというもの、その数日で一気にラクトリーに叩き込まれた技術だ。だからこそミリアはその技術を活かして戦う事が出来るようになったようだ。

まあ、エレメンタルアップのおかげで頭まで良くなった訳ではないが、ラクトリーのおかげでここまでの戦いが出来るように成長できたのは確かなようだ。そんなミリアがエリンに向かって笑みを向けてきた。

「う～ん、鎖を外すのは難しいよ～。でもさ～、このままで良いの～」

「何が言いたいのよ」

ミリアの笑みとは逆に睨みつけるような視線を突きつけるエリン。そんなエリンに向かってミリアは余裕がある笑みを浮かべながら話を続ける。

「だって～、私のアースシールドハルバードは川底に刺さったままだよ～」

「ゥ？　それがどうしたって言うのよ」

ミリアの言葉と笑みにエリンは態度を変えずに言葉を返す。どうやらミリアが言おうとしている事が分っていないようだ。そしてミリアもあえて自分から手の内を明かすような真似はしない。だからこれはミリアが見せた余裕であり、最後の決着をつける為の最終勧告であった。

そんな事に気付かないままに、エリンはミリアのアースシールドハルバードが振れないように動きを封じるが、今のミリアにはこの状態だけでも充分だった。そしてエリンはミリアの最終勧告に気付かないままに、今はミリアの動きを封じていれば何とかなるという誤算をしているのだった。

そんなエリンにトドメを刺すべくミリアはアースシールドハルバ

ードに一気に地の属性を流し込む。
「それじゃあ、これで最後だよ～。今回の戦いは思いっきり暴れられて楽しかったよ～」
そんなミリアの言葉を聞いてエリンは更にミリアを鋭い視線で睨みつけながら言葉を発する。
「まるで勝ったような言い方ね。勝負はこれからでしょ」
そんなエリンの言葉にミリアは先程までの笑みを消して真面目な表情を向けるとはっきりとエリンに告げた。
「違うよ～。もう私の勝だよ～」
そんな事を言ったミリアにエリンは更に力を込めてハルバードを押さえ込む。どうやらエリンはこのままハルバードを押さえ込んでいればミリアは何も出来ないと考えているようだ。実際にここまで押さえ込まれれば、ミリアはアースシールドハルバードを自由に振るう事は出来ない。だが、今のミリアにはこの状況だけで充分だったのだ。それを証明するかのようにミリアはエリンに最後の言葉を告げる。
「それじゃあね～、バイバイ～」
「何を言って……ッ！」
言葉を途中で止めてやっと気付いたエリン。だがもう遅い、すでにミリアの術中に陥っていたのだから。だからエリンが川底に溢れ出ている地の属性に気付いた時には遅かった。
「アーススピアッ！」
川底から大地が槍のようになってエリンに何本も突き刺さる。そう、先程ミリアが言ったとおりにアースシールドハルバードの槍先は川底に突き刺さったままなのだ。だからこそミリアはアースシールドハルバードを通してアーススピアを放つ事が出来た。
そのうえエリンのエルターレフレイルは鎖がミリアのハルバードに巻き付いている状態だ。確かにそれはミリアの行動を封じてると言えるだろうが、逆言えばエリンも鎖を巻きつけているのだから自由にエルターレフレイルを振るう事が出来ないという事だ。つまり

お互いに動きを取れないは同じ。違う点は自分の属性を自由に発揮できたか、その点だけだろう。

ミリアはハルバードの槍先が地面に刺さっていると分かったからこそ、自分の勝利を確信したのだ。一方のエリンはそこまで考える余裕が無かった。ミリアの動きを封じて回復する事に専念していたからこそ、そこまで気が回らなかったのだ。

もちろん、ミリアもあれだけの大技を連続で放ったのだから消耗していてもおかしくは無い。だがエリンが思っている以上にミリアに掛けられたエレメンタルアップは強力なのだ。だからこそミリアはあれほどの大技を連続で掛けても、あまり消耗する事も無く。集中力も落とす事無く、冷静に状況を分析して自分の勝利を確信したのだ。

だが、確かにアーススピアはエリンを貫いた。けれどもそれだけでエリンに致命傷と言えるだけのダメージを与えるまでには至らなかった。だからこそ、エリンは足掻くように何とか体に刺さったアーススピアを何とかしようとするが、肝心の武器であるエルターレフレイルは未だにミリアのアースシールドハルバードに絡まっており、エリン自身も自由に振るう事が出来ない。

そんなエリンを見て、ミリアは川底からアースシールドハルバードを抜き去る。未だにエルターレフレイルの鎖が絡まっている状態だが、エリンはアーススピアの影響ですでにハルバードを押さえ込むだけの力は残っていない。だからエルターレフレイルの鎖が絡まっていてもミリアはアースシールドハルバードの矛先をエリンに向けるのには充分だった。

だからこそミリアは未だにエルターレフレイルが絡まったままのアースシールドハルバードをエリンに向かって構えると、一気に力を解放する。

ミリアから天に向かって一気に光の柱が伸びる。それは精界を突き抜けそうな勢いで精界の天井まで達すると、今度はミリアのアースシールドハルバードに注ぎ込まれるかのように光の柱はドンドン

とハルバードの中に吸収されていく。そしてハルバードは煌々とした光を放つ。

ミリアは未だにエルターレフレイルが絡まったままのアースシールドハルバードをエリンの胸先へと突き立てる。それを見てエリンは足掻くがアーススピアの影響でエリンは既に動く事すら出来ない。だから今のエリンにはエルターレフレイルを手にしているだけで精一杯だ。

そんなエリンにミリアはアースシールドハルバードに溜め込んだ。地の属性が有する破壊力を収束させた力を一気に放つ。

「タイタロスブレイクシュートッ！」

煌々と光を放っていた力は一気に解放されて、収束された破壊力となってエリンに向かって放たれる。ミリアの放ったタイタロスブレイクシュートの輝きにエリンは飲み込まれて行き、その姿が見えないほどにミリアの放った攻撃は輝きを強めるのだった。

第百十六話　全力全開のミリア（後書き）

はい、そんな訳で……やっと更新できた。というか、この時期は私にとって何回でも死ねる時期です。そんな訳で更新もすっかり遅くなってしまいました～。……てへっ。

……あぁ～、ダメだ。この時期はもう遊ぶ気力すら無くなって、死んだのと同じになってる。そんな訳で今回は真面目に行こうかと思っております。

そんな訳で今回はミリア対エリンの戦いをお送りしました～。それにしても……エレメンタルアップでパワーアップしたミリアが凄かった。まあ、それ以上にラクトリーにいろいろと教え込まれたんでしょうね。今回は影の薄いミリアがいつも以上に大活躍でしたね。

さてさて、これでミリア人気も上がるかな？　まあ、何にしてもおバカな子対決、げふんっ、げふんっ、いやいや、破壊力対決は決着が付きましたね～。そんな訳で次回はいよいよ閃華さんを活躍させたいと思っております。

というか、以前に行った人気投票でも閃華さんはダントツで票を集めてましたからね～。そんな閃華さんが珍しく次回は思いっきり戦います。そんな訳で次回の閃華さんに期待しましょう。

……えっ、いつ頃更新できるかって？　……。

……そんなん知るかっ！！！　更新のペースを上げられるものならこっちだって上げたいわっ！！！　今までに何度死んだと思っているんだコンチクショウッ！！！

まあ、そんな訳で次回の更新がいつになるかは未だに分かりませんが、なるべく早くは更新しようかと思っております。

そんな訳で、話が長くなってきたのでそろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちして

おります。
以上、エアコンを付けたいけど電気代を気にしている葵夢幻でした。

第百十七話　怒涛の閃華

―昇琴流　天昇雷撃斬―

琴未は全身に雷をまとわせると、雷と共に上空に居る鷲に急上昇を行った。なにしろ琴未は雷をまとって跳び上がったのだ。その上昇速度は雷並みで、一瞬の移動速度でなら翼の属性すらも上回る速度で鷲に向かって上昇していくと、そのまま雷をまとった身体と雷閃刀で鷲に向かって斬撃を繰り出す。

けれども琴未が相手にしている鷲もローシェンナがエレメンタルアップ対策で作り出した鷲だ。だから琴未の一撃ぐらい避ける事は簡単だった……とローシェンナは思っていただろう。そして現に琴未の一撃を鷲は避けているのだから。

だが昇は全員に思いっきり力を送り込んで、今までに無いぐらいのエレメンタルアップを見せているのだ。だから琴未の一撃は何とか避ける事が出来ても、その余波までは避け切れる事が出来なかった。

なにしろ琴未が使った技は対シエラ用、つまり対空用に作り出した技だ。だから避けられた時の事も考えてしっかりと手は打ってある。確かに琴未の雷閃刀は鷲にかすりもせずに空を斬ったが、それや刃の部分だけである。

なにしろ今の琴未はエレメンタルアップと技の効果で自分自身の身体と雷閃刀に巨大なほどの電撃を溜め込んでいる。それを雷閃刀を振るうのと同時に解き放ったのだ。振るわれた雷閃刀から放たれた雷は四方八方に飛び散るどころか、まるで雷のボールでも出来たかのように琴未を中心に雷撃が飛び交う。

さすがにそんな中を鷲が全ての攻撃を避けきれる訳が無かった。なにしろ雷撃の威力が強すぎて最早、雷と呼べないぐらいの雷撃が琴未を中心に展開されているのだ。それは電気が飛び交う電球の中

に鷲を投げ込んだぐらい、琴未の攻撃は相手に避ける隙を与えなかった。

一方の琴未は放電しながらもゆっくりと地面へと降りてくる。さすがにこれだけの電撃を発したのだ。地球の磁場と反作用を起こして重力を軽減しているようだ。それほどまでに高電圧の広範囲攻撃を行ったのだから琴未に隙が出来てもおかしくは無い。だが未だに光り輝く電撃の中にいる琴未に対して、同じく電撃の中に居る鷲は琴未に反撃どころか動く事さえままならなかった。

そんな琴未の雷撃がやっと収まると、鷲はすぐに翼を羽ばたかせて琴未から距離を取るために上昇しようとするが、そんな鷲に昇の放った砲撃が直撃して、今度こそ鷲は地面へと落とされた。

どうやら琴未の攻撃が相当効いているようで鷲は地面に落ちても、ぎこちない動作で再び飛び立とうとしている。未だに琴未の雷撃によるダメージが残っているのは確実だろう。

けれども鷲にここまでのダメージを与えられたのは琴未の技がそれだけ威力を持っているからではない。確かに琴未の放った技は通常の状態でもある程度の範囲攻撃をして相手からの反撃を許さないだろう。けれども、ここまで鷲にダメージを与えられたのは、やはり昇のエレメンタルアップによるものだ。それほどまでに昇のエレメンタルアップは琴未のみならず全員に向かって計り知れない限界突破をさせていたのだ。

そんな昇達の戦いを脇目に閃華は自分に突進してきた鷹を簡単に避けると今の状況について冷静に頭を回転させる。

琴未の戦いを見ている限りでは、昇は相当頭に来ておるようじゃのう。なにしろここまで強いエレメンタルアップを体感するのは久しぶりじゃからのう。それを四人全員に行い、なおかつ自分自身も戦闘に参加しておるんじゃ。今は感情に任せて暴れたいんじゃろうな、昇も、琴未も……まあ、人の事は言えんみたいじゃがな。

どうやら閃華も今は感情に任せて暴れたいのは確かなようだ。それはそうだろう、なにしろシエラが居なくなってからというもの、一番苦労したのは閃華なのだから。それは閃華が自分の役目をしっかりと知っており、それを忠実に行ってきたからだ。

昇や琴未は自分自身の感情を抑えながらシエラを探し回っただけだ。けれども、そんな事をしていればいつかは昇達の感情が爆発してしまう。だから閃華は昇達の感情が爆発しないように、時にはなだめたり、気を使ったりと全員の間に入って中和役をやっていたのだ。そのおかげで昇達の感情が爆発する事無く、無事にシエラを見つけられる事が出来たのだ。

もし、閃華がそんな役目をしていなければ、昇達は今頃には内輪揉めをしていてもおかしくは無い。閃華が気を使って全員の間に入って中和させたからこそ、全員が理性を優先させて仲間同士での喧嘩をする事は無かったのだ。

だから今までの事で一番気を使っていたのは閃華と言えるだろう。なにしろ爆発しそうな昇を上手く押さえ込んだり、シエラに夢中な昇を見た琴未を慰めたり、時にはミリア達の手伝いをして上手く昇達に情報を伝えたりとシエラが居ない時間で一番苦労したのは閃華とも言えるだろう。

だからこそ閃華もここまでのエレメンタルアップが掛かっている状態だ。今までの苦労と気分を払拭（ふっしょく）させるためにも、今は大暴れしたいのだと閃華はしっかりと己の心が分っていた。分っておきながらも閃華はそんな気持ちを封じ込める事無く、今は目の前の敵に向かって全力を出すのだった。

鷹にとって最大の特徴と言えるのは、その狩猟能力だろう。つまり、それだけ敵を的確に攻撃する事が出来て、確実に仕留めるだけの攻撃力を持っているという事だ。しかも閃華が相手にしているのはローシェンナの力をたっぷりと注ぎこまれて召喚された鷹である。その狩猟能力もはるかに上がっており、戦闘能力を上げてきたと言っても良いだろう。

そんな鷹が地面を上手く利用しながら、足で地面を蹴って猛スピードで閃華へと突撃してくる。もちろん、そんな単純な攻撃は閃華にとって簡単に避けられるものだが、鷹が本領を発揮してくるのは、ここからである。

鷹の突撃を閃華が避けると、鷹はすぐに足で地面を蹴って飛んでいた方向を急転換。そうする事で閃華の反撃を防ぐのと同時に再び突撃できる状態に持って行っているのだ。

閃華もエレメンタルアップで反応速度が上がっており、鷹の突撃を止める事も可能だが、一度でも鷹の突撃を止めてしまえば、今度は閃華の方が手が出せない。なにしろ龍水方天戟で鷹を受け止めるわけである。そこまでは良いだろう。だが鷹には突撃を止められても、その後に足の爪を使った攻撃を仕掛ける事が出来る。一方の閃華は龍水方天戟で鷹を受け止めていないといけないから自由に龍水方天戟を振るう事が出来ない。

もちろん、受け止めるのではなく弾いてしまえば良いのだが、鷹の突撃スピードを見るかにして閃華がエレメンタルアップで限界突破しているとしても、鷹の突撃を弾く事は難しいだろう。だからこそ、閃華はあえて今は反撃に移る事無く、鷹を観察しながら反撃の手段を考えているのだ。

ふむ、ここまでのスピードと威力があるとはのう。これでは下手にこちらから手を出すと逆効果じゃな。じゃからといって、このままというわけにもいかんしのう。さて、どうしたものかのう。随分と呑気に思考を巡らす閃華。それだけエレメンタルアップの影響で閃華に余裕を与えているのだろう。

そんな閃華が鷹の攻撃を避けると、ふとあるものを目にする。

……うむ、あれは使えそうじゃのうお。ちと派手じゃが、ここは思いっきり暴れたいからのう。あれを使うとするかのう。そんな判断を下すと閃華は鷹の突撃を避けるとある方向へと一気に駆け出した。

閃華は水の精霊であり、そんなにスピードには特化していないの

だが、エレメンタルアップの影響を受けているのだろう。鷹でも簡単に追い付けないほどのスピードで一気に駆け抜ける。そして閃華が移動した場所、つまり移した戦場は……川の中だった。

確かに川の中なら鷹も先程のように器用な攻撃を繰り出せないだろう。そのうえ閃華は水の精霊である。だから水辺があるなら、力を最大限に発揮できるというわけだ。だからこそ閃華は戦場を川の中に移しても不思議ではなかった。

そんな閃華が龍水方天戟を川に差し込むと水の属性を一気に川に流し込む。

「龍水舞闘陣、八俣ノ大蛇陣っ！」

閃華が叫ぶのと同時に龍水方天戟に巻き付いていた水龍が放れるのと同時に閃華の周りに七つの水柱が上がった。そして、その全てが龍水方天戟から放れた水龍と同じ姿、同じ大きさとなって閃華の周りを威嚇するように舞い踊る。その姿は閃華が八匹に水龍に守られているようにも見える。けれども、どの水龍もそれぞれの意思で動いており、鷹が攻撃してくれれば各個に対応するだろう。

つまりこの技も龍水舞闘陣と同じように全ての水龍が自動的に攻撃や防御をしてくれるのだ。もちろん閃華自身がコントロールする事も可能である。川の水を利用した龍水舞闘陣の強化版と言えるだろう。

さすがに八匹の水龍が閃華を守るように旋回しているのだ。その姿を見てさすがの鷹も不用意に攻撃が出来なくなってしまった。もし下手に攻撃したら八匹の水龍に八つ裂きにされるのは目に見えている。それは鷹を召喚したローシェンナも良く分かっている事であり、ここは鷹に様子を窺いながら反撃をするように命じるのだった。

そんな防御姿勢を見せる鷹とは違って閃華は攻撃的に出た。ここで大暴れしたいのは閃華も同じだ。それにエレメンタルアップと八匹の水龍である。形勢はどう見ても閃華が絶対的に有利である。だから閃華としては防衛に出る理由が無い。ここは一気に攻勢に持っていった方が一気に決められるのは閃華でなくても分かる事だろう。

だから閃華は四匹の水龍を先行させると自分自身も一匹の水龍に乗って鷹に向かって一気に突撃を掛ける。八匹の水龍だけでもやっかいだというのに、そのうえ一匹の上には閃華が乗っているのだ。そんな閃華の猛攻はどんな攻撃よりも派手で威力があるのは見なくても想像が出来るだろう。

そんな閃華の猛攻として先行した四匹の水龍が鷹に向かって、それぞれ爪と牙を付き立ててくる。だが鷹もエレメンタルアップ対策として召喚された、つまりローシェンナの力が最大限にまで注ぎこまれた鷹だ。だから先行してきた四匹の水龍が繰り出してきた攻撃はなんとか避けて見せた。問題は次の攻撃だろう。

なにしろ閃華は八匹の水龍を同時に攻撃させているのではなく、しっかりと時間差を付けて攻撃しているのである。それは一見すると非効率みたいなやり方に見えるが、このやり方こそが相手に反撃の隙を与えない最大限の効果を発揮する攻撃方法だという事を閃華はしっかりと理解している。

つまりは猫が獲物を甚振(いたぶ)るが如く。閃華は徐々に鷹にダメージを蓄積させて落とそうと目論んでいるのだろう。

そんな閃華の猛攻は当然のようにローシェンナの目にも映る。確かに召喚した鷲は昇と琴未が二人掛りで攻撃してくるからには手を抜く事は出来ない。だが、それ以上に閃華は派手で威力のある攻撃を繰り出してきたのだ。

そこでローシェンナは選択を迫られていた。なにしろ召還した時に最大限の力を注ぎこんだのは良いが、その分だけ二匹同時にも自由自在に操るのは難しかった。なにしろ召喚だけでかなりの力を消耗しているのだから。その後の戦闘で召喚した鳥をコントロールするだけの力はあまり残されていなかったからだ。

そのうえ一匹は昇と琴未の二人を相手にしなくてはいけない。そしてもう一匹は閃華からの猛攻を受けている。つまり今の状況ではどちらの戦いも手が抜けないし、ローシェンナが召喚した鳥をコントロールしないと落とされる可能性が高い。

いくら召喚した鳥が自分の意思で行動すると言っても、その戦闘思考には限界がある。つまり鳥並みの頭しかもっていないのである。だからサモナーの能力は重要な戦闘では自分自身で召還したものをコントロールする必要な時があるのだ。

一見すると便利に見えるサモナーの能力だが、こうした弱点があるのも確かな事である。どんな能力も弱点が無いというわけではないのだ。それは昇のエレメンタルアップも同じであり、昇は今回の事でエレメンタルアップの弱点を知り、なおかつ発動条件である繋がりがどれだけ大事かを学んだ事だろう。

話を元に戻すとローシェンナは昇と琴未、そして閃華。そのどちらかの戦いに集中して鳥をコントロールした方が勝率が高くなると考えたようだ。確かに今のローシェンナでは昇達を相手に二匹の鳥を自由自在にコントロールして戦えるだけの力は残ってはいない。それほどまでに昇達は猛攻を掛けてきているのだ。

だからローシェンナはどちらかのコントロールを切って、一方にコントロールを集中させて相手を倒した後で、そのコントロールした鳥でもう一方を倒した方が勝率が上がると考えたようだ。つまり一匹を自動で動かして時間稼ぎをし、その間にコントロールしている方で相手を倒して、そのままもう一方を倒そうと考えたのだ。

確かにこの方法なら今現在のローシェンナが発揮できる力を最大限に活用できるだろう。だが逆言えば、この方法しかローシェンナには残されていないともいえる。それほどまでにローシェンナ追い詰められているのだ。

その事を実感しながらも、改めてエレメンタルアップの能力が発揮する恐ろしさを実感するローシェンナだった。そんなローシェンナは標的を閃華へと定めた。

確かに閃華の猛攻は派手で高威力だが、今のうちに叩いてしまえば後で楽になると考えたのだろう。ローシェンナにそう判断させるほど閃華の攻撃は苛烈を極めていた。そしてローシェンナは鷲のコントロールを切って自動的に攻撃させると、鷹にコントロールを集

中してきた。
　そんなローシェンナの動きを閃華はすぐに察する事が出来た。なにしろいきなり鷹の動きが鋭くなったのだ。だからローシェンナがまずは閃華から叩いてくる事は容易に想像できる事だ。
　そんなローシェンナの行動に閃華は軽く笑みを浮かべる。どうやらローシェンナも気付かなかったようだ。そう、自分自身に攻撃を集中させる、それこそが閃華の狙いだったのだ。
　確かにエレメンタルアップで琴未はかなりの力を発揮しているが、それでも最大限の力で召喚された鷲を相手にするのは少しだけ梃子摺るだろう。昇も先程のシエラとの戦闘で力を消耗している。それを察したからこそ、閃華は自分に攻撃を集中させるようにあえて派手な技を出してきたのだ。
　……まあ、閃華の本心だけを言えば暴れたかった。というのもあるかもしれないが、戦況を見て閃華が取った手段が一番有効だと判断したのも、そんな感情だけで判断したのではなく、しっかりと現状を見て判断したところも閃華らしいといえるだろう。
　なんにしても、これで閃華が相手にしている鷹が更に力をつけた事には間違いは無い。そんな鷹を相手に閃華は三匹ずつの水龍を二組。自分が乗っている水龍ともう一匹の水龍で一組。合計で三つの組に分けて猛攻を続ける事にした。
　なにしろ水龍を戦闘の頭数に入れれば九対一である。数の上では圧倒的に閃華が有利なのだ。かと言って戦略的に閃華が圧倒的に有利とは言えない。なにしろ八匹の水龍を動かしているのだ。閃華も八匹の水龍を自分の意思でコントロールする事は出来ない。簡単な命令を下す事しか出来ないのだ。
　その点だけはサモナーの能力と似ているだろうが、戦場は川の上、閃華は水の精霊、そのうえ川の水を利用して作り上げた水龍と閃華に掛かっているエレメンタルアップ。もともと閃華は戦闘能力が高いが、これだけの好条件が揃えば閃華も負ける要素どころか勝利を確信していた。後はどうやって鷹にトドメを刺すかである。

三組に分かれた水龍が一撃離脱を繰り返して着実に鷹にダメージを蓄積させていく。もちろん、鷹も反撃しようと行動するのだが、なにしろ閃華が呼び出した水龍は数が多い。その分だけ、どれか一匹に攻撃が当たる可能性が高いが、その間に別の水龍からの攻撃が来る可能性の方が大いに高かった。

だからだろう、ローシェンナは鷹を操りながら水龍と閃華が繰り出してくる攻撃を避けるが、なにしろあれだけの数である。確実に避ける事は不可能だ。だからこそ鷹に少しずつではあるがダメージが蓄積されていく。

そして蓄積されたダメージは……必ず動きに出る。わずかだが鷹の動きが鈍くなった事を感じ取った閃華はここで戦術を変えて来た。今まで三組に分けていた水龍を一箇所にまとめると全てを支配下、コントロールできるようにしたのである。やはりここでもエレメンタルアップの効果が最大限に出ているようだ。だからこそ、閃華は詳細とまではいかないが、八匹全ての水龍をコントロールする事が出来るようだ。

そんな閃華が一匹ずつ時間差を付けて鷹に向かって突撃を掛ける。さすがに八匹の水龍を細かく動かす事は出来ない。だから大まかなコントロールだけだが、今の閃華にとってはそれだけで充分だ。だから水龍が突撃する時の動きが少しだけ荒くても閃華の攻撃には何にも支障は出なかった。

閃華を乗せている一匹の水龍以外が時間差を付けて鷹に向かって突撃する。もちろん、鷹もローシェンナのコントロール化にあるからには単純な突撃を避けるには充分だった。むしろ先程のように一撃離脱を繰り返されるよりは少しは楽だ。

そんな戦術を何で閃華が選んだのかローシェンナは疑問に思いながらもローシェンナは鷹をコントロールして無傷で水龍の攻撃を避けている。そんな光景を閃華は上昇した一匹の水龍に乗りながら観察していた。

ふむ、どうやら思っていた以上に集中力が落ちたわけでは無いよ

うじゃのう。どうやら閃華はローシェンナの集中力では、この程度の突撃でも充分にダメージを与えられると思っていたようだ。だがローシェンナも高い能力を持つサモナーである。だからこそコントロールする集中力も充分に高く、この程度の事ではあまり衰えないのだろう。閃華はその事を感じ取りながらも次なる手段を考える。

どうやらもう少し追い詰めないといけないようじゃのう。じゃがあまり時間を掛けると昇のエレメンタルアップに支障が出てもおかしくは無いからのう。ここは早めに決めるとするかのう。確かに昇は先程シエラとの戦闘で体力と精神力を消費している。そこに最大限のエレメンタルアップである。だから閃華は今の状況が長く続けば昇への負担が大きくなるばかりか、下手をするとエレメンタルアップが解ける危険性を感じてた。昇の消耗も閃華はしっかりと考えていたわけである。

だが今現在の最大限に掛けられているエレメンタルアップを出し惜しみするのは愚の骨頂である。全員が思いっきり暴れている中で閃華一人が自重する必要は無い。つまり閃華もここは容赦する事無く、一気に決めてしまっても構わないと判断したようだ。

それはそうだ。なにしろ戦況は昇のエレメンタルアップで昇達が大いに有利なのである。だからエレメンタルアップが切れないうちに勝敗を決してしまった方が昇達にとっては有益なのだ。

それが分っているからこそ閃華は再び戦術を変えてきた。そしてそんな閃華が思う。

さて、ここまでのエレメンタルアップで力が増しておるんじゃ。私も遠慮する事はないじゃろう。じゃから……久々にやろうとするかのう。そんな事を考えると閃華は楽しそうに笑みを浮かべた。なにしろ勝が見えている勝ち戦だ。そのうえ思いっきり暴れられるのだから閃華も自然と笑みを浮かべても不思議では無いだろう。そんな閃華が再び水龍を一箇所に集めると閃華を守るように水龍を舞い踊らせている。

そんな光景を見てローシェンナは選択を迫られていた。確かに閃

華の力は圧倒的で鷹一匹ではどうする事も出来ないだろう。だからと言って、これ以上の召喚は出来ない。それほどの力はローシェンナに残されていないのだから。

これは決して鷹が弱いわけではない。閃華の力がエレメンタルアップで圧倒的に上がって、鷹の戦闘能力を一気に上回ってしまったからだ。まさか閃華がここまでの力を出してくるとは思っていなかったからこそローシェンナは迷っていた。

このまま閃華との戦闘を諦めて昇達を先に叩くか、それともここで何としても閃華を叩くか。どちらにしても困難なのは目に見えている。それに今の時点で鷹のコントロールを切ってしまえば次の攻撃で閃華に落とされる事は確実だろう。だからこそローシェンナは選択を迫られていたのだ。

閃華の準備が整わないうちに鷹を突撃させて閃華の攻撃を未然に防ぐか、それとも閃華の攻撃を避け切って反撃に出るか。どちらにしても分の悪い賭けなのは確実である。なにしろ閃華の戦闘能力は先程の戦闘で嫌というほど見せ付けられたのだ。そんな閃華に勝つためには、どうしても分の悪い賭けに出るしかないとローシェンナは理解せざる得なかった。

だがローシェンナが思っていたよりも閃華は圧倒的に力を増していた。なにしろローシェンナが迷っている間にすでに準備を終えて、いつでも攻撃が出来るようにしてしまったのだから。そんな事に気付きもしないローシェンナに閃華はためらう事無く一気に攻撃に出る。閃華としては相手が決断を下すまで待つ理由が無いから当然だろう。

そんな閃華が一気に水の属性を有している力を一気に放つと、閃華を乗せている水龍を中心に他の水龍が閃華を囲むかのように、まるで時計状に並ぶ。そして閃華は一気に攻撃に出る。

「龍水舞闘陣　八俣ノ大蛇陣……水球の陣っ！」

閃華を囲んでいた七匹の水龍が一気に飛び出すと、それに続くかのように閃華を乗せている水龍も後を負うかのように飛び出してい

った。そして七匹の水龍はそのまま鷹に突撃するかのように見えたが、意外な事に七匹の水龍は鷹へ攻撃する事は無く、まるで鷹を閉じ込めるかのように鷹の周りを固める。そこに閃華を乗せた水龍が飛び込んでいった。

「なっ、なんですのっ！　あれはっ！」

思わず驚きの声を上げるローシェンナ。それはそうだろう、地上に居るローシェンナから見れば召喚した鷹が八匹の水龍によって閉じ込められる。いや、まるで水で出来た球状の檻に閉じ込められたように見えたのだから。

そんな状況にローシェンナが戸惑っているうちに閃華の猛攻が始まる。なにしろ八匹の水龍が上下左右、どちらを見ても、まるで逃がしはしないように取り囲んでいるのである。だから鷹に逃げ場がある訳が無い。そんな鷹が戸惑うように飛んでいると、水龍の一匹が攻撃を仕掛けてきた。

もちろん、いくら逃げ場が無いと言っても避けるぐらいのスペースは残されている。だから一匹ぐらいが攻撃して来ても避ける事は出来る。だが、閃華が見せた猛攻はこれからが本番である。

最初の一匹を皮切りに水龍は球状の檻、水球の檻を崩す事無く次々と攻撃を仕掛ける。時には時間差を付けて、時には同時に、そんな攻撃を繰り返していったのである。

そんな閃華の猛攻に鷹も最初は避けていたが、なにしろ水球の檻に閉じ込められて自由に動く事は出来ない。だから最初の一撃を喰らうまではそんなに時間を要しなかった。最初の一撃を鷹に喰らわせると水龍はまるで弱った獲物に喰らい付くかのように次々とその牙と爪を突き立てては放れていった。

なにしろローシェンナの鷹は閃華が作り出した水球の檻に閉じ込められている状態である。そこに一撃でも攻撃を喰らってしまえば、もう反撃どころか動く事もままならず、水龍が繰り出してくる攻撃を喰らい続けるしかない。それほどまでに水球陣は強力な陣形と言えるだろう。

閃華が繰り出した水球陣は相手を閉じ込めるだけの技ではない。八匹の水龍で相手を閉じ込めるのと同時に相手の自由を奪い、そこに攻撃を仕掛けるのである。もちろん閉じ込められた相手は動ける範囲が限られているからには自由に動く事は出来ない。そこに八匹の水龍と閃華が攻撃をしてくるのである。

一撃でも喰らってしまえば、その時点で動きが止まってしまって次の攻撃に備える事は不可能だ。つまり水球陣とは最初の一撃さえ喰らわせて、相手の動きが止まったところに次々と攻撃を加える。相手の動きを封じ込めるのと同時に怒涛の攻撃を仕掛ける事が出来る技なのだ。

もちろん、こんな技を閃華も自由自在に使えるというわけではない。今回は条件が揃っていたからこそ発動できた技だ。その一つとして龍水舞闘陣　八俣ノ大蛇陣を既に発動させている事が絶対条件である。なにしろ水球陣を完成させるためには八匹の水龍が必要だ。だから水場を利用して八俣ノ大蛇陣を発動させている事が絶対条件となってくる。

もう一つは、やはりエレメンタルアップである。なにしろ八匹の水龍にこれだけの攻撃性能を持たせるのであるから、閃華自身の限界突破が必須条件となってくる。

今回はこの二つが揃ったからこそ、龍水舞闘陣　八俣ノ大蛇陣水球の陣を発動できた訳だ。そして、その効果は先程も説明したとおりに相手の動きを封じてから怒涛の攻撃である。そんな閃華の攻撃にローシェンナはどうする事も出来ずに、ただやられて行く鷹を見守るしかなかった。

すでに鷹は水球の陣で相当のダメージを喰らっており、動く事もままならないだろう。そんな鷹に対して閃華は攻撃を緩める事無く、とことんまで鷹を追い詰めていく。

すでに自らの力で飛ぶことすら出来なくなった鷹を押し上げるように下からの攻撃を続ける水龍の攻撃に鷹は成すがままになっている。そんな鷹に残った水龍が次々と攻撃を仕掛け、そこに閃華も自

ら龍水方天戟を振るって鷹にダメージを与えていく。最早、鷹は虫の息と言っても良いだろう。それほどまでに閃華の攻撃は苛烈を極めていた。

そんな状況にローシェンナは呆然とするばかりだ、そんなローシェンナとは反対に閃華はそろそろ次の事を考えていた。

くっくっくっ、随分とスッキリするものじゃのう。まあ、これほど甚振(いたぶ)ったのじゃから当然じゃろうな。さて、思いっきり暴れさせてもらったからのう……そろそろ終幕といくかのうっ！

閃華は龍水舞闘陣　八俣ノ大蛇陣　水球の陣を解くと一匹の水龍に乗りながら他の水龍と共に上昇していく。そして今まで散々甚振られた鷹はというと、すでに羽ばたく力が残っていないのか、力なく重力にしたがって落ちていくだけである。閃華はそんな鷹に向かって龍水方天戟を向けると更に水の属性を発動させる。

それと同時に一気に巨大化していく八匹の水龍。そして閃華は一気に力を解き放つ。

「龍神激　八俣ノ大蛇っ！」

巨大化した八匹の水龍が閃華の示した鷹に向かって同時に突撃していく。龍神激は一匹だけでもそれなりの水量を有しているというのに、今回は八匹も同時に鷹に向かって突っ込んでいくのである。しかも鷹にはすでに動くだけの力は残されていない。つまり今の鷹に閃華の攻撃を避ける事は不可能である。

そんな鷹に向かって閃華は上空から地面に向かって龍神激　八俣ノ大蛇を放ったのである。鷹にもローシェンナにもどうする事も出来ないだろう。

そして巨大化した八匹の水龍は鷹を飲み込むとそのまま地面へと突撃していった。それと同時に閃華が作り出していた龍水舞闘陣も解けて、まるで雨が降っているかのように水龍が突撃した地面には水が降り注ぐ。

龍神激　八俣ノ大蛇を直撃して、そのまま地面に叩きつけられたのである。鷹は確実に落ちた事は確実だろう。そんな事を思いなが

らも閃華は未だに龍神激の影響で水が降り注いでいる地面へと舞い降りた。

そんな光景を遠くで見ていたローシェンナは驚きを隠せないといった感じで呆然としていた。それは閃華の攻撃が凄まじいだけではない、サモナーの能力を持つものだけにしか分からない感覚。つまり召喚したものが倒されて消された感覚を憶えたからである。つまりローシェンナが召喚した鷹は閃華によって完膚なきまで倒されえたのである。それが分かるだけにローシェンナは驚きを隠せなかった。なにしろローシェンナは負けるとは思っていなかったからだ。もちろんローシェンナがそう思うにも理由があった。ローシェンナは驚きと共に自然とその理由を含めて目の前の事実を受け入れないような思いを抱いていた。

そんな……まさか……前回のエレメンタルアップはここまで強力ではありませんでしたわ。それに、アレッタの話では能力者は消耗しているはずですのに、なのに……なのに、なぜここまで強力な力を、エレメンタルアップを発動させる事が出来ますのっ！　契約者が消耗しているからこそ、私達に勝算がありましたのに、なぜここまでの力が出せますの？　なぜそこまで戦えるんですのっ！

自らの思惑と目の前の現実とのギャップに混乱するかのように取り乱すローシェンナ。そんなローシェンナの前に閃華はゆっくりとその姿を現した。

閃華の姿を見たローシェンナは驚くのと同時に数歩退がる。なにしろサモナーの能力は召還したものが戦闘能力を持っており、サモナー自身は戦闘能力を持っていないからだ。つまりここで閃華に攻撃されたらローシェンナはその時点で敗北が決定するのである。だからローシェンナに残された道は、どうにかして閃華から逃げて、残った鷲をどうにかする事だった。だからこそローシェンナは動揺しながらも閃華から逃げようとするが、閃華は龍水方天戟を肩に担いで決してローシェンナに向けようとしなかった。

それどころか笑顔でローシェンナに話しかける閃華だった。

「残念じゃったのう。そなたらには勝算があったのかもしれぬが、今回の敗因はそなたら自身が招いた事じゃ。素直に敗北を受け入れる事じゃな……とは言っても、今回は全員が勝敗を付けん限りは決着が付かんじゃろう」

そんな事を笑顔で話し掛けてくる閃華にローシェンナは疑念を覚えていた。確かにここで閃華がローシェンナを倒せば、その時点で勝敗は決する。それなのに閃華からは既に闘志が消えていた。つまり閃華はすでに戦う気を失っていたと言っても良いだろう。だからこそローシェンナはそんな閃華に疑念を抱きながら言葉を返すのだった。

「な、なぜ私を倒さないんですの？」

ローシェンナには他にも聞きたい事が沢山あった。けれども今の時点ではこれが一番の疑問であり、動揺しているローシェンナはその事を聞くだけで精一杯だったのだ。そんなローシェンナの質問に閃華は笑顔を崩す事無く答えてきた。

「ふむ、確かにここで私がそなたを倒しても良いのじゃが。それじゃと他の皆が納得せんからのう。じゃから今回は完膚なきまで、つまり全滅するまで叩かせてもらうというわけじゃ」

「なぜ……そこまで？」

閃華の言葉にローシェンナは思わず、そんな言葉で聞き返してしまった。そんなローシェンナに対して閃華は初めて笑顔を崩して真面目な顔をするとローシェンナの言葉に答えてきた。

「なぜ……じゃと？　決まっておるじゃろう。そなたらはシエラをあそこまで追い込んだんじゃ。その事は私も含めて皆の逆鱗に触れるのと同じじゃ。じゃからこそ、今回はそこまで戦うまでじゃよ」

「そ、そんな理由で。あんな妖魔如きに」

ローシェンナとしては特に意味を込めた言葉では無かったのだろうが、ローシェンナの言葉に閃華は思わず睨み付けながら言葉を返す。

「そなたらにとっては妖魔如きじゃろうがなっ！　私達にとっては

シエラは大事な仲間じゃ。たとえ私の大事な存在の恋敵であっても、昇が、皆が仲間じゃと思っている者をここまで痛めつけられて黙っておられるほど……私達もお人良しでは無いんじゃよっ！」

そんな閃華の言葉にローシェンナは腰を抜かしたかのように尻餅を付く。それだけ閃華の言葉に迫力があったのだろう。

閃華もローシェンナの言葉に思わず今までの思いが弾けたに過ぎない。確かにシエラは閃華にとって大事な存在、つまり琴未の恋敵には違いない。けれどもそれと同時に共に戦う仲間なのだ。そんなシエラを侮辱されたような言葉を聞いて閃華も黙ってはいられなかったのだろう。特に今回はシエラの所為で散々ひっかき回されたのだ。閃華が一番苦労しただけにローシェンナの言葉に思わずそんな言葉を返してしまったのだろう。

そして、そんな言葉を発した閃華もすぐに自分が熱くなっている事に気付き、一回だけ大きく深呼吸すると再び軽く笑みを浮かべてローシェンナに目を向けた。

「さて、私の戦いは終わったからのう。ここで観戦していても良いんじゃが、そなたにとっては私が居ては迷惑じゃろうからのう。ここは別の戦いに援軍に行こうとするかのう。まあ、すでに勝敗は決しておるがのう。まだまだ終わりという訳では無いみたいじゃからな」

そんな閃華の言葉を聞いてローシェンナは未だに立ち上がれないまでも、プライドを傷つけられたと思ったのだろう。それに戦いが終わったと言っても閃華に鷹を倒されただけである。まだローシェンナ達が完全に敗北したワケでは無い。だからこそローシェンナは背を向けた閃華に向けて言葉を放つ。

「まだ負けた訳ではありませんわっ！　あなたが私を倒さないのなら、アレッタやエリンがあなた達をやっつけて私の増援に来る可能性だってありますわよっ！」

そんな言葉を聞いて閃華はローシェンナに顔を半分だけ見せるように振り替えると、ある方向に視線を送った。そんな閃華を見て、

ローシェンナも閃華が見ている方向へと視線を向けると次の瞬間にはそちらから眩い光が放たれた。
　そんな光を見て閃華は笑みを浮かべてローシェンナは動揺する。そして閃華はそのままの体勢でローシェンナに向かって話しかけるのだった。
「どうやらあっちも決着が付いたようじゃのう。能力者のそなたなら自分の精霊がどうなったか分かるじゃろ。まあ、勝敗は聞かずとも分かりそうなものじゃがのう」
　そんな閃華の言葉が聞こえないかのようにローシェンナの顔は驚きで満ちていた。そう……閃華達が見ていた方角はミリアとエリンが戦っていた場所だ。そして煌々とした眩い光と共にローシェンナは感じる物があった。だからこそ呆然とそちらに目を向けるだけだった。正しくローシェンナにとっては信じられないといったところだろう。
　閃華はそんなローシェンナの顔をちらっと見ると視線を上に移した。
「さて、後はそなただけじゃぞ……シエラ」
　閃華が見ている先にはシエラとアレッタとの戦いが繰り広げられているはずである。ここからでは良く見えないが、閃華はシエラの勝利を信じていた。いや、信じたかった。そしてもう一度、あの時間が戻ってくるのを心待ちにしていた。
　そしてもう……こんな事が起こらない事を祈るのだった。

第百十七話　怒涛の閃華（後書き）

あ～、やっと更新が出来ましたっ！！！　……随分とお待たせしたみたいで申し訳ないです。

まあ、活動報告を読んでいる人や私のブログを見ている人はご存知かと思いますけど、七月の中ごろからプライベートな事でゴタゴタがありまして、小説を書いている時間がまったく取れない、という事態に陥ったのですよ。

まあ、八月に入って、やっと落ち着いて来たので活動を再開したのですが……まだゴタゴタが片付いたわけでは無いので、今までの更新スピードを維持するというのは不可能かと思います。そこはご了承ください。

……いやね、私にもいろいろとあるわけですよ。まあ、私もこれで飯を食っているわけでは無いですからね～。どうしても生活に支障が出るゴタゴタが起きると、そっちに集中しないといけない訳ですね。まあ、そんな訳で更新スピードが落ちる事だけは、ここに宣言させてもらいますね。

……まあ、連載を二本も抱えている私の自業自得と言えなくも無いけど……ここまで来ちゃったらもう引き返せないのよっ！！！

そこは分ってっ！！！　えっ、無理……分かった。……ならっ！！！　介錯をっ！　介錯を――っ！！！　ここで自決して果ててやるっ！！！

……はい、久しぶりなんで戯言をやりましたが、今回はここで終わりです。

あっ、ついでに宣伝。私のホームページ『冬馬大社』に電撃大賞で落選した作品を上げました～。良ければ読んでもらって感想をください。次の参考にしたいので～。私のホームページには作者紹介のページから飛べるようにしてありますので、そちらから行っても良いし、『冬馬大社』で検索しても出てくると思いますので、よけ

れば読んでやってください。あっＰＣ専用で作ってあるから携帯だと見辛いかもしれません。

さてさて、久しぶりの更新だったのでいろいろと書いてしまいましたが、ここいらで締めるとしましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、やっぱり小説を書いている時が一番落ち着くわ、と改めて思った葵夢幻でした。

第百十八話　妖魔シエラ

おかしい？　シエラとの戦闘を始めて何回か打ち合ったアレッタはシエラに違和感を覚えていた。それはそうだろう、なにしろ先程までシエラは自分の命を戦闘能力に変えてアレッタ達と戦っていたのだから。そんなシエラが今では普通どころか戦闘能力をかなり上げてアレッタと戦っているのだから。

シエラが急上昇したからこそ、その行為がシエラからの挑戦状と受け取ったアレッタも急上昇してシエラとの一騎打ちに出たのだが、まさか瀕死に近い状態だったシエラがここまで回復をしているどころか、かなりのパワーアップをして戦っているのだからアレッタはすぐに違和感と同時に驚きもした。

どんな手段を使ったのかはアレッタには分からないが、今戦っているシエラは先程まで戦っていたシエラとは比べものが無いほど強くなっている。攻撃力はもちろん、翼の属性にとって最大の特徴であるスピードでも微かにアレッタが劣っている。更には反射速度もシエラはアレッタの上を行っていた。

つまりシエラは全体的な戦闘能力で完全にアレッタの上を行っていたのである。それは先程の瀕死だったシエラを目にしたアレッタには信じられない光景であり、驚きに値するだけの動きをシエラは見せていた。だからこそアレッタは驚きながらもシエラと対等な戦いをしていたのだ。

確かに戦闘能力は完全にシエラの方が上を行っているだろう。だが先程までの戦いで負ったダメージや生命力の消費は庇いきれない部分があるようだ。シエラの動きは少しだけ鈍く、攻撃に少しだけキレがなかった。だからこそアレッタは何とかシエラと対等に戦う事が出来ているのだ。

けれどもアレッタはそれ以上に怒りに近い感情を抱いていた。その根源が何かはシエラには分からないけど、アレッタがシエラに対

して、そのような感情を抱いている事は何となくだがシエラも感じていた。だからこそシエラも油断する事無くアレッタと刃を交えている。

そんな二人の戦いは、まずお互いのスピードを利用しての一撃離脱戦術を駆使した戦いから始まった。その時点でアレッタはシエラが異常なほどに回復している事に気付き、心にも寸分の隙が無い事を悟っていた。アレッタにも分かったのだろう、今のシエラにはまったく迷いが無いという事を。

そんな事はシエラと何回か刃を交えればアレッタにも分かるほど、シエラは先程とはまったく違い。シエラの瞳にはしっかりとした生気と闘志がみなぎっていた。それは先程まで死んだような目をしていたシエラとは思えないほど迫力がある瞳になっている。だからこそアレッタは気付く事が出来たのだ。

そんなシエラを相手に動きを良く見ていると完全に契約者の能力。つまり昇のエレメンタルアップが掛かっている事は間違いないだろうとアレッタは判断した。そうでもしなければ戦い続きのシエラがここまでの動きを見せることなんて不可能だとアレッタは思ったからだ。

そんなアレッタの推測も間違いではなかった。確かにシエラはエレメンタルアップの応用で生命力を回復させたが、本調子で戦えるほど体調が整っていない。それどころか連戦で疲労がかなり溜まっており、普通ならここまでの戦いは出来なかっただろう。

だが昇がシエラに家族だと言ってくれた、一緒に居る事が当然だと言ってくれた。それだけでシエラの心からは完全に迷いが消えた。それだけではない、そこに琴未達まで迎えに来てくれたのだ。

自分が原因で皆に迷惑を掛けた事が分っているシエラだけに、そんな皆の行為が嬉しくて、優しかった。だからこそシエラは目の前の戦闘に集中する事にした。ここでアレッタとの因縁に決着を付ける事こそ、シエラが皆の行為に報いる手段なのだから。それが分っているからこそ、シエラは最後の力を振り絞るかのようにアレッタ

と刃を交えている。それがシエラに出来る唯一の事だからこそ、シエラはエレメンタルアップの力を借りながらも全力でアレッタに向かって行っているのだ。

そんな事を知らないアレッタはシエラの変化に驚きながらも悔しさが込み上げてきた。だからこそ今のシエラを叩きのめしたいという気持ちが更に強くなっていくのだった。

そんな二人の戦いに変化が見え始めた。先程の一撃離脱はあくまでもアレッタとシエラがお互いに相手の今現在に至る戦闘能力を測るためのもの、つまりは腹の探り合いである。つまり相手の力量さえ把握してしまえば一撃離脱の戦術にこだわる必要は無い。

だからこそアレッタは一撃離脱から、そのまま離脱しようとしたシエラの後ろを取るように急旋回すると完全にシエラの後ろを取って飛んでいる。確かにその位置なら、どんな攻撃でも当たるだろう。それが分っているからこそ、アレッタはシエラの後ろを取ったのだ。

そんなアレッタがスカイダンスツヴァイハンダーをシエラに向ける。

「フェザーシュートッ！」

スカイダンスツヴァイハンダーから羽が数枚生み出されると、それは弾丸となりシエラに向かって放たれた。フェザーシュートの攻撃速度は速く、そのうえ弾丸の数が十には達していないものの、数が多いのは確かだ。

そんなアレッタの攻撃にシエラは左手を後ろに向けると、シエラの左腕から白い光を放つ光球が八つ出てきた。

「ポインターシールド、八つっ！」

白い輝きを放つ光球がシエラの後ろで八角形の形で並ぶと光球同士が光の線で結ばれて、線が完全に繋がった時に八つの光球は八角形の半透明で白いシールドとなっており、完璧にアレッタの攻撃を防いだ。

普段ならミリアと組んで防御をミリアに任せるシエラだが、やはり一対一になると、こうした防御技も使わざる得ない時があるのだ

ろう。だがシエラはそれを切っ掛けにアレッタと同様に急速に反転するとアレッタに向けて飛行を開始する。

こちらに向かってくるシエラにアレッタは動揺は見せなかった。シエラなら、そうした行動をしてくるだろうとアレッタは予測していたからである。だから向かってくるシエラにタイミングを合わせるためにスカイダンスツヴァイハンダーを構える。

一方のシエラもアレッタが冷静に対処してくると予測していたのだろう。冷静にスカイダンスツヴァイハンダーを構えてきたアレッタに向かってシエラもウイングクレイモアを構える。そして両者は猛スピードで激突する。

金属音というよりかは爆音に近い音を立てて、ぶつかり合うウイングクレイモアとスカイダンスツヴァイハンダー。ここまで派手にぶつかり合ったのである。こうなると誰しも次はこのまま力比べになると思うだろう。だがアレッタは意外な事に自らスカイダンスツヴァイハンダーを退いてシエラの体勢を崩そうとする。

そしてすぐにアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーを振るいだす。そう、この切り替えしと、空中で反撃をする時の速さこそスカイダンスツヴァイハンダーの真髄なのである。

一方のシエラが持っているウイングクレイモアは威力重視の武器であり、素早い切り替えしがどうしてもスカイダンスツヴァイハンダーよりも劣る。それは別の属性を相手にするなら充分に早い切り替えしが出来ただろう。だが同じ翼の属性同士となると、どうしても威力重視のウイングクレイモアは少しだけせめぎ合いからの攻撃への切り替えしが遅くなる。

その点だけで言えばアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーは翼の精霊が持っている中でも切り替えしが最も早い武器だと言えるだろう。だからこそアレッタは猛スピードでぶつかり合っても、すぐに退いて切り替えし反撃に打って出たのだ。

だがアレッタがシエラの事を詳しく知っていたように、シエラもアレッタの事を詳しく知っている。だからこそスカイダンスツヴァ

イハンダーが繰り出す攻撃がどのようなものかは分っている。そこでシエラはアレッタが反撃に転じる前に防御に出た。

「ポインターシールド、四つっ！」

シエラの腕から先程のように白い光球が出ると、今度は四角形の盾を形成する。このポインターシールドは点の数によって盾の強度が決まってくる。つまり点が多ければ強度の強い盾が作れるのだが、どんな力も弱点が無いわけじゃない。ポインターシールドは点を増やそうとすればするほど時間が掛かるのだ。

だからシエラはアレッタの反撃を予想しながらも最低限の段階で防御できる盾を作り出したのだ。

だがアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーの真髄を見せるのはここからだった。

アレッタもシエラが盾を作り出した事はすぐに察した。けれどもアレッタは構わずにスカイダンスツヴァイハンダーを振るう。その一撃はシエラの予想通りにポインターシールドによって防がれたのだが、アレッタの攻撃はそれで終わりではなかった。

アレッタはシエラのポインターシールドを斬り付けると、すぐに切り替えして再びスカイダンスツヴァイハンダーを振るう。そう、切り替えしを利用しての連撃。それこそがスカイダンスツヴァイハンダーの真髄なのだ。

それはシエラのも分っていたことだ。だが、まさかここまで早い連撃を繰り出されるとはシエラも思ってもいなかった。どうやらアレッタの事を甘く見すぎていたのか、それともエレメンタルアップの力を過信しすぎていたのか分からないが、このままではポインターシールドが保たれない事は確かな事だ。

つまりシエラはポインターシールドが保たれている間に次の手を考えなければいけない。けれどもアレッタの連撃はシエラが思っている以上に早いもので、数秒の内に数十回もの斬撃を入れられてしまった。さすがにそこまでの連撃をされると即興で作り出した盾が持つはずが無く。アレッタの百回に近い数の攻撃でポインターシー

ルドは見事に砕かれてしまった。
だが、そこはシエラである。ポインターシールドを砕かれるのを黙って見ている訳が無かった。シエラはポインターシールドを砕いて少しだけ油断しているアレッタの隙を付いて反撃に転じる。だが、このまま反撃してもアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーを前にしては分が悪いのは確かだ。
だからこそシエラはしっかりとその点を抑えるための手段に出る。
「フェザーバインドッ！」
ウイングクレイモアから放たれた数枚の羽はそのまま巨大化してスカイダンスツヴァイハンダーに巻き付く。そう、これこそがシエラが短時間に考え出した手段だ。アレッタのスカイダンスツヴァイハンダーが切り替えしが早く、連撃を得意としているのなら、その連撃を封じる手段を講じれば良い。つまりフェザーバインドでスカイダンスツヴァイハンダーの切り替えし速度を少しでも落とそうというのだ。
それにフェザーバインドは本来、相手の動きを封じるために使う技だ。それを武器に使ったのだから、そう簡単にフェザーバインドを破る事が出来ない。まあ、第三者の協力でフェザーバインドを攻撃すれば簡単に外せるけど、シエラ達の戦場は精界上空ギリギリの行動である。つまり飛べる属性が無い限りはアレッタに増援はありえない。
それはシエラも同じだが、シエラには昇が居る、昇のエレメンタルアップがある。だからこそいつでも繋がっている事を感じる事が出来る。その事こそがシエラに更なる戦う力を与えるのだ。そんな繋がりを実感できているからこそ、シエラはいつも以上の力を出して戦っているのだ。
そして、その戦い方こそシエラの戦い方であり、いつものシエラである。つまりシエラの戦い方を見る限りは心配は無いという事だ。それどころか昇がシエラ達の戦いを観戦で来ていたなら昇は安心してシエラを見守っていられただろう。それぐらいシエラの戦い方は

本来の姿を取り戻している。
その証拠としてシエラが放ったフェザーバインドはスカイダンスツヴァイハンダーに絡みつくとアレッタは苦い顔をした。どうやらフェザーバインドの効果でスカイダンスツヴァイハンダーを今までのように振るえなくなった事に気付いたようだ。それどころか、いつも持っているスカイダンスツヴァイハンダーがいつもよりも重く感じた。
つまりフェザーバインドの効果によりスカイダンスツヴァイハンダーは先程のような切り替えしが出来なくなったというわけだ。これでシエラにとって不利な点が一つ消えた事になる。そのうえシエラはアレッタとの決着を付けるために全力を出している。だからここでシエラが遠慮をする理由は無い。
フェザーバインドの効果が効いている内に一気に攻勢に出るシエラ。切り替えしは本来のスカイダンスツヴァイハンダーに及ばないものの、シエラのウイングクレイモアにも充分な翼の属性が宿っている。つまり動きが鈍くなったスカイダンスツヴァイハンダーとも対等に、いや、威力重視のウイングクレイモアがあるからシエラは一気にアレッタを追い詰める事が出来る。少なくともシエラはそう思っていた。
けれどもアレッタの中にある意地では無いが、何か感情的なものがアレッタを突き動かしているのだろう。フェザーバインドで括られたスカイダンスツヴァイハンダーを駆使いて、威力のあるウイングクレイモアの攻撃を上手く捌いて見せた。
つまりシエラがここぞとばかりに攻撃を仕掛けても、アレッタは重いとも感じるスカイダンスツヴァイハンダーを上手く操り、ウイングクレイモアの攻撃を受け止める事無く、上手く受け流してシエラの攻撃を避け続けているのだ。
スカイダンスツヴァイハンダーが本来の力を発揮出来るなら、受け流してからすぐに反撃に転じる事も出来ただろう。けれどもシエラはそれをさせないためにスカイダンスツヴァイハンダーにフェザ

ーバインドを掛けたのだ。だからアレッタには反撃に転じる好機がなかった。

そんなアレッタを相手にシエラはウイングクレイモアを振るい続ける。けれども空中での機動性は未だにスカイダンスツヴァイハンダーの方が上回っているのだろう。シエラの攻撃は当たる事無く、アレッタに上手く捌かれていた。そんな状況にシエラは決意する。

まさかアレッタがここまでやってくるとは……予想外。なら、しかたないか。今は昇のエレメンタルアップがあるし、全力を出しても充分に持つ。それに、それで決められなかったら最後の手段を出せば良いだけ。そんな決断を下すとシエラは一旦アレッタから距離を取った。

もちろんその隙にアレッタからの反撃も充分に考えられたが、アレッタはスカイダンスツヴァイハンダーに巻き付いたフェザーバインドをどうにかする方を優先させたようだ。

シエラが距離を取ってきたという事はシエラが何かをしようとしている事はアレッタにも充分に分っている。だが今の状態でシエラが更なる力を出してきたら対応できないだろうとアレッタはフェザーバインドを解除する方を優先させたのだ。

シエラもアレッタならそうすると思ったからこそ、一気に距離を取って力を集中させるのだ。それは自分自身の力と昇から流れ込んでくる力。それにシエラは流れ込んでくる力の中に皆の気持ちが宿っているような気がしていた。帰ってきても良い、そんな言葉が聞こえそうな皆の気持ちを受け取ったようなシエラは一気に力を解放する。

「発動、セラフィスモード」

シエラのウイングクレイモアが白く光り輝くと刀身から新たなる翼が生えてくる。そして最初は少しずつ、姿を現してきた白き翼は飛ぶが如く、その姿を一気に広げると羽が舞い落ちる中でウイングクレイモアに新たなる翼が四枚生えた。

どうやらシエラは全力であるセラフィスモードで一気に決着を付

けようというのだろう。確かにセラフィスモードならシエラの全体的なスピードを飛躍的に上げる事が出来る。つまり攻撃の切り替えし、攻撃のキレでもアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーに負けないほどのスピードを発揮する事が出来るのだ。

シエラがセラフィスモードを発動させている間にアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーに出来る限りの力を流し込んで内側からフェザーバインドを破壊していた。これで五分の勝負になるだろう。少なくともアレッタはそう思っていた。

だが昇が今回使ってきたエレメンタルアップは今までに無いほどの力を発揮している。その影響はもちろんシエラにも出ており、シエラは発動したセラフィスモードが今までに無いぐらい力を放出している事にすぐに気付いた。

これで勝てる、アレッタ……もう終わりにしよう。昇のエレメンタルアップにシエラにとって最大級の形態ともいえるセラフィスモードである。今のシエラにはアレッタに負ける気はしなかった。

一方のアレッタはシエラがセラフィスモードを発動させてきた事に驚きを示していた。先程の戦いでシエラを消耗させた事は確かだ。それなのに先程よりも強い力を放つセラフィスモードを発動させてきたのだアレッタが驚いても不思議ではない。

そんなシエラを相手にアレッタが、どう戦おうか思案している間にもシエラは一気に攻勢に出た。

アレッタの目でも微かに追いきれるスピードで一気にアレッタの後ろを取ったシエラはすでにウイングクレイモアを振り上げている。シエラが後ろを取った事でアレッタにはシエラがどんな攻撃に出てくるのかが分っていた。それだけシエラとアレッタとの絆も深かったのだ。つまりお互いの手の内は分っている。だからこそアレッタも振り向くのと同時に振り下ろされたウイングクレイモアを上手く受け流して、そのままシエラに反撃を入れようとする。

もちろんウイングクレイモアを受け流した直後の反撃である。まともな攻撃が出来るはずは無い。せいぜいかすり傷でも与えれば良

い方だろう。それでもアレッタが反撃に転じたのはシエラへの牽制が含まれているからだ。

ここでシエラが先手を取ったからには、次の攻撃に出る前に微かなダメージしか与えられない攻撃しか出来なくとも反撃しておいた方が、シエラは次の攻撃に出にくいだろうとアレッタは判断したからだ。

だがそんなアレッタの思惑は外れる事になった。アレッタのスカイダンスツヴァイハンダーはウイングクレイモアを受け流すと、そのままシエラの肩を目掛けて斬撃を入れようとする。けれどもセラフィスモードを発動させたシエラなら、その程度の攻撃なら距離を置くことで避けられるだろう。だがシエラはあえてアレッタの反撃を受ける事にした。

シエラにも分っているのだ。アレッタはこの状態で相手に深いダメージを与える攻撃をしてこないと、だからこそ微かな傷を負ってでもシエラは次の手を繰り出すために、あえてアレッタの反撃を避けなかったのだ。

そしてアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーはシエラの右肩を軽く斬り裂く。それと同時に微かに血が吹き飛ぶが、アレッタは自分の反撃が当たった事に驚くのと同時に脅威を感じていた。

シエラがわざとアレッタの反撃を避けなかった事はすぐに分かったからだ。そうなると次に怖いのはシエラからの攻撃である。なにしろアレッタは攻撃をした直後、今の状態からスカイダンスツヴァイハンダーを引き戻して、シエラが繰り出す次の攻撃に備えるだけの時間は無い。もちろんシエラもアレッタにそんな時間は与えない。

振り下ろしたウイングクレイモアの翼を全て一気に羽ばたかせると、振り下ろしたウイングクレイモアは急停止、それから急上昇を始めた。もちろん、その先にはアレッタがいる。この体勢ならアレッタのスピードを駆使しても避けるのは不可能だろう。

だが、ここでシエラには予想外な事が起きた。いきなり腹部に痛みを感じるのと同時にアレッタが自分から遠のいて行くのを目にし

たからだ。どうやらアレッタは自分のスピードでは避けられないと感じ取ったのだろう。だから咄嗟にシエラを蹴る事で自分の身体をウイングクレイモアの軌道から外れる位置に持って行ったのである。

強引とも言えるアレッタの行動が功をそうしてウイングクレイモアはアレッタに直撃する事は無かった。けれどもウイングクレイモアの切っ先はアレッタに届いたようで、ウイングクレイモアが振り抜かれるのと同時にアレッタが身に付けている胸の防具は切り裂かれ、更に下の衣服まで切り裂いたようで、服の切れ間からアレッタの白い素肌が微かに見える。

けれども、それだけであり、シエラのウイングクレイモアはアレッタの肌すらも斬り裂く事が出来なかったみたいだ。逆に言えば巨大なウイングクレイモアだからこそ、アレッタの防具と衣服を斬り裂く事が出来たのだろう。

なんにしてもアレッタが追い詰められているのは確かである。まさかシエラがこのような攻撃方法をしてくるとは思ってもいなかったからだ。いや、本気になったシエラがここまで強いとは思っても見たかったと言った方が正解だろう。

昔の事になるがアレッタとシエラは模擬戦で戦った事はあるが、シエラがここまで本気になった事は一度たりとも無かった。シエラはいつでも冷静に状況を分析して、自分が攻撃を受けないように反撃する事を優先していたからである。それがまさか、攻撃を受ける事を覚悟しながらも反撃してくるなんてアレッタには予想も出来なかった事だ。

けれどもアレッタにとって幸いな事が一つだけあった。それはシエラを蹴飛ばした時の事だ。ウイングクレイモアを完全に避けきる事は出来なかったが、体格差のおかげでシエラを少しだけ遠くに蹴飛ばし距離を置く事が出来たからだ。

つまりシエラを蹴飛ばしたおかげでアレッタは何とかウイングクレイモアの間合いから出る事が出来たのである。ちなみに、こんな攻防を二人は数秒の内にやってのけたのだ。そこは翼の精霊同士、

さすがのスピード戦と言えるだろう。
一度開けた距離を良い事にアレッタは更に後退してシエラとの距離を開ける。そしてシエラが体勢を立て直した頃にはアレッタは充分にシエラから距離を取る事に成功しており、シエラも追撃を諦めるしかなかった。
そんな状況で、いや、そんな状況だからこそアレッタは思う。
このままだと負ける。シエラが強い事は充分に知っているつもりだった……けど、今のシエラは私が知っているシエラよりも何倍も強い。そんなシエラを相手に……どうやって戦えば……。どうやらアレッタも記憶のシエラよりも強い今のシエラに戸惑っているようだ。だからこそアレッタも決断せざる得なかった。
……使うしか……ないかな。本当ならシエラを相手に使いたくは無かったんだけど、今のシエラが本気で向かってくるなら、私もそんなシエラを受け止めるために本気を出す義務がある。それが、ううん、もうこなったら、それしか……贖罪の道は無いっ！　そんな決断をするとアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーを構えると一気に翼の属性を流し込む。
そんなアレッタを見てシエラはアレッタが本気を出してきた事を感じていた。確かに模擬戦でシエラは本気を出す事はなかった。それはアレッタも同じであり、お互いに摸擬戦を遊びのようなものだと捉えていたからだ。だからこそお互いの本気などは知りもしなかった。
つまりこれからアレッタがやって来る事はシエラにとっては未知の領域。それでもシエラはアレッタの隙を付こうとせずに待つ事にした。シエラも充分に分っているのだ、アレッタの前から逃げ出した卑怯な自分。そんな自分が許される事が無いと、アレッタは自分を許さないと、だからこそシエラは全力を出してくるアレッタに全力で戦う事が唯一の謝罪である事を。
シエラと琴美のやり取りを見ても分かる通りにシエラも意外に生き方が不器用なのだ。それは妖魔である自分が受け入れられないと

知っているから、自然と生き方が不器用になってしまったのだろう。だからシエラはアレッタに素直に謝れなかった、いや、謝り方を知らなかった。だからこそシエラに出来る唯一の謝罪はアレッタと本気で戦う事。それこそがシエラの謝罪なのである。

つまりシエラはお互いに戦う事で、傷つけ合うことで分かり合う事しか知らなかったのだ……昇と出会う前までは。昇と契約をしてからというものシエラはいろいろな事を昇から教えてもらった。琴美とは最終的に武器を交える事になったとしても、その前に舌戦で理解しあうという事を憶えた。ミリアと知り合った事でシエラは自分の生き方が硬い事を理解した。そして閃華と話し合うことで、話し合いでも充分に相手と理解できる事をしった。それら全てがシエラが昇と契約してから得たものである。

そして昇からは繋がりを、言葉を使わなくても一緒にいるだけで理解しあえるだけの絆を築ける事を知った。だからこそ今のシエラは強いのである。そして、そんなシエラが未だに不器用な相手こそがアレッタなのだ。アレッタとは未だに戦う事でしか理解しあう事が出来ない。それが分っているからこそ、アレッタが本気を出すまで待つ事にしたシエラだった。

そんなシエラの心境を分からないままにアレッタは充分な力をスカイダンスツヴァイハンダーに注ぎこみ、後は発動させるだけである。アレッタはシエラを睨みつけると力を一気に解き放つ。

「発動、トーテンタンツ」

加速度を増して増幅される翼の属性。たぶん、これこそがアレッタの最終手段なのだろう。トーテンタンツは死の舞踏を意味しており、死生観を表していると言われている。その程度の知識はシエラも持っていたが、アレッタがそこにどんなアレンジを加えてくるかまでは、まったく予想が付かなかった。

そんなシエラにアレッタは一気に突撃を掛ける。突撃スピードは先程とあまり変わりない、そうなると別な箇所が強化されてくるのだろうとシエラは予想しながらもウイングクレイモアを構える。

そして距離が一気に詰まるとアレッタはスカイダンスツヴァイハンダーを振るい始める。けれども今のシエラはセラフィスモードにエレメンタルアップが掛かっている。そんな単純な攻撃を避けるのは動作も無いことだ。

だが次の瞬間にはシエラは驚く事になる。なにしろシエラすらも気が付かない内に、いつの間にか右腕を微かに斬られていたのである。その事実にシエラは驚きならも、アレッタの力を確かめるために後退するが、アレッタはシエラと密着して放れようとはしない。その間にもシエラの身体には傷が増えてく。

そういう事か。アレッタの攻撃を何度か喰らったシエラはようやくアレッタが何をして来たのかが分かった。スカイダンスツヴァイハンダーの真髄は切り返しの速さによる連撃である。つまりアレッタはそこを強化して来たのだ。

シエラの目でも微かに追えるスカイダンスツヴァイハンダーの剣閃。そのおかげで致命的な傷を負う事は無いが、少しでも油断すればシエラの身体はスカイダンスツヴァイハンダーに切り刻まれているだろう。それほどまでに早い連撃をアレッタは繰り出してきたのだ。

さすがのシエラもこの連撃にはどうする事も出来なかった。なにしろアレッタの繰り出す連撃が速過ぎて、まったく反撃をする余地が無い。それどころか避ける事だけで精一杯だというのに微かだが攻撃を喰らっている。そんな中でもシエラは思考を巡らす。

これが……アレッタの本気。これだけの連撃を喰らえば一瞬で死ぬ。まさしく死の舞踏といったところ。そんな感想を抱くシエラ。どうやらシエラには、まだ余裕はあるみたいだ。

けれども反撃の手段が見付からない。どうにかしてアレッタが繰り出す連撃を止めない限りはシエラに反撃をする時間が無いのだ。それほどまでにアレッタは素早い連撃を繰り出している。数秒に数十、いや、数百とも思える連撃を繰り出してきているのだ。そんな連撃を避けるだけでも精一杯だというのに、連撃と止めて反撃に転

じるのは、相当難しいだろう。
だがそれをやらなければシエラに勝ち目は無い。だからシエラはアレッタの連撃を止めようと剣閃から次の攻撃を見極めようとするが、どうしてもアレッタの連撃が速過ぎて攻撃を受け止めることが出来ない。そんな状況にシエラはある決断を下す。
アレッタの本気がここまで強いなんて……しかたないか……もう、使うしかない。うん……もう大丈夫、昇が、皆が受け入れてくれたから、私に恐れる物なんて無い。だから……私はっ！
シエラは決断を下すと後退を止めて、突撃に切り替える。セラフィスモードを発動中のシエラだ。後退から突撃に切り替えるまでの時間はコンマ数秒だろう。だがアレッタの繰り出す連撃に飛び込むのような自殺行為とも思えるシエラの行動にアレッタは驚くのと同時に苦い顔をした。それはシエラがトーテンタンツの的確な対処方法を取ってきたからだ。
シエラはトーテンタンツを避けながらの反撃を無理だと判断した。そうなるとどうしても高速の連撃であるトーテンタンツを止めるしかない。けれども下手にウイングクレイモアで受け止めれば、流されて攻撃を受けるのは先程の行動で分っている。だからこそシエラは突撃という手段に出たのだ。
トーテンタンツは確かに高速の連撃で下手に飛び込めば切り刻まれるのは目に見えている。だが、トーテンタンツにも劣らないスピードで飛び込んだらどうだろう。シエラの身体には確かにスカイダンスツヴァイハンダーが食い込む事になる。
ここで重要なのは武器の長さである。確かにトーテンタンツは高速の連撃で今のシエラでさえも避ける事が精一杯だったろう。だが使っている武器はスカイダンスツヴァイハンダーには変わりない。つまり剣の鍔元だと何も切り裂けないと同じで、密着されてしまえば刃元はシエラの身体に食い込むものの、斬り裂く事はできないのだ。
そもそも剣や刀という物は刀身で切るものであり、懐に入られる、

つまり密着させられると刀身を相手の身体に当てる事が出来ずに、斬り裂くことが出来ないのだ。しかもスカイダンスツヴァイハンダーはウイングクレイモアに匹敵するほどの長さを持っている。その分だけに密着させられると通常の剣よりも振り辛く、無用の長物になってしまう。

同じ長さの武器を持っているからこそ、シエラはそこに気付けたのかもしれない。つまりシエラも密着させられるとウイングクレイモアを振るう事が出来ない。

要するに突撃を掛けて一気に距離を詰めて密着状態に持って行ったシエラだが、それではお互いに武器を振るう事が出来ないのである。けれどもこれでアレッタのトーテンタンツを止める事が出来たのは確かである。それにシエラには、そこから更なる手段があるのだろう。シエラは身体に食い込んだスカイダンスツヴァイハンダーの痛みを無視するかのようにアレッタに目を向けると口を開いてきた。

「アレッタ、確かに私が妖魔だという事を知っていたのはアレッタだけ……でも、私の……本当の姿を知っている者は誰も居ない。今の時点だけど」

「なっ、ど、どういう意味よ」

密着状態でお互いに武器を使えない事はアレッタにも充分に分っている。それにスカイダンスツヴァイハンダーがシエラの身体に食い込んでいる分だけアレッタが有利なのだ。これでシエラが退けば、そのまま切り裂けるし。押し出してくれれば、アレッタが退いて、これでもシエラを斬り裂くことが出来る。でもシエラは、その両方ともせずに話しかけてくるだけだ。その事にアレッタは戸惑いを隠せなかった。

そんなアレッタにシエラは軽く笑うと瞳を向ける。アレッタにはそんなシエラの瞳が不気味でしょうがなかった。それはシエラが不敵な笑みを浮かべている訳でも無いし、余裕の笑みを出しているわけでもない。ただ普通に笑みを出しているだけだ。だからこそアレ

ッタはそんなシエラに恐怖心に近い何かを憶えたのだろう。
そんなアレッタにシエラは普通の笑みを浮かべながら話を続ける。
「だから……見せてあげる。一番最初に、アレッタに見せてあげる。私の……本当の姿。妖魔である私が隠してきた本当の姿を」
「なにをっ！」
アレッタが何かを言い終る前にアレッタは何かの力に吹き飛ばされる形でシエラから離れる事になった。さっきまでの密着状態を維持していればアレッタに有利だったのに、シエラが行った何かしらの力によってアレッタはシエラから離されて吹き飛ばされてしまったのだ。
シエラが何をやったのかはアレッタにはまったく分からなかった。だが今のシエラに再び攻撃を再開させる気にもならなかった。それはシエラが不思議な力を放っていたからだ。
シエラの身体から発せられる黒い力は風のようにシエラの髪を全て持ち上げる。それと同時にシエラの精霊武具である防具が全て消え去り、衣服だけになった。そんなシエラの衣服も姿を変えており、シエラの服は背中が大きく開いた、真っ白なローブに近い服装になっていた。
それからシエラは自ら嫌っていた妖魔の証である背中の翼を自らの意思で生やすとアレッタに目を向けて話しかけてきた。
「これが……本当の私、本来あるべき私の姿」
シエラがそう言うと背中の翼は一気に開かれて、浮き上がった髪で翼の根元にある黒い部分もしっかりと見える。だがアレッタが驚くのは、その後に起きた出来事である。
黒い風に吹かれて真っ白な服を着ているシエラの翼がゆっくりとではあるが、少しずつ根元の黒い部分が消えて行き、白くなって行く。まるで体の中に入り込むように翼の根元にあった黒い部分は消えて行き、最後にはシエラの翼は真っ白な純白な翼へと変化した。
その姿だけを見れば天使どころか女神を想像するぐらい美しいものだった。だからこそアレッタも思わず見蕩れてしまった。けれど

もシエラが女神の印象を与えていたのはその瞬間だけだった。
シエラの身体に少しずつ黒い紋様が刺青のように浮き上がってきたのである。その紋様は禍々（まがまが）しく、とてもではないが女神のイメージとはかけ離れた物だ。そんな物がシエラの身体に刻まれていくのである。まるで女神と邪神を掛け合わせたような、そんな矛盾的なイメージを抱かせるような刻印のようなものがシエラの身体に刻まれた。
それが無ければ女神のように見え、それだけを見れば邪悪な存在に見える。それこそがシエラが隠してきた本当の姿であり、本来あるべき力なのだ。そう、これこそが妖魔シエラの本当の姿なのだ。

第百十八話　妖魔シエラ（後書き）

はい、そんな訳で……なんとか八月中に上がったっ！！！　いや～、一時は八月中のアップは無理かなとも思ったんですよ。けど、無事に上がってよかったです。

まあ、前話の後書きでも活動報告でも書いたとおりに更新のペースは落ちました。それでも、なんとか書き続けている状態ですね。まあ、次話はなるべく早く上がると思います。

……なにしろ……エレメ次編のプロットがやっと上がったからっ！！！

いやはや……長かった。これってプロット？　って疑いたくなるほど長かった。それぐらいプロットに時間を掛けてしまいましたが、ようやくプロットも上がったので、これから白キ翼編に集中できます。……まあ、断罪咎も同時進行でやっているので、そんなに早くは更新できませんが、なるべく早く更新するつもりです。

まあ、九月も二話ぐらい上げられれば良いかな～。という感じですかね。それに断罪咎の四章も上げるつもりなので……実質四話ほど書いているのと同じですね。

まあ、それでも断罪が終わるまでなので、しばしのご辛抱を……まあ、断罪咎もいつ終わるか分からないけどね（笑）

さてさて、少しだけ本文に触れますか。最後でいよいよ見せた妖魔化したシエラ。あの姿こそ妖魔シエラの本当の姿なんですね～。というか、イメージが天使を通り越して女神になりましたからね～。……絵にすると大変な事になりそうだな～。

まあ、実際に描いてくれる絵師さんが居ないんですけどね～。いやね、いろいろなところに挿絵を書いてくれる絵師さんを探しているんですけど……さすがに、これだけ長いエレメだと、いろいろと変更されている点が多いのか。読むだけでも大変なのかまったく見付かりません。まあ、そんな訳で挿絵は絶望的ですね。

まあ、私はしかたないと諦めてますけどね。これぱっかりは人脈がまったくない自分にはどうする事も出来ないですから（笑）

さてさて、なんか長くなってきたので今回はこの辺で締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、なんで今年の夏は暑さが続くんだっ！！！　私もＰＣもダウン寸前じゃないかっ！！！　と叫んでみた葵夢幻でした。

第百十九話　大気のルーラー

女神を想像させる純白の服を着て、背中からは一点の黒も無い白キ翼を生やしており、それと同時に邪神を想像させるような黒い紋様がシエラの身体には刻まれていた。いや、まるで隠していた物を明らかにするように黒い紋様は姿を現した。

そんなシエラの姿を見て呆然とするアレッタ。確かにアレッタはシエラが妖魔だという事を知っていた。けど、それは背中にある翼に黒い染みのような部分があったから純粋な精霊ではないから妖魔だと分かっただけであり、本当に妖魔の力を発揮したシエラの姿を見るのはこれが始めてだ。だからだろう、シエラを良く知っているはずのアレッタですら呆然とするのは。

そんなアレッタを見る事無く、完全に妖魔の姿になったのだろう。シエラの髪を浮き上がらせるように吹いていた黒い風は収まり、今では背中の白キ翼を羽ばたかせて宙に浮いている。そんなシエラがゆっくりと瞳を開くとアレッタは再び驚く事になる。

なにしろシエラの瞳が紅色に変化していたからだ。いつものシエラは黒い瞳をしている。けれども今、アレッタの前に居るシエラは紅い色をした瞳でアレッタを見詰めている。体中に現れた黒い紋様といい、紅い瞳といい、今のシエラは精霊とはかけ離れた妖魔の姿そのものだった。いや、この姿こそシエラが今まで隠してきた本当の姿、妖魔の姿なのだ。

完全に妖魔の姿となったシエラを見てアレッタは言葉を発する事も、何か行動を起こす事も出来なかった。それほどアレッタにとっては始めて見る妖魔の姿、しかもシエラが今まで隠してきた本当の姿を見て動揺しているようだ。

そんなアレッタとは正反対にシエラはゆっくりとウイングクレイモアを持ち上げると、アレッタに切っ先を向ける。そしてシエラはアレッタに向けて言葉を投げ掛けるのだった。

「これが……昇達にも……そして、アレッタにも隠し続けてきた本当の姿。私が今まで忌み嫌っていた私の……本当の力と……本当の姿。……でも、今は違うっ！　昇が、皆が本当の私を受け入れてくれた。だから私はこの姿を今では嫌ったりはしない。そしてアレッタ……アレッタだからこそ……本当の姿を一番最初に見て欲しかった。それが……」

それ以上の言葉が言えなくて黙り込むシエラ。そんなシエラを不思議な顔で見守るアレッタ。とても戦場とは思えない光景が広がっていた。

けど、今のシエラとアレッタは敵同士で戦わないといけないのだが、だからと言って今のシエラにはアレッタを攻撃に攻撃をする気にはなれなかった。なにしろアレッタに、いや、妖魔の姿を晒したのはこれが初めてだ。それだけにシエラには分かる、アレッタが自分を見て動揺しているのを。もちろん、それは戦場において最大の隙とも言えるだろうが、過去の絆がシエラに攻撃をする事をためらわせていた。

シエラは自分が妖魔である事から他の精霊との繋がりに一線を引いていた。でも、アレッタはそんな事を気にしないでシエラと対等に接してくれた。シエラにとってアレッタは今でも大事な絆を持った友達なのだ。

だからこそシエラはアレッタに本当の姿を見せる事にまったくちゅうちょしなかった。いや、アレッタだからこそ、この戦いで本当の姿を見せておきたかったのだろう。それがアレッタの前から逃げ出したシエラに出来る精一杯の事なのだから。

そんなシエラの言葉を聞いてアレッタはやっと自分を取り戻した。そしていつの間にか自分の中からシエラに対する怒りが消えている事に気付いた。そして、怒りとは逆の感情が湧き出している事にも気付いた。そう、アレッタは嬉しかったのだ。シエラが本当の姿を一番最初に自分に見せた事が。

だからこそアレッタの表情は自然と和らぎ、口元に軽い笑みを浮

かべながらシエラに向かって言葉を返してきた。
「……そう、なんか……なんかね。やっと、超えられたような気がするよ、今までシエラが私に対して引いていた一線を……やっと……越えられたような気がする」
「……アレッタ」
静かなアレッタの言葉にシエラは違和感を持ち始めた。なにしろ先程までアレッタからは怒りにも似た感情のような物を感じていたのだが、シエラが本当の姿をアレッタに見せた途端にアレッタからは、そんな感情を感じるどころか、昔を思い出すような懐かしい気分がしたからだ。
それが何なのかはシエラには、まだ分からない。だが今はアレッタとの戦闘中である。だからアレッタに対して気を抜く事は出来なかった。だからと言って今のアレッタを攻撃する気にもなれなかった。なにしろ今のアレッタは……あまりにも無防備だったから。
アレッタは戦闘中だというのに、そんな事をすっかり忘れたかのように闘志が消えている。それどころかアレッタは涙すら流していた。そんな無防備のアレッタに攻撃を仕掛けるなんてシエラには出来る訳が無い。だからこそシエラは今のアレッタに戸惑うばかりだ。
シエラがすっかり戸惑っている内にアレッタは心の整理が付いたのだろう。涙を拭くと再びスカイダンスツヴァイハンダーを構えてシエラに鋭い瞳を向けてくる。だがシエラはそんなアレッタの瞳からも変化が生じている事に気が付いた。
確かに先程まで戦っていたアレッタの瞳も鋭かった。けれども今のシエラが写っているアレッタの瞳は鋭いものの、瞳の奥には優しさのような物をシエラは見つけたからだ。
それは先程までのアレッタを見ていれば、まるで別人になったような変化だ。まあ、シエラも姿がすっかりと変わって外見だけは別人のようだが、アレッタは中身が別人のように変化した。しかも、その雰囲気はシエラが知っているアレッタの雰囲気そのものだった。
そんなアレッタの変化にシエラは思わず言葉を投げ掛けてしまう。

「……アレッタ、どうしたの？」
　アレッタの変化に思わず、そんな質問をしてしまったシエラ。一方のアレッタはそんな質問を受けて一瞬だけ驚きの表情を浮かべると笑い出した。その笑いは先程までとはまったく違い。笑いの奥にまったく悪意が無い、純粋たる笑いだった。
　そんなアレッタに首を傾げるシエラ。どうやらシエラにはアレッタがどうして無邪気にも似た笑いを続けているのかが、まったく分からないと言った感じだ。
　そんなアレッタが笑いを封じ込めるように、涙目になった目を拭くと再びシエラに向かって話を続けてきた。
「シエラ……そういう所は昔から変わらないよね。まあ、今のシエラに私の気持ちを分って貰いたいとは思わないわよ。もし、そんな事になったら思いっきり悔しいからね。だからシエラ……私の気持ちが知りたかったら私に勝つ事ね」
　言葉が終わるのと同時に再びスカイダンスツヴァイハンダーを構えるアレッタ。そんなアレッタにシエラも言葉を返すのだった。
「もちろん勝たせてもらう。今の……今の私は負ける訳にはいかない。受け入れてくれた皆のためにも、そして……」
　やっぱり最後の言葉は出せないシエラ。そしてアレッタに謝るためにもとはシエラは言えなかった。だがそんなシエラを驚かせる言葉をアレッタが返してきたのだ。
「そして私に謝るためにでしょ」
「なっ！　なんで」
　まさかアレッタの口からシエラの本心が飛び出してくるとはシエラ自身も思ってもみたかった事であり、シエラは驚きを隠せなかった。そんなシエラとは正反対にアレッタは意地悪な笑みを浮かべると話を続けてきた。
「本当に……そういう所は昔から変わってないわよね。シエラ、一つだけ教えてあげるわよ。私はシエラの心を知ってる、それは私がシエラの心を知りたいと思ったから。でも、シエラは私の心を知ら

ない、それはシエラが私の心を知りたいと思わなかったから。ただ……そう、ただそれだけの違いよ」

「どういう意味？」

「言葉どおりの意味よ。私はシエラの心が分かるけど、シエラには私の心が分からない。それだけの事よ。そして……だからこそ戦うのよシエラ。戦う事が……今の私達がやるべき事なんだからね」

「……言われるまでも無い」

アレッタが言った言葉の意味をシエラには分からなかったが、アレッタが再び戦う意思を示し、その瞳に闘志を戻したからには戦わない訳にはいかないとシエラもウイングクレイモアを構える。そんなシエラを見てアレッタは口元に笑みを浮かべると一気に行動に出てきた。

「行くわよっ！」

宣言と共にシエラに向かって突撃してくるアレッタ。そんなアレッタに対してシエラはウイングクレイモアを構えているものの、まったく動こうとはしなかった。どうやらここでアレッタを迎え撃つつもりなのだろう。

だがアレッタは先程発動させたトーテンタンツを解除していない。つまりアレッタの戦闘能力は落ちていない。先程と変わりなく、距離が縮まれば怒涛のような連撃を繰り出してくるのは目に見えている。

そんな事はシエラは分っているはずなのにシエラは動こうとはしない。つまりシエラにはトーテンタンツに対抗出来る手段があるのだろうとアレッタは判断した。だが、それでもアレッタは突撃を止める事はしなかった。

シエラ、どうやら私のトーテンタンツに対抗出来る手を持ってるみたいだけど、私はもう油断も手加減もしないわよ。ここからは本気で決着を付けるわっ！　そんな決意と共にシエラに向かって背中の翼を羽ばたかせながら一気に距離を詰めてくるアレッタ。

そしてついにシエラはスカイダンスツヴァイハンダーの間合いに

入る。後はアレッタがスカイダンスツヴァイハンダーを振るいだせば一瞬の内に数百という斬撃がシエラを襲うだろう。それは二人の戦いを見ていれば誰でも分かる事だ。戦っているシエラなら誰よりもそんな事は分っている。それでもシエラは動こうとはしなかった。

アレッタはまったく動こうとはしないシエラに疑念を感じながらも、ついにスカイダンスツヴァイハンダーを振るい始め、トーテンタンツの真髄を発揮する。この一撃を皮切りに怒涛の連撃を繰り出そうと一気に決めようとするアレッタ。

「なっ！」

だがアレッタが驚く結果となってしまった。なにしろ連撃の皮切りとなる最初の一撃。その一撃はもちろんシエラを斬り裂くつもりで深く斬り付けた斬撃だ。その斬撃がシエラに届く前に止まっているのだから。

もちろんアレッタの意思で止めた訳ではない。何かによって阻まれたのだ。だがシエラはウイングクレイモアを構えたままで、まったく動いていない。だからアレッタには何がスカイダンスツヴァイハンダーを阻んだのかが、まったく分からなかった。

いったい何が？　シエラに何かが起こっている事はアレッタにも予想が付く、だがそれが何かまでは分からないし、シエラもアレッタに考える時間を与える訳が無かった。

スカイダンスツヴァイハンダーの一撃を完璧に防いだ事を皮切りに、一気に反撃に出るシエラはすぐにウイングクレイモアを振るいだす。セラフィスモードに今までに無いほどのエレメンタルアップの上乗せである。そんな一撃を喰らってしまえばアレッタは一撃で落とされる事は目に見えている。だからアレッタはしかたなく、シエラの一撃を避けるために距離を取るのだった。

その後に当然シエラの追撃があるものだと思っていたアレッタだが、シエラはアレッタを追撃する事無く、再びウイングクレイモアを構えるだけだった。そんなシエラを見てアレッタもスカイダンスツヴァイハンダーを構えると口を開く。

「随分と余裕ね、どうやって私の一撃を防いだかは分からないけど、まだシエラが勝ったわけじゃないのよ」

追撃してくる事無く、余裕を見せるシエラにちょっとだけ悔しかったのだろう。アレッタはそんな言葉をシエラに投げ掛けた。そしてシエラもそんなアレッタの言葉に返事を返すのだった。

「さっきも言ったけど勝たせてもらう、私は負ける訳にはいかないから。それと私からも言える事が一つだけある。アレッタ……アレッタも昔から変わってない。特に知識に欠けるところは」

そんなシエラの言葉を受けてアレッタは顔をしかめる。どうやらシエラが言った事は的を射ていたようだ。つまり、アレッタにはシエラほどの知識が無い。だからシエラが何をしているのかが分からないとシエラはアレッタに向かって宣言したものだから、アレッタが顔をしかめても当然と言えるだろう。

そんなシエラにアレッタは不機嫌な顔で言葉を返すのだった。

「だったら、昔みたいに説明してよね」

随分と勝手な言い分だ。なにしろ戦っている相手に自分の力を自分で説明しろと言っているのだから。もちろんシエラはそんな愚かな真似はしない……相手がアレッタ以外なら。

そう、驚いた事にシエラは自らの力について説明を始めてしまったのだ。敵であるアレッタに向かって。

「アレッタは私が妖魔である事を知っておきながら、妖魔に関してはまったくしらないみたい。だから教えてあげる。妖魔は精霊と人間のハーフであり精霊に近い存在。だから契約をすれば妖魔は契約者と同様に個人の能力を発動できるようになる。つまり、精霊でありながら契約者の能力も使える。だから精霊からは忌み嫌われた。そんな力を持った者を同類とは認めたくないから。精霊から見れば精霊の力だけでなく、契約者の能力まで使えるようになるなんて卑怯以外のなにものでもないから」

「それって……つまりシエラも翼の属性だけじゃなくて、契約者と同様に何かの能力を発動出来るようになったって事？」

そんなアレッタの解答にシエラは黙って首を縦に振るのだった。
そんなシエラを見てアレッタが叫ぶ。
「そんなの卑怯じゃないのよっ！」
「……だから妖魔は精霊から嫌われた」
「あぁ～、なるほど、そんな歴史があったからか」
どうやらアレッタは妖魔が精霊から差別されている存在だと知ってはいたものの、何で差別されているかまでは知らなかったようだ。まあ、ほとんどの精霊がそうなのだろう、なにしろ精霊社会では妖魔は差別する物という常識が生まれている。だからその根源まで知る者はあまり居ないのだ。だからアレッタが妖魔の能力について知らなくても不思議ではなかった。
けれども今、一番問題にしないといけないのはシエラの能力についてである。なにしろ、まったく動く事無くスカイダンスツヴァイハンダーを受け止めたのだ。それだけでも、かなりの力を持っている能力だという事が分かる。
だからこそ、アレッタは契約者が発動する能力でシエラが使った能力について考えてみるが、アレッタが知る限りでは、契約者の能力でそんな事が出来る能力はまったく思いつかなかった。防御したという面についてシールダーの能力を思い浮かべてみたものの、シールダーの能力は必ず盾を形成する。それが光や闇や風といった物理的に掴めない物でも、物理的に防御する力を与える盾を形成する能力だ。
だが先程の攻撃でシエラが盾を作り出した形跡は無い。そうなるとアレッタにはシエラが使った能力が何なのかがまったく分からなくなってしまった。
能力が分からないうちは下手に攻撃する事も出来ない。なにしろシエラは妖魔、能力の他に翼の精霊でもあるのだ。そのスピードを持ってすれば下手に攻撃して、その能力によって動きを遅らせる事になってしまうとシエラのウイングクレイモアが襲ってくるのは目に見えている。だからアレッタは遠巻きにシエラを観察するのだが、

何が起こっているのかがまったく分からなかった。
そんなアレッタを見飽きたのだろう。シエラが自ら口を開いてきた。
「じゃあ、もう少しだけ私の能力を見せてあげる」
シエラの言葉に警戒するかのようにスカイダンスツヴァイハンダーを構えて、何が起こっても対応できるように背中の翼を大きく広げる。これでいつでも高速移動出来るからだ。
だがシエラの能力はアレッタの予想をはるかに上回っており、思いもよらない形で発動されたのだった。
「なっ！」
突如としてアレッタの後ろからシエラに向かって突風、いや風の塊がアレッタを押し出すかのようにシエラの元へ運んで行く。下手に翼を広げていただけに、アレッタはいきなり現れた風の塊を思いっきり翼に受けてしまって、心を落ち着かせて平常心に戻った頃にはシエラが目の前でウイングクレイモアを振り上げていた。
慌てて横に高速移動するアレッタ。そんなアレッタが居た場所をウイングクレイモアが通過して行く。そうなるとシエラは無防備である、そんな隙をアレッタが見逃すはずが無い。ここぞとばかりにスカイダンスツヴァイハンダーを振るうが、またしても刃がシエラの身体に届く前に阻まれてしまった。
くっ、また……って、これって……まさか……風の流れっ！　どうやらやっとアレッタは気付いたようだ。今までシエラの身体を守っていた物、それは風の流れ、言い返れば風の壁とも言えるだろう。
風の流れと聞いてもピンとは来ないだろう。なにしろ風が流れているだけでアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーを受け止められるとは思えないのが普通だからだ。だが、風の密度とスピードを変化させたらどうだろう。風は圧縮されればされるほど流れるスピードが速くなる。そして速ければ速いほど、その威力は凄まじく、弾く力が強くなるのだ。
身近なところでドライヤーを思い浮かべてもらおう。良く実験な

どで見る光景だが、ドライヤーから発生する風の上にボールを乗せて浮かべるという光景を見た事があるだろう。ドライヤーの風速を弱にするとボールはそんなに浮かばず、風速を強にするとボールが弾かれるほどの風が発生する。つまり空気の流れが狭くて速いほど、物を弾く力が大きくなる。シエラはそれを利用したのだ。

つまりシエラは自分とスカイダンスツヴァイハンダーの間に高圧縮した空気を狭い範囲で一定方向に高速で流したからこそ、スカイダンスツヴァイハンダーはシエラに届く事無く、高速で流れ続ける空気に阻まれたのだ。それこそが風の壁である。

だが、そうなるとアレッタには一つの疑問が浮かんだ。確かに風の属性に関した能力は幾つもあるが、シエラのように風の壁を作ったり、アレッタを押し出すような風の塊を発生させたりする能力は無いはずだ。それに能力を応用出来ると言っても限度がある。ここまでの事が出来る能力などは、まず無いはずだ。だからこそ、アレッタは攻撃を中断して再びシエラから距離を取ると首を傾げることになってしまった。

そんなアレッタを見てシエラは軽く笑うと片手でウイングクレイモアをアレッタに向けると口を開いてきた。

「不思議……って顔をしてる」

「当たり前でしょ、妖魔が契約者の能力を使えるってのは分かったけど、シエラが使ってる能力なんて聞いた事も見た事も無いわよっ！」

あまりにもシエラがもったいぶってるからだろう、アレッタは少し怒り気味で返事を返すのだった。そんなアレッタの返事にシエラは軽く笑うとアレッタにまったく鋭さの無い、いつもの無機質だが優しさを秘めた瞳を向けると話を続けてきた。

「契約者の中にレアな能力があるように、妖魔には妖魔にしか発動しない能力がある」

「つまりシエラもレア能力持ちって事？」

それがもし本当ならあまり知りたくない事実だが、シエラがそこ

まで話したからには聞かない訳にはいかないとアレッタは尋ねるとシエラは頷いてきた。そんなシエラを見てアレッタは思いっきり溜息を付くと、シエラは軽く笑って自分の能力を自ら明かす。

「そう、私の能力は大気のルーラー。私の能力が届く範囲の大気は私の支配下になる」

「ルーラー、つまり支配者って訳ね。それで納得したわ、つまりシエラの力が届く範囲の大気は全てシエラの支配下、自由に操れるって事だからね。だから風の壁を作ったり、私を押し出すような空気の流れを作り出せたって事か。空気、いや、大気を自由に操れるって、風のシュータやエレメンタルに比べると、かなり卑怯じゃない」

「せめてレア能力と言って欲しい」

「そんな要望なんて知るかっ！」

あまりもの事実に逆ギレ、いや、叫んでしまったアレッタ。それはそうだろう、なにしろ大気のルーラーはその名の通りに大気の支配者。つまり空気や風を自由自在に操る事が出来るのだから。だから風のシュータやエレメンタルでは出来ないような事まで簡単にやってのけるのだ。だからアレッタが叫びたい気持ちも分からなくは無い。

だがこれこそがシエラが有している妖魔の能力であり、妖魔にしか発動しない能力なのだ。

やっとシエラの能力について理解したアレッタは何とかして対抗策を考える。だがシエラは自分の力が及ぶ限りの大気を自由に操ってくるのだ。そのうえ、自分を守るために常に自分の周りには風の壁を張り巡らせているのだろう。さしずめ風の鎧と言ったところだろう。それがある限りはアレッタの攻撃は届かないのだから、アレッタは対抗策に悩むばかりだ。

そんなアレッタをシエラは少しの間だけ、いつもの瞳で見詰めていた。そんなシエラがアレッタについて思う。アレッタ……確かにアレッタが言ったとおりかもしれない。私は自分が妖魔である事に必死になってアレッタの事を知ろうとはしなかった。でも……アレ

ッタはずっと私の事を気に掛けて、ずっと私の事を理解しようとしてくれていた。やっぱり……私はずるい、私はそんなアレッタに甘えてただけなんだから。だからアレッタ……終わりにしよう。私の責任に、私の贖罪に、決着を付けよう。そうしたら私も……アレッタの事を理解できるかな？

そんな疑問で思いに終止符を打つとシエラはウイングクレイモアを持ち替えるように構え直すと再び闘志に満ちた瞳をアレッタに向けて口を開くのだった。

「私の能力はこれで全部説明した。だから、そろそろ再開させよう」

戦闘再開を口にしたシエラに対してアレッタは苦笑いしながら答えてきた。

「えっと、まだ対抗策が思い浮かばないから、もう少しだけ考えてて良い？」

「ダメ」

アレッタの提案を一蹴するシエラ。そんなシエラにアレッタは軽く笑うとスカイダンスツヴァイハンダーを構えて、真剣な表情へと戻る。どうやらアレッタは対抗策は思い浮かばないものの、このまま戦闘を避ける事だけはしたくないようだ。なにしろこの戦いに決着を付けない限りは二人とも因縁を断ち切れないのだから。

そんなアレッタがシエラを鋭い眼差しで見詰めながら話を続けてきた。

「相変わらずケチね。まあ、いいわ。なにしろこれは摸擬戦じゃなくて本当の戦いなんだから。相手の都合に合わせる理由なんて無いわよね。まあ、いいわ……シエラ、それじゃあ、そろそろ決着を付けましょうか。お互いに最後の手段を出してきた事だし」

「そのつもり」

「じゃあ……行くわよ」

「……うん」

お互いに武器を構えながら出だしのタイミングを計るシエラとアレッタ。どうやら二人とも、今度こそは決着を付けるつもりらしい。

いや、二人とも最後の手段を出してきたからこそ決着が付くのだろう。それが分っているからこそ、シエラもアレッタも慎重になる。

だがアレッタには未だにシエラの能力に対抗する手段が思い浮かばない。それどころかシエラの能力は翼の属性を有している者にとって最悪な物だという事に気付いていないらしい。だからこそシエラは罠を仕掛けるために自ら動く事にした。

シエラを後押しするかのように一陣の風が吹くと、シエラは背中の翼を思いっきり広げて一気にアレッタに向かって突っ込んで行く。さすが大気のルーラーだけあって、追い風を起こす事ぐらいは簡単な事だ。しかもシエラは背中の翼を思いっきり広げている。だから今までに見せたことが無いぐらい猛スピードでアレッタに突っ込んで行くのだった。

一方のアレッタはここまで早いスピードでシエラが突っ込んで来るとは思っていなかったのだろう。シエラの動きに驚きながらも、その場を動かずにスカイダンスツヴァイハンダーを後ろ気味に構える。どうやらシエラが突っ込んできたらトーテンタンツで一気に仕留めようと言うのだろう。

確かにシエラには風の鎧がある。だからと言って風の鎧が絶対的な防御力を持っているわけではない。どちらかというと風の鎧は相手の攻撃を受け止めているのでは無い、受け流しているのだ。だから、その流れよりも早い一撃を一度でも入れる事が出来れば風の鎧を突破する事が出来るだろう。それがアレッタの考え出した対抗策だった。

そんなアレッタの対抗策に気付かないままにシエラは一気に突っ込んで行く。そしてお互いの距離が一気に縮まると、アレッタはスカイダンスツヴァイハンダーを振るうが、今度は風の鎧に阻まれるどころか、シエラがいきなり目の前から居なくなった事により、スカイダンスツヴァイハンダーは空を斬る事になってしまった。

そんな状況に慌てて周囲を探るアレッタ。だがアレッタがシエラを見つけた時にはすでに遅かった。アレッタが下を見た時には、シ

エラは回転しながら急上昇して来ていた。どうやらシエラは背中の翼を思いっきり広げていた事を良い事に、アレッタの攻撃が当たる寸前に大気を操って下降気流を起こしたようだ。

つまり下に向かって急激に流れ始めた風を思いっきり広げた翼で受け止めたのだ。その行為によりシエラ自身の身体は風の力により、一瞬にして急降下したのだ。そして今度は上昇気流を起こして、そこに回転を加える事で更に加速してアレッタに迫ったのだ。

一瞬でそんな事をやってきたシエラにアレッタは背中の翼を羽ばたかせて、その場からの離脱を計るが、何故だか急速移動が出来ない。それどころか上手く飛べないのだ。そんな状況に慌てるアレッタに向かってシエラの一撃が振るわれる。

回転を止めて加速速度を一定にしたシエラがアレッタの背後を狙って下から急上昇する。けれどもアレッタは急に上手く飛べなくなった状況に慌てているのはシエラの目にも映った。だからこそ、この一撃が最後だと決めて渾身の力をウイングクレイモアに込める。

そしてアレッタが間合いに入ると一気に振り上げるのだった。これでアレッタにトドメとも言える深手を負わせる事が出来ただろう。少なくともシエラはそう思ったし、確かな手応えがあったのも確かだ。だがシエラにとって驚くべき事態が起きた。

「フェザーシュート」

突如として放たれた羽の弾丸。シエラはその事に驚きながらもウイングクレイモアの周囲に風を展開させて広範囲を打撃出来るようにするとフェザーシュートを全て叩き落した。それからシエラは確かめるように羽が放たれた方向に目を向けると、そこには翼を血で濡らしたアレッタの姿があった。

「どうやって？」

まさか、あの状況から攻撃を避けて反撃まで仕掛けてくるとは思っていなかったシエラは思わず口に出してしまう。そんなシエラの問い掛けにアレッタは口元の笑みを浮かべながらも答えを返してくるのだった。

「さすが卑怯な能力である大気のルーラーだけはあるわね。まさか翼の周囲にある大気を薄くするとは思ってもいなかったわ。けどシエラ、シエラが攻撃した瞬間こそ、私にとってはシエラの攻撃を避けるチャンスだったのよ」

「……そういう事」

どうやらアレッタが何をしたのかがシエラには分かったようだ。分かったからこそアレッタの心がシエラには少しだけ理解する事が出来た。アレッタは……傷を負う事を覚悟した上で私の攻撃を利用して避けた。アレッタ、今の私ならアレッタの気持ちが少しだけ分かる。アレッタはもう私に勝つ気は無い。ただ戦いを続けたいだけ。なんでアレッタが戦いを続けたいのかは分からないけど、この戦いが終われば分かる……よね、アレッタ。

そんな事を思ったシエラは再びウイングクレイモアを構えて、大気のルーラーを使って大気を操るのだった。

ちなみに先程の展開を説明すると、まずシエラがアレッタの周囲、特に翼の周囲にある大気を限りなく薄くしたのだ。さすがに真空状態にまで持って行くと悟られると思ったのだろう。だが薄くするだけならアレッタも気付かなかったようだ。

そもそも翼とは羽ばたかせて空気を押し出す事により浮力を得るのだ。まあ、翼の精霊はある程度は自由に空を飛べるが、どうしても速度が必要な時は翼を使う必要がある。だが先程のアレッタの状態を思い浮かべてみると理由が分かるだろう。

そう、アレッタの翼には高速移動に欠かせない、羽ばたくための空気が限りなく無くなっていたのだ。つまりいくら翼を羽ばたかせても移動するための空気が無いのだから移動できるわけが無い。だからアレッタは翼を使っての高速移動が出来なかったのだ。どんな大きな翼でも、羽ばたいて掴める空気の量が少なければ飛べないと同じである。シエラはそんな罠をすでに用意してからアレッタに突っ込んで行ったのだ。

そしてアレッタはシエラが迫って、やっとその事に気付くと避け

る事を断念した。だからと言って負けを覚悟したわけではない。アレッタはとんでもない方法で避ける事にしたのだ。それがシエラの攻撃に合わせた反発である。

シエラはアレッタの後ろから攻撃した。だからアレッタは後ろから来るシエラに対してスカイダンスツヴァイハンダーで防御する事も出来ないのだ。なにしろ高速移動が出来ないのだから、その場で旋回する事すら困難な状態だったからだ。

そこでアレッタはシエラのウイングクレイモアが自分の身体に食い込むのと同時に自らウイングクレイモアに倒れこむ形で突っ込んで行ったのだ。もちろん、そんな事をすれば傷が深くなるだけだが、それは最初だけ。シエラがウイングクレイモアを振り抜くためにはアレッタの身体からウイングクレイモアを引かなければいけなかった。

つまりアレッタは一番最初の斬り始めで、自らの背中を一番深く傷つけて、後はシエラがウイングクレイモアを振り抜くために、少しずつ引いて切り上げるのと同時に倒した身体を今度は前に持って行ったのだ。

要するにアレッタはシエラの攻撃に対して一番最初に深手を負う事によって、その後の傷を皆無に近い状態に持って行ったのだ。まさかシエラもアレッタがそんな事をするとは思っていなかったから普通にウイングクレイモアを振り抜いてしまった。それが結果的にだが、その普通の攻撃がアレッタの傷を最小限に留める結果となってしまったのだ。

だからと言ってアレッタの傷が決して浅いわけではない。なにしろシエラがウイングクレイモアを振りぬく前に傷を一番深い所に持って行ったのだから、深手を負った事には変わりない。それでもアレッタはシエラがしっかりとした手応えを感じた事に油断してるだろうと反撃をしてきた。

そんなアレッタの行為を見ただけでも、アレッタの戦意が無くなっていない事を示していた。なんにしても、そんな攻防を一瞬の内

にやってのけた翼の精霊同士の戦いはまだまだ続きそうだが、シエラが完全に有利にある中でシエラは少しだけ複雑な心境だった。

アレッタ……さっきの一撃は完璧にトドメとなる一撃だった。それなのに、そこまでして戦いを続ける理由。私には……それが分からない。でも……もう逃げないと決めたから、皆のためにも負けられないから。だからアレッタ、そんな状態でも手加減しない。本当はもう戦う事を止めたいけど、もう逃げるわけにはいかないから。今度こそは逃げずに向き合うよ……アレッタ。

発動された大気のルーラーによってシエラが完全に有利な中でもアレッタから闘志が消える事はなく。まるで何かを望むようにシエラとの戦闘の意思を示し続けた。シエラにはそんなアレッタの気持ちが分からなかった。

だがシエラは複雑な心境ながらも迷いはなかった。それはもう逃げないと決めたから、一度アレッタの前から逃げ出して、今度も逃げ出したくは無いから、そんな思いがシエラから迷いを消していた。いや、生み出す事すらさせなかった。それほどまでにシエラは今のアレッタを全力で戦い、全力で理解しようとしていた。

そんなシエラの気持ちが分かるのか、分からないのか。アレッタの顔にはいつの間にか笑みが浮かんでいた。それが何か対抗策が浮かんだ笑みなのか、それとも別の意味があるのかシエラには判断が付かなかった。

けど、そんなアレッタの笑みはシエラにとってはとても心地良いものだった。シエラ自身もなんでそんな風に感じたのかは分からないが、今は戦闘を重視すべきだとウイングクレイモアを握り締める。

そしてアレッタもシエラに対抗する意思を示すかのようにスカイダンスツヴァイハンダーを残った力で奮い立たせるかのように握り締めてシエラに向けるのだった。まるで、シエラに昔のアレッタを思い起こさせるように。

第百十九話　大気のルーラー（後書き）

はい、そんな訳でシエラ対アレッタの戦いも佳境に入ってきました。たぶん、次回で決着が付くことでしょう。そして語られるアレッタの本心、それはシエラに対する大切な物だった。

……という次回予告はこの辺にしておいて、話を少し変えましょうか。

というかですね、最近は少しだけ心配なんですよ。なにしろ一気に一話を書いている訳では無いですから、どうしても繋ぎ目では無いですが、中断して書き続けるという作業になってしまうわけです。だからこそ思うんですよ。これって……しっかりと書けてる？　しっかりと繋がって読める？　内容がちぐはぐになってない？　これればっかりは書いている本人には分からないものなんですよ。

そんな訳でお願いで～す。最近になって読み辛くなったと感じた人は遠慮無く言ってくださいね。その際にどこら辺が読み辛くなったか言ってもらえると助かります。

まあ、なんというか、最近になって少し自分の作品に自信が無くなったというか……まあ、以前ほど自信を持って書けなくなった。という感じですかね～。まあ、そんな訳で、その手の助言があると助かります。こちらからお願いするのは、どうかと思いますが、エレメを良くするためにも、その手の助言をお願いします。（ペコリ）

さてさて、相変わらずの更新速度ですが……それについては勘弁してーっ！！！　なにしろ連載を二本やってますからね～……どうしても更新が遅れてくる。というかですね、少しだけ言い訳をさせてもらいますと、別連載も月に二話ほど書いてるんですよ。つまり合計すると月に四話は書いてる計算になるんですよっ！！！　なので、決してサボってるわけでは無いですよ～。ただ別連載があるから更新が遅れてるだけですよ。だからそこは目を瞑ってっ！！！

お願いっ！！！

……はい、いつもの言い訳が終わったところで思いました。そろそろ……このネタも飽きてきたな。そろそろ次のネタでも考えるかな（笑）

まあ、次回の後書きは内容が決まっているので、その次からのネタでも無駄に考えてみる事にしましょうって事で締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、白キ翼編のラストバトル……後数話使うな、とか思った葵夢幻でした。いや、だって、意外とシエラ戦が長くなったんだもん。

第百二十話　アレッタの本心

思ったより傷は深いか……まあ、あんな避け方をすれば当然よね。アレッタの背中から未だに流れ続けている血と痛みが傷の深さを物語っていた。そして、それだけの傷を負ったのだからアレッタもそう長い事は戦えない事を自負していた。

……そうなると……次が最後か。まあ、しかたないか。シエラがあれだけの力を隠してたんだもの、それに契約者のエレメンタルアップ……いや、契約者達との絆かな。あんな物を見せ付けられれば私の敗北なんて最初から分かってた事なのに……でもシエラ、私は最後まで戦うわよ。もちろん私のためでもあるけど……それ以上に……シエラのためにもね。そんな事を思いながらアレッタは残った力を全て搾り出すかのように翼の属性をスカイダンスツヴァイハンダーに注ぎ込むのだった。

そんなアレッタを見守りながらシエラも大気のルーラーを使って大気を操り、罠を完成させようとしていた。けれどもシエラには不可解な事が一つだけあった。それは、今度の一撃こそ、この戦いに決着を付ける事になるのはシエラも分っていたからだ。それが分っていながら、確実に劣勢なアレッタが笑みを浮かべていたのだ。それは争奪戦が始まってからは見せたことが無い、シエラがアレッタの前から逃げる前までは見せていた懐かしい笑顔。

そんなアレッタの笑顔にシエラは戸惑いはしたものの、動揺まではしなかった。つまりシエラはアレッタの笑顔に何かしらの意味がある事は分っていたが、それが何であっても看破するだけの余裕があるという事だ。それだけ妖魔化したシエラの力は強いし、今ではエレメンタルアップでかなり力が上がっている事を示していた。

そんなシエラを前にしてアレッタは笑顔を浮かべているのだ。シエラには、その意味が分からなかった。ただ分っている事は……次の一撃こそが、この戦いに決着を付けるという事だけだった。だか

らこそシエラは大気のルーラーを発動させながらも、セラフィスモードが発動されているウイングクレイモアを水平に構える。どうやらシエラはトーテンタンツを警戒してか、一番隙無く、最もスピードを活かせる突きを選択したようだ。確かに、これならスピード次第ではアレッタのトーテンタンツを突破して、アレッタにウイングクレイモアを突き立てることが出来るだろう。

けれどもアレッタも深手を負ったからと言って、そうそう負けるつもりは気はしなかった。だからこそ、アレッタはここで最後の手段とも言える。アレッタが使える技の中で最大の威力とスピードを生み出す技を選択する。それこそがアレッタにとっては正に最後の手段とも言える技なのだろう。

それを証明するかのようにアレッタのスカイダンスツヴァイハンダーに翼の属性が注ぎ込まれるたびに、スカイダンスツヴァイハンダーは白い光を輝かせていき、その輝きを強くしていくのだった。

そんなアレッタの行動を今は見守るシエラ。どうやらシエラから仕掛ける気は無いようだ。それはそうだ。なにしろシエラは既に大気のルーラーで罠を張っている。ここで動くよりかはアレッタが罠に掛かったところを狙った方が確実に仕留められるだろう。だからこそシエラは今の時点で動くつもりは無かった。

アレッタもまったく動こうとはしないシエラに、シエラが何かしらの手段を講じている事は分っている。分っていても、アレッタは先手を取る事にした。……そうする事でしかアレッタの願いは叶わないからだ。その事はアレッタだけが良く分かっている。だからこそ、今まで誰にも打ち明けず、シエラにも悟られないようにしていたのだ。

そんなアレッタが握っているスカイダンスツヴァイハンダーの輝きが最高潮に達する。

「コローニデトーテンタンツッ！」

コローニデトーテンタンツ、死の舞踏において終幕を意味する。つまりこれこそがトーテンタンツの最終奥義とも言える物だろう。

アレッタはその場から動く事無く、一秒の間に数十、いや、数百もスカイダンスツヴァイハンダーを振るう。もちろん、アレッタとシエラの間はかなりの距離が空いており、とても刀身が届く距離では無いのだが、アレッタが振るった剣閃に沿って風の刃である風刃が形成されると共に風刃に翼の属性が宿る。

その事によって風刃はとてつもないスピードで標的に向かって無数に放たれる。なにしろ一秒に数百もの風刃である。一秒の間にそれだけの数を出すだけでも凄いというのに、風刃に翼の属性が加わる事によって、猛スピードで標的に向かっていくのである。数と良い、スピードと良い、確かにこれだけの技ならアレッタの最終攻撃に相応しいだろう。……けれどもそれが普通に放つ事が出来ればの話である。

スカイダンスツヴァイハンダーが……重い。いや、何かに邪魔されて数が撃てない。いったい何が……そういう事か、シエラ……やってくれたわね。そんな事を思いながらもアレッタはコローニデトーテンタンツを放ち続ける。

一方のシエラはアレッタが自分の罠に掛かった事を実感すると背中の翼を羽ばたかせてコローニデトーテンタンツに向かって突撃する。本来のコローニデトーテンタンツは避けるスペースが無いほどに、数多くの風刃を放ち、それを猛スピードで相手にぶつける技だが。

今のアレッタが放っているコローニデトーテンタンツは充分に避けるだけのスペースがある。それに今のシエラには自分の背中に生えた翼とエレメンタルアップがある。だから数が少なくなったコローニデトーテンタンツが発生させた風刃を避けながら突進する事なんて簡単なことだった。

そう、これこそがシエラの仕掛けた罠なのだ。シエラはアレッタの最終攻撃がどんな技かは知らない。だがスカイダンスツヴァイハンダーの特性を考えれば充分に推測できるという物だ。それはつまり、切り替えしによる連撃、威力ではなく手数で攻めて来るのは充

分に分っていた。
　それだけ分かれば後は簡単だ。なにしろアレッタの手数を少なくすれば良いのだから。その発想だけなら簡単だろう。だがアレッタの手数を少なくするというのは難問である。けれども今のシエラにはその難問を簡単に解決するだけの能力を持っていた。
　そう、大気のルーラーである。シエラは先程アレッタの翼周辺にある空気の密度を薄くする事によってアレッタの翼を使えないようにした。今度は逆の事をしたのである。
　つまりシエラはスカイダンスツヴァイハンダーの周囲にある空気の密度を濃くしたのだ。これによって普通では感じ難い空気の摩擦力を強く感じる事になったわけである。剣を振るうにしても、振るうのと同時に空気を押しのけているわけである。その空気を押しのける時に発生するのが空気の摩擦力である。
　普通の状態なら何も感じる事は無いだろう。だが空気の密度を思いっきり濃くしたらどうだろう。それは剣を振るった時に押しのける空気の量が増すという事であり、その時に生じる摩擦力も強くなるという事だ。
　つまりシエラは大気のルーラーによってスカイダンスツヴァイハンダーに強い摩擦力を与える事に成功したのだ。そのため、本来なら素早いスピードで振れるはずのスカイダンスツヴァイハンダーなのに、空気の摩擦力が大きくなったために、いつもスピードで振る事が出来ず、どうしても動きが遅くなってしまう。動きが遅くなるという事は、それだけ切り替えしが遅くなり、手数が少なくなるという事だ。
　そのため本来なら避けるスペースを与えずに猛スピードの風刃をぶつけるはずのコローニデトーテンタンツなのだが、シエラの画策により、シエラが突撃出来るだけのスペースを作ってしまったのである。後はスピードだが、セラフィスモードとエレメンタルアップを発動させているシエラにとってはコローニデトーテンタンツのスピードなど警戒しなくても充分に避けきる事が出来るだけのスピー

ドだった。
　それはコローニデトーテンタンツのスピードが遅いわけではない。なにしろ風刃に翼の属性を付加させてスピードを上げているのである。そのスピードは充分過ぎるほど早いのだが、今のシエラを相手にしては、それほその脅威にはならないというだけの話である。
　だからシエラがコローニデトーテンタンツを避けながら、猛スピドで突撃する事が可能になったのだ。
　そんな状態でもアレッタはコローニデトーテンタンツを放ち続ける。もちろんシエラが突撃してくるのを、しっかりと目にしながら。それでもアレッタが攻撃を止めないのは、これが最後の勝負だと分っているからだ。だからこそ勝負が付くまでコローニデトーテンタンツを止める事はしなかった。
　一方のシエラは、すでにアレッタにトドメの一撃を加える事しか頭に無かった。だからこそコローニデトーテンタンツを避けながらも、ウイングクレイモアをいつでも突き出せる構えで突撃していく。
　そしていよいよ、シエラがアレッタの眼前まで迫るとシエラはアレッタがスカイダンスツヴァイハンダーを切り替えす前に、一気にウイングクレイモアを突き出した。そして……ウイングクレイモアはアレッタの腹を見事に貫いたのだった。
　あまりもあっけない最後にシエラの瞳にはウイングクレイモアが突き刺さった瞬間がスローモーションのように写った。アレッタの身体を突き進むウイングクレイモア、それと同時にアレッタの身体から血飛沫が弾け飛び、シエラの顔にも付着する。そしてウイングクレイモアが完全にアレッタを突き刺さると、アレッタは衝撃で後ろに仰け反るが、すぐにシエラの方に倒れこんできた。
　先程までの勝負とは打って変わってのあっけない幕切れである。それどころかシエラはアレッタが最後の攻撃を自分の意思で止めるのをしっかりと目にしており、アレッタがまるで待っていたかのように優しい瞳でシエラの攻撃を受けるのを目にしていた。そう、まるでアレッタがシエラにトドメを刺してもらいたいように。

その事がシエラを動揺させるのと同時に混乱させていた。争奪戦で一番最初に会ったときには敵意を剥き出しにしていたアレッタが、最後にはまるでシエラを受け入れるかのように、シエラの攻撃を受けたのである。だからシエラにはアレッタが何で最後は抵抗せずに攻撃を受け入れたのかが不思議でならなかった。

そんなシエラの攻撃を受けたアレッタの手からスカイダンスツヴァイハンダーが滑り落ちるとアレッタは空いた腕でシエラを優しく抱きしめる。その懐かしい感触にシエラは自然と涙が流れ落ちるのを感じた。そんなシエラにアレッタは優しくささやく。

「最初の予定とは違っちゃたけど、目的を果たせたから充分かな？」

「目的？　予定？」

アレッタの言葉にシエラは混乱するばかりだ。そんなシエラの髪を優しく撫でながらアレッタは話を続ける。

「そう、予定。最初はシエラを倒してから……シエラを私達の仲間にするはずだったのよ」

「仲間……なんのために？」

予想外の言葉にシエラはますます混乱するばかりだ。一方のアレッタは更にシエラを強く抱きしめるとシエラの耳元で呟く。

「そんなの決まってるじゃない。シエラを……受け入れるためよ」

「ッ！」

まさかの言葉にシエラは口を開くが言葉が出ない。まさかアレッタがシエラを仲間にするためにシエラを倒そうとしてたなんて予想外どころか発想も出来なかった事だ。けれどもシエラはこれでアレッタが行ってきた行動をやっと理解できた。

そもそも争奪戦で負けた精霊は一定期間を置けば別の契約者と契約が出来る。一方の契約者は負ける。つまり己の中にある精霊王の器を破壊されれば、もう二度と争奪戦に参加できない。

つまりアレッタは昇達を倒す事により、昇達との絆を断ち切るのと同時に再び自分がシエラとの絆を築いていこうと、そんな目的をもってたからこそシエラが昇達と仲良くしているのが気に食わなか

ったし、昇達の中を裂くためにシエラが妖魔である事を知らしめたのだ。

そう、アレッタが昇達と出会ってからは全てシエラの為に戦ってきたのだ。その事にやっと気付いたシエラの手が自然とウイングクレイモアから離れる。もちろん抱き合っている状態だからウイングクレイモアがアレッタの身体から抜ける事は無いが、それでも空いた手でシエラはアレッタを抱きしめるのだった。

「ごめん……ごめんなさい」

「別にシエラが謝る事じゃないけど……謝ってくれて、ありがとう」

そんなアレッタの言葉にシエラは流れ続ける涙を気にする事無く、強く、そう強くアレッタを抱きしめるのだった。そしてアレッタもそんなシエラを優しく抱きしめ続けるのだった。

そうしている内にシエラの頭には一つの疑問が浮かんだのだろう。未だに涙が流れている顔を上げてアレッタの顔を見上げると、その事を尋ねてみる。

「アレッタの目的は私を仲間にして、受け入れて、また昔みたいに仲良くすることだったんだね。だったら、何で最初からそう言わなかったの？」

そんなシエラの質問を受けてアレッタは意地悪な笑みを浮かべて見せる。その笑みも昔のアレッタと変わりない、懐かしい意地悪な笑みだった。そんなアレッタが当然のような口調で話し始める。

「だって、やっとシエラを見つけたら……あの契約者達と仲良くやってるようじゃない。そんな光景を見たら、いくら私だって頭に来るのよ。だから絶対に私の本音は話してやらないって決めてたの、だって自分から話したら何か悔しいじゃない」

……えっと、そんな事で？　シエラが少し呆れたような顔でアレッタを見詰めていると、今度は意地悪な笑みから優しい笑みに変わると、口調も優しくなり言葉を続けてきた。

「それに……今度こそはシエラにも私の事を理解して欲しかったのよ。昔は妖魔である事を気にしてて私の事を理解しようともしなか

った。だから……私が妖魔であるシエラを受け入れるから……シエラにも私の事を受け入れて理解して欲しかったのよ」

「……アレッ、タ」

アレッタの言葉に感無量と言ったところだろう。シエラはまともに返事が出来ずに、今にも泣き出しそうだ。

それはそうだ、なにしろシエラはアレッタの前から逃げ出した。何の説明も責任を果たさないままに。だからこそシエラにしてみればアレッタに嫌われる理由はあっても受け入れてくれる理由は無いと思っていた。

だが実際はアレッタはシエラが妖魔だと分ってもシエラを受け入れていた。けれども今のシエラを見てアレッタの心境は少しだけ変化を見せた。シエラを取り戻すために、昇を、そしてシエラを追い詰めて再びシエラを取り戻そうとアレッタは本音を隠してシエラと戦ってきたのだ。

アレッタとしてはシエラに自分の事を理解して欲しいという気持ちと、倒した後に全てを話すのでも、どちらでもよかったのだ。一番肝心な部分は昇達とシエラを引き剥がす事だったのだから。そうやって昇達の関係を修復不可能にしてから本音を話せばシエラが戻ってくるとアレッタは信じていたからこそ、あそこまで闘ったとも言えるだろう。

だが、そんなアレッタの計画にも一つだけ狂いが生じる事になってしまった、それが昇達だ。普通の精霊や契約者なら妖魔とはよっぽどの事情が無い限りは契約なんてしないだろう。もし契約していても、妖魔だと分かった時点で契約を破棄すると思っていた。けれども昇達はシエラが妖魔である事をまったく気にせずに、とまでは言えないだろうが。昇がまったく気にせずにシエラの事を気に掛けたものだから、他の誰にも口を出す事が出来ず。皆も自然とシエラを受け入れていたようだ。

そう、アレッタの計画で一つだけの誤算は昇だったのだ。昇が妖魔の事を知っても、シエラとの絆を重視したからこそ、ミリアや閃

華のような精霊ですらも自然とシエラの事を受け入れたのだ。
それはフレト達も同じだろう。昇は世間の常識とも言える差別を思いっきり無視してシエラの事を受け入れて、必死にシエラを探している昇を見ていたからこそ。世間の差別よりも今まで築き上げた絆が重要なのだと気付かされたようだ。
つまりシエラを受け入れる切っ掛けを作ったのは昇なのだ。もちろん本人にはそんな自覚は無いだろう。けれども昇の懸命な気持ちと行動が皆から妖魔を差別するという認識を薄くし、最後にはなくしてしまったのだろう。
だからこそ今では皆で戦う事が出来る。シエラの為に戦ってくれている。その事だけがアレッタにとっては一つだけの誤算だった。
そうなるとアレッタに残された手段は一つだけしかなかった。シエラのその事を確かめるように言葉を口にする。
「じゃあ、アレッタは……今の戦いが始まった時から私に負けるつもりだったの？」
そんなシエラの言葉にアレッタは軽く笑って見せるが、その笑顔も少し儚げで今にも泣き出しそうだ。
「あんなのを見せられたら……私が入る余地が無いじゃない。だって……あんなの……ずるいよ……本当は、本当は……私がしたかったのにっ！」
アレッタはシエラに思いっきり抱き付くと、今まで堪えていた物を全て吐き出すかのように泣きながら話を続けてきた。
「シエラ……シエラッ！　なんであの時に逃げたのよっ！　それは私だって驚いたけど、私にだってシエラを受け入れることが出来たっ！　ずっと一緒に居る事が出来たっ！　……なのに……ずるいよ。なんでシエラは私の傍にいないの、なんで……私はシエラの仲間に入れないの……そんなの、そんなのずるいよっ！」
「……アレッタ」
アレッタの本音をやっと理解できたシエラはアレッタに掛ける言葉が見付からなかった。だから、その代用としてシエラはアレッタ

を思いっきり抱きしめる。せめて最後に……自分の温もりを残すかのように。

そんなシエラが静かにアレッタに向けて言葉を放つ。

「ごめん、アレッタ。あの時に私が逃げ出したから、だからアレッタを苦しめる事になった」

「シエラ」

突然、優しく話し始めたシエラにアレッタは涙で濡れている顔を向けると、シエラはアレッタに微笑を向けるのだった。そして今度は瞳を閉じて静かに語り始めるシエラ。

「そう、全ては私の責任。私が勝手に受け入れてくれないと先走ったからアレッタにも迷惑を掛けた。でも……それでもっ！　アレッタが私を受け入れてくれるなら、アレッタは私の仲間だよ。今は一緒に居られないけど……次は一緒に居られる、ずっと傍に居る事が出来る。そこだけは約束するよ」

「……シエラッ！」

シエラの言葉を聞いてアレッタはシエラの温もりを確かめるように抱きしめると、そのまま頬を寄せ合い、お互いの温もりを確かめてからアレッタが呟く。

「じゃあ、次からは……もう私もシエラの仲間だよね。それは変わらないよね」

そんなアレッタの言葉にシエラは瞳を閉じて首を横に振った。

「アレッタはもう私の仲間だよ。それに、これは私から言う言葉だよ。今までごめんなさい、そして受け入れてくれてありがとう。だから……もう既にアレッタは私の仲間だよっ！」

「シエラッ！」

シエラの言葉に再び泣き出して抱き付くアレッタ。シエラもそんなアレッタの温もりを憶えるかのようにアレッタを強く、そして優しく抱きしめるのだった。

そんなシエラが心に思う。そっか……アレッタは最初から私を受け入れてくれてたんだ。でも……私と昇達の関係を見たからこそ、

アレッタは敵意を剥き出しにして戦いを挑んできた。全ては……私の為に。やっぱり……全ての原因は私にあったんだね。ごめんねアレッタ、私のせいでくるめて。でも、もう大丈夫だよ。もうアレッタは仲間だし、今度会った時には仲良く出来るから……昔どおりに。だから……心配しないでアレッタ。

そんな事を思うシエラ。どうやらシエラもやっとアレッタの全てを理解したのだろう。人間界の言葉にこんな言葉がある『可愛さ余って憎さ百倍』アレッタの心境はまさに、こんな感じだったのだろう。

争奪戦が始まってからアレッタはずっとシエラを探していた。今度こそはしっかりと受け入れようと、昔のような絆を取り戻そうと。そんな時にシエラと仲良くしている昇達を見たのである。アレッタとしてはシエラを取り戻したい、という気持ちより、まずは昇達の仲を引き裂きたいと思ってしまったのだろう。

だからこそアレッタはシエラの正体を昇達に明かしたし、一人なったシエラにトドメを刺そうとして、それから仲間にしようとした。そんなアレッタの気持ちをやっと全て理解したシエラ。そんなシエラの表情は曇り一つなく、女神のような優しさ溢れた微笑でアレッタを優しく包み込むように抱きしめるのだった。

沢山の時間と戦いをへて、やっと分かり合えた二人の顔には後悔どころか笑顔が浮かんでいた。それだけ分かり合えた喜びが大きかったのだろう。

けれども……この戦いには決着を付けないとならなくて、すでに勝敗は決していた。後はシエラがアレッタにトドメを刺すだけだ。そう、これが、二人にとってはしばしの別れ、次はいつ会う事に出来るか分からない別れなのである。

それでも二人は既に泣いてはいなかった。それどころか二人とも晴れやかな顔をしていた。それだけ二人は戦い、傷つけ合いながら

も、やっとお互いの事が理解できたのだから、もう二人にとって悔いが残る事は無いのだろう。

だからこそシエラはためらう事無く、アレッタに真剣だけど、どこか優しげな顔を向けてウイングクレイモアをしっかりと握ると口を開く。

「じゃあ、行くよ」

「えぇ、思いっきりやっちゃって良いわよ」

そんなアレッタの言葉を聞いてシエラはアレッタに突き刺さっているウイングクレイモアを少しずつ引き出していく。さすがに全部抜くとアレッタは既に飛べない状態だから、ウイングクレイモアの刀身を三分の一ほどアレッタに刺したところでシエラはウイングクレイモアを引き抜くのを止めた。

さすがのアレッタもウイングクレイモアを引き抜いている時には苦痛の顔を浮かべていたが、それが終わると一息ついて、笑顔をシエラに向けてきた。そんなアレッタの笑顔を見てシエラは一度だけ頷くとウイングクレイモアに生えている六枚の翼を思いっきり広げるとウイングクレイモアと翼に属性の力を一気に流し込む。

アレッタの目の前で白い輝きを放つウイングクレイモアと六枚の白キ翼。そして白キ翼はシエラの背中にも生えている。その翼もこれからはあまり黒く染まる事は無いだろう。なにしろ昇達がシエラを受け入れてくれたのだから。妖魔であるシエラを受け入れてくれたのだから。だからアレッタはシエラを昇に任せても良いといつの間にか思っていた。だからこそ、シエラの背中に生えている白キ翼を今では安心して見る事が出来ていた。

そんなアレッタが安心した事をシエラも察したのだろう。だから、これからも心配ないという意味を込めてシエラはアレッタに向けて一度だけ微笑んで見せる。そんなシエラの微笑みに満足げに頷くアレッタ。もう、今の二人には言葉はいらないのだろう。既に言葉が無くてもお互いに理解しあえるほどの絆を再び築いたのだから。

そんな事をしているうちにウイングクレイモアと翼に溜まった翼

の属性は最高潮に達していた。だからこそシエラは最後にアレッタに向けて言葉を送る。

「それじゃあね、アレッタ。次に会うのはいつになるか分からないけど。また……一緒に遊ぼう」

まるで子供の約束みたいな事を最後に付け加えるシエラ。それで良いのだ、アレッタの性格からして最後に湿っぽいのは似合わないとシエラは分っているから、だからシエラは最後にあのような言葉を付け加えたのだ。もちろんアレッタもそんなシエラの気持ちを分っている。だからこんな言葉をシエラに送るのだった。

「そうね、まだまだシエラを連れて行きたい場所が沢山有るから、次に会った時にはいろいろと引っ張りまわして上げるわよ。だからシエラ……今を大事にしなさい。争奪戦が終わって、シエラが精霊世界に返ってきても、必ず見つけ出してあげるから。だから私の心配はしないで、今は自分を大事にしてくれる契約者と仲間の心配をしてあげなさいね。私との約束は、その後でいいから」

最後まで明るい口調で言葉を送るアレッタにシエラは思わず涙を流しそうになるが、何とか堪えた。ここで泣いてしまっては笑顔でアレッタを送る事が出来ない。もし泣いてしまえばアレッタを心配させる事になる。それが分っているからこそ、シエラは少しだけ崩れた微笑を向けるのだった。

そんなシエラを見てアレッタは一度だけ天を仰ぐと、シエラに向けて最後の微笑を向けてきた。

「さて、このまま話してもラチが空かないわよ。だからシエラ……もう、終わりにしましょう」

そんなアレッタの言葉にシエラは言葉ではなく、何度か頷くだけだった。もし声を出してしまえば自分が泣きそうなのがアレッタに悟られると思ったからだろう。だからこそ頷くだけにして、後はウイングクレイモアをしっかりと握ると六枚の翼が大きく広がり、力が一点に収束されていく。

そんな光景を見ながらもアレッタは微笑を崩さなかった。だから

こそ、シエラも微笑んでいるつもりだったが、いつの間にか涙が流れていた。けど今の状態で決して泣く事は出来なかった。なにしろ自分の手でアレッタを送らないといけないのだから。だからこそ、泣く事無く、涙を拭く事もなく、今はアレッタを送る事に集中していた。

そんなシエラを見てアレッタは微笑みながらも、少し呆れたように息を吐く。そんなアレッタの姿すらシエラの目には涙でにじんで良く見えなかった。けれどもこれからやる事だけはしっかりと分かっていた。だからこそ、今はその事に集中する。

そして一点に収束された力は放たれるのだった。

「セラフィス……ブレイカーッ！」

ウイングクレイモアと六枚の翼が一気に白い輝きを増すと、一点に収束された力がアレッタに向けて放たれた。

白い力に包まれて自分の身体が崩壊して行く中でもアレッタはシエラの事を見続けていた。そんな中でも思う事はシエラの事だった。

まったく、最後まで強情なんだから。もう少し素直になって、泣いちゃっても良かったんだよシエラ。それにしても……まさか私以外にシエラを受け入れてくれる契約者や精霊が現れるなんてね。おかげで私の役目を取られちゃったけど……よかったねシエラ。ちゃんと受け入れてくれる存在が出来て。だからシエラ、シエラはもう一人じゃない。もう隠す事なんて、無いんだよ。だからシエラ、安心して。今ではあなたの契約者があなたを受け入れてくれる。その次には私が必ずあなたを受け入れるから。だからシエラ……それまで元気でね。

最後にそんな事を思ったアレッタは白い光に包まれて、最後には人間世界から姿を消す事になった。白い光の中でアレッタが何を思ったのかはシエラには分からない。けど……シエラはアレッタとの戦いで何か大切な物をもらったような気がしていた。ただ……そんな気がしていただけだった。

そんな時だった。突如として上から一枚の羽が落ちてきた。それ

はシエラやアレッタと同じ白キ翼の羽。一点の曇りも無い、白キ羽。シエラは手を伸ばして、その羽を手の上に乗せるように受け止めると、突如して頭の中にアレッタの声が聞こえたような気がした。

『もう、心配ないよ。シエラ』

そんなアレッタの声が聞こえたような気がした。そして次の瞬間にはシエラは羽を抱きしめると思いっきり泣き出していた。けれどもシエラの中に後悔の念は一つも無い、ただ……アレッタと別れる事になったのが寂しいから泣いただけである。

その一枚の羽はアレッタから送られた最後のメッセージかもしれないとシエラは思う事にした。たとえそれが幻聴だったとしても、シエラはそう思う事にした。そう思っていれば……いつまでもアレッタを傍に感じる事が出来ると思ったから。

だからこそシエラは白キ羽を抱きしめながら思いっきり泣き続ける。そのうち白キ羽が少しずつ消えていくが、それでもシエラは泣き続けた。今のシエラには思いっきり泣き続ける事で次に進めるのだから。

やっと心が落ち着いて涙を拭うシエラ。ウイングクレイモアをしっかりと握ると地上の様子を窺うのだった。

鳥が……二匹。あのサモナーが新たに召還した鳥。それに二人がかりで昇達が戦っている。琴美と閃華、昇とミリアがそれぞれの鳥を相手にしてる。それにあのサモナー……相当消耗している。どうやら無理して、もう一匹召還したみたい。

地上の様子を見て、そこまで推測するシエラ。どうやらアレッタと戦いながらも、少しではあるが地上の様子を時々見ていたようだ。もちろん次に備えてだが、そんなところがシエラらしいと言えるだろう。だからこそシエラは次の一手を考える。

ミリアが参戦してるって事は、もう相手に精霊は残ってない。あのアッシュタリアの戦力は完全にフレト達が押さえ込んでる。なら、

鳥一匹ぐらいならミリアでも相手は出来るか。それに……そんなに時間は掛からないはずだから。

そんな推測を立てるシエラ。どうやらシエラの頭には既に次の作戦が思い浮かんでいるようだ。だからこそ、ここは一気に攻めるために昇の元へ向かって急降下を開始するのだった。

大気のルーラーを駆使して、なるべく高速で急降下するシエラ。そんなシエラが目指すのは昇とミリアが相手にしてる。ローシェンナが新たに召還した燕の巨鳥がいる場所だ。そこを目指して急降下すると、シエラはウイングクレイモアを燕に向けると六枚の翼を思いっきり広げる。

そして昇とミリアが一度退くタイミングを見て技を発動させるのだった。

「フルフェザーショット」

昇とミリアが燕から遠のいた時に、真上から奇襲を掛けるシエラ。まさか燕も真上から来るとは思ってなかったのだろう。シエラの攻撃を受けて地上へと叩き付けられる。そんな奇襲に驚いたのはローシェンナと燕だけではない。昇とミリアも驚きを示し、上空から降りてくる背中に白キ翼を生やしたシエラの姿を確認すると昇とミリアは合流して、ミリアは思いっきり笑顔を浮かべながら、昇は優しげな笑顔をしながら降りてくるシエラを迎え入れるのだった。

「遅くなって、ごめん」

真っ先にそんな言葉を言うシエラにミリアは言葉よりも行動に出ていた。シエラが降りてくるなり、思いっきりシエラに抱き付くミリア。どうやらシエラが帰って来てくれた事がよっぽど嬉しいようだ。

一方の昇はシエラの姿に見蕩れていた。確かにシエラは姿は妖魔化して、いつもの姿とは変わっている。防具という防具は一切付けておらず、全てが布服のような物を着ているだけだ。それ以上に目を引いたのはシエラが始めて昇達の前で見せる本物の白キ翼。背中に生えた、一点の曇りも無い白キ翼だった。

そんな白キ翼を見ながらも昇はシエラの雰囲気すらも変わった事に気付いた。今までよりも優しげな、そんな雰囲気を出していた。それはまさしく、今のシエラを象徴しているかのような雰囲気であり、女神のような姿をしてるシエラにとってはピッタリの雰囲気と言えるだろう。だからこそ昇はシエラに見蕩れていたのである。

だが今は戦闘中である。シエラはすぐにミリアを引き剥がすと、すぐに昇の元へやってきた。いつもとは違う姿をしているシエラに思わずドキッとしてしまう昇だが、今は戦闘中だと自分自身に言い聞かせて平静を装う。どうやら昇にはシエラの体中に刻まれている黒い紋様など取るに足らない物のようだ。

そんな昇にシエラは現状を告げる。

「ミリアが一人の精霊を倒してくれた。私もさっきアレッタを倒した。だから今の相手には精霊が居ない状態。ここでサモナーの能力を無理に相手をする事は無い。だから……」

そんな切り出しからシエラは自分の作戦を昇に伝えると、昇はやっと真剣な顔になり、シエラの話を聞いて、それがどんな物かを確実に理解する。そして昇はミリアに顔を向けるのだった。

「どお、ミリア、行けそう」

「大丈夫だよ昇～、それぐらいの事なら今の私には楽勝だよ～」

昇の言葉にそんな返事を返すミリア。そんなミリアを見て、昇はシエラを顔を見合わせるとお互いに頷くのだった。

そして、これからシエラが提案してきた作戦を持って、この戦いに幕を引く事をストケシアシステムで全員に伝える昇。そんな昇が送った思考にそれぞれ返事を返してくる皆の声を聞いて昇は頷くのだった。

そして昇はシエラの顔を真っ直ぐに見据える。

「じゃあ、行こう」

こうしてローシェンナ達との戦いに幕を引くための戦いが始まるのだった。

第百二十話　アレッタの本心（後書き）

さてさて、やっと上げる事が出来ました。エレメの百二十話……なんか丁度キリが良いですね。何がキリが良いかというと、もちろん……お祝い事をするためですっ！

そんな訳で、このエレメも……三周年を迎える事になりましたっ！！！　わ～、パチパチ。いやはや、こうして無事に三周年を迎える事が出来て、なによりです。というか……とうとう三周年を迎えちゃったよ。いったい、何時になったら、このエレメは終わりを迎えるのでしょう。

もう一周年の時に宣言したとおりに五周年以上も続きそうな勢いですね。……まあ、更新ペースはここでは気にしないでください。

そんな訳で、皆様の支えと、いろいろな意見を頂き、こうして三周年を迎える事が出来ました。これからも……本当に五周年以上を目指して頑張って行こうかと思います。

……そんな宣言をしてよかったのだろうかと後悔してますが、ここはやっぱり期待に応えようと頑張って行こうかと思います。

そんな訳で三周年を迎える事になったエレメをこれからもよろしくお願いします。

さてさて、三周年のお祝いが終わったところで、今回は少しだけ本文に触れますね。今回の話でアレッタの本心が明らかになったわけですけど、これで今までアレッタがどんな気持ちで戦ってきたのかを察してもらえれば、私としては上手く書けたのだと思います。

というか、私的には今回は上手く書けたと思うのですけど……如何でしょうか？　やっぱり感動が薄かったりしますかね～。今回は少しだけ感動させようという意図を組み込んで書いたつもりですが……上手く書けてますかね。まあ、これで何人かが感動してくれれば、今の私にとっては大成功といえるでしょうね。

……いやいや、そこまで私は自分の腕を過信してませんよ。

そんな訳でアレッタの本心、そしてその本心を知ったシエラ。更には絆を取り戻した二人に、祝福をしてくれる人が居るなら幸いです。

さてさて、長くなって来たので、そろそろ締めましょうか。

ではではここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、三周年の間、応援してくれた人はありがとう～っ！　と心の底から叫んでみた葵夢幻でした。

第百二十一話　取り戻した幸せ

「紫黒、レベル2、バーションソニックウイング」
シエラと合流して、シエラからの作戦案を聞いた昇は、その作戦を実行するために紫黒のバーションを飛翔が出来るソニックウイングへと変化させた。黒い二丁拳銃には、それぞれに黒い一対の翼がそれぞれ生えて、昇も翼の精霊とまでは行かないが飛ぶ事が出来る。
それを確認したシエラはすぐにミリアに顔を向けるのだった。
「ミリア、行ける？」
「大丈夫だよ～、それよりも、もうやっちゃって良い？」
そんな返答を返してきたミリアから一時的に視線を逸らせたシエラは昇へと目を向ける。そして昇が頷くと再びミリアに顔を向けるのであった。
「行けるなら、いつでも行って良い」
「分かったよ。じゃあ、思いっきり暴れてくるね～」
そんな言葉を残してミリアはアースシールドハルバードを肩に担ぐと燕の方へ向かって一気に駆け出して行った。そんなミリアを見送ったシエラは少しだけ呆れたように息を吐いた。それを見ていた昇は少し笑いながらシエラに話しかける。
「心配は無いと思うよ。もう勝敗は決したから、後は僕達がこの戦いに幕を引くだけだから、ミリアが少しぐらい無茶をしても問題ないと思うよ」
そんな事を言って来た昇にシエラは軽く微笑んだ顔を向けると話を続けてきた。
「私もその点については心配してない。ただ……少しはしゃいでいるように見えたから」
どうやらシエラはミリアの事を心配して息を吐いたようではないようだ。ただミリアが調子に乗っているから、いや、乗り過ぎているから溜息に近い形で息を吐いたのだろう。そんなシエラの言葉を

聞いて、昇は微笑みながら話を続ける。
「確かにそうかもしれないね。でも……ミリアの気持ちも分かるよ。やっとシエラが帰って来てくれたんだから。少しぐらい羽目を外して思いっきり暴れたいんじゃないかな」
「……やっぱり……私の所為で心配を……」
アレッタとの因縁は解消したものの、シエラは未だにミリアを始め、琴未達ともまともに話をしていない。だから未だに居なくなった事に対する責任感が抜けきれていないのだろう。そんなシエラに昇は表情を変える事無く、微笑みながら口を開く。
「そうだね、今回の事は全部シエラに責任があるから……帰ったら皆にちゃんと謝らないとね。琴未もあれぐらいだと怒りはおさまって無いと思うよ。それに閃華や与凪さんやラクトリーさんも散々苦労してくれたんだから」
「うん、分ってる。だから……帰ったら、ちゃんと皆に対して責任は取る。もちろん、昇にも、だから……今夜は空けててね」
えっと、シエラさん。それはいったいどういう意味でしょう。というか、その言葉を聞いた時点でオチが見えているんですけど。またしても地獄絵図ですかっ！　思わずそんな事を思ってしまう昇。まあ、今までの経験から昇がシエラの言葉を聞いて、そんな事を思ってもしかたないだろう。なにしろ昇をめぐって別の意味で行われている争奪戦では、昇は散々な目に遭っているのだから。
だから昇は苦笑いをしながらシエラから視線を外すのだった。そんな昇を見てシエラは軽く笑うと、今度はウイングクレイモアをしっかりと手に取り背中の翼を広げて真剣な眼差しになる。
「じゃあ、そろそろ行こう、昇」
「そうだね、シエラ」
同時に羽ばたくシエラの白キ翼と昇の黒キ翼。そして二人は一斉に飛び立つと、今回の戦いに幕を引くために羽ばたいてくのだった。

その頃、琴未と閃華のコンビネーション攻撃によって鷲の巨鳥は完全に弄ばれていた。それでも未だに鷲にトドメをさせていないのはローシェンナが鷲を主力にコントロールしているからだろう。だがサモナーにとって召還したものをコントロールするという事は精神力がいる事であり、そのうえローシェンナは召還だけでかなりの精神力を消費している。だから鷲の動きが少しずつ荒くなってきている事を琴未と閃華はしっかりと感じ取っていた。

そんな時だった。二人にとって予想外な事が起きた。突如として、もう一匹の巨鳥である燕が吹き飛ばされる形で鷲にぶつかって、そのまま二匹はもつれ合うように地面に叩きつけられて転がって行ってしまった。

突然飛んできた燕が居た方向に顔を向ける琴未と閃華。そこには、こちらに駆けて来るミリアの姿が瞳に写った。そんなミリアが笑いながら謝ってくる。

「ごめんごめん、思いっきりやったら、そっちに飛んじゃった～」

そんな事を言い出すミリアに琴未は瞳を閉じて拳を震わせており、閃華は溜息を付くのだった。ミリアの言動と行動から考える事をしなくても分かった。ミリアが周りを見ずに、ただ思いっきり戦っていただけなのは。だからこそ、ミリアは後先考えずに燕を鷲の方へ弾き飛ばしてしまったのだ。

そのおかげで琴未達の戦闘は邪魔される事になってしまった。だからだろう、琴未が無言でミリアを呼ぶと、駆け寄ってきたミリアの頭に拳を思いっきり叩き付けたのは。

「う～、琴未～、痛い～」

「痛いじゃないっ！　いくら思いっきりやって良いからと言っても周りを見て、味方に被害が出ない戦い方をしなさいよね」

「別に琴未達に当てた訳じゃないから良いじゃない～」

「何か言ったのかな、ミリア～」

「あう～、ごめんなさい、ごめんなさい」

言い訳を呟くミリアに対して両手の拳でミリアの頭を挟んでグリ

グリと痛めつける琴未。どうやら戦闘を邪魔されたのが琴未にとっては怒るに充分な出来事であり、周りを見ていなかったミリアにはお仕置きが必要と琴未はそんな行動に出たのだろう。
　そんな二人に閃華は仲裁に入ると琴未とミリアを引き剥がし、未だに涙目で頭を押さえているミリアの頭を撫でながら話し始める。
「じゃが琴未よ、これはこれで良い展開かもしれん」
「どういう意味よ、閃華？」
　質問をしてくる琴未に対して閃華は口元に笑みを浮かべながら答える。
「琴未よ、私達の目的は何じゃ？」
「えっ、昇達が決着を付けるまでの時間稼ぎでしょ」
　シエラの作戦を即答する琴未に対して閃華は一度頷いて話を続けてきた。
「そのとおりじゃ。じゃから琴未よ、これで敵の戦力は一箇所に集まった事になった訳じゃ。後は私達が壁となってサモナーの元へ行かせなければ良いだけじゃ。こちらもミリアと合流した分だけ、鳥の進行を阻むのは簡単じゃろ」
「そっか、相手の戦力が集中したから私達は目の前の敵だけに集中出来るって訳ね」
「そういう事じゃよ」
　つまり閃華が言いたい事はこういう事だ。先程までの現状では戦場が二つあっただけに、どちらかが抜かれてしまえばシエラの作戦が決行出来なくなる。だが、こうして相手の戦力を一箇所に集めた事で戦場が一つとなり、閃華としてもミリアの方を気にする事無く、目の前の相手に集中できる。
　つまり戦う戦場が集中した分だけに、琴未達は自分達の戦闘に集中できるというわけだ。もちろん、ミリアがそこまで考えて燕をこちらに弾き飛ばしてきたわけではない。偶然の状況が閃華達をより有利な状況へと導いただけだ。
　ただでさえ琴未達は有利に戦闘を進めていた。ここに来て更に有

利になっただけの事だ。だから琴未の怒りは一気に収まり、今は雷閃刀を手に未だに再び飛び立とうとしている巨鳥達に目を向けるのだった。

そんな状況に閃華は自ら提案をしてくる。

「さて、そんな訳でじゃ。ここからは三人での防衛線となってくるわじゃが。こちらの戦力が増えたからには誰かが指揮を取らねばなるまい。じゃから二人とも私の指示に従ってもらうが、よいな？」

「了解」

「分かったよ～」

閃華の提案に賛同を示す琴未とミリア。確かにこの面子なら閃華が戦闘の指示を出した方が良いというものだろう。だからこそ二人から不満の声が上がる事無く、あっさりと閃華の提案を受け入れてきた。……まあ、二人とも指示を出すより思いっきり暴れたいという気持ちが強いから前線に立ちたいだけだろう。だから指示を出すという、めんどうな行為を閃華に譲り、前線に立ったのだ。

そんな二人の気持ちに気が付いているのだろう。閃華は呆れたように溜息を付くと、二人に向かって指示を出す。

「琴未と私でそれぞれの鳥を相手にするんじゃ。ミリアは鳥が飛び立とうとしたら、それを防ぐんじゃ。絶対に飛ばせてはいかんぞ」

「分かったよ～」

閃華の指示に元気良く返事を返すミリアを見て閃華は微笑む。閃華が出した指示は、言わば二人のフォローである。それをミリアはあっさりと受け入れた。どうやらラクトリーからの強制修行により、自分の立ち位置が段々と分かってきた事を閃華は実感したようだ。

そんなミリアの返事を聞いた閃華は琴未と視線をまじあわせるとお互いに頷き、それを合図に琴未と閃華はそれぞれの標的に向かって駆け出した。琴未は今まで戦っていた鷲に、閃華はミリアが弾き飛ばしてきた燕に向かって一気に距離を詰める。

そんな二人に巨鳥達も気付いたのだろう。ここは一気に空から攻めようと翼を羽ばたかせて宙へ舞い上がろうとするが、その前にミ

リアが動く。
「アーススピア」
巨鳥達の下から地面が突撃槍のような形で何本も巨鳥達に向かって突き出してくる。だが少しだけ遅かったようだ。地面から突き出した槍が伸びきる頃には鳥達は槍が届かない範囲まで舞い上がってしまった。けれどもミリアは笑みを浮かべる。
「ショットッ！」
掛け声と同時にアースシールドハルバードを振り上げるミリア。それを合図に地面から突き出していた槍は、まるで地面から撃ち出されるかのように地面から離れると鳥達に向かって、弾丸のように突き進む。
さすがにこんな攻撃なんて鳥頭では予想できなかったのだろう。鳥達は発射されたアーススピアを避ける間もなく、体中に傷跡を残し、何本かは身体に刺さり地面へと落下する。これで二匹とも宙に舞い上がる事無く、地に足を付けて琴未達に対抗しなくてはならなくなってしまった。
鳥達はそれでも何とか立ち上がるとアーススピアは砂となり地面へと帰し、そこに琴未と閃華が一気に突っ込んで行く。
二匹とも地面に足を付いている状態だ。この状態で足の爪は使えない。そうなると、どうしてもくちばしでの攻撃を余儀なくされる。二人とも鳥達の初撃がくちばしである事は分かりきっている。だからこそ閃華は燕の攻撃を避けると、そのまま横に回り、反撃に移る。
そんな閃華とは対称的に琴未は攻撃的だった。なにしろ、くちばしの攻撃を避けるのと同時に跳び上がり、鷲の頭を踏み台にすると琴未は更に上を取ったのだ。そんな琴未が雷閃刀に雷の属性を一気に流し込む。そして跳び上がった琴未は真下に居る鷲に向かって雷閃刀を突き出せるように、大きく雷閃刀を握った腕を後ろに引くのだった。
そして充分な力と属性を溜め込むと真下に居る鷲に向かって一気に技を繰り出す。

―昇琴流　雷ノ村雨（いかずちのむらさめ）―

真下に居る鷲に向かって数え切れないほどのスピードで刺突を連続で繰り出す琴未。それだけのスピードがあれば刀身が届かなくても、刺突の衝撃で傷を負わせる事は充分に可能だろう。だが、この技の真髄はここから始まる。

一回の刺突と共に何本かの雷が落ちる。琴未は刺突の攻撃だけでなく、雷を交えて攻撃しているのだ。刺突の数だけでも、かなりの数で傷を負わせるのに充分だというのに、そこに刺突よりも多くの雷が落ちるのだ。鷲は逃げる事も出来ずに、ただ琴未の攻撃を受けるしかなかった。

なにしろ真上からの連続攻撃である。しかも広範囲の連続攻撃、これを完全に避けきるのは、かなり難しいだろう。なにしろこれは対シエラ用に琴未が考案した技であり、一撃の威力は低いが、確実にダメージを与える事が出来る技なのだ。

そんな技を地面に落ちた鳥風情が何とか出来るわけが無い。ただ琴未の攻撃を喰らうだけである。

そして琴未が地面に戻る事には、鷲の身体には無数の切り傷と雷による焼け焦げた後が無数に残っていた。それでも倒すに至らなかったのは、相当力を込めてローシェンナが召還したからこそ、かなりの耐久度を持っている証拠である。

けれども充分なダメージを負わせた事は確かであるのだが、琴未はこれでは満足が行かないのだろう。地面に降り立つとすぐに鷲に向かって駆け出して次なる攻撃に移るのであった。

やれやれ、今の琴未を相手にせんとはいかないとは、鳥とはいえ少しだけ同情を禁じ得ないものじゃのう。そんな事を感じながら閃華は燕が振り出してきた翼を大きく跳んで避けると、反撃に転じる。

跳んだために未だに空中にいる閃華だが、そんな事に構う事無く龍水方天戟を燕の身体に突き刺す。空中での姿勢制御や反撃の仕方などは、いくつもの戦場を経験している閃華にしてみれば慣れていることなのだろう。

そのうえ、今はかつて無いほどのエレメンタルアップで力が溢れ出ている。だから閃華の動きは今までに無いほど軽やかで鋭かった。そんな閃華の反撃に力不足で召還された燕が対抗出来るわけではない。

燕が悲鳴に似た泣き声を上げると閃華は龍水方天戟を引き抜きながら地面へと舞い降りた。そんな閃華に向かって燕はすぐに頭を向けてくる。下手に傷を負ったものだから痛みで刺激されたのだろう。

燕は翼を羽ばたかせると軽く宙に浮かび、足の爪を閃華に向けてくる。そんな燕の行動を見て閃華は改めて感じるのであった。

やはりこちらは完全に自立行動をしているようじゃのう。周りを見ずに攻撃してくるが、その証拠じゃな。そんな事を思いながら閃華は燕から遠ざかるように後ろに飛び退く。もちろん、そんな事をすれば燕が飛び立って閃華を空中から襲ってくるのは目に見えている。そう、相手が閃華だけなら。

だからこそ閃華は燕から距離を自分に被害が及ばない場所まで後退したのだ。そんな閃華の行動に何も疑念を抱く事無く、飛び立とうとする燕。そんな燕に他からの攻撃が向かってくる。

「アースボール、ショットッ！」

そう、燕が飛び立とうとした瞬間からミリアがいつでも攻撃出来るように準備していたのだ。そして閃華が退くのと同時にミリアは大地から作り出した、幾つもの大地の球体を燕に向かって放ったのだ。

閃華だけしか見ていなかった燕にとっては、ミリアからの攻撃は予想外であり、逆にミリアにとっては警戒していたからこそ、すぐに攻撃を仕掛ける事が出来たのだ。

そしてミリアが放ったアースボールは燕に直撃して、燕は簡単に

地面へと戻される事になってしまった。そんな状況に満足げに笑みを浮かべるミリア。ミリアの性格からして、これで満足するとは思えないが、そこはラクトリーからの強制修行の成果で戦闘での考え方も少しは変わってきたようだ。

今までのミリアなら常に前線に立って、全員の盾となり、隙を見ては攻撃をする事を優先させてきたが、今のミリアはそんな考え方をすっかり変えていた。そもそも全員の盾になるという事は常に前線に立って攻撃を防ぐだけではない。時には後ろから戦況を見て、防御と攻撃を行う。これこそが大地の精霊が有している力を最大限に発揮できる戦い方なのだ。

つまり一対一ならともかく。仲間との連携が必要な時には常に戦況を見て、全員の盾となり、時には槍となって攻撃を行う。そんな戦い方をミリアはラクトリーから根気良く、というか時間を思いっきり費やして、やっと学んだのだ。大地の精霊が最も有意義に力を発揮できる位置取り。その場所こそが全員の盾となれる場所だという事を。

要するに大人数での戦闘では大地の精霊を効果的に戦闘に参加させるなら、前線に押し出すより、少し退いた位置から属性による防御と攻撃を行わせる。それこそが大地の精霊が有している力を最大限に発揮させる戦い方なのだ。

もちろん閃華もその事は知っていた。だが今までのミリアが修行不足であり、自ら前線に出る事が多かった事から、このような戦術は取らなかったのだ。だが今はラクトリーのおかげでミリアは確実に成長している。だから指示を出す閃華にとってもミリアの行動は読みやすく、戦略を練るにも楽になっていた。

まあ、ミリアもそれなりに成長しているという事なのだろう。閃華はそんなミリアを見ると軽く微笑んだ。そしてすぐに地面に落ちた燕に視線を戻すと、龍水方天戟を手に一気に駆け出す。さすがにミリアの攻撃を受けた直後だけであって、未だに動けないようだ。そんな燕に閃華はトドメを刺すために一気に動き出す。

それでも閃華はトドメが刺せるかは五分五分だと思っていた。なにしろ閃華は先程の戦いで大分、属性の力を消耗している。確かに、この戦いは全ての戦いで勝利しないと全員が納得しないし、気が収まらないだろう。だからこそ、閃華としても先程は全力で鷹を倒したのだが、さすがの閃華も無尽蔵に属性の力を使えるわけが無い。

そのうえ、先程は消耗が激しい技をかなり多く使ってしまった。それだけ閃華も暴れたかったし、ここまで戦闘が長引くとは思ってもいなかったのだろう。だから閃華には属性の力を使うだけの力があまり残ってはいない。

それでもここまで戦えるのは、それだけ閃華が属性に頼らない戦い方を戦場で学んできたからだ。だから今度も属性に頼らずに、燕にトドメを刺すために一気に攻撃を仕掛けるのだった。

再び地面に落ちた燕はよろけながらも、何とか立ち上がろうとしている。そんな燕に向かって閃華は龍水方天戟を走りながら構える。槍先を下に向けながら突撃体勢を取る閃華。そんな閃華に向かって、やっと体勢を立て直した燕は閃華の姿を確認すると一番攻撃し易いくちばしを閃華に向かって突き立ててくる。

もちろん弱った燕の一撃だ。今の閃華なら簡単に避ける事が出来るだろう。だか閃華はあえて燕の攻撃を避けようとはしなかった。それどころか龍水方天戟を横にして前に押し出して、迫ってくる燕のくちばしに備える。

そして燕のくちばしが閃華に届いた瞬間だった。燕としては閃華に攻撃を入れたつもりだったろうが、思い掛けない衝撃に自分の攻撃が通っていない事を察すのだった。そして閃華はというと、龍水方天戟で燕のくちばしを受け止めていた。

いや、正確には燕のくちばしが届く瞬間に一気に身を沈めた閃華が、下から龍水方天戟を突き出して、くちばしの攻撃力を無くすのと同時に動きを止めたのだ。そのため、今はくちばしの下に潜った閃華が龍水方天戟でくちばしを上に押し出そうとしている形となっている。

そんな一瞬の攻防に燕は驚くという感情が無いのだろう。閃華によってくちばしを上に弾かれないように、今はくちばしを下に向けて力を込めている。どうやらこのままくちばしで閃華を押し潰そうというつもりなのだろう。

そのうえ相手は普通の燕ではなく、巨鳥である。そんな鳥が体重を掛けるようにくちばしを押し付けてくるのだ。いくら閃華でも、巨鳥の燕を持ち上げるなんて芸当が出来るわけがなかった。それでも閃華はある一瞬を狙って今は上から押し込んでくる、燕のくちばしを支え続けるのだった。

……さて、そろそろのようじゃな。ある事を確認した閃華は一気に行動に出る。今まで支えていた燕のくちばしを投げ下げるように力の流れを変える。もちろん、そんな事をすれば燕のくちばしは支えを失って下に落ちるだけだが、閃華が確認した事と力の流れ方が閃華の思惑通りの展開にさせる。

閃華が確認した事。それは燕が体重を掛けるために足を地面から半分ほど離すかだ。体重をくちばしに掛けるからには、自然と重心が前に行くために、どうしても爪先立ちでは無いが、地面を掴んでいる足の力が緩んで足が地面から離れていく。それが半分も離れれば、かなりの重心が前に来ている証拠だろう。

閃華はその事を確認するとくちばしを下に向けて投げるように力を掛けたのだ。その結果、燕のくちばしは円状に軌道を描き、燕のくちばしは綺麗な形で地面に突き刺さる結果となってしまった。そう、くちばしを地面に刺して燕の動きを封じ、なおかつ自分は燕の懐に入る事に成功した。これこそが閃華の狙っていた戦術だ。

それでも、いきなり支えを失った燕の身体が閃華に向かって落ちてくるが、閃華は龍水方天戟で落ちてくる燕の身体を思いっきり弾き飛ばす。しかも地面に刺さっているくちばしが抜けないように弾き飛ばしたのだ。これで燕の身体は完全に空中に浮いた事になる。そして一度は浮き上がった燕の身体は、弾かれた勢いが無くなると再び閃華に向かって落ちてくる。

けれども今度は閃華も充分に備えている。そう、落ちてくる燕の身体に向けて龍水方天戟の矛先を向けて思いっきり力を溜めているのだ。後はタイミングを計るだけ。そして閃華は狙いを定めて、射程圏内に入ると一気に跳び上がった。

龍水方天戟の矛先を向けて、落ちてくる燕に突っ込んでいく閃華。そして機が熟すると閃華は一気に龍水方天戟を突き出した。

その衝撃で一瞬だけ落ちていた燕の身体が空中で一旦停止する。そして次の瞬間には燕の身体を突き抜けて閃華が飛び出してきた。

さすがは閃華と言ったところだろう。燕の身体が落ちてくる力と自分自身が上昇する力を利用して、龍水方天戟の矛先に全ての力を集中させて、燕の身体を貫通するだけの力を生み出して一気に攻撃したのだから。

その結果として燕の身体には、穴が開き、閃華は空中で姿勢制御しながらミリアの元へと舞い降りた。

「やったね、閃華～」

閃華の攻撃で確実に燕を倒したと感じたミリアが喜びの声を上げる。そんなミリアに閃華も微笑みのだった。

だが次の瞬間には燕は大きな鳴き声を上げて、再び立ち上がろうとしている。どうやら燕にかなりのダメージを与えたものの、倒すまでには至らなかったようだ。

「うわ～、身体に穴が空いているのに、まだ立ち上がってくるよ～」

燕を見て、そんな感想を口にするミリア。閃華も燕の様子を見ながら現状をミリアに説明する。

「どうやら倒せなかったようじゃのう。なにしろ、あの燕はサモナーの能力によって召還されたものじゃ。普通の鳥とは訳が違うわけじゃよ。じゃから身体に穴が空こうとも、召還された力を完全に消滅させないと倒せないじゃろ」

「う～、まだ戦わないといけないの～」

しぶとい燕にそんな不満を口にするミリア。だが閃華は燕に背を向けるとミリアの元へやってきた。

「いや、もう充分じゃろ。あれほどの傷じゃ、すでにあの燕は戦う事は出来んじゃろ。それに……」
「それに？」
「そう、それに……そろそろ時間じゃろうな」
何かを確信した閃華にミリアは首を傾げるばかりだった。そして閃華は琴未の方へと目を向けると琴未が相手にしている鷲もすでに戦える状態とは言えないだろう。そんな状況を見て、閃華は琴未に戦闘を中断して集るように指示を出すのだった。

閃華達の戦闘が始まった直後、昇とシエラの二人はローシェンナの前へと降り立っていた。そして昇はすぐに紫黒をローシェンナに向けると宣言するかのように、はっきりと言葉を口にした。
「さあ、あなたの精霊二人は倒しました。残っているのは、あなただけです。覚悟は……良いですね」
昇にしては珍しく勝利を示す言葉を口にした。昇は今までの戦いでは、はっきりと契約者を倒した事は無い。それだけに今回のように、はっきりと勝利を口にする昇が珍しかった。その珍しさがシエラにも分かったのだろう。シエラは昇の一歩後ろに立ちながらも、表情には出さないが少しだけ驚いていた。
一方、紫黒を突き付けられたローシェンナは動揺するばかりだ。なにしろサモナーの能力は直接戦闘が出来ない。全て召還したものに頼って戦う能力だ。だからこうして戦える昇達を前にすると敗北を悟る前に動揺しか出来ないようだ。
そんなローシェンナが苦し紛れか、意外な言葉を口にし始めた。
「わ、分かりましたわ。確かに今の状況を見れば私の負けは明らかですわ。ですから、今回は負けを認めますわ。だから、その、見逃してくださいまし」
プライドの高いローシェンナにしては珍しい言葉を口にした。それもしかたないだろう。なにしろ戦力となる精霊は全て倒されてい

る。そのうえサモナーの能力は完全に琴未達に抑えられている。この状況でローシェンナに戦うだけの力は無いのだ。

それにかなり無理して三匹目を召還したから、今のローシェンナには更に召還するだけの力が残っていないのだ。だからだろう、昇の情けに頼ろうとするような言葉を口にしたのは。さすがのローシェンナもここまで完膚なきまで叩きのめされるとプライドよりも自分の事を心配するようだ。

そんなローシェンナに向かって昇は首を横に振ると、鋭い視線で叫ぶ。

「申し訳ないけど……あなたを見逃す事は出来ないっ！　いや、あんなだけは絶対に倒させてもらうっ！」

昇のはっきりとした宣言を聞いたローシェンナの顔が青ざめて行く。いくら争奪戦で命を落とす事が無いと言っても、ここまではっきりとトドメを刺すという宣言を聞かされてはローシェンナも絶望を感じたのだろう。それでも微かなプライドがローシェンナの口を動かす。

「あ、あなたは負けを認めた者の首を取ろうというのですの。それがあなたのやり方ですの、それは卑劣とは思いませんの」

そんな事を言ってくるローシェンナに昇は紫黒の引き金に指を掛けると紫黒に力を流し始めた。

「卑劣ですか？　それはこっちのセリフです。あなた達こそシエラを甚振り続けたじゃないですか。僕はそんなあなた達を許す事が出来ない」

徐々に紫黒が光り輝き始めていく中でローシェンナは、それでも言葉を返す。だが、その言葉こそがローシェンナにとっては命取りであり、決して言ってはいけないことだという事にローシェンナは未だに気付いていないようだ。だからこそ、その言葉を口にする。

「そ、そんなのは当然ですわ。妖魔は忌むべき存在、そんな存在を甚振って、倒して、何が悪いというのですの」

はっきりとその言葉を口にしたローシェンナに向かって昇が叫ぶ。

「妖魔とか関係ないっ！　シエラは僕達の仲間だ、仲間が甚振られて、傷つけられて黙って引き下がるなんて事は僕には出来ない。大事な仲間だから、掛け替えの無い家族だから、僕はあなたを許す事が出来ないっ！　だからこそ、この一撃であなたを倒させてもらうっ！」

昇の気迫に押され、更に輝きを増す紫黒を見てローシェンナには反論するだけの気迫は残ってはいなかった。それどころか輝きを増す紫黒を見て、後ずさりするばかりだ。

どうやらローシェンナは未だに理解できてないのだろう。いや、最早理解するだけの時間すらないのだから、しかたない。昇達がシエラを受け入れた瞬間からシエラが妖魔であるという事実など取るに足らない事実になっている。つまり気にする事もしない、人が自然と呼吸をするように、昇達にとってはシエラが妖魔という事実はその程度の認識しかしなかった。

けれどもローシェンナ達はシエラを妖魔として甚振った。それは昇達から見れば、大切な仲間であり、家族でもあるシエラを散々傷つけた事に見える。だからこそ昇はローシェンナを許す事は出来なかったのだ。いくら昇でも自分の家族を傷つけられて黙っていられるほど、お人よしでは無いという事だ。

そんな昇達の理解に理解できないままにローシェンナは昇に背を向けて逃げ始める。精界の中は完璧な閉鎖空間である。人の足では逃げても逃げ切れる物ではない。だが負けたという事実から少しでも抵抗するためにローシェンナは昇の前から逃げ出したのだ。

そんなローシェンナに向かって昇は紫黒の引き金を引く。

「フォースバスターッ！」

紫黒の片方から砲撃とも言える力がローシェンナに向かって放たれる。それを感じたローシェンナは走りながらも振り向き、自分に向かってくる力に恐怖するのだった。それでも、ローシェンナは今まで遊びとはいえ争奪戦を経験して来ただけの事はあるのだろう。

ローシェンナはフォースバスターを横に転がるように避けると、

ローシェンナが居た場所にフォースバスターが着弾して爆発を引き起こす。さすがに近距離での爆発である、いくらローシェンナが争奪戦で経験を重ねたと言っても、近距離での爆発を避ける事なんて出きるわけがなかった。

そのため、爆発の衝撃によりローシェンナは吹き飛ばされて、ついでに着ていた派手なドレスもところどころが破けたり、焼け焦げた後を残したりした。それでもローシェンナの体力は尽きてはいなかったのだろう。ローシェンナはすぐに立ち上がると、再び逃げ出そう駆け出そうとするが立ち上がった時点で身体が動かなくなっていた。

その事に激しく動揺するローシェンナ。そんなローシェンナの後ろから静かに声が聞こえてきた。

「エアーバイント。今のあなたは空気の鎖に縛られている状態。だから動く事も出来ないし、空気だから鎖を断ち切る事も出来ない。つまり、あなたは逃げる事は出来ない。後は……今回の戦いに幕を引くだけ」

後ろから聞こえてきた声にローシェンナは唯一だけ動く首を後ろに回すと、そこには昇とシエラがゆっくりとローシェンナに向かって歩いている。その事にローシェンナは動揺よりも恐怖を感じていた。

それは負ける事の恐怖よりも、シエラを痛めつけた事による報復を想像させたからの恐怖なのだろう。そんな恐怖を感じながらもローシェンナは体を動かそうとするが、シエラが言ったとおりに、まるで無数の鎖で縛られているかのようにローシェンナは一切、身体を動かす事が出来なかった。

そんなローシェンナの横を通り過ぎて、昇とシエラはローシェンナの前に立つ。そしてシエラは少しだけ意地悪な笑みを浮かべながら口を開くのだった。

「これがあなた達が嫌った妖魔の能力。私の能力である大気のルーラーは全ての大気を自由に操る事が出来る。もちろん、そうやって

空気だけで相手の動きを封じる事も出来る」
　そんな事をわざわざ説明するシエラ。どうやらシエラはローシェンナが報復で痛めつけられると勘違いしている事に気付いているようだ。だからこそ、シエラはわざわざ自分の能力について説明するのだった。隣で少し呆れている昇を見ないようにして。
　そして、そんな説明を受けたローシェンナは恐怖から動揺するばかりだ。
「こ、こんな事をして、いったい、どうする……つもりなんですの？」
　そんな質問をしてくるローシェンナにシエラは更に意地悪な笑みを浮かべるが、昇はそんなシエラの肩に手を置くと、シエラより一歩だけ前に出た。
「決まってるじゃないですか。終わりにするんですよ……こんな戦いも、こんな差別も……そして僕は大切な家族を取り戻す。それだけです」
　最後はローシェンナに向かって微笑む昇。そんな昇の微笑を見てローシェンナは動揺しながらも首を傾げるばかりだ。
　そんな昇がシエラに顔を向けると黙って頷く。一方のシエラは少しだけ残念そうな顔をしながら昇に向かって頷くのだった。どうやらシエラとしては怯えるローシェンナを仕返しに、もう少し怖がらせてやりたいと思っていたのだろう。
　だが未だに琴未達は戦っている状態である。昇としては、この戦いを一刻も早く終わらせたかったし、これ以上の戦いは無益だと思ったからこそ、シエラに向かって頷いたのだ。
　そのシエラがウイングクレイモアをローシェンナに向けると真剣な眼差しになる。そんなシエラを見てローシェンナは、もうプライドも何もあったものじゃない。ただ思った事を口にするばかりだ。
「い、いや、ダメ、ダメよ。私は、もっと……もっと」
「悪いけど、これ以上はあなたと話すことは無い。だから……この一撃で終わらせる」

ローシェンナの言葉を遮って、そんな言葉を口にし終えたシエラはウイングクレイモアを突き出して、背中の翼を羽ばたかせると未だに動けないローシェンナに向かって突っ込んでいくのだった。

そして次の瞬間にはローシェンナに何も喋らせない内にウイングクレイモアがローシェンナの身体を貫く。なにしろウイングクレイモアはかなり大きい、そんな物が身体を貫いたのだからローシェンナは致命傷を負って、このまま死んでもおかしくは無いだろう。

だが、この戦いは争奪戦であり、精界の中は精霊世界と言っても良いほどの環境だ。つまり、精界が張られて行われる争奪戦では人が死ぬ事は無い。一部の例外はあるものの、通常の争奪戦では死ぬ事は無い。

ならトドメとは何を意味しているのか。それは契約者の中にある器の破壊である。契約者は致命傷を追うと、その致命傷の代償として己の中にある精霊王を受け入れる器が壊れる。そして器は争奪戦に参加するチケットと言っても良いだろう。それを失う事になるのだ。

実際、ローシェンナの身体を貫いたウイングクレイモアには一滴の血も付着していないし、シエラはしっかりとローシェンナの中にある精霊王の器を破壊した感触をしっかりと感じ取っていた。

それからシエラはウイングクレイモアを一気にローシェンナの身体から引き抜く。器を破壊された契約者は争奪戦に参加も出来ないし、精霊との契約も出来ない。つまり争奪戦から完全に落とされた事になる。

そしてローシェンナが死んでいない証拠にウイングクレイモアが貫いた部分の服は切り裂かれているものの、ローシェンナの身体には傷一つ残っていなかった。これこそが器を破壊された証拠でもあり、ローシェンナにトドメを刺した証拠であり、昇達の勝利を示す物であった。

シエラはウイングクレイモアを引き抜くのと同時に大気のルーラーでローシェンナを縛っていた大気の鎖も解除したのだろう。すっ

かり気を失ったローシェンナが倒れるのを見ていると昇がシエラの隣に歩いてきて、倒れているローシェンナを見るが、すぐに視線をシエラに移動させた。

「これで終わりだね」

「うん、こちらの作戦通りに行ったから楽だった」

どうやら全てはシエラの作戦だったようだ。確かに昇とシエラが力を合わせて、巨大な砲撃を放り込めば。それだけでローシェンナを倒す事が出来ただろう。だが、万が一という事もシエラは考慮して、ここは確実に倒せる作戦に出たのだ。

それが昇の砲撃で気を逸らせて、シエラがエアーバインドで相手の動きを封じるという作戦だ。たとえ昇の砲撃が直撃していたとしても、シエラの力なら確実にローシェンナの動きを封じる事が出来ただろう。いや、直撃しただけに動きを封じやすかっただろう。

後はシエラが直接攻撃でトドメを刺すだけ。なにしろ相手の動きを封じているのだから。動かない的に攻撃を仕掛けるようなものだ。だから確実にトドメをさせる可能性が高くなる。だからこそシエラは確実にローシェンナを倒す事が出来る、この作戦を選んだのだ。

そこには、こんな戦いを一刻も早く終わりにしたいというシエラの気持ちもあったかもしれない。けど、それ以上にこんな運命を導いたローシェンナを自分の手で確実に倒したかったのだろう。

もし、シエラとアレッタが別の出会い方をしていれば、あのような結末は迎えなかったかもしれない。そんな思いがシエラの中にあったからこそ、シエラは自分の手で確実にローシェンナを倒せる作戦に出たのかもしれない。

最後は自分の手で戦いに幕を引くことでシエラは過去の因縁と昇達への謝罪を一緒に解消することが出来たのだ。最後の最後まで人の手でやってもらうと、どうしてもシエラの中に後悔では無いが、悔やみが残るだろう。

けれどもシエラはローシェンナを自分の手で倒した事とアレッタと和解できた事で少しだけ、ローシェンナ達に感謝していた。なに

しろローシェンナがアレッタと契約して、アレッタを連れてきてくれたからこそ、シエラはアレッタと和解できたのだから。
だが、それと同時にアレッタとは別の出会い、再び味方として出会いたかった。という気持ちがシエラの中では強かった。もし味方として出会っていれば、アレッタと戦う事無く。お互いに本音を話し合うだけで済んだかもしれないのだから。
だからシエラは複雑な心境だった。
そんなシエラの隣で昇が静かに口を開く。
「終わったね」
「……うん」
短く答えてきたシエラに昇は視線を向けると少し驚きを示した。なにしろシエラが涙を流してるのだから。昇としては、なんでシエラが涙を流しているのかが分からない。だから、その事を聞こうとしたが、やっぱり別の質問に変えた。
「なんで泣いているか……聞いて良い？」
そんな昇の質問にシエラは驚いた表情をすると慌てて涙を拭った。どうやらシエラは自分でも涙を流していた事に気付いていなかったようだ。そんなシエラが涙を拭き終わると自然と穏やかな顔付きになった。そして昇の質問に答える。
「後で話す。今は……大切に仕舞っておきたいから」
「そっか、分かったよ」
シエラの答えにすんなりと承諾の言葉を返す昇。どうやら昇にも分かったようだ。シエラが流した涙の理由が、だからこそ今はそれ以上の事は聞かなかった。
そして昇が黙り込むとシエラは昇の腕に抱き付き、そのまま昇に寄り添ってきた。そんなシエラを見て昇は微笑むと、いつものように優しい口調でシエラに話しかける。
「そんな事をしてると、また琴未から攻撃されるかもしれないよ」
「その時は返り討ちにするだけ、だから……今だけは」
「……分かったよ」

昇にしては珍しくシエラの行為を受け入れる。それもしかたないだろう、なにしろ昇も始めて見るのだから。シエラが……幸せそうな顔で昇に寄り添ってくる姿を。

第百二十一話　取り戻した幸せ（後書き）

はい、そんな訳で、やっと終わりましたね～。これで白キ翼編のラストバトルは終わりです。まあ、正確に言うと、まだ少しだけ残っているんですけどね。まあ、それは次回のお楽しみ～、という事で。

そんな訳で白キ翼編も残り数話となりました。ちなみに予定では、後二話ぐらいで終わりにしようかな～、と思ってますけど……終わるのかな？　まあ、なんにしても白キ翼編はそれぐらいで終わりにしようかと思っております。

そんな訳で次編の予告を少し。次編は少し本筋から離れた番外編……じゃないですけど。う～ん、なんていうか。本編とは少し話の流れが違う……劇場版？　みたいな感じの話にしようかと思っております。

そんな訳で次編は一応本筋とは繋がっておりますが、一編完結の話にしようかと思っております。だから次編は一切の伏線を残しません。確実に一編だけで話が終わります。

とまあ、そんな感じで次編をやって行こうかと思っております。

さてさて、予告も済んだところでそろそろ締めましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、そろそろ本気で社会復帰しないとだな～、とか思っている葵夢幻でした。

第百二十二話　ただいま

フレト対アンブル、契約者同士の戦いは未だに続いていた。フレトは攻撃を自らが有している風の属性に絞って攻撃しているため、フレトの攻撃は苛烈を極めた。だがアンブルも氷の盾でフレトの攻撃を全て防いでいるのも、また事実だった。

そんな戦況の中でフレトは焦りを感じていた。

くそっ！　威力よりも発動時間を優先させた攻撃を連続して出しているのに一発も入らないだと。まさかここまで防御に徹するとは思っていなかったが……思っていた以上にやっかいな能力のようだな、シールダーの能力は。だが、防御に徹しているために反撃も出来ないのだろう。ならっ！　ここは一気に攻め続けるっ！

フレトは自らの能力である風のシューターを活かして攻撃をしていた。フレトのマスターロッドは他の属性を使う力を持っているが、その代償として他の属性を操るためには詠唱時間が掛かる。

フレトは、その詠唱時間がアンブルに盾を作る隙を与えているのだと考え、攻撃方法を自らの能力である風のシューターに絞って攻撃していた。確かにフレトの能力なら詠唱無しで風の属性を操り、打ち出すことが出来る。それだけにアンブルに盾を作る隙を与えず、また集中的に攻撃する事でアンブルの盾を砕こうとしたのだが。アンブルもシールダーとしての能力が高いのだろう、フレトが打ち出してきた攻撃を全て氷の盾で防いでいた。

もちろん、フレトも工夫も無しに攻撃を仕掛けている訳ではない。フェイントや囮、そのうえ上下左右、いろいろな方法を取って攻撃をしているが、未だに傷一つ付けることが出来ずに、全て氷の盾に防がれてしまっていた。

それでもフレトが攻撃を選択したのは、これまでの戦いでアンブルがほとんど反撃してこなかったからだ。確かに戦いを見ればフレトの攻撃は通っていないものの、アンブルもフレトの攻撃を防ぐだ

けで精一杯に見えていたのも、また事実だった。
だからこそフレトは更に風を操ってアンブルに攻撃を仕掛けるが、どの攻撃も全てアンブルの盾に弾かれて一度もアンブルに届きはしなかった。
それでも攻撃に徹しようとするフレト。アンブルは盾の隙間から、そんなフレトを見て軽く笑みを浮かべた。それがフレトにも見えたのだろう、フレトはアンブルからの反撃を警戒して攻撃を中断させる。そんなフレトにアンブルはわざわざ自分の前に展開してある盾の隙間を広げてきて、自らの姿をフレトに晒す。
そんなアンブルにフレトは反撃を入れられる前に攻撃しようとするが、その前にアンブルの口が開いた。
「いやいや、妖魔如きのために、ここまで戦われるとはご立派ですね。私にはあなた達がそこまでして戦う理由なんて分かりもしませんね。あんな妖魔如きに、そこまでする価値があるとは思いませんが？」
「お前、なんかに、わ……ッ！」
アンブルの言葉に反論しようとしたフレトだが、思ったように言葉が出ない事で、やっと自分が置かれた状況を理解した。
くそっ！　やられたっ！　あいつの目的は最初からこれだったのか。俺とした事が滝下昇達に乗せられて冷静さを失っていたか。
そう、アンブルが今まで反撃を控えてたのも、フレトが冷静さを失っていた事を見抜いていたからだ。だからこそアンブルは防御に徹して待つ事にした……フレトの体力が落ちるのを。
フレトも言葉を口に出そうとした事で、やっと自分の息が荒くなっている事に気付いた。そしてフレトの体力が落ちた今こそがアンブルにとっては反撃する好機となってしまっている。
つまりアンブルは最初からフレトの体力を消耗させるために防御に徹して、フレトに苛烈な攻撃をさせ続けたのだ。フレトも自分の体力が落ちている事を実感するのと同時にアンブルの狙いにも気が付いた。

あいつは最初から俺の体力が落ちるのを待っていた。いや、シールダーの能力を考えると、ワザと防御に徹して、相手の体力が落ちたところを反撃した方が確実に仕留められる。……くっ！　俺がもう少し冷静だったら、すぐにその事に気付けていたはずだ。……悔しいがこの中で一番冷静だったのは、あいつだったという事か。

荒い息をしながら、急に身体が重くなったと感じたフレトはアンブルを睨みつける。一方のアンブルはフレトが思惑通りに動いてくれたために、余裕を感じたのだろう、アンブルはフレトに向かって微笑みかけるのだった。

そんなアンブルに向かってフレトは一気に息を飲み込むと短く叫ぶ。

「これがお前の狙いかっ！」

言葉を発した後にむせそうな呼吸を無理矢理押さえ込んで、再び息を荒げるフレト。そんなフレトにアンブルは少しだけ楽しげに話しかける。

「ええ、そうですよ。私にはあなた達が、そこまで怒る理由は分かりませんが、あなたが冷静さを失っていた事にはすぐに気付きました。なので、あなたが考えた通り、ワザと持久戦に持って行った訳ですよ」

よくもぬけぬけと自分の手を話すものだな……だが、俺があいつの思惑にはまった事も事実だ。くそっ！　まさか、こんな屈辱を受けるとはな。アンブルの言葉を聞いて、そんな事を思いながらアンブルを睨み付けるフレト。

それもしかたないだろう。なにしろ今まで優勢に進めてきた戦いの全てがアンブルの思惑通りに進んでいた事に気付いたのだ。まんまとアンブルの手の上で踊っていた事に気付いたフレトにとって、今の状況は屈辱でしかなかった。

そんなフレトの姿をあざ笑うかのように、アンブルは氷の盾を操り始めると再び自分の前に氷の盾を展開させる。今度は今までの防御を目的とした密集した盾ではなく、確実に攻撃を目論んだ展開の

させ方をしている。
　アンブルの前方に展開した四つの盾は、まるでフレトを囲むように展開されたからだ。これで盾から一斉に攻撃されれば、今のフレトでは逃げる事も出来ないとアンブルは考えたようだ。そんなアンブルが微笑みながらフレトに告げる。
「さて、それでは、そろそろ終わりにしましょうか。あなたもお疲れのようだし、すぐに私の手で楽にして差し上げますよ」
　アンブルとしては最終宣告のつもりだったのだろう。だが、フレトにとってはアンブルの言葉はフレトの逆鱗を撫でるのと同じだった。
　ふざけるなっ！　こんな所で終わる俺では無いっ！　そんな心の叫びに、気合だけで重い体を動かし、搾り出した精神力で風の属性を発動させる。そんなフレトの姿にアンブルは一瞬だけ驚きの表情を見せるが、すぐに微笑を浮かべるのだった。
　すっかり体力が落ちたフレトにこれ以上の戦いは出来ないとアンブルは考えているのだろう。だがフレトの闘志は未だに消える事無く、すぐに行動に出して見せた。
　フレトは自分の両脇に一瞬にして風を集中させると、その風を回転させてドリルのような破壊力を与えると、すぐに打ち出した。これにはアンブルも再び驚きを示した。まさか、ここに来てまでフレトが攻撃を仕掛けて来るとは思っていなかったのだろう。だから一瞬だけ、行動が遅れたのだが、フレトの攻撃はアンブルの前に密集した盾によって阻まれてしまった。
　フレトの体力が万全なら、そのまま風を回転させて盾の破壊を試みるだろうが、今の体力では風を打ち出すだけで精一杯のようだ。フレトの打ち出した、二つの風はアンブルの盾に阻まれるとすぐに四散してしまった。
　それでもフレトはアンブルにマスターロッドを向けて、未だに戦う意思を示していた。そんなフレトにアンブルは微笑むと、再び盾を攻撃態勢に展開させてからフレトに向かって話しかけてきた。

「いやいや、これは驚きですね。まさか未だに、そんな力が残っているとは。どうやら……あなたは確実に仕留めておかないといけないようですね」

そんなアンブルの言葉を聞いて、フレトは未だに整っていない呼吸のままアンブルに言葉を返す。

「別に驚く事でも無いだろう。お前が喋っている間に俺の体力が少しは回復してもおかしはないのだから。それに……俺がこの程度で倒れると思ったら大間違いだっ！」

フレトの言葉を聞いてアンブルは盾を攻撃態勢から再び防御主体に展開させる。どうやらフレトの反撃がアンブルに警戒心を植えつけたようだ。

そんなアンブルに向かってフレトは笑みを浮かべると話を続けるのだった。

「またお得意の防御戦法か。だが次からはしっかりと防御しておくんだな、次はそんな頬の傷では済まないぞ」

そんなフレトの言葉にアンブルは驚きを示すと自分自身の頬を確かめる。そして、右手の指先に血が付いているのを目にして、更に驚くのだった。

「いったい……いつの間に」

「俺がいつも全力で攻撃するは限らないって事だ」

「……そういう事ですか」

どうやらフレトの言葉を聞いて、フレトが何をやったのかが分かったようだ。フレトが攻撃を行った瞬間、ほんの少しだけだったがアンブルは盾を密集する時間が送れた。つまり、それだけアンブルはフレトの行動に驚き、動きに出たのだが。アンブルにとっては、よほど予想外だったのだろう。密集した盾にも繊細さが欠けていた。

つまり、ほんの少しだが、完全に盾を密集させる事が出来なかったのだ。フレトも自分がここで攻撃すれば、油断しているアンブルは必ず動きに支障をきたすと考えた。だからこそ、先程二つの風を操った、すぐ後に小さな風刃を盾の隙間を通してアンブルの頬を傷

つけたのだ。
　つまり最初の攻撃はアンブルが油断していると予想しての囮。フレトの狙いはそこにあったのだ。微かとはいえフレトの攻撃が通ったのだ。アンブルとしては更に警戒心を強めるのだった。
　だが現実はアンブルが思っていたように、フレトにとっては不利な状況だった。なにしろ先程まで苛烈を極める攻撃をし続けていたのだ。だからフレトの体力が一気に落ちても不思議ではない。むしろ、ここに来て攻撃できた事が運が良く、フレトにとっては次の手段が残されていないほど体力は消耗していた。
　だから先程の攻撃も、今こうして立っているのもフレトの意地が起こした行動とも言えるだろう。だがフレトの体力が限界に来ている事だけは事実であり、ここでアンブルからの攻撃を受けたら、それを避けられるかも分からないほど、フレトは自分の身体が思った以上に動かない事を実感していた。
　けれどもアンブルは慎重な性格なのだろう。ここまで来て、確実にフレトを仕留める手段を考えていた。フレトの望みと言えば、アンブルが考えている間だけでも、動けるまで体力が回復するための時間を稼ぐ事と言えるだろう。だからフレトは、それ以上の攻撃をする事もなく。ただアンブルの出方を窺うかのように見せかけた。そうする事で更にアンブルに警戒させようというのだろう。
　だが二人の思惑を超えた動きがいきなり起きた。
　突如として後方に殺気を感じたアンブルがすぐに自分の後ろに氷の盾を生み出す。フレトをかなり警戒していた為か、アンブルの作り出した盾は先程と同様に強固で精密な物だった。
　だが、そんなアンブルの盾も相手によっては完璧な防御を取れるとは言えないのだ。それは、アンブルの盾を全て破壊すると、アンブルの横を一気に駆け抜けてフレトの前に立つ。その姿にフレトは思わず声を上げるのだった。
「ラクトリーッ！」
　いきなり飛び込んで来たラクトリーの姿にフレトもアンブルも驚

いていた。そんなラクトリーがフレトに向かって微笑むと、すぐにアンブルに向かってアースブレイククレセントアクスを向けて鋭い言葉と眼差しを投げ掛ける。

「残念でしょうけど、あなた達の負けが決定しました。これ以上の戦闘を望むというのなら、今度は私が相手をしますよ」

そんなラクトリーの言葉にアンブルはすぐに自分の身を守る盾を作り出すとラクトリーの動きに警戒しながら戦場の状況を確かめる。

「……おやっ、そういう事でしたか。私とした事が少年との戦いに夢中になって、すっかり目的を忘れてましたよ」

そう言うとアンブルは先程作り出した盾を消し去るとフレトに向かって微笑みながら話しかけてきた。

「どうやら、その通りみたいですね。さすがにこれ以上、そちらに戦力が増えると私達は確実に倒されるでしょう。だから……ここは退かせてもらいましょう」

そんなアンブルの言葉を聞いてもフレトには何の事だか分からなかった。そんなフレトにラクトリーがクレセントアクスを構えたまま報告をしてきた。

「昇さん達が相手の契約者を倒しました。すでに契約者の反応が消えています、それに契約者が連れていた精霊達の反応もです。これは昇さん達の勝利を意味してると考えて良いでしょう」

そんなラクトリーの言葉を聞いてフレトは軽く笑うと、ラクトリーと同様に攻撃の姿勢を示す。どうやらフレトにも戦場の状況が理解できたようだ。

「なるほどな、そういう事か。だったら……尚更お前をここで倒さないと俺の気が済まないな」

そんなフレトの言葉を聞いたアンブルが微笑みを消して首を横に振ってきた。

「残念ですが少年。ローシェンナさんが倒されたという事は、私の戦う理由が無くなったのと同じなのですよ。だからここで戦いを続ける意味は無いのです。だから退かせてもらいますね」

「ふざけるなっ！　このままお前達を逃がすと思っているのか」
アンブルの言葉を聞いて叫ぶフレト。そんなフレトに向かってアンブルは再び微笑むとサラッと言ってのけるのだった。
「もちろん思ってませんよ。ですが少年、私はローシェンナさんをアッシュタリアに勧誘しに来たのです。そのローシェンナさんがやられたという事は……私の目的が無くなったのと同じ。それに、その程度の力しか持っていなかったという事でしょう。まあ、こんな所でやられるような契約者なら捨て駒程度にしか、なりませんけどね」
「それはお前の理由だろう。俺にはお前と戦う理由と決着を付けなければいけない理由が在る」
「おやおや、そんなに私の手の上で踊っていた事がお気に召しませんでしたか」
「貴様っ！」
どうやら図星だったのだろう。アンブルの言葉を聞いたフレトは言葉と共に風の弾丸を打ち出す。打ち出された風の弾丸はそのままアンブルに向かって行き……そのままアンブルを貫いて、アンブルは砕け散るのだった。
「なっ！」
「……やられました、マスターッ！　いつの間にか自分の前に氷のスクリーンを作って、自分の姿だけを写していたようです。反応はすでに消失、レットと半蔵が戦っていた精霊達も退いたようです。今から精霊の反応を追えば追い付ける可能性があります、どうしますか、マスター？」
ラクトリーの早口報告を聞いたフレトはマスターロッドを強く握り締め、奥歯を噛み締めた後にラクトリーに告げた。
「いや、追わなくて良い。こちらも引き上げるからレットと半蔵を戻せ」
「分かりました」
フレトの本心を言えば、今からでも追って雌雄を決したいところ

だろう。だがフレトはアンブルとの戦いで冷静さが欠けている事を思い知った。そして今の状況を冷静に判断した結果がフレトに追わなくて良いという言葉を言わせたのだろう。

なにしろラクトリー達だけならともかく、フレトの体力は限界に来ている。それだけ後先考えずに戦っていたのだから、今からアンブル達を追っても、すぐにフレトの体力が尽きて動けなくなるだろう。フレトはそう結論を出したからこそ、アンブル達の追撃を諦めたのだ。

だが、それだけではない。最後の最後でまたしてもアンブルにまんまと逃げられるという失態を犯している。その事がフレトに今の状態で戦っても勝てない事を思い知らされたのだ。悪知恵といえば聞こえは悪いが、戦略では確実にアンブルはフレトの上を行っている。

つまり今回の戦いでフレトが一気に不利になったのも、フレトの冷静さが欠けていただけではない。戦略的にアンブルがフレトの上を行っていたのだ。だからこそ、こうも簡単にアンブルに逃げられてしまったし、今から追ったとしてもアンブルの戦略を破らない限りは勝機は無い。そしてフレトは自分にはアンブルの戦略を破るだけの力が無い事を思い知ったのである。

だからこそフレトはアンブルの追撃を諦めざるえなかった。そんなフレトが今回の戦いを振り返ってみる。

さっきの戦いは完全に俺の失態だ。あそこでラクトリーが飛び込んで来なかったら……俺はやられていたかもしれん。……だが、一つだけ収穫があった。そこだけは、あのアンブルとかいう契約者に感謝するとしよう。俺は……思い上がっていたんだ。精霊達との完全契約という思い上がり、それがあるから最初から有利だと、確実に勝てると。だが、どんなに優れた力でも使いこなせないと意味は無い。今回の戦い……俺は完全契約をした精霊達を上手く使いこなせなかった。だから負けそうになったんだ。ふっ……今に思えば俺が滝下昇に負けたのも、そこかもしれないな。

いつもの平常心以上に冷静な視線で今回の戦いを振り返るフレト。今までのフレトなら、自らのプライドを重視して、ここまで自分の弱点を見詰めようとはしなかっただろう。だが、今回の戦いで自分の弱点を直視したフレトはプライドを良い方向に向ける事が出来たようだ。

つまり、フレトは負けそうになった事実がフレトのプライドを傷つけ。今度はそのプライドが今まで見ようとはしなかった自らの弱点を見るように、いや、克服して次こそは絶対にアンブルを倒す。という意地を生ませる事になったのだ。

今までは完全契約という有利な条件を頼りに、絶対に負けないという自信とプライドがあったからこそ、フレトは自らの弱点に気付く事無く、昇達に負けた理由も本気で考えようとはしなかった。

だが先程の戦いを得てフレトのプライドは別の方向へと向いたのだ。完全契約という有利な条件だけを誇るのではなく、完全契約という力を完璧に使いこなして完全な勝利を得る。そんな風にフレトの考えを変える結果となったのだ。

プライドが高いフレトにしては今回の戦いで、今後はかなり成長する事だろう。だが今はそれよりも考える事があるとフレトはラクトリーに話しかける。

「とりあえず戦いには勝った訳だが……滝下昇達の方は大丈夫なのか？」

そんな事をラクトリーに尋ねるフレト。だがフレトが昇達を心配するのも無理は無い。確かに先程はシエラが妖魔であっても気にしない、そんな事実をシエラに伝えたわけだが。戦いが終わって、全員が冷静になった今でも昇達がちゃんと和解しあえているかがフレトには心配だったのだ。

なにしろ精霊が妖魔を差別するのは精霊の常識だとフレトは知っている。いくら戦いが始まる前は気分に任せた部分もあるだろう。こうして戦いが終わった後に冷静になってもシエラがしっかりと昇達の、そして自分達の仲間に戻ってくるのかがフレトには少し心配

だったのだ。
　そんなフレトにラクトリーは微笑みながら答えてきた。
「はっきり申しまして、それだけは分かりません。ですが……信じましょう、昇さん達の絆を、今は信じる事しか出来ません」
　そんな答えを返してきたラクトリーにフレトは顔を向けると真剣な面持ちで話を続ける。
「ラクトリーは信じてるんだな。あいつらの……絆を」
「はい」
　フレトの言葉にラクトリーは微笑みながら、しっかりと返事を返してきた。そんなラクトリーを見てフレトはラクトリーから視線を外すと、まるで独り言のように口を開いてきた。
「絆……か。少しだけ癪だが……俺も滝下昇を少しだけ見習うとするかな」
　そんな言葉を口にして軽く笑い出すフレト。そんなフレトを見てラクトリーはワケが分からないとばかりに首を傾げるのだった。そこに丁度、レットと半蔵が戻ってきたので、フレトは契約を交わした精霊達の顔を一度だけ見回すと、マントをひるがえして精霊達に背を向ける。
「では戻るとするか、行くぞ」
『はっ』
　フレトの言葉に一斉に返事を返す精霊達。そしてフレトはすぐに歩き出したのだが、数歩だけ歩くと足を止めた。その事に精霊達はフレトがまだ何か言う事があるのではないのかと耳を傾けるが、意外な事にフレトは振り返ると精霊達に向かって微笑んだ。
「それと言い忘れていたが……今回の戦いでは皆ご苦労だった、これからも頼むぞ」
　それだけを言うとフレトはすぐにきびすを返して再び歩き始めた。今までは戦いが終わっても、そんな事を言った事が無いフレトなだけにラクトリーとレットは顔を見合わせて、思わずお互いに首を傾げてしまった。そんな二人とは違って半蔵だけが、すぐに「御意」

とだけ返事を返してフレトの後ろを歩き始める。
　そんな二人の後を慌てて追うラクトリーとレット。ラクトリーもレットも半蔵にフレトが発した言葉の意味を尋ねようとしたが、半蔵の性格を考えるとまともな答えが返ってくるとは思えなかったので止める事にした。
　けれどもラクトリーとレットはお互いに顔を見合わせて微笑むのであった。二人ともフレトの本意は分からなかったようだが、フレトの言葉が嬉しいと感じた事は確かだったようだ。
　そんなフレト達が昇達と合流するために、今は黙って昇達の元へ向かっているのだった。

　フレト達が昇達と合流すると、すぐにフレトは……呆れた顔をした。そんなフレトの横で苦笑いしている昇。そしてお互いの精霊達はというと、何故だか昇達の後ろでレジャーシートひいてお茶をしていた閃華とミリアに合流して、今では呑気に目の前の光景を目にしながらもお茶を味わうのであった。
　そして、そんな昇達の目の前で行われている光景とは……シエラと琴未の本気を出した戦いだった。そんな二人の戦いを見ながら昇は二人の言葉に心の中で反論していた。まあ、昇に本心を口に出すだけの勇気が無いのだろう。それもしかたない、もし口に出してしまえば……地獄がまっているだけなのだから。
　そんな昇の心境を知らないまま、二人の戦いは続いていた。
「シエラッ！　いつもいつも人が居ない事を良い事に昇とイチャつくんじゃないっ！」
　えっと、琴未さん、僕は別にイチャついている、つもりは無いんですけど。
「相手の隙を突くのは戦術においても、戦略においても基本。だから隙を見せる方が悪い。もっとも……琴未如きが本当の力を解放した私に勝てるとは思えないけど」

……シエラさん、すっかり妖魔である事を気にしなくなりましたね～。まあ、それは良い事なんですけど……こんなところで本気の力を出さないでくださいっ！

「ふっ、大気のユーレーだかラーラーだか知らないけど、その程度の力が私に通じると思ったら大間違いよっ！」

琴未さん、大気のルーラーです。というか……本当に琴未には大気のルーラーが効いてないっ！

「確かに風の鎧や大気を切り裂けるほどの雷閃刀が誇る力は認めてあげる。でも……私が出せる力はそれだけじゃないっ！」

あの～、シエラさん。このまま行くと本当に収拾が付かないので、その出せる力を出さないでください。

昇がそんな事を思いつつも、二人の戦いは激化の一途を辿っていくばかりだった。そんな二人の戦いを見て思わず溜息を付く昇。そんな昇にフレトは呆れた顔を向けて話しかけるのだった。

「戦いが始まる前にお前達の絆が復活した事は感じたが……それが、なんで、こんな事態になってるんだ？」

そんなフレトの質問に昇はバツが悪そうに顔を背けるのだった。

「いや、その、何ていうか。今までシエラが苦しんだから、その、つい」

「つまり、戦いが終わって、お前の同情を利用して甘えてきたシエラを拒む事が出来ず。その場面を琴未に見られたから、こんな戦いが始まったと、そんなところか」

うっ、フレト……いつの間に、そんな推理力を？　というか、何でそんな簡単に、この事態が想像できたんですか？　昇がそんな事を考えているとフレトは軽く笑ってみせる。

「ふっ、いつものお前達を見ていれば、そんな事ぐらいは簡単に推測が付く」

「って！　人の心まで読まないでっ！」

そんな二人の会話が聞こえていたのだろう。後ろでのほほんとしていた精霊達から笑い声が聞こえてきたので、昇の顔は一気に真っ

赤になって行く。そんな昇を見てフレトも微笑むと昇との会話を続けるのだった。

「それにしても……まさかここまで簡単にいつも通りの光景を目にする事になるとはな。お前達の事を心配していた自分が愚かだったとつくづく思い知ったよ」

そこまで言いますか。フレトの言葉に心の中で突っ込みを入れる昇。けれども、昇もすぐに顔に軽く笑みを浮かべるとフレトの方を向いてきた。

「ごめん、フレト。今回の事は僕達の問題なのに、こんなにも巻き込んじゃって。でも……ありがとう」

そんな昇の言葉にフレトも軽く笑みを浮かべた顔を昇に向けるのだった。

「なに、お前に負けて、お前から受けた恩に比べれば安いものだ。それに……お前達と戦う事で俺も得る物が多い事に気付いた。だから礼など言わなくても言い」

「えっと……得る物って何？」

フレトの言葉を聞いて昇は思わず、そんな質問をしてしまうが、昇の質問にフレトは軽く笑うと一言で返すだけだった。

「お前が気にする事ではない」

……ん～、まあ、フレトがそう言うのなら無理に聞かない方が良いのかな？　フレトの返答にそんな事を思う昇。そんなフレトが昇から視線を外すと独り言のように呟く。

「まったく困ったものだな。だが……今は少しだけ羨ましいと感じるのも確かだな」

「えっ、なんて言ったの？」

フレトの声が小さかったのだろう。フレトの言葉は二人の戦いが出す激音に掻き消されて、昇には微かに聞こえるだけだった。そんな昇にフレトは背を向けると、今度ははっきりと言葉を口にする。

「何でもない。俺もまだまだ未熟だという事だ」

そんなフレトの言葉を聞いて首を傾げる昇。その間にフレトは広

いレジャーシートに腰を下ろすと、ラクトリーから差し出された紅茶を楽しみながら、お茶菓子に手を伸ばすのだった。そんなフレートを見て、昇は未だに戦いを続けている二人に目を向けて、一度だけ微笑むとフレトと同様にお茶会に混ざるのであった。

「そろそろ終わりのようじゃな。まあ、今回は全力で戦った後じゃったからのう。いつもより終わるのが早いようじゃ」

閃華がそんな言葉を口にすると全員の視線が先程まで戦いを繰り広げていたシエラと琴未に集中する。二人とも荒い息をしており、すっかり戦うだけの体力が残っていないようだ。まあ、あれだけの戦いを繰り広げた後に喧嘩をしたのだから、終わるのも早いのだろう。

そして二人の戦いが終わる事を見越した閃華とラクトリーが片付けに入り、昇達もカップのお茶を空にしてからレジャーシートを降りる。そして最後までお茶菓子を楽しもうとしていたミリアもラクトリーによって弾き出されると閃華が一気にレジャーシートを片付けて、お茶会は終わりを告げた。

その頃にはすっかり疲れ果てたシエラと琴未が昇達の方へ向かって歩いて来ていた。琴未は未だに文句を言っているが、シエラは無言で歩いてきている。そして、そんな二人を迎え入れようとする昇達だが、琴未はすんなりと昇達の輪に入るがシエラだけは途中で立ち止まって、顔を伏せて手を持て余すかのように動かしている。

そんなシエラに向かって琴未が何かを言おうとするが、すぐに昇が止めた。そしてシエラに言葉を向けたかったのは琴未だけではなかったのだろう。ミリアを始め、全員が何かを言おうとしたが一番最初に口を開こうとした琴未が昇に止められてしまったものだから、全員が黙ってシエラを見守るのだった。

シエラも何度か声を出そうとするが、その度に言葉が出ずに再び黙り込むのだ。それでも昇は何も言わないし、誰かに何も言わせな

かった。そんな昇の姿を見て、シエラも覚悟を決めるかのように強く拳を握ると、やっと声に出して話し始めた。

「あ、あの、その……今回の事で、その、皆に迷惑を掛けて……ごめんなさい。その、えっと……私は、自分自身の思い込みで……その、皆に絶対に拒絶されると……思ってたから。だから、その……耐えられない、というか……拒まれると思い込んでたというか。だから……その……逃げ出して、その事が……また迷惑を掛けて……だから、本当なら許されない事なのに、でも、それなのに、こんなにも……だから、その……ありがとう、って言うの変だけど。それ以外に、言葉が見付からないから、それだけしか言えないから。他に……なんて言って良いのか……わからないから、だから、その……」

「あ――――っ！　もうっ！　イライラするっ！」

いつまでも、もどかし話を続けるシエラに耐えられなくなったのだろう。琴未がシエラの言葉を遮って思いっきり叫ぶ。その叫びにシエラも思わずビックリした表情を浮かべ、そんな琴未の後ろでは閃華が軽く笑ってるし、昇は目を瞑って和やかな顔をしていた。

それから琴未はシエラを人差し指で思いっきり指差す。

「今回の事はシエラが全面的に悪い事も皆が迷惑した事も全員が分っているから今更言う事は無いのよっ！　それに迷惑を掛けたバツとして当分の間はシエラが食事を作るという罰があるでしょ。だったらっ！　シエラがいう事は一言だけでしょっ！」

自分の言いたい事を思いっきり叫んですっきりしたのだろう。琴未はやっとシエラに向けて軽く微笑んで見せる。そんな琴未に続くかのように今度は閃華が口を開いてきた。

「まあ、今回に限っては琴未の言う事が正しいようじゃのう。それに……私個人の意見としても琴未の意見に賛成じゃ。じゃからシエラよ、難しく考える事は無いんじゃよ。この場は最も簡単で、最も望んでいる言葉を口にすれば良いのじゃ」

「そうだよ、シエラ～。今回の事でシエラの事を怒ってるのは誰も

居ないよ～」
　閃華に続いてミリアもそんな言葉をシエラに向ける。そして、そんなミリアの頭を撫でながら今度はラクトリーが口を開いてきた。
「シエラさん、確かに精霊と妖魔の問題を考えればシエラさんの不安や逃げ出したいという気持ちも分かります。ですが、今でも不安や逃げ出したいという気持ちがありますか？　確かに妖魔の問題が解決した訳ではありません。ですが、シエラさんの問題は解決したと私は理解してますよ。そして、私達も昇さん達と同じ気持ちですよ、そうですよね、マスター」
　ラクトリーがフレトに話題を振ってきたので、フレトは溜息を付くと話し始めた。
「まあ、そうかもな。それに、迷惑を掛けたという点を上げるなら、俺達の方がお前達のシエラよりも迷惑を掛けていると言えるぞ。なにしろセリスの事では大分助けてもらっている。その前にお前達と戦った時もお前達には迷惑だったろ。だから今更俺達に迷惑を掛けても、俺達は何とも思わん。なにしろ今回の事とは比べようが無いぐらい迷惑を掛けているのだからな。そうだろう、滝下昇」
　まるで厄介事を押し付けるかのように昇に話を振るフレト。そんなフレトの言葉を聞いて昇は笑みを浮かべて口を開く。
「別に僕はフレト達の事も迷惑だとは思ってないよ。僕はただ……うん、自分のわがままを通そうとして、自分が望んだ未来を築こうとしている。だから僕がシエラに帰って来て欲しい、そんな望みも僕のわがままかもしれない。でも、今は皆が同じ事を思っているのなら。僕は自分のわがままを通したい。だから……シエラ」
　昇はそう言ってシエラに向かって手を伸ばすが、シエラは差し出された手を取るのに戸惑っていた。どうやら未だにシエラはちゅうちょしているようだ。
「……でも」
　やはりシエラの中には未だに不安があるのだろう。だから素直に昇の手を取れないのだろう。そんなシエラを見かねて、いや、この

場合は痺れを切らした琴未が昇の肩に腕を置いてシエラに話しかける。
「でもじゃないわよ。だったら、その涙はなんだって言うの。というか、自分が泣いてる事にも気付かないなんてマヌケ過ぎるわよ」
「えっ？」
琴未に言われてシエラは自分の目に手を当てると、そこには確かに涙で溢れており、頬には涙が流れ続けている事を始めて知った。
だからシエラは慌てて涙を拭うが、シエラの涙は一向に止まる気配は無かった。そんなシエラに琴未は更に言葉を続ける。
「いい加減に素直になりなさいよね。あ～、それとも昇が私に取られたから悔し涙なの」
「……」
琴未の言葉に黙り込むシエラ。そんなシエラが顔を伏せると思いっきり涙を拭いて、やっと流れ続けた涙を止めると琴未に顔を向ける。
「もしかしたら……天変地異が起こったら、そんな事がありえるかもしれない」
「はいはい、さっきまで泣いてたやつに言われても全然悔しくありませんよ～」
そんな琴未の言葉を聞いて思わず笑い出す昇。そんな昇の笑い声に釣られてミリアまでも笑い出し、最後は全員が笑い声を上げた。
もちろん、シエラを含めて。
そんな笑い声が止むと、再び視線がシエラに集まる。そしてシエラは今まで誰にも見せた事が無い。いや、今までは出来なかった。最上級の笑顔で皆に向かって一言だけ告げる。
「ただいま」
そんなシエラの言葉を聞いて全員が一斉に同じ言葉を口にした。
『おかえり』

第百二十二話　ただいま（後書き）

え～っと、そんな訳で随分とお待たせした更新なのですが……いやね、ちょっとしたプライベートな事で前回のエレメを上げてからというもの……死んでました。特に十月下旬から一一月上旬に掛けては酷い物でしてね。小説を書くどころか、ＰＣの電源すら入れられなかったのですよ……これがっ！！！

まあ、そんな訳でして、更新が遅れましたが、これからは頑張って行こうかと思います。……えっ、その言い訳には飽きた。……そがん事を言わんといてくだせえっ！！！　だって、だって……これしか言い訳が思いつかないんだもん（ハート）

……えっと、まあ、そんな訳でして、今回はかなり更新期間が空いてしまいました。次からは頑張って行こうと思っております。……いや、本当だよ。本当に頑張ろうとしてるよ……ただ……気持ちと結果が追い付いてないだけですよ。

そんな訳で……気持ちでは頑張ろうとしてるのだから、そこだけは認めてくださいなっ！！！　えっ、何？　その疑いの眼差しは……。いや、気持ちはあるから、そこはあるから、だから信じて――――っ！

さてさて……毎度の事ですが、言い訳と戯言はここいら辺にしときましょうか。

えっと、そんな訳で白キ翼編も残り数話となりました。まあ、たぶん……後二話ぐらいかな～。それぐらいで白キ翼編も終わりとなります。

……毎度の事ながら、今回もかなりの量になりましたね～。まあ、今回はシエラの伏線を一気に使いましたからね～。そう言った意味では、量が増してもしかたないでしょう。というか、一応シエラがこの作品ではメインヒロインです。……だよね？

えっと、まあ、当初の設定はそうだったんですよ……今ではすっ

かり影が薄くなりましたが、作成開始当初はそういう設定だったんです。……まあ、過去の事はこれぐらいにして未来の事を話しましょう。

そんな訳ですでに次のプロットが上がっているので、次に関しては心配ないっ！！！　私がっ！！！　まあ、そんな訳で少しだけ次回に関して宣伝すると……昇が地獄を見ます。……これって……毎度の事やん（笑）

まあ、そんな訳で次回ぐらいの後書きにでも、なんで地獄になるかをほんの少しだけ宣伝しようかと思っております。

さてさて、長くなってきたので、そろそろ終わりにしますね。……というか、最近の後書きは少しはっちゃけ度が少なくなってきてるな。よしっ！！！　どっかで巫女成分を補充してきて、次回の後書きは少しでもはっちゃけるようにしますっ！！！　という事で締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、思い返してみれば、最近では巫女成分を補充するより、プリキュアにハマっていた葵夢幻でした。

第百二十三話　静かな夜

「さて、それでは俺達はここで別れるとしよう」
ローシェンナ達との戦いを終えた昇達は自宅への帰路へと付いていた。今ではすっかりいつも通りの服装で、いつも通りに帰路に付いていたのだが、フレトの自宅が昇の家と近い事も有り、フレトは丁度分かれ道で、そんな言葉を口にした。
そんなフレトに昇は感謝を瞳に出しながら別れを口にする。
「うん、今日はありがとう。フレト達のおかげで大分助かったよ」
感謝の言葉を口にする昇に対してフレトは軽く笑ってみせる。
「ふっ、たかがこの程度の事で感謝しなくても良い。セリスの事ではお前に大分助けてもらっているんだからな」
フレトらしい言葉の切り替えしに昇は苦笑いを見せた。まあ、フレトらしいといえばフレトらしい言葉と言えるからだ。素直に感謝の言葉を受け取らない部分なんてフレトらしいと言えるだろう。
それでも昇は苦笑いを消すと言葉を口にする。
「それでも、ありがとうって言葉を伝えるだけでも、僕は充分に必要な事だと思うよ。だから……ありがとう」
そんな昇の言葉を聞いてフレトはすぐに振り返って昇に背を向けるのだった。
「……そこまで言うなら勝手に言ってろ。……あ～、そうだな」
フレトは何かを思い出しかのように再び昇と向き合うと、すぐに昇の首に手を回してお互いに顔を近づける状態になる。そこからフレトは静かに昇に向かって話し掛けるのだった。
「こんな事は俺から言えたワケでは無いんだがな。シエラの事だが、まだ全部終わったとは言えないだろう」
どうやらシエラが未だに少しだけ、ぎこちない仕草をしている事にフレトも気付いていたようだ。フレトですら気付くほどだ、そんな事に昇が気付かない訳が無かった。だからこそ昇は笑みを浮かべ

ると静かに口を開く。
「大丈夫だよ、今は全員が心の整理が付いて無い状態だから……たぶん、明日になればいつも通りになってるよ」
そんな昇の言葉を聞いてフレトは乱暴に昇から離れると呆れた顔を向けてきた。
「随分と気楽だな」
「やるべき事は全部やったからね。後は自分達の絆を信じるだけだよ」
真顔ではっきりとその言葉を口にした昇を真剣な眼差しで見詰めるフレト。それからフレトは軽く笑みを浮かべ、昇も釣られるように笑みを浮かべるのだった。
「そうか、どうやら余計な心配だったようだな」
「でも……心配してくれて、ありがとう」
「気にするな、俺も今回の件に関わった一人だからな。結末を心配するのは当然の事だ」
まるで昇への気遣いが当たり前のような言葉を口にするフレトに対して昇は再び苦笑する。フレトの言葉を素直に感謝として受け取って良いのか、それとも少しだけ皮肉を入れた言葉として受け取って良いのか分からないからだ。どちらにしても昇としては反応に困るフレトの言葉だった。
そんな昇をフレトは軽く鼻で笑うと自分達の精霊に帰ると告げて昇達に背を向けるのだった。
「それじゃあな」
「うん、また明日」
その言葉を最後に昇達とフレト達はそれぞれの帰路へと帰って行った。

「ただいま～」
「ご飯～、ご飯～」

昇達が自宅に帰り付くと真っ先に玄関を開ける琴未、その後にミリアは夕食を待ちきれない感じで急いで玄関へと入って行き、そんなミリアを閃華は落ち着かせながら玄関を潜る。そして昇も玄関に入ったのだが、昇はすぐに玄関の前でちゅうちょしているシエラに気が付いた。

どうやらシエラは勝手に居なくなった事で綾香に心配を掛けた事、自分の所為で迷惑を掛けた事を思うと素直に玄関に入る事も出来ないようだ。そんなシエラに向かって昇は静かに手を伸ばす。

「さっきも言ったけど僕達は家族だ。だからシエラ、何も怖がる必要は無いんだよ」

「で……でも」

「大丈夫、どんな事が起こっても、それを許し合えるのが家族なんだから。だからシエラ、何も心配は要らないよ」

「……うん」

昇が伸ばした手を静かに取るシエラ。それから昇にエスコートされる形でシエラは玄関へと足を踏み入れた。そしてシエラは決して大きいとは言えないけど、何故か懐かしいと思ってしまう玄関を見渡した。

帰って……来た。私は……また、この場所に。そんな事を考えながら感傷に浸るシエラ。自分の所為で多大な迷惑を掛けて、心配までさせてしまった家族。それでも迎えに来てくれた家族。そして再び、その家族が待っている場所に帰ってきた。全てに決着を付けて、全ての結末を迎えるために、シエラは再びこの場所に帰ってきた事を実感していた。

いつまでもシエラが玄関で感傷に浸っていたからだろう。いつの間にか琴未が昇とシエラを迎えに玄関まで戻って来た。

「いつまで、そこに居るのよ。早く入って来なさいよね。こっちだってさっきの戦闘で疲れてるし、お腹だって空いてるんだから」

琴未の言葉に昇はすぐに靴を脱いで家に上がり、シエラも戸惑いながらも家に上がるのだった。そして琴未が二人の背中を押してリ

ビングへ急がせる。シエラとしては綾香にどんな言葉を掛けて良いのか迷っているだけに心の準備が出来ていなかった。それだけにシエラは背中を押してくる琴未を払い除けようとするが、昇がそれを止めてしまったのでシエラは琴未に押される形で一気にリビングまで来てしまった。

……えっ？　リビングに付いて驚くシエラ。そこには既に人数分の夕食が作ってあったからだ。もちろん、シエラの分を含めてである。

何も言わずに勝手に出て行って、何も言わずに勝手に帰ってきたのである。シエラとしては、まさか自分の分まで用意してあるとは思っていなかったのだろう。

そして琴未はというとシエラをリビングに押し込んだ後、さっさと自分の席に戻って行ってしまった。リビングのテーブルにはすでにミリアと閃華が席に付いており、夕食を前に暴走しそうなミリアを閃華は、ミリアで遊びながら待たせるのであった。

どうやら夕食は綾香が作ってくれたようだ。なにしろ琴未もさっきまで戦闘をしていたのだから、夕食を作る時間なんてありはしない。そうなると綾香がシエラが戻って来る事を想定して、夕食を作った事になる。

そんな事をシエラが考えていると綾香がキッチンから出てきて、静かにシエラの前に立つのだった。突然の事でシエラは綾香を見詰めるものの、言葉が上手く出てこない。綾香はそんなシエラに微笑を向けると一言だけ告げる。

「おかえりなさい、シエラちゃん」

その瞬間、シエラの中で何かが弾けたような感触があった。だからこそ、シエラは自然とその言葉を口にする事が出来た。

「ただいま」

シエラの言葉を聞いて綾香がシエラの頭を撫でてくる。そんな光景を昇は隣で優しく見守っていた……のだが、まさか自分まで飛び火するとは思っていなかったのだろう。綾香は充分にシエラの頭を

撫でてやると、今度は昇のおでこを思いっきり殴るのだった。
突然の事で昇はそのまま倒れ掛かるが、その前に壁に当たり、なんとか倒れる事は無かったが、昇は驚きの眼差しで自分の母親を見詰めていた。そして当の綾香はというと、昇の姿を見て思いっきり溜息を付いた。
「まったく、女の子を泣かせるどころか家出までさせるなんて。こんな甲斐性無しに育てた覚えは無いって言うのに、なんなの、この体たらくは。やっぱりもうちょっと厳しく育てるべきだったわね」
勝手な事を言ってくる綾香に昇は傷む額を押さえながら思う。
いやいや、母さん。今回の事は僕が原因じゃないし、母さんは充分過ぎるほど厳しく僕を育てたじゃないかっ！　まあ、そのおかげで、こうやって争奪戦を戦えてるのかもしれないけど、今回の事でそこまで責められる要因は僕には無いと思うよ。昇がそんな事を考えていると、綾香はまるで昇の心を読んだかのような言葉を返してきた。
「何が原因であっても男の子なら絶対に女の子を泣かせちゃいけないし、家出なんて持ってのほか、だから今回の事はシエラちゃんの事をしっかりと見ていなかった昇が悪い。分かったっ！　はい、それで決定っ！」
……理不尽だ――――――――っ！　思わずそんな事を叫びたくなった昇。だが叫んでしまえば更なる地獄が待っている事は昇は今まで生きてきた経験上で分っている。だからこそ、ここは素直に綾香の前から逃げようとする。
そんな昇を逃がさないように、綾香はどこに持っていたのか、いつの間にかフライパンで昇の逃走経路を塞ぐが、それと同時に我慢の限界が来たのだろう。ミリアがご飯と騒ぎ出したので、綾香の態度は一変、シエラの手を優しく取るとシエラをいつもの席に着かせた。
そんな光景を見て昇はやっと一安心したかのように安堵の息を付いた。そして昇もすぐに自分の席に付くと、いつも通りの夕食が始

まるのであった。

夕食後、シエラを最初に順番にお風呂へと入って行った。もちろん、昇が一番最後である。そんな昇がリビングへと戻ると、そこには誰も居なかった。どうやら皆、今日の戦闘で全力を出し尽くして疲れているようだ。だから今日はリビングが静まり返っており、昇も今日はすぐにでも寝たい気分だった。

だからだろう、人気の無いリビングでもまったく気にする事無く。昇はリビングの電灯を消すと自分の部屋に戻って行った。

昇は自分の部屋に戻ると電灯を付ける事無く、すぐにベットへと倒れ込み、布団をかぶるのだが、昇は自分の背中に誰かが密着しているような温もりを感じると眠い目をしながらも、寝返りを打って温もりの正体を確かめる。

「こうやって一緒の布団で寝るのも二回目」

「あ～、言われてみれば、そうだったね。まあ、最初は僕も記憶が無くて、いつの間にかシエラが布団に潜り込んでただけどね」

……へっ？　このまま寝ようと思っていたからすっかり思考回路が停止していたのだろう。昇が今の状況を理解するのに、かなりの時間を要する事になった。そして昇は恐る恐る現状を確かめる。

昇はすぐに布団をめくると、そこには寝巻き姿のシエラが居た。その事実に昇の思考が再び停止する。その間にすでに布団の中に身を隠す必要が無くなったシエラが布団から頭を出してきて、昇と頭を並べる。それからシエラはゆっくりと昇に抱き付くように、昇の首に手を回すのであった。

密着してきた衝撃で昇の思考回路が再び回りだしたのだろう。昇は抱き付いてきたシエラの温もりを感じながら思考を巡らす。

え、えっと、何でシエラが僕のベットに？　というか、この状況は何？　それよりも僕はどうすれば良いんですか？　誰か教えてく

ださいっ！　シエラの大胆な行動にすっかり混乱する昇。そんな昇の耳にシエラは口を近づけると静かに言葉を口にするのだった。

「昇、一年ぐらい前かな？　その時の事を覚えてる？」

……へっ、一年前？　突然の質問に昇は更に混乱する。それでもシエラの質問に答えようと一年ぐらい前の記憶を呼び起こそうとするが、どうしても睡魔が記憶の回帰を邪魔する。それでも思い出そうとする昇だが、どうしても思い出せなかった。昇が諦めたように息を吐くと、シエラは再び言葉を口にする。

「昇が琴未と帰っている時に昇達は一匹の死んだ犬を見つけた。その犬は餓死したようだった。それはしかたない、なにしろその犬は突然変異なのか、とても可愛いと思えないほど不細工な犬だったのだから。だから誰もその犬に同情を向けなかった。だから、その犬は誰からも施しを受ける事無く……餓死した」

「……あぁ、あの時の事」

シエラの言葉を聞いて昇もやっと、その出来事を思い出したようだ。けれども一年ぐらい前の記憶で、内容もどうって事の無い物だと言えるだろう。けれども昇はその犬について特別な感情を持っていたからこそ、シエラの話を聞いて思い出すのに時間が掛からなかった。

「えっと、その話と今の状況がどういう意味を指しているのでしょうか？」

シエラの話が理解出来たものの、シエラが突然そんな話をしてきたかまでは理解出来ていなかった。そんな昇にシエラはゆっくりと語りかける。

「あの時は争奪戦が始まる前だった。けど……精霊世界と人間世界は隣接している。だから精霊は人間に見えなくても、人間世界の出来事を見る事が出来る。つまり人間には見えないけど、そこに存在しているのと同じ。だから……私もその時の出来事を見ていた。そして、その時に昇が言った言葉。それを聞いたから私は昇を契約者に選んだ」

「つまり……その時の僕が言った言葉がシエラに僕を契約者にしようと決断させる言葉だったと言うわけ？」
「そう……昇は……その時の言葉を覚えてる？」
そんなシエラの問い掛けに昇は記憶を辿るが、どうしてもシエラが昇を契約者にしようとするような言葉を言った覚えがなかった。もしかしたら、すっかり忘れているのかもしれないが、どちらにしろ昇にはシエラが昇を契約者として選んだ理由がそこにあり、その決断をさせた言葉を思い出す事は出来なかった。
それでも何とかして思い出そうとする昇を見て、シエラは軽く笑う。やっぱり昇が自分の事で必死になって思い出そうとしてくれる姿が嬉しく、そして楽しかったからシエラは自然と軽く笑ったのだ。
そんなシエラの顔が笑みから微笑みに変わるとゆっくりとその時の言葉を口にした。
「その時に昇はこう言った。『犬は犬なのに変わりないのに、それなのに少し違うからと言って虐げられるのは間違ってるよ。生まれ方が少しだけ変わってただけじゃないか、それなのに……誰からも見捨てられるなんて間違ってるよ』って昇は言った。だから私は昇を契約者として選んだ」
「……えっと、そんな事を言ったっけ？」
どうやら昇はそこまで詳細に覚えている訳では無いようだ。だがシエラは、その言葉を一字一句間違い無く覚えていた。なにしろ、その言葉があったからこそ、シエラは昇を契約者に選んだのだから。
未だに首を傾げる昇に対してシエラは微笑を絶やさないまま話を続けてきた。
「その言葉を聞いた時に……私は昇に対して興味と期待を抱いた」
「興味と期待？」
「そう、生まれ方が変わっていたのは私も同じ、そして私がその事で精霊から差別されている事も同じ。だから昇に対して興味を覚えた。そんな考えを持った人間が居るとは思っていなかったから。そして……それと同時に期待も生まれた。昇なら……妖魔である私を

受け入れてくれるんじゃないかという期待。だから……私は昇を契約者として選んだ。ずっと一緒に居られると期待した。妖魔である……私と」

「……シエラ」

昇はやっとシエラの本心を聞いたと確信した。今までは自分の事を一切話さなかったシエラだが、今では自ら妖魔である事を打ち明けて、昇が妖魔であっても受け入れてくれると期待していた事も打ち明けてくれた。だからシエラの言葉は昇の胸に深く突き刺さるのと同時にシエラの心が開くのをしっかりと感じ取る事が出来た。

そんなシエラを昇は優しく抱きしめる。

「そっか……でも、シエラは怖かったんでしょ？」

「うん」

昇の質問に即答するシエラ。どうやら昇の言った事は的を射ていたようだ。そんな昇が同じ布団の中に居るシエラの頭を優しく撫でる。

「シエラはずっと怖かったから自分から妖魔である事実を僕達に話す事が出来なかった。そして、あのアレッタさんがシエラの正体をバラそうとしたから必死になって止めた。僕達との関係が壊れるのが怖かったから、だからあの時は僕達を拒絶する事で僕達との関係を保とうとしてた。そうしないと全てを失いそうで怖かったから……そうなのかな？」

最後は疑問系で締めくくる昇の言葉。そんな昇の言葉を聞いてシエラは昇の胸に顔を埋めると溢れ出る涙を昇に見せないように頷いた。

そんなシエラを優しく包み込むように抱きしめる昇。だからこそ、昇はシエラに言葉を掛ける。

「でも……もう全部終わったよ。シエラが妖魔であっても僕達の関係に何も変わりは無い。いつまでも、今までどおりで良いんだよ。だからもう大丈夫、もう怖がらなくても大丈夫。だって……僕達はいつまでもシエラの傍に居るから。だからシエラ、もう孤独を怖が

らなくても大丈夫だよ」
「うん……うん、ありがとう昇」
それからしばらくシエラは昇の胸で泣き続けた。昇もそんなシエラを優しく受け止めてあげるのだった。
そしてシエラが泣き止むと、シエラは再び昇に顔を向けて未だに少し赤い瞳で昇の顔を見詰めてきた。そんなシエラが少し嬉しそうに話し始める。
「こうやって昇に抱きしめてもらってると……受け入れてくれた事が実感できる。だから……アレッタの事も今ではしっかりと理解できる」
「アレッタさんって、シエラが戦ってた？」
「そう……今回では敵だったけど。今では……そう、私はアレッタの事を親友だと思い始めてる。それぐらい……私はアレッタの事が理解できたし……アレッタも私を受け入れてた事を知った」
「でも、最初っからアレッタさんは僕達に敵意を剥き出しだと思ったけど」
「それにもアレッタらしい理由がある。だから昇、私とアレッタの事も……聞いてくれる？」
「うん、もちろん」
それからシエラはアレッタの心境がどういうものだったかを最初から話し始めた。アレッタの目的、心境、昇達との戦いが意味する物。それら全てを昇に話すシエラだった。
以前のシエラなら、ここまでアレッタ事を理解出来なかっただろう。だが、あの戦いがあったからこそ、あそこで全力で戦ったからこそ、シエラとアレッタはお互いに理解し合えたのではないだろうか。昇はシエラの話を聞き終えるとそんな風に思った。
そんな昇がシエラの話を聞いて更にこんな事を思った。もし……言葉が無くても相手の事を理解しあえるのなら、どんなに良い事なんだろうな。けど、人間も精霊も同じなんだね。言葉だけはお互いに理解しあえない。本当の気持ちを伝えるのに言葉は必要だけど、

本当の意思を伝えるのには言葉だけは不十分なのかもしれない。それは僕達も同じかな、言葉だけでは表せない絆があったからこそ、今回の事は収拾が付いた。もし……僕達の絆がシエラを受け入れるのに不十分なら……こんな良い結末は迎えられなかったかもしれない。

そんな事を思う昇だが、それは昇の慢心と言えるだろう。なにしろ昇は言葉という物を充分に使いこなせるほど言葉という物に精通していない。そんな昇が言葉だけでは不十分と言えるわけが無いのだ。もしかしたら、昇の知らない言葉にお互いの意思を伝え合う言葉があるかもしれない。だから昇が言葉だけでは不十分と思うのは慢心と言えるだろう。

だが、その言葉を充分に使える人間が何人居ると聞かれたら、もしかしたら誰も居ないのではないだろうか。それほどまでに言葉というのは出現と消去を繰り返しており、常に改変されている。そんな無数の言葉の中には誰にも知られていない言葉もあるかもしれない。

だから、もしかしたら数万分の一の確立でシエラとアレッタがお互いの意思を伝え合う事が出来る言葉があったかもしれない。それでも、二人ともお互いの意思を伝え合う事に戦いが必要だったのは、その手段でしかお互いの意思を伝え合う方法が知らなかったと言えるだろう。

そうなると、もしかしたらの話だが、数十万分の一の確立でシエラとアレッタは戦う事無く、アレッタが素直にシエラの元へ来て、昇達の仲間になっていたかもしれない。少なくとも、そういう未来もあったかもしれない、という話である。

何にしても、今の昇達では、この結末を向かえるだけで精一杯だっただろう。シエラを連れ戻す事。それが出来ただけでも昇達にとっては幸福な結末と言えるだろう。確かにアレッタとの別れは悲しい事かもしれない。けれども、あの別れがあったからこそシエラはこの場所へ、昇がいる場所へ帰る勇気を貰ったのだ。それだけでも、

あの戦いに充分な意味があったと言えるだろう。
だから昇もシエラも今回の戦いが無駄だったとは思っていない。むしろお互いに理解を深めるために必要な戦いではなかったのかと思い始めているほどだ。それほどまでに今回の戦いは昇達に大きな影響を与えたようだ。
そんな影響を自覚しているのか、していないのか分からないが昇はこんな事を思った。
アレッタさんも不器用なのかな？　う～ん、不器用とはちょっと違うような気がする。アレッタさんは……そう、意地悪なのかもしれない。だから素直に自分の意思をシエラに伝えようとは思わなかった。逆にシエラを仲間にしてから自分の意思を伝える事でシエラを驚かそうとしていたのかもしれない。そう考えればアレッタさんの行動にもしっかりとした理由が付くかな？　まあ、何にしてもシエラとアレッタさんの仲が修復されたのは良いことなんだろうね。それだけじゃなく、シエラと僕達の関係も今回の戦いで更に深まったと思っても良いかもしれない。だって……こうしてシエラが帰って来てくれたのだから。
そう思うとこうしている事が昇にはとても幸福な事ではないかと思い。シエラにも今の気持ちを聞いてみようと思ったけど止めた。なにしろシエラは……昇の腕に抱かれて静かに寝息を立てていたのだから。
そんなシエラを見て昇はシエラの頭を優しく数回撫でると、そのままシエラを抱きしめるように昇も睡魔に身を任せて意識を沈めて行くのだった。

「なるほどね～、今回はそんな事があったんだ」
綾香はビールを片手に、空いている片手で閃華が持っている杯（さかずき）に日本酒を注ぐ。どうやら閃華は綾香の晩酌に付き合うのと同時に今回の出来事を報告していたようだ。それでも酒を飲みながらである。

閃華は未成年の容姿をしているとはいえ精霊である、すでに数百年は生きているから何も問題無いと開き直っている。まあ、精霊に人間の法律を当てはめようとする時点で間違っていると言えるだろう。なにしろ種族どころか体の構造自体が違うのだから。だから閃華が酒を飲んでいても、まったく不思議でも無いし、閃華は今までも酒をたしなんでいる。

だから、こうして綾香と一緒に晩酌に付き合うのも珍しい事では無かった。

そんな閃華が杯に注がれた酒を一気にあおると、一息付いて話を続けてきた。

「まあ、これでシエラも心の整理が付いたじゃろう。じゃから今までのように私達に対して一線を引くような態度は見せんじゃろうな。それどころか開き直って、妖魔の力を充分に出してくるじゃろうな」

「シエラちゃんにしてみれば、もう妖魔である事を隠す必要なんて無いもんね。それにしても今回は昇も閃華ちゃんもちょっと鈍かったわね」

「そう言われると耳が痛いものじゃな」

確かに綾香が言った通りである。昇も閃華もシエラの異変を感じていた。そしてそれが、何かしらの前兆では無いかと心配までしていた。それなのに、シエラの家出をみすみす許してしまい。自分達の絆が崩れそうになるまで発展してしまったのである。

これらはシエラの異変に気付いていた昇と閃華が、早急にシエラについて手を打っていれば、こんな事にはならなかっただろう。少なくともシエラが妖魔だと分かった時点で手を打って置けばシエラが家出をするのを防ぐ事が出来ただろう。それでも昇も閃華もシエラが妖魔だと分ってもすぐには動かなかった。これは二人の失態とも言えるだろう。だから今回の事では閃華も反省すべき点があると言えるだろう。

それでも昇のおかげで今回も無事に丸く収まってくれた。それだけでも喜ぶべきだろうと閃華は自らの手で杯に酒を注ぐ。そんな閃

華の杯に注がれた酒を半分ほど飲んでから閃華は杯を置いて、傍にあるつまみに手を伸ばす。そんな閃華を見ながら綾香もビールを軽く飲むと話を続けてきた。

「それにしても……難しい問題よね」

「妖魔の事じゃろうか？」

「そうね、確かにシエラちゃんは昇達に受け入れてもらったけど、他に居る妖魔達を考えると、とても今回の事で全てが終わったとは思えないわね」

「ふむ、それはもっともじゃな」

確かに綾香の言うとおりである。妖魔はシエラ一人だけでは無い。精霊世界には自分が用まである事を隠している妖魔が他に数百人ぐらい居てもおかしくない。それほどまでに妖魔を差別する習慣は精霊には常識となっているし、だからこそ妖魔は自分の正体を隠そうとする習慣が生まれたのだ。

その中でもシエラが契約者のみならず精霊にも受け入れられた事は例外とも言える事であり、それだけで妖魔が未だに差別されている事には変わりないのだ。

そんな現状を考えながら閃華は杯を一気に空けると綾香が酌をしにビンを出してきたので、閃華は素直に杯を出して綾香からの酌を受ける。そうして杯に注がれた酒を軽く飲む閃華はこんな事を言い出してきた。

「確かに私達の事に関しては丸く収まったものじゃが……一歩間違えれば私達はシエラを失っていたかもしれんのう。まさか妖魔の事を知っても昇が自然と妖魔を受け入れるとは思っておらんかったからのう」

そんな閃華の言葉を聞いて綾香は少しだけ誇らしげに言い始める。

「それは、私が育てた大事な一人息子ですから。シエラちゃんを見捨てるような真似なんてしないわよ」

随分と酔いが回っているのか、綾香にしては珍しく昇の事を誇らしく褒めた。そんな綾香の態度に興味をそそられた閃華が綾香に尋

ねる。
「ほう、では今回の一件では奥方の教育が有効的に働いたというわけじゃな」
「まあ、そうでしょうね」
あっさりと肯定する綾香。そんな綾香を見て閃華は軽く笑うのであった。まさかあの綾香がここまで簡単に自分の功を誇るとは思ってもいなかったからだ。けれども綾香は閃華の笑いがバカにしたようも取れたのだろう。だからこそ、閃華にも昇に教えた事を説教するかのように言い始める。
「大体、世間の常識という物が絶対的に正しいとは限らないのよ。むしろ世間の常識が人道的に間違っている方が多いのよ。簡単な例を上げれば戦争でしょうね。戦争では人の命より大事な物があるという名目で人殺しを容認している。それは人道的に見れば間違ってると言えるでしょ。けれども、戦争をやってる人達にとっては人を殺す事は常識であり、殺さないという事は逆に自分が殺される事だから殺す。そういう認識が常識となり、世間にまんえんする。だから世間の常識が絶対的に正しいとは言いきれないでしょ」
説教にも似た綾香の言葉を閃華は酒を進めながら聞いていた。そして、綾香の説教が終わるとこんな言葉を返した。
「まあ、それは極端な例とも言えるじゃろうが、そうかもしれんのう。自分達が教えられた常識、あるいは自分から覚えた常識、他の者が持っているから持つようになった常識。その全てが絶対的に正しいと誰もが言えんじゃろうな……じゃが」
閃華はそこまで言うと杯に残っている酒を一気に空にする、その途端に綾香が再び酌をしてきたので杯が再び酒で満たされると閃華は言葉を続けた。
「人間も精霊も一度身に付けた常識を変える事が出来ないのが現状じゃな。それは誰しも自分が持っている常識が正しいと思っているからじゃ。いや、そう思わないと物事の判別が出来んからじゃな。何かを判別する時には常識、つまり自分の物差しを使う場合が多い。

最も法律やルールで決められた事に従う場合もあるじゃろうな。じゃが、その法律もルールも絶対的に正しいと誰が言えるじゃろ。誰も言えないからこそ、誰しもが自分の常識で物事を判別するしかないんじゃないじゃろうか」

そんな閃華の言葉を聞いて綾香は少しだけ考えるとビールを一気にあおって缶を空にすると、次のビール缶を開けるのだった。そして少しだけビールを飲むと閃華との会話を続けてきた。

「だからこそよ、私は昇に自分だけの物差しで物事を見るな、相手の物差しも使って状況を判断しろと教えてきたのよ。まあ、最も昇はそんな自覚は無いだろうけど、私は自然とそういう考えと判断が出来るように教えてきたつもりよ。自分だけの常識に囚われないように、他人の考えや意思を理解できるように。そのための方法を叩き込んだのよ」

「くっくっくっ、じゃから昇は自分自身の特徴を理解できていないわけじゃな。昇の常識は私が持っている常識に比べれば、もの凄く広い。じゃからこそ、私達が戸惑うような妖魔の問題であっても昇はあっさりとシエラを受け入れたんじゃろうな」

「けど……皆が私や昇のように同じような広い常識を持っているわけじゃない」

「それはそうじゃな。じゃからこそ、シエラは受け入れられても妖魔の問題が残っているわけじゃな」

二人とも、そこまで話すとお互いの手にある酒を一気に喉に流し込んだ。そしてお互いに一息付くと今度は綾香から口を開いてきた。

「まあ、妖魔の問題は精霊精界の問題だから私が何かを言う資格は無いんだけどね。だから、そこは精霊達に期待するとしましょう」

「くっくっくっ、随分と言ってくれるものじゃのう。そうじゃな……私も今回の争奪戦が終わったらシエラの事を教訓に、この問題に取り掛かるのも面白いかもしれんのう。案外、話してみれば共感してくれる者が多いかもしれんからのう」

「そうね、何にしても妖魔の問題を解決するには誰かが皆に対して

訴えない限りは……何も始まらない。そこは閃華ちゃんの活躍に期待するとしましょうか」

「まあ、どこまで出来るか分からんがのう。やってみるだけの価値はあるじゃろ」

「それじゃあ、改めて閃華ちゃんの奮闘を期待して乾杯」

「くっくっくっ、奥方もしかたないものじゃのう」

そう言いながらも閃華は酒の入った杯と綾香のビール缶をお互いに軽くぶつけて乾杯をするのだった。それからお互いに酒を流し込む。そうなると当然のように閃華が手にしている杯の酒が先に無くなるわけだから、閃華は自らの手で酒を再び杯に流し込む。そんな光景を見ていた綾香がこんな事を言いだしてきた。

「そういえば……閃華ちゃんって必ず清酒か焼酎よね。ビールとかワインは飲まないの？」

そんな、どうでも良い質問に閃華は軽く笑いながら答えた。

「くっくっくっ、どうも炭酸が入っている物や果実酒は苦手での。それに私は長い間、この日本や唐（とう）の国に居たからのう。じゃから、その手の酒は馴染みが無くて苦手なんじゃよ。じゃから馴染みのある清酒や焼酎、どぶろくなんかを好んで飲んでいる訳じゃ」

「へぇ～、閃華ちゃんは日本や中国に居た時期が長いんだね」

「いや、正確に言うと今で言う中国で生まれたんじゃが、それから貿易の盛んだった日本の事を耳にしてのう。それで日本に来たワケじゃが。前にも話した通りに、私が以前に契約した者は大罪を犯した。じゃから私も五百年の永い眠りに付いていた訳じゃから。他の国に行く機会が無かった訳じゃよ」

「なるほど、閃華ちゃんも長い間生きてきたけど、他の国に行く切っ掛けが無かったんだね」

「まあ、そういう事じゃな」

それから、どうでも良い楽しい話となり、閃華は綾香の晩酌に付き合い、夜が更けるまで綾香の晩酌に付き合うのだった。

そんな閃華が綾香から解放されて自分の部屋に向かうために階段を登りきる時だった。閃華は昇の部屋に背中を預けるようにたたずむ琴未の姿を目にした。

ドアの横に立つ琴未は顔を伏せており、その表情も悲しげで、それでも、どうしてもやりきれない気持ちを抑えきれないといった複雑な表情をしていた。そんな琴未の姿を見て閃華は溜息を付くと琴未に声を掛ける。

「やれやれ、やっぱり気持ちの整理が出来ておらんようじゃな、琴未」

「……閃華」

声を掛けられてゆっくりと閃華の方に顔を上げる琴未。それからすぐに琴未は閃華から離れるように鼻を塞いだ。

「って、閃華、かなり酒臭いわよ」

「ふむ、今夜は奥方と大分深酒をしてしまったようじゃな。まあ、直に慣れるじゃろう」

「いや、そういう問題じゃないと思うけど」

どうやら琴未は酒臭い事を問題にしているようだが、閃華がまったくそんな事を気にしないので呆れた表情になっている。

それから閃華は昇の部屋を指差すと、まるで琴未の心を読んだかのように言葉を口にした。

「ふむ、いつもの状態なら踏み込んで行くところじゃろうが、今のシエラには昇が必要じゃから琴未としてはシエラの邪魔をする気にはなれないという訳じゃな」

「……」

閃華の言葉を聞いて琴未は閃華から顔を背けた。どうやら図星のようだ。

琴未は確かにシエラと昇が今は一緒に部屋に居る事を確信している。だからと言って、いつものように踏み込む気にはなれなかった。なにしろ今のシエラは心に深い傷を負っている状態だ。そして、そ

の傷を治してあげられるのは昇しか居ない。それが分っているからこそ、琴未は昇の部屋に踏み込むことが出来ずに、ただ昇の部屋を前にして立っていただけである。

琴未としては、ここで踏み込んでシエラの邪魔をしてやりたいというのが本心だろう。そうすればシエラは再び傷つき、もう二度と戻って来ないかもしれない。けど、そんな事をすれば昇が悲しむ事になる。琴未としては昇がシエラの事だけを気に掛けるのは、もう嫌なのだ。

だからこそ、今だけはと自分に言い聞かせて、今はただ昇の部屋の前に立っていただけでなのだ。

そんな琴未を見て閃華は溜息を付くと、琴未の肩に手を回して頭を優しく撫でてやる。

「まったく、優しすぎるのも難点じゃな。じゃがな琴未よ、琴未がそのような優しさを持っているからこそ、昇は琴未の事を嫌いになれずに未だに迷っているんじゃぞ。そんな琴未の良さまで消してシエラと決着を付けてもしかたないじゃろう。そんな事をすれば二人とも傷つくだけで何も進展はしない。それに今回はシエラがかなり傷ついているからのう。今回だけはシエラに華を持たせてやるんじゃな」

「そんな事……分ってるわよ。だから……こうしてるんじゃない」

そんな琴未の言葉を聞いて閃華は再び溜息を付いた。この優しさこそが琴未の美点なのだが、今回に限ってはその美点が琴未の行動を阻害し、琴未に迷いを生じさせている。琴未も分っていないのだ。この場合にどうすれば良いのかを。琴未もそれが分かるまでの経験を積んでいる訳ではない。だからこうして昇の部屋の前に立つ事しか琴未には出来なかったのだ。

そんな琴未の心境を悟った閃華は静かに杯を差し出す。それを見て琴未は閃華に向かって呆れた視線と言葉を向ける。

「私はまだ未成年よ」

そんな琴未の言葉に閃華は笑いながら答えてきた。

「くっくっくっ、まあ、少しぐらいなら良いじゃろう。それに……こんな時は酔ってしまって、すぐに寝た方が良いものじゃよ」
「そうとは思えないのよね」
「なら試してみるんじゃな。たまには羽目を外すぐらいが丁度良いものじゃよ。それに……」
「それに……何よ？」
「琴未は負けるつもりは無いんじゃろ」
「当たり前でしょ」
はっきりと断言すると琴未は閃華から顔を背けて自分の意思をしっかりと示す。顔を逸らしたのは少しだけ恥かしさがあったからだろう。そんな琴未を見て閃華は静かに話を続ける。
「なら、明日からはいつものように勝負をすれば良い。まだシエラとの決着は付いておらんのじゃろ。それに琴未としてもシエラとは決着を付けたいのじゃろ」
「当たり前でしょ」
琴未としては突然、昇の傍に現れたシエラの存在が許せないのだ。なにしろ今まで昇の一番傍に居たのは琴未なのだから。それなのに突然現れたシエラに昇を取られるなんて、琴未とっては考えるだけでもおぞましい事だった。だからこそ琴未は自分の居場所を、自分が居たいと思う場所を取り戻すためにシエラとの決着を付けたいと思っているのだ。
けれども今日だけは、そんな気持ちも抑え付けるしかなかった。琴未が琴未の目的を達成するためには……今日だけはシエラに華を持たせるしかないと琴未自身も良く分かっていた事なのだから。
だからこそ、閃華はそんな琴未に優しく語り掛ける。
「なら、こんな所に立っていないで私に付き合ったらどうだ？」
「さっきまでおばさんと呑んでたんでしょ？」
「なに、少しだけ呑み足りないと思ってのう。じゃから琴未よ、今夜だけは少しだけ付き合ってもらおうか」
「……分かったわよ」

琴未がそういうと二人は琴未の部屋に向かって歩き始めた。
そして閃華が琴未に酒を進めて数分後、琴未はすっかり酔って、今ではベットで静かな寝息を立てている。そんな琴未を優しく見詰める閃華。そんな閃華の手には泡盛のビンが握られており、ビンのラベルにはアルコール度数６０と書かれている。
ちなみに、普通の焼酎でもアルコール度数は２５程度である。それなのにいきなりアルコール度数が高い酒を、しかも琴未は勢いに任せて一気に飲み干したのである。そんな琴未が酔い潰れて寝てしまうまで、そんなに時間が掛からなかった。
まあ、閃華も琴未を早く寝かしつけて楽しようとアルコール度数の高い酒を飲ませたわけだが、まさか一杯だけで酔い潰れるとは閃華にしても予想外だった。それでも、今では琴未も静かに寝息を立てている。これで明日からはいつもの琴未に戻るだろうと、閃華は琴未に布団を掛けなおしてやり、頭を優しく数回撫でると、部屋の電気を消して自分の部屋へと戻って行くのであった。
そんな閃華が歩きながら思う。
さて、明日からはどんな日になって行くんじゃろうな。
シエラが戻り、今までシエラが抱えていた傷も全て癒えた。そして琴未も、明日からはいつも以上にシエラに対して好戦的に出られるであろう。そう思うと閃華は静かに自然と笑いを表に出していた。
なにしろ……明日からは、また騒がしい日常が戻ってくると確信しているからだ。それを思うと閃華は自然と嬉しくなり、明日という日が楽しみになりながらも、自分の部屋へと戻って行くのであった。

第百二十三話　静かな夜（後書き）

はい、そんな訳でやっと上げたエレメの百二十三話ですが……えっと、まあ、あれですよ。私としてもいろいろとありましたからね～。最近では更新ペースがすっかり落ちている事はしかたないですよね～。

まあ、そんな訳で、これからも更新ペースに期待しないで続きを気長に待っててもらえるとありがたいです。そんな訳で、これからもエレメをよろしくお願いしま～す。

とまあ、一通り挨拶も済んだところで次回予告に行きましょうか。次話はいよいよっ！　白キ翼編の最終話となります……まさか一年に渡って白キ翼編を書く事になるとは思って無かったよ。まあ、今年は後半がいろいろとあり過ぎたからね。それに対処できなかった。そんな感じですかね。

まあ、なんにしも、次で白キ翼編も終わるので、そろそろ次編について紹介しようかと思っております。次編は百年河清終末編となります。……はい、またこいつ読めないよな字を出してきやがったなと思った人は挙手～。ふははは、読めないだろ、ざまあみろっ！！！　……はい、ごめんなさい、かなり言い過ぎました。だから意思を剛速球で直撃させないでください。すいませんでした。

さてさて、戯言は終わりにして次の「ひゃくねんかせい終末編」は番外編に近い形になると思います。強いて言うなら……一編完結。次への伏線は、他の話とも繋がらない話となります。まあ、繋がっていると言ったら、白キ翼編の数日後から話が始まるところだけで、他との関わりや伏線が無いのが百年河清終末編ですね。

まあ、そんな感じで進めて行こうと思っているので、いつ上げる事になるか分かりませんが、百年河清終末編もよろしくお願いします。

とまあ、お願いしたところでそろそろ締めましょうか。

以上、ヤバイ、今日は思いっきり寒い、と今日になってストーブを持ち出してきた葵夢幻でした。

第百二十四話　本当の……

シエラが滝下家に帰って来てから翌朝、シエラは前と同じように朝食の準備に取り掛かろうとしていると、そこに琴未がやって来た。そんな琴未にシエラは朝から、いつものように無感情な瞳を向けながら挑発的な言葉を口にする。

「何をしに来たの、しばらくは琴未の出番は無いと思うけど。それに、琴未が私にしばらくは食事の準備をしろと言った。だから琴未がここに来る理由が無いから、部屋に戻って二度寝でもしたら」

そんな言葉を口にしたシエラに向かって琴未も挑発的な視線を向けて口を開く。

「まあ、確かに、そんな事を言った気もするけど。シエラの事だから私の食事に毒を盛る可能性があるからね。だから逆にシエラが口にする食事に毒を盛りに来たのよ」

そう言いながら、以前のように二人揃ってキッチンに立つシエラと琴未。そんな琴未をシエラは自然と受け入れて、以前のように二人で食事の準備が出来るようにスペースを空けると、琴未もそれが当たり前のように、シエラが空けたスペースへ入ると以前のように二人揃って朝食を作り始めた。

最初は黙々と食事を作るシエラと琴未だが、そんな沈黙が漂う空気を琴未から破った。というよりかは独り言のように呟くのだった。

「あんな事が有ったからね、昨日は華を持たせて上げただけ。だから頭に乗らない事ね、私もこれからは一歩も譲る気は無いんだから」

静かに呟いた琴未の言葉は自然とシエラの耳にも入ってくる。だからこそ、シエラも独り言のように呟く。

「私は……もう逃げないと決めた。皆が受け入れてくれたから、私は自分自身を見詰めて、自分を嫌う事無く全力で戦うと決めた。だから……」

そこまで言うとシエラは琴未の方へ振り返り、琴未もシエラと視

線を合わせる。それからシエラははっきりと琴未に告げる。
「琴未との戦いも絶対に逃げない。昇が私を選ぶまで、琴未と決着を付けるまで戦うと決めた。だから……覚悟しといた方が良い」
そんなシエラの宣告に琴未は呆れたように鼻で笑うとシエラに挑戦状を叩きつける。
「ふんっ、そんな覚悟なんて必要ないわよ。それに、そんな幼児体型で昇がシエラを選ぶとは思えないわよ」
はっきりとシエラの体型から侮辱する言葉を発する琴未。だがシエラも負けじと鼻で笑うと琴未に挑戦状を叩き返してやるのだった。
「ふっ、私がこの体型を選んだのは戦闘を有利に進めるため、飛ぶにしても、攻撃を回避するにしても、小さい体型の方が便利だから、この体型を選んだ。それに……胸だけしか魅力が無い琴未とは違って、私は全体のバランスが整っているから雰囲気では負けてない」
お互いに挑戦状を叩き付けてきた、この状況下でシエラと琴未の二人はお互いに笑みを浮かべながらも朝食の準備をしているのだが、誰しもが近づき難いオーラを二人はかもし出していた。たぶん昇が、この場に居たら真っ先に逃げ出すであろうオーラがキッチンに立ち込めているのである。だからキッチンの空気も自然と緊張感が増してくるのであった。
そんな中で二人の舌戦は続くのであった。
「雰囲気だけで勝とうなんて甘いのよ。昇もれっきとした男、だから雰囲気よりも実質的な物に弱いはずよ」
「そんな琴未こそ甘い。確かに女性の胸は大きさによっては強力な武器になるかもしれない。けど、そんなのは一時的な物。最後には胸なんかよりも、全体的な雰囲気、いわゆる女の子らしさを出している方に付くもの」
「何を言ってるのよ、女の子らしさなら私だって負けては無いのよ。私はその女の子らしさの上に完璧なスタイルを持ってる。これはどう見たって私の圧勝じゃない」
「琴未の場合は、それよりも凶暴さがにじみ出てる」

「そういうシエラだって、陰湿さがにじみ出てるわよ」
「……」
「……」
最早、言葉では言い表せないほどの緊張感がキッチンには立ち込めていた。こうなってしまっては昇でなくても、誰も近づかないし、逃げ出すだろう。そんな緊張感が立ち込めているキッチンで更に戦いは続く。
「シエラ、塩」
さすがに狭いキッチンに二人も居るのだ。お互いに手の届かない場所に調理に使う調味料がある。だから、使いたい調味料が近く似ない時にはお互いに渡し合っているのだが、すでにキッチンは戦場となっている。
シエラは手元にある塩が入っている容器を手に取ると、思いっきり琴未に向かって投げつける。だがこんな事は琴未にとっても頻繁に行われている行為である。だから琴未は間近で思いっきり投げつけられた塩の容器を軽々とキャッチすると、容器から適量を取り出して自分の料理に振り掛けるのだった。
「琴未、砂糖」
今度はシエラからの要求である。琴未は砂糖の入った容器を手にすると……シエラの方ではなく、明後日の方向へと思いっきり投げ付けるのである。
だがシエラは翼の精霊。たとえ地上であっても、その瞬発的なスピードは見事な物であった。なにしろ明後日の方向へ投げられた砂糖をキャッチして、元の場所に戻るまでコンマ数秒である。さすがはスピード自慢の精霊と言えるだろう。
けれども琴未はそんなシエラの行動に驚く事も悔しがる事もしなかった。なにしろ……シエラが失踪する以前はこんなやり取りが頻繁に行われていたのだから。そしてキッチンでの戦いは更に高まるのであった。
フライパンから料理を盛り付けたシエラ。それからシエラは用済

みになった熱々のフライパンを片付けるための、フライパンを片手に思いっきり振り返る。もちろん、フライパンが琴未の頭部に当たるように狙いを定めてである。

だが琴未もシエラの行動をすでに読んでいたのだろう。自分に向かってくるフライパンを琴未は手にしている菜箸（さいばし）で見事にフライパンを挟み込んで受け止めた。それから琴未は器用に菜箸で受け止めたフライパンをシエラの手から離すと、そのまま流し台へと持って行き、水を掛けて一気に冷やすのであった。

そして、ここから琴未の反撃が始まる。琴未はワザとフライパンに付いた水滴をシエラに向かって振るい、フライパンから水を切ろうとした。シエラなら、そんな水滴ぐらい簡単に避ける事が出来るであろう。たとえ狭いキッチンでもだ。

だがシエラは避けずにあえて飛び跳ねた水滴をかぶる事にした。もちろん、琴未の行動がフェイントである事をすでに察しているからだ。

琴未はフライパンを振るって水滴をシエラに飛ばしたすぐ後に、いつの間にか手にしていた深手の片手ナベをオーバーアクションで自分が居た場所へと持って行く。もちろん、片手ナベがシエラの頭に当たるようにワザとオーバーアクションにした行動だ。

だが、そんな琴未の攻撃もシエラが手にしているフライ返しで片手ナベを上に弾くと、琴未は姿勢を崩しながらも、倒れる事無く数歩だけ歩き、元居た場所へと戻った。

それから二人とも何事も無かったかのように次の料理に取り掛かるのであった。

なにしろ今では滝下家もすっかり大所帯だ。それにミリアが朝から食欲旺盛なので、作る方としてはかなりの量を作らないといけない。だからこそ、キッチンではこうした無言の戦いがいつも繰り広げられているのである。

もちろん、この事は昇どころか滝下家に住む住人、全員が知っている。だからこそ、二人の料理が出来上がるか、二人が本格的な戦

闘に入るかしないと決してリビングには顔を出さないのだ。
ちなみに以前は昇も一度だけ早起きして、逸早くリビングへ行ったのだが、あまりにも緊迫したキッチンの雰囲気に気圧されて再び自分の部屋に戻るなんて事もあった。それぐらい、朝に行われるキッチンでの攻防は緊迫感をかもし出し、誰もが入れない空間へと変化していた。
そして、それを証明するかのように未だにリビングへは誰も顔を出していない。この雰囲気は閃華ですら立ち入れないほどの空間と化しているのだからしかたないだろう。
それでも昨日の事で心配になったのだろう。昇はリビングへの扉を少しだけ開いて中の様子を窺っていた。
「どうやら、いつも通りの展開みたいじゃな」
そんな声が聞こえるのと同時に昇は頭に重さを感じた。どうやら閃華が昇の頭に手を置きながら同じく中の様子を窺っているようだ。そして、いつものように突然現れた閃華にすっかり慣れた昇が閃華に向かって言葉を返す。
「そうみたいだね、もう心配する必要は無いかな」
「そのようじゃな……ところで昇よ」
「んっ、どうしたの閃華」
「いやな……昨晩はどこまで行ったのかだけは確認しておこうかと思ってのう」
……えっと、閃華さん。それはいったいどういう意味でしょうか？　昇がそんな事を思っている間に閃華はさっさと話を進めてきた。
「なにしろ一つの部屋、しかも一つの布団に男女が一緒に寝たんじゃ。どこまで行ったのか聞いておかねば琴未が可哀想じゃろう」
そんな閃華の言葉を聞いて昇の顔が一気に真っ赤になる。まさか昨日の出来事が閃華に知られているなんて昇には思いもよらなかった事だ。なにしろ昨日は静かにシエラと一つの布団で寝た事は確かなのだから。
だからだろう、昇は慌てた様子で閃華に告げる。

「べ、別に何もしてないですよ。せ、せ、閃華が思っている事は何もしてないから。それに、なんて言うか、そんな事は、ぼ、ぼ、僕には」

慌てて弁解をする昇に閃華は堪えきれない笑い声を何とか掻き消して笑うのであった。そんな閃華を見て昇はやっと気が付いた。

……謀られたっ！　というか閃華さん、そういう意地悪は止めてくださいよ～。笑いを堪えようとする閃華とは対称的にすっかり泣きそうな、いや、すでに涙を流している昇であった。そんな昇を見て、閃華はようやく笑いを押さえ込むと昇に向かって言葉を掛けてきた。

「まあ、昇にはそんな事が出来ん事は百も承知じゃ。じゃから安心せい、私も琴未も、そこまで事が進んだと思っておらんからのう」

……えっと、なんだろう、この複雑な気分は。どうやら昇も少しは男としての自覚はあるみたいで、閃華の言葉に複雑な気持ちにさせられた事は実感できたようだ。まあ、それはそうだろう。なにしろ、昨晩のシエラとの関係が進んでもおかしくない状態だ。それなのに、何も出来なかった事を悟られたのだ。それは男としては凄く恥かしい事なのだが、昇の恋愛感覚はそこまで発達していないものの、少しだけは恥かしいとは思うぐらい、少しだけ発達しているようだ。

だからか、複雑な心境のまま気落ちする昇。そんな昇を見て閃華は笑いを堪えながら慰めの言葉を掛けるのであった。

「ま、まあ、そうした事は、後々に、覚えていけば、良い、事じゃよ」

閃華さん、そこまで笑う事ですか。閃華の態度にいじけた視線を向ける昇。そんな昇の視線に気付いたのだろう。閃華は何とか笑いを封じ込めるといつもの態度へと戻る。

「くっくっくっ、まあ、こうした事は」

閃華は突如として発しようとした言葉を中断させると真面目な顔でキッチンへと視線を移す。それからすぐに閃華は昇の手を取ると、

一気に玄関に向かって駆け出した。そのため、昇は玄関まで引きずられる状態となったのだが、突然の事に昇は驚いており、こんな行動を取った理由を閃華に尋ねようと思うまで時間が掛かった。

けれども、昇が質問する前にキッチンからシエラの叫び声が聞こえてきた。

「精界展開っ！」

その途端に昇はキッチンとリビング、そして庭にまで展開された小さな精界を目にするのだった。幸いな事にシエラは家を丸ごとではなく、庭を中心に精界を展開したおかげで玄関に居る昇達まで精界に囚われる事は無かった。

けれども、これで閃華が昇を玄関まで一気に引きずって行った理由が昇にも理解できた。閃華は逸早く、シエラが精界を展開させる事に気が付いて昇と一緒に避難したのだ。そのおかげで昇はシエラ達の戦いに巻き込まれる事は無かったのだから、昇はとりあえず閃華にお礼だけは言っておく事にした。

「ありがとう、閃華」

「なに、いつもの事じゃから礼などいらんじゃろ。それにしても……初日から精界を展開させるとはのう」

「何かもう、二人とも昨日の事を忘れたような気がするんですけど」

そんな昇の言葉に閃華は軽く笑ってから話を続けてきた。

「ふむ、それはそれで良いのではないのかのう。なにしろ、ここ数日は誰しもが緊迫感を持っていたんじゃが、今では誰もが心穏やかに過ごしておる。だから琴未もシエラもいつも通りに、いつものように振舞えるのじゃろう。それに……」

「それに、何？」

閃華が途中で何かを言い掛けて止めたので、昇はとりあえず閃華に言葉を続けるように質問して促した。そんな昇の言葉を聞いて閃華は昇に向かって微笑むとはっきりと言葉を口にする。

「それに……私も含めて全員が心の整理が付いたのじゃろ。それほどまでに昨晩という時間は皆の心を静めてくれたようじゃのう……

もっとも、誰かさんは複雑な心境みたいじゃがのう」

……えっと、閃華さん、それは遠回しの嫌味ですか？　というか、そろそろ嫌がらせは止めてくださいよ。そんな事を思いながら肩を落とす昇。そんな昇を見て閃華は昇に視線を合わせると珍しく真面目な顔をして話しを続けてきた。

「じゃからのう、昇。今ではなくとも後で琴未にはしっかりとした礼をせねばならんじゃぞ。なにしろシエラがここまで心の整理が出来たのは昨晩、シエラが昇に全て話したからじゃろ。琴未は、その事を知っておきながら、あえて二人っきりにしてあげてたんじゃ。じゃから昇、自分には琴未対しての責任が有る事は分っててもらいたいんじゃ」

「……そうだね」

う～ん、確かに言われてみれば、ここ数日はシエラの事しか考えてなくて、琴未にも散々迷惑をかけた事は確かだよね～。それに……琴未には辛い思いをさせちゃったのかな？　……う～ん、その辺は良く分からないけど、なんかこう……琴未に対してお礼以上の事をしないといけないような気がする。とは言っても……何をすれば良いんだろう？

閃華に言われて昨晩の事で琴未がかなり気を使ってた事を諭された昇は、そんな事を思うが、どうやら琴未に対して、どのようにお礼ではないが、感謝の気持ちを示したら良いのかと迷っていた。

そんな昇の心境を察したかのように閃華は立ち上がると軽く溜息を付いた。どうやら昇が迷っている事をすでに見抜いているようだ。そして、昇がしなくてはいけない事も閃華は知っている。けれども、閃華はそれを絶対に昇には伝えようとはしなかった。なにしろ、それは昇が自分自身で決める事だし、昇が自分で答えを出して行動しなければいけない事だと分っていたからだ。だから閃華はもう一度溜息をついた後に軽く一言だけ呟くのだった。

「まったく、これじゃから朴念仁は困った者じゃな」

そんな言葉を聞いて昇は苦笑する。えっと、閃華さん、それは僕

の事ですか？　思わずそんな事を聞こうと思った昇だが、やっぱりやめる事にした。ここで閃華に質問すれば、更に閃華が溜息を付いて意地悪な言葉を続けてくる事は昇にも分っていたからだ。

だから昇はバツが悪そうな顔で立ち上がると、閃華の顔を見てはっきりと告げた。

「まあ、確かに閃華が思っている通りに僕は迷ってるのかもしれない。でも……琴未には感謝してるよ。それに迷惑も掛けた事も充分に分ってる。だから……いつになるか分からないけど、いつかはそんな琴未の気持ちに応えたいと思ってるよ」

そんな昇の言葉を聞いて閃華は……思いっきり呆れた顔をした。そんな閃華を見て昇は首を傾げる。そして閃華は疲れたように溜息を付くのだった。

「やれやれ、分かってそうで分っておらんようじゃのう。まあ、それは昇じゃから、しょうがないじゃろう。しかたないのう、ここは一つ、また策でも練るとするかのう」

……えっと、閃華さん、また何かを企むつもりですか？　そんな不安を覚えながらも、閃華は昇の心境を悟ったのだろう。あえて昇に向かって微笑むが、その微笑が昇にはとてつもなく恐怖を象徴しているものに思えるのであった。

そんな不安だけが残る未来像を描きながらも昇は思いっきり溜息を付くと、精界には入らないように自分の部屋に戻ってく。昇の後ろではなにやら楽しげな顔をしながら付いてくる閃華をあえて無視しながら。それから昇は学校へ行くための準備をするために自分の部屋へと入り、閃華も自分の部屋へと戻って行くのであった。

「あっ、おかえりなさい、滝下君」

「いつもの事ながら、ご苦労な事だな」

昇はそんな言葉を聞きながら、本日二度目のいつも使っている生徒指導室に入って行くのだった。

生徒指導室には与凪を始め、閃華とフレトと咲耶がまったりとお茶を楽しんでいた。そして昇はというと、今まで着ていたエレメンタルジャケットを解除するといつもの制服姿に戻って先程まで座っていた席に付くのだった。

そんな昇が疲れたようにテーブルに突っ伏すと、与凪は席を窓際にまで寄せると思った事を口にする。

「それにしても……昨日までの事を考えると、こんなにも簡単に今までの日常に戻れた事が不思議ですよね」

そんな言葉を呟く与凪であった。そんな与凪の言葉にフレトも興味を抱いたのだろう。フレトは席を立つと与凪の横に立って、外の様子を窺うのであった。そして与凪と同じく思った言葉を口にする。

「まったく、昨日までの事を考えると、昨日までの事がバカバカしく思えてくるな」

「そうですよね～、私達の苦労は何だったのかと思えてきますよね」

フレトに同調するように言葉を口にする与凪。そんな二人の言葉を聞いて、閃華が軽く笑うと、そんな二人に向かって言葉を投げ掛けるのであった。

「まあ、シエラの事で皆に迷惑を掛けた事は確かじゃろうが、シエラが居なくなった時に皆が必死になって昇を、そしてシエラを支えてくれたからこそ、今という時間があるんじゃよ。じゃから、外で行われてる光景こそ、昇が選んだ結果であり、昇が望んだ結果なんじゃろ」

そんな言葉を口にする閃華に与凪は納得したような顔で頷いてきた。そんな与凪とは正反対にフレトは昇を指差して閃華に質問する。

「そうなると……ボロボロになってテーブルに突っ伏すほど疲れるのも、滝下昇が望んだ結果だと言えるのか？」

そんな質問をするフレトに閃華は笑うだけで答えを返そうとはしなかった。そんなやり取りを聞き流しながら、昇の魂は身体から少しだけ抜け出ているのであった。

そもそもの始まりは、いつものようにシエラと琴未も一緒に、今

回の事で与凪にも礼を言うために昇達がいつもの生徒指導室に入って来た事から始まった。
　最初は和やかに進んでいた会話だが、そのうちいつものようにシエラと琴未が挑発的な発言が目立ってくると、シエラは昇の首に腕を絡めると生徒指導室の窓から脱出して強制的に昇を連れ去ろうとする。だが、ここでいつも通りに琴未の追撃が入る。そして琴未が攻撃が直撃する。そう……シエラにではなく昇に。
　それから昇を掛けての戦闘に入って行ったのだが、昇だけはすっかりパワーアップして妖魔の力を出してきたシエラと、そんなシエラに対抗するために最初からフルパワーを出してきた琴未の攻撃に巻き込まれながら、命辛々この生徒指導室に戻ってきたのだ。
　そもそも、この生徒指導室は与凪の結界操作により精界との出入り口になっている。つまり、この生徒指導室に入るという事は与凪の精界に入るのと同じであり、与凪も自分達の秘密だけを守るために常に展開させて、霧の属性で精界を隠している状態だ。だから、この生徒指導室から見える外の光景は、放課後の部活風景でなく、今ではシエラと琴未の戦闘状態が見れるという事だ。
　それでもシエラが昇を連れて逃げ出そうとしたのも、与凪が作り出した精界に理由がある。常に学校を覆っている精界は通常の物とは違って与凪がかなり手を加えている。そのため、内側からでは絶対に破る事が出来ない精界なのだが、与凪は精界を隠す方に力を回したために、内側から強力な一撃を入れれば、精界の一部が壊れるようになっている。最も、壊れてもすぐに修復される自動修復機能が付いているが、完全に修復されるまでには時間が掛かるのであった。
　だからシエラはいつも昇と一緒に……もとい、昇を強制的に連れて、与凪の精界から脱出しようとするのだが、いつも琴未に邪魔されて、そしていつものように二人の激闘へと変わって行くのだった。
　昨日まではシエラを探す事に必死で、まったく余裕がなかった与凪達だが、今ではすっかりいつも通りになっていた事に与凪もフレ

トもそんな言葉を発したのだろう。そしてミリアとラクトリーはというと……ラクトリーには事態がこのようになる事が分っていたのだろう。すでにミリアを捕まえて、どこかに作った修行場へと強制連行されて行ったのだった。

だから今はミリアとラクトリーを欠けた状態で、シエラが失踪する前の日常を目にして今までの努力がバカバカしく思えたのだろう。けれども、与凪とフレト達のフォローがあったからこそ、昇がいつもの日常を取り戻せたと言えるだろう。だから与凪とフレト達の行動は決して無駄ではないのだ。後ろで昇達を支えてくれたからこそ、すぐにいつも通りの日常に戻る事が出来たのだ。

だから与凪は納得したし、フレトの質問に閃華は答えずに笑うだけだった。閃華としては答える必要が無いと感じたようだ。そんな閃華を見て、フレトも軽く笑うと自分の席に戻り、咲耶が新たに入れてくれた紅茶を楽しみながら、未だにテーブルに突っ伏している昇へと言葉を掛けるのであった。

「それにしても、今までとは違ってお前へのダメージは酷くなったようだな」

そんな事を軽く笑いながら言ってくるフレトに昇は顔を上げる事無く答えるのだった。

「だって……シエラは妖魔の力を使うし、琴未にはシエラの力が通じていないようだったから、だから二人の戦いは一気に激しさを増したんだよ」

「ふっ、それでそのざまになったというわけか」

「……もう放って置いてください」

「主様、さすがにそれ以上、お戯れになりますと昇様がかわいそうですよ」

そんな咲耶の言葉を聞いてフレトは笑いながら背もたれに寄り掛かる。それでも、フレトには一つだけ疑問があったのだろう。目の前で突っ伏している昇にではなく、与凪の傍で二人の戦いを観戦してる閃華に向かって問い掛けた。

「そういえば、先程滝下昇が琴未にはシエラの力が通じてないと言っていけど。琴未に妖魔の力を凌ぐほど力量があるとは思えないのだが？」

そんなフレトの質問に閃華はフレトを再び窓際に呼び寄せて、外で繰り広げられている二人の戦いに目を向けるように促すのだった。そんな閃華の指示通りに行動するフレト。それから閃華の説明が始まった。

「確かにその通りじゃ。じゃが、この場合は力量ではなく、シエラの力が琴未の雷閃刀と相性が悪いというのが二人の戦いが拮抗している原因となっておるんじゃよ」

「なるほどな、そういう事か」

閃華の説明を聞いて納得するフレト。どうやらフレトにも二人戦いが拮抗している原因が分かったようだ。

そして、その肝心な二人、シエラと琴未は……未だに外で激闘を繰り広げているのだった。

「琴未のくせに、随分としつこい」

そんな事を言いながらシエラは琴未に向かってウイングクレイモアを振り下ろすのと同時に琴未が避けるであろう位置を予測して、その真上から風の塊を打ち下ろすように大気を操作する。

「シエラこそ、いつもいつも陰湿な作戦ばっか使ってきて、いい加減に諦めなさいよね」

琴未も言葉を返しながらウイングクレイモアを避けると、シエラが予想していた位置へと移動する。そこにはすでに琴未の上空から風の塊が一気に琴未に向かって放たれている状態だ。だが琴未は慌てる事無く、上空から来る風の塊を一閃の元に切り裂いてしまった。

その勢いを使って琴未はすぐにシエラに攻撃を入れるが、琴未の雷閃刀はシエラがまとっている風の鎧は切り裂いたものの、ウイングクレイモアによって阻まれてしまった。琴未としてもシエラが防

いでくる事は予想していたのだろう。だからこそ、雷閃刀がウイングクレイモアにぶつかるとすぐに次の手に出る。

「雷撃閃っ！」

雷閃刀から数本の雷がウイングクレイモアを避けるように飛び交うと、シエラを目掛けて一気に突き進む。そんな琴未の攻撃にシエラはウイングクレイモアを羽ばたかせると、一瞬で後退して琴未の雷を見事に避けて見せた。

そんなシエラに向かって琴未は雷閃刀を突き付けながら、はっきりと言う。

「残念だったわね、せっかく妖魔の力を出しても私に通用しないなんてね。所詮、シエラの力なんて、そんなものなのよ」

そんな琴未の言葉にシエラも言葉で返す。

「それは違う。たまたま私の能力と琴未の能力が相性が悪かっただけ。しかも残念な事に、相性の悪さが琴未に有利に出ただけ。だから琴未が勝っている訳じゃない」

そんな事を言って来たシエラに琴未は笑みを浮かべるとはっきりと言葉を返す。

「どうやら……私達はとことん相性が悪いみたいね」

「確かに……これで相性が良かったら最悪。だから相性が悪かった事に感謝してる」

「言ってくれるじゃない。まあ、確かに私達の相性が悪かった事には私も感謝してるわよ。シエラと相性が良いなんて言われたら、鳥肌どころか恐怖すら覚えるわよ」

「なら、それ以上の恐怖を与えてあげる」

「やってみなさいよね」

舌戦の後に再び同時に動き出すシエラと琴未。そんな戦いの中で琴未はシエラが発している妖魔の力が確かに自分との相性が悪く、自分にとっては妖魔の力を無効化出来る事をしっかりと感じ取っていた。

なにしろ雷閃刀は日本刀の形をしており、その切れ味は大業物ど

ころか最良大業物と言って良いほど日本刀としては最良の物だからだ。

そもそも日本刀は究極の刃物と言われるほど切れ味が鋭い。だからこそ、シエラが使っているクレイモアやラクトリーのクレセントアクスに比べると根本から使い方が違ってくる。

まずはクレイモアやクレセントアクスのような武器は押し切る形で物を切るのだ。つまり、武器の重量と力を加える事によって、尖った刃で少しだけ切れ目を入れると、後は力で押し切るのだ。

それに比べて日本刀は刃が鋭すぎて、刃を押し当てただけでは逆に切れなくなっている。なら、どうやって切っているかというと、刃を押し当てながらスライドさせると鋭すぎる刃が綺麗に切って行くのだ。それは文字通りに『斬る』と言えるだろ。そこが他の武器とは違う日本刀だけが持つ特徴とも言えるだろう。

だから日本刀は相手の体に当てるだけでは意味が無い。そこから引くか、押すかしないと、まったく斬れないのだ。だが逆に言えば、そんな日本刀の使い方を熟知していれば斬れないもの等はほとんど無いだろう。

それに琴未は幼い頃から自分の家にある道場で祖父から剣術を習っていた。つまり琴未にとって日本刀は最も馴染んだ武器と言えるのだ。だからこそ、エレメンタルで作り出した雷閃刀も自然と日本刀の形となったのだ。

それでも、剣の腕は琴未は免許皆伝とは言えないだろう。だがエレメンタルの能力が琴未の腕を押し上げているのだ。だから、琴未の雷閃刀に斬れない物を上げるとしたら、精霊武具しかないだろう。

そんな雷閃刀を持っている琴未だからこそ、たとえ空気の塊だろうとも斬り裂くことが出来るのだ。

他の武器なら阻む事が出来る風の鎧だが、それは風の流れが相手の武器が侵入する前に押し流す力が強いから、相手の攻撃がシエラに届く事は無い。だが雷閃刀のうな日本刀は違う。日本刀の斬り方なら、風の流れそのものを斬り裂くのだ。本来なら風の流れにぶつ

かる摩擦で相手の攻撃を防ぐ風の鎧だが、琴未の雷閃刀は風の鎧が作り出す、風の流れを斬り裂くことで摩擦力を無効化している。それが日本刀の特長とも言えるだろう。

つまり雷閃刀、元を正せば日本刀は斬り方によっては逆風であろうとも、逆流だろうとも、斬り方によっては斬り裂く事が出来るのだ。だからこそ、風の鎧は琴未にとって脅威には値しない物になっていた。

更に相性の悪さを上げるとしたら、やはり電子だろう。電子は大気だけは無い、風や大地、それに人間や精霊の体にも存在しているのである。琴未が持っている雷の属性はそれらの電子を大規模に集めた物を指している。

つまり、風の流れだろうが、水の流れだろうが、雷を阻む事は出来ない。それどころか返って分散させてしまうのだ。だからシエラが風の鎧で琴未の雷を阻もうとしても、完璧に防げるわけが無い。なにしろどんなに強い風流の中でも電子は存在しており、その電子を目印に琴未が放った雷は風の鎧を突き抜ける事が出来るのだ。

だから大気のルーラーは雷の属性と相性が悪いのだ。どんなに風の流れを作ろうとも、そこに電子がある限りは、琴未の雷撃が届いてしまう。それを阻む手段は、完全に真空状態を作るしかない。

確かに大気のルーラーなら自分の周りを完全な真空状態にする事も可能だが、それは逆に言えば風の鎧すら作り出さないのと同じであり、琴未が放った雷は防げても、雷閃刀の攻撃はまったく防ぐ事が出来ないのだ。それどころか空気摩擦すら無くなるのだから、逆に琴未に攻撃を鋭くするのと同じなのだ。だからシエラは自分の周りを真空状態にはしないのだ。

ちなみに人間は自然と呼吸して酸素を取り入れているが、精霊は酸素を取り入れなくても大丈夫なのだ。なにしろ元々がエネルギーの結晶体と言える精霊である。そのエネルギーの結晶体が自分を維持するために必要なのは、エネルギーその物であり、人間のように様々な物からエネルギーを取り入れないと生きて行けないという事

は無いのだ。
　つまり精霊は自信の元となるエネルギーが存在する限り、それは自然に存在している物、あるいは人が作り出した物、または信仰心などがエネルギーとなり、大多数集ると精霊となる。だから精霊は人間のように酸素を絶対的に必要としないのだ。だからシエラが自分の周りを完璧な真空状態にしても問題は無いのだ。
　ただシエラは相性の悪さから、それをしないだけで、やろうと思えば出来るのだ。だが相手が琴未だと相性が悪すぎて、どうしても妖魔の能力をフル活動出来ない。それほどまでにシエラにとって琴未は厄介な相手と言えるだろう。
　シエラは琴未との激闘を続けながら、改めてその事を実感するのであった。
　そんな琴未が雷閃刀を振るいながら口を開いてきた。
「本当の力と言っても、所詮はその程度なのよ。どんなに足掻いても私には勝てないのよ」
　そんな事を言って来た琴未に対してシエラは雷閃刀を避けながら言い返す。
「確かに、これが私にとって本当の力だし、本当の姿。けど……私は今まで、この力を使ってなかったから使い方がまだ充分じゃないだけ。これから、本当の力を……本当の私を磨いていけば琴未すら足元に及ばない力を得る」
「何言ってるよ、その頃には私も充分に力を付けて、絶対に差が埋まらないようにしてるわよ」
「自分が有利だと思っているなら大間違い。今は……私の方が勝ってる。だから……絶対に琴未を叩きのめす」
「ふ～ん、その挑戦……受けてあげようじゃないっ！　私だって逃げも隠れもしないわよ。絶対にシエラを叩きのめして、勝利と昇を手に入れる」
「私は絶対に負けないし、昇も渡さない。絶対に振り向かせて見せる。今度は……心配じゃなくて……好意によって」

「やれるものならやってみなさいよねっ！」
「絶対に……やるっ！」
その言葉を最後に大きく金属音が鳴り響く。そしてシエラのウイングクレイモアと琴未の雷閃刀がお互いに刃をぶつけあい、二人の視線もお互いを見ながら火花を散らしている。
そんな状況の中でもシエラは心の中に嬉しさがあるのを感じていた。
最初は自分が妖魔である事を知られるのが怖かった。もし、皆に知られれば、シエラが昔受けたように、皆から見下げた視線を受けて、虐げられると思っていたから。けど、昇だけはそんな事はしないと期待したから昇と契約した。たとえ他の精霊や契約者がシエラを軽蔑しようとも昇だけは受け入れてくれると思っていたから。
けど、今では昇だけではない。皆が妖魔という異質な自分の存在を受け入れてくれた。今までどおりに接して来てくれた。皆が……異質な存在であるシエラを受け入れてくれた。だからこそシエラはこうして琴未とも本当の力と姿で戦う事が出来ている。
最初はシエラも昇にだけでも受け入れてもらえれば充分だと思っていた。けど……シエラはそれすらも確認する事が怖くて逃げ出した。でも……昇が、皆がシエラを迎えに来てくれた。
そして今、こうして本当の姿で、本当の力で、本当の自分で、本当の気持ちを出す事が出来る。琴未と真正面から向き合って、今までとは違う本当の自分で本当の力と気持ちをぶつける事が出来る。その事実だけでもシエラは嬉しかった。
そして琴未も、そんなシエラを真正面から受け止めるように、今までのように対等な立場で戦いを挑んできた。
それだけでもシエラは琴未との決着を付ける事に充分な意味を見出していたし、琴未と全力で戦う事がいつの間にかシエラの中では大切な事であり、嬉しい事になっていた。それだけ、本当の気持ちをぶつけられる相手が居るという事が幸せなんだとシエラは改めて思った。

だからこそシエラはアレッタの事を思い出していた。アレッタに対しても本音をぶつければ良かったのではないのかと。そうすれば、アレッタとの絆ももっと深くなっていたかもしれないとシエラは改めて思った。

琴未との戦いには昇という絶対的に執着する者があったからこそ、シエラは琴未に全力で本当をぶつける事が出来た。けどアレッタに対してはシエラは何も出してはいない。アレッタに対してもシエラは隠す事を優先してきたからだ。

だが、今こうやって琴未と戦ってると、シエラはアレッタに対してもこうやって本当を出して戦えば良かったのではないのかと思うようになっていた。そうする事でお互いの事が理解できるのなら、シエラはアレッタと本当の戦いをする事が出来ただろう。

けれどもシエラがアレッタと本当の戦いをしたのは、先の一戦だけである。後は本当を隠しながらアレッタとも、そして他の誰とも戦ってきた。だから、こうして本当を出して戦える琴未と出合った事がシエラには少しだけ嬉しいと感じさせていたのだろう。

そして、この戦いに……いつか決着を付ける事がシエラの願いになっていた。それほどまでにシエラは琴未を好敵手と見るようになっていたのだ。だからこそ、シエラは琴未と全力で戦える事を嬉しいと感じるようになり始めたのだろう。

だからこそシエラはこれからも願うのだった。自分が昇の剣でいられるように、今度はそこに依存する事はしない。昇の剣でいる事で昇の傍にいる事の理由にはしない。シエラは自分自身の意思で昇の剣となり、昇のために戦う事を決めたのだ。それは昇だけでなく、皆にシエラを受け入れるような行動をした昇だからこそシエラは昇るために戦う事を誓ったのだ。

それは……こうして琴未といつものように戦っているのが嬉しいと感じるようになったから、皆が自分を受け入れてくれた事を実感したから。だからシエラは戦い続けるのだった。

こうして昇を賭けて琴未と全力で戦える事も、今のシエラなら心

のどこかで楽しいとも、嬉しいとも感じていただろう。けれどもそれ以上に昇に対する執着心があるからこそ、シエラは一歩も引く事はしなかった。それどころか昨晩の事でシエラは更に昇に対して執着するようになっていた。それほどまでにシエラの中で昇という存在はもの凄く大きくなっていたのだ。

だからこそ、シエラは琴未とも戦いを続ける。

―昇琴流　天昇雷撃斬―

琴未が宙に舞い上がっているシエラに向かって雷をまといながら斬りかかって来る。そんな琴未に対してシエラもウイングクレイモアの翼を羽ばたかせて、一気に琴未の真横を取るのだった。

だが琴未はそんなシエラの動きを見て、すぐに攻撃を切り替えて、その場で溜め込んだ雷を放電、広範囲に雷を撒き散らす。だがシエラも、そんな琴未の広範囲攻撃を網目を潜るようにすり抜ける。

そして隙が出来た琴未に切りかかるのだが、空中でウイングクレイモアと雷閃刀がぶつかりあい、お互いに弾き飛ばされる。

そんな戦いをしているのにシエラの顔には、いつの間にか笑みが浮かんでいた。それを見た琴未も自然と笑みを浮かべる。

どうやら昇を賭けた二人の戦いはまだまだ続きそうだ。けれども二人とも自然と理解したようだ。こうして納得が行く戦いが出来る事、本当を出し合い、本当の力で戦う事が出来る事。それがどれだけ大切で、嬉しい事なのかを二人は言葉ではなく、心で受け入れて自然と感じ取っていた。

だからこそシエラは改めて実感する事になった。こうやって、いつものように戦う事が出来るのが……どれだけ大切なのかを。だからこそシエラも琴未に対して全力で本当の力を出す事が出来る、まだ戦う事が出来る。

だからシエラと琴未は今日も全力で戦うのであった。お互いに大事な存在を賭けた戦いであり、戦う事によってお互いの事を理解し

合っているのだから。それがどれだけ大切なのかを二人とも肌で感じているかのように、二人とも顔に笑みを浮かべながら戦うのであった。

そして、そんな二人の戦いを閃華達は楽しみながら観戦している……昇一人だけが死に掛けたままに……。

……というか、二人ともそろそろ僕を巻き込まないでやってください。そろそろ……限界です。そんな気持ちを言葉にしたいが、今の昇にはテーブルに突っ伏したまま顔を横に向けるだけで精一杯のようだ。そして昇の瞳にはいつものように二人の戦いを楽しげに観戦している閃華達を見ると、二人とも未だに戦っている事を昇は知った。

そんな光景を見ながら昇は心で密かに思う。まあ……こんなもんじゃないかな。もしかしたら僕にはもっと出来た事があったかもしれない。けど……その時の僕にはそれだけの決断が出来なかったからこそ、今の結果が出たんだから。だから、シエラを失わなかっただけでも僕としては満足するべきなのかな。それにしても……いつの間にか大切なものが増えたよね。

改めてそんな事を実感する昇。今の昇にとって大切な存在はシエラだけでは無い。今、ここに居るメンバーだけではなく、昇の周りに居る仲間がいつの間にか昇にとっては大事な存在になっていたのだ。

だからこそ昇は改めて思う。もう二度と……誰も失わないと。そんな願いにも似た昇の思いはシエラに似ていた。シエラの背中に生えた白キ翼こそ、シエラを象徴する物であり、昇が願ったように純粋で一点の曇りも無い、真っ白な翼。そんな翼を羽ばたかせて昇達はこれからも戦い続けるだろう。昇が思い描く、白キ翼のような未来像を実現させるために。

1979

第百二十四話　本当の……（後書き）

はい、そんな訳でお送りしました白キ翼編ですけど……なんか……一年近く時間を費やしてしまった。う～ん、今年の前半は一気に書けたんだけどね～、後半に入ってから一気にペースダウン。まあ、いろいろとあったんですよ。そう……いろいろとね。

まあ、そんな話は置いておいて、次回からは百年河清終末編をお送りします。けど……まあ……今年中に上げる事は無理でしょうね。だって……今年も残すところ、後数日だけだし。今の状態で次に行くのは無理だよね～。

そんな訳で百年河清終末編は来年になってから上げようかと思っております。

さてさて、次回予告はこの辺にして、少しだけ本編に触れてみましょうか。実は本編を締めくくる最後なんですが、結構あっさりとシエラの本心だけで終わらせようとしたんですよね～。けどっ！！！　本編を読み返してみると思ったわけですよ『サブタイトルの白き翼って……昇達の事も示してるんじゃ』そんな事を思ったので最後はこんな形になりました～。まあ、私としては……なんとか形になったと思っております。

……いや、何か、結構最後はどうしようか必死だったのよ（汗）

まあ、それでも白キ翼編の最後としては、それなりにまとまったと勝手に思っておく事にしておきます。まあ、これが今の私が出来る最大限の技量なんでしょうね～。

というか、本当なら話の前半、シエラ達が朝食を作るシーンなんですけど……思っていた以上に長くなってしまいました～。そのために全体に長くなり、最後には収拾が付かないと一時は思ったほどです。

けど、こうやって最後まで形に出来た事で一安心しております。

はい、そこの方、あまりその事実には触れないように。……だって、

これが精一杯だったんだもんっ！！！

……はい、言い訳です。すいません。

さてさて、そんな訳で勝手に話を終わらせて次にでも行ってみましょうか。実はというと……本来の予定ならもっとシエラと琴未が戦うシーンを入れる予定だったんですよね～。けど……なんか説明してたら一気にページ数が多くなって、結果としてシエラと琴未の戦いを短くせざる得なくなりました。本当だったら、もっと二人を戦わせたかったんだけどね。

まあ、この二人が戦うシーンはこれからもあるだろうから。その時にでもいつも行われているシエラと琴未が戦うシーンを詳細に書ける時が来るでしょう。まあ……いつものように、いつになるかは分かりませんけどね。

まあ、それでも最後の二話は結構昇達の私生活を書いているよね～。と思うよ……たぶんね。まあ、あんな毎日を過ごしている訳ですよ、昇達は。……なんというか……結局は昇が……報われてないよね（笑）　まあ、それが昇だからしょうがないか。

さてさて、長くなってきたので、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想をお待ちしております。

それでは皆さん、良いお年を～。

以上、マジックカード発動、うつ病の睡眠時間狂い。このカードの効果によって作者の睡眠時間が一気にずらす事が出来る。そんなマジックカードのダイレクトアタックを喰らってしまったために、昼間に凄い睡魔が襲ってきている葵夢幻でした。

第百二十五話　三十六計逃げるにしかず

夜の帳が下りて、住宅街には人通りどころか家の明かりさえ消えかかる頃。そんな時間に夜道を歩く人影が二つあった。一つは大きく、一つは小さく。まるで親子のように夜道を歩く二つの人影が街灯の明かりに照らされて、その姿を鮮明に見せる。

大きい方は男性であり、その巨漢からも見て分かるぐらい筋肉質の身体を持っていた。そんな男が小さな方。そちらは少女といえるだろう、年齢的には昇達より二、三ほど下ぐらいの年齢だろう。そんな少女の手を取って、少女の歩幅に合わせて男性は歩いていた。

それでも少女の歩みは遅かった。なにしろ少女は盲目らしく、常に瞳を閉じており、左手に持っている杖で前方を確かめながら、男性に手を引かれて歩いている。だから自然と二人の歩みは遅く、それでもゆっくりと確実に二人は夜道を歩いていた。

そんな時だった。突如として少女が立ち止まると、左側に建っている建物に顔を向ける。盲目のために瞳は閉じたままだが、まるで見えているかのように、少女は建物に顔を向けるのだった。

「どうかしたのか？」

突然立ち止まった少女に対して男はいつもの事みたいに話し掛ける。どうやら、こうした事は良く有る事みたいだ。そして少女は建物に顔を向けながら男に告げるのだった。

「この中に……精霊が四人居る」

はっきりと精霊の事を口にする少女。どうやら、この二人も争奪戦に参加している契約者と精霊なのだろう。けれども、精霊が精霊を察知するには、かなり近づかないといけない。それなのに少女は建物の外、かなりの距離が空いているのに精霊の存在を察しただけではなく、人数までも正確に男に告げるのだった。

男も少女の言葉を聞いて精霊が居る建物に目を向けると、はっきりと思った事を口にする。

「随分とこの町にそぐわない程の豪邸だな。周りの住宅に比べてると、はっきりと存在が浮いているのが分かるほど豪勢な建物だ。いったい、どんな人物がこんな場所に豪邸を建てたのやら。随分と酔狂だな」

そんな事を言う男。だが確かに男が言ったとおりである。周りの建物に比べると、この屋敷だけが、まるで別の町を思わせるほど豪勢な建物となっている。敷地面積もさもながら、建物の作りも門も立派な作りとなっている。

この町、そしてこの場所は一般的な庶民の住宅が並ぶ住宅街だが、その中にポツンとまるで町の住宅街を見下ろすような豪邸が建っているのだ。男がそんな言葉を発しても、まるで不思議ではなかった。

だが男の言葉はよっぽど少女の興味を引いたのだろう。少女は瞳は閉じながらも、興味津々な顔付きで男に向かって話しかけるのだった。

「この豪邸って、そんなに凄いの？」

別に夜だから豪邸の凄さが分からない訳ではない。少女の目が物を写さないからこそ、少女は男に向かって尋ねるのだった。そんな少女の言葉を聞いて男は少女の言葉に答えながらも質問する。

「確かに凄い豪邸と言えるだろうな。それで……見たいのか？」

そんな問い掛けに少女ははっきりと頷いて元気な声で返事を返すのだった。

「うんっ！」

そんな少女の返事を聞いて男は豪邸に目を向けると真剣な面持ちになる。

「そうか……なら、丁度精霊が居る事だし、こちらから仕掛けても構わないだろう」

そんな男に少女は喜びの声を上げるが、男はそんな少女に落ち着くように言うと。それよりも優先させるべき事を口にするのだった。

「だが、今は今夜の宿を探すのが先だ。ここは、また後日にしよう」

そんな男の言葉に少女は少しだけがっかりしたような顔を見せる

が、すぐに笑顔に戻って男の手を強く握り締めるのだった。そして少女は嬉しそうに男に向かって告げるのだった。

「これでまた一つ、思い出が増えるよ」

「ああ、そうだな」

少女の言葉に男は短く答えるだけだった。けれども、男がいつもこんな感じなのは少女は知っているのだろう。男の返事に構う事無く、話を続ける。

「豪邸か、そういえば建物を見るのは初めてだね。今までは景色を見てきたけど、建物を見るために戦うのは初めてだよね。でも……立派な豪邸なら見てみたいな。お屋敷か～、今から楽しみだよ。さすがに中を見る事は出来ないと思うけど、外から見れるだけでも充分だよ」

楽しそうに話す少女だが、そんな少女とは正反対に男は現実を突き付けるのだった。

「だが……我らには時間が無い。その時間をこの豪邸に費やして良いのか？」

そんな質問をしてくる男に対して少女は男を見上げながら、しっかりと確実に男の顔を見ながら答えるのだった。

「うん、構わないよ。だって……見たいって思っちゃったもん。だから絶対に見たいっ！」

最後に強調した言葉を聞いて男も納得したように頷くと少女に向かって承諾の言葉を送る。

「分かった。なら……我からは何も言うまい」

ぶっきら棒に答える男に対して少女は満面の笑みを男に向けながら、しっかりと男の名前を呼びながらお礼を言うのだった。

「うん、ありがとう、アルビータ。そして……今度もお願いね」

アルビータと呼ばれた男は少女の言葉に「あぁ」と短く返答するだけだった。それからアルビータは再びゆっくりと歩き出すと、少女も杖で前を確かめながら歩き始めるのだった。そして二人は暗闇へと姿を消していくのだった。

シエラの一件が終わり、数日が経過した、ある日。それはいつものように、でも少しだけ違った形で始まっていた。
「シエラっ！　よくも邪魔してくれたわねっ！」
「ふっ、あの程度で私を出し抜けると思ったら大間違い」
そんな言葉と共にお互いの武器をぶつけあうシエラと琴未。これまた、いつものように与凪が常に学校に展開させている精界内で戦っていた。
今回の戦闘に入った原因は珍しく、琴未から行動を起こした事にある。授業が終わってから放課後になると昇達は自然といつもの生徒指導室に集まるようになっていた。まあ、学校内で争奪戦について公に話せる場所と言えばここラクトリーがミリアの修行を行うために学校内のどこかに作った訓練場ぐらいなものだろう。だから昇はフレト達と連絡を取り合うにも、与凪から情報を貰うにも、この部屋が都合が良く。放課後には自然とこの部屋に集まるようになったようだ。
今日もそこで昇はフレトと話をしていたのだが、話題が争奪戦の話から他愛も無い世間話に移ると琴未はこっそりと動いた。閃華が全員の興味をそそるような話を始めると同時に琴未はこっそりと昇の後ろに周り込んで、一気に口を塞いで、そのまま昇を静かに、そして迅速に後ろに押し倒したのだ。
さすがに全員が閃華の話に興味が行っていたので、琴未の行動に気付く者は居なかった。そう、シエラ以外は。琴未は昇を後ろから抱える感じで、そのまま静かに部屋を出ようとする。その速さに昇も呆気に取られるばかりで、何が起こっているのか理解できなかった。
そんな時だった。突如として席を立ったシエラが、いきなりウイングクレイモアを出すと琴未の前に回り込み、そのまま琴未を昇もろとも窓から叩き出したのだ。当然、その後を追うようにシエラは

妖魔の力を解放。背中の翼を羽ばたかせると一気に窓から外に出た。
一方の琴未は昇を盾にする事で何とかシエラの一撃は防いだが、窓から落下している事は確かだ。そこで琴未はしかたなくエレメンタルの能力を解放。雷閃刀を手にすると着地体勢に入るが、シエラはスピードが自慢の翼の精霊である。だから瞬発的な初動スピードも速く、一気に琴未に追い討ちを掛けてきたのだ。そのため、琴未は昇を解放するとシエラの攻撃に備える。
そんな事もあり、二人の戦いは幕が開いたのである。そして……昇はというと……いつものように、何とか自力で着地すると、すぐにその場から逃げ出して来て、今では生徒指導室に設置してあるテーブルに突っ伏している。
どうやら琴未の盾にされて、シエラから貰った一撃が相当のダメージだったようだ。それもしかたない、なにしろ昇も戦闘用のエレメンタルジャケットを身にまとう前だったのだから、昇でなくてもシエラの一撃が相当なダメージとなったのだろう。
そんな経緯もあり、今の展開となっている。そしてフレト達はというと……これまた、いつものように自動修復された窓から二人の戦いをのんびりと観戦しているのだった。言うまでも無いが……テーブルの上で死にかけている昇を放っておきながら。
そんな昇に気付かないままに、二人の戦いはますますヒートアップして行くのだった。

―昇琴流　天昇雷撃斬―

琴未は雷の属性を自分の身体に集中させると、まるで琴未の身体は雷に包まれたようになる。そんな状態のまま琴未は地面を蹴ると、まるで地面から雷が天に向かって放たれたような猛スピードで一気に上空に居るシエラに向かって突き進む。
さすがにスピード自慢のシエラといえども雷と一緒のスピードで突っ込んで来る琴未に対しては避けるだけが精一杯だ。それだけ琴

未の上昇スピードは翼の精霊よりも勝っているのだが、一直線にだけしか進めないのが、この技の欠点とも言えるだろう。それでも、琴未が雷をまとっているのだ。雷の総量だけでも、かなりの量で稲妻というより電撃砲とも言えるほど太い雷だからシエラも避けるのが精一杯なのだ。

もし、直撃を喰らっていれば雷だけではなく、琴未の雷閃刀によって切り裂かれていただろう。雷撃と斬撃、この二つを兼ね備えたのが、この技なのだ。だが、シエラに避けられた事によって琴未は上昇を止めると同時に上空で無防備になってしまう。

そんな琴未に向かってシエラは背中の翼を羽ばたかせると、琴未に向かって突っ込んで行く。だが、その程度の事は琴未も予想済みだ。だからこそ、琴未は次の展開に持って行く。

「雷華っ！」

琴未がそう叫ぶのと同時に琴未がまとっていた雷が一気に放出されて、空中に雷の華が咲く。それでも、雷と雷の間にはかなりの隙間がある。シエラはその隙間を潜り抜けて、一気に琴未に向かって突撃を掛ける。

さすがは本当の姿をあらわにしたシエラと言えるだろう。今までとは段違いのスピードで一気に雷の華を潜り抜ける。今までは移動も攻撃もウイングクレイモアに頼っていただけに、どうしても移動スピードに関しては少しだけ同類の精霊には劣っていたのだが、こうして本来の姿となったシエラにとっては、この程度の事は簡単に出来るようになったようだ。それだけ、背中に生えている真っ白な翼がシエラにそれだけのスピードを出させているのだろう。

そんなシエラが雷の華を潜り抜けると未だに落下中で無防備な琴未に向かってウイングクレイモアを振るう。琴未としては先程の雷華でシエラの動きを完全に止めるつもりだったが、こうして雷華を潜り抜けてくるとシエラが有している妖魔の力が厄介だと改めて感じながらも、空中で雷閃刀を後ろに引き、刺突の構えを見せる。

そして琴未は一気に雷閃刀を突き出す。シエラにはではなくウイ

ングクレイモアに対してだ。

―昇琴流　雷華一輪刺突―

さすがは剣術を叩き込まれた琴未というべきだろう。雷閃刀の切っ先は見事に尖ったウイングクレイモアの刃に当てたのだから。そんな雷閃刀の切っ先から再び雷の華が咲く。さすがに零距離での雷華だ。いくらシエラでも避けようが無かった。

だが雷華一輪刺突は元々、遠距離広範囲用の技であり、相手に当てる事を重視しており、威力としては弱かった。しかも肝心の刺突を空中で出したためか、まったく刺突の威力が出ておらず、雷華による細い雷のいくつかがシエラに直撃するだけだった。だからシエラとしては大したダメージは負ってはいないものの、一時的に動きを止めざるえなかった。

その間にも琴未は雷閃刀をウイングクレイモアに当てた衝撃を利用して一気に落下速度を増して、地面に向かって行く。そして無事に着地するのだったが、琴未はその場から動く事が出来なかった。まるで上から重い物を押し付けられているような、あるいは重力が増したような、そんな感触を琴未は覚えていた。

その間にも急降下してきたシエラが再び琴未に向かってウイングクレイモアを振るう。琴未は何とか雷閃刀を地面に突き刺して、その影に隠れると、何とかシエラのウイングクレイモアを受け止めた。それでも未だに琴未の動きが封じられているのは確かだ。そんな琴未に対してシエラが静かに呟く。

「エアーバインド、ダウンバースト」

その言葉を聞いて琴未もやっと理解した。琴未の動きを封じている上からの重い物。それは凝縮された下降気流である事を。

シエラが有しているもう一つの力。妖魔としての能力、それが大気のルーラーである。シエラは大気を自在に操る事が出来る。だから先程も琴未の攻撃を喰らった直後だが、雷に衝撃ですぐには動け

ないとシエラは判断したのだろう。だからこそ、琴未が着地する場所に狙いを定めて空気の流れを凝縮すると一気に吹き降ろしたのだ。

そのため琴未は上から流れ続ける下降気流に押し潰される形で動きを封じられたのだ。

これで一気に形勢がシエラに傾いたように見えるだろうが、琴未もこの程度で負けを認めるほどお人よしではなかった。

シエラが何をしているのか理解すると琴未は再び雷を集める……雷閃刀にではなく自分の身体にだ。今の雷閃刀はウイングクレイモアを受け止めているだけで精一杯であり、そのうえ動きを封じられている状態だから、ここから雷閃刀を使っての反撃は無理だと判断したのだろう。だからこそ琴未は自分の身体に雷を集めると、それを上空に向かって一気に解き放つのだった。

「調子に乗らないでよねっ！」

そんな気合の言葉と共に雷が天に向かって放たれる。その雷はまるでシエラが有している大気のルーラーで作り出した下降気流を真っ二つに斬り裂くように、一気に天に向かって駆け上って行くのだった。

さすがにそんな雷を間近で放たれてはシエラも琴未から離れざるえなかった。あのまま雷閃刀を力で押し返しても良かったのだが、琴未があれだけの雷を放出したとなると間近に居ると雷のダメージを受けてしまう。

さすがに精霊とはいえ微かな電撃を喰らえば痺れを感じるのだ。その電撃が強ければ強いほど痺れは強くなり、動きを制限され、最終的にはシエラの方が動きを封じられる事になる。シエラはそれを防ぐためにも琴未から離れたのだ。

琴未もやっとシエラのエアーバインドから解放されて、ゆっくりと立ち上がると再び雷閃刀を構える。シエラも琴未に合わせてウイングクレイモアを構える。一旦、お互いに離れた事で戦いの流れが中断されて仕切り直しになったようだ。

お互いに相手の出方を窺いながら出方を探っている。そのため戦

闘は一時的に拮抗状態に入ったが、今度はシエラから仕掛けてきた。
シエラはウイングクレイモアを前に押し出し、縦一線に構えるとウイングクレイモアの翼を思いっきり広げる。
「フルフェザーショット」
翼から無数の羽が弾丸となって琴未に向かって放たれる。そんなシエラの攻撃に対して琴未も迎撃に転じる。

―昇琴流　雷ノ村雨―

シエラが放ってきた無数の羽弾丸に対して琴未は雷閃刀を下段に構えると、そこから一気に連続で刺突を繰り出す。しかもただの刺突ではない、雷の属性を宿した刺突だ。そのため一回の刺突から何本かの雷が放たれる。そんな刺突を常人の目では捉えきれないぐらい速く、連続で行ったのだ、シエラが羽の弾幕を張ったように、琴未も自分の前に雷の弾幕を作り出す。
そしてお互いの弾幕がぶつかり合い、小規模な爆発が次々と連鎖して行き、最終的には大規模な爆発を引き起こす。そうなればお互いに動きが止まる事になるだろう。だが……あくまでも、そうなる前まではである。
「フェザーバインド」
シエラはタイミングを計ると弾幕の最後にフェザーバインドを繰り出していた。そしてお互いの弾幕が大規模な爆発を引き起こして、シエラも琴未も爆発の衝撃により動きが一時的に止まる。そんな時にシエラが最後に放ったフェザーバインドが琴未を縛り上げるのだった。
大きくなった数枚の羽は琴未の身体に巻き付くと、そのまま琴未を縛り上げて動きを封じる。だがシエラも大規模な爆発の衝撃によりすぐには動けない。琴未もその事が分っているから慌てはしないものの、今現在、自分を縛り上げているフェザーバインドが厄介だと思っていた。

確かに、すぐにシエラからの攻撃は来ないだろう。だが、この状態では琴未から攻撃を仕掛けるのは無理だ。だからこそ、琴未は雷閃刀でフェザーバインドを切り裂こうとするが、いつの間にか雷閃刀まで動かない事をたった今悟った。

どうやらシエラはフェザーバインドだけではなく、最後にエアーバインドで雷閃刀の動きを封じたようだ。これで琴未は完璧に動きを封じられて動けない状態だ。それでも時の流れは止める事は出来ない。

爆発の衝撃は既に無くなり、煙の向こうからシエラが姿を現してきた。フェザーバインドだけでなく、エアーバインドまで琴未を縛り上げているのである。そんな状態だからこそシエラには琴未の位置を的確に知る事が出来た。だから未だに爆煙が上がる中を琴未に向かって的確に突っ込んで来たのだ。

だが、琴未は突っ込んで来たシエラに笑みを向けながら言葉と共に行動を起こす。

「これで私を倒せると思ったら大間違いよっ！　落雷陣っ！」

いきなりシエラと琴未に向かって稲妻が落ちる。そんな稲妻をシエラは背中の翼を羽ばたかせて急ブレーキ、そして急速後退する事で稲妻を避けた。だがもう一本の稲妻は琴未に直撃していた。

そんな事態にシエラは苦い顔をする。確かに稲妻は琴未に落ちた。だが琴未は雷の属性を有している。つまり琴未には雷撃、稲妻が落ちてもダメージは負わないのだ。それどころか、琴未に稲妻が落ちた事によって琴未を縛っていた二つのバインドが消滅、これで琴未も自由に動けるようになった。

どうやら琴未は先程のバインド。エアーバインド、ダウンバーストを打破するために上空に放った雷はバインドを消滅させるためだけではなく、落雷陣を展開させる事も計算に含んでいたようだ。そのため、今では精界ギリギリに展開された落雷陣から琴未はいつでも稲妻を落とす事が出来る。

確かに稲妻を幾ら落とされようともシエラは避けきる自信はある

が、琴未を攻撃する際には邪魔になる事は確かである。だからこそシエラは苦い顔をしたのだ。バインドを解かれただけではなく、これでシエラの攻撃も制限された事になる。しかも落雷陣は精界ギリギリに展開されている。落雷陣を破壊する事は可能だが、その衝撃で精界も破壊してしまうおそれがある。だから落雷陣を容易に破壊するわけにはいかなかった。

なにしろ、この精界は与凪が作り出した特殊な精界だ。だから本来なら内側からの攻撃ならいくらでも耐えられる精界だが、この精界は内側からの攻撃にも容易に破壊できるほど強度が弱い。だから下手すると落雷陣を破壊した衝撃で、そのまま精界の外に飛び出してしまうおそれがあるからこそ、シエラは落雷陣の存在を厄介だと感じていた。

なにしろ、一度外に飛び出してしまえば、下手に飛ぶわけにも行かないし、戻るためには精界を破壊するか、もう一度生徒指導室の出入り口から入らないといけない。精界の外で下手に属性の力を使うわけにはいかない。もし関係ない人にでも見られたら、厄介では済まないほどの騒ぎになってもおかしくない。だからこそ、争奪戦は精界内という特殊な空間で行われているのだ。それなのに、放課後という一番、関係無い人に見られそうな時間帯に精界の外に出るわけにはいかなかった。

それに生徒指導室まで戻る時間を考えると、その間に琴未が何をやってくるか分かったものではない。だからこそ、シエラは上空に展開された落雷陣を警戒しながらも琴未に対して、どう攻撃するか思考を巡らすのだった。

一方の琴未もこれで優位に立ったとは思ってはいなかった。ここ十数分の戦闘で三回もバインドを喰らっているのだ。下手に動けばシエラに再びバインドで動きを封じられるおそれがあったからこそ、琴未は落雷陣で優位に立ったとは思わなかった。むしろ、これでシエラの動きが少しは制限されるだろう程度にしか思っていなかった。

それだけシエラが繰り出してくるバインドは予想が付かないし、

一度喰らってしまえば脱出するまで時間が掛かりすぎる。その分だけシエラは一気に攻勢に出てくるだろう。さすがに今度もバインドを掛けられて上手く脱出する自信は持てない琴未だった。
そのため、お互いに手が出し難い状況になり、お互いの出方を窺う拮抗状態になってしまった。なにしろ戦術的にはシエラが有利だが、落雷陣で戦略的には琴未が一気に有利になってしまったのだ。そのため、ここはお互いに出方を変えないと次はやられるという危機感があったのだろう。だからこそ、戦闘は拮抗状態に入って行ったのだ。

「ふむ、どうやら今日はそろそろ終わりそうじゃのう」
今までのんびりと観戦していた閃華がそんな言葉を口にする。なにしろお互いに手詰まりになり、戦闘が拮抗状態に入ったのだ。このまま次の手がお互いに思いつかないと、いつもそこでお互いに終戦を口にするのだった。だからだろう閃華が終わりが近い事を口にしたのは。
その言葉を聞いて与凪が口を開いてきた。
「それにしても、シエラさんの力も凄いけど……琴未も成長しましたよね」
二人の戦いを見て、そんな感想を言って来た与凪に対して閃華は少し笑いながら答えてきた。
「くっくっくっ、それはそうじゃろうな。なにしろ、ここのところはこうしてシエラと戦っているんじゃ。琴未も自然と成長してもおかしくは無いじゃろ」
「あぁ、確かに。というか、琴未はその事に気付いて無いですよね」
「そうじゃろうな」
そんな言葉を口にしてお互いに笑う閃華と与凪。
確かに与凪が言葉にしたように琴未はここに来て急成長している。それは特別な特訓をしているわけではない。こうしてシエラと本気

で戦う事で技術を磨いて、戦闘経験を積み重ねているのだ。
傍から見ていたら昇を賭けた喧嘩にしか見えないが、その喧嘩が琴未を成長させる要因となっているのだ。だが、その事に気付いていないのは当人達だけだろう。だからこそ閃華と与凪はおかしくなり笑ったのだ。
そんな笑い声を聞きながらフレトが会話に参加してきた。
「あの二人には、これ以上無く好敵手という言葉が似合いそうだな」
その言葉を聞いて更に笑う閃華と与凪。まさしくフレトが言ったとおりだからだ。確かに二人の関係を見れば好敵手、ライバルという言葉が似合いすぎる。だが当人達から見れば、その言葉を思いっきり拒否する事が目に見えるほど想像できるからこそ、更に笑い声が大きくなったのだ。
そして、その言葉を発したフレトはというと、発言した後に空になったティーカップに紅茶のおかわりを咲耶に頼んでいたのだった。
外で行われている戦闘とはまったくの正反対の空気を出している室内では、すっかりのんびりな雰囲気が広がっているようだ。
そんな時だった。部屋の扉が開くと笑顔のラクトリーとすっかり疲れ果てたミリアが部屋に入ってきた。ラクトリーは真っ先にフレトの元へ行くと笑顔のまま告げる。
「今日の訓練と仕事は終わりました、マスター」
そんな報告をしたラクトリーはいつの間にか椅子を用意しており、フレトの横に座ると咲耶が入れてくれた紅茶を口にするのだった。フレトもそんなラクトリーの言葉を聞いて「そうか」と答えるだけだった。
ラクトリーは必ずと言って良いほどフレトと一緒に帰宅している。この学校に来たのもフレトの護衛を兼ねてだが、教師として赴任したからには、それなりの仕事もある。それにミリアが居るからこそ、師匠としてミリアに訓練を課しているのだ。フレトもそんなラクトリーを待つために、この部屋に訪れる事が多い。そのため、自然とラクトリー達が戻ってくると全員がそろそろ帰宅時間だという事を

察するようになっていた。
　そのラクトリーが窓際にフレト達が集っているのを見て、少し呆れながらも口にする。
「またやっているのですか、ここのところ毎日のようにやっているのに飽きもせずに、まあ」
　どうやらラクトリーも外でシエラと琴未が戦っている事を察したようだ。まあ、今では二人の戦いを窓際に集って観戦する事も日課になっているが、シエラの一件が終わってからというもの二人の戦いは激化して、ここのところは毎日のように二人の戦いは開催されていた。だからだろう、ラクトリーが少し呆れながら、そんな事を言ったのは。
　その言葉を聞いて閃華も少し笑いながら同意する。
「くっくっくっ、まったく、その通りじゃな。最近は昇も慣れの所為か、手強くなっておるからのう。じゃから二人とも強引な手段が多くなって来たんじゃろうな」
「滝下君も災難ですね」
　閃華に続いて与凪がそんな言葉を付け足して来たので、再び部屋に笑い声が響き渡る。そんな中で、ただ一人だけ笑い声を上げていないミリア。正確には疲れ果ててテーブルに突っ伏していたのだが、そんなミリアが顔を上げると周りをキョロキョロと見回してから閃華に尋ねた。
「ねえ閃華、昇は～？」
「んっ？　そこにおるじゃろ」
「えっ？　居ないよ～」
「……はぁ？」
　ミリアの言葉に珍しくすっとんきょうな声を上げる閃華。そんなミリアの言葉を切っ掛けに与凪やフレト達も部屋を見回すが昇の姿は無かった。姿だけではない、いつの間にか昇の鞄も無くなっていた。
「なるほどのう、そういう事か」

いつの間にか部屋から姿を消した昇に閃華は納得したような言葉を発すると、部屋に居る全員に視線が自然と閃華に集まる。そんな閃華が姿を消した昇に付いて推測を述べるのだった。

「昇め……とうとう逃げおったな」

いつもなら昇は二人の戦いに巻き込まれても、最後はしっかりと皆一緒に帰宅するのが日課なのだが、この日に限っては、そうでは無いと閃華の言葉を聞いて全員が納得した。そして与凪が少しだけ心配そうに、思いっきり楽しそうに外の二人を見ながら閃華に尋ねる。

「良いんですかね、あの二人を放っておいて逃げ出して。二人が聞いたら、何を言い出すか分かったものじゃないですよ」

「まあ、滝下昇が逃げ出したい気持ちも分からなくは無いが……ここで逃げてはマズイだろう」

与凪に続いてフレトまで、そのような感想を述べる。

もう分っていると思うが昇はこの部屋には居ない、すでに荷物も無い、つまり……すでに帰宅の徒に付いたのだ。簡単に言うと、これ以上シエラと琴未の戦いに巻き込まれたくないから、さっさと帰るために逃げ出したのだ。

そんな事実をシエラと琴未が聞いたら、二人とも怒り出すのは間違いないだろう。だからこそ与凪もフレトもそんな言葉を口にしたのだが、閃華は少し考えると意外な事を口にした。

「……ふむ、まあ、これで良いじゃろう」

「って、良いのかよっ！」

閃華の言葉に思わず突っ込むフレト。そんなフレトに向かって閃華は珍しく真顔で答えてきた。

「なに、昇にも一人になりたい時があるじゃろう。それにシエラの一件以来、二人とも猪突猛進しておるからのう。ここは一つ、二人の頭を冷やすためにも。たまには昇を一人にしてやるのも必要じゃろ」

「ま、まあ、お前達がそう言うなら、俺としては口を出す気は無い

が……」
「本当に良いんですかね～」
フレトの本心を読んだかのように言葉を口にする与凪。そんな与凪はフレトとは正反対で楽しそうだ。まあ、与凪の性格からして、これも他人事で済ます事だろう。そんな与凪とは違ってフレトは少しだけ心配そうだ。さすがに男同士、分かり合う物があるのだろう。そんなフレトに向かって閃華は微笑みながら口を開く。
「なに、構わんじゃろ。昇とて人の子じゃ、いつも完璧でいられる訳では無いからのう。それに……たまには自由にしてやっても良いじゃろう。その事で、あの二人も最近の行動が昇の事を考えて無いと察するじゃろうて」
「というか、琴未の作戦を考えてたのって閃華さんですよね」
そんな与凪の突っ込みを閃華はどこ吹く風のように無視した。それから外の二人に優しい視線を送りながら、無理矢理に話を続けるのだった。
「それに居なくなって、初めて存在の大切さに気付く。我々はその事をシエラの一件で知ったばかりじゃからのう」
「私は無視ですか、まあ良いですけど。それにしても……本当に滝下君を一人にして良いんですかね」
しつこく、その言葉を口にする与凪。そんな与凪に対して閃華もしつこく同じ事を言うのだった。どうやら閃華としては早く話題を切り替えたいようだ。だが与凪の言葉が意外な事を気付かせる。
「大丈夫じゃよ、昇とて子供では無いんじゃし。たまには一人になりたい時もあるじゃろ」
「いえ、そうじゃなくてですね。滝下君の事ですから……また、どこかでトラブルに巻き込まれる可能性があるのではないのかと、私はそこを心配して言ってるんですけどね」
「……」
与凪の言葉に思わず無言になって考える閃華。それから閃華の頬に一筋の汗が流れながらも閃華は言葉を口にするのだった。

「ま、まあ、大丈夫……じゃろ……うな」
どうやら閃華にも、そこまで断言できるだけの確信は無いようだ。むしろ、昇だからこそ女性関係でトラブルが起きるのでは無いのかと心配になっているのは確かだった。だが、そんな事は決して口にしてはいけない。なにしろ……外に居る二人の耳に入ったら、どんな事が起きるか分かったものではない。だからこそ閃華はその事は胸の奥に仕舞いこむ事にし、今は外に居る二人をどうやって説得するかを考えるという現実逃避に走る事にした。
「さて、今日はセリスのために早く帰るか」
「あっ、私も帰ります」
どうやら、これから起きる修羅場をすでに想像できたのだろう。まあ、普段から昇達に関わっていれば、これから起きる修羅場などは簡単に想像できるだろう。だからこそ、フレトと与凪はそんな言葉を口にして、本当に帰ってしまった。
そして部屋に残された閃華とミリア。ミリアは耳を塞いで何も聞こえないフリをしていた。どうやらミリアもこれから起きる修羅場を想定して準備しているようだ。そして……静かになった生徒指導室には閃華の溜息が大きく響き渡るのだった。

閃華が大きな溜息を付く数十分前、昇は一人で帰宅のために歩きながら身体を伸ばしていた。
ん～、はぁ～、そういえば……こうやって一人で歩くのって久しぶりだな～。いつもは皆が居たり、誰かが横を歩いてたからね。でも……たまには良いよね、こうやって一人になるのも。
どうやら昇は充分に自由な時間を満喫しているようだ。それでも、頭の中では自然とシエラ達の事を考えてしまう辺りが昇らしいところと言えるだろう。
う～ん、今は良いけど。家に帰って来たら、また詰め寄られるだろうな～。まあ、その前に閃華が何とかしてくれてると思うけど…

…ごめん、閃華。けど、いつもいつも閃華には苦労させられるからね～。たまには仕返しって事で閃華に頑張ってもらうのも良いよね、うんうん。けど、帰って来たら皆に謝らないとかな？　それとも何かで誤魔化さないとかな？　なんにしても、シエラ達の機嫌を取らないといけないよね。そのためにはどうしたら良いのかな？

その事で頭を悩ませながら歩き続ける昇。今は良いけど、家に帰ったら嫌でもシエラ達と顔を合わせる事になるのだ。だから昇としては、その事に真剣に悩んでも不思議では無い。

だからだろう、昇は周りに注意する事無く歩き続け、気が付いた時には何かに足をとられていた。そして昇は豪快に転んでしまった、自分が仕出かした事の重要さに気付かないままに。

第百二十五話　三十六計逃げるにしかず（後書き）

はい、そんな訳で、やっと始まりました百年河清終末編ですっ！！！　いや～、新年早々に新編のスタートですよ……なんというか……また終わるまで一年ぐらい掛かりそうだな……。

さてさて、ネガティブな考えはやめにして、少しポジティブな感じで本編に触れてみましょうか。さあ、いよいよ二人の戦いが激化する中、これまたとうとう逃げ出した昇。

そんな昇を待っていたのは……次回明らかになります。それに冒頭に出てきたアルビータも気になるところですね。さらに少女がはっきりと遠くに居る精霊を察知してきたのも気になるところですね。まあ、それはおいおい明らかになってくるでしょう。そして最後には……。

とまあ、こんな感じで行こうかと思っております。そんな訳で次回、いよいよ昇が○○しますっ！！！　まあ、丸の内容については次回をお待ちくださいな。まあ、昇がそんな行動を起こすのも無理は無いですよね～。なにしろ、今回のような戦いに昇は毎日巻き込まれているのですから、それは逃げ出したくもなりますし、○○もしたくなりますよ。そんな訳でバトルはしばらくありません……まあ、修羅場ならあるかもしれませんが、数話ほどバトルなし、そしてシエラと琴未が珍しく○○しますっ！！！　さあ、どうする昇。……という感じですかね。

まあ、そんな感じで進んで行くと思うので、これからの百年河清終末編もお楽しみください。という事で、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に、評価感想もお待ちしております。

以上、始まったのは良いんだけど……本当に終わるまで時間が掛かりそうだな～と今から更新ペースについて心配している葵夢幻で

した。

第百二十六話　盲目の少女

豪快に前のめりに倒れて、地面と思いっきり顔面でキスをする昇。よっぽどシエラ達の事で頭が一杯になっていたのだろう。だから足元が疎かになって、そのような結果となってしまったようだ。

「っててて」

けれども、いつも巻き込まれているシエラと琴未の戦いに比べれば、この程度の事はかすり傷にも入らないだろう。昇は一応傷む顔を押さえながらも、未だに転ぶ切っ掛けとなった足に絡み付いている、それに目を向けて手に取る。

これって……ステッキ？　でも、なんでこんな所に？　そんな疑問を覚える昇だが、その疑問はすぐに解決する事になる。なにしろ、昇の足元から少し離れたところに、少女が何かを探すように座り込んで、地面を手探りで何かを探しているようだからだ。そんな少女を目にすれば、昇が足に引っ掛けてしまったステッキは、この少女の物だという事は昇でなくても察しが付くところだろう。

あ～、これって、あの子のか。でも……なんで目を瞑ってるんだろう？　少女が瞳を閉じて、手探りで地面を探している事に昇も違和感を覚えたのだろう。なにしろ普通なら目を開いて目で探せば良いのに、少女はわざわざ瞳を閉じて手探りで探しているのだ。それが何を意味しているのか昇は少しだけ考えると、すぐに答えを出して大きな罪悪感と心が焦りを見せる。

あの子、もしかして……目が見えないとか？　あ～、だから、ああやって手探りで、このステッキを探してるんだ～……って！　ならすぐにこのステッキをあの子に返さないとじゃないかっ！　今頃その事実にやっと気付いた昇は慌てて立ち上がると、未だに地面を探している少女に声を掛ける。

「えっと、ごめんなさい。探しているのはステッキだよね。どうも僕が足に引っ掛けちゃったみたいで、だから……えっと」

とりあえずは謝るが、その後は何て言えば良いのか分からない昇はすっかり困り果ててしまった。自分が悪いという気持ちがあるだけに真っ先に謝ったのだが、相手は盲目の少女である。だから昇としては、どう接して良いか分からないと言った感じを丸出しにしている。

そんな昇とは正反対に少女は声を掛けてきた昇の方へ顔を向けると静かに手を伸ばしてきた。どうやらステッキを返して欲しいという意思表示なのだろう。そんな少女を見て、昇は慌てて手にしている少女の手に戻すと、そのまま少女の手を取ってステッキを握らせてあげるのだった。

それから二人ともゆっくりと立ち上がる。正確には昇が少女を導きながら立たせたから、自然とゆっくりと立ち上がる事になったのだ。そして立ち上がると昇は再び少女に向かって早口で謝り始める。

「本当にごめんなさい。僕が別の事をずっと考えてたから前を見てなくて、だから君のステッキに足を引っ掛けちゃったんだけど、だから僕は転んだというか、僕よりも君の方に迷惑を掛けたから。だから何て謝って良いか、だから本当にごめんなさい、ワザとじゃないんです、事故だったんです」

早口でそんな言葉で謝ると相手に見えていないのにも関わらずに昇は深く頭を下げたのだった。

そんな昇の誠意が通じたのか、それとも昇が面白かったのかは分からないが、少女はきょとんとした顔をしていたが、すぐに少女は笑い出したのだ。その事に昇はゆっくりと頭を上げると、未だに笑い続けている少女に声を掛けた。

「え～っと、あの～？」

少女が何でこんなにも笑っているのか分からない、昇は戸惑いながらも少女に声を掛ける。その声を聞いた少女は笑いを押さえ込むように、ゆっくりと呼吸をすると始めて昇に向かって話し掛けてきた。

「私の方こそ笑ってごめんなさい。でも……そこまで謝らなくても

大丈夫よ。ワザとやった事じゃないのなら、私は怒ったりなんかしないから。だから、そんなに謝らないで」

そんな少女を言葉を聞いて昇も一安心したのだろう、昇は安堵の息を付くと、再び少女が軽く笑い始める。その事に首を傾げる昇、それから昇は少女に声を掛けるかどうか迷ったが、昇の雰囲気を感じ取ったのだろう。少女の方から昇に向かって話し掛けてきた。

「ごめんなさい、まさか初対面の私に対して、ここまで謝る人も、安心したような人も居なかったから。つい面白くなって、だから笑ってごめんなさい」

そんな少女の言葉を聞いて昇も慌てて言い返す。

「そんな、こちらこそ謝らないとだよ。だって、君の大事なステッキを蹴飛ばしたどころか、間違ったら折れそうな勢いで転んじゃったんだもの。だから僕が謝って当然だし、前をまったく見て無かった僕が悪くて当然だから、僕が謝るのも当然だから」

「ありがとうございます」

昇の言葉にお礼の言葉を述べる少女。昇としてはお礼を言われる筋合いは無いのだが、少女から見れば、ここまで初対面で心配してくれた人だからこそお礼を言ったのだろう。だが相手は昇である。そんな事に気付きもしないままに、少女の言葉にどう対応して良いのか分からなくなってしまった。そんな時に少女は昇の声を頼りに、昇が居る方向へ顔を向けると微笑みながら言葉を口にする。

「でも……私って怒ったらそんなに怖いですかね？　自分では分からないから、他人から見たら私は怖いのかもしれませんね」

そんな事を言い出してきた少女に向かって昇は慌てて弁明する。

「いや、そういう意味じゃなくて。君は全然怖くないけど、えっと、むしろ可愛いぐらいというか、そんな感じだから大丈夫だよ……って、そうじゃなくて……えっと」

最早何を言っているのか自分でも分からなくなってきた昇。そんな時だった、少女は再び軽く笑い始めると昇に向かって一言だけ言って舌を軽く出す。

「冗談です」
「……えっ、あっ……あぁ、そういう事か、良かった～」
やっと少女の冗談だと察した昇は再び胸を撫で下ろして一安心する。それから昇は目の前にいる少女をしっかりと見るのだった。
外見からして年齢は昇の一つか、二つ下と言ったところだろう。瞳を常に閉じており、目付きは良く分からないが、それでも少女は可愛いと思わせるほどの雰囲気と容姿を持っていた。更に長い髪が少女の雰囲気を良くしている。言うなれば、シエラ達とは正反対の守ってあげたいと思わせるような雰囲気を出している少女だった。
そして昇は少女に話しかけて、少女の手を取るのだった。

「はい、どうぞ」
昇はそう言いながら少女の手を取ると、今しがた買って来たクレープを握らせてあげるのだった。盲目の少女を気遣ってだろう。クレープに巻かれている紙は取ってあり、食べやすくなっている。昇は少女がクレープをしっかりと手に取るのを見届けてから、昇も少女の隣に座る。
あれから昇は少女の手を取って、近くにある公園へと足を踏み入れたのだ。もちろん、少女にしっかりと謝らないといけないと思ったからだろう。だから昇は少女を公園のベンチに座らせると、自分はクレープを買いに走り。今しがた、それを少女に渡して自分も一息ついたところだ。
そんな昇が隣で手探りでクレープを口に運ぶ少女を優しげな目で見守っており、少女はクレープを一口食べると、美味しそうな笑みを浮かべて昇も一安心したかのように自分が食べる分のクレープを口に運ぶのだった。
そんな時だった。少女は口を少し休めると昇に話し掛けるかのように言葉を口にする。
「春澄、雫春澄（しずくはすみ）、それが私の名前よ。変な名前だよね」

春澄がそんな事を言って来たので、昇も慌てて口の中を空にすると、すぐに春澄に向かって話し掛ける。

「そんな事無いよ、綺麗な名前だと思うよ。あっ！　そうそう、僕は滝下昇、歳は一六歳だから君よりも年上かな？」

そんな事を言いながら春澄に向かって微笑む昇。けれども春澄は昇の方へ顔を向けようとはしなかった。少しずつクレープを口に入れながら、昇の方へ顔を向けずに話を続けて来たのである。

「うん、そうだね。本当なら私も中学生だから、昇さんの方が年上だよ。そして……綺麗な名前だって言ってくれてありがとう。そう言われたのは昇さんで二人目だよ」

「二人目っていうと、もう一人居るっていう事？」

そんな事を聞き返す昇だが、春澄が持っていたクレープが謝って口から外れた場所に行ってしまったために春澄のほっぺには生クリームが思いっきり付く事になってしまった。昇はポケットからハンカチを取り出すと、春澄の頬についている生クリームを取ってやるのだった。

それから春澄はクレープの形を確かめるように手探りで形を確かめると、手に付いたクリームを舐め取る。それから昇との話を再開させてきた。

「うん、そうだよ～。その人とは今でも一緒に居るんだけどね。今は用事があるから別行動を取ってるの」

「えっと……その用事については聞いたちゃダメかな？」

「うん、それは話せないよ」

やっぱりか～。そんな事を思う昇だった。昇がそんな事を思うのは不自然なようにも思えるだろう。盲目とはいえ春澄は中学生、そして今は放課後となっている時間帯だ。だから春澄が外に居てもおかしくは無いのだが、春澄が着ている服はどう見ても私服。どこかの学校に行っている訳ではないのが昇には分っていた。だからこそ、そんな事を聞いたのだが、やっぱり春澄は何も答えてはくれないみたいだ。

それでも、いや、だからこそ昇は春澄に興味を持ったのだろう。
昇は春澄について話を続けるのだった。
「えっと、春澄ちゃんで良いかな？」
「うん、好きなように呼んでも良いよ」
「うん、ありがとう。それで春澄ちゃんはどんな生活をしてるのかな？　こう言っちゃ悪いけど、とても学校に行って普通に暮らしてるとは思えないんだけど」
率直に思った事を口にする昇。確かに昇が言ったとおりである。この時間帯で私服で出歩いている中学生は、まず居ないだろう。それに昇がそう思ったのは、春澄が着ている洋服がくたびれているからである。確かに洗濯はしているのだろうが、とても綺麗な状態とはいえない。服にはシワが多く、同じ服を定期的に着まわしていると思ったからだ。だからこそ、昇はそんな事を口にしてみたのだ。
そして昇が言った事は的を射ていたのだろう。口に持って行こうとしていた春澄のクレープが口の寸前で止まると、春澄の手はクレープを下ろしてしまった。それから口は昇との会話を続ける。
「普通に暮らすか……それは私達の願いでもあるけど、その願いは私達には絶対に叶わない願いだから。だから私達は普通の生活を捨てるしかなかったんだよ。それから昇さん、なんで私がいつも目を閉じているか分かりますか？」
突如として真剣な口調に変わってきたので、昇は春澄の雰囲気に戸惑いながらも、春澄との会話を続ける。
「えっと、目が見えないからじゃないの？」
「ふふっ、目が見えなくても目は開けられますよ」
「でも春澄ちゃんは目を閉じてるよね。そこには理由があるの？」
「えぇ、昇さんは盲目者が目を開けた時に目がどうなっているか分かりますか？」
質問を質問で返されて昇は春澄の質問に答えようと思考を巡らすが、どうしても答えを見つける事が出来なかった。そして昇は降参したように大きく息を吐くと、それが春澄にも聞こえたのだろう。

春澄は軽く笑ってから、再び真剣な口調で答えを言って来た。
「盲目者が目を開くと、目が見えない訳ですから焦点が合わないんですよ。だから、左右の瞳孔が別々な方向に向く。私は、その事で昔……苛められた事があって、だから……いつでも目を閉じるようになった。ううん、目を閉じる努力をした。これが答えです」
「……」
春澄の答えを黙って聞いていた昇だが、ここまで真剣な口調で重い話をされると昇としても、どう返事をして良いのか分からないのだろう。だから昇は沈黙で春澄に答えるのだった。
それから春澄は初めて昇の方へ顔を向けると、ゆっくりと微笑むのであった。
「やっぱり……昇さんは優しいですね。普通ならこんな話をしたら適当に流すか、逃げ出すかのどちらかなんですけど。昇さんは私の話を聞いて、私の事を考えてくれてる。だから……凄く優しい人ですね」
そんな事を言ってくる春澄。そんな春澄の言葉を否定するかのように昇は話を続ける。
「そんな事は無いよ。僕は春澄ちゃんの話を聞いても何も出来ないし、何かをして上げることも出来ない。ただ……こうやって話し相手になってあげる事しか出来ない。だから全然優しくなんか無いよ。僕は僕が正しいと思った事をやってるだけだよ」
そんな昇の言葉を聞いて、春澄も再び昇から顔を逸らして真正面に持って行くとクレープを口にする。それから今までとはまったく違う、優しい口調で昇に向かって言葉を返すのだった。
「やっぱり昇さんは優しいですね、それに……とても強い。昇さんからは、そんな強さと優しさを感じます。そう、今まで誰からも感じた事が無い、強さと優しさを。だから……私とも仲良くしてくれると嬉しいです。どうですか？」
突如として、そんな申し出をしてくる春澄。そんな春澄の言葉を聞いて、昇は何故だかためらいを感じていた。普段の昇なら即答で

良いと返事を返しただろう。けれども春澄に対しては何かを感じる物があったのだろう、だから即答せずに戸惑いながらも思考を巡らすのだった。

確かに……僕は春澄ちゃんの申し出を断る理由なんて無い。無いんだけど……なんだろう……なんか……春澄ちゃんには僕の何かが見通されているような、そんな気がする。だから、春澄ちゃんと仲良くするという事は……自分の全てをさらけ出すように思える。春澄ちゃんになら、それでも良いと思うけど……なんだろう……僕の中にある……何かが……それを拒絶している。

そんな風に戸惑いっていると春澄が、今まで食べていたクレープの最後を全て口の中に押し込むとゆっくりと飲み込む。それから閉じた瞳のまま顔を昇の方へ向けてきて、それから質問を重ねてきた。

「やっぱり……こんな私とは仲良くは出来ないですか？　目が見えない私とは……仲良くしたくないですか？」

そんな質問をしてきた春澄に対して昇も真剣な面持ちと声で言葉を返す。

「その質問は……卑怯だと思うな」

そんな発言をしてきた昇に対して春澄は驚きの表情を浮かべる。それから春澄はすぐに微笑を浮かべると再び昇に向かって言葉を返した。

「……そうですね。そして……ありがとうございます。何か……ますます昇さんに興味が沸いてきちゃったよ」

そんな春澄の言葉を聞いて昇は半分照れるように、半分は何かを隠すように春澄から視線を逸らせて頬を掻くのだった。昇としては、それは自然な事だから、そうしたのだが、やっぱり春澄から見れば、昇の態度は特別であり、昇の優しさと価値観がにじみ出たものだからこそ、春澄は昇に興味が沸いたと言ったようだ。

話を少し整理すると昇が発した言葉が全ての切っ掛けとなっている。『卑怯だと思うな』その言葉こそが春澄を盲目者、つまり障害者として特別な目線で見ている訳ではないという証拠なのだ。もし、

昇が春澄を障害者として特別な目線で見ているとした、絶対にそんな言葉は出ないだろう。

もし、昇が春澄を障害者として特別な目線で見ていたのなら、春澄の質問に対して必ず否定するだろう。それは春澄が障害者だから仲良くしたくない訳じゃないと言っているような物だからだ。だからこそ、春澄には昇の優しさと強さがより良く分かったし、昇に対して興味が沸いたのだろう。

たぶんだが、この場合はほとんどの人が春澄の質問に対して否定的な答えを口にするだろう。だが、それは春澄から見れば、障害者だから仲良くしてくれるのであり、普通ならどうなのだろうと首を傾げるような結果と成るだろう。つまり、この場合は障害者だから優しくしてくれるという複雑な心境を相手に与える場合が多いのだ。

けれども昇は春澄をあくまでも春澄という人物として接していた。だから春澄が障害者だから仲良く出来ないのか？　と聞いてきた時に、その質問は卑怯だと返したのだ。それは昇から見れば春澄が障害者という立場を有利に相手を強制的に肯定させる手段にも思えたからだ。だから昇はそれを指定するかのような言葉を返し、その言葉を聞いた春澄も昇に対して興味が沸いた。

たぶん、春澄も今まで親切にしてもらった事は沢山あるだろう。けれども、それは春澄が障害者だから、だから親切にしてくれたし、優しくもしてくれた。けど、もし春澄が障害者で無ければどうだろう、今まで親切にしてくれた人は障害者では無い春澄に親切にしてくれただろうか。たぶん答えは否だろう。つまり、相手が障害者というだけで、その人は周りから親切にされる事が多い分、普通の人とは区別されるのだ。

けれども、昇は春澄の目が見えないと分っても、目が見えなくて不自由な部分だけを助けて、それ以上の事は一切助けてはいない。つまり昇は春澄を障害者という認識よりも、春澄という人格を先に見るようにしていたのだ。だから春澄が仲良くして欲しいと言って来ても、即答せずに迷ったのだろう。

それは当たり前の事だろう、出会ってから十数分しか経っていない相手に、あまり分かり合えていない相手に仲良くして欲しいと言われれば、誰だって即答は出来ないだろう。よっぽど気が合うか、酒の席でなければ、初対面の相手とはすぐに仲良くして欲しいと言われても、すぐに承諾なんて出来ないだろう。相手が障害者ではなく、普通の人物なら、それが普通だろう。

けれども、相手が障害者になると人はすんなりと、その人が仲良くして欲しいと言えば、すぐに承諾の返事だけでも返してしまうものだ。それは相手が障害者だからこそ、優しくしてあげないと、仲良くしてあげないと、そんな気持ちが出てくるからだ。それはそれで良い事なのかもしれない。

けれども昇は違っていた。たとえ相手が障害者であっても、昇はその事を放っておいて、まずはその人物を見る。相手の性格はもちろん、価値観や考え方、そうした物を見て、この人とは仲良くなれるかを判断しているのだ。

まあ、昇自信には、そんな事をしている自覚は無いが。綾香が昇にしてきた教育の成果か、昇は自然と相手をそんな風に見るようになっていた。そんな昇の心にはある言葉が刻まれていた『人間生まれながら不平等、身体的に貧しい人、精神的に貧しい人、環境的に貧しい人、誰もが何かを背負っている。だから人の本質は見掛けの向こうにある』そんな言葉だ。

たぶん、昇が幼い頃から綾香に言われ続けた事で、昇も自然と覚えた言葉なのだろう。けれども、昇はその言葉が意味している事をしっかりと理解しているからこそ、春澄を障害者ではなく春澄という人物として見ている。だから、昇はあのような言葉を発したのだ。

一方の春澄も昇に卑怯だと言われて少しだけ嬉しかった。春澄も障害者として自然と周りが優しくしてくれる人が多いと思っているのだろう。それは意識的にではなく、自然とそうなってしまった事であり、その事が春澄に障害者だからこそ特別に優しくしてもらえるという概念を植えつける事になってしまっている。

けれども春澄は、それとは真逆な事も考えるようになっていた。
それは自分の目が普通に見えていたら、周りの人はどうしていたのだろうと？　やっぱり優しくしてくれてたのだか、それとも無関心だったのか。そう考えると確かに優しくしてくれるのは嬉しいが、その優しさが何に対してなのかが気になっていた。
そこに昇から卑怯と言われたのだ。だから春澄としては嬉しかったのだ。今までは、どんな事をしても障害者というレッテルが付きまとっていた。それは人に優しくされたり、意地悪されたりと様々な待遇を受けていただろう。そして、そのほとんどが、春澄には障害者だからという認識があった。
そこに昇は障害者という春澄のレッテルを無視して、春澄の行動を批判するような言葉を投げ掛けてきたのだ。それは春澄にとっては、初めて障害者という認識を無視して、春澄自身を批判する言葉であり、初めて自分を見てくれたという認識があったのだろう。だからこそ、春澄は嬉しかったのだ。あの昇の言葉には……障害者という春澄のレッテルを無視して、本当の春澄を見ての言葉だったからだ。
だから春澄も自分自身の非を認めて、謝るのと同時に昇への興味が増したと言ったのだ。春澄も今までいろいろな人と関わってきただろう。だが、昇ほど障害者というレッテルを無視して自分を見てくれる人は居ないだろう。だからこそ知りたくなったのだろう、昇という人物を、自分を春澄という人物で見てくれる人の事を。
そんな事実を二人が理解している訳では無いが、春澄ははっきりと感じたようである、昇という人物が自分をしっかりと見てくれるという事実を。一方の昇はそこまで自覚がある訳ではなかった、ただ思った事を口にしただけに過ぎない。だからこそ、春澄から顔を逸らすと照れるように頬を掻いたのだ。
けれども、これで春澄の興味が昇にますます向いた事は確かだろ。春澄は昇にしっかりと顔を向けて言葉を投げ掛けてきた。
「なら……まずはお互いの事を話しましょう。もちろん、話したく

ない事は話さなくても良いから、お互いの事を話し合って、まずはお互いの事を知りましょう。それじゃ……ダメ？」

そんな春澄の言葉を聞いて、昇も春澄に向かって顔を向ける。春澄は瞳は閉じているものの、その顔からおねだりしているような、そんな雰囲気を出しているのを昇はしっかりと感じ取っていた。だからだろう、昇が思わずこんな事を思ってしまったのは。

……可愛い……って、違う違うっ！　そんな事を思っちゃダメだっ！　まあ、確かにお互いを理解するには、まず自分達の事を伝え合わないとだよね。まあ、そこは分かるんだけど……なんだろうな～、何かが引っ掛かるのは？　けど……まあ、良いかな。だって、軽く話をするだけだし、ここから大きな問題に発展する事は無いよね。

そんな事を思う昇。たぶん春澄の雰囲気に呑まれて、すっかり忘れているのだろう。そう……シエラ達の事を。そんな事に気付く事無く、昇は春澄に向かって話し始める。

「そうだね、それぐらいなら良いかな」

「うん、ありがとう。じゃあ、まずは昇さんの事から教えて」

そんな事を言って来た春澄の顔には満面の笑みが出ていた。だから昇としても春澄の言葉を拒否する事は出来なかったのだろう。それでも、複雑な自分を取り巻く環境を考えながら春澄に話す。

「えっと、僕は両親と三人暮らしだったんだけど。父さんは仕事柄、海外に行く事が多くて、だから父さんの事はあまり知らないんだけど。今では、その、いろいろとあって、四人の居候がいるんだよね。だから毎日が賑やかで、楽しいけど、苦労してる……そんなところかな」

自分の事を話し終えた昇は一息付く、さすがに争奪戦や精霊の事なんて言える訳が無く、なんとか誤魔化しながら話したのだ。だから昇はシエラ達に関しては名前すら出してない、それが功をそうしたのか、春澄は四人の居候より昇の父親に興味を持ったようだ。

「お父さんは何をしてる人なの？　海外に行く事が多いって事は飛

行機のパイロットさんとかなのかな？」
　そんな質問をしてきた春澄に対して昇は少し呆れながら自分の父親について話し始める。
「いや、父さんは考古学者なんだ。本当なら、どっかの大学で考古学について講師をするだけで良いんだけど。父さんは何でも自分の目で見ないと気が済まない人だからね、だから何か新しい発見があると、すぐにそこに行っちゃうんだ。それでも、そこですぐに功績を上げちゃうから、何処からでも歓迎されちゃうんだよね。だから世界中を飛びまわってるんだよ。時々来る手紙には、そこは何処？って聞きたいところから手紙が来る事もあるしね」
　半笑いで呆れながら自分の父親について話す昇。まあ、それはそうだろう、なにしろ自分の父親が自分の家族を放っておいて、自分の興味を持った場所に飛んで行って、そこで研究チームに歓迎されて、更にそこの研究チームで功績を上げてくるのだ。そんな人物だからこそ、どこでも行けるのだろう。
　だから学者としては、凄く優秀かもしれないが、息子の立場としては半分は呆れるものの、半分は羨ましいと思う部分があるのだろう。なにしろ昇の父親は自分の好きな事を自由にやっており、その仕事を認められている。男としては理想な生き方だろう。だから昇は呆れながらも、そんな父親を少しは認めてるし、いつか自分もそんな生き方をしたいと思っているようだ。
　そんな昇の話を楽しいそうに聞いていた春澄は終始、楽しそうに昇の話を聞いていた。やっぱり昇の父親についてはかなり面白い話だったから、春澄は満面の笑みを浮かべている。そんな春澄の笑顔を見た昇は春澄に向かって言葉を投げ掛けた。
「じゃあ、次は春澄ちゃんの事を教えてよ」
　そんな昇の言葉を聞いて春澄の顔から急に笑顔が消えた。それから春澄は座り直すと、瞳を閉じた顔を真正面に向けならが、ゆっくりと口を開いてきた。
「私は自分の両親を知らない。私の目は先天性な物だから絶対に治

らない。だから両親は私の目が見えないとお医者さんに告げられた時には、私を育てて行く自信が無かったんだって、だから私の両親はすぐに私を障害者孤児院に預けたの、どんな事をしても私の眼は治らないって知らされたのが決意させたんだって」

「……寂しかった？」

春澄の話を聞いていた昇は思わず、そんな事を聞いてしまった。そんな質問を受けた春澄は一瞬だけ驚いた表情になるが、すぐに微笑を返してきた。

「その質問をしたのも昇さんで二人目だよ、やっぱり……似てるんだね、優しいところが」

そんな事を言うと春澄は再び昇から顔を背けて正面を向くと、再び無機質な声で話を続けてきた。

「寂しいと思った事は無いよ。だって……それ以上に嬉しいと思った事が無いから。今に思えば毎日が寂しかったのかもしれない、けど……それが普通になっちゃったから、特別に寂しいと思った事は無いよ。だから私は物心付いた時から、いつもこんな感じだったよ。でも……私達は出会った、それから私達の世界は変わった。それが、どんなに大きな代償を支払う事になったのだとしても、私は今の時間が好き、今の世界は大好きだよ」

そんな言葉を最後に春澄は再び昇に顔を向けてきて微笑んできた。そんな春澄とは対称的に昇には春澄の話しに引っ掛かる部分があるのをしっかりと感じていた。

春澄ちゃんは、はっきりと言った……どんな大きな代償を支払う事になったのだとしてもって……そっか、そういう事か。どうやら昇にはやっと今まで引っ掛かっていた物が分かったようだ。まるで歯の奥に詰まった物が取れたようにスッキリとしたし、詰まってた物が何をやっと理解した。

……春澄ちゃんの瞳を見る事が出来ないから、今まで気付かなかったけど。春澄ちゃんは……何か大きな覚悟と決意を背負ってる。普通の人なら、そうした物が目に出るんだけど、春澄ちゃんの瞳は

常に閉じてるからな～、まったく気付かなかったよ。でも……春澄ちゃんにそこまでの大きな覚悟と決意をさせているものって……いったい……何だろう？

昇がそんな事を考えている時だった。春澄が突如として立ち上がるとある方向に顔を向けた。それから何かを確かめるように春澄は見えない瞳で一点を見詰めると昇に向かって振り返ってきた。

「ごめんなさい、今日はもう行かないと。でも……昇さん、一つお願いして良いかな？」

「えっ、あっ、うん、僕に出来る事なら」

今まで考え事をしていたためだろう、昇は春澄の言葉に思わず二つ返事で返してしまった。けれども、そんなに大事では無いだろうと、昇は春澄に向かって微笑みながら春澄の言葉を聞く事にした。

「また……明日もこうやってお話をしたいな。だから、明日もこの時間、この場所で私と会ってもらえますか？」

「……」

そんな春澄の真っ直ぐな言葉に昇はすぐに答える事が出来なかった。春澄の言葉と雰囲気で春澄に何かがある事は昇は察する事は出来た。だからと言って昇は春澄とって何をすべきなのだろう？　そう考えると昇には何も出来ないと結論を出すしかなかった。なにしろ……昇も春澄の事をあまり知らないからだ。だからだろう、昇が春澄にこんな答えを返したのは。

「うん、分かったよ。また明日ね」

「ありがとう、昇さん」

昇の言葉に春澄は満面の笑みを向けてくる。その笑みを見て昇もこれで良かったのだと思う事にした。確かに春澄の覚悟も決意も昇には何なのかが分ってはいない。それでも、昇は春澄を応援したいと思った。それだけ、春澄は自分の運命に抗い、抵抗してるように思えたからだ。

だからこそ春澄には必要だったのだろう、大いなる覚悟と決意が。だからこそ昇は思わず思ってしまった。そんな春澄の力になって上

げたいと。春澄の覚悟と決意がどんな物であっても、昇は自分が出来る事はやってあげたいと思った。

それは春澄が目が見えない障害者だからではない。春澄が全力で自分を取り巻く世界に、運命に抗おうと抵抗しているからだ。そんな春澄だからこそ昇は手伝いたいと思ったのだろう。だからこそ、昇は春澄との約束をしたのだ……他の事をまったく考えずに。

そんな時だった、昇に背を向けた春澄が、まるで見えているかのように、ある方向に向かって大きく手を振って声を上げたのだ。

「こっちだよ～！　ここ～！」

その声を聞いて、今まで公園の人込みで分からなかったが、ある人物がこちらに歩いてくるのがしっかりと分かった。

その人物は男性であり、遠目でも分かるほどに筋肉質であるが、そんなに威圧感を与える雰囲気を出してはおらず、むしろ頼もしいと感じるほどの雰囲気を出していた。年齢は二十代前半だろう、身体とは違って顔付きは優しいものだった。けれども昇は、その男性を見て、何故か悲しい顔をしていると思った。その根拠は分からないが、ただ、そう感じただけかもしれないと、昇は再びこちらに歩いてくる男性に目を向ける。

髪は短く、白銀のような色をしている。頼もしい体付きと、優しい表情が周りの女性達が自然と、その男性に目を向ける。それほどまでに、その男性には魅力があると共に、容姿も整っていたのだろ。そんな男性が近くまで来ると、春澄は再び昇に顔を向けてきた。

「それじゃあ昇さん、また明日ね」

そんな言葉を聞いて昇も立ち上がると春澄の顔をしっかりと見て言葉を返す。

「うん、また明日ね。それと、その人は春澄ちゃんの保護者なの？」

先程まで歩いていた男性がいつの間にか春澄の後ろに立っていたので、昇は思わず、その男性について尋ねてしまった。そんな昇の質問を受けて、春澄は満面の笑みで答えてくる。

「うん、今では私の家族だよ。そして……私の大事なパートナだよ」

その春澄が発した言葉を聞いて、この男性こそが春澄との深い関わりがある人物だと昇はすぐに察する事が出来た。その間にも春澄は男性に昇の事を紹介していた。そして話が終わったのだろう。男性は春澄の後ろから昇の前にまで移動すると、ゆっくりと深く頭を下げた。

「今日は春澄を助けて頂き、ありがとうございます。このお礼は後日、必ず致しますので」

そんな事を言って来た男性に対して昇は慌てて頭を上げるように言うと、今日の事を男性にも謝る。

「いえ、今日の事は僕が全部悪いんだし、お礼を言われる事じゃないですよ。だから、そんなに気にしないでください」

そんな言葉を口にした昇は男性の瞳を真っ直ぐに見据える。その途端に昇は男性の瞳に吸い込まれそうな、そんな深みを男性の目に見た。その事で昇の意識が一瞬だけ揺らぐ、そして気付いた時には、昇は男性の手で支えられていた。そんな男性が優しい口調で昇に言葉を投げ掛けてきた。

「大丈夫ですか？」

何が起こったのか分からない昇は頭を混乱させながらも、男性の手から離れながらも、自力で立ちながら、再び男性の瞳を見ると、やっぱり深い何かがあるが、今度はそれに飲まれる事無く、しっかりと見据える事が出来た。そんな昇が男性にしっかりと告げる。

「すいません、ちょっと立ちくらみがしたもので、もう大丈夫です」

はっきりとそう告げる昇。あえて男性が持っている深みに手を入れるような言葉を口にはしなかった。昇も察したのだろう。男性が春澄と深く関わっているには、男性にも大きな覚悟と決意があるという事に。だからこそ、男性の瞳には深く、それが刻まれており、昇はその大きな覚悟と決意に飲まれるように押し流されたのだ。

その事をはっきりと察したからこそ、昇はそれ以上の言葉を口にする事は無かった。

それからすぐに春澄が男性の手を取ると昇に向かって満面の笑み

を向けてきた。
「それじゃあね、昇さん、また明日ね。明日も楽しみにしてるから、絶対に来てね」
「うん、分ってるよ。それじゃあ、また明日ね」
その言葉を最後に春澄が男性の手を引っ張ったので、男性は春澄を誘導するように歩き始める。そんな二人を見送る昇。そんな昇が二人を見送りながら思う。
春澄ちゃん……ともう一人の男か。そういえば、結局男の人は紹介してくれなかったな～。なんでかな？　もしかしたら僕達と戦う事になったりして……そんな訳はないか。ここで僕達と戦っても意味は無いからね～。もし、争奪戦に参加しているのなら、僕が契約者だという事に気付いているはずだし、それなら僕が一人でいる時、さっきの瞬間を狙った方が確実に僕を倒せたんだし、それをしないって事は争奪戦とは関係ないって事だよね。それにしても……春澄ちゃんが大きな代償を支払う程の決意と覚悟って何だろう。
そんな事を考える昇だが、それればかりは本人の口から聞いた方が早いと判断して考える事を止めた。とりあえずは、明日の事を考える昇だが、突然何かを思いだしたかのように、今まで手に持っていた鞄が地面に落ちた。
……僕……もしかして……とんでもない約束をしちゃった？　……明日も、ここで春澄ちゃんと会って話をするって約束しちゃったよね。それって……シエラ達から逃げ切って、しかもシエラ達に見付からないようにしないといけないって事だよね。もし……見付かったら、僕だけじゃなく春澄ちゃんまで……。ど……どうしよう、どうすれば良いんだっ！
やっと事の重大さに気付いた昇は心の中で思いっきり叫ぶ。
春澄と交わした約束。それは明日、ここでゆっくりと話す事だけだが……この場合は相手が悪い。なにしろ春澄は女の子、しかも守ってあげたいと思わせるほど可愛い。もちろん、盲目という点もあるが、遠目から見ただけでは、そこまで気付かないだろう。つまり

……ある意味ではデートに見えてもおかしくないという事だ。
もし、そんな現場をシエラ達に見られでもしたら、どんな修羅場が待っているかなど想像を絶する事になる。しかも、下手をしたら春澄までも巻き込む事になる。春澄のためにも、それだけは避けねばならない。そうなるとどうすれば良いのかと考え込む昇。そんな時だった、突如として公園の時計が楽しげなメロディーと共に仕掛けが動き出す。どうやら、一時間おきに仕掛けが動き出すようだ。そのメロディーに誘われるように昇は時計に目を向けると……午後七時を過ぎていた。
普段ならすでに家に居て、皆で夕食を頂いていてもおかしくない時間だ。それなのに昇は未だに公園にいる。だから昇はまず、今日の事から言い訳を考えなければいけなくなってしまった。

その頃、昇と別れた春澄はというと、楽しげに夜道を歩いていた。今は繁華街を歩いているだけに人も多く、かなり注意して歩かないと、春澄が持っている杖が逆に事故の元になってしまう。傍に居る男性も春澄が誰かにぶつからないように気をつけながらも、春澄に向かって問い掛けるのだった。
「随分と楽しそうだな、よっぽど先程の男が気に入ったのか？」
そんな質問をしてくる男性に春澄は満面の笑みを向けながら口を開く。
「そうだね、気に入ったといえば気に入ったかな。それに……あの人、昇さんから精霊の気配を感じた、しかも三人。昇さんは間違いなく契約者だよ」
そんな春澄の言葉を聞いた男性は思いっきり溜息を付く。
「それで春澄、どうしたいんだ？」
そんな事を聞いてきた男性に向かって春澄は今までに無いほど真剣な顔付きで話を続けてきた。
「昇さん、あの人の周りには三人も精霊が居る。後、分かり辛かっ

たけど……たぶん、エレメンタルの能力を持つ契約者。だから四人の戦力があると思う。その四人の気配が一番強かった」

「一番強かった？」

春澄の言葉にオウム返しで言葉を返す男性。そんな男性の顔を見るように春澄は頷いて見せた。

「うん、後は交じり合って良く分からなかったけど、複数の精霊の気配を感じた。契約者が持ってる残り香みたいなものだから良く分からないけど……どちらにしても……今まで戦ってきた中では一番強いと思うよ、それに戦力も揃ってる」

「そこまで分っていながら何を望むんだ？」

「これは……私の望みじゃなくて……アルビータの望みだよ」

その言葉を聞いて男性、いや、アルビータも黙り込んでしまった。そして何かの結論を出すかのように大きく息を吐くと、話を続けてきた。

「そうか……なら……我らの旅もここで終わりか。春澄はそれで良いのか？」

そんな事を問い掛けるアルビータ。そんな質問を聞いた春澄は瞳を閉じながらも、口元に笑みを浮かべながらはっきりと答える。

「私の事なら気にしなくて大丈夫だよ。私も……最後に見たいものが決まったから。だから……私達の旅はここで終わり、お互いに望む結果を手にして終わりにする。それで良いよね、アルビータ？」

「……春澄の見立てどおりなら、間違いないだろう。なら、我からという事は何も無い。後は終焉を迎えるまで、全力で挑むのみ」

「うん、期待してるよアルビータ。そして……昇さん、あなたなら……きっと……。でも、その前に、この前のを見ないとだね」

「もう少し調べた方が良いな、だからもう少しだけ待ってくれ」

「うん、分かったよ」

その会話を最後に春澄とアルビータは夜の街、人々の雑踏が作り出す音に消えて行くのだった。

2022

第百二十六話　盲目の少女（後書き）

はい、そんな訳でお送りしましたエレメですが……如何でしたでしょうか？

ついに二人の人物がはっきりとしましたね～。盲目の少女、春澄。そんな春澄に付き添うように存在するアルビータ。二人の目的はいったい、そして二人の終焉とは？　そして昇はこれから待ち受ける修羅場をどうやって切り抜けるのか？　今から見所が満載ですね。

……特に昇がどうやって修羅場を切り抜けるところとか……まあ、今の段階ではまったく考えてないんだけどね（笑）　だから私も次回の話で昇がどうやって修羅場を切り抜けるかに期待してます（無責任）　まあ……昇ならなんとかするでしょうね。そんな訳で次回は昇の奮闘ぶりに期待するとしましょう。

さてさて、今回も説明文が多かったですね。まあ、私としては、かなり噛み砕いて説明したつもりですが……分かり辛かったですかね。まあ、分かり辛かったら一報ください。次は頑張りますから（笑）

いや、だって、今から書き直すのも無理だもん、そんな時間は取れないんだもん。だから、そこは……ゆ・る・し・て（ハート）

……って、何で私が張り付けにされてるの？　というか、その筒は何？　いや～っ！！！　ごめんなさい、ごめんなさい、次からはしっかりとやりますから、だからロケットランチャーだけは勘弁してくださいっ！！！　……えっ、ダメ？　そんな殺生な――っ！！！（爆死）

……ゾンビのように復活っ！！！　さあ、一度死んだからには、もう何も怖くない、こうなったら何でも持って来いやっ！！！　……えっと、すいませんでした。だから戦車砲だけは勘弁してください。……えっ、やっぱりダメ、そりゃあ～、そうですよね～……（大爆発）

……さてさて、戯言はこの辺にしときましょうか。相変わらず意味不明な後書きで申し訳ないです。けどっ！！！　ここで遊ばないと他で遊ぶ場所が無いんです。それほど、私の後書きはフリーダムなんです。という事で、全てを（勝手に）まとめた所でそろそろ締めましょうか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、更新ペースが遅くなってるけど、その分だけ密度が増してるから許してねと懇願してみたが、やっぱり爆死させられた葵夢幻でした。

2024

第百二十七話　緊急対策会議

「ただいま～」

昇はなるべく静かに玄関を開けて、誰にも気付かれないように靴を脱いで、それから忍び足でとりあえずは自分の部屋へと向かうのだった。

「随分と遅い帰りじゃのう、昇よ」

突如として後ろから聞こえてきた声に昇は驚いたように直立不動になる。それから油の切れたブリキ人形のように、ゆっくりと首を後ろに回して、いつの間にか後ろに立っている閃華の姿を確認するのだった。

閃華が神出鬼没で、そんな閃華に慣れてきた今日この頃の昇だが、さすがに今日だけは神出鬼没の閃華に驚いたようだ。

なにしろ時刻は午後の八時を過ぎている。普段なら全員が夕食を終えて、それぞれにリビングでくつろいでいる時間帯だ。それなのに昇一人だけが今頃になって帰って来たのだ。そして遅くなった理由が春澄という女の子に理由があるだけに昇としては、突然現れた閃華にも大いに驚き、戸惑いを隠す事は出来なかった。

そんな閃華に向かって、どんな言い訳をしようかと必死に考える昇。昇は帰宅するまでも必死に言い訳を考えていたのだが、今になっても考えているという事は未だに良い言い訳が見付からなかったのだろう。更に酷い事に、閃華はよほど機嫌が悪いのか、かなり不機嫌なオーラを出しており、ゆっくりと昇に近づいてくる。

そして閃華が昇の前に立つと、閃華はまるで誰かの所為でこうなったと言わんばかりの雰囲気を出しながら愚痴を言い始める。

「まったく、誰かの所為でシエラと琴未をなだめながら帰るのに苦労したものじゃぞ。なにしろ二人とも怒り心頭じゃったからのう、そんな二人をなだめながら、やっと帰って来たというのにのう、当の昇はおらんのじゃからのう。これはどういう事なのか一から十ま

で話してもらわんと私としても納得が出来んものじゃな」
　明らかに昇が悪いと、まあ、実際には昇が悪いのだが、ここまではっきり言われると昇としても言い返すことが出来なかった。出来る事と言えば今の状況を脱出する脱出口を見つけ出す事だけだ。だが、目の前に居る閃華を出し抜くのは至難の業だ。更に閃華の事だから、上手く掻い潜っても何が待っているか分かった物ではない。つまり昇は、今ここで閃華をどうにかしてなだめて納得させるしか、脱出する手段は残されていないのだ。
　だからこそ、昇は閃華と視線を合わせる事無く、宙を漂わせながら必死になって言い訳を考える。もう、ここまで来たら、何かを言うしかないと昇は覚悟を決めて思った事をそのまま口に出す。
「えっと、ほ、ほら、今日って重力が十倍になる日じゃない。だから身体が重くて重くて、だから帰るのに時間が掛かったんだよ」
「ほう、地球にそんな現象が起きるとは初めて聞いたんじゃが。それに私達は普通に帰って来たんじゃぞ、それなのに私達の方が早く家に着いたのは、どういう理由じゃ」
「だ、男性限定なんだよ。いや～、男の人って大変だよね。たまに、こんな日があって力を酷使して帰宅するんだから大変だよね～」
「なるほどのう。じゃが帰りに見かけた男性は普通に歩いておったが……これは、どう説明するんじゃ」
「そ、それは……年齢制限だよ。ほら、あまりにも子供だと辛すぎるし、疲れてるサラリーマンにも辛すぎるでしょ。だから僕達の年齢に限定されて重力が強くなるんだよ」
「私が見かけたのは昇と一緒ぐらいの年齢で学生じゃったがのう。その男子学生は普通に歩いていたが、これは何が違うんじゃろうな」
「そ、それは……契約者だよ、契約者っ！　契約者だけに重力が強くなるんだよ」
「なるほどのう。ところで昇よ、いつまで、こんな不毛な言い訳を続けるつもりなんじゃ」
　うっ、やっぱり無理だったか。というか閃華さん、思いっきり僕

で遊ぶ事で僕に八つ当たりしてませんか。そんな事を思う昇はチラッと閃華の顔を見るが、閃華の顔は微笑んではいるものの不機嫌なオーラが昇の目にはしっかりと見えた。それほどまでに閃華が微笑んでいる事が逆に怖かったのだろう。

そんな閃華を見た事で昇は言い訳が通じない事を察すると次なる手を考えるが、意外なところから昇にとって救世主となる人物が現れた。

「昇？　帰って来たなら、さっさと夕飯を食べちゃいなさい。いつまでも放っておくとシエラちゃんと琴未ちゃんが大変なんだから」

母さんは手伝う気が無いんだね。でも……ありがとう母さんっ！

廊下で不毛な言い訳を続ける昇にとってリビングから覗くように姿を現した綾香の姿はまさに後光が射していた事だろう。これで昇は正当な理由で閃華から逃れて、夕食を食べるという大義名分が立った。さすがの閃華も綾香がそんな事を言えば口は出せないだろうという魂胆があったからこそ、昇は始めて今までに無いぐらい母親に感謝するのだった。

だが当然のように事態は昇が期待していた方向に行くはずが無かった。

……えっと、なんか……凄く食べ辛いんですけど。というか……両方から来る不機嫌なオーラが痛いです。そんな事を思う昇。それも仕方ないだろう、なにしろ夕食の席に付いた昇の両脇にはシエラと琴未が座って昇に微笑んでいるのだから。

しかも無言で不機嫌なオーラを出しながら微笑んでいるのだから、昇としては居心地が悪いどころか針の筵（むしろ）に座らされている気分だ。最早、居心地が悪いどころの気分ではない、すでに拷問に遭っているような気分の昇だった。

まあ、全ての原因が昇にあるのだから、しょうがないといえばしょうがない事だろう。だがシエラ達がここまで不機嫌なオーラを出しつつ、不機嫌さを強調させるように微笑んでいるのだから昇としては予想以上の窮地に立たされた事にやっと気が付いた。

それでも、昇は何とかして窮地を脱しないといけない。なにしろ原因が昇にだけあるなら良い、帰宅が遅れた理由が昇の他に春澄にも要因があるとなると、シエラ達の事だ、全力で春澄を排除しかねない。まあ、そんなに酷い事はしないと昇は思っているけど、それでも盲目の春澄を昇の事情で巻き込むのにはかなり気が引けたようだ。

だからこそ昇は原因を話す事無く、ただ夕食を口に運びながら両脇から感じる不機嫌で痛い感触を耐えなければならなかった。

更に悪い事に、昇の前には閃華が座っており、昇の部屋に繋がっているリビングのドアにはミリアが控えていた。この状況で昇が脱出するのは至難の業どころか、絶対不可能と昇は思っているが、それでも何とか、この危機を脱しようと夕食を口に運びながら何とか脱出方法を考えるのだった。

うぅ、完全に包囲されてる。これだと部屋に戻るにしても戻れないよ～。けど今日の出来事を素直に話すわけにはいかないよね。琴未は僕に告白する前に僕に好意を寄せていた女の子を排除してたし、シエラは何を企んでくるか分ったものじゃないからな～。だから余計に春澄ちゃんに付いて話す事は出来ないよね～。……あ――――っ！　神様っ！　どうすれば良いんですかっ！

そんな事を心の奥底で叫ぶ昇。けれども、神様はいつものように昇に味方をする気は無いのだろう。昇がどんなに、この状況をどうにかしようとしても昇の頭には脱出する手段がまったく浮かばなかった。

それでも神様の気まぐれだろう。まさかの事態が昇の身に起きたのだった。

それは夕食を食べ終えた時だ。昇が箸を置くと琴未がもの凄いスピードで昇の食器を一気に片付けると、再び席に付こうとした。そんな時だった、再び綾香が現れたのである。

「皆～、お風呂が沸いたわよ。順番に入っちゃいなさい」

そんな事を言って来た綾香だが、今の状況で呑気にお風呂に行く

者など居ないと思われたが、意外な事をシエラが言い出してきた。
「じゃあ、今日は昇からお風呂に入ってくると良い」
突然、そんな事を言い出してきたシエラ。そんなシエラに抗議の声を上げようとする琴未だが、その前に閃華が琴未を制して何も言わせなかった。そして昇も意外な事を言い出してきたシエラに驚きはしたものの、これは好機だと感じたのだろう。シエラの言葉に甘えて早口で言葉を吐き出す。
「じゃあお言葉に甘えて先に入らせてもらうよ」
昇は早口でそういうと誰にも何かを言わせる隙を与えずに、すぐに席を立つと猛スピードで駆け出して自分の部屋に戻ると、着替えを持ち出してスピードを落とす事無く、風呂場に向かうのだった。
そんな状態の昇を見送るシエラ達。そんなシエラ達の中で琴未が黙っている訳が無かった。なにしろ今日は昇が裏切って、先に帰ったのにシエラ達より帰りが遅いという事は誰にも昇に何かがあった事は明白だ。琴未としては、それをこれから昇に追求するチャンスだったのに、シエラの一言がそれを潰したのである。琴未としてはシエラに文句を言わずにはいられなかった。
「ちょっとシエラ、さっきの発言はどういう意味よっ！　おかげで昇に逃げられちゃったじゃないっ！」
そんな抗議の声を上げる琴未に対してシエラは呑気にお茶を一気にすすると湯飲みを手にしながら琴未に真剣な眼差しを向けてきた。そんなシエラがこんな事を言い出す。
「今は詳しい事は言えない。でも、早急に対策会議を開かないといけない。だから、全員私の部屋に集まって」
琴未の抗議を無視して、そんな事を言い出すシエラだが、そんな事で琴未の怒りが収まるはずが無かった。そんな琴未の心境を読んでいたのだろう、琴未が何かを言う前に閃華が琴未に向かって話し掛けてきた。
「琴未よ、どうやらシエラには何かが分かったようじゃな。じゃからこそ、昇をこの場に居させる訳には行かなかったんじゃよ。どう

やらシエラは昇に聞かれては、まずい事を話そうとしておるんじゃからのう」

「その昇に聞かれちゃいけない事って何よ？」

琴未がそんな質問をシエラに投げ掛けるが、シエラはその質問を無視するかのように立ち上がると、お盆に湯飲みと急須を乗せるとさっさと自分の部屋に来るように全員を顔で促すのだった。そんなシエラの態度を見て、琴未としては不に落ちなかったが、シエラがここまでするという事は閃華が言ったとおりにシエラだけが分かった事があるのだろうと、琴未は思いっきり溜息を付いて、自分の湯飲みを空にすると閃華と共にミリアを引き連れてシエラの部屋に向かうのだった。

「さて、それじゃあ昇に聞かれちゃいけない理由っていうのを聞かせてもらおうじゃない」

シエラの部屋に全員が揃い次第、そんな事を口走る琴未。まあ、琴未としては先程のシエラがとった行動が余程不満だったのだろう。だからこそ、こうして準備が出来次第、思いっきり上から物を言い出したのだ。

そんな琴未の言い分を無視するかのようにシエラはのんびりとお茶をすすった後で、湯飲みを置くと静かに確実に言い始めた。

「昇から知らない女の匂いがした。これは事によっては重要な事になる」

はっきりとそんな発言をするシエラだが、琴未にはいまいち理解が出来なかったのだろう、琴未が首を傾げると閃華が補足説明を加えてきた。

「琴未よ、シエラは翼の精霊じゃ。じゃから風の属性も少なからずも有しておるんじゃ。それにシエラは妖魔の能力として大気のルーラーがあるじゃろ、じゃから風の属性に関しては風の精霊よりも強い力を発揮できるんじゃよ」

「それと女の匂いがどんな意味があるのよ？」
「まあ、そう焦るでない。琴未よ、風の属性は空気を操るだけでは無い、空気からいろいろな情報を引き出したり、探したり出来るんじゃよ。つまり……今のシエラは犬以上の嗅覚を超えて匂いに反応する事が出来るんじゃ」
　そんな事を言った閃華をシエラは軽く睨みつける。さすがのシエラも犬と比較されては少しだけ癪に来るのだろう。だが、例えとしては限りなく近い表現とも言える。だからシエラは黙って閃華を睨みつけただけで、何かを言う事はしなかった。
　そして、その話を聞いた琴未がシエラが言った事を踏まえつつ、話を理解したか確かめるようにシエラに向かって尋ねるのだった。
「つまり、シエラの能力によって匂いに対してかなり敏感に反応できる。そして、シエラはその能力で昇から私達の知らない女の匂いを嗅ぎ取ったって事になるわけ？」
　そんな琴未の解答にシエラは黙って頷くのだった。それからシエラは持ってきた湯飲みが空になったから、急須からお茶を入れると再び両手で湯飲みを持ちながら真剣な面持ちで話し始めた。
「与凪やフレトの傍にいる女性の匂いなら私にも分かる。それが誰の匂いなのかという事も。けど……さっきまで昇の隣に座ってて、今まで嗅いだ事が無い女の匂いがした。これは長時間、昇が私達の知らない女と一緒に居た事を示している」
「それってつまり……」
　琴未にもシエラが何を言いたいのかが分かったのだろう。琴未も真剣な面持ちになると生唾を飲み込む。さすがに琴未も信じ難い事実だけに緊張しているのだろう。だがシエラの能力が確かだからこそ、シエラが言った事には信憑性がある。そしてシエラは思った事をはっきりと口にするのだった。
「そう、昇は……私達の知らない女と浮気してるっ！」
　はっきりと断言するシエラ。そんなシエラの発言に琴未も驚きを隠せなかった。そんな中で閃華だけが溜息を付いてから、シエラに

対して発言をするのだった。
「だがのうシエラよ。昇から知らない女の匂いがしたとしても、それが浮気に繋がると決め付けるのは早計というものじゃろ」
そんな閃華の発言にシエラは不機嫌そうな顔を閃華に向けてきた。ただでさえ、昇が逃亡して機嫌が悪いと言うのに、ここで更に自分が言った事を否定されたのだから、シエラも不機嫌さを隠す事は出来なかったのだろう。
だが閃華はそんなシエラ達をなだめながら帰宅してきたのだ。今更、不機嫌な顔を向けられても閃華としては特別な感情も、うんざりとした気分にもなる事無く、ただシエラの発言に対して自分の意見を述べる。
「確かにシエラの能力で昇が私達の知らない女と長時間一緒に居た事は事実じゃろ。じゃからと言って昇が浮気をしてると決め付けるのは早すぎるじゃろ。なにしろ昇の事じゃ、他にも理由があるかも知れんじゃろ」
「それってどんな理由よ？」
今まで黙って閃華の話を聞いていた琴未が閃華の意図を問い質してきた。そんな琴未もシエラに負けないぐらい不機嫌な顔をしている。琴未が不機嫌な顔をしているのもシエラと同じ理由だろう、だから閃華はシエラの時と同様に琴未対しても平常心で答える。
「琴未よ、琴未が一番昇の性格を知っておるじゃろ。あの昇の性格じゃ、じゃから昇が知らない女に余計な手助けをしてもおかしくは無いじゃろ。今回も昇が余計なおせっかいをしただけで、それだけで終わるのではないのかと、私は言いたいわけじゃよ」
「……なるほど、確かに言われてみればそうね」
閃華にそう言われて納得する琴未。さすがは幼馴染で幼い頃から昇の事を好きだった琴未だからこそ、一番昇の事を理解している。だから閃華の言い分が無い事も無いと断言できなかったし、昇の性格を考えれば閃華の言っている事の方が信憑性が高かった。
そんな理由で納得した琴未にシエラは昇にとっては凄く余計な事

を言い出してきた。
「確かに、昇の性格から言って、そういう事があってもおかしくはない。けど……相手の女から見ればどう？　もしかしたら昇との仲を進展させる事を考えてもおかしくは無い。昇の性格から言っても、女性にリードされると簡単に篭絡させられる。そうなると私達がやってきた事は完全に無意味になる。だから琴未は、私が昇と契約をする前は昇に告白しそうな女を排除してきた、そうでしょ」
「随分と余計な事を覚えてるわね。まあ、確かにその通りだけど。けど……そうなると、確かにこのまま放っておく訳にはいかないわね」
　シエラの言葉を聞いて、そんな発言をした後に考え込む琴未。琴未としてもシエラが思っている事の重大さにやっと気付いたのだろう。そして閃華もすでに二人を止める事は出来ないと諦めたように溜息を付いた。そんな閃華の隣でのんびりとお茶をすすりながら、お菓子に手を伸ばすミリア。どうやらミリアは最初から真剣に話をする気は無いみたいだ。だが、この場にいるからにはミリアも無関係でいられる訳ではなかった。
　琴未が黙り込んだ事により一時の沈黙が訪れるが、その沈黙をすぐにシエラが崩すのだった。
「なんにしても、このまま放っておけない事は確実。ならば私達は事の真相を確かめないといけない。だからミリア、分ってる」
「……はへぇ」
　いきなり話を振られて間の抜けた返事を返すミリア。まさかシエラが自分に話を振ってくるとは思っていなかったのだろう。けれどもシエラは、そんなミリアに構う事無く、ミリアに命令するかのようにミリアのやるべき事を言うのだった。
「ミリアは一刻も早く昇の反応を終えるように準備しておく事。大地の精霊なら相手が足を地面から離さない限りは精霊だろうと契約者だろうと普通の人間だろうと追跡が出来る。だからミリア、いつでも昇を追跡できるようにしておきなさい」

そんな発言をするシエラ。一方のミリアはその発言を聞いて思いっきり嫌な顔をシエラに向けて返答をする。

「え～、なんで私がそんな事をしないといけないの～。昇を追跡するだけなら大気のルーラーを使えるシエラ方が楽でしょ～」

そんな不満をもらすミリアに対してシエラはミリアから顔を逸らしながら話を続けるのだった。

「大気のルーラーは今まで使っていなかった能力だから、今はまだ覚え始めたばかり。だから今はそこまでの技術を習得出来てない。それにミリア、普段からご飯ばかり食べてないで、たまには役に立つ事をしなさい」

ミリアの不満に対してそんな言葉を返すシエラだが、当のミリアは不適な笑みを浮かべてシエラに向かって言葉を放つのであった。

「そんな事を言って～、シエラは自分に出来ないからこっちに押し付けてるんでしょ～。や～い、シエラでも出来ない事があるんだ～」

日頃の恨みか、今日の事で溜まっていたうっぷんを晴らしたのか、それは分からないが、もしかしたら両方かもしれないが、ミリアはシエラを小バカにしたような言葉を放った。その言葉が何を意味しているのかも知らないままに。

その言葉を聞いてシエラは顔を伏せて不機嫌なオーラが更に増す。そんなシエラを見て閃華は再び溜息を付くのだった。そしてミリアとはいうと、調子に乗ってシエラを小バカにしたような発言を続けていた。

「まあ、確かに～、追跡や発見は大地の精霊が風の精霊に次いで優秀だって言われてるけど～。シエラは風の属性より優位な大気のルーラーを持ちながら、そんな事も出来ないんだ～。だから私を引っ張り出そうとしてるんだ～。それだったら、ちゃんとした頼み方をして欲しいな～」

調子に乗ってそんな発言をするミリア。だが、そんなミリアの言葉を聞いて黙っているシエラでは無い。それどころか、シエラにとってミリアは扱いやすい精霊だ。だからこのままシエラだが黙って

いる訳が無かった。
　シエラは不機嫌なオーラを大いに出しながら、ミリアに向かって微笑むとはっきりと宣言した。
「ミリア、素直に私の言う事を聞かないと……有る事無い事をラクトリーに言うわよ。それはもう、地獄の特訓だけでは済まないほどに。ミリア、それでも良い」
「ごめんなさい、シエラ、許して～」
　シエラの言葉を聞いてミリアの態度が一変。半泣きになりながらシエラにすがりつくのだった。どうやらラクトリーからの特訓という言葉がミリアの胸には深く突き刺さったようだ。
　なにしろミリアはこのような性格だ。いくらラクトリーが厳しくとも、素直に特訓とか、練習とか、勉強とかを受ける訳がなかった。それどころか、なにかしらの理由を付けてはシエラに助けてもらっているのだ。
　そんなシエラからミリアにとって不利な事をラクトリーに告げ口されれば、ミリアに待っているのは……地獄の特訓を通り越しての地獄なのはミリア自身が一番良く分っている。だからこそミリアは一変に態度を変えてシエラに泣き付くのだった。
　そんなミリアの頭を撫でながらシエラはやっと不機嫌なオーラを消すと、納得したようにミリアの頭を少し強く撫でてやる。そして閃華は……そんな光景を見ながら先行きに不安を感じたのだろう。この部屋に来てから三度目となる溜息を付くのだった。
　それからシエラはミリアを引き剥がすとミリアに具体的な指示を出す。
「とにかくミリアは昇を追跡出来るようにしておく事。もし……明日も昇が私達の知らない女に会うことになっているのなら、必ず私達を出し抜いてくるはずだから。だから私達はあえて昇を逃がす。その方が昇も油断して尻尾を出しやすい。そこを一気に捉えるわよ」
「つまり私達が邪魔しているように見せかけて、実は後からこっそりと跡を付けて現場を抑えるというわけね」

今まで考え込んでいた琴未だが、話だけはしっかりと聞いていたのだろう。シエラの言葉に対して、そんな言葉を口にしてきた。そしてシエラも琴未の言葉を聞いて頷くのだった。どうやら二人とも、普段は対峙する事が多いだけに利害が一致した時にはお互いの意思を汲み取るのが早いようだ。

そんな光景を見ながら閃華は再び溜息を付きながら思う。琴未よ、先程も言ったんじゃが、まだ昇が浮気をしているとは限らんのじゃぞ。まあ……昇の事じゃからのう、浮気とまではいかんでも、他の女性と何かあってもおかしくは無いんじゃが。二人とも早計というか……決め付けすぎじゃな。というか……やる気マンマンじゃのう。そんな事を思いながら閃華は遠い目でシエラ達を見守るのだった。

琴未が発言してから、閃華がそんな事を思ってすぐ、涙を拭いたミリアがシエラに向かって申し訳無さそうに話し始めた。

「あ、あのね……シエラ。えっと……昇を追跡するのは作れるんだけど、なんというか～、ちょっと、ちょ～っとだけ、時間が掛かるんだよ～」

そんな発言をしてきたミリアに目を向けるシエラと琴未。それから二人ともミリアから視線を逸らすと独り言のように、この部屋に居る者に聞こえるような声で呟くのだった。

「使えない子」

「役立たず」

「閃華～っ！　今日は二人とも凄く意地悪だよ～っ！」

もう閃華のところしか逃げ場が無いとミリアは悟ったのだろう。今度は閃華に泣き付くミリア、閃華はそんなミリアの頭を優しく撫でながら、呆れた顔をしながらもミリアを慰めるのだった。

その間にもシエラと琴未はお互いに話を進めて行く。

「とにかく、今は昇の浮気相手を締め上げる事が最優先よっ！　だからシエラ、あなたとの決着は後回しにしてあげるわよ」

「それは私のセリフ、まあ……琴未なんていつでも倒せるから構わないけど、今は協力した方が良い。どこかの知らない兎のフンなん

かに昇を取られるわけには行かない。だから今は停戦して共同戦線を引いてあげる」

「その話、乗ってあげても良いわよ。私もどこかの馬糞みたいな女に昇を取られるわけにはいかないからね。だからここは一つ、停戦協定を結んで共同戦線と行こうじゃない」

「なら話は決まり。今は力をあわせるしかない」

「仕方ないわね。やってやろうじゃないっ！」

そんな会話を終えた後にがっしりと握手するシエラと琴未。いつもはいがみ合っている二人だが、こんな状況になればすんなりと協力をするようだ。まあ、二人とも昇を取られるのが嫌だからこそ、いつもいがみ合っているだ。だからこそ、他の女が出てくればあっさりと協力するのは当たり前の事だと言えるだろう。

そんな光景を目の当たりにしながら閃華はミリアの頭を撫でながら、本日何度目かの溜息を付きながら思うのだった。やれやれ、どうやら昇はまたしても自ら災難の種を撒いたようじゃな。まったく、あの朴念仁は二人の気持ちを分ってやれんものかのう。それにしても、二人とも今回ばかりはあっさりと協力したのう。まあ、こんな状況だからこそあっさりと手を組んだんじゃろうけど……二人とも……やる気を出しすぎじゃぞ。

そんな事を思った閃華は未だにお互いの手を取っている二人を見ると、やる気が炎なって目に見えているような錯覚を覚える閃華であった。そんな二人を見て閃華は再び口は出さないが心に思う。

まあ、こういう形で協力するのもたまには良いじゃろうな。いつも喧嘩ばかりでは何も進展しないからのう。じゃが昇よ……まさか昇から進展しそうな要素を持ってくるとは思っておらんかったぞ。じゃが……これが裏目に出なければ良いのじゃがな。

そんな事を思う閃華。確かに今回の事で二人が停戦して協力するのは良い事だと思えるだろう。だが一つ間違えば、二人の仲が更に悪化するどころか、別方向へ向いても不思議ではない。それだけに閃華が心配するのも当然だった。

確かに今回の停戦と共同戦線は二人の仲を一時的に良くはしている。だが結末次第では、どちらかに傾く可能性がある。そうなると二人の仲は一気に悪化、状況は更に悪くなり、今度は昇が逃げ出す事も出来ないほどの展開になりかねないと閃華は心配したのだ。

そんな閃華の心配を余所に二人のやる気は更に増すのだった。

滝下家で、そのような事が行われている頃。昇達が住んでいるホテルの一室では少女と筋肉質の美青年という不釣合いの二人組みが、先程ホテルマンに案内されたホテルの一室で少女はベットに横たわりながら、男は椅子に座って夜景を見ながら会話をしていた。

「あの豪邸だが、外からでも分かるぐらい広いからな。中に入っての戦闘は不可能だろう。だから、こっちから精界で奇襲を掛けて引きずり出すしかないな」

「へぇ～、そんなに広いんだ。なら……中を見るのは無理か～」

そんな事を言って枕に顔を沈める春澄をアルビータは無表情な顔で見ていた。それから春澄は顔を枕から上げると、アルビータに向かって話を続けてきた。

「なら、しょうがないね。中を見るのは諦めるよ。それと、明日は私も一緒に行くね」

「んっ、春澄。お前は今日会った、あの少年と明日も会う約束をしていなかったか？」

春澄は昇の事と昇と話した事を全てアルビータに話していたようだ。もっとも春澄が一方的に話すだけでアルビータは適度に相槌を打ってくるだけだが、春澄にとってはそれだけで充分だったようだ。だからこそ、春澄はそんなアルビータに不満を言う事はしないし、今でも笑顔で話している。

「うん、したよ。だから明日の午前中に見に行くよ。午後からは、また昇さんとお話がしたいし、アルビータは適度な時間になったら迎えに来てよ」

そんな事を言って来た春澄に対してアルビータは否定的な言葉を口にする。これも別に珍しい事ではない。二人にとっては会話が出来るという事が特別であり、心を許し会える者との会話だからこそ、どんな言葉も不満に思わなかった。

だからこそ二人とも態度を変える事無く会話を続ける。

「別に春澄が来るまでも無いだろう。下調べだけなら私だけで充分だ」

「でも、私が居た方が相手の戦力が分かるでしょ。だって……私は契約者の能力と他の力を持ってるんだから。それを使えば相手の戦力が分って、アルビータも戦いやすいでしょ」

「確かにそうだが、春澄にそこまで足を運ばせる理由が無い。どんな敵でも、相手が何人居ようと私は決して負けない……終焉を迎えるまでは」

「さすがアルビータだね。そう、私達は絶対に負けない。アルビータの力と私の契約者としての能力がある限りはね。だからだよ、私達が負けない事は分ってるんだから、後は相手をどうやって倒さないかを考えないと、そうしないと意味が無いし、昇さんとの最終決戦にも支障が出る可能性があるでしょ」

「なるほどな、確かに少しは補充しておいた方が良いかもな。そのためにも相手の戦力をしっかりと把握できた方が良いか。それに……春澄がそうしたいのなら私は拒絶しない」

「ふふっ、ありがとう、アルビータ」

そんな会話を交わしてから春澄は枕を抱きしめてベットの上を転がる。よっぽどアルビータの言葉が嬉しかったのだろう。なにしろ春澄にとっては、今までこんな会話が出来る相手が居なかったのだから、そしてそれは……アルビータも同じだった。

だからこそ二人とも今という時間を楽しむかのように、それぞれ好きな行動を取っているのだ。

そんな時だった。アルビータが何かを思い出したのだろう。春澄の方へ振り向くと、春澄もアルビータの視線を感じたのだろう。べ

ットの上にちょこんと座るとアルビータの方に顔を向けてきた。
「そういえば……相手の精霊は四人だったな。後は契約者がどれだけ居るかだが、それだけでも分かれば戦いやすい」
そんな言葉を口にしてきたアルビータに対して春澄は枕を抱きしめると嬉しそうに話を続けてきた。
「たぶんだけど……契約者は一人だけだと思うよ。他に普通の人が一人いるみたいだけど、こっちは関係ないと思う。だからアルビータの相手は精霊が四人、契約者が一人の合計で五人だよ。たぶん、そうなると思うよ」
「そうか、その程度なら楽に行きそうだな～」
「う～ん、それはどうかな～」
「んっ、どういう意味だ？」
意味深な言葉を口にした春澄にアルビータは首を傾げながら質問する。そして春澄はというと意地悪というより、楽しそうな口調で話を続けるのだった。
「実際にその契約者と出会ったわけじゃないから分からないけど……あの契約者からは相当強い精霊の気配を感じたよ。たぶん……私達と同じじゃないかな」
そんな春澄の言葉を聞いて今まで無表情だったアルビータの口元に笑みが浮かぶ。
「なるほど、そういう事か。なら……楽しめそうだな」
「うん、思っていたより強敵みたいだからアルビータには丁度良いかもね。前菜にしては量が多いかもしれないけど、アルビータなら楽勝だよね」
「春澄がそう望むのならばな」
そんな会話を交わす春澄とアルビータ。未だに二人の目的は、はっきりしないものの、契約者として誰かに戦いを挑もうとしている事は確かなようだ。それは争奪戦に参加している者なら当然な事かもしれないが……この二人はどうやら特別なようだ。だからこそ、争奪戦を別の意味で楽しんでいるのだろう。

そんな春澄達に昇が気付かないままに、夜は深けていくのであった。

第百二十七話　緊急対策会議（後書き）

はい、そんな訳でやっと更新できたわけですが。……まあ、私のブログを読んでもらっている方は分っていると思うのですけど……今まで使ってたグラボが死んだ。だから小説を書けない時間が数日に渡って続いたわけでして、それでも小説を書きたいという創作意欲が溜まっていたのか、一気に仕上げてしまいました～。

まあ、そんな訳で今回のエレメは如何でしたでしょうか。さてさて、これで昇の浮気が発覚したわけですね。さ～て、これからどうなっていくんでしょうね～。このままシエラ達が黙っているわけが無いし、昇はそんなシエラ達を掻い潜って春澄と会わないといけない。……昇よ、自業自得とはいえ無残よな～。

まあ、そんな昇に同情する事無く、話を続けて行きたいと思っております。そんな訳で最後の方に春澄達が出てきましたね～。どうやら春澄達も何かしらを企んでいるようです。そして春澄達が口にする終焉とは……。それはこれから明らかになるので、更新が遅れるかもしれないけど皆さんは寛大なお心で更新をお待ちくださいな。

……まあ、私はその間にネトゲに現実逃避してるけど（笑）いやね、だって、ブレイドクロニクルというネトゲなんですけど……凄く面白いのよ。それに私好みだから、私はすっかりハマってしまって最早抜け出せなくなりました～（笑）　そんなブレクロをやりつつ、何とか更新ペースを上げて行ければなと思っております。

まあ、実際には小説を書けなかった時間が多かっただけに、今は一気に小説を書き進めてますからね～。次回の更新は意外と早いかもしれません……まあ、そんな気がするだけだけどね。

さてさて、エレメも今回は意外な展開に向かって来ましたね～。なにしろ昇の浮気、更にはシエラ達による昇の浮気調査。いや～、今までのエレメには無い状態です。ですが、最後は……。

まあ、その辺は更新を待ちつつ、じっくりと楽しんでくださいな。

……さっさと生活保護を寄こせコノヤローっ！！！　いやね、ほら、私ってうつ病で、かなり深刻じゃないですか。つーか、普通に働く事も出来ないし。だから生活保護を頼みたいんだけど……肝心の武器が未だに出来上がらない。まあ、情報によれば一ヶ月以上かかるみたいですからね～。ここは気長に待つしかありません。

それから……さっさと障害者基礎年金を寄こせコノヤロー。……はい、こちらもうつ関係です。今は手続きの途中ですが、手続きが終わるまでかなり時間が掛かりそうです。

というか……そろそろ、それらの救助が無いと生活が……病状が悪化するよ～。けど、その手の手続きには時間が掛かるのは当たり前。だから私も気長に待つ事にします。なので皆さんも更新を気長に待ってくださいね。

さあ、無理矢理なこじ付けは終わった。だからそろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、普通に働けるんだったら働いているわっ！！！　と明後日の方向に叫んでみた葵夢幻でした。

第百二十八話　伝説の精霊

滝下昇はいつもの登下校する道とはまったく違う、道とも呼べない生い茂った草を掻き分けながら走り続けていた。なんで昇がこんな事をしているかというと、全ての始まりは今朝から始まっていた。

昨日の事があるからこそ、昇はシエラ達が不機嫌で再び痛い視線や雰囲気を味わいながら登校するのだろうと思っていたのだが、昇の予想は外れて、意外な事にいつものように昇を中心にいつものように騒がしげに登校したのである。

昇にはその事が不自然でならなかった。昨日の夜はあんなにも不機嫌だったのに、今日になって、まるで何事も無かったかのようにシエラ達は振舞ってきたのである。だからこそ昇も気付いたのだ。これは……何かあると。

だからこそ、昇は余計に準備だけを怠らなかったのである。すでに逃走経路は把握済み、タイミングも何とか作ろうと準備をしてきた。後は放課後になるのを待って決行、そして春澄との待ち合わせの場所に向かうだけだ。そんな事を考えながら登校した昇であった。

そして、授業が全て終わり、ホームルームの時間となると森尾とラクトリーが教室に入ってきて、連絡事項を伝えてくる。そんな森尾の話を聞き流しながら、昇は着々と準備をする。そして森尾がホームルームの終わりを告げた時だった。

普段ならシエラ達の方から昇を誘って帰路に付いたり、いつもの生徒指導室でのんびりしたりするのだが、その日の昇はシエラ達が何かを企んでいる事を察したからこそ、シエラ達が動き出す前に一気に行動に出るのだった。

森尾がホームルームの終わりを宣言するのと同時に昇は机の下に隠してあった爆竹に火をつけると、なるべく人が無い、前の方へと見付からないように投げる。そんな事をすれば、当然のように数秒後には爆竹は大きな音をだしながら破裂を繰り返して、クラス中が

パニックにもなり、その後に誰しもが呆然とするだろうという昇の計算だ。だからこそ、昇はそのような大胆な手に出たのだ。

そして昇の思惑通りに爆竹が一気に破裂し、大きな音を撒き散らし、少量の煙を上げる。いきなりの事にクラスの誰もが爆竹の音に驚いて、隠れたり、驚いたり、または呆然としたりしている。

そんな誰しもが爆竹に反応を示しているうちに昇は荷物を持つと、一気に教室の出入り口へと走り。爆竹の音が止まないうちに教室から飛び出したのだった。そこからはシエラ達との競争になると昇は考えていたのだろう。だからこそ昇の行動はもの凄く早かった。

廊下を一気に駆け抜けて、階段を数段飛ばしで一気に駆け上り、そして昇が到達したのは、いつも与凪が使っている生徒指導室である。昇は部屋の扉を開けるとすぐに入り、ドアを再び閉めたのである。

この生徒指導室の扉は与凪が作り出した精界の出入り口でもある。だから今は昇だけが与凪の精界に入っている状態だ。

それから昇はすぐにアルマセットを行い、紫黒と八咫烏という名のエレメンタルウェポンとエレメンタルジャケットを身にまとう。

こうして準備が出来た昇は生徒指導室の窓を開けると、霧の精霊である与凪が作り出した精界、つまりグレーに染まった校庭が広がっていた。だから、校庭には誰一人として人影は無いし、与凪達が未だに来る気配は無い。だからこそ、昇は今のうちと窓から一気に校庭に跳び下りる。

さすがに昇もいくつもの戦いと修羅場を掻い潜って来ただけの事はあるのだろう。今となっては、この程度の事などは簡単に出来るようになっていた。それから昇は一気に校庭を駆け抜けると運動部の部室棟に辿り着く。

そこは与凪が作り出した精界の端であり、部室棟の後ろは林となっており、誰もがそこには行かないような場所である。だからこそ昇はそこを選んだのだ。

昇は部室棟の後ろに回りこむと、すぐそこには生い茂った背の高

い草があり、与凪が作り出した精界の端もあった。そして昇は紫黒を構えて、引き金に指を掛ける。なにしろ、与凪が学校に作った精界は隠れ家的な意味が大きいために、普段なら内側からは破壊が不可能とも言われている精界だが、ここの精界は隠す事を優先しているために内側からでも破壊が可能なのだ。

それでも昇は紫黒に最小限の力だけを注ぎ込むと引き金を引く。なにしろ昇としては学校から脱出すれば良いだけだから、無駄に爆発や大きな音を立てる事だけは避けたかった。だから紫黒から撃ち出された力は与凪の精界を昇が通れるだけのスペースだけ破壊されて、他に爆発も大きな音も出なかった。そして昇は普段の制服姿に戻ると、そこから学校を脱出して、今現在、こうして林の中を駆けているわけである。

そんな昇が草を掻き分けながら思う。今日は上手く行ったけど、明日からはこうは行かないよね。う～ん、春澄ちゃんの事だから、また明日もって言いそうだからな～。まあ、僕も春澄ちゃんと話をしてみたいし……しばらくはシエラ達から逃げ続けないとかな～。そんな事を思いながら、明日の逃走経路を考える昇はやっと林を抜け出して、春澄が待っている公園へと向かうのであった。

一方、その頃、シエラ達はというといつもの生徒指導室に居た。そこには珍しくフレトの姿がなかった。どうやら爆竹の騒ぎがフレト達の教室にも伝わっており、フレトにはそれが昇の仕業で、未だに面倒な事になっていると察したのだろう。だからフレトは生徒指導室に顔を出す事無く、咲耶を共にさっさと帰宅したのである。

だから今の生徒指導室にはシエラ達と与凪、そしてラクトリーの姿があった。そんな中で琴未が少し怒ったような表情をしながら、少し怒りながら発言を開始するのだった。

「あんなのを仕込んでくるなんて、昇も昇よっ！　そんなに私達と一緒に居たくないわけっ！」

シエラ達の計画なら昇の邪魔をしながらも、昇をワザと逃がすつもりだったのだが、まかさここまで手際良く、昇が逃げるとは誰も予測していなかったのだろう。だからこそ、琴未の怒りゲージは上がっていたのだった。

そんな琴未をなだめるかのように閃華が口を開く。

「確かに今回は昇に一杯食わされたが琴未よ、そんなに怒る事はないじゃろ。昇とて本気で私達を嫌っておる訳では無いのじゃからな」

そんな閃華の発言を聞いて琴未は閃華を軽く睨み付けながら、質問をしてきた。

「どうして閃華は、そんな風にはっきりと断言できるのよ？」

明らかに不機嫌な気分を出しつつ、閃華に突っ掛かるように質問する琴未。どうやら閃華が口にした言葉がいまいち納得できないようだ。閃華はそんな琴未に溜息交じりの笑みを向けながら質問の答えを返してきた。

「そもそも琴未よ、昇が本当に私達の事を嫌っておるのなら、契約を解除すれば良いだけじゃ。そうすれば私を含めて精霊は人間世界に居られなくなるんじゃからな。それに琴未に対してもはっきりと近づくなと言ってくるはずじゃ。それが無いという事は、昇は本心から私達を嫌っている訳ではない。何か理由があって私達が逃げておる、そう考える事が出来るじゃうがな」

「ま、まあ、確かにそうだけど……納得行かないっ！」

閃華の言っている事は正しいと琴未は理解したようだが、理解したからと言っても心が頭と同じように理解で収まるかといえば、それはまた別問題である。頭で納得しても心では納得が行かない事なんて、いくらでもある物だ。今の琴未もまた、その一つに過ぎない。

そんな時だ、与凪から琴未に向かって話し掛けてきた。

「琴未、どうやら滝下君は一旦、この部屋から私の精界に入って、精界を破壊して学校の外に出た見たよ。ほら、ここの精界が破壊されてる。まあ、今は自己修復の最中だけど」

そう言って与凪は空中に浮かんだモニターを琴未にも見せる。モニターには学校の地図が示されており、与凪が指差した点には何かしらの文字が出ていた。与凪が使っているだけに、使われている言語が精霊の標準語で琴未には読めない文字だった。それでも与凪がそう言っているのだから、これはそういう意味だと琴未は勝手に理解すると、それを踏まえて発言する。

「じゃあ、明日はそこに先回りしてれば良いのね」

「単純」

琴未の発言に明らかに琴未をバカにしたような発言をするシエラ。そんなシエラに対して琴未突っ掛かりに行くが、何とか閃華がなだめると与凪がシエラの代わりに説明を始めてきた。

「まあ、滝下君の事だから、一度使った逃走経路は二度とは使わないでしょうね。それに私が学校全体を監視できると言っても、それは私がここに居る時だけだからね。ここに先回りされると私でも滝下君を追いきれないわよ。それに学校の構造から、精界を破壊しても見付からない逃走出来る経路は数え切れないぐらいあるのよ。まあ、後は靴と上履きを常に持ち歩いていれば、いくらでも私の監視を掻い潜って逃げ出す事なんて可能でしょうね」

つまり昇が学校から脱出するには与凪が学校を監視できる、この生徒指導室に来る前より早く学校から出てしまえば、与凪は昇がどこへ逃げたかは追う事が出来ないというわけだ。それに昇の戦略は今までの戦闘を思い出してもらえば分かるとおりに、かなり高度な戦略技術を持っている。

だから昇の戦略を上回らない限りは昇の逃走を防ぐ事は難しいと言えるだろう。その事を丁寧に琴未に説明する与凪。その琴未の隣で閃華が時々補足説明を加えてきたので、琴未もやっとシエラが言いたい事を理解したようだ。それでも単純と言われた事が癪だったのだろう、だからこそ、琴未はシエラに対して話しかける。

「さ～て、それじゃあ、昇に出し抜かれたのに呑気にお茶を飲んでいるシエラの意見を聞こうじゃないの」

思いっきり嫌味を込めて琴未はシエラが考えている事を尋ねる。いや、最早尋ねるという領域を超えているだろう。なにしろ琴未は思いっきり上からものを言っているのだから。

そんな琴未の嫌味すらもシエラは無視して湯飲みを置くと、シエラは泣きながら作業しているミリアを指差した。なにしろ昨日の話し合いでミリアが昇を追跡出来るようにすると決まってしまったのだ。だからミリアはラクトリーから厳しい指摘と指導を泣きながらやっているのだ。

そんなミリアを見て琴未は再びシエラに向かって、怒ったかのように、いや、確実に怒っているように話しかける。

「それじゃあ、なに、ミリアが作ってる追跡装置が完成するまで、このまま手を拱(こまね)いていろっていうのっ！　シエラはそれで良いわけっ！」

はっきりと思った事を口にしてくる琴未に対してシエラは冷静だった。いや、冷静を通り越して、何もかもを見通していると思わせるほどの冷静さと冷徹さを出してた。もちろん、琴未もそんなシエラの雰囲気を察しているが、シエラが出してくる冷気以上の冷たさを自らが出している炎以上の熱さで相殺しているのだ。

そんな二人だからこそ、対照的な態度を取ってはいるものの、お互いに考えている事は同じなのは言うまでも無いだろう。だからシエラは琴未の言葉を聞いて言い返す。

「残念だけど、確実に昇を追い詰める方法はあれしかない。確かに今日は出し抜かれたけど、明日からは、そうはいかない。そのための方法がある」

「へぇ～、それじゃあ、その方法というのを聞かせてもらおうじゃない」

シエラの言葉に胸を張って返答する琴未。やはり対照的な二人なだけにお互いの態度が癪に思える時があるのだろう。だからこそ琴未は威張ったような言い方でシエラに言い返すのだった。一方のシエラも冷静さと冷徹さを溶かす事無く、琴未に冷たく不機嫌さが籠

もった瞳を向けるとはっきりと口にするのだった。
「人海戦術」
「……はぁ？」
シエラが口にした言葉に琴未は間の抜けた声を出した。確かに人手が多ければ多いほど、昇を追い詰める事は簡単に出来るだろう。だからと言って、そう簡単に大勢の人を集めるのは不可能だ。琴未もそれが分っているからこそ、シエラの言葉に間の抜けた声で答えたのだ。
それから琴未はまるでシエラをバカにするかのように肩をすくめるとはっきりとシエラに向かって言うのである。
「人海戦術って、これだけの人数でどうやって決行しようっていうのよ。無理にフレト達を巻き込んでも、絶対的に数が足りないじゃない。それなのにシエラはどうやって数を補うつもりなのよ」
確かに琴未の言うとおりである。人海戦術は文字通りに人を海のように大勢集めて、相手を追い詰める戦術である。シエラ達は与凪やフレト達を無理に巻き込んでも十人揃えられるか、どうかだ。
だからこそ琴未はシエラをバカにしたような物言いで言葉を吐いたのだが、シエラにはすでに準備が出来ているのだろう。シエラは与凪の方に顔を向けると、そのまま与凪に話しかける。
「与凪、私が言った物を準備してくれた？」
そんな言葉を聞いて琴未と閃華の視線が自然と与凪に向く。ミリアはラクトリーの厳しい指導でそれどころではないようだ。そして視線が集まった与凪は呆れたようにシエラに向かって話を続けるのだった。
「まあ、確かに頼まれた数は用意しましたけど、もしかして、このために準備してたんですか？」
そんな与凪の問い掛けにシエラは首を振ってきて。
「正確には、いざという時のために防御陣を取るために前々から頼んでた。でも、今回は人海戦術を行うために使う」
「なるほど、確かに私の精界は弱いですからね。一気にここが攻め

られたら、すぐに落ちるのは目に見えてますね。だから前々から私に用意するように言っておいたんですか」

「って、二人だけで話を進めないで説明しなさいよねっ！」

今まで黙っていた琴未が耐えかねて叫んできた。琴未の心境としては一刻も早く、昇を追い詰める方法を聞きたいほど心が逸っているのだ。そんな琴未が二人の話が終わるのを待つわけがなかった。

横から琴未に乱入されてシエラは溜息を付くと湯飲みを置いて、代わりに空中にキーボードとモニターを出すと、ある物を表示させた。それを琴未に示すようにモニターを琴未に向ける。琴未の横に居る閃華もモニターを見て感想を述べる。

「なるほどのう、確かにここにも精霊王の力を制御するための装置があるわけじゃからのう。確かにこれなら守りが薄いここでも、しっかりと守れるというわけじゃな」

そんな閃華の感想を聞いて琴未もモニターをしっかりと見るが、琴未には良く分かっていないようだ。なにしろ示されたモニターには人形みたいな物に精霊文字で、細部の情報が書かれているのだから琴未に読めるわけがなかった。そんな琴未が閃華に尋ねる。

「って、閃華、なんなのよ、これ」

「おぉ、済まんかったのう琴未。琴未には精霊文字が読めんのじゃったな。じゃが、これは琴未も良く知っておる物じゃぞ」

「えっ？」

自分も知っていると言われて記憶を辿る琴未。確かに閃華に言われてみれば、モニターに写っている人形みたいな物には微かに見覚えがあった。正確には、それに似たのを、どこかで見たような記憶があると言えるだろう。

そんな琴未が記憶を引き寄せ、モニターに写っている物と似た物を記憶から手繰り寄せると一つの物が琴未の頭に思い浮かんだ。だから琴未はモニターに写っているのが、何なのかが分かると両手を打って理解した事を示したのだ。そんな琴未が思わず口にする。

「もしかして、これって……」

「どうやら分かったようじゃのう」
琴未の態度を見てシエラが与凪に用意させていた物が何なのかを理解したと解釈する閃華。そんな閃華が琴未に向けて笑みを浮かべる。そんな閃華の笑みを見て琴未も笑みを浮かべるのだった。閃華もシエラが考えた作戦が有効だと思えたからこそ、琴未に向かって笑みを浮かべ。琴未も閃華と同じように考え、少し癪だがこの方法なら昇を追い詰める事が出来ると判断したからこそ笑みを浮かべたのだ。
そんな二人を見ながらもシエラは用意していた物の数を与凪に確認する。
「それで与凪、全部で何体用意できた？」
シエラの質問に与凪はキーボードを操作して、すぐに使えるだけの数を確認すると、その数をシエラ達に伝えるのだった。
「すぐに使えるのは３００ちょっとですね。確かにこれだけの数なら学校中に配置できますし、私が自ら手を加えた改良型ですから。少し小さいけど高性能ですよ」
「分かった、なら、すぐに使えるやつだけをこっちに寄こして」
そんな言葉と共に与凪も珍しく笑みを浮かべる。どうやら与凪が用意している物は今でも作られ続けているらしい。更に与凪がそれに手を加えて性能を上げたのだろう。だからこそ、与凪は自ら作ったそれが自慢でもあるし、それに対して昇がどう対処してくるのかが楽しみなのだ。やっぱり、最後は他人事のような心境になるのは与凪らしいと言えるだろう。
そしてシエラは与凪が用意した物を確認するかのように、それに関する情報と管理権を渡されるとモニターに向かいながら、空中に浮かんでいるキーボードを叩くのであった。
シエラが何かを始めた時だった。与凪が何かを思い出したかのように手を叩いて話題を切り替えてきた。
「そうそう、いつもの噂話が今になって、しかも日本に限って広まっているみたいですよ」

いきなりそんな事を言い出す与凪に対して琴未は首を傾げるだけだった。さすがに精霊ではない琴未がいつもの噂話と言われても何の事だか、まったく検討が付かないのは当たり前だ。そんな琴未とは対称的に閃華とシエラには何の事だか分かったようだが、シエラはあまり興味持たなかったのか、いったん湯飲みを手にするとお茶を一口飲んで作業を続ける。一方の閃華は溜息をついた後に与凪との会話を続けるのだった。

「まあ、あの噂話は争奪戦がある度に、どこかで広まっておるからのう。今になって出てきてもおかしいとも思えんのじゃが」

「ふっふっふっ、それが閃華さん、今度の噂話はちょっと違うんですよ」

「ほぉ、何が違うと言うんじゃ？」

「実はですね。伝説にあるとおりの力を持った精霊が出てきたと、最近では噂になってて、これは伝説の再来とまで今では噂が広まっているんですよ。ここまで広まるからには、具体的にその精霊と戦った契約者や精霊が居るみたいなんです」

「なるほどのう、確かに具体的な事が起きれば噂に信憑性が増すという物じゃが。今までも、そのような展開だったが、結末が実は違ってたという例が数え切れないぐらいあるじゃろ。じゃから今回もそんな結末じゃろうな。まあ、確かに伝説の精霊が出てきたのなら、それはそれで面白いといえるがのう」

「って、さっきから二人で何を話してるのよっ！　私にも具体的に教えてよね」

すっかり二人の話から置いてけ堀を喰らった琴未が耐えかねて、そんな抗議の声を上げてきた。そんな琴未の言葉を聞いて閃華も与凪も、やっと琴未には何の事だか分からない事を思い出して琴未対して軽く誤ってから、与凪の口から伝説の精霊について語り始めるのだった。

「その精霊は伝説の精霊って言われてるの。本来ならエネルギーの結晶体である精霊、そのエネルギーは人の信仰心や確立した論理。

それに本来から自然界に存在している物、それらの物から自然と流れ出る力。まあ、私達は精霊力とも言ってるけどね。つまり精霊の元になる力は常に何かから流れ出てるの。だから人間には、その存在が確認できなくても、精霊には確認できる存在が多くあるのよ。でも、そんな精霊でも存在を確認できない、そんな精霊が昔から伝説として伝わっているのよ」

「つまり精霊でも確認できない精霊が居るって事？」

「まあ、そういう事ね」

どうやら琴未には理解できたようだが、話が複雑なので少し整理する事にしよう。

まず、精霊という存在は与凪が言ったとおりの存在だ。何かから常に流れ出ている精霊力、それが集って精霊が誕生する。だから精霊は自然界だけでは無い、人間界にあるもの、人間が生み出した論理や倫理、あるいは信仰心、そうした物から生まれてくる。だからこそ、精霊は精霊を精霊だと確認する事が出来るのだ。なにしろ同じような存在だからこそ、相手も同じような存在だと確認しているのだ。

だが人間はどうだろう、倫理や論理なら文字で表現できる物なら人間にも確認できるだろう。けれども信仰心みたいに人間の目には見えない物はどうだろう？　確かにその人の心には何かに対する信仰心があるかもしれない。けれども人間の目には確認できない、それは当たり前だ、人間は他人の心までは見えないし、聞こえないのだから。

だが精霊は違う。精霊は人間の心に信仰心があるのだとしたら、それらが放つ精霊力が集まって必ず精霊となる。つまり精霊は何の精霊かを見る事で、人間には見れない物を見る事が出来るのだ。

簡単な例を上げるとしたら、昇達が海で戦った竜胆を思い出してもらいたい。竜胆は高温の精霊で焦熱の属性を持つという、人間が発見して生み出した理論から生み出された精霊だ。人間はその存在を文字で確認できるが、逆に言えば文字でしか確認できないのだ。

逆に精霊は、その精霊が存在する事で、そうした理論や倫理、そして信仰心などを確認できる。つまり、人の心が持っている精霊力で生み出された精霊を確認する事で、人の心にある信仰心があると確認出来るのだ。

だが何事にも例外と言うものがある。それが与凪達が話していた伝説の精霊である。だから、話の流れは自然と伝説の精霊に向かって行くのだった。

「それで、その伝説の精霊ってのは何の精霊なの？」

「命の精霊」

今まで黙っていたシエラが琴未の質問に対して、たった一言で返してきた。そんなシエラに琴未は更なる説明をするように突っ掛かろうとするが、その前に閃華が口を開いてきたので琴未がシエラに突っ掛かる機会が無くなってしまった。そのため、琴未はしかたなく閃華の言葉に耳を傾ける。

「命の精霊が争奪戦に参加してきたのは過去に二回、しかも争奪戦が始まってからの最初の二回だけなんじゃ。それに精霊世界でも普段から命の精霊を見た者はおらんのじゃ。じゃが、過去の争奪戦には二回も姿を現しておる。つまり争奪戦の時にだけ確認ができる精霊、そんな特殊な精霊じゃからこそ、命の精霊は伝説の精霊と言われておるんじゃよ」

「同じ精霊なら精霊世界で、その存在を他の精霊に見られても不思議では無いし、精霊なら精霊の姿を確認出きるのが普通の事なのよ。人間が人間を見て、相手が人間だと確認するように普通の事なのよ。でも、命の精霊だけは別なの。命の精霊は精霊世界では、私達精霊でも姿を見る事も出来ないのに、争奪戦にはしっかりと精霊として参加して来ている。そんな過去があったから、今でも命の精霊は伝説の精霊と呼ばれてるの。もっとも、命の精霊が現れたっていう争奪戦が、開かれるようになってから最初の二回だけ、その後の争奪戦で実際に命の精霊を見た者は居ないから、今では伝説の精霊と呼ばれてるし、争奪戦が始まる度に、この手の噂が流れてもおかしく

はないのよ」
　閃華の説明に、長い補足説明を付け加えてきた与凪。そんな二人の説明を聞いて琴未も命の精霊が伝説の精霊と言われる理由が理解でたように二人に向かって頷く。それでも琴未の頭には疑問に思う事が生まれたのだろう。琴未はその事を尋ねてみる。
「そもそも、何で、そんな噂話が争奪戦の度に流れるわけ？　それに命の精霊が確認できない理由が何か有るの？」
「琴未よ、そう一気に質問されても、こっちが困るだけなんじゃが。まあ、一つ一つ説明して行くとするかのう。まずは争奪戦の度に命の精霊が現れたという噂じゃが、これは与凪に説明してもらった方が早いじゃろ」
　閃華が説明を完全に与凪に任せてしまったので、与凪は閃華に呆れた笑みを一度向けると、スムーズに説明をするためか、目の前に置かれてある紅茶を一口。それで喉を潤してから琴未に向かって説明を開始した。
「精霊でも争奪戦でさまざまなタイプが居るのは琴未も分かるよね。私みたいにバックアップ専門の精霊とか。そういう精霊がお互いに情報を交換するのも珍しくは無いのよ。お互いに情報を提供する事で情報が貰える。そして貰った情報次第では、自分達が一気に有利になる事もある。だから精霊がお互いに情報を交換するのは当たり前の事なの、情報に関してはギブアンドテイクが当然になっているのよ。そんな情報交換をしているうちに、どこからか、争奪戦が始まると必ず命の精霊が現れたって情報が最低でも一回は流れる物なのよ。もっとも、私の知る限りでは本当に命の精霊が現れた例は無いけどね。だから、今回も噂話として広まってるって言ったのよ。私達も今では、その程度しか見ていないんだけど、今回はちょっと具体的な話が多くてね。だからちょっとだけ信憑性が増して、噂が広まってるのよ。まあ、大抵のオチは決まってるけどね」
「オチって何よ？」
　琴未の質問に対して与凪はすぐには答えなかった。さすがに一気

に説明したからだろう、少しだけ乾いた口を潤すために目の前にあるティーカップに手を伸ばす。そうして与凪が紅茶を飲んでいる間に、しかたないとばかりに閃華が続きを説明するために琴未に話し掛けて、説明を続ける。

「琴未よ、そもそも争奪戦は大体１５０年前後の周期で行われておるんじゃ。それはエレメンタルロードテナーとなった者が死んで、その亡骸が完全に無くなる前に争奪戦は行われるんじゃよ。その周期が大体１５０年なんじゃ。争奪戦は新たなる精霊王の器、エレメンタルロードテナーを決めるための戦いじゃ。じゃから以前のエレメンタルロードテナーが完全に消滅する前に始められて、完全に消滅した時点で最高の力を持っていた者がエレメンタルロードテナーとなるんじゃ。そうする事で精霊王が消える事無く、精霊王の力が地球を、人間世界と精霊世界を支えてくれているんじゃ」

「その説明は前にも聞いたわよ」

閃華の説明にそんな事を言ってくる琴未。閃華はそんな琴未に焦るなとばかりに溜息を付くと説明を続けるのだった。

「ここで大事なのは１５０年という年月なんじゃ。それだけの時間があれば人間は大いに進歩する場合もある。それに自然界に大きな異変や新たなるものが誕生する場合もある。つまりじゃ、それだけの時間があれば、新たなる精霊が誕生していてもおかしくは無いんじゃよ。それが大体のオチじゃな」

「そう言われても、いまいち飲み込めないわよ」

どうやら閃華の説明だけでは琴未は理解できてはいなかったようだ。そんな琴未に対して肩をすくめて見せる閃華。これは琴未の頭が悪いわけでも、覚える要領が悪いわけでもない。なにしろ琴未は人間である。だから精霊世界での情報や事情には疎(うと)くて当然だ。なにしろ文化どころか世界が違うのだから。

精霊世界は人間世界との隣接世界だが、精霊世界では独自の文化と発展をしている。それに精霊世界から人間世界を観察したり出来るが、干渉する事は出来ない。つまり精霊は人間世界に関しても事

情や情報を持っていてもおかしくは無いのだ。
だが逆に人間は精霊と接するまでは精霊の事なんて、まったく知らずに生きているのだ。琴未もまた、その一人だった。つまり今まで精霊世界との接点が無かった人間の琴未だからこそ、事細かく、砕いて説明しないと人間には理解できない部分が多いのだ。そして琴未も例外無く、そんな精霊世界での事情を細かく聞かないと理解できないと示したのだ。
閃華も琴未の要領が悪い訳ではないと分ってはいるが、自分では常識と思っている物を人に事細かく、砕いて説明するのは疲れるようだ。だからこそ閃華は肩をすくめて見せたのだ。
そんな閃華と入れ替えに与凪が説明の続きをしてきてくれた。
「琴未、人間が新たに確立した理論や考え、または憧れ。それから自然界での変化、そんな事が起こると、それを切っ掛けに新たなる精霊が生まれるのは珍しくは無いのよ。そうした精霊が争奪戦に参加してくると、今まで見た事が無い精霊だからって噂になる事が多くて。なにしろ新たなる精霊だから、新しい属性を有している事もあるのよ。そんな見た事も聞いた事も無い精霊と戦ったら、誰だって驚くでしょ。そんな話が広まって、いつの間にか新たに誕生した精霊が伝説の精霊として噂されるって事なのよ。つまり、伝説の精霊だと言われてたけど、実は新たに誕生した精霊でした。それがいつものオチなのよね」
「随分とまあ、お約束というか、ありがちというか」
二人の説明を聞いて琴未もやっと理解できたようだ。まあ、これだけ詳しく説明してもらえれば誰でも理解しやすいだろう。けれども琴未の質問はこれで終わりという訳ではなかった。だからこそ、琴未は立て続けに二人に対して質問するのだった。
「それで、噂になるのは分かったけど。なんで命の精霊は精霊世界では誰も確認していないの？」
新たに、そのような質問をしてきた琴未対して閃華と与凪の二人はお互いに顔を見合わせて肩をすくめるのだった。どうやら二人と

も説明をするのに疲れたらしい。まあ、これだけ立て続けに精霊世界では常識と言える事を説明させられてきたのだ。二人が疲れを示してもおかくはない。

それに琴未の隣に座っているシエラは琴未に対して説明する気は無いのだろう。だから今までも会話を無視して、目の前のキーボードを操作しながらモニターと睨めっこをしている。そんな状況に琴未がどうしようかと思っていると、今までテーブルから離れたところでミリアを指導していたラクトリーがお茶を手にテーブルに付いて来た。それからラクトリーはお茶を一口飲むと琴未に対して質問をする。

「琴未さんは、命というのを何だと思っています？」

いきなりラクトリーから、そんな説明をされて琴未は腕を組んで考え込む。けれども、琴未はすぐに降参を示すかのようにラクトリーに向かって手を振ってきた。それを見て軽く笑ったラクトリーは話を続けてくる。

「精霊世界では命を存在するための力だと考えられているのです。人間も動植物も、そして物も、存在するためには命という力を使っていると考えられているのです。それは物理的に見えるものだけではなく。人の心にある信仰心、または確立された理論。それらが誕生した時点で、それには命が宿り、存在が出来ると精霊世界では考えられているのです。これは精霊が目に見える物からだけではなく、人の心や理論からも精霊が誕生するから、そう考えられるようになったのです。つまり、命とは存在するための力。命が尽きるとは、存在する力をなくした時。つまり、世界に存在出来ない事を示しているのです」

「それって、死んだって事ですか？」

ラクトリーが副担任で先生をやっている所為もあるのだろう。琴未はついつい、いつもの調子で生徒が教師に質問をするように質問をしてしまった。まあ、ラクトリーがここで教鞭を取っているのだから、それは普通の事なのだが、やはり精霊である閃華や与凪から

見ると、どこかに違和感があって少しだけ笑いそうになったようだ。
　そんな二人に構う事無く、ラクトリーは琴未対して説明を続ける。
「そうとも言えるし、そうとも言えません。そもそも死ぬというのは動物に使われる言葉なのですよ。人間もそうですが、猫なんかの動物も死ぬと表現されます。これを植物にしてみると枯れるとか言われます。物質に関してはいろいろと言われますね。朽ちる、壊れる、消える、どれも存在が消滅する意味を示しています。そうした存在の消滅を命が尽きると私達も言っています。つまり死ぬという言葉は動物に適用される言葉であって、他にも命が尽きる言葉が存在するという事なのですよ。だから一概に死ぬとは言えないのです」
「そっか、死ぬっていう言葉は動物にしか使われないですよね」
「えぇ、その通りです。だからこそ命とは存在する力であって、命があるからこそ、全ての物に命が宿り、そこから精霊が誕生するのです。この考えは、この国、つまり日本の神道に考えが似てますね。全ての物に命が宿り、神が宿る。八百万の神と似たような考えですから、琴未さんには理解しやすいでしょう。それからミリア、１１３番目と１２７番目と１３１番目の計算が間違ってます。やり直しなさい」
「はうっ！」
　どうやらラクトリーは琴未に説明しながらも、しっかりとミリアの作業も見ているようだ。さすがはミリアの師匠だけあって、誰かに物を教えなれているのだろう。だから琴未に説明しながらもミリアの作業もしっかりと監視しているラクトリーだった。
　一方のミリアはラクトリーに間違いを指摘されて、泣きながら間違っている場所を修正するために計算をし直すのだった。なにしろミリアが作っている装置もそうだが、精霊達が新たに作り出している道具は計算式を大量に使って作り出される物が多い。そこは人間が作り出した機械と似ている物があるだろう。
　たとえるのならパソコンである。これは０と１、二つの電圧を幾つも並べて、複雑な計算式を形成する事でさまざまなアプリケーシ

ョンを作り出している。どうやら精霊達は人間が計算を重ねる事でさまざまな物を作り出す、という技術をかなり前から発見して開発をしていたのだろう。だからこそ、今では人間では真似する事が出来ない技術も持っているようである。

まあ、そんな作業をしているミリアを監視ながらもラクトリーは琴未とのやり取りを続ける。

「さて、それでは命に関して理解した所で話を戻しましょうか。琴未さん、そもそも命とは目に見える物ですか？」

そんな質問をしてくるラクトリーに琴未は少し驚きながらも答えるのだった。なにしろ、そこだけは人間にも同じぐらい常識的な物だから、常識的な質問をされて琴未は少し驚いたようだ。それでも琴未はしっかりとラクトリーに向かって答えを返す。

「見えません。少なくとも私の知る限りでは人間には命は見えません。精霊に関しては命が見えているかは知りませんが」

はっきりと答えを返した琴未にラクトリーは満足げに頷きながら、自ら持ってきた紅茶を少し喉に流し込むと話を続けてきた。

「さすがは琴未さんですね、はっきりとした良い解答です。少しはミリアも見習いなさい」

「うぅ、は～い」

既に泣いているミリアは、まさかここでもラクトリーからとばっちりを受けるとは思っていなかったのだろう。更に泣きながら返事をするのだった。そんなミリアの返事を聞いて、ラクトリーは軽く笑うと琴未に顔を向けて話を続けてきた。

「精霊に関しても命が見える精霊なんて居ません。それは精霊が存在しているからです。だからこそ、精霊にも命というのは見えないのです。つまり命とは見えない力、そう決まっていると精霊達も考えています。けれども命は存在する、確認する事は出来ないけど存在しているのです。それは精霊も自分が存在している事で命という力が存在しているのを確認しているからです」

「つまり命が見えないのは精霊も命、存在する力を使っているから

見えないという訳ですか？」
「ええ、その通りです」
琴未の質問に満足げに頷きながら答えるラクトリー。どうやらラクトリーにとって琴未はミリア以上に優秀な生徒と言えるような存在に感じたのだろう。だからこそ、ラクトリーは琴未に足して、そのような態度を見せたのだ。これがミリアなら未だに首を傾げていたところだろう。
ここで二人の会話を少し整理してみよう。
命とは存在する力。だがその力は人間にも精霊にも見えないし、聞こえない。ただ自分が、そしてその他の人間や精霊が存在する事で命という存在する力を確認する事が出来るのだ。
だが、それは間接的に命という物を確認しているだけであって、直接的に命という存在する力を確認する事は出来ない。それは人間も精霊も同じである。
先程、命の精霊という言葉が出てきたからには、精霊には命が直接的に見える物だと勘違いしそうだが、精霊にも命を直接的に感じる事は出来ない。そこは人間と同じと言えるだろう。
けれども命、存在する力は確実に存在している。見えなくても、聞こえなくても、そして触れる事が出来なくても、命は存在している。人間も精霊も命があるからこそ、存在しているのであり、命があるからこそ、命が直接的に感じられないのだ。つまり、誰もが存在する力を見る事も出来ないし、感じる事が出来ないのだ。それが命というものである。
精霊が考えている命の定義が終わったところでラクトリーは命の精霊について説明を開始してきた。
「さて、琴未さん。命が何なのかが分かったところで、一つだけ質問です。あなたは命、存在する力を失いたいですか？」
「自殺志願者じゃないですから、絶対にそんな事は思いません」
琴未の解答にラクトリーは軽く笑うと説明を続けてきた。さすがに解答に自殺志願者なんて言葉が入ればラクトリーでさえも、少し

は笑ってしまうのだろう。それでも、ラクトリーは教師の態度を崩さずに講義を続けるように話を続けてきた。

「そう、誰もが命を失いたくない。それは人間も精霊も同じです。最も、精霊には寿命は無いですから。充分に生きた精霊は争奪戦で完全契約をして、契約者と共に命を失う事を望む者も出てきます。まあ、私達の事ですね。私も充分に存在しましたから、そろそろ後継者であるミリアを完璧に鍛え上げてから消えようと思ってます。っと、話がずれましたね。つまり命を失いたくない、特に人間に関しては、その欲望が強いです。ですから、古来より不老不死の研究やら儀式が行われてきたのです。もっとも、それらの行為を自殺行為にしか見えないのですが、昔の人間はそれで永遠の命を手に入れようとしたのです。つまり命という存在の力を永遠に望むという人間の心。それがあるからこそ、命の精霊は誕生したと言われています」

「その言い方だと、まるで確証が無いように聞こえますけど？」

ラクトリーの言葉に違和感を感じたのだろう。琴未は思ったままを口にすると、ラクトリーはまた琴未に笑みを向けながら話を続けてきた。

「良い質問ですね。確かにその通りです。先程、お二人が説明したように精霊にも命の精霊が精霊世界では見えないし、出会った者も居ないのです。つまり精霊世界でも命の精霊を確認した者は居ない。けれども、争奪戦では命の精霊を確認している。だからこそ、命の精霊は伝説の精霊と言われているのです。まあ、最も、これに関しては私は私なりの答えを出したつもりですけど、それを実証する術がありません。たぶん、私と同じ事を考えた精霊も実証出来ないからこそ、今でも命の精霊を確認する事が出来ないのです」

そんなラクトリーの言葉を聞いて琴未は少し考え込むと、琴未にしては珍しく答えが浮かんできた。まあ、琴未は普段から成績が下位という訳ではない。ただ精霊世界という異文化だからこそ、知らない事が多いだけだ。

そして答えが出た琴未がラクトリーに対して答え合わせをする。

「命、存在する力は見えない力。そんな力から生まれた精霊だからこそ、人間にも精霊にも直接的に見る事も確認する事も出来なかった……じゃない、今でも確認する事が出来ない。それは精霊も人間と同様に命を持っているから。自分が存在するために見えない力を使っているからこそ、その力から生まれた精霊も見る事も確認する事も出来ない、そういう事ですか？」

「さすが琴未さんですね、見事に合格点です」

そんな事を言って微笑みを向けてくるラクトリーに琴未も嬉しそうに拳を握り締める。どうやら琴未の解答が合格点にまで達していた事が琴未には嬉しかったのだろう。

だから、ここで琴未の解答に関して少し整理しようと思う。

命という物は人間にも精霊にも宿っている。だが、命という存在する力は誰に目にも見えないし、直接的に干渉する事が出来ない。まるで精霊が人間世界を確認しながらも人間世界に干渉できないように。

そんな命を精霊も宿しているからこそ、命に対する人間の執着心から生まれた命の精霊を精霊も見る事が出来ないのだ。なにしろ、命という見えない力を精霊も使っているからである。元々、見えないものから生まれた精霊だからこそ、同じ精霊であっても見えないし、その存在を確認する事が出来ないのだ。

だが、そんな命の精霊を確認する手段が一つだけあった。それが契約者との契約である。争奪戦が始まれば精霊は人間と契約をして人間世界に干渉出来る身体を得る事が出来る。正確には具現化といえるのだが、どちらにしても人間世界に存在できるようになるのである。

それは命の精霊も同じである。なにしろ普段は精霊にも存在が確認できない命の精霊でも、争奪戦で契約をすれば人間世界に存在する事が出来る存在になるのである。だからこそ、精霊世界では確認できなかった命の精霊が、争奪戦でしか確認が出来なかったからこ

そ伝説の精霊と呼ぶようになったのだ。
　それに命の精霊が過去に二回しか、争奪戦に参加していない事も伝説と言われるようになった要因とも言えるだろう。なんにしても、命の精霊とは、そのような精霊なのである。
　やっと命の精霊に関して理解した琴未はいっぺんに理解する事が多かった所為で頭をフル回転させた疲れたのだろう。疲れたように座り直すと、目の前に置いてある日本茶に手を伸ばすと、それを一気に飲み干してから、普段の口調で会話を始めた。
「それにしても、精霊世界にも伝説なんてあったんてね。私としては、そこがちょっと驚きだわ」
　そんな事を言った琴未に閃華が当たり前のような口調で会話に参加してきた。
「まあ、精霊世界は人間世界と同様に長い歴史があるからのう。そのような伝説が残っておっても不思議では無いんじゃよ」
　そこに与凪まで、再び会話に参加する。
「まあ、精霊世界にも精霊文化とも言えるのがあるからね。精霊は文化を持つ種族と言っても良いのよ。ただ元を正せば、古代の人間に大元を作られただけで、後は精霊達が自分達で自分達の文化を作ってきたんだから。だから伝説の一つや二つ、あってもおかしくはないのよ」
「なんというか、精霊も人間とあまり変わらないんなじゃない、とか思えてきた」
　与凪の言葉にそんな言葉を返す琴未に部屋に中に軽く笑い声が立ち上る。
「まあ、確かに、そんなに変わらんのかもしれんのう。人間も精霊ものう」
「そうですね、精霊も人間には気付かれていないだけで、隣接世界で独自の文化を気付きましたが、人間世界からの影響は大きくありますからね。なにしろ隣接世界ですから、どうしても影響を受けて、似たような文化が生まれるし、伝説だって残るのかもしれません」

閃華の言葉にそんな言葉で締めくくるラクトリーにシエラとミリア以外の全員が頷くのだった。

確かにラクトリーが言ったとおりに人間世界と精霊世界は隣接しており、精霊世界は人間世界が見えているだけに、人間世界の影響を受けていてもおかしくは無かった。それだけに、人間世界と同様に伝説などが残っていてもおかしくは無い。

だが、所詮は伝説は伝説である。与凪が大きく身体を伸ばしながら、今回の事について話を続けてきた。

「まあ、今広まっている伝説の精霊も、たぶんいつもと同じオチだと思いますけど。けど……本当に伝説の再来だった面白いですね」

「くっくっく、まあ、確かにのう。じゃが、そう簡単に伝説の精霊にお目に掛かれるものでは無いからのう。あまり期待はせぬが、下手にこちらに干渉されてもマズイからのう。その辺の監視だけはしっかりとしておかんとじゃな」

「その辺は大丈夫でしょう。与凪さんの監視網は町全体に張り巡らされている訳ですし。精霊が来たら、すぐに分かるでしょう。最も、本当に伝説の精霊が来ていたら、監視網に引っ掛からなくても不思議では無いですからね。なにしろ伝説ですから、精霊反応があるのかも分かりません。伝説だけに、何があっても不思議では無いですからね」

「……えっと、ラクトリーさん、少し怖い事を言わないでください。さすがに私が作った監視網が役に立たなかったら怖いですよ」

そんな与凪の言葉に閃華達の笑い声が部屋に溢れる。そんな時だった、突如として琴未が立ち上がると、時計を見ながら口を開く。

「って！　もうこんな時間じゃない。しまった～、今日は買い物をして帰らないと夕食を作れないのよね。なにしろ、ウチには大食らいが居るから」

琴未のそんな言葉に全員の視線がミリアに集中する。そのミリアはというと今にも泣きそうな表情で琴未を見詰めるのだった。それからミリアは駄々をこねるように言い出す。

「ご飯抜きじゃヤダ～っ！　ご飯っ！　ご飯っ！」

ミリアがこうなっては、今のミリアに、これ以上の作業をさせる事は出来ないだろうと。しょうがなく琴未はミリアにご飯の為に帰ると告げる。それがミリアには天使のささやきに聞こえたのだろう。ミリアは元気良く返事を返すと、素早く作業を終わらせるのだった。

そんなミリアを見て呆れながらも微笑むラクトリー。なにしろミリアが作業を終わらせるための作業が今までに比べると、比べものにならないぐらい速かったからだ。つまり、ミリアが本気で作業に取り掛かれば、これだけの効率で作業が進むのだが、ミリアの性格からなかなかそうはいかない。

だがミリアの撤収作業を見ていればミリアが有している能力が分かるという物だ。その能力の高さからラクトリーは呆れならが微笑むしかなったのだ。それでもミリアが確実に成長している事は確かだから、その性格から力が出せていないのが現状である。それでもミリアが成長している事には変わりからラクトリーは微笑んだのだ。

そんなミリアの撤収作業が終わる頃には、何かをしていたシエラの作業も終わったのだろう。シエラもすでに帰り支度をしており、ついでに買い物リストを確認していた。後は与凪と閃華が全員が使ってたティーカップやら湯飲みやらを手際良く片付けて、この日は解散となった。

そう……誰もがシエラの仕込んだ罠に気付かないままに。そして琴未達は夕暮れの町へと向かって行くのだった。

第百二十八話　伝説の精霊（後書き）

はい、そんな訳で……なんか、かなりの密度でお送りした今回のエレメですが……たぶん、総文字数が今までは最大といえる程の数になっているのではないのかと思えるぐらいの密度となってしまいました。

まあ、今回は説明が多かったですからね～。というか、大半が説明で終わってしまってます。まあ、この説明で、これからの展開が少しだけ読める人がいるでしょうけど、実はまだまだ隠された事がありますので、そこも楽しみにしながら次をお待ちくださいな。

さてさて、今回は琴未達の話になりましたね～。まあ、シエラが何かを仕込んでいたようですけど、それが出てくるのは……まあ、そのうち出てきますよ。そんなシエラの罠を掻い潜りながらも昇は春澄に会うために、シエラ達と対峙しないといけないんですからね～。

……昇よ、身から出たサビとはいえ……大変だね～。今回は上手く脱出できたようだけど、次は大変みたいだね～。なにしろ、あのシエラが何かを仕込んでたんだから、昇はそれをどう掻い潜るか、それともシエラの罠に落ちてしまうのか。そこはこれからのお楽しみという事で～。

まあ、そんな感じの次回予告でした。まあ、次回はこの辺の話じゃないけどね（笑）

次回は並行時間で昇へと視点が切り替わります。再び春澄と出会う昇。そんな昇は春澄から何を感じるのか、そして春澄はいったい何を企んでいるのか。その辺を少しずつ出せたらな～、とか思っております。

まあ、しっかりとした次回予告が終わったところで、次に行きますか。

さてさて、百年河清終末編も始まったばかりですが……書く側と

しては、そろそろ次も考えておいた方が良いかな～、とか思っております。……まだ、百年河清終末編が始まったばかりなのにね～（涙）

まあ、次はいよいよ、あの方を出そうと思っております。そう、以前行ったアンケートで、あまり目立っていないのに、何故か人気があったあの人ですっ！　しかも、そこに更なる登場人物の再来で戦力を強化して、再び昇達と出会う事になるでしょう。

そこから、いよいよエレメも本格的に始動しようかと思っております（……思いっきりスロースタートだな）まあ、今までの事を振り返りつつも、新たなる人物や精霊が出てくることでしょうね。まあ、設定が決まっているところは決まっているんだけど、決まっていないところは未だに白紙にもなってないです（笑）

まあ、そんな訳で百年河清終末編が始まったばかりですが、そろそろ次も考えとかないとだな～、と次のプロットを頭の中だけでも作り始めようかとしている今日この頃です。つまり……未だに次の事は考えているけど、何もしていないって事ですね（笑）

まあ、百年河清終末編も始まったばかりですし、ゆっくりと次の話も練って行きたいと思っております。

とまあ、そんな感じで話が尽きたところで締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、次編の話をしておきながらも、次回の話を具体的にまったく考えてはいなかった葵夢幻でした。

第百二十九話　両想い？

「……えっと……大丈夫？」

隣に座っている春澄が心配げに聞いてくるが、昇は『大丈夫』と言葉にする事が出来ないほど呼吸を荒くしていた。

なにしろ昇は学校を切り抜けてからも、シエラ達なら何かしてくるのではないのかと思い。細心の注意を払いつつ、全速力でここまで駆けて来たのだから。最近では鍛えられた昇だが、学校から公園までの全力疾走は昇の体力を一気に削ったのだろう。だからこそ、昇は未だに春澄にしっかりとした返答が出来ずに荒い息をしていた。

そんな昇に対して春澄はどうして良いか、戸惑うばかりだ。なにしろ春澄の目は見えない。つまり、昇がどんな状態のかが分からないのだ。だからこそ春澄は昇に向かって凄く心配そうな顔をしつつ、どうして良いか戸惑っていた。

そんな春澄を見て、昇も早く春澄を安心させないといけないと思ったのだろう。無理に呼吸を整えようと深く息を吸い込むが、さすがに無理だったのだろう。思いっきりむせて、荒い咳を連発するが、けれども少しだけ楽になったのだろう。昇は途切れ途切れながらも春澄に向かって話し掛ける。

「だい、じょうぶ。少し、疲れただけ、だから。もう少し、すれば、落ち着くから」

「えっと……そうなんだ」

昇の言葉を聞いて、春澄も急を要する事態ではない事を察したのだろう。だから春澄は少しだけ心配そうな顔をしながら、今は昇の呼吸が落ち着くのを待つ事にした。春澄は目が見えないだけで、耳はしっかりと聞こえる。だから昇の呼吸が荒い事もしっかりと分っていた。そして、その呼吸が少しずつ、平常に戻っていくのもしっかりと確認できた。

だから春澄は何も言わずに、今は昇の呼吸が整うのを待つために、

昇のとなりにちょこんと座り続ける事にした。
そんな春澄とは正反対に昇の身体は疲労と乾きを訴えていた。さすがに長距離を全力疾走したのだから、昇の喉が渇くのも当然の事だと言えるだろう。だから昇は何とか話す事が出来るまでに呼吸を整えると春澄に、ここで少し待っているように伝えると、公園に設置してあるジュースの自動販売機に向かった。
そこから二本のジュースを購入すると、すぐに春澄の元へ戻って、春澄に声を掛けてから、春澄の手を取ると購入したジュースを持たせる。春澄に持たせたジュースがプルタブ式ではなく、回転式の蓋になっている辺りは昇らしい気遣いと言えるだろう。だから春澄は持たされたジュースを手探りで形状を確かめると、戸惑う事無く、蓋を開けて一口だけ含んで味を確かめる。
そんな春澄とは正反対に昇はジュースの蓋を開けると半分ほどを一気に飲み干した。全力疾走をした後だけに、昇は身体に染み込む水分が心地良く感じられた。
季節は夏は過ぎたものの、未だに少しだけ残暑が残っている季節といえる。だから昇には余計に身体に染み込んで来る水分が心地良く。身体だけでなく心も落ち着けさせる事が出来た。
そんな昇の横で春澄はゆっくりとジュースを口にしていた。そんな春澄が昇の呼吸が正常に戻っている事を感じたのだろう。ジュースから口を離すと昇に向かって微笑みながら口を開くのだった。
「今日もオゴってもらっちゃった、ありがとう、昇さん」
昇の好意に素直に礼を述べる春澄。そんな春澄を見て昇の心は更に心地良さを覚える。
一見すると、それは普通の光景かもしれない。けれども昇にとっては春澄にお礼を言われると心地良く、ついつい思ってしまうのだろう……可愛いと。だが、昇が春澄を好きになった訳ではない。盲目でありながらも、前向きの姿勢と覚悟と雰囲気を出している春澄だからこそ、昇は自然とそんな事を思ってしまい。春澄から目を逸らすとジュースの残りを一気に飲み干して、照れたように言葉を返

すのだった。
「別に気にしなくて良いよ。僕だけが飲んでるのもあれだったし、それに一本買うのも二本買うのも同じだから」
一応、言っておくが決して同じでは無い。確実に金額的に違いがある。けれども昇としては春澄が喜んでくれるなら、ジュース一本どころか百本以上の価値があると感じるようになっていたようだ。
だからこそ、そのような言葉を口にした後に昇は照れたし、春澄も昇の行為に満面の笑みで感謝を示すのだった。そんな春澄の笑みを見て昇はますます照れる自分を感じていた。だからだろう、昇から話題を切り出してきたのは。
「そ、そういえば昨日の人。まだ紹介してくれてなかったよね。確か……家族であり、パートナでもあるとか言ってたけど、あの人がそうなの？」
そんな質問を切り出してきた昇に対して春澄は口にしていたジュースを離すと昇の方へ顔を向けて答えてきた。
「うん、そうだよ。ちょっと前から二人っきりで、いろいろな所に行ってるんだよ」
「へぇ～、二人っきりで」
無意識の内に、その言葉に引っ掛かりを感じた昇は思わず、その言葉を繰り返してしまった。そんな昇の言葉を聞いて、春澄は少しだけ意地悪な笑みを浮かべると昇に向かって言葉を放つのだった。
「もしかして……ヤキモチを妬いてくれた？」
突然すぎる春澄の言葉に昇は春澄とは反対方向に息と唾を思いっきり吐き出すと、慌てて言い繕う。
「いやいや、そういうんじゃなくて、二人っきりでいろいろな所に行っているのが珍しいというか、なんで二人っきりなのかなって思ったから、だから、別に特別な意味がある訳じゃなくて」
慌てる昇とは正反対に春澄は堪えきれなくなったのだろう、昇が言い繕っている途中で思いっきり笑い出してしまった。そんな春澄を見て、昇もやっと自分がからかわれた事に気付いた。けれども

昇は、そんなに悪い気分にはならなかった。むしろ逆の気持ちを覚えるのだった。

ずるいな～。春澄に対してそんな感想を抱く昇。自分がからからわれたのにも、何故か春澄が笑っていると昇には春澄対して悔しいと思うより、逆に春澄と一緒に笑い出すほど楽しかった。だから昇は春澄の笑顔に釣られるように一緒になって笑っていた。

それだけ春澄の笑顔には何も無かったのだ。ただ楽しいから笑ってる、本当にそれだけだ。だからこそ、昇は春澄に釣られるように笑ったのだろう。本当に何も無い笑顔、その笑顔こそが純粋な笑顔と言える本当の笑顔だからだ。

二人で楽しく笑っていると、昇としてはますます昨日、春澄と一緒に居た男性が気になったのだろう。昇は笑いを収めて、いつもの昇が出している表情に戻ると、再び同じ質問を春澄にするのだった。

「それで春澄ちゃん、あの人の事は教えてくれないの？」

昇がそんな質問をすると今まで笑っていた春澄も呼吸を整えて、春澄が昇に多く見せている純粋な顔付きになると春澄は昇の質問に質問で答えた。

「そんなに気になるの？」

そう聞かれて昇は少し考える。確かに気になると言えば気になる。けど、ここで春澄対して追及するほど気になると聞かれれば、昇も首を傾げるしかなかった。つまり昇は春澄と一緒に居た男性は気になるが、春澄に追求してまで知りたいとは思えなかったのだ。だからこそ、昇はこういう答えを返す事にした。

「そうだね、気になると言えば気になるかな。でも……答えたくないのなら答えなくても良いよ。僕もちょっとだけ気になっただけだから」

そんな昇の答えを聞いて、今度は春澄が考え込む仕草をし始めた。どうやら春澄にとって昇の答えが考えるに値する、または考えるだけの価値があると判断したのだろう。だからこそ春澄は少しだけ考えると、昇に顔を向けてくる。その表情は先程までとは違って、真

剣さを訴えるような顔つきだった。
そんな春澄が口を開く。
「アルビータ、それがあの人の名前。そして……私もアルビータも同じだった。だから今は一緒に居るんだよ」
「同じだった？」
春澄の言葉に引っ掛かりを感じた昇はその言葉を繰り返す。そして春澄も昇が必ず、そこに注目してくれると思ったのだろう。昇の言葉を聞くと頷いてから語り始めた。
「そう、私もアルビータも同じだった。普通の人とは少しだけ違う。でも……たったそれだけの違いで私達は死んでた、無為な日々を送るしかなかった。だから私は決めたんだよ、アルビータと一緒に世界を見るって」
春澄の言葉に昇はなんて言って良いのか分からなかった。そもそも『死んでいた』という言葉が春澄にとって何を意味しているのかが昇には分からなかった。だから春澄が何を決めて、アルビータと一緒に世界を見るといわれても理解が出来なかった。
だからこそ昇は春澄の言葉を頭の中で繰り返しながらも、春澄が何を言いたいのかを理解しようと頭をフル回転させる。
死んでたって……春澄ちゃんがここで僕と話している限りは春澄ちゃんは生きてるって事だよね。という事は……死んでたってのは何かの比喩かな？　その続きの無為な日々……何も無い、空っぽな日々。そんな日々を春澄ちゃんは送ってたって事かな？　……そっか、そういう事か。半分だけだけど、春澄ちゃんの事が分かったかもしれない。昇はそう確信すると、その確信が確かな物かを春澄に問い掛ける。
「春澄ちゃんには……夢も希望も、そして目標もなかったんだ。だから未来が見えない、昔も何もしていない、そんな何も無い日々を送ってたんだ。確かにそれは死んでると言えるかもしれない。身体は動いていても、心が何も持っていないのなら、生きているという事を実感できないし、生きる意味すら見えない。生きる意味が見出

せない人生だったからこそ、春澄ちゃんは死んでたって言うんだね」
　そんな昇の言葉を聞いて春澄は驚いた表情を示した。けれども、それも少しの間だけ、春澄の表情はすぐに少し複雑な表情になった。どこか悲しげで、それでもどこか嬉しそうな、そんな表情を昇に見せてきた。
　そんな春澄の瞳が光る。少しだけではあるが春澄の瞳には涙が浮かんだのだろう。春澄はその涙を拭うと、気分を紛らわすためか、残っているジュースを口にすると顔を俯けたまま、昇との会話を続ける。
「凄いですね。たったあれだけの言葉で、そこまで私の事を理解してくれるなんて。私が暮らしてた施設の人なんて、私の言葉が何を意味しているのかすら考えてもくれなかったのに。だから凄く驚きました。けど、こういう時にどんな感情を示せば良いのか分からないから。ちょっとだけ戸惑ってます」
　昇はそんな事を言って来た春澄の頭を優しく撫でてやると、優しい声で会話を続ける。
「僕が言うのもあれだけど……いつもの春澄ちゃんで良いと思うよ。少なくとも、昨日出会ってから今までの春澄ちゃんは明るくて、純粋な笑顔をするいい子だと思うよ。僕には、それが本当の春澄ちゃんかどうかは分からないけど、僕が昨日から知り合った春澄ちゃんは、そういう子だと思うから」
　昇の言葉に春澄は何かに気付いたかのように顔を上げる。それから春澄は何かを考えるように手にしているジュースの缶を少しだけ強く握り締めると、大きく深呼吸して昇に今までと同じように純粋な笑顔を向けてきた。
「そうですね、その通りかもしれません。こんなのは私らしくないですよね。なんだか変な事を考えていた自分がバカみたいに思えてきました。どんな事をしても、私は私なんですから」
「そうだね、どれだけ辛い事があっても、どれだけ苦しい事があっても、自分を作り出しているものは変えられない。成長は出来るか

もしれないけど、自分が自分である事には変わりない。だから春澄ちゃんも春澄ちゃんでいれば良いんだよ」

「うん、私は今の私で行きたいと思います。最後の終焉まで」

そんな言葉を口にした春澄は再び残っているジュースを口にする。けれども、昇には引っ掛かる言葉があった。それが終焉という言葉だ。なにしろ春澄は昨日から、まるで終わりを意味する言葉を多く使う事が見受けられた。だからこそ、昇が自然とその事を気にしても不思議ではなかった。

だが終わりを意味する言葉に対して率直に尋ねるのは気が引けた。なにしろ終わり、つまりは死を意味しているからだ。そう、昇が時折ではあるが春澄の言葉に引っ掛かりを感じていたのは、まるで春澄が死に向かって歩いているかのように昇には思えたからだ。

だからと言って、昇には率直に、その事を尋ねるだけの勇気も無かったし、そんな気分にもなれなかった。だから昇は言葉を変えて春澄に尋ねる。

「ところで、春澄ちゃんは何か目的があって旅をしてるんでしょ。その目的って何なの？」

そんな質問をする昇。春澄の目的さえ分かれば、春澄が時折口にしている終わりについても分かると判断したからだろう。そんな昇の質問に対して春澄は昇に顔を向けると、今までの笑顔とは打って変わり、まるで何か重大な決断をした者の顔になっていた。そんな春澄が昇に向かって話を続ける。

「私はこう考えているの、人は終わりを目指して人生という道を歩いている。その終わりこそが終焉、死という人生という道を終わらせる最後の場所だと。だから皆が辿り着く場所は同じで、終わりを目指して歩き続けてるんでしょ。途中でいろいろな事があるかもしれないけど、最後に待つものは終焉、終わりで死だと。だから私が終わりを目指して歩いているのは当然だと思いませんか？」

そんな春澄の言葉に昇は考えざるえなかった。なにしろ、春澄の言葉は正しい、けれども、どこか間違っている。そんな風に昇には

思えたからこそ、昇は春澄の言葉を考えるのだ。
　確かに、春澄ちゃんが言っているように……人の終わりは死。それは終焉とも言えるものだ。けど……それだけで済まして良いのかな。確かに人は死に向かって歩いているのかもしれない。その途中でいろいろな事があって、人は幸福だと思うのかもしれない。でも……それだけ？　なんだろう、何か……違うような気がする。
　春澄の言葉にすっかり考え込む昇。春澄はそんな昇が見えているかのように満面の笑みを浮かべるのだった。その笑顔を昇は見てはいない、それでも春澄は嬉しかったのだ。自分の言葉にここまで真剣になってくれる人がいる事が。そして春澄はしっかりと気付いていた。昇が自分の言葉に否定的な事を思っている事に。
　目が見えないだけに人が出している雰囲気に敏感になっているのだろうか、春澄にはそれだけの事がしっかりと分っていた。だからこそ、春澄は楽しみでしかたなかった。自分のいった言葉に否定的な事を考えている昇がどんな言葉を口にするのかを。
　けれども、春澄が出した問題はよっぽどの難問だったのだろう。昇はしかたないとばかりに、一旦白旗を上げる事にした。
「ごめん、今の僕だと春澄ちゃんの質問に答えられないよ。本当なら答えてあげたいけど、今は無理かな」
　そんな昇の言葉を聞いて、明らかにガッカリとした表情を見せる春澄。けれども、それも一時の事だけだった。次にはいつものように純粋な笑顔を浮かべながら春澄は昇に言うのだった。
「じゃあ、この質問は宿題だね。私が終わりを迎える前に答えを聞かせてね」
「年齢的に言えば、僕の方が先に死にそうだけどね」
　確かに昇が言ったとおりである。年齢的に言えば昇の方が年上。だから順番的に言えば、昇の方が先に死ぬのは当然とも言える事だろう。けれども、春澄は変わらない笑顔のままで昇に告げるのだった。
「残念だけど、その考えは間違ってるよ。先に死ぬのは私、それは

私は大きな代償を支払ってるからね。だから先に死ぬのは私って決まってるんだよ」

そんな春澄の言葉を聞いて昇は春澄の笑顔を見詰める。昇には分っていたのだろう、春澄が浮かべている純粋な笑顔の向こうには、春澄が決意した覚悟と何かは分からないが、絶対に譲れない何かがあると。だから昇は会話を一旦中止して、次に出すべき言葉を考えざる得なかった。

何故かは分からないが昇には、これ以上は春澄の奥には入ってはいけないような気がしたからだ。いや、正確には昇がそれ以上、春澄の奥に入る事をためらったのだ。

けれども、そこにあるのは大事な物だと昇にも分かったのだろう。だからこそ、あえてためらいながらも、その領域に足を踏み入れようとする。

「その大きな代償を支払ってまで春澄ちゃんが望む事は何？　何のために大きな代償を支払ったの？」

そんな質問をする昇。もし、春澄の目が見えていたのなら、昇が真剣な顔付きで質問してきた事が見えていただろう。けれども春澄は目が見えない代わりに、周りに雰囲気に敏感になっている。だから昇が真剣に質問をしてきた事に春澄はしっかりと気付いていた。気づきながらも、春澄は笑顔のままで昇の質問に答えるのだった。

「昨日も言ったけど、それは話せないよ。でも……もう少しだけ私の我が侭に付き合ってくれたら話して上げても良いよ」

そんな事を言い出して来た春澄に昇は戸惑いを感じていた。確かに春澄が望む物、つまり春澄の目的が気になるのは確かだ。だからと言って、春澄が昇達の障害として立ちはだかるとは思えない。むしろ春澄が契約者という証拠は無いし、話に出てきたアルビータが精霊か契約者だという証拠も無い。

つまり、ここで無理してでも春澄の目的について追及する必要は無いのだ。だからと言って昇には、このまま春澄を放っておく事も出来なかった。春澄達が争奪戦に関係が無いのだとしても、春澄が

言葉にした終焉が昇には気になっていた。いや、正確には、それは欠片に過ぎない。昇は春澄という少女が気になり始めていたのだ。

それは好きとかの恋愛感情ではない。放っておけない、いや、むしろ引き合うような感触を覚えていたからだ。だからこそ昇は春澄に質問に答える、少しだけふざけながら。そうでもしないと春澄に何もかも見通される気がしたからだ。

「それではお嬢様、そのお嬢様の我が侭をお聞かせくださいませ」

そんな返答してきた昇に春澄は面白そうに笑うと、満面の笑みのまま口を開いてきた。

「じゃあ、これからしばらくの間、毎日こうやって、お話がしたいな。そんな私の我が侭を聞いてくれるなら教えてあげても良いよ。でも、その前に、その時が来るかもしれないけどね」

……その時？　春澄が言った言葉に、またしても引っ掛かりを感じる昇。それは今までの春澄の奥に隠された覚悟とか、そういう物じゃない。まるで未来を見通したような言い方をしたと昇は思えたからこそ、今までとは違う引っ掛かりを感じたのだ。

だからだろう、昇は少し不思議そうな顔で春澄の顔を見詰めたのは。もし、春澄の目が見えていれば、昇が何を考えていたのかが分かっただろう。だが春澄の目が見えないからこそ、春澄は笑顔のまま昇の答えを待っていた。

そんな春澄を見詰めつつ、昇はある覚悟を決めていた。いや、正確には確証が無い因縁を確信したと言えるだろう。つまり根拠は無いけど、昇は春澄とは何かしらの縁があると感じ取ったようだ。だからこそ、昇は微笑むと春澄に向かって答える。

「良いよ。それじゃあ、その時が来るまで毎日春澄ちゃんに付き合ってあげるよ」

「やったっ！」

昇の言葉に嬉しそうに返事をする春澄。そんな春澄の笑顔を見て、昇はこれで良かったのだと思う事にした。はっきり言って、春澄が言った『その時』なんて昇には想像が付かなかった。けれども、昇

が感じた縁は春澄との関係を良くしておいた方が良いと訴えていた。
　先に待ち受けているものなんて誰にも分からない。けれども、昇には一つだけはっきりと未来について分っていた。昇は……春澄との因縁に近い物があると。だからこそ、昇は春澄の提案に乗る事にしたのだ。そう……まったく他の事を考えないままに。
　昇が春澄の提案に乗ってきた事に春澄は純粋に喜んでいると、今度は春澄から質問が飛んできた。
「こうして話してると、やっぱり昇さんが強くて優しい事が良く分かるよ。だから今度は私の番だね。昔はお母さんと二人暮しだったんでしょ、でも、今は居候が増えて賑やかになってるっていったよね。その居候さんについて聞きたいな」
　春澄の言葉に昇は硬直してしまった。それはそうだ、まさか争奪戦の事なんて話せないし、精霊と一緒に暮らしていると言っても信じてもらえないだろう。だから昇はなんて答えれば良いのか戸惑ってしまったのだ。まあ、それ以前に、まさか居候全員が女の子だと言って良いものか分からないからこそ、昇は硬直してしまったのだ。
　いつまでも返事をしてこない昇に対して春澄は首を傾げると、手探りで昇の身体に触れると、そのまま手を顔のところに持って行って、昇の頬を軽く引っ張る。それで昇の硬直も解けたのだろう。昇は慌てて、春澄から上半身を離すと驚いた視線で春澄を見詰める。
　一方の春澄は昇の反応が面白かったのだろう。楽しそうに笑うのだった。そんな春澄の笑顔を見て、これは誤魔化しきれないと感じ取ったのだろう。昇は出来るだけ、話せる事だけを話す事にした。
「えっと、前にも言ったけど、四人も居候が居るんだ。だから毎日が騒がしくて、それでも楽しくて、苦労する事も多いけど。皆が居たから、いろいろな苦労を乗り越えられてきた。そんなところかな」
　具体的ではなく、なるべく抽象的に話を進めようとする昇。そんな昇とは正反対に春澄は具体的な事を聞いてきた。
「へぇ〜、そうなんだ。それで、その四人の人ってどんな人？」
「いや、どんな人って言われても」

「一人ずつで良いから教えて欲しいな」
そんな春澄の言葉に昇は戸惑った。改めてシエラ達がどんな人と聞かれても、どう答えて良いのか分かり辛かったからだ。まあ……シエラと琴未に関しては深くは話せないだろう。なにしろ、毎日ように喧嘩、または戦闘を行っているのだから。
それでも昇は一人一人を思い浮かべながら、春澄に伝わるように話すのだった……なるべく黒い部分を隠すように。
「えっと、一番最初に来たのはシエラって言って、表情や感情をあまり表に出さないけど、頭が良いから頼りになるよ。二番目に来たのがミリアって子で、ミリアはシエラとは正反対で元気が良くて、食欲旺盛で……それでも皆の為に頑張れる子だよ。次に昔から知っていた、幼馴染の琴未が来て、琴未は変なところで不器用だけど。それでも、いつでも僕ためにいろいろと頑張ってくれる、大切な幼馴染だよ。最後は閃華かな、閃華はいつも何を考えているのか分からないけど、いつでも皆をまとめてくれたり、僕に道を示してくれたり、いろいろと頼りになる存在かな。そんな居候が居るから、今は騒がしくて、苦しくても立ち向かえる、そんな風になってると思うよ」
「へぇ〜」
昇の話が終わると春澄は短い返事を返した後に、残っているジュースを一気に飲み干した。さすがに、一気に四人も説明に出されては、春澄としても頭の中で整理するのに時間が掛かって当たり前だ。
だから春澄が昇の話を確認するかのように、指を折りながら一人ずつ考えている仕草を昇は微笑みながら見詰めていた。
確かにシエラ達も昇の事を一番に考え、理解しようとしてくれるだろう。けれどもシエラ達は少し強気、いや、かなり気が強いので昇が日常ではシエラ達に押し切られる場面も多い。だが大事な場面では昇に重要な決断を任せ、昇の為に戦ってくれる。それはそれで昇としても頼りになるし、大事に思っている事も確かだ。
だが、春澄のように出会って、そんなに経っていないのに昇達の

事をしっかりと理解しようとしてくれた事が昇には嬉しかったし、話した意味が充分にあると感じていただろう。

けれども、昇は重要な事を一つだけ忘れていた。そして春澄はしっかりとそれに気付いて、それについて質問してきた。

「ちょっと気になったんだけど……名前から考えると皆、女の人だよね。それって同棲っていうの？」

春澄の質問に昇は思いっきり後頭部をベンチの背もたれにぶつける。昇としては四人の女性と暮らしているという事実を春澄には隠しておきたかったのだが、春澄がこうも簡単に名前から女性だと判断してきたのだから昇には驚きだろう。その反応として昇は思いっきり後頭部をぶつけたわけだが、それでも昇は春澄に向かって言い繕う。

「いやいや、同棲なんてとんでもない、皆居候だよ、そう、皆してウチ暮らしてるけど、そんな同棲なんて、そんな関係じゃないよ」

慌てているのが、はっきりと分かるほどに早口で春澄に向かって話す昇。分っているかと思うが、昇達の関係ははっきり言って同棲と同じようなものだ。

なにしろシエラとは二回も同じ布団で寝ているし、琴未に対してはいろいろと触れているし、思いっきり抱きしめた事もある。更に、閃華とは二人っきりで風呂に入っているし、そこで閃華から思いっきり抱き付かれている。ここまでの事をやっておきながら、今更だが同棲では無いと昇は断言できないし、誰が見ても同棲以上の事をしていたのも確かな事だろう。

けれども昇は春澄には、そんな風に思って欲しくは無いのか。慌てて言い繕うのだが、春澄には、そんな昇の言い訳なんてお見通しみたいだ。だから春澄が軽く笑い出すと、昇は少しだけ呆けた顔になり、春澄の反応を窺っている。

そんな春澄が笑いを止めると、微笑みながら昇に向かって言うのだった。

「その居候さん達、皆さんとも昇さんの事が好きなんだね」

突然、春澄から、そんな言葉が飛び出した物だから、昇の顔は一気に真っ赤になり、舌足らずの口調で春澄の言葉を否定しようとする。

「いや、そ、そんなんじゃないと思うんだ、ほら、えっと、なんていうか、は、ハプニングというか、そう、そういうハプニングが無い事も無いんだよ」

既に何を言っているのか意味不明な昇の言葉に春澄は再び笑うのだった。そんな春澄を見て、昇もやっと自分がかなり動揺している事に気付いて、座り直すとワザとらしく咳払いすると大きく深呼吸する。これでやっと昇の心も落ち着いたように思えた。だが、意外なところから再び昇を動揺させる事が起こった。

何の前触れも無く、春澄が手探りで昇の手を探り出すと、春澄は昇の手をしっかりと握ってきたのだ。あまりにも突然の事で昇は再び動揺する。そして春澄に対して言葉を投げ掛けたいのだが、あまりにも動揺した所為か、言葉が出ずに口をパクパクと動かすだけの昇だった。

そんな昇に向かって春澄は微笑を向けると言葉を口にしてきた。

「私にも少しだけ分かるかな、その居候さん達の気持ちが。だから……ますます昇さんに興味が沸いてきたよ」

「いや、えっと、そう言われても……」

春澄の言葉に対して何と答えて良いのか分からない昇は、それだけの言葉を口にすると後は黙り込むしかなかった。そもそも昇には今の状況をどういう風に捉えて良いのかが分からないのだ。ベンチに二人っきり、しかも春澄のように可愛らしい少女と手を繋いでいる。そんな状況なものだからこそ、昇の頭は混乱するばかりだった。

そんな昇とは正反対に春澄は手探りで昇の腕を確認すると、今度は腕を組んできた。そんな春澄が昇の腕に顔を沈めて、静かに言葉を口にする。

「恋愛か……今までの私は自分の望みを叶える事だけしか考えてなかったから、そんな事を考える余裕もなかったよ。でも……今はそ

ういうのも悪くないかなって思えるよ。こうして昇さんの温もりを感じてると……凄く……安心できるから……」

春澄の言葉が混乱している昇の頭を一気に冷やした。昇にもはっきりと分かったのだろう、今の春澄が口にした言葉には真剣に答えなければいけないと。

昇も伊達にシエラ達と暮らしてきた訳ではないようだ。確かにシエラや閃華の画策により、いろいろな罠にはめられてきた。けれども、そこで得た経験、そしてシエラ達が時折見せる女らしさと本音。そんな経験を重ねてきたからこそ、昇には今の春澄にしっかりと答えてあげなければいけないという気持ちが沸いてきた。それはもう、他の事をまったく考えないほどに。

そんな昇が腕に寄り添っている春澄に向かって微笑みながら春澄の言葉に答える。

「そうだね、誰かが傍に居る、誰かの温もりを感じる、そして誰かと繋がっていると感じる。そうした事はとても大事な事だと思うよ。僕も春澄ちゃんの傍に居ると、とても安心出来るよ。だからお互い様かな」

すでに春澄の事だけしか考えていない昇が、そんな言葉を口にする。それを聞いた春澄は嬉しそうに顔を上げると昇に向かって微笑みながら、そして少しだけ照れながら素直な気持ちを口にする。

「なら……私達は両想いだね」

「……へっ？」

春澄の言葉にすっとんきょうな声を出す昇。そんな昇を気にする事無く、春澄は話し続けるのだった。

「だって、お互いに傍に居る事が重要なんでしょ。そしてお互いに安心できるなら、それは両想いって言えると思うんだけど……違うの？」

「えっと、いや、うんと……」

春澄の言葉を否定するのは簡単な事だ。それは昇の本心が春澄を本気で好きだと思っていないと告げれば良いだけだ。けれども、昇

が春澄の事を少しだけ気に掛けている事も本当の事だし、春澄の傍に居る事でシエラ達とは違った安心感があった事も本当の事だ。だからこそ、昇はあのような言葉を口にしたのだが、まさかここまで飛躍するとは昇には思いもよらない事だった。

だからと言って春澄の言葉を、そのまま否定する気にもなれない昇だった。

正確に言えば怖かったのだろう。昇は自分の言葉で春澄を傷付ける事が、だから昇は春澄の言葉を否定できずに、どうやって返答して良いのか迷っていた。

そんな時だった。突如として春澄が笑い出すと昇から離れた。それから手探りでベンチに立てかけてあったステッキを手にすると立ち上がった。そして昇の方に顔を向けると、微笑みながら、けれども、ほんの少しだけ悲しそうな微笑で昇に言うのだった。

「冗談だよ、だから、そんなに本気で考えなくても大丈夫だよ」

そんな事を口にした春澄は昇に向かって笑ってみせる。それはいつもと同じように純粋な笑顔だった。先程の悲しそうな一面はすっかり消えていた。けれども、春澄は昇に背を向けると話を続けてきた。

「でも……ちょっと残念だったかな。もっと早く昇さんと出会っていたら……私は違う生き方を選んだかもしれない。でも……もう決めちゃったから。だから、もう間に合わない。でも……後悔はしない。だって、それは私が望んで、私が決めた事だから」

それだけ言うと春澄は再び振り返り、昇に顔を向ける。そこには先程と同じように純粋な笑顔があった。昇はその笑顔を見ながらも口にする。それが無駄だと分っていながらも。

「今からでも……間に合うんじゃない。失敗したと思ったのならやり直せば良いだけだし」

そんな昇の言葉を聞いた春澄は静かに顔を横に振る。

「さっきも言ったように私は後悔してない。だから失敗したとも思っていないよ、だから……私は進む事が出来る。自分が決めた未来

に向かってね」
……なんだろう……胸が……苦しい。昇は何故だか、春澄の言葉を聞いて、そんな風に感じていた。春澄が春澄の決めた未来に向かっているのなら、それは良い事だと昇は思っている。思っているのだが、何かが違うような気がしていた。それが何なのかは昇には分からない。ただ……春澄は何かが間違っている。そんな気持ちが昇の胸を締め付けているのだろう。
そんな昇に気付かないままに、春澄は昇から顔を背けると、公園の出入り口に顔を向けて、それから再び昇に顔を向けてきた。
「迎えが来たから、今日はここまでだね。私の我が侭、本当に聞いてくれる？」
最後にそんな事を尋ねる春澄に昇は胸を締め付けている、何かを振り払って立ち上がると春澄に向かって微笑みながら答える。
「うん、約束したとおりに毎日会いに来るよ」
「ありがとう」
昇の言葉に心の底からお礼を言う春澄。そんな春澄が最後にちょっとだけ意地悪な笑みを浮かべると、とんでもない事を言い出してきた。
「それから、私達って両想いだよね。だから、居候さん達以上の事をして欲しいな」
「……へっ？」
「あははっ、冗談だよ。それじゃあ、迎えが来たから、また明日ね」
春澄はそういうと昇に背を向けて歩き始めて行った。昨日と同じく、迎えに来た男性の元へ向かって。
そんな春澄とは正反対に昇は血の気が引くのを、しっかりと感じていた。まあ、それはそうだろう。ただでさえ、シエラ達を出し抜いて春澄と会っているのに。その春澄から両想いだと言われた事がシエラ達に伝わったら……どんな事が起きるか分かった物ではない。
まあ、全ては春澄に優しくしすぎてしまった昇が悪いのだが、昇の性格から言ってもしかたないだろう。ついでに言うとはっきりと

春澄の好意を否定できなかった昇が悪いのだ。自業自得も、ここまで来ると無残としか言いようが無い。

そんな昇はこれからの事を考える事も出来ずに呆然としてしまう。いや、正確に言うと、今は何も考えたくないから呆然としているのだろう。

なにしろ、これから春澄との会話次第で……春澄の心が本気になりかねないと昇は感じ取ったからだ。つまり、昇は自ら厄介事の種を撒いた訳である。自分でやった事はいえ、さすがにこれはどうかしないといけないだろう。だが今の昇には、それを考えるだけの余裕がなかった。

だから昇の頭に一匹にハトが乗ろうとも、昇は硬直したままだった。

第百二十九話　両想い？（後書き）

はい、そんな訳で、春澄フラグと死亡フラグを同時に立ててしまった昇でした（笑）

いやはや、まさか春澄があそこまで積極的な行動に出るとは、まったく当初の予定にはなかったのですよ。でもさ……やっぱり浮気をするなら徹底的にやった方が面白くない？

とか思ったので春澄が積極的になりました。そんな訳で、皆さんは昇のような朴念仁にならないように注意しましょうね～。その先に待っているのは修羅場だけですから（笑）

まあ、少しだけ昇をフォローしてあげると、昇は春澄の本音に本気で考えて、春澄の為に自分が出来る事をしただけだよ。……まあ、昇は朴念仁だし、どうやら春澄もこれが初恋っぽいから、二人がギクシャクしてもおかしくはないんだけどね（笑）

さてさて、そんな二人がこれからどうなって行くんでしょうね。そして、そんな二人、じゃないか、昇を待っているシエラ達はどうするのか。この辺がこれからの展開で楽しみになところですね。

まあ、最後には、たぶん、想像できないような展開が待っていると私は思いますけどね～。けどけど……最後を想像させるような文章が多々ある事も確かです。

そんな中で昇が選ぶ未来とは、そして春澄が望む終焉とは。その辺も楽しみにしながら、次を気長にお待ちくださいな。

……いやね。更新ペースを上げたいのは私も同じですよ。でもさ……連載を二本もやってるじゃん。更に言うとさ……私の小説って一話の文字数がかなり多いじゃない。だからさ……一話書くのに時間が掛かるんだよね～。まあ、一話の文字数を減らしても良いんだけど……それだと話数が凄い事になりそうなので、凄く怖いから、こんな形で上げてるんだけどね。

たぶん……一話の文字数を減らしたら、今頃は千話近くまで行っ

てるんじゃね。とか思うぐらい書いていると思います。まあ、さすがに千話は言い過ぎかもしれませんが……かなりの数になってるのは確かだよね。

そんな訳で、これからも、これぐらいの文字数を目安に進めていこうと思います。

という事で長くなってきたので、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、気付けば三月ですね……二月っ！！！　早いよっ！　早すぎるよっ！！！　と過ぎ去った季節を見送りながら叫んでみた葵夢幻でした。

第百三十話　残り少ないカウントダウン

「なっ！」

昇は目にした光景に驚きを隠す事が出来ずに、窓から身を乗り出しながらも驚きを示していた。つい数分前までは昨日のように上手く行ったと確信していたのだが、目の前にある光景を目にすると、とてもではないが驚かずにはいられない昇だった。

事の始まりは数分前にさかのぼる。昨日の事があるからこそ、今日は少しの事ではシエラ達は動揺せずに冷静さを持って的確に行動してくるだろうと読んだ昇は強行策に出たのだ。そう……帰りのホームルームに出ないという強行策にっ！

だから昇は最後の授業が終わるのと同時に荷物を隠しながら、トイレに行くフリをして教室から出たのだ。それから真っ先にいつもの生徒指導室に向かった。今日も与凪の精界を突破して逃げるつもりだったのだろう。

それに森尾の事だ。たとえ帰りのホームルームで昇が姿を消したとしても、後でラクトリーを通じて必要な連絡事項があったら伝えてくれるだろうと思った。だからこそ、ホームルームに出ないという強行策に出た昇だったのだが、そんな昇を待ちうけていたのは……校庭に数え切れないほどにうごめいている機動ガーディアンの姿だった。

今までに見た事が無いタイプの機動ガーディアンだったが、鎧だけの姿といい、手にしている武器といい、どう見ても機動ガーディアンだと思っても良いだろう。それに与凪の事だ。今まで見てきた機動ガーディアンを参考に、自分なりの機動ガーディアンを製作していてもおかしくはない。なにしろ、ここは以前の戦いで流れ出た精霊王の力、その一端だけだが流れ出てる精霊王の力を制御するための設備を備えている。だから、ここが襲撃される事を予想して機動ガーディアンを用意しておいても、まったく不思議ではなかった。

だが、今現在では校庭にうごめいている機動ガーディアンを見る限り、どう見ても、ここを守っているとは思えない。なにしろ、まるで何かを探しているかのように機動ガーディアン達は辺りを見回しながら巡回しているからだ。

そんな数え切れないぐらいの機動ガーディアンを見て、昇は真っ先に一人の人物を思い浮かべるのだった。

これは……シエラの仕業かな。そんな風に考える昇。与凪が機動ガーディアンを用意しておいても不思議では無い事は先程、説明したとおりだ。だからと言って与凪が面白半分でシエラ達に手を貸して、ここまで機動ガーディアンを配置するとは思えない。なにしろ……校舎の中からも機動ガーディアンが歩き回っている音が聞こえてくるのだから。

だから学校中に機動ガーディアンを配置してあると思って良いだろう。ここまでして昇を追い詰めようとしているのだ。だから与凪の意思で機動ガーディアンを配置したとは思えない。まあ、与凪はあのような性格だから他人事のように機動ガーディアンを貸したりはするだろう。だが、まるで昇を逃がさないように配置された機動ガーディアンを見る限り、情報管理に精通している人物が機動ガーディアンを配置した事は間違いないだろう。

そして昇達のメンバーで、そのような事が出来るのは与凪を始め、シエラと閃華、後は除外しても良いと思われるミリアとラクトリーだ。ラクトリーの性格から言っても、シエラ達に手を貸すにしても、必ずミリアの修行を兼ねてミリアにやらせていただろう。だが、配置された機動ガーディアンには付け込むだけの隙が無い。だからこそ、機動ガーディアンを配置した人物が絞られる事になる。

確かに閃華がやったとも考えられるだろうが、閃華の性格から言って、あからさまに威嚇を含めた配置はしないだろう。閃華なら、機動ガーディアンを隠して、昇が罠に掛かったところで一斉に機動ガーディアンを昇に向かって襲い掛からせるだろう。つまり、閃華がやったにしては逃がさないという意思が出すぎている。そうなる

と残った人物は一人だけである。
そう……シエラだ。昨日、与凪から機動ガーディアンの指揮権を貰ったシエラは、一人黙々と琴未達の話を聞きながら、機動ガーディアンを学校中に配置していたのだ。だからこそ、シエラは昨日の会話は聞いてはいたものの、会話に参加する事無く、今日のために機動ガーディアンを学校中に配置していたのだ。
そう、これこそがシエラが言っていた人海戦術である。シエラは与凪がここを守護するために、誰にも秘密にして機動ガーディアンの設計と生産ラインをいつの間にか作っていた、シエラはどこで、その事を知ったのかは知らないが、与凪が密かに守備を強化しようとして機動ガーディアンを作っていた事を知っていたのだ。だからこそ、与凪に機動ガーディアンを貸してくれるように頼んでおいたのだ。
そして、昨日。与凪から借り受けた機動ガーディアンを学校中に配置したという訳である。
まさか、こんな人海戦術にも似た手を打ってくるとは思っていなかった昇は窓から身を乗り出しながらも、学校中に配置されている機動ガーディアンに対しての対抗策を考えるのだった。
まさか、こんなにも機動ガーディアンがあるなんて思って無かったよ。与凪さん、いつの間に、こんなにも作っていたんですか？しかも……それをシエラに貸さないでくださいよ～。そんな泣き言のような事を思った昇は自分が追い詰められている事を実感していた。
このまま手をこまねていたら、シエラ達がいつ、ここに来てもおかしくは無いよね。なにしろシエラ達の事だから、ホームルームが終わったら真っ先にここに来るはずだから。だから、その前に、ここを脱出しないと。シエラ達が来るまで、そんなに時間は無いはずだから。う～ん……しかたない。与凪さんには悪いけど、ここは僕も強行策で行かせてもらうよ。
そんな決断をくだした昇はすぐに実行に移った。

「紫黒、レベル2　バージョンソニックウイング」
　昇が手にしているエレメントウェポンである二丁拳銃の紫黒に黒い翼が生えると、その翼は少しだけ大きくなる。大きさで言えば昇の手を包み込む事が出来るだけの大きさだろう。けれども、この翼は大きさよりも強力な力を秘めていた。
　ソニックウイングを発動させた昇は一気に窓から飛び出す。それと同時に紫黒の翼が羽ばたくと、一気に上昇して学校を見渡せる位置で止まった。そのスピードは翼の属性には負けるものの、かなりのスピードだ。それを、こんな小さな翼を二対で出しているのだから、ソニックウイングの力もかなり強力だと言えるだろう。
　そして学校を上から見渡した昇は呆れたように溜息を付くのだった。それもしかたないだろう。校舎の中から音がしていたから、校舎の中にも機動ガーディアンが居る事は昇にも分かった。けれども、機動ガーディアンは中庭はおろか、体育館、屋上にまで配置されていた。もう、学校中が機動ガーディアンだらけだ。
　そんな光景を見たからこそ、昇は呆れたように溜息を付いて思うのだった。シエラさん、何もここまでする必要は無いと思うんですけど。というか……そこまでして僕を追い詰めたいんですかっ！
そんな事を思う昇は、学校中にうごめいて昇を探している機動ガーディアンを見ながらも対抗策を練る。
　けれども、意外な事に対抗策は簡単に昇の頭に浮かんだ。いや、正確には昇をここまで追い詰めたからこそ、昇もその手を取るしかなかった。そう考えるのが自然だろう。なにしろ昇が考えた対抗策というのは……広範囲破壊なのだから。そんな昇が心の中で与凪に謝りながらも精神を集中させる。
　与凪さん、ごめんなさい。けど……シエラに機動ガーディアンを貸したのが、運の尽きだったね。本当に与凪さんには悪いけど、ここは一気に行かせてもらうよっ！
　そんな事を思っていた直後に、宙に浮いている昇の足元から、昇にしか見えない黒い歪が昇を中心に、昇の体格よりも少し広く展開

された。そして次の瞬間には昇の意識は黒い歪に沈んで行った。
一気に最下層まで降り立った昇。そこには四つの紅い紐が目の前まで伸びて来ているのだが、昇は紐を掴む事無く、自分自身の旨に手を当てた。そして自分自身に一気に力を流し込むと、再び意識を急上昇させて、自分の身体へと戻る。
「エーライカーっ！」
昇の中に強大な力が一気に生まれる。それを証明するかのように、エーライカーを発動させた昇は力の余波が突風となって撒き散らされ、身体からは別人とも思えるほどの力を撒き散らしている。普通の人間なら、今の昇に睨まれただけで失神してしまうぐらいの力を昇は放っているのだ。
けれども、それは呼吸と同じで、昇が放っている力は受け止めきれなかった力の一端に過ぎない。それ以上の力が昇の中に生まれ続けているのだ。
そんな昇が生徒指導室を避けるように紫黒を構えると、紫黒にエーライカーの力を一気に流し込む。その影響で紫黒は光り輝き、銃口の先には、その輝きに負けないほどの輝きを放っている光球が存在していた。そんな力を発揮している昇が目標地点を確認すると与凪に向かって、もう一度だけ心の中で謝るのだった。
ごめんなさい、与凪さん。出来るだけ、精界を破壊しないようにするから。でも……校舎の半分ぐらいは吹き飛ばしちゃうかな？
今の僕には何とか与凪さんの精界が維持できるだけ破壊するのが限界だから。だから、ごめんなさい、与凪さん。そして……後は任せますね。
そんな事を思った後に昇は照準が合っている事を確認すると一気に引き金を引き絞るのだった。
「ヘブンズブレイカーっ！」
紫黒が生み出した光球から圧縮された無属性の力が一気に放たれる。放たれた力は校舎を破壊し、昇が狙った目標地点に着弾する。圧縮砲での攻撃である、着弾すれば当然のように圧縮された力が一

気に解き放たれて爆発を引き起こす。
　昇のヘブンズブレイカーによって校舎は三分の二が破壊され、一緒に中に居た機動ガーディアンも消滅させた。それだけではなく、中庭、校舎にいる機動ガーディアンもヘブンズブレイカーの直撃によって大多数が消滅した。それと同時に与凪が築き上げた精界が三分の一ほど消滅する。
　昇としても与凪の精界を完全に壊さないように手加減したのだから、未だに精界が崩れないだけでも大成功と言えるだろう。それに、エーライカーによるヘブンズブレイカーである。いくら新型の機動ガーディアンと言えども、そんな攻撃を受けて無事で済むわけが無かった。むしろ、昇の力が範囲限定されていた事により、範囲内に居た機動ガーディアンへのダメージは大きかっただろう。
　そして昇はというと、未だに爆発の煙が大量に上がっている中で、崩れた精界を見渡して外に出れる場所を探して見つけると、すぐにそこに向かって飛んで行き、舞い降りるのだった。そして、エーライカーとアルマセットを解除して、いつもの制服姿に戻ると昇は与凪の精界を脱出すると、人間世界に戻った。そこは完全にどこからも死角となっている場所だ、だから昇は辺りを見回して、誰も居ない事を確認すると、シエラ達が追ってくる前に春澄が待っている公園へと駆け出すのだった。

　昇が脱出してから数十分後、いつもの生徒指導室には与凪を初め、いつものメンバーが集っていた。シエラ達だけではなく、フレトの姿もあった。どうやら琴未がフレトが逃げる前に確保したようだ。だからフレトもしかたなく、この生徒指導室で呑気にお茶をしているのだった。
　そんな中で状況を確認した与凪がテーブルに突っ伏すと、泣きそうな声で昇に向かって文句を言い始める。
「滝下く～ん、これは、いくらなんでもやり過ぎですよ。修復する

こっちの身にもなってくださいよ」
　与凪にしては珍しく泣き言を言って来たので、全員が与凪が映し出しているモニターに注目するために与凪の後ろに集る。精霊言語が読めない琴未とフレトは首を傾げるばかりだが、精霊達は溜息を付くなり、舌打ちをするなり、呆れたりとそれぞれの反応を示していた。
　そんな中で琴未とフレトは与凪に対して説明を求めたいのだが、肝心の与凪が涙を流しながらテーブルに突っ伏しているのだから、与凪に質問する事が二人には出来なかった。その間にもシエラが独り言のように呟いた。
「これだけの範囲破壊、昇はいったい何をやったの？」
　誰に質問したわけではない。ただ昇がやった事に見当が付かないからこそ、シエラの言葉は自然と質問形になっていたのだ。そんなシエラの質問に答えるかのように閃華が口を開いてきた。
「どうやら昇はエーライカーを使ったようじゃな。さすがの昇も的確な判断が出来るようになったというわけじゃな」
「どういう意味？」
　閃華の言葉に質問するシエラ。確かに昇がエーライカーを使った可能性はある。それほどまでに校舎は見事に破壊されており、配置してあった機動ガーディアンもほとんど残っていないほど壊滅状態になっている。だからこそ、シエラは閃華に詳しい説明を求めたのだ。そして閃華がシエラに向かって口を開く。
「シエラが配置した機動ガーディアンは新型じゃろ。昇にしてみれば今までに見た事が無いタイプの機動ガーディアンじゃ。そんな機動ガーディアンを相手に昇が一体一体相手にするのは愚の骨頂じゃと思ったんじゃろ。なにしろ昇には時間が無いのじゃからのう。じゃからこそ、昇は最大限の力を出してきたというわけじゃ。時間が無い上に相手の攻撃性能も分からない、じゃからこそ、昇はエーライカーを使ったというわけじゃ」
「……そういう事」

閃華の言葉に納得したかのように頷くシエラ。そんなシエラを見て、もう介入しても良いと思ったのだろう。琴未が口を挟んできた。

「って！　また二人だけで納得してないで私にも説明しなさいよねっ！」

そんな文句を言って来た琴未に対して閃華は軽く謝り、シエラは無視した。そんな状況を見かねたのだろう、ラクトリーが口を開いてきた。

「琴未さん、今回のケースは昇さんの立場に立って考えた方が理解しやすいでしょう。昇さんは時間的猶予が無く、目の前には戦闘能力が未知数な機動ガーディアンが数え切れないぐらい配置されている。この状況を打破するためには、どうすれば良いでしょう？」

まるで問題を出すかのように、そんな言葉を口にするラクトリー。そんなラクトリーからの問題に対して琴未は首を傾げるばかりだった。どうやら琴未はすぐに答えを導き出せなかったようだ。

その間にもラクトリーの問題が分かったかのようにフレトが口を開いてきた。

「そういう事か。滝下昇が、この状況を打破するためには相手の戦闘能力を測ったり、一体一体相手にしている余裕は無い。だからこそ、自分が持っている最大限の力を発揮して突破口を作った。相手の戦力が分からない場合は、こちらが発揮できる最大限の力を一気にぶつけた方が有効だからな。それに相手は機動ガーディアンだ、手加減無しで破壊しても問題ないだろう。後は校舎や精界に注意して攻撃すれば、脱出するのは容易な事だと言えるな」

「さすがはマスターですね、その通りです」

フレトの言葉に感心したかのように賞賛の言葉を述べるラクトリー。そんなラクトリーの言葉を聞いてフレトも少しだけ得意げな顔をするが、出来て当然という態度を出しているのも確かだ。そんな二人とは対称的に琴未には未だによく分からないところがあるのだろう。二人の会話に口を挟むのだった。

「だから私を放って置いて納得しないでよね。私にも分かるように

説明してよ」
　そんな文句を言って来たものだから、ラクトリーは少しだけ誤魔化すような微笑を琴未に向ける。どうやら琴未の事を完全に忘れていたようだ。そんな琴未に対してラクトリーはフレトの解答を参考に琴未への説明を開始する。
「琴未さん、相手の戦力や数が分からない場合は、こちらはどんな手段を取った方が有効的ですか？」
　そんな質問をするラクトリーに琴未は首を傾げた。どうやら琴未には解答が出ないようだ。まあ、それもしかたないだろう。今まで、こうした戦略的な事や重大な決断は昇が行ってきたのだ。だから琴未が戦略的な思考が未発達なのはしかたない事だ。
　フレトもアンブルに破れてからというもの、戦略について自主的に学んでいたのだ。なにしろ昇は戦略によって完全契約の弱点を突いてきてフレト達を倒した。そうやって昇は戦略という物を学んで行ったのだ。だからフレトも戦略の重要性にアンブルとの戦いで気付かされたものだから、今では自主的に学んでいるというわけだ。
　と、フレトの事はひとまず置いて、琴未が未だに解答が出来ないと横から閃華が口を挟んできた。
「琴未よ、こう考えてはどうじゃろうか。ある合戦で敵が出陣して来たのじゃが、相手の数が分からない、さあ、こちらはどれだけの兵を出せば良いじゃろ。この場合、両者の数は同じ物とする。さあ、こう考えれば、どうすれば良いか分かるじゃろ」
　閃華のヒントを受けて考え方を変える琴未。そんな琴未にもやっと解答が浮かんできたのだろう。その事を口に出してみる。
「閃華の場合だと、こちらは全部の兵を出した方が有効的よね。だって、相手の数は同じだから、もし相手が戦力を分散させるんだとしたら、全部の兵を出して、各個撃破した方が有利よね」
　ラクトリーの顔を窺いながら、そんな解答をする琴未。そしてラクトリーが頷くと、琴未もやっと一安心したように息を付いて、少しだけ納得するのだった。そして、そんな琴未にラクトリーが昇の

場合に当てはめて説明を始めた。
「昇さんの場合だと、見た事が無い機動ガーディアンが学校中に配置されてますから、昇さんには相手の戦力や戦闘性能なんて分かりはしません。けど、このまま手を拱いていては琴未さん達が来てしまうでしょ。だからこそ、昇さんは最大限の力を発揮できるエーライカーを使ってきたのですよ」
そんなラクトリーの説明を聞いて納得する琴未。そこに閃華から、更に追加説明が加えられた。
「それに、昇のエーライカーは短時間なら身体に支障は無い。じゃから、一撃だけに最大限の力を込められるエーライカーを選んでも不思議では無いんじゃよ。いや、むしろ、この状況を打破するために、エーライカーをちゅうちょ無く使ってきた昇が下した判断の速さこそが賞賛すべき点と言えるじゃろ」
閃華の言葉を聞いて納得したように頷く琴未。
確かに昇のエーライカーは強力なだけに副作用も大きい。だが、短時間の一撃だけなら副作用は全く出ない。だからこそ、昇は戦力が未知数な機動ガーディアンがうごめいている、校舎や校庭、そして中庭を狙って砲撃を撃ち込んだのだ。
その結果として、昇が狙ったとおりに機動ガーディアンのほとんどが壊滅。昇は無事に精界から脱出する事が出来た。この結果から、一番賞賛に値するのは、昇が下した正確な判断力と決断力だ。
昇は相手の数も能力も分からない機動ガーディアンを相手に、一体一体破壊しながら進むより。広範囲高威力砲撃を撃ち込んだ方が確実に逃げられると確信した。なにしろ一体一体相手にして突破するよりは、砲撃を撃ち込んで、校舎等を破壊してまでも機動ガーディアンを一掃した方が確実に逃げ切れると判断したのだ。
もちろん、全てのケースに今回のパターンが適用される訳ではない。相手の戦力が分からない場合の対処パターンは幾つもある。逃げる事も充分に有効的な手だし、あえて乱戦に持ち込んで琴未達に介入させないという手もある。

だが、昇には時間が無いのだ。それはシエラ達が追って来ているだけではない。あの公園で春澄を待たせているからだ。昇としては短時間でシエラが用意した包囲網を突破して、脱出しなければいけない。だからこそ、エーライカーを使った手段を使ってきたのだ。

その的確で素早い判断こそが琴未達を驚かせる事になり、昇が成長した証拠でもあり、賞賛に値するだけの判断と言えるだけのものと言えるだろう。

改めて昇の成長と能力に感心する一同。これが他の誰かなら、未だに脱出できずに機動ガーディアンと戦っている可能性が大きいだろう。だが、昇は見事にシエラが用意した機動ガーディアンを突破してみせたのだ。琴未としては、ここでシエラを責めるのは心地良かった。

「シエラ～、残念だったわね。昨日は自信満々にあれだけの事を言ってたのに、こんなにも簡単に突破されて、無駄な努力をご苦労様。昨日はあれだけ昇を止める事が出来るような事を言っておきながらも、こんなにもあっさりと突破されるんだもんね～。所詮、シエラなんて、その程度よね～」

そう言いながらシエラの頭に肘を置いて高笑いする琴未。もちろん、シエラもそんな事を言われて黙っている訳が無かった。シエラは琴未の肘を払い除けると意地悪な笑みを浮かべて琴未に向かって言葉を放つのであった。

「そう、確かに私の作戦は破られた。なら……私の作戦について暴言を吐いた琴未には、昇を確実に追い詰める代案があるんでしょう」

なにしろ、今回の人海戦術はシエラが確実に昇を追い詰める事が出来ると確証しての作戦だ。それなのに、いとも簡単に突破されてしまったのだ。シエラには返す言葉が無いものだがら、シエラはそれを逆に利用して琴未を追い詰める事にした。つまり琴未には昇を追い詰めるだけの代案を出す事が出来ないと思ったからだ。

だが、事の展開はシエラが思ったのと違う方向へと向かって行くのだった。

「当然じゃない。明日こそは私の作戦に従って、確実に昇を追い詰めるわよっ！」

意外な事に琴未にしては昇を追い詰める代案を出してきたのだ。そして琴未は自分が考えた作戦を全員に聞かせる。そして琴未の作戦を聞いたフレトは溜息を付いてから琴未に向かって言葉を放つのだった。

「それで今日は俺達も連れてきたという訳か」

「もちろん」

フレトの言葉に琴未は胸を張って答える。どうやら琴未の作戦はかなり有効的で、フレト達も巻き込む事が前提になっているらしい。だからこそ琴未はフレトに向かって言うのだった。

「だからフレト、明日は半蔵さんやレットさんも借りるわよっ！」

フレトを指差しながら、はっきりと宣言する琴未。そんな琴未に対してフレトはラクトリーの方へと顔を向けた。そのラクトリーも呆れながら首を縦に振るのだった。

確かに今の状況でフレトの妹であるセリスに危険があるわけではない。だから無理に護衛を付ける必要も無い。もちろん、セリスが自らの意思で出かけると言えばフレトも護衛として精霊を付けるだろう。だが、琴未がここまでやる気になっており、セリスの病を治すために昇達に借りがあるフレトにしてみれば琴未の申し出を無下に断るわけにもいかない。

だからこそ、ラクトリーに相談するために顔を向けたのだが、そのラクトリーが呆れながらも首を縦に振ってきた。これは琴未に協力して昇を追い詰めたい気持ちもあった。だが、それ以上に……こんな事に引っ張り出された事に呆れていたのだ。そんなフレトが承諾の言葉を口にする。

「分かった、明日はこちらも総動員で協力するとしよう」

フレトの言葉に満足げに頷く琴未。これで明日は琴未に作戦が展

開される事が決定された。まあ、巻き込まれたフレト達は呆れるしかないのだが、確かにお遊びとはいえ、あの昇を追い詰める事は面白そうだった。だからフレトもどんな作戦で昇を追い詰めようかと紅茶を口にしながら精霊達の配置や昇の動きを予想しながら、明日の作戦を考えていたのだった。

そんな冷静なフレトとは違って、琴未は明日の作戦に向けて燃え上がっているようだ。

「見てなさいよ、昇っ！　明日こそは捕まえてみせるんだからっ！」

はっきりと断言する琴未に対してシエラが冷静な、というか、本来の目的を口にするのだった。

「昇をワザと逃がさないと昇の浮気相手が分からない。だから、昇を捕まえても意味は無い」

そう、それこそが本来の目的である。そのためにミリアは半泣きになりながらも、昇を追跡出切る装置を開発しているし、閃華も苦笑いを浮かべているのだった。そんな中でラクトリーが楽しそうに口を開いてきた。

「一直線なのも琴未さんの長所でもあり、短所でもあるようですね。まあ、一途に何かを成そうとする事は良い事ですよ。それからミリア、３５８番目と４０２番目と４２２番目と４３０番目の計算が間違ってます。だから３５０番目から全て見直しなさい」

「はうっ！　うぅ、は～い、お師匠様～」

既に泣いているミリアはラクトリーに言われたとおりの作業に移るのだった。

その頃、昇はというと……いつもの公園で春澄と談笑していた。

「それは昇さんが悪いよ」

そんな事を言って笑う春澄。話題は昇達が海に行った時の事だ。風鏡との戦いが終わった後に昇が女性陣全員から無視された話をしたら、春澄は笑いながら、そんな事を言って来たのだ。だから昇は

不満げに反論する。
「僕としては最善の選択をしたつもりだし。それに僕は皆に対して酷い事をした覚えはないよ」
そんな反論する昇に春澄は楽しげな笑顔を浮かべながら会話を続ける。
「その皆って、全員女の人でしょ。それなのに、その風鏡さんだけを特別扱いするような事をしたら、私だったらヤキモチを妬くよ」
「別に風鏡さんを特別扱いしてないし。僕としては風鏡さんに気付いてもらいたかっただけだから」
「それでも、いつも一緒にいる女の子としては特別扱いされた女の人にヤキモチを妬くものだよ。だからこれは昇さんが悪くて当然だよ」
「……春澄ちゃんまで」
「自業自得だよ」
そう言った後に楽しそうに笑う春澄。
昇が春澄と話すようになったのは、今日で三日目だが、今まではお互いに重たい過去を話したからだろう。今ではすっかりお互いの事を理解したかのように楽しげに談笑している。昇にしては珍しい事に女の子とこうした談笑をするのは滅多に無い事だ。
なにしろ、いつもシエラ達に囲まれているのだから。昇としてはシエラ達とは違う女の子と談笑する事が新鮮であり、春澄と話していると楽しくもあった。そして春澄も昇の話をよく聞いてくれていた。
なにしろ春澄は目が見えない盲目者である。それだけに見るという体験が全く無く、何かを体験しても半分ぐらいは理解出来ないだろう。だからこそ、こうやって昇の話を聞いて、楽しそうに笑っているのである。つまり、春澄の境遇がすっかり春澄を聞き上手にしてしまったのだろう。
だが、そんな春澄だからこそ、昇は自分の事を話すのが楽しいし、争奪戦の事で話す事が出来ない部分も多いが、自分が感じた事、考

えた事、理解した事、それらを春澄に話して。春澄も昇の話について一つ一つ真剣に考えたり、笑ったり、頷いたりといろいろな表情を見せてきた。

どうやらお互いに理解し合えた部分が増えたのだろう。だからこそ、こうやって今は談笑する事が出来ているのだ。

そんな春澄が昇の現状に付いて話を切り替えてきた。

「でも、昇さん。そろそろ誰かに決めないと……本当に取り返しが付かない事になりますよ」

「いきなり預言者のような言い方をしないでくれる」

そう言いながら苦笑いする昇は春澄の言葉を聞いて、今の段階で考えている事を春澄に話した。

「それは分っているんだけどね……怖いのかな？　もし……誰かに決めてしまって、今の関係が崩れるのが。だから、今の僕は誰か一人に決めるだけの勇気が無いんだよ」

「それって……自分が女たらしと言っているようなものですよ」

「そういう意味じゃありませんっ！」

春澄の言葉に思いっきり突っ込む昇。そして二人はお互いに笑い出す。どうやら昇が突っ込めるほど、二人の関係は進行しているようだ。そして……そんな春澄がとんでもない事を言いだしてくる。

「それで昇さん、この前の事は考えてくれました？」

「この前って？」

「……酷い、昨日私から昇さんに告白したのに、私ってもう捨てられた女」

ワザとらしく泣き崩れて見せる春澄。そんな春澄を昇は苦笑いした顔で見ながら、春澄に向かって話を続けるのだった。

「告白って、まあ、それに近い物は聞いたけど、本気で考えなくて良いって言ったのは春澄ちゃんだよ」

そんな事を言った昇に対して春澄は元の態度に戻ると思いっきり溜息を付いた。

「ダメですよ、昇さん。少しは女の子の気持ちを考えてあげないと。

昇さんは優しいところが良いところだけど、誰にでも優しいのはダメなところですよ」

「いや、別に誰にでも優しくしている訳じゃないけど」

「じゃあ、私への優しさも遊びだったのね」

そう言って、再びワザと泣き崩れる春澄。そんな春澄に対して昇が思いっきり行動に出す。

「だから、それを止めてくださいっ！」

春澄の態度に思いっきり突っ込む昇。確かに昇は誰に対しても優しさを見せる一面がある。ただ、それが女性に対して多いだけだ。だから昇としては女性に対してやましい事を考えた事は無いし、下心があって女性に接した事は今まで一度も無い。だからこそ、昇としても春澄に対して特別な感情がある訳ではなく。なんとなく、放っておけないという気持ちから、毎日春澄と会って話しているのだ。

だから昇には春澄が、ここまで女性関係に対してふざける理由が理解できなかった。そして春澄も、そうやって昇をからかっているうちに、昇が本当に女性関係に疎い人物だと理解してきたようだ。

そんな春澄がワザとらしく大げさに溜息を付いて見せた。

「本当に……昇さんを好きになった人は大変そうですね」

「いや、どちらかというと僕が大変な目に遭うことが多いんだけど」

「やっぱり大変そうです。まあ、だから好きになったとも言えるんでしょうけどね。その気持ちは私も良く分かりますから」

そう言いながら軽く笑い出す春澄。昇は春澄が笑っている理由がまったく分からなかった。そんな春澄が笑いを止めると昇の方へと顔を向けてきた。

「あっ、そうだ。最後のお願いがあるんですけど」

そんな事を言って来た春澄に昇は何も考えずに二つ返事で返す。

「うん、僕に出来る事なら、何でも……」

そんな事を言った直後に昇は固まってしまった。なにしろシエラ達の事が頭を横切ったのだから。さすがに今までの事があるのだろう。昇は今まで春澄と話している時はシエラ達の事は忘れていたの

だが、さすがに今回はやっとシエラ達の事を思い出したようだ。
その事で一気に昇の顔色が悪くなる。この場合は幸いと言うべきだろう。盲目の春澄には昇の様子が分からなかった。だから昇の顔色が悪くなった事に気付かなかったのだ。そんな春澄に昇は細心の注意を払いながら問い掛ける。
「えっと、それで最後のお願いというのは何かな？　もしかしたら僕には出来ない事かもしれないし」
念の為に最後にそんな言葉を付け加える昇。そんな昇に向かって春澄は意地悪な微笑を向けるとゆっくりと口を開いた。
「それは……最後のお願いだから、最後に話すね」
「……へっ？」
春澄の言葉が良く理解できなった昇。そんな昇を気にする事無く、春澄は話題を切り替えてきた。
「そうだ、確か昇さんって海外からのお友達も居るんでしょ。その人の事も聞きたいな」
春澄がフレトの話題を振ってきたので昇は思考を中断させて春澄との会話を優先させた。この時の昇は春澄の言葉がそんなに重要だとは思ってはいなかったようだ。まあ、それもしかたない。もう、春澄が決めた事なのだから。
それから二人は夕暮れまで談笑し、お互いに笑い合い、楽しい一時を過ごした。それから、いつものように春澄は別れを告げるように立ち上がると「また、明日だね」と言って、アルビータの所に歩いて行くのだった。
そんな春澄を昇はいつものように見送るのだった。今はまだ……何も気付かないままに。

日が落ちて、人が作り出した明かりが町中を照らしている中を春澄はアルビータの手を取りながらゆっくりと歩いている。そしてアルビータから春澄に向かって話し始めた。

「大体の事は調べが済んだ。後はいつ決行するかだな」
そんな事を口にしたアルビータ。そして、アルビータの言葉を聞いた春澄はアルビータが思いも寄らない事を言い始めた。
「やっと分かったんだけど。昇さんと、あのお屋敷の人……たぶん、ううん、確実に友達だよ。だって、昇さんから感じた精霊の気配が、あのお屋敷からも感じたから。それに……昇さんの話しに出てきた人。その人が今回の相手になるよ」
春澄の言葉に驚きを示すアルビータ。春澄の能力はアルビータも良く知っているが、まさか昇との会話から、そこまで推測しているとはアルビータも思いも寄らなかった事だ。なにより春澄がそこまで知っておきながら、計画を中断しない事にアルビータは驚いていた。だからこそ、アルビータは尋ねずにはいられなかった。
「それでも……実行するのか？」
そんなアルビータの問い掛けに春澄はアルビータに向かって微笑むと、はっきりとした口調で答える。
「もちろんだよ。だって……私が見たいと思ってたし。それに……今では、はっきりと分かる。私と……昇さんはしっかりとした因縁があると。それに昇さんも友達が私達に倒されたとなると……黙っているわけが無いよ。絶対に私達に戦いを仕掛けてくる、ううん、少なくとも戦ってくれるはずだよ。その時こそが……私達の終焉だよ」
春澄の言葉を聞いてアルビータはいつもの表情に戻るとはっきりと口にした。
「春澄が、それを望むのなら、私はいつまでも戦おう」
「うん、ありがとうね、アルビータ」
そんな言葉で感謝を述べる春澄。一方のアルビータからは返事が無い。これもいつもの事なのだろう。だから春澄はアルビータから返事が無くても、まったく気にしなかった。それよりも春澄はこれからの事を考えるのだった。
さてと、これで作戦を実行すれば……確実に敵同士になるね昇さ

ん。でも……それは私が望んだ事だから。だから私は後悔しないよ。私は昇さんと戦う決意を持ってる。昇さんはどうなのかな？　全てを知っても私と戦ってくれるかな？　……けど、戦うしかないよね。だって、私達が昇さんの友達に戦いを挑んで倒すんだから。そうしたら、昇さん自身が出てくるしかないよね。そんな時に、どんな態度を取るのかな？　怒る、それとも嘆くのかな？　どちらにしても、もう運命は決まった。後は……実行するだけだよ。

そんな事を考えた春澄はアルビータに告げるのだった。

「明後日の夜に仕掛けるよ。その翌日はお休みだし、昇さん達も混乱の中で戦いたくは無いだろうから。だから昇さんにもしっかりと休んでもらって、そして戦ってもらうよ」

「そうか」

「うん、そして……昇さんとの戦いが最後になると思う。昇さんが……私達に終焉をくれる。だからアルビータ、それまではお願いね」

「分かった、ならばそうしよう。これで……私も終焉を迎えられる。今まで奪ってきた命に……終止符が打たれる。ならば戦おう……終焉を迎えるために」

「うん、最後まで一緒だよ、アルビータ」

「当然だ、我が主よ」

そんな会話をしながら、春澄とアルビータは身体を休めるために、既に決まっているホテルに向かって歩いて行くのだった。

第百三十話　残り少ないカウントダウン（後書き）

さ～て、いよいよ春澄達の目的が明らかになってきましたね～。だが……それは本当の目的では無いのですよ。春澄達の本当に願っている目的とは……今後のエレメでお確かめくださいな。

さてさて、そんな訳で、あまり代わり映えが無い。まあ、場面が今までとカブっているので、そんなに真新しい場面はありませんが、次回はいよいよ、昇がっ！！！　……まあ、それは次回のエレメを楽しみにしてくださいな。

さてさて、私はこうやって無事に小説を上げる事が出来たのですが、皆さんはいかがお過ごしでしょう。あの未曾有の地震から、かなりの時間が過ぎました。無事に、そして元気にお暮らしでしょうか。もし、被災地で、エレメを読んでくれている方がいらっしゃったら。私には何も出来る事はありませんが、影ながら無事だった事を祈り、亡くなった方には哀悼の意を捧げたいと思います。

そしてエレメを読む事で、少しでも楽しい一時を過ごして頂けたのなら、私としては、今回の地震に対して充分な事が出来たと思っている次第でおります。そんな訳で、地震もまだまだ予断を許さない状況であり、復興も始まっている今日。被災地の方々には頑張って、そして元気に暮らしてもらいたいと、影ながら祈る次第でございます。

そんな訳で、今回は真面目に後書きを書かせてもらいました。まあ、あの地震が来た後ですからね～。さすがに、ここであまりふざけるのもどうかと思ったもので。そんな訳で今回は真面目に後書きを書いたのですが、次回からはいつも通りにふざけた内容の後書きとなるでしょう。

……まあ、私の後書きだし、それでも良いよね～（笑）

そんな訳で、長くなったので、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そ

して、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、被災地とは呼べないけど、少しだけ地震の影響を受けている葵夢幻でした。

第百三十一話　学生の人は絶対に真似をしないでください

「我が主の命により捕縛する」
「って、なんで半蔵さんまで居るんですかっ！」
思わず、そんな突っ込みを入れてしまった昇。そんな昇は放課後で賑わっている校舎の中を必死になって駆け回っていた。
ちなみに、今日はこんな感じだった。昇はもうクラス中を混乱させる事も、抜け駆けも出来ないと判断した。だからこそ、今日に限っては昇はホームルームが終わるまで教室に居た。そうなるとシエラ達は昇が、また何かしら企んでいるだろうと疑ってい来る。だが、実際には昇は何も用意していなかった。
そして担任である森尾がホームルームの終了を告げるのと同時に昇は椅子を倒す勢いで立ち上がり、そのまま一気に教室を出て、廊下を駆け出したのだ。シエラ達から見れば、今までの事から考えても、今日も何かしらの作戦を出してくるだろうと思っていただけに、何の策も無しに逃亡を謀るという考えは思い浮かばなかったようだ。だからこそ、昇は廊下を一気に駆け抜けて、いつものように与凪の生徒指導室に入ろうとしたのだが……入れなかったのだ。
なにしろドアに鍵が掛かっているだけでは無い。ドアに鎖が巻き付いてあり、見た事も無い鍵が幾つも掛かっていたのだ。けれども、他の生徒はそんな生徒指導室を気にする事無く、通り過ぎている。だから、この仕掛けは精霊と契約者にしか見えないものだろうと昇はすぐに判別する事が出来た。
そうなると昇は、いつものように与凪の精界を利用しての脱出は無理だ。なにしろ昇には生徒指導室のドアを開けるだけの知識も技術も無い。たぶん、与凪なら一瞬で開けられるだろうが、与凪がシエラ達に加担している可能性が大きいからには与凪に頼る訳にもいかない。

そうなると昇に残された手段は一つだけである。そう……通常空間、つまり人間世界から普通に学校から出ないといけない訳である。そう、これこそが昨日、琴未が考え出した作戦の一つなのだ。

昇はシエラ達が追い付く事を計算して、脱出が容易で時間が掛からない与凪の精界を利用していたのだが、まさかドアを封じられるとは昇にとっては予想外だ。そして二つ目が、今は廊下を走っている昇を後ろから追いかけてくる半蔵である。

つまり琴未の作戦はこうである。昇に生徒指導室を利用した脱出をさせないために、ドアの封印をして開かないようにした。それから、それぞれ学校中に散らばって、連絡を取りながら昇を追い詰めて行こうという訳である。

たしかに与凪の精界に入れないからには昇も大っぴらに力を使う事が出来ない。それはシエラ達も同じである。そうなると鬼ごっこ状態になるわけだ。しかも鬼はシエラ達、逃げるのは昇一人。と圧倒的に昇が不利な鬼ごっこなってしまった訳である。そこに半蔵までもが介入してきたのだから昇は驚きを隠せなかった。

そんな昇が人気の無い階段を一気に跳び下りると、やはりというべきか昇の前に半蔵も跳び下りてきて昇の前に立ち塞がる。そんな半蔵に対して昇は半分ほど、やけになりながら話しかけるのだった。

「って、半蔵さんが学校に居たら注目を浴びてフレトに迷惑が掛かるんじゃないんですかっ！」

そんな事を叫ぶ昇。確かに半蔵の格好は普通とは言えない。強いて言うなら昔の忍者装束に近い物がある。そんな人物が学校に居たら注目を浴びるどころか、教師の目に止まって不審者が侵入したと思われてもしかたないほどだ。だが、半蔵は冷静に昇に告げるのだった。

「心配無用、我が属性は我の姿を相手を選んで消す事が出来る。それだけでは無い、攻撃も出来る。そう、こんな感じで」

そういうと半蔵の姿は確かに消えた。そして背後に気配を感じた昇は一気に前に飛び込む。そして一回転してから後ろを振り向くと

半蔵の姿があった。そう、これこそが半蔵が有している空の属性が持っている力である。

空の属性は空間を操る事が出来る。だから瞬間移動したみたいに空間を繋げたり、切り離したり出来るわけだ。だから半蔵は自分の周りの空間を操って、自分の姿が見えないように空間を投影しているのである。

簡単に説明すると、四角柱を想像してもらいたい。それが真ん中に立っていると、当然だが四角柱の向こう側は見えない。だが、四角柱の向こう側にある景色を撮影して反対側に投影させると、まるで四角柱が消えたように見えなくなるのである。無数の小型カメラで景色を撮影し、反対側にある無数の小型テレビに映し出す。そんなステルス迷彩と同じ原理である。

ただ半蔵は空の属性だから撮影とか投影が出来る訳ではない。そうした光学的な物は光の属性が得意としている。なら、なんで半蔵が同じような事が出来るかというと、それは簡単な事だ。

空の属性、つまり空間を操る事が出来る力である。ここで肝心なのが空間に関しては幾つもの定義や理論があるという事だ。そこを一から十まで説明していたらキリが無いので半蔵が行っている事だけを簡単に説明しよう。

先程の説明どおりに半蔵は自分とは反対側の景色を映し出して自分の姿を消している。ここで使われているのが次元空間の定義だ。一次元、これは線を意味する。二次元、これは面を意味する。三次元、これは立方体。つまり、人間が平面ではなく、立方体、つまり人としての形を取れているのは三次元に居ると考えられているからである。

だが、先程も言ったとおりに空間にはさまざまな定義や理論があり、それが絶対とは言えないが、そうした定義や理論が使われているのも確かであり、その理論や定義から空間の精霊が生まれてもおかしくは無いのだ。

話が少しずれたので元に戻すと、半蔵は己の周りに二次元の空間

を展開させているのだ。そこに自分の姿が完全に消えるように反対側の景色を映し出しているのだ。つまり、半蔵は反対側の空間をコピーして貼り付けているのだ。そしてパラパラマンガの要領で空間を動かしている、そんな二次元の空間に囲まれていれば普通の人間には気付けないのは当たり前の事だ。

半蔵はそれを使って普通の人間から姿を隠す事をしていたのだ。しかも、空の属性はかなり使い勝手が良い。先程、半蔵が行った空間移動の他にステルス迷彩のように姿を消せる。しかも、相手を選んで姿を消したり、見せたり出来るのだ。

今回の場合だと半蔵は普通の人間には姿を見せないようにしているが、契約者と精霊、つまりシエラ達にだけ普通を姿が見えるようにしているのだ。ここで一つだけ疑問が浮かぶ事だろう。なんで相手を限定して姿を消したり、見せたり出来るか？　という疑問が頭をよぎった事だろう。

それは戦闘に深く関わってくる。簡単にいうと味方からも姿を見えないようにしてしまうと、下手したら味方の攻撃を喰らったり、味方との連携が取れないのだ。だから空の属性は相手を限定して姿を消したり、見せたり出来るのだ。それほどまでに空の属性は使い勝手が良い。その代わりに、空の属性に関しては属性を利用しての攻撃方法が無い。

つまり空の属性は奇襲や隠密行動を取るのには適しているが、属性を使った戦闘では属性攻撃が無いために、どうしても攻撃方法が武器での攻撃に限られてくるのだ。要するに一見すると使い勝手が良い空の属性だが、万能では無いという事だ。

だが昇には、そこまでの知識は無い。ただ半蔵が普通の人間からは見えない事は充分に理解する事が出来た。なにしろ、人気が無い、階段の踊り場に来るまでに、ワザと人気の多い場所を通っている。けれども、誰一人として半蔵の姿に気がつかなかった。だからこそ、空の属性に関しての知識は無いが、半蔵が空の属性で何をしているのかは、だいたい想像が出来た。

それだけに半蔵が居るだけでも厄介な事がこの上なかった。昇は踊り場の窓から外を見る。そこは中三階と言った所だろう。しかも、窓の下、つまり外の地面には人気が無い。だから、ここから跳び下りても支障は無いだろう。だが半蔵が居るという事は、フレトの精霊が他にもいる可能性がある。特に厄介なのがレットである。

レットは爪翼の属性を有している。つまり上空から監視出来るのだ。まあ、さすがに翼を広げて飛び回る訳にもいかないから、今は屋上を渡り歩いている可能性がある。短距離の飛行なら翼の属性を持っている爪翼の属性を使えば人の目に映る事無く、屋上から屋上に移動するのは簡単な事だ。

つまり下手に外にも出られないという事だ。

昨日の機動ガーディアンもそうだが、シエラ達はドンドンと手段を選ぶ事無く、確実に昇を追い詰めて来ているのは間違い無いと昇は感じざるえなかった。だからこそ、昇も手段を選ばないために今は半蔵に背を向けて、一気に二階まで跳び下りると、再び半蔵に追われながら駆け続ける。

そして昇は一階、そして一度中庭に出てから、再び校舎の中に入った。もちろん、一旦外に出たのだから、確実にレットに見付かった事だろう。そのレットから連絡を受けたかのように、閃華、フレト、咲耶、次々と昇を追ってくる者が増えてくる。そして最後にはシエラ達が全員揃って昇を追う羽目になってしまった。だが……これも昇が考え出した作戦の一つだった。それに気付かないまま、昇を追うシエラ達だった。

そんな昇が足を止めたのは人気の無い、窓からは裏道が見える、廊下の真ん中だった。シエラ達も人数が揃ったからこそ、あえて二手に分かれて昇を挟み撃ちにしようと考えるのは昇も考えた事だ。だから今ではシエラ陣営と琴未陣営に分かれて昇を挟み撃ちにしている。いや、正確にはシエラ達にその手段を取らせるために昇は一回だけ外に出て、全員を一箇所に集中させたのだ。

そんな昇の計略に気付かないままに琴未としては完璧に昇を追い

詰めたと思った事だろう。だからこそ、余裕と不機嫌な笑みを同時に出しながら昇に向かって話しかける。
「さ～て、昇。とうとう追い詰めたわよ。今日こそは、ここのところ毎日毎日帰りが遅い理由と相手を話してもらいましょうか」
そんな琴未の言葉と共に両側から挟み込んでいるシエラ達がゆっくりとにじり寄る。そんな光景を見ながらも昇は廊下のある場所を背中にすると、そこから動く事無く、琴未に返事を返した。
「えっと、僕は別にやましい事をしている訳じゃないし、何もここまでして僕を追い詰める事も無いかと思うんですけど。琴未達が僕に対してちょっと過敏になり過ぎてるだけだよ」
そんな言い訳で誤魔化そうとする昇だが、当然のように、そんな言い訳が通る訳が無かった。それを証明するかのようにシエラが口を開く。
「けど、最近は放課後になると昇は私達から逃げるように学校から出てる」
「うっ！」
「それに、やましい事が無いのなら、帰りが遅くなる理由を私達に話しても支障は無いはず」
「げはっ！」
「更に言うと、今のところは確かな証拠は無いけど……昇が私達の知らない女の子と密会している疑いがある」
「がはっ！」
シエラの言葉が槍となって次々と昇に突き刺さる。その度に短い悲鳴を上げる昇、どうやら反論は出来ないようだ。それでも、シエラが言った言葉が決め手となったのだろう。昇は何とか、そこで反論に出た。
「で、でも、シエラが言ったとおりに確かな証拠は無いんでしょ。それに僕が女の子と密会しているなんて、そんな事があるわけ無いよ」
そんな昇の言葉を聞いてフレトが溜息を付くとはっきりと言うの

だった。
「滝下昇、そんな追い詰められた表情で大量の汗を掻きながら言っても説得力が無いぞ」
「げぶしっ！」
フレトの言葉が決め手となったのだろう。昇は力尽きたように膝を付いて、近くにある物に手を置いて身体を支える。これで完全に昇にトドメを刺したと琴未は思ったのだろう。琴未は一歩だけ前に出ると、勝ち誇った笑みを浮かべながら胸を張って、昇に最終宣告をするのだった。
「さ～て、昇。今日こそは全部話してもらうわよ。家に帰るとおばさんが居る手前から昇に問い詰める事が出来ないからね。さあ、昇～、今っ！　ここで全部話してもらうわよっ！」
そんな琴未からの最終宣告を受けながらも、昇は手にしている物を支えにして立ち上がるとゆっくりと口を開く。
「……そうだね……それじゃあ」
俯いて口を開いている昇を見て琴未も完全に勝利を確信した事だろう。だからだろう、昇への注意力が無くなったのは。昇としても、琴未達が勝利を確信して隙を見せる時を待っていたのだ。そして、それが今だと判断すると一気に行動に出る。
「もう一度だけ僕を捕まえられたらねっ！」
そう叫んでピンを抜く昇。それから昇は消火器の口を琴未達の方に向けて、一気にレバーを引くと消火剤が一気に琴未達に襲い掛かる。それを見た反対側のシエラ達も動こうとするが、昇はすぐにシエラ達にも消火剤を吹き付けると次の行動に移る。
これで一時的だがシエラ達の足が止まった事は確かだろう。だが、まだ厄介な者が居る事を昇は充分に分っていた。そのために消火用のホースを一気に取り出すと、噴出口をしっかりと握り締めると蛇口を一気に回した。
そして昇が思っていた通りに、閃華と半蔵が昇の前に姿を現してきた。昇も、この二人なら、この程度の事では動揺しないし、すぐ

に行動に出ると分っていたのだろう。だからこそ、昇の目の前に姿を現してきた閃華と半蔵に対して、昇は消化ホースの噴出口から一気に吹き出た大量の水を二人に向けて叩き付けたのだった。

さすがに閃華は水の精霊とはいえ、突発的な昇の行動に対して水を操っている時間は無かったようだ。それは半蔵も同じであり、昇が消化用の水を利用してくるとは思いも寄らなかった事であり。二人一緒になって、一気に噴出した水に押し出されてしまった。

しかも昇は消火用の水が作り出す圧力なら窓ガラスぐらい簡単に割れる事も充分に承知していた。それに半蔵と閃華だ、二人とも戦闘に関しては熟練者であり、経験も豊富である。だから、この程度の事で怪我はしない事と昇は判断したのだろう。だからこそ、噴出口から一気に吹き出た水を利用して二人を吹き飛ばすのと同時に窓を壊して外への脱出口を作ったのだ。

更に言うと、今の状態では全員がここに揃っている。つまり、今の時点で外に脱出すれば追跡は困難である。だからこそ、昇は強敵である半蔵と閃華を排除するのと同時に脱出口を確保してから水を止めると、未だに消火剤で動きが取れないシエラ達を横目に校舎の外に脱出する。それから、昇は一気に学校から脱出するのだった。

昇が学校を脱出するために必死で走っている頃。すっかり復活している閃華は、同じく隣に立っている半蔵の服から水の属性を使って、被った水を全て払い除けてやるのだった。そして珍しく、半蔵から口を開いてきた。

「これで良かったのだな、閃華殿」

そんな半蔵の言葉を皮切りに二人は昇を追う事無く、呑気に話を始める。

「まあ、こんなもんじゃろうな。半蔵、おぬしに本気を出されると、さすがの昇も逃げ切れんじゃろうからのう。今はワザと逃がしてやらないと、ミリアの苦労が泡となって消えるからのう。じゃらから、

これで充分じゃよ」
「ならば我から言う事は無い。ただ……閃華殿も本気を出せば、あの程度の水はどうにか出来たのでは？」
「くっくっくっ、確かに水の流れを変えて防ぐ事は出来たのは確かじゃ。じゃが、それをやってしまうと昇も次は本当に諦めるしかないからのう。ワザと喰らったわけじゃよ」
そんな会話を呑気にしている閃華と半蔵。ちなみに後ろの廊下では未だに消火剤が舞い上がっており、悲鳴やら怒声やらが聞こえてい来るが、そんな事を無視して二人は会話を続けた。というよりも今度は閃華から半蔵に質問してきたのだ。
「それにしても、半蔵。その閃華殿という昔の言葉使いはどうにかならんのか？　今の時代じゃと明らかに時代錯誤じゃぞ」
「誰に対しても、そんな呼び方をしている訳ではない。ただ、閃華殿とは面識があったからこそ、その呼び方が定着したに過ぎない」
「まったく、私と半蔵が面識を得た後に私は嫌な思い出があるんじゃぞ。そんな呼び方をされると、それを思い出してしまいそうなんじゃよ」
「……そうとは思えない」
「何でじゃ？」
「今の閃華殿は顔に陰りが無い。我が呼びかけても普通に答えている。とても昔の事を思い出しそうな雰囲気を出してない。なればこそ、我は昔と同様の呼び方をしている」
「くっくっくっ、さすがじゃな。そこまで見抜かれておったのはのう」
「……話したいのなら聞くが」
「別に聞いてもらわなくても大丈夫じゃよ。昇が……そう、あの時に昇が言ってくれた言葉だけで……私は後悔せずに済む、今も前に進める。それだけの事じゃよ」
「……そうか」
それから二人とも後ろから聞こえてくる混乱の声や悲鳴を無視し

ながら沈黙を守るが、今日の半蔵は珍しく口数が多いと言えるだろう。再び閃華との会話を再会させるのだった。

「それにしても……閃華殿の中からあの出来事を消すとは、閃華殿の主もなかなかの者」

そんな言葉を口にした半蔵に対して閃華は目を丸くすると軽く笑ってから答えてきた。

「くっくっくっ、な～に、まだ消えてはおらんよ。じゃが……どう考えたら良いかを教えたもらっただけじゃ。じゃから私の中には未だに……あの問題はあるんじゃよ。昇は……その問題を抱えながらも進めるようにしてくれただけじゃ。そう……たった……たった、それだけの事じゃよ」

「……優しい主だな」

「そうじゃな。じゃが昇は主では無い、私の主は琴未じゃ。じゃからこそ、琴未の恋を成就させようと策を労している訳じゃよ」

「……」

突如として黙り込んだ半蔵に対して、閃華もまるで半蔵が何を言いたいのかが分っているかのように半蔵が口を開く前に答えを言って来た。

「こればっかりは縁じゃからのう、今更になってどうこう言ってもしかたないじゃろ。それに……私は表舞台に立つよりも、裏方で策を労していた方が性に合っておる。じゃから私は今の境遇に満足しておるし、楽しくやっておる訳じゃよ」

「……閃華殿らしい」

そんな半蔵の言葉を聞いて閃華は軽く笑うのだった。そんな閃華の笑いが止まる頃には、すっかり消火剤で真っ白になった琴未が外に居る閃華に向かって文句に近い事を言って来たので、閃華は苦笑しながらも水を操り、全員の身体に付着している消火剤を水に含ませると、外に捨てたのであった。

そのおかげで、すっかりいつも通りに戻った琴未達。琴未なんかはよっぽど混乱して叫びつかれたのだろう。だから今ではすっかり

廊下に座り込んでいる。フレトも、またしても昇にやられたという敗北感を感じたのだろう、すっかり不機嫌な顔になっていた。
　そんな面々を見て苦笑する閃華。そんな閃華とは正反対に半蔵はフレトの元へ戻っており、フレトの命令を待つかのように控えているのだった。

「あ～っ！　もうっ！　今日は酷い目に遭ったわよっ！」
「……全部琴未が考えた作戦の所為」
「なに責任転換しているのよシエラ、シエラだってやる気を出してたじゃないっ！」
　昇に逃げられた琴未達はいつものように与凪達が居る生徒指導室に戻って休憩に入っていた。さすがに昇に逃げられたからには、今からでは打つ手が無い。だからこそ、琴未は誰にかに向かって文句を言ったわけではなく。ただ独り言ように文句を言ったのだが、そこにいつものようにシエラが絡んで来たわけである。
　おかげで二人とも一触即発の勢いを見せるが、与凪が昨日の出来事で、昇が破壊した精界が完全に修復が終わっていない事を告げて、閃華が仲裁に入ったからこそ、二人はそれ以上は何もいう事無く、咲耶が出してくれたお茶を口にするのだった。
　そんな時だった。琴未がある事に気が付いたのだろう、その事をフレトに尋ねてきた。
「そういえばフレト、半蔵さんとレットさんはどうしたの？」
　琴未が言ったとおりに、今の生徒指導室には二人の姿は無かった。つい先程までは一緒だった覚えがあるだけに琴未は、そのような事を尋ねたのだが、フレトは当然のように答えてきた。
「元々は滝下昇を追い詰めるために二人を使ったのだろう。なら、滝下昇に逃げられたからには用が無いはずだ。だから帰した、それだけだ」
「別にそこまで警戒しなくても、誰もセリスちゃんに手を出すよう

な奴は居ないって」
　琴未が茶化すような言葉を口にしたからか、フレトは軽く琴未を睨みつけて来た。確かに琴未の言うとおりだろう。足が不自由なセリスが一人で外出は出来るが、ここは二人の祖国ではなく日本である。セリスも一人だけで外出するのは控えていた、あまりフレトに心配させても、シスコン……もとい、心配性のフレトが口うるさくなるのは分かりきった事だ。
　それにフレトとしても、なるべく護衛ではないが、セリスの相手を出来る相手、それがレットや半蔵でも傍に居るだけで安心できる相手を傍に置いておきたかったのだろう。だからこそ、用事を済ませたと考えたフレトは二人をとっとと屋敷に帰した訳である。
　まあ、一番の理由としてはセリスを一人で屋敷に置いておくのが心配だったからというのがあるだろう。琴未はそんなフレトの本心を見抜いたように意地悪な目線でフレトを見詰めると、フレトはばつが悪いような態度で紅茶を一気に飲み干して、咲耶に再び紅茶を入れさせるのだった。
　そんな時だ、突如して元気な声が上がる。
「終わったよ～っ！」
　そんな叫び声を上げてから、生徒指導室に設置してあるソファーに倒れ込むミリア。一方では今までミリアが作業していた場所ではラクトリーが完璧に出来上がっているかをチェックしている。
　ミリアの作業が終わったという事は、これで昇を追跡できる装置が出来上がったという事だろう。だからこそ、視線は自然とミリアに集まり、琴未とシエラはミリアに詰め寄るのだった。
「良くやったじゃないミリア、ご褒美に後で何か買って上げるわよ」
「ミリアにしては感心するほどの働きをしたから、後でご褒美を上げる」
「わ～いっ！」
　これで昇を追跡できるのだからシエラも琴未も上機嫌だ。だからこそ、ミリアを甘やかすような事を言って来て、ミリアも素直に喜

ぶのだった。そして装置が出来上がったからには琴未の性格から言っても、すぐに実行に移るのは確実と言えるだろう。
「じゃあ、さっそく、それを使って昇を追跡しましょう。ミリア、早速貸してちょうだい」
「うん、これが追跡くん３８７号だよ～」
「３８７って、いったいどれだけ失敗作を作ったのよっ！」
ミリアの言葉に思わず突っ込みを入れてしまった琴未。まあ、命名はともかく、ミリアが失敗に失敗を重ね、その度にラクトリーから厳しい指摘を受けながら、ようやく完成させた装置だ。琴未としては一刻も早く使いたい気分なのだが、そんな琴未にラクトリーから水を差すような言葉が伝えられる。
「意気揚々としているお二人には悪いのですけど。ミリアが作ったこれですが完成した事には間違いが無いのですが……」
ラクトリーにしては最後に言葉を濁してはっきりとは口にしなかった。ラクトリーの言葉を聞いても完成したのは確かな事だろう。だが、何かしらの問題があるのだろう。ラクトリーとしてもミリアは弟子であり、自分の後継者として育てようとした愛弟子である。だから、あまり非難されている姿は見たくないのだろう。
だが、事実を伝えない限りは話が進まないとラクトリーは溜息を付いてから二人に向かって装置について簡単に説明する。
「ミリアが作ったこれですが……確かに間違いなく相手を追跡できます。ですが……そのためには相手の力を登録しないといけないんですよね」
そんな事を言って苦笑するラクトリー。そんなラクトリーの言葉を聞いて琴未には意味が分からなかったのだろう、琴未は首を傾げるがシエラはしっかりとその言葉の意味を理解してミリアに向かって呟くように言葉を口にする。
「やっぱり使えない子」
「お師匠様～、シエラが意地悪だ～っ！」
そんな事を言ってラクトリーに泣き付くミリア。そんなミリアを

ラクトリーは慰めるように頭を撫でてやるのだった。その一方で話についていけない琴未が誰かに説明を求めようと辺りを見回す。どうやら今のラクトリーではミリアの世話だけで説明が出来る状況では無いと判断したようだ。

そんな琴未の視線を受けて、与凪が溜息を付いて説明を開始した。

「ミリアさんが作った追跡装置だけど……相手の力、まあ、気とか精霊力とか言われてる力を登録した相手しか追跡が出来ないのよ」

「それって、つまり」

「そう、これに滝下君のデータを入れないと追跡が出来ないの。だから今の状態だと、ただのガラクタとまでは言わないけど、意味が無い事は確かね」

与凪にそこまで言われてやっと琴未にも理解が出来たようだ。つまりミリアが作り出した装置を使用するには、追跡する相手のデータを入れないと追跡が出来ないのだ。

そもそも人間も精霊もほんの少しではあるが、無意識の内に自分が持っている力を放出しているのである。それは体内で力を生み出しているからである。生み出された力は体内に蓄積されて戦闘で使われる事になる。だが、戦闘が無い日常では生み出された力は蓄積されるばかりで消費されないのである。だからこそ、契約者も精霊も無意識の内に自然と、自分に適した量が使えるように力を放出して調整しているのである。

簡単に説明すると風船が分かり易いだろう。風船に空気を少しずつでも送り込めば膨らみ続ける。そう、限界まで。そして限界が来ると風船は破裂してしまう。契約者も精霊も同じなのだ。生み出した力をいつまでも蓄積していると、いつかは限界を迎えて身体に支障を来たし、最後には力によって破裂してしまう。だから自然と力を放出させて自らの身体に溜まっている力の総量を調整しているのだ。

それは呼吸と同じであり、自然と行う生命維持と同じとも言えるだろう。

そこで話を元に戻すと、ミリアが作り出した装置は、そうして昇が放出した力のデータを入力して、始めて昇を追跡できるのだ。つまり……昇のデータが入っていない今の状態では役立たずという事である。

その事を理解した琴未がシエラと同じように独り言を呟く。

「この上なく役に立たないわね」

そんな琴未の言葉がミリアの胸に刺さりミリアは更にラクトリーに泣き付く。

「お師匠様～、私、頑張りましたよね？　一生懸命やりましたよね？　しっかりと装置を完成させましたよね？」

そんな事を言って来たミリアにラクトリーは頭を優しく撫でながら、慰めの言葉を掛けてからシエラと琴未に向かって話し掛けてきた。

「お二人が焦る気持ちも分かりますけど、ミリアも一生懸命に頑張ったのですから、そう苛めないでください」

「別に苛めてるつもりじゃ」

「……言い過ぎた」

ラクトリーに言われて二人とも少しは反省するしかないと思ったのだろう。確かにミリアが居なければ、ミリアが装置を完成させなければ、いつまでも昇と意味の無い鬼ごっこを続けないといけないのである。だが、これがあれば明日には確実に昇を追跡できて、ここのところ、毎日会っている女が判明するのである。だからこそ、二人ともミリアに対して謝罪の言葉を述べたのである。まあ、それが謝罪になっているかどうかは別として、二人とも言い過ぎた事は反省したようだ。

だからこそラクトリーは、それ以上の事は言わなかった。そこで少しだけ重い空気がまんえんするが、それを払拭するかのように閃華から口を開いてきた。

「さて、これでこっちの準備は整った訳じゃな。それで琴未よ、明日はどうするつもりじゃ？」

確かにこれで明日には昇を追跡する事が出来る。だからこそ、明日も昇にはしっかりと逃げてもらわないと困るという訳だ。それを考えると琴未としては、今日と同じように昇をワザと追い詰める事を提案してきたが、ここでフレトが奇策を弄してきた。

そんなフレトがこんな事を言い始める。

「最近のところ、こちらが滝下昇を追い詰めてるだろう。なら、明日は逆の事をしてみたはどうだ？」

「逆って、どういう意味よ」

「それはな……」

フレトは自ら考えた作戦を琴未達に言い聞かせる。そしてフレトの作戦を聞いた琴未達も納得の顔を浮かべていた。

「……なるほど、それは効果がありそうね」

「逆に昇の警戒心を強めるけど、それだけ昇を疲労させる事が出来る。そうすれば、最終的には警戒が薄くなるのは当然とも言える」

「そうじゃな、ならば明日はその手で行ってみるかのう？」

閃華がそう尋ねるとシエラ達が一斉に頷いた。そんなシエラ達を横目にラクトリーはいつの間にかシエラ達の和に入ったミリアを見送った後に、フレトに耳打ちをする。

「マスターもなかなか考えましたね。それなら明日は巻き込まれる事は無いですからね。後はシエラさん達、次第という事になりますから」

そんなラクトリーの言葉にフレトも小声でラクトリーに言葉を返す。

「当然だ、そう毎日毎日付き合わされては、こっちが疲れるだけだからな。そして明日はなるべく早く帰ってやりたい。翌日は休日だからな、しっかりとセリスをかまってやらないとな」

「かまって欲しいのはマスターの方では」

「何か言ったか？」

「いいえ、別に」

ワザとらしく白を切るラクトリーに向かってフレトは睨み付けた

後に、誤魔化すかのように鼻を鳴らすと、残っていた紅茶を空にして咲耶に再び紅茶を注がせるのだった。

「何か、今日も大変そうでしたね」
「そういう春澄ちゃんは、今日も楽しそうだね」
「ええ、ここに来るたびに疲労している昇さんを感じるのも、今では楽しみになってます」
そんな意地の悪い事を言うと春澄は楽しそうに笑ってみせる。そんな春澄の笑顔を見ると昇には春澄に対して許してあげたいという気持ちが沸きあがってくるのを感じていた。何故かは昇には分かりはしない。ただ……春澄の笑顔を見ていると、どんな事でも許せそうな、そんな事を昇は感じるようになっていた。
そんな昇が意外な事を言い出してきた。
「そういえば春澄ちゃん、明日は暇？」
意外な事に春澄の予定を聞いてきた昇。そんな昇に対して春澄は意地悪な笑みを浮かべると楽しそうな口調で言うのだった。
「デートのお誘いですか？　う～ん、昇さんから誘ってくれるとは思いませんでした」
「いやいやいや、そんなんじゃないからっ！」
思いっきり赤面しながら慌てて否定する昇。春澄はそんな昇を楽しそうに笑うと、昇はまたからかられたと肩を落とすが、すぐに話を元に戻すために、大げさに咳払いすると話を続けてきた。
「そろそろ皆に春澄ちゃんの事を紹介しようと思ってね。明日なら休みだし、皆ともゆっくりと話が出来るから」
「逃げるのに疲れて白旗を上げるんですね」
「うっ！」
春澄の言葉が昇の胸に突き刺さる。けれども、昇としても春澄の事はいつまでも隠して置けるものじゃないから、いつかはシエラ達にも話そうとしていた事は確かだ。それには、しっかりと春澄の事

を理解して、春澄と親睦を深めてから紹介する形が一番誤解を招かないと思っていたからこそ、今までは逃げ続けていたのだ。

まあ、今の状態をシエラ達から見れば、今の二人はデートをしているようにしか見えないのも確かだからこそ、いつかは正式な形で紹介しようとしていたのだ。だからこそ、昇は春澄の予定を聞いてきたのだが、春澄からは昇が予想していなかった言葉が返って来た。

「う～ん、残念ですけど、その日は会えないんですよね。というか、会うだけの時間が取れないのかな？　どっちにしても、その日は会えません」

「そっか、じゃあ、明後日は？」

どうやら昇としては、なるべく早くシエラ達に春澄の事を紹介しておきたかったのだろう。さすがに、ここ数日に渡って繰り広げられた鬼ごっこに終止符を打ちたいようだ。だからこそ、昇は更に春澄の予定を聞いてきたのだ。

ちなみに、明日は土曜日で休み、明後日も日曜日だから当然休みなのだ。だからこそ、昇が更に春澄の予定を聞いて来ても不思議ではなかった。そしてまたしても、春澄から昇が予想していなかった言葉が返って来た。

「う～ん、そうですね～。じゃあ……十時頃なら良いですよ」

「日曜日だから、その時間帯だと、ここも混みそうだけど、それなら春澄ちゃんの行きたい場所にも行けるから良いんじゃない」

「違いますよ。午前十時ではなくて、午後十時ですよ」

「……へっ？」

思い掛けない言葉にすっとんきょうな声を上げる昇。そんな昇に対して春澄は微笑を向けてくるばかりだ。そんな中で昇は自然と春澄が午後十時、かなり遅い時間帯を指定してきた理由を考えていた。

えっと、何で、そんな遅い時間になるんだろう。夜の十時だと、ここはまったく人気が無くなって、話し易いといえば話し易いけど……そんな遅い時間帯を指定する必要があるのかな？　どうやら昇は春澄の意図が見えなくて、すっかり困り果ててるようだ。

一方の春澄は昇が黙り込んだものだから、すっかり混乱しているのだと思ったのだろう。だからこそ、こんな言葉を付け加えてきた。
「わざわざ夜を選んだのは私の事を考えてじゃないです。昇さんの事を考えたからこそ、わざと夜の時間帯を指定したんですよ」
「えっと……なんで僕の為に？」
「それは、その時になれば分かります」
そう言い切って微笑む春澄。そんな春澄の微笑を見て、昇はこれ以上は追及しても無駄だと感じ取った。ここ数日、春澄と会話をしていて昇にも気付いた点があるようだ。それは春澄だけが知っていて、昇が知らない何か。それが何かは昇には分かりはしない。けれども、もし、春澄が何かを考えて、そんな事を言っているのだとしたら、春澄の真意を知らなくてはいけないと思ったのだろう。昇は思い切って春澄に尋ねる事にした。
「ねえ、春澄ちゃん」
「なんですか？」
「もし……僕に話しておいた方が良いと思った話があるのなら、全部話して欲しい。なんで僕がこんな事を言いだしのか、春澄ちゃんは聞かなくても分かるよね」
そんな昇の言葉を聞いて春澄の顔から微笑が消えた。それから春澄は視線を昇から逸らすように顔を真正面に向けると口を開いてきた。
「少し長くて、凄く重い話になりますよ？」
「それでも春澄ちゃんは僕に聞いて欲しいんでしょ」
「……」
春澄にしては珍しく、すぐに返答せずに真正面を瞑った瞳で見詰めるように、少しの間だけ沈黙を作り出した。その間は昇も何も言わなかった。今は春澄が話してくれる事を真剣に聞いた方が良いと判断したからだろう。だからこそ、昇は何も言わずに春澄を見詰めた。
そんな昇の視線に気付いたのだろう。春澄は再び昇の方へ顔を向

けると、悲しげな微笑を浮かべながら口を開いてきた。
「本当に、昇さんは優しいんですね……ずるいぐらいに」
そんな春澄の言葉に昇は少し軽い口調で返答した。
「どうだろうね、自分では良く分からないけど、春澄ちゃんがそういうなら、そうかもしれないね」
「本当に……ずるいです」
春澄はそれだけの言葉を口にすると再び昇から顔を逸らして真正面に顔を向けた。そんな春澄が今までとは、全く違う。まるで別人のような重い口調で語り始めた。
「なんで私だけ？　って最初は思いました。でも……皆同じ事を思ってるかもしれないと、最近では思ってます。皆……なんで自分だけがって……」

第百三十一話　学生の人は絶対に真似をしないでください（後書き）

はい、そんな訳で、百年河清終末編に入ってから、ようやく進展がありそうな展開を見せてきましたね～。ついにミリアの装置も完成したし、昇も春澄の真意を見抜こうとしております。

まあ、そんな訳で、いよいよ進展する……には、まだ一話ほどありますが、進展の兆しを見せてきた今回でしたね～。

いやはや、それにしても……私のブログを読んでいる方には申し訳ないんですけど、本当なら先日に上げる予定だったんですけどね。何と申しましょうか……死んでました。そんな訳で更新する時期が延びてしまいました事を、ここでお詫び申し上げます。

というか、やっぱりこの時期は辛い物がありますね～。花粉だけならまだしも……そこにストレスが加わって、生殺し状態になってました。ううっ、花粉だけなら、まだなんとかなったけど、ストレスとの合併症になると……辛すぎる。

まあ、そんな訳で死んでました～。

さてさて、言い訳も終わった事ですし、未だにちょっと辛いので今回は短めにして締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、とりあえず、後でカラオケに行って四時間ぐらい一人で熱唱してストレスを発散させようとしている葵夢幻でした。

第百三十二話　悩める夜

最初はそんな風に思ってました。普通の人は、ううん、この世で多くの人は目が見える事が普通なのに。それなのに、なんで私だけが目が見えないのかって。私以外の大勢対数に値する人は普通に目が見えているのに……私だけが目が見えないなんて……なんか……ずるいって思いました。

だって、そうじゃないですか。私以外にも目が見えない人は居ます。でも……私の周りには……私の世界には普通に目が見えている人ばかりでした。だから羨ましかったし、悔しいとも思いました。その人達は目が見える事が普通だからこそ、私の介護が出来る。私に優しく出来る、私に適切な接し方をしてくれる。でも……誰も私の本心までは分からなかった。

……恨んでたんです。私を捨てた両親なんてどうでもよかった、ただ……私の面倒を見てくれていた施設の人達が、普通に目が見えている人が普通に物を見ているのを恨んだんです。最初は悔しくて悔しくて、そして羨ましくってしかたなかった。そんな私の感情はいつの間にか悔しさや憧れを超えて憎しみに変わっていったんです。どうにもなら無い……世界に向けて。

目が見えない私が目が見える人を恨んでも仕方ない事は分ってました。だから……私は世界を恨みました。私に暗闇しか与えてくれなかった世界を……いつの間にか恨んでました。だから何度も思ったんですよ。こんな世界……壊れてしまえば良いって。

でも……どんなに世界を恨んでも世界は変わらない。目の見えない私には何の力も無い。自分の無力さに歯痒さを感じてました。確かに私の周りに居た人は私に優しくしてくれたかもしれない。でも……私が欲しかったのは人の優しさじゃない。自分の目で世界を見る事だったから、だから……世界を恨むしかなかったんです。

しょうがないじゃないですか、だって……他に、この感情をぶつ

ける場所が無かったんですから。だから私は世界を恨み続けました。それでも……何も変わらない日々、無為に過ごす日々、そんな日々が、またしても私の心を変化させました。

幼かった頃は世界を恨む事で目が見えない事実を紛らわせる事が出来ました。でも……成長するにつれて受け入れ始めたんです。目が見えない世界を……だから……少しずつ、自然に私の中から消えていきました。世界を恨むという感情が。

それからは無為の日々が続きました。ある時に何となく悟ったんですよね。私には何の力も無い、ただ、こうやって周りの人達に支えられながら一生を終えていくんだって。

それは終わりと同じでした。だって、これから向かう目標も無い、進むべき道も無い。文字通りに希望も夢も無かったんですよ。そんな日々を送りながら分からなくなってきました。自分が生きているのか、死んでいるのか。

だから変な事まで考えました。これは誰かの夢であり、私はその夢に出てくる登場人物の一人に過ぎないとか、ここは違う世界で本当の自分は別の場所で、この世界を見ているとか。どれもこれも途方も無い、現実から逃げるための手段に過ぎませんでした。ただ……そう思った方が楽だったから。そう思わないと……本当に自分が生きているのかが分からなかったから。

だから今の私にはしっかりと分かるんです。あの時の私は確かに生きてた。でも……同時に死んでたんです。夢も希望も目標も無い、ただ無為に過ごしていく日々。そこに、どれだけの意味があるんでしょうね。たぶん、意味なんて無いです。ただ生きてる、その事実がそこにあるだけで他には何も意味が無い。本当に……意味が無い人生とは、そういう事なんだと思いました。

そんな時でした。私達は出会ったんです、そう、アルビータと。そしてアルビータも言いました。自分も生きている意味が分からないと。アルビータも私と一緒だったんです。夢も希望も目標も無い人生。そんな人生をアルビータも送っていたんです。

そして、アルビータが言ったんです「私はあなたに夢や希望を、ましてや生きる意味を与える事は出来ない。けど……望む終わりを与える事は出来る。あなたの望む終わりを、私達は手を携える事で迎える事が出来る。その終わりこそ、私も望んでいる終わりなのだから」そんなアルビータの言葉を聞いて決意しました。

夢も希望も、そして生きる意味すら持ってない私だけど、ううん、私だから。意味のある終わりを迎える事が出来る。私は……意味の無い人生よりも意味のある終わりを選んだんです。だから私はアルビータと一緒に旅に出る事にしました。意味のある終わり、私が望む終焉を探すために。

ふふっ、まるで、間違ってるって言いたそうな顔ですね。でも……これだけは誰に何と言われようとも、昇さんに何を言われても止めるつもりはありません。例えるのなら、これは禁断の果実かもしれませんね。それを口にすれば全てが終わる、でも、その甘味な味は無為な日々よりかはずっと良い。私はそう考えてます。

私の行動も考えも、世間一般から見れば間違ってるかもしれません。でも……私は正しいと思ってます。それは私の世界が、それを正しいと認識したから。だから私は自分が間違っているとは思いません。

今まで暗闇と微かな人の温もりしかなかった世界。その世界がアルビータとの出会いで大いに広がった。その先に待つ物が終焉でっても、私は喜んで終焉に向かって歩いていける。そう、アルビータと出会った事で私の世界は一変したんです。

だから今の私は昔みたいに無為に日々を過ごしてはいない。確かに今の私にも夢や希望はありませんけど……目標は出来ました。私が望む終焉に向かうという目標が。その為に旅に出て、終焉に向かって歩き続けてきました。確かに困難な事も多かったですけど、後悔はしてないです、確かに終わりは終焉かもしれないけど……その途中で得る物が多かったからです。

それに……少し考えてみれば、私の考えも間違ってないと思いま

すよ。皆、終焉に向かって歩き続けているんです。その途中に夢や希望があるだけ、あるいは困難や挫折もあるかもしれません。でも……人は終焉に向かって歩き続ける。そうは思いませんか？

ふふふっ、分からないって顔をしてますね。でも、考えてみれば、これは自然の摂理じゃないんですか。人はいつかは死ぬ、つまりは終焉を迎える。つまり人が最後のゴールは終焉、死だと私は思ってます。

だから人は死に向かって、終焉に向かって歩き続ける。夢や希望なんて、その途中にある幸福や不幸に過ぎません。最後に待っているのは……死という名のゴール、終焉です。だから私が終焉を目指して歩いていくのは当然と言えるんじゃないですか？　だって……生きているからには終焉が絶対に訪れるのだから。

春澄が自分の考えを語り終えると疲れたかのように大きく息を吐いて、それから、いつものように昇が買ってきてくれていたジュースを口にして一息付いていた。そんな春澄とは正反対に昇はどう反応して良いのか迷っていた。

確かに春澄が言っている事には説得力がある。それは人の最後は死、終焉という事実は絶対だからだ。だから昇は春澄に対して反論も肯定する言葉も口にする事は出来なかった。

春澄の言っている事が絶対的な事実だとしても、昇としては、いや、人としては受け入れたくは無い。そんな感情が昇の中には生まれていたからだ。だから昇は春澄に対して、どんな反応を反せば良いのか迷って戸惑うばかりだ。

そんな昇を気配を感じ取ったのだろう。春澄はジュース缶を口から離すと昇に向けて言葉を放ってくる。

「確かに私は終焉に向かって歩き続けてます。でも……今を楽しむ事を忘れてませんよ」

そんな言葉を掛けてきた春澄の方へと顔を向ける昇。そこには、

いつもの春澄が浮かべている笑顔があった。だからこそ昇は余計に分からなくなってしまった。春澄は間違いなく、終焉、つまり死ぬ事を前提に歩き続けている。それが何なのかは昇には分からないが、昇には終焉が近づいていると知りながらも、そんな笑みを浮かべられる春澄が分からなかったのだ。

そんな春澄が言葉を付け加えてきた。

「前にも同じような事を話しましたよね。その時は、今のように深くまで話さなかったけど……昇さんは少ない私の言葉から私の事を理解しようとしてくれた。それが嬉しかったのは事実です。でも……私は自分の考えを変える気はありません。答えは簡単です、私には……それしかなかったからです。だから私は後悔もしないし、別の道も探さない。ただ終焉に向かって歩いて行く。そう決めてますし、それがアルビータとの約束でもありますから」

そんな春澄の言葉を聞いて昇はやっと理解した。何で春澄の事が気になったのか、なんで春澄を気に掛けるようになったのか。それは昇と一緒だったからだ。昇は自然と感じ取ったのだろう。春澄から感じる硬い決意と信じた道を進む決意の雰囲気を。それは昇も同じだ、昇は自分が望んだ未来を作るためなら硬い決意で争奪戦で戦う事をいとわない、自分が信じた道を突き進む事にちゅうちょはしない。そんな二人の共通点を昇は自然と感じ取ったからこそ、春澄の事を気に掛けたのだろう。

だが、それは昇にとっては初めての経験だった。考えも価値観も違う、けど同じように固い決意と信じた道を突き進んでいる。考えや価値観に対して明らかに違うと言えれば物であれば、昇は春澄の言葉を否定できただろう。だが、春澄の考えは昇ですらも否定する事が出来ないほどの真実であり。春澄は昇と同様に自分の考えを硬く信じ、己の道を突き進もうとしている。そんな春澄をどうやって止めれば良いのか、もしくは止めなくても良いのか。昇は困惑するばかりだ。

そんな昇が必死になって春澄の言葉を否定しようとするが、否定

できなかった。確かに春澄が言ったとおりに人は終焉に向かって歩き続けている。それは自然の摂理であり、そこに向かっている春澄は当然とも言えるだろう。けれども、何かが間違っている。昇は、そう感じたからこそ、春澄の言葉を否定したかったが、やはり何の言葉も出す事が出来ずに黙り込むだけだった。

そんな時だった、突如として昇はほっぺたに手の感触を感じると、そのまま引っ張られて、すぐに離された。

突然の事で驚きながらも手の感触を感じた方、つまり春澄の方へ向かって困惑した表情を浮かべながら、軽く引っ張られた自分の頬撫でる。一方の春澄は先程以上に笑い声を上げていた。その事が昇を困惑させるだけだったが、春澄は一息付くと昇に向かって、はっきりと宣言した。

「さっきも言ったように、私は今を楽しむ事を忘れてないよ。だから、昇さんにも今を楽しんで欲しいな。悩んだり考え込んだりするのは後でも出来るでしょ。でも、二人で一緒に居る時間は限られてるんだから、二人で一緒に居る時だけは今を楽しもうよ」

「……そうだね」

春澄の言葉にすんなりと肯定する昇。今度も昇は春澄が言ったとおりだと感じたからだ。確かに春澄の言った言葉に対しては後で悩む事も考える事も出来る。けど、春澄と楽しい時間を過ごすのには、春澄と一緒に居られる時しかない。だからこそ昇は一旦、春澄の言葉を忘れる事にした。そう、春澄との今を楽しむために。

「なんだか……今日は春澄ちゃんに教えられてばっかりだな～」

「これでも人生経験は豊富なんだよ」

「なんか、そう言われると僕よりも年上に感じるな」

「う～、それは女の子に対して失礼だよ～」

怒ったように頬を膨らます春澄に対して昇は「ごめんごめん」と言いながら優しく頭を撫でてやるのだった。そう、昇も思考を切り替えてきたのだ。今は春澄の覚悟や考えについて思い悩む時じゃない。今は……春澄との時間を楽しむべきだと。

滝下家、午後十時。昇の帰りが遅くなってからというもの、各自翌日に備えて、この時間帯にはそれぞれの部屋に戻って、様々な画策をしているのだった。だからリビングは真っ暗だが、庭に通じる窓は開かれていた。時折、夏の終わりを告げる風がレースのカーテンを揺らすが、そんな風さえも気にする事無く、昇は足を庭に出しながら考え事をしていた。

人は終焉に向かって歩き続ける……か。う～ん、確かにそうかもしれないけど……なんだろう、この違和感は？　確かに春澄ちゃんが言ったとおりに人は最後には死ぬ。それは自然の摂理であり、誰もが死に向かっている事は確かだ。でも……それだけで片付けて良い事なのかな？　春澄ちゃんが間違っているとは思えない。ううん、逆に正しいとも思える。でも……なんだろう。僕は……春澄ちゃんを止めたいと思っているのかな？　それとも……その逆？　……なんか……ますます分からなくなってきたな～。

すっかり迷走してしまっている昇。そんな昇頭に対して急に冷たい物が乗っけられると、昇は驚いたように頭を激しく手で払うと、後ろを振り向いた。そこにはビール缶を手にした昇の母である彩香が立っていた。

「どうやら、かなり迷っているようだね、我が息子君」

「なんだ、母さんか、驚かせないでよ」

「おっ、驚くって事は、かなり迷ってる事みたいだね～」

うっ、こういう時だけ鋭いな～。昇がそんな事を感じていると彩香は昇の隣に座って、ビールを軽く飲むと、意地悪な顔で昇に向かって話しかけてきた。

「まあ、確かに今の状態じゃ、シエラちゃん達に相談する事も出来ないわよね～。まあ、これも自業自得、そこに更に問題を持ち込むとは、我が息子ならが呆れた女たらしね」

「って、僕が女の子の事で悩んでるって言った覚えは無いよ」

「じゃあシエラちゃん達に相談してみれば？」
「……」
「やっぱり女の子が絡んでるんでしょ。しかも厄介な問題を持ってる、だから一人で、こんな場所で悩んでた。そんなところかな～」
「人の行動を分析しないでくれる」
そんな突っ込みを入れる昇に対して彩香は大いに笑うだけだが、笑った後に微笑みながらも少しだけ真剣みを出した顔で話を続けてきた。
「しかたないわね。母さんが聞いてあげるから、とりあえず全部話しちゃいなさい」
うっ、そう来たか。でも……母さんに、そう言われると絶対に断れないんだよな～。どうやら昇は完全に彩香から、そういう風に教育されてきたらしい。だからこそ、昇は春澄の事を隠しながらも春澄の考えや、固い決意を持って、自分が信じている道を進んでいる事を全て話した。
彩香もそんな昇の話を微笑みながらも真剣に聞いてやった。もちろん、途中で何度もビールを口にしているが、そんなに酔ったところは見せなかった。むしろ母親として、いや、それ以上の優しさと真剣さで昇の話を聞いてやるのだった。
昇としても彩香がビールを飲んでいても、自分の話をしっかりと聞いてくれてる事は充分に分っている。伊達に親子はやっていないという事だろう。
そして全てを話し終わった昇が一息付くために冷蔵庫から缶ジュースを取に行って、元の位置に座ると彩香から話を切り出してきた。
「世界か……随分と面白い表現をする子ね」
「いや、そういう事じゃなくて」
「いいから黙って聞きなさい。昇にとって世界はどれぐらいの広さ？」
「へっ？」
いきなり質問をされて昇はすっとんきょうな声を上げるが、すぐ

に答えた。
「そりゃあ、今のところは地球全体じゃないかな？　宇宙開発も進んでるけど、未だに宇宙は遠い存在と言えるし。あっ、精霊精界も世界の一つかな？」
　そんな昇の答えを聞いて笑い出す彩香。昇はそんな彩香を思いっきり睨みつけるのだった。まあ、昇にしては真剣に答えただけに笑われたのが悔しいのだろう。そんな昇の視線に気付いたのだろう。彩香は笑うのを止めるとビールを一口飲んでから話を続けてきた。
「昇の世界は随分と広いのね。それじゃあ昇、この地球上で起こっている事を全部説明できる？　精霊世界も昇の世界なら精霊世界の事も説明できる？」
「そんなの無理に決まってるじゃないか。だって、僕だって世界の全てを知ってるわけじゃないし、精霊世界に精通しているわけじゃない」
「じゃあ、昇の世界はどんなの？」
「……」
　彩香の質問に答えられずに沈黙で返す昇。まあ、それもしかたないだろう。なにしろ昇は質問の意味がしっかりと分かっていなかったのだから。いや、昇は世界が何を指しているのかも分っていないのだ。
　そんな昇から目を離して、夜空を見上げる彩香はこんな事を言いだした。
「確かに、世界は昇が言ったとおりに広大な台地と海がある。でも、人はそんな大きな世界を抱えられる大きくは無いのよ。精々、自分を中心とした世界しか分からないのよ。まあ、極端な例を上げると、ここことは反対側の国で戦争してても、私は知りませ～んって事かしらね」
「……つまり世界は自分を中心に構成されてるって事？」
「その答えは５０点、半分の答えよ。世界っていうのは、昇が言ったとおりに人類の全て関わっている世界と自分を中心にした世界の

二つがあるって事よ。そしてほとんどの人が自分を中心とした世界の中で生きてる。当然ね、一人の力なんてちっぽけな物で人類全てに関わる何かに干渉する砂粒みたいな物だからね。だから人は自分を中心とした世界で生きてるのよ」

彩香の言葉を整理してみる昇。これも昇が幼い頃よりの習慣だ。彩香はいつも遠回しな言い方をする。だからこそ、彩香の言葉は考えて理解しないと頭に入らないのだ。昇は幼い頃から、そんな彩香のやり方を知っているからこそ、今度も彩香の言葉が意味している事を自然と考えるのだった。

彩香が言うには世界は二つあるという事だ。

一つは人類全てが関わっている世界。一般的に世界と言われれば誰しもが想像しても良いと言うべき世界だろう。今のところは地球圏に留まっているが、宇宙開発が行われてるからには、そのうち宇宙も世界に組み込まれてもおかしくは無い。そこで、一つだけ気になるであろう精霊世界だが。こちらは隣接世界とはいえ、人間世界とはまったく切り離された世界だ。だから一つの世界という訳には行かないだろう。言うとすれば別世界、それが精霊世界と言えるだろう。

もう一つが自分を中心とした世界。正確には自分を中心に関わっている世界の事だ。そこで昇は自分を中心に考えてみる事にした。昇は父親は海外だが、母親とは同じ屋根の下で一緒に暮らしている。そこにシエラ達も加わり、滝下家は賑やかになった。更にフレト達という仲間や与凪との関係も入れれば、小さいが、そこには世界が生まれる。それが昇の世界であり、もう一つの世界である。つまり、広大な世界の中で自分と関わりがあるものだけで構成される小さな世界が生まれる。それがもう一つの世界なのだ。

昇はそんな風に理解すると彩香との会話を続ける。

「つまり自分を中心に関わっている人や空間だけで構成される世界。そっか、確かに世界は広大で全てに関与する事は出来ないけど、自分が関与しているだけの小さい物も世界なんだ」

「まあ、そんなところかしらね」
　正解とは言わないものの、昇の言葉を肯定した彩香は再び昇の方に顔を向けると、先程の同じく微笑みと少しの真剣さが入り混じった表情で会話を続けてきた。
「その世界は価値観とか、常識とか、いろいろな言われ方をするけど……世界である事には間違いはないのよ。そんな人の世界に干渉して、気が合えば友達になれるし、あるいは敵になるかもしれない。昇も、その子も、それぞれに世界を持ってる。だから間違っていると思っていても、何も考えずに間違ってるって言うのは間違ってるのよ」
「んっ？　間違っている事を間違ってるって指摘するのは良い事じゃないの？」
「人の話はしっかりと聞きなさい。私は何も考えずに間違ってると言うなと言ってるの。その子の行動が間違っているのだとしたら、何で間違ったのか、本当に間違っているのか、間違ってはいないけど考えを変えさせたいのか。そういう事を考えてから言えと言ってるのよ」
「そんな事は分ってるよ。だから今日は何も言わなかった。でも……何かが引っ掛かるから迷ってるんだよ」
「まあ、それは合格点ね」
　つまり昇が取った行動は正しいと彩香は判断したのだろう。昇も彩香がそういう時には自分は間違った行動は取っていないと確信が出来た。問題なのは、その次に当たる部分だろう。それについて彩香から話を切り出してきた。
「人は終焉に向かって歩いてる、それには私も同意見ね。人である限り、死という最後が待っているのは確かなんだから」
「……でも、それはなんだか違う気がする」
　彩香の言葉に否定的な言葉で返す昇。春澄と離している時にも、何かが違うと感じたが、あの時はやはり言うべきではなかったのだろう。あの時に言わなかったからこそ、昇はあの後で春澄と楽しい

時間を過ごす事が出来たし、今ではこうやって彩香に相談している。だからこそ、昇は思った事をそのまま口に出したのだ。

彩香としても、昇が思った事を口にした事で満足げに頷いてから話を続けるのだった。

「確かに昇の気持ちも分かるわよ。今の昇は自分の考えとその子の考えが違っている部分が分っていないだけ。昇はその子の言葉を聞いても否定できなかったでしょ。それは、その子の考えに同意したけど、賛同は出来なかったという事よ」

「……ごめん、母さん、それは意味が分からない」

「少しは国語の勉強をしなさい。確かに同意には賛同と同じ意味もあるわよ。けど、この場合はね、昇はその子の考えに同じような考えを持てたけど、その考えを認めて賛成した訳じゃない。って事よ。つまり昇とその子は考えは同じでも、賛成するか、否定するかで違ってるって訳よ。分かった」

「うん」

彩香の言葉に短く答える昇。まあ、これで自分が勉強不足なのを実感したのと同時にシエラ達に知られたら、どうなる事かと不安の種も出来たことだが、今は春澄の考えで賛成できなった事が大事だと、昇はそこに重点を置いて彩香に相談の言葉を放つ。

「母さんの言っている通りかもしれない。でも……僕はなんで、その子の考えに賛成できなかったのかが分からないんだ。確かに、その子の考え、その子の世界は正しいかもしれない。でも……賛成は出来ない。その理由が分からないんだ」

「やれやれ、どうやら最近は忙しすぎて変な癖が出来たみたいね」

「へっ、どういう事？」

「いい、昇。人は計算や考えだけで動く生き物じゃないのよ。時には感情を爆発させて動く場合もあるのよ。つまり、全ての考えに、理論的な理由があるわけじゃないのよ。もっと単純で、もっと簡単な理由で、その考えに達したのかもしれないじゃない」

……つまり、僕が否定したいのは頭で考える事じゃない、心で感

じる事……って事なのかな？　でも……それって何だろう？　彩香の言葉を聞いて、そんな事を考え出す昇。まあ、確かに彩香の言うとおりなのだからしかたないだろう。

人が小さな世界、つまり自分の世界を構成する時には理論的な考えだけではなく、感情的な部分が含まれていてもおかしくは無いのだ。けれども昇は争奪戦の戦いで戦略を活かしてきたから感情的な部分を思考に組み込む事を忘れていたようだ。

なにしろ争奪戦の戦略では相手の行動やら攻撃には計算や経験のといったパターンがある。昇はそれを計算に入れて戦略や作戦を立てる事が多い。というか、それしかやって来なかったのだ。だからこそ、今回のように感情的な部分を入れて、相手の事を考えるという事をすっかり忘れていたのだ。

しかも、争奪戦で戦略や作戦を計算で立てる癖が付いてしまったのだろう。だから彩香に言われても、すぐに答えが出せない昇だった。そんな昇に対して呆れたように溜息を付くと、昇の頬を軽く何度も突付きながら微笑を絶やさぬままに話を続けてきた。

「まったく、しょうがないわね。今回だけサービスして上げるわよ。昇、確かに人は終焉に向かって歩いているかもしれない。でもね、自然と歩くのと、自分の意思で歩いていくのは、まったく違う事なのよ。これだけ言えば、何が違うのかが分かるでしょ」

すっかり彩香の玩具にされた昇は、それでも彩香の言葉をしっかりと受け止めて答えを模索する。う～ん、つまり……そうかっ！僕達は確かに終焉に向かって歩いてる。でも、それは自然な成り行きなんだ。でも……春澄ちゃんは違う。自分の意思で終わりに向かってる。そう、まるで死ぬ事を覚悟したように。だから僕は春澄ちゃんを止めたいと思った。……けど……どうやって止めれば良いんだろう。

やっと胸の支えが取れた気分の昇だが、再び春澄の事で頭を悩ます事になり、いつまでも頬を突付いてくる彩香の指がうっとうしくなり、軽く弾くのだった。一方の彩香は指を弾かれた事により、昇

が何かしらの答えを出した事を察したのだろう。だから素直に引っ込もうとしたが、昇が未だに悩んでいる事を察すると昇に向かって話しかけるのだった。

「やれやれ、どうやら、かなり厄介な事を持ってきたようね。まだ話す事がある？」

そんな事を尋ねてきた彩香に昇は顔を向けると彩香は満足そうに一度だけ瞳を閉じて頷くのだった。

「ううん、たぶん……これは僕が自分で答えを出さないといけない事だと思うから。だから……必死になって足掻く事にするよ」

「そう、じゃあ、必死になって足掻きなさい。自分が望む未来の為にね」

それだけを言うと彩香は立ち上がって自分の部屋に向かおうとしたが、途中で昇が呼び止めてきたので、彩香は足を止めて振り返り昇の言葉を待った。そして昇はこんな言葉を口にするのだった。

「ねえ、母さん。どんなに足掻いても……自分が望んだ未来に出来なかったら……どうしたら良いんだろう？」

そんな質問をしてきた昇に彩香は瞳を閉じて優しげな表情になる。そして、そっと昇に向かって答えてやるのだった。

「誰だって自分が望んだ未来にしようと足掻いてる。でも……成功できる人の方が少ないのよ。だからこそ、失敗しても出来る限りの事をする。それが足掻くって事よ。一番大事なのは自分が望んだ未来を築く事じゃない。自分が望んだ未来の為に足掻く事よ」

「……そっか」

「そうよ、じゃあ、私は寝るわね」

それだけを言い残して彩香は自分の部屋へと戻っていった。半分呆れて、半分は悲しげな表情をしたまま。たぶん、彩香には分っていたのだろう。正確には勘に近いかもしれない。昇が……失敗ではないが、自分が望んだ未来を築けない事に。

時間が日付が変わるちょっと前になると、さすがに外の風も寒くなってきたのだろう。昇は自分の部屋に戻ろうとしたが、たぶん、ずっと待っていたのだろう。琴未が少し寒そうにしながら部屋の前で昇を待っていた。

「えっと……琴未？」

琴未の姿を見掛けた、というか明らかに昇を待っているように見えたものだから、昇もとりあえず琴未に声を掛けた。その琴未が昇の方に顔を向けてくる。その表情には怒ったり、不機嫌な表情はしていなかった。至って普通、昇にはそんな感じに思える琴未が返事を返してきた。

「とりあえず話があるから、部屋に入って良い？」

「うん、良いけど」

昼間とは打って変わって、平穏な雰囲気を出している琴未に昇は二つ返事で入室を許可した。まあ、昇に言わせれば部屋で待っててもらっても構わなかったのだけれど。琴未には、それなりに抵抗があったのだろう、だからシエラのように不法侵入なんて真似は出来なかった。だから昇が帰ってくるまで待っていたのだ。まさか、こんなにも待たされるとは琴未も思ってなかったろうが、それでも琴未としては、どうしても確かめたい事があったのだろう。だから昇を待っていたのだ。

そして二人は昇の部屋に入ると設置してあるテーブルを挟むように慣れた位置に座ると、琴未はしっかりと用意してあったのだろう。いつの間にかポットと湯飲みを取り出すとお茶を入れて昇と自分の前に置いて、琴未は少し冷めたお茶をゆっくりと口にする。

「えっと、琴未？」

琴未の訪問理由が分からない昇はとりあえず琴未に問い掛けてみる。そして問い掛けられた琴未は湯飲みをテーブルに戻すと、真剣な眼差しで昇に問い掛けてきた。

「ねえ、昇。いつまで……続けるつもりなの？」

いきなりそんな事を尋ねてきた琴未に昇は内心で焦りを感じてい

た。昇としては春澄を良く知らないうちに、シエラ達に会わせれば、在らぬ誤解を受ける事が確実なのは分っている。だからこそ、今までシエラ達から逃げては春澄と会っていたのだ。けれども、そろそろ限界が近いと悟ったからこそ、昇は春澄をシエラ達に紹介しようと今日は誘ったのだ。まあ……断られたけど。

けれども昇としてはしっかりとシエラ達にも春澄を紹介するつもりだったからこそ、あえて逃げてたし、誰にも何も言わなかった。下手なタイミングで何か言えばシエラ達が変な誤解をする事は間違い無いのだから。

だから昇としては琴未の質問に対して何て答えようと考えてると、琴未は大きく溜息を付いてから口を開いてきた。

「昇、私達は昇が女の子と密会している事も、その事を隠そうとしている事も知ってる」

「うっ」

しっかりと見抜かれていた事をはっきりと言われて言葉が昇の胸に突き刺さる。だが、琴未からは意外な言葉が次には出されてきた。

「それに昇には下心が無い事や、その子の事を放っておけない事も私は分ってる。だから、その点について昇を疑ってる訳じゃない」

「琴未……」

「けどさ……私達の事も考えてる。私は昇が好きだってはっきりと伝えたはずよ。その気持ちは今でも変わってない。だからさ……不安なのよ。昇が私の知らない女の子と会っている事が、その子とどんな話をしてるとか、気になるのよ……自分でも嫉妬深いって分ってる。でもさ……こういう気持ちって……私じゃなくても抑えられないのよ……どうしようないぐらい」

「……」

琴未から本音を聞かされて沈黙する昇。確かに琴未の気持ちも、シエラ達の気持ちも昇は分っているつもりだ。けれども、それ以上に春澄が気になるのも確かだ。だからこそ、昇はなんで春澄が気になるのかを確かめるために、シエラ達から逃げて春澄と会っていた

のだ。
　確かに昇の気持ちに春澄に対しての下心は無い。普通なら有っても良いものだが、この朴念仁は、そんな気持ちを一つも持っていなかった。だからこそ、今もこうして琴未と普通に話が出来ているのだろう。もちろん、琴未から本音を聞かされて戸惑っているのは確かだが、昇も琴未の気持ちに応えるために言葉を返す。
「僕はしっかりと琴未達の事も考えてるつもりだよ。でも……それ以上に気になるんだよ。それは好きって感情じゃない。なんていうかな～、えっと～」
「放っておけない、でしょ」
　昇が言葉に詰まっていると、まるで代弁するかのように琴未が言葉を放ってきて、昇もそれだとばかりに頷くのだった。それから昇は琴未達と春澄の事を思いながら話し始める。
「だから、その時が来れば琴未達にも紹介するつもりだったんだよ。でもさ、今のタイミングで紹介すると変な誤解を生みそうだったから。だから、紹介できるタイミングを見てから、紹介するつもりだったんだよ」
「……まったく」
　少し長い沈黙の後に溜息交じりの言葉を発する琴未。昇としては、まさかそんな反応をされるとは思っていなかったので、困惑するばかりだ。なにしろ昇としては真面目に話したつもりだったのだから、それを溜息交じりの一言で返されるとは昇としては拍子抜けを通り越して困惑するばかりだった。
　そんな昇を見て、琴未は湯飲みを手にしながら軽く笑ってから言葉を口にする。
「昔から、そういうところは変わってないわよね。変なところでおせっかいを焼いたり、一人でいたい時にはずっと隣で座ってるし、人の気持ちを分かってそうで分ってなかったりするところも変わってない」
「なんか……そういう言い方をされると僕が成長してないように聞

こえるんだけど」
「そうは言ってないわよ。ただ……昇が持ってる、そういう良いところは昔と同じって言いたいだけ」
「やっぱり、成長していないって聞こえるよ」
昇が不貞腐れたようにそんな事を言うと、琴未は軽く笑うと湯飲みを一気に空にして、空っぽになった湯飲みを片手で軽く揺らしながら話を続けてきた。
「昇が成長して無いとは言ってないわよ。ただ……昔から変わってない所があるって言ってるだけよ」
「そう言われると喜んで良いのか、怒って良いのか、まったく分からないんだけど」
昇の言葉を聞いて思わず笑ってしまう琴未。そんな琴未を見てて、いつの間にか昇の表情も和らいでいた。そして琴未が昔を振り返るように、少し遠い目をしながら話を続けてきた。
「昇は昔からそうだった。私が強がっても、本心を見抜いたようにずっと傍に居てくれた。一人にしてと言っても、ずっと傍に居てくれた。その時の本音は確かに誰かに傍に居て欲しかったのよ。昇はまるで、その事を知っているかのように傍に居てくれた。それに私がどんなに強情で強がっても、私の事を理解しようとしてくれた。強がって嘘を付いても、すぐに嘘だってバレた。だから……私は昇に泣き付く事しか出来なかった。そうやって、昇はいつの間にか人の中で大きな存在になってる。それは私だけじゃない、たぶん……シエラや……閃華でさえも感じてる事だと思う」
「自分では、そんなに大層な事をしてるつもりは無いんだけどね」
「別に大層な事をしなくても良いのよ。寂しい時、悲しい時、そんな一人では居たく無い時に傍にいてくれる。それだけで、そうやって私を理解してくれた事が私は嬉しかった。だから……いつの間にか私は昇の事が好きになってた」
「……」
「けど、私はこんな性格だからね、閃華が後押ししてくれなかった

ら、この思いはずっと伝えられなかったかもしれない。だから私は……今でも昇の事が好きで居られるし、この思いを遂げたいと思うからシエラとも張り合える。それが今の私であり、私達だと思う」

「……えっと、結論としては琴未は何を言いに来たの？」

耐え切れなくなった昇が、とうとうその質問をしてきた。昇としては琴未の訪問理由がまったく分からないのだ。だから、そんな疑問を抱いても不思議では無い。けれども琴未は訪問理由を話さずに昔話をするばかりだった。だから昇は思い切って、その質問をしたのだが、琴未はすぐに答える事無く、もう話す事は無いとばかりに湯飲みを片付けるのだった。

そんな琴未の行動を呆然と見守る昇。そして琴未がお茶を片付けて部屋を出て行くときだった。開いたドアから振り返って、片手で拳銃の形を作ると昇を撃つ真似をした。そして琴未は軽く微笑みながら言うのだった。

「乙女を甘く見てると痛い目をみるって事よ」

すでに日頃から痛い目に遭っているのですが、そんな言葉が思わず出かけたが、今の琴未にはそんな言葉を言う気分ではなかった。ただ一つだけ昇にも分かった事は……琴未達もいよいよ本格的に動き出す、という事だけだった。

どうやら昇が望んだように、ゆっくりとタイミングをまって春澄を紹介するのは無理みたいだ。それは今の琴未と先程の琴未が口にした言葉を思い出せば、昇でもしっかりと理解できた。だからか、昇は琴未の言葉に苦笑いをするだけで精一杯だった。

そんな昇の反応に満足したのだろう。琴未は「おやすみ」とだけ告げると昇の部屋を跡にした。そんな琴未を見て、昇の苦笑いは更に苦い物になっていた。どうやら昇にもしっかりと分かったのだろう。明日は今まで以上に琴未達が手強いという事と今でも琴未達の気持ちが変わっていないどころか強くなっているという事を。

後者はともかく前者は大問題である。だからこそ、昇はすぐにベットに倒れ込むと明日の対策を考えるが、どうしても春澄の事を考

えてしまっていた。そんな思考を巡らしているうちに日付は変わり、昇は考える事を放棄して寝る事にした。

もう、こうなったら、やれるだけやるだけだ。そんな事を思う昇……開き直ったというかなりゆきに身を任せるというか。どちらにしても、今は睡眠を優先させようと昇は部屋の電気を消して、睡魔に身を委ねるのだった。

第百三十二話　悩める夜（後書き）

……えっと……とりあえず……すいませんでしたっ！！！！！！
はい、なんで冒頭で謝ったかというと……実はずっと間違えていた事がありました。それは昇の母親である彩香の名前です。最初の方はしっかりと彩香と書いていたのですが……途中で「彩香」と「綾香」が入り混じってしまいました。正しくは「彩香」ですので、たぶん、読み返すと名前が入り混じっているのが分かると思います。
……いや、だってさ、なんていうか……彩香の出番ってすくないじゃん。だから……つい……なんというか……はっきり言うと……名前を間違えましたっ！！！
え～、そんな訳で、今まで読んできて違和感を感じてた方、すいませんでした。そして修正ですが……はっきり言って量が多くて、どこで間違えてるかも、こちらでは把握が出来ないので修正はしません。
まあ、次からはしっかりと確かめて、二度とこのような事態が起きないようにしますので、今回は勘弁してくださいっ！！！
（土下座）
さて、謝罪が終わったところで、そろそろ後書きを始めましょうか。まあ、ほとんど書く事は無いんだけどね（笑）なんか、後書きの欄はとりあえず何かを書きたくならない、もの凄くくだらない事でも（笑）
それにしても……何となく思ったんだけど……本編と私の後書きって本当に温度差があるよね～。本編では真面目な事を書いているのに、後書きはほんとにくだらい事ばかりですよね～。
まあ、中には連絡事項なんかも入ってますけど、とりあえずいろいろな事に使われている私の後書きですね。
……ほら、今回も後書きについて語ってしまった。まあ、私の後書きなんて、ほとんど意味が無いから良いんだけどね（笑）

っと、そんな訳で長くなってきたので、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、未だに完全回復していない葵夢幻でした。誰かっ！　ベホマ、かケアルガを掛けてください。それが無理ならアルテマで良いです。……って、それだと私は完全に死ぬじゃんっ！！！　と最後にくだらない事を書いてみました～。

第百三十三話　楽しい時間

乙女を甘く見てると痛い目をみるって事よ。そんな琴未の言葉が昇の頭から離れないうちに時間は昇の意思を無視したように時を刻み、とうとう放課後になってしまった。

まあ、今日は春澄ちゃんと会う約束はしていないけど……こんな展開になると……まるで春澄ちゃんに会いに行けと言われてるような気がする。そんな事を考えながら昇は辺りを見回す。すでにシエラ達の姿は無い。なにしろシエラ達はホームルームが終わるのと同時に与凪を拉致してどっかに行ってしまったからだ。

だから、ぽつんと一人残された昇はどうしようかと途方にくれていた。シエラ達の行動から見ても、フレトを誘って帰るという手段も無駄だろう。なにしろ昨日の事でフレト達もシエラ達に協力しているのは分っている。だから今更フレトが救済の手を差し伸べてくれるとは思えなかった。

つまり昇は一人で置き去りにされたようなものだ。それが逆に昨日、琴未が口にした言葉が怖いとも感じるし、何故だか分からないが、今日も春澄に会いに行かなくてはいけないような気にしていたのだ。その理由が何かは分からない。いや、正確には気が焦っているのだろう。昇には春澄に伝えなければいけない事がある、その事を一刻も早く春澄に伝えたいと。だから昇は春澄に会いたいと思っても不思議ではないのだ。もっとも、昇自身がその気持ちに気付いているかは分かったものではないが、春澄と会いたいという気持ちを持っている事は自覚しているようだ。

だがシエラ達の行動は明らかにおかしい、これは絶対に何かがある。昇はそう考えながらも、これから、どう動くべきかを考えていた。なにしろシエラの事だから、どこに罠があるか分かったものではない。それに閃華ならば不意を突いて来る事は間違いないだろう。誰の画策だとしても危険だと昇は考えていた。そう、それがフレト

の考え出した作戦だと気付かないままに。
　実際のところは誰も何もしていないのだ。フレト達はすでに帰宅の徒についているし、シエラ達は与凪と一緒に生徒指導室に居た。つまり今の昇は誰も監視していないし、何かの罠や不意打ちが待っているわけでは無い。フレトはそこに罠を仕掛けたのだ。
　今までが今までなだけに、シエラ達が何かしらの画策をしても不思議では無い。だがミリアの作り出した追跡装置にはすでに昇のデータは入力済み、つまり今の時点で無理に昇を追いかけなくても良いのだ。逆に、こうやって放って置かれる方が昇は疑心暗鬼になり、さまざまな可能性を疑う事になって動きが遅くなってしまう。つまり、あえて昇に干渉しない事により、昇に疑心暗鬼を起こさせるのがフレトの考え出した作戦なのだ。
　確かに、今の昇を見れば効果は抜群なのは確かだ。そして生徒指導室で昇の動きをすでに追跡準備が出来ているシエラ達も昇が動き出すのを待っている。更に言えば、フレトも巻き込まれること無く、セリスとゆっくりとした時間を過ごせるのだから、シエラ達にとっては最大限の効果を発揮する作戦とも言えよう。
　まあ、フレトとしては、これ以上は巻き込まれたくないから、こんな作戦を提案したに過ぎないのだが、効果がある事は確かだ。それは今の昇を見るだけでも充分に分る事だろう。だからフレトは昇に自業自得と思いながらも、自分はセリスとゆっくりとした時間を過ごすために、この作戦をシエラ達に提供したのだ。
　そして肝心の昇はというと……辺りをしっかりと見回してから、一度大きく深呼吸をすると意を決したような顔になり、辺りを警戒しながら教室を出て行った。どうやら昇も、このまま教室で考えるよりも、シエラ達の動きに合わせて対応していった方が効果的だと判断したのだろう。
　だから昇は警戒しながらも普通に昇降口にまで歩いて行き、そのまま学校を後にした。その事が昇には拍子抜けした事ながらも、まだ油断ならないと気を緩めなかった。そんな昇が、これからどうす

るかを考える。
　う〜ん、今日は春澄ちゃんとの約束が無いから、久しぶりにシエラ達と帰ろうとしたんだけど……まさか、こんな結果になるなんてな〜。琴未の言葉も気になるし……なんか……このまま春澄ちゃんに会いに行けと言わんばかりの展開だな〜。どうしようかな〜。などと、戸惑いながらも昇の足は自然と春澄と会っている公園へと向かっていた。

　結局来ちゃったよ。そんな事を思いながら昇は春澄と会っている公園の入口に立ち尽くしていた。昇としては素直に帰宅してもよかったのだが、誰かの意思なのか、それとも昇が望んだ事なのかは分からないが、昇は春澄と会っている公園へと来てしまっていた。
　このまま公園に足を踏み入れても春澄は居ないはずだ、少なくとも昨日の約束では、そういう事になっている。だが、昇は春澄が公園に居るのではないのかと感じていた。確かな事は分からない。ただ……昇の意思なのか、それとも何かの力なのか、昇と春澄は引き付けあう因縁のような物を持っていた。だから昇はもしかしたらと、理由の無い確信を得ながらも公園へと足を踏み入れた。
　……春澄ちゃん……普通に居たんだけど……僕はどうすれば良いんだろう？　そんな疑問を思い浮かべながらも昇の足は自然と春澄に向かって歩き出し、いつの間にか春澄の前に昇は立っていた。
　そんな昇の気配を感じたかのように春澄は昇の顔を見るかのように顔を上げると昇に向かって話し掛けてきた。
「やっぱり来ちゃったんですね。昨日は会えないって言ったんですけど……争命の因果からは逃げられないようですね」
「まるで僕が今日もここに来る事を想定していたような言い方だね」
　そんな昇の言葉に春澄は首を横に振ってから答えてきた。
「来るかもしれないとは思ってました。でも……私の本心は来て欲しくないと思ってました。だから昨日は会えないと約束したんです」

「まるで……僕に会う事を拒んでいる言い方だね」
「……その通りかもしれません。今日は……昇さんには会いたくなかった。でも……私達の因果はお互いに引き合った。これはしかたない事かもしれませんね。それに……こうやって、今日も出会ってしまったのだから、仕方の無いことです」
そんな言葉の後に春澄は大きく息を吐くと昇は微笑みかけながら春澄に尋ねた。
「それで、春澄ちゃんとしては、出会ってしまった僕達は何をすべきだと思う？」
そんな質問に対して春澄は半分ほど呆れたような、けど半分ほど嬉しそうな顔で答えてきた。
「なら、今日も楽しく過ごしたいです。出来るだけ……残された時間を最大限に」
「うん、そうだね」
そう言うと昇はいつもと同じように春澄の横に座ると春澄も少しだけ嬉しそうな顔を昇に向けてきた。けれども、昇は少しだけ真剣な顔付きで春澄に話しかけるのだった。
「突然だけど、やっと春澄ちゃんから出された宿題に答えが出せたよ」
その言葉を聞いて春澄も顔付きが変わって真剣な物になり、昇の言葉に耳を傾ける。もう、昇の言葉しか入らないほど、春澄は真剣に昇の言葉を待っていた。そんな春澄に対して昇は真剣に、そして……最大限に自分の感情を込めて口を開いた。
「確かに春澄ちゃんが考えた事は正しいと思うよ。人は終焉、死に向かって歩き続けてる。でも……自然と歩いて行くのと、自分の意思で歩いていくのは違う。自然と歩いていくのは自然の摂理だ、人はいつか死ぬ事には変わりないから終焉に向かって歩いて行くのは当然の事だし、生きているからには誰も終焉の摂理からは逃げられない。でも、自分で歩いていくのは違う。それは自分が死に行くようなものだから自殺行為と変わらない。自らの意思で終焉に向かっ

て歩くという事は、自らの意思で死に行くのと同じだ。だから僕は春澄ちゃんを止めたい。それが僕の答えだよ」

そんな昇の答えを聞くと春澄は大きく息を吐いてから、天を仰ぐようにして昇に言葉を返してきた。

「確かに……私は自分から死に向かってるかもしれません。でも……絶望はしてません。その代償に……掛け替えのない物を得たから。だから私は死に向かって歩いてるんです。そんな私の人生に私は後悔も、絶望もしません。だから、そんな私の人生を……昇さんに止める権利なんてありますか？」

「権利なんて無い。でも、僕は春澄ちゃんに生きてて欲しい。出来る事なら、僕達の友達になれるかもしれないし、もっと楽しい時間を過ごせるかもしれない。でも……僕は春澄ちゃんと過ごした時間を楽しいと感じてたし、出来る事なら、僕の仲間達とも仲良くなって、もっと楽しい時間を過ごしたい。そこに理由も権利なんていらない。僕がそう思ったからこそ、思った事を言葉にして伝えた。僕の……正直な気持ちを……」

そう、これこそが昇が出した答えだ。そこには理論も倫理も無い、ただ……昇が思った素直な気持ちが込められた言葉だけに過ぎない。そんな昇の言葉を聞いて春澄は手探りで昇の位置を知ると、昇に寄り掛かるように頭と身体を預けてきた。それから春澄は閉じた瞳の端に涙を見せながら昇に向かって言うのだった。

「その答えは……ずるいです。そんな素直な感情をぶつけられたら……どんな言葉も意味を成さないじゃないですか。それに……そんな事を言われたら……私もそうしたいと思っちゃいますよ」

「なら、そうすれば良い……って言いたいけど、そうは出来ないんだよね」

「はい、私の人生はもう決まってます。終焉に向かって歩くしか無いんです。今更になって他の道に行く事は出来ない。でも……終焉の前に楽しむ事は出来ます。だから……」

「うん、そうだね。今ぐらいは楽しい事を話そうか」
「はい」
昇に寄りかかりながらも、元気良く返事を返してきた春澄の顔には、もう涙も悲しみもなかった。すでにいつもの春澄が浮かべている笑顔に戻っていたのだ。そんな春澄の笑顔を見ながらも昇は今を楽しむ事に決めた。
これから春澄が何をするかは分からない。でも……春澄が何をしようとも、自分が絶対に春澄にとって最高の終焉を迎えられるように決意したからだ。だから昇も今は春澄との一時を楽しむかのように笑顔を浮かべるのだった。

「って！　何よ、あの女っ！　あんなにも昇に密着してっ！」
「これ、琴未よ、あまり大きな声を出しては気付かれるぞ。今はじっとしておるんじゃ」
「……あの女が契約者なら……」
「シエラよ……さらりと怖い事を言わんでくれ」
「皆して暴れないでよ～、これを使うのって難しいんだから～」
昇と春澄が楽しげな会話を始めた頃、公園の茂みに身を隠したシエラ達は始めて見た春澄の存在に、それぞれの反応を示していた。まあ、もっとも、怒っているのはシエラと琴未だけで、仲裁役となっている閃華は大変そうだが、ここまで追跡したミリアは今では下敷き状態だ。まあ、ここまで昇を追跡出来れば、もうミリアの装置は用無しだが、ミリアはせっかく自分自身の手で作ったものだから大事にしたいらしい。
そんな状況の中で閃華が何とか琴未を落ち着かせて、茂みの隙間に円陣を組むようにお互いに顔を見合わせると、今後の事を話し始めようと閃華が説得してきたので、渋々ながら琴未は一旦昇から目を離して、シエラも加わり、円陣が組まれて、話し合う事を決定された。

「それで閃華、今の状況を見ても昇が浮気しているのは、まぎれも無い事実でしょ。だったら、今すぐに昇の元へ行って、あの女をギタギタにいびるのが一番でしょ」
「ギッタギタだ～」
琴未の言葉にミリアも意味無く、同意したかのような言葉を口にする。そんな二人を見て閃華は溜息しか出なかった。そして、いつの間にか円陣から姿を消していたシエラに気が付くと、シエラが茂みから、少しだけ頭を出して、何かをしている姿を発見した。
「それで、シエラは何をしておるんじゃ？」
既に止めても無駄だと諦めた閃華は言葉だけをシエラに投げ掛けた。そんな閃華の言葉を聞いた後にシエラの作業は終わったのだろう。円陣に戻ってくると自分の考えを話し始めた。
「状況から考えて、今の段階で私達が飛び出して行くのは得策じゃない」
「なんでよ」
シエラの言葉に不満そうな、いや、思いっきり不満な声を上げる琴未。そんな琴未を横目に見ながらシエラは話を続けてきた。
「今の段階で私達が、あの二人を問い詰めると、昇は必ず、あの女の味方をする。今の状況だと、どう見ても私達の方が悪役になってしまう。それに、昇の性格を考えても、複数で責められている人を放っておくわけが無い。絶対に私達を説得するに決まってる」
「つまり、今の段階で飛び出しても意味は無いって言いたいわけね」
琴未の言葉に頷くシエラだった。琴未も昇との付き合いが長いだけに、シエラが言った場合を想像すると昇が取るだろうと思われる行動は琴未にも、すぐに理解できた。それはシエラが言った通りだからこそ、琴未はシエラの意見をそのまま肯定したのだ。
だが、そうなると琴未は自分達がどう動けば良いのかが分からなくなったのだろう。先程まで席を外していたシエラに向かって話しかける。
「それで、シエラには何か考えがあるの」

そんな琴未に質問にシエラは笑みを浮かべて即答してきた。
「当然、何の策略も無しに私は行動しない」
「はいはい、シエラはそういう性格だものね。陰湿というか、陰険というか」
「琴未は戦略上での陰策や陰謀という作戦が立てられないほどの知能しか持ってないから、そう感じてるだけ」
「……」
「……」
いつの間にかシエラと琴未の視線がぶつかり合い、視線の中心では大きく火花を散らしている。どうやら二人の悪い癖が出たのだろう。そんな二人を見て、閃華は思いっきり溜息を付くと、話を元に戻すために口を挟んできた。
「今はシエラの性格や琴未の頭を討論する時ではないじゃろう。二人とも、いい加減に対立を激しくしておると、そろそろ昇も愛想を尽かすかもしれんのじゃぞ」
「んっ！」
「ぐっ！」
閃華の言葉を聞いて、思わず言葉を飲み込むシエラと琴未。昇が逃げ出した事もあり、自分達の行動が昇の負担になっていた事は自覚していたようだ。だから、改めて閃華から、そのような言葉を浴びせられると二人は返す言葉を飲み込むしかなかった。
そんな二人の光景を見ていた閃華は大きく溜息を付くと、シエラに対して質問をした。
「ところでシエラ、先程は何をしておったんじゃ？」
その質問に対してシエラは全員に密着するように手招きするのだった。それから自分が考えた作戦と先程の行動について説明した。
そんなシエラの作戦を聞いて、琴未は納得しながらも作戦にもう少しアレンジ出来ないかを口に出してきた。
「なるほどね、確かに昇を追い詰めるのには、それが最高かもしれない。でも……やっぱり、このままだと気が済まない。どうにかし

たいのよね」
　そんな琴未の言葉を聞いて考え込む一同。確かにシエラの作戦は完璧だが、今の時点で決行する訳にはいかないようだ。だから今は何をやるべきかを考える一同。その中で一番初めに思案を出してきたのは……意外な事にミリアだった。そんなミリアが一同に向かって考え付いた事を話し始めた。
「ね～、ね～、私達が乱入すると、昇があの女の子を庇うから困ってるんでしょ」
「そうよ、それはさっき説明した通りじゃない」
「だったらさ、いっその事、私達もあの女の子と友達になっちゃおうよ。そうすれば昇から何も言われる事は無いでしょ」
「なるほど、妙案じゃのう」
　ミリアの発案にしては珍しいとばかりに声を上げて、軽く手を叩く閃華。確かに今までのミリアを知っていれば、こんな作戦を出してくるとは思えないだろう。もっとも、昇に対して一番執着が無いミリアだからこそ、そんな事を思いついたのかもしれない。
　確かにミリアも昇の事が好きなのには変わり無い。だが、ミリアにしてみれば、昇を独占したい訳ではないのだ。昇と一緒に居る事で、シエラ達をも巻き込んで楽しい時間が過ごせるからこそ、そんな時間を作り出している昇が好きなのだ。だから、ミリアは昇を独占したいとは思わないし、昇の事が好きで得られる時間が好きだからこそ、ミリアは昇が好きなのだ。
　だからミリアの好きというのは恋愛とは言えないかもしれない。けど、好きという事に定義も概念も無いからこそ、ミリアの好きはシエラ達とは違う好きだと言えるだろう。それは別にミリアが幼い頭を持っているからではない。そこには、やっぱりラクトリーからの影響があったのだ。
　それは歴史に関する事だった。英雄色を好む、との言葉どおりに、英雄と呼ばれる人は女好きが多い。けど、それを逆に言えば、それだけの女性を魅了するだけの魅力を持っているのも確かな事である。

つまり、英雄ほどの器を持っていれば、一人の女性を一途に愛するだけでなく、複数の女性を虜にするのも不思議では無いという事だ。

つまり、昇には複数の女性から愛されるだけの魅力と器を持っている。ミリアも昇の中にそれを見つけたからこそ、ミリアは昇が好きだが独占したいとは思わない。それは複数の女性に好きと言わせた昇の一面も昇の魅力だとミリアが感じたからだ。だからミリアはそんな昇の魅力にひかれて好きになったのだ。そこがシエラ達とは違うところだといえるだろう。

だからこそ、ミリアは昇が違う女性と親しげにしていても嫉妬したりはしない。それは昇が持っている魅力が他の女性をひき付けたに過ぎないからだ。そんな魅力を持った昇をミリアは好きになったのだから、今更になって他の女性と昇が親しげにしていても嫉妬しないのである。

そんなミリアだからこその妙案とも言えるだろう。そしてシエラと琴未もミリアの妙案について考え、そして答えを出してきた。

「ミリアにしては珍しく役に立つ作戦を出してきたわね。でも……行けるかもしれない」

「……敵を知る事こそ攻略の第一歩……」

どうやら二人ともミリアの作戦には賛同のようだ……まあ、それぞれに思惑が有る事は言うまでも無いだろう。だが、これで方針が決まった事には変わり無い。だからこそ、琴未は立ち上がると全員に告げる。

「なら、さっさと昇のところに行きましょう」

猪突猛進のような事を言い出してきた琴未に対して閃華は溜息を付いた。確かに方針は決まったが具体的にどうするかは、まったく決まっていない。だからこそ閃華は溜息を付いたのだが、そんな閃華の溜息を吹き飛ばすかのように琴未は微笑む。

「大丈夫よ、閃華。そこはしっかりと考えてあるから、閃華達は私に話を合わせてくれればいいのよ。だって、私達はあの女と友達に成りに行くんだからね～」

「……琴未よ、その不気味なほどの微笑みは消してから行く事じゃな」

琴未の言葉を聞いて、琴未には何かしらの腹案があると感じ取ったのだろう。だから、ここは琴未に任せた方が良いとシエラは判断してきた。なにしろシエラは舌戦ならともかく、友達になるような話し方には不慣れなのだ。そんなシエラとは打って変わって、琴未は普通に女友達と話す事にも、友達に成る事にも慣れている。だからこそ、シエラは何も言わずに琴未に任せる事にした。まあ、閃華が指摘したとおりに、最後には本音を出したかのように微笑みに邪悪なオーラが出ていた。

なんにしても、これで琴未達の行動については決まった。後は実行あるのみと琴未達は行動を開始するのであった。

「あっ！　昇じゃない、こんな所でどうしたの」

「って！　琴未っ！」

普通に公園の入口から入って行き、偶然のように昇を見つけたフリで声を掛ける琴未。もちろん、先程の事があるから琴未達がここに来たのは偶然ではない。全ては偶然と自然を見せるために琴未が演じているだけである。

そんな琴未達が当然のように昇に近づくと、昇は当然、あたふたと混乱と慌てふためくばかりだ。一方の春澄は微笑んだまま琴未達の方へと顔を向けていた。そして琴未は昇が何かを言う前に会話の主導権を一気に手に入れる。

「丁度良かったわ、私達も暇だったのよね。だから私達も二人の会話にお邪魔して良いよね？」

微笑みながら、そのような言葉を口にする琴未。昇から見れば、琴未の微笑が決して拒否してはいけない事を物語っていた。それでも、相手はシエラを始め、四人が揃っているのである。このままでは春澄が変な嫌疑を掛けられて、もしかしたらシエラと琴未にいび

られるのではないのかと昇は心配になり、何とか誤魔化して、撤退しようとするが、その前に春澄が琴未達に対して口を開いてきた。
「琴未？　……あ～、昇さんが話していた幼馴染の人ですよね。良いですよ、私も大勢で騒ぐのは大好きですから」
　って！　春澄ちゃんっ！　その言葉は自殺行為と一緒だよっ！
思わず、そんな突っ込みを心中で入れる昇。そして春澄の言葉を聞いた琴未達は、これは良い展開になったとばかりに春澄を挟むようにシエラと琴未割り込むと、ミリアが昇の隣である一番端っこに座り、すでにベンチにスペースが無いので閃華は後ろから事の成り行きを見守る事にした。
「突然お邪魔してごめんね～、えっと……」
「あっ、私は春澄って言います、雫春澄です」
「へぇ～、春澄ちゃんか～」
　……えっと、琴未さん、何で僕の方に不気味な笑みを浮かべながら確認をするのでしょうか？　そんな疑問さえも口に出来ない昇は、何とか春澄だけは守らないとと思うが、事態は昇が想像していた方向とは、まったく違う方へと向いて行くのだった。
「昇から聞いてるみたいだけど、一応自己紹介しておくね。私は武久琴未、昇と幼馴染っていうのは知ってるみたいね」
「……シエラ」
「はいは～い、私はミリアだよ」
「最後は私じゃな。閃華じゃ」
　和やかに自己紹介をする琴未達、そんな琴未達には不機嫌なオーラも不気味な微笑みも無かった。まるで普通に、というか、普通としか言えないような自己紹介をして来たのだ。その展開に呆気に取られる昇。どうやら昇は琴未達が最初っから春澄に喧嘩腰に来ると思っていたのだろう。それが、まさか、こんな普通の展開になるとは思ってもいなかった。
　一方の春澄はいっぺんに言われて戸惑っているようだった。それでも、紹介された名前と位置を指差しながら確認する。その光景に

琴未は不思議そうな顔で言うのだった。
「別にそこまで丁寧に確認しなくても良いんじゃない。私達の事は昇から聞いてるでしょ」
「あっ、いえ、そういうわけじゃなくて」
「琴未よ、それじゃ」
閃華に指摘されて琴未は初めて、春澄の傍に置いてあるステッキに目を向けた。それでも琴未には何の事なのかが分からなかったのだろう。閃華に向かって首を傾げると、シエラが簡潔に答えを出してきた。
「盲目」
「えっ？」
シエラの言葉に一瞬だけ意味が分からないと言った表情を浮かべる琴未。だが、シエラの言葉と春澄が常に瞳を閉じている事と決して傍から離さないステッキを見て、ようやく全てを理解したようだ。
「あっ、そういう事か、ごめんごめん、まったく気付かずに勝手に話しちゃったね」
「いいえ、気にしないでください」
まさか春澄が健常者では無い事をまったく想定していなかった琴未にしてみれば、春澄が盲目だった事は驚きでもあり、少しの罪悪感を残すものになってしまった。けれども、春澄はまったく気にしていないとばかりに琴未の方へと顔を向けると微笑んだ。
そんな春澄の微笑を見て、琴未は何故か昇の方へと顔を向けると溜息を付いた。そんな琴未の行動に昇はワケが分からないといった顔をするが、そんな昇を放っておいて琴未は春澄との会話を再会させた。
どうやら琴未には昇が春澄と毎日も会っている理由が分かったようだ。それはシエラ達も同じであり、春澄に対しての考え方を少しだけ変えた。確かに春澄は悪くは無いが……昇には充分に問題があった。その事にまったく気付かない昇を放っておいて、会話は自然と弾んで行った。

「へぇ～、じゃあ、いろいろな所を旅してるんだ。でも、目が見えないのに大丈夫なの？」
「ええ、大丈夫ですよ。私には保護者じゃないですけど、パートナーと言える存在が居ますから」
「パートナー？　それって春澄ちゃんの恋人とかになるわけ？」
「違いますよ。私達の間に恋愛感情なんて無いです。あるのは共通の目的だけです」
「なるほどのう。その共通の目的を果たすために、一緒にいるわけじゃな」
「はい、そうです」
「じゃあ、家族みたいなものなのかな～？」
「そうですね～……そうかもしれませんね」
「じゃが、春澄と家族のような関係を築くとは、その人物もかなり優しい者のようじゃのう」
「う～ん、優しいといえば優しいけど、私達は自分達の目的を達成するために旅をしてますからね。自然とあっちが私に合わせてくれるんでしょうね」
「でも、春澄ちゃんと旅をしてるんだから、それだけで優しい人って言えるでしょ」
「そうだよ～」
すっかり会話が弾む琴未達。その中でシエラだけが言葉を発する事無く、まるで春澄を観察するみたいに見詰めていた。そして昇はというと……琴未達の登場により、すっかり忘れられたように居心地を悪くしていたのであった。
まあ、女性陣がこれだけ集れば男の昇が会話に介入するのは難しいのだろう。それが慣れている琴未達だとしても、春澄と琴未達との会話に対しては、なかなか介入する事が出来ない。だから昇は苦笑いを浮かべながらも、琴未達と春澄を見守っていた。まあ、親しい女性が女友達と楽しく会話をしてて、その会話に割り込めない。今の昇はそんな状況と言えるだろう。

そして春澄はというと、昇の時とは違った。まるで今の状況を楽しんでいるような、昇に見せる笑顔とは違った笑顔を浮かべているのだった。そんな春澄を見て、昇はやっぱり春澄も女の子達と話していた方が楽しいのかなと疑問を抱いていた。

どうやら昇の朴念仁も治りそうにないようだ。昇が春澄と会っていた時間を合計しても約二十四時間、つまり一日ぐらいだろう。だが、昇はその一日ぐらいの時間で春澄の心を開いてしまったのである。それだけではない、春澄の心を自分に向かせたのだ。だから今となっては昇という存在は春澄にとって特別な存在なのだ。それを恋愛感情と言えるかどうかは別として、春澄の中では昇は特別な存在になっているのは間違いない。だからこそ、昇だけにしか見せない笑顔を持っているのだ。

当然のように昇がそんな春澄の心にまで気付くわけがなかった。けど……こうやって春澄が琴未達と楽しく会話しているのも悪くは無いと、昇は春澄達を見て、そんな事を思っていた。

琴未達が昇達と合流してから数時間が過ぎただろう。辺りはすっかり暗くなり始めた頃。春澄は静かに立ち上がると琴未達に対して言うのだった。

「今日はこれから用事があるので失礼しますね。それから……ありがとうございます。今日は……とっても楽しかったです。出来る事なら、もっと楽しい時間を過ごしていたいけど、私達にはやるべき事があるので、今日は失礼しますね」

「そうなんだ……って！　もうこんな時間じゃない、すっかり話し込んじゃったわね。こっちも楽しかったから、また機会があったらお喋りしようね」

「はい、そうですね……機会があったらですね」

ちょっとだけ顔を伏せて、少し暗い表情を見せてきた春澄に対して昇達は首を傾げるばかりだった。そんな春澄が気持ちを切り替え

たのだろう。笑顔に戻ると昇達に言うのだった。
「それじゃあ、今日は失礼しますね」
「じゃが、送っていかなくても大丈夫なのか？」
盲目の春澄に対しての気遣いだろう、閃華がそんな事を春澄に尋ねると、春澄は公園の入口に顔を向けた。そこには遠巻きながらも春澄達を見ている巨漢の男性が立っていた。それから春澄は琴未達に顔を戻すと話を続ける。
「見ての通り、迎えが来てますから。だから大丈夫です」
「なるほどのう、あれが春澄殿が言っていたパートナーじゃな」
「うわ～、おっきい人だな～」
春澄を迎えに来たアルビータの姿を見て、感想を言う閃華とミリア。アルビータの存在が確認できたところで春澄は先を急ぐかのように言うのだった。
「それじゃあ、今日は用事があるので失礼しますね」
「あっ、引き止めてごめんね。じゃあ、また今度ね」
「はい、また……」
春澄は昇達に対していつもの微笑を向けると一度だけ大きく頭を下げてから、アルビータの元へと歩いて行った。そんな春澄を見送る昇達。そして春澄とアルビータが合流するとアルビータも感謝の意味を表したのだろう。昇達に対して一礼すると、春澄の手を取って公園を後にするのだった。
そんな春澄達を見送った後、突如として不機嫌なオーラを出し始めた琴未が昇に対して口を開いてきた。
「春澄ちゃんね。確かに盲目というハンデキャップを抱えてるし、苦労も多そうだったわね～。それに……なによりも……可愛かったものね、昇」
えっと、琴未さん、春澄ちゃんが居なくなった途端にそれですか。と思わず、そんな事を言いたくなる昇だが、琴未の不機嫌なオーラが昇の口を塞いだ。それはそうだ、なにしろ、ここのところは毎日、昇は春澄と密会に近い状態で会っていたのだ。琴未が不機嫌になる

のも昇には分っていたし、分っていたからこそ、昇は自分から打ち明ける機会を狙っていたのだ。自分から言い出せば琴未達の不機嫌さも軽減できるし、上手く行けば消し去る事が出来ると考えたからだ。

だが、こうして琴未達から来てしまったのでは昇は後手に回って返す手が無い。だからこそ、琴未に対しても苦笑いするしかなかったのだ。それから琴未から怒涛の言葉が飛び出すかと誰もが思ったが、意外な事にシエラが口を開いてきた。

「昇」

突如として昇に呼び掛けるシエラ。一方の琴未はシエラに遮られたのでシエラを睨み付けるが、シエラはそれ以上の真剣な眼差しで琴未を制すると、シエラには何か考えがあると琴未も感じ取ったのだろう。だから今はシエラに任せる事にした。

そんな二人のやり取りを見ていた昇は何も起きなかった事に一安心したが、シエラは思いも掛けない事を言い出してきた。

「あの……春澄って子……気をつけた方が良い」

「えっ？　気をつけるって、何を？」

「……分からない。でも……あの春澄って子を見てたら、何か違和感があった。それが何かは分からないけど……分からないから気をつけた方が良い」

シエラがそんな事を言うと昇は意味が分からないとばかりに閃華の方へと説明を求めるが、閃華も肩をすくめて首を横に振るだけだった。どうやらシエラだけが春澄に対して、何かしらの違和感を覚えたようだ。だから閃華もシエラが言う違和感について説明ができる訳がなかった。

シエラの気のせい……って事は無いよね。シエラの観察力なら、春澄ちゃんが隠している事を見つけてもおかしくは無いんだけど……違和感ってなんだろう？　春澄ちゃんの行動に何かあったのかな？　まあ、シエラの言う事だから何かあるのかもしれないけど、別に気をつける事でも無いんじゃないかな。最終的には、そんな結論

を出す昇。
　昇はシエラの観察力を疑っているワケではない、春澄に対して警戒する必要が無いと思ったからこそ、そんな判断を下したのだ。もちろん、シエラの観察力が優れている事は今までに幾つもの戦場を共にしてきた昇だからこそ良く分っている。
　なにしろシエラは相手の力を見て、すぐに相手の属性を言い当てているからだ。もちろん、シエラがそれだけの知識がある事も要因の一つだが、相手の力を見て、それが何の力なのかを見極めるには、やはり知識と観察力は欠かせないのだ。シエラはその両方を持っているからこそ、すぐに昇と敵対してきた相手の属性を言い当てている。そんな事があったからこそ、シエラの観察力に対しては疑わない昇だが、やはり春澄に対して警戒する必要が無いからか、シエラの言葉をそんなに重く受け止めず、心の端っこに覚えとくだけにしておくのだった。それに……。
　昇には分っているのだ。この後に待っている修羅場が、だからこそ、昇は修羅場を掻い潜る手段を考えようとするが、時既に遅し、琴未が口を開いてきた。
「さて、それじゃあ私達も帰りますか。ねえ、昇」
　最後だけ、やけに威圧感を含ませながら昇を帰宅させようとする琴未。そんな琴未に対して昇が敵うはずもなく。昇は素直に琴未の言葉に従うのだった。
「……はい」
　すっかりうな垂れて返事をする昇。こうして、昇はまるで刑務所に連行される囚人になった気分で帰宅の徒に付くのだった。

　そして、琴未達が動き出したのは夕食を終えた後だった。すっかり片付いたテーブルに全員が揃っていた。昇としてはさっさと自分の部屋に撤退したかったのだが、すっかり閃華の罠に掛かってしまい、撤退は失敗に終わった。

その経緯は、こんな感じである。閃華が何気ない質問に、何も考えずに二つ返事で返してしまった事に要因があるのだが、まさか閃華が「昇、これから用事はあるかのう？」そんな閃華の質問に昇は無いと即答してしまったのが閃華の罠だったのだ。だから閃華は「なら、私達は昇に用があるから、ここに居る事じゃな」と、すっかり決定事項とした言葉を口にしたから昇としては逃げる機会を失ってしまったのである。

その後に閃華が小声で言うには、相手の隙を狙うのは戦略にとっても、戦術にとっても基本中の基本じゃからのう。つまり、夕食を終えた事で、すっかり気が緩んだ昇に対して、昇をリビングに留めとくために、閃華は自然かつ何気ない言葉の中に罠を仕込んだのである。

そのため昇はリビングから逃げる口実を失ってしまった。そして全員が揃った事を確認したシエラはテーブルの上に身を乗り出すと何かを広げ始めた。そして昇の前に見せ付けるように、広げられたのは……何枚もの写真だった。その場には彩香も居たので、彩香も興味津津で写真の一枚を手に取ると、じっくりと見る。

そう、この写真の数々こそがシエラが茂みに身を隠していた時に取っていた行動の結果である。つまりシエラは一時だけ円陣から離れて、カメラを構えて写真を撮っていたのである。昇達にも、そして周囲の人達にも気付かれないように。その結果として、テーブルの上には何枚もの写真が無造作に置かれており、昇の前に広がっているのであった。

そんな写真を見詰める彩香を余所に、シエラ達は本題に入るのだった。真っ先に口を開いてきたのは琴未だった。

「さ～て、昇。昇が春澄ちゃんと楽しそうに会話している証拠は、ここにあるわけだし、今ここで春澄ちゃんとの関係について徹底的に話してもらおうじゃない」

そんな事を言って来た琴未に対して昇は引きつった笑顔で返事をする。

「べ、別に特別な関係じゃないよ。なんというか……ほら、春澄ちゃんって盲目じゃない、だから」
「確かに、昇がそういう人に対して優しいのは分かるわよ。でもさ……」
と言ってから琴未は写真の中から一枚を適当に手に取ると昇の目の前に突き出した。その写真には楽しそうに春澄と会話をしている昇の姿がしっかりと映し出されていた。そんな写真を見ながら昇は何とか言葉を口にする。
「ほ、ほら、普通に話してるだけじゃない。だから」
「昇、凄く楽しそう」
「うっ」
シエラの一言に胸を貫かれる昇。そう、確かにテーブルに散らばっている写真の数々。その写真に写っている昇は、どれもこれも楽しそうな笑顔で春澄と話している様子をしっかりと写し出しているのである。そんな証拠を前にして昇は言葉を失った。
そんな光景を見ていた彩香が楽しそうに横から口を挟んできた。
「おやおや、昇君や。こんなにも美少女に囲まれながらも、別の女の子に手を出すつもりかい」
「って！　母さんもからかわないでよ」
「でも証拠の写真が沢山」
「ぐっ」
「ですよね、おばさんっ！　これって絶対に浮気ですよね！」
「まあ、これだけの証拠があると、とっと、電話だ」
突如として鳴り出した電話に出るために席を立つ彩香。そして彩香が居なくなった事で、再び昇に対して攻撃を始めるつもりなのか、琴未を始め、決定的と言える写真を探し始める琴未達。だが事態は意外な方向へと展開する。
「昇～、電話よ」
彩香がそんな事を伝えてきたのだ。時間はすでに夜だ、こんな時間に電話をしてくる相手なんて昇には想像できないが、昇としては

彩香の言葉が救済の言葉に聞こえ、電話には後光を見る昇だった。
　そんな昇が電話ならしょうがない、という感じを出しながら、少し嬉しそうに電話に向かうと彩香から受話器を受け取り、電話を代わると、相手は思いも掛けない人物、いや、正確には精霊だった。だが、それ以上に慌てた、いかにも非常事態であるような早口で喋ってくるのだった。
『昇様ですか、咲耶でございます。夜分ながら失礼かと思いますが事態が急を要する事態が発生したのでお電話をした次第でございます』
「咲耶さん？」
　まさか咲耶から電話が来るとは思っていなかっただけに昇の胸には嫌な予感が走った。だからこそ、余計な事は言わずに咲耶の言葉を聞くことにした。
『単刀直入に申し上げます。出来うる限り早く、援軍をお願いします。今現在、我らの屋敷は精界の中で、私だけが脱出してセリス様を守護しているのですが、主様達は戦闘中です』
「フレト達が戦闘中っ！　それってどういう事？」
　あまりにも思い掛けない緊急事態。電話の向こうに居る咲耶はかなり焦っているようだ。昇はそんな咲耶に対して要点だけを説明するように求めるのだった。そんな昇の言葉を聞いて、咲耶は早口で一気に説明する。
『いきなり、お屋敷が精界に包まれたんです。ラクトリーによると相手は二人、つまり契約者と精霊だけになります。だから主様は自分達だけで迎撃出来ると判断して迎撃に向かい、私はセリス様を守るために、非常用の精界破壊装置を使ってセリス様の元へ戻りました。相手が二人なら私も問題は無いと思いました。ですが、ラクトリーから非常用の救援信号が届いたんです。精界の中はここでは何が起こっているかは分かりません。私もセリス様の傍に居なければならないですから。だから昇様、お願いします。どうか援軍として来てください』

「分かりました、すぐにフレト達の元へ行きますから。咲耶さんは、そこをお願いします」
『ありがとうございます、では』
昇は慌しく電話を切ると真剣な眼差しでシエラ達の方へと振り返る。シエラ達も電話とはいえ昇の雰囲気から何かあったのかが察したのだろう。だから今は昇の言葉を待つ事にした。そんな昇がシエラ達に告げる。
「フレト達が誰かに襲われてるみたい。相手は分からないから、こっちは全員でフレトの援軍に向かうよ。詳しい事は走りながら話すから、皆はすぐに出かけて戦える準備をして」
そんな昇の言葉にシエラ達はすぐに動き出す。シエラ達はすっかり普段着になっていたから、とてもでは無いが、外に出歩く服装ではない。だから着替える必要が有ると、女性陣はすぐに部屋に戻って行った。そんな女性陣とは変わって、昇は普段着でも出かけられる服装をしている。まあ、ここは男女の違いと言ったところだろう。だから、昇はその間に彩香に告げる。
「母さん、ちょっと非常事態だから、出かけてくるね」
「あいよ……昇、下手打つんじゃないわよ」
「うん、分ってる」
それだけを言うと昇も玄関に向かって駆け出した。二人とも詳しい事は一切、話はしなかった。もしかしたら、もう彩香は既に全てを知っているではないのかと昇は思ったが、口にはしなかった。それはたぶん、どんな事があっても昇が自分自身で進んでいかなければならない事を彩香は態度で示しているのではないのかと昇は考えたからだ。だからお互いに余計な事は口にしなかった。
なんにしても、今現在、フレトの屋敷では戦いが行われているのだから。今はフレトの救援に向かうのが最重要事項である。だからこそ昇は気を引き締めながらも、玄関で全員が揃うのを待っていた。そんな昇が不安を感じつつも思う。
フレトの事だから大丈夫だと思うけど……何なんだろう、この不

安と焦燥感は。理由は良く分からないけど……何かが動き出したような気がする。もう、引き返せない何かが。そんな理由も無い思いが昇の胸を締め付けるように、何かの因果を感じながらも昇達はフレト達の救援に向かうために動き始めるのだった。

第百三十三話　楽しい時間（後書き）

はい、そんな訳で……思いっきり長くなって、密度も増し増しの今回ですが……いよいよ物語が動き始めた感じが出てきましたね。

そんな訳で……次回はいよいよバトル開始ですっ！　ん～、今までのエレメに比べれば、本格的なバトル開始が遅すぎる感じがしますね～。まあ、それだけに、今までの展開が重要であり、バトルが引き立つというものなのですよ。

そんな訳で、次回はいよいよ戦闘開始です。久しぶりのバトルシーンなので……もしかしたら長くなりすぎるか、二話に分ける可能性もありますね。なにしろ……久しぶりですからね。

まあ、なんにしても、次回は久しぶりのバトルシーンをお楽しみくださいな。誰と誰が戦うかは、もちろん、まだ内緒。次回をお楽しみに～。

さてさて……蘇れっ！　私っ！　そう……腐ったゾンビのように……って、それじゃダメじゃんっ！　ううっ、せっかく最近になって復活してきたと思ったら、すっかり腐ってたよ。まあ、前々から腐っていたのは忘却の彼方に投げるとして、ここまで腐ると……後は焼くしかないのかな。

そうなると……ゾンビからガイコツに転職って事になりますよね～。というか、この場合はどっちが強いんだろう？　まあ、どちらにしても……回復魔法を掛けられたらダメージを受けそうですね。

えっと、それはつまり……今の私は回復すら許されないって事ですかっ！　そこまで進行してしまったんですかっ！　既に復活魔法も効かないのですかっ！　誰か私に復活魔法を掛けてっ！

……復活は失敗に終わった。

なんですとっ！　くそっ！　こうなったら転生しかない、私は再び生まれ変わるのだっ！　それっ！

……マッチ棒の明かりに転生した。

食物連鎖にも入れてくれないんですかっ！　っていうか、マッチ棒の明かりってっ！　マッチの火が消えたら同時に消えるって事じゃんっ！　えっ、私の命ってそんなに儚いの？　だったら食物連鎖の一番下で良いから入れてくださいっ！　儚い命でも良いですからっ！　……えっ、ダメ？　残ってるのは水銀だけ……有害物質じゃんっ！　私は有害って事ですかっ！　……はい、そこで肯定した方……うわ～ん、いじめられた～、バカ～（大泣き）

っと、そろそろ意味の無い戯言はお終いにして締めますか。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、自分が風邪をひいてた事に半月以上も気付かなかった葵夢幻でした。最近になって、やっと治ってきたよ（涙）

第百三十四話　フレト邸来襲

昇達が帰宅した頃、春澄達は目的の場所に到達していた。それからアルビータは春澄の手をゆっくりと離すと春澄に向かって話しかける。

「本当に良いんだな？　ここの住人はあの少年と友達なんだろう。そんな奴らを襲ったら……」

最後だけ言葉を濁すアルビータ。どうやら最後まで言わなくても春澄には分ってるだろうし、春澄の意思をしっかりと確認したいからこそ、最後まで言わなかったのだ。そんなアルビータの心境を見抜いたように、春澄はアルビータの方へ顔を向けると、閉じた瞳のままでアルビータに話しかける。

「それで良いんだよ。私達がここを襲えば、必ず……昇さんは動き出すから。その時こそ、昇さん達と本気で戦う時だよ。昇さんの能力については分からないけど……昇さんなら私達の期待に答える事が出来る。少なくとも、私はここ数日の会話で、そう確信したんだから。だから……まずは昇さんを本気にさせないと」

そんな春澄の言葉を聞いてアルビータは溜息を付いてから返事をしてきた。

「まあ、春澄があの少年に対して、そこまで言うなら信じよう。我らの望みが叶う事を、そして……」

「そう……そして……終焉の幕を閉じるために。だから……今を戦うよ」

「了解した、我が主よ」

その会話を最後にアルビータは精神を集中するのだった。

同じ時刻、フレト達は早めの夕食を終えて、フレトはセリスと夕食後のティータイムを楽しんでいた。そこにはレットが護衛のよう

に近くにおり、ラクトリーもお茶を楽しんでいた。そして咲耶はやっぱりフレト達のお茶汲みをしていた。

フレト達にとってはごく普通の、いつも過ごしている時間だ。だが、そんな時間を壊すかのようにフレトは違和感を感じると、今まで目の前に居たセリスの姿が消えた。それと同時に非常事態を示すアラートが成り始めた。

「半蔵っ！」

フレトは真っ先に半蔵を呼び付けた。そして、半蔵もどこからか姿を現して、今ではフレトの前で膝を付いている。そんな半蔵にフレトは尋ねる。

「何事だ？」

非常事態のアラートが鳴っているのだから、何かが起こった事はフレトにも分っている。だが詳細は一切分からないのだ。だからこそ半蔵を呼び付けたのだ。その半蔵がフレトの質問に対して簡潔に答える。

「精界に屋敷が飲み込まれました。精界の規模は屋敷と同じ位の範囲からして、相手は確実に若様が契約者だと分かっての行動だと思われます。相手の数と位置はラクトリーに」

半蔵の報告を聞いてフレトはすぐにラクトリーに顔を向けた。すでにラクトリーは何かを調べているかのようにモニターを空中に浮かべて、空中に浮いてるキーボードを叩く。やはり、突然の事なので、ラクトリーも調査が完成するには時間が掛かるようだ。そんなラクトリーとは正反対に半蔵がすぐに現状を報告できたのは、フレトが半蔵に対して常に屋敷の警備も命じていたからだ。

そんなフレトの命令を受けていたからこそ、半蔵は屋敷に何があっても分かるように、常にいろいろな仕掛けをしている。そのおかげで緊急事態でも慌てる事無く、フレトは現状を知る事が出来たのだ。

そんな半蔵の働きによってフレトも冷静さを保てているようだ。だから、精界に対して違和感があるのにも、しっかりと気が付いた

ようだ。だからフレトは、その事を半蔵に確認する。
「半蔵、精界は作り出した者の属性によって、精界内を染める色が決まるのだったな。だが……この精界は何色にも染まってないぞ」
「言われてみれば……そうですね」
精界が張られたからには、いつ戦闘が起こっても不思議ではない。だから、フレトを守護するために隣に来ていたレットがフレトの意見に同意する。確かに、フレトの言った通りなのだ。
精界内は精界を張った者の属性によって世界が染まる。地の属性なら茶色、火の属性なら赤と属性からイメージされる色に染まる。もちろん、ちょっと分かり辛い属性も存在する。イメージされる色が薄かったりすると分かり辛いが、フレトの屋敷を包んでいる精界は無色と言っても良いだろう。無色、つまり相手の属性からイメージ出来る色が無いという事だろう。そんな事がありえるのかとフレトは疑問に思ったのだ。
そんなフレトの問い掛けに半蔵はラクトリーの方を見てから、再び顔をフレトの方へ戻してきた。やはり人に説明するのは半蔵の得意分野ではなく、ラクトリーから説明した方が分かりやすいのだろうが、肝心のラクトリーは現状分析で手が離せない。だからこそ、半蔵は自分の口から説明する事にした。
「若様、属性が数多くあるからには、必ずしも色が付いてるとは限らないのです。私共も全ての属性を知っている訳ではございませんから」
「つまり、無色の精界があってもおかしく無いという事だな」
「御意に」
精界について納得したフレトだが、やはり気がかりな事があるのだろう。次はその事を半蔵に尋ねた。
「半蔵、精界の範囲は屋敷と同じだったな？」
「御意、屋敷を囲むように展開されてます」
フレトの質問に簡潔に答える半蔵。そんな半蔵の言葉を聞いてフレトは咲耶を呼びつけて命令を下すのだった。

「相手の人数が分らないからには、精界の外に敵が居てもおかしくない。だから咲耶は精界を脱出してセリスの守護に付け。この屋敷の外には精界を破壊できる装置が設置してあるからな。それを使って、すぐにセリスの元へ行け。こちらは何かあったら連絡を入れる。もっとも、俺の屋敷に乗り込んで来たからには、相応の報いを与えるつもりだがな」

「分かりました、主様。では、私はセリス様の元へ、主様達もあまり無理せず、何かあったら連絡をください。すぐに援軍を用意します」

そんな咲耶の言葉を聞いてフレトは鼻で笑う。

「援軍？　なに、滝下昇に頼るような事態にはならないさ。この屋敷に乗り込んで来たんだ、屋敷の主である俺がしっかりともてなしてやるさ」

そういうとフレトは咲耶に余裕を見せる笑みを浮かべて見せると、咲耶は一礼する。

「分かりました。それでは主様、ご武運を」

それだけを言い残して咲耶は頭を上げると、セリス様は任せてください、とばかりに口元に笑みを浮かべて、すぐに部屋を飛び出して精界からの脱出口へと急ぐのだった。

その頃にはラクトリーの分析も終わっており、ラクトリーはフレトに分かった事を報告を始める。

「マスター、敵の人数と位置が判明しました」

「それで、そいつらは何人で俺の屋敷に殴りこみに来て何をしている」

「敵の人数は二人、どうやら契約者と精霊の二人だけみたいです。その二人は正門を抜けた位置で止まっております。どうやら、私達が出てくるのを待っているみたいですね」

「ふむ」

ラクトリーの報告を聞いてフレトは思考を巡らす。

意外と人数が少ないな。だが……相手も勝算が無いのに戦いは仕

掛けてこないだろう。少なくとも宣戦布告の意味を含めての精界だ。何かしらの交渉が目的なら、いきなり精界は展開させないだろう。つまり、相手は最初から戦意を示しており、何かしらの勝算があるというわけか。そうでなくては相手も戦いを挑んでこないだろうな。それにしても……。

どうやらフレトには引っ掛かる点があるらしく、思考が自然とそちらへと向かうのだった。

どうして俺達の事が分かったんだ？　与凪が言うには俺達の事も分からないようにカモフラージュしてあるはずだが、それにラクトリーも屋敷に仕掛けをしていて、俺が契約者だと簡単には分からないはずだ。だが……今回の相手は確実に俺が契約者だと知って、しかもピンポイントに屋敷だけを精界を包んだ。どう見ても、相手はここに契約者が居る事、更に精霊が居る事を承知した上での行動だろう。与凪とラクトリーに限って、俺が契約者だと簡単に分からせるようなミスはしないはずだ。だが……相手は俺達の事を確実に知ったうえで精界を屋敷だけに絞り込んでいる。そこに何かあるな、もしくは……それが相手の勝機に繋がるのか？

そんな思考を巡らしていたフレトに半蔵が声を掛ける。

「若様、敵の意図は分からないにしろ、これは明らかに宣戦布告。あまり後手に回るのはいかがかと」

「そうだな……ラクトリー、相手は未だに動いていないんだな？」

フレトの質問を受けてモニターを確認したラクトリーが即答する。

「はい、相手は未だに正門を抜けた位置で止まっております」

「そうか……まあ、正道と言えば正道だな」

「御意」

フレトの言葉に半蔵がすぐに肯定する返答をする。もちろん、半蔵がフレトの言葉を肯定したのにも、フレトが発した言葉にもしっかりとした理由がある。

フレトの屋敷はかなり広い。そんな中を良く知らないままに進むという事は、いつ相手の罠にかかってもおかしくは無いという事だ。

それだったら、屋敷の中には入らずに、相手を引きずり出してから戦った方が、屋敷の中を知らない相手にとっても好都合という物だろう。

だから逆にフレト達としては屋敷の中に引きずり込んで、屋敷の構造を活かして戦えば有利に戦局進められるだろう。だが、相手も屋敷の構造を知らない、屋外の中で戦う事が不利だという事を心得ているのだろう。だからこそ、相手はフレト達を引きずり出そうと、未だに正門を動かずにいるのだろう。少なくともフレト達は、そう考えていた。

更に理由を挙げるなら屋敷の構造が関わってくる。なにしろフレトの屋敷は、近隣にならぶ住宅を数十宅を集めたぐらいに広大だ。だから正門から玄関までも距離があり、更には正門と玄関の間には前庭が広がっている。

前庭は芝が広がっているどころか、木々もあり、花壇もある。かなり腕の良い庭師が居るのではないのかと思ってしまうほど手入れが行き届いている。だが、逆に言えば、これほどの広さがあれば戦うのには何の支障も無い。それほどまでに広いのだ。だから相手としても、知らない屋敷内よりも前庭にフレト達を引きずり出した方が、断然と戦いやすいのだ。

そんな理由があるからこそ、相手も正門を潜った位置から動かずにいるのだろう。なにしろ寄せ手、つまり攻め込む方にとっては、知らない屋敷内、更に時間帯は夜である。暗い屋敷内での戦いは不利以外の何物でも無い。だから相手が動かないのも当然だと言えるだろう。

もちろん、フレトの方でも、この屋敷に敵が侵入してきた時の事を考えて、さまざまな罠が仕掛けられている。当然と言えば当然だろう、なにしろ敵が、この屋敷を襲撃してこない保障は無いのだから。だから襲撃を受けた時の準備だけはしっかりとしていた。セリスを守るためにも、フレトはそこの所はかなり気を使って、念入りに準備をしていたのだが、相手が動かないとなると、屋敷内に仕掛

けた罠も意味を成さない。
　そうなると、どうするべきかとフレトは考える事無く、すぐに行動に出た。
「とにかく、侵入者が正門の位置から動かないのなら確かめに行くぞ」
『はっ』
　フレトの言葉にすぐに返答をする精霊達を引き連れてフレトは部屋を後にする。もちろん、確かめると言っても、このまま正直に敵の前に姿を現すわけでは無い。ただ、屋敷は広いだけはなく、高さもある。だから前庭が見渡せる部屋なども幾つかはあるのだ。フレトは正門が真正面に見る部屋、その部屋は三階に辺り、その部屋から相手に気付かれぬように壁に身を隠しながら侵入者を窺う。
「……んっ？」
　侵入者の様子を覗き見たフレトが思わず、気の抜けた声を上げてしまう。それも仕方ないだろう。なにしろ侵入者は二人、一人はいかにもいつでも戦えそうな雰囲気を出しており、屈強な肉体は見ただけでも強さを感じさせるほどの巨漢な男性だ。雰囲気だけでも、戦意が出ており、話し合う余地無く、戦う気概を見せていた。
　だが、フレトが声を上げたのは、もう一人の侵入者を見たからだ。もう一人の侵入者はいかにも少女であり、その少女が……前庭で遊んでいるように見えたからだ。というか、どう見ても、遊んでいるようにしか見えなかった。
　綺麗に咲き誇っている花壇を楽しげに見て周ったり、均等に切り揃えてある芝生の上を寝転がって、そのまま転がったりと、遊びたい放題だ。そんな少女の姿を見たからこそ、フレトは声を上げたのだ。
　確かに男性の方だけを見たなら、相手が戦う目的で、こんな行動に出てきたのも分かるだろう。だが、無邪気に遊ぶ少女を見るとフレトはワケが分からなかった。だからこそ、フレトと同じく外を覗き見ているラクトリー達に尋ねる。

「あ～、とりあえずラクトリー、あの少女は何をしてるんだ？」
そんな疑問を受けて、ラクトリーも返答に困ったような顔を見せながら、見たままの事を口にするのだった。
「どう見ても、遊んでいるようにしか見えませんね。あるいは、何かの意味があるのかと」
「俺には、あの無邪気な笑顔を見ると、遊んでいるようにしか見えませんけどね、フレト様」
ラクトリーの言葉に横から口を挟むレット。まあ、正直に言えば、ラクトリーもレットと同じ意見だろう。だが、相手が侵入者である事は確かである。だからこそ注意を促すような言葉を付け足したのだが、レットは、それすら無用だと思ったのだろう。だからこそ、横から口を挟んできたのだ。
そんなレットがフレトに尋ねてきた。
「それでフレト様、いかがいたします？」
そんなレットの問い掛けにフレトは少しだけ考えると、すぐにラクトリーに向かって指示を出すのだった。
「ラクトリー、とりあえず、あれを出せ。それで相手の力量を見極める」
「どの程度出しますか？」
「全てだ」
「分かりました」
ラクトリーの質問に即答で言葉を返すフレト。そんなフレトの言葉を受けてラクトリーは頷くとモニターとキーボードを出現させた。そしてキーボードを叩いて何かの操作を始める。
そんなラクトリーの操作が終わらないうちに前庭では変化が起きていた。地面には幾つもの魔法陣のような物が出現していた。それを見た少女はすぐに男性の元へ、駆け寄り、そのまま男性の後ろに身を隠すのだった。その間にもラクトリーの作業は続き、魔法陣から次々と鎧のような物が頭から迫り上がる。
その鎧達はそれぞれに武器を手にしており、空洞なはずの兜から

は紅い瞳がしっかりと見て取れた。そう、これがフレトが用意していた罠の一つ、前庭に五十体ほど用意していた機動ガーディアンだ。しかも与凪が作り出した最新作である。だから機能性も充分に補償されている。

フレトは、まず機動ガーディアンを当てる事で相手の力量を見ると共に、相手がこの程度で倒される程度なら、一気に機動ガーディアンで押し切るつもりでいた。そして、フレト邸の前庭には機動ガーディアンで満たされた。

そんな状況に少女は怯えるどころか、興味津々と言った感じで起動ガーディアンを見ていた。そんな少女を守るように男性は高らかに叫ぶ。その声がしっかりとフレト達にも聞こえるほどの大声で。

「ツインクテラミノア＜二つの両刃斧＞！」

男性が叫ぶのと同時に男性の前には巨大な両刃斧が二つ、クロスさせた状態で出現した。男性の身体も重装備とまでは行かないが、重厚な鎧を身にまとっていた。そして男性は両刃斧を手に取ると大きく振り抜く。その風圧だけで、余程の威力があったのだろう。二人を囲むように陣取っていた機動ガーディアンの数体が少しだけ体勢を崩す。どうやら威力はかなりの物のようだ。

それでも五十体もの機動ガーディアンである。いくら威力があろうとも、そう簡単に気に抜けられるものではない。そう、フレトは考えていた。だからこそフレトはラクトリーに向かって指示を出す。

「攻撃を精霊と思われる男に集中して全機を突撃させろ」

「契約者の方が良いのですか？」

フレトの命令を聞いてラクトリーが、そんな質問をしてくる。その質問もフレトは即答で応じるのだった。

「あの少女は、どう見ても戦闘向きではない。後方からの遠距離型とも考えられるが、そうだとしても攻撃の要は前衛の精霊だ。だから、あの精霊さえ倒せば、あの契約者に戦うだけの力は残らないだろう」

「分かりました、では、そのように」

フレトの言葉を聞いて、少し嬉しそうに操作を始めるラクトリー。それはフレトに成長の跡が見えたからだろう。

今までのフレトなら、機動ガーディアンを二つに分けてから契約者と精霊、それぞれに機動ガーディアンを当ててた事だろう。だが今のフレトは違う。少し見ただけで相手の戦い方を読んだのだ。少し見ただけで攻撃の要が前衛の精霊にあるというフレトの読みは間違ってはいないだろう。それは経験を積んだラクトリーや半蔵にも読めた事だろう。つまり、フレトも相手の陣容から相手の意図を読む。そんな技術をいつの間にか身に付けていたのだ。

それはフレトが成長した跡であり、ラクトリーは自らの主が成長した事に嬉しさを感じていたのだ。

だが、いつまでも感賞に浸っているワケは行かなかった。なにしろ、すでに目標と攻撃命令を受け付けた機動ガーディアン達が一斉に動き出したからだ。すでに戦いの幕は上がったのだ、だからラクトリーとしてもものんびりと観賞している訳にはいかなかった。戦いが始まったからには出来るだけの情報を取得しておくだけでも、今後の展開で有利になる場合がある。だからラクトリーは、次には情報収集という作業をしなくてはいけなかったのだ。

ラクトリーが情報収集している間にも正門前では、すでに戦いが始まっていた。攻撃命令を受けた機動ガーディアンの数体が男性を囲むように、それぞれ槍を突き出すと、そのまま突撃を開始したのだ。

囲まれているだけでも不利だというのに、男性はまったく、その場から動こうとはしなかった。それどころか、後ろで見学するように見ている少女を気遣うのだった。そんな男性に数本の槍が一斉に突き出される。

普通なら避けてからの反撃が多いだろう。だが、男性はとんでもない事をして見せる。突き出された槍が自らの身体に届く少し前、男性は両手に持っている両刃斧を一気に振るうと、突き出された槍を砕いてしまったのだ。

しかも、それだけではない。突撃してきた機動ガーディアンすらも斬り裂いたのだ。確かに男性が手にしてる両手斧は柄の部分だけでも男性の身長と同じぐらいある。そのうえ、刃となっている斧の部分は柄の半分ほどある、巨大な物だった。そんな物を軽々と振るえば、確かに突撃して行った機動ガーディアンも一緒に撃破出来るだろう。

だが、相手の武器を砕くだけでなく、そのうえ機動ガーディアンも一緒に撃破して見せたのだ。そのおかげで切り裂かれた機動ガーディアンが爆発する。爆発により一瞬だけ炎と煙が一気に舞い上がり、その炎と煙を利用して、他の機動ガーディアンが剣を持って突っ込んで行く。さすがに機動ガーディアンだけあって、この程度の炎と煙は攻撃を阻害する物にはならないようだ。

逆に男性は機動ガーディアンを撃破した直後で動きが止まっていた。そこに、またしても数体の機動ガーディアンが剣を持って突っ込んでいく。今度は剣を持っているだけに、攻撃が多彩で、そう簡単にはさばけないはずだ。そのうえ、男性は攻撃をした直後である、動きが鈍ったり、止まったり、してもおかしくは無い。

そんな男性に機動ガーディアンが、積み込まれた戦闘思考システムをフル回転させて、最も有効的な攻撃をするために剣を振るう。男性から見れば、爆発の中を突っ込んできた機動ガーディアンに対して驚いてもいいはずだ。なにしろ、今度は先程のように直線的な槍の攻撃は無い。それぞれに上下左右から剣が繰り出されてくるのだ。男性は追い込まれたと言っても良いだろう。更に言えば囲まれてるだけに逃げ道が無い。つまり今の状況は男性にとって極めて不利と言っても良いだろう。

だが、またしてもフレト達は驚かされる事になる。

攻撃直後で動きが止まっていた男性だが、今度は二つの両刃斧を下に下げると、一気に振り上げたのだ。しかもフレトには目で追いきれないスピードで。だからフレトは何が起こったのかが分からず、ただ突撃して行った機動ガーディアンが空中に浮いているのを目に

し、その後に爆発するのを目の当たりにしたのだ。
そんな光景を見たフレトが思わず口にする。
「何なんだ、あの精霊はっ！　さっきのあれは何だ？」
そんなフレトの言葉を聞いてレットは一筋の汗を流しながら答える。
「突撃して行った機動ガーディアンの全てに一撃を入れて空中に斬り上げたんです。しかも、その後に、それぞれの機動ガーディアンに三回ずつ攻撃を入れました。パワーだけでなく、攻撃スピードもかなりものです、フレト様」
「なっ！」
レットの言葉を聞いてフレトは絶句する。それはそうだ、ただでさえフレトには男性の攻撃が見えなかったのだ。そのうえ、更に攻撃を入れてたと聞かされたら、フレトでなくても驚く事だろう。だが、さすがは爪翼の属性を持ってるレットと言えるだろう。先程の攻撃もしっかりと見えていたようだ。レットもスピードに関しては一日の長があるのは確かだろう。
そんなレットの言葉を聞いた後にフレトは視線を戦場へと戻した。そしてフレトは更に驚く事になる。なにしろ男性は既に突撃してきた機動ガーディアンの半分を撃破していたからだ。しかも驚く事に、男性は絶対に避けるか、受けるか、しないと防げない攻撃でも二つの両刃斧で機動ガーディアンの武器を破壊しつつ、機動ガーディアンを撃破しているのだ。
そんな光景を目の当たりにしてフレトが思わず叫ぶ。
「何だっ！　あの化け物はっ！」
フレトが驚いて、そんな言葉を口にしてしまうのも無理はない。威力だけならパワータイプの精霊と分かるだろう。だが……その精霊は明らかに違っていた。他の精霊には無い、フレトの言葉通りに化け物染みた強さを機動ガーディアンを破壊する事で見せ付けていたのだ。
攻撃の威力はもちろん、攻撃スピードの早さ、更には斬り返しの

早さ、反応速度の早さ、とにかく攻撃と攻撃の間に隙が無いのだ。
そこに、あれだけの威力を持った攻撃をハイスピードで放っている、だから突撃してくる機動ガーディアンを男性は軽々と次々に撃破しているようにフレト達には見えたのだ。
更にフレトを驚かせたのが……その精霊は最初の位置から一歩も動いていないのだ。正確には片足を軸に、身体を回転させながら、次々と機動ガーディアンを撃破している。
フレト達が用意したのは与凪が自信を持って開発した機動ガーディアンだ。だから性能面でも、機動ガーディアンにしては、かなり優秀だと言えるだろう。確かに機動ガーディアンは精霊に比べると戦闘能力は格段に落ちるが、これだけの数を簡単に、しかも一人で倒せるものではない。しかも、その場から一歩も動かずにだ。
普通の精霊なら、これだけの数を相手にするなら動き回って、撹乱しながら撃破して行ってもおかしくは無い。だが、現在戦闘中の精霊は足を完全に止めて、その場で向かってくる全ての機動ガーディアンを撃破して行っている。それは与凪が用意した機動ガーディアンの性能が低いわけではない。その精霊が強すぎるのだ。
そんな光景を目の当たりにしたからこそ、フレトは思わず、そんな言葉を口にしたのだ。そしてフレトは、思わず精霊の戦いに見入ってしまった。それほどまでに、その精霊は強く、華麗に機動ガーディアンを撃破して行ったからだ。
そんなフレトをラクトリーからの報告が現実に引き戻す。
「マスター、全ての機動ガーディアンが撃破されましたっ！　こんな短時間で……しかも一人でです……」
「何なんだ、あの精霊は？」
ラクトリーの報告を聞いて、そんな言葉を口にしてしまうフレト。それほどまでに、その精霊の強さがフレトの印象に強く刻まれたのだ。だからと言ってフレト達の戦意までもが消えた訳では無い。むしろレットなどは戦意を向き出しにしたような発言をする。
「強すぎますね、ですが……それぐらいの方が面白いですよ。フレ

ト様、ご命じください。私にあの精霊の頸を取って来いと」
どうやらレットはあれほどの強さを見せ付けられて、逆に火が付いたように戦意を高ぶらせているようだ。そんなレットとは正反対にラクトリーと半蔵は静かにフレトの言葉を待つ。
確かに、あの精霊が見せ付けた強さは異常過ぎるだろう。だからと言ってフレト達も、ここで退いては面目が立たない。それよりも戦いもしない退くなどとはフレトのプライドが許さなかった。だからこそ、フレトは思考を巡らす。
確かに、あそこに居る精霊の強さは異常だ。契約者の能力か？それもありえるな、なにしろ滝下昇というエレメンタルアップという能力を間近で見ているのだからな。だが、エレメンタルアップは、かなりのレア能力だ。そうそう持っているとは思えないな。そうなると、それに近い能力か？　だとしたら……取るべき作戦は一つだな。
何かを思いついたのだろう。フレトは精霊達の方へと振り返る。
「出るぞ、あの精霊を見る限りでは、小細工は無駄だろう。俺達が直接戦うしかないだろう」
「ですが、マスター。あの精霊と正面衝突では分が悪いかと」
ラクトリーがそんな注意を促すが、フレトは口元に笑みを浮かべる。
「心配するな、しっかりと作戦は考えてある」
そう言うとフレトは自分が考えた作戦を精霊達に告げるのだった。その作戦を聞いて、ラクトリーは驚きながらも、納得したような顔をし、半蔵は……相変わらず無表情で、レットはやる気をたぎらしていた。
そしてフレトの説明を聞いたラクトリーが感心したようにフレトに言うのだった。
「ご慧眼、感服しました。あの戦いのを見ながらも、そこまで見ていようとは思いませんでした」
そんなラクトリーの言葉にフレトは胸を張って偉そうな口調で答

える。
「当たり前だ。俺だって、いつまでも負け犬でいるつもりは無い。いつかは滝下昇を越える器を見せ付けてやるさ。お前たちも、その時までしっかりと俺を支えてくれ」
「はい、マスターの命ある限り、必ず」
「当たり前ですよ、フレト様」
「御意」
フレトの言葉にそれぞれの返答をする精霊達。そんな精霊達に背を向けて、フレトは再び窓から前庭を覗き見る。そして心の中では安堵の息を漏らしていたのだ。
実のところはフレトも、この作戦を思い付くまでは戦っている精霊にしか目に入らなかったのだ。それほどまでに、その精霊が見せた強さは印象的だった。だからこそフレトも、その精霊の強さしか見なかったのだが、さすがにアンブルとの一戦が堪えているのだろう。一度は冷静になろうとしたら、フレトの目に飛び込んできたのだ。だからこそ、フレトは作戦の立案が出来たのだ。
つまりフレトも結構、ギリギリのところで立てた作戦とも言えるだろう。だが、ここで自分が動揺してしまっては精霊達に示しが付かない。そう決断したフレトだからこそ、あえて偉そうな態度を取って、精霊達に動揺や戸惑いが生まれないようにしたのだ。
それだけでもフレトが成長した跡が見えるというものだろう。そんなフレトが窓の正面に立つと、窓を大きく開け放つ。そんなフレトの後ろには既に精霊達が居る。そんな自分の精霊達にフレトは振り向く事をせずに告げる。
「では、出るぞ」
『はっ！』
フレトの言葉に一斉に言葉を返す精霊達。その声を聞いたフレトは窓枠に足を掛けると、そのまま窓の外へと跳び下りた。そんなフレトに続けとばかりに精霊達も次々と窓から跳び下りる。そしてフレト達が着地したのは、玄関前に設置してある広いポーチの上だ。

フレトはそこからポーチの先に歩き出すと、相手の二人も話が出来る距離まで近づいてきた。
そしてフレトは、そんな二人を見下ろすような視線で話し始める。
「夜分に無礼な来訪だな。もっとも、俺はお前達を招待した覚えは無いし、勝手に入って来た泥棒と同じだからな。それなりに歓迎したつもりだったが、どうやら、あれでは力不足だったようだな」
そんな言葉を聞いて男性が一歩だけ前に出るとフレトに言葉を返す。
「無礼と非礼は承知の上、どんな歓迎を受けようとも私達から文句の言葉は出さない。それよりも、こうして私達の前に現れたという事は、私達の無礼な挑戦状を受け取ってもらえたと思って良いだろうか？」
「まったく、無礼極まりない挑戦状だな。だが……俺の屋敷に乗り込んできた上に、挑戦状まで叩き付けられたからには、俺としても受けないわけにはいかない。いや、拒否する事などは俺のプライドが許さんっ！　そちらとしても、俺の屋敷に乗り込んできたからには戦いは覚悟のうえだろうなっ！」
フレトの言葉を聞いて男性は軽く鼻で笑うと、フレトに向かって鋭い眼光を投げつけながら返事をしてきた。
「もちろん、戦う覚悟があってこその宣戦布告といえる精界。その精界に留まり、私の挑戦を受けてくれた事には感謝する。さあ、存分に相手をしてもらおう。我が名はアルビータ、終焉の幕を閉じる者だ」
「終焉の幕……だと？」
思い掛けない言葉に、そのままオウム返し言葉を返すフレト。そんな時だった、今までアルビータの後ろに隠れていた少女がアルビータの後ろからぴょんと出てくると、そのままフレトを見え上げると思ったままを口にする。
「アルビータ、そんなに焦らないで、私にもちょっとお話させてよ。ねえ、良いでしょ、フレトさん」

「お前……どこで俺の名を？」
　まさか相手が自分の名前まで知っているとは思っていなかったフレトは少しだけ動揺する。そこまで情報が漏れているとは思いも寄らなかった事だし、フレト達が隠している情報は、そう簡単に漏れるものでは無いからだ。
　だからこそフレトは動揺したのだが、少女は満面の笑みを浮かべながら言葉を返す。
「ん～、それは秘密。とは言っても、すぐに分かると思うけどね。ついでだから私も自己紹介させてもらうね。私は雫春澄、春澄って言えばフレトさんの仲間には分かると思うよ」
「……滝下昇か」
「はぁ～、凄いね。ほんの少ししか話してないのに。もう、昇さんの名前が出てくるんだ」
　そんな春澄の言葉を聞いてから、フレトは納得が行く物があったのだろう。すっかり動揺が消えて、今では冷静に春澄との会話を続けている。
「ふん、そんな事は簡単だ。俺達も、この国に来てから、そんなに時間は経ってはいない。そんな状況で仲間と言われれば、滝下昇の名前しか出てこないからな。少なくとも、この国で仲間と呼べるのは、滝下昇だけだ」
「あ～、なるほど、ちょっと失敗だったかな。でもでも、さすが外国の人だね～、髪の色とか瞳の色とか、日本の人と違ってるんだな～、って実感するよ。フレトさんを見れただけでも、結構収穫有りかな」
「……なんか、調子が狂うな」
　先程のアルビータとの会話とは打って変わって、春澄は無邪気に話すものだからフレトは、どう対応して良いものかと少しだけ戸惑っているようだ。一方の春澄は珍しそうにフレトを見ていた。そう……しっかりと瞳を開いて。
　一方のフレトは春澄に調子を狂わされて、返す言葉が無くなって

しまったのだろう。今ではすっかり呆れたという感じで、軽く頭を掻くのだった。そんなフレトを見て、アルビータも溜息を付くと春澄に言葉を掛ける。

「春澄、もう良いだろう」

「ん～、もうちょっとお話しないな～。だって、さっきの会話で戦う事は決まったんでしょ。だったら、もう少しフレトさんと話がしたいな～」

無邪気にそんな事を言い出す春澄にアルビータはもう一度溜息を付くのだった。そして、それはフレトも同じであり、呆れた表情のままに春澄に冷たい一言を投げ掛ける。

「悪いが、もうお前と話す事は無い。まだ語りたければ、戦いの中で自分自身が持つ刃で語ってみろ」

「ん～、そう言われても～。私は戦闘には参加しないし、力もあまり持ってないからフレトさん達の相手は出来ないんだよ。それよりもフレトさん、フレトさんの精霊が一人だけ精界から脱出したようだけど、何で？」

「なっ！」

さすがに今度の言葉には驚きを隠せなかったフレト。昇の口からフレト達の情報が漏れていても不思議ではないが、つい先程、セリスの元へやった咲耶の事まで知られているとは予想外どころか、想像も出来なかった事だ。だからこそフレトは驚きを隠せなかったのだ。

そんなフレトを見て、春澄は瞳を細めると、まるでフレトの全てを見透かしたような言葉を放ってきた。

「心配しなくて良いよ、私はアルビータとしか契約してないから、だから他に仲間はいないよ。だから良いよ、今からでも呼び戻しても。もしかして、この屋敷に住んでる、もう一人の方へ向かわせたのかな？　そんな心配しなくて良いのに～。こっちは正面から堂々と来てるんだから、そんな卑怯な真似はしないよ～」

「……お前、何者だ」

まるで全てを知っているかのような春澄の言葉にフレトは警戒心を強くした。確かに春澄が言ったとおりに、春澄自体は戦う力を持っていないかもしれない。だが、アルビータはまったく別だ。先程の化け物染みた戦いを見れば、この人数で戦っても有利に戦えるか分かったものではない。だからこそフレトは警戒心を強くしたのだ。先程立てた、作戦までも見抜かせないために。

だが、それこそフレトの杞憂というべきものだった。春澄は少しだけ考える仕草をすると、笑みを浮かべながらフレトに言葉を返すのだった。

「何者って言われても……分かんない。まあ、そこはアルビータと同じかな、私も……終焉に幕を下ろす者って感じかな～。それでフレトさん、逃がした精霊は呼び戻さなくて良いの？　アルビータは強いよ。フレトさん達でも敵わないから、だから、逃げた精霊が戻ってくるまで待ってあげるよ」

「ふんっ！　貴様らの相手など、この人数で充分だ」

「へぇ～、凄い自信だね～。まあ、良いや。アルビータ、そろそろ始めようか……前座の幕開けだよ」

「前座だとっ！」

さすがに聞き捨てならないのかフレトは怒った口調で言葉を返す。だが春澄は真剣な表情で瞳を細めると、独特な鋭い雰囲気を出し始めた。それからフレトに向かって冷たく言い放つのだった。

「そう、この戦いは前座に過ぎない。本番の戦いはもう少し後だよ。だからフレトさん、簡単にアルビータに負けないでくださいね。前座が盛り上がらないと……終焉の幕が下りないかもしれない。私達には時間が無いんですから、だからフレトさん……頑張って私達の期待に応えてくださいね」

冷たく言い放つ春澄の言葉がフレトのプライドに突き刺さる。さすがに確実に年下の相手にここまで言われるとフレトとしても、込み上げてくる怒りを抑える事が出来ないのだろう。それでもフレトの頭は冷静だった。それだけアルビータの強さが忘れられないほど

に強い印象として刻み込まれているからだ。
　つまり冷静さを失ったらアルビータには勝てない。そういう自覚があったからこそ、フレトは冷静でいられたのだ。だからこそ、フレトも声を荒げる事無く、鋭い刃を声に込めて春澄に投げ掛ける。
「良いだろう、そこまで言われたからには、俺もグラシアス家の家名を掛けて、この戦いに挑もうではないか。だが、俺はこの戦いを前座にする気は無い、ここで決着を付けさせてもらう」
　フレトの言葉を受けて春澄は口元に笑みを浮かべる。それが何を意味しているのかはフレトには分からないが、ここまでバカにされてはフレトとしても黙ってはいられないのは確かな事であった。
　そして春澄は冷たく細めた瞳をフレトに向けて言い放つ。
「そこまでやる気を出してくれるなんて、感謝が絶えません。それじゃあ、アルビータ。そろそろ始めようか。この戦いが……終幕の始まりだよ」
　それだけ言うと春澄は再びアルビータの後ろに退がる。それと同時にアルビータもツインクテラミノアを構える。それを合図にフレト達もポーチから跳び下りると同時に戦いの幕が上がった。
　そう……終焉に続く戦いが……

第百三十四話　フレト邸来襲（後書き）

さ～て……はい、予定が狂いましたっ！！！！　う～ん、本来の予定通りなら、すでにバトルを始めるつもりだったんですけどね。なんか、フレトさんが屋敷にいろいろな仕掛けをしたから、ついつい長くなってしまいました～。

でもでも、いよいよバトル開始ですよ。やっと戦いの幕が上がりましたね～。いやはや、なんか……今回はバトルに突入するまで長かったな。それと……今回のバトルも長引く予感がします。まあ、それはアルビータにも秘密があり、春澄にも秘密があるからですね～。

そんな二人を相手にフレトはいったい、どんな作戦を立てたのでしょうね。まあ、その辺を楽しみながら、えっと……毎度の事ながら……気長に次を待ってくださいなっ！！！！

さてさて、最近ではいろいろと溜まってるな～、と感じる今日この頃です。……はい、今の発言でいかがわしい事を想像した人は挙手～。その溜まっているではないですよ。ストレスと倦怠感が溜まってるという意味ですよ～。ふっふっふっ、先程の発言で何人がいやらしい想像をしたかな。ちょっと数えてみたい、お・と・し・ご・ろ。

別に悪いことじゃないんだから～、素直に口に出して良いんだよ。いやん、口に出して良いって、そういう意味じゃないよ。もっと、こう、素直に……ほら、ここだって、もう……こんなになってるじゃない。だ・か・ら、素直な気持ちを言葉に出して、聞いてあげるから。

……。

……ストレス発散がしたいっ！！！！！　酒だ、誰か酒を持って来いやっ！！！！　はい、素直な気持ちを出してみました～。さ～て、何人がいかがわしい想像をしたのかな？　それとも期待したのかな？

さすがに私の後書きでも、あの一線は越えられないですよ。まあ、超えてもいいんですけどね。そうすると……後書きだけが別世界になってしまうという罠が待っているんです（笑）

いや～、久しぶりに後書きで遊んだ気がしますね～。何か、凄く満足している自分が居ます（笑）

そんな訳で、ネタも尽きたし、書く事も無くなってきたし、飽きてきたので、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に、評価感想もお待ちしております。

以上、カラオケに行って、ノンストップで三時間も歌い続けた葵夢幻でした。

第百三十五話　伝説の再来

アルビータと機動ガーディアン達の戦いを見ても、アルビータには、かなりの戦闘能力が備わっている事はフレト達も充分に承知している。だからこそ、下手に防戦に回るワケにはいかなかった。なにしろ、相手が機動ガーディアンだからこそアルビータも本気ではなかっただろう。そんなアルビータが本気を出せば、フレト達は苦戦をする事は必須なのは変わり無い。

だからこそ、フレトは少し奇策とも言える作戦に打って出たのだ。だが、そのためには、まずはアルビータの相手をしなくてはいけない。だからこそ、フレト達が一斉に地面に降り立つのと同時にレットは背中の翼を広げると低空飛行のままアルビータに突っ込んで行ったのだ。

まずは、こちらから仕掛けてから自分達のペースに持って行こうとしているのだ。そうでもしないと、あそこまでの力を見せたアルビータに対して防戦一方になってしまう可能性が高いからだ。だからフレト達は戦いの流れを自分達のペースに持って行くために、ここは攻勢に出る事にしたようだ。

だが、アルビータはそんなフレト達の思惑すらも気に留めないような素振(そぶ)りで、突撃してきたレットと刃を交える。さすがに空中からの攻撃に対してはアルビータも機動ガーディアンのようには行かないのだろう。

それは上から攻撃しているという点もある。単純に言えば、上から攻撃する方が有利なのだ。相手よりも高い目線から、真上という、最も防御がやり辛い場所に攻撃が出来る。だからこそ、昔の戦でも騎乗して戦った方が有利とも言われている。最も、時と場合によるが、騎兵は槍衾(やりぶすま)のような戦術に弱かったりもする。

だが、上空からの攻撃は相手が地に足を付けてる限りは有利な点だとも言えるだろう。そのうえ、レットは爪翼の属性。半分は翼の

属性を有しているからこそ、上空からの攻撃には慣れているのだ。そのうえ、爪の属性によってレットのテルノアルテトライデントは刃の切れ味が上がっている。だから、レットのトライデントに少しでも切り裂かれたら、かなりのダメージになる事は必然と言えるだろう。

だが、アルビータのツインクテラミノアは完全にレットの攻撃を防いでいた。それどころか、まるでレットの攻撃が有している属性を無視するかのように、反撃も加えてきたのである。そのため、レットもアルビータのツインクテラミノアを防ぎながらも、打ち合う形になって行った。

その状態は拮抗しているとも言えるだろうが、決して、そうでは無い。なにしろ、相手の上を取った時点でレットは有利な位置から攻撃できるし、翼の属性なら空中を自由に移動できる。そんなレットを相手にアルビータは、ほとんど動く事無く、二つの大きな両刃斧を振るうだけでレットの攻撃を防いでいるのである。それだけでも、アルビータの戦闘能力が高い事を示すのには充分だろう。

なにしろ、ツインクテラミノアはアルビータの身長ほどあると思われる、長い柄の先に柄の半分ぐらいはあろうと思われる斧の刃が柄の左右に付いている両刃斧である。それは一本だけでも、かなりの重量だろう。だがアルビータはそんな両刃斧を二本、つまり左右で一本ずつの両刃斧を片手で振るっているのだ。それだけを見れば威力重視の攻撃をしてくる事は分かるが、アルビータはレットに負けないスピードでツインクテラミノアを振るっているのだ。

普通、ここまでの大きな武器ならば、スピードを落として、一撃必殺を狙うの普通だろう。だが、アルビータはそんな事を気にせずにツインクテラミノアを振るってくる。それに武器の特性を見ればツインクテラミノアの重量がかなりある事も分かるだろう。そんなアルビータの攻撃を受けているレットはトライデントから伝わってくる衝撃も、とてつもないほどの衝撃を伝えていた。それでも、レットがアルビータと対等に渡り合ってるのは、やはり上を取ったと

いう点が大きいだろう。
　なにしろ、危なくなればレットはツインクテラミノアの範囲外である上空まで移動すれば簡単に避けられる。実際にレットはここまで打ち合っている中で、何度か上空に逃げては、すぐに反撃に出ている。だからこそ、二人の戦いは拮抗しているようにみえながらも、レットは有利とはいえない状態になっていた。
　それは今まで二人の戦いを静観していたフレトとラクトリーにも良く分っていた。そんな二人の戦いを見ながらフレトは横に居るラクトリーに話し掛ける。
「やはり、レットだけでは分が悪いか」
「マスター、それは最初から分かっていた事です。あまりレットを苛めては可哀相ですよ」
「別に苛めているつもりはないんだがな、それで半蔵の方はどうだ」
「すでに準備が整っているかと」
「よしっ！　なら俺達も参戦するぞ」
「はっ」
　フレトの言葉に気合を込めた返事をするラクトリー。そんな二人が攻撃態勢に入る。フレトはマスターロッドを向けて、ラクトリーはアースブレイククレセントアクスを地面に突き刺す。そしてフレトは詠唱を開始する。
「吹き抜く風よ、我が前に集り、巨大な渦と化して敵を滅せよっ！」
　フレトは風のシューター。だから風の属性を持っているから、風を扱う時には詠唱はいらないのだが、フレトはアルビータをかなりの強敵と見ているのだろう。だからこそ、確実にダメージを与えるために、わざわざ詠唱を加えて風のシュータだけでは出せない威力を出すために詠唱を入れてきたのだ。
　そんなフレトの詠唱が終わるのと同時に、マスターロッドの先からは小さな竜巻が生まれると、それはすぐにフレトの身長ぐらいまで成長し、アルビータに向かって放たれた。そこに追い討ちを掛けるかのようにラクトリーが更なる力を加える。

「アーススピア」

竜巻の直線状に地面から大地の槍が突き出す。だが、アーススピアは攻撃を重視した技であり、槍の強度までは確保していない。つまり、フレトが生み出した竜巻はラクトリーが出した、アーススピアを砕いて、飲み込み、竜巻の中に無数の大地の槍が渦巻く凶悪な状態へと変化したのだ。さすがにこれを避けるのは、困難だろう。なにしろアルビータは現在、レットと拮抗した戦闘状態とも言える。

レットならギリギリまでアルビータと戦いながらフレト達が放った攻撃を避けるのは簡単だ。だが、アルビータはフレト達の攻撃に気付きながらも、目の前に居るレットの攻撃を防ぎながら、どうにかしなくてはいけない。つまり、アルビータが置かれている状況は限りなく、回避不能な状態とも言えるだろう。

それはそうだ、なにしろ、この状況を作り出すために、フレトはレットに突撃を仕掛けさせたのだ。後はアルビータの足を止めて、そこに最大級の技をぶつける。これだけでも、弱い精霊なら確実に倒せるだろう。それぐらい、フレト達の攻撃は完璧だ。だからこそ、フレトも倒せなくてもダメージを与えられると思っていた。

そして、フレトの竜巻がレットとアルビータに迫り、レットはギリギリまでアルビータの足止めをすると上空へと回避した。一方のアルビータはまったく動く事無く、直前にまで迫った竜巻に顔を向ける。

よしっ！　フレトだけでなく、上空から見ていたレットも攻撃が入った事を確信しただろう。だが、ここから驚くべき事が起こるとは思いも寄らなかった事だ。

アルビータは向かってくる、大地の槍を交えた竜巻を目にしながらも、まったく動かなかった。それどころか、ツインクテラミノアを構える事をしないで下から一気に切り上げて。そんなアルビータのそっけない攻撃がフレト達が作り出した竜巻を切り裂き、そのまま消滅させてしまったのだ。

「なにっ！」

「これはっ！」
「どうなってんだよ」
そんな光景を見ていたフレト、レット、ラクトリーがそれぞれに驚きを示した。だが、フレトには、そんなに驚いている時間は無かった。なにしろ、フレトの攻撃を消滅させたアルビータがフレトに向かって行くからだ。
そんな光景を目の当たりにしたレットはすぐにアルビータを追い、ラクトリーはフレトの前に立つと、再びクレセントアクスを地面に突き刺す。
「アースウォール」
一瞬にしてフレト達の前に大地の壁がアルビータに立ちはだかる。だが、またしても、それは起こった。
大地の精霊は強固な防御と苛烈な破壊を主な力としている。だから、ラクトリーが作り出したアースウォールは強固であり、そう簡単に壊す事は出来ないはずだ。いくら相手が威力重視の相手でも、ラクトリーほどの力を持った者が防御を主体とした技を出してきたのだ。だからこそ、アルビータの攻撃は完全に防げるはずだった。
だが、またしても、ラクトリーのアースウォールはアルビータの放った一振りの攻撃によって簡単に切り裂き、消滅してしまった。
先程の竜巻といい、アースウォールといい、両者とも簡単に攻撃で消滅させたり、破壊できる物ではない。何より、フレト達の放った竜巻を切り裂いて消滅させるなんて、余程の威力がある一撃を放たなければいけない。けれども、アルビータはたった一振りで消滅させてしまったのだ。そして、今度のアースウォールといい、どちらも、そう簡単に消滅させる事が出来る物ではないはずだ。
だが、アルビータが消滅させた事は確かな事であり、だからこそ、アルビータは今度こそ、フレトに向かって攻撃を仕掛けようとした。だが、そこにはすでにフレトの姿は無かった。そう、先程のラクトリーが作り出したアースウォールはこのために作ったのだ。
ラクトリーはアースウォールを作り出した直後にフレトの手を取

ると、タイミングを見て、一気に横に移動したのである。つまり、ラクトリーが作り出したアースウォールはアルビータの攻撃を防ぐためではなく、フレトを守るための目晦ましだったのだ。そのため、フレトはアルビータと接触する事無く、何とか難を逃れたが、肝心のアルビータは無傷である。

そんなアルビータを相手にフレトは思った事を口にする。

「なんだ……あれは？　こちらの攻撃を相殺したワケでもなく、逸らしたワケでもない。完全に……消滅させた。いったい、どうなってるんだ、ラクトリー？」

フレトにはワケが分からなかったのだろう。いや、正確には攻撃の手応えから、そういう結論に至ったのだ。フレトにはアルビータの攻撃を感じなかった、つまり、アルビータがフレトの作り出した竜巻に攻撃した感触をフレトは得なかったのだ。そう、それは、フレトが口にしたように……消滅させられた感触を得ていたのだ。

そんな事が出来るのか、分からない。だから、フレトは一番の知識精霊であるラクトリーに尋ねるが、そのラクトリーも驚いたような顔で固まっていた。

そんな二人に向かってアルビータは追撃の姿勢を見せるが、レットが間に割って入り、アルビータを牽制しながらフレトの元へ後退していった。さすがのアルビータも警戒されている事を察したのか、その場での追撃を諦めて、改めてツインクテラミノアを構え直した。

アルビータとしては、ここで更なる追撃に入っても良かったのだが、フレト達に何かしらの策があると見抜いたのだろう。なにしろ、実際に戦闘状態に入ってからは半蔵が姿を消しているからだ。半蔵の能力はアルビータ達には、まだ不明なだけにアルビータは安全策を取って、追撃を控えたに過ぎない。

だからこそ、両陣営は睨み合う形になってしまったが、アルビータには余裕がありそうだ。そんなアルビータとは正反対にレットは舌打ちをして、確実に自分達が危なかった事を察し、そしてラクトリーは驚きの表情のまま、フレトに告げるのだった。

「マスター、どうやら私達は……伝説の再来を目にしているようです」
「伝説の……再来だと」
「はい、あれは正しく無の属性。そして、無の属性が使えるのは……命の精霊だけなのです」
「命の精霊だと？」
確かに命の精霊ついては与凪から話が出ていたが、運が悪いというべきか、タイミングが悪かったのか、フレトは命の精霊について話していた場所に居なかったのである。ラクトリーも良くある噂程度にしか思っていなかったために、フレトには話していなかった。それがまさか、ここで裏目に出るとは思っていなかった。つまり、フレトは命の精霊と言われても、それが、どんな、伝説であり、どんな力を持っているのかを知らないのだ。
だがラクトリーとレットは違うようだ。ラクトリーはともかく、レットも伝説の精霊については噂話として、それなりの知識を得ているようだ。だからこそ、レットがラクトリーに確認するかのように尋ねる。
「おいおい、ラクトリーよ。命の精霊について、俺もちょっとは知っているが、あれが本当に命の精霊なのかよ？」
そんなレットの質問にラクトリーもすらすらと答える。
「間違いないでしょうね。なによりも無の属性が使えるのは命の精霊だけ、他の精霊に無の属性が出たなんて聞いた事が無いです。それに、近頃は命の精霊が出たという噂が広まっているようでしたからね。その噂が本当で、目の当たりにするなんて私も思ってませんでした」
「なんてこった。まさか、こんな形で伝説を目にするとはな。それで、俺達は伝説の精霊を相手にどうやって戦えば良いんだ？」
そんなレットの質問にラクトリーはフレトの顔を見る。どうやらラクトリーがこれから言う事はフレトにもしっかりと聞いておいて欲しいという意思表示だろう。だからこそ、フレトも一回だけ頷く。

それを見たラクトリーは、軽く微笑むと無の属性について一気に話す。

「無の属性は属性を無効にする属性です。つまり属性を使った攻撃や防御は全て無効化、消滅させられます。ですから属性を使った攻撃は出来ません。ですが、レットのように移動に属性を使うのまでは無効化出来ません。要するに、属性を使った攻撃を全て無効化出来るのが、無の属性です。そうなると……こちらの手段が限られてきます。どうしますか、マスター？」

「随分と卑怯な属性だな」

「それだけなら、まだ楽なんですけど」

「まだ何かあるのか？」

ラクトリーに手早く質問するフレト。フレトも感じているのだろう、アルビータがこちらの準備が整う前に仕掛けてくるほどの殺気を放っている事を。つまり、いつ戦いが再会されても不思議では無いという事だ。だからこそ、ラクトリーも手早くフレトに説明する。

「簡単に言えば、命の精霊と契約した者は必ず同じ能力を得るんです。その効果は昇さんのエレメンタルアップとほぼ同じ。だから、先程の強さは納得できるという物でしょう」

「ほぼ同じというのは、どういう」

フレトが言い終わる前にレットが横から口を挟んできた。どうやら、既にお喋りをしている時間は無いという事だ。なにしろ、いつまで経っても半蔵は姿を現さない、その事がアルビータを牽制させていたのだが、この状態で奇襲を掛けてこない、という事は別の目的があると判断したのだろう。だからこそ、アルビータはフレト達の戦いを優先させようとしているのだ。

そんな状況を把握したフレトが頭の中で情報をまとめる。

つまりだ、あいつの戦闘能力は滝下昇と同様にエレメンタルアップと同じで、戦闘能力の底上げをしているというわけか。しかも、凶悪な事に無の属性という厄介な物まで持っているとはな。そうなると、こちらは属性攻撃を封じられたのと同様だ。ならば……相手

に合わせて戦うしかないな。
　フレトは素早く、そのようは判断を下すとラクトリーとレットに向かって指示を出す。
「レット、なるべく上空から仕掛けて死角を作れ。そこに俺とラクトリーが切り込んでく。属性が通じないのなら、武器で直接攻撃をするだけだ」
　そんなフレトの言葉にラクトリーは不安げな声で異論を口にする。
「ですが、マスターまでも前に出なくても良いのではないでしょうか」
　ラクトリーの不安も分からなくもない。なにしろフレトは基本的に属性を使っての遠距離攻撃を元に戦っているのだ。そんなフレトが前に出る事にラクトリーが不安を覚えてもおかしくはないだろう。だが、フレトには、しっかりとした考えがあるのだろう。ラクトリーに向かって笑みを浮かべるとはっきりと自分が考え、訓練してきた事を告げる。
「心配するな。滝下昇との戦いで分かった事だが、俺も遠距離だけの攻撃ではやられる可能性が高くなる。ならば答えは簡単だ、近接戦闘の技術を身に付ければ良いだけだ。そうすれば、こちらにとっても戦略の幅が広がって勝算が高くなるのは間違いはないだろう」
「……マスター」
「しっかり見ていろ、これがマスターロッドのもう一つの姿だ」
　そういうとフレトはマスターロットをアルビータに向けた。その事に両陣営に緊張が走る。けれどもアルビータは動きはしなかった。先程の戦いで察したのだろう。やはりフレト達は生半可な相手では無いという事を。だからこそ、アルビータはフレトを警戒しながら成り行きを見守る事にしたようだ。
　そんなアルビータをあざ笑うかのようにフレトはマスターロッドに力を注ぐと、攻撃ではなく変化へと力を持って行く。そして、フレトは新たなる武器の名前を高らかに叫ぶのだった。
「マスターランスっ！」

その途端にマスターロッドは光を放ち、光に包まれながら形状を変える。そして、光が消えるとフレトの手にはマスターロッドとは、まったく違う。フレトの身長ほどはあるであろう突撃槍が握られていた。

フレトらしくマスターランスには派手だから、気品がある装飾が刻まれており、しかも手をしっかり保護が出来るほどの内部空間が空いていた。簡単に例えるなら、開きかけの傘を想像してもらえれば良いだろう。そんな形をしているマスターランスを手に、フレトは笑みを浮かべると、そんなフレトの横にラクトリーがクレセントアクスを構える。それからフレトはラクトリーとレットに指示を出す。

「二人とも属性を含んだ攻撃をするな、そんな物に意味は無い。だからこそ、武器だけを頼りに攻撃を仕掛けろ。レットは上空から、ラクトリーは俺の動きに合わせて、同時多重攻撃を仕掛けるぞ」

「はい、マスター」

「分かりました」

フレトの指示を了解したように返事をするラクトリーとレット。そんな二人の返事を聞いて、フレトは満足そうに頷くとアルビータに鋭い眼差しを向ける。どうやらアルビータから仕掛けてくる様子は無いようだ。

アルビータもそれなりに考えているのだろう。だからアルビータも察しているはずだ、自分の属性がフレト達に知られた事を。だからこそ、アルビータはフレト達の出方を窺うのだった。なにより数ではフレト達の方が勝っているのだ。だから下手に突っ込んで行くと、フレト達に囲まれる事は必須。だが、こうして出方を窺っていれば、フレト達に囲まれる前に攻撃を仕掛けて、包囲を免れる事が出来る。だからこそ、アルビータからは仕掛けてこないのだ、とフレトは考えているだろう。

だからこそ、ここは素早く動かなくてはいけなかった。なにしろ、数の有利を活かすためにはアルビータを包囲するのが一番だ。だが、

逆に言えば各個撃破の機会を与える事にもなる。
つまり、フレト達が先に包囲陣を完成させるか、それともアルビータが誰か一人でも撃破して、もしくは突破すれば数の有利を減らす事が出来る。要するに、どちらが己の思惑通りに事を進められるか、この場合は、その時間こそが敵とも言えるだろう。
その事はフレトが分っているからこそ、拮抗状態が続いたのだ。だが、フレト側が完全に準備が出来たからには、もう拮抗状態を保つ必要は無い。フレトから見れば、一気に包囲撃破した方が勝算が高いからだ。だからこそ、フレトは攻撃の合図を出す。
「行くぞ、散開っ！」
フレトの言葉と同時に一気に上空に舞い上がるレット、それと同時にラクトリーは右へと走り、フレトはラクトリーとは反対側の左へと走り出した。これでアルビータは三人を同時に相手にしなくては行けない。だが、アルビータはまるで、それを望んでいるかのように口元に笑みを浮かべると、その場から動かずにツインクテラミノアを構えるのだった。
それはフレトとしては予想外だった。フレトはてっきり、アルビータは誰か一人に攻撃を集中して来ると思っていたが、今のアルビータを見る限りでは、まるで攻撃して来いと言わんばかりだ。
……罠か？　フレトは、それも考えたが、アルビータの戦闘能力と少し話しただけだが、ある程度の性格分析から罠の可能性は低いと判断した。そうなると出せる答えは一つだけである。そう、アルビータはフレト達の攻撃を完全に防ぎながら反撃に出ようとしているのだ。
先程、ラクトリーから契約者の能力について説明してくれた事が重要な判断材料になる。なにしろ、契約者である春澄は昇とほとんど同様なエレメンタルアップに似た能力を持っているのだから、アルビータも限界を超えて、力を発揮できるからこそ、フレト達を相手に出来ると判断したのだろう。
だが、フレトには、まだ引っ掛かる点が残っているように思えた。

けれども、今は攻撃を重視しようと、フレトは目で二人に合図を出すと、三方に散ったフレト達が一気にアルビータに向かって突っ込んで行く。

レットは完全に真上から、ラクトリーはやや後ろをとり、アルビータの右後方から、そしてフレトは、さすがに身体能力まではエレメンタルのように上げる事は出来ないのだろう。だからこそ、精霊に合わせて動ける訳がなかった。だからアルビータの左前方という位置取りで、三人は一気にアルビータに向かって突っ込む。

更に言えば、ラクトリーなどはワザと地の属性を発動させようとフェイント掛け、フレトも何かしらの詠唱を口にしていた。それが何を意味しているのか分からないが、アルビータの注意をある程度、フレトから逸らす事が出来た。だからこそ、三人は足並みを揃えて一気にアルビータに攻撃を仕掛ける。

上空からはレットがトライデントで斬り裂くように振るい、後方からはラクトリーがクレセントアクスを横一線に薙ぎ払おうとし、斜め前からはフレトがマスターランスを連続で突き出せるように、しっかりとマスターランスを握り締めながらタイミングを計る。

……今だっ！　三人が同時に同じ事を思っただろう。それだけに三人が攻撃に出たタイミングはピッタリと言えるほど正確な物だった。三方向からの同時多重攻撃である、さすがのアルビータも今度ばかりは避けるだろうと、それにフレトはワザと前を少しだけ空けてアルビータに逃げ道を作っていた。そうする事でフレトはアルビータの逃げる方向を知る事で戦況の流れを一気に自分の方へ持っていこうとしたのだ。

だが……流れを持って行ったのはアルビータで、驚かされたのはフレト達だった。

「なっ！」

「こんなっ！」

「おいおい、そんなのありかよ」

アルビータは片方の両刃斧でレットとラクトリーの攻撃を正確に

受け止めて、点で攻撃するフレトのマスターランスも、アルビータはもう片方の両刃斧で確実にマスターランスの先端を受け止めていた。つまり、アルビータは三方からの同時多重攻撃を見事に防いで見せたのだ。

確かにアルビータの行動には驚かされているばかりフレト達だったが、フレトも思考を素早く切り替えてきたのだろう。二人に向かって叫ぶ。

「手を止めるなっ！　このまま一気に押し込むぞっ！」

そんなフレトの指示を聞いてレットとラクトリーはすぐに次の攻撃に移る。その間にもフレトはわざわざアルビータの真正面に立ち、アルビータの逃げ道を完全に塞ぐ。そんなフレトがマスターランスを一気に突き出す。それでも、アルビータはフレトのマスターランスを片方だけの両刃斧だけで防ぎ、残りの一本はレットとラクトリーの対処に向けている。

それにはフレトなりに、マスターランスに仕掛けを施してあるからだ。フレトは詠唱を使う事で他の属性を使う事が出来る。それはマスターロッドだけでなく、このマスターランスも同じだ。そこで重要になってくるのが……攻撃の早さだ。つまり、フレトはマスターランスに翼の属性を付加させているのだ。だからこそ、アルビータはフレトだけに一本の両刃斧を使う事になってしまったのだ。

フレトもダメージの大小は無視して、とにかくダメージを与える事を重視したのだろう。だからこそ、フレトは翼の属性をマスターランスに付加させたのだ。そして翼の属性を付けたマスターランスが放つ、刺突の速さはマスターランスを自ら握っているフレトですら、何とか見えるほど早いものだった。

だが、傍から見ていれば、とてもじゃないがフレトの攻撃は見えた物ではないだろう。それなのにフレトには、何のか見えるのは、フレトが翼の属性を付加させた時点で、翼の属性であるスピードに適応させるために、瞳を重点的に身体にも属性の力が宿っているからだ。

だからこそ、フレトは翼の精霊と同等……とまでは行かないが、かなりのスピードで攻撃する事が出来た。それにフレトのマスターランスは形状から言って、突く事に重点を置き、横に斬り裂くとか、そうした事には向いてはいない。つまり、攻撃を刺突だけに絞る事によって、単純ではあるが、手数が多い攻撃を繰り出す事が出来るのだ。そこに翼の属性を加えたのである。だからこそ、アルビータはフレトの攻撃だけを防ぐために片方の手を使わざる得なかったといえるだろう。

そこにレットとラクトリーも攻撃しているのだからアルビータとしては防ぐだけで精一杯だろう。ちなみにレットが使っている爪翼の属性は翼の属性を含んでいるが、それは移動用のためであり、攻撃は爪の属性を使っている。だからフレトのように素早い攻撃を繰り出す事は出来なかった。それでも、ラクトリーと共に攻撃をしているのだから、手数で言えば二人を合わせてもフレトには負けていないだろう。

それにラクトリーは地の精霊では破壊型と言えるだろう。だから武器だけの攻撃でも、かなりの威力はあるはずだ。そこに爪の属性は効かないとはいえ、切れ味はしっかりとある武器で攻撃されているのだから、アルビータは追い詰められても不思議ではなかった。

だが、そんな三方多重攻撃にもアルビータは動じる事無く、反撃の機会を窺っているようだった。そんなアルビータに気付いたのだろう。フレトは攻撃の手を緩める事無く、言葉で揺すりを掛けてみる事にした。

「はんっ！　俺達の攻撃を受けながらも涼しい顔をしているな。だが……それで良いと思っているのか。お前が思っているほど、俺は甘くは無いし、弱くも無いぞ。それに……こちらは全戦力を投入したワケではないからな。お前の契約者、どう見ても戦闘向きでは無いだろう。それに戦う力も無いと見たが、それでもお前は涼しい顔をしていられるかな」

そう、実はフレトの狙いは、そこにあったのだ。つまりアルビー

タを足止めしているウチに春澄を一撃で片付けようというのが、フレトの考えた作戦だった。だからこそ、今は三人がかりでアルビータの相手をしている。

そしてフレトは自分の言葉にアルビータが動揺を見せると思っていただろう。だが、そんなフレトの期待を裏切るかのように、アルビータは未だに涼しい顔をしながら、攻撃を防ぎつつ、フレトに言葉を返す。

「残念だが、春澄を狙っても無駄だ。確かに春澄は戦闘能力は無い。だが、戦えない事が不利なるとは限らないぞ。それに……春澄は少し面白い能力を持っているからな、どんな精霊が相手でも、どれだけの人数を投入しても、春澄を仕留める事は不可能だろう」

「それは、どういう意味だ？」

フレトが尋ねると未だにマスターランスが凄まじいスピードで突き出されている中でアルビータはフレトの方に顔を向けて、口元に笑みを浮かべるのだった。それからアルビータは更に言葉を続ける。

「そのままの意味だよ、少年。さて、そろそろ私も反撃に移らせてもらうとするか。いい加減に防衛だけも飽きてきたのでな。さあ、少年よ、精々足掻いてもらおうかっ！」

アルビータがそう叫んだ瞬間、三人の目からアルビータは消えた。いや、正確には消えたように見えただけだ。つまりアルビータの動きを目では追いきれなかったのだ。けれでも、気配や空気の流れから相手の位置を察するのも戦いにおてい重要な事であり、ラクトリーもその事に気を配り、すぐにアルビータの位置を特定すると叫ぶ。

「下ですっ！」

フレトとレットがそこに目を向けると、身を屈めて、すでに次の攻撃態勢に入っているアルビータの姿を捉えた。そのため、フレトは考える暇も無く、防衛本能に従ってマスターランスを盾代わりにする。その間にもレットは上空に逃れ、ラクトリーもアルビータからの反撃に備える。

そして次の瞬間にはフレトは何かがもの凄い勢いでマスターラン

スに当たった事を感じるのと同時に自分が吹き飛ばされた事を悟った。確かに追い詰めるはずのフレト達だったが、たった一度の攻撃で、こうも簡単に形勢が崩されるとは思ってもいなかっただろう。

だからと言って、フレト達が不利になった訳ではなかった。確かにフレトは吹き飛ばされてしまったが、ラクトリーはしっかりとアルビータの反撃を受け止めていた。さすがは大地の精霊でミリアの師匠と言えるだろう。防御に関しても高い能力を持っているのは確かな事だ。

ラクトリーがアルビータの反撃を防いでるウチに、すでにアルビータの攻撃を避けたレットが攻撃を仕掛け始めたが、そんなレットの攻撃も、もう一本の両刃斧、先程までフレトの攻撃を防いでいた方で、今度はレットの反撃を軽々と受け流す。

そんな形勢を見て、フレトもすぐに立ち上がると、マスターランスに付加した翼の属性を駆使し、初動から猛スピードでアルビータに向かって突っ込んで行く。さすがに今度は両方の斧が塞がってるからには、フレトの攻撃を防ぐのは無理だろう。少なくとも、フレトは、そう思っていた。

だが、アルビータは突っ込んでくるフレトの姿を確認するとんでもない行動に出た。まずはレットのテルノアルテトライデント、その最大の特徴と言える爪のような三本の刃に両刃斧を突っ込むと、そのまま絡み付かせる。それから未だにアルビータの攻撃を受け止めていたラクトリーをクレセントアクスごとラクトリーを持ち上げてしまった。

「がぁぁぁぁっ！」

それから気合の掛け声と同時にツインクテラミノアを一気にフレトの方に向かって一気に振り出す。その間の時間は五秒も無いだろう、それだけの短時間でアルビータは力任せにレットとラクトリーを突っ込んできたフレトの方に投げ付けてきたのだ。

まさか、今になって、こんな力技を使ってくると思っていなかったフレトは仕方なく急停止、マスターランスの姿からロッドの姿に

戻すと、風を操って二人を受け止めると、何とか無事に二人を受け止める事が出来た。その事で一安心するフレト、だが、その油断こそが致命的な油断とも言えるだろう。

フレトが後ろに気配を感じて振り向いた時には、ツインクテラミノアの一本がフレトの身体に食い込む。もっとも、かなり身近に迫っての攻撃である。柄で殴ったというよりも拳を叩き込んだといった方が近いかもしれない。

だが、アルビータ行動はそこで終わりではない。フレトを吹き飛ばしたアルビータはそのまま、未だに空中に居るレットとラクトリーに追撃を掛けるようにツインクテラミノアを叩きつける。だが、ここでアルビータは不可解な行動を取った。さすがにあのタイミングなら斧の刃を叩きつけて大ダメージを与える事が出来ただろうう。だが、アルビータは斧の刃ではなく、刃が無い腹で、それぞれ一本ずつレットとラクトリーを同時に地面へと叩き付けたのだ。

そのため、レットとラクトリーは思いっきり地面に叩き付けられた反動で、再び宙に舞い上がり、その後にまた地面を二転、三転しながらフレトが転がっている地点の近くで止まるのだった。

確かにフレト達はアルビータの強さをしっかりと確認したつもりだった。それでも勝てるという勝機があったと思ったからこそ、戦いを挑んだのだが、フレト達は大きな計算違いをしていた。それは……アルビータの強さが、フレト達の計算以上に強いという点だ。まさか、フレト達もアルビータがここまで強いとは思ってはいなかっただろう。

それでも、まだ勝負が決まったワケではない。なにしろフレト達もダメージを喰らったものの、フレトは一回だけ崩れかけたが、今ではしっかりと立っている。それに続くかのようにレットとラクトリーも立ち上がろうとしていた。そんなフレト達を見て、アルビータは嬉しそうに口元に笑みを浮かべるのだった。

一方、そんなフレト達の戦いを遠くで見ていた春澄は粘っているフレト達に感心していた。

「へぇ～、アルビータを相手にあそこまで追い詰めたんだ、おかげでちょっと大目に注がないといけなかったよ。うんうん、さすが昇さんのお友達だよね～、そう簡単にはいかないか。でも、残り少ないと言っても、この戦いに決着を付けるだけの余裕はあるんだよね～。それに……戦いが終わったらフレトさん達からも少し貰っておこうかな～。そうすれば、今の戦いでも少しは遊べるよね」

誰に言うわけではなく、独り言のように話し続ける春澄。そんな春澄の背後に黒い切れ目が静かに、気配を消しながら現れるのだった。

第百三十五話　伝説の再来（後書き）

はい、そんな訳で……一ヶ月以上死んでましたっ！！！　いや～、なんといいましょうか。ほら、この時期って酷いじゃん……五月病……って、既に七月やねんってっ！！！　そっか～、じゃあ、七月病だね。そういう問題じゃないだろっ！！！

という事で何となく一人漫才をしてしまいました。いや、何となくね。もちろん、いつものように意味は無いっ！！！　それこそが私の後書きにおける美学だからっ！！！　……まったく意味が無い、美学だよね～、いや、私が言うのもなんですけどね……きゃはっ！

さてさて、やっと本格的なバトルが始まったのですが……次回はあの人がかなりの活躍を見せるでしょう。まあ、それは次回のお楽しみって事で。

まあ、次もなるべく早めに上げるつもりなんですけどね。いや、ちょっと……プライベートな都合でいろいろとあり、気力もすっかり死んでて、すでに腐食してました。

だがっ！！！　こんな危機を脱すべく、ヤクを強くしてもらいました。へっへっへっ、これだけ強いヤクなら……いちころですで、旦那。……いや、普通の薬ですけどね。しっかりと薬局で処方されているやつです。

まあ、そんな訳で薬の効果に期待しつつ、何とか次を早めに上げて、ペースも上げて行きたいと思っております。……というか、毎回同じ事を言ってるけど……一向に進歩がないな。まあ、そこは……そうっ！！！　日進月歩という事で（意味　歩みは遅くても着実に進んでいる　＊注意　この意味は作者の妄想であり、決して辞書をひいて訴えないでください。敗訴のショックで北国へと旅立ってしまいます）

という事で、そろそろ戯言も終わりにして、次の作品に取りかかろうかと思いますので、締めますね～。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、今年は待たされる年なのかな、と半年を過ぎた時点で、そんな事を感じた葵夢幻でした～。

第百三十六話　春澄の力

「よっと！」

背後から何の前触れも無く現れた腕と手に握られた小太刀、その刃はしっかりと春澄を背後から突き刺さってもおかしくは無かった。けれども、春澄は突如として跳び上がると、背後から伸びてきた腕に逆立ちで掴む。更にそこからは腕を屈めて小太刀の刃が届かないところまで腕の力だけで跳んだのだ。

そんな軽業のような身のこなしは見事な物だと言えるだろう。それぐらいの動きを春澄は見せてきたのだ。そんな春澄が今ではすっかり無くなっている、空間の切れ目があった場所を見て呟く。

「へぇ～、こんな事が出来る精霊が居るんだ～。う～ん、なんていう精霊かな？　まあ、面白い能力なのは間違いないよね。最も……私には通じないけど」

そんな独り言を呟いていると今度は春澄の真下から空間の切れ目が出来ると、苦無が飛んできた。それなのに、春澄はまるで真下から攻撃が来る事を分っていたように、軽く後ろに飛んで、全ての苦無を避けた。

だが、それこそが半蔵が狙っていた瞬間だった。春澄は攻撃を避けた直後で、次の攻撃には対処できないだろう。なにしろ半蔵は春澄が着地する前に春澄の後ろに姿を現すと、春澄に向かって思いっきり斬り付けようとしていたのだから。

この攻撃で半蔵も確実に春澄を仕留めたと思っただろう。だが、ここからは半蔵すらも驚かせる動きを春澄は見せてきた。背後からの一撃、なにしろ苦無を避けるために後ろに跳んだばかりだ、そこから後ろの攻撃に対処が出来るわけが無い。それだけ、半蔵は春澄が後ろに目が無い限り、対応できない攻撃のタイミングで空斬小太刀を振るってきたのだ。だから春澄にとっては避けるのは限りなく不可能と言えるだろう。

けど、春澄は身体を捻るようにして、更に後ろに高く跳ぶと、半蔵の両肩に手を置いて、そこから再び腕の力だけで半蔵から遠のくのだった。

さすがに、これに対しては半蔵ですら驚きを隠せなかった。春澄が攻撃をギリギリで避けたのなら驚きはしないだろう。だが、春澄はまるで半蔵の動きが分っているかのように、余裕で半蔵の攻撃を避けただけでなく、半蔵の身体に触れてから遠のいたのだ。攻撃を避けられるだけでなく、自らの身体に触れて、更に攻撃を利用して避けたのだ。それは普通では考えられない事だ。

半蔵の属性は奇襲、または必殺の手段を用いる場合が多い。そのため、半蔵と渡り合える精霊は、そう多くは無いだろう。それぐらい空の属性は奇襲や必殺の一撃を入れるのに適しているのだ。

だが、春澄はそんな空の属性を持つ半蔵の攻撃を避けただけでなく、半蔵の身体にまで触れてきたのだ。これで春澄が武器を持っていれば、半蔵は確実にダメージを負っていただろう。つまり、半蔵としては必殺の一撃を避けられただけでなく、身体に触れられるという、忍として、そして空間の精霊としては考えられない行動を春澄が見せたからこそ半蔵は驚きを隠せなかったのだ。

一方の春澄は面白そうに笑みを浮かべながら、先程の攻撃についての感想を率直に口にしてきた。

「やっぱり、強いね～。真下からの攻撃で相手の移動先を限定して、更にその後ろから攻撃してくるなんて、私じゃなかったら終わってたかな」

まるで自分が強いような事を口にする春澄に対して、半蔵は警戒心を強めるのと共に珍しい事に春澄との会話を始める。

「それは……自慢か？」

「ううん、自慢じゃないよ。私も力を少しだけ見せただけだよ。それに……私は戦闘に向いて無いからね～。だから、あなたと戦う事は出来ないよ。出来る事と言ったら……鬼ごっこぐらいかな」

「ならば、その鬼ごっこをやるか？」

「へぇ～、遊んでくれるんだ。おじさん、思ったよりも優しい人みたいだね。それとも私を倒したいだけかな。どっちにしても、遊んでくれるなら良いよ。思いっきり遊ぼうよ」

春澄は本当に楽しげに話してくるので半蔵は少しだけ警戒心が緩んでいるのに気付いていた。けれども、半蔵は春澄に対して警戒心を強める事はしなかった。

それは契約者の性質にもよるからだ。契約者が発する能力は戦闘的では無い物もある。例えるなら前の戦いでフレトが戦ったアンブルが良い例だろう。シールダーの能力は盾を作り出し、自分の身を守る事。つまり防戦のために発せられる能力と言えるだろう。

それに、昇のエレメンタルアップも本来は契約者に力を与える物ではない。エレメンタルアップは契約した精霊に力を送り、力の限り限界を超えてパワーアップさせる能力だ。だから本来なら昇自身が戦わなくても良いのだが、昇は性格と経験から自らも戦うという手段を選んだに過ぎない。

以上を参考にすれば、契約者の能力が確実に戦闘的な能力を発するとは限らないと言えるだろう。そして、春澄もまた、その手の能力だと半蔵は判断したのだ。つまり、春澄自身は戦闘能力を持っていない。だから、直接的な戦闘が出来ないのだと。そこが、半蔵が警戒心を緩めた理由と言えるだろう。なにしろ、春澄は戦闘能力を持っていないからには、春澄からの攻撃は無い。つまり、半蔵は反撃や攻撃に対して、まったく気にする事は無いからだ。

だが、先程の動きは半蔵を驚かせるのには充分だった。だからこそ、半蔵は警戒心を緩めながらも春澄に対して有効的な手段を考えながら、空斬小太刀を構えるのだった。そして一方の春澄は本当に遊ぶかのように、楽しげな笑みを浮かべながら半蔵を見ていた。どうやら、春澄にとって、これは戦闘ではなく、本当に遊びと言っても良いのだろう。

そんな春澄だからこそ、半蔵は気組みを少し崩されながらも攻撃に出る。

一気に跳び上がり、春澄の上空を制する半蔵。そんな半蔵を春澄は驚きながらも、楽しげな顔で見ていた。そんな春澄に向かって半蔵は苦無の雨を降らせるかのように、無数の苦無を春澄に向かって投げつける。

その光景を目にしても春澄の楽しげな顔を変わらなかった。そして苦無の雨が消えるのと同時に春澄は思いっきり横の方に向かって跳ぶのだった。そして、その直後には春澄が居た背後から無数の苦無が通り過ぎて行く。

けれども半蔵の攻撃はこれで終わりではなかった。再び無数の苦無が全部消えると、再び春澄の背後から飛び出して行く。そんな攻撃を分っているかのように、春澄は思いっきり跳び上がると足の下を飛んで行く苦無を目にするのだった。

だが、投げられた苦無がいつまでも飛んでいる事は出来ない。だから、半蔵の投げ付けた苦無が失速して地面へと落ちて行く。そして、その頃には春澄よりも更に上から姿を現した半蔵が春澄に向かって蹴りを放つ。

空中では自由に動けないからこそ、半蔵はあえて空中戦を仕掛けたのだろう。けれども、半蔵は春澄の行動に驚きを覚えながら攻撃を続ける事になる。なにしろ、半蔵が放った蹴りは、春澄の踏み台として利用されて、確実に避けられたのだから。

そして、空中にいる間にも半蔵は蹴りと拳を繰り出す肉弾戦に持って行った。けれども、どの攻撃も春澄に当たるどころか、春澄に利用されて攻撃を避ける手段に使われてしまった。けれども、それで良いのだ。なにしろ、半蔵の能力が一番発揮されるのは、この後なのだから。

空中での戦いも徐々に落ちて行き、そろそろ両者とも地面に辿り着く頃だろう。そうなれば、春澄は確実に着地と同時に半蔵から遠のくだろう。ならば……狙う瞬間は一つだけである。

両者が空中で肉弾戦を行っていて、そろそろ着地体勢に入る瞬間だった。半蔵は空中戦では始めて空斬小太刀で春澄に向かって突き

出された。今までは刃物を使っていなかっただけに、さすがの春澄も気を引き締めた事だろうと半蔵は思っていたが、春澄は全て分っているように笑顔を半蔵に向けるのだった。

そして空斬小太刀が春澄に届く瞬間だった。突如として空間の切れ目が出来ると、半蔵の腕が空間の切れ目に消えて行く。そして、入口があれば出口があるように、空間の切れ目の出口は春澄の背後だった。

相手が空間の精霊と分っていても、今までの肉弾戦から突如としての刃物を使った攻撃である。それは誰しも目の前から伸びて来る刃物に目を奪われて、刃物を避ける事に行動を起こすだろう。だからこそ、突如として目の前から消えた空斬小太刀が背後から現れる事なんて、予想するのには難しい事だろう。だからこそ、必殺の一撃となるわけだ。

だが、春澄は目の前から伸びてきた空斬小太刀を気にする事無く、そのまま着地体勢を取るとのと同時に両手を思いっきり上から後ろに回した。そして背後から現れた空斬小太刀を手にした半蔵の腕を掴むと、思いっきり身体を引っ張り、そこを軸に半回転をしてから半蔵の腕を蹴った反動を利用して半蔵から離れるのだった。

今度も見事とも言える軽業、まるでサーカスや雑技団で見るような、軽やかな身のこなしで春澄は半蔵が繰り出してきた必殺の一撃を避けて見せたのだ。そんな事をされて半蔵も驚いていると思いきや、半蔵は何かに気付いたかのように空斬小太刀を構えながら春澄を見ていた。

一方の春澄も半蔵が自分の能力に気付いたと感じたのだろう。いや、正確には、半蔵の雰囲気から感じ取ったようだ。さすがに普段は目が見えないだけに、人や精霊が発する雰囲気が変わった事には敏感なのだろう。だからこそ、春澄は半蔵に思いっきり楽しげな笑みを向けると一気に走り出したのだ。しかも、半蔵の方へではない、アルビータが戦っている地点を目指してだ。

アルビータも相変わらずフレト達から三方多重攻撃を見事に防ぎながら、どう反撃するかを考えていたのだが、アルビータの視線に春澄の姿が写ったのだろう。アルビータはフレト達の攻撃を全て受け止めると、力任せに弾き飛ばし、ツインクテラミノアを地面へと叩き付けたのだ。

その衝撃を受けてフレト達はかなりの距離を弾き飛ばされ、おかげで春澄は無事にアルビータと合流する事が出来た。そんな春澄が楽しそうに、アルビータに向かって楽しそうに言うのだった。

「結構、苦戦しているようだけど、大丈夫なのかな～？」

そんな春澄の質問にアルビータは涼しい顔で答える。

「なに、まだ時間があるからな。少しは戦わないとつまらないだろう」

「ふ～ん」

アルビータの答えに素っ気無い返事をする春澄。そんな春澄が今度はとんでもない事を言い出してきた。

「じゃあ、アルビータ、ここは任せたね。私は、あのお屋敷の中を探検してくるよ～」

春澄はまるで遊びに行くようにアルビータにフレトの屋敷に侵入すると告げてくる。そんな春澄にアルビータは軽く溜息を付くと、返事をする。

「屋敷は外から見るだけだったのではないのか？」

そんなアルビータの質問に春澄は少しだけ首を傾げて、考えながら話を続ける。

「う～ん、戦力が少ないとはいえ、アルビータとここまで戦ってるんだから。フレトさん達もまだまだ大丈夫でしょ。それに……フレトさん達は最初から私を狙ってると思うから。そうなれば私は外に居るより、あえて屋敷の中を歩き回った方が撹乱できるでしょ。それに……私を倒そうとした精霊は私の力に気付いたみたいだから。だから、屋敷の中に飛び込んでも、絶対に私を探そう何て思わない

よ。だって……それが私の力が持つ一つなんだから」
「物は言いようだな」
春澄の言葉にアルビータは溜息交じりの言葉を返す。
確かにフレトの作戦で一番重要な点はそこにあった。どう見ても春澄は戦力とは言えない事は機動ガーディアンの事で分っている。だからこそ、フレトは半蔵に春澄を狙わせたのだ。半蔵が春澄を倒してしまえば、いくらアルビータが強くても、そこでフレト達の勝ちが決まるからだ。
だが、実際に戦うと春澄は攻撃はしないものの、その身のこなしと動きはフレト達の予想を遥かに上回っており、それに他の力があるのも半蔵は気が付いている。だからこそ、春澄はそんな事を言い出してきたのだ。
そんな春澄にアルビータは優しげな笑みを向けると、しっかりと言葉を口にする。
「あまり調子に乗るんじゃないぞ。それから、あまり遊びすぎるなよ。いくら、その力があったとしても、それで絶対に倒されない保障は無いんだからな。だから少しは慎重に」
「はいはい、分ってますよ～。さ～て、それじゃあ、フレトさん達も体勢を立て直して来た事だし、私は屋敷の中を探検してくるよ」
確かに春澄が言ったように、弾き飛ばされたフレト達は、今ではすっかり立ち上がり、二人を包囲するように、それぞれの武器を構えている。そんな状況を見て、アルビータは呆れたように溜息を付いてから、春澄に言うのだった。
「分かった、くれぐれも気をつけてな」
「うん、分ってるよ。アルビータも頑張ってね～」
それだけの会話を終えると春澄は一気に駆け出して屋敷の中に突っ込んで行こうとする。けれども、そんな春澄を妨害するかのように、突如として春澄を中心に外周全て、しかも真上まで、まるで春澄を包囲するかのように現れた苦無が一斉に春澄に向かって飛んでいく。

そんな状況なのに、春澄は楽しそうな笑みを浮かべながら走るスピードを落とさず、一気に駆け抜けようとする。もちろん、半蔵も春澄が走る続けると思ったからこそ、全ての苦無が春澄を追うように投げ付けられていた。その全ての苦無が、切り裂かれた空間を通って春澄に襲い掛かろうとしているのだ。

それでも春澄は駆けるスピードを落とそうとはしない。それどころか、いつの間にか手にしていた苦無で、進むのに邪魔な苦無だけを弾くと、春澄はそのまま屋敷の玄関を蹴破ると、そのまま屋敷の中に駆け込んでしまった。どうやら、いつの間にか半蔵が投げ付けた苦無の一つを拾っていたようだ。

そんな春澄にフレト達も驚きを隠せなかった。なにしろ半蔵は確実に春澄を仕留めるために、無数の苦無を春澄に向かって放ったのだ。けれども、春澄はまるで、それが分っているかのように、いとも簡単に屋敷への侵入してしまったのだ。そんな光景を目にしたからこそ、フレト達は驚きを隠せなかったのだ。なにしろ、あの半蔵が仕留めきれないのだから。

そこでフレトは決断を下さなくてはいけなかった。このままアルビータと戦い続けるか、それとも、あえて屋敷の中に入っていった春澄を追うか。春澄を追えば、それだけ春澄を仕留めるチャンスが多くなる。けれども、春澄を追う事をアルビータが易々と見ているとはフレトには思えなかった。

そんな時だった。突如としてアルビータの背後に現れた半蔵が空斬小太刀で斬りかかる。けれども、突然の事とはいえ、その程度にの攻撃ならアルビータも防ぐ事は簡単だった。だが、半蔵の狙いは、その先にあった。

片方の両刃斧で半蔵の空斬小太刀を受け止めたアルビータは、もう一方の斧を半蔵に振るおうとするが、それよりも早く、半蔵は口に半分ほど含んだ物を一気にアルビータに向かって吐き出した。それは無数の針だった。さすがのアルビータも反撃をしようとしていた最中だ、半蔵が吐き出した針を防ぐ事なんて出来はしなかった。

そのため、何本もの針がアルビータに刺さるが、所詮は針である。アルビータにダメージを与えた事にはならないだろう。

けれども半蔵はすぐに背後の空間を斬り裂くと、斬り裂いた空間に姿を消す。そのため、アルビータの反撃は空を斬る事になった。そして、肝心な半蔵はというと……なんとフレトの傍に姿を現したのだ。その半蔵が早口にフレトに報告する。

「若様、どうやら作戦の遂行は無理だと判断するべきです。あの契約者は厄介な能力を持っております、そのため、精霊と契約者では、あの契約者を倒すのは無理です。ですから、ここは一旦、屋敷内まで撤退して、新たな策を」

「だが、あの精霊がみすみす俺達を見逃すと思うか？」

「その事はご心配無く」

半蔵がその言葉を放った後に、アルビータは突如として片膝を付くと、両手に持ったツインクテラミノアで身体を支える。そんなアルビータはまるで身体から力が抜けたようにも見えた。そんな光景を目にしてフレトは確信したように呟く。

「毒か」

フレトの言葉を聞いて、半蔵も早口で説明する。

「精霊の神経系統を麻痺させる猛毒です。普通の精霊ならしばらくは動けないでしょうが、あの精霊なら、あの状態でも防戦は出来るでしょう。けれども、我らの後を無理には追って来ないでしょう。ですから、今は撤退を」

「……くっ、それしかないか」

半蔵の言葉に悔しそうに、その言葉を口にするフレト。今のアルビータを見れば、アルビータを倒せそうな気もするが、先程までの戦闘を思い返せば、アルビータが本気で戦っていたとは思え無い。だからこそ、フレトは決断するしかなかった。それは、今回の戦いでフレトの立てた作戦が失敗要素を含んでいたワケではない。アルビータ達の能力が未知数だっただけに、その力がフレト達の予想を遥かに超えていたからに過ぎない。

それだけ春澄達が未知数の存在とも言えるだろう。それはアルビータと戦ったフレトも充分に分かっている事だし、半蔵から撤退という言葉を出させたのだから、春澄も未知数の力を持っていても不思議ではない。

つまり、今回の戦いは通常の争奪戦よりも未知数な部分が多すぎるのだ。それだけに、フレト達の予想を超えた展開が繰り広げられていた。だが、確実に勝利するためには、半蔵のもたらした情報とラクトリーからの説明が絶対に不可欠だと決断しないといけない事に、フレトはプライドよりも勝算を選ぶしかなかったのだ。それが分っているだけに、フレトは悔しそうにラクトリーとレットに向かって叫ぶ。

「二人とも一旦、屋敷の中に撤退するぞ。ラクトリー、念の為に撤退の補佐にあれを使えっ！」

フレトが、そう叫ぶのと同時にレットもラクトリーも頷き、フレトと半蔵が屋敷に向かって駆け出すのと同時に合わせて駆け出した。そして、半蔵が言ったとおり、アルビータは麻痺系の毒を喰らっているからにはフレト達を追う事はしなかった。

それでも油断ならないとラクトリーは玄関ポーチの柱にある仕掛けを作動させる。すると、すぐさま、ポーチの中から幾つかの銃身が姿を現すと、ラクトリーは全ての銃身をアルビータに向けさせて斉射させる。銃弾は精霊用に改良された銃弾だが、所詮は小さな銃弾である。その小ささから強力な力を含ませる事は不可能だった。

だが、足止めと弾幕を張るには充分だった。その間にフレト達は一気に屋敷の中に飛び込むとラクトリーは玄関を厳重にロックすると、無意味とは分っていても地の属性を使って扉の強度を上げる。それでも充分な時間が取れるだろうと、ラクトリーは玄関ホールに集ったフレト達に合流した。

全員が集ると、まずフレトは半蔵からの報告を求めた。なにしろ、今回の作戦はフレト達がアルビータを足止めしているうちに、半蔵が春澄を仕留める手筈になっていたのだから、だからフレトが真っ

先にその事を尋ねても不思議ではない。半蔵の性格から言って、下手な言い訳なんてする訳が無いだろう。むしろ、半蔵だからこそ、何かしらの理由が在るとフレトは思ったからこそ、半蔵からの報告を受ける。その半蔵は「では」と前置きを付けると説明を開始する。

「若様、あの契約者は精霊感知能力者です。なので、精霊も契約者も、あの契約者を仕留めるのは無理と思われます」

短く説明する半蔵。その半蔵の言葉にラクトリーは納得したような顔をし、フレトは首を傾げるのだった。そして、レットは……フレトと同じく呆然としている。どうやらレットもワケが分かっていないようだった。

そんな二人に向かってラクトリーが精霊感知能力者についての説明を始める。

「マスター、霊感という物はご存知ですよね。幽霊などの霊が見えたり、感じたりする力の事です。もっとも、精霊である我らも幽霊に関しては意見が別れるところですが、今はその事は置いておきましょう。肝心なのは、精霊感知能力者は、その霊感と同じような力があるという事なのです」

ラクトリーの言葉を聞いて思考を巡らすフレト。そんなフレトが考えながらも、思った事を口にする。

「つまり……その精霊感知能力者は精霊の存在を知る事が出来るという事か？　例えば、契約前の精霊がどこに居るかとか？」

「だいたいはそんな感じです。契約後の精霊でもお互いにかなり近づかないかぎり、人間世界では相手が精霊だと認識できません。そのため、精霊を探索するシステムが進化しているのですが、精霊感知能力者は契約の以前、後に関係無く、精霊の存在を感じ取る事が出来るんです」

つまり、精霊感知能力者は霊感能力者と似ている部分があるとラクトリーは説明したのだ。この二つの共通点として、目では見えないものを感じ取る事が出来る、または見る事が出来る、というのが上げられるだろう。

精霊も結構めんどうな存在であり、契約前の精霊は人間には見る事が出来ない。精霊が契約結界を展開しない限りは人間は精霊を見る事が出来ない。更に言えば、精霊同士でも契約した者は人間世界に具現化しているから、どこに精霊が居るか、というよりも精霊と人間の区別が出来ないと言った方が早いだろう。だからこそ、契約後の精霊がお互いに精霊だと感知するには、かなり近づかないといけない。それでも、まあ、普通に話が出来る距離ぐらいだから、数メートルぐらいと言えるだろう。

だが、それが今回の戦闘でフレト達が退く事になった理由とは結び付かなかったフレトは更なる説明を求める。そしてラクトリーは精霊感知能力者について詳しく説明を開始した。

「精霊感知能力者はほとんど居ないと言えるぐらい、その力を持って生まれてくる人間は少ないんです。それに、争奪戦でも無い限りは精霊を察知しても精霊は接触をする事が出来ません。最も、争奪戦が行われているのなら接触は出来ますが、争奪戦が行われていなければ接触出来ません。つまり、それぐらい珍しい能力という事です。それに、この上なく厄介な力を持っているから、相手にするのはかなり面倒でしょう」

「そういえば、半蔵も厄介な能力だと言っていたな。それが俺達が退く事になった原因か？」

「御意」

フレトの言葉を素直に肯定する半蔵。ここまで半蔵に言わせるのだから、相当厄介な能力なのだろうと、フレトは軽く溜息を付くと、再びラクトリーに説明の続きを求めた。

「精霊感知能力者は精霊を感知するだけではありません、属性すらも感知したりするのです。つまり、どんな属性を使ってくるか、最初から分っているのと同じなんです。そのうえ、発動のタイミングも感じ取る事が出来ますから、どんな属性攻撃も避ける事は簡単なんです。だから、半蔵の動きも全て読み取られ、簡単に避ける事が出来たんです」

つまり春澄は最初から半蔵がどこから現れ、そこに力を使ってくるかが、力を使おうとした時点で察知出来るのだ。だからこそ、春澄は半蔵がどこの空間を切り裂き、どこに繋げるかが最初から分っていたと言えるだろう。だからこそ、背後や下からの空間移動攻撃を簡単に避ける事が出来たのだ。

要するに春澄には半蔵の手の内が全て分っていたのだ。だからこそ、どんなフェイントの通じなかったし、半蔵が得意としている空間移動を使った、必殺の攻撃も簡単に避ける事が出来たのだ。それどころか、春澄はそんな半蔵の動きを感知して、利用したからこそ、半蔵が空中戦で仕掛けた攻撃は通らなかったし、春澄は楽に避ける事が出来たのだ。

それは他の精霊でも同じと言えるだろう。例えば、ラクトリーやレットでも、属性を使った攻撃なら、攻撃前に避ける事も可能なのだ。それぐらい、精霊感知能力者が察知する属性や精霊の感度は高いのだ。

それにシエラのようにスピードで一気に攻める事も考えられるが、春澄から見えれば、翼の属性を使っている限り、どの軌道を取り、どのタイミングで自分に向かって来るのか、攻撃前に分ってしまうのだ。だから、どんなにハイスピードでも、春澄に攻撃を入れるのは困難だと言えるだろう。それはレットや閃華のように武器に属性を込めてる者も同じである。攻撃前に、相手の攻撃方法、攻撃範囲、攻撃のタイミングが分かるのだから避けるのは簡単だ。

それはラクトリーも同じと言えるだろう。どれだけ広範囲な属性攻撃をしたとしても、その前に範囲外に出られてしまっては意味が無い。むしろ、範囲が広ければ広いほど、攻撃するには時間が掛かるし、その間に攻撃範囲から出る事は精霊能力感知者には簡単な事なのだ。

それだけではなく、ラクトリーが言うには契約者からも精霊の存在を感じる事が出来るとの事だ。移り香のような物なのだろう、精霊感知能力者は契約者からも普段から接している精霊を間接的に感

じ取る事が出来るのだ。
　そこまで理解したフレトの頭に一つの疑問が浮かび上がる。それは説明を聞いていれば、誰しもが思った事だろう。だからこそフレトは率直に、その事をラクトリーに尋ねる。
「だが、どれだけ相手の行動が分っても、身体能力が付いていかないと、相手の攻撃を完璧に避ける事なんで出来ないだろう？」
　確かにフレトの言ったとおりである。どれだけ相手の攻撃を察知して、読んでも、身体が攻撃に対して動けなくては意味が無い。つまり、どんな攻撃も避けるだけの動きが出来なければ当たってしまうのだ。けれども、春澄は半蔵が繰り出した全ての攻撃を避けて見せた。それは精霊感知能力者だけの力では説明しきれないだろう。けれども、ラクトリーにはしっかりと説明できるみたいであり、話を今度はそっちに持って行った。
「それに対しては契約者の能力だと思います。なにしろ命の精霊は伝説の精霊と呼ばれるぐらい争奪戦には参加してませんから、情報は少ないのですが、確実に伝わっている話があります。それは……命の精霊と契約を交わした者は三つの能力を得ると」
「三つとは……随分と卑怯だな」
　ここまで来れば、もう呆れるしかないといった感じで溜息交じりで言葉を発するフレト。普通なら、最初の精霊と契約を交わした時点で発揮できる能力は一人に一つである。それが契約者としては普通であり、それなのに三つも能力が発動されるとは卑怯を通り越して呆れるしかないのだろう。そんなフレトの溜息が移ったように、ラクトリーも溜息を付いてから話を続ける。
「その三つの能力は、命の提供、命の活性、命の強奪、この三つの能力が命の精霊と契約を交わした契約者に発揮される能力です。一つでも厄介なのですが、ここまで揃うと厄介どころか、どう対処して良いのか分かりませんね」
「それで、それらの能力はどんな力を発揮するんだ？」
「そうですね、それでは、まず命の提供から。この能力は契約者の

生命力、寿命とも言いますけど、その生命力を戦闘力に変えて命の精霊に与える事が出来るんです。先程も説明したように、昇さんのエレメンタルアップと同様の能力といえますが、自分の生命力を分け与えている分け与えているワケですから、自分の生命力が尽きれば死にます」

「なるほどな、だから、ほぼ同様の能力と言ったわけか」

ここでようやくアルビータの強さについて理解したフレトだった。確かにアルビータの力は尋常では無い。けれども、昇のエレメンタルアップと同じく、限界を超えて力を発揮出来るのならアルビータの強さも納得が出来るというわけだ。

だが、エレメンタルアップのように契約者の力が続く限り、力を発揮できる、というワケではない。むしろ、その逆、自分の命が続く限り、契約者は命の精霊に力を与え続け、命の精霊を強くし続ける事が出来る。だが、自分の命が尽きれば、つまり死ねば、そこで終わり。

だからエレメンタルアップのようにリスク無しに限界突破させるワケではない。契約者の命という代価を払って命の精霊を限界突破させてるワケである。だから契約者も相当な覚悟が無い限りは命の精霊とは契約をしないだろう。

けれども、春澄には何かしらの理由があるからこそ、自分の命を削ってまで戦いに挑んでいるのだから、アルビータの強さも納得が出来るというものだろう。そう感じたフレトは話題を次に移す。

「それで、他の能力は？」

「では、次に命の活性ですね。これはエレメンタルとほぼ同じ効果を発揮します」

「また、ほぼ同じか」

いい加減にその言葉に飽き飽きしてきたのだろう、フレトは溜息を付くとラクトリーは苦笑するしかなかった。それでも、一息付くと説明を続けてきた。

「エレメンタルの能力は、マスターも知っての通りに契約者を精霊

と同等の戦闘能力を発揮出来るようにさせます。ですが、命の活性はそこまでの力は発揮しません。命の活性は戦闘能力を上げるのではなく、身体能力を上げるのです。これは戦いが始まっても、契約者が狙われても防ぐための処置だと考えられてます。現に、半蔵が相手にした契約者は攻撃をせずに逃げの一手だけでした。精霊と同じ動きが出来る者に逃げの一手を打たれると、半蔵でも倒す事は困難と言えるでしょう。むしろ、戦ってくれた方が打つ手もありますし、策が使えます。ですが、あそこまで逃げる事に集中されると……誰も、あの契約者を仕留める事は無理でしょう」

「なるほどな、確かにそれは厄介な事はこの上ないな」

これで先程フレトが感じた疑問が解決されたと言えるだろう。春澄は命の活性によって身体能力が精霊並みに上がっているのだ。そんな春澄が戦う事無く、防戦、そして逃げる事を優先されれば倒す事は難しいだろう。

そのうえ、春澄は精霊感知能力者である。だから、どのような攻撃も相手が精霊か契約者ならば攻撃を避ける事は簡単だ。命の活性と精霊能力感知、この二つがある限りは春澄を仕留めるのは無理と考えて良いだろう。

そう判断したフレトは呆れたように息を吐くと、玄関ホールの天井を見上げる。

「つまり、この屋敷から、あの契約者を探し出して仕留めるのは無理というわけか」

「ですね。これだけ広い屋敷ですから隠れる場所は幾つもあります。そのうえ、あちらにはこちらの気配が遠くから察知されてます。居場所によっては更に逃げられるでしょう」

「自らの屋敷とはいえ、こんな不利な点が出てくるとはな」

「まあ、今回は特別な事例と区別した方が良いかもしれませんね。なにしろ、伝説の精霊を相手に戦っているのですから」

ラクトリーがフレトの気疲れを察したのだろう。そんなフォローを入れてくると、フレトは最後の能力について尋ねた。

「それで、最後に残った命の強奪とは？」
「それが一番凶悪で始末が悪いです。命の強奪とは倒した精霊、または契約者から生命力、つまり命を奪う事が出来るのです。もっとも、相手を戦えない状態まで倒してしまえば、命の強奪は発動できます。それはもう……相手の命を全て強奪出来るほどに。だからこそ、命の提供で失った命を、命の強奪で補う事が出来るんです」
「おいおい、それこそ卑怯で凶悪以上に凶悪じゃないか」
今まで黙って聞いていたレットがそんな突っ込みを入れてくる。
そんなレットに対してラクトリーも肩をすくめるだけだった。確かにレットの言ったとおりなのだ。ラクトリーの説明どおりなら、命の精霊と契約した者は、倒した相手の命を奪う事が出来る。そう……倒した相手が死んでしまうほどに。
そこに精霊と契約者の区別は無い。つまり精霊でも、戦えない状態なってしまったら命を強奪させるしかないのだ。場合によっては……死ぬほどに。そこまで命を奪い取るからこそ、命の提供で際限無く、命の精霊に力を与える事は出来るが……。本来なら誰も死なない争奪戦だが、命の強奪に関しては、契約者の意思によって確実に死ぬのだ。
だからこそ、レットの言った事は間違いでは無い。だが、フレトには何か引っ掛かる部分があるようだった。そもそも春澄がそこまでする理由が分からない。そんなフレトの頭に思い浮かんだのが滝下昇である。そんなフレトが思考を巡らす。
やれやれ、どうやら俺達は滝下昇に関して、完全に巻き込まれる形になったようだな。まったく、あいつには借りがあるからな、ここは一つ、現状を打破して借りを消しておくとするか。フレトは、そう判断すると決断を下す。
「何にしても、半蔵でも仕留められない契約者だ。その契約者が屋敷の中を逃げ回っている限りは、契約者から叩く事は無理だろう。ならば……なんとしても倒すぞ、あの命の精霊をな」
「そうは言っても、どうするんですかフレト様。さっきだって、こ

っちが有利に戦いを進めていたワケでは無いですし、あいつだって未だに本気は出していないようでしたよ」

フレトの言葉にそんな言葉を付け加えてくるレット。そう、レットの言う通りなのだ。確かに先程の戦闘ではフレト達はかなり攻勢に出てはいたが、一回もアルビータに一撃を加えられていないのだ。そんなアルビータ対抗するには、どうすれば良いか？　その事をフレトは考えなければいけなかった。

それにアルビータにも春澄と同様に卑怯と呼んで言いぐらい無の属性がある。それがある限りは、アルビータと同等に戦えるとは思えなかったのだろう。けれども、フレトには何かしらの思案があるようだ。だからこそ今は、その事に全力を注ぐ。

「半蔵」

まずは半蔵を呼び寄せるフレト、それからラクトリーを呼んで、何かをやっているようだ。そこからフレトは全員に指示を出すと、フレト達は玄関ホールの奥に陣形を展開させるように備える。

そんな時だった、突如として玄関のドアが吹き飛ぶと、粉塵の中からアルビータの姿がゆっくりと現れた。

第百三十六話　春澄の力（後書き）

さ～て、何とか更新が出来ました～。いや～……死んだ死んだ。もう、何回死んだか覚えてません。それぐらいに私の気力と意欲は死んでおります。

それでもっ！　なんとか頑張ろうと書き上げました～。えっへん、どうだっ！　これで誰も文句は言えないだろうっ！　えっ？　それでも、やっぱり更新のペースが遅い……細かい事は気にするなっ！

それからそこっ！　返事は「はい」ではないっ！　「イエッサー」と叫べっ！　中途半端な返事は許さんぞっ！　分かったか、この愚民どもっ！　お前達は所詮、飯を食らうだけのごく潰しだっ！　その事を忘れるなっ！　役に立たないカスどもがっ！

そんな時だった、突如として遠くから銃声が聞こえると共に……私の意識は薄れて行った。どうやら狙撃されたようだ。まあ……しかたないか……。そんな事を思った私は微かに残っている意識を振り絞り、最後の言葉を残す……「ＴＫＧ」と……。

説明しよう、ＴＫＧとは「卵かけご飯」の略称であり、誰しもが口にした事がある庶民にとっては最終兵器と言える食卓にとっては最後の手段とも言える食べ物であるっ！

ちなみに、この作者はご飯よりも卵を先に入れて、ときほぐして、そこにご飯を乗せるという邪道を進む覇者であるっ！　我が道に……一片の悔い無しっ！！！！

……ガクリッ

とまあ、相変わらず意味不明ですね。まあ、自分で書いておきながらあれですが。でもでも、卵かけご飯って、先に卵を入れたほうが良くない？　その方が掻き混ぜ易いでしょ？　それにご飯がこぼれる可能性も少なくなるし。

……まあ、こんな事を、ここに書くことでも無いし、必死になって訴える事でもしないし……所詮はノリで書いてる事だからね～。

だから……考えたら負けだっ！！！！

という事で、そろそろ飽きてきたし、ネタも尽きたので締めますね～。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、納豆には大量のからしを入れる、激辛納豆好きの葵夢幻でした。……最後まで意味の無いことだったね（笑）

第百三十七話　意地とプライド

「ショットッ！」

ゆっくりと姿を現したアルビータに対してフレト達はすぐに行動を開始した。とは言っても、半蔵が投げ付けた丸い玉を、フレトが風の属性で速度を強化して、一気にアルビータに向けて打ち込んだ。

その程度の攻撃だからこそ、アルビータもツインクテラミノアの片方で丸い玉を叩き潰すと、すぐに突風がアルビータに叩きつけられ、そのまま風はアルビータの周りに霧散して行った。けれども、いつの間にかマスターランスからマスターロッドに武器を切り替えていたフレトが姿を現したアルビータに対して、何事も無かったように話を始める。

「精界を張った時といい、今回といい、随分と手荒い来訪が好きみたいだな」

「私とて事は穏便に運びたい。だが、我々には時間が無いのでな、どうしても手荒くなってしまう。そこは勘弁願おうか。それに、争奪戦は戦いだ、戦うからには全力を尽くすのが相手に対する礼儀でもある」

「確かにそうだな。最も、命の精霊とその契約者が争奪戦で正々堂々とは言えないぐらいの力を発揮してるようだからな。そんな力を見せ付けられては、こちらも愚痴を言いたくなるというものだ」

「だが、どんな力でも力には変わり無い。そして戦いとは力のぶつかり合いだ。そこに卑怯も卑劣も無い。むしろ戦いの中で策として卑怯卑劣な策を使っている訳では無いのでな。固有している力に対して文句を言うのは筋違いというものだろう」

「なるほど、確かに、その通りだな。お前達はここに来てから、自分達の力を駆使して正々堂々と戦っていた。その点だけは認めよう。だがな、俺達が策を使わないと限らないぞ」

「使いたければ使えば良い。どんな策だろうと、私の力で打ち破っ

てみせる」
「ほぅ、相当な自信だな。さすがは伝説の精霊と言われるだけの事はあるという事か。それで、その伝説の精霊が、なぜあのような少女と契約を結んだ。お前の力なら、あのような少女ではなく、もっと強い契約者も選べたはずだ。そこだけは理解できんな」
フレトがそんな言葉で話を結ぶと、アルビータは戦闘体勢を解き、ツインクテラミノアを床に突き刺すように持つと、まるで体中の力を抜いたように。そんなアルビータがゆっくりとフレトに向かって話を続けてきた。
「精霊とは……精霊は何のために存在している？」
「んっ？」
突然の質問にフレトは少しだけ困惑の色を見せて、それからラクトリーに相談するように振り替えるが、ラクトリーも首を横に振るばかりだった。だからこそ、フレトは再びアルビータと向き合うと自分なりの考えを口にする。
「俺は存在という言葉自体に意味があるとは思えない。そこに居る、そこにある、これだけは絶対的な真実であり、理由も要らない。だから精霊が何のために存在している理由なんて事は知らん。俺は、俺を慕って付いてきてくれる精霊が居るだけで充分だ。それが俺の答えだ」
そんなフレトの言葉を聞いて、アルビータはしっかりとフレトの顔を見詰めると、軽く笑みを浮かべるのだった。それから、こんな言葉を口にする。
「なるほど、お前達の主は相当の器を持っているようだな。確かに、貴殿は精霊達の主としては相応しいだろう。だがな、私はこう考えている。精霊は戦うために存在しているのであり、戦わない精霊に意味は無いと。戦いこそが我が存在を確かめる唯一の手段だからだ」
アルビータの言葉を聞いて後ろからレットが文句を言いそうになるが、フレトがそれを止めると再びアルビータとの会話を続けた。
「つまりお前は戦うために自分の存在意義はあると、そう言いたい

訳だな。随分と荒っぽい考えだな。戦う事でしか己を存在を確認できないのか」

「ふっ、その通りかもしれんな。だからこそ、私は戦いを求める。強き者と知勇の全てを掛けた戦いこそが私が存在していると確認させてくれる。強き者との戦いだけが……私を満たしてくれる。だからこそ、私は戦うのだ。そう……終焉まで」

「また終焉か、その言葉を聞く限りでは、お前はまるで死ぬために戦っているように聞こえるが、それもお前の望みか？　命の精霊とは思えない言葉だな」

「……命の精霊か、お前達には分からないだろう、私が命の精霊として生を感じない生き方を余儀なくされた事に。それ故に私は終焉を求めるのだ。延々と続く無為な日々を終わらせるように、それは川の流れが無くなるように、命の精霊として、命の終焉を」

「あぁ、分からんし、分かろうとも思わない。お前が俺の屋敷に進行して来た時点でお前は敵だ。そんな敵の心中まで理解してやるほど、俺は甘くないのでな。もっとも、滝下昇なら、どう出るかは分からんがな。だが、俺には俺のやり方がある。だからこそ、ここは俺のやり方を貫くまでだ」

「ふっ、よかろう。ならば、そのやり方を貫いて見せよっ！　私はそのやり方すらも打ち砕いて前へ進もうではないかっ！」

アルビータはそう叫ぶと再びツインクテラミノアを構える。けれども、フレトの方はアルビータと違って戦闘体勢には入らずに、フレトはアルビータを鼻で笑うかのような仕草をして見せた後に話を続けてきた。

「まったく、短気だな。最も、そのように短気で猪突猛進するなら、こちらも罠を仕掛けやすいというものだがな」

「ならば、私はその罠ごと破壊して猛進しようではないか」

「言ってくれるではないか。だがな……俺の仕掛けた罠は一筋縄ではいかんぞ。最も、すでに遅いかもしれんがな。良いだろう、そこまで戦いを望むのであれば」

フレトは再びマスターロッドからマスターランスの姿にエレメンタルウェポンを変えると、口元に笑みを浮かべながら言葉を続ける。
「お前が望むとおりに、俺の知勇を全て賭けて戦おうではないか。さあ、見るがいいっ！　これが俺の全てを賭けた知勇だっ！」
「ならば……参るっ！」
フレトの挑発的な言葉にアルビータも戦闘体勢に入っていたので、その場から一気にフレト達に攻撃を仕掛けようとする。だが、アルビータの身体はアルビータが思ったようには動いてはくれなかった。
そんなアルビータを見下すかのようにフレトは鼻で笑うと、アルビータに向かって自分が仕掛けた罠について説明してやるのだった。
「やはり猪は猪だな。二度も同じ手段に掛かってくれるとはな。もっとも、それがお前にとって最大の弱点だといえるけどな」
「……なにをした？」
今では腕一本すらまともに動かないアルビータは、自分の身体に起こった異変がフレト達の策略である事は分っている。けれども何をしたかまでは分ってはいないようだ。だからこそ、アルビータはフレトに問い掛ける。まるで何事も無いように。
そんなアルビータに対してフレトは見下すように説明してするのだった。
「契約後の精霊はエネルギーの結晶体から具現化した人間に近い体になる。そうなると、当然のように神経や血管などが生まれるというわけだ。もっとも、精霊世界でも同じような身体の構造みたいだが、人間世界では、そうした細かなところまで人間のように近く再現される。だからこそ、このような策も通じるという訳だ」
「神経系の毒か」
「ご名答」
アルビータの答えにフレトは嫌味な笑みを浮かべる。まあ、それもしかたないだろう。なにしろ、先程まではまったく歯が立たなかったアルビータに一矢報いたような物だ。だからこそ、フレトはそんな笑みを浮かべたのだ。

それに自分の作戦が上手く行った事も関係があるだろう。フレトの作戦が開始されたのは、アルビータが姿を現した時だ。フレトは半蔵に命じてあった毒の入った玉を投げさせると、フレトは風を操りアルビータに放つ。アルビータの性格から考えても、その程度の事は避けるよりも粉砕する方を選ぶだろうと考えた結果だ。

そのため、玉の中に仕込んでいた神経系の毒がアルビータの周囲に広まる事になってしまったのだ。だが、フレトが考え出した作戦は更に悪辣だった。そこから、アルビータに気付かれないように風を操り。常にアルビータの周囲に毒の粉を留め、アルビータに吸い込ませるように風の滞留で毒を吸い込ませたのだ。

アルビータもかなり油断していた部分もあったのだろう。だからフレトが風を操っている事にも気付かなかったし、半蔵が投げてきた玉の意味にも気にもしなかった。そこに毒が霧散しないようにフレトが風を操っていたのだ。これはアルビータの油断とも言えるし、フレトが言ったとおりにアルビータの弱点とも言えるだろう。

アルビータの性格から考えて、小手先の策や戦術よりも、力や勢いを使った突撃戦を好む所がある。それがアルビータの弱点とも言えるだろう。フレトは先程のアルビータとの攻防戦で、アルビータの性格と好む戦い方をしっかりと見抜いていたのだ。だからこそ、アルビータと対峙すると決めた時点で、半蔵にそのような用意をさせておいたのだ。アルビータの弱点を考慮に入れて立てた作戦だ。ここはフレト達の策が一枚上手だった事は確かだろう。

そんなフレトの作戦も効果を見せ、アルビータはツインクテラミラノを地面に突き刺し、振るえてる足で何とか立つのがやっとだ。だからこそ、フレトも作り出した好機を逃さないために、再びマスターランスに変えて手にすると、精霊達に一斉に攻撃を仕掛けようとするが、そんなフレト達を見てアルビータは大きく笑い声を上げた。

この状況、アルビータにとっては絶対的に不利とも言える状況で笑ってきたのだ。だから、アルビータには、まだ何かしらの力があ

るとフレト達は攻撃をせずに成り行きを見守る事にした。今の状況で攻めてもアルビータに充分なダメージを与えられるだろう。

だが、アルビータが何かしらの力か策で状況を反転してくる事も充分に考えられた。ならばとフレトは先に情報を引き出してからの方が良いと判断したようだ。だからこそ、フレトは攻撃に出ようとしていたレットを制すると、様子を窺う。どうやら半蔵とラクトリーは最初からフレトの考えと同じようだ。だからこそ、フレトが制止するまでもなかった。そんなフレト達を見て、アルビータはとんでもない事を言い出す。

「私が命の精霊と気付いているのなら、契約者の能力も分かっているはずだな。ならば……そろそろ本気で使う事にしようか、春澄の能力をな」

「なっ！」

アルビータの言葉に驚きを示すフレト。それはそうだ、アルビータの言い方では、先程の戦いでは春澄の能力、つまり命の提供を使っていない事になる。そうなると、命の提供も無しで、あれほどの力を見せてきたのだ。もう、アルビータの力がどれほどの物か分かったものではない。

けれども、そんなアルビータの言葉に驚きながらもフレトは思考を素早く巡らすと、一つの答えを導き出した。それならば、先程の攻防がフレト達を優位に立たせていた理由にも納得が行くというものだ。

だからこそ、フレトは答え合わせをするかのようにアルビータに尋ねる。

「そうか、お前も、いや、お前達も……完全契約か？」

「そうだ。春澄の力でお前達も完全契約をしている事は知っていた。だからこそ、初戦は防戦に回ったのだ。お前達の力を完全に見極めるためにな」

「なるほどな、精霊感知能力者はそこまでの事が出来るのか。ならば、こちらの情報はすでに知っていても不思議ではないというわけ

か」

「その通りだ。私一人でもある程度の事は調べられるが、春澄の力を使えばより詳しく調べる事が出来た。だからこそ、ここ数日はお前達の事を調べさせてもらった」

「なるほどな、事前にそこまでの準備をしておいたとなると……この状況すらも打破できる手段があるというべきか」

「その通りだ。さあ、見せてやろう。だから存分にかかって来るが良いっ！　完全契約で結ばれた我らの契約と、命の契約者が持つ能力を最大限に見せてやろうっ！」

アルビータがそう叫んだ途端にアルビータは何かを振り切りようにツインクテラミラノを数回振り回す。その事にさすがにフレトも驚きを隠せなかった。なにしろ、今のアルビータには神経系の毒が回っているはずだ。

その毒はアルビータの身体を動かす神経系統にまで達して、麻痺させて機能停止に近い状態にしてあるはずだ。だが、アルビータは、そんな毒を振り払うかのようにツインクテラミラノを振り回してきたのだ。まさか、神経系の毒までも効かないなんてフレトにとっては大誤算だ。

一方のアルビータは驚いているフレトに向かって笑みを浮かべると、ツインクテラミノアを構えて口元に笑みを浮かべながら、驚いているフレトに何をしたのかを説明し始める。

「残念だったな、少年。命の提供は精霊の方で発動するタイミングと場所を選べるのさ。だから毒で麻痺している体性運動神経を強化して、毒を跳ね返すほど限界突破をすれば、毒なんて物は意味が無い。それだけではない、少年が言ったとおりに精霊が具現化した時には、身体が人間に近づく。すなわち、戦闘には使わない神経を切り離し、反射神経などの神経を強化する事が出来る。実際に今の私には色を識別出来ないからな、神経の操作なども命の提供もってすれば簡単な事だ」

「まったく、どこまでも卑怯すぎる力だな」

「故に私は孤独なのだ」

最後のに発したアルビータの言葉が何を意味しているのか分からないのだろう、フレトは首を傾げるばかりだが、他の精霊達は既に戦闘体勢に入っている。特にラクトリーと半蔵はかなりアルビータの動きを警戒しているようだ。それはアルビータの言った事が、どれだけの力を発揮するか分かっているからだろう。

繰り返すようだが、精霊は契約すれば肉体が具現化して人間世界に身体を持ってこられる。その時に発生するのが肉体の人間化。つまり、細かな神経などが生み出され、精霊も人間と同じく呼吸をするのだ。

精霊世界ではエネルギーの結晶体である精霊だからこそ、肉体があっても、食事を取る必要も無いし、呼吸をする必要も無い。精霊世界で精霊の生命を維持しているのは、人間世界から送られてくる、自分の力となるエネルギーなのだから。

そのエネルギーは信仰、憧れ、理論、自然、倫理などだ。それら生命の営みや、人間の心と考えが生み出したエネルギーが精霊世界へと流れ込んで、その精霊を生み出し、精霊として存在する力、つまり命を与えているのだ。

だからこそ、精霊世界での精霊は人間とは違い、あまり肉体的に複雑な構造を持ってはいない。だが、一度契約をすれば、その身体は人間に近づき、神経を始め、血管や呼吸器官などが形成されるのだ。そのため、精霊達は人間ほど肉体構造には疎いのだ。

だが、半蔵やラクトリーのように、長年生きてきた精霊は、その点をしっかりと理解している。だからこそ、アルビータが言った事が分かったのだ。

一口に神経と言っても様々な物がある。それは内臓運動を維持する物だったり、肉体を動かす物だったり、感覚をつかさどるものだったりする。そんな、幾つもある神経の中から、戦闘にはあまり役に立たない神経を切り離し、別の神経を強化するという事も可能なのだ。

簡単な例を上げると、良く交通事故で突然、周辺がスローモーションのように感じるという話を聞いた事はあるだろう。それは事故で危険を察知して、少しでも危険回避するために聴覚や識色、視覚が切り離されるからだ。つまり、危険を回避するために必要が無い、これらの神経を切り離す事で、他の神経を高めて危険を回避出来るようにする防衛本能である。

これらは実際に自由自在にやろうとしても出来る物ではない。だが、今のアルビータは自由にそうした神経を切り離し、戦闘に必要な神経を強化している。そこに命の提供で春澄から注ぎ込まれた命が、さまざまな戦闘器官を高めているのだ。

それはつまり、今のアルビータは先程とは比べ物にならない力を発揮してくるという事だ。それが分っているからこそ、ラクトリーと半蔵は警戒を強めるが、フレトには報告しなかった。いや、正確には出来なかったのだ。今の時点で隙を見せれば、アルビータは容赦無く、襲い掛かって来るだろう。だからこそ、ラクトリーも半蔵も黙って成り行きを見守るしかないと判断せざる得なかった。

それでもラクトリーは最低限の事を小声でフレトに伝える。

「マスター、お気をつけください。今のあの精霊は、先程とは比べ物にならないほどの力を発揮してくるはずです。なのでマスター、慎重に」

そんなラクトリーからの忠告をフレトもアルビータを更に警戒しながら思考を巡らす。

ラクトリーがそこまで言うほどの相手だ。ここは、先程の戦闘経験を無視して、新たな敵と対峙すると考えた方が良さそうだな。だが、相手の性格まで参考にしないのは愚かだろう。となると……取るべき手段は一つだけか。命の提供が無制限では無い限り、戦っていれば必ず契約者の命が尽きる。突くとすれば、そこしかないな。後は……俺達がどれだけ、この化け物と戦えるかだ。

そう判断したフレトが全員に命令を伝える。

「皆（みな）、俺の傍に集れ、とにかく密集して、お互いに補える位置を取

れっ！」
『はっ』
フレトがそんな命令を下すと、ラクトリーと半蔵はフレトの左右を固める。そしてフレトの真上にはレットが抑えていた。これで、どこからアルビータの攻撃が来ても対処できるとフレト達は判断をしただろう。だが、相手はフレト達が思っている以上に化け物といえる物だった。
アルビータはフレト達が戦闘体勢に入った事から、フレト達の陣形を見て、防戦に持って行き、春澄の命を少しでも使わせる気なのは間違い無いと判断した。だからこそ、ここは春澄の命を無駄に消耗しないためにも一気に攻勢に出た。
フレト達も充分にアルビータを警戒していた。けれども、そんなフレト達の前から突如としてアルビータの姿が消える。いや、正確にはアルビータの動きを誰も追えなかったのだ。そしてフレトの真上から衝撃音が発するのと同時にレットが玄関ホールの奥にある大階段に向かって弾き飛ばされていた。
何が起こったのかレット自身も分からないし、フレト達にも分からないほどのスピードだった。だが、こうして一度止まったからには次の動きはしっかりと見えるし、こちらからの反撃も充分に出来る。だからこそ、半蔵はワザと未だに空中に居るアルビータに向かって跳び上がった。
もちろん、アルビータにも半蔵の動きはしっかりと見えていた。だからこそ、ツインクテラミノアの片方を振るい、そのまま半蔵をレットと同じく弾き飛ばそうとするが、今度は半蔵の方がアルビータの攻撃が当たる前に消えたのだ。
そして半蔵に注意を向けていた事を最大限に活かすためにラクトリーがアースブレイククレセントアクスを思いっきり振り出す。さすがに半蔵の行動によって虚を突かれたのだから、少しは反応が鈍くなり、確実にダメージを与えられるとラクトリーは思っていた。
けれども、実際にはラクトリーのクレセントアクスは、もう片方

のツインクテラミノアによって防がれるどころか、振り下ろされたツインクテラミノアによってアースブレイククレセントアクスごとラクトリーを床に叩き付けたのだ。そのため、ラクトリーはクレセントアクスで防いだものの、思いっきり床に叩きつけらて床を転がる事になってしまった。

けれどもフレト達の攻撃はここで終わりはしない。ラクトリーを完全に叩いた事により、両方のツインクテラミノアは使えなくなったのも同じだ。それを見越したかのように、アルビータの背後から空間が切り裂かれると半蔵が姿を現し、そのまま空斬小太刀でアルビータの首筋を狙って一気に前に突き出す。

ここまで相手の隙を突いたのだ。半蔵も確実にダメージを与えられると思っただろう。だからこそ、空斬小太刀はアルビータの首筋を確実に斬り裂くと思っていた。だが、そんな半蔵の目の前からアルビータの姿が消えると、いつの間にかアルビータの蹴りが半蔵の脇腹にめり込んでいた。どうやらアルビータは空中で身体を捻ると、その勢いを使って半蔵に蹴りを入れてきたようだ。そこからアルビータは、そのまま蹴り抜いたので、半蔵は蹴り飛ばされる形で玄関ホールの左側の床に叩きつけられる事になってしまった。

驚くべき事は、アルビータはこれだけの行動を最初にレットを弾き飛ばした時から、床に着地するまでに行ったという事だ。それは決してラクトリー達の反応や攻撃が遅いワケでも無いし、見当違いな場所に向かって放ったわけではない。確実な攻撃をしても、アルビータは、それを避けて、尚且つ反撃してきたのだ。その間の攻防は五秒も経っていないだろう。

だから突如として目の前に着地したアルビータの姿を見て、フレトは思わず反応が遅れてしまった。やはり遠距離戦を得意としているフレトでは、接近戦でのハイスピードな攻防には、まったく付いていけないのだろう。

そのためフレトは驚きの表情をおり、隙だらけである。そんな隙をアルビータが見逃すワケがない。フレトが驚いている間にツイン

クテラミノアの片方でフレトを強打するアルビータ。ここでも斧の刃ではなく、腹の方で叩き付けたので、斬撃というよりも打撃といった感じだ。けれども、フレトはそんな事を感じる前に、弾き飛ばされた事にやっと気が付いた。しかも強打を思いっきり喰らったので身体中に激痛が走り、そして次の瞬間には玄関ホールの柱に身体を叩きつけられ、フレトの意識は一瞬だけ沈むが、痛みと意地とプライドがなんとかフレトの意識を引き上げる。

まさに一瞬の出来事である。アルビータは十秒も経たない内に全員にダメージを与えたのである。しかも全員に強烈な一撃を入れたのだから、スピードといい、攻撃力といい、かなりの物だと言えるだろう。

けれどもフレト陣営も黙ってやられるほどヤワではない。最初に攻撃を受けたレットが、上空からではなく、床スレスレの低空飛行で一気に突っ込んで行った。確かに、これならばアルビータがツインクテラミノアを振る前に、一撃を入れて離脱する事も可能だろう。けれども、アルビータはレットが考えているよりも想定外のスピードを見せたのだ。

なんとアルビータはハイスピードで突っ込んできたレットを、タイミングを見計らって、そのまま片足を上げるとレットを踏み付けたのだ。その衝撃で床が大きく割れて、踏み付けた場所は大きく陥没する。

レットは爪翼の属性、つまり半分は翼の属性を持っているのと同じだ。だから翼の属性には敵わないものの、かなり翼の属性に近いスピードで突っ込む事が出来た。それなのに、アルビータはそんなレットのスピードを見極めたように、いとも簡単にレットが攻撃を入れる前に踏み付けたのだ。つまりレットのスピードを完全に見極めたといえるだろう。それは並みの反射神経では絶対に無理であり、アルビータの反射神経がレットのスピードよりも高い事を示している事の証明だった。

それでもアルビータはレットのスピードを厄介だと感じたのだろ

う。ツインクテラミノアの刃を立てると、アルビータはレットの翼を一振りで斬り落としたのだ。激痛がレットの背中を走って、レットは悲鳴に近い声を上げる。さすがに翼を斬り落とされては、レットといえども声を上げても不思議ではない。

そのため、レットの背中を血が赤く染める。それでも、レットは翼の属性を半分は持っている。時間が経てば再び翼を生やす事は出来る。だが、レットのダメージは決して軽くない。むしろ重症と言っても良いだろう。それほどまでのダメージを喰らった後に翼を斬り落とされたのだ、再び翼を生やすには時間が掛かるだろう。少なくとも今の戦いが行われている間に再生するのは不可能だろう。

そんなレットをアルビータは邪魔とばかりに玄関ホールの奥へと蹴り飛ばす。これでレットは戦線離脱と同じだろうとアルビータは判断しただろう。だからと言って、まだフレト達が負けたワケではないとばかりにラクトリーがいつの間にか接近して来ており、すでにクレセントアクスを振り出そうとしている。

そんなラクトリーの攻撃をアルビータはツインクテラミノアの片方で防いだだけだった。アルビータが反撃に出なかったのは、既にアルビータの上から落下してくる半蔵の姿を捉えていたからだ。

しかも半蔵の姿は一つでは無い、なんと半蔵の姿は四人になっていた。もちろん、本物の半蔵は一人、残りの三人は空の属性を使っての幻影である。半蔵は自分の身体を覆っている空間をコピーして、別の場所にある空間に映し出したのだ。正確には半蔵の身体を切り取る形で空間を切り裂き、そうして出来た半蔵の姿を、別の場所の空間に割り込ませたのだ。そうする事で、別の場所にある空間に半蔵の姿が写るというワケである。

片方ではラクトリーの攻撃を受け止め、上から来る半蔵にも対処しなければいけないのである。さすがのアルビータでも、ラクトリーの攻撃は対処が出来ても半蔵の攻撃までは対処できないとラクトリーも半蔵も思っていた。

だが、アルビータは空いている片方のツインクテラミノアを上方

へ向けると力を解き放つ。その途端、半蔵の幻影は消えて、半蔵の姿は一人だけになる。その事に驚きを示すどころか、自分達のミスを悔やむラクトリーと半蔵。それでも半蔵は上からの奇襲を続行する。

そう、二人ともアルビータが無の属性を持っている事を忘れていたのだ。無の属性は属性の無効化、だから半蔵が空の属性を使って作り出した幻影もアルビータが放った無の属性で消し去られてしまったのだ。それでも、半蔵は少しでも勝機をと思い、空斬小太刀を突き出す。

だが、巨大なツインクテラミノアと半蔵の空斬小太刀では武器の間合いが違いすぎる。そのため、アルビータは半蔵がツインクテラミノアの間合いに入ると、そのまま半蔵に強打を与える。だが、さすがは半蔵と言ったところだろう。半蔵は空中で体勢を変えると、そのままツインクテラミノアの腹を蹴り、その勢いを殺し、自分に作用させるために身体を屈めると、そのまま一気に飛び跳ねる。

相手の攻撃を活かした見事な避け方である。けれども、これもアルビータがツインクテラミノアの刃ではなく、腹で打撃を加えてくるという憶測があったからである。やはり、アルビータは命の強奪を行うために、精霊達に致命傷を与えないためにも打撃で済ませていると半蔵もラクトリーも考えていた。

だからこそ、アルビータの攻撃が打撃だけなのは予想済みだ。それだけでも分っていれば、少しは対処法があるというものだ。

一方のアルビータは半蔵の見事な動きでダメージを与えられなかったのだが、悔しい顔はしなかった。むしろ、それぐらいはやってもらいたいぐらいという感じで軽く笑みをこぼしていたほどだ。そんなアルビータが半蔵をを叩き損ねたツインクテラミノアでラクトリーを叩きに来た。

そこでしかたなく、ラクトリーは後方へ下がろうとするが、いつの間にかツインクテラミノアとクレセントアクスがお互いの斧と柄の間に入り込み、すっかり二つの武器は絡み合う状態になっていた。

おかげでラクトリーはその場から動く事が出来ず、何とか絡み合う武器を外そうとして、外れた時にはすでに遅かった。

片方のツインクテラミノアがラクトリーの身体を宙に舞い上げるように打撃を加えると、もう片方のツインクテラミノアがラクトリーを力任せに、空中に舞い上がっているラクトリーの身体を容赦無く地面へと叩きつける。そのため、ラクトリーは思いっきり吹っ飛び、遠くにある玄関ホールの壁に叩きつけられ、壁にはヒビが入った。それだけでもアルビータの攻撃が苛烈を極めている事が分かるだろう。

これでラクトリーもすぐには動けないだろうと判断したアルビータは半蔵を探すが、攻撃を仕掛けてきたのは、予想外にもフレトだった。フレトは完全に自分から注意が外れている事を察すると、アルビータが半蔵を探すために背中を向けた瞬間に攻撃を仕掛けたのだ。

けれども、今のアルビータは微かな空気の流れや、肌から感じる気配を敏感に感じ取る事が出来る。だからこそ、アルビータは半蔵を探すのを中断してフレトの方へ向くと、そこにはフレトが既にマスターランスの連撃を放っていた。

先程はフレトのマスターランスが繰り出す刺突を全て防いでいたアルビータだが、今度はフレトの攻撃を全て避けきると、間合いに入ってきたフレトの顎を思いっきり蹴り上げる。蹴りの衝撃が大きかったのだろう。フレトは顎を上に空中に舞い上がった。そこにアルビータから追撃があるのはフレトも分かっている事だろう。それでも、フレトは何とか叫び声を上げて命じる。

「やれっ！」

その言葉と同時にアルビータはツインクテラミノアでフレトを叩き弾くのと同時に背中に痛みが走るのを感じた。そう、アルビータが完全に隙を見せる瞬間、つまり攻撃の時を狙って半蔵が背後から奇襲を掛けたのである。しかも、囮がフレトという契約者である。

まさか契約者を危険にさらしてまで奇襲を掛けてくるとは、さす

がのアルビータも思わなかった。けれども、こうして奇襲が成功したのは事実である。半蔵の空斬小太刀は見事にアルビータの背中に縦一線の傷を付けることが出来た。

だからと言って、アルビータがまとっている重厚な鎧を切り裂いての攻撃である。傷は付けたものの、ダメージとしてはかすり傷程度の物だ。その程度の傷だからこそ、アルビータはまったく気にする事無く、すぐに振り向くと攻撃直後で床に膝を付いている半蔵の姿を目にするとアルビータはそのまま半蔵の腹に蹴りを入れて、半蔵の身体を空中に舞い上げる。

けれども相手は半蔵である、下手な攻撃は出来ないとアルビータはツインクテラミノアを握り締めた拳で半蔵の顔面に叩きつけると、そのまま半蔵を玄関の方へと叩き投げた。さすがの半蔵も、そんな攻撃をされては避ける事が出来なかった。だからこそ、半蔵は空中で体勢を立て直す事が出来ずに玄関の脇にある壁に、その身を叩き付けて、そのまま外まで飛ばされてしまった。

これで全員倒したとアルビータは思っただろう。けれども、再び自分の背中に痛みが走るとアルビータはすぐに振り向く。そこには傷付きながらも、思いっきりテルノアルテトライデントを振り下ろしたレットの姿があった。

そんなレットがアルビータを見ながら、笑みを浮かべつつ言葉を口にする。

「あまり俺達をなめるなよ」

レットは翼を斬り落とされただけでなく、かなりのダメージを負ったというのに、ここで更にアルビータの隙を付いて攻撃をしてくるとは予想外な事だった。そのため、普段なら無の属性でレットの攻撃で特長とも言える爪の属性を無効化するところなのだが、完全に不意を付かれたために、無の属性を発動させる間も無く、レットの攻撃を受けてしまったのだ。レットの爪の属性、切れ味を増加させて、かなりの硬度でも切り裂ける、という利点を利用して見事にアルビータの鎧を切り裂き、背中に傷を残す事が出来たのだ。

レットはダメージ量から既に戦闘不能でもおかしくはないのだが、まかさ、ここに出てくるとはアルビータも思いも付かなかった。レットとしても素直に寝ておきたい気分だったが、フレト達が戦っているには、自分だけがみっともない姿だけで終わらせるのが癪だったため、気力だけで立ち上がったようなものだ。

そのため、レットの呼吸は荒く、何とかテルノアルテトライデントを掴んでいるのがやっとだった。そんなレットに対して容赦無く、攻撃を入れようとするアルビータ。だが、レットに攻撃を入れる前にラクトリーがレットをフォローするためにアースブレイククレセントアクスを振るってくる。

そんなラクトリーの姿を見たアルビータは片方のツインクテラミノアでレットを弾き飛ばすと、ラクトリーの攻撃も、もう片方のツインクテラミノアでいなすと、そのまま前がガラ空きなったラクトリーの腹を思いっきり蹴り飛ばす。

だが、それと同時に今度は脇腹に痛みを感じるアルビータ。二人を完全に弾き飛ばした瞬間を狙った攻撃だ。いくらアルビータでも、攻撃に集中してて、確実に死角が出来ていたようだ。そして、その死角からフレトは思いっきりマスターランスを突き出し、そのままアルビータの鎧を砕いて、切っ先だけをアルビータに突き刺さしたのだ。

そんなフレトを見て、アルビータは突き刺さっているマスターランスを抜こうとするが、そうはさせないとばかりに、フレトは更にマスターランスを突き入れようとする。そんなフレトがアルビータの方へと顔を向けると言葉を放つ。

「レットの言うとおりだ、俺達をなめるなよ。たとえお前がいかに強大な力を振るおうとも、俺達がお前に膝を屈するワケには行かない。それがたとえ、伝説と言われる精霊であってもな。誰に膝を屈する事無く、自分の描いた道を進むのが俺の、いや、俺達のやり方だ。だから……この程度の事で……負ける訳にはいかないっ！」

噛み付くように最後の言葉を放つフレト。そんなフレトを見て、

アルビータは複雑そうな顔でフレトの顔を見ながら応える。
「さすがは精霊の主として、またはエレメンタルロードテナーに適した者として相応しい言葉だな。私も……もし、次も精霊として生まれてきたのなら……私もあなたのに仕えたいと思うほどだ。だが……今の私が、そんな事を言っても詮無き事。ならば……少年っ！」
私は貴殿達を倒して戦いに幕を下ろそうではないかっ！」
「やれるものなら、やってみるが良いっ！　俺達の意地とプライド、その身体に刻み込んでやるっ！」
睨み付けてくるフレトに対して、アルビータは満足そうな笑みを浮かべると……再び戦いの幕が上がるのだった。

「うわ～、これは随分と派手にやったね。それに……アルビータにこれだけの傷を負わせるなんて、思っていた以上に強かったんだね」
戦いが終わった事を察したのだろう。いや、春澄の事だから、どこからか見ていたのかもしれない。なにしろ、今、フレト達は全員、戦闘不能状態であり、戦うどころか意識があるかも怪しいものだ。それぐらいフレト達は完全に叩きのめされている。
そんなフレト達と戦ったアルビータも無傷というワケにもいかなかったようだ。致命傷は無いものの、深い傷が幾つかあり、浅い傷は数えられないほどある。それぐらい、アルビータもフレト達の戦いで苦戦した証であり、フレト達の強さを物語っていた。
そして戦場となった玄関ホールはすっかり荒れ果てており、瓦礫がそこら中に点在している。そんな状況の中を春澄は身軽な足取りでアルビータの元へやって来た。そんな春澄が倒れこんでいるフレト達に声を掛ける。
「私が言うのもあれだけど、意識がある人っていますか～？」
大きな声で叫んだのだから聞こえてはいるだろう……意識があればの話ではある。だが、誰一人として春澄の声に応えるどころか反応する者は誰も居なかった。そんな状況に春澄は「う～ん」と考え

込んでからアルビータとの会話を始める。
「今までの戦いでアルビータにここまでのダメージを負わせた人は居なかったし、ここまで戦える人も居なかったよね。アルビータもかなり傷を負ったようだし、かなり本気だった？」
そんな春澄の問い掛けにアルビータはフレトが倒れている方を見ながら答えた。
「本気にならざる得なかった。それぐらい強い意志と力を持った強敵と言えるだろう。正直なところ、春澄にかなりの命を注いでもらったおかげで勝てた、そんな感じだ」
「うわ～、そんなに強かったんだ。やっぱり追加しておいてよかったよ」
「どうせ、どこかで見ていたのだろう。だから今更、少年達の強さについて語っても意味は無いだろう」
「あっ、バレてた。あはは～っ、まあ、最後の方だけね。アルビータが苦戦しているのが分かったから、追加しておいたよ」
「そのおかげで勝てたようなものだな」
そう言ってアルビータは周囲を見回す。正直なところアルビータは歓喜に震えていた。これほどの相手に本気で、春澄に更なる援護を貰ってやっと勝てた相手だ。だからこそ、アルビータとしても戦い甲斐があったし、満足が出来る戦いでもあった。
そんな時だった。春澄がある方向を指差すと思いっきり声を上げる。
「あっ！　あそこのお姉さん、何かやってるっ！」
そう言って指差したのはラクトリーだった。そう、ラクトリーは自分達が完全に負けた事を外に知らせるのと同時に、疲弊した今の春澄とアルビータなら、昇達なら倒せると踏んだからこそ外に向けて非常用の救援信号を発したのだ。今頃は咲耶が救援信号を見て、昇達に連絡を取っている頃だろう。それに春澄達のデータも少しだけだが、送っておいたので昇達が戦う時には参考になるだろう。そこまで考えて、ラクトリーは咲耶に救援信号を送ったのだ。

そして春澄に指摘されたラクトリーの元へ向かうアルビータ。そこでアルビータはラクトリーが外へ救援信号を送っている事を見たのだ。だからと言ってアルビータは、それ以上の事をラクトリーに対して何かをする訳ではなく、春澄の元へ戻って行った。

「どうやら外に連絡を取っているようだな。下手をすれば、あの少年がここに来るかもしれないぞ」

「う～ん、今の時点で昇さんに来られるとダメなんだよね～。まあ、いいや、やる事だけやって、今日はさっさと引き揚げようか」

そんな事を言った春澄がラクトリーの元へ行くと、その場にしゃがんでラクトリーに話しかける。

「お姉さん、ちょっとだけ伝言を頼めるかな。昇さんに、明日の約束を忘れないでねって、言っておいて」

それだけラクトリーに言うと春澄は立ち上がって、片手を上げる。それから、ラクトリーに告げるように言うのだった。

「大丈夫だよ、死ぬまで取らないから。まあ、明日の夜までは起きられないぐらいは取らせてもらうかな～。そんな訳で、お姉さん、伝言よろしく」

春澄は笑顔でそれだけ言うと、今度は上げた手に精神を集中させる。そして、その力を発動させるのだった。

「命の強奪っ！」

その途端、フレトを始め、ラクトリー、レット、半蔵の身体から白い物が出てきて、春澄の上げた手に集っていく。それと同時にラクトリーは自分の中から何かが奪われるのを感じながら、意識を保つ事も、これ以上は困難だと感じながらも、何とか意識を引っ張り上げようとするが、とてもでは無いが、この奪われる感じがしている限りは意識を保てそうには無いと半ば諦めながら、ラクトリーは意識を沈めるのだった。

それから春澄はある程度の命を、いや、生命力と言った方が的確だろう。その生命力をある程度だけ奪うと、命の強奪を止めるのだった。それから春澄は首を傾げながら言葉を口にする。

「う～ん、さすがに今日の消耗は厳しかったな～。せめて、今日使った半分ぐらいは回復するかと思ったけど、今日使った半分も回復できなかったよ」

そんな春澄の言葉に、まるでどうでもいい感じでアルビータが答える。

「構わんだろ、どうせ、今日のは前座。次の戦いこそ我らの終焉なのだから」

「まあ、それもそうだね。けど、次の戦いは今日より厳しいと思うよ。状況によってはフレトさん達も再戦してくる可能性だってあるし、それに……昇さんの方が圧倒的に強いと思うよ。まあ、私の勘だけどね」

「何でも構わんさ。相手が強ければ強いほど良い、その強敵こそが……私の目的なのだから」

「アルビータの願いも、これで叶うね。後は私か～、う～ん……私は、昇さんを見てみたい。出来る事なら、最後は昇さんのところで終えたいんだけどね。周りの精霊や人がうるさいから無理かな。でも……最後ぐらいは私の願いに気付いてくれるよね。ねえ、昇さんならね」

「……」

春澄の言葉にアルビータは言葉を返さなかった。それはアルビータに向けられた言葉で無い事をアルビータは分っていたからだ。その言葉こそ、春澄から昇に向けた本心の言葉だと知っていたからだ。だからこそ、春澄は願うのだった。最後が自分の望んだ最後であるようにと。

そんな春澄にアルビータが声を掛けてきた。

「……さて、そろそろ脱出するべきだろう。ぐずぐずしてて鉢合わせになっては意味が無い。早急に撤退するに限るな」

「うん、そうだね。それじゃあ、今日は引き揚げようか。フレトさん、聞こえてないと思うけど、一応言っておくね。今日は楽しかったよ、ありがとう……さて、じゃあ、行こうか」

「あぁ、そうだな」
それだけの会話を終えると春澄とアルビータはフレト邸の門を潜って外に出ると、アルビータは精界を解いた。そして二人とも誰も来ないうちに夜の闇に消えて行くのだった。

第百三十七話　意地とプライド（後書き）

さてさて、これでフレト達対アルビータの戦いが終わりましたね～。いや～……今回は長くなったよ。なんというか、フレト達が奮戦する状況をしっかりと書いておきたかったんだよね。そうしたら……いつの間にやらいつもよりも密度が増してしまいました～。

けど、まあ、これほどの密度なら更新が遅れた事も許してくれるよね。というか、言語道断……えっ、ダメ……逃げるが勝ちっ！

という訳で出口に向かってダッシュッ！　……えっと、突如として私の足元に開いた穴はなんでしょう？　しかも床には無数の竹槍があるんですけどっ！！！！　って！　こんな事を言っている間に、あああああぁぁぁぁ……グサッ！

……作者復活中、もうしばらくお待ちください……。

……ふう、やっと生還できたよ。まさか落とし穴だけではなく、地雷や絨毯爆撃をされるとは思ってなかったよ。けど、まあ、こうして無事に生還できたことだし、やっと我が家に帰れるワケですね～。わ～い、そんな訳で、早速帰宅。

……『入居者募集』……。

えっと、この張り紙は何？　いつの間に私の家が、というか部屋がなくなってるの……こ、このまま泣き寝入りなんて出来るかっ！！！！　こうなれば大家に直訴だっ！！！！

……敗訴。

ダンボールで家を作るなんて子供の時以来だよ。それに新聞紙も意外とあったかいよね～。……家なき子になってしまいましたっ！！！！

さ～て、そろそろネタも尽きた事だし、というか飽きたので、そろそろ締めますね～。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちして

おります。
以上、やっぱりタバコとコーヒーは文章を書く時には必要だよね～、とか思っている葵夢幻でした。

第百三十八話　霧中模索

「どうやら遅かったみたいじゃのう」
フレト邸に急行した昇達だったが、正面の門に辿り着くと昇がチャイムを鳴らす前に閃華がそんな言葉を放ってきた。そのため、昇はチャイムを押すよりも閃華に尋ねる。
「遅かったって、何で分かるの？」
当然の質問と言えるだろうが、閃華にしてみれば見ただけで分かる事であり、それはシエラも同じだった。だから閃華が答えるよりも早く、シエラが質問の答えを口にする。
「話を聞いた限りでは、屋敷全体を精界で覆われてるはず。けど、今では精界を解かれてる。これは戦闘が終了した証拠と敵が既に去った事を示してる」
「じゃあ、フレト達は？」
それにはシエラも首を横に振るのだった。それはそうだ、戦闘に参加していない昇達にフレト邸で行われた戦闘について分かるはずが無い。昇もシエラを見て、自分が焦っていた事を自覚すると、冷静になるために、その場で大きく一回だけ深呼吸すると会話を続ける。
「何にしても、ここでいくら話し合っていても意味は無いよね。だったら、すぐに咲耶さんから話を聞こう。皆には悪いけど戦いの準備をしてもらってきたのに、今の僕達には、それぐらいしか出来ないみたいだ」
「私達の事は気にしなくて良いわよ。それよりも早く話を聞いて状況を掴んだ方が良いでしょ、昇」
「うん、じゃあ、行こうか」
琴未にそんな事を言われて、無用な気遣いをしたと昇は感じながらチャイムを押す。それから数秒後に応答があり、咲耶の声がチャイムから聞こえると昇は自分達の来訪を咲耶に告げる。すると咲耶

は「とにかく入ってきてください」とだけ言った後に門が自動的に開くのだった。

まあ、フレトの家は見ただけでも豪華だというのが分かるほどだ。だから門の開け閉めを屋敷内で出来ても、全く不思議ではない。昇達も、その事は充分に分っているからこそ、門が開ききる前に正門を潜り抜けて玄関へと急いだ。

玄関にも玄関用のチャイムが備え付けてあり、昇は再びチャイムを押すと、すぐに鍵が開く音がすると大きなドアが開いて咲耶が姿を現した。

「咲耶さん、フレト達は？」

姿を見せた咲耶に対して、すぐに質問する昇。そんな昇に対して咲耶は冷静に昇達を中に招き入れながら答えて来る。

「詳しい事は後で、ですから、今は私の後を付いてきてください。詳細はそこで話し合いましょう」

咲耶の言葉を聞いて頷く昇。それからは黙って咲耶の後を追って、二階にある、とある部屋へと案内された。そして、部屋のドアが開けられると昇達は言葉を失う事になってしまった。なにしろ、その部屋にはフレトを始め、ラクトリー、半蔵、レットとフレト達が全員ベットに寝かされていたからだ。

その光景だけを見ればフレト達が負けた事は一目瞭然だろう。そうなればフレト達は争奪戦からは落脱、精霊達との関係も切れると思った昇だが、昇の目の前には咲耶がしっかりと存在している。これは未だにフレト達の契約が成立している事を示している。つまり、フレトの中にある器、精霊王を受け入れる器が破壊されていない事を示していた。

そうなると昇は不思議に思った。目の前に存在している光景を見ればフレト達が負けた事は間違いないだろう。けれども、フレト達の契約は解除されていない。これはフレト達を倒したものの、フレトにトドメを刺さなかった事を示していた。だから昇は不思議に思って思考を巡らす。

フレト達が負けた事は見ただけでも分かるけど……どうして、相手はフレト達にトドメを刺さなかったんだろう？　争奪戦ならトドメを刺して精霊王を受け入れる器を破壊するために、契約者に致命傷を与えるはずなのに……どうして？　いや、ここは逆に考えた方が良いかな。敵、つまりフレト達と戦った相手はフレトにトドメを刺さない方が自分たちにとって都合が良かった。もしくはフレト達がその前に脱出したかの二択かな。でも……見ただけだけど、ここまで完膚なきまでに倒されたフレト達を見ると、後者は考え難いか。

昇がそんな事を考えていると、予想外な方向から思いもしなかった声が聞こえてきた。

「滝下、さっさと中に入ったらどうだ。いつまでも、そこで立っていても仕方ないだろう。今はよっちゃんに話を聞いた方が全貌を掴めるんじゃないか」

「って、森尾先生っ！」

「よっ」

思いも掛けなかった森尾の登場に昇は驚きの表情を見せる。そんな昇を見て、森尾は昇が何に驚いてるのかをさっしたのだろう、人差し指である方向を何度か指し示してくる。そのため、昇達の視線は自然と森尾が示した方へと向き、昇達は驚きを見せる者と、納得した表情を見せる者に分かれた。

まあ、納得した者はシエラと閃華だけだが、琴未も驚きの表情を見せたが、すぐに事態を察したのだろう、すぐにシエラ達と同じように納得した顔で何度か頷くのだった。そして、それは昇も同じだった。だからこそ、昇は森尾に尋ねる。

「与凪さんにも連絡があったんですね？」

そう、森尾が指差した先には与凪の姿があったのだ。その与凪は何かの作業をしているらしく、忙しそうに、いろいろと何かをしているようだが、そんな与凪の姿を見て昇達は事態を把握するのと同時に納得した。

大きな部屋の中央には長いテーブルが置かれており、そのテーブ

ルを囲むようにフレト達が寝ているベットが置かれていた。与凪は椅子に腰を掛けて、テーブルの上に幾つものモニターを見ながら早い速度で空中に浮かんでいるキーボードを叩いている。

だから与凪がここに居るという事は……戦いに決着が付き、フレト達の治療を行うのと同時に戦いの全貌を明らかにするために、与凪は治療と情報収集に大忙しなのは見ただけでも分かるというものだろう。

そんな昇の質問に森尾は一度頷くと一から説明を始めてきた。

「たぶん、先生の元に連絡が来たのは滝下達の後だろうな。咲耶君の話だと、傷を負って倒れているフレト君達の事を明確に説明してくれたからな。それから、俺達は車で、すぐに出発した訳だ。それに、よっちゃんはバックアップ専門だからな。連絡が来た時点で戦闘が終わっているのは察しが付いた。だから、よっちゃんが準備をしている間に先生が車を回してすぐに出られるようにしていた訳だ。そんな訳で滝下達よりも早く到着する事が出来たワケだ」

「なるほど、言われてみれば与凪さんに連絡した時点で咲耶さんが詳細な事態を掴んでいる事は分かりますからね」

そんな事を言って来た昇だが、横から口を出してきた咲耶が昇の言葉を否定する。

「いいえ、昇様、それは違います。私も詳細な事態は掴んでません。詳しく説明すると、昇様に連絡を入れた後に精界が崩れたので、私は主様の元へ急行しました。そして玄関ホールに倒れいる主様達を見つけ、全員をこの部屋に運んだだけです。けれども私は情報収集や情報分析は不得手ですから。だからこそ、与凪様に連絡をして来てもらったワケです」

「ふむ、昇よ、どうやら未だに情報が整理されていないようじゃな。じゃから今の時点で与凪から話を聞くのは無理じゃろう。それよりも手分けして、私達もフレト達の治療に当たった方が良いじゃろう。それに私とシエラは与凪と一緒に情報収集と分析に当たれば、情報整理が早く終わるじゃろう」

「そうだね、ならシエラと閃華は与凪さんを手伝って、琴未とミリアは僕と一緒に咲耶さんの手伝いに回ろう。咲耶さん、今はこんな事態ですから、僕達に的確な指示を出してくれると助かります」
そんな昇の言葉に咲耶は申し訳なさそうに一度だけ頭を下げる。
「ありがとうございます。こちらこそ、お礼をいう事しか出来ません。今はそれだけでご容赦ください」
「はいはい、そんな挨拶は抜きして、さっさと作業に入るわよ。今は、それしか私達に出来る事が無いんだからね」
琴未がそんな言葉で締め括ると昇は大きく頷く。それを合図に昇をはじめ、それぞれが所定の場所に付き、それぞれの作業を始める。シエラと閃華は与凪と一緒に情報収集と分析、昇達は咲耶が的確に指示を出してくれたおかげで、フレト達の応急処置から治療まで充分に手伝う事が出来た。もちろん、森尾までもが手を貸してくれたおかげでフレト達の治療は、ひとまずは終わり、後はフレト達の意識が戻るのを待つだけだ。
そのため、手の空いた昇の元へ、心配そうな顔付きで車椅子に乗ったセリスが来ると、セリスは真っ先に昇に質問する。
「あ、あの、昇さん、お兄様は大丈夫ですよね？」
その質問に対して昇はセリスの顔を見ずに、現状で言える事をはっきりと告げる。
「正直なところ、今のところは何とも言えない。与凪さん達が検査もしてるから、その結果次第としか言えない」
「そう……ですか」
昇の言葉に更に落ち込むように顔を伏せるセリス。昇は、そんなセリスの手を取ると微笑を向けながらはっきりと言葉を口にする。
「でも大丈夫だよ。フレトの事だから、この程度で倒れる事は無いはずだよ。それどころか、逆に復讐心を燃え上がらせるほどの気迫もって目を覚ますかもしれないよ。それはもう、僕達の想像を超えてね」
そんな昇の言葉にセリスも昇の手を軽く握り締めると、軽く笑い、

そのまま微笑を昇に向けた後、フレトに視線を移してから昇との会話を続ける。

「確かに、お兄様なら、それぐらいやるかもしれませんね。グラシアス家の名に懸けて、絶対に十倍返しで後悔させてやるって、思いっきり叫びそうですね」

「そうだね、フレトなら、それぐらい言うかもね」

それからお互いに燃え上がりながら起き上がってくるフレトの姿を想像したのだろう、昇とセリスは楽しそうに笑い出した。けれども、そんな昇の笑い声もすぐに痛みで消える事になる。なにしろ琴未がセリスの手を取っている昇の手をつねりながら引き剥がしたからだ。そして、その琴未が二人に告げるように言葉を放つ。

「どうやら解析が終わったみたいよ。与凪が皆に集ってくれだって」

それだけを口にすると琴未は昇の手を取って、無理矢理に立たせると、すぐに与凪の元へ向かった。そんな光景を見ながら、また軽く笑うセリスは後ろから声を掛けてきた咲耶に向かって返事を返すと、咲耶に車椅子を押してもらって与凪の元へ行くのだった。

全員が与凪の元へ集ると閃華が与凪に、その事を告げる。けれども与凪は未だに不思議そうな顔をしながら顔を上げると、とりあえず説明を始めるのだった。

「まずはフレトさん達の怪我ですが、全員とも多くの打撲を負っていますが命に別状はありません。だから安心してください……と言いたいんけど……少し変なんですよね」

「というと？」

与凪の言葉にそんな疑問をぶつける昇。そんな昇の質問を受けて、与凪も何て答えて良いのか分からないのか、自分の髪を少し掻き混ぜてから質問に答える。

「えっと、とりあえず一つずつ答えて行きますね。先にも言ったとおりにフレトさん達は命に関わるようなダメージは負ってません。

そこは安心してください。けれどもレットさんの傷に付いて少し引っ掛かるところがあるんですよね。レットさんは爪翼の属性を持ってますから背中に翼を生やして空中戦を得意としているのは皆が知っての通りです。敵もそれがやっかいだと感じたのでしょう、ですから、レットさんの翼は切り落とされています。つまり、敵にはレットさんの翼を切り落とせる武器を持っていた。つまり刃の付いた斬撃が出来る武器を持っていた事が考えられます。ですが……フレトさん達には斬られた跡は全く無いんです、斬られた傷を負っているのはレットさんだけなんです。つまり、レットさんの翼だけを切り落として、後は打撃だけでフレトさん達を倒した事になります」

「……それって、どこが変なの～？」

与凪の説明を聞いて、そんな言葉を口にしてきたミリアに対して全員がこけそうになった。いや、それどころか琴未は完全にこけているし、シエラも呆れたように溜息を付いていた。そんなミリアに対して閃華が仕方ないという形で説明してやるのだった。

「のうミリアよ、お主のアースシールドハルバードでも斧を使った斬撃や、槍を使った刺突が基本攻撃じゃろ」

「うん、刃の付いた武器を使う場合は斬撃を基本にした攻撃をした方がいいって、お師匠様が言ってたよ～」

「うむ、肝心なのは、その点なのじゃ。敵は斬撃が使える剣を持っているとしよう。じゃが、フレト達を攻撃するのに剣の刃を使う斬撃ではなく、剣の横腹を叩き付けるような、もしくは剣を握り締めた拳、または蹴りといった打撃だけで攻撃をしておったのじゃ。普通ならば剣を振るって刃で斬り裂くのがダメージを与えるのには効果的じゃろ。じゃが、フレト達と戦った敵は何故か刃を使える武器を持っているのに打撃だけで済ませておる。だから変じゃと言っておるのじゃ」

「つまり～、敵を斬り裂く武器を持っておきながら、それを使わない方法でフレト達を倒したって事？」

「そういう事じゃよ。レット殿の翼が切り落とされている事で、敵

は斬撃を使える事は明らかじゃ。じゃが、フレト達の身体には打撃の跡しか残っておらん。もちろん、レット殿の翼以外はじゃがな」

そう、それが与凪を始め、昇達に疑問を持たせる事になった。相手は敵を斬る事が出来る武器を持っていながら、斬る事をせずに打撃だけで済ませていた。わざわざダメージが大きい斬撃よりもダメージが小さい打撃だけで済ませているのだ。

もちろん、他の可能性も考えられる。打撃系の武器を持っていながら、属性は斬撃に近い形で発動できるとか。隙が大きくなる斬撃系の武器を持っていたから、打撃だけに攻撃を絞ったとかが考えられる。

だが、与凪が調べた限りでは、レットの翼を切り落としたのは属性攻撃ではなく、精霊武具による攻撃だという事は分っている。もし、属性攻撃なら何かしらの痕跡が残るはずだからだ。だが、与凪が調べた限りでは、そのような痕跡は残ってはいなかった。その事だけでも、相手は精霊武具を使って、レットの翼を切り落とした事は確実である。

そして不可解な点はまだあるのだった。閃華の説明でミリアが納得したところで、与凪はそちらの説明に入る。

「それから、戦闘が行われたであろう地点を探ったんですけど、まったく属性の反応が出ていないんですよね」

「それって、ただたんに属性が使われなかったって事じゃないの？」

「そんな事はありえないわ」

琴未の質問に即行で否定する与凪。そんな与凪が目を瞑り、首を傾げながら、いかにも不思議という事を身体で表しながら説明を続ける。

「フレトさんは風のシューター、だから戦闘になると絶対に風の属性を使ってもおかしくはないんですよ。それにラクトリーさんは大地の精霊から見ればエキスパート、そんなラクトリーさんが地の属性を使わないなんて考えられないんです。むしろ、ラクトリーさんのようなエキスパートだからこそ属性攻撃を主体に戦闘が行われて

も不思議じゃないんですよね。それなのに、戦闘予測地点にはまったく属性の痕跡が残ってない……なんていうか……そう、まるで消されたかのように」

「属性を伴わない攻撃だったっていう事は考えられないの？」

与凪の説明を聞いて、今度は昇がそんな質問をぶつけてきた。けれども、与凪はそれもどうかという感じで背もたれに思いっきり寄り掛かり、頭を垂らして考えると、すぐに頭を戻してから昇の質問に答えてくる。

「確かに、滝下君のように属性を伴わない攻撃もありますけど。精霊が戦闘に参加している限りでは、絶対に属性は使われるはずなんですよ。なにしろ、精霊である限りは絶対に属性は持っていますし、持っている属性を使わないで勝てるほど、フレトさん達は弱くはないですよ。むしろ、フレトさん達と戦ったのなら、属性の反応があちこちに出るのが普通なんですけど、それが全く無いというのが不思議なんです」

「精霊が移動系の属性というのは？」

今度はシエラが与凪に質問をぶつけてきた。けれども、そんなシエラの質問にも与凪はワケが分からない、と言いたげな仕草で自分の髪を軽く指で弄んだ後でシエラの質問に答えてきた。

「確かに、シエラさんのように空戦ハイスピードを得意としている翼の属性とか、半蔵さんのように空間を斬り裂く、移動系の属性なら属性の痕跡がすぐに消えますから、属性の痕跡は残らないんですけど、それは相手がそうならって話だけで、フレトさん達が属性を使ったのなら、必ず、それが残っているはずなんですよね」

「なるほどのう、敵はともかく、フレト達の属性を使った痕跡がまったく残って無い事が不思議じゃというのじゃな」

「そう、そうなんですよっ！」

閃華の言葉に、正しく、その通りという感じで身を乗り出す与凪。そんな与凪を見て、納得したように頷く一同……だがミリアだけは除いて。そんなミリアを放っておいて、昇は自分なりに考えをまと

めてみるのだった。
　属性を使った痕跡がまったく残ってないか～。う～ん、こういう時は発想を逆転させるのが良いかな。フレト達は属性を使わなかった、もしくは、使う事が出来ない状況だった。つまり属性の発動が無理だった。そう考えれば、一応辻褄は合うけど……本当にそうなのかな？
　自分自身でそれなりの答えを出してみた昇だったが、何か納得が出来ない物があるのだろう、だから自分で出した答えだけど、まったく確証も自信も無かった。それでも聞くだけの価値はあるだろうと判断した昇は自分の考えに沿って与凪に質問をぶつける。
「与凪さん、フレト達が属性を使えないようにするとか、属性を支えない状況を作ったとは考えられないの？」
「つまり、フレトさん達は属性を使えなかった、という事ですか。う～ん……」
　昇の発言を聞いて考え込むように、目の前にあったテーブルに突っ伏す与凪。そんな与凪が昇の質問に答える前に、シエラが口を開いてきた。
「封の属性」
　呟くように言葉を発したシエラの言葉に、自然と全員の視線が集まるが、与凪には納得が出来ない物があるのだろう。上半身を起こすと再び背もたれに寄り掛かり、シエラの言葉を否定してきた。
「確かに封の属性を使えばフレトさん達は属性を使えないですけど……封の属性は設置型ですから。そんな封の属性にフレトさんはともかく、ラクトリーさんや半蔵さんまで引っ掛かるとは思えないですし。封の属性を使ったのだとしたら、その痕跡が他の型よりも強く残りますから。だから設置型でる封の属性なら、放出型や移動型よりも痕跡を多く残しているはずです。けれども、それを見落としているとは考えずらいです。だから封の属性を使ったとは考えずらいですね」
　シエラの言葉を与凪は完全に否定した事により、その場は再び全

員が考え込む事になってしまった。ちなみに封の属性とは相手の属性を封じる属性である。けれども封の属性を発動させるには地雷のように設置し、敵が範囲に入らない限りは属性の発動は出来ない。だが、一度でも相手の属性を封じてしまえば戦いを有利に進める事は確かである。

けれども、それには他に属性を使う仲間の精霊がいる事が大前提となる。だが、上手く封の属性を発動させて成功させれば、かなり高い確率で勝利を得る事が出来るだろう。なにしろ相手、全員の属性を封じて、こちらは属性攻撃が出来る者をぶつければ、勝率はかなり高くなると言えるだろう。

つまり封の属性は発動が難しいだけに、効果は絶大と言えるだろう。けれども、封の属性は罠のように設置して発動させる属性であるため、戦闘後でも属性反応が強く出るのだ。だが、それも無いために与凪はシエラの言葉を否定したのだ。設置型の封の属性だからこそ、その痕跡が強く残るのが当然だからだ。

丁度良い機会なので、一旦本筋から離れて属性の型について説明しておこう。

まずは放出型、これが一番多い型と言えるだろう。身近な例を上げるとしたら、琴未が有してる雷の属性、閃華が有してる水の属性、契約者でも属性を使っているから同じなので上げておくので、フレトが有している風のシューター、つまり風の属性が放出型と言えるだろう。

放出型はそのまま属性の力を撃ち出すと言えるだろう。つまり、属性に変化させた力を撃ち出すのが放出型と言えるだろう。だが、撃ち出すだけでは能が無いと言えるだろう。だからこそ、閃華のように龍水舞闘陣といった、水龍として撃ち出した後にコントロールしたり。琴未のように剣術と一緒に属性を放つ事も放出型の特徴と言っても良いだろう。

つまり放出型とは属性の力を撃ち出すだけではなく、それぞれの工夫で応用が出来やすい型とも言えるだろう。

次に移動型。これらはシエラが有している翼の属性、半蔵が有している空の属性、更に先の戦いで戦った、シェルが有している縮地の属性が上げられる。

これらの属性は直接的に攻撃として使われる事は無いが、シエラやシェルのようにスピードを活かした戦い方。半蔵のように奇襲を主にした戦い方と、使い方がシンプルなだけに、より強力な力を発揮できるし、下手な小細工が無いだけに属性を破るのは難しいと言えるだろう。

つまり移動型とは、シンプルに移動に特化した型といえるだろう。その形がスピードであれ、空間移動であれ、使い方が限られてはいるが、その分だけ属性の力を最大限に活用できるのが移動型の属性と言えるだろう。

次に設置型。設置型は精霊よりも契約者に現れる方が多い。これは設置型の属性が直接的な戦闘に向いていないためだ。そのため、戦闘を主にしている精霊に現れる事は少ない属性とも言えるだろう。先の戦いでアンブルが有していた氷のシールダー、ローシェンナが使っていたサモナーといての召喚陣、更に与凪が学校に張り巡らせている霧の属性もそれに当たる。

まずは契約者の二人だが、二人とも盾と召喚陣といった、設置した物から、それぞれの特性を活かした戦い方をしていた。アンブルは設置した盾を中心にフレトの攻撃を完璧に防ぎ、逆に手玉に取っていた。ローシェンナは召喚陣というサモナーとして呼び出す属性を設置しない限りは力を発揮出来ないと言っても良いだろう。

そんな二人とは別に与凪が常に学校に転換させている霧の属性。この力は幾つもの探索能力やシステムから隠す効果を持っている。だが、霧の属性を発動させるためには、発動させる部分に設置してから力を注ぎこまないと発動しない。つまり、隠したい物を指定してから発動させないと発動できないのだ。だから与凪の属性も設置型と言えるだろう。

最後に特殊型。これは上記にあげた三つに分類されない属性を指

し示す。その中には属性を持たない物もある。それが契約者の能力として発動される事も珍しくは無い。まあ、昇が有しているエレメンタルアップや、かつての戦いで戦った雪心が使った仮契約などは特殊型の属性から外れた力といえるだろう。それでも、他に分類出来ないから、特殊型の属性と言っても良いだろう。というよりも、そうとしか言いよう無いのが現状とも言えるだろう。

ちなみに、海で戦った竜胆が有していた焦熱の属性も特殊型といえる。もっとも、竜胆自身が未熟だったために、属性の力を充分に発揮できなかったからこそ、シエラに遅れをとったとも言えるだろう。

更に上げるとミリアとラクトリーの地の属性は設置型と放出型を組み合わせたタイプとなっている。二人が使うアースウォールやアースウェーブなどは、先に属性を使う場所、または範囲を決めてから属性を発動させる設置型と言えるだろう。放出型としてはアースボールやラクトリーの決め技となっているタイタロスブレイクシュートが放出型と言えるだろう。つまり、地の属性は、防御と攻撃といった両面を持っているように、放出型と設置型の二つのタイプを持っているというわけである。

以上のように、属性にもさまざま型、つまりタイプがあり、それぞれに分類出来るというわけである。だが、与凪もシエラも全ての属性を知っているワケではない。話を数日前に戻せば、いつもの生徒指導室で話したように、シエラ達も知らない属性を有している者は日々、誕生し続けているのである。だから与凪も、先程集めたデータを見ても、どの属性が使われたのか全く分からず、推測も立たないために不思議と言って、頭を抱える事になったのだ。

そんな与凪が、いつまでも、この事について考えていても埒が明かないと思ったのだろう。次なる不思議な点を話し始めたのだ。

「それと、最後に思いっきり引っ掛かる点があるんですよね」

「というと？」

再び昇が尋ねると、与凪はやはり何と言葉にして良いのか考えて

から思った事を口にする。
「なんというか、フレトさん達の回復が変なんですよ。普通なら戦闘後には新陳代謝が促進されて傷を癒すために様々な効果が出ます。例えば傷口を塞ぐかさぶたとか、内臓器官を修復するための細胞分裂とか。う～ん、とにかく、普通なら戦闘後に人間も精霊も自己治癒を自然と行う物なんです。ですが……今のフレトさん達からは、そうした治癒能力が活発では無いんですよね。なんというか……病人のように衰弱したような。生命力が落ちてると言いますか、とにかく、そんな感じなんです」
　与凪の言葉に与凪自身も首を傾げる結果となってしまった。どうやら、与凪もなんて説明して良いのか分らないといった感じだ。そんな中でシエラが皆に向かって与凪の代わりに、難しい事は省略して簡単な説明を始める。
「つまり、今のフレト達は自分で傷を癒す機能が落ちてる。人間も精霊も怪我をすれば、怪我を治そうと自然に治癒機能が行われる。戦いが終わった後なら、尚更、力を使ったよいんが残っているために、治癒機能がフル回転で行われる。けど、今のフレト達は、そうした治癒機能が落ちてる。それは普通の戦闘後ではありえない現象。致命傷で死に掛けているのならともかく、戦いで動き回った身体だからこそ、新陳代謝が高まり、その後の怪我が治る機能は強く働く。けど、フレト達はそこまで体力を削られえたワケでは無いし、人間も精霊も体力を使いきらないようにリミッターが掛かってる。だから、フレト達の身体にある治癒機能が落ちているのが、おかしい」
「かなり、簡単に説明すると、今のフレトさん達は、自然治癒がスムーズに行われないほど衰弱している、という感じですかね」
　シエラの説明が終わった後に投げやりな説明を付け加える与凪。
まあ、与凪としても、なんと説明して良いのか分らないのだから、というか、今まで散々考えた結果といって明確な言葉が出てこないからこそ、投げやりな態度になっても不思議では無いだろう。それぐらい、フレト達の身体に起こっている事は不可解だったのだ。

とにかく、与凪とシエラの説明で何となくだが、フレト達の状態ついて理解する一同。そして与凪はというと、不可解な状況が続いたために、すっかり疲れたようにテーブルに突っ伏すと、そんな与凪を労うかのように、いつの間にか紅茶を用意していた咲耶が、与凪の前に紅茶の入ったティーカップを置くのだった。

そんな咲耶の行為を切っ掛けに昇達も疲れたように席に座ると咲耶は全員分のお茶を出した後にテーブルに付いた。そして与凪は疲れを吐き出すかのように大きく息を吐き出し、それから誰も口を開く事無く、沈黙がその場を制する事になった。その中で、昇は頭をフル回転させて、今の状況を考えながら、今後の事も考える。

なんだろう、なんていうのかな～。そう、僕達にはしっかりとした情報があるけど、その情報からは何も掴めてないんだ。つまり、与凪さんが掻き集めた情報だけで何かの判断を下すのは危険だと言えるだろうね。そうなると……やっぱりフレト達が回復してから話を聞いた方が早いか。今は無理に調査をするよりも、実際に戦ったフレト達の方が有意義な情報を持っているのは確かだからね。それなら……。

そんな判断を下すと、昇は与凪にフレト達の事を尋ねる。

「与凪さん、フレト達の意識が戻るのは、いつ頃になりそうですか？」

そんな昇の質問に与凪は疲れきったように、片手でゆっくりとキーボードを叩きながら計算を始めると、そんなに時を置かずに昇の質問に答えてきた。

「自然治癒が低下しているから意識が戻るまで時間が掛かりそうね。最も、フレトさん達はそんなに大きな傷を負っているワケでは無いし、決定的な攻撃を喰らったわけでは無いから、そうね……明日の昼から夜には意識が戻るでしょうね。最も、自然治癒が低下してなければ一晩で確実に意識を取り戻すんだけどね～。今の私に言えるのは、これぐらいね」

そんな言葉で締め括ると与凪は再び疲れてように背もたれに寄り

掛かると、咲耶が淹れてくれた紅茶で喉を潤す。その間に昇の質問が何を意味しているのか察したシエラと閃華が会話を始める。
「そうなると、今は余計な詮索をせん方が良いじゃろう。下手な詮索をして敵に引っ掛かっても厄介だしのう」
「そう、ここはフレト達が完全に意識を取り戻してから話を聞いた方が確実で的確な情報が手に入る。それに、ラクトリーの事だから、絶対に有意義な情報を持っているはず。下手に模索するよりも、そちらを充てにした方が確実」
「そうじゃな、敵の人数は既にラクトリー殿からの連絡で知っておる。後は敵の能力じゃが、そちらが不可解な点が多いだけに与凪でも検討が付かない状態じゃからのう。下手に想像を膨らませるよりも、ラクトリー殿から情報を得た方が良いじゃろう。というのが私達の意見じゃが、昇よ、どうするんじゃ？」
突如として決断を任される昇。まあ、こんな事はいつもの事だし、重要な事はいつも昇が決めてきたからこそ、今回の決断も昇に委ねられても不思議ではない。そんな昇が咲耶の淹れてくれた紅茶を空にすると、全員に向かって話しかける。
「僕もシエラと閃華の意見に賛成だよ。本来ならバックアップ専門の与凪さんでさえ、敵の全貌どころか不確定要素が多すぎる状態だ。だから、尚更、フレト達の意識が戻るのを待った方が良い。それに、一度襲撃したからには、二度目の襲撃は無いと思うから、セリスの事も心配する必要は無いと思う。なにしろ、敵から見ればフレト達を倒したのと同じなのだから。そんなフレトに今更トドメを刺すような行為に出るとは思えない。トドメを刺すつもりなら、今回の戦いでトドメをさせたはずだから。今更、フレト達にトドメを刺しに来るとは考えられない。だから僕達は下手に動き回るよりも、フレト達から確実な情報を得よう。だから咲耶さん、今晩は帰りますね。そして明日の夜に、また来ます。その頃にはフレト達も目が覚めている頃だろうから。それから与凪さん」
「んっ？」

まさか自分に話が振られるとは思っていなかった与凪は疲れた顔を上げて、適当な返事をしてきた。まあ、今回の事は与凪にとってはかなりの負担となったのだろう。それだけ、与凪にとっても不可解というか、始めてな事が多すぎたのだ。だから与凪が、そんな状態になっていても不思議では無い。そんな与凪に昇は申し訳なさそうに言うのだった。

「与凪さんは明日の昼から、ここに来ててください。その方がフレト達が目を覚ましても、すぐに充分な手当てと情報収集が出来ると思いますから」

「まったく、精霊使いが荒いわね。まあ、今回はこちらの力不足が原因とも言えるからね、それぐらいはやっておきますよ」

「ありがとう、与凪さん。それから森尾先生」

「分ってる。フレト君達の状態から見て、学校に来れる状態では無いからな。そこは何とかしておこう。それに明日は日曜日だからな、そっちに手を回すだけの時間は充分にあるから、そこは心配しなくても良いぞ」

「何というか、ありがとうございます」

森尾の言葉に苦笑を交えながら答える昇。何にしても、これで方針が決まった事は確かだ。後はフレト達が回復するのを待つしかない。そうは言っても、やっぱり昇の頭には何かしら引っ掛かる事があるのだろう。昇はその引っ掛かりに後ろ髪を引かれるように、今は待つしかないと思いながらフレト邸を後にして帰路に付くのだった。

同時刻、とあるホテルの一室。ベットの上でお気に入りの大きなぬいぐるみを抱き締めながら、春澄は見えない瞳をアルビータに向ける。

「そろそろ昇さん達が到着する頃かな、それとも、もう到着してるかな。驚いてるだろうな～、昇さん。けど……それが私達の仕業だ

と分かったら、もっと驚くだろうな～。アルビータは昇さんがどんな行動に出てくると思う？」

春澄がそんな質問をしてくるとアルビータはもう片方のベットに腰を下ろしてから、春澄の質問に答えてきた。

「たぶんだが……何もしないだろうな」

「え～、何で～？」

アルビータの答えに不満そうな声を上げる春澄。どうやら春澄の願望としては昇がさまざまな手段を使って自分達のところに攻め込んで来るのを期待していたようだ。だが、昇が動かないと聞かされたからこそ不満の声を上げたのだ。そんな春澄にアルビータは自分の推測を話し始める。

「私が見たところでは、あの少年は慎重であり、策士とも言えるだろう」

「策士？」

聞きなれない言葉に首を傾げる春澄。そんな春澄にアルビータは優しく説明してやるのだった。

「策士というのは作戦を立てるのに長けた者を言う。私はあの少年から見たもの、そして春澄から聞いた話で、そんな人物だと推測した。つまり、あの少年は確実な勝機が無い限りは攻撃を仕掛ける事はしない。常に勝てる状況を生み出してから戦いに望んでいる。私はそう思ったからこそ、あの少年は動かないと言ったのだ」

「う～ん、つまり、今の昇さんは自分達が勝てるとも、勝機が無いと考えているからこそ、動く事はしないっていう事」

「だな、だが……その前に私の力と春澄の力で混乱している事も確かだろう。そんな不確定な状態で推測だけを頼りに動く事はしないだろう。むしろ、動かない事によって、今回戦った少年から情報を得ようとするだろう。なにしろ、あの少年は私達の力を全て知っているのだからな。それに、無の属性はあらゆる痕跡を消す効果もある。あの少年なら、今頃は下手な推測をするよりも、これからの事について考えるだろうな」

「ふ～ん」
アルビータの返答に納得する物があったのだろう。春澄はぬいぐるみを抱き締めながら横になってからアルビータと言葉を交わすのだった。
「なら、明日の夜は更に面白くなりそうだね。なんかわくわくしてきたよ。けど、今はそろそろ寝ないとかな。さすがに戦いで疲れてるし、私の生命力も低下してるから回復が遅いからね」
「そうだな、今は早く寝ると良い」
「うん、そうだね、アルビータ。じゃあ、おやすみ」
「あぁ、おやすみ」
それから部屋の電灯を消すアルビータ。それから春澄に掛け布団を掛け直してやり、それから自分のベットに腰を掛けて横になろうとはしなかった。そんなアルビータが暗がりの中で己の手を見詰める。
アルビータも分っていたのだ。フレト達の戦いが、いかに自分を高揚させたのかを。そして、昇達との戦いが更に自分を高揚させてくれると。それが分っているからこそ、アルビータは高ぶる心を抑えるかのように自分の手を強く握り締める。
全ては……自分が望んだ終焉を迎えるために……。

第百三十八話　霧中模索（後書き）

はい、そんな訳で、やっとこさ更新したエレメですが、いかがでしたでしょうか。そんな訳で、昇達は間に合いませんでしたね～。最も、フレト達が戦っている間に外部に連絡を入れさせるような真似はアルビータはさせないでしょうね～。そんな訳で、昇達から見ればワケの分からない事だらけになったわけですよ、これが……。

さてさて、いよいよ百年河清終末編も中盤を終えた？　ところまでやってきましたね～。……なんといか……そろそろ次も考えないとかな～と思っている今日、この頃でございます。

まあ、大体の話は出来てるんだけどね～。次はいよいよ、本格的にさまざまな事柄が動き始める。そう、それは序章と言っても良いだろう。ついに開かれる戦いの幕、その中で昇は誰に何を伝えるのか、そんな昇が誰の手を取るのか。それはまだ分からない。だがっ！！！！　一つだけ言える事がある。それは……やっぱり昇は朴念仁だという事だっ！！！！　だけど、女たらし（キャハッ）

と、まあ、ノリだけでやった嘘の次回予告は適当に無視しといてくださいな。でもでも、物語がいよいよ本格的に動き始めるのは本当だよ。それに……意外と人気があった、あの人もそろそろ登場させようかと思っております。

そして最後には……なんとっ！！！！　誰もが予想しなかった人が登場して終わりっ！！！！　……ってな感じで行こうかな～って思っております。まあ、まだ形にしてないし、設定も作って無いので、今のところは妄想だけですけどね（笑）

まあ、そんな訳で、気が向いたら、そろそろ次の話を作ろうかと思っております。まあ、何にしても、次は一気に凄くなりそうですけどね～。……というか……なるよね？　なってくれるよね？　……えっ、無理……分かった、それなら……介錯を頼むっ！！！！

これが武士としての生き様だっ！！！！　……って！！！！　この

格好は斬首なんですけどっ！！　何の罪を犯して無いのに斬首なんですかっ！！　武士としての最後も許されないのですかっ！！！！

この人でなしっ！！！！

……えっ、その前にお前は武士なのかって……いいえ違います、世捨て人です。なら斬首で決まり……そりゃあ、そうですよね～。

……ザシュ……作者首を縫い付け中……

さ～て、これで責任も果たした事だし……そういえば……何の責任なんだろう？　もう、それすらも忘れてしまったよ（笑）　というか、いつもの事だけど、後書きがフリーダムすぎるのは私がフリーダムだからだっ！！！！　……ちなみにガン〇ムとは一切関係ありません。というか絡みません。なので過度な期待はしないでください。

……さてさて……飽きた。そんな訳で、そろそろ締めますね～。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、フリーダムこそ俺のジャスティスッ！！！！　と叫んでみた葵夢幻でした～。……いや、本当にガン〇ムとは関係ないし、絡んでないんだからね。

第百三十九話　＊注意　ゲームのプレイ中に精界を展開して戦闘行為に及ばないでください

「しかし、あれよね～」
「んっ、どうしたんじゃ、琴未よ？」
机に片肘を付きながら頬を支えて、視線を外に向けている琴未が独り言のように呟くと、暇潰しに琴未のベットで読書をしていた閃華が本から顔を上げて、琴未に話し掛けてきた。それから琴未は閃華の方へと椅子を向けると、閃華が予想した通りの事を言い始めた。
「なんていうかさ～、こうして、たた待ってるのって……性に合わないよね」
やっぱりかという少し苦笑しながら本を閉じる閃華、そして琴未は背もたれに思いっきり寄り掛かって身体を伸ばす。そんな琴未に閃華は溜息まじりで答えるのだった。
「そんな事を言ってもしかたないじゃろう。今の状況で下手に動いては、相手に気取られる可能性が高いからのう。じゃから、今日は皆も大人しくしているじゃろう」
「そうなんだけどね～。なんて言うか……やっぱり退屈なのよ。いっその事……シエラでもからかって遊んでこようかな～」
「逆に遊ばれるだけじゃから、それは止めておいた方が良いと思うぞ」
「それって、どういう意味よ？」
「ずる賢さでは、シエラが十枚ほど上手というワケじゃよ」
少し怒り気味で尋ねてきた琴未に対して、まったくフォローになってない、どころか、逆に悪口に聞こえるような答えを返す閃華。まあ、閃華は琴未と契約を交わした精霊だから、琴未に付くのは当然と言えるだろうが、ここまで露骨に出すと、琴未も呆れたような顔しか出来なかったのだ。
そんな琴未が座り直すと閃華に尋ねる。
「そういえば、シエラはともかく、昇とミリアはどうしてるのよ？」

「んっ、シエラは部屋に籠もって知識書と睨めっこしておるぞ。シエラの事じゃからのう、事前に少しでも情報を掻き集めておるのじゃろう。ミリアは昇を引っ張って行って、どこかに出かけたようじゃな。まあ、二人とも今の状況を分っておるから、すぐに帰って来るじゃろうな」

「相変わらずミリアには緊張感が無いわね。それに昇もミリアを甘やかすんだから。というか、今の状況を知っておきながら外出するなんて考えられないわよ、まったく、ミリアも何を考えているんだか」

すっかりミリアに対しての文句になった琴未に対して、閃華は再び本を開くと、視線を本に落としながら話を続ける。

「まあ、ミリアの事じゃから深くは考えて無いじゃろうな。じゃが、最近ではラクトリー殿から散々鍛えられておるからのう。バカな真似はしないじゃろうて。むしろ、そんな事を考えるだけ思考の無駄と言えるじゃろうな」

そんな閃華の言葉を聞いて琴未は思いっきり溜息を付く。それから、今度は背もたれに頭を乗せながら、呆れたように話を続ける。

「まあ、言われてみれば、そうよね～。ミリアの行動について考えるだけ無駄というものよね。シエラもシエラで何をやってるんだか。まったく……」

「つまり暇だから何かしたいというワケじゃな」

「ぐっ」

閃華に本心を言われてしまった琴未は言葉を失ってしまい、軽く睨むような視線を閃華に向けるのだった。そんな閃華が本を閉じると、ある事を告げてきた。

「どうやら、ミリア達が帰ってきたようじゃのう」

「噂をすればなんとやらね」

「そうじゃな、それに……なにやら忙しそうに、こっちに向かって来るようじゃのう」

「何で」

琴未が質問する前にドアが勢い良く開かれるとミリアが片手に持った物を二人に差し向けながら口早に話し始める。
「琴未、閃華、これやろうよ、これっ！」
「って、いきなり人の部屋に入ってきて、何を言ってるのよ」
「良いから、これやろうよ、これっ！　シエラも誘って皆でやろうよ～。どうせ、二人とも暇だったんでしょ」
「ミリア程じゃないわよ」
そう言いながら琴未はミリアが差し出して物を手に取ると、それはゲームソフトだった。隣から閃華も覗き込むようにゲームソフトのジャケットに視線を落とす。それから、琴未はジャケットに書かれているゲームソフトの名前を口にするのだった。
「人生勝ち組みゲーム」
「どうやら、ボードゲームをソフト化したゲームのようじゃな。確か、これは、あの手この手を使って他のプレイヤーを潰し合いながら、進めるスゴロクのような物じゃな。それで、最後に勝ち組の条件を一番揃えているプレイヤーが勝者になるゲームじゃな」
「……やけに詳しいわね？」
まさか閃華がここまでゲームに詳しいとは思わなかった琴未が呆れたような視線を閃華に向けながら尋ねる。そんな琴未の問い掛けに閃華はあっさりと答えるのであった。
「うむ、確か、このボードゲームは奥方が持っておるからのう。それで知ってるというわけじゃ。まあ、酒を呑みながらやる余興には適した物じゃよ」
「相変わらずね～」
もう、その言葉しか出なかった琴未は呆れるのを通り過ぎて苦笑を交えながら言葉を口にするのだった。まあ、そんな琴未の気持ちも分からなくもない。なにしろ、昇の母である彩香は酒好きで、かなり呑む方である。そして、いつも昇に対している素行を見ていれば分かる事だろう。そう、かなり絡んでくるのである。だから琴未も閃華に誘われて一回だけ、参加したが、酔っ払いを二人を相手に

したのである。相当、苦労した事は言わずとも分かる事だろう。閃華はともかく、彩香はかなりめんどうな相手なのは確かなのだから。それ以来、琴未が閃華達の宴に参加していない事は言わなくても分かる事だろう。

まあ、そんな余談はともかく、琴未はゲームソフトを見ながらミリアに尋ねるのだった。

「それで、これを買うために昇と一緒に出かけたと」

「うん、今日が発売日だったんだよ～。それで昇と一緒に買いに行ったんだよ～」

「何で昇を引っ張っていく必要があった訳？　これぐらいなら一人で買いに行きなさいよ」

「だって～、今の状況を考えれば単独行動は危険すぎるよ～。それに、昇が居ればエレメンタルアップが使えるし、シエラ達が救援に来るまでの時間稼ぎぐらいでは出来るよ～。それぐらい、ちょっと考えれば分かる事でしょ？」

「うっ、ミリアに諭されるなんて」

うな垂れるように頭を下げる琴未。まさか、ミリアに正論どころか正当性がある言葉で自分の意見が間違っている事を指摘されるとは思ってもいなかったのだから仕方ないだろう。それにミリアの言葉だったからこそ、余計に琴未が受けた心のダメージは大きかっただろう。そんな琴未を見て閃華は呆れたように溜息を付くのだった。

閃華としても、ラクトリーが再びミリアの修行を再開してからというもの、それなりの成長をしている事は知っていた。だからこそ、先程も心配していなかったのだ。それが分っているからこそ、ミリアの取った行動は理に適ってる事が分かり、琴未の嫉妬心を軽く払い除ける結果となった事に閃華は呆れたのだ。

まあ、琴未も成長しているが、やっぱり昇が絡んでくると、そちらが優先になるのが玉に傷だろう。だからこそ、閃華は話を戻すかのようにミリアに話しかけるのだった。

「それでミリアよ、昇はどうしておるんじゃ？」

「もうリビングで準備しながら皆が来るのを待ってるよ～」
そんなミリアの言葉を聞いた閃華は琴未が手にしているゲームソフトのケースを空けると、確かに中身は無かった。どうやら中身は昇が既にリビングでゲームの本体に入れて準備しながら、待ち呆けているのは確かなようだ。
ちなみに、リビングに設置してあるゲーム機は元々、昇の部屋にあったものだ。だが、昇の部屋では全員が集まると狭すぎる。そのため、昇の意見を無視した協議の結果としてゲーム機はリビングに移動したと言うわけだ。その後に昇が自腹で新たに自分の部屋にゲーム機を買った事は言わずとして分かる事だろう。
まあ、そんな経緯もあり、多人数で遊べるゲームをやる時はリビングに集まる事が、すっかり定着しており、そのため、ミリアが買ってきた多人数用のゲームはリビングに並んでいるというわけだ。
まあ、そんな余談は置いておく事にして、ミリアに促されるように閃華は引っ張られ、琴未もやれやれという感じで部屋を後にするのだった。それからシエラも無理矢理に引っ張り出し、日曜日の未だに少し暑さが残る中で全員がリビングに集合したのであった。

……数時間後……。

「って、シエラ！　さっきから私にばかり邪魔するカードや略奪するカードを使ってるんじゃないわよっ！　おかげでこっちの総資産がかなり低くなったじゃないっ！」
「そういう琴未こそ、さっきからお見合いの邪魔ばかりしてる。だから一向に玉の輿になれないから、その仕返しを受けるのは当然」
「こっちだって、シエラの所為で何個も子会社が潰されてるんだから、それぐらいの事は当然でしょっ！」
「琴未の所為で、こちらの子会社も潰されてるんだから、当然」

すっかりお互いを潰し合い、最下位争いをする事になっているシエラと琴未。もっとも、二人にとっては相手に勝つ事が重要であって、相手よりも順位が高ければ、それで良いのだ。だからこそ、二人はお互いに潰し合いをし、こうして文句をたれているワケである。

そんな二人を昇はいつものように苦笑しながら見守り、閃華はそれなりにゲームを楽しんでおり、ミリアは思いっきり楽しそうに、ゲームを楽しんでいた。そんな中で昇が閃華に話し掛けてくる。

「ところで閃華さん、いつもの事だけど……シエラと琴未はあのままで良いのかな？」

「まあ、所詮はゲームじゃ、やりたいようにやって楽しめれば良いじゃろう。あれも、あの二人なりの楽しみ方と考えれば何の事もないじゃろう。おっ、これは良いカードを引いたのう」

そう言って閃華もそれなりにゲームを楽しんでいるようだ。ちなみに、このゲームは特定のマスに止まるとカードを引ける。そのカードを駆使して自分の総資産を高めたり、相手の邪魔をしたりするのだ。そのため、カードを引けるマスはかなり多く設置されている。

そんなゲーム画面には閃華が引いたカードが映し出されていた。そして昇は閃華の引いたカードを疲れたような視線で見ると、呆れたような声でカードに書かれた文字を声に出して、読み上げるのだった。

「インダサイダー取引……なんていうかさ、このゲームはかなり犯罪に近い物が多くない？」

「まあ、実際に犯罪名が記しているワケではないのじゃからセーフじゃろ。そんな訳で、さっそく、このカードで昇が持っている会社の一つ、うむ、これで良いな。この株式を買い占めて会社を乗っ取るとしようかのう」

「って、僕に攻撃ですかっ！」

「当然じゃろ、ほれ、私の番は終わったからのう、次はミリアじゃぞ」

「うんっ！」

自分の番になって楽しそうにコントローラを操作し、円盤状のサイコロを回すと、出た数だけ駒を進めてゲームを進行する。そんなミリアが止まったマスは、やっぱりカードを引くマスだった。そのため、ミリアも一枚カードを引く。

「ヤの付く不動産か～」

「またしても怪しいカードが、というか、それはありなんですか」

「まあ、相手を邪魔するカードが多いゲームじゃからのう。それなりに、しっかりとした言葉に出来ないカードが多くても不思議では無いじゃろう」

「もう、ここまで来ると、何でもありですね」

「じゃからこそ、面白いんじゃよ」

またしても現れた、決して言葉に出してはいけないようなカードに昇は、すっかり諦めの言葉を口にするのと同時に閃華が諭すような言葉を昇に向けるのだった。その間にもミリアはさっそく引いたカードを使うんだった。

「じゃあ、このカードで昇が持っている子会社の一つを略奪、これで昇の総資産を削ったよ～」

「またしても僕に攻撃ですか」

「仕方ないじゃろ。現状では昇が一番じゃからのう、昇を蹴落とすために攻撃をするのは当然の戦略と言えるじゃろ。それに、昇は怪しいカードを使わずに、自分の総資産を高めるカードしか使っておらんからのう。じゃから、攻撃が昇に集中するのは必然という物じゃよ」

「まあ、確かに……なんか使い辛いカードが多いゲームだからね……つい」

どうやらゲームの状況は閃華が言ったとおりのようだ。昇は攻撃カードを使わず、自分の総資産を高めるカードしか使っていないため、今では一番高い総資産となっている。まあ、昇の性格から言っても、ゲームとはいえ、あまりそういうカードは使い辛いのだろう。だからと言って、このまま負ける気は無い事は確かである。

だからこそ昇も自分の番になると決心する。
「……カオス取引……またしても怪しいカードが、でも、そろそろ、こっちからも攻撃しないと追いつかれるからね。このカードで閃華を攻撃して資産を奪うっ！」
そう宣言してしてカードを使った昇、だが、その隣で閃華は待っていたかのように笑みを浮かべてコントローラを操作するのだった。
「くっくっくっ、甘いぞ昇よ。今まで取って置いた、密告のカードじゃっ！　これによって取引系のカードは無効化。だが、それだけでないんじゃぞ。昇は逮捕で三回休みじゃな。そのうえ評判が落ちて、総資産も低下じゃ」
「なんか凄く卑怯なカードを出されたっ！　というか、取引なのに僕だけが逮捕ですかっ！」
「囮捜査というやつじゃな、まあ、この手の防御カードもあるからのう。さ～て、ここから巻き返すとしようかのう」
「なんか納得が行かないんですけどっ！」
すっかり閃華にほんろうされてた昇は抗議の声を上げるが、閃華とミリアに笑われるだけだった。そして順番が次の琴未に移ると……またしても、怪しげなカードでシエラを攻撃、玉の輿を狙っていたシエラの相手を破産させた。
更に順番がシエラに移ると、かなり良いカードを引いたのだろ。琴未の子会社を三つほど破産させた。ちなみに、シエラが使ったカードは『清藤への賄賂』と『上からの圧力』のコンボである。そんなゲームの進行を見ていた昇はつくづく思った。
……このゲーム……良く、無事に発売が許可されたな～……。
まあ、何にしても、ここからもシエラと琴未の潰し合いが続き、三回休みとなった昇も回復すると何とか総資産を増やそうとするが、ミリアが昇に対して『火口取引』を行使、昇も『カオス資金』でミリアとの取引を成立させて総資産を増やそうとするが、閃華が『スッパイ活動による内部告発』発動。昇とミリアの取引は失敗、更に総資産も削られる羽目になってしまった。これにより閃華が総資産

で昇を抜き去り、一番の座を手にして、ゲームは更に続くのだった。

……更に三十分後……。

「って！　もう頭に来たわっ！　シエラ表に出なさいっ！」
「ふっ、その挑戦を受けて上げる。さあ、琴未、懺悔の時間っ！」
すっかりゲームに熱くなったシエラと琴未がお互いにコントローラーを手放すと、二人ともリビングを飛び出して庭に出る。するとシエラは小規模で、滝下家とは反対方面に精界を展開させるのだった。なにしろ滝下家まで精界に包んでしまえば、今の昇達を巻き込んでしまうからだ。
ちなみに、毎朝……では無いが、いつもように行われる朝食前のシエラと琴未の一戦は、滝下家の一角は取り込むものの、昇達を巻き込まないように、シエラが上手く精界を展開させているために昇達は巻き込まれる事は無いのだ。
そのためか、すっかり小規模の精界を張る事に慣れたシエラが精界を築くのと同時に二人の姿が消える。なにしろ精界の外からでは、集中して目に力を集めないと精界の中を見る事は出来ない。だから、普通に見ている分には二人の姿が消えたように見えるのだ。
まあ、説明はこれぐらいにして、すっかりゲームを放り出したシエラと琴未。この二人が抜けたために、このままゲームの続行が不可能になってしまった。そんな状況に閃華はやれやれとばかりに溜息を付き、昇は苦笑するしかなかった。そしてミリアはというと、いつの間にかゲームをリセット、再び三人だけで再開させようとしていた。
そんな光景に昇は閃華に話し掛ける。
「閃華さん、なんと言いましょうか」
「んっ、どうしたんじゃ、昇？」

「いや……暇過ぎるのも考え物なのかな～っと思って」
「まあ、息抜きだと思って諦める事じゃな。それとも今から精界内に突撃するか？　または、このままゲームを再開させるかのどちらかじゃな」
「……素直にゲームを再開させてください」
「まあ、無難な選択じゃな」
昇の言葉に苦笑する閃華。そんな二人を放っておいて、ミリアがすっかり最初のスタート画面から新たなるゲームを再開させるために、既にスタートをしていた。そんな事もあり、シエラと琴未を除いてゲームは再開される事になった。
そんな中でも昇はちょっとだけ目に力を集中させると精界の中を覗き見る。そこにはすっかり破壊された建物と本気でぶつかり合うシエラと琴未の姿がはっきりと見えた。そんな状況に昇は溜息を思いっきり付く。それから思うのだった……今回は巻き込まれなくて本当によかったと。
そんな感じで昇達の日曜日は過ぎて行くのだった。

同時刻、某ホテルの一室。
「うん、う～ん」
薄い掛け布団を軽く払いのけながら春澄は生あくびをしていた。どうやら、今頃になってやっと起きたみたいだ。けれども、仕方ないだろう。春澄にとって昨日の戦いはかなりの負担が掛かっていたし、春澄も自分の生命力を削る事になってしまったのだから。そのため、春澄の体力を回復するために睡眠時間は段々と長くなってきているのだ。
そんな状況の中でアルビータがルームサービスを頼むと、そのまま春澄の着替えを手伝ってやる。命の活性が使えない普段の生活では春澄は盲目のままなのだから仕方ないだろう。そのため、すっかり手馴れた手付きで春澄の着替えを手伝ってやるアルビータ。最も、

春澄も先天性の盲目だ。目が見えていない事には慣れている。だからアルビータは着替えを取り出し、それを春澄に渡すだけで、春澄は充分に自分の事が出来た。

そして春澄の着替えが終わる頃には、先程アルビータが頼んだルームサービスが届いたようであり、アルビータはそのままチップを渡すと、後は自分でやるかのように台車を春澄のところまで運んでいくのだった。一方の春澄は匂いで何が届いたのかが分かったのだろう。匂った物を言葉にしてアルビータに尋ねる。

「うどん？」

「あぁ、消化の良い物の方が身体には良いと思ってな」

素っ気無いアルビータの言葉に、春澄はベットから両足を投げ出すと少しだけ不貞腐れたように呟くのだった。

「何か、今は何も食べたくないよ」

「そんな事は分っている。それだけ生命力が低下するのと同時に生命を維持する機能も低下している証拠だ。だが、それでも何か食べておかないと更に生命力を削る事になってしまうぞ。我らの最後が近いのだから。今はしっかりと食べて、最後の戦いに備えておくのが良い事は確かであろう」

「う～」

アルビータに諭されて唸る春澄。どうやらアルビータが言った事は確かなようだ。春澄は生命力が低下しているからこそ、生命力を維持しようという機関までも弱っているのだ。そのため、食欲が出ないのも仕方ない事だろう。それでも、しっかりと食べておかないと春澄の命は自分達が望んだ前に尽き果ててしまう。

それに昨日の戦闘で体力が低下しているのも確かだ。だからこそ、春澄は余計に食欲が出ないのだろう。それでも、アルビータの言ったとおりだと分っているからこそ、春澄はアルビータから箸とうどんの器を貰うと、そのまま麺をすするのだった。

そんな春澄が食事をしながらアルビータに話し掛ける。

「はぁ、今日はもう動きたくないよ」

「まあ、昨日の戦闘が思っていた以上に響いていいるようだな。私としても、あの少年があそこまでの力を有しているとは思っていなかった。それだけ手強い敵を相手にして勝ったのだ。その代価として、その倦怠感は仕方ない事だろう。だから今日はゆっくりと休むと良い」

そんな事を言って来たアルビータに春澄は気だるそうな返事を返すと時間を聞いてきた。そんな春澄にアルビータは既に午後になっている事を告げると、春澄は一気に食べ尽くした、うどんの器をアルビータに突き出すと、そのままベットに横になり、アルビータに話し掛ける。

「じゃあ、アルビータ、夜になったら起こしてね」

「あぁ……眠れないのか？」

春澄は横になったものの、気だるさはあるものの、そのまま寝る気にはなれなかった。いや、正確にはそのまま寝てしまう事が不安だったのだ。だからこそ、春澄はアルビータの方へ、手を伸ばすとアルビータは春澄の手を優しく包んでやるのだった。

そんなアルビータの温もりを感じながら春澄は正直な気持ちを口にする。

「ちょっと前からかな、少しずつ不安になってきたんだよ。もし、このまま寝たら、もう二度と目が覚めないかもしれないって。今までは、そんな事を考えもしなかったのに……昇さんと出会って、楽しい時間を過ごして、そして楽しい知り合いが沢山出来ると……急に不安になってきたんだよ。私はもう……こんな楽しい時間は過ごせない、もう消えるしかないんだなと思うと……怖くて、不安で胸が押し潰されそうになるんだよ」

そんな事を言って来た春澄が片方の腕を目に当てる。アルビータには春澄が涙を流している事はしっかりと分っていた。だが、その事に触れる事無く、アルビータは優しい声で春澄に話し掛けるのだった。

「それは当たり前の事だろう。春澄は今まで何も持ってはいなかっ

た、持とうとはしなかった。だからこそ、自分の終焉に不安も恐怖も感じる事が無かった。それだけ、春澄が生きてきた時間は春澄に何も与えてくれなかったのだ。だが、あの少年と出会って、春澄は初めて失いたくないと思えるものに触れたのだ。だからこそ、自分の命が消える事を恐れるのは当然とも言えるだろう。だから何も恥じる事も動じる事も無い、怖ければ怖いと言えば良い、不安なら不安だと言えば良い。それが普通の事なのだからな」

そんなアルビータの言葉を聞いて春澄は一つの質問をしてきた。

「アルビータは……怖かったり、不安にはならないの？」

その質問にアルビータは瞳を閉じると、今まで過ごしてきた虚無の時間を思い出し、それが示した意味を改めて感じると、はっきりと答えてきた。

「私は長く生き過ぎた。だから恐怖も不安も無い。だから自分が思った最後を迎える事だけを考えられる。だが……春澄は幼すぎた。自分の生まれ方さえ違っていれば、春澄は自分の命に終わりを迎えたいとは思わなかっただろう。そして、今と同じように、失われると分っている命に恐怖と不安を抱いただろう。それが命というものだ」

「そっか……そうだね。私の目が普通に見えてれば、私は自分自身を終わらせようとは思わなかったよね。でも、私の人生は私に最初から普通を与えてくれなかった。だからこそ、私は自らの終わりを望んだ。でも……普通に生きる事が出来れば、私はそんな事を望まなかったし……もっと、違う望みがあったかもしれないね」

「そうだな、だが……私と契約したからには……結末は変えられない」

そんなアルビータの言葉に春澄は涙を拭うとアルビータに向かって微笑みながら話を続けてきた。

「私も……今から結末を変えようとは思わないよ。アルビータと契約したからこそ、私は自分自身が望んだ生き方が出来た。だから後悔はしない……けど、この不安で怖い気持ちも消し去る事が出来な

い」

アルビータは春澄のベットに腰を掛けると、そのまま春澄の頭を優しく撫でてやりながら話を続ける。

「それで良い、そう思う事が普通なのだから。誰だって、自分の命が消える寸前だと分かれば不安で怖いだろう、それが命というものだ。だから命が失われる事に恐怖するのも、不安になるのも普通の事だ。春澄は今まで命を感じる事をしなかったし、感じる機会が無かった。だが、あの少年と交流した事で春澄は初めて、命の活性を使わないで命を感じる事が出来た、自分が生きているだけで大事だと感じる事が出来た。それはとても良い事だ。だから、今になって恐怖するのも、不安になるも当然の事だ。春澄は……それだけ命に、生きるという事を知ったのだ。それは遅すぎたのかもしれないが、春澄にとっては良い事なのは確かだ」

「そっか、そうだね」

春澄はそのまま寝返りを打つと、両手でアルビータの手を握り締める。その手は、あまりにも小さく、あまりにも弱弱しいと言えるだろう。それぐらい、春澄の手は小さいのだ。

それでも、春澄は今になって後悔はしない。それは春澄がアルビータと生きてきた時間こそが生きてきた証拠なのだから。施設で無為に生きているよりも、命を削ってでも自分の望みを少しでも叶えてきた事に春澄は自分が生きている事を、生きる意義を感じてきた。それは春澄が今まで望んでも叶わない事だったのだから。だが昇との出会いが命の終わりが近づいているほどに春澄は生きるという事が大事になってきていたのも確かな事だと言えるだろう。

確かに命ある限り、長く生きる事は大事とも言え、子孫を反映させる事も生きる上では最重要事項と考えるのも大事だろう。だがっ！　長く生きるだけで、何もしない事に何の意味があるのか。それだったら、命を削ってでも、生きている事に何かを成すのも最重要事項と言えるだろう。

結局のところ、この場合は前者も後者も正しいものであり、間違

っているものである。全ての物が白黒はっきり分ける事が出来るほど、世の中は単純ではないという事なのだろう。だからこそ、最後は自分で決めなければいけないのだ。いかに生きるか、どんな生き方をするかを……。

そして春澄の出した答えはこれだ。だからこそ、後悔はしない。けれども、生きている限りは、いや、生きている事に大事な物を見つけたのだとしたら……春澄が命が終わる事に恐怖するのも、不安になるのも当然の事だと言えるだろう。だからこそ、アルビータの手を握り締めた春澄はしっかりと言葉を口にする。

「でも、私は昇さんとの戦いは絶対に止めない。最強の敵と戦いの中で終わる事がアルビータの願いしだし、私は昇さんを……ううん、生きている上で大事な存在になりそうな昇さん達をしっかりと見詰めたい。最後の最後まで、それが……たった一つだけ、私がやりたいと思った事だから。だから戦い続けるよ、私も……絶対に……後悔だけはしたくないから」

「あぁ」

「でも、それでも、やっぱり怖いし、もっと違う出会い方をしたかったというのは私の我がままなのかな？　そんな事を思っちゃいけないし、今になって怖がっちゃいけないのかな？」

「春澄、世の中が自分の思い通りに、むしろ、自分が思った事以上に悪い方向に進む事があるのは春澄は良く分かっているだろう。だから、それで良いんだ。怖いと思う事も、違った人生があったかもしれないと思う事も、それは誰にでも許されている事だ。その中で人も精霊も自分の命をどう使うかは自分で決めないといけない。どんなに理不尽な事があったとしても、どんなに裏切られたとしても、それが自分で決めたものなら後悔はしてはいけないし、春澄はそれに打ち勝つ事が出来ている。だから、今はそれで良いんだ」

「そう……なのかな？」

「あぁ、命の精霊である私が言うのだから間違いないだろう」

「そっか、そうだよね」

そう言うと春澄はアルビータに向かって微笑んだ。
どうやら春澄も分かったようだ。今、自分が抱えている気持ちこそが生きたいという気持ちであり、この気持ちがあるからこそ生き続ける事が出来るのだという事を。けど、同時に逆の事もしっかりと考えていた。
生きたいと思うからこそ、その生を価値ある物にしたい、その結果として……命を削る事になったのだとしても。だからこそ、春澄はしっかりと前を向いて終焉に向かって歩く事が出来る。春澄は自分が生きているという価値を無にしたくはないのだ。それどころか、逆に命をしっかりと感じ取れる今だからこそ、自分の人生を最高だと思える物にしたい。命が尽きる時に……自分が生きてきて良かったと思えるように。
それでも、生きているからには生への執着があるのも確かだ。だからこそ、春澄はアルビータに少しだけ甘えるのだった。
「少し、眠るね。だからアルビータ、時間になったら起こしてね。今日は大事な約束があるから」
「あぁ、分っている。だから心配するな、ゆっくりと休むが良い」
「うん、じゃあ……そう、するよ」
その言葉を最後に春澄は寝息を立て始める。春澄がアルビータと契約をし、今までいろいろなところを見て、春澄は自分の生を実感した。そんな春澄の生き方を誰が否定できるだろう。答えは否である。春澄が決めた人生だからこそ、選ぶ権利は春澄にある。全ての決定権は春澄が持っており、春澄はこの生き方を決めた。だから、誰が何と言おうとも春澄の生き方を否定する事は出来ない。自分が持っている命の使い方を決められるのは自分だけだから。
それでも、春澄は幼すぎた。未だに子供とも言える春澄の年齢で、このような生き方を決めるのには相当な覚悟があったのだろう。だからこそ、アルビータは春澄と契約をしたのだ。それこそが、二人の始まりであり、二人にとって終焉に向かうために歩き出した証拠なのだから。

だからこそ、アルビータはしっかりと決めていた。アルビータの願いは先程も春澄が言った通りに戦いの中で満足が行く戦いで終わる事だ。だが、アルビータの中には、もう一つの願いが生まれていた。それは……春澄がしっかりと笑って、終わりを迎える事が出来るかである。

そして願う事なら……春澄が笑顔で終わりを迎えられる事を……。

第百三十九話　＊注意　ゲームのプレイ中に精界を展開して戦闘行為に及ばないでください

さてさて、今回はなるべく早く更新できたと思っているエレメですが、如何でしたでしょうか？

今回は前半は明るく、後半は暗い展開になってますね。そんな明暗を付けてみました。まあ、書いてたら自然とこうなっただけなんですけどね～（笑）

まあ、これはこれで有りかと思って、そのまま勢いに任せて行ってみました。まあ、少し緊張感がある話が続きましたからね～。昇達の小休止という事で、ちょっと日常的な部分を入れてみました～。

そんな昇達とは反対に春澄は深刻ですね。まあ、春澄は春澄なりに悩まないといけないんですよ。理由は本編に書いてあるので省略。

という、感じになったエレメですが、次回から一気に物語を加速させようかな～、とも思っているんですけどね～。まあ、それは昇次第になってきますね～（笑）

そんな訳で終盤に向かっての小休止とも言える本話ですが……あのゲームは一体何なんだろう？　と私も思ってしまうほどです（笑）

まあ、勢いだけでやるにしても限度がある、というか、勢いだけで作ったゲームですからね～。かなり、怪しげなカードが沢山ありそうですね。

ちなみに、このゲームは開発予定はされていません（笑）

いや、だって……なんかさ、開発側がいろいろと問題が起きそうじゃん。というか、開発側が怪しくないと開発されないソフトですね（笑）まあ、クソゲーとして名を残すのは確かかもしれませんがね（笑）

そんな訳で、小休止として書いた話ですので、あまり後書きではっちゃけません。少しおとなし目に行った後書きですが、そろそろ締めようかと思っております。いや、だって……ネタは使い切ったし、もう書く事が無くなっちゃったから。っと、いう事で。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、残暑の風は強いな～、とまったく関係無い事を思っている葵夢幻でした。

第百四十話　見え始めた難問

「まったく、お前にこんな醜態を晒すとは、屈辱以外の何ものでもないな」

フレトの言葉に昇は苦笑いを浮かべて、フレトの皮肉を適当に流すのだった。けれども、意識を取り戻したフレトからの第一声がこれである。昇としては安心したものの、今のフレトが思っていたよりも深刻な状態に心配もしていた。

事の始まりは昇達が早めの夕食を済ませて、すぐにフレト邸に向かった事である。与凪の予測通りにフレト達は夜になると全員が意識を取り戻していた。けど、それだけなら喜ぶべき事だろう。だが、フレト達は意識を取り戻したものの、立つ事さえ、ままならないほど体力が戻っていなかったのだ。

昨日の時点で与凪が言ったとおりに、フレト達の回復機能は落ちており、未だに誰かの支えがないと歩けない状態だ。けれども、与凪の話では二日もすれば完全に回復機能が機能し始めて、日常の生活に戻れ、一週間もあれば戦闘すら可能なほどに回復が出来るとの事だ。

昼からフレト邸に来ていた与凪はフレト達の容態を第一に調べていたために、それぐらいの事は、フレト達の意識が完全に戻る前に分析する事が出来た。けれども、未だに、フレト達がこんな状態になったのは不明である。与凪も昇達と一緒に話を聞いた方が良いと思ったのだろう、だから与凪も未だに何があったのかは聞いていなかった。

そのため、話の流れは自然とそちらに向くのだった。

「それでフレト、いったい何があったの？　フレト達をここまで叩きながらもトドメを刺してないなんて、ちょっと考え辛い状況だし、戦闘地点からも、まったく痕跡が出なかった。その辺について話してもらえると、ありがたいんだけど」

そんな質問をフレトにする昇。けれども、フレトは明らかに不機嫌な顔で昇を軽く睨み付けると、まるで昇の所為だと言いたいばかりに答えるのだった。

「俺達も全貌は分っていない。ただ、今回の件で中心に居るのは滝下昇、お前だ。だから俺達の話を聞いた後に全て説明してもらおうか」

「えっと、それはどういう事？」

昇には思い当たる節が無いのだろう。だからこそ、戸惑うように苦笑いを浮かべながら、疑問系で言葉を返すのだった。そんな昇を見て、フレトはラクトリーに話しかけた。

「ラクトリー、まずは何があったかを話せ。それから詳しい資料を見せた方が早いだろう」

「はい、分かりました、マスター」

フレトから指示を受け取ったラクトリーが説明を始める。その説明は琴未達を驚かせるのには充分な事だった。なにしろラクトリーは伝説とも言われている命の精霊と戦闘したと告げたばかりか、契約者が精霊能力感知者と告げてきたからだ。

そんなラクトリーの話を聞いて首を傾げる昇。まあ、昇はここ数日、逃げる事で精一杯だったので伝説の精霊については、まったく聞いていないのだ。そんな昇の為にラクトリーは命の精霊が持っている能力と契約者が発動する能力をしっかりと説明するかのように話した。

そんなラクトリーの話を聞いて、話が一区切りすると与凪は納得したように言葉を発する。

「噂だけだと思ってましたけど……まさか本当に実在していたんですね。しかも……属性を無効化する、無の属性。そして能力者が発動する三つの能力。それらを考えれば、確かに筋は通りますね。それに命の精霊に関する伝説どおりの力ですから、信憑性は更に増しますね」

そんな事を言って納得する与凪。けれども、与凪は納得したよう

に頷くだけで昇達への説明を後回しにしたために、昇達には分からない部分があった。それでも、昇達の中でラクトリーの話から全てを察したシエラと閃華が昇達に向かって詳しく説明してくる。

最初に口を開いてきたのはシエラだった。シエラは無の属性について話し始めた。

「昨日の時点で与凪は属性反応が出ないと言ってた。それは普通なら考えられない事だけど、無の属性なら、それが可能。なにしろ無の属性は……全ての属性を無効化するから。更に広範囲に展開されれば、属性反応が残らないのは当然。無の属性は属性反応すら無効化、つまり消してしまうから。それに、相手が無の属性と分かったのなら、属性を使った攻撃に意味は無い。自分達の武器だけで戦う事を余儀なくされる。だからフレト達も属性を使わなかった」

「それでフレト達も属性を使った攻撃をしなかったんだ」

昇がそんな言葉を口にすると、フレトは、その通りと言わんばかりに頷くのだった。そんな昇達とは別に琴未には疑問に思った事があったようだ。だからこそ、それをシエラに向かって質問する。

「属性を無効化するって事は、シエラが持ってる翼の属性も無効化されて、飛べなくなるワケでしょ。なら、爪翼の属性を持っているレットさんの翼を切り落とす必要が無いんじゃないの？　無の属性で無効化すれば翼を消せるわけだし、なんで翼を切り落とす必要があったのよ？」

そんな質問をシエラにする琴未。同じ翼の属性を持っているもの同士、共通点があるからこそ分かる事があると琴未は考えたから、わざわざシエラに質問をしたのだ。シエラも、琴未から、そんな質問を受けて、少しは自分で考えろと言わんばかりに溜息を付くと、その点についての説明を始める。

「確かに、無の属性を放たれたり、展開したテリトリーに入った時点で無効化されて、翼を消される。けど、一度翼を消されても、無の属性から開放されれば、すぐに次の翼を生やす事が出来る。でも、翼を切り落とすって事は、翼の属性を発動させながら翼の属性を機

能させないようにするため。つまり、翼を切り落とされると再生には時間と力が掛かる。けど、無効化で消されたのなら、無効化が解かれたら、すぐに翼を再生する事が出来る。だから、今回の場合はレットの翼を切り落とす事で、翼の属性を発動させながらも使えないようにした。更に言うと、翼の属性は一度切り落とされると再生には多大な力と時間がいる。だからこそ、翼の属性を半分だけもっているレットの翼を切り落として、使えないようにした」

シエラの話を要約するとこういう事になるだろう。

翼の属性は、翼を切り落とされた時点では翼の属性は発動したまま、翼を再生しようとするのだが、一度切り落とされた翼を再生するには時間と力が必要になってくる。つまり戦闘中に翼を切り落とされると、そう簡単に再生は出来ないのだ。つまり、翼は無くても翼の属性をフル回転で使って翼の再生を行っているワケである。

だが、無の属性で翼を消してしまうと、無の属性が効果を発揮している時は翼の属性を消滅して無効化が出来るのだが、無の属性が発してる効果が消えると再び翼の属性を再発動、すぐに翼の属性が使えるのだ。

つまり、無の属性で翼の属性を消す事は可能だが、翼の属性が持っている利点から、無効化で翼の属性を消滅させるよりも、翼の属性を残しながら翼を再生させた時間を与えた方が長い時間だけ翼の属性を使えないようにすると同じ効果を発揮する事が出来るのだ。だからこそ、レットの翼は切り落とされたのだ。その方が発動中である翼の属性があるだけに、再生に時間が掛かるからだ。

むろん、いったん翼の属性を消すという選択肢もあるが、翼の属性は移動型の属性である。この手のタイプは一度発動すると、すぐに消したり、再発動させたりするのが無理だと言える属性だからだ。移動型は一度属性を発動すれば戦いを優位に持って行けるが、戦っている間は常に属性を使っているのと同じだ。だから、常に属性を使い続けている移動型の属性だからこそ、すぐに消したり、再発動させるのが無理と言えるのだ。なにしろ戦闘中は常に使い続けるの

が移動型の特性であり、一度発動させれば戦いが終わるまで使い続ける移動型だからこそ、長時間使える半面、属性の再発動とかは器用に出来ないのだ。つまり移動型も決して万能ではないという事だ。

シエラの説明だけでは理解できなかった琴未に、閃華がそんな補足を付け加えると琴未も含めて全員が理解できたように頷くのだった。

これで無の属性に関しては全員が理解したと悟ったのだろう、与凪が話題を変えて、次の問題について話し始めた。

「まあ、無の属性については、これで理解できたと思いますので、次はフレトさん達の回復が遅い点について説明しますね」

与凪がそう言い出したので、自然と全員の視線が与凪に集まる。

それから与凪は説明を始めるのだった。

「まずは、最初に理解してもらいたいのは、命の精霊と契約した契約者は必ず三つの能力を得ると言われています。命の提供、命の活性、そして命の強奪です。フレトさん達の回復が遅いのは命の強奪で生命力が奪われて、回復機能が低下したと考えて良いでしょう。伝説で伝わっている命の強奪では、相手が死ぬほどに生命力を奪っていたみたいですが、今度の契約者は、そんなに命の強奪でフレトさん達から生命力を多くは奪ってなく、むしろちょっとしか奪っていないみたいなんです。生命力が低下しているという事は、それだけ体力も精神力も、そして回復機能も低下していて当たり前と言えるでしょう。だからフレトさん達の回復が遅いんです」

さすがは与凪と言ったところだろう。要点だけを明確に説明して、全員が納得するように頷くのだが、その中で閃華だけが疑問に思う所があったのだろう。閃華は、その事を与凪に聞いてみる。

「じゃが与凪よ、過去に二回だけ現れた命の精霊と契約を結んだ者は、必ずと言って良いほど、相手が死ぬまでの生命力を奪っておる。それが、今回に限っては、なんでフレト殿達の生命力を全て奪わなかったんじゃろうな？」

そんな閃華の言葉を受けて、与凪は腕を組み、眉間にシワを寄せ

るうように瞳を閉じながら、思った事を口にする。
「確かに、伝説に残っている話では、そうですけど。今回の契約者は何を考えているのかが分かりませんからね。それを私に聞かれても困るんですけど。それは今回の契約者が何を考えているのかを知らないと分からない事ですね」
「なるほどのう、考えてみれば、そういう事じゃな」
与凪の言葉で閃華も納得できる、というよりも与凪の考えを察したと言っても良いだろう。だからこそ、閃華は納得したように話を切り上げるのだった。まあ、確かに与凪が言ったとおりに命の強奪は契約者の能力だ。つまり契約者の意思次第で相手の生命力をどれだけ奪うかが決まってくる。それは生命力を百として考えると、相手の生命力を一からどれだけ奪うかは契約者次第である。もちろん、百奪う事も可能だが、一だけ奪う事も可能だ。つまり、契約者の意思一つで奪う命の量を決められるのだ。だからこそ、閃華は与凪が言う相手の契約者が、何でフレト達から全ての命を奪わなかった理由なんて、その契約者しか分からない事だと閃華は察したのだ。
話が一区切りしたところで、今度は昇から質問が口にされた。
「精霊や契約者の能力については分かったけど、その精霊感知能力、だっけ？　それについてはあまり分からないんだけど」
そんな言葉を口にした昇に、自分もとばかりに琴未も声を上げる。ついでにミリアも、それに付いては分からないと主張したのだが、それは勉強不足だとラクトリーの傍に居たミリアはラクトリーからゲンコツを喰らう事になってしまった。そのため、ミリアが涙を流しながらも与凪は簡単な説明を開始する。
「簡単に言うと、幽霊が見えたり、感じたりするのと同じですよ」
笑顔で、もの凄く簡単に説明してきた与凪に昇は首を傾げ、琴未は与凪が遊んでいる事を見抜いたように溜息を付き、シエラと閃華は与凪の言葉を無視して、咲耶の入れてくれたお茶をすするのだった。
そんな状態に与凪は不満そうな顔をする。与凪としては誰かに突

っ込んで欲しかったのだろう。それなのに反応が薄い事が不満らしい。けど、いつまでもこのまま、というワケには行かないので、今度はしっかりと説明する。

「既に承知だと思いますけど、人間世界と精霊世界は隣接、または重なってるのと同じなんですよ。だから精霊世界からは人間世界と同じ光景が広がってたりもしますし、精霊世界にしかない物もあります。まあ、人間世界より精霊世界の方が広いって事ですね。ここで重要なのが、人間世界と精霊世界が重なっている部分、つまり人間世界の領域ですね。精霊達は、そこから人間達を観察して、自分が仕える契約者を選びます。けど、かなり低い確率ですが、人間の中には契約もしないで、しかも争奪戦に関係が無く。精霊が見えたり、感じたりする事が出来る人が居るんです。その人達を総称して精霊感知能力者と呼びます」

「えっと、本来なら精霊世界から見られるだけの人間世界でも、人間世界から精霊世界に干渉して精霊の存在が見えたり、感じたりする事が出来るって事ですか？」

与凪の説明に、そんな答えと疑問をぶつける昇。そんな昇の言葉を聞いて、与凪は「う～ん」と唸ってから答えてきた。

「正確に言うとちょっと違いますね。精霊感知能力者でも精霊世界には干渉できません。でも、精霊が見えたり、感じたりする事が出来ますから、精霊と話したりする事は出来ますね。それに精霊を感じるという事は属性を感じるのと同じですから、精霊自身と精霊の力を感じる事が出来るという事ですね。だからと言って、精霊世界に触れたり、侵入したり、干渉する事は出来ませんが精霊世界に居る精霊を見たり、話したりすることが出来ます。ただ……精霊によっては精霊感知能力者と話をしたりするんですが、通常の人には精霊世界に居る精霊は見えませんから、異端児のような目で見られたりもするんですよね」

「つまり精霊世界に居る精霊が見えたり、話をする事が出来るって事ですか？」

再び疑問をぶつけてくる昇に与凪は疲れたように息を吐くと、咲耶が淹れてくれた紅茶で喉を潤す。その間に与凪に代わってシエラが説明を始める。

「昇の言っている事は合っている。でも、争奪戦だと、それだけじゃない」

「というと？」

「精霊感知能力者は属性の力も感知できる。どのタイミングで、どんな属性を使って攻撃してくるのかを先読みが出来る。それだけじゃない、私のように移動型の属性でも、進行経路を先読みして、確実に攻撃を回避できる。だから反撃をするのにも楽だし、フレト達と戦った契約者みたいに逃げに徹せられると契約者を倒す事は不可能に近い。なにしろ、精霊感知能力者には属性の力が、どの方向から、どのタイミングで攻撃してくるかが分っているから、簡単に避ける事が出来る。それに自分を追い掛けてくる精霊も、すぐに感知できる。だからこそ、半蔵ですら契約者を倒す事は不可能だった」

えっと、つまり、精霊感知能力者は属性も感じる事が出来るから、属性攻撃を先読み出来るって事で良いのかな？　けど、それだと、僕はどうなんだろう？　そんな疑問を感じた昇は、その事を聞いてみる。

「僕みたいに属性を使わないで、力を放出するだけの攻撃なら有効なのかな？」

「なかなか良い質問じゃが、その可能性はあまり考えない方が良いじゃろ」

横から口を出してきた閃華に向かって昇は首を傾げる。やはり、閃華の言葉は短いと何を意味しているのかが分からないようだ。そんな昇に向かって閃華が説明をする。

「そもそも昇のように属性を使わない攻撃自体が珍しいのじゃ。昇よ、自分の能力であるエレメンタルアップがレア能力で、かなり珍しい力だという認識が薄いようじゃな。つまりじゃな、昇のように珍しい契約者か、かなりの工夫をしないと意味は無いという事じゃ。

なにしろ、精霊も契約者も属性を基盤にして戦っておるんじゃからのう。無属性の力を使える精霊は皆無、契約者としても、かなり珍しい能力か、かなりの工夫をしないと無属性の攻撃は出来ないんじゃよ」

「あ～、そっか、そういえばシエラがエレメンタルアップの能力を得たのは僕で三人目とか言ってたっけ」

「うむ、そのとおりじゃな。まあ、もっとも、最初の一人目は争奪戦が始まって、四度目の争奪戦じゃったかのう？　その辺りにエレメンタルアップの契約者が現れたからのう。精霊世界の歴史でも名前は残っておらんのじゃ。二人目は、第六天魔王と呼ばれた織田信長様じゃな。まあ、あの方はいろいろと不思議な人じゃったからのう、エレメンタルアップを発動させても不思議ではないじゃろ。それで、三人目が昇じゃな。長い争奪戦の歴史で、この三人しかエレメンタルアップの能力者はおらんのじゃ。じゃから昇よ、自分の能力を基準に考えても、実用実行は不可能に近いんじゃよ。まあ、後は工夫しだいでは何とかなる能力もあるがのう」

そんな言葉を口にして閃華はフレトに目を向けた。そんな閃華の視線と同じようにフレトに視線が集まると皆が納得したように頷くのだった。そしてフレトも自分が何で注目されたのが分っているからこそ、胸を張って堂々としていた。

フレトは基本の能力は風のシューターだが、エレメンタルウェポン、契約者が作り出す武器にかなりの工夫をしていた。それが詠唱システムだ。フレトは詠唱をする事で風以外の属性も操れるようにしているのだ。そんなフレトだからこそ、無属性も詠唱次第で放つ事が出来る。だが、そのためには詠唱をするための時間が要る。その時間さえ作れれば、かなり有効的に使えるのだが、やはり、そんなフレトの詠唱システムを基準に考えるのも危ないと言えるだろう。下手をすれば、自分自身の能力を低下する事になるからだ。

例えば琴未のエレメンタルで無属性の力をフレトと同じように放とうとすると、どうしてもエレメンタルの利点である、精霊と同様

の戦闘能力を低下させて無属性の力を発動させなければいけない。それだったら、自分自身の属性を使いこなした方が効果的な攻撃が出来るのだ。だから無理して無属性の力に頼るのは危ないと言えるだろう。下手に無属性の力を使おうとして、反撃を喰らってしまっては意味が無い。逆にエレメンタルなら精霊と同等の戦闘能力を得られるのだ。それだったら、属性を使わずにエレメンタルの戦闘能力に頼った方が効果的だと言えるだろう。

つまり、下手に無属性にこだわる必要は無いのだ。ただ、精霊感知能力者の力が厄介だというだけで、その力を持っているから絶対に勝てるとは限らないし、打ち破る手段も考え次第では幾らでも出てくるだろう。要は精霊感知能力者を前提に作戦を立てれば、充分に勝てる相手だという事だ。だから、下手に無属性の攻撃に頼るよりも、自分達の力を効果的に使った方が勝率はかなり上がるだろう。それだけの話である。

これで精霊感知能力者についての話も終わりだろと、話を切り替える前に、フレトが精霊感知能力者についての話を続けてきた。

「そういえば、その命の精霊が精霊感知能力者の力を使えば、更に詳しく調べる事が出来るとか言ってたな。あれはどういう意味なんだ？」

そんな質問をするフレトにラクトリーが真っ先に答えてきた。

「精霊感知能力者は精霊や属性を感知するだけではないのです。人や物に残した精霊反応、精霊の力や属性ですね。そんな残り香のようなものまでも感知する事が出来るんです。だからこそ、精霊感知能力者はこちらの戦力を全て把握していました。だからセリス様の護衛に向かった咲耶の存在も知っていたんです。それに調べようとすれば、屋敷の周りを一周するだけでも、こちらの戦力だけではなく能力までも分かる可能性があります。例えば、どんな精霊と契約しているとかですね」

フレトの質問にラクトリーは丁寧に説明すると、フレトを含めて昇達も納得したように頷くと、フレトは昇に向かって呆れた視線を

向けてきた。それから皮肉を込めて、昇に向かって言葉を放つ。
「ただでさえ、その精霊感知能力者でこちらの事を調べられたのに、そこの滝下昇から更なる情報を得たのだとすると、こちらが不利になるのは必然か」
「えっ、僕？」
昇としては思いもしなかった言葉だろう。だが、フレトは既に春澄と会話して、そこに昇の名前が上がっているのだ。だからフレト達が更に不利になった要因として昇からの情報漏れを指摘されても不思議ではないのだが、今の時点では昇達に襲撃を掛けてきた春澄とアルビータの情報を見せていない。だからこそ、フレトはラクトリーに命じる。
「ラクトリー、相手の情報もあるのだろう。顔写真と共に、この女たらしに見せてやれ」
えっと、何か凄く蔑まされてるんですけど、フレト……僕はそんなに悪い事をしましたか？　フレトの言葉に思わずそんな事を思ってしまった昇。だが、フレトの言葉が真実だと分かったのはラクトリーが大型モニターに戦ったアルビータと春澄の顔写真を映し出してからだ。
「ちょ、この子っ！」
まさか春澄の写真が出てくるとは思ってなかった琴未は声を上げるとシエラ達にも動揺が走る。昇にしてみれば、まさに予想外、いや、春澄が絡んでいるとは思いもしなかった事だ。そして、春澄の顔写真を見た、シエラ達が一斉に叫ぶ。
『昇の浮気相手っ！』
「いや、違うからっ！」
シエラ達の言葉に対して、思わず突っ込みのような言葉で否定する昇。けれども、春澄の写真がモニターに映し出されたのは昇を始め、シエラ達にも驚きが走った。そしてフレト達はやっぱりかという感じで昇に呆れた視線を向けながら、フレトは思いっきり溜息を付くのだった。

「滝下昇、やっぱり、お前の関連か」
「いや、何と言うか……これは間違いないの？」
「俺達がここでお前達に嘘の情報を流して、何の得がある。それとも、俺達の情報は、そんなに信憑性が無いか？」
「ごめん、別にフレト達を疑ってるワケじゃないけど……あの春澄ちゃんが契約者だって事が信じられなくて」
まさか春澄がフレト達を襲撃した敵である事に驚き、すっかり混乱する昇。そんな昇は頭の中でいろいろな事を考えるが、どうも考えがまとまらずに混乱するばかりだ。その間にも、シエラは何かに気付いたのだろう、その事を口にするのだった。
「目を開けてる……」
シエラの言葉に混乱している昇と閃華を除いた全員が頭の上にハテナマークを浮かべるような仕草をするのだった。どうやらシエラと閃華以外は写真に写っている春澄の姿に違和感がある事に気付いていないようだ。もっとも、フレト達は戦闘でしか春澄と接触していないから、分からなくても当然だと言えるだろう。けれども、琴未達は映し出された春澄の姿に違和感がある事を知っているが、まだ気付いていないようだ。だからこそ、琴未はシエラに尋ねる。
「目を開けてるって、普通の事じゃない。それが、どうかしたのよ？」
そんな疑問をぶつけてくる琴未に対してシエラは呆れた視線を送り、閃華は思いっきり溜息を付いた後に、普段の春澄から戦闘中の春澄を見て、感じる違和感を説明をしてあげるのだった。
「琴未よ、春澄殿は先天性の盲目で日常では常に瞳を閉じておるのじゃぞ。それなのに、戦闘中に記録した春澄殿はしっかりと目を開けておる。更に先程の話から春澄殿が契約者なのは間違いないじゃろ。その事を総合して考えれば、戦闘中の春澄殿は目が見てえている事になるんじゃ。決して治らないと言われた盲目が、戦闘中には回復して、しっかりと物を見る事が出来る。そこに違和感を感じるのは当然じゃろ。なにしろ盲目の春澄殿が戦闘中だけ目が見えてい

るようなっているんじゃからのう」
「あっ、そっかっ！」
閃華の説明を聞いて、やっと春澄が普段の生活では盲目だという事を思い出した琴未。けれども、ラクトリーが映し出した戦闘中に写した顔写真の春澄は、しっかりと目を開けている。それに盲目なら、フレト達も戦闘中に、その事に気付いて当然だろう。だが、フレト達は春澄が盲目だという事を知らない。だからこそ、シエラと閃華のように春澄の写真を見て違和感を感じなかったし、閃華の話を聞いていたラクトリーは物思いにふけっている。どうやらラクトリーには、春澄の盲目に対して何かしら思い当たる節があるようだ。だからこそ、ラクトリーは物思いにふけっているのだが、そんなラクトリーに気付いたフレトがラクトリーに声を掛けてきた。
「ラクトリー、どうやら何か思い当たる事があるようだな」
「えっ、あっ、はい、当たっているか、どうか分かりませんが、少しだけ思い当たる事があります」
「やっぱりな、話してみろ」
フレトにそう言われて頷くラクトリー、それからラクトリーは空中に現れたキーボードを操作して、テーブルの真ん中に大きく映し出されたモニターに、戦闘中に記録した春澄と半蔵の戦いが流れ始めた。そこには、完璧に半蔵の攻撃を避けて、尚且つ、半蔵をしっかりと見て、話をする春澄の姿が映し出されていた。
その戦闘記録を流しながらラクトリーは思った事を口にする。
「ご覧の通りに、私達が接触した契約者……春澄、さんでしたっけ。その方は半蔵の攻撃を完璧に避けています。先程も話したとおりに春澄さんは精霊感知能力者です。でも、その能力だけで半蔵の攻撃をここまで完璧に避ける事は不可能です。ですから、戦闘中の春澄さんは視力を取り戻している事は言うまでもなく、分かる事です」
ラクトリーの言葉を聞いて、やっと全てを理解した琴未だが、一つだけ疑問に思う事があるのだろう。その事を口に出してみる。
「でも、普段は盲目の春澄ちゃんが、なんで戦闘中だけ視力を取り

戻せてるわけ？」
「命の活性」
「その通りかもしれません」
相変わらず一言で答えてきたシエラに同意するラクトリー、どうやら二人が出した結論は同じようだ。そして、それに賛同するかのように与凪と閃華と半蔵も頷くのだった。そして、琴未を含めた他のメンバーには、まだ理解が出来ていないようなので、与凪から説明は入るのだった。
「今の段階では推測でしかありませんが、命の活性は身体能力を上げるだけでなく、失われた身体能力、例えば、視力とか聴覚とか筋肉とかですね。普段の生活では失われた身体能力も回復させるのかもしれません。だからこそ、春澄さんの視力が戻ったのかもしれません。最も、それは命の活性が使われている間、戦闘中だけに限られますけどね」
与凪の説明を聞いて納得したように頷く琴未達。だが、その中で一人だけ首を傾げている者が居た、どうやら与凪の説明を聞いても理解が出来なかったようだ。その一人とは……言うまでもなくミリアだった。そのため、再びラクトリーからげんこつを喰らって、たんこぶ増やしたミリアは涙を流しながらラクトリーからの講義に近い、説明を受ける羽目になってしまった。
まあ、そんなミリアのために補足を入れると、日常生活では盲目だったり、何も聞こえなかったり、身体の一部が麻痺して完全に動かせない状態だったりしても、命の活性を使っている間はそのような障害も回復して、尚且つ、身体能力もかなり上昇するという事だ。ラクトリーは、その事を厳しくミリアに叩き込むように話し続ける。
そんなミリアに向かって苦笑いを浮かべる琴未達。そして、ミリアとラクトリーを放っておいて、話はいよいよ肝心なところへと移っていくのだった。
まず口を開いたのはフレトから昇への質問だった。
「まあ、これで俺達から話せる事は全て話しただろう。そこで滝下

昇、お前絡みの春澄という契約者が、何で俺達に襲撃を掛けてきたのが疑問だ。その春澄ならばお前が契約者だという事は分っているはずだ。それなのに、まずは前座と称して俺達に戦いを挑んできた。滝下昇、お前はこの事態をどう見る？」

フレトがそんな質問をしてきたので、皆の視線が自然と昇へと集中する。けれども、昇としても春澄が契約者という事は考えもしなかった事だし、フレト達に襲撃を掛けてきた理由も検討が付かなかった。それでも、昇は春澄の事を思い出しながら、フレト達を襲撃してきた意味を考えるために思考を巡らす。

分かった事は一つだけかな。春澄ちゃんは以前に終焉に向かって歩いてるという事、それに無為な日々に生きている価値を見出せなかったという事、この二つを合わせれば、春澄ちゃんがなんでアルビータさんと契約をしたのかが分かる。戦闘中、その時間だけは春澄ちゃんの視力が回復する。それはつまり、春澄ちゃんは大きな世界を見る事が出来る、はっきりと自分という存在を確認する事が出来る。その結果として……命を削る事になったとしても、春澄ちゃんは選んだんだ、自分の命よりも……世界を感じる事を……。

そんな事を考える昇は複雑な心境になっていた。

春澄はアルビータと出会う前は、施設で何をして良いのか分からない、ただ存在しているだけの無為な日々を送っていた。だが、アルビータと出会い、話をする事で春澄は知ったのだ。たとえ自分の命を削ったとしても、少しの間だけでも、世界に干渉する事を、世界を確認する事を選んだのだ。

そう考えると昇はやっと春澄の真意が分かったような気がした。春澄にとって命とは長く存在し続けるために使うものじゃない。世界に干渉するために、自分という存在を確認するために春澄は自分の命を使っているのだ。その結果として……命を削る事になったとしてもだ。春澄にとって命とは長く生きるためじゃない、何かを成すために使う物だと春澄は考えているに違いないと昇は結論を出して、その結論の元にフレト達を襲撃した理由を考える。

確か、フレトの話だと、前座と称して戦いを始めたんだっけ。そうなると……本番、自分達が望んでいる戦いがあるという事だよね。それって……どう考えても僕達の事だよね。そうなると……挑発、いや、それは理由の一つかもしれない。春澄ちゃんの考えはもっと単純で、感情から来る事なら、深く考える必要は無いはずだ。そうなると……。

それから昇はテーブルの上に映し出された、繰り返して流れている春澄の映像を見ながら、ある答えを出す。

そっか、春澄ちゃんはフレトの家を見たかったのかもしれない。だから、途中で半蔵さんを振り切って屋敷の中に侵入したのかもしれない。まあ、これだけの豪邸だから、誰もが一度は中を見てみたいという気持ちも分かる。僕だって、最初はそうだったし、まあ、その時は驚く事だらけだったけど、それは春澄ちゃんも同じで、そうやって様々な物を見る事で、春澄ちゃんは世界を感じ、自分という存在に意味を成そうとしてるんだ。でも……春澄ちゃんは終わりに向かって歩いてる。それは命の提供という能力で自分の生命力を使ってるから、だから春澄ちゃんは終焉に向かって歩いてると言った。今に思えば、それは当たり前の事かもしれない。春澄ちゃんは世界への干渉と、自分の存在意義を得るために……自らの命を代価として払っているのと同じだから。

今度は悲しい気分になり、何かやりきれない気持ちを抱く昇。この時こそ、自分が無力だと昇は始めて感じた事だろう。春澄の真意を理解した昇だが、だからと言って春澄を止める事は出来ない。それは春澄が選んだ人生であり、春澄が自らの意思で選んだ、固い決意なのだ。そこに昇は口を出す権利が無いからだ。

春澄には迷いが無い、そして……春澄の生き方を否定する事も出来ない。つまり春澄は間違った事はしていないし、その生き方に口を出す権利を誰が持っていると言えるのだろう。昇はその事を理解したからこそ、自分は無力だと感じたのだ。

昇は春澄に生きてもらいたかった。たとえ盲目の身だとしても、

しっかりと生きて欲しかった。けど、春澄は命を代価に盲目を治し、世界に干渉して、自分を確認する生き方を選んでしまったのだ。そんな他人の生き方に誰が、どれだけの事を言える権利があるのだろう。むしろ、自分で選んだ生き方だからこそ、誰も口を出す権利は無いのだ。

昇はそれを良く分かっている。だから昇は春澄の生き方に口を出す事は出来ない。もちろん、それが間違っているのなら、口を出して正す事が出来るだろう。けど、誰が春澄の生き方を間違っていると否定できるだろう。春澄は命の強奪という能力を得ながらも、フレト達を殺すまで生命力を奪わなかった。それだけでも、春澄は他人を傷付けて生きるより、自らの命を差し出す生き方を選んだと考えられる。つまり、それだけでも春澄の生き方を間違ってると否定できないのだ。

しかも、ここまでしたという事は、春澄の決意は固く、今更になった昇が何を言ったとしても春澄は自分の生き方を変えないだろう。もし、昇の言葉で揺らぐ程度の決意なら、昇は迷わずに説得という道を選んだ事だろう。

だが、ここ数日、昇は春澄といろいろと話して、春澄の決意は固く、迷わずに終焉に向かって歩き続ける事を選んだ事に後悔はしていないだろう。むしろ、アルビータと契約を交わさない方が後悔した事だろう。昇は、ここ数日、それは少ない時間だが、そこまで春澄の事を理解していた。だから……昇が選べる選択肢は一つしかないのだ。

それが分っているだけに、昇は悔しくもあり、自分の無力さを感じるのだった。

昇が黙って考え込んでいる間は誰も口を開かずに沈黙が場を支配した。だが、ラクトリーが何かを思い出したようにミリアを解放すると、昇に向かって話しかけるのだった。だが、昇はかなり考え込んでいたのだろう。ラクトリーに数回呼ばれて、やっと返事を返した。

「えっ、あっ、はい、何ですか？」
「私も意識を失い掛けていた時に春澄さんから伝言を頼まれていたので、すっかりわすれてました」
「伝言……ですか？」
「ええ、確か……『明日の約束を忘れないでね』でしたね。最も、日付が変わってますので今日の約束と言えるでしょうけど」
「約束……」
昇は記憶を辿り、春澄が言った約束にいての記憶を引っ張りだそうとした。すると、あっさりと、その約束について思い出し、約束の意味をやっと理解する事が出来た。だからこそ、昇は思うのだった。
そっか、そういう事だったのか。春澄ちゃんがフレト達に襲撃を掛ける事は、その時には既に決まってたんだ。その日時まで、だからあんな約束を。
そう考えると昇は時計に目を向けた。時計の針は九時半ぐらいを刺しており、約束した時間の前である事を示していた。だからこそ、昇はすぐに立ち上がると部屋を出ようとするが琴未が止めてきた。
「ちょっと、昇。今から、どこに行こうっていうのよ」
「……ちょっと……春澄ちゃんと会ってくる」
「なっ！」
昇の言葉に驚きを示す琴未達。それからシエラが、すぐに口を開いてきた。
「なら私達も一緒に行く、春澄が契約者と分かったからには、昇一人で行かせるわけにはいかない」
「そうよ、昇。この際だから全員で行くわよ」
シエラに続いて琴未も、そんな事を言い出すが、昇は振り返らずに、扉の取っ手に手を掛けながら返事をする。
「ごめん、僕一人で行ってくるよ、いや、僕は一人で行かないと意味がないんだ」
はっきりとシエラ達の同行を断る昇。その事に琴未は反論しよう

とするが、閃華に止められてしまった。そのため、仕方なく黙る琴未に対して閃華が口を開く。

「昇よ、もし戦闘になった場合は、どうするつもりじゃ。あっちは、フレト殿を襲った事によって、私達が春澄殿の情報を得ているのは承知の上じゃろう。そんな状況で昇が一人だけで行ったところで、あのアルビータという精霊には勝てんじゃろ。昇の事じゃから、何かしらの考えがあると思うのじゃが、せめて、それを聞かせてから行ってもらえると、こっちも安心できるんじゃがのう」

そんな閃華の言葉に昇ははっきりと否定の言葉を口にする。

「春澄ちゃん達の性格から考えても、僕が一人で行ったところで戦闘にはならない。むしろ、逆にシエラ達を同行させた方が戦闘になりやすい。それはどちらも戦力を持っているから。それに……今は何も言えない。その答えを出すために、僕は一人で行かないといけないんだから」

「……分かった、ならば私達はここでのんびりと待っておいた方が良いみたいじゃな」

「ありがとう」

それだけの言葉を残して昇は部屋を出て行ってしまった。そんな昇を思わず追い掛けようとする琴未を閃華が制する。それから閃華は琴未に微笑みながら言うのだった。

「今回の事で全てを知っているのは昇だけじゃ。じゃから、全ての結論は昇に任せた方が良いじゃろう。琴未よ、心配は無い、昇の事じゃ、上手くやってくれるじゃろう」

「……でも」

「ふむ、やっぱり不安か？」

「そんなの当たり前でしょっ！　シエラもそれで良いわけっ！」

話を振られたシエラだが、そのシエラは呑気に咲耶が淹れてくれた紅茶を味わっていた。そんなシエラに腹を立てる琴未を閃華がなだめる。そんな琴未を見て、やっとシエラが口を開いた。

「私は昇を信じてる、だから昇の剣として戦える。それに、昇が言

った事にも筋が通っている。今の状況で下手に戦力となる私達が同行すると、その場で戦闘になりかねない。けど、春澄の性格から言って戦力を持たない昇を攻撃するとは思えない。つまり、下手に戦力を揃えれば、相手も戦力を出さなければいけない状況になる。昇はそれを避けるために、私達の同行を断った。それに……」

それだけを言って黙り込むシエラ。そんなシエラに首を傾げる琴未、そんな琴未に閃華は話を続けてきた。

「琴未よ、琴未は昇との付き合いが長いから、私達よりも良く分かっておるじゃろ。今の昇が悩んでいる事に。じゃからこそ、不安な気持ちが沸き上がってくる。それは私達も同じじゃ。じゃからこそ、昇は一人で行かねばならんのじゃやよ。抱えている問題に答えを出すために、そして……これからの事についてものう」

「……これからの事って何よ」

それは琴未も分っているのだが、やっぱり納得が出来ないのか、それとも不満なのかは琴未の心にあるとして、やっぱり、その言葉を口に出さずにはいられなかったようだ。そんな琴未に閃華は軽く微笑みながら、琴未の肩に手を掛ける。

「それについての答えを出すためにも、昇は一人で行ったんじゃよ」

それだけ言うと閃華は琴未の横を通り過ぎて、今まで座っていた席に戻ると咲耶が淹れなおしてくれたお茶を口にするのだった。

けれども、昇が出て行った事にその場の空気が重かった。あのミリアですら黙り込むほどだから、全員が重い雰囲気を感じていた。琴未もそんな雰囲気をしっかりと分っていたが、そんな雰囲気は琴未の性に合わないのだろう。琴未は無理矢理、大声を出すと咲耶に紅茶のおかわりと夜だというのにケーキまでも要求した。そんな琴未に同調するようにミリアも喜んで咲耶にケーキの注文する。

そんな琴未達にラクトリーは微笑、閃華も軽く笑いながらも同じようにお茶菓子を注文し、フレトは瞳を閉じて鼻で笑うのだった。そんな琴未達に釣られるようにシエラとレットも食べ物を要求し、重い雰囲気が一気に明るくなっていた。

全員分かっていたのだ。たとえ昇が重く悩んでいたのだとしても、昇が帰ってきた時に明るく迎えてやらないといけない事に。だからこそ、今ではすっかり賑やかになった雰囲気を楽しむ事にした琴未達。

そんな琴未達とは対称的に昇は難題を考えながらも夜道を歩いていくのだった。

第百四十話　見え始めた難問（後書き）

え～、そんな訳で、このエレメも、ついに百四十話、そして……遂に四周年を迎えましたっ！！　ワー、ドンドン、パフパフ、そんな訳で四周年を迎えたエレメに乾杯～。

いやはや、ついにエレメも四年目に突入です。それでも見えない終わり……本当にいつになったら終わるんだろう。まあ、今の更新ペースだと確実に五周年を向かえる事は決定事項だけどね（笑）

それにしても、三周年を迎えた時は百二十話でした……一年で二十話しか更新してね～。まあ、去年の後半はプライベートな事で更新する時間が取れなかったですしね。今年の前半になって、やっと落ち着いてきたという感じですから、まあ、仕方ないと言えば仕方ないんでしょうね。

ちなみに、ちょっとだけ試算して見る事にしました。エレメの一話平均を４００字詰めの原稿用紙に換算すると、平均して３８枚になります。そこに、この一年で更新した二十話をかけます。すると……７６０枚、更に同時進行で断罪の日～咎～も書いているので、それを二倍にします。すると……１５２０枚……これは本にすると、どれだけの量になるんだろうね。とか思ってしまいます。たぶん、一冊にまとめるとかなりぶ厚くなるんだろうな～、とか思ってますけどね。

というか、話が進まない割には、結構な文字数を書いてますよね～。というか、エレメを本にしたら、どの編も一冊ではまとまらないよっ！　とか思ってますけどね～（笑）

まあ、そんな訳で、ここ一年の報告と四周年を迎えたエレメですが……まあ、お祝いって事で、ここは楽しく行きましょうか。誰かっ！　酒を樽ごと持って来いやっ！！！！　さあ、今日は呑むぞっ！！！！　そう、記憶が無くなるほどに……まあ、明日が辛くなるので、そこまではやりませんがね（笑）

まあ、お祝い事なので、ここは楽しく、皆で祝おうではないかっ！　そんな訳で、ここまで私を支えてくれた皆さん、ありがとう～、こうして四周年を迎えられたのは、皆々様のおかげでもあります。なので、ずっとエレメを読んでくれた方には感謝感謝です。皆～、ありがとう～っ！！！！

そんな訳で、無事に五年目に突入したエレメですが……次編はかなり長くなる予定です。使う話数も、今までの二倍ぐらいになりそうな、長い話を考えております。まあ、その途中で、いよいよ……いよいよっ！！　五周年を迎えそうなので、皆～、これからもエレメを、そして私を支えてね。皆の応援を待ってるよ～。そんな訳で、五周年を目指して、改めて乾杯っ！！　……というか、既に五周年を迎える事は決定事項になっているのが、また怖いというか、頑張らないといけないというか、いろいろと不安でもあり、楽しみでもありますね。

けど、今は無事に四周年を向かえた事を祝って、そして楽しみましょうか。そして、明日からは、五年目に突入したエレメを更に進化が出来るように頑張りつつ、次の事を頑張って行きたいと思っております。

さてさて、未だに宴が続いてますが、今回は無礼講という事で、私も羽目を外すので、そろそろ締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました～。そして、これからもよろしくお願いします。更に、評価感想もお待ちしております。

以上、四年間、私を支えてくれた人達に感謝の意を込めて、もう一度だけ叫びます。皆～、ありがとう～っ！！！！　と思いっきり叫んでみた葵夢幻でした。

第百四十一話　悲しみを秘めた宣戦布告

静かな公園。休日の夜なら、そこには沢山の人が集っていても不思議ではなかっただろう。だが、まるで誰も入れないよう、人々の足が公園に踏み入れる事は無かった。何かの力が人の侵入をさせないかのようになっている公園に、昇は何かを気にする事無く、公園に足を踏み入れるのだった。

公園の中央にある噴水は綺麗にライトアップされ、公園各地に設置してある照明が、木々を明るく照らして、夜の公園に光という華を咲かせている。そんな公園の中を昇は迷う事無く、歩き続け、そして止まるのだった。ベンチに座る春澄、そして隣に立っているアルビータを前にしながら。

春澄は既に昇の存在は感知してたはずだ。なにしろ、春澄は精霊感知能力者なのだから。だから昇に染み付いている精霊の力をしっかりと感じ取っていたはずだ。それなのに、春澄は昇が目の前に来るで声を出さなかった。けど、こうして昇が目の前に来たのなら、今更になって黙っている意味は無い。だから春澄は昇に微笑を向けながら会話を始めてきた。

「約束……覚えていてくれたんですか？　それとも、私が託した伝言を聞いて思い出してくれたんですか？」

そんな春澄の質問に昇は思いっきり溜息を付いてから話し始める。まあ、それも仕方ないだろう。なにしろフレトの事があったからこそ、昇は春澄との約束を忘れていたのだ。だから、春澄が言った後者が正しく、すっかり忘れていた自分を情けないと思ったのだろう。だからこそ、溜息を付くと、すぐに会話を続ける。

「まさか、こんな事になるとは思ってなかったからね。正解は後者だよ。春澄ちゃんが伝言を託してくれなかったら、すっかり忘れていたところだよ」

そんな昇の言葉を聞いて、良かったと言わんばかりに無邪気な笑

みを浮かべた春澄は楽しそうに昇との会話を続ける。
「やっぱり、そうなると思ってましたから、伝言を残してきて正解でしたね。それで、昇さん」
春澄の顔は先程の無邪気な笑みから真剣な顔付きに変わる。そして春澄は言葉を続けるのだった。
「私達の事を怒ってます？　昇さんの友達に襲撃を掛けた事を怒ってます？　それとも……別な事を考えてます？」
そんな質問をする春澄に昇は即答で答えてきた。
「怒ってはないよ。契約者なら、それに争奪戦に参加しているのなら、契約者同士の戦いは当然の事だから、だから僕に春澄ちゃんに対して怒る理由は無い。むしろ、春澄ちゃんに何かしらの思惑があるのなら、戦いが起こるのは当然というべきだろうね」
そんな昇の言葉を聞いて、再び春澄の顔に無邪気な笑みが戻ると、今度は春澄から口を開いて会話は続く。
「やっぱり怒ってないんですね。まあ、昇さんなら、これぐらいの事で怒るとは思いませんでしたけどね。むしろ、怒っていた方が驚きです。それで昇さん、私が契約者と知り、アルビータの力も見たと思います。それなのに、ここに一人で来た理由は何故ですか？私達が契約者であるのなら、私と昇さんとの間に戦いが起こっても、それは必然だと思いますけど」
「それは、今日、この場所で、春澄ちゃんが僕達と戦うつもりなら、僕も皆と一緒に来たよ。でも、あの時の約束に僕一人とも、皆でとも、人数の約束をした覚えは無い。それに……春澄ちゃんはしっかりと言ったから。その時になれば分かると、だからこそ、僕は一人でここに来た。知らなきゃいけない事を知るために」
「やっぱり……昇さんは、そういう人なんですね。良いですよ、どんな質問をしてきても、出来る限りは答えますから」
「なら、一番最初に知っておかなきゃいけない事は一つだけ。春澄ちゃん、君の命は後どれぐらいで無くなるの？　後……どれぐらい生きていられるの？」

そんな質問をする昇。その質問は決して軽くない、重要な質問だ。だからこそ、昇は知っておきたいと思ったのだ。春澄の命が、どこまで消耗している事を。後、どれだけ戦えるかを。それを知っておかないと……後悔しそうだと昇は直感で悟っていた。だからこそ、一番最初に、この質問を口にしたのだ。

そんな昇に対しても春澄は笑みを消す事無く、まるで、それが当然かのように答えてきた。

「戦えて、後一回でしょうね。まあ、このまま戦わなくても一ヶ月以内に死ぬでしょうね。フレトさんは強かったですからね、私もかなり命を削ってアルビータに注がないといけなかったんです。だから、思っていた以上に、私の消耗は激しかったですね。まさか、ここまで削らないと勝てない相手だとは思ってませんでしたよ」

そんな春澄の答えにアルビータは昇が驚くと思ったのだが、昇は驚きを示す事はなかった。そんな昇を見て、アルビータは少し嬉しそうに瞳を閉じて微笑むのだった。それこそが、アルビータの願いだったからだ。

そして、その昇はというと内心ではやっぱりと感じながらも、態度を変える事無く、春澄との会話を進める。

「そして……最後の相手が僕達……という事で良いのかな？」

「ええ、その通りです。私達は最後の相手として昇さん達を選びました。まあ、フレトさん達の襲撃は昇さんと出会う前から決まってましたけど。そこに偶然か、それとも必然なのか、それは分かりませんが、昇さんと出会いました。そして昇さんと時間を共有して行くと分かったんです。昇さんこそ、私達が最後に戦う相手に相応しいって。だから、フレトさん達への襲撃も、本来の目的に付け加えて、昇さん達を挑発を込める事になったんですけど……あまり、意味はなかったみたいですね」

「そうでも……ないよ」

春澄の言葉を聞いて、昇は拳を強く握り締め、少し悔しげな声で言葉を返してきた。それは春澄にとっては予想外な声だった。確か

に昇の声だけで、春澄は昇が悔しいという気持ちを抱いていると感じ取れたのは確かだ。けど、その理由としては春澄達がフレトに襲撃を掛けたからではない。何が別な理由で昇は悔しいという気持ちを出だしている事に春澄は気付いていた。

そんな昇が一度、自分の心境を落ち着かせるために、一度だけ、大きく深呼吸をすると、それからしっかりと春澄の顔を見ながら会話を続けてきた。

「僕は春澄ちゃんが契約者だと知った事で、それにフレト達に戦いを挑み、勝利した事で理由が出来た。だからこそ、僕は春澄ちゃんと戦わないといけない。春澄ちゃん達が戦う理由を僕は僕なりに理解しているつもりだよ。だからこそ、戦わないといけない。それは春澄ちゃん達の願いを叶えるために、僕が……春澄ちゃんを見送るために……僕達は戦わないといけないんだって」

「……」

そんな昇の言葉を聞いて顔を伏せる春澄。そんな春澄は何かを耐えるように、短いスカートの裾を強く握り締める。それでも、このまま黙っているワケにはいかないと思ったのだろう。春澄は顔を伏せながらも、深い呼吸を何度かすると顔を上げてきた。今度は瞳を閉じながらも、しっかと真剣な顔付きだと分かるほど、真っ直ぐな顔を。そんな春澄が昇に向かって宣言するかのように話す。

「なら……私達の挑戦状を受けてくれると思って良いんですね」

「その通りだよ、僕達は春澄ちゃんと戦う。でも……僕は春澄ちゃんとは戦わない」

「……えっ？」

予想も出来なかった昇の言葉に春澄は驚きの表情を見せる。まあ、それはそうだろう。戦うと言った後に、すぐに戦わないと言ったのだから。結局は、どちらかなのか、誰しもが分からずに迷うだろう。それでも、昇はしっかりと春澄の顔を見詰めると話を続けてくる。

「戦うのはアルビータさんと僕達が揃えた戦力だけ、僕と春澄ちゃんは直接的には戦わない。それが、ここに来るまでに出した僕の答

えだよ」
「どういう……意味ですか？」
春澄の表情が真剣ながらも鋭いものに変わるのを昇はしっかりと目にした。たぶん、春澄が真剣に戦う時に見せる表情なのだろうと、昇は勝手に想像し、そんな春澄を見ながらも会話を続ける。
「フレト達の戦いは見せたもらったよ。その戦いでは、春澄ちゃんは戦うための力は持っていない。それに精霊感知能力者なら、僕でも近づけば分かると思う。そんな春澄ちゃんと鬼ごっこをするつもりは無いという事」
「なら……私達はどうすれば良いんですか？」
そんな春澄の質問に昇が微笑みを浮かべるのをアルビータはしっかりと目にした。それだけでアルビータには昇が次に出す、言葉が分かったのだろう。だからこそ、アルビータも微笑むかのように瞳を閉じて、まるで安心したかのような態度を示した。
そんなアルビータに気付かずに昇は話を続ける。
「さっきも言ったように、僕は春澄ちゃんを見送るために戦いを引き起こす。だから……僕だけは見送るよ。春澄ちゃんの命が尽きるまで、その傍らでずっと春澄ちゃんを見守ってるよ。春澄ちゃんの隣で……ずっと、見てるよ……春澄ちゃんを……春澄ちゃんの命が尽きる……最後のその時まで」
「ッ！」
昇の言葉に声にも出せない驚きを示す春澄。まさか昇から、そんな事を言われるとは、春澄にとっても、想像が出来なかった事だ。だから、そんな春澄が一筋の涙を流しながらも、昇に向かって、いつもの笑みを浮かべながら、はっきりと言葉にする。
「やっぱり……昇さんはずるいです。そんな風に言われたら……断れないじゃないですか」
そんな春澄の言葉を聞いて、昇も微笑むと春澄の答えを聞く。
「なら、それで良いかな？　次の戦いでは、僕はずっと春澄ちゃんの隣に居るって事で？」

昇の質問に春澄はこれ以上無い笑顔を浮かべながらも、真剣な声ではっきりと昇に告げえるのだった。

「はい、それで良いです。だから昇さん……ずっと……見ててくださいね。私の最後を、私が最後に成す事を……しっかりと見ててくださいね。終焉を迎える……その時まで……」

「うん、約束するよ。次の戦いでは絶対に春澄ちゃんの傍で、ずっと見てるから、春澄ちゃんの事を、春澄ちゃんがやるべき事を……ずっと。本当に……最後の……最後まで」

「なら見ててください。私の終焉を……最後に残せる……私の死に様を……」

春澄はそこまで言葉にすると一旦黙り込むと、急に笑い出した。そんな春澄に昇もアルビータも春澄に優しい視線を送る。そんな春澄の笑いが収まると、春澄は既に止まって、瞳に留まっている涙を拭い去って、無邪気な笑みを浮かべながら言葉を続けてきた。

「なんか、私らしくない事を口にしちゃったね。でも、少しだけ安心したかな。正直な気持ちを口にすると、私は終焉を迎える時には昇さんに居てもらいたかった。すぐ横で、ここで過ごした時間のように。昇さんの温もりを感じながら……私は終わりたかった。それが……私が最後に望む事だし、私には、この方法でしか、あの人達には敵わないから。だから……こんな終焉を望んだのかもしれないね」

そんな事を言って来た春澄にアルビータは相変わらず優しげな瞳で春澄を見守るが、昇は首を傾げるのだった。どうやら春澄が本当に望んでいる事を理解できていないらしい。まあ、それは昇らしいといえば昇らしいのだろう。

けど、そんな昇だからこそ、春澄は正直な気持ちを打ち明けたのだ。昇なら……春澄が抱いていた本当の終焉に気付いてくれるだろうと信じながら。

そして……全ての物事は春澄が望んだとおりに進んで行った。だからこそ、春澄には、もう心残りはなかった。だからこそ、春澄は

昇に告げる。
「そこまで言われたら、私から戦いを断る理由は無いです。後は……アルビータは、どう思う。最後に……終焉に向かって、アルビータは何を望むのかな」
話を自分からアルビータの事に切り替えてきた春澄。どうやら春澄と話す事は、これ以上無いのだと、昇とアルビータは思った。だからこそ、アルビータは眼差しを真剣なものに変えると昇に向かって鋭い瞳で告げる。
「私が最後に望むのは強者との戦いだ。私と契約した春澄の能力は既に知っているだろう。そんな私を倒せる者が居るかは私には分からない。だが……貴殿達なら私を倒してくれると、私は感じている。そんな強者との戦いを、私には拒む理由が無い」
そんな言葉を口にするアルビータ。その言葉にも昇は平常心でいた。アルビータが強者との戦いを望んでいる事はフレト達からの話しで知っている。けれども、昇としてはアルビータの言葉に引っ掛かるものを感じたのだろう。だからこそ、その事をアルビータに尋ねてみる。
「命の精霊は伝説の精霊と言われているようですね。それはアルビータさんの事ですよね？」
「あぁ」
「なら、何で戦いを望むんですか、まるで……自分を倒してくれる者を待っているかのように聞こえます。先程の言葉を聞いても、アルビータさんは僕達に倒される事を前提としてる。アルビータさんは、あれだけの力があるのに、僕達に倒されると確信しているように聞こえますけど。そんなに……自分が倒される事を願ってるんですか？」
そんな昇の言葉に応えるかのように、アルビータは視線を昇に向けると、その眼差しは真剣であり、少し悲しいと昇には思えた。そんなアルビータがゆっくりと口を開く。
「少し……昔語りをする事になるが……良いか？」

「はい、そこにアルビータさんの真意がそこにあるのなら、しっかりと聞かせてもらいます」

アルビータの言葉に即答する昇。まあ、昇としてはアルビータが終焉に何を望んでいるのかを知る必要があるとも感じていたからだろう。何も終焉を迎える事を望んだのは春澄だけではないのだ、アルビータも春澄と同じように、最後に何かを成して終焉を迎える事で、今まで生きてきた時間に意義を与えたいのだろう。それが分っている昇だからこそ、即答したのだ。

そんな昇の言葉を聞いて、アルビータは昔を思い出すかのように瞳を閉じると、昔に起こった事を、そして感じた事をゆっくりと昇に向かって語り始めるのだった。

私は命の精霊として、他の精霊とは違う存在となっていた。それが精霊にも命が宿っているからこそ、精霊にも命が見えないものであり、象徴でもある事は、すぐに理解できた。そして……最初はそんな特別な精霊に生まれた事を誇りに思っていた。

だからこそ、争奪戦が始まると、私も主を決めて、主のために戦い続けた。だが、その途中で思ったのだ。本来なら死者を出さずに、次のエレメンタルロードテナーを決める戦いのはずなのに、私が仕えた主は相手を殺すまで命を奪った。今になって考えれば当然の事だと理解できる。人は死を恐れてる、それは太古の昔から変わらない。だからこそ、人は求めるのだろう……不死という理想を。

二回程、争奪戦に参加したが、二人の主は同じだった。二人とも相手が死ぬまで命を奪い、自分の寿命を延ばしていたのだ。その頃からだろうか、私には段々と分からなくなってきた。争奪戦なのだから、主の為に武器を振るって戦う事には異議は無い。だが、主達は相手が死ぬまで命を強奪した。そこまで命に執着する主達を見て、思ったのだ。もしかしたら……私という存在が他者の命を奪っている原因かもしれないと。

人間は、それほどまでに命というものに執着した。それは当然だ、誰だって死にたくはないと思うのは当然の事だ。だからこそ、過去に仕えた主達は命の強奪で自分の命を延ばして、不死に近づこうと思うのは当然の事だろう。だが、そんな主達も不死ではいられない。

争奪戦が終われば、精霊と契約者達の戦いは終わる。つまり戦う理由が無いのだ。けれども、私が仕えた主は戦いを終えようとはしなかった。エレメンタルロードテナーの目を盗んで契約者達との戦いを続けていたのだ。全ては……他者の命を強奪して、自分の命に代えて不死を得るために。

だが、いつまでも、そんな事は続きはしない。争奪戦が終わっても、戦いを止めずに、他者の命を奪い続けている者を、エレメンタルロードテナーは放っておきはしなかった。だからこそ、過去に仕えた主、その二人はエレメンタルロードテナーの手によって殺される事になった。確かに他者の命を奪い続ける命の強奪。それでも、命の総量よりも致命傷が上回れば命の精霊である主でも死ぬのだ。つまり、命が無くなるまで殺し続けた。私は、そんな光景を二度も見てきた。いや、二度も見れば充分だった。

それからは自分の存在が何なのかが分からなくなってしまった。精霊世界にも人間世界に関与出来ないという自分の立場。それは自分が選ばれた特別な存在という考えを一変させ、自分は二つの世界から切り離された、世界に関与してはいけない存在だと思うようになっていた。だからこそ、私は、それ以来、争奪戦には参加しない事にした。参加すれば、以前の主達みたいに他人の命を奪い続けるという愚行を行うのは目に見えていたからだ。

ならば、何故？　私という存在が成り立っているのか？　私が存在する意義はどこにあるのだろうか？　そんな自問自答を繰り返しながら、私は悠久の時間を過ごしてきた。

けど、その悠久の時間を終えるかのように、私は春澄と出合った。そして、春澄は言ってくれた。「私は他人の命を奪ってまでも生きたいとは思わないよ。それよりも、自分の人生を価値ある物したい

と思う。そのために……自分の命を差し出せというのなら、私はちゅうちょなく、差し出せるよ。自分の……命を」そんな春澄の言葉は私の価値観だけでは無い、私のためらいまで消し去って、私という存在に意義を与えてくれた。

だからこそ、私は決めたのだ。春澄と契約して主とし、お互いの望む終焉を迎えるのだと。だからこそ、私達は完全契約を交わした。それは春澄の命が尽きた時に、私の命も尽きるようにするためだ。

だが、私は過去の争奪戦でも、悠久な時間でも、何一つとして、何かを成した事は無い。だからこそ、私の意義として、私は戦いの中に、それを見出したのだ。強者と戦う事、そんな相手に打ち勝つ事。そして最後には……お互いの知勇、力量を全て出しつくせる強者と戦える事を……私は望んだ。

そこで、私も春澄と同じく少年を選んだ。少年の瞳は純粋だが、決して弱くは無い。むしろ逆に、幾つもの修羅場を潜り抜けてきたかのように、強い意志を宿している。だからこそ、私は春澄の意見に同意したのだ。少年、貴殿なら私という存在に充分な意義を与えてくれる戦いをしてくれると思ったからだ。

だからこそ、私は強者との戦いを望むのだ。だからこそ、その強者に倒される事も私は望んでいる。知勇の全てを賭けた戦いだからこそ、私は戦いの中に自分という存在の意義を見出す事が出来るのだ。それは中途半端な相手では勤まらない。昨日、戦った少年のように強き者との戦いの中で私は私だと認識できる。

ふふっ、随分と厄介な気性を持っている事は自覚している。だが少年よ、その気性こそが私の存在、そのものなのだ。そこには相手の命を奪うという、下賤な考えは無い。ただ、お互いの知勇の全てを出して戦う事に意味があるのだ。

だから少年よ、貴殿と直接戦えない事は残念だが、貴殿なら私を倒してくれるような戦いをしてくれると信じている。だからこそ、私は戦うのだ。春澄の為、そして、自分自身の意義を存在させるために。

語り終えたアルビータはゆっくりと瞳を開けると、昇をまっすぐに見据えてくる。そんなアルビータの瞳に純粋な闘志と淀みが無い、戦いたいという意思が現れているのを昇ははっきりと確認した。その上で、昇はアルビータの話しに思いを巡らすのだった。

そっか、だからアルビータさんは春澄ちゃんを契約者に選んだんだ。確かに春澄ちゃんの精霊感知能力を使えば、アルビータさんの存在も感知できるし、春澄の心を知った事で、アルビータさんも自分と春澄が同じだと感じたのかもしれない。だからこそ、二人は契約を交わして、ずっと探してたんだと思う。自分達が……終焉を迎えるべき場所を。そして……その場所と相応しい相手として、春澄ちゃん達は僕達を選んだ。思っていたよりも、僕達を選んだとなると、僕の責任は大きいな～。でもっ！　ここで弱音を吐くわけにはいかないし。僕には春澄ちゃんが最後の相手として選んでくれた期待に応えないといけない義務があるっ！　なにしろ、ここまでの事をしっちゃったからね。今更になって春澄ちゃん達を無視する事は出来ない。僕に出来る事は……ただ一つだけ。

改めて決意を固めると昇はしっかりと春澄達を見詰めて、言葉を口にする。

「二人の考えは良く分かりました。なら、僕がしっかりと二人に終焉の幕を引く、その役目を背負うかと思います。ここまで知ったからには……僕としても引き返す事は出来ない。ここまで知ったからこそ……僕はその役目をまっとうしようと思います。お二人とも、それで良いですか？」

改めて確認するかのように言葉を発する昇。そんな昇の言葉に春澄達はしっかりと答えを返してくる。

「やっぱり、昇さんを最後に選んでよかったです。嫌な役目だと思いますけど……昇さんならしっかりと受け止めてくれると思ってます。だから……最後の役目は昇さんに任せます」

「私も春澄と同様に異議は無い。少年、貴殿がここまで我らの目的を知ったからには、貴殿は必ず、その役目をすると思っていた。だから……こんな事を言えた義理ではないが……頼む、我らに……望んだ最後を迎えさせてくれ」

そんな二人の言葉を受けて昇はしっかりと一度だけ頷くと、強く拳を握り締めながら、二人に向かって告げる。

「なら、一週間後、この場所で、この時間に。そこで終焉の幕を引きましょう。お二人とも異議はありますか？」

「うぅん」

「無い」

はっきりと昇の提案を受け入れる春澄達。それだけ、春澄達も全てを話し、昇に理解してくれたからこそ、昇に全てを任せるような決断が出来たのだろう。だからこそ、昇の意見に異議は出さずに、そのまま受け入れたのだろう。

そんな春澄達の言葉を聞いて昇はもう一度だけ、しっかりと頷くと、次の事をはっきりと春澄に告げた。

「なら、その時まで、僕達と春澄ちゃん達は会わないほうが良いでしょう。下手な同情を招く事になりますから。お互いに行動を慎むという事でお願いします。他に僕達に対して言っておく事はありますか？」

そんな昇の質問に春澄達は首を横に振るのだった。どうやら、春澄達にも、これ以上の言葉は要らないようだ。そう感じた昇は春澄達に背を向ける。それから昇は歩き出そうとするが、春澄が声を掛けたので、昇の足は自然と止まってしまった。そして春澄はというと清々しいほどの笑顔を浮かべて昇に一言だけ言うのだった。

「ありがとう、昇さん」

そんな言葉を聞いて、昇はすぐに歩き始めた。ここに、これ以上も居たら、自分がどうなるか分からないと昇は分っているからだ。だからこそ、昇は早足で春澄達の前から消えると、公園を後にして、皆が待っているフレト邸に向かうのだが。公園を出た直後に、昇は

近くにあった電柱を思いっきり殴り付けた。そうでもしなければやりきれないのだろう。そんな昇が心に強く思う。

……僕は……なんて無力なんだろう……。

フレト邸に戻った昇は、まるで何かを隠すかのように、しっかりと、そして、少しだけ悲しさを背中にしながら歩いて行くのだった。そして、昇が先程までフレト達と話していた部屋に戻ると……中はすっかりと宴会騒ぎのように賑わっていた。

そんな賑やかさを目にして、昇の肩から余計な力が抜けると心に思う。

少し……気負ってたかな。でも、それを皆に悟られるわけにはいかない。だから……いつも通りに、そして、はっきりと皆に告げよう。そう決めた昇が部屋に足を踏み入れると、すぐに気付いたミリアの声で、昇はすぐに騒ぎに巻き込もうと周りが騒ぎ立てるが、昇はそんな騒ぎを制するかのように、テーブルに両手を置くと、そのまま全員に向かって話し掛けた。

「皆、ひとまずは僕の話を聞いて欲しい」

真剣な眼差しと声で、そのような言葉を発する昇。そんな昇の雰囲気に、大事な話なのは確かであると、先程までの騒ぎが、すぐに収まると昇は先程の事を言ってきた。

「さっき……春澄ちゃん達に宣戦布告してきた。場所はあの公園、時間は一週間後の午後十時、そこで僕達は春澄ちゃん達と対峙する事になる」

「いよいよ決戦ってワケね」

「……少し複雑だけど、私は昇の剣だから、迷いなく戦う」

昇の言葉に戦意を出してくる琴未とシエラ。そんな二人を横目にフレトが現実として向き合わないといけない問題点を出してくる。

「だが、滝下昇よ。どうやって決着を付けるつもりだ？　あのアルビータという精霊の強さは化け物並みだぞ。それにだ、あの春澄と

かいう契約者を討つ事も不可能に近いだろう。こんな状況で勝算はあるのか？」

そんな言葉を受けて昇ははっきりと頷いて見せた。それだけで昇にはアルビータに対する勝算がある事は、その場に居た誰しもが分かった事だ。だからこそ、昇はフレトの質問に対して明確な答えを出してきた。

「二つの手段を使えば、確実にアルビータさんに勝てる。一つは、僕のエレメンタルアップ。最近の修行でシエラ達だけではなく、ラクトリーさん達にも掛ける事が出来るから、これで命の提供を打ち消す」

「それで五分五分だな、そこから、どうする？」

説明を促すように言葉を出すフレト。そんなフレトの言葉を聞きながらも、昇は二つ目の手段を提示する。

「そこで、もう一つの手段である……ストケシアシステムを使う」

「なるほど、エレメンタルアップで命の提供を打ち消し、そこに完全連携が出来るストケシアシステムを使う事によって、数の有利を完璧なものに出来ますね。ただでさえ、数ではこちらが多いんですから、そこに完全連携で攻撃が出来れば、充分に勝てる見込みはあるますね」

昇の言葉に、そこまで理解した与凪が思った事を口にする。そして、昇は与凪の言葉どおりと言わんばかりに頷くのだった。そしてフレトも複雑な心境ながらも、昇の言葉に賛同するかのように腕を組むと、一度だけ頷くのだった。

まあ、それもしかたないだろう。なにしろ、フレト達が昇達に負けた要因の中で、このストケシアシステムが大きな要素となっている。だからこそ、ストケシアシステムの恐ろしさはフレトが一番良く分っているし、自分達が負けたシステムを使う事に、ちょっとだけ複雑な心境を抱いても不思議はないだろう。

だが、これでアルビータに対する対抗策は完璧とも言えるだろう。けれども、もう一つの要素であるものを、珍しく半蔵の口から出さ

れて、ラクトリーは詳しく説明する。
「相手の契約者に対する人数は？」
「そうですね～、相手は精霊感知能力者ですからね～。その対策と、割ける人数を計算しないといけませんね。精霊を倒せたとしても、契約者が倒せないのなら、意味は無いですからね～」
「そっか、誰かが契約者と戦わないといけないんだ。戦略次第では契約者を倒してしまえば良いんだからね」
二人の言葉を聞いて、そのような言葉を口にする琴未。だが、昇からは、まったくラクトリー達との会話に関係ない事を与凪に質問してきた。
「与凪さん、フレト達が完全に回復するまで、どれぐらい時間が掛かります？」
「えっ、ちょ、ちょっと待ってね」
いきなり話を振られて、その辺りの資料を開く与凪。そんな与凪が昇の質問に答えてくる。
「そうですね。普通に生活するまで二日、戦闘が出来るまで五日、といったところでしょうね」
「なら、時間内には間に合うね」
「んっ？　いったいどういう事だ、滝下昇？」
昇の質問に、昇にはラクトリー達が話していたのとは別の腹案があるのだろう。それを見抜いたフレトが直接的に昇に質問してきた。そして、その昇はというと、フレトの方を見て、微笑を浮かべると、とんでもない事を言い出す。
「次の戦い、僕はフレト達にも参加してもらいたいんだけど」
そんな昇の言葉にフレトは思いっきり拳を握って見せる。
「当然だっ！　今回の屈辱、次の戦いで晴らしてやるさ」
「なら、ストケシアシステムはフレトに任せるよ」
「なっ！」
「えっ！」
昇の言葉に全員が驚きの声を上げる。それはそうだ、なにしろス

トケシアシステムの考案者は昇であり、使うのだとしたら昇が一番効率良く、使いこなす事が出来る。それにストケシアシステムの基礎となっているのは、昇のエレメンタルアップだ。

なにしろストケシアシステムは昇のエレメンタルアップを改良して作り出したシステムだからだ。それが、ここに来てストケシアシステムをフレトに任せると言いだしたのだ。その言葉に誰もが驚いても不思議ではないだろう。

そんな周囲の驚きを無視しながらも、昇は与凪に告げる。

「だから与凪さん、悪いんだけど、フレトにストケシアシステムを使えるように練習と指導をお願いします。本番では僕が皆にエレメンタルアップを掛けた後に、ストケシアシステムを起動させて、その後はフレトに任せますから」

「いや、それは良いんですけど……」

さすがに驚きで、それ以上の言葉は出ないのか、与凪は戸惑っているばかりだ。それは他の者も同じであり、昇の言葉に驚かされている。その中で、すぐに冷静さを取り戻した閃華が昇に質問をぶつける。

「昇よ、次の戦いで腹案がある事は充分に分かったんじゃが。じゃがのう、ここで一旦、全てを説明してくれんと、私達の方が混乱してしまいそうじゃぞ」

閃華にそう言われて、それもそうかと考える仕草をする昇。どうやら、どうやって、まとめて話そうかと考えているようだ。そんな昇の思考もすぐに済み、昇は自分が考えた作戦と戦いについて話し始めるのだった。

「まずは契約者、春澄ちゃんの事は気にしなくて良い。だから……参戦できる戦力は全てアルビータさんにぶつける。そこでフレトにはストケシアシステムを使って、戦闘の指揮を任せたいと思う。アルビータさんは無の属性だから、属性攻撃は通用しない。そこで、シエラ、琴未、ミリア、閃華、ラクトリーさん、半蔵さん、レットさんの七人でアルビータさんと戦い、フレトは後方で指揮、咲耶さ

んと与凪さんは、その補佐をやってもらいたい。そこで僕だけど、僕は戦闘に参加しない。その代わりに春澄ちゃんも戦闘に参加しない事を約束してきた。だから、今回の戦闘で戦うアルビータさん、ただ一人。だからこそ、そこに総力をぶつける。この戦力差とストケシアシステムを使えば、確実にアルビータさんを倒せる。だから、今回の戦闘はフレトに任せるよ」

「……」

昇の言葉に黙り込む一同。それはそうだろう、なにしろ昇は自分が戦闘に参加しない事を表明したし、春澄も戦闘に参加しない約束をしてると言っても、その約束をどこまで信じれば良いのか判別が付かない状態だ。だからこそ、各々がそれぞれ思考を巡らしていると琴未が、これ以上は考えていられないとばかりに声を上げて、昇に向かって叫ぶ。

「あ～、もうっ！　ワケ分かんないわよっ！　だから私は考えるのをやめるわ。だから昇……信じて良いのよね？」

最後だけ真剣に、重たい言葉で質問する琴未。そんな琴未に対して昇は一度頷くと琴未を含めた全員に向かって答えてきた。

「うん、今は僕を信じて欲しい。僕は……僕達の状況と春澄ちゃん達の状況を見て、一番良い手を打ったと思ってる。だから皆にも異論はあると思うけど、今は僕を信じて協力して欲しい。今回の戦いを終わらせるためにっ！」

最後だけはっきりと宣言する昇。それだけ、昇は皆に賛同してもらい、協力して欲しいのだろう。確かに、今回は今までと違って、昇は全てを皆に打ち明けていない。逆に隠していると言っても良いだろう。でも、それは昇自身の問題であり、その問題に皆を巻き込んだ形になるのだから、昇としては頼むしかなかった。でも、頭を下げるわけにはいかない。昇がそこまでしては、逆に昇に対してけねんを抱く結果になるのは分かりきっている事だ。だからこそ、昇は頭を下げずに、言葉だけで皆の賛同を得ようとしているのだ。

そんな昇の心境を知ってか、知らずか、シエラが真っ先に答えを

返してきた。
「私は、いつでも昇を信じてる。だからこそ、昇の剣として剣を振るえる。だから……今は何も言わない。全てが終わってから、話してもらっても良いし……話したくないのなら、話さなくて良い」
「シエラ……」
思わぬシエラの言葉に昇はシエラの名を口にすると、自分もと言わんばかりに琴未が賛同の声を上げる。そんな昇達の陣営がまとまって行く中で、ラクトリーは意地悪な笑みを浮かべながらフレトに話しかける。
「それで、マスターはどうしますか？　このまま昇さんの提案を断りますか？　それとも賛同ですか？」
そんなラクトリーの質問にフレトは大きく溜息を付いて答えてきた。
「俺の答えはもう、決まっている。このまま引き下がるなど、グラシアス家の名に泥を塗って、誇りを汚す事だ、そんな事は出来ん。それよりもラクトリー、最近は意地の悪い質問が多くなったな」
「ふふっ、それは気のせいでございましょう」
「ふんっ」
ラクトリーの言葉を鼻息で吹き飛ばすかのように、鼻から一気に息を噴出したフレト。そしてフレトの発言により、フレト達の参戦も決まった。後は決戦に向けての準備だけである。なにしろ、相手は伝説の精霊とも呼ばれているアルビータである。準備に念を押した事で後顧の憂いが無くなるだろう。
そして、決戦が決まった事により、まるで勝利したかのように前祝を始め、騒ぎを再開させるシエラ達。そんな中で昇は与凪と、与凪をここまで送って来た森尾を誰にも気付かれないように部屋の隅に呼ぶと、ある事を頼んだのだった。

第百四十一話　悲しみを秘めた宣戦布告（後書き）

さてさて、いよいよ昇が宣戦布告を行ったわけですが……ちょっと、悲しい宣戦布告でしたね～。けど、まあ、次回は、その辺を中心に行こうかと思ってます。

そんな訳で、何か今月はハイペースですね～。まさか、一ヶ月で三話も上げるとは思って無かったですよ。いやはや、これは良いことなのだろうか、悪い事なのだろうか。

まあ、今までのペースは休息を兼ねた物で、本来のペースに戻ったのかもしれませんね。あるいは……このペースに全ての運を使い切ったかのどれかかもしれませんね。

って！！！！　私の運はこの程度の事で全て消費されるほど、運が無いのかっ！！　どれだけ運が無いんだよ、私っ！！　というか、ここまで来ると呪われてると感じるよっ！！　ならば、これだっ！！！！

こういう時にこそ、教会って物があるんじゃないかっ！！　そこで祝福を受ければ、呪いを解除出来るはず。そんな訳で早速、教会へ。

はい、そんな訳で教会で祈りを捧げると神の声が聞こえました。

「お前って巫女属性じゃん。そんな人がウチに来ても呪いを解く事は出来ないわ（笑）」……しまった――――っ！！！！　自分の属性を忘れて教会に来ちゃったよ。そりゃあ、断られて当然だよね。……てへっ。そんなワケで、教会から神社へと移動。

神社前

……巫女属性を有してる人は立ち入り禁止。だって、お前らの為に巫女がいるわけじゃないからな……

という看板が……。

ふざけんな――――っ！！！！　なら、私はお払いさえ出来ないのかっ！！　この呪いを解く事は出来ないのかっ！！　ならばっ！

！　せめて巫女さんの姿を見て、巫女属性を満たしたいと思います。
そんな訳で侵入っ！！
カチッ。
……えっと、なんか、いきなり何かを踏んだんですけど、これってどういう意味ですかね。というか、地雷なら、足を話した瞬間に爆発ですよ。それとも……別の何かか……あっ、空から何か降ってきた。
って！！！！　爆撃ですか、しかも絨毯爆撃ですかっ！！！！
あのスイッチ一つで爆撃をされるんですかっ！！　いや――――っ！！　誰か、助け、げばぶっ！！
……作者復活中……
いや～、まさか絨毯爆撃が来るとは思ってなかったよ。おかげで身体は木っ端微塵だし、復活に時間が掛かったよ。さすが絨毯爆撃、避ける隙さえも無かったですね。
さてさて、戯言も飽きてきたので、そろそろ締めますね。
ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。
そして、これからも、よろしくお願いします。更に、評価感想もお待ちしております。
以上、今回の後書きは思いっきり遊んだな～、と今更ながら、後書きについて、自分がフリーダムな事を感じた葵夢幻でした。

第百四十二話　月夜の下で……

昇が春澄達と戦う事を宣言してから数時間後、昇達は既に帰宅しており、さすがに驚き疲れたというか、騒ぎ疲れたというか、どちらにしても全員が、すぐに自室へと戻っていった。そのため、昇が居るリビングには昇しかおらず、昇は明かりも点けないでで庭に通じているリビングの窓から足を投げ出して、月夜の空を見上げながら考え事をしていた。

これで……良かったのかな？　もしかしたら別の道があるかもしれない……そう考えるのは自分を過大評価しているって、母さんが言ってたっけ。人は、その場面で最適な選択をしている。後になって、それが間違ってると思っても、その時にそれが考えられなかったのだから、それが自分の限界だって。だから……これが僕の限界なのかな？

そんな事を考えながら思いっきり溜息を付く昇。それから両手を組んで膝に置くと、その上に頭を置く。それから再び思考を巡らす昇だった。

僕は……春澄ちゃんを止める事が出来なかった。だからこそ、春澄ちゃんが望んだ戦いを挑んだんだ。それしか……ないと思ったから。でも……もしかしたら、戦いを止めて、春澄ちゃんの命を長くする方法があるかもしれない。けど……春澄ちゃんは、そんな事を望んでないから、だから僕達に叩き付けてきた挑戦状を受ける事にした。そんな挑戦を受けたからこそ、僕は戦うしかないと判断したけど、もしかしたら別の道が……って！　考えがループしてるっ！

昇は再び深い溜息を付くと、もう一度、天を仰ぐように夜空を見上げるが、突如としてカンッという良い音が鳴って、昇のおでこに痛みが走るのだった。そのため、昇は痛みが走ったおでこを擦りながら振り返ると、そこには彩香と閃華の姿があった。しかも、彩香の手には空になったと思われる缶ビールが潰された形になっており、

閃華は一升瓶を片手に、もう片方には杯を持っていた。そんな二人を見て、昇は呆れた視線を送りながら尋ねる。

「母さん、いきなり人の頭で空になった缶を潰さないでよ。それに閃華まで居るなんて、いったい、二人して何の用なの？」

そんな事を尋ねてきた昇を無視するかのように彩香は昇の横に立つと夜空に目を向ける。それから閃華に向かって言うのだった。

「ほらほら、やっぱり良い月が出てるじゃない。こんな時は月見酒に限るわよね」

そんな事を言い出した彩香に昇は少し睨むような視線を送ると閃華が少し笑いながら、昇に向かって事情を説明するのだった。

「昇よ、私らも大した用ではない。ただのう、奥方が今夜は月が良い形で出てると言い出したのでな。それで今晩は月見酒にしようという事になっただけじゃよ」

つまり、月を酒の肴にしようって事ですか。風流で良いですね。今まで悩んでいた昇が、そんな皮肉を視線に込めて彩香に送ると、彩香もそんな昇に気付いたのだろう。昇に酔った笑みを浮かべると、そのまま昇の横に座るのだった。そして、そんな彩香を見ていた閃華も、彩香との間に酒の肴を置いて、二人と同じく、窓から足を投げ出して、月を見ながら杯に注いだ酒を少しだけ呑むのだった。

そんな状況に呆れたように溜息を付く昇。そんな昇を見て、彩香は鋭い一言を放ってきた。

「どうやら、我が息子は未だに悩んでいるようね。まったく、女の子を口説くのも良いけど、限度って物を覚えなさいよね」

「まったくじゃな」

「二人して、人が真剣に悩んでいる事に茶々を入れないでくれるかな」

二人の言葉に文句を口にする昇。まあ、今まで真剣に悩んでいたのに、酔っ払いの二人に絡まれたら、誰だって文句を言いたくなるだろう。それでも、彩香は缶ビールを呑みながら、昇に優しい眼差しを向けると、今度は優しい口調で話し掛けてきた。

「それで、今度は何で悩んでるわけ？」
そんな質問をしてくる彩香。さすがに昇が先程まで悩んでいた事を話すには、争奪戦を含めて精霊の事も話さなければいけない。けれども、昇としても、何となく察しつが付いていたのだろう。だからこそ、昇は彩香に質問を質問で返す。
「それよりも母さん、僕達がやってる事をどこまで知ってるの？閃華が一緒に居るからには、それなりの話を聞いてると思うけど」
そんな事を言って来た昇に対して、彩香は思い出すような仕草をした後に、昇の質問に答えてきた。
「全部よ、海から帰ってきてから数日かな？　閃華ちゃんが全て話してくれたのは」
「って、閃華～」
「別に構わんじゃろ。事は日に日に大きくなっておる。いつまでも奥方に全てを隠しておくのは無理というものじゃよ。それならば、全て話した方が良いと思ってのう。酒の肴として、いろいろと話したもんじゃ」
……えっと、それは良いの？　そんな事を思ってしまった昇。やはり、昇としては戦いという危険な行為を行っているだけに、彩香に心配を掛けないように隠しておきたかのだが、やっぱり彩香が何かを察してくるのは時間の問題だっただろうと昇は思った。だから、閃華を責める言葉は出さなかった。その代わりに昇は彩香に尋ねる。
「母さんは……争奪戦で戦ってる僕達を止めようとはしないの？」
「しないわよ」
「即答ですかっ！」
あまりにもあっさりと答えてきた彩香に昇は思わず突っ込みを入れてしまった。そんな昇に彩香は楽しげな視線を送り、閃華は笑い出すのを抑えているようだ。そして、彩香が再び優しい目と声に戻るとはっきりと言って来た。
「昇が戦いを嫌がっているのなら、母さんはどんな手を使っても昇達を止めるわよ。でも、この戦いは昇自身が自分で戦うと決めた事

でしょ。なら、母さんからいう事は何もないわよ。昇が自分自身の考えで覚悟を決めて、それで戦いに挑んでいるのなら、それは母さんが口を出す事じゃ無いのよ。昇の人生だもの、昇が真剣に考えて、覚悟を決めてやる事に口をだす権利は母さんにも無いわよ。だって、それは昇の人生だからね」

「うん……そう、だね」

そんな彩香の言葉を聞いた昇が思う。やっぱりというか、さすがに母さんには敵わないな。それから昇が彩香に尋ねる。

「母さんは……間違ってると思っていても、何かをやった事がある？　後悔するかもしれないと分っていても……何かをやった事がある？」

そんな事を尋ねて昇は顔を彩香の方へと向けた。そんな昇に対して彩香は呆れたを通り越したような視線で右手を昇のおでこに出すと、そのままデコピンを昇に喰らわせるのだった。

あまりにも予想外な事だったので、昇はデコピンの勢いで後ろに仰け反るが、すぐに元の体勢に戻って、再び痛みが走った、おでこを擦るのだった。そんな昇に対して、彩香は缶ビールをあおると、数口ほどビールを喉に流し込んでから、肴を口にしてから昇の質問に答えてきた。

「まったく、この子は。最近では勝ちが続いてたから、すっかり慢心してるみたいね。閃華ちゃんはどう思う？」

「まあ、確かに、そうかもしれんのう。昇は今までの戦いで敗退した事は一回しか無いからのう。慢心しても不思議ではないじゃろう」

「うんうん、そうよね。そろそろ痛めつけた方が昇の為になるかもしれないわね」

「って！　二人して意味が分からない会話を続けないでよ」

二人の会話にそんな文句を挟む昇。そして、そんな文句を言って来た昇を見て、彩香と閃華の二人は一斉に溜息を付くのだった。って！　なんで僕が呆れられるの！　二人の反応を見て、そんな事を思った昇。そんな昇の頭に片手を置いてきた彩香が優しい声で話し

掛ける。
「昇、どんなに努力しても、どれだけ必死になっても、出来ない事はあるものよ。そんな、どうしようない事を目の前にして、自分の行動が間違ってるとか、後悔しそうとか思ってもしかたないのよ。だって、どうにもならない事だからね」
「そうじゃな、いくら頑張っても、どうにもならない事はどうにもならん。ならば……足掻くしかないじゃろう。どうにもならない事を目の前にして、必死に足掻くしかないんじゃよ。その結果として、悔やむ事があれば悔やめば良い、間違ったと思うなら、次に備えれば良いんじゃよ」
「そうね、どうにもならない事を目の前にしたら、必死に足掻くしかないわね。少しでも良い方向へ持って行くためにね。でも、どうにもならない事だから、結果は変わらない。大事なのは、どうにもならない事に対して、どんな事をしたかよ。どうにもならない事に対しての行動こそが自分を成長させてくれるのよ」
「じゃな。じゃから昇よ、そろそろ私と奥方に全て話したらどうじゃ。話したからといって、なにも変わらんかもしれんがのう。少しだけなら、昇の背負っている物を持つ事が出来るじゃろうて。それに安心せい、琴未達には言わんからのう。ここで昇の本心を知ってしまったら、琴未達の士気に関わってくるじゃろう。じゃから、せめて私と奥方には話したらどうじゃ。話すという事だけでも状況が整理を出来るしのう、それに……少しだけ気が楽になるというものじゃ」
「そう……なのかな？」
二人の話を聞いて、そんな返事をする昇。どうやら未だに昇には全てを話して良いものか、どうか、迷う点があるみたいだ。けれども、話し相手が彩香と閃華なら話しても良いかと昇は思っている。
二人とも人の話を聞いてないようで、しっかりと聞いてるし、的確な助言をしてくれる。そんな二人が持っている長所を知っているからこそ、昇はそんな事を思ったりもした。だからだろう、昇は月

夜を見上げながら考え込むと、彩香と閃華は昇が口を開くのを待つように黙り込んだ。そして昇は決断を下す、全てを二人に話してみよと……。

「なるほどのう、今回の戦いで昇が戦わないと言ったのは、そんな事を考えておったからじゃな」

「うん、僕としては戦う事よりも……春澄ちゃんの気持ちを最優先にしたいと思ったから。だから、僕が春澄ちゃんに出来る、最大限の事として、その選択をした。でも……それで本当に良かったのかって、未だに悩んでる。分かりきった結末に納得できずに、憤りを感じてる。僕は……僕に出来るのは、その程度の事しかないのかな？」

「その通りよ」

「また即答っ！」

全てを話し終えて、自分が思った質問を口した昇に対して、再び彩香は即答する。またしても彩香の素早い反応に昇も再び突っ込みを入れてしまったほどだ。まあ、それはそれとして、彩香は昇の質問に答えると、一気にビール缶を空にすると、次の缶を開けてから昇に話し掛ける。

「昇、強い決意で自分を固めてしまった人は強いのよ。昇達だって、そうでしょう。それぞれに強い決意で自分を固めてる。そんな人達に何を言っても無駄な事は、自分の周りを見れば分かるでしょ」

確かに……そうかもしれない。彩香の言葉にそんな事を思う昇。それから自分達の事を思い出している。シエラは妖魔の件からは自分の全てをさらけ出し、今でも昇の剣となって戦う決意を固めてる。そんなシエラとは対称的に、琴未は自分の為に戦っている。少しでも昇の力になって昇を振り向かせるために。そのために琴未は強い決意で昇の傍に居る事を決めた。ミリアは、ああ見えても、時々敏(さと)いところがある。だからミリアは昇の本質を見抜き、昇になら全て

を託せられると思ったからこそ、昇の盾となる事を選んだ。まあ、ミリアは細かい事を考えないから、そんな自分に気付いてはいないだろうが。それでも、ミリアはいつでも昇の言った事を全て信じてる。それだけの信頼を昇に向けているのだ。その信頼は、どんな決意よりも硬い物がある。つまり、ミリアは信頼という形で強い決意を固めているのだ。

そして閃華はというと……疎い昇には分からない部分が多すぎるのだろう。だからこそ、昇はどんな決意を持っているのかと思いながら閃華を見詰めると、閃華もそんな昇の視線が示す意味に気付いたのだろう。軽く笑いながら答えてきた。

「くっくっくっ、そもそも私が契約を交わしたのは琴未じゃぞ。昇はそんな琴未の主となったのじゃから、私が一番に考えるのは琴未の事じゃ。じゃからこそ、琴未の想いを成就させるためなら、どんな事でもすると決めておる。それだけは誰に何を言われても変える気にはならんのじゃよ」

……まあ、確かに分かりますけど……閃華さん、時々、やり過ぎている事に気付いてますか？　それともワザとですか？　閃華の言葉を聞いて、そんな事を思ってしまった昇。それが顔に出ていたのだろう。彩香と閃華は二人揃って昇を笑うのだった。そんな二人に拗ねたような視線を向ける昇。そんな昇の視線を受けてしかたないという形で彩香と閃華はそれぞれに酒を喉に流し込むと、話を本題に切り替えてきた。そして彩香は昇に向かってはっきりと言うのだった。

「昇、昇だって誰かに言われたからといって、自分の信念を変える事は無いでしょう。だから、その子も同じなのよ。だからこそ、自分の命よりも、命を犠牲にして人生に意義を見出す道を選んだ。それは昇には納得ができない事かもしれないけど、その子は充分に思い、考えて、そして結論を出した事なのよ。そんな人の意見に、人生に誰が口を出せるというの」

そんな彩香の言葉に意気消沈する昇。確かにそうだ、先程、昇が

彩香に自分達を止めないの？　と聞いたけど、彩香は止めないと言って来た。それは昇が自分で考えて、充分に思い悩んでから決めた道だからだ。そんな人の人生に息子とはいえ、口を出す権利は無いと彩香ははっきりと告げた。

だから昇は思うのだろう。家族とか、友達とか、親戚とか、そういった人達から何を言われても、自分で決めた強い意志を誰も文句を言える権利を持ってない。たとえ、それが間違った事だったとしても、強い意志で固めた自分の道は、自分の人生は誰にも文句を言えない自分だけの物だから。

昇がそんな事を思っていると、今度は閃華が昇に話しの続きをしてきた。

「それに昇よ、春澄殿は人の命を奪う事より、自分の命を削る生き方を選んだんじゃ。確かに命の強奪を使えば、春澄殿は長く生きられたじゃろう。じゃが、春澄殿は人の命を奪う事より、自分の命を削る事を選んだんじゃ。自分の命を賭ける……言葉にするのは簡単じゃが、実行するのは、どんな事よりも難しいものじゃよ。じゃが、春澄殿は自分の命を賭けて、戦う道を選び、自分の人生に華を添えたのじゃ。そんな春澄殿の意見を誰が変えられるんじゃ、今からでも人の命を奪うほどに命を奪えと誰が言えるんじゃ。春澄殿は……それをやりたくないからこそ、自分の命を削る選択をしたんじゃ。そんな春澄殿の道を、今から変えるのは無理というものじゃろうな、なにしろ……春澄殿に人を殺すほど命を奪えてと言えないからのう」

「ッ！」

閃華の言葉に胸に刺さるものがあったのだろう。昇は驚きを示すと、すぐに何かを考えるかのように思考を巡らす。そんな昇は閃華が最後に言葉にした事を考える。

そうだ、今から春澄ちゃんを助けるという事は……人を殺してまで命を奪えって事なんだ。そんな事……春澄ちゃんに出来るわけが無いし、春澄ちゃんが望むわけが無い。それだったら、自分の命を差し出す、春澄ちゃんはそういう子じゃないかっ！　そんな春澄ち

ゃんを今から助ける手段なんてありはしない。なにしろ……春澄ちゃんの命は尽きかけているんだから。なら……僕に出来る事は……やっぱり一つだけなのかな。

昇はそんな事を思うと、凄く悲しくなり、いつの間にか涙を流していた。昇自身も、その事に気付いたのは彩香に抱き寄せられてからだった。それから自分が流した涙を拭くが、涙は止まりはしなかった。そんな昇に彩香は優しい声で言うのだった。

「まったく、強情ね。悲しかったら泣いても良いのよ、どうにもならない事なんて、悲しい事だらけなんだから」

「そんなん……じゃ、ない」

彩香の言葉を否定する昇。確かに悲しい事は確かだ。だが、昇は悲しくて泣いているとは思っていなかった。昇は悲しい出来事を目の前にして、何も出来ない自分が悔しくて泣いているのだから。そんな昇の心境を見抜いたかのように、彩香は閃華に視線を移すと、閃華は頷いて冷蔵庫から、いつも昇が飲んでいるジュースをコップに注ぐと戻って来た。

それから彩香は昇を離すと、未だに涙を拭っている昇の頭を撫でてやり、閃華は昇の隣にジュースを置くと、再び座っていた場所に戻って、杯を手にする。それから閃華は昇に話しかけるのだった。

「昇よ、確かに今までの私達はそれぞれに努力して、昇が一生懸命に考え、努力する事で、どんな困難にも打ち勝ってきた。だがのう、どんなに一生懸命に頑張っても、どんなに努力しても、どうにもならん事は沢山あるものじゃ。じゃから、私は今回の事でも昇は最大限に考え、努力して出した結論しては間違って無いと思えるんじゃ。じゃが、今回はそんな努力に結果を出せないだけじゃ。昇よ、そんなどうしようもない事に対して、まだやるべき事があるのじゃろ。じゃから、今はそれを成す事に精一杯になれば良い」

そんな閃華の言葉に続いて彩香も昇に言葉を投げ掛ける。

「そうね。今回は昇と出会うのが遅すぎた、そうやって割り切るしかないわね。だから昇、どうしようもない事、しかも、その子が強

い決意で自分を固めちゃってるから、今更になって何かが出来るとは思わないわ。そうやって、どうにもならない事を認めるのも強さよ。どうにもなら無い事を認めて、その上で何を成すか、それが一番大事な事だと思うわよ」

そんな言葉を昇に投げ掛けた彩香も昇の頭から手を離すと、置いてあった缶ビールに手を伸ばすと中身を少しだけ呑む。そして、そんな二人の言葉を聞いて、昇は二人の言葉をよく考えてみる。

どうしようもない事か……確かに、今の状況では僕に状況を変えるだけの力は無い。それは、どうしようもない事だからなのかな。なら……認めるしかないよね。僕が何も出来ない事を、春澄ちゃんに対して……自分が思った理想を押し付ける事が出来ない事を。……そっか、母さん達が慢心してたというのも事実かもしれない。僕は……僕が最大限に頑張れば、春澄ちゃんの考えを変えて、春澄ちゃんの人生を有意義に、充実させた道に変える事が出来ると思ってた。けど、それが出来ないと感じたからこそ、僕は自分が無力だと感じた。

そう、それが昇が思い悩んでいた事だったのだ。昇は春澄が選んだ人生の道を変えて欲しかったのだ。たとえ盲目でも、自分達と同じ考えを持った人は沢山居る。自分なら春澄を充分に幸せで有意義な人生に変える事が出来る。そう思っていたけど、昇はやっと気付いたようだ。それができない事に、いや、そんな事が出来ると思っていた自分が慢心していた事にだ。

確かに、昇達は今までの戦いでは艱難辛苦を乗り越えてきた。だからこそ、今回の事でも春澄に対して、春澄の生き方を変える、自分の命を削るんじゃなくて、もっと生きながらにして楽しい事が沢山あると示したかった。自分なら、春澄が進んでいる道を変えて、生きながらに幸せに出来ると思っていた。けど、二人の言葉を聞いて、それが自分の慢心だと昇はやっと気付いたようだ。

本当は昇のも分っていたのだろう。けど、認めたくはなかったのだ。自分なら、それだけの事が出来ると、今までの戦いで、それだ

けの事してきた自分だからこそ、今度も自分が思い描いた未来になるという事を。

でも……現実は時として過酷となる。いや、現実は常に過酷なのだ。そんな過酷な現実を乗り越え、打ち破って、昇達は進んできた。いや、それは昇達だけではない、皆そうなのだ。過酷な現実を目の前にして、人はそれを乗り越えようと努力する。人はそうやって成長して行くのだろう。そして……その成長は人生が終わるまで続く。人生終わるまで勉強とは良く言ったものだ。人は生きている限り、常に過酷な現実を目の前にしながら努力し、勉強して強くなっていくのだ。

だが、そんな過酷な現実をいつでも、誰でも、必ず乗り越える事が出来るわけではない。むしろ、過酷な現実に打ちのめされる事が多いだろう。けど、それは悪い事ではない、過酷な現実に負ける事も必要な事なのだろう。だからこそ、人は目の前の道だけでなく、他の道に行く事が出来る。それが間違えであれ、正しくもあれ、人は道を進む事が出来る。そうやって人は人生という道を歩いて行くのかもしれない。それでも、過酷な現実に挑もうとしていたのが、今までの昇であり、過酷な現実こそが、どうしようない事なのだ。

昇は、今まで生きてきた中で、歩いてきた人生という道で、初めて乗り越える事も、打ち破る事も出来ない壁にぶつかったのだ。そして、その壁は……どうしようもない事なのだろう。それこそが過酷な現実であり、昇は初めて、どうしようもない事に打ち負かされたのだ。

だからこそ、昇は自分の無力さを嘆いていたのだが、それが間違えだと気付いたのだ。どうしようもない事を乗り越えるんじゃない、どうしようもない事に対して何かを成す事に意味があるのだと。

確かに、それでは壁を乗り越えたとか、打ち破ったとか言えないだろう。けど、それで良いのだ。誰しも生きていれば、どうしようもない事がある。その壁に対して無理に乗り越えようとしなくて良いのだ。人生という道に立ちはだかる壁に対して、避けて通っても

良い、脇道から迂回しても良い。それが、どうしようない事に対して、何を成すかである。

その事にやっと気付いた昇は、やっと閃華が自分の脇に置いてくれていたジュースに気付き、それを手に取る。そして、そんな昇を見ていた彩香は缶ビールを月に向かって、高々と上げてから話を別方向で再開させてきた。

「さて、辛気臭い話はここで終わり。ほらほら、二人とも月を見なさい、綺麗な満月よ。綺麗な満月を見て楽しまないのは損よ、月に対する冒涜よ、だから今は綺麗な満月を見て、心を清めなさい。秋の満月は綺麗よ」

そう言った後に、一気に缶ビールを空ける彩香。閃華もそれに倣うかのように杯に月を写すと、それを一気に飲み干すのだった。そんな酔っ払い二人に、昇は呆れた視線を向けながら言うのだった。

「って、僕の悩みは満月以下なの」

思わず、そんな事を言ってしまった昇。そんな昇の言葉を聞いた二人から文句が出る。

「昇よ、そういうのを風情が無いと言うんじゃぞ」

「そうそう、春の桜、夏の夜風、秋の満月、冬の雪、これらを満喫できないと、人生の半分は損をしているものよ。まったく、すっかり頭が固くなって、今はそういった風情を感じなさい」

まさか、二人から、そんな文句が出た事に自分が失言をした事に気付いた昇。なにしろ、相手は酔っ払いだ。失言をしたら下手に絡まれるのは当然とも言えるだろう。特に彩香には……。

その彩香が乱暴に昇の首に手を回すと、そのまま引っ張る。おかげで、昇が手にしていたジュースが危うくこぼれそうになってしまった。そんな彩香が、満月を見ながら言うのだった。

「ほらほら、昇も見なさい。これだけ綺麗な満月を見れる事なんて、滅多に無いんだから。だから、今だけは全部忘れて、満月を堪能しなさい」

彩香にそう言われて、昇は思いっきり溜息を付くと、ここで彩香

に逆らったら、もっと酷くなると思い、昇も天を仰ぐと、そこには確かに綺麗な満月が静かな輝きを放っていた。まるで、全てを包み込むような優しい輝きを。

そんな満月を見て、昇は思わず口にする。

「……綺麗」

「でしょ～」

昇の言葉に勝ち誇った口調で笑みを浮かべる彩香はやっと昇を解放した。それから、彩香は満足したかのように、窓から出した足を振りながら、昇に言うのだった。

「ほらほら、昇も飲みなさいよ。お酒でなくても、月を肴にして何かを飲むのは良い事よ」

「……そうだね」

彩香に促されてジュースを一気に飲んでからにする昇。その途端に閃華が立ち上がると、空になった昇のコップを取り上げると「今日ぐらいは私が注いでやるぞ」というと、再びキッチンに戻った閃華が、再びジュースを注いでくると、また昇に手渡し、それから再び座ると、彩香から杯に酌をしてもらい、閃華は月の写った杯を半分ほど一気に飲むのだった。それから、閃華は何かを思い出したかのように杯を置くと昇に差し出してきた。

「ジュースだけではあれじゃろう。これも肴にして味わうと良いじゃろうて」

そんな事を言って、閃華が差し出してきたのは、今まで彩香と閃華がつまみとして置いてあったお菓子や、肴だった。どうやら、閃華はキッチンに戻ったついでに皿まで用意しており、それに昇の分を取り分けたようだった。

それを受け取った昇は自分の横に置くと、再び満月を見上げながら呟くように言葉を口にするのだった。

「月が……こんなに綺麗だと思ったのは初めてかもしれない。今まで月を見るために見上げた事が無かったし……今までの僕には、そんな事を感じる余裕が無かったのかもしれない」

そんな昇の呟きを彩香が会話に変える。
「まあ、昇が子供だったという事ね。でも、こうして風情が分かるようになったのなら、少しは大人になったのかもね」
「別に言われるほど子供だったワケじゃないし」
彩香の言葉に思わず、そんな言葉を返してしまった昇。そんな昇に彩香は笑みを浮かべながら話を続けるのだった。
「なら、今は全てを忘れて風情を満喫しなさい。そうした心の切り替えが出来るのも大事な事なのよ。目の前に一生懸命だけでなく、時には立ち止まって、周りを見て、上を見なさい。そこには今まで気付かなかったものが沢山あるはずよ。そうしたものを感じる事が出来れば、それは少しずつ成長している証拠よ」
「周りを見てみる……か」
昇には、何となくだが、彩香の言っている意味が分かったような気がする。それは、この綺麗な満月の下に居たからこそ、分かる事なのかもしれない。少なくとも、昇には、そんな風に思えた。
そして、そんな昇の心境を見抜いたかのように閃華が会話に参加してくるのだった。
「この国には、独特の自然が織り成す風情を楽しむ傾向があるからのう。それは四季が豊かな、この国ならではの風習じゃな」
「そういえば、閃華は中国の出身で、すぐに日本に来たんだっけ？」
「いや、見聞を広めに最初は西方を周った。そこには、この国とは違い、造形物を楽しむ傾向が豊かだったからのう。まあ、今で言うヨーロッパ地方の事じゃな。それもそれなりに味があるものじゃが、私はこの国のように四季を楽しむ方が気に入っておる」
「なんで？」
「くっくっくっ、何を楽しむかなんて、人それぞれじゃろうて。私はこの国の風情が好きだからこそ、好きだと言っただけじゃぞ」
「そうそう、人の好みなんて、人それぞれよ。でも……日本に生まれたからには、自分の国ある風情は知っておくものよ。そうすれば、他国の風情がよりいっそう分かるというものよ」

「そんなものなの？」
「うむ、奥方の言う通りじゃな」
話の方向はすっかり変わり、今では雑談をする昇達。そして、いつの間にか昇の頭が少しずつ白くなり、昇は気分上々に彩香達と話していた。満月の優しい光の下で、昇は何かが分かった気がした。それは言葉に出来ない事かもしれないけど、昇は今の自分に悪い気はしなかった。そして……時間は過ぎて行く。

「やれやれ、寝ちゃったわね」
「ふむ、少しガス抜きをしてやろうと思ったからのう。大分薄めて注いだんじゃが、効果はあったようじゃのう」
「さすが閃華ちゃんね」
そんな事を言って親指を立てて、閃華に差し出す彩香。そんな、彩香の仕草に閃華は今まで隠していた物を取り出す。それは一升瓶であり、しかも焼酎と書かれていた。その瓶を持ち上げて満面の笑みを浮かべる閃華。どうやら閃華は昇のジュースに少しずつ焼酎を混ぜて、昇に飲ませていたようだ。そんな閃華に答えるように彩香も満面の笑みを浮かべると、すっかり空になっている、今まで昇が飲んでいたコップを取り寄せると、コップを脇に置いて、新たなる缶ビールを開けると、隣で寝息を立てている昇の頭を優しく撫でながら、閃華との会話を続けてきた。
「明日……悪酔いになってなければ良いんだけどね」
「くっくっくっ、なにそろジュースでかなり薄く割ってしまったからのう。気付かれないだけに、どれだけの量を飲んだかも私にも分からんじゃが、まあ、たぶん、大丈夫じゃろ」
「まあ、そうなったら、そうなったで楽しいけどね」
「くっくっくっ、奥方も相変わらずご子息には厳しいものじゃのう」
「あらあら、せめて愛のムチと言って欲しいわね」
そんな事を言って笑い出す彩香と閃華。そんな二人の笑い声に反

応するかのように声を上げる昇だが、起きる気配は無かった。だからだろう、彩香は立ち上がると、掛け布団を昇に掛けてやり、またしても缶ビールを手にした。それから閃華との会話を続けるのだった。

「まあ、閃華ちゃん。後で昇を部屋で寝かせてやってね」

「うむ、分っておる。精霊は人間よりも身体能力が高いからのう、昇一人を運ぶぐらいは簡単な事じゃて」

「……それにしても、ある意味では最悪の展開よね」

「春澄殿の事じゃな。確かに……そう言えるかもしれんのう」

それから二人は一口ずつ酒を呑むと会話を続ける。今まで優しい光を放っていた、月に叢雲が少し掛かった光の下で。

「昇から見れば、結果が分ってる、しかも、その結果が最悪なものだと分っているだけに。昇としても思い詰めていたんでしょうね」

「そうじゃな、今回の一件で昇だけが全てを知っておった、昇の気持ちを聞いた今では、昇の気持ちも分らなくはないんじゃが、どうしようもない事も確かじゃからのう。それだけに、今回は私達も何も昇にしてやれんのも確かじゃな」

「何も出来ないのは私も同じね。それにしても……さっきは、ああ言ったけど、やっぱり辛い部分があるわね」

そんな言葉を口にして昇に少し悲しげだが、優しい顔で昇の笑顔を見る彩香。そんな彩香に閃華は酒を口にすると、当たり前のように言うのだった。

「奥方とて人の親、子を想うのは当然の事じゃろう。確かに……今回の結末は最悪なものじゃ、じゃが、奥方には、それを見守る義務がある。昇がどんな事になっても……見守らないといけないんじゃな」

そんな閃華の言葉に彩香は軽く息を吐いてからいうのだった。

「まったく、その通りよね。今回は……見ている方も痛いわね。でも、昇がそれだけしか出来ないのなら、見守りましょう。どんなに痛くてもね」

「くっくっくっ、さすが奥方じゃのう。時代が時代なら女傑となっていた事じゃろうて」
「残念だけど、そうは成ってないわね。なにしろ、私は自分で前に出るより、息子や夫の尻を叩いている方が似合ってるもの」
そんな彩香の言葉に思いっきり笑い出す、閃華と彩香。どうやら彩香も自分で言ったけど、思いっきり当てはまっているので、自分でも笑えるほどおかしいと思ってしまったようだ。そんな二人の笑い声に昇は気付く事無く、眠り続ける。なので、二人とも今では昇を気にする事はしなかった。
まあ、知らない間に酒を呑まされていたのだから、呑み慣れていない昇がダウンしても、そう簡単には起きない事は確かだろう。だからこそ、二人は昇を気にする事無く、話を続ける。
「まあ、何にしても、閃華ちゃんには私の分まで昇の尻を叩いてやってね」
「大丈夫じゃよ、昇はしっかりと成長しておる。尻を叩かなくても、自分で進めるじゃろうて」
「そっか、まったく、男の子なんて産むもんじゃないわね。勝手に成長して、どっかに行っちゃうんだから」
「くっくっくっ、まあ、男なんて、そんなもんじゃろうて。……と、酒が切れてしまったのう」
「あ～、こっちも、これが最後だったわ」
そんな事を言って、立ち上がる彩香と閃華。それから彩香は身体を伸ばし、閃華は首をほぐしてから言うのだった。
「じゃあ、後片付けは私がやっておくから、閃華ちゃんは昇をお願いね」
「うむ、心得た」
そう言って、それぞれの作業を始める二人。閃華は昇を背負ってリビングを後にし、彩香は手馴れた手付きで、今まで呑んでいたり、食べていた物の後片付けをすぐに終わらせた。そんな彩香が、リビングの窓を閉めてから、カーテンを閉めようとするが、もう一度だ

け、月を見上げると、満月は叢雲によって、濁った輝きを放っていた。

「月に叢雲か……本当に風情が無いわね。まるで……これからの事を示してるようね」

そんな事を呟いた彩香が溜息を付く。そして、そんな彩香が思うのだった。

確かに、昇が行く道には叢雲が掛かってるかもね。でもね、昇。たとえ月に叢雲が掛かっていても、月は輝いているのよ、優しく、静かに。だから昇、今は月の光に成りなさい。優しく、静かに……その子を見送れるように。

それから彩香はカーテンを閉めると、月夜の下で行われた事は全て終えるのだった。

第百四十二話　月夜の下で……（後書き）

さてさて、そんな訳で昇にも何かが見えてきたようですね。というよりも、皆さんは、閃華の真似をして未成年に酒を呑ませたりしないでくださいね～。

……まあ、高校時代から酒で宴会を開いていた私が言える事ではないですけどね～（笑）

いや、だって、あの頃の年代って、酒やタバコに興味を示すものじゃない。いやいや、私はやってないですよ、うん、本当にやってないよ～。まあ、その辺は皆さんの想像に任せる事にしましょう。

それよりもっ！！！！　皆さんは日本の四季を満喫してますか～。ちなみに、私は冬の雪が一番好きですね。しかも、何の雑音もしない静かな中で降る雪が最高です。

そんな田舎の旅館に泊まって、雪の音を聞きながら、美味しいお酒を呑む。う～ん、これほどの贅沢は無いですよね～。私の地元では、しょっちゅうじゃないですけど、時々雪が降ってたので、しかも真夜中に起きると、雪が降り積もる音が聞こえて、その自然の音を聞いてるだけでも、充分に風情があるものです。

そんな訳で、私もいつかは雪の音を聞きながら、酒が呑める旅行に行きたいものですね～。

と、まあ、自分の希望を書いたところで、書く事も無くなったので、そろそろ締めますね～。

以上、田舎に引っ越して、四季の風情を楽しみたいという気持ちと、都心近くに引っ越して、いろいろと便利な生活を営みたいと、両極端な思いで悩んでいる葵夢幻でした。

第百四十三話　それぞれの心

「さて、それでは、始めましょうか」

与凪がそう言うと、その場に揃った全員が頷いた。昇達は既に、いつもの生徒指導室から与凪が常に展開させている精界内へと入り、校庭に集っていたのだ。

昇が春澄に宣戦布告をしてから三日後の今日にはフレト達も完全に回復しており、本格的な戦闘は出来なくても、軽い戦闘行為なら出来るようになっていた。そのために昇が言い出した、フレトにストケシアシステムを使えるようにする練習を兼ねて校庭に集っている訳である。

ちなみに、ストケシアシステムの基本についてはフレトが学校を休んでいる間に、ラクトリーに渡してあった資料と放課後には与凪が毎日、フレトのところに行っていたから知識的には充分だろう。後は実戦でどれだけ使えるかである。それを確かめるためにも、練習と訓練を兼ねて全員が、ここに揃ったというわけだ。

開始の合図を口にした与凪が空中に現れたキーボードを叩くと、昇達から離れた所に魔法陣が展開され、その魔法陣から一体の機動ガーディアンが現れた。その機動ガーディアンはアルビータと同じような武器を持っており、体格もアルビータに似ている。どうやら、与凪が練習のために作った機動ガーディアンらしい。そんな与凪が機動ガーディアンについて説明する。

「これはフレトさん達の戦闘データから作った機動ガーディアンです。試作型ですけど、かなりアルビータさんの動きを真似できます。なので、属性攻撃はしてきませんし、武器だけの戦い方となります。だから属性攻撃をしないでくださいね。ちなみに、試作型なので、これ一体しかないので壊さないでくださいね」

与凪の説明を聞いて頷く一同だが、数名は厄介そうな顔をしている。それが琴未にミリアにレットだ。どうやら、壊さないように攻

撃を加減しなければいけない事に対して、めんどくさいと思ったのだろう。だが与凪としても、この短期間でアルビータの動きと同じ動きをする機動ガーディアンを作っただけでも、かなりの重労働だったろう。閃華やラクトリーが、めんどくさそうな面子を見て、そんな事を説明してやるのだった。

それから昇達は円陣に集まると昇が差し出した手に片手を重ねていった。それから与凪が口を開く。

「さて、機動ガーディアンの方は自動で防御と反撃を重視にしてますから、なるべく相手の防御を崩すように完全連携をとってくださいね。それじゃあ、滝下君、お願いね」

与凪に言われて昇は目を瞑って、精神を集中させると、昇にしか感じられない足元の黒い歪に精神を落として行く。それから昇は目を開くと、そこは真っ暗な世界で、暗闇の向こうからは赤い紐と白い紐が伸びてきていた。昇はそれを全て掴むと精神を浮上させて、ゆっくりと瞳を開いてから言うのだった。

「起動、ストケシアシステム」

昇がその言葉を口にした瞬間に手を置いた全員の頭に何かが走る感覚を感じていた。これが、ストケシアシステムを起動させた証拠なのだろう。それから昇達は重ねた手を離すと、昇は遠くに離れ、フレトは機動ガーディアンに対して後方に位置を取り、他の全員はそれぞれの精霊武具を手にするのだった。

それからフレトの目の前にモニターとフレトの手の平が置ける玉が二つ、現れるとフレトはその玉に手を乗せるとモニターに集中する。その隣には咲耶が控えており、四つほどのモニターを見ながら、キーボードを操作している。そして与凪も反対側に立ち、六個のモニターを見ながらキーボードを操作しているのだった。それから与凪はフレトに話しかける。

「さて、もう説明する事は無いと思いますけど、行けそうですか？」

与凪のそんな質問にフレトは真顔で答える。

「何とかしてみせてやる」

「分かりました、では、始めましょうか。それでは……スタートッ！」

こうして、フレトが始めてストケシアシステムを使った訓練が開始された。

それから一時間後、訓練が一時的に中断されるとフレトは地面へと座り込み、咲耶が用意していた水筒から水をもらうと一気に飲み干すのだった。昇も前線で戦っていたメンバーに飲み物を配って雑談をしているようだ。どうやら、疲れているのはフレトだけであり、前線で戦っていたメンバーには疲労がまったく出ていなかった。

やはり、ストケシアシステムが特殊なシステムであるために、フレトも相当に苦労をしていたようだ。先程まで行われていた訓練も、まともな連携を取る事が出来ずに、味方同士がぶつかりそうになってしまうほどだ。それでも、前線メンバーが何とかしてくれたから良かったものの、アルビータとの戦いだったから、とっくに壊滅していたところだろう。

そんな状況は指示を出していたフレトが一番良く分かっている。けれども、フレトには未だにストケシアシステムを使いこなす事が出来ていないようだ。けど、それも仕方ない事だろう。なにしろストケシアシステムの基盤となっているのは、昇が持っているレア能力のエレメンタルアップなのだから。

昇ならまだしも、レア能力にまったくなれていないフレトが、レア能力を使ったシステムを使うのである。だから誰しも、最初から上手く行かない事は分っていたが、フレトはここまで難しい物だとは思っていなかったようだ。だからこそ、ストケシアシステムを使いこなせなかった自分に腹が立ち、その原因となる要因を与凪に向かって尋ねるのだった。

「まったく、我ながらみっともない醜態だな。まさか、ここまで厄介なシステムだったとはな。滝下昇は何で、こんなシステムを自由

自在に使いこなせるんだ？」

そんなフレトの質問に与凪は少し考える仕草をすると、話す事を整理してから話し始めた。

「まずはシステム自体の問題ですかね。滝下君はエレメンタルアップの力で味方の動きを見なくても感じ取れます。だからこそ、視界が塞がれていても、全員が見ている光景から戦況を把握する事が出来るんですよね。このストケシアシステムは、そんな滝下君の能力を基盤にしたシステムですからね。フレトさんが使うには、ちょっと無理があってもしょうがないんですよ。なにしろ、エレメンタルアップの応用で味方の動きだけでなく、味方からの視野や思考を瞬時に伝達するシステムですからね。さすがに、そこまでの応用が効くようなシステムは作れませんよ」

「つまり、滝下昇は味方の動きだけでなく、味方から見た光景や思考までも瞬時に処理して指示を出しているというわけか？」

「そうですね。そもそも、ストケシアシステムとは瞬時に情報のやり取りを行い、滝下君が指示を出せるようにしたシステムですからね。味方の情報を完璧に処理できていないフレトさんには無理があっても仕方ないんですよ。それに情報も一度、滝下君を中継して送られてきますからね。相互の情報伝達にラグタイムが出ても仕方ないんですよね」

そんな事を言って溜息を付く与凪。さすがに自分で開発したシステムだけに理解しているが、昇の力がレアなために応用の範囲が限りなく狭くなっているのも確かだ。

つまり、昇ならエレメンタルアップの力で味方の状況だけでなく、味方からの情報。例えるなら、相手の隙とか、相手の姿とかが、見るだけでなく感じる事が出来るのだ。つまり、昇からは見えたり、気付いたり出来ない事を、前線メンバーからの情報で知る事が出来て、瞬時にそれに対応した指示を前線メンバーに送れるのだ。

味方との情報伝達、昇の力なら、それを瞬時に出来るからこそ、完全連携が可能なのだ。だが、フレトのように第三者に使わせるに

は応用が効かない部分がある。それが味方からの情報伝達だ。
　第三者に使わせる場合は昇のように味方の思考や視界、それに感じた事までも伝達が出来ないのだ。だからこそ、フレトはモニターと咲耶との情報伝達で前線の情報を得ながら、敵味方の動きしか知る事が出来ない、だから一方通行で指示を出す事しか出来ないのだ。つまり、昇なら最大限の情報を瞬時に伝達できるが、フレトの場合だと、前線の戦況を見ながら情報を集め、それから指示を出す事になる。
　つまり、本来なら相互伝達が出来るストケシアシステムだが、フレトの場合だと味方からの情報伝達が無いに等しい。だからこそ、咲耶のサポートを得ながら前線の状況を全て処理しないといけないのだ。だが、前線での状況が理解が出来ているのなら、瞬時に指示を送れる事は確かな事だ。要は前線での敵味方の動きを全て把握すれば、フレトでも完全連携が出来るという訳だ。
　だが、フレトも普段は前線に立つ事が多い。氷のシューターだけに、前線に出て、相手の動きを見ながら戦う事に慣れてしまっている。一方の昇は後方から戦況を見る事が多い。それはレア能力であるエレメンタルアップを使っているために、実戦派では無い事もあり、だからこそ、後方から戦局全体を見る事が多かっただけに、後方から戦局を見ながら味方に指示を出す事に慣れているのだ。
　そんな昇に適応したシステムだからこそ、フレトにとっては使いこなせない部分も出てくるのだろう。だが、フレトが完全にストケシアシステムを使いこなせれば、この前のようにアルビータに膝を屈する事は無いだろう。そのためにも、今は後方から戦局全体を見ながら、敵味方の動きを把握し、的確な指示を出す事が最優先だ。
　与凪との会話で、その事を感じたフレトが次の質問を出してきた。
「レア能力だからこそ、使えるシステムか。それだけに使い方は難しいが、使えれば強力な武器になる事は確かだな。そうなると……戦局全体を見なくてはいけないのだな。敵味方の動きを完全に把握して、後ろから的確な指示を出さないといけないという事か？」

「その通りですね。でも、さっきのフレトさんは情報量に惑わされて、味方の動きまでも把握できていなかったですね。だから、さっきもシエラさんとレットさんが空中でぶつかりそうになったり、隙だらけのミリアさんをラクトリーさんが思いっきり叩いて、弾き飛ばす事で急場をしのいだ、という事がありましたね。だから、まったく味方の動きさえも把握できていない状態ですね」

「まったく、滝下昇め。ここまで厄介なシステムを押し付けてくるとはな、やってるこっちの身にもなって欲しいものだな」

最後はそんな文句で再び水筒の水を口にするフレト。やはり、普段とは戦い方がまったく違ってくるために、相当な苦労をしているようだ。そんなフレトが、まずは一番最初に適応しなければいけない問題について考えるのだった。

まずは味方の動きを、しかも全員分の動きを完璧に把握する事だな。こちらからでは、モニターと咲耶からの情報だけでしか戦況を把握が出来ない。それでも、モニターに映る味方の動きと咲耶からの情報から的確に必要な情報だけを抽出して、その情報を元に指示を出すしかないか。こちらの指示は前線の全てに伝わるからな。誰一人として遊兵を作る事無く、確実に全員が連携を取れるように指示を出さないとだな。それを的確にやるには……。

そこまで整理できたものの、やっぱり対応策が思いつかないのだろう。だからこそ、フレトは与凪との会話を再開させる。

「まずは味方の動きを全員分だけ把握しないとか。もう少し、味方の動きが分かるように出来ないか？」

そんなフレトの質問に与凪は考え込む。それで答えが見付かったのだろう、与凪はフレトの方へ顔を向けると、人差し指で天を指しながら答えてきた。

「なら、個人の精霊反応も見れるようにしときましょうか。モニターに映らない死角でも、別の窓で精霊反応が上空からの視点と横から見た視点を加えてみましょうか？」

そんな与凪の提案に、今度はフレトが考え込む。

なるほどな、それなら味方の位置は完全に把握できるな。二つの視点で三次元に情報が得られるからな。後は……味方についての情報か。位置を把握する事が出来ても、その味方が動けるかまでは判断できないからな。それをどうするかなだな……。

そんな事を考えたフレトがひとまず与凪に対して考えた事を口にする。

「そうだな、それはやってもらおう。それから、咲耶の方で味方の状態を把握できないか？　咲耶の方で情報をまとめて、誰が攻撃が出来る状態か、それと反撃に出来るとか、それを簡単に表示が出来ないか？」

「そうですね、さっきのように咲耶さんからの情報量が多すぎると把握出来ないですからね。簡単に色分けにでもしときましょうか」

「あぁ、そうしてくれ」

「そうですよね、さっきは攻撃直後で動きが取れない半蔵さんに攻撃指示を出したり、連続攻撃が出来る状態なのに、琴未だけが先走りすぎて、連携が取れなかったですからね。あそこで琴未の動きを少し遅らせれば、確実に連携が取れて、連続攻撃が出来ましたからね。分かりました、それじゃあ、ちょっとシステムをそのように改良しますから、ちょっと待ってくださいね」

それから与凪は空中に浮いているキーボードを素早い指捌きで一気にフレト用のストケシアシステムに改良を加える。与凪がそんな作業をしている間に、やっぱり心配になったのだろう。昇がフレトの元にやってきた。

「順調……とは言えない状況かな……」

心配そうな顔と声でそんな事を言って来た昇に対して、フレトは瞳を閉じて、大きく息を吐くと昇に対して言ってやるのだった。

「まったくだ。こんな物を押し付けられるとは思っていなかったからな」

そんなフレトの言葉に昇は苦笑いを浮かべるしかなかった。そんな昇が少し申し訳なさそうに、それからフレトを信じているという

瞳でフレトに向かって言うのだった。
「いや、それは、ごめん。今回の戦いで僕が出ないって決めちゃったから、フレトに負担が掛かってると思うけど、それでもフレトなら出来ると信じてるから。だからフレトになら、ううん、フレトだから任せる事が出来たんだよ」
そんな事を言って来た昇にフレトは瞳を開けて、鼻で笑ってやると、心配が無いとばかりに胸を張るのだった。そんなフレトを見て、やっと笑みを浮かべる昇。そんな昇の笑みを見て、今度はフレトに気掛かりが出来たのだろう。だからこそ、フレトは言ってやるのだった。
「まあ、戦闘の事は任せておけ。それよりも、お前が参戦しない事に異議を唱えるワケでは無いが、お前の方は大丈夫なのか？　状況は知らんが、お前の様子を見ていると、こっちまで気が暗くなりそうだからな」
そんな事を口にするフレト。確かにフレトが言ったとおりだったのだ。フレトも久しぶりに学校に来てみれば、そこには表情に陰りがある昇の顔を見たのだ。だからこそ、そんな言葉を口にしたのだ。そんなフレトの言葉を受けて、昇は苦笑いを浮かべながら答えてきた。
「正直なところ、自分でもどうしたら良いのか、まだ迷ってる。自分に出来る事が、まだあるんじゃないかって、結末を変える事が出来るんじゃないかって、まだ迷ってる。それでも……来るべき結末に心が折れないように覚悟を決めておくよ」
「来るべき結末か……まるで、今回の戦いでの終わりを分っているような言い方だな」
「うん、まあ、そうかな」
「なら全部を話してしまえ。聞く事ぐらいなら俺にも出来るからな」
「ごめん、それは止めとくよ。これは僕と春澄ちゃんの戦いでもあり、問題でもあるから。だから……僕達で答えを出さないといけないと思うし、今は他の皆にあまり心配を掛けたく無いからね」

そんな昇の言葉を聞いてフレトは思いっきり溜息を付くと、呆れたように昇に言うのだった。
「なら、今は皆の前で暗い顔をするな、人前に居る時ぐらいは、いつものマヌケ面をしておけ、その方がよっぽどマシだ」
フレトの言葉に昇はやっぱり苦笑いしながら言葉を返す。
「なんか、酷い言われようだね。でも、そうするよ。皆の前では暗くならないように、いつもの自分でいる事にするよ。ありがとう、フレト」
そんな昇の言葉を受けてフレトは慌てて昇に背を向けると、腕を組んで偉そうな態度を取る。それから昇に向けて言葉を放つのだった。
「別に礼を言われる筋合いは無い。それにお前を心配したワケでも無いからな。ただ、セリスが世話になっているから、俺はお前達に協力してやるだけだ。それに、あいつには屈辱を受けたからな。その仕返しをしたいから必死になってるだけだ」
「うんうん」
フレトの言葉に簡単な返事をする昇。どうやら昇にも分っているようだ。昇の言葉にフレトが照れている事を。まあ、プライドが高いフレトなだけに、こうした対応しか出来ないのだろう。だからこそ、昇も笑みを浮かべる事が出来た。フレトは少しだけ顔を後ろに回し、昇の顔を見ると鼻で笑ってやるのだった。
そんな時だった、システムの調整を終えた与凪が声を掛けてきたのは。
「フレトさん、システムの調整が終わりましたよ。どうします、すぐに再開しますか？　それとも、まだ滝下君との話を続けます？」
そんな事を尋ねてきた与凪。どうやら与凪なりに気を利かせたようだ。なにしろ、ストケシアシステムの核となっているのは昇の能力だ。だから昇からストケシアシステムについて聞くのも悪くは無い。むしろ、昇の言葉がシステムを扱うためのヒントになる可能性が大きい。フレトもその可能性に気付いたからこそ、与凪に向かっ

て返答するのだった。
「いや、もう少しだけ休ませてもらおう。それに……この滝下昇からいろいろと聞きだした方が有効だからな」
「了解です、では、前線メンバーには、そのように伝えておきますね」
少しだけ楽しそうに返答する与凪に対してフレトは昇の方へと真剣な眼差しを向けた。そして、その肝心な昇はというと……意味が分かっていなかったようだ。だからフレトが真剣な眼差しを送ってきても、何の事か分からずに苦笑いを浮かべるしかなかった。
そんな昇を見てフレトは思った。やっぱり、特殊な人間は自分が特殊だと分かってないと有害だな。まったく、こいつは自分が出来る事だから俺にも出来ると思っているのだろう。まったくもって迷惑千万だな。そんな事を思ったフレトが溜息を付くと、話をストケシアシステムについて変更してきた。
「それで滝下昇、ストケシアシステムについて少し聞いておきたいんだがな。まあ、押し付けられたシステムだからこそ、しっかりと答えてもらおうか」
フレトがそんな言葉を口にすると昇にもやっとフレトの心境が理解できたようだ。まあ、先程の光景を見ていればフレトがストケシアシステムを使いこなせていない事は昇にも分っていた。そんなフレトがストケシアシステムについて聞こうとしているのだ。だから重要な事だろうと思い、フレトが真剣な眼差しをしている意味をやっと理解したのだった。
だからこそ、昇もフレトに向かって真剣な眼差しに変えると一度だけ頷くのだった。そんな昇を見たフレトが質問する。
「このストケシアシステムを使っている時に、最も重要視している事は何だ？　お前が一番に重要に思っている事なら、俺にもそれが必要だからな」
そんな質問に対して昇は考え込む仕草をして思考を巡らすのだった。

最も重要な事か……なんだろう？　フレトの言いたい事も充分に分っているつもりなんだけどな～。改めて、そう聞かれると……思い当たる節が無いんだよね。

そんな事を思ってしまった昇。まあ、それも仕方ないだろう、ストケシアシステムは昇のレア能力であるエレメンタルアップを基盤に作り出したシステムだ。だから一番重要な事に昇が気付くには時間が掛かったようだ。なにしろ、それは……昇が普通にやっていると思っている事だったからだ。そんな重要な事に昇はやっと気付いたようで、再び思考を巡らす。

……あっ、そうか。この場合はストケシアシステムよりもエレメンタルアップに必要な事を答えれば良いのかな？　このストケシアシステムはエレメンタルアップの基礎構造から作り出したシステムだからね。エレメンタルアップで一番必要な事を教えれば、フレトにもストケシアシステムを使う上で最も重要な事が理解出来るという事だね。でも、そうなると……エレメンタルアップで一番重要な事って何だろう……信頼、絆、あぁ、そうか、それは簡単に言葉にする事が出来るけど、最も難しい事だよね。

そんな事を思った昇がフレトに向かって微笑みながら、フレトの問い掛けに答えてきた。

「全部任せちゃう事かな。皆の力を、皆との絆を信じて、全部任せる事かな。それが一番大事な事だと思う」

「随分とあっさりとした答えだな」

昇の言葉にそんな言葉を返すフレト。まあ、フレトとしては、もっと具体的な答えが返ってくると思っていたのだが、まさか、全部任せるという他力本願な答えが返ってくるとは思っていなかったようだ。そんなフレトを見て、昇は軽く笑うと、それからフレトに尋ねる。

「なら、フレトは全部を皆に、仲間に任せられる。戦う事だけじゃない、自分の想いや望みを、全部を皆に任せる事が出来る？」

「……そういう事か。口にするのは簡単だが、それは最も難しい事

だな」
「そうだね……」
フレトの言葉に昇は微笑みながら答えを返す。どうやらフレトにも昇が言いたい事が充分に理解が出来たようだ。
昇が言いたかった事、それは信頼とか絆とか、そんな言葉で言い表せる物だが、それをどの程度のレベルまで行えるのかが重要だという事だ。確かに人は誰かを信頼したり、絆を頼る事が出来るだろう。でも……そんな人との繋がりに、どれだけ自分の思いや望みを乗せる事が出来るかというと事を昇は言いたかったのだ。
信頼とか絆とか、そうした人の繋がりを口に出すのは簡単だろう。けど、その繋がりにどれだけの量を乗せられるのかは別問題である。つまり、その繋がりに自分がどれだけの期待とか、信頼を乗せる事が重要だという事だ。
一口に期待とか、絆とか、言っても、その言葉には別の項目で重量があるのだ。それは信頼度とか言われるものだろう。そんな繋がりの重量に全てを乗せるなんて事は普通は出来ないものだ。誰だって信頼しているからといって、全てを、自分の命すらも任せるような選択は出来ないからだ。
どんな事であれ、相当の繋がりがあっても、自分の命すら任せるような信頼を置く事は無理だろう。なにしろ、自分の命を本当に人に委ねてしまうのである。それはよっぽどの事が無い限りは無理という事だ。まあ、崇拝とか、人徳とか、そうしたもので人の命を預けられる程の身分を持った人が居ないわけじゃない。けど、普通は、そう簡単に自分の命すらも任せる事なんて出来はしないのだ。
けど、昇は皆を、仲間を信じて、自分自身の全てを任せる事が出来る。つまり、それだけ昇達の繋がりが強い事を示し。その強さこそがエレメンタルアップにおいては力の根源になっているわけである。だからこそ、昇は仲間を信じて、全てを任せる事が出来るのだ。
今回の事だって、そうだろう。今回の戦いでは昇は戦闘の全てをフレトを始め、全員に任せた。つまり、昇はそれだけ皆を信じてる

し、必ず皆が自分の信頼に応えてくれると信じているからだ。だからこそ、昇はあんな言葉を口にしたのだろう。全部を任す、言葉にすれば簡単だろうが、誰かに全てを任すなんて、そう簡単に出来る事ではない。

特に次の戦いは一度は負けているフレト達をアルビータと戦わせようとしているのだ。そこにシエラ達も加えて、後は全て丸投げである。そんな大それたというか、肝が据わっているというか、何も考えていないというか、とにかく大胆な決断を昇が下した事には変わり無い。

けど、その決断が出来たのも、シエラ達だけじゃなく、フレト達も心から信じたからこそ、アルビータとの戦いを任せる事が出来た。アルビータの望みを知っているのなら、普通は誰かに全てを任せる事なんて出来ないだろう。それでも昇は今回の戦いを全てフレトに任せた。皆なら、アルビータの望みを叶えてやる事が出来ると信じたからだ。だからこそ、全てをフレトに任せたし、その信頼こそが全ての根源であり、昇が無意識にやっていた事なのだ。

そして、その信頼が生み出す力……それがストケシアシステムの真骨頂であり、完全連携を完成させる手段とも言えるのだ。

やっと、ストケシアシステムの真骨頂を知ったフレトが考える。

仲間を信じて全てを任せるか……言葉にすれば簡単だが、実際にやるとなると難しいな。俺だって皆(みな)を信じていないわけじゃないけど、全てを任せさせるほど信頼しているかと聞かれると……即答は出来ないな。だが、滝下昇なら簡単に言ってのけるだろうな、信じてると。なら、やるべき事は一つだけだな。俺も信じるか、皆なら俺の指示通りに動いてくれると。後は俺が皆の信頼を受けて、的確な指示を出せば良いだけだ。

そんな事を思ったフレトが昇に向かって言うのだった。

「答えは、すぐ傍にあったという事か。それにしても、こんな難題を基礎としているシステムを作り出すなんてな。お前が相当のバカなのか、凄いのか分からなくなってくるな。なにしろ、指示を出す

だけとは言っても、それだけ戦っている者を信じて、全てを任せないといけないのだからな。相当の信頼関係があっても、まったく疑いを持ってはいけないという事は、かなり難しい事だぞ」

そんなフレトの言葉を聞いて昇は微笑みながら会話を続ける。

「それでも……僕はフレトならやってくれると信じてるよ。このストケシアシステムの真髄が皆との繋がりだから、僕達が築いてきた繋がりは強いもので、絶対に壊れないって信じてるから。だから、僕はフレトも戦ってくれてる皆も、全部任せる事が出来るぐらい信じる事が出来る。それだけだよ」

「簡単に言ってくれるな。このストケシアシステムは戦況を全て理解した上で、皆を信じて、攻撃を全て任せる指示を出す。その信じるが、どれだけの量なのかが問題だというのに、お前は俺だけでなく、ラクトリー達も信じてるみたいだな」

「うん、もちろん、信じてるよ。戦ってくれる皆も、そしてフレトも。僕達が築いてきた繋がりは絶対に壊れないと信じてるから。だから全てを任せる事が出来る、皆を信じる事が出来る。それだけだよ」

「その、それだけが一番難しいというのにな。まったく、つくづくバカなのか、凄いのか、まったく分からないやつだな。どうやったら、そこまで人も精霊も信じる事が出来るのか、俺にはまったく分からんな」

そんな言葉を吐いて、やれやれという感じで肩を上げるフレト。そんなフレトを見て、昇は苦笑いをする。やっぱり、フレトの言葉が少しだけ引っ掛かったようだ。それでも、フレトには伝えておいた方が良いと思った事を昇は口にする。

「僕だって、無条件で誰も彼も信じてるワケじゃないよ。今まで戦ってきた仲間だから、これからもずっと一緒に居たい皆だから、だから信じてるだけだよ。それで、もし、裏切られるような事があったら、自分が人や精霊を見る目が無かっただけだよ。信じられるから信じる、それは皆も同じだし、僕自身も僕を信じてるから信じら

れるんだよ」
　そんな昇の言葉を聞いてフレトは何かに気付いたような表情になると、すぐに呆れた表情になって、思いついた事を考える。
　俺とした事が、こんな基本的な事を忘れていたとはな。俺は自分の精霊達を信じてる、そして……滝下昇を信じる事を俺自身が決めた。自分で決めた事を信じられなくては、何を信じれば良いというだ。自分で決めた事だからこそ、信じなければいけないんだ。それが信じるという事であり、ストケシアシステムを使うにあたって一番大事な真髄じゃないか。ならば信じるか、皆を、そして……滝下昇を含めた皆を信じると決めた自分自身を信じてやろうじゃないか。
　そんな事を思ったフレトが昇に向かって言うのだった。
「まあ、いい、お前と話したおかげで話が整理できたし、ストケシアシステムの真髄にも気付く事が出来た。だから訓練を再開させるから、お前は遠くで見ていろ。今度こそは上手くやってやるさ」
「うん、分かったよ。じゃあ、頑張ってね、フレト」
　そう言って、その場から遠のく昇。どうやら昇もフレトが一番肝心な事に気付いた事を察したようだ。だからこそ、昇は安心した表情で再び戦闘場所から離れて行くのだった。その一方でフレトは与凪に向かって訓練を再開させる事を前線メンバーに伝えるように言うのだった。
　それを聞いた、前線メンバーが再び戦闘体勢に入る。そんな光景を見ながら、フレトは思うのだった。
　今までは俺が先頭に立って戦ってきたが……こうして後ろから見てると……さっきとは、まったく違う光景に見えるな。そうだ、俺は信じなければいけない、戦っている皆を、そして……自分自身を。だからこそ、後ろから見ているだけでも戦える。戦っている皆を信じる事が出来る。これが、そういう事なのか。
　そんな事を思ったフレトの瞳には、先程までとは違って、前線で戦ってくれているメンバーが頼もしく見えるようになっていた。それだけ、フレトは前線で戦っている者達を信じ、任せる事が出来る

のだろう。
　そんなフレトが与凪に向かって頷くと、与凪はキーボードを叩き、機動ガーディアンにも戦闘体勢に入らせる。それから与凪は再び訓練再開の合図を口にするのだった。
「それじゃあ、行きますよ。訓練……スタートッ！」
　そんな与凪の合図と共にフレトは一瞬で全員に指示を出すのと同時に、機動ガーディアンも動き出し、訓練が続くのだった。

　その日の同刻、某ホテルの一室。
　春澄は窓ガラスに手を置きながら、まるで外の光景でも見ているかのように、閉じた瞳で外を感じていた。そんな春澄がアルビータに向かって言うのだった。
「今日は良い天気みたいだね～。出来れば、どっかにお出かけしたいけど、もう無理だよね」
　そんな言葉を口にしてきた春澄に対して、アルビータは少しだけ悲しげな瞳をしながら答えるのだった。
「そうだな、春澄の命も残り少ない。下手に活動して減らすよりは、今は少しでも消費を抑えておいた方が良い。お互いに終焉を迎えるためにな」
「そうだねよね。自分でも分かるよ、少しずつ……自分が終わって行く事を……」
　そんな言葉を聞いたアルビータが思わず聞いてしまった。
「後悔しているのか、私と契約をした事を、自分の……命を削った事を？」
　本当なら、そんな事を聞いてはいけなかったのだろう。もし、春澄の中に少しでも生きたいという気持ちがあれば、それを増幅させて春澄に後悔させる事になる。だが、春澄はアルビータの方へ振り向くと、満面の笑みを浮かべながら答えるのだった。
「後悔なんてしてないよ。あの日……アルビータと契約を交わした

時から、この結末は決まってたからね。今になって後悔はしないよ。私は、アルビータと契約を交わした時に生まれ変わって、それからずっと戦いながらも楽しい日々を過ごしてきた。それはもう、人の一生分ね。だから後悔なんてしない、辛い戦いもあったけど、楽しい事の方が多かったから。だから後悔なんてしない。でも、ちょっとだけ楽しみかな」

「楽しみ？」

「うん、昇さんは私の想いに気付いてた。そんな昇さんが私に、どんな終焉をくれるのかが楽しみだよ」

そんな言葉を聞いたアルビータが大きく息を吐きながらも、軽く笑う。どうやらアルビータも自分が春澄と同じ気持ちを抱いている事に気付いたようだ。だから軽く笑ったのだ。そう、アルビータも楽しみにしているのだ。昇達が、アルビータにって最後となる戦いに、どんな華を添えてくれるのかという事を。

本当なら、いや、本来なら、誰しもが、そんな事は思わないだろう。誰も自分が死んで行く時の事なんて考えもしないのだから。けど、春澄とアルビータは契約を交わした時から死ぬ事が決まっていた。だからこそ、二人ともお互いに望む死を選んだのだ。それは二人が特別な環境に居た事も関係してくるのだろう。だからこそ、誰も二人の死について口を出す権利なんて無い。

二人とも死ぬ事を前提に契約を交わし、死ぬ事を前提に生きてきたのだから。そんな人の人生に第三者が口を挟む権利なんて持ってない。だから、誰も二人の死についても何も言えないし、言う権利も無い。だから昇もその事に関しては何も言わなかったのだ。ただ、最後に春澄達に華を添えるために戦う事を選んだにすぎない。

その戦いの中で、昇ははっきりと最後まで春澄の生き様を見守ると言ったのだ。春澄にしてみれば、そこまでしてくれた人、そこまで理解してくれた人は昇だけだったのだろう。だからこそ、春澄は楽しみと言ったのだ。昇がくれる終焉を彩る華が何なのかが楽しみなのだ。

それはアルビータも同じだった。アルビータも最後の最後に満足の行く戦いが出来る。そう確信していた。正確には昇が宣戦布告をして来た時、その時に確信に近いものを感じていたようだ。昇なら最高の戦いで終焉を彩ってくれる事を。だからアルビータも春澄が楽しみといった気持ちも分からなくはなかった。

何にしても、後数日で二人は終焉を迎える。それを彩るのが昇である、その昇がどんな事をしてくるのかが二人には楽しみだったのだ。

だが、春澄が言ったように春澄の命は残り少ない。だからこそ、春澄は出かけたくても出かけられなかったし、下手に出かけて昇達と出会ってしまったら取り返しが付かない事になりかねない。それに……既に春澄には、それほどの体力は残されていなかった。

だから春澄は大きなあくびをすると、窓から離れて、杖で周囲を確認しながら自分が使っているベットへと倒れ込み、杖もすぐ分かる場所に戻すと、手探りでお気に入りのぬいぐるみを見つけ出すと抱きしめて、横になるのだった。

そんな春澄に布団をかけてあげるアルビータ。そんなアルビータに春澄は笑みを向けて頷くと、そのまま、ゆっくりと眠りに落ちていった。そう、既に春澄の命はかなり削られ、春澄自身が衰弱するほどまで春澄の命は残り少なくなっていたのだ。

そんな春澄の面倒を見ながらアルビータは終焉までの時間を静かな心地でのんびりと待ち続けたのだった。

そして……ついに、決戦の日、決戦の時間を迎えるのだった。

第百四十三話　それぞれの心（後書き）

はい、そんな訳で、次回からいよいよラストバトルに入りますっ！！　……まあ、バトル以外にも、昇達の話を入れて行くつもりですけどね。そんな訳で、百年河清終末編も終わりが近づいてきましたっ！！

そんな中で……次の設定資料が未だに出来上がっていないんだよね～。まあ、次編はかなり長くするつもりだから、設定資料もかなりの量になるし、プロットも書かないといけないんだよね～。……あ～、なんか、だるいわ～。誰か～、私の代わりに設定資料を作っておいて、そこの妖精さんお願い。……えっと、この紙はなに……えっ、見れば分かるって。それじゃあ拝見。

―請求書　作者代行料　一千万円―

……払えるか、こんな金額。つーか、金額が微妙にリアルだぞっ！！　ネタならもっと金額を上げとけよっ！！！！　……えっ、お前が頼んできたから当然だろ……そうですよね～（さわやかな笑顔）

うぅ、これで妖精には頼めなくなった。残された手段は何だっ！！　一体何が出来るというんだっ！！！！　……あっ、さっきの妖精さん……えっ、とりあえず、これを読めって。うん、じゃあ読んでみる。

愚痴ってないでさっさと作らんかいっ！！！！

……そうですよね～（風に吹かれて、さわやかな笑顔）

まあ、そんな訳で、なんとか百年河清終末編が終わるまでには、設定資料とプロットを上げたいと思っております。……まあ、その前にちょっとした事をやるけどね～。そんな訳で、いよいよ終わりが見えてきた百年河清終末編ですが、どうか終わりまで見捨てないでください。

……見捨てられたら、雨の中でダンボールに入り、拾ってくださいという札を下げないとならなくなりますからっ！！　……えっ、誰も拾わないだろうって……。

そうですよね～（さ（略））

そんな訳で、そろそろ書く事が無くなったので締めますね。

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

そして、これからもよろしくお願いします。更に、評価感想もお待ちしております。

以上、すっかり睡眠時間が狂っている葵夢幻でした～。

第百四十四話　終焉の開幕

まったく人気が無い夜の公園。休日の夜というのもあるのだろうが、与凪が早めに来て、この公園に人が入ってこないように細工をしたようだ。そのため、夜の公園には昇達と春澄とアルビータの姿しかなかった。

そんな対峙する両陣営から閃華とアルビータが前に歩み出ると、同時に手を上げて、同じ言葉と力を放つ。

『精界展開っ！』

光の柱がドーム状に展開すると精霊と契約者以外の生物を消し去り、精霊世界が展開される。そしてアルビータの精界は公園を完全に包み込んだところで止まり、閃華の精界はそれよりも少し広い範囲を覆ってから止まった。

そのため、公園内は普段の色をしており、何色にも染まる事は無かった。無色の精界はフレトから話を聞いているために、昇達も驚きはしないが、ちょっとだけ違和感を覚えていた。さすがに今まで色の付いた精界内で戦ってきただけに、初めて体験する無色の精界に精界内とは思えない違和感を覚えるのも不思議では無いだろう。

そんな戦場の準備が整うと閃華もアルビータも元の場所に下がり、その代わりに昇と春澄が前に出て来た。それから春澄はゆっくりと瞳を開けると、しっかりと昇の姿を瞳に写す。それから春澄は嬉しそうに笑みを浮かべながら昇と言葉を交わすのだった。

「こうして、昇さんの姿を見るのは初めてですけど。やっぱり……想像していたように優しそうな人に見えますね。特に顔立ちが優しく見えます」

「う～ん、僕自身は自分の顔がちょっと幼いように思えるんだけど、そう言われると、喜んで良いのか、ガッカリして良いのか、迷うね」

そんな昇の言葉に春澄は本当に楽しそうに笑うのだった。

「あははっ、でも、顔付きが悪くて近づき難い顔立ちよりはマシだ

と思いますよ」
「それは確かに。僕も春澄ちゃんの瞳を始めて見るけど、優しい瞳をしていると思うよ。春澄ちゃんの優しさが瞳に出てると思うけど」
「あ、ありがとうございます。なんか……そんな事は初めて言われたんですけど、ちょっと照れますね」
「僕も顔付きを褒められて照れてるけどね」
そんな会話をして微笑みを交わす昇と春澄。それから二人はお互いに見詰め合い、お互いの心境を読んでいるように思えるが、二人とも優しい瞳でお互いを見ているために、緊張の走る雰囲気にはならず、優しい空気が二人を包んでいるように見える。それだけ、お互いの事が分っており、今更になって相手の心内を探ろうという下心が無いからだろう。
二人の間にあったのは、お互いを思う、優しさかもしれない。少なくとも昇はそうであって欲しいと思うのであった。
それから春澄が瞳を閉じると、昇も瞳を閉じる。そして何かの合図があったかのように同時に瞳を開くと、今までの優しさは消え失せており、お互いに真剣で鋭い眼差しとなっていた。
完全に戦闘のスイッチが入った春澄から言葉を口にする。
「あまりアルビータを待たせるのはあれですから、そろそろ始めましょうか」
「そうだね、僕達が言葉を交わす時間はまだあるから、始めようか、最初で最後の……本気の戦いを」
「えぇ、アルビータが満足できる終焉を迎えるために、全力を尽くしてください」
「言われなくても分ってるよ。それじゃあ、始めようか」
そんな会話をした後に昇と春澄はお互いの陣営へと戻って行く。
それから昇達は円陣を組むと昇から話し始める。
「今回の戦いは……本当に全部、皆に任せちゃったけど。皆なら勝てると信じてるよ。だから……僕を信じて全力で戦って欲しい。僕は僕自身の戦いに挑むつもりだから。だから……戦闘の方は任せる

よ」

そんな昇の言葉に全員が頷き、シエラと琴未、そして最後にフレトが返事を返す。

「私は昇の剣となる事を決めた。だから、どんな時でも昇を信じてる、昇を信じて戦う。それが私の決めた私の戦いだから」

「こっちは大丈夫よ。まあ、確かにいろいろと不に落ちない事もあるけど、昇が私達を信じてくれるなら、私達も昇を信じるわよ。だから、私達は全力で戦う事が出来るんだから、ね」

「まあ、そういう事だ。戦闘の方は俺に任せておけ、ここ数日の特訓でも得られた物は多い。後は全力を尽くして戦うだけだ。だからお前は俺達の心配をするな、自分がやるべき事をやれば良い。それがお前のやる事だからな」

そんな返事に皆が昇に向かって微笑みを見せてくれる。そんな皆に向かって昇は一度だけ頷くと、はっきりとした言葉で返すのだった。

「うん、ありがとう」

お互いの信頼が形なった。少なくとも昇には、そんな風に思えていた。そんな時だった、戦闘の補佐役として同行していた与凪から言葉が出る。

「それよりも、そろそろ準備しないとですよ。あまり待たせるのもあれですから」

「うん、そうだね」

昇がそんな返事を返すと片手を円陣の中央に差し出す。そんな昇の手にシエラ、琴未と次々に手を重ねて行き、全員の手が集ると昇は瞳を閉じて精神を集中させる。それから昇は、昇にだけ感じ取れる足元に開いた黒い歪に意識を沈めるのだった。

そんな真っ黒な空間に降り立った昇の精神は暗闇の向こうから伸びてきた、赤い紐と白い紐を片手で詰む。合計で十本にもなった紐の束だけに、片手で掴むだけで精一杯な程の束になってしまった。それでも、昇は掴んだ紐を離す事無く、今度は沈んだ意識を浮上さ

せると目を覚ましたように瞳を開いた。それから全員を見回すと、皆が頷いたので、昇も頷くと、昇にだけ感じる事が出来る、手にした紐の感触に力を一気に流し込む。

「エレメンタルアップ！」

昇が発した言葉の後に精霊達だけではなく、フレトまで自分の中から別の力が自分の力となって、ドンドンと湧き出る力を感じていた。これがエレメンタルアップを掛けられた時の感触なのだろうと、フレトは湧き出る力に感心するのと同時に、自分が負けた事に少しだけ分かったような気がした。

エレメンタルアップによって全員の力が限界突破を果たすと、今度は切り札であるシステムを起動させる。

「ストケシアシステム、起動」

昇がそんな言葉を呟くと全員の頭にストケシアシステムの力が駆け抜ける。それから昇は更に言葉を続け、力を渡すのだった。

「管理者権限移譲、フレト＝グラシアス」

昇がそんな言葉を呟いた後に、与凪はすぐに目の前にモニターを映し出すと、ストケシアシステムの状況を確認して報告するように言うのだった。

「ストケシアシステムの管理者権限、フレトさんへの移譲を開始。システムとのシンクロ率、オールグリーン。ストケシアシステムの管理者権限の移譲が完了しました。これでストケシアシステムは完全にフレトさんが扱えます」

そんな準備が完了して、全員が昇から手を離して行く。それから精霊達は各々の精霊武具を身にまとい、武器を手にする。それはフレトも同じであり、戦闘には参加しないものの、アルマセットで完全に武装をしている。そんなフレトが与凪と咲耶の補佐でストケシアシステムの最終調整を完了させると、フレトは昇に向かって頷き、その行為で自然と皆の視線が昇に集まる。

そんな視線を受けて、昇は皆に向かって言うのだった。

「今回の戦いは敵を倒すためじゃない。アルビータさんの終焉を飾

るために、全力で戦う事に意味がある。だから……皆には、いつものように、アルビータさんを倒すつもりで戦って欲しい。僕には……こうやって皆に頼む事しか出来ないけど。だから、僕は僕自身が出来る事を精一杯やるつもりだよ。それしか……僕が出来る事は無いから。そのために……今回の戦いを皆に任せるのは僕の我が侭かもしれないけど……けど……だから信じたい、皆の戦いが、僕の考えが、間違ってないと。だから……信じてる、そして……ごめん」

そんな言葉で締め括ると琴未が軽く手を振りながら言ってくるのだった。

「別に謝らなくても良いわよ。まあ、今回の事は完全に蚊帳の外にさせられた気分だけど、それでも、私は信じてるから。昇なら……最良の結果を出せるって」

「琴未……」

琴未の言葉に昇は少しだけ安らぎを感じる事が出来た。そして、そんな琴未に続くかのようにミリアが元気良く、手を上げると、元気一杯に言うのだった。

「はいは～い。大丈夫だよ、昇。昇が考えてる事や、何を考えれば良いのか、まったく分からなくて考えなかったけど。私は昇を信じて精一杯に戦うよ」

ミリア……その言葉は嬉しいんだけど……もう少し考えて発言した方が良いと思うよ。昇がそんな事を思っている間にも、いつの間にかミリアの後ろに移動していたラクトリーがミリアの頭を片手で鷲掴みにする。それから、黒いオーラを出しながらいうのだった。

「ミ～リ～ア～、確かに今回の事情は複雑ですけど、少しは昇さんや皆さんの気持ちを考えるようにしなさいと教えたつもりですけど、いつの間に、この頭から、その事が抜け落ちたんでしょうかね」

「痛いっ！　痛いっ！　痛いっ！　ごめんなさいっ！　ごめんなさいっ！　お師匠様～、今の言葉はしっかりと覚えますから、だから許してくださいっ！」

どうやらラクトリーはミリアの頭を力一杯に握り締めているよう

だ。そのため、ミリアは半泣きになりながらも、そんな言葉を口して謝るが、ラクトリーの怒りは収まらずに、そのままミリアを引き寄せて個人指導という名のミリアにとっては地獄の説教が始まるのだった。

そんな光景に昇が苦笑いしていると、ふと手に温もりを感じた。昇がそちらに目を向けると、いつの間にかシエラが昇の手を取っていた。そんなシエラが昇に向かって言うのだった。

「私は、どんな状況でも、どんな状態でも、昇の事を信じてる。だから、今回の事は深くは聞かない。それだけ……昇を信じてるから。だから……私は昇の為に精一杯、戦う事が出来る。それが、昇の剣として昇の傍に居る事を決めた私の正直な気持ちだから」

「うん、ありがとう、シエラ」

「だから、その信頼の証として」

「止めんかっ！」

昇の唇に自らの唇を近づけようとしたシエラとの間に琴未が割り込み、二人を引き剥がす。こんな状況でも、しっかりと役得を得ようとするシエラ、そして、そんなシエラの企みを完全に粉砕する琴未。こんな状況でも、いつもの二人に昇は半分程、苦笑いしながら、残りの半分は安心して二人を見ていると。

「こうなったら、先に琴未を精界から追い出す」

「それはこっちのセリフよ、先にシエラから叩きのめす」

あの～、お二人共、武器を向ける相手を間違えてますよ～。まったくもって、いつも通りの展開を繰り広げる二人に昇の苦笑いすら引きつっていた。そんな二人を仲裁するために、閃華がやれやれといった感じで昇の横を通り過ぎて行くと、今度はフレトが昇の所にやってきた。

「まったく、お前らのところは相変わらず賑やかだな。こんな状況だというのに」

「はっきりと言われると耳が痛いです」

「ふっ、それは自業自得だな」

フレトの言葉にしょげる昇にフレトは鼻で笑いながら、当然だと言わんばかりの言葉を口にした後に、話を変えてきた。
「それよりも、こっちの準備は完全に完了したぞ。いつでも戦闘状態に入れるんだが……お前達が来ればの話だがな」
そんなフレトの言葉に昇は溜息を付くと、フレトに「ごめん」と告げてから、シエラ達を呼びに行き、再び全員を集合させるのだった。そして、再び集った一同に向かって昇は真剣な声で言うのだった。
「それじゃあ、皆、後は任せたよ。僕には皆を信じる事しか出来ないけど、信じてるから、皆が僕を信じてくれたように、僕も皆を信じてるから」
そんな言葉を口にする昇に全員から微笑が向けられる。その中で一人だけ、少し呆れたような声で返事をする者が居た。それがフレトだった。
「そんな事は今更になって言われなくても分っている。だから、ここは俺達に任せて、お前はお前のやるべき事をやって来い」
そんなフレトの言葉を聞いて、昇は少しだけ涙が流れそうになるが。少しだけ出てきた涙を拭うと全員に向かって言うのだった。
「うん、じゃあ、行ってくるね」
そんな昇の言葉に全員が頷いて昇を見送るのだった。そして昇は再び皆から離れて前に出ると、春澄も昇に合わせるかのように前に歩み出た。それから春澄が言うのだった。
「随分と賑やかだったですね。遠くから見てたけど、凄く……楽しそうでした」
そんな春澄の言葉に昇は何て答えれば良いのか迷っていた。それでも、何とか言葉を口にする。
「うん、まあ、賑やかなのは、いつもの事だからね。楽しそうに見えても、その、ちょっとだけ大変かな」
そんな言葉を口にすると春澄は軽く笑ってから微笑みながら、昇に向かって言葉を返すのだった。

「それこそが自業自得ですよ」
うっ、まさか春澄ちゃんからも同じ事を言われるとは思ってなかったよ。春澄の言葉にそんな事を思ってしまった昇。まあ、年下の春澄から、昇が楽しいが、苦労している事を見抜かれていたのだから、昇としては複雑な心境になっても不思議ではないだろう。
それでも、昇は気分を切り替えるために大きく深呼吸を一回だけすると春澄に向かって片手を伸ばす。
「それじゃあ、行こうか。春澄ちゃんの終焉まで、しっかりとエスコートするよ」
そんな昇の言葉を聞いて、春澄は驚きながらも照れたような顔をする。それから、昇の手を取ろうとするが、その前に真剣な言葉で昇に告げるのだった。
「さっき、命の提供で私に残っていた命の全てをアルビータに注いできました。だから……アルビータが命尽きる時、私の命も尽きます。その時まで、一緒に居てくれますよね？」
「当然だよ」
即答する昇に春澄は嬉しそうに微笑みながらも、微笑みの中に照れている自分を感じているのだった。それから春澄は昇の手を取ると、戦場の舞台となる場所から一番遠くにあるベンチまでエスコートしてもらって、二人して、そこに腰を下ろすと、既にフレトとアルビータが前に出て言葉を交わしているのだった。

昇達が戦場の舞台から降りて行くと、フレトはすぐに前に歩み出た。そんなフレトを見たアルビータもフレトに合わせるかのように前に歩み出るのだった。そして二人はお互いに睨み合うように対峙する。そして、言葉を発してきたのはフレトからだった。
「この前は随分と世話になったからな、今日はそのお返しにやってきた。あの滝下昇はお前の終焉に華を飾ってくれと言ってたが、俺はそんな気は無い。全力でお前を叩き潰すだけだ」

そんなフレトの言葉にアルビータは少し嬉しそうに笑みをこぼすと、フレトに向かって言うのだった。
「少年、それでこそ戦士の言葉だ。私は……ずっと、その言葉を待っていたのかもしれない。貴殿のその言葉に対して、私も最大限の力で答えよう」
アルビータの言葉にフレトも思わず、嬉しそうに笑みをこぼすと、両腕を組んではっきりと告げる。
「なら結構。だが、この前と違ってこっちは数も、そして、そちらの情報も持っている。そんな状況でもお前は俺達に勝てると思っているのか、いや、思っているのだろうな」
「もちろんだ、少年。戦うからには勝つ事を考えるのは当然。私としても負けて終焉を飾る気は無い。貴殿を打ち倒して終焉を飾るつもりだ」
「残念だが、お前の終焉は地に伏せたものにしてもらおうか。お前には完全契約と命の提供があるだろうが、俺には数の有利と切り札がある。それを駆使してお前を倒す。必ずお前を地に落としてやる」
「良い言葉だ、少年。それでこそ、最後に選んだ甲斐があったというものだ。最後に戦士、いや、勇者の言葉を聞けてよかった。では、そろそろ始めようではないか。終焉の戦いを」
「望むところだ。貴様の終焉、俺達の勝利という華で飾ってやるよ」
「ならば……来るが良いっ！」
「もちろんだっ！」
事がここに至れば言葉は不要とばかりにアルビータは己の武器であるツインクテラミノアを構えるのと同時に、フレトは後ろに跳ぶのと同時に地面に向かって風を放つ。その風の反動でフレトは大きく後ろに跳ぶと、そんなフレトの代わりとばかりに琴未と閃華が前に出る。その二人の両脇を固めているのがミリアとラクトリーだ。そしてシエラとレットは既に宙に舞い上がっている。そしてフレトのすぐ前には半蔵と、既に陣形が組み上がっていた。どうやらフレトがアルビータと離している間に与凪と咲耶が陣形を組み立ててい

たようだ。
　そんな陣形の最後方に下がったフレトの目の前に、すぐにストケシアシステムの操作ボールとモニターが並ぶ。これでお互いに戦闘準備が整ったのと同じだ。後はどちらから仕掛けるかである。
　フレトはすぐにストケシアシステムをコントロールするボールに両手を乗せると、自分達の配置とアルビータの位置を確認する。それからフレトは琴未と閃華に戦闘開始の先陣として進めようとするが、意外にもアルビータの方が先に動いて、攻撃を仕掛けてきたのである。
　先の戦いでは防戦が多かったアルビータだけに、フレトにとっても、まさかアルビータが最初から攻勢に出てくるとは予想外だった。それでも、フレトはすぐにアルビータの動きに対応するためにストケシアシステムを駆使する。
　その頃、先陣である琴未と閃華は迫ってくるアルビータにフレトの指示を待っていた。琴未としては、敵が迫ってきたからには、自ら出るつもりだったのだが、意外にもミリアとラクトリーが琴未と閃華の両脇を駆け抜けると、アースシールドハルバードとアースブレイククレセントアクスが振るわれる事になった。
　ミリアとラクトリーの攻撃にアルビータもツインクテラミノアで防ぎ、そのまま弾き飛ばそうとしたが、ぶつかり合った武器同士はお互いに動きを止めてしまった。正確にはアルビータの強烈な一撃をミリアとラクトリーが完全に相殺して動きを止めたと言えるだろう。
　これには、さすがのアルビータも驚きを示した。アルビータも多少とはいえ、命の提供で攻撃の威力を上げているのだが、その攻撃をミリアとラクトリーは完璧に受け止めてしまったのだから。前回の戦いでは、とても考えられない事だ。けれどもアルビータには察しが付いたようだ。そんなアルビータが思う。
　まさか……エレメンタルアップの能力かっ！　それしか考えられないか、こちらの地の精霊は前回の戦いでは私の攻撃を受け止める

事が出来なかった。今でも命の提供で強化されている私の一撃を完璧に受け止めたのだ。それだけしか考えられないか。

アルビータが素早く、そんな思考を巡らすが、それ以上の事を考える事が出来なかった。いや、正確には考えている時間が無かったのだ。ミリアとラクトリーがアルビータの攻撃を受け止めている間に琴未と閃華が一気に前に出てきて、アルビータは出てきた琴未達に対処しなければいけないからだ。

だが、アルビータの両手は己の精霊武具であるツインクテラミノアで塞がっている。この状況から琴未と閃華が繰り出してくる斬撃と刺突を交わすのは出来ないだろう。少なくとも、フレトは、これでアルビータにダメージを与えられると思っていた。

だが、アルビータはそれほど甘い敵ではなかった。アルビータは手にしているツインクテラミノアを精一杯に押し出す。そうなると受け止めているミリアとラクトリーは押し出されてくるツインクテラミノアを受け止めるだけで精一杯になる。つまり、これでミリアとラクトリーの動きを封じたのも同じだ。だが、アルビータの反撃はここから始まるのだった。

なんと、アルビータは押し出したツインクテラミノアを軸に跳び上がり、そのまま両足で琴未と閃華を蹴飛ばしてしまったのだ。そう、これこそがアルビータの狙いだったのだ。ツインクテラミノアを思いっきり突き出されてしまえば、ミリアもラクトリーも受け止めるだけで精一杯になる。つまり動く事が出来ずに、その場に釘付けになったのも同じだ。

そんな二人とは正反対にアルビータは特定の方向になら動く事が出来た。それがツインクテラミノアを軸にした円周運動である。つまり、ミリアとラクトリーがツインクテラミノアを支えてくれたからこそ、アルビータはそこを軸に円周運動、反時計周りに動く事が出来たのだ。琴未も閃華もアルビータが飛び上がって、蹴りを放ってくるなんて予想外どころか予想も出来なかったために、なんとか精霊武具でアルビータの蹴りを防いだものの、蹴り飛ばされてしま

ったのだ。
けど、だからと言ってフレト達の攻撃が終わったワケでは無い。突如としてアルビータの後ろに姿を現した半蔵がアルビータの背中を空斬小太刀で斬り付ける。その攻撃は見事にアルビータの背中を斬り付けたものの、アルビータの防具と筋肉に阻まれて、ほんの浅手に終わる事になってしまった。どうやらアルビータには多少のダメージを覚悟したからこそ、半蔵の攻撃には対処しなかったのだろう。

半蔵もフレトも一撃必殺でアルビータに攻撃をしたかったのだが、それだと、どうしてもアルビータの反撃範囲に飛び込まないといけない。だからこそ、フレトは半蔵が最も得意としている空間移動を利用した一撃必殺を諦めて、確実にダメージを与える攻撃を選んだのだ。

それにフレトとしても、数が揃っているだけに、無理に攻め立てる理由は無い。ここは数の有利を利用して、小さくてもダメージを蓄積させた方が確実に勝機を掴める事が分っていた。だからこそ、半蔵には確実にダメージを与えされる攻撃を選んだのだ。

その一方でアルビータは半蔵の攻撃を受けながらも、大した傷ではない事が分っていたのだろう。傷を無視して着地すると、今度はそのまま身体を回転させる。なにしろ、アルビータの精霊武具であるツインクテラミノアは未だにミリアとラクトリーに押さえ込まれたままだ、その二人を振り払うのと同時に半蔵を退かせるために、アルビータは着地した衝撃を利用して、多少回転しながら着地、そのまま一気に身体を回して、ツインクテラミノアを防いでいるミリアとラクトリーごと振るって、そのまま二人を弾き飛ばしてしまったのだ。

これでミリアとラクトリーは距離を取られて、少しの間は攻撃が出来ないとアルビータは考えて、次の手を考えるが、アルビータが考えているほど、今のフレトは甘くはなかったのだ。

今まで空中に居た、シエラとレットが、そのまま二人のフォロー

に入り、二人を受け止めるようにいなすと、そのまま空中で回転して、再びミリアとラクトリーをアルビータに向かった投げ付けてきたのだ。これも、二人が勢い良く、弾き飛ばされたために、シエラもレットも二人を受け止めるのではなく、勢いを利用して、地に足を付けないまま二人の体を掴むと、その場で一回転して、アルビータに投げ付けて、二人に突撃させるという荒技に出てきたのだ。

けれども、アルビータは二人の突撃に慌てる事はなかった。なにしろ、二人とも大地の精霊。そんな二人が投げられるように突撃してくるだけである。だから、二人の直線上から移動すれば二人の突撃を避けるのは簡単だった。そのため、アルビータはすぐに横に向かって一気に移動するとミリアとラクトリーがお互いに激突する形となってしまった。

けれども、この二人は伊達に師弟関係をしているワケではないし、フレトもそんな事は計算済みだった。ミリアとラクトリーは武器を持っていない手をお互いの方向に向かって突き出すと、二人は激突すると思いきや、すれ違い、その瞬間にお互いの腕を組むと勢いを殺すように空中で何度か回転しながら地面に足を付けるのだった。

そう、こんな荒技がアルビータに通じるとはフレトも考えては無い。そのため、シエラとレットはお互いにアルビータを挟む形で、二人が進む直線上の真ん中に空間が出来るように投げ付けたのだ。そのため、二人は空中で腕を組む事が出来て、そのまま回転して勢いを殺し、着地したというわけだ。

けれども、これで行動直後のシエラ、レット、ミリア、ラクトリー、そして半蔵と、すぐに動ける者が制限された。これで少しは楽になると思いたいアルビータだが、敵にまだ動ける者が居るのを察している。だからこそ、アルビータはすぐに、その二人に対して迎撃体勢を取る。

そしてぶつかり合う、ツインクテラミノアと龍水方天戟と雷閃刀。そう、アルビータの移動先を計算に入れていたフレトはすぐにアルビータに追撃が出来るように琴未と閃華を配置していていたのだ。

だが、ここでアルビータにとっては計算外の事が起きた。確かにツインクテラミノアで閃華の龍水方天戟は受け止めたが、琴未の雷閃刀を受け止めた感触がなかったのだ。そのため、アルビータの視線がすぐに琴未に向くと、琴未には地面に膝を付いて、雷閃刀を振り抜いたような格好をしていた。

その琴未の姿に疑問を抱くアルビータ。そんなアルビータに向かって閃華が言うのだった。

「ここは公園じゃから噴水ぐらいしか水場が無かったからのう。じゃから、その程度が精一杯じゃったんじゃよ」

そんな閃華の言葉を聞いたアルビータが琴未を凝視すると、琴未の姿はすぐに全身が水となって地面へと落ちて行った。

「虚像水映（きょぞうすいえい）」

そう、先程のアルビータに攻撃をしてきたのは閃華が水で作り出した琴未の姿なのである。そして本物の琴未はというと、先程の荒技とも言える突撃でアルビータの移動先が制限されているために、その死角に移動する事も簡単な事である。そのため、アルビータの対応が大きく遅れる事になる。

―新螺幻刀流　飛翔乱舞―

アルビータの死角から飛び出してきた琴未が勢いを利用して、アルビータの横を通り過ぎるのと同時に一閃を斬り込むと、琴未はすぐに着地して別方向へ跳んで、再びアルビータに一閃を斬り込んだ。

この技は相手の死角から死角へと跳びながら斬り付ける技である。そのため、アルビータもすぐには琴未の姿を捉える事が出来なかった。これで琴未が有利に攻撃が出来ているようにも見えるが、なにしろ、ツインクテラミノアの片方は閃華が抑えているために、琴未も跳ぶ方向が制限されてしまっているのである。

だが、アルビータとしても琴未の攻撃だけに気を取られていては、閃華の攻撃を受ける事は分っている。だから、琴未の攻撃は最初か

ら五回だけはアルビータを斬り付ける事は出来たが、それだけ見れば、アルビータも技の軌道が分かるようになったのだろう。徐々に琴未の攻撃を防いで行き、攻撃が十回目に達すると完全に片方のツインクテラミノアで防がれてしまった。

琴未はそれでも数回ほど攻撃を入れるが、完全に防がれたために攻撃手段を変えるために一旦退くしかないと判断を下すしかなかった。それはフレトも同じであり、琴未と閃華に一旦下がるように指示を出す。

だが、アルビータも間合いに入っている琴未と閃華を、そう簡単に逃がすともフレトには思えなかった。けど、ここでフレトもアルビータをも驚かす行為を琴未はやってのけたのである。

琴未は一旦退くフリをすると、当然のようにアルビータのツインクテラミノアが琴未に攻撃を入れるために振るわれる。だが、琴未はその瞬間を待っていたかのように、後ろに傾けた身体を一気に前に持ち出すと、斜め下に振るわれたツインクテラミノアの攻撃を紙一重で避ける。それから、一気に前へ出て、ツインクテラミノアの柄に足を掛けると、そのまま上に跳んだのである。

―新螺幻刀流　乗り刀返し斬り―

本来なら相手の武器を琴未の体重と踏み込んだ勢いで封じるのだが、さすがはアルビータといったところだろう。琴未がツインクテラミノアの柄に思いっきり踏み込んでも、ツインクテラミノアの動きを封じるどころか、動きを制限する事すら出来なかった。それでも琴未にとっては充分だった。

アルビータの上を取った琴未が、そのまま重力と雷閃刀の重さを利用して、落下しながら一気にアルビータに斬り込む。まさか、こんな反撃があるとは思わなかったアルビータの左肩を琴未の雷閃刀が斬り裂く。

そのためにアルビータには激痛が走り、集中が乱れる。その間に

琴未と閃華は一気にアルビータの間合いから出てしまったのだ。琴未に下がるように指示したフレトだが、まさか、こんな手段を使って後退するとは、フレト自身も考えられなかった事でもあり、驚いているのはアルビータだけではなくフレトも同じだ。

けれども、確実にダメージを与えた事には変わり無い。フレトは思いも掛けなかった琴未が発した攻撃が通った事に驚きの声を上げるのだった。

「下がれとは言ったが、まさか、こんなダメージのおまけを付けてくれるとはな。普段では騒がしいだけの女だと思っていたけど、意外とやるものだな」

そんなフレトの言葉が思考が繋がっている琴未にも聞こえたのだろう。琴未から『騒がしくて悪かったわね』という文句が来た。そして、フレトの隣に居る与凪はそんなやり取りに笑いながらも自分の考えをフレトに話す。

「ふふふっ、まあ、琴未は元々、新螺幻刀流という日本の剣術を習っていたですからね。閃華さんと契約をする前でも、琴未に木刀を持たせれば、その辺の悪ぶってる人は簡単に叩きのめしてましたよ」

「それが今の攻撃と何の関係があるんだ？」

与凪の言いたい事が分からないフレトが率直に与凪に尋ねると、与凪は軽く微笑みながらフレトに説明するのだった。

「つまりですね。契約をする前から剣術を身体に叩き込んでいた琴未だからこそ、属性に頼らない攻撃も得意というワケです。だから、この中で最も属性に頼らない攻撃が出来るのは琴未なんですよ。この戦い、そんな琴未をどう使うかが鍵になってくるかもしれませんね、というのが私の意見です」

「なるほどな。確かに契約をする前から、ある程度の強さを持っていれば、無理に属性に頼る事もしないという事か」

「そうですね。だから琴未も最初は剣術と属性攻撃を別けて使ってましたけど、今では両方の特性を生かした攻撃が出来てます。でも、そんな琴未だからこそ、属性に頼らなくても充分に戦えるというわ

けですね。閃華さんも、その辺の事は分ってますから。だから自分に注意を引き付けて、琴未が充分に攻撃を出来る状況を作ったというわけですね」

「俺は二人で攻撃しろと指示しただけだが、そんなアレンジを加えてくるとはな。やはり滝下昇のようには行かないか」

そんな事を口にしたフレトに対して与凪とは逆側にいる咲耶が口を開いてきた。

「主様、琴未様と昇様は幼馴染と聞いております。そんな二人だからこそ、分かる物があるのでしょう。それに主様と昇様は違います。主様は主様の戦い方をすれば良いと思います」

「……その通りだな。俺は滝下昇ではない、フレト＝グラシアスだ。だから滝下昇の真似なんてする必要も無いし、してはいけないんだな。俺は俺の戦い方を貫くまでだ」

そんなフレトの頼もしい言葉に咲耶は微笑を向け、与凪は少し楽しそうに言うのだった。

「その通りですね。さて、戦いはこれから本番ですよ。それでは、フレトさんの戦いぶりをじっくりと拝見する事にしましょうか」

そんな言葉を口にしてきた与凪にフレトは訝しげな目で与凪を見ながら言うのだった。

「なんというか、自分だけは蚊帳の外で他人事のようにいうんだな」

そんなフレトの言葉に与凪は楽しそうに答える。

「いえいえ、そんな事はありませんよ。決して、楽しんで補佐や見物をしているワケじゃないですよ」

絶対に嘘だろ。というか、見物とはっきりと言ったな。なんだか……滝下昇の苦労が少しだけ分かったような気がするのは気のせいだろうか。与凪の言葉に思わず、そんな事を思ってしまったフレト。そんなフレトの横では、本当に楽しげに与凪がキーボードを叩きながら情報整理をしている。そんな与凪を見て、フレトは思いっきり息を吐くと、気分を切り替える。

なにしろ……戦いの幕は上がったばかりなのだから。

第百四十四話　終焉の開幕（後書き）

はい、そんな訳で、長かった、百年河清終末編もいよいよラストバトルに突入しました～。それにしても、最後は美味しい所を琴未が持って行ったな～。普段は目立たないだけに、ここで大活躍かな。

でもでも、アルビータも、これだけの数を前にして、ダメージは喰らっているものの、その奮闘ぶりは見事ですね～。まあ、全力前回のアルビータになったら、どうなるのかは分かりませんからね～。

という訳で、数話ほどバトルが続きますっ！！　まあ、途中でちょっとずつ回想やら、昇達の会話やらを入れて行く、つもりですから。バトルだけではない。というのが、今後の展開になりそうですね～。

まあ……次話については現段階でだとまったく考えて無いんだけどね（笑）　まあ、それはそれで何とかなるでしょう。

それにしても……疲れた～、気が乗らない、誰か甘やかして～。というのが今の私の気分です。そんな訳で、甘やかしてくれる人を大募集です（笑）　出来る事なら金銭的にっ！！（笑）　それと優しさをくださいっ！！　それで満足しますからっ！！　というか、それぐらいやってもらっても良いよね？　それぐらいなら許されるよね？

……えっ、ダメ。んっ、とりあえず、宇宙に行って反省して来い？　って！！　いつの間にか私がロケットにワイヤーで縛り付けられているんですけどっ！！　というか大気圏はどうするのっ！！

熱いよ、凄く熱いと思うよ。……えっ、我慢で乗り切れ、行きも帰りも……あ～、帰りも大気圏に突入して落っこちていくんですね～。って、そんな事がっ！！

……作者発射……

……作者帰還……いろいろと修復中……

赤かった、地中が赤かったよ～。というか成層圏を突き抜けなかった事は大問題だと思うけど。えっ？　私だからオッケ～。

……そうですか～。

という事で、そろそろ戯言にも飽きてきたので、締めますね～。

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

そして、これからもよろしくお願いします。更に、評価感想をお待ちしております。

以上、気付けば一一月……今年中に百年河清終末編は終わらないかな、とか思ってしまった、葵夢幻でした。

第百四十五話　戦いの中にある矜持

命の精霊とは特別な存在、いや、許されざる存在でもあるかもしれない。それは古代技術によって作り出された精霊王。その精霊王が生み出してきた精霊達。その精霊達も命という生命機関を有しているからこそ、精霊にとっても命は大事な物と言えるだろう。

それに精霊には繁殖能力はあるが、その本能は無い。つまり、精霊王に作り出された存在だからこそ、命を次に繋げるという本能が無いのだ。全ての精霊は精霊王から生み出されているのだから。

だが、その精霊王でさえも無尽蔵に精霊を生み出せるワケでは無い。生み出せる精霊に限りがあるからには、いや、限りがあるからこそ、精霊達は命を大事にし、死ぬという概念を持たないように不老長寿を手にした存在となった。そんな精霊達が戦う争奪戦だからこそ、精霊は死なずに、そして契約者も死なないようになっている。

全ては……命という物を尊き存在と精霊王が認識しているからである。だからこそ、争奪戦では死という概念を無視した戦いが行われているのである。精霊も契約者も……死なないと思っているからこそ全力で戦える。それは戦闘を激化させる要因となっているのかもしれないが、そんな戦いを勝ち残った者が精霊王の器、エレメンタルロードテナーに相応しいとされているからである。

なら、精霊は絶対に死なないのか。そんな疑問が湧き出たのなら否である。精霊も特定の条件下では死ぬ事もある。そのほとんどが自らの意思で死を求める事が多い。だが、そんな精霊は今まで生きてきた中で充分に役目を果たしたと感じたからこそ、自ら死を求めるのだ。精霊にとっては、それが普通だった。

なら命の精霊はどうだろう。命の精霊は特別な存在。人間にとって精霊が特別な存在と思えるように、精霊にとっても命の精霊は特別な存在なのだ。つまり、命の精霊は精霊でありながらも精霊達との共存が出来ないのである。

それは精霊も命という存在を維持する能力を持っているからだ。だからこそ、命の精霊は同じ精霊世界に居る精霊達とも触れ合う事が出来ない。それどころか、命の精霊は精霊世界に関与が出来ない。ただ見ているだけである。そう、それは精霊が人間世界を見るかのように。

特別たる命の精霊。その特別たる存在だからこそ、同じ精霊でも命の精霊は隔離されるように精霊世界から切り離され、命の精霊だけが存在できる世界を作り出してしまった。それは人間も精霊も同じく命という存在を感じる事は出来るが、見たり聞いたりする事が出来ないからだ。だからこそ、命の精霊も命という存在と同じように、人間からも精霊からも見たり聞いたりする事が出来ない存在となってしまった。

そんな隔離された世界でアルビータは一人で数え切れないぐらいの昼と夜を過ごしてきた……たった一人で。そんなアルビータも争奪戦にだけは参加が出来る事だけは知っていた。そう、争奪戦の時だけは特別な存在となっている命の精霊である、アルビータも他の精霊と同じように契約者を選び、争奪戦へと身を投じた。

初めて触れ合う精霊や人間、最初は楽しい事ばかりだった。だが、その考えはすぐに変わる事になる。それは契約者が命の精霊である、アルビータの能力を使って、不老長寿を手にしようとしたからである。

戦いの最中、相手を倒すのは当然の事。だが、争奪戦では相手を殺す事が出来ないのが普通であった。だが、アルビータと契約した契約者が発揮する能力は人を狂わすのには充分だった。命の強奪で相手が死ぬまで命を奪い、自分の命を延命させた。そして、争奪戦が終わっても、契約者は自分の命を永らえる行為を止めようとはしなかった。

争奪戦が終わっても契約者と精霊との関係は変わらない。ただ、契約者が死ぬか、契約の解除を口にしない限りは契約者と精霊は常に共にある。だからこそ、アルビータが一番最初に契約した主は争

奪戦が終わっても、契約者狩りと称して契約者との戦いを続け、勝ち続けて、相手の命を奪って自分の物にして行った。

そんな事態に、当時にエレメンタルロードテナーが黙って見ているワケがなかった。当時のエレメンタルロードテナーは討伐隊と称して契約者と精霊を集めた。そんなエレメンタルロードテナーの呼び掛けに沢山の契約者と精霊が殺到する事になる。皆、分っていたのだ。次に狙われるのは自分であってもおかしくは無いという事を。

そんな状況にアルビータは悲壮感を覚えながらも、何度も契約者を説得しようとしたが、契約者の暴走を止める事は出来なかった。誰だって、相手を殺す事で自分が永遠に生きられるなら、誰だって殺す事にちゅうちょはしないだろう。そんな契約者の下にエレメンタルロードテナーが自分を殺すために討伐隊を組織した事を知る事となる。

相手はエレメンタルロードテナー、争奪戦で最も強き者であり、その配下には続々と契約者と精霊が集っているのである。故にアルビータは契約者と共に逃げ回る事になってしまった。だが、そんな逃亡生活がいつまでも続くワケがなかった。なにしろ、多くの契約者と精霊がアルビータと、その契約者を探し回っているのだから。だからアルビータ達が見付かるまで十日とも掛からなかった。

そして……エレメンタルロードテナーの手によって、最初の契約者は殺され、命を落としたのであった。それが最初の争奪戦が終わった後で行われた出来事だった。

アルビータも主たる契約者が悪い事は充分に分っていた。だからこそ、二度目の争奪戦では、決して相手を殺そうとはしない。強き志を持った者を主として選んだ。

だが、アルビータの能力は、そんな主でさえも変えてしまう。人は歳を取れば老いて行く、誰も、その運命には抗えない。だが、アルビータの能力なら、その運命に打ち勝つ事が出来る。だからこそ、二度目の主も争奪戦が終わって数十年後に同じ契約者狩りを始めてしまった。

そんな二人の契約者を見て、アルビータはやっと気付くのであった。自分自身の能力が人を変えると、どんなに立派な人間でも老いて行く、自分を目に知れば命を求めると。故に、それ以降、アルビータが争奪戦に参加する事は無かった。

その後はアルビータにとって無為な日々が続いた。まるで、流れ続ける河のように、ただ世界を見つける日々、何も出来ない日々。そんな、目的も理想も意思さえも分からなくなってしまったアルビータは、ただただ、世界を見ながら存在している。たった、それだけの存在となってしまったのだ。

そして、そんな無為な生活は長きに亘って続いた。流れ続ける大河のように、ただ、流れに身を任せ、その場に居続けた。決して流れが絶える事が無い……河のように。

なんとも楽しい時か。アルビータの中にはそんな想いが生まれていた。無為な日々は春澄との出会いで終わりを告げた。そんなアルビータにとって、最も幸福と言える時は今なのかもしれない。それだけアルビータは充実感を身に感じていた。

それは春澄の命を全て背負っているからこそ、感じる事が出来た、最高の時なのかもしれない。今までの契約者は自分の命に拘って、自らの命を永らえる事を選んできた。だが、春澄は自分の命を削り、人生という道に色鮮やかな華を添えてきた。そんな春澄の命をアルビータは感じながら、精霊としての本分。主である春澄の為に戦える、春澄の命を使っているからこそ、アルビータは最後の戦いに身が振るえるほどの充実感があったのだろう。

それでも、戦いは始まったばかりである。先程は琴未によって確実にダメージを入れられてしまったが、その事でアルビータも気付いたようだ。そう、フレト達が使っているストケシアシステムを。

かといって、ストケシアシステムを見破ったワケではない。ただ、フレトが後方に位置を取っており、戦いに参加して来ない事が妙だ

とアルビータは思ったのだ。なにしろフレトとアルビータは一度だけだが戦っている。だからこそ、アルビータはフレトが自ら前線に立つタイプの契約者だと思っていたが、今回の戦いでは一度も前線には出てこずに後ろで何かをしている。その事だけでも、アルビータにはいくらかの察しが付くというものだ。そんなアルビータが思考を巡らす。

あの少年は前線で自らも戦う事を基礎としていると思ったが、今回はそれをしてこず、前回以上に精霊達の動きが合っている。確実に少年が後ろで何かをしている事は確かだろう。だからこそ、精霊達もここまでの動きが出来るのだろうな。そんな精霊達に、どうやって立ち向かうか……出る答えは考えるまでもないか。私の戦いに退がるという文字は無いっ！　正面から打ち倒して行くのみっ！

正々堂々とした真っ向勝負、それこそが私の戦いだっ！

完全契約によって完全な力を出せるアルビータは身体の奥底から力を搾り出す。命の提供を使っても良いのだが、まだ戦いは始まったばかり、しかも先程は琴未のよって左肩にダメージを残す事になってしまった。これはアルビータが前回の戦いでフレト達の戦力を完全に読み違えた結果だという事をアルビータは分っていた。だからこそ、次こそはと全力を出してきたのだ。それでもダメなら、命の提供を使うだろう。だが、アルビータにとって命の提供は少しずつは使っているもの、その強大な力は勝敗を分けるほどの切り札になる。だからこそ、アルビータは命の提供を温存しておきたかったのだ。

アルビータが本気を出してきた事は、フレトにもすぐに分かった。なにしろ、アルビータからは今までに無い程の威圧感があり、放っている気合は空気も揺るがすほどだった。

今までとはまったく別人のように力を出してくるアルビータ、そんなアルビータを見てフレトの頬に一筋の汗が伝って滴り落ちる。アルビータの強さは充分に分っているつもりだったが、今回は前回の戦いと違っている。なにより、フレト達には琴未をはじめ、四人

もの戦力が増えている。
　その点だけを見ても、アルビータが早い段階で全力を出してくる事は充分に予想はしていた。だが、これ程の力を出してくるとはフレトも思ってはいなかった。前回の戦いでは、最後の方に命の提供と全力を出してきたアルビータに、フレト達は反撃もままならずにやられてしまった。だが、今回はそうは行かないとばかりにフレトもアルビータの威圧感に動じる事無く、堂々と後方に立って、ストケシアシステムに集中するのだった。
　そして、アルビータの力を最も感じていたのが、前線で戦っているメンバー達だ。ここまで強烈な威圧感、肌が粟立つ程の力を感じていた。それだけでアルビータの強さが分かるといった感じた。そんな中でアルビータが動く前に琴未の口が動いた。
「どうやら、あちらさんは全力で来るみたいね。さっきは奇襲が上手く行ったけど、次は行かないか。それにしても、結構深く斬り付けたつもりだけど、まるでダメージが通っていないみたいね。なんか傷も塞がっているみたいだし」
　そんな琴未の言葉に対してラクトリーから返事が来た。
「あの精霊は、既に精神が肉体を凌駕している状態です。なので、琴未さんが付けた傷の痛みなどは既に感じてもいないでしょう。ですが、確実にダメージを与えた事は確かです。確かに血は止まってますが、傷口までも癒したワケではありません。今は全身の力を搾り出す事によって、一時的に傷口を筋肉で締め付けているだけです」
「どうやら、そのようじゃな。なにしろ、あの体躯だからのう、琴未の雷閃刀で深く斬り付けたつもりでも、筋肉の厚さが琴未の一撃を深くは入れられなかったのじゃろう。じゃから琴未は深く斬り付けたつもりでも、実際はさほどに深手は負ってはいないという事じゃな。それにラクトリー殿の言ったとおりに精神が肉体を凌駕しておる、今では琴未が付けた傷の痛みすらも感じておらんのは確かみたいじゃな」
　ラクトリーに続いて閃華がそんな事を言って来たので、琴未はや

れやれという感じで溜息をついた後、雷閃刀を構えながらも口を動かす。

「それだけ一筋縄では行かない相手ってワケね。それで、そんな相手に、こちらの大将さんはどんな手を打ってくるのかな」

別に琴未はフレトの指示に対して信頼していないワケではないが、やっぱり戦い方が普段とは違い。しかも指示を出しているのが昇ではなく、フレトだからこそ、戦い方に違和感を覚えても不思議ではない。それでも、ここまで戦えるのはストケシアシステムとエレメンタルアップがあればこそだ。

この二つが無かったら、こんなにも早くにアルビータが全力を出しては来なかっただろう。それが琴未にも分っているからこそ、ちょっと皮肉って、そんな言葉を口にしたのだが、ラクトリーは、そんな琴未の言葉にも笑みを浮かべながら言うのだった。

「今回の戦い、マスターなら勝てると信じたからこそ、昇さんは戦いの全てをマスターに託したんですよ。今はマスターを信じて、こちらも全力を出すしかないでしょうね」

「それは分ってるんだけどね～、なんか」

琴未がそんな事を言い掛けた瞬間、フレトから指示が全員の頭を一気によぎってく。そして、フレトの指示を聞いた琴未が驚きの声を上げる。

「嘘っ！　マジでこの手で行くの？」

思わず、そんな言葉を口にしてしまう琴未。そんな琴未に対して、閃華とラクトリーは琴未ほどではないが、驚きを苦笑いに変えて、それぞれに思った事を口にするのだった。

「この手は……賭けですね。あちらが全力を出して来たからには、こちらも全力で行かないといけない。けど、相手に命の提供があるからには、命の提供を使って体力を回復してくる可能性があります」

「じゃからこそ、こちらは少しでも体力を温存するために、この手を選んだんじゃろ。じゃが、上手く行けば、確実に大ダメージを入れ続ける事が出来るんじゃ。じゃが……逆に下手を踏めば」

「こっちが痛手をこうむるってワケね」
「まあ、そういう事じゃな。そのうえ、次の攻撃が出来ないという、おまけ付じゃ」
琴未とは正反対に閃華のお気楽な言葉で締め括った会話が終わった時だった。琴未のところに舞い降りてきたシエラが口を開く。
「あまり気が進まないけど、こんな指示が来たからには従わないといけない。だから、仕方ないと諦めた。琴未、行くから掴まって」
「シエラ、あんたの順応能力がちょっとだけ羨ましいわ」
琴未の隣で、宙に浮きながら、上から手を伸ばしてきたシエラに対して、そんな言葉を口にする琴未。そんな琴未に閃華はやれやれとばかりに溜息を付き、ラクトリーはシエラと同じく降りてきたレットの手を取ってシエラ達と動きを合わせるために今は待機している状態だ。
そんな状態にも関わらずシエラはサラッと普通の事みたいにいうのだった。
「私は昇の剣。だから昇が今回の戦いをフレトに託したのなら、私は昇が信じたフレトを信じてるだけ」
そんなシエラの言葉を聞いて、琴未は思いっきり溜息を付くとシエラの手を取るのだった。それからシエラに向かって言葉を掛ける。
「分かったわよ。私も昇を信じてるから、気持ちは分かるわよ。だからシエラ、下手を打たないでよね」
「それはこっちのセリフ、琴未こそしっかりしないと意味が無い」
「そんな事は分ってるわよ」
「ほれほれ、二人とも、そのへんにしておくんじゃな。あちらさんは既にこっちに突撃してくる構えを見せておるんじゃから」
そんな閃華の言葉にやっとシエラと琴未はアルビータに目を向けると、ツインクテラミノアを肩から後ろに回して、既に突撃体勢に入っていた。そんな状況にシエラと琴未の目が真剣なものになるとお互いに頷き、シエラはレットに視線を向けると、レットも頷いてきたので、それを合図にシエラとレットは再び空へと舞い上がるの

だった。

だが、その頃にはアルビータが既に駆け出し、フレトの前に立ち塞がっている閃華の元にミリアと半蔵が合流してきた。三人、横並びになってアルビータに対して迎撃体勢を取る閃華、そんな閃華が二人に向かっていうのだった。

「良いな、ミリア。相手の一撃を完璧に受け止めるんじゃぞ。後は半蔵殿に合わせるんじゃ」

そんな閃華の言葉にミリアからは返事が無かった。まあ、正確には、既に間合いに入りかけていたアルビータに対処するためにミリアも迎撃体勢を取っており、閃華と呼吸を合わせて、同時に前に出るしかなかったからだ。

迎撃に出来た閃華とミリアにアルビータはツインクテラミノアを渾身の力を込めて一気に振り下ろす。長い刃が閃華とミリアに迫るが、二人は見事にツインクテラミノアを受け止めたのだが、それだけで精一杯であり、そのうえ受け止めた衝撃だけでダメージとなり痛みが身体を走るのと同時に二人が立っていたところを中心に地面が円形に陥没する。

それだけアルビータの一撃が凄まじい破壊力を持っていた事は分かるというものだろう。閃華もエレメンタルアップがあればこそ、受け止められた感じるほどにアルビータの一撃は重く、衝撃だけでも充分に痛みを感じた。

だが、これでアルビータの初撃を防いだ事は確かだ。渾身の一撃を放った直後だからこそ、アルビータはすぐに動く事は出来ない。そこに素早く動ける半蔵が一気に動き出した。ツインクテラミノアを受け止めた二人の間を跳び上がりならが通過すると、身体を一回転させて足を開く。そう、それこそが半蔵の目的だった。身体を一回転させた事で威力を増した踵（かかと）がアルビータの両腕に振り下ろされる。

両腕を狙った、踵落としである。更に腕を狙う事で閃華達への負担を減らす効果も出ると思ったからこそ、半蔵はあえて体術で攻撃

を仕掛けたのだが、アルビータの両腕は半蔵の攻撃に対してまったく動く事無く、半蔵もぶ厚いゴムを蹴ったような感覚しか得られなかった。

それだけアルビータの筋肉が硬い事を示しているのだが、半蔵が狙ったのは腕の内側にある急所だ。身軽で的確な攻撃が出来る半蔵ならではの攻撃と言えるだろう。だが、そんな半蔵の攻撃にもアルビータはダメージは元より、痛みすら感じていないようだった。

そして目の前に居る半蔵を迎撃するために、アルビータは力任せに両腕を開いて閃華とミリアを横に弾き飛ばすのだった。そして、半蔵に向かって左の両刃斧を突き上げるが、半蔵も伊達に百戦錬磨ではない。

アルビータが両腕を開いた時は半蔵は重心を前に出して、既に片方の足をアルビータの肩に掛けていた。そしてアルビータの両刃斧が半蔵に届く前に、既に膝を折っていた半蔵はアルビータの顔を蹴るのと同時に折っていた膝を一気に伸ばす。そのため、自ら後方に飛ぶのと、アルビータの顔を蹴った衝撃が一緒となり、瞬時にして半蔵の身体を後方へと移動させた。そのため、アルビータの両刃斧は空を切る事になってしまった。

それでも、半蔵はぶ厚いゴムを蹴ったような感触しか残らなかった。そして蹴られたアルビータはというと、まるで何事も無かったかのように、すぐさま半蔵に向かってツインクテラミノアの両方を半蔵に向かって振るうのだった。普通なら顔を蹴られて動きが止まるものだが、さすがはアルビータと言ったところだろう。

一方の半蔵は後方に移動したとしても、アルビータの間合いから出る事は出来なかった。そのうえ、アルビータの反撃は素早く、空中に居る半蔵に向かってツインクテラミノアが走る。そしてツインクテラミノアは見事に半蔵を切り裂いてしまった。

だが、アルビータは気を緩める事はしなかった。それはそうだ、なにしろ半蔵を切った感触が全く無いうえに、半蔵の姿が陽炎のように消えてしまったからだ。これは半蔵が完全にアルビータの攻撃

を避けた事を示していた。だからこそ、アルビータはすぐにツインクテラミノアの片方で喉元をガードするように移動させると、両刃斧に刃が走った音がした。それと同じくして、半蔵から珍しく声が出た。

「虚像分身、それを見抜けなかったものの、我が反撃を防ぐとは見事」

相手に賞賛の声を出すあたり、日本の戦国時代に活躍した将としてのクセが残っているのだろう。だが、空の属性を使って自分の分身を作り出し、尚且つ、素早い空間移動でアルビータの横を取ったのは見事と言えるだろう。そして、そんな半蔵の攻撃を防いで見せたアルビータもだ。

そんな二人に通じ合う物があったのだろう、半蔵とアルビータはすれ違いながらも、お互いに笑みを浮かべている事に気付いた。それだけ、この戦いが二人にとって心躍るものになっているのは確かかもしれない。けれども、そんな事は刹那の如く、一瞬の出来事だ。アルビータは半蔵を振り払うように両刃斧を振るう。だが、その前に半蔵は空間移動で既にアルビータの間合いから出ていた。

これで全員を振り払った事は確実だが、さすがに半蔵に対して時間と取り過ぎたのはアルビータにも分っている。そのため、アルビータはすぐに左右から来る攻撃に対して迎撃体勢を取る。そう、半蔵が時間を稼いでいる間に体勢を立て直した閃華とミリアが同時に突っ込んで来たのだから、アルビータにしてみれば閃華とミリアの攻撃に対して迎撃体勢を取るのは当然の事だ。

そして閃華とミリアがそれぞれの間合いに入ると武器を振りかざす、これで二人とも、すぐに攻撃が出来る状態となった。そんな二人の攻撃に対してアルビータはするに左右を確認すると閃華とミリアが攻撃してくる軌道を見極めると、それに合わせてアルビータはツインクテラミノアを振るうのだった。

そしてお互いの武器が……ぶつかり合う事はなかった。なにしろ、閃華もミリアも武器を振りかざし、攻撃すると見せかける為である。

そのため、閃華とミリアは振るわれたツインクテラミノアを避けながらも、アルビータの両脇をそれぞれ一気に駆け抜けたのである。

これもフレトの作戦であり、そんなフレトの狙いはアルビータの真上、その上空にいるレットとラクトリーである。レットは既にラクトリーの手を取って急降下して来ている。そして、重力と降下スピードが最高点に達すると、なんとラクトリーをアルビータに向かって投げるように、更にスピードを付けてラクトリーを突っ込ませたのである。

急降下によるスピードと重力によるスピード、そこにレットから投げられるように離れたのである。そのため、ラクトリーの降下スピードはかなりのものであり、アルビータに考える時間は無かった。だからか、アルビータは防衛本能のおもむくままにツインクテラミノアを上空から降下して来るラクトリーに対して十字に構えると受け止める姿勢を示した。

先程まで地上で戦っていた半蔵に閃華とミリア。その三人は既にアルビータから遠くに離れている。だからこそ、ラクトリーはためらいも無く、クレセントアクスをアルビータに向けたまま降下してくるのだ。地の精霊であるラクトリーだけに、猛スピードを生かした攻撃は出来ないのが普通と言えるだろう。だからこそ、ラクトリーはクレセントアクスをアルビータに向けたままにして、後はスピードに任せて降下するだけで精一杯だった。

まあ、翼の属性を持っている精霊なら、このスピードから更に武器を振りかざして、そこから一気に武器を振るう事で威力を増す事が出来ただろう。だが、いくらラクトリーでも、さすがにそこまでは出来ない。だからこそ、武器と一緒に落ちてくると言っても良いだろう。一つだけ特質したところを上げるなら、猛スピードでの落下である。

閃華とミリアのフェイントに対して完全に引っ掛かったアルビータに対して避けるだけの時間は無い。だからこそ、落下してくるラクトリーを受け止める感じで、攻撃を防ぐしか手は残っていなかっ

た。そんなアルビータにラクトリーは猛スピードで急降下、そしてクレセントアクスとツインクテラミノアがぶつかり合う。

それと同時に武器がぶつかり合った事により空気が弾け、ラクトリーが急降下した威力を示すかのようにアルビータを中心に周りの地面が大きく陥没する。そして次には一気に弾けた空気が戻るかのように、アルビータとラクトリーの元へ烈風となって二人の動きを完全に封じる。

普通なら急降下してきたラクトリーの攻撃を受け止める事すら出来ないだろう。けれども、アルビータは見事に、それをやってのけたのだ。これが本気になった、全力全開のアルビータが持っている力なのだろう。

無の属性という特質な属性を持っているからこそ、アルビータは武器だけの戦いが出来る体型を選んだのだ。故にアルビータの敵となった精霊や契約者は属性を使うことが出来ず、武器に頼る戦い方をしなくてはいけない。つまり、アルビータは無の属性を持っているというだけで相手の属性を完全に封じ込めている。そんなアルビータが次も求める強さは決まっているだろう。それは武器同士の戦いでも相手を倒せる力強さである。

故に、猛スピードの急降下で威力を増しているラクトリーの攻撃を見事に受け止める事が出来たのだ。この力強さこそがアルビータの持っている力の真髄と言えるだろう。けれども、今回ばかりはフレトの方が一手だけ先んじてた。

ラクトリーの攻撃を防ぎ、その衝撃よって破壊され、烈風によって動きが取れなかった二人だが、上に居たラクトリーはしっかりとその姿を確認していた。そう、アルビータの死角から急降下してきたシエラと琴未の姿を。

上空に居たシエラはいつでもアルビータの死角に行けるように常に移動していたのだ。そして、フレトの合図と共にレットが急降下すると、シエラはワザと遅れて急降下を始めた。だが、真下は地面である。それでも、シエラは急降下をし続ける。そして、地面から

数メートルのところで九十度旋回、そのまま低空飛行でアルビータに突っ込んできたのである。
そんな二人の姿を確認したラクトリーが落下の衝撃が無くなるとアルビータの反撃をさせないかのように素早く、ツインクテラミノアの柄に足を掛けると大きく、シエラ達の軌道上から外れる位置に飛び上がると、上空で旋回したレットが再びラクトリーの手を取って、そのまま一気にアルビータの間合いから高速回避を実行する。
そしてアルビータがシエラ達に気付いた時には、既にシエラが手を離して、琴未が地面に足を付けて地面を削るように突っ込んでくる姿を見た時だった。まあ、気付いたというより、琴未が気合のこもった声を上げたからこそ、アルビータはそちらに振り返ると、既にハイスピードで琴未が突っ込んで来ていた。
「りゃあああぁぁぁぁっ！」
そんな琴未が雷閃刀の切っ先と両足で地面を削りながら、ある程度のスピードを殺した時だった。シエラもそこまで計算して手を離すタイミングを取ったみたいであり、琴未が技を放つ時にはしっかりと相手を捉えられるスピードになっており、琴未にもしっかりと技を放つタイミングが取る事が出来た。
そこまでの連携を見せてきたからこそ、アルビータが振り返った時には、既に琴未は技を放つ事が出来た。

―新螺幻刀流　奥義　地・脈・抜・刀　改―

今まで地面に突き刺していた雷閃刀を振り上げると、切っ先に溜まっていた力が解放されるのと同時にシエラによってもたらされたハイスピードがより加わった力も解放されて、その斬撃は最早、斬撃だけではなく、無属性の力と雷閃刀の斬撃をより強大なものに変えてしまっていた。
無属性の力が光を放ち、地面からアルビータに向かって襲い掛かり、琴未の雷閃刀も巨大な斬撃となりアルビータの左足から一気に

切り上げる。琴未が放った斬撃はアルビータが身にまとっている左足と重厚な鎧を斬り裂き、その傷は左胸にまで及んでいる。

地上の戦いに集中させておきながら、上空からの二段攻撃。これこそが、フレトの賭けとも言える作戦であった。なにしろ、少しでもタイミングを間違えればアルビータに避けられてしまって、次に繋げる事が出来ない。そのうえ、決め手となるのはシエラと琴未という、いつもはいがみあっている二人である。それだけに、最後の決め手には不安要素もあっただろう。

だが、閃華だけは、そんなに心配はしていないようだった。なにしろ、二人とも飽きる事無くて、いがみあっては対立から戦闘になる二人である。だからこそ、二人ともお互いの力をしっかりと分かり合っている。だからシエラから見れば、このタイミングで琴未を離せば上手く行く事も分っていたし、琴未もこのタイミングでシエラが手を離す事が簡単に予想できた。

対立し合っている二人だけに、お互いの力量をしっかりと把握できたからこその決め手とも言えるだろう。もちろん、フレトもその点には気付いていた。それに事前に与凪に相談していたからこそ、フレトは賭けとも言える手を打つ事に決めたのだ。それだけ、与凪からの情報は確かであり、自分が持っている判断が正しいという認識があったからこそ、フレトはこの手を選んだのだ。

そして賭けに勝ったフレト達。けれども、それで倒せるとは誰も思ってはいない。だからこそ、次に備えるためにシエラはアルビータの横を勢いのままに通り過ぎた琴未を回収するかのように手を伸ばすと、再び琴未の手を取って上空へと舞い上がる。

確実に大ダメージを入れた事のより、フレトは精霊達を下げさせるとアルビータの様子を伺う事にした。あのまま追撃を入れてもよかったのだが、手負いの狼ほど恐ろしいもの無い。アルビータも大きな傷を負った事により、防衛本能に任せて追撃を叩きのめされる可能性があったからだ。なにしろ相手は強大な威力を放ってくるアルビータである。下手な追撃は逆に自分達を追い込んでしまうとフ

レトが考えても不思議ではなかった。
いや、むしろ、その判断が正しいと言えるだろう。アルビータ自身、立ってはいるものの、琴未によって傷を負ったのだが、あまりにも瞬時の出来事だったために、アルビータには痛みを感じるまで時間が掛かった。
そんなアルビータが左足を伸ばし、右足を屈して、膝を地面に付ける。それと同時にアルビータの身体が倒れそうになるが、その前にアルビータはツインクテラミノアを地面に突き刺して、寄り掛かる形で体勢を保っていた。
そんなアルビータが呆然とした瞳で左足からの傷を見る。そんな状態が数秒ほど続き、アルビータは動きを止めていた。フレトとしては、それが逆に恐ろしく、アルビータに攻撃をする指示を出せなかった。
一方のアルビータは傷口から血が地面に一滴、滴り落ちると大きく笑い出した。そんなアルビータが心の底から歓喜しながら思う。
そうっ！　これだっ！　今までの戦いで傷を負う事はあったが、全ては浅手、私に深手どころか傷を負わせる事が出来る契約者も精霊も居なかった。だが、今の私は深手を負って、あろう事にか膝を屈している。そう、この者達が初めて私に膝を屈させたのだっ！　なんと心地良い、この痛みすらも歓喜に感じる。そうだっ！　少年、それで良いのだっ！
突如として笑い出したアルビータに対してフレト達の全員が不思議そうな顔をしている。だがアルビータは心の底より歓喜していた。なにしろアルビータが有している無の属性は精霊や契約者の戦い方を無条件で封じているのと同じだ。だからこそ、今までの戦いで精霊や契約者はアルビータに傷を負わせる事が出来ても、膝を屈するほどの深手を与える事が出来た者は居なかったのだ。
つまり、無の属性が相手の攻撃を制してしまい。今までの相手は慣れていない、属性を使わない戦いを余儀なくされたのだ。それは過去の争奪戦でも同じ、アルビータにここまでの傷を負わせる事は、

どの契約者も精霊も出来なかった事だ。
だが、フレト達は初めてアルビータに膝を屈させた。つまり、アルビータにとって、今のフレト達は今まで戦ってきた精霊や契約者とは比べ者にならないぐらいに強い事が嬉しかったのだ。それこそが、ここまでの強敵と戦う事がアルビータの願いだったのだ。それをフレト達がやってのけた。アルビータにとってここまで嬉しい事は無いだろう。そして……本当の全力を出せる相手だと判断するのが妥当だと思わせたのも初めてだろう。
だからこそ、アルビータは傷ついた左足を庇いながらも、立ち上がると再びフレト達に向き合うとツインクテラミノアを構えるのだった。そんなアルビータにフレトは声を上げた。
「あそこまでの傷を負いながらも、まだ戦うのか。勝負は付いたと思ったんだが、あいつの闘志は未だに消えていない。そこまで戦いを望むのか」
そんなフレトの言葉に隣に居た咲耶が珍しく私情を込めながら言葉を発してきた。
「そこまでして、この戦いに戦う意味があると感じたのでしょう。主様にプライドがあるように、あの精霊にも、この戦いに矜持(きょうじ)があるのでしょう。その矜持がある限り、あの精霊は何度も立ち上がってくる事でしょう。何となく気持ちが分かるような気がします。昇様はこの戦いに華を添えてくれと言いました。あの精霊にとって、この戦いは、それだけ特別な戦いだという事です。主様がセリス様を思うように、私が主様を慕うように、あの精霊もこの戦いに望む物があるのでしょう」
珍しく多弁な咲耶にフレトは考えさせられる事になってしまった。
咲耶にここまで言わせるとはな。あの精霊は戦いの中に、俺達が背負っている物と同じ物を持っているのかもしれないな。だとしたら……なおさら負ける訳にはいかないっ！　もう、前回の屈辱とか、再戦とかいう気持ちは俺の中から無くなった。今、俺の中にあるのはただ一つ、堂々と戦い、あいつに勝つ事だっ！　この気持ちが咲

耶の言っていた戦いの中にある矜持というやつか。だとしたら、なんか……心地良いな。戦いの中でこんな気持ちになったのは初めてだ。

そんな事を思ったフレトが鼻で笑う。それは誰を笑ったワケではない、自分自身を笑っただけの事だ。フレト自身も、闘いの中でここまで清清しい気持ちになるとは思ってもみなかったからだ。だからこそ、そんな自分がおかしいとも思ったし、昇がフレトに戦いを任せた理由がやっと分かったようだ。

そう、昇には分かっていたのだ。アルビータが、こうした戦いを望み、戦いの中で生きた事を実感するのと同時に、こうした戦いの中で終わる事を望んでいると。だから昇はフレトに戦いを任せたとも言えるだろ。

もちろん、春澄の事も関係しているが、昇は自分が戦うと、どうしても甘さが出ると思ったからだ。手を抜くわけではない、どうしても相手に感情移入をしてしまい、戦いに対して、ここまでの矜持を持たせる事が出来ないと思ったからだ。だからこそ、昇は今回の戦いをフレトに全て任せた。フレトなら、アルビータの望む戦いをしてくれると信じたから。

そして、現にフレトはストケシアシステムを完璧に使いこなし、アルビータに膝を屈指させた。それだけでも大成果と言えるだろう。だが、アルビータの終焉を飾るにはまだまだ不足だった。それをフレトが感じたのは立ち上がってきたアルビータを改めて見た時だった。

アルビータからは先程までの威圧的な雰囲気が消えており、周りの空気も静かなほど穏やかだった。先程のアルビータと例えるなら、洪水時の激流といえるだろう。だが、今のアルビータは穏やかな清流。先程までとは正反対なアルビータの姿にフレトは見ただけで分かった。

ここからが、アルビータの本領が発揮される時であり、次からは戦いが更に激化し、今までとは違って厳しいものになると。

第百四十五話　戦いの中にある矜持（後書き）

はい、そんな訳で激化してきた戦いですが、今のところはフレト達が優位に戦いを進めていてるようですね～。けど、アルビータも、このまま黙ってやられるわけが無い。むしろ、今までに今回ほどのギリギリな戦いをした事がないアルビータだけであって、次は何をしてくるのかがわかりませんね～。

とまあ、次回予告を軽くしたところで……胃が重い。なんつ～か、最近なんですけど、何か胃が重いというか、胸焼けがするというか、胃が詰まってる感じがするんですよね～。……そんなにストレスは感じて無いと思うんだけどな～。別の原因があるようですね～。

まあ、そんな事は置いておいて、まだまだ続くラストバトルですよ～。そして、まだ上がってない次編のプロット、いや～、書こうとはしてるんだけどね。ちょっと短編が書きたくなって、そっちにはまったく手を付けてないんだよね～。

まったく、次編だけでも新登場の人や精霊がかなりの人数になるのに、そのうえ、あの方々も再登場ですよ。そして少しずつ見えてくる……あの組織。更には別な組織も出てきて、最後の方は凄い事になりそうですね～。

まあ、次編はいろいろと考えてた事を形にしようとしたら……ついつい、思いっきり長くなりそうな話になってきた。という感じですかね～。というか……次編だけで純情不倶戴天編の二倍ぐらいの話数を使いそうだな～。まあ、そんな次編のプロットを作りつつ、百年河清終末編も終わりにしたいですね～。というか……このペースだと今年中に終わらないよね～（笑）

まあ、来年の頭ぐらいには百年河清終末編も終わりにしたいですね。それにしても……一編が終わるのに約一年ぐらい掛かってる。まあ、一話の密度もさることながら、話数も使ってるからね～。そりゃあ、長くなるわ。

そんな訳で、出来れば今年中に終わらせたい百年河清終末編ですが、未だに、後何話で終わるという予定が立たない状況（笑）　なんというか、結構行き当たりバッタリでやってるからね～。予定なんて無いのも同じなんですよ、これが（笑）

と、まあ、今後の予定にはならない予定を話した事で書く事も無くなってきたので、そろそろ締めますね～。

以上、アニメ、たまゆら……なんか、話が進むたびに深いな～、と思う事が多かったり、何となく、その気持ちや感じが分かったりする部分が結構、創作意欲を掻き立てるんですけど、なかなか実際には動く事が出来ない、葵夢幻でした。

第百四十六話　激闘、でもお気楽な者達

「そこに居るのは誰？　人間……じゃないのかな？」

その言葉が春澄との出会いだった。そして、ただ流れている河を見つける日々に、無為な日々に終止符を打つ出会いだった。この出会いこそ、百年、千年にも亘る河の流れに身を任せて生き続ける事に対して終末を迎える事が出来る出会いだったのだ。少なくともアルビータは、春澄との出会いを、そのように捉えていた。そして、たぶん春澄も……。

だからこそである。アルビータは最後の主に春澄を選んだ。春澄こそが、無為の日々を生きてきた、河の流れみたいな日々に終末を打てる主だと思ったからだ。だからこそ、春澄とは完全契約を交わしたのである。もし、春澄が以前と同じ契約者と同じ事をしても、最後には春澄が討たれる事は分っていたからから。だが、そんなアルビータの心配も杞憂（きゆう）に終わった。

春澄は自分の命を永らえようとは思わなかった。それよりも、アルビータと戦っている一瞬、一瞬を大事にし、尚且つ、初めて見る事が出来た世界に対して春澄の心は完全に、そちらに向いていたのである。

春澄と契約を交わし、春澄と旅を始めて、そしてやっと春澄の心を理解したと思った時には、アルビータの心からも迷いは消えていた。春澄を最後の主とし、そんな主の下で全力を尽くす戦いこそがアルビータにとって最後にするべき、いや、最後にしたかった事なのだろう。だからこそ、事がここに至った今、アルビータの心に迷いは無かった。それどころか、逆に胸の奥から湧き出る歓喜を、その身を持って感じていた。

それほどまでに、アルビータにとっては、この戦いは最後であり、最も重要な意味を持っていた。なにしろ、春澄の命は全てアルビータの中にある。だからこそ、アルビータは最後の主である春澄の命

を感じながらも、最後に望んだ最高の戦いを行っているのである。
そんな二人に待っているのは死という名の終わり。だがアルビータに後悔は無かった。最後にして、自分が思い描いていた主と出会い、そして最後にして最高の戦いを行う事が出来る。これほどまでに幸福な時は無いとアルビータは感じていた。
今までは、ただ見るだけの世界、何も出来ない無為な日々。ただ、河の流れのように、幾千、幾万の昼と夜を流れ続ける河のように、どこに辿り着く訳でもなく、ただ流れるだけの日々。そうして積み上げてきた、数え切れない時間。だが、その時間には意味が無い時間だ。
けど、今は最後の主である春澄の下で、最も尊く、最も有意義な時間を過ごしているのである。その時間はアルビータが過ごしてきた、幾千、幾万の時間に比べれば、ほんの刹那の瞬間かもしれない。だが、その刹那の瞬間こそが、幾千、幾万よりも貴重で重要なのだ。
意味も無く、ただ生きているよりも。命の炎を燃やし、刹那の時間を自分の思った信念で貫く事が出来る。大事なのは長い時間を生きる事ではない。たとえ短くとも、刹那の時間を自分の信念で行き、その意思を貫き通し、命の炎を燃やして、燃え尽きるまで戦う。その事こそがアルビータにとっては最も重要な事なのだ。
それに比べたら、今まで過ごしてきた無為な日々など、どうでもいい日々だ。それよりも、この一瞬一瞬に命の炎を燃やし、春澄から貰った命を燃やし、自分の意思を貫く事が出来る。信念と共に戦う事が出来る。この一瞬一瞬が尊く、煌めくほどに充実していた。この刹那の時間こそ、アルビータが求めていた時間なのだから。

先程までのアルビータを例えるとしたら、荒れ狂う嵐と言ったところだろう。だが、今のアルビータは凪のように静かで、雫の波紋すら立たせないほどに淡々としていた。それほどまでに静かに立っているアルビータに対してフレトは先程よりも脅威に感じるものが

あった。
　先程のアルビータが全力というのなら、今のアルビータは、その全力すらも超えた次元に居る。フレトは今のアルビータを、そんな風に見ていた。そしてフレトが思っていた最悪な事態の通りに、戦いは終幕に向かって進んでいくのであった。
　そんな中でフレトは左に居る与凪に意見を求める。
「さっきの攻撃で、かなりのダメージを負わせたと思うんだが、あれほどの傷を負っても、なお立つどころか、こちらに脅威と思わせるほどの力を見せ付けてくるか。この状況、どうなっているんだ？」
「そうですね、確かに、まるで嵐の前ある静けさみたいですね。それから、琴未によって与えたダメージですけど、既に血は止まって、自然治癒してますね。おそらくは命の提供を使って治癒能力を上げているのだと思います。それに、先の攻撃で分っている通りに、今のアルビータさんは精神が肉体を凌駕している状態ですからね。痛みは感じていないかもしれません。けど、あれほどのダメージですから、動きには現れるかもしれませんね」
「そうなって欲しいものだな……」
　そんな短い言葉で締め括ったフレトに、何か感じるものがあったのだろう。右に居る咲耶が少し心配そうな声で話を続けてきた。
「そのご様子、主様には何か気になる事があるように思われます。ですが、今は主様が大将なのです。ここで弱気を少しでも見せれば、前線で戦っている者達にも伝わってしまいます。なので」
「分っている、分っている……のだがな。先程までとは違った静けさが、まるで、そのまま、あいつの威圧感に感じるのも確かだ。咲耶、補佐をしっかりと頼む。ここからは先程よりも厳しい戦いになってくるはずだ」
「御意」
　咲耶に向かって、そんな言葉を返したフレトは再びストケシアシステムに集中力を集めるのだが、やはりアルビータの静けさが、先程までの威圧感よりも脅威に感じるのだろう。だからフレトは自然

と慎重に事を進めようとするが、戦況はフレトが予想していた最悪以上の状況を作り出した。

なにしろ、忽然とアルビータの姿がフレト達の前から消えたからである。その事に思わずフレトが声を上げる。

「なっ！　どこ」

「上ですっ！」

フレトが言葉を言い終える前に横に居る咲耶から報告の声が響く。その声を聞いて空を見上げるフレトだが、その時には既に遅かった。上空に居るシエラもレットも充分に警戒していたのだが、あまりの速さで上昇してきたアルビータに対して素早く対処が出来なかったのである。なにしろ、二人とも琴未とラクトリーを掴む形で上空に居たからだ。

だからこそ、二人は俊敏な動きが出来なかった。むしろ、アルビータの動きに驚きつつも、少しだけ移動するのが精一杯だった。そんなシエラとレットに向かってツインクテラミノアを振るうアルビータ。二人とも片手が塞がっている状態だから、この状況では琴未とラクトリーは足手まといにしかなっていない。

それでも、素早い動きに慣れている二人は、それぞれの武器で防ごうとする。だが、アルビータは跳び上がるのと同時に回転も加えていたようであり、それに足手まといを持っているシエラとレットを撃墜するのは簡単な事だった。

そうやって素早く繰り出されたツインクテラミノアの一撃を受け止めるシエラとレットだが、二人とも空中は地上ほどの踏ん張りが効かないので、それぞれの翼に頼るしかないのだが、それでもアルビータの放った一撃は重い衝撃があったのだろう。シエラとレットは琴未とラクトリーを離す間も無く、そのまま一緒に地面に向かって撃墜されてしまったのだ。

まさか、いきなり上空の敵に向かって行くとは思っていなかったフレトだっただけに、さすがに、この奇襲には驚かされた。だが、いつまでも驚いているワケには行かない。電光石火の動きで上空の

味方を撃墜されたとしても、フレトには地上戦力が残っている。
それに一度は跳び上がっただけに、アルビータは重力に任せて落ちて行くだけである。だからこそ、咲耶が素早く着地ポイントを割り出すとタイミングを見ながら指示を出そうとしている。狙うのはアルビータが着地する少し前、その時点で攻撃を繰り出せば、いくらアルビータが凄かろうとダメージは通るとフレトは考えたからだ。
なにしろ相手は上空から降りてくるだけしか出来ない。ならば、その着地前の瞬間を狙えば確実に攻撃を入れる事が出来るだろう。なにしろアルビータでも空中では自由に動く事は出来ないのだから。だからこそ、フレトはタイミングを計るとミリアと閃華を突撃させるが、すぐに後退するように指示を出すのだった。
そんなフレトの判断は正解だったと言えるだろう。なにしろアルビータはフレトが着地前に仕掛けてくる事を予想していた。だからこそ、フレトが仕掛けてくる瞬間にツインクテラミノアを一気に振り上げてきたのだ。その行動を見ていたからこそ、次に何を仕掛けて来るのかが分かったフレトが二人を、すぐに引き返させたのである。
そして次の瞬間には地面に向かって一気に振り下ろされたツインクテラミノアが地面を陥没させるのと共に衝撃波を引き起こす。そのため、地上に居たメンバーは一時的に足を止める事になってしまった。
フレトもここまで読んだからこそ、二人に後退を命じたのだ。あのまま突っ込んでいればツインクテラミノアの衝撃と共に刃が二人に向かって振られても不思議ではない。だが、こうして二人が後退したからこそ、何とか次に繋げる事が出来ると考えたフレトだが、その考えが甘い事をすぐに悔やむのだった。
なにしろ、着地したアルビータは衝撃が収まる前にミリアに向かって突撃を掛けたのである。ミリアも先程の衝撃波で足を止められた状態だ。そこにアルビータが突っ込んで行ったのだからミリアにとっても驚くべき事態となっていた。

そして足が止まっているミリアに対してツインクテラミノアを振るうアルビータ。ミリアもすぐに防御体勢に入る。振り出されてくるツインクテラミノアの軌道を予想してミリアもアースシールドハルバードを振り出す。さすがのミリアも、この短時間でアルビータの一撃を受け止める事は不可能に近い事を学習したのだろう。だからこそ、相手と攻撃を合わせて、攻撃の相殺を狙ってミリアはハルバードを振るったのだ。

振るわれた二つの刃がぶつかり合い、激しい金属音と共にミリアの腕にはかなりの衝撃が傷みとなり走った。だが、ミリアが完全に受け止めようとしていたら、アルビータによって確実に弾き飛ばされていただろう。だが、ミリアが上手く、アルビータの攻撃を相殺したために、なんとかミリアは踏ん張る事が出来た。だが戦況はミリアにとって不利と言えるだろう。なにしろ、ツインクテラミノアはもう一本あるのだから。

片方の両刃斧を止めた事は賞賛に値するだろうが、そのおかげでミリアも、もう一本の両刃斧に対しては無防備であり、その身を晒しているのと同じだ。そのため、アルビータはもう一本の両刃斧をミリアに向かって一気に降り下げる。

さすがに、この状況は後方で見ていたフレトにも不味いと思い、瞬時に思考を巡らせるが、アルビータの動きが速すぎたために、誰かを動かすような指示を出せなかった。だが、アルビータと向かい合っているミリアは口元に笑みを浮かべるのであった。

「アースウォールッ！」

地の属性を使ってアルビータの攻撃を何とかしようと考えたのだろう。地面に接している石突から地の属性を発動させるミリア。だが、属性防御がアルビータに対して効かない事はフレトもアルビータも良く分かっていた。だが、属性の発動場所によっては違ってくるのである。

そう、ミリアはツインクテラミノアの攻撃を防ぐためにアースウォールを作り出そうとしているワケではない、アルビータを上に押

し出すためにアースウォールを発動させたのだ。
突如として足元から土の壁に乗るように上に強制移動させられるアルビータ。アースウォールを壁としてではなく、相手の動きを止めるのと同時に確実に避けるために、相手を土の壁に乗せて発動。そんなミリアの行動はアルビータだけでなく、フレト達も驚いた。まさか、ミリアがここまで有効的な手を打つとは誰も思っていなかったからだ。まあ、それだけ、毎日のように行われていたラクトリーの強制修行が功を奏したようだ。
そのため、ミリアはアルビータを強制移動させるのと同時に移動しようとするが、それをみすみす見送るアルビータではなかった。既にツインクテラミノアは振るった後で、すぐに刃を返して攻撃する事が出来ない。ならば……攻撃できるところで攻撃すれば良い。
アルビータは土の壁によって強制的に上に押し上げられると共に一気に片膝を折って、体勢を沈めると片方の足を大きく振るう。そしてミリアを完全に取られると、そのままミリアを蹴り飛ばしてしまったのだ。
ミリアとしてもアースウォールで完全に虚を付いて、確実に後退が出来るという慢心があったのだろう。だから、アースウォールの上でそんな行動を取ってきたアルビータに気付いたのは、蹴り飛ばされた後である。確かにアースウォールを使った攻撃回避は見事だったが、やっぱり詰めが甘い部分が出てしまったのだろう。すっかり油断したミリアが蹴り飛ばされて、フレト達の方へと飛んでくるが、アルビータもそんなに力を込めて蹴るだけの時間が無かったのだろう。そのため、ミリアは地面に一回だけ叩きつけられると、そのまま地面を滑ってフレト達の前方で止まった。
その間にもアルビータは無の属性を足に発動、ミリアの作り出した壁が砂となりアルビータはゆっくりと降りてきた。上空に居る四人を一気に撃墜、さらに地上戦力のミリアを弾き飛ばしたのである。この時点でフレト達の戦力は半減どころか、戦闘を維持する事も不可能に近いだろう。だからこそ、フレトは閃華を自分達の方へと後

退させる。確かにフレトの前には倒れているとはいえミリアがいる。それに撃墜された四人とも両脇にある林に突っ込んで行ったために、視覚では姿は確認できないものの、そろそろ戦線復帰が出来る頃だろう。だからフレトとしては、何としても時間を稼がなくてはいけなかった。そのために閃華を戻したのだから。

そして、ミリアの作り出した壁を全て砂にして大地に戻すと、アルビータはツインクテラミノアを構えて、一気にフレト達が居る最終防衛ラインとも言える場所へと突っ込んで来るのだった。そんなアルビータに閃華は迎撃の構えを取る。そして閃華はタイミングを見計らうと、一気に飛び出した。確かに現状で確実に動けるのは閃華だけだろう。それだけに、閃華としても指示を出しているフレトに、これ以上はアルビータを近づけさせるのは危険だと考えたからこそ、自分からも飛び出して、一気に二人の距離を縮めたのである。

そんな二人が間合いに入った瞬間に武器を振り出す。激突する龍水方天戟とツインクテラミノア……と思われたが、さすがは閃華と言ったところだろう。横一線に振るわれた両刃斧、閃華はそれを下から切り上げて、上手くアルビータの攻撃をいなしてしまったのだ。そのため、振るわれた両刃斧は体勢を低くした閃華の上を通過していった。

だが両刃斧はもう一本ある。アルビータは振った両刃斧を戻すのと同時に閃華に向かって、もう一本を斜めから振り下げてきたのである。振り下ろされた両刃斧に対して閃華は方天戟を横にして突き出すと、受け止めるような姿勢を示したのだ。

そんな閃華の方天戟に両刃斧の刃がぶつかり合う刹那の瞬間。閃華は方天戟を更に前に突き出すのと同時に右足で地面を強く蹴って、そのまま時計回りに側転するかのように、軽やかな動きで接してる方天戟と両刃斧を軸に一回転、そのままの勢いを利用してアルビータの横に着地するのだった。

確実にアルビータの横を捉えた閃華。だが、アルビータもしっかりと閃華の動きが見えていた。だからこそ、最初に振るった右の両

刃斧を閃華に向かって突き出す。なにしろ左の両刃斧を振り下げた状態だ。ここから体勢を戻してから攻撃していては閃華からの反撃が来るのは当然といえるだろう。

だからこそ、アルビータは刃で押し切るのではなく、両刃斧の軸である柄の先頭による打撃に切り替えてきたのだ。そんな素早い、アルビータの思考と行動。だが閃華も負けてはいなかったのだ。

自分に向かって突き出された両刃斧に対して、閃華は両刃斧の軌道を見切って、方天戟を立てに突き出すと、そのまま刃に方天戟を当てるのと同時に一気にアルビータの前を横切ったのだ。素早くアルビータの懐に入り、そして一気に駆け抜ける閃華。だが、閃華なら、そのまま置き土産程度の反撃は出来たろうが、閃華は防戦一方で反撃を見せる気配は無かった。

だからと言って閃華から確実に反撃が来ないわけで無い。だからアルビータは閃華を目で追いながら体勢を立て直そうとするが、すぐに右肩に痛みが走り、その痛みだけで全てを察したアルビータがツインクテラミノアを左右に開くように振るうのだが、どちらも手応えは無かった。

既にアルビータの間合いから出ていた閃華は同じく隣に姿を現した半蔵に対して言葉を掛ける。

「さて、どうにか一撃を入られたみたいじゃが、そこで攻撃を入れた半蔵殿の意見を、是非とも聞いておきたいんじゃが」

少しだけ皮肉った言葉を放つ閃華。まあ、閃華が半蔵に対して不満を持っていた訳ではない。反撃もままならずに、避ける事に専念して半蔵のために隙を作る。そこまでしなければアルビータに一撃を入れる事は出来なかっただろう。つまり、閃華がアルビータの攻撃を軽やかにかわしていたのは全て半蔵に一撃を入れる機会を作るためだ。だが、ここまでしなければアルビータに一撃を入れられないのも確かな事であり、こんな苦労を強いられた事に閃華は少しだけ意地悪な意味を込めて半蔵に言葉を掛けたのだ。

半蔵も、そんな閃華の心境が分っているのだろう。だからだろう、

いつものように単調な言葉で返事をするのだった。
「軽傷、我が空斬小太刀では深手を入れるのは不可能。それほどまでに、重厚な鎧と鋼のような肉体が我が刃を阻む」
「ふむ、やはり、そうか。じゃが、今は時間を得る事が重要じゃ。突然の奇襲で主力である、上空が落とされてしまったからのう。ここは時間を稼ぎながらも少しでも傷を負わせれば上々と言えるじゃろうな」
「同意、若様が全体の体勢を立て直す、それまでの時間を二人で稼げば良い」
「簡単に言ってくれるのう。じゃが、それしかないじゃろう。それにしても、くっくっくっ、こうして再び最前線に揃って立つとはのう。昔の大戦（おおいくさ）を思い出すというものじゃ」
「うむ、ならば」
「じゃな、私の背中、しっかりと預けるぞ」
「応諾、承ろう」
そんなやり取りをすると、閃華と半蔵は視線を重ねるとお互いに口元に笑みを浮かべるのだった。二人とも伊達に戦国時代を共に戦ってきたワケではない、と言ったところだろう。強敵、不利な状況、そんなものは二人とも何度も体験してきている。だからこそ、アルビータを前にしてもお互いに信頼し、一歩も退く事無く、戦う事が出来る。
改めて、その事を実感しながらも、閃華と半蔵は再び突撃を掛けてきたアルビータに対して、閃華は軽やかな動きで攻撃をいなし、避けつつもアルビータに攻撃をさせて隙を作り出す。そして、その刹那の隙に半蔵が攻撃を入れる。二人の連携は完璧といえるだろう。ストケシアシステムに頼らずとも、これほどの動きを見せるのである。さすがは戦国を生き抜いた二人とも言えるだろう。
そんな二人の活躍もあり、前線では閃華と半蔵によってアルビータは完全に足止めされてしまっていた。その間にも後ろでは着実に事を進めて行っているのだった。

「とにかく、シエラとレットを空に上げるぞ。その間に琴未とラクトリーは合流、ミリアはどうなってる」
　閃華と半蔵が時間を稼いでいる間に状況確認と指示を出すための情報を得るために、フレトは左右に入る咲耶と与凪に言葉を飛ばす。そんなフレトの言葉を聞いて、真っ先に答えてきたのは咲耶の方だった。
「シエラさんとレットはまだ無理です。どうやら上空で琴未さんとラクトリーを庇うように攻撃を受けたために、攻撃を防ぐのが精一杯だったようです。それでも二人とも上手く琴未さんとラクトリーを林の中に落としているので、琴未さんとラクトリーはすぐに動けますが、シエラさんとレットは無茶な体勢で落下したためにダメージは大きいようです。なので、今の状態で空に上げても、まともな攻撃は出来ないかと」
　咲耶が素早く現状を整理して、そのような報告を上げると、次は与凪からの報告が上がってくる。
「ミリアさんは参戦が出来ますけど、閃華さんと半蔵さんがあれだけの動きを見せていますから、無理にミリアさんを突っ込んでしまうと二人の連携を邪魔する事になりますね。だからミリアさんはしっかりと距離を取って次の指示を待っているようです。体力を温存するためでもありますけど、正しい判断をしていると思います。最初の奇襲でシエラさんとレットさんはダメージが大きいですからね。今は地上戦力だけで対抗するのが良いと思いますよ」
　報告と共に自分の意見も重ねてくる与凪。だが与凪の見解も間違いではない事はフレトは良く分かっていた。だからこそ、与凪の報告を聞くとすぐに指示を出す事が出来るのだった。
「なら、琴未とラクトリーはミリアと合流。その後に地上戦力で総攻撃を掛ける。閃華と半蔵もそのつもりで体力を温存しておくように時間を稼いでもらうか」

フレトの出した言葉が、そのまま思考になり、全員の頭を一気に駆け抜ける。そして、指示を聞いた琴未とラクトリーがミリアと合流するために林の中を一気に駆け出す。その間にも閃華と半蔵が時間を稼いでいるが、閃華は半蔵に合流すると言葉を放った。

「まったく、お主の主(あるじ)も無茶な要求を出してくるものじゃな。こちらとて時間稼ぎが精一杯じゃというのに、体力を温存せよ、とはのう」

「さりとて出来なくは無いはず」

「まあ、そうじゃがのう。じゃが、ここまで扱き使っておいて、今回の戦いでは私にとっては、あまり美味しい所は無いからのう。それこそ、私の士気に関わってくるというものじゃな」

随分と好き勝手な事を言って来た閃華に対して半蔵は軽く笑みを浮かべながら返事をするのだった。

「ならば、後で秘蔵の酒を送ろう。若様のツテで最高級の酒蔵から手に入れた酒だ。それなら文句はあるまい」

「くっくっくっ、そんなつもりは無かったんじゃがのう。そこまで言われてはやらない訳にはいかないようじゃな」

絶対に嘘だっ！　昇ならそんなツッコミが来そうな二人のやり取りだが、閃華としては、それだけでも満足そうに笑うのだった。そこを見ただけでも、閃華が何を求めてたのかが分かるというものであり、半蔵もそれを見抜いたからこそ、的確な品を出してきたと言うわけだ。

まあ、これぱかりは付き合いが長い半蔵だからこそ分かった事だし、閃華としても、そんな対応をしてくれると分っていたからの戯れである。それだけでも二人には余裕があるというのが分かると言ったところだろう。なにしろ、アルビータの猛攻をいなして避けながらも、閃華はしっかりとアルビータと距離が取れるように後退し、半蔵もそんな閃華に合わせる事が出来ているのだから。

そんな二人を相手に一歩も引かないアルビータの猛攻も凄いが、そんなアルビータに対して防戦しながらも少しずつダメージを入れ

て行く二人の連携も凄いと言えるだろう。
だが、そんな二人の連携も所詮は時間稼ぎ、アルビータもそれを察し始めたのだろう。だから少しずつ攻撃の手を緩めて次に来るであろう、総攻撃に備えて力を温存しながら閃華を攻め立てる。閃華もアルビータの攻め手に緩みが出た事から、アルビータがこちらの思惑を察したと見抜いていた。それでも、閃華はアルビータの前に立ちはだかり、半蔵と共にアルビータの攻撃をしのいでいるのだった。
その間にも後方では着々と準備を整えながら、琴未が……呑気にお喋りをしていた。
「はぁ～、さすが閃華ね。かの有名な服部半蔵と組んでも決して負けてはいないわね」
「それもありますけど、どうやらアルビータさんもこちらの思惑に気付いたようです。だから二人に対しての攻撃が緩やかになってます」
隣に居るラクトリーにそんな事を言われて琴未は、改めて閃華達の戦いに目を向けるが、すぐに溜息を付いて、肩をすくめて言うのだった。
「やっぱり、私もまだまだって事よね。百戦錬磨の閃華達に比べれば、そんな変化にまったく気付かないし、言われても分からないわ」
「だよね～、お師匠様が、そう言うのなら、その通りなのかもしれないけど～。今の私達には無理なレベルだよね～」
琴未に続いて同意するかのような言葉を放ってきたミリア。琴未はそんなミリアから視線を逸らすと呟くのだった。
「なんか、ミリアに同一視されるような事を言われると、自分が弱くなった気分になるのよね」
「酷っ！　う～、琴未～。それは酷すぎる発言だよ～」
「まあ、閃華達に比べれば、私がまだまだだという自覚はあるけどね。けど……ミリアと一緒にされるのも何気なく嫌な気分になるのよね」
「そんなの偏見だっ！　差別だっ！　お師匠様～、最近の私は頑張

って強くなってますよね～」
　琴未に皮肉に似た言葉を聞いてラクトリーに泣き付くミリア。さすがに今回はミリアも活躍したし、怒られる事は無いと思ったようだ。だが、そんなミリアにラクトリーからトドメが刺される。
「えぇ、確かに最近のミリアは強くなって来てますし、戦い方のバリエーションも増えているのですが……」
「ですが、何ですか～？」
「もっとしっかりと私の修行と勉強をしていれば、今以上の力を付けていたのは間違いないでしょうね。何かにつけて逃げ回るから、そんな事を言われても仕方ないのですよ」
「な……なんか理不尽だ――――っ！」
　ミリアの叫び声を聞きながら、後ろで情報整理をしている与凪からは軽い笑い声が聞こえ、咲耶は笑うのを必死に堪えているようだ。そしてフレトはというと、今はストケシアシステムから手を離して、モニターの向こうにいるお気楽三人組に対して溜息を付くのだった。
　そんなフレトが思いっきり呆れた視線をモニターの向こうにいる、お気楽三人組に対して言葉を放つのだった。
「お前ら、一応戦闘中で、前線では閃華と半蔵が頑張ってるんだぞ。もうちょっと緊張感を持てないのか」
「持てません」
「即答かよっ！」
　琴未の言葉に思わずツッコミを入れてしまったフレト。そんなフレトに対して両脇から笑い声が漏れるのをしっかりとフレトは耳にしながら、しみじみと思った事を口にするのだった。
「よく、滝下昇は、こんな連中を引き連れて、戦えるものだな。俺は何だか、もう全てを投げ出したい気分になってきた」
「確かに緊張感は大事ですけど、緊張してばかりだと疲れますから、だから休める時には休むのが一番ですよ。だから、今は閃華さんと半蔵に頑張ってもらって、私達は最後に備えて英気をやしなってるんじゃないですか」

「ラクトリー」
「どうかしましたか、マスター？」
「この場面だと、そのセリフはお前が一番言ってはいけないセリフだと思うんだがな」
「そうでしょうか？」
首を傾げながら、そんな返答をしてきたラクトリーにフレトは思いっきり溜息を付く。まあ、確かに、この場面ならばラクトリーが他のメンバーを戒めるべきなのだが、やっぱりミリアの師匠なのだろう。少しばかりのんびりというか、ゆったりしたところにフレトは呆れた視線をラクトリーに送るのだった。そして、そんな光景を見ながら与凪が楽しそうにキーボードを叩きながら呟くのだった。
「類は友を呼ぶ」
「……否定できない言葉を呟かないでくれ、少なくとも俺は滝下昇とは同一視されたくは無いと思っているんだからな」
「まあまあ、マスター。人類、皆兄弟って言うじゃないですか」
「……はぁ」
ラクトリーの言葉に最後には疲れたように溜息を付くフレト。もう、これ以上の会話は疲れるだけだと、やっと悟ったようだ。まあ、昇なら適度に和んで自らの思考を柔軟にしそうな場面だが、フレトはそこまで柔軟にはなれないようだ。
まあ、そこがフレトの長所でもあるのだから、否定する者は誰もいない。むしろ、戦いに対する率直なところが、半蔵やレットにとっては気が引き締まる部分でもあるのだから。だが、ラクトリーは少し、のんびりとしているところがあるからこそ、半蔵とレットが居ない、今では改めてラクトリーのお気楽さを感じるフレトだった。
だからと言って、戦況をこのままにしておくわけにはいかない。今では時間を稼いでくれている閃華と半蔵の体力にも限界がある。だからこそ、フレトは気分を切り替えるために、一回だけ大きく深呼吸をすると、改めて真面目な目付きに戻ると確認作業に移る。
「咲耶、シエラとレットはどうなってる？」

「二人とも戦線に復帰できます。それから、シエラさんは妖魔化してます。だから、シエラさんのスピードがかなり強化されていると思います。どうやら、シエラさんは、そろそろ戦いも最終局面だと判断したみたいですね。いつでも全力で行けるようにしているみたいです」

「分かった、なら最終局面にするぞ。お前達もそろそろ全力で行けるようにしておいてくれ」

モニターの奥に居る三人に向かって、そんな言葉を掛けるフレト。そんなフレトの言葉を聞いて、それぞれが返事を返す。

「分かったわ、任せなさい」

「は～い」

「御意、いつでも出れます」

三人の返事を聞いたフレトが再びストケシアシステムに手を置くと、言葉と思考を一気に流し込む。

「よしっ！　なら、機を見ながら、その時が来たら半蔵と閃華は一旦後退。ラクトリーを先頭に地上戦力を一気に突撃させる。半蔵と閃華もラクトリー達の動きに合わせるようにしておいてくれ。それと同時にシエラとレットは空に舞い上がれ、あいつの上を確実に取って、機を見て攻撃を入れる。次が最後の総力戦であり、戦いに幕を引く戦いだと思えっ！」

フレトの指示と激を飛ばして、それぞれに思考の返事が返ってくると、さすがに琴未達もお喋りをやめて、今では、それぞれの武器を手にして閃華達の戦いを見ている。既に戦いが最終局面に来ている事は琴未達も肌で感じ取る事が出来た。

それだけ、アルビータも最後に備えて力を溜め込みながら閃華達との戦闘を続けている状態だからだ。だからこそ、次に戦局が動いた時、その時こそが、それぞれの総力を掛けた戦いになる事は必至である。だからこそ、それぞれに戦いの中に機をみる。ここで機を見逃してしまっては出遅れる事になってしまう。誰か一人でも出遅れれば、フレト達は連携攻撃が出来なくなる。だからこそ、フレト

は余計に今の戦いに機を見つける事に専念していた。それは他のメンバーも同じだ。

決して見逃してはならない機に注意を払いながら前方で行われている戦いに注意を向ける。

その事は今も戦っている閃華と半蔵にも良く分かっていた。それはアルビータも同じだ。だからこそ、お互いに退く時機を見逃してはならないのだ。だから機に注意しながら戦い続ける閃華と半蔵。

相変わらず軽やかな動きでアルビータの攻撃をいなしては避ける閃華に、刹那の隙があれば容赦の無い攻撃を繰り出してくる半蔵。二人に攻められながらもアルビータは前方で突入体勢に入っている琴未達もしっかりと警戒していた。

そして閃華と半蔵が同時に攻撃に出ると、その機会を待っていたかのようにアルビータもツインクテラミノアを大きく振るう。そんなツインクテラミノアを防ぐように、自ら後方へと跳ぶ閃華と半蔵。そんな二人を見ながらアルビータは笑みを溢しながら思うのだった。

さあ、終幕への最終局面だ。少年、遠慮無く、掛かって来るが良いっ！

そんな事を思ったアルビータに突撃を開始した琴未達の姿を瞳に写す。それと同時に左右に分かれた閃華と半蔵も再び突撃に入ってきてる。五人の同時攻撃、だが、そんな攻撃をわざわざ受けるほどバカではないアルビータは琴未達と閃華を無視して半蔵に突撃する。そんな状態に半蔵は空間移動でアルビータから距離を取るしかなかった。だが、これで三方向からの攻撃は出来ない。それどころか、アルビータが半蔵が居た場所を占拠し、更に振り返ることで、全員がアルビータに対して正面から攻撃をしなくてはいけない。

そう、さすがに数の不利を少なくするためにアルビータが考えた策である。けれども、フレトも最初から、そんなに簡単にいかない事は分っている。最後は正面から一気に攻め立てる事を考えていた。事が最終局面に至ったからには小手先の策などは無用。正面からの連携攻撃が一番効率が良いのである。それが分っているからこそ、

フレトはあえてアルビータと正面から対峙するように指示を出し、アルビータもそんなフレトの挑戦を受けて立つのだった。
こうして最終局面と化した戦場の幕が上がったのである。

「ん～、さすがだね……アルビータが、ここまで苦戦しているところなんて……見るのは初めてだよ」
昇の肩に頭を置き、腕に寄りかかっている春澄が、そんな言葉を口にした。なのだが、春澄の声は弱弱しく、今にも消え去りそうな声だった。昇はそんな春澄の言葉に返事をする事無く、春澄を腕から離すと、そのまま春澄の身体を引き寄せて、肩を出して自分の身体に春澄を寄り掛からせる昇。そんな昇が春澄の言葉に対して、やっと言葉を返す。
「まあ、フレト達も意地を見せたいんだろうし、琴未達も絶対に負けられない戦いだという事は充分に分っていると思うから。だから皆が全力で戦ってくれてる」
「うん、見てるだけで、良く分かるよ。良かったよ、これで、アルビータの望みは叶えられたんだね」
「そうだね、じゃあ次は春澄ちゃんの番だね。僕に出来ることなら、何でもするよ。だから、今は何も隠す事無く、全部話してみて」
「ちょっと……昔話から聞いてもらっても良い？」
「もちろん」
昇がそんな返事を返すと、春澄は弱弱しくも嬉しげな笑みを浮かべる。それから昇は更に春澄を引き寄せて、完全に春澄の寄り掛からせると、春澄の口から語られる話をしっかりと耳にするのだった。

第百四十六話　激闘、でもお気楽な者達（後書き）

はい、そんな訳でバトルも最終局面に突入したみたいですね～。それと同時に弱っている春澄。そんな春澄に対して昇はどうするのか？　まあ、そんな感じ、という事で次回予告とさせてもらいますね～。

まあ、次回の展開は考えてるんだけど……ん～、というか、百年河清終末編も残り……三話か四話ぐらいになる予定です……まあ、予定ですからね～。私の場合は増える可能性が大きいです。

まあ……今年中に終わらない事が確定かもしれませんね（笑）

さてさて……十二月です……年末です。なのでっ！！　今年を振り返ってみようっ！！　そんな訳で、今年ですが……なんか厄が払えた気がするっ！！！！　というか、呪いが解けたと思える今年でしたっ！！！！

いやね、なんつ～か、十年ぐらい前から、やる事、成す事、何をやっても上手く行かない。それ以前に……周りに振り回されっぱなし、自分が本当にやりたい事が出来なかった。そんな事を思ったりもしたんですよ。

だがっ！！！！　今年に入って、かなり待たされたものの、やっと全ての荷物を捨てて、私の時代がキタ――――（。Д。）――――！！！！！　と思わせる一年でした。

そんな訳で、来年からは今まで堕ちていただけに、一気に繁栄の年にしたい気持ちで年末を迎えようかと思っておりますっ！！！！

というか……呪われたと思われる時機から、なんか、ずっと正月気分が味わえないというか、年末という気分にもなれないんだよね～。

ん～、なんというか……年末の風情を感じる事が出来なかった。なのでっ！！！！　今年は年末だっ！！　とか思える年末にしつつ、新年には正月気分を味わいたいですね～。……楽しみたいのよっ！

！　お正月をっ！！！！！

悪いっ！！　悪いかっ！！！！！　良いじゃないかっ！！　正月ぐらいはっ！！！！！　年末だって、年の瀬と言う空気を感じたいんだよっ！！！！！　けど、今までいろいろとあったからさ……そう……いろいろとね～。……はぁ、もう叫ぶ気分でもなくなりましたね～。

まあ、要約すると……気付けば年の瀬だった……という事ですね。なんというか、もう、この年になると一年が早いね～。まあ、思い返せば、いろいろとあったな～。と思えるんだけどね。なんというか、想い出をあまり残せて無いというか、今年も前半は苦労が多かったんですよ。まあ、そんな気分を吹き飛ばすために、年末は風情がある時間にしたいですね～。

っと、ついつい、愚痴と年末について語ったところで、そろそろ締めますね～。

ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。

以上、けど、新年はネトゲで迎えるんだろうな～、とか思っている葵夢幻でした。

第百四十七話　命の炎を燃やし

昇さんも知っているように、私は先天性の盲目で視力を生まれた時から失っていた。そんな私を育てる事は自分達では難しい、そう言って私のお父さんとお母さんは私を専門の施設に預ける事になった。後で聞いた話だけど、お父さんもお母さんも最初は、こんな私を育てるつもりだったけど、周りが大反対したから、私は施設に預けられた。そんな話を私が成長してから、私の世話をしてくれてた人から聞いたの。

でも、その時の私には、そんな事はどうでもよかった。どんな経緯であれ、私がお父さんとお母さんから離れて暮らしているのは事実だし。辛いからという理由でお父さんとお母さんは一度も私に会いに来なかったのも確かだったから。だから私は家族というものを知らないで、ずっと施設で生きてきた。

確かに、施設の人は優しくしてくれたし、学校にも行かせてくれた。でも……分からなかった。何で私がここに居るのか、なんで……私の目は見えないのか。その所為で私は学校ではいじめの対象となった事があるから、私はずっと目を閉じる訓練をして、ずっと目を閉じられる事が出来た。だからと言って、何かが変わったワケじゃない。ただ生きてる、無為な日々がずっと続くだけだった。

今になって思うんだけど。あの時の私は生きるという事に目的も意味も見出せなかったんだと思うよ。何か目標があったワケじゃない、何かが私の心を打ちはしない、だから、何処に目指して歩いていけば良いのかが分からなかっただけだと思うよ。だから、分からなくなったの、自分が……生きているのか、死んでいるのかが。

ふふっ、今になって思えば、おかしな話だよね。その時の私はしっかりと生きてた。けど、生きるための、生きていくための、目指すべき場所が私にはまったく分からなかった。もしかしたら、その時に一生懸命に探せば、何かが見つけられたかもしれない。でも…

…その時の私は何をしたいのかも、何をやればいいのかも、分ってなかったから。だから……ただ何もしない、何も無い、そんな日常を重ねて行ったの。

そんな私でも、ちょっとだけ興味を持った事があるの。それが精霊の存在。アルビータと出会う前は、それが精霊だなんて分からなかった。ただ他の人とは違う、何か別な存在が居る事は私には分かった。だから、その事を話してみた事もあるけど、私の話を聞いても困らせるだけだった。だから私は自然と、その事は話してはいけない事だと思うようになったの。

ここだけの話し、最初は幽霊とか妖怪とか、そんなものが私には感じてるんだと思ってた。だから私には霊感があるんだな～って、そんな風に思ってたの。でも……アルビータとの出会いが全てを私に教えてくれた。

あのね、アルビータも精霊だけど、他の精霊とは違ってるんだよ。なんていうか、他の精霊よりも感じ辛くてね、希薄って言うのかな？　他の精霊よりは透明に感じてたの。だからかな、私はアルビータの存在を感じて、私とアルビータだけの二人っきりになる時を待ったの。アルビータも私がアルビータの方を気にしていたように見えたから、ずっと私の近くに居たんだって。そして……私はアルビータと出会った。今でも忘れない、満月が照らす暗い部屋で、私はアルビータに向かって話しかけたの。

「そこに居るのは誰？　人間……じゃないのかな？」

アルビータが人とは違う事は分ってた、他の人は何かが違うという感覚があったから。だから最初は、そんな風にアルビータに話し掛けたの。アルビータが言うには、私に話しかけられて思いっきり驚いたって、アルビータは精霊にも認識できない存在だったから。誰もアルビータの事を感じる事も見る事も出来なかったから。そんな自分に私が普通に話しかけてきたから、凄く驚いたんだって。

そしてね、アルビータが返事をするまで私はずっとアルビータに向かって話し続けたの。

「えっと……幽霊？　普通の人じゃない事は分かるんだけど、なんていうか、あなたは特別な存在だという事は分かるよ。どんな風にと言われると困るけど、でも……私はあなたをしっかりと感じる事が出来る。それは確かだよ。だから、あなたの事も教えて欲しいかな……あっ、無理だったら無理って言っても大丈夫だよ。別に気にしないから……でも……あなたの事を教えてもらえたら嬉しいかな」

「貴方には……私が見えるのですか？」

やっと返事をしてくれたアルビータの第一声をそれだよ。こっちは沢山話しかけたのに、最初はたったそれだけだった。でも……何だか知らないけど、凄く嬉しくなって、いつの間にか私は笑みを浮かべながら話してたんだって。だから私は言ってやったの。

「見えてはないよ、だって、私の目は見えないんだもんっ！　でも、あなたを感じる事は出来るよ。それよりもっ！　さっきから私がずっと聞いてるのに何も答えてくれないの？　少しぐらいはお話したいと思ってたんだよっ！」

そう言うとね、アルビータは申し訳なさそうな声で答えてきたんだ。

「それは、何と言うか……申し訳ありません。まさか、私の事が分かる人間が居るとは思っては居なかったので、その……つい」

「人間……って言ったからには、あなたは人間じゃないの？」

「はい、私は命の精霊です」

「せい、れい？」

「はい、人とは違い。自然や物理、論理から生まれてくる象徴であり、具現化した存在を精霊と言うのです」

「……えっと？」

「簡単に言えば、人間には見えない隣接世界に居る存在ですね」

「……んっ？」

アルビータったら、最初から難しい事ばかり言うから、私には何も分からなかったんだよ。それでも、アルビータは精霊が、どんな存在かを私に向かって、一生懸命に伝えようとして、いろいろと焦

ってたっけ。そんな事をやって、やっと私は精霊という存在を知る事が出来たの。

「そっか～、他の人とは違う、何か別な人の気配には気付いていたんだけど。その人達は幽霊じゃなくて精霊なんだね」

「他の気配にも気付いてた？　……なるほど、貴方は精霊感知能力者なのですね」

「精霊かん、ち……んっ？」

「精霊感知能力者です。つまり、あなたは契約に関わらず、精霊の存在を感知する、つまり感じる事が出来るんです。それは契約を交わした精霊も同じでしょう。全ての精霊を感じ、その力までをも見抜く事が出来る能力。それが精霊感知能力者なのです」

「へぇ～、って？」

「で、とは？」

「その精霊感知能力だっけか、それって凄いの？」

「そうですね。かなりの確立で精霊感知能力を持っている人間が出るのは低いですね。だから凄いと言えば凄いですけど、争奪戦に参加しない限りは、あまり意味の無い能力とも言えます」

今に思えばアルビータも酷い事を言ってるよね～。それだと私の力が意味の無い、能無しと聞こえるんだもん。でも、それを皮切りにアルビータとの会話は争奪戦についての話になって、アルビータは争奪戦についても、自分の能力についても話してくれたんだよ。

聞いた時は自分とは遠い世界の話だと思ったけど、改めてアルビータを感じて思ったの。もしかしたら、この力は、その戦いで使うためにあるのかもしれないって。そう思ったら、急に今までの日々が、この日のための準備期間に思えてきたの。だから私は思い切って言ったの、私も争奪戦に参加したいって。その途端にアルビータが困っていた事が分かったの。

だから、私は戸惑うアルビータに理由を聞いたの。そうしたら、アルビータは以前に争奪戦に参加して、自分と契約をした契約者達について話してくれたのね。アルビータと契約をした人は、二人と

も最後には狂ったように自分の命を永らえるために人の命を奪ってきたんだって。だからアルビータは争奪戦に参加したくないって言ったの。

そうだよね、確かに命の強奪を使えば自分の寿命を限りなく永らえる事が出来る。死を目前としたら、誰だって命の強奪を使っちゃうよね。でも……私は命の強奪よりも、別の能力に魅力を感じたの。

そう、それが……命の活性。その力を使えば、もしかしたら目が見える事が出来るかもしれない。自分自身の身体能力を限りなく上げて、尚且つ、修復する能力、それが命の活性。だから私はアルビータに言ったんだよ。

「私は絶対に人の命が無くなるまで奪わない。そんな事をするぐらいなら、私は命の強奪なんて使わない。私が争奪戦に参加したいって言ったのはね。生きたいからだよ」

そんな私の言葉を聞いてアルビータは思いっきり困ってったっけ。それから私が思っていた事を、胸の内に秘めていた事を全てアルビータに話したの。今までの私は死んでいるのと同じ、生きる目標も意味も見出せずに、ただただ人の世話になりながら無為な日々を過ごしてる。生きているという事に対して何もしない、何も出来ない、それは死んでるのと同じだって。そう言ったの。

こうして、自分の命が尽き掛けている今でも、私は、その時に言った言葉を後悔したり、言わなければよかったとか思ってないよ。ううん、その時に、その事が言えてよかったと今でも思ってる。私にとっての生きるとは……そういう意味だと思うから。

そうしたらね、アルビータは逆の事を言って来たんだよ。

「私は……死にたい。けど、ただ死ぬのは嫌です。たった一度で良い、命の炎を燃やして、全力で戦い、その戦いの中で死にたいのです。命の精霊として隔離され、ただ精霊世界と人間世界を見詰めるだけの毎日。ただ、河の流れように過ぎていく日々。そんな日々を送るぐらいなら、私は命の炎を燃やし、命尽きるまで戦っていたい。それが精霊として生み出された自分の本分だと思うからです」

その言葉を聞いて、ちょっとカッコイイとも思ったけど同時に私とアルビータは似ていると思ったんだよ。私もアルビータも存在しているけど、生きている上で目標も意味も、そして道標すら無かった。ただ……存在しているだけの日々を、無為な日々を河が流れるように過ごしてきた。

だからアルビータの言葉を聞いた時に同じ思いを持ってると思ったし、そんなアルビータの考えにカッコイイと思ったの。だって、命の炎を燃やして生きる。その言葉だけでもカッコイイよね～。だから私も、そうしたいと思ったの。

このまま、河の流れのように、ただ流れる日々を送るんじゃなくて、命の炎を燃やして、命尽きるまで何かをしたい。そんな事を思っちゃったの。だからこそ、今まで胸の内に秘めてきた思いをアルビータに伝えたの。

「なら、私も……命の炎を燃やして、自分が望んでいる事、自分が居る世界を、この目で見たい。そのためなら、私は命の炎が燃え尽きるまで生きたい。たとえ戦いの運命を受けれても、私は……世界を見てみたい。自分が存在している世界を見たい。そのために命を差し出せというなら、私は差し出すよ。その思いが有ったからこそ、私は今まで生きてきたんだから。だから、今度は命の炎を燃やし、命尽きるまで生きるよ。だから……アルビータさん、私と……契約を」

どうしても……無理だと分かっていても、その思いだけは捨てる事が出来なかった。自分の目で自分が居る世界を見る。それが出来るのなら、私は争奪戦の運命を受け入れて、戦う運命を受け入れて。その場所で命の炎を燃やし続け、最後には諦めていた事さえもやってみたい。そんな風に思ったの。それこそが……今まで胸に秘めてきた思いだったから。

私の言葉を聞いて、アルビータも感じるものが有ったんだって。そして、アルビータも私と同じ事を思ってくれた。私達は……似てると。だからかな、私が契約を口にするとアルビータが黙り込んだ

後、金色に染まった世界を目にしたのは。
　最初は何だか分からなかったけど、それはアルビータが私を受け入れてくれた証拠だと、アルビータの言葉で分かったの。そう、そこは契約結界の中。いわゆる特殊な空間、それにアルビータは命の精霊だから、私の死んだ目に命を吹き込む事が出来た。そして……私は初めて自分の目で、私を受け入れてくれた人を、ううん、精霊を瞳に映した。
　最初はびっくりしちゃったよ。大きい気配はしていたけど、アルビータは想像していたのよりも大きくって、そして強そうだったから。私がアルビータを見て驚いているうちに、アルビータは契約の事、そして、これからの事を話してくれた。そして最後に私に向かって聞いてきたの。
「貴方は……戦いの運命を受け入れてまで、自分の命を削ってまで、私と契約する事を望みますか？　契約を交わしたら最後、貴方は命尽きるまで戦いに身を置かなければいけません。その覚悟はありますか？」
　要するに、契約を交わしたら後戻りは出来ない。死という終焉が訪れるまで、私は戦いの中に身を置き、その中で自分が望んだ事を叶えるんだと分かったの。命の炎を燃やし、その炎が消え去るまで……。
　けど、アルビータから、そう言われても、私はまったくちゅうちょはしなかった。だから、すぐにアルビータに返事をする事が出来たよ。
「あるよ。この先に、どんな戦いが待っていようと。私は命の炎を燃やし、命の限り生きる事を選びたい。人の一生分だけの時間は生きられないけど、人の一生分に値する命の炎を燃やす事を誓うよ。だから、私に世界を見せて、どんな世界でも良い、自分自身が居た世界を見たいの。そのためなら、アルビータさん、私の命……その全てを預けますから、燃え尽きるまで命の炎を燃やしてください」
　あははっ、そんな事を言っちゃった。でも、その誓いは今になっ

ても変わらないよ。私は人の命を奪わない。だから自分の命を削り、削った命の炎を燃やして、最後まで生きていたい。その時間が短くても、私は人の命を奪う事よりも自分の命を燃やす事を選んだ。その選択は今でも間違ってるとは思ってない。だって……私が最初で最後に自分の意思で、自分の生き方を決めたんだから。

そんな事を言ったら、アルビータは私に跪(ひざまつ)いて、はっきりと言って来たの。

「分かりました。ならば、これからは私の命を貴方に預け、貴方を主として仕えさせてもらいます。そして……貴方の命が尽きた時、その時が私の命が尽きる時です。それが私達の、ただ流れる河の終焉、私達の終末です。河の流れが、いつかは大海に出るように、私達の日々も、大海に帰する日が来るでしょう。それまでは、私も命の炎を燃やし、貴方と共に戦いたいと思います。それでは、契約を行います」

「うん、分かったよ。一人だと寂しいけど、二人でなら一緒に終焉を迎えても寂しくはないよね。だったら、ううん、だから、良いよ。これからは、お互いに命の炎を燃やして生きて行こう」

「はっ」

それからビックリしちゃったよ。いきなりアルビータの胸から光り輝く玉が出てくると、それが私の胸の中に入っちゃったんだもん。そして、アルビータが完全契約が完了したって言って来たからワケが分からなかったよ。

「完全、けいや、く？」

「はい、私の、精霊の核となっている部分を契約者に預け、完全な力を引き出す契約の事を完全契約というのです。ですが、この契約は完全な力を引き出す代わりに自らの命を契約者と共にしなければいけないのです。つまり、先程、貴方の中に入っていったのが私の核は貴方の命に同化し、貴方が死ねば、私も死ぬのです。争奪戦で死を望む精霊が、最後の主とする契約でもあります」

「えっと……つまり、私が死ねば、アルビータさんも死ぬって事？」

「はい、それから、私の事はアルビータとお呼び下さい。既に契約は成立し、今では貴方が私の主となっているのです。ですから、私への気遣いは無用です」

とか言ってもね～。いきなりだったから、正直、思いっきり困っちゃったよ。いきなり僕（しもべ）のように扱えと言われても困るよね。だから、最初は、なんとかアルビータって呼ぶ事は出来たけど、結構なほどに気を使ってたよ。

それからアルビータは契約についてもいろいろな仕方があると教えてくれたの。でも、私達の目的は共に終焉を迎える事。だからアルビータは私に命を預け、私もアルビータに命を預けてるの。運命共同体ってやつだよね、これ。あははっ、お互いに命を預けあってるんだもんね。アルビータは完全契約で、私は命の提供で、お互いの命を預けあってる。

なんて言うかね、上手く言葉に出来ないんだけど……なんか、嬉しかった。お父さんとお母さんに見捨てられ、施設の人とも馴染む事が出来なかった私だけど、初めて心を許せる相手に出会ったんだな。って、そんな風な事を思ったの。

それから、アルビータは契約結界を解くと、そこには私が今まで暮らしていた部屋が私の瞳に映ったの。凄く……殺風景だった。部屋には最低限の物しかなく、それ以外の物は何も無くて、余計な物は何も無い。そんな暗い部屋を月明かりだけが照らしていた。まるで……今までの自分を見ているような部屋だった。

そしたら、アルビータが施設を脱出するから急いで荷物をまとめるように言って来たの。目が見えているのは契約の影響が続いてるからだって、時間が経てば、また私の目は見えなくなるって言って来たの。正直、ちょっと残念だったけど、それ以上に楽しみだった。だって、やっと世界を見る事が出来るんだよ。今までは絶対に見えないと言われてた、私の目に光を映す事が出来るんだよ。だから、アルビータに急かされて、私は急いで荷物をまとめたの。

けど、私の荷物と言っても着替えだけだったからね。あっ、後は

いつも使ってるステッキか。それをまとめると、私も着替えて。準備を終えた私をアルビータは簡単に肩の上に乗せると、そのまま、窓から跳び出したの。なんか、凄かった。初めて見た光景で、いきなり絶叫マシーンのような体験をしたんだもの。

それから施設を脱出すると、アルビータが言った通りに私の目は再び見えなくなったの。まあ、残念だけど、これから起こる戦いの中で私は世界を見るんだから良いっかって思っちゃった。

だから私はいつものようにステッキを片手に持つと、もう片方の手をアルビータが握ってくれたの。確かに、今までは施設の人がそうしてくれた事も充分過ぎるほどにあるよ。けど、私の手を握ってくれたアルビータの手はとっても大きくて、そして暖かかった。だから感じたの、私達は、もう同じなんだなって。

う〜ん、なんていうかね。手の温もりと自分の中にあるアルビータの命が暖かく感じて、凄く心地が良かった。まあ、さすがに、こんな事はアルビータには言えなかったけどね。それからアルビータと共に夜の間に施設を抜け出して、すぐに街から離れたの。

もっとも、私は途中で寝ちゃったから、分らなかったけど。アルビータが私を背負って、なるべく施設から遠くに移動したみたい。まあ、朝になって騒がれて、私を探すだろうし。その時に見付かったら大変だから。アルビータは一晩中、私を背負って、移動して、私が起きた時には、知らないホテルだった。まあ、それはアルビータが教えてくれたんだけどね。

そこからは戦いの連続だったかな。最初は戸惑う事が多かったけど、契約を交わした時から命の提供、命の活性、命の強奪についての知識は既にあったからね。だから最初の戦いでも命の活性を使って、動き回って、敵の攻撃をかわしながら、私は世界を目にしていた。

戦いの中で見る世界。それは、自分でも思っていた物よりも色鮮やかで、凄く綺麗だったり、凄いとしか言い様がなかったり、そんな世界を目にしてきた。空が凄く高くて、白い雲がゆっくりと移動

して、海は凄く広くて、夕焼けは凄く綺麗だった。私は戦いの中で、そんな世界を目にしてきたの。

それに……人にもいろいろな人が居るんだなって思ったよ。目が見えない時、一人で居る私に意地悪して来る人も居たし、そんな時はいつもアルビータに守ってもらっていたよ。それに、昇さんのように優しい人にも出会った。そして……敵として戦った人にも出会ってきた。そんな、いろいろな出会いがって、時には優しい人でも契約者なら敵として戦った事もあった。

でも……後悔はしてないよ。だって、それは私が望んだ事だし、私が決めた事だから。だから後悔なんてしない。敵として倒した優しい人にも悪いとは思ったけど、戦いだからしょうがないと思った。けど、相手を倒しても、相手の命までは決して奪わなかった。まあ、いつも命の提供で削った分のほんの少し、相手が数日ほど寝込むぐらいしか命を奪わなかった。そんな戦いを続けてきたんだから、私の命がそろそろ尽きても当たり前の事だよね。でも……後悔はしてない。

けど……後はちょっとだけ我が侭を言いたいだけかな。

さすがに語り疲れたのだろう。春澄は身体を預けている昇に更に寄り掛かった。昇は、そんな春澄に用意してあった、ペットボトルのジュースを渡すと、春澄は昇に弱弱しい微笑を向けて、蓋が開けてあるペットボトルを手にすると、ゆっくりとジュースを口にするのだった。

そんな春澄の姿を見て、昇は改めて思った。やはり、先程の話には昇に確信に思うほどに、強い力があったようだ。だからこそ、昇は春澄の温もりを確かめるように春澄を抱き直すと、春澄が話してくれた話について考えるのだった。

やっぱり……今の僕だと、ううん、誰も春澄ちゃんの意思と運命は変えられない、変えられる訳が無いんだ。春澄ちゃんは自分の命

を削ってまで、自分がやりたいと思ってきた事を実行したに過ぎない。それは、普通に生きている人には分からない、普通じゃないからこそ出来た、運命の選択だったんだ。誰しも自由に生きる事なんて出来ないんだ。たとえ自由だと選んだ道でも、やっぱり制約があって、本当の自由じゃない。必ずしも、何かを選んだのなら代価を支払わないといけない。それが世界のルールだからかな。

等価交換、とは言わない。それは手にした物と支払った物が必ずしも等価とは限らないからだ。時には支払う代価が多く、手にする物は少ないだろう。春澄はそんな代価にしては大きすぎるものを払っているのだと昇は思ったのだろう。

それはそうだ、目が見える、それは多くの人にとっては普通の事だろう。だが、春澄にはどうする事も出来ない、変えたくても変えることが出来ないものだった。けど、春澄とアルビータが出会った事で、その変えたくても変えることが出来ないものを変える事が出来る。それはとても魅力的で、春澄にとっては今まで胸に秘めていた願いだったのだから。その代価に……自分の命を差し出してもである。

そして春澄は、その運命を自らの意思で受け入れた。目が見える、多くの人にとっては普通の事に、春澄は自分の命までを差し出して、制限付きで目が見えるようにしたのだ。それは、明らかに……代価としては大き過ぎるものだろう。多くの人、大多数の人が普通にしている事、普通になっている事を手に入れるために、春澄は自らの命を代価に、その普通を手に入れようとしたのだ。そんな春澄の意思を、誰が変えられるというのだろう。

たぶん、そんな春澄の意思を一番に分っているのがアルビータなのだろう。だからこそ、アルビータは春澄を最後の主として完全契約をしたのだ。春澄なら、以前の契約者みたいな事はしないと確信したのだろう。それはアルビータも自分と同じと思った事もあるのだろう。

二人とも、自分で作ったのか、はたまた、自然に出来たのかは分

からない。ただ、共通して言えるのは、二人とも世界とは関われない壁があり、その壁を越える事は出来ないと思って日々を過ごしてきたのだ。だから見るだけ、感じるだけの世界を横目に、二人とも何も無い日々を、ただ河の流れのように過ごして行ったのだ。

そんな二人がお互いに見出した希望が、今の運命なのだろう。それは二人とも自らの意思で決めた運命であり、二人とも、その運命を受け入れた。だから今になっては誰かの言葉や行動で変える事は出来はしない。なにしろ……既に運命は終端を迎えようとしているのだから。

そんな運命だからこそ、昇には何も出来ない。ただ、こうやって春澄の傍に居る事しか出来ないのだ……。

だが、昇はまだ諦めたワケではなかった。運命は変える事は出来ないけど、春澄が望む事、燃え尽きようとしている春澄のわずかな命。その命が終わりを迎える前に自分に出来る事を必死になって思考を巡らし、何が出来るかを考えていたのだ。

だが、春澄の運命は終端を迎えようとしている。つまり、もう時間は少ないと言えるだろう。そんな少ない時間で自分に出来る事を昇は見出す事は出来て無い。だから、もう形振(なりふ)りに構ってはいられないだろう。昇は春澄が最後に言った言葉が、最後の希望だと信じて春澄に話しかけるのだった。

「ねえ、春澄ちゃん」

「んっ」

昇の腕に抱かれて、ちょっと気だるそうに顔を上げる春澄。それだけでも、最終局面へと入った戦いの中で、アルビータが命の提供を使っている事を示しているのだろう。だから、昇には春澄が弱弱しく見えたが、それでも、昇はいつものように、心配という本音を表に出さないように話を続けるのだった。

「最後に言ってた我が侭って何？　僕に出来る事なら、してあげるよ」

そんな昇の言葉に春澄は弱弱しくも微笑むと、口元に少しだけ意

地悪な笑みを浮かべて昇に言うのだった。
「うん、昇さん……だったら、良いかな。私がやりたくても絶対にやれない事。その真似事だけでも良いから、やりたいかな」
「真似事って、僕は春澄ちゃんがして欲しい事なら、なんでもするつもりだよ」
「なら結婚して」
「……へっ？」
あまりにも予想外な言葉に昇は気の抜けた返事をしてしまった。
そんな昇が面白かったのだろう。春澄は静かに笑うと、再び昇の肩に頭を預け、身体も昇に寄り掛かるように預けながら言うのだった。
「ほら、無理でしょ。だから真似事だけって言ったの」
そして静かに笑う春澄。もう元気に笑うだけの力は残されていない証拠だろう。それでも、春澄は楽しそうに笑い、戸惑っている昇に対して言うのだった。
「だって、女の幸せは結婚って言うでしょ。だから、大好きな人と結婚して、普通の暮らしをしたかったかな」
「春澄ちゃん……」
昇はそれ以上の事は言えなかった。それは春澄が、普通の暮らし、と言ったからである。普通なら幸せな暮らしと言っても良いだろう。それぐらい、少女が結婚に憧れても不思議ではない年齢の春澄である。そんな春澄が幸せ、ではなく、普通と言ったのだ。それだけでも、春澄が見てきた普通が、どれかけ幸せなのかを昇は改めて感じるのだった。
だから昇には春澄が言った言葉の重みが充分すぎるほど分かった。だからこそである、昇も安請け合いで返事を返す事が出来なかった。春澄が最後に望んだ我が侭、それが結婚である。自分の命を削り、命の炎を燃やして戦ってきた春澄が最後に望んだ事である。そう、簡単に安請け合いの返事をしても春澄は決して喜ばないだろう。それが分っているからこそ、昇はすぐに返事が出来なかったのである。
それでも、昇としては、その望みを叶えてやりたかった。それが

絶対に出来ない事でも、少しぐらいなら出来るから、そう信じて昇は春澄に向かって言うのである。

「じゃあ、真似事だけでも良いから、結婚してみる？」

そんな言葉を春澄に返す昇。だが、その途端、春澄は呆れた視線を昇に向けて、昇の腕に抱かれながらも身体を起こすと、今度は昇に背を向けて寄り掛かってきたのである。それだけでも、昇の言葉が春澄を不機嫌にさせた事は昇でも分かる事だ。だが、その原因が何なのかまでは、やっぱり分からない昇だった。

そんな昇が戸惑いながらも春澄を呼ぶのである。

「えっと、春澄ちゃん」

「何ですか？」

「……僕は何か悪い事を言いました？」

そんな昇の言葉を聞いて、春澄は大げさに溜息を付いて見せるが、やっぱり弱弱しく、命が尽き掛けている事を示していた。それでも二人とも、そんな事を表に出さずに会話を続けるのである。

「言った、凄く言った。そんなんだから、昇さんは周りから朴念仁と言われるんだよ。もうちょっと雰囲気を考えて欲しいな」

「えっと、雰囲気？」

「そうだよ、真似事でも結婚だよ。もうちょっと、こう、ロマンチックな雰囲気を出して欲しいな。それなのに普通に、結婚してみる？　とか言われても全然ロマンチックじゃないよ。結婚だよ、女の子にとっては最大限の幸せだよ。それを一言で聞くなんて、まったく雰囲気が出て無いよ。私が最後に望んだ我が侭なんだよ。そこは雰囲気を出してプロポーズして欲しいな」

春澄の言葉に苦笑いを浮かべる昇。やはり、女の子に対しての配慮が足りない、というか、まったく思いつかない所は昇らしいと言えるだろう。だから昇は苦笑いを浮かべるしかなかったのだが、すぐに気分を入れ替える。すると昇は寄り掛かって来ている春澄の体を起こすと、かなり大胆な行動に出た。

昇は春澄の背中を片手で支えながら、もう片方の手を足の下に入

れて、春澄を抱き上げたのである。いわゆるお姫様抱っこだ。そして、そのまま春澄を自分の膝に座らせるのだった。

昇の言葉に文句を言った春澄だが、まさか、すぐに昇がここまで大胆な行動に出るとは思っていなかったようで、春澄の顔は真っ赤になっている。それでも、昇の膝に座り、優しく抱きしめてくる昇の胸に手を当てて、自分の心臓がもの凄い音を立てているのを聞き、早く脈を打っているのを感じたのだった。

それから昇は春澄の顔に優しく手を当てて、春澄を自分の方に向けさせると、ゆっくりと、一言一言大切に、心を込めて言うのである。

「傷付けちゃったみたいで、ごめん。でも、これからは普通なんかじゃない、思いっきり幸せにしてあげるよ。まだまだ、春澄ちゃんを好きになれるから、心から愛する事が出来るから、だから、ずっと傍に居て欲しい。これからも、ずっと……好きでいたいから」

「私……目が見えないよ。だから、昇さんに凄く迷惑を掛けるし、ただの足手まといだよ。それでも……私が傍に居て良いの？　こんな私でも、好きでいてくれる？」

「もちろん、好きが大好きになるまで、傍に居て欲しい。それに、春澄ちゃんの事は絶対に迷惑とか足手まといとか思わないよ。だって……好きな人が傍に居てくれるだけで幸せなんだから。だから、これからも好きでいさせてね。大好きになっても、もっと、好きになれるように、ずっと傍に居させてほしいな」

「うん、ありがとう。私も……昇さん事が好きだし、これから大好きになりたいな。だから……ずっと一緒に。そして、これからも……」

それだけ言うと春澄は静かに瞳を閉じる。そんな春澄を抱き寄せ、更に抱きしめ、お互いの顔が近づく。そして、ゆっくりと二人の唇は重なるのだった。

暖かく、柔らかい春澄の唇を感じる昇。今だけはと、昇は頭の中を春澄でいっぱいにして、春澄の事だけを思えるようにした。だか

らこそ、昇は優しくキスが出来たのだ。今だけは春澄の事だけしか思っていないから。

それから昇は少しだけ名残惜しさを感じながらも、ゆっくりと唇を離して行く。このまま何度でも、そんな思いが昇の中に生まれてくるが、昇はそんな思いを抑え込み、ゆっくりと春澄から離れていくのだった。

それでも、お互いの顔が目の前にあるところで昇の動きは止まり、春澄は思いっきり顔を昇の胸に押し当てている。そんな春澄を見て、昇は微笑みながら言うのだった。

「う～ん、僕としては、もう少し春澄ちゃんの顔を見てたいな」

少しだけ意地悪をしていると昇は感じながらも、楽しさを隠す事無く、そんな言葉を口にする。それを聞いた春澄はますます昇の顔が見えないようにしてしまった。そんな春澄を優しく見詰め、抱きしめている腕を緩めると昇は春澄の返事を待つ。と、小さくではあるが、春澄の声が昇の耳に入って来た。

「言い出したのは……私だけど、なにも……ここまで」

そんな春澄の言葉に昇は自分が意地悪だなと感じながらも言わずにはいられなかった。

「でも、春澄ちゃんの言葉で僕は春澄ちゃんの事しか考えられなくなったよ。だから、今はずっと春澄ちゃんを見ていたいし、何度でもキスしたいかな」

「……ばか」

そんな声が聞こえると昇もさすがに軽く笑うのだった。そんな昇を顔を真っ赤にした春澄が見上げて、拗ねるような視線で見詰めてくる。そんな春澄を見た昇が思ってしまった。

うん、やっぱり春澄ちゃんは、こういう所が可愛いな。でも、なんか、そういう視線で見られるとね～、なんというか、あまり我慢が出来ないかな。

春澄は未だに拗ねているようであり、少しだけ恨みがましげに昇を見詰めてくるのだった。そんな春澄を見た昇は、もう一度だけ春

澄を抱き寄せると不意打ちのキスをする。
　またしても突然な事に春澄は驚くものの、すぐに昇を受け入れるかのように瞳を閉じて、後は昇に委ねるのだった。
　春澄の身体が力を抜けた事を感じた昇は春澄から離れると、今度は春澄を包み込むように抱きしめるのだった。そして春澄はというと、さすがに二回目のキスで慣れたのだろう。昇を追い込むような事を口にするのだった。
「ん～、嬉しいんだけど、ちょっとだけ悪いと思っちゃったかな～」
　そんな事を言って来た春澄の顔を昇は見ると、春澄がいつの間にか意地悪な笑みをしている事に気付いた。それでも、春澄の真意が汲み取れない昇は首を傾げるばかりだった。そんな昇を笑ってから春澄は言っちゃうのだった。
「こんなところをシエラさんや琴未さんに見られたかな～、とか思っちゃった。二人とも過激みたいだからね、後が凄い事になりそう」
「がはっ！」
　うぅ、今、ここで、それを持ち出しますか。というか……言われると、本当に後が怖いんですけど、うぅ、さっきまで雰囲気とか言いながら、自分で雰囲気を壊さないでよね。そんな事を思ってしまった昇。だからだろう、昇はうな垂れてしまった。
　そんな昇を春澄は笑うと、昇の顔に手を当ててきた。そのため、昇の顔は自然と春澄の方へと向けられた。そして春澄は顔を少し赤くしながら言う。
「でも、今だけは昇さんが私だけを見ていた事は嬉しかったよ」
「今更、そう言われても……さっきの言葉が胸に刺さって抜けないよ」
「ふふっ、それは、ごめんなさい。でも、嬉しかったのは本当だよ。それに……真似事とはいえ、あそこまでしてもらったんだから。もう我が侭は言えないかな」
　そんな春澄の言葉を聞いて昇はやっと顔を上げると、優しく微笑みながら春澄に向かって言うのである。

「まだ時間はあるよ。だから、もう少しぐらい我が侭を言っても良いと思うよ」

昇の言葉を聞いた春澄が照れながらも微笑み、それから昇の胸に寄り掛かると、最後の我が侭を言うのであった。

「じゃあ、戦いが終わるまで、ずっと抱きしめてて欲しいかな。最後は……昇さんに抱かれて終焉を迎えたいから」

「うん、分かったよ」

悲しみ、苦しさ、どうにも出来ない事に対する悔しさ。そんな気持ちが昇の中に沸きあがってくるが、昇はそんな事をまったく顔に出す事無く、春澄を優しく、包み込むように抱きしめてあげるのだった。

今は……まだ……。そんな言葉で自分の気持ちを抑え込む昇。それでも、抑え込めない気持ちが少しだけ表に出たのだろう。昇はいつの間にかうな垂れていた。そんな昇の頬を春澄の手が優しく触れると昇は春澄を見詰める。すると春澄の頬には一筋の涙が流れていた。そして春澄は昇に抱かれながら言うのだった。

「ありがとう、昇さん」

その瞬間に昇も涙を流しそうになる。けど、そんな気持ちを抑え込むように、春澄をしっかりと抱きしめると、自分が泣いてないかを確かめる。そして、何とか涙が出ていない事を確認した昇は、やっと春澄の方を見ると、春澄の視線は昇ではなく、戦場に向いていた。だからこそ、昇は春澄の感触と温もりを感じながらも、最終局面となっている戦場へと、春澄と同じように目を向けるのであった。

戦いは激闘と言っても良いだろう。アルビータの一撃一撃は振るうだけで衝撃を発し、時には地面をも砕く。そんなアルビータの攻撃を何とか凌ぎながら、フレト達も数の差を活かして攻め立てる。

そんな激闘の中で昇ははっきりと目にするのである。アルビータの顔が満足な笑みを浮かべている事に。そんあアルビータの姿を見て、昇は安心する。そして、やはりフレトに任せてよかったと思うのだった。

そんな昇と春澄に見詰められながら、戦いの運命は終端へと向かって行くのである。

第百四十七話　命の炎を燃やし（後書き）

はい、そんな訳で、すっかり女たらしになった昇でした～（笑）

まあ、何と言うか、思いっきり大胆な行動に出まいしたね～、昇は。まあ、たまには強引なのも、ありという事でしょうかね。まあ、その辺は皆さんの状況判断にお任せします（笑）

さてさて、いよいよ百年快晴終末編も佳境に入ってまいりました～。予定ですと、残すは二話になりますね。残り二話で、いよいよ百年河清終末編が終わります……まあ、予定通りに行けばだけどね。

それに、言い返れば、まだ二話もある。うん、今年中に終わらせる事は無理だっ！！　と、既に、その辺は諦めの境地に入っているワケですよ、これが。

いや、だって……ねぇ。今の更新ペースで残り二話を今月中に上げるのは無理ですっ！！　というか、既に半分も無いよっ！！　そんな限られた日数で上げられるかっ！！　はい、無理です、けって～い。……えっと、何で私は丸太に縛られてるの、というか、この近づいてくる重低音は何っ！！　えっ、戦車？　戦車なのかっ！！

というか、砲台っ！！　砲台がこっちを向いてるってっ！！！！

いや、無理っ！！　さすがに砲撃を喰らっての復活は無理だってばっ！！　というか、良く見たら一台じゃないしっ！！　複数の砲門がこっちに向いてるんですけどっ！！！！　無理っ！　これは。

……作者集中砲火を浴びている途中です……

……作者、復活を諦めて再び細胞分裂中……

ふぅ～、さすがに細胞分裂からやり直すのはしんどいです。まあ、一つのＤＮＡに体全部の情報が入ってると言いますからね～。だから、なんとか復活出来ました～。まあ、他の細胞が分裂して、何人

もコピーが出来なかったのは幸いでしょうね。
……いつも思うんだけど……私……時々、何を書いてるんだろうと素に戻る時があるんだよね～。……というか、本当に何を書いてるんだろうか。もう、私にも意味不明です。
という事で長くなってきたので、そろそろ締めますね～。
ではでは、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。
そして、これからもよろしくお願いします。更に評価感想もお待ちしております。
以上、今回の終盤、その辺は恋愛小説的な表現が出来たかな～？と疑問に思いながらも、少しだけ満足している葵夢幻でした～。

第百四十八話　命尽きるまで

一撃、その一撃に自分の命、そして春澄の命を乗せてツインクテラミノアを振るうアルビータ。だが、フレト達が繰り出してくる連携攻撃は完璧とは言えないまでも、かなり苦戦するアルビータだった。それでもフレト陣営で戦っているシエラ達に痛撃を加えているのも確かだが、落とすためのトドメになる一撃を入れられないのも確かだった。

それは数の問題だけではない。アルビータが振るう渾身の一撃が入れば、シエラ達ですらも一人ずつではあるが倒す事も出来ただろう。だが、攻撃の前線となっている琴未とミリア、その後ろで自由自在に動いてみせる閃華とラクトリー。そして上空いるシエラとレットは完全にフォローに周っているために、どんな攻撃でもシエラとレットによって避けられてしまう。正確には言えば攻撃が当たる前に腕なり首なりを掴んで、攻撃が届かない場所にまで退避させる。そんなシエラ達のフォローあるために、アルビータの攻撃はなかなか当たらなかったのだが、その衝撃だけでも、それなりにダメージを与える事が出来た。

そして、そんなアルビータが一番目に厄介と感じていたのが半蔵だった。半蔵も最終局面だからこそ今まで以上の動きを見せている。空間移動のフェイント、空間投影の分身、ありとあらゆる手段でアルビータに無駄な動きをさせるのだった。だが、半蔵を無視しては半蔵から本当の攻撃が来た時に対処が出来ない。だからこそ、アルビータは緩急を付けた半蔵の動きにほんろうされながらも半蔵の動きに惑わされないようにしていたのだ。

つまり、一番前で攻撃だけに集中している琴未とミリア、その後ろで攻撃と前に居る二人のフォローやアルビータに対する牽制と攻撃をする閃華とラクトリー。そして完全に攻撃をせずにフォローに周っているシエラにレットに半蔵。これだけの連携陣形を崩すのは、

さすがのアルビータも一人では無理だと感じざるえない。それでも、アルビータはしっかりと感じていた、自分の中にある春澄の命が残り少ない事を。だからこそ、アルビータは全力を尽くしてシエラ達と戦うのだった。

そんな前線での戦いを後ろで指揮しているフレト。そこでも前線以上に忙しさと戦っていた。なにしろ左右からは前線での状況とアルビータの動きに対しての情報が次々と上がってくるのだから、、フレトはそれらの情報を整理しながらも、前線で戦っているシエラ達に指示を出さなければいけない。

前線での動きが激しくなっているだけに、フレトの元へ、上がってくる情報量もかなりの量になり、それらをまとめながらも、フレトに伝える咲耶と与凪、それでも情報が整理しきれていないから、フレトは自分自身でも多少は情報整理して判断を下すのだった。

そして……前線での戦いは更に激化して行くのだった。

事がここまで至ったからこそ、もう相手の隙や動きに注意を払う必要が無い。なにしろフォローはシエラ達がやってくれているのだから。そんな状況だからこそ、琴未とミリアは周りを見ずに、ただアルビータだけを見て攻撃を繰り出して行くのだった。間断的に攻撃を繰り出してくる琴未とミリア。それでも、アルビータは琴未の方を中心に防御をしつつ反撃を狙う。さすがに、ここでは経験の差が出たのだろう。やはり、属性をまったく使わない攻撃では、琴未の方が攻撃の鋭さと威力が違ってくる。それが分っているからこそ、琴未の攻撃に注意を払いつつも力任せに反撃に出るアルビータ。

雷閃刀とハルバートを同時に受け止めると、そこから力任せに二人を弾き飛ばそうとするが、琴未は上手く勢いを殺して、後ろに飛ばされながらも自力で着地できた。だが、ミリアは完全に吹き飛ばされしまった。そんなミリアに注意を払っていたのだろう。すぐにシエラが上空から降下してミリアを受け止めると、勢いを殺してミ

リアにも着地させるとシエラはすぐに上空へと舞い戻る。
その間にもアルビータは近くに居る琴未に向かってツインクテラミノアを振るうのだが、それと同時に閃華とラクトリーが突撃を掛けてくる。だが、アルビータは攻撃を中断しなかった。そして琴未も攻撃を受け止められない事は分っているから、更に後方に退く。そうなると完全にアルビータの背中はガラ空きになるのだが、命の提供が与えた力なのだろう。アルビータはツインクテラミノアが地面に突き刺さると、そのまま地面を削りながら反転、後ろから突撃を掛けてきた閃華とラクトリーに、そのままツインクテラミノアを振り上げるのである。
そんなアルビータの反撃に閃華とラクトリーには土砂と衝撃波が襲い掛かるが、二人とも幾つもの戦場を戦い抜いてきた事だけはある。だから、アルビータの反撃を上手く避ける二人だが、アルビータにとっては、ここで閃華とラクトリーに向かって更に追撃を掛けたいところだが、とっさに後ろから殺気を感じて、アルビータはツインクテラミノアの片方をそちらに振るうが、両刃斧は空を斬るだけだった。
そして、先程の殺気を仕掛けた者である半蔵は既に安全圏にまで退いていた。ここはさすがと言えるだろう。アルビータにこれ以上の攻撃をさせないために、アルビータの動きを止めつつ、牽制しながら無駄な時間を使わせたのだ。だからこそ、その間に再び琴未とミリアが突撃を掛ける。
だが、このまま攻撃しても、通る可能性は低いだろう。だからこそ、琴未はあえてミリアの歩調からワンテンポだけ下げるのだった。そうすれば、ミリアが先にアルビータに到達して攻撃を仕掛ける事になる。だからこそ、ミリアは最初の一撃に全力を込めてアースシールドハルバードを振るう。
その攻撃は予想通りと言うべきか、ツインクテラミノアの片方でミリアの一撃は完全に防がれてしまった。そして、アルビータはすぐに琴未の方に注意を向ける。やはり、アルビータはこの状況では

琴未が攻撃の要だという事は分っているようだ。それは琴未も充分に分っており、アルビータが自分に対して警戒している事も分っている。それでも琴未はアルビータに対して、一気に勝負に出る形で攻撃を仕掛ける。

雷閃刀の切っ先を地面に対してギリギリまで下げながら突撃を仕掛ける琴未。そんな琴未に対してアルビータはツインクテラミノアの片方を振り上げ、そのまま力任せに振り下ろそうとする……のだが。

―新螺幻刀流　嵐崩し―

アルビータがツインクテラミノアを振り上げる直前に軽く飛び上がり、膝を折る琴未。そんな琴未がアルビータがツインクテラミノアを振り下ろすのと同時に琴未が勢い良く跳び上がる。なにしろ、振り下ろしたばかりのツインクテラミノアに対して、琴未は充分に力を溜めてからツインクテラミノアに向かって跳び上がったのである。

そのため、雷閃刀とツインクテラミノアがぶつかり合うとアルビータの腕に衝撃が走る。琴未としては、このままツインクテラミノアだけをアルビータの手から弾き飛ばそうとした攻撃である。だからこそアルビータは自分の手から抜けそうなツインクテラミノアを必死になって握り締めるのだった。

さすがに振り下ろしたばかりの初動では、アルビータの攻撃も威力はほとんどなく、琴未でもツインクテラミノアを弾き飛ばせそうな程の攻撃が出来たのだ。

けれども、アルビータとしては今の状態で琴未にかまっている時間は無かった。なにしろ、琴未達の攻撃を予想して閃華とラクトリーが既に突撃を掛けているからだ。だからこそ、アルビータも自分の手から弾き飛ばされそうな片方の両刃斧を血が出るまで握り締め、もう片方の両刃斧でミリアを弾き飛ばすと、そのまま閃華達の方へ

と向けるのだった。

普通ならば、自分の方へ突き出された武器に対して警戒をして動きを止めるだろう。だが、閃華とラクトリーはアルビータの動きが二人の動きを封じる牽制だと分っている。だからこそ、閃華はあえて、突き出されたツインクテラミノアに突っ込んで行き、ラクトリーはミリアのフォローに入る。

琴未が時間を稼いでいる間にと、閃華は突き出されたツインクテラミノアの刃を一気に飛び越えて、更に柄を踏み台にすると、そのままアルビータの首を目掛けて方天戟を振るう。この状況にさすがのアルビータも焦ると思ったのだが、アルビータは命の活性を一瞬で出せる最大限の力を出す。

そのため、琴未に抑え付けられていた、もう片方のツインクテラミノアが琴未ごと振りかざして、迫ってくる閃華に琴未をぶつける形で、何とか閃華の突撃を防いだのだが、その直後に脇腹に痛みが走った。どうやら琴未達を対処するので精一杯だったのだろう、攻撃を入れてきたミリアには気付かなかったようだ。そして、そのミリアはというと……地面に顔を突っ込む形で動きが止まっていたのだ。

何があったのかというと、ミリアが弾き飛ばされた時、すぐにミリアのフォローに周ったラクトリーがミリアの腕を掴むと、その勢いを利用するために片足を軸にして一回転、そしてミリアをアルビータに向かって投げたのだ。

まさか、こんな事をされるとは思ってはいなかったミリアだが、ここで攻撃をすれば確実に通ると判断したようだ。なにしろ、アルビータが持っているツインクテラミノアは両方とも琴未と閃華に対して使われていたのだ。つまり、砲弾のように飛ばされたミリアを防ぐ手段は無い。だからこそミリアはアルビータの後ろを通り過ぎる前に脇腹に一閃を入れたのだ。その後はシエラが受け止めてくれるだろうと思っていたミリアだが、シエラのフォローは無く、そのまま無様に顔面から地面に着地する事になってしまったのだ。

まあ、ミリアらしいと言えばらしいが。そこ頃のシエラは既に琴未達のフォローに入っており、シエラが飛ばされてきた琴未と閃華を受け止めるだけで精一杯で、その間にレットがアルビータの直上から攻撃を入れていたのだ。そのため、誰もミリアを受け止める事は出来ず、ミリアにとっては不幸な出来事になってしまったというワケだ。

だが、いつまでも寝てられないと、ミリアが顔を上げた時にはレットは既に上空に退避するのと同時にラクトリーが再突撃を仕掛けていた。

ラクトリーもどちらかと言えば属性攻撃を得意としている精霊である。だからこそ、武器だけの戦いでは不利があると感じたからこそ、あえて大振りな攻撃は控えて、連続で刺突を放つ事にした。それでも、アルビータは時には避け、時には受け流し、ラクトリーの攻撃を凌いでいた。けれどもラクトリーが放つ刺突は素早く、アルビータは反撃に出辛い状況になっていた。

そんなラクトリーの素早い攻撃が行われている時だった。またしてもアルビータは背後に気配を感じる。だが、ラクトリーの攻撃を避けながら対処するだけの事は出来ない。だからこそアルビータは思い切った行動に出たのだ。

なんと、後ろに姿を現した半蔵に対して、そのまま体当たりをするかのように背中をぶつけてきたのだ。確かに、これならラクトリーから距離を取るのと同時に半蔵に対しても対処が出来るようだ。そして、この行動が一番功を成したのが、半蔵の虚を付く事が出来たという事だ。

もし、少しでもアルビータの判断が遅ければ半蔵から一撃を喰らいながらも、後退していただろう。だが、アルビータの判断は素早く、半蔵を背中で押し流すように後退したのだ。半蔵も、そこまでは予想できてはいなかったのだろう。それはフレトも同じであり、指示を出したは良いが、まさか、こんな反撃が来るとは思っていなかった。そのため、アルビータは後退した時には半蔵は弾き飛ばさ

れ、ラクトリーは追撃を仕掛けるか迷ってしまった。
　それはラクトリーの攻撃が時間稼ぎであり、琴未達が体勢を立て直すまでの攻撃だったからだ。そのため、アルビータへの追撃を迷ってしまったのだ。それはフレトも同じであり、ラクトリー一人でアルビータを追い詰める事は出来ないと判断を下すまで時間が掛かってしまった。それも仕方ないだろう。なにしろ、不意打ちの切り札である半蔵が、あのような形でダメージを喰らいつつ、弾き飛ばされて、更に動きを無効化されるとは思ってもみなかったからだ。
　それでも、当初の目的である、琴未達が体勢を立て直す時間を得る事は出来た。ならばと、フレトは決断するのだった。
　ラクトリーはクレセントアクスを構えながらも時を待ち、閃華と琴未が左右に並ぶと一斉に駆け出した。それと同時に上空からシエラとレットも、完全にアルビータの上を取り、琴未達の動きに合わせて急降下する。更には別方向からミリアも単独で突撃を開始した。
　そう、同時多重攻撃。これがフレトが次に考えた作戦だった。アルビータも先程の攻撃では後ろに退がるしかなかった。つまり、今のアルビータは少しだけ動きが鈍くなっている。与凪の報告から、そんな判断を下したフレトが決断した一手である。フレトも度重なる攻撃とダメージでアルビータの動きが鈍くなったと思ったようだ。そして、その作戦が一気に前線メンバーの頭を駆け抜けると、お互いの動きをみながら同時に攻撃を仕掛けるのだった。
　各々が一気にアルビータに迫った時だった。アルビータも迎撃のためにツインクテラミノアを思いっきり振り上げる。この体勢なら地面を破壊して地上戦力を足止めして、上空の攻撃に備えるのだろう。フレトはそう考えていた。それでも、ここまでの同時多重攻撃である、攻撃が通る可能性は大きかった。
　そしてシエラ達が同時に距離を詰めた……その時だった。それは突然にして訪れた。
　閃華の方天戟とラクトリーのクレセントアクスがアルビータの腹を突き刺し、琴未の斬撃がアルビータの右肩を斬り付け、ミリアの

ハルバードが右の横腹へと突き刺さる。それと同時にアルビータの背中をシエラのクレイモアとレットのトライデントが斬り裂いた。まるで今までの動きが嘘だったかのように、アルビータの動きは人形のように止まってしまったのだ。突然の事で驚きを示す前線メンバー、それはフレト達も同じだった。それから閃華の声が響く。

「みな、武器を退くんじゃっ！」

自らも方天戟をアルビータの腹から引き抜くと、ラクトリーもクレセントアクスを引き抜き、ミリアも二人同じように武器を引く。それと同時に琴未は距離を取り、シエラとレットも距離を取って着地する。そんな光景を目にしてフレトは驚きを隠せず、ただ与凪に尋ねるだけだった。

「これは……いったい、どうなってるんだ？」

そんなフレトの問い掛けに与凪は顔を伏せて何も答えなかった。その代わりに今まで使っていたモニターとキーボードを全て消し去る。それだけでも分かるというものだろう。けど、フレトには信じる事が出来ずに、咲耶の方に振り向くと、咲耶も黙って首を横に振るだけだった。そして……次の瞬間にはフレトはアルビータに向かって駆け出していた。

「マスター……」

フレトの姿を確認したラクトリーが道を空けるかのように移動すると、フレトは真っ先にアルビータの前に立つのだった。そんな時だった、突如としてアルビータがフレトに向かってツインクテラミノアを一気に振り上げる。

だが……振り上げただけで終わってしまった。後はアルビータの手から滑り落ちるように地面へと突き刺さるツインクテラミノア。それからアルビータは満足したような顔でフレトに話し掛けるのだった。

「少年……貴殿の勝ちだ」

「なっ！」

思いも寄らなかった突然の敗北宣言をするアルビータ。その事に

フレトは驚き、そして納得が行かなかった。
「ふざけるなっ！　こんな終わり方があってたまるかっ！　俺は……まだ、お前を倒してはいないっ！　それなのに俺達の勝ちだと、そんな事があってたまるかっ！」
　そんなフレトの言葉を聞いて、アルビータは今までフレト達には見せなかった、優しい微笑をフレトに向けると、満足したように天を仰ぐ。そしてアルビータは言うのだった。
「だが、主である春澄から受けた命の提供は使い果たした。最早、私に貴殿達と対等に戦うだけの力は残されてはいない。春澄の命を、そして……私の命を使い果たした時点で、少年、貴殿の勝ちは決まっていたのだ」
「それは……既に命の提供が使えないという事か」
「あぁ、私の命も、主である春澄の命も、もうすぐ終焉を迎える。それは我々が待っていた時であり、目指していた時でもあった。だから……既に命の炎が消えようとしている、私に戦うだけの力は残っては無い。だから少年、貴殿には感謝する。最後にこの時を、この戦いで命の炎を限りなく燃やして戦った、この時こそ……私が望んだ戦いだから、私は満足だ」
「だがっ！　……」
　やはりフレトには納得が行かない部分があるのだろう。それはアルビータから完璧な勝利を得る事が出来なかったという事だ。それはでも、アルビータは満足だと言ってくれたのだ。この最後になった戦い、アルビータにとっては勝敗などはどうでも良い事なのだ。肝心なのは自分が本気で戦えた事、命の炎を燃やして戦いつくした事、それが一番重要なのだ。
　フレトにも、それが分っているのだろう。だからこそ、それ以上は何も言えなかった。いや、言いたい事は沢山あるだろう。けど、言ってはいけないと思ったのだろう。それは戦いを通してフレトも感じた、戦いの中にある矜持である。フレトもアルビータと本気で戦ったからこそ、そんなアルビータの気持ちが理解できたのかもし

れない。
　それは前線で戦っていたシエラ達も同じだ。今では全員、武器を引いて、二人を見守っている。その中でアルビータはフレトに向かって最後の願いを言うのだった。
「さあ、少年よ。貴殿の手で私にトドメを刺せ。私に戦いの中で消えて行くという誉をくれ、それこそが……私の、最後になる望みだ。戦いの中で生きると決めた時から決まっている終わりだ。さあ、少年よ、いや、フレトよっ！　私にトドメを刺せっ！　精霊として、戦いに生きる者として、名誉ある最後をくれっ！」
「……」
　アルビータの言葉を聞いて、フレトは、もう語る事は無いと悟ったのだろう。だからこそ、最後の行動へと出る。
「……マスターランス」
　フレトの手元が光ると、その光はすぐにマスターランスの形状になり、光の中から現れたマスターランスをフレトがしっかりと握ると、光はすぐに消え、元の夜に戻っていく。そしてフレトはマスターランスをアルビータに向かって構えるのだった。
「これで終われる」
　そんな声が聞こえるのと同時にフレトは思いっきりマスターランスをアルビータの胸に向かって突き刺て、そのままアルビータを貫いた。マスターランスが完全にアルビータを貫いた事により、普通ならば精霊も人間に近い形で具現化しているから血が噴出すのだが、マスターランスが貫いたところからは、淡い光の玉が少しずつ噴出していた。
　これが……精霊の最後なのだな。フレトはアルビータの最後を目にして、そう感じ取った。光の玉が増えて、ドンドンと天に向かって行くにつれて、アルビータの身体は少しずつ消えて行くのだった。
「アルビータは……満足、だったのかな？」

昇の腕に抱かれ、春澄は弱弱しい声で昇に尋ねながらアルビータの最後を見ていた。そんな春澄の姿に昇は涙を流しそうになるが、涙を堪えて春澄をしっかりと抱きしめて言うのだった。

「うん、満足だったと思うよ。最後の最後まで……自分の願いを貫くために、命尽きるまで、命の炎を燃やしたんだから……だから、満足だったと思うよ」

「そっか、なら……良いかな」

弱弱しい春澄の声に昇は春澄の顔を見るが、春澄は眠そうな顔をしているが、その顔からは生気がほとんど無いと分かるほど、春澄の顔から色が消えていくように昇には見えた。そんな春澄を少しでも、なるべく長くと願いながら、春澄を抱きしめる昇。

そんな昇の頬にふと春澄の手が触れてくる。そして春澄は弱弱しい微笑で言うのだった。

「私も……満足だったよ。最後に……昇さんと、出会えて。ちょっとだけど、シエラさんや琴未さん、皆と……楽しい時間を過して、最後には昇さんからプロポーズされて。だから……私が……もう、願う事は無いかな」

「まだっ！」

少しでも抵抗したいのか、それとも自分の為なのか、春澄の為なのか、または素直な気持ちなのか、既に昇は自分の心で思っている事すら分からなかった。けど、少しでも春澄と一緒に居たい、最後の最後まで、その最後を少しでも伸ばせるなら伸ばせるだけのばしたい。だから、昇は涙を浮かべながらも春澄に微笑みながら言葉を告げる。

「まだ時間はあるよ。だから、もう少しぐらいは春澄ちゃんに付き合う事も出来るし、お願いだって聞くよ。だから、もう少しだけ、楽しい時間を過ごそうよ」

そんな昇の言葉を聞いて、春澄は昇の胸に頭を付けながらも首を横に振るのだった。

「もう時間は無いよ。アルビータが消えた今、私に、残されてる命

は、火の粉程度だよ。でも……そう、言ってもらえて、嬉しいよ」
「……春澄ちゃん」
「なら、最後に我が侭を……言っちゃおうかな」
「うん、何でも聞いちゃうよっ！」
春澄の言葉に、まるで希望を見出したかに声を上げる昇。だが、昇も心でも、頭でも、分っているのだ。もう、時間が無い事を、春澄に残された時間は残り少なく、今にでも消えてしまいそうな事を。
そんな春澄が昇の温もりを確かめるように昇の手を取ると、しっかりと昇に顔を向けて、そして微笑みながら言うのだった。
「生きて」
「……えっ？」
「私は……他の人に……比べたら、短い時間しか生きられなかったけど、でも……振り返ると後悔しない一生だった。だから……昇さんには……私の分まで生きて。そして……昇さんにも……振り返っても、後悔しないような……そんな生き方を、して欲しいかな」
そんな春澄の言葉に昇は言葉で答える事が出来ず、いや、正確には春澄の言葉に肯定的な言葉で答える事が出来なかったのだろう。だからこそ、昇は春澄を思いっきり抱きしめて、春澄の言葉を一つでも聞けるように、春澄を抱き寄せて、肩に顔を乗せてあげるのだった。
そんな春澄に対して、どんな風に答えて良いのかと、迷う昇。そして、春澄は弱弱しく、昇には見えないが、少しだけ意地悪な笑みを浮かべながら言うのだった。
「これが私の……本当に、最後の我が侭。今までは……自分の事ばかり、だったけど、最後だけは……好きになった人に……大好きな人の為に……我が侭を、言いたいかな。ずっと……迷惑だけしか……かける事しか出来なかった……そんな、私が……最後に言う……我が侭は……迷惑を掛けてきた……人達に……言いたいから」
「僕は春澄ちゃんの事を迷惑だなんて思って無いよ。それはシエラ達だって同じだよ。僕達は……春澄ちゃんと友達になれた。こんな

戦いをしても、友達になれたはずだよ。だから、僕達は迷惑とは思わない。ずっと……春澄ちゃんと友達だし、僕は春澄ちゃんの婚約者かな。だから」

「うん、分ってる。でも……私が、迷惑を掛けた、そんな風に……思ってるから、しょうがないよね。だから……最後の我が侭は、私が迷惑を掛けた、私を助けて、そして好きになって、くれた人に……言いたいの。それが……私が、皆に……唯一……出来る事だから」

「春澄ちゃん……」

昇はそれ以上の事は何も言えなかった。それが……本当に春澄が願っている事だと分かったから。

春澄は生まれてから、ずっと人に助けられて生きてきた。けど、そんな春澄の人生も、今、終わりを迎えようとしている。そんな終焉を見ながらも、春澄は最後に自分のためではなく、今まで自分を支えてくれた人に我が侭を言いたいのだろう。

今までは自分勝手に生きてきたけど……ありがとう、と。

それは春澄なりの感謝なのだ。それを最後の我が侭として昇に伝えたのだ。昇なら、今まで迷惑を、いや、世話になった人達に、自分が思った、最後に思う事が出来た、本当の気持ちを伝えてくれると信じたからだ。だからこそ、春澄は最後の我が侭に言ったのだ「生きて」と

たった、それだけの言葉。けど昇にとっては、とても重く、大切な言葉に思えた。だからこそ、昇も春澄に伝えなければいけない。その言葉が本当に大切で、春澄の気持ちが全てこもった言葉だったからだ。

「分かったよ、僕は……僕達は春澄ちゃんの分まで生きるよ。振り返っても後悔しない、自分の意思を貫けるように、強い気持ちを持ちながら生きてくよ。僕は、後どれくらい生きられるなんて分からないけど、だからこそ、春澄ちゃんの気持ちを受け継いで生きてくよ。それが……最後に言った春澄ちゃんの我が侭だから、聞かないワケにはいかないよね」

「……うん」

昇の答えに春澄は短く答えるだけだった。けど、その返事には春澄の気持ちが、感謝の気持ちが込められてると昇には分かった。だからこそ、昇は涙を流しながらも、しっかりと春澄を抱きしめる。最後の時まで、しっかりと春澄の温もりを感じて、ずっと覚えているために。

そんな時だった。ふと春澄の手が昇の頬に触ると、春澄は少しだけ昇から離れて、しっかりと昇を見詰める。そんな春澄の顔は、しっかりと微笑んでいた。そんな春澄の微笑を見て、昇は春澄の気持ちが分かったのだろう。だからこそ、昇もしっかりと春澄を見詰める。

そして春澄は微笑みながら、今までには無いくらい幸せそうに言うのだった。

「泣いて……くれてるんだよね……私の、ために。だから……ちょっとだけ、嬉しいな。こんな……私でも……思ってくれる人が居る、悲しんでくれる人が居る。遅いかもしれないけど……それが分かっただけでも……私は、自分が……幸せだったと……思えるよ。お父さんと……お母さんは……分からないけど……施設の人は、私に……優しかった。だから……その人達と……昇さんが……泣いてくれるなら、私は……本当に、幸せだよ。これだけは……心の底から、言える、本当の……言葉……だから」

「うん、僕だけじゃない、シエラも琴未も、春澄ちゃんの為に泣いてくれると思うよ。だって、あれだけ仲良くなったんだから、もう友達だよ。だから、春澄ちゃんは自分で思っている以上に幸せなんだよ」

そうか……僕は……それを伝えないといけなかったんだ。ここに至って、やっと自分がやるべき事に気付いた昇。だが……それをやるには遅すぎた。既に戦いの運命は終端を向かえ、春澄に残っているのは火の粉程度だけの命。そんな短い時間しか春澄には残されてはいない。だからこそ、昇は残された時間の中で出来る限りの事を

春澄に伝える。
「春澄ちゃんは無為な日々を過ごしてきたんじゃない。アルビータさんと出会う前も、嬉しい事や楽しい事があったはずなんだ。分からないのなら、それに気付いていないだけ。それに気付けなかった事は悲しい事かもしれないけど、今の僕ならしっかりと言えるよ。春澄ちゃんは、本当に幸せな人生を歩んできたって。無駄な時間なんて一つも無い、迷って苦しんだかもしれない。けど、それ以上に幸せな時間を過ごしてきた。僕もそうだけど、ほとんどの人が、そんな時間に気付かないで過ごしてる。そこは春澄ちゃんも同じだよ。春澄ちゃんも気付かなかっただけで、本当に幸せな時間を過ごしてきた。これだけは僕が保障するよ」
「そう……なのかな」
「うん、そうだよ」
「だったら……嬉しいかな。私は……幸せだったんだね。そっか……そう、言われれば……そうかもしれない。でも……私は、自分で決めた……戦いの運命……その選択を、後悔するつもりはない。たとえ……私が……施設で幸せな……暮らしをしたとしても、私は……アルビータと出会って、戦いの運命を選んだ。それから……過ごしてきた……時間も、本当に……幸せだった……時間だったから」
「そうだね、僕も春澄ちゃんの選択が間違ったとは言わないよ。春澄ちゃんが幸せな暮らしをしてたとしても、アルビータさんと出会ったら同じ事をしてたかもしれないし、だから、僕は春澄ちゃんが間違ってるとは言わない。ただ、ちょっとだけ周りの事に気付けなかっただけだよ。だけど、その中で春澄ちゃんが命の限り生きた事は確かだよ。その命は人より短いかもしれないけど、春澄ちゃんが言うとおりに、その短い人生で春澄ちゃんは命の炎を燃やし、命の限り生きてきた。それは、ここにある事実だから」
「うん、ありがとう……昇さん」
突如として春澄が再び昇に寄り掛かると昇は春澄をしっかりと抱きしめる。そんな春澄がどこを見ているのかは分からないけど、し

っかりと言葉を口にした。
「海が……見える」
「海？」
「うん、私が……逝くべき、帰るべき、場所なのかな。アルビータも……海に帰って逝った。河の流れが、海に流れ着くように、私も……そこに帰るのかな」
「春澄ちゃん……」
「もう……良いかな。凄く……眠い、だから……寝て良いよね。私も……アルビータが逝った、海に……逝くから。だから、もう……眠っても、良いよね」
「……うん」
本当はそんな事は言いたくは無かった、無理をしてでも春澄を起こそうかと思った、でも……それが、もう無意味だとい現実は昇の目の前にあるから。それはどんなに否定しても、拒否できない現実。春澄達が望んだ終焉、その終端が目の前に来ている。そんな状況だというのに、誰が春澄の言葉を否定できるだろうか。
それは春澄が自分で選び、アルビータと共に歩いた終焉に続く道。そのゴールが、終端が、目の前に迫ってきてる。それを前にして、もう……昇に出来る事は無い。後はただ、このまま春澄を抱きながら最後を迎えるだけ。戦いの運命に……終端を迎えるだけである。
そう……ただ、それだけ。
そんな春澄が微かな声で昇に伝える。

―最後まで、ありがとう―

その瞬間、春澄の身体から力が抜け落ち、人形のように昇に倒れてくるだけである。昇はそんな春澄をしっかりと抱き寄せると春澄の顔を目にする。春澄の顔は、まるで楽しい夢を見ているみたいに眠っているようだった。けど、昇がどれだけ春澄の名前を呼んでも、どれだけ抱きしめても春澄は返事を返さない。

分っていた。この終端が来る事は分っていた。けど、何で受け入られるだろう、どうすれば、信じられるのだろう。その答えが出ないままに昇は叫ぶ。

「うあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

そんな昇が精界内に響き渡り、戦いの運命に終端が訪れた事を告げる。

春澄もアルビータも、河の流れのように続いた日々に終わりを告げる事が出来た。途中で引っ掛かり、ただ河の流れを見るだけの日々は終末を向かえて、今、二人は河の流れに沿って大海に出たのである。どんなに途中で引っ掛かろうとも、最後には河が大海に出るかのように。

第百四十八話　命尽きるまで（後書き）

さてさて、そんな訳で……今回は何も語らずに終わりましょう。
以上、葵夢幻でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6773c/

エレメンタルロードテナー

2011年12月28日12時08分発行